甲骨文獻集成

第六册

甲骨文考釋·著錄片考釋

四川大學出版社

◇中國古文字大系◇

甲骨文獻集成

甲骨文考釋・著録片考釋

第六册

四川大学出版社

本册目録

甲骨文考釋

著録片考釋
甲骨文字　一
日本所見甲骨録　六一
論文資料
一九四九年以前　九五
大龜四版考釋　一〇四
釋後岡出土的一片卜辭　一〇五
安陽侯家莊出土之甲骨文字　一二四
讀天壤閣甲骨文存及考釋　一二八
一九四九年—一九六五年
臺灣大學所藏甲骨文字　一二八
鈔本武乙卜辭十一版　一三〇
牛胛骨龜腹甲刻辭　一三一
關於「文參」誤解甲骨文寅字和兆文的兩點意見　一三二
國立歷史博物館所藏甲骨文字　一三二
方地山所藏之一版卜辭　一三五
吉林大學所藏甲骨選釋　一三六
一九六六年—一九八〇年
美國納爾森藝術館藏甲骨卜辭考釋　一三八
美國納爾森藝術館藏甲骨卜辭考釋(續)　一四一

美國納爾森藝術館藏甲骨卜辭考釋（續二） 一四三
美國納爾森藝術館藏甲骨卜辭考釋（續三） 一四五
美國納爾森藝術館藏甲骨卜辭考釋（續四） 一四七
加拿大多倫多博物館所藏一片骨柎銘文的考釋 一五〇
聯合書院圖書館新獲東莞鄧氏舊藏牛甲骨簡介 一五二
加拿大多倫多大學安達黎奧博物館所藏一片牛胛骨刻辭考釋 一五七
安陽新出土的牛胛骨及其刻辭 一六四
讀《安陽新出土的牛胛骨及其刻辭》 一六七
加拿大安省皇家博物館所藏一片大胛骨的刻辭考釋 一六八
臨淄孫氏舊藏甲骨文字考辨 一七五
關於「戰後殷墟出土的新大龜七版」 一七八
輔仁大學所藏甲骨文字——明義士先生藏拓本 一八六
輔仁大學所藏甲骨文字後言 一九三
讀殷契萃編小識 一九四
天津師範學院圖書館藏甲骨選介 一九七
武丁卜辭雜釋之一 一九八
散見于日本各地的甲骨文字 二〇〇
一九八一年——一九八五年 二一一
安陽博物館館藏卜辭選 二一二
《戩壽堂所藏殷墟文字》補正 二一三
日本散見甲骨文字蒐彙（六） 二一三
山西省文物工作委員會收藏的甲骨 二三五
孟廣慧舊藏甲骨選介 二三七
記日本京都大學考古研究室所藏一片牛胛骨卜辭 二四二
一九八六年——一九九〇年 二四三
記香港大會堂美術博物館所藏一片牛胛骨卜辭 二四四
甲骨卜辭新獲 二五〇
萍廬藏契・附校釋 二五九
日本後藤朝太郎氏藏的甲骨文字 二六一
西北大學所藏甲骨文字 二六二
浙江省博物館新藏甲骨文字 二六四
一九九一年——一九九五年 二六七
蘇聯國立愛米塔什博物館所藏甲骨文字 二七五
記美國辛格博士所藏甲骨 二七七
立教大學博物館學研究室所藏甲骨片 二七八
東京國立博物館保管的甲骨片——有關人頭骨刻字的考察 二七四
一九九六年——一九九九年 二七五
殷墟甲骨拾遺 二七六
中央研究院歷史語言研究所所購甲骨選釋 二七七

歷史語言研究所購藏甲骨選釋（二） 二八三
河北大學文物室所藏甲骨 二八九
殷墟花園莊東地甲骨卜辭選釋與初步研究 二九四
殷墟甲骨拾遺（續） 三〇九
附錄：年表　索引
甲骨年表
——關於甲骨文字三十年來發現研究的總記 三一一
甲骨年表 三一七
續甲骨年表 三四九
甲骨卜辭地名通檢（一） 三七四
甲骨卜辭地名通檢（二） 三七八
皇家安大略博物館收藏甲骨文字索引（一——九） 三八一

ひとものこころ

Mutual Understanding Through The World's Heritage

甲骨文字

天理大学
天理教道友社 共編

據日本天理教道友社一九八七年二月版影印

甲骨文考釋・甲骨文字考釋・甲骨文字

『ひと もの こころ』に寄せて

天理参考館と私

平澤　興
（日本学士院会員・元京都大学総長）

「ひと　もの　こころ」――この標題を聞いた時、私はまず驚いた。なんと、これほど短くて、しかもこれほどずばりと文化の本質をついた言葉があろうか。確かに現代は文化盛んな時代である。しかし、その文化は決しておおらかに平衡のとれたものではなく、心に安らぎを与えてはくれず、余りにも知的に偏したもので、人間の疎外化をきたすようなものである。現代やかましく言われるのは、いわゆる科学的、あるいは科学技術的の知的文化で、情緒的な文化、すなわち心の文化への関心はどうもそれほど強くはないようである。いわゆる心の文化は芸術、信仰、倫理などを含む文化で、生物学的に考えると、むしろ知的文化よりも古く、原始的なものであるが、昔と比べて今日はたしてより良くなりつつあるかというと、むしろ怪しいのである。

ある意味では、世の中は「もの」と「こころ」で満たされているとも言われよう。実は「ひと」さえも、その成立を科学的、根元的に考えれば、大自然によって作られた「もの」なのである。今から30数億年前に、未だに充分解明し得ない大自然の不思議な力でつくられた単細胞の「いのち」が、その基なのである。この不思議の原始的生命が次第に進化して、一方では植物となり、他方では動物となり、さらに人間にまで発展するのである。われわれは科学の力によって、そうした経過はかなり詳しく知ることができた。しかし、こうした不思議の過程が、そもそもいかなる力によるかという、その基本的な真実は未だによく知らぬのである。

大自然のつくる「もの」は、人間だけではなく、すでに述べたごとく、植物も動物もすべてそうだが、私はここで、しみじみと天理教教祖様の言われた「かしもの・かりもの」の理のすばらしい独創性に打たれるのである。「かしもの・かりもの」という日常語を用いて、普通の人々が忘れている大自然の真理を、こともなげに言いのこしておられるのである。難しい事実を日常語で表現される点でも、教祖様はまさに天才と申すべく、説明しても説明しつくせないような大自然の哲理を、日常語でいとも簡単に述べておられるのである。余りにも言葉が簡単なために、ともすると、そのすばらしい内容が充分大切に取り扱われていないようだが、心してそういうことのないようにしたいものである。「かしもの・かりもの」こそは、まさに人間の本質の一部を喝破したもので、自然から見れば「かしもの」であり、人間から見れば「かりもの」であろう。

もとより、「かしもの・かりもの」はただ人間だけではなく、草も木も、虫も獣も本来すべて自然から与えられた「もの」である。自然という言葉のかわりに、天という言葉を用いてもいいかもしれない。

「もの」を広く解すれば、命あるものも、命なきものもすべて含まれ、命なきものとは、たとえば土や石、山や川などであり、命あるものとは植物、動物、人間などであり、それによってつくられる「もの」になると、ほとんど限りがないほどいろいろ様々のものがある。とかくわれわれは、ただ人間だけを中心として考えやすいが、そうした気持ちを捨てて、およそありとしあらゆる「もの」を味わい、楽しむようにしたいものである。

見る目をもつ者には、そのどれ一つをとっても面白く、さらに深く見ると、そのどれにもわからぬ不思議がかくされている。世の中にある無数の植物、そうした植物がつける色とりどりの花、そして花のもたらすいろいろの実など、愛情を傾ければそれぞれに面白く、普通は見落とされている雑草の花などにも、尽きぬ味がある。俗の目はただ評判の花だけを見て喜んでいるが、真に植物に愛の目を持つ人なら、つまらぬ花などというものは何一つなく、芭蕉は「よく見れば　なづな花咲く　垣根かな」などと、人の見落としている垣根のなづなをも楽しんでいるのである。すべては見る人の目であり、心である。もとより、一般人に愛好される花々には、それなりの独自の美があり、その花作りに生涯を捧げて喜ぶ人もある。そうした花は、またそれぞれの芸術家により、絵になったり、彫刻になったり、あるいは衣服や調度品の飾りになったりして、人生に趣を与えてくれるのである。

これは動物についても全く同じことで、やはりすべては自然の産物で、その千差万別の生き方は全く驚くばかりである。こうした動物の大部分には、植物と違って、その生き方をさらに微細に調節する神経があるが、この神経の発育も動物によりいろいろ様々で、魚類以上の脊椎動物になると、神経がさらに発達して脳脊髄などという中枢神経系をつくり、その生活はいよいよ面白くなる。どの動物にもそれぞれの特長があり、こうした動物はさらに芸術家によって絵、彫刻、織物などに取り入れられ、直接人間生活を豊かにしている。

「もの」の中でも特に面白く、味の深いのは人間によってつくられる「もの」であり、芸術品である。芸術品などといえば、おそらく主として人間によってつくられる「もの」であろうが、これには数限りないものがある。天理教道友社から出ている「ひと　もの　こころ」なるシリーズで取り扱われているのは、この人間による「もの」で、それらは天理参考館にあるのであるが、私はこの間、天理参考館を訪れて大急ぎで中を一回り歩かせて戴き、近江昌司氏から心をこめて説明して戴き、驚きに身の躍るような感動を覚えた。まず民族学の部を、そしてその次に考古学の部を見せてもらっ

天理参考館のあゆみ――序にかえて

ひとを理解することはむずかしい、まして見知らぬ土地のひとはなおさらです。けれどもひとの理解がなくては、こちらのこころを伝えることは出来ないでしょう。ひとを理解する一つの方法に、それぞれの土地のひとが造ったり、使ったりしているものを理解することから始めるのも一案ではないでしょうか。ひとが生活の中で実際に使っているものを知ることから、使うひとのこころまで進んで知ることが出来るのではないでしょうか。

そのように考えられたのは中山正善・天理教二代真柱です。天理教の教えに「世界いちれつみな兄弟」という言葉があります。世界の人々が平和で自由で陽気に暮らすには、互いによく知り合うことが必要です。そのためにはまずものの理解からも始めようとされたのです。そして「ものにも徳がある」とも言われました。造ったひと、使ったひとのこころがそのものにこめられているからでありましょう。

海外へ出向かれた途次には自ら率先して、庶民の実生活を肌で感じられるような、各種の生活用具を主として集めるべく努力されました。また多くの伝道者らにも同じことを奨励されて、ものすなわち物質文化から、こころすなわち精神の問題に立ち入って考える術のあることを説かれたのです。

大正15年、中国・韓国からの帰国後、収集された資料を天理大学の前身である外国語学校に展示して「鮮満旅行展覧会」を催され、海外伝道の必要性を喚起されましたが、次いで昭和5年の中国大陸からの帰国直後にも「支那風俗展覧会」を催し、終了とともにこれまでの全展示資料を天理大学に寄贈されました。大学では「海外事情参考品室」と名付けた教室に収蔵し、外国語教育と海外伝道の参考資料として活用することになりました。同年4月28日のことですが、ここに小規模ながらも珍しい博物館施設が誕生したのです。

収蔵品は今日の民族学資料のほか、考古学資料に相当するものも含まれていました。それは主として伝道者という、学術的な専門家による収集ではなかったためと同時に、庶民のこころを歴史的にもさかのぼり、原始のこころに立ちかえって、ひとや文化を考えようとする意図によるものでした。

こうして今日的にみれば、民族学・考古学の専門博物館が成立したわけです。

昭和9年にはキャンパスに「朝鮮館」と称する、おそらくわが国最初と思われる野外博物館も誕生しました。韓国の民家を移築しただけでなく、韓国人家族が実際に生活し、学生らと自由に交際・懇談する場でもありました。

昭和13年、教室を三つも占めるほどに資料の増加をみた参考品室は、この年に独立した建物に移り「海外事情参考品館」と名付けられました。そして太平洋戦争の激化と終戦時の混乱を経て、昭和30年に現在の位置に移り、大学附属の博物館として運営されてきました。他方では学外・教外一般にも開放された、歴史博物館としての機能を果たしながら今日に至っています。

現在、各地で活発に博物館活動が行われています。しかし、ともすれば名品主義、あるいは観客動員を第一義とする風潮が席巻しています。そうしたなかで天理参考館は、現実の生活に密着したひとのぬくもりを感じさせる素朴な民族学資料と、古代人の生活の息吹を肌に感じさせる考古学資料を、好きな日に静かな環境で観賞と瞑想にふける場を今も提供しています。

折しもそれら収蔵品の中から、以上の目的により適した資料を選んで、主張のある美しい図版と、興味深く語られる解説によって構成する本書の企画が実現いたしました。これをひもとくことによって、さらに新しい観賞と瞑想の方法を再発見される材ともなれば幸甚です。

天　理　大　学
天理教道友社

目　次

天理参考館のあゆみ――――序にかえて　1

特別寄稿「天理参考館に見る」　平澤　興　2

●

総論――殷代の社会と文化　江村治樹　5

遺跡地図　11

●

モノクローム図版　13

●

座談会　甲骨文字のある風景　123

伊藤道治

金関　恕　近江昌司

天理参考館所蔵の甲骨について　136

甲骨文字釋文　138

三～四

が、その作品のどれ一つを見ても、それぞれに面白く、作者の「こころ」の深さに打たれたのであった。専門外の私などには、専門的のことは何一つ言う言葉がないが、しみじみと人類の歴史のすばらしさに感動し、民族により、国により、それぞれ独自の道を歩きながら、しかもそこに大きな点では何か共通のものがあるように感ぜられ、蒐集のすばらしさに感動した。その際、特に感動したのは、二代真柱様の偉大な先見性とその深さである。天理教伝道という大きな柱を基にして、その目は文化の全面に及び、考古学、民族学等のあらゆる面からの蒐集と研究とが進められた。しかも、ただ「もの」をものとして物象的に見るだけではなく、研究の最重要点を、それをつくり出した各民族の心や歴史におかれたが、その目の深さと独創性には全く驚くばかりである。

人類の生活内容の発達と充実とにつれ、次第に作品も粗から密に入ることや、信仰は違っても、それぞれの神に仕えようとする敬虔な姿など、誠に趣深く、神に仕える生き方も誠に多彩であり、何かと機械化の現代文明に対し多くの警戒を与えられている。そしてしみじみと感じたことは、この参考館の宝物を見るには私の目があまりにも浅いことで、親切に案内して下さった近江氏には何か申し訳ないような感じだった。しかし、やはり何としても直接宝物に接することはありがたく、粗末な目にも、それはそれなりにすばらしい感動を与えて戴き、心の洗濯をしてもらったのである。何を見ても、そこには作者の「こころ」があり、神への姿があるのであり、ただ「もの」をものとして物質的にだけ見るような粗末な見方はしたくないものである。

心の目には、実は無限の深さがあるのである。目で見ることは動物も人間も同じであるが、しかし、その深さは全く違っている。動物が見るのは、何かがそこにあるということで、たとえば鏡にものがうつるような見方で、見たものが何かというような批判力はないのである。たとえば、魚にもものは見えるが、それは見たものが何かなどという批判力は全くなく、見たものが食物であればそれを捉え、敵であれば逃げるというようなことで、すべてはただ生きるための本能的な方便にすぎないのである。しかし、人間がものを見るのは、ただものが鏡にうつるだけのようなものではなく、見たものが何かという批判力を持っており、人間では見るとは考えることである。しかも、ものを見ての考える深さは鍛練によるもので、人により天地の差があり、鍛えあげた目は一見して、見たものの時代から人までもわかるのである。動物の目を本能的見方とすれば、人間の目は批判的、文化的の見方で、見たものを哲学的にまで深く究め得るのである。パスカルが散歩の時、風に揺れ動く葦を見た。そして「あゝ人間もこの葦のようなものだ。自然の中で最も弱いものだが、しかし、考える葦である」などと言って、一方では人間の弱さを葦の姿にたとえ、他方では人間の思考力による強さを強調したことなどもその一例で、見るとは最後的には哲学的の深さにまで達し得るのである。

面白いことに、年をとるほどに、いよいよこうした心が深くなり、私なども八十を越したこのごろでは、見るもの、聞くものが何もかも面白く、今日のいのちにも不思議を感じて楽しく生きているのである。一体これはどうしたことか、私にもよくわからぬのである。だが、とにかく、そういうことで日々ありがたく生きている。運よくも人間に生まれてきたが、とてもこんなことは具体的に説明できることではない。しかも人間に生まれてきたおかげで、大脳表面の精神中枢には生まれながらにして140億もの神経細胞と、それによる無限の可能性を与えられているのである。今日も50兆もの微少生命たる細胞の生命共同体でありながら、元気でおられるということは何たることか。究めれば究めるほど、一見平凡の今日のいのちも不思議極まるもので、わからぬことばかりである。大自然から生まれたいのち――ありがたいというには、あまりにもありがたい。「あな尊うと　不可思議光のこのいのち　九十路への旅　欣喜雀躍」――私はこのごろ、こんな気持ちで生きている。

この年になってしみじみ感じることは、万物の「こころ」である。「こころ」といっても、私のいう「こころ」は心理学のいう「こころ」よりは、むしろ宗教的・文学的の「こころ」で、理論的なものよりも、もっと素直な自然的のものである。こうした「こころ」は、虫にも獣にも、草にも木にも、いやさらには命のない石にも土にも感じられるのである。自然科学をやった人間としてはおかしいではないかと言われるかもしれないが、それは私にとっては全く自然そのものの姿である。「こころ」には、おそらく感じる側のものと、感じられる側のものとがあろうが、木や石の「こころ」などは自ら感じる「こころ」ではなく、感じられる側の「こころ」で、木や石の側から言えば、むしろ木や石の自然の姿とか、不思議な本質とかいうことになるであろう。

越後の片田舎に生まれた私は、年とともにもう一度素朴な田舎びとに返りつつあるようである。このごろ何となく「天を拝み、人を拝み、己を拝む」というような気持ちで生きているが、毎日拝みながら、喜びながら、楽しく生きることは何とありがたいことか。天よ、地よ、人よ、ありがとう、と叫びたいのである。

殷代の社会と文化

江村治樹
（名古屋大学助教授）

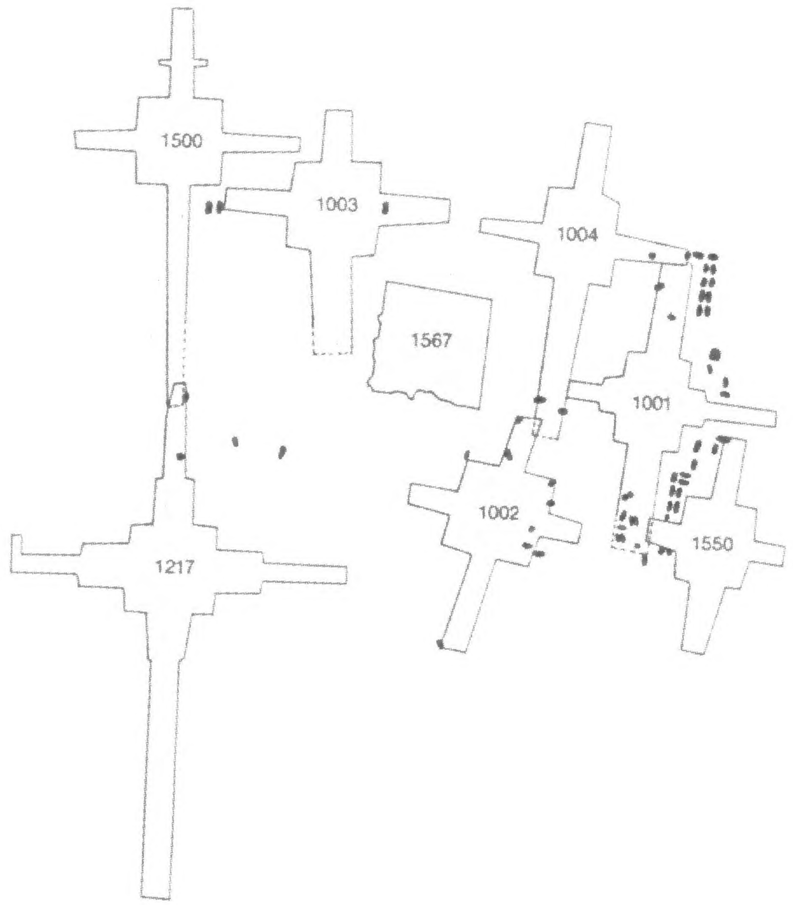


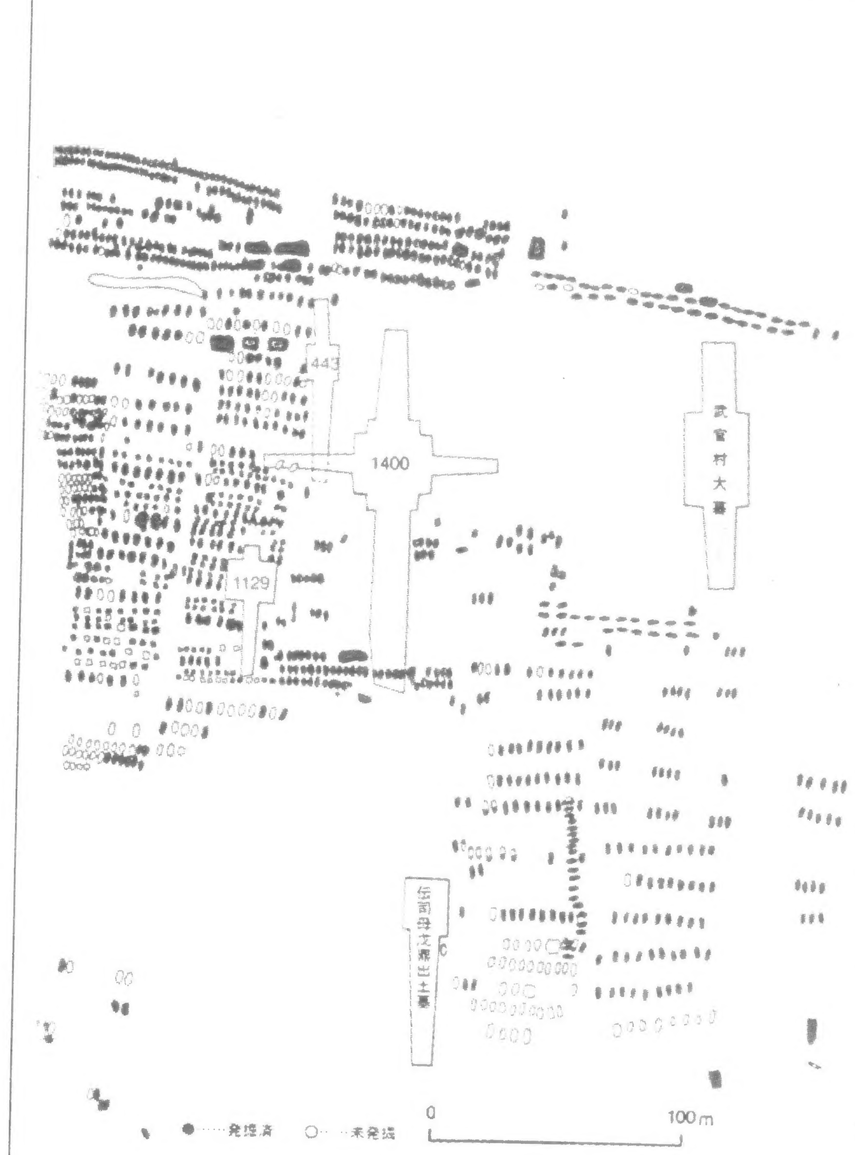
図1　西北崗大墓・祭祀坑分布図

巨大な殷王墓

河南省安陽市の一帯は、古くから殷墟と呼ばれ、かつて殷の都が置かれたところとされてきた。事実、今世紀に入って、安陽市の西北約3kmにある小屯村付近で、殷代のものと推定される多くの建築址や神意を占った大量の甲骨文が発見され、この地こそ、第19代殷王盤庚以来、殷が滅びるまでの270余年にわたって都が置かれたところと考えられている。しかし、それ以前の殷の都と考えられている河南省鄭州市などには城壁が発見されているのに対して、小屯の建築址の周囲にはいまだ城壁が発見されていないため、ここを殷都とすることを疑問視する学者もいる。だが、その遺跡・遺物からみて、この地が殷王室の祭祀場などが営まれた重要な場所であったことは間違いない。

この小屯村の建築址の発掘とともに、その周囲の調査発掘も行われたが、とりわけ大きな注目を集めたのは、小屯の西北、洹河を越えた侯家荘と武官村の北、西北崗付近で発見された大墓群である（図1）。この地区からは、侯家荘寄りに、四つの墓道をもつ大型墓7基と未完成の大型墓1基、武官村寄りには、四つの墓道をもつ大型墓1基と、やや小型の二つの墓道をもつもの3基と一つの墓道をもつもの1基が発見された。四墓道をもつものについて見てみると、最大の1001号墓は、墓口が南北18.9m、東西21.3m、深さ10.5mあり、墓道を含めると南北は68.1mにもなる（図2）。そして最小の1550号墓でも、墓口が南北16.5m、東西14.5mもある。これら大墓のほとんどすべては、副葬陶器や青銅器などから、小屯村の遺跡とほぼ同時代のものと考えられ、未完成のものと1400号墓の南の1基（伝司母戊鼎出土墓）を除く11基を盤庚から後の11代の王の墓とする説や、四つの墓道をもつ8基を武丁から後の8代の王の墓とする説などがある。これらを王墓と確定できる証拠は何も出土していないが、殷代のこのような巨大な大墓は他の地では発見されていないので、まず王墓として間違いない。しかし残念なことに、これら大墓はすべて徹底的に盗掘されており、出土品からもとの有様を十分うかがうことはできない。1004号墓から出土した大量の青銅製胄や戈・矛などの武器、1400号墓の南の大型墓（伝司母戊鼎出土墓）から発見されたと伝えられる875kgという中国史上最大の銅鼎などによって、これらの大墓が他の墓とは別格のものであったらしいことが、かろうじて感じとられるにすぎない。

だが最近、盗掘をまぬかれた完全なままの殷墓が初めて発見されたことにより、実感として大墓の副葬品の量を推測できるようになった。その墓は、小屯村の西北100mのところで発見された殷墟5号墓と呼ばれる墓である。墓の深さは5.7m、墓口は南北5.6m、東西4mの中型墓であり、墓道はない。16人の殉葬者と6匹の犬が葬られており、被葬者は副葬の青銅器銘文から第22代殷王武丁の妃の一人である婦好という人物だとされている。墓は前述の大墓に比べてかなり小さいが、殷王の妃という身分の高い人物の墓であり、その副葬品には眼を見張るものがあった（図3～5）。青銅器は、重さ128kgの大方鼎、113kgの三連甗をはじめ、精美なものばかり468点もあり、総重量は1.6トンに達した。その他、動物や人物などの形をしたさまざまな種類の玉器755点、石製の礼器や動物の形をした装飾品63点、メノウやトルコ石などの宝石製品47点、骨製のかんざしなど564点、精緻な細工をほどこした象牙製の容器3点など、大量のしかもすぐれた副葬品



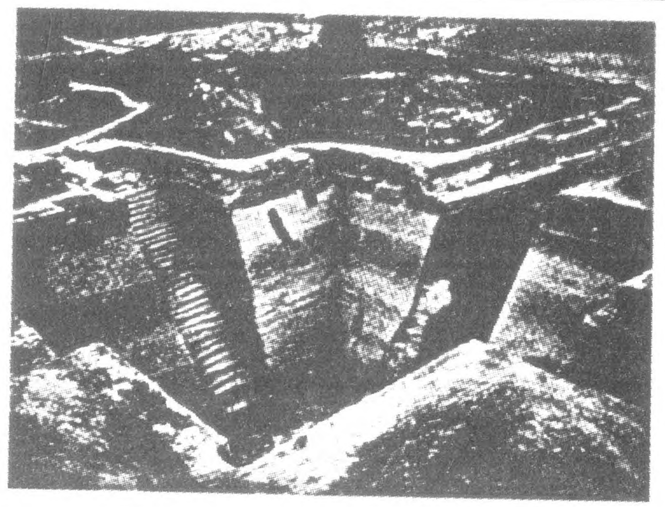


図2　1001号墓の全景

頭骨1個が発見された。総計すると、この一墓域内に葬られた五体完全な殉死者は90人、斬首死体は74人分にのぼる。このような状況は二墓道のみをもつ武官村大墓でも同様であり、五体完全な者は45人、人頭は34個と報告されている。ただし、他の大墓ではこれよりずっと少ないか、あるいは数は不明であり、同じような状況であったかわからない。

王墓における殉死は他の世界でも見られることであり、中国でもずっと後の戦国時代の墓でさえ人数は一般に少ないものの、珍しいことではない。『史記』の秦本紀によると、春秋時代、秦の武公が卒した時、66人が殉死したと記されているし、秦では戦国時代の中ごろまで君主に対する殉死が行われていたようである。だが、多人数の人間を斬首してから殉葬するという例は、中国の他の時代には見られないし、世界史上にも類がないのではないかと思われる。

そして、殷においては、このように人間を斬首して埋葬するというやり方は、大墓の殉葬としてのみ行われたのではない。最近、武官村大墓と1400号墓の南、南北100m、東西70mの範囲内で、大きさ2m×1m、深さ2mくらいの長方形の竪穴が多数発見され、うち191カ所が発掘された（図1）。そして、それぞれの竪穴には8～10体の首無し死体が埋められていたのである。確定できる総数は1,178体と報告されているが、全竪穴数は250にのぼるとされ、推計では1,930体を下らないとされている。これらの竪穴群は、配列の様子から特定の大墓を追祭するためのものではなく、竪穴の分布している区域は殷王室が祖先を祭った祭祀場ではなかったかとされている。この地区では、それ以前にも、この祭祀場の西北、1400号墓の北と西に1,000基あまりの小型の竪穴墓が発見されている。発掘されたもののうち、人頭のみを埋めたものは209基、斬首死体を埋めたもの192基と報告されている。これらも同様な祭祀用の竪穴と考えてよいであろう。

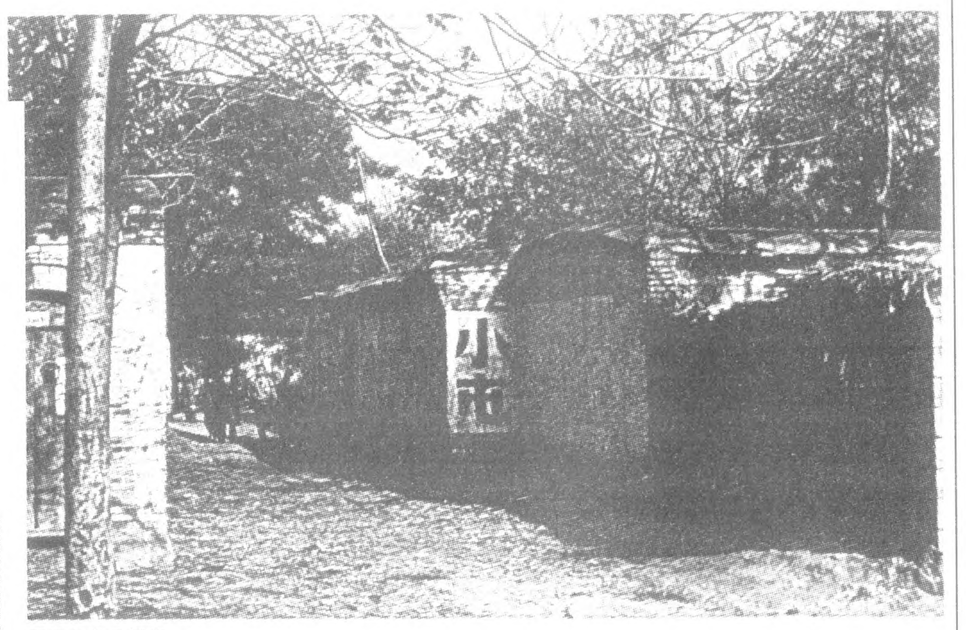
この他にも、同様な竪穴群は小屯村の建築址でも発見されて

王墓の殉葬と祭祀坑

西北崗の大墓については、さらに驚くべきことが明らかになっている。それは、五体完全なまま葬られた殉死者の数と斬首されて埋められた人間の数である。大墓は盗掘がひどいため、これらの殉死者数がもともとどれくらいであったか明らかでないが、1001号墓を例にとると次のようである。墓の最深部の墓底の九つの竪穴に犬と武器を伴った人間1体づつ計9体、木梯の上に11体、そして墓口外東部に掘られた竪穴31カ所に68体の殉葬者が発見されたが、すべて五体完全なものばかりであった。これに対して墓道には、五体完全なものは2体だけで、身体のみで頭のないもの60体と人頭のみ73個が埋められており、埋め土の中にも

が出土した。このことからみても、西北崗の大墓の副葬品の分量と質は想像を絶するものであったと思われる。このような巨大な墓の構築と富の集積は、いかにして可能であったのであろうか。





在の小屯の村内

屯の村内

るという「炮烙の刑」を行った。また、王子の比干が諫めると、紂王は「聖人の心臓には七つの穴があいていると聞いている」と言って、比干の体を裂いてその心臓を確かめてみたという。しかし、これら紂王の残虐さの話は、殷を滅ぼした周によってかなり潤色されていると考えられる。そして、斬首の実数やその甲骨文による推測数も、むしろ紂王の時よりずっと前の武丁の時の方が格段に多いとされているのである。発掘報告書では、前述の武官村大墓の南の祭祀場で1回に用いられた斬首死体の数は古い時代ほど多いとされている。また甲骨文でも、ある人の統計によると、武丁期には祭祀に用いられた人間の総数も、1回の祭祀に用いられた数もともに最大であるが、その後はともにかなり急激に減少していくとされている。ところが、『史記』の殷本紀によると、武丁は「政を修め徳を行い」、そのために天下の人々はみな喜び、死後は王朝を復興したことを讃えて「高宗」という廟号が送られたとされている。もちろん、千年以上も後の文献である『史記』が、どれだけ真実を伝えているか定かではないが、大量の斬首を専制君主としての王個人の性格に帰してしまうのは無理のように思われる。

中国の学者は、このような大量の殉死や斬首による祭祀の盛行を奴隷制と関係づけて説明している。殉死は、人が他の人の生命をも支配する奴隷的不平等関係を示すものであるが、斬首による祭祀も奴隷制の形成と大いに関係がある。甲骨文をみると、殷は羌族などとたえず戦争し、しかもそれらの族を祭祀の犠牲として用いている。そうすると、斬首された死体は戦争捕虜であった可能性が強い。一般的に奴隷制は、戦争捕虜が生かされて生産に投入されることから成立するとみなされている。しかし殷の場合には、まだ生産力が低い段階にあったため余剰が少なく、捕虜を養うことができなかった。そこで、これら捕虜を人身犠牲として祭祀に用いたのだという。だが、奴隷制の初期の段階ではこのようであったが、生産力の上昇とともにその必要がなくなり、捕虜は生かされて生産に投入される。先にふれたように、武丁期をピークに祭祀に用いられる人間の数が減少していくのは、このためだと考えられている。しかし、もしそうだとすれば、中国以外の他の世界でも、奴隷制の初期の段階に同様な大量の捕虜殺人が行われたはずであるが、そのような残酷な例はまだ知られていない。

日本の学者たちも、殉葬者や斬首死体を奴隷と考え、戦争捕虜に来源するとする見方が一般的である。ただし、殉葬の根源には未開民族の神秘的で前論理的な心性が存在し、それが大量殺人という特異なあらわれ方をしたのは、殷の北方系遊牧民族的要素と王朝自体の専制化が関連しているとする見方がある。北方系遊牧民族では、『史記』匈奴列伝には匈奴単于に対する「臣妾数千百人」の殉死がみられ、モンゴル帝国でも、ジンギスカンに対して長官や将軍の子女40人が殉死したとされているなど、大量殉死の例が目立つ。殷の支配階層も、このような北方系遊牧民族に属する可能性があり、農耕民を征服する過程で大量の捕虜が生じ、それらが人身犠牲として祭祀に用いられたとする。そして、それが殷のように世界史に例のないほど肥大化したのは、

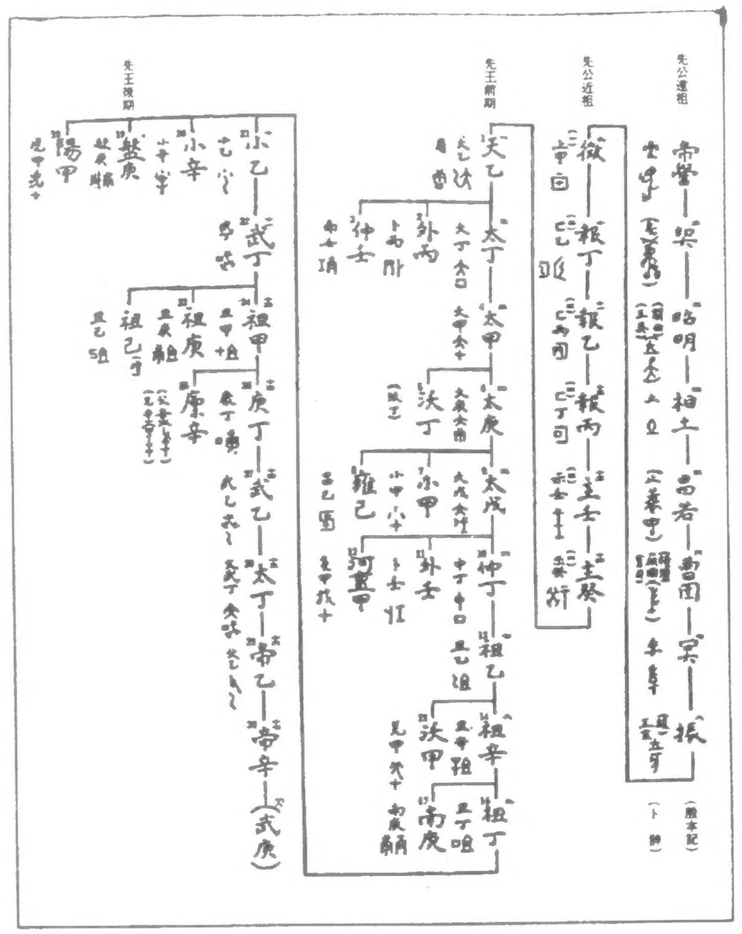


表1　殷王室世系図



小屯の殷墟

いる。小屯のC発掘区の乙七と名づけられている建築址の南で発見された、北、中、南の3グループに分けられる特殊な竪穴群がそれである。北グループでは、それぞれ乗員と戦車を埋めた五つの竪穴、五体完全なままの人間25人を埋めた五つの竪穴、斬首された死体125体を埋めた27の竪穴および子供や器物を埋めた竪穴が発見されている。中グループでは、馬1匹を伴った騎馬兵と思われる人間1人を埋めた竪穴一つと、やはり斬首された死体377体を埋めた78の竪穴が発見されている。ただし、南グループでは、銅器を埋めた竪穴一つだけであった。これらの竪穴が発見された当時、北グループは戦車隊、中グループは歩兵隊とみなされ、宮殿や殷王を悪霊から守るため、軍隊を編成のまま埋めたものとする考えが有力であったが、最近は斬首死体をも殷の兵士とみなしてよいか疑問とされている。

それにしても、これら小屯や前述の武官村大墓、1400号墓周辺の斬首死体を埋めた竪穴群は、その位置から考えて、ともに殷王室あるいは殷王に直接かかわるものであることは間違いないと思われる。そして、大墓の斬首死体も含めて、これらは殷王室の祭祀と関係して行われたものであることも確かであろう。甲骨文には、神々を祭る艾(伐)という儀礼がみえるが、字形からこれは人間の首を斬る儀礼だと解釈されている。また、祭祀のための犠牲として、1回に数十頭、数百頭、さらに千頭といった牛や羊などの動物を用いる例とならんで、人間千人を用いる例さえある。殷代では、多数の人間を祭祀の犠牲として用いることは普通であった。ある人の統計によると、甲骨文に見える祭祀に用いられた人間の犠牲数は13,052人にのぼるとされており、実際に殷墟で確認された斬首死体は2,327体にのぼっている。

大量人身犠牲の意味

以上、残酷な斬首死体の数を執拗に数えあげてきたが、殷代のこの時期に、なぜこのような中国史上のみならず世界史上にも類を見ないようなことが行われたのであろうか。まず原因として考えられるのは、巨大な王墓でもうかがわれるように、絶大な専制権力と、それにかかわる王の個人的性格ではなかろうか。『史記』の殷本紀によると、安陽に都が置かれてより後、第24代祖甲は「淫乱」であったため国が衰えたとされており、第27代武乙は「無道」で天神を侮辱する行為が多く、雷に打たれて死んだと記されている。そして、第29代帝乙の時には国はますます衰え、次の帝辛(紂王)は暴虐の限りをつくしたため、殷はついに滅びたとされている。紂王は酒好きで淫楽を好み、「酒池肉林」の宴を張り、重税を取り立てた。人民や諸侯が恨むと刑罰を重くし、銅柱に油をぬってその下で炭火をおこし、罪人にその上を渡らせ

註① 楊錫璋、楊宝成「従商代祭祀坑看商代奴隷社会的人性」(『考古』1977年1期) など。
註② 貝塚茂樹『貝塚茂樹著作集第一巻　中国の古代国家』(1976年、中央公論社)
註③ 伊藤道治『中国古代王朝の成形』(1975年、創文社)、赤塚忠『中国古代の宗教と文化－殷王朝の祭祀』(1977年、角川文庫)
註④ 松丸道雄「殷周国家の構造」(『岩波講座世界歴史4　古代4』1970年、岩波書店)

成されていたことは確かであろう。殷王朝が多数の異族から成る連合体であり、王室自体も異なった複数の集団から構成されていたとなると、殷王朝に強力な専制支配権力の存在を想定することは困難であろう。では、大墓や大量の殉葬、斬首による祭祀の盛行という専制権力の存在を思わせるような現象は何に由来するのであろうか。

この点に関して、殷王朝が以上のように祭祀を通して、多数の異族によって支えられていた連合的性格をもつものであったからこそ、生まれた現象ではないかとする見方もある。この考えでは、まず、殷王と服属異族長との関係は、祭祀を通じて「子」と「父」「母」の関係が設定された擬制的親族関係にもとづく連合的関係にあったとする。そして殷王自身は、生存中は先王の末端に位置するが、死後は王朝の観念上の支配者である先王の列に加えられることが予定された存在であった。それゆえ殷王の埋葬は、王が神となる国家的最重要行事であり、殷王を「父」とみなす「子」たる全構成諸族の協働によって盛大に行われねばならなかったとするのである。祭祀場の斬首死体も、殷の先王に対する同様の国家的行事として行われたものと理解されるが、なぜこのような形式をとらねばならなかったかという疑問は残る。

現在のところ、このような世界史上特異な現象がなぜ起こったのか、依然として謎であるが、さまざまな要素の複合によって起こった可能性が強い。注目されるのは、このような現象が、盤庚以後の殷代の全期間を通じて一様に起こったのではなく、前述のごとく武丁期をピークにかなり急激に減少していく点である。一方、甲骨文によると、武丁の後、祖甲の時代ごろから祖先神に対する規則正しい祭祀が王朝の中心的祭祀として行われるようになる。また、祖先神自体も上帝に代わって福を与えるものと観念され、「帝」の称号が与えられるようにもなる。このような、王朝における祖先神祭祀の重視は、祖先神を祭祀し、かつ死後祖先神に列せられることになっている王の権威を高め、王権の確立を促したと考えられる。そうすると、斬首による祭祀は、王権の確立、安定化とともに衰退していく傾向にあると考えられ、このような現象は王権の確立期に起こった一時的現象ではなかったかと思われる。しいて言えば、多分に殷族に色濃く残っていた原始的な心性を背景として、殷王朝が諸族を征服、統合していく過程の不安定な状況で起こった、かなり病的な現象ではなかったかと思われる。

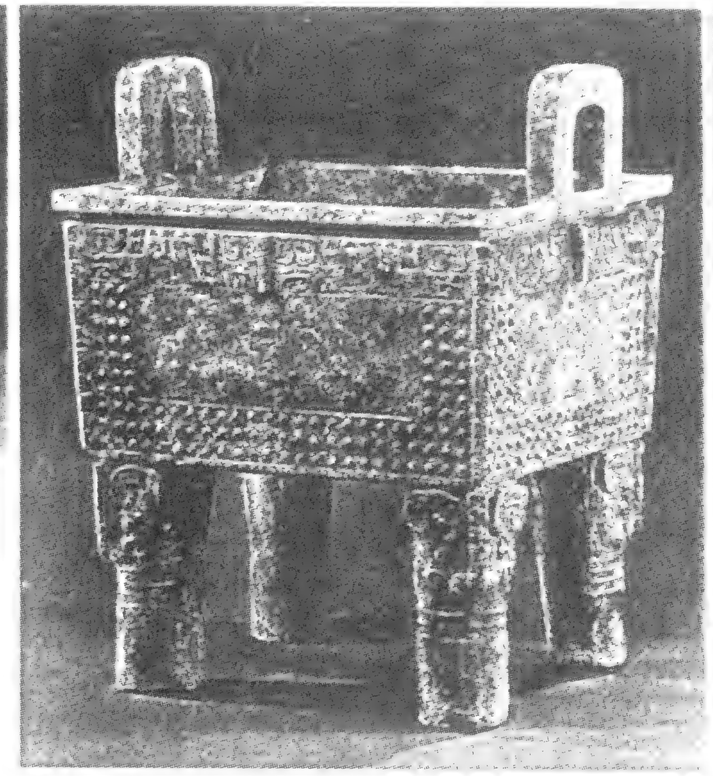
殷文化の伝統

これまで、殷代の社会と文化にかかわる特異な現象に眼を向けてきたが、殷とは中国史上いかなる存在であったのであろうか。殷は斬首による祭祀に見られるように、後代とは断絶した特異な王朝であったのであろうか。清末のすぐれた学者で、甲骨文の研究においても大きな仕事をした王国維は「殷周制度論」(『観堂集林』巻10所収)を著して、殷の制度・文化は周のそれと大きな相違があることを指摘した。王国維によると、殷と周はそれぞれ異なる文化圏に属し、周の制度が殷の制度と根本的に異なるところは、殷が兄弟・小子相続制をとったのに対して、周は長子相続制を確立したことにあるという。周はこの制度を基礎に、宗法制度や喪服制度を生み出し、あわせて子弟分封の制度や君臣関係を明確にする制度、いわゆる「封建制度」を生み出したとする。また、宗廟の数を規定する制度や同姓不婚の制度も周独特のものとしている。これらの制度は周のみならず、後の中国の社会を長く規定する制度であり、中国の文化的伝統は周に始まるということになる。

しかしこれに対して、現在では、すでに殷代の終わりごろには長子相続制は行われており、「封建制度」もやはりこのころには行われていた形跡があるとされている。また、至上神としての上帝の観念や、祭祀に牛や羊を犠牲として用いることなども周以後も継承されており、殷の重んじた祖先祭祀も後の中国の宗教・文化の根幹を成すものである。また近年、陝西省の周の本拠地である周原から、占卜に用いた甲骨文が発見されており、しかもその甲骨文から周が殷の先王を祭祀していることがわかり、文化的にも周が殷と全く異なる系統に属するものとは考えられなくなってきている。このように見てくると、周の制度・文化は、殷と全く異なるものではなく、周はむしろ殷の制度・文化のかなりの部分を受け継いでいることになる。殷においては、斬首による祭祀など、中国史上に類を見ない特異な現象も確かに存在するが、殷は独力で後に中国文化の伝統となるべきものを創りあげていたということができる。殷の文化は中国史上において、歴史的に断絶した特異な存在ではなく、中国の伝統文化の源泉を成すものと考えてよいであろう。



図3　王人



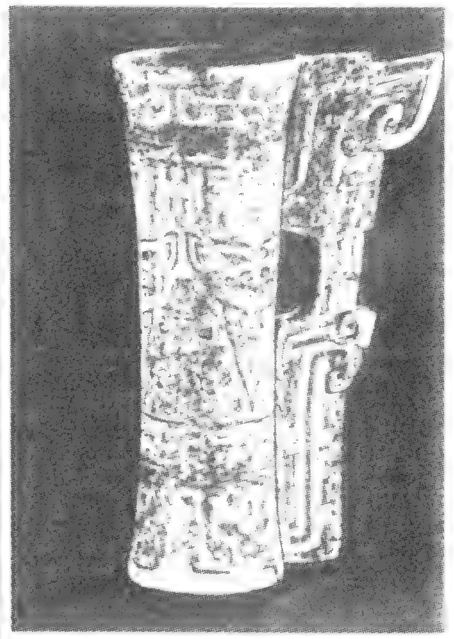


図5　象牙杯
図4　大方鼎　　(いずれも『殷虚婦好墓』よ

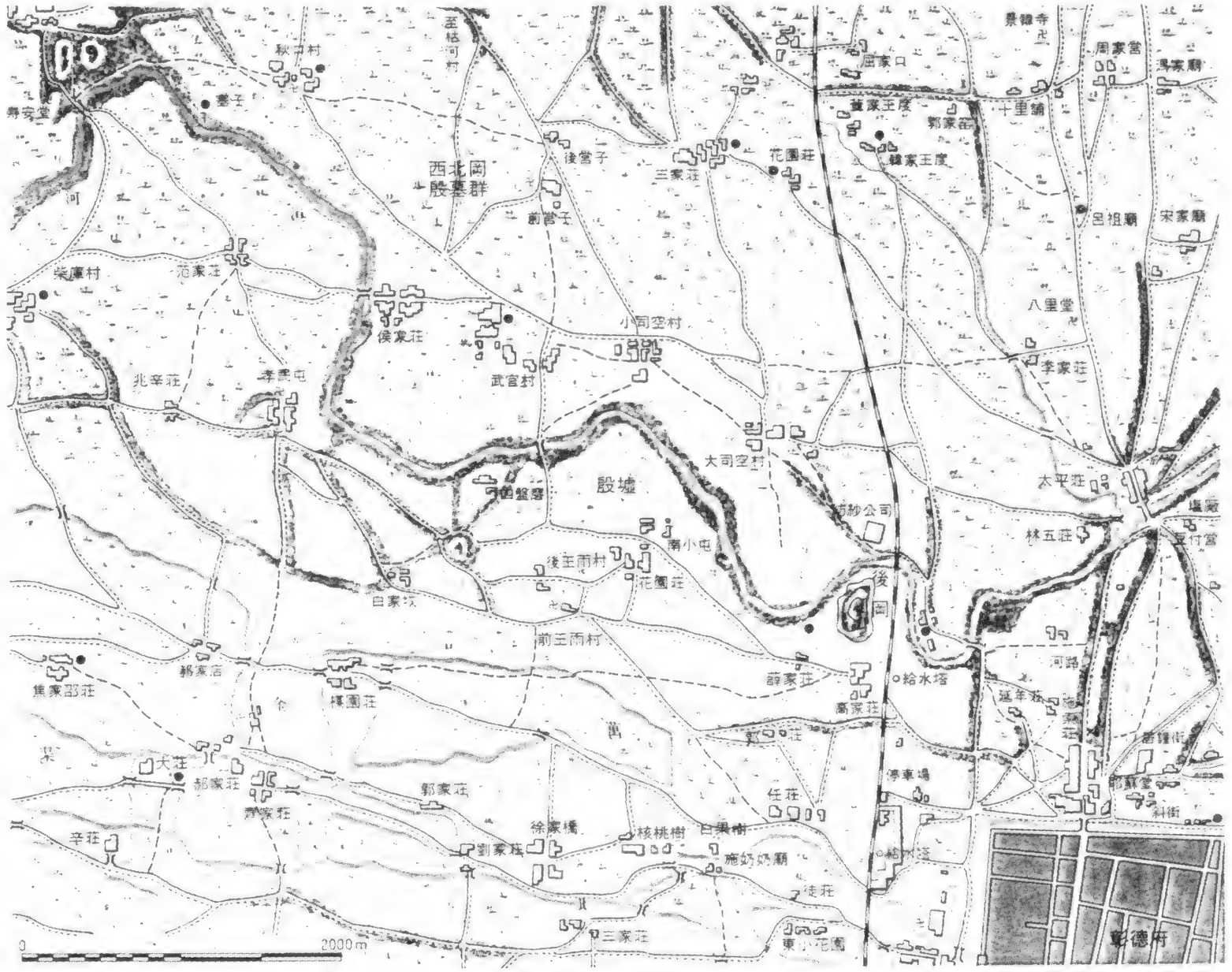
王朝の専制化によるのではないかとしている。しかし、殷の支配階層は、初期には遊牧民族的な征服者として中国に入ってきたかもしれないが、大量殉葬の行われた時代には定着農耕民化していた可能性が強い。また、確かに大墓や大量殉葬、斬首による祭祀の盛行は、殷王朝の専制化を思わせるものではあるが、これらは単純に専制化のあらわれと考えることができるであろうか。このことを考えるには、殷という王朝がどのような社会を基礎として成り立っていたかを明らかにする必要がある。

このような問題を考えるためには、やはり甲骨文の研究にたよらざるをえない。甲骨文とは、殷の神々に対してその神意を問うた占いの記録であり、卜辞とも呼ばれる。それは主として「貞人」と呼ばれる王朝の占い師が神意を問うたものであるが、その吉凶の判断は殷王自らが行ったと考えられている。占卜の内容は、大部分王朝の祭祀の可否に関するものであるが、穀物の豊凶、風雨などの自然現象の有無、戦争の可否、狩猟や旅行などにおける王の行動に関する安否、十日間（旬）や毎夜の吉凶などに及び、王朝や王に関係すると考えられる、あらゆることが占われている。このため甲骨文は、王朝を中心とした殷の社会全体を明らかにする上で、最も重要な材料であるといってよい。

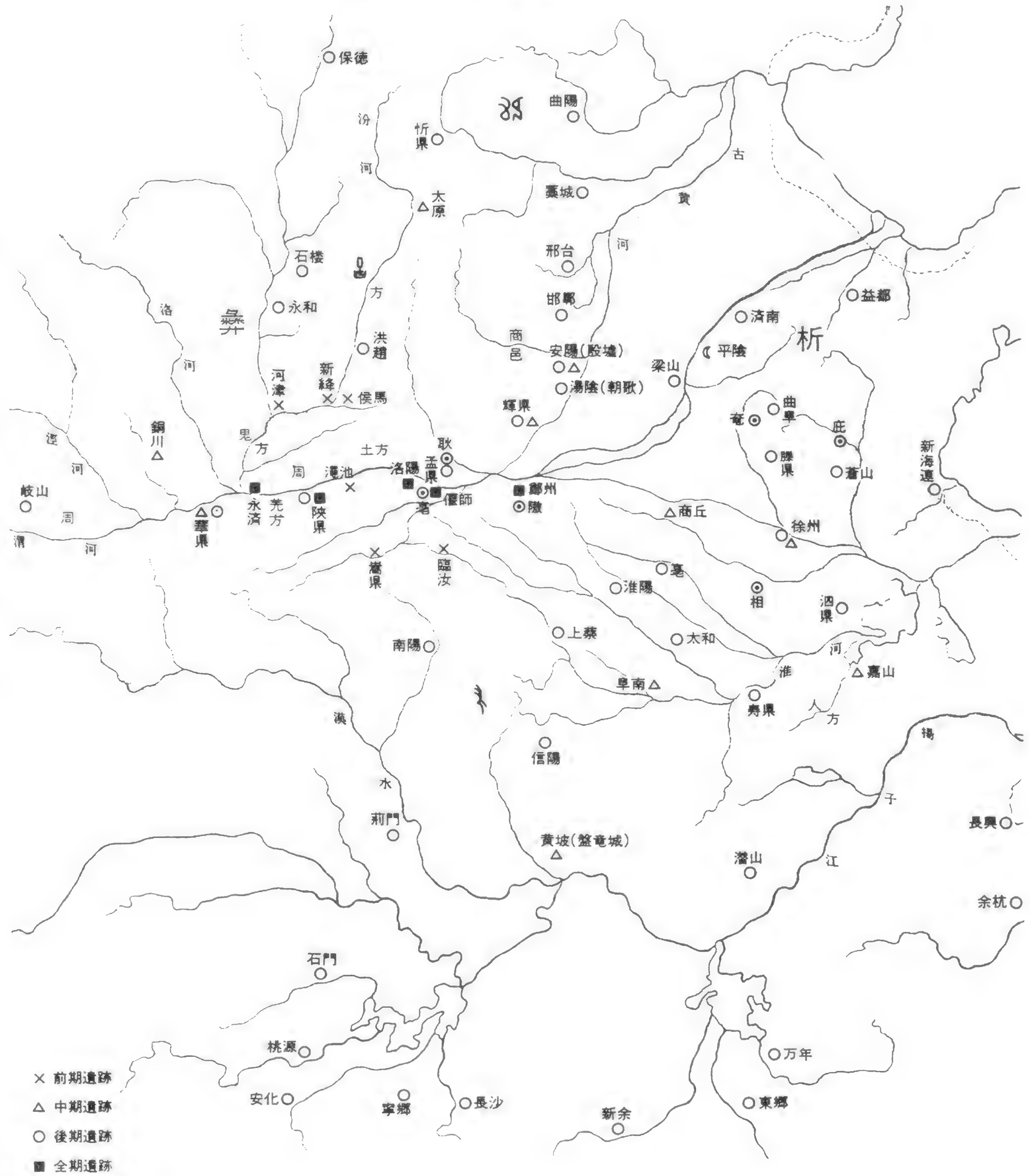
まず結論から言えば、現在のところ、殷王朝は殷族を中心として、諸族が祭祀を通して連合した連合国家ではなかったかと考えられている。甲骨文にはさまざまな神々がみられるが、それらは大きくわけて上帝、自然神、祖先神の3種に分類される。上帝は直接祭祀の対象にならない抽象的な神であり、天の至上神として気候など自然現象を支配し、人間に対して一方的に禍福をもたらす存在であった。これに対して、自然神や祖先神も人間に禍福をもたらすものであったが、祭祀することによって人間がコントロールできる、より身近な存在であった。このうち自然神とは黄河の神である「河」、崇山の神と考えられる「𠂤」〈音不明〉など山川の神々である。これらは地名や族名としても甲骨文にあらわれることから、もともとは殷以外の族の族神であったと考えられる。自然神はもともと固有の族によって祭祀された神であったが、その族が殷に服属すると、殷によって祭祀されるようになったものであるとされている。祖先神とは、一般には殷族の先王やその妃（先妣）を指すが、殷の王系表の最初の方には、夔（帝嚳）、夒〈音不明〉（契）や王亥（振）など一般の先王と異なる名称をもったものが見られ、先公と称されている（表1）。これらは祖先神というより、祭祀において自然現象に密接に作用している点で、むしろ自然神に近い。したがって、これら先公も、もともと族神であった可能性が強い。この場合も、殷が異族を服属させた時、異族が奉じていた族神を殷王の系図に取り込んだものと考えられる。そして、これら自然神や先公が殷によって祭祀されていることから考えて、殷族とそれに服属した族との関係は、一方的支配の関係ではなく、むしろ連合というようなゆるい関係であったということができる。

このようなゆるい関係は、殷王朝の中核を成す王室の構成についてもいえる。王朝の占卜を行った「貞人」集団は、王の代がかわるごとに大部分入れかわり、祭祀の方法などもそれによって変化することもある。それは、特に王位継承が兄弟の間で行われた場合に顕著であり、兄弟は異なった集団を背後にもっていたのではないかと考えられる。あるいは、兄弟は実際には直接の血縁関係はなく、殷族内の異なる集団の長が交代で王位を継いだとする説もある。いずれにしても、王室自体も複数の集団によって構

河南省安陽殷墟周辺地形図



殷代主要遺跡分布図



一一～一二

資料図版

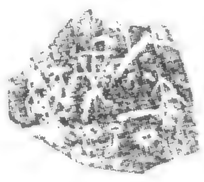
写真と拓本

編　集　　伊藤道治（神戸大学教授）

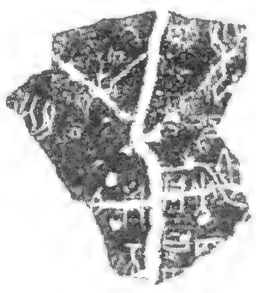
凡　例

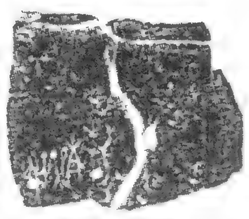
1. 本書は天理参考館所蔵の甲骨文資料のうちから、692点を選んで収録したものである。
2. 資料の配列は、時期と類別によった。時期の区分は、主として陳夢家『殷虚卜辞綜述』（1956年　科学出版社　北京）によった。
3. 資料番号の頭に冠した「S」は亀甲、「B」は牛骨、「T」は泥に残っている文字を示す。また、尾に付した「b」は背面、「c」は骨臼部または側面を示す。
4. カラー図版は現物より拡大したもの、モノクローム図版は原寸大である。
5. モノクローム図版は左ページに写真を、右ページには拓本を、対称になるように配置した。
6. カラー図版に付した番号は、モノクローム図版の資料番号と同じである。ただし、P.21下段とP.61上段左の資料については、モノクローム図版に収録していないので本館の所蔵整理番号を付したが、その番号の頭に冠した「王」の字は王国維旧蔵分であることを示す。
7. 天理大学附属天理参考館の名称は、表紙以外ではすべて天理参考館と略した。

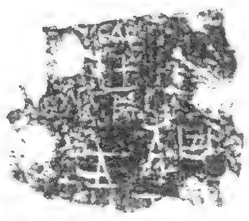

B001


S002

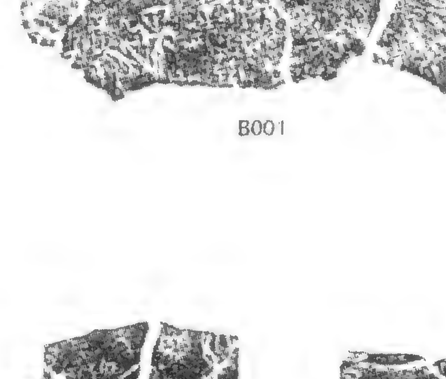

S005


S003


S004


S004b


B007

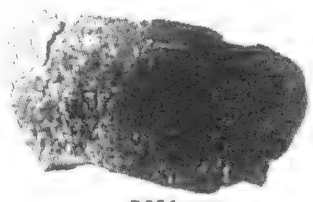

B006

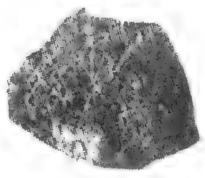

B006c

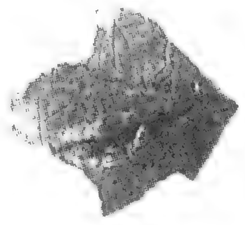

B008

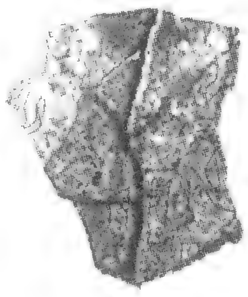

S009

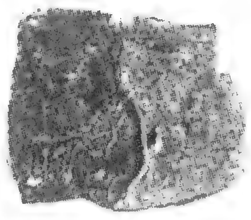

S009b

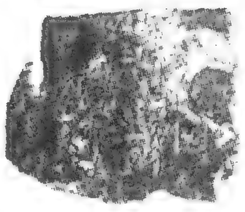

B001


S002


S005


S003


S004

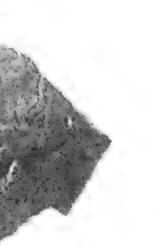

S004b


B007

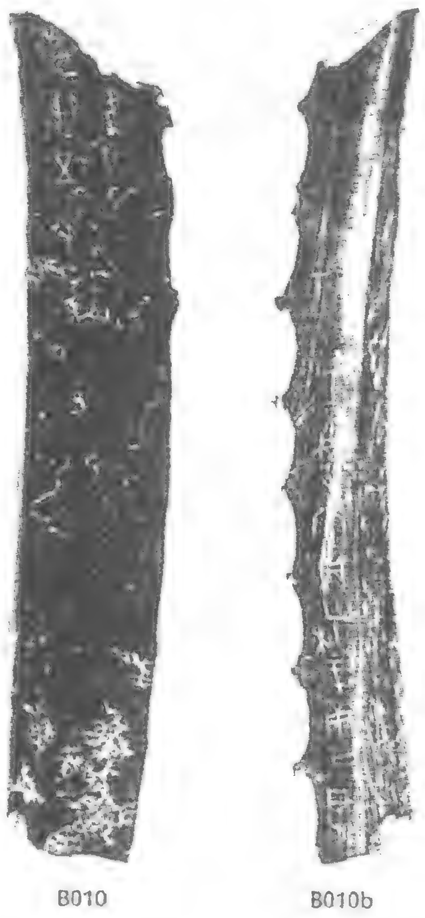
B006

B006c

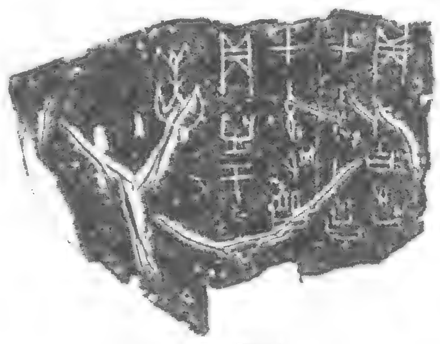

B008


S009


S009b


B010

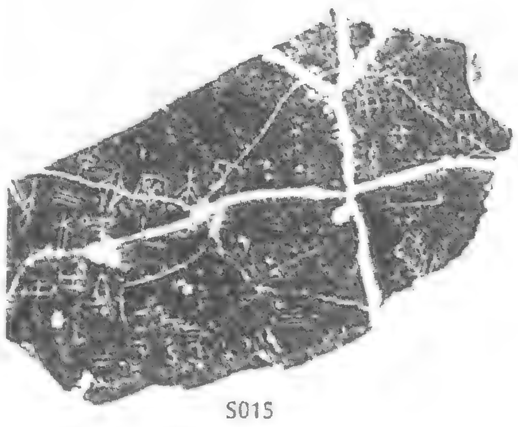
B010b


B011


B012


B013


B014


S015


B016

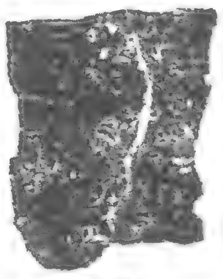

B017

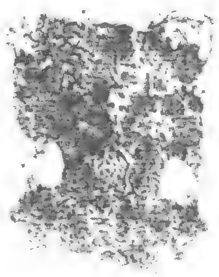

S018


S019


B020


S021

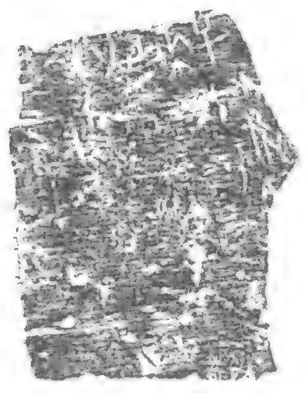

S023


S023b


S022


B026

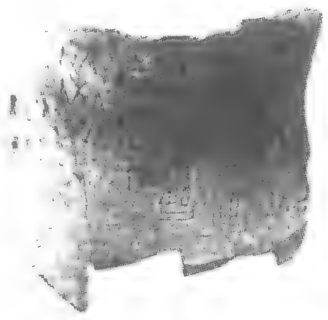

S024


S025


S027

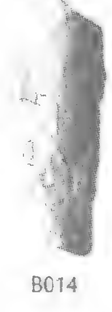

B010

B010b

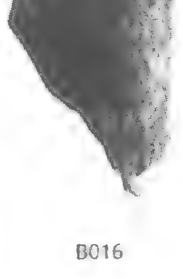

B011

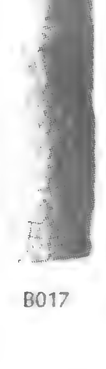

B012


B013

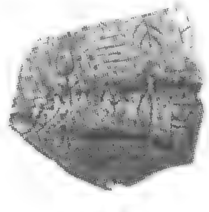

B014

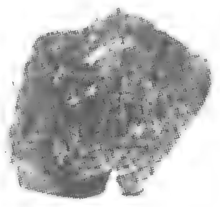

S015


B016

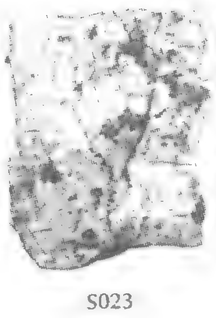

B017

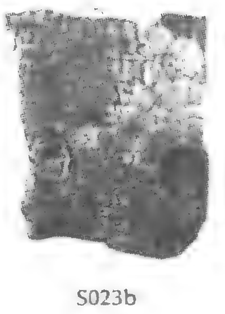

S018

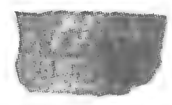

S019

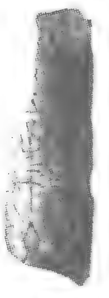

B020


S021

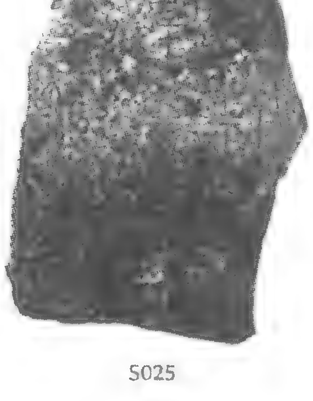

S023


S023b

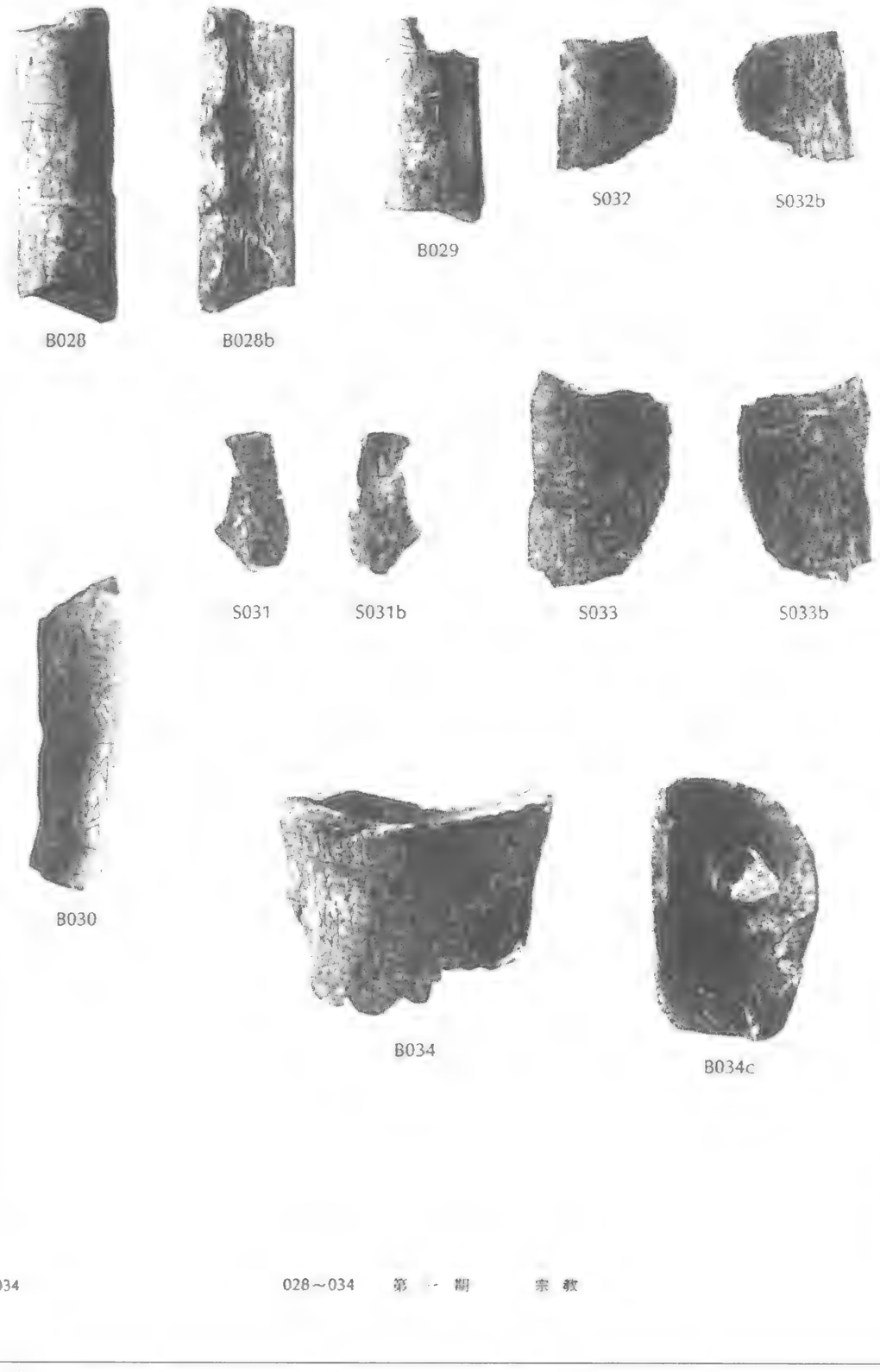

S022

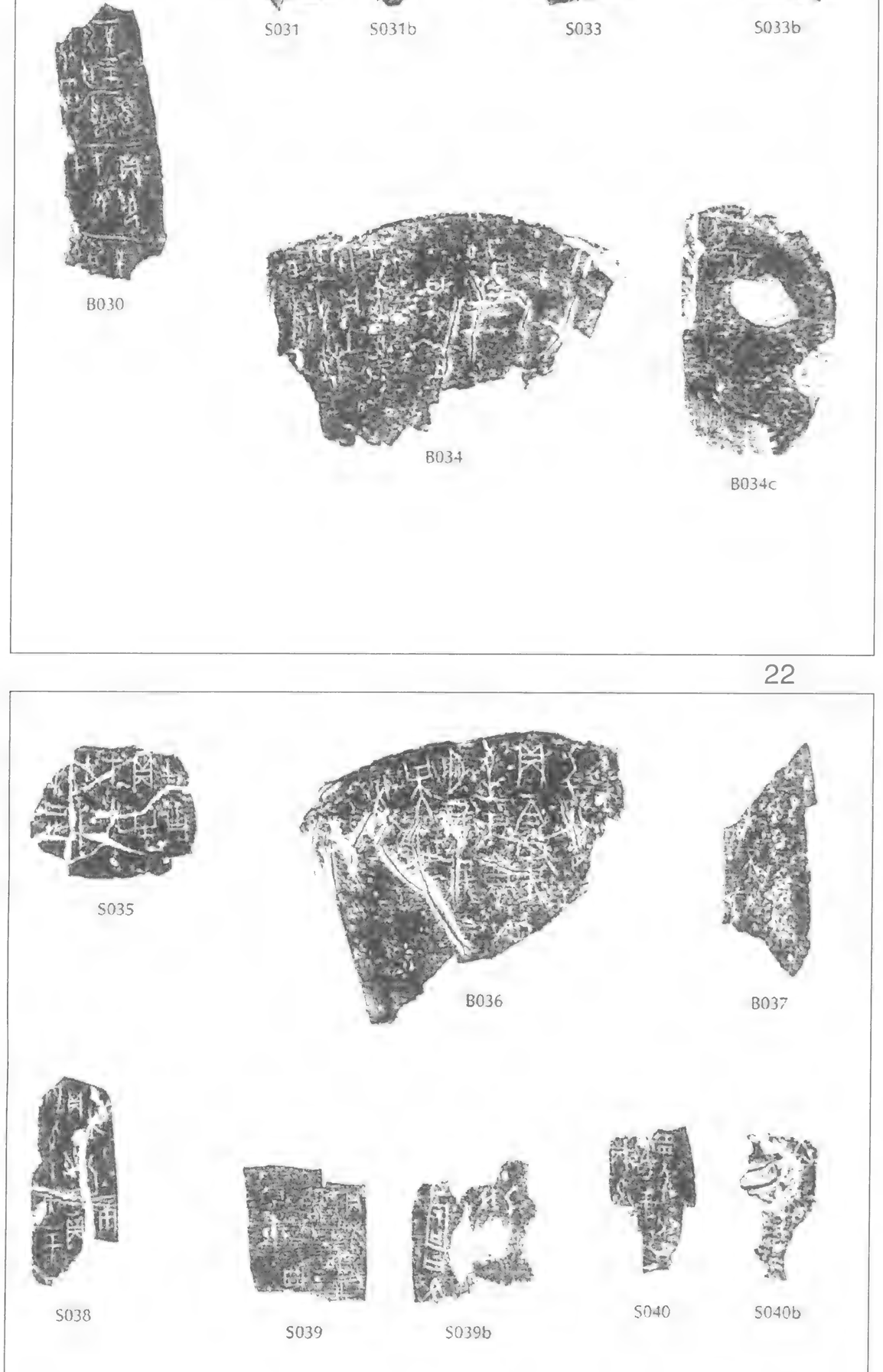

B026

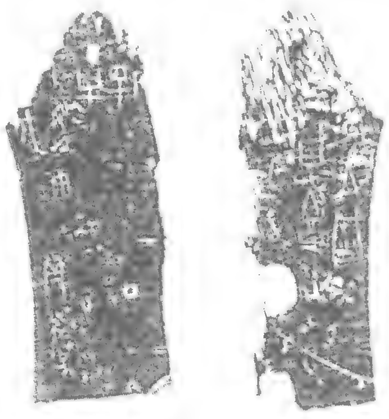

S024


S025


S027

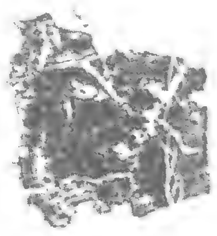

B028
B028b
B029
S032
S032b
S031
S031b
S033
S033b
B030
B034
B034c

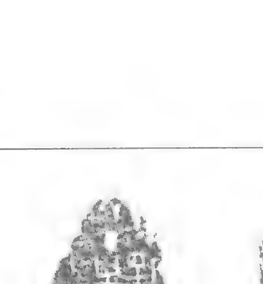

S035
B036
B037
S038
S039
S039b
S040
S040b
S041
B042
S043
S043b


B044

B044b

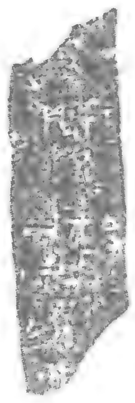

S045

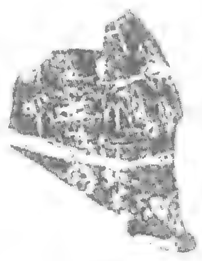

S045b

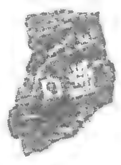

S046


S049


S048

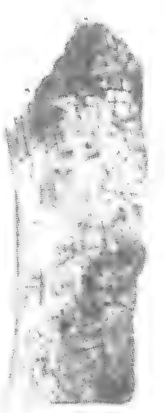

B050

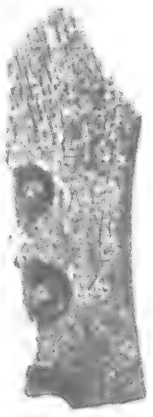

S051

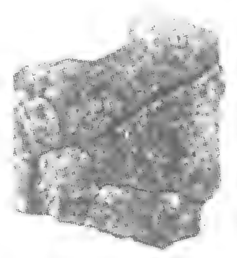

B052

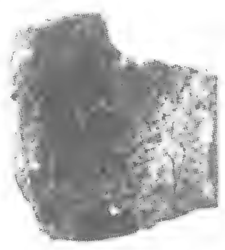

B053


B054


B044


B044b


S045


S045b


S046

S047

S049


S048

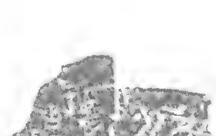

B050


S051


B052


B053


B054


S055


T056


S057

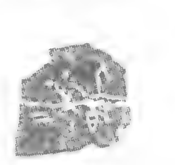
B058

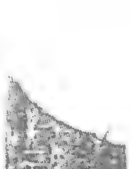

B059

B060


B061


S062


B063

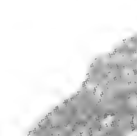

B064


B065


B065b




S067


S055


T056

S057

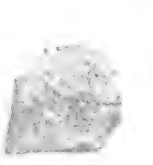
B058


B059

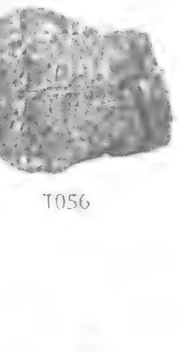
B060

B061

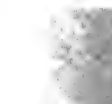
S062


B063


B064


B065


B065b




S067


S068


S068b


B069


B069b


S073

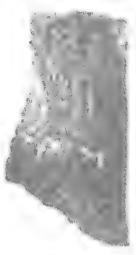

B070

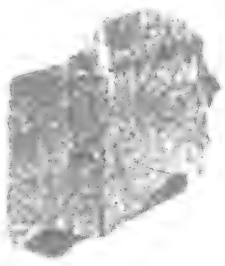

B070b

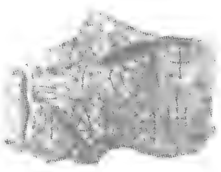
S071

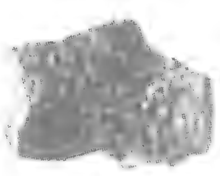

S075


S075b


B072


S074


S076


S076b


B070


B070b


S071

S073


S075

S075b


B072

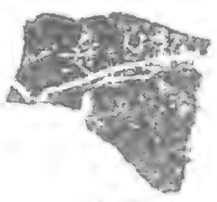

S074


S076

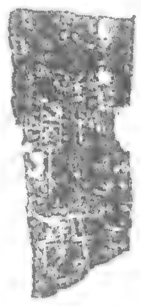

S076b

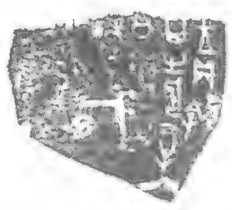

S077


S078


S079


B080


B081


S082


S083


B084

B085

S087

S088

S089

S086

B090

S091

B092


B093


S094

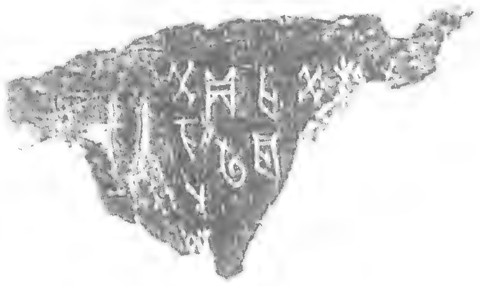

S095


B097

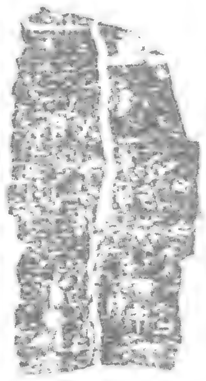

B096


S098


B099

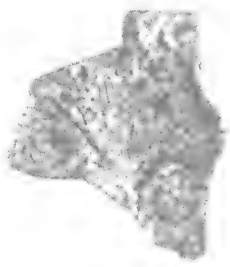

B100


B101


S102


B093

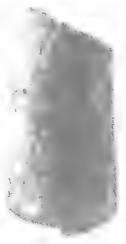

S094


S095


B097


B096


S098


B099


B100


B101


S102


B103


B103b

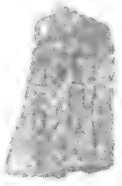

B104


B105


B106


B106b


B107


S108


B109


B110

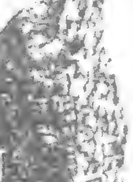

B093


S094

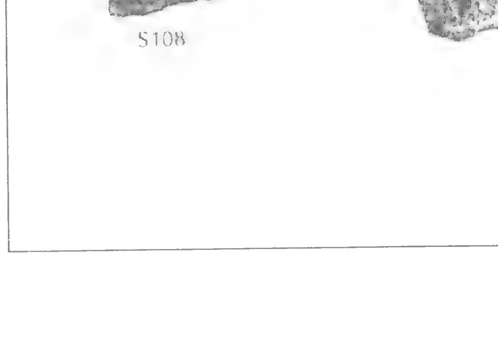

S095

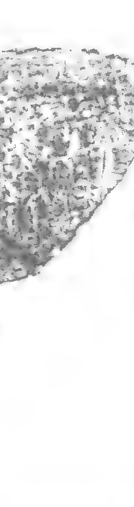

B097


B096


S098


B099


B100


B101


S102

B103

B103b

B104

B105

B106

B106b

B107

S108

B109

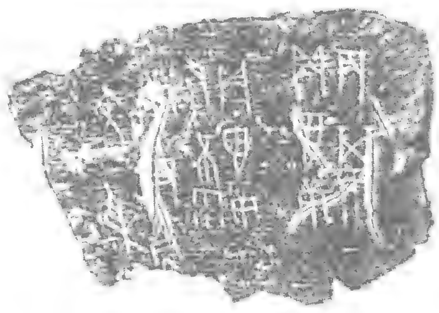
B110


B111

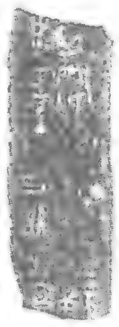
B111b


S112


S113


B114


B117


B119


S115


B116


S118

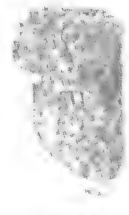

B111

B111b


S112

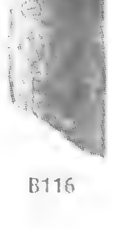

S113


B114


B117


B119

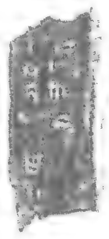

S115

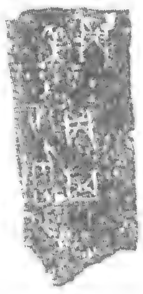

B116


S118


B120


S121


B122

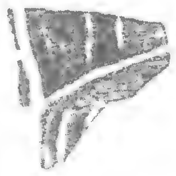

B123


B123b

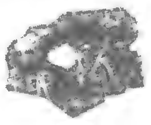

B124


B125

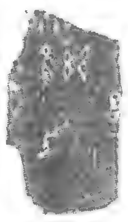

B126


S127


S127b


B128

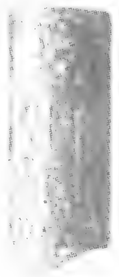

S129

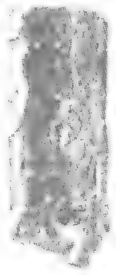

B130

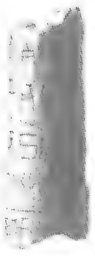

B120


S121


B122

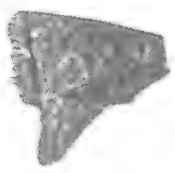

B123


B123b

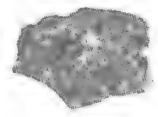

B124


B125

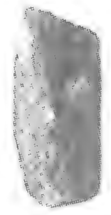

B126

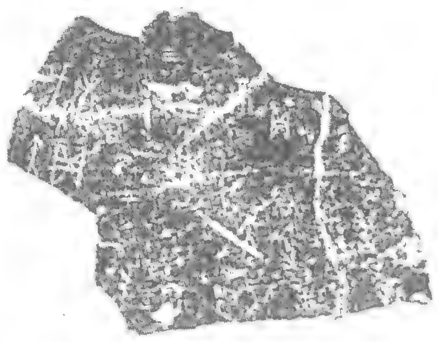

S127


S127b


B128


S129


B130

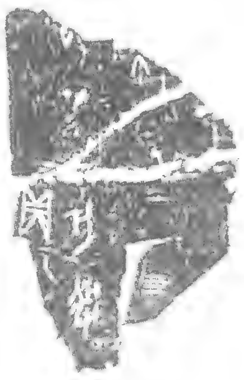

S131


S133

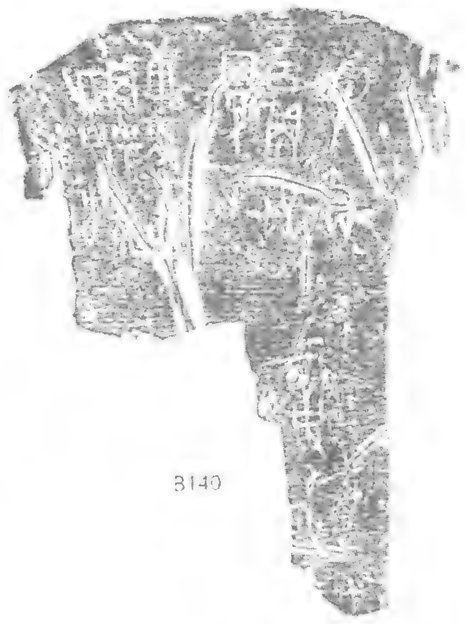

S134


B136


B138


S132


B135


B140

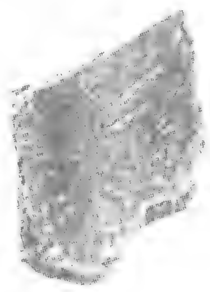

S137


S139

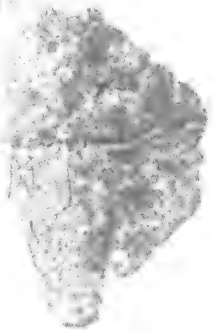

S131


S133


S134

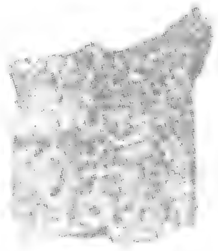

B136


B138


S132

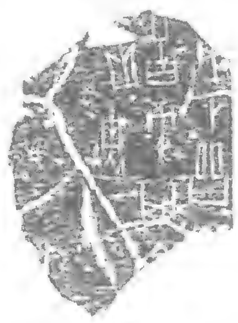

B135


B140


S137


S139


B141


S142


S143

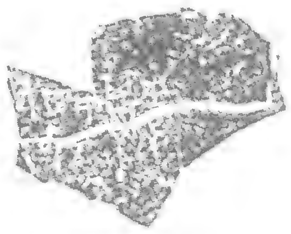

B144


B145

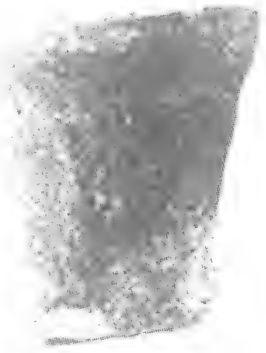

B145c

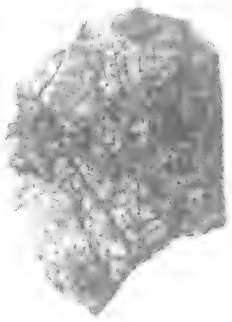

B146


B147


S148

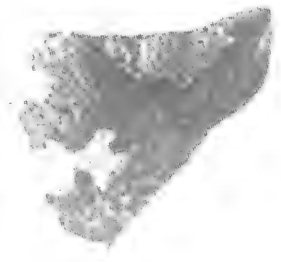

B149


B141


S142


S143

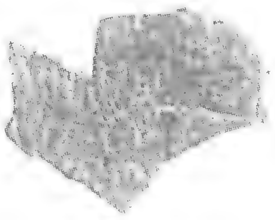

B144


B145


B145c


B146

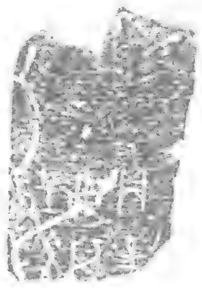

B147


S148


B149


B150

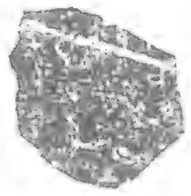

S151

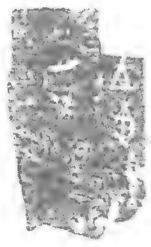

S153


S153b


B152


S154

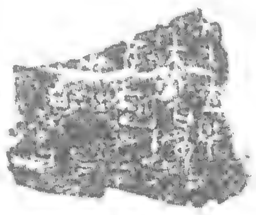

S156

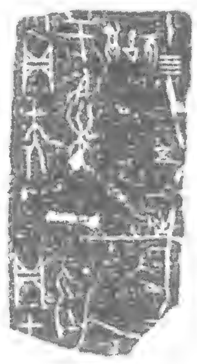

S157


S155


S157b

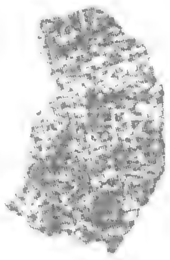

B158


S159

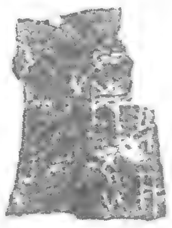

S160

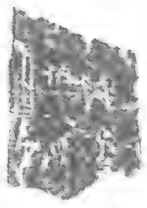

B161


S162

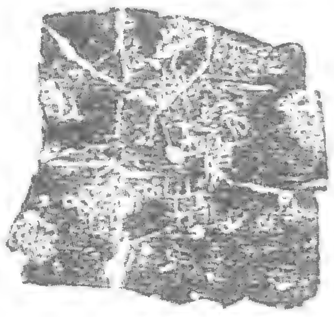

S163


S164


B165


B168


B167


S169

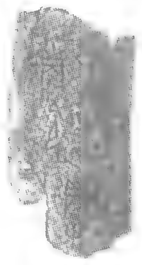

S169b

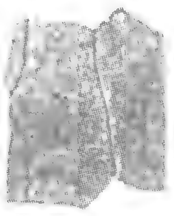

B150

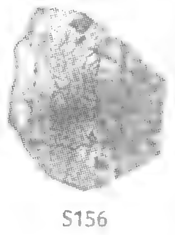

S151

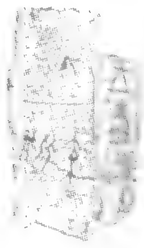

S153

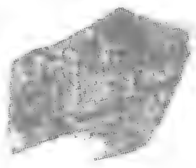

S153b


B152


S154

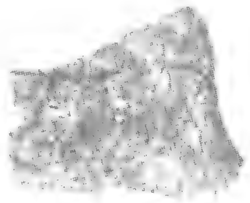

S156


S157


S155

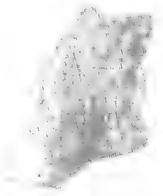

S157b


B158

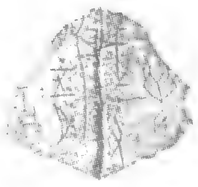

S159


S160


B161

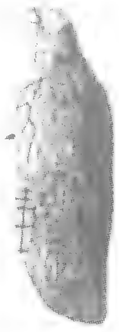

S162

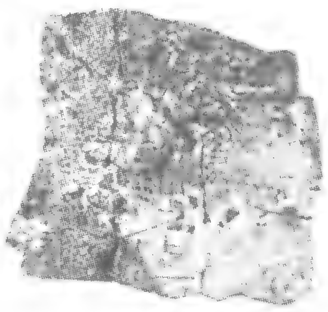

S163

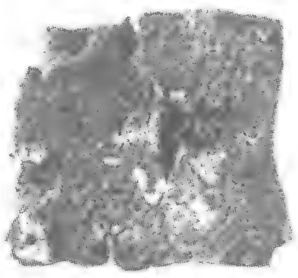

S164


B165


S166


B167

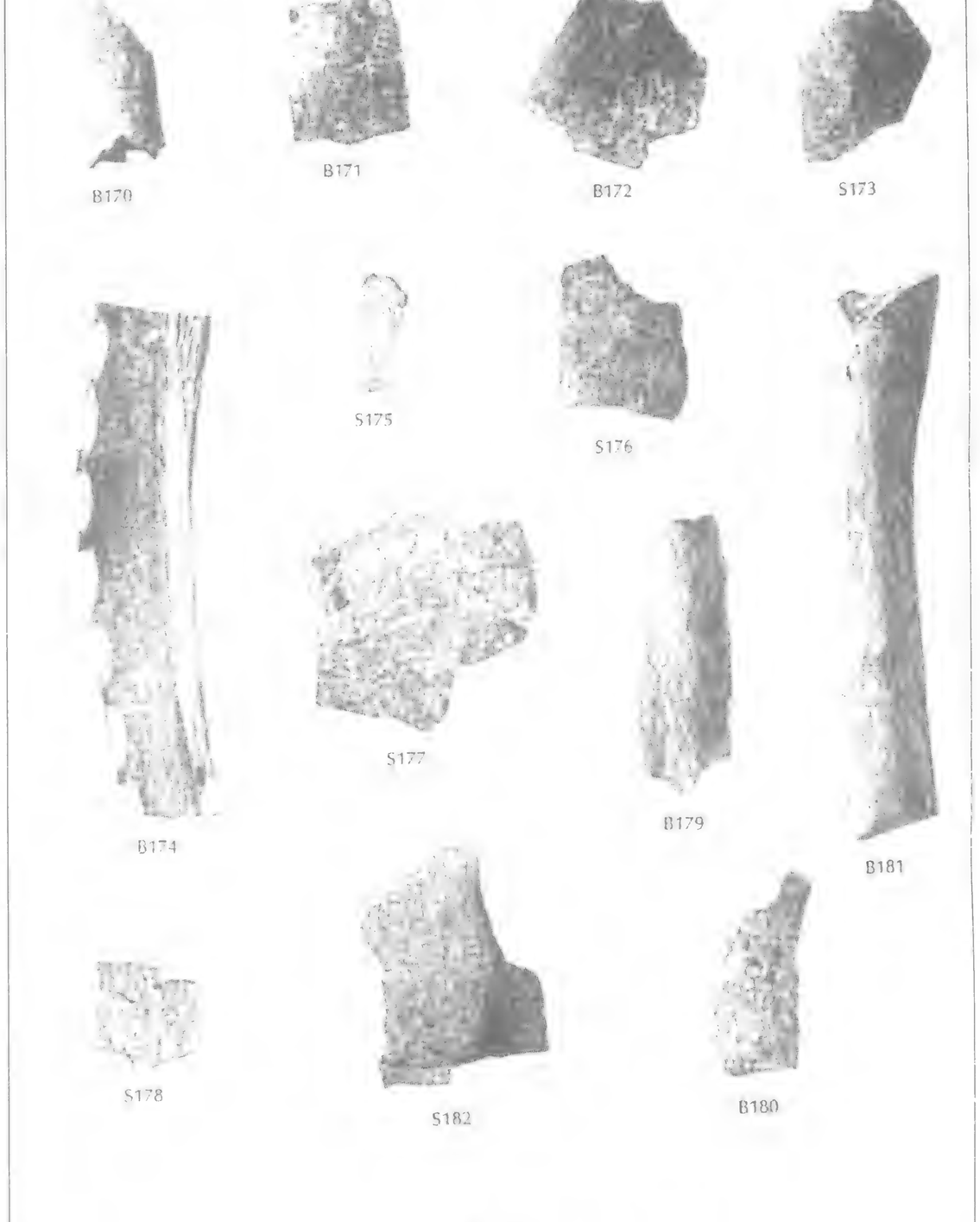

S169

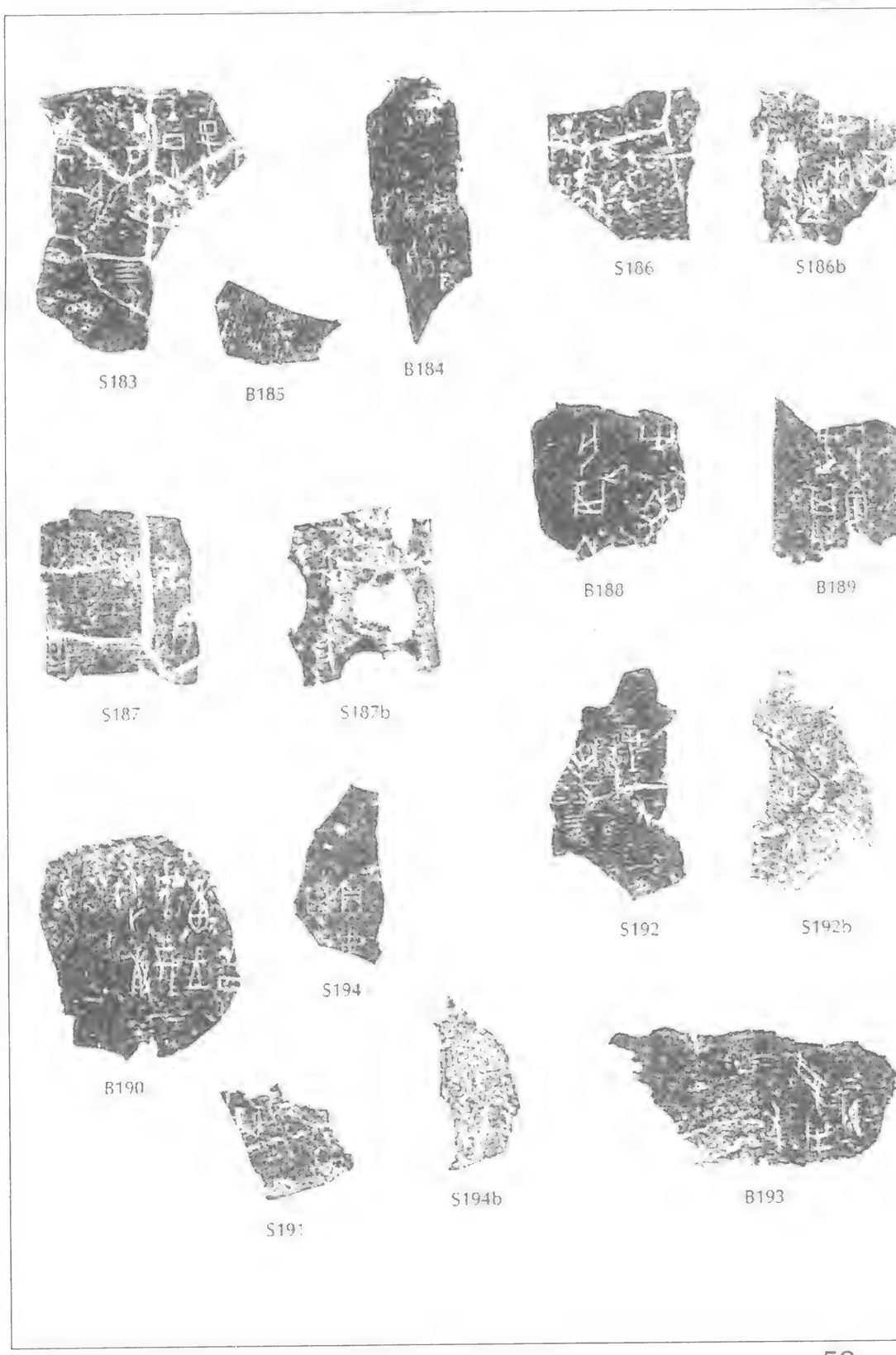

S169b

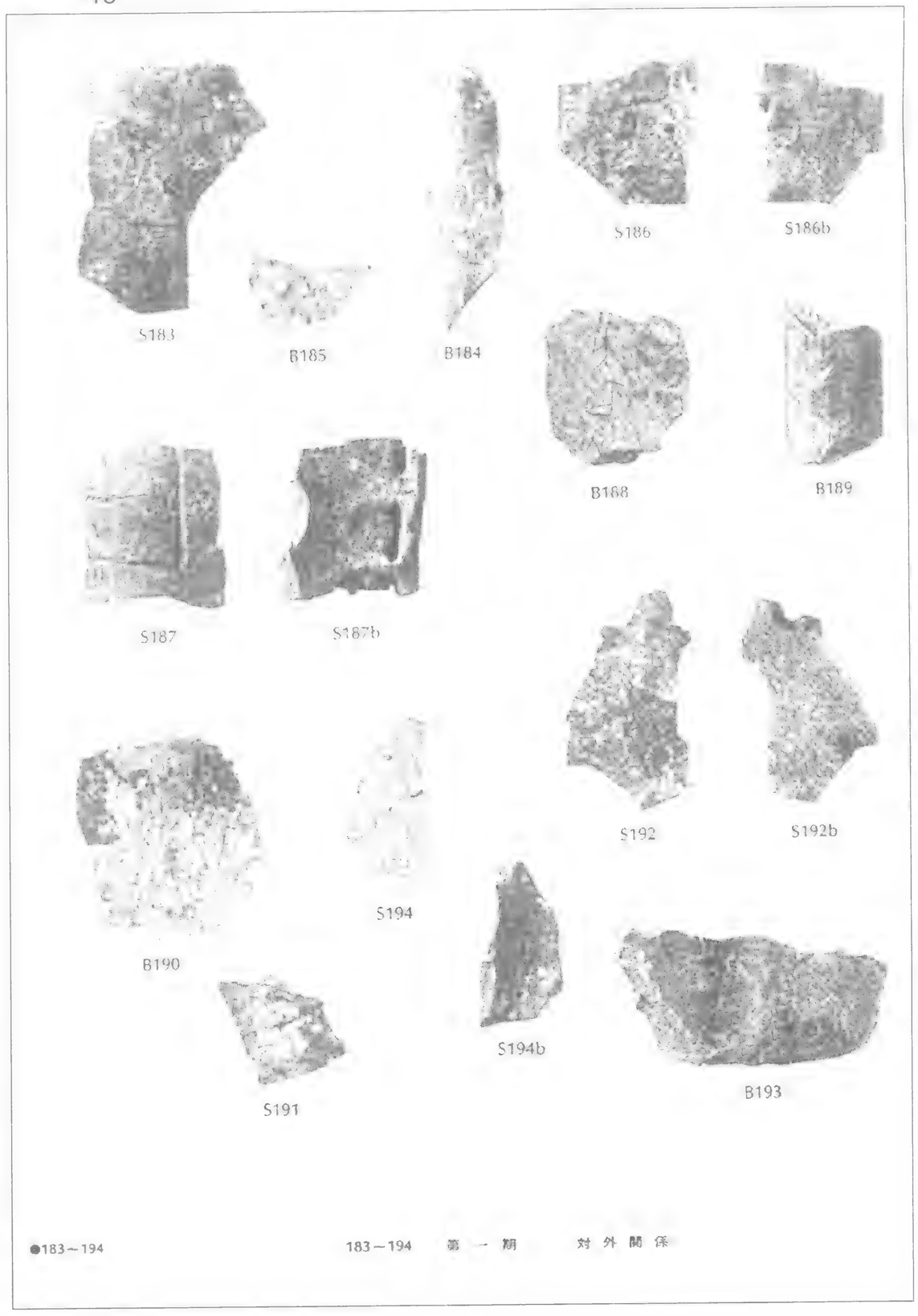
●150～158　150～158　第一期　対外關係

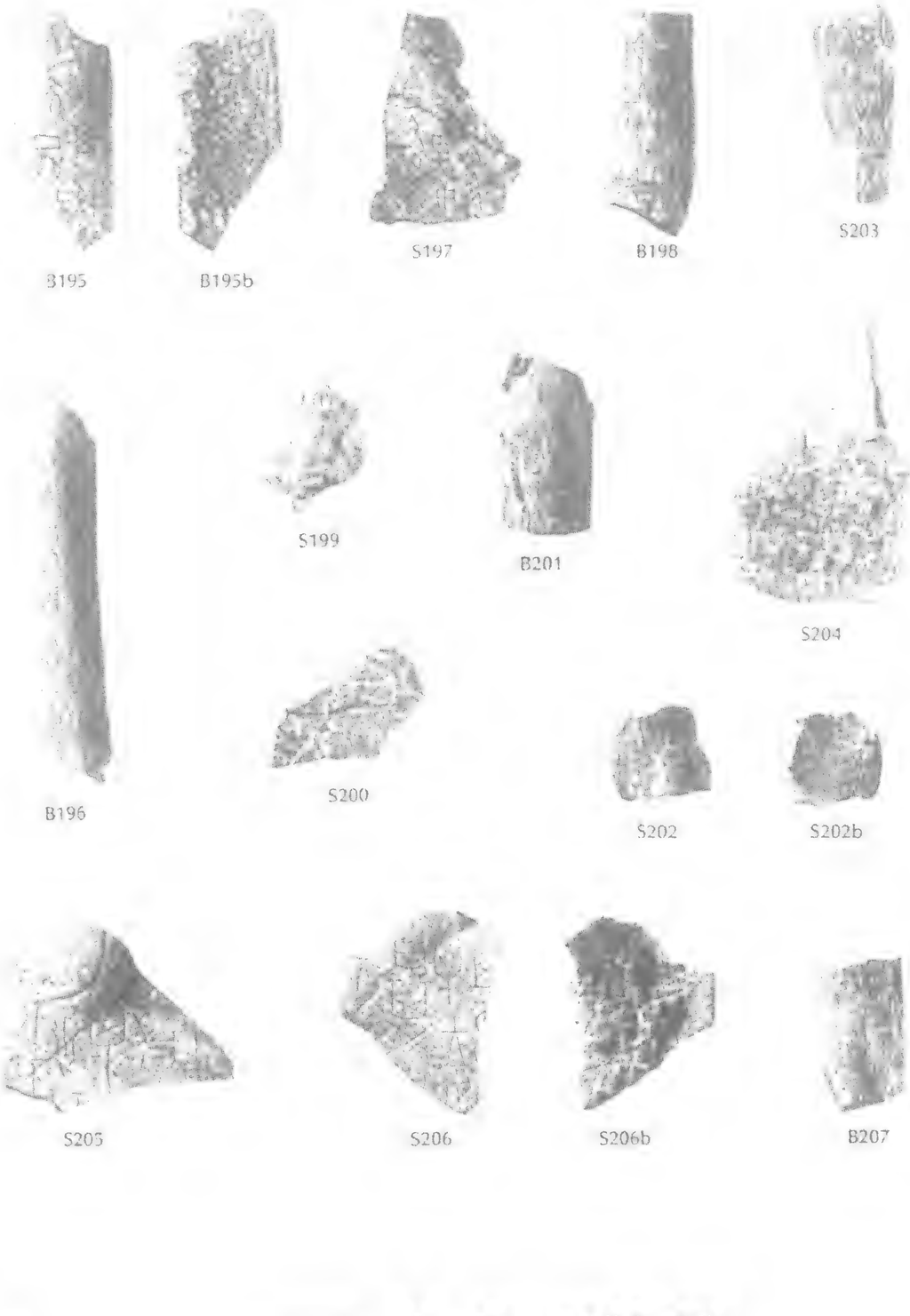
●159～169　159～169　第一期　対外關係


B170
B171
B172
S173
S175
S176
S177
B174
B179
B181
S178
S182
B180

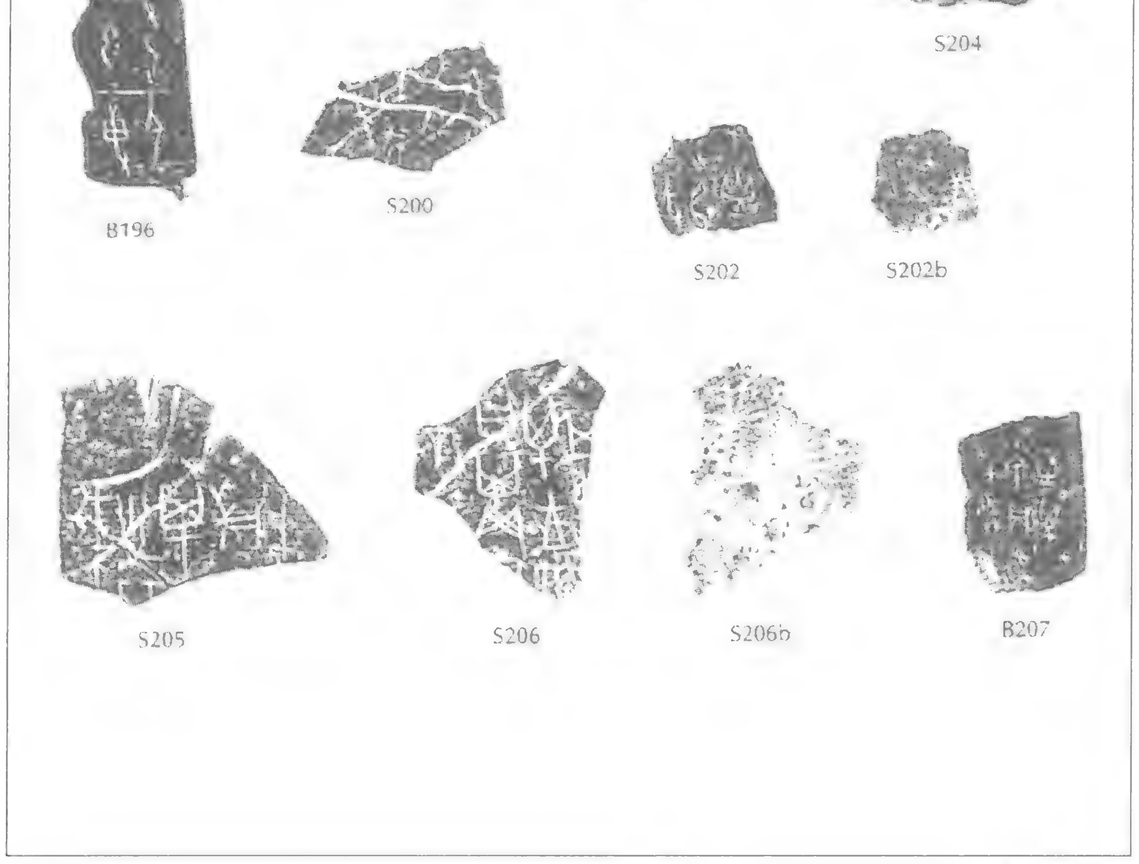

B170
B171
B172
S173
S175
S176
S177
B174
B179
B181
S178
S182
B180


S183
B185
B184
S186
S186b
B188
B189
S187
S187b
S192
S192b
B190
S194
S194b
B193
S191


S183
B185
B184
S186
S186b
B188
B189
S187
S187b
S192
S192b
B190
S194
S194b
B193
S191

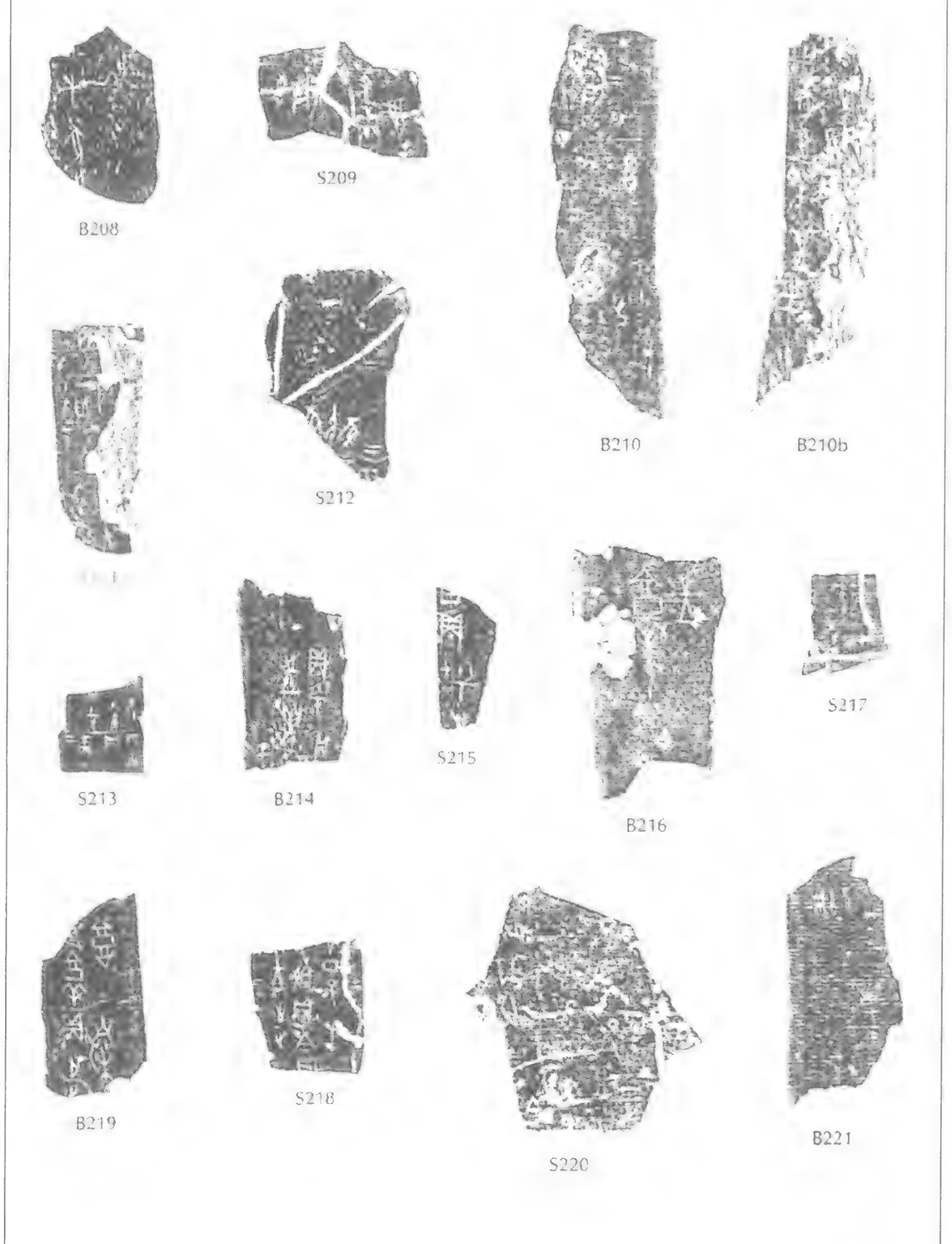


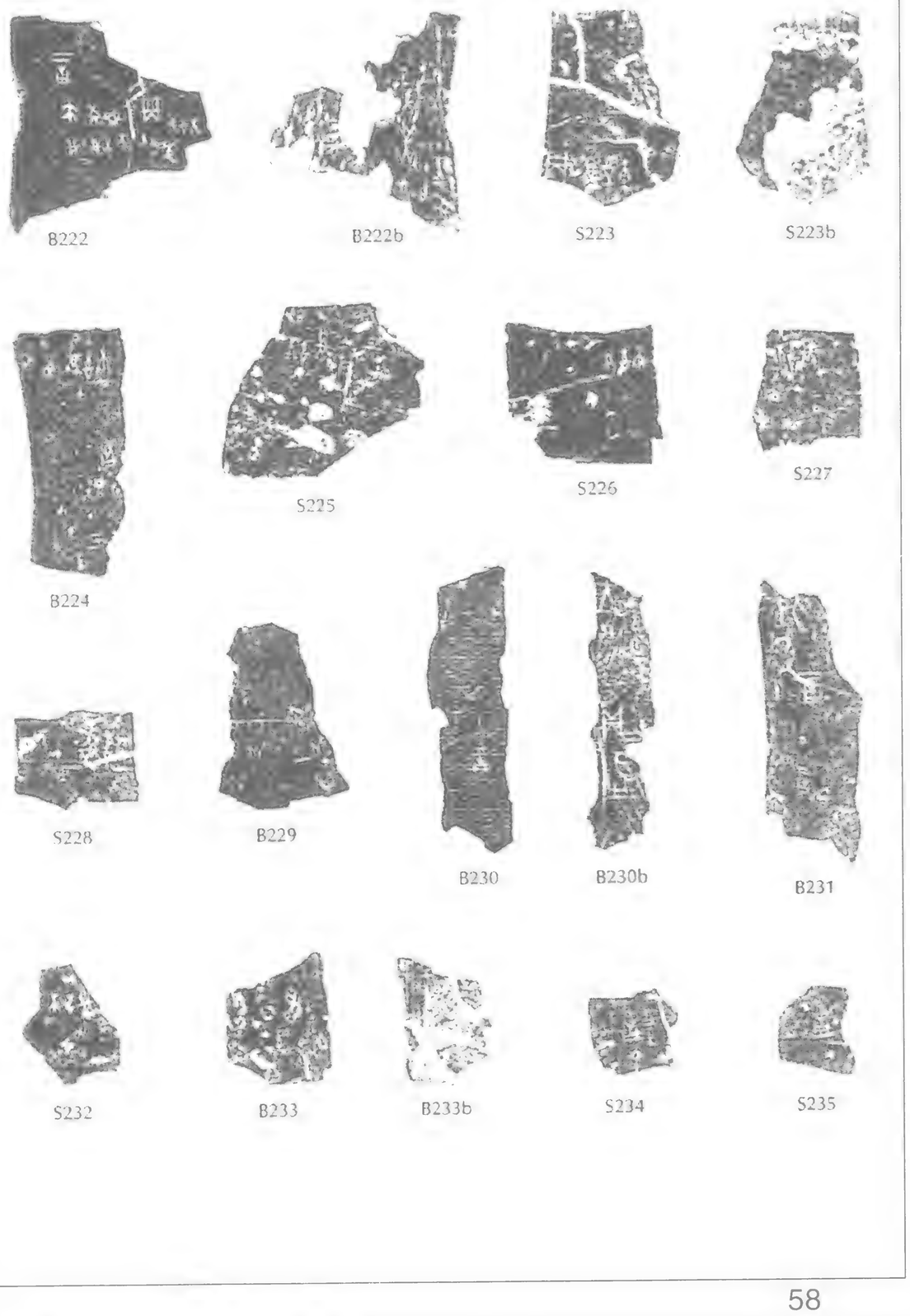
●195～207　195～207　第　…　期　対外關係・狩獵



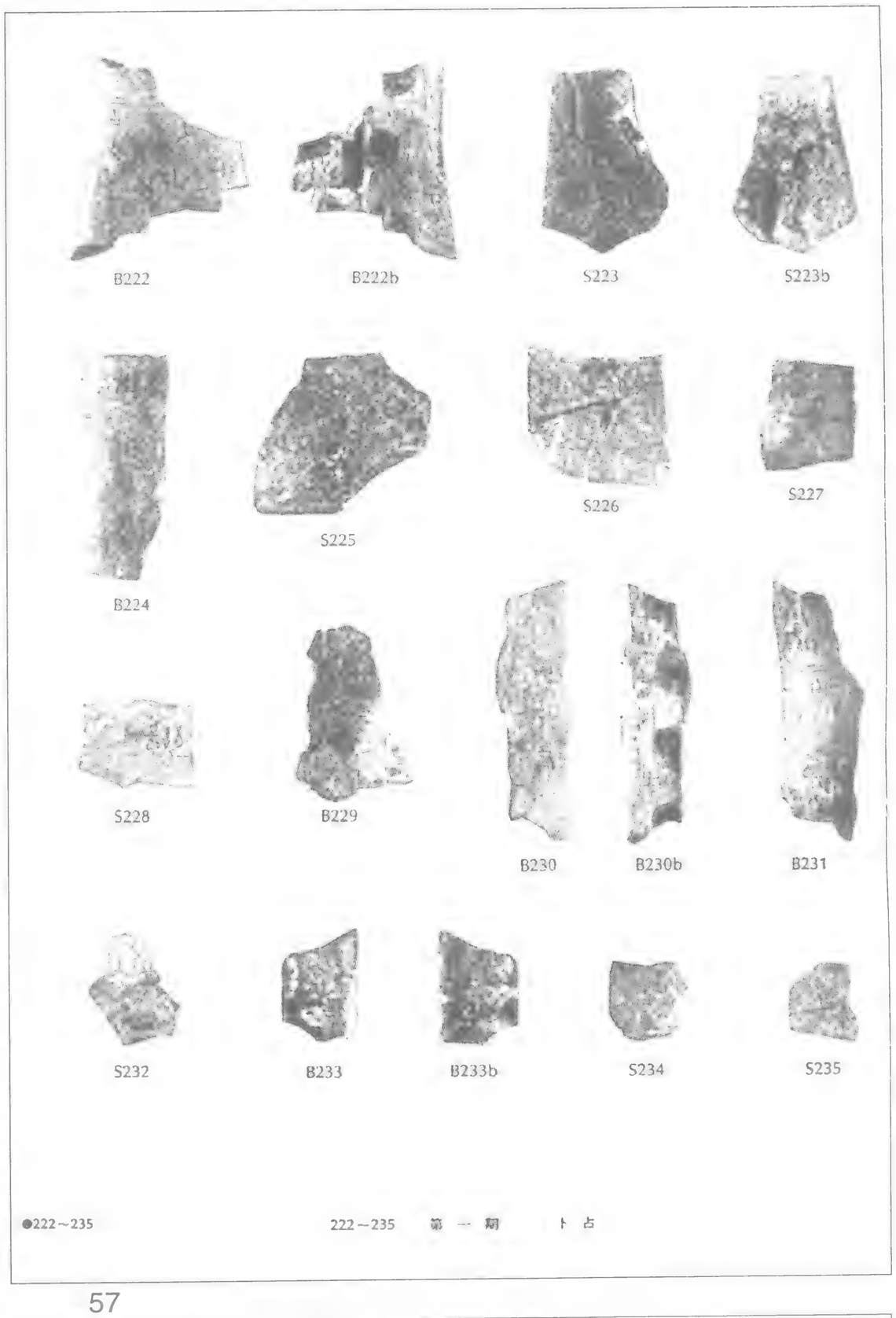


●208～221　208～221　第　…　期　狩獵・往來・卜占



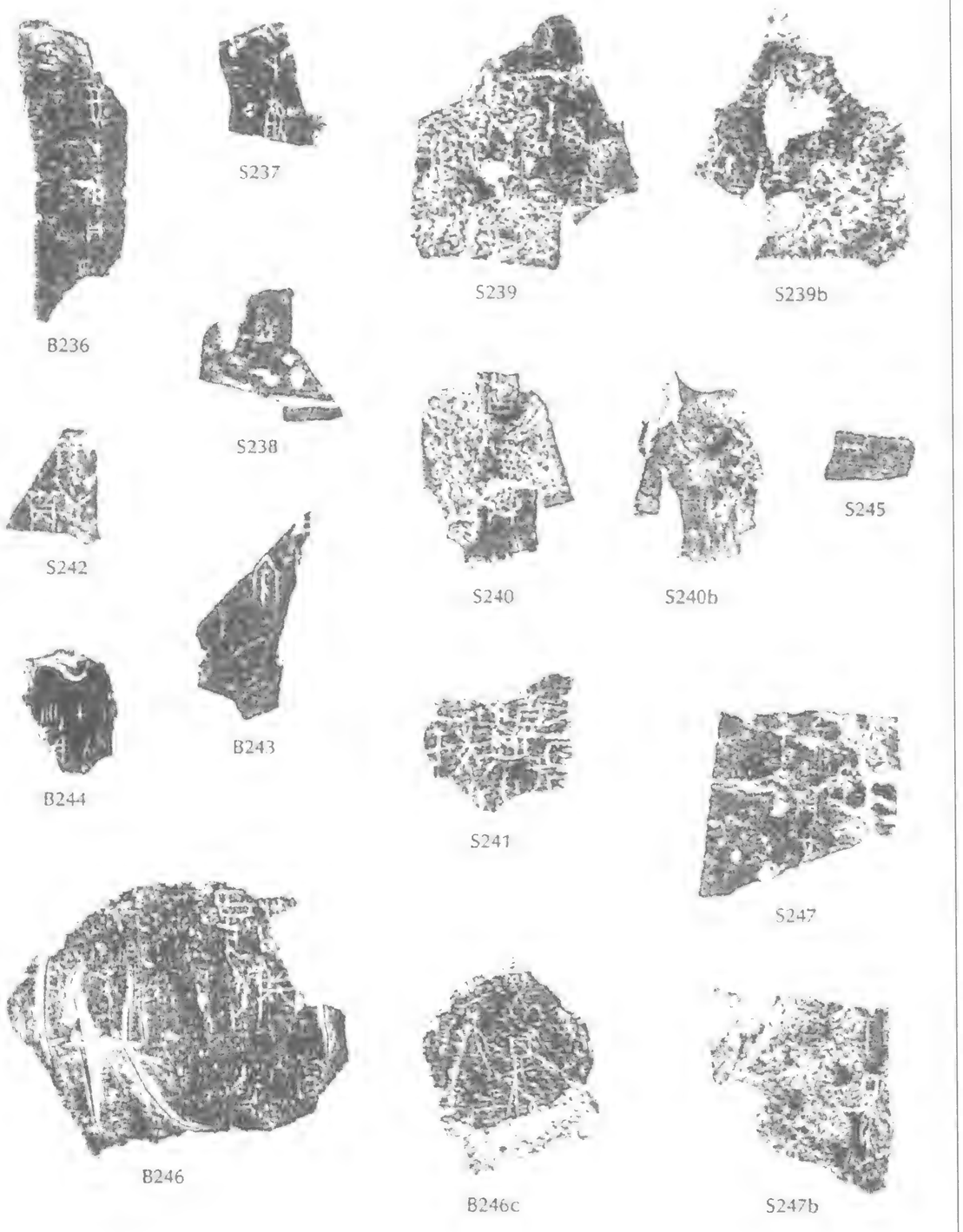


58

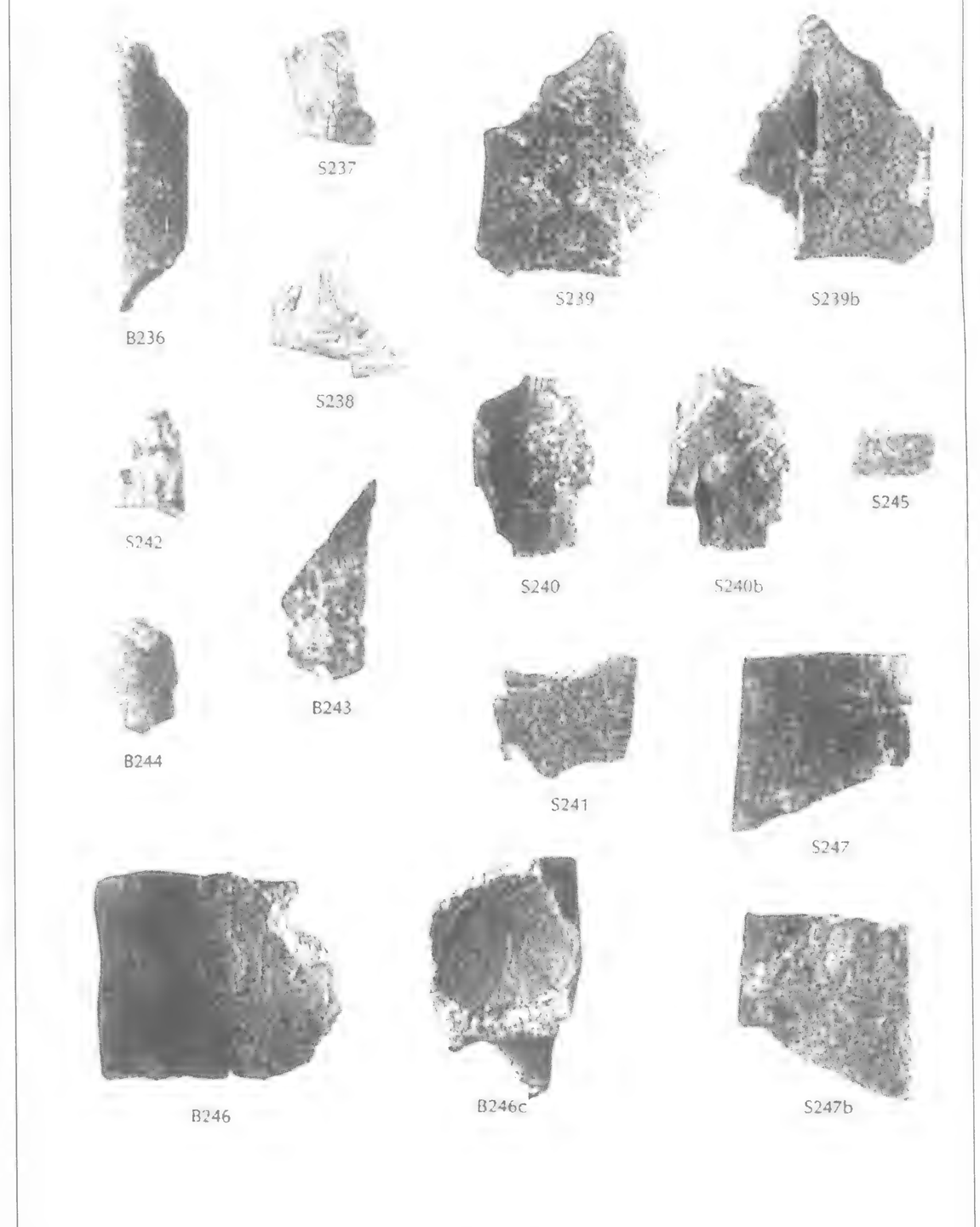


●222～235　222～235　第一期　卜占

57

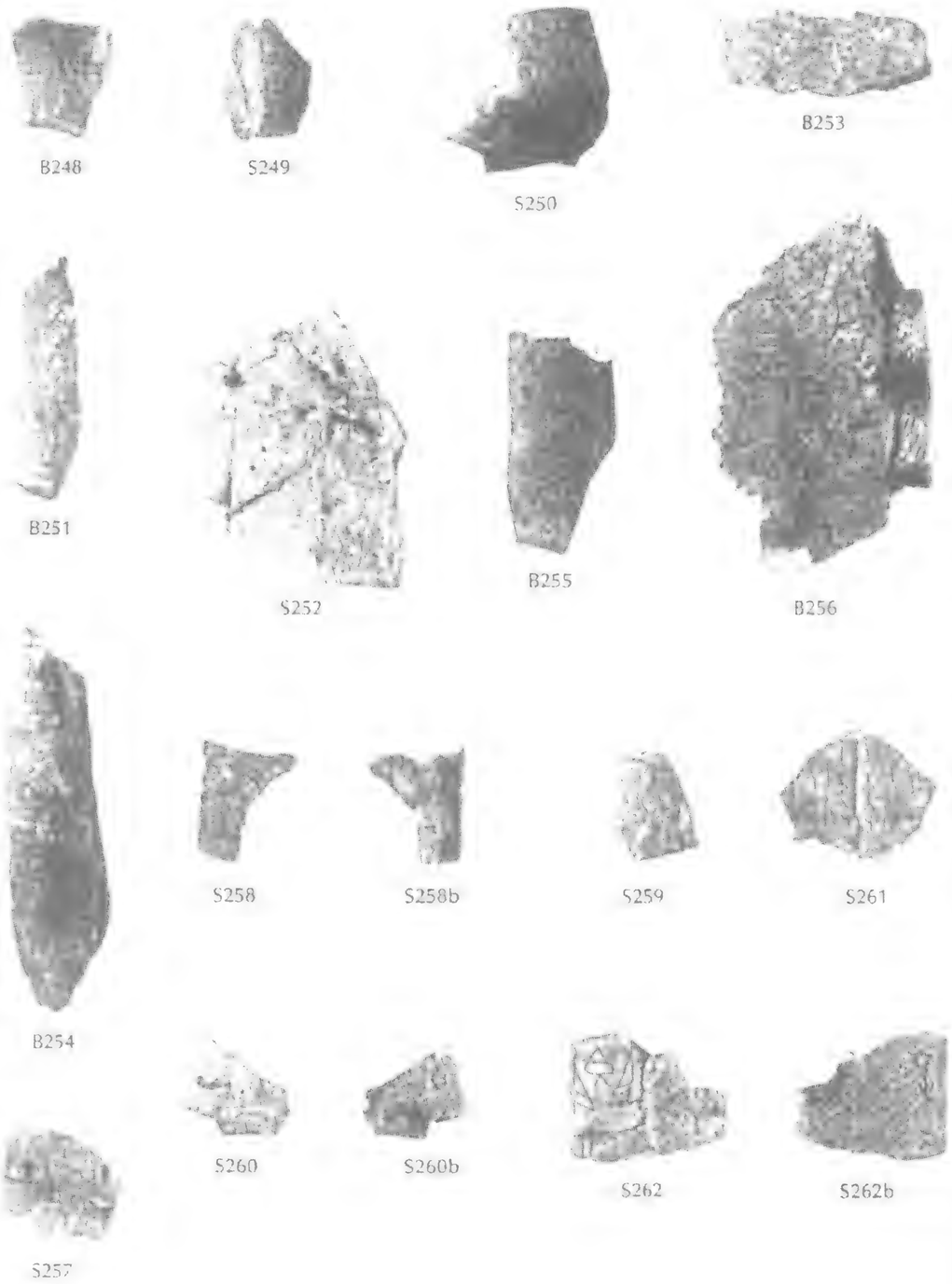


60



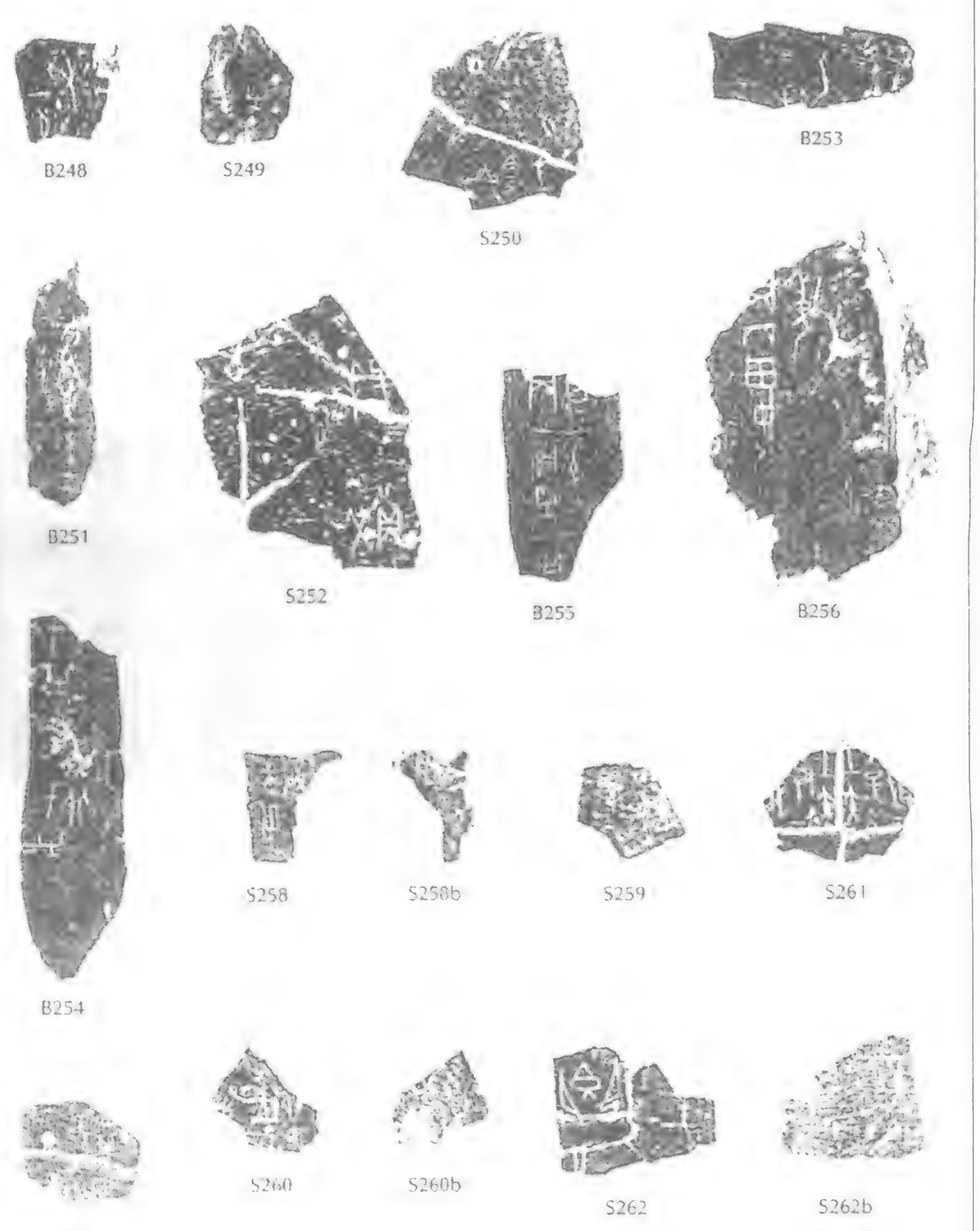
●236～247　236～247　第一期　卜占

59

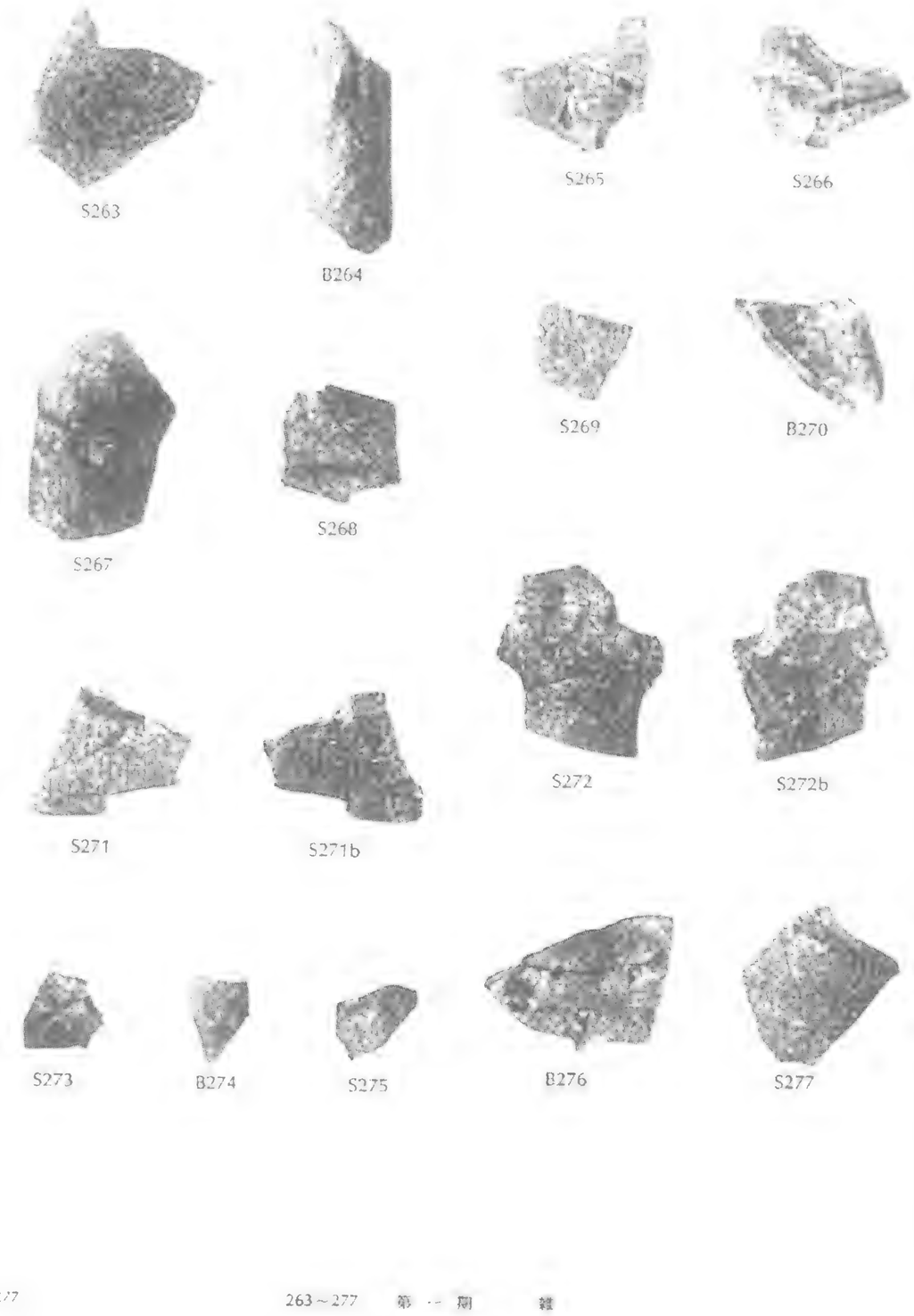


●248—262　　248 - 262　第　期　補

61

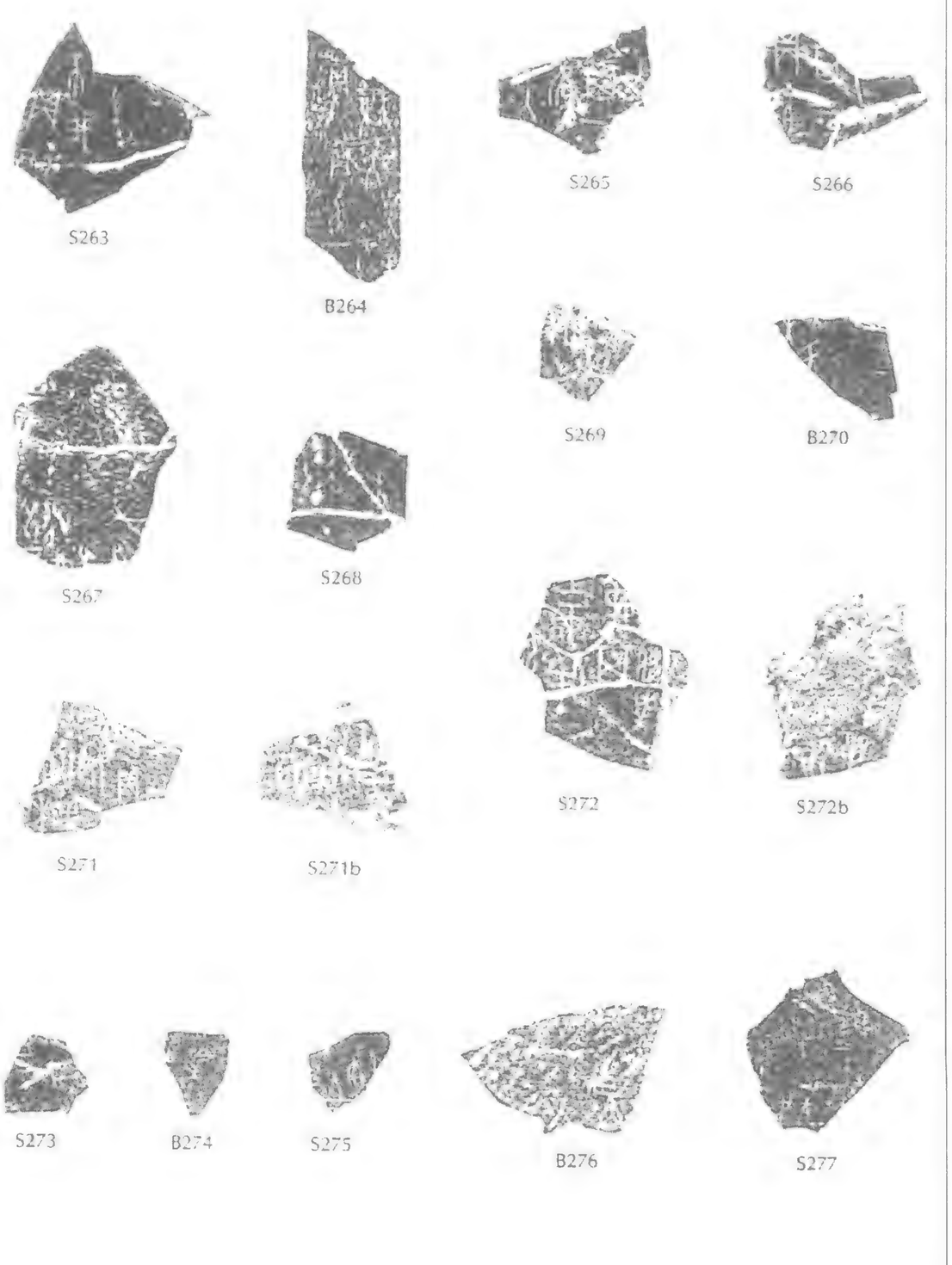


62

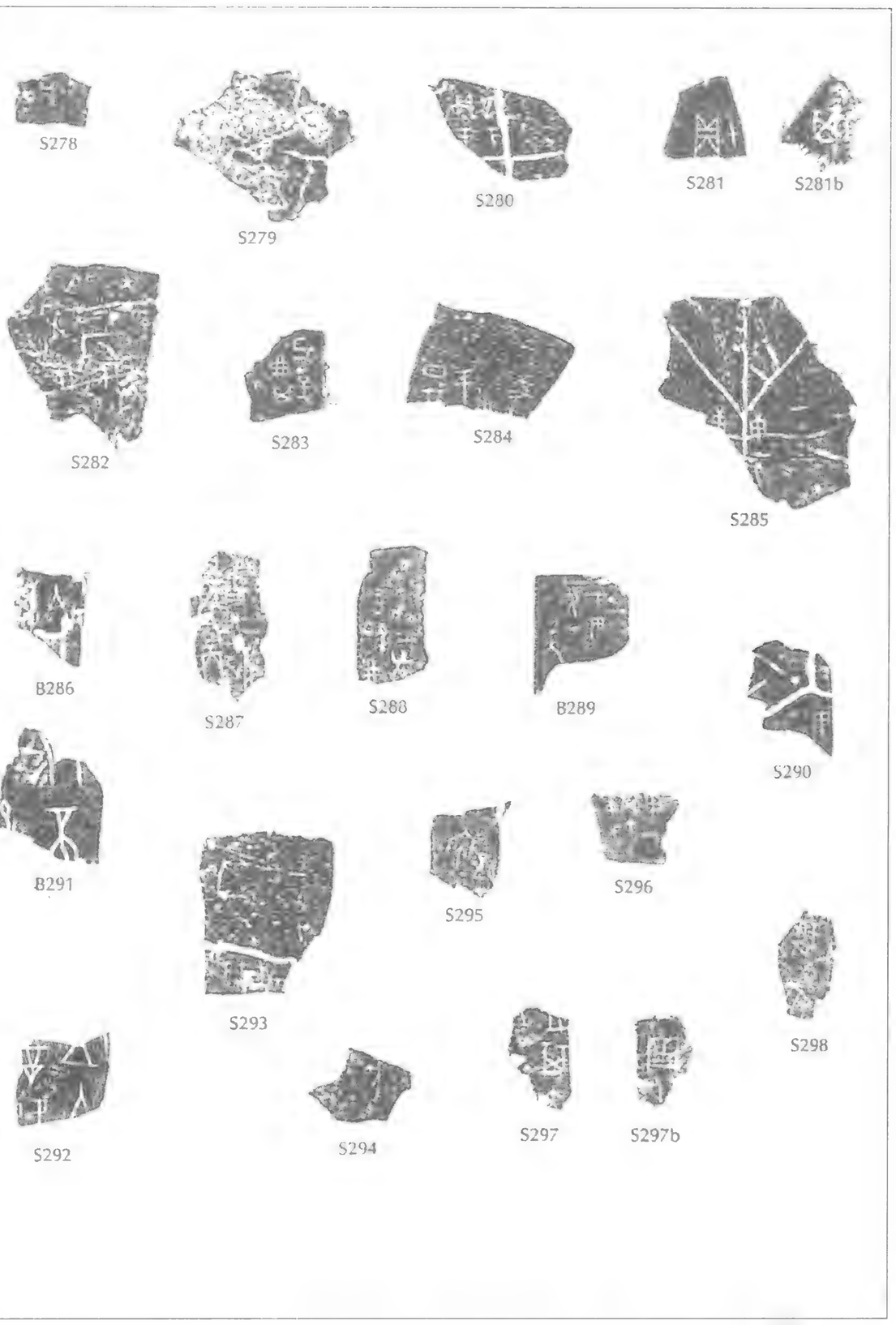


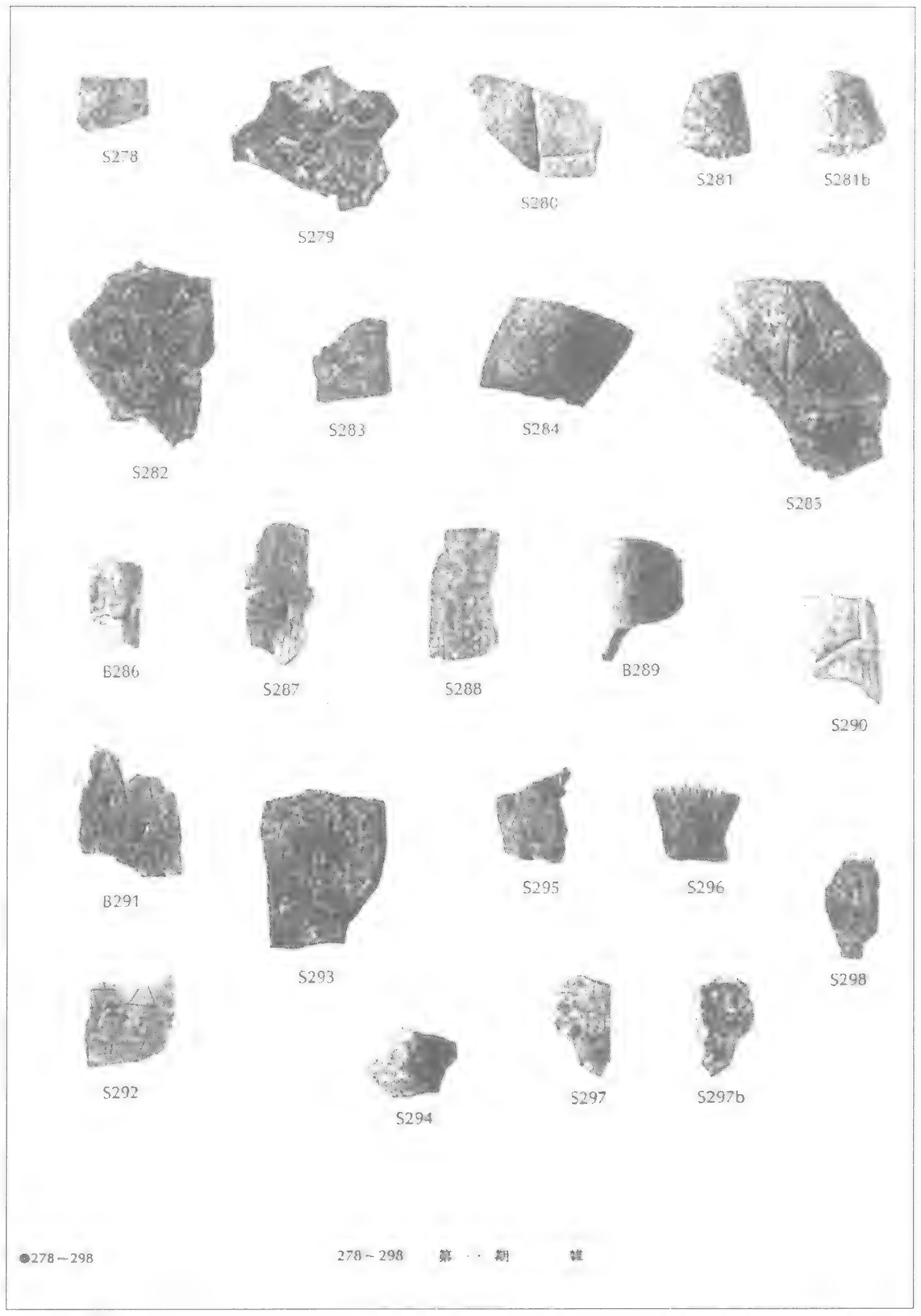
●263～277　　263～277　第　一　期　補

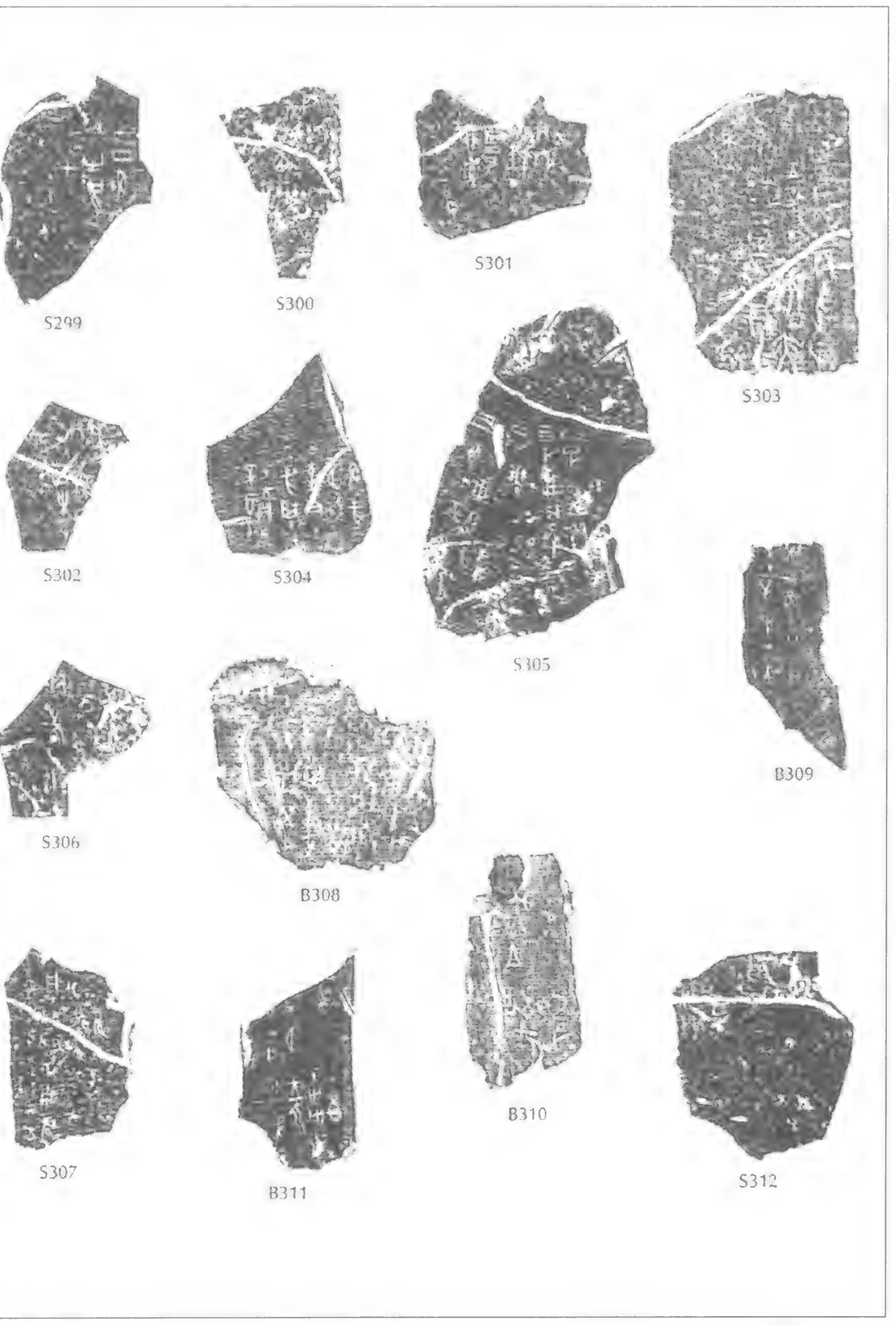
63

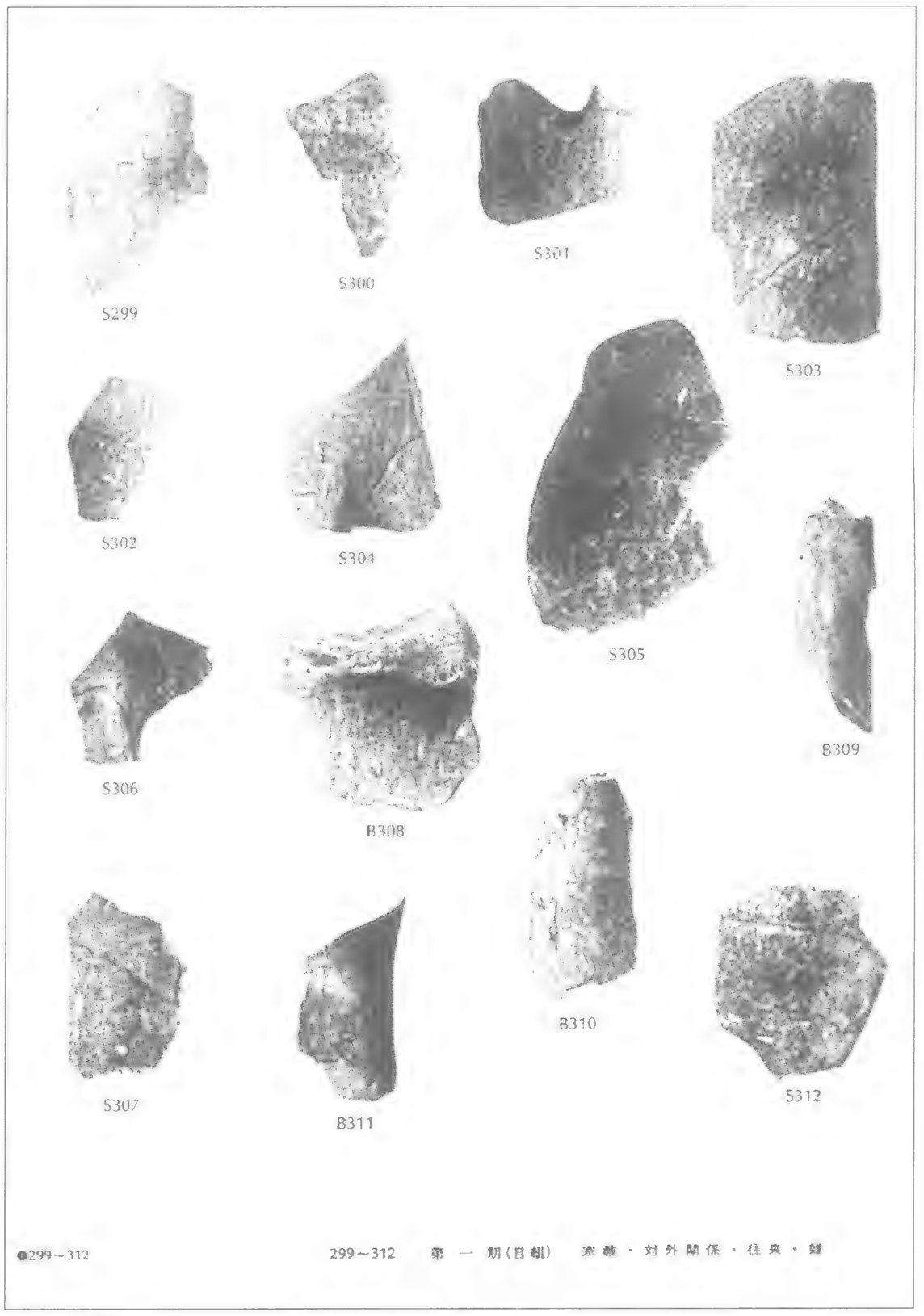


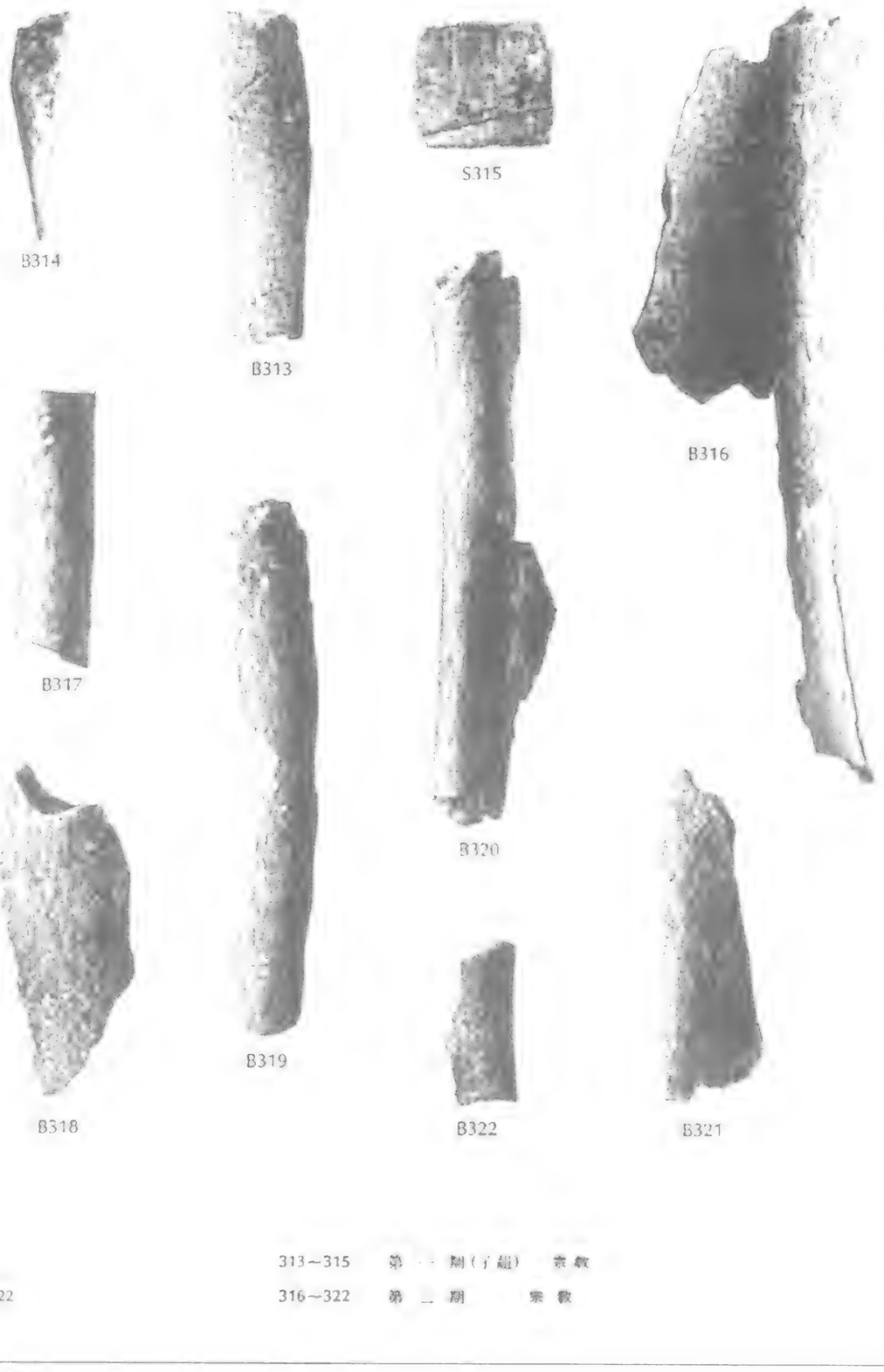
64


S278
S279
S280
S281
S281b
S282
S283
S284
S285
B286
S287
S288
B289
S290
B291
S293
S295
S296
S298
S292
S294
S297
S297b


S278
S279
S280
S281
S281b
S282
S283
S284
S285
B286
S287
S288
B289
S290
B291
S293
S295
S296
S298
S292
S294
S297
S297b
●278～298
278～298 第 一 期 雑

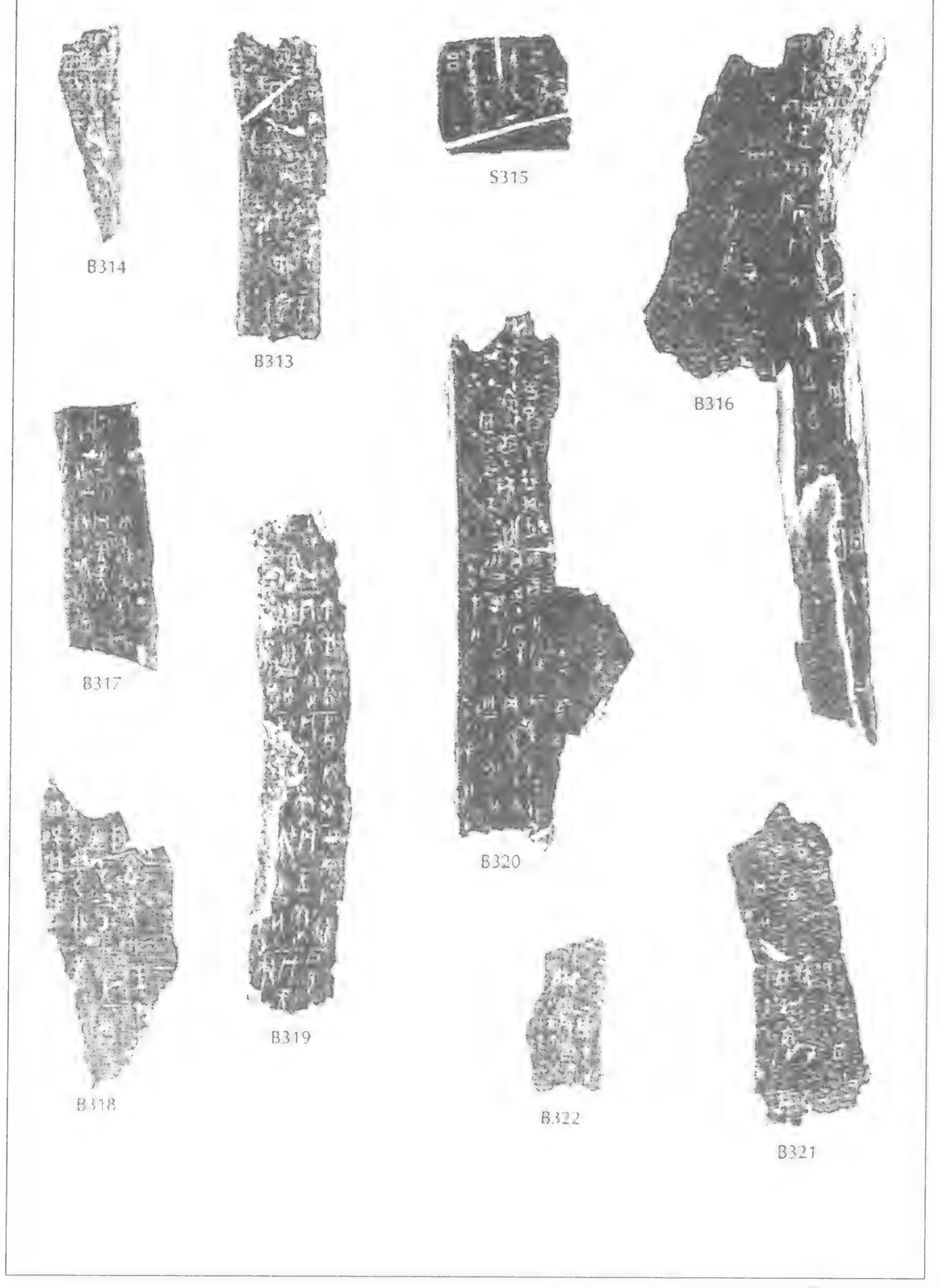

S299
S300
S301
S303
S302
S304
S305
B309
S306
B308
B310
S307
B311
S312

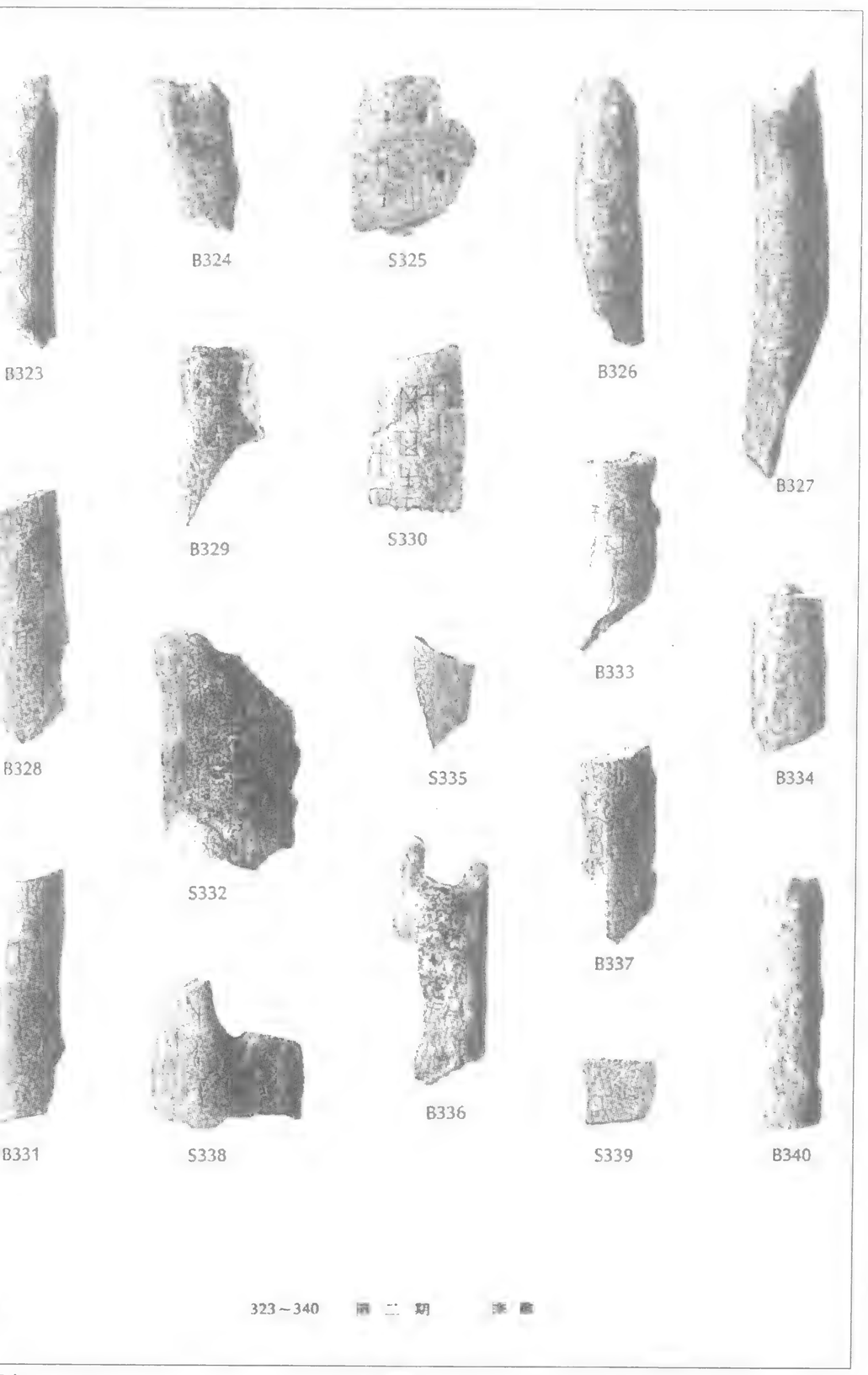

S299
S300
S301
S303
S302
S304
S305
B309
S306
B308
B310
S307
B311
S312
●299～312
299～312 第 一 期(自組) 宗教・対外関係・往来・雑



313～315　第　期（子組）　宗教
316～322　第　期　　宗教

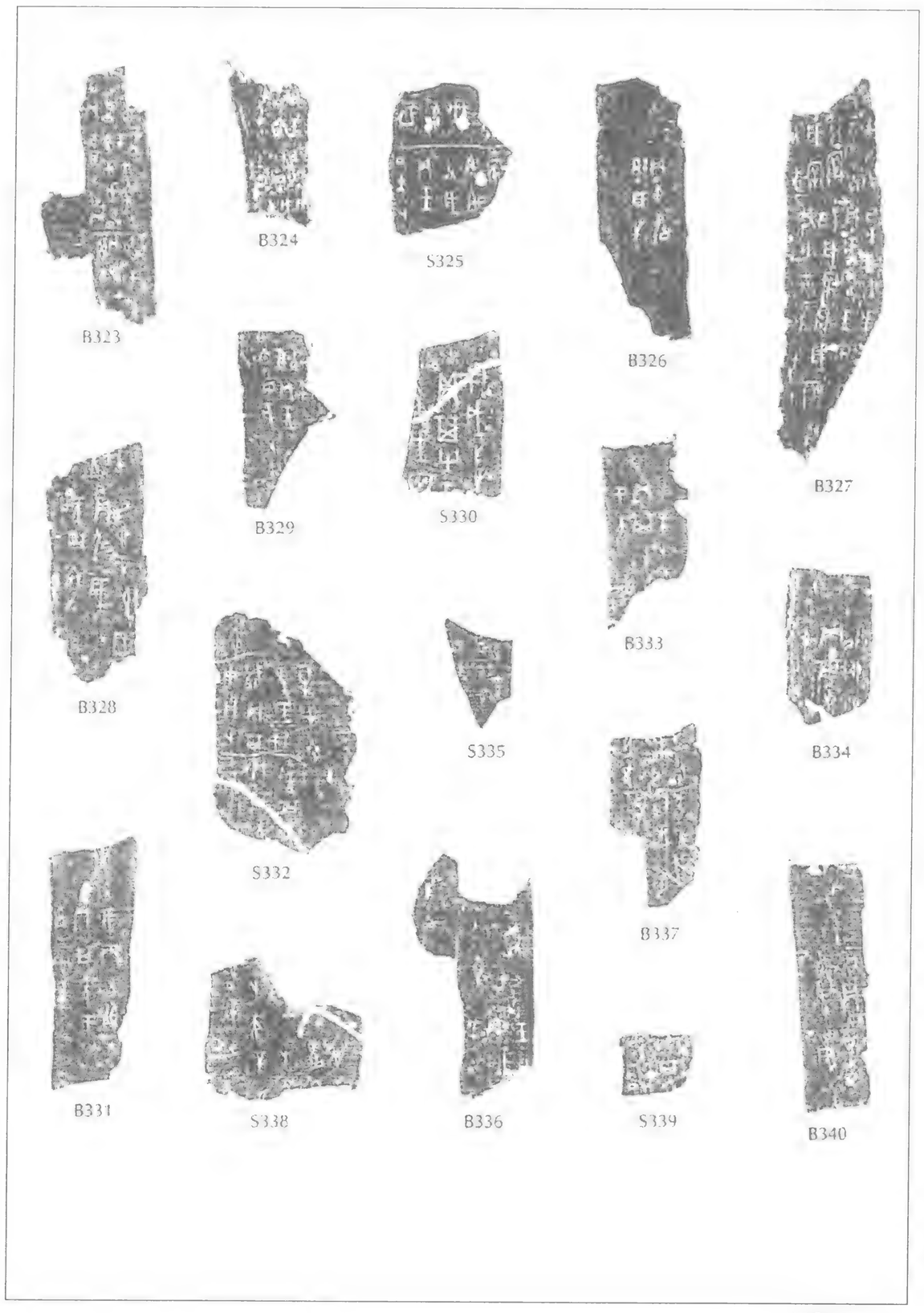
●313～322

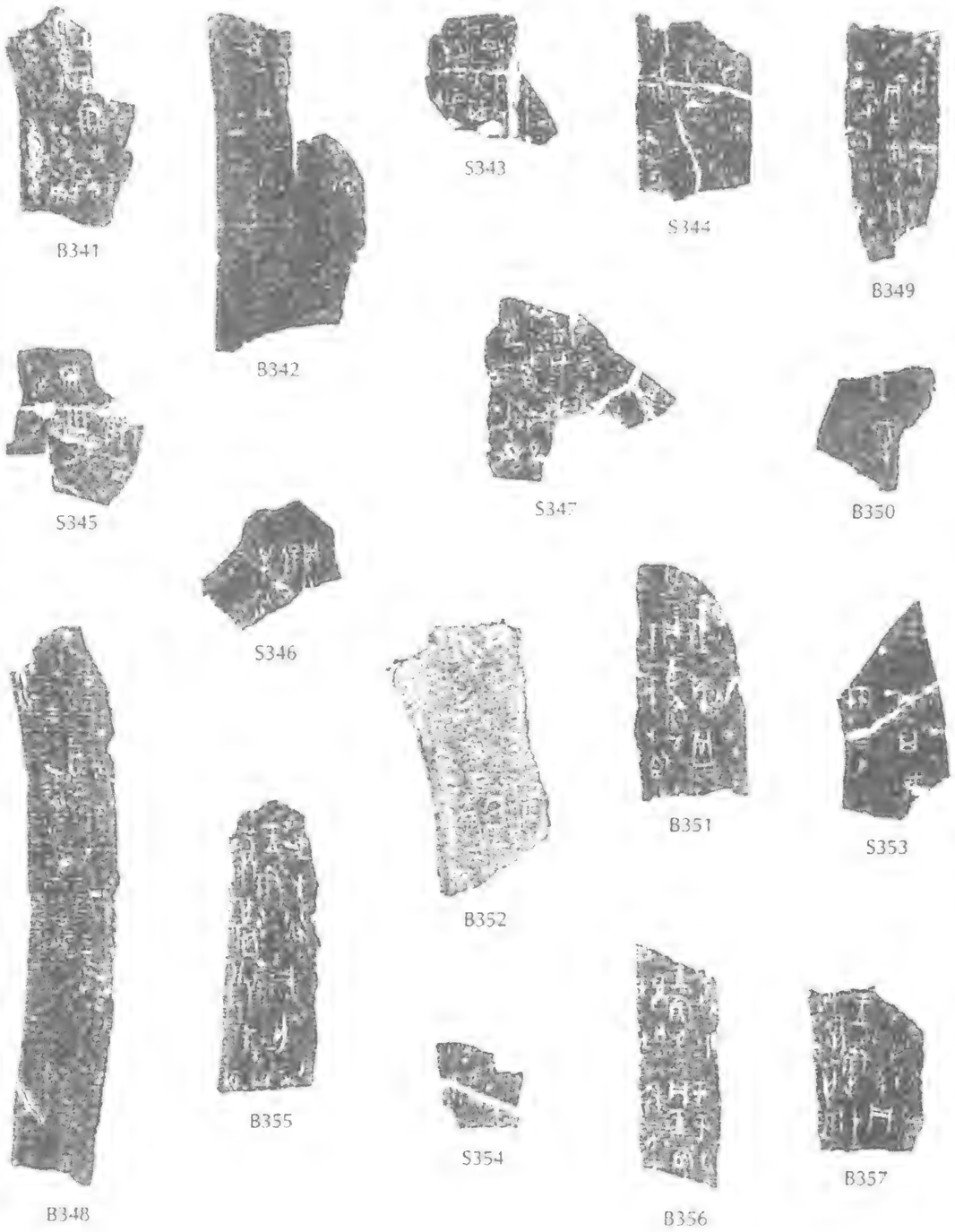


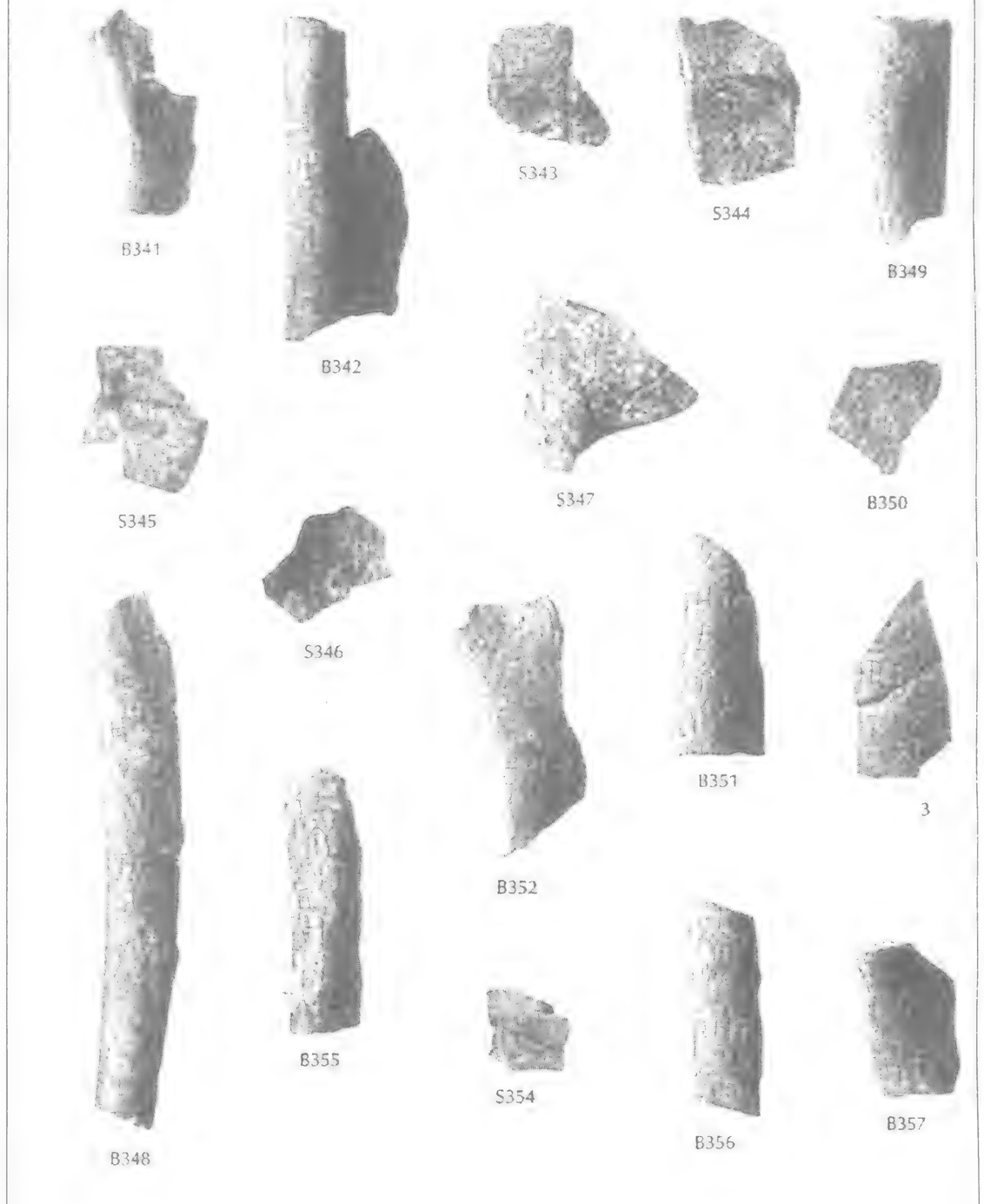


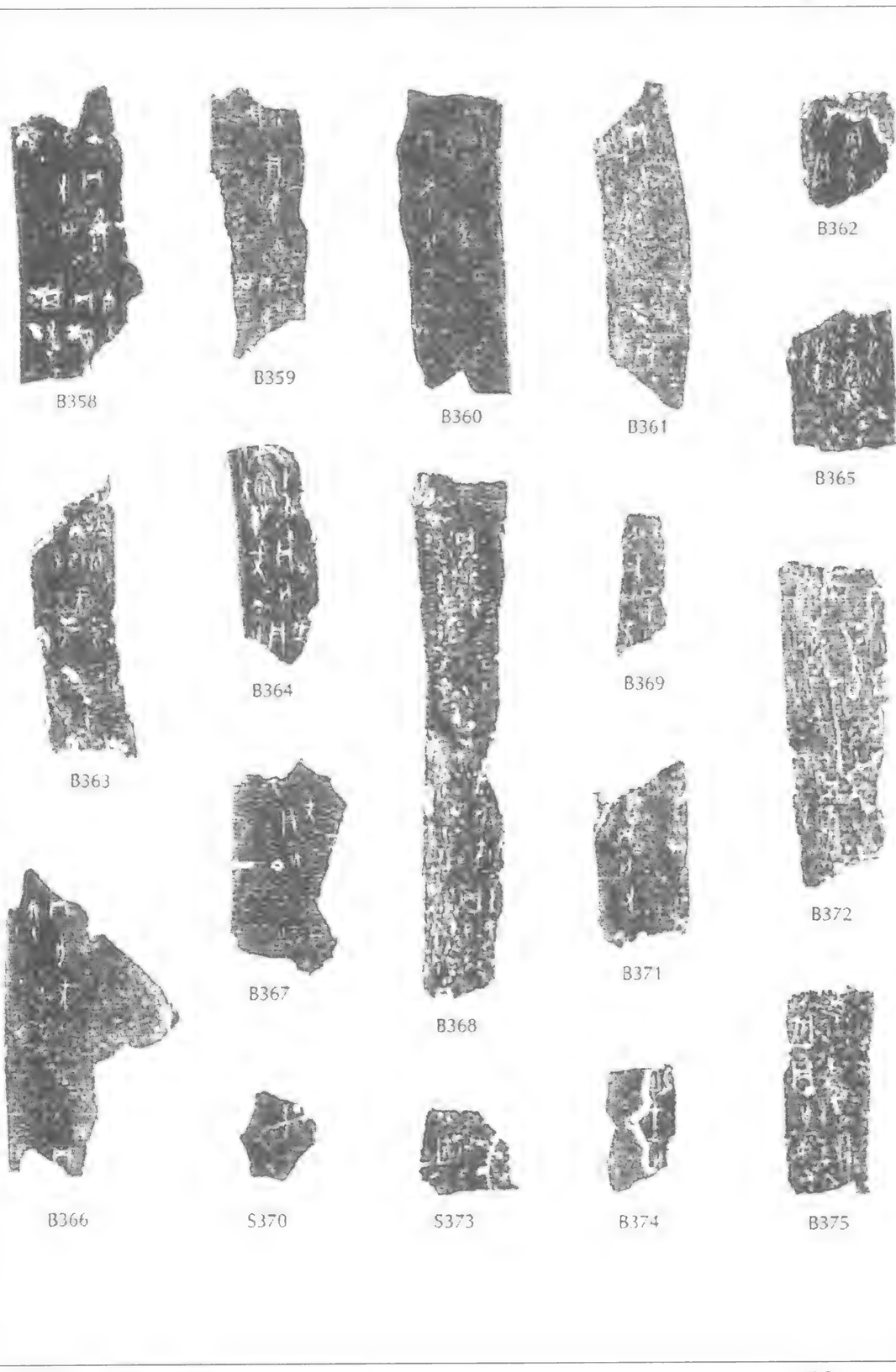
323～340　第　期　　宗教

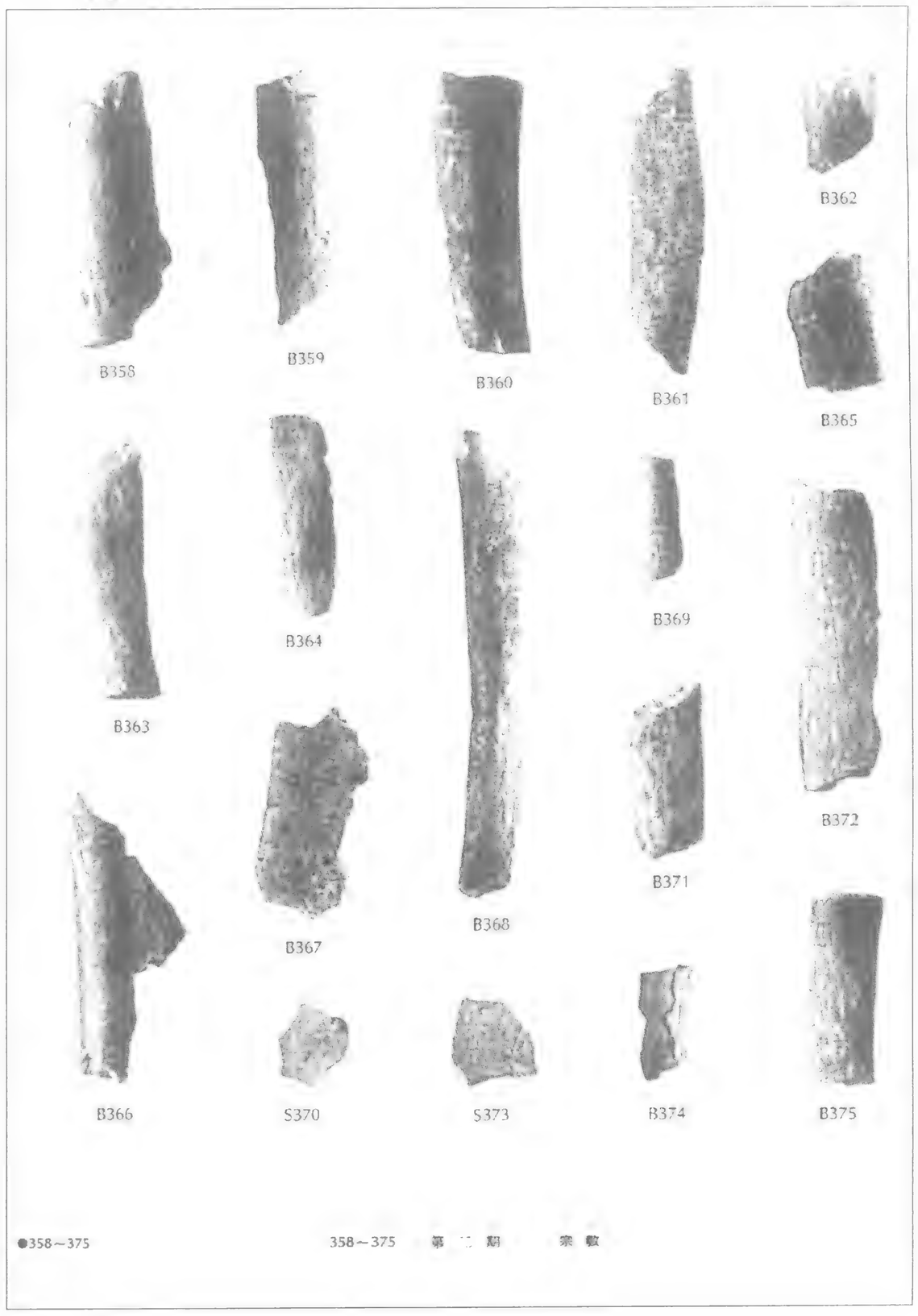
●323～340

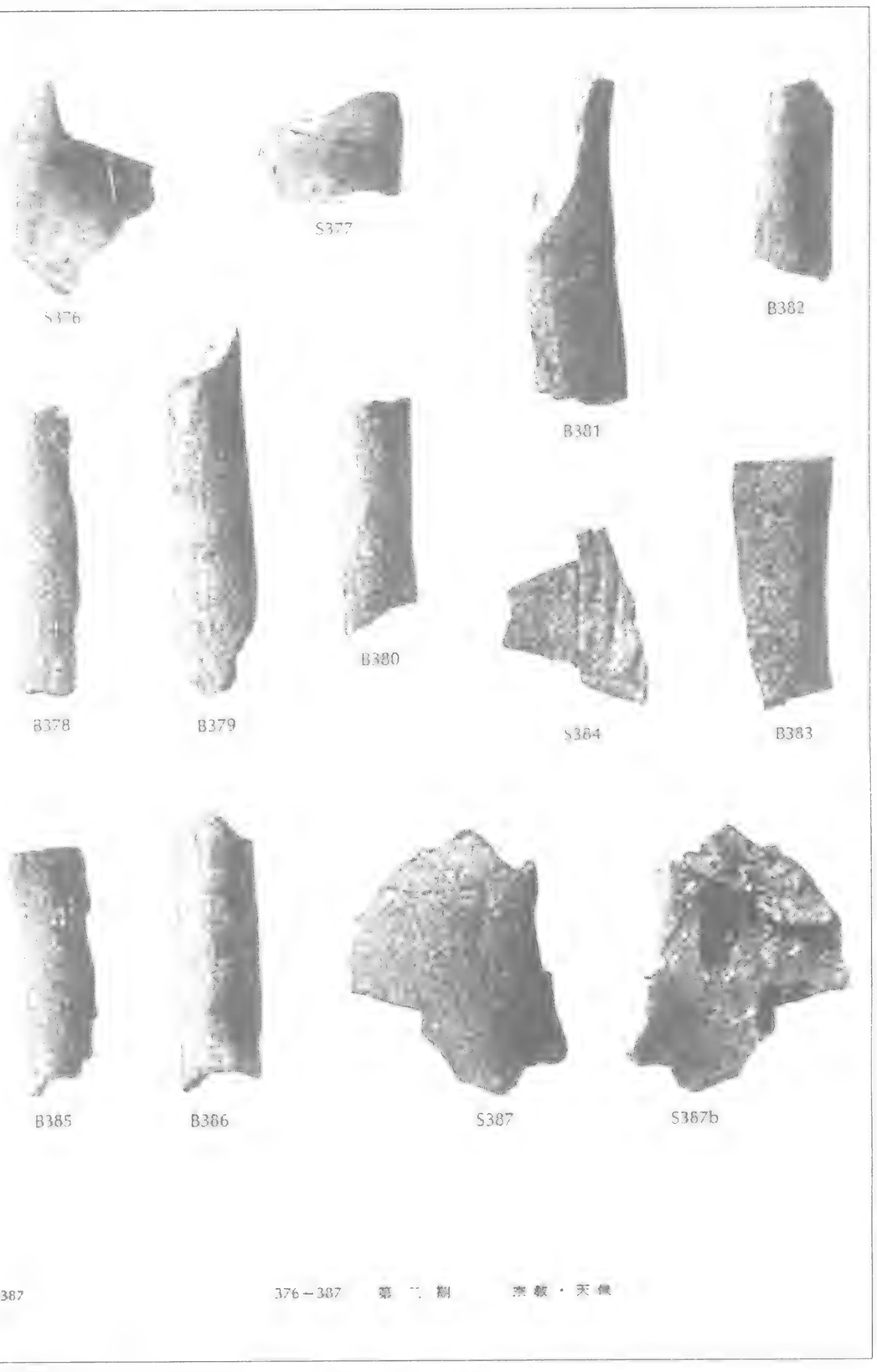



B341
B342
S343
S344
B349
S345
S347
B350
S346
B351
B352
S353
B355
S354
B356
B357
B348

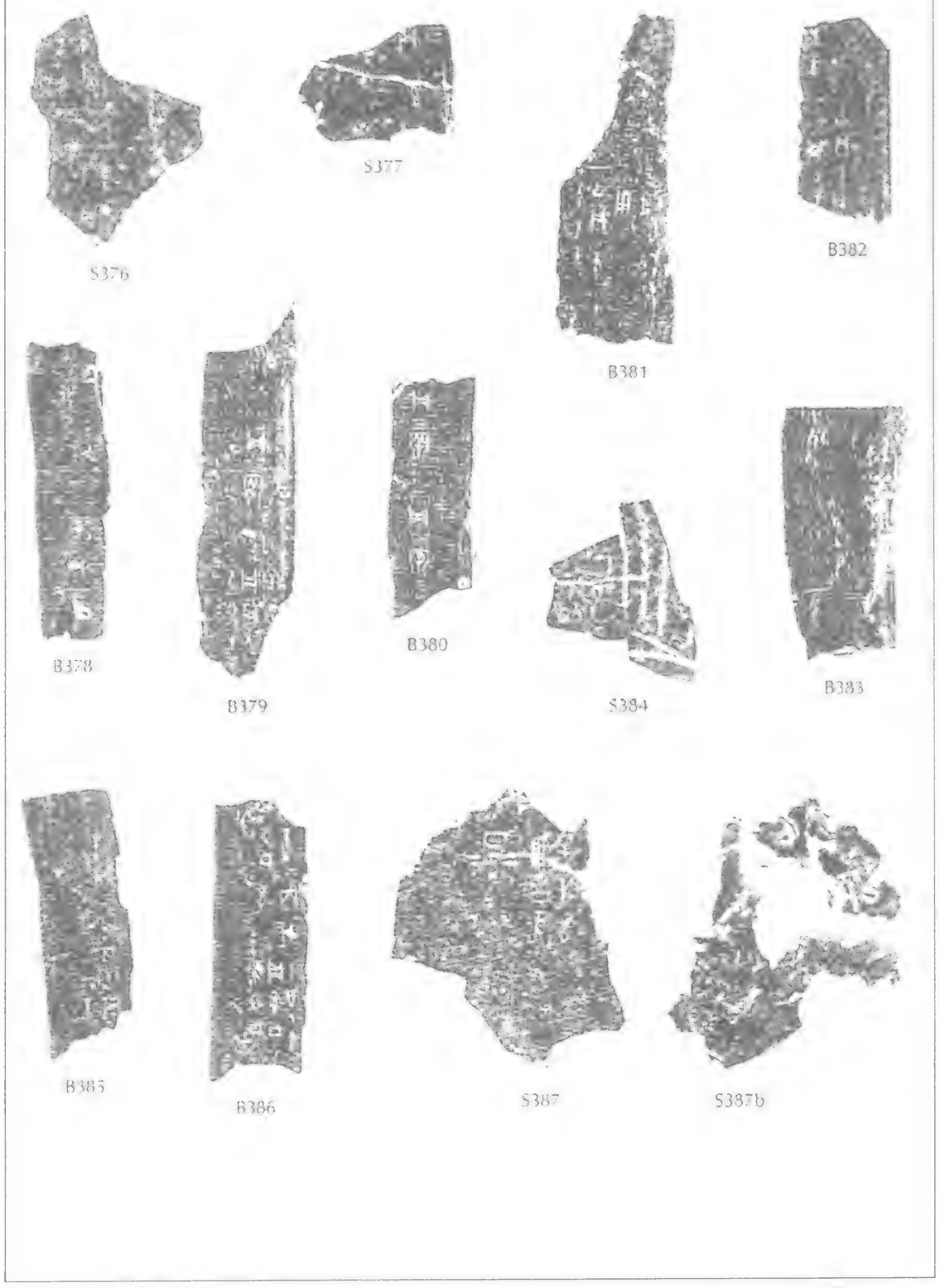

B341
B342
S343
S344
B349
S345
S347
B350
S346
B351
3
B352
B355
S354
B356
B357
B348
●341～357
341－357 第 二 期 隶 教

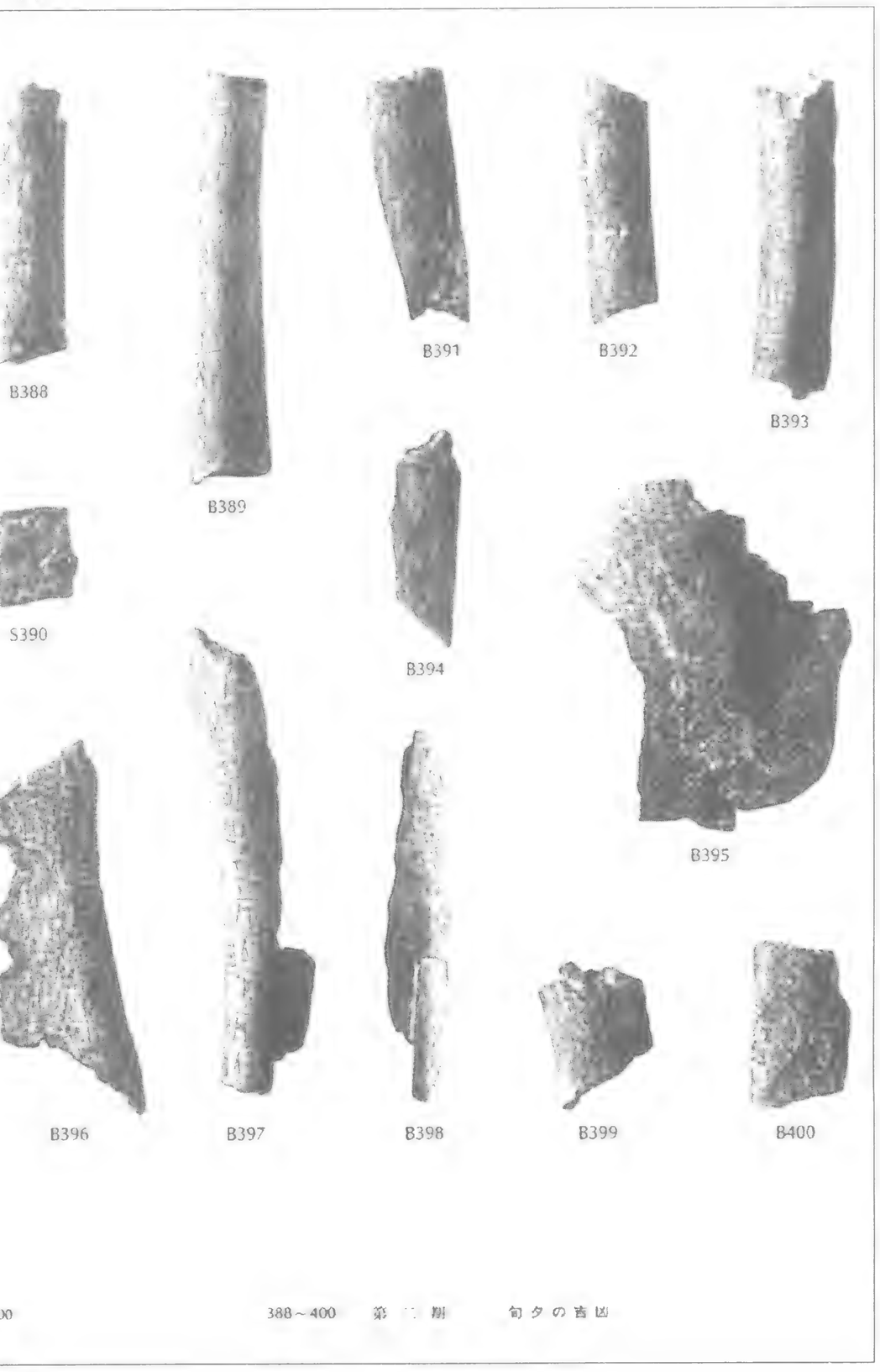

B358
B359
B360
B361
B362
B365
B364
B369
B363
B367
B368
B372
B371
B366
S370
S373
B374
B375


B358
B359
B360
B361
B362
B365
B363
B364
B369
B367
B368
B372
B371
B366
S370
S373
B374
B375
●358～375
358－375 第 二 期 隶 教

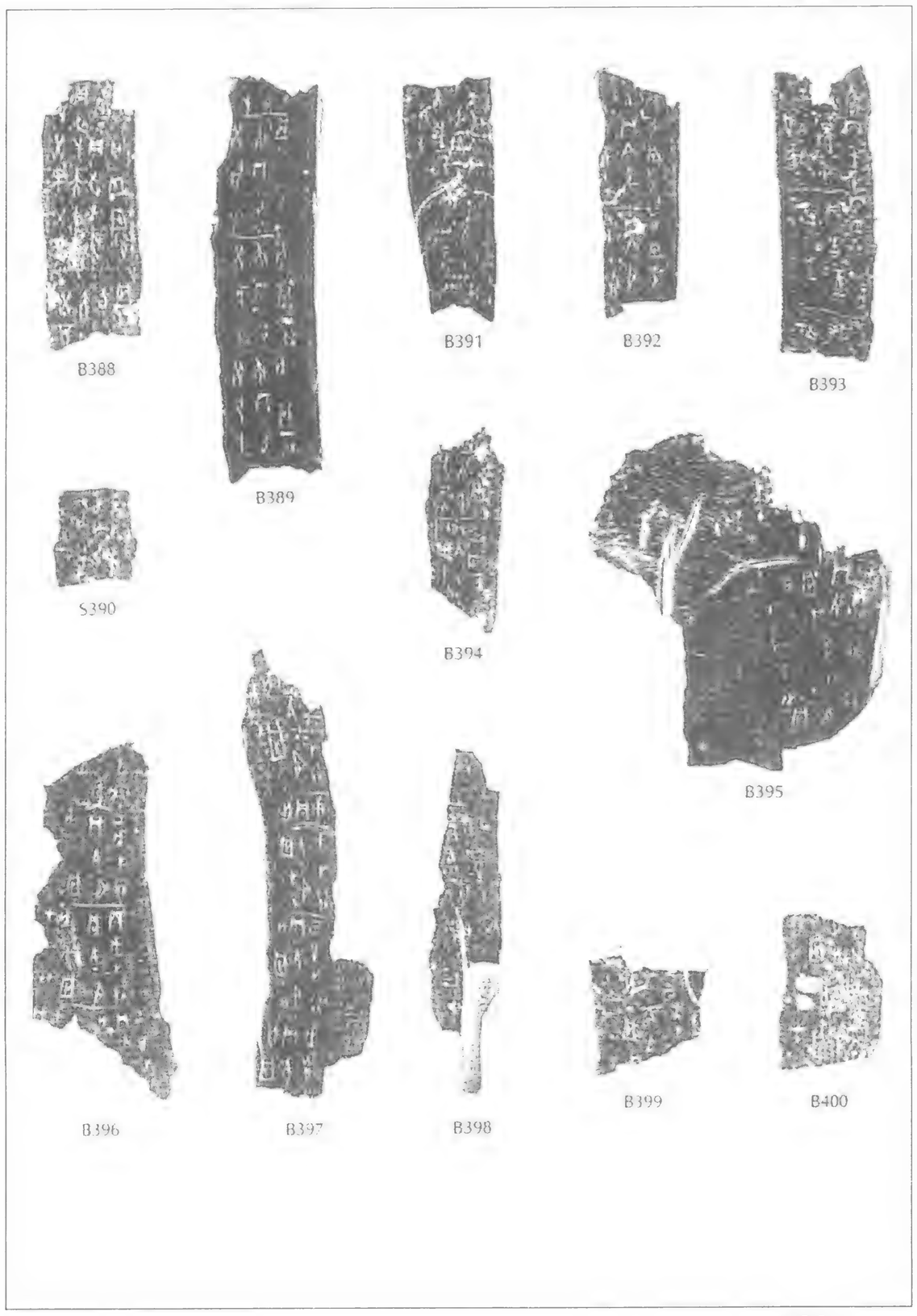


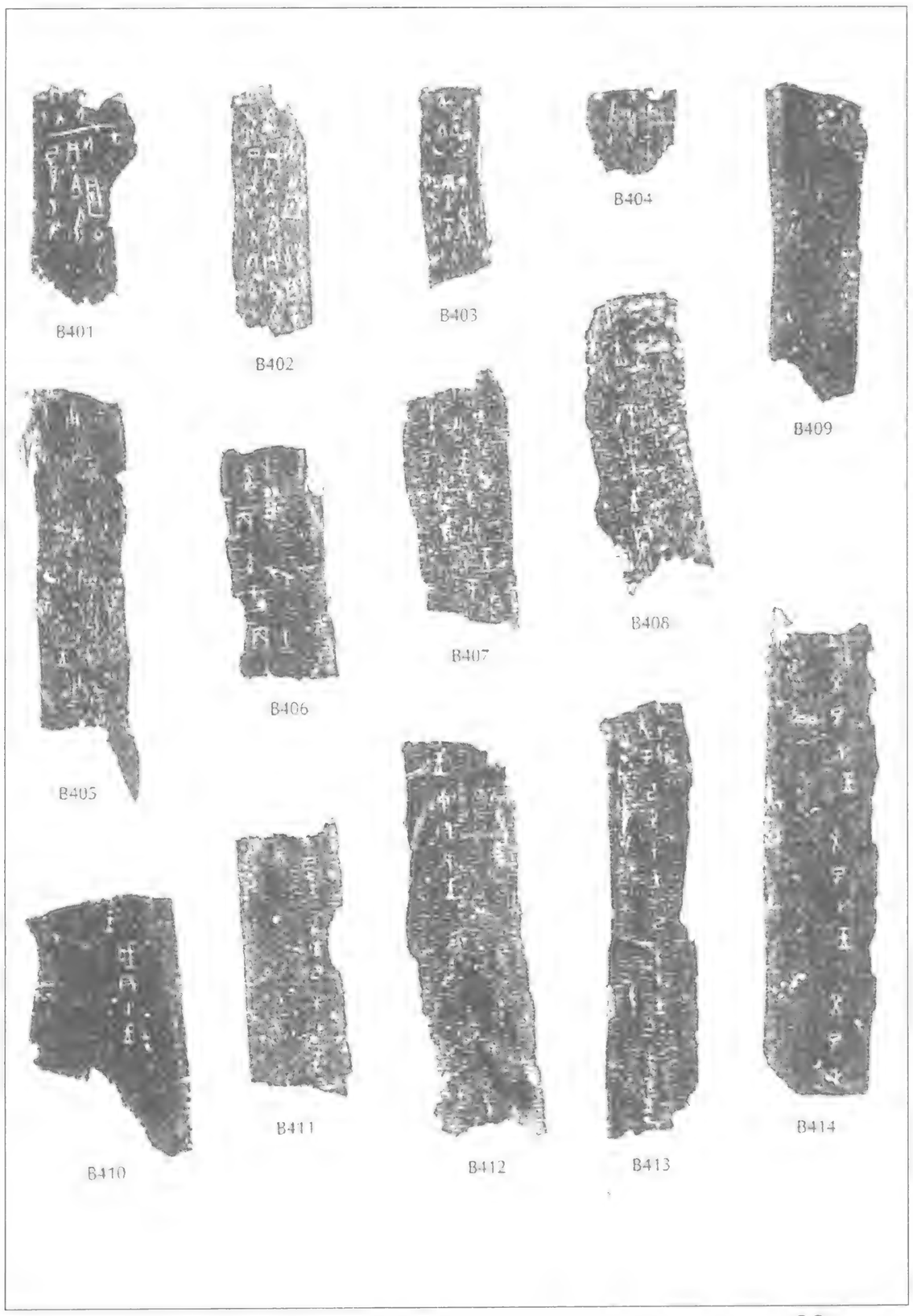
■376～387　376－387　第　二　期　宗教・天候



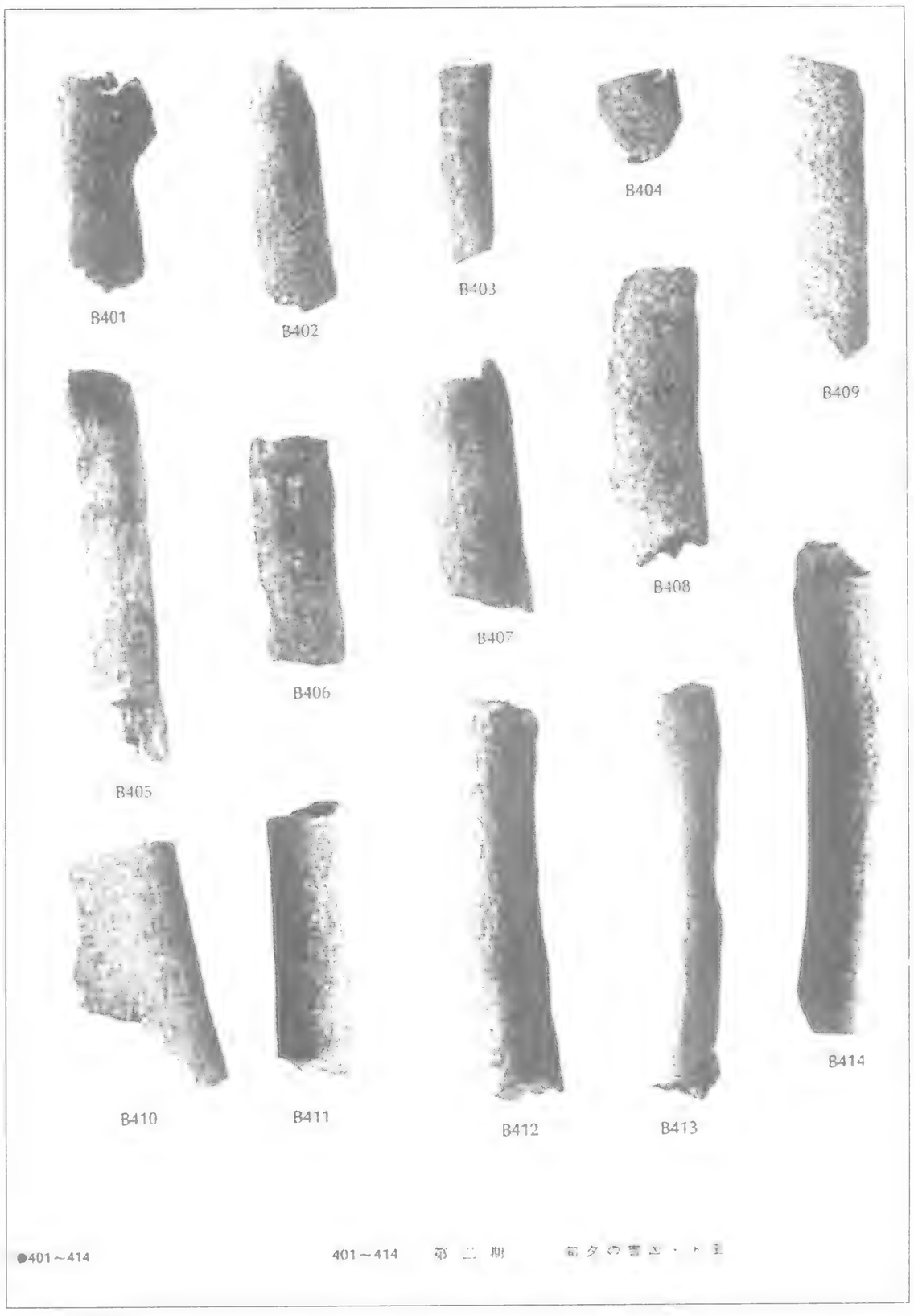


●388～400　388～400　第　二　期　旬夕の吉凶

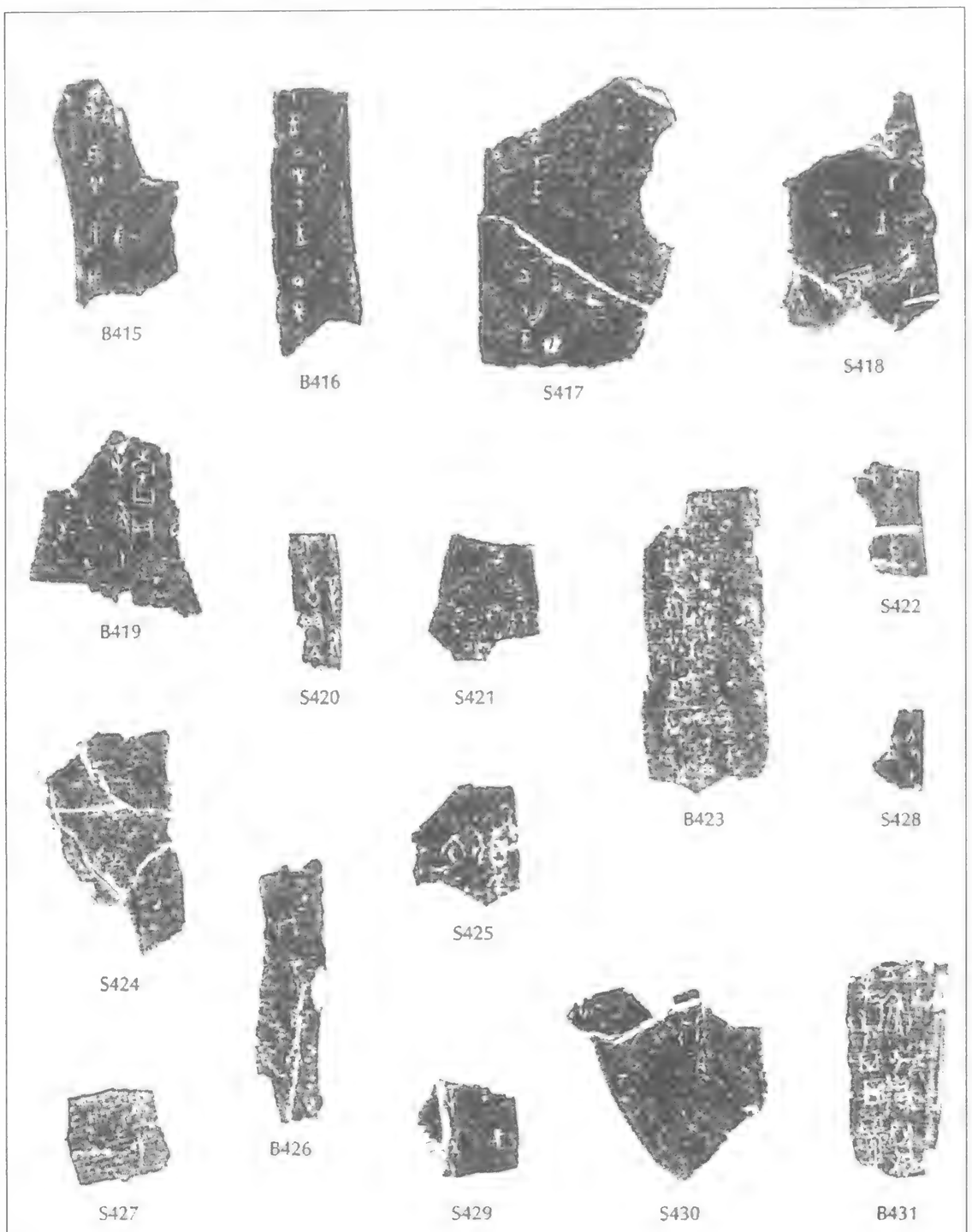



B401
B402
B403
B404
B409
B408
B407
B406
B405
B411
B412
B413
B414
B410

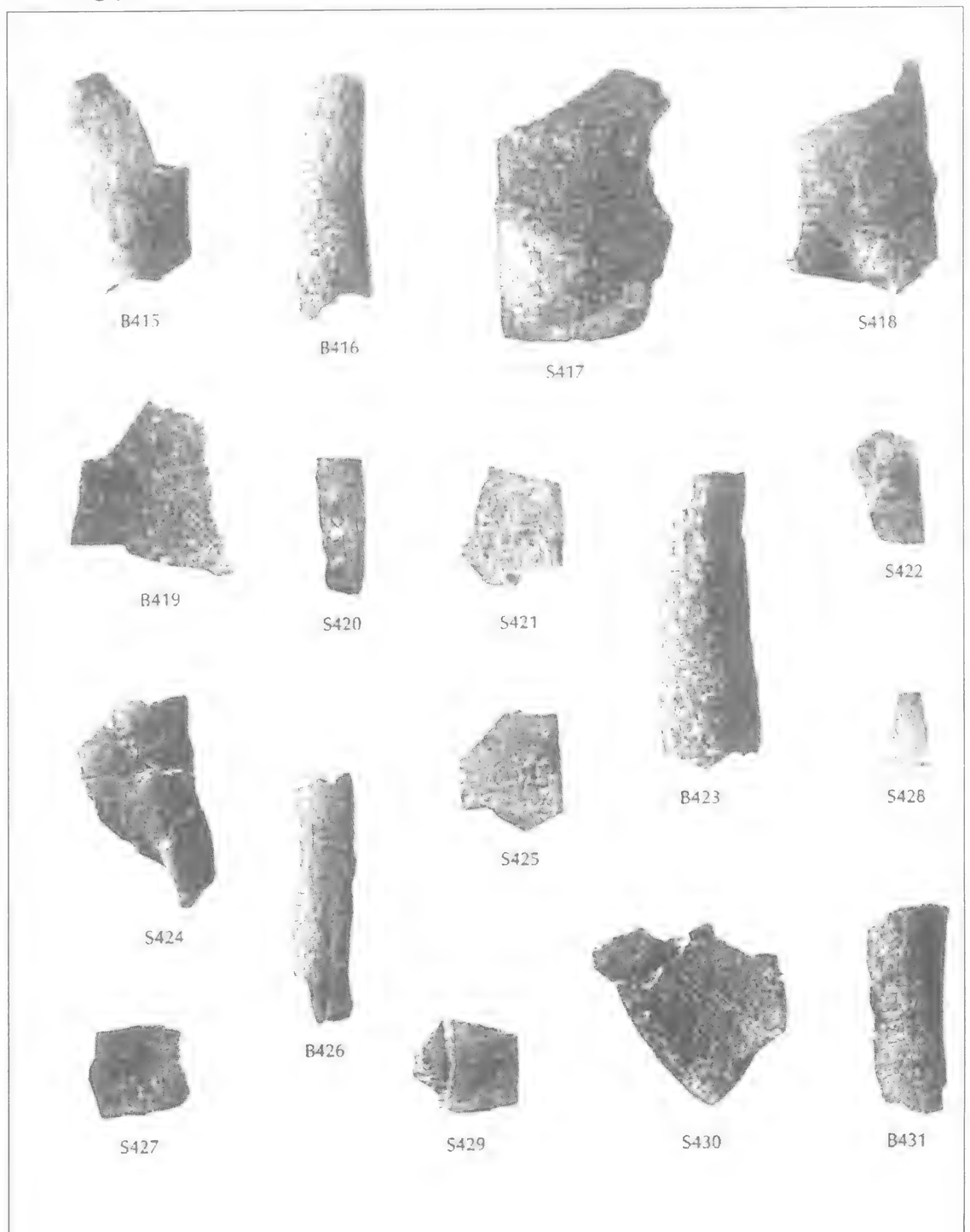
82


B401
B402
B403
B404
B409
B408
B407
B406
B405
B410
B411
B412
B413
B414
●401～414
401～414 第二期 前夕の書き・ト王

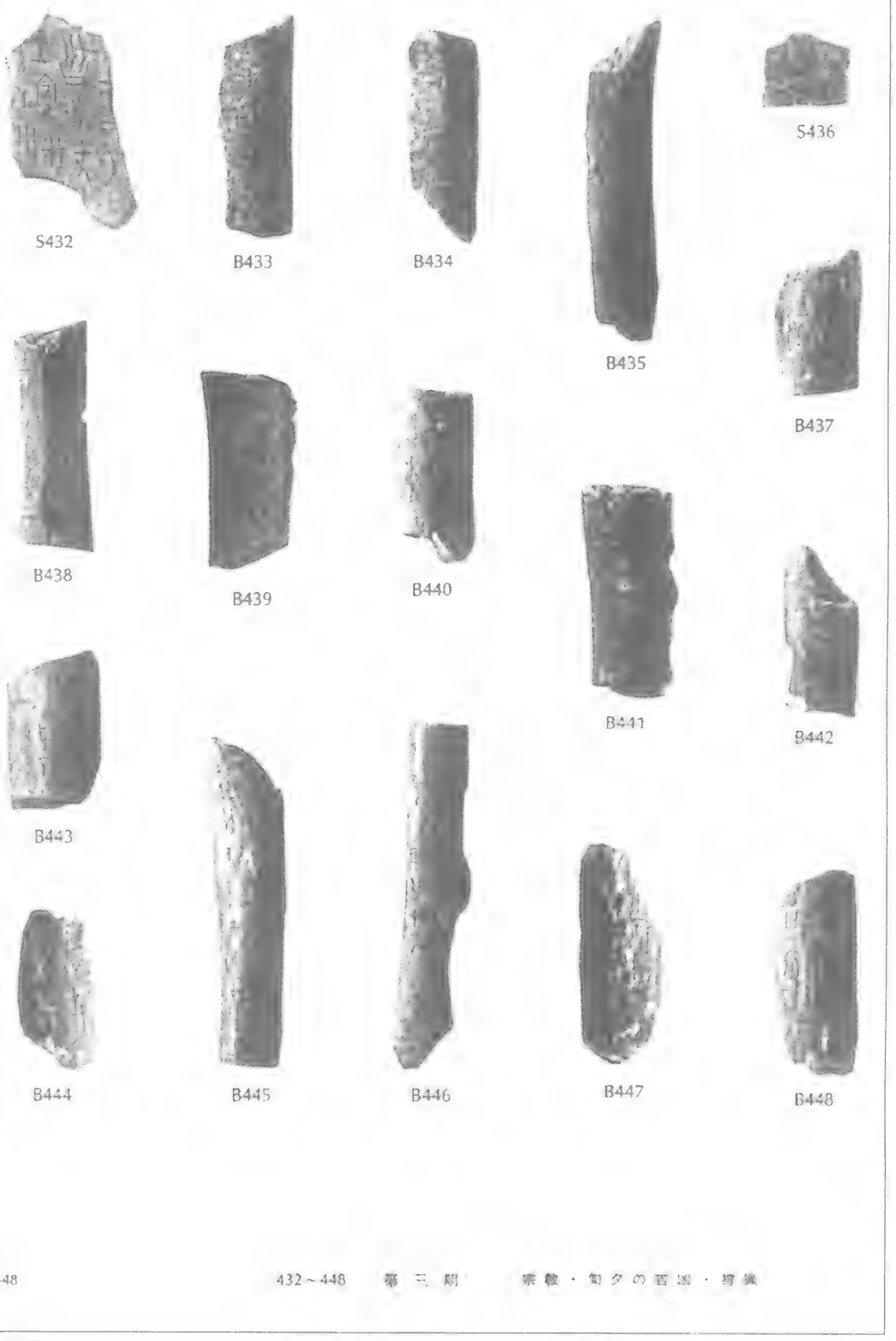
81


B415
B416
S417
S418
B419
S420
S421
B423
S422
S428
S424
S425
B426
S427
S429
S430
B431

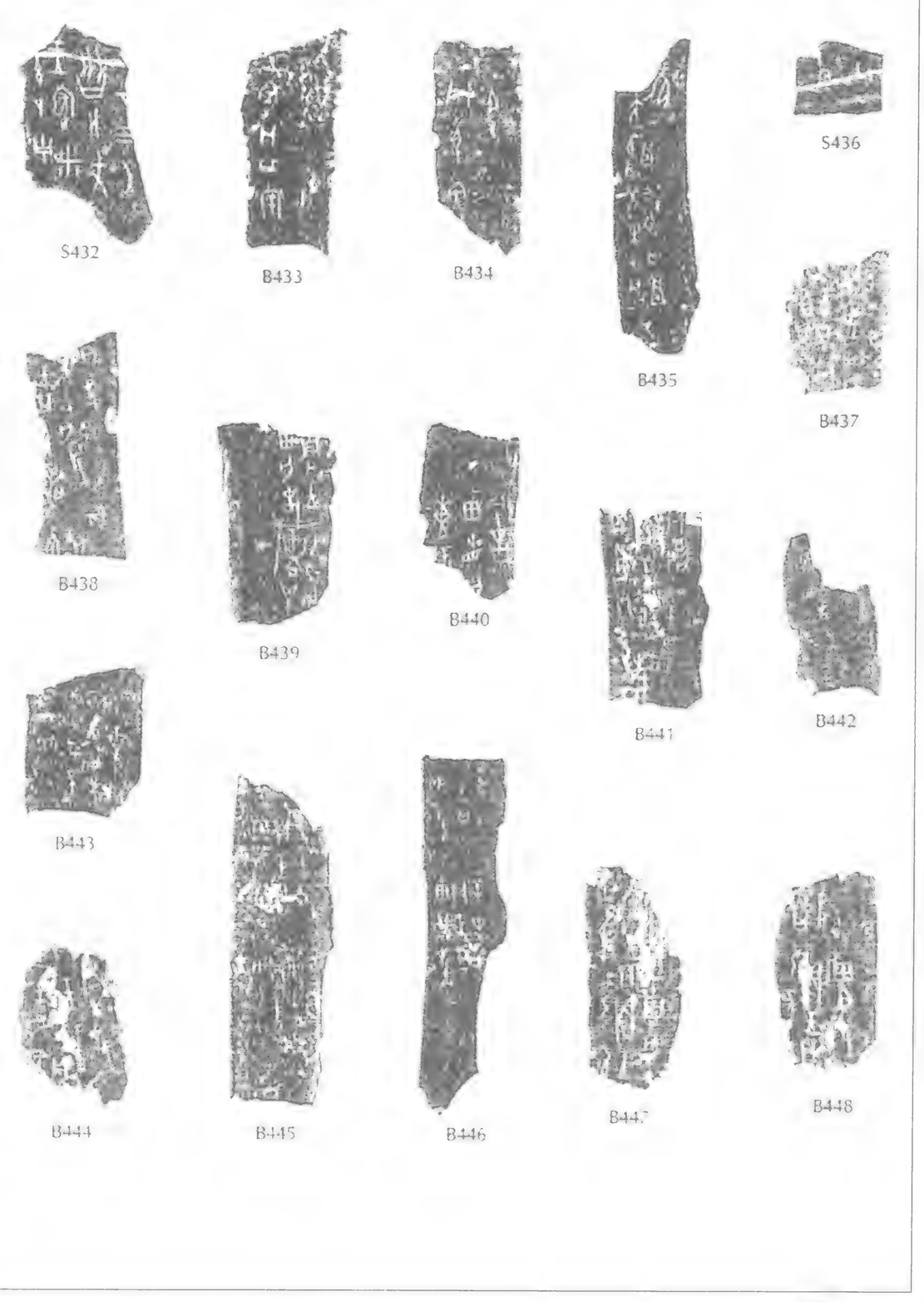
84

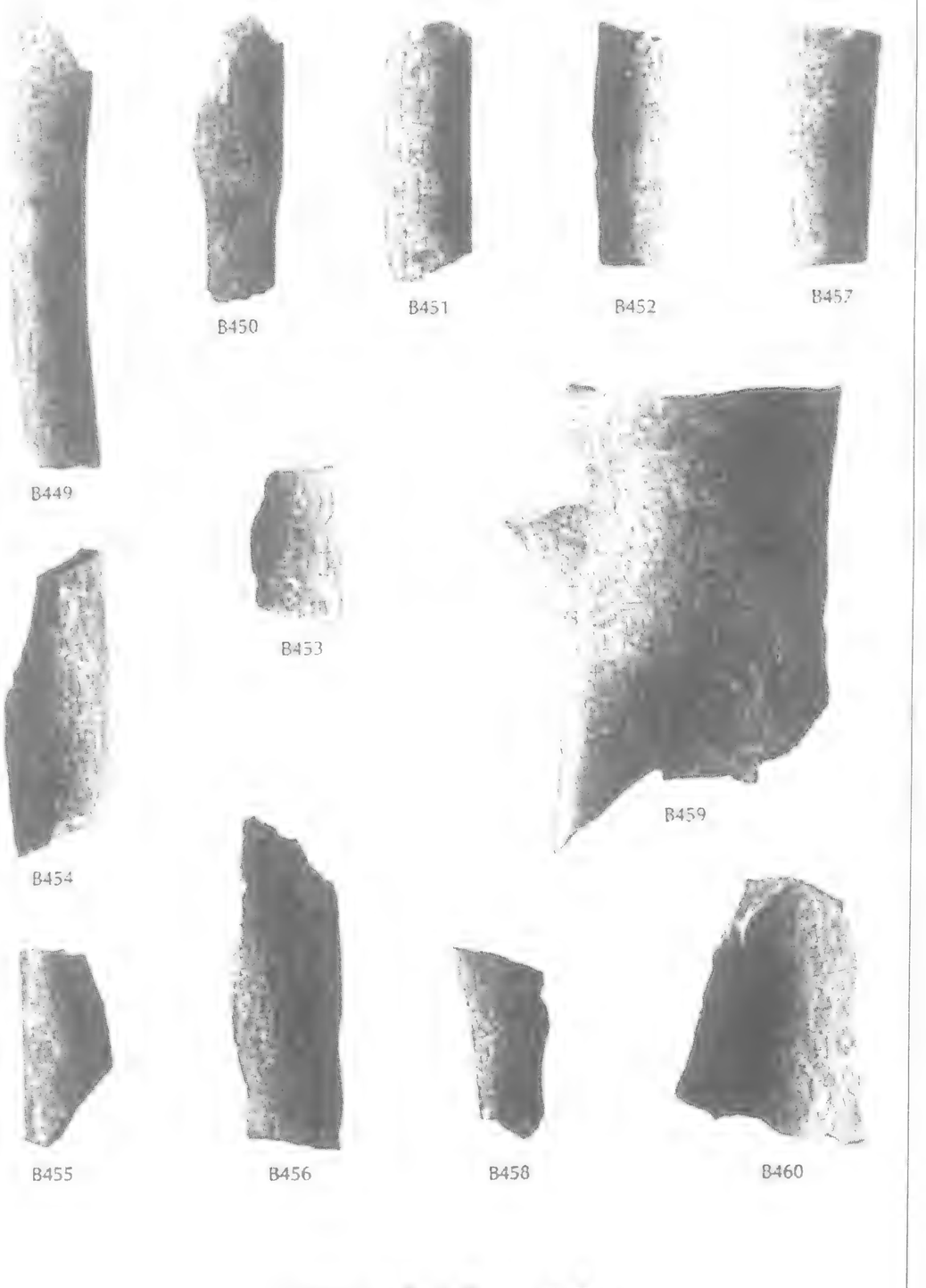

B415
B416
S417
S418
B419
S420
S421
B423
S422
S428
S424
S425
B426
S427
S429
S430
B431
●415～431
415～429 第二期 卜王・雑
430～431 第三期 宗教

83



●432～448　　432～448　第三期　　宗教・旬夕の吉凶・増減

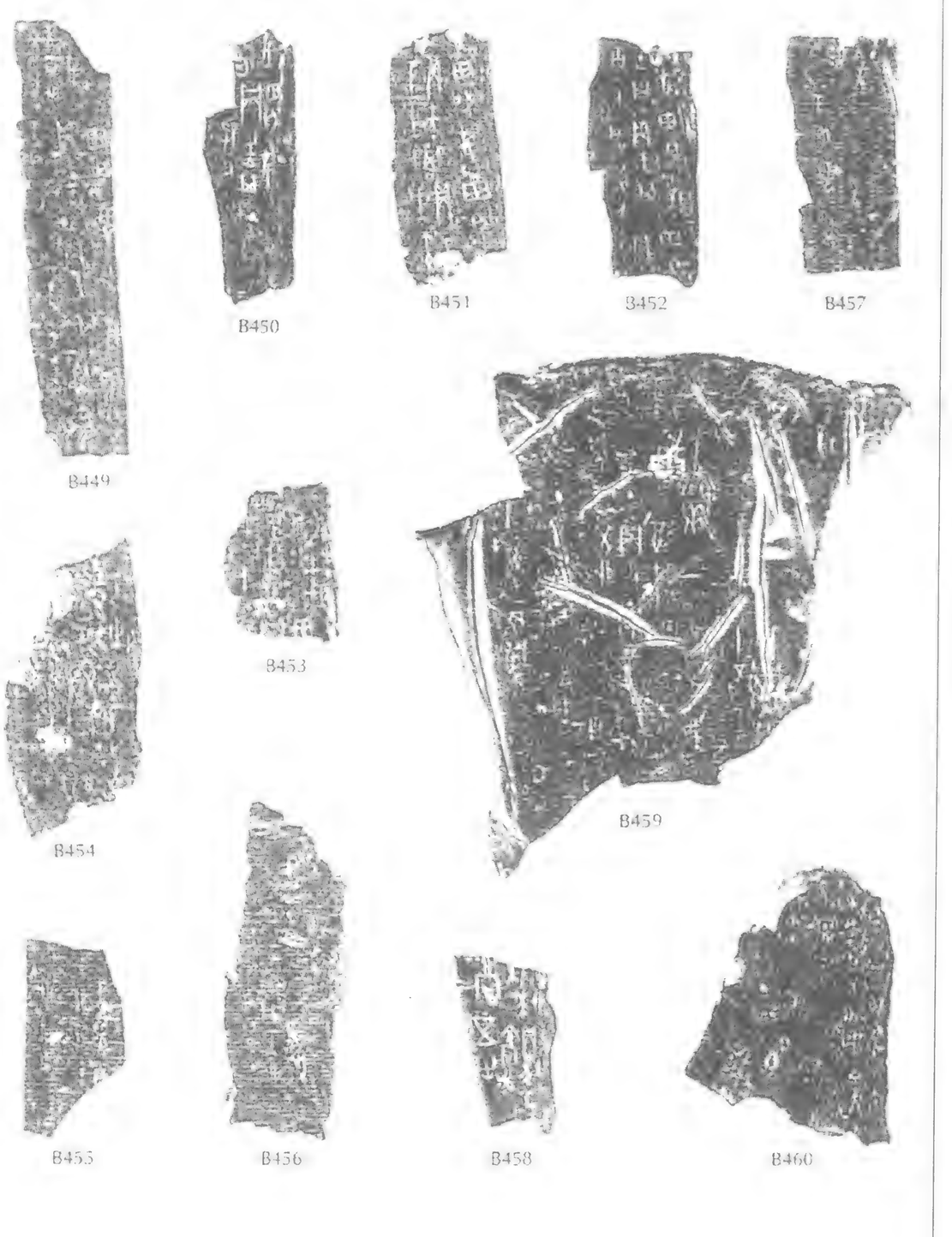


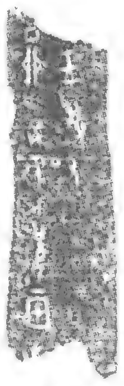


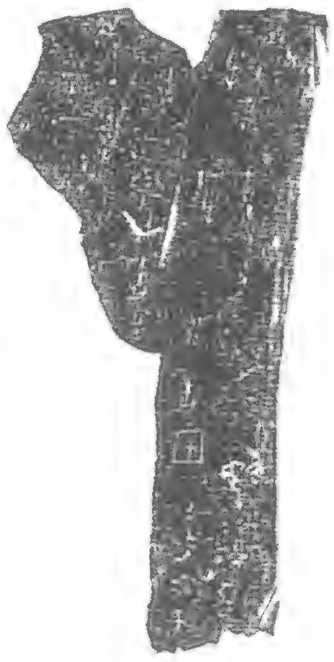
449～453　第二期　特属

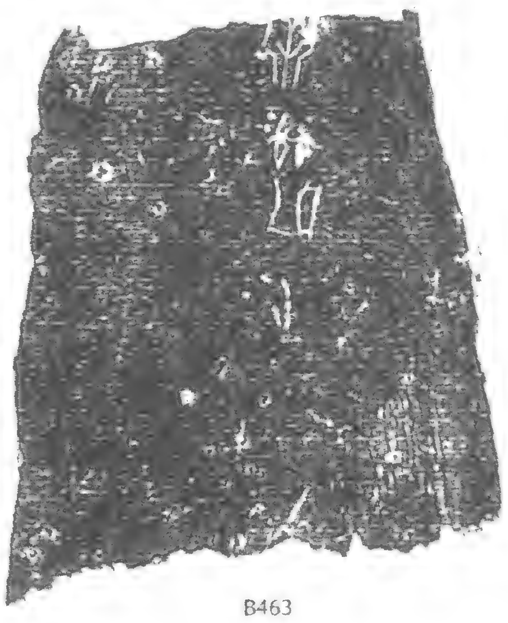
454～460　第三・四期　宗親

●449～460



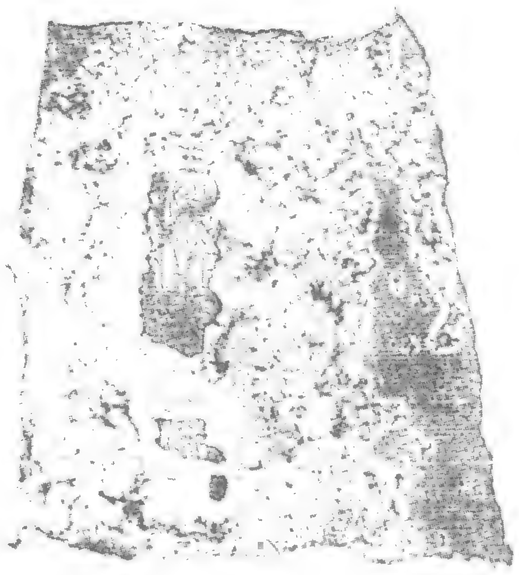

B461

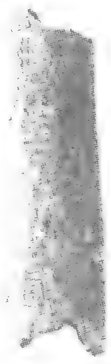

B462


B463


B464


B465

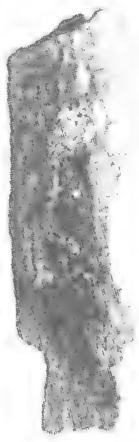

B463b

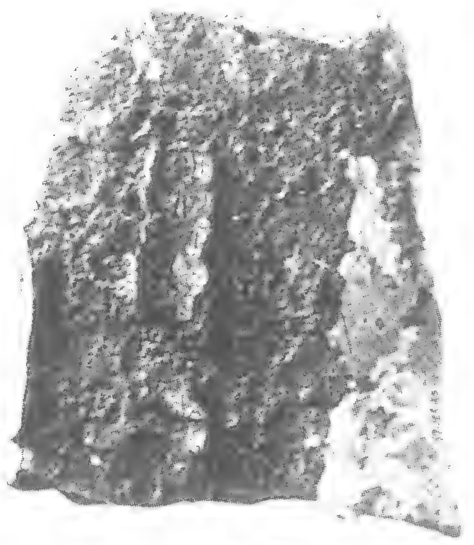

B461

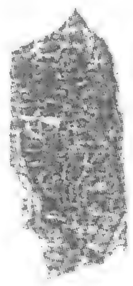

B462

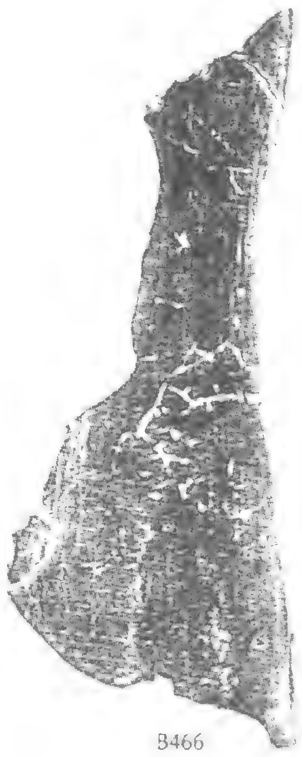

B463


B464


B465

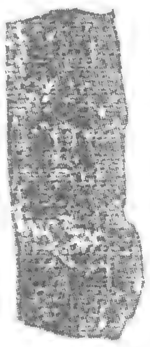

B463b

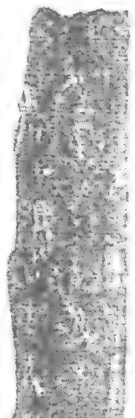

B467


B466


B469


B470


B468


B471


B472

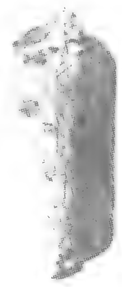

B473


B474


B475

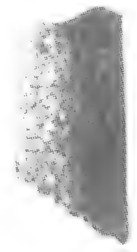

B476

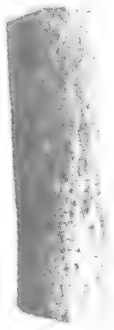

B477


B467


B466


B469


B470

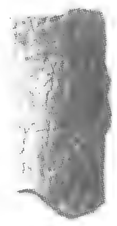

B468


B471

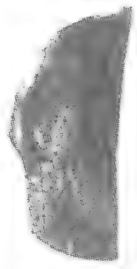

B472

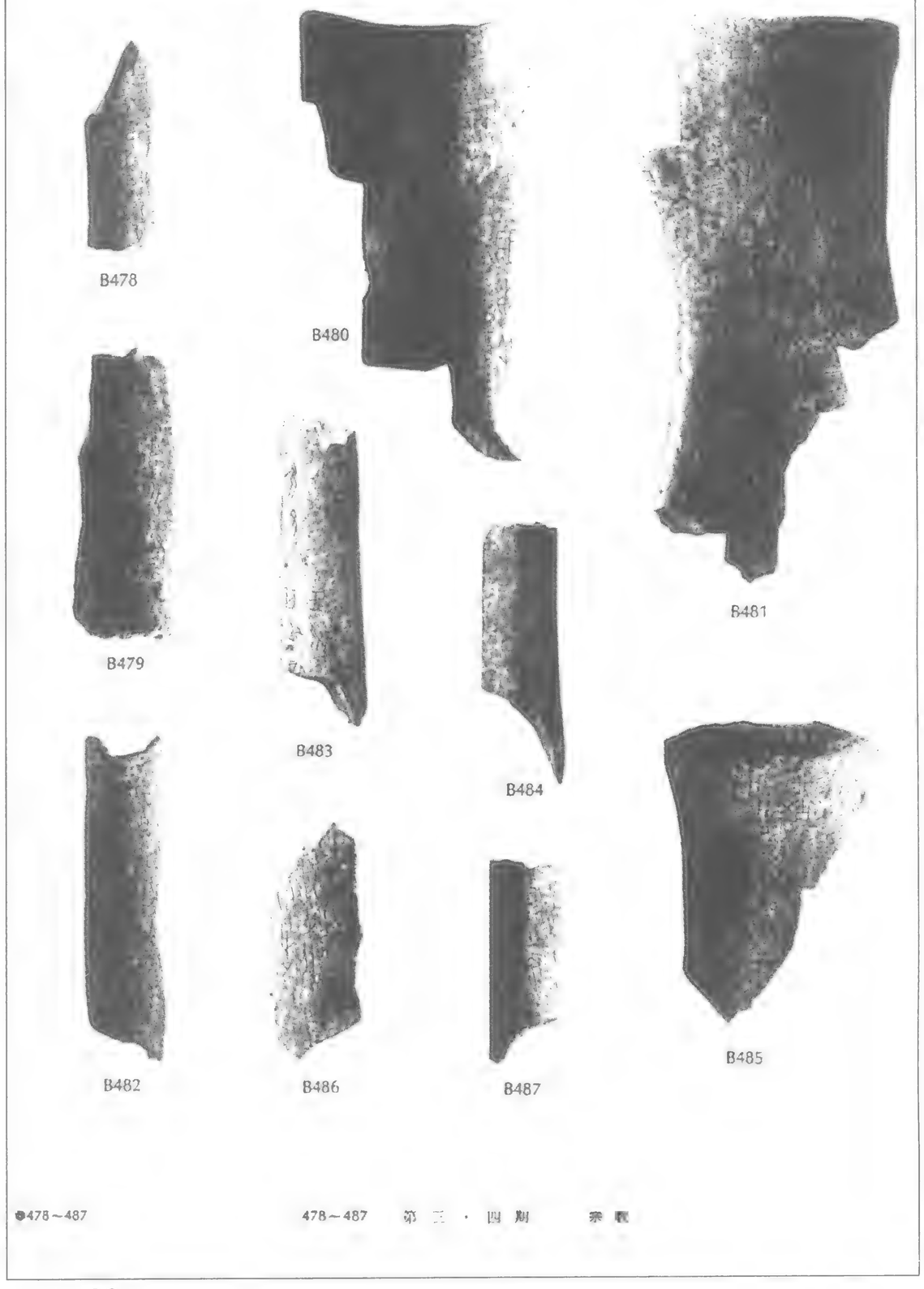

B473


B474

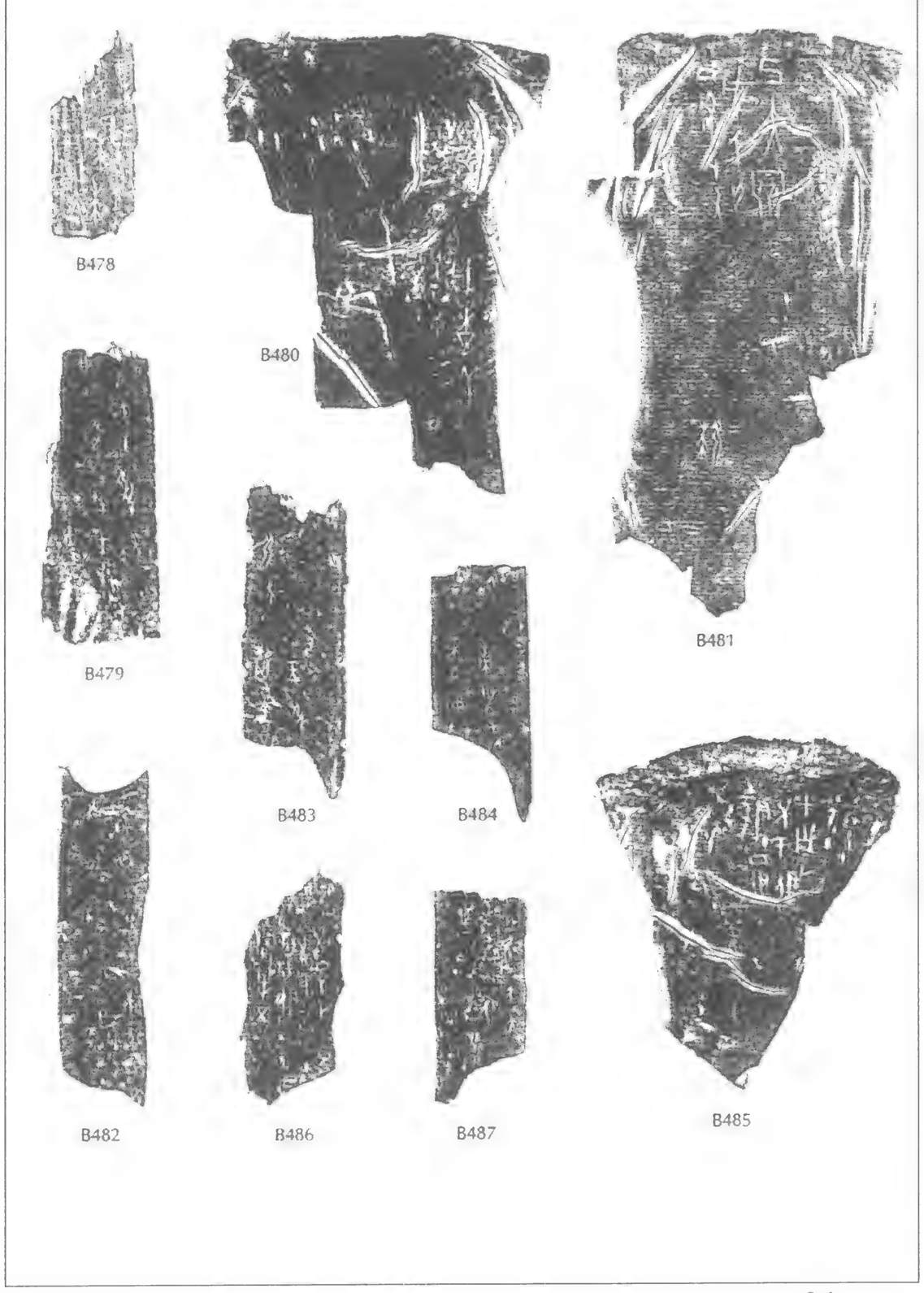

B475

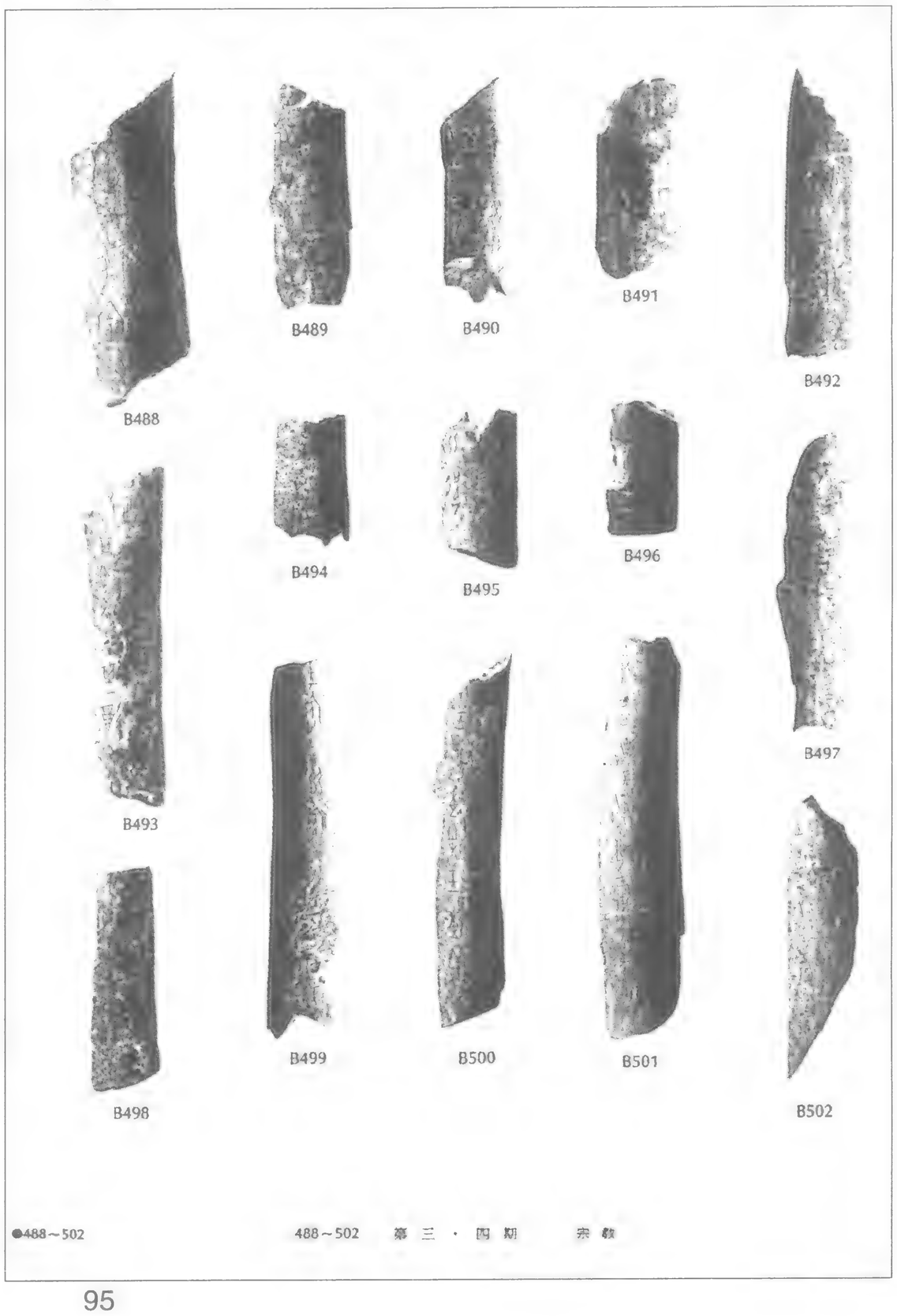

B476


B477

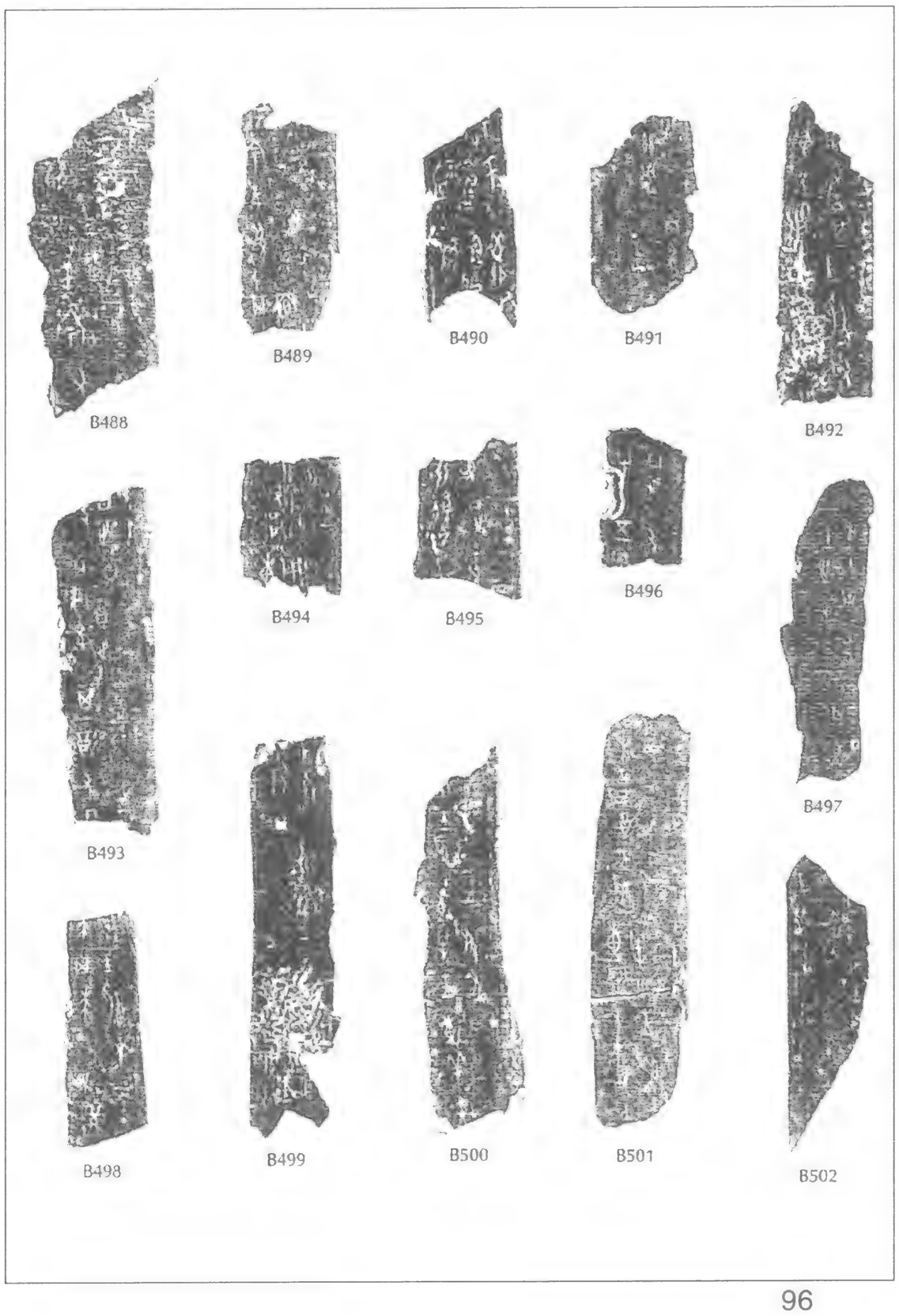


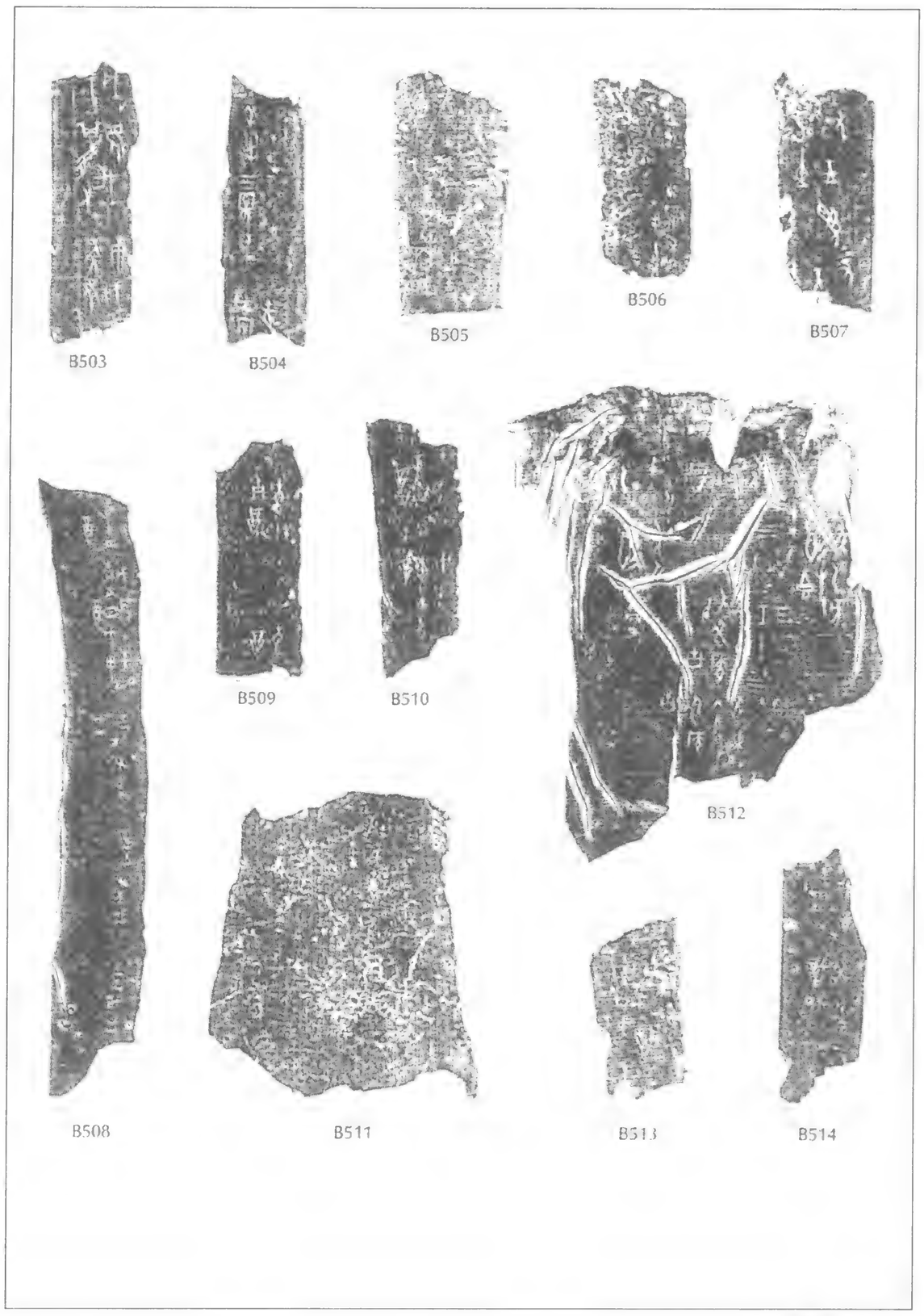
●478～487　478～487　第三・四期　宗教

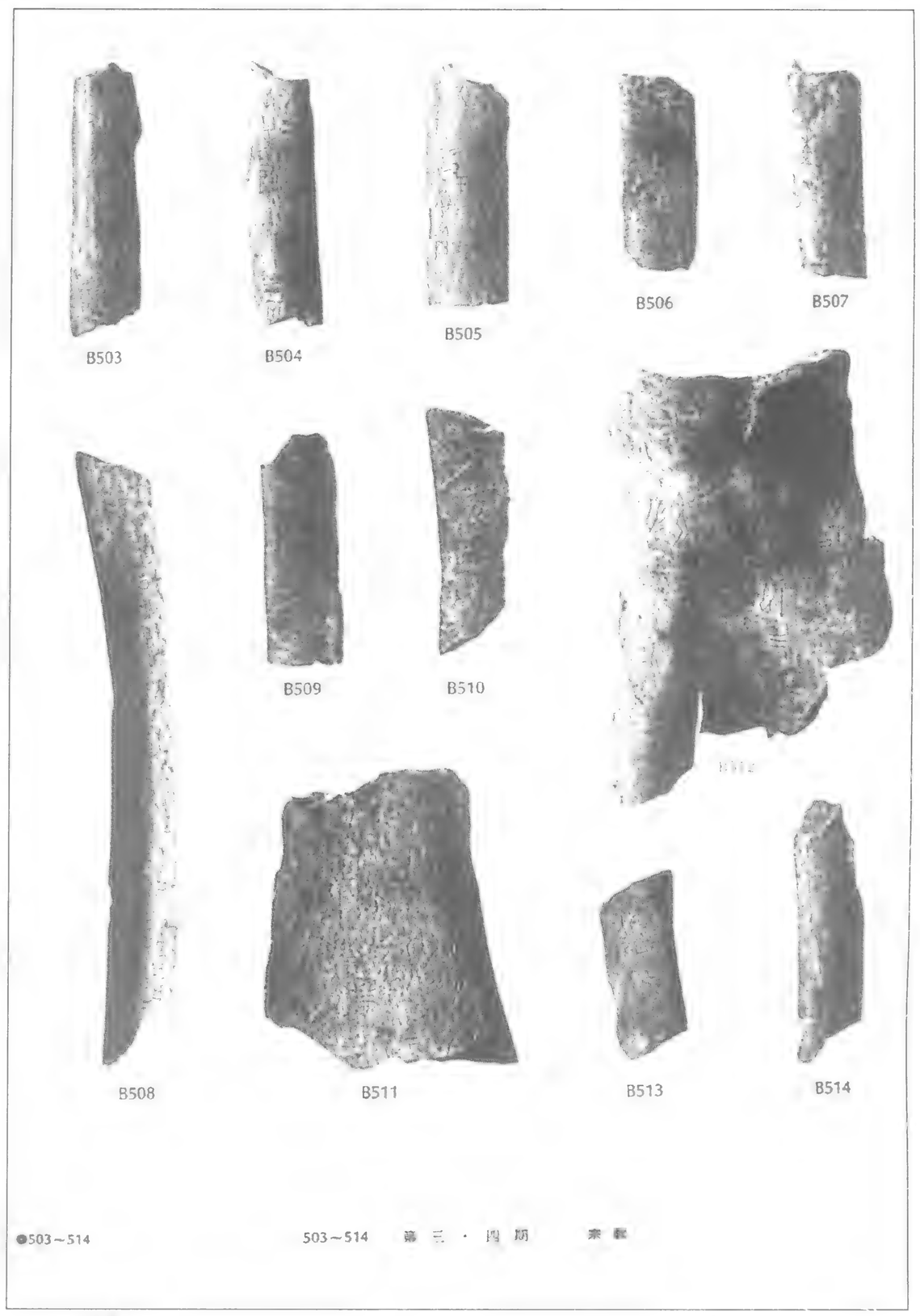


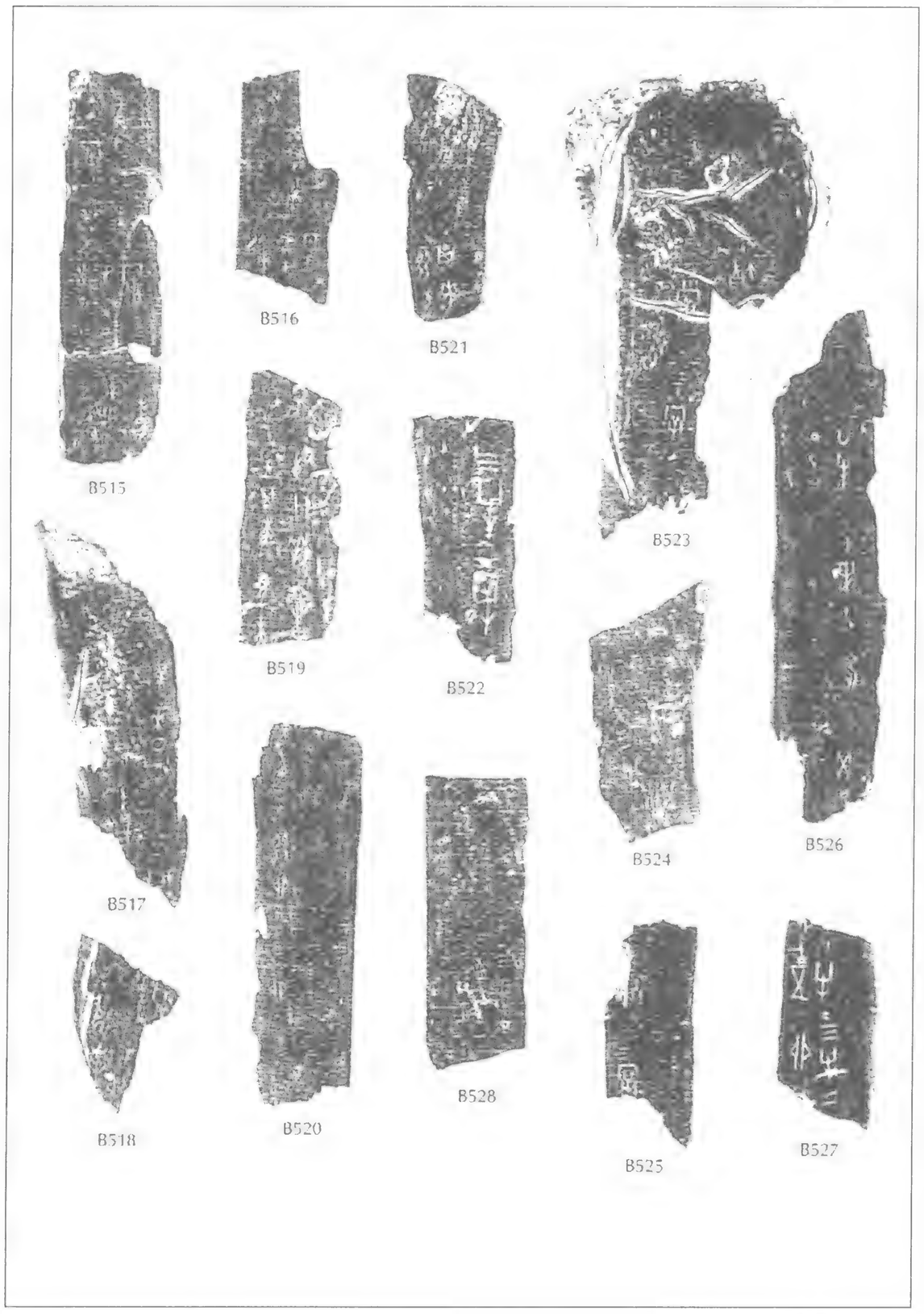


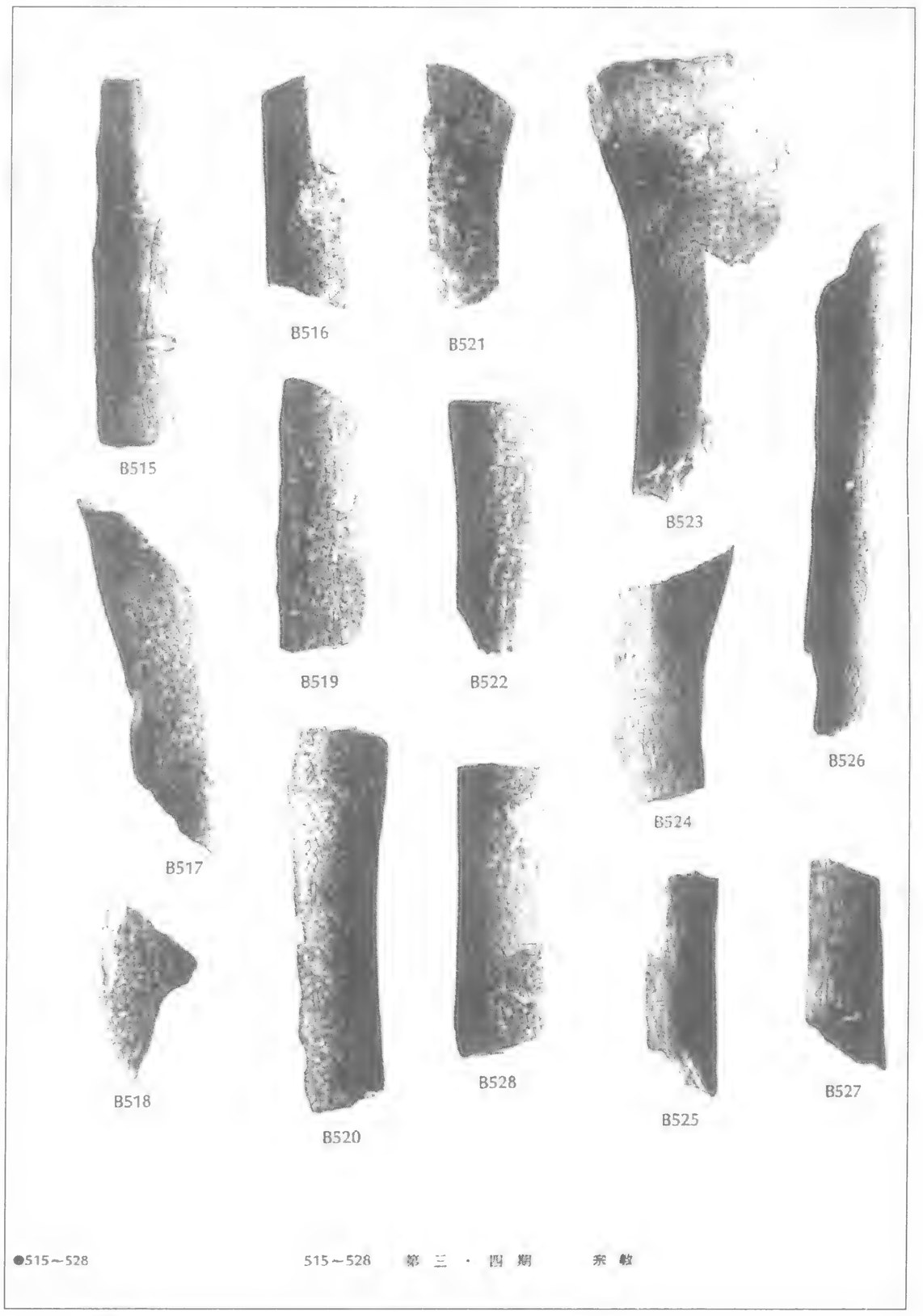
●488～502　488～502　第三・四期　宗教

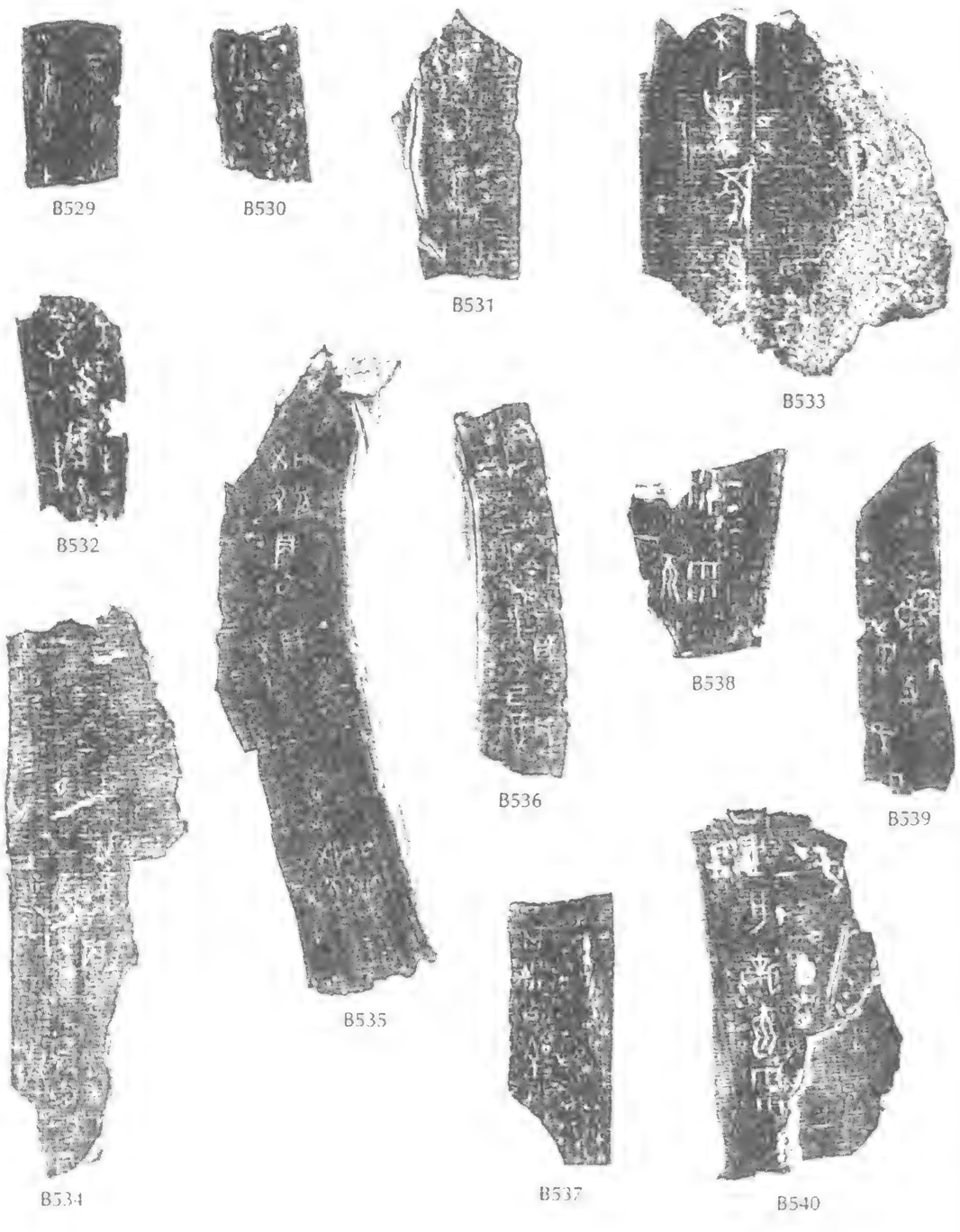


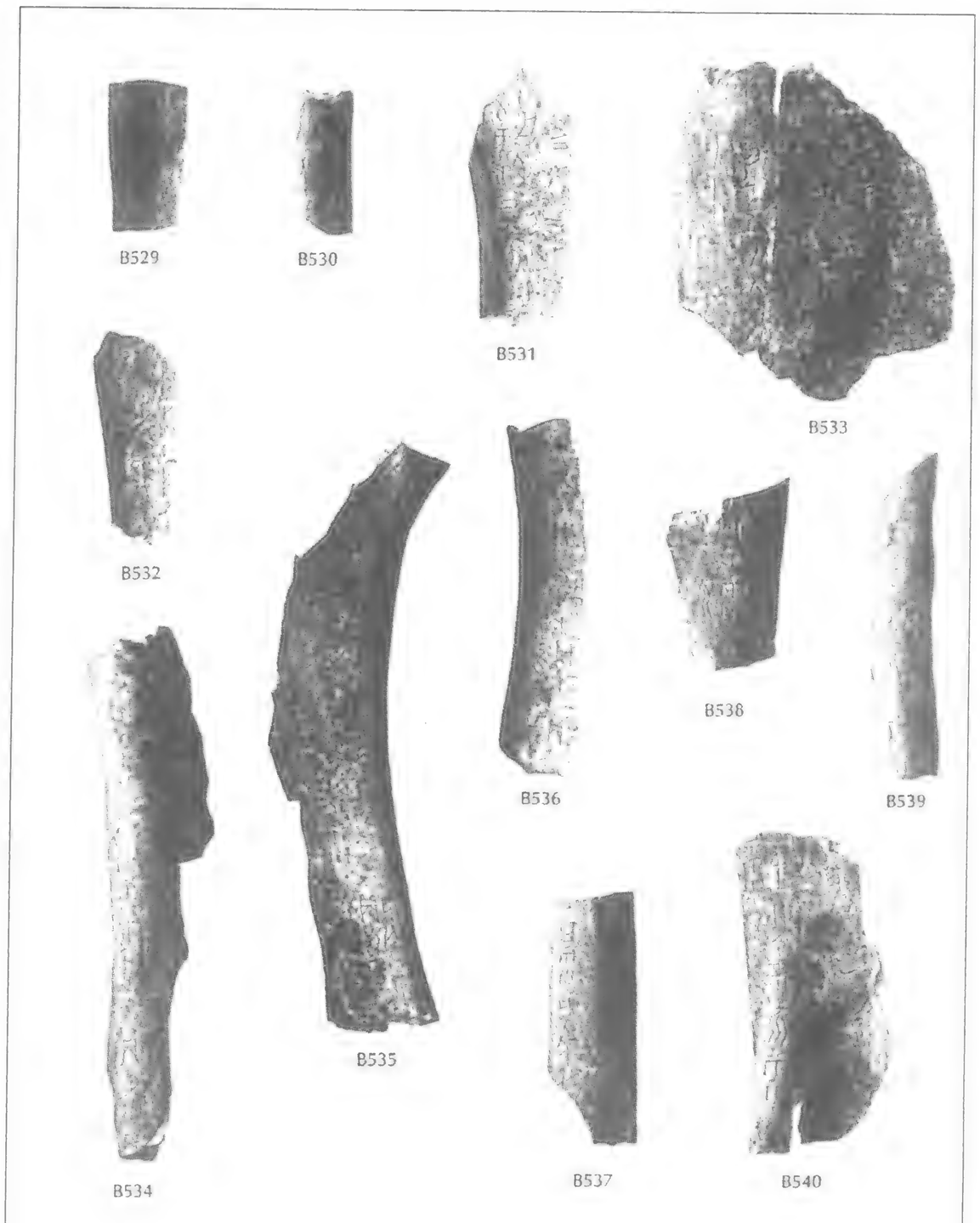

B503
B504
B505
B506
B507
B509
B510
B512
B508
B511
B513
B514


B503
B504
B505
B506
B507
B509
B510
B512
B508
B511
B513
B514
●503～514
503～514 第三・四期 泰戟

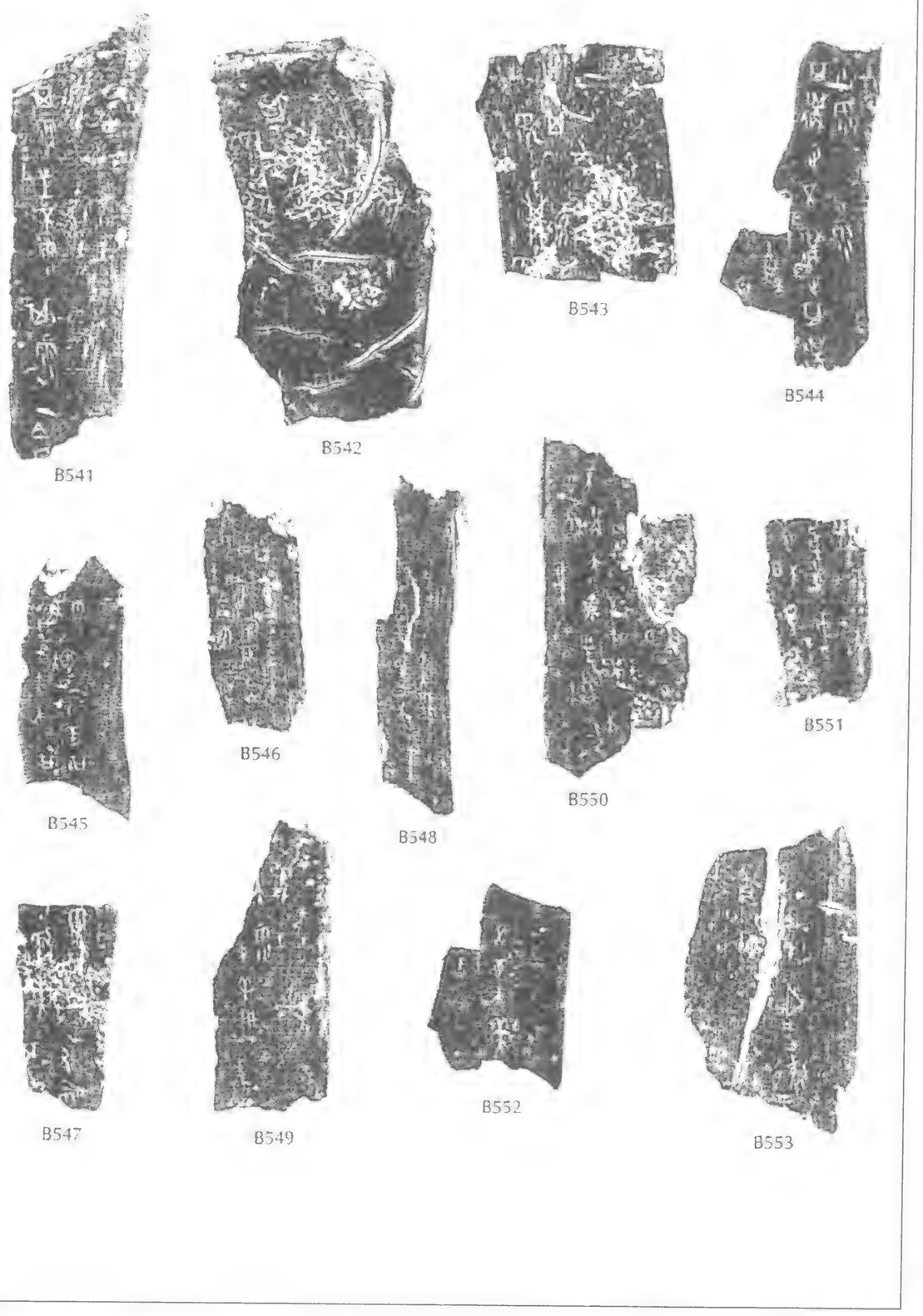

B515
B516
B521
B523
B519
B522
B524
B526
B517
B518
B520
B528
B525
B527

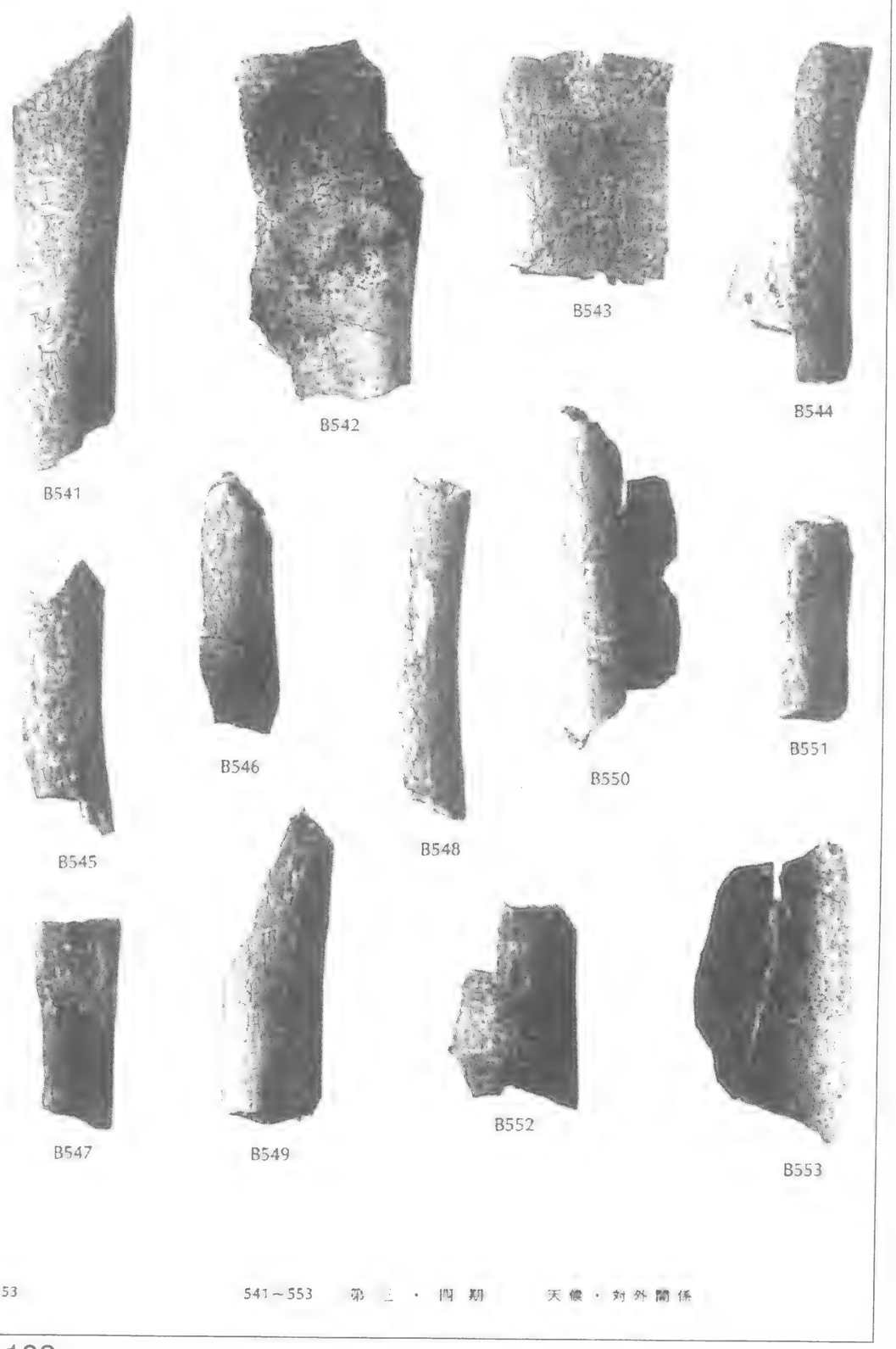

B515
B516
B521
B523
B519
B522
B524
B526
B517
B518
B520
B528
B525
B527
●515～528
515～528 第三・四期 泰戟



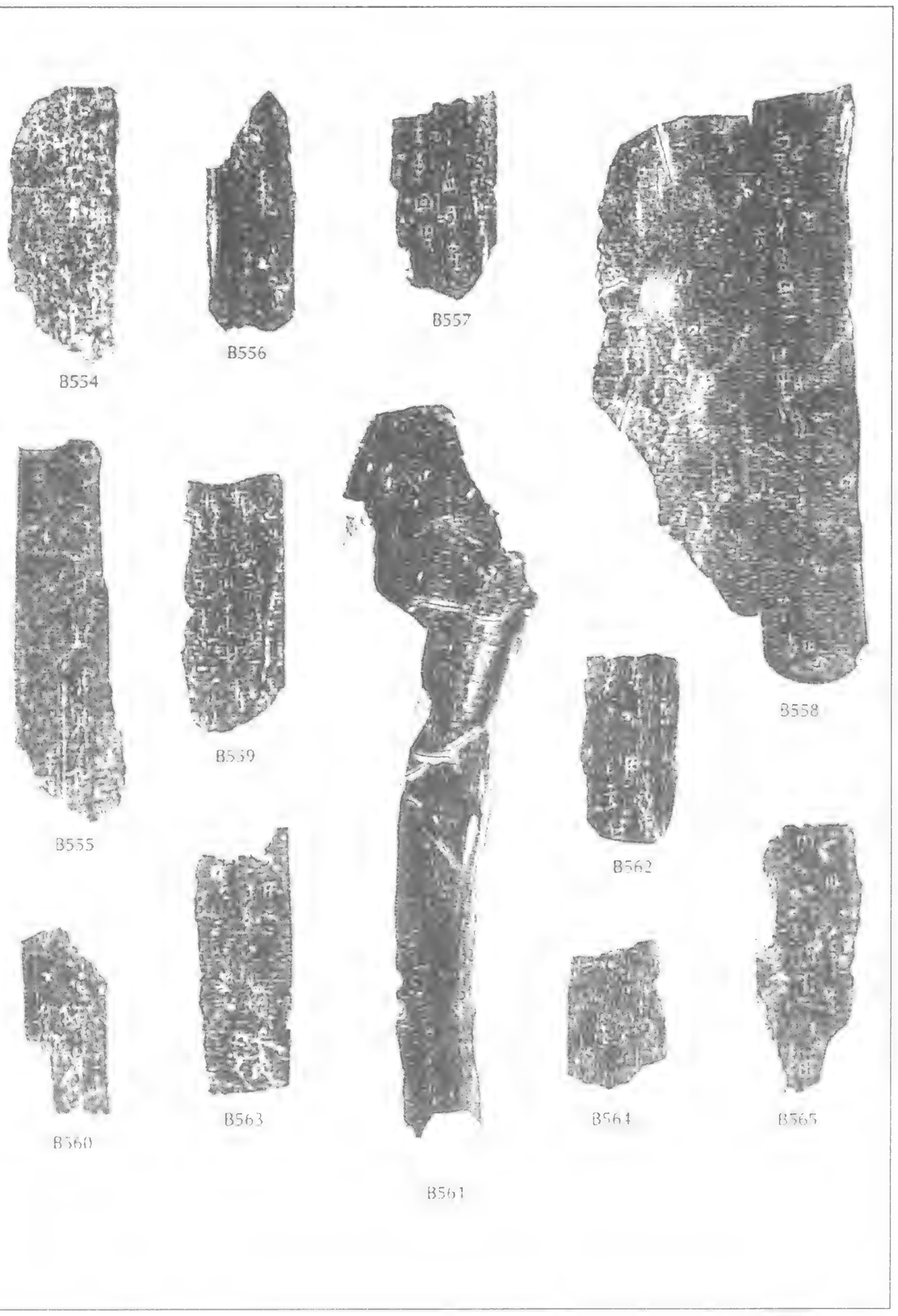


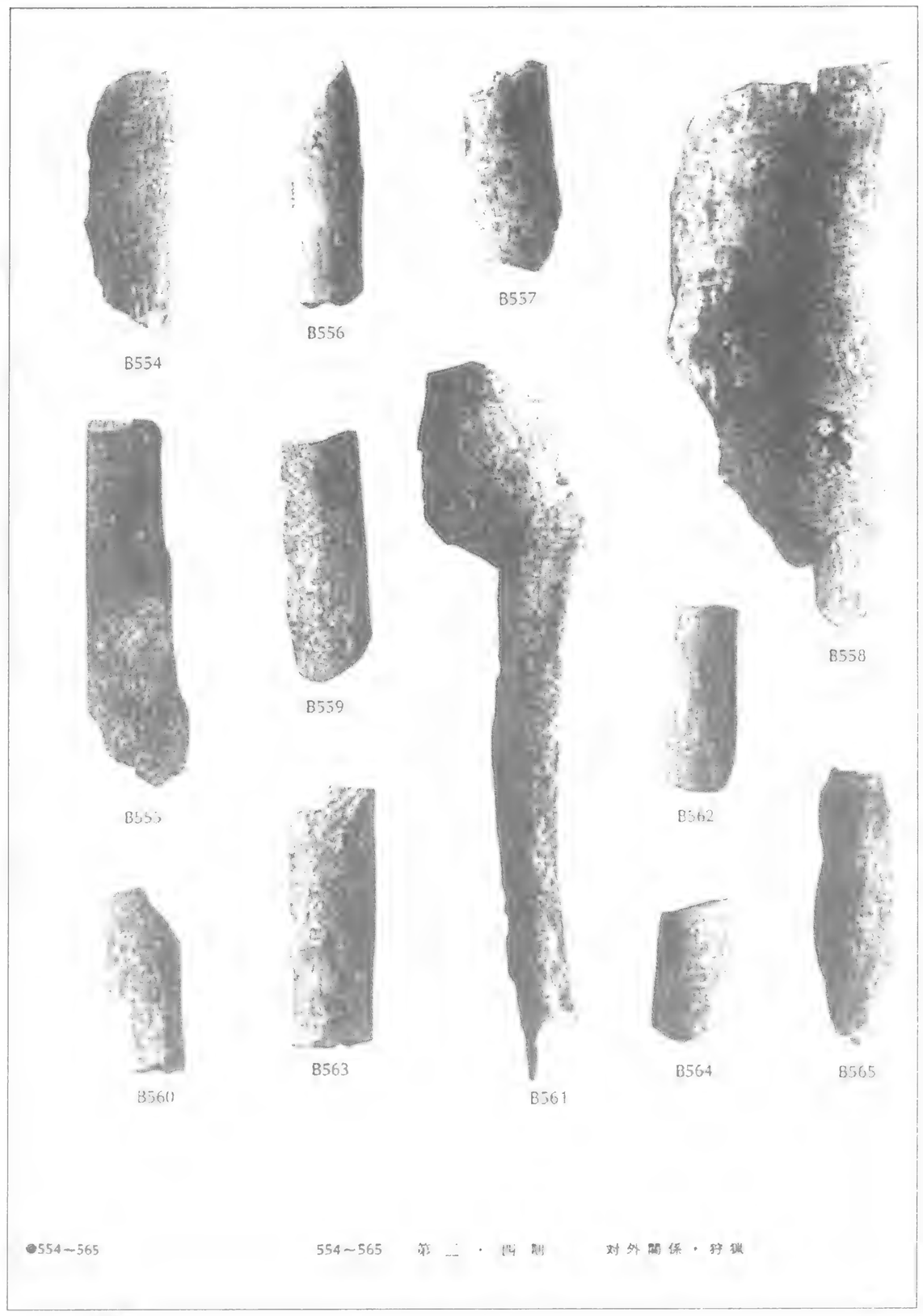
●529～540　529～540　第　・　四　期　宗廟・祓り・旬夕の吉凶・天候



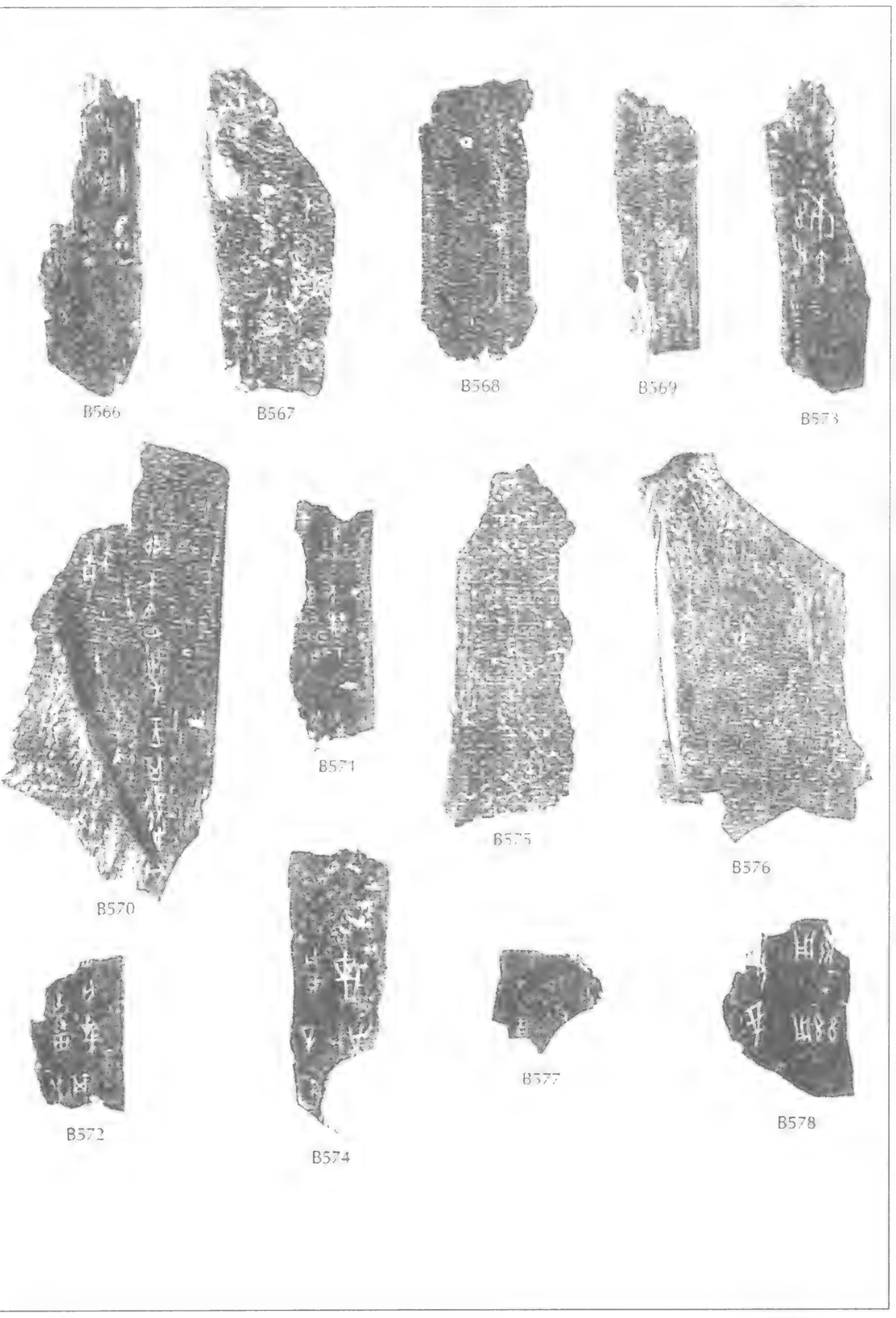


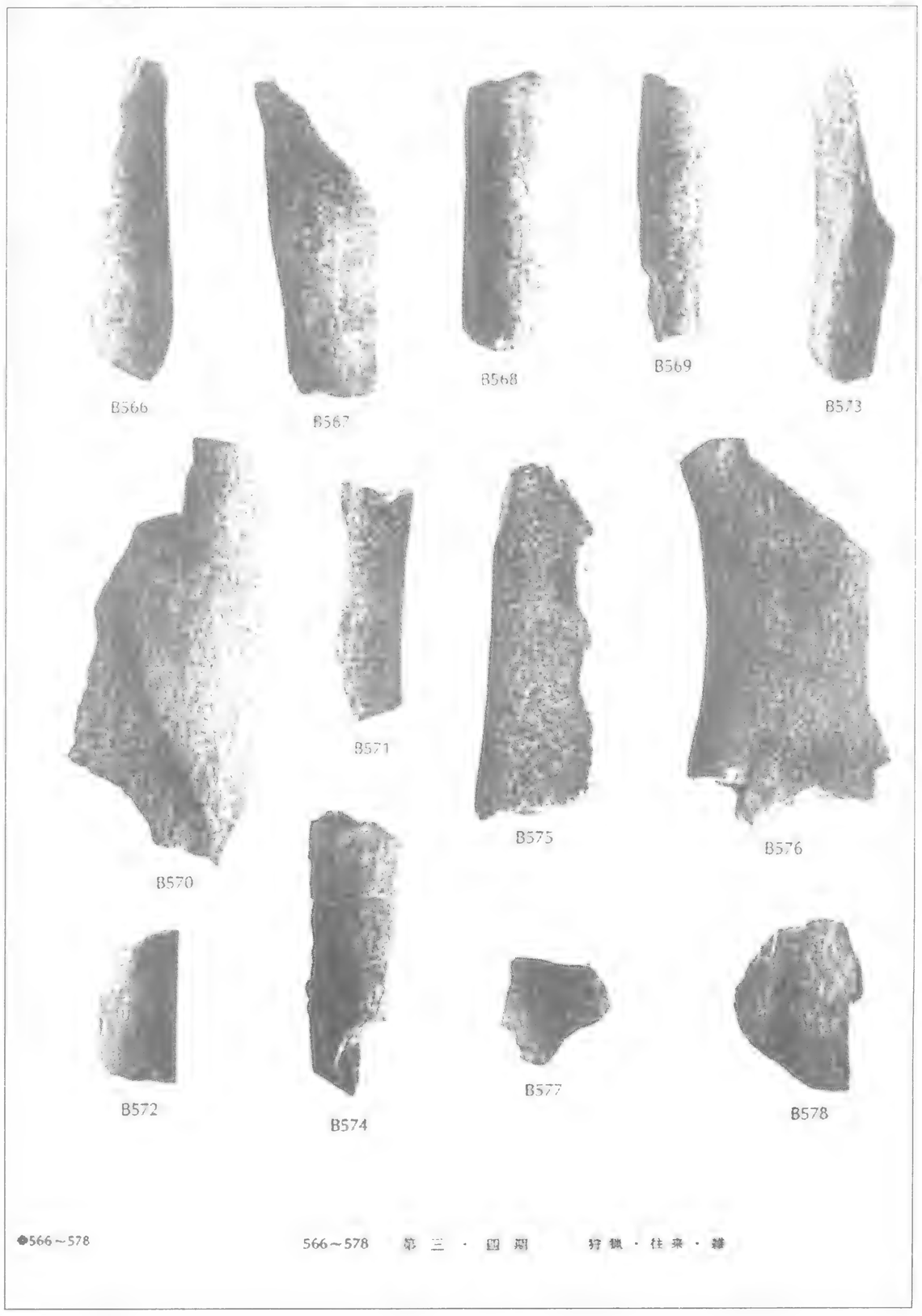
●541～553　541～553　第　・　四　期　天候・対外関係



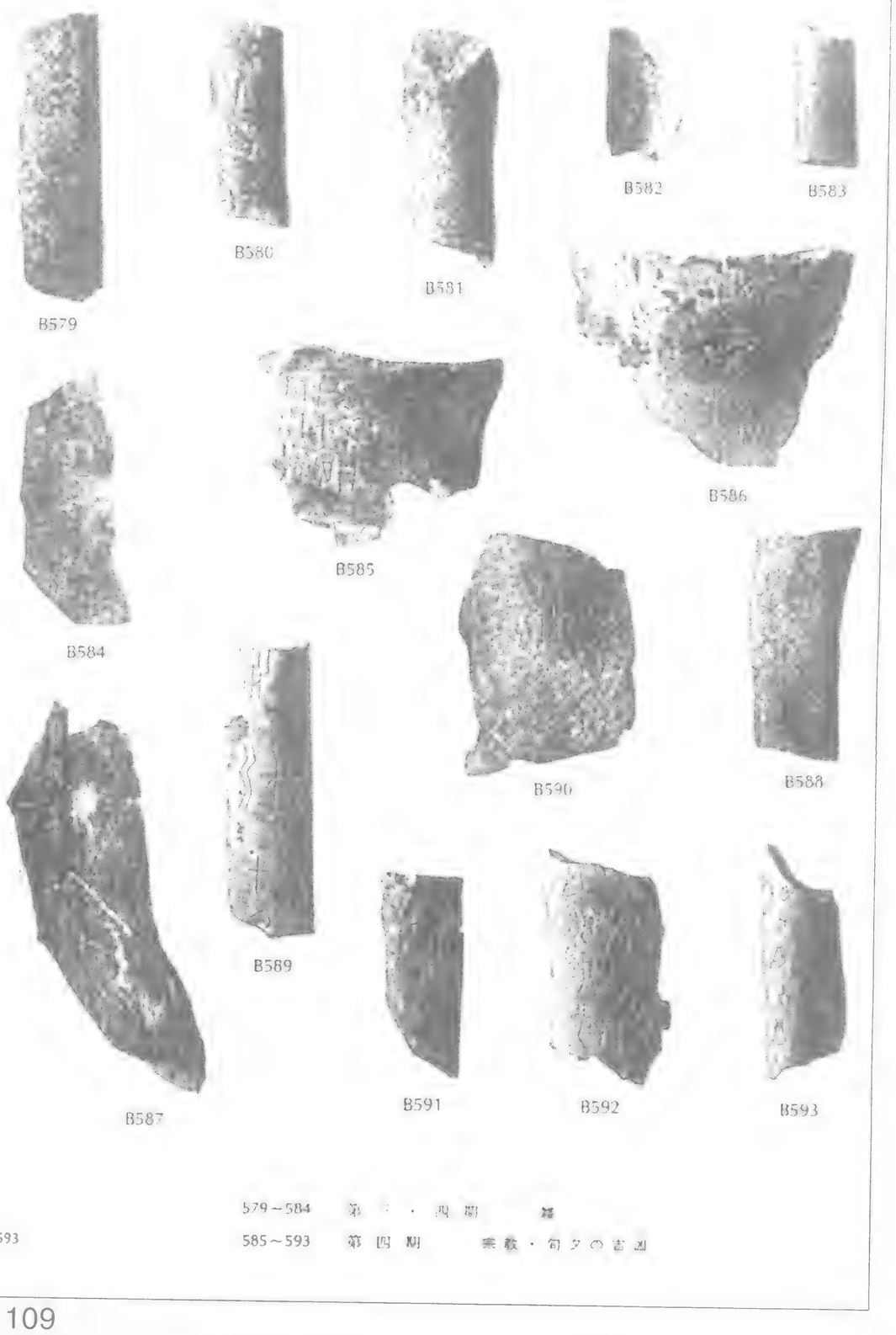


●554～565　554～565　第二・四期　対外關係・狩獵





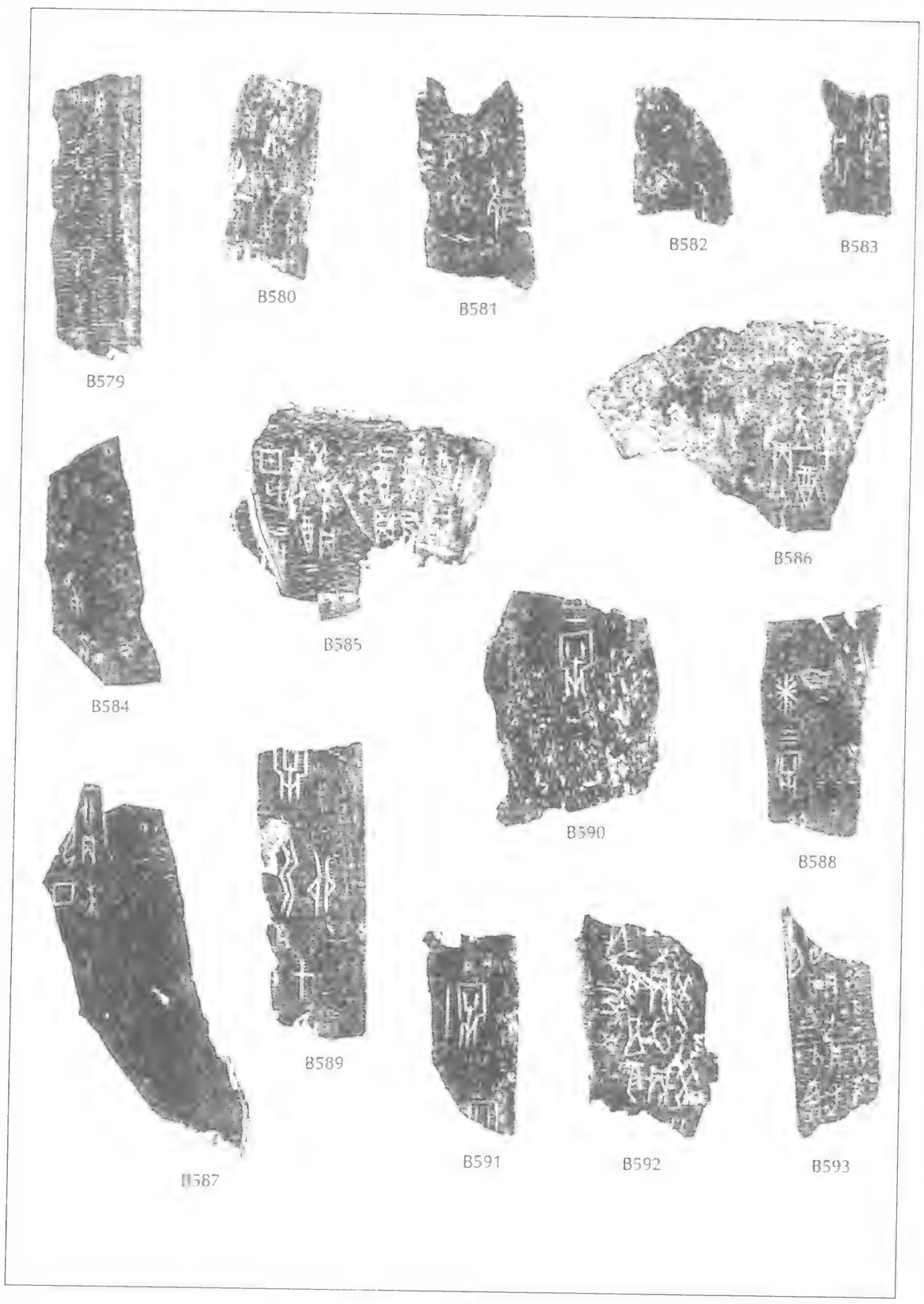
●566～578　566～578　第三・四期　狩猟・往来・雑

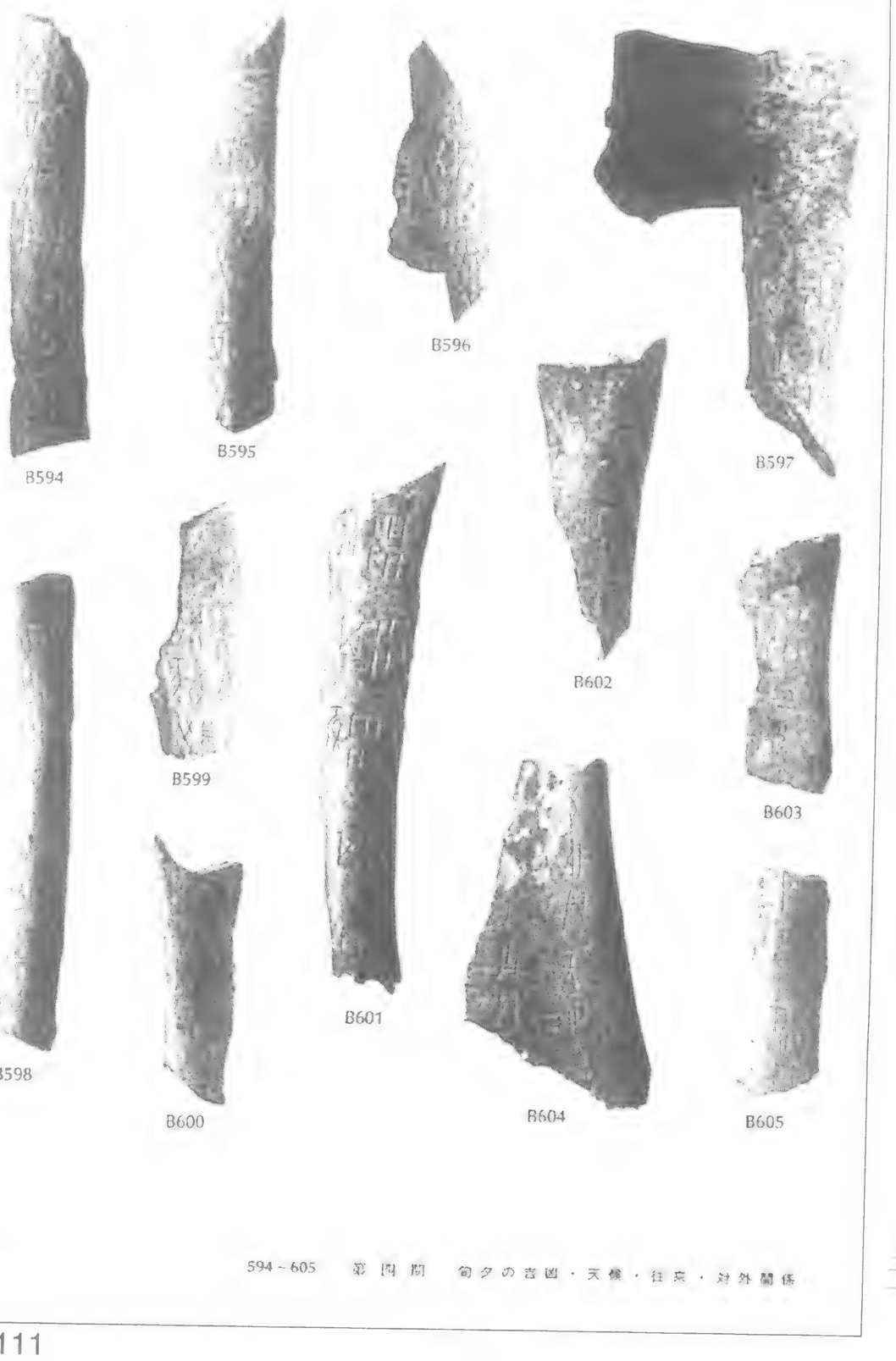


579～584　第一・四期　雑

585～593　第四期　宗教・旬夕の吉凶

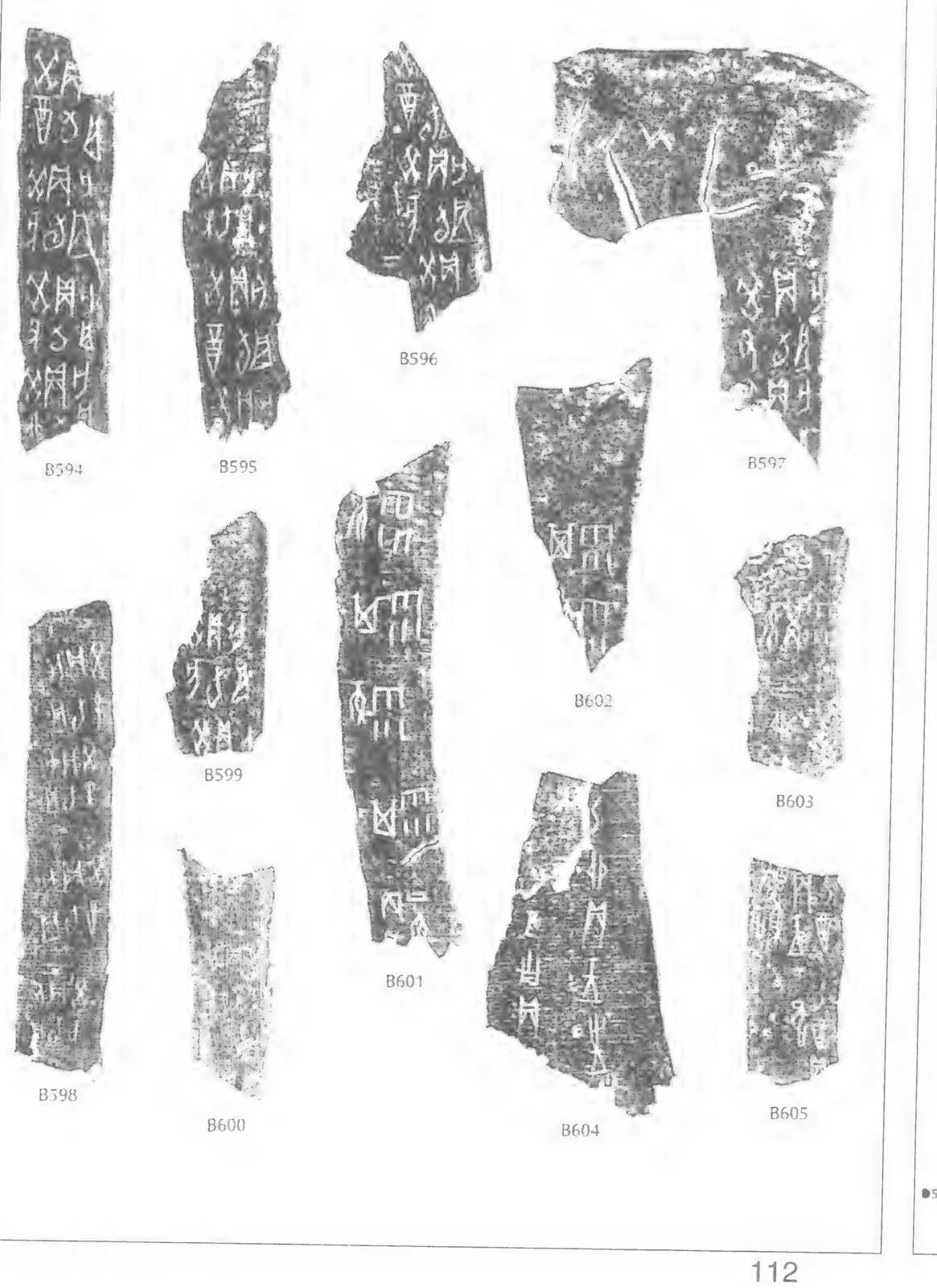
●579～593

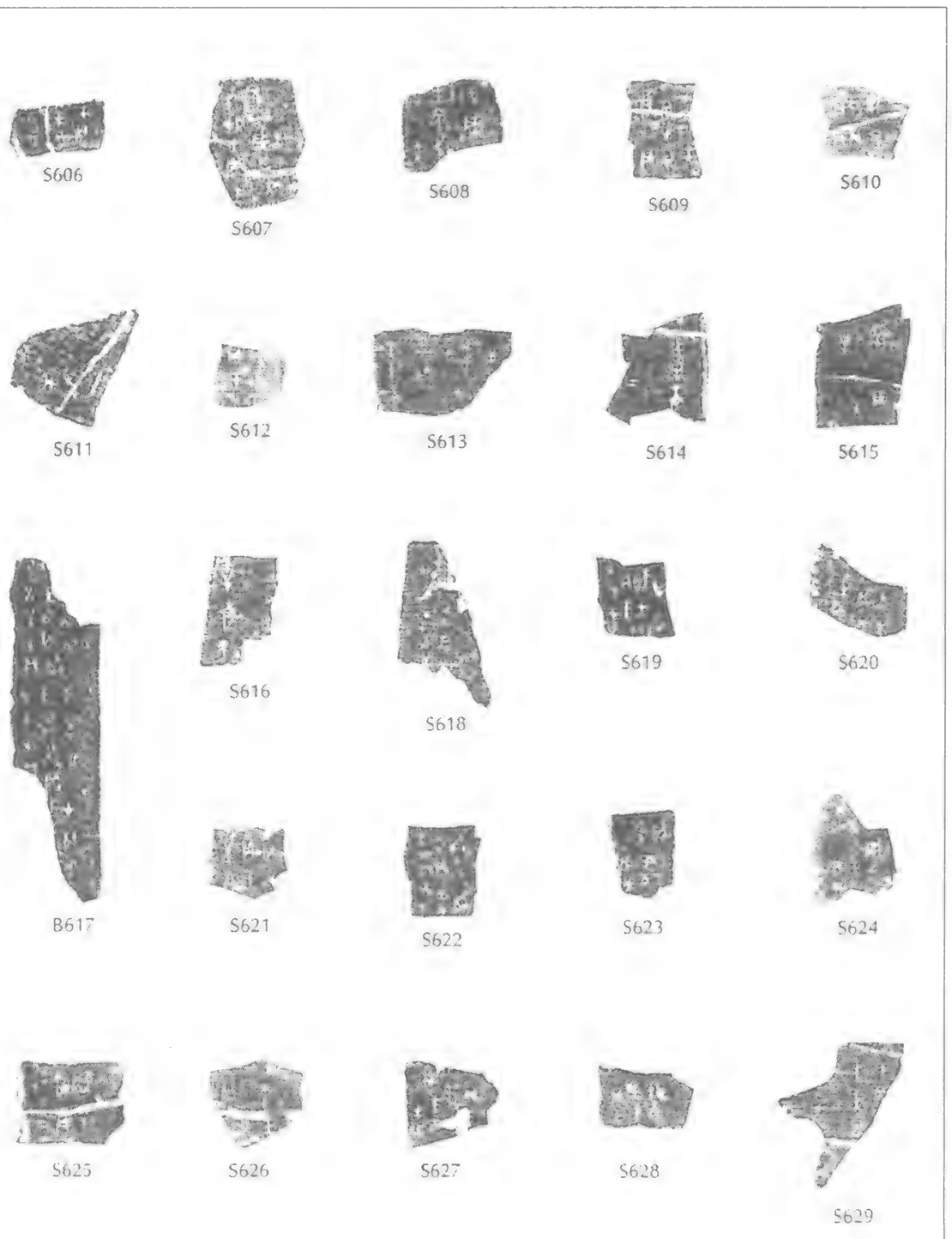


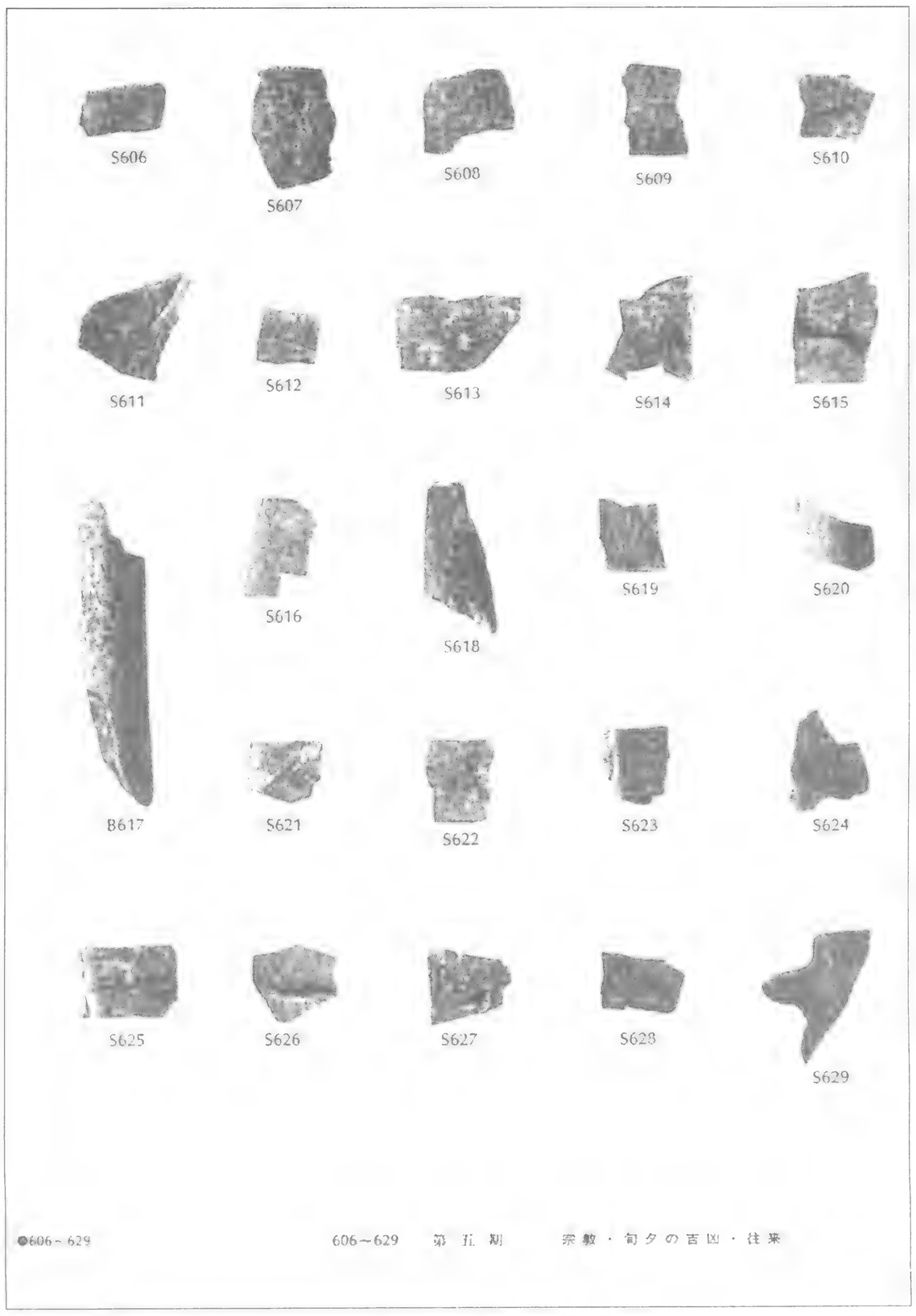


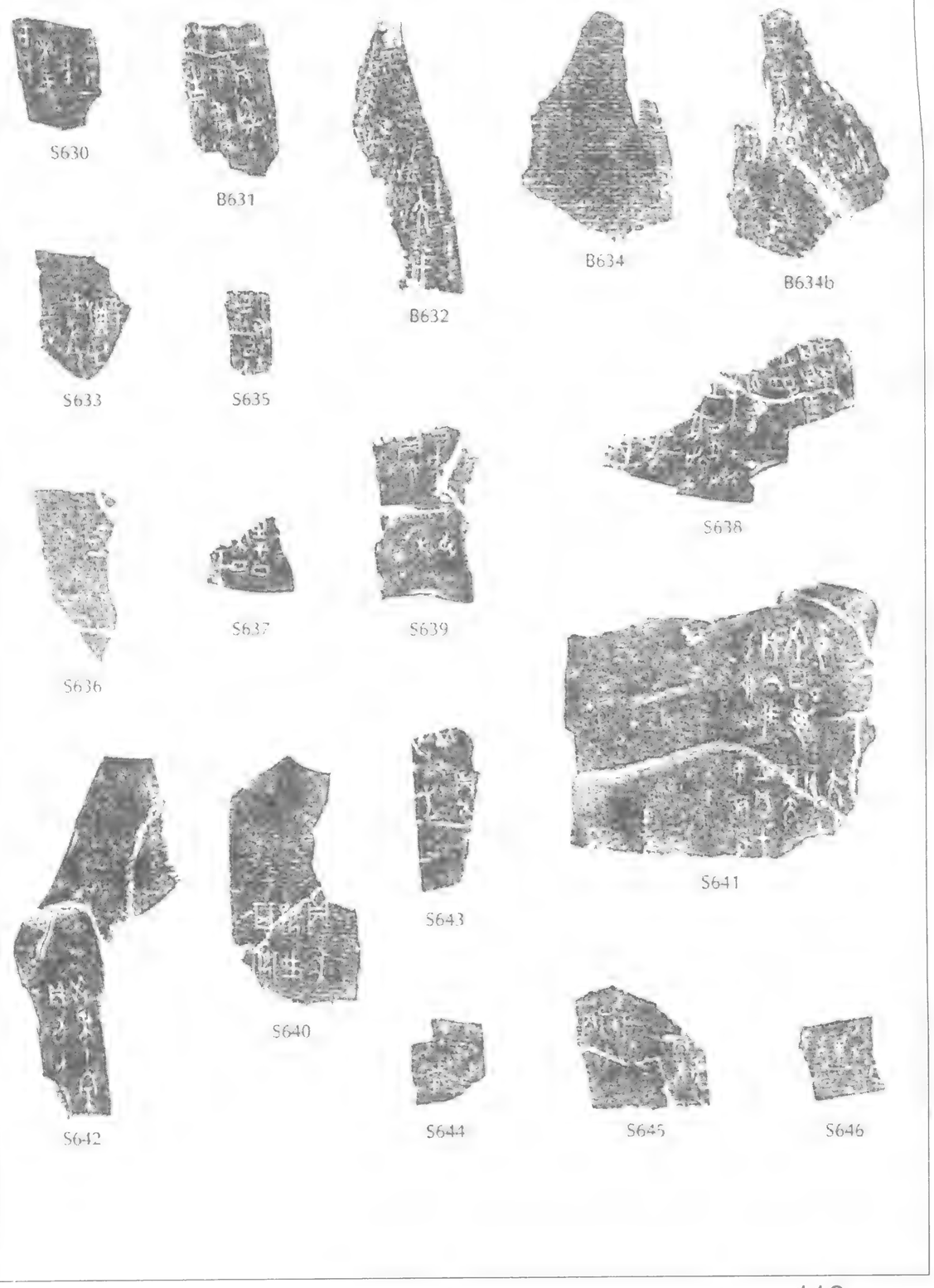
594～605　第四期　旬夕の吉凶・天候・往来・対外関係

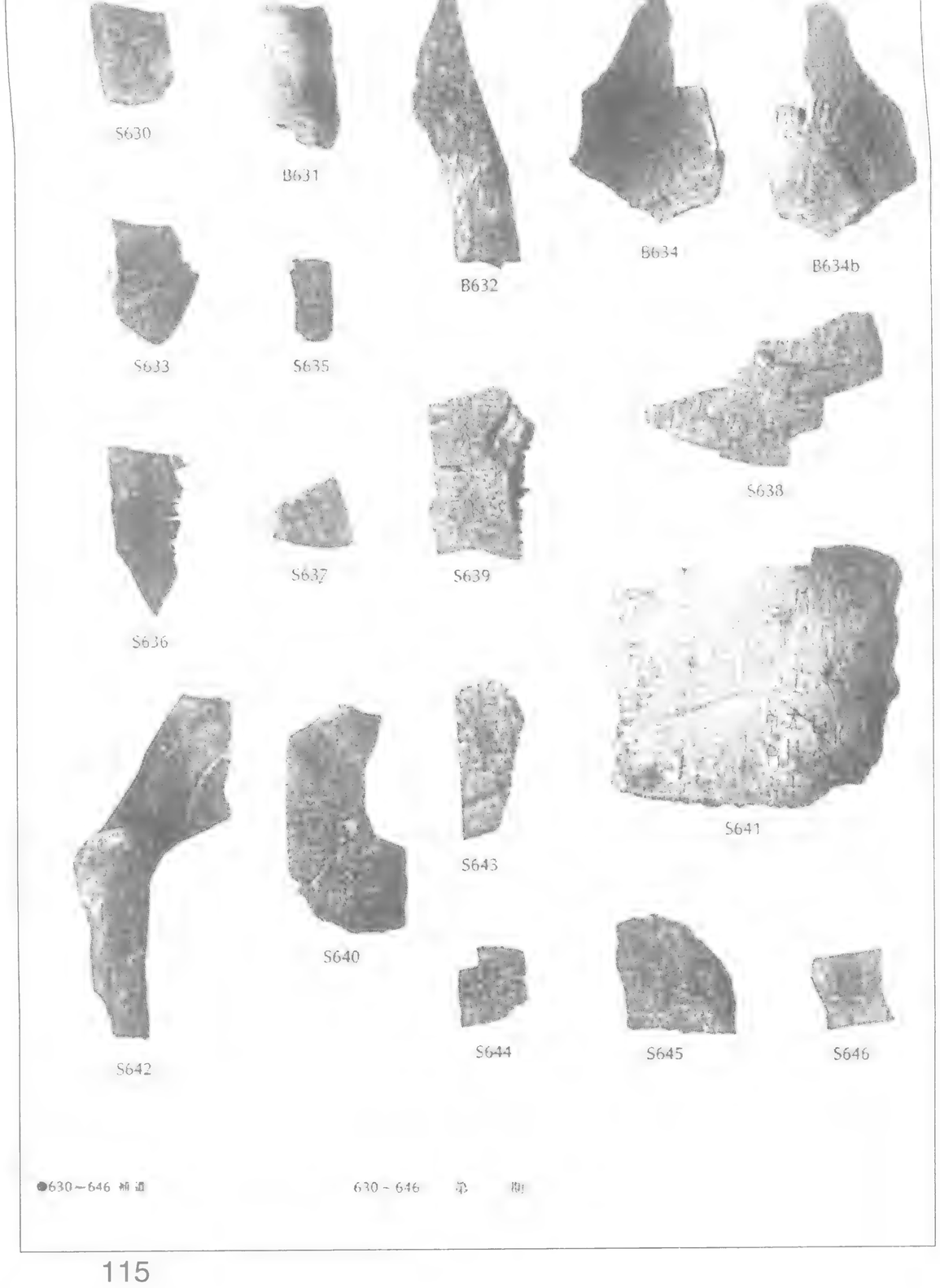
●594～605




S606
S607
S608
S609
S610
S611
S612
S613
S614
S615
S616
S618
S619
S620
B617
S621
S622
S623
S624
S625
S626
S627
S628
S629


S606
S607
S608
S609
S610
S611
S612
S613
S614
S615
S616
S618
S619
S620
B617
S621
S622
S623
S624
S625
S626
S627
S628
S629
●606～629
606～629 第五期 宗教・旬夕の吉凶・往来

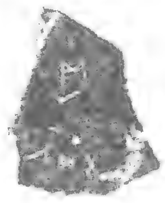

S630
B631
B632
B634
B634b
S633
S635
S636
S637
S638
S639
S640
S641
S642
S643
S644
S645
S646


S630
B631
B632
B634
B634b
S633
S635
S636
S637
S638
S639
S640
S641
S642
S643
S644
S645
S646
●630～646 神通
630～646 第 期

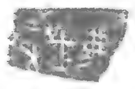

S647


B648


B649


S650


S651

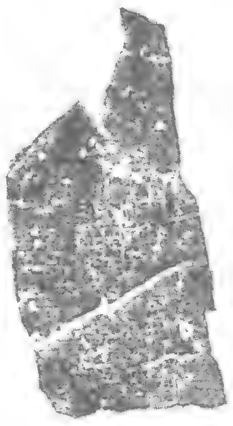

S652


S653

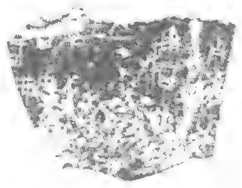

S654


S655


S656


S659


S657

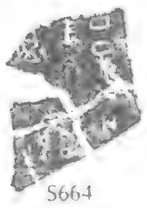

S658


S660


S661


S662


S663


S664


S665

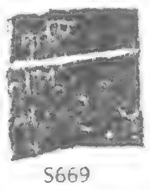

S666


S667

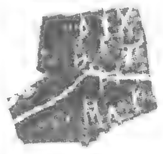
647～660　第　期
662～667　第　期

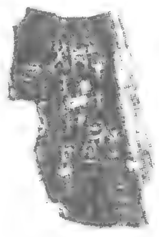
●647～667 補遺


S668


S669


S670

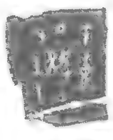

S672

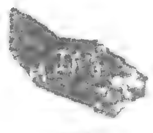

B671


S673


S674


B675


S676

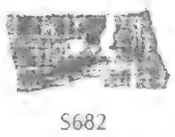

S677


S678


S679


B680


S681


S682


B683


S684


S685


S686


S687


S688


S689

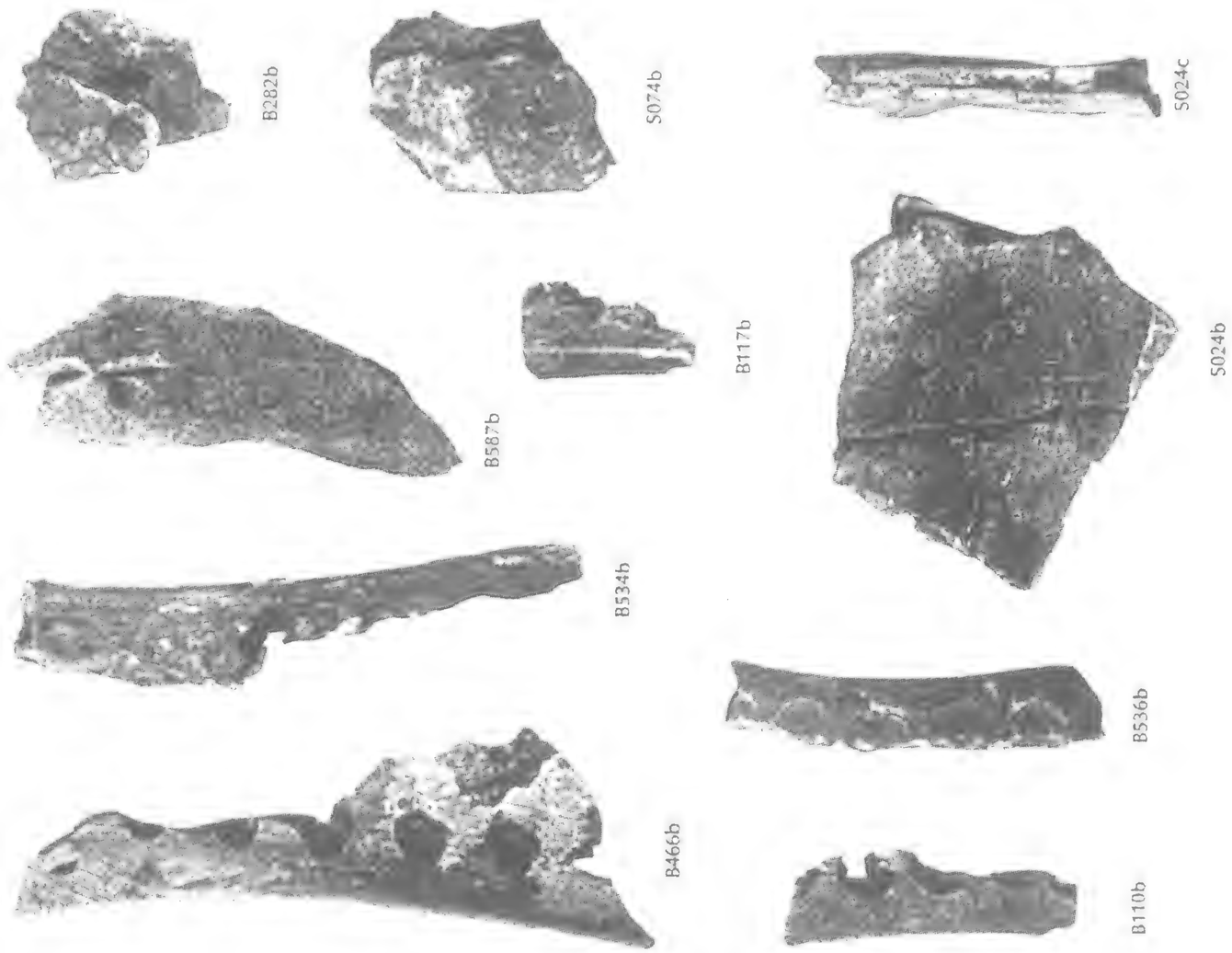

S690


S691

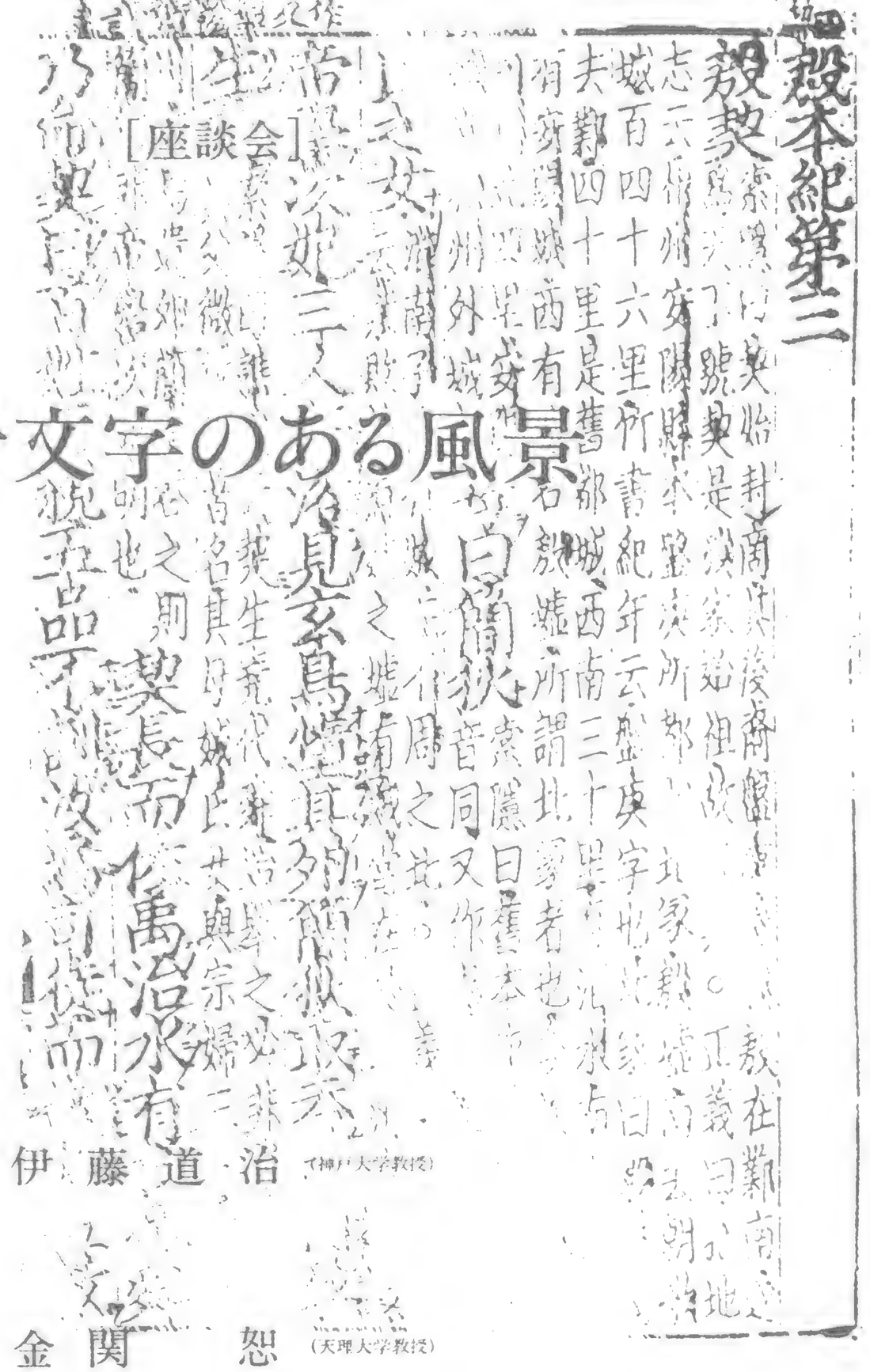

B692

668・670　第　期
669・671～675　第　期
676～692　第　期

●668～692 補遺



甲骨文字のある風景



伊藤　道治（神戸大学教授）

金関　恕（天理大学教授）

近江昌司（天理参考館学芸員）

近江　今日は甲骨文字という非常に特殊な、それでいてわれわれ日本人が日常使っている文字はみなこれから出発しているという点で、漢字のルーツそのものなのですが、その甲骨文字を取り上げたいと思います。特殊なものだけに研究者はわずかで、おそらく現在日本の甲骨学者といえば数人をかぞえるぐらいではないかと思います。そのお一人で中国からも高い評価を受けておられる伊藤道治先生に、金関さんと二人で甲骨文字に関するいろいろなお話をうかがいたいと思います。
どうぞよろしくお願いします。

◉製作と占いの方法

近江　いきなり具体的な話を切り出しますが、一般の人に甲骨文字を説明するのにこのように話していますが、間違いを訂正して下さいますか。
「中国の殷時代は青銅器時代ですから青銅の刃物も造ります。しかし、特にその中心は青銅彝器と呼ばれる容器ですね。殷の王様が政治を行うのには神様の意志を聞うてみるのですが、そのために盛大な神の祭りをやらねばなりません。その神祭に使うのが青銅彝器です。祭りが終わったら亀の甲か牛の骨に神様の判断を仰ぐ文章を刻んで火にくべる。そうするとひび割れがおこりますから、ひびの方向によって神の意志を聞くことができる、一種の占いをするわけです。その後で神人共食ともいう神と人との宴会、つまり直会があるわけでしょう。この占いには亀の甲か、牛のような獣の骨に文字を刻むので、これを甲骨文とか甲骨文字、あるいは卜辞というわけです。この文字は現在われわれが知り得る最も古い漢字の原形なのです」といった具合に申しますが、いかがでしょうか。

伊藤　いや、そうではないのです。祭りをする前に、この祭りをやるのがいいか、その時の犠牲は牛がいいか、羊がいいか、何匹がいいかといったことを占うのです。その占いの結果を見た上で祭りをし、そのあとに直会をしたのです。占う時はひび割れだけで判断し、占いが終わったあとで質問した内容を書いておくのです。だから甲骨文字は占いを記録するために書いておくものです。非常に宗教的な記録なのですね。

金関　それでは、甲骨文字に至る順序というか製作過程をうかがいましょう。まず甲骨を手に入れて一番初めにすることは何ですか。

伊藤　一番最初にしたことは、おそらくお祓いをしたと思います。それで牛骨の例で申しますと、牛の肩甲骨を使います。前肢のかみ

資料ー1



あうところ（関節）が円板状になっていますから、これを半分に裁断して骨の裏側をそぎ落とすのです。骨には筋肉なんかとくっつきやすいように凹凸した部分があったりしますので、そぎ落として平らにするわけです。それから裏側に小さな穴をあけます。

近江　その穴に火をあててひび割れをおこさせるのですね。ここまでが占いのための下ごしらえといったところでしょうか。

伊藤　そうですね。私は、こうしたものを前もってたくさん造っておいて、王から命令があったらこれを出して使うのだろうと思います。

金関　穴の列や数は決まっていますか。

伊藤　特別な決まりはありませんね。

近江　ひび割れは実際にどうやっておこすのでしょう。普通は「火にくべて」なんて書いた書物もありますが……。

伊藤　実はこの占いの方法は日本にも伝わっていて、対馬に残っていたのを江戸時代に伴信友が調べているんです。それは乾いた木か草の茎のようなものを燃やして、炭のようなものを甲骨の裏側に彫った穴へ押しつけるわけです。そうやって生じたひび割れを見るんです。

近江　その対馬の方法を殷でもやっていたわけですね。甲骨の裏に炭を押しつけた痕跡のある穴はたくさん彫られていますね。そうやって判断した結果を甲骨の表側に文章で刻んでおくんですね。で、書いた人はどんな人ですか。

伊藤　「貞人」といわれるグループによって書かれるのです。

近江　その「貞人」は任意に集まったグループですか、それとも書記局とでもいった役所にいる公務員のようなものでしょうか。

伊藤　単なる書記ではなくて、占いをする人ー貞人ーでもあるわけです。ただこれは占いの問題だけではありませんが、殷の国にはどれほどの役所や制度があったのかは甲骨文字からはわかりません。甲骨文字には貞人の名前が出てきますが、王様が亡くなると貞人の集団がかわっていくわけです。それだけで判断するのは危険なのですが、王がかわると、かなりいろんな分野で変化がおきるのではないかと考えられます。つまりある王様には一つの集団が所属していて、その王が死ぬと貞人の集団もかわるぐらいですから、今のような役所とか、きちっとした制度とはかなり違っていたでしょうね。

金関　王が死ぬと貞人集団も殺されて一緒にお墓に入れるんでしょうか。殷の王墓には2000人～3000人もの殉死者が葬られていますからね。

伊藤　殺されたかどうかはわかりませんが、
　人の王様には一つの貞人集団が所属していたことは事実です。それから、殷の王様は親子相続だけでなく兄弟相続をやっていますか、親子相続のときは文字の書き方も変わります。兄弟相続の場合は文字は比較的共通していますが、占いの内容や祖先祭祀のやり方ががらっと変わります。貞人集団にもいろいろあったのでしょうね。

金関　エジプトには王室に直属する書記がいて、書記の像という彫刻がいくつか遺っていますが、貞人もあんなものだと思っていいんでしょうか。

伊藤　さあ、それはわかりません。エジプトと違って殷にはあのような肖像彫刻はまったくありませんので。

金関　貞人が、後継者育成のために習字をやらせた記録があると聞きましたが、本当ですか。

伊藤　占いをしていない甲骨がありまして、字が非常に下手なんです。その上文章が完全でないから、おそらく稽古のためにやらせたと思うのがあります。

近江　その前のひび割れをおこして占うこと自体は王様自身でやるのですか。

伊藤　王様が自分でやることもありますが、多くは貞人が占いをするのです。たとえば「明日は雨が降るか」という問いを出すわけです。その問いを出す者が貞人なんです。

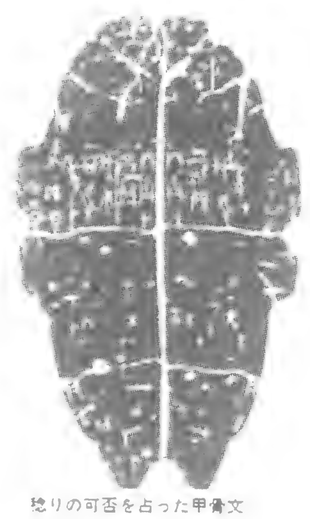
近江　王様が「明日は雨が降るか」問えと命令して、貞人が神に問いかけるんでしょう。

伊藤　そうですね。問いかけをしてひび割れによって答えを聞いて、何を占ったかを文字に刻んで記録するのです。占いも同じことを何回もやるんです。面白いことに「明日は雨が降るか」だけを占うんではなくて、「明日は雨が降らないか」というのも同時に占うんです。その両方を何回も占って一つだけを選ぶんです。一人の貞人が何回も、一つの骨だけでなく、一つの骨を使ったりしてやるんです。それが面白いのは、そのどれを採用して占いを決めるのかはわからないのです。

金関　雨降りの確立何パーセントとするのかな一。今の天気予報と同じで近代的ですね。(笑)

近江　降る・降らないを交互にやるのも今日的です。花びらを使ってね。(笑)ところで何回もと言われるのは、炭火を押しつける行為を何回もやるのですか。

資料ー2



卜りの可否を占った甲骨文

伊藤　上の図は卜りの可否を占ったもので、右が肯定形、左が否定形の占いです。その下半に左右対象に、小さく一、二、三、四、五、六という数字が書いてあります。これが占いをした順番です。

金関　どういうひび割れが吉で、どれが凶かわかりますか。

伊藤　それもわからないのですねえ。イエス、ノーの返事を占う場合もありますし、同じことを何回か占って、吉と書いた場合も、大吉と書いた場合もあります。

金関　単なる○×ではなくて、よろしいとか、まあよろしいとかのグレードがあるんですね。

伊藤　それから最初に祭りをすることが良いか悪いかを占ったあと、犠牲の羊を2匹にするか3匹にするかと聞いていくんです。

近江　犠牲は何匹でしょうか、というのではなくて2匹か3匹かというのは、やはりどちらが吉か凶か、二者択一ですね。

伊藤　吉にあたる判定が出た場合は吉と書くのですか、凶の字がないのです。

近江　それも現代のおみくじと同じだね。あれは大凶はまったくなくて、凶もほとんどないそうですから。(笑)

金関　そもそも凶という文字はあるのですか。

伊藤　甲骨文字にはありません。

金関　箱の中に木の棒を入れて何人かの者が1本ずつ順番に取り出して、最後に1本残ると奇数で吉とか、2本残れば偶数で凶とかいう占いがあって、凶という字はその箱と木の棒によってできているんですね。

伊藤　現実にあっても、甲骨には書かなかった文字があったと思います。禍とか祟の字は書くのです。その場合「禍はないか」「祟はないか」という否定詞を伴うのです。「禍はあるか」「祟はあるか」という問いかけはめったにしません。

近江　甲骨文字はすいぶん鋭い彫方で刻んでいますね。文字の美しさや強さを読者に提供・紹介するのも、この巻の目的の一つなのですが、何を使って刻んでいるのですか。殷は青銅器時代ですから、鉄製の彫刻刀のようなものはなかったわけですね。

伊藤　それもわかりませんね。鉄はなかったと言われますから。

金関　青銅製品ではちょっと無理かもしれませんね。むしろ硬い石器の方がいいような気がしますね。

近江　甲骨文字は宗教的な記録だと言われましたが、記録したものをたくさん集めて保存しておいたわけですか。

伊藤　安陽の殷の都址といわれる殷墟の発掘調査は、中国の中央研究所以来何回にも分けて行われているのですが、第3回調査では完全な亀の甲か1枚発見されました。これは保存するために穴庫に納めておいたものだと思われます。13回目の調査では1カ所から亀の甲を主として300枚近くもかたまりになって出

てきたのです。これも貯蔵されていたのだと思います。最近では1971年でしたかに、文字を刻んだ牛骨が6枚と、文字を刻んでいないものも一緒に出てきました。みんな古いに使用した後のものばかりです。

金関　古いの結果が思わしくなかったり、具合の悪いものはこのまま埋めてしまうというような……。(笑)

伊藤　ところがこんな例もあります。最近、陝西省岐山県周原で発見された甲骨の年代は、殷末か周になってからのものかは問題になっていますが、建物の中に掘った竪穴から出てきたのです。それがみな、小さく割れてしまって廃棄しているので、いったい何のためにこうしたのか、わからないですね。

近江　みな文字は刻んでいるのでしょうか。

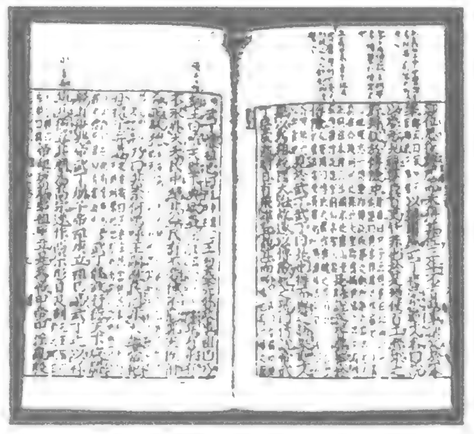
伊藤　文字は100点ほどのものに見られますが、第5期といっている終末期の揃れたものです。その中で文章らしいのがわかるのは20点ほどで、その内容は、殷の紂王が自分の祖先の祭りの時に周伯を犠牲にしたものだと考えている人もあります。まだ完全に解読されてはいませんけれど。

金関　人肉を食うのでしょうか。

伊藤　それはわかりませんが、いったいこれは殷人がやったのか周の人がやったのか。殷の人がやったのならば、なぜ、西安から150キロも奥地の周原みたいな所でやったのかわからないのです。

金関　周の人にしてみれば、自分の親玉が殺されたからというので、すごく腹立たしい思いで……。(笑)

資料－3



「史記」殷本紀第三　元時代（天理図書館蔵）

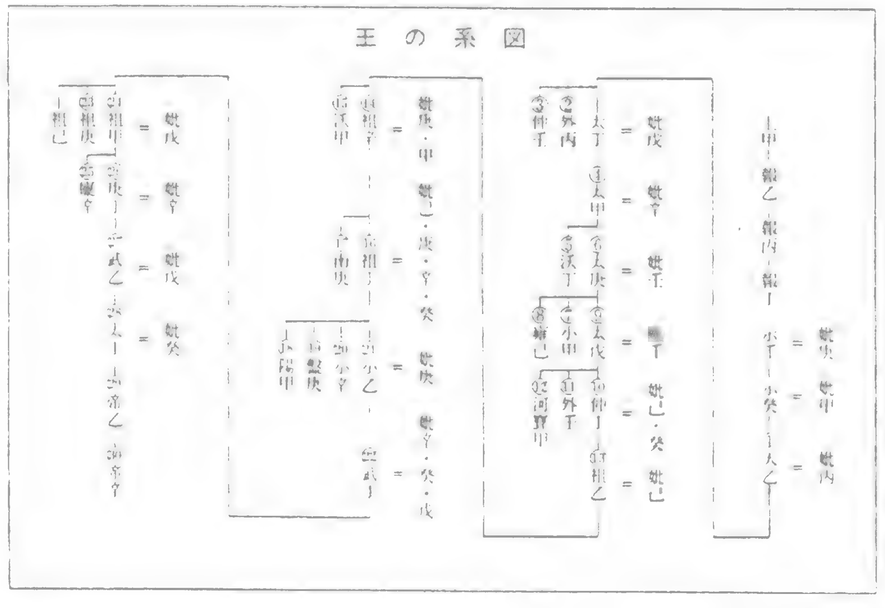
伊藤　そうなんです。それで亀の甲も、みなこなごなに割ってしまって埋めたのかもしれません。そうすると、殷と周の政治関係がどうであったかを考えるのに面白い材料になります。ちょっとした物語になりますね。

金関　話が変わりますが、亀甲と牛骨ではどちらが古いのですか。時代による違いはありましょうか。

伊藤　古いのは牛の骨ですね。甲骨文字よりも前の時代の偃師二里頭遺跡の時代から使っています。亀の甲は、鄭州の二里岡遺跡の時代から始まります。文字を書くようになるのが安陽の時代です。甲骨文字の内容によって甲と骨を区別していませんし、両方とも同じ時期からあります。ただ、今わかっている範囲では、甲骨文を5期に分けて考えますと、1期、2期、3期の一部、5期は甲と骨の両方がありますが、3期の一部と4期は骨だけで亀甲はありません。それがどんな意味をもつのかもわかりません。

●年代について

近江　甲骨文字は殷の時代に作られたと言いましたが、正確に言えば殷王朝の後期、王様で言えば第22代ごろの武丁の時代から始まって、最後の第30代帝辛、これが酒池肉林で有名な紂王ですが、この王様までの時代ですね。



B.C.2300ごろ		龍山文化が始まる。
〃 2100ごろ		龍山文化が盛行し、卜骨が普及する。
〃 1700ごろ		夏王朝は実在したか？
〃 1600ごろ	天乙	亳を都として殷（商）王朝が始まる。（二里頭から宮殿址が発見され、祖霊の青銅器が出土する）
	太甲	宰相伊尹が政治を代行する。
〃 1450ごろ	仲丁	殪に都を遷す。（王位をめぐる争い）
	河亶甲	相に都を遷す。
	南庚	奄に都を遷す。（王権が衰える）
〃 1300ごろ	盤庚	殷（河南省安陽）に都を遷す。（王権が再び興隆し青銅器の最盛期に入る）
	武丁	王権が最も伸展する。甲骨文字始まる
	祖甲	内政を整え、祭祀制度を改める。（甲骨2期）
	廩辛	祭祀制度を旧に復す。（甲骨4期）（殷王朝の衰ぼえ）
	帝乙	祭祀制度を再び改める。（甲骨5期）
	帝？	殷の武王を盟主とする連合軍に敗れる
〃 1050ごろ		殷王朝が滅亡する。

西暦になおすと紀元前1300年ごろから、同1050年ごろまでの約250年間ということになりますね。この250年間にも甲骨文字はいろいろな発達や変化があったわけですが、発達過程を考えるのに5期に分けてみたのは董作賓ですか。

伊藤　そうです。董作賓の研究に基づくものです。

金関　何を手がかりにして、五つの時期に分けたのですか。

伊藤　それはですね、まず占い師の貞人の名前と、祖先の名前ですね。これは『史記』に載っている王系と対照させてみるのです。たとえば第1期の武丁の時ですと、彼の父親の兄弟4人が順に王になるので、これを父の甲・父の乙・父の丁といった呼び方をしています。そして、貞人Aの占いに甲乙丁の3人の王が出てくると、これは武丁の時代のこととなる。また貞人Aは貞人Bと一緒に（文章は違うわけですが）占いをしていたとすると、AとBは同時代の貞人でしょう。そういうように、祖先の名前の呼び方を中心にして決めていくのです。そして分けてみますとね、それぞれの時期ごとに文字の書き方に共通した要素が出てくるのです。たとえば第1期でしたら、簡潔で大型で非常に力強い字を書くのです。ところが第2期になりますと、文字は小さく弱く細いのです。だから、われわれは董作賓か貞人と祖先の呼び方で5期に分けたものを利用しまして、貞人の名が出てこなくても、文字がこの字体・書体で書いてあったら第2期だとか、この文字は第5期だとかいうように分けていきます。

近江　甲骨文字の5期分類は現代でも生きているわけですね。

伊藤　そうです。董作賓の5期の分け方は基本的には使いよいと思うのです。ただ、充分わからないところがありましてね、それはだいたい四つのグループの解釈が問題だったんです。その内二つは、最近小屯から出た甲骨の出土状況や層位などから何とかわかるようになりました。しかし、あと二つのグループは依然としてわかりません。目下論争中です。

近江　第3期以下の文字の特徴についても教えて下さい。

伊藤　第3期は、一画一画をきちんと書かずに省略したり、斜めに二画を分けて引くところを一画で引いてしまったりします。

近江　誤字になるわけですか。

伊藤　誤字ではないけれど、略字ですかね。

近江　にわか勉強ですと、4期は非常に鋭い文字を書くようになるそうですね。にわか勉強のついでに5期の様式を見てみますと、難しい字を使った表現がありまして、それは董作賓でしょうか。それから、第1期は旧派、第2期は新派などとありますが、これは貞人グループのことですか。

伊藤　そうですね。貞人グループが交替することとも関係するのですが、もっとも大きなことは祖先祭祀が変わるということです。

近江　そうすると第4期に旧派は、古い貞人集団に交替すると同時に、古い祖先祭祀が復活することですね。当然この変化に対応して政治的なものや社会的なものも変わるでしょう。

伊藤　董作賓などはそういうことを言っています。しかし、なぜ新旧が変わるのかは今のところわからないのです。祖先祭祀のやり方が変わるのは確かですが、それ以外にですと、たとえば第2期の新派の時代に入ると、それまでやっていた外征や狩猟に関する占いがまったく出てこない。これらは旧派にだけ出てきます。もちろん、第2期に外征なんかやらなかったわけではないと思います。ただ、占いはしていないということになりますと……、これはどう言ったらよいのですかね……。

金関　第2期は何を占っていたのですか。

伊藤　ほとんどが祖先祭祀です。それも新派の時代の祖先祭祀は非常に規則的に決まっていましてね、考えてみたらわざわざ占いをしなくてもいいようなものですが、一種のカレンダーがありまして、何の日には誰の祭りをするか、きちんと決まっているんです。では、占いで何を問いかけているのか、祭りをすることそのものを問いかけているのか、それとも、祭りはするけれど祖先がそれを受け入れるかどうかを問うのかね。

金関　王様が強引で、カレンダーを無視せよというので占ったとか。(笑)

伊藤　カレンダーも、第1期の旧派の時のものはわかりませんが、第4期の旧派の時には占いをする祭りのやり方は旧派ですけれど、カレンダーは新派の時のを使っているんです。

近江　カレンダーをそのまま使うんですね。そこに書いてあるのは祭祀のことだけですか。

伊藤　祭祀のことだけです。カレンダーを復元していきますと、第2期の時は1年が360日くらいなんですが、第5期ですと380日くらいになってしまう。

近江　祭祀の対象である神様が増えるんですね。

伊藤　そうなんです。結局、第2・3・4期の王様がその間に入ってきますので、カレンダーもその分だけ伸びるわけです。もっとも、この時代は太陰太陽暦ですから、380日を360日に何とか調整しないと合わなくなりますから、おそらく、カレンダーの通りに祭ったのではなくて、ある人を繰り上げて別の人と一緒にやってみたり、何人かをまとめてやったりしたんでしょうね。

金関　キリスト教では万聖節というのがあって、たくさんの聖人を1日で祭ってしまうのと同じですね。太陰太陽暦はどういう仕組みですか。カレンダーの作り方はどうなっていますか。

伊藤　これは月の満ち欠けが中心になっていますので、1カ月は30日ですから1年は360日になるのです。それでは閏の5日間が残りますから、旧派の時だと、時々13月というのが出てきます。

近江　そうすると、明治以前の日本の置閏法

とは細かいところでは違うんでしょうけれど、数年おきに閏月がある点で、基本的には同じようなものですね。

●殷の神様

近江　甲骨を使って占いをするのは、神様の意志を問うているわけですが、この場合の神は祖先神ですか。

伊藤　それも問題なんです。祖先を祀ることが吉か凶かを占いて聞く場合ね、その答えははたして祖先がしているのか、別の誰かがしているのか、実はまだわからないのです。

金関　古代のいずれの民族にとっても祭りは大変重要な行事で、殊に中国では強調されていますね。エジプトはナイル河が定期的に氾濫を起こして上流から土を運び、ほぼ収穫が一定しているというような気がしますし、メソポタミアなんかは灌漑用の大工事をして、収穫がある程度安定している。つまり気象条件の安定があると思うのですが、中国の場合はそれがやや不安定で、洪水や旱魃などの天災が多いために、より天を畏怖せねばならないという理由があったのだと思うのですが。

伊藤　殷代の農耕とか殊に灌漑などはよくわかっていないのですが、非常に不安定であったと考えていいでしょうね。たとえば、これは次の西周の時代の資料ですが、農民が他人の土地の穀物を盗んだ場合に賠償が問題になります。あまり大した土地ではないのですが、盗んだ方はともかく土地と5～6人の農民をつけて返済するのですが、被害者の方はやはり現物で返せと言うのです。もし今年返せなかったら来年は倍にして、来年で完済できなければその次の年に被害額の3倍にして返せと言っています。裁判では結局現物で返すということになって、被害額とさらにいくらかの損害保証額を加えて返したらしいのです。

われわれだったら土地をもらって、しかも農民が何人かついてくるんだから、それでいいではないかと思うんですが、あくまで現物に執着するということは、やはり土地よりも現物を手に入れた方が確かという考えかあったんでしょうね。だから、さかのぼって殷代の状況もあまり変わりはないと思うんです。

金関　そうすると甲骨を使った占いの大部分は、雨とか風とかいう天意をうかがったものでしょうか。

伊藤　それも一つの特色なんですが、もっとも大きな特徴はやはり国王の祖先祭祀ですね。それなら、祖先が土地・収穫・雨に対して力を持っているかというと、祖先は基本的には力を持っていない。それとは別に土地の神や川の神などに雨乞いをしたり、祈穀祭をしたりする。

金関　現実に祖先祭祀をやらなければ、どんな害がおよぶわけですか。

伊藤　人間に病気をおこさせたりするのが祖先なんです。だけど甲骨文字の歴史250年の間に、具体的に明確に祟りが出てくるのは最初の武丁の時代なんです。ところが、その後の時代に入りますと、祖先はそうした悪さをしなくなります。むしろ子孫を助けてくれる働きが強くなってきます。祖先に対する考え方も違ってくるのですね。

金関　子孫を助けるというのは豊作を約束するというようなことでなくて、天候をよくするとか戦争に勝つとかいうことでしょうか。

伊藤　内容を具体的に書いたものがないので、よくわからないのですが、病気にさせるとか助けるとかいうのではなくて、戦争に勝たせるとかいうことだと思います。

金関　古代中国で青銅器が盛大に作られるのは、中国社会が基本的には宗族社会なので、共通の祖先から出た子孫が生き残って一つの武力集団となる。それがバラバラになるといけないから、集まっては祭りをして飲み食いをし、祖先を祀るのだという説明があったと思うのですが。だから祖先は、子孫の結合を助け、戦を勝利に導くような援助をしてくれる。それ以外の天候などのことは、祖先霊とは違ったものが支配するのでしょうか。

伊藤　天の神が最高神と考えられていたと思うんですか、実はその性格がはっきりしていないんですね。周の時代になると、金文（青銅器の銘文）に「大命」という言葉が出てきて、これは天命のことで天の神の命令だというのですが、この神に対する祭りは甲骨文字にも金文にも出てこないのです。

金関　「天」という抽象的な概念も出てきませんか。

伊藤　甲骨文字で言うと「帝」が殷の神だと言われています。周代になると「帝」の文字はなくなりますので「天」を考えていたといいます。また、周の王を天子と呼びますのは、王をはめて「天の子」というわけですから、当然「天」というものを考えていたのでしょうが、はっきりした神格としては現れません。

金関　『詩経』の中に、犠牲の羊を焼くと煙が天に昇って「好い香りだなあ」と上帝が喜んでおられる詩がありましたね。だから天を祀る祭りがあり、人類を守ってくれるという思想があったと思いますが……。

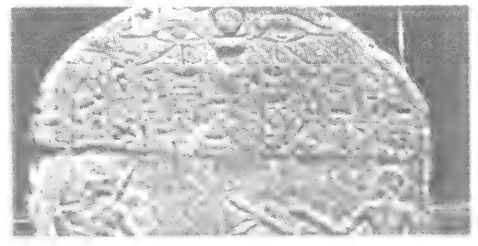
伊藤　それは殷代よりも後の時代の詩であって、甲骨文字の範囲ではそれがよくわからないのです。ただ、戦争の勝ち負けを握っていて、土地の神を支配し、命令を与えている神はいるのです。その神に対して戦争をするから助けてくれというようなことは言わないのです。だから、天の神の気にいらなければ戦争に負けても仕方がない、というように考えていたという気がするのです。

●文字の起源

近江　一般的なと申しますか、広く文字の発生という面から甲骨文字を考えますと、どういうことになりましょうか。なぜ、文字を作ったか、あるいは文字の出現にはどのような社会が背景にあったかといったことですが。

伊藤　西アジアや、エジプトや、新大陸などの古代文明を成育した地域では、それぞれの文明の特色の一つとして、文字も取り上げられるわけですし、文明が文字に与えた役割もいろいろあって、それをどう考えていくかは重要なことです。しかし、私自身は他の文明のことをよく知りませんので、甲骨文字に関してだけ言えば、やはり宗教的なことを重視する社会だったので、それを記録するために必要だったということができましょう。甲骨文は言うなれば、占いの記録だったわけです。それぞれの占いの判定が、正しかったかどうかを確認する必要があったのではないかと言われています。けれども、甲骨文字が作られたのは殷代の後半に当たりますが、「冊」とか「典」という文字が甲骨文字にはありますから、木簡や竹簡のようなものがあったことは確かです。しかし、そのころには甲骨以外のものに文字を書くことが、どの程度あったのか、そのところはわからないのです。殷の終末には金文が現れますが、それまでは甲骨文字だけだったとは断定できません。ただ、私どものように3000年も後になって研究する人間にとりましては甲骨文字しかないわけですから、これが残ったということは、殷の人々か神を崇敬し、宗教的に深い志があって非常に占いを重視し、これを記録するのに占いに使った甲骨をそのまま用いて刻字したとか考えざるを得ないわけです。

資料－4







（上）ヒエログリフ
（中・下）楔形文字（当館蔵）

近江　占いの記録として必要があったから、甲骨文字を作り出したと考えてよいわけですね。宗教的な文字だという意味では、甲骨文字よりも古いエジプト文字・ヒエログリフや、アッシリアの楔形文字も宗教的な意味が非常に強いわけですが、これは東西軌を一にするわけですね。

金関　ヒエログリフは聖文字という意味ですから、宗教的な文字に違いないのだけれど、エジプトの場合は神と王が一緒で王の事跡そのものが宗教的な意味を持っているから、宗教的な文字と言っても中国とは少し違うのじゃないかな。

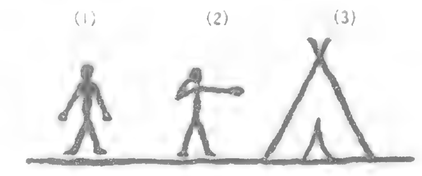
近江　それじゃあ、甲骨文字そのものを取り上げる前に、文字の起源という見方で考えれば、中国の場合はどう説明すればいいのでしょうか。

金関　文字とは何かを辞書でひきますと「言語を記号であらわしたもの」とあるんですが、絵と記号と文字というのは、どういうふうに分けなければいけないでしょう。

伊藤　それはまあ、文字というものはいくつかの記号を組み合わせて意味を表現するということでしょうか。記号だけでは文字にならない。

金関　ここにインディアンの絵文字かあります（図1）。（1）は両手を広げていますね。これは何もないという意味です。アメリカ人などに、何か良いアイデアはないかなどと聞きますと、肩をすくめて両手を広げるこんなポーズをとります。何もないという意味です。その次の（2）は一方の手で口を、他方の手で（3）のテントを指しています。口を指すのは「食べる」ことを意味します。この（1）～（3）で「家の中に食物は何もない」という意味になります。もっともこれを文字ということはできないでしょう。あくまでも絵文字です。ところが次の古代エジプトの象形文字（図2）で、aは「何もない」、bは「食べる」、cは「家」を示し、これも「家の中に食物は何もない」という意味です。だからインディアンの絵文字は、ちょうど記号から文字へ発展する中間的な段階と見なしてよいと思うんです。

図－1



「住居のなかに食料がない」

図－2

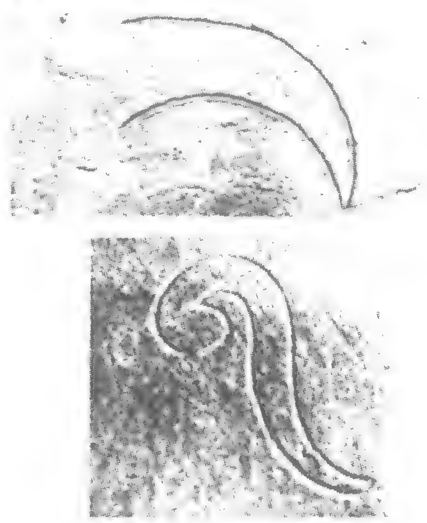


（上）インディアンの絵文字
（下）エジプトの象形文字

伊藤　それは甲骨文字にも類似した例はあります。たとえば、人か片手に盾をもっているのですが、これも完全に象形化、絵画的なものになっていますけれど、これを漢字に当てて見ると「守る」とか「守備をする」といった動詞としてあらわれてきます。ところが、そのほか特別な冠詞だとか、十干十二支なんかは象形ではなくて、反対に抽象化されてしまっている。抽象的に文字化されていないものを絵画的に表現して、同じ文章の中に入れてくるのです。だから絵画的な文字は抽象化される前の段階にあるのでしょうね。

金関　日本ではもちろん中国の圧倒的な影響を受けて漢字を採用し、それを簡略化して仮名を作っていくという道筋をたどりましたけれど、漢字が日本に登場する以前の弥生時代

資料－5



弥生土器の記号文
大阪府和泉市・池上遺跡出土）

の終わりごろには土器に記号を入れたものが割合にたくさん出土しています。森浩一さんなどは「土器の記号は、もしあのまま中国の影響を受けずに、日本だけで文化が発達していれば、文字になったのではないか」というふうな意見を出しておられます。つまり文字以前の記号というのは、具体的な形を抽象化し、それがある範囲では共通に理解されているものであろうというわけです。中国の場合は、甲骨文字以前にそうした記号の段階が考えられるのでしょうか。

伊藤　中国にも記号の入った土器があります。中国の研究者にもそれを文字だと言ったりする人があるわけです。甲骨文字よりは、もっと非常に簡略な形でしてね、較べましてもそれが文字になっていくとは考えられないんです。

金関　記号と文字はどう違うのかの問題になるのですが、図3はインディアンの使う縄を用いた数字で、縄の絞め方で1から9まで表現されているんです。こうした縄で数字をあらわすのは、記号と言えるだろうし、その組み合わせで意味が通じれば文字の母体だとも考えられますが。

伊藤　甲骨文字の場合も1から10までの数字があります。結局、文字は1字ではなくていくつかの文字が組み合わさって、ある意味を伝達することができるものではありませんか。

金関　文字は文章の構成要素であって、そういう条件を満たしていなければ文字とは言えない。一つ一つが意味を持っていても、それは記号にすぎない。だから数字は記号であっても文字ではない。プラスやマイナスも記号ですよね。

伊藤　記号が一つでも意味をもつ場合が当然あるわけですが、その場合も、その記号を使って意志を伝達し合っている人間には、その前後に出てくる記号か文字が、一応了解されていなければなりません。

金関　文化のある段階では記号はどこでも発生するけれど、それが文字となるためにはまた別の条件が必要なのでしょうか。そしてその条件が文明だというわけですね。

伊藤　文明というものの中から文字を生み出すには、何が必要か、文明の内容ですね。

金関　文明というのは、一つのコンフィギュレーションというか、総合体でありいくつかの構成要素からなっていますが、その要素の一つが文字であって、しかも非常に必要な要素の一つであるというふうに理解してよろしいでしょうか。

伊藤　そうだと思います。

近江　ずいぶん古いですが、モルガンが『古代社会』で提唱した文明の3段階では、野蛮、未開、文明の3時代に分類し、文明時代の重要な技術の発明には文字の使用をあげていますし、エンゲルスの『国家家族および私有財産の起源』でも同様なことを言っていますね。ですから、文字と文明の関わりは古くから考えられているのですが、いったい文明社会になって文字ができ上がることによって、人間の世界はどのように変わったのでしょうか。

金関　文字が発生するのは、文明の仕組みにあるだろうと思います。チャイルドは、文明は都市の形成と無関係に成立はしないだろうと述べています。文明発生の大きな条件の一つは、村落が都市に発展することだと言っていますね。村落を形成した人々、農耕民とか農牧民とかは、土地に直結した生活をせねばなりませんが、そうではなくて土地とは切り離された生活をする人々、そういう職業の人々が多数集まって作り上げたのが町であり都市だとすれば、その段階でどうしてその中で文字が必要になったり、作られたりするのでしょう。

伊藤　やっぱり、それぞれが違った習慣を持った者が集まるのですから、その間に意志を疎通させるためのものとして文字が必要だったのでしょう。しかし、それだけでなく、お互いに通じ合ったものを後世へ残す必要があったということだと思うんです。ただ、そうなると殷代には甲骨文字以外のものが残っていてもいいというような気がするのですね。ところが、それらは残っていない。書かれた素材によってなくなってしまうわけですから、他にもあったか、なかったか、その辺の判断はちょっと簡単には決められません。というのは素材によって長く遺るかどうかは、当時の人でも経験的にわかっていたでしょうから、素材によって記録の目的も違っていたと考えることができると思うんです。西周時代の金文など、その素材が青銅であるということと、その記録の内容を子孫の間で伝えていくという目的とがうまくあっていたのではないでしょうか。本筋などより甲骨の方がよく遺る、そうしてみると中国の場合は、西アジアとは少し違った性格の古代都市を考えてみる必要があるのだろうと思われますね。

金関　文字が発生した時にエジプトなどは、デモティックというようなヒエログリフを抽象化したような、改良されて使いやすい形のものを作りますね。それから、楔形文字なんかは、どちらかというと商業経済の記録文書として、非常に多く使われていますね。ところが、甲骨文字だけは一貫して聖文字に近い用途に限られていて、商業経済の記録のようなものは使われていないような気がします。

伊藤　そうです。だから人間の生活という面から見ますと、なにかちょっとかけはなれたところで使われていた文字になるわけです。

●殷代前後の文字

近江　甲骨文字は殷の後期に突然あらわれ、周代になると急になくなるわけですが、その前後の状況はどうなっていますか。

資料－6



二里頭出土の遺物一爵

伊藤　先ほども申しましたように、甲骨文字は宗教的なものだけの記録です。ところが殷の次の周になりますと、金文が出てきて青銅器を作る貴族のことに限られはしますが、土地の譲り渡しだとか、周の王室から家臣が官職に任命されたりするような歴史の記録があります。ですから一般的に、文明としては一つに考えて殷周時代とか殷周文化とか呼びますが、記録して残されたものから言うと、かなり性格が違うようです。そのところを逆に殷の性格をどのように考えていくかですね。

近江　同じことが殷代の中でも言えますね。甲骨文字が現れるのは殷代の後半の安陽に遷都してからですね。殷代前半の安陽より前には、甲骨文字はないのですから、殷代前半と後半は文明というか社会生活など、かなり違っているのでしょうか。

伊藤　甲骨文字の他に、青銅器を見ても、また墓制から言ってもこれは明らかな相違がありますから、殷の前期と後期には質的な違いを考えずにはおられないと思います。

金関　普通一般に漢字の説明をする時には、指事・象形・会意・形声・転注・仮借の、六書という漢字の作り方を6種類に分けた話をします。甲骨文字にはこの6種の要素が、みな備えられていると聞きますが、そうですか。

伊藤　はい、そうですね。

金関　そうだとすれば、文字としては相当に発達した姿であると思います。それは殷代後期に突如として作られたものではなくて、殷代中期にさかのぼる歴史があるだろうと思うのですが。

伊藤　もちろん、それはわれわれも予想してはいるんです。だから、それがどこから発見されるのか楽しみなわけです。中国の北なのか、もっと向こうから入ってきたのかね。

金関　殷の後期と言っているのは、安陽小屯の殷墟と言われている所に都を造った時から始まりますが、甲骨文字はその当初からすでにあったのでしょうか。

伊藤　いえ、前に申しましたように、殷の王様の系図がだいたいわかっていまして、その第19代盤庚王の時に安陽小屯の殷墟に都を遷します。しかし、盤庚の時の甲骨文字はなくて、第22代の武丁王の時から始まります。武丁は、だいたい紀元前1250年ぐらいでしょう。

近江　大ざっぱに見て200年から250年の歴史が甲骨文字にもあるわけですね。

金関　その200年余りの間に字体は変化しているのでしょうけれど、文字自体も発達というか、進化しているんですか。

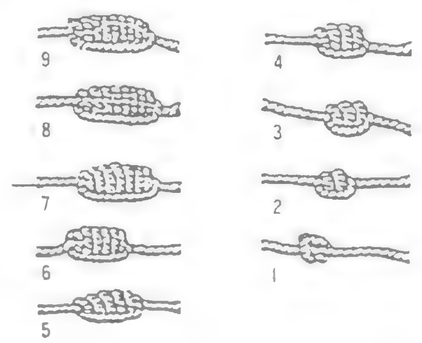
伊藤　進化・発達を、どういう意味にとるかですね。だんだん簡略化されていくかといえば、むしろ反対に複雑化しています。結局、それが漢字になっていくんですね。一例をあげますと、「遘」の字は、武丁の時だと旁（つくり）の冓だけで意味をあらわしていますが、後になると辵（シンニュウ）をつけるのです。意味は変わらないで、形はむしろ複雑になる。木偏をつけた「構」字は、まだ見つかっていません。「遘」は甲骨文字では「出会う」とか「遭遇する」とかの意味に使います。たとえば、「雨に会う」とか、また、「今日はこういう祭の日」とかいう場合も「祭の日に出会った」、辵をつけますので、「……と出会った」という意味をもっとはっきりさせて、意味が限定されてくるんです。旁の冓は、木を何本も交叉させて組み合わせた形ですから、木偏をつけた構（構える）、構造の構の意味がその形にあるわけですが、それが人と何かが交叉するといいますか、出会うという意味にもなるわけです。

金関　複雑になって内容が限定されてくるのは、ある意味ではやはり進化でしょう。

伊藤　そうでしょうかね。冓に木偏をつけることによって、結局木をいくつか合わせて、一つの物に組み立てていくというふうに使われると漢字になっていくんです。

金関　文字の進化ということでは、ヒエログリフや甲骨文字が持っている象形的な要素がだんだん捨てられていって、音だけが残り、結局表音文字になっていくことではないかと思うのですが、そうした意味での進化は、殷代後期の安陽250年間に起こったのではありませんか。象形的なものから、表音的なものに

図－3



インカの結縄。1から9までをあらわす

変わっていくという……

伊藤　そうです、その場合にアルファベットなんかとはかなり違う。たとえば今の「晋」字ですが、晋の方は音の要素が中心になり、それに走をつけて「進う」という意味をはっきりさせるわけですが、この走は道路と人の足の形で、街頭で人が出会ったことを示している。そこに象形的な働きが必ず入ってくるわけです。

●甲骨文字の源流

近江　さっき、殷代前期の話がちょっと出ましたか、そうした甲骨文字はいったいどこから来たのか、あるいは中国独自の創作なのかという問題があります。以前は外国の影響を考える学者もいましたね。

伊藤　私は、ほとんど考えていませんが、最初に段階の進んだ文字が出てくるわけですから、その前段階の文字はどうであったか、中国になければどこか外国からきたのではないかと考える人はいますね。貝塚茂樹先生は楔形文字の影響を考えられていた時期があります。楔形文字も初期は表意文字で、文章の組み立て方も甲骨文字に似たところがあるんです。私は、中原与茂九郎先生の演習に出たのですが、楔形文字の組み立て方は漢文に近いものがあって、漢文を読める人は楔形文字をやるのに入りやすいのだとおっしゃってましたね。(笑)

近江　文字の形はどうなんでしょうか。これも似ているのですか。

伊藤　牛とか魚とかを表現する時は、割に近い形なんですが、他のものはかなり違っていますね。

金関　仮に影響があったとすれば、楔形文字の初源的なものと甲骨文字との比較になると思うのですが、年代的には楔形文字の方が非常に古くて、ほぼ紀元前3000年ごろ成立したものでしょう。そうすると、甲骨文字の発生とは1500年以上もの年代のズレがあって、時代錯誤的なことになるのではないでしょうか。

しかしもう一つの可能性としては、林巳奈夫さんが西南アジアと中国の馬車・戦車の構造を比較して、その西からの影響は動かし難いものだと言われています。さらに、中国の青銅文化そのものも、西からの影響を考えなければならないでしょう。青銅器や戦車が伝わるルートがあるとすれば、当然文字も伝わるものと思われますし、その伝播に長時間を必要としたのだとも考えられます。

伊藤　それはそうなのですが、そのことを証明するには文字の場合、もう少し東西の間を埋めるような資料が見つかってくると、それは面白いと思います。

近江　東に甲骨文字、西に楔形文字があって、両者の間にはまったく文字が存在していない。年代的にも差が大きすぎる。それでも一部の字形や構文に似たところがある。文字の使い方は、乱暴に対比すれば東は宗教的、西は商業的と異なる。というところで、将来の問題ですね。

金関　もう一つ、西アジアの青銅器はどちらかといえば、装身具や武器・工具の製作に重点がおかれていたような気がします。ヨーロッパの場合でも主要な青銅器は斧であり、剣であり、刀物であった。ところが、中国では青銅器といえば、刀物や装身具は少なくて重点は彝器ですね。あれほど青銅の工芸技術が発達したが、そのすべては宗教的・祭祀的な目的に全力が注がれている。文字そのものも、中国では宗教的な用途に限られるという点に、特徴があるような気がします。

伊藤　そうした時代の背景もあったのでしょうが、漠然とした印象でいうと、甲骨文字の7～8割は宗教に関係したものばかりです。ですから、甲骨文字を使って殷代の社会問題を考えようとする人がいますが、それは現状ではちょっと無理なんです。そうしたことを考えるのに適した材料は、皆無ですね。仮に農耕関係のことが出てきたとしても、それは豊作を願うことか、祝うとかの意味ですし、なかには「ある人に農耕をさせることが良いかどうか」を占った文章だと言われるものもありますが、それも生産労働を意味するのではなくて、日本風に言えば、一種の豊作を願って田植えの祭りをするかどうかという、むしろ祭りの方のことだと考えるべきなのです。

●甲骨文字の周辺と研究史

近江　少しかたい話が続きましたので、雑談めいたことになりますが、中学の社会科教科書でも「漢字のはじまり」といった項目があって、「山」は「𡗗」、「川」は「𡍮」ぐらいの説明はあるのですが、これが先ほどの六書の分類で言えば「象形」に当たるのですね。他の五書についても2、3書いて表にしておいて下さい。次いでそれが篆書・隷書と展開して現在の漢字になるわけですから、その篆書・隷書も書いておいて下さいますか。

金関　甲骨文字には、どれぐらい種類があって、解読はどの程度進んでいますか。

伊藤　きちんと計算した人はいないのですが、3000字と言ったり、3500字といったり、4000字と言う人もいます。

金関　みんな読めているのですか、まだわかってない字がありますか。

伊藤　いや、それは正確には半分も読めていないでしょう。

金関　発音はどうでしょうか、当然口に出して言っていたのでしょうね。

伊藤　口に出して言ったものですが、内容も限定されているし、占いということで言い方にも一つの決まりがあったかもしれません。もっとも、日常の言葉として甲骨文字を書くことはなかったのですか、たとえば、こういうものはあります。第1期の甲骨ですが、何枚をお祓いして占いに使えるようにしたか、それを誰がやったのかを書くわけです。これは占いと違った数量的な記録です。管理者の名前もわかりますので、お役所の文書のようなものですから、口に出して読んだのかどうかわかりませんが、甲骨文の中には、その占う事柄を王が言ったと書いたものがありますし、占いの判定の場合は、王が判定してかくかくと言ったと記録しています。

近江　殷代の文字というと甲骨文字になるわけですが、実際には甲骨文字の他に文字は使わなかったわけではないのでしょう。

伊藤　それはもちろん、甲骨以外にも文字を使ったのですが、残っていないので甲骨文字が大きく取り上げられるのです。そうですね、たとえば、安陽で出土しました大理石の盤(容器)は、青銅器と同じような型をしたもので



注　指示は線を境にして点を打ち、上下を太すように、位置関係などで意味を示すもの。象形は物の形をかたどって字形としたもの。会意はすでにでき上がっている字を組み合わせ、一つの字形としたもの。形声は組み合わせた字のどちらかが主な意味を示し、他がその音を表すようにしたもので、漢字としてはもっとも多い。金文は殷周の青銅器の銘文の字体。大篆は戦国時代の秦で用いられ、秦による統一後はこれを簡略化した小篆が使われた。隷書は漢代に、楷書は3世紀以後に標準とされた。



すか、これには黒で書いた字がありましたね。5字か6字ぐらいの文章だったと思います。字体そのものは甲骨文字と同じですけれど、筆のようなもので書いていますから、ふくらみがあって、むしろ金文に近いような感じがします。

近江　それから金文というのは、青銅器に刻まれている文字のことですが、これは甲骨文字と同じ殷代にも使っているのでしょう。

伊藤　甲骨文字の第5期の終わりごろから、文章になった金文が出てきますね。基本的には甲骨文字の書き方とは、ちょっと違っています。しかし、文字の構造は基本的には同じですが、甲骨文字は堅い甲や骨に彫りますから、どうしても直線的になりますし、形が簡単になっています。金文の方は筆で書いた通りにやわらかい銅に彫りますから、後世の小篆や隷書に直接つながっていく字体で書くことができたわけですね。

近江　甲骨文字よりは発達しているわけですからね。それから、金文の方は青銅器の美しさにふさわしいというか、対応した美しさも必要だったでしょう。

伊藤　そうですね、確かに殷の終わりから周の初めごろまでの金文は、非常に美しい文字を書いていますね。

近江　それから金文の場合、青銅器を作るのは粘土の鋳型に流し込むわけで、粘土のやわらかい時にヘラで書けば、筆で書くのに近い字ができるでしょう。甲骨文字は小刀で刻むのですから、字の形や様式が少しずつ違ってくるような気がしますね。たとえば先ほどの「晋」の字だと一画一画は変わらないわけですか。

伊藤　それは変わりません。

近江　それでは簡単に言って、金文が読めれば甲骨文字も読めるというわけですか。

伊藤　そうはいかないのです。と申しますのは書く目的が全然違うものですから、同じ文字が両方に重なる場合は非常に少ないのです。

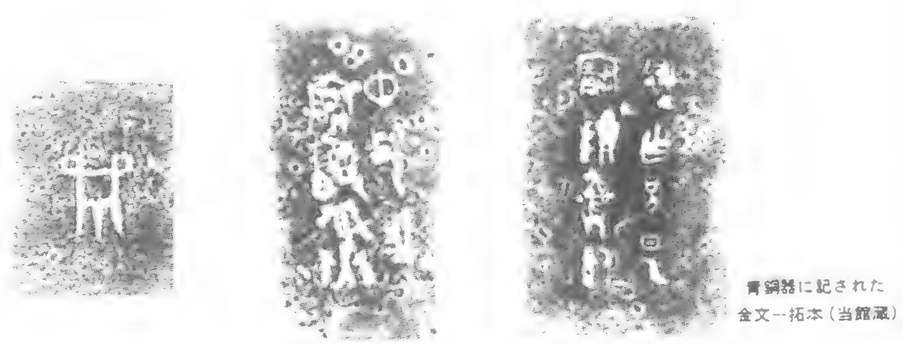
近江　貞人という特殊な書記がいて、世襲のように継承していく必要がある文字だったのですからね。

金関　甲骨と金文とでは字の種類がずれている、辞書が違うんですよ。それに金文の方は、まだまだ漢字に近いんで何とか読めるけど、甲骨文字はそうはいかない。だから甲骨文字の方は、こればっかり何年もやっている専門家でないと解読できない。ですから今回は伊藤先生にお願いしたわけです。(笑)

近江　次に研究史についてですが、甲骨文字の専門家としては、劉鉄雲から始まるとしてよろしいですか。

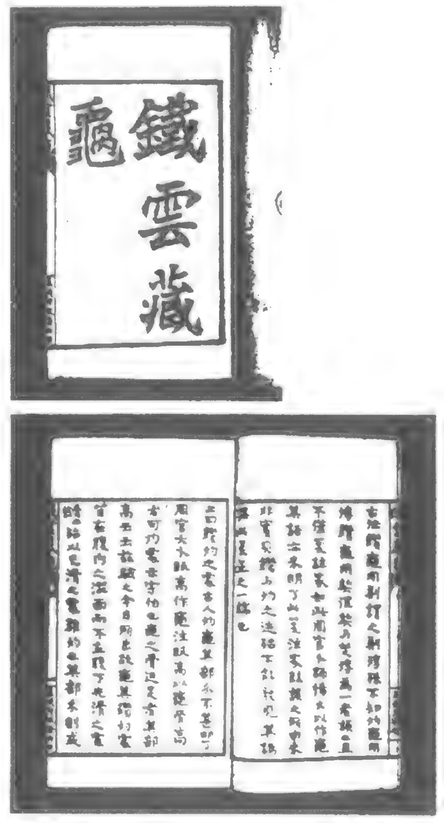
伊藤　はい、そうです。解読の体系化を始めた人ですね。清朝の終わりごろに龍骨と呼ばれるものがたくさん集められ、それが漢方薬になる。そうですね、オコリとか解熱剤になるというので、北京などの町で売られていたのです。そのころ王懿栄という高級官僚の家に寄食していた劉鶚(号を鉄雲)という人が、それに文字が彫られていることを発見したのです。1899年のことです。それから彼はこの

資料一7



青銅器に記された金文の拓本(当館蔵)

資料－8



「鉄雲蔵亀」清時代－光緒29年（天理図書館蔵）

文字の蒐集と研究や出土の追究を行って、1903年には『鉄雲蔵亀』という書物を作っています。その中で『史記』の王名と比較をして、甲骨文字は殷代のものであると断定したのです。

近江　本巻の大部分を占める甲骨文字は、羅振玉と王国維の旧蔵と考えられる箱書がありますが、この人も有名な甲骨文字の研究者ですね。

伊藤　この天理参考館の甲骨文字は、羅振玉が持っていたであろうことは、ほぼ確実だと思います。と言うのは、劉鶚の『鉄雲蔵亀』に入れられてあるものが、30点ほど混じっていますのでね。おそらく劉鶚の死後か生きている時かはわかりませんが、売りに出されたものが羅振玉の手に入った可能性が充分あると思います。

近江　羅振玉は劉鶚の弟子にでもあたるのですか。

伊藤　師弟関係はありません。あるいは会ったことはあるかもしれませんか、王国維は羅振玉の助手をしていたんです。

金関　王国維はたいへん博学で、偉大な歴史学者でしたが、演劇にも通じていて、宋元の戯曲の研究論文も書いていますね。

伊藤　そうです。羅振玉も王国維も日本に亡命しています。清朝の滅亡によってやって来たのです。王国維は中国に帰るのですが、清王朝の行方をはかなんで自殺されたとも言われています。

金関　孫詒讓は、甲骨学の歴史ではどんな位置づけが与えられますか。

伊藤　孫詒讓はね、ちょっと待って下さい。何か書いてましたねえ、そうです『名原』とか『契文挙例』という書物を書いています。この人も甲骨文字解読の功労者の一人です。金文や古典の研究にも大きな業績を残していますね。

金関　日本では東京高等師範学校（現筑波大学）の林泰輔博士などが、古いころ『亀甲獣骨文字』を出された甲骨学者ですね。中国以外の初期の学者では、林博士ですか。

伊藤　それからカナダに行きましたが、宣教師のメンチツなんかが、中国人以外では知られています。スペルは J. M. Menzies です。漢字では明義士と書きます。

近江　どのような研究をしたのですか。

伊藤　甲骨文字の研究もしたし、資料もかなり集められてらしたんです。5～6年前に彼の資料集が出まして、その序文に研究の要約が載っているんです。

金関　まとめられたのはどなたですか。

伊藤　台湾の学者なんですが、許進雄という人です。この人がカナダへ行ったメンチツの資料を整理して、資料集を刊行したんです。その時にメンチツのノートなんかを整理して載せたのです。確か『殷墟卜辞後編』と言いましたか、それと "The Menzies Collection of Shang Dynasty Oracle Bones" です。

近江　中国では、その後に続く学者としては先ほどから何回も名の出ている董作賓ですか。

伊藤　そうですね、董作賓の仕事は大きいです。一つの区切りみたいなものを作ったでしょうか。

金関　董作賓の系統では、その後どのような人がいますか。

伊藤　胡厚宣氏があげられます。そのほか台湾の李孝定氏や嚴一萍氏も董作賓のお弟子ですね。この人も甲骨学の一方の雄です。

金関　日本では、林博士の後を継がれたのはどなたですか。貝塚先生は誰かの影響を受けられたのでしょうか。

伊藤　誰人にも習われたのではないと思います。おそらく、内藤湖南先生などが勧められたのではないでしょうか。先年亡くなられた島邦男さんなども、お一人で始められました。その前に加藤常賢さんがおられますが、加藤さんに直接習われたのではないと思います。

金関　白川静さんも独自にやられたのですね。甲骨学者は、独りでやられる人が多いのですね。

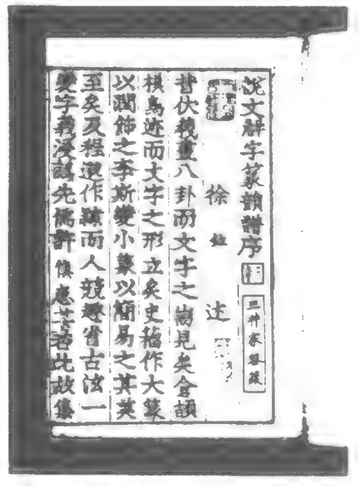
伊藤　と言いますのは、甲骨文字は教えることができないのです。文字を写して覚えることから始めなければなりませんから、他人が教えることは難しいんです。写す時には何を使うかというと、私の場合は貝塚先生に言われて、郭沫若の講釈を読みながら拓本の文字を写していくんです。そういう手作業を4～5年続けてやると、だいたいみな同じ段階になるように見えるんです。まあ、10年やっている人も、20年やっている人もね。

金関　現在の甲骨文研究といいますと、先端的な分野では、社会制度とか、政治組織とかを追究する資料として使われているのでしょうか。

伊藤　むしろ、先端的な研究というのは、現在は文法論だと思います。これはアメリカで始まったのですが、これをやらないと正確な文章が把握できないからです。甲骨文は省略した文章が多いんですね。完全な文形が基にあって、それをどんなふうに省略してあるのかという研究なんです。それからもう一つは、たとえば、動詞とそれを否定する場合の否定詞の関係ですね。こういう動詞の場合は、こういう否定詞しか使わないという組み合わせがあるわけです。そういうことは、これまではほとんど考えないできたものですから、これはきちんとおさえておかないといけないのではないかというので、今みんなやり始めたわけです。この動向は中国よりも、むしろアメリカやソビエトの方が盛んなのです。

近江　中国と欧米で研究方向が違うのはどうしてですか。

資料－9



「説文解字篆韻譜」元時代（天理図書館蔵）

伊藤　それは、中国は文字の国で、昔から文字学の伝統がありますから、どちらかといえば、一字一字の研究で進むのです。後漢の許慎という人が『説文解字』という書物を作り、初めて漢字を偏と旁に分けたりして、その成り立ちを説明して以来、この方法での研究が進んできました。この『説文解字篆韻譜』も宋の徐鉉が書いた研究書です。これに対してアメリカやソビエトは、最近言語学が盛んなので、どうしても文法や文章論の方面から入ってくるのです。

金関　ソビエトのクリコフさんも天理に来られたことがあります。最近その方面で活躍しておられますか。

伊藤　そうです。クリコフもそうした研究方向をもった学者ですね。

●言葉と漢字

近江　米ソにならって少し言語学的なことをうかがいましょう。甲骨文字は口に出して読んでいたと言われましたが、周代になってより漢字に近い文字になっても、同じ発音で読んでいたのでしょうか。

金関　殷の言葉と周の言葉と言えば、陝西省の人か河南省に行って、普通の会話ができたかどうなのかも問題になるでしょうね。殷という国名は、盤庚が安陽の殷の地に遷都したから周人がそう呼んでいるが、当時の人の呼び方でいえば「商」というのが正しいのです（日本では『史記』の呼び方に従ってこれを使用している）。ですから中国では商と言っています。ところで、この商の国の人は亡国の後、故地を追われ経済活動を活発にやったので、商人・商品という言葉ができたという小島祐馬先生の説がありますね。

伊藤　別にそれを否定する資料はないのですね。でも私はそうは考えていません。殷という呼び方ができるのは、西周の中ごろですけれど、どうしてそうなったかはよくわかりませんね。

金関　後世、間の抜けた男の話いえば、いつも殷人の子孫である宋人で、兎が切株に当たって死んだのを見て、それからずーっと切株を見て暮らしていたという有名な物語がありますね。あれなんか、宋の人が馬鹿にされていたような説明もされていると思うのですが……。殷人の子孫だからというので差別されたのでしょうか。

伊藤　私はむしろ、周が殷を倒して東の方に出てきた時に、殷の人を使わなければできないことが多かったと思いますね。

金関　それは殷人の方が文化的に高かったからですか。

伊藤　それは文化の内容にもよりますが、少なくとも西に住んでいた周人が東に出てきて東（殷）の人の習慣と同じことをするためには、殷人に習わざるを得ないわけでしょう。後の衛という国に康叔という人を封建するのですが、この時にも殷の優秀な人材をうまく使えと言っています。そうすれば、政治がうまくいくだろうということで。逆に殷の人たちもうまく立ち回って周に従って、自分たちを残していこうと考えた連中も多いでしょう。

金関　そうですね。青銅器なんかでも、殷から継承した様式が西周の初めごろあまり変わらないままに続き、そして長い年月の間にだんだん変化していった。文字も同様で着実に受け継いで次第に変化していく。その変化は表音文字になっていくのでなく、厳密な意味を表すような方向に変わっていったと考えてよいのですね。

近江　文字の変化はやはり進化と考えてよいのでしょう。

伊藤　そうです。

金関　文字の進化の仕方には、原因があるのでしょうか。たとえば宮崎市定先生は、中国はとても広い国で、違った言葉を話すから発音では意志が通じない。文字を使えば共通の漢字だから即座に通じる。日本人と中国人でさえ筆談できる。完全に表音文字に分解すると文字を書いても通じないから、意志伝達の手段がなくなってしまう。従って、漢字が進化せずに象形文字的な部分を残してもっているというのは、広い中国を支配する古代帝国にとっては都合がよかったというようなことをおっしゃっていますが。

伊藤　そういう考え方を周の時代までさかのぼって考えるのはどうでしょうか。

金関　たとえば周王室と地方の封建国家との交際は、漢字を使った方が良かったということはありませんか。文字が分解してアルファベットになっていく条件は、都市国家の内的

矛盾がそれを醸成するであろうという意味のことを宮崎先生は言っておられます。最初は祭事にだけ使われて、その段階では貴人にしか読めない。ところが、都市文明が熟成し、市民社会が形成され、文字が市井でも使われるようになると表音文字になってしまうとか。

伊藤　違った言葉といいますけれど、それは多少方言がある程度で、基本的には同じ言葉ですね。だから周が殷の文字を引き継いで金文を書く時でも、スムーズにできたわけで、同じ文章構造で表現できたわけです。甲骨文と金文との間に言語としての差はありません。もし言語として違っていたら、こうはいきません。たとえばヒッタイトは楔形文字で書きますが、これは表音文字の楔形文字を、その音だけを借用して表音文字として使うわけですから、文型などは完全に別のものになりますね。孟子なんかでもそうですが、かなりあちこちを歩いて問答なんかするんですね。そうするとそれほど発音が違ったり、言葉が違っていれば、問答はできないわけでしょう。中国の北の方では西周の終りから春秋の初めごろに作られた『詩経』という書物があります。一方、南の方では戦国時代の後半に『楚辞』という書物にまとめられた「賦」という長歌が作られます。この両者は音韻学者にいわせると、同じ音韻体系だと言うのです。北の発音が南ではどう変化するのかは割合に理解しやすいらしいのですが、コツさえわかれば通じるのではありませんか。それに中国人がしゃべるのにはすごいゼスチャーが入りますしね。秦の始皇帝が文字を統一したとよく言いますけれど、当時使われていた文字の大半は同じで、ごく一部が地方で異なっていたというのが実情です。南の方の鳥書というものなどたいへん特殊な装飾文字で、日常に使用していたものは、それほど変わっていなかったと言われています。

近江　最後に漢字の将来ということで、中国では漢字が簡略化されていきますね。あれは簡略体というのですか。

伊藤　もうやらないでしょう。というより、特に文化大革命の時にはそれぞれが勝手にやるという状況までいってしまった、一人ひとりが独自の略字を作っていってね。それでわかりにくくなってしまったという弊があります。どこかで止めないとどうにもしようがなくなる。

近江　日本でも、榊とか辻とか峠とか、いわゆる国字と言っている中国にない漢字を作りますか、これは略字ではなくて都合の良い作字ですから、簡略体とは発想が違うようですね。簡略体は書家も困るでしょう。日本だったら前衛書道は別だけど、書道の方からは反対運動が起こるのではないでしょうか。それから、最近は何と言いましたっけ、「……である」と書くのに、「……でR」と書くやり方が流行しています。

伊藤　中国の文字をアルファベットにするとわかりにくいでしょうね。同じ発音の言葉が多いので。

近江　世界共通の文字の必要性は、一方ではあるのでしょうがね。エスペラント語の問題もありますし……。

金関　言葉を知らないでも文字を勉強すれば、共通の理解し得るものがあると思います。いま世界共通のものが要求されるといえば、交通標識などがそうですね。あれは記号ですが、一つの象形的なものでしょう。漢字が持っている性格というのは、そういう点で共通文字への一つの方向を示唆しているのではありませんか。

伊藤　日本に来ている外国人に日本語を教えるとかいう内容のＮＨＫ番組がありまして、そこで言っていましたね。漢字というのは文字一つで、ある程度意識を伝えることできる。だから世界共通文字などを作るのに漢字を使ったらどうかって。

金関　ラフカディオ・ハーンが日本へ来た時の印象記に、うら覚えですが、人力車に乗って街を通った時に店の看板を見て「字は全然読めないけれど、その字体の姿・・・ているような笑っているような豊かな表情からなんとなくわかる」という意味のことを言っています。漢字にはそういう要素があるんですね。

近江　世界共通の記号といえば、ナショナル、日立といった家電メーカーが集まってデザイン研究会みたいなものが組織されていて、その団体が甲骨文字とヒエログリフを見せてほしいということがありました。何の参考になるのかというと、たとえばテレビや洗濯機のフッシュボタンに、昔は「押」と書いていたのが、近ごろはたとえば指先を描くことによって、外国でも指で押さえるんだということがわかるでしょう。そうした類の共通のデザインを創るのに、古代文字が参考になることを思いついたというのです。甲骨文字も意外なところで超近代社会に役立つ要素があるのですね。

当巻は資料の甲骨文字の釈文はもちろんのことですが、分類や配列に至るまですっかり伊藤先生のお世話によってでき上がりました。その上に今日は書物の上ではちょっとわからないような、興味深いお話を長時間にわたってうかがうことができました。ありがとうございました。この辺で終わりにさせていただきます。

（文責・近江）

［天理参考館所蔵の甲骨について］

天理参考館に所蔵される甲骨文資料の来源は七つに大別される。そのうち旧蔵者が明らかなのは、堂野前種松氏旧蔵のうちの40片１箱（うち２片は偽刻）のみである。この40片は、硬質木製ニス塗り、幅40cm・奥行き29cm、高さ29cmの箱で、内部は４段の引出しになり、各引出し内部は、布張りで、甲骨をはめ込むようになっている。うち第１期３片、第１期自組１片、第４期７片、他は本書において第３・４期として分類したものである。38片のうち35片は、金祖同の『殷契遺珠』に堂野前氏蔵として書録される。次に前所有者は不明であるが、ベニヤ板に黒と銀灰色の雷文に似た織柄のある布をはり、内面はブルーの布張りで、はめ込みになった鉄箱36個に入れた547片、うち２片は偽刻がある。箱の蓋には、羅振玉所蔵の紙札が添付されている。この鉄は縦・横ともに23cm、深さ５cmである。うち第１期281片、自組13片、子組２片、第２期114片、第３期24片、第３・４期104片、第４期21片、第５期1片である。第１期281片のうちおよそ20片が、劉鶚の『鉄雲蔵亀』に収録されている。一方第３・４期として分類される104片は、おそらく1925・26年の両年にわたって、小屯村中およびその村のすぐ北側で盗掘されたものと考えられるので、この羅振玉蔵と表示される36鉄の甲骨は、少なくとも1926年以降に、羅振玉のもとで劉鶚旧蔵の甲骨などと併され、その後に日本に将来されたものであることがわかる。この鉄に収められた一群を、天理教の二代真柱中山正善氏が入手されたのは、太平洋戦争後のことであり、それ以前の日本における旧蔵者は不明であるが、劉鶚旧蔵品とともに羅振玉のもとで、1925・26年盗掘の第３・４期甲骨などと併されたことは、現在京都大学人文科学研究所に蔵される、上野精一氏旧蔵のものと関係が深いことを示している。おそらく、上野氏のもとに甲骨資料を納めた骨董商貴司彌三郎氏が日本に還ど、関西の旧蔵者に購入されたものと考えられる。その旧蔵者の氏名、また中山正善氏が入手された経路・時期なども現在では明らかにされなくなっているが、時期については、上野精一氏のコレクションが京大人文科学研究所に寄贈された昭和25年とほぼ同じ時期か、やや遅れた時期であろうと推測される。

第３の資料群は、縦39cm、横31cm、深さ1.5cmのもの４段、３cmのもの１段の、計５段からなる桐箱に収められた250片で、蓋には王国維旧蔵の上書きがある。いずれも小片であるため、比較的大きなもの45片、うち第１期17片、第１期子組１片、第２期３片、第３期１片、第５期23片を載せた。

以上３群の図版編集後、参考館の収蔵庫を再調査したところ、さらに４群の資料が見つけ出された。その一つ第４群は、横30cm、縦27cm、深さ３cmの木の箱で、紫色のふろしきに包まれ、内部には薄い布団を敷き、その上に甲骨を糸で固定したものである。中には羅振玉旧蔵と書いた紙がはいっている。小片が多いが、25片のうちから、第１期５片、第２期３片、第５期16片を本書に載せた。第５は横20cm、縦16.5cm、深さ4.2cmの鉄型の箱で、表は紺色の布をはり、内部はブルーの布で、はめ込みになっている。本来は15片収納されていたものであるが、３片は失われており、本書には12片のうちの７片を載せた。第６は縦24cm、横17.5cm、深さは一つが3.2cm、他の一つは3.5cmあり、二つとも同じ紺色の布をはった鉄箱で、内部はブルーの布をはったはめ込み式である。前者には15片が収納されうち11片を、後者は18片収納のうち17片を本書に載せた。第５・第６の群は、箱の大小は異なるが、鉄にはられた布地は同質のものであり、収納される甲骨も同期のものであることからみて、一群のものである可能性がある。この３箱から本書に載せた甲骨は、第１期が23片、第２期５片、第３期３片、第５期１片、第１期自組が２片、第４期と考えられるもの１片である。

最後の第７群は縦30.5cm、横18.5cm、深さ３cmの鉄型で、表面には紺色の布をはり、内部は赤褐色の布をはったもので、小片40片を収めてある。うち第１期２片、第２期１片、第３期１片を本書に載せた。

以上７群のうち、第３群から第７群に及ぶ甲骨は、本書の時期区分に言う第３・４期、第４期の資料をほとんど含んでいないという共通した性格をもっている。このことは、この５群の資料が、比較的早く、小屯村の北の砂丘地区、すなわち殷代後期の建築基壇の発見された地区で盗掘されたものであることを示している。これに対して、第１群は、38片中27片が第３・４期のものであり、また第２群にも104片のこの期のものが含まれているので、1925・26年に、小屯村中およびその近辺で盗掘されたものをかなり含んでいると考えることができる。

以上が、本書に紹介した甲骨資料の概略であるが、第１期の祭祀関係の資料には、いくつかの重要なものがあり、またＳ025、Ｂ026は、明らかに同一甲版の左右対象の位置にあったものと考えられるものである。自組卜辞についても、Ｓ300、Ｓ301、Ｓ303、Ｓ304、Ｓ305、Ｓ307などは重要な資料とすることができるが、特に補遺に入れたＳ659の内容は難解であるが、参考館の甲骨中でも、第１、２の重要性をもつものと言うことができる。

また第２期の資料では、Ｂ316、Ｂ317、Ｂ318、Ｂ319、Ｂ320、Ｂ321、Ｂ322、Ｂ323が、第2期祖甲時代の祭祀として重要な新資料と言うことができる。第３・４期の甲骨は、現在もなおその厳密な時代区分が学界で検討されているものであり、特に第２群に属する未刊のこの期の104片を紹介することができたことは、本書の価値を高めるものであろう。

このほか本書に紹介した資料のなかには、甲骨の背面などに付着した泥土に文字が印されたもの、たとえばＳ055の文字が、Ｔ056の背泥には陽文となって写されていること、あるいはＳ387は第２期の甲版であるが、その背泥には第１期と思われる文字が見られること、また第4期のＢ463の背泥には第３・４期の上甲に対する祭祀卜辞が陽文となって残っている。甲骨版は、何枚かを重ねるようにして竪穴に入れた場合があるが、その際版の間に入った泥土に文字が残ることがあったのである。将来こうした重なった甲骨を剝離させるとき、泥土をうまく残すようにして剝がすことが必要であることをこれらの資料が示している。

最後に、本書のうち、Ｂ222、Ｂ230の２片の表面には、盗掘後に近人によって追刻された文字が見られるが、これらは実物写真によって明らかなごとく、追刻された文字は、いずれも線が浅く弱いことが明確に看取されることを注意しておきたい。また174頁に示した背面の写真は、甲骨背面の灼鑿の状況を示すためのものであるが、そのなかで、Ｂ110、Ｂ117の２片は、表面の文字は第1期と考えられるものでありながら、灼鑿の形は、むしろ後期のもの、たとえば第３・４期のＢ536のものに非常に近いものであることを示している。この点も、今後の甲骨の編年と灼鑿の関係を研究する際に重要となるであろう。

本書の性格上、詳しい注釈は一切省略したが、３年後に改めて出版する予定である。

（伊藤　道治）

天理大学
天理教道友社　共編

甲骨文字釋文

伊藤道治

B006

氏人。
貞、臭
1 →甲申卜、亘
2 ←貞、于河
　奉年。

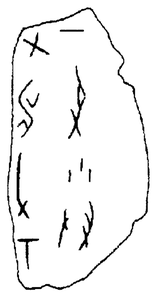
1 甲申に卜い、亘が貞う、臭が人を氏せんか？
2 貞う、河に年を奉らんか？



B006c

一包。小𡈼。
→甲申、力示

甲申に、力が一包（一對）を示せり。小𡈼。



B008

←貞、王
　御。
2 ←貞、勿
　于河
　奉雨。

1 貞う、王が御せんか？
2 貞う、河に雨を奉る勿からんか？





B007

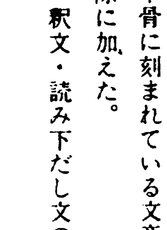
□河廿牛、埋廿牛。

…河に廿牛を□し、廿牛を埋めんか？

S009

□□、俎□。
羊、沈
河三豕二？
貞、賓于
→戊辰卜、

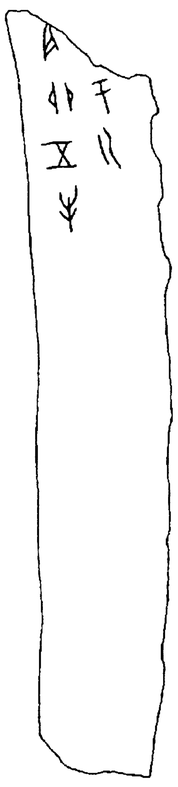
戊辰に卜い、貞う、河に三豕二羊を賓し、□□を沈め、□を俎せんか？



B010

←□千河
□？卯五牛。

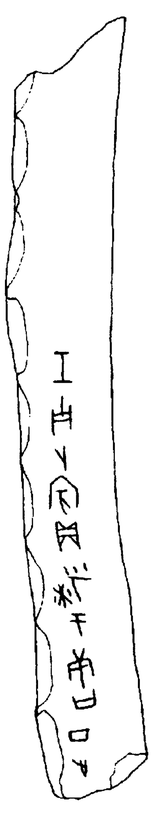
…河に…五牛を卯せんか？



B010b

壬子卜、賓貞、乎賓于唐、正□。

壬子に卜い、賓が貞う、乎（＝呼）んで唐に賓し、正…？



B011

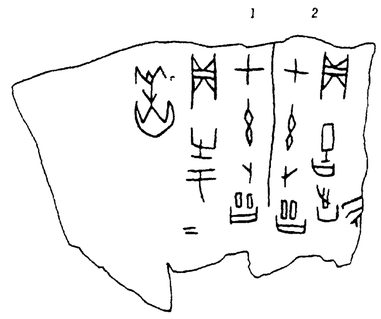
1←甲午卜、㞢
貞、㞢于
𢀛。

貞、㞢出。

2→甲午卜、㞢

1 甲午に卜い、㞢が貞う、
𢀛に㞢めんか？

2 甲午に卜い、㞢が貞う、㞢が出でんか？



B013

日雨。

1→貞、今

𢀛。
奏于

2→貞、勿

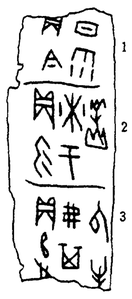
氐牛。
弗其

3→貞、追

1 貞う、今日雨ふらんか？

2 貞う、𢀛に奏する勿からんか？

3 貞う、追がそれ牛を氐すあらざるか？



B014

貞、奏
于土。

貞う、土に奏せんか？

B015

雨。
𠂤
宰
卯于土
帝三豕㞢犬

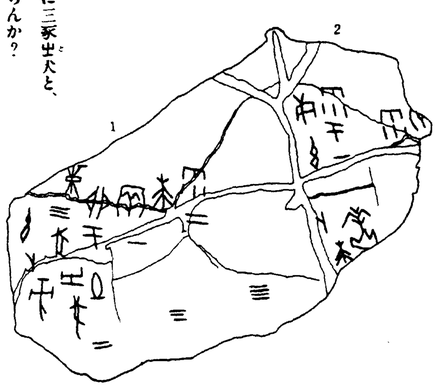
1→庚午卜、方

雨于𢀛。

2→庚午卜、𠂤

1 庚午に卜う、方帝するに三豕㞢犬と、
土に宰を卯し、雨を宰らんか？

2 庚午に卜う、雨を𢀛に宰らんか？



B028

←𠂤巳卜、永貞、
來乙亥
㞢于
祖乙。

巳巳に卜い、
永が貞う、
來る乙亥に、祖乙に㞢めんか？

註 一二四と〇二五は、同一亀版の左右で、〇二五が右半、一二四が左半と考えられる



二南。
亥奏

1→來癸

辛□。

2→貞、祖

1 來る癸亥に二南を奏せんか？

2 貞う、祖辛に□せんか？

B028b

1←貞、王
入。

2←狌□
于祖
辛。

3←貞、王
勿獸。

1 貞う、王が入らんか？

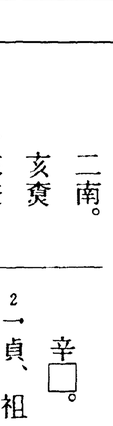
2 狌を祖辛に□せんか？

3 貞う、王が獸する勿からんか？

卜、亘。

→甲戌

甲戌に卜い、亘〔が貞う〕。





S018

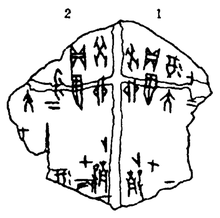
甲。
𠂤大
貞、翌甲辰

1→癸卯卜、㱿

2←癸卯卜、㱿
貞、翌甲辰
勿𠂤
大甲。

1 癸卯に卜い、㱿が貞う、翌甲辰に大甲に𠂤せんか？

2 癸卯に卜い、㱿が貞う、翌甲辰に大甲に𠂤する勿からんか？



S021

戊。二月。
㞢于大
貞、王𠂤

→甲戌卜、□

甲戌に卜い、□が貞う、
王が𠂤して大戊に㞢めんか？二月なり。

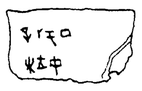


S022

丁。
于中
卜、王、

→辛未

辛未に卜う、王〔が貞う〕中丁にか？

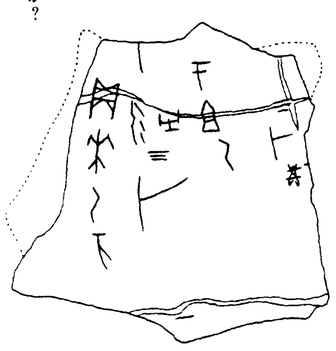


S024

于祖乙。
㞢
勿

→貞、來乙亥

貞う、來る乙亥に、
祖乙に㞢むる勿からんか？



S033

祖□。
告于
𡆥貞、

→乙亥卜、

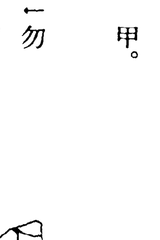
乙亥に卜い、𡆥が貞う、
祖□に告げんか？

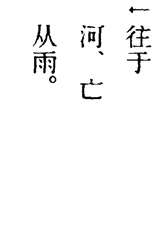
S033b

1←王固曰、
其告。

2
／侯商／。

1 王が固（判）じて曰く、それ告げんと。





1←往于
河、其
从雨。

2←貞、御
于羌
甲。

3←勿
御。

4←往于
河、亡
从雨。

1 河に往くに、それ从りて雨ふらんか？

2 貞う、羌甲に御せんか？

3 御する勿からんか？

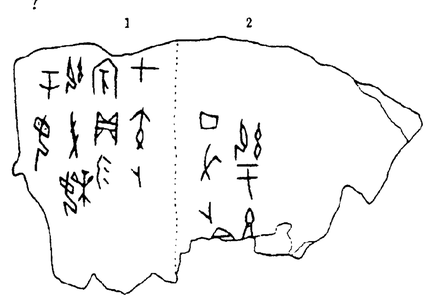
4 河に往くに、从りて雨ふること亡きか？

註 1と4、2と3が対卜である。



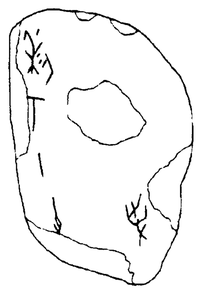
B034

1←甲寅卜、
賓貞、勿
御婦娘
于母□。
御于祖□。
2→丁丑卜、賓貞、
1 甲寅に卜い、賓が貞う、
婦娘を母□に御する勿からんか？
2 丁丑に卜い、賓が貞う、祖□に御せんか？



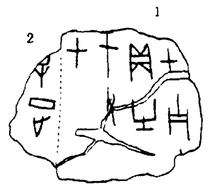
B034c

□。
→剌示十包。
剌が十包を示せり。□。



S035

1←甲子卜、
貞、屮
于父
甲。
□子正□。
2→□
1 甲子に卜い、貞う、父甲に屮めんか？



B036

←乙卯卜、亘
貞、今日王
至于章、
夕酌。子
央屮于
父乙。
乙卯に卜い、亘が貞う、今日王が章に至り、
夕に酌す。子央が父乙に屮めんか？



S038

父乙。
貞、御于
1→丙申卜、賓
2←庚□卜、□
貞、□
于□。
1 丙申に卜い、賓が貞う、父乙に御せんか？



B037

1←今乙
丑不
雨。
2←貞、隹
父乙
𢀛。
1 今乙丑に雨ふらざるか？
2 貞う、これ父乙が𢀛せるか？



S039

←貞、隹父
乙𢀛。疾
齒。
貞う、これ父乙が𢀛せるか？
齒を疾めり。



S039b

□𢀛。
乙
父
→王囚曰。隹
王が囚（一圏）じて曰く、これ父乙が𢀛せり。



S040

多介父。
御于
→貞、勿
貞う、多介父に御する勿からんか？



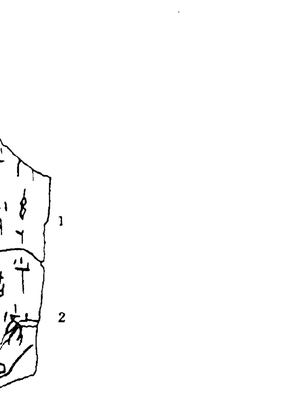
S041

1←丙午卜、
乎雀
出于伐
征𠂤。
九月。
2←乎雀
罰兄丁
十牛
歲。用。
1 丙午に卜う、雀を乎（呼）んで伐に出で、𠂤に征ばしめんか？
2 雀を乎んで兄丁に十牛を罰して歲せしめんか？ 用いん。



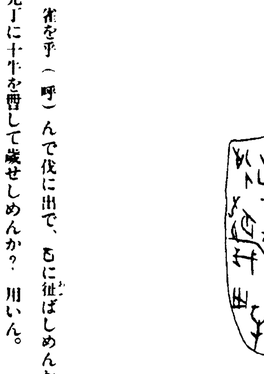
S043

1←□子卜、永
貞、屮方
□。
2←貞、
御見
于母
庚。
3→貞、屮
屮又。
王鄉。受
方出
1 □子に卜い、永が貞う、屮方が……？
2 貞、見を母庚に御せんか？
3 貞う、屮方が出で、王が鄉（嚮）う。
屮の又（祐）を
受けんか？



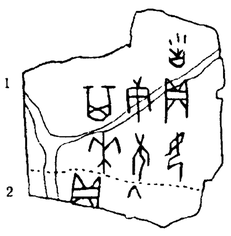
S043b

→庚戌婦□示□。
庚戌に、婦□が
□を示せり。



S045

1←貞、母
庚不
其來。
貞う、母庚それ來らざるか？



S046

母辛。用。
告于
□其□
□卯王
→□
…卯に王は…其れ□して母辛に告げんか？
用いん。



B050

1→□子卜、永
2→貞、□方
□。
1→貞、□
□又。
王鄉。受
方出
2←貞、
御見
于母
庚。
3→貞、□
1 □子に卜い、永が貞う、□方が……？
2 貞、見を母庚に御せんか？
3 貞う、□方が出で、王が鄉う。
□の又（祐）を
受けんか？

S057

1→貞、□
示。
2→貞、□
于九
3→貞、□
伐。
4→貞、□
勿伐。
1 九示に、□らざるか？
2 貞う、九示に、□らんか？
3 貞う、□んで伐せんか？
4 伐する勿からんか？

S057

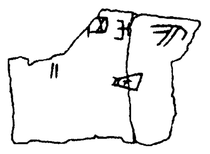
1→貞、□
于止。
2→貞、□
1 貞う、止に□せんか？



S062

←其出作
禍。

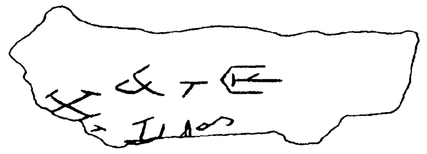
其れ禍が(作)すことあらんか?



B065

←癸丑卜、賓、
□亡𢦏。

癸丑にトい、貞(が貞う)、
□が𢦏りすることなきか。



B065b

→王固曰、
吉。亡𢦏。

王が固(一判)じていい、だなり。𢦏りすることなし。



S076

←甲子卜、
殼貞、
勿歲羌𠂤。
十三月。

甲子にトい、殼が貞う、羌𠂤を歲する勿からんか?
十三月なり。



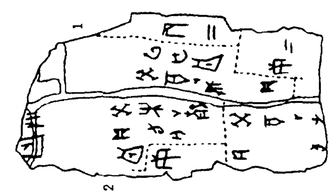
S102

1→癸酉卜、殼貞、
旬亡禍。

2←癸未卜、殼貞、
旬亡禍。

1 癸酉にトい、殼が貞う、旬に禍いなきか。

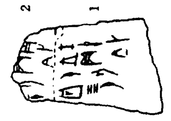
2 癸未にトい、殼が貞う、旬に禍いなきか。



S108

1←壬午卜、王貞、今夕亡禍。四月。

壬午にトい、王が貞う、今夕に禍なきか。四月なり。



B109

1←丙午卜、今夕其出禍。

2→丙午卜、今夕亡禍。

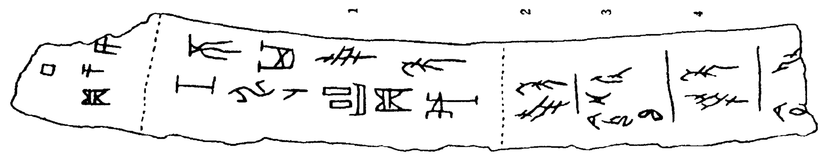
3→丁未卜、𢦏?小雨。

1 丙午にトう、今夕にそれ出(有)るか?

2 丙午にトう、今夕に禍亡きか?



B093



1→壬申卜、㞢貞、我不其受年。

2→受年。

3→令般。

4→受年。

1 壬申にトい、㞢が貞う、我はそれを受けざるか。

2 年を受くるか。

3 般に令するか。

4 年を受くるか。

B100

1→癸亥卜、㱿貞、旬亡禍。

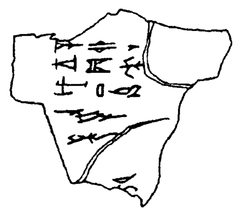
癸亥にトい、㱿が貞う、旬に禍なきか?



S095

←辛卯卜、
歲𠂤王貞、來
年受。

辛卯にトい、王が貞う、來年に𠂤は年を受くるか?



1→癸酉卜、㱿貞、今日其雨。

2→其雨。

3→今日不雨。

4←庚辰卜、㱿貞、翌辛巳啓。

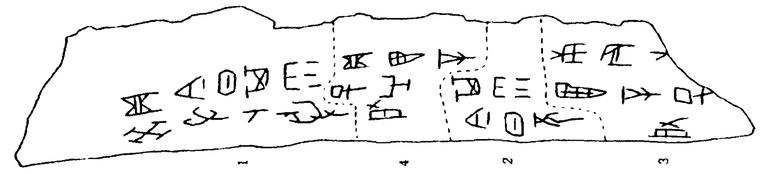
4←貞、翌辛巳出啓。

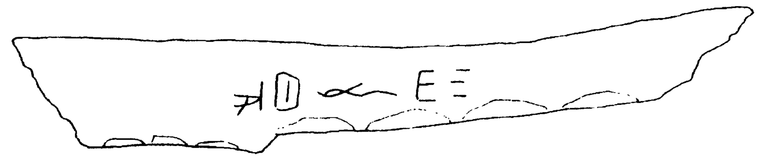
1 癸酉にトい、㱿が貞う、今日それ雨ふるか。

2 今日それ雨ふらざるか。

3 庚辰にトい、貞う、翌辛巳は啓くか。

4 貞う、翌辛巳は啓くこと出るか?





B111b

之日允雨。

この日に允に雨ふれり。

S112

←貞、今日
其雨。
之日允
雨。

貞う、今日それ雨ふるか。この日に允に雨ふれり。



S113

貞、雨。

1→丁巳卜、㱿

2←貞、不其雨。



1 丁巳に卜い、㱿が貞う、雨ふるか？

2 貞う、それ雨ふらざるか？

B114

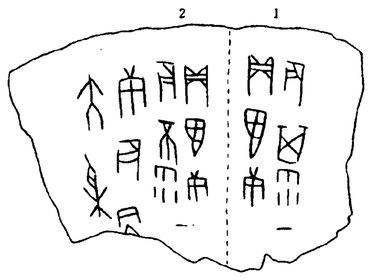
辰其雨。

1→貞、翌庚

2←貞、翌庚辰不雨。

庚辰□

大采□。



1 貞う、翌庚辰にそれ雨ふるか？

2 貞う、翌庚辰に雨ふらざるか？　庚辰に…、大采に…。

B120

雨。

至甲戌

自今

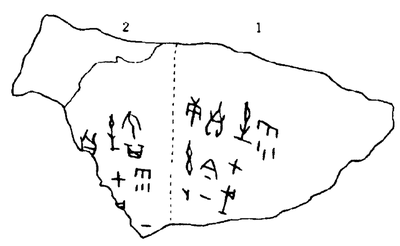
1→庚午卜、

不其雨。

至甲戌

自今

2→庚午卜、

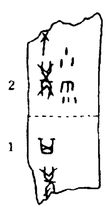


1 庚午に卜う、今より甲戌に至るまで雨ふるか？

2 庚午に卜う、今より甲戌に至るまで其れ雨ふらざるか？

B122

1 其𩵦小雨。



2→不𩵦

1 それ小雨に𩵦（遘）うか？

2 小雨に𩵦わざるか？

B135

1←不其隻羌。

2→☑死☑。



1 それ羌を隻（獲）ざるか？

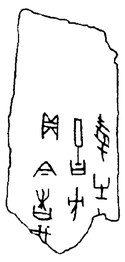
2 ☑死☑。

B138

受㞢又。

㠯方、我

→貞、今春伐



貞う、今春に㠯方を伐つ、我は㞢の又（祐）を受くるか？

B140

牛羌。

亘貞、劊

1→丁巳卜、

2←庚申卜、㞢

貞、乎伐

㠯方、

受㞢又。

1 丁巳に卜い、亘が貞う、牛を劊して雩せんか？

2 庚申に卜い、㞢が貞う、乎んで㠯方を伐たしむるに、この又（祐）を受けんか？

史步。

令我

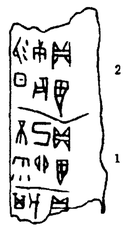
3→貞、勿

3 貞う、我が史に令して步せしむるなからんか？

B124

1←貞、翌己卯不雨。

2←貞、翌庚辰易日。



1 貞う、翌己卯に雨ふらざるか？

2 貞う、翌庚辰は易日なるか？

B125

易日。

不其乙未

1→貞、翌乙未亡𢦏。

2→乙未



1 貞う、翌乙未はそれ易日ならざるか？

2 乙未に𢦏なきか？

S129

□𠂤

奠。十一月。

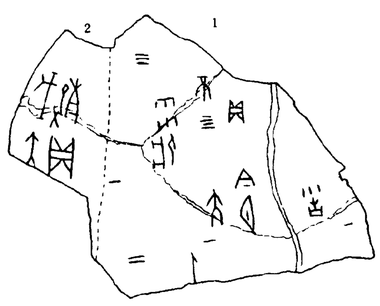


□に奠あるか？　十一月なり。

S131

1←貞、今夕不大雨、疾。

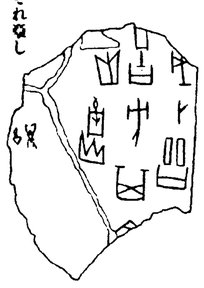
2→戊寅㱿貞、☑、



1 貞う、今夕大いに雨ふらずして、疾むか？

S142

←甲戌卜、㞢貞、㠯方其𡆥。



甲戌に卜い、㞢が貞う、㠯方がそれ𡆥し𣪘に……せんか？

B141

受㞢又。

方、弗其

→貞、勿伐㠯



貞う、㠯方を伐つ勿し、それこの（"祐"）を受くるあらざるか？

B149

自行。

戊至

1→其先

其工。

2→戊亡

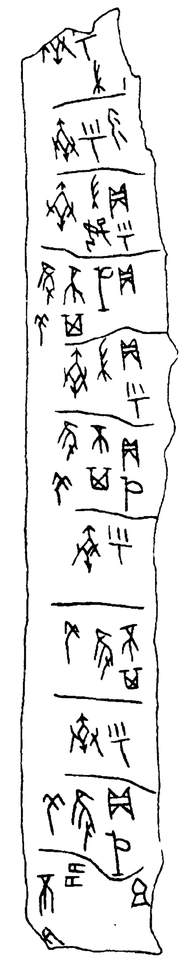


1 其れ先と戊とが行より至らんか？

2 戊は其れ工あるなきか？

B150

1←貞、戊
隻
羌。
2・4←乎
執。
3←不其
隻
羌。
5←貞、戊
不其
隻羌。
6←貞、乎
帚
執。



8←貞、乎
帚好
執。
9←勿
乎
執。

1 貞う、戊が羌を隻（獲）るか？
2・4 乎（呼）んで執せしめんか？
3 それ羌を隻ざるか？
5 貞う、戊がそれ羌を隻ざるか？
6 貞う、帚（婦）を乎んで執せしめんか？
8 貞う、帚を乎んで執せしめんか？
9 乎んで執せしむるなからんか？

B152

希方我。
戊乎
一貞、令



貞う、戊に令して希方を我に乎ばしめんか？

S156

伐?戊。
望澤
雀乎从
𡆥貞、宙
一甲午卜、



甲午に卜い、𡆥が貞う、これ雀を乎（＝呼）んで、望と澤とを从（＝従）えて、戊を伐せしめんか？

B158

□又。
弗其受
乘伐旨、
乎从望
一貞、今春



貞う、今春に乎んで望乘を以えて旨を伐たしむるに、それこの又（＝祐）を受くるあらざるか？

B161

□盾弗𢦏周。十二月。
…宿が周を𢦏らざるか？
十二月なり。



S162

周凡。
殼貞、
一丁未卜、



丁未に卜い、殼が貞う、周が凡するか？

B168

←貞、勿
乎見
□方。



貞う、乎んで□方を見せしむるなからんか？

B179

←貞、帚
不其
龍。



貞う、帚（婦）はそれ龍せざるか？

B181

來告。
1→貞、邑
來告。
不其
2→貞、邑
3→□
□來。

1 貞う、邑が來りて告げんか？
2 貞う、邑がそれ來りて告げざるか？

S197

□。
寅令
貞、翌庚
一己丑卜、殼



己丑に卜い、殼が貞う、翌庚寅に、□に令せんか？

S218

←丁巳卜、
殼貞、今日
王步。



丁巳に卜い。殼が貞う、今日に王は步せんか？

B196

1→𠂤。
人于
貞、吏
2→貞、勿
吏人。
3→吏
人。



1 貞う、人を𠂤に吏（使）わさんか？
2 貞う、人を吏わすなからんか？
3 人を吏わさんか？

B207

𠂤畢。
賓貞、多
一甲申卜、

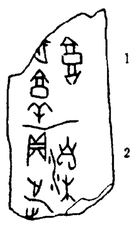


甲申に卜い、賓が貞う、多を畢（＝禘）するあらんか？

B219

1 →丈亭
　埔。
　渉。
2 →貞、涉

1 丈が埔をひらせんか？
2 貞う、渉を渉らんか？



S299

←丁丑
　出兄
　甲。

丁丑に兄甲に出せんか？



S300

←丙午卜、御于
妣□、羊百白豕。

丙午に卜う、妣□に御するに、羊百と白豕（とを用いん）か？



S301

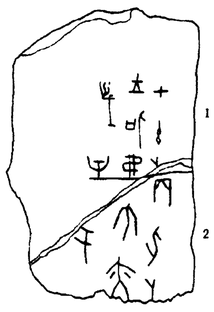
←甲辰卜、
貞、丙
隹犬
旬
多子、
卯豕。

甲辰に卜い、貞う、丙にこれ犬が多子に旬す、豕を卯かんか？

S303

1 ←甲午卜、
　王叹弗
　𢦏出。
2 ←丙申卜、
　不亦
　于□。

1 甲午に卜う、王が叹ち、出を𢦏らざるか？
2 丙申に卜う、□に赤ざるか？



S304

□。
丑方
八月乙
至。今
方其
卜、王貞、
1 →辛酉

辛酉に卜い、王が貞う、方がそれ至るか？
今八月乙丑に方が…せり。



S305

1 →己卯卜、王、勿
　亜御方。

2 ←丁巳卜、王貞、
　四卜弗其隻
　征方。

1 己卯に卜い、王が〔貞う〕、
亜して方を御するなからんか？
2 丁巳に卜い、王が貞う、
四卜がそれ方を征するを隻（獲）るあらざるか？

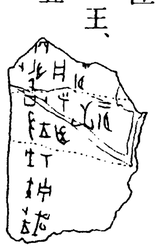


S307

□□。十月。
□□凡
□貞、徂
1 →□□卜、

十二月。
□。
乎𠂤
卜、王、
2 →丁丑
示宁成。
3 →戊寅卜、王、

3 戊寅に卜い、王が〔貞う〕、宁を成に示せんか？



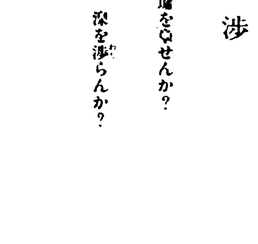
B308

1 →于癸未
　出至雀自。
　至雀自。
2 →于甲申出

1 癸未に、雀自（＝師）に至る出（＝有）らんか？
2 甲申に、雀師に至る出らんか？

3 →甲午卜、
　雨。今日

3 甲午に卜う、雨ふらんか？ 今日…。



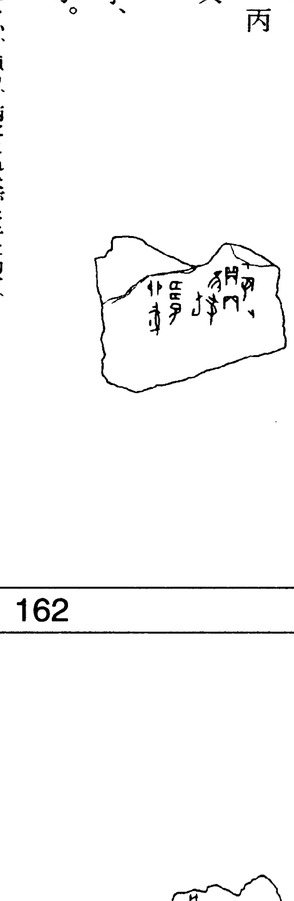
B316

□月。
禍。在六
報＝乙祭、亡
貞、王賓
1 →乙丑卜、尹
尤。
2 →貞、亡

1 乙丑に卜い、尹が貞う、王が報乙を賓して祭るに、禍亡きか？六月に在り。
2 貞う、尤亡きか？

3 →乙丑卜、尹
　亡禍。
　貞、王出、
4 →貞、亡
　祭、亡禍。
　貞、王賓報＝丙
5 →丙寅卜、尹

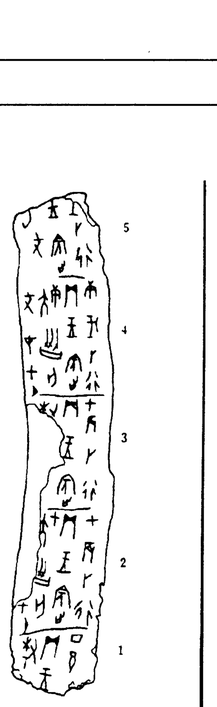
3 乙丑に卜い、尹が貞う、王が出ずるに、禍亡きか？
4 貞う、尤亡きか？
5 丙寅に卜い、尹が貞う、王が報丙を賓して祭るに、禍亡きか？

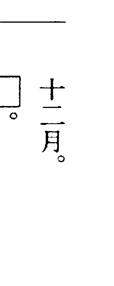


B317

1 ←庚辰卜、行
　貞、王賓
　兄＝庚祭、亡禍。
2 ←貞、亡尤。
　在十月。

1 庚辰に卜い、行が貞う、王が兄庚を
賓し祭るに、禍亡きか？
2 貞う、尤亡きか？ 十月に在り。

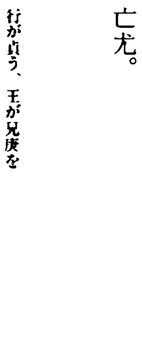




B318

1 ←癸丑卜、王貞、旬亡禍。
　在三月。甲寅𢦚虎甲、
　乙卯彳小乙。
　丁巳𢦚父丁。
2 ←癸亥卜、王
　貞、一旬亡禍。
　在□月。乙丑
　𢦚小＝乙、丁卯𢦚
　父丁、己巳𢦚兄＝己、庚＝午
　𢦚兄庚。

1 癸丑に卜い、王が貞う、旬に禍亡きか？
三月に在り。甲寅に虎甲を𢦚し、乙卯に小乙を彳し、
丁巳に父丁を𢦚す。
2 癸亥に卜い、王が貞う、旬に禍亡きか？
一月に在り。乙丑に小乙を𢦚し、丁卯に父丁を彳し𢦚し、
己巳に兄己を𢦚し、庚午に兄庚を𢦚す。



B319

1←丁酉卜、行
貞、王賓
叔、亡尤。

2←甲辰卜、行
貞、王賓
大=甲𢦏、亡
尤。在七月。

3←甲辰卜、行
貞、王賓
叔、亡尤。

4←庚戌卜、行
貞、王賓
大=庚𢦏、亡
尤。在七月。

5←庚戌卜、行
貞、王賓
叔、亡尤。

1丁酉に卜い、行が貞う、王が賓して叔す、尤亡きか？

2甲辰に卜い、行が貞う、王が大甲を賓して𢦏す、尤亡きか？
七月に在り。

3甲辰に卜い、行が貞う、王が賓して叔す、尤亡きか？

4庚戌に卜い、行が貞う、王が大庚を賓して𢦏す、尤亡きか？
七月に在り。

5庚戌に卜い、行が貞う、王が賓して叔す、尤亡きか？

B320



1←甲寅卜、行
貞、翌乙卯
𢦏于小=乙、亡
𡆥。在十一月。

2←丙辰卜、行
貞、翌丁巳
𢦏于父=丁、亡
𡆥。在十=月。

3←己巳卜、行貞、王
賓枳㞢、亡
禍。

4←〿、亡尤。

1甲寅に卜い、行が貞う、翌乙卯に小乙を𢦏す、亡𡆥きか？
十月に在り。

2丙辰に卜い、行が貞う、翌丁巳に父丁を𢦏す、亡𡆥きか？
十月に在り。

3己巳に卜い、行が貞う、王が賓し、
枳㞢するに、禍亡きか？

4…尤亡きか？

B321

尤。
1→貞、亡
亡禍。
大=戊彡㞢、
貞、王賓
2→戊寅卜、行



1貞う、尤亡きか？

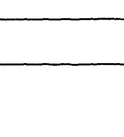
2戊寅に卜い、行が貞う、王が大戊を賓し彡㞢す、
禍亡きか？

3貞う、尤亡きか？

3→貞、亡
尤。

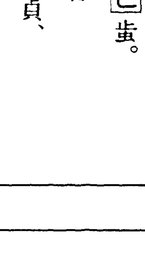
B322

禍。在十=月。
衆雍=己彡□、亡
王賓大=戊□□、
2→貞、亡
1→己未卜、行貞、



1己未に卜い、行が貞う、王が大戊を賓して
□□し、衆び雍己に彡□す、禍亡きか？
十月に在り。

B323



1→癸卯卜、行
貞、翌甲辰
2→己酉卜、行貞、

翌=日于大=甲、亡
𡆥。
翌甲寅翌日
癸丑卜、行貞、
于小甲、亡𡆥。
3→
于大庚、亡
翌庚戌翌=日

1癸卯に卜い、行が貞う、翌甲辰に大甲に翌日す、亡𡆥きか？

2己酉に卜い、行が貞う、翌庚戌に大庚に翌日す、亡𡆥きか？

3癸丑に卜い、行が貞う、翌甲寅に小甲に翌日す、亡𡆥きか？

S325

二宰、亡尤。
衆祖=丁□
父=丁歲□、
貞、王賓
1→丁未卜、㠯

1丁未に卜い、㠯が貞う、
王が父丁を賓し歲：衆び祖丁に…するに
二宰〔を用う〕、尤亡きか？

2□□にト い、㠯が貞う、
翌戊申に王が大戊を賓し□す、尤亡きか？八月に在り。

□、亡尤。在八=月。
王賓大=戊
貞、翌戊申
2→□□卜、㠯

B327

1←戊戌卜、涿貞、
王賓大=戊歲宰
妣=戊歲小=宰叔、
亡尤。

2←己亥卜、涿
貞、王賓
兄=己歲宰
叔、亡尤。

3←庚子卜、涿
貞、王賓南
庚歲宰、
□=□歲宰
叔、亡尤。

1戊戌に卜い、涿が貞う、王が大戊を賓して宰を歲し、
妣戊に小宰を歲して叔す、尤亡きか？

2己亥に卜い、涿が貞う、
王が兄己を賓して宰を歲して叔す、尤亡きか？

3庚子に卜い、涿が貞う、王が南庚を賓して宰を歲し、
□□に宰を歲して叔す、尤亡きか？

S326

←貞、由后
祖=乙歲先。

貞う、これ后祖乙に歲し先せんか？

S330

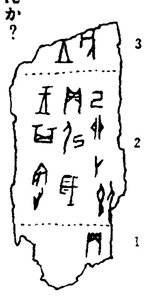
←甲戌卜、出
貞、其𡆥于
大戊宰。



甲戌に卜い、出が貞う、それ大戊に宰を𡆥めんか？

B328

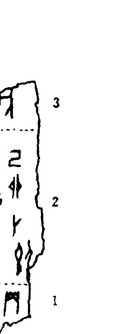
2←己卯卜、即
貞、妣=己歲、
王其賓。



己卯に卜い、即が貞う、
妣己に歲するに、王がそれ賓せんか？

B331

←戊辰卜、即
貞、其又于
祖=乙一牛。



戊辰に卜い、即が貞う、それ祖乙に一牛を又めんか？

S332

小=王、其氐□。
貞、其又于
1→己亥卜、旅
一牛。在六=月。
又于妣=庚
旅貞、其
2→庚子卜、



3←□□卜、旅
貞、□□妣=庚
〿。

1己亥に卜い、旅が貞う、それ小王に又むるに、
それ□を氐せんか？

2庚子に卜い、旅が貞う、それ妣庚に一牛を又めんか？
六月に在り。

S347

歲𣪊ト。

出貞、

1→甲寅ト、

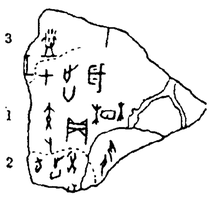
2←癸亥ト、

出貞、

旬亡禍。

1 甲寅にトい、出が貞う、歲𣪊す、よせんか？

2 癸亥にトい、出が貞う、旬に禍亡きか？



B348

1←壬申ト、㞢

貞、王賓

歲、亡尤。

2←癸酉ト、

貞、王賓

歲、亡尤。

1 壬申にトい、㞢が貞う、王が賓して歲す、尤亡きか？

2 癸酉にトい、貞う、王が賓し歲す、尤亡きか？



B349

叙、亡尤。

貞、王賓

1→乙卯ト、行

歲、亡尤。

貞、王賓

2→丁巳ト、行

1 乙卯にトい、行が貞う、王が賓し叙す、尤亡きか。

2 丁巳にトい、行が貞う、王が賓し歲す、尤亡きか？



B351

哉、亡禍。

貞、王賓

←辛亥ト、即

辛亥にトい、即が貞う、王が賓し哉す、禍亡きか？

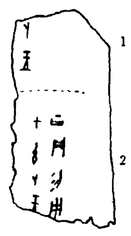


B382

曰貞、勿用。

2→甲午ト、王

甲午にトい、王が𠂤いて貞う、用うる勿からんか？



B383

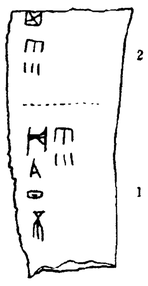
雨。

1→貞、今日不

2 貞、其雨。

1 貞う、今日雨ふらざるか？

2 貞う、それ雨ふるか？



S387

B386

1←乙酉ト、大

貞、翌丁

亥易日。

2 丙戌。

3←貞、不

其易日。

八月。

1 乙酉にトい、大が貞う、翌丁亥は易日なるか？

2 丙戌。

3 貞う、それ易日ならざるか？八月なり。

←辛？巳ト、出

貞、翌丁亥

易日。

辛巳にトい、出が貞う、翌丁亥は易日なるか？

B355

1←庚申？ト、行

貞、王賓

㚔、亡

禍。

2←貞、亡

尤。在

十𠂤二月。



3←壬？戌ト、行

貞、王賓

□裸、亡禍。

1 庚申にトい、行が貞う、王が賓し㚔す、禍亡きか。

2 貞う、尤亡きか？十二月に在り。

3 壬戌にトい、行が貞う、王が賓し□裸す、禍亡きか？

B356

1←戊戌ト、尹

貞、王賓

叙、亡尤。

2←□□ト、尹

貞、王賓

枳？裸、亡

禍。在□月。

1 戊戌にトい、尹が貞う、王が賓し叙す、尤亡きか？

2 □□にトい、尹が貞う、王が賓し枳？裸す、禍亡きか？

□月に在り。



B381

用。

曰貞、不

→甲午ト、王

甲午にトい、王が𠂤いて貞う、用いざらんか？



B388

禍。八月。

旬亡

大貞、

2→癸未ト、

1→癸酉ト、

禍。八月。

旬亡

大貞、

3→癸巳

亡禍。

貞、旬

ト、大

4→癸卯ト、

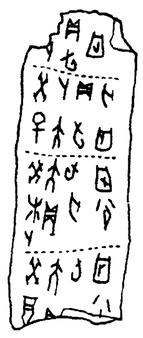
亡禍。

1 癸酉にトい、大が貞う、旬に禍亡きか？八月なり。

2 癸未にトい、大が貞う、旬に禍亡きか？八月なり。

3 癸巳にトい、大が貞う、旬に禍亡きか？

4 癸卯にトい、大が貞う、旬に禍亡きか？



B389

亡禍。一月。

㞢貞、旬

1→癸丑ト、

亡禍。一月。

㞢貞、旬

2→癸亥ト、

禍。一月。

㞢貞、旬亡

3→癸酉ト、

亡禍。二？月。

㞢貞、旬

4→癸未ト、

1 癸丑にトい、㞢が貞う、旬に禍亡きか？一月なり。

2 癸亥にトい、㞢が貞う、旬に禍亡きか？一月なり。

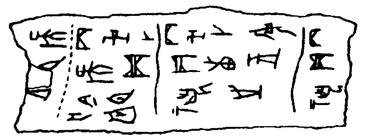
3 癸酉にトい、㞢が貞う、旬に禍亡きか？一月なり。

4 癸未にトい、㞢が貞う、旬に禍亡きか？二月なり。



B393

1 ←丙戌卜、□
　貞、□□
2 ←丙戌卜、中
　祝貞、由王
　祝止。
3 ←丙戌卜、
　貞、今夕
　亡禍。



2 丙戌にト、中が貞う、これ王が止に由らせんか？

3 丙戌にト、災が貞う、今夕に禍亡まあか？

B395

1 ←甲辰卜、行
　貞、今夕亡
　禍。在五＝月。

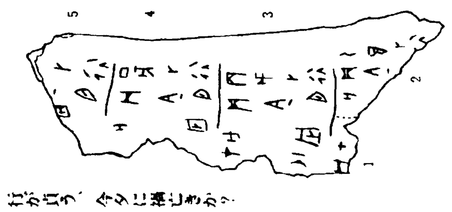


1 甲辰にト、行が貞う、今夕に禍亡まあか？　五月に在り。

2 乙巳にト、行が貞う、今夕に禍亡まあか？　五月に在り。

B396

1 ←甲申卜、行
　貞、今夕
　亡禍。
2 ←乙酉卜、行
　貞、今夕
　亡禍。
3 ←丙戌卜、行
　貞、今夕
　在十＝月。
4 ←丁亥卜、行
　貞、今夕
　亡禍。
5 ←戊子卜、行
　貞、今夕
　亡禍。

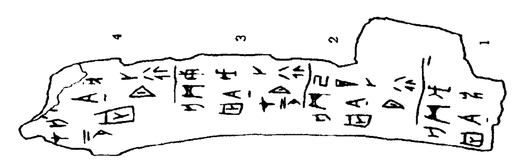


1 甲申にト、行が貞う、今夕に禍亡まあか？

3 丙戌にト、行が貞う、今夕に禍亡まあか？　十月に在り。

B397

1 ←戊申卜、行
　貞、今夕
　亡禍。
2 ←己酉卜、行
　貞、今夕
　亡禍。
3 ←庚戌卜、行
　貞、今夕
　亡禍。在二月。
4 ←辛亥卜、行
　貞、今夕
　在二月。



2 己酉にト、行が貞う、今夕に禍亡まあか？

3 庚戌にト、行が貞う、今夕に禍亡まあか？　二月に在り。

B401

1 →己酉卜、尹
　貞、今夕
　亡禍。在□月。
2 →庚戌卜、尹
　貞、今夕
　亡禍。



1 己酉にト、尹が貞う、今夕に禍亡まあか？　□月に在り。

2 庚戌にト、尹が貞う、今夕に禍亡まあか？

B402

1 →丙午卜、尹
　貞、今夕
　亡禍。在九月。
2 →丁未卜、尹
　貞、今夕
　亡禍。
3 →庚申卜、尹
　貞、今夕
　亡禍。

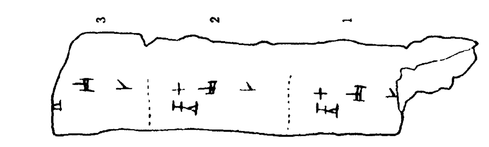


1 丙午にト、尹が貞う、今夕に禍亡まあか？　九月に在り。

2 丁未にト、尹が貞う、今夕に禍亡まあか？

B405

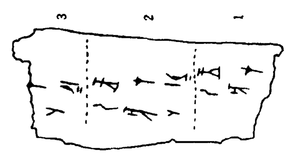
1 ←甲子卜、
　王。
2 ←甲子卜、
　王。
3 ←甲子卜、
　王。



1 甲子にト、王が貞う。

B407

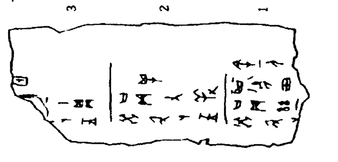
1 →乙亥卜、
　王。在□□月。
2 →乙亥卜、
　王。在十＝＝月。
3 →乙亥卜、
　王。在十＝＝月。



2 乙亥にト、王が貞う、十二月に在り。

B423

1 →癸丑卜、王
　日貞、亾（无）
　其𡆥（艱）日
　貞、亾（无）
　余一人□□。
2 →癸丑卜、王
　日貞、𡆥。
3 →□□卜、王
　貞、□図
　□。



1 癸丑にト、王が日いて貞う、この一旬それ出に𡆥し（艱）ず、余一人（无）らんか？

2 癸丑にト、王が日いて貞う、𡆥（艱）せず。

S424

←己酉卜、出
貞、甫（今）日
令出□
□。

己酉にトて、出が貞う、これ今日に出でて令せんか？

S430

←后祖＝乙
蚩。

后祖乙が蚩するか？



S432

□祭、亡尤。
貞、王賓𢦏
□午卜、宁

□午に卜い、宁が貞う、王が賓して𢦏□し終す、亡きか？
三月に在り。

在三月。



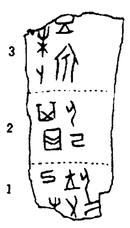
B431

妣己。
王又□
1→己未卜、

妣己。
2→其□

□宗。
3→□未卜、

1 己未に卜う、王が又して妣己に…するか？
2 それ妣己に因ぜんか？



B435

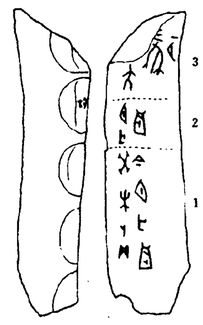
今夕亡禍。
1→癸未卜、貞、

禍。
2→夕亡

3→□大

1 癸未に卜い、貞う、今夕に禍亡きか？
2 夕に禍亡きか？
3 …大風…。一月。

一月。
風。



B454

1←癸巳卜、
又□
河。

2←癸巳卜、
又于
王
亥。

1 癸巳に卜う、河に又（侑）めんか？
2 癸巳に卜う、王亥に又めんか？
3 乙未に卜う、□？

3→　卜、
←乙未
□？。

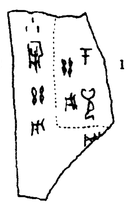


B455

1←于兕。
丝用。

2
□？小宰。丝用。

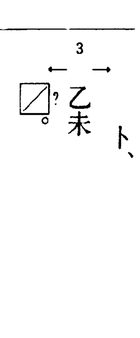
1 兕に（祭らん）か？丝用いん。
2 …小宰か？丝用いん。



B456

毎。
凡、王弗
→于兕

兕に凡す、王は毎（＝悔）ざるか？



B457

年。
1→于河御、受又

2→于　□？
　　□？

1 河に御す、又の年（＝稔）を受くるか？
2 □に御す、又の年を受くるか？

又年。
御？、受
□？

B458

2←乙卯卜、
貞、桑禾
高、爽
五牛。

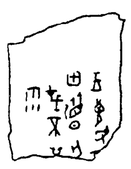
3←乙卯
貞、桑
禾
高。

2 乙卯に卜い、貞う、禾を高に幸るに五牛を爽せんか？
3 乙卯に貞う、禾を高に幸らんか？

B443

←王亩虎？
田、湄＝日亡
𢦚。不冓
雨。

王がこれ虎に田す、湄日に𢦚（＝遘）る亡きか？
雨に冓（＝遘）わず。



B445＋B446

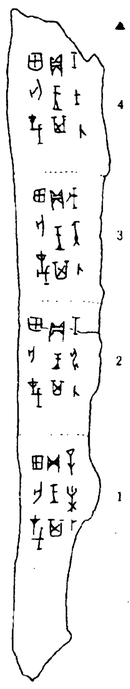
1←辛未卜、
貞、王其
田、亡𢦚。

2←壬申卜、
貞、王其
田、亡𢦚。

3←戊寅卜、
貞、王其
田、亡𢦚。

4←壬午卜、
貞、王其
田、亡𢦚。

1 辛未に卜い、貞う、王がそれ田す、𢦚る亡きか？
2 壬申に卜い、貞う、王がそれ田す、𢦚る亡きか？
3 戊寅に卜い、貞う、王がそれ田す、𢦚る亡きか？
4 壬午に卜い、貞う、王がそれ田す、𢦚る亡きか？



B449

田、亡𢦚。
貞、王其
1→乙卯卜、

田、亡𢦚。
貞、王其
2→戊午卜、

田、亡𢦚。
貞、王其
3→壬戌卜、

亡𢦚。
貞、王其田、
4→乙丑卜、

1 乙卯に卜い、貞う、王がそれ田す、𢦚る亡きか。
2 戊午に卜い、貞う、王がそれ田す、𢦚る亡きか？
3 壬戌に卜い、貞う、王がそれ田す、𢦚る亡きか？
4 乙丑に卜い、貞う、王がそれ田す、𢦚る亡きか？



B459

彭、甲辰上＝甲。用。
貞、𠂤伐
1→癸卯卜、

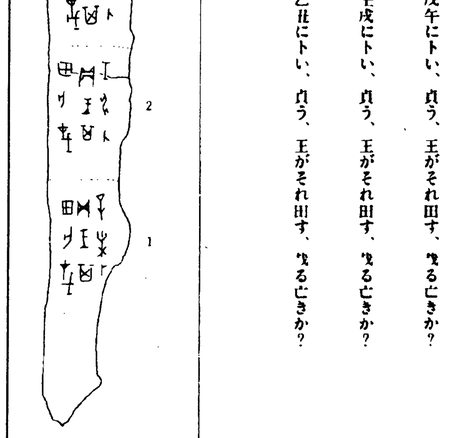
二牢。用。
征伐祖＝甲歲
2→甲辰卜、

1 癸卯に卜い、貞う、𠂤し伐し彭す、甲辰に上甲にか？用いん。
2 甲辰に卜う、征（＝延）て祖甲に伐して二牢を歲せんか？用いん。
3 十小宰を歲せんか？

十小宰。
3→歲

4←歲小宰上＝甲
十
又伐。

4 小宰を上甲に歲することを上にして、又（＝侑）め伐せんか？

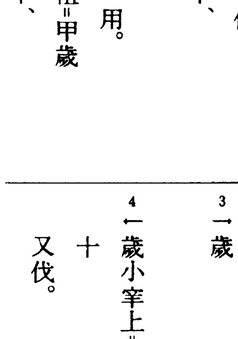


B460

1←己丑卜、在小宗
又𠂤歲、自大乙。

2←□亥卜、
在大宗
又𠂤伐二羌
十小宰、自上＝甲。

1 己丑に卜う、小宗に在りて又しめし歲す、大乙よりせんか？
2 □亥に卜う、大宗に在りて又し二羌十小宰を伐するに、上甲よりせんか？



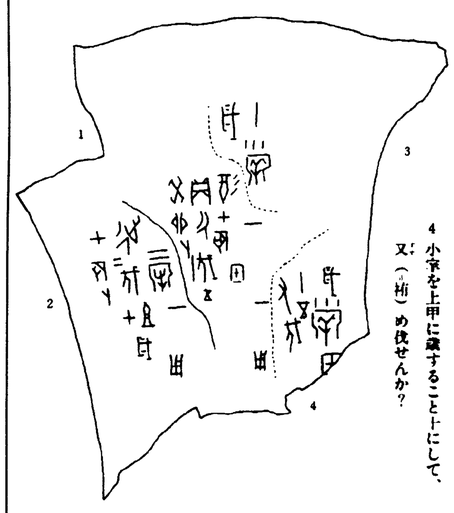
B461

1 癸亥卜、兄上＝甲□。

□、王受又。
2→□丁卯。

1 癸亥に卜う、上甲に兄（＝祝）し…せんか？
2 …丁卯に…、王は又（＝祐）を受けんか？

B461



4 小宰を上甲に歲することを上にして、又（＝侑）め伐せんか？

B462

2 弜告上甲。

3 一 王受又。
一 牛。

3 大吉。

4 一 二牛
4 □，吉。

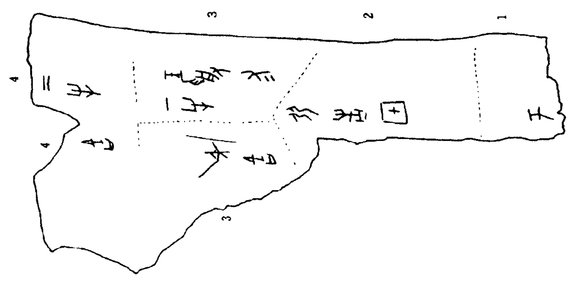
2 上甲に告げる勿（＝弗）るか。

3 一牛〔を用う〕，王は又の又（＝祐）を受けんか。

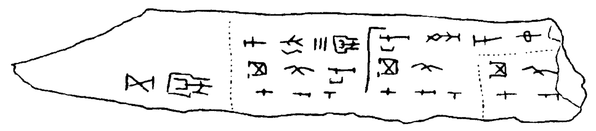
3 大吉なり。

4 二牛〔を用いん〕か。

4 □吉なり。



B464



1 → 其又□。
甲午卜，
2 歲，王手中丁。

2 → 其又
甲午卜，
3 → 其又歲
甲午卜，
4 五牢。

手大乙三牢。

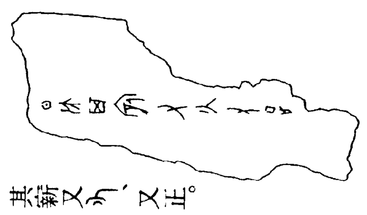
1 甲午にトう，そんなし…。

2 甲午にトう，それなし歲するに，中丁に至らんか。

3 甲午にトう，それなし大乙に三牢を歲せんか。

4 五牢〔を歲せん〕か。

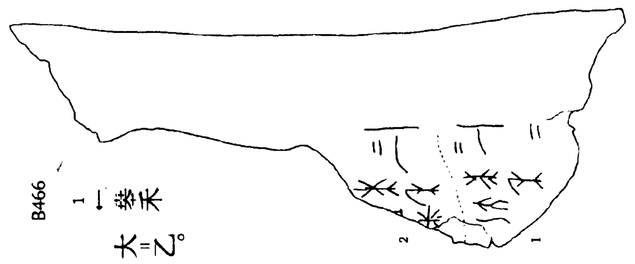
B465



□日大乙，其新又ㄣ，又正。

……大乙に□日するに，それ新しなし又しㄣす，正は又（＝祐）らんか。

B466



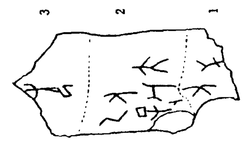
1 → 奉禾
大乙。

2 → 奉禾
上甲，爽。

1 禾を大乙に奉らんか。

2 禾を上甲にするに，爽せんか。

B467



又大戊。

2 → 乙巳卜，

2 乙巳にトう，大戊に又（＝祐）めんか。

B468

1 → 祖乙歲□
十年□，
王受又ㄣ。

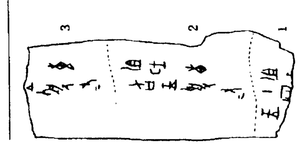
2 → 祖乙歲，亩
ㄊ，王受又ㄣ。

3 → □□，重
□ 王受又ㄣ。

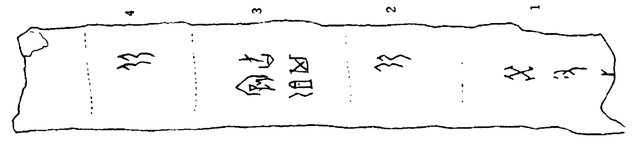
1 祖乙に歲し…，十年も□す，王は又の又（＝祐）を受けんか。

2 祖乙に歲するに，これなす，王は又の又を受けんか。

3 □に□するに，これ□す，王は又の又を受けんか。



B469



1 癸丑卜，□。
2 弜

3 → ㄊ，其
新祖乙。
4 弜

3 さすれば，それ祖乙に宜するか。

B471

1 弜。

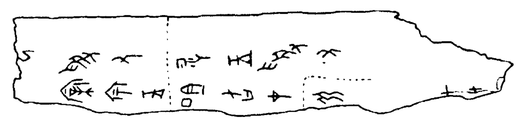
2 升，王受又。
2 祖丁ㄊ，在

3 → 新宗，王
受又。

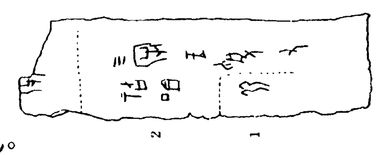
1 〔…する〕勿（＝弗）るか。

2 祖丁にまるに，升に在りて，王は又（＝祐）を受くるか。

3 宗に寓す，王は又（＝祐）を受くるか。



B472



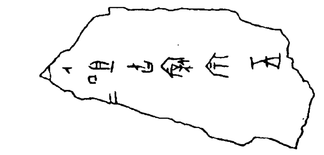
三年，王受又。
2 → 祖丁，

2 祖丁に祐するに，三年〔を用う〕，王は又（＝祐）を受くるか。

B473

□□卜，祖丁ㄊ，新宗，王受又。

□□にトう，祖丁にまるに，宗に寓す，王は又（＝祐）を受くるか。

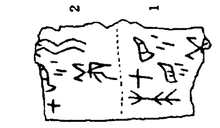


B475

1 → 眾光
甲眾□
2 → 奉□。
弜
甲。眾光

1 光甲と□とに□を奉らんか。

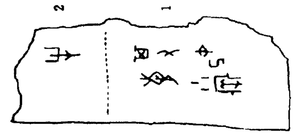
2 光甲とするに，勿（＝弗）るか。



B476

1 → 其又中己，
重小宰。
2 □牛。

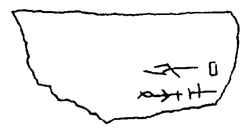
1 それ中己に又（＝祐）むるに，これ小宰〔を用いん〕か。



B477

→ 至于父丁。

父丁に至らんか。



B478

1 → 王申
奉于
大丁。
2 → 于父
丁奘。

3 → 癸酉
奉于
□□。

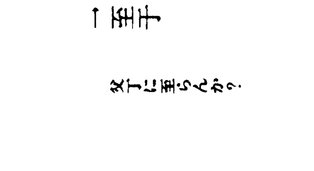
1 王申に大丁に奉（＝祈）らんか。

2 父丁に奉らんか。

3 癸酉に□□に奉らんか。



B479



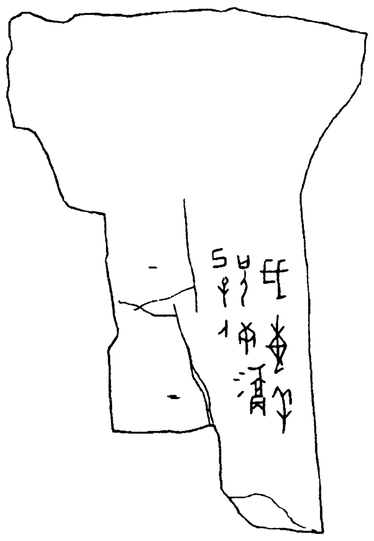
夕歲，王受又。
→ □卯卜，翌＝日父甲

□卯にトう，父甲に翌日するに，夕に歲す，王は又（＝祐）を受けんか。

B480

歲、重羊。
兄庚祼
→己巳卜、

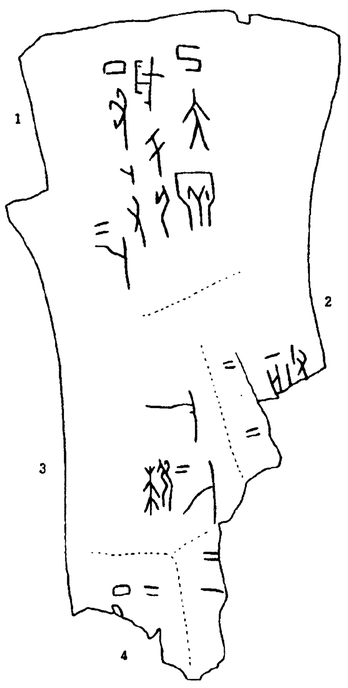
己巳にトう、兄庚に祼し歲するに、これ羊（を用いん）か？



B481

己、大宰。
歲于妣
1→丁丑卜、又
2←父□
用□。

1 丁丑にトう、又（＝祐）めて妣己に歲するに、大宰（を用いん）か？
2 父□に□を用いんか？
3 宰（＝析）る弜（＝弗）ざるか？



3←弜
奏。
4 丁丑□。

B482

戊子卜、兄于妣庚、玆隹宗□？。

戊子にトう、妣庚に兄（＝祝）するに、この隹宗…か？



B484

1→帚作蚩。
2→重妣＝辛

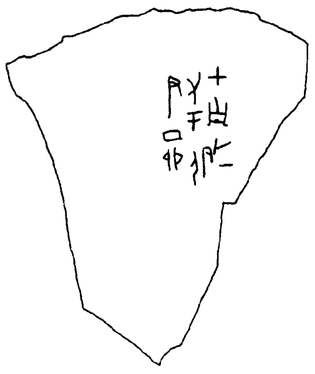
1 これ帚（＝婦）が蚩を作すか？
2 これ妣辛が蚩を作すか？



B485

←甲子卜、
又于伊
尹、丁卯。

甲子にトう、伊尹に又（＝祐）む、丁卯に（せん）か？



B486

1←癸巳卜、
又于
□伊
尹、牛五。

癸巳にトう、□伊尹に又（＝祐）むるに、牛を五（用いん）か？



B487

1←于大
宗。
2←□□卜、翌
日戊王其田、
亡戈。

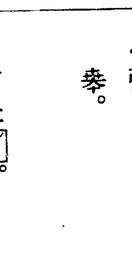
1 大宗においてか？
2 □□にトう、翌日戊に王はそれ田せん、戈（＝傷）る亡きか？



B490

1←癸卯卜、
祖鄉于
宗。
2←于
倉
祖。

1 癸卯にトう、祖して宗に鄉（＝饗）せんか？
2 倉に祖せんか？



B492

王受又ミ。
1→重二牢用、
用、又正。
2→重五牢

1 これ二牢を用う、王は又の又（＝祐）を受けんか？
2 これ五牢を用う、正又（＝有）らんか？

B493

1 其彭、又正。
正。
2→其卯、又
正。
3→其□、又

1 それ彭せん、正又（＝有）らんか？
2 それ卯せん、正又らんか？
3 それ□せん、正又らんか？



B497

1 丁丑卜、其𡆥□。
2←重小宰、
王受又ミ。

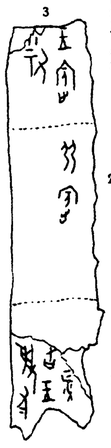
1 丁丑にトう、それ𡆥し…？
2 これ小宰（を用いん）、王が又の又（＝祐）を受けんか？



B499

1←□升
乞、王
受又ミ。
2 弜賓。
3←王賓
𢦏。

1 □升しとせん、王は又の又（＝祐）を受けんか？
2 賓する弜（＝弗）ざるか？
3 王が賓し𢦏せんか？



B500

1 重羊、王受又。
受又。
2→重牛、王
3→重□、王受
又。

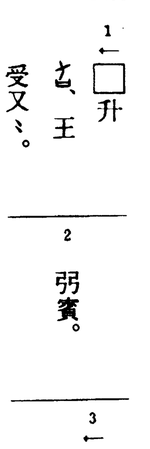
1 これ羊（を用う）、王は又（＝祐）を受けんか？
2 これ牛（を用う）、王は又を受けんか？
3 これ□（を用う）、王は又を受けんか？



B501

1 戊子卜、□
2→重牢又
一牛用、王受又。
3→來日己𢦏、王受
又。

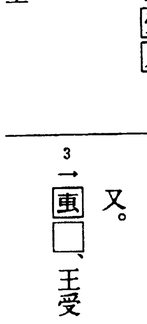
1 戊子にトう、□。
2 これ牢又一牛とを用う、王は又（＝祐）を受けんか？
3 來る日の己に𢦏す、王は又を受けんか？



B503

1←庚戌卜、□？
希、隹□□？
2←隹我
其受又。
3←庚戌卜、
□于
□我。

1 庚戌にトう、…希い、これ…。
2 これ我はそれ又（＝祐）を受けんか？



B508

1 重歲用。

2 重叀用。

3←重豕
用。

4←戊戌卜、重
今日戊史
彭。

5←□來日女
□彭。

1 これ歲することを用いんか？

2 これ𤔔を用いんか？

3 これ豕を用いんか？

4 戊戌にトう、これ今日戊に史彭せんか？

5 來日に、女□彭せんか？

B509

1←重
彭。

2←重甲
子彭。

1 これ彭さんか？

2 これ甲子に彭せんか？

B510

1←方奏、
重今夕
彭。

2←于翌日
辛
彭。

1 方奏す、これ今夕に彭せんか？

2 翌日の辛において彭せんか？

B511

1←己卯卜、
甲申𡆥。

1 不。

易日。

2→來甲申
彭。

3→弜
彭。

1 己卯にトう、甲申に𡆥（＝遘）せんか？

1′（𡆥せ）ず。（結果を追記した語）

2 來甲申は易日なるか？

3 彭する弜（＝弗）ざるか？

B512

1←癸酉卜、
來乙亥
彭鼓。

2←弜
彭。

3←壬午卜、
令
般从侯
告。

4←癸未卜、
令般
从侯
告。

1 癸酉にトう、來る乙亥に彭し鼓せんか？

2 彭する弜（＝弗）ざるか？

3 壬午にトう、般に令し、侯を从（＝從）えて告せしめんか？

4 癸未にトう、般に令し、侯を从えて告せしめんか？

B513

1 辛□。

牛彭。

2→即日戊

2 即日戊に牛を彭せんか？

B514

1←癸弜
彭、亡
雨。

2←□□彭、
又雨。

1 癸に彭する弜（＝弗）ず、雨亡きか？

2 □□彭す、雨又（＝有）るか？

B515

1→于裸。

2→癸巳卜、
牢。
裸杏

3 牢又一牛。

□勿牛。

4→□裸

1 裸するによってか？（茲用いん。）

2 癸巳にトう、裸し杏するに、牢（を用いん）か？

3 牢又一牛（を用いん）か？

B516

1←丙戌卜、
裸示、
今來□。

2←其
裸示。

1 丙戌にトう、示に裸す、今來□。

2 それ示に裸せんか？

B523

1←其□
一小宰。

2 二小宰。

3 三小宰。
3′ 大吉。

1 それ□するに、一小宰（を用いん）か？

2 二小宰（を用いん）か？

3 三小宰（を用いん）か？

3′ 大吉なり。

B528

←己亥卜、
由𢍏。

己亥にトう、これ𢍏（＝二歲の牡牛）（を用いん）か？

B531

至□。
卜、□

1→戊□

雨。

2→己卯不

3→癸亥卜、
受禾。

2 己卯に雨ふらざるか？

3 癸亥にトう、禾を受くるか？

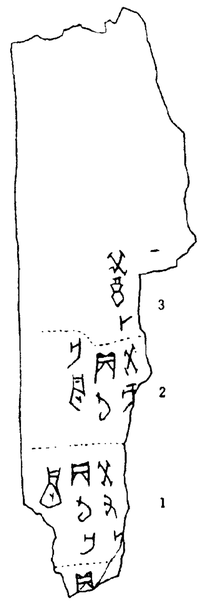
B532

2←癸未卜、
亡虫
禾。

3←□癸未卜、
□。

2 癸未にトう、禾に虫する亡きか？

B534



1 癸丑卜、
貞、旬亡
禍。

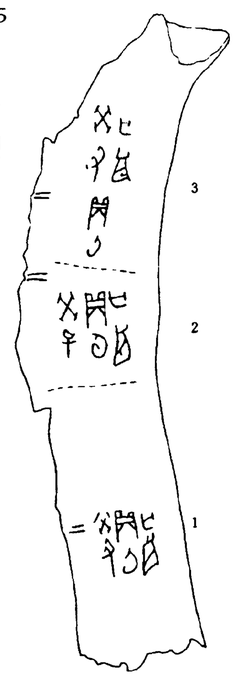
2 ←癸亥卜、
貞、旬
亡禍。

3 癸酉卜。

1 癸丑に卜い、貞う、旬（＝甲寅～癸亥）に禍亡きか？

2 癸亥に卜い、貞う、旬（＝甲子～癸酉）に禍亡きか？

B535



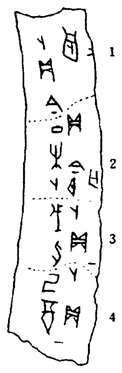
亡禍。
貞、旬
1 →癸丑
亡禍。
貞、旬
2 →癸巳
亡禍。
3 →癸丑貞、旬

1 癸丑に貞う、旬（＝甲寅～癸亥）に禍亡きか？

2 癸巳に貞う、旬（＝甲午～癸卯）に禍亡きか？

3 癸丑に貞う、旬（＝甲寅～癸亥）に禍亡きか？

B536

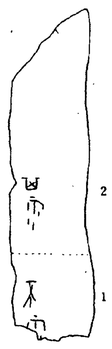


夕亡禍。
1 →丙午卜、貞、今
禍。
亡
貞、今夕
2 →丁未卜、

1 丙午に卜い、貞う、今夕に禍亡きか？

2 丁未に卜い、貞う、今夕に禍亡きか？

B539

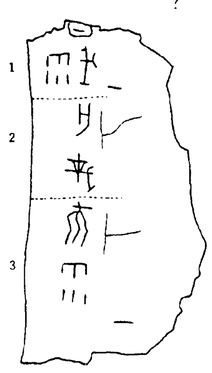


1 不雨。
2 其雨。

1 雨ふらざるか？

2 それ雨ふるか？

B540



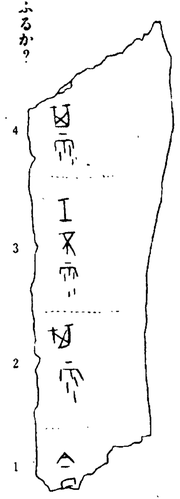
1 ←翌？日戊
其雨。
2 亡𢦏。
3 不雨。

1 翌日戊にそれ雨ふるか？

2 𢦏（＝憋）るときか？

3 雨ふらざるか？

B541



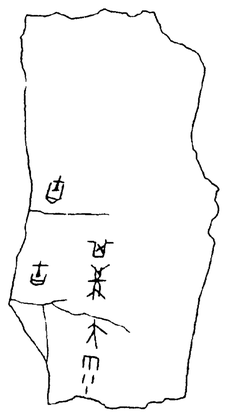
1 今日□。
2 其雨。
3 壬不雨。
4 其雨。

2 それ雨ふるか？

3 壬（の日）に雨ふらざるか？

4 それ雨ふるか？

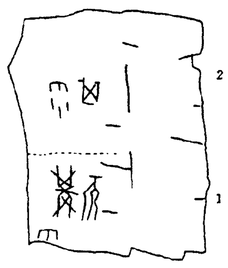
B542



其雋大雨。
吉。
吉。

それ大雨に雋（＝遘）うか？
吉なり。
吉なり。

B543

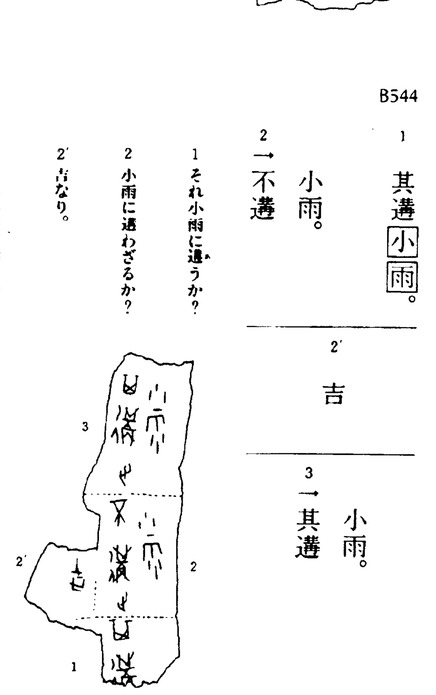


1 ←不
雋雨。
2 ←其
雨。

1 雨に雋（＝遘）わざるか？

2 それ雨ふるか？

B544



1 其遘小雨。
2 →不遘
小雨。
2′ 吉
3 →其遘
小雨。

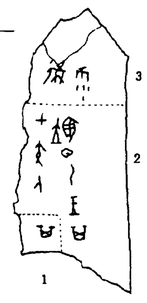
1 それ小雨に遘うか？

2 小雨に遘わざるか？

2′ 吉なり。

3 それ小雨に遘うか？

B545



1 其□
翌日乙王其□。
2 →甲寅卜、
3 →不？雨。
備

2 甲寅に卜う、翌日乙に王がそれ…か？

3 雨に備（＝遘）わざるか？

B546



今日征雨。
1 →辛酉？卜、
征雨。
2 →癸亥卜、今日不
甲子。
3

1 辛酉に卜う、今日雨に征（＝延）ぶか？

2 癸亥に卜う、今日雨に征ばざるか？

B548



又大雨。
→自今日至翌日庚

今日より翌日庚に至るまで大雨又（＝有）るか？

B550



庚辰卜、□
1
2 ←辛其雋
風。
3 ←壬王其
不雋大
風。

2 辛（の日）にそれ風に雋（＝遘）うか？

3 壬（の日）に王がそれ大風に雋わざるか？

B553



□巳卜、在㠯衛。
吉。

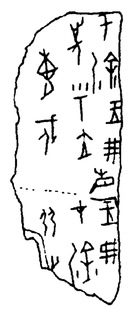
□巳に卜う、㠯に在りて衛せんか？
吉なり。

B554

于涂、王弗省。
先乎立
1→重戍

1 これ戍を先に乎（＝呼）んで涂に立（＝位）せしむ、王は省るあらざるか？

王弗省。
在涂□
2→弱先□□



B555

癸酉卜、王其乎𠂤戍大𠂤／。

癸酉に卜う、王がそれ戍の戍を乎（＝呼）んで大いに𠂤…か？



B557

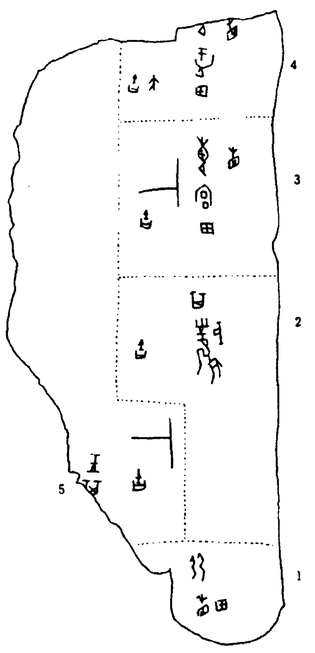
省、亡𢦏。
→王重宮田

王がこれ宮に田して省す、𢦏（＝禍）るなきか？



B558

1 省し田する弱（＝弗）ざるか？
2 それ風ふくか？ 吉なり。
3 これ宮に田し省するか？ 吉なり。
4 これ盂に田し省するか？ 大吉なり。
5 王がそれ…か？ 吉なり。



田。
1→弱省
2 其風。吉。

3→重宮田
吉。

省。
4→重盂田
←大
吉。

省。
5 王其／。
吉。

B559

1 弱／。
田省、亡𢦏。
2→王重

2 王がこれ田し省す、𢦏（＝禍）るなきか？

亡𢦏。
3→王重獣。

3 王がこれ獣（＝狩）す、𢦏るなきか？

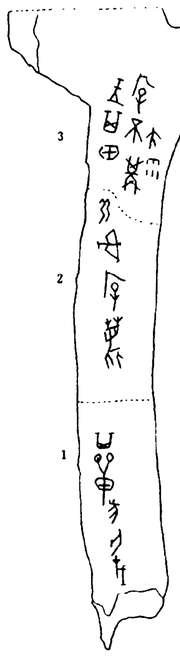


B561

1 其獣、亡𢦏。
2 弱射斿鹿。

大雨。
斿、不冓
3→王其田

1 それ獣（＝狩）す、𢦏（＝禍）るなきか？
2 斿に鹿を射る弱（＝弗）ざるか？
3 王がそれ斿に田す、大雨に冓（＝遘）わざるか？



B564

←戊弱
田、其毎。

戊（の日）に田すること弱（＝弗）らざれば、それ毎（＝悔）んか？



B565

1 ←／
田／。
2 ←今辛弱
田、其雨。

2 今辛（の日）に田する弱（＝弗）ず、それ雨ふるか？

3 ←／弱田、
其雨。



B569

王弗毎。
乍𡆥、
1→于疆

王弗毎。
2→于□乍𡆥、

1 疆に于いて𡆥を乍（＝作）す、王は毎（＝悔）る弗ざるか？



B570

乙卯卜、今日𡆥、王其逶、亡𢦏。
大吉。

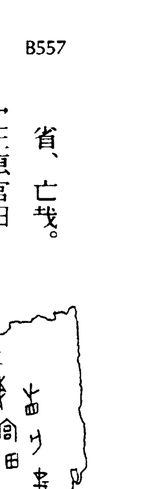
乙卯に卜う、今日𡆥す、王はそれ逶（＝踐）す、𢦏（＝禍）るなきか？
大吉なり。



B575

乙巳卜、𡆥妥出。

乙巳に卜う、𡆥妥が出でんか？



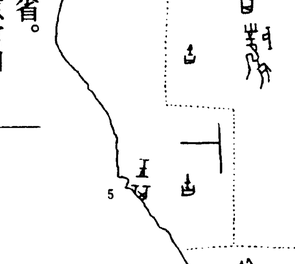
B585

1←癸巳貞、
甲午酌
上＝甲歳三牛。
允□。

牛。
2→丁酉貞、□

癸五辛□□
秋雋？□□、

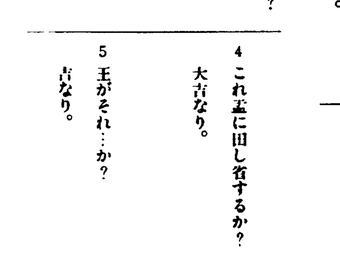
1 癸酉に貞う、甲午に上甲に酌するに三牛を歳せんか？ 允に…せり。
2 丁酉に貞う、…秋雋？……五宰と…牛とを歳せんか？



B586

祖＝乙、又□。
専于
巳王酌
→甲辰貞、乙

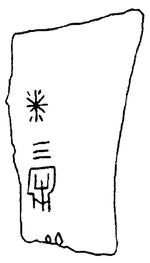
甲辰に貞う、乙巳に王が祖乙に酌し専するに、又…か？



B588

奏三牢。玆用。

三牢を奏せんか？ 玆に用いん。



B592

1←癸卯
貞、旬
亡禍。

1 癸卯に貞う、旬（＝甲辰～癸丑）に禍亡きか？

2←癸丑
貞、旬
亡禍。

2 癸丑に貞う、旬（＝甲寅～癸亥）に禍亡きか？



B593

1←癸丑卜、
貞、旬
亡禍。

1 癸丑に卜い、貞う、旬（＝甲寅～癸亥）に禍亡きか？

2←癸亥卜、
貞、旬
亡禍。

2 癸亥に卜い、貞う、旬（＝甲子～癸酉）に禍亡きか？



B594

亡禍。
貞、旬
1→癸卯

亡禍。
貞、旬
3→癸亥

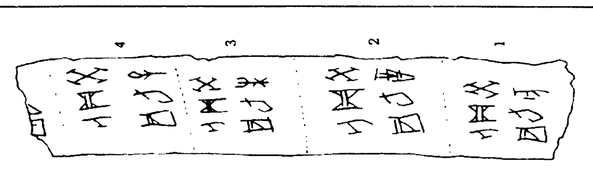
□禍。
貞、旬
4→癸酉

貞、旬
2→癸丑

1 癸卯に貞う、旬（＝甲辰～癸丑）に禍亡きか？
2 癸丑に貞う、旬（＝甲寅～癸亥）に禍亡きか？
3 癸亥に貞う、旬（＝甲子～癸酉）に禍亡きか？
4 癸酉に貞う、旬（＝甲戌～癸未）に禍亡きか？



B598



1 ← 癸亥
貞、旬
亡禍。

2 ← 癸酉
貞、旬
亡禍。

3 ← 癸未
貞、旬
亡禍。

4 ← 癸巳
貞、旬
亡禍。

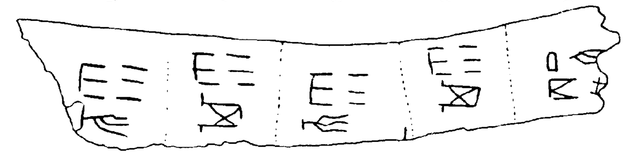
1 癸亥に貞う、旬（甲子～癸酉）に禍亡きか。

2 癸酉に貞う、旬（甲戌～癸未）に禍亡きか。

3 癸未に貞う、旬（甲申～癸巳）に禍亡きか。

4 癸巳に貞う、旬（甲午～癸卯）に禍亡きか。

B601



1 → 丙戌貞、丁不雨。

2 → 其雨。

3 → 不雨。

4 → 其雨。

5 → 不雨。

1 丙戌に貞う、丁の日に雨ふるか。

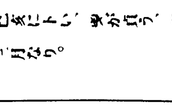
2 それ雨ふるか。

3 雨ふらざるか。

4 それ雨ふるか。

5 雨ふらざるか。

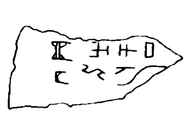
S628



一□□卜、貞、王
□□亡災。
往來
茲。

□□に卜い、貞う、王が□□に甲午、往來に災亡きか。
これは誤せん。

S622



1 → 戊寅卜、貞、王今夕
亡禍。

2 → 丙戌卜、貞、王今夕
亡禍。

1 戊寅に卜い、貞う、王は今夕に禍亡きか。

2 丙戌に卜い、貞う、王は今夕に禍亡きか。

S630



□貞、王
□亥卜、癸
亥。
十月。

□亥に卜い、貞う、王に災せんか。十月なり。

B631

← 貞、勿
告。
其
寧。

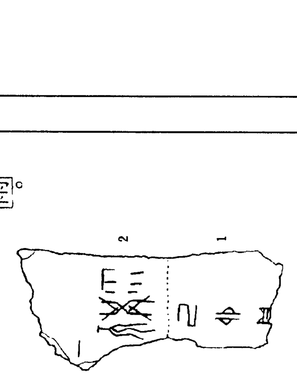
貞う、寧に告す勿からんか。

S633

← 子漁
父乙
寧。

子漁が父乙に寧（一頭）もて寧（を用いん）か。

B603



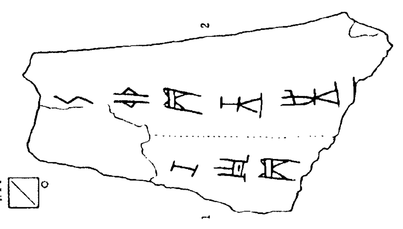
1 己卯貞、其𡆥雨。

2 → 不𡆥雨。

1 己卯に貞う、それ雨に𡆥（遇）うか。

2 雨に遇わざるか。

B604



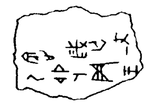
1 壬子貞、□。

2 乙卯貞、王往□。

1 壬に貞う、……か。

2 乙卯に貞う、王が…往き…か。

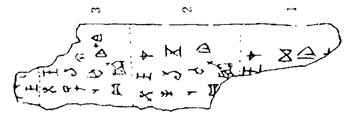
S607



一 賓歲、亡尤。
乙卯卜、貞、王

乙卯に卜い、貞う、王が歲を賓す、尤亡きか。

B617



在三月。甲戌□□虎=甲□。
1 → 癸酉卜、貞、王旬亡禍。

在五月。
2 → 癸未卜、貞、王旬亡禍。

甲午□祖=甲
3 → 癸巳卜、貞、在六月。王旬亡禍。

1 癸酉に卜い、貞う、王は旬（甲戌～癸未）に禍亡きか。
五月に在り。甲戌に虎甲（祭甲）に…す。

2 癸未に卜い、貞う、王は旬（甲申～癸巳）に禍亡きか。
五月に在り。

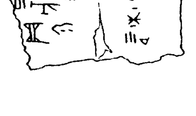
3 癸巳に卜い、貞う、王は旬（甲午～癸卯）に禍亡きか。六月に在り。
甲午に祖甲に…す。

S635

← 戊辰卜、王
出就己□。

戊辰に卜い、王（が貞う）、就己に出（祭）ぬ…か。

S636



一 丙申卜、貞、出于□。

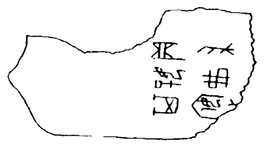
丙申に卜い、貞う、□出（祭）ぬんか。

S639

← 己亥卜、貞、勿𡆥。
三月。

己亥に卜い、貞う、𡆥する勿からんか。
三月なり。

S640



← 貞、帚好弗
其𡆥。

貞う、帚（婦）の好がそれ𡆥する弗るか。

S641



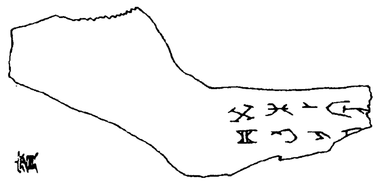
2 → 庚辰卜、方
王貞、其大出。
十一月。

1 → 乙卯卜、貞、不其受
今我
其大出。十一月。

1 乙卯に卜い、貞う、今（歲）に我がそれ年（稔）を受けざるか。

2 庚に卜い、王が貞う、方がそれ大に出ずるか。
十一月なり。大に出でたり。

S642



←癸未卜、賓
貞、旬亡禍。

癸未占い、賓が貞う、旬（十日一余日）に禍とあるか。

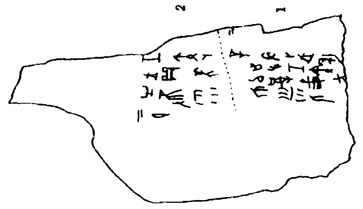
S654



←癸未卜、
貞、王其
亡𡆥、
𡆥。

癸未占い、貞う、王が𡆥事を行す、𡆥とあるか。

S659



1 ←辛丑卜、王、
步。壬寅
以步昔方、
不𢦏人。

2 ←壬寅卜、
王貞、年
一出隻雨。
二月。

1 辛丑占い、王（が占う）、歩かんか？
壬寅に…以下は雨下る前か。

2 壬寅占い、王が貞う、
年が雨を貢（獲）ること生（有）らんか？

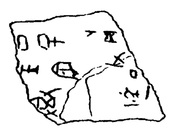
S663



它𠂤。
父=丁歲、
貞、王賓
一丁丑卜、尹

丁丑占い、尹が貞う、
王が父丁を祭し侑す、𠂤とあるか。

S664



←丁巳卜、貞、
王賓父=丁
𡆥𡆥。

丁巳占い、貞う、
王が父丁を祭して𡆥を𡆥（一共一供）せんか。

S670



←貞、今夕
不雨。

貞う、今夕に雨ふらざるか？

B671



←癸亥卜、旡貞、
在七月。
一旬亡禍。

癸亥占い、旡が貞う、
旬（一日十余日）に禍とあるか。七月に在り。

S672



←癸亥卜、
事貞、今
夕亡禍。

癸亥占い、事が貞う、今夕に禍とあるか。

S673



亡禍。
貞、今夕
一戊辰卜、
二□、五月。

1 戊辰占い、貞う、今夕に禍とあるか？

S678



←癸未卜、貞、王
賓示一癸、祭、
亡尤。

癸未占い、貞う、王が示癸を賓して祭す、尤とあるか。

S689

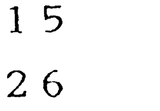


1 甲戌卜、貞、
甲戌其用。
一武=乙□
其牢。
二丙子卜、貞、
武丁□
牢。

1 甲戌占い、貞う、
武乙に□するに、其牢（全いけにえ）か。これ用いん。

2 丙子占い、貞う、
武丁に□するに、其牢（全いけにえ）か。

B692



亡禍。
一定貞、王旬
一癸丑卜、在

1 癸丑占い、在にありて貞う、
王は旬（一日十余日）に禍とあるか。

S682



大=庚𢦏、𢦏一王□、亡尤。
一壬申卜、貞、王賓
二貞、王賓、叔亡尤。

1 壬申占い、貞う、
王が大庚の𢦏（一匹）の供王を賓して□す、尤とあるか。

2 貞う、王が賓して叔す、尤とあるか？

『ひと　もの　こころ』　第5巻「甲骨文字」　正誤表

頁	段	行(上から)	誤	正
181	右	13	人が片手に盾を	人が片手に盾、もう一方に戈を
181	右	18	特別な冠詞	特別な助詞
182	右	15	農牧民	遊牧民
184	左	26	楔形文字の組み立て	楔形文字の文章の組み立て
185	中	17	やわらかい膜に	やわらかい模に
185	右	26	オコリとか	オコリの薬とか
188	左	15	これは表音文字の	これは表意文字の
189	右	16	またS025、B026は	またS024、S025は
			――――	
3	下	釈文(別冊)	Ｂ０１５	Ｓ０１５
29	上	釈文(別冊)	Ｓ３２６	Ｂ３２６

日本所見甲骨錄

卜辭通纂 郭沫若 附

伊藤道治

據日本京都朋友書店一九七七年七月版影印

目次

一、故小川睦之輔氏藏甲骨文字……一
二、藤井有隣館所藏甲骨文字……二一
三、檜垣元吉氏藏甲骨文字……五一
四、関西大学考古学資料室藏甲骨文字……六五
五、あとがき……九三
六、大原美術館所藏甲骨文字……九七

故 小川睦之輔氏藏甲骨文字

はじめに

ここに紹介する卜骨七片は、故小川睦之輔氏が、明治三十年から同末年の間に購入されたと傳えられ、現在も小川家に所藏されているものである。[1] 小川氏は、羅振玉を通じて多數の美術品を購入されているので、この卜骨も、同氏を通じて入手されたかと推定される。

また七片の時期・內容から見ても、ほぼ羅氏の『殷墟書契前編』と同じ部類であり、また金祖同『殷契遺珠』に輯錄される河井荃廬氏藏・中村不折氏藏の甲骨或いは現京都大學人文科學研究所藏になる故黑川幸七氏舊藏の甲骨とも關聯が深い。もつとも『殷墟書契前編』には、日本の三井源右衞門氏藏の甲骨の拓本を多く採入したと言われているから、この七片を含めて、相前後して日本に將來され、諸家に所藏されることとなつたものと考えられる。[(1)]

而うして、これらの甲骨の出土地は、小屯村北の砂丘地帶、卽ち中央研究院の發掘區劃のA・D・E・G等の區であると推定され、有名な大連坑も、この內にふくまれる。小屯の村民の言によると、一九〇四年卽ち光緒三十年（明治三十七年）にこの地域の、朱家の所有する十三畝の地で、大規模な盜掘が行なわれ、多量の甲骨が得られたという。[(2)] この年は、小川氏が購入されたと傳えられる時代にふくまる年である。またこの時に出土したと推定されている甲骨文の斷代上の時期とこの七片の時期も等しい。恐らくこの甲骨のうちから相當數が日本に送られたと考えられ、この七片もその際に出土したものと考えられる。

七片の內容は、時期的には第一期・第二期・第五期のものであり、祭祀類・旬夕類・田獵類に屬するが、第一期祭祀類・第二期祭祀類及び第五期田獵類の一つは、類例の少ない內容を含み、貴重な資料である。詳細は夫々の註釋に述べる。

なおこの七片は、本來は九片として一函に格納されていたものであるが、うち第一期の二片と第二期の二片とはそれぞれ小川氏によつて既に綴合の試みられた痕跡が背面に見られる。本稿においても、拓本・寫眞・考釋ともに綴合した形で揭載する。本稿において使用する時期區分・分類は、貝塚茂樹『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』の方法による。最後に、貴重な資料を提供され、度々の借覽を許された小川廣己氏及び同夫人に謝意を表する。

(2) 董作賓「甲骨文斷代研究例」（慶祝蔡元培先生六十五歲論文集上）四坑位、胡厚宣『五十年甲骨文發現的總結』四甲骨文出土的地方

一 第一期 祭祀類 骨



(1) 貞、[命]「望」乘[1]歸[2]。」（左行）

(2) 𠂤[3]于㚔」戊・[4]咸」戊奈[5]。」（左行）

(3) 貞、𠂤」于父」甲・父」庚・辛[6]。」（左行）

(4) 勿于[7]𡆥。」（左行）

(5) 隹玆」邑𡆥[8]」不若。」（左行）

(6) 貞、于」𡆥。」（左行）

(7) 亡」若[9]。」（左行）

(1) 貞う、望乘に命じて歸らしめんか。

(2) 㚔戊と咸戊とに𠂤し奈せんか。

(3) 貞う、父甲と父庚と父辛とに𠂤せんか。

(4) 𡆥にすることなからんか。

(5) これこの邑に不若を𡆥せるか。

(6) 貞う、𡆥にせんか。

(7) 若がうことなきか。

1 望乘　殷の附庸の國と考えられ、人S〇三三一「乙卯卜、㱿貞、望乘伐下危、弗其受𠂤又。」（乙卯の日にトい、㱿が貞う、望乘を從がえて下危を伐たんに、それこの祐を受けざるか）の如く、卜辭ではもつぱら下危の討伐に關聯してあらわれる國族名である。その位置については、島邦男氏や饒宗頤氏の如く、殷の東南におく說もあるが、契五九六「庚子卜、賓貞、翌甲辰用望乘來羌」（庚子の日にトい、賓が貞う、翌甲辰の日に、望乘を用いて羌を來たらしめんか）のごとく、望乘の人間を使用して羌人を來貢させようとしていることを考えると、寧ろ殷の西南に位置したとす可きであろう（島邦男『殷墟卜辭研究』頁三七三、饒宗頤『殷代貞卜人物通考』頁一八四・五八八、貝塚茂樹『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』本文篇S〇三三一註參照）。なお本條第二字命は、前七・四・三「辛卯卜、㱿貞、勿命望乘先歸。九月。」（辛望の日にトい、㱿が貞う、望乘に命じて先んじて歸らしめんか。九月なり。）の例にならつて補う。

2 歸　この文字には、國族名の場合と歸還の意の動詞の場合とがあるが、本片では後者の用法である。

3 𠂤　この字は、有無の有、祭祀の侑などの意に使用されるほか、前註に引用した人S〇三三一の卜辭のように「この」という意味ー確定的ではないがーに使用されることもある。本條では祭祀用語の侑として使用されたものである。第二期以後には主として又と書かれ、この字體は殆んど使用されなくなる。

4 㚔戊・咸戊　ともに殷の舊臣といわれる。このうち咸戊は

であろう。本片のように咸戊・㚔戊が同一卜辭中にあらわれる文例は、本片以外では、殷綴六「丁未卜、㱿、𠂤咸戊・㚔戊𢍏。」（丁未の日にトい、㱿が貞う、咸戊と㚔戊とに𠂤し𢍏せんか）があるのみである。この殷綴六は所謂王族卜辭で、通常の第一期卜辭や、それ以後の各期の卜辭では、このような例は本片のみで、重要な資料である（陳夢家『卜辭綜述』頁三六一〜三六六參照）。

5 奈　この部分は傷が多く、正確な字畫は不明であるが、束薪と示とからなる文字と思われる。

6 父甲・父庚・父辛　ともに第一期武丁の父の世代で王位についたことのある陽甲・盤庚・小辛をさす。第三の父辛は、父字を誤つて脫しているが、文意から見て補うことが出來る。武丁の父は小乙で、本條の三人は何れも小乙の兄であるといわれている。後上二五・九には右から「父甲一牡、父庚一牡、父辛一牡」（父甲に一匹の牡をささげんか…以下略）と書かれているが、これは一卜辭か、三條の卜辭の下半なのか、明らかでない。確實に一條の卜辭に三人の父の名をならべたのは本條が唯一の例であろう。乙二五二三「隹父甲。隹父庚。隹父辛。不隹父乙。」（これ父甲が[たゝり]せるか。…中略…これ父庚が[たゝり]せざるか。…以下略）の例も、同一版上に四王が書かれているが、明らかにそれぞれ別條の卜辭である。しかしここで注意しなければならないことは、乙二五二三の例では、全體の文意から見て、父乙を補なうことが出來るが、さきの後上二五・九にしろ、本條にしろ、四人の父王のうち、武丁の父である父乙が除かれていることである。卽ち父乙は、武丁にとつては直系の父であるのに對し、他の三人は、伯父であり、傍系にあたるために、直系の父乙とは別個に扱われていたのであろう。第一期卜辭について見ると、四父王のうち、父乙に關する卜辭が最も多く、他の三王に比較して、より重視されていたことがわかる。次ぎには父甲が多く、父庚・父辛は少數である。同じ父と呼ばれながら、直系と傍系とでは差があり、同じ傍系でもまた差があつたのである。[補2] それはとも角として、珠一〇四八「庚寅卜、㱿貞、告于三父。」（庚寅の日にトい、㱿が貞う、三父に告げんか）の如き例に見られる三父の稱は、他に乙二一七二などにも見られ、いづれも第一期の卜辭で、武丁の父世代の四王のうちの三人を示すとされているが、どの王を除くかは明らかでなかつた。この點、本條によつて、三王とは、直系の小乙をのぞく、陽甲・盤庚・小辛であることが明らかになつた。四父と稱する例は見られない。なおこれと關聯して、第三・四期卜辭といわれる一群の卜辭を見ると、第三期において、父の世

『尚書』君奭篇に見える大戊の時代の巫咸であると言われる。㚔戊は不明であるが、この二人のほか、卜辭には盡戊（𢍏𢦏）といわれるものもあり、三者とも、祭祀をうけ、また生人に「たゝり」を降したりすると考えられていた。この咸・㚔・盡などの字は個人名であり、戊は官名であるとする說がある。戊字は𢦏に作るに對し、巫咸の巫は卜辭では𢦏に作り、字形・音ともに近いために混亂したとする說がある。然し、卜辭に見る限り、𢦏と𢦏とが誤り混用された例はなく、且つ甲二九〇七「丁巳卜、㱿父戊。丁巳卜、㱿咸戊。」（丁巳の日にトう、父戊に𠂤せんか。丁巳の日に下う、咸戊に𠂤せんか。）・珠五二二「貞、祖戊不𢍏。貞、㚔戊不𢍏。」（貞う、祖戊がたゝりせざるか。貞う、㚔戊がたゝりせざるか。）のように、咸戊・㚔戊がそれぞれ父戊・祖戊という十干の戊を名とする父祖と對に卜占の對象となつていることから考えて、この咸戊・㚔戊の戊も、官名としての巫を意味するのではなく、明らかに十干の戊であることがわかる。㚔戊・盡戊は、古典中に比定される人物はない。しかし咸戊にしても、卜辭に見る限りは、大戊との關係は不明である。殷の王系では、戊を名とするものはたゞ大戊一人のみであるが、むしろこの點こそ㚔戊などの性格を考える際にも、同時に考慮しなければならない問題

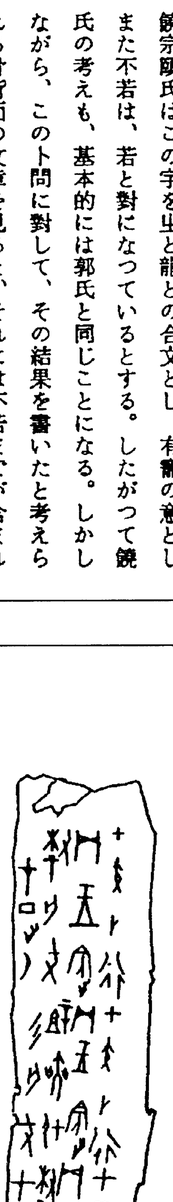
代である祖己・祖庚・祖甲の三王のうち、祖己・祖庚―卜辭では父己・父庚と稱す―を二父と稱するのに對し、第三期の王廩辛・康丁の直系の父である祖甲―卜辭では父甲と稱する―を除いている點も注意されなければならない。何れも直系の父王をのぞき、傍系の父王を一括して稱しているのである。この第三・四期卜辭にも三父という稱は見られない。[補3] このような事實は、單に宗教的な意味―例えば死者に對する考え方などによるものだけではなく、おそらく、王室の構成上に複雜な問題があったことによって、おこつたものであろう。

7 [illegible] この文字は、ほかに前六・一九・三「貞、□[illegible]于[illegible]。」に一例を見るのみで、この點でも本片は重要な資料である。この引用例にあらわれる[illegible]字は、殷の先公夔とされる[illegible]、或いは同じく先公の冥といわれる[illegible]の異體かとも考えられるが、前置詞「于」の前に位置することから見て、まず動詞或いはそれに近い述語と考える可きであろう―ただし意味は明らかでない。[補4] したがつてこの引用例でも[illegible]の意味も明らかでないが、葉玉森氏は、岳即ち嶽などとともに、或る山獄を示す文字であるとする。おそらく單なる山ではなく、岳などと同じようにある山の神格化されたものを考えられるが、この二例のみでは、その神格の內容なども全く不明である。第四條・第六條とも、動詞―恐らく祭祀に關するものと想像されるが―が省略されている（葉玉森『殷虛書契前編集釋』卷一第一三五葉）。

8 [illegible] この文字も用例が少ない。珠六二〇「壬寅卜、賓貞、若玆不雨、帝隹玆邑[illegible]不若。」、同背面「王固曰、帝隹玆邑[illegible]不若。」について、郭沫若氏は、この字を龍字の異體であろうとし、假りて寵となすという。郭氏の言う全文の意味は、「若しこれ雨ふらざれば、帝これ玆邑を寵するなり。しからざれば、[寵せず]。」とする。この場合若・不若の若は假定法として使用されたとする。また饒宗頤氏はこの字を𡆥と龍との合文とし、有寵の意とし、また不若は、若と對になつているとする。したがつて饒氏の考えも、基本的には郭氏と同じことになる。しかしながら、この卜問に對して、その結果を書いたと考えられる骨背面の文章を見ると、それには不若までが含まれているので、この不若は郭氏や饒氏のように句首の若と對に使用されたとするのは疑問であり、帝以下不若までが、上の假定或いは條件の結果として考える可きであることがわかる。所で卜辭を見ると、不若の二字が一つの成語のようにして使用されている。たとえば、乙五七九三「甲申卜、[illegible]貞、王𡆥不若。貞、王亡不若。」は不若の有無を問うものであるし、また前七・三八・一「貞、

今の所、これといつてよい釋讀も得られないので、この句は一應郭氏の說に從う。なお本片第七條の亡若は、この珠六二〇の假定句の若と對になるのかもしれない。なお金祖同氏は、玆邑[illegible]を一つの名詞とし、[illegible]は大邑商の商と同じくある土地の名とするが、玆邑の用例から見て、問題にならない（郭沫若『卜辭通纂』別二中村獻骨考釋、饒宗頤『殷代貞卜人物通考』頁二四三、金祖同『殷契遺珠』六二〇考釋、玆邑・帝については島邦男『殷墟卜辭研究』

二　第二期　祭祀類　骨



(1)甲申[卜]、[行]貞、王[賓]叡、亡[尤]。」　（左行）

(2)己丑卜、行」貞、王賓」[illegible]彡、亡尤。」在十二月。」　（左行）

(3)己丑卜、行」貞、王賓」叡、亡尤。」　（左行）

(4)甲辰卜、行」貞、王賓」[illegible]甲彡、亡尤。」在十二月。」　（左行）

(5)甲辰卜、行」貞、王賓」叡、亡尤。」在十二月。」　（左行）

(6)甲寅卜、行」貞、王賓」祖辛[illegible]妣甲」彡、亡尤。」　（左行）

(7)甲寅卜、行」貞、王賓」叡、亡尤。」在正月。」　（左行）

(2)己丑の日に卜い、行が貞う、王が雍己に賓して彡するに、とがめなきや。十二月に在り。

(3)己丑の日に卜い、行が貞う、王が賓し叡するに、とがめなきや。

(4)甲辰の日に卜い、行が貞う、王が[illegible]甲に賓して彡するに、と

我勿已[illegible]乍、帝降不若。貞、我其已[illegible]乍、帝降若。」のように、若を降すに對して、不若を降すことが問われる。勿論この場も不若は若の否定形であるのであるが、後者の例では、單なる否定形ではなく、もつと强く、若の反對の概念として理解されねばならない。本條の不若も、一つの成語として、[illegible]の目的格として理解することが出來る。しかも本條は、珠六二〇によれば、主格は省略されてはいるが、帝であることは明らかであるから、次に帝と玆邑との關係について見る。乙四五三四「丙辰卜、[illegible]貞、帝隹其[illegible]玆邑。貞、帝弗[illegible]玆邑。」（丙辰の日に卜い、[illegible]が貞う、帝がこれそれこの邑を[illegible]らしむるか。貞う、帝がこの邑を[illegible]らしめざるか）、卽ち帝が玆邑を滅亡せしめるか否かを問うている。また庫一三四「[illegible]雨、帝[illegible]玆邑禍。」（…雨ふるは、帝が異として玆邑に禍を降せるか）の如く、雨の有無が、帝の禍を下したことによるか否かを問うている。このように帝は玆邑に對して、威を振うのであるが、このことは、玆邑の人間の行爲が、帝の意にかなうか否かによつて決定されると考え、それはまた自然現象として示現されると考えられていたことを前提としている。珠六二〇にしても、ある人間の行爲に對して、若し雨が降らなかつた場合には、その行爲が帝の意にかなわないのではないかを卜問したものであろ

うか。何れにしても、[illegible]字の意味が明らかでないので、本條の眞意も明らかでないが、[illegible]字の下半部の[illegible]は、龍字であり、中國では古來龍と雨―ひいては水―とは關係が深いものとされているが、珠六二〇によると、[illegible]が雨と關聯した場合に使用されていることは興味ある點である。なお本條は、珠六二〇の假定句を省略したものであり、他に綴附七・八に本條と同文の句があるのが、この資料のすべてである。また玆邑は、殷の都の人々が、その住む町卽ち都を呼ぶ稱であり、若字は、帝や祖神が人間の行爲を認めることを示す字で、その否定形は帝の場合には弗若、祖神や生人の場合は不若が多く使用される―時に弗・不が混亂して使用される場合もあるが。さてここで珠六二〇の意味であるが、「壬寅の日に卜い、賓が貞う、もしこれ雨ふらざれば、帝がこれこの邑に不若を[illegible]せるか」という讀みになり、郭氏がこれを求晴之卜也としたのとは反對に、人間の側からすれば、むしろ降雨になることが望まれていたことになるのである。ただ句首の若字については、一應鄭氏の說に從つたのであるが、若を假定的用法とするのには、いささか問題があり、郭氏も指摘するように、このような用法は、この一例のみで、他はすべて許諾の意に使用されるので、或いは他の解釋が考えられるのではないかと思う。しかし

がめなきや。十二月に在り。

(6)甲寅の日に卜い、行が貞う、王が祖辛の爽である妣甲に賓して彡するに、とがめなきや。

1本條は、第三條にならい、缺字を補うことが出來る。本條の前、卽ち實物について言えば、斷缺している下部に、「甲申卜、行貞、王賓小甲彡、亡尤。」というト辭があつた筈である。

2行　第二期後半祖甲時代の貞人。

3賓　儐に通じ、祭祀において、王が自ら祖靈を導き降し、敬愛の情を示すことである。第一期や第四期ではこの事が行われることは稀であるが、彡などの五祀が行われる第二期・第五期には、しきり行われている（貝塚茂樹『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』本文篇S〇〇七七・S〇二七八註釋參照）。

4[illegible]　[illegible]・[illegible]などに作る。吳其昌氏が第八代の王雍己に當ててより、これに從う（『殷虛書契解詁』一九六〇年臺北藝文印書館再刊頁一一七～一二〇）。

5彡　彡・多などの形にも作る。肜の古形、祭祀の一つで、[illegible]・[illegible]などの樂器の使用を主とすると言われる。本片のごとき第二期後半祖甲時代では五祀と呼ばれる重要な祭祀の一つとなる（貝塚茂樹『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』本文篇S〇〇七七・S〇二七八註釋參照）。

9亡若　非常に省略されたト辭であるので、一應上記の如く讀んだが、前註でも述べたように、或いは珠六二〇の「若玆不雨」の對としての否定文を省略したものかもしれない。この場合は、「もしこれ雨ふらざることなくば」となる。

頁一九三～一九七・頁三六〇～三六二、不若・若については貝塚茂樹『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』本文篇S〇〇四二・S〇〇四六註釋參照）。

9亡若　非常に省略されたト辭であるので、一應上記の如く讀んだが、前註でも述べたように、或いは珠六二〇の「若玆不雨」の對としての否定文を省略したものかもしれない。この場合は、「もしこれ雨ふらざることなくば」となる。

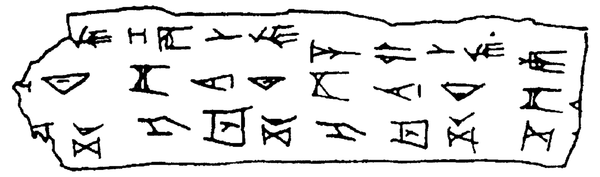
文字』本文篇S〇〇八二註及び頁三七七～三八〇參照）。

6[illegible]　柴と[illegible]とを共に束ねて、これを燃やし、その香煙によつて神靈を祭る儀禮と言われる（島邦男『殷墟卜辭研究』頁二六三～二六四）。第一片第二條の[illegible]は、この古體か。

7戔甲　郭沫若氏が、第十二代の王河亶甲に當ててより、これに從う（『卜辭通纂』一七六考釋）。

8[illegible]　[illegible]・[illegible]などの形にも作る。[illegible]字には諸說あつて一定しないが、先王の妣であることを示す文字である（島邦男『殷墟卜辭研究』頁九三～九四參照）。祖辛は第十四代の王であり、妣甲のほかに、配妣として妣庚が五祀の祭りを受けている。

本片は、第二期後半祖甲時代の五祀の一つである彡の祭祀に關し、また殷代の歷法に關する重要な資料である。本片に見られる如く、干支による日名と、月名とがある期間にわたつて記錄されている資料によつて、董作賓氏は、五祀の方法と祭祀曆ともいうべき長曆を復原したが、今董氏の說によつて、甲申から甲寅に及ぶ期間の祭祀日表を復原すると、左表の如くなる。前註にも述べた如く、第二・三條、第四・五條、第六・七條のそれぞれの關係にならい、甲申の日に小甲の彡の祭祀を補うことが出來るので、表にもこれを加える。表中



(1)庚寅卜、㱿」貞、今夕亡𡆥。」五月。」　(左行)
(2)辛卯卜、㱿」貞、今夕亡𡆥。五月。」　(左行)
(3)壬辰卜、㱿」貞、今夕亡𡆥。五月。」　(左行)
(4)癸巳卜、㱿」貞、今夕亡𡆥。五月。」　(左行)

(2)辛卯の日に卜い、㱿が貞う、今夕にわざわいはなきか。五月なり。

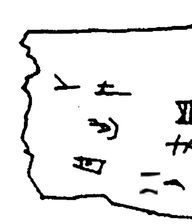
1本片の第一條・第四條は、第二條にならって、祓字を補うことが出来る。卜辭には全期にわたって、旬朏ち甲より癸に至る十日間の吉凶やその日その日の夜（夕）の吉凶をトつた記錄が見られるが、特に第二期と第五期とにこのタの吉凶をトうことが盛んであつたらしい。なかでも第二期には、本片の如く、晝夜の吉凶をトつた記錄があり、且つ文末に、その日が何月に屬するかを示す月名を記しているので、これも、殷代の曆法を考えるのに重要な資料となる（董作賓『殷曆譜』下篇卷十タ證）。

2㱿　第二期貞人であるが、前片の行・永片の尹とはことなつて、第一期でも前半の祖庚時代に屬すると考えられ、永注にのべる月名の記載法でも、行などの卜辭とはことなる。

3日　禍字に釋するのが通說である。

4五月　董作賓氏によると、卜辭の月名記載法には、月名のみを記すものと、月名の上に在字を冠するものとがあり、前者は第一期・第四期などの所謂舊派の文化に屬し、在字を冠するものは第二期・第五期の新派に屬すると言われている。しかし詳細に見ると、同じ第二期貞人と言われるものでも、本片の㱿をはじめ大・出・兄・丞などの貞人群は、その卜辭に見える祖先の稱謂や祭祀などでも、前片の行や尹・永・即などの貞人群とはことなつて、事實片の月名記載法などでも、このことを示す資料の一つである（董作賓『殷曆譜』上篇卷一殷曆譜論」、拙稿「殷代における祖先祭祀と貞人集團」『京都大學文學會『研究』第二八號參照）。

四　第二期　往來類　骨

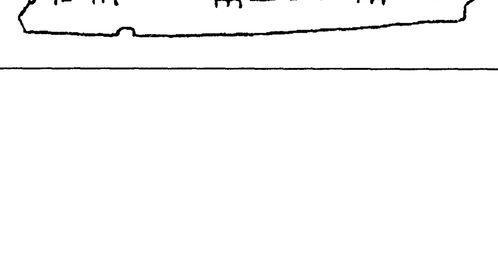


(1)貞、□。
(2)貞、亡」𡆥。在」八月。」　(左行)
(3)□卜、尹」貞、王出」亡𡆥。」　(左行)

(2)貞う、とがあ亡きか。八月に在り。
(3)某々日に卜い、尹が貞う、王が出うるにわざわい亡きか。

1尹　第二期後半祖甲時代の貞人。
2出　この文の出字は、前後の文が缺けるため、意味が明らかでないが、人名と五四六「戊寅卜、旅貞、王出、亡𡆥」（戊寅の日に卜い、旅が貞う、王が出るに、わざわいなきか）の例にならつて、殘缺部を補ない、意味は出入の出としての動詞と解する。このほか出には第二期前半の貞人名としての固有名詞の場合があるが、本片ではこれに解するのは不適當である。

五　第五期　旬夕類　骨



(1)癸酉王卜」貞、旬亡𡆥。」王占曰、吉。」　(左行)
(2)癸酉王卜」貞、旬亡𡆥。」王占曰、吉。」　(左行)
(3)癸未王卜」貞、旬亡𡆥。」王占曰、吉。」　(左行)
(4)癸巳王卜」貞、旬亡𡆥。」王占曰、吉。」　(左行)

(2)癸酉の日に王が卜い、貞う、旬にわざわいなきか。王、占曰いて、吉なりと。

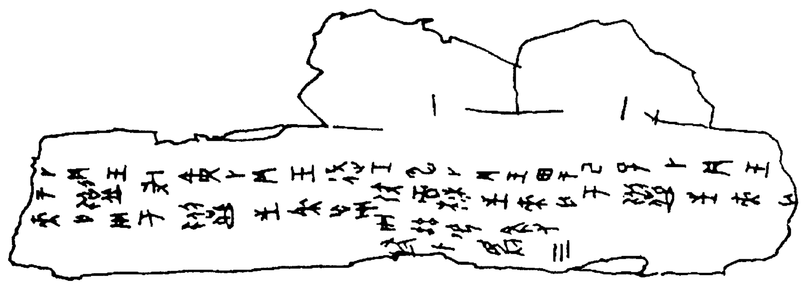
1第一條・第四條は、一應第二條・第三條の前後の旬として、祓字を補なう。
2旬　禍字の第五期の字體で、第二期より第四期までは、旬・旬などに作るが、第五期には、右に大の條をつける（貞家庄南『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』本文篇S二七四一圖版參照）。
3占　第二期では固に作る。卜問に對して、甲骨にあらわれた兆を判斷したことを示す文字で、その主格は殆んど王であり、特に第五期では王に限られる。第二期では、卜問の結果が凶であつても、これを記錄しているが、第五期では、吉の場合しか書かれていない。しかし卜問の判斷を記錄することは、全部の卜問に對して行われたのではなく、第五期では旬夕類と田獵類に行われているのは、卜問の方式に一定の規準が考えられていたからであろう。この時期には卜問そのものが可成り儀禮的に行われてい

干支表號は本片にある日のみを擧げ、他は省略する。日名の上の月名は、その日がその月にあることを示すのみで、その日がその月の何日にあたるかは、一應不明であり、その日からその月が始まる或いは終るというようなことを示すものではない。

月名	干支表號	日名	先王	先祖
十一月	21	甲申	小甲	
		乙酉		
		丙戌		
		丁亥		
		戊子	雍己	
		己丑		
		庚寅		
		辛卯		
		壬辰		
		癸巳		大戊
	26	甲午		祖乙
		乙未		
		丙申		
		丁酉		
		戊戌	中丁	
		己亥		
		庚子		
		辛丑		
		壬寅		
		癸卯		中丁
		甲辰		祖乙
		乙巳		祖辛
		丙午		
		丁未		
		戊申		
		己酉		
		庚戌		
		辛亥		
		壬子		
		癸丑		
		甲寅	外壬	中丁
		乙卯		
		丙辰		
		丁巳		
		戊午		
		己未		
		庚申		
		辛酉		
		壬戌		
		癸亥		祖乙
		甲子	河亶甲	祖辛
		乙丑		祖乙
		丙寅		祖丁
		丁卯		祖乙
		戊辰		祖辛
		己巳		祖乙
		庚午		祖丁
		辛未		祖辛
		壬申		祖乙
		癸酉		祖丁
十一月	41	甲戌		中丁
		乙亥		祖乙
		丙子		祖辛
		丁丑		祖乙
		戊寅		祖丁
		己卯		祖辛
		庚辰		祖乙
		辛巳		祖丁
		壬午		祖辛
		癸未		祖乙
		甲申		祖丁
		乙酉		祖辛
		丙戌		祖乙
		丁亥		祖丁
		戊子		祖辛
		己丑		祖乙
		庚寅		祖丁
		辛卯		祖辛
		壬辰		祖乙
		癸巳		祖丁
正月		甲午		祖辛
		乙未		祖乙
		丙申		祖丁
		丁酉		祖辛
		戊戌		祖乙
		己亥		祖丁
		庚子		祖辛
		辛丑		祖乙
		壬寅		祖丁
		癸卯		祖辛
	51	甲辰		祖乙
		乙巳		祖丁
		丙午		祖辛
		丁未		祖乙
		戊申		祖丁
		己酉		祖辛
		庚戌		祖乙
		辛亥		祖丁
		壬子		祖辛
		癸丑		祖乙
		甲寅	祖辛	祖乙
		乙卯		祖丁
		丙辰		祖辛
		丁巳		祖乙
		戊午		祖丁
		己未		祖辛
		庚申		祖乙
		辛酉		祖丁
		壬戌		祖辛
		癸亥		祖乙
		甲子	祖甲	祖丁
		乙丑		祖辛
		丙寅		祖乙
		丁卯		祖丁
		戊辰		祖辛
		己巳		祖乙
		庚午		祖丁
		辛未		祖辛
		壬申		祖乙
		癸酉		祖丁

この表によると、この多の祭祀は、ある年の十月から翌年の二月にかけて行われたもので、本片はそのうちの十二月から正月にかけての部分であり、而かも、その期間の一部分の記錄で、他の祭祀は、別の甲骨を使用してト占されていたと考えられる。ところで甲申から甲寅までの全日數は三十一日であり、當時の曆は大建大盡曆で、一ケ月は二十九日或いは三十日であつたと推定されているから、甲寅をふくむ正月の期がとの干支の日、つまり乙巳以後のとの日であつたかが判明すると、月名を缺く甲申の月も決定出来る。正月の期を、最も遲く甲寅の日におくと、十二月が大月であれば、甲申は十二月朔、小月であれば、十一月の末日となるが、これは、他の資料との關聯においてでなければ、最後的には決定出来ない。董作賓氏は、本片のような五記に關する幾つもの資料を、前後に排列して、缺けた所を補いながら殷曆を復原した

のであるが、いま氏が復原した殷甲時代の祭祀の曆譜について、右の表が適合する年を求めると、全くそのままにはあてはまる年がない。求めに、これに近い年を求めると、殷甲十三年と同二十四年の二つの年がある。このうち二十四年は、十二月の朔を丁亥の日とするから、甲申は十一月となるが、甲寅は十二月二十八日で、本片の如く正月とはならない。次ぎに十三年の譜は、十一月を小月として、甲申は十一月二十九日、十二月は乙酉が朔で、大月とし、甲寅は十二月三十日、翌十四年正月は乙卯を朔とする。これを本片と比較すると、一日の差で、二十四年よりは差が少なく、董氏の譜の十二月を小月とすれば、甲寅は正月朔となつて本片とも適合する。或いは甲申を十二月朔とすれば、十二月は大月としても、兩者があう一二の場合は十一月をも一日移動させる必要が生ずるが。何れにしても、最も近い十三年の譜でも、一日の移動が必要となる。勿論このようなことは、董氏の考える殷代の曆法を一應正しいものと認めた上でのことである。この場合にも、一日位の移動は許容されると言われるが、然し問題は、董氏の復原したような曆法が當時にあつたと認めるか否かという點にあり、この點は今後の課題である。なお董氏は、第一期などでは、閏は十三月として年の末におくが、殷甲時代には最中に閏月をおく、即ち我々がかつて使用した所謂舊曆と同じ方法であるとする。董作賓氏が殷甲十八年十月・十一月の多の祭祀とする金六〇十三四〇「(1)乙酉卜、行貞、王賓𣪘乙彡、亡𡆥。在十月。(2)丙戌卜、行貞、王賓𣪘丙彡、亡𡆥。在十一月。」によると、丙戌は十一月の朔であることがわかる。この十一月を大月とし、丙戌を閏十一月の朔、本表の乙酉を十二月朔とし、十二月を小月とすれば、本片の記譜に接續することが出来る。もしこのように金六〇十三四〇の資料を董氏の譜の十八年から十三年に移して、十三年に閏月をおくとなると、董氏の曆譜は大きな訂正を加えなければならない。然し少なくとも、部分的に見れば、このような譜を作ることも可能であることがわかる。董氏の譜も、このような部分的な譜を卜辭によつて構成し、さらにこれらの多くの部分的な譜を背構成することによつて全般の曆譜を復原したのであるから、部分的な譜の構成如何によつては、可成り異なつた譜が出来上ることが豫想される（董作賓『殷曆譜』下篇卷十五第二記譜」、拙稿「殷曆に關する二三の問題」『東洋史研究』第十五第二號參照）。



(左行)
(1)己巳ト、貞、王[illegible]千[illegible]、往來亡災。」
(2)壬申ト、貞、王田于「[illegible]、往來亡」災。弘[illegible]。[illegible]十・[illegible]三。
(左行)
(3)戊寅ト、貞、王[illegible]」千[illegible]、往來亡災。」
(左行)
(4)□□ト、貞、王」[illegible]千[illegible]」[illegible]來亡災。」
(左行)

(1)己巳の日にトい、貞う、王が[illegible]に遊せんに、往來にわざわいなきか。
(2)壬申の日にトい、貞う、王が[illegible]に田せんに、往來にわざわいなきか。これ御せり。[illegible]を十と[illegible]を三とを獲たりき。

六　第五期　田獵類　骨

1 遊　本條は数字なるも、第三條にならい補なうことが出來る。この字の正確な意義は明らかでないが、右傍のよ、よは、戈などの武器を示す形であり、左傍は走で、武器をもって行くの意味を示している。恐らく軍の訓練を行なうのが目的かと考えられるが、この字で示される行爲には、時に狩獵を行つたこともあり、前二・三三・二己丑ト、貞、王遊于[illegible]、往來亡災。在九月。弘御。[illegible]一。」(己丑の日にトい、貞う、王が[illegible]に遊するに、往來にわざわいなきか。九月に在り。これ御せり。[illegible]一を獲たり)のように、本片第二條と同じように捕獲した動物

つた卜問がすべて凶であつたとするのも危險である。

のは、その傾向が強い。したがつて、結果を記錄しなかつたと考えられる點がある。例えば五記の条記に關するもの

(左行)
(1)己巳ト、貞、王[illegible]千[illegible]、往來亡災。」
(2)壬申ト、貞、王田于「[illegible]、往來亡」災。弘[illegible]。[illegible]十・[illegible]三。
(左行)
(3)戊寅ト、貞、王[illegible]」千[illegible]、往來亡災。」
(左行)
(4)□□ト、貞、王」[illegible]千[illegible]」[illegible]來亡災。」
(左行)

(1)己巳の日にトい、貞う、王が[illegible]に遊せんに、往來にわざわいなきか。
(2)壬申の日にトい、貞う、王が[illegible]に田せんに、往來にわざわいなきか。これ御せり。[illegible]を十と[illegible]を三とを獲たりき。

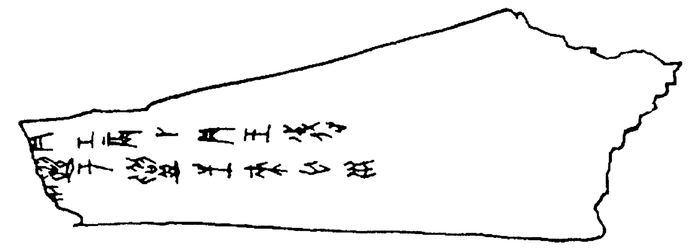
六　第五期　田獵類　骨

1 遊　本條は数字なるも、第三條にならい補なうことが出來る。この字の正確な意義は明らかでないが、右傍のよ、よは、戈などの武器を示す形であり、左傍は走で、武器をもって行くの意味を示している。恐らく軍の訓練を行なうのが目的かと考えられるが、この字で示される行爲には、時に狩獵を行つたこともあり、前二・三三・二己丑ト、貞、王遊于[illegible]、往來亡災。在九月。弘御。[illegible]一。」(己丑の日にトい、貞う、王が[illegible]に遊するに、往來にわざわいなきか。九月に在り。これ御せり。[illegible]一を獲たり)のように、本片第二條と同じように捕獲した動物

甲骨文字』本文篇S三八七〇注釋及び松丸道雄「殷墟卜辭中の田獵地について」東洋文化研究所紀要第三輯參照)。

2 [illegible]　前期の卜辭では召部ちに[illegible]。山西垣曲縣附近にあつた地と一般に言われているが、正確には不明である。西周金文には[illegible]公という人物があらわれるが、これは武王・周公旦の弟の召公奭であると言われ、この地名と關係があるとする說がある。しかし田獵卜辭の[illegible]の書き方については、殷の都のあつた安陽に近い地で、しばしば田獵一正確には遊一が行なわれた地であるとする說もある。この場合には、現在のどの地にあたるかは明らかでない(白川靜「召方考」甲骨金文學論叢第二集及び松丸道雄「殷墟卜辭中の田獵地について」參照)。

3 [illegible]　田獵地の一つで、鼎三六七「□在[illegible]卜。」(…[illegible]に在りてトう)の字姿は、第三・四期形式と見られるので、トト辭の時期では後半からあらわれる地名とすることが出來る。第五期卜辭では田獵地として、前二・三三・四「□田于[illegible]、往來亡災。□[illegible]十又八。」(…[illegible]に田し[illegible]十八を獲たり)前二・三三・三「□□ト、在[illegible]貞、王田[illegible]往來亡災。」([illegible]日トい、[illegible]に在りて貞う、王が田[illegible]往來にわざわいなきか)。[illegible]二・三六・八(一[illegible]二七)「□辰ト、在□貞、王[illegible]于[illegible]、往來亡災。」([illegible]の日にトい、[illegible]に在りて貞う、[illegible]に田するに、往來に



故　小川睦之輯氏藏甲骨文字　補注

補1　この甲骨については、後日[illegible]神田喜一郎先生より、[illegible]入された[illegible]々代小川為次郎氏、即ち睦之輯氏の父君である旨の御教示を得た。

補2　後日、資料を再調査した結果、「貞、[illegible]于[illegible]申・父庚・父[illegible]、[illegible]于[illegible]申・父庚・父辛二牛(貞う、[illegible]于[illegible]申・父庚・父辛に[illegible]于、二牛か)」(乙七七六七)があることが判明した。この資料は第一期のものであることが他の資料によつて明らかになつているので、本片以外にも同様な資料があることになる。ただ乙七七六七では[illegible]申を父甲と呼ばずに、[illegible]申は[illegible]甲で[illegible]ることが、その理由の一つではないかと推測される。しかし、第一期ト辭では明らかにはできないが、[illegible]期以前の王であることを明らかにしている。

亡災。弘御。[illegible]□」(壬申の日に…[illegible]に【田せん】に、往來にわざわいなきか。これ御せり。…を獲たり)にも[illegible]があらわれる。卜辭にはこれ以外にも[illegible]麑などで田獵が行なわれているが、山麓地帶が田獵の好適地であることは今もかわりがない。

5 弘御　卜占の結果、吉を得て、田獵を實行することの意味の語で、[illegible]以下は、田獵の結果を後に記錄したものである。本片註1に引用した人B二九八によれば、正式には、王曰吉の語の後に書かれる可きものであるが、王曰吉を省略したのが、本條のような形式である。祭祀卜辭では「用」・「弘用」なる語が附記されるが、これは卜問した通りの靈性を用いるの意と理解される。田獵卜辭の「弘御」の御字は、事を[illegible]して田獵を行う意味であろうか。

6 [illegible]　[illegible]即ち學名の Moschus chinloo で、鹿に似るが、頭部に角がない。

七　第五期　田獵類　骨

(左行)
(1)壬辰ト、貞、王[illegible]」千[illegible]、往來亡災。」
(左行)
(2)□□ト貞、」[illegible]千[illegible]」[illegible]亡災。」

(1)壬辰の日にトい、貞う、王が[illegible]に遊せんに、往來にわざわいなきか。

四王との親族の關係を示していると考えられるので、王室の構造を考えるには小乙をさす父乙が最も多くあらわれるのに對して、つぎには[illegible]甲をさす父甲がよくあらわれるので、この乙七七六七によつて、[illegible]甲と祢した[illegible]とが、關係が[illegible]であることによるとすることはできないであろう。また[illegible]甲と小乙とが[illegible]庚・小辛に比して、多くあらわれることは、別の問題を含んでいるように思われる。それはかつて拙著「古代殷王朝のなぞ」一〇四―一〇七頁においてふれた問題であり、張光直氏らによつて提起されたところでもあるが、[illegible]を[illegible]成する[illegible]を示すものであり、殷王の位は、丁[illegible]甲団と甲・乙[illegible]甲団との間に婚姻が行なわれ、祖名につけられた十干が殷王室二[illegible]団を[illegible]成されたという考え方との關係である。私自身は、ふれたように、この張光直氏らの考え方には[illegible]に[illegible]成はできないと現在も考えているが、第一期ト辭における出現頻度は、武丁と父甲時代の[illegible]期を考え

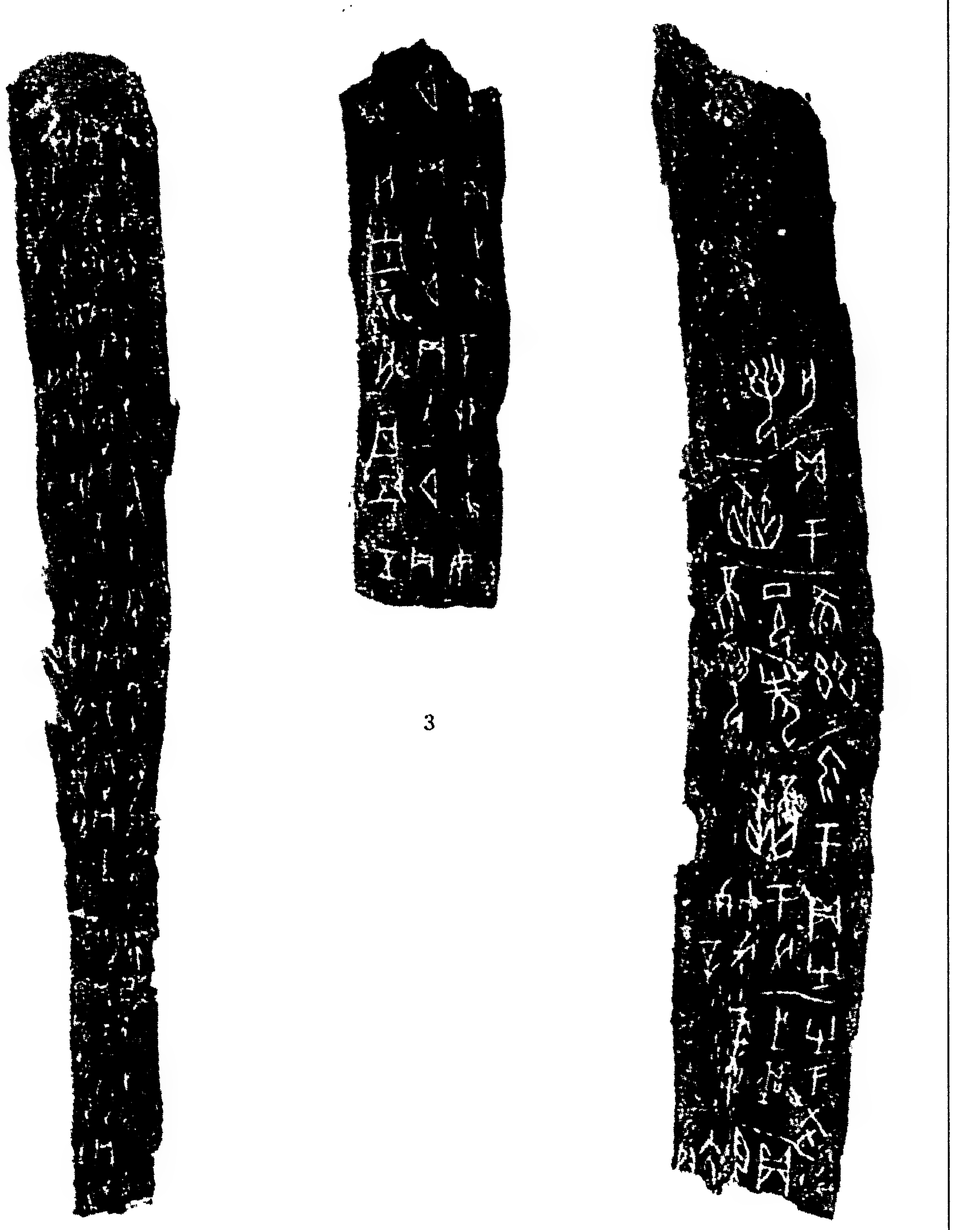
るときに無視できないものであることを注意しておきたい。

補3　人文一八一七には三父の稱があらわれる。これが第三・四期であることはその字体からまず誤りはないと考えられるので、この場合の三父は、第二期の祖己、祖庚、祖甲をさすと考えられる。ただこの資料は残欠し、文章が不明である（貝塚茂樹「京都大学人文科学研究所藏甲骨文字」本文篇四六六頁）。

補4　この数字の動詞的用法を示す資料としては、前六・一九・三のほかに佚五二四をあげることができる。

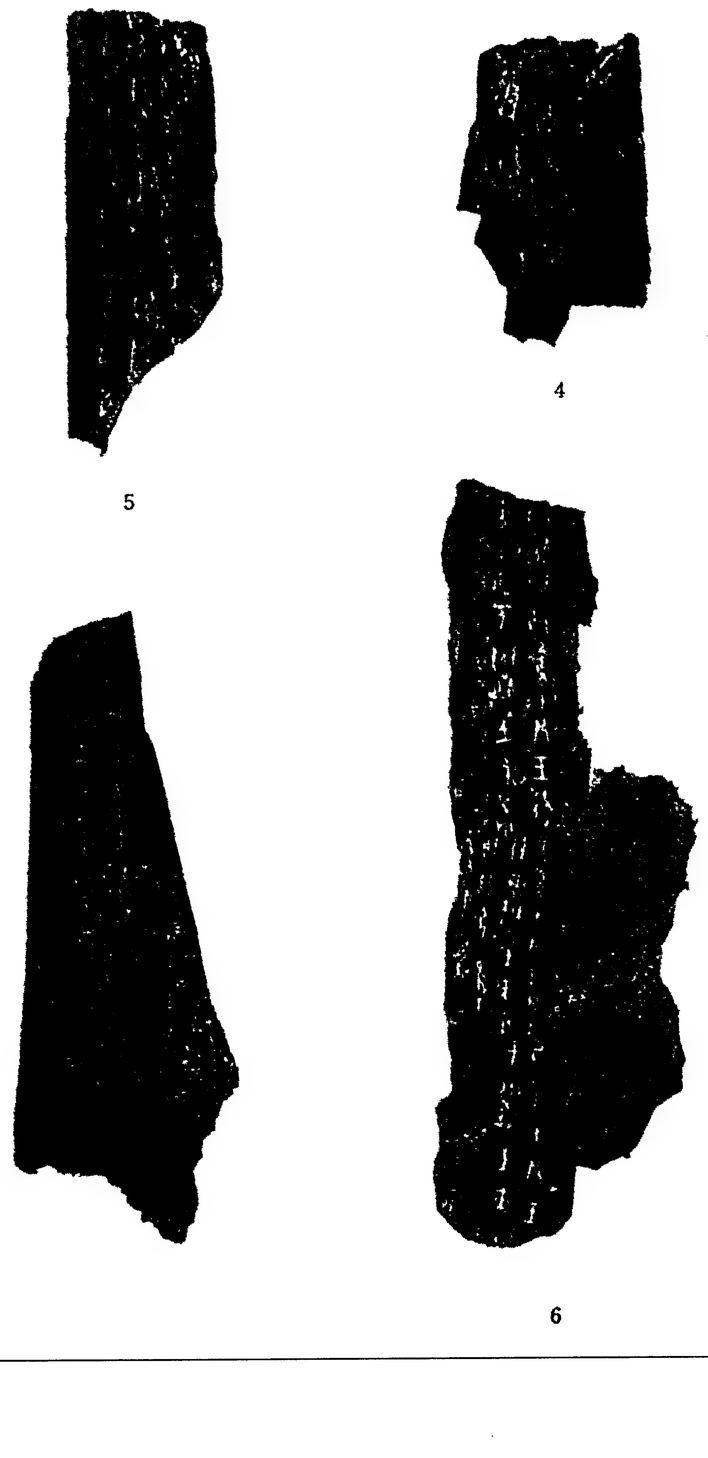
補5　郭沫若氏が『卜辭通纂』四四八に引く前五・一七・五「癸巳卜、㞢貞、日若玆𣪘隹年禍。三月。（癸巳の日に卜い、㞢が貞う、日かくの如く晦するは、これ年に憂あるか。三月なり。―郭氏の解によって読み下す）によれば、本例などの「若玆不雨」も、「かくの若く雨ふらざるは」と読む可きものとなる。したがって珠六二〇の帝以下は、不雨の原因をなすものと考えられることになる。前五・一七・五の「隹年禍」も、隹字の用例からすれば、年が禍の主格となるべきであり（藤井有隣館所藏甲骨文字二註1參照）、日の晦の原因が、年が禍を下すことによるものか否かを卜問したものと考えなければならない。したがって郭氏が「年其有憂也」とするのは誤りであろう。ただこの場合の年が、何を意味するかは明らかではない。卜辭の通例からすれば、年は稔りを意味するが、この場合には稔りを左右する神とすることができるか否かは確認できない。島邦男氏が指摘されるように、年は音の仮借によって、何かの神格を示したものかもしれない。（『殷墟卜辭研究』五〇四頁）。

Plat I



1　2　3

Plat II



4　5　6

藤井有鄰館所藏甲骨文字

はじめに

ここに紹介する十六片の甲骨は、故藤井善助氏によって購入せられ、現在藤井有鄰館に所藏されるものである。十六片のうち、七片は第一期、四片は第二期、五片が第五期のものである。このうち、第五期祭祀類に屬する第十二片は、附論でも述べるように、羅振玉舊藏と推定される甲骨と關係が深く、また十六片の時代が、第一期・第二期・第五期に限定されていることは、これらが、一九〇四年に小屯村北の朱家所有地から盜掘され、羅振玉の『殷虛書契』などに著錄されるに到った甲骨と同時期のものであることを示しているので、この十六片も、おそらく一九〇四年に朱家の土地から盜掘されたものの一部であり、それが羅振玉の所藏するところとなったと推定される。藤井守一氏によると、この十六片は昭和初年に藤井氏が購入されたということである。昭和初年といえば、現在京都大學人文科學研究所に所藏されている故上野精一氏舊藏の甲骨が、羅振玉の手をはなれ、上野氏の手に歸したころである。この十六片も、ほぼ同時に羅振玉から藤井氏の手に移ったものと考えることができよう。以下第一期祭祀類より紹介するが、その分類は、貝塚茂樹『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』による。最後に貴重な資料の發表を許可された藤井有鄰館の好意に對して、謝意を表する。

一　第一期　祭祀類　　牛骨



貞、翌辛未」彭[1]貧[2]」于王」亥[3]　（右行）

一（序數）。上吉[4]。

貞う、翌辛未の日に、王亥に彭し貧せんか。

1　祭祀上の用語。犧牲を處理する儀禮の一つである（貝塚茂樹『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』本文册頁一六七）。

2　柴を燃やして祭る儀禮。本來は王亥などの先公、河などの自然神に對して行なわれたものであるが、祖先神の祭りにも用いられた（島邦男『殷墟卜辭研究』頁三二二）。

3　殷の先公の一人、『史記』殷本紀の王系では、第八代にあげられる振のことである（王國維「殷卜辭中所見先公先王考」觀堂集林卷九）。しかし多くの研究者によって指摘されるごとく、その神格の上では、河などの自然神と同じであり、本來は殷の王室とは無關係の異族神であった。しかし第四期甲骨文では、高祖王亥・高祖亥とよばれ、大乙以下の先王とともに祭られているので、少なくとも第四期にはすでに王室との間に擬制的な血緣關係が考えられ、上甲の前におかれるようになっていたのであろう（拙稿「卜辭に見える祖靈觀念について」東方學報第二六册、「宗教面から見た殷代の二・三の問題」東洋史研究第二十卷第三號）。

本片では卜日の干支が省略されているが、その祭日は、文より辛未であることが明らかである。王國維はかつて、王亥の祭日はみな辛亥の日であると說いた（前掲書）。たしかに「甲辰卜、敲貞、來辛亥貧于王亥卅牛（甲辰の日に卜い、敲が貞う、來る辛亥の日に、王亥に貧するに三十牛を、辛亥の日に用いんか）。」（後上二三・一六）、「貞、𠂤于王亥卅牛、辛亥用（貞う、王亥に𠂤するに四十牛を、辛亥の日に用いんか）。」（前四・八・三）は、その祭日が辛亥の日である。しかし本片や「甲申卜、賓貞、翌辛卯貧于王亥三牛（甲申の日に卜い、賓が貞う、翌辛卯の日に王亥に貧するに三牛を用いんか）。」（陳一八）は、辛日ではあるが、辛亥ではない。以上に引用した資料はすべて第一期である。第一期の資料のうち、王亥の祭日が明白なものは本片をふくめて十二例、うち八例が辛日である。したがって、第一期に關する限り、辛亥とは限定できないが、辛日がきわだって多いことは事實である。この風習は、つぎに再び王亥が頻繁にあらわれる第三・四期や第四期の甲骨文では見られなくなる。すでに前掲拙稿において指摘したごとく、『山海經』や『竹書紀年』に傳えられる王亥の說話の原形は、少なくとも第四期に形成されていたし、また第四期の甲骨文において、數人の直系先王の系列に加えられて同時に祭られたのは、多くの先公・自然神のうち、王亥一人である。したがって、第四期には、王亥は祖先の系圖に加えられていたと考えられるが、その後さらに多くの先公が系列化され、王亥の上に加えられるに至った際、第一期に、王亥が辛日に祭られたことが多かったことが、何らかの影響を與えたのではなかろうか。というのは、辛は十干の第八番目にあり、『史記』では振すなわち王亥が第八代であるからである。殷では、先王の祭祀は、王名の十干と同じ十干の日に行なうのがいちおう原則となっていたので、第四期に王亥が上甲の上に加えられ、その後さらにその上に先公を加えたとき、辛よりはじめて甲まで溯及することになり、王亥の上に、さらに七人を加えることになったと想像することができよう。このような點は、上甲より示癸に至る六人の先王が、十干にあわせて人爲的に、すでに第一期において王系化されていたのと類似している。ただ先公の場合は、十干をともなっていない。また『史記』などに傳えられる先公は、振すなわち王亥を除くと、甲骨文の先公・自然神との對比がそれほど明確ではなく、また王亥のごとき說話もあまりないので、これらが王系に加えられるに至った經過は明らかではない。



b

二　第一期　祭祀類　　龜腹甲

(1)　隹[1]祖」丁。　一（序數）。　（右行）

(2)　☑帝[2]☑。　一（序數）。

b　☑王☑。

a

(1)　これ祖丁なるか。

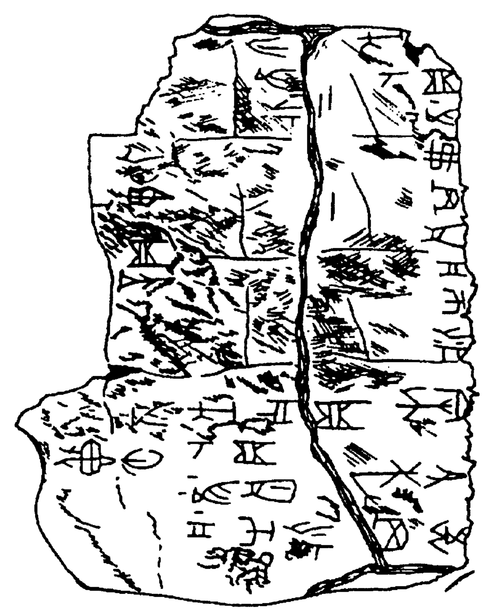
4　第三片註2參照。

1　祖丁は第十六代の王。この文は省略形であり、もとは「貞隹、祖丁（貞う、これ祖丁なるか）。」（乙二三二七）の「𠂤王」を省略したものである。隹は一般に唯・惟と同じといわれるが、禍・𠂤など災厄を示す文中に、おもにその主格（多くの場合祖先）に冠して使用され、まれに主格と動詞である禍などとの間におかれることがある。この文字が結びつく祖先は、上甲と第十三代祖乙以下に多く、報乙より河亶甲までの祖先にはほとんどない。また𠂤などの行爲をするのも、上甲と祖乙以下が多い。上甲はしばらくおき、祖乙は武丁にとって高祖父に當たり、このあたりが、祖先として、あるいは死者として實感し得た限界であり、それが同じ祖先でも、祖乙以下と、それ以前との間に、靈魂の働きに違いが考えられるもとになったのであろう。なお帝や自然神が隹・𠂤などと結びつくときは、王を對象とするほか、稔りなどの自然現象に對する場合がある。い

本片は上部が缺けているため、全文が明らかではない。唐・宮も上半分を缺き、正確ではないが、いちおう唐・宮に釋しておく。また日字も、字畫が明らかではなく、判讀の範圍では、多少日字とは字形が異なると思われる點もあり、また意味からも、通じ難い點もあるが、いちおう日字と釋しておく。

1　殷王朝の創設者成湯大乙のこと。第一期全般および第二期前半の一部の卜辭では唐と書かれ、また少數ではあるが成とも書かれる。成湯の湯は唐と音が同じであり、傳說の同じ唐を湯と書くようになったのである。他の時期では大乙と書かれる（島邦男『殷墟卜辭研究』頁七七・八一・八二參照）。

2　この文字には、固有名詞など多くの用法があるが、本條では構造を處理する儀禮の一つである（李孝定『甲骨文字集釋』第五頁一六四九～五四、島邦男『殷墟卜辭綜類』頁四〇〇參照）。



五　第一期　疾夢類　　龜腹左前甲

(1)　戊子」卜、貞」雀」𡆥」風」出」疾。」　(左行)

(2)　戊申」卜、貞」雀」弗」其」𡆥」風」出」疾。」　(左行)

(3)　貞、𡆥」雀」其」𡆥。」　(左行)

(1)　戊子の日に卜い、貞う、雀、𡆥風ありて疾むことあらんか。

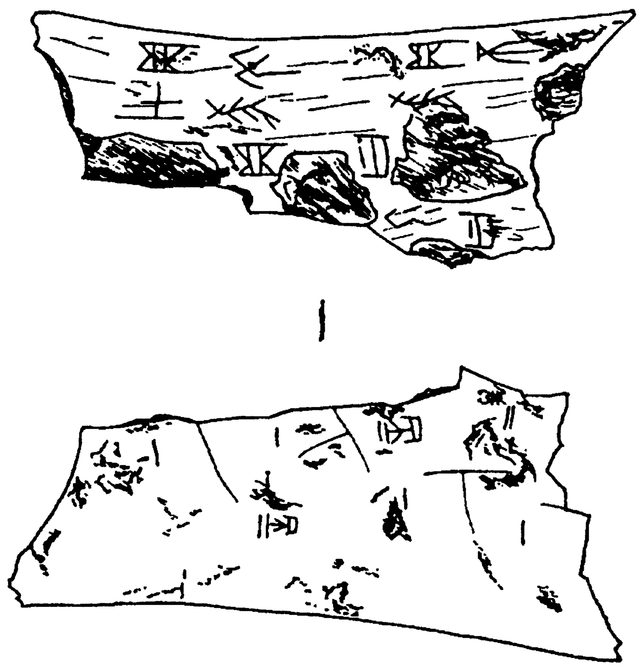
(2)　戊子の日に卜い、貞う、雀、𡆥風ありて疾むことあらざるか。

(3)　貞う、𡆥が雀するに、それ在んか。

1　人名・國族名。殷王室の出身で、有力な諸侯の一つであり、河南省溫縣一帶にあった。王室の祭祀や征伐などに從事している（甲骨金文學論叢第六集收、白川靜「殷代雄族考」二篇參照）。

2　禍をともなう風によって、疾病がおこるか否かをトったもので、第一條は肯定、第二條は否定と、對になっている。第一期卜辭では、多くの場合、このように肯定・否定の二つの形でトわれる。京都大學人文科學研究所藏のS〇三八〇の卜辭は、本片と同じように、雀の疾病をトったものであり、その卜日は乙酉で、本條の戊子と同旬に入るものである。また本片とともにいずれも、腹甲左前部に刻されたものであり、したがって、異版であり、卜日は異なるが、關係深い一聯のものと考えることができよう。なお、S〇三八〇釋文では、𡆥字を不明字とし、方國類にいれたが、本片と比較するべきものであったことが明らかである。本片第二條は、雀字以下が右より左へ橫書きされている。本片にはなお數條の雀に關する卜辭があるが、損傷のために文字が不明のもの多く、文をなさぬので省略した。

3　この第三條は他に類例なく、唯一の文例である。𡆥は、「乙未卜、貞、秉在𠂤𡆥、𡆥受出年。二月（乙未の日に卜い、貞う、秉つくりて𠂤（＝地名）の囿にあり、𡆥この稔りを受くるか。二月なり）」（前四・五三・四）によると、農耕に關係した語（恐らく名詞か固有名詞）であると推定できる。𡆥は、これ以外に、「□𡆥□其□」（後下一五・三）があるのみで、意味は明らかでないが、秉と止とから成る點から見て、秉の耕作に關係した語と考えることができる。最後の𡆥は、收穫の穫である（貝塚茂樹「京都大學人文科學研究所藏甲骨文字」本文篇頁三〇）。したがって本條は、𡆥が秉の耕作に從事し、その結果として收穫があるか否かをトったものと解することができる。



三　第一期　卜占類　　牛骨

a

b

1　當時の卜占では、同じ一つの事がつづけて何回も占なわれている。そのたびに、卜兆あるいは卜辭の傍らに、その卜占が何回めのものであるかを示す數字が刻される。この序數は十を最大としている。それ以上の回數に及んだことがあるのか否かは明白ではないが、その場合は再び一にもどったものと考えられる。

2　不𢦏又は、第一期のみに使用される語で、卜兆の判斷に關する術語である。その意味については、「卜兆を得ず」、「證據せず」、「享福ならず」などの諸說があるが、現在のところどの說も完全な解釋とはいい得ない（貝塚茂樹「京都大學人文科學研究所藏甲骨文字」本文篇頁一五三～一五七參照）。

3　これも卜占上の術語である。この文字は、二告と釋する說もあり、現在のところいずれとも定めがたいが、いちおう告に釋する說にしたがう（高嶋謙一「殷墟卜辭の構造と展開」東洋文化研究所紀要第一〇五册參照）。

4　第十五代の王沃甲のこと。

5　祟は禍と同じ意味である。禍は名詞であるのに對し、祟には動詞・名詞の二用法がある。その主格となるものには、河・王亥などの自然神と、上甲以下の先王・先妣、𠬜尹など先臣とよばれるものであり、その對象となるものは、ほとんど殷王である。この語の使用は、大部分が第一期であり、他は第三・四期、第四期に少數ある。したがって所謂賓派に獨特の用語であると考えることができる。なおこの語の否定詞は、弗が使用されることが多い。[1]



四　第一期　祭祀類　　龜腹左後甲

□□卜、□貞、其」𡆥告」自」其」𡆥登」六牛。九月。」　(右行)

來日に卜い、𠬜が貞う、それ…唐に…するに…六牛を登せんか。九月なり。



貞、不」其□」　一（疾齒）。　（左行）

貞う、それ…もさらんか。

断片であるため、もとの文を復原することができない。上段にも卜辞があり、その下部の三字の下端が見えるが、その文字も不明である。

七　第一期　旬夕類　　牛骨



□卜、□貞」旬亡𡆥。」十月。」上吉。　（左行）
三（疾齒）。上吉。
三（疾齒）。

祭□の日にトい、貞う、旬に禍なきか。十月。上吉なり。

旬の語の有無は、前旬の最後の祭の日に行なわれることになっていたので、本條も祭を補うことができる。

八　第二期　祭祀類　　龜腹左甲

貞、不」其□」　一（疾齒）。　（左行）

貞う、それ…もさらんか。

断片であるため、もとの文を復原することができない。上段にも卜辞があり、その下部の三字の下端が見えるが、その文字も不明である。

七　第一期　旬夕類　　牛骨

□卜、□貞」旬亡𡆥。」十月。」上吉。　（左行）
三（疾齒）。上吉。
三（疾齒）。

祭□の日にトい、貞う、旬に禍なきか。十月。上吉なり。

旬の語の有無は、前旬の最後の祭の日に行なわれることになっていたので、本條も祭を補うことができる。

八　第二期　祭祀類　　龜腹左甲



圍[1]卜、尹[2]」貞、王[3]𠂤[4]乙奴[5]虎[6]」𣪊[7]目[8]、亡𡆥。」　（左行）

虎虎の日にトい、尹が貞う、王が祖乙の奴たる虎虎に資し𣪊目するに、とがめなきか。

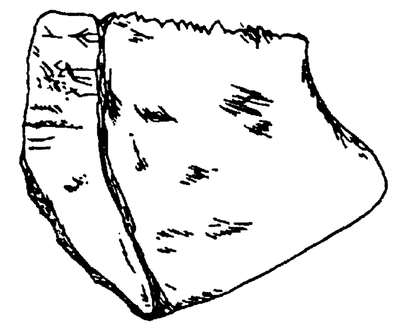
1　虎虎に對する祭祀は、庚日に行なわれるのが原則であるから、庚を補うことができる。庚字は一部の殘畫を殘すのみであるが、六十干支のうち、庚と組み合う十二支干・辰・寅・子・戌・申のうちで、本片のこり殘畫を殘すことが出來るのは辰のみである。

2　第二期後半祖甲時代の貞人。

3　祭祀の際に、王が自ら酒醴を奉び進じ、敬愛の情を示すことであるという。この文字は、第二期後半や第五期、すなわち五祀とよばれる祭祀が行なわれた時期に多く使用されるので、五祀のもつ祖先觀と關聯した祭祀上の行爲であったと考えられる（貝塚茂樹「王學文集人文科學研究所藏甲骨文字」本文篇貳一六四・一一〇三參照）。

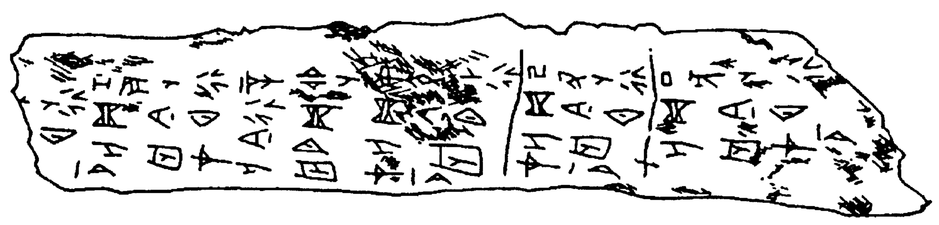
4　𠂤は配偶者であることを示す語。虎虎は祖乙の配偶者の一人で、ほかに妣己とよばれるものがある。

5　𣪊と書く場合もある。その祭祀の意義は明確ではないが、五祀の一つであり、重要な祭祀であった（董作賓『殷曆譜』下編卷二、島邦男『殷虛卜辭研究』第一期第一章・第四章第一節參照）。なお本條のように、𣪊字に日を附しているのは、當時の人々が、十日（旬）・十干と晦朔との間に密接な關係があると考えていたことによる（拙稿「卜辭に見える祖妣觀念について」・「𣪊字について」參照）。



□□卜、大[1]貞、□□[2]𣪊。」　（左行）

(1)　第一期の貞人。
(2)　我[1]家の祭祀かと考えられるが、右半は姜の祭祀であるから、おそらく別字であろう。他に資料がないため、意味は不明である。



一〇　第一期　旬夕類　　牛骨

(1)　丁亥卜、行[1]」貞、今夕[2]」亡𡆥。在一月。」　（左行）
(2)　己丑卜、行」貞、今夕」亡𡆥。」

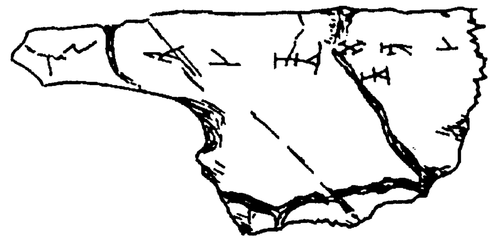
在一月。」　（左行）

(3)　庚寅卜、行」貞、今夕」亡𡆥。」在一月。」　（左行）
(4)　辛卯卜、」行貞、」今夕」亡𡆥。」　（左行）
(5)　壬辰卜、行」貞、今夕」亡𡆥。在」一月。」　（左行）
(6)　□卜、行」貞、□夕」。亡𡆥。　（左行）

(1)　丁亥の日にトい、行が貞う、今夕に禍なきか。一月にあり。

1　第二期後半祖甲時代の貞人。

2　夕とは夜の意味である。夜の語の有無をトうことは、第一期から行なわれている。第二期後半の祖甲の時代になると、本片のように數日にわたって連夜の語がトわれるようになり、また各時期の全卜辭中に占める割合いから見ても、この時期にもっとも多い。古代人にとって、夜は惡靈が跳梁すると考えられていたので、夜の語の有無が重要な關心事であったと考えることも可能である。しかし、本片のような連夜の語の有無をトうことが、この時期からはじまったことの説明とはなり得ない。また第四期には、第一期のような單獨の夜の語のトいも多くあらわれず、第五期に復活する。ということは、この風習が、五祀の行なわれる時期に行なわれたことを示している。あるいは月相の變化に對する何らかの意識が、五祀の基礎にあった宗教思想と結びついて、このような卜占を行なうことになったのかも知れない（拙稿「卜辭に見える祖妣觀念について」東方學報第二六冊）。



一一　第二期　貞人類　　龜腹左前甲

(1)　癸亥卜、」王。」　（左行）
(2)　乙丑卜、王。

この形式の卜辭は、第二期に非常に多い。その讀み方については、癸亥の日に王をトすと讀む説もあり、王がつね

1　祭祀上の用語であり、牢獄で犠牲を切割する、あるいは犠牲を供献する施設などとする説があるが、確定しない。本條の如きト辭は、非常に多くあらわれるので、単なる儀禮の一つを示す語ではなく、獨立した祭祀の種類である可能性もある(島邦男『殷墟卜辭研究』頁三六二～三參照)。

2　この字は、殘缺しているため、正確ではないが、第一條の歲のト辭と隣接して叙に關するト辭が書かれていることが多いので、いちおう叙としておく。これは燔であり、束ねた薪を神前において燃やし、香煙を出すことだといわれる(島邦男『殷墟卜辭研究』頁三六三)。この文字は第一期の後半祖甲時代に頻繁にあらわれ、第三期・第四期には少なく、第五期になって再び頻繁に使用されるので、五記と平行するものであり、いわゆる「新派」に獨特のものであるということができよう(拙稿「殷代における祖先祭記と貞人集團」)。

一四　第五期　田獵類　　牛骨

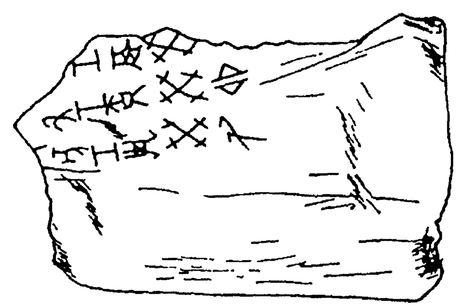


(1)　戊子の日にト い、貞う、王が鹿に射するに、往來亡災。」　(右行)

(2)　□□卜、爭、王」□告□、往」鹿□獲。」　(右行)

33

一五　第五期　雜卜類　　牛骨



(1)　□、王占、曰。

(2)　□、圍虫、王占、曰。

(3)　□、圍炙、王占、曰。

六十干支表の一部である。次の第十六片も同じであるが、本片は次片に比し、字體が亂れている。習刻であるのかもしれない。



一六　第五期　雜卜類　　龜腹甲

(1)　□、戊辰、己巳、庚午、□。

(2)　□、戊寅、己卯、庚辰、□。

35

1　『史記』殷本紀によると、成湯太乙の太子であったが、太乙の在位中に死亡したといわれている。直系先王の合祀や五祀にも含まれているので、傳說とはちがって、殷代の人には卽位したと考えられていた可能性が強い。

2　犠牲の音を供える意味の祭祀儀禮とする、羅振玉の解釋しかない(『殷虛書契考釋』六八)。島邦男氏もこの說に從ったうえで、貢祭の一儀禮としている(『殷墟卜辭研究』頁三二)。この文字の用例は、董氏によると二十五例あり、うち一例(坐二五)が第三期と推定される以外は、すべて第五期のものである(『殷墟卜辭綜類』頁九五)。この儀禮は、男系祖先すなわち先王にのみ行なわれ、先妣には行なわれなかった。この點はかなり特色のあるもので、斬首といわれる伐の儀禮が同じく男性祖先に限られていたのと共通するものである。いわゆる五記は、男女兩性の祖先に對して行なわれたが、かつて指摘したごとく、この五記は、政治的色彩の強い祭祀であり、先妣は王の母という地位によって、五記に加えられたと考えられる。これに對し、𡍮や伐は男性、姬は女性というように限定され、性別によって祭記にも區別があったのがより古い段階ではないかと考える(拙稿「殷代における祖先祭記と貞人集團」諸戸大學文學會『研究』第二八號及び本書附論參照)。

3　附論にあげる資料、續二・二一・一、續存二・八七二などによると、この祭記は、祭られる先王の十干と同じ十干日に行なわれ、かつある一定の規則をもって行なわれているので、本片第二條の丁酉から考えて、戊午を補うことができる(附論參照)。



4　第九代の王、大丁の竇体に當たる。

一三　第五期　祭祀類　　龜腹甲

(1)　辛酉卜、貞」王賓[1]叙」亡𡆥。」　(右行)

(2)　貞、王賓」叙[2]、匄。　(右行)

(1)　辛酉の日にト い、貞う、王が賓し叙するに、とがめなきか。

34

1　『史記』殷本紀によると、成湯太乙の太子であったが、太乙の在位中に死亡したといわれている。直系先王の合祀や五祀にも含まれているので、傳說とはちがって、殷代の人には卽位したと考えられていた可能性が強い。

2　犠牲の音を供える意味の祭祀儀禮とする、羅振玉の解釋しかない(『殷虛書契考釋』六八)。島邦男氏もこの說に從ったうえで、貢祭の一儀禮としている(『殷墟卜辭研究』頁三二)。この文字の用例は、董氏によると二十五例あり、うち一例(坐二五)が第三期と推定される以外は、すべて第五期のものである(『殷墟卜辭綜類』頁九五)。この儀禮は、男系祖先すなわち先王にのみ行なわれ、先妣には行なわれなかった。この點はかなり特色のあるもので、斬首といわれる伐の儀禮が同じく男性祖先に限られていたのと共通するものである。いわゆる五記は、男女兩性の祖先に對して行なわれたが、かつて指摘したごとく、この五記は、政治的色彩の強い祭祀であり、先妣は王の母という地位によって、五記に加えられたと考えられる。これに對し、𡍮や伐は男性、姬は女性というように限定され、性別によって祭記にも區別があったのがより古い段階ではないかと考える(拙稿「殷代における祖先祭記と貞人集團」諸戸大學文學會『研究』第二八號及び本書附論參照)。

3　附論にあげる資料、續二・二一・一、續存二・八七二などによると、この祭記は、祭られる先王の十干と同じ十干日に行なわれ、かつある一定の規則をもって行なわれているので、本片第二條の丁酉から考えて、戊午を補うことができる(附論參照)。

4　第九代の王、大丁の竇体に當たる。

一三　第五期　祭祀類　　龜腹甲

(1)　辛酉卜、貞」王賓[1]叙」亡𡆥。」　(右行)

(2)　貞、王賓」叙[2]、匄。　(右行)

(1)　辛酉の日にト い、貞う、王が賓し叙するに、とがめなきか。

34

1　祭祀上の用語であり、牢獄で犠牲を切割する、あるいは犠牲を供献する施設などとする説があるが、確定しない。本條の如きト辭は、非常に多くあらわれるので、単なる儀禮の一つを示す語ではなく、獨立した祭祀の種類である可能性もある(島邦男『殷墟卜辭研究』頁三六二～三參照)。

2　この字は、殘缺しているため、正確ではないが、第一條の歲のト辭と隣接して叙に關するト辭が書かれていることが多いので、いちおう叙としておく。これは燔であり、束ねた薪を神前において燃やし、香煙を出すことだといわれる(島邦男『殷墟卜辭研究』頁三六三)。この文字は第一期の後半祖甲時代に頻繁にあらわれ、第三期・第四期には少なく、第五期になって再び頻繁に使用されるので、五記と平行するものであり、いわゆる「新派」に獨特のものであるということができよう(拙稿「殷代における祖先祭記と貞人集團」)。

一四　第五期　田獵類　　牛骨

(1)　戊子の日にト い、貞う、王が鹿に射するに、往來亡災。」　(右行)

(2)　□□卜、貞、王」□告□、往」鹿□獲。」　(右行)

33

一五　第五期　雜卜類　　牛骨

(1)　□、王占、曰。

(2)　□、圍虫、王占、曰。

(3)　□、圍炙、王占、曰。

六十干支表の一部である。次の第十六片も同じであるが、本片は次片に比し、字體が亂れている。習刻であるのかもしれない。

一六　第五期　雜卜類　　龜腹甲

(1)　□、戊辰、己巳、庚午、□。

(2)　□、戊寅、己卯、庚辰、□。

35

1　𢦏は、犬に類した武器と犬とからなる文字で、狩獵に類似する行爲、あるいは狩獵に關聯の深い行爲を意味する文字であり、とくに鹿という地名に對して使用される場合が非常に多い。この鹿の地は、召とも書かれる。周公旦ととも に西周の創業に功のあったといわれる召公奭は、この地の諸侯であり、山西省垣曲縣附近であったとされているが、確定しない(拙稿「故小川睦之舊氏藏甲骨文字」頁二六一東方學報第三十册參照)。

一五　第五期　雜卜類　　牛骨

(1)　□、王占、曰。

(2)　□、圍虫、王占、曰。

(3)　□、圍炙、王占、曰。

六十干支表の一部である。次の第十六片も同じであるが、本片は次片に比し、字體が亂れている。習刻であるのかもしれない。

一六　第五期　雜卜類　　龜腹甲

(1)　□、戊辰、己巳、庚午、□。

(2)　□、戊寅、己卯、庚辰、□。

36

(3) 𠂤戈、己丑、庚寅、𠂤。

附　論

第一二片の註2においてふれたごとく、𠂤という後綴は、第五期に特徴的なものである。この第五期における用例は、本片の三例を加えて、計二十七例ある(1)。うち祭祀される祖先名の明らかなものは十四例、すなわち大乙一例、大丁三例、大戊二例、外丙・祖辛・祖丁・羌甲・南庚・祖己各一例、祖甲二例である。さらにこのうち、卜日(=祭日)の干支が明らかなもの、及び祖先名の十干や同版の𠂤に關する卜辭の干支によって補うことのできるもの、あわせて十二例あり、表示すると左の如くなる。

群別	干支	祖先名	出典
A	丙寅 己丑	大丁 祖己	京五〇〇六 粹編四五
B	丁巳 庚寅 戊戌 甲戌	大丁 外丙 南庚 祖甲	前一・四・六 續存一・二三七 前一・一四・二 後下三三・二

群別	干支	祖先名	出典
C	丁酉 丙申 辛巳 丁亥 甲寅	大丁 大戊 祖辛 祖丁 祖甲	鄴三二 同右 續一・三・一 同右 續存二・八七二 同右

第五期には、周知の如く、五祀とよばれる祭祀が行なわれていた。この五祀では、先王・先妣とも、世代と即位の順(先妣は夫の順)にしたがって、祭祀された(2)。ここでとりあげた𠂤についても、同じようなことがいえるのではなかろうか。例えば、同一版に二例が見られる續一・三・一について見るに、王系表によると、祖辛と祖丁との間には沃甲一人があるが、祖辛の祭日の辛巳と祖丁の丁亥との間には、沃甲の祭日となるべき甲申があり、他に甲日をふくまぬ、すなわち甲名の先王の數と甲日の數とが一致している。また續存二・八七二の武丁と祖甲との間には、祖己・祖庚の二先王があり、祭祀日として己酉・庚戌の二日があるのみで、他の己日・庚日は含まれぬ、すなわちここでも先王の數と祭祀日の數とが一致する。このことは、𠂤というものが、五祀と同じ方法で行なわれていたことを示すと考えることができよう。もしこの假說が許されるならば、以上にあげた先王名と干支名との明らかなものを手がかりとして、この𠂤の記譜を再構成することができると考えられる。その結果によると、A・B・C三つの記譜を作ることができた。左にそれをあげよう。表中干支名と王名とを一段あげたものは、資料のあるもの、また數字は干支番號である。

A

干支	先王
1甲子	上甲
2乙丑	報乙
3丙寅	報丙
4丁卯	報丁
9壬申	示壬
10癸酉	示癸
12乙亥	大乙
14丁丑	大丁
21甲申	大甲

干支	先王
23丙戌	外丙
27庚寅	大庚
31甲申	小甲
35戊戌	大戊
36己亥	雍己
44丁未	中丁
49壬子	外壬
51甲寅	祖乙

干支	先王
58辛酉	祖辛
1甲子	沃甲
4丁卯	祖丁
7庚午	南庚
11甲戌	陽甲
17庚辰	南庚
22乙酉	小乙
24丁亥	武丁

干支	先王
26己丑	祖己
27庚寅	祖庚
31甲午	祖甲
34丁酉	雍丁
42乙巳	武乙
44丁未	文丁
52乙卯	帝乙

B

干支	先王
41甲辰	上甲

干支	先王
42己巳	報乙

干支	先王
43丙午	報丙

干支	先王
44丁未	報丁

以上の三表には、いずれも最後に帝乙を加えてあるが、現在のところ第五期五祀の卜辭には帝乙を祭った資料が見あたらない。また王系には祖甲と庚丁との間に廩辛があるが、これも五祀の卜辭には見あたらない(3)。したがってこの二人は考慮の外におくことができる。また、五祀において行なわれる祀典と類似したものもこの祭りには見あたらないので、これも考慮外として計算すると、右の三表はいずれも十一旬をもって完了することになる。ではこの A・B・C の三表は、相互にどのような關係にあるかを次に表示する。

C

干支	先王
41甲辰	大甲
34丁酉	大乙
32乙未	大丁
30癸巳	示癸
29壬辰	示壬
24丁亥	報丁
23丙戌	報丙
22乙酉	報乙
21甲申	上甲

干支	先王
12乙亥	祖乙
11甲戌	祖甲
9壬申	外壬
4丁卯	中丁
56己未	雍己
55戊午	大戊
51甲寅	小甲
47庚戌	大庚
43丙午	外丙

干支	先王
44丁未	武丁
42乙巳	小乙
38辛丑	陽甲
37庚子	南庚
31甲午	陽甲
27庚寅	南庚
24丁亥	祖丁
21甲申	沃甲
18辛巳	祖辛

干支	先王
12乙亥	帝乙
4丁卯	帝文丁
2乙丑	武乙
54丁巳	康丁
51甲寅	祖甲
47庚戌	祖庚
46己酉	祖己

干支	先王
11甲戌	帝乙
7庚午	帝文丁
4丁丑	武乙
3丙寅	康丁
1甲子	祖甲
54丁巳	祖庚
52乙卯	祖己
50癸丑	示癸
49壬子	示壬

干支	先王
41甲辰	帝乙
38辛丑	帝文丁
32乙未	武乙
31甲午	康丁
29壬辰	祖甲
24丁亥	祖庚
23丙戌	祖己
22乙酉	示癸
21甲申	示壬

干支	先王
6己巳	帝乙
4乙卯	帝文丁
2乙丑	武乙
58辛酉	康丁
57庚申	祖甲
51甲寅	祖庚
47庚戌	祖己
44丁未	示癸
43丙午	示壬

干支	先王
32乙未	帝乙
24丁亥	帝文丁
22乙酉	武乙
14丁丑	康丁
11甲戌	祖甲
7庚午	祖庚

以上の三表には、いずれも最後に帝乙を加えてあるが、現在のところ第五期五祀の卜辭には帝乙を祭った資料が見あたらな

い。また王系には祖甲と庚丁との間に廩辛があるが、これも五祀の卜辭には見あたらない(3)。したがってこの二人は考慮の外におくことができる。また、五祀において行なわれる祀典と類似したものもこの祭りには見あたらないので、これも考慮外として計算すると、右の三表はいずれも十一旬をもって完了することになる。ではこの A・B・C の三表は、相互にどのような關係にあるかを次に表示する。

周期		表
1	甲子～甲辰	A
2	甲寅～甲午	

周期		表
3	甲辰～甲申	B
4	甲午～甲戌	

周期		表
5	甲申～甲子	C
6	甲戌～甲寅	

周期		表
7	甲子～甲辰	A

のごとく、A・B・C の各間に十一旬をおきながら、A→B→C→A と循環していたと考えることができよう。

ところで、この𠂤に關する資料にあらわれる祖先は、さきにも指摘したように、すべて先王に限られ、先妣は一例も認められない。この點、五祀が先王・先妣に共通していたのと著しい對照をなしている。この𠂤とは逆に、先妣のみに見られるものとして、姪と釋される祭祀がある(4)。例えば、「癸酉卜、貞、王賓母癸姪、亡尤(癸酉の日に卜い、貞う、王が母癸に賓して姪するに、とがめなきか)。」(前二・三・三)、「己卯卜、貞、王賓祖乙奴妣己姪、𣪘二人、伐二人、用二羊、亡尤(己卯の日に卜い、貞う、王が祖乙の配妣己に賓して姪するに、𣪘には二人、伐には二人、卯には二羊を用いん、とがめなきか)。」(京五〇〇六)などである。この姪の意味は明らかではないが(5)、島邦男氏によると、姪の資料とされるもの十例のうち(6)、粹一八六は第三・四期、鄴二・四〇・七は第五期田獵卜辭に入れるべきもので、あるいは姪とは別の字であろうか(7)。殘る八例

はすべて第五期の祭祀であり、うち六例には先妣の名が見える。右にあげた前一・三一・二の母癸は、第五期前半の帝乙の母すなわち第四期後半文丁の配妣である。また續一・二五・二の「壬寅卜、貞、王賓武□央妣癸姬、翌日卯□、亡尤。」の武某は、癸名の配妣をもつことから、他の資料と比較して、武丁であることがわかり、かつ卜日の壬寅は、妣癸を祭るべき癸日（癸卯）の前日であり、原則的には妣名の十干とは同じであったと考えることができる。さらに、右にあげた京五〇八〇には、同版卜辭として、甲申の日に祖辛の配の妣甲に對する姬の祭りが卜われている。この京五〇八〇に記錄される二つの祭祀の間には、祖乙のいま一人の配妣である妣庚の祭祀が、庚辰の日に行なわれていたはずであることが、五祀や𣪘の場合から、推定できる。以上の四つの資料から見て、この姬の祭りは、先妣の十干と同じ十干の日に、夫王の五祀の順にしたがって行なわれていたと考えることができよう。そこでこの祭祀を、右の四例を中心として復原すると左表の如くなる。括弧内は夫王の名、右の四例は、祭日の干支と妣名を一段あげる。數字は干支番號である。

干支	妣名
37 庚子	妣庚(示壬)
41 甲辰	妣甲(示癸)
43 丙午	妣丙(大乙)
45 戊申	妣戊(大丁)
48 辛亥	妣辛(大甲)
49 壬子	妣壬(大庚)

干支	先名
59 壬戌	妣壬(大戊)
6 己巳	妣己(中丁)
10 癸酉	妣癸(中丁)
16 己卯	妣己(祖乙)
17 庚辰	妣庚(祖乙)
21 甲申	妣甲(祖辛)

干支	妣名
26 己丑	妣己(祖丁)
27 庚寅	妣庚(祖丁)
28 辛卯	妣辛(祖丁)
30 癸巳	妣癸(祖丁)
37 庚子	妣庚(小乙)
38 辛丑	妣辛(武丁)

干支	先名
40 癸卯（壬寅卜）	妣癸(武丁)
45 戊申	妣戊(武丁)
55 戊午	妣戊(祖甲)
58 辛酉	妣辛(康丁)
5 戊辰	妣戊(武乙)
10 癸酉	母癸(文丁)

この表によると十旬を要したことになる。このうち祖丁の四人の妣のうち、妣辛・妣癸を認めない説もあるが、その説によるとしても、この祭祀が一循するには、十旬を要することにかわりはない。

また島氏のあげる六例のうちには、夫王名をともなわぬもの二例がある。その一つ「庚子卜、貞、王賓妣庚姬、亡尤（庚子

この表のうち、もっとも問題となるのは、第八旬・第九旬の間である。すなわち小乙・武丁の二王が第九旬に祭られるのに對し、小乙の配妣庚と武丁の二人の配妣辛・妣癸が夫王より前の第八旬に祭祀されることである。妣庚・妣辛・妣癸の三人を第九旬に移せばよいのであるが、第八旬癸卯の妣癸の祭りは資料によって確定しているので、この移動も不可能である。また先王の祭りに操作を加えることも、第七旬丁亥の祖丁、第九旬丁未の武丁の祭りが資料によって確定しているために、これも不可能である。したがってこの表に見られるような二つの祭りの關係が正しいとすれば、このような矛盾も認めざるを得ない。五祀においても、董作賓氏の場合には、祖辛の配妣二人のうち、妣庚が夫王の前日に祭られることになる。また島邦男氏の祀序においても、祖辛の妣と祖丁の妣とが、交互に祭られることになったり、小乙の妣の祭りが一旬遲らされることになっている。この小乙の場合は、明らかに資料から見てそうならざるを得ないのであるが、このことは、殷代においても、先妣の祭祀は、機械的に順を追って行なわれたのではなく、かなり操作を加えたことがあったのではないかということを推測させる。[8] とくに五祀においては、先王の祭祀が根本であり、先妣の祭祀はそれに附屬して行なわれたと考えられるので、[9] このような矛盾を殘すことになったのであろう。とくにここにあげた𣪘と姬との場合は、本來別個の祭りであったのだから、たまたまこの表の

旬	I				II			
干支	21 甲申	22 乙酉	23 丙戌	24 丁亥	29 壬辰	30 癸巳	32 乙未	34 丁酉	37 庚子	41 甲辰
先王	上甲	報乙	報丙	報丁	示壬	示癸	大乙	大丁		大甲
先妣										妣甲(示癸)

旬	III				IV			
干支	43 丙午	45 戊申	47 庚戌	48 辛亥	49 壬子	51 甲寅	55 戊午	56 己未	59 壬戌
先王	外丙		大庚			小甲	大戊	雍己	
先妣	妣丙(大乙)	妣戊(大丁)		妣辛(大甲)	妣壬(大庚)				妣壬(大戊)

旬	V				VI			
干支	4 丁卯	6 己巳	9 壬申	10 癸酉	11 甲戌	12 乙亥	16 己卯	17 庚辰	12 辛巳
先王	中丁		外壬		雍甲	祖乙			祖辛
先妣	妣己(中丁)			妣癸(中丁)			妣己(祖乙)	妣庚(祖乙)	

旬	VII				VIII	
干支	21 甲申	24 丁亥	26 己丑	27 庚寅	28 辛卯	30 癸巳	31 甲午	37 庚子
先王	沃甲	祖丁	南庚				陽甲	盤庚
先妣	妣甲(祖辛)		妣己(祖丁)	妣庚(祖丁)	妣辛(祖丁)	妣癸(祖丁)		妣庚(小乙)

旬	IX					
干支	38 辛丑	40 癸卯	42 乙巳	44 丁未	45 戊申	46 己酉	47 庚戌
先王	小辛		小乙	武丁		祖己	祖庚
先妣	妣辛(武丁)	妣癸(武丁)	妣戊(武丁)				

旬	X			XI		
干支	51 甲寅	54 丁巳	58 辛酉	2 乙丑	4 丁卯	5 戊辰	10 癸酉
先王	祖甲	康丁		武乙	文丁		
先妣		妣戊(祖甲)	妣辛(康丁)			妣戊(武乙)	母癸(文丁)

ようにいちおう重ね合せることができたに過ぎないのであり、この二つが常に對應して行なわれたと主張するつもりはない。

しかしこの二つの祭りには、ある程度の規則性を認めることが可能であるということ、またこの兩者に關する資料が、ほとんど一時期に出土したと推定されることは、興味ある點である。この兩者にわたる資料のうち、『殷虛書契』前編・後編・續編にふくまれるものは勿論であるが、京都大學人文科學研究所藏の二五八四・二六〇五・二六一二は、いずれも羅振玉の手を經たものである。[10] また『戰後京津新獲甲骨集』『甲骨續存』は、個個の資料の舊藏者は明記されていないが、その序文などによると、いずれも羅振玉舊藏品、あるいはそれと同時に出土したと考えられるものを含んでいるので、これらの資料が、ある一時期に、同じ地點あるいは近地點から出土したものであることを推測させるのである。

私はこのような推測をもとにして、さらに一歩をすすめて、次のような假設を提出しようと思う。すなわち、𣪘と姬の二つの祭りは、第五期前半帝乙時代の初期に行なわれたものではないか、しかもこれらの資料は、𣪘の周期から考えて、ほぼ二年の範圍内に入り得るものであろう。五祀は、第二期後半祖甲時代に確立しているが、その後、第四期にかけて甲骨文から姿を消し、第五期に至って再び盛行する。この五祀が姿を消した第四期のいわゆる舊派の時代には、先王と先妣は別個に祭祀されていた。ここにあげた姬などの祭祀は、このような舊派の影響を受けて、帝乙時代の初期に行なわれたものではなかろうか。[11] ただこのようにいったとしても、ここにあげた二つの祭りと五祀とがある時點で畫然と交替したとまでいうつもりはない。おそらく重複して行なわれ、五祀の政治的意義が重視されるにつれて二つの祭りが脫落したものであろう。

ところで、ここで檢討して來たように、𣪘と姬とに一定の周期が認められるとすると、この二つは單に祭祀における儀禮の一つといったものではなく、儀禮以上のものであり、祭祀そのものであったと考えなければならない。甲骨文にあらわれる祭祀上の用語は、祭祀そのものをさすのか、ある祭祀中に行なわれる一つの儀禮をさすのか、明らかでないものが多いが、少くともこの二つは祭祀というべきものであるとしなければならない。さきにあげた姬の資料である「己卯卜、貞、王賓祖乙𣪘妣己姬、翌二人、𣪘二人、卯二牢、亡尤」（京五〇八〇）について見ると、翌・𣪘・卯が儀禮であり、姬はこの三つ

の儀禮をふくむ祭祀とすべきものであろう。(11) ここにあげた二つの祭祀以外の祭祀に、どこまで規則性が認められるかは今後の問題であるが、このような方法によって祭祀全體を再檢討することが重要な課題となろう。

註

(1) 島邦男『殷墟卜辭綜類』頁九五
(2) 董作賓『殷曆譜』下編卷一・二・三、島邦男『殷墟卜辭研究』第一編第一章
(3) 註2
(4) 島邦男『殷墟卜辭研究』頁三一三
(5) 貝塚茂樹『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』本文篇頁六二一
(6) 島邦男『殷墟卜辭綜類』頁一四三
(7) 前者は島邦男氏、後者は董作賓氏である。註2參照。なお本稿では、この二つの祭祀が同一期間に平行して行なわれたものと考えて、表の組合せを行なったが、先王の祭祀が終了したのちに、先妣に對する姬の祭祀が行なわれたとすれば、B表につづく。卽ち頁八四の表でいえば、甲午にはじまる第四周期が姬の祭祀ということになる。

藤井有隣館所藏甲骨文字　補注

補1　京都大学人文科学研究所藏の〇九八四背の第一条は、その解説の際、「貞、羌□九𠂤」と釋したが、この背文は文字が細く拓影が不鮮明であったために誤り釋したものである。本片と比較すれば、「貞、羌囚希」であることが明らかである。この所を借りて訂正する。

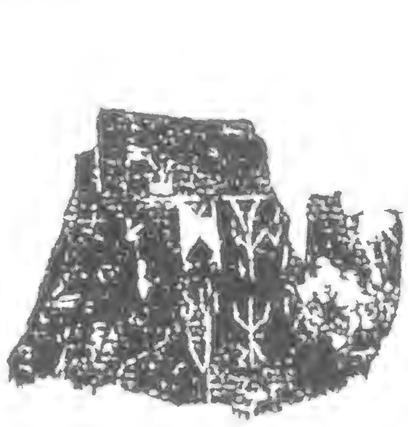
補2　粹三八六の文は「其又姬于妣辛」であり、この姬は明らかに女性の祖先である妣辛に対する祭祀である。したがって姬と別字かとしたのは誤りであった。これが第三・四期の卜辭であることの意義については四六頁及び補6を參照されたい。

補3　この人文二五八四は、小乙以外に示王の配である妣庚に対するものである可能性もある。

補4　この前一・三五・六の庚午の祭祀は四二頁の表の第6周期の第6旬の庚午に行なわれると考えられる祖丁の配の妣庚に対するものとすることができる。

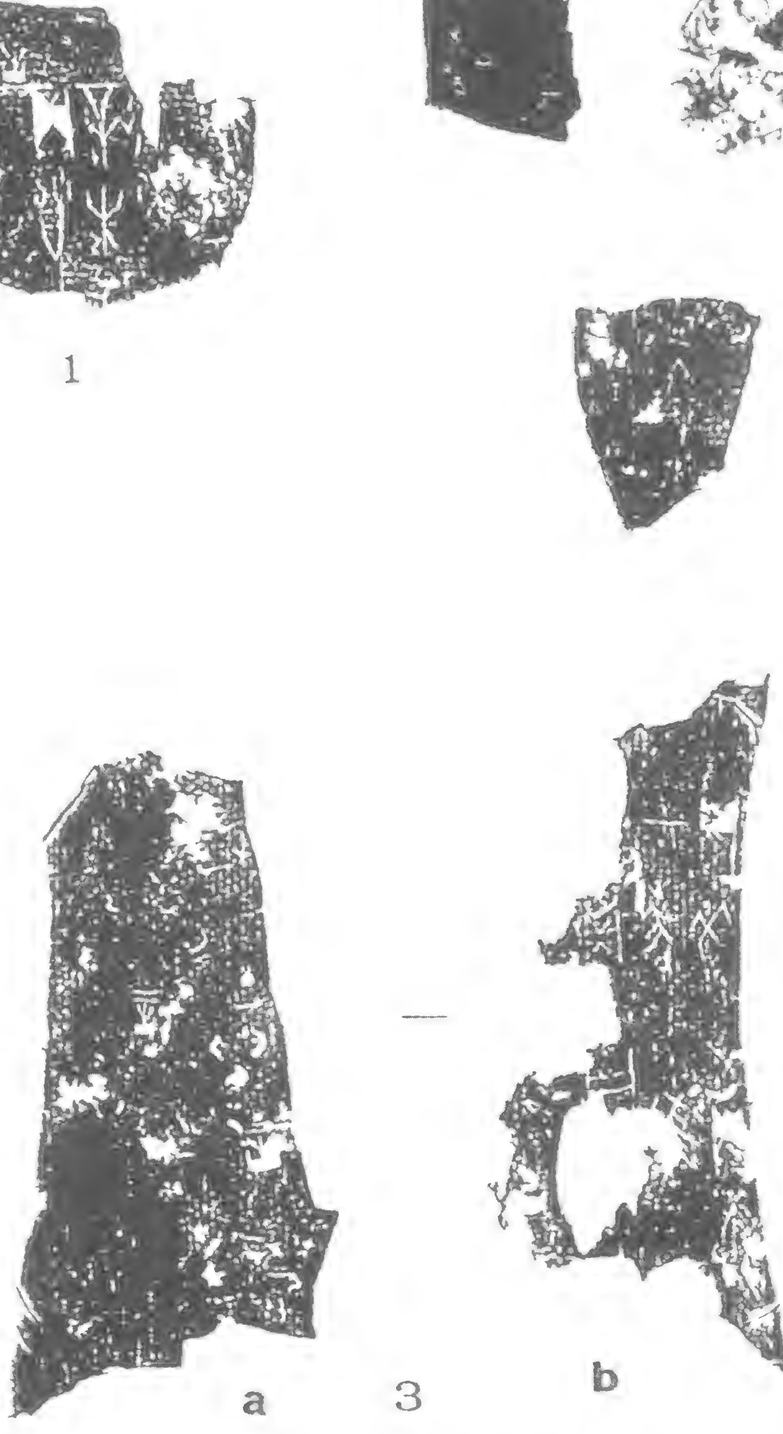
補5　四三頁の先妣に対する祭祀は四二頁の表の第4周期、卽ち甲午に始まる期間にも合致する。したがってこの姬の祭祀は第3周期表Bの先王に対する祭祀につづいて行なわれたことになり、第3周期と第4周期の二周期によって先王先妣に対する祭祀が一組となることになる。とくに第4周期の最後の甲戌に始まる旬には姬の祭祀はないので、この旬間にも第5周期・第6周期の一組の祭祀に対する祀典が行なわれたとすることも不可能ではない。祀典は五祀においては行なわれたと考えられているが、この姬の祭祀などでは、そのような確実な資料は今のところ発見されていないので、右のようなことも推定の域を出るものではない。

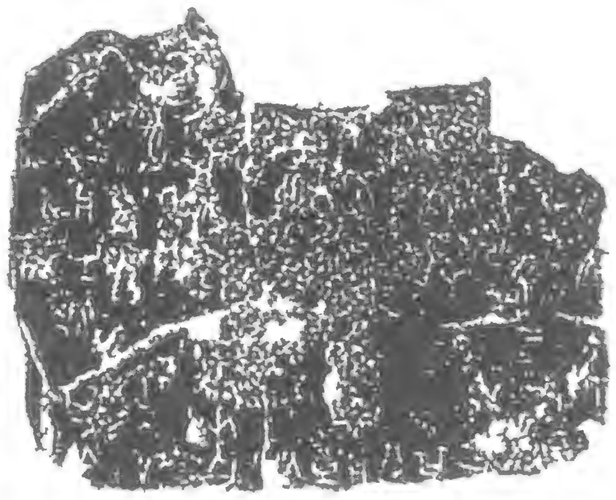
補6　四二頁と補2においてふれた粹三八六の資料が、このことを推測させるのではないかと考えられる。

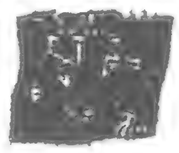

1






a　3　b


5


6


8


7

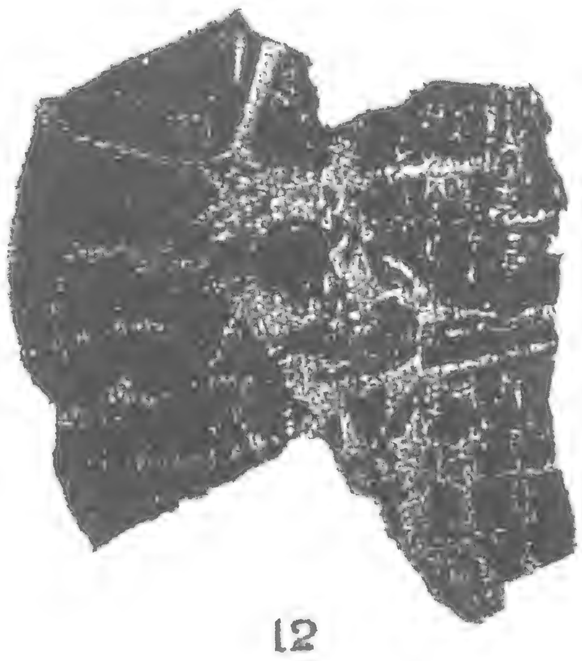

9



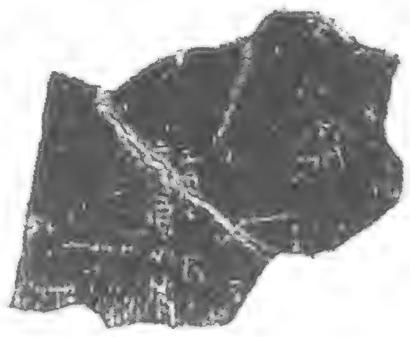
10



11



12



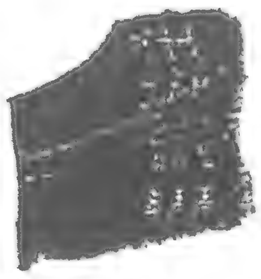
13



14



15



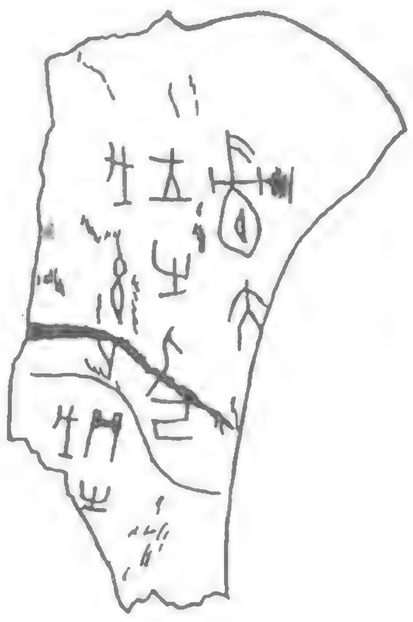
16

50

49

檜垣元吉氏蔵甲骨文字

ここに紹介する十三片の甲骨文資料は、元九州大学教授檜垣元吉氏の所蔵になり、現在九州大学教養部資料室（玉泉館）に寄託されているものである。内容的には、第一期と第二期に限定されているが、第九片には、初見の文字がふくまれ、また第一片にも類例の少ない文字が見られる。それらの意味については、それぞれの註にゆずるが、その点だけから見ても重要な資料であることがわかる。



一　第一期　祭祀類　　亀右腹甲

(1)　戊午卜、㱿[1]王、㞢[2]妣己」𠂤大[3]𢀛。」（右行）

(2)　戊午[卜]、㱿、□」貞、㞢[4]□。」（右行）

(1)　戊午の日に卜い、㱿が王〔が貞う〕、妣己に㞢し、𠂤し……。

1　又の古体であり、侑の意味であるといわれる。

2　妣己、先妣の一人である。第一期甲骨文で、妣己とよばわる人物は、中丁・祖乙・祖丁の三先王の妣にあるが、三人のうちのどれに当るかは不明である。

3　この文字は、稀見の文字である。字形は、旂をつけた袋状のものなかにDを入れた形である。「癸卯卜、貞、旬𡆥（癸卯の日に卜い、貞う、旬し𡆥せんか）」（外二二四）の𡆥はこれと同じ文字と考えられ、袋状のものの内部にあるDは肉片と考えられる可能性がある。この外二二四は、旬という祭祀に関するもので、供物にする肉片を袋状の容器に入れて処理したものであろう。本条も或いは妣己に対する祭祀において、肉片を袋状のものにいれて、供物としたとも考えられる。何れにしても珍らしい資料である。

4　本片の貞字は、上部を門に作る。この形は、所謂王族卜辞に特徴的なものであるが、第一期卜辞にも稀れには見られる。第一条の文字も、普通の第一期卜辞よりは、流動的な線の傾向を感じないではないが、王族卜辞と断定するだけのものはないので、一応第一期卜辞としておく。



二　第一期　祭祀類　　亀右腹甲

己丑[卜]、㱿[1]貞、□」三小宰㞢[2]□」人𢀛[3]□」𠂤。」（右行）

己丑の日に卜い、㱿が貞う、三小宰と……人と𢀛……とを〔用いんか〕[4]。

1　第一期の貞人

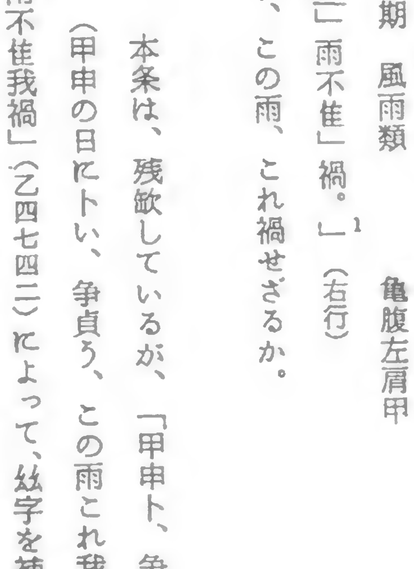
52

51

2　又と同じで、旬又六日（十日と六日、即ち十六日）などの又と同じ用法であり、同性格のものを幷挙するときの一種の接続詞である。したがって、この字と人との間の不明字は人数を示す数字であり、三頭の小羊とともに何人かの人間を犠牲とすることを示している。

3　この文字は、「甲申卜、争貞、𠂤于王亥、其𠂤（甲申の日に卜い、争が貞う、王亥に𠂤するに、それ𠂤せんか）」（乙六七三八）、「𠂤王𠂤𠂤于祖乙、𠂤二宰卯三大牢を卯し……）」（京四〇〇二）、「一𠂤三宰（一𠂤と三宰とを〔用いんか〕）」（南北・輔二一）などの如く、諸種の字形と用法とがある。第一例は第一期のもので、𠂤祭における一儀礼としてあらわれる。第二例は、第四期の資料で𠂤𠂤として、祭祀の重要行為として使用される。第三例は、第一期の省略形の卜辞であるが、宰とともに供物の一種としてあらわれる。一つの文字が動詞的にも名詞的にも使用されるわけであるが、甲骨文―漢字をも含めて―では、このようなことは往々見られる。この文字の字形は、或いは王（玉）の繁文であろうかと考えられるが、確かではない。殷代においては、祭祀に玉を使用したことは、甲骨文にも見え、考古学的にも確認されることであるので、この文字を玉器の一種と考えることも不可能ではない。呪術的な被禊の作用を玉に認めていたのであろうか。以上に引用した例からもわかるように、この文字があらわれるのは、第一期・第三・四期・第四期の所謂旧派的な甲骨文に限られているようである。

4　文が残欠し、動詞になる部分が確認できないので、補って読んでおく。



三　第一期　風雨類　　亀腹左肩甲

貞、[丝]雨不隹」禍。」[1]（右行）

貞う、この雨、これ禍せざるか。

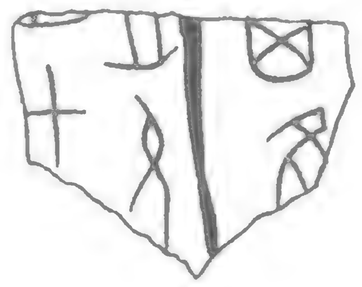
1　本条は、残欠しているが、「甲申卜、争貞、丝雨隹我禍。（甲申の日に卜い、争貞う、この雨これ我に禍するか）」「貞、丝雨不隹我禍」（乙四七四二）によって、丝字を補って解した。また「この雨これ我に禍するか）」という卜辞があったはずである。なお、卜辞では禍は多く帝などの神によって降されるものであったが、本条などの例によって、雨も禍に関係するものと考えられていたことがわかる。

四　第一期　風雨類[1]　　亀甲

(1)　丙午[卜]、[争]貞、[翌]戊申[□]夕[□]。」（右行）

(2)　[癸丑卜]、[争]貞、[今]日」[不雨。][2]（右行）





六　第一期　田猟類　　亀甲

[□其隻][1]」[□]丑。允」[2][3][隻][□]七。」（左行）

…それ…丑を隻んか。まことに…七を隻たり。

1　獲の字である。

2　本片では下半身しか残らないが、その形から、本字形のような頸部を補なうことができる。この動物は、甲骨文中に、狩猟の対象として、多数あらわれるが、その種類は明らかでない。本条はこの文字までが、卜いの内容である。

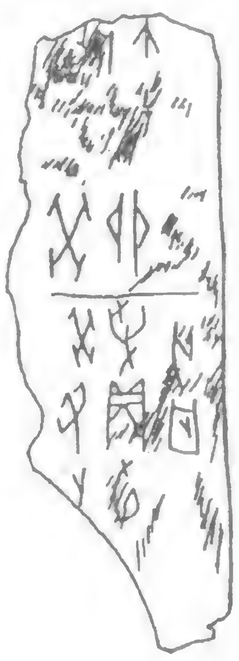
3　これ以下は、卜いをしたうえで実行された狩猟の結果を附記したものである。

七　第一期　方國類　　牛骨

貞、我[1][□]。

1　我は、現在では、第一人称代名詞として使用されるが、甲骨文では、國名・地名（族名、或いはその國・族出身の個人名をもふくむ）、さらには神名などの個有名詞として使用される場合と、第一人称代名





(2)　[癸]丑の日に卜い、貞う、今日雨ふらざるか。

1　本片は、第一〇片と背中あわせに、泥によって粘着している。

2　この文は、肯定か否定かは明らかでないが、一応不字を補なっておく。肯定であれば、其字を補なうことになる。

五　第一期　旬夕類　　牛骨

(1)　癸丑卜、」争貞、[1]旬」亡禍。」（右行）

(2)　癸」卯。[2]」（右行）

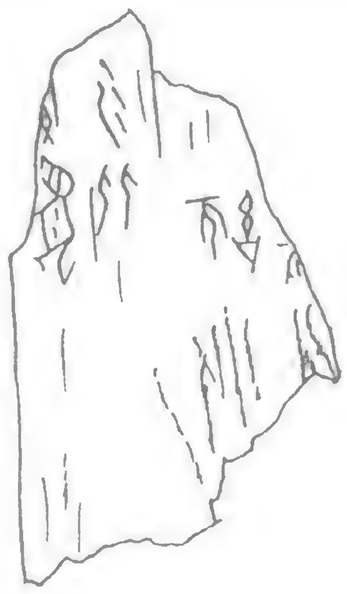
(3)　□[3]

1　第一期の貞人。

2　本条は、癸卯の日に行なわれた卜旬卜辞の省略形と考えられる。

3　本片上部には、二つの文字の下部が見えるが、損傷しているために不明である。

詞と解される場合とがあるといわれている。しかし、代名詞と一般に考えられる用例は、個有名詞と解しても、特に文意に矛盾をもたない場合が多いが、逆の場合は、必らずしもそうではない（貝塚茂樹「京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字」本文篇SO〇二・SO二三四・BO七〇六各注参照）。本片の場合は、述語が残欠しているため、何れの用法かは不明であるが、一応個有名詞と解しておく。

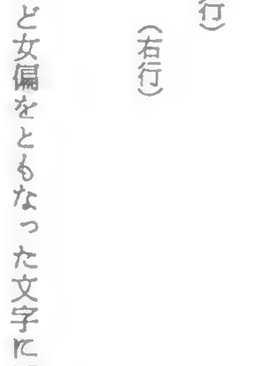


八　第一期　方國類　　牛骨

(1)　(1)　[貞、勿从」[宜侯虎」[1]□。（左行）
(2)　(2)　不[隹]𡆥。[2]（右行）

(1)　貞う、宜侯の虎を従えて…するなからんか。

1　宜は國名にあたる固有名詞である。現在のどの漢字にあてるかは数説があるが、どれも確かではない。その位置は、現在の山西省南部、河南省西部にあたる地域にあったと言われている（島邦男「殷墟卜辭研究」頁四〇七・四二六）。侯は諸侯、虎は個人名である。この虎を、甲骨文にあらわれる虎方の虎にあてる考え方もあるが（胡厚宣「殷代封建制度考」甲骨学商史論叢初集）、虎方の虎は地名・國名であり、しかもその位置は、淮河上流域と考えられるので、虎方の虎とすることはできない。

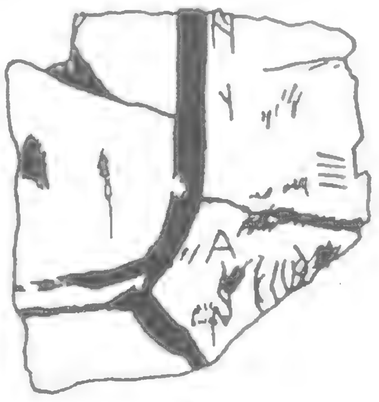


九　第一期　方國類　　龜甲

(1)　甲辰卜、[1]「王、帚」□[1]。（右行）
(2)　□□[卜]、□貞、乎」[2]□。（右行）

1　この文字は、帚姘・帚好など女偏をともなった文字に冠して使用されるのが一般である。一種の女性の称号であると解されている（貝塚茂樹「京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字」本文篇SO四五九註参照）。この帚字にともなう好・姘などの右旁である子・井は国名か地名であり、帚好などとよばれる女性の出身した国・土地であると言われている。

2　この文字は、初見の文字であり、字形は、上半は建築物、下半は笞の如きものかと考えられるが、文がはとんど残欠しているので、どのような部類に属する語かもわからないし、その意味も不明である。ただこの文字を一部とすると考えられる[囚]は、「[夢]御[囚]于妣乙[宀]邑鼎。」（後上六・四）によれば、夢による悪い結果を、妣乙に祈って払い去ろうとした意味の文字と考えられる。[囚]は𡆥の働きを制限する意味をもっていたと考えられる。例えば、𡆥（禍）と[囚]とでは、[囚]は𡆥（禍）を否定的に制限しようとする働きがあったと推定される。同じようなことが、この場合にも認められるであろう。ただ本字である𡆥の用例が、本片一例にすぎないので、その意味そのものは明らかではない。



一〇　第一期　使令類[1]

(1)　(1)　[宀]」令[宀]。」（左行）
(2)　(2)　□辰卜。

1　本片は、第四片と背中あわせに貼着している。第一条は、残欠しているので、文意は不明であるが、令字は明白であるので、一応使令類とする。第二条は、十干が不明である。この片は左甲橋部に近いところであると推定されるので、第二条は、さらに左側に文が続いていたとは考えられない。おそらく卜問の内容を省略したものであろう。その内容は、対照位置である右甲橋に近い部分に完全形の卜辞として刻記されていたと考えられる。

龜左腹甲　　四（序数）。

一一　第一期　卜占類　　牛骨

(1)　一（序数）。不[隹]𡆥。
(2)　三（序数）。不[隹]𡆥。
(3)　二（序数）。上吉。[1]



1　この文字は、二告と釈する説もあり、その意味とともに、現在では、何れとも決定し難いが、一応上吉の説に従っておく（貝塚茂樹「京都大学人文科研究所蔵甲骨文字」本文篇SO四九一註）。本片の三条は、いづれも卜兆の判語であり、かつ卜占の順序を示す序数が附刻されているが、この三条がともに同一卜占に関するものか否かは、これのみでは明らかではない。殷代の卜占は、同一事項に対して何回も繰り返されて行なわれるが、その卜兆のうちどれを採用するのか、或いはその回数などにも事項によって何らかの制限があったのか、といった事は、卜兆の判語が意味不明であるのとともに、現在では明らかにされていない。



一二　第二期　祭祀類

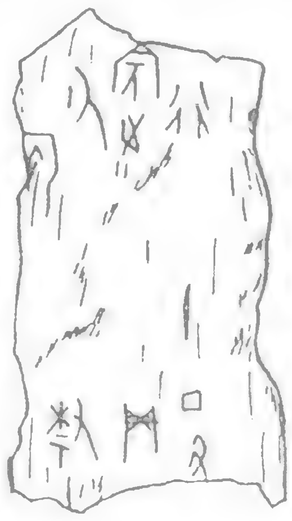
乙卯卜、□[貞]、王賓」□[1]歲□」□、亡[尤]。」（左行）

龜腹右肩甲

乙卯の日に卜い、某が貞う、王が賓し、…歲し、…するに、2がめなきか。

1　彳は、升と釈し、犠牲を供えること、歳は単なる儀礼ではなしに、祭祀そのものの一種と考えられる場合もある。いづれにしても具体的なことは明らかではない。

一三　第二期　祭祀類　　牛骨



(1)　丁丑卜、行」貞、王賓」叙、亡尤。」（左行）

(2)　□□卜、行」貞、王賓」□□彳」□□羊、」亡尤。」（左行）

(1)　丁丑の日に卜い、行が貞う、王が賓し叙するに、とがめなきか。

1　島邦男氏によると、柴と穀物とを共に燃やし、その香煙によって神を祭る儀礼と言われる（『殷墟卜辞研究』頁二六三）。この叙を卜った卜辞は、例えば、「甲寅卜、行貞、王賓祖辛奭妣甲彡、亡尤。甲寅卜、行貞、王賓叙、亡尤。在正月。」（小川2）などのように、祖先に対する五祀などと一組にして卜問されている場合が多い。この場合、彡という祭祀とこの叙とが具体的にどのような関係にあるのかは、明らかでない。叙に相当する卜問に、他種類の儀礼と考えられるものが、同じようにあらわれるならば、彡などの祭祀において、どのような儀礼を行なうかを卜ったのであり、その一つとして引用したごとき例が記録されたと考えることもできるが、このような一組の卜問においては、殆んどこの叙に限られている。それとこの叙字

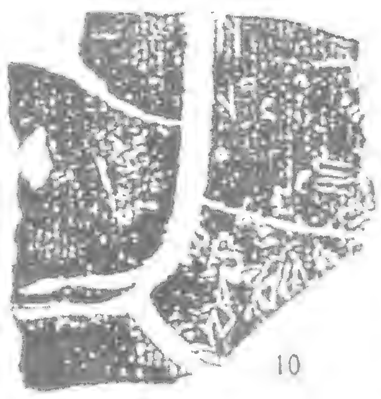
があらわれるのは、かってふれたこともあるように、第二期祖甲時代と第五期、即ち董作賓氏の所謂新派時代に特徴的なものであり、この時代は、祭祀が卜問はされるが、その実行如何は、卜問以前に既定の行事として決定されているので、叙も祭祀に関する既定のしかも常に行なわれるべき行為であったのであり、選択の対象になるようなことではなかったのではなかろうか（拙稿「殷代における祖先祭祀と貞人集団」神戸大学文学会『研究』第二八号、なお拙稿「卜辞に見える祖霊観念について」東方学報第二六冊頁一五において、歳と叙とを選択の対象と考えたが、ここでふれた如く、再考を要するとしなければならない）。本条と一組になるべき卜辞は、多く本条の左右か下部にあるので、第二条は一応本条とは無関係と考えておく。拙稿「関西大学考古学資料室蔵甲骨文字」第十一片註③参照

2　第二期後半祖甲時代の貞人。

〔後記〕　この十三片の甲骨は、中国製の木箱（内装絹張り）一函に納められて居り、その箱の口縁に「九」と墨書されているので、本来は九箱以上あったものの一部であると考えられる。檜垣氏によると、この甲骨はもと、島原の呉服商で、キリシタン資料の収集家であった本山元造氏の所蔵品であり、本山氏は長崎の骨董商と頻繁な交渉があったから、恐らく上海を経由して長崎の骨董商から本山氏に売られたのではないかと推定されている。最後に貴重な資料の調査・公表を心よく許された檜垣氏及び調査に当って種々便宜をはかって下さった九州大学文学部の岡崎敬氏に謝意を呈する。なお、本稿は昭和四十六年度文部省科学研究費による成果の一部である。

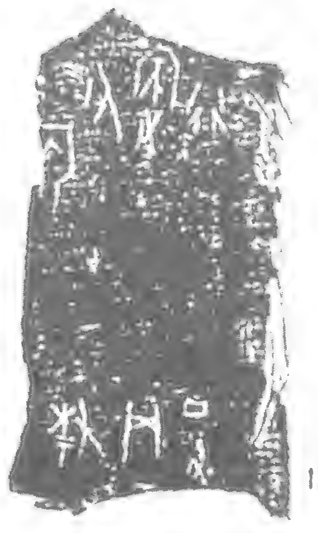








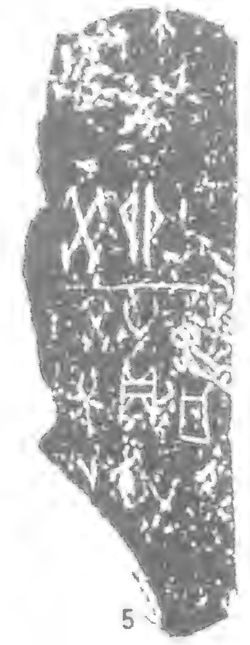




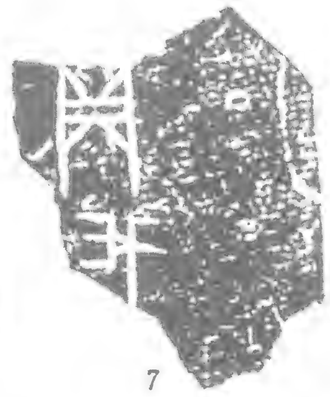


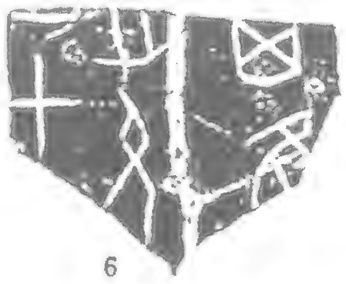












関西大学考古学資料室蔵甲骨文字

ここに紹介する二十二片の甲骨文字は、現在関西大学考古学資料室に所蔵される故本山彦一氏（元毎日新聞社長）旧蔵の資料で、今回はじめて学会に紹介されるものである。

二十二片のうち、第一期が十片、第二期八片、第五期が四片である。このことは、この甲骨文字の来歴を知る上に重要な点である。さきに私が紹介した故小川睦之輔氏、藤井有鄰館の所蔵になる甲骨文字とその時期が全く一致し、一九〇四年に小屯村北の朱家所有地から盗掘された甲骨文字の一部であると考えられるのである。このとき盗掘された甲骨文字のうち、多くのものが羅振玉を介して日本に将来され、一部は早く明治末年にすでに日本の諸家の手にわたり、大部分が昭和初年に羅振玉の手を離れて、故上野精一氏などの手に帰した。この二十二片が何時頃本山氏の手に渡ったかは記録がないので明らかではないが、大正六年十一月八日の毎日新聞紙上に、本山氏が「学術的興味と価値」という一文を執筆され、なかで中国における金石学の発達に強い関心を示し、羅振玉の名をあげておられるので、すでに甲骨文字をはじめ金石資料の研究の情況にも通じておられたのではないかと考えられる。このような点から見て、本山氏がこの甲骨文字を入手されたのは、明治末年から大正初年の間であったろうと推定される。以下各片について解説する。

1　第一期　祭祀類　　亀腹甲



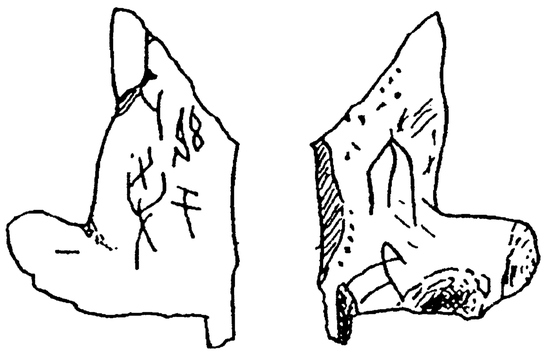
辛□卜、㞢貞、于祖辛御。①

辛□の日に卜い、㞢が貞う、祖辛に御せんか。

① 祖辛は、上甲より数えて第十八代、大乙より数えて第十二代の王である。

② 本集第2片参照。

2　第一期　祭祀類　　亀腹甲



□□卜、㞢貞、勿御于□□。　一（序数）。　（右行）

(背不隹②。)

□□の日に卜い、㞢が貞う、□□に御するなからんか。

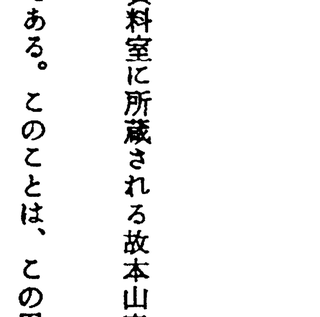
(背隹（これ）……〔たたり〕せず。)

① 御は禦に通じ、災厄を祖先に告げて攘除する意味に使用することが多い。その際、災厄が祖先のたたりによって起こると考えた場合も多い。おそらく本条も祖先のたたりによって起こると考えた場合も多い。おそらくいるが、一によって起こされたたたりを攘うものであろう。その理由は、背面に不隹の二字が見えるからである（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁一四八）。

② 隹の字は、唯、惟のごとく発語詞と解されているが、卜辞では𠂤・禍などの災厄を示す文字と組み合せて使用する場合が多い。例えば、「貞、隹妣己𡆥王（貞う、これ妣己が王にたたりせるか）」（人文〇〇四七）の如く、𠂤の主格である妣己を間にはさんで、𠂤を予告するような意味として使用される。本条では主格となる個有名詞も欠け

ているが、表面の御の祭祀の対象とされたものが、本条の主格として下部に記録されていたと考えることができる。（貝塚茂樹前掲書頁一五六参照）。

3　第一期　祭祀類　　亀腹甲



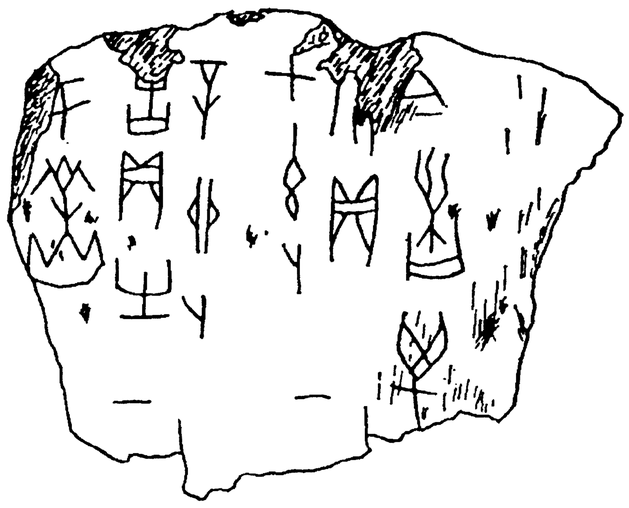
貞、勿𢦏①𡆥于𡆥□。①

貞う、𢦏いて𡆥□に𡆥することなからんか。

① 延の字で、この場合には、ある事柄と関連して、或いはある事柄から延長してといった意味である。この卜辞には日附が省略されているが、同日にある祖先に対して、𡆥□に対しても同じ祭祀をすることの可否をトったものである。

② 上の𡆥字は、祭祀の一種であり、侑の意味に当てて考えるのが一般である。下の𡆥字は、𡆥邑、𡆥宗、𡆥祖と同じ用法で、本片では、𡆥の次の文字が残欠して不明であるが、祭祀対象の一つであることは明らかである。ただし𡆥は又であり、同音によって右とすることが可能かどうかは、この場合決定できない。なお人文〇一〇六、〇一〇七の二片の考釈において、「于𡆥□」の𡆥の意味を祭祀としての𡆥と理解し、且つそのために于を接続詞と考え、于の上に別の祭祀を示す語があったものとしたのは誤りである。この両片の「于𡆥□」の𡆥は本片と同じ用法としなければならない。ここに訂正する（貝塚茂樹前掲書頁一七一）。

4　第一期　祭祀類　　牛骨



(1) 辛卯卜、㞢貞、𡆥①于羌②。

(2) 甲午卜、賓貞、今春𢦚③。④　一（序数）。　（左行）

(1) 辛卯の日に卜い、㞢が貞う、羌に𡆥せんか。　（右行）

(2) 甲午の日に卜い、賓が貞う、今春に𢦚せんか。

① 𡆥は第二期以降は又と書かれる。本条は祭祀用語である侑の意味に解されている。

② 岳とも釈される。山岳神のうちの代表的なもので、嵩山（河南省にあり、五嶽の中嶽として古くから尊ばれた）の神とする説もある。地名・族名としても甲骨文中にあらわれるが、この神を祭る族、その土地を示すものである。（赤塚忠「殷王朝における宗の祭祀」甲骨学第六号参照）。

③ 葉玉森の釈字に従う（『殷契鉤沈』甲巻一葉）。季節の春を示す文字である。

④ 甲骨文の𢦚は、族名・地名としての固有名詞と、動詞との二つの用法がある。動詞の場合は、この文字を動物を捕える手網の象形であると考え、禽或いは獲の意味とする（羅振玉『殷虚書契考釈』中巻四八葉、唐蘭『天壤閣甲骨文存』釈七九）。ただ本条のように季節を示す語に、𢦚字をつづけて終る文は他に用例がない。これに最も近い例は「庚戌卜、今日𢦚（庚戌のトう、今日に𢦚せんか）」（乙一二七）である。このような用例では、禽・獲の意味ではなく、手網を使用することの可否をトったものか、或いは手網を準備することの可否をトったものであろう。

5　第一期　祭祀類　　亀腹右首甲



しても、室内よりはむしろ南室の庭で行なわれると考えるべきものであろう。いずれにしても、確実な意味は不明である。

6　第一期①　風雨類　　牛骨

(1)　[丁]亥①卜、今日不其雨。
(2)　丁亥卜。①
(3)　戊子卜、自今旬。①

(1)　丁亥の日に卜う、今日それ雨ふらざるか。
(3)　戊子の日に卜う、今旬よりか。

(右行)

(1)　甲□[卜]、□貞、□[羌]①。　(左行)
(2)　□[弜]□[雨]②。　(右行)

①　一応羌字とするが疑問がある。
②　この字形は報乙・報丙などを示す[刃]、[西]の[冂]と同じであるところから、報の音・意味であるとし、神祐に対する報祭であるとする説がある（島邦男『殷墟卜辞研究』頁三〇九）。しかし[刃]などの[冂]は、神主を納める石室であると考えて、祓の意味、即ち廟門内の庭で行なう祭りと解する説がある（唐蘭前掲書四一）。この説に対して島氏は、この祭祀が南室などで行なわれる例があるとして、否定されるのであるが、当時の祭祀は、例え南室で行なわれるとしても、室内よりはむしろ南室の庭で行なわれると考えるべきものであろう。いずれにしても、確実な意味は不

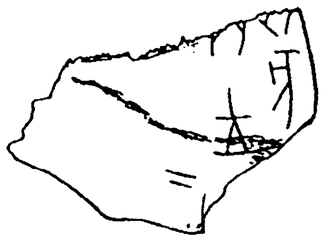


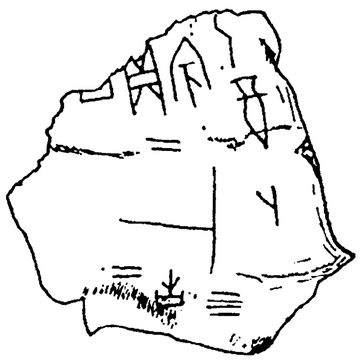
①　第二条にならい丁字を補う。
②　本条の丁亥の二字は、刻したのち削ったものらしく、ほとんど消滅している。卜占の内容も省略される。
③　旬字以下が省略されたもので、おそらく降雨の有無が卜占されたものであろう（島邦男『殷墟卜辞綜類』頁一六八参照）。
④　本片の字体・書風は不揃いで、乱れを感じる。たとえば第一条のうち今日までと、不其雨との三字は太さがかなり異なる。また第三条の戊字は縦画が長きに過ぎ、かつ線が左右にぶれている。これらの点は第三・四期或いは第四期の卜辞の一部によく見られる傾向であるが、各文字の構成は第一期のものと考えられるので、一応第一期とする。

7　第一期　方国類　　牛骨

(1)　戊寅卜、賓貞、乎取牛。①　一（序数）。
(2)　甲午卜、亘貞、沚[戛]来。②　一（序数）。

(右行)
(左行)





との関節面に刻したものである。その意味は、帚妌即ち婦妌が一対の肩甲骨を卜占用に整治した記録であり、最後の羌と内は、管理責任者の署名であろうと考えられている（貝塚茂樹前掲書頁三五〇～三五六参照）。

8　第一期　貞人類　　亀腹右肩甲

乙酉卜、賓貞、[弜]。二、三（序数）。下吉①。

①　卜兆を判定した語である。ただし吉と釈した文字も、一説であるに過ぎず、告と釈する説もあり、確定しない。したがってこの「下吉」を、現在の卜占における小吉などの意味にとると危険である。（貝塚茂樹前掲書頁二五六参照）。

9　第一期　雑類　　亀腹右脇甲

乙亥卜、□貞、王[弜]。二（序数）。

(右行)
(左行)





(白)　丁丑、帚妌示一[屯]。羌、内①。　(左行)
(白)　(1)　戊寅の日に卜い、賓が貞う、乎んで牛を取らしめんか。
(白)　(2)　甲午の日に卜い、亘が貞う、沚[戛]が来らんか。
(白)　丁丑の日に、帚妌が一[屯]を示せり。羌、内。

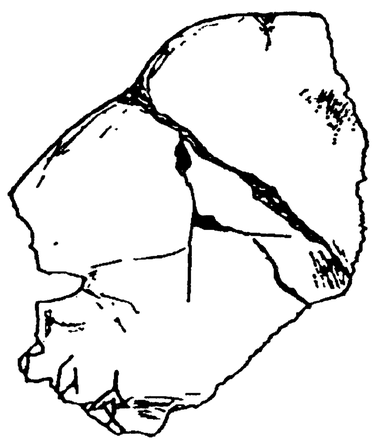
①　乎は評で、召の意味と考えられるが、このほか「乎伐」などの用例のように、討伐を意味する文章にも使用される。また「丁卯王卜貞、我其乎方、若。（丁卯の日に王が卜いて貞う、われそれ方を乎するに、諾せんか）」（人文二九四五）の例では、外敵を意味する方に対して乎という行為をし、それについておそらく帝と考えられる神の承諾の有無が卜問されていることを考えると、乎は単に召ということではなく、承服させるような意味をもつのかとも考えられ、本条でも使役の助動詞としての働きをもつとすべきものであろう。

②　沚[戛]は山西省中部にあった国で、殷に服属していたと考えられる（貝塚茂樹前掲書頁二一五）。また来の意味は、一応来朝するの意に解しておく。本条では来字の下が破損しているが、その部分に例えば馬といった名詞があれば、その物を「もたらす」意味となる。貢納である。

③　一般に骨臼刻辞といわれるものである。肩甲骨の上腕骨

10　第一期　雜　類　　龜腹左前甲

本片は残存する字画から見て第一期と考えられるが、文の内容は不明。



11　第二期　祭祀類　　牛骨

(1) 癸卯卜、行貞、王賓示癸翌。
(2) 癸卯卜、行貞、王賓叡、亡尤。
(3) 戊申卜、行貞、王賓大丁𠂤戊翌歲三小宰、亡尤。



(1) 癸卯の日に卜い、行が貞う、王が示癸に賓して翌するに、とがめなきか。
(2) 癸卯の日に卜い、行が貞う、王が賓して叡するに、とがめなきか。
(3) 戊申の日に卜い、行が貞う、王が大丁の配妣戊に賓して翌し三小宰を歲するに、とがめなきか。

① 翌は第二期後半祖甲時代に行なわれた五祀の一。何如なる祭祀かは不明であるが、第二期後半と第五期には非常に重視された祭祀である。本条は董作賓氏の祖甲祀譜中の六年六月、九年十月など七つの場合に合致する（董作賓『殷暦譜』下編巻二）。

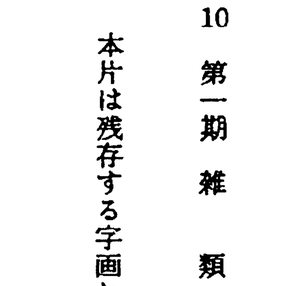
② 第18片注参照。

③ 柴と黍稷とを一つに束ねて燃やし、その香煙によって神霊を祭る儀礼といわれる（島邦男『殷墟卜辞研究』頁二六三～二六四）。この文では祭祀の対象が示されていないが、おそらく第一条において卜問された翌の祭祀において行なうべき儀礼として、叡の可否を卜ったものであろう（拙稿『中国古代王朝の形成』頁二五）。この叡が五祀にともなう儀礼の一つであることは島氏が指摘された通りである。

④ 妣戊と称せられる先妣は、このほか武丁、祖甲、武乙に見られるが、前旬の癸卯㊵（干支番号、以下同じ）の日に示癸に対する翌祀が行なわれていること、及びこの甲骨文が第二期祖甲時代のものであることから見て、当時の五祀の通例として大丁の妣であると考えなければならない。この条の戊申㊾の日付けは、申字の下半を残すのみであるが、妣戊は戊日に五祀を受けるから、戊字を補うことができる。但し問題がなお残る。それは、この時期の五祀においては、大丁の妣戊が祭祀されるのは、示癸が祭られた旬から数えて二旬目の戊日に行なわれるべきものと考えられるからである。即ち戊午㊺の日に行なわれるのが、当時の五祀の規則に合うのである。そこで、この妣戊を大丁以外の武丁の妣とした場合、戊辰㊺の日に行なわれたことになる筈で、本条に申字を残すのと合致しない。何れにしろこの第三条には問題があるといわねばならないが、五祀はこの第二期後半に始まったと考えられるので、第五期における董作賓前掲書下編巻二・三祀譜、島邦男前掲書第一篇第一章参照。なお五祀については完全な規則化がまだ行なわれていなかったと考えるべきものであろう。

⑤ この文字は下半部を残すのみであるが、五祀の儀礼の一つである歲字とすることができる。意味は犠牲を切りさくことである（唐蘭前掲書第二十七片釈）。

12　第二期　祭祀類　　龜腹右腰甲

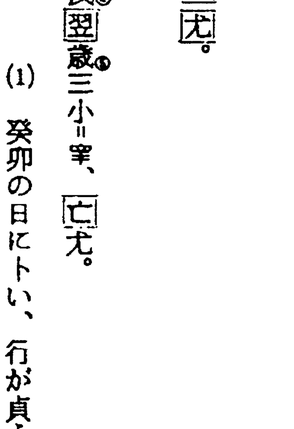


□□卜、旅貞、庚辰其又□于大甲庚三宰☑。　（左行）

某日に卜い、旅が貞う、庚辰の日にそれ大庚に又し□せんに三宰を……。

① 祭祀の対象が大庚であるので、一応庚字を補う。
② 音通によって有とし、侑食の侑に解す。犠牲を供する意味であろう。
③ 本条の大庚の大は左上の横画を脱して𠂇に作る。甲骨文字は、一つの文字を刻するとき、縦画をすべて先に刻し、そののち横画を刻するので、誤って忘脱したのであろう。

13　第二期　祭祀類　　龜腹甲

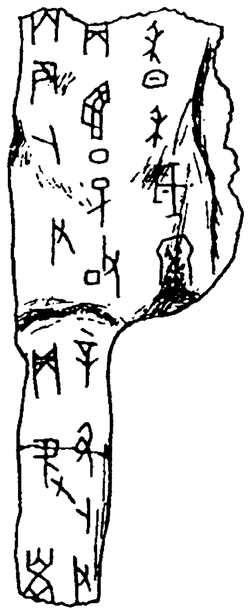


甲□卜、□貞、翌乙□彡于祖乙衣、亡𡆥。一　（序数）　（左行）

甲□の日に卜い、□が貞う、翌乙□の日に祖乙に彡するに衣す、たたり亡きか。

① 五祀の一つ。この祭祀は前日の夕、当日、明日の三日にわたって連続して行なわれ、鼓・籥などの楽器を使用したと言われる（島邦男前掲書頁二九六）。しかしこれが三日間にわたって行なわれたという点には疑問がある。その理由は、本条の第二行第二字目には翌字の上部がとく一部残るが、そのことは、この彡が卜日甲□の翌日の乙□の日に行なわれることを示している。しかも五祀関係の通例として、五祀の当日に卜占が行なわれるときは、最後に卜問される言葉は「亡尤（とがめなきか）」であるのに対して、前日に卜占が行なわれるときには「亡𡆥」である。したがって本条の彡は明らかに、乙□の日に実施されるものであると考えなければならない。五祀というもののもつ意義の一つは、実施日と先生の十干

14　第二期　祭祀類　　龜腹右腰甲



(1) 辛丑卜、尹貞、𠂤□。
(2) 丙辰卜、尹貞、翌丁巳父丁賓歲宰。

(2) 丙辰の日に卜い、尹が貞う、翌丁巳の日に父丁に賓し歲するに、宰か。

① 𠂤は妣、或いは疑の一体であろうか。次の字も残欠し、意味は明らかでない。

② 第二期祖甲時代のしかも限定された時期に行なわれた祭祀に関する語の一つ。本片以外に十例の資料があるにすぎない。すべて貞人、字体から判断して、第二期祖甲時代のものであり、しかもその祭祀は、𣪊八七八の一例が妣庚（同版卜辞により羌甲＝王系上の沃甲の妣であることがわかる）であるほかは、すべて父丁即ち王系にいう武丁である。したがって祭祀対象としても非常に限定されたものであることがわかる。この卜辞において賓と歲とのどちらに重点があるのかという点を見ると、歲は犠牲を割く意味に一般に理解されているが、この場合は祭祀というよりは、むしろ祭祀に附属した一つの犠礼としての要素が強くなる。しかし第二期ではむしろ一つの独立した祭祀と考えられる場合がある。たとえば「乙亥卜、行貞、王賓歲、亡尤（乙亥の日に卜い、行が貞う、王が賓して歲するに、とがめなきか）」（戩二〇・一）がそれである。さきにふれた佚八七八にはイ「己巳ト、行貞、翌庚午歲す、それ羌甲の配の妣庚にひいてせんか）」とあるが、これも庚午の日に歲という祭祀をするについて、それと関聯して羌甲の配偶者である妣庚を合せて祭るか否かを卜問したものである。主体はあくまでも、

独立した歳という祭祀にあることは明らかである。この佚八七八にはこれにつづいて、

ロ貞、于后妣（貞う、后妣にせんか）。

ハ貞、妣庚歳竝彫（貞う、妣庚に歳するに竝彫せんか）

ニ貞、弜竝彫（貞う、竝彫することあらざるか）

ホ貞、妣庚歳由𠂤彫先日（貞う、妣庚に歳するに𠂤彫し先日せんか―先日の意味は不明）

とある。ロはイの後の妣庚に対する祭祀の可否を改めて独立させて卜問したものであるのに対して、ハとニは妣庚に対して歳という祭祀をするについて、その儀礼として竝彫（竝は意味不明、彫は犠牲を処理する方法の一）が、肯定、否定の対の形式で卜問されている。しかしハとニいずれも満足のゆく結果が得られなかった故か、さらにホの卜問が行なわれたのである。したがって𠂤彫は歳祭に行なわれる儀礼と考えられる。またこのホとイを比較することによって、ホの妣庚が羌甲の配偶者であることがわかる。このホの𠂤彫の𠂤は、ハ・ニの竝と同じような働きをする言葉で、彫を修飾（限定をも含めて）すると考えられるが、この文字の用例は、本片を言えよう。

ではその意味という点になると、必らずしも明らかではない。金祥恒氏はこの文字と、第三・四期に多くあらわれる甘字とを同じとし、莫即ち暮と解している。したがって時を示す語であり、副詞的に作用する言葉であるということになる。たしかに甘は「其又父己𠂤甘彫、王受又ㄙ（それ父己に又するに、これ甘彫す、王は祐を受けんか）」（粋三一七）のように彫を修飾する形で用いられるが、これは先にあげたホの文章における𠂤と同じである。また「□□卜、祖丁甘歳二牢、王受又ㄙ（□□の日に卜う、祖丁に甘歳するに二牢、王は祐を受けんか）」（粋二六四）のごとく、祭祀対象である祖丁と歳との間に置かれているのは、本片の𠂤と同じである。また「其又父己𠂤甘彫、王受又ㄙ（其父己に又するに、これ甘彫す、王は祐を受けんか）」（京四〇六一）のように、甘に作るものがあり、これ

は莫の省体と考えられる可能性がある。しかしながらもっとも基本となる可き莫即ち甲骨文字の𦯎或いは𦯎の字にこれと同じような用法は現在のところ見られない。少くとも金氏自身のあげる文例にも見られないし、島邦男氏の『殷虚卜辞綜類』にも見られないのである。このことは、卜辞中における甘と莫とが別の文字であることを示していると言わなければならない。しかも京四〇六一のように甘の形に作るものは、少なくとも祭祀関係と明確に決定できる卜辞ではむしろ異例の形態であり、大多数が甘に作ることは、この文字の基本的な形が艹と口によって構成されることを示している。日に従う文字ではなく、石室を示す祊ではないかと考えられる口に従う文字であって、本片の𦯎が日に従う文字であるのとは、文字の構成要素から言っても、決定的なちがいがあることを注意しておく必要がある。

一方、暮即ち𦯎字は、第一期にすでに使用される文字である。その構成要素は草と日とであるが、草に代って禾が使用された字形はないし、また逆に第二期祖甲時代に禾に代って草に従った文字もないことを考えると、草に従うものと、禾に従うものを同じ文字とすることには疑問をもたざるを得ない。勿論、草に従う暮字は第一期或いは第三・四期など所謂「旧派」の字体、禾に従う𦯎を第二期祖甲時代の「新派」の字体とするのも一つの考え方ではあるが、この𦯎という文字そのものが、第二期祖甲時代でも限定された時期に使用されたにすぎないと考えられるので、意味の上でも限定された特殊な文字として扱うことが必要である。この文字の用例十二のうち、妣庚に関するものは別として、父丁に関する十一の文は、祭祀日によって、幾つかにまとめられる。第一に丁未に祭祀が行なわれるものとして、金七六の同一版上の二つの文がある。その一つは「辛丑卜、旅貞、翌丁未父丁𦯎歳、其勿牛（辛丑の日に卜い、旅が貞う、翌丁未の日に父丁に𦯎歳す、それ勿牛か）」であり、第二の文は卜日が欠けているが、大体同文で、最後が「其牡。在十一月（それ牡か。十一月に在り）」で終っている。したがってこの二つの文章は、犠牲として勿牛を用いるか、牡を用いるかを決定するために行なわれたものである。これと同じ丁未に行なわれるものとして亀

二・一八・一四があるが、これは最後の部分が欠けているため、これが、勿牛と牡以外の犠牲をさらにトったものかどうか決定することはできないので、一応金七六とは無関係とすると、丁未に行なわれるものが二回ということになる。つぎに丁巳に行なわれるものは本片と後上二五・一四の二例がある。本片は犠牲として宰、後上二五・一四は牛であり、いずれかの選択をしたと考えることができる。しかも本片は腹甲の右腰部に当るに対し、後上二五・一四は右肩部になると考えられるので、もとは同一亀版の分れであると考えることが可能である。つぎに丁卯の二例について考えると、粋三〇〇には文末に三月と記載し、文三二七の二月が前であるとすれで明らかに別個のものである。したがってこの二つの資料の間の期間は、文三二七の二月となり得る。そのほかは、丁亥と丁酉ば、粋三〇〇は翌年の三月になり、逆であれば文三二七は翌々年の二月となり得る。そのほかは、丁亥と丁酉とが各一例、あとは日附の不明のものが二例となる。もっとも丁卯の二例は、さきにあげた期間は最短のもので、長期にわたる可能性もあるが、私は、この𦯎字で示されるものは、祖甲時代でも、その早期の限定された期間のものと考える。その理由は、この𦯎の用例の最後に残った一例である羌甲の配偶者妣庚というものが、祖甲時代の早期にしかあらわれないと考えるからである。第二期祖甲時代には五祀とよばれる祭祀が行なわれるが、その際先王の配偶者で妣が祭られるのは、直系先王に限られる。ところが、祖甲時代に限らず、卜辞では、さきの佚八七八にあらわれる羌甲は原則としては、傍系先王であって、配偶者が五祀に加えられる可きではない先王である。ところが、ただ一例であるが、五祀のうちの一つである𣪘という祭祀において、羌甲の妣庚が祭られる資料がある。しかも佚五三六によると、第二期の前半祖庚時代の貞人大の卜辞に、祖辛・羌甲・祖丁・祖乙・武丁の五人を直系先王として記録したものがある。この大という貞人は、祖庚時代から継続して貞人として在職しているので、もし羌甲を直系として考えることがあったとすれば、それは祖庚の末期から祖甲の初期にかけての期間であったのではないかと考えられるのである。とくにその可能性が強いのは、祭祀制度などに大きな変革が行なわれた祖甲の初期であろう。その変革のときに、羌甲を直系に加える動きがあらわ

れたものと考えられるのである。なおこの羌甲を直系とするか傍系とするかという件や貞人大の在職期間については、このほかにも問題があるが、それらの点については拙稿『古代殷王朝のなぞ』頁九三・九四及び前掲書頁八四補注（6）を参照されたい。

ところで、この文字の意味は、先にのべたとおり、余り明らかではないが、これが羌甲の配妣庚と武丁に対して行なわれる祭祀に関聯する点にやはり重要な意味があったと考えられる。武丁と祖甲との関係は、王系に見る限りは、武丁の次子或いはそれ以下の王子で、兄の祖庚を継いだものとなっているが、かつて私が論究したように、この場合の兄弟・父子関係はそれほど単純ではなく、武丁と祖甲との関係が、直接的には血縁がなかった可能性が強いと考えられる。直系というよりは傍系といった関係ではなかったかと考えられるのである。そこで気付かれることであるが、羌甲の配妣庚を直系化することと同じような意識が祖甲と武丁との間に生じ、そのために行われた祭祀を意味する文字であったと考えられないかと思う。その際この文字が禾と日とから構成されていることが重要な点であろう。十干を名とすることによっても明らかな如く、太陽即ち日と殷王とは非常に関係が深く、両者を結ぶ神話が当時あったと考えられるし、また農耕を基本とする社会であったから、穀物を示す禾＝アワを媒介とすることによって、人と人とを結びつけることが可能となるような意識が存在したのではないかと考えられるのである。若しこのような考え方が認められるとすれば、本条の𦯎と歳との関係は、𦯎に重点があり、歳はそのときの犠牲を処理する方法ということになる。なお祖甲の問題については拙稿前掲書第一部第三章、太陽と王との関係については拙稿「再び『隹』字について」（岩波講座世界歴史第四巻月報十二号）を参照されたい。さらに附記すれば、「新派」時代の𦯎の祭祀などは、同じく「新派」時代である第五期の𠂤や姬と記録される祭祀などとも関聯して考察すべきであるが、この点は後考に俟つ（拙稿「藤井有鄰館所蔵甲骨文字」附論参照）。

15　第二期　風雨類　　背甲？



貞、今夕雨。止夕允雨。①
貞う、今夕に雨ふらんか。この夕まことに雨ふれり。
①　止は之と音が同じで、意味が通じ、「この」「ここ」などの指示形容詞、指示代名詞として使用される。本条は指示形容詞で、卜文の今夕の今を受ける。夕は夜の意味である。止以下は後に雨が降ったことを追記した文である（羅振玉前掲書上巻一二葉参照）。

（右行）

16　第二期　旬夕類　　牛骨



(1)　乙亥卜、旅貞、今夕亡禍。　（左行）
(2)　丙子卜、旅貞、今夕亡禍。①　十一一月。②　（左行）
(3)　丁丑卜、旅貞、今夕亡禍。　（左行）

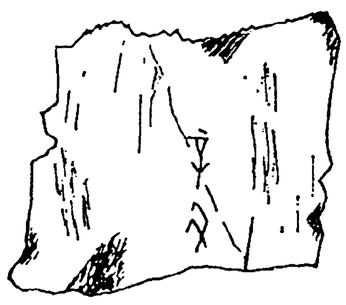
(2)　丙子の日に卜い、旅が貞う、今夕に禍なきか。十一月なり。
①　夕は夜の意味で、本片のように連夜の禍いの有無を卜占することが、第二期後半祖甲及び第五期、即ち五祀の祭祀が行なわれた時期に実施される（拙稿前掲書貞二八及び「藤井有鄰館所蔵甲骨文字」第一〇片注東方学報第四二冊参照）
②　月名を記録する際、祖甲時代には月名の上に「在」字を冠して「十一月に在り」とするのが通例であるが、本片では「在」字がない。古い記月法によったものである。

17　第二期　雑類　　亀腹甲



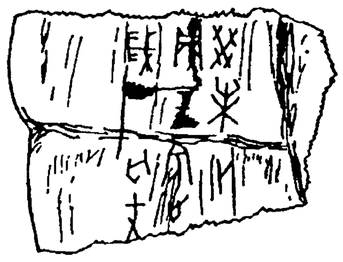
(1)　丁丑□　（右行）
(2)　壬□卜、□貞、□亡□。　（右行）
(3)　□□卜、□貞、□不□。　（右行）
本片は残欠甚だしく、文の復原は不可能である。

18　第二期　雑類　　亀腹甲



辛丑卜、王。①
①　この甲片は辛丑の二字を残すのみである。字体から見て第二期と考えられる。この時期には、卜占の内容を省略した「干支卜王」という形式の卜辞が多いので、一応卜王の二字を補った。ただしこのような形式は他の一般貞人には見られないものであるため、「王をトう」と解釈する説もあるが、この説はとらない（拙稿「藤井有鄰館所蔵甲骨文字」第一一片註参照）。

19　第五期　祭祀類　　亀腹甲



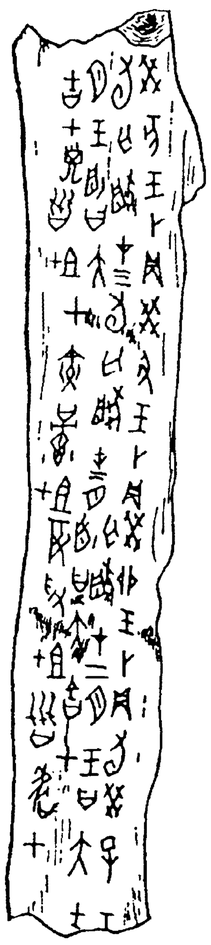
癸未卜貞、王賓歲、亡尤。①
癸未の日にトいて貞う、王が賓して歲するに、とがめなきか。
①　祭祀において王が自ら祖霊を導き、敬愛の情を示すことを意味する文字である（郭沫若『卜辞通纂』第三九片考釈）。

（左行）

20　第五期　風雨類　　牛骨



(1)　乙丑卜貞、今日不雨。𢦏御。①　一　（序数）。　（右行）
(2)　其雨。　（右行）
(3)　戊辰卜貞、今日王田𡆥、不遘雨。②　（右行）
(4)　其遘雨。　（右行）
(5)　壬申卜貞、今日不雨。　（右行）
(1)　乙丑の日にトいて貞う、今日雨ふらざるか。これ御せん。
(2)　それ雨ふるか。
(3)　戊辰の日にトいて貞う、今日王が𡆥に田（かり）す、雨に遘わざるか。
(4)　それ雨に遘うか。



21　第五期　旬夕類　　牛骨

(1)　癸巳王卜貞、旬亡禍。王𠂤曰、大吉。甲午𢦏虎甲畐羌甲。①　一　（序数）。　（左行）
(2)　癸卯王卜貞、旬亡禍。在二月。　（左行）
王𠂤曰、大吉。甲辰祭祖甲畐虎甲。一　（序数）。　（左行）
(3)　癸丑王卜貞、旬亡禍。在二月。　（左行）
甲寅賓祖甲。一　（序数）。　（左行）

(4) 癸亥王卜貞、旬亡禍。在三月。[1] 王㠯曰、大吉。甲子酉祖甲。一（序数）。（左行）

(2) 癸卯の日に王が卜い貞う、旬に禍なきか。二月に在り。王が㠯じて曰く、大吉なりと。甲辰の日に祖甲に祭し虎甲（＝陽甲）に酉す。

(3) 癸丑の日に王が卜い貞う、旬に禍なきか。二月に在り。甲寅の日に祖甲に宜す。

① この卜辞は下部が欠けているが、第一行から第二行のはじめにかけて、七字が補われるので、第二行の下部にもほぼ同数の文字を補うことができる。第2条の卜辞から考えて、同様に五祀中の祭系統に関するものとして、第二条の前旬の甲日に行なわれるのは、虎甲（『史記』殷本紀に言う陽甲）に対する宜の祀と、羌甲（同じく沃甲）に対す酉の祀である。卜旬卜辞―本条ではトいの行なわれた癸己の翌日の甲午から癸卯までの一旬＝十日間の禍の有無をトった記録―ののちに五祀を記録する意味については拙稿前掲書第一部第一章第五節参照。祭は祭祀一般の意味ではなく、五祀の一つであり、祭・宜・酉が一系統をなし、宜は祭より一旬遅れ、酉はさらに一旬遅れて上甲以下を順次祀るものである。祭・宜・酉などの意味は、例えば祭は酒肉を霊前に供すること、宜は俎であり、酉は協風の協で和の意味などといった説が出されているが、必らずしも正確ではなく、またこの三者が、何故に一系統をなしているかなどは、この意味では説明できない。したがって祭祀としての意味は三者とも不明と言わねばならない。

② 㠯は卜兆を判定したことを意味する文字。第五期卜辞において判定が行なわれるときは必ず吉と書かれているから、逆に判定が記録されないとき、例えば第三条の場合などは、凶であったと考えられる可能性が強い（拙稿前掲書頁四四）。

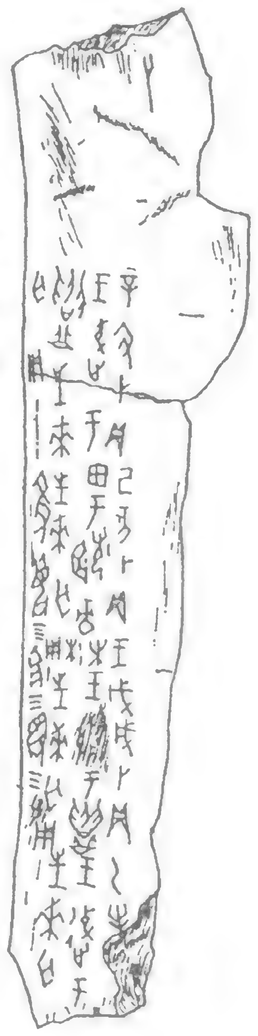
③ 本条から三月になるが、五祀の譜と月名とが、本片と完全に一致するのは、董作賓氏によれば帝乙三祀の二月から三月にかけての譜である（董作賓前掲書下編巻二）。

字」第六片注4参照。

④ 鹿に似るが角のない獣である。群生動物で、ときに百頭という数で捕獲されている。

⑤ 遘の省略体である。

（神戸大学教授）



往来亡災。隻鹿四虎三𠂤[1]四。

(4) 辛丑卜貞、王𡆥于𣪊[1]、往来亡災。

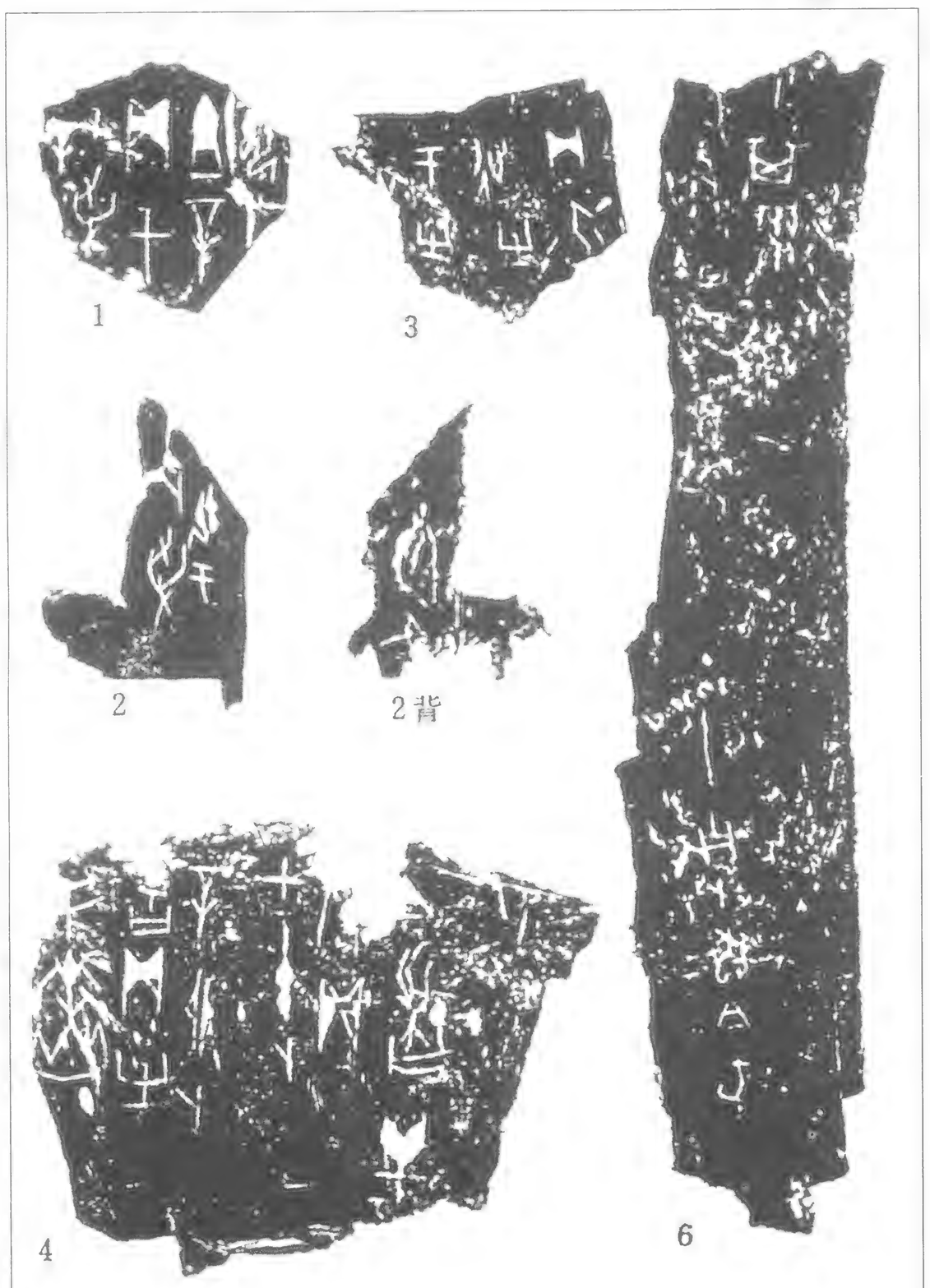
(1) 乙未の日に卜いて貞う、王が𣪊に遊せんに、往来亡災。（左行）

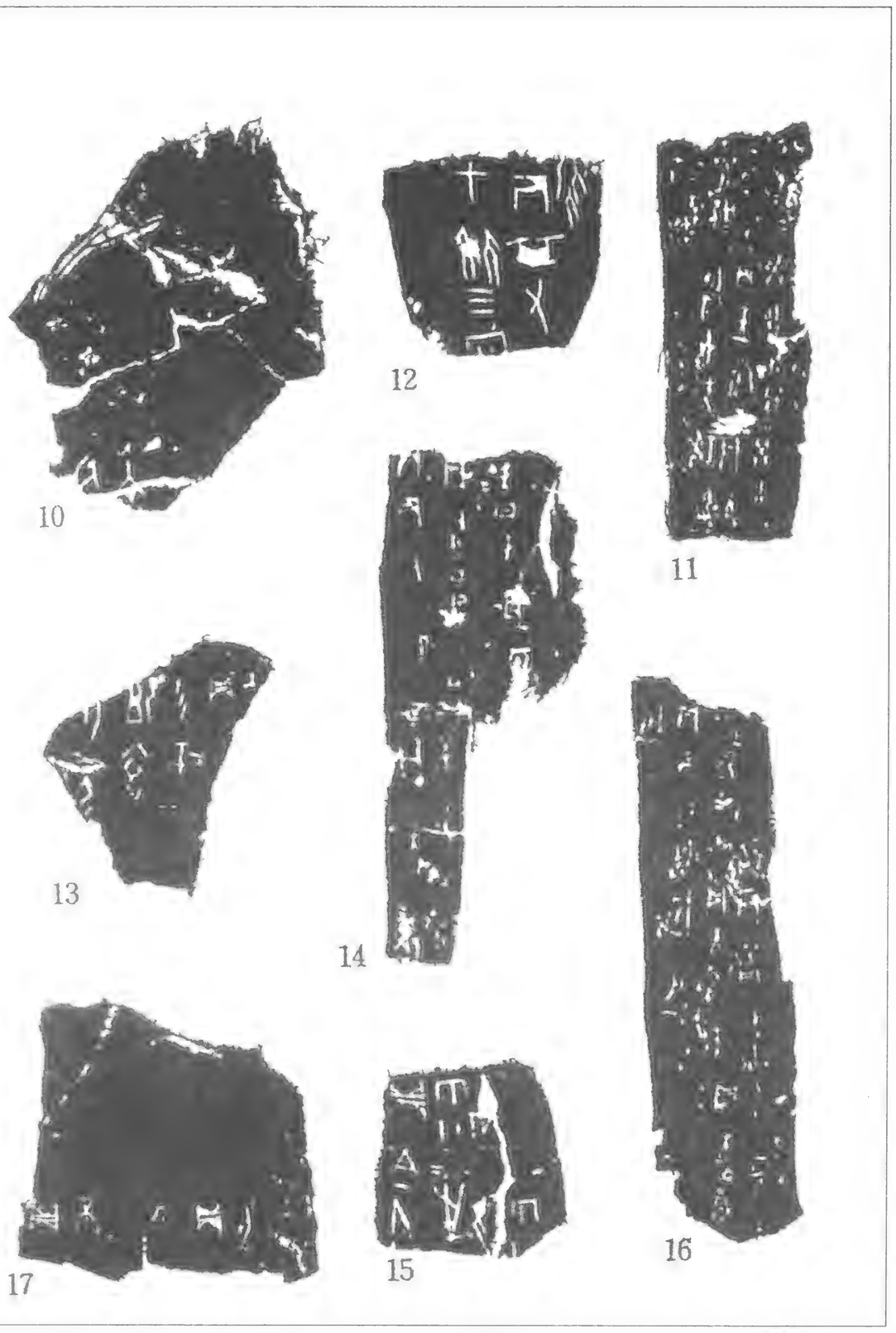
(3) 己亥の日に卜いて貞う、王が𠂤の𣎵に田せんに、往来にわざわいなきか。鹿四と虎三と𠂤四とを獲たり。（左行）

① 右傍は武器の戈を示す文字であり、文字としては武器を所持して行くことを意味する。おそらく軍事訓練を兼ねた示威行動を意味するのであろう。この行動には狩猟に類似したことも含まれていたことは、かつて考証したように、前二・二三・二の資料によって明らかである（拙稿「故小川睦之輔氏蔵甲骨文字」第六片注1東方学報第三十七冊及び貝塚前掲書本文篇頁六五四参照）。

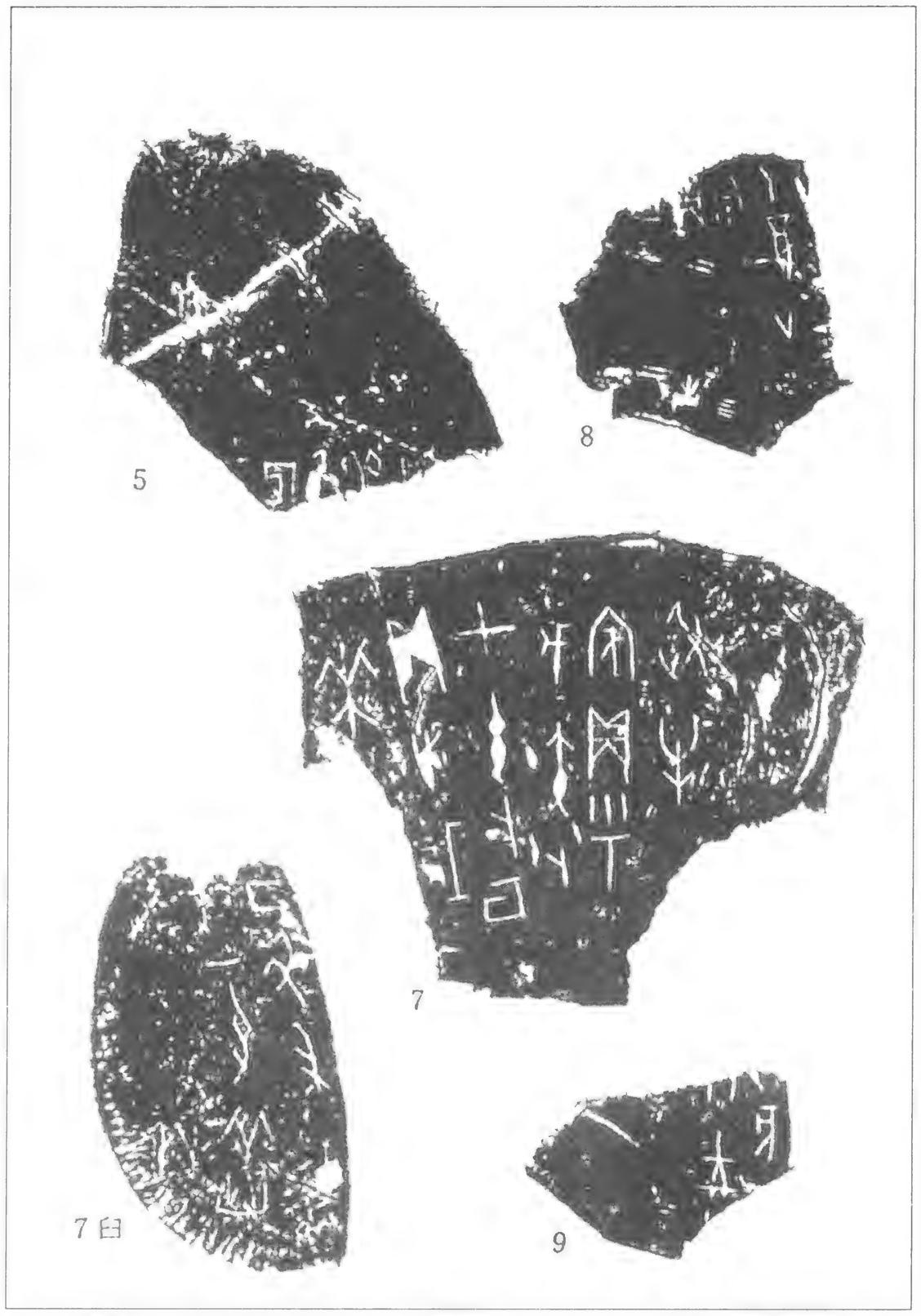
② 前期の卜辞では召(𠆢)と書く。一般には山西省垣曲県附近の地と考えられるが、安陽に近い地とする説もある（郭沫若前掲書第六一五片考釈、白川静「召方考」甲骨金文学論叢第二集、松丸道雄「殷墟卜辞中の田猟地について」東洋文化研究所紀要第三一冊参照）。

③ 𠂤は地名、ほかに鄴初下四〇・七（＝京二二八三）にあらわれる。𣪊の近傍であろう（李学勤『殷代地理簡論』頁三二）。𣎵は麓で、𠂤は丘陵をなした地形であることがわかる。𣎵については拙稿「故小川睦之輔氏蔵甲骨文



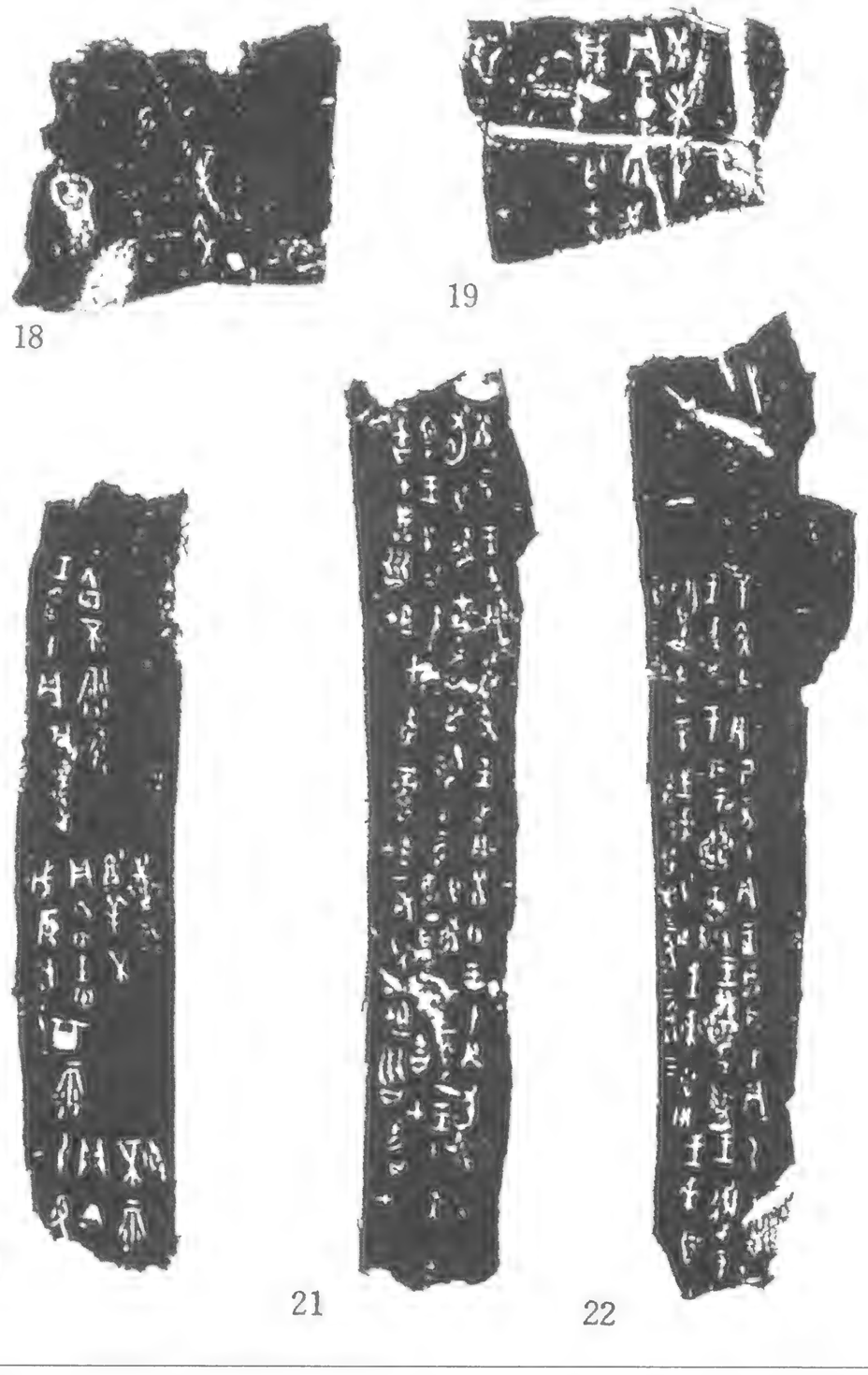


90



89

92



91

あとがき

この度、郭沫若氏の『卜辭通纂』を復刊されるについて、朋友書店の土江澄男氏から、私がこれまでに発表した甲骨文資料を附録として併せ刊行したいとの申し出を受けた。郭沫若氏は、中国古代史研究の先達であり、その書物に、私の論考を例え附録としてとは言え、併せ刊行されることは、後学として面映ゆさを感じないではないが、私の紹介した資料がより広い範囲の方に利用していただける機会を与えられると考え、土江氏の御厚意をお受けすることにした。

一九四九年、私が甲骨文研究に従うようになったとき、貝塚茂樹先生から、最初に読むべき書物として、教示を受けたものが、この『卜辭通纂』であった。拓影を透写しては、郭氏の考釈と対照し、一つ一つの文字を覚え、郭氏の明解な考釈に魅せられた当時のことは、今も忘れることはできない。その時から二十余年を経た現在では、多くの資料数とその考釈、或いは研究書が出版されている。我が国でも、貝塚茂樹氏の『京都大学人文科学研究所藏甲骨文字』には三千余片の甲骨文資料とその全考釈が含まれているし、その考釈の一部は私も執筆したものである。

しかし、現在、甲骨文研究の最初に読むべき書物はと問われたとき、これらの新しい書物を挙げるかといえば、必ずしもそうではない。『京都大学人文科学研究所藏甲骨文字』の考釈には、読み下し文が附してあるので、とくに日本の研究者には適しているように考えられるが、最も適したとは言えないのである。

その理由の一つは、資料の内容に偏りがあるという点である。この資料は、故上野精一、故黒川幸七両氏旧藏品を中心とするものであるが、これらは骨董商を通じて購入された際、甲骨文の内容による選別が行なわれたものではないため、偏りがあることは避けられない。この点はすべての資料集に大なり小なり当て嵌まることではあるが。これに対して、『卜辭通纂』は、郭沫若氏が『鐵雲藏龜』や『殷虚書契前編』など七編の資料集から選別して集められたものであるので、各種類の内容の甲骨文が通覧できるようになっている。この『卜辭通纂』が一九三三年に出版されて以来、ほぼ五十年を経た。その間に、中央研究院歷史語言研究所の発掘による大量の甲骨文資料が、『殷虚文字』甲編、乙編として発表され、そのほかにも多くの資料集が出版された。しかし、甲骨文資料の内容的な種類という面からすれば、特に種類が著しく増加したとは言えず、基本的なものは、大部分すでにこの『卜辭通纂』に含まれているといっても過言ではない。

その第二の点は、この『卜辭通纂』の考釈が、簡にして要を得ているということである。この書物が出版されてより以後、甲骨文資料の解読研究はそれなりに進んだことは事実であるし、またそれを基礎にした歷史的な研究も進んだ。それによって郭沫若氏の解釈を訂正することになった点があることも事実である。しかしそれだけに、解読は勢い詳細になり、特殊研究化し勝ちである。そのため、甲骨資料の全体を概観することが困難になりつつある。そのため最近の資料解読に最初に踏み込むことは危険である点がある。また一方陳夢家氏の『殷虚卜辭綜述』や島邦男氏の『殷墟卜辭研究』など、甲骨文資料の性格、問題を概括的にとりあげた書物もある。これらの書物は研究書として非常に重要なものではあるが、これらを入門書とすることには、私としては賛成できない。その理由は、最初にこれらの書物によって概念的に甲骨文資料に接することは、あの甲骨文学のもつ独特な形象的世界に自己を没入させることが困難になるからである。こういった面から見ても、この『卜辭通纂』の図版と考釈とを対照させながら、甲骨文資料のもつ世界に入ることを現在でもやはり第一とすべきことであると言えよう。若しこの書物と併せ読むべきものと言えば、董作賓氏の「甲骨文斷代研究例」であり、郭氏のこの書物とともに、依然として甲骨文研究に際して最初に読むべきものとしての重要性をもっているのである。それは兎も角として、現在では殆んど入手不可能になったこの書物が復刊されることの意義は、以上に述べて来たことからも、その重要性がおわかりいただけたものと思う。

ところで、この『卜辭通纂』の郭沫若氏の自序によると、郭氏がはじめに企図された書物は、このような形式ではなく、当時我が国に多数将来されていた甲骨文資料の集成であった。滞日中であった郭氏は、東京・京都において、公私の諸家に所藏される約三千片の甲骨文資料を探訪し、さらになお多数の資料があることを耳にし、これらを集成して出版することを企図されたのである。自国の貴重な資料が多数異邦に渡っているのを目にし耳にした郭氏とすれば、これを自己の手で出版することを考えられたのも当然である。しかし主として拓影など技術的な障害のため、早急に実現することが不可能であることが明らかになり、その最初の意図は変更されて、いまの『卜辭通纂』の形となり、その附録の二に「日本所藏甲骨擇尤」として七十七片が載せられるに止まったのである。

この郭氏の最初の意図の一部は、のちに金祖同氏によって、『殷契遺珠』として果たされた。その後、戦争のためにこのような事業は全く停止してしまったが、一九五一年に雑誌『甲骨学』が発刊されると、日本の研究者によって、我が国に現存する甲骨文資料を調査し、公刊して、学界の共有の資産としたいという気運が高まって来た。その後も『甲骨学』には松丸道雄氏らによって、毎号新資料が調査紹介されているし、さきにふれた『京都大学人文科学研究所藏甲骨文字』はその最大のものである。私もこれまでに五家所藏九十七片の甲骨文資料を調査紹介した。勿論我われの意図は、おそらく郭氏の意図されたところとは完全には一致しないものがあろうと思う。しかしこれらの仕事によって多数の資料が公表され、学界の共有のものとなり、研究に資することができるようになったことは、郭氏の意図の一部は果たすことになったのではないかと思う。

この度、土江氏が、私の先に発表した五編を、改めてこの『卜辭通纂』に併せ再録されることを考えられたのは、私の紹介文がいずれも紀要など限られた分野にしか公表されない誌上に載せられたものであるため、この機会により広い範囲の方に公表することによって、併せて郭氏の最初の意図に多少なりとも副いたいと考えられたからであろう。すでに発表してより十年以上を経過したものもあり、補訂すべき点もあるが、それらは各編末尾に補注としてあげるにとどめた。現在、私の手許では、天理大学に附置される天理参考館所藏の約六百片の甲骨文資料がほぼ基礎的な整理を終っている。両三年中に拓影、考釈を併せて学界に紹介したいと考えている。甲骨文資料を所藏される方には、調査、公表の便を与えて下さるよう、この機会に併せて御願いする。

最後にここに収めた五編のもとの掲載誌と発表年月をあげておく。

故小川睦之輔氏藏甲骨文字　東方学報京都第三十七冊　一九六六年三月

大原美術館所藏甲骨文字　倉敷考古館研究集報第四号　一九六八年一月

藤井有隣館所藏甲骨文字　東方学報京都第四十二冊　一九七一年月三

檜垣元吉氏藏甲骨文字　神戸大学文学部紀要Ⅰ　一九七二年一月

関西大学考古学資料室藏甲骨文字　史泉第五十一号　一九七七年三月

大原美術館所蔵甲骨文字

こゝに紹介する39片の甲骨は、昭和41年に大原美術館の所蔵するところとなったものである。中國製の立派な木箱に、四段の引出しに各10片が分けて収められている。たゞし、そのうちの1片は偽刻であるので、こゝには論じない（たゞし参考として図版にはあげる）。この39片のうち、38片はすでに金祖同『殷契遺珠』（1939年）に、東京の堂野前種松氏の蔵として紹介され、さらにうちの9片は、商承祚『殷契佚存』（1933年）中に収められる北京の孫壮氏所蔵の拓本のうちにふくまれる。また『殷契遺珠』に載せられなかった1片は、松丸道雄「日本散見甲骨文字蒐彙」三（甲骨学第9号）に東京の白川一郎氏蔵として紹介されている。堂野前氏より、現在に到るまでの経過については、この松丸道雄氏の文によって知ることが出来るので、いまこゝではふれない。

この39片は、金祖同氏の『殷契遺珠』の序によると、昭和13年（1938年）には、すでに堂野前氏の所蔵になっていたことが知られる。しかも9片は『殷契佚存』に、金石学者であった北京の孫壮氏の蔵拓として収録されているから、1933年にはすでに掘り出されていたことがわかる。しかも1928年から1937年にかけては、中央研究院による殷虚発掘が行なわれているので、これらの甲骨は1928年以前に盗掘されたものであることがわかる。

そこで、これらがどのような来歴をもつものであるかを知るためには、この39片の内容と他の既刊資料との比較が必要となる。この39片の所属時代は、第1期が3片、うち1片は王朝卜辞とは別個の集団に属するもの、即ち王族卜辞とよばれるものである可能性が強い。また24片は第Ⅲ・Ⅳ期に属する。うち1片は或いは王族卜辞にふくまれる可能性がある。残りの12片は第Ⅳ期に属するが、うち数片は第Ⅲ・Ⅳ期としてもよいと考えられるものであるが、厳密な区別をすることが出来ない点があるため、一応第Ⅳ期としておく。これらのうち、最も特色となるものは24片（或いは23片）の第Ⅲ・Ⅳ期卜辞である。この期に属する卜辞で、既刊資料に見られるのは、郭沫若『殷契粋編』（1937年）、胡厚宣『戦后南北所見甲骨録』（1951年）のうちの明義士旧蔵分、及び貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』（1960年）中の上野精一氏旧蔵分が最も多い。したがって、『殷契粋編』にのせられる劉體知旧蔵のものや、明義士、上野精一氏旧蔵のものと、関係が近く、1925年、1926年に、小屯村中及びその北（宮殿址のあった砂丘と村の聚落との間）で行なわれた村民の盗掘によって入手されたものであることが推定されるのである。

しかも最も興味ある点は、39片のうちの第6片が、京都大学人文科学研究所蔵の第1806号と接合されることである。これは上野氏旧蔵のものであり、これらが同時に盗掘された可能性が強いことを示すものである。また大原美術館の第23片がすでに羅振玉『殷虚書契』第2巻第20葉5号として著録されていることも重要である。上野氏の旧蔵甲骨は羅振玉の手を経たものであることが明らかになっているので、大原美術館の甲骨も、おそらく羅振玉の手を経たものと考えられるのである。

さきにあげた大原美術館第6片と接合される人文科学研究所の第1806号は、もと中国製の精巧な手提箱におさめられていたが、実は手提箱は同じものが二個あり、この二つは同時に作られたものである。第1806号はそのうちの一つに収められていたのであり、別の一つに収められていた第3031号が『殷虚書契』第4巻第19葉7号に著録されているのである。即ち、第6片と接合された第1806号も、かつて羅振玉の手を経た可能性があることを示しているのである。したがって大原美術館の甲骨をも含めて、これらがかって羅振玉を経て将来されたものであることがわかる。しかも上野氏旧蔵のものは、大正15年から昭和2年、即ち1926年から1927年のうちに、羅振玉の手をはなれ、貴司弥三郎氏の手をえて、上野氏に帰したものであることがわかっているので、おそらく、大原美術館の甲骨も、殆んど同時に堂野前氏の手に入ったものと推定出来る。

以上述べ来たところをまとめると、大略次のようになる。1925年・1926年に、小屯村中及びその近辺で行なわれた盗掘によって得られた甲骨は、そのうち非常に多くのものが明義士の手に帰した。のこりのものは上海の商人によって羅振玉や劉體智に売られた。そのうちの可成りのものが、さらに我が国に将来され、1927年には上野氏の手に帰し、またある部分が堂野前氏など数氏の所蔵となったと云うことが出来るのである。而して、『殷契佚存』にのせられた拓本は、羅振玉が所蔵していたときにその拓本が孫壮氏に渡ったものと考えられるのである。なお1940年頃に小屯村中において、一大坑から盗掘された甲骨は、すべて第Ⅲ・Ⅳ期のものであり、うち688片が胡厚宣『戦后寧滬新獲甲骨集』（1951）の第1巻として刊行されている。このことから考えても、村中に埋蔵されている甲骨は、第Ⅲ・Ⅳ期が非常に多いことがわかる。

ところで、こゝで問題になるのは、大原美術館の第27片の甲骨である。これは、その考釈では第Ⅲ・Ⅳ期としておいたが、実は王族卜辞に属する可能性があるものであったのである。貝塚茂樹氏は、第Ⅲ・Ⅳ期の甲骨文の特色として、その王字は  に作られ、  、  に作るものはないと云われている。しかるに本片の王字は、に作るのであり、貝塚氏は、この字形をもつものを王族卜辞として分類している。たとえば人文科学研究所蔵第3222号がそれであり、これは卜辞の内容も、干支を別とすれば、全く同じである。しかもこの内容の卜辞は、各時期に普遍的に見られるものではなく、可成り限定されているのである。したがって、この二つの例は、同時期同集団のものとしたほうが、無理がないと考えられるので、第Ⅲ・Ⅳ期とするか、或いは王族卜辞とするか、何れかに決定する必要がある。大原美術館の第27片を第Ⅲ・Ⅳ期と決定したのは、やはり同じ内容の甲骨が、さきにふれた『戦後寧滬新獲甲骨集』第1巻第12号を中心とした資料に見えるからである。

ただしなお問題は残っている。それは人文科学研究所蔵のうちの王族卜辞とした第3091、第3092、第3095、第3097も同じものであるが、これらはいづれも亀甲片であることである。従来発見されている卜辞のうち第Ⅲ・Ⅳ期に属するものには亀甲がなく、すべて牛骨片であるのに対して、いまあげた諸片を同じグループとして一括すると、第Ⅲ・Ⅳ期のものに亀甲がふくまれるようになり、今后この期のものを考える際にそれを考慮する必要が生ずる。しかし王族卜辞は、従来村北に出土すると考えられていたが、『小屯』乙編下に収録されるものを見ると、中央研究院の発掘区域C区の最南端、即ち丙組基壇の地域の下層に分布していることがわかったので、王族卜辞もさらに小屯村の北側にかけて分布していた可能性があり、それが第Ⅲ・Ⅳ期卜辞と同じ時に掘り出されたと考えることも出来るのである。

この第Ⅲ・Ⅳ期卜辞というのは、時期の上から見ると、第Ⅲ・Ⅳ期に限定されるのではなく、早いものは第Ⅱ期後半の祖甲時代に及んでおり、遅いものは第Ⅳ期に及んでいる。したがって、この第Ⅲ・Ⅳ期として呼んでいる甲骨は、実は第Ⅱ期後半から、存在していたのである。しかも第Ⅱ期，第Ⅲ期，第Ⅳ期には、それぞれ別個の甲骨文が存在しているのであり、この三期間にわたって、二つの性格をもった甲骨が併存していたことになる。即ち第Ⅱ期，第Ⅲ期には、それぞれ独自の貞人群の署名をもった甲骨文があり、それに対して、第Ⅳ期には、大字の干支貞形式の甲骨文があった。これに対して第Ⅲ・Ⅳ期形式は、字体のうえでは第Ⅲ期，第Ⅳ期にそれぞれ通じるものをもっているが、甲骨文の形式では干支卜形式を中心とし、これに干支卜貞，干支貞形式をともなったものとして併存していたのである，勿論この第Ⅲ・Ⅳ期形式を第Ⅲ期後半の康丁時代に限定し、従来の第Ⅲ期といわれるものを、前半の廩辛時代におく説もあるが、大原美術館第11片から見ても、それが康丁時代に限定出来るものではなく、またこの群では第Ⅱ期前半の祖己・祖庚を、見己・見庚とよんでいることから見ても、第Ⅱ期の後半にはじまることがわかるので、以上のように限定することが出来ないのである。

たゞ貝塚氏も指摘されるように、この第Ⅲ・Ⅳ期形式の甲骨文には、第Ⅳ期干支貞形式の甲骨文の前駆的性格があるので、全く別個のものとすることは出来ないが、第Ⅱ期後半から、貞人署名形式或いは干支貞形式の甲骨文――王朝卜辞と云うことが出来る　――とは別個の意味をもっていたと云うことが出来る。

ところで、所謂王族卜辞は、第Ⅰ期武丁の私的な集団において行なわれた甲骨文であり、第Ⅰ期王朝卜辞とは別個のものと考えられる。しかもこの王族卜辞は、実は第Ⅰ期に限定されるのではなく、第Ⅱ期にまで及んでいるのである。したがって第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけても、王朝卜辞とは別個の集団の卜辞が併存していたのである。以上から見て第Ⅰ期から第Ⅳ期にかけて、王朝卜辞とは別に、“アウトサイダー”として王族卜辞と第Ⅲ・Ⅳ期卜辞が存在していたのであり、しかも、この王族卜辞と第Ⅲ・Ⅳ期卜辞とは時代的に連続するものであること、またその出土の地域でも接近するものであったことがわかるのである。現在この二つの卜辞の内容を詳細に比較する余裕はないが、今后の研究における一つの問題としてよいのではないかと考えられる（末尾附記1参照）。

大原美術館所蔵のうち、他の第Ⅳ期としたものは、以上にのべてきた第Ⅲ・Ⅳ期のものと同時に出土したものと考えられるが、第Ⅰ期のものは、別の時に、他処で掘り出されたものが羅振玉の手もとか或いは盗掘した農民によって第Ⅲ・Ⅳ期のものとあわされ、一つの箱に収められることになったものと考えられる。（註）

そのほか大原美術館所蔵甲骨のもつ個々の問題は、それぞれの考釈においてふれるが、全体として見ると個々の文字の釈字は、不明のものが多く、その点で解読があまり充分に行なわれたと云えない。しかし問題は個々の文字の釈字のみにあるのではなく、実は甲骨文そのものの構成がよく研究されていないところにあるのである。釈字のみに限定すれば、これまでに多くの研究がなされている

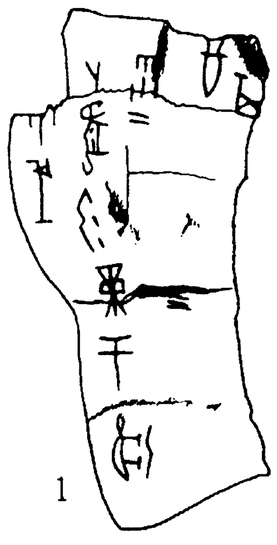
のであるが、用例が増加するにつれて、それでは意味の通じ難いものが多くなって来たのであり、今後は、個々の文字の釈字の場合も、単に字形・音からするばかりでなく、構文上に占める位置などについても、用例を比較することが必要となって来たのである。この点は今後の大きな課題となるものである（末尾附記2参照）。

なお本稿は昭和41年度科学研究費による成果の一部である。

（註）商承祚『殷契佚存』、金祖同『殷契遺珠』、胡厚宣『戦後南北所見甲骨録』、同『戦后寧滬新獲甲骨集』、貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇の各序論、及び胡厚宣『五十年甲骨文発現的総結』（1951年）、松丸道雄「日本散見甲骨文字蒐彙」（三）、陳夢家『殷虚卜辞綜述』（1956年）第四章によったものである。

最後に以下各片の註釈中に引用した資料の略号表をあげる。

乙	殷虚文字乙編上中下三冊
文	甲骨文録一巻
甲	殷虚文字甲編一冊
甲釈	殷虚文字甲編考釈一冊
京津	戦後京津新獲甲骨集四巻
人文	京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字二冊
佚	殷契佚存一巻
前	殷虚書契前編八巻
南北	戦後南北所見甲骨録三巻
輔	輔仁大学所蔵
明	明義士旧蔵
後	殷虚書契後編二巻
珠	殷契遺珠二冊
菁	殷虚書契菁華一巻
寧	戦後寧滬新獲甲骨集三巻
続	殷虚書契続編六巻
粋	殷契粋篇



1

1　第Ⅰ期祭祀類　　珠647　　亀腹甲

a　庚戌卜、豹　勿帝・于滴　、雨。

b　□酉王、其□。

a　庚戌の日に卜なうに、豹が滴に帝することなく、雨ふるか。

イ　豹字は、ときに虎字と混同して解されている。例えば胡厚宣『殷代封建制度考』（甲骨学商史論叢初集）は、虎（）方という国名の虎と冒侯豹の豹とをともに虎と解しているが、この二字は、孫海波『甲骨文編』以来の説にしたがって、区別すべきものである。本片の豹字が

2　第Ⅰ期方国類　　珠685　　牛胛骨

a　乙□酌□

b　庚子易日ㇾ。

c　貞、勿乎ㇺ望ㇵ呂方ニ。

b　庚子の日は、曇り日なるか。

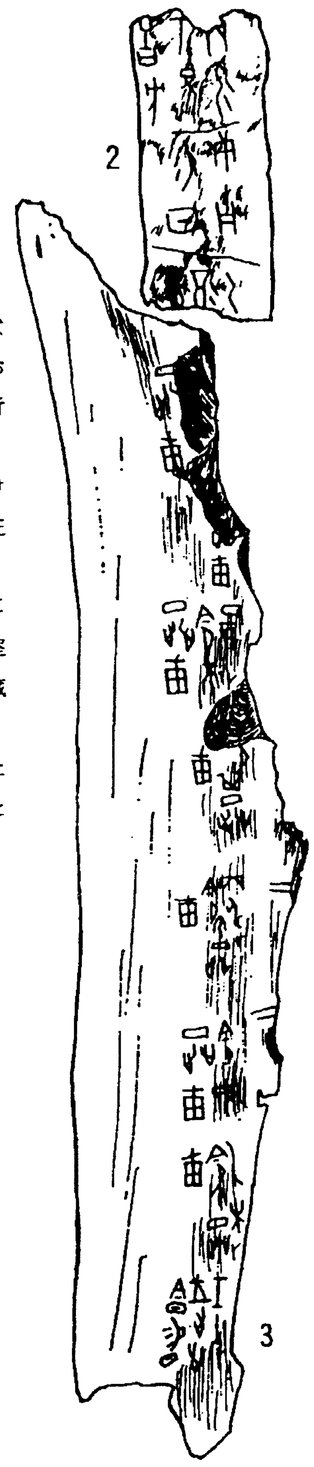
c　貞う、望を呂方に呼ばんか。

イ　易とは暘の省略形で、日が雲にかくれ、わづかに現われる状態であると云われる（郭沫若「易日解」古代銘刻彙考）。なお本条は、庚子の日に卜問されたのではなく、それより以前に行なわれたもので、卜日などが省略されたものと考えられる。

ロ　一般に呼字と解されているが、たゞ単に「ヨブ」というだけの意味ではなく、「乎伐」などと熟語にされることがあり、征伐させることを意味していると思われる。

ハ　望乘とも書かれ、殷の西、或いは西南にあった国族で、殷に服しており、下危或いは呂方などを征伐している。また殷王室の祭祀に参加している（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁212、商承祚『殷契佚存』875考釈）。

ニ　第Ⅰ期武丁時代にあった強国で、盛んに殷の辺境に侵入したり、或いは殷の征伐を受けている。山西の黄土台地上にあったと考えられる。



3　第Ⅰ期ㇾ方国類　　佚97，珠648　　牛胛骨

a　壬午卜、王歩、今日易日。

b　乙未卜、今夕不𩐠。亩ㇵ。

c　今夕□ニ𩐠亩。

d　丙申卜、今夕不𩐠亩。

e　𠂤夕其𩐠亩。

f　丁酉卜、今夕不𩐠亩。

g　𠂤夕𠂤𩐠亩。

h　𠂤𠂤卜、𠂤夕𠂤亩𩐠。

a　壬午の日に卜なう、王が歩するに、今日は易日なるか。

b　乙未の日に卜なう、今夕に亩を𩐠せざるか。

c　今夕にそれ亩を𩐠せんか。

使用されるのは、侯豹或いは宮侯豹の場合に多い。しかもいづれも第Ⅰ期の甲骨文に限られるので、侯豹や本片の豹は宮侯豹のことであると考えることが出来る。宮侯は殷に服属した国であり、「命宮侯帰。」（珠455）即ち「宮侯に命じて帰らしめんか」、「貞、亩侯豹従。」（佚375）即ち「貞う、これ侯豹が従がわんか」などの例から見て、殷王の命を受けていたことがわかる。また豹というのは、この宮侯の個人名であると解されており、したがって本片は、宮侯を省略したものである。たゞし甲骨文には族名や個人名が同じ文字で表現され、個人名を使用した例は余りなく、本片などの豹も果して現在我々の使用する個人名と同じものであるかどうかについては、問題が残されている。しかしこゝでは一応宮侯豹と同一人物とし、文意は豹が滝に禘祭を行うが、その際に雨がふるか否かを卜ったものと解する。

ロ　帝字には天の神を意味する場合と、禘と云う祭祀を意味する場合とがある。本片は後者の用法である。この祭祀は、風雨や年の稔りに力をもつ自然神に対して行なわれるものである（島邦男『殷墟卜辞研究』第一編第三章）。

滝は、本片では自然神として使用されたもので、その例には「戊午卜、王賓于滝、三宰𡍮。」（南北・輔20）即ち「戊午の日に卜なう、王が滝に賓し、三宰を埋めんか」などがある。この賓（第4片参照）も本来は自然神に行なわれたものと考えられ、また犠牲を土地に埋めるのも、自然神に対する祭祀において行なわれるものである。この滝には地名としての用例もあり、「乙卯卜、争貞、今春命𠂤田従幷至于滝獲羌。」（前7・2・4）即ち「乙卯の日に卜ない、争が貞う、今春に𠂤に命じて、田（かり）せしむるに、幷を従がえて滝に至り、羌を獲んか」によると、王命を受けた𠂤が、狩猟において、滝に至り羌とよばれる異族を捕獲するか否かを卜ったことがわかる。甲骨文では、地名と自然神名とが一致するものが、他にも多くあり、滝という地において祭祀されていた自然神を滝とよんだのである（拙稿「宗教面から見た殷代の二・三の問題」東洋史研究第20巻第3号）。たゞ本片の場合、豹が滝の地に派遣されて祭祀を行なったものか、それとも都において行なったものかは、この卜辞だけからでは明らかでない。

甲骨文には滝以外に龜というものがある。「己巳卜、賓貞、龜𠬜姟。」（乙5269）即ち「己巳の日に卜いて、賓が貞う、龜が姟を得んか」、或いは「貞、龜𠬜。」（前4・54・5）即ち「貞う、龜が提せんか」などは、いづれも族名か若しくは龜族出身の個人を示すものである。この龜は滝字の水を省略したもので、これが本来の地名・族名であり、他の例から見ると、その地の河川を滝として示したものである。したがって滝は水神として考えられていたものであろう。殷代金文に見られる龜形、子龜形、天龜形などの図象文字で示される族記号も或いはこの龜・滝と関係があると考えられる。したがってこの龜の地がどこにあるかを推定することが出来ると興味ある。赤塚忠「鮌・禹と殷代銅盤の龜・龜図象」（古代学第11巻第4号）は、この龜族は、はじめ陝西・山西の界にあり、次第に東進し、殷の滅亡後には山東に移ったとする。本片にあらわれる豹即ち宮侯豹の宮地は、山西省の西南部黄河の屈曲点近くにあったとする説もあるので（島邦男『殷墟卜辞研究』頁423・426）、龜の地は、殷代でも第Ⅰ期の頃には、殷の西南、宮の近くにあった可能性がある。

5　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　佚74，珠688　　牛胛骨

a　于𡍮𡆥ㇾ又大雨。

b　于□𡆥□。

a　𡍮に𡆥するに、大雨あらんか。

イ　この字は、一般に禍・祟の意味をもつと解される。たとえば卜旬卜辞（第37片参照）では普通には「旬亡禍」と書かれるのに、稀れに「旬亡𡆥」と書かれるし、また「旬亡禍」の卜問に対して、禍のあるときには「𠂤（有）𡆥」と書かれる。また「貞、父庚弗𡆥王。」（乙2589）即ち「貞う、父庚が王に𡆥すること非ざるか」のような例では、𡆥即ち祟と同じ意味に使用されている。「丁未卜、争貞、𡆥雨、匄于河。十三月。」（甲釈2949）という文は、島邦男氏によれば、「雨に祟あり、河に祈る」と解されることになる（『殷墟卜辞研究』頁320）。したがって島氏にしたがえば、本条は「𡆥又大雨」即ち「祟りて大雨あり」と解することになる。しかし若しこのように解した場合には、幾つかの疑問点が生ずる。先ず第一に「于𡍮」の二字にかゝる語がないこと、したがって于𡍮とそれ以下との関係が不明確になること、第二にこの時期には卜文の末尾に「又雨」などの語が記されるが、その場合、又字の前の語は多くは動詞で、又以下にかゝるのではなく、前句の意味を決定する働きをもつことが多い。本条で言えば、𡆥と于𡍮とが一句を成し、その意味を決定するのである。そして又以下は、前句のことが行なわれる時の状態を示すか、或いはその結果の状態を示すと考えられる。たとえば「其𡆥年于河𡆥、又雨。」（南北・明424）即ち「それ河に年を𡆥りて𡆥す、雨あらんか」や、「其𡆥年于𡍮、𡆥又大雨。」（南北・明426）即ち「それ𡍮に年を𡆥るに、これ大雨あらんか」などである。これが否定の場合には、「其毎𡆥年上甲、亡雨。」（南北・明427）即ち「それ毎して上甲に年を𡆥る、雨なきか」のように亡雨となる。いまあげた例はすべて祈年祭であり、したがってその祭祀の結果としての雨の有無とも考えられるから、この又雨・亡雨が卜問の中心課題となっているとすることが出来る。また田猟とか往来の際にも又雨などが問われる。その場合は、田猟のときの状況として卜問の課題となっているのである。祭祀の場合にも、必ずしも祈年祭とは考えられないものもあるので、その祭祀の時の状況と解することも出来る場合もある。当時にあっては屋外で行なわれる祭祀が多かったため、雨の有無によって、それが中止されることがあったからである（第16片参照）。ところで、このように考えて来ると、本条は「𡍮に𡆥す」と読むことになるが、しかしこの𡆥を禍・祟の意味と解したのでは通じ難い。そこで郭沫若・商承祚氏らはこの字を𡆥即ち𡆥と同じ意味に解し、さきにあげた甲2949などは「雨を𡆥（𡆥）り、河に匄す」と読む。しかし、𡆥字に𡆥或いは求などの意味を与える根拠は、「𡆥雨」・「𡆥年」などと用例が類似する点以外には認めることは出来ず、商承祚氏は、𡆥と書いたのは誤って書いたものであると説明する（郭沫若『卜辞通纂』359釈、商承祚『殷契佚存』143釈）。しかしこれでは𡆥字の説明とはならないため、楊樹達氏はこの字は殺字の古文であり、殺と歳とは同音であるから、歳の



イ　本片の文字は、普通の第Ⅰ期卜辞ではなく、王族卜辞といわれる一群に属する可能性が強い。その理由は、a条の干支壬午の午字の形、あるいは、その他の干支が、第Ⅰ期卜辞よりは軟かい線であり、王族卜辞の字体に近いからである。しかし第Ⅰ期にもくづれた体もあるので、一応第Ⅰ期としておく。

ロ　𩐠は𩐠にも作る。正字と同じとし、征の意と解されることが多い。しかし最近正字とは区別して、これを囲字とする説が出されている。この場合も、外国に対して行なわれる行為であり、武力による行為と解されている。いづれの意味にとるとしても、この字形が第Ⅰ期と王族卜辞とに限られることは、注意すべき事実である（厳一萍「釈𩐠𩐠」中国文字第15号、たゞし厳氏は王族卜辞を第Ⅳ期後半の文丁時代の卜辞とするが、この説はとらない）。

ハ　甫字とする説もあるが確かではなく、また𠂤・𠂤に作るものと同じであるかも、今一つ確実ではないが、若し、同一であるとすれば、殷の西方にあった地名である（島邦男『殷墟卜辞研究』頁380）。商承祚氏は本片の考釈において、国名としている。𩐠字の対象となっているから、国名か地名であることには間違いない。

ニ　この字の附近は、損傷があり、明らかでない。e条と比較すれば、其字であるが、現在判る範囲では□の形であると見られる。

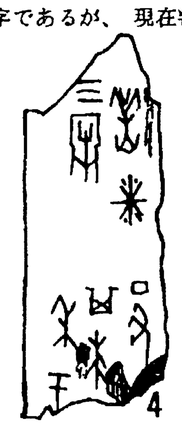
4　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠667　　牛胛骨

a　丁丑卜、其𡆥ㇾ禾ㇺ于𠂤。

b　𡍮ㇵ𡆥ニ三牢。

a　丁丑の日に卜なうに、𡍮に禾を𡆥らんか。

b　𡍮に三牢を𡆥せんか。



イ　神に祈り求める意味の祭祀用語である（郭沫若『卜辞通纂』164考釈）。

ロ　現在の漢字の禾は、第一義はイネとされているが、甲骨文では寧ろ穀類の総称として使用されたとするか、或いは𡆥（年）即ち稔りの意味として用いられたと考える可きである。第Ⅰ期には「𡆥年」と書かれ、第Ⅲ・Ⅳ期、第Ⅳ期では本条のように「𡆥禾」とも書かれている。

ハ　𡍮の字は羔や岳と釈されることもあるが、𡍮即ち羊と山形とをあわせたとする説がよい。これは自然神の一つであり、最も代表的な山岳神であり、それを羊と山形とで表現したものである。稔りや雨などに対する力をもつものと考えられていた。第Ⅰ期・第Ⅳ期など所謂旧派の甲骨文には、頻りにあらわれる（赤塚忠「殷王朝における𡍮の祭祀と中国における山岳崇拝の特質」甲骨学第6号・「殷代における祈年祭祀形態の復元」甲骨学第9号）。

ニ　柴を燃やして祭る儀礼で、古い礼に関する書物では天を祭る儀礼とされている。𡆥の字は𡆥などの形にも書く。𡆥・𡆥は薪を交叉させて積んだことをあらわし、丨の点は火をあらわす。神を祭るには広く世界的に行なわれた儀礼である。

意味として書かれたものと考える（『卜辞求義』一七）。歲は甲骨文では祭祀の一種であるから、まに歲という祭祀をすることを意味するのである。これに対して島邦男氏は、この𡆥字は金文では國名の𡆥字に釈されるから、むしろ祭の意味であるとする。しかし卜辞では、祭字は𡆥に作るのが一般的であり、この𡆥は祭祀一般の意味ではなく、ある特殊な種類の祭祀として用いてられている。しかもこの意味での「祭」というものは、自然神に対して行なわれるものではなく、本来血縁関係のある祖先神に対して行なわれるものであるために、「祭」と同じ音であることによって、本条の如く自然神の祭礼に用いたとするには、少しく無理があるように思われる。※いづれにしても、甲骨文の音韻体系はまだ不明な点が多いので、所謂同音仮借の方法によって解釈することは危険が多い。いづれにしても、二つの用法における𡆥字の統一的な意味は目下の所不明であるが、禍・祟の意味から、禍・祟をとゞめるための祭祀を示すものとして使用されることがあったのではなかろうか。また本条の場合、最初の于字をtoの意味ではなく、fromの意に解し、「まより𡆥（祟）あり」と読むことも一説としては考えられるが、甲骨文の于字に、このような意味上の使い分けを認めるか否かは、また別個の大きな語法論上の課題であり、今後の研究にまたねばならない。

※ 「丁巳卜、行貞、王賓父丁𡆥十牛、亡尤。」（京津3284）即ち「丁巳の日に卜ない、行が貞う、王が父丁に賓して𡆥するに十牛を用いんに、とがめなきや」という例によれば、𡆥という祭祀用語が、父丁に対して使用されていることがわかる。この場合𡆥を「歲」と解することも、「祭」と解することも可能であるが、別個のものとすることも可能である。



6 第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　人文1806＋珠659　　牛胛骨

この骨片は京都大学人文科学研究所蔵の骨片B1806と綴合される。

a 甲戌卜、王其□。

b 叙艸亻。

c 乙亥卜、其𡆥又。于高祖𠂤十牛、王受又𠂤。

d 王受又。

e □彭。

b 艸を叙めんか。

c 乙亥の日に卜なう、それ𡆥りて、高祖に又するに十牛〔を用いん〕、王は又を受けんか。

叙艸の二字は第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけて盛んに使用される語で、古典にいう致福、即ち祭祀に供えた胙肉をすゝめるの意であり、これから一般的な受福、幸福を受ける意に転化したと言われる。第Ⅲ期から第Ⅳ期の卜辞では、大体同一骨版上には同種類のことが卜される、即ちある骨版には祭祀のことのみ、また別のものには狩猟のことのみが卜問されているのである。叙艸の語は、本片のように祭祀関係の骨版に最っとも多くあらわれる

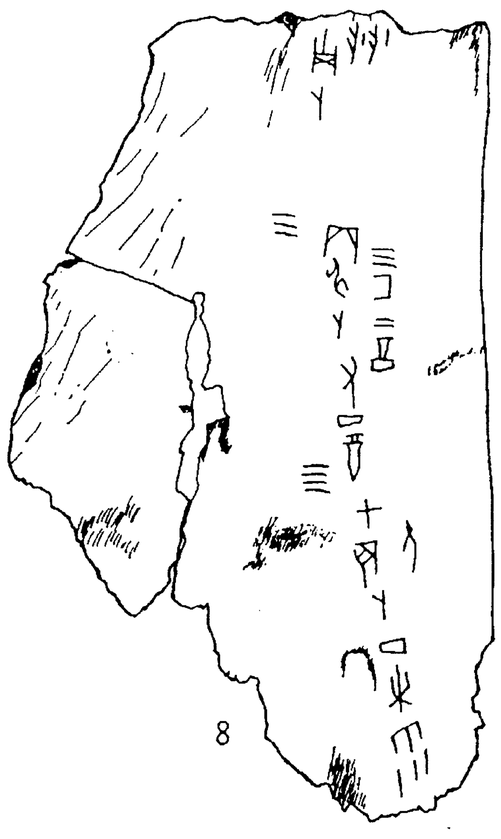
こと、或いは「庚戌卜、何貞、妣辛歲其叙艸。」（「釈叡艸」頁697引）即ち「妣辛に歲す、それ艸を叙めんか」という例から考えると、本来は祭祀に関するものであったことがわかる。しかし第Ⅲ・Ⅳ期卜辞ではすでに狩猟や風雨に関する卜辞にも見られるので、可成り一般化した概念で使用されていたと考えられる。しかも注意すべきことは、この語は長い卜辞の文中にあらわれることはなく、殆んどが叙艸の二字のみで、独立して使用されることである。そのため、この語がある祭祀行為を示す語であるのか、或いは祭祀なり狩猟なりの結果を示すものであるのかを、判断し難いものとしている。たとえば本片でいえば、c条に対してd条では、祭祀の結果を示す「王受又」の語のみが、卜問の対象として書かれている。叙艸もこれと同じような性格をもつものでないかと考えることも可能なのである。またこの語の第Ⅴ期の形式であるとされる延艸という語についても、董作賓氏は「亡尤」（「とがめなきか」）、「亡災」（「わざわいなきか」）という語と同じもので、祭祀・田猟の結果を示す語と解し、「亡尤」「亡災」が凶を否定する形をとるに対し、「延艸」は吉の形で卜なうものであるとする。「戊申卜、貞、王田于温麓、往来亡災。𢦏御。隻兕一𤰔三。其延艸。」（前2・28・3）という場合、王が温麓に狩猟をするについて、災のなきを卜問したのである。その卜いに吉の判定を得たので、𢦏御即ち王が狩を行なったということを書き、さらにその獲物として兕を一頭、𤰔を三頭えたことを記録したのであり、その最後に狩猟の総結論として福を受けたと書いたと解する。この場合「延艸」は「亡災」と対になると考えることは出来る。しかし董氏が「亡尤」の対としてあげた「貞、王賓□延艸、亡尤。」（前6・12・3）即ち「貞う、王が賓し……延艸するに、とがめなきか」という例は、一般の第Ⅴ期の祭祀卜辞の体例から考えると、延艸の二字は祭祀行為としなければならず、「亡尤」は寧ろその結果として考えられるもので、延艸と亡尤とが、同じことの吉凶両面の語として使用されるのではない。したがってこの叙艸・延艸の厳密な意味は、依然として決定し難いのであるが、こゝでは一応貝塚茂樹氏の読みにしたがい「さいわいをすゝめんか」と読み下しておく（『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁462）。董作賓「釈叡𣪘」安陽発掘報告第四期、李孝定『甲骨文字集釈』第三冊頁0973𢦏字の項参照。

ロ 甲骨文における又字には、幾つかの意味がある。左右の右、有無の有、神祐の祐、侑食の侑であり、いづれも同音であることによって通用する。こゝは祭祀の儀礼の一つで、侑食の侑と考えられている。

ハ 殷代の王系表を見ると、上甲以下の諸王がすべて十干を王名に使用しているのに、それ以前の諸王にはこのようなことは見られない。王亥とか帝𡆥などがそれにふくまれ、これらを先公とよんでいる。しかし第1片や第4片に見られる𡆥などの自然神と先公とは、甲骨文に見られるところでは、その神格に区別はなく、むしろ先公も本来は自然神の一つであったと解す可きものであった。それが第Ⅳ期頃から次第に血縁関係をもった祖先として考えられるようになり、高祖王亥とよばれたりするようになる（拙稿「卜辞に見える祖霊観念について」東方学報京都第26冊）。本条の高祖は、ある特定の一人をさすのか、高祖全般をさすのかは

丁との関係は、直系先王全体と、直系先王中の最後の父丁のみとの対卜と考えることが出来るのである。したがって大示の意味は、陳氏の説のほうが妥当である。また金氏のように大示を大宗、小示を小宗と解することにも疑問がある。「己丑卜、在小宗又𡆥歲自大乙。□亥卜、在大宗又𡆥伐三羌十小𡆥自上甲。」（佚131）即ち「己丑の日に卜なう、小宗に在りて、又𡆥し歲するに大乙よりせんか。□亥の日に卜なう、大宗に在りて、又𡆥し、三羌を伐し、十小𡆥を〔用いるに〕、上甲よりせんか」のごとく、小宗において大乙以下、大宗において上甲より示癸までの六王を祭ったと解される。即ち大宗が上甲より示癸まで、小宗が大乙以下に関係しているのである。これに対して「乙未貞、其𡆥自上甲十示又三牛、小示羊。」（後上28・8）即ち「乙未の日に貞う、それ𡆥るに上甲より十示又三に牛、小示に羊〔を用いんか〕」によれば、上甲より祖乙までか、或いは上に述べたように上甲より祖甲までの十三王に対して、小示が別にあげられている（池田末利『殷虚書契後編釈文稿』頁133）。この二つの資料を比較すると、大示・小示と大宗・小宗とが同じものでないことは明らかである。また報乙より示癸までの五王は別に一括してとりあげられることはつぎの第8片の資料によってもわかる（拙稿『古代殷王朝のなぞ』頁53）。補1

8 第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠628　　牛胛骨



a 戊亻子卜、𩅦。。

b 丙申卜、又三𠂤二示𠂤。

c 丁酉𠂤。

d 甲辰卜、丁未雨。允𠂤。

a 戊子の日に卜なう、𩅦ふるか。

b 丙申の日に卜なう、三𠂤二示に又せんか。

c 丁酉の日に〔又せんか〕。

d 甲辰の日に卜なう、丁未の日に雨ふるか。まことなりき。

イ 同一骨版上に複数の日付がある場合には、骨版の下部からはじまり、次第に上に及ぶのが一般的な習慣であるが本片は上部からはじまる。したがってa条の戊は、b条の丙申の前にあり、しかも丙申に最も近い子の日である戊子の日と推定した。

ロ この版では羽の部分しか残らないが、その上部にわずかに冂が刻線の一部として残っているので、𩅦字であることがわかる。雨と羽とからなる。意味は雪である。京津3115には「壬寅

明らかでない。

ニ この場合の又は天祐の祐であり、神から与えられるものである。第Ⅰ期や第Ⅳ期の甲骨文では、主として外国征伐のさいに、帝即ち上天の神からあたえられる祐助として、考えられている。これに対して、第Ⅲ・Ⅳ期の卜辞では、祖先（高祖も先王も含む）に対する祭祀の結果として祐助を受けるか否かゞ卜問されることが多い（拙稿「卜辞に見える祖霊観念について」）。

7 第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠654　　牛胛骨



□子卜、𢦏亻自大示。□𡆥。

□子の日に卜なうに、𢦏するに大示より……𡆥らんか。

イ 𢦏の原形の𠙵は血滴であり、八は几であると言われる。即ち血を几上にたらして祭ることと言われる（島邦男『殷墟卜辞研究』頁304）。第13片註ロ参照。

ロ 金祖同氏はこの大示を大宗と同じく上甲・報乙・報丙・報丁・示壬・示癸の六先王（先公とも言い得る）を意味し、小宗を大乙以下の先王と解している（『殷契遺珠』631・654考釈）。これに対して陳夢家氏は大示を上甲以下父王に至る歴代の直系の先王をさすと言う（『殷虚卜辞綜述』頁466）。ところで南北・明655という第Ⅲ・Ⅳ期の甲骨文には「a弜𡆥其告于十示又四。b壬申卜、𡆥于大示。c于父丁𡆥。d□酉𡆥于大示。」即ち「a𡆥るにそれ十示又四に告げるに弗ざるか。b壬申の日に卜なう、大示に𡆥らんか。c父丁に𡆥らんか。d□酉に大示に𡆥らんか」とあるごとく、十四示（a）と大示（b）、父丁（c）と大示（d）とが対に卜されている。この父丁は第Ⅲ期の王康丁のことであるから、この資料は第Ⅳ期武乙の時のものであることがわかる。陳夢家氏はこの十四示を祖乙より康丁（＝父丁）までの直系・傍系の十四王即ち祖乙・祖辛・沃甲・祖丁・南庚・陽甲・盤庚・小辛・小乙・武丁・祖庚・祖甲・廩辛・康丁（下線は大示にもあるもの）のことゝ解してこれを小示とし、大示をこれとは別の上甲以下康丁までの直系十九王即ち上甲・報乙・報丙・報丁・示壬・示癸・大乙・大丁・大甲・大庚・大戊・仲丁・祖乙・祖辛・祖丁・小乙・武丁・祖甲・康丁と解した。しかし大乙より康丁までの十三王に上甲を加えたものが十四王即ち十四示であるとすることも出来る。たとえば第Ⅳ期の資料には「□未卜、𡆥自上甲・大乙・大丁・大甲・大庚・大戊・中丁・祖乙・祖辛・祖丁十示牢牡。」（佚986＋甲2282）即ち「□未の日に卜なうに、𡆥るに上甲より大乙……祖丁の十示に牡を牢せんか」とあり、報乙より示癸までを除いているのである。これと同様に考えると、上甲と大乙以下康丁（＝父丁）までの十三王、計十四王が十四示であるとすることが出来、とくに十四示を大示と別個のものとする必要はなく、十四示と大示との対卜は、報乙より示癸までを含むかどうかにあったと考えることが出来る。また大示と父

祀とよばれる祭祀体系のみは、可なり明らかにされているが、それ以外のものに関しては具体的な内容を考えることは、まだ困難な情況である。

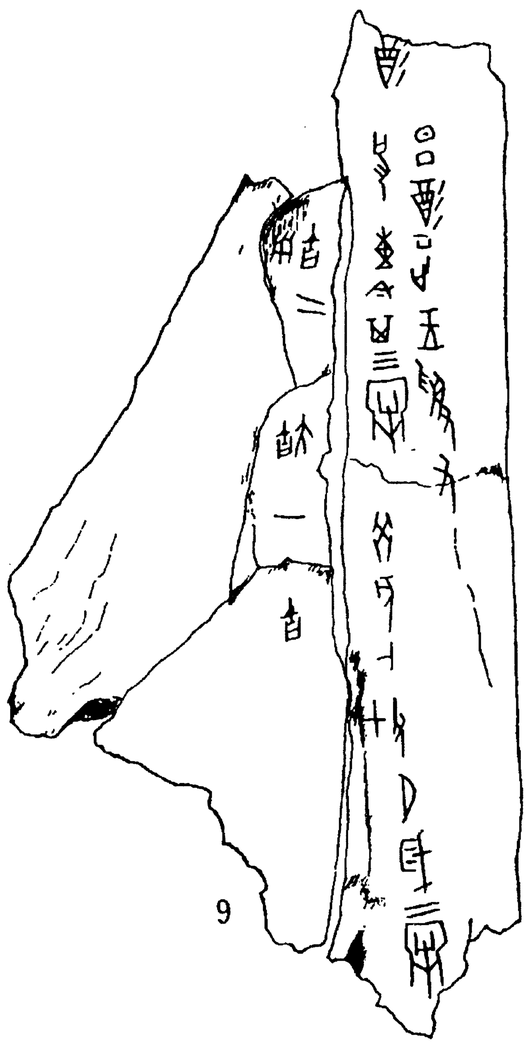
ハ　吉はａ条の卜問に対する判定の語であるが、ｂ条の大吉、ｃ条の吉用ともに、この判定の書かれている部分は破損しているため、佚166・珠625ではともに省略されている。

ニ　ｂ条は三字より成る文で、前文は省略されているが、ａ条の二牢に対して、さらに三牢では如何と卜ったものである。『殷契佚存』の釈文はこの句をｃ条と混じ、祝𢀛今其三牢日丁……に作り、また『殷契遺珠』ではｃ条の王受又を本条に入れ、其三牢王受又としているが、いづれも、この時期の他の文例と比較すれば、誤りであるとしなければならない。

ホ　この時期には、癸亥卜という場合には十二支も必らず書かれているが文中の場合は、十二支を省略して、十干のみで日示すことが多い。

ヘ　この字は、酎であり、酒を用いる祭りと解されてもいるが、「丙午卜、賓貞、禋八羊眾酌卅牛。」（京都0083）即ち「丙午の日に卜ない、賓が貞う、八羊を禋し及び卅牛を酌せんか」によると、禋と酌とが対になって居り、寧ろ犠牲を處理する方法と解しなければならない（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁167）。また正字は、祭祀上の用語であるが意味は明らかでない。また最近足字に釈する説もあるが（金祥恒「釈又𠂤止𠂤」中国文字第7冊）、足字と正字とは中古音が明らかにことなっていることからみて、足字とすることは出来ない。一月を正月と書くのも、本片のような場合も、或いは征伐の征もすべて同じ字形である。

ト　用いんとは、卜問に対する判定が吉であったので、卜問の内容通り行なうとの意味である。



9

10　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　佚175，珠634　　牛胛骨

木丁に歳し云々」と釈しているが、この父に釈した文字は、十二支の丑若しくは又に釈す可き文字である。とくに本条が又杏と書いているのと比較すれば、それは明らかであり、したがって杏を、父字があることによって、ことさら木丁のごとく十干の丁を釈出する必要はない（屈萬里『殷虚文字甲編考釈』頁462）。

ハ　この文字は異体が多いが、一般には酒に作る。本片の如き形は第Ⅲ・Ⅳ期に特有のものである。この文字は三足器と水滴とから成って居り、酒を潅いで祭ることを示している（島邦男『殷墟卜辞研究』頁266）。

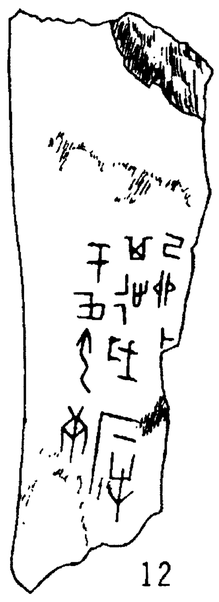
12　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠622　　牛胛骨

ａ　一牛。

ｂ　己卯卜、其延𠂤歳于𠂤庚。。

ｂ　己卯の日に卜なうに、それひいて𠂤庚に歳せんか。

イ　この字は「延雨」即ち雨が長びく意味にも使用されるし、また「大乙事、其延大丁。」（粋169）即ち「大乙に事あり、それ大丁に延せんか」というように、大乙の祭祀の折りに、さらに大丁にまで及ぼして祭祀をすることを示すためにも使用されるので、一応「ひいて」と読んだ。しかし「戊申卜、中貞、王賓延、亡尤。」（文432）即ち「王が賓し延するに、とがめ亡きか」と卜問されるように、賓字にすぐ続けて置かれる場合、卜辞の通例からすれば祭祀儀礼の一つとして使用されたものとしなければならない。したがって、本条や粋169の場合も、これと同じように祭祀儀礼であるかもしれない。



12

ロ　𠂤字は普通タタリの意味に使用されるが、ここでは庚に冠して、神名とされている。たゞ𠂤庚は本片の一例しかないため、王系のうちの誰れに当るか、或いは王系にはあらわれない神なのか、一切不明である。甲骨文にあらわれる王系の先王名には十干の一つに大・中・小或いは祖・文・武などの字を冠したもの以外に、𡆥甲、羌甲、唐甲、盤庚などやのように特殊な文字を冠したものがある。これら以外にも竜甲とか咸戊など多くの神名があるが、𡆥、羌、竜、咸、盤などの字が何を意味しているのかは明らかでない。これが明らかになると、殷王ひいては王室の性格を知る手掛りが得られるものと考えられる（拙稿「故小川睦之輔氏蔵甲骨文字」東方学報京都第37冊頁251）。

13　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠655　　牛胛骨

ａ　弜□𣪊□。

ｂ　王其𠂤𠂤。。

ｃ　弜𠂤𠂤𣪊二、𢀛雀𠂤冊用。

ｂ　王がそれ𠂤〔を𢀛りて〕𠂤せんか。

ｃ　𣪊を𠂤すにあらず、これ雀し冊し用いんか。

卜、雨。甲辰卜、𠦝。」即ち「壬寅の日に卜なう、雨ふるか。甲辰の日に卜なう、𠦝ふるか」というように、雨の卜問と同版に見え、本版ではd条が雨の卜問である。卜辞にはまた羽字が別にあり、『甲骨文編』・『続甲骨文編』など多くの書物が、羽と𠦝とを同字として扱かっている。然し羽字は金祖同氏も指摘するように地名或いは国族名として使用される（『殷契遺珠』105考釈）。例えば「乙巳卜、亘貞、羽不其受年。」（前7・43・1）即ち「乙巳の日に卜ない、亘が貞う、羽がそれ年（稔）を受けざるか」、或いは「庚戌卜、貞、羽不作𡆥。」（京津1181）即ち「庚戌の日に卜ない、貞う、羽が𡆥（難）をおこさざるか」は何れも国名と考えられる。したがってこの二字は区別しなければならない。

ハ　三□二示のうち、三□は𠂤𠂤即ち報乙・報丙・報丁をさす。二示とは示壬・示癸の二王である（金祖同『殷契遺珠』627考釈）。同じような例は『殷契粋編』542の資料にも見られる。これに対して報乙の前に位置する上甲を元示とよんでいる（陳夢家『殷虚卜辞綜述』頁460）。ところで、二示の示は、普通には丁・𠂤・𠂤に作るが、本片は𠂤、哲庵蔵拓では𠂤（陳夢家『殷虚卜辞綜述』図版21）、乙8670では𠂤に作っている。示とは祖先の木主であるといわれるが、本片や乙8670の字形から見ると、台の上に、上が大きい柱状のものを立てたものであることがわかる。木製ばかりでなく、石製のものもあり、所謂角型石柱といわれるものが、これにあたるかとも推測される（凌純声「中国古代神主与陰陽性器崇拝」中央研究院民族学研究所集刊第8期参照）。□は木主をいれる匣或いは石室といわれる。上甲をさす𠂤という文字の□も同じであり、なかの＋が甲字である。上甲の場合が□という四角形であるのに対し、報乙などが一辺を缺くのは、上甲を中心として、その左右に、上甲に接してその匣が列べられていたからであるといわれる（第10片註イ参照）。補2

ニ　b条と対卜になるものと考えられる。

ホ　この一字は、丁未になって実際に雨が降ったので、丁未の日に追記したものである。

9　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　佚166，珠625　　牛胛骨

ａ　癸亥卜、父甲𠂤夕歳。二牢。吉ㇵ。　　ｂ　其三牢𠂤。大吉。

ｃ　祝𢀛今日丁𠂤酌正ㇵ、王受又。吉。用𠂤。

ｄ　□酌。

ａ　癸亥の日に卜なうに、父甲に夕し歳するに、二牢を〔用いんか〕。吉なり。

ｂ　それ三牢を〔用いんか〕。大吉なり。

ｃ　祝するにこれ今日丁の〔日に〕酌し正すれば、王は又を受けんか。吉なり。用いん。

イ　父甲とは第Ⅲ期の王廩辛・康丁の父にあたる第Ⅱ期後半の王祖甲のことである。

ロ　夕と歳とは、ともに祭祀儀礼の一種であり、夕とは前夜の祭祀儀礼、歳とは犠牲を供える儀礼の一つと解する説もある。またともに五祀とよばれる重要な祭祀に属する儀礼とも考えられているが、必らずしもそう限定出来ず、独立した祭祀である可能性も強く、私自身は独立説をとる（拙稿「殷代における祖先祭祀と貞人集団」神戸大学文学会研究第28号）。一般に五

ａ　其𣪊𠂤于父丁。。

ｂ　弜ㇵ又𣪊父丁。

ａ　それ父丁に𣪊せんか。

ｂ　父丁に又し𣪊するあらざらんか。

イ　𠂤は𠂤とも書く。また𠂤に作るものも同じと考えてよい。この形はもと死者の木主をいれる匣であったものが、祭祀の一種を示す語として使用されるようになったもので、門内或いは室内において祭ることともいわれ、また祖先の徳に報いる祭りであるともいわれるが、決定は下しがたい（陳夢家『殷虚卜辞綜述』頁439，島邦男『殷墟卜辞研究』309頁参照）。

ロ　父丁とは第Ⅲ期後半の康丁をさすと考えられる。このことからこの卜辞が第Ⅳ期の時代に作られたものであることがわかる（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁85～91）。

ハ　弜は弗と通用し、否定詞として用いたと解されている（張宗棄「卜辞弜弗通用考」燕京学報第28期）。ａ・ｂ両条は前者が肯定、後者が否定として対卜されたものである。この風習は第Ⅰ期と第Ⅲ・Ⅳ期，第Ⅳ期の所謂旧派の卜辞に盛行したものである。ただ卜辞の弜のすべてが弗と通用したか、疑問がないわけではない（第13片註ニ、第36片註ハ）。



10

11　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠637　　牛胛骨

ａ　弜又𢀛𠂤。

ｂ　丁未卜、其又杏。于父丁祼ㇵ一牢。

ｃ　二牢。𢀛用。

ｄ　□牢。用。

ａ　又し𢀛するあらざるか。

ｂ　丁未の日に卜うに、それ父丁に又し杏するに、祼して一牢〔を用いんか〕。

ｃ　二牢ならんか。これ用いん。

イ　𢀛とは臘であり、肉を供える儀礼である（島邦男『殷墟卜辞研究』頁270）。

ロ　第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけて行なわれた祭祀儀礼の一つであるが、その内容は明らかでない。「丙子卜、祼杏一牢。」（甲571）即ち「丙子の日に卜なう、祼し杏するに一牢〔を用いんか〕」のごとく祼と并記される場合が多い。本条ではこの祼が後にかゝれている。屈萬里氏は甲3629を「□父木丁歳即祖□」即ち「父なる

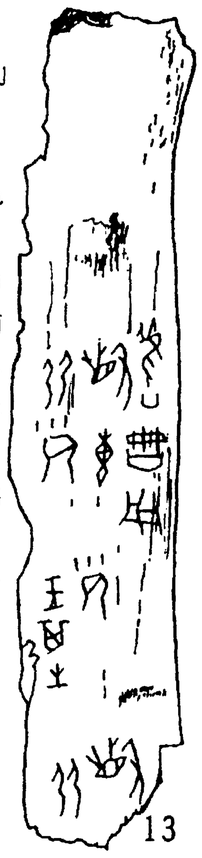


11

イ　この字は、生と釈したり、之に釈したりする。本条では「□𡚴土𠂤于□。」（京津4764）即ち「…生を𡚴りて某に𠂤し…」にならって、「𡚴」字を補って解釈した。𡚴生とは、子供の生れることを祈ることで、先王の配妣など、女性の祖先神になされることが多い。

ロ　この字は第7片の𠂤と同じといわれるが、必ずしもそうとは言いきれない点がある。第7片は直系先王の合祀と考えられるが、このほか、「乙亥貞、又𢦏伐自上甲𠂤至父丁于乙酉。」（粋79）即ち「乙亥の日に貞う、又しㇾし伐するに上甲よりして、𠂤して父丁に至るに、乙酉においてせんか」というように、𠂤は直系祖先の合祀の場合に使用されることが殆んどである。これに対して𠂤の形に作る場合は、こうしたことが明確ではない。したがって一応二字を別字として、後考にまつ。然し「𠂤豚」（後下39・9）という句もあるから、犠牲を処理する語であると解することも出来る。

ハ　第10片註ハに述べた如く、否定詞の弗と同じと解されるが、本条ではどこまでを否定するのか必ずしも明らかでない。一応重という助詞と対になるものとして𠂤𢦏の二字を否定するものとする。しかし弜以下と重以下とが併列される理由、或いは𠂤𢦏と𢍏𠂤用とがそれぞれもつ宗教観念上の差異などに関しては不明であるので、このように句を切ることも不確実であり、また通説にしたがって弜を弗と解するとしても、なぜ否定句をこゝに書く必要があったのか。本片でいえば、a条に否定句があるので、重以下を書けばそれでよいことになるのではないかなど、卜辞の構成上からも、実は疑問が存するので、根本的には弜字の意味を再検討する必要がある。

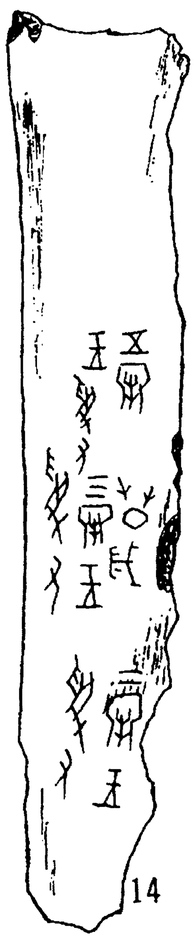

13

ニ　𢦏は𢦏にも作る。また𢦏とも同じといわれる。「王重𢦏田、亡𡆥。擒。」（京都2071）即ち「王がこれ𢦏に田せんに、𡆥なきか。擒せり。」というように、地名としてあらわれ、また「□其用𢦏大示。」（京都1831）即ち「…それ𢦏を大示に用いんか」のように𢦏という邑の人を意味し、その邑人を祭祀の犠牲として用いたことを示す資料もある。本条も、𢦏邑の人を意味する（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所甲骨文字』頁472,606）。

ホ　𢍏・𢍏と同じく𢍏に釈し、釁の省体と言われる。𢍏即ち酒をそゝぐ意と解する説もあり、また祭祀の一つである𡈼・又即ち侑と通じる点もあり、正確には明らかでない（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』頁146,220）。

𢍏は犠牲を処理する方法の一つである（白川静「作冊考」甲骨金文学論叢第二集頁5～11）。用字は「𢍏用」という場合のように、卜占の結果が吉であったので、卜問通りに実行するという意味もあるが、また犠牲を用いるという意味の用法もある。本条では後者の用法と解する。たとえば「重𢍏𢍏用、又正。」（京都1875）即ち「これ𢍏し用いるに、正あらんか」或いは「己亥卜、貞、

𢍏用来𡆥。」（甲59）即ち「己亥の日に卜ない、貞う、𢍏するに来（もたら）せる𡆥を用いんか」などの用法と同じものと解する。ただ本条ではその対象が略されているが、前半の句の𢍏であろう。したがって、本条は𠂤と𢍏𢍏用という二つの犠牲の処理方法を比較するものと解すことが出来る。


14


15

14　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　佚79,珠626　　牛胛骨

a　二牢、王受又。　　b　𠂤ㇾ歳三牢、王受又。

c　五牢、王受又。

a　二牢〔を用いん〕、王が又を受くるか。

b　𠂤に歳するに、三牢〔を用いん〕、王が又を受くるか。

イ　この文字の用例は、殆んどが第Ⅲ期か第Ⅲ・Ⅳ期の卜辞に限られている。例えば「貞、于祖丁𠂤既□唐。」（甲1280）即ち「貞う、祖丁に𠂤に既し…唐」は第Ⅲ期といわれ、また「□𠂤歳妣庚、王受又。」（粋394）即ち「……妣庚に𠂤に歳す、王が又を受けんか」は第Ⅲ・Ⅳ期である。なかでも第Ⅲ・Ⅳ期が非常に多いから、この時期に独自の文字と言うことが出来る。祭祀上の用語としては、𠂤・歳の儀礼と組みになって使用されることが多い。意味はよくわからないが、暮とする説がある。たとえば「父己歳、重𠂤𠂤。」（後上・5・12）即ち「父己に歳するに、これ𠂤𠂤せんか」という文に対して、同一骨版上にこの条とつゞいて「重夕𠂤。」即ち「これ夕𠂤せんか」と卜問されている。重という字が、ある事柄を特に強調するための助詞であるとすれば、𠂤と夕とが対になり、時刻を示すとも考えられる。卜辞の夕は夜の意味であり、祭祀としては前夜の祭りであるのに対して、𠂤は前日の暮れ方である可能性がある。いづれにしてもこの時期の卜辞に特有な祭祀上の用語である。なお田倩君氏は、𠂤・𣅀・莫をすべて暮となし、甲骨文では、暮字は𠂤・𣅀の形から莫の形に進んだとしているが、これは誤りで、暮字を莫に作るのはむしろ第Ⅰ期に多く、𠂤・𣅀の形は第Ⅲ期以後のものである。もしこの莫と𠂤・𣅀とが同じ字であるとすれば後の時期になって簡略化されたと言う可きである（田倩君「釈莫」中国文字第7冊）。補3

15　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠644　　牛胛骨

a　己丑卜、翌庚彭𡆥。

b　己ㇾ亥卜、弜𢦏𡆥、辛歩。。

a　己丑の日に卜なう、翌日の庚に彭し𡆥らんか。

b　己亥の日に卜ない貞う、𢦏し𡆥ること弗ず、辛の日に歩せんか。

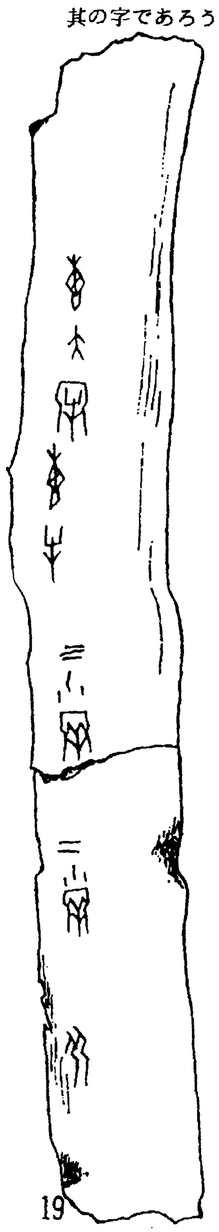
ロ　このような場合、𠂤と読み祭祀儀礼として犠牲を処理する方法と考えることが一般的であるが、語詞として「これ」と読む説をとる（第26片註イ）。

20　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠627　　牛胛骨

a　翌□。　　b　弜。

c　𠂤ㇾ又𠂤歳。

イ　𠂤は、おそらく縦劃のみをほり、横劃を省略したもので、日をしめす十干の丁か、或いは其の字であろう。


19

21　第Ⅲ・Ⅳ期田猟類　佚87,珠671　牛胛骨

壬子卜、王其𢦏ㇾ于𣪊。。吉。吉、用。

壬子の日に卜なうに、王それ𣪊に𢦏せんか。

イ　この字は第Ⅴ期には𢦏という形に作る。𠂤・𢦏は戈か矛などの武器を示し、𠂤は走であり、武器をもって行くの意である。軍隊の訓練を意味すると考えられるが、同時に狩猟をも兼ねたものであったらしく、「戊戌卜、貞、王𢦏于𣪊、往来亡災。𢦏御。隻麋一。」（前2・26・7＋前2・24・1）即ち「戊戌の日に卜い、貞う、王が𣪊に𢦏するに、往来に災いなきか。これ御せり。麋一を獲たり」のごとく、𣪊という地に𢦏した際に、鹿の一種の麋を一頭捕獲したことを記載している。したがって𢦏字で示される行為には、狩猟に類似したものがあることがわかるが、また狩猟の行なわれる地と𢦏の行われる地とには多少区別があり、またそれぞれの場合の卜辞の文章にもある点で区別があったことがわかっている（松丸道雄「殷墟卜辞中の田猟地について」東洋文化研究所紀要第31冊，拙稿「故小川睦之輔氏蔵甲骨文字」東方学報京都第37冊頁261）。


21

ロ　現在の河南省沁陽県を中心として存在したと考えられている殷の狩猟地区のうちの一地名であるが、黄河の南岸、安陽より東南に当たる商邱県地方に比定する説もある。また安陽周辺の可成り限られた範囲内にこれらの田猟地をおこうとする説もあり、現在のところ明らかではない（陳夢家『殷虚卜辞綜述』頁260，島邦男『殷墟卜辞研究』頁362，李学勤『殷代地理簡論』，貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁511，

イ　己丑ののちの亥の日は、己亥が最も近いので、一応、己字を補なう。己丑の前々日の丁亥である可能性もある。

ロ　辛日の歩という行為と、𢦏𡆥という祭祀とがどういう関係にあるのか明らかでない。第27片の場合には、歩と昜日との関係が明らかでないことを指摘しておいたが、本条から考えると、歩というのは単なる歩行の意味ではなく、宗教的な行為を意味する語であったかもしれないのである。

16　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠642　　牛胛骨

a　其□。

b　□于翌日戊彭、又大雨ㇾ。

b　…翌日の戊に彭せんに、大雨あらんか。

イ　この時期の卜辞には、祭祀の場合などの天候に対する卜問がよく記録されている。それは、当時の祭祀が屋外で行なわれたことよる。屋外で行なわれるのは、宗教的な意味によっても必要とされたと考えられるが、当時の建築物の規模が小さいために、どうしても屋外に於てせざるを得なかった面もある（拙稿『古代殷王朝のなぞ』頁155）。雨のために祭祀を中止した例もある。


16

17　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠624　　牛胛骨

a　丙申卜、□。

b　弜又夕歳。

c　□、王受又。

b　又し夕し歳すること弗ざるか。

18　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠663　　牛胛骨

□牛、王受又。

19　第Ⅲ・Ⅳ期祭祀類　　珠661　　牛胛骨

a　弜。　　b　二小宰。

c　三小宰ㇾ。　　d　重𠂤牛。

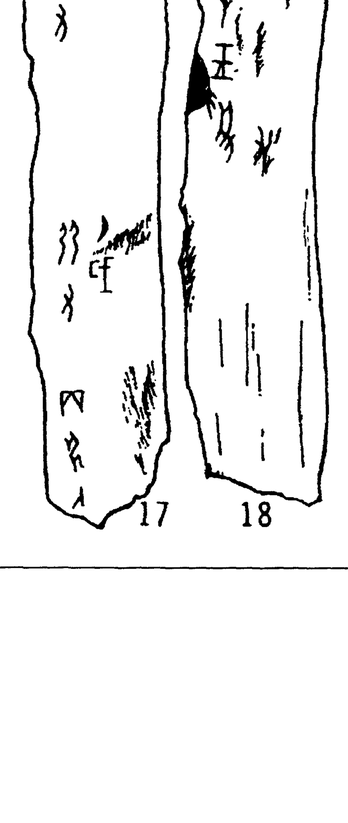
e　重大牢。

b　二小宰〔を用いんか〕。

d　これ牛〔を用いんか〕。

e　これ大牢〔を用いんか〕。

イ　b・c条が対であり、d・eが対となる。


17　18

Ⅳ期（第Ⅲ・Ⅳ期を含む）では𢦏、第Ⅴ期は𡆥に作ったと言う（「甲骨文断代研究例」慶祝蔡元培先生六十五歳論文集上）。第Ⅰ期などの形は水による災を示すが、第Ⅳ期・第Ⅴ期の文字の𠂤は才（在）で、音を示し、才・災は同部であることによって、𡆥などは災を意味する文字であると解する。たしかに卜辞の文例よりすれば、この𢦏（𢦏）は災と同意と考えることが来来る。しかし孫海波『甲骨文編』、金祥恒『続甲骨文編』第十二編才部の𢦏字の項を見ると、そこにあげられる文字には大別して三つの形があることがわかる。即ち𢦏・𢦏・𢦏である。このうち第二の形はいまこゝにのべたものである。第一の形式は第Ⅰ期より第Ⅲ期の卜辞にあらわれる形式であり、而かもその内容は、「甲辰卜、王、𢦏弗𢦏朕事。」(前4・4・7) 即ち「甲辰の日に卜ないて、王〔が貞う〕、𢦏が朕が事を𢦏することあらざるか。」或いは「上略……土方𢦚于我東鄙𢦏二邑……下略」（菁2）即ち「土方が我が東鄙を𢦚して、二邑を𢦏せり」というように、主として戦争の場合に相手に損害を与えることを示す文字として使用される。また第三形式の𢦏は、第Ⅴ期の甲骨文にあらわれるもので、多くの場合「不𢦏𢦏」という成語として使用される。この意味は明らかでない。したがって三つの形式は用例からいって、明らかに区別される可きものであることがわかる。その意味で、1965年に出版された中国科学院考古研究所編の『甲骨文編』が、この三形式を一応分類したのは正しいと言うことが出来る。

24 第Ⅲ・Ⅳ期田猟類

佚183，珠670 牛胛骨

a 于盂、亡𢦏。吉。

b 于宮、亡𢦏。吉。

c 不雨。弘吉。

d 吉。

25 第Ⅲ・Ⅳ期田猟類

珠673 牛胛骨

a 乙亥卜、貞、王其田𠂤、亡𢦏。

b 戊寅卜、貞、王其田、亡𢦏。

c 辛巳卜、貞、王其田、亡𢦏。

d 壬申卜、貞、王其田、亡𢦏。

e □□卜、貞、王其田、亡𢦏。

a 乙亥の日に卜ない、貞う、王がそれ田するに、𢦏なきや。



24

25

イ この字は、ごく一部分しか残っていないが一応祖字としておく。第Ⅰ期の武丁のことゝ考えられる。

ロ この場合の且字の意味は俎である。犠牲を供する意。

ハ 壬午は辛巳の翌日であるが、この壬午という日と、王歩という行為との関係は、どのように考えられるのか。たとえば、歩が壬午の日に行なわれ、その日が晏りであることを卜なうものとすることも出来る。ただその場合、本来ならば壬午王歩と書かれる可きであるが、※この時期にはこのような文に作るものは少なく、むしろ本条のようなものが多い。またd条では辛巳と乙酉の間には三日の間隔がある。また「甲辰卜、王歩、戊申易日。甲辰卜、王歩、己酉易日。庚申不易日。」（寧1・12）（読みは省略）の第1条は3日、第2条は4日をおいている。さらに第3条は、卜日は記載されていないが、同じく甲辰であるとすれば15日の間があることになる。可成りの日数があくことになるが、具体的にどのような関係になるのか、理解し難い点がある。なお歩字については第15片註ロを参照のこと。

※ 例えば「庚戌卜、辛亥又歳祖辛廿牢又五、易日。丝用。允易日。」（寧1・9）即ち「庚戌の日に卜なう、〔翌〕辛亥に祖辛に又し歳するに、廿又五牢を〔用いん〕、易日なるか。これ用いたり。まことに易日なりき」という例のように、辛亥が文のはじめに置かれている場合は、明らかに易日は辛亥の日のことであることがわかる。

28 第Ⅳ期祭祀類 珠633 牛胛骨

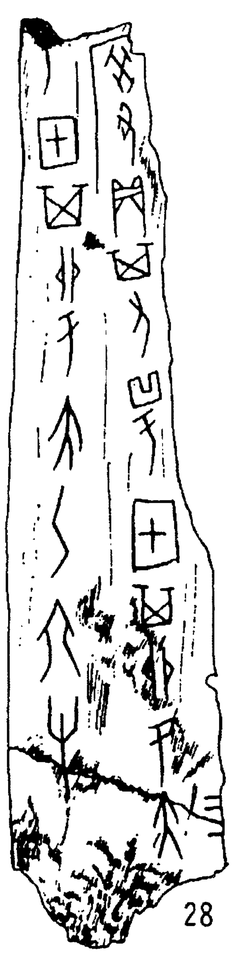
a 癸丑貞、其又𥘅于上甲𠂤、其卯。于大乙𠂤四牛。

b □□貞、𢦚𢦚𢦚于上甲、其卯于大乙六牛。

a 癸丑の日に貞う、それ上甲に又し𥘅し、それ大乙に卯するに四牛〔を用いんか〕。

イ 上甲は一字で、𢦚・𢦚などに書かれる。これを上甲にあてたのは羅振玉『殷虚書契考釈』上にはじまる。殷の王系は、上甲以下が十干を名とし、また第Ⅱ期や第Ⅴ期の五祀はこの上甲を頂点として行なわれることから考えて、上甲は非常に重要な位置を占める先王である。たゞ上甲より報乙・報丙・報丁・示壬・示癸の六王は、実在した人物かどうか可成り疑点がある。また報乙から示癸に至る五王は、余り重視されなかったようで、この五王を省略して、上甲から大乙へと数える方法があった。第7片註ロ、第8片註ハ及び拙稿『殷王朝のなぞ』頁53参照。

ロ この場合の卯は祭祀儀礼であり、犠牲を二つつに剖く意味であるという（郭沫若『卜辞通纂』16葉）。



28

松丸道雄「殷墟卜辞中の田猟地について」）。

22 第Ⅲ・Ⅳ期田猟類 珠679 牛胛骨

辛巳卜、𢦚𠂤、王其逐于𢦚、亡𢦏。

辛巳の日に卜なう、𢦚𠂤、王がそれ𢦚に逐するに、𢦏なきや。

イ 𢦚𠂤の二字の意味はわからない。𢦚は𢦚・𢦚にも作る。「乙卯卜、今日𢦚、王其逐、亡𢦏。」（佚104）即ち「乙卯の日に卜なう、今日𢦚す、王それ逐するに、𢦏なきや」などの例によれば、逐という動作の前提となるような語であったかと考えれるが、「□于𣪘日𢦚卣又𠂤、王受𠂤。」（後上19・6）即ち「𣪘の祭祀の日に𢦚し卣し（或いは卣を𢦚し）又し𠂤す、王が又を受けんか」などは祭祀用語であったことを示すとも考えられる。或は「今日丁𢦚日、王其逐、亡𢦏。」（寧1・107）即ち「今日丁にして𢦚日に……」や「□𢦚日、又正。」（京津4329）即ち「……𢦚日に、正あらんか（？）」などはある時を示すための語かとも思われる。しかし「又正」の語は祭祀に附随して卜問されるものであり、上に引いた後上19・6の資料の𣪘日と同じようにある祭祀の行なわれた日を示すもので、したがって、𢦚がある祭祀の一種を意味していたのかもしれない。またこれを祭祀と解した場合に、𢦚と逐との関係をどう考える可きか。逐は軍事訓練の一つと考えられるが、或いは祭祀に関連して行なわれることがあったのであろうかと想像される。

𠂤も、「帝𠂤𠂤門。」（乙8896）即ち「禘し𠂤し、門に𠂤せんか」の如き例では祭祀用語であるが、その意味は不明である。

ロ 次片註ロ参照。

23 第Ⅲ・Ⅳ期田猟類 前2・20・5，珠677 牛胛骨

a 辛卯□。

b 于盂𠂤、亡𢦏。

c 于宮、亡𢦏。

d 甲午卜、翌日乙王其逐于𢦚、亡𢦏。

e 𢦚𢦚、𢦚𢦏。

盂に〔逐せんに〕、𢦏なきや。

d 甲午の日に卜なうに、翌日の乙に、王それ𢦚に逐せんに、𢦏なきや。

イ 本片の盂・宮・𢦚・𢦚はいづれも近接した狩猟地である。

ロ この字は、羅振玉以来𢦏字に釈され、意味は傷・害とされている（『殷虚書契考釈』中）。しかしこの文字は本片のように第Ⅲ・Ⅳ期や第Ⅳ期の田猟類の卜辞に使用されるのが殆んどで、災の意味と解したほうがよい。董作賓氏は、災字は第Ⅰ期より第Ⅲ期までは𡆥の形につくり、第



22

23

イ 甲骨文における田字には二つの意味がある。その一つは農耕地としての意味であり、二は田猟即ち狩猟の意味である。第Ⅰ期では狩猟を意味する語として獣即ち狩という文字も使用されるが、第Ⅱ期以后は、田字を用いるのが一般である（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁197）。

26 第Ⅲ・Ⅳ期田猟類 珠672 牛胛骨

□□卜、王其田、𢦚𠂤辛不𢦏𢦚。

某日に卜うに、王がそれ田せんに、これ辛〔の日〕に雨に遘（あわ）ざるか。

イ この文字については多くの異説があり、祭祀儀礼の一種と解される場合もあるし、また「𢦚𠂤田、湄日亡𢦏。𢦚𠂤田、湄日亡𢦏。王其田于宮、湄日亡𢦏。」（甲573）即ち「これ𠂤に田せんに、湄日（日出より正午まで）に𢦏なきや。……王がそれ宮に田せんに、湄日に𢦏なきや」という如く、𠂤などの田猟すべき地名を特に選択すると考えられる場合もある。本片の如き場合は、ある一定の日即ちこゝでは辛の日にとくに強い関心があったことを示すために使用されたものと考えられる。

第9片のc条の𢦚も同じである。池田末利「𢦚𢦚字考」甲骨学第1巻第1号，李孝定『甲骨文字集釈』第四冊頁1417参照。

27 第Ⅲ・Ⅳ期往来類 佚38，珠678 牛胛骨

a 丁丑卜、𢦚𠂤丁且。一牢。

b 辛巳卜、王歩、壬午𠂤易日。

c 不易日。

d 辛巳卜、王歩、乙酉易日。

e 不易日。

f 壬午卜、王歩、癸未易日。

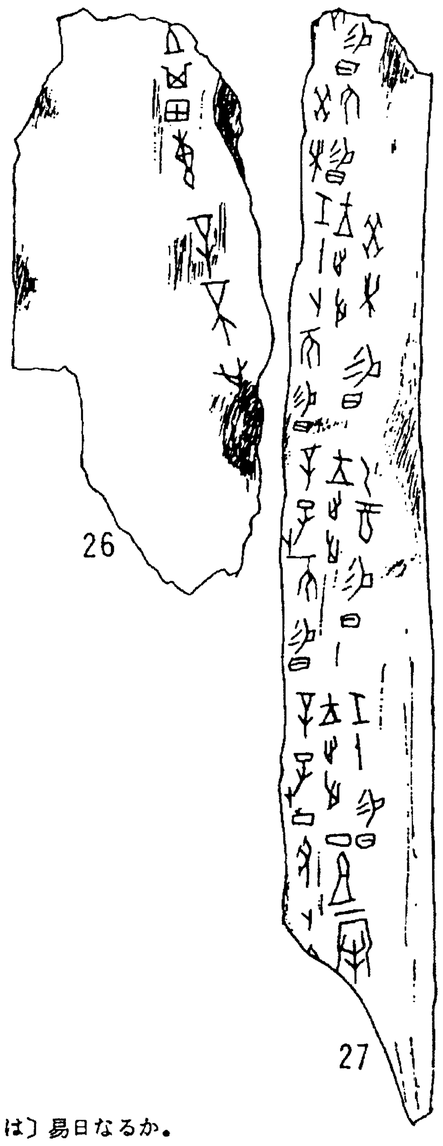
g 癸未不易日。

h □易日。

a 丁丑の日に卜なう、祖丁に一牢を且せんか。

b 辛巳の日に卜なう、王が歩するに、壬午〔の日は〕易日なるか。

c 易日ならざるか。



26

27

ハ　乙字はb条によって補なう。

ニ　本条は、a条によって六字分を補なう。

29　第Ⅳ期祭祀類　　珠630　　牛胛骨

a　甲寅貞、其又𠂤伐。自上甲𡆥☐。

b　甲寅貞、𡆥ㇵ又𠂤伐自上甲☐。

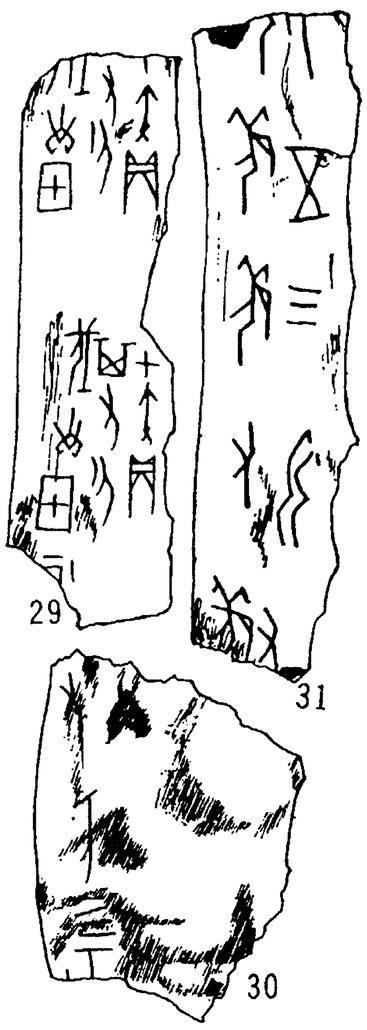
a　甲寅の日に貞う、それ又し𠂤し伐するに上甲よりし、𡆥し……。

b　甲寅の日に貞う、又し𠂤し伐するに上甲よりするに弗ず……。

イ　この字は升に釈し、登高することといわれるが、必らずしも正確ではなく、寧ろ不明とすべきである（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁146）。

ロ　伐とは祭祀において、人間を儀牲として斬首し、その首を神に供える意味の語である（呉其昌「殷代人祭考」清華週刊第37期）。羌・南などとよばれる異族の人間が主として使用された。

ハ　a条と対になると考えられるので、a条の其字に対して、否定詞の弜（弗）字を補なうが、読みの点で必らずしも最良ではない（第10片註ハ，第13片註ハ，第36片註イ）。



30　第Ⅳ期祭祀類　　散327　　牛胛骨

☐又于四方𠂤☐。

……四方に又し……。

イ　卜辞における四方とは、東西南北の四方をさす。ただ現在のように単なる方角を示すのではなく、四方の神をも意味していたのである。そしてそれぞれの方の神には名前がつけられ、またそれぞれの方角から吹く風にも名前がつけられて、ともに祭祀されていた。たとえば東方を析、東風を𠂤、南を𠂤、風を長、西を彝、風を𠂤、北方は不明であるが、その風は𡆥と呼んでいる。元来卜辞における方という字は、外国、しかも殷にとつて敵対関係にあった国を意味する言葉として使用されている。周囲にある多数の外国を、東西南北の四つにわけ、それを代表させたのが、この四方の名と風名とであったと考えられ、河や𡆥などの自然神と同じ神格を与えて祭っている。このことから逆に当時の自然神というものが、本来は殷とは異族の祭る神であったことがわかる。ちなみに南風の長は、時に南方

の名としてもあらわれるし、また国名・族名としてもあらわれる。同じく西方の𠂤も族名としてあらわれる（拙稿「宗教面から見た殷代の二・三の問題」東洋史研究第20巻第3号）。

31　第Ⅳ期祭祀類　　佚162，珠665　　牛胛骨

a　又𢦏。　　b　弜又。

c　三𢦏。　　d　五𢦏。

e　☐𢦏。

a　又するに𢦏〔を用いんか〕。

b　又すること弗ざらんか。

c　三𢦏〔を用いんか〕。

aとb、cとdとがそれぞれ対になると考えられる。

32　第Ⅳ期祭祀類　　珠641　　牛胛骨

a　弜又。　　b　弜又。

c　弜告。

本片は、弜を弗と解すれば、すべて否定形の卜問のみである。これらに対となる肯定形の卜問は他の骨版を使用したものと考えられる。したがって、対になる卜問が同じ甲骨版上に行なわれるときと、別の甲骨版を使用するときがあったことがわかる。

33　第Ⅳ期祭祀類　　珠664　　牛胛骨

a　二牢。　　b　三牢。

34　第Ⅳ期祭祀類　　珠650　　牛胛骨

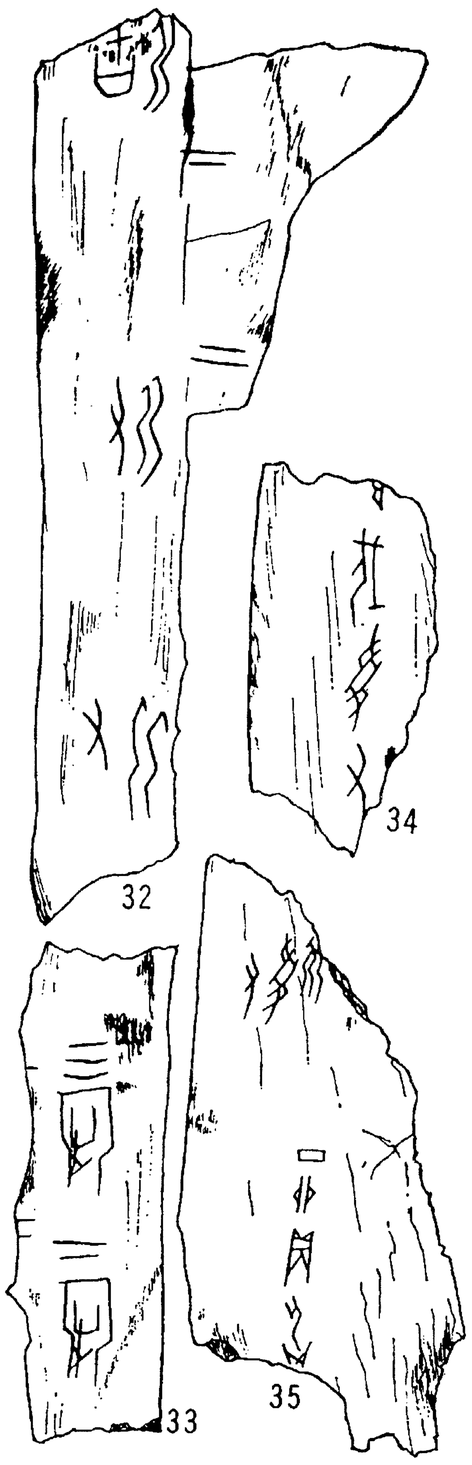
☐伐、受又。

35　第Ⅳ期方国類　　珠702　　牛胛骨

a　丁卯貞、𠂤𠂤☐。

b　不受又。

イ　𠂤とは第Ⅰ期以来あらわれる国族名であり、またその出身の個人名でもある。子𠂤・小臣𠂤などと呼ばれる人物は、殷王室の出身者であり、𠂤に派遣されたものである。したがって王室とは関係が深



このような解釈が行なわれたのも、弜の意味が確定しないことによるのである。

ロ　小臣は、殷の王室の出身である。子某（たとえば子漁などと書かれる）の子孫であることをしめす身分的な稱号であると言われる（白川静「小臣考」立命館文学第116・117号）。

ハ　この文字は、他に用例がない。商承祚氏は、「動」字と推測するが、確かではない。第Ⅰ期にあらわれる𠂤・𠂤字に𠂇を附した形であり、第Ⅰ期などの𠂤が遘と書かれるのと同じように考えることも出来る。しかしこの𠂤字の意味も明らかでなく、ある行為を示す動詞と考えられる場合と、個有名詞と考えられる場合とがあって、確定しない（貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁280、686）。したがって遘も不明である。

37　第Ⅳ期旬夕類　　珠699　　牛胛骨

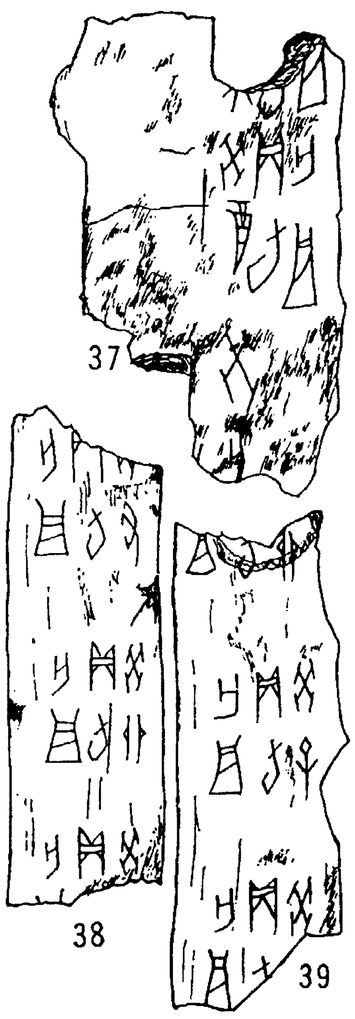
a　癸亥𠂤、旬亡禍。

b　癸酉貞、旬亡禍𠂤。

c　𠂤未𠂤、旬亡禍。

b　癸酉の日に貞う、旬に禍なきか。

イ　旬亡禍とは甲日より癸日に至る十日間の吉凶をトう語であり、第Ⅰ期より第Ⅴ期の全期にわたって最も普遍的に見られるト問である。本条では癸酉の翌日の甲戌から癸未までの十日間である。殷ではこの旬というものが暦日の重要な単位で、五祀という祭祀もこの旬を規準として行なわれ、また旬と呼ぶ祭祀もあった。『山海経』大荒南経には、帝俊即ち殷の始祖といわれる帝嚳の妻である羲和が十日を生んだという説話が伝えられていることを考えても、殷代において旬が如何に重要なものであったかがわかる。なお西周になると、現在のWeekに近い初吉とか、生覇・死覇などの語が使用されるが、東周以後になると、再び旬が重要になる。なお旬夕の夕は毎夜の吉凶をト問した甲骨文のことで、特に第Ⅱ期に多い。本集にはこれに属するものはない（拙稿「卜辞に見える祖霊観念について」東方学報京都第26冊）。



38　第Ⅳ期旬夕類　　珠696　　牛胛骨

a　癸巳貞、旬亡禍。　　b　癸卯貞、旬亡禍。

c　癸丑貞、旬亡禍。

く、祭祀を主宰したり、殷王の命をうけて外国征伐にも従事している。本条も「辛卯貞、𠂤以衆𠂤伐召方、受又。」（人文2523）即ち「辛卯の日に貞う、𠂤が衆𠂤をひきいて召方を伐つ、又を受くるか」と同じように、征伐関係の卜辞であったろうと推測される。b条に不受又とあるが、これはおそらくa条にあった受又と対になるものと考えられる。第Ⅲ・Ⅳ期の卜辞では、受又は祭祀に関連して卜問されるが、第Ⅳ期の卜辞では、第Ⅰ期と同じく征伐に関係して問われることが殆んどであるからである（白川静「殷代雄族考」三𠂤甲骨金文学論叢六，貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』本文篇頁220頁）。

36　第Ⅳ期方国類　　佚3，珠706　　牛胛骨

a　乙酉☐。

b　弜允𠂤。

c　☐小臣𠂤☐遘ㇵ。

b　允に弗ざるか。

イ　允は「まことに」という副詞的用法が普通であり、卜問に対して、実際にその通りであったことを示す場合、即ち卜問通りの結果を示すときに使用される。たとえば「庚午卜、壬申雨。」即ち「庚午の日に卜なう、壬申の日に雨ふるか」という卜問に対して、雨がふったので「壬申允雨。」（続4・6・1）即ち「壬申の日にまことに雨ふれり」というように書かれる。また卜問中にもこの文字が使用されるときもある。たとえば「丙戌卜、殸貞、𠂤允其来。」即ち「丙戌の日に卜ない、殸が貞う、𠂤（個有名詞）がまことにそれ来るか」のように卜問される。これに対して、対卜の文は「丙戌卜、殸貞、𠂤不其来。」（乙6668）即ち「丙戌の日に卜ない、殸が貞う、𠂤がそれ来らざるか」と書かれる。この二つの対文を比較すると、允が不と対になることがわかる。したがって允字は来という字を、肯定する立場で強調していることがわかる。また否定詞不に冠して使用される場合もある。「貞、今癸亥不其雨。允不雨。」（乙6408）即ち「貞う、今癸亥の日に、それ雨ふらざるか。まことに雨ふらず」がその例であるが、同版上の対卜の文は「貞、今癸亥其雨。」即ち「貞う、今癸亥の日に、それ雨ふるか」と書かれ、これには結果の記載はない。したがって、允の字は不雨の二字を肯定したものであることがわかる。以上に見た允字の用法からも考えられるように、允字に否定詞を冠した例はないのであり、また允字の意味からしても、これに否定詞を冠するのは不自然でもある。この点からも弜を弗とするのは、全面的には正しいとすることができないことがわかる。なお商承祚氏は『殷契佚存』の本片の考釈において、本条を左から「允弜」と読み、弜を从と釈する。弜を从と釈することは、あらためて検討する必要があるが、この時期の卜辞では、弜が句の首にくるのが通例であるから、商氏のように左から読むことは誤りである。また氏は、c条を右から読むが、本片のような甲骨片の場合、左を頭にしたり、右を頭にするものが、混在することはない。



大原美術館所蔵甲骨文字　補注

補1　董作賓氏は、甲骨文にあらわれる十三示を、大乙より祖甲に至る直系十二先王に上甲を加えたものと解している(「甲骨文斷代研究例」)。

補2　1965年に発堀された江蘇省銅山県丘湾の殷代遺蹟において、当時の祭祀遺址が発見された。高さ1米、22糎に23糎の立方石柱を中心にし、これに向うようにして20人の人間と、2個の人頭及び20頭の犬が埋めてあった。この石柱は土＝社の神主であり、人間や人頭、犬などは、この土神に供えられた犠牲である。甲骨文にも、土神に対して人頭を供える祭祀儀礼が行なわれたことが見える。「貞、又伐于土羌(貞う、又して土に羌を伐せんか)」(粋17)の伐がそれである。この伐という祭儀は本来人間である先王に対してのみ行なわれるものであるが、これが土に対して行なわれることは、土が自然神のなかでも、特異な存在であったことを示すものであるが、その点がこの丘湾遺蹟の発掘によって、実証された。

それとともに、示壬、示癸の示即ち主、或いは報乙などの報即ち枋が、石柱や石室を表示することと、土神を表示する石柱などが共通する意味をもっていることは、上甲より示癸までの六王を考えるときに重要な要素となると考えられる。(南京博物院「江蘇銅山丘湾古遺址的発掘」考古1973年2期、俞偉超「銅山丘湾商代社祀遺跡的推定」同1973年5期、王宇信・陳紹棣「関于江蘇銅山丘湾商代祭祀遺址」同1973年12期、拙稿『古代殷王朝のなぞ』頁43～46、52～55参照)

補3　拙稿「関西大学考古学資料室蔵甲骨文字」第14片注②参照。

39　第Ⅳ期旬夕類　　珠700　　牛胛骨

a　癸酉貞、旬亡禍。　　b　癸巳貞、旬亡禍。

c　癸卯貞、旬禍亡。

附　記〕　1

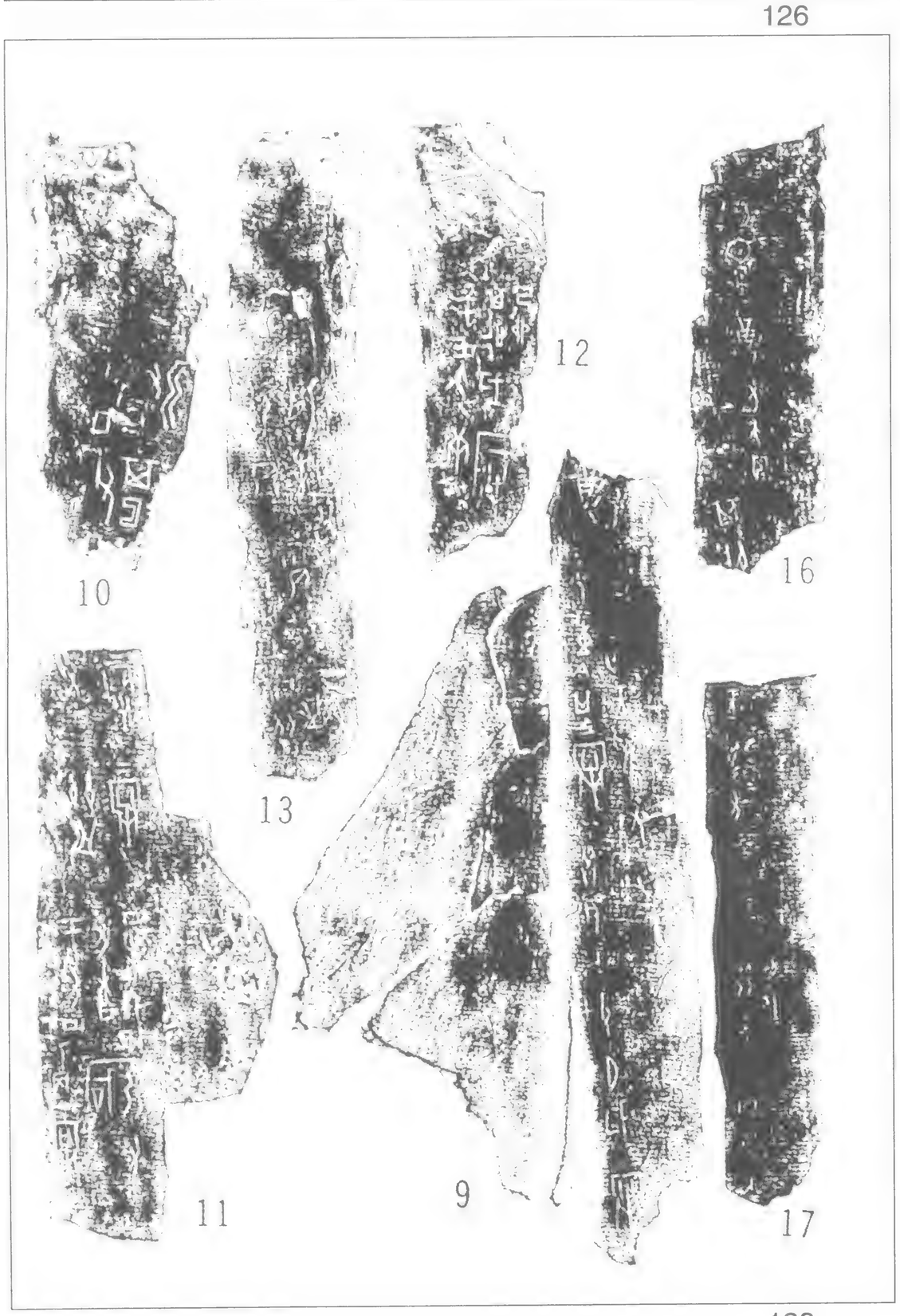
最後に、甲骨の背面にある鑽鑿についてふれておく。この鑽鑿というのは、甲骨の背面に火をあてゝト兆をする際、表面に卜兆である割れ目が出やすくするために、背面にほった円形・楕円形のくぼみである。例えば　図版第四の(2)、8B を見ると、左上に円形のくぼみがある。これを円鑽とよんでいる。その下にあるくぼみは、楕円と小半円とが組み合わさっているが、この楕円の部分が鑿であり、半円が鑽である。鑿の部分は深く、且つ底の中央は、とくに深くきり込んであるのに対し、鑽は浅い。動物の骨や亀甲を卜占に使用するのは、新石器時代の竜山文化から、広く中国に見られるが、上に述べた第二の鑽鑿組合せ式は、殷代の王朝卜辞に最も特徴的に行なわれたものである。これに対して第一の円形鑽のみを使用するのは、新石器時代から西周時代にかけて一般に行なわれていたものであるが、こゝにあげた第Ⅰ期の王族卜辞かと考えられる第3片や、この第Ⅲ・Ⅳ期の第8片にも行なわれている(図版第四の(2)、3B・3C・8B)。たゞ同じ円形鑽といっても、鄭州二里岡のごとき殷代中期のものまでは、第二の組合せ式の半円鑽のような、浅い鍋底式の円鑽であるが、殷代後期になると、3Cの断面にも見られるように、深く垂直な円筒形の円鑽になっている。しかも第3片のBでもわかるように、この円鑽は、完全な円形ではなく、多少楕円になっている。このことは、この鑽を掘るのに、ドリル状の工具を使用したのではなく、ノミで彫ったことを示すものである。またCで見ると、鑽の壁面と底とが垂直であることもわかる。これらの鑽は、深さが7㎜位い、径も、およそ7～8㎜であるから、可成り細い刃の、しかも鋭利なノミを使用したと考えなければならない。支那鍋やフライパン状の円鑽であれば、石器でほることも可能であると考えられるが、このような深い円鑽は、おそらく不可能であろうと考えられる。青銅器よりもっと鋭利なものを考えたいのである。しかし当時はまだ鉄器があったとは見られないので、一応青銅器を使用したと考えておく。鑽鑿といっても、たんに卜占の方法としての意味のみのみでなく、このような工具の問題をもふくんでいることを見落してはならないのである。はじめにも述べたように鑽鑿組合せ式の方法は、殷代の王朝卜辞に特有のものであるが、これ以外の円鑽式などが、王族卜辞や、第Ⅲ・Ⅳ期形式卜辞に見られることも注意す可き問題である。　すでに前書きにもふれたように、王族卜辞と第Ⅲ・Ⅳ期形式卜辞とは、その出土地や文字、或いは、王朝卜辞と別個の卜辞として存在していたことなどの諸点において、共通する性格をもっていた。さらに鑽の形式においても、共通する点をもっているのである。勿論これらの事実によって、王族卜辞と第Ⅲ・Ⅳ期卜辞とが、時代的に連続するものとたゞちに断定することは、現在のところでは出来ないが、今後の研究上の一つの課題となるものである。

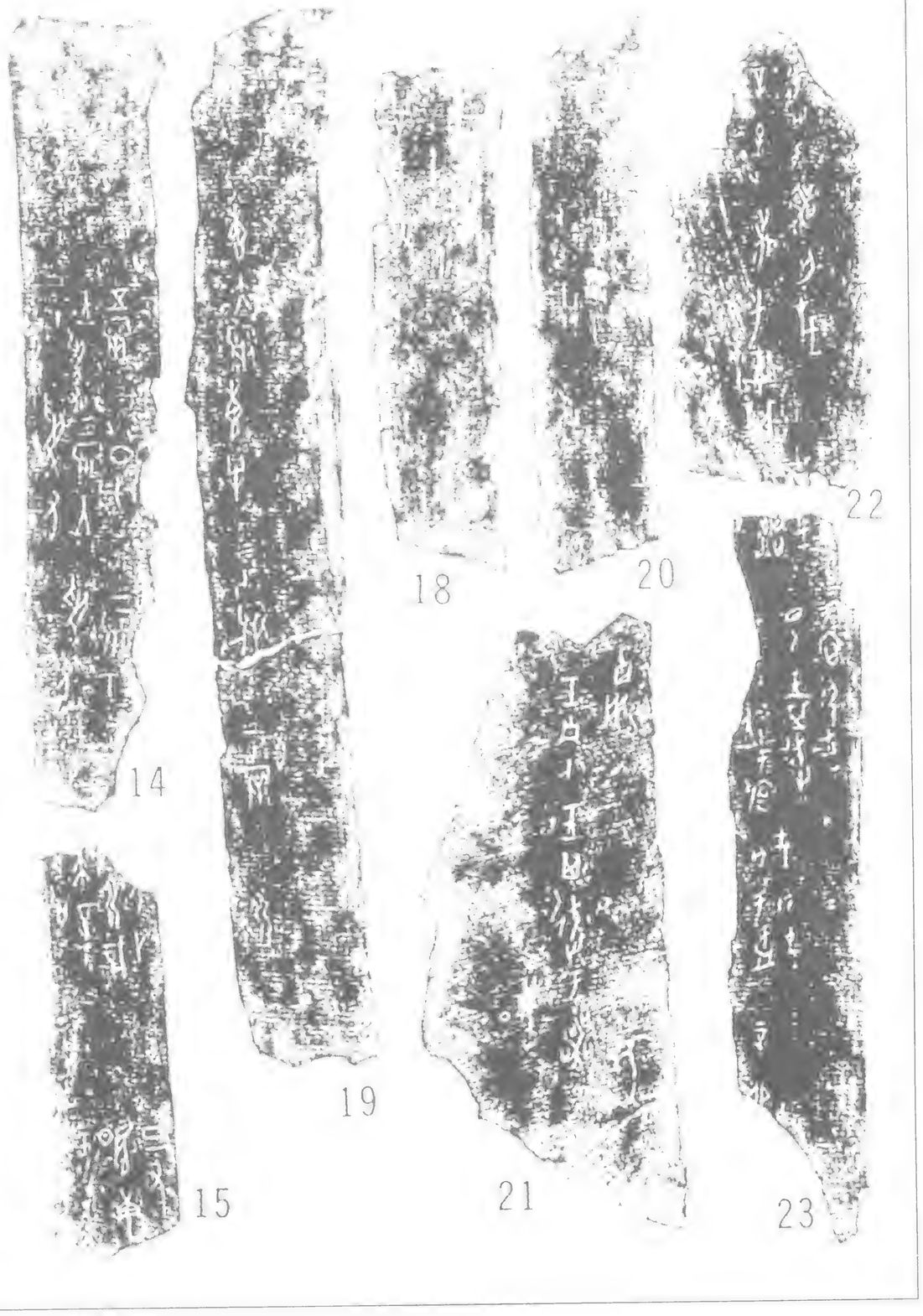
参　考　　拙稿「殷以前の血縁組織と宗教」―― 附論卜亀卜骨について（東方学報第32冊）、貝塚茂樹『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』　本文篇序論第六章

〔附　記〕　2

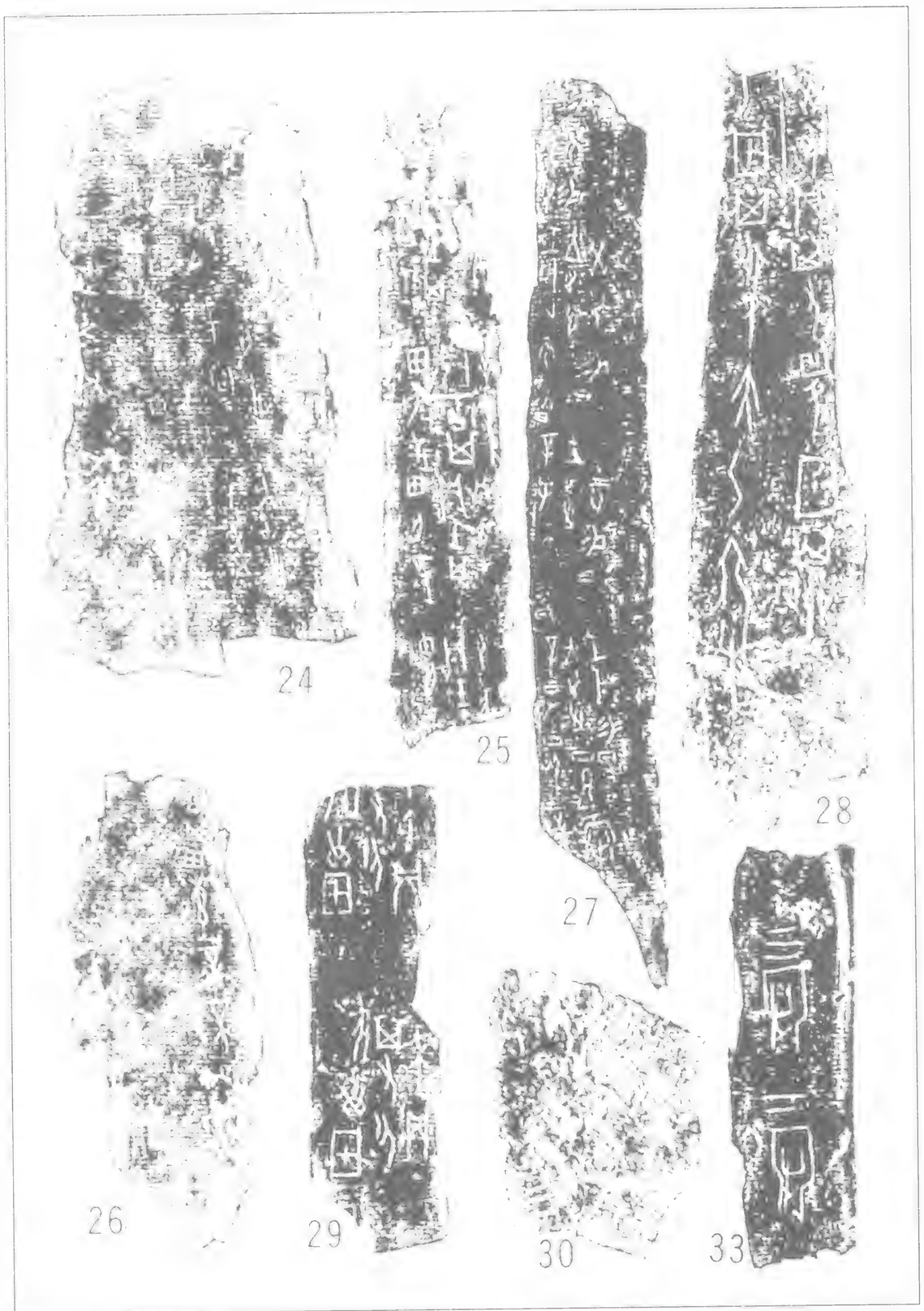
本稿の組版中、島邦男氏の大著『殷墟卜辞綜類』が出版された。この書物は、甲骨文の用例の分類集成であり、甲骨文の語法、意味の研究にとっては、最も基本的な、しかも貴重な成果である。したがって本稿もこの書物によって、補正を加えなければならぬ点が多々あるが、今回は編集の都合上、加筆訂正はせず、後日に行なうこととする。



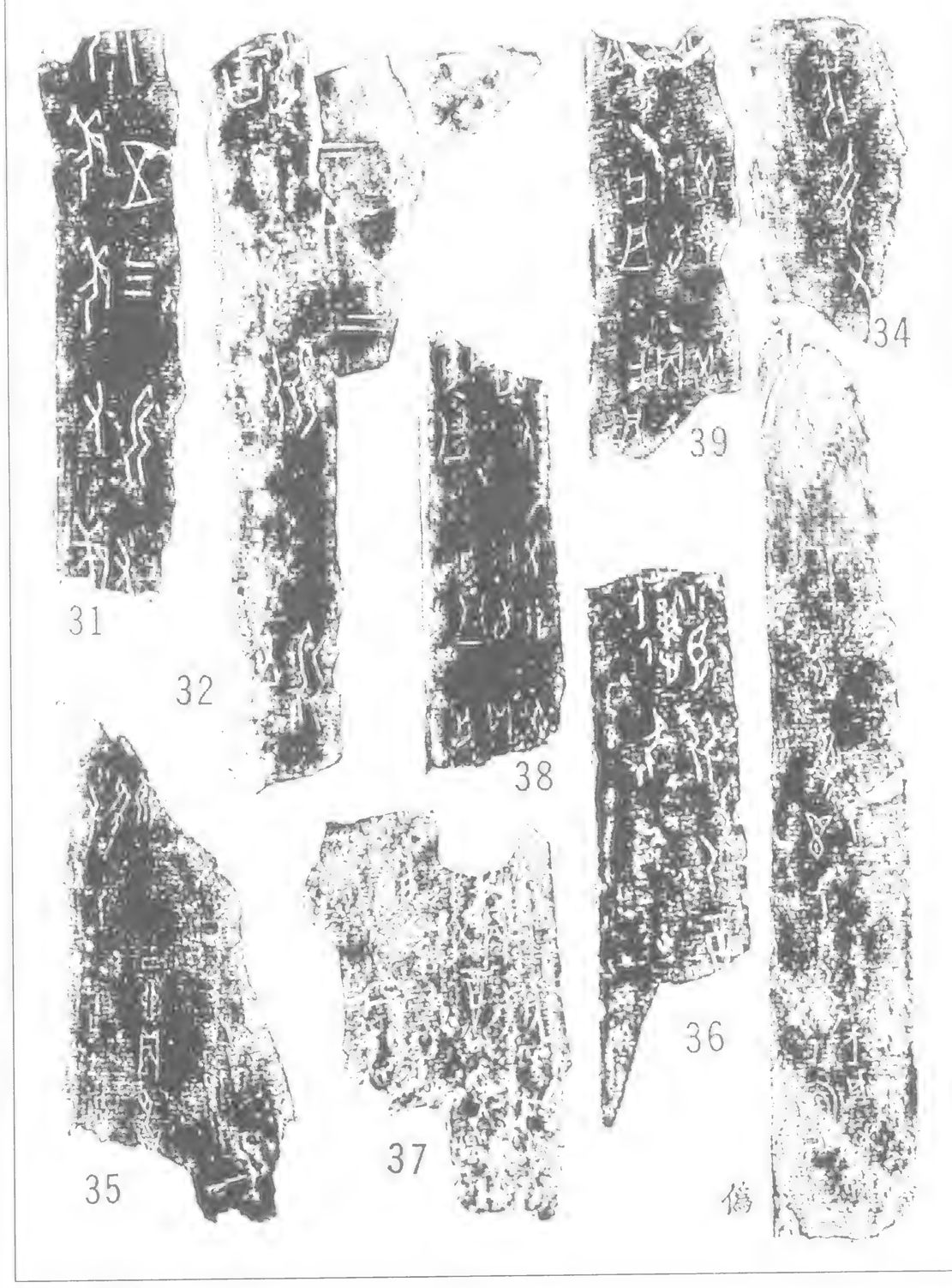




129



130



131

著錄片考釋

論文資料

編的次序	原號	簡稱
大龜四版之一	3.0.1863	1 版
大龜四版之二	3.0.1860	2 版
大龜四版之三	3.0.1862	3 版
大龜四版之四	3.0.1861	4 版

(二)它們的所在。大龜四版的所在,與別的遭了水災而曾經漂泊的甲骨不同,它們所在,乃是很安適的一個儲藏之室。這儲藏室就是大連坑南段的長方坑(參看本報告第二期220葉附第五圖)。它們的出土地點,乃在此長方坑東北隅深約3.8米之處。這坑的情形,李濟之先生記載的甚詳:"6,大連坑南段長方坑。東西長三米,南北寬一米八,最深處未見底,距地面六.五米,距坑口二.一米,坑口有隋墓一座。下出整龜一,刻字龜版四;再下有蚌壳一層,再下,又有貝一層,並夾銅器及石刀等"(二期236葉)。又據發掘日記,得此大龜四版,在十八年十二月的十二日。

(三)它們的環境。這長方坑在大連坑的一隅,乃是儲藏室之一。大連坑,可以說是殷代文物的一個寶庫,在十八年秋,恰被我們開發着了。這坑除了幾個隋唐墓葬之外,所得皆殷商遺物,如雕刻花紋的石器,骨器,蚌器,銅器,象牙器,銅,骨,石,蚌的箭鏃;刻花白陶;銅范;鹿角;綠松石之類幾於應有盡有;尤其是甲骨文字最多。它們的環境既如此,它們本身的重要,更是不言可喻了。

大龜四版考釋

董作賓

一:介紹大龜四版
二:釋一至四
三:考
卜法考一
事類考二
文例考三
時代考四
種屬考五

一

打算作這篇文字,至少也有一年了,因爲想澈底的研究這難能可貴的材料——大龜四版,就不能不有待於它的附近有關係的地層和同出的甲骨文字古器物等等的研究完了,尤其是在考證文辭方面,處處牽涉到契文的全體,所以這篇文字延擱至今。現在已不容再推委了,釋既不敢妄釋,考也無暇詳考,只有先把材料印出,附以個人片段的見識,以供讀者參證而已。

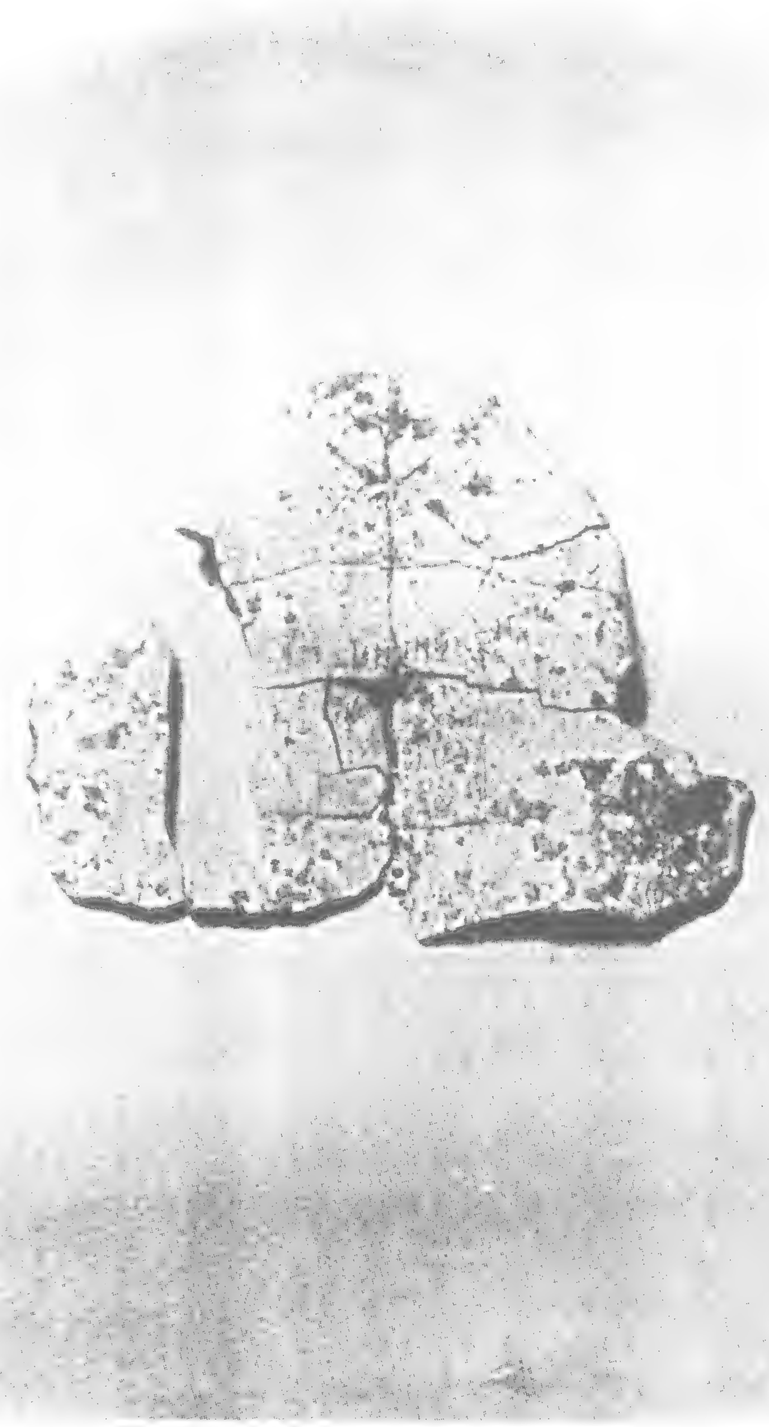
在考,釋之前,先介紹大龜四版。

(一)它們的名稱。因爲這四塊大龜版是同時同地出土,又比較的完全,所以同時來研究它們,就稱它們爲"大龜四版。"排列這四版的次序,是以文辭較完全的在先,與原編號的次第有異,現在列表對照於下:

(四)　它們的小照　1版



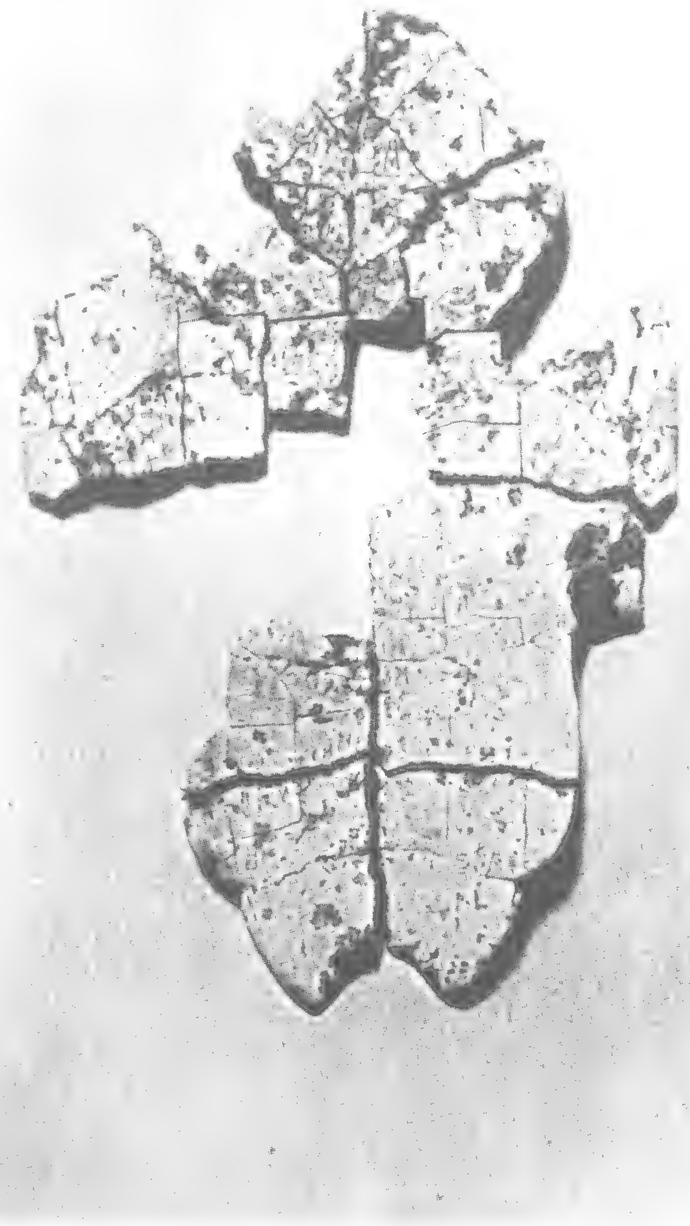
2版



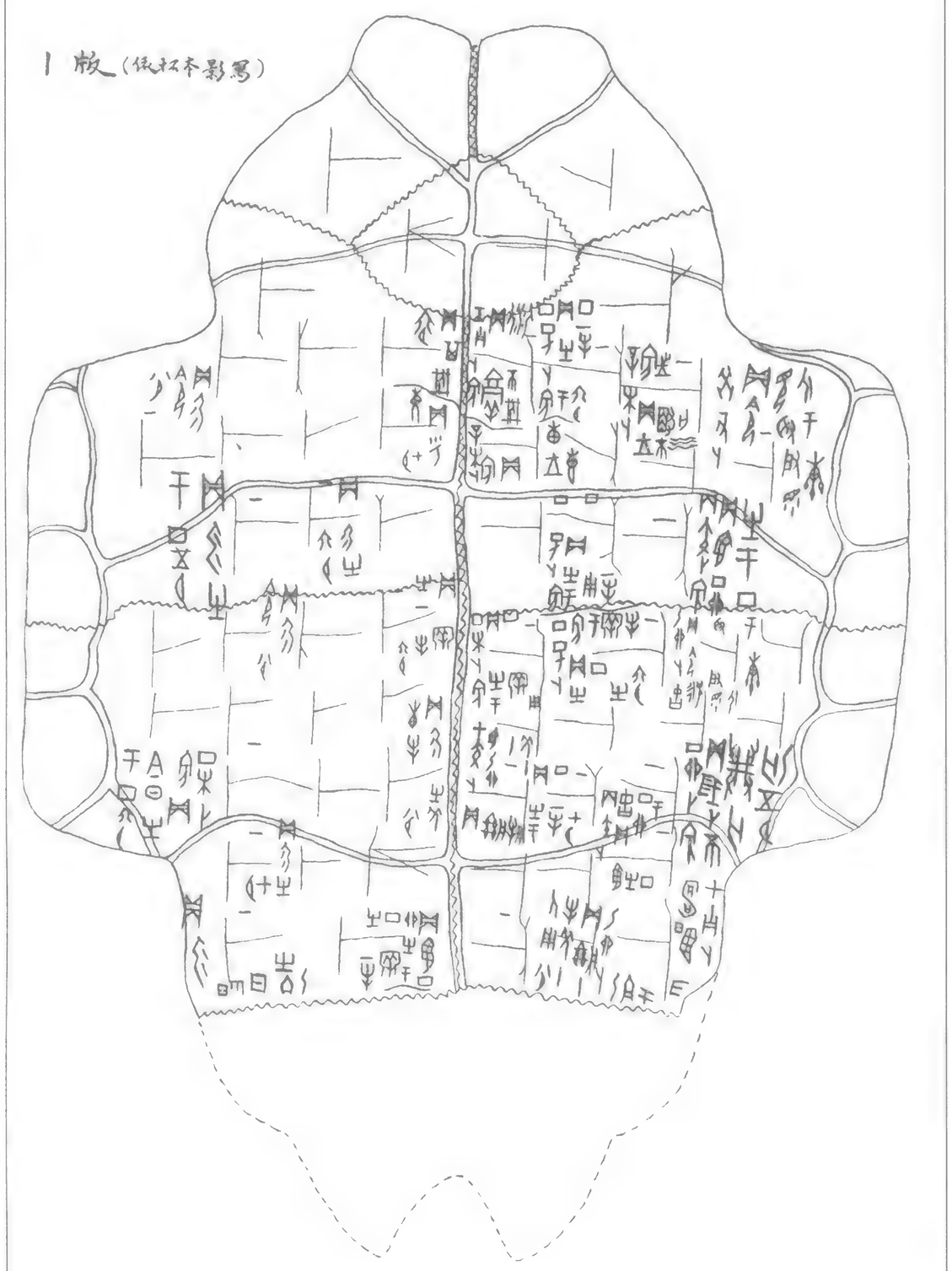
3版



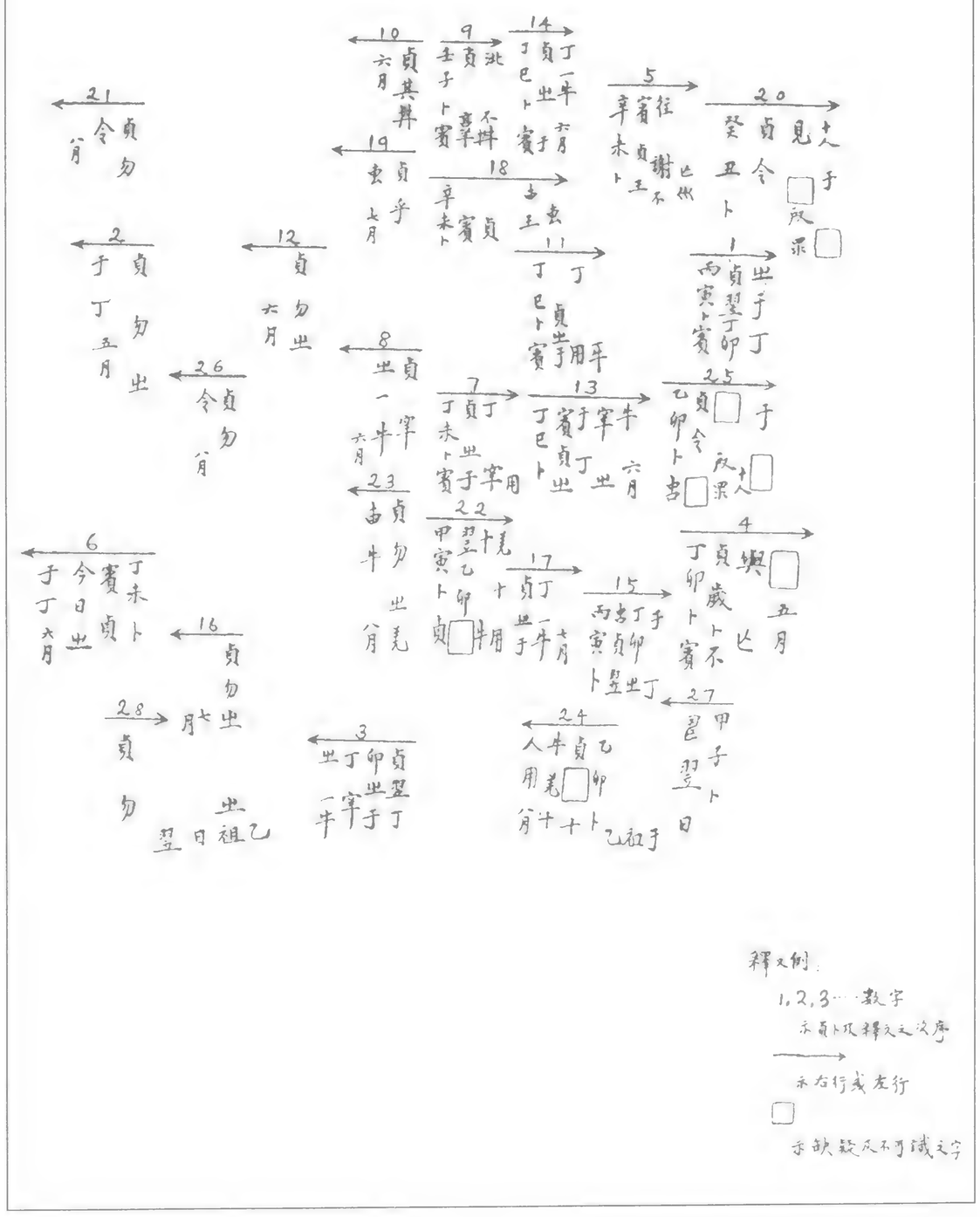
4版



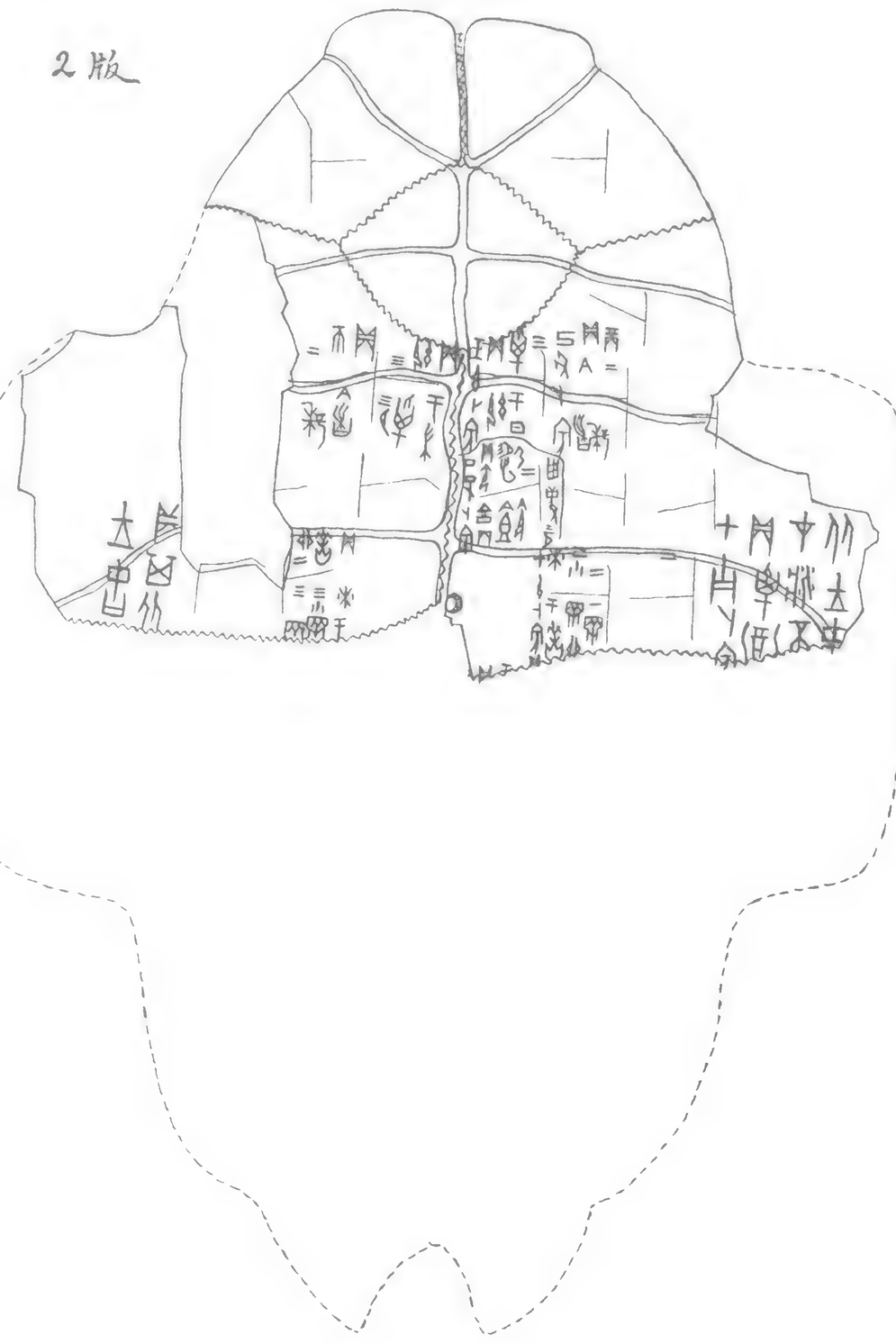
1 版（倒打本影寫）



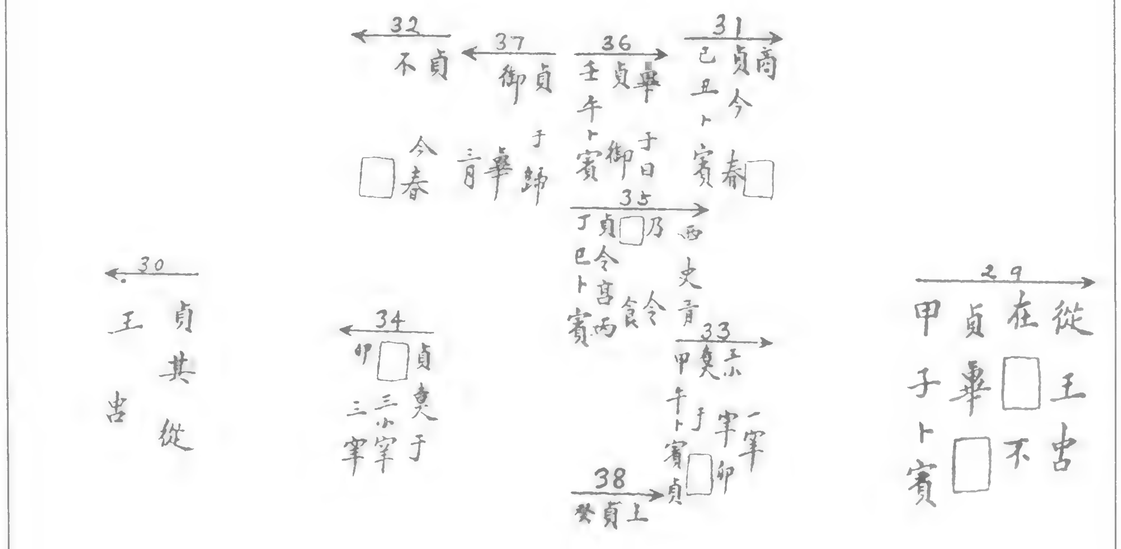
釋 一



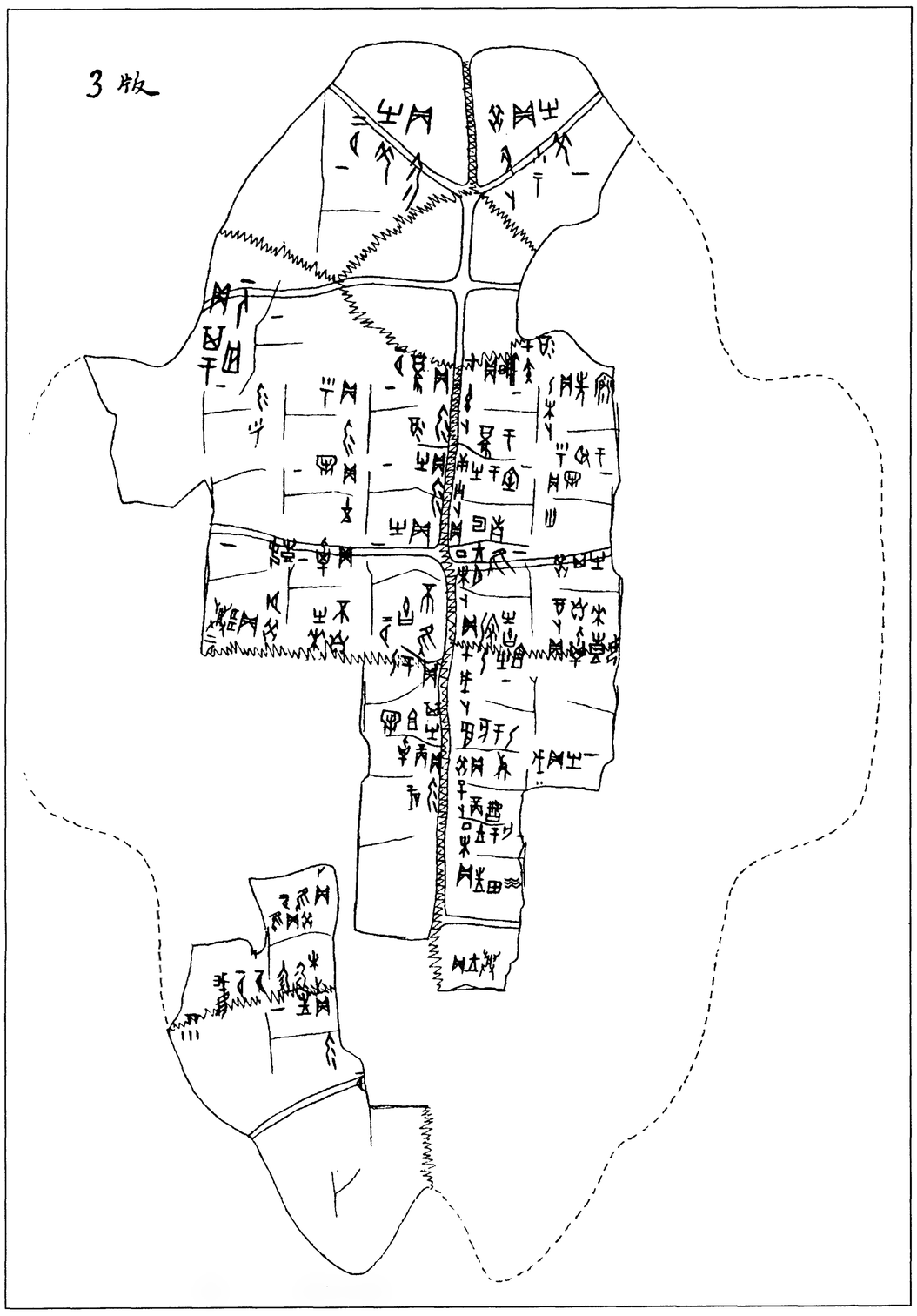
2 版



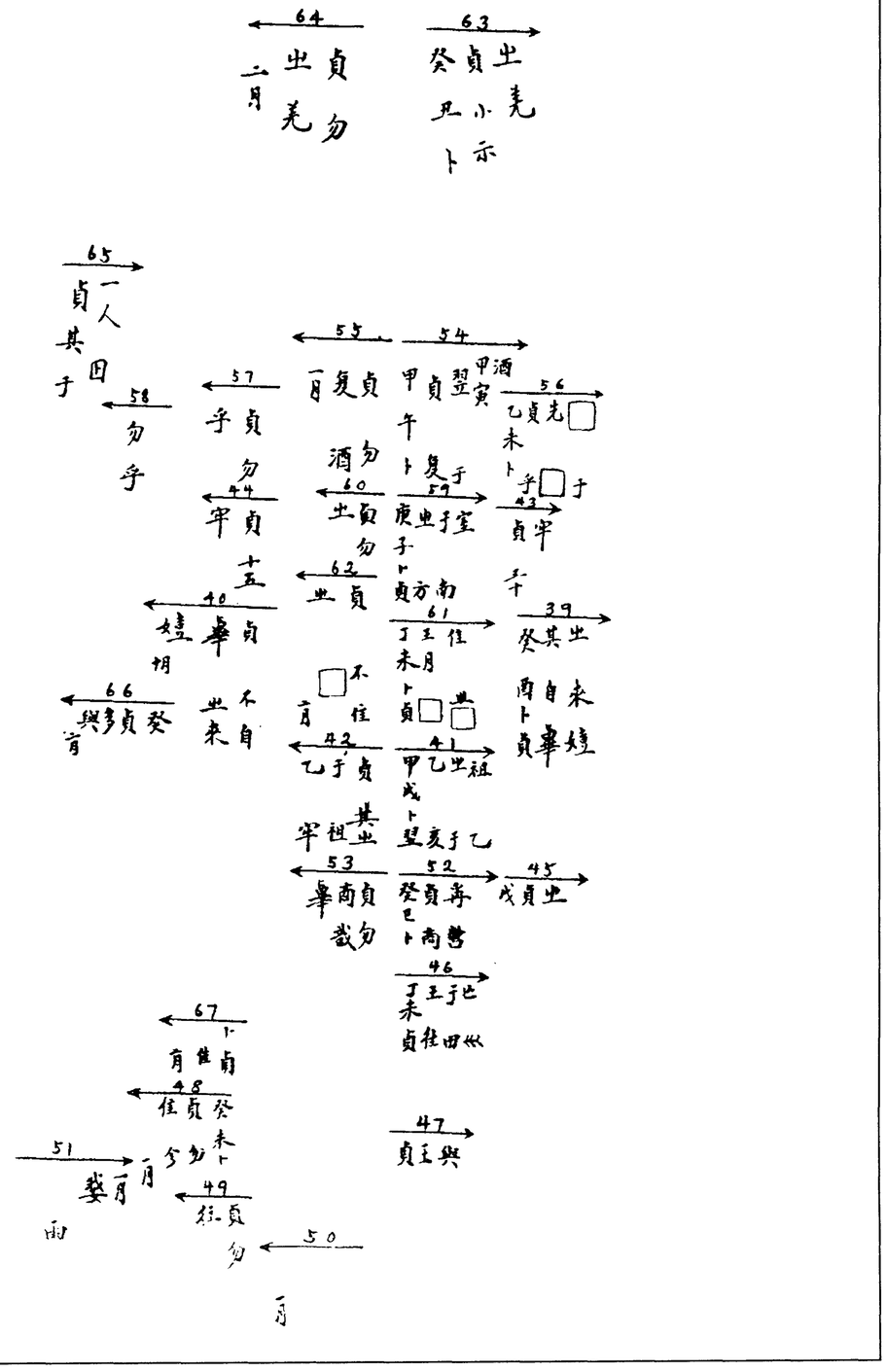
釋 二



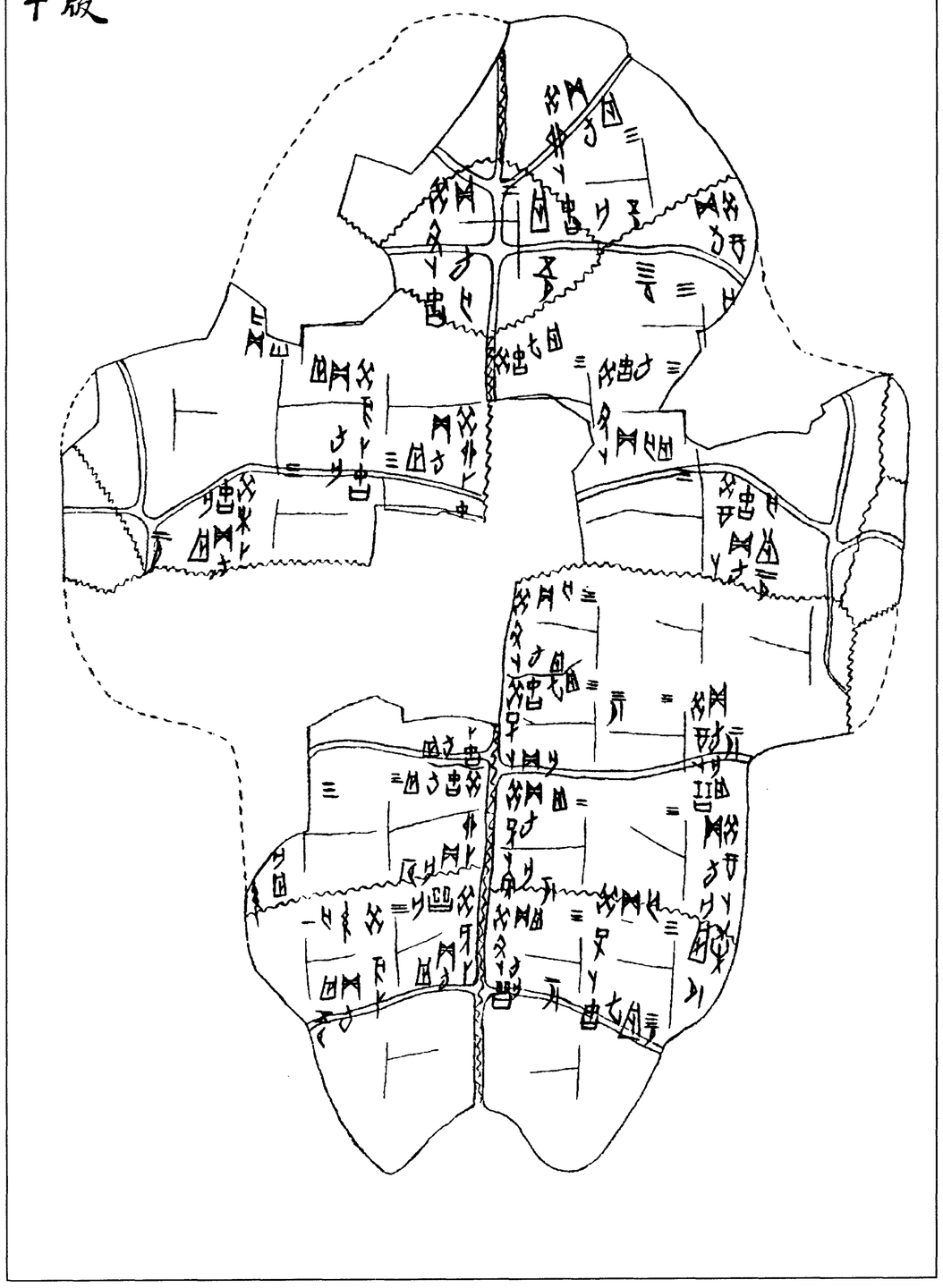
3 版



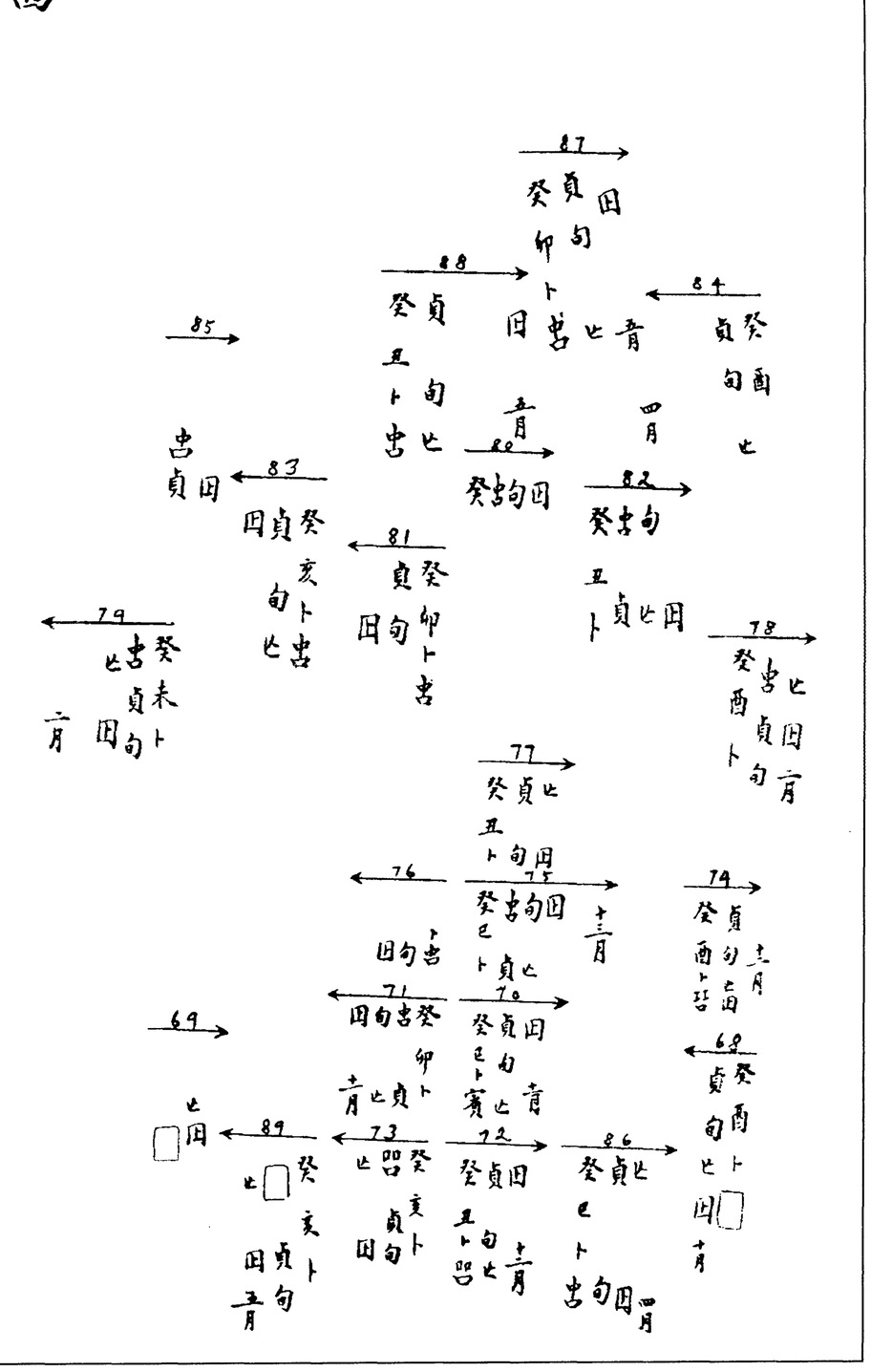
釋 三



4 版



釋 四



三

卜法考一

殷人龜卜的方法,在未得此四版大龜之前,曾作過一次約略的推測,主要部分,就在鑽鑿,燋灼,兆璺,書契的四項。在四版中,關於書契卜辭一項,除文例另節敘述外,貞卜法中最大的發現,就是左右對貞,一事兩決之例;又在一版上貞卜先後的次序,卜用的時日,也可畧見一斑;茲並鑽灼,兆璺,分別考論於次。

甲, 左右對貞及其他

今由此大龜版所啟示,可知吾人所稱爲卜辭者,實卽卜時命龜之辭,亦卽貞辭。貞訓"卜問",卜以決疑,因有疑而問之於龜,所以貞辭也就是問事命龜之辭。周禮春官'以邦事作龜之八命,"史記龜策列傳也載有漢時太卜"命龜"之法(卽命曰云云),分反正兩項,如所舉占病者之辭:

"今某病困,死。—首上開,內外交駭,身折節。不死,—首仰足胎。"

這和9,10兩辭甚相似。𢀛,象人在棺木中,丁山先生疑是死字。今並列比較之。

今某病困,死。　　不死。

貞,其死(10)。　　壬子卜,賓貞,亖沚不死(9)。

此類之例甚多,在四版中,凡左右對稱之辭,他的卜兆卽遙遙相嚮,大致是右邊記卜日的甲子及貞人,左邊僅記月份,也有省去月份者。茲更分爲兩貞,三貞,四貞,及一貞各法,述之于下:

子,兩貞法。兩貞法,是一事而卜問兩次,其中又可分爲三種,卽左右皆正者,左正右反者,左反右正者。列舉如下:

左右皆正:(凡三例)

右 18 } 貞事未詳
左 19 }

右 33 } 決用牲多少
左 34 }

右 36 } 貞事未詳
左 37 }

左正右反:(凡二例)

右 9 } 決死不死(?)
左 10 }

右 29 } 決从不从
左 30 }

左反右正:(凡十二例)

右 20 } 決命勿命
左 21 }

右 22 } 決用勿用
左 23 }

右 25 } 決命勿命
左 26 }

右 27 } 決𠂤祖乙勿𠂤
左 28 }

左 31 } 決𣪊不𣪊
右 32 }

右 40 } 決嬉來不來
左 39 }

右 51 } 不詳
左 52 }

釋文附註:

2, 𠬜釋勿。在甲骨文中,勿與物牛之𠂤非一字,而與不,弗,亡等字略同,皆有否定及禁止之義,此例甚多,如本篇12,16,21,23,26,28各辭皆是。

3, 宰義同牢,用法有別。疑卽牛爲太牢,羊爲少牢之義。从羊之宰有作𦎫者可證。少牢卽小牢,太牢卽大牢也。

4, 歲字从郭鼎堂釋。

5, 謝字从羅雪堂釋。疑是地名。

9, 沚,疑卽邶,地名。𢀛,丁山先生釋死。

15, 𠂤从中从口,爲貞人名,音義不可知。

20, 𢀛,疑是取字。

22, 𠂤,从羊,从人,當卽羌字,如24辭"羌十人"卽樂舞者十人也。

29, 𣪊,从酉从州,疑是酬字。𢀛,丁山先生釋疾。

33, 𠂤,或釋岳,或釋羔。

39, 嬉同僖。

54, 𠂤,釋复,疑卽復,覆之初文。

59, 𠂤釋方,疑卽房字。

68, 𠂤,音義不可知,貞人名。

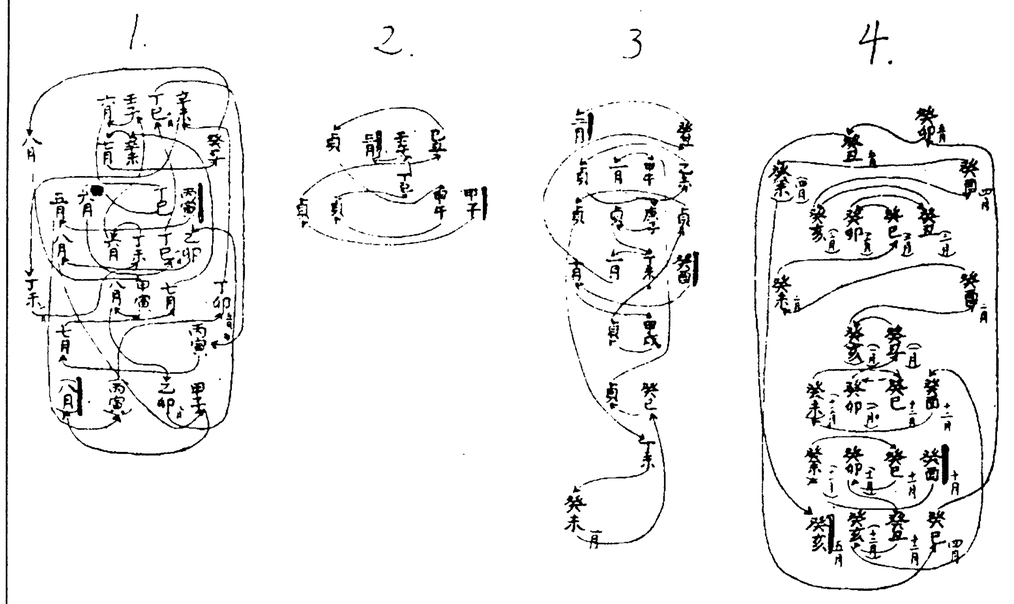
69, 𠂤,同上。

72, 𠂤,同上。

74, 𠂤同上。

關係,各製一圖。箭頭表示先後的次第,粗線表示起訖。

大龜四版貞卜次序圖:



以上四圖,以第1,4兩版爲完全,4版中括號內之甲子及月份,乃據左右對稱及應有之癸日擬補之者。由此可以見貞卜的次序,大概是如此:

先右後左,若一事兩貞,則皆在對稱處。

先外後內。

先下後上。

先中部,後四隅。

先疏後密,有時爲填滿空隙而上下內外錯落。

至于卜而不刻辭的,當又在有辭卜兆之後,觀第3版未灼之處可知,另詳下節。

丙, 一版所用的時日

在四版中,每版所用的時日,也可由甲子求出。茲列舉各

四月 癸酉 癸(未) 癸巳

五月 癸卯 癸丑 癸亥

1,2,3版爲雜卜所用,多左右對稱之關係,故用的日子較少,由三個月乃至五個月。4版爲純粹卜旬之用,一旬一卜,故用的日子較多,前後共用九個月。茲更列一表:

版別	開始卜日		終了卜日		約計日數	所佔月數
	月份	干支	月份	干支		
1	五	丙寅	八	甲子	119	4
2	一	甲子	三	壬午	78	3
3	十	癸酉	二	癸丑	101	5
4	十	癸酉	五	癸亥	231	9

在這裏很可以看見殷代的卜法,除了卜旬是十日一次的照例的公事之外,別的事便不一定了,有一日卜四次的,如11,12,13,14等辭;有過了三十六天(五月辛未(5)至六月丁未(6))乃至四十二天(七月辛未(18,19,20)至八月癸丑(21))才再卜一次的。在這三十六天,四十二天之內,卜旬之版,已照例要用過三次四次了。

丁, 鑽,灼與兆

子,鑽。四版皆是鑽鑿並用的。尖長之處用鑿,旁邊灼處用鑽。茲依商代龜卜之推測文中所定龜甲各部分原名,列舉可以推知之鑽鑿處而統計之,約如下表:

甲之各部	大龜四版之鑽鑿數				備註
	1版	2版	3版	4版	
中甲 (1)	2	0	2	1	

左 4缺——決十五

一事一貞 右 4——不詳

右 24——決用羌,牛

右 35——決命酉史

右 46——決往于田(此版獨省月份)

68至89——皆卜旬之辭

上列各辭,除了一事一貞及純粹卜旬者以外,都可以見左右對稱的關係。前此出土之物,每因甲質脆薄,又經灼鑽,並接縫之處,皆易分裂破碎,故難得左右相聯繫之龜版。即或有之,而土人挖掘,見一片,檢一片,使原在一處之全版,輕輕離析,遂永無合攏的一日。嘗見北京大學所藏甲骨刻辭,有後足叉左右兩片,對稱處爲卜貞用牲之辭,惜已分裂,不能見其關係。又如本報告第一期122葉所舉之一例,(鐵雲藏龜244)也可見左右對貞之關係。並錄于此以供參證。

甲子卜,㞢貞:求年于丁,食十物牛,𠂤百物牛。(右)

貞:求年于丁,食三物牛,𠂤卅物牛。九月。(左)

此爲"左右皆正"之例,以決求年用牲之數。

已酉卜,步,王征苦方,下上若,受我佑。(右)

貞:勿征苦方,下上弗若,不我其受佑。(左)

此爲"左反右正"之例,以決征否苦方。

乙, 貞卜先後之次序

在一版上,貞卜先後的次序,也是應該研究的問題。以前出土的龜甲,因爲太零碎了,不能見彼此貞卜的時間關係,在大龜四版中,只有1,4兩版,較爲完全;2,3兩版,則幾缺過半,不易看出貞卜的次序。現在依有月份的甲子推算,並左右對稱的版月份甲子於下,其不繫月份者,則推算其應歸某月,旁作問號以示未能確定。

1版: 五月 丙寅 丁卯 辛未?

六月 丁未 壬子 丁巳

七月 丙寅 丁卯 辛未

八月 癸丑 甲寅 乙卯 甲子?

2版: 一月? 甲子

二月? 己丑 甲午

三月 丁巳? 壬午

3版: 十月 癸酉

十一月? 甲戌?

十二月? 丁未?

一月 癸未 癸巳? 甲午 乙未? 庚子?

二月 丁未 癸丑

此版多殘缺,又多不註月份,按卜辭迴避界劃之例,以癸巳一辭與甲戌(上)丁未(下)相較,當先有甲戌,丁未,故列甲戌于十一月,丁未于十二月。又以庚子一辭與甲午較,當先有甲午,故列庚子于一月。

4版: 十月 癸酉

十一月 癸(未) 癸巳 癸卯?

十二月 癸丑 癸亥? 癸酉

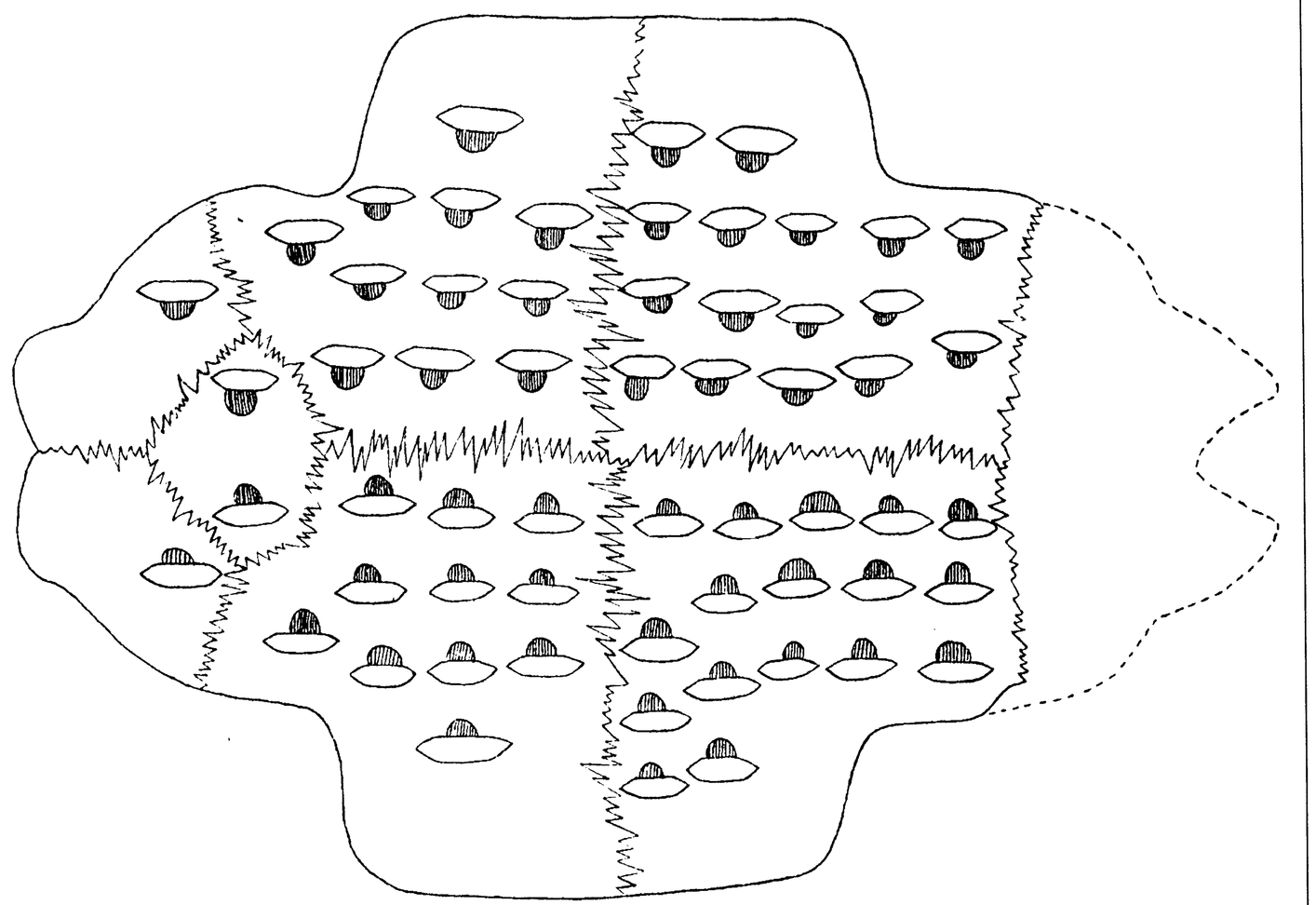
十三月 癸(未) 癸巳

一月 癸(卯)? 癸丑? 癸(亥)

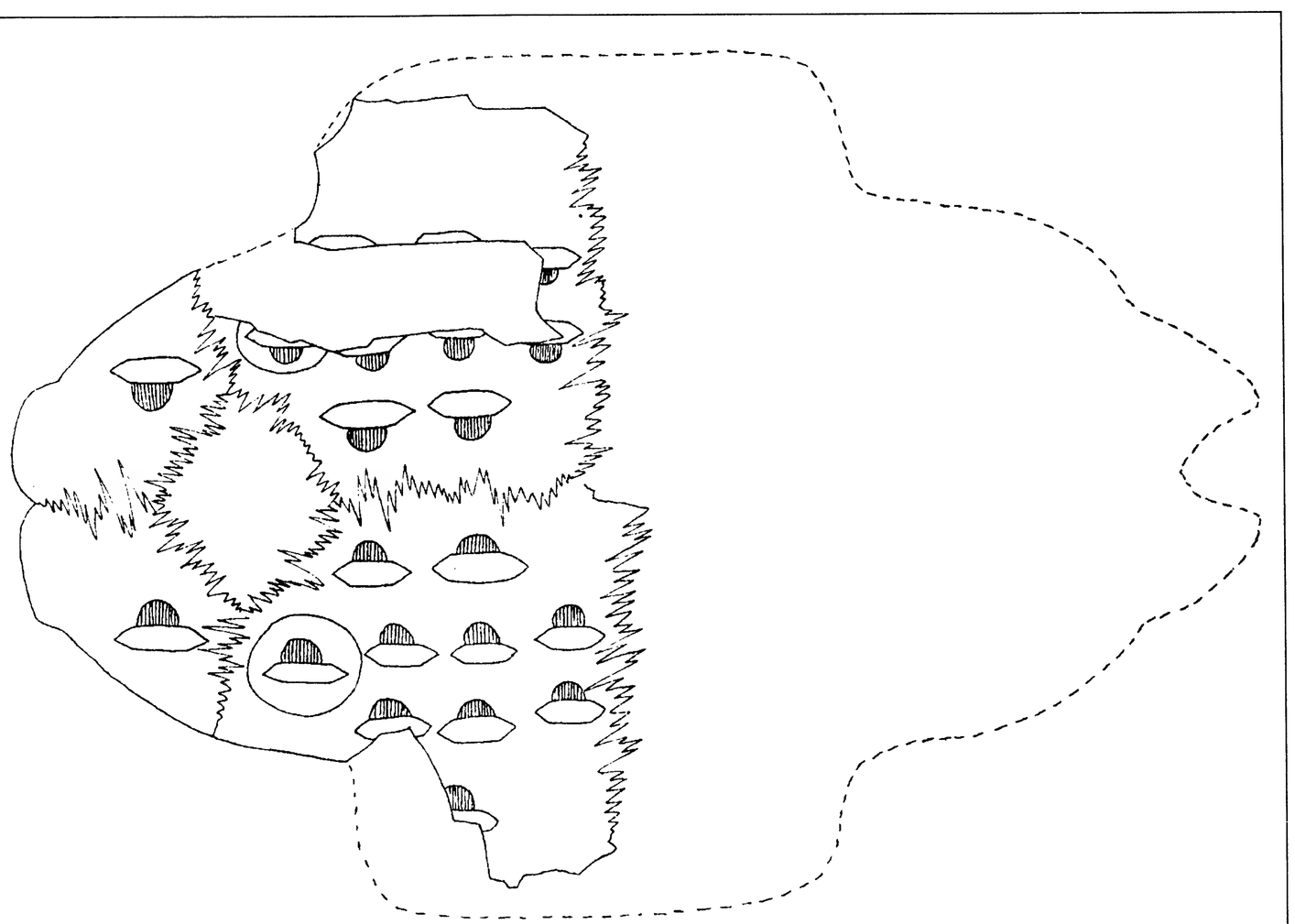
二月 癸酉 癸未 癸(巳)

三月 癸卯? 癸丑? 癸亥?

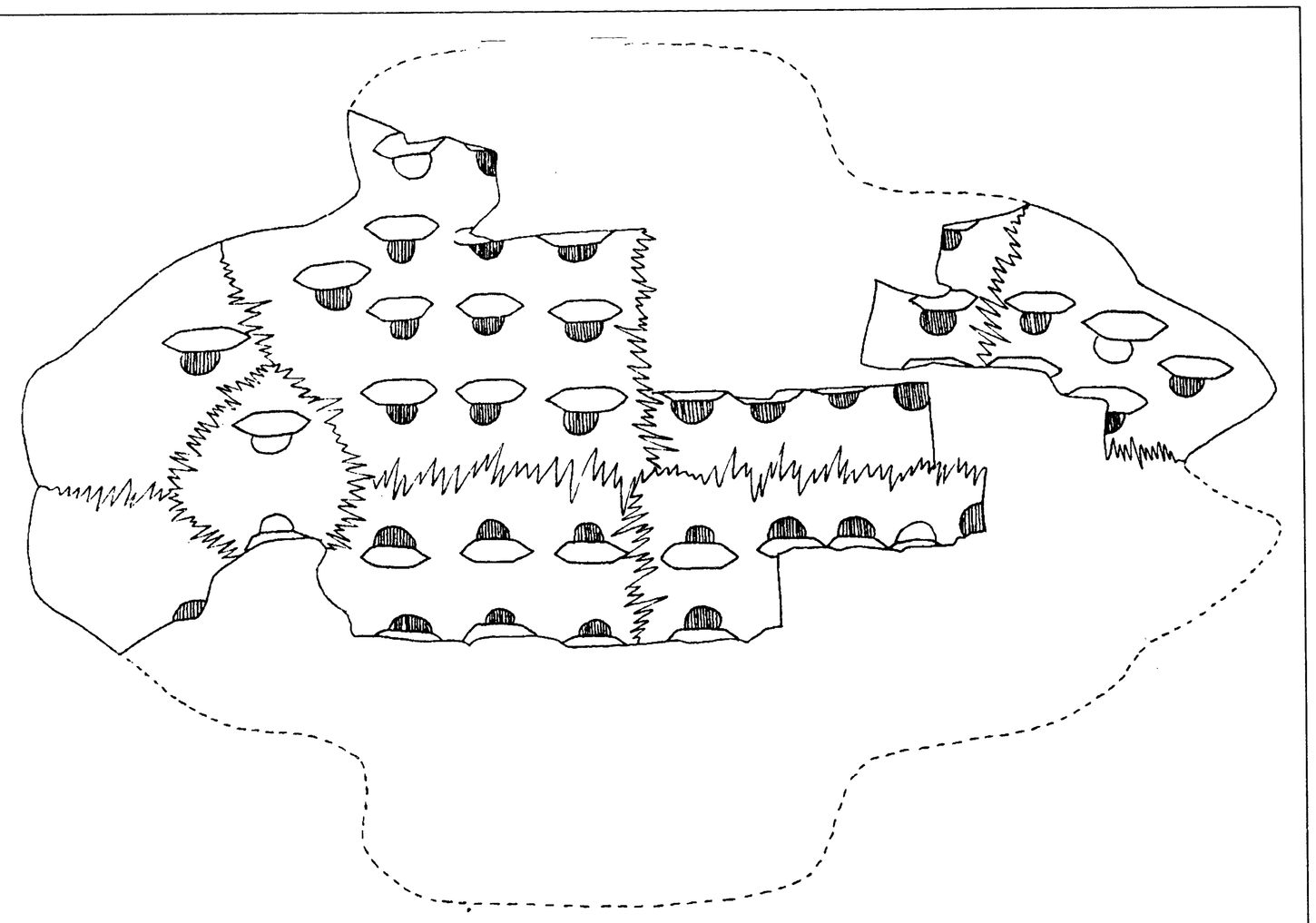
大龜四版背灼圖 (1)



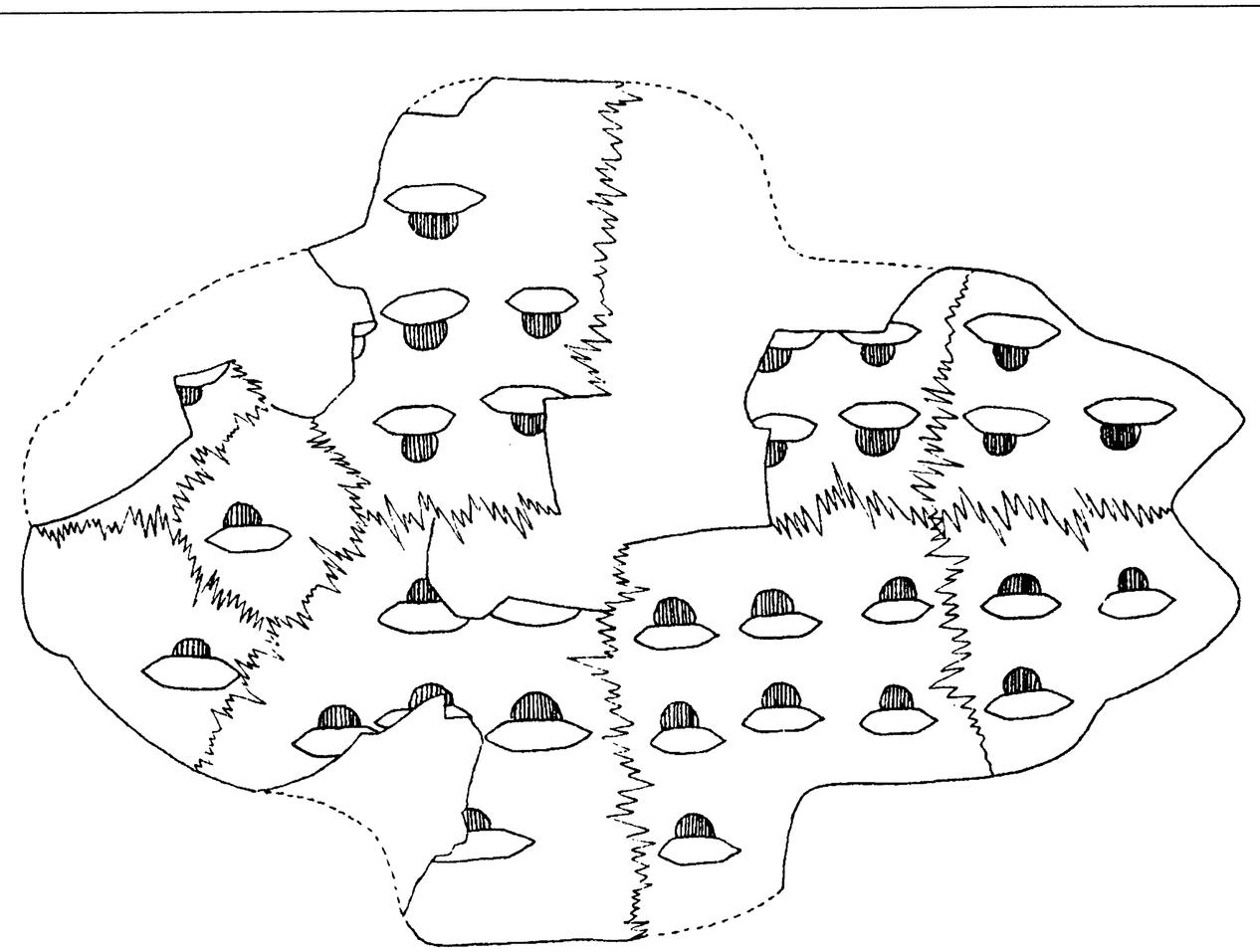
(2)



(3)



(4)



2	18	10	8	
3	33	29	4	
4	35	25	10	此版可見者 22 辭,已推得全版爲 25 辭。
總　計	145	92	53	

由此可見貞卜與刻辭的關係了。3 版邊緣不全,4 版純爲卜旬,不能爲例。就 1,2 兩版看來,則貞卜而刻辭記事者,不過二分之一,這其中的緣故,或不出于下列各端:

一,所問之事,已經一卜再卜,然後刻辭記之者。

二,因小事而不刻辭記之者。

三,刻辭者先卜,以後再卜因無隙不容刻辭者。

四,卜于此版而刻辭記事于彼版者。

以第一項論,在四版中,即有一事二貞三貞四貞之例而每貞必書,又僅一貞者甚多,卜旬即其好例,是此項不能成立。三項亦然,有時有本有空隙,可容刻辭而反不刻者,是此項亦難成立。惟二,四兩項,尚有可能。龜骨多全版卜而不刻辭者,應屬二項,而有刻辭無卜兆之骨版,似又應屬于四項。

但是問題又來了,就以大龜四版中第 4 版而論,這二,四兩項也難成立。此版爲每旬卜用之物,凡卜用 35 次而刻辭者 25,所餘 10 次,不卜旬又將何卜?因全版既純粹爲卜旬之用,便不應更以其他小事羼混其間。若所餘 10 次,仍皆爲卜旬之用,而記事不刻于此,則卜旬之辭,從未在他處發現無兆璺者。是二,四兩項,于此又皆講不通了。

在四版中,除 4 版爲純粹卜旬者之外,其餘 1,2,3 版,有用三,四,五月之久者,而祭祀,行止,册命之事,幾于月月有之。至于征伐,田漁不能常有;卜年,卜霽,必待定時;瘳,夢與告,也都是罕見之事;所以四版中獨無之。雜卜一項,則多爲不可知之辭,然可斷其不屬上列各類。

於此,可見殷人日常貞卜事類的一斑。

文例考三

甲文刻辭左行右行之例,我曾在商代龜卜之推測一文中,求得他的大概,彼時未見全龜,僅由各部分拼湊而成,得公例如此:

"中甲(1)刻辭,由中縫起,在右者右行,在左者左行。

首右甲(2)由右邊始,左行。

首左甲(3)由左邊始,右行。

前右甲(4)除前足乂之上由右邊起者左行外,其餘各辭一律右行。

後右甲(6)除後足乂之下由右邊起者左行外,其餘各辭一律右行。

尾右甲(8)自右邊起左行,(自中縫起右行)。

前左甲(5),後左甲(7),尾左甲(9),刻辭皆與右方對稱,其左右行適相反。"

總括言之,就是

"沿中縫而刻辭者向外,在右右行,在左左行。沿首尾甲之兩邊而刻辭者向內,在右左行,在左右行。"

首左甲 (2)	1	1	1	1	
首右甲 (3)	1	1	1	1	
前左甲 (4)	11	9	13	6	
前右甲 (5)	11	10	13	6	
後左甲 (6)	16	?	16?	7	3版以每行五讖,三行加邊綠一讖合計
後右甲 (7)	17	?	16?	7	
尾左甲 (8)	5	?	5	3	1版以3版爲例
尾右甲 (9)	5?	?	5	3	
合　計	69?	21?	72?	35	有"號者爲未定數

丑,灼。灼在鑽後,這是由第 3 版可以斷定的。大概卜事是在龜版刮削整治之後,先施鑽鑿,然後卜用,卜一次即灼一次。3 版有鑽而未灼者五處,一在尾左甲,一在前左甲,一在後右甲,兩個在中甲相對之處。這五處有鑽無灼,所以正面也不見兆璺。茲附列大龜四版鑽灼圖以供參閱。

寅,兆。兆,本緣于鑽灼,鑽灼之處即見兆之處。四版之灼,皆自中縫起,兩旁內向,故兆璺也就內向。圖已見大龜四版摹寫本,可參閱。

現在把可以推知的卜兆,分有刻辭無刻辭兩種,列表比較于此:

版　別	可知之兆	有刻辭者	無刻辭者	備　　註
1	59	28	31	

事類考二

貞卜的事類,現在所知道的,不過一個概畧,有許多因字不可識,文不可通而無從歸類的,正還不少。例如一個瘳字,經了丁山先生的認識而我們才知道應添上"卜夢"一類。現在把已有的各類和四版中所見的,列表比較一下。

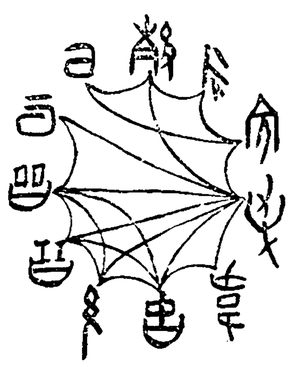
卜事分類	四版所有之各類及卜辭號數			
	1	2	3	4
祭 (1)	1—3 6—8 祭 11—17 22 -24 27-28	祭 33—34	41—45 54- 祭 55 59-60 63—64	
告 (2)				
𡆥 (3)	𡆥 9—10			
行止 (4)	行止 5		行止 46—49	
田漁 (5)				
征伐 (6)				
年 (7)				
雨(風) (8)			雨 51	
霽 (9)				
瘳 (10)				
夢 (11)				
命 (12)	命 20—21 25—26	命 35	命 56—58	
旬 (13)				旬 69—89
雜卜 (14)	雜 4 18—19	雜 36—37 29—32	39—40 48 雜 52 53 61 62 65 66	

成立的。

1. 貞上一字是人名的確定。從前研究契文者對于貞上之一字,有疑爲官名者,有疑爲地名者,有疑爲所貞之事類者,現在根據第 4 版,可以確定他是人名。因爲貞上一字如爲地名,則必有在字,如"在向貞,""在潢貞"(殷虛書契考釋下五葉引),只言"某某卜某貞"者,決非地名。又 4 版全爲卜旬之辭,若爲卜貞事類,或職官之名,應全版一致,今卜旬之版,貞上一字不同者六,則非事與官可知。又可知其決爲卜問命龜之人,有時此人名甚似官名,則因古人多有以官爲名者。又卜辭多"某某卜王貞"及"王卜貞"之例,可知貞卜命龜之辭,有時王親爲之,有時使史臣爲之,其爲書貞卜的人名,則無足疑。貞卜而書命龜之人,此爲一時風尙,也有一部分卜辭不記貞人的,也有全不記貞人的。四版的貞人分配,畧如下表:

版名	月份	貞人	卜辭號數	無貞人之辭	備註
1	五	賓	1,4,5		
	六	賓	6,7,9,11,13,14		
	七	㱿	15	20	無貞人之辭,對稱處及同日卜者不計。
		賓	18		
	八	㱿	25		
2	?	賓	29,31,33,35		
	三	賓	36		
3	十,一,二			39,41,41,46,52,54,56,59,61,63	此版全無貞人
4	十	㠯	69		
	十一	𠂤	70		
		㱿	71		
	十二	𠂤	72,73		
		𠂤	74		
	十三	㱿	75,76	77?	
	一	?			
	二	㱿	78—80		
	三	㱿	81—83		
	四	㱿	85,86		
	五	㱿	87—88		
		𠂤	89		

求所有材料,另文論之。茲先將貞人關係,圖之于下,以見一斑。



㱿,似乎應該是武丁時代的貞人,㠯除了和𠂤,𠂤未見同版外,別位都曾和他同時。又圖中只有𠂤,𠂤,㱿,㱿,韋五位不見於四版,餘均見 1, 2, 4 三版中。

四版可以說是同時,這是從斷代標準的八項中,都可以證明的,雖然 3 版是不記貞人。因爲㱿爲武丁時人,所以說這些貞人,也是早不過武丁,晚不過祖庚的。

種屬考五

大龜四版出土的同時同地,曾得到一副較完整的龜甲,這大概是卜用龜原料之一。這龜的腹甲,與卜用者差不多一樣,藉它很可以證明卜用龜的種類。據秉志先生的考定,定名曰"安陽田龜"(Testudo Anyangenses)。有論文載本刊,不再詳述。

茲以此安陽田龜之腹甲爲標準,與大龜四版比較,列表于下,以供參考。

標準線		安陽田龜	四版之 1	2	3	4
寬	甲	84公釐	110公釐	112公釐	116公釐	92公釐
	乙	133	162	165	(167)(3)	140
	丙	98	116	(118)(1)	120	103

現在把這兩段記載,證之大龜四版,完全對了。參看釋文一至四,各辭數碼下之箭頭,卽示文例左右行的方向。

時代考四

當民國十七年試掘殷墟得到甲骨之時,因"字形之演變,契刻方法與材料之更易,"我就疑心"決非短時期內所能有。"又因三十六坑龜甲層之特出,更疑此坑爲"商代前世之物。"今更參以三次發掘之經驗,乃知殷墟時代,非僅自武乙至帝乙之三世,而以王靜安先生盤庚遷殷之說爲不可易。

古本竹書紀年稱"自盤庚徙殷至紂之滅,二百七十三年,更不徙都"(據朱右曾輯本)。今若以盤庚十四年遷殷,至帝乙之末(假定此時因河患而都邑淹沒),亦當有二百餘年。此二百年間,經過了七世十一王這七世十一王的卜辭,必有許多不同之處。因此而斷代的工作,也就應運而生。倘能把每一時代的卜辭,還他個原有的時代,那麼,卜辭的價值,便更要增高,由籠統的殷人二百年間的卜辭,一躍而爲某一帝王時代的直接史料了。

斷代之法,應從各方面觀察而求其會通,大要不外下列的數種:

一,坑層　二,同出器物　三,貞卜事類
四,所祀帝王　五,貞人　六,文體
七,用字　八,書法

在四版中,這八種標準,都同樣的可以證明它們的時代。這裏單單提出"貞人"一項,因爲貞人之說是全靠這四版啟示而

2, 因貞人以定時代。凡見於同一版上的貞人,他們差不多可以說是同時。如上列第 4 版,貞人共有六個,在九個月中,他們輪流着去貞旬,他們的年齡無論若何,必須在九個月內是生存着的,最老和最少的,相差也不能過五十年。因此,可由貞人以定時代。4 版中的㠯先生,他的資格算最老了,也許他的年紀活得最大,所以和他同過事的貞人是狠多的。我曾就鐵雲藏龜,書契菁華中所列的同版的貞人,選出有關係的一部分,與四版相較,已可畧知四版的貞人,大概是在武丁祖庚之世。這是從帝王,書體,同時人名等都可以互證的。關于貞人,將搜

釋後岡出土的一片卜辭

董作賓

像後岡那樣鼓彭彭地一塊高邱,地面上又滿佈着繩紋陶片,鬲足,間或有石斧,石刀的殘片,誰都會格外的注意它。後岡,在安陽縣城北二里許之高樓莊(卽是舊的抄紙莊)後,濱臨洹水的南岸,豫新紗廠的對面,平漢鐵路洹河鐵橋之西。當十七年秋季我初到小屯調查時,歸途經過此地,聽說有人在河神廟附近河岸,得過大的有字的胛骨,那時就很注意這一帶地方。十八年春季,李濟先生來了,也覺得此處應該發掘,後來因爲小屯工作還沒有頭緒,所以把它延擱下了。後岡的名子,是本年春季發掘時才知道的,以前我們只叫它做高樓莊後的大谷堆。發掘的工作,完全是梁思永先生主持的,工作時期,有一個半月的光景,在最後幾天內,吳金鼎先生也來幫忙,就在他所監工的坑裏,發現了一塊字骨。詳細,有他們的記載在,這里只把編號的登記抄下:

總號	種類	名稱	出土地點	標點			出土時間		
				X	Y	Z	月	日	午
H-478	骨	字骨	白灰坑二之灰土坑	1.2	2.9	9.4	5	9	下

據說,這白灰坑的時代較早,打破白灰坑的層次,又有一個灰土坑,灰土所出的陶器等類,多同於殷墟,白灰坑的時代,是有帶彩陶片,和黑光陶器同出的。這可以說是本季發掘意外的創獲,爲晚期之甲子表。四辭有康丁之祀,而稱康祖丁,可知爲文丁帝乙時物。

此版時代,可斷其在文丁帝乙之世,卽殷之末季。又就吾人所可推知者,小屯村中及村北河濱,爲殷人宮禁之地,宗廟宮室之所在,所出甲骨文字,固皆王朝之物。今後岡東去小屯三里之遙,有此文字出現,其是否王朝卜辭,自屬疑問。若占卜年歲豐歉,固不僅帝王所專有,尋常百姓,貞問受年與否,亦是可能之事。則卜法與文字之能普及於民間,於此也可考見一斑了。

所以在這小小的一塊骨版上,實在給予我們不少的啓示:

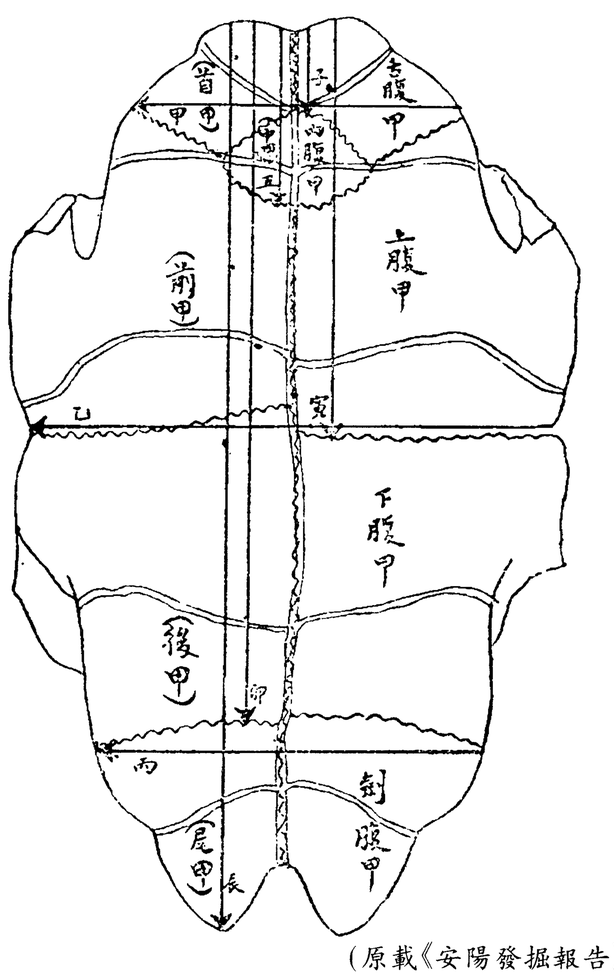
1. 這塊字骨,倘然不是殷代王室貞卜之物,必爲民間所用,是骨卜之法,已普及于一般民衆。
2. 骨上的文字,倘然不是吏官所記,是當時的民衆也能應用文字了。
3. 由書體的沿變,和用字的簡略,可以推知它的時代應在殷之末葉。
4. 如民間已有卜問"受年"之事,可證其時必爲農業甚盛的時代。
5. 由此一片卜辭,足以推斷同坑出土一切遺物的相當時期。

二十年七月二十四日,盛暑時候,寫于焙茶塢裏

長						
	子	20	26	28	31	25
	丑	46	66	71	74	65
	寅	102	135	138	147	115
	卯	117	224			
	辰	230	(282)(4)	(284)(4)	295	240

註:有括號之數碼右上角小註數字,示據以比例推算之版。

附標準線圖:(據安陽田飜)



(原載《安陽發掘報告》第 3 期,1931 年)

由此足證仰韶,城子崖,小屯三地文化的相互關係,將來大體研究完結時,對這三個地方文化的溝通,必有重要的貢獻。

這里只說一塊有字的卜骨,由此以斷定灰土坑之時代。這塊卜骨上的文字是:(見文後附拓本)。

當它出土的時候,適明義士牧師去參觀了,他以爲丙辰下的一個字很新穎,惜不可識。晚間我見到了,覺得丙辰之下應是兩個字,並且認爲是"受年"二字,今說之於下:

受字从兩手,像授受之意;从舟,若釋爲舟船字,則爲諧聲;若釋爲盤盞字,則像授受之物。在甲骨文中,受字普通作(前編卷四,三十七葉),也有把作的,像(後編下,三十三葉),又有舟字省作的像(前編卷七,三十八葉)。此作,完全省去了舟字,是受字最簡的寫法了。

,卽是年字的省寫。年字甲骨文本作,从人首戴禾,像豐年收穫之意。也有省从禾的,如後編下,三十三葉一辭:

癸酉卜从求,受年()。

受年年字卽省作禾,是個最好的例證。

這段文字,看丙辰二字的書體,可定是晚期(指文丁,帝乙時)之物。早期(指武丁乃至祖甲康丁時),丙作,辰作,辰上無一橫畫,丙內兩筆不延長至足。凡丙作形,及(見甲子表)形者,皆晚期之物。辰字上有一橫者,皆晚期物,例如

 甲辰酋祖甲,王來征盂方。(後編上,十八葉)

 甲辰 (前編卷三第二葉)

 甲辰 (同上,第七葉)

 貞辰卜貞康祖丁丁其牢……。(前編卷一,二十一葉)

第一辭,王字作,又酋祭祖甲,至少爲武乙以後之物。二三辭

安陽侯家莊出土之甲骨文字

董作賓

(一) 發現與發掘

先從侯家莊的發掘說起。

在民國二十一年春季,洹河北岸的侯家莊,已經有過一次發掘。那時本着二十年的計劃,爲了探求殷墟的範圍,把工作擴大。二十年的預定計劃,是要向洹河兩岸,十里以內去找與殷墟同時的文化遺物及遺址,再拿殷墟的遺物做標準,找那前於它或者後於它的遺址來作比較研究。那年的春秋兩季,在後岡發現了前於殷墟的彩陶同黑陶,並且有殷墟式的白陶,無意中藉了小屯文化,證明了仰韶與龍山(城子崖)兩種文化的時代的層序。在四盤磨一帶,發現了同於殷墟的文化遺址。我們陡覺得這是又到了一個峯迴路轉柳暗花明的境界,我們高興起來,便約了常川駐在安陽的王湘君向洹河兩岸,到處探檢,他果然找到不少的遺址所在,這侯家莊的遺址也是其中之一。於是二十一年的春季,就在這里開始工作。

1. 侯家莊高井台子之發掘

根據王湘君的調查,知道侯家莊西北濱河地方有一塊遺址,於是在二十一年春季,就派他同了吳金鼎君前往發掘,統共作了八天,他們工作的地點在莊村之西北約里許的洹河北岸上,地名土人呼曰高井臺子。這一次發掘的結果吳君曾有簡單的報告,(刊安陽發掘報告第四期.葉629)現在摘錄如下:

> 吾人發現此址之表面一層,有細柄豆及灰色陶片,與龍山淺處頗有相似之處(按龍山上層遺物,約當春秋戰國之世)。掘破此層之後,便不外乎下列幾種可能:
>
> (一)純粹仰韶式物,以下卽爲生黃土,吾人名之爲"仰韶區"。
>
> (二)類似龍山下層之物,不過未見純正之黑陶,而單見厚片之黑陶,且有帶刻紋者,大概較龍山爲晚,吾人名之曰"黑陶區"。
>
> (三)先出黑陶,再出仰韶,換言之,卽灰陶,黑陶,紅陶三層文化相壓置,吾人名之曰"三層區"。

由這段記載看來,這遺址之表面一層是晚於殷墟的,而所謂"仰韶區"與"黑陶區",又都是早於殷墟的,所以這一次發掘,只是找到了些前於及後於殷墟文化的比較材料。

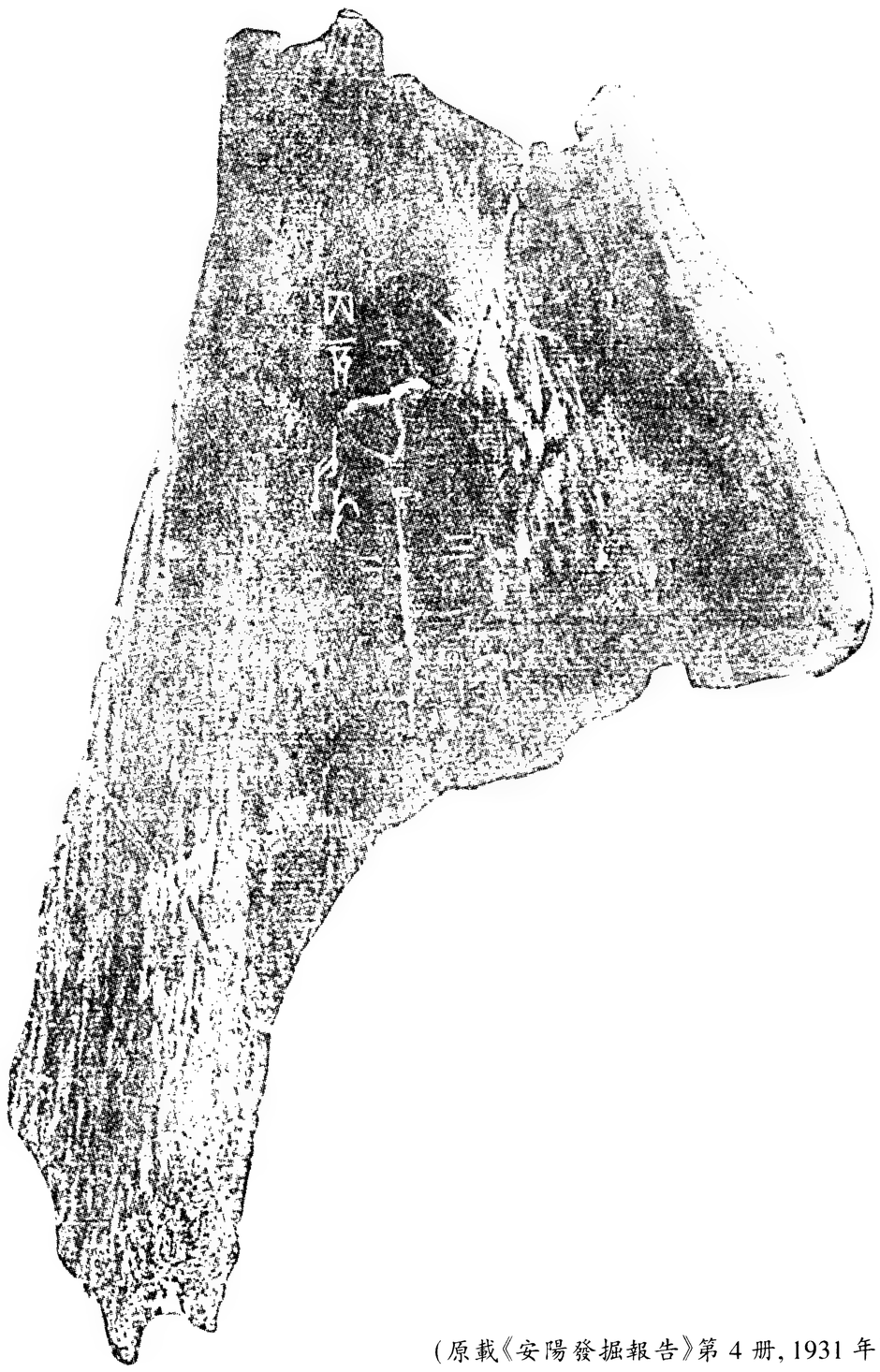
這次工作,只找到幾塊"龍山式"的卜骨,照例這卜骨是沒有文字的。殷墟式的甲骨文字,自然也同其他的的遺物一樣,在這遺址上,不曾有所發現。

2. 侯家莊發現甲骨文字之由來

安陽小屯村一帶的挖掘甲骨文字,遠在數十年前,村人的私掘古墓,搜求所謂"爵盃花插(觚)玉戈頭",也是十年以前的事。自從民國十七年中央研究院在殷墟工作以來,附近村人,利欲熏心,早已蠢蠢思動,不過爲了地方政府的禁止,不得不偸偸摸摸去做,多少還遮掩着官家的耳目;在夜間,在院子或屋子裏挖坑,實在不能夠暢所欲爲。從二十二年的春天起,却就大大不然了,他們靠着地痞,流氓,白面犯,勾結了官紳,便大幹起來。洹河兩岸的區長,便是盜掘古物的領袖人物,古董商人,出了六七千元的"捐款"給所謂"古物保存會",他們就可以坐地分贓,公然買賣。於是這盜掘古墓在安陽已成了一種公開的秘密了。一般的村農,都瘋狂了一般的去刨古,他們寧願放棄了地面上的工作,而專心致力於地面下的工作。

民國二十三年的春天,三月裏,我們第九次發掘殷墟的工作開始了,繼續着八次的工作,在小屯同後岡兩地,同時發掘;一面請地方政府嚴厲的制止私掘。但是私掘的風氣既然極盛一時,那里能禁止得了,所以是禁者自禁,掘者自掘。不過,私掘的目的在得銅器,寶銀元,與我們做遺址,研究問題的,目的迥異;因之,方法也就不同。我們要的是有灰土,有黑土,或紅燒土,有瓦片,凡是經人居住的地方;他們却頂討厭的是挖出了灰土同瓦片,他們要找的只是夯土,夯土是銅器葬——卽"三代"墓葬的線索。他們本來在遍地裏找墓葬,却於無意中在侯家莊南地找着了灰土坑,找着了殷墟式的遺址,找着了甲骨文字。

侯新文,是侯家莊一個老戶,他同他的祖母,合夥所有的祖遺田產不到一畝地,地在莊的南面,約有半里之遙。他看見別人都在自己地裏刨,刨,刨出了銅器,玉器,賣回來白花花的大洋錢,他眞是不勝垂涎三尺。他想:我何不也試試我這塊地,俗話說得好:"遍地是黃金,單等有福人",難道我就沒有這一份福氣?他拿定主意,便約了幾個人,在地的南頭刨起,刨了一個整天,看看日色平西,他們還沒發見什麽寶物。據說這天是二月初八(陰曆)。大家都敗了興,散了,他也沒精打采的爬出坑來,看着這暮色蒼茫裏堆着的成績是一堆打破了的骨頭。他捨不得這費了一天血汗的出品,他把大衣服脫下來,一塊一塊檢了回



(原載《安陽發掘報告》第4册,1931年)

去,打算再審查一遍然後棄去。在豆油燈光之下,他用指甲剔去了泥土,一片一片看,他先發現了有"火號"(灼痕),他聽人家說過,"有火號的骨頭會出字的",他第二步就找字,結果,他居然找到了幾塊是刻着字的骨頭,他這一喜眞是非同小可。

從十七年以後,眞的"字骨頭",在古董店是幾乎絕跡了。除了幾塊老的收藏,或者指甲蓋大小的碎片之外,大的都是藍造和王造。貨雖然缺,但是價錢却還賣不上。侯新文一古腦兒找出幾十塊"字骨頭",秘密的到古董店去賣,因爲要"求善價"所以終於也沒有"沽之"。三月二十九,我們的密探報告我,並且裝作收買古董的客人,取了一塊樣子給我看,(就是本文圖錄中的第27塊)那時徐旭生先生適過彰德,下車參觀,也在那里,我們看這是晚期的文字,又聽說是洹河北岸出土,眞高興起來了,這彷彿是殷墟發掘的新生命。從這天起,接連着就籌備計劃洹河北岸侯家莊的發掘。

3. 侯家莊南地之發掘

探聽着侯家莊出甲骨文是三月二十九日,接着籌備向河北去開工,調查出土地點,辦理公文手續,到四月一日完畢。二日的清晨,我們集齊了小屯,後岡兩地的工作人員及保安隊,工人,直赴侯家莊而來。到了侯家莊南地,把工隊分爲東西兩組,皆開南北縱溝,以試探這遺址的蘊藏之謎。

一面,我招來了保長侯得仁和發現甲骨文的侯新文愷切的把工作的意義宣示給他們,同時囑侯新文把掘獲的無字甲骨,統統交出。合計先後繳出的及從無字骨中檢出的,共有三十一塊:

有字胛骨　二十六塊

有字龜甲　一塊

由卜骨中檢出有字胛骨　四塊

無字卜骨　一包袱

據說這是一坑所出的全數了,由無字卜骨中檢出骨曰三十餘個,可以知道這一包袱中,至少是三十多個骨版的殘碎成績。有字骨版,共有四個骨曰,也可以說其中的有字骨版至少有四個。這坑中有字龜甲只一片,無字的也佔極少的數量。

把骨版的碎片都點收之後,當時付以代價十元,同着保長簽了字,算是完了一樁公案。這天下午,我又約了侯新文到南地去找他發現甲骨文字的老坑,居然找到了,坑在我們所挖H.S.8坑之東約數公尺(在H.S.57坑中)。將盧土掏出,於盧土中復檢得有字骨六版(圖34二版,31,9,18,39)其中二版,可與侯新文以前交到之骨版,文字啣接(34與35,9與10)。可以實際上證明侯君之言非妄,而此一批材料之出土地,確切卽是此坑了。坑爲不規則圓形,直徑約一公尺許,深至一公尺四寸五;其中爲灰黃雜土,周圍皆至生黃土壁,蓋此坑原爲存儲什物而挖成者。

發現甲骨之出土地旣得,吾人乃逆料旣有此存儲甲骨之坎穴,其近旁當有居住之跡,循是探求,結果得東西兩組遺址,而大龜版七事,卽出土於此東組遺址之中。

(二)大龜七版之出土

這七版大龜,乃是六個腹甲,半個背甲,在侯家莊的工作中,可以說是意外的收穫。我們只打算清理一下這個遺址,看看它同已出的甲骨文字的關係,並不敢有多大的奢望。關於大龜七版的出土情形,看守這坑的石璋如君有過詳細的記載,現在摘錄如下:

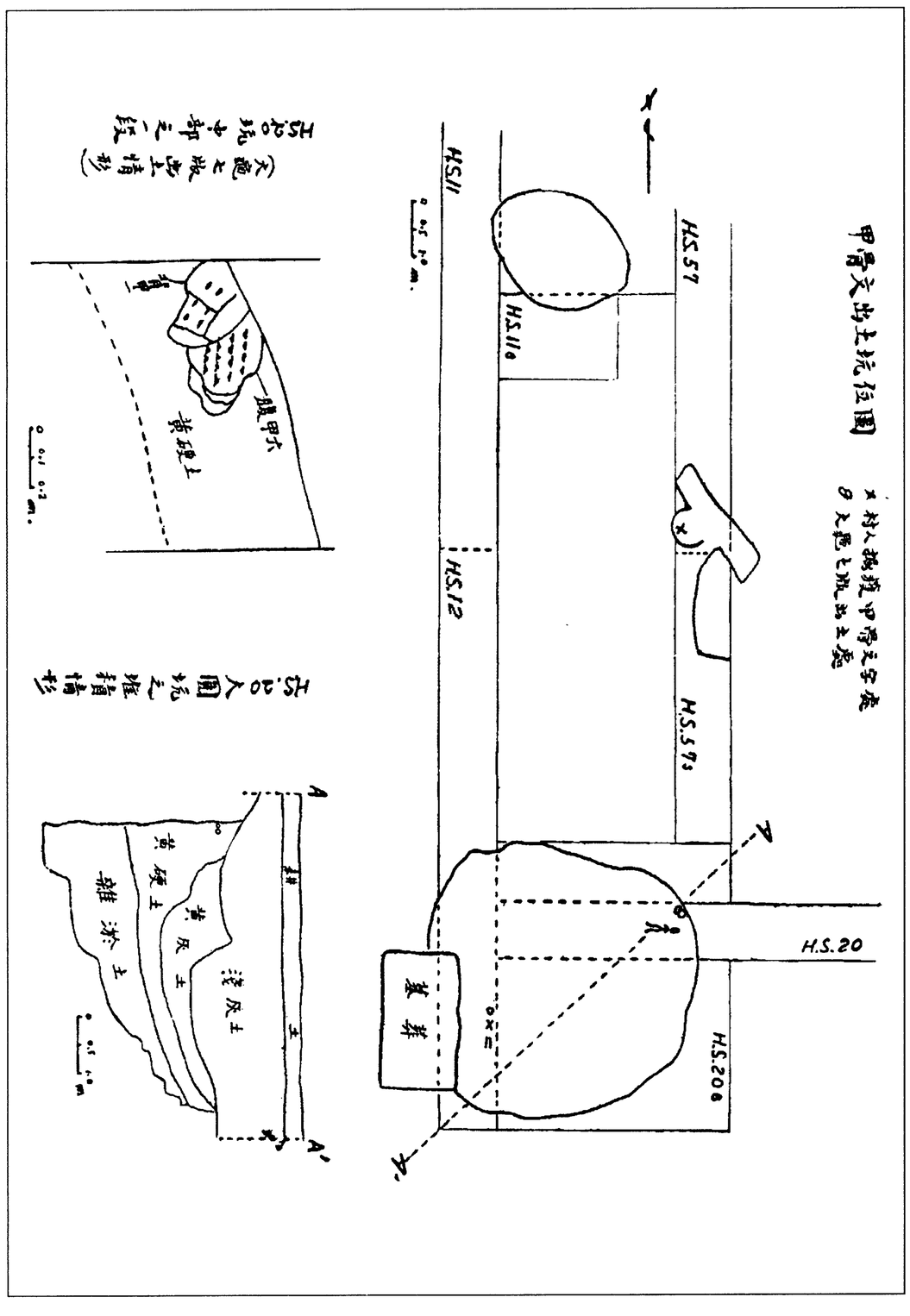
> 四月十一日下午五時,已經是該要收工的時候了。在H.S.20大灰土坑的東北隅,深一公尺五寸的黃硬土中,發現了卜用過的大龜版。它們分南北兩組,錯落着相壓。南邊一組共有六個完整的腹甲,它們的表面向下,裏面有鑿灼之處向上,牢牢的黏貼在一起。它們的頭端向西南,尾端向西北。北邊的一組,是幾塊破碎了的背甲,散置成層,南面高,北面低在斜放着,它的右方壓了六個腹甲的一部分(看圖版之一,二)。
>
> 時已薄暮,天氣又那樣的濃陰;這龜版附近的黃硬土堅強難剔,緊張的,小心的,直到夜色蒼茫,纔把它們挖了出來,裹着厚輭的棉絮,捧回工作站。當夜經過精細的剔土刷洗之後,纔顯露出滿版面的字跡(圖版之三)。

出土的情形是如此。

六塊緊相黏着的腹甲,用了許多方法,纔把它們分離開來,按着出土的次序,第一塊在最下,第六塊在最上,編了號碼(卽拓本一至六)。破碎了的背甲,本來只殘餘着半甲的一部分,也把它黏對起來(拓本七)。

七塊龜版的環境,石君也有詳細的說明。H.S.20坑,挖在一個大圓坑的上面,這圓坑內的儲積,分三個層次:據石君說明:

> 大龜七版出土的處所,是在一個卵圓形的灰土坑裏。這灰土坑被一個後代的墓葬破壞了一隅,而失其完整。上口距現在的地面約六公寸;口徑東西長約五公尺,南北長約四公尺五寸。底部自西向東,呈坡狀,以次而下,



3. 第一層墓葬的時代,當在商末或周初,這建築物完全廢棄了之後。所以它與這灰土坑中的堆積,除了擾亂破壞之外,是沒有什麼關係的。

根據出土的遺物,也可以看出灰土坑堆積的兩個時期的異同,例如同出繩紋陶片,鬲,灰陶,紅繩紋陶,卜甲,都是殷墟後期所常見的;第二層(上層第五期)的刻紋陶片,帶釉陶片,可以說是殷墟最晚期的特產,在殷墟不能十分斷定者,這里給一個有力的實證。根據文字來斷定其他遺物的時代,並以斷定遺址的各個時代,這是可以互相爲用的。

(三) 遺址之概況及甲骨文之分佈

侯家莊南地之發掘爲時僅及兩月,故所知之範圍甚小,其東,西,南三面尚有甚大之面積,土人曾盜掘得物者,吾人尚不能知其蘊蓄之情形。吾人所作之一部分,原分東西兩組,適亦各自成爲一小組織,兩區皆有甲骨文字之分佈,可藉以確定其年代。茲分別述其概況:

1. 東部遺址之一小組

侯家莊遺址情形,幾完全相等於小屯村,有建築之堂基,版築,石礎;有地面下之圓及橢圓形窖穴;穴中有甚勻整之土階,有深及黃泉之方形竇窖。甲骨文字皆發現於窖穴竇窖中,亦與小屯全同。

在東部,有略作長方形之堂基一座,乃版築而成,方向子午線正南北,東西長約十四公尺,南北寬約七公尺,其上殘餘之石礎共十一個,尚排比成行列。此堂基爲第三期抑第五期築成,尚難推斷,但其爲殷墟後期之物,則無足疑。

遺留着殘破的斜坡和土階;坡與階上,附着一層黑色的硬砂,情形同小屯村E區大灰土坑(E161)的底部相彷彿;東部最深處約四公尺四寸纔到底。西部的斜坡和土階,很可能的是當時的人出入上下的路道。

灰土坑本身的堆積,和後來的墓葬的破壞,自上而下,可歸併爲三大層,列簡表如下:

層次	深度	土色	遺物
第一層	0.20---2.00公尺	雜灰土	瓦鬲
第二層	0.60---2.40公尺	灰土	灰繩紋陶,瓦鬲,灰素陶,紅繩陶,刻紋陶,帶釉陶,陶甕,骨,蚌,卜用龜版,石卵。
第三層	1.00---4.40公尺	硬黃淤土	灰繩紋陶,瓦灰,鬲,素陶,紅繩陶,骨,蚌,有字龜版,鹿角,石卵。

第一層墓葬雖沒有銅器出土,但是依據着墓的形制和殉葬器物的式樣,也可以斷定它是銅器時代的墓葬。二,三兩層的異點,是第二層沒有鹿角,第三層沒有刻紋陶,帶釉陶,陶甕。

這個記載,給了研究時代問題一個很大的幫助。因爲我們已經可以斷定了大龜七版是同時之物,又在第三期廩辛康丁之世,由此可以知道:

1. 第三層的堆積遺物同龜版,是在第三期廩辛康丁時代所填置的。這地方建築的工程,不能晚於第三期。
2. 第二層的堆積,當然在第三期之後,根據侯新文所挖之甲骨文字作旁證(詳下節),則這第二層應該是第五期帝乙帝辛時的堆積。

出土地	甲骨數	拓本	時期	備註
H.S.12A大圓坑	甲 8	1至8	第三期	擾亂
H.S.57小圓坑	甲 1 骨 30 (合 4)	10至17,19,至22,24, 26至30,32,33,35至38,40至42,	第三,五期	購得
	骨 6(合 2)	9,18,39,31,34	第三,五期	檢出(擾土中)
	骨 1	24		擾亂
H.S.31A 井中	骨 2	23,25		擾亂

甲骨文字,在此遺址中給予吾人之啓示,爲斷定遺址整個的時代之重要標準。殷代第三期廩辛康丁之世,此地確曾爲田遊居住之所,其後廢棄,至第五期帝乙帝辛時,更有改建及居住之跡。殷亡,尚有居人直至周秦之季。

4. 其他遺物與小屯之關係

從發掘所得的遺物看,也可以證明是殷墟晚期。曾參加過兩處工作之石璋如君,把侯家莊南地遺物,與小屯遺物,略略比較一下,作了一個簡表,可見此兩處之關係。表如下:

遺物種類	小屯村	侯家莊	備註
鬲	有	多	數量多者曰"多",
甑	有	有	常見者曰"有"絕
甗	多	無	不見者曰"無",不
皿	多	無	常見者曰"少"。
獸頭陶棒	有	多	
紅色繩紋陶罐	有	多	
刻紋陶片	有	多	
帶釉薄陶片	有	多	
白陶	有	無	
"將軍盔"式陶器	多	無	
孔雀石(鉱礦)	多	無	

堂基之南偏東,約去八公尺,有大灰土坑,形略方,直徑八公尺以上,深至四五公尺,以墓葬及後世擾亂,已不完整。基之北偏西,約去十七公尺,有大灰土坑,卽出土大龜七版處。灰土坑之北,約六公尺,卽村人挖得甲骨文字處。又北偏西約三公尺,有較小之灰土坑,直徑可二公尺。

總之,東部之中心建築物爲堂基,基前後之大小圓灰土坑,皆爲存儲什物之所,是無足疑的。

2. 西部遺址之一小組

在東部之南爲侯姓之大坟園,土饅頭林立,不得不舍之而向西移動,另爲西部工作,此組亦自成一系,乃於東部之堂基西南隅,相去七十四公尺處,又得一堂基,亦南北正向,東西約長十一公尺,南北寬四公尺,版築而成,上有殘餘之石礎十四個,尚排列有序,其爲堂基亦無疑。

堂基之南偏西約十公尺,有大橢圓坑一,坑中復有長方形深井。基之北偏西,約十一公尺,亦有橢圓灰土坑一,乃兩坑合成,其南半有土階,層層而下,爲出入此窖穴之道。基之正北約四公尺處,一長圓灰土坑,坑之南壁下有土階數級,如梯然。

此一組,亦有堂基及灰土坑,與東一組形式略同。

在若大的遺址中,限於近代墳墓,所作的一小部分遺址,除了一百四十八個盜掘坑,和二十個殘墓葬之外,所得的知識,不過如此。

3. 甲骨文字在此遺址中之分布情形

由上節可知此遺址之東西兩小組,皆有版築堂基及圓坑,其情形與小屯村北地略同。甲骨文字,在此兩組建築基址中,分佈情形,如下表所示:

遺物種類	小屯村	侯家莊	備註
石刀	多	少	
石斧	多	少	
石戚	有	無	
石網錘	有	無	
骨鏃	多	有	
骨鏟	多	有	
花骨	有	無	
字骨	多	有	
字甲	多	有	
龜腹版	有	無	
蚌	多	少	
鹿角	多	少	
鋸鏃	有	少	

小屯村村中,村北地各處基址,由甲骨文字的時期,使我們對於各處都有點時間的概念。我們感覺到"刻紋陶片","帶獸頭的陶器","紅色繩紋尊","帶釉薄陶"多是相伴着出土的。它們的時期比較的晚些,大概在第三期以後以至於第五期。在侯家莊南地遺址中,更得到了一重的證明。這遺址時代是三及五期,而遺物中較多的,也就是這些東西。將軍盔是冶銅的鍋,孔雀石是銅礦的原料,在小屯當屬於第一期之物,這里都沒有了。所以從其他遺物大概來講,也足以相互的證明遺址的關係。

(四)甲文概論

1. 關於史官"狄"

甲、"狄"之認識

演化而來的了。

(3)義　狄爲北狄,又稱犬種,段玉裁註云"此與蠻閩本蛇種,貉本豸種,羌本羊種,一例"。今按,若以蠻,貉,羌爲例,於狄可得二解:

一爲形聲,以其所產之特種動物爲形,而附之以聲,閩蠻產蛇(虫),卽附以門繙爲聲,貉產豸,卽附以各聲,則狄當爲產"犬"之域,而附"大"爲其聲,猶杕从大聲,今猶與狄同音;大與狄爲雙聲之轉。

一爲會意,善於牧羊之民族,謂之羊人,而命之曰羌,則善於御犬之民族,當命之曰犬人,大亦卽人,故因犬大而命之狄。

由此言之,兩種解說於狄皆可通了。

在甲骨文中,羌爲民族,亦卽方國,而狄則僅見史官之名,此史官所司多爲田獵之事,則其人與所謂北狄者,不無因緣,古者地名,方國,民族,姓氏,人名,多是出於一源,可以相同的。

因此,我們可以假定這𠂤字就是小篆中的狄字,書仍作狄。

乙、小屯村大連坑之"狄"

在小屯村甲骨文字出土之五個區域中,大連坑屬於第四區。我作斷代研究例時,曾把四區貞人,列爲一表,表中狄(舊書作犬)見於卜詞中的次數爲92,在第三期貞人裏以他爲最多(參原文359葉)。這次重新檢抄,又發現了28處,計共見120次,現在分錄如下表:

犬字從犬從大,爲第三期廩辛康丁時史官名,曾見於殷墟出土之甲骨文字。此次發現大龜,皆狄一人所記卜辭,發現後方策先生參觀,戲謂此當是狄字,从犬大聲。張暬先生更爲之辭說,走書商討。原書有云:

> 貴處新獲卜辭,从犬从大之字,方公疑爲狄字,頗屬可信。因去歲出土泉城王碑有兩狄字,書作犬犮,可資證明,吾人祖先本自大之心,目四夷爲犬羊,而以狄人爲犬之大者,故以从犬从大,造成形聲而兼會意之狄字。作碑者或見古字孑遺。此外以大配成狄聲之字,尚有旁證,如詩經"有杕之杜"之杕,以大配木,俗讀爲第,顏黃門謂詩河北本皆爲夷狄之狄,讀亦如字,可知杕狄古本通音,而狄應從大,不从亦省。

張氏意見:爲1.从犬从大是形聲兼會意之字;2.由杕狄同音可證狄之得音於大。狄之創製取意取聲,此時已不易考知,但聲意皆可講通,茲並就杕狄關係推闡如下。

(1)音　以杕證狄在音的方面,古韻是講不通的,因爲

狄,廣韻,徒歷切,在錫韻。古讀 d'iek

杕,廣韻,特計切,在霽韻。古讀 d'iei

但是古聲則杕,狄,皆爲定母,是完全相同的,至於今音則同讀爲ㄉㄧˋ,不過聲有去入之異而已。

(2)形　說文解字犬部狄字云"赤狄,本犬種,狄之爲言淫辟也。从犬,亦省聲"。狄从亦省聲,許氏當有所本,金文曾伯𡩠簋,狄字正作狄,从犬从亦;亦爲腋之本字,从大,像人正面立形,旁加兩點,指示兩腋之所在;亦與大,形近易訛,則狄之由大變亦,復省爲火,亦自可能。是由形體言,今之狄字,固可以說是由狄形

大連坑出土貞人狄所卜事類及甲骨編號表

甲(第三次發掘甲文)	編號(原六位,舍去前二或三位。如 3,0,0800, 作 800)							共見次數
卜祭	800	835	1714	1556	1513	1995	1804	
	1149	1194	1298					10
卜田	1637	1592	1594	1543	1428	1438	1938	
	1054	1186	1185	1787	1929	1332	1236	
	1243							16
卜雨	2013							1
卜夕	1577	1549	1791	1703	289	1075	1188	
	1151							9
雜卜	1738	1385	912	1971	1975			5
骨(第三次發掘骨文)								
卜田	651	688						3
雜卜	497	760						2
卜旬：癸酉	360	510	548	544	536	581	658	
	728	725	792	793	796			12
癸未	287	23	360	444	458	544	510	
	582	726	725	716	778	792	548	14
癸巳	360	444	458	544	579	582	632	
	725	716	778	792				11
癸卯	281	471	510	548	491	511	579	
	582	716	784	792	793			12
癸丑	345	364	360	445	434	728	501	
	491	584	530	510	511	582	671	
	793	716						16
癸亥	388	364	360	445	434	491	548	

丁、 犬之時代及事功

統以上犬所經手的卜辭,可以看出他在官之長久及地位之重要。他是廩辛,康丁時史官,是毫無疑義的。例如上節所舉辭中(3·0·1513)有后祖丁,文曰:

☐犬☐祖乙,其告后祖丁,王☐

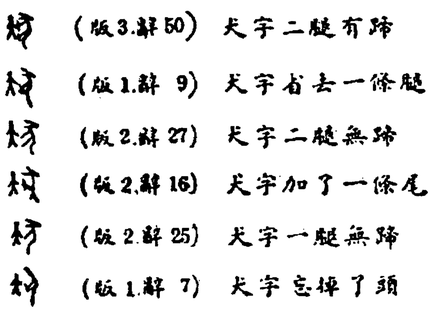
祖丁之後,名丁的第一個是武丁,稱他爲祖,又加后(後)字以別於祖丁,當然在廩辛,康丁時候(其以後第四期猶有此稱)了。

侯家莊大龜 4,辭(73)有父甲,卽祖甲,亦是重要的時代之證,由此可以確證此史官犬當在廩辛,康丁之世。時代旣定,可以進而言犬之事功。

犬在官甚久,成績甚多,可由三方面言之:

(一)犬之書法,由極幼稚進而至於甚老練之程度,此決非短時間內之事 如本文所論之大龜七版,皆當是犬在學成時的作品,雖然這時的文風,並不算盛,文辭,字體皆不甚講究,可是在侯家莊供職時的犬,已不同於在小屯時了。在小屯有他最初學習書契的成績,這是很顯然的。試舉一片爲證(見次一面)。這塊骨版,出在小屯村北的大連坑,犬一方面在參加卜夕的記載,在右邊空處,他卻又在練習書契干支字,筆法的生疏拙劣,行款的欹斜參差,一望可見。拿來同大龜(五)相較,同是卜夕,其工方眞不可以道里計了。小屯出土者,不盡是犬的幼稚作品,他的成熟作品也還不少,可見他學歷之久。在侯家莊供職時,至少是在他學成之後。

(二)犬自己簽名有幾種不同的寫法,在一版上,他可以寫三個不同的樣子。不過,時隔一旬,他自己也不注意了。如 3.2.0716 一版,就有下葉的三種簽名式:



總之,犬不畫腹,是此時的變格,而二腿無爪,或一腿,皆省簡的書法,至於無頭,乃是一時遺忘或筆誤,就不能算是省略之體了。犬生在文風衰落的時代,所以自己簽名也可以任意爲之。

(三)他參與卜旬的次數之多。本來卜旬的史官,在一二期可以說是輪值的,大龜四版之四卽是一例。在頭年十月至次年五月的八個月,卜旬二十一次。二十一次之中,五個貞人輪值,分配如下

𠂤	1 次	𠂤	2 次	𠂤	11 次
𠂤	2 次	𠂤	1 次	(?)	1 次

以𠂤爲最多,然不過全體之半。犬同時的貞人,有𠂤,宁,彭,口,逢,亘,𠂤等,在破碎之殘版中,尙見有犬與彭(佚 278),同時輪值貞旬,與口同時輪值貞夕(大龜五)。可見犬之卜旬,是與其他史官更迭爲之,非在長時間內由他一手所包辦。因此,如犬在廩辛,康丁之世,貞旬十次,則此十次決非連續十旬,乃在二倍乃至六七倍以上(因同時有七人輪值)了。現在,犬所貞旬的殘辭,總前表所計:

癸酉	13 次(12 加 1)	癸丑	16 次
癸未	14 次	癸亥	20 次
癸巳	11 次	癸(?)	14 次
癸卯	12 次		

甲(殷契佚存所收,亦大連坑出土者。附此)

卜旬: 癸酉	278				1
卜㞢	314				1
卜田	281	288	292	294	4
卜雨	297				1
雜卜	236	297	313		3

以上就小屯今日已出土之甲骨中,由"犬"貞卜之辭,計凡 155 次,此君本爲第三期居官較久,資格最老之史官,故其手蹟亦多。

丙、 "犬"在侯家莊

侯家莊之大龜七版,除卜夕一版(五)有口君兩次參加外,殆皆犬一手所包辦。

甲	編號(依拓本中卜辭號)					
卜㞢	16——20	37——40	59——60	72——74	110——118	23
卜由	21 — 22	25——27	29——36	43——45	47 54—57	
	61 — 64	103——108	121 122	124——128	130——136	45
卜雨	23 24	129 75				4
卜風	119 120					2
卜行止	13 14	65——71	102			10
卜夕	76 — 84	86——94	96——101			24
雜卜	1——12	15 28	41 42	46 48—53	58	
	109 123	137				27

大龜七版,並一塊碎片,共有卜辭 137,除了口君有兩卜之外,其餘都是犬卜的,雖然有些不記名或一事二貞以上,省略記名的,但皆出犬手,是無甚疑問的。所以統計的結果,犬所記之辭佔着135次之多。



3.2.0501

犬的簽名式

(1) (2) (3)

本來,他的名叫大犬,二字合而成犬,大字無甚變化,犬字,在一二期作𤰔或𤰔都是有腹的,到了三期,把腹去掉,把頭也變爲兩筆而獨立了,有時又省去了一腿,或不畫其爪。三期的獸類象形字,多半省去了腹,不僅犬字爲然。犬簽名的不一致,日久成爲習慣,所以他在侯家莊時,雖已甚老練,而簽名卻仍是很隨便的。如次葉所舉。

共二百八十二次,(就可知者而言),在殷墟時代,五期之史官(貞人)中,也算得一個重要的人物了。

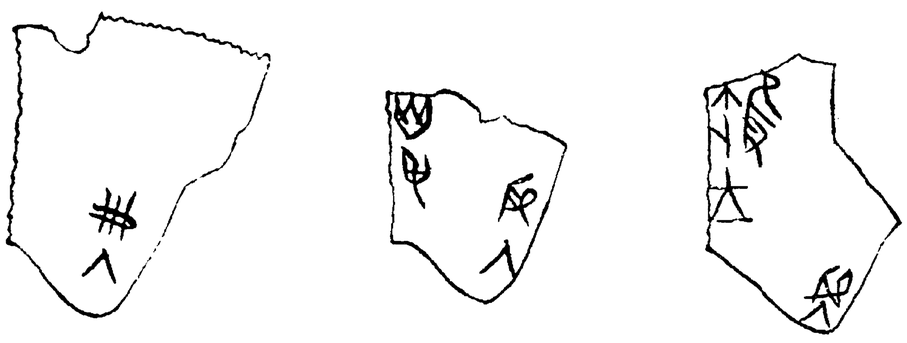
2. 尾甲記名例

甲、"册六"的訂正

在整理第一次掘獲之龜版時,發現一尾甲上刻有"册六"之文,予曾著錄於商代龜卜之推測文中,並舉同例"編六"之版二(詳原文 127 葉)。茲以大龜七版中一,六兩版證之,前說有誤,爲訂正於此。

原文"册"下之字,當釋"入"非"六"。更摹如下:

1.0.0454　　2.0.0002　　1.0.0449



六字,在甲文記數中固有作𠆢(鐵 100.2)𠆢(鐵135.3)者,但此下則當爲入字。因以大龜一,六兩版及其他甲尾有史官狄簽名之例證之,上一字當是史官之名,下一字,以釋入爲宜,其意當爲史官某"入"值,某卽記名於下,此一時之特殊習慣,並非通例。以上之三版,意當爲册及㠯入卜府輪值之記識,乃史官私人刻記,與卜辭無關,故皆在甲尾空隙處。狄僅記己名,此又注一入字,猶言,某史入值所爲。侯家莊骨文(28)有"入於卜"記載,(29,30)有"出自卜"記載,似皆史官記出入於太卜府供職之辭,可與記"某入"的也有七八個史官,據前節的論證,狄在職稍久,就拿他作代表好了。以下就大龜七版來探究第三期書契卜辭的草率:

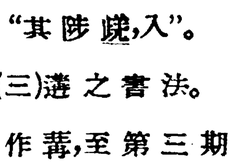
甲、書法的歧異

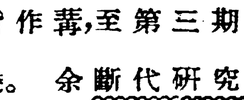
侯家莊出的大龜版皆狄一人手筆,七版的時期,卽不連續,也相距不會甚遠。但是一個人在短時間內,同樣字的書法,就會有前後的歧異,也可見書法太不規則了。茲舉四例:

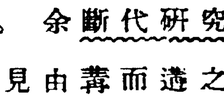
(一)琡之書法。琡字兩見,爲地名,皆狄書。7 版辭(134)作𠂤文曰"往琡,御'。1 版辭(14)作𠂤,字曰"其琡入"。

(二)𢍏之書法。𢍏字兩見,爲地名,皆狄所書。7 版辭(133)作𠂤,羌字倒書,文曰"王其田𢍏"。1 版辭(13)作𠂤,省彳,羌正書,文曰"其陟𢍏,入"。

(三)遘之書法。遘在卜辭中爲常見之字,作遇解。第一,二期皆作𠂤,至第三期乃加彳作𢓊,或加止作𨓜。至第五期乃更作遘。余殷代研究例中(411)但舉𠂤,𢓊,遘,三體,此又多一𢓊體。更可見由𠂤而遘之過程了。此𠂤𢓊𢓊三體,皆出狄一人手,摹如下:

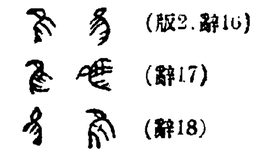

(辭 23,24)


(辭 1,2)


(辭 129,130)

𠂤本假借字,至此始附以義,加彳示在途中,加止示足行相遇,殆後始合二者爲一,既示在途,又示足行,而成遘字了。

(四)隹字書法。隹鳥同字,卽象鳥形。在甲文中往往不易索解,有時當如後世維字,如"吉日維午"之維。大龜中狄一人所書,乃有六種不同之形狀。


(版2.辭16)
(辭17)
(辭18)

合共一百次,此百旬決非連續,可以斷言。又就癸亥言,此20次亦決非連續之百二十旬。若以大龜四版次數最多之貞人㞢爲準,設狄一人卜旬最多,爲全體卜旬之半,則此20癸亥,以二倍之,所佔時間當爲40癸亥,二百四十旬了。以每年三十六旬計,是狄的在官時期至少當在六年以上。

狄的成績,不僅卜旬一項,卜夕也是一端。卜夕,大致是王在外田遊征伐時,爲尊重王之起居安全計,乃逐夕卜之,似非常例。如狄所參與卜夕之版,在小屯出土者九次,侯家莊出土者凡連續二十六日,似其時王在行宮別館住居,故有此卜夕之舉,卜辭亦卽留於其地。凡參與卜夕,卽扈從車駕,親信之史,可見狄之地位,在侯家莊時代,已甚重要了。

其他,狄所參與之卜事,合計之:

卜祭	34 次	卜田	63 次
卜風雨	8 次	卜行止	10 次
雜卜	32 次		

狄所參與的卜事,以田遊爲最多,卜風雨,行止,亦與田遊有關,合計八十餘次,每田必命狄卜之,可證時王好田獵,亦可見狄之頗受時王信任了。

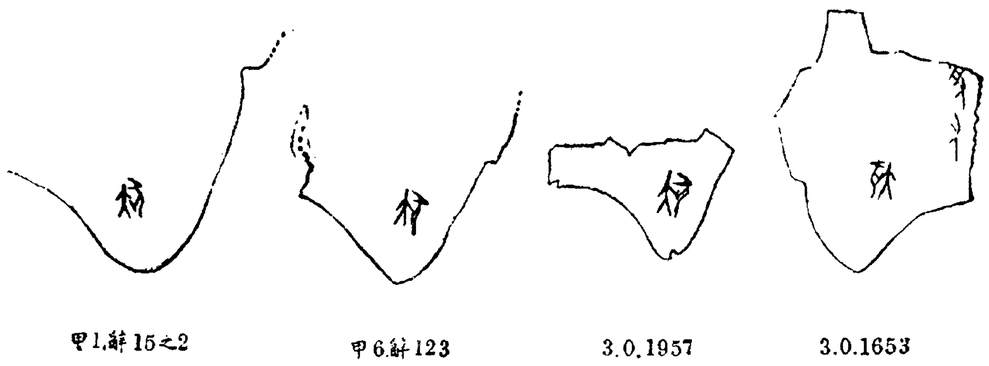
第三期廩辛康丁之年代,一時尚難推計,茲舉三說:

竹書紀年	廩辛	4 年	康丁	8 年	合計 12 年
通鑑外紀	廩辛	6 年	康丁	6 年	合計 12 年
御覽卄八引帝王世紀	廩辛	6 年	康丁	31 年	合計 37 年

三說雖不同,然廩辛年長繼位,在位時期甚短,是可以斷言的,無論爲四年爲六年,史官狄在官六年以上,必可以爲兩朝之老史,也可以由此推知了。狄,身爲兩朝老史官,又參加卜辭記事凡相印證。

乙、狄的記名

狄在甲尾記名,侯家莊出土者二,兩版所有卜辭,皆狄一手所記,故在甲尾簽名。予檢小屯大連坑出土之甲,亦有在尾上記狄名者,可推知其全版刻辭亦皆狄一手所作。茲並摹錄之。


甲1.辭15之2　　甲6.辭123　　3.0.1957　　3.0.1653

前三者皆記名於尾右甲,與"册入""㠯入"同地,後者乃在尾左甲,可知此種簽名記識,原無定式,惟就其空隙處爲之而已。

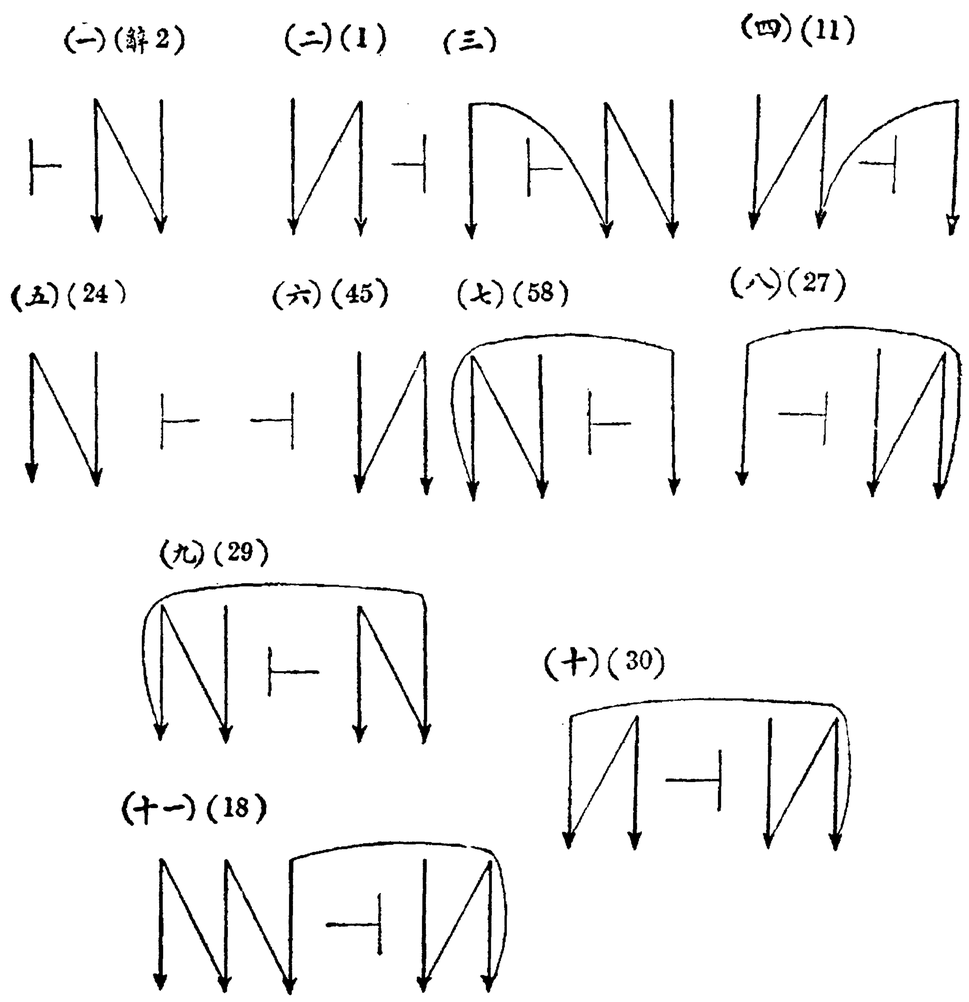
3. 第三期刻辭之草率

卜辭,本來在殷代是一種特殊的記載,並沒有史册那樣的鄭重,牠不過是一種宗教迷信式的點綴裝飾品而已。商之前世,已不可知了,到了盤庚遷殷之後,像武丁乃至祖庚祖甲之世,(一,二期)確也算很重視的。並且因爲那時有些賢君良史,所以還算好的,把許多曾經占卜的國家大事,都記載上去了,而且詳記了某月某日,有些又塗了朱,墨,裝飾得格外美觀。這可以說是殷墟卜辭的極盛時代。第三期,却是文風凋敝之時了,其他記載不可知,但就卜辭而論,比較一,二期,實在相去太遠。這樣頹廢下去,一直到第四期。在三期,廩辛康丁之世,現在知道

丙、 行款之錯雜

甲骨文行款,原只有左行右行二種。在龜甲上,更只限於卜辭迎合卜兆之款式,看下圖(一)至(四)。背着卜兆而刻辭的,在前期只有骨版如是(參下圖五,六)。狄在六版上把款式改得特別複雜,第一,是把骨文中背兆刻辭法,用於龜版。第二,是憑空創立了五個格式(參下圖七至十一),以補救背兆刻辭法的缺點。茲圖之如下:

卜辭行文款式圖



狄本來是寫字不規矩的,只看他自己簽名,把自己的名字,弄成六種寫法(見上節),也就可想而知了。

乙、 字畫之缺漏

在狄的筆下,不但書法可以隨意,隨時歧異,他又會把一個字忘掉了幾畫,或者把整個的字丟掉。各舉例如右:

					所見辭
王	人		五	三	(103) (36)
其	𠂤	丌	亘	一	(103) (36)
从	𠂤		𠂤	〃	(114)
貞	𠂤	丌	𠂤	×	(114) (36)
丁	口		口	二	(126)
勿	𠂤		𠂤	三	(112)
巳	𠂤		𠂤	一	(26)
亥	𠂤		𠂤	一	(27)

(一)缺略了筆畫的:

由上諸例,可見粗疏之一斑。這裏所缺皆是橫畫,也可以證明契刻之時是先直後橫的,斜畫有時與直畫同刻,有時與橫畫同刻。嘗見今之刻木版者,刻直畫時,每字之直皆刻之,然後掉轉版之方向,一一補刻其橫,可見先書後刻,先刻直,後刻橫,三千餘年,方法上是無大變化的。

(二)遺漏了文字的:

原文	漏字	見辭	注說
戊寅卜,貞王其田,亡	𡆥	(33)	
己巳卜貞:王其田,重乙,亡𡆥	二	(26)	卜兆記數二字,因他二辭記一與三,此辭當記二。
庚午卜,狄貞:	一	(28)	卜兆記數一字。
貞:重唐,用,大吉	七	(117)	依地位及次序當缺卜辭記數"七"字
貞:从禽,吉	三	(114)	同上當缺三
貞:勿𡆥	二	(112)	同上當缺二
辛酉卜,貞:衣𡆥,亡	𡆥	(110)	亡下當缺一𡆥字

以上可見此期文字草率情形,不但筆畫可缺遺,整個文字及記數字,也都可以漏掉了。

文中有:

女雙㞢於王　女雙敦

反入㞢章　頵敦

皆作覲見解。爾雅釋詁"覲,見也"。禮記曲禮下:"天子當依而立,諸侯北面而見天子,曰覲"。詩韓奕"韓侯入覲"。在商代,君侯見王爲覲,小臣見王亦爲覲,不以諸侯爲限,爲凡羣臣百僚朝見王者之專用名辭。

5. 釋鳳

甲、 風之新字

大龜6有兩辭,皆有鳳字:

(辭109) 癸亥卜,狄貞:今日亡大𩵦。

(辭120) 癸亥卜,狄貞:又(有)大𩵦。

此字,左從鳳之象形字,右从兄聲,當是風之形聲新字,也可以說是段借附聲之字。風字,在甲骨文中有一個演變的歷史,最初一二兩期,完全借鳳鳥字爲之,這是第三期,狄先生寫的乃是一個附聲的新字,到了四,五期,又改爲附了凡聲之新字,即完全成了現世習用的風字了。茲略論之。

乙、 風字演變的三個時期

在甲骨文斷代研究例中,我曾論及"象形變爲形聲"一事,舉鳳字爲例,共列六文,我的結語是鳳字"無論象形或形聲,在卜辭中,皆是假作風字用的,而第一期用象形字,第四五期用形聲字,也是無可疑義的"。那時侯家莊這批甲骨未發現,還不知第三期竟有這樣一個形聲字。現在把三期中風之假借字的演變圖之如下:

五以下皆爲背兆刻辭;七以下,皆爲跳兆刻辭;跳兆所以補背兆之弊的,可是,跳過兆來却又自亂其例了。因爲背兆者如左行,跳過兆便成右行了,背兆之右行者反是。跳兆之後,又有雙行,則原左行者仍左行(九)原右行者仍右行(十)還算合理,而(十一)又亂此例,原起首時背兆右行,向左跳兆之後,却又左行。這些都是狄的創作,第三期卜辭的奇怪的款式了。

4. 說堇

侯家莊大龜第1版,右邊的緣旁,刻着一段記事的卜辭。辭如下:

乙酉,小臣𠂤㞢。(辭15)

這段辭中無貞,卜字樣,近旁又無兆璺,分明是在此借一塊地方記一件事。𠂤是一個小臣的名子,辭既刻在第三期的卜用龜版上,人當然也是廩辛或康丁時代的小臣了。乙酉去壬戌二十四日,全版十四辭(1—14)皆壬戌一日所卜,乙酉一辭,獨居邊緣,當然在壬戌刻辭之後,至少也相去二十四日了。

這一辭乃記小臣的覲見,在殷文中是一個特別之例。覲字,增見旁乃是後起之字,甲骨金文中都是假借堇字爲之。堇作𦥑,从𦥑从火與𦥑有別,在第一期兩字並用,𦥑假爲覲見字,𦥑假爲饉饉字。堇字除此辭外在卜辭中第一期一見,第二期二見:

西土尹堇。(第一期,後下,24,2)

𠂤大貞:來丁亥堇。(第二期,殷契卜辭29)

𠂤丁亥,堇丁出醬亦𠂤　(後下,18,1)

前一辭尹卽君,言"西土君",西土當是國名,堇卽覲見,最爲明顯。後兩辭皆骨版,均言"丁亥堇",似爲一版破裂之殘片。金

金文中兄,見二字如上例。

可見作𠂤形者,有時作祝,有時亦作兄弟之兄。从兄爲聲之字,甲骨文中尚無他例,在金文中,則醜字有从兄聲者。醜在甲骨中作鄙,爲地名。至金文則又有增兄爲聲者。如:



可知附兄爲聲,不止一個醜字了。

丑. 由文法上證醜之爲風

卜風雨之辭,普通的只稱有風,雨;或無風,雨;若是王去田遊,則稱遘風,雨;不遘風,雨。辭 119 及 120 云:

癸亥卜,狄貞:今曰亡(無)大醜(風)。

癸亥卜,狄貞:又(有)大醜(風)。

這顯然是在家時所卜,像 2 版辭 23,稱"其田不雚雨",便是爲田獵而卜雨了。上兩辭卜風之例,與第一期文法全同。第一期有:

"今曰鳳(風)"。 後.上 31,14

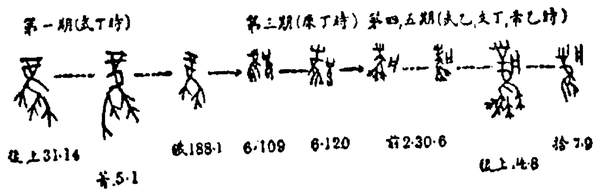
"其𠂤(有)鳳(風)"。 前 4,43,1 (說見斷代例 415 葉)

第一期以"𠂤"爲有無之有字,至第三期則完全以"又"代𠂤。如本篇甲 1,辭 9,的受又(有)又(祐),也就是第一期的"受𠂤(有)又(祐)"(通 515)了。

第四,五期,卜風多稱"其遘大風",或"不遘大風"則多是屬於田獵時之辭了。

寅. 風,凡,兄音表

風,與凡,與兄,今音(指國音)有甚大的差異,可是在商代究竟如何?是否全同或相近?至今沒有人可以負責的答應出來。在方音中,這三字有些地方是从 h 聲的,本來鳳字的音,也許就是

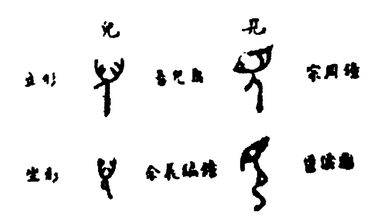


這種演變是很合理的,有四五期的形聲字,就可以有第三期的形聲字。本來風字最初假借鳳的象形字,鳳就是孔雀,他有頭上的華冠,尾上的斑眼,在記載中,說鳳是"五色備舉",並且"雄曰鳳,雌曰凰"(格物總論),孔雀正是雄的纔有高冠與彩屏,也甚相合。又有"六像九苞"之說,九苞中有"彩色光","冠矩州",正指尾屏及冠而言。六像中有"翼像風"之說(均見論語摘衰聖),也就是最初假鳳爲風的由來了。詩大雅"鳳皇于飛,翽翽其羽",翽,廣韻'呼會切'說文"飛聲也"。翽翽猶呼呼,鳳之翼大,其飛生風,作翽翽聲,假借鳳字作風,眞是再好沒有了。第三期時,把冠上加了裝飾,又附了兄聲,創一新字。第四,五期,又改附兄聲爲附凡聲,冠上加飾如故,尾部並加了斑眼,使他更與孔雀逼肖了。這時期的分劃,是最嚴格的,據作者所見,他的前後期的變化,秩然有序,毫不紊亂,並且也沒有一個例外的。

丙、 風與兄,凡及其音的關係

子. 說兄

在卜辭中,兄與祝往往不易分,有時兄作  ,祝作  ,但亦可互通(殷墟文字類編第八,九頁所收兄字,卽有兩體)。第三期康丁時辭有:"其禍兄辛"(後上,7,10)兄辛合文作  ,是其證。本來人形之側面字立者作,坐者作,書寫時可以隨意爲之,這在其他文字中甚多,舉古



像鳳飛時呼呼的風聲,而風的聲音,實在也是與物相盪而生的,近於通聲及磨擦聲。如果說方音中還保存着古音的話,也許這些从 h 的,就是古音,h 是通聲,呼呼的風聲,有點與他相似。現在把風,凡,兄三字的國音同相近的方音,(據高本漢的中國音韻學方音字典),列表如下:

風	凡	兄	
fəŋ	fan	ɕiŋ	國音
xū	xuā	ɕyū	文水方音
huŋ	huaŋ	hiŋ	福州方音
hoŋ	huam	hioŋ	汕頭方音

今河南方音中,也有讀風爲 huŋ 者,與返 fan 還 huan 爲一音之轉,同例。从兄之悅,又讀爲 huaŋ,可知風有 hu 音,凡,兄亦皆有 hu 音,風之音,乃呼呼然像大鳳鳥之飛聲,尙有一線之可尋了。

(五)骨文概論

侯家莊骨文,多出於村人侯新文私掘之坑,其時代有第三及第五兩期,茲擇其與斷代有關者及較新異之文辭,分別述之。

1. 第三期之骨文

甲、 父己

圖版第 10,12,皆有"其用父己"之文,9 至 12,乃一版所破裂,掘者碎斷之,已不可啣接,但由辭字及款式看之,尙可相連,如考釋中附圖。"其用,父己",爲省略辭,猶言"其用牛於父己"。版 10,上一辭爲"馭彀,用"。馭彀爲第三期慣用之複辭,卽受右,受福之義。(說詳拙作釋馭彀,安陽發掘報告第四期,葉 697–703)

金文中兄,見二字如上例。

可見作𠂤形者,有時作祝,有時亦作兄弟之兄。从兄爲聲之字,甲骨文中尚無他例,在金文中,則醜字有从兄聲者。醜在甲骨中作鄙,爲地名。至金文則又有增兄爲聲者。如:

可知附兄爲聲,不止一個醜字了。

丑. 由文法上證醜之爲風

卜風雨之辭,普通的只稱有風,雨;或無風,雨;若是王去田遊,則稱遘風,雨;不遘風,雨。辭 119 及 120 云:

癸亥卜,狄貞:今曰亡(無)大醜(風)。

癸亥卜,狄貞:又(有)大醜(風)。

這顯然是在家時所卜,像 2 版辭 23,稱"其田不雚雨",便是爲田獵而卜雨了。上兩辭卜風之例,與第一期文法全同。第一期有:

"今曰鳳(風)"。 後.上 31,14

"其𠂤(有)鳳(風)"。 前 4,43,1 (說見斷代例 415 葉)

第一期以"𠂤"爲有無之有字,至第三期則完全以"又"代𠂤。如本篇甲 1,辭 9,的受又(有)又(祐),也就是第一期的"受𠂤(有)又(祐)"(通 515)了。

第四,五期,卜風多稱"其遘大風",或"不遘大風"則多是屬於田獵時之辭了。

寅. 風,凡,兄音表

風,與凡,與兄,今音(指國音)有甚大的差異,可是在商代究竟如何?是否全同或相近?至今沒有人可以負責的答應出來。在方音中,這三字有些地方是从 h 聲的,本來鳳字的音,也許就是

這種演變是很合理的,有四五期的形聲字,就可以有第三期的形聲字。本來風字最初假借鳳的象形字,鳳就是孔雀,他有頭上的華冠,尾上的斑眼,在記載中,說鳳是"五色備舉",並且"雄曰鳳,雌曰凰"(格物總論),孔雀正是雄的纔有高冠與彩屏,也甚相合。又有"六像九苞"之說,九苞中有"彩色光","冠矩州",正指尾屏及冠而言。六像中有"翼像風"之說(均見論語摘衰聖),也就是最初假鳳爲風的由來了。詩大雅"鳳皇于飛,翽翽其羽",翽,廣韻'呼會切'說文"飛聲也"。翽翽猶呼呼,鳳之翼大,其飛生風,作翽翽聲,假借鳳字作風,眞是再好沒有了。第三期時,把冠上加了裝飾,又附了兄聲,創一新字。第四,五期,又改附兄聲爲附凡聲,冠上加飾如故,尾部並加了斑眼,使他更與孔雀逼肖了。這時期的分劃,是最嚴格的,據作者所見,他的前後期的變化,秩然有序,毫不紊亂,並且也沒有一個例外的。

丙、 風與兄,凡及其音的關係

子. 說兄

在卜辭中,兄與祝往往不易分,有時兄作,祝作,但亦可互通(殷墟文字類編第八,九頁所收兄字,卽有兩體)。第三期康丁時辭有:"其禍兄辛"(後上,7,10)兄辛合文作,是其證。本來人形之側面字立者作,坐者作,書寫時可以隨意爲之,這在其他文字中甚多,舉古

像鳳飛時呼呼的風聲,而風的聲音,實在也是與物相盪而生的,近於通聲及磨擦聲。如果說方音中還保存着古音的話,也許這些从 h 的,就是古音,h 是通聲,呼呼的風聲,有點與他相似。現在把風,凡,兄三字的國音同相近的方音,(據高本漢的中國音韻學方音字典),列表如下:

風	凡	兄	
fəŋ	fan	ɕiŋ	國音
xū	xuā	ɕyū	文水方音
huŋ	huaŋ	hiŋ	福州方音
hoŋ	huam	hioŋ	汕頭方音

今河南方音中,也有讀風爲 huŋ 者,與返 fan 還 huan 爲一音之轉,同例。从兄之悅,又讀爲 huaŋ,可知風有 hu 音,凡,兄亦皆有 hu 音,風之音,乃呼呼然像大鳳鳥之飛聲,尙有一線之可尋了。

(五)骨文概論

侯家莊骨文,多出於村人侯新文私掘之坑,其時代有第三及第五兩期,茲擇其與斷代有關者及較新異之文辭,分別述之。

1. 第三期之骨文

甲、 父己

圖版第 10,12,皆有"其用父己"之文,9 至 12,乃一版所破裂,掘者碎斷之,已不可啣接,但由辭字及款式看之,尙可相連,如考釋中附圖。"其用,父己",爲省略辭,猶言"其用牛於父己"。版 10,上一辭爲"馭彀,用"。馭彀爲第三期慣用之複辭,卽受右,受福之義。(說詳拙作釋馭彀,安陽發掘報告第四期,葉 697–703)

乙、 關于口

口,是第三期的貞人,龜甲五,辭 85 及 95,有兩次卜夕之辭,是口替狄去作的,可見他們是同時之人。骨版 13,辭,45,有:

其乎口。

之文,版 17 辭 152 有

口取貝六百。

之文,皆記口事。殷契佚存 267,口與逢共同卜夕,283, 286, 287 有口卜旬之辭七。大連坑出土有口與彭同版卜辭,逢彭皆三期貞人,與口狄同時。又小屯村大連坑出土卜辭,口所貞卜之

其用亹,弗每王。 泳 (骨 33,辭 206)

其娶,从,用口我王。 泳 (骨 34 辭 208)

囚泳。(骨 36 辭 211)

在這樣簡略的卜辭之下,注着史官名子,五期以前,是沒有見過的。

丑. 泳在小屯

(一)帝乙二十年之泳。從已經著錄的小屯出土的卜辭中,可以知道泳是時常扈從着時王去田遊征伐的史臣。如帝乙二十年上鬯之遊,卜辭有:

癸未,王卜貞:旬亡𡆥。在九月,在上鬯王廿司。(前 2,14,1 與 4,28,1 合)

癸未卜,在上鬯貞:王旬亡𡆥,王廿司。(前 2,14,3)

癸未卜,在上鬯,貞:王旬亡𡆥。在十月,王廿司。(前 2,14,4)

我們再看,泳,他曾參與過王廿祀六月卜旬及上甲的祀典。

癸巳卜,泳貞:王旬亡𡆥。在六月,甲午,工典其牢。

癸丑卜,泳貞:王旬亡𡆥。在六月,甲寅,酒翌上甲。王廿祀。(前 3,28,5)

他也曾參與遊上鬯的卜旬。

癸卯卜在上鬯,泳貞:王旬亡𡆥。在二月。(續 3,19,7)

由此可知泳于王之廿祀,已任史官之職。至何以知此王之爲帝乙,則由殷末曆法推算,可得而證。

(二)帝辛十年之泳。這里有個先決問題,就是"正人方"之役是應該在帝乙,或帝辛之世? 正人方,據史籍載記同曆法的推算,當然是在帝辛時,雖然郭沫若氏,尙堅持着帝乙之說,可是在拙作斷代研究例,方國,乙,(史語所集刊外編 葉 366—373)及吳其昌氏讖殷甲骨金文中所涵殷曆推證第一證(史語所集刊第四本 297—310 葉)均已有甚細密的推論。我與吳氏,均斷定征人方在帝辛之世,吳氏據小臣艅尊定爲十五年,我覺不如依甲骨文本身的記載(前編四,一八,一與三,二七,六合)定之爲帝辛十年。其辭曰:

甲午,王卜貞:𠂤余酒,𠂤𣪊。丁酉,余步从侯喜征人方,三𠂤示,受又,不𢦏𢦚,𠂤告於大邑商,在𡆥。王𠂤曰吉。在九月,遘上甲,隹十祀。

吳氏疑十祀後尙有"又一"之文,細審之,殊不然,明明僅爲十祀而已。

既知正人方爲帝辛十祀,則正人方時,泳亦曾參與記錄卜辭。如:

癸亥卜,泳貞:王旬亡𡆥。在雇𨸏,正人方。

囚卜在囚喜畐,囚𨸏,泳囚旬亡囚來正囚。(前4,11,4及2,9,7)

癸亥卜,在攸,泳貞:王旬亡𡆥。王來正囚

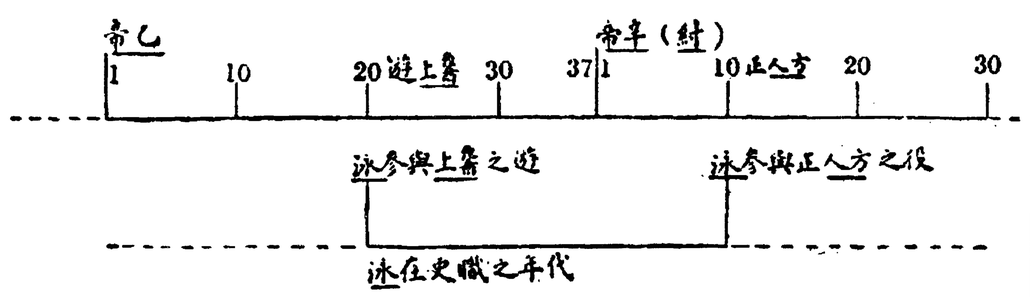
癸未囚雧囚泳囚王旬𠂤𡆥

囚正人方 (通,別 2,4,8)

癸酉卜在攸,泳貞:王旬亡𡆥。王來正人方。(前 2,16,6)

是泳在帝辛十年正人方時,猶供職太卜之府。

(三)泳在史職之久。觀上兩個時期卜辭,一有廿年記載,一有十年記載,如爲一王,至少亦在十年以上。現據曆法推證,二十年確在帝乙,十年又在帝辛,如果帝乙在位三十七年(因既有十祀,則帝乙在位九年之說,已不可據),則其二十年至帝辛十年,乃有二十八年,泳之在史職,須有二十八年以上了。其關係當如下圖:



第五期卜辭,行款齊整,文字工麗,泳在職如是之久,當不少他的作品,不過因此期沿四期之習,以不記貞人爲常,于征伐,遊田,卜旬,偶一記之而已,泳生當其時,亦幸而尙留其名于三千載之下了。

乙. 用牛于乙

骨 27,辭 197 曰"其用牛于乙,用"。這一辭與同版另二辭,由字體書法,文例,皆可定爲第五期之物。第五期僅帝乙帝辛兩世,帝乙時,稱武乙爲"武祖乙"文丁爲"文武丁"此僅稱乙,當是帝辛祭帝乙之卜辭。因此可證殷墟卜辭,確曾至帝辛之世。帝辛稱帝乙本當曰父乙,但殷人常有對最切近之人,僅舉忌日,不加稱謂者。如大龜四版之一,載祭丁之辭十三,皆但稱丁,不加祖或父之稱謂。同版有祖乙(27—28)之祀,若祖乙爲小乙,則此丁卽父丁,武丁了。此版皆武丁時舊史,或係祖庚時之卜辭。其與此辭例相近者:

丁巳卜,賓貞:𠂤于丁,用一牛。(辭 11)

與"用牛于乙",文例正同。知彼之丁爲武丁,此乙亦當爲帝乙了。

帝辛都殷,此亦一證,徙朝歌,置離宮別館,當是帝辛晚年事,不能說並早期的卜辭也沒有了。正人方及其他卜辭,亦皆可辭凡 26 次,由此可見𠂤亦第三期重要史官之一了。

丙、說毋

甲骨文中,一字往往假借作幾字用。如又,作福佑,作再又,作有無之有,作侑;于作在,作與,之類,其例甚多。骨文有二辭曰:

尹有不若,女見。(辭 190)

女从。(辭 195)

女皆當爲毋,卽毋,尹卽君,前言君有不若,毋見,後言毋从。卜辭中女,母,汝,本爲一字,音當如母,此假爲無,勿,莫,禁止之辭,卽後起之毋。

2. 第五期之骨文

甲、關于泳

泳是第五期的貞人,他和黃是共同參與過帝辛征人方之役的。他曾任帝乙帝辛兩代的史官。在殷末年歷不能十分確定以前,一切問題,都在一種假設中研討,自然這時的人物,也是其中之一。由甚久時期詳細推研的經過,才有以上關於泳的時代之斷定。

殷末帝乙乃至帝辛時代,卜辭的記載是非常鄭重而詳密的,譬如紀年祀一事,在帝乙以前,絕不曾有,這本是一個研究殷末年曆最好的證券,將別有殷商疑年一文,詳加討論,這里只提出有關史官泳的一部分來講。

子. 泳在侯家莊

侯家莊出土骨文中,有泳所記的卜辭之存在,這時期當在帝辛之世,因爲同出骨辭,尙有帝乙之祀,文曰"其用牛于乙,用"(版 27,辭 197)。泳的簽名式,頗類于早期的骨臼刻辭,是記名于文辭之末的。如:

司,主也,凡事有專主者,謂之有司。

周禮多稱"有司",亦因殷禮之舊了。

(六)拓　本

1. 甲文　(編號 1 至 8,又 26)

2. 骨文　(編號 9 至 25,又 27 至 42)

拓本 1 至 7,爲印刷便利計,照原片縮小,比例各不相同。茲將原龜版之長,寬,厚度,以糎計之,附列於下:

龜版號	長	寬	厚
1	258	211	6 糎
2	288	190	7 糎
3	293	211	6 糎
4	276	202	6 糎
5	274	198	7 糎
6	270	181	7 糎
7	260	143	7 糎

原甲有凸度,長寬與拓本略有不同。

拓本 8 至 42,皆原片大小。

證。

丙、　取貝

貝在殷代,確爲重要貨幣,發掘所得,有孔可系者均屬之。侯家莊新出骨文,第五期卜辭有記取貝事:

丁亥卜,光取貝二朋,在正月。　取。(版 27,辭 196)

此光,當是人名,疑卽第一期卜辭中光國之人。辭記正月丁亥,光取貝二朋之事。又記取貝,在三期已有之,新出骨辭云:

遘取貝百:

口取貝六百。(版 17,辭 151,152)

此骨被村人私掘,掘出後剔損,拓本已不清,僅模糊之間,可見字畫而已。

在早期卜辭中,貝爲貨幣,亦可參見一二。　如:

取屮(有)貝。(藏百四,4,)

庚戌囚貞:易(錫)多女(母),屮(有)貝朋。

由字體可證爲第一期辭,可知商人以貝爲貨布,在殷墟時期,是始終一致的。

丁、　有司

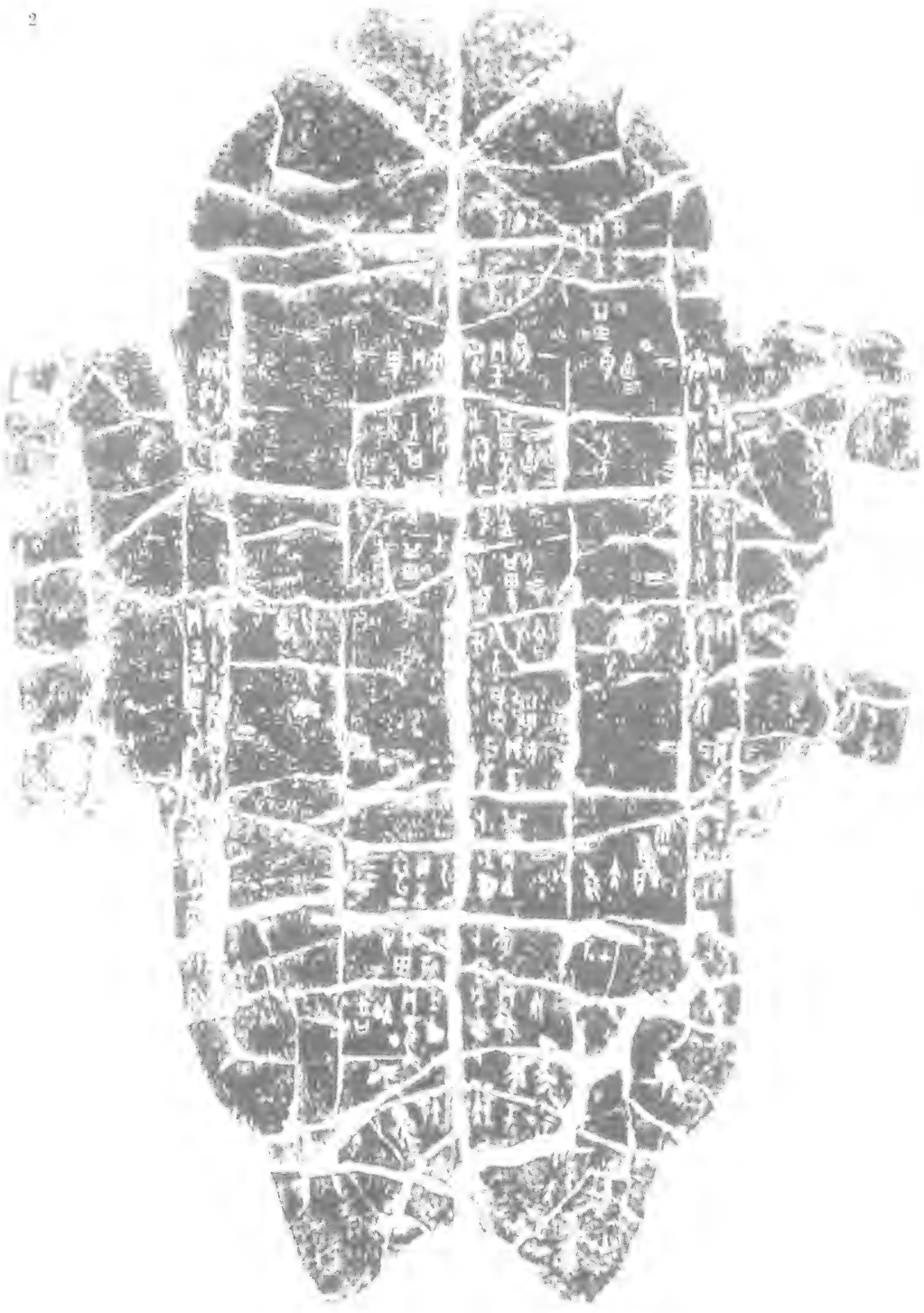
殷代官爵見于卜辭者甚多,如侯,白(伯),子,男,卿史,御史,大右,小臣等,均見著錄,有司一名,則于此僅見之。骨 34 有兩辭,下一辭有泳書名,決爲第五期物。　文殘泐,約如下:

口娶口入,乎又(有)司,女(汝)克拏二人。

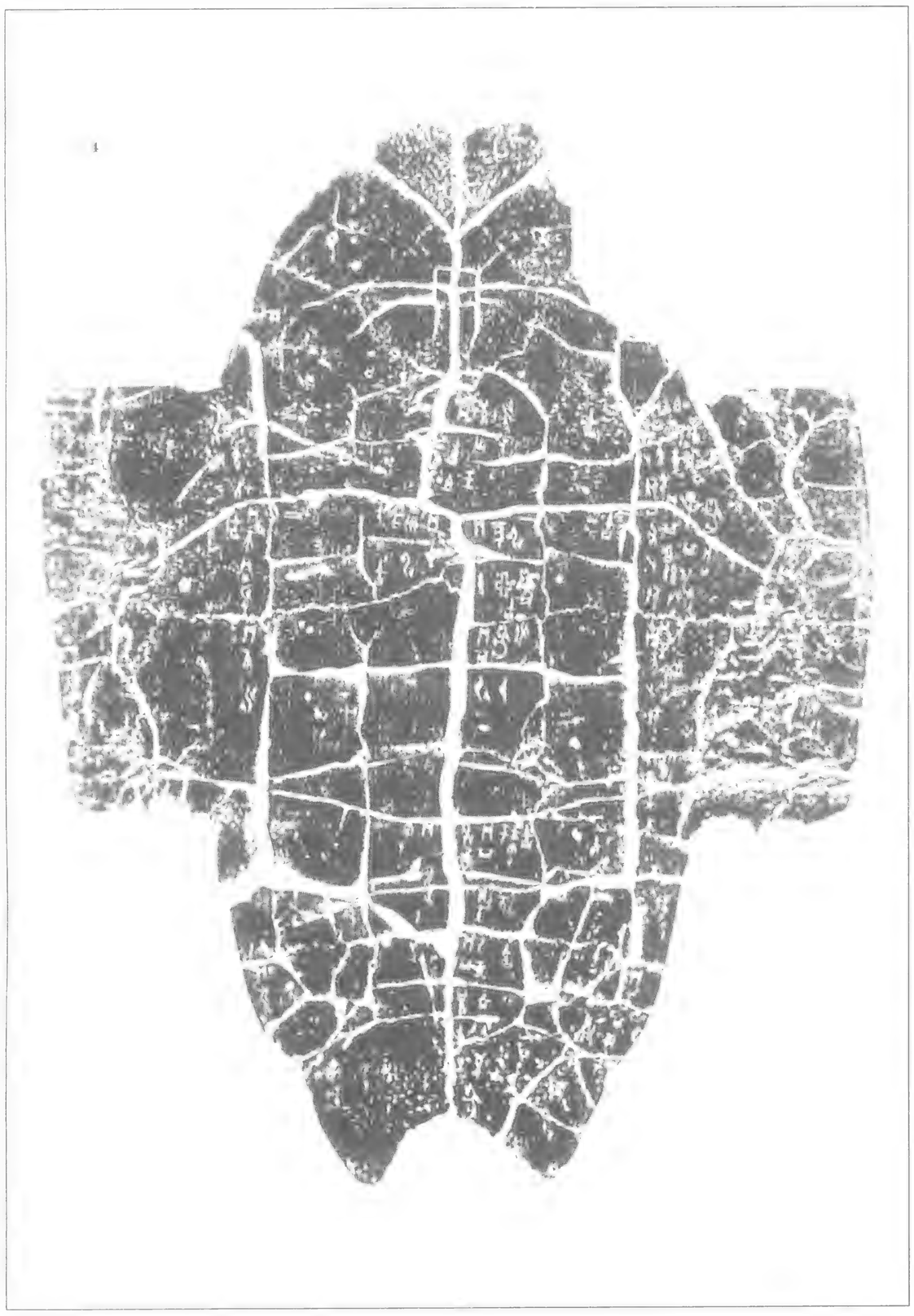
"乎有司"文極清晰,知商代稱官司亦曰"有司"了。

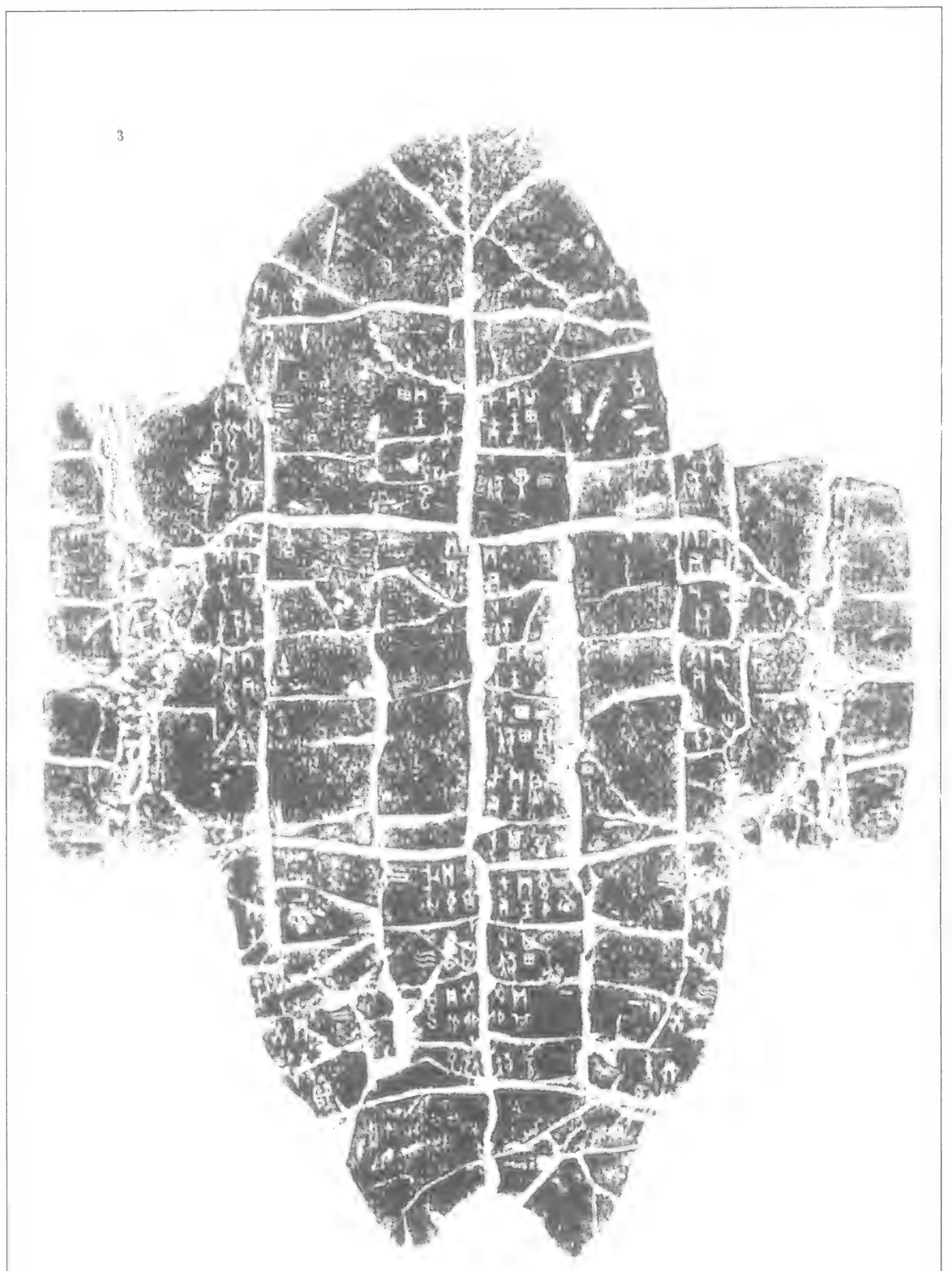
有司,爲一般負有職責之官司通稱,非專指一人一官,如孟子所謂"百官有司",又鄭穆公稱"吾有司死者三十三人",有司皆指有官守者而言,胡匡衷儀禮釋官云:

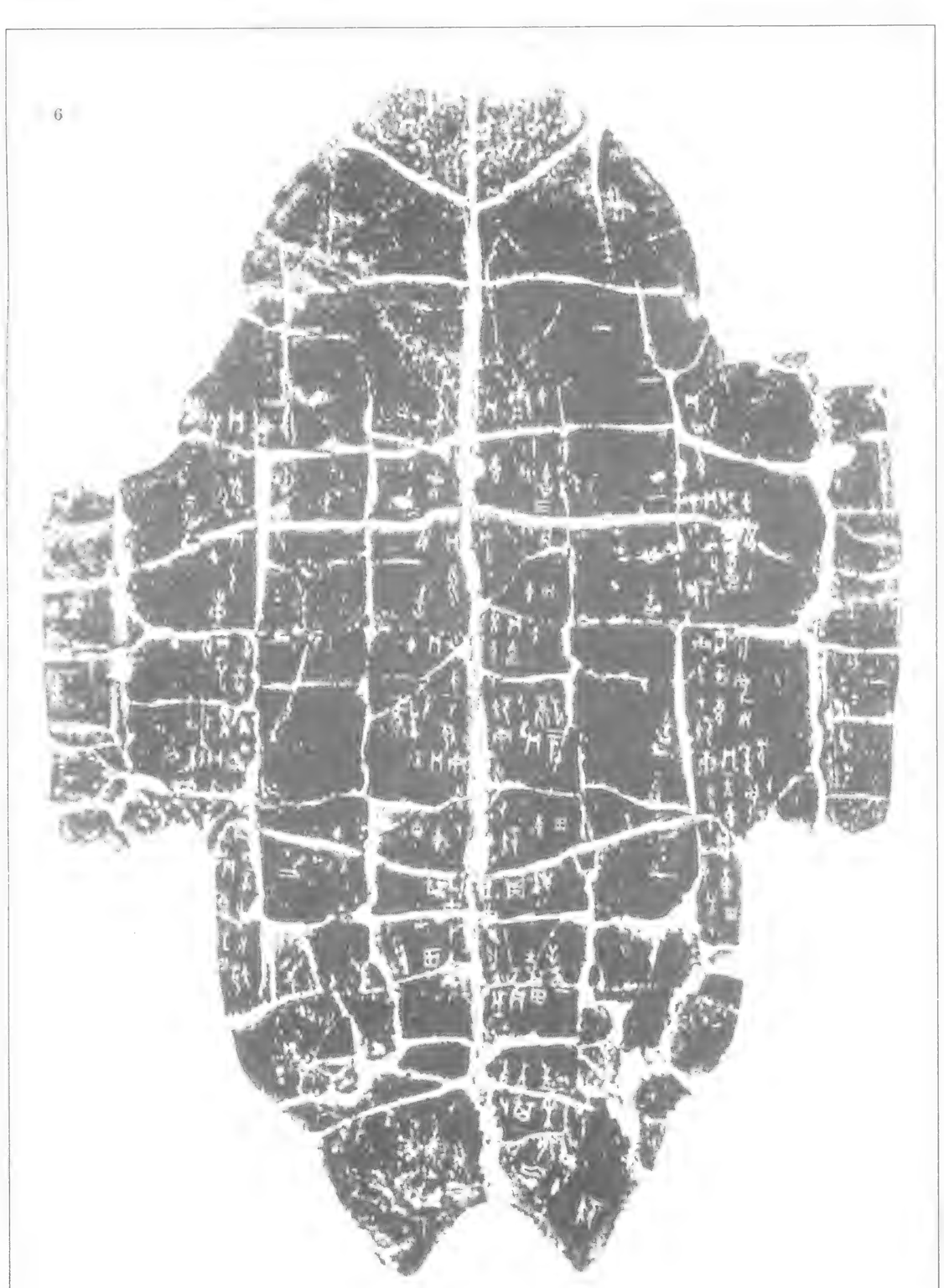
2

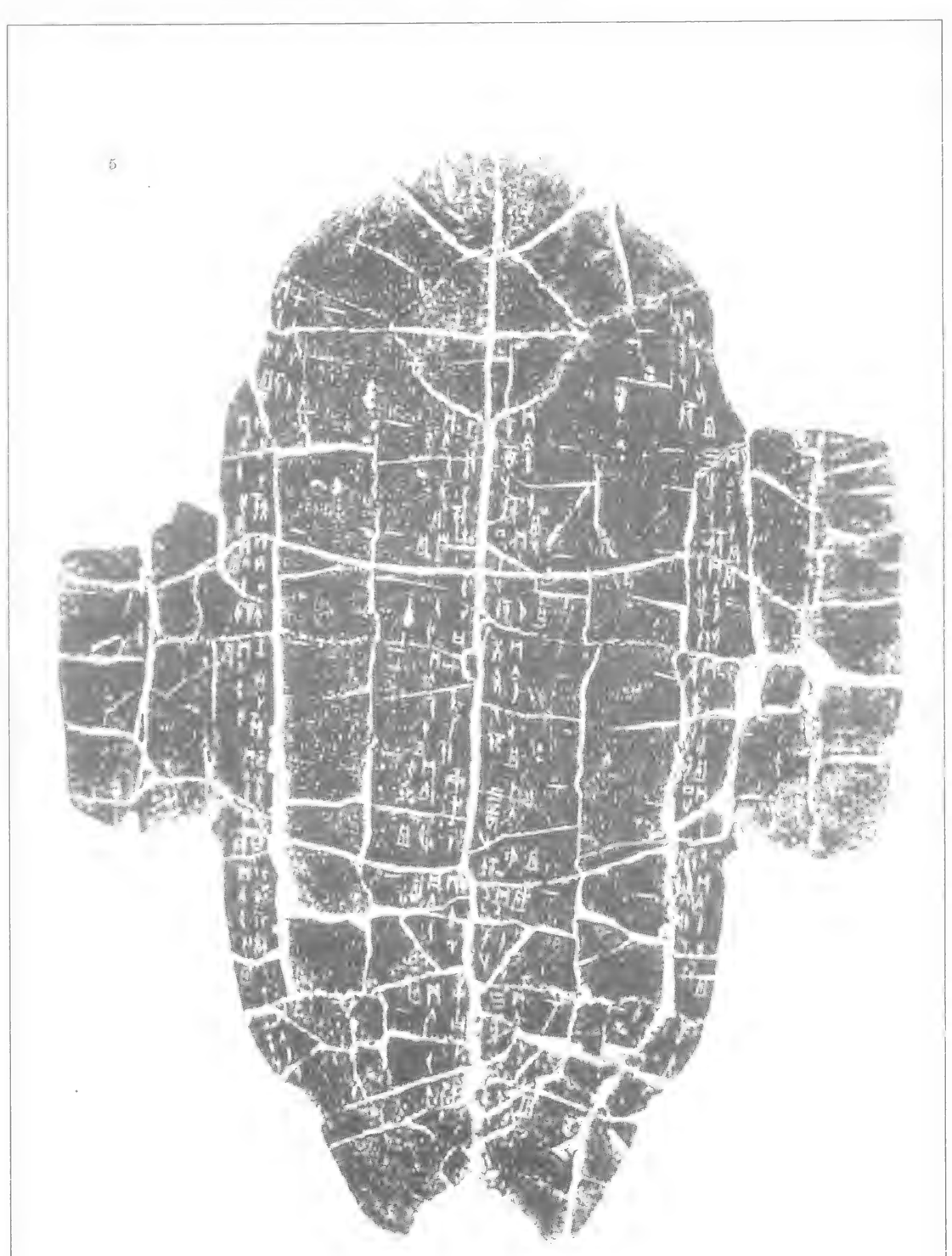





4


3


6

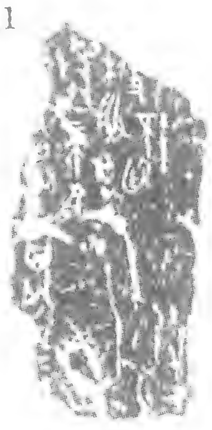

5


7

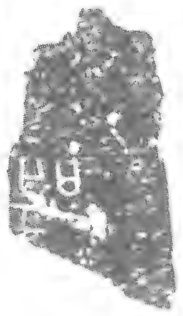

8

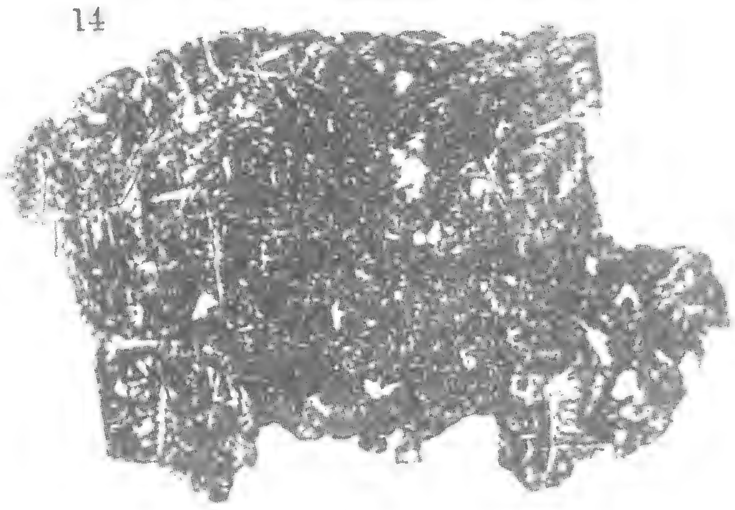

9

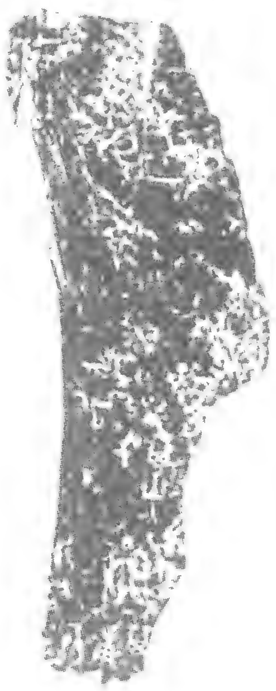

10

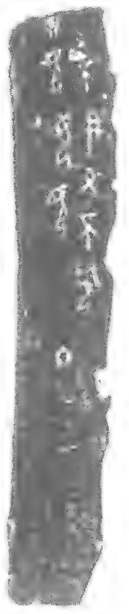

11

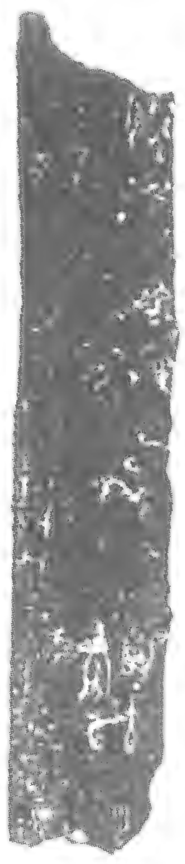

12

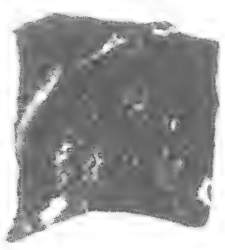

13

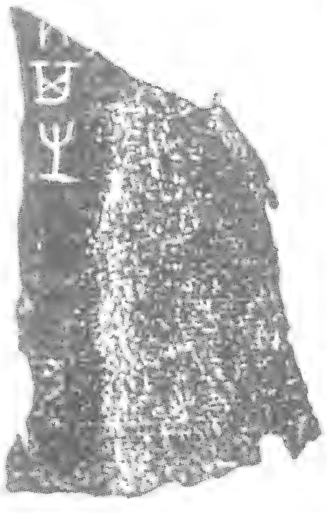

14

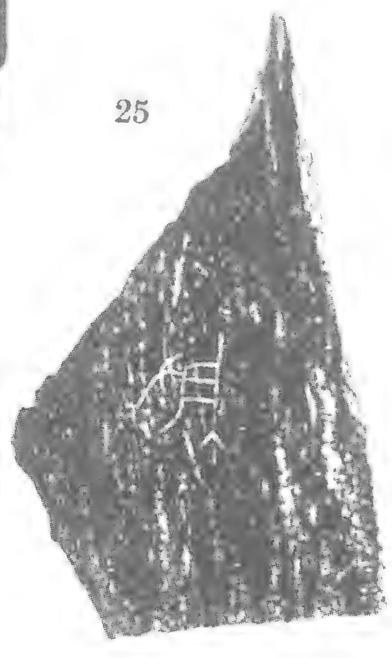

15


22


24

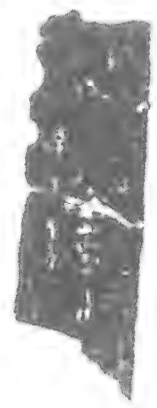

26

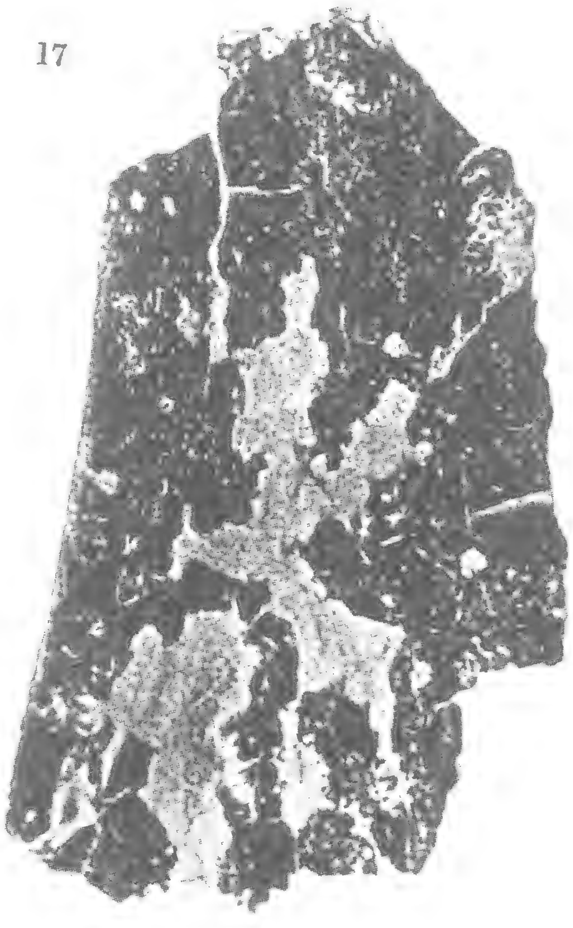

23


25


16

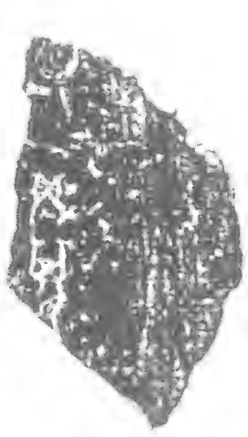

18


19

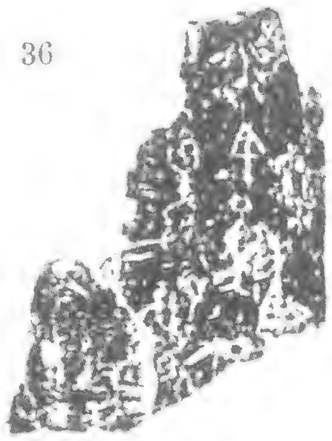
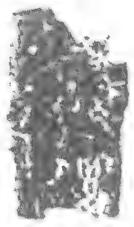

17


20


21



(七)考　釋

1. 編例

考釋悉依拓本編列號數次序,更將每一卜辭,列爲一號,以便檢閱。大龜腹背甲七版,均附摹寫本,以資參證,其次骨版,則擇拓本不能清晰或可相啣接者摹之,餘均不再列摹寫本。

辭之排列,依干支日次,並據卜法文例爲序。

七版大龜之排列,背甲出土于腹甲之旁,自爲一系,腹甲則六版密相積疊,字向下,契灼向上,由一版至六版,自下而上,以次排列。其甲子日次及所卜事類,亦若版自爲系,故仍原排次序,列爲一至六版。

編號 10 至 17,19 至 22,24 至 30,32,33,35 至 38,40,41,皆購自村人之手者,依時代爲次,不復知出土情形。其有可相接連者,則接連之。

編號 9,18,31,34 及 39,乃翻掘村人出土之坑而得者,與村人掘者可合,足證村人所得,亦在此一地。

本篇拓本排次,依時代爲序,大致如下:

1 至 18　第三期　(廩辛,康丁時卜辭)

19 至 26　第三或第五期(?)

27 至 42　第五期　(帝乙,帝辛時卜辭)

2. 考釋

1、甲

(1)壬戌卜,貞:不𡆥方。　一。

方作𢀛,爲由𢀛形變𢀛形之過渡字,𢀛爲第一期字形,此辭乃第三期物,省其右旁之竪而仍留左竪,作𢀛,至第五




期,則左右皆省,作才。 一、記卜兆先後之數字,以下同。

(2)壬戌卜,狄貞:其𠂤方。 二。

狄,貞人名,已詳第四章。 此與第一辭爲一事對貞,前辭作否定語,此作肯定語。 前辭當亦狄貞,省略貞人。

(3)壬戌卜,狄貞:又出方,其目來𠂤。 一。

𠂤卽奠,假爲甸,卜辭有"征于我奠"及"征我奠"之文,奠疑卽郊外之甸(參安陽發掘報告四期,660葉)。

此辭本右行,書于卜兆右方,至"方"字,因邊逸,乃跳書于兆之左方,"其目來奠"爲一行。

(4)壬戌卜,狄貞:馭𠂤目來。 二。

(5)壬戌卜,狄貞:𠂤馬亞乎執。 一。

(6)壬戌卜,狄貞:𠂤伐乎執。 二。

(7)壬戌卜,狄貞:及方。 大吉。 一。

(8)壬戌卜,狄貞:弗及。 吉。 二。

兩狄字,犬皆作𠂇缺首兩筆。

(9)壬戌卜,狄貞:其又有來方,亞旅其𢀛,王受又(有)又(祐)。 一。

旅作𠂢,爲三期別體。 普通作𠂢(藏90,1)𠂢(前5,41,1)𠂢(後下4,8)金文有从一人作𠂢(𠂤侯鼎)者,有加止加彳作𢀛(伯其父簋)𢀛(曾伯簋)者。 此从兩止相背,一人持旗,亦旅之象。 亞旅並稱,疑卽書牧誓"亞,旅,師氏"之義,亞,旅,皆官名。 此辭"王受又又"跳兆之左,仍右行。

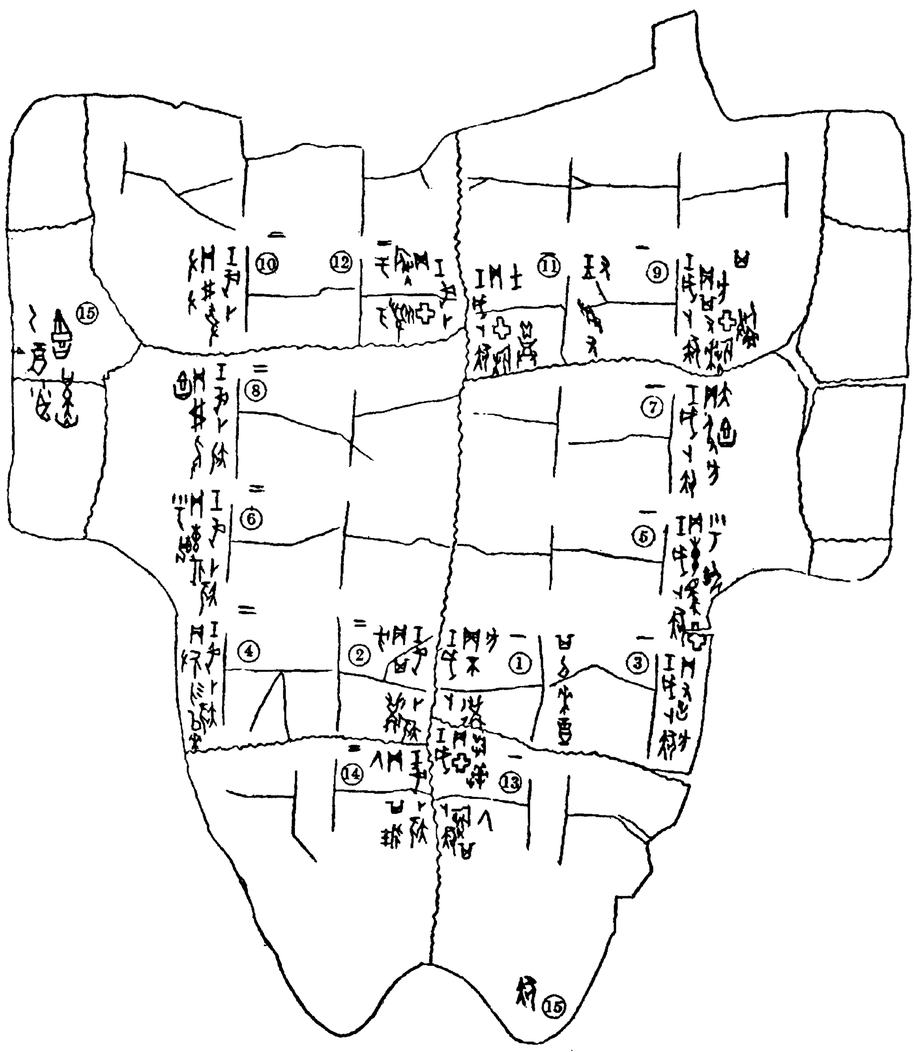
(10)壬戌卜,貞:弗受又(有)又(佑)。 二。

按此與(9)辭同時貞,省略貞人。

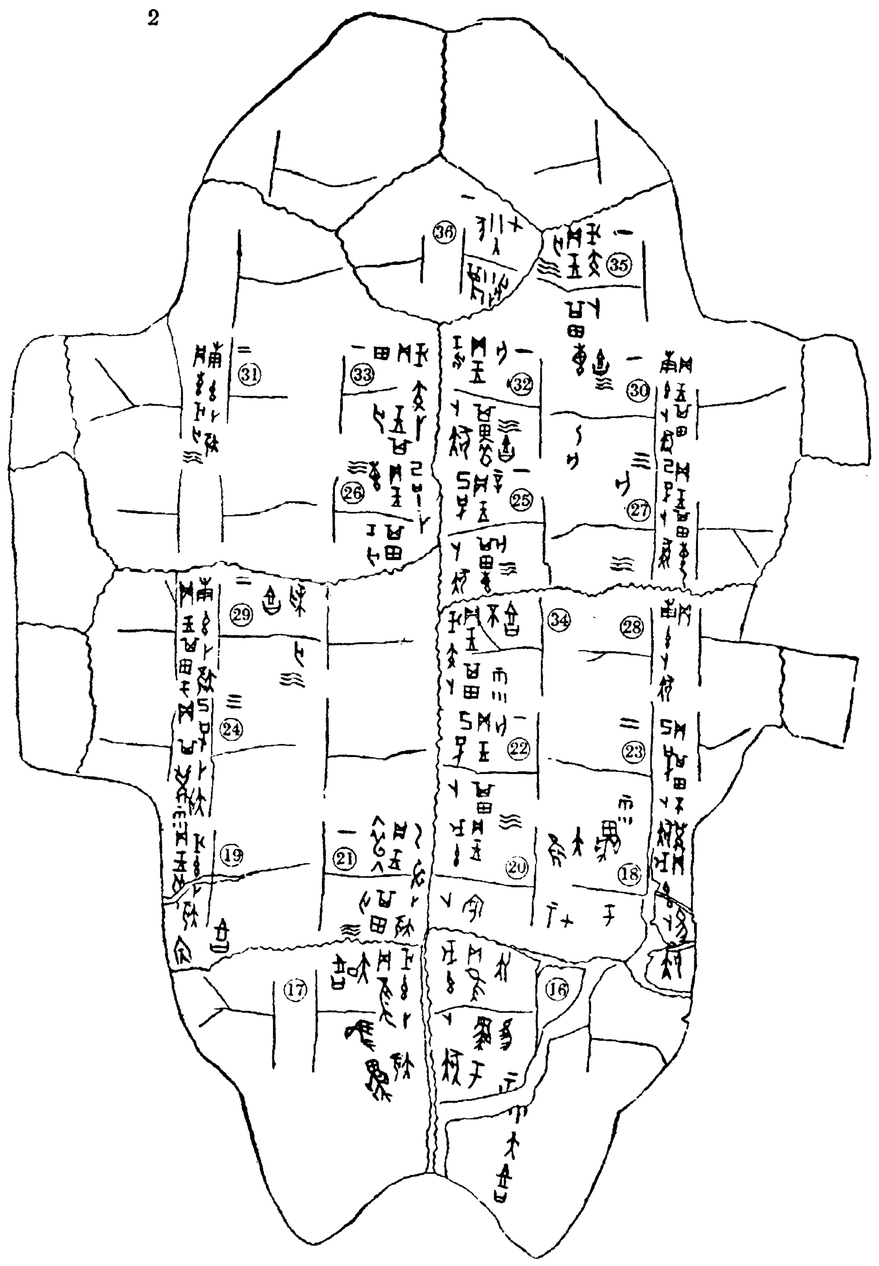
(11)壬戌卜,狄貞:亞,旅,亡𡆥。

(12)壬戌卜,貞:亞,旅从受于𠂤。 二。

1.



2



(13)壬戌卜,狄貞:亞旅其陟𠂤入。 一。

𠂤,辭(133)作𠂢,乃一字。 曰"田𠂢,往",當是地名。

(14)壬戌卜,狄貞:其豕入。 二。

豕亦地名,見辭(134),作𠂢。

(15)乙酉小臣㠯葦。

此辭在甲之左邊緣處,旁無卜兆,可知非卜辭,蓋記事之辭,偶書于此者。

(15之2)狄

此爲史官狄在甲尾隙處刻記己名,非卜辭。

2、甲

(16)戊午卜,狄貞,隹兕于大乙佳示,大吉。

𢆶疑卽𡆥之別構,从唐說,釋兕。

(17)戊午卜,狄貞:隹兕大丁,佳吉。

(18)戊午卜,狄貞:隹兕于大甲,佳示。

(19)戊午卜,狄貞,王从賓,吉。

(20)戊午卜,貞:王賓。

(21)乙丑卜,狄貞:王其田衣,入,亡𡆥。 一。

(22)己巳卜,貞:王其田亡𡆥。 一。

(23)己巳卜,狄貞:其田,不𢦏雨。 二。

雨字跳卜兆之左,書下方,因其上有記數二字,可知記數字契於前,卜辭書于後。

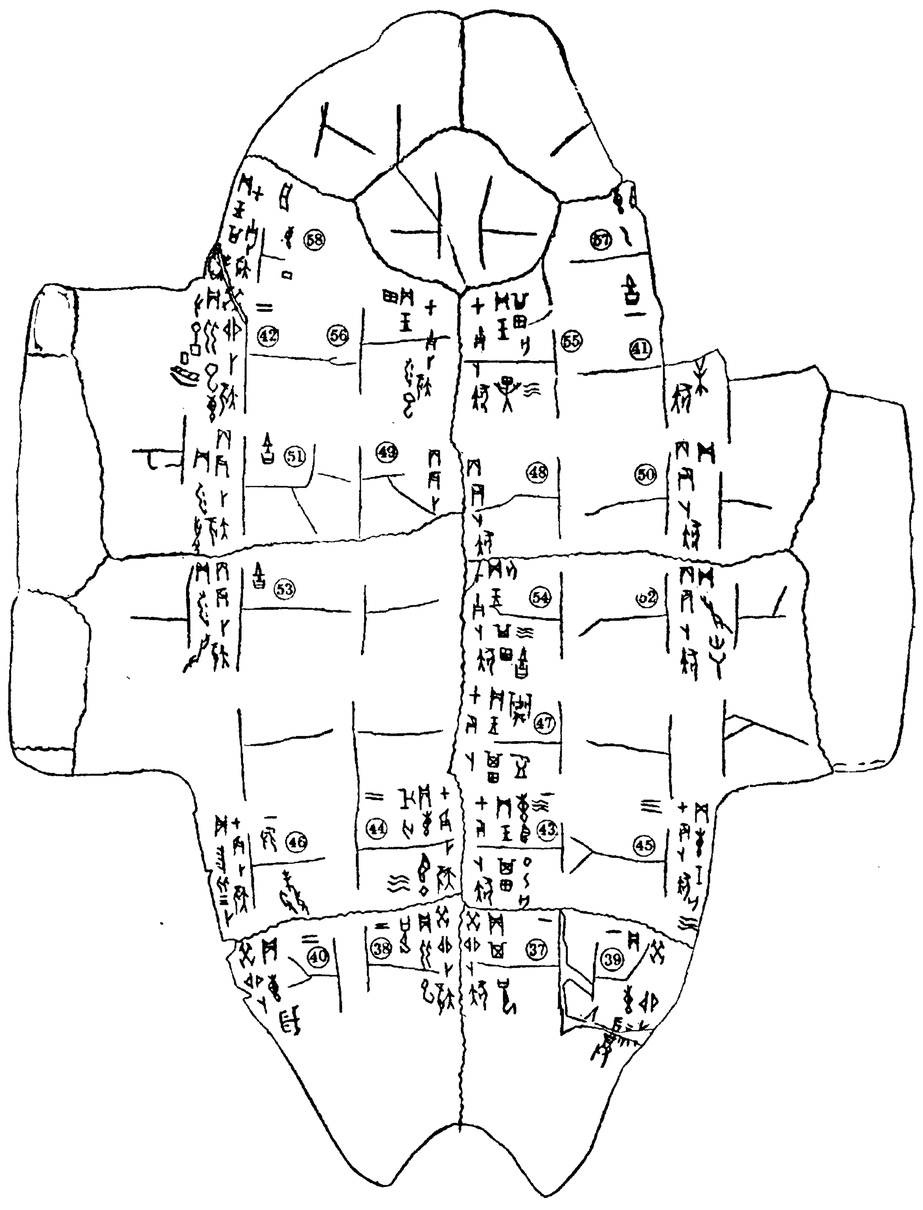
(24)己巳卜,狄貞:其𢦏雨。 三。

有記數字一,二,三,可確知三卜之次序。

(25)己巳卜,狄貞:王其田重辛,亡𡆥。 一。

(26)己巳卜,貞:王其田重壬,亡𡆥。

3.



此辭缺書記數"二"字。已字缺下一橫畫。

(27)己巳卜,狄貞:王其田衆乙,亡𡆥。三。

(28)庚午卜,狄貞:

(29)庚午卜,狄貞:王其田于利,亡𡆥,吉。二。

此辭在兆左二行,左行,又跳兆右二行,亦左行。

(30)庚午卜,狄貞:王其田衆乙,亡𡆥。吉。一。

此辭"吉"字在𡆥上,若依次讀之,爲"亡吉,𡆥",非。由此可知記數在卜之後,記卜辭之前,書"吉",亦在卜辭之前了。依理推之,此先後,當爲先書記卜次序之數字"一",次見兆吉,乃更書"吉"字于旁,後乃書卜辭,故𡆥字書次行吉字下。

又此辭行文之例,爲先于兆右書二行,右行;次跳于兆左,更更書二行,亦右行。然與辭(18)在同一甲之右半,而行文之例不同,可見此時書法文例之雜亂無序。

(31)庚午卜,狄貞:衆戊,亡𡆥。二。

貞下省略"王其田"三字。

(32)壬申卜,狄貞:王其田衣,亡𡆥。吉。一。

(33)戊寅卜,貞:王其田,亡。一。

原刻遺一"𡆥"字。

(34)戊寅卜,貞:王其田,不雨。吉。

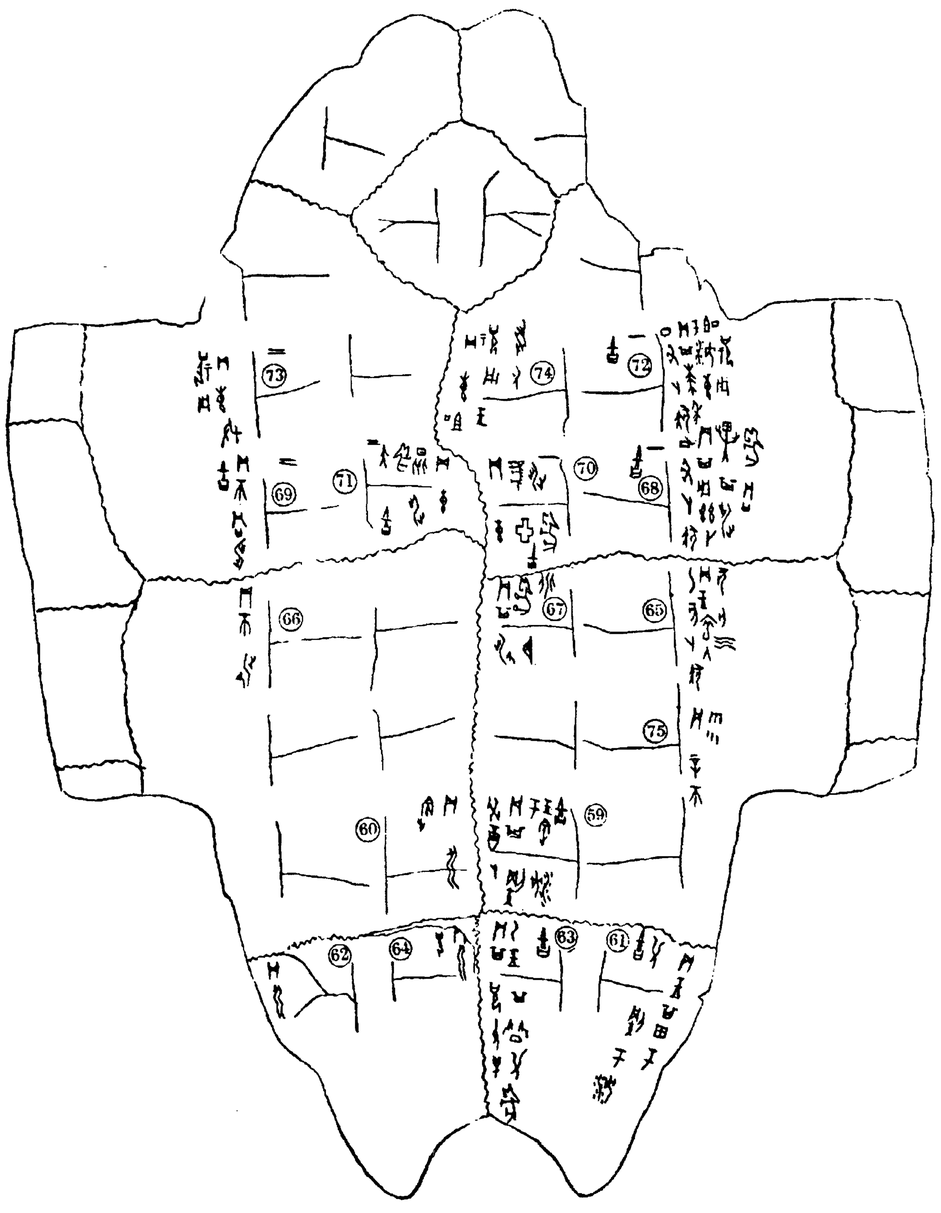
(35)戊寅卜,貞:王其田,亡𡆥。

(36)甲申卜,貞:王田,逐鹿。

貞,王,田,三字均缺橫畫。逐缺止。

3、甲

(37)癸卯卜,狄貞:其兄(祝)。一。



(38)癸卯卜,狄貞:从已(祀)兄(祝)。二。

(39)癸卯卜,貞:衆禱。一。

(40)癸卯卜,貞衆歲。二。

(41)囚狄囚𣎳囚。一。

(42)癸卯卜,狄貞:从已衆,又𢦏用。二。

(43)甲辰卜,狄貞:王其田衆翌日乙,亡𡆥。一。

(44)甲辰卜,狄貞:衆翌日戊,亡𡆥。二。

(45)甲辰卜,狄貞:衆壬,亡𡆥。三。

(46)甲辰卜,狄貞:𢀛从三卜,啟蹇。一。

曰"从三卜"从第三次之卜,卽決于壬日田丁。

(47)甲辰卜,貞:王其田擒盬。

(48)丙辰卜,狄。

(49)丙辰卜。

(50)丙辰卜,狄貞。

(51)丙辰卜,狄貞:勿𢦏。吉。

(25)丙辰卜,狄貞:勿𢦏𣎳。

(53)丙辰卜,狄貞:勿𢦏。吉。

勿作𠂤,爲此期特異之體。

(54)甲子卜,狄貞:王其田,亡𡆥。吉。

(55)甲子卜,狄貞:王巽其田,亡𡆥

(56)甲子卜,狄貞:王勿已田。

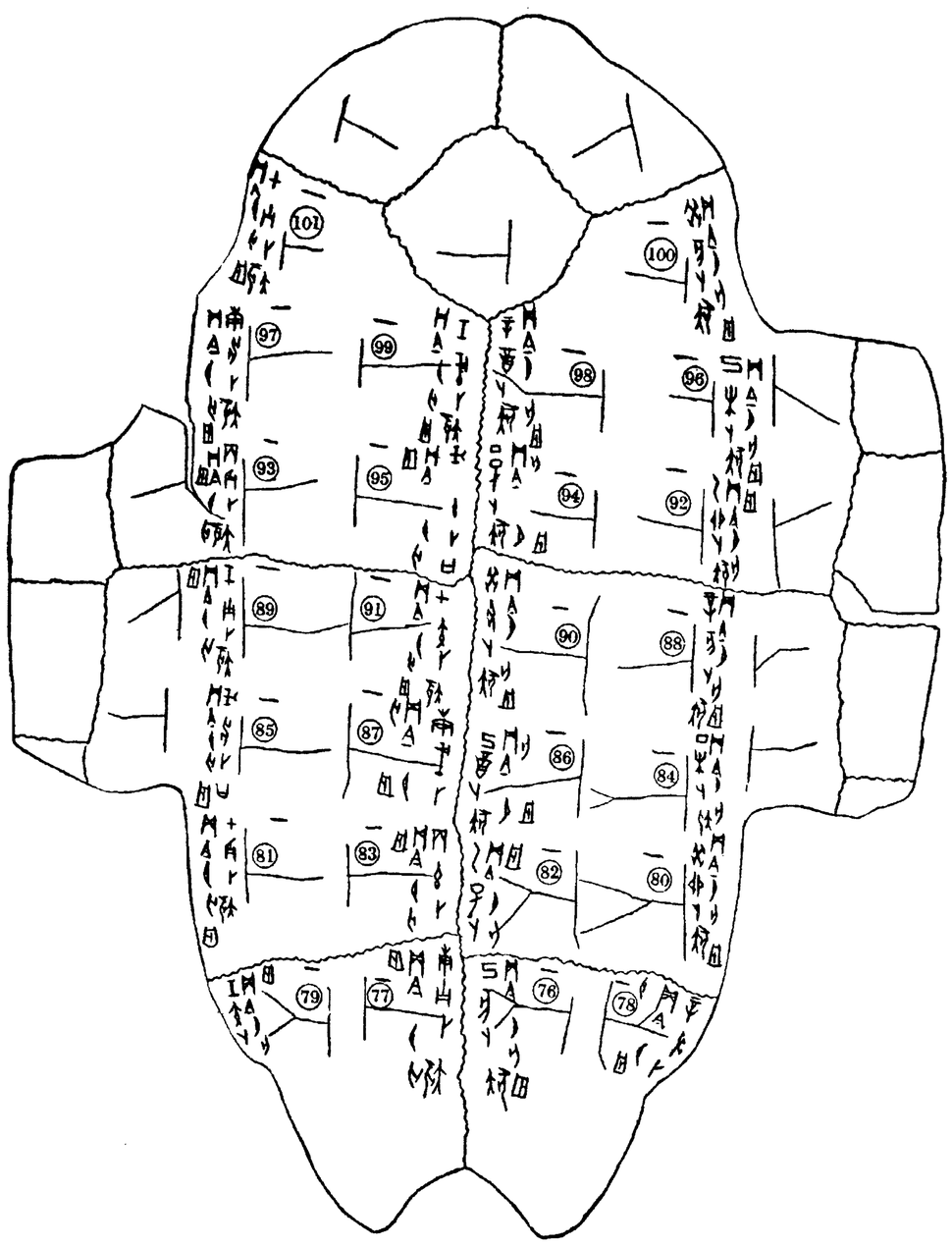
(57)囚舟囚衆乙。吉。

(58)甲子卜,狄貞:王其𢦏舟,衆丁。

此辭與(46)辭,皆左行跳兆右一行。

4 甲

5



(59)癸酉卜,貞:其剿于沈,王賓。 吉。

(60)貞:从賓。

(61)貞:王其田于𠬜,剿于沈。 吉。

(62)貞:从。

(63)貞:其兄(祝),允𠂤。 乙,王其𡆥(格)𠬜,兕。 吉。

沈,𠬜,兕,疑皆地名。

(64)貞:从兄。

(65)乙亥卜,狄貞:王衣,入犬,亡𡆥。

(66)貞:不涉。

(67)貞其涉兕㞢洮。

(68)丁丑卜,狄貞:其用。 茲卜異,其涉兕,同。 吉。 一。

(69)貞:不同涉。 吉。 二。

(70)貞:𢀛馬,亞,涉兕。 吉。 一。

(71)貞:𢀛衆涉兕。 大吉。 二。

(72)丁丑卜,狄貞:其求年于沈,𢀛祖丁祝,用。 吉。 一。

沈當是水名,亦地名。 于此求年,猶求年于河,岳。 河舊釋妣乙,岳舊釋羔,皆誤。

(73)貞:𢀛父甲祝,用。 二。

(74)貞:𢀛祖丁祝用,王受又。

按𢀛字在此版凡五見,皆有乎詔之義,疑卽後世之傳。面告曰"乎",以文書召令曰"𢀛",記此以待後證。

(75)貞:辛不雨。

5、甲

(76)己亥卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(77)庚子卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(78)辛丑卜,貞:今夕亡𡆥。 一。

(79)壬寅卜,貞:今夕亡𡆥。 一。

(80)癸卯卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(81)甲辰卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(82)乙巳卜,貞:今夕亡𡆥。 一。

(83)丙午卜,貞:今夕亡𡆥。 一。

(84)丁未卜,狄貞:今夕亡。 一。

原缺刻一"𡆥"字。

(85)戊申卜,口貞:今夕亡𡆥。 一。

口亦第三期史官,此版共狄貞夕,並(95)凡兩見。

(86)己酉卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(87)庚戌卜,貞:今夕亡𡆥。 一。

(88)辛亥卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(89)壬子卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(90)癸丑卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(91)甲寅卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(92)乙卯卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(93)丙辰卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(94)丁巳卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(95)戊午卜,口貞:今夕亡𡆥。 一。

(96)己未卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(97)庚申卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(98)辛酉卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(99)壬戌卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(100)癸亥卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

6、甲

(101)甲子卜,狄貞:今夕亡𡆥。 一。

(102)壬子卜,狄貞:王其止𢀛。

止,疑是往之上半,下半缺。

(103)壬子卜,王其田。

王缺橫畫。 其缺下一橫。

(104)戊午卜,貞:王其田往來亡𡆥。

(105)庚申卜,貞:王𢀛委鹿逐。

(106)庚申卜,貞:王勿利且鹿。

(107)庚申卜,狄貞:𢀛辛田。

(108)庚申卜,貞:𢀛壬田。

(109)庚申卜,狄貞:王𢀛斿鹿用。 吉。

(110)辛酉卜,貞:衣犬亡口。 一。

亡下當缺一字。

(111)壬戌卜,狄貞:王父甲𢀛其豐,王受又。 大吉。 一。

(112)貞:勿豐。

勿字缺二點。 此辭當缺記數字"二"。

(113)壬戌卜,貞:𢀛耏用。 三。

(114)貞从耏。 吉。

此辭當缺記數字"四"。

(115)貞:𢀛佳。 五。 一。

"五"字記數,先刻,故夾入貞字下,讀當如上。

(116)𢀛:从美。 六。 二。

此兩辭雙層記數,當先列一,二,後又序爲五,六。

(117)貞:𢀛唐用。 大吉。

此辭當缺記數"七"。

(118)貞:勿唐。 八。

(119)癸亥卜,狄貞:今日亡大風。

(120)癸亥卜,狄貞:又(有)大風。

風作從鳳,兄聲,爲三期新形聲字,四期以後則更作凡聲了。 詳見第四章,5,釋鳳。

(121)辛未卜,狄貞:𢀛田。 一。

(122)辛未卜,狄貞:𢀛壬田。 二。

(123)狄

此一字標于龜甲尾尖右下方,確爲記名簽字之意,以誌此版乃史官狄一人經手記載之卜辭。 詳第四章,2,甲尾記名例。

7、甲

(124)丁丑卜,貞:王其射隻御。

(125)貞:弗𢀛。

(126)丁丑卜,貞:王其田于盂,祡南沚立。

丁字缺刻橫畫。

(127)貞:于北沚立。

(128)貞:勿巳。

(129)丁丑卜,狄貞:其𩵦雨。

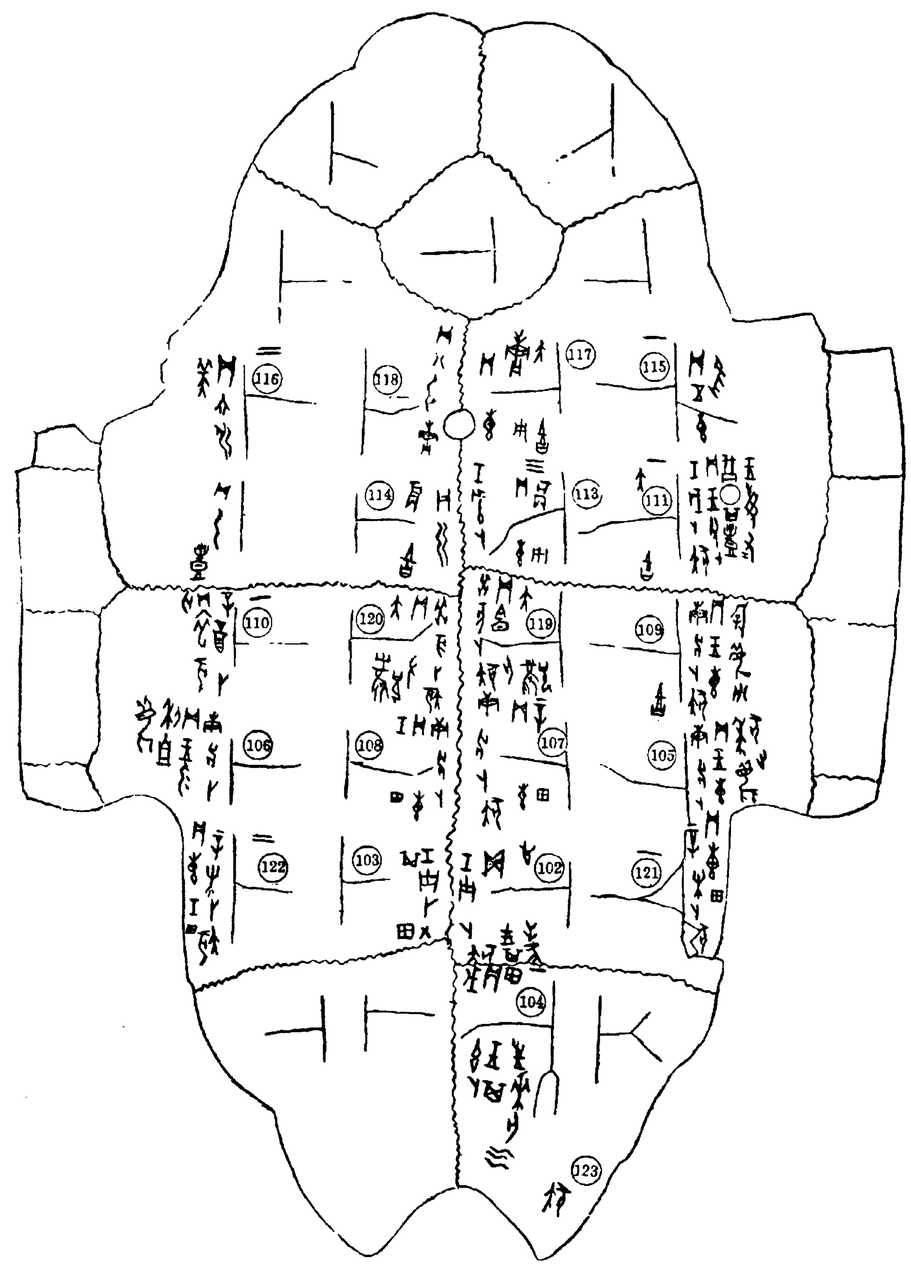
(130)丁丑卜,狄貞:王田,不𩵦雨。

(131)丁丑卜,貞:王田𢀛乙。

(132)丁丑卜,貞:王田𢀛丙。

(133)丁丑卜,狄貞:王其田𣪊,往。

(134)丁丑卜,狄貞:王往𣪊御。



(135)丁丑卜,狄貞:王田𢀛。

(136)弗𢀛。

8、甲

(137)辛巳卜,口貞:王其口𢀛于口。

9、骨

(138)囚茲陟帝囚卜囚。

10、骨

(139)囚王作囚于卜亦茲陟帝。

(140)馭𠂤,用。

(141)其用,父巳。

11、骨

(142)貞:若茲陟帝,余利,朕御史不句。

(143)其取囚。

12、骨

(144)其用,父巳。

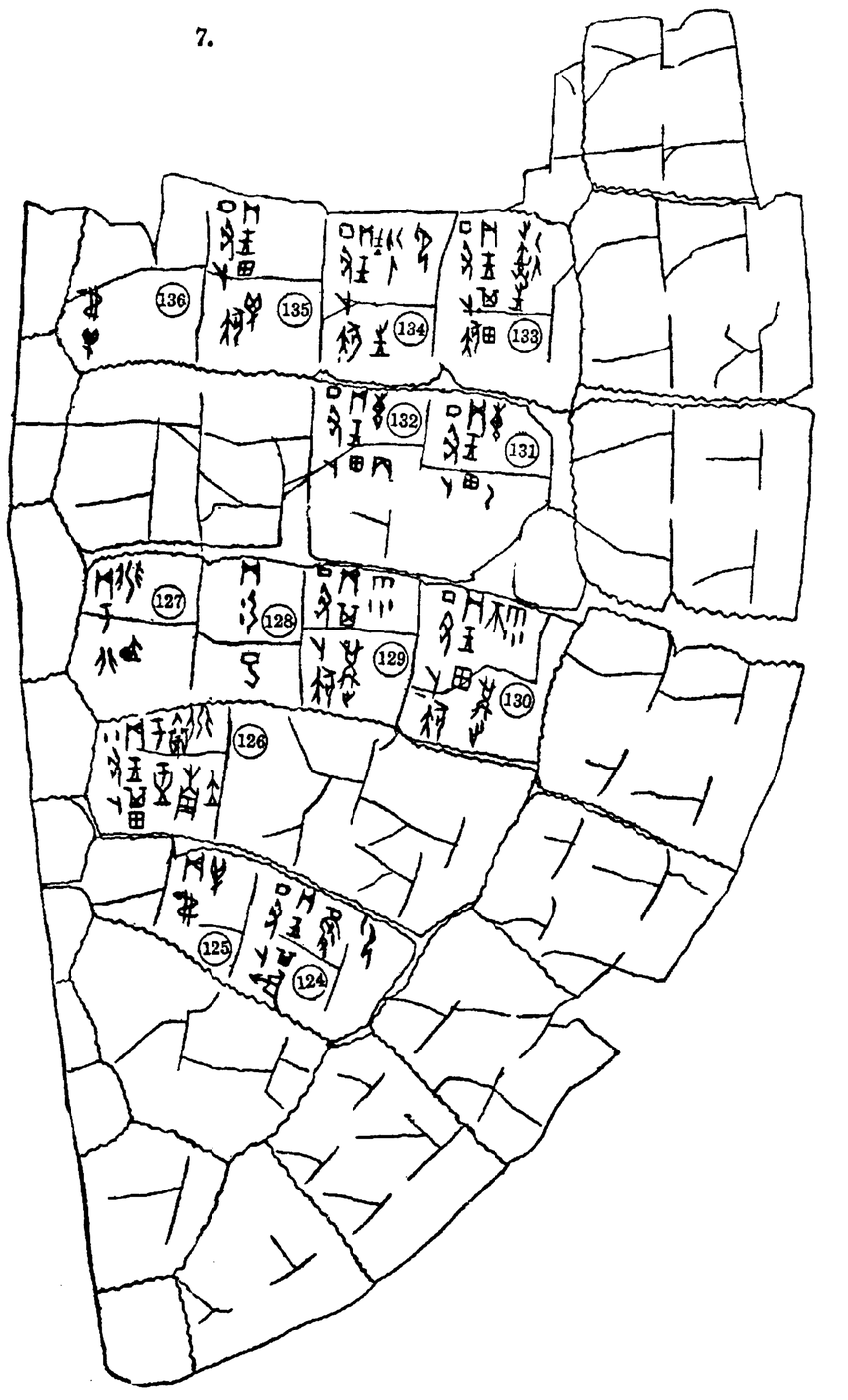
以上四骨,皆牛胛骨右邊,文字相聯屬,似是一版被打破者,然已殘缺,不能密接。 由背面鑽灼之迹,可以推知其原形,如右圖。 圖之左,依背面鑿灼之跡,推求其兆卜之所在。

此辭與(141)兩見父巳之文,父巳卽祖巳,可證在廩辛康丁之世。 此一批骨版,多與大龜七版同時。



13、骨

(145)其乎口。

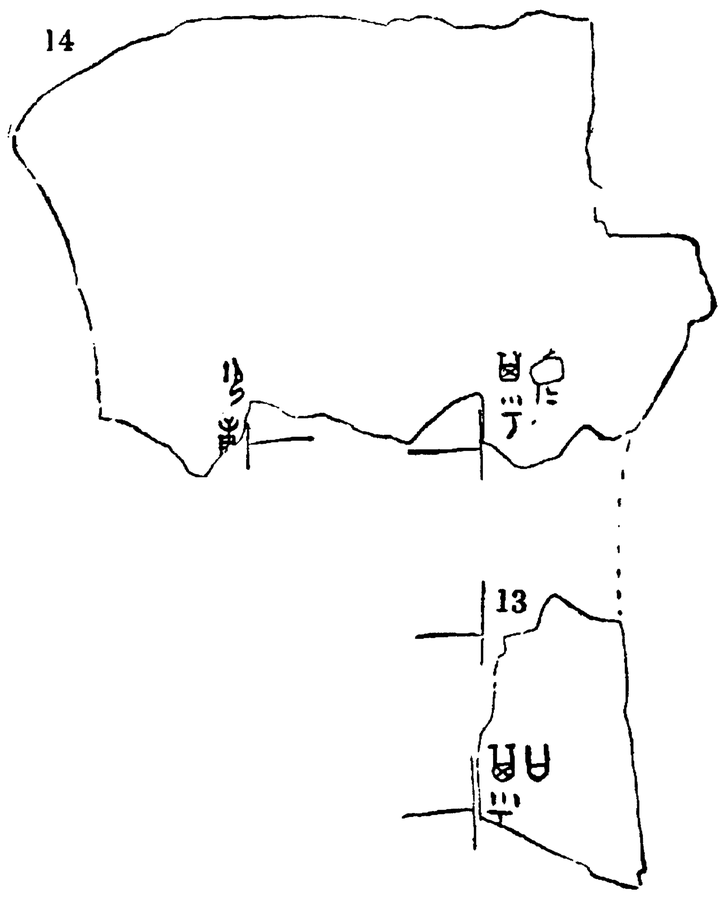


14、骨

(146)其乎□。

(147)御庚□。

此兩版亦原一版,爲盜掘者殘毀,乎下一字,乃爪痕剔傷,亦土人所爲。□三期史官名,見辭85,95。兩版之聯接依卜兆之推求,圖如右:



15、骨

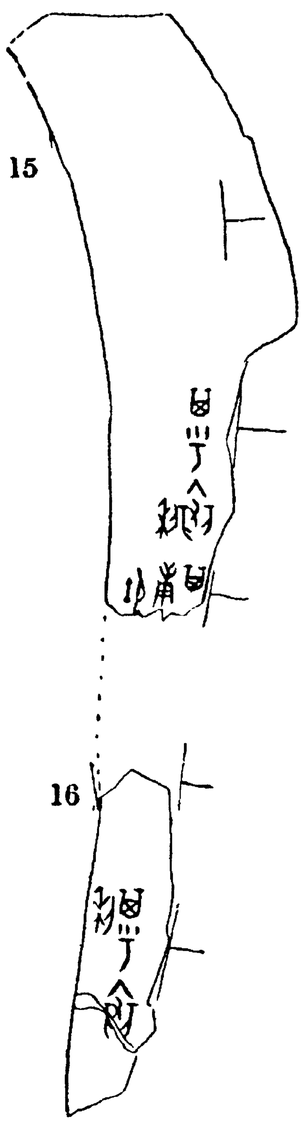
(148)其乎衰利。

(149)其□庚□御□。

16、骨

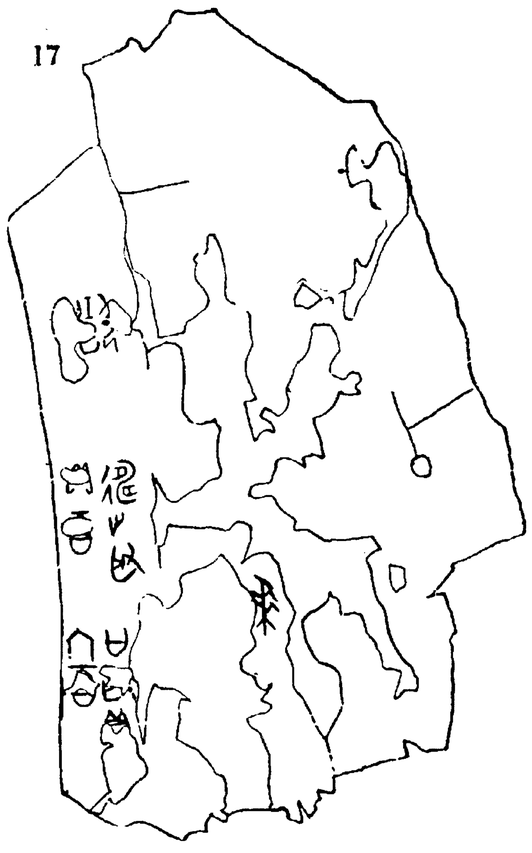
(150)其乎衰利。

以上兩版,亦一版分裂者,文字本甚纖淺,又經蟲蛀並受剔損傷,原骨猶彷彿可以辨識,拓本模糊不清,更摹如左圖。



17、骨

(151)遝取貝百。



(152)□取貝六百。

(153)□來□。

此骨質已腐朽,又被掘者剔刮更不易識,字上之爪痕宛在,殊爲可憾。最上一辭,僅可見女旁,次二辭,隱約可見,皆記取貝事,亦特異之品。拓本不清晰,更摹如圖。

18、骨

(154)□□每□。

19、骨

(155)仔十年。

20、骨

(156)大又口隹若。

21、骨

(157)□用牛。

(158)貞作□兄夙□。

貞,兄,二字缺橫畫。

22、骨

(159)□又不□見。

(160)尹又不若,女(毋)見。

23、骨

(161)□貞其虫。

24、骨

(162)□它。

(163)其去它。

25、骨

(164)敉。

26、甲

(165)女(毋)从。

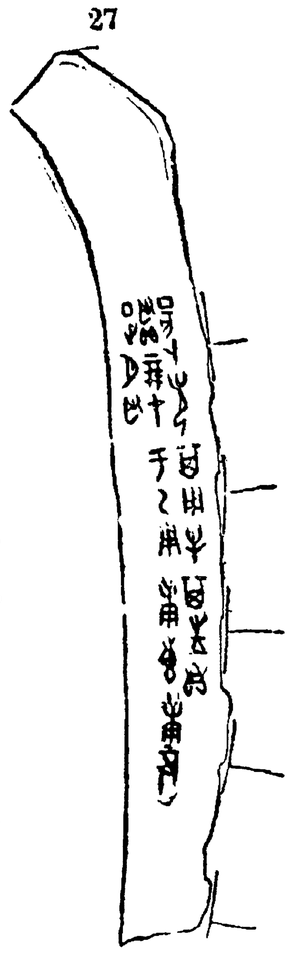
27、骨

(166)丁亥卜,光取貝二朋,在正月。取。

(167)其用牛于乙。用。

(168)其往,自庚,寅,庚辰。

此版文字乃第五期體,196辭記取貝,爲卜辭中特有之新例,辭151及152乃第三期記取貝之事,此爲第五期,皆新發見。又文中用牛于乙,乙卽帝乙,可知此爲紂時之卜辭。餘詳第五章,2,2,丙。



28、骨

(169)□入于卜。王舊不□。

29、骨

(170)余及今月出自卜。

(171)甲戌卜,又曰吉,余弗及之月出自卜。

此卜嘗指太卜之府而言,169一辭有"入于卜"之記載,可知史官輪值,入于太卜之府了。又史官每于所記載龜甲之右下角簽名爲識,如六甲卽其一例,又有"册入"之例,卽于人名之下更加一"入"字,卽表某人入值之意。詳四章,2。

30、骨

(172)□巳卜貞余出自□。

此辭及上兩辭之"余"疑是卜官自稱,則辭亦卜官自記,

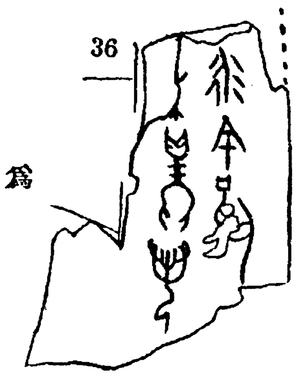
(180)其用𠂤,弗每王,泳。 克孚二人。


35

36、骨

(181)☐𠂤若☐泳余口☐。

以上四版,文字相聯屬,知爲一骨文分裂,更依背面灼痕,推知其卜兆所在,合之,如右圖。


36

37、骨

(182)貞:其㚔☐。

㚔字殘餘一目字,據上辭可推知仍爲㚔字。 㚔疑祭名。

38、骨

(183)其牢。

39、骨

(184)𠂤☐。

40、骨

(185)壬戌卜。

(186)辛酉卜,貞。

酉字缺頸下一橫畫。

(187)庚申卜。

41、骨

(188)今來庚,其☐。

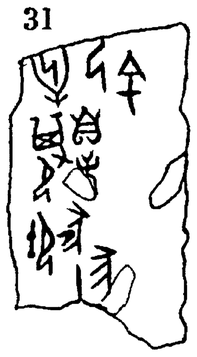
42、骨

(189)貞:余辛酉☐。

四字皆缺刻橫畫。

非關時王了。

(173)其往御,自庚寅庚辰,往。


31

31、骨

(174)☐其艮御☐自口豚☐余。

骨殘蝕特甚,另摹如右。

32、骨

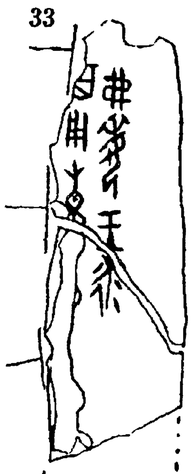
(175)令報㚔☐。

㚔殘下半,由辭(207,208)推知之。

33、骨

(176)其用𠂤,弗每王,泳。

泳爲帝辛史,此辭及下列辭(178)皆書名于末,爲一新例。


33

34、骨

(177)☐㚔口入,乎又司,克孚二人。

又司卽有司,在卜辭中爲僅見之職官。孚疑爲孚之繁文,卽輔右之意。"二人",未知何指。

(178)其㚔,从,用口我王。 泳。

"用口我王",爲僅見辭句。 惟用下一字骨殘,不可推知。 曰"我王",亦史官口吻。

以上爲二版,相黏合者,於村人私掘出土甲骨之舊坑翻虛土得之,與上下三版皆可聯繫,可確證彼三版亦此坑所出者。


34

35、骨

(179)☐㚔☐若

拓本編號	登記編號	田野編號	卜辭編號	品名	出土坑位	出土時日	深度
29		9 H. 27	(170)—(171)				
30		9 H. 17	(172)—(173)				
31	9.2.0005	(HS. 3)	(174)		(HS.51)	23,4,1,下午	擾土中
32		9 H. 9	(175)				
33		9 H.12.13合	(176)				
34	9.2.0004	(HS.1.2 合)	(177)—(178)		(HS.57)	23,4,1,下午	擾土中
35		9 H. 14	(179)—(180)				
36		9 H. 10	(181)				
37		9 H. 29	(182)				
38		9 H. 23	(183)				
39	9.2.0008	(HS. 6)	(184)		(HS.57)	23,4,1,下午	擾土中
40		9 H.1.2.3合	(185)—(187)				
41		9 H. 30	(188)				
42	9.2.0010	HS. 1481	(189)		(HS.57)	23,4,28下午	0.80

民國二十四年,八月,二十日。 校竣完畢於南京。

(原載《田野考古報告》第1期,1936年)

3. 編號記載對照表

拓本編號	登記編號	田野編號	卜辭編號	品名	出土坑位	出土時日	深度
1	9.0.0440	HS.1478.1	(1)—(15之2)	字甲	HS.20	23,4,11,下午	1.50m
2	9.0.0441	HS.1478.2	(16)—(36)	,, ,,	HS.20	,,	1.50
3	9.0.0442	HS.1478.3	(37)—(58)	,, ,,	HS.20	,,	1.50
4	9.0.0443	HS.1478.4	(59)—(75)	,, ,,	HS.20	,,	1.50
5	9.0.444	HS.1478.5	(76) —(101)	,, ,,	HS.20	,,	1.50
6	9.0.0445	HS.1478.6	(102)—(123)	,, ,,	HS.20	,,	1.50
7	9.0.0446	HS.1478.7	(124)—(136)	,, ,,	HS.20	,,	1.50
8	9.0.0447	HS.1479	(137)	,, ,,	HS.20	,,	1.50
9	9.2.0007	(HS. 5)	(138)	字骨	(HS.57)	23,4,1,下午	擾土中
10		9 H.4,5 合	(139)—(141)	,, ,,	（以下田野號9H.皆賸品，乃村人挖掘自 HS. 37 小圓坑中者，無記載.）		
11		9 H. 6	(142)—(143)	,, ,,			
12		9 H. 7	(144)	,, ,,			
13		9 H. 31	(145)	,, ,,			
14		9 H. 28	(146)—(147)	,, ,,			
15		9 H. 19	(148)—(149)	,, ,,			
16		9 H. 20	(150)	,, ,,			
17		9 H. 18	(151)—(153)	,, ,,			
18	9.2.0006	(HS. 4)	(154)	,, ,,	(HS.57)	23,4,1,下午	
19		9H.15.16 合	(155)	,, ,,			
20		9 H. 22	(156)	,, ,,			
21		9 H. 25	(157)—(158)	,, ,,			
22		9 H. 8	(159)—(160)	,, ,,			
23	9.2.0009	HS 760	(161)	,, ,,	HS.31A北	23,4,18,下午	9.50
24		9 H. 24	(162)—(163)	,, ,,			
25	9.2.0011	HS. 1930	(164)	,, ,,	HS.31A北	23,5,18	11.00
26		9 H. 26	(165)				
27		9 H. 21	(166)—(168)				
28		9 H. 11	(169)				

讀天壤閣甲骨文存及考釋

魏建功

民國二十八年夏初唐君(蘭)自北平來昆明，承示其所著天壤閣甲骨文存考釋。陳君夢家曾爲文評之，載圖書季刊新第一卷第三期。愚亦有讀記付「讀書」新三號，特爲于民斬棄後截，不克竟所說與斯學賢達盡商榷：爰復整舊文，重請學誌發表，雖與陳君之題相複，竊念論點各有所歸，或者汲埃不無小補於河岱也！　二十九年二月魏建功識於滇池東濱馬村鳧樓。

※

天壤閣甲骨文存一册，二十八年春北平輔仁大學印行，爲福山王懿榮舊物拓本一百零八片；吾友唐蘭先生作考釋一册並行；承其南來見贈一部。　余受而讀之，發卷見唐君序，因知此書出版因緣，與君治古文字學歷略及將來計劃。

唐君序謂：「凡有所見，異夫時賢，輒爲考釋，列於後卷，治斯學者，庸有取焉。」又曰：「卜辭研究，自雪堂導夫先路，觀堂繼以考史，彥堂區其時代，鼎堂發其辭例，固已極盛一時。然尋按諸論，當多蓋闕，已定之說，時復舛誤。蓋文字之學，自爲專門，但恃比較，無異面牆，純以會意，便成穿鑿，或者忽其瑣屑，無復深思，或者昧於系統，隨文生義，故猶多罅隙，有待補苴。」斯編之作，精思結撰，草創入神，自異常構；竊感材料寡少，無由發揮，浩汗旨趣，未獲疏解，如渴賡門，弗克大嚼，作者讀者，當共喻之！

余惟金石文字之學，著述蓁出，當代蹁躚，在有刊布，無不楮墨精良，固是吾輩讀書人一快：特玉軸縹緗，徒資玩喪，代價高昂，置蓄匪易，研索之士類多寒素，廢然却步，勢所必出。此書編製，一反積習，既惜物力，更便學人，並不失其美觀，亦無礙於實用，自有契文書錄以來，首創普及之風，心遠識大，宜加讚歎！

（以上總讀全書編製）

※

文存後附檢字，全書得二百五十一字，唐君謂「以自然分類法次之」。纂錄古文字之書約有二宗：郭忠恕汗簡以形爲綱，取準說文；夏竦古文四聲韻，依音排列，依據韻書。近世著作多屬汗簡一流，如吳大澂說文古籀補之集錄金文，商承祚殷虛文字類編之纂輯甲骨文字，顧廷龍陶文舊錄之編錄陶器文字，其文字同於說文者固可包羅，而說文所無之字整齊部勒概出臆爲。孫海波古文聲系糅合甲骨金文，有古文四聲韻依音編形之意，實別屬古韻著作如段玉裁六書音均表也。夫說文分別部居，一以漢行篆書爲主體，許愼時代之文字材料足以適用，先乎此後乎此之文字材料許愼創其系統，亦惟許愼時代解可知其不合。是則甲骨文字部類之編排，古文字學者所宜客觀研定。唐君「自然分類法」，蓋已於所著「古文字學導論」書中著其條目，斯編檢字正例證耳。案此二百五十一字，唐君排列情形大致如次：

（一）　人之屬，（一至七十五）

（二）　天地日月山川草木之屬，（七十六至百一十八）

（三）　貞卜之屬，（百一十九至百二十一）

（四）　鳥獸蟲魚之屬，（百二十二至百五十九）

（五）　數字之屬，（百六十至百六十六）

（六）　制度之屬，（百六十七至百七十一）

（七）　服用之屬，（百七十二至二百三十八）

（八）　宮室之屬，（二百三十九至二百四十三）

（九）　祭祀之屬，（二百四十四至二百四十七）

（十）　刑罰之屬，（二百四十八至二百四十九）

（十一）闕疑。（二百五十至二百五十一）

許愼說文序，「仰則觀象於天，俯則觀法於地，視鳥獸之文，與地之宜，近取諸身，遠取諸物」。唐君排列，蓋存此意，故首之以「人」之屬。日本人中島竦弱年垂老，因「近取諸身」一語纂著「書契淵源」，分繫古文字自成系統，而以「遠取諸物」一語則於來哲。唐君於茲二語，皆已發凡，他日綜合全殷商文字，自必更有可觀。自古文字學發達以來，於文字學本身之進展，或者啓端於此。且唐君所列類目實有意旁貫訓詁，學者苟加思索，不難明其默契於爾雅分篇也。

二百五十一字每字各注以「隸定」之體，利在學者論據舉稱得有定形。然本書材料限於一斑，無以見其全豹；更或學說歧疑，容有待商，互加怦礪，時賢優爲，自揆固陋，措之不道。若就類分眉目，商略體例，孔見一得，則所樂論。唐君所謂「自然分類」，案諸例字乃依文字形體本身先後相次，昔徐鍇說文繫傳部叙，段玉裁說文解字注述部目相蒙，其理不殊。例如一至七十五「人」之屬，歸納「字根」，（此余假定指稱文字形體基本單位之名目，即王力先生中國語文概論中所謂「字式」之構成部分也，）當爲一

一，側立之人形（第一字）；

二，側跪之人形（第五第六等字之所從），隸定作「卩」若「𠂔」；

三，正立之人形（第二十六字），隸定爲「大」；

四，嬰兒形，隸定作「兒」（第三十七字）若（子）（第三十八字）；

五，斂手屈膝之人形，隸定爲「毋」（第三十九字）若「女」（第四十字等所從）。

以上五形取人體之全身，雜具繁簡，自餘爲得人體之一部者，凡從某形之字各以其類相閒而蒙次焉。蒙從之例似有兩可者：如第四十七字「傍」，唐君謂「疑卽𠂤字」，次「害」字後；「害」唐君釋「害」字，從人足止上下皀旁「方」從「行」，疑若亦可次於第十九字或第百七十字。又如第九十七九十八「陟」「降」二字，從人足止上下皀旁，說文在「皀」部，今亦列第二類；然第七十四七十五「正」「韋」二字與「陟」「降」實同其例，亦以從人足止見意，乃列第一類而不以「口」爲類屬依據，疑若亦可次於第七十一以至第七十五字也。再如第百八十七「至」字從矢及於一（一地也），百八十八「矦」字從矢及於「（「所張矦鵠也），皆因弓矢之事而生之字，次於「矢」；而第二百二十「医」字從矢藏於匚（匚盛器也），亦因弓矢之事而生之字，則敬重在「匚」不次於「矢」；疑若「矦」「至」「医」亦可別次於「冂」「一」，或「医」似亦可次於「矢」。唐君本別有「殷虛文字記」，分科析目上下系屬，蓋卽此

類分纂從標準之所本，俾得按其綱領，作劣行列上之排列有如古韵家之諧聲生表譜，庶幾就美需善，思慮疑似之處不淆解；而今見此書字字平列，學者不免眩迷兆晚者，亦可以睽如指掌矣！（以上分讀文存）

※　※　※

考釋論述約爲二部分：甲，關於甲骨刻辭之體例者，乙，關於甲骨文字之識斷者。由文字識斷又可別爲數事：一有關文字演變之類例者，二有關殷商史事者，三有關古代社會風俗制度者，四有關古籍詁訓者。依項條舉，聊爲斯學同志考索之資：

事例	本書片數	考釋內容之分類	附記
干支表	1 至 3	甲·乙之一三·	論干已乙字屬乙之一。
不ナ𠂤	4 94 103	甲·乙之一三四·	唐釋爲「不再舉」或「不丼舉」。
卜句之辭	5 至 10	甲·乙之三·	
貞夕之辭	11 至 15	甲·乙之三·	
宄冗	5	乙之一二·	唐釋爲「宄」，卜人名。
田畝囿甴	5 9 10 至 16 57 59	乙之一三四·	
設	6	乙之一二·	卜人名。
見	7	乙之二·	卜人名。
衆	8	甲·乙之三·	唐釋爲「周禮大卜八命之二曰象」者。
卜句後繼衆辭	8	甲·	
第五期卜辭	9	甲·乙之二·	
白	9	乙之二·	地名。
卜句後繼王親祿之辭	10	甲·乙之三·	同唐釋武丁與帝乙帝辛之世祿辭不
吉	10 16	甲·乙之二·	
即	11 至 16	乙之二·	卜人名。
貞雨之辭	17 19 20 至 25	甲·乙之三·	
貞川泉之辭	17	甲·乙之三·	
帝自刻辭	17 21 24 39 42 72	甲·乙之三·	本書共六片。
灼而刻辭	19 22 23 24 33 37 38 42 43 58 63 74 75 83 86 87 90 93 94 97	甲·乙之三·	本書共二十片。
丐及從丐之字	17 33 39 72	乙之一三·	
示	17	乙之二·	唐釋爲「祇」。
易日	18	乙之二·	
雀	18	乙之二·	
蟲	19	乙之二·	
龍	20	乙之二·	卜辭唐釋爲「秋」之假借字，而爲「蟜」之象形。
亘古	22 106	乙之二二·	卜人名。
宅	22	乙之二·	
吾	23	乙之二·	卜人名。
雧	25	乙之二二·	卜人名。
貞王貶之辭	26 至 29	甲·乙之三·	
陽甲 盤甲 沃甲 羌甲	26	乙之一二·	
彡夕	26	甲·乙之三·	
古文字增點爲飾無意義	27	乙之二·	
戠	27 28	乙之二三·	唐釋爲「劓」。
貞年之辭	29	甲·乙之三·	
日	29	乙之二·	唐釋爲「日」。
其	29	甲·乙之二·	
伐	29	乙之三·	
卜辭但記日名	30	甲·	
𠂤	30 31	乙之三·	
𢆶	30	乙之二·	
亩蚩	30	乙之二三四·	唐釋爲與「雉」「惟」同義語詞。
彡日	31	甲·乙之三·	
旁祭	33	甲·乙之三·	
貞	34	乙之一二·	唐釋爲與「更」一字。
啄	34	乙之二·	唐釋爲「喙」。
貞祭侑之辭	34	乙之三·	
丐	35	乙之二三·	
𢍏	35	乙之二·	唐釋爲「產」。
矛	35	乙之二·	唐釋作「殺」並即說文之「殺」。
𠂤	36 37	乙之一二·	卜人名。

肯	63	乙之一・	
沚戠	64 65	乙之二・	卜人名
貞戠之辭	66	乙之二三四・	唐釋「戠」爲「戕」。
古文倒書者或改爲正書	66	乙之一・	
古文從口者象有器盛之	66	乙之一・	
貞伐之辭	67	甲・	
邑方	67	乙之二三・	唐釋爲「邛方」。
貞𠂤之辭	68	甲・乙之三・	
貞令之辭	69 70	甲・乙之三・	
𠂤尒	70	乙之一・	唐釋爲「位」，卜人名。
貞入之辭	71	甲・乙之三・	
之	71	乙之一四・	
貞往出之辭	72 至 74	甲・乙之三・	
囘	72	乙之二・	卜人名。
好	72	乙之一・	唐釋爲「婐」。

貞卩之辭	73 76 至 78	甲・乙之三・	
殷末卜辭	77	甲・	
王親卜	77	甲・	
喜	77	乙之一・	
貞王狩禽獲之辭	79 80 至 84	甲・乙之三・	
𠬜	79	乙之一・	唐從孫詒讓釋「禽」。
𠂢	80	乙之一・	唐釋爲「而」，地名。
獸協	81	乙之一・	
𠂤	82	乙之一・	唐釋爲「鹿」。
貞夢之辭	84	甲	
卓	84	乙之二・	卜人名，唐從孫詒讓說釋「卤」。
貞疾之辭	86	甲・	
貞祐之辭	87	甲・乙之一・	
貞勿之辭	88	甲・	
貞執之辭	90	甲・	

貞𠂤之辭	44	甲・乙之三・	
貞御之辭	45	甲・乙之三・	
𤔔	46	乙之一・	唐釋爲「熱」。
𡆥	47	乙之一・	唐釋作「叚」「矣」字異文，並謂說作「𠬜」「𠬜」一。
令	48	乙之一・	唐釋爲「本」。
月冠日名上例	49	甲・	
燎	51	乙之一・	唐釋爲「巂」。
壬	52	乙之一・	唐釋爲「巫」。
貞受𠂤之辭	54 至 56	甲・	
𠂤	56	乙之一・	唐釋爲「西」之假借字。
𠂤	56	乙之一・	唐釋作「𠂤」。
貞𠂤方之辭	60 至 62	甲・乙之三・	
衛	61	乙之一・	唐釋爲「遹」。
由𠂤	62	乙之一・	
貞王從人之辭	63 至 65	甲・乙之三・	

蚁	36	乙之一・	唐初釋爲「𠂤」，今改作「蚁」。
勺	36 94	乙之一・	唐釋爲「氏」。
黃陟	36	甲　乙之二三四・	
羽	36	乙之一・	唐釋爲「𠂤」。
梶	39	乙之一・	唐釋爲「相」。
鬳	39	乙之一・	唐釋爲「掃」。
𠂤	40	乙之二三・	本，唐釋爲「列」用作人名，卜辭中「列」人名，或即「卤」之假借字。
旬𠂤	41 88	甲・乙之一・	
亦卜辭文字因用法不同書法有殊異	41	甲・	
兆面灼面卜辭進貶例	42	甲・	
配𠙵	42	乙之二三・	唐釋爲「𡆥」。
㠯	42	乙之二三・	唐釋爲「洋」。
𠂤	42	乙之一・	用唐釋作名詞「𠂤」，未詳其象說析形，卜辭。
章	42	乙之二・	卜人名。

冒		乙之二二四・	唐釋爲「蔣」。
冓	100	乙之一・	唐釋爲「幸」。

以上考釋所論及者無慮百餘事，而釋文之蒐集契合者尤見其用力之勤。蓋王氏故物入於丹徒劉氏，鐵雲藏龜所有者往往一甲骨而分爲數處，若羅氏所印前後編中多有焉。本書既出自王氏，唐君乃以鐵雲藏龜及殷虛書契後編比合得三事：

一，十九片下半見藏龜一九三・四。

二，三十片與後編下十三・七可互補。

三，八十八片下半見藏龜一九三。

考釋文中，愚見略有數事獻替於次：

(一)干支表　一至三片。唐君謂此爲習書者所爲，舊說卜人藉以記誦稽考之干支表者非是云云。其言曰：「今世星者推人命造，年月日時之幹枝，頃刻可得，寧有專家世業，而不能舉此六十日名者乎？」按習書與干支記誦兩說實不相悖，吾人寧不可謂習書者取干支表爲資料乎？流沙墜簡中有干支簡箋書甚工緻，蓋猶與此古意同也。先古事物凡有兩說可相容，縞意不妨並存之也。

(二)甲𠂤固𠂤𠂤系諸文　五片。唐君曰：『卜辭之發現垂四十年矣。「亡𠂤」「亡𡆥」之文，「王固」「王𠂤」之語，數盈千百，與幹枝之名，卜貞之屬，幾乎相等，然迄無使人滿意之詮釋，此吾人治文字學者之恥也。諸家所釋極魚龍曼衍之觀，然既未盡通其詞例，又不詳考其字體，望文生義，不求會通。』故於柯昌濟華學泝葉玉森董作賓羅

潤緝吳其昌郭沫若孫海波陳夢家諸家學說各有商榷，然後出其主要結論曰：『卜字本象箋楚之類，或即籌策，古人用爲占卜之具，後世承之，爲一切占卜之公名，本與龜兆無涉也。𠂤爲卜在卣中，當讀卣聲，書傳並借「繇」或「由」爲之，本當爲卜所得吉凶之象，引申之則爲象之繇辭矣。占字從口從卜，爲見卜象而以口占之。然𠂤之與占，其事至近，聲亦相轉，猶酉之爲𥫱，卣之爲倉也。』此條考釋大抵誠如所言，其方法足爲研究卜辭者加意參考也。卜辭中𠂤字用法及有關此字之例，唐君歷論無遺，（就現在既經通行者，）與主要結論不相逕庭。唐君釋字以詁訓爲溝通之鄭，視前賢益加精嚴：

𠂤卣則爲1咎2攸3逌4維5猷6由7幼8繇9卜10迪；

𠂤卜則爲1咎2稽3繇4由5占；

𠂤猷則爲1咎2稽3酉；

𠂤𠂤則爲1咎2盩3留4休5幸；

𠂤備則爲1卣2卜3各4繇5占。

其中如言「卣」之爲「攸」，連釋「凡」之爲「同」，而疏卜辭「卣凡」爲「攸同」並「卣興」亦爲「攸同」，以明古書中用「興」字義多若「同」；復見詩書成語「攸同」即「猷同」即「猷同」若「維同」，而再證卜辭「卣凡有疒」爲「猷同有疾」；因「卣凡」爲「猷同」，從而明卜辭「卣告」即爲彷書中之「猷告」。若是之類，形義相參，觸理自然，頗有左右逢源之感。唐君言卜辭「𠂤」即「𠂤」字，此以形用相同而斷者，自可信從；又以「象意聲化例」（見唐君古文字學導論）說「興」「同」聲義當相同，進而曰「古書用興字者義多若同」，是「同」「興」形既相遞，用復所當然，無用駭駁也。言古韻者未嘗推翻切韻，然則言商代之音，亦豈推翻古韻而後之音，其中頗多流變。其變之近者，猶易推跡，若其輾轉遞變，迷失本原，舍諸聲系統外，固無以正之。學者間有迷信古韻，欲持之以衡量周以前音者，其可廢然知返矣」。曰：「字音之變不可方物，學者固不可拘泥後世用韻，而輕議諸聲系統也。」（皆殷虛文字記中語。）此其說固足啓後生努力於殷商音系之考索，而於研究聲韻史家亦不無他山之錯益也。愚所聞於語言學者治研聲音變遷之方法，蓋不厭其分併頻繁，而務求得分併之所以然：且於上下承繫順成無礙。例如唐君文字記於釋豈鼓鼓鼜喜憙億鄭嬉嬉中以時間先後之條件說「嬉」「蘱」同義相遞，即其類也。若「卣」「𡆥」二字若無時間之先後，一以爲「南」，一以爲「𡆥」，在形與用固可成說，而先民日常辨方之語音得毋不異於後世之「那含切」乎？竊謂形用果無疑慮，則其音似亦可不必强就後世。執周秦以下音系說甲骨諧聲系統，固也。依周秦以下音讀甲骨文字，或者亦有不可膠接者矣。愚嘗欲爲「甲骨文字徵音」以究古漢語之面目而病未能，蓋有懼於甲骨文字認識之未照。學者能循唐君之前路，以說音史之方法貫論形史，吾知其成就於新訓詁學或古漢語學也必非唐君所指爲迷信古韻者之能夢想！方今漢語華文日爲域外人士所競尚討論；從人之炙而耕我田，巍然海內泰斗者，其亦有感於唐君之瞀耶？

(四)骨曰刻辭與灼面刻辭　十七與十九等片。唐君討論骨曰刻辭，同時言及灼面刻辭，董君作賓一歸矛說」實發其端，而郭沫若氏從而修改爲檢署題包說，皆視爲記事之文；唐君考釋主張本是卜辭，以本書所收王氏拓本精眞，連拓曰面與兆面若灼面，如第二十一片曰面刻辭一例爲卜辭之確徵。說者或尚可以否認其說，而不信任王氏拓本。唐君又亟欲否定「骨曰刻辭」一詞以堅非記事之文之說，並舉灼面刻辭與此刻辭同類，反

證董郭二說之非。說者或尙可以否認其說，而以曰面無兆罅非卜辭之據。唐君固已用殷虛書契菁華四大骨卜辭無兆罅爲其反證；（有舉大龜七版一辭爲反證者亦僅孤文。）且釋董「矛」郭「包」之字爲「無足豕字倒文」。唐君想象卜辭初刻灼面，次刻曰面，再次刻兆面；今所見實物例其量正相反，兆面刻辭多於灼面，灼面又多於曰面，恐未足以服他人之心口。且骨曰刻辭之名初無礙其爲卜辭，今以特見之地位爲論舉之便亦容許可。曰面刻辭多與灼面刻辭同類；固是事實，未可抹撥；而曰兆灼三面命兆先後，似亦有其條例，亦未可抹撥。憶董君大龜四版考所得殷商龜卜命兆先後次第之條例，頗悟此殆骨卜曰兆灼三面命兆之例也。爰就本書骨片曰面兆面灼面所記干支，觀其命兆先後：

片數	曰面	兆面	灼面
17	辛卯	乙亥	丙戌
21	己巳 壬午		丙申 己丑
22			兆面己丑之繇辭繇兆面
42	丁巳	壬戌	丙寅
72	庚寅	壬辰	

命兆干支

此數片可見事例凡七：

1曰面在兆面之先刻辭，如21 42 72三片；17存疑。

2兆面刻辭在曰面後，如21 42 72三片，相距近者二日，遠者五日；17片如非例外，則四十四日爲最遠。

3灼面刻辭又在兆面之後，如42片。

4灼面刻辭似與兆面相繇，爲兆面之補充，如22 42 72三片。

5兆面刻辭有時似在曰面之前，如17 22二片。

6曰面刻辭與灼面內容往往相同。

7灼面刻辭既有爲兆面之繇，則曰面兆面刻辭內容當有相關之處。

學者儻能去意去必，歸納實例，惠我新知，是則爝火之光，不無微張拋引之緒也。

（五）古文字增點爲彩飾無意義　二十七片。此本唐君古文字學導論所立說之一。本書二十七片「戠」字，唐君舉此爲說「戠」之異文，唐君釋「戠」爲「劗」，卜辭中「今歲」作「今戠」也。然則「戠」與「戉」既爲異文，「戉」與「歲」得毋同字乎？且唐君並謂「戉」「戊」本一字，是「戉」「戊」「歲」將同音乎？

（六）宙東　三十片。唐君辨別卜辭早期用「宙」，後期用「東」，並解爲聲有變轉，故所假字不同。又釋此字爲語詞。由「宙」「東」古當讀如「惠」，而「惠」古有用爲語詞，明其用與「惟」「維」字同；於是疏證尙書中「惠」字前人訓「順，若，仁，愛」者皆爲語詞同於「惟」「維」。詩「九十其犉」，「三十維物」，一旦豁然，得其源於卜辭「宙」「⊠」二字相對之文例矣。唐君曰：「由此可見治卜辭者首當通其文例，不可顧此失彼，枝枝節節以爲之釋也。」自來孫詒讓羅振玉余永梁王襄商承祚朱芳圃孫海波郭沫若葉玉森吳其昌亦展轉釋以文例，或者見取其便己，而棄置其他，不周乃不允。余按「惟」「維」於古文字當卽作「隹」，今本書第五十七片有一辭：「不隹我出⊠」；七十五片有一辭：「叟乖其隹雨」。不識何以他辭用一「宙」若「東」，而此乃獨用「隹」也？

（七）黃陟　三十六片。按此片唐君釋「黃」字，頗疑爲太丁之合文，丙寅卜來旦⊠祭太丁夾，似可信；則「陟」當如唐君釋「夾」爲母妻妾義。又按唐君釋「夾」當讀爲「陟」，且在早期，晚期始假讀爲「妻」。然甲骨文中自有「陟」「降」字，如本書四十四片是也，不識何以又須別出此假借之字？如「陟」爲「升」義，而「夾」爲「輔」義，則本自兩語，不必定謂「夾」爲「陟」，而更成引申之字。

（八）旬　四十一八十八二片。唐君言，卜辭中同一文字，因用法不同，書法亦有殊異。以此例說㠯爲「旬」，㠯爲「雲」，而㠯疑讀爲「惸」或「鰥」。於四十一片「貞⊠㠯」及戩壽堂甲骨七之十六「𠂤帚豕子于匕己允有𡆥」如此釋。至八十八片「貞帚好㠯」「貞不其㠯」及藏龜百九三「貞㠯」「貞不其㠯」則曰：「㠯疑讀爲徇或徇，巡也，宣令也。」疑不應兩歧。陳夢家君釋此爲「娠」，以其在卜辭中與帚常相連用也。（以上分讀考釋）

※

甲骨文字材料，難得而復難理。發現四十餘年，爲數成千累萬，不密閉高閣，卽星散零落，傳流之功，獨推羅氏；商氏近年亦力行之。研究專家多重考史，將以汎文字學眼光，條分縷析，斬荆斷棘，爲來學造福者，似所罕遘。讀唐君此書竟，不禁鼓舞，樂觀其重訂古文字學導論，增補殷虛文字記，卜辭類編，契合編，諸書早成，以饜讀者求全之望。且唐君已屬稿撰釋達古齋贈藏北京大學甲骨刻辭，是則尤期快覩者也！（以上餘說）

二十八年十月二至六日，昆明，學無不暇簃。

（原載《輔仁學志》一九四〇年第九卷第一期）

臺灣大學所藏甲骨文字

附　考　釋

董作賓

在臺灣，我們現在所知道公私收藏的甲骨文字，確實不能算太少，它大約相當於五十年來出土的甲骨文字分存在世界各國的全量四分之一以上。實際的數字是二萬九千三百三十四片。我們估計甲骨全量是十萬片，這是抗戰以前較爲浮誇的數字，抗戰中，曾被盜掘出來一部分，這一部分正可以補償以前估計所應有的折扣，所以我們祇能承認這十萬片的估計。

民國四十年，胡厚宣君寫了一本五十年甲骨文發現的總結，他在「引言」中說：

> 據我們粗略的統計，在這短短的五十年裏，出土的甲骨，共有十六萬一千二百五十九片。

胡君的統計，有零有整，似乎應當可靠。但是，我們如果翻閱一下他的清册，十六萬片的來源，卻是這樣（原書第八節「五十年甲骨文出土的總計」）。

已經著錄過的材料，七十一種，四一零八七片。

尙未著錄的材料：

國內，機關採集的三一處，二〇九七一片。

私人收藏的七六家，九三六二五片。

國外，機關採集的九處，五三八一片。

私人收藏的六家，八二五片。

總共一九三家，一六一八八九片。

這一個總計數字是不錯的，但已經比「引言」中所列的數字，又多出了六百三十片。再看所列細目，國內私人收藏的五十七家中，有三十四家都是「約」數，從「約二八〇〇〇片」到「約一〇〇片」，如果不先把這些「約」字取消，怎樣能够計算出「有零有整」的數目來？

十六片。

國立中央圖書館購得甲骨文字二宗，共七百四十四片。

國立臺灣大學舊藏甲骨文字，共五片。

私人收藏：李玄伯先生藏甲骨文字，七片。

金東溪先生藏甲骨文，共四片。

以上公私收藏，共有甲骨文字二萬九千三百三十四片。此外我所知道的還有幾宗，都是僞刻。

臺灣大學舊藏的五片，是日據時代臺北帝大所搜集的，雖然殘碎，但第一是眞品，第二是未曾著錄過，第三是最先到臺灣的。這一點點零金碎玉，在十萬片的甲骨總量中，卻也算得是可貴的資料。

臺灣大學所藏甲骨文字考釋

或者有人要笑我，這是「小題大做」，我也並不否認。因爲在我的看法，這曾經切實估計的十萬片總數中，任何一片，上面的任何一個字，都是有同樣研究價值的。

一　貞：弗克賓(右行)

此版爲龜腹甲中部右邊，第一期卜辭。原甲的左方貞正面，當有日名及貞人。此貞反面，故曰「弗克」，賓或爲人名，辭太簡略，意義不明。

二　癸卯卜□貞：「翌甲(辰)啓」？(右行)

此版爲龜腹甲左上部邊緣，第一期卜辭。缺貞人名及辰字，所貞乃久雨望晴，問「明日甲辰天氣能放晴麼」？啓字本爲開啓之義，左爲戶，右爲又(卽右手)，義爲晴霽之啓字，說文「啓，雨而晝晴也」。此借用以手開戶之啓，爲雲開見日之啓。此片甚重要，可用以補充武丁時代氣候研究的卜辭。

向來編錄甲骨文字者，以中字無旂者(如小篆)，爲伯仲之仲，有旂者上下各一者爲二旂，上下各二者爲四旂，皆以爲中間之中。現在把四旂者彙集比較，乃知二旂與四旂，確有不同。無論左右有二旂者，是中間之中，也用爲貞人或小臣的名子。四旂者必伴一立子，知此中當是軍中之大旂，此字，後世用纛，集韻「皂纛，軍中大旗也」。在殷代當是立於軍中的大旂四旂，謂之爲中，「立中」必卜日，又恐遇風，可知爲國之大事，有風則不能立起，又可知此旂之大。卜辭有云：

癸卯卜爭貞：「翌(丙子，立)中，無風」？丙子(立中)，允無(風)。(徵天十)

(癸)酉卜賓貞：「翌丙子其(立中，無風」？(丙)子立中，允無風。(徵天九)

這一次是武丁時代擇了丙子日「立中」，第一次是在一個月以前的癸卯日卜的，第二次在三天以前又卜，得兆皆如「無風」。丙子立中，果然無風，史臣爭和賓都記載下來，附於原卜辭之後，可見立中的重要和無風方能立中的情形了。中是大旂，立於中軍，所以引伸爲中央之中，寫時減去二旂，以示區別。在甲骨金文中的旂形，如旅字之旂，車字車上所建之旂，旂字人所執之旂，皆是一旂，似均爲小旂。考工記「司常」：「常九旗之物名，各有屬以待國事」。又云「王建大常」，殷代「立中」，當屬於「建大常」一類。金文作四旂者多，儀盂鼎中字作六旂，作冊作九旂，卽爲後世增繁之書體。

五　乙丑(卜□貞：王)從侯□⊠(左行)

此龜腹甲上部右方邊緣處殘片。第一期卜辭，武丁時征伐方國，多有命諸侯率師從王之事，此太殘闕，不知從征者爲誰何。他辭如：

(辛巳)卜爭貞：「今春王從望乘伐下旨，受有祐」？十一月。(佚九七九)

又如「王從侯喜征人方」，皆是同類之例。

六　省桑田(下行)

此版爲牛胛骨近右邊處殘片，第四期武乙世卜田獵之辭。桑地名，舊釋疆，今從葉玉森氏說。桑從木從兩口，不見著錄。

我們再看他所列私人收藏的幾個大宗：

(一)劉晦之藏(未著錄者)約二八〇〇〇片

(二)羅叔言舊藏(未著錄者)約二〇〇〇〇片

(三)明義士舊藏(未著錄者)約二〇〇〇〇片

(四)胡厚宣新獲(連拓本摹本)約一五〇〇〇片

胡君自己新獲的材料太多了，以至於「不計其數」，只能說連拓片摹寫在內，共「約一萬五千片」，就算他自己新獲的是眞有此數。劉、羅、明三家所藏未著錄的，他估計共有六萬八千片甲骨文，這不能不令人懷疑。劉晦之的甲骨文，號稱兩萬多片，一部分較大的甲骨片，皆是僞刻，眞的又皆是小得可憐的碎片，除了殷契粹編所著錄的一千五百九十五片以外，像樣的實在有限得很。羅叔言所藏，印了殷墟書契前編、後編和菁華共計三千四百零一片以外，到了民國二十二年印續編時，二千零十六片之中，僅只三百七十五片是不重複的，其餘一千六百多片，都是用別人的拓片雜湊，可見羅氏的收藏，至此已是山窮水盡了。明義士舊藏，自稱五萬片，曾把大片選出編印了一部殷墟卜辭，共收二千三百六十九片，其餘破碎不堪，且早已在安陽損失了，明氏在民國十年前後所得村中出土的甲骨，不過二三千片，已有拓本流傳。胡君三十三年寫甲骨文發現之歷史及其材料之統計時，列私人收藏估計，稱：

明義士(未著錄者)約一〇〇〇〇片

這七年明氏在美國，無由增加到一倍，改稱「舊藏」，這前後兩次的估計，相差的也未免過多。又胡君三十三年的統計，劉晦之未著錄者是二萬片，這次是二萬八千，我也決不相信，劉氏在最近又會買入八千片。因此，所謂劉羅明三氏的六萬八千片者，等於虛報。

胡君新估計十六萬片之說，是經不起加以考驗的。老實一點，還是維持舊估計十萬片爲可信。至於已著錄的，除了重複的，僞刻的以外，約佔全量十分之四。

現在保存在臺灣的，卻是實有其物。據我所知道的，計：

公家機關採獲：國立中央研究院歷史語言研究所發掘殷墟自民國十七年至廿六年，十年工作所得甲骨文字共爲二萬四千九百一十八片。

河南博物館在民國十八，十九年間挖掘小屯村所得甲骨文字，共爲三千六百五

三(反面)　王固(曰)(左行)

前甲之反面。武丁時，喜親臨占卜，卜事已爲太卜及史臣貞卜竣事，王每喜親臨審視卜兆，加以考驗，故卜辭之後，每繫以「王固曰」，所說雖爲王的意旨，仍與所卜事項有關，史臣因王曾親臨，必更於事後記入「徵驗」之辭，這在武丁時代已成爲定例。正面如無處可記，則自「王固曰」以下記於反面，但須與正面地位相應。此辭殘甚，不知所云爲何，試舉殷墟書契菁華骨版中卜啓之辭，以見全例。

庚子卜，爭貞：「翌辛丑啓？」(菁七)

與此版正面卜辭同例，爭爲武丁時史官。同骨的反面，辭云：

王固曰：「今夕其雨？翌辛丑雨？」之夕允雨。辛丑啓。(菁八)

在庚子的白天，史臣爭卜問「明天辛丑可以晴麼？」卜的結果如何，不得而知。同時武丁親臨卜室，察看卜兆之後，他的判斷是「今天夜裏要下雨，明天辛丑還是下雨」。辛丑這一天，卻是晴了，王的話只應驗了一半，就是庚子夜裏下雨了。史臣在庚子這一天，已記下來王所說的話了，辛丑過去了，史臣爭又把徵驗辭記下來，就是下一段：「這夜果然下了，辛丑晴了」。這正是和本版殘辭同樣的一個例子。

四　羌⊠中⊠我(右行)

此版龜腹甲上部中央，殘餘三字，不成句讀。卜兆刻劃過，當爲武丁早年之物，據卜兆可推知卜辭右行。中字作四旂而向左者，甲骨文編凡四見，金祥恒君續編凡六見，均與此版不同，並凡十一見，亦可證此版未見著錄。凡中字有四旂者，無論向左向右，除了是殘辭之外，均與立字相伴，如：

庚寅卜永貞：「王叀立中，若？」十一月(前七、二二、一)

貞：「立中？」(龜二、一二、一)

貞：「來甲辰立中？」(前七、一六、一)

(貞)：「來(甲)辰(立)中？」(前四、三七、四，與上辭同版，不接)

鈔本武乙卜辭十一版

董作賓

這是二十七年以前的事了。民國十七年在殷墟第一次試掘時，匆忙之中，親手鈔錄的幾塊牛骨卜辭，現在發表出來，以供治甲骨學的參考。所揩的是龜版，不是獸骨。我們知道，龜甲是當時只鈔錄了文字，不曾鉤出骨版的輪廓，希望以後有機會可以揩拓，於是把原本入書中，誰知一擱就是二十多年，也不知原物流落在何處？近來出版的著錄中，都沒見發表出來。所以這雖然只有文字鈔本，也是應該予以保存的。

甲骨學重要的工作之一，無疑的是永遠要注意搜輯材料。我在去年六月寫甲骨文材料的總估計時，會估計這五十餘年出土的甲骨文字，龜甲和牛骨的殘版，不會超過十萬片。已見於著錄的總數約爲四二〇〇五片，還不到全數的一百九十六片，再加上金祖同郭若愚的職責。其次搜輯流傳在國內外的拓片的行的拓片，這是我們作田野工作機關應當的是胡厚宣，胡君以私人之力，在十年之內募寫編印至六千四百拓本六七五片，共在二萬片以上。最後的十年，已比得上以前四十多年的成績了。我每次和散賓研究甲骨文字的朋友們談起，都自己也嘗然在內。現在這一點鈔錄的的成績，實不過出土全量中的滄海一粟，不發表永遠埋沒下去。希望情此引起愛好甲骨學者的興趣，多多把未曾著錄的甲骨文字，發表出來，供人研究。那末，我們雖然試細殷虛就要開工了，現在回想起來爲這十一片甲骨文時，我對於出土的情況，都很值得寶貴的。

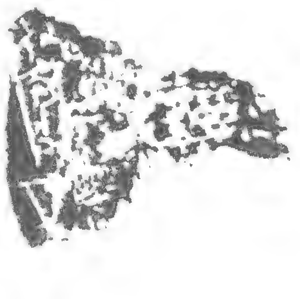


（原載《臺灣大學考古人類學刊》第 1 期，1953 年）







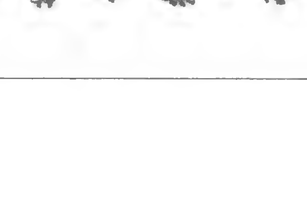












六「(今)月大漁」?从。

七「其五牛」?

壬戌貞：「其告於祖乙，𢆶」?(右行)

八「从喪，亡𢦏」?(右行)

喪，田獵區之地名，舊解𠂤，非。

九　□踐於高其遘□　其□　□日

十　癸巳貞：「旬亡𡆥」?(癸卯貞：旬亡𡆥」?(右行)

此類卜旬文例，也是武乙時代特點。

十一　庚□羊□豕□

當時匆匆鈔錄，未能鉤勒骨版原狀，是爲一大缺點。現在殘缺部分，已不可見，惟有據經驗加以臆度而已。

右列十一版之中，文字稍異者，是見於六片之漁字。今據孫海波氏甲骨文編及金祥恒君甲骨文續編稿本所收各字，加以研考，當不出以下所列：

1 前四・五六・一 (1)

2 前四・二二・二 (1)

3 前六・五十七 (1)

4 後上・二七・二 (1)

5 前二四五・四 (1)

6 後下・三九・一 (1)

前七・一三・三 (1)

拾二・五 (1)

甲一〇八七 (1)

佚九二六 (1)

菁二・一〇九 (1)

京一九六五 (1)

觀上表，漁字共有六體，大都在第一期和第四期(所注14即是)，是全爲舊派占卜時所記，新派或者捕魚事少，或者漁而不卜，故不見卜辭。茲將上表所列各體，分別加以敘說。

1　此爲魚的象形字，據孫書七見，金書十八見，共二十五見。一部分稱「在𩵦魚」，當是地名，一部分作動詞，如所𢆶之一例即「癸未卜，丁亥魚？」當即捕魚之漁。此二十五字，首尾鰭鱗俱備，雖間有繁簡之異，大體上一望可知爲魚。

2　此字上部殘，僅一見，上从手，不从刀。當是徒手捕魚之專字，文義上通用作漁。

3　此字一見，作四魚在水中形，漁之繁體。文曰「王漁」，當是王親捕魚之紀錄。

4　此字从魚从水，確即後世之漁字。孫書二十九見，金書二十三見，凡五十二見。舊日多據此字以證明殷代爲漁獵社會，大誤。此字僅見於第一期武丁時，皆作「子漁」，乃是人名，武丁的王子之一，常代武丁致祭其父祖。如「貞子漁𠂤於祖丁」，「貞翌乙未𡆥子漁𠂤于父乙」等是。沒有一個是作爲動詞捕魚之漁的。

5　此字第一期六見，皆作右手持竿釣魚之形，會意字。四期一見，省手。在卜辭中稱「在漁」，皆爲地名，無例外。意者其地當是釣魚之區，如後世之稱地名爲釣魚臺。

6　此字四見，乃是用網捕魚的專字，見於第一期之一體，孫書中摹寫，缺網上之手，今補正。第四期三體，除見於鈔本之一體外，餘二字皆見金書。文作「其漁」、「大漁」、「从漁」，當皆是兩人張橫網於河內捕魚之意。舊說以爲一人兩手張網者誤，兩手相對，兩臂在外，示兩人之手，亦可見橫網之長。四期三網形略異，魚形也和一期不同。

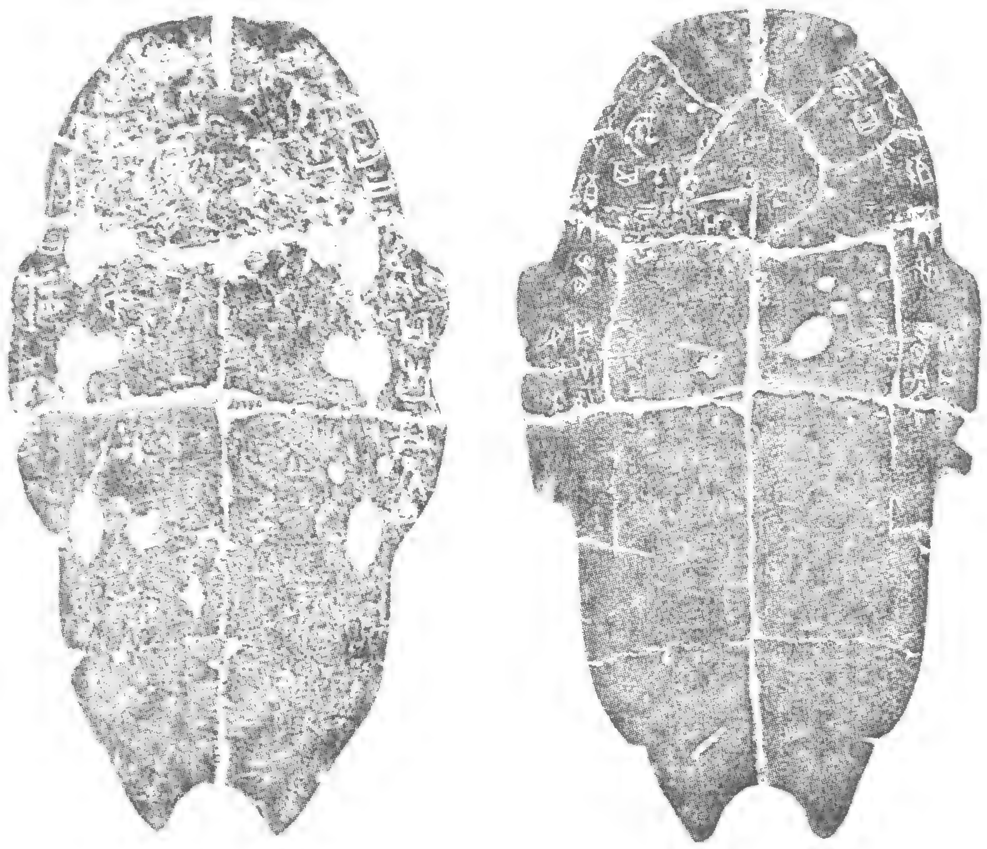
六體之外，尚有从虎頭从魚之字，从八从魚之字，舊說皆以爲魚與漁之別體，尚待考證。總之漁字在卜辭中僅見於一、四兩期，對捕魚之事：有用「魚」字表示的，有用「魚在水中」表示的。簡體用爲人名專字，繁體用爲捕魚字。用手捕魚的从手从魚，用釣竿捕魚的，一人可以勝任，用長網捕魚的則必須兩人。可見我國文字，最初創造時，分類是如何的精詳。在殷代用魚用漁，當指普通的捕魚之事，用鉤釣魚，用網撈魚，皆有專字。周秦而後，但以魚爲名詞，漁爲動詞，已漸趨於簡便。

這十一版，在文法上如「王其田」、如「癸巳貞」，在字形上，如「翌」、如「遘」、如「戈」、如「𢦏」，均足爲第四期之確證，不再贅述了。

(原載《大陸雜志》第九卷第二期，一九五四年)

牛胛骨龜腹甲刻辭

這是紀元前十三世紀殷武丁時代的一個完整龜甲（腹甲），安陽小屯出土。甲的正面刻了卜人所卜問的兩件事：某人來不來與天時，反面刻了武丁的推斷。背後有六個橢圓形的「鑿」，卜時就在那橢圓形洞裏用火燒灼，正面就顯出兆來。甲上共有六個兆。原物由中央人民政府文化部收藏。



正　面

左邊：戊午卜㱿貞□貞㱿卜午戊　不其來
　　鳳其來　　貞洗□

右邊：戊午卜㱿貞洗　不其來
　　□其來　　□鳳

反　面

左邊：王□（占）曰□其□
　　庚

右邊：王□（占）曰鳳其出其□

在甲骨卜辭四方風名的發現在所知一共只有三見：一個是本刊本期封面的牛胛骨刻辭，一個是「殷契拾掇」第一集一一九片的龜甲，另外一個就是本期發表的下圖龜甲（腹甲）卜辭。此甲下部分曾在「小屯」殷墟文字乙編中輯二、三冊裏發表過，但現在的這個圖是比較完整的，是以後繼續綴合而成。



此骨是今年四月五日在河南鄭州二里崗發現的。圖較原物縮小約五分之三。右邊部分的刻紋模糊，下圖是照實物大致摹繪的。

（原載《文物參考資料》1954 年 5 期）

經，以經考字的方法來作二重三重的證實的，而且也還可以從字音上來考證的。

其次關於兆文方面，董作賓的「商代龜卜之推測」一書兆瘳第八裏說：「鑿新購之龜版，灼之既罷，將見兆奏、而爆然之聲，乃發於所灼之中，亟覆版視之，坼文縱橫畢具，而卜字之形亦遂與爆然之聲同時出現……兆之爲象形字，同於卜，異點則在兆爲多數坼文之代表，卜則僅表一坼文而已；嘗於甲文中，見兩兆坼之間，有鈎勒之處，蓋所以劃分兩卜辭之界限者，實即兆之象形字也。」董文說明了「卜」是一個坼文，「兆」是在多數坼文之外加刻的鉤挑形文，這是不錯的。本刊說明上說：「甲上共有六個兆」，但附圖上只能看出有「卜」文，並無加刻的「兆」文，在廣泛的意義上也可以說沒有錯，而在「兆」的名詞的眞實意義上說，却是錯的。

（原載《文物參考資料》一九五四年第十二期）

關於「文參」誤解甲骨文寅字和兆文的兩點意見

周綱仁

〔編者按〕本刊今年第五期封裏頁刊出的龜甲拓本，在說明上，由於我們處理稿件不够仔細，發生了文字抄錯和解釋模糊的問題，出版後很久我們也沒檢查出來，現在承周綱仁先生指出，這是我們應該深刻檢討，並對作者致以感謝的。這稿文章原來旁徵博引，考證甚詳，全文達六千字，因爲限於篇幅，商得作者同意，予以節略發表。周先生現年七十一歲，以如此高齡，對研究學問這樣積極和熱心，這種精神是值得我們欽佩和學習的。

本刊今年出版的第五期封面背後扉頁中的龜甲拓片正面，在左右兩邊各有「𠂤𠂤」兩字，下面的說明文字作「戊午」。「午」字應該是「寅」字之誤，其根據如下：

劉鶚的「鐵雲藏龜」龜甲拓片第六頁前面「壬寅卜」，第一二七頁後面「戊寅卜」，寅皆作𠂤；四頁前面「乙巳丙午」，二十二頁前面「壬午卜」，午皆作𠂤，此其一。羅振玉的「殷虛書契前編」卷三第三頁甲骨文拓片干支表，有「甲子乙丑丙𠂤丁卯戊辰己巳庚𠂤」等文，每自甲至癸爲一行，順序而下，寅作𠂤，午作𠂤，至爲清楚，此其二。王襄的「簠室殷契徵文」甲骨文拓片，天象六五，「戊子卜昱庚寅雨」，典禮一一六「己丑卜昱庚寅」，寅皆作𠂤，游田二六「己巳卜貞昱庚午」，游田一一九「庚午卜貞昱辛未」，午皆作𠂤（簠室拓片，雖屬有贋品，但非全贋），此其三。郭沫若的「甲骨文字研究」釋干支第三頁，甲寅壬寅之寅皆作𠂤，丙午戊午之午皆作𠂤，此其四。關百益的「殷虛文字存眞」第一集拓片中，甲寅二見，丙寅三見，庚寅一見，壬寅四見，寅皆作𠂤；甲午三見，丙午庚午各一見，午皆作𠂤，此其五。這是根據字形方面來說。就字義解說：寅，甲骨文作𠂤，象人在早晨起身時着衣束帶的形狀，以後又經過許多演變，進展到篆文作寅，到了隸書楷書才譌變作寅。至於午字，甲骨文作𠂤或𠂤，就像御者所持的以竹枝或樹枝做的上面還留有許多節疤的馬棒，御字甲骨文作𢀛，或作𢀛，這上面的午字就有象徵馬棒的意思。這是可以用以字考

國立歷史博物館所藏甲骨文字

董作賓

一、來歷

遠在三十年以前，我就開始注意這一批材料。因爲親手發掘這批甲骨文字的工友告訴我，在地下，在劉姓的二十畝地中間，有完整的牛胛骨一堆出土。我的感覺無論龜甲或牛骨，在地下，殘碎得像指甲一樣大小，拓印摹繪出來，也是同樣大小，就是考釋出來，上下不成句讀，所以一段卜辭，大一點的片子，都是難能可貴了。一件完整的龜甲和牛骨，更是少有。但是我有一個信念，我相信，無論原物或拓印出來的片子，根據甲骨的原形，就分期、分派、文例、書體，仔細研究，皆可以綴合接對，恢復成一個完整的原版，然後才可以整理研究殷代的歷史文化。不然，僅僅就殘片上，斷章取義，一知半解，永遠得不到殷代文化的眞象。當時就下了一番決心，以恢復完整的材料，爲整理研究甲骨文字的第一步工作。

歷史博物館所藏甲骨文字的來源，是教育部指定河南博物館存在臺中倉庫的古物借來的。河南博物館是在民國十八、九年，派人從河南安陽小屯村挖掘出來的。十七年的十月，我受中央研究院歷史語言研究所的委託，開始試掘小屯村，見於安陽發掘報告第一期，題爲試掘安陽小屯報告書（民國十八年十二月史語所出版）。十八年的春天。研究院又派史語所的考古組同人，正式發掘，秋天，又作第三次發掘。十月底，河南省政府派河南民族博物館何日章同時發掘，研究院工作暫停。河南民族博物館於十九年春天，再度發掘，這一批甲骨文字，就是民國十八年及十九年兩次發掘小屯村所得者。

據民國二十五年我同胡厚宣合編的甲骨年表所載：

民國十八年(一九二九)戊辰—己巳

十月七日，中央研究院歷史語言研究所考古組李濟、董作賓、董光忠、張蔚然、王湘等再赴安陽開工，二十一日，忽有河南省政府所派何日章至安陽，聲言拒絕中央研究院工作，並招工自掘，考工組乃暫時停工。十一月十五日復開工，至十二月十一日停工。先後得古器物甚多，甲骨文字凡二七四二版。是爲安陽發掘第三次。何日章所派人員，挖掘兩月，亦得甲骨文字及古器物甚多。

十二月，中央研究院歷史語言研究所所長傅斯年，因安陽發掘糾紛，至開封，與河南省政府接洽，商定解決辦法五條以歸。(詳見傅斯年國立中央研究院歷史語言研究所發掘時之經過一文)

民國十九年(一九三〇)己巳—庚午

河南省政府不顧成約，准許何日章派人再赴安陽小屯村挖掘古物，中央研究院安陽考古工作，因復完全停頓。何所派人，自二月二十日起，至三月九日止，又四月十二日起，至月終止，凡開工兩次，所得古物未詳。

河南博物館，在十八九年之挖掘古物工作，因無報告，故甲骨年表，不能詳列。

河南博物館所獲甲骨文字，經關葆謙整理，於民國二十六年六月發表殷墟文字存眞第一集一冊，收入甲骨文字拓本一百片。在自序裏說：「將分集拓售，每集拓本百片，計至二十四年，出齊八集八冊。」但出至二、三集而止，外面甚少流傳。

據我的甲骨學五十年所載，已見著錄的甲骨文字有：

眞　殷墟文字存眞第一集　許敬參　民國二十二年六月，河南博物館石印本，與摹寫考釋合一冊。一〇〇片。

錄　甲骨文錄　孫海波　民國二十七年十一月，河南通志館出版，與考釋合二冊附索引。九三〇片。

民國四十七年夏，藝文印書舘重加校編，實得九〇五版，付重印，刪去考釋索引。有秀水嚴一萍，在書前作「抗戰初期，民國二十六年，河南博物館，裝運了若干箱，運至重慶，內有甲骨、銅器、陶器、織錦、玉石器、玉如意、書籍等件。大陸淪陷，搶救來臺的僅一部份箱件，存於臺中倉庫。三十九年四月五日至八日，經河南同鄉推定四人，前往點查。計李敬齋、張幼山、董作賓、何日章等。先開書箱，檢出裝箱時檔卷，各箱古物備極零亂。銅器、陶器大部份擠破。可見匆忙之中，塞入稻草，日子久了，稻草潮濕，積壓成團。新鄭大銅器無一完好，陶俑之類破碎尤甚。甲骨文字，每片裝一紙口袋，口袋上註明字號，日子久，口袋上膠水失效，紙多破裂，甲骨及原拓片，無字號互相羼雜，無從清點。有些甲骨，攪有黃臘墊子，一並裝入，五零四散，傷及甲骨原片。不得已，就原箱封存，以待將來設法作長時期之整理清點也。照原登記之檔案冊子，抄了一個單子如下：

骨文　九八三片，編爲九八三號，分十七組，列入「黃」字。

甲文　二六七三片，編爲二六七三號，分一六七組，列入「黃」字。

總計甲骨文字　共有三六五六片。

以上拓片，經孫海波編入甲骨文錄，計九三〇片，尚有二七一六片，未曾編入。但是甲文皆碎小之片，破無可破，骨文計片僅見於文錄三六、六八加七二四、四二、一七八、一七九、三九八加七一八加四八五、四二二加五六一加四二〇加四〇四(內有嚴一萍據拓本併合者三版，見重刊本)。骨版經裝運，大片殆皆變爲小片，數量一定增多了。

據何日章言，此次借與歷史博物館陳列之甲骨文字，仍無法清點，僅照原箱借與。但是這批材料，急需整理，要總大數量，對照甲骨文錄，編號入原甲骨，併合大骨版，我也是責無旁貸的一人了。將來我的健康恢復，稍竭綿薄，是可以達成此目的的。

二、特色

文錄中的特別之片子，業已數見不鮮，這一批材料，以新派祖甲時代爲多。且足爲祖甲時代改革文字，卜事減少，文例規整，改定曆法，考驗太卜的重要證明。就大體說，有舊派武丁時(一七一)卜辭，有殘碎之大字塗硃者(五七五)，有背甲殘片(七九四、七九五、八四九)有腹甲卜王之片(七六九、六七二)，皆他處所不經見。有廩辛康丁時(三一二)卜辭，有帝乙帝辛時代(六〇二及九)卜辭，但皆佔少數。以下舉「卜夕」「卜王」兩版示例：

甲、「卜夕」完全骨版之重要性

卜夕全骨，太少見了。今河南博物館所挖卜辭見於甲骨文錄者，多爲殘骨。僅藝文重刊本最後一葉第四二版是完整之骨。此骨已見於民國三十三年三月出版的胡厚宣所作一甲十癸辯(見他所著的甲骨學商史論叢初集第四冊)。同年四月，我出版的殷曆譜下編卷六、朔譜三，均列此版。卜夕版何以有關「朔譜」，有關「一甲十癸」，這裏需要先略談骨法。

三十年以前，正疑古派風靡一世之時，對於甲骨文字所代表的商代文化，疑心記載不可靠，凡是可以證明商代史實可信者，必羣起而攻之。我在民國三十年發表大龜四版考釋，其中有第一期「卜旬」之版(甲二一二二)，全版卜旬，十二月有癸酉，二月亦有癸酉，此年有十三月(爲有閏之年)，十三、一月，兩個月共佔有五個癸日，則十三月和一月，僅有「癸未、癸巳、癸卯、癸丑、癸亥」五個癸日。結果證明十三月和一月，一定有一個小月廿九日。有閏月，以調濟太陽年，月名必爲太陰月，此由卜旬版可以委屈宛轉求之。結果大爲疑古派所不滿，劉朝陽、孫海波、莫非斯諸人，羣起責難。雖然如此，到今天幾乎大家公認了。但是「一甲十癸」之說，仍然有人相信劉朝陽，這可以說一般人不肯細心去想問題，但知其一，不知其二。因爲商朝人特別着重甲子紀日，所以一般人也看作甲子紀日，就是商代的曆法，這是很容易明瞭的，甲子至癸巳，三十天是單月，甲午至癸亥，三十天是雙月，一年六次甲子紀日，算是三百六十天，這樣低估了商代文化，當時的曆法，一年三百六十日，不是太陰月，也不是太陽年。這種曆法，容易瞭解，也容易出麻煩。單月有甲子至癸巳的，如果一月有乙未，那就不合了。由此劉朝陽爲的要使他調和，所以隨便加十天、二十天或三十天的閏月，每月的干支，一日：初一日，十一日，二十一日，都是甲日。劉朝陽的晚殷長曆，就是如此擬列的。大龜四版卜旬全龜甲，可以證明十日不是癸日，因爲十三月和一月必有一個月沒有三十日。十三月一月或二月，必有一個月初一是癸日，一日也不必是甲日。

文錄第四二版，是卜夕的全版，卜夕是每夕必卜的，下邊必注有月名。例如：

丙申卜旅貞：「今夕亡𡆥」？十月。一。(由下而上，全版八段卜辭。)

丁酉卜旅貞：「今夕亡𡆥」？在十月。一。(以下省鈔戊戌、己亥、庚子三段卜辭)

辛丑卜旅貞：「今夕亡𡆥」？在十月。一。

壬寅卜旅貞：「今夕亡𡆥」？在十一月。一。

癸卯卜旅貞：「今夕亡𡆥」？在十一月。一。(此段在最上方第八段)

此版分明十月至辛丑而止，十一月始自壬寅，則壬寅確爲十一月一日，十一月二日是癸卯，則十日不是癸日，一日不是甲日。其他二例胡君視兩月名不同，證明一日不是甲日，例如續四、四〇、一。證明四月一日乙酉不是甲日。錄五五證明十二月一日是辛未，不是甲日。胡君辯一甲十癸是對的，但猶差一間。他不知河南博物館挖得此大骨時，尚有一個故事，更不知這十一月小、十二月大同在一年也。

在殷曆譜下編卷六朔譜三，有一段記載云：

骨爲民國十八年秋季：河南民族博物舘，派人在小屯村挖掘所得者。今藏河南省立博物館。據余調查所得，此批骨版，出土地在小屯村北濱臨洹河處，村人呼爲「劉姓二十畝地」之內。在吾人發掘之西北隅A二六、二九兩

坑之間，據目覩之工友言：「此坑出土『馬蹄兒』（土人謂牛肩胛骨也，因骨上有臼端，形似馬蹄，故名。）皆完整有文字。其排列小端向西。有兩版被壓殘破，共出土六版。」

今著錄於甲骨文錄者，僅此卜夕之版完整，其他五版，殆皆殘破。此次挖掘主其事者爲軒邱兩君。所得物皆無坑位地層之記載，故余述所聞如此。

此坑據工人言出土六版，今文錄中除四二版之外，皆碎小之片，多卜夕之文，殆皆同坑出土者。

胡君所舉兩版，殆皆一坑出土，一年之物也。稍知古四分術者，知十一月壬寅朔，十二月辛未朔也。我在朔譜三中，曾據文例試補大骨四版，據同一貞人旅，接對殘骨四片，錄如下：

補卜夕一版：自十一月三日甲辰（接四二版）至十一月十日辛亥，凡八段卜夕辭。（一）左肩胛骨。

補卜夕一版：自一月十一日壬子（接上版）至十一月十九日庚申，凡九段卜夕辭。（三）右肩胛骨。

補卜夕一版：自十一月二十日辛酉（接上版）至十一月二十日丙寅，凡五段卜辭。（四）左胛骨。

尙有殘辭「錄四七」一片（自下而上）：

丁卯（卜旅）貞：「（今夕）亡（囚）」？（在十一月）

丙辰卜旅貞：「今夕亡囚」？　在十一月。

（己）巳卜旅貞：「（今夕）亡（囚）」？　在十一月　（錄四七）

補卜夕一版：自十一月二十九日庚午至十二月八日戊寅，分兩排參互卜之。（五）左胛骨。

庚午卜旅貞：「今夕（亡）囚」？　（在）十一月　（在左邊右行）　（錄五五）

庚午卜旅貞：「今夕亡囚」？　在十一月。（在左邊右行）　（錄五五）

辛未卜旅貞：「今夕亡囚」？　在十二月。（在左邊右行）　（錄五五）

（壬申卜旅貞：「今夕亡囚」？在十二月）　（在右邊右行）

癸酉卜旅貞：「今夕亡囚」？　在十二月　（在左邊右行）　（錄五五）

（甲戌卜）（旅貞：「今夕亡囚」？　在十二月）（在左邊右行）　（錄五五）

乙亥卜旅貞：「今夕亡囚」？在十二月）（在右邊右行）　（錄五〇）

丙子（卜旅）貞：「（今夕）亡（囚）」？　在十二月　（全上）　（錄五〇）

（丁丑）卜旅（貞）：「今夕（亡）囚」？　（右邊右行）　（錄四四）

戊寅（卜旅）貞：「今（夕）亡囚」？（在）十二月　（在右邊右行）　（錄四四）

以上勉强補齊大骨四版，雖不中，不遠矣。而胡君之細心，差遜一籌。將來有機會時，可以利用殘辭，一一補足之。

卜夕之辭，據第五期帝辛之世，上有「在某地點」，下有「王今夕亡（囚）」也。卜辭本有外字，僅作卜兆外向（卜），合ㄩ文外丙作（卅）是其例。有人認爲「卜夕」今爲外字，甚合古誼，不知金文小篆中「外」乃後起字。說文解字「外」下云「遠也。卜尙平旦，今夕卜，於事外矣。」許氏以「夕卜」讀之，尤遠。卜夕讀爲會意字，猶近也。國王在外，每夕必卜，此爲殷人恆例，王不外出，不卜夕也。卜辭一版中，尙有甲子不相連綴之卜夕版，如錄四三：三月及五月相接，知四月全月王未出行也。國王出外：征伐、田獵、游觀，必有卜夕，此亦殷代卜事之定例也。

乙、「卜王」完全骨版之重要性

河南博物館挖掘出來的「卜王」之辭，見於甲骨文錄中者共九十七片。在全部選印中佔到十分之一强。許敬參曾作契文卜王釋，於民國二十六年，載入河南博物館館刊。我彷彿記得，他是按卜日之甲子統計的，所有六十甲子，每天都有。以前王襄以爲「卜王」是「卜嗣王」之事（見殷契徵文考釋典禮），馬元材以爲「卜王」是選舉嗣王的決定（見所著卜辭時代的經濟生活），還幾位都看得差了。卜王、卜嗣王、卜選舉嗣王，爲甚麼別的王一個也沒有，獨全見於祖甲的時代？我在民國四十三年，作殷代的革命政治家，刊於中國的政治思想與制度史論集，指殷代祖甲是維新派的領袖，是一位改革禮制的皇帝。改革禮制，第一是修改文字，第二是制定祭祀的新辦法，第三是改正曆法，第四是減少貞卜的事項。我在文中的第二段稱「考驗太卜的卜王問題」，卜王問題是祖甲時代的特點，他的一切新政主要在考驗太卜。

貞卜的事情，用現代眼光看去，確切是一種迷信。在古代記載中，掌管卜事的是太卜，太卜有一種絕技可以上通神靈，無論天神地祇人鬼，一切神秘他們都知道，所以可以上下其手，愚弄政府的最高當局——國王。祖甲小的時候，爲武丁老王所寵愛，他的大哥祖己早死了，老王希望立祖甲爲太子，他讓給二哥祖庚，自己逃往民間，所以周公稱述他說：

其在祖甲，不義惟王，舊爲小人。作其卽位，爰知小人之依，能保惠於庶民，不敢侮鰥寡，肆祖甲之享國三十有三年（尙書無逸）。

漢代的古文家以爲祖甲是太甲，今文以爲是祖甲非太甲。照無逸篇稱述殷代賢王，從中宗（太戊）以下稱高宗（武丁），以下稱祖甲（武丁子），次序如此，決非稱太甲爲祖甲，於殷代先王的次序不合了。

鄭玄云：祖甲武丁子帝甲也。有兄祖庚賢，武丁欲廢兄立弟，祖甲以爲不義，逃於民間，故云久爲小人。

馬融也以此祖甲爲武丁之子，與鄭玄所述故事略同，是最合理的。由此可以證明祖甲少時的遭遇，他所以逃之民間，久爲小人，也就是在於「不義惟王」。到了祖庚崩，祖甲立，他的年紀不能少於三四十歲，至少也活到七十八十。所以他卽位之初，改革王字（作丟），改正曆法作「在幾月」。卽此已足爲祖甲時代之堅强證據，「卜王」各片，有此表示已足。

祖甲是周公盛稱的殷代賢王，在甲骨文中的表現，也足徵他是英明睿哲之主，他對於極端的迷信，神秘的太卜，久已在懷疑之列。對太卜所爲的卜兆，我們看，吉凶斷自橫紋，就甲骨原版上細看，有向上的，有向下的，有上下皆有歧枝的，在兆上每每註上「吉」、「大吉」、「上吉」字樣，眞令人莫名其妙。太卜之稱爲神秘之專家者，正在此。祖甲所以要懷疑者，也正在此。

祖甲之考驗太卜，問題就在「卜王」之辭上，請畢其說。

在甲骨文錄裏，卜王之片最多，何以知道他是考驗太卜呢？胡厚宣有戰後新獲甲骨集，其中第三四八三片有：

甲寅卜王一　甲寅卜王二　乙卯卜王曰貞：「翌丙辰王其步自隻」？　乙卯卜王曰貞：「于丁巳步」？

卜貞之事，照例是太卜灼龜見兆，太史秉筆記事，先記「卜之日」次記「卜」字，又次記問卜之人，卽貞人。國王祖甲親自問卜，也記下「王」字。甲寅這一天，照例記上「甲寅卜王」四字，一爲卜之次序，甲寅日卜兩次，王都沒說話，太卜不敢問，太史也不敢問，僅記這四字而已。所有卜之片，皆是如此。乙卯日，照例記此四字，忽然王說話了。王說：「問明天丙辰我要從婁地走去好不好？」同一天，王又問一次，說：「問在後天丁巳走好不好？」太卜兩次答詞，現在都不知道，這是一個好例子。考驗太卜最完整的一版，是文錄中的一七八版，有十次「卜王」皆在癸未這一天：

癸未卜王　在四月　（右胛骨右邊一行最下一辭，左行。全骨上下均截去一部份。）

癸未卜王　（在右胛骨左邊，王字佔一行，文左行。六辭，連上共七辭，距離不等。）

（癸未卜）王　癸未卜王（同骨右邊佔一行下行。以上九次僅記四字，表示王沒說話。）

癸未卜王貞：「其雨？」　同骨右邊下行，同日第十次王說：「問將要下雨嗎？」）

癸未卜行貞：「今日至于甲申不雨？」（骨中，左行）

以上全版，也可以見考驗太卜的實例了。四月癸未這一天，記卜王者九次，王九次沒發問。第十次國王才說話了，說：「問將要下雨嗎？」不知太卜答應的話，但是國王又叫太史行卜問：「今天明天都不下雨嗎？」卜兆卜的記數字，「一」是王貞註一，行貞註二。太卜答詞不記，也不知道。

經過長時期的考驗，他盡知太卜的神秘了。因爲這種貞卜，自古以來就是有的，他不便全部廢棄，但是有關國家大事，征伐、祭祀、田獵、行止、卜旬、卜夕這一類的例行公事，照例貞卜，其餘過於迷信的，一律不去貞卜了。所以祖甲時卜辭較少，我恭維祖甲是革新派的領袖，就是爲此。

以上學歷史博物館所存甲骨文字的重要，介紹兩版，暫止於此。以後就已著錄及未著錄者，重要之材料尚多，且待有機會時再發表出來。

民國四十八年十一月七日寫訖于平廬

（原載《教育與文化》第二百二十三、二百二十四期，一九五九年）

方地山所藏之一版卜辭

去年三月十一日，上海吳淞中國公學一個學生陳杉蕤君寫信給我，問我一件事。原來他想把他父親方地山所藏甲骨文字，送給研究所藏。他出版。書時看他附來的一張樣本，不甚高明，一時也沒有答覆他。上海戰起，停手連回信也不暇給他。

陳君於甲骨文字，雖力尚差，但是對於研究的興趣是很濃厚的。現在要到高手先生的學問天津，謁見了方地山先生，蔭見先生所藏的九十餘版的甲骨。九十餘版的來源，據說是和羅振玉合資購買

拓來的並且羅氏曾有約，說羅印後印後編，六印後編。後來方先生辜于人事和愛好點的不同，（喜收藏古錢）終究沒有刊出。杉蕤細心的研究，費了兩天的工夫，摹寫了八十多片。其中最大的比著錄者還大，小的也比習見的大些。文字呢，單簡一片而講，已費了兩月的討論——我和張政烺先生——最初張先生的意思是「于立王其有大事」于文武帝

口王□十又二」。把「文武」帝稱作文武王。雲征是陳邦福的後來說很想把甲骨文字年限降落若干年。我呢，係着「帝」字在那時我作上帝解的緣故，認定武丁。同時收集甲骨文中的「帝」字到二百多條結果是多作上帝解。最普通的是「帝令雨」「帝令多雨」等文。並且把王襄徵文的「文武帝釋文武丁的證據。後來漸次由字形的擴到「帝」德識是「帝」了。帝辛受。明顯的是表明兩個人的動作。王而受則帝的人王知。結果我們佔了勝利，假定這樣的釋文。

陳君信中這一段文字的討論，正見他研究深思的精神但是最

吉林大学所藏甲骨选释

姚 孝 遂

吉林大学历史系文物陈列室曾于1961年收購到一批甲骨，共一百余片，乃罗振玉旧藏。其中有一部分是未曾著录过的；也有一部分虽被著录，但或者是仅著录其正面的刻辭，而遺漏了其背面；或者是拓本經过割截，以致文辭不全。在这些甲骨刻辭中，有的可据以解决目前某些悬而未决的問題；有的則对于过去認为毫无問題的說解，向我們提出了一些新的疑問。現在选录其中特别重要的几片，并提出个人的初步見解，以供同志們参考。

〈一〉、在甲骨刻辭中，有一部分的字体和內容都非常特殊，其主要貞人有“子”、“我”、“余”、“𠂤”、“歸”等等。关于这一类刻辭的断代問題，大家意見分歧，爭論很大，一直悬而未决。或以为“当属于武丁以前，或为盤庚、小辛、小乙之物。”[①]或以为是属于帝乙时代[②]，或以之列于武丁后期[③]，另外則有人把它属之于文武丁时代，并据以論証文武丁的所謂“复古”[④]。

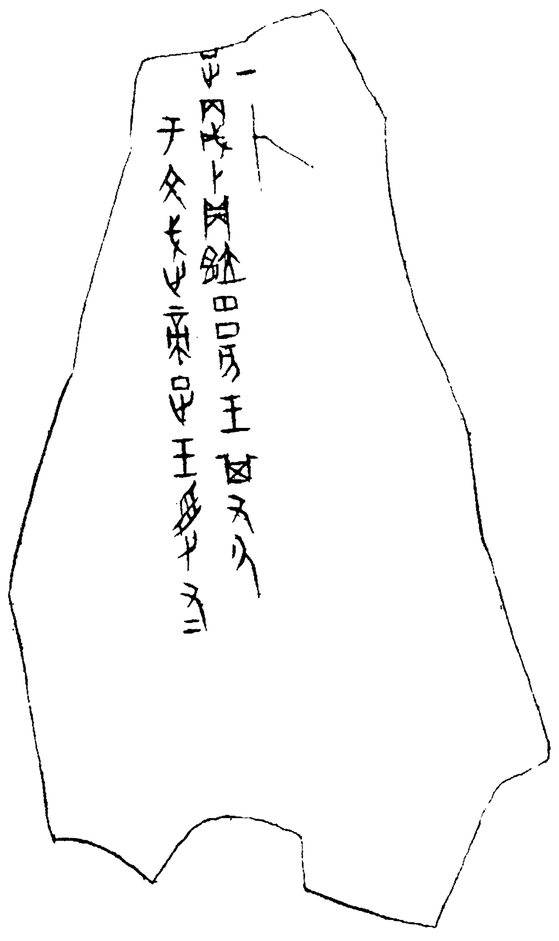
《殷墟書契前編》曾著录过这类刻辭的一片干支表（3．14．2），其拓本乃是經过剪截的。实际上骨的上端尚有一部分殘辭，有貞人“爭”的名字（見图一）。根据这片“干支表”的字体——尤其是其“子”字作“孓”、“丁”字作“○”来看，可以毫无疑問地确定它是所謂“子組”刻辭。其上端的刻辭虽已殘缺不全，但我們可以依据卜辭的通例补足为“□□卜，爭□（貞），□（旬）□（亡）𡆥”。同时，就其字体来看，也和我們所常見的貞人“爭”的字体完全相同。据此，則这类刻辭也应当肯定其为属于武丁时期，因为貞人“爭”无可怀疑地是武丁时人。

固然貞人“爭”的卜辭与属于所謂“子組”的“干支表”刻辭，不一定是同时所契刻，但我們应該注意到下列这些事实：

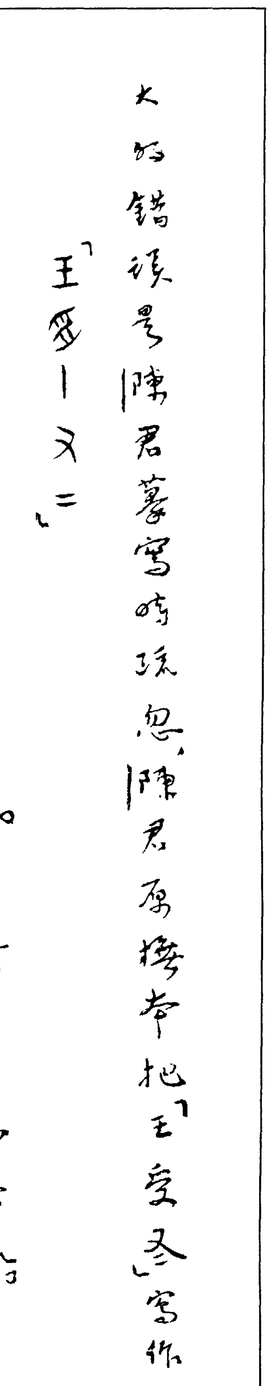
①、这类刻辭与武丁时期的刻辭曾經同坑出土；

②、这类刻辭所記載的人名与武丁时期刻辭所提到的人名有很多相同；

③、这类刻辭所占卜的內容与武丁时期所占卜的內容有很多相同；



（原載《中國文字》第九册，一九六二年九月）



---

① 胡厚宣：《战后京津新获甲骨集序要》，又参見《甲骨續存序》。

② 李学勤：《帝乙时代的非王卜辭》，見《考古学报》1958年第一期。其中有一部分刻辭将之列于文武丁时期。

③ 陈梦家：《殷墟卜辭綜述》158－166頁。

④ 董作宾：《殷墟文字乙編序》

娶妇。……巫行視人家女好者，云：是当为河伯妇。即娉取，……共粉飾之如嫁女，床席，令女居其上，浮之河中。……民人俗語曰：即不为河伯娶妇，水来漂沒，溺其人民云。”

鄴是商的故墟，为河伯娶妇的风俗可以远溯到商代。卜辭中就已有为河伯娶妇的記載：

“其寮于河牢，沈𡆥” 《上》23.4

“𡆥、珏酌河” 《鉄》127.2

“……河，女一人” 《河》607

“酌河卅牛，氏我女” 《乙》3094

“河伯”在后代不过是人格化的水神，而在商代，則是属于祖宗神，卜辭的“河”，不仅与其它各“先公”并列，享受隆重的祀典，而且直接称之为“高祖河”（《摭續》2）。

卜辭中商王为其先祖娶“冥妇”的例子尚有：

“帚（婦）于小乙三姜” 《河》303

这段刻辭是說用三个羌女陪侍死去了的祖先“小乙”。在殷墟所发掘的商代陵墓中，我們发現有殉葬的女子，这和卜辭所載可以互証。而为死人娶“冥妇”的陋习，历代均有所聞，并非罕見。

然則此片的“隹且乙取帚”、“隹大甲取帚”，即为商王的祖先“祖乙”和“太甲”娶“冥妇”，这是非常明显的。据此以推，“隹唐取妇好”就是为“太乙”即“湯”娶“妇好”为“冥妇”了。我們知道，“妇好”是武丁时期經常率兵出征的一員非常著名的女將。商王也曾为她占問生育的吉利与否。她与商王武丁的关系，或以为是武丁之妃，或以为是武丁的子妇。她先武丁而死，在武丁时期的卜辭中，有着祭祀她的記載：

“嬪妇好；弗其儐妇好” 《前》7.27.4

既然“隹唐取妇好”指的是“妇好”死后以之配于“唐”作为“冥妇”，則“妇好”为武丁之妃或其子妇的說法就难以成立了。

在古代社会，为神祖娶“冥妇”，絕大多数是以女性的俘虜或奴隶充之。但也有以亲属中之妇女充之者。如《史記·六国年表》所載：秦灵公“初以君主妻河”，《索隐》云：“取他女为君主，君主犹公主也。妻河，謂嫁之河伯。可是“唐”乃是武丁的祖先，武丁以其妃或子妇配与“唐”作为“冥妇”，則是絕对不可能的事情。而“隹唐取妇好”又无法作其它的解释，因此，“妇好”与武丁的关系就得重新加以考虑了。不仅如此，所有卜辭中的“多妇”，如“妇姘”等，其与商王的关系究竟如何，也是需要重新加以探討的。

此外，这段刻辭中的“妇好有取”較为費解，也可能是“有取妇好”的倒語。图二④、这类刻辭的文字形体与武丁时期的文字形体在某些地方有相类似之处；

根据上述种种迹象，再加上同版有貞人“爭”的名字，在沒有其它更有力的反証之前，我們只能断定这类刻辭是属于武丁时期，而否定其它的一切說法。

这段“干支表”并不完整。其最后的一个干支当作“甲申”，由于“申”字沒有刻全，属于所謂“缺刻横画”之例，所以我們現在看起来就和“乙”字完全一样了。

〈二〉、如图二所示，过去未曾見之于著录：

“貞，隹且乙取帚”

“貞，帚好𠂤取不”

“貞，隹大甲取帚”

“貞，帚好𠂤取上”

“貞，隹唐取帚好”

“隹且乙”

“貞，隹大甲”

“貞，隹唐取帚好”

“隹”即“唯”；“且”即“祖”；“取”即“娶”；“帚”即“妇”；“好”实际上就是“子”字之加上“女”旁者；“𠂤”相当于現在的“有”。

《庫》1020有与此相类似的卜辭：

“隹父乙”

“貞隹且乙取帚”

“貞帚好𠂤取不”

“隹大甲取帚”

“貞帚好𠂤取上”

两者文辭基本相同，乃所謂“一事多卜”。

“取”字在甲骨刻辭中有两种不同的用法：一为“取舍”之“取”，如“取牛”就是；一則为“娶”。例如：

“乎取女于林” 《乙》3186

“允其取妾” 《乙》7161

“乎取奠女子” 《合》276

“取𠂤妾” 《甲》2287

“乎取𣪊” 《下》37.8

在古代，不仅活人娶妇，死人以至于神鬼也要娶妇。最著名的就是“河伯娶妇”。据褚补《史記·滑稽列傳》：

“魏文侯时，西門豹为鄴令。豹往到鄴，会長老問之民所疾苦。長老曰，苦为河伯

編》誤將𣪊字混入𣪘字（孙治讓曾釋𣪘为“設”）。𣪊、𣪘、𣪘都毫无疑問应当是“死”字，其本义乃指死亡而言，用作“屍”或“尸”，乃其引申义。后世文字孳化，“死亡”之“死”作“死”，“屍体”之“屍”則另作“屍”字以当之。至于“尸”字則本作“𡰥”，即“夷”之初文。

这里还牽涉到卜辞中“𣪊”字的考釋問題。丁山釋为“死”①，胡厚宣先生又进一步詳加申論②。現在卜辞既有𣪊、𣪘、𣪘等形无疑地是“死”字，同时也作“死亡”之义；而且卜辞有“𢦏𣪊”的語例，“𢦏”即今“延”字，其义为“延續”。卜辞的“𢦏雨”即連續下雨；“𢦏𤰔疾”即連續有疾。如果釋“𣪊”为“死亡”之“死”，不仅卜辞已有“死亡”之“死”的本字，而且“𢦏死”一辞也难以解釋。

此片的“子”字写法很特殊（參見图四B），也为卜辞所仅見。上象人首，所从之二点，乃象人目，当为“子”字的異体。

《五》、图五A《前》6.11.4曾加著录。其缺文可据《前》6.11.5补足为：“貞翌丁卯王其狩𢦚录𤰔？八月。”“𢦚录”二字合文，乃地名，即《拾》6.11之“𢦚鹿”，“录”和“鹿”都是“麓”的借字。③罗振玉以为是“樊”字，即《周礼·弊人》之“弊”④，在形体上是說不通的。

图五C乃背文，罗氏遺漏未录。实际上背文很重要，是一段驗辞，指明在狩獵中所擒获的乃是虎。文当自左向右讀，即“獸（狩），允𤰔虎”。“𤰔”即“禽”字，意为擒获。

卜辞中有不少关于獵虎的記載。而其它关于田獵的記載，更是习見繁出，难以胜数。有人認为“卜辞中所有关于田獵的記載，都是时王为逸乐而行𢦏游田，并无关乎生产。”⑤这种說法是不够恰当的。既然野兽的“肉可以食，皮毛可以禦寒，骨和角可制为器物。利用这些部分，正是田獵的目的之一”⑥，那么，就不能說所有的田獵都与生产完全无关。就以獵虎而論，《乙》2844有辞云：“貞我馬𤰔虎，隹𢀛”，既然有野虎为患于馬群，前往獵虎，就未尝沒有消灭虎患，保护畜牧生产的作用。当然，商王的田獵活动，通常是帶有遊乐性質的，但是，如果說它与生产完全无关，那就不符合于事实了。

《六》、“多子逐𢀛隻（获）”的“𢀛”字，“似鹿而无角”（見图六，未曾著录），罗振玉釋“麋”①，唐蘭先生以为“麋”之本字，即今之所謂“獐”②，并辨明釋为“麚”之不可据。唐蘭先生的說法是对的。卜辞中的“多子”經常从事田獵活动，如：

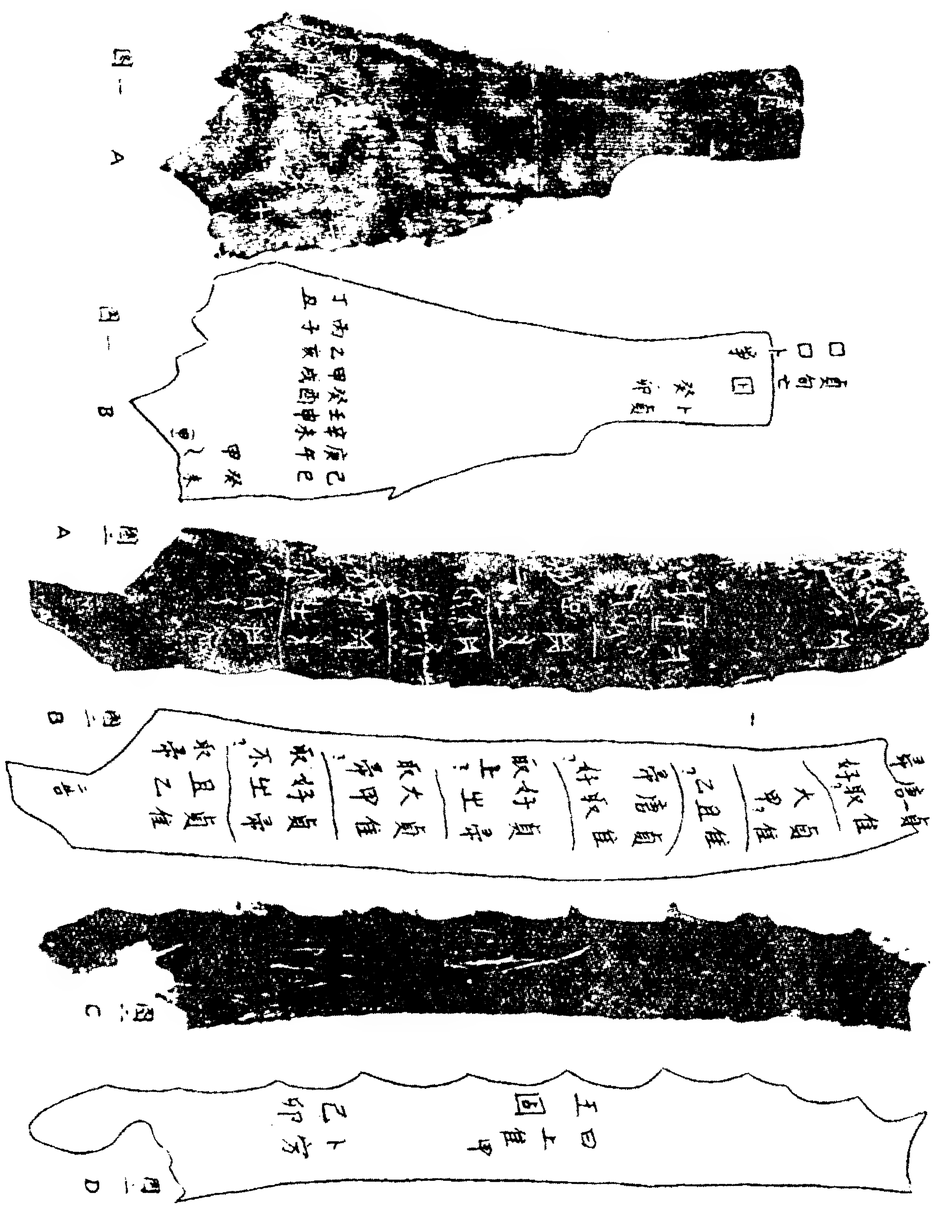
“多子隻鹿”	《乙》4501，3441
“多子逐鹿”	《乙》3083

“多子”应当就是經常参加战爭的“多子族”，“多子族”乃是“多子”的集合称謂。

《七》、图七的卜辞也未曾著录过，乃是有关祭祀先祖的卜辞。其中值得注意的是关于“成”的部分。卜辞称“湯”为“唐”、为“大乙”、为“成”。而“成”字过去多誤釋为“咸”，以为即“咸戊”，亦即“巫咸”。卜辞的“咸”字从“口”，而“成”字則从“丁”，两者有着严格的区别③，不能加以混淆。

右上側的刻辞当念作“自九示”，“于大甲”，不能自上而下連讀作“于大甲自九示”。“自九示”乃指自“大乙”至“且丁”之九世直系先祖而言。《粹》149有辞云：“九示自大乙至丁且”，郭沫若先生的考釋說：“自大乙起，以父子相承之直系計之，为大丁、大甲、大庚、大戊、中丁、祖乙、祖辛、祖丁，共九示。知丁且即且丁矣。”《佚》986的“𢀛自上甲、大乙、大丁、大甲、大庚、大戊、中丁、且乙、且辛、且丁十示”（《合》29同），“上甲”乃所謂“元示”，《前》3.22.6有“上甲元示”的記載。“元示”加上“九示”即为十示。这一些都是关于“九示”說解的最好証明。

总起来說，这里所选录的甲骨片虽然为数不多，但却非常重要。根据它可以解决某些旧有的問題，也向我們提出了一些新的疑問。尤其是如图一所示，它解决了一直認为是悬案的、具有相当数量的甲骨刻辞的断代問題，同时也提醒了我們：甲骨刻辞的著录是一項非常細致复杂的工作，任何草率从事，都将造成不可估量的損失。而出土甲骨之流散亡佚者亦复不少，广事搜求，使这些甲骨能够重見天日，也是一項艰巨的任务。

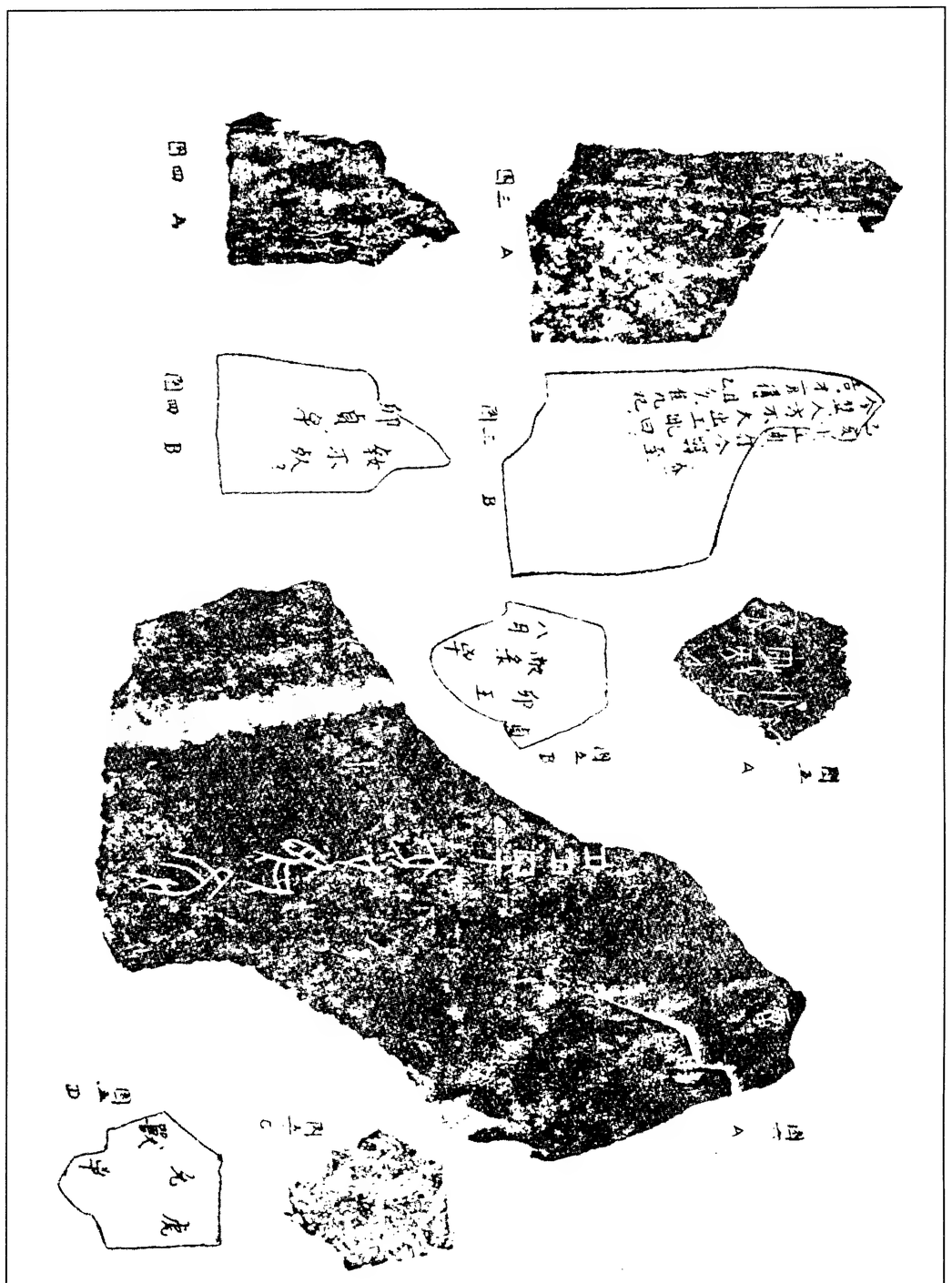


图一

① 《釋𢀛》，見前中央研究院历史語言研究所《集刊》，1930，1—2。
② 《商史論丛·釋𢀛》。
③ 《殷墟書契前編集釋》卷六，11頁。
④ 《增訂殷墟書契考釋》卷中，76頁。
⑤ 《殷墟卜辞綜述》552頁。
⑥ 《殷墟卜辞綜述》552頁。

① 关于这一点，目前尚有爭論，也有人認为当是帝乙时事。作者的看法是当属于帝辛时代，但在这里不便詳加申論。
② 見《說文古文考》，轉引自《殷墟書契前編集釋》卷五第45頁。

① 《增訂殷墟書契考釋》卷中29頁。
② 《获白兕考》，見燕京大学《史学年报》第四期。
③ 《殷墟卜辞綜述》第411頁。



美國納爾森藝術館藏甲骨卜辭考釋

嚴一萍

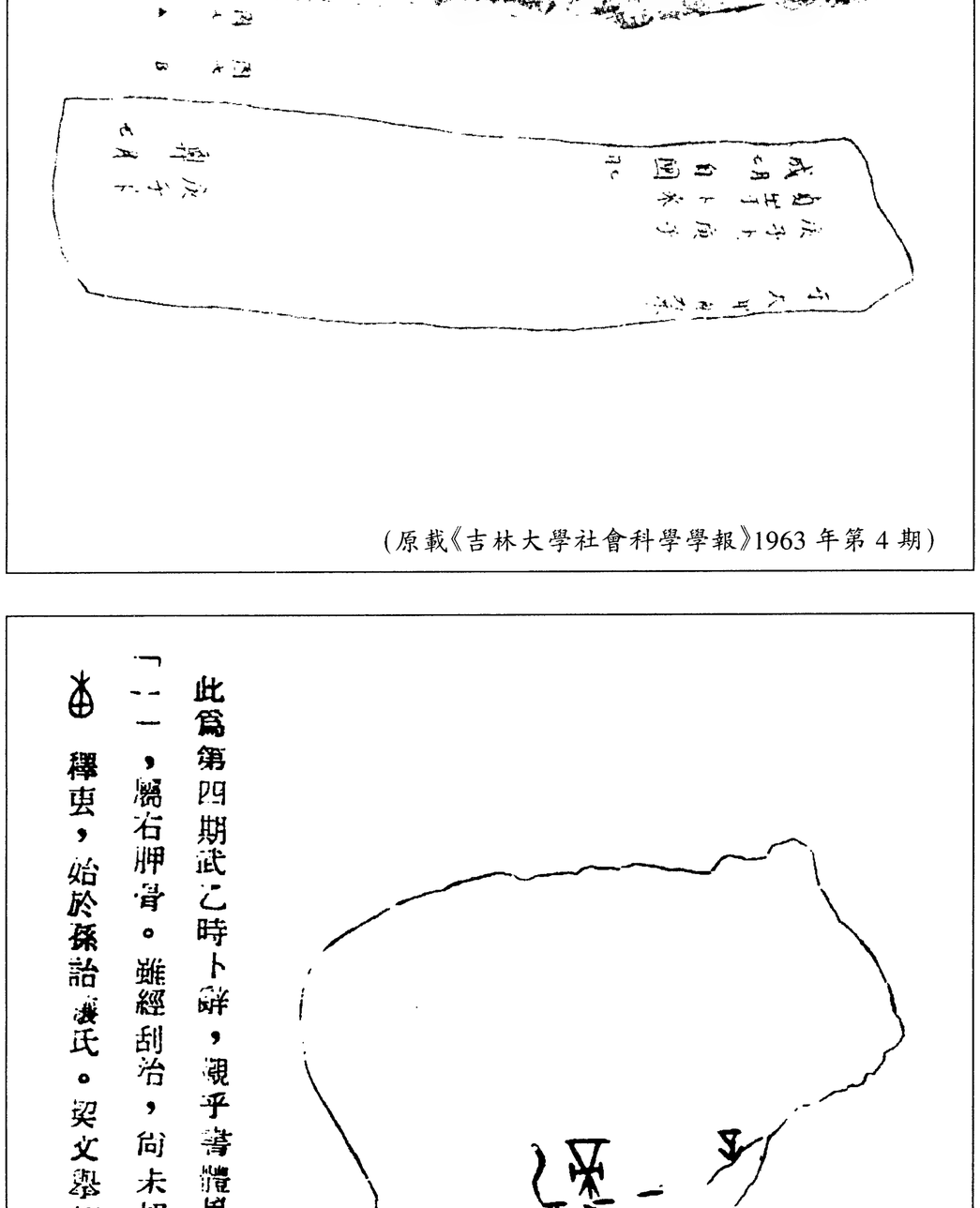
一九六六年八月杪，日本梅原末治先生將有美國之行，行前承告坎恩薩斯城納爾森藝術館（ Nelson Gallery of Art ）有未著錄之甲骨收藏。九月先生至美遊歷一月，曾參觀該館新收資料，並請館長席克門先生（ Mr. Laurence Sickman ）代將甲骨攝影。計照片十二幀，於十月十二日寄達日本，先生即轉寄一葮，囑加研究，並許以自由發表。長者獎掖之忱，至深感激！爰加考釋，刊諸中國文字，藉供甲骨學者之探賾。並對梅原先生與席克門先生致其謝意！

納三五・一一五・一：（註）此編號爲該館原編號碼，並即以「納」爲代字。

一、庚□　一

二、乙酉卜中帝一犬

三、辛□　一



（原載《吉林大學社會科學學報》1963 年第 4 期）



納 35.115.1

此爲第四期武乙時卜辭，觀乎書體風格可知也。係第一卜之骨版，故卜兆之序數首「一」，屬右胛骨。雖經刮治，尚未切割，故右上角猶存臼骨之原狀

釋叀，始於孫詒讓氏。契文舉例曰：



鐵 216.3

之辭，則與 字之用迥異。其爲兩字無疑也。叀字之用例，大別之有六：

一、冠於時間之上。如：

丙戌卜叀己丑囚

乙酉卜兄貞叀今夕告于南室

貞叀今來甲子奠

叀庚圍

二、冠於人名之上。如：

鐵一三八・三

鐵三三・七

鐵十三・四

佚三五二

貞叀羊出于母丙

五、冠於地名之上。如：

叀商方步立于大乙戈羌方

叀宮田眚亡

六、其他。如：

乙丑卜 貞王燕叀吉不冓雨

丙戌卜叀新豐用叀舊豐用

其 年 叀用祝叀茲祝用

吳子苾殷虛書契解詁本王靜安余永梁「叀卽專，亦卽剸，亦卽斷者，謂爲斷首。一之說，舉十證以明「叀者乃斷牲首饗懸以祭之義」，舉證雖多，尚非全部，故欲貫通無礙，於是益以三說。其一、本王襄之說訓繫，卽周殊嫌牽強。葉洪渙以爲一義不足以概全體，於禮展牲繫牢之禮。其二、爲祭名，或用爲專命義。其三、則依孫詒讓之說釋摶（見前編集釋卷一・頁四十五）。雖葉氏自詡「持解各辭或較順」，然如「叀土方征」之訓摶，「叀 單往追羊」之訓專等等，皆難順適。至唐立厂以叀爲語詞，乃眞能暢通全部卜辭矣。天

鐵二一六・三

丁丑卜出兄丁羊叀今日用　五月

叀般乎田于幷　鐵五九・二　佚九五同

貞叀 告命　鐵六八・一

貞叀王征 方　鐵一一八・二

辛巳卜殼貞王叀 侯伐 方受出又　佚二三

癸酉卜叀陟敉　佚二七

三、冠於祭名之上。如：

叀歲　粹三四二

貞叀叙祝　商六四二（註：此條據吳氏解詁引未見原片。）

舉父己父庚叀御往　粹三一五

（王戌）卜殼貞乎子 出于 叀犬出羊　佚一四

四、冠於牲名之上。如：

丙辰卜自叀二牛于　佚九

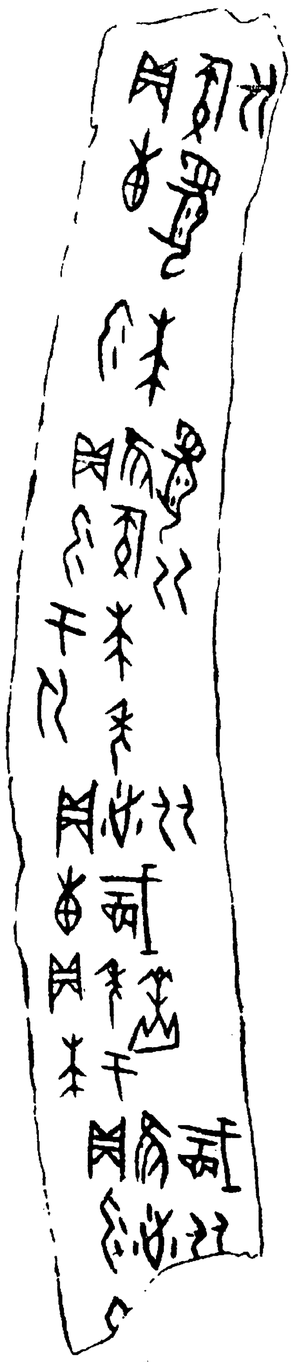
丙辰卜自 叀羊　佚九

由或叀之得爲語詞者，旨古讀當如惠，故金文多以叀爲惠。而惠從叀聲，惠字古用爲語辭，左傳襄二十六年『寺人惠牆伊戾』，服注『惠伊皆發聲』，其義當與惟字同。書洛誥云『予不惟若茲多誥』，多方『予不惟多誥』，君奭云『予不惠若茲多誥』，句例全同，不惠卽不惟也。僞孔傳訓爲不順，江聲讀爲不慧，俱失之。今人楊筠如尚書覈詁謂惠疑當作惟，又引左傳服注謂『古書惟與伊同用爲發聲，不見惠字，則惠亦惟之假也。』（覈詁九六）。洛誥曰：『惠篤敍無有遘自疾。』楊氏亦云惠與惟聲近相通，而謂左傳之惠亦當爲惟。（覈詁八五）按楊氏讀惠爲惟甚是。其謂惠爲惟之假則誤，語詞豈有正字，作惠作惟同是假借，孰有更假惠爲惟哉。余謂堯典『亮采惠疇』，猶云亮采惟疇。咎繇謨『朕言惠可底行』，猶云朕言惟可底行。多方云『爾曷不惠王熙天之命』，王疑借爲徃，猶云爾曷不惟徃熙天之命。文侯之命云『惠康小民無荒寧』，荒讀爲妄，猶云惟康小民無妄寧。此諸惠字，前人訓爲順若仁愛者均誤。然則惠之用爲語詞者甚多，不僅楊所舉二處也。知叀與惠同讀若惟，則見於千百卜辭中之由若叀字罔不迎刃

貞勿隹㞢虎从

勿求

貞由侯虎从



佚375

辭係對貞，一者用隹，一者用由，同爲語詞。其爲同音同義之字，無可置疑也。

叀爲紡專之象形，紡專下垂，故得引申而爲懸。漢書遊俠列傳陳遵傳引楊雄酒箴：「一旦叀礙。」顏注：「叀，縣也。」是其證。專者會意，以手運「叀」，卽使紡專旋轉，故引申爲圜轉之義。史記賈生傳「大專槃物兮」，漢書作「大鈞」。史記鄒陽傳集解引漢書音義曰：「陶家名模下圓轉者爲鈞。言其能制器大小，以比之於天。」朱錦綬曰：「案專之與鈞，聲形各別。漢書作鈞，此作專者，漢書五行志注：『專有員義』。故大鈞可作大專，猶言大圜耳」（讀史記漢書日記）。陶者運鈞與紡專之旋轉相類，是其明證也。徐灝以「㞢」爲專之古文象形」（段注箋），蓋不知甲骨叀之外別有㞢字也。

㞢　唐立厂曰：「舊不識，余以詛楚文巫咸字定爲巫。（詳古文字學導論）然則羅振玉取㞢之殘文作㞢者，釋爲巫，其誤自易見也。（一萍案：後下第四葉、鐵一三・一、及佚六三六同，皆是㞢之殘去上部者。）彼爲㞢字，當是弄之古文。」（天壤閣甲骨文存考釋）古文字學導論曰：「屮字在甲骨文和銅器裡常見，向來沒有人認得。（有人釋做『癸』非是。）假如我們去讀詛楚文就可以知道是『巫咸』的『巫』字。說文作㞢，反不如隸書比較相近（屮誤爲丄）。金文有笁字，以前也不認識，由此就可知道是笁卉字了（史懋壺『親命史懋路笁』昔人或釋做笨字非是。）」

案釋巫可从。卜辭之巫，非僅「巫者」一義。唐氏又曰：「巫者祓也。祓及禊同，皆巫術，故字並从巫耳。」（天壤考釋十二葉眉批）此又一義。玄應一切經音義卷三道行般若經卷十巫下曰：「事鬼神曰巫」，此爲事鬼神之事。其三也。本版「巫帝一犬」，亦見於甲編二一六版，係第一期卜辭。蓋爲「事鬼神，帝以一犬也。」蓋泛指鬼神，未有專屬，

巫始祭名耳。



甲216

孫詒讓契文舉例釋帝，羅振玉謂「卜辭中帝字亦用爲禘祭之禘」（增訂書契考釋十四頁）。王觀堂先生曰：「帝者蒂也，不者柎也。古文作，但象花萼全形，未爲審諦，故多于首加一作文諸形以別。」（觀堂集林釋天）桑帝象花蒂之說，始於鄒楚六書略，吳大澂說文古籀補繼之，至郭氏甲骨研究釋祖妣一文，更據之以發揮爲「生殖崇拜之一例」。詳審契文結體，與花蒂之形殊不類。葉洪漁曰：

卜辭帝作等形，與省同，即卜辭賚字。」象架形，象束薪形，唐書引禮盧注禘帝也。卜辭之帝亦多假作禘，禮大傳不王不禘是惟王者宜禘，禘與賚竝祭天之禮，殷人亦以祭祖禘必用賚，故帝从賚帝爲王者宜賚祭天，故帝从二爲譌變非古文上。卜辭帝字亦有到書者如後編卷上第二十六葉之，下从一或象地，仍象積薪置架形，眙敦帝作，从二从，象諦彌顯，觀此則許書从二束聲之說爲不然矣。（殷契鉤沈）。

按帝與賚柴于爲一系，柴爲束薪焚於示前，賚爲交互植薪而焚，帝者以架捧薪焚而祭天也。三者不同處，僅在積薪之方式與範圍。故辭言「帝一犬」，猶他辭之言「賚一牛」也。

（原載《中國文字》第二十二册，一九六六年十二月）

美國納爾森藝術館藏甲骨卜辭考釋（續）

納三五・一一五・二：



一、丙寅卜旦丁歲其𠂤

二、三卣

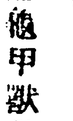
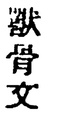
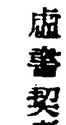
此是第三期黃辛康丁時卜辭，旦丁爲武丁。按照文例，其全辭當如庫一二三〇之形式：

壬申卜逐貞示壬歲其𠂤于口癸

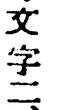
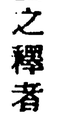
嚴一萍

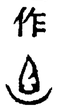
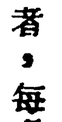
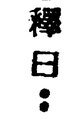
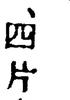
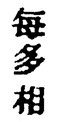
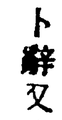
納35.115.2

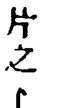
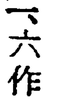
知本辭所闕者爲貞與貞人之名及𠂤于某祖耳。

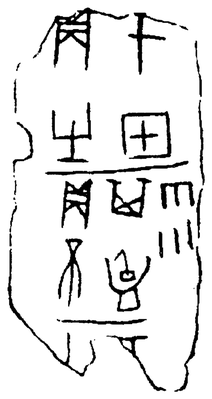
 之釋卣，始於王國維先生，戩二五・九片考釋卣卜辭作  。案盂鼎卣字作  ，他器或作  ，則知从  作者，乃从  （即皿字）之省。說文以爲从乃，失之矣。

其後羅振玉作殷虛書契考釋曰：

古吉金文作  作  ，卜辭又省  。其文曰鬯六卣，故知爲卣矣。（殷考四十二頁）

 釋卣至碻。然後之釋者，每多相混。孫海波甲骨文編卣下共輯十二字，其所引前五、一一、一作  ，六、一五、五作  ，八、一二、六作  ，後下一七、一六作  ，皆非卣字。又引林泰輔龜甲獸骨文字二、一一、四片之  釋卣，而遺第三片之  ，其實一字，而與  之形體有異。孫詒讓作契文舉例時，以鐵雲藏龜百九十三・四之  與六十六・一之爲一字，雖其用相同，而其形體實異。孫氏論之曰：

又有兩盉字云：「貝  卣」（六十六之一）「今月不  卣雨」（百九十三之四）兩形一从  ，一从  ，方圍微異，實一字也。（舉例上二十三葉）



林 2.11.3



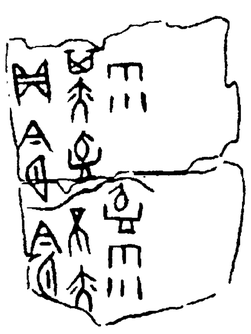
林 2.11.4

唐蘭从之，天壤閣文存考釋曰：

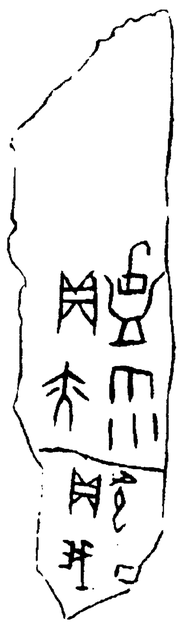
𠂤字卜辭多作𠂤，前人未識，蓋字形變譌也。

又曰：

卣並段爲脩。（周禮鬯人「廟用脩」，脩卽卣也。）脩長也、久也，蓋謂雨之



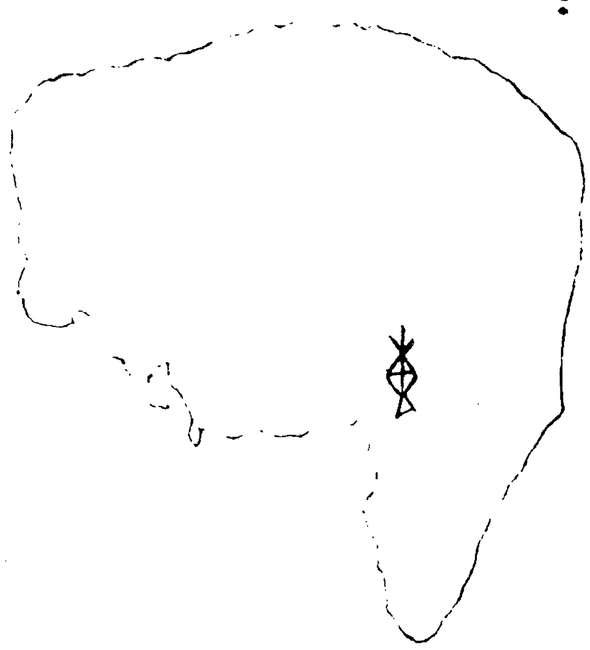
鐵 193.4



鐵 66.1

綿長者。

今按凡與𠂤字雨字相連者多作𠂤，鐵一九三・四者殊爲例外，則𠂤之作𠂤，或爲偶然之疏忽耳。兩字前人論述尚多，頗嫌糾纏，蕫而理之，尚待深論。此不贅。



納 35.115.3

叀

按書體，此版當亦第四期物。原骨尚有文字，惟以骨紋錯雜，遇難辨析，僅有墨拓，或可辨認。且待異日矣。

納三五・一一五・四：



納 35.115.4

一、翌日戊不雨

二、其雨

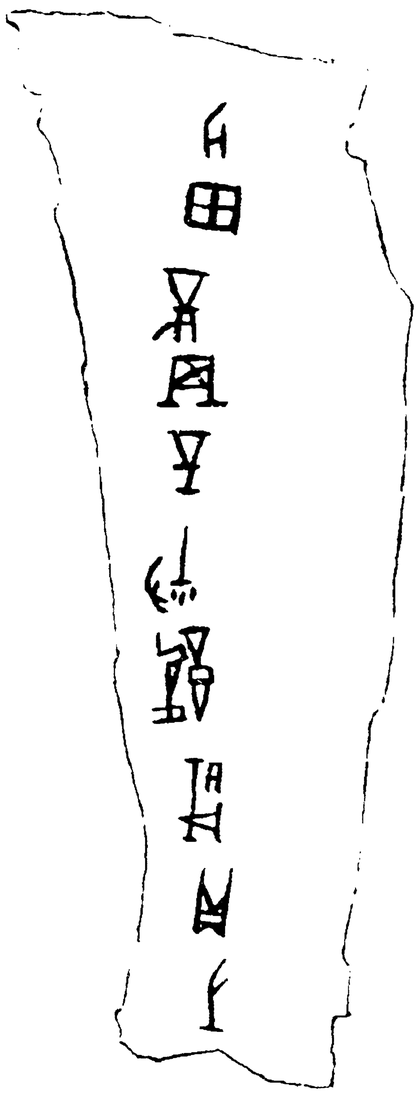
三、貞王其田眉亡才（災）

此爲第三期田獵卜辭。𣏌字，通常多作𣏌，而下有日字：「𣏌日無災」乃三期田獵卜辭之成語也。楊樹達曰：「𣏌讀爲瀰，猶言終日也。」（卜辭求義）

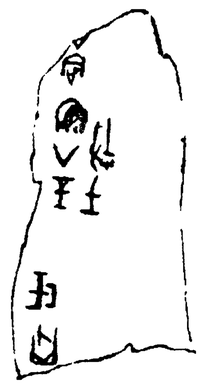
按𣏌與瀰迷彌敉，古並相通。詩小雅巧言：「居河之糜。」傳云：「水草交謂之糜。」釋文：「糜，本又作𣏌。」爾雅釋水郭注引作：「居河之𣏌。」左傳二十八年傳：「余賜女孟諸之𣏌。」杜注曰：「水草之交曰𣏌。」孔疏：「李巡曰：水中有草木交會曰𣏌。古字皆得通用，故此作𣏌耳。」王筠曰：「鐘鼎文多借𣏌爲眉，則𣏌作𣏌者，猶之省形存聲也。」大載禮保傅：「衛嗣公之時，迷子暇不肩而任事。」此卽左傳之彌子瑕。周禮春官眡祲：「七曰彌。」注云：「故書彌作迷。」彌迷通用之證。春官小祝：「彌兵革。」注曰：「彌讀曰敉。」孫詒讓正義引段玉裁云：「敉彌聲類同部。」故彌與𣏌可得相通。是「𣏌日」猶言「終日」者，可信也。

（原載《中國文字》第二十三册，一九六七年三月）

圖六



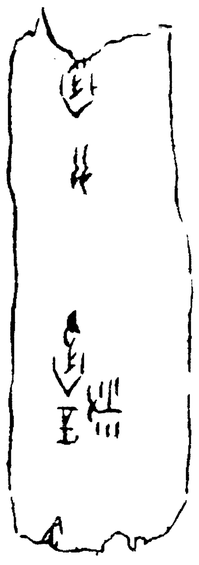
圖五



圖三



圖四



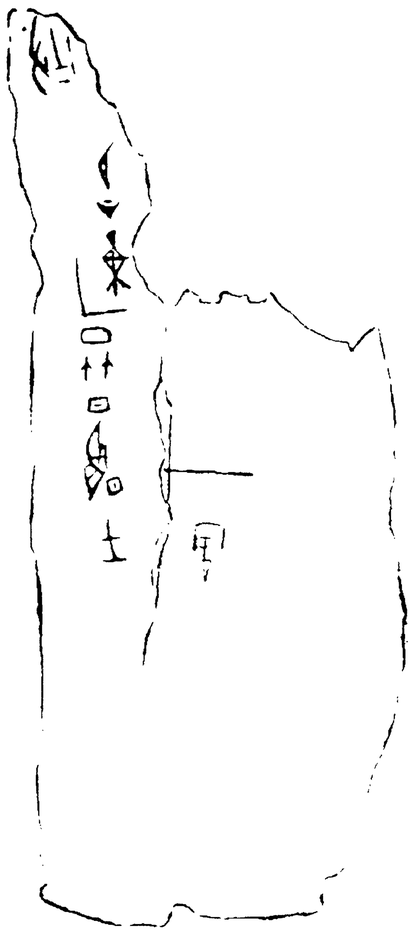
此是殆四期武乙時卜辭，目三期必，至四期止。他期則未見。卒或作㞢㞢形。殆形。與𠂤為一字。說詳拙著釋殆一頁○一〇九）。㞢無定論。㞢見於如下諸片：

甲骨文考釋・著錄片考釋・論文資料

圖一



圖二



四二六六片　乙八八一五　（圖八）

乙八八三　（圖六）

乙八八六〇　（圖七）

粹三八一　（圖三）

甲四二六　（圖四）

續二・二・四　（圖五）

粹編釋祭。續甲骨文編入示部附錄。甲編考釋於王國維釋㞢。甲骨文字集釋入祐字下。粹編考釋於

乙八八一五　（圖八）

于匕已㞢

于匕已㞢

于匕已㞢酉

口㞢貞咸既㞢王其往田亡（㞢）

王入酒各口于㞢

王宏祈

㞢㞢

口子祭酸王宏㞢

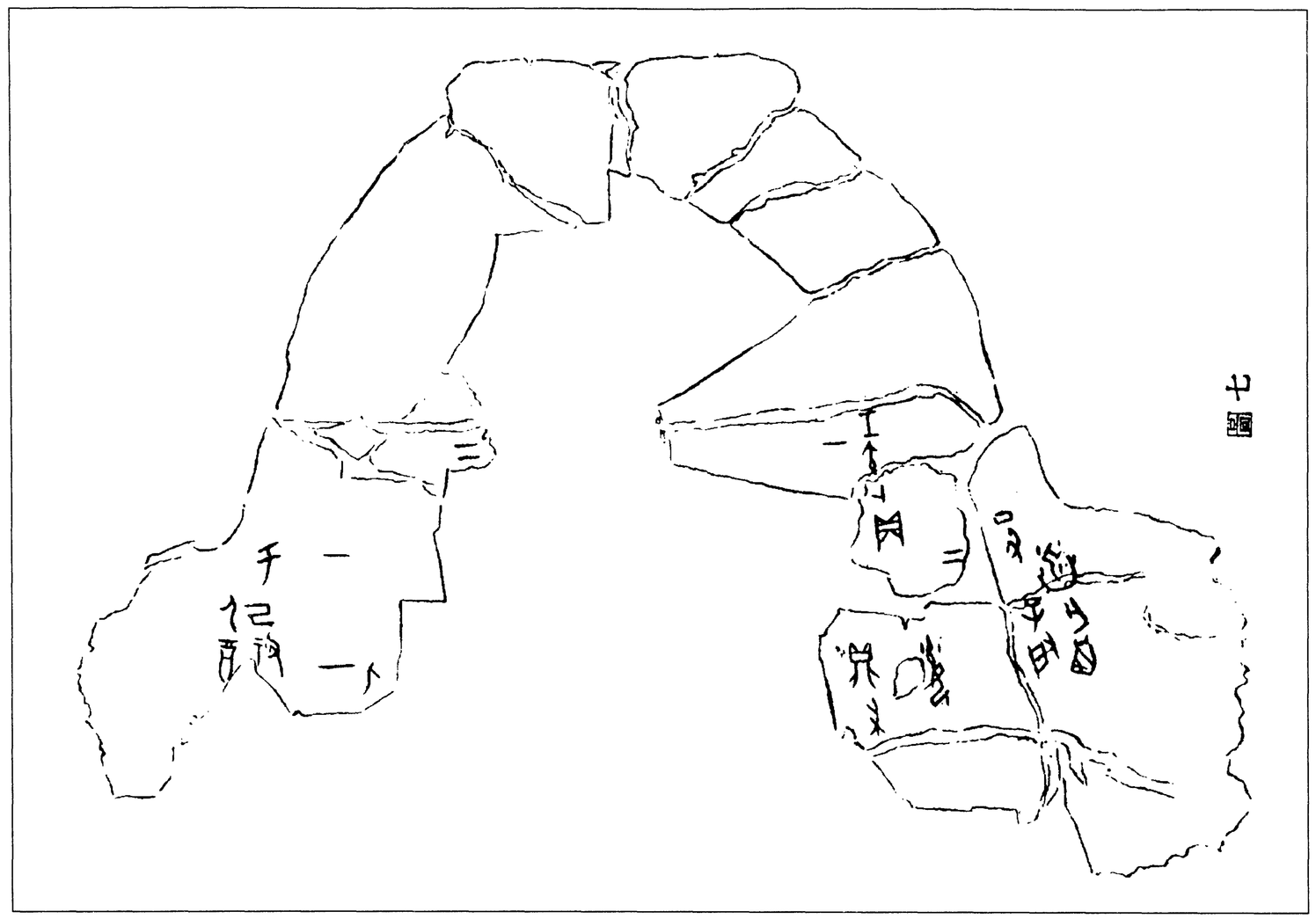
㞢令夕㞢

東令夕㞢

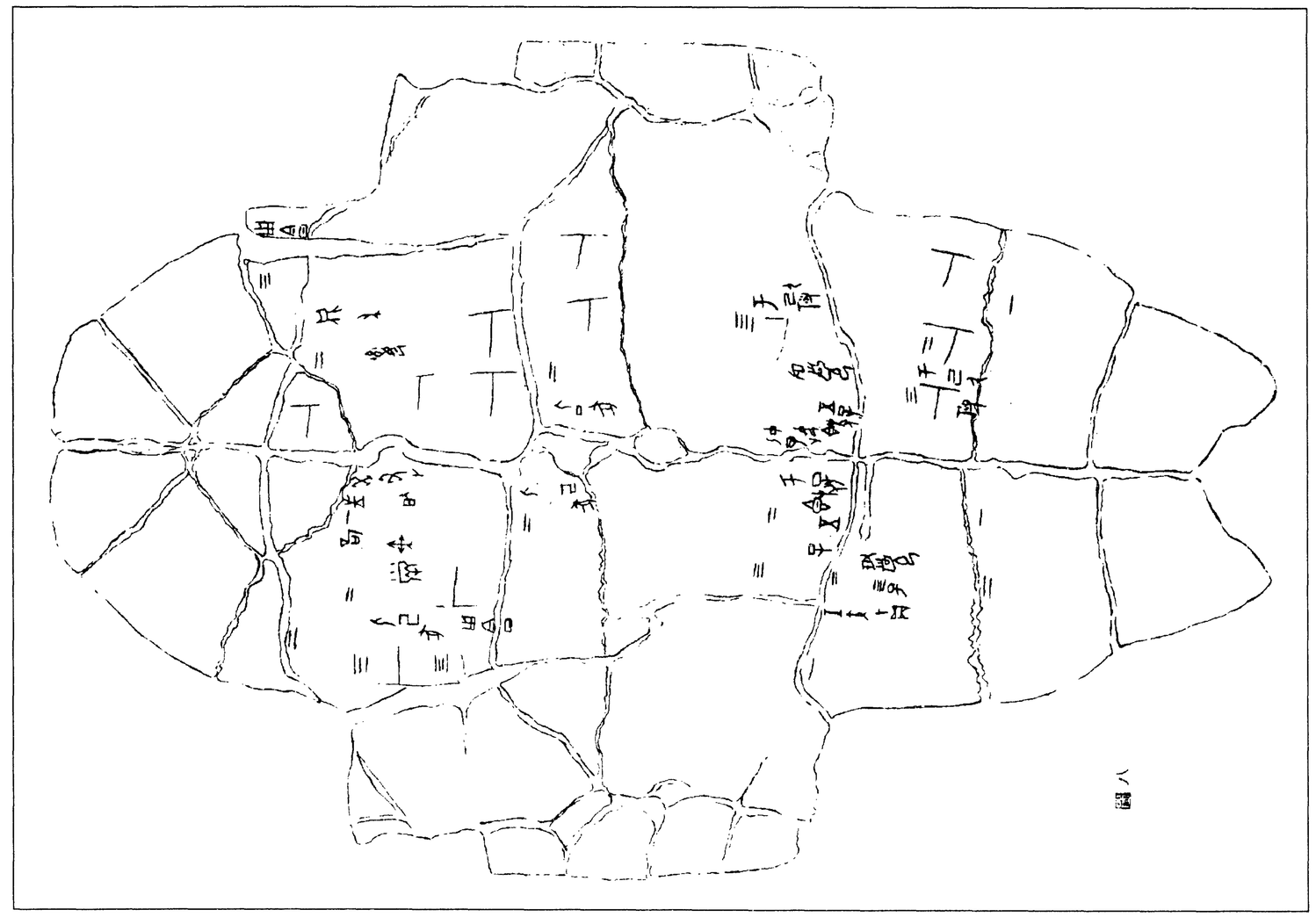
貞今日既祐日王其林鬃口雨不雨才（在）十月。

貞今日既祐日王其林鬃口雨不雨才（在）十月。

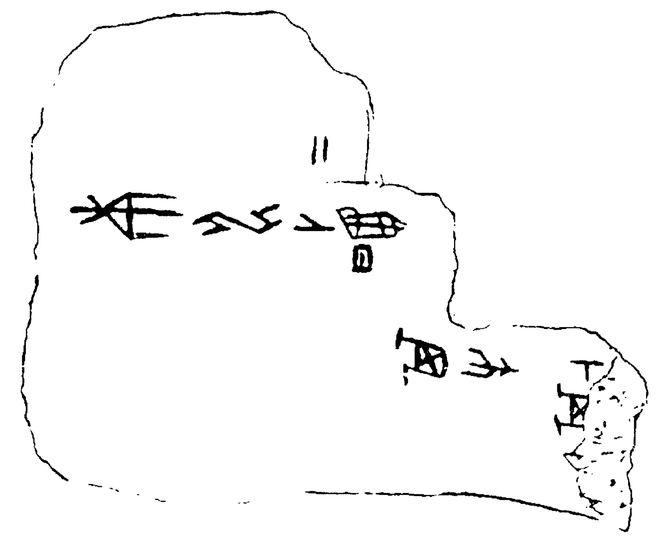
貞今日既祐日王其林鬃口雨不雨才（在）十月。



圖七



圖八



綴三五・一一五・六：

一、□□卜□其

二、其牛

三、庚申卜㱿　三

此爲第三期卜辭。



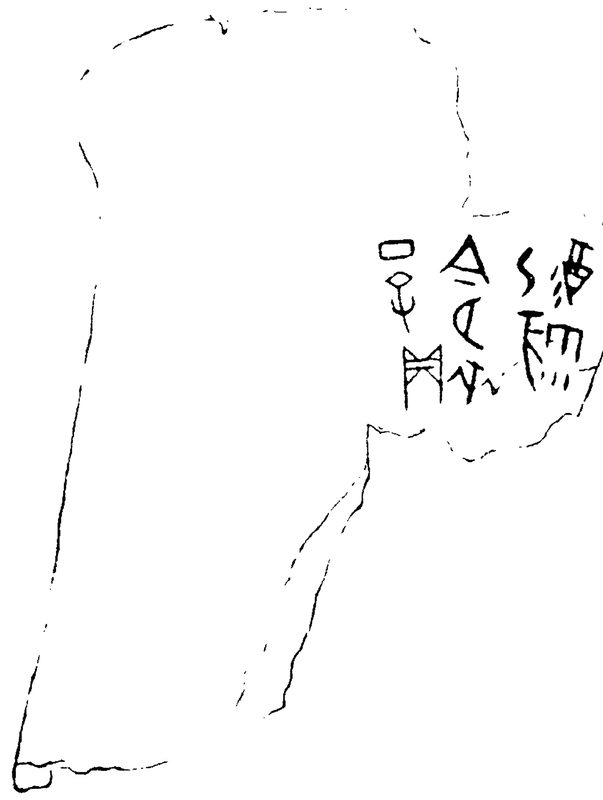
綴三五・一一五・七：

一、癸亥卜貞旬亡□

二、癸丑卜貞旬亡□　三

此爲第四期卜旬辭。

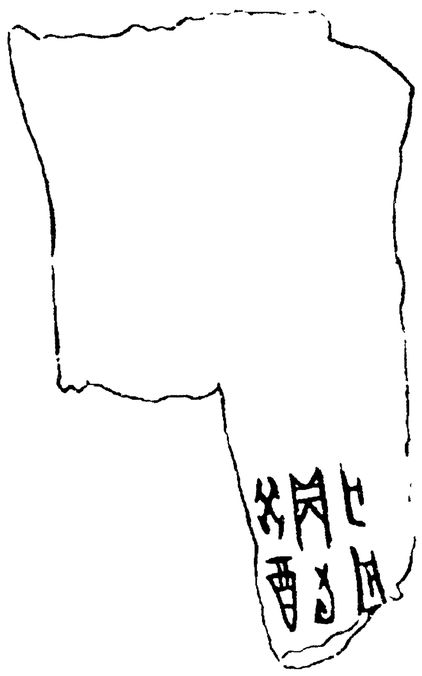
納三五・一一五・八：



一、丁巳貞今月來乙亥酒雨

此爲第三期卜辭。

納三五・一一五・九



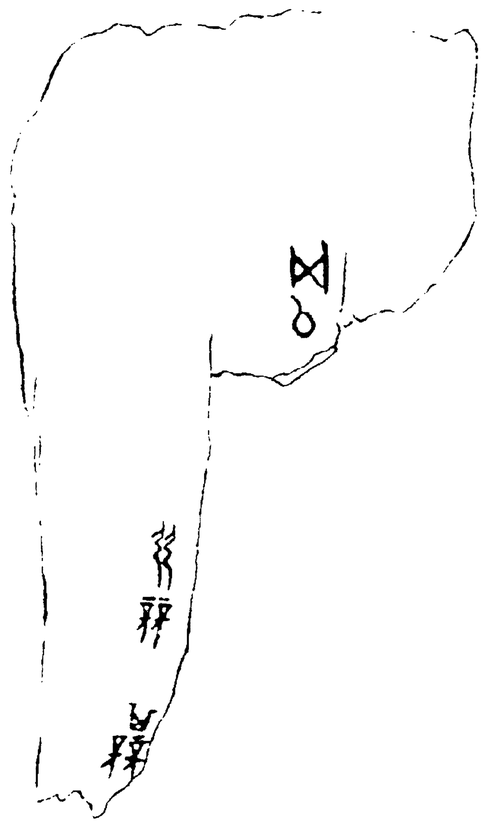
一、癸酉貞旬亡𡆥

此爲第四期卜旬辭。

（原載《中國文字》第二十四册，一九六七年六月）

美國納溺森藝術館藏甲骨卜辭考釋（續三）

納三五・一一五・十：



一、其𣪘

二、弜𣪘

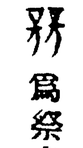
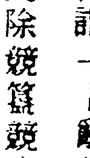
三、貞𠂤𠂤

爲第三期卜辭。

嚴一萍

貞省二橫，三期多有契刻之草率如此者。

𣪘羅振玉釋競，至確。（殷虛書契考釋）李孝定甲骨文字集釋謂「卜辭競爲人名，不詳其義。」（頁七五七）殊矢考・卜辭諸競字，皆非人名。金文除競簋競卣競作父乙卣外，宗周鐘「亡競」連文，亦非人名。

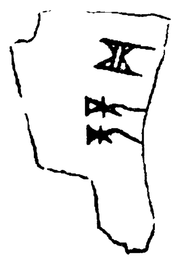
小屯甲編四一四一片考釋，以  與爲一字，是是。謂  爲祭名，則可商。

掇擒卜辭，競字凡十二見：

一、貞競弗𠂤　　殷三三・一二　續六・二五・八・同（續已殘去左上角）

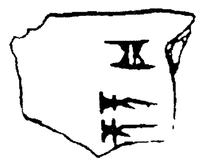
二、貞𠂤競𠂤　　掇五〇　七集S一三二同（七集失錄貞字）

三、貞𠂤𢦏𠂤

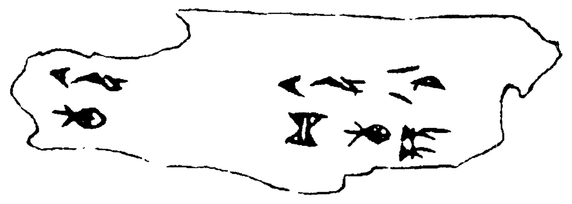


前五・四一・四

四、貞𠂤𢦏𠂤　八月



前五・四二・五

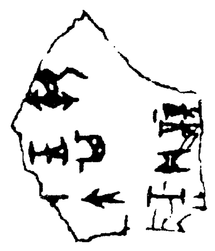


以上第一期。

五、□□卜大（貞）王其□𢦏

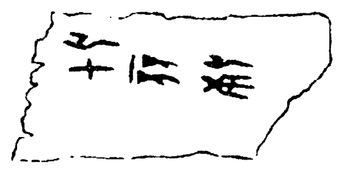
壬戌（卜□）貞（王其執）𢦏

京津四一三八



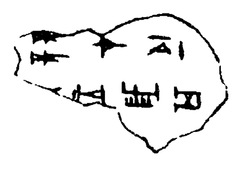
六、□七甲𢦏七庚

京津四〇八一



七、□王歲其□𢦏　在十一月

後下十・六



以上第二期。

八、弜𢦏其又𢀛

誠三四三



九、弜𢦏𢀛用

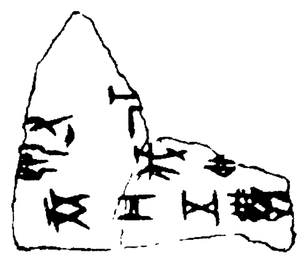
京津四一八八



十、□𢦏□宰□又

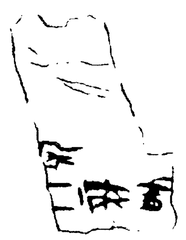
貞五牢𠂤□伐卯□我□

京津四一四九



十一、貞𢦏父己□宰

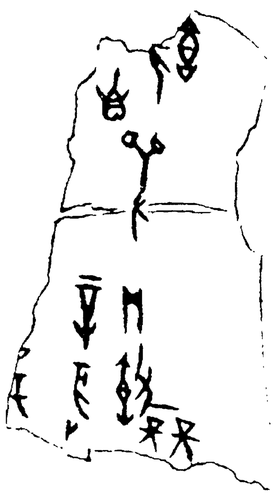
甲二二四一



十二、□𢀛□自獻

辛亥卜貞𢀛𢦏

甲二四三三



案此版上一執字作，下作，乃別構。爲（鄴三・四四・一〇）（甲一一六六）若（後下三一・八）（京Ｂ一八四九）（京Ｂ一八五〇）之省。字又見於束八六・續存七一九。　以上第三期。

說文訓競爲「彊語也，一曰逐也」。王筠句讀曰：「競祇是彊，而謂之語者，爲其从言也。經典競字皆訓彊，不訓語。」徐灝說文段注箋曰：「爾雅釋言、競，逐、彊也。周頌執競篇曰：執競武王。鄭云：競，彊也。能持彊道者，惟有武王耳。按此競之本義，彊有爭勝義，故引申之訓逐。左氏昭九年傳：諸侯逐進。杜注：逐猶競也。」離騷：「衆皆競進而貪婪兮。」注：「並也。」詩執競：「無競維烈。」傳：「無競競也。」抑：「無競維人。」箋云：「競，彊也。」馬瑞辰曰：「韓詩云執服也。說文執捕罪人也。義與服近。韓詩訓執爲服者，蓋以執競爲能執服彊禦。猶朱博傳云懃服豪強也。」競之義如此，璩之以釋卜辭，皆可順適。知「執競」武王之美譽，源自殷商。而「能持彊道者」，殷王先之矣。

別有字，見於佚存九八五。續甲骨文編收入競字，甲骨文字集釋因之。商氏考釋曰：「爲地名」，當非一字。



（原載《中國文字》第二十六册，一九六七年九月）

美國納爾森藝術館藏甲骨卜辭考釋（續四）

嚴一萍

納三五・一一五・一一

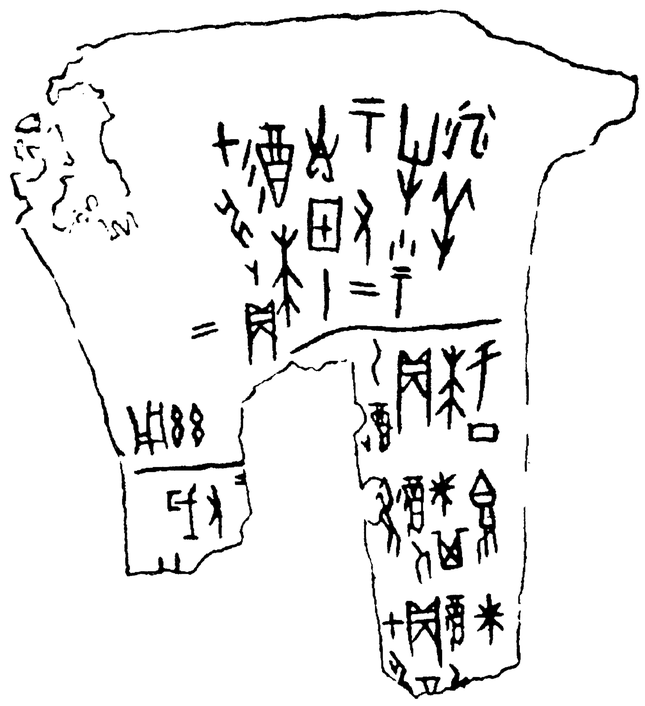


納 35.115.11

一、甲申卜貞乙酒𢀛自囲十示又二牛小示羌。

二、乙酉（卜）貞𢀛于丁。

此爲武乙時牛胛骨卜辭。甲骨續存一七八五片與此爲同文異版。所存文字較多・・



續存 1785

一、甲申（卜）貞（乙酉）酒河賁。

二、弜酒河賁其  。

三、甲申卜貞（乙）酒𢍏自囲十示又二牛小示  羊　二

四、乙酉卜貞𢍏于丁。

五、茲用。

六、𠂤又歲𠂤。

上甲十示又二爲大宗，係指先公近祖自上甲至示癸六示，及先王前期自大乙至中丁六示之直系先祖。

（自上甲六示）

上甲一匚乙一匚丙一匚丁一示壬一示癸　（先公近祖）

「大乙一大丁一大甲一大庚一大戊一中丁　（先王前期）

（自大乙六示）」

小示則指旁系先王，如外丙、仲壬、沃丁、小甲、雍己、外壬、戔甲等；此處所稱小示，是否包括至㞢辛爲止，則不可知。

 字，商承祚待問編謂：「此乃祭名，又疑即祭字之省。」吳其昌殷虛書契解詁七續三二五頁第二〇一條（前一・三〇・四）解詁曰：

義，未詳。但亦間可從其餘卜辭中相推見其辜較。他辭有曰：『丙寅卜，宂貞：羊，來甲戌，用。』（前六・六七・四）又云：『（甲）戌卜貞，禽見百羊，用，自上示……』（續前七・三二・四。又後二・三九・九，亦見此字作，但前後文漸就漫滅，無可逭讀。）此外又見有：『……大乙宗……』（佚二一八）之殘語，及此片『用』之成語，衡以高鄭王氏經傳釋詞「經文牲以祭饗之專名，今卜辭疊見『用』之成語，及此片『出』之連文。按「用」爲刑平列上下二字皆同義」之古語言定律，則「」之與「用」，義殆不異。故彼文『用』，恆得爲牲祭之習詞，而本文『出』，宜即爲「用之」之異撰矣。

案于省吾引吳氏此條誤註爲「七續四八五」，諸家轉引，承襲原書，遂多沿誤。商吳二氏說，于氏並以爲非，其殷契駢枝續編釋曰：

字从數點，象血滴形。當即說文盥之初文，盥古今字，乃降門夾室皆用雞，其衅皆於屋下割雞，門當門，夾室中室，然則是磯謂羊血也。山海經東山經：祠毛用一大，祈神用魚。中山經：刲一牝羊獻血注，以血祭也，刲猶刦也。按易歸妹上六，士刦羊無血，與郭注可互證。至士師鄭注毛牲羽牲之分，不可據，辨見孫氏周禮正義。黃以周禮書通故云：刲字从刀，義取割牲。說文訓斷，廣雅訓刺，山海經郭注訓刦，皆其證。衅字从血，義取涂釁。殺梁叩鼻衅社，范注云：衅釁也，取鼻血以釁祭社器。山海經字又作眸，郭注云，眸音餌，以血涂祭，皆其證。刲衅者，割牲血以涂，乃釁禮之別名也。經傳或言刲，或言衅，或言刲衅，單文連文，義得兩通。雜記于羊言刲，魚言衅，與小子職于社稷言珥，五祀言祈，皆屬互文，非對文。按黃說是也，管子形勢，山高而不崩，則祈羊至矣，祈即刲也。由是可證卜辭之，當於說文之盥。經傳亦作幾。經傳祈者，並係音近字通。說文：血祭所薦牲血也。卜辭言，皆謂刲牲或人取血以祭也。

一卜辭言之例，前一・三十・四：「貞：出彡戠，自母辛衣。六・六七・四：「丙寅卜，貞：來甲戌，用。七・三二・四：「丙戌卜，貞：

今字，茲分陳其說於左：

一、  等均象几形，乃几之變體，其或一足高一足低者，邪視之則前足高後足低，其有橫者，象橫距之形。禮記明堂位，俎夏后氏以嶡注，謂中足爲橫距之象。金文處字从几，如宗周鐘作，弓鍚作，蚰匕作，古璽文字徵四・二，肌字數見，从几作，均其證也。

一、字當於說文之。說文：以血有所刲涂祭也，从血幾聲。按从几从幾音同字通。以聲言之，几幾並見紐三等字；以韻言之，几幾並隸脂部，如飢饑机機之類。經傳每互作，亦其證也。然則字从數點象血滴，與之从血，其義一也。从几與之从幾，其音一也。

一、字經傳亦假幾刲祈爲之，周禮犬人，凡幾珥沈辜用駹可也注。玄謂幾讀爲刲，珥當爲衅，刲衅者釁禮之事。士師，凡刲珥則奉犬牲注，珥讀爲衅，刲衅釁禮之事。用牲毛者曰刲，羽者曰衅。肆師，以歲時序其祭祀及其衈珥注，故書衈爲幾。杜子春讀幾當爲祈，珥當爲餌。玄謂祈當爲進機之機，珥當爲衅，機衅者釁禮之事。雜記曰：成廟則釁之。雍人擧羊，升屋自中，中屋南面，刲羊血流于

：舉見百牛  ，用自上示。後上二五・七：丙申貞：射雀以羌 ，用自甲。粹七九：甲辰貞：其大，王自甲，用白九。（唐釋見天壤閣考釋四六）下示。九九：乙亥貞，又升伐自甲，至父丁。二二七：其日小示。遺珠六五五：王其生，鄴初下四十，其弗三匚日，其。新八五：己亥卜，宀，用來羌。葉玉森前編集釋一零一，引容庚藏契有四辭：一、丁未貞：年，自上甲六示牛，小示羊。二、丁酉卜，口自上甲，用人。三、辛巳貞：口自上甲，賓。四、癸丑卜，自上甲，又伐。余嘗見拓本云：辛酉其若，亦伐。以上所列諸辭，或單言，或就羌與牛與羌與人爲言，以字之形音義及其辭例推之，則爲刲牲或人取血以祭，較然明矣。

綜之，契文之，即說文之，幾古今字。以六書之誼求之，字象鬲血於几上，从从几，几亦聲，从象血形，猶之从血也；从几聲，猶之从幾聲也。爲牲或人獻血之祭，周代經傳作幾刲祈者，借字也。研契者不識其字，遂致殷禮之無徵矣。

撫佚續編第二片，於字釋曰：

，商承祚氏釋祭，非。今按字當釋衋。說文云：「衋，牲血塗器祭也。」象血滴器物，器上遍塗牲血，當是衋字。經傳多假釁爲之。禮月令：「孟冬之月，命太史釁龜筴。」雜記：「成廟則釁之。」等是也。卜辭則用衋爲祭名。

案說文無衋字，甲編考釋（五九片）引作「衅」。衅亦說文所無。雷浚說文外編卷六，收此兩字曰：

衋，樂記：「車甲衋而藏之府庫。」鄭注：「衋，釁字也。」說文無衋字，依注當作釁。玉篇曰：「衋亦作釁。」

衅，雜記：「其衅皆于屋下。」鄭注：「衅謂將刲牲以釁，先滅耳旁毛薦之，周禮有刲衅。」案刲衅見秋官士師，然經文實作刲丮。鄭注：「丮讀爲衅。」凡鄭云「讀爲」，皆易其字，故注禮記竟作刲衅，而說文無衅。

撫佚以「衋」釋，義則近似，形與音則相去甚遠。楊樹達甲文說釋曰：

說文妻字重文作，許君云：「古文妻从女。，古文貴字。」甲文之與古文妻字所从字形同，然則是貴字也。卜辭云「貴羊」，而他辭言「叀羊」叀讀爲惠，惠與惟古通用。云貴羊者，貴與惠隹古音同在微部，字可通作。詩齊風敝笱云：「敝笱在梁其魚唯唯。」釋文云：「韓詩作遺遺。」是其證也。

李孝定甲骨文字集釋曰：

按契文字，僅于楊二家有釋。按之卜辭辭例以于說爲長，楊引許書妻之古文，參之于說，亦可解爲从女（幾）聲。然契文小點爲抽象符號，或爲雨點、或爲水滴、或爲酒漿、或爲沙石，其誼悉視所施而異。此字下从偏旁不一，其形已不可必其爲几，且几上薦血必將貯之以皿，不然則爲以血涂几，將爲釁几矣。几之與血義既不屬，則上从小點亦殊難必其爲血。于說於義雖較勝，然與後世之，於字形上殊難證其遞嬗之迹，似仍以存疑爲較適也。

按于氏釋，至碻。爲涂血之祭，月令章句：「涂以牲血謂之釁。」王筠說文句讀，於字注曰：

「祭也」一者，謂「」爲祭禮中之一名也。夏官小子：「祈于五祀。」注：「祈或爲刲，釁禮之事也。」然則刲即釁。

王說是也。爲祭名，禮亦即釁禮。馬夷初說文解字六書疏證：

釁謂血祭者，五篇：，以血有所刲涂祭也。經記言釁廟、釁器者，皆當作。

周禮肆師：以歲時序其祭祀及其祈珥，注：故書祈爲。犬人即作幾珥。祈音皆羣紐，釁音曉紐，同爲舌根音，故經記或借釁爲。

又於下說曰：

三篇：釁血祭也，即此字義，此即釁廟、釁鼓之釁本字。

大戴禮諸侯釁廟篇曰：

成廟釁之以羊，君元服立於寢門內南向，祝宗人宰夫雍人皆元服，宗人曰：請令以釁某廟，君曰：諾。遂入。雍人拭羊，宰夫入廟門碑南北面東上，雍人舉羊，升屋自中，中屋南面，刲羊血流於前，乃降。

此以羊牲釁廟之禮。周禮大司馬有：「釁主。」鄭注：「主謂遷廟之主及社主在軍者也。」小宗伯：「若大師則帥有司而立軍社，奉主車。」注云：「王出軍必先有事於社及遷廟，而以其主行。」

卜辭之示即主，今之所卜，乃羊牛於上甲十二示及小示，其非尋常例祭，而爲「有事」者，無疑也。

一、□羌□　　二

二、癸酉貞射鹿㠯羌用自圃

三、癸酉貞射鹿㠯羌用自圃于（甲申）

四、乙未卜其𠂤方羌一牛一　　二



納 35.115.12

此亦武乙時牛胛骨卜辭。因照相關係，其右側骨緣未能照及，故「自上甲于」之下有缺文，如墨拓必不闕。粹編八一片，係同文異版，文曰：



粹 81

一、癸（酉）貞（射）鹿（㠯羌用）自（圃）

二、癸酉貞射鹿㠯羌用自圃于甲申

足證前版「于」字之下，所缺者爲「甲申」二字，他日倘能墨拓，必可補此缺憾也。

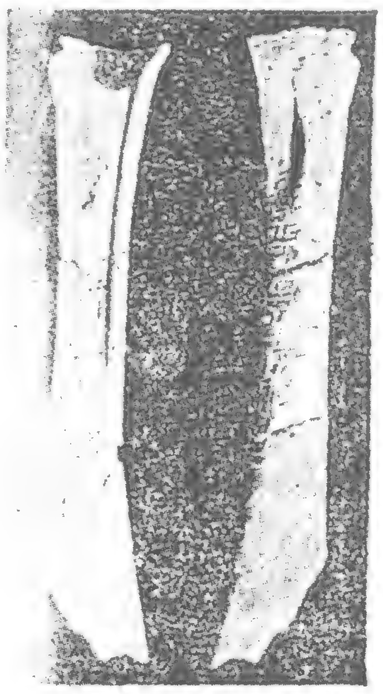
—完—

（原載《中國文字》第二十九册，一九六八年九月）

加拿大多倫多博物館所藏一片骨柶銘文的考釋

金祥恒

（圖一）←



（圖二）→



此片骨柶之形狀銘文，最先見於記載者，首推懷特（威光）先生（William Charles White）的中國古代骨文化（Bone Culture of Ancient China 1945）原物現藏於加拿大多倫多博物館。

骨柶之現長爲 220mm，上寬殘缺，中寬 23mm，下寬 40mm。骨柶之刻文分兩面，正面凸出，柄部較厚，刻一龍紋。懷特氏謂蜥蜴似的爬蟲類動物（a lizard-like sprawling animal）。龍紋兩旁各刻夔龍，左邊破碎，不易看出，右邊夔龍形狀清晰可辨。柄上端再刻兩夔鳧紋。骨柶腰部，刻一側形夔龍，中有一眼，下邊刻蟬因骨紋。其餘空白無任何雕刻。反面凹入，刻有文字，懷特先生釋爲：

辛酉日，王出獵於鷄公山之麓，大有所獲。十月大示於其地（地名爲虎形字），舉行第三年祀典，以所獲爲犧牲。

The purport of the inscription is that on the lisin yu day the king went hunting in the foothills of the Cock Mountain and was successful in the chase; and at a great announcement at (a certain place t
he name of which contains the pictograph for tiger) on the tenth month, the royal third year supplementary sacrifice was offered.

因懷特先生不嫻習我國古文字，難免有誤。凌純聲先生之匕圖與醴栖考云：「董彥堂先生譯爲『大練虎，在十月，叟王三祀，翌日。辛酉，王田于鷄条叟（獲）』」。（見中央研究院民族學研究所集刊第十二期一九六頁。）凌先生依照刻辭自右至左讀之。然按一般刻辭文例當讀爲：

辛酉，王田于鷄条，叟（獲）大雩虎，在十月，隹王三祀，翌日。

甲骨文如殷墟文字甲編三九三九片冢頭骨刻辭：

□邢㠯条，叟（獲）白冢，叡邢□，在二月，隹王十祀肜日，

甲編三九四一片鹿頭骨刻辭：

己亥，王田邢羌，□，在九月，隹王十□

金文父乙彝（三代吉金文存卷六，頁五二，第二器）：

戊辰弜師易（錫）鬯圂卣賚貝，用乍父乙寶彝，在十月，隹王廿祀，𠂤日，遘邜（于）妣戊，武乙爽，𢦏一。

骨柭刻辭如殷契佚存第四二六片：

壬午王田邜（于）麥（麥）汆，叟（獲）⿰犭⿰犭⿰犭⿰犭，宰丰兕小𥫱兄（祝）⿰犭。

第四二七片：

辛巳王劃茫⿰犭⿰犭汆，叟（獲）白豕。丁酉⿰犭。

第五一八片背：

壬午王田邜（于）麥（麥）汆，叟（獲）商戠豕，王易（錫）宰丰兕小𥫱兄（祝），在五月隹王六祀，肜日。

皆然。凌先生根據董師彥堂的口述，文中「隹王三祀」之「隹」譯爲「叟」，顯係排版之誤。其中「叟（獲）大⿰雨⿰龍虎」之「⿰雨⿰龍」字，董師彥堂譯爲「祘」，仍沿用懷特先生「大示東虎」之說。今細察原物照片，便可知示乃雨之訛誤。雨字之兩肩旁因骨有裂紋，摹本竟脫落之，遂成小篆之「示」，其實乃甲骨文之雨字，故此字非从示，當爲从雨从東之「⿰雨⿰龍」，⿰雨⿰龍雖不見於甲骨金文，然東卽束，疑是⿰雨⿰龍字。集韻⿰雨⿰龍訓小雨貌，刻辭「大⿰雨⿰龍虎」，謂細斑紋之大虎。懷特先生謂地名，顯然有誤。此骨柭刻辭，因獲犬虎而銘刻，以旌田獵之功。猶甲編三九三九、三九四一之豕頭鹿頭骨刻辭因獲豕鹿而刻，故此骨爲虎骨，亦可斷言。

王田于鷄汆之王，卽隹王三祀之王，懷特先生考證爲殷王帝辛，云：「吾人可有信心，斷定此年爲紀元前一一七二年，卽商朝最後君主帝辛（或受辛），在位之三年。文字之字體及文體均足證實是項考證。」

We may confidently accept this inscription as designating the year 1172 B.C., Which was the third year of Ti Hsin (or Shou Hsin) the last king of Shang; and the styles of script and composition both corroborate this attribution.

懷特先生僅根據文字之字體及文體考證爲帝辛時之刻辭，並無其他證據，今根據甲骨卜辭及歷史記載，作一補充說明：帝辛爲帝乙之少子，名受，一名辛，是爲帝辛，或合稱受辛，以其殘義損善，天下稱云爲紂。紂身壯力强，能手格猛獸，倒曳九牛。如史記殷本紀云：

帝乙崩，子辛立，是爲帝辛……帝紂資辨捷疾，聞見甚敏，材力過人，手格猛獸。

律書云：夏桀殷紂，手搏豺狼，足追四馬

帝王世紀云：帝紂能倒曳九牛，撫梁易柱。

六韜云：紂喜田弋走狗試馬，出入不時。（太平御覽八三）

帝王世紀云：紂六月發民獵於西山。（太平御覽八三）

今本竹書紀年云：紂十年夏六月王畋于西郊。

由此可知帝辛力大無窮，能與猛獸格鬥，且好田獵。甲骨卜辭如：

戈申卜，貞：王田雞，往來亡𢦏，王固曰，吉，茲御，獲（獲）二。（前編卷二，頁三六第七片）

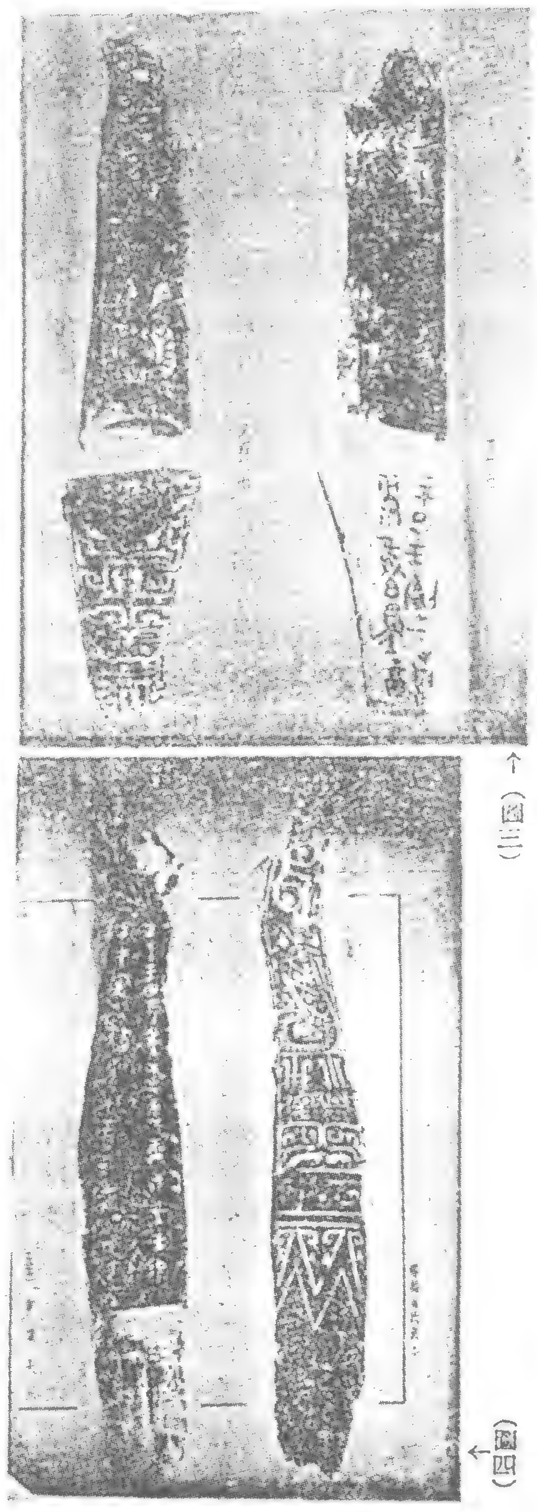
戊寅卜，貞：田鷄，往來亡𢦏，王固曰，吉，茲御，獲（獲）狼卅。（續編卷三，頁一八第三片）

貞：王田于鷄，往來亡𢦏，⿰犭弘吉。茲御，獲（獲）狼八十又六。（明義士舊藏甲骨文字七八七）

甲骨卜辭每言王田于鷄，或卽此骨柭之鷄汆（麓）之鷄，其地望當卽河南信陽縣南七十里之鷄公山，一名鷄頭山。魏晉地形志云：「樂寧有鷄頭山」，與卜辭中之⿰雨⿰龍雖相接近。由此可知，此骨柭爲殷帝辛三祀（殷人稱年曰祀）之銘文。根據董師彥堂之中國年曆總譜，殷帝辛三年十月爲己卯朔。己卯至辛酉計四十天，超過三十天，辛酉不在十月，與此銘文不合。但合於陳夢家、許進雄二先生所考𢦏祭之祀統，辛酉在帝辛三祀十月。此係曆法問題，暫且不論。懷特云：

此一抹月形片，可稱完整，來自安陽，購自倫敦盧氏公司（Messrs. C. T. Loo），於一九三五年（民國二十四年）十二月所獲得。

This spatula, which is practically complete, Came from Anyang area, and was obtained through Messrs. C. T. Loo, at London, in December, 1935.



↑（圖三）　（圖四）←

倫敦盧氏公司，卽我國骨董商盧芹齋也。

商承祚殷契佚存中所搜錄之三片骨柭，（第四二六、四二七、五一八片）銘文見前，商氏考釋第五一八片云：「此辭與四二六版同文。彼殘下截，兩行十四字，皆正面鏤華文。形似獸角，由古生物學家定爲獸肋骨。」又於第四二六片考釋云：「花紋孔中嵌松石。」其花紋柄部爲龍紋，上端再刻饕餮紋，腰部側形夔龍，中有一眼，其下爲蟬蛟；與多倫多博物館所藏之骨柭，僅有大小之分而無顯注差別，且亦嵌松石。猶如銅器鼎彝之花紋，亦有如出一手或出一范者。銘文「隹王六祀」與此片「隹王三祀」前後僅距三年。必同爲帝辛時之物。商氏殷契佚存自序云：「承祚頻歲奔走南北，搜求不遺餘力，凡估人所鬻，財力所及，必購得之。」殷契佚存出版於民國二十二年（一九三三），所載三片骨柭，何時獲得，雖未說明，由其自序推知當在民國二十二年以前，與多倫多博物館於民國二十四年（一九三五）購自盧氏公司，其時亦甚接近。故疑此四塊骨柭或爲同時出土。

骨柭銘文之𢦏日、肜日，皆殷商五種祭祀之一。董師彥堂殷曆譜云：「殷人之𢦏，每祀（年）有之。且自上甲以下，祖妣皆已入祀。……𢦏亦稱𢦏日」。（殷曆譜上編卷三，祀與年十五頁）所謂五種祭祀，卽肜、翌、祭、𠂤（亂）𢦏。肜祭在殷代當是伐鼓而祭之義。

此骨柭之銘文，其大意爲：「在帝辛三年十月辛酉這天，帝辛往鷄山山麓打獵，獲得一隻細斑紋的大虎，並舉行𢦏祭。」

聯合書院圖書館新獲東莞鄧氏舊藏甲骨簡介

李　棪

一九六九年五月間，本校理學院鄧祖玄同學奉母命，以其父爾雅先生遺存龜甲卜辭三十三片，獸骨卜辭十二片，又殘骨十一片，合計五十六片，慨贈本校；今歸圖書館收藏。館長陸華深先生屬為簡介，以表揚其事；因請馮文潭君墨拓，選其較清晰者，附圖於末。

爾雅先生為東莞容庚教授希白、容肇祖教授元胎之母舅；工詩文，有綠綺園詩集行世；尤以法書及篆刻，為世知名。據容希白金文編自序（一九三八年）云：「余十五而孤，與家弟肇新、肇祖從四舅鄧尒疋治說文。民國二年余讀書於東莞中學，四舅來寓余家，余兄弟課餘輿牖方案而坐，或習篆，或刻印，金石書籍擱置四側，心嗜樂之。」又云：「九年秋舅家火災，金石拓本書籍印譜之屬，蕩然無存。」於此知爾雅先生不惟秉賦小學，而收藏亦至富也。方今甲骨實物流傳海外者，日漸希少，此區區數十片，雖非極罕見之品，然未經著錄，頗為難得。香港公家所藏，祇香港大學馮平山博物館藏有七片，曾經著錄；及香港美術博物館藏有一片而已。

茲就文字可讀者四十五片考之，知為晚殷武丁第一期，及祖庚、祖甲第二期之物。第一期有貞人記名者：「設」二片，「出」一片；「即」二片；「尹」四片；「旅」四片；「行」一片。此外，卜祭祀者十一片；卜雨者二片；卜夕者二片；雜卜十片；存于支字者三片。

茲選錄七片示例，并略為釋說如左。

第一片

辛丑卜，設貞：勿隹王匽缶？

設，為第一期貞人名。甲骨所見貞卜人物通考所採，已逾二千條。辭中所祭先王之稱謂有父乙者，如小屯乙編二二九三片「甲辰卜，設貞：羽乙巳，虫于父乙，𡆥用」？之父乙，即武丁父小乙，故知設為武丁時人也。

匽，見鐵雲藏龜（一九九、二），王襄簠室殷契類纂釋為匽，引許慎說，飯器；故相段，史頌毀匽作匽、亦從羊。

缶就文字形體言，從匚羊聲；此從羊，羊同聲，故相段；史頌毀銘：「頌其萬年無彊日匽天子顯令」（王編十二、五七）。李孝定教授從王說，引史頌毀匽字作匽、亦從羊。以匽為動詞（甲骨文字集釋卷十二、頁三八二九）。按鐵雲藏龜（二。五、二）尚有殘辭「王匽」二字連文，胡厚宣收入戰後京津新獲甲骨集（三四四八），無解說。英國蘇格蘭皇家博物館舊藏甲骨有「癸酉卜，王匽住入于商」？之辭（見庫方二氏藏甲骨卜辭二七三）；與此片詞意，可以互參。按金文尚有匽字（匽侯盨），與史頌毀匽形相近；而蔡侯鐘「天命是匽」之匽字，其形作匽；因之，匽字從羊，與匽字從𡆥，無別也。如讀「王匽」為「王匽」，訓「王安」；詞義可通。

缶、罐定作缶，習見者為地名或氏族之名；偶作動詞，如鐵雲藏龜（一九一、四）云「帝弗缶于王」，與後編（下、二四、二）云「帝弗其福王」，詞語相類。陳夢家謂「缶即保，韓非子難勢篇：而勢位足以缶賢者也；多士：惟時上帝不保，降若茲大喪」（綜述頁五六九）。其說可從。按乙編七七五一片，「甲寅卜，設：𡆥子沐缶于冥于商酌缶。癸丑卜，爭：亞缶于大(子)。癸丑卜，設：隹囚？隹缶用」？因知禍與保，相對言之；陳夢家讀缶為保之說不誤。又陳氏引盧芹齋未刊影本云「亞缶于大子」（綜述四八四），與乙編七七五一片同文；予疑亞字或是亞形之誤釋。本片卜辭云「勿隹王匽」者，殆貞問王之是否安保耳。片之最上部殘存半字，疑其全形為丙，乃复字。又按「匽缶」連文，向所未覩；此雖殘片，亦足珍矣。

第三片

□□卜，大(貞)：□(王)祝？

歲、祭名。殷人喜卜歲之豐歉，故歲祭甚繁。祝歲習語如：「歲𡆥農」，「歲七尤」，「虫升歲」，「歲今農」，之類習見。陳夢家謂周祭即由歲祭所演變（綜述四五。）；饒選堂謂歲祭即薦歲事之正祭（頁考一。二六）。說甚允。

此片祝作𥘅，與𥘅（後上、一九、十），𥘅（前編四、一八、八）同；省文作𠂤（林泰輔（增考中、頁一五）；郭沫若云，「象跪拜形，加示即面神而有所禱告」（甲骨文字研究釋且上）；王恒餘云，「初似人跪拜形，加示即面神而拜；由簡而繁，更能表明祝義。及至周器大祝禽鼎所書祝字，已將所從之𠂤形，簡而為𠂤，孟鼎更簡而為𠂤（甲研、史語集刊三十二本）。按卜辭「兄」字作𠂤形者，不下百數十見，而作𠂤形者，不過十之一；「祝」字亦數十見，而作𥘅形者為多，作𥘅者不及十條。金文兄弟之兄字作𠂤、𠂤形，與甲骨文同；其作𠂤（辜兄癸酉）、𠂤（中其自）形者，則段為祝；作𠂤（令簋）者，則段為覡。見林泰輔（三、二五六）之片。

「祝」字上殘闕，當有「王」字。「歲由王祝」一詞，習見，如：「庚子卜，喜貞：歲由王祝？（簠室殷契徵文、頁、六）；「……卜，喜貞：歲由王祝？（戰後南北所見甲骨錄遺七二）；亦有省「歲」字者，如：「貞：由王祝？（前編四、一八、七），是也。至於同屬貞人大所卜之殘辭，有確知其與此同文者，如誠齋殷虛文字（二二四）云，「庚申卜大貞：歲(由)(王)祝？（未見戰後京津新獲甲骨集三三七五）；日本所見甲骨錄（三。）云，「……卜，大(貞)：歲由(王)祝？」；均足資參證。

第七片

即貞：𠂤歲，王入自𡆥，其往？□

卜辭之𠂤、𠂤、𠂤、𠂤等形，多為𠂤字而段為妣；與人字之形往往無別，須視上下文義而定。「𠂤歲」一詞，為祭祀成語，習見。若以貞人即之卜辭為例，如續編（一、三。、一），「丁巳卜，即貞：王室𠂤歲，亡尤？」；續存（一、一五九二）。「甲申卜，即貞：王室𠂤歲，亡尤？」；續存（一、一五九二）。「庚申卜，即貞：王室𠂤歲，亡尤？」；續存（一、一五九二）。其敘「十一月。甲申卜，即貞：𠂤歲其盜？」；戰寿堂（二。一。八），「癸巳卜，即貞：𠂤歲，王其……」；南北。南（一、一。八），「癸巳卜，即貞：𠂤歲，勿牛？」等是也。殷代貞卜人物通考（頁九九一），續續編之「王室𠂤歲」為「王賓尸歲」；蓋以同版乳卯日祭祖乙、父丁，知所賓之尸即祖乙、武丁。祇收彡形之字，引金文謂象屈膝形，意東方之人，其狀如此（頁二七四五）；郭沫若考釋粹篇一一八七片「侯告伐𠂤方」之𠂤為尸（考頁一五三），蓋以其形作屈膝狀也。今考即所卜各辭，字形均作尸或𠂤，無屈膝狀，故當釋𠂤而讀為妣；𠂤歲者，以歲祭于妣之謂。茲再以即之其他卜辭為旁證，如鐵雲藏龜零拾第五片，「庚午卜，即貞：王室𠂤庚歲眾……」；𠂤歲兩字中間夾一庚字，蓋謂王賓以歲祭于妣庚也。又如續存（二、六二七），「庚午卜，即貞：王室𠂤歲眾兄庚，亡尤？」；則謂王賓以歲祭于妣眾(先)兄庚也；妣下未刻干支名，疑是妣庚之簡稱；按此與零拾之片，為同日所卜，貞人既相同，卜事又相類，或是同版而漏刻一庚字。祖甲卜辭稱「兄庚」者，乃武丁之子祖庚；祖甲歲祭之「妣庚」，

則為羌甲之配。至於後編（上・三・五），「貞：王室且乙夾匕庚歲又于……眾兄庚歲二羊，七尤？」之「兄庚」，仍是祖庚；惟「匕庚」之上明著「且乙夾」三字，則是指祖乙之配也。

「王入」，習見，為時王在外還入國都之詞，與「王出」對言。惟「王入自某」之辭則頗費解，如京都一五八三片有殘辭「王入自𠂤」，「自」字之下一形不甚清晰，不能確知其為祭名抑地名也。甲編二零五零片，「入自丁酓」，屈考釋云，入字於此，未詳何義（頁二五七）。粹編三九三片，「其又匕庚，𢀛入自己夕酓。𢀛入自酓。𢀛入出夕自𢦏」，續編（六・一二・八），「貞：……入自上甲」，咸與上甲，為殷代先公先王之名，大抵殷王在外巡遊或征伐，當其將返國都之前，先舉行各種祭祀於其先公先王而後入也。

𢀛，亦見甲編二六零二片，屈氏云，「𢀛、祭名，卜辭習見，未能詳其音讀（考釋頁三三）。按此字散見他書者均為祭名，并無他義，屈說是也。「王入自𢀛」者，與甲骨文錄六七八片之「王入自禘」，語法正同。

「其征」之征字，於此為祭名。往者孫詒讓、羅振玉、胡光煒、葉玉森、董作賓、郭沫若、楊樹達諸公解釋「征」字，均祇就說文誼訓，互相揣摩，李氏甲骨文字集釋（頁六。七）釋征為延，讀為延，蓋取舊說延續一義。屈氏甲編考釋以為征是祭名，可云創獲。如甲編一五九九片，「其征羌甲，王受又？」，考釋謂征為祭名，蓋繼續致祭之稱（頁二一三），本片「自𢀛其征」者，殆謂舉行祭祀，自𢀛祭始，并繼續致祭以訖於征祭耳。「征」下殘存半字，未敢臆補。

第八片

癸丑卜㱿貞：旬亡（禍）？在七月。

（發）友卜出（旬）：旬亡（禍）？在七月。

出、第二期貞人名。饒氏通考引甲編二九零六片，讀為「出貞・出貞・出貞・泳」，又以出卜各辭言及字之時代應上及武丁晚期（頁八四六）；然屈氏考釋甲編二九零六片時，改讀為：「貞派、貞出、貞出、貞出、貞出、貞出」，并謂派與出同版，知為第二期貞人；且本版八辭，皆先著貞字，再著貞人之名，不更著貞卜之事，其辭視「干支卜王」者尤簡（頁三七六）。今從舊說，以出為第二期貞人。

王國維釋㠯或𠂤形為旬（觀堂集林六・釋旬），其說甚是；至於旬字何以作此形，諸說紛紜，殊難塙指。董氏謂旬字象周匝循環之形，故以十干一周為一旬，商人每旬必卜（安陽發掘報告頁四九三）。按卜辭凡言「貞：旬亡𡆥」者，不下千百見，皆以癸日卜，蓋自甲至癸為一旬，故於每旬之末預卜下旬之吉凶也。易豐卦初九，「象曰，雖旬无咎，過旬災也」，「旬亡𡆥」與「旬无咎」，語例正同。李氏集釋謂旬字在卜辭中，其義均為十日（頁二八九九）；按甲骨文錄三七四片有「貞小旬」之辭，後編（下・二一・四）亦有殘文「小旬」，殷代貞卜人物通考引魯實先云「大旬則癸日殿後，其紀旬有大小是其紀月亦有大小，殷代紀旬雖有大小，然必以甲日為旬首」（頁一。二二）。饒證以淮南子大時小時，及周髀算經大歲小歲之說，謂殷記時屢見十三月，是為有閏之大歲，亦即大時，固知殷曆時有大小，故旬亦有大小（頁一。二三）。按魯、饒二氏之說，均未能證明「小旬」在卜辭中真確之涵義，存疑可也。又按饒氏通考，祭名不收旬字，檢甲篇三四零二片，宜貞之條，有「𢀛𠂤」連文，屈釋云，不識𠂤為何字，引卜辭通纂考釋（七四七）謂當是動詞，亦操駕之意，待考（甲編考釋頁四三三）；予疑𠂤即旬字，若以下列各辭證之，旬字似是祭名。如乙編五七八三片云，「丙子卜㱿貞：旬于且乙？」；前編（一・五三・三），「丙辰卜㱿貞：旬于祊七牛十羊？九月。」；京都大學（S。。八九），「丙辰卜㱿貞：旬于（祊）十牛十羊？」，蓋謂旬祭于且乙，旬祭于祊也。亦猶他辭之「貞：𡆥于河十牛？廿牛？」（丙編四二五）；蓋謂𡆥祭于王亥一牛？」（丙編一二三）；「貞：𢀛于河十言「多父旬」，即它辭之「多介」、「多介父」，旬其名也；亦即紀年盤庚名之旬（猶徵居甲文戩三八）；楊說最不可信。按前編（一・四六・四；鐵雲一五一・二；京大七三四同）之「戊子卜㱿多父旬」，猶庫方（九三）之「貞旬多父」，蓋謂以旬祭于諸父耳；推而言之，林泰輔（一・一四・五）「辰卜王貞：旬于多子？」，與殷墟卜辭（一。一八）「壬申卜㱿旬多子？」，殆亦指旬祭也。卜辭中一字而往往有數段借誼，常令讀者迷惑，即以「旬」字言之，亦有作人名或地名用者，如金璋（六九九），「……旬曰來；甲骨續存（二・二二・一），「貞：旬來？」，庫方（三一九），「貞：旬來？」；殷墟卜辭（七一七），「𠂤西卜：其用自旬羌于……啟？」等，予疑是人名或氏名也。又如南北明義士（一九三），貞：中子孚田于旬？」；與鄴中片羽（二・三七・五），有「旬方」殘辭，則是地名也。

第廿一片

……今日……隹車克……

此殘甲片，雖零零數字，然考釋亦非易事。車字形作  ，罕見。鐵雲藏龜零拾（一二・一六）作形者，最為近似。按車有三義：㈠人名，如小屯兩編第一片，「癸丑卜，爭貞：自今至于丁巳，我弗其𢦏，于來甲子𢦏？」旬出一日，車弗𢦏。之夕岀甲子允𢦏。」；乙編三二四片，「戊辰卜，車：允𢀛貝，今生……」，是也。㈡地名，如乙編八零八一片，「于車舞？」；京津（一。。二），「車不其𢀛？」；佚存（九八。）及鐵雲藏龜（一六。三）；均有「在車」之辭，疑皆指地而言。㈢普通名詞，如菁華第一片，「𢦏馭王車」；而南北坊間（三七一）亦有「王車」一詞，是也。

克字字形，㠯㠯無別。李氏集釋（頁二三四四）謂克字或為人名，如「貞：子克征。（拾・一五・二）」或訓勝，如「貞：其克孚？（前・三・二七・二）」或訓能，如「孚歸克鄉王事。」（甲編四二七）。按李說尚未發揮詳盡。按此字在卜辭有數義：㈠人名，如京都大學二六零片，「克七𠂤？」；京津二一七二片，「卜㱿今戊至……克不其至？」是也。㈡動詞，訓為勝負之勝，如甲編二九零二片，「戊午卜：弜克貝、𠂤南手方？已未卜：隹𠂤方其克貝，弜在南？」；貝為地名，故「其克貝」，或「弜克貝」，義甚明顯。又如甲編第一二六七片，「東小臣豔日克，又𢦏𠂤？小臣豔朝覲王也。㈢祭名，前人未嘗注意。按乙編八四六四片，「丁巳卜爭貞：王其𠂤，曰：《且丁克？》」，蓋卜王其舉行出祭而零九六片，「王克于各」，若以詞義揣之，殆謂王舉行克祭於「各」之地。南北所見（輔一六），「且庚弗其克？」，殷虛文字綴合（一四二），「貞：𠂤庚弗其克？」，殷虛文字乙編（五・二八・二），「子卜㱿貞：𠂤己克往……」，若弗其以克祭於祖庚或妣庚也。續編（五・二八・二），「子卜㱿貞：𠂤己克往？」，上子省，不解「克」為祭名，實無法通讀。前引李氏所舉以「子克」為人名之辭，並檢原文，知為誤記。據鐵雲藏龜零拾（一五・一）原文為，「貞：上子克征？」，上子省，舊說以為天神，後編凡三見（上八・六；上八・七；上八・八），若以乙編「且丁克」之詞語例之，此片「克」字「征」字，疑皆是祭名；而「子克」非連文也。又乙編四零七

片，「癸卯卜㱿貞：克妻㚔羊……」，饒氏通考引之，謂克即粹篇一五三八片之子克（頁六八一）；予意「克」與「子克」、姑不論其是否同屬一人，惟「上子克征」一辭，不當讀「子克」為人名也。㈣李氏訓克為能之義，其所舉甲編四二七及三九三三之例，仍未能令人心悅誠服也。屈氏釋四二七片第三辭云：「此卜問不執之而呼其歸來，其能嚮於王事乎？」；揣屈氏之意，「嚮王事」與習見之「叶王事」，詞意相同；然考之甲編三三三八片、乙編八二零九片、及其他卜辭，每著人氏之名於動詞之上；如是，則「克」為人名，大有可能。殷虛文字綴合三一零片，有「比克田弗其叶王事？」之辭，與此相近；惟「比克田」不能讀為「比能田」也。續編（三、二八、七、子吉卜），「王其令㠯不㯥克叶王令？」，克字於此究當訓為人名抑訓為能，殊難碻指。至屈氏釋三九三三片第一辭云：「入乎又司：《女克㠯二人》，此當是記事之辭，非卜辭也。又司即有司，謂官吏也。㠯字未識。」屈氏以「女克㠯二人」為呼有司時之語；若讀為「汝克、㠯二人」，則「克」疑是人名。又殷虛文字綴合三五九片，所綴殘辭，亦有「克㠯二人」四字；惜此辭殘缺過甚，又無同文異版者可資參證；存疑可矣。

卜辭字之偏旁從克作者，有㱿、㱿等形，張秉權氏讀甲編二一二四片之「乙卯卜㱿貞：令㱿取敉眾仆于𡆥？」，及殷契拾掇（一、九七）之「侃眾㱿㚔出敉？」之㱿，以為是人名。又讀甲編三四三零片，「㱿貞：王今日往𢦏㱿？」之㱿，則以為是地名。予頗疑㱿即克之繁體，侯存（九八。）「丁卯王歲牧㱿車馬……在車𠂤馬亦……」，與前編（七、五、三）「王固曰：出希……巾㱿車……車𠂤馬亦出希……」，兩辭均㱿車連文，疑均人名。至於此片之「車克」，與「㱿車」究否相類，須俟有更多確詁也。一九四四年于省吾綜合論之，見雙劍誃殷契駢枝三編（頁七）：

河字作㠯㠯㠯形者，孫詒讓釋為人乙（舉例下五。）；羅振玉（增考上九）、王國維（戩釋頁二）、葉玉森（集釋二、一。六）均釋為妣乙；郭沫若釋汔（通考五六。）作汔者，王國維釋汔（類纂存疑五三）。作㠯、㠯作㠯者，王襄釋汔（類纂存疑五三）。作㠯者，葉玉森釋汔（集釋二、四八）。作㠯㠯者，王襄釋𠂤（類纂六一）。作㠯者，郭沫若釋汔（通考一六七）。作㠯㠯者，董作賓釋汔（大龜四版考釋）。按諸家所釋，至為紛歧。詳察之，均係汔字一形之所孳變。汔河古今字。作㠯者與汔字形似，而非汔字。侯家莊大龜四、六一有辭云：「王其田于𡆥，㠯于㠯？」與後上十五、四：「王其田于𡆥，㠯于𠂤？」祭法語例並相同，知㠯即𠂤字也。說文：河从可聲。按：可从丂聲。契文汔字，右从丂即可字。再變而為㠯，右从𠂤，象人荷戈形；三變而為㠯㠯，右亦从𠂤。他說如：商承祚初讀為人名，後讀汔，謂是水名而非人名（佚存攷八四）；李旦丘釋沒（零拾二九、又三八）；唐蘭釋汔（導論一四）；郭沫若隸定作㳄，謂即河字（粹考頁一百十二）；董作賓眉批朱氏文字編汔字，從新說讀為河（李氏集釋頁三二六三引）。屈萬里補充于說，續舉京津三八九一片，及粹編八三四片又舉其他卜辭作例證，因而斷言：㠯㠯㠯㠯等，均是河字（釋㠯、集釋外編第四種）。屈氏又有「河字意義的演變」一文，載集刊第三十本，列出兩組例證以說明河字即後世所稱之黃河。（一九五九年三十周年紀念專號，頁一四三至一五五）李氏甲骨文字集釋卷十一，謂卜辭河字當從屈氏之說，為黃河之專名，其或與殷世先公並列者，蓋河岳祀典先公比隆，非即先公。（頁三二七二，三二）按：若持屈說以讀卜辭，誠無往而不通；然卜辭每字多有數誼，河字恐亦難為例外也。

河字誼訓，異說尚多，可分兩類。㈠董作賓讀㠯為妣乙；又引傅斯年說謂即契文毋嬪狀（新代例、頁三三七）。于省吾以為是先公曹圉（駢枝三、頁七）。楊樹達以為是殷之先人，而實為河伯之嫡祖（積微居甲文說、頁四）。胡厚宣以為是祖先之名（戰後寧滬甲骨集自序、頁三）。吳其昌以為是先公之名或地名（解詁頁五。六）。容庚以為是人名（殷契卜辭考釋頁二）。㈡董作賓後從陳夢家說以為是河神（大陸雜誌三卷十二期、頁三九二；燕京學報十九期、頁一二三至一三。）。李學勤謂河與岳均為自然神（考古學報、一九五七年三期、頁一二三）。時至今日，仍有小問題未盡愜人意。

予試從卜辭語法分析之，河字可能有至少三種不同之誼訓。㈠殷代先公之名。如殷契拾掇卷一第五五零片，有「幸㚔貞：𡆥禾高祖河于幸𤔔酒𡆥？」之辭，與稱「高祖夒」（粹編一、三）、「高且𡆥」（續編一、二、三；鄴三、三七、三）、「高祖王亥」（後編上二、一三）、「高祖乙」（粹編一六三；一六五；一六六）、等辭，均於「高祖」之下，明著其名；如是，則「高祖河」未嘗不可以讀作先公之名。㈡地名。如劍橋大學圖書館藏金璋第七二八片，「癸酉卜，在云莫河邑，泳貞：王旬亡𡆥？」「壬戌卜，行貞：今夕亡𡆥？」又如丙編圖一四七，「貞乎往于河，不若？」前編（二、四、八）「貞：王旬亡𡆥？在河。」等辭，河字亦可讀為地名。按金璋之片，雖是腹甲殘片，然色澤黃淨，刻畫清晰，惜河字左邊上下均有剝蝕痕，故饒宗頤改讀為古文掌字。（人物通考頁六一五）㈢水名。如粹篇三六片，「乙酉卜，㱿貞：史人于河，沈三羊三𠂤三牛？」及鐵雲藏龜（六。三），「王其涉河？」，殷虛文字綴合廿三片，「癸巳卜，㱿貞：今日般涉于河東？」，前編（六、六三、六），「虎方其涉河東？」，鄴中片羽三（四五、二。按張氏丙編上輯二，頁一八六引此條，以河為地名，于則以為是水名，與前編涉河東

第廿五片

貞：王㞢夢，不㞢河𡆥？

自丁山釋牀為夢，而牀為夢之異文（集刊第一本第二分，頁二四五至二四七），郭沫若從之（通纂考釋頁九二）；於是釋瘧、釋瘳諸舊說，群知其誤。惟董作賓以牀从疒从爿，象病人兩手無力而下垂，輾轉於臥榻之狀，當為疒之本字（李氏集釋頁二五一。引）；張秉權於一九五七年考釋兩篇圖版第四八片及第八一片，尚遵守師說，認為與疾字無異。越二年，張氏綴合丙編圖版第八八片，始悟同版中，其第一、二、三、四辭之夢字，與第五、二十、二十一辭之疾字，書體及用法有別。蓋疾字之受詞，往往是人身某一部分器官之名，如云：疾首、疾舌、疾耳、疾齒、疾目、疾鼻、疾口、疾肘、疾脛、疾踵、疾止、疾身等；至於夢字之受詞，則往往是一事之敘述，如「王夢𡆥隹禍」？（綴合三、一牛），「王夢亡其人來」？（簠、人名七）等，皆例證也。按張氏以兩編圖版八八及九八，均夢、疾同版，不應同訓，甚是；今檢殷虛書契前編（四、二八、三），「貞：亞多鬼夢、亡疾？四月。」之片，更是夢疾同見於一辭，益覺丁說之頗撲不破也。至楊樹達謂牀字、其字从丌从父，讀為痛（積微居金文說頁五八），則誤以丌為父字，不可信。又卜辭夢字之異體甚多，有作㞢形者，見殷虛書契菁華（三、二），云：「出希出㞢」；丁山以為是「夢父」合文，今皆知其字亦為夢之繁體。惟魯實先別作一解，謂定為臏，謂當是從丌從眉父聲，乃瘟之古文，所謂「出希出臏」者，乃謂有祟咎、有大創也（殷契新詮五、頁四）。楊、魯二氏，均泥於丬形，妄曲求證耳。

河字在近二十年來，始成定論；良以字形變化甚多，早期學者，均未得其

洮，詞意相類），「弜于河東洮莫即又？」等辭，皆水名也。或竟指黃河言之。按第一期武丁貞人爭，有數次卜祭于河之辭，皆舉出所在之地曰「𠂤」者，豈以黃河流域甚長，而殷之時王，巡狩所至，隨地卜祭歟？下列各辭，可見一斑：

丁巳卜，爭貞：叀于河五牛沈十牛？十月。　貞：在𠂤。（前編二、九、三）

（）（）卜，爭貞：叀于河（田）（牛）沈（九）（牛）？十月。　貞：（南）𠂤。（甲編三四六一）

……（王）（占）余，酒河𡆥？十月。在𠂤。（甲編圖版零伍肆）

張氏兩編圖版一一六考證，嘗以貞人「何」之名，納入「河」字之第四證，殆已接受屈氏之卅亦為河之異體說法，并云：

先公之河，地名之河，貞人名之何，這四類不同意義的河字，它們之間的關係大概是這樣的：殷之遠祖有名河者，他的子孫，有一支封在黃河邊上的一個叫做河的地方，世為殷之諸侯，楊樹達所舉的河伯，即為河地之伯，其後世並且曾經在朝擔任貞人之職。

帝、𡆥體甚多，習見者為形略近。郭沫若讀為𣪊之初字（青銅器銘文研究，卜辭通纂頁八七）。孫氏甲骨文編卷三「殺」字條云說文殺字从朵即𣪊形之譌（重訂本頁一三二）。金氏續甲骨文編卷九「帝」字條（頁十二）無說。至於各家異說，具詳李氏甲骨文字集釋卷一（頁九七）朵字；集釋卷三（頁九二七）叕字；及集釋卷九（頁三。。）帝字各條。

王夢見先祖而畏其為祟之卜辭，習見。茲舉兩編圖版三八五為例：第一至第四辭，卜王有夢而是否為禍；第七第八辭，卜祖辛是否為祟；第九第十辭，卜祖丁是否為祟；反復貞問，足見時王畏懼禍祟之情狀。按卜辭言「河帝」者數見，如乙編五四零六片；戩壽堂七、一四片；殷契拾掇一、一七九片；金璋五九片；皆是也。惟此片所云「王出夢不住河帝」者，以予所曾讀卜辭萬千片中，尚屬初見；誠難得矣。王於用「河告」為詞者，茲舉兩編圖版一八八為例，記「王夢且乙」；繼之，卜祭于祖辛、祖乙、祖丁，庶可窺見一斑：其第一至第四辭，則卜河是否告王。按告義與帝義，均與祟近，故兩編之片，正可與此片參看。

祭河祀典，有沈、㳄、浮、𣳾、𣳾、𣳾、告、𡆥、酒、取、求、𠂤、𠂤、帝、祀、諸祭。羅振玉謂㳄形象沈牛於水中，㳄形象提地及泉實牛於中。引周禮大宗伯以貍沈祭山林川澤（增考中頁一六）。按卜辭紀沈祭于河者識多，而紀貍祭于河者亦復不少。如前編（一、三二、五），後編（上二三、一。）粹篇（四二、及三八），京津（五七八），南北坊（四、五五），七集丁（八），庫方（五四三）等片，是知殷周禮制，有所損益，不必相襲。前舉兩編圖版一八八，祀序為祖辛、祖乙、示壬、及河，學者多以為祀河神與先公比隆。又前舉拾掇卷一第五五零片，乃頗為完整之牛肩胛骨；雖有「高且」者兩辭，單稱「河」者兩辭，單稱「𡆥」者一辭；假如讀𡆥為岳，則此片尚不足以證明「高且河」三字連讀。余以張氏既分河誼為四，故從其說亦以河有人名之一誼；又以殷都屢遷，均因河水為患；嘉者殷先公中治河成功者，必實有其人，故即以河名專稱之；楊氏謂河伯或是河地之伯，猶此義耳。於是祭祀先公，偶亦兼舉河名，故祀法不惟有沈祭，抑且用貍祭也。

第卅一片

（貞）：羽幸耒，（卖）告于毓且乙、父丁，由𡆥酒？

羽字在此辭讀為翌日之翌。告字有數義：（一）祭名，殆由祝告之義所引申；予所見數百片告祭卜辭中，其與先祖妣名同辭者極多。魯實先云是禧之初文（轉註五、頁一）。饒宗頤謂禧即禱告（通考頁一五八）。（二）動詞，其義為告語。如「汕武告曰」（菁華三）；「𠂤告曰」（前編七、四、三）。（三）方國或人名。如「告于亡田？告于其出田？」（乙編三四二六）；「貞：王由𡆥告从正人？貞：王勿由𡆥告从」？（兩編圖版一、五三）；「庚寅卜，告貞：其囚」（南北明三七七）。

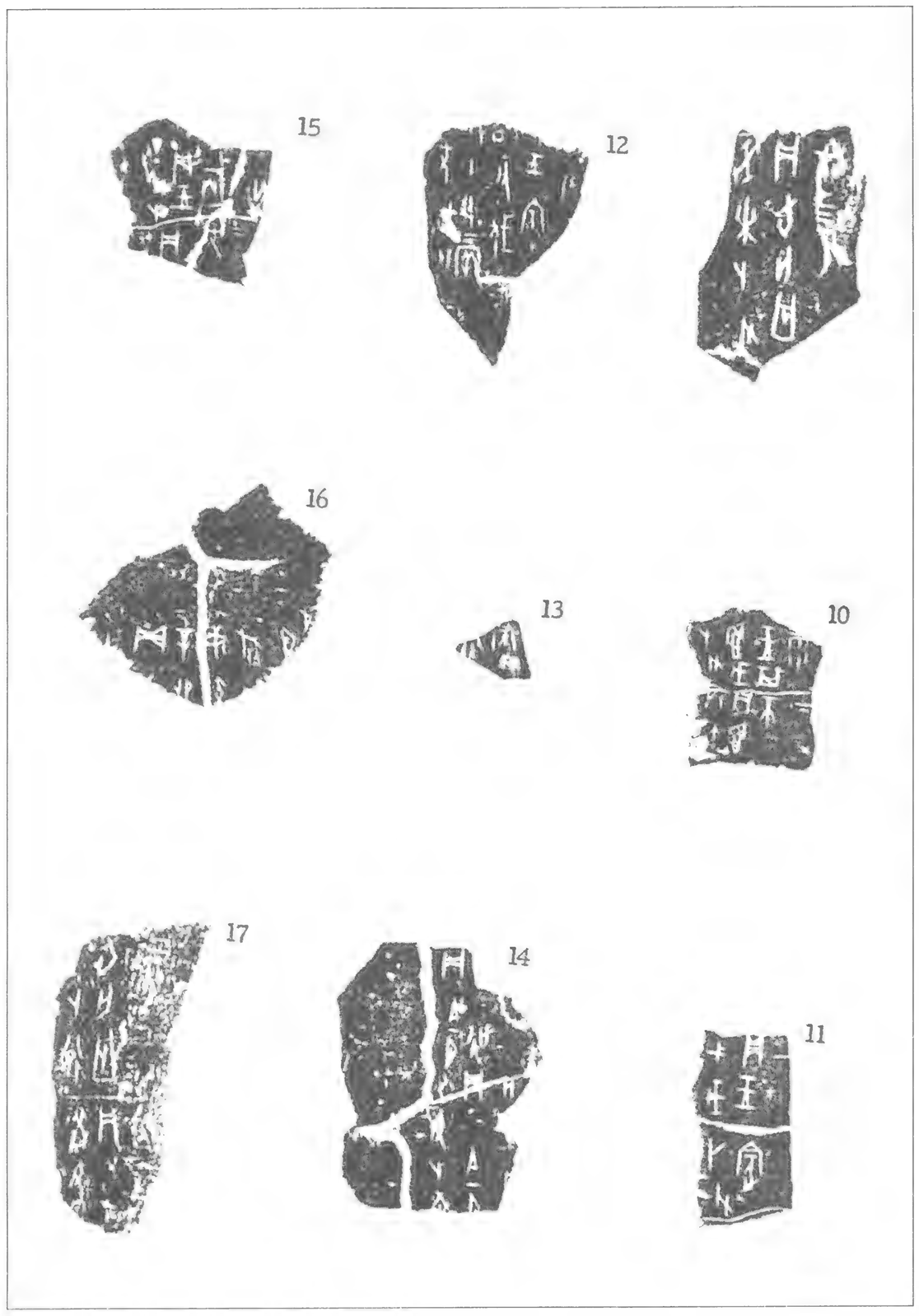
毓字有𡆥、𡆥、𡆥、𡆥、𡆥、𡆥、諸形，金文作𡆥（毓且丁尊，舊釋𡆥）。卜辭與金文均段為前後字。王國維云，「此字變體甚多，从女从古，或从母从古，象產子之形，其从𠫓者，則象產子時之有水液。从人與从女从母之意同，以字形言，此字即說文育字之或體毓字。又云，「𡆥、𡆥、𡆥、諸形，皆象倒子在人後，故引申為先後之後，又引申為繼體君之意者（卜通頁十七）。李孝定云，「王釋謂毓后一字，是也。毓字尚接近象意畫階段，當為初文」。（考釋頁四三三）

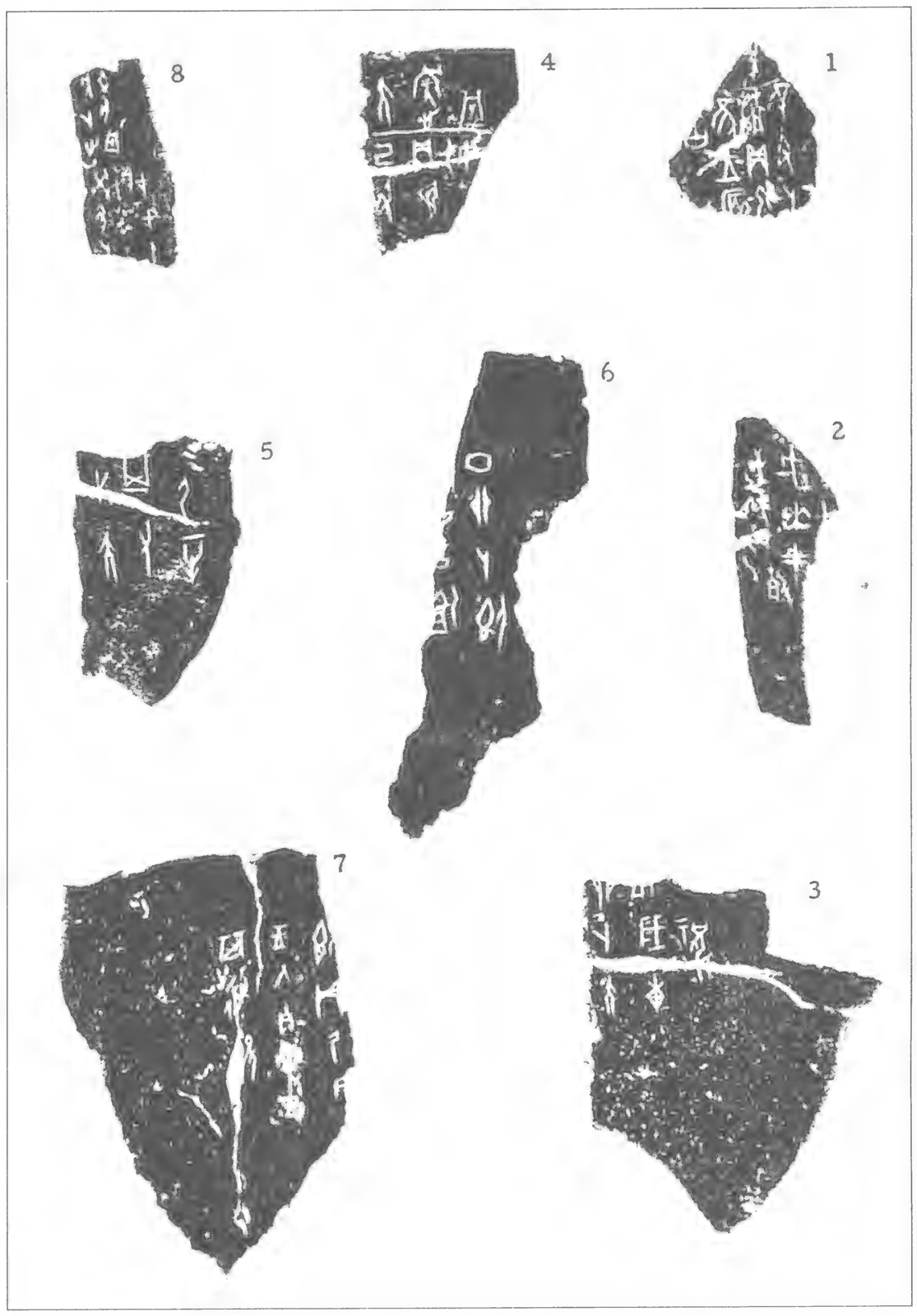
毓且乙即後祖乙，亦即小乙；王國維以為是武乙，若證以祖庚卜辭，知其非是。按續編（一、一九、四）「自且乙、且辛、毓且乙、父丁，七尤？」之辭，毓祖乙在祖辛之後，父丁之前，必須是小乙。屈氏考釋甲編四一四片，亦謂毓祖乙即小乙。此片毓祖乙與父丁同祭，其祀序與佚存八九三片（戩三、八；續二、三二三同文，殘重出）「乙卯卜，即貞：王宜毓且乙、且辛、毓且乙、父丁、歲，七尤？」相同；因知此片亦祖庚時物。庫方一二零四片，紀周祭毓且乙與兄己云，「乙亥（卜）（翌）貞：王宜毓且乙彡，七尤？己卯卜旅貞：王宜兄己彡，七尤？在正月」，若依其干支，則毓且乙亦必須是小乙。祖庚祖甲時期，「乙」在卜辭中之稱謂有五：（一）且乙。如佚存（五二六）「己丑卜，大貞：于五示告：㠯、且乙、且丁、羌甲、且辛」。（二）小且乙。如續編（一、二五、八）「癸巳卜，即貞：羽乙未其又于小且乙」。（三）小乙。如粹篇二八零片行卜之「翌于小乙」，文錄三零四片旅卜之「翌于小乙」，粹編二八八片即卜之「彡于小乙」。（四）亞且乙。如殷契卜辭二五三片「隹亞且乙告王？」（五）毓且乙。周祭卜辭如庫方（二。四）之旅卜。歲祭卜辭如續編（一、三、四；南北師二、一七五葉）之旅卜；明義士（二、四。）之旅卜；京津（三二七七）之行卜；林泰輔（一、二二、五）之行卜；庫方（一。二五）之行卜。名祭卜辭如文錄（三。六；明四五六；元二。三；存一、二五。重）之旅卜；續編（一、一六、二；戩三、七重）之即卜。均足資參證。

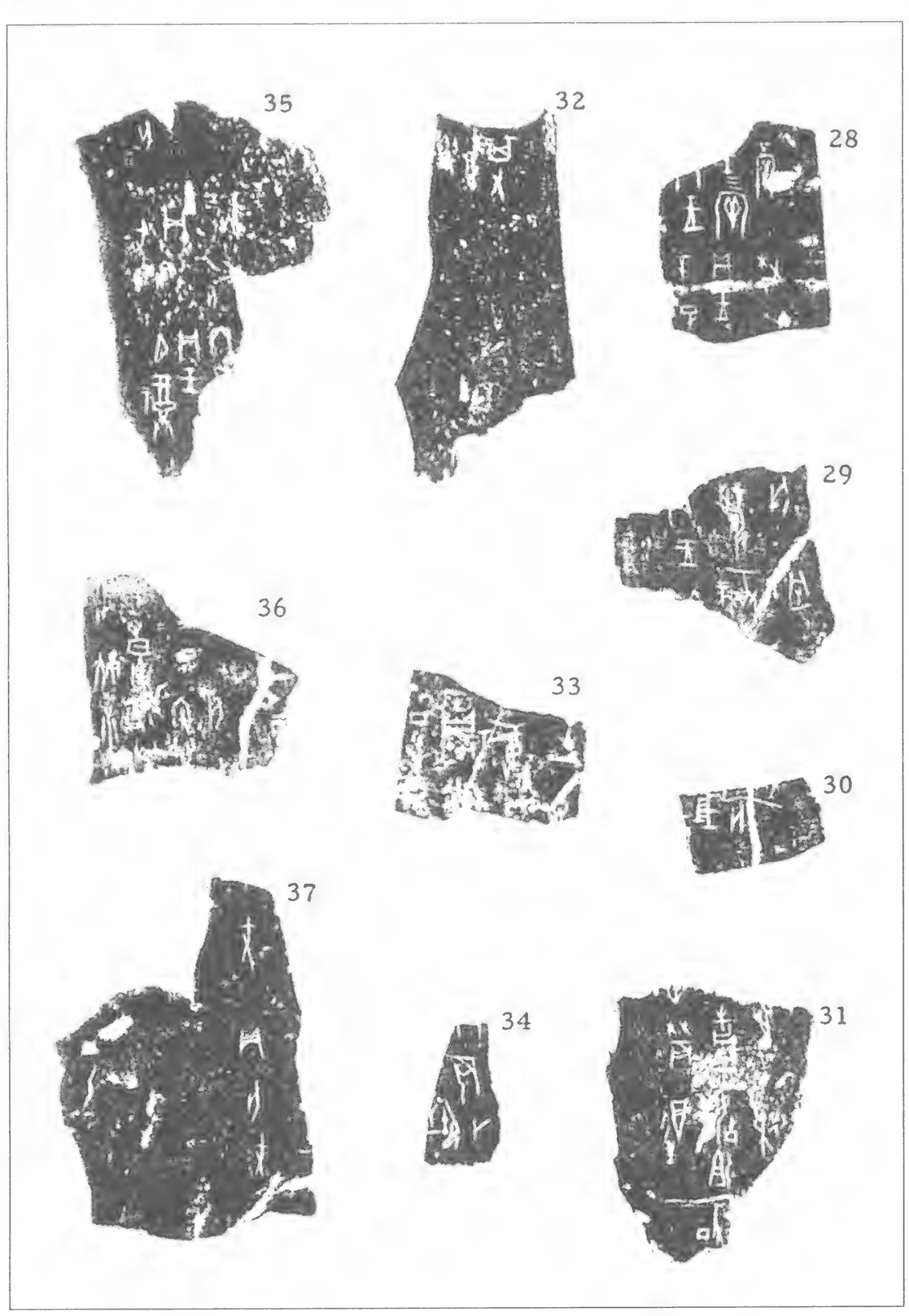
𢍏字有𢍏、𢍏二形，每與酒祭或歲祭連用。其辭作「𣪊𢍏酒」者如明義士（三。三），粹編（三五二），遺珠（八四八），續編（二、二、二），等皆是也。乙編二八二片有云：「甲寅卜：王𣪊𢍏示𢍏？五月。」之辭，李氏甲骨文字集釋以為「𢍏示」即𢍏神，與後世祀社相類」，（頁八四二）其或然歟。

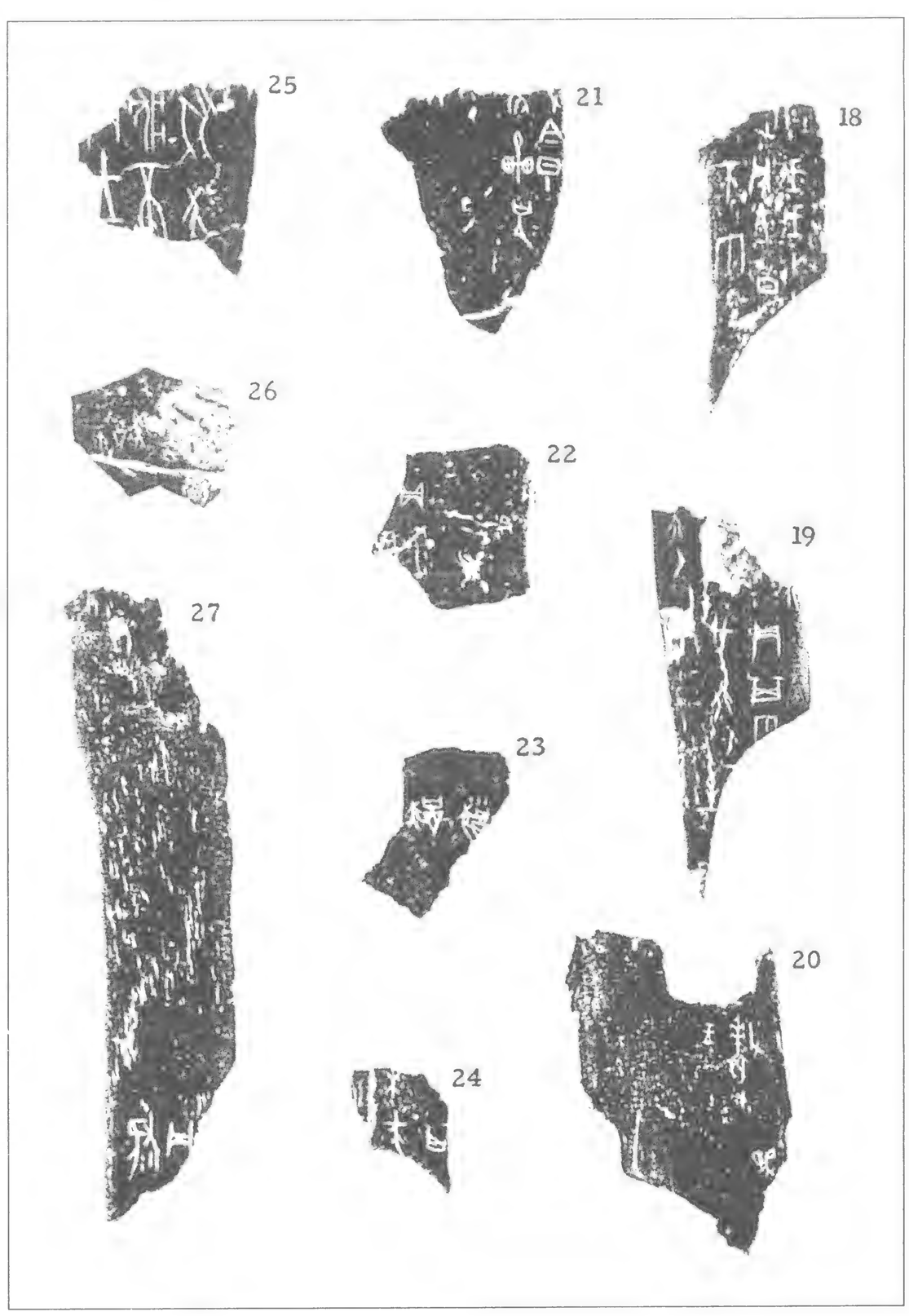
上述甲骨七片，予嘗檢甲骨著錄書籍八十部，均未見徵引。意者鄧尔迈文藏之篋笥垂四十年，未嘗出以示人；而容希白兄叢在北平為其選購，亦不曾面有招本；遂不為世人所知。今香港中文大學聯合書院圖書館乃於無意中獲此，不其幸歟！余於摩挲考釋之餘，緬懷往事，不禁有人琴之感矣。

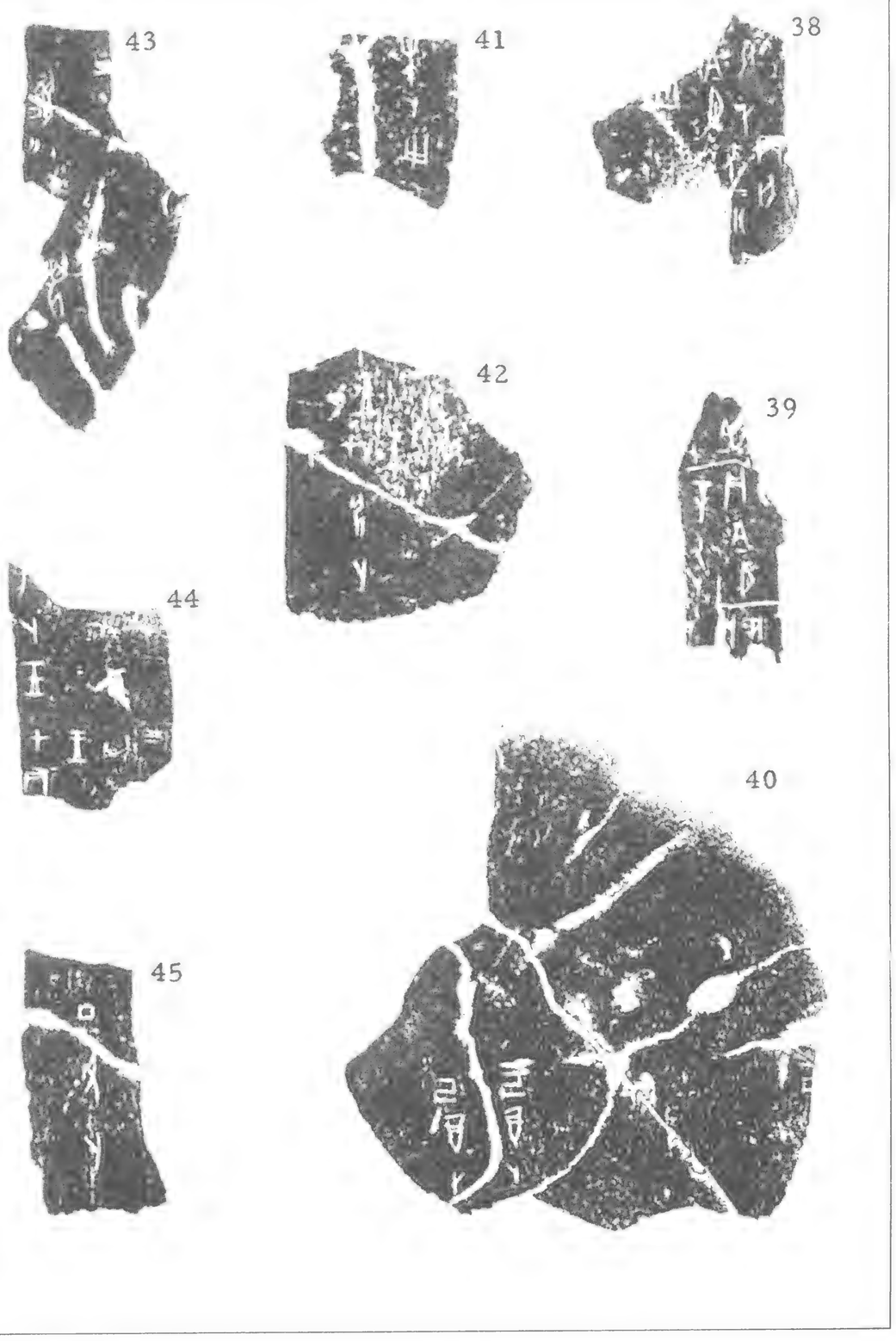
一九六九年六月　李校初稿


15
12
16
13
10
17
14
11


8
4
1
6
5
2
7
3


35
32
28
29
36
33
30
37
34
31


25
21
18
26
22
19
27
23
20
24



（原載《聯合書院學報》第七期，一九六八年—一九六九年）

加拿大多倫多大學安達黎奧博物館所藏一片牛胛骨刻辭考釋

金祥恒

一前言：

前年本系研究所碩士班畢業生許進雄君應加拿大多倫多大學之聘請，前往整理安達黎奧博物館（Ruyaj Ontario Museum af Asiatic Arto Canada）收購前甲骨學者明義士及懷履光所藏之甲骨，不論摹寫或拓印，行世與否，先行拼捖，然後墨拓。迄今時逾二年又半，業已蔵事，方待整理研究考釋。去年年初，許君發現一片大牛胛骨，所契卜辭，殊屬罕見，於是函告屈翼鵬先生，承屈先生轉知本人，又承張清徽先生借觀其拓片，讀其卜辭確與行世者不同，擬加探究考釋，縈繞在心，無日或忘，惟數千年前之斷簡殘文，考其史實，事屬艱難，茲就其文字，略加考釋，自揣謬陋，疏漏之處難免，祈方家不吝教正。

二釋文：

正面：

丙午卜，設貞：「乎自（師）𠂤（往）見𠂤（又）自（師）？」王（固）曰：「隹老隹人（夷）𠂤（途）𨒫（遘），若（茲）卜，隹其匄。」二旬𠂤八日癸壬（子）自（師）夕𣪊（殊）。

反面：

王固曰：「隹老隹𠂇（夷）𠂤（途）𨒫（遘），若茲卜，隹其匄。」設是其中之一。所以此三考釋：

設爲貞人，羣師彥堂在「甲骨文斷代研究例」一文中云：「第一期武丁時的史官共十二人：設、亘、永、賓、爭、韋、𠂤、㠯、𠂤、𠂤、史。」設是其中之一。所以此臚第一期武丁時之卜辭。凡研究甲骨文者皆知之，故不贅述。

乎　羅振玉云：「說文解字乎語之餘也。从𠂤，象聲上揚越之形也。古今文作乎（頌鼎頌敢），𠂤（師遽敢）與此同」（考釋中七八頁）屈翼鵬先生甲編考釋，乎又爲疑問之詞云：「『𠂤已卜，𣪊：𠂤乎』？（甲一九六）『丁未卜𣪊：𠂤戊，學戊乎』？乎字似當爲疑問之詞。」然此段爲評。說文：「評，召也」，經典以呼代之。甲骨卜辭如：

貞：登人三千，乎伐舌方，受𠂤又？

貞：東羌乎伐舌（方）？

庚申卜，設貞：乎王族𠂤从𢦏？

甲子卜，爭：雀弗其乎王族來？

丁巳卜，王貞：四卜乎从韋（圍）方？允𠂤。

其乎皆段爲評。金文如：

王乎乍册內史册令師㠯𢦏嗣口口。

王乎內史先册命諫曰：

王乎內史先册令𠂤

王乎尹氏册令𢦚夫克。

王乎乍命內史册命𠂤。

王乎史𢦚册命師酉。

王乎命尹封册命伊𢦏官嗣康宮王臣妾百　。

王乎內史尹册令師兌。

其乎與甲文同，召也。尚書甘誓：「大戰于甘，乃召六卿」宣公六年：「冬，召桓公逆王后于齊。」說文：「召，呼也。」評召二字互訓。儀禮特牲饋食禮：「凡祭呼佐食許諾」。呼猶命也。故乎召亦有命令之意。

合三〇二
外三〇

師㠯殷
諫殷
揚殷
大克鼎
𠂤鼎
師酉殷
伊殷
師兌殷

自　甲文假爲師。說文：「師，二千五百人爲師，从帀从自，自四帀，衆意也。」孫詒讓契文舉例云：「自，小皀也。象形，』此疑假自爲師。金文盂鼎：『𠂤師』，字作『𠂤自』可證。」（下卅六葉）郭氏殷契萃編第五九七片：

丁酉貞：王乍三自（師）右中左。　（圖三）

云：「自乃古堆字，然多用爲屯聚之屯，此亦當以讀屯爲適，言作左中右之三營以屯聚三軍也，狩獵亦有採取三行之例，如云：丙申卜，貞：𠂤兕左右中人三百，六月。（前三・三一・二）是也」。孫氏甲骨文錄第五六一片

貞：亡尤，在自漬。

云：「說文：自小皀也。是自本系小皀之形，卜辭皆假爲師，訓众。金文亦然。自本小皀，何以有師旅之意，蓋上古之世，都邑必實附丘陵以築。章太炎嘗撰古者天子居山說，以爲太上之君，王相宅度邑，必于山麓，此說雖近新奇，然證以古代地名之名丘名州名陵者甚多，知所說殆不盡虛。都邑所在，又即軍旅所在，友人童丕繩爲余言，西歐中古之世，城邑多築於高原，名之曰堡，封君及軍衞居焉，所以周封域而禦外侮也。上古中原有洪水之患，民非高土不可以居，是以都城所在，必宅于高原，是式亦一因也。自本小皀與丘陵同，古代帝王宅丘陵以配天，居師衞以鎭众，王者之居，軍旅所守，古軍旅以可曰自，于是自字遂含有師旅之義，凡從自得聲受意之字，遂亦引申其衆意。」甲文𠂤即小篆之𠂤，其義爲師，乃引申也。甲文：

庚午貞：今夕自亡歷？　撫續二三一

辛未貞：今夕自亡歷？　粹一二〇、一

甲戌貞：今夕自亡歷？　前二・二・五

乙亥貞：今夕自亡歷？　後上一〇・一〇

庚辰貞：今夕自亡辰？　前八・六・二

口巳卜，在洮東貞：今夕自不歷？　前二・一三・二

乙亥卜，在𠂤貞：今夕自不歷？在十一月　續三・一・三

辛未卜，在洮貞：今夕自不辰？吉，茲知。

甲戌卜，在𡆥貞：又邑今夕弗歷？在十月又一

乙丑卜，設貞：茲邑亡歷？

屈翼鵬先生云：「卜辭習見『自不踩』，『自亡踩』，或『茲邑亡踩』等語，白虎通德論（五行篇）及說文（辰部）並云：辰，震也。此雖以訓十二辰之辰，然實亦自亡踩之本誼。甲骨文未見震字，踩震同聲，義固相通，震者驚也、警也，亦騷動也。然則『今夕自亡踩，』或『今夕自不踩者，乃卜王及其臣衆（包括軍旅）於茲夕是否有警也。『茲邑亡踩』或『又邑今夕弗踩』者，卜其邑之是否有警也」（書傭論學集，自不踩解）

來告大方出伐我自（師），東馬小臣口？　粹一一五二

丙子卜，爭貞：自（師）亡𡆥？　甲二九三五

乙酉卜，王貞：自（師）不余其見？二月　後上三一・三

貞：方來入邑，今夕弗歷王自（師）？　殷契卜辭八九（圖四）

其辭甚明，謂方來入城，今晚王師弗震驚也。金文如彔𠂤卣：女其以成周師氏戍于𠂤自。

郭氏考釋云：「女其以成周師氏，古師氏之職，本司軍旅，其位頗高，師氏即伯雝父，故又稱自（師）雝父。師繫其職，伯繫其爵或字，周禮師氏職文甚訂饾，半敍爲師保之師，半敍爲師戍之師，其經劉歆改竄爲無疑。」

競卣：隹白犀父以成自即東，命伐南尸（夷）。

卜辭金文某自之自，乃是師戍所在。

𠂤壺：更乃且（祖）考乍冢嗣土（司徒）于成周八自。易女𠂤（秬）鬯一卣。

小克鼎：王命善夫克，舍令于成周遹正八自之年。

小臣謎簋：白懋父以殷八自征東尸（夷）。

南宮柳鼎：王乎乍冊令柳嗣六自。

班簋：王令吳白曰：「以乃自左比毛父」，王令呂白曰「以乃自右比毛父」。

成鼎：揚六自，殷八自。

陵貯簋：隹巢來伐（笞）王令東宮追以六自之年。

禹鼎：王迺命：六自殷八自。

郭氏云：『成周八自』，亦見小克鼎，『王命善夫舍命于成周遹正八自』，蓋戍成周之師有八屯也。」（兩周一〇〇頁）金文亦引申自爲師。或以自（師）爲氏者，甲骨文如：

貞：乎見自般？　林一・二五・六　圖五

自般弗右王事？　存一・一〇、九三

癸巳卜，𡆥貞：自般涉于河東？　綴三・三

戊辰卜，宁貞：乎自般祭大口？

董師彥堂甲骨文斷代研究例云：「據分期整理的結果，武丁時代有『師盤』其人，我以爲也就是甘盤，僞書說命云：王曰來，汝說，台小子舊學于甘盤，既乃遯于荒野，入宅于河，暨厥終罔顯。漢書古今人表于商氏列有甘盤，在上中欄，注：師古曰：武丁師也。卜辭中甘盤正作師盤。今本竹書紀年記載：武丁元年，命卿士甘盤」。自（師）般，僞書說命作甘盤，疑甘爲自之譌，甘篆文作㠯，師甲金文作𠂤，形相似，凡互古，知天文，閑地理，明軍事者，如呂尙爲文王師也。金文如：

竅鼎：師雉父戍才（在）古自，遹從。

遹觶：師雉父戍才（在）古自，遹從。

禮卣：禮從師雉父戍于古自。

臤觶：臤從師雉父戍于古自之𠂤。

師毛父般：師毛父即立。

師遽般：王乎師般易師遽貝十朋。

遂以其職官爲氏，鄭樵氏族略云：「或以官爲氏」者也。

後上二・七

己酉卜黍年，虫（又）足雨？

貞：𡆥虫（又）雨？

乎舞，虫雨？

乎舞，亡雨？

虫與亡對文，假虫爲又之證。

壬戌卜，狀貞：亞𠂤线𠂤，王受又又？

壬戌卜，貞：王弗受又又？

貞：勿登人，乎伐舌方，弗其受虫又？

「受又又」爲卜辭成語，一作「受虫又」，蓋虫與又相通借。

弜𠂤，弗受又年？

乙未卜貞：黍在龍囿𡆥受虫年？

受又年？

弗受虫年？

「受又年」爲卜辭成語，一作「受虫年」，蓋虫與又通借，其例甚夥，不煩備舉。故「虫自」即「右自」也。卜辭：

壬辰卜，亘貞：弗其𠂤𠂤。

貞：行𠂤虫自眾虫邑？

癸巳卜，韋貞：行𠂤（虫自）眾邑？

貞：行弗其𠂤虫自眾邑？

虫（又）自（師）即卜辭中三自之一。如：

丁酉貞：王乍（作）三自，右中左。

此右師爲軍旅行陣三師中之右師也。如左傳僖公廿五年衛人伐邢：「晉侯辭秦師而下，三月甲辰，次于陽樊，右師圍溫，左師逆王」會箋云：「晉武公初滅翼，王命以一軍爲晉侯，至獻公始作上下二軍，惠公與秦戰韓，其年作州兵，以贈軍賦，至文公初猶是兩軍，此左師右師是也」。晉未稱霸之前，所建之三軍，作戰時或曰左右師也。

哀公十一年，齊國書帥師伐魯：「孟孺子泄帥右師，顏羽御，邴泄爲右，冉求帥左師，管固父御，樊遲爲右。」可證齊軍亦分左右師。

此卜辭之自（師），疑爲三師之中者，其名即下文𠂤也。

見　說文：「視也，从儿从目」。商承祚謂：「卜辭見字作𥁕，望字作𥄎，目視爲見，目舉視爲望，決不相混。」其說是也，金文亦然。如：

沈子敃克蔑見敃于公休。

余子迺遣閒來逆邵王，南夷東夷具見。

其見一作𥁕，一作𥄎，與卜辭同，字或从彳或从亻，与與人古相通。惟望如「既望」之望作𡆥，所从之聖均作舉目也。卜辭如：

貞：乎見自般？

口未卜，宁貞：乎見𠂤？

壬寅卜、口見，弗口隻鼋（圜）𠂤？

貞：勿乎𡆥見𠂤？

丁酉卜，𠂤貞：令𡆥見𠂤侯？六月

如今「相見」之見也。

虫自　虫于卜辭或假爲又，如：

林一・二五・六

續五・二八・三　（圖六）

後下三四・四卜五五四（圖七）

續存一・二三八京二二一四（圖八）

珠六（圖九）

乙七三八五（圖一〇）

丙五〇〇（圖十一）

萃五九七

襄公十九年，楚公子午帥師伐鄭：「楚師伐鄭，次於魚陵，右師城上棘逐涉潁。次于旃然。」會箋云：「子庚將左師，其將右師者，蓋右尹罷戎也。」可見楚軍亦然。或以爲六卿之一，如左傳文公七年：「夏四月宋成公卒，於是公子成爲右師，公孫友爲左師，樂豫爲司馬，鱗矔爲司徒，公子蕩爲司城，華御事爲司寇。」或以爲氏：鄭樵氏族略，右師氏云：「世本宋莊公生子申，世爲右師氏，漢有中郎將右師譚，後漢有博士右師細君」。案世本所言莊公生子中，即公子成也。卜辭中有關「乎自往見屮自」者如：

丙午卜，設貞：勿呼自往見屮自？一　珠二八〇（圖一二）

□□設貞：勿乎自見屮自？四　粹一一三二（圖一三）

此片僅言「乎自見屮自」，無往字，與「往見」之辭意全異，「往見」如今言「前去見」也，其間必有距離，此兩片卜辭爲同屬一事之貞卜，與明義士所藏者有關，疑爲成套卜辭之一，遺珠爲第一卜，粹編爲第四卜，明義士所藏此片雖破裂殘缺，不見卜兆，亦無兆序，僅存其卜辭。按其辭例此三片一定有關。其他如

乙亥卜，爭貞：叀邑竝令葬我于屮自？二月。　粹一二一三（圖一四）

丙子卜，宂貞：令𣎵葬我于屮自？冎告不死。　續五・四・三　人五五（圖一五）

己卯卜，宂貞：今日祈𣎵令葬我于屮自？

□卯□葬□于屮自□？　續五・四・三　人五五（圖一五）

此四殘片爲同一版之殘簡，其干支相銜，辭類相近，同卜一事。亦與此片所卜有關。

王固曰　三視兆而言也。據此反面王下卜辭補一固字。

老　，葉玉森云：「契文之　，象一老人髮傴僂扶杖形，乃老之初文」。說文：「老，考也，七十曰老，从人毛匕。言須髮變白也。」許氏據篆文爲說，从人毛匕，惟匕乃如攴从卜之譌，卜象手所持之杖，非若許氏所謂卜聲。　新一六九八（圖一七）

夷　𠂤或𠂤，吳大澂云：「古夷字作𠂤，即今之尸字也，古尸字作𠂤，即今之死字也。師𣎵敦𣎵𣎵𠂤𠂤，又云𣎵𠂤𠂤，會伯𣎵簋曰𣎵𣎵𠂤𠂤，今田盤亦𣎵𣎵𠂤𠂤，我曾乎當讀至于南淮夷，淮夷舊我員畮，淮夷二字重文，非夷字作𠂤也。𣎵命𠂤𠂤，當讀𣎵安夷伯，夷伯賂𣎵貝布，夷伯二字亦重文，夷爲東方之人，𠂤字與𠂤字相似，象人曲躬蹲居形。白虎通，夷者僔，夷無禮義，論語原壤夷俟，集解引馬注：夷踞也，東夷之民蹲居無禮義，則其非中國之人，故𠂤與𠂤相類而不同。大澂釋𠂤爲卬𠂤之𠂤，象西夷推結之狀，亦此意也。𠂤爲蹲居，𠂤爲傾頭，皆賤之之詞，疑古者从尸之字皆當从夷。許書解尾字爲西南夷所飾采尾。此从夷之證也。孝經仲尼居，釋文盡古尸字也。經文居字不當作尸，疑尻字之誤，漢書樊噲傳注，尸讀與夷同，漢儒或見故書夷字重文作𠂤。誤以爲古夷字本作𠂤，許書又以𠂤爲仁字古文，更不可解也，自後人以尸爲陳屍之屍，而尸與夷相混。周禮：『凌人大喪共夷槃冰。』注：『夷之言尸也，實冰于槃中，置之尸牀之下，所以寒尸，尸之槃曰夷槃，牀曰夷牀，𣎵曰夷𣎵，移尸曰夷于堂，皆依尸而爲言者也。』儀禮士喪禮：『士有冰，用夷槃可也。』注：『夷槃承尸之槃，又：『牀第夷𣎵。』注：『夷𣎵覆尸之𣎵。』凡此夷字皆當讀尸，或故書本作尸，而漢儒誤釋爲夷，或當時尸夷二字通用。古文尸字隸書皆改作夷，均未可知，然則漢初去古未遠，必有知尸字即夷字者，故改尸爲夷也。使夷敦𣎵字與小篆𣎵字相近，是晚周已有變𠂤爲夷者，不自漢人始矣」（字說三十頁）

吳氏之說至確。甲骨文之人夷亦易誤，如戰後京津新獲甲骨集二九九二「口寅卜，㠯令人方㠯」，胡氏序文誤釋爲「夷方」，其人與帝辛征人方之人作𠂤同。如：

癸未王卜貞：旬亡𡆥？王𠂤正𠂤方？

癸未卜，黃貞：王旬亡𡆥？王來正人方？

其人作𠂤。卜辭夷如：

貞：夷方不出？

庚戌貞：叀王自正夷方？

庚戌貞：叀王自正夷方？

庚戌貞：叀（王）自正夷方？

王弜正令？

灸告伐夷方？

癸卯卜，夷方其出？

其夷作𠂤、𠂤或𠂤，與人相似。商氏佚存釋文作夷，郭氏萃編釋爲尸云：「尸方者夷方，即東夷也。」郭氏以字形隸定，商氏以字形義釋之，其實一也。

或釋爲尸者，如：

隹尸方受又　後上三一・八

甲三三五五

屈翼鵬先生甲編考釋云：「尸即夷字，本辭尸方二字合文，尸方即夷方，夷方數與殷爲敵，本辭卜夷方受又，蓋方在和親時也。」甲編三三五五「王來正人方」，屈翼鵬先生考釋人方隸定爲「尸方」。日人島邦男先生之卜辭綜類第三頁「𠂤」下引粹編一一八七「」，第五頁「𠂤」下又引粹編一一八七。豈非一字二釋矣！

金　于氏云：「契文金字即今途字，其用法有二：一爲道途之途，一作動詞用，義爲屠戮伐滅，應讀爲屠，途與屠聲韻並同。逸周書周祝：『國屠』，注：『屠謂爲人分裂也』」（駢三第二十三葉）作道途解如：

甲戌卜，㱿貞：翌乙亥，王𠂤（途）首亡𡆥？　乙三四〇一

貞：翌庚申我伐，易日庚申明𠂤，王𠂤（途）首，雨小。　乙六四一九

貞：王途首勿𡆥？　佚五七四

首途猶今啓程，資暇錄「見將道途者，多云車馬有行色」，如「王途首亡𡆥」，即卜問「王首途無禍也。」「王來途首雨小」言王來啓程時雨小矣。

遘　羅振玉云：「說文解字：『遘，遇也从冓从𠂤聲』，此與許書同或省𠂤。」甲骨文遘或作，或从彳作，或从止作，其義爲相遇也」。（考釋中六十六頁）。卜辭

如

戊寅卜，貞：今日王其田澅，不遘大雨？　前二・二八・八

今日辛，王其田，不𠂤大風？　佚七三

辛卯卜，貞：旬其先𠂤重？五月。　金五三五

辛卯卜，貞：在𢀛，其先𠂤重？

貞：在𢀛，其先𠂤重？五月？　金四七七

說文𠂤，「交積材也，象對交之形」。段注引「高誘淮南子曰：構架也。材不相乘架也。」故引申爲相遇相逢之意。說文：遇，「逢也」，逢，「遇也」。遘，「遇也」。遘遘互相爲注。

若玆卜　若玆卜者，如此卜也。如：

王固曰：余母𠂤，若玆卜，下其佳羊（祥），出（又）大𡆥。

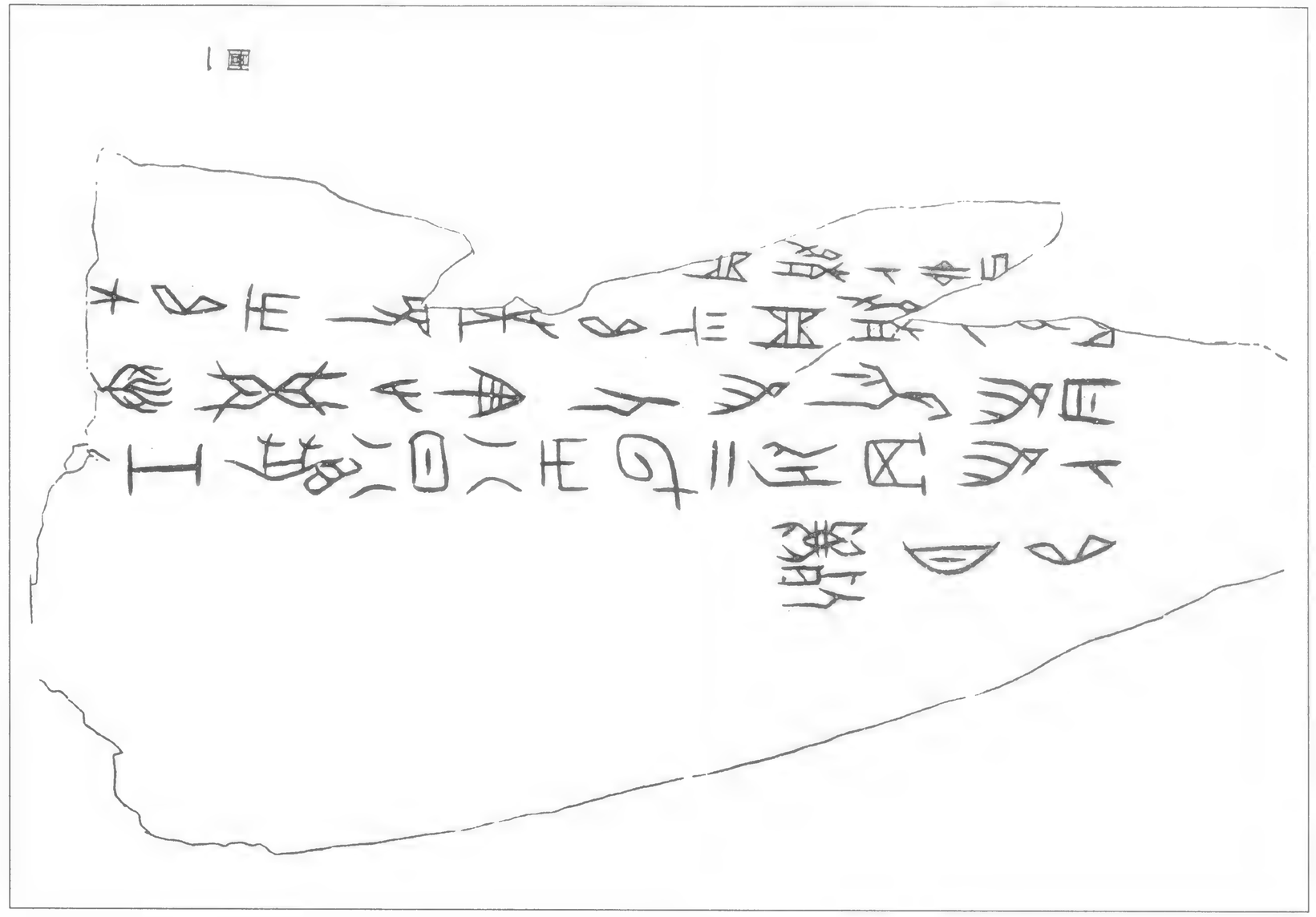
王固曰：不𢦏，若玆卜，其生，于甲酒成𠂤，佳甲𢀛？　乙三四七二

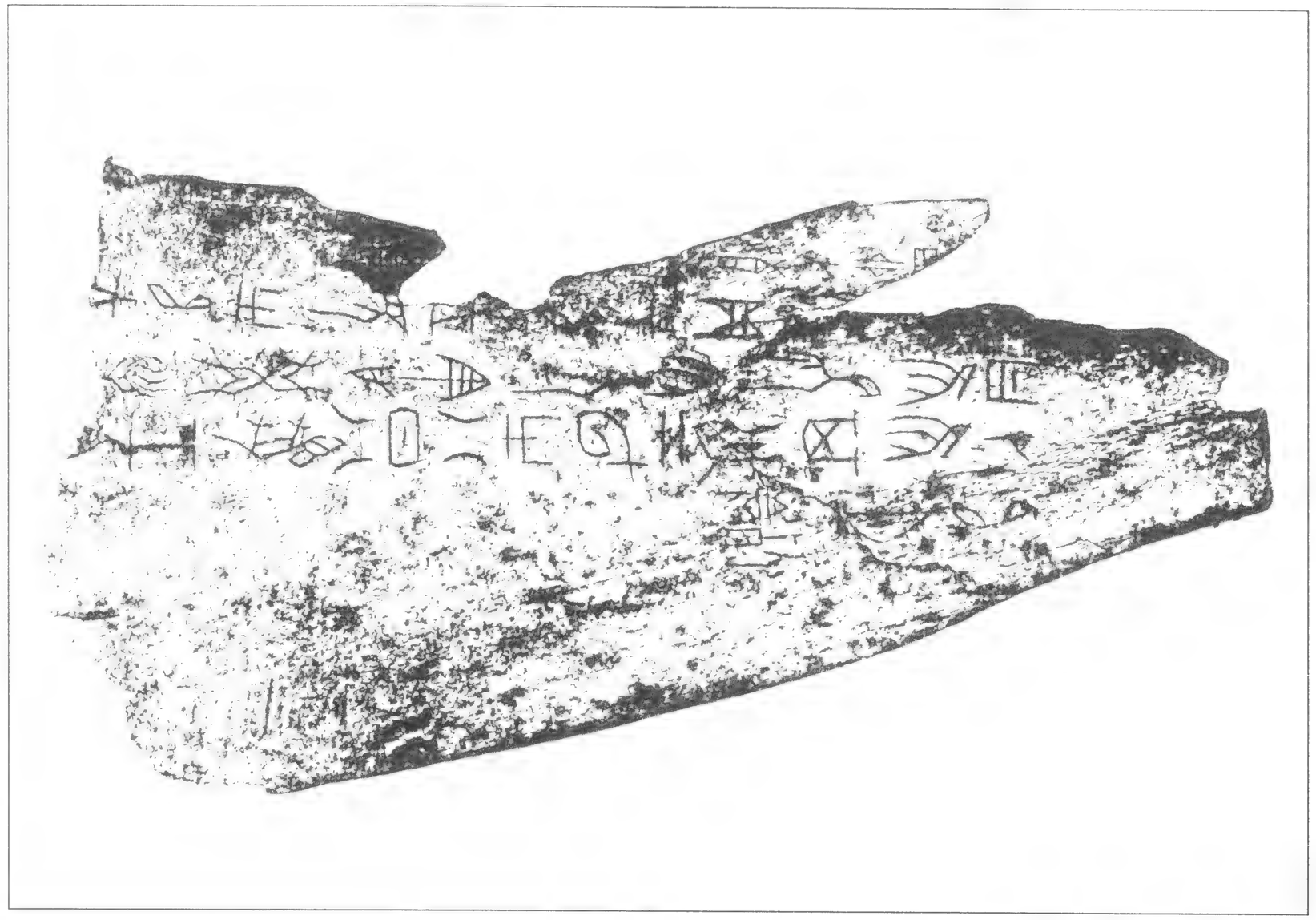
是其例。

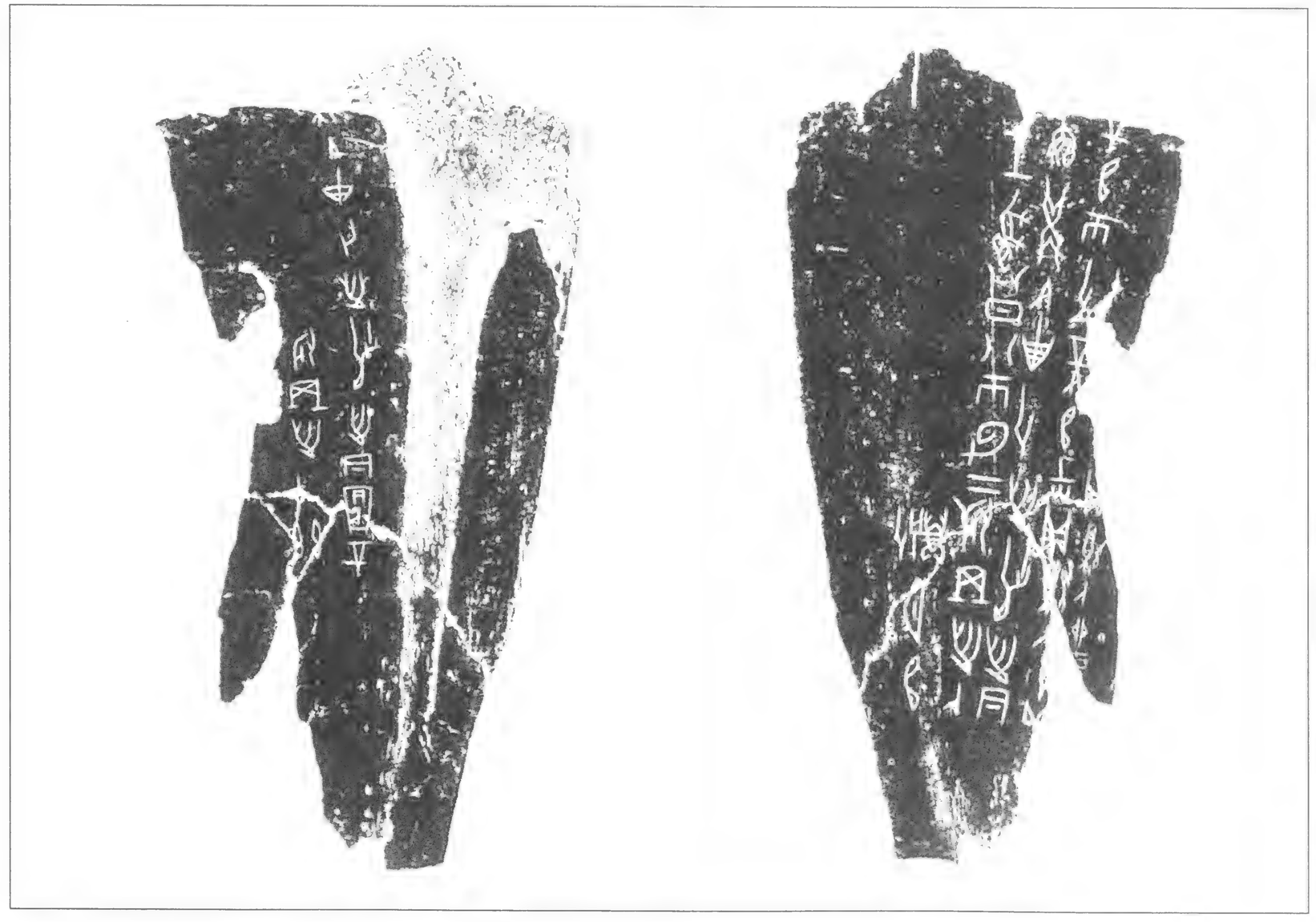
句　羅振玉云：「說文解字：句气也。逐安說亡人爲句。古金文亦作，與卜辭同，與逐安說亦合」（考釋中）。卜辭通纂別一・一郭釋：「卜辭屢言『亡𡆥』，猶言亡害也，與『亡尤』『亡𡆥』同例」。甲骨文：

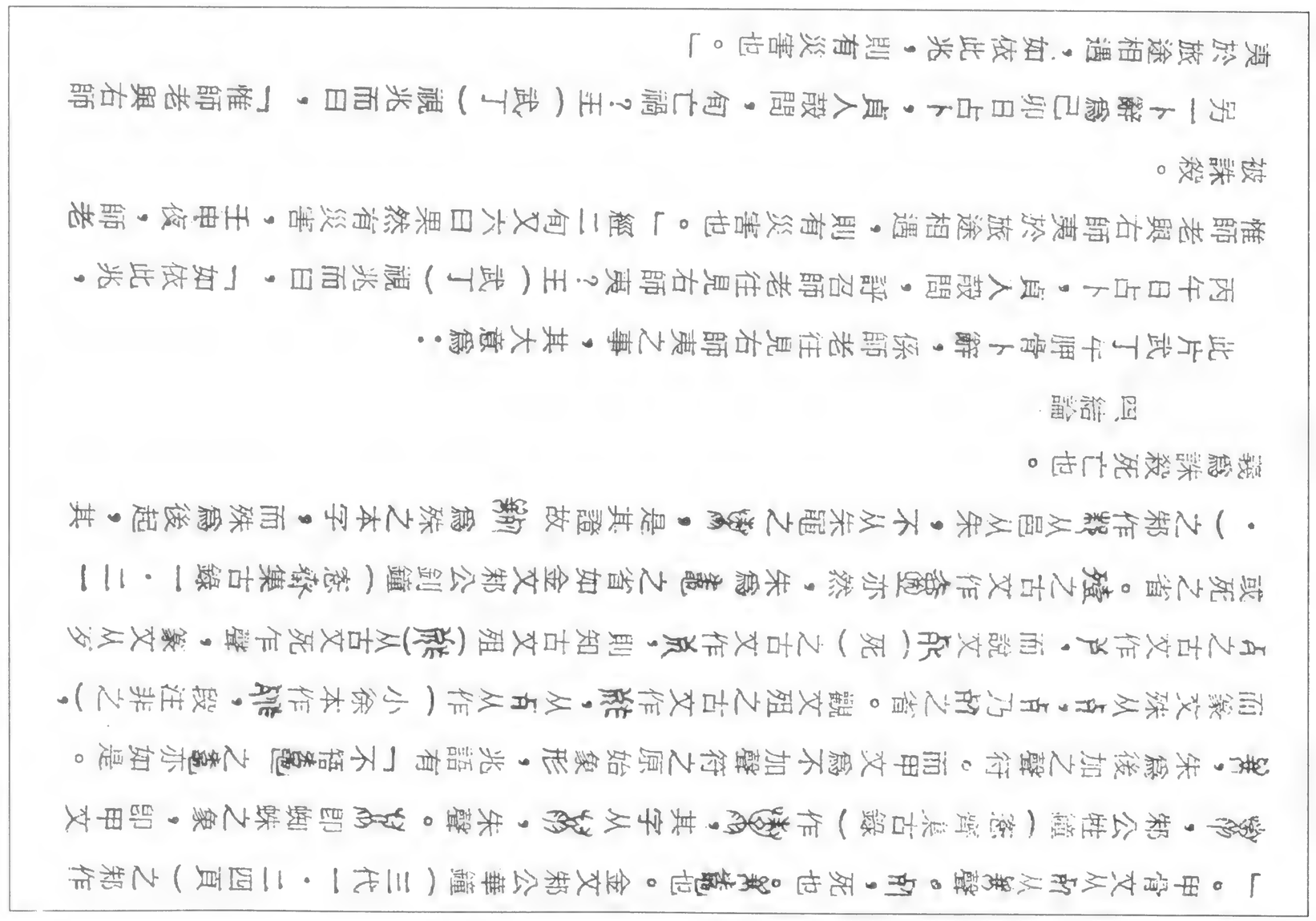
癸酉卜，㱿貞：旬亡𡆥？王二日：「𡆥，出希，出夢，五日丁丑，王嬪中丁𠂤，在宦阜，十月





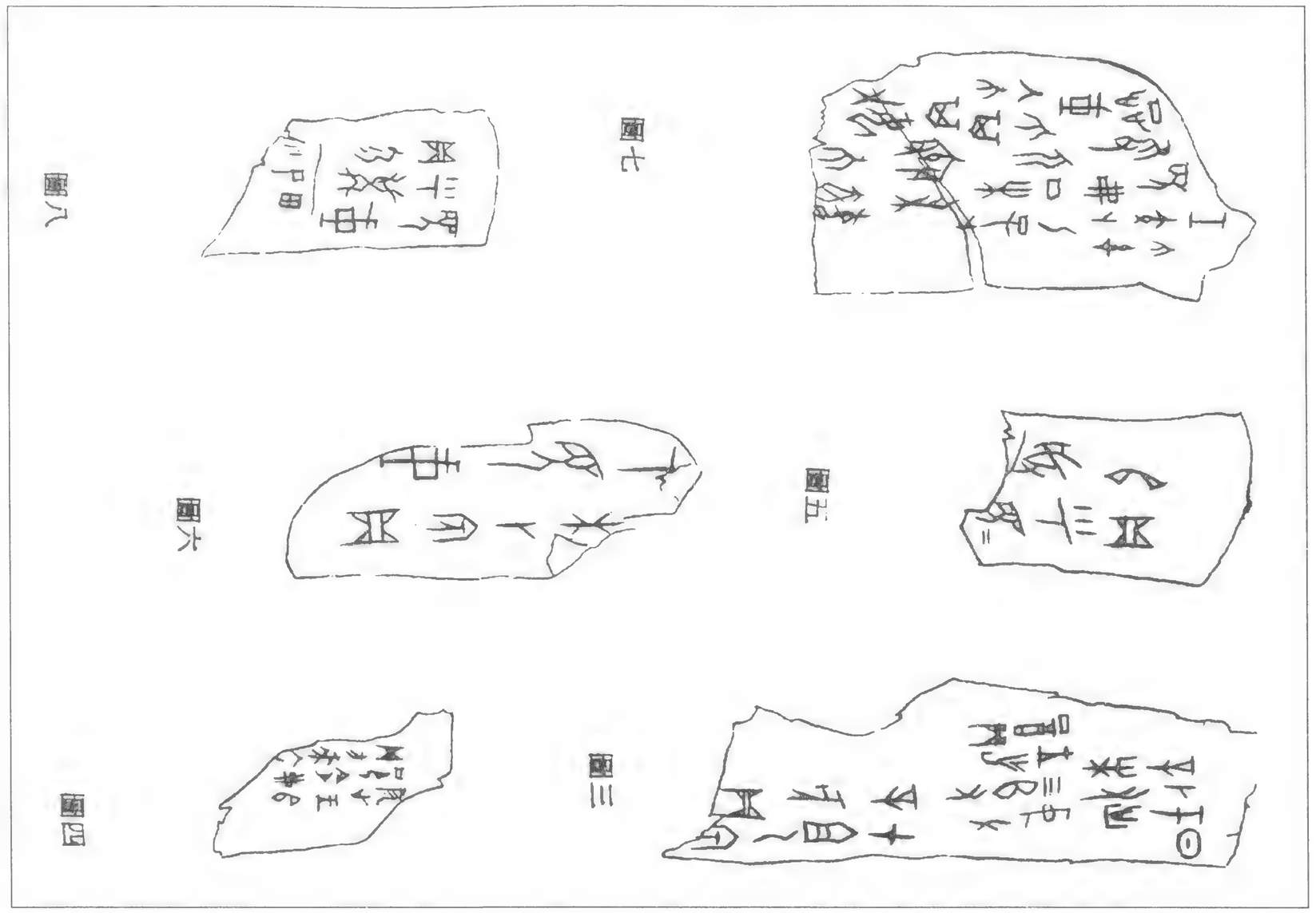


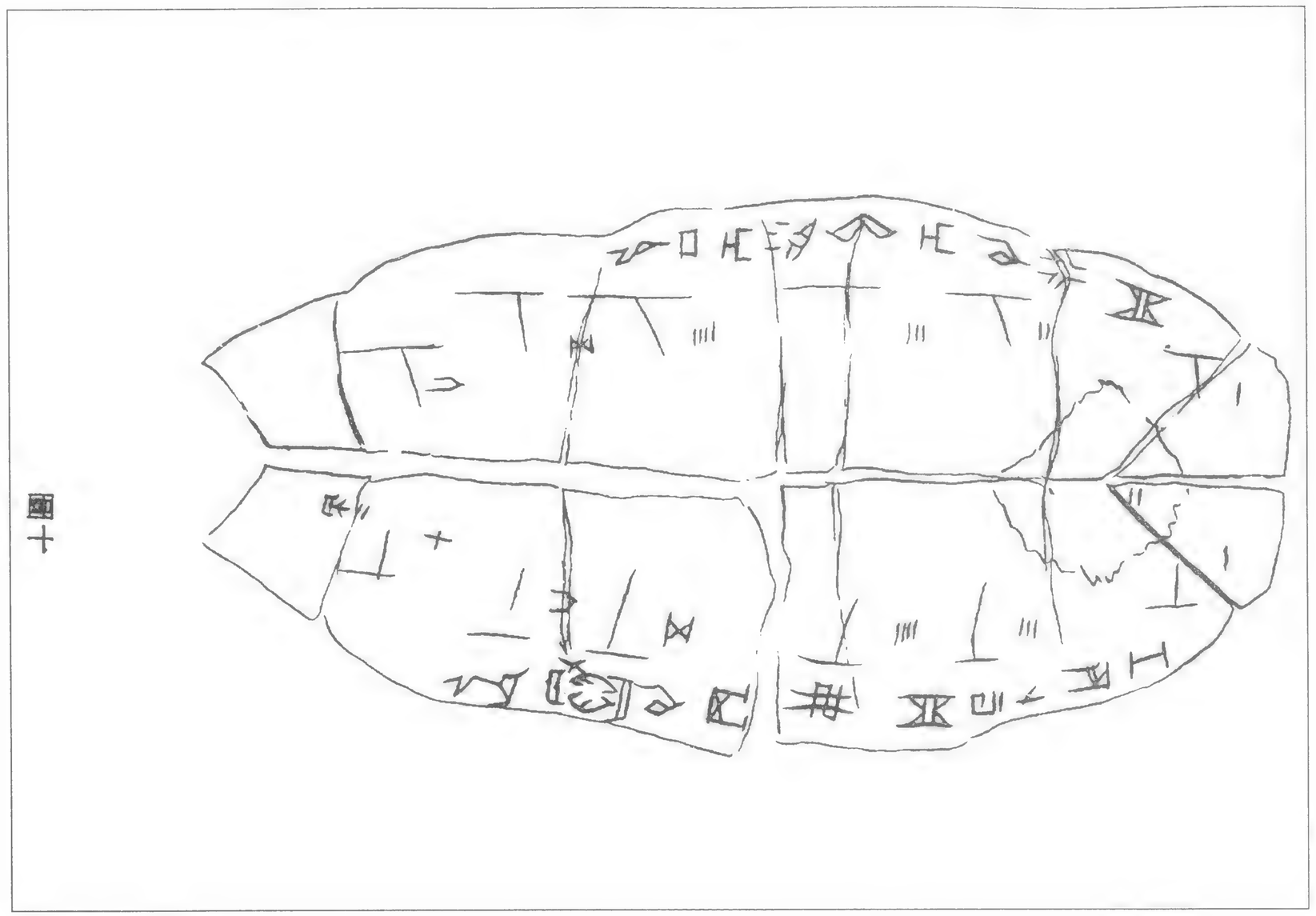


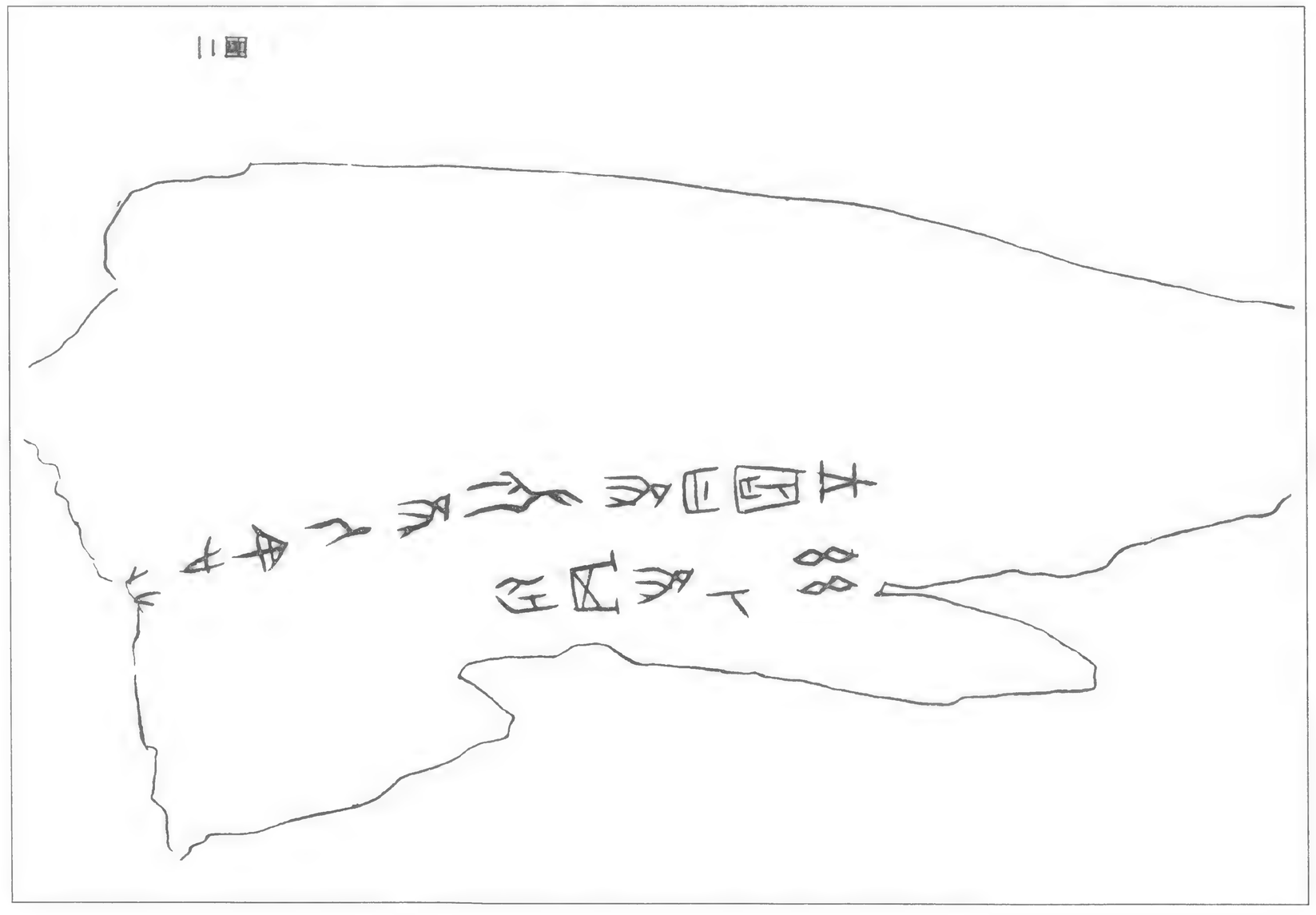
辛。甲骨文从卯从㚔聲。卯，死也。㚔亦死也。金文邾公華鐘（三代一・二四頁）之邾作㚔，邾公牼鐘（憲齋集古錄）作㚔，其字从㚔聲。朱聲。卯即蜘蛛之象，即甲文㚔字，朱為後加聲符之原始象形，兆語有「不悟蟲之蟲亦如是。

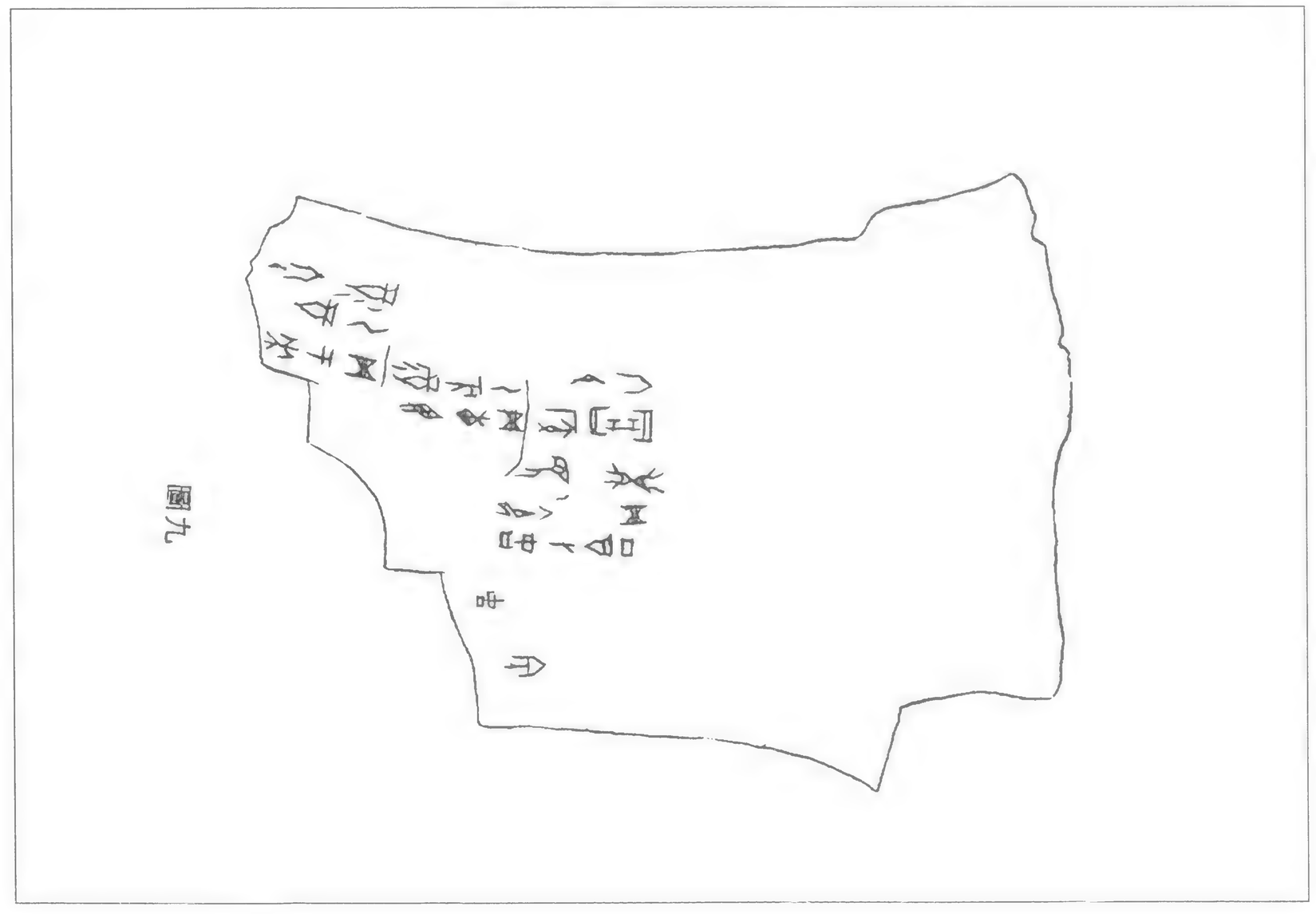
㚔，朱為後加聲符之原始象形，兆語有「不悟蟲之蟲亦如是。

而豕文殊从㚔，卯乃卯之省。觀文殂之古文作㚔，从卯从㚔聲。卯，死也。㚔亦死也。金文邾公華鐘（三代一・二四頁）之邾作㚔，邾公牼鐘（憲齋集古錄）作㚔，其字从㚔聲。朱聲。卯即蜘蛛之象，即甲文㚔字







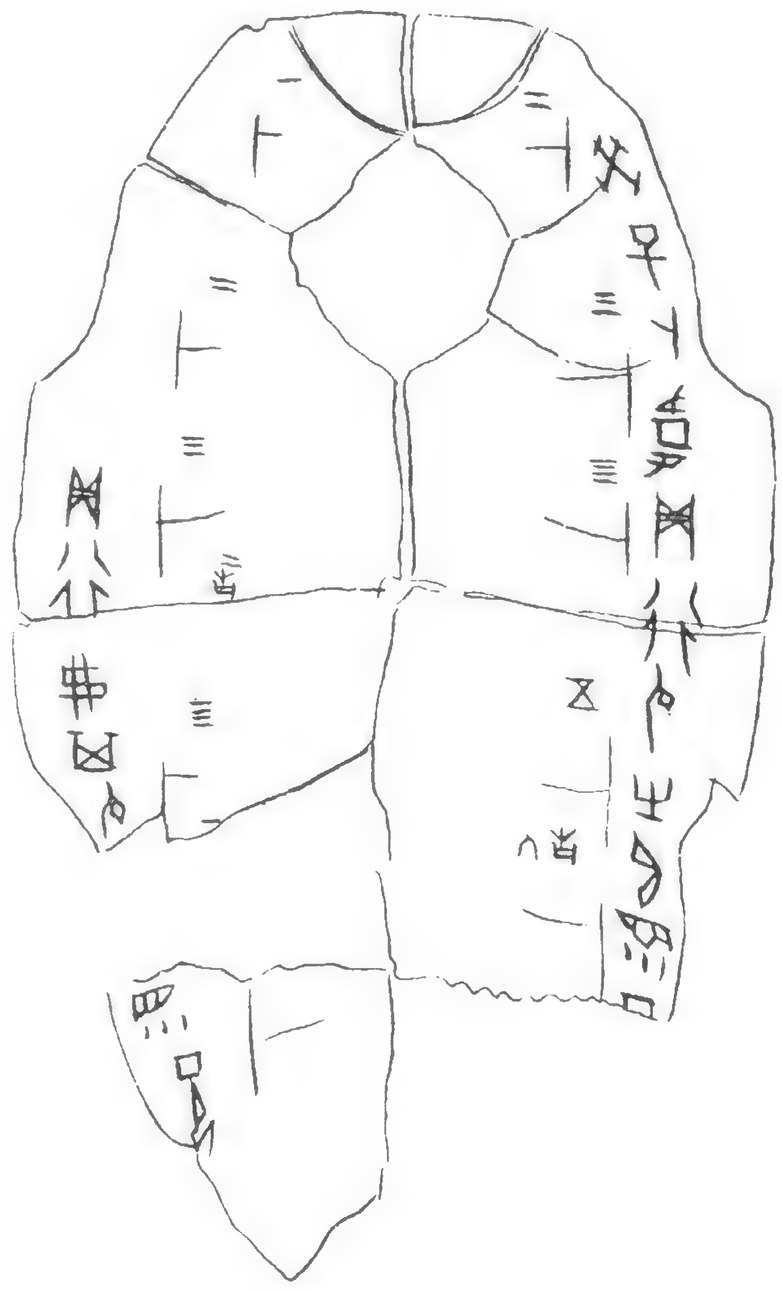




圖十三

圖十四

圖十二



圖十一

安阳新出土的牛胛骨及其刻辞

郭沫若

一、卜骨出土情况的报告

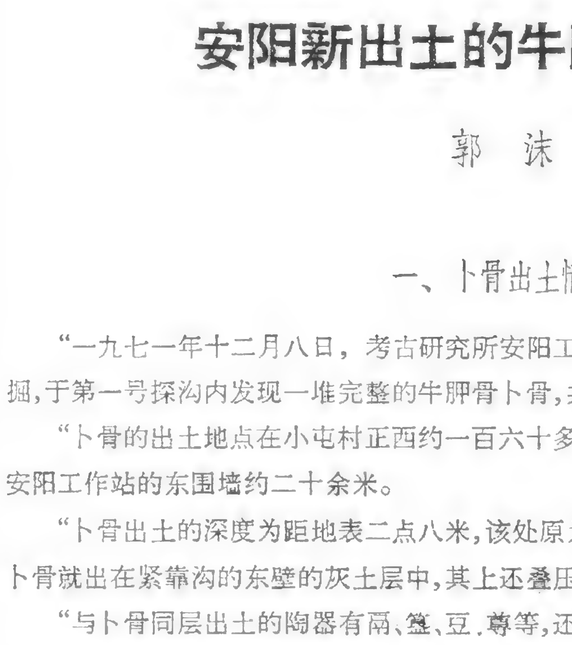
“一九七一年十二月八日，考古研究所安阳工作队在小屯西地殷墟重点保护区内进行发掘，于第一号探沟内发现一堆完整的牛胛骨卜骨，共二十一枚，其中有刻辞的凡十枚。

“卜骨的出土地点在小屯村正西约一百六十多米，北去洹河约六百多米，西距考古研究所安阳工作站的东围墙约二十余米。

“卜骨出土的深度为距地表二点八米，该处原为殷代的一条南北向的大沟，沟内填满灰土，卜骨就出在紧靠沟的东壁的灰土层中，其上还叠压着四层殷代晚期的堆积层。

“与卜骨同层出土的陶器有鬲、簋、豆、尊等，还有釉陶片和骨料。从器形看来，陶器的年代大约属于殷代（盘庚迁殷以后）晚期的前半叶。

“这二十一枚卜骨重叠着堆放在一起，井然有序，骨臼大多向东，只有三枚向北。叠压的情况大致分为三组：西南一组三枚，东南一组六枚，北面一组十二枚（图一；图版壹）。



图一　卜骨出土时的叠压情形

“这些卜骨不是挖坑埋藏的。因为没有发现任何坑穴的痕迹。估计它们被整齐地放在灰土上以后，又用灰土覆盖起来。

“卜骨都经过整治，背面的骨脊被锉平，骨臼角被锯除。卜骨只有凿，无钻，有灼，而且正反两面都有凿、灼。

“在清理过程中，每枚卜骨都编号、记录，编号由西南一组起，其次为东南一组，然后为北面一组，每组的卜骨都按自上而下的顺序。西南一组三枚，编为一至三号；东南一组六枚，编为四至九号；北面一组十二枚，编为十至二十一号。十枚有刻辞的卜骨的编号分别为四号、五号、六号、七号、八号、九号、十二号、十四号、十五号、十八号。



圖十八



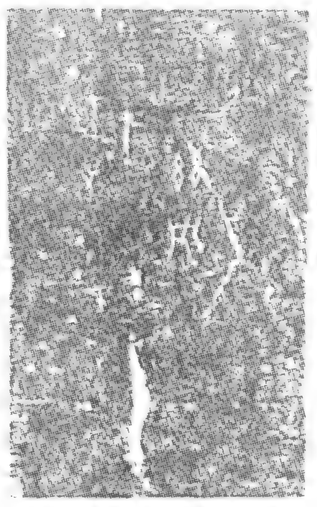
圖十五



圖十七

圖十六

（原載《中國文字》第三十八册，一九七〇年十二月）



图二　第十八号刻辞卜骨的残文(原大)

"御臣,父乙豚,子豚,母壬豚。
御鷹,丙鼎犬,丁豚。祖庚豚,父乙豚,子豚。"

(二) 原标号第六(图六):

"御𠂤日丙豕,又𢦏丁妣豕。
又妣戊豕,又父乙豚。"

(三) 原标号第十二(图七;图版贰,2):

"御牧,于妣乙𤔔豕,妣癸彘,妣丁豕,妣乙豕豕。
𠂤妣丁……
御众,于祖丁牛,妣癸𤔔豕。
御祖癸豕,祖乙彘,祖戊豕豕。
𠂤[illegible],父乙豕,妣壬豚,兄乙豚,𠂤□;
兄甲豚,父庚犬。"

(四) 原标号第十四(图八;图版贰,1):

"御父乙羊,御母壬五豚,兄乙犬,
𠂤御父甲羊,又御父庚羊,
𠂤御于父乙羊,于又妣壬豚。"("于又"殆颠倒。)

"御"凡十一见,其中单言"御"的是用字义;所谓"御臣""御鷹""御牧""御众"的"御"则是治字义,即是整顿、料理之意。"牧"和"众"是从事生产的劳动者,都是被统治的奴隶,"众"主要是农民。"鷹"或作豸,是莫须有的一种怪兽——"解鷹"的省称。《说文》"解鷹,兽也,似山牛,一角,古者决讼令触不直者"。盖古时奴隶主于判处罪状时,将牛角去其一,以神乎其事。故后代司法官所戴之冠名"解鷹冠"。鷹字音读如宰,在此即读为宰,当是执法小吏。"臣""鷹"同是管理"牧""众"的统治者的爪牙。值得注意的是:"臣""鷹"合刻在一枚,"牧""众"合刻在另一枚,这里显明地有阶级的划分,奴隶制度是相当森严的。

"丙鼎犬,丁豚"("丙"字上端多一横划,盖刻损。):"丙"与"丁"不是日期,是所祭的对象,但都没有注明辈分和性别,不知道是祖、是父、是兄、是子,也不知道是妣、是母。可能是刻辞时疏忽了。"鼎犬"当是以鼎盛犬。

"吴日丙":"吴"字卜辞屡见,旧不识。案在此当是兄之异文。兄字乃侧面形,"吴"乃正面形。"𢦏"乃古投字,《说文》"𢦏遥击也,古文投如此。"(依纽树玉校正。)"𢦏丁妣豕"谓祀妣丁之豕乃槌杀之。卜辞有"𢦏一人","𢦏二人"之例(前见《殷虚书契前编》一·三五·六;后见《战后京津新获甲骨集》五〇八〇),亦谓以人为牲,槌击而死。

两"𤔔豕"字,原文作[illegible],在卜辞中多见,旧未能识。今案卜辞中有从此之字作[illegible],我于一九三七年春纂述《殷契粹编》时,根据周恭王时《趞曹鼎》"王射于射庐"字作[illegible],释定为卢,以为"乃鑪之初文,下象鑪形,上从虍声也。"(粹一〇九)然于[illegible]字亦未能释。其实[illegible]既象鑪形,即古鑪字。要这才真是"鑪之初文"。今隶定此字为"𤔔"。《说文》"卢饭器也",故"𤔔豕"犹言"鼎犬"。

"这十枚刻辞卜骨,除了刻辞以外,还有二个现象需要说明。第一,卜辞中的'豕'、'豚'、'牛'、'羊'、'犬'等字,大都在字首削去一二笔,形成明显的斑痕,尤以第十二号卜骨最为明显,很可能是含有某种意义。第二,有的卜骨在刻辞以后复又刮去,如第十八号卜骨在'兹用'的左侧,原有一行刻辞,刮去后残存些字划,第八号卜骨在一个'贞'字下也是这样;第五号、七号、九号卜骨各存一个'吉'字,在'吉'字的左侧原来也有刻辞,但都被刮去,第十五号卜骨也只有一个'三'字,但卜骨上未见刮削的痕迹。此外,第十一号、十三号、二十号卜骨原来也有刻辞,但全被刮去,不剩一字。"

二、卜用三骨的启示

卜骨出土情况如上述。就卜骨所在地位和枚数的分布看来,可以得到一些启示。

骨臼大多东向,只有三枚向北,这向北的三枚可以想见是受到上层的积压而转移了地位。换句话说,就是二十一枚卜骨骨臼原本一律东向。

卜骨分为三组,西南一组三枚,东南一组六枚,北面一组十二枚。三、六、十二,是以三为它们的公约数。这很值得注意。一九三三年初,我纂述《卜辞通纂》,得见何叙甫所藏甲骨文拓片中有"习一卜""习二卜"二辞(见《通纂》别录一,何十二片),当时我曾经有所拟议:

"《书·金縢》'乃卜三龟,一习吉'。……《论衡·知实篇》及《死伪篇》皆云'乃卜三龟,三龟皆吉'。疑古人以三龟为一习,每卜用三龟。(《洪范》'三人占'亦一证据。)一卜不吉,则再用三龟。其用骨者当亦同然。言'习一卜''习二卜'者疑前后共卜六骨也。"

这一拟议距今已近四十年,由此次二十一枚卜骨出土情况看来,我四十年前的揣测,似乎已由出土实物而得到证明了。即是卜骨或卜龟甲是以三枚为一组,一次卜用三龟或三骨,卜毕后储存,在当初想必有帛以裹之,有绳以缠之,有箧以藏之,年代既久,帛朽、绳烂、箧毁,化为灰土,便仅剩下甲与骨。

当然,这次出土的卜骨,尽管是三组,每组都是以三为公约数,但也有可能是出于偶然。因此,我还得把希望寄托于今后的出土情况上,尤其是关于龟甲的出土情况上。如果再有得三两次牛胛与龟甲以同样的情况出土,那么,我的拟议便毫无疑问可以成为定论了。

三、刻辞的考释

二十一枚牛胛骨中有十枚有刻辞,但其中六枚是把原有刻辞削去后所剩下的残文,有一枚(原标号十八)剩字较多,在"兹用"二字外还可看出"丐又,丙申其又"二辞的痕迹(图二)。就其字迹看来,都比较晚。大率当于武乙、文丁时期。估计是将用过的卜骨加以整治,再行使用过。骨上卜穴仅有凿有灼而无钻,亦一证明,因骨已剔薄,无需施钻,但后来史官存档时,以其今古混淆,故将较晚的刻辞刮去了。

刻辞颇长者四枚,其文考释如下。

(一) 原标号第四(图五):

前·六·二·二(粹·四一四)	左	口寅	右
粹·四一三	(左)	丁卯	中
汉城·一	(左)	癸酉	右
前·六·二·三(龟·二·二·一二)	中	丁酉	中
粹·四一一	中	癸卯(二例)	左
粹·四一五	中	癸卯	右
筠人·三〇(续·一·五二·二)	右	丁未	左
契·一〇	右	己未(二例)	左
甲·三三六一	右	己未	中

又甲骨中有两版以上同文之例,每版龟甲或牛胛骨卜兆旁边刻着序数,就其卜兆序数看来,以一组三卜者为多,三卜以上亦有不少三倍数之例。

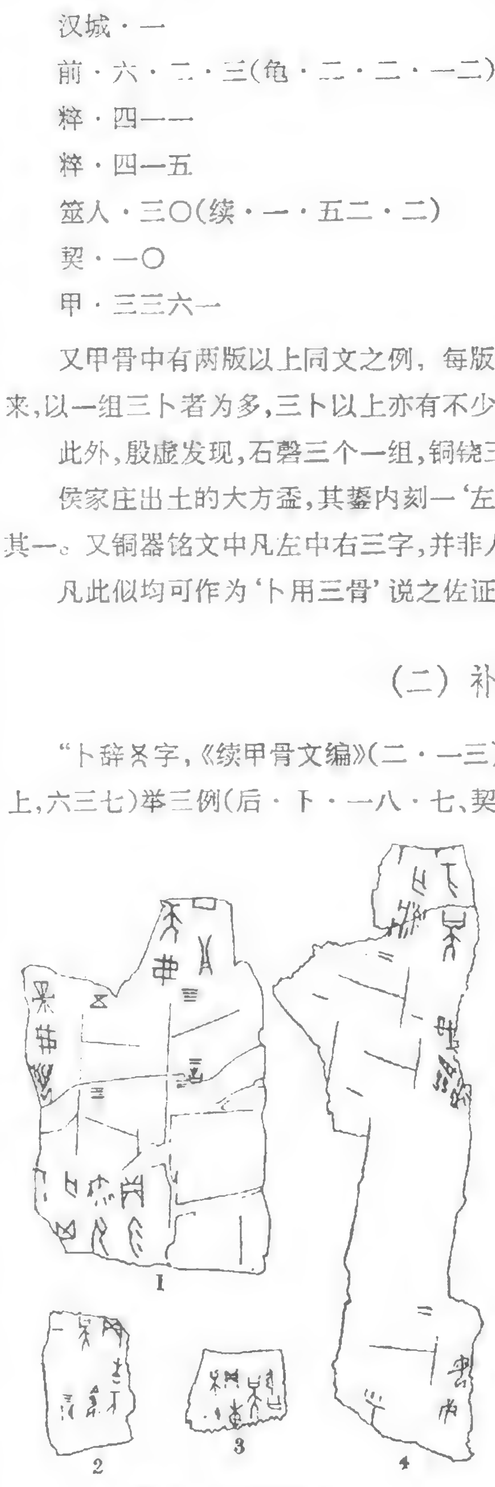
此外,殷虚发现,石磬三个一组,铜铙三个一组。

侯家庄出土的大方盉,其鋬内刻一'左'字,论者或以为盉原有左中右三个,本为一组,此乃其一。又铜器铭文中凡左中右三字,并非人名地名,乃左中右三个一组之铜器。

凡此似均可作为'卜用三骨'说之佐证。"

(二) 补充[illegible]字的刻辞四例

"卜辞[illegible]字,《续甲骨文编》(二·一三)举一例(乙·七四三六),《甲骨文编》重编本(附录上,六三七)举三例(后·下·一八·七、契·六八二、乙·七四三六)。此外,我还找到了一条(乙·六八五七),又乙·七四三六仅残存一字,以乙·一九七四与之拼合,则成了全文。兹摹出卜辞,一并列之如下:



图三　[illegible]字的刻辞(2/3)

1. 贞亥[illegible]亡𡆥。(乙·一九七四与乙·七四三六)(图三,4)

2. 贞[illegible]𢦏[illegible]凡[illegible]。(乙·六八五七)(图三,1)

3. 贞宙(维)亥[illegible]令。十三月。(后·下·一八·七)(图三,2)

4. □未卜,□,贞[illegible]□[illegible]□□。(契·六八二)(图三,3)

观此,则'亥[illegible]'似为武丁时一个人名。一、二两版,虽不相连接,但似为一个龟版之左右两侧,贞问亥[illegible]亡𡆥(无疾)出𡆥(有疾)之反正两面。就字体看来,四条卜辞,都应该属于武丁时期。

四、牛胛骨的年代

据上《出土情况的报告》,言同出的陶器"从器形看来,……大约属于殷代晚期的前半叶"。说得更准确一点,盖谓陶器的制作属于廪辛、康丁时代或更晚一点的武乙时代。

有的同志从字形上来初步判断,据说刻辞可能是廪辛、康丁时期的东西。这样,便和从陶器上的定年推断颇相接近。

但我注意到了刻辞中所祭的祖、父、兄、子和妣、母。祖、兄、子和妣、母,都无法据以定年,特别是祖与妣,祖父以上均为祖,祖母以上均为妣。但父是可以作为定年的依据的。刻辞中"父乙"出现了六次,"父庚"出现了两次,"父甲"出现了一次。据此可知:留下了这些刻辞的殷王至少有父乙、父庚、父甲三位诸父。这和武丁的情况颇相符。武丁之前的四位殷王是兄弟相及的,即阳甲、盘庚、小辛、小乙四位弟兄。小乙是武丁的亲生父亲,故刻辞中出现六次。出现两次的父庚当即盘庚,出现一次的父甲当即阳甲,就只有小辛没有出现。此外,丙、丁、戊、己、壬、癸的父号也未出现。因此,我觉得这一批牛胛骨应该是武丁时代的遗物。

上述看法,和从字形上来的初步定年不一致。但我觉得十枚牛胛骨上的刻辞,显然有早晚混淆的迹象。上面已经说过,"兹用"及二残辞,都比较晚,仔细注视,可以辨别其先后,即是刻辞中有较早与较晚的东西,较晚的被刮去了,尚有少数残存,容易致混。故除"兹用"等字外,我认为上面所考释的四枚卜骨刻辞,都是武丁时代的。

上述看法,和从陶器上来的约略定年也不一致。但这个矛盾更容易解决,因为陶器与牛胛骨即使同时被埋入土内,陶器也尽可以晚些。这犹如祖父一代和孙子一代同被埋入一坑而已。何况刻辞中有较晚的东西被刮去,正足证明埋藏之晚。

因此,我提出我的这个年代观来,以作为攻错的对象。如果我的看法不正确,尽可以随时加以修改。

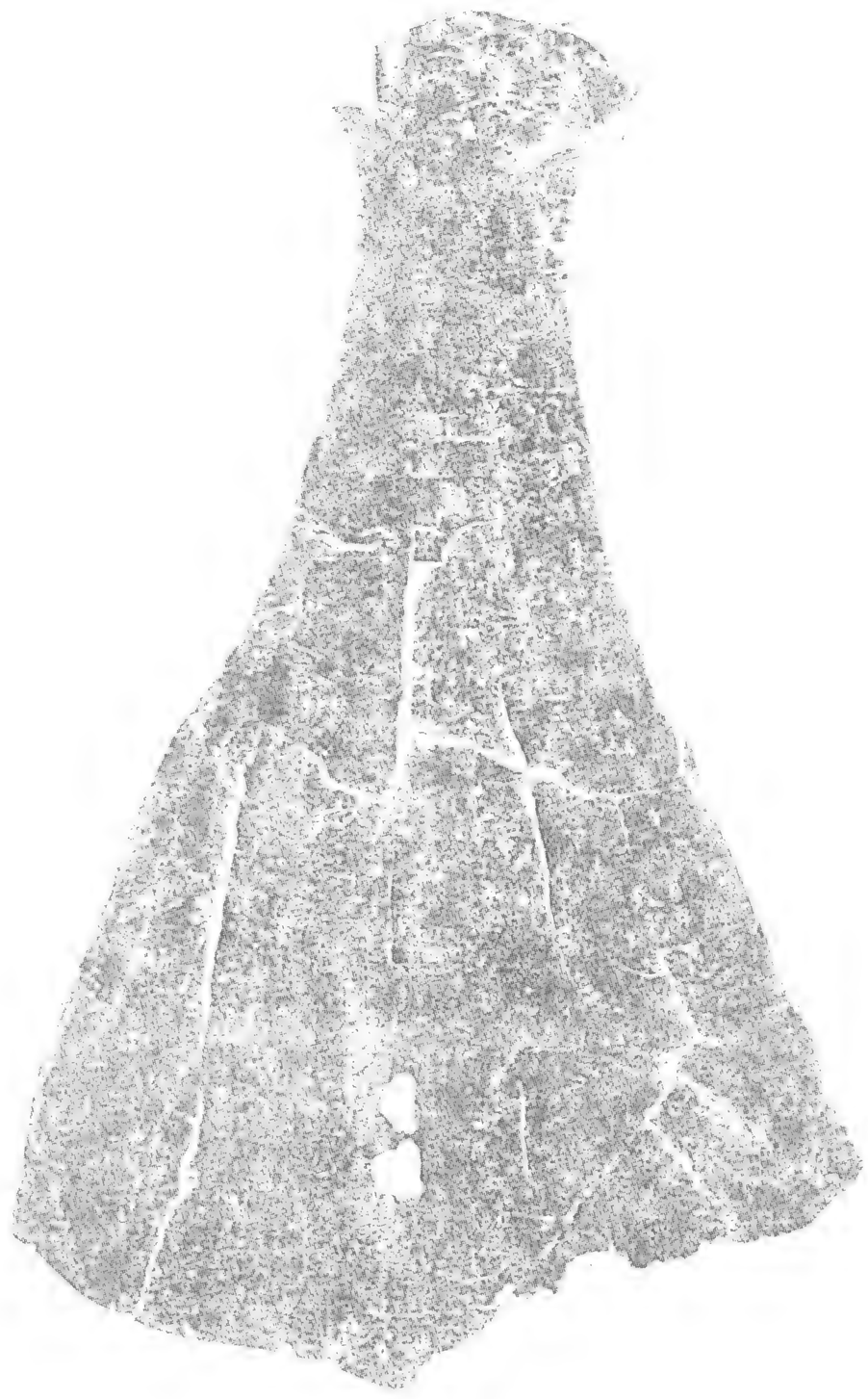
一九七二年一月十三日

追　　記

文章写好后,经过胡厚宣同志看过。他为我提供了"卜用三骨"的一些佐证,和关于[illegible]字的刻辞四条。现在我把他的来信摘录如下。

(一) 关于"卜用三骨"的佐证

"甲骨中有所谓牛胛骨《龟甲兽骨刻辞》者,今发现共九例。末署三左三中三右,皆以左中右为一组。有人按其七个日期,每日为左中右一组,共排为七组二十一例。



图五　第四号刻辞卜骨（1/2）

㚔字当以释兄为妥。”

× × × ×

沫若案：兄字古可假为况或贶。故知古音读如匡，即筐之初文，象形。此种人，口鼻向上，古人以为巫祝，故祝字从之。

《左传(僖公二十一年)》：“夏大旱，公欲焚巫筐”。杜预注云：“巫筐，女巫也，主祈祷请雨者。或以为筐非巫也，瘠病之人，其鼻上向。俗谓天哀其病，恐雨入其鼻，故为之旱。是以公欲焚之。”

《礼记·檀弓下》：“岁旱，穆公召县子而问然，曰：‘天久不雨，吾欲暴尪，而(尔)奚若?’曰：‘天久不雨，而暴人之疾子，虐，毋乃不可与?’‘然则，吾欲暴巫，而(尔)奚若?’曰：‘天则不雨，而望之愚妇人，于以求之，毋乃已疏乎?’”郑玄注云：“尪者面向天，觊天哀而雨之。”又云：“巫主接神，亦觊天哀而雨之。”

郑注与杜注所引“俗谓”似相异而实同。盖“雨入其鼻”其害小，大旱被暴或被焚其害大，天既哀其小害，想将哀其大害。

古人虽以尪为巫，但尪者不必尽为巫，巫者也不必尽为尪。“尪者面向天”、“鼻上向”，故尪字左旁从𠙵，即向上之二鼻孔。鼻既“上向”，面既“向天”，则口亦向上向天，兄字正象其形。

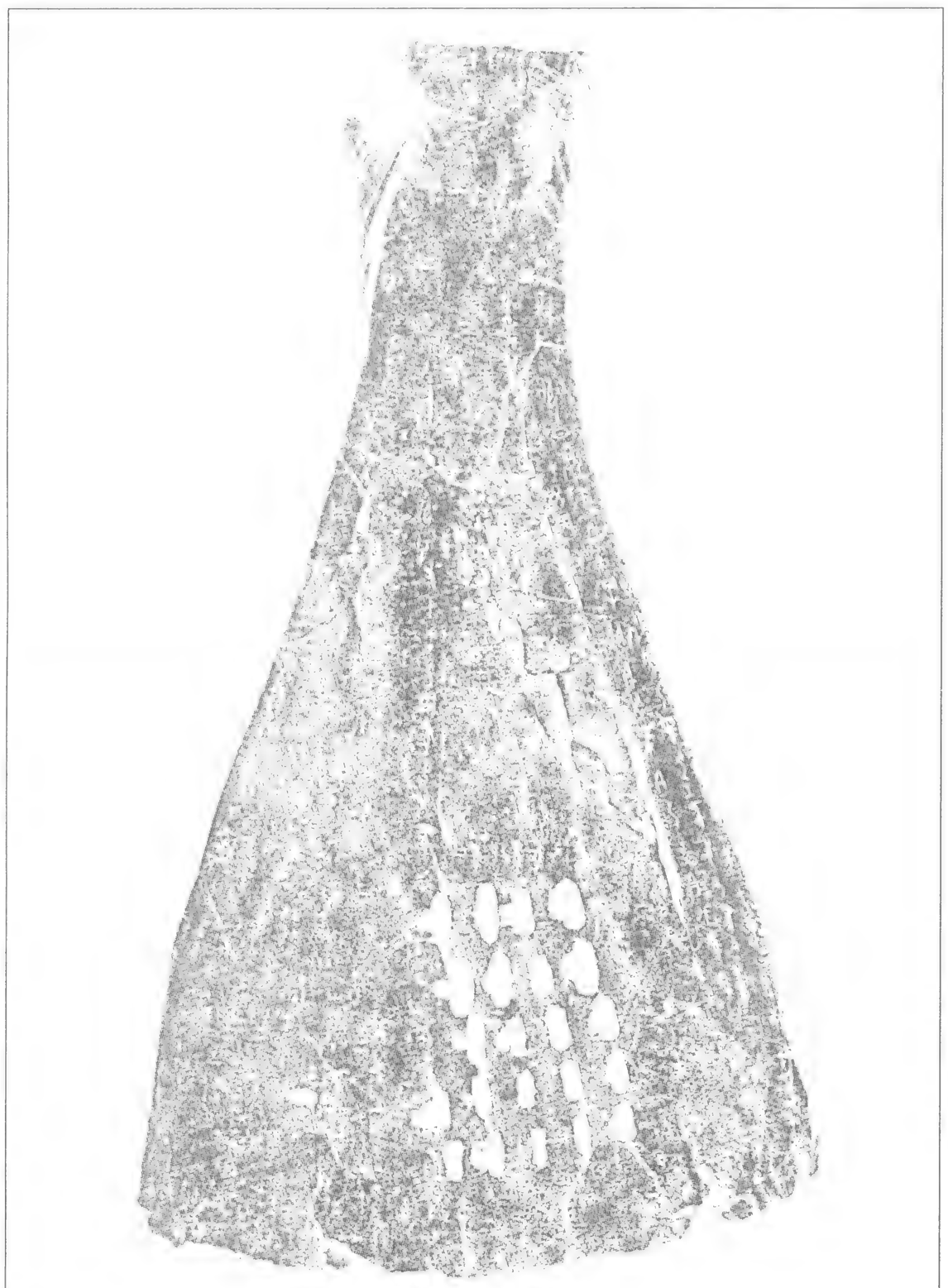
兄字，被假为兄弟字，故别造一尪字，形声。金文中兄弟字又多作𠂤，其实亦即是尪字。《一切经音义》卷十一“尪古文从坐作𡰥，同。”可知尪实即𡰥字之变。



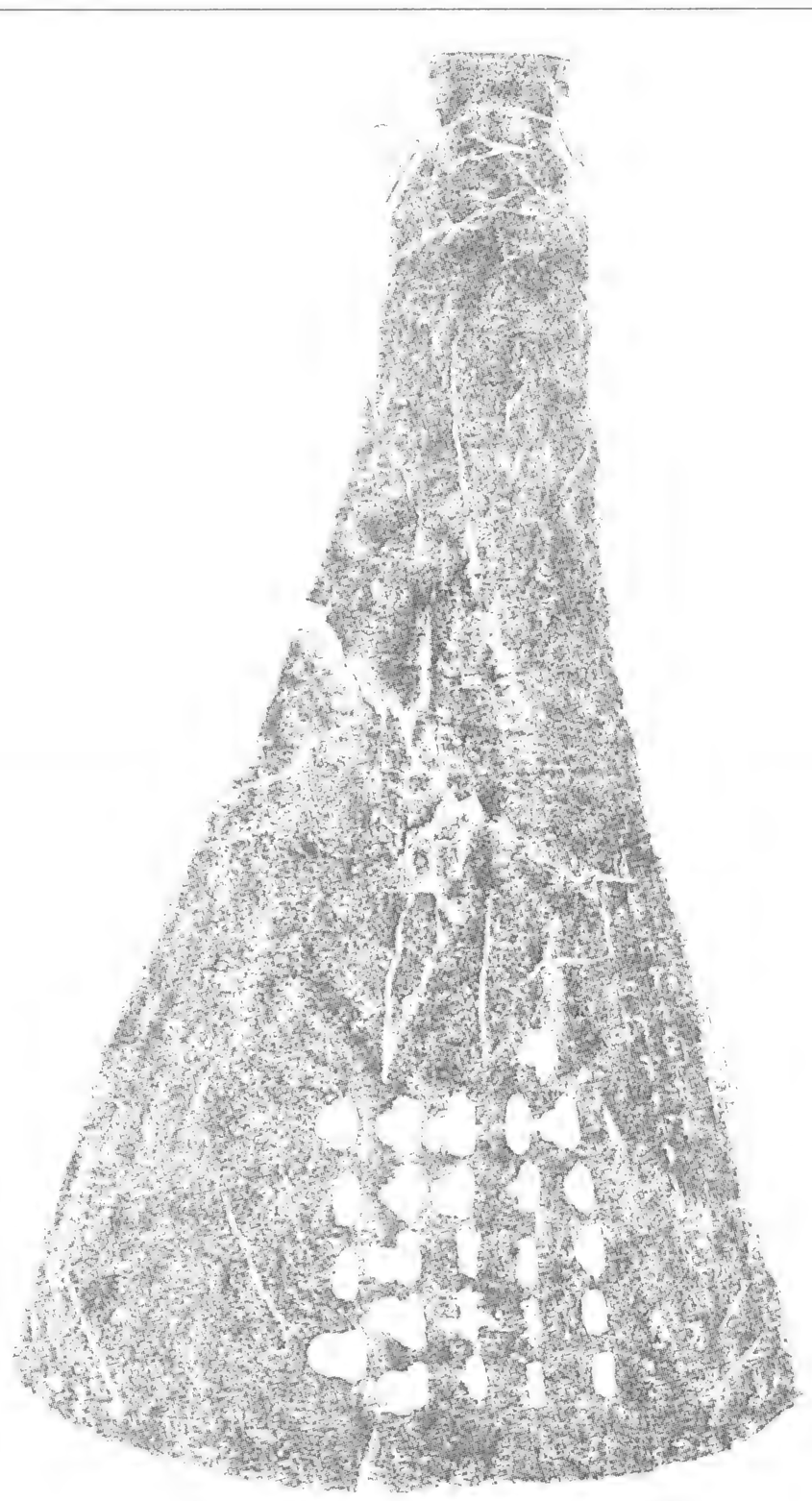
图四　金文中㚔字的图形文字(2/3)
1.父己尊　2.㚔鼎
3.觚　4.鼎

今之㚔字，亦即是尪。金文中有此字的图形文字四个，两个在口中有齿(图四，1、2)，两个在口旁有须(图四，3、4)，形如鬼怪，当是古之为巫祝者的族徽。但“㚔口丙”当为“兄日丙”，“亥㚔”则当为“亥尪”，武丁时的巫祝。殷代巫祝，其职位颇尊显，史籍中有巫阳、巫彭、巫咸、巫贤诸名人，故其有疾或无疾竟为之卜问。

一九七二年二月九日

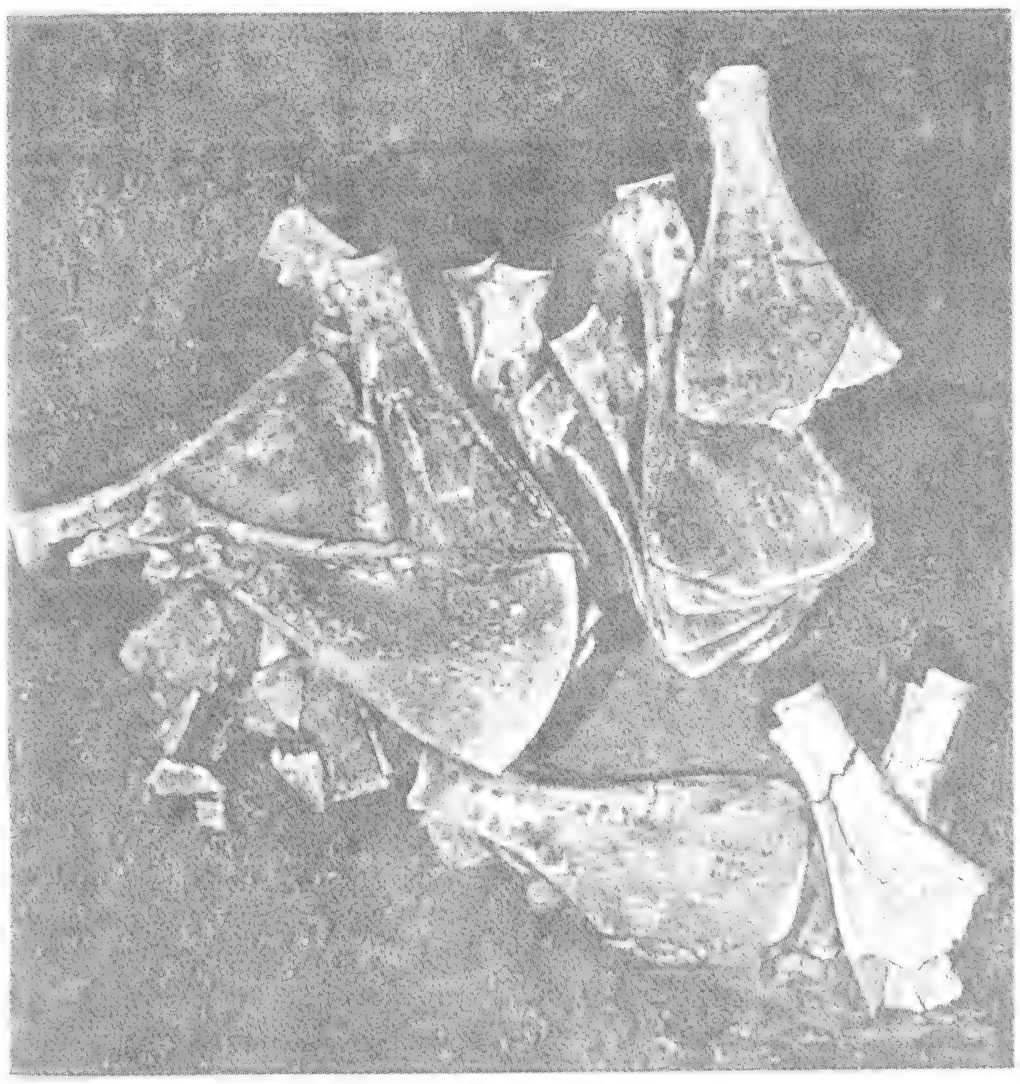


图七　第十二号刻辞卜骨（1/2）

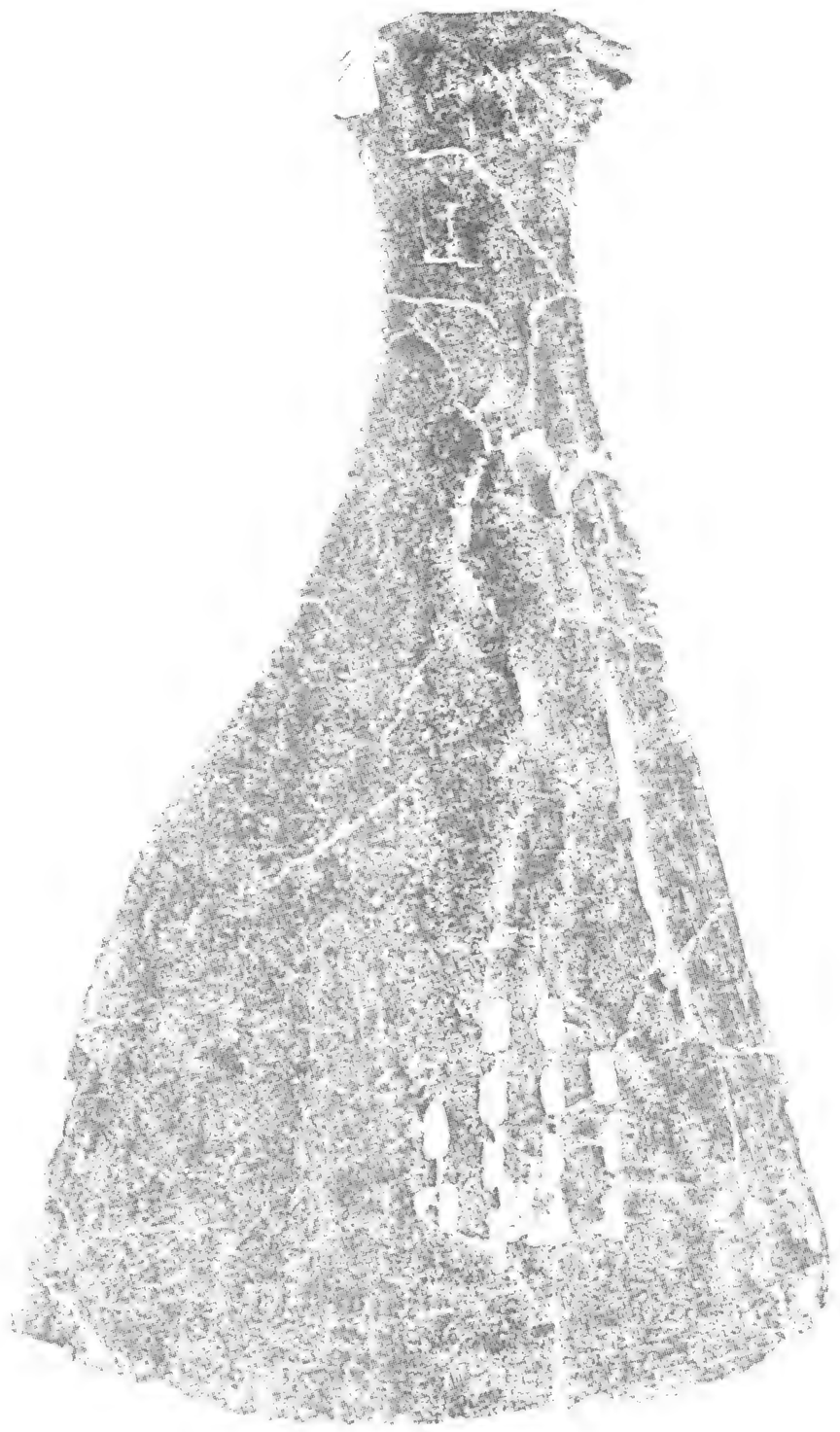


图六　第六号刻辞卜骨（1/2）

图 版 壹



安阳小屯刻辞卜骨的出土情况



图八　第十四号刻辞卜骨 (1/2)

讀《安阳新出土的牛胛骨及其刻辭》

裘　錫　圭

读郭沫若同志《安阳新出土的牛胛骨及其刻辞》(《考古》1972 年 2 期)后，有一些不同意见，提出来供同志们参考。

一、关于卜骨时代

这次所出卜骨，18 号骨上遭刮二辞和卜辞旁的"兹用"二字，完全是三、四期甲骨的作风(这里所说的三、四期指康丁、武乙、文丁三朝，廩辛卜辞作风大多与祖甲卜辞接近)。郭沫若同志说它们"大率当于武乙、文丁时期"，是不错的。卜骨出土情况报告中说："第五号、七号、九号卜骨各存一个'吉'字，在'吉'字的左侧原来也有刻辞，但都被刮去。"这种在卜辞旁刻"吉"字的作风，三、四期甲骨上也是常见的。4 号、6 号、12 号、14 号四骨，虽然刻辞形式比较特殊，但如"凰""牧""𠂤""且""匕"等字，都是典型的三、四期字体，跟同出的18号等骨应该是同一时期的东西。但是这几片卜骨上的亲属称谓，跟一般的三、四期卜辞的确不合，这是郭沫若同志不同意把它们定为三、四期卜骨的主要原因。这一点我觉得也是可以得到解释的。

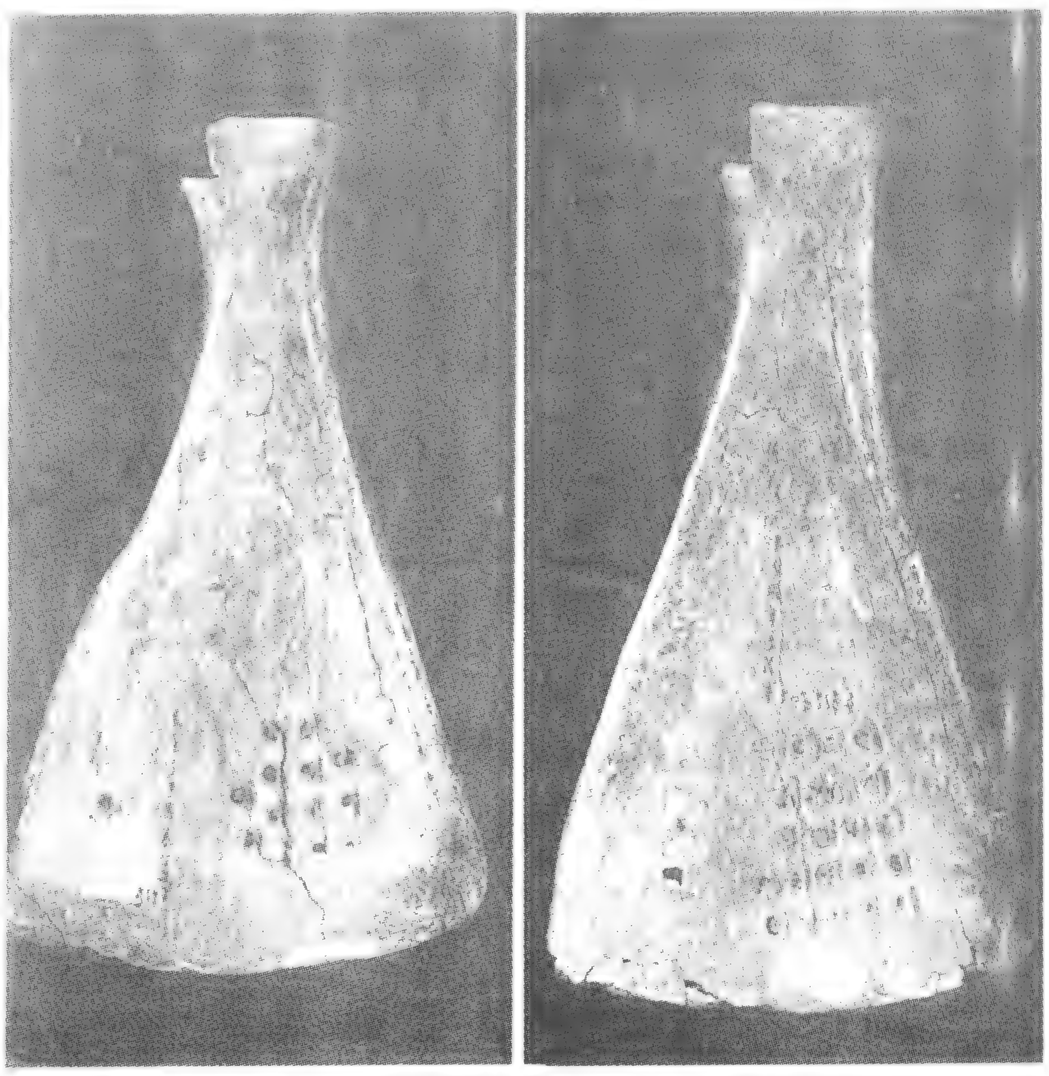
殷虚出土的甲骨绝大部分当然是商王朝太卜之官的遗物，但也有一些是王室或其他贵族私家的占卜遗物。贝塚茂树曾指出，在武丁时代除了殷王朝公家的占卜机关外，还存在王族私家的占卜机关和属于多子族的私家的占卜机关，其卜辞的内容及形式都各有特点(见《中国古代史学的发展》第一部，第二、三节，1946 年弘文堂出版)。陈梦家也认为武丁时代除"王室正统的卜辞"外，还有其他种类的卜辞，甚至可能有"嫔妃所作"的卜辞(《殷虚卜辞综述》166、167 页)。这些非正统的卜辞中所见的称谓，往往与正统卜辞不同。例如陈梦家所谓"自组卜辞"(贝塚茂树以为王族卜辞)中有父甲、父乙、父戊、父庚、父辛、父癸等称谓(《综述》146 页)，不但跟一般武丁卜辞不合，就是跟其他各期的正统卜辞也无一相合。陈梦家以为正统派的卜辞"所祭的亲属称谓多限于即王位的父祖母妣，而非正统的则扩张至未即王位的诸父诸祖诸兄诸子"(《综述》158 页)。这一意见大概是对的。如果确实存在属于王室以外的其他贵族的卜辞的话，其亲属称谓当然更不能与正统卜辞一致了。这次所出的 4 号、6 号等四骨，卜辞的辞例、行款都比较特殊，应该是三、四期的非正统卜辞，所以其亲属称谓与正统的三、四期卜辞不能相合。

二、关于习卜

卜辞所见"习一卜""习二卜"之"习"，我以为当与《礼记・曲礼上》"卜筮不相袭"之"袭"同义。袭、习古通。《周礼・地官・胥》"袭其不正者"，郑注"故书袭为习"；《左传・襄公十三年》"岁习其祥"，《礼记・表记》"天子无筮"郑注及《周礼・春官・大卜》正义引《传》文，"习"皆作"袭"；《文选・齐竟陵文宣王行状》"龟谋袭吉"，李善注"袭与习通"，皆其证。郑玄注"卜筮不相袭"曰："卜不吉则又筮，筮不吉则又卜，是渎龟筴也。"可知用不同的方法同卜一事可以叫"袭"。

《卜辞通纂》所录的、有"习一卜""习二

图 版 貳



1. 第十四号刻辞卜骨(约 3/8)　　2. 第十二号刻辞卜骨(约 3/8)

安阳小屯出土的刻辞卜骨

(原载《考古》1972 年第 2 期)

編》1·24·4）“𠂤帚𡆥匕巳二牡”（《前編》1·33·7，二牡疑指一牝一牡），文例与“𠂤臣父乙豚……”等辞相同。“𠂤且癸豕”“𠂤父甲羊”“又𠂤父庚羊”等辞之𠂤，也应指御祭而言。𡆥、又当指御祭时所采取的用牲方法。他辞或言“□戠卜：𠂤奔司，𠂤子𡆥”（《续编》5·6·6），盖谓御子𡆥于奔司而用𠂤祭（甲骨文“𠂤”“又”通用），可与此参证。

12号一辞言“𡆥𡆥父乙豕……”。第一字是“乍”字，《甲骨文编》“乍”字下所收有与此相似者。第二字疑是御疾之御之专文，或𡆥𤰞二字之合文，申论之于下。

甲骨文有𤰞字：

乙亥鼎：𡆥𠂤（否定词，与“勿”相近）𤰞方□

𠂤正（征）方才□

《拾掇》一·415

又有于此字加注鱼字之字：

壬戌卜，狄，鼎：其又（有）来方，亚𢦏其𤰞，王受又（有）又（佑）？

（末四字转在另一侧）

壬戌卜，鼎：弗受又又？

《甲编》3913

这个字象一人抵御另一持杖者的攻击，疑即御之初文。御、鱼古音同声同部，所以字或加注鱼声，与𡆥加注凡声而为𡆥（凤）、𡆥加注昔声而为𡆥（耤）同例。上引卜辞读为“𠂤御方”“其有来方，亚𢦏其御”，文义颇觉妥贴。又《前编》6·6·3一辞云：

鼎：由（读惠，与“唯”相近）帚好乎（呼）𡆥伐？

伐上一字疑即𤰞之变形而加午声者，𡆥伐即御伐。由此形省去支旁，就成卜辞中常见的𠂤字了。这和“𢍏”字省去“𠬜”旁而成“耤”字，是十分类似的。午是𠂤的音符，所以𠂤字可以省作午：

癸未卜：𠂤（午）余于且庚，羊豕艮？

于且戊𠂤余，羊豕艮？

《乙编》4521

上引第一辞的午字显然应该读为𠂤。

12号卜骨的𤰞字，应该看作𤰞与𡆥（疒）的合体字，𤰞当即𤰞的省体。《后编》下11·8一辞云：

鼎：帚好不征𤰞？

末一字为疒身二字的合体字，可以看作疒身之疒的专字，也可以看作疒身二字的合文。《京都大学人文科学研究所藏甲骨文字》3053一辞云：

庚寅卜鼎：由（读惠，与“唯”相近）丁酉洒𣎵？

末一字为伐羌二字的合体字，可以看作伐羌之伐的专字，也可以看作伐羌二字的合文。以上二例，情况与𤰞字相类，所以我怀疑这个字是御疾之御的专字或御疒二字的合文。卜辞或言“乍（作）大𠂤白圃”（《后编》下6·12），或言“乍𠂤，斮（祈）庚不𢦏”（《京都》994），可证御祭可以言“乍”。

四、关于𡆥字

这个字也见于卜辞：

由𠂤𡆥令监□？

《殷契摭佚续编》190

由□𡆥令监凡？

《宁沪》1·500

从文例看当是人名，与见于金文之图形文字者大概属于一族（商代人名往往即其族氏）。郭沫若同志说这个字象人“口旁有须”，甚是。《说文》：“髭，口上须也”。孟鼎有𡆥字，当是在𡆥字上加注此声而成，与前举“凤”“耤”诸字同例。所以这个字应该是髭的象形初文，与吴并非一字。又文中所举“口中有齿”的人形，也不象是吴的异体，可能就是齿的繁文。

注　　释

① 鼋为龟名。《甲骨续存》下·57一辞曰：“□鼎（贞）：𠂤□来？王□隹（唯）来。五□允至，氏（致）龟：鼋八，鼋五百十。三月。”（参阅《综述》图版贰壹所录拓本）鼋和鼋都是龟名。

（原载《考古》1972年第5期）

卜”等辞的卜骨是三、四期的。三、四期卜骨上的卜辞还有说“习龟卜”的：

□习龟卜，又来执用于□

《殷虚卜辞》715

□□卜：习鼋①一卜，五□

《粹编》1550

据此，卜辞所谓习卜当指骨卜和龟卜的相袭。“习一卜”就是说卜问一件事时骨和龟各卜一次，“习二卜”就是骨和龟各卜二次。三、四期卜骨的卜辞还有“习三卜”“习四卜”的：

己□（此条当卜“习一卜”，辞已残）

习二卜？

习三卜？

习四卜？

《战后宁沪新获甲骨集》1·518

如以三骨为一习，习四卜就应共卜十二骨。三、四期卜骨上记卜兆次序的数字，几乎从未见过“五”以上的，一事卜至十二骨恐不可能。

三、关于𠂤字的解释

卜辞的𠂤字，大多数是用作祭名的。这次所出诸骨的𠂤字，从文例上看也应该是祭名，当读为御（繁体为“禦”）。御是御除灾殃的一种祭祀。卜辞或言：

鼎（贞）：𡆥（疾）齿，𠂤于父乙？

《前编》1·25·1

这是因为患牙病而卜问是否举行御祭于父乙。或言：

鼎：𠂤𡆥身于父乙？

《乙编》6344

这是卜问是否御除腹病于父乙。或言：

甲子卜，宁，鼎：𠂤𡆥才𡆥，不从王古？

鼎：其从王古？

壬午卜，宁，鼎：𠂤𡆥于丁？

鼎：于帚（妇）𠂤𡆥？

《甲编》2121

丙辰卜，鼎：𠂤告𡆥𡆥于丁，新𡆥？

戊午卜，鼎：今日至（致）𡆥，𠂤于丁？

□□卜，[鼎]：𠂤𡆥于帚，三宰？五月。

《续编》1·44·6

这是因为𡆥和𡆥有病而卜问是否为他们举行御祭于丁或妇。或言：

甲午卜：王马𡆥骍（葬？）其𠂤（御）于父甲亚？

《甲骨文录》312

这是因为王的马有灾殃而卜问是否举行御祭于父甲亚（“亚”又近于宗、庙）。或言：

辛酉[卜]：𠂤大水于土（社），宰？

《遗珠》835

这是卜问是否御除水害于社。或言：

戊子卜，鼎：𠂤年于囲？五月。

《库方》1684

这是卜问是否御除农业年成的灾害于报甲。

卜辞还有说“𠂤年”（《佚存》867）“𠂤禾”（《殷契拾掇》二·177）的。𠂤、𠂤当读为防，指防御灾害。防年、防禾当是与御年同类之事。卜辞又有说“𠂤王田于匕（妣）己”（《战后南北所见甲骨录》坊3·39）的，当是与御疾同类之事。

《周礼·天官·女祝》：“掌以时招、梗、禳、禬之事，以除疾殃”，郑注：“郑大夫读梗为亢，谓招善而亢恶去之；杜子春读梗为更；玄谓梗，御未至也。除灾害曰禬，禬犹刮去也。却变异曰禳；禳，攘也”，孙诒让《正义》曰：“说文示部：禦，祀也。疑即所谓梗矣。”今案，殷人于已至之灾殃亦御之，御祭似可包禬、禳。

这次所出卜辞，或言𠂤众，应该是指御除众人的灾殃；或言𠂤牧，应该是指御除牧奴或牧事的灾殃；或言𠂤臣，应该是指御除家臣的灾殃。至于鹰和吴，疑都是人名，𠂤鹰、𠂤吴与上引卜辞言𠂤𡆥、𠂤𡆥同例。

上引卜辞或言“𠂤𡆥于帚三宰”，文例与“𠂤众于且（祖）丁牛…”等辞相同。他辞或言“𠂤𡆥（羌，为第一期常见人名）大乙宰”（《前

加拿大安省皇家博物館所藏一片大胛骨的刻辭考釋

史景成

一、前言

加大安省博物館開始收購甲骨，遠在第一次世界大戰結束前後。當時館裏收買中國古物的代理人，是住天津富商科拉夫氏（George Crofts）。第一批甲骨是一九二〇年自天津運到的。爲了區別此後所收購的其它甲骨，所以館中稱這批甲骨爲科拉夫氏收藏。現在筆者將試考釋的這片大胛骨，乃科氏代購甲骨之一。因這片大骨的內容殊屬罕見，在一九五〇年左右，館中特爲選出放置玻璃匣內，供民衆及學人觀覽。這片大骨金祥恒及李棪二先生都已先後考釋[一]。金先生以爲它屬明義士氏收藏甲骨之二，事實並非如此，不過明先生對這塊大胛骨會作綴合工作，並指出它的特點，使館中注意。

明先生原以傳教身份去中國，工作地區，就是甲骨出土的安陽。他開始收集甲骨，是在一九一四年。所編輯的「殷虛卜辭」（一九一七），即在此時所蒐集。後掌教山東齊魯大學時，他又推廣研究範圍，除甲骨外，凡銅器、陶器一切出土古物，皆在他搜集治學的領域。一九三七年抗日戰爭爆發。次年先生回國，擬寫「商戈」一書。一九四二年被聘去華盛頓作抗戰工作。居多倫多城四年中，除了私人的研究工作外，先生並襄助博物館整理久被封鎖在箱內的科氏甲骨。去華盛頓前，對科氏甲骨，僅作了剔出贋品，編出號碼及綴合的初步工作。上言放置玻璃匣中的大胛骨，即先生綴合骨中之一。他的「商戈」初稿，亦在此時期完成。

第二次世界大戰結束後，先生復回齊魯大學，但此時已近告老年齡。一九四九年，退休回加，擇居多倫多城。此時簒者適在多倫多大學掌教。因中文圖書館在博物館內，所以中文部亦因之設於館中。先生安家後，時來館內看書，因此，筆者就和先生認識了。不久，漸成好友，他遂鼓勵我說：「甲骨文現已成世界的一門新學問，你在此教書，近水樓臺，何不開始研究，作將來教古史和經典的憑藉。若要對古籍作深一步的研究，甲骨文是不可少的一種學問」。筆者之學甲骨文，就是這樣開始了。我們就用科氏的甲骨作材料，凡認字、墨拓、辨眞僞和綴合的工作，都包括在內。

金、李二先生所考釋加大博物館所藏的大胛骨，也是先生曾欲考釋的一片，惜未如願前，即與世永別了。

先生逝世後，明夫人即請筆者整理先生的藏書。筆者就將先生的書籍、刊物、分門別類，編一小册，交給夫人。隨後夫人和她的子女將先生所藏甲骨及遺書，贈送博物館，附帶條件即是請博物館負責人，專請一人整理先生所藏甲骨和遺稿出版。因此，現在館中有科氏所藏甲骨，有懷氏（William C. White）爲博物館遠東部及多倫多大學中文部主

任時，代購甲骨，和最後明先生家人所贈甲骨，而以明先生所藏的最多。

金、李二先生對此片科氏藏骨的考釋，各有所見。他們的大著，引起筆者的興致，所以也想充數湊曲，試作考釋，參加討論，既可藉此紀念亡友的苦心教導，同時也可因此未成熟之文，得到卓識學者的指正。

二、釋文

正面：

丙午卜，㱿貞：

乎自往見出自？

王（固）曰：隹老隹人，途𢍏若。

（茲）卜，隹其𠂤：二旬出八日 𡆥（𡆥）（虎），壬（申）自夕 𡆥（殊）。 圖一

背面：

王固曰：隹老隹人，途𢍏若。茲卜隹其𠂤。 圖二

三、考釋

丙午卜，㱿貞：

㱿 是武丁王朝有名貞人之一。董作賓氏稱他爲「四朝元老」，上自般庚、小辛、小乙以迄武丁之世㈠。「四朝元老」一語，雖有過史實，但㱿爲武丁朝的重臣元老，是可信的。

此句的今譯卽：丙午日，貞人㱿卜問：

乎自往見出自？

自 爲「師」字的初形。它有人名、地名、氏名、師旅、衆或衆人等不同的解釋。在未釋此句之「自」以前，茲先將與本卜同日、同貞人反卜異版的二例錄下，以供參閱：

丙午卜，㱿貞：勿乎自往見出自？一珠二八〇 圖三

☐☐☐，㱿貞：勿乎自見出自？四粹一一三二 圖四

由上二辭看來，此「自」字決非一地名。學人有釋此「自」爲師旅的，此或因未見本卜正卜的刻辭所致。按正卜刻辭最末一句「壬申自夕殊」當釋爲「自在壬申夜裏被殊殺」。因此，此句必指「乎自往見出自」之自一人被殺，而非指全師旅被殺戮。故此句之「自」爲一人名。

往 卜辭作 ，从 （止）从 （王）。 象足着地形，王爲聲讀，爲往字之初文，偏旁彳爲後世所增益。它的意義，古今無別，卽往來之往。

見 在契文可作地名、方國名、人名或動詞等解釋：

1.地名：

貞：……方出勿自見？一月 鐵五〇・二

壬辰卜，內：翌癸巳雨？癸巳見允雨。 甲三三三六

2.方國名：

丁未卜，☐貞：令立見方？一月。 粹一二九二

3.人名：

貞：乎見于𠂤？ 續二・二五・一〇

癸丑卜，貞：令見取攸衆 于 ？ 甲二一二四

4.動詞：

已未卜，㱿貞： 其來見王？一月。 綴合三〇一

貞：乎見自般？ 林一・二五・六 圖六

丁酉卜，出貞：令𢍏見 侯？六月。 珠六

以上之辭，「見王」可譯作進見或拜見；「乎見」可譯作召見；「令𢍏見」可譯爲相見或去見之見。

見字既有地名、人名、方國和動詞等義，而本卜辭中的「見」字在動詞「往」的下面，所以學人有釋它作地名的。其實「見」和其它動字一樣，可和其它動字連合作連合動詞。如本卜的「乎自往見」的「往見」，卽連合動詞。不過此「往見」的涵義，全憑它下面的賓詞爲人名或地名爲斷。如爲人名，其意卽「去見」「相見」等。如爲地名，則此「往見」之見有：視、望、循等義。如：

視：

壬子卜，㱿貞：舌方出王𨔵（視）？五月。 外一

貞：王勿𨔵？ 庫一六八五

按𨔵卽雚，訓作視字。在上引二辭，當訓爲觀察或觀望之義。卽國王親自觀察舌方的舉動，好作防禦或攻守的計畫。

望：

貞：乎望舌方？ 續三・八・四 圖七

貞：☐☐望☐☐？

貞：勿乎𠂤望舌方？ 珠四八四 圖八

卜辭中「望」字作 或 ，象人舉目遠望或瞭望的樣子。上引三辭都是貞問是否可令某某觀望或瞭望舌方的行動以作攻擊或抵禦的準備。

循：

庚申卜，敲貞：今春王循土方出𠂤？　林二・九・三　圖九

貞：王勿循土方？　前七・七・四

王亩出循？　丙二二

王勿隹出循？　丙仝上

丁巳卜，貞：𠂤于𠂤，王循入？　甲一八九十二〇三・圖十

按「循」卜辭作 𢓊 或 𢓊，从彳从十目，而十目之義，據說文，卽正見或正視也。又「彳」爲行走之義。循巡古通，故循有巡視或巡察之義。如禮記月令：「循行國邑」，循卽巡。

出自　陳夢家論「邑與鄙」時，曾將邑分爲兩類：一爲國王的都邑，一爲國內族邦之邑；並謂「邑」是聚族而居之處。關於族邦之邑，他引契文「勿乎取出邑」後，繼謂：「其中的出邑或與出族（前七・一・四；菁一一・七）出邑與出自（乙七三八五）有關㈢。此外丁山論氏族制度時，認爲「出邑，卜辭或曰出氏，或曰出族」㈣。換言之，他以爲出邑，出氏出族，是三者一也。丁氏之說，或對或否，在此不擬討論。不過由陳丁二氏之說，卽可看出他們已先我注意到出族、出邑、出自三者是有關係的，但是二氏沒說出甚麼關係來。按出族自當以「出」爲名之族。筆者認爲若將契文中有關出自、出邑、出族及出族的首領出伯的刻辭合而稽之，不但可從出族與殷王朝的關係考出出族、出自、出邑三者的關係，而且也可看出「出自」在本文所考卜辭是人名、地名或官名了。茲將有關的卜辭一一列下：

1.出伯：

𠂤卜，宂貞：出伯 𢓊 示？三月。　寧二・三〇　圖十一

貞：禽弗其出伯？　續存下二三九　圖十二

壬寅卜 𢓊 令 𠂤𠂤伯？　庫一一〇八　圖十三

𠂤伯𠂤告？　八月。　京三〇七八　圖十四

王令𠂤 𠂤伯？　佚六二七　圖十五

以上五辭，前二辭屬第一期，後三辭屬第四期。五辭皆極簡略，且文句也殘缺不全，讀者不易得其要領。然自後二辭可以看出出族的首領出伯和商王是君臣的關係，且由王朝屢有貞卜關於出伯之事，亦可推知出族乃一强悍的族邦，它的政治活動對殷王是很有影響的。

五、出族：

丁未卜，爭貞：令郭 𠂤 出族 𠂤 𠂤 出又又？五月。　前七・一・四　圖一六

辛酉卜，爭貞：羽 𠂤 出族从 𢓊 𠂤 𠂤？　菁一一・七

郭沫若釋此兩辭的出族謂：「出族與王族同例，當讀爲友族，猶書稱友邦也」㈤。釋「出族」爲「友族」頗有可商，且「出」字釋「友」，卜辭尙無其例。于省吾對出族無說，但於郭字下的 𠂤 字訓爲氏（卽郭氏）。因此，他釋爲「令郭氏出族尹」，並謂郭氏爲殷代的一個氏族㈥。據愚見，𠂤 字在上引二辭中，當爲動詞。惟 𠂤 字在卜辭中訓爲動詞，學者的解釋，不但彼此不一，甚至一人訓此同一字，也有不同，而且有彼此相反的意義。例如魯實先訓它爲：(1)「抵之初文」並引說文：「抵，側擊也」㈦。(2)「提」，「如李陵提步卒之提，謂挈舉某方之師旅或敵手以任征伐徭役也。」㈧換言之，其義用於師旅，有提帶或領帶之義。按前者用於師旅爲攻擊之義時，對方必爲敵國；後者用於師旅，若爲提帶或領帶之義，對方當爲臣服之國。魯氏雖舉例訓「𠂤」爲「擊」和「提」，但未說明在何原則下，當訓爲「擊」，何原則下，當訓爲「提」。(3)訓「𠂤」爲「致」，卽致送或致貢之義㈨。于氏亦訓 𠂤 爲「致」，讀底，其義則爲「使之歸順也」㈩。丁山謂：「𠂤，不訓引，也當訓取」(十一)。嚴一萍與丁氏同，亦訓它作取(十二)。郭氏則訓 𠂤 爲「挈」之初字，而「挈」據說文，乃懸持也。字形象懸持狀，用於師旅時，可引申爲領帥之義；又可假作「契」爲「契滅」之契。若 𠂤（挈）爲不完全之他動詞，下必有動詞仂語以爲補格，與領帥之意同。若 𠂤（挈）爲完全他動詞，下祇用賓格，而無補格，如此，則挈可假作「契」，爲契滅之義(十三)。

按郭氏所訓之「挈」（卽領帥）與魯氏之「提」（卽提帶），意義完全相同，郭氏之「契」（卽契滅）與魯氏之「抵」（卽側擊），義亦相近。惟領帥、提帶和契滅、側擊，用於師旅，則二者之義相牴牾。前者的對象當爲臣服之國，後者則爲敵國。據上所引諸氏之說，可知 𠂤 字若爲動詞，解釋之不易。惟筆者從郭氏之說，但略有修正，例如：

茲雨 𠂤 畝（戰）？　粹七五五　圖十七

此辭爲貞問：雨中是否帶霰？ 𠂤 字在此句爲完全他動詞，但仍可釋爲挈或帶的意思。

然下數例則大致合郭氏之說：

辛丑卜，貞：𢓊 羌王于門 𠂤？　後九・四

辛丑卜，宂貞：旂眾敲 𠂤 羌？　乙六三七三

貞：旂眾敲不其 𠂤 羌？（與上仝版）

按羌爲殷之敵族，不但向爲殷王攻擊的目標，卽所獲羌人亦常用作犧牲祭祖之用，有時

羌王亦所不免。因此，上三辭之 ㇇（爲完全他動詞）可依郭氏之說，可假爲「契滅」之「契」。惟依丁氏、嚴氏、于氏之說，則當訓爲「取」、「使之歸順」。愚意與魯氏同，當訓爲「擊」，因「契滅」、「取」、「使之歸順」，都必從攻擊着手。故 ㇇ 字基本上是攻擊的意思。

由上所引 ㇇ 字用作完全他動詞之例，可知 ㇇ 字的解釋，除如郭氏所說，依句子的結構而定外，尚須以句子的內容爲斷。

郭氏謂 ㇇ 字若爲不完全之他動詞，其下有動詞仂語以爲補格時，則當訓作「挈」此說可取。茲舉數例如下：

由沏 ㇇ 戈人伐舌方？ 金五二二

丁未卜，爭貞：勿令𠂤 ㇇ 衆伐舌𠙵？ 粹一〇八二

令𡆥 ㇇ 王族从𠂤古王事？六月。 前七・三八・二

乙丑卜，奚貞：令羽衆鳴 ㇇ 奚尹从宣𠂤古事？七月。 前七・二三・一

丁卯卜，令執 ㇇ 人田于𠂤？十一月。 人二六九

㇇ 字的解釋既明，茲再回稽前引含有「𠂤族」之二辭。按此二辭之 ㇇ 字，皆爲不完全之他動詞，其後亦有動詞仂語爲補格，故可訓爲領帥或提帶之義。換言之，由該二卜辭可知𠂤族在武丁時期曾爲殷之友邦。

三、𠂤自、𠂤邑：

貞：行 ㇇（擊）𠂤自衆𠂤邑？ 乙七三八五 圖十八

癸巳卜，韋貞：行 ㇇（擊）𠂤自衆邑？

貞：行弗其 ㇇（擊）𠂤自衆邑？ 丙五〇〇 圖十九

行 ㇇（擊）𠂤自衆邑？ 乙六四三三 圖二十

貞 ㇇（擊）𠙵自自𠂤邑？ 乙四五三九 圖二一

貞：勿乎 ㇇（取）𠂤邑？ 林二・八・一 圖二二

乙亥卜，爭貞：東邑並令𠙵（葬）我于𠂤自？ 續五・四・三 圖二四

丙子卜，宂貞：令 𡆥 𠙵（葬）我于𠂤自？ 陳三一

己卯卜，宂貞：今日𣪊 𡆥 令 𠙵（葬）我于𠂤自？ 京一六九八 圖二五

𠙵卯𠙵，：：：：𠙵（葬）𠙵于𠂤自？

以上十辭，前五辭的 ㇇ 字之後，皆無動詞仂語以爲補格，因此，此五辭之 ㇇ 字，當訓爲擊，而第六辭則直問取𠂤邑之事。據此，𠂤自、𠂤邑當時都爲殷王武丁攻擊的目標。自後四辭「葬我于𠂤自？」之卜問看來，可知𠂤自終被克服，遂有葬我死亡師衆於𠂤自的命辭。

由合稽所引有關𠂤伯、𠂤族、𠂤自、𠂤邑的卜辭，結果得數要點如下：

1. 𠂤自爲一地名。
2. 𠂤自與𠂤邑皆爲𠂤人聚族而居之地。在武丁時期𠂤族有時臣服，有時叛離。
3. 由「自」奉武丁之命，往見「𠂤自」而死，及壬申「自」死後之數日（乙亥、丙子・己卯），凑巧都有卜問葬我於𠂤自之事，即可推知所卜「乎自往見𠂤自」之意，乃武丁命老臣自前往觀察敵人陣地「𠂤自」的情形。這是一個重要而且危險的使命，所以才作了本卜的命辭。

王固曰：

固 是視卜兆後，推斷所貞問的事是吉是凶，以便決定是否進行。本卜王固曰的固字殘缺，據背面王固曰刻辭補足。這裏的王當然指武丁。

隹老隹人：

隹 與唯、維、東和由同義，是契文中常見的虛字，金文中也時常見到。至於「隹某隹某」這種句字的結構，詩書中都有其例。它的作用，只是連合兩字，使詞句有節湊，有生氣。所以此處的「隹老隹人」，並沒有甚麼深宏大義，只是老人的意思。加上兩隹字是使文句不呆板而已。自此句，顯知自是武丁王的元老重臣，言外含有敬愛之意。所以總說：自，這年齡高邁的老人。

途莫若：

途 甲骨文作 𠙵。它可用作名詞或動詞。若爲名詞，即道途或旅途的意思。若爲動詞，則有「制止平服」(由)或「屠戮伐滅」的意思(由)。按「途」在本卜當爲名詞。

莫 契文作 𠙵，即今遵字。它可作人名、地名、祭名，亦可作動詞，即遇見的意思。在本辭遵爲動詞。

若 爾雅釋詁：「若，善也」，釋言：「若，順也」。郭沫若謂：「若者，順也，不若者，不順也。」(由)胡厚宣謂：「若亦有祥意。書盤庚曰：『迪高后丕乃崇降弗祥』，與卜辭『帝降不若』同意。帝降若，即帝降祥，帝降不若，即帝降不祥也」(七)。那麼，「若」在本辭就是順利和吉祥的意思。

「途遵若」三字的今譯即：在旅途上會遇見順利的。

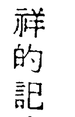
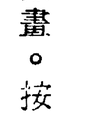
茲卜隹其𠙵：

茲 正卜缺（圖一），據卜骨背文補足。圖二

隹 釋見前，爲虛字。

句　契文句字習見，有禍害或凶險的意思。

全句的譯文卽：但是這一卜，却是凶險的。

二旬出八日  （  ）壬（申）自夕 

二旬出八日，就是丙午日卜後過了二十八天。不過據本卜異版的殘辭「二旬出六日壬申」（圖五），知「二旬出八日」係誤刻，因二十卜爲「二旬出六日壬申」。（按本卜的丙午日，是甲辰旬的第三日，亦卽干支第五旬的第三日。自丙午的次日數起，至二十八日爲甲戌，二十六日爲壬申）。

 係一合字，它的寫法不一，考釋的學人，意見也不一致。孫詒讓釋它爲豕，讀爲隊(一)；唐蘭釋它爲彖，讀爲彖(二)；饒宗頤釋它爲，訓作陰霾之義(三)。王襄(四)、董作賓(五)、郭沫若、明義士皆釋它爲。例如粹編一五八〇片：

（癸卜，貞：）旬亡，九日辛，出，王隊：：：：。

郭氏釋云：「癸日卜旬，翌九日自爲辛日，此于九日與辛之間，著一字，不解何意，蓋用爲迫薄等動詞者耶？(六)」亡友明義士先生在世時，對一字，曾向筆者作以下的解說：

老虎係一猛獸，八虎言其多。若四面八方都有老虎迫近，無疑的是一個凶險的處境。所以字，是一個不吉的象徵，有窘困危險的意思。可能「」是商朝一字之成語。只用這一個字，就活現身臨其境的情況，並且省了不少的廢話。我想卜辭中一字或兩字的成語，到現在還有許多不了解的，可惜「」一字，第一期以後，就不見用了。

筆者覺亡友明君對字的解釋，活現如畫。按 正如李孝定所說，乃「上从八下从一動物象形字，其形不一，莫可名狀，其爲物大抵有爪牙之利」(七)，因此，此字頗合董、王、郭、明諸氏所訓爲八、虎二字的合文。卽不爲字，亦當爲八及另一某獸的合文。

稽之卜辭，凡句中插有此字者，多爲不祥的記事驗辭，所以普通它是不吉祥或不順利的意思，有時可釋爲窘迫、危險或災禍等義。本文所考刻辭與郭氏所引之辭的句子結構相類，本卜辭則爲：丙午日卜，翌二十六日爲壬申，此二十六日與壬申日之間，亦著一字。此字在本辭無疑有窘迫、凶險的意思。

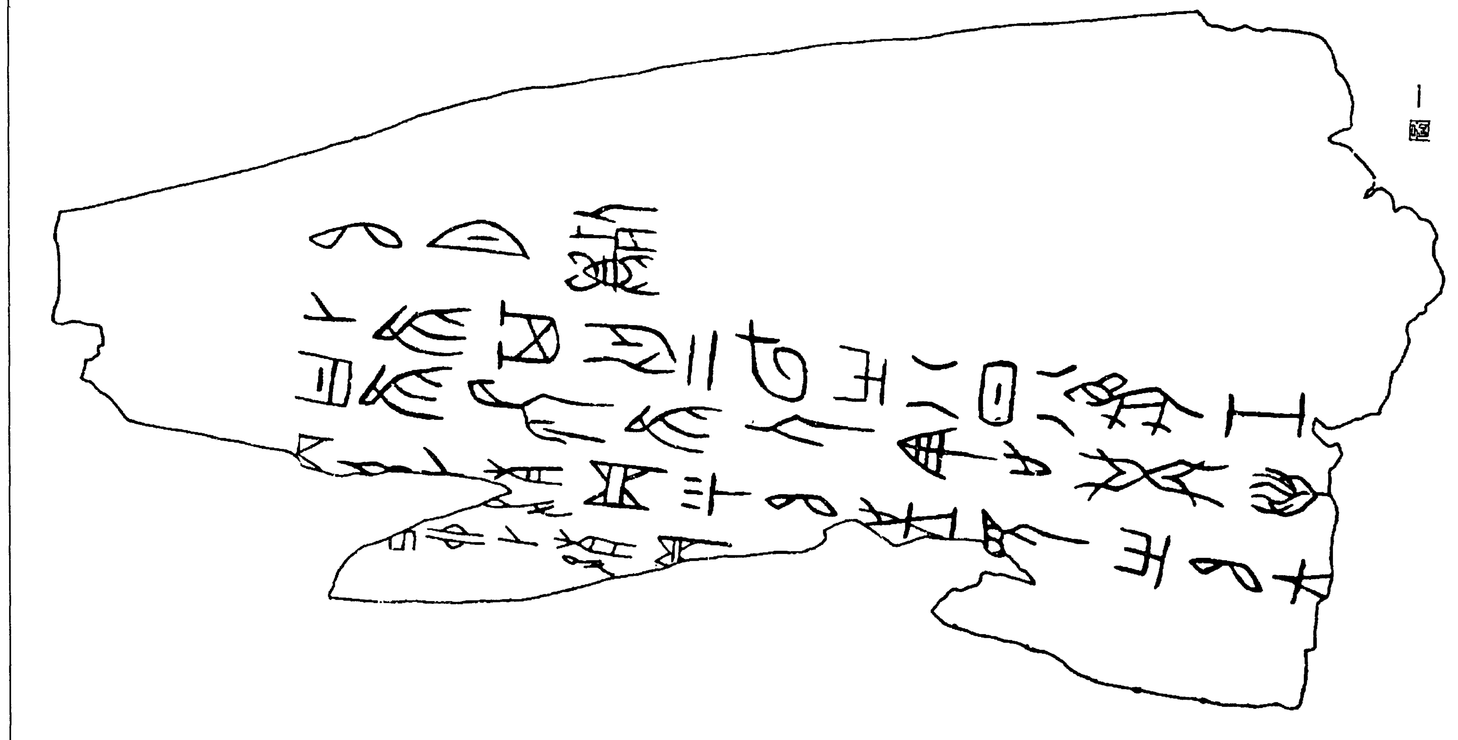
壬 申字殘缺，照同卜異版補足。說見上「二旬出八日」一段。

自 就是「乎自」之 。

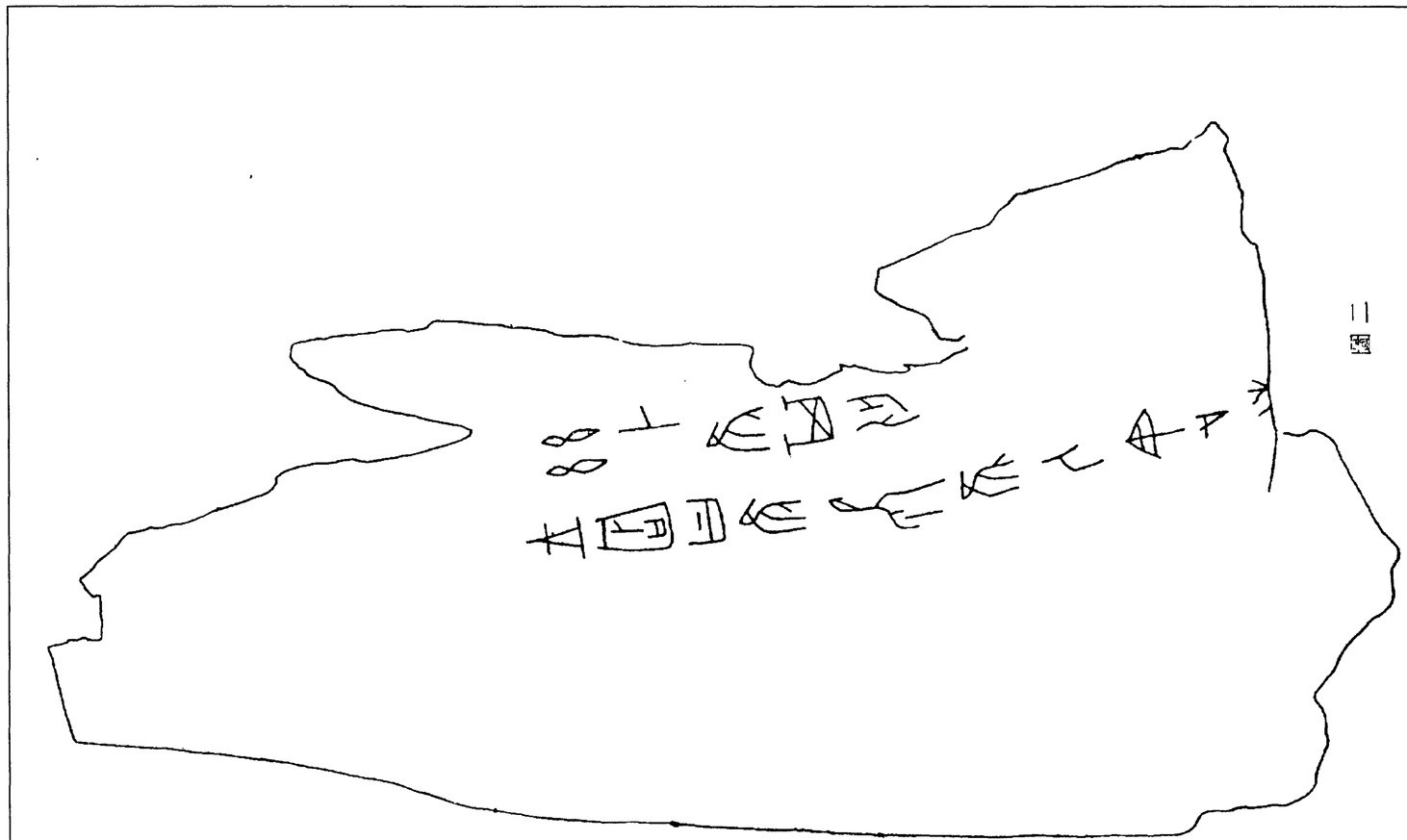
 係一合字，从 从 聲，爲殊之本字。 ，卽死字，小篆之殊从 ，乃 之省。漢令曰：「蠻夷長有罪當殊之」，是殊原爲殊殺，死亡之意，漢時猶然。後其義他轉，遂以誅字代之。

全句的今譯卽：占卜後二十六日，自卽遇險，當日（壬申）夜晚，自就死了。這殊字表明他是被殺而死，非病死的。

1. 金祥恒，加拿大多倫多大學安達黎奧博物館所藏一片牛胛骨刻辭考釋，中國文字，三八，台北，國立台灣大學中國文學系編印，一九七〇
2. 董作賓，殷代月食考，史語集刊，第二十二本，一九五〇，P.一五一—一二
3. 陳夢家，殷虛卜辭綜述，一九五六，P.三二三、五〇三—四
4. 丁山，甲骨文所見氏族及其制度，一九五六，P.四四
5. 郭沫若，釋，甲骨文字研究，上册，一九三一
6. 于省吾，殷契駢枝，一九四〇，P.五九—六〇
7. 魯實先，卜辭姓氏通釋之一，東海學報，第一卷，第一期，一九五九，P.二〇
8. 仝上，P.一九—二〇
9. 仝上，P.一七—一九
10. 于省吾，仝上註6.
11. 丁山，仝上註4，P.一五
12. 嚴一萍，甲骨文斷代研究新例史語集刊外編，第四種，一九六一，附圖九二之字譯作取，P.五〇九
13. 郭沫若，釋，P.三，仝上註五
14. 胡厚宣，殷代封建制度考，P.二一，甲骨學商史論叢，初集一，一九四四
15. 于省吾，殷契駢枝三・二三
16. 郭沫若，卜辭通纂攷釋，一九三三，P.七六
17. 胡厚宣，殷代天神之崇拜，P.五，論叢，初集二
18. 李孝定，甲骨文字集釋，一九六五，二、〇二七九
19. 仝上，二、〇二七九—八〇
20. 饒宗頤，殷代貞卜人物通考，香港大學出版社，一九五九，P.三二
21. 李孝定，集釋，二、〇二七九
22. 董作賓，殷曆譜，一九四五，下編，卷九，P.六，No.八一，附圖，P.二三



圖一



圖二

鹿一，二句皆記應之辭」惟楊氏此解，語焉不詳，且此卜亦無圍辭，是以「茲卜隹其𠂤」貞：王𢀛于召，往來亡𡆥？在九月。茲𠂤，隻鹿一。（頁七一），雖曾釋：「茲𠂤，隻鹿一，二句皆記應之辭」惟楊氏此解，語焉不詳，且此卜亦無圍辭，是以「茲卜隹其𠂤」與「𢀛達若」頗相牴牾。楊樹達在卜辭瑣記之：「己丑卜，茲卜隹其𠂤」如爲圍辭，與「𢀛達若」頗相牴牾。楊樹達在卜辭瑣記之：「己丑卜，貞：王𢀛于召，往來亡𡆥？在九月。茲𠂤，隻鹿一。（頁七一），雖曾釋：「茲𠂤，隻鹿」，惟楊氏此解，語焉不詳，且此卜亦無圍辭，是以「茲卜隹其𠂤」

附記

本文試考的這片胛骨，亡友明義士本擬考釋，惜未如願，即艱世永別，此點又內已提及。當時他除對𠂤字發表意見外，並謂𢆶乃死𠂤二字，𠂤係靈物，言其死，當爲不祥之兆（按先生釋𢆶爲𠂤，可商），因先生以此片胛骨刻辭殊屬罕見，所以引起筆者的興趣。拜讀金、李二先生對此骨文的考釋後，因他們的解釋及斷句不同，而筆者所見亦異，因此，舊興復發，遂找出舊稿及筆記同金、李二君之文，請許君進雄參閱，並發表他本人對這片骨文的意見。許君認後，即將拙文所引重要的刻辭代爲描出，勤余整理舊稿發表，參加討論。他除對「隹老隹人」別有解釋外，且表示「茲卜隹其𠂤」，據彼意，當屬驗辭，整理舊稿時，或可考慮此點。此一建議頗覺搔著癢處，因筆者亦感「茲卜隹其𠂤」如爲圍辭，與「𢀛達若」頗相牴牾。楊樹達在卜辭瑣記之：「己丑卜，貞：王𢀛于召，往來亡𡆥？在九月。茲𠂤，隻鹿一。（頁七一），雖曾釋：「茲𠂤，隻鹿一，二句皆記應之辭」惟楊氏此解，語焉不詳，且此卜亦無圍辭，是以「茲卜隹其𠂤」是否爲驗辭，筆者頗躊躇不決。今從許君建議，將舉者向惪爲圍辭之「茲卜……」改爲驗辭。如此分段，既出許君卓見，筆者不敢掠美，故特記於此，並將許君論及此點之專文附後，供學人參閱。

23. 郭沫若，殷契粹編考釋，一九三七，第一五八〇片，P二一一

24. 李孝定，集釋，二、〇二八二



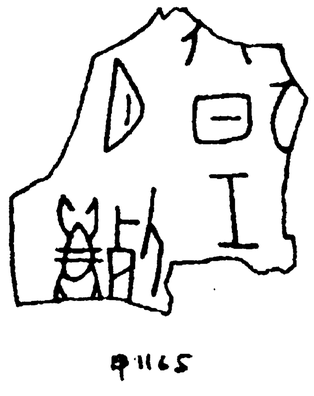
珠280

圖三



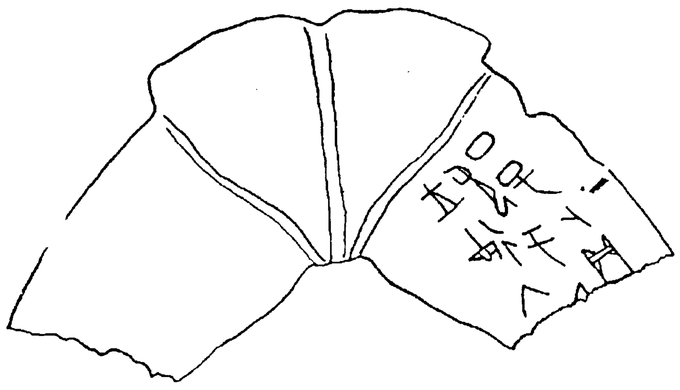
粹1132

圖四



甲1165

圖五



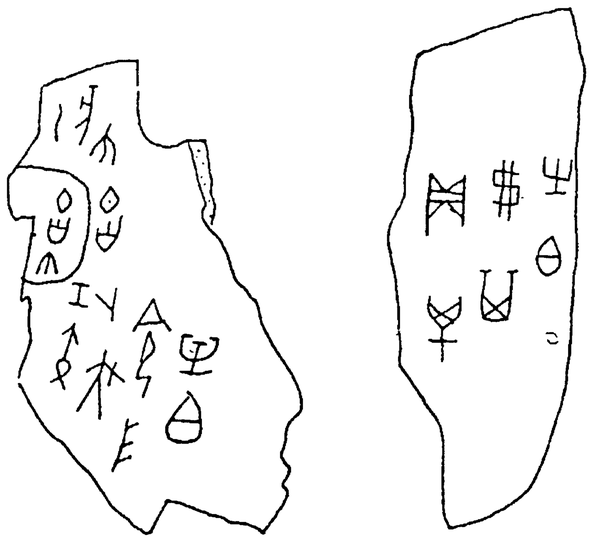
甲189+203

圖一〇



京3078

圖一四



二一圖



佚627

圖一五

庫1108

圖一三

醜存下239

圖一二



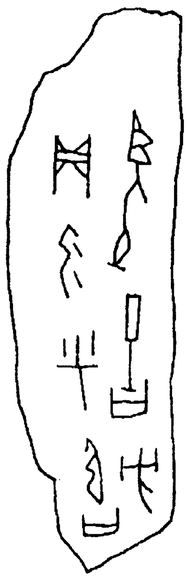
林1.25.6

圖六



佚3.8.4

圖七



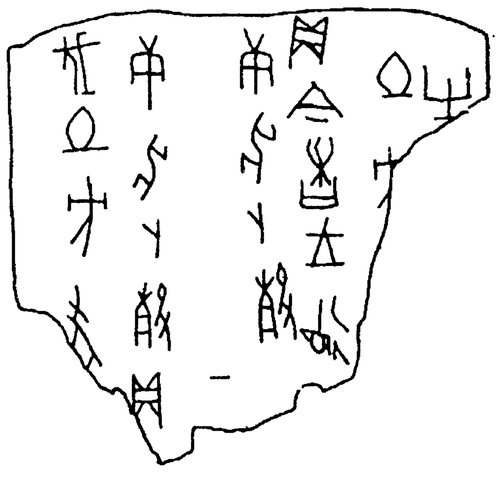
珠484

圖八



寧2.30

圖一一



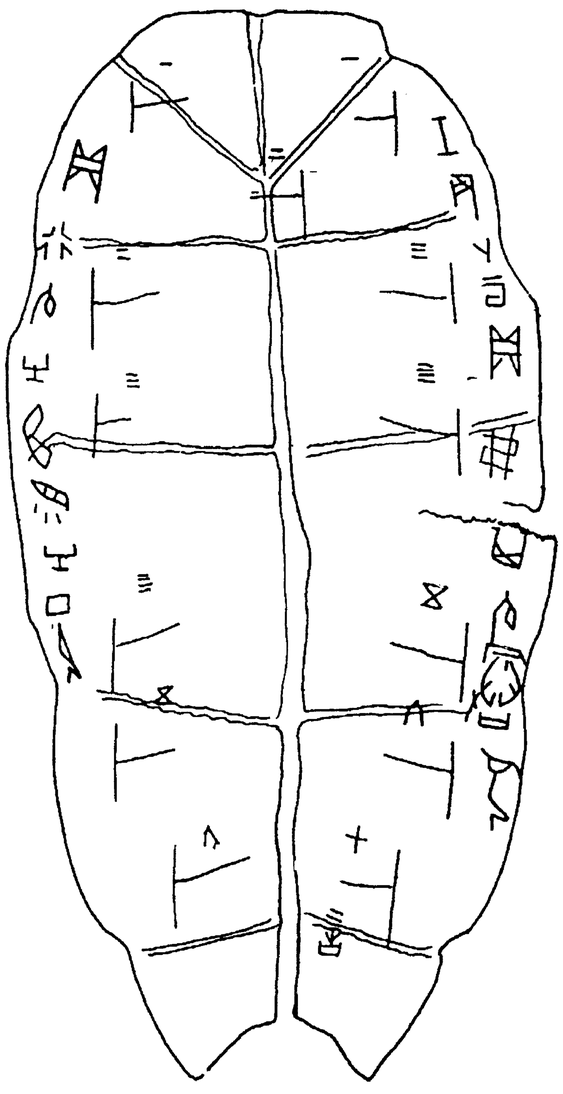
林2.9.3

圖九



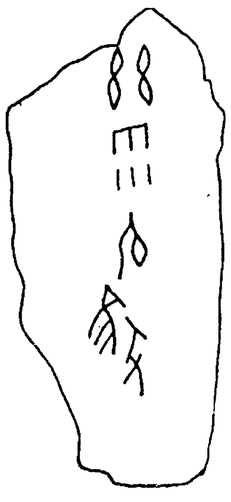
前7.1.4

圖一六



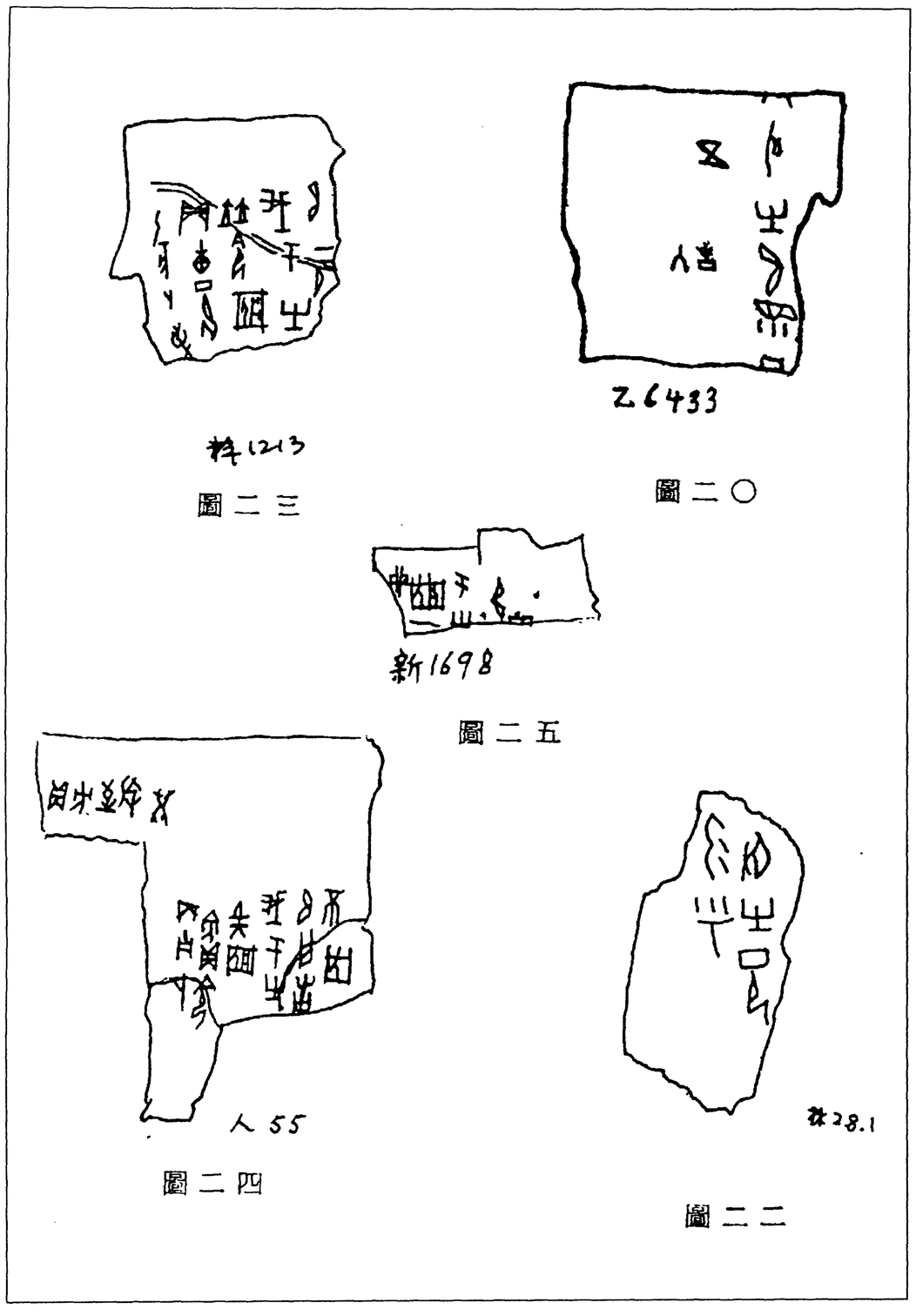
乙7385

圖一八

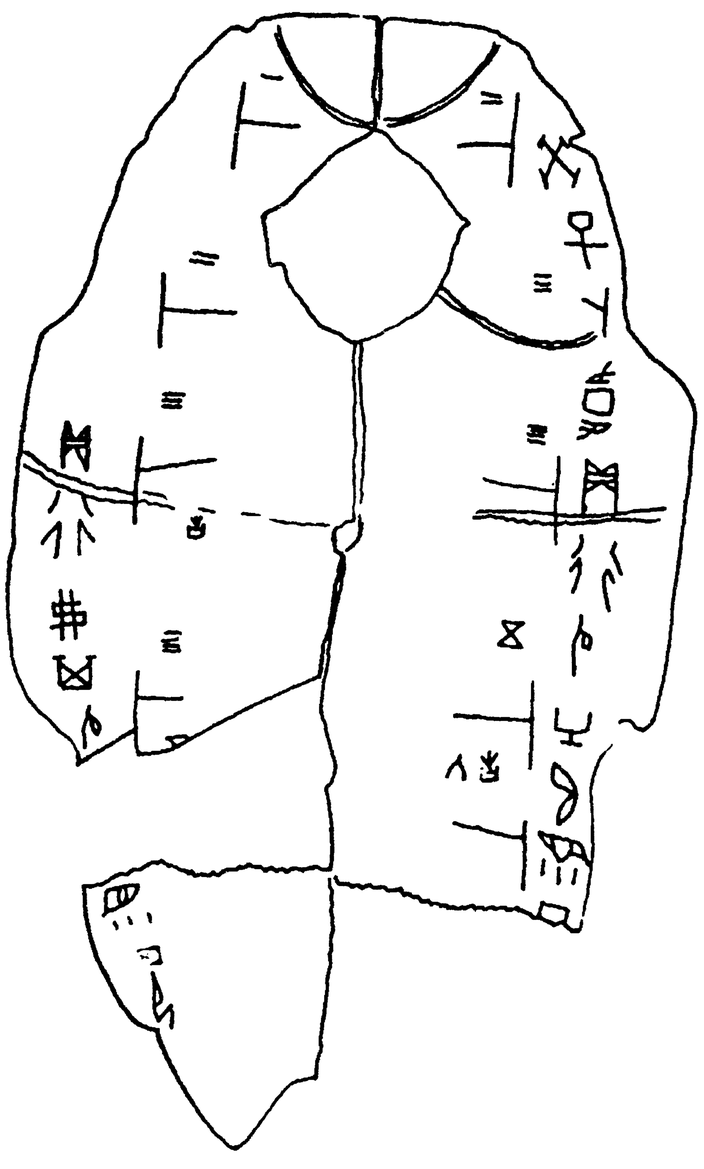


粹755

圖一七



圖二〇　圖二三　圖二五　圖二四　圖二二



圖一九

臨淄孙氏旧藏甲骨文字考辨

胡厚宣

一

大约在我国河南安阳殷墟甲骨文字被认识（公元1899年）的第四年，即1903年前后，就有英国人库寿龄（Samuel Couling）和美国人方法敛（Frank H. Chalfant）所谓库方二氏（Couling-Chalfant）者在我国山东潍县向一李姓（名茹宾）古董商人，大肆搜购甲骨，几年之间，共购得甲骨，约在三千片以上。

方氏凡购得甲骨一批，必先画其图形，摹其文字。后来见到别人收藏的甲骨，也都设法摹写下来。十年之间，以所摹甲骨，编为《甲骨卜辞》（Bone Inscriptions）一书。书中包括摹本甲骨文字四二三页及其他附件数种。1914年方氏死，遗稿后归美国纽约大学教授白瑞华（Rosmell S. Britton）保存。

白瑞华自从1935年以来，从方氏《甲骨卜辞》手稿四二三页摹本甲骨文字中，选印了三部书。其中《甲骨卜辞七集》一书，收录甲骨文字，共有七部分，三二页，五二七片。其中第六部分，即是所谓孙氏所藏的甲骨文字。

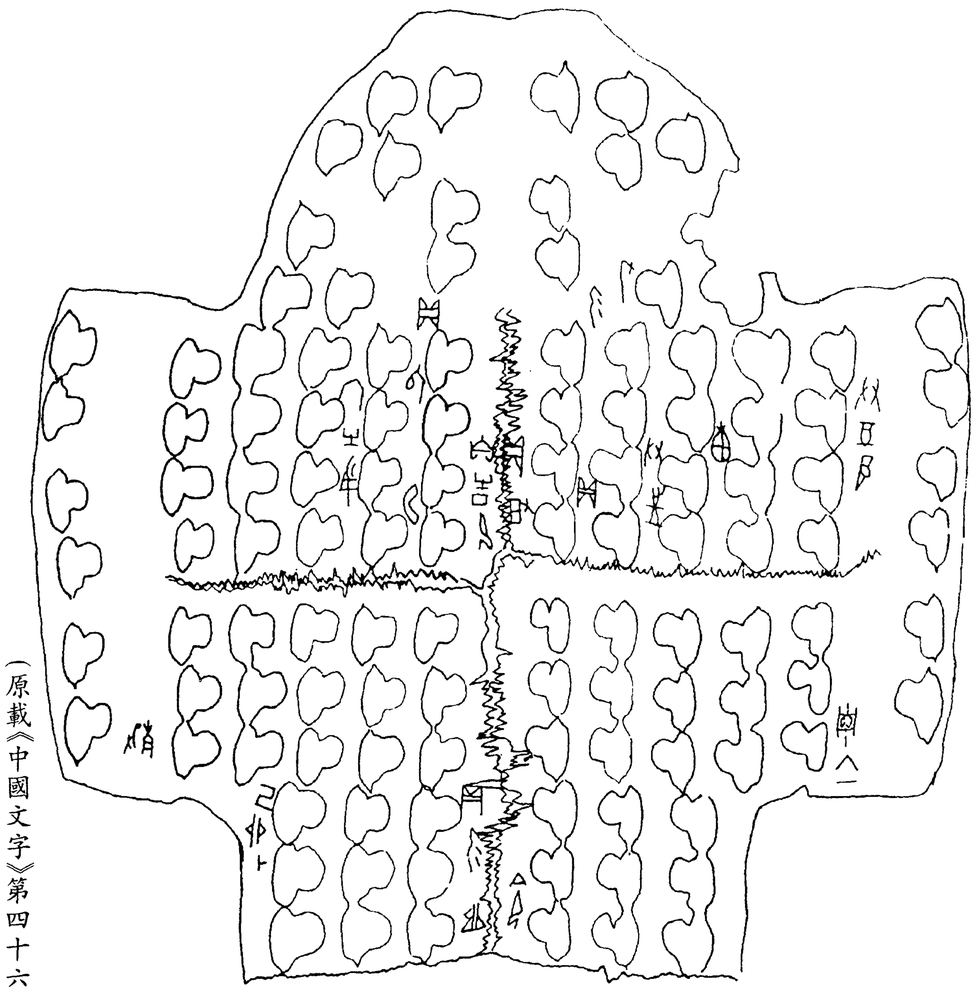
孙氏，名文澜，字观亭，山东临淄人，为一金石陶瓦收藏家①。其所藏甲骨，据说原有一百片，乃1907年以前所购，为早期所出土。方氏常去临淄，得识孙氏，就从他所藏的一百片中，选摹了三一片，收入书中②。

二

当方氏1938年在美国纽约校印《甲骨卜辞七集》之前，于1937年，曾在加拿大多伦多(Toronto)，请明义士（James M. Menzies）教授，将原稿全部代为鉴定一过。明氏认为孙氏所藏的甲骨文字，有三片是可疑的，其号码为X23，X24，X29③。

1940年，《图书季刊》发表《方法敛博士对于甲骨文字之贡献》一文，该文作者检查方氏所摹甲骨三书，认为《甲骨卜辞七集》一书，其中孙文澜氏所藏甲骨三一片，全部都是仿刻。说"1907年，方氏在临淄人孙文澜处，见所藏甲骨文字百版，选摹其中三一版，见《七集》X1—31。其1—8，附有拓本，似皆仿刻者"。又说，"《甲骨卜辞七集》孙文澜氏三一片，皆仿刻。"又说，"《七集》中孙文澜所藏甲骨最可疑。三十一版之中，前八版附有拓本，由拓本审视，几乎全是仿刻，无一原刻。"又说，"方氏所摹，前后不过十年之间的搜集，这十年内赝刻已有显著的进步，仿刻全段而依原款式者，疑《七集》X一至三一皆是。这是最进步的赝品。"又说，"仿刻与赝刻不同。赝刻或杂凑字句，或别构新辞，出于臆造为多。仿刻则颇像翻版之书，依样葫芦，冒牌原版。其蓄意作伪，厥罪相等"。④

孙氏所藏甲骨文字，本来与拼凑杜撰的伪作迥然不同，尽管卜辞完整成文，却有人



圖二一

（原載《中國文字》第四十六册，一九七三年六月）

偏要说它是仿刻，即使附了拓本，也硬说它不真。

1940年，《图书季刊》发表了另一作者《述方法敛所摹甲骨卜辞》一文，这时，这位作者还没有认为孙氏所藏乃是仿刻。只说，"临淄孙氏甲骨共三一片，今存何处，不详。一九〇七年以前所得，本有百片左右。"⑤及至1956年，这一作者也竟改而认为《甲骨卜辞七集》中，临淄孙氏所藏甲骨文字三一片，乃全是仿刻⑥。

临淄孙文澜氏所藏甲骨，在1937年，明义士还仅仅以为只不过有几片可疑。到1940年及1956年这几位作者却认定三一片，乃全部都是仿刻的伪作，一片也不真。

三

其实，《甲骨卜辞七集》第六部分所收录的《孙氏所藏甲骨文字》，乃全部为真，没有一片是假的，也没有一片是仿刻的伪品。理由很简单，只要我们找出所能得见的原甲骨实物，那就可以得到确凿可靠的证明。

临淄孙文澜旧藏甲骨，系1907年以前所得，乃早期殷墟出土之物。1935年夏间孙氏死，原藏甲骨一百片，据说"山东图书馆想买，而教育厅不给钱"，⑦最后只买了九片，有两片为一片之折，实际上仅有八片。山东图书馆将这八片甲骨，装一长方黑布盒，封面题"殷商契卜甲骨"，盒盖里面裱有拓本。又加以说明，"甲骨九片，均河南安阳县殷墟故地出土，皆商代灼卜刻辞。山东省立图书馆藏"。并盖有"山东图书馆藏"图章。这盒甲骨，现归山东博物馆保存。

孙氏所藏甲骨，另外还有二二片，同时归于当时山东图书馆馆长王献唐，王氏特制两个方形本色楠木盒，每盒内嵌装一一片，两盒共装二二片。解放后，王氏于1959年将两盒甲骨，捐赠中国科学院，现归中国科学院历史研究所庋藏。

孙氏旧藏甲骨一百片，今日所能得见者，只此两批，共计三〇片，另外还有七〇片，后来归于何所，不知道，尚有待于继续探寻。

解放前，我曾看到过王献唐氏所藏的甲骨，见其全真，当即选摹一〇片，著录在后来拙编《战后南北所见甲骨录》中的《南北师友所见甲骨录》卷二中。即南师2.33，南师2.50，南师2.73，南师2.131，南师2.176，南师2.177，南师2.178，南师2.180，南师2.183，南师2.192。一〇片之中，其见著录于方氏《甲骨卜辞七集》中《孙氏所藏甲骨文字》者共六片，即南师2.50(X18)，南师2.73(X4)，南师2.178(X30)，南师2.180(X22)，南师2.183(X17)，南师2.192 (X14)。另外我未选摹而著录于《孙氏所藏甲骨文字》的，还有二片，即X15与X23。是王献唐氏所藏二二片之中，其见著录于方氏《甲骨卜辞七集》中《孙氏所藏甲骨文字》者共计八片。无一片为伪，亦无一片为仿刻之例。

解放初，从1953年以后，我曾几次去济南山东博物馆参观，也看到过原山东图书馆旧藏的甲骨文字，共九片，有两片为一片之折，实共八片，八片之中，已见著录于方氏《甲骨卜辞七集》中《孙氏所藏甲骨文字》者六片，即X1，X2，X3，X11，X13，X26。既无一片为伪，亦无一片为仿刻的卜辞。

方氏《甲骨卜辞七集》中《孙氏所藏甲骨文字》三一片，其原甲骨实物现藏于山东博物馆者六片，现藏于中国科学院历史研究所者八片，共计一四片。就这一四片甲骨实物看来，绝无一片为伪，亦绝无一片仿刻，乃全部为真。

至于孙氏所藏《甲骨卜辞七集》未曾著录之片，现藏于山东博物馆的还有二片，现藏于中国科学院历史研究所的还有一四片，共计一六片，亦无一片为仿刻之伪品。由此可以推知不特《孙氏所藏甲骨卜辞》不见实物之一五片不伪，即孙氏所藏全部一百片亦当全为真物。

四

不过方氏这一部分摹本，写的不好，亦不准确，甚至还有摹错的地方。兹特根据原甲骨实物及拓本，将方氏《甲骨卜辞七集》中《孙氏所藏甲骨文字》所著录的一四片，依次考释如下。

(1) X1正：乙丑卜……
弜乂。
乂匕辛溼。
弜乂。
其用丝卜。
重丝卜用。
乙丑卜重。
丁亥卜，宁，𠂤……
重派令。(图一：1)
反：□公歲小宰。(图一：2)

这是一片牛肋骨卜辞。卜辞用牛肋骨的极少见⑧。因有贞人宁，知当为廩辛康丁时所卜。后上5.3贞人宁，称父甲，父甲即祖甲，所以宁乃廩辛康丁时贞人。孙氏原骨，曾归山东图书馆，现藏山东博物馆。

正面卜辞共九条，自下而上。一辞下文残，大意约为，乙丑日卜，又祭于某祖或某妣，又即侑，祭名。二辞说，弜又。弜读为弗⑨，言弗侑。三辞说，又妣辛溼。妣辛是祖甲的配偶，也称母辛，溼祭名。言侑于妣辛用溼祭。四辞说，弜乂，即弗侑。五辞说，其用丝卜。用即施行，丝即兹，义犹此。谓其按照这一卜去施行么?⑩六辞说，重丝卜用。重读若惠，是一个表示肯定的副词⑪。言要按照这一卜去施行。这六卜一正一反，乃反复占卜之辞。七辞说，乙丑卜，重，后边的"丝卜用"省去了。是对第六卜加重肯定的卜辞，意思说，乙丑日占卜，还是要按照这一卜去施行。八、九两辞，也是占卜两面。八辞说，丁亥日占卜，贞人宁问，𠂤是人名，见前7.10.3，下边残了。意思大约是，命令𠂤这个人去做什么事。九辞说，重派令。"重派令"亦见宁1.500，派也是人名。京236说，"丙申卜，贞令派"可证。意思说，命令派这个人去吧。

反面卜辞一，说，□公歲小宰。公的意思是祖，卜辞常说多公⑫或三公⑬。歲祭名，小宰即羊。意思说歲祭某祖公，用一宰即一对羊⑭。

方氏摹本及拓本，都漏了反面的卜辞。

(2) X2正：贞勿隹僔令(图一：3)
反：小臣𠂤入。(图一：4)

这是一片龟腹甲卜辞。看字体乃武丁时所卜。曾归山东图书馆，现藏山东博物馆。

正面卜辞说，问不要命令僔这个人。僔人名，铁60.4说，"乙丑卜，㱿，贞僔氏𠂤"；南辅1及2说，"丁丑卜，㱿，贞僔不其氐龟"；续3,38,4说，"贞今四月僔至"可证。

反面乃"甲桥刻辞"⑮。"小臣𠂤"后残一"入"字。言这一龟甲乃小臣𠂤所入。小臣官名，𠂤人名。小臣𠂤亦见掇1.343，也是一条"甲桥刻辞"。

方氏摹本及拓本，都漏掉了反面的"甲桥刻辞"。

(3) X3：丁未卜，王，祊亩父乙。
虫父乙牛。
弜佣。(图一：5)

这是一片龟背甲卜辞。时代为武丁。卜辞称父乙即小乙，小乙为武丁之父，所以属于武丁时。曾归山东图书馆，现藏山东博物馆。这一龟背甲，疑与X31为一版之折。

卜辞共三条。一辞说，丁未日占卜，殷王武丁亲自问，要祊祭父乙即小乙。祊祭名，与祓字同，即升字，《仪礼·觐礼》说，"祭山丘陵升"，知升为祭名⑯。二辞说，虫祭父乙，即小乙，用牛。虫即又，即侑，祭名。三辞说，弜佣，弜读为弗，佣为动词，疑读为用，用即施行，意思是不按这卜去施行。

方氏摹本"亩"下夺"父乙"二字。"虫父乙"之父，误作丑。

已见著录于南师2,192。

卜辞四条，左右对贞。一辞文残，据方氏摹本大意约为，乙酉日占卜，问祭上甲杀人，并用酒升。二辞完整，说，乙酉日占卜，问到第十天甲午再用酒升之祭吧！甲午那天，是不会下雨的。三辞已全部残去，据方氏摹本，大意约为，乙酉后三日丁亥日占卜，问衣祭大乙，并用酒升。四辞残留只剩下三个字。大意说，丁亥日占卜，问不要衣祭大乙用酒升吧。四辞乃是两两左右对贞，先左后右，先上后下。

方氏摹本二辞"彭"下多写一划，"甲""彭""升""不"字都摹错。

(8) X15：贞其嫔。(图三：1)

这是一片牛胛骨卜辞。看字体当为武丁时所卜。曾归王献唐，现藏中国科学院历史研究所。

骨残，只剩下卜辞一条，说，问要嫔祭好么？嫔，祭名。乙2866+4151说，"贞王嫔羌甲日。贞勿嫔羌甲日"。可证。

方氏摹本嫔字误作婞。

(9) X17：癸[illegible]王，贞旬亡[illegible]。二
癸亥卜，王，贞旬亡[illegible]。二
癸酉卜，王，贞旬亡[illegible]。二
癸未卜，王，贞旬亡[illegible]。三(图三：2)

这是一片牛左胛骨。由王贞的王字，知为祖庚祖甲时所卜。全版都是第二卜。曾归王献唐，现藏中国科学院历史研究所。已著录于南师2,183。

原骨下部残，留下卜辞四条。一辞只剩下了"癸"、"贞旬"三字。全辞大约说，癸丑日占卜，殷王祖庚或祖甲亲自问，在一旬即十天内⑰没有灾祸么。[illegible]即祸。二辞说，癸亥日占卜，殷王亲自问，在一旬即十天内没有灾祸么？三辞说，癸酉日占卜，殷王亲自问，在一旬即十天内没有灾祸么？四辞"王"和"亡[illegible]"三字残了，大意说，癸未日占卜，殷王亲自问，在一旬即十天内没有灾祸么？癸丑癸亥癸酉癸未四旬相接。殷王卜旬，往往是一旬接着一旬的。

方氏摹本二二二三，误作一二三四。

(10) X18：甲寅卜，自上甲又伐羌十五，卯□，亡尤。(图三：3)

这是一片牛胛骨卜辞。看字体及"亡尤"，知为祖庚祖甲时所卜。曾归王献唐，现藏中国科学院历史研究所。已著录于南师2,50。

卜辞说，甲寅日占卜，问以升伐祭自上甲，用羌奴十五，卯牛，是否没有祸尤。卯下所缺一字当为牛，伐是杀人祭⑱。卯牛亦是杀牛的意思。

方氏摹本骨形及行款都有错误。"甲寅"后夺"卜自"二字，最后夺"亡尤"二字，"卯"字误作月，"伐羌"二字亦摹错。

(11) X22：甲寅卜，𠂤，贞王宾叡亡尤。
七月。(图三：4)

这是一片龟腹甲卜辞。由贞人𠂤，知为祖庚祖甲时所卜。曾归王献唐，现藏中国科学院历史研究所。已著录于南师2,180。

卜辞说，甲寅日占卜，贞人𠂤问，王宾⑲叡祭没有祸尤么？叡祭名。日本岛邦男谓即禋祀⑳。日本贝塚茂树谓即烧薪祭㉑。

方氏摹本"甲寅"误作"甲子"，"子"又误作"𡿺"。"宾"字摹错。"宾"后又夺"叡亡尤"三字。

(12) X23：癸亥卜，尹，贞旬亡[illegible]。在十一月。乙丑[illegible]小乙，丁卯[illegible]父丁。一
癸[illegible]，尹，贞旬亡[illegible]。在十二月。(图三：5)

这是一片龟腹甲右尾卜辞。尹为祖庚祖甲时贞人，父丁即武丁，祖庚祖甲时称武丁为父丁，故知为祖庚祖甲时所卜。曾归王献唐，现藏中国科学院历史研究所。

卜辞二条。一辞说，十一月癸亥日占卜，贞人尹问，在一旬即十天内没有灾祸么？第三天乙丑这天翌祭小乙，第五天丁卯这天翌

(4) X4正：□□[illegible]，㱿，贞□鼻弗□□。(图一：6)
反：□入□。
不□。(图一：7)

这是一片龟腹甲卜辞。看贞人㱿，乃武丁时所卜。曾归王献唐，现藏中国科学院历史研究所。已见著录于南师2.73。

正面辞残，鼻为人名，甲1167说，"庚寅卜，争，贞令鼻罕彘斫工衡虫𠂤"可证。卜辞大意可能是，某日占卜，贞人㱿问，命令鼻这个人不要去做什么。

反面"□入□"为一"甲桥刻辞"，人名数字皆残。"不□"，为一卜辞，文亦残。

方氏摹本及拓本，都漏了反面的文字。

(5) X11：戊辰卜，旅，贞王其田于隙亡[illegible]。一
戊寅卜，[illegible]，贞王其[illegible]隙亡[illegible]。在四月。一
戊午卜，旅，贞王其于宰亡[illegible]。一
……尤。(图二：2)

这是一片牛右胛骨卜辞。从贞人旅，知为祖庚祖甲时所卜。全版都是第一卜。曾归山东图书馆，现藏山东博物馆。

全版共四辞。一辞说，戊辰日卜，贞人旅问，殷王祖庚或祖甲要去隙这个地方去打猎，没有灾害么？隙地名，疑即春秋贝丘。《左传》庄公八年说，"齐侯遂田于贝丘"。杜预注，"贝丘，齐地也。乐安博昌县南有地名贝丘也"。高士奇说，"《水经注》浣水迳博昌县故城西，西历贝丘。京相璠曰，博昌县南近浣水，有地名贝丘，在齐郡西北四十里，即齐襄田处。《后汉志》博昌有贝中聚是也。今博兴县南五里有贝中聚。"㉒即今山东惠民地区博兴县。二辞说，四月戊寅日占卜，贞人"旅"字残了，问王其田于隙没有灾害么？"田"字也残了。三辞说，戊午日占卜，贞人旅问，王其田于宰这个地方，没有灾害么？"田"字原来就刻漏了㉓。宰地名。由后上13.7知其地当在商的附近。从戊辰到戊寅十一天，殷王祖庚或祖甲都在隙这个地方打猎。从戊寅到戊午四十一天后，王又到宰这个地方去打猎了。四辞只残留下一个"亡尤"的尤字，当是一条关于祭祀的卜辞。

方氏摹本二辞漏了"在四月"。四辞漏了"尤"字。又一辞、三辞的"亡"字，二辞的"隙"字都摹错了。

(6) X13：己亥贞，庚子彭[illegible]于[illegible]，羌卅，十牢。
……[illegible]。□[illegible]允[illegible]画[illegible]祖[illegible]，十牢。(图二：3、4)

这是一片牛胛骨卜辞。看字体当为廩辛康丁或武乙文丁时所卜。原骨已断为二片，中间上下有缺。曾归山东图书馆，现藏山东博物馆。

卜辞二条。一辞说，己亥日占卜，问第二天庚子举行酒肉祭于[illegible]这个地方，用羌奴卅人，用牛十对，[illegible]地名，粹363说，"于[illegible]奏"，前5.9,9说，"丁未卜，贞，王登[illegible]，往来亡[illegible]"，前2，42,2说，"丁酉卜，贞，王田[illegible]，往来亡[illegible]"可证。牢为一牡牛一牝牛之称，意思是一对牛㉔。二辞有残缺，大意约为，某日占卜，问举行酒肉祭于[illegible]这个地方。几日之后，果然命画登捧俎肉于[illegible]，用十牢，即十对牛。画，人名。

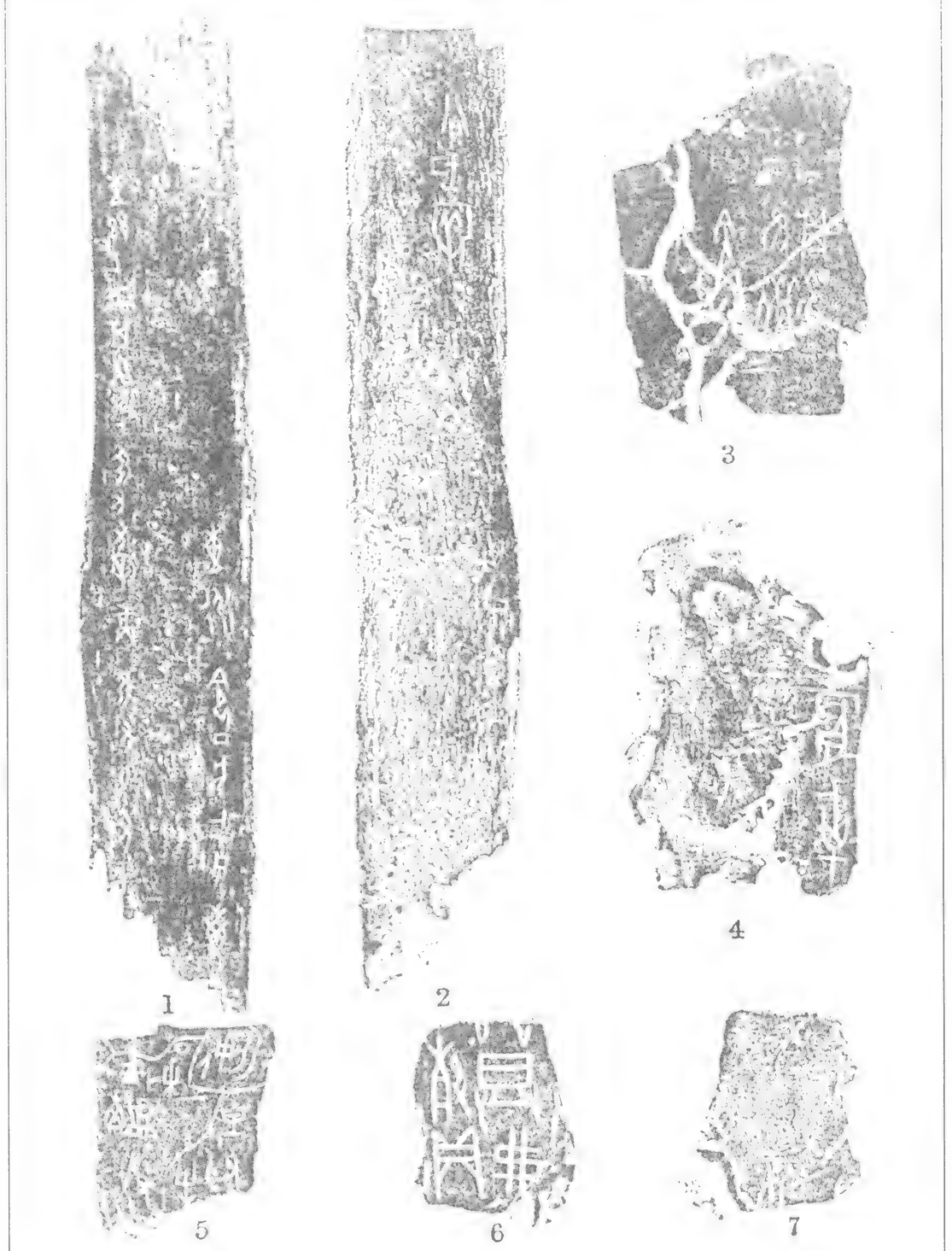
方氏摹写本一辞"彭"下多摹一"□"字。"屮"误作"𠂤"，"羌"字"牢"字都摹错。二辞漏摹"日允"二字。"俎"字亦摹错。

(7) X14：乙酉[illegible]，自上[illegible]又伐[illegible]彭升。三
乙酉卜，[illegible]甲午彭升。甲午不雨。二
丁亥[illegible]，[illegible]天乙[illegible]升。三
丁亥[illegible]，[illegible]衣[illegible]天乙彭[illegible]。三(图二：1)

这是一片牛右胛骨卜辞。看字体，当为廩辛康丁或武乙文丁时所卜。原骨左下部分已残去了四分之一左右。全版都是第二卜。曾归王献唐，现藏中国科学院历史研究所。



图二　甲骨文字拓片



图一　甲骨文字拓片

祭武丁。二辞残了，大意说，十二月癸某日占卜，贞人尹问，在一旬即十天内没有灾祸么？

方氏摹本这一片错字很多。一辞"癸"后夺"亥卜尹贞"四字，"十一月"误作"十月"，"乙丑"字摹错。"乙丑"后夺"翌小"二字，"丁卯翌"后夺"父丁"二字。二辞漏摹"尹""在"二字。

(13)X26：[癸]丑卜，旅，[贞]翌乙酒[㞢]且乙，其[𠂤]㞢升岁，一宰，羌十人。（图三：6）

这是一片龟腹甲右尾卜辞。由贞人旅，知为祖庚祖甲时所卜。曾归山东图书馆，现藏山东博物馆。

卜辞略有残缺，但仍可以填补。说，癸丑日占卜，贞人旅问，翌日第三天乙这一天酒日祖乙，会遇到侑升岁祭，杀一宰，即一对羊，及羌奴十人么？酒日祭名，侑升岁也都是祭名。

方氏摹本夺"丑"字，"翌乙酒"及"岁"字都摹错。"十"误作"㠯"。

(14)X30：[癸]□卜，旅，[贞]王宾□祓[㞢]㞢。（图三：7）

这是一片龟腹甲卜辞。由贞人旅，知为祖庚祖甲时所卜。曾归王献唐，现藏中国科学院历史研究所。已著录于南师2,178。

卜辞有残缺，除干支外，仍可填补。大意说，某日占卜，贞人旅问，殷王祖庚或祖甲宾，用夕祓或枫祓之祭，不会有灾祸么？夕祓或枫祓都是祭名。祓为祭时进品物之升[25]。

方氏摹本误画成牛胛骨，又骨形亦嫌过大而宽。㞢字误作"▽▽"。

五

总之，孙氏旧藏甲骨文字，其著录在《甲骨卜辞七集》中《孙氏所藏甲骨文字》的，尽管摹的不好，但却无一不真。原骨现在归于山东博物馆者六片，归于中国科学院历史研究所者八片，共计一四片。就这一四片甲骨实物看来，绝对没有可以怀疑的地方。既不是所谓"进步的赝品"，也决非所谓"全是仿刻"。那些"可疑"、"仿刻"、"赝刻"、"赝品"等等的说法，显然是不正确的。

这些甲骨，不但不是伪品，而且内容较精。一四片甲骨中，自武丁以迄文丁，各时代都有。贞人有武丁时的㱿，祖庚祖甲时的旅、尹、𠂤，廪辛康丁时的宁。还有武丁时和祖庚祖甲时殷王亲贞之辞。有龟腹甲，有龟背甲，有牛左胛骨，有牛右胛骨。特别应该注意的是还有一片牛肋骨，正反两面都刻有卜辞，用牛肋骨刻卜辞的例子，在过去一般很少见。有记载入龟的"甲桥刻辞"。有一条卜辞分开两段记载之例。在卜辞中或记载其用丝卜，重丝卜用。又有连续卜旬之辞，有卜旬而兼记遇翌之祭。有连续田猎记载着不同的地名，因此可以考证殷代的地理。有人名[illegible]，僔，𠂤，派。有地名隕，牢，𠂤。有祭名溼、祊、俎、酒、衣、叡、嫔、伐、翌、酒、岁、宾。更重要的是还有用羌奴祭祀之辞，或十人，或十五人，或卅人。对于研究殷代的阶级关系，是很好的文字史料。

《甲骨卜辞七集》一书，所著录甲骨凡七家，其中《天津新学书院》及《孙氏所藏甲骨文字》两部分，片大字多。尤其以孙氏所藏部分最为重要。倘贸然以仿刻赝品，屏而弃之，那就未免太可惜了[26]。



图三　甲骨文字拓片

① 张凤贤致张政烺同志的信说，"此间（益都）北乡有孙文澜者，字观亭，为一金石陶瓦搜藏家。今夏死去。遗物省立图书馆想买，而教育厅不给钱，所以尚未出手，而孙公亦无以为殡。十二月六日。"刊北京大学潜社《史学论丛》第二册，1935年。

② 方法敛摹，白瑞华校，《甲骨卜辞七集》《材料来源表》，1938年。

③ 方法敛摹，白瑞华校，《甲骨卜辞七集》《材料来源表》；又白瑞华《声谢》（Acknowledgements），1938年。

④ 见《图书季刊》新二卷三期，三〇一、三〇六、三〇七、三二一、三二二页，1940年。

⑤ 见《图书季刊》新二卷一期，四七页，1940 年。
⑥ 见《殷虚卜辞综述》六七二页，1956 年。
⑦ 张履贤致张政烺同志的信，刊北京大学潜社《史学论丛》第二册，1935 年。
⑧ 参看胡厚宣《战后京津新获甲骨集》《序要》，1954 年。
⑨ 张宗骞，《卜辞习弗通用考》，刊《燕京学报》二八期，1940 年。
⑩ 胡厚宣《释丝用丝祀》，刊《历史语言研究所集刊》八本四分，1940 年。
⑪ 管燮初，《甲骨文中"唯"字用法的分析》，刊《中国语文》，1962 年 6 月号。
⑫ 多公见库 1022，粹 405，邺 3,47,4。
⑬ 三公见粹 406。
⑭ 胡厚宣《释羊》，刊《历史语言研究所集刊》八本二分，1939 年。
⑮ 胡厚宣《武丁时五种记事刻辞考》，收入《甲骨学商史论丛》初集第三册，1944 年。
⑯ 于省吾《释祘》，收入《双剑誃殷契骈枝三编》，1944年。
⑰ 高士奇《春秋地名考略》卷三，齐贝丘。
⑱ 参看胡厚宣，《卜辞杂例》，刊《历史语言研究所集刊》八本三分，1939 年。
⑲ 胡厚宣《释羊》，刊《历史语言研究所集刊》八本二分，1939 年。
⑳ 马汉麟《关于甲骨卜旬的问题》，刊《南开大学学报》1956 年一期，
㉑ 吴其昌《殷代人祭考》，刊《清华周刊》三七卷九、十号《文史专号》，1932年；又《殷虚书契解诂》五续一三一片，刊《文哲季刊》五卷一号，1935 年。
㉒ 郭沫若《卜辞通纂考释》一五页，1933年；又《殷契粹编考释》六六页，1937 年，又 1965 年。
㉓ 日本岛邦男《殷虚卜辞研究》，二六四页，1958 年。
㉔ 日本贝塚茂树《京都大学人文科学研究所藏甲骨文字》《本文篇》三七七页，1960 年。
㉕ 于省吾《释祘》，收入《双剑誃殷契骈枝三编》，1943 年。
㉖ 本文附图引用山东博物馆及前山东博物馆副馆长王献唐（已故）甲骨拓本。

關於「戰後殷墟出土的新大龜七版」

嚴一萍

彥老生前對於甲骨新材料的發見最爲關心，對於材料的流傳也最爲鼓勵。記得有一次在平廬夜談時，說起歷史語言研究所在抗戰勝利復員到南京後，他的學生胡厚宣曾經特地去拜訪一次，向老師請教今後從事甲骨研究工作的方向，彥老還是很熱情地勉勵他以流傳材料爲第一。不管當時胡氏的感想如何，他對於甲骨材料的搜集確實很努力，此後編印的甲骨材料書，陸續出版了好多種，可說是接受了老師的指點。他的戰後南北所見甲骨錄、戰後寧滬所見甲骨錄、甲骨續存、戰後京津新獲甲骨集等書，因爲是材料，所以在出版當時都很流行，至今研究甲骨的人也都很容易見到，其中祇有「新大龜七版」是一般學者所不易見到的，因爲這是一篇專文，發表在民國三十六年（一九四七）的上海中央日報副刊文物周刊上（上海市博物館研究室輯）。共登九次，自二月十九日第二十二期開始至四月二十三日第三十一期止。中間第二十六期沒有登載。每一版龜甲都有拓本摹本及考釋，標題是「戰後殷墟出土的新大龜七版」。報紙副刊最不易保存，時過境遷，就很難再見。但是這是甲骨的新材料，所以此後在甲骨研究的著作中，時有提到這篇文章的；因此曾引起海外甲骨研究者的探索。

民國五十年（一九六一）日本出版的甲骨學第九號，有松丸道雄氏的一篇報導，他得到 M. V. KRYUKOV 氏的幫助，知道這新大龜七版已經發表在其他的甲骨著作中，製成一張對照表：

新大	雙古	六錄雙	雙劍誃	拾掇二	京津	續存	殷虚文字綴合
一				一	一		
二				七	八九九		
三					一九六六		
四	下三二、三	一			六四八		
五	下三二、一	二					
六	下三二、二	三					
七			四二			下二二四	二六九（＝新大六加乙四六三〇）

這表內所列的出處，可說大體上已經具備，但就整個材料來講，還沒有十分完整。十多年來，隨時想把這批材料加以補充說明，一直沒有空暇的時間來着手。今天，彥老逝世已經十年，就用這「新大龜七版」的補充說明，作爲逝世十周年的一個紀念吧！

大龜第一版（圖一至圖三）

第一版刊登在民國三十六年二月十九日中央日報文物周刊第二十二期。「圖版（一）拓本」。此版今已遺錄在殷契拾掇二、一、及戰後京津一，京津尚有甲背摹本，而文物周刊脫去，卜兆已刻過。胡氏釋文作：

丙午卜，韋，貞之（茲）十月雨，其隹（唯）靈？

一　二　三　二告　四　五

丙午卜，韋，貞之（茲）十月不其隹（唯）靈雨！

一　二　三　四　五

他說「之」讀作「今茲」的「茲」。案甲骨「之」作 ，或 ，此處作 ，是「生」字。「生月一相當于「來月」，釋「之」是舊說，還沒有把出 三字分清的緣故。甲背有三字朱書未刻，應加補錄：

晝來卅

大龜第二版（圖四至圖五）

第二版刊登于三十六年二月二十六日文物周刊第二十三期。「圖版三拓本」「圖版

四摹本」。此版今已著錄在拾掇二、七及京津八九九。胡氏原釋作：

癸未卜，賓，貞旻。

一　二　三　四　不　五　二告　六　七　不

案此版原釋有漏字，應作：

癸未卜，宂貞：今日旻。

一　二　三　四　不　五　二告　六　七　不　八

卜辭漏去「今日」二字，不免疏忽，大約是報館校對不精，撰文者有時也無可奈何的。

大龜第三版（圖六至圖八）

第三版刊登于三十六年三月五日文物周刊第二十四期。「圖版五（正面拓本）原大$\frac{1}{2}$」「圖版六（正面摹本）原大$\frac{1}{2}$」「圖版七（反面摹本）原大$\frac{1}{2}$」。案所附圖版六應是「反面摹本」，而圖版七纔是「正面摹本」，不知何以會顛倒如此。此版今已著錄在京津一二六六（松丸氏表作一九六六誤），可惜京津祇錄正面拓本，不錄背面拓本，不免是一個缺憾。這一版與小屯乙編五三四〇、五三四三、五三八五合，已刊入丙編上輯，圖版二四。因爲屬於乙編這一半的背面無字，所以丙編也沒有背拓，而兩家的釋文也各就所著錄的一半入錄，先看胡氏原釋作：

一、辛酉卜，曳，貞王从望乘伐下危。　一

二、辛酉卜，曳，貞王勿隹（唯）望乘从。　一

三、貞口（王）从口（望）乘口（伐）下危。　一

四、貞口（王）勿口（唯）望口（乘）口（从）。　一

五、王口（从）沚口（戠）。　一

六、勿口（从）沚口（戠）。　一

七、……　一　二告

八、……　一

九、貞王宙（唯）沚戠从伐巴方。

十、貞王勿隹（唯）沚戠从。　（一）

十一、宙（唯）沚戠从伐巴。　一

十二、……

十三、貞王宙（唯）沚戠从。

關於「戰後殷墟出土的新大龜七版」

十四、……

十五、王宙（唯）沚戠从。　一

十六、……

十七、宙（唯）乘从。

十八、……

十九、貞王（唯）夷仜，正。

二十、……

廿一、貞王……　一

廿二、……

廿三、一　二告。

廿四、……

丙編二十四釋文作：

1.〔貞〕：王〔从〕望〔乘〕伐〔下危〕？

2.〔貞〕：〔王〕〔勿〕〔从〕〔望〕〔乘〕？

3.王宙望乘从？　一

4.王勿隹望乘从？　一

5.〔宙〕〔乘〕〔从〕？　（一）

6.勿隹乘从？　一

7.一　上告

8.一

9.〔王〕〔宙〕〔沚〕戠从？　一

10.〔勿〕〔隹〕〔沚〕〔从〕？　一

11.〔王〕〔宙〕〔沚〕〔戠〕〔从〕〔伐〕？　（一）

12.王勿从沚戠伐？　一

13.〔王〕〔宙〕〔沚〕〔戠〕〔从〕？　（一）

14.勿从戠？　一

15.〔貞〕：〔王〕〔宙〕〔沚〕〔戠〕〔从〕？

16.王勿隹戠从？

17.王宙〔沚〕戠〔从〕？　一

18.王勿隹戠从？　一

19.〔貞〕：〔王〕〔宙〕〔人〕〔𠂤〕〔正〕？　一

20.貞：王勿隹人正？　一　上吉

21.〔貞〕：（王）宙龍（方）伐？　〔一〕

22.王勿隹龍方伐？　一

這一版腹甲既然已經綴合，恢復了全形，在這裡應當作一篇完整的釋文，自然也應當恢復一幅完整的甲背全形。所以我的釋文次序與胡張兩家有些不同。

一、貞：王宙龍方伐？　一

二、王勿隹龍方伐？　一

三、王宙沚㱿从？　一

四、王勿隹沚㱿从？　一

五、宙乘从？　一

六、勿隹乘从？　一

七、貞：王宙沚㱿从？　一

八、王勿隹㱿从？　一

九、王宙沚㱿从？　二告　一

十、勿从㱿？　一

十一、貞：王人𠂤正？　一

十二、貞：王勿隹人正？　一

十三、「辛酉卜爭」（反面刻辭）貞：王宙沚㱿从伐巴方？　二告　一

十四、貞：王勿隹沚㱿从？　一

十五、王宙沚㱿从伐巴？　一

十六、王勿从沚㱿伐？　一

十七、王宙望乘从？　一

十八、王勿隹望乘从？　一

十九、辛酉卜，爭貞：王从望乘伐下危？　一

二十、辛酉卜，爭貞：王勿隹望乘从？　一

廿一、貞：王从望乘伐下危？　一

廿二、貞：（王）勿（隹）望（乘从）？　一

廿三、王宙沚㱿从？　一

廿四、勿隹沚从？　二告　一

第十三辭的「辛酉卜爭」是根據甲背刻辭加上，這卽是彥老所標示研究甲骨六項原則之一的「面背相承」。

大龜第四版（圖九至圖十）

第四版刊登于民國三十六年三月十二日文物周刊第二十五期。「圖版八（拓本）原大$\frac{3}{4}$」「圖版九（摹本）原大$\frac{3}{4}$」。今已著錄於雙劍誃古器物圖錄三。京津六四八。

原釋文作：

一、己亥卜，賓，屮（侑）于口甲（上甲）五牛。　一

二、屮（侑）于口甲（上甲），五牛。　一　二告

三、十牛。　一

四、勿苜十牛。　一

五、庚子卜，殼，貞年屮（有）它。五月　一　二　三　二告

六、庚子卜，口，口年口口。　一　二　三　四

七、貞令雀西征悔。　一　二

八、貞雀叶王事。　一

在上面較大的一個字，胡氏認爲是習契者所刻。

大龜第五版（圖十一至圖十四）

第五版刊登于民國三十六年二月十六日文物周刊第二十七期。「圖版十（拓本）原大」。「圖版十一（摹本）原大」。此是龜腹甲的上半，今已著錄於雙劍誃古器物圖錄三，原釋文作：

一、戊辰卜，內，貞戠射。　一　二　三　二告　四

二、勿戠射。　一　二　二告　三　四

三、王往入。　一　二　三

四、王勿往入。　一　二　三

這一版可與小屯乙編四四七三及四四七五相綴合，而乙編四四七三還有背拓。釋文應作：

一、貞：射三百。　一　二　三　二告　四

二、射三百。

三、戊辰卜，內貞：射。　一　二　三　四　五　六　七　八

四、勿射。　一　二　三　四　二告

五、王往入。　一　二　三

六、王勿往入。　一　二　三

全版卜兆已經刻過，背拓祇有存「𠙵」一字，當是記載入貢腹甲的數字，可惜上半沒有背拓，不能確知爲某人所入。但根據乙編四六九六版所記載的「𠙵入𠙵」，當爲同時所貢納的四十版龜甲中的兩版，所以兩版的數字都作「𠙵」。因此可以知道這一版所缺的爲「𠙵入」二字。雖然沒有背拓，但是鑽鑿的排列，可以根據卜兆補出，如圖十四。

大龜第六版（圖十五至圖十六）

第六版刊于民國三十六年四月二日文物周刊第二十八期。「圖版十二（拓本）原大」「圖版十三（摹本）原大」。今已著錄于雙劍誃古器物圖錄二，原釋文作：

一、丙戌卜，曳，貞婦（婦）娘冂冂（冥妨）　一　二　三　四　二告
二、貞帚（婦）娘冥（殀），不其妨（嘉）。　一　二　三　二告　四
三、貞帚（婦）娘冥（殀），妨（嘉），隹（唯）衣。　一　二　三　四
四、𠙵（侑）父庚。　一
五、勿𠙵（侑）。　一
六、𠙵（侑）兄戊。　一
七、勿𠙵（侑）。　一

這一版也可與小屯乙編四六三〇綴合，已收入殷虛文字綴合第二六九版。綴合後第一條「雙劍誃所藏甲骨」內，編號四二。此後這一批摹本又輯入甲骨續存的下輯內，編號爲二二四。原釋文作：

一、丁冂卜，貞勿𠂤（御）子奴……王固（占）曰吉。奴亡……一
二、貞福于母庚旬（恂）。
三、于匕（妣）己福，子奴，旬（恂）。
四、于母冂。　一　二告

大龜七版的全文共刊登九期，龜甲部份刊至第二十九期止，中間第二十六期未載。以後四月十六日文物周刊第三十期及四月二十三日文物周刊第三十一期所刊登的是總論。據胡氏說，這七版龜甲的一至三版，是他在北平購得；四至七版是于省吾氏所藏。他合而稱之爲「戰後殷墟出土的新大龜七版」。他在第一版的敍說中有這樣一段話：

在北平所得武丁時的大龜甲，其特點又恰與中央研究院十三次發掘所得的一坑，完全相同。

事實不止是他在北京購得的三版相同，即是于氏所藏的四版，也是完全相同的。這一坑的位置在乙十二基址的西面，包括在乙七基址的範圍內（註一）。代號YH一二七。共出土龜甲一七一二九版，發掘編號自一三、〇、〇六二八—一七七五六。現在檢查綴合上的缺字可以補足，而讀法應當是這樣的：

一、貞：帚娘殀妨，隹衣。　一　二　三　四　二告
二、一　二　三　四　二告
三、丙戌卜，爭貞：帚娘殀妨？七月。　一　二　三　四　二告
四、貞：帚娘殀，不其妨？　一　二　三　四　二告
五、𠙵父庚？　一
六、勿𠙵？　一
七、𠙵兄戊？　一
八、勿𠙵？　一

這版卜兆也經刻過，最特殊的是全版有許多人爲的小洞，這是很少見的。釋文第二行，我以爲是第一行的對貞，省略了刻辭，胡氏則「疑心卜辭一定是在背面，因爲龜版背面粗澀，年代久了，字跡就看不清了」。這一點，祇有留待能見到實物以後的證實了。

大龜第七版（圖十七）

第七版刊登於民國三十六年四月九日文物周刊第二十九期。「圖版十四（摹本）」這版腹甲很小，至今祇有摹本，未見拓片或原物的照片。最早的摹本著錄在甲骨六錄的上半，著錄於民國四十二年出版的京津四二八號及拾掇二、六。胡氏在京津序中說明這兩版龜甲，已歸「北平歷史博物館」，原藏誰氏？何時入藏？都未見記載，不得而知。但是由胡氏所流傳的材料中，屬於YH一二七同坑的大龜，還有一版四方風的大腹甲去的幾版腹甲的編號，第四版的大腹甲是一三、〇、一一九二四。一三、〇、一一九二九。一三、〇、一一九八五。第五版的兩小片是一三、〇、一〇四五五。一三、〇、一〇四五六。一三、〇、一〇四七一。一三、〇、一〇四七四。一三、〇、一〇四九二。第六版的甲橋部分是一三、〇、一〇七四二。一三、〇、一〇七四三兩小片。這許多數字都包含在一三、〇、〇六二八—一七七五六這個總數之內，那麼確實可以證明是YH一二七的同坑之物。據胡氏在甲骨續存的序中說：

下編（甲骨續存下編是摹本）三八八、三八九、和四四二、四四三，是兩版完整的龜腹甲中的表面和背面。兩龜都是武丁時所卜，卜辭字劃裏邊塗著赭色。和中央研究院一九三六年春季第十三次發掘所得一二七坑的整坑龜甲作風相同，疑爲同時所卜，或即爲同坑所出之物。有一個最好的證明：本書下編三八八、三八九是第二卜，殷虛文字乙編六八七七、六八七八是第三卜，殷虛文字乙編七二七、七二八是第四卜。三版表背面同文，乃同時爲同事而占卜。

這兩版龜甲，已歸「北平歷史博物館」，原藏誰氏？何時入藏？都未見記載，不得而知。但是由胡氏所流傳的材料中，屬於YH一二七同坑的大龜，還有一版四方風的大腹甲上半，著錄於民國四十二年出版的京津四二八號及拾掇二、六。胡氏在京津序中說明這

一版可與乙編四五四八相綴合，四五四八號是腹甲中部，也是YH一二七坑出土的，後來我又綴合上乙編的四七九四、四八八三、五一六一、六五三三。證明殷人卜四方風爲的是求年，曾爲文發表在民國四十六年七月大陸雜誌十五卷一期，至民國五十一年出版的丙編中輯(一)把這一版綴合的腹甲編爲二一六版，並在釋文內作爲插圖第七一。根據綴二的記載，大龜第一第二兩編版與這四方風腹甲，已歸北京圖書館所藏。就現在所知道的YH一二七坑同時出土的龜甲，應當有十塊了。YH一二七是最有名的灰土坑，彥老在甲骨學六十年的殷代文化寶庫的開發一節中曾引述石璋如先生的報告說：

H一二七這個窖，是被壓在M一五六墓葬之下。

上口距地面約一・二公尺，口徑約一・八公尺，深約六公尺。窖內的堆積分三層，上層爲灰土，下層爲綠灰土。中間一層堆積灰土與龜甲。從坑口下半公尺發現龜甲起，到深二・一公尺止，龜甲層高一・六公尺。此窖圓形，在甲骨未傾入以前，下面已有相當時間的堆積，綠灰土中含有少量陶片和獸骨（按綠灰土質輕，似是穀米陳腐所成，小屯他處多有之）。堆積是北高南低，當從北邊傾入。甲骨的傾入，也是如此。

一個特殊的現象，是緊靠北壁，有一個拳曲而又倒置的人體骨骸，大部份陷入甲骨堆中可知是同時埋入的。

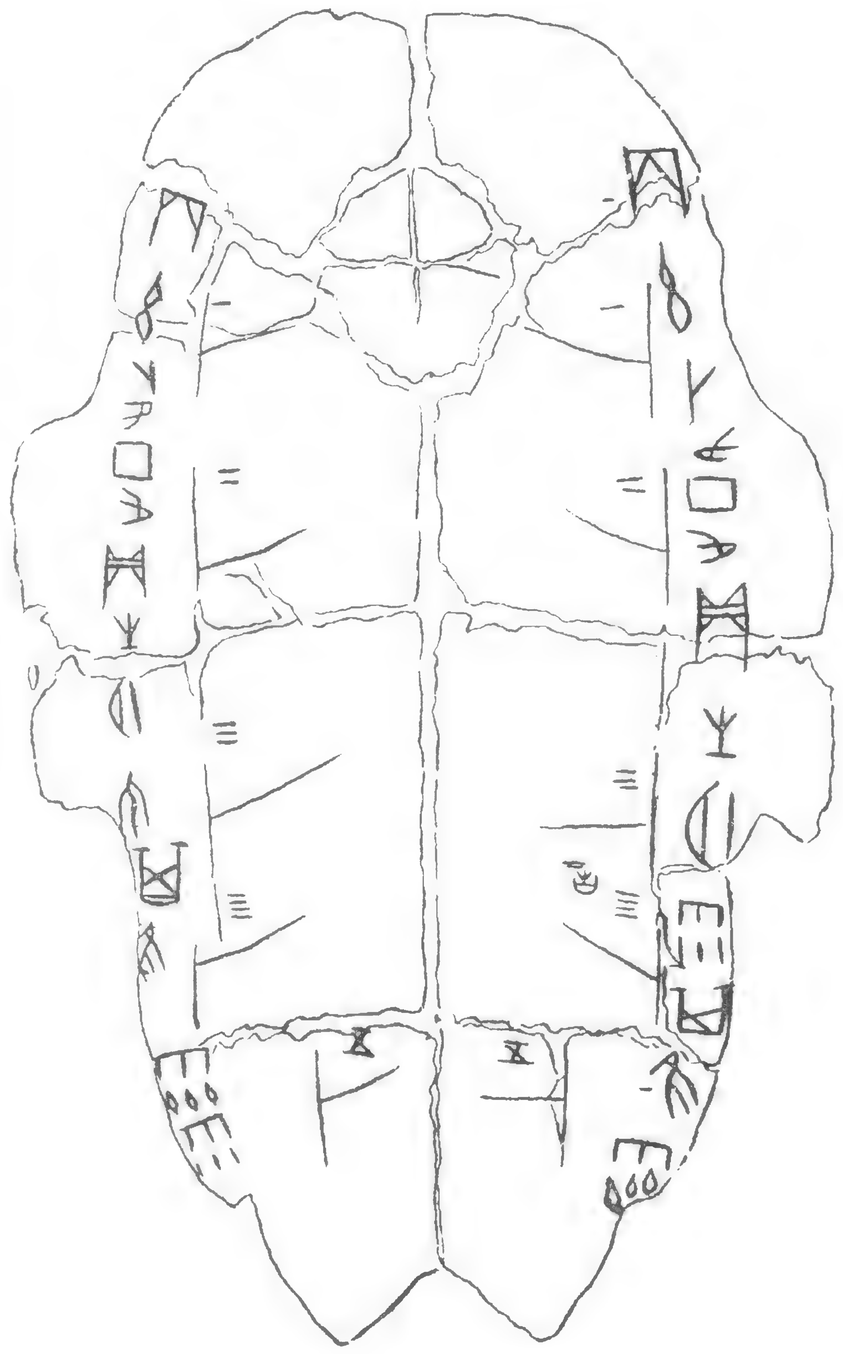
這坑所得的一大塊甲骨堆積，太堅硬，太大；當時無法在田野整理，因此是整塊運到南京史語所後纔整理的。甲骨學六十年的附圖二十四，便是這一堆甲骨運到後的形狀。這當然是戰前的事，所以胡氏題稱「戰後殷墟出土」就有些不符事實。我想應當改題爲「戰前殷墟第十三次發掘YH一二七同坑出土的大龜十版」纔算合理。

（註一）見石璋如先生殷墟建築遺存附表一二七「與基址有關的甲骨之時期」中央研究院歷史語言所出版。

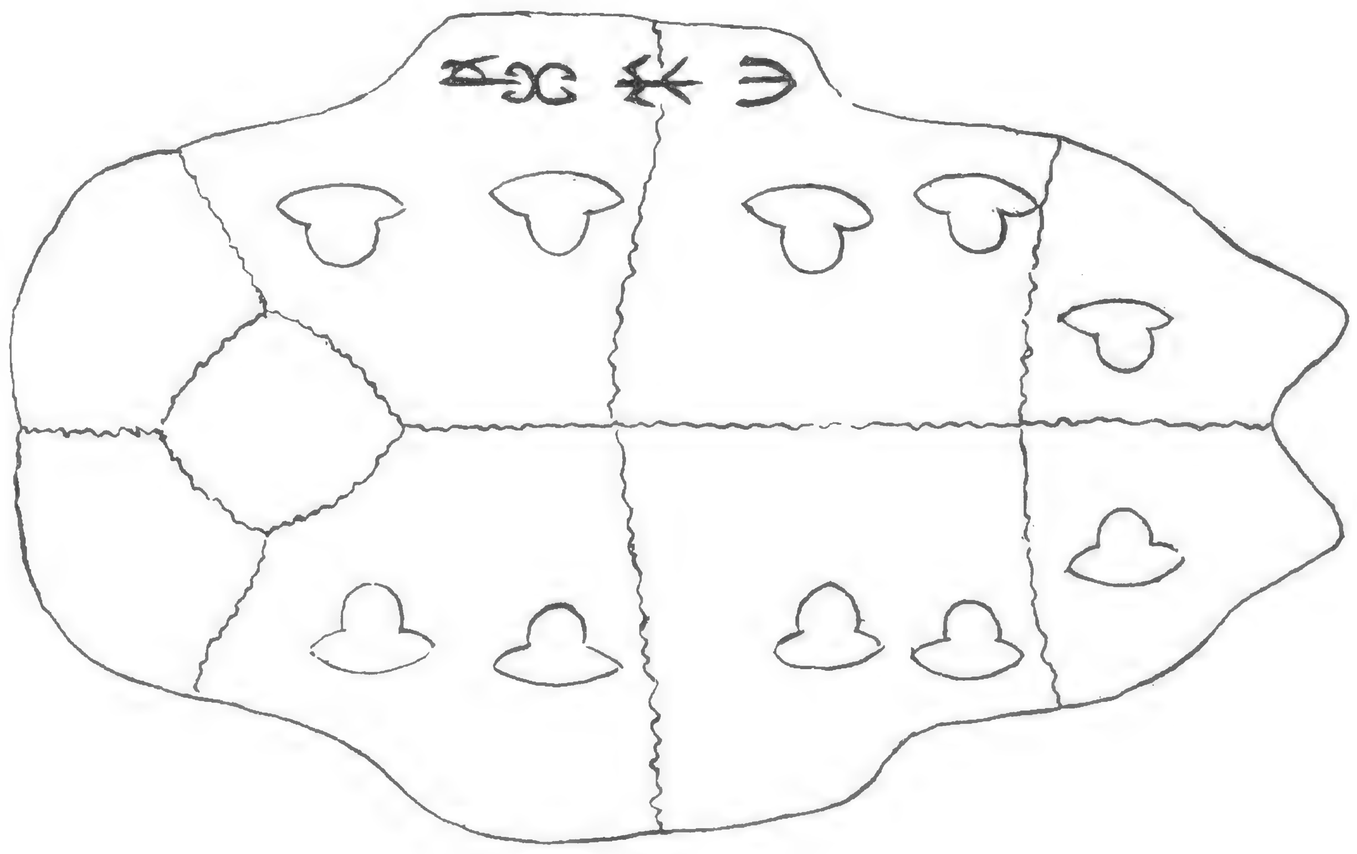
圖版一（大龜七版之一正面拓本）



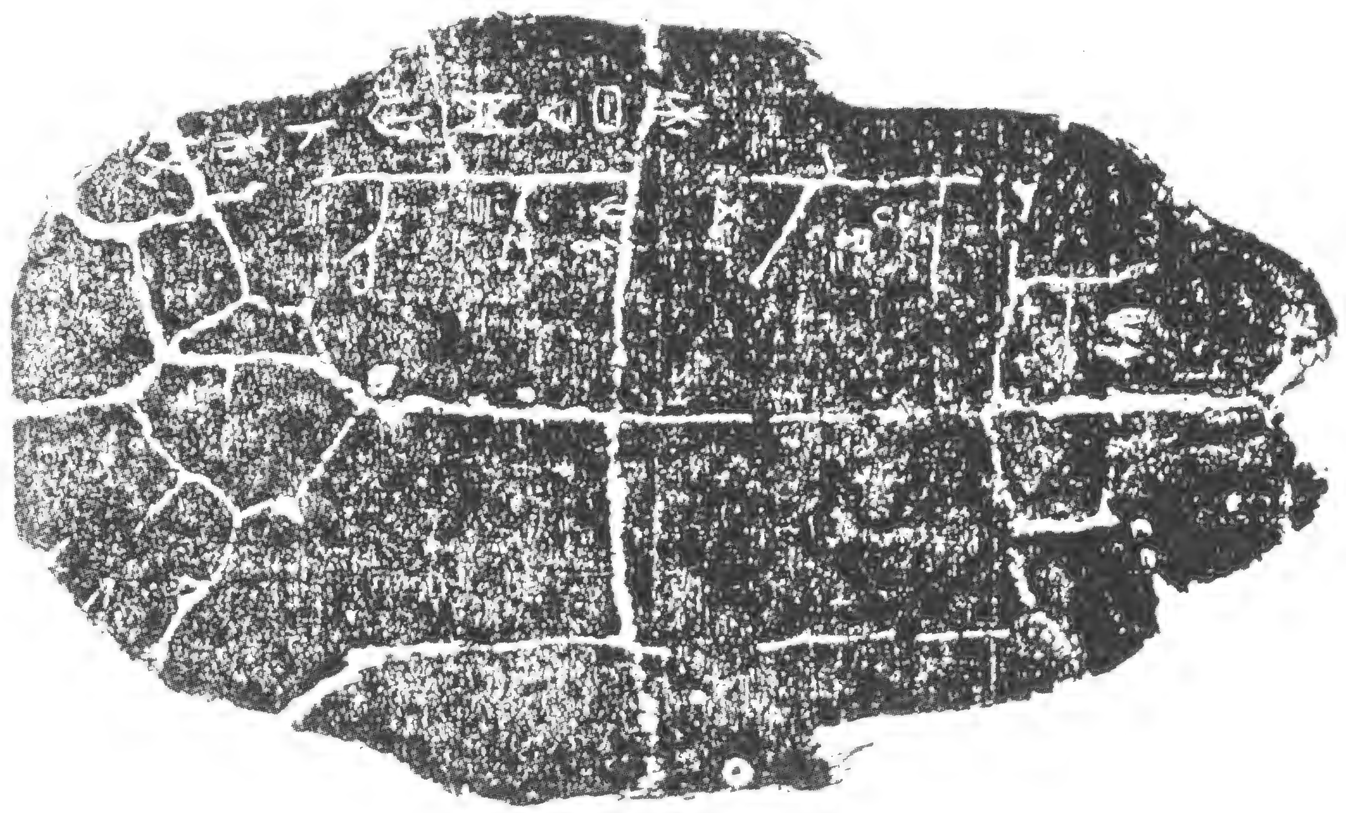
圖版二（大龜七版之一正面摹本）



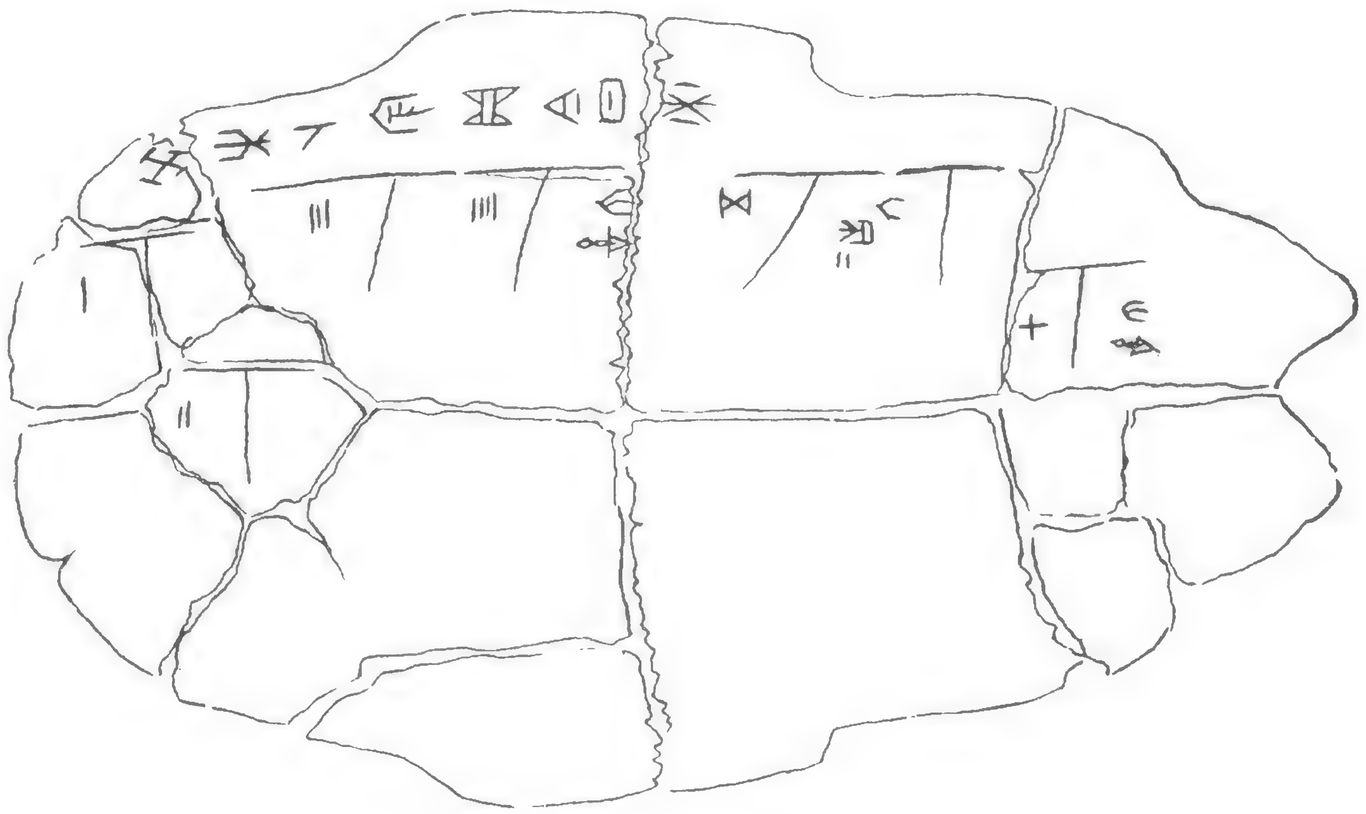
圖版三（大龜七版之一背面摹本）



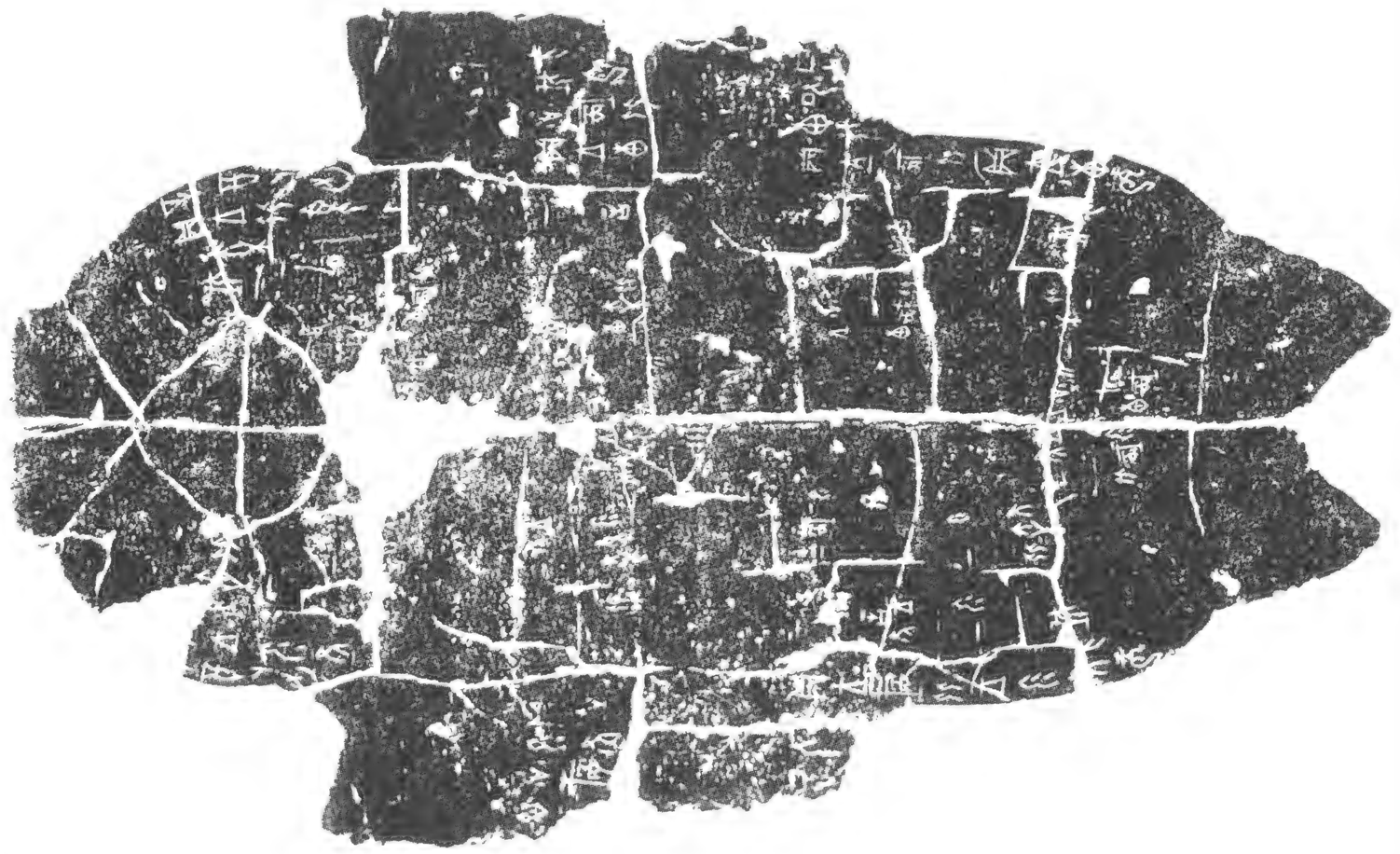
圖版四（大龜七版之二正面拓本）

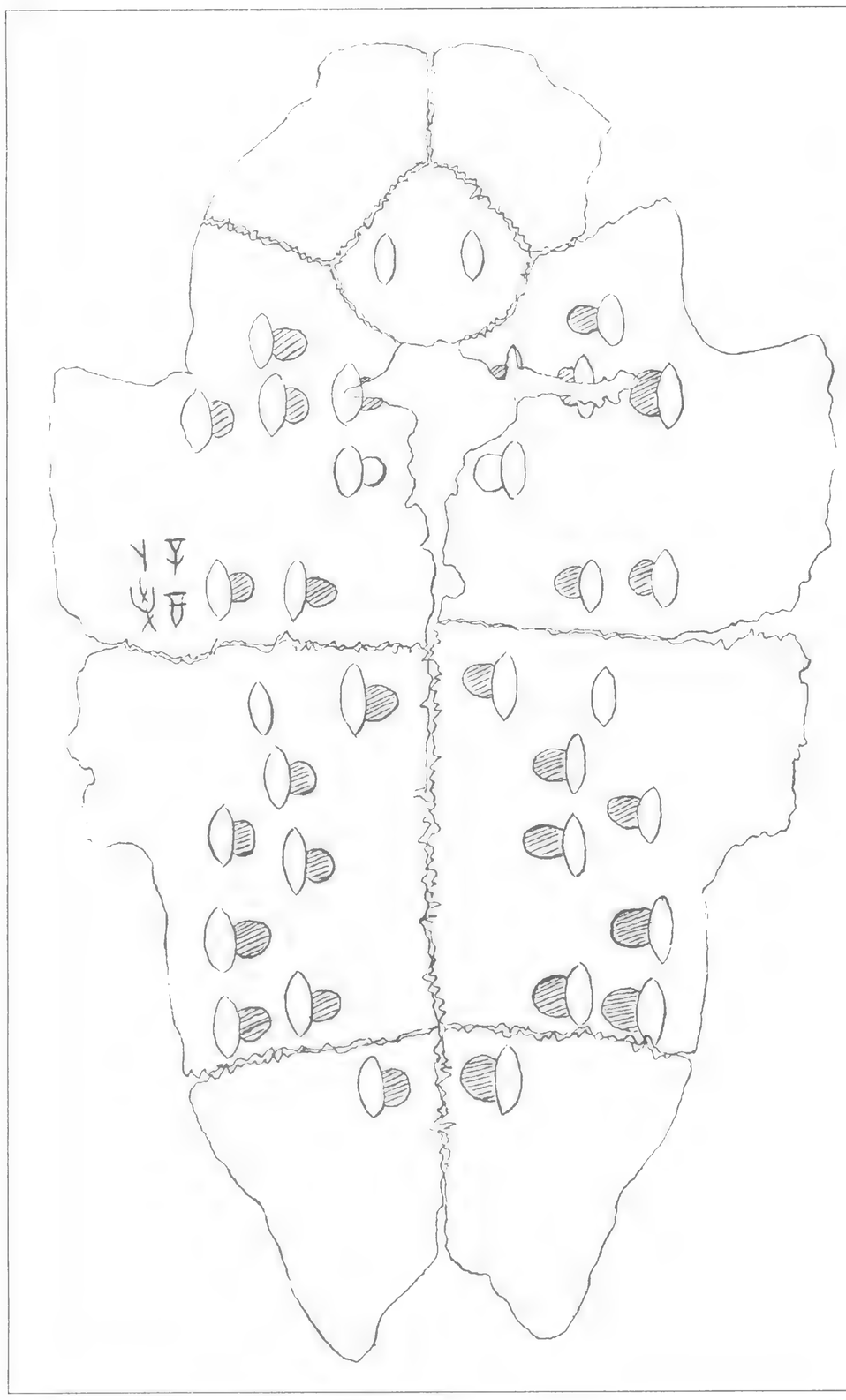


圖版五（大龜七版之二正面摹本）

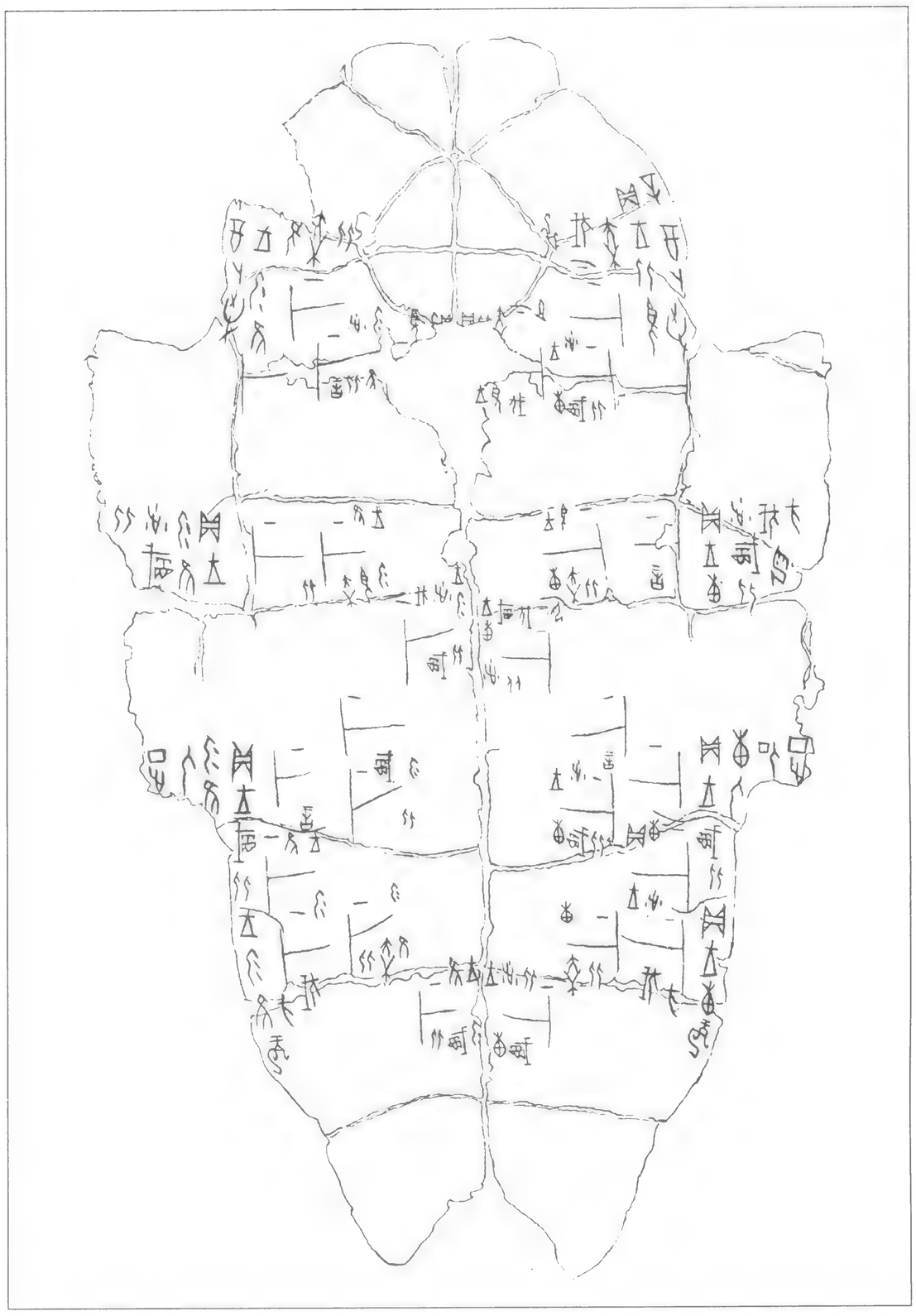


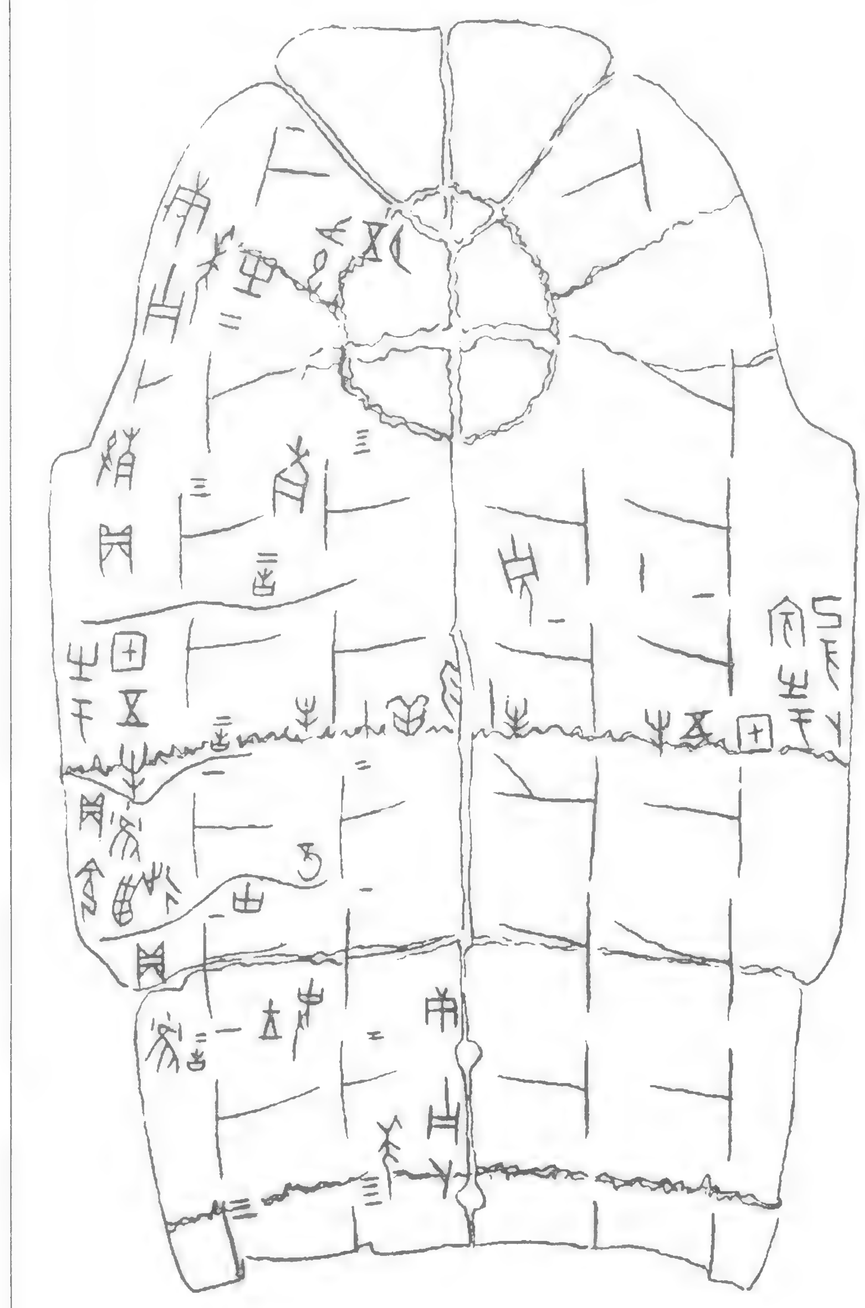
圖版六（大龜七版之三正面拓本）



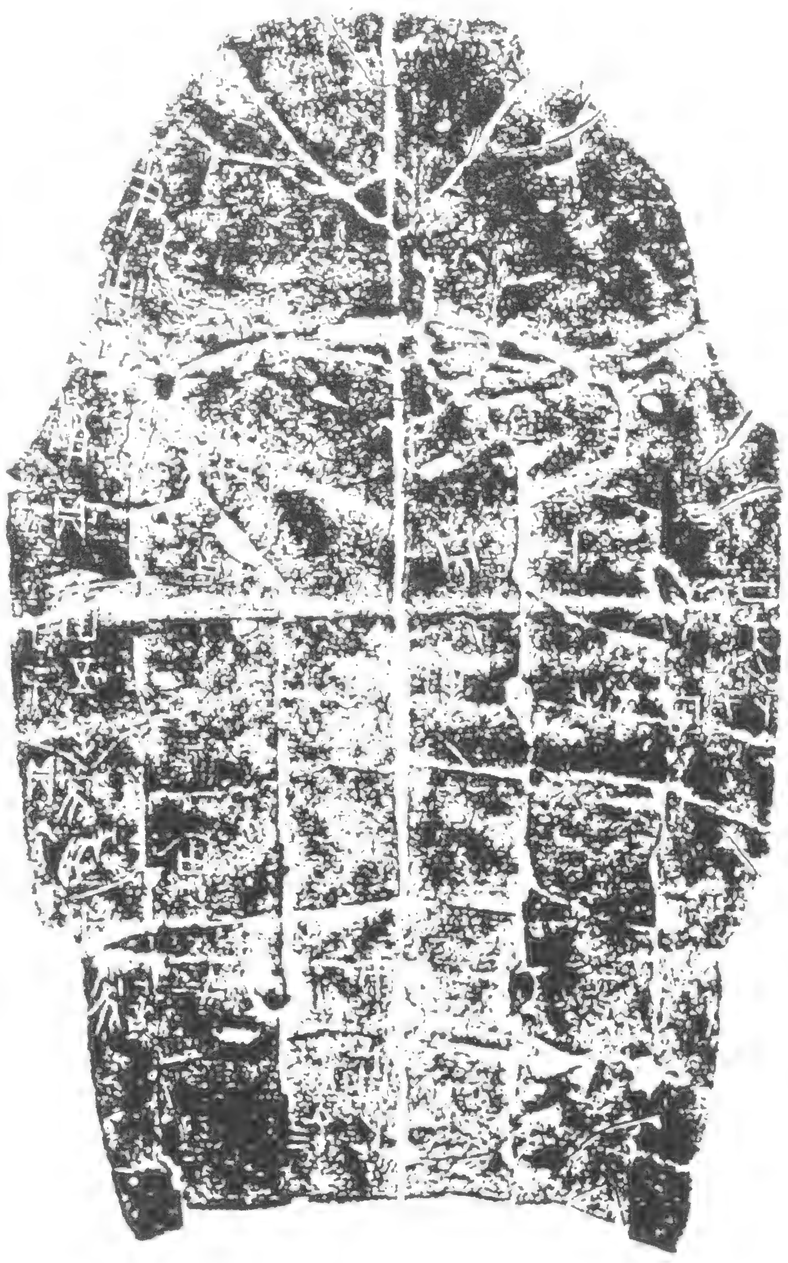


圖版八（大龜七版之三背面摹本）

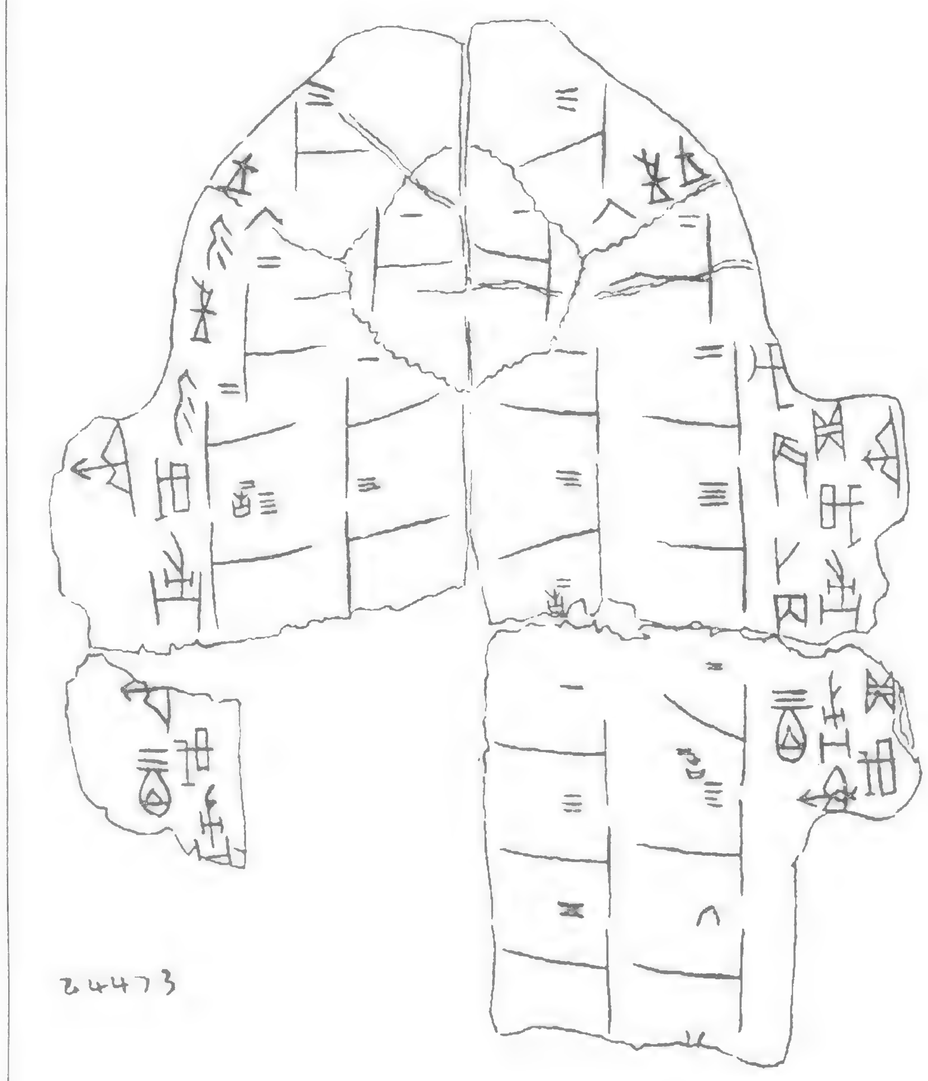




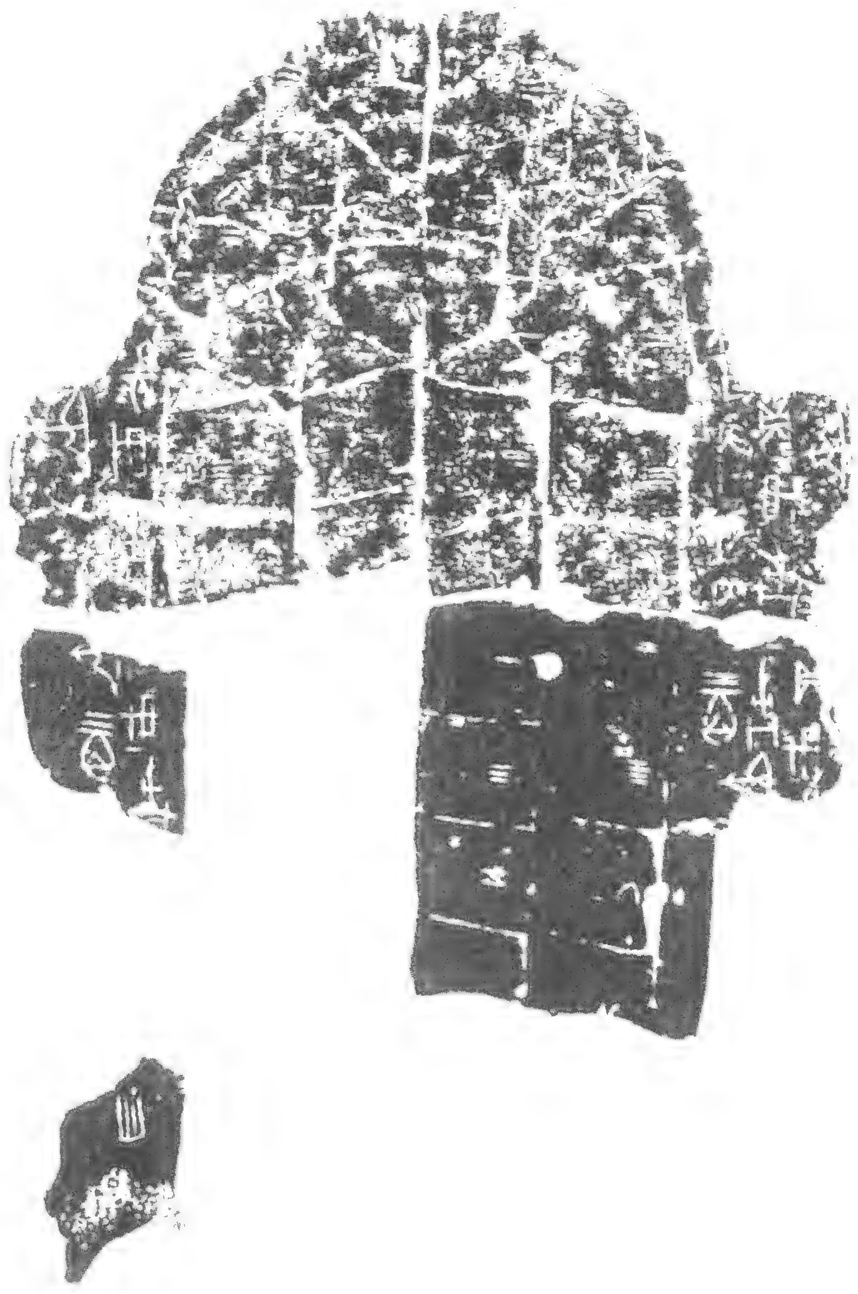
圖版十（大龜七版之四正面摹本）



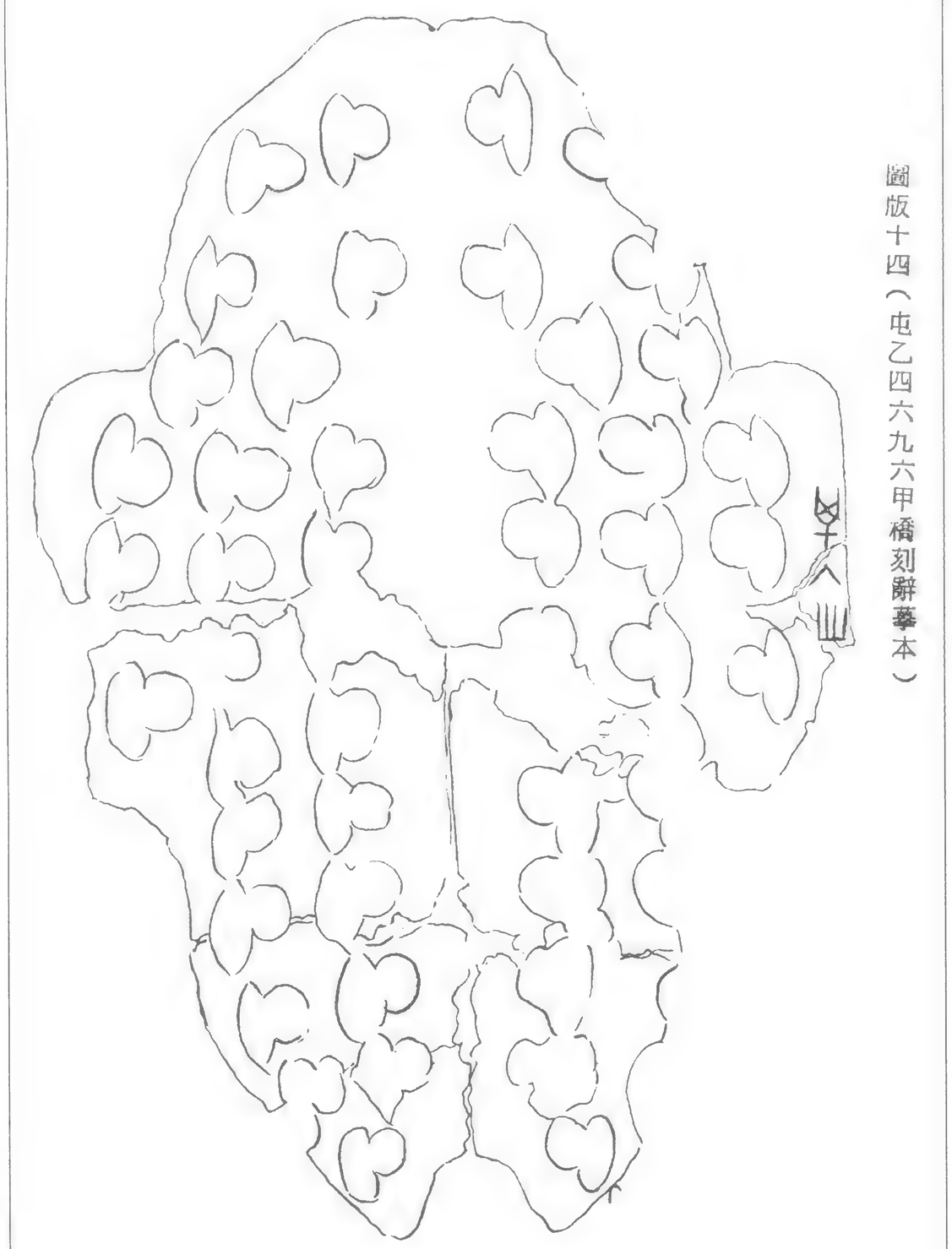
圖版九（大龜七版之四正面拓本）



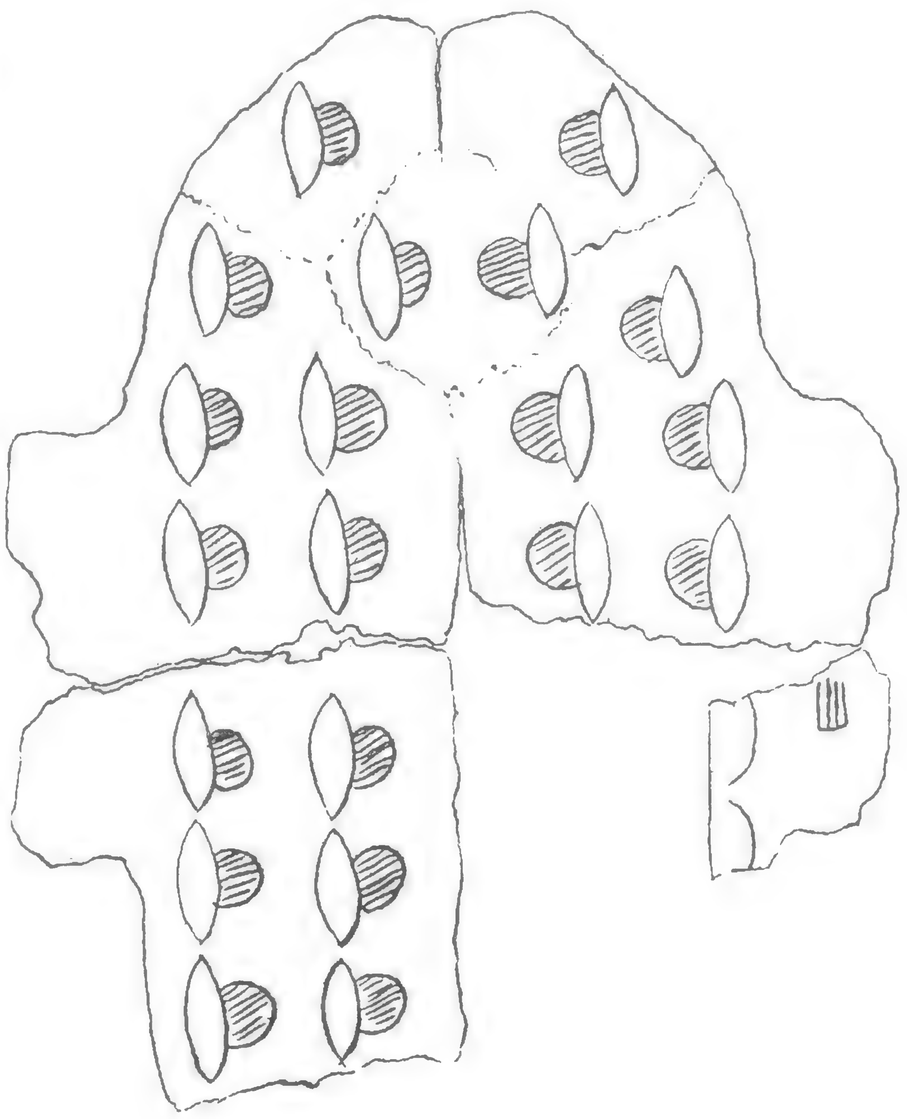
圖版十二（大龜七版之五正面摹本）



圖版十一（大龜七版之五正面拓本）



圖版十四（屯乙四六九六甲橋刻辭摹本）

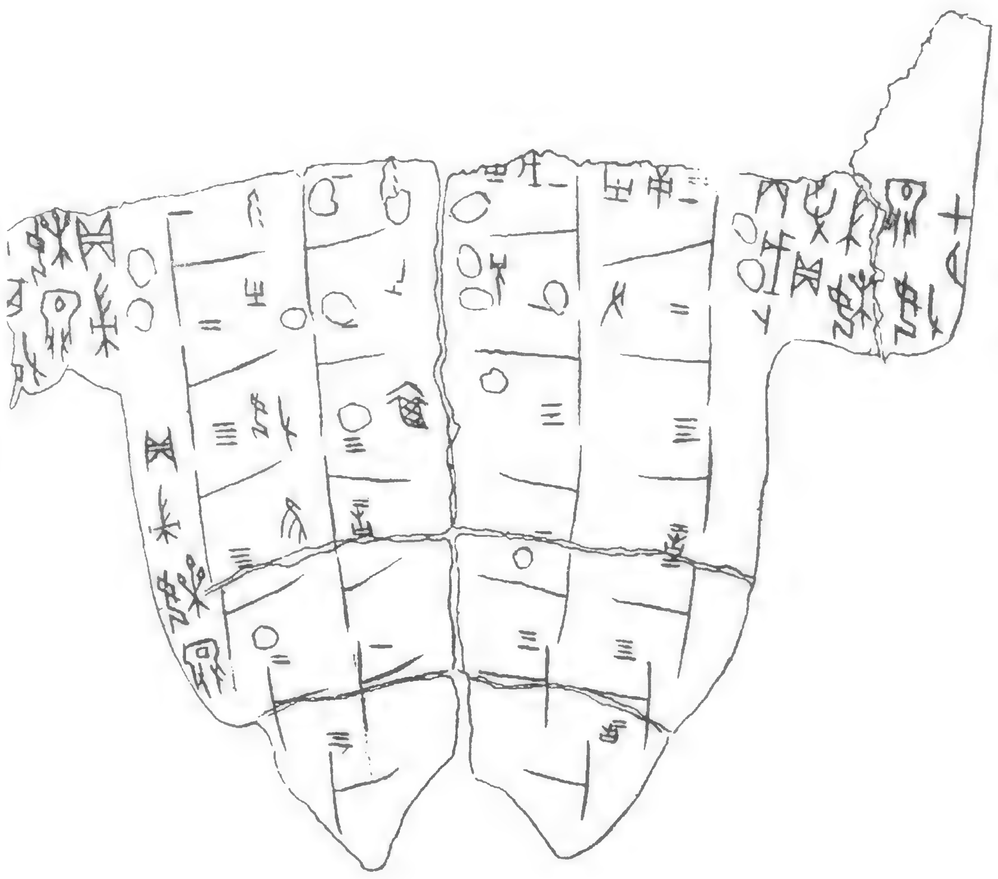


圖版十三（大龜七版之五背面摹本）

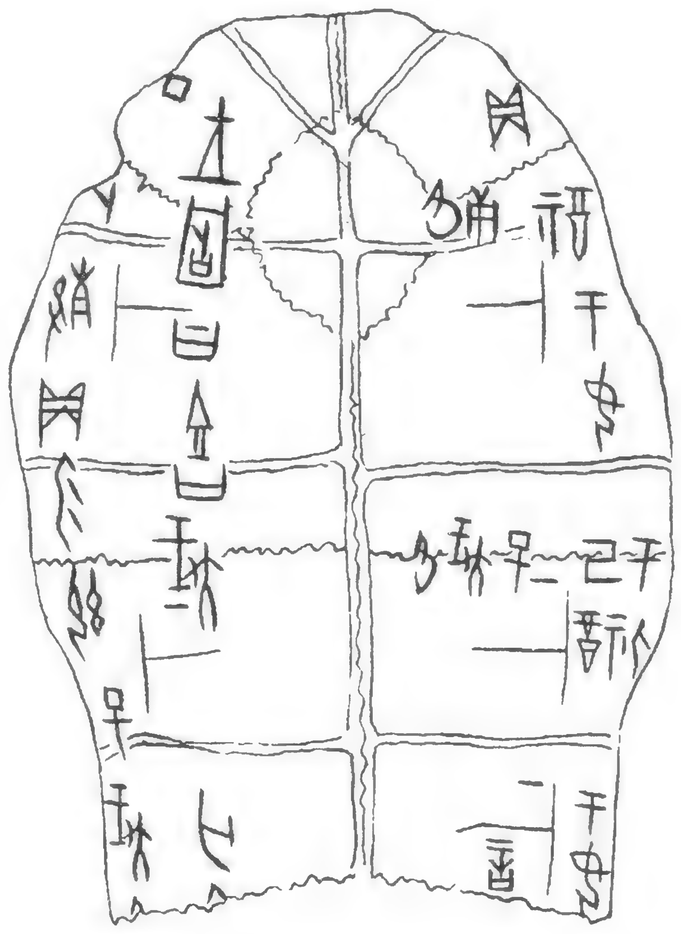
圖版十五（大龜七版之六正面摹本）



圖版十六（大龜七版之六正面摹本）



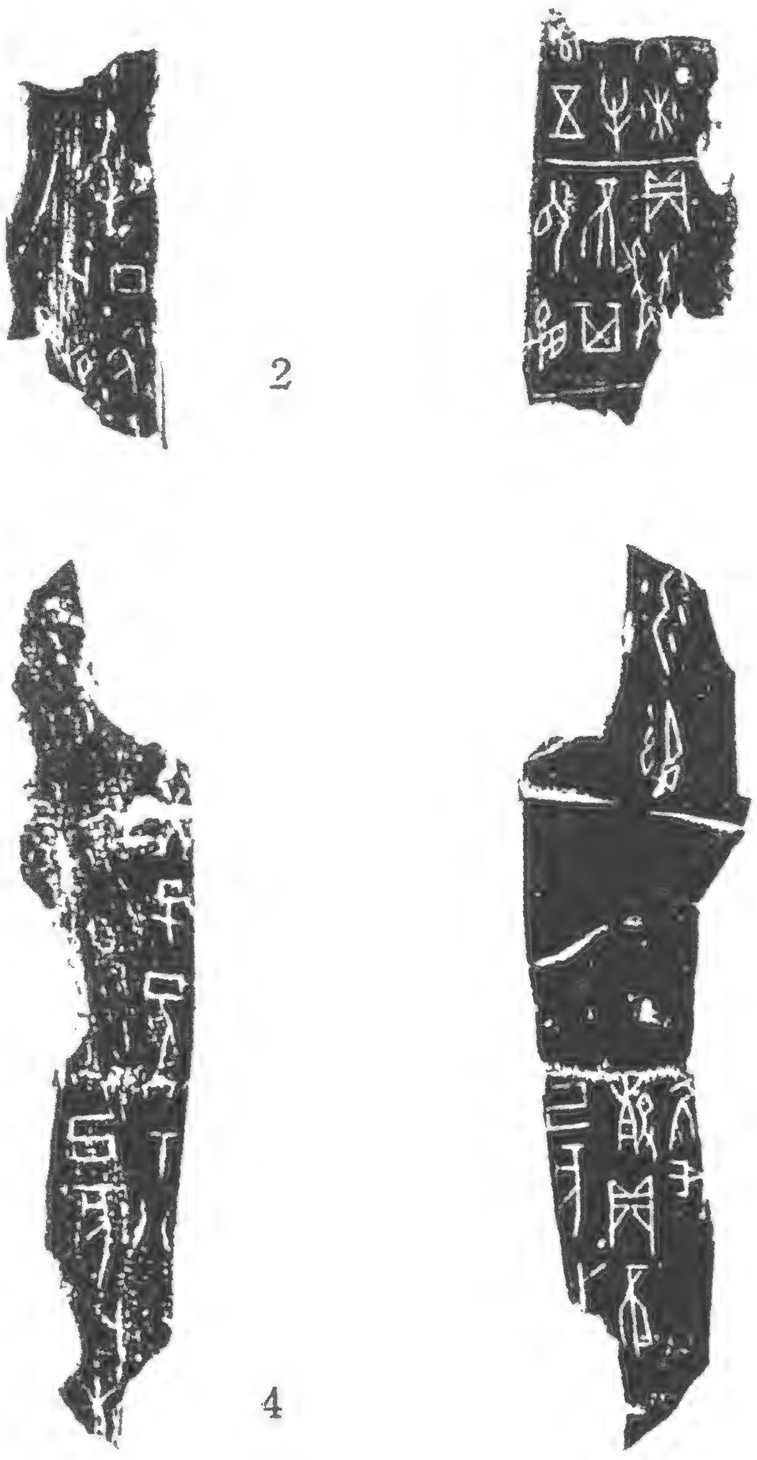
圖版十七（大龜七版之七正面摹本）



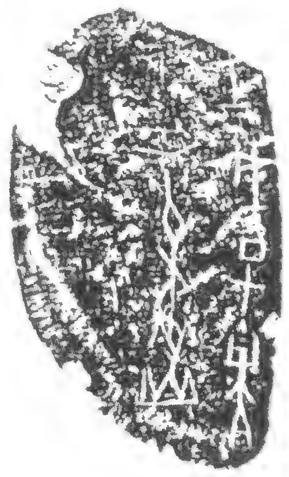
（原載《中國文字》第五十册，一九七三年二月）

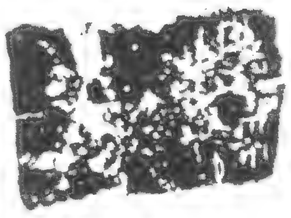
輔仁大學所藏甲骨文字

明義士先生藏拓本




11

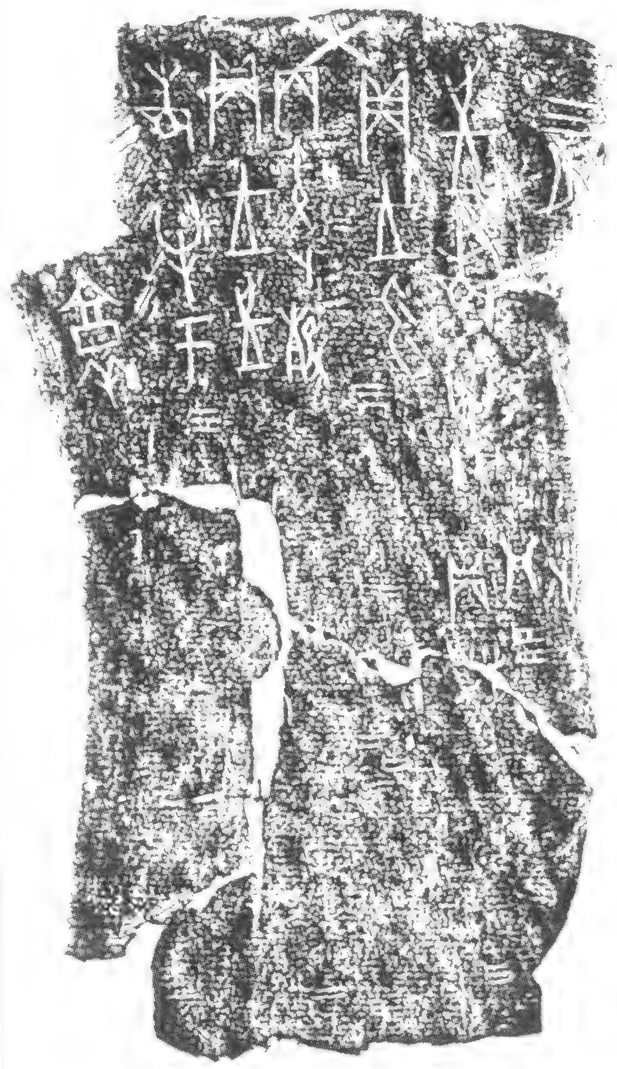

8

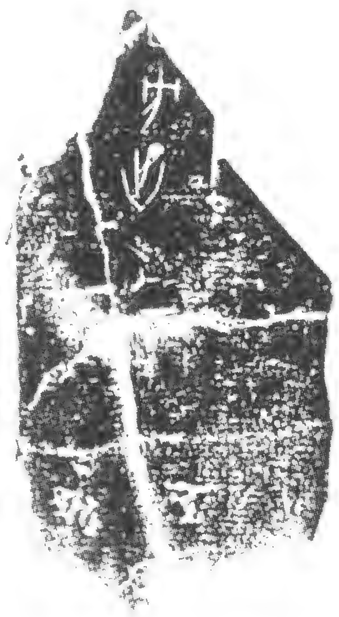

12


9

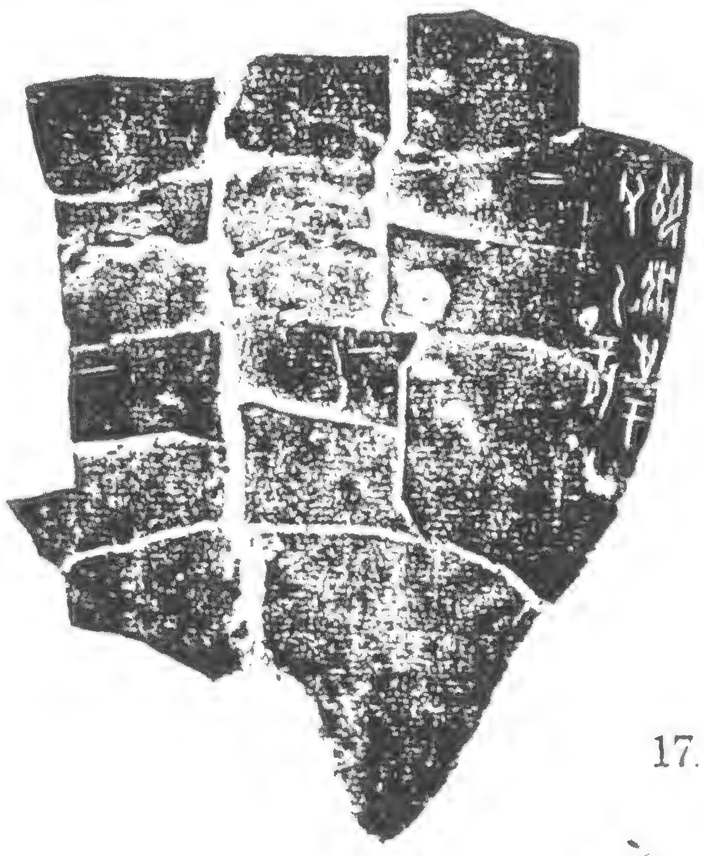

13

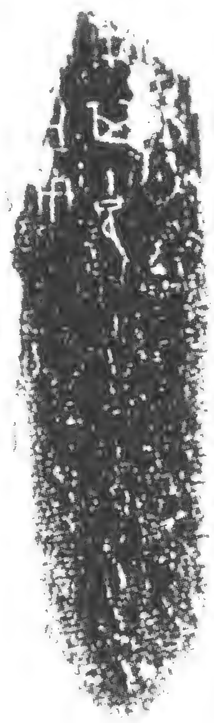

10

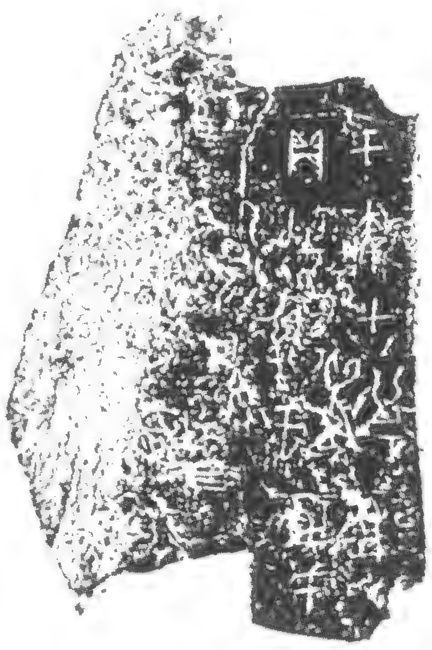

7

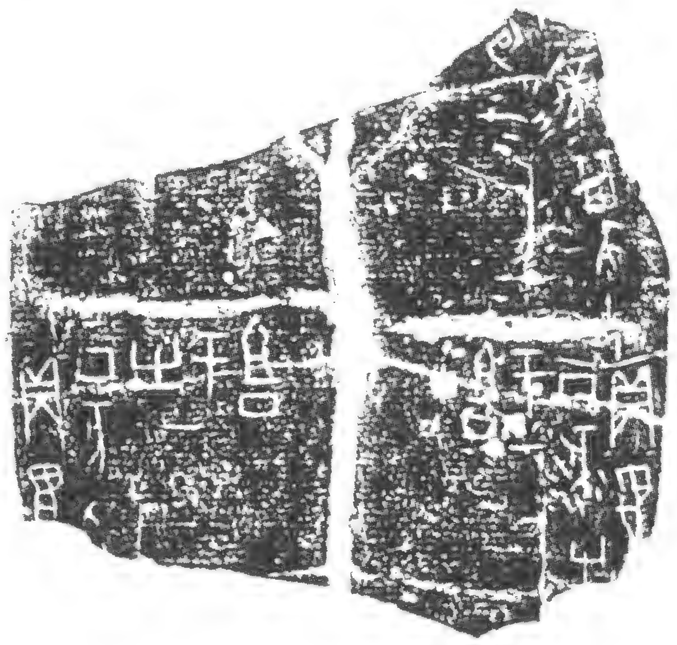

5


6


17.


16


14

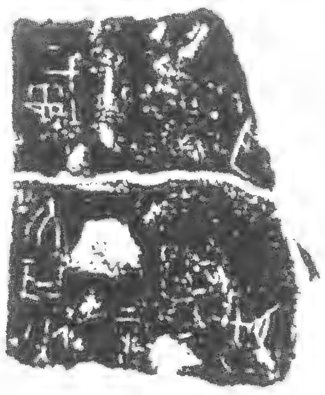

15


19


18



27



25



28





37

34



35



38



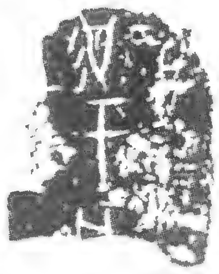
36



23



20



21



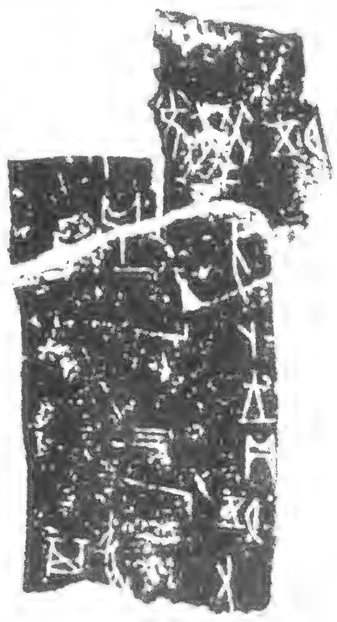
24



22



31



29

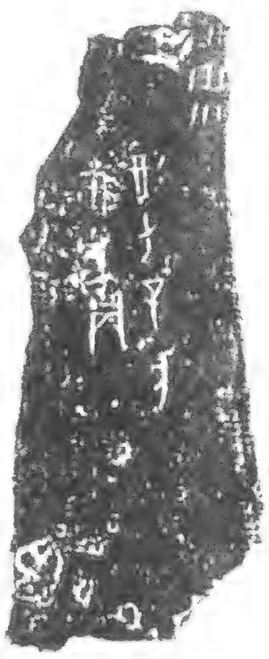


32



33

30



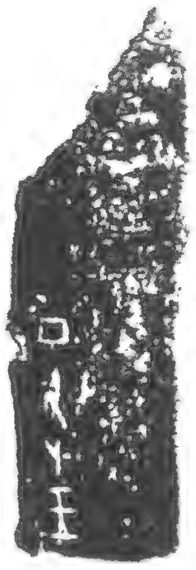
45



43



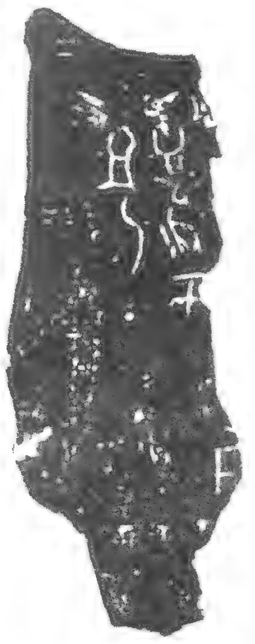
46



44



41



39



42



40



52



51

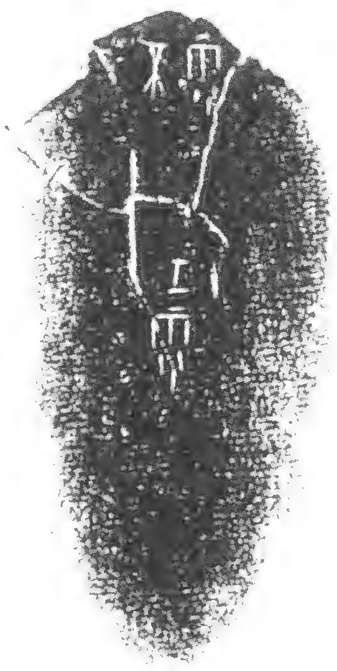
53



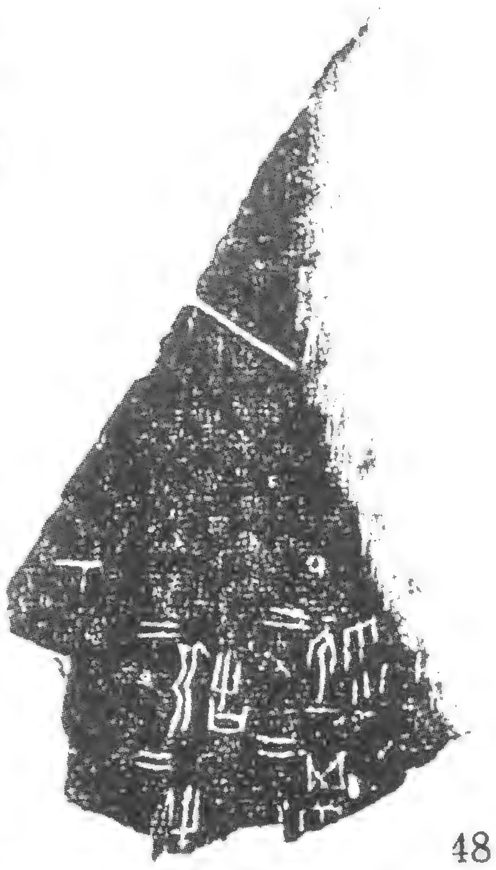
49



47



50



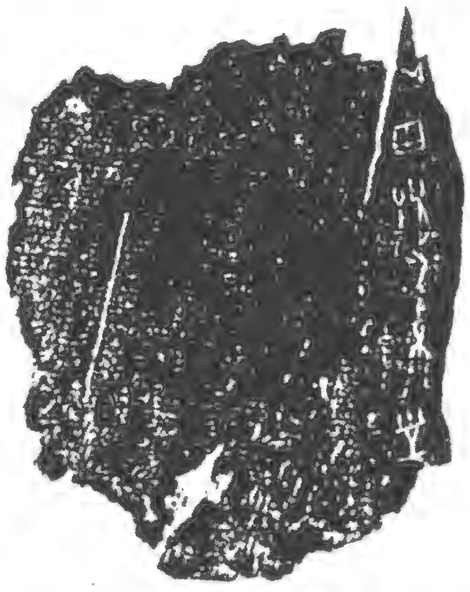
48



55



54



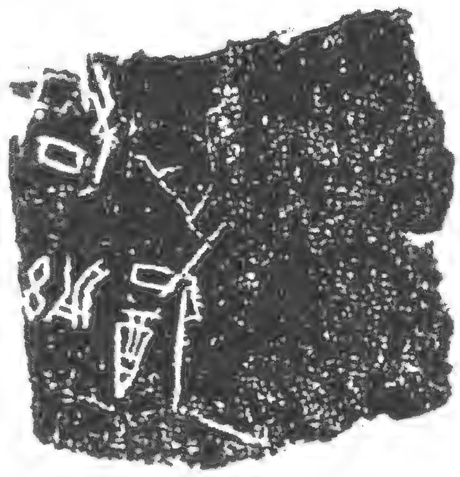
56



57



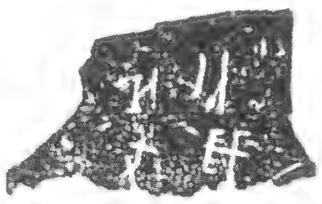
59



60



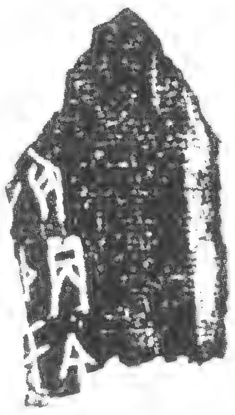
58



66



69



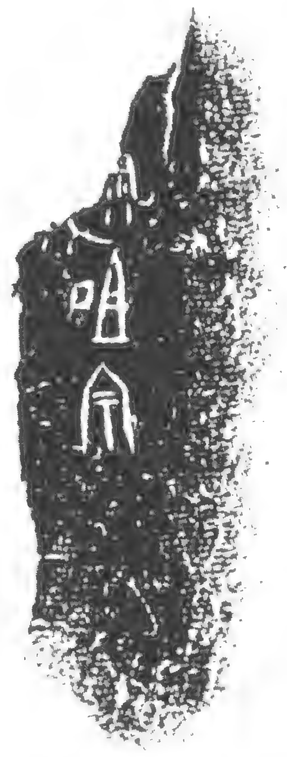
67



68



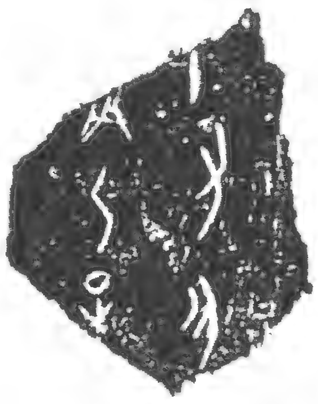
63



61



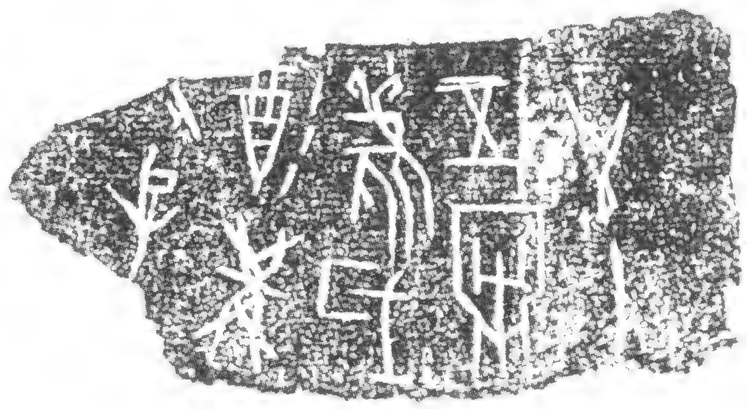
64



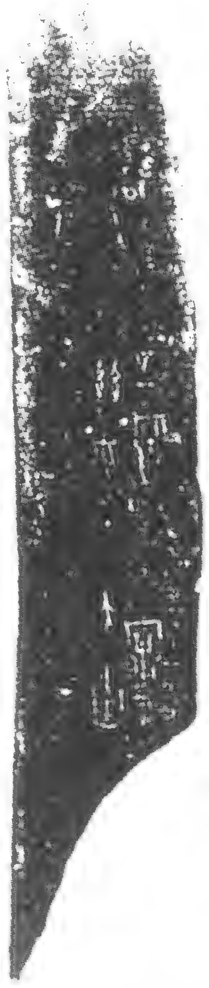
65



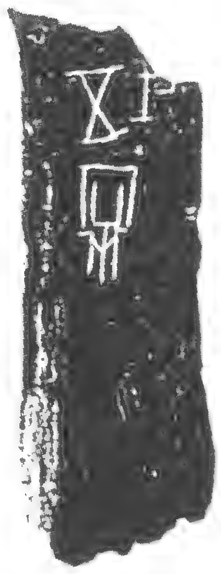
62



72



74



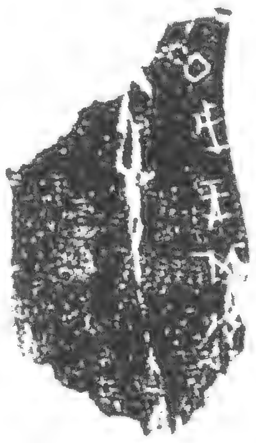
73



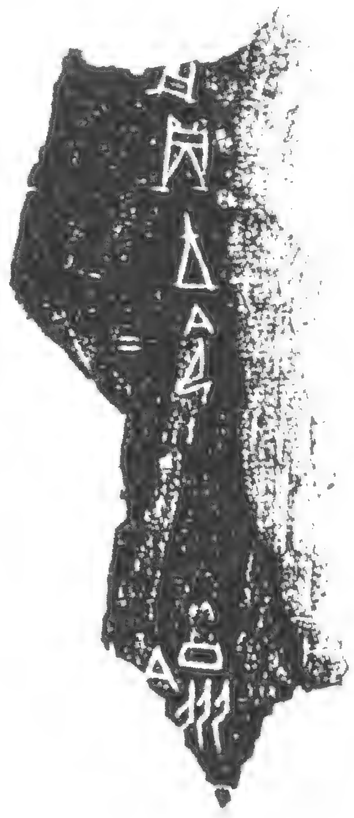
71

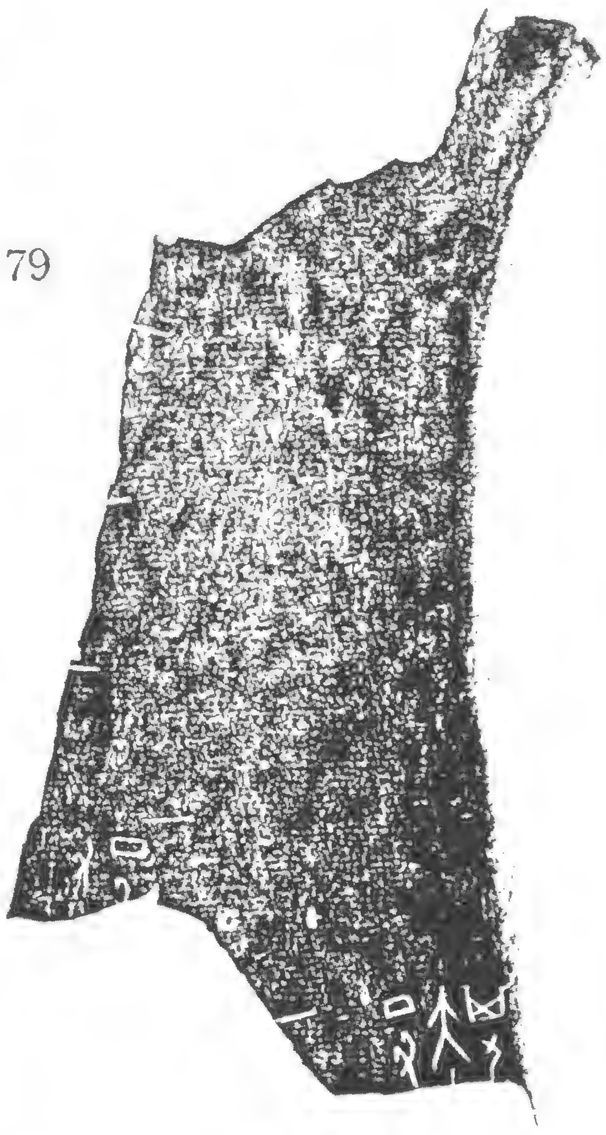


70



79





78

80



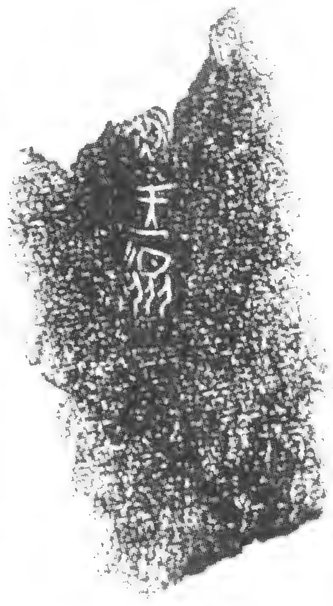
77



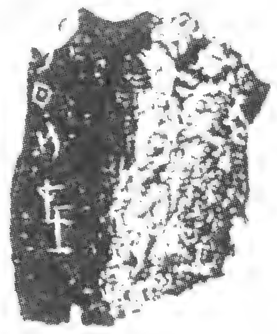
75



76


81


84


82


85


83

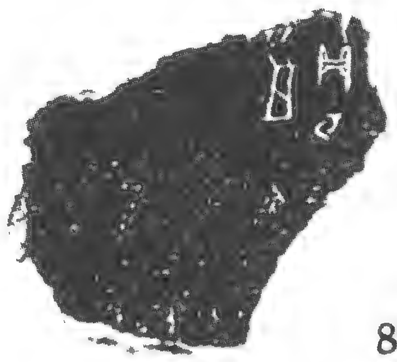

89


86


87


90


91


88

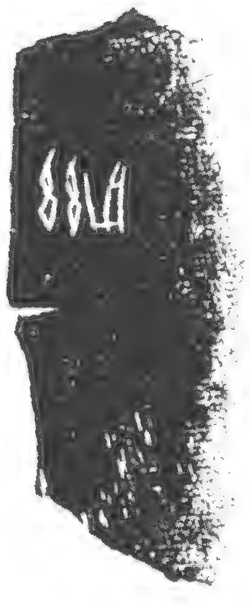

99


96

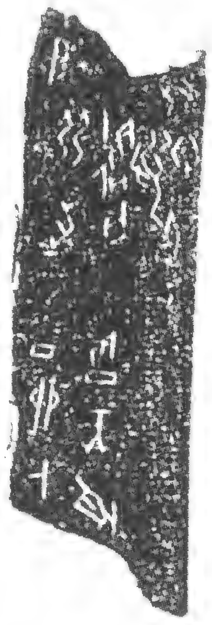

100

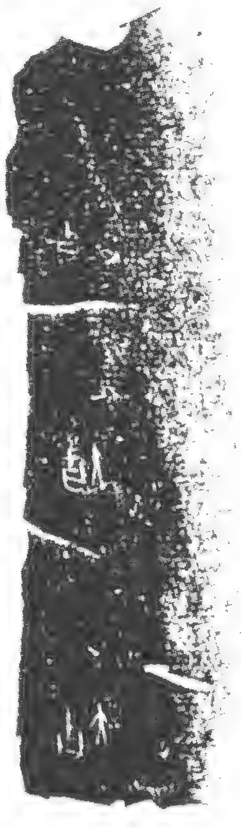

97


101

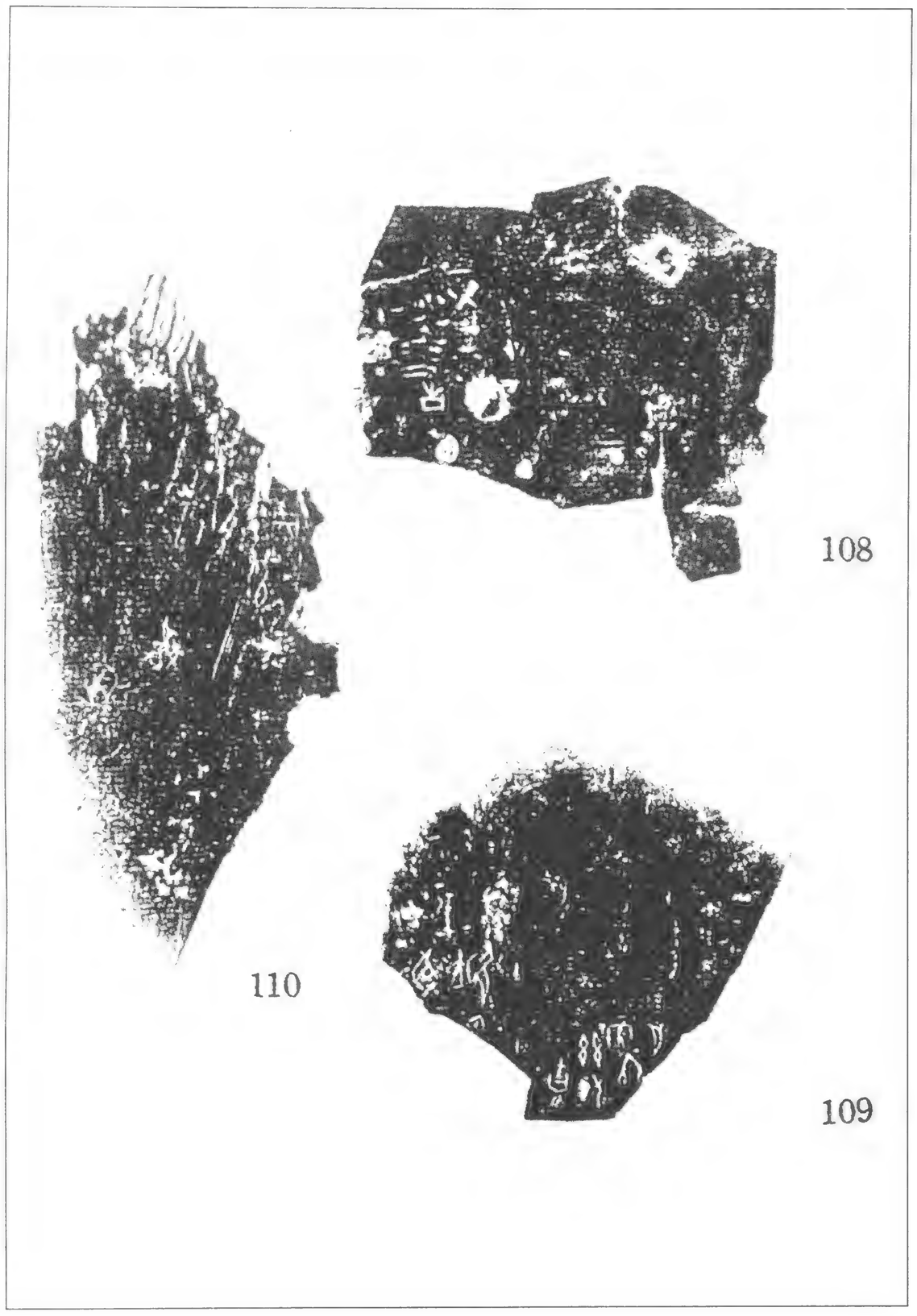

98

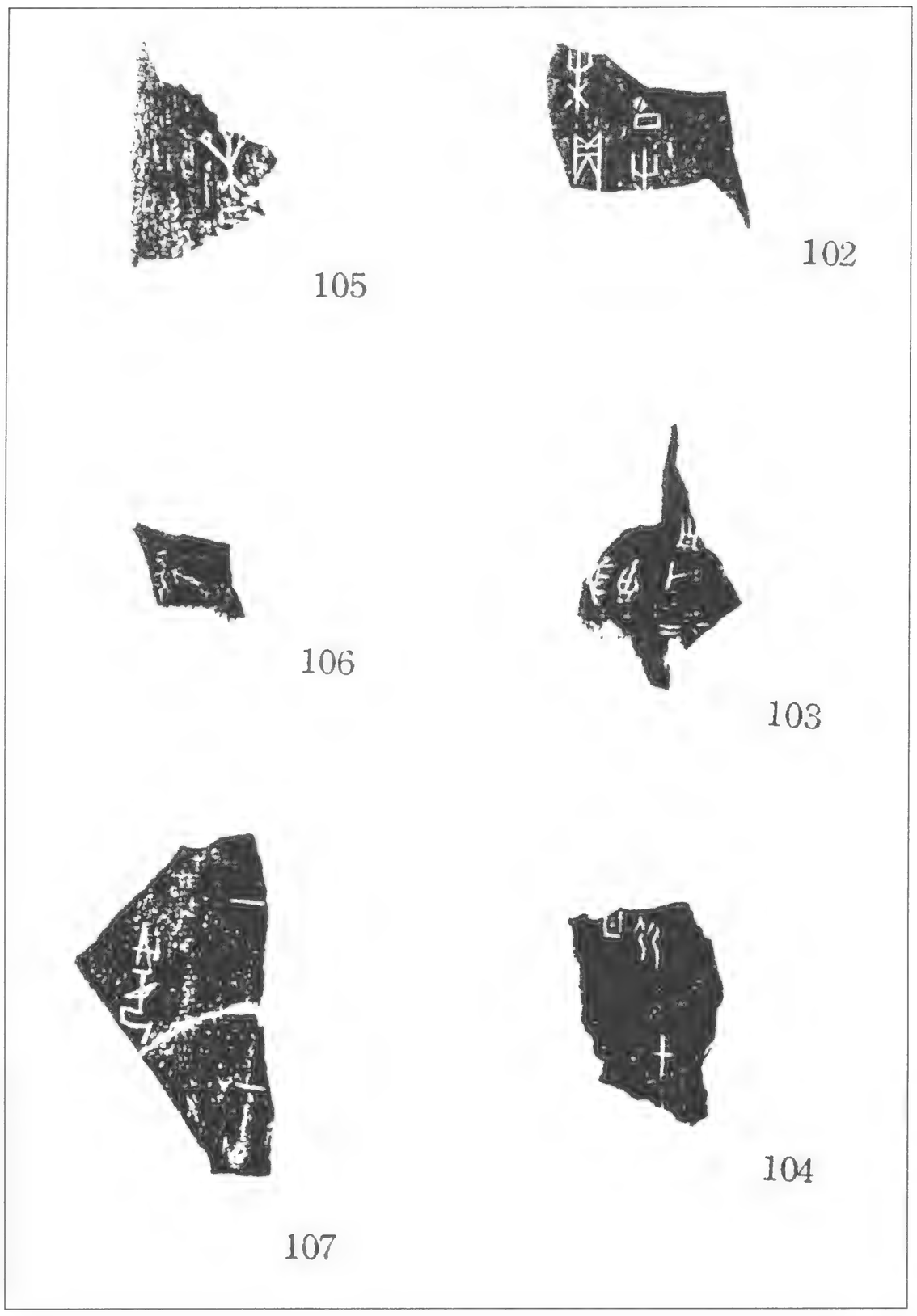

94


92


95


93





輔仁大學所藏甲骨文字後言

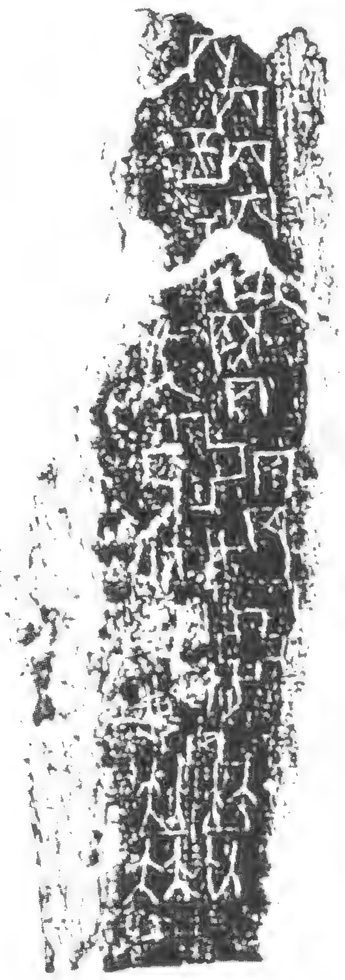
金祥恒

輔仁大學所藏甲骨文字拓本一百零九幀，爲明義士所藏。現歸加拿大多倫多安達黎奧博物館（ Royal Antorio Museum of Asratic Arts, Canada ），由許進雄君見寄，並承安達黎奧博物館慨允公之於世，供好之者研究，可感殊深。

輔仁大學所藏甲骨文字，亦見於胡厚宣戰後南北所見甲骨錄。其序云：

> 輔仁大學所藏甲骨二百二十九片，抗戰期間在北京購得。一九四五年，承周燕孫教授以拓本見假，使摹錄一過。除鄴中片羽三集已著錄者外，得片一百零七。今較胡氏一百零七片，益出二片。次第編排，爲便讀者計，悉照胡君，甲骨雜陳，不予分列。摹本文字脫誤，一目瞭然。言其來原，輔仁大學於抗戰期間購自北京坊間，原爲明義士之故物。明義士收購甲骨，一有所得，輒即椎搨，此即明義士收藏甲骨之一部分。輔大所藏甲骨二百二十九片，除一百零七片外，尚有一百二十二片，亦爲明義士故物，著錄於鄴中片羽三集。鄴中片羽三集共二百一十四片，其中一骨爲正反兩面（三、四七、七與三、四七、十）實爲一百一十三片，黃濬刊於民國三十一年。時逢中日戰爭，明義士於二十七年遄返加拿大，甲骨未及携帶，留於淪陷區，如何流入市估，益不詳焉。陳夢家卜辭綜述「出土甲骨的統計」：





（原載《中國文字》第五十册，一九七三年十二月）

北京師範大學承輔仁大學收藏三百二十片，鄴中片羽三集著錄一百二十片。陳氏所言輔大藏甲三百二十片，較胡氏所見多九十一片。鄴中片羽三集二百十三，加胡氏摹本一百零七，與陳氏所言三百二十相符。惟陳氏所言「著錄一百二十片」是否由胡氏所見二百二十九，除去摹本一百零七而言，亦不得其詳。輔大所藏甲骨摹本與鄴中片羽三集重出者凡三：

㈠輔大第三片與鄴中片羽三集三十五頁第四片重。

㈡輔大第十三片與鄴中片羽三集四十六頁第十二片重。

㈢輔大第十五片與鄴中片羽三集三十四頁第五片重，惟鄴中片羽爲殘片，少「貞：羽丁亥勿　于且丁」。

由是言，輔大藏甲實爲三百零七，加明義士所藏輔大甲骨文字拓本所益出二片，爲三百零九。北京師範大學收存輔大藏甲究爲多少，今亦不得詳焉，茲據見於載籍如是而已矣。爰識於此，以求教於博雅君子。

（原載《中國文字》第五十册，一九七三年十二月）

一辈，卜辭云幺雨者甚多，除上揭說所舉之外，其例如：

癸亥卜，涿貞：幺雨佳若？

貞：幺雨不佳若？

戊申卜，出貞：幺雨佳若？

甲申卜，爭貞：幺雨佳我田？

貞：幺雨不佳我田？

癸未卜，穷貞：幺雨亦佳𠂤田，

癸未卜，穷貞：穷雨佳𠂤田？

貞：幺雨不佳霾？

貞：幺雨佳霾？

壬寅卜，穷貞：若幺不雨，帝佳幺邑龍，不若？

□若幺不雨，佳□出醜千□

甲己卜，出貞：幺雨非𠂤？

乙不雨，幺不雨？

幺小雨？

其雨，幺雨？

幺亡雨？

幺雨孚𢦏？

幺雨住庚？

幺雨佳庚？

乙二二八五

京四七六

乙四七四二

丙六一

甲二八四〇

遺六二〇

續四、九、二

簠天三八

粹七七九

粹七六一

粹七三〇

粹六八〇

粹七五五

摭續一四〇

續四、五、二

讀殷契萃編小識

蔡哲茂

㈠

萃編八一六片：



不雨？

郭氏釋文云：「不雨　乙，幺雨，少。」

考釋：「說文云『幺，古文系。細絲也，象束絲之形。』與文作糸，實系之初文，說文『系，繫也。』段注若縣即詩及爾雅之『緜緜』與說是也。（詳十三卷系下）」然揚樹達於卜辭求義五五葉幺下已修正郭說，其云：

「樹達按：郭說然見苦心，然實非是，辭云：『幺雨，小。』豈有上文既云細雨徹雨，下文復云小者，其不可通明矣。（小，郭釋少，非也。甲文小少同字）余謂本書七六六片云：『不雨，幺雨。』此辭云『不雨，幺雨』然則幺雨乃幺雨之省繇，猶改省作戶，遜省作系耳。幺雨小，文乃無病而可通矣。」

按揚說甚確，然卻不容復出之集釋所採用，本文即就揚說再加以證明。卜辭中「幺雨」者，故本片之「幺雨」乃「幺雨」之缺刻

貞：幺雨不辭？

其雨？

幺不雨？

幺雨酒日？

貞：幺雨佳永田？

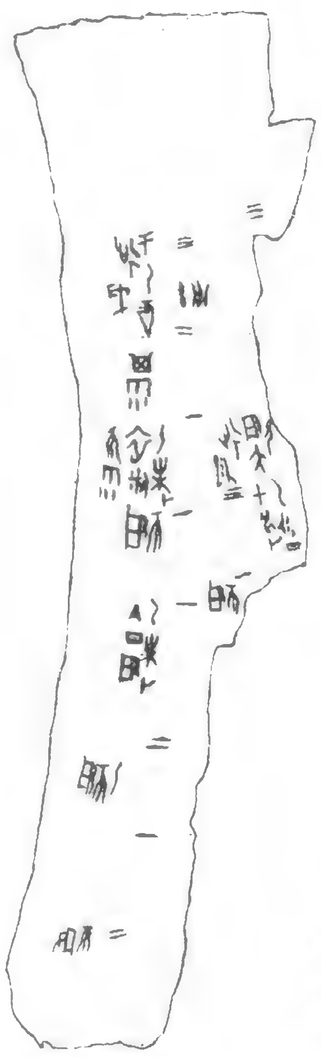
幺雨佳𢦏□

卜辭中缺刻之例甚多，通常所見，率缺刻横筆，但亦間有一字缺刻其半者，揚說云「改省作𠂤，遜省作系」當即系缺刻，繇的字卜辭中亦可見缺刻其半作幺者，若以「幺」字釋之則大繆，其例如

壬申卜，如又𢦚？幺用

于乙酉祉禾？

幺用





林一、二五、一六

南輔五一

南明西西五

人一六四

掇一、二四一

粹三九八

明續B二五二八

庚申卜，㞢父乙𡆥？用，𠂤用

庚申卜，母庚求蜀？不用



𠂤用



壬申卜，癸酉雨？

𠂤用。

乙酉

乙未卜：今日酒彳伐？𠂤用

酒伐？𠂤用。



明後B二五二四

明續B二四四八

七九九

明續B二四七六

三一一

甲四〇八

〈二〉

萃編四三〇片：

辭文：丙寅卜又伐于司𠂤卅羌卯卅豕

丁卯卜今日令𠂤？

萃編四三一片：

辭文：丁未貞：𠂤歲于司尊？

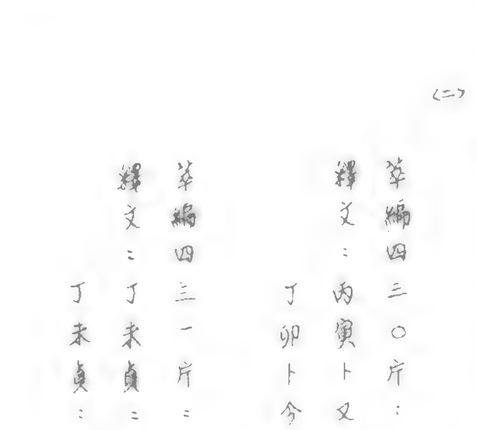
丁未貞：𠂤歲于𠂤尊？

郭氏於四三〇片考釋云：「司疑假為㠯春祭曰柯」（余足）之祖，下片同與此對文可證。」按郭氏於此將祭字誤成司，即將此誤讀成此，萃四三一之同辭文例亦見於下列所舉

萃四二二

丁未貞：𠂤歲卯祭尊？

𠂤歲于𠂤尊？



南明六八五：（明後B二八ㄙ）

〈三〉

乙巳貞：𠂤歲卯𠂤尊？

丁未貞：𠂤歲于祭尊？

人二二一六：

丁未貞：𠂤歲卯祭㠯？

𠂤歲于𠂤尊？

粹編之可拼合者，郭氏於考釋亦嫌及之，然亦有未見之者，如粹一〇三九及五〇七即一骨斷為兩片者，其拼合如左：



〈四〉

粹三九八：（見前）

辛亥貞：生月乙亥酒 磬立于？



以上六例之非誤刻「𠂤用」皆為「𠂤用」之88字缺刻其半而成此用香，粹三九八片，郭氏考釋即云：「此字未刻全」，又粹九五九片有辭云「己巳卜，逐麋？𠂤六月。」郭氏考釋云：「第六辭於『六月』上缺一『此』字，亦辭例意。」由上例可知本辭之「此六月」亦為「此六月」之此字缺刻其半，卜辭云此月或此幾月者甚多，如下：

乙酉卜，大貞：及此二月出大雨？

丁酉卜，㱿貞：其品后？在此八月

此月之大雨？

及此月又大雨？

及此月又大雨？

癸亥卜貞：及此月又雨？

此月至生月又大雨？

癸未卜㱿：此月又大雨？

又楊說以「甲文小少同字」亦甚推，卜辭中小少同字，其例如：

己丑卜，知于庚卅少宰，己丑余至杜羊？

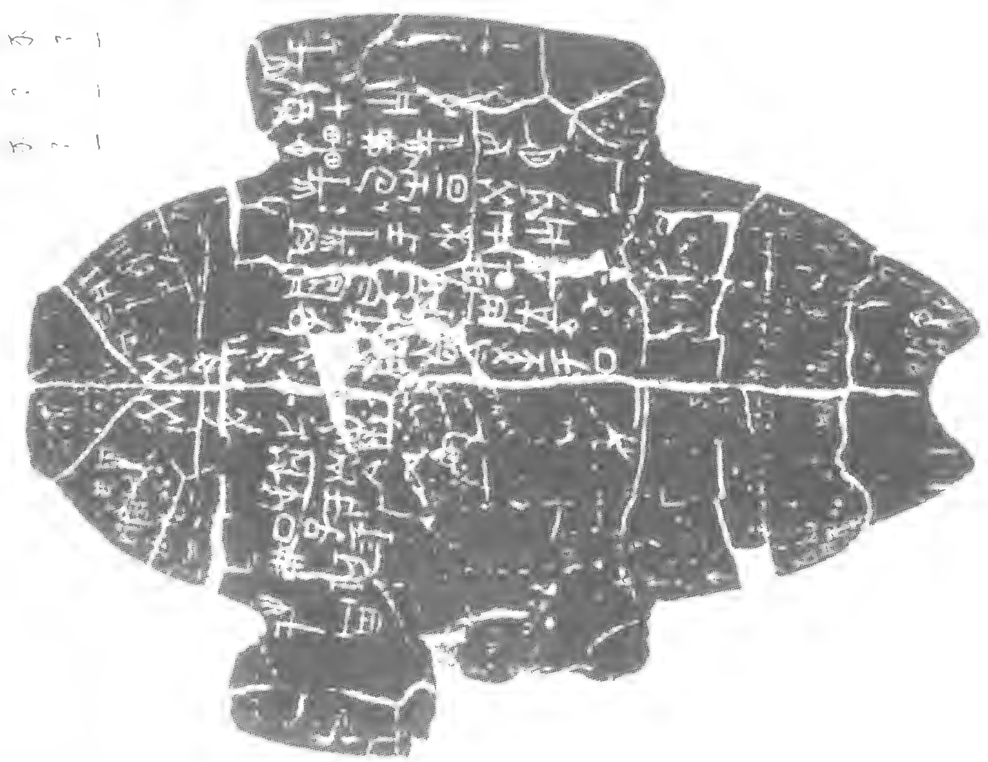
𢀛小宰于父戊？

壬戌卜，甲子少雨？

[illegible]雨，之夕𣪊，丁酉允雨少

己巳卜，㱿，少臣其取又？

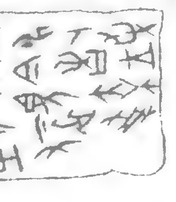
由以上數例可知其少宰即小宰，少雨雨少即小雨雨小，少臣即小臣。殷墟編八一六片之「此雨少」由以上論證，即可知其為「此雨少」之缺刻一筆者。

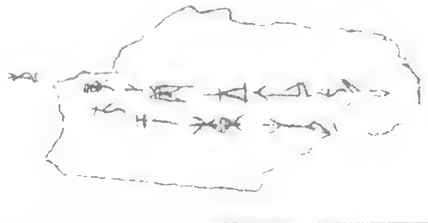


貞：來
日自
人鳥邦男先
征伐，二告王，一此片詢殺牲
八六，二〇〇，一〇〇，乙狀鳥式所者殷魂卜辭綠稚的
晦，而二〇〇，八八云：
庚庚申申卜，王貞貞：余伐不一上步
庚庚申申卜，王貞貞：余勿伐不一一
庚庚申申卜，王貞貞：余不其伐不一一
庚申申卜，王貞：余勿伐不一一

以
為
九
遺三、十一、三。

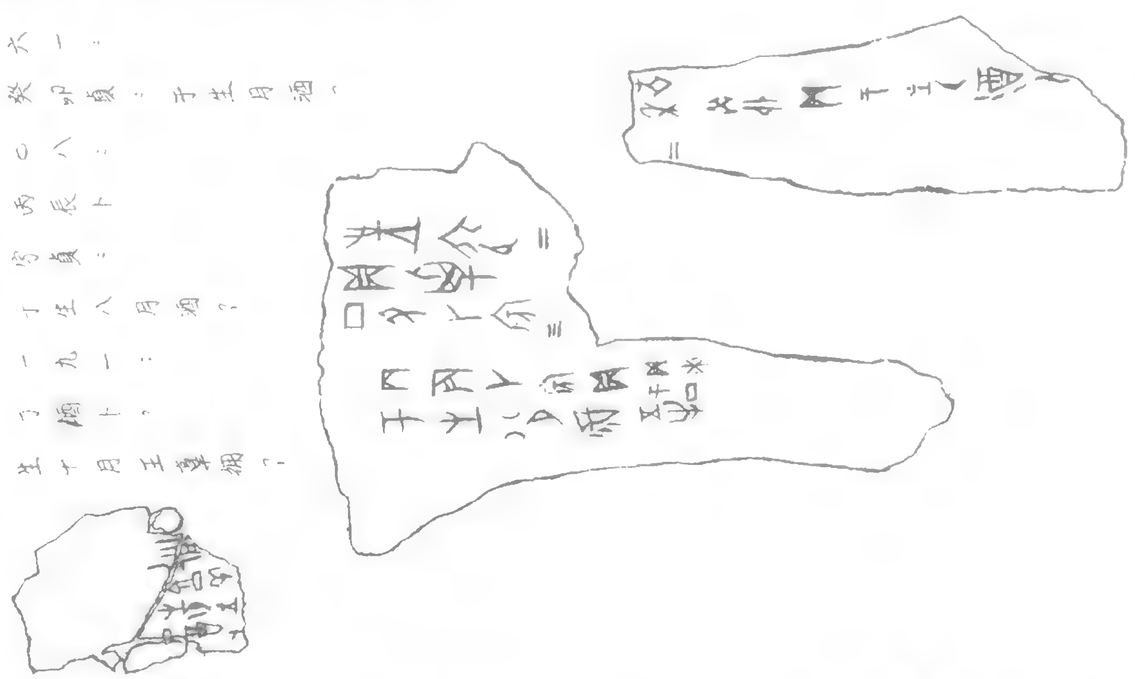
所由上、字重、余奉王以往來方十已、受出又：





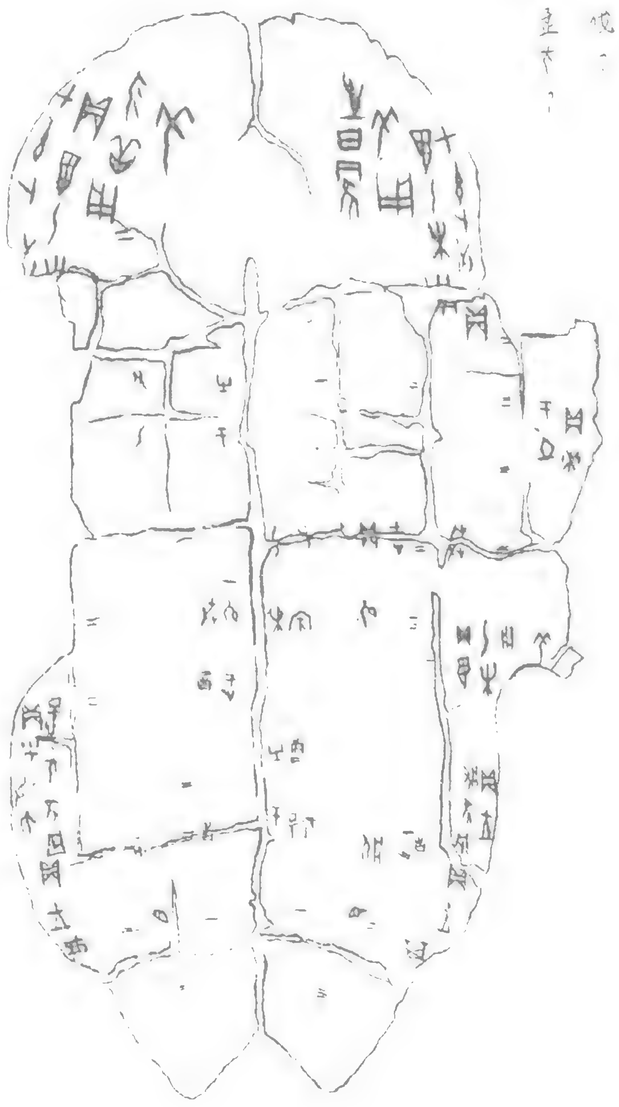
晦 B 北七二、五五B

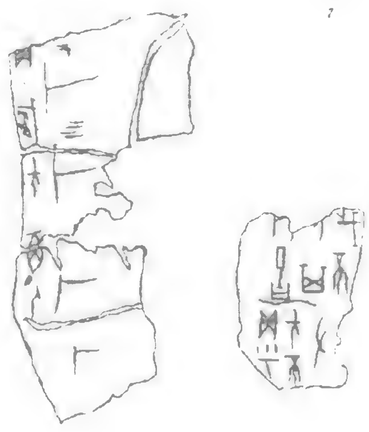
子已卜貞、王余勇下步于

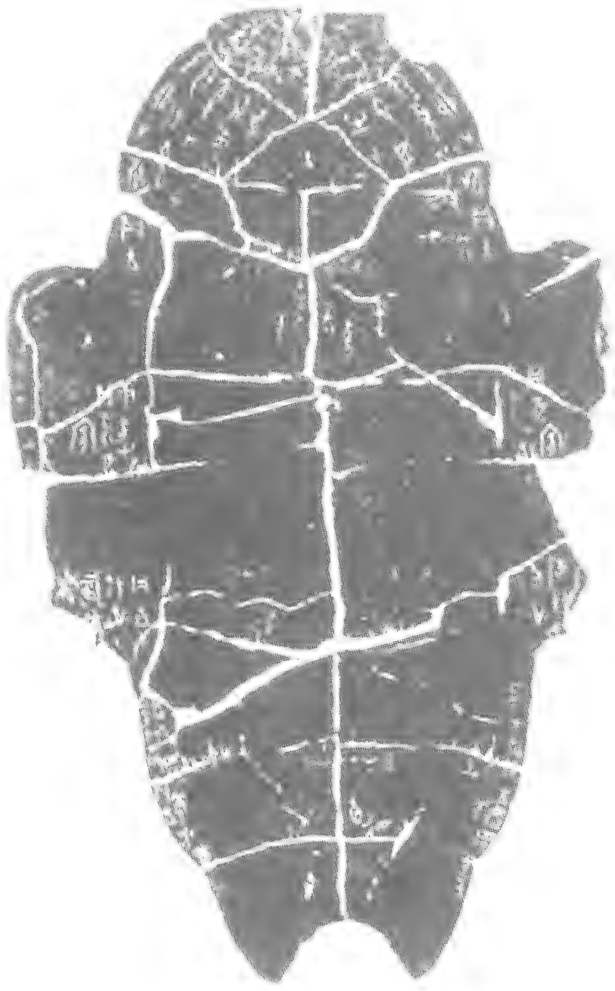


粹四六一。
癸卯貞：子生月迺。
粹五二八：
乙酉貞：子生月迺。
丙辰卜：
丁酉貞：子生月迺。
粹一一：一：月酒。
一一丁生八月酒。
一一九卜，月酒。
生十月王棗祖。

卜：國|綠|述一一八貞祟，得同在一三|生」字，此|郭|民考釋於上出三|生月，祐|陳|氏訓|王、貞|六期|考之，以言|生」為|考釋之，三九八片明|卜辭中之來月錫為生日，而於望日、來日、卫夕、來夕、來歌、來降、來祟之日，來月，乃







天津师范学院图书馆藏甲骨选介

李 先 登

殷墟甲骨自清光绪二十五年（1899年）发现以来，至今出土已逾十万片之多。自刘鹗《铁云藏龟》开始著录以来，多已公诸于世。然流散于国内外而未见著录者，仍不断有所发现。这些发现，即使是断片叟字，对于甲骨学的研究，尤其是对于甲骨缀合工作，仍然具有不可忽视的重要意义。天津师范学院图书馆为配合教学工作，历年来征集入藏了甲骨24片，经鉴定，除一片系伪刻外，其余23片皆确真无疑。虽其内容与文字无突出者，但皆未见于诸书著录，具有一定的研究参考价值。兹将其分期分类，略加诠释，介绍于后，供研究参考。

第1片（图1）：牛骨，一期（盘庚、小辛、小乙、武丁时期，下同）。正面残存“圆曰帝丝邑”五字，背面残存“叡贞若”三字。

第2片（图2）：牛骨，一期。正面卜辞二条，上条残存“辰贞”二字，下条残存“癸贞”二字。背面残存“癸”一字。

第3片（图3）：牛骨，一期。残存“岁且”二字。

第4片（图4）：牛骨，一期。卜辞二条，上条存一字，惜残泐过甚，不能识读。下条残存“卜贞”二字。

第5片（图5）：牛骨，一期。残存“二、□”二字。

第6片（图6）：牛骨，一期，残存“戉”一字。

第7片（图7）：牛骨，一期。卜辞二条，上条残存“不七”二字，下条残存“三”一字。

第8片（图8）：龟甲，一期。残存“我□死不”四字。

第9片（图9）：龟甲，一期。卜辞二条，上条残存一“用”字，下条残存“贞囧毋[囧]”四字。

第10片（图10）：龟甲，一期。残存“小告，贞”三字。

第11片（图11）：龟甲，一期。残存“不𢀛鼄，一”四字。

第12片（图12）：龟甲，一期。残存“𣪊，庚”二字。

第13片（图13）：龟甲，一期。背面残存“寅”一字。

第14片（图14）：龟甲，一期。正面残存“三”一字，背面残存“曰，若”二字。

第15片（图15）：龟甲，一期。残存“不，二”二字。

第16片（图16）：龟甲，一期。残存“其”一字。

第17片（图17）：龟甲，一期。残存“未”一字。

第18片（图18）：龟甲，一期。残存“一”一字。

第19片（图19）：龟甲，一期。残存“缶羌”二字。

第20片（图20）：牛骨，二期（祖庚、祖甲时期，下同）。残存“丝尤”二字。

第21片（图21）：龟甲，二期。残存“贞尤”二字。

第22片（图22）：牛骨，三期（廪辛、康丁时期，下同）。残存“𢀛牛”二字。

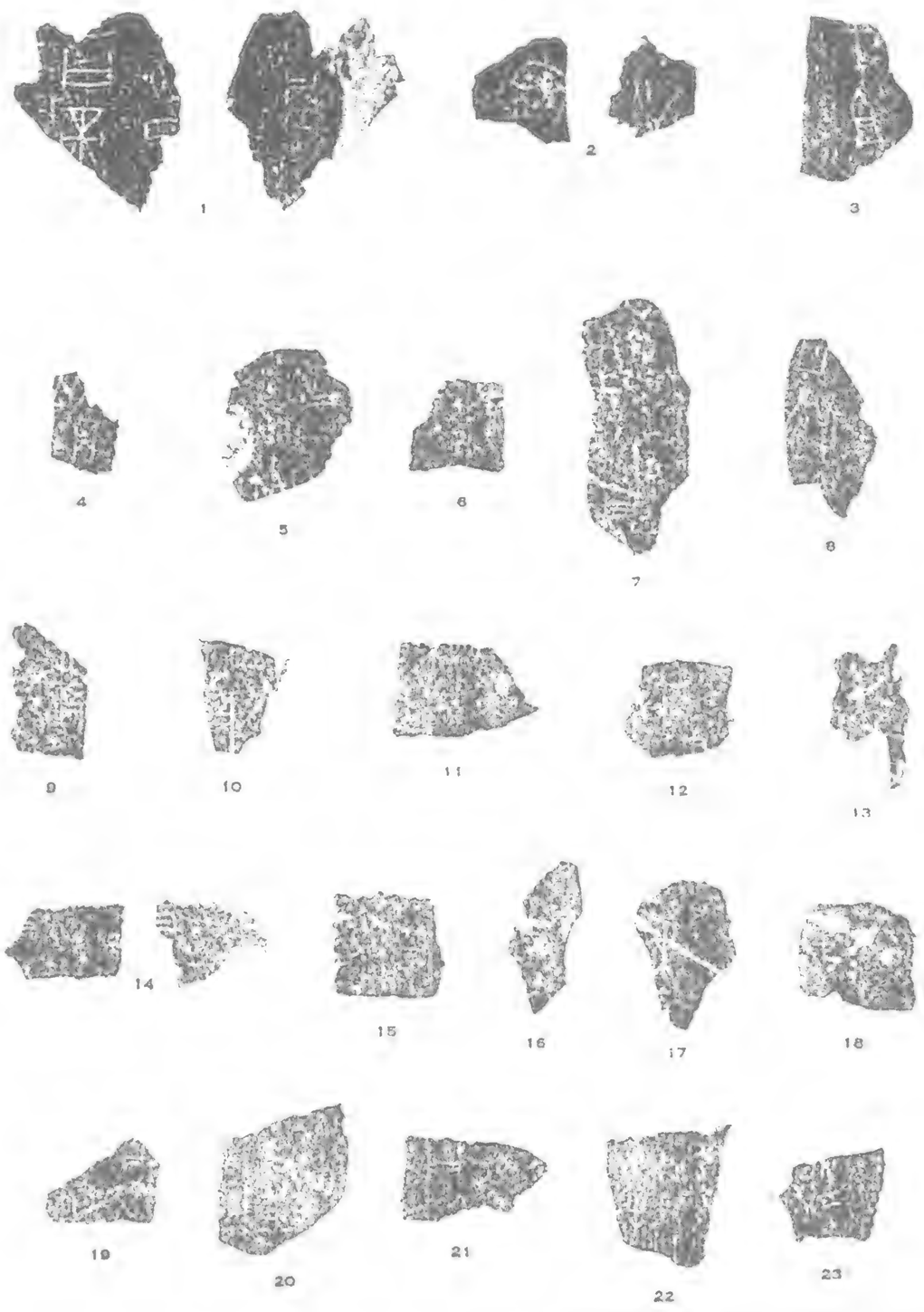
第23片（图23）：龟甲，三期。残存“又，又二”三字。

总计，一期甲骨19片，其中龟甲12片，牛骨7片。二期甲骨2片，龟甲和牛骨各一片。三期甲骨2片，龟甲和牛骨各一片。

以上诠释，有不当之处，请批评指正。

（原载《書目季刊》第十卷四期，一九七七年三月）

天津师范学院图书馆藏甲骨文拓片



（原載《天津師院學報》1978 年第 4 期）

11. 甲　癸丑卜貞旬亡𡆥王固曰出希七日己未坐。庚申月有食（董武丁日譜十二月癸丑）

12. 癸酉卜㱿貞旬亡𡆥王固曰叙有希有梦。五日丁丑王嬪中丁以降在𡍮阜。十月

上列十二辭一一四爲一事，丙申卜，旬當癸巳。第五辭旬在癸卯。菁四未列月。同辭在前七・四三・二即上第六辭有「在十二月」四字。董武丁日譜繫此辭於二十九年一月誤。當在十二月，何年則不知也。如以記月有「在」而言，又當繫于二期中矣。辭一乃二十九年十二月十五庚申月食之卜。

13. 𡆥曰令若茲鬼降在　（阜）

14. （癸）亥卜㱿貞旬亡𡆥王固……丁卯王獸攸㬎車馬……降在車𠂤馬亦□

（綴二一八）

(1) 有希

上各辭每有王固辭云「有希」。有，契字爲出。故亦有人以爲當作「侑希」解，非只今人所云「糟糕」也。檢視武丁時契辭，王固而曰有希者，十辭中之三爲某之生死，如子𡜀，子攷，「子昌嫗不死」。十辭中三辭爲有來僖。又有二事爲失事之記，如車馬失墜之記或天災變異大雷風之例。故知「有希」及「有來僖」之卜，非只是敵人來侵一端而已。李亞農曲解出蚬之辭爲敵人「過橋」，未免望文生義矣。一二辭曰有希有梦，當非侑希侑梦也。「有𠂤有希」例亦同，「有𠂤有見」亦然，知李之說非。

卜辭之曰有希，有災咼也。希，賊也，祟也。如云「二示希王」「河希我」，均此

武丁卜辭雜釋之一　丁驌

1. 丙申卜㱿貞：來乙巳酒下乙。王固曰日酒。隹出希。其出設？乙巳酒。明雨。伐既雨，咸伐。亦雨，攸卯鳥星。

2. 乙巳夕有設于西。　（乙六六六四）

3. 丙申卜㱿貞：己酒下乙，酒隹希。其出設。乙巳明雨。伐。既雨。咸伐亦雨。攸卯鳥星。　（乙六六七二）

4. 乙巳夕有設于西。　（乙六六七三，上之反）

5. （癸卯卜……）王固曰有希。八日庚戌有各雲自東向。晦。昃。亦有出蚬自北

6. 飲于河。　（菁四）

允有設明有各雲（……）昃亦有設有出蚬自（……）于河在十二月（前七・四三・二）

7. 七日己巳夕坐……新大　並火……希，其有來僖？　（後下九・一）

8. （辛）未有設，新　（綴二七）

9. 癸未卜爭貞旬亡𡆥。三日乙酉夕坐。丙戌允有來入齒　十三月

二　（此在武丁二十九年）　（庫一五九五）

10. （癸未卜）……有希三日乙酉夕坐。丙戌允有來入齒。　（鐵一八五・一）

意也。希雨謂致水災之淫雨也。止雨之祈有「臧于河」「于岳」「于土」「于上甲」「于大乙」，皇天后土先公先王自然神皆爲祈雨止之對象。

(2) 𠂤

第一二辭董先生有「王二日旬」之文，幽默生動，讀之神往。惜董先生以己𠂤二字釋爲「𠂤陟」。此二字李氏集釋有詳論。郭某說𠂤之文雖不可易，然此契字并非𠂤字。李引金文𠂤類皆𠂤形，無一作𠂤形者。陟則說文所無。（李三七三一，四一五三）

吾人泥于𠂤爲以。古己以通，己字乃以字之倒文，此字實爲己即以也。契文降字从二𠂤之倒形，此文从𠂤，字極少見。實即降字。董釋爲傷趾非。郭釋爲降，謂是仄字之異文，亦泥于讀𠂤爲蹶之見。字不見說文，因降行而陘廢。若釋爲仄爲傷趾，則他辭：

「王臣固曰途若茲鬼降在宜」。　（綴二八）

豈鬼亦傷趾乎？　（按鬼字爲魂另有說）

契辭𠂤字與𠂤字、耏字同見一辭，何有二例，又均與「財」聯爲一詞，曰「𠂤財」。如卜三八三「貞告𠂤企財于高」陳三一：「戊子卜貞羽庚寅祉耏企財」。南明五五六：「叀夕福企酒告于且乙武丁」。𠂤財二文當讀以降，即由中丁起以下各王之祀也。降，不能作仄也，作斷趾也。

故此𠂤財

(3) 設

設契文  。乙六六六四（一辭）契稍偏作  無誤。此字从殳从  。說文信，古文省作  ，正作。故前人隸爲毀爲酘者皆謬誤。說文設从言从殳，以言使人也。古文言作  ，如訊字詩字諧字，其偏旁皆如是，故知  爲言之省無疑。

契文  ，一般隸爲設。郭氏會以前編四・四・四之  謂是从音之設之別体。以其明明从言，故斷音言二字古相通也。  字亦見甲六八七二，新四三〇二，佚二五三，後上二・九・六，知从者實省文也。

按言字古文之形  乃  與  之合，  見契文舌作等形，怪其何以有二歧也。如就此而論，設字或當作詵，惟詵說文所無，但有譖美言也。契辭「王宎譖」云云，豈以美言禮敬先祖乎？又麥甲之稱，豈因其善辭令歟？

設字之隸定雖無問題，其字何解則頗有可商。說文謂以言使人，「殳者可以運旋之物，故使人取意于殳」。今郭某李某不以設爲施陳之解，而以爲設置建置之意，怪哉！夫建設乃後世之詞，後起之義，說文未見者也。契辭「設司室」亦卽「設于司室」或「設祀于室」，斷不能曲解爲「築一司室」，衡以他辭，如粹（五〇三）曰「設六人」，絕非「建造六人」也。

舌字契文亦假爲設。故辭有「舌母庚」（前六・三四・五）又訛爲涉。辭曰「舌河宿。畢宿在西，乃好雨之星，求其不要再下雨也。余上所解雖可通順，但求畢宿之事，則不見契辭。如斷讀契辭或可謂「敉卯」之後遂現鳥星。此解終嫌勉強也。

音 古文　契文  　从音

言 古文　契文

金文 

舌 古文　契文 

設 契文

信 古文

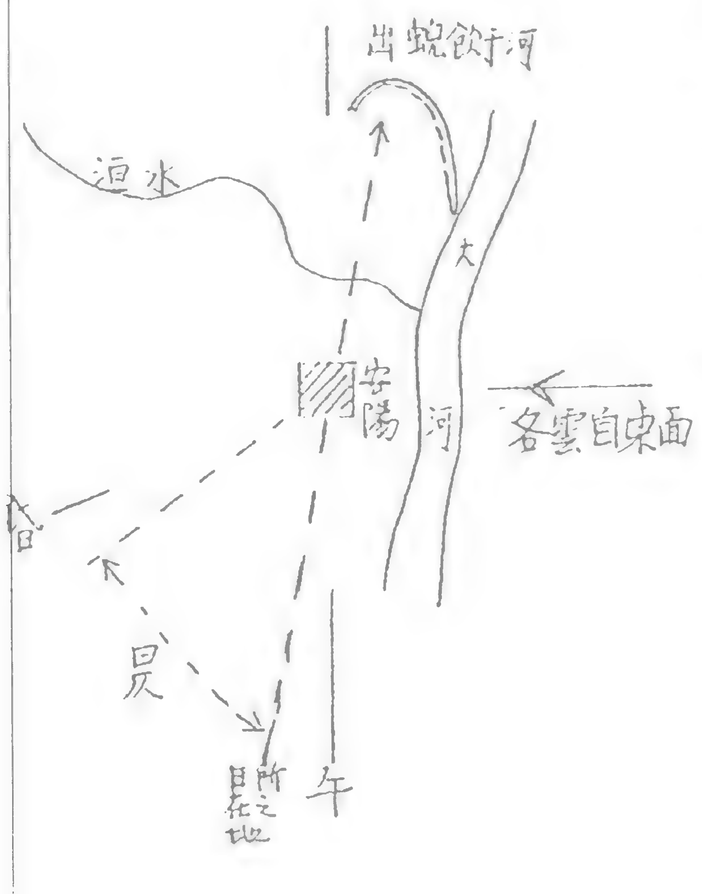
(4) 面

契文，李釋爲向，字在卜辭爲地名，皆四五期辭「翊日」「𠂤、」所示也。他辭曰「方于盂歸迺从向」爲唯一不爲地名之辭。用迺字當是一期辭。說文宧向也，从宀从口，北出墉也。

讀說文，向也，面聲。字隸偭。固悟契文  引申爲向。契文此字从目从  ，狀人目外視，卽面字也，會意。許書以爲意，面爲聲。契文  字乃狀屬屋宇之形。如按許例當以目爲聲矣，目面一聲之轉。

引例辭5「有各雲自東面，晦。昃，亦有出蜆自北飲于河，在十二月」。各，格也，來也，落也，「有行而止之不相聽也」。行雲斷斷續續自東面來，浮雲蔽日，故曰晦。昃，下午也。下午日在偏西之南，光射安陽北偏東之洹水而生蜆。查安陽在北緯三十六度許。冬十二月（今十月）陽曆十一月，日出在上午七時許，日落在下午五時，故所謂昃當在午至申，一時至四時之間，日之位置在南方偏西不遠（如圖），霓之成因可能由於日光高度不大（昃或在十八度左右，日中二十五度），水面反射所成，「飲于河」之河，此河當是洹水所入之大河。時間不能太晚，當是過午以後數小時耳。

董先生釋設爲毀，謂辭「有毀霓于西」似爲斷句之誤，是「有設霓于西」也。辭與所引者近，或漏契一「有」字亦未可必。



置位之河于飲霓出示圖

上述鳥星之卜，貞辭在丙申，旬當癸巳，與上引第七、八兩辭不知相接否。七八兩辭卜日當在癸亥，相間至少一月，辭尾未記月，故不知究竟。惟火星出現於殷爲四月（今陰曆二月，陽曆三月春分左右）。

火星發光最大之時爲與地球在近日點附近時與日成一直綫，而地球居間。卽所謂OPPOSITION是也。此每隔十五或十七年爲一周。如一九五六年火星距地球最近，一九七三年又爲最近。其先在一九三九年。依一九三九年上推凡十七年一周計算，新大星並火之時，假定武丁所見之火適在周首，故光芒特異。則近在祖庚七年一二七四，武丁一二九一，一三〇八、一三二五至于小乙八年一三四二均爲周首。則武丁一二九一，四月癸丑朔，一三二五，四月辛丑朔，均可容納，其他則不合也。如以十五年爲周計則：一二八六、一三〇一兩年亦可容納。

所謂新星當非常見之星，所見應具光芒，亦必在天空有相當長久之時間，故不可能是一般之星及行星，亦非隕星，最可能者爲彗星。其中以HALLEY氏彗星周期又長（七四—七九年，平均七六・〇三年一周），而史上記載凡二十九次之多。我國史上記彗現之事頗多（表一）。秦始皇七年所見（二四〇B、C）確爲HALLEY彗星。由此上推以七五年周期或七六年周期，則彗星在武丁時應現於一二九〇或一三〇三年。此與上推武丁一二九一年之火星周首極爲近接，故竊以爲「大星幷火」，乃HALLEY彗星與火星同見於夜之記錄也。其確切年月應由天文家計算。因火星周期彗星周期皆是平均約數，其同見而近之點之月日，亦待計算方可確知，上之揣測至少示其可能也。

表一

彗星見

魯文公十四年七月	六一三 B、C、
昭公十七年冬	五二五
哀公十三年十一月	四八二
（據百科全書彗星見）	四六七
周顯王八年	三六一
赧王十年	三〇五
赧王十二年	三〇三
秦昭襄王二年	二五五
秦昭襄王四年	二五三
秦始皇帝七年	二四〇
（應見未見有記）	一六三
漢文帝十七年後元年	
景帝三年長星現	一五四
HALLETS彗星見於二四〇B、C、其一六三B、C、者舉世未見。	
景帝三年（一五四B、C）正月乙巳長星出西方，疑卽此，如此錯後凡十年。由一五四起上溯依七六年周期當一二九四，如依七五年計當一二八五，平均亦在一二九〇左右。	

一九七六于洛上集

（原載《中國文字》新二期，一九八〇年九月）

散見於日本各地的甲骨文字

（一）

松丸道雄著
劉　明輝譯
東　由扶

流散到我國的甲骨，有一些從來到以後，就原封不動地保存在那裏，從來沒有發表過。因而，不可能作爲史料來利用。屬於這種情況的甲骨，達到了相當多的數量。卽使從甲骨學的現狀來說，對於這些甲骨也應該從速着手彙集並加以發表。這是我國的甲骨學者們對中國應盡的首要義務。這裏，先將偶然收集到的一些拓片與摹本，在本刊上發表出來。本期所刊載的部分藏品，其收藏單位和甲骨來源如下：

○早稻田大學東洋美術陳列室（會津紀念室）藏二十三片，其中無字骨一片（會四・一一），僞刻一片（會五・一一）。本稿收二十一片（一—二五）。

會津八一氏舊藏。據說是大正年間購入的，但詳情不明。從本文四，（會一、四）即《續》五・一八・八中所見到的情況來判斷，推想是羅振玉舊藏。這片以外的，也許已經著錄過了，但沒有核對過。甲骨分裝在五個匣子內，每匣數片。

○谷邊橘南氏藏，十八片。本稿收十八片（二六—四三）。

是住在京都的書法家谷邊橘南氏所藏的。甲骨裝在一個匣子內。據說是在戰後購入的。

○園田湖城氏藏，五片，其中二片僞刻。本稿收三片（四四—四六）。

○富岡昌池氏藏，一片。本文四七。

園田、富岡兩氏所藏的甲骨，原拓可能收入了京都篆刻家園田湖城氏主持的同風

印社所刊行的鈐印印譜《印印》上。但因為該書的印本太少，一般人幾乎都不知道，所以再錄於此。在《印印》的第三三、三四、三九、四四冊所收的甲骨拓本中，本文四四－四七號各收入一片。在第三二、七四冊也各有一片，但由於是偽刻的，故沒有收進。

○佐藤武敏氏所藏，一片。本文四八、四九。

大阪市立大學的佐藤武敏氏的藏品。據談氏說，原是羅振玉舊藏。

○東京大學文學院考古學研究室藏，一百十九片，其中無字三片，偽刻三片。本稿收百十三片（五〇一－一六五）。

東大考古學研究室所藏的甲骨，曾著錄於以下二書：

一、郭沫若《卜辭通纂》（一九三三年）別錄之二、X（收十四片）。

二、饒宗頤《日本所見甲骨錄》(一)(Journal of Oriental Studies Vol, Jan. 1956)（收五十三片）。

郭氏在《通纂》自序中說：『東大考古學研究室藏約百餘片。』又，在『饒書』中有包含偽刻在內的百一十片，而現存一百十九片。胡厚宣氏在《五十年甲骨文發現的總結》中認為舊藏約一千片，全是根據想象。又，『饒書』裏重載了『別二』所收的十四片中的六片，對其餘的八片，饒云：『予所未見，知東大考古學研究室所藏甲骨，戰後已有遺失。』（三一頁）這個說法是錯誤的。因除一片（別二、X、一四）外，現在還存有十三片。二書都附有釋文。但由於是根據從來經剔刷的甲骨拍下來的照片做的考釋，所以誤釋、缺釋的字隨處可見。例如，『別二』X、一（本文五〇）的『丙午卜穷貞翌乙亥𣪊其正受佳又』，應是『丙午卜穷貞翌乙亥𣪊其正受佳又』。『饒』五二字。還有，在背面、骨白上的刻字也有給漏掉而未釋的。因此，對東大所藏甲骨重行整理還有意義。所以不嫌重複，除偽刻、無字的六片外，全部公布。排列，是按照分期的次序，但將甲和骨分開了。關於分期，也還有一點問題。關於甲骨的來源，其中的四五十片是渡瀨二郎氏於大正五年（一九一六年）在歐德府得到的，其他的就不知道了。

本文在甲骨片下附了連續的號數，引用的時候，僅根據此號數就行了。遇有一片的背面、骨白都有文字時，為了引用的方便，分別編了號。但只是將背面、骨白有字的，分別標明背、白字樣。因而，號數與所收的片數沒有關係。（一）內的號碼是原來收藏者的編號。又，東大藏骨中（一）內號碼是前記二書的著錄號數，附記於此。

僅借這個機會，向為了讓我收集拓本或做出摹本而提供方便的各位收藏家致以深深的謝意。我誠懇地希望，如果有人知道即使哪裏收藏着一片甲骨，或者知道哪裏有人收藏着甲骨的，都請見教為感。通訊地點：東京都文京區，東大文學院東洋史研究室。我衷心希望各界能給予協助。

（二）

○小谷武之助藏，五十三片。本稿收五十三片（一六六－二二〇）。

小倉氏現住千葉縣習志野市。他所收藏的甲骨，是已故宮內大臣秘書官工藤壯平氏的舊藏。其中有一片被認為是人頭骨，頗為珍貴（參照陳夢家《殷虛卜辭綜述》圖版拾參、拾肆）。

○小林斗庵氏藏，三十四片。其中一片是偽刻。本稿收三十三片（二二一－二五六）。

小林氏是篆刻家，住在埼玉縣川越市。他收藏的甲骨收在兩個匣子裏。如何得來，情況不詳。

○國學院大學文學院考古資料室收藏，十一片。本稿收十一片（二五七－二六八）。其中一部分是在中日戰爭前購入的。還有該大學考古學系教授樋口清之氏在殷墟所採集的也混在一起了。二五七號是《鐵》七二、一，可能是購入的。其它大約都是採集品。尚有無字的卜骨數片，未見。

○早稻田大學高等學院收藏，七片。其中一片是偽刻。本稿收六片（二六九－二七五）。

早稻田書房主大林氏於昭和五年（一九三〇年）在日本高島屋（中國展覽会）購入的。

○明治大學文學院考古教研室收藏，四片。本稿收四片（二七六－二七九）。

昭和三十年（一九五五年）購於東京橋龍泉堂。據說是羅振玉的舊藏。可能已刊入出版的著錄中，未經核對。

○岩井大慧氏藏，五片。本稿收五片（二八〇－二八四）。

岩井氏是東洋文庫的主事。他的藏品據說是其友人某君在殷墟採集贈送給他的。

○東京大學教育學院博物館藏，一片。本稿收一片（二八五）。

此片是未內庸夫氏所贈送的。

○國立上野博物館藏，二百二十五片。其中二片是偽刻。本稿收二十一片（二八六－三〇七）。

談博物館，第一次（明治四十五年（一九一二年），由黑田太久馬氏收的）一十八片。第二次（大正二年（一九一三年），由龜田一郎氏收的）五片（其中二片是偽刻的）。第三次（昭和二十七年（一九五二年）），羅振玉的舊藏）收藏二〇二片。由於篇幅關係，在此只收第一次（二八六－三〇四）和第二次（三〇五－三〇七）的藏品。另外，尚有郭沫若《卜辭通纂》別錄之二所收的七片，茲注明其著錄號數，仍在這裏重新發表出來。

另外，對所舉的諸位收藏家之外，還受到了梅原末治、山田統、樋口清之、船津富彥、河野漢子、三上次男、李內武夫諸氏的支持、協助，深表謝意。

（三）

○松谷石韻氏藏，二片。本稿收二片（三〇八、三〇九）。

松谷氏是住在京都的篆刻家。這批甲骨是戰後購入的。本稿三〇八的大骨版上刻有三條卜辭，右端的『□子卜王貞，乎子漁出于出祖』下方的四個字，其義不明。最初懷疑是偽刻，經過仔細檢查原骨的結果，與其它部分的刻劃對照又完全一樣。從全面看，具有第一期最典型的特征，是沒有任何懷疑的。『出祖』的『出』也可能是錯刻。在現有的甲骨文中錯刻的數量雖不多，但殷代書契者的誤記、錯刻的情況，肯定是有的。另外，松谷氏收藏的其它數片，未見。

○八木正治氏藏，十四片。本稿收十四片（三一〇－三二三）。

八木氏住在奈良市，他的藏骨，現由大阪市立美術館保管着。

○白川一郎氏藏，八十九片。本稿收四片（三二四－三二七）。

白川氏，住在東京永福街，是西洋畫家。他的藏骨：㈠放在中國製作的有布套的兩個木匣子裏。每個匣子有四個格，每格放骨十片，共八十片。其中一片是偽刻，實有七十九片。㈡兩匣之外還有十片。合計八十九片。經校對結果，知道大部分已在金祖同《殷契遺珠》（一九三九年）中著錄過，該書中注明是堂野前種松氏的藏骨。堂野前氏收藏的即是《遺珠》六二二－七〇。六的六八三）外的八十五片，全部包括在白川氏現藏的八十九片中。因而，本稿所收的僅僅是白川氏藏骨中未收進《遺珠》的四片。這些都是㈠項內的。㈠項中特製的木匣是中國造的。堂野前氏當初收藏時，這幾片也應統統包含在內。金祖同編《遺珠》時，大約是給漏掉或者刪去了。在這重複的八十五片中，我校對的結果，有二十三片收在商承祚的《殷契佚存》中，另一片已收在羅振玉《殷虛書契前編》中。這些編號今從略。另外，饒宗頤的《日本所見甲骨錄》㈠（*Journal of Oriental Studies Vol. III, No.2*）中說的峪伊之助氏藏品，指的就是這批甲骨。

○慶應塾大學考古學研究室藏，二十三片，無字骨一片。本稿收二十二片（三二八－三三四九）。

從來沒有著錄過。我也是最近才知道的。保阪三郎在《慶應義塾圖書館藏甲骨文字》一文中（《史學》第二十卷第一號，昭和十六年七月（一九四一年））發表了十八片的拓本。據保阪氏說是『田中一貞氏當館長時收集的』。戰後，該大學考古學研究室成立時，才被移交過來的。保阪氏的著錄，一般人幾乎不甚知道，並且他所發表的拓本又是縮成了原物的二分之一大小，很不清楚。因此，現在將保阪氏未曾發表的四片和他已經發表過的十八片，即考古學研究室現藏的全部有字甲骨共二十二片在這裏一起發表出來。

○慶應義塾圖書館藏，一片。本稿收一片（三五〇）。

上述慶應義塾圖書館舊藏之外，該館現在僅藏了這一片。此片是由中村三之助氏寄贈的。

○松丸道雄藏，一片。本稿收一片（三五一）。

是最近從美術商店購入的。

另外，本稿作成之際，在此對所舉的諸位收藏家之外，還受到佐藤武敏、上田宏範、三上次男、松本信廣、伊藤彌之助等諸氏的支持、協助，深表謝意。

(四)

○不信堂藏，十二片。本稿收十二片（三五二－三六三）。

不信堂是東京日本橋的文物商店。該處所藏甲骨的來源雖然不詳，但從三五二－三六〇九片與三六一－三六三三片分藏在二匣來看，原來的收藏者可能不是一個人。

○約翰・法蘭正（*Mrs. John M. Farrior*）收藏，十五片。本稿收十五片（三六四－三七八）。

她是美國人，現住東京目黑區。她曾經在哥倫比亞大學以及中國研究中國考古學。這些甲骨是一九四九年她在北京收購的。雖然不是日本人的收藏品，但從在日本所見的甲骨這個意義上，故收錄於本稿之中。

○明治大學文學院考古研究室（考古學陳列館）所藏（一九二），十片。其中二片是偽刻。本稿收八片（三七九－三八六）。

在本稿㈡（《甲骨學》第八號）著錄了該大學收藏的四片甲骨(A)。其後，在昭和三十七年（一九六二年）四月又從東京京橋龍泉堂購入十片(B)。推測或者是明治大學發行了《明治大學考古學陳列館說明書》，其中收集了(A)中的二片（本稿二七六、二七八）和(B)項中的七片照片(比實物尺寸要小些)。這次除掉(B)項中的偽刻卜骨，收錄八片。

○京都大學文學院考古學研究室（考古學博物館）收藏，九十四片。以前，已有四本書對這些甲骨作了介紹。

①《京都帝國大學文學院陳列館考古圖錄》（簡稱《圖錄》），一九二二年，收錄五片。

②郭沫若《卜辭通纂》別錄之二（簡稱『別二』），一九三三年，收錄七片。

③梅原末治《河南安陽遺寶》（簡稱《安》），一九四〇年，收錄廿五片。

④《京都大學文學院博物館考古資料目錄》第三部，一九六三年，收錄三十一片。

其中除了第④因系採用原大三分之一的照片，不夠清楚而難於利用外，故後面甲骨摹本只列出①、②、③書的甲骨編號。下表系根據該研究室的登記簿以及我的調查而匯集成的現存甲骨數（表見下頁）。

表上的現存數雖然是根據寫在各片上的記錄整理的，但不清楚為什麼它竟超過了登錄數。另外，④所記的登錄數和其他書所記的登錄數稍有不同，理由也不清楚。關於這批收藏品，郭沫若氏說是『半為羅叔言寄贈，半為濱田青陵博士於殷墟所拾得』（《通纂、自序》），以及『羅氏寄贈品』（『別二』，第十四葉）。但是，正確的還是如上表所引的。在E項裏，或者說不定有濱田氏的採集品。C的寄贈者渡瀨二郎氏，也是東京大學考古學研究室藏骨的寄贈者（參照本稿㈠《甲骨學》第七號，一一四頁）。從其他兩大學寄贈的時期考察，我認為可能是把一批資料分贈了二處。關於這個總數，郭氏在《通纂、自序》中認為『東大考古學研究室所藏四五十片』的意見發表以來，很多人都以這一說法為根據。應該說，這大體上是符合現存有字甲、骨合計五十六片的數目的。

○西川靜庵氏藏，一片。本稿收一片（四四六）。

西川氏是東京教育大學教授、書法家。他的藏骨是昭和六年（一九三一年）在上海購買的。

另外，本稿作成之際，受到收藏者各位和杉原荊介、小林三郎、關野雄、橫山浩

資料登記號(No)	寄贈者	寄贈年月日	登錄號	現存數				
				有字甲骨	有字骨	無字甲骨	偽刻甲骨	計
A 一〇六三	羅振玉	一九一五、四、一四	一八	十	八	〇	〇	十八
B 二八七	東洋史研究室移交	一九一六、四、二七	十	三	五	三	一	十二
C 二六一三	渡瀨二郎	一九二七、十二、一	廿三	二〇	二	二	二	廿六
D 一六五七	內藤虎次郎	一九一八、一、二三	二	二	〇	〇	〇	二
E 無登錄號				五	一	廿八	二	廿六
計			五三	四十	十六	廿三	五	九四

本稿號(No)	計
三八七－四〇七	十八
四〇八－四一五	十二
四一六－四三七	廿六
四三八－四三九	二
四四〇－四四五	廿六

一、佐原真諸氏的大力支持，在此致以衷心的感謝。

(五)

○武藏大學歷史學研究室收藏，六片。其中一片無字，本稿收五片（四四七－四五一）。

研究室現藏的六片中，五片有資料編號，分別為一九七七－二、三、四、五、九，一片無號。據此，另外可能還有數片是亡佚了。該大學與此有關的人士不瞭解藏品的來歷及有關的事情。

○東京教育大學東洋史研究室藏，七片。本稿收七片（四五二－四五八）。

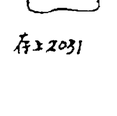
這些甲骨的來歷也不清楚。順便說一下，該大學的前身雖然曾是林泰輔氏擔任過教席的東京高等師範學校，但是這幾片甲骨似與林氏舊藏沒有關係。

○小川睦之助氏所藏，七片。本稿收七片（四五九－四六五）。

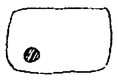
卜骨裝在中國製的深藍色布面的囊匣裏，原來是九片，因有二例能夠綴合，故現在着錄為七片。本資料已經在伊藤道治《故小川睦之助氏藏甲骨文字》（《東方學報（京都）》三十七，昭和四十一年（一九六六年）三月）一文中發表了。我承蒙小川家與藤枝晃氏的厚意，調查了這些材料。因為本文是紀錄日本現存的甲骨，故在這裏也收錄了。

○籾野直禎氏收藏，三片。本稿收三片（四六六－四六八）。

京大助教籾野氏的藏骨，是故籾野直喜氏的舊藏。但是，其中的No.四六六是趣珍貴的例子，在這裏想講一下。從字體及文例上看，雖然明顯是貝塚氏所說的『王族卜辭』，但有兩點值得注意：一、正面和背面，很明顯是用像鑽一樣的東西挿成辭形穴。二、上、下、右邊的一段用鑽々斷，顯示出折斷了的形狀。顯然，當時是有目的地做成這個樣子的。可是，要想另外找到這種類型的卜骨（當然，僅由原來的拓本或摹本是不大確切的），目前能夠看到的有下面的四個例子：


後上叶一三

京3100


庫420


存2031

在這裏，《後》上、三十一、三、《京》三一〇〇（即《存》下、五九二）的二例，與本片一樣，大約是『王族卜辭』。《庫》四二〇因為是摹本，難於判定是否屬『王族卜辭』。《存》上、二〇三一大約是三期乃至貞塚氏所謂『第三、四期卜辭』。不過，這個例子，放在這裏也不一定合適。雖然例子不多，但『王族卜辭』占壓倒多數的這一點，必須引起注意。《庫》四二〇上注明有『兩個鑽孔』（Two holes drilled through），關於這點也應當注意。在這些例子中也能見到甲骨的周圍像是用鋸鋸掉的情況。從這些例子可以推測，這兩種『加工』，是在占卜以後進行的。占卜以後，有在刻辭中塗茅的，這是人所共知的事情。但是，像這樣用孔鑽挖孔、用鋸鋸成小片的『加工』，確是從來沒有報導過的。為什麼要做成這種形狀呢？說不定這是曾在挖孔處繫上帶子掛在頸上以作為護身符的那種風俗的遺存。當然，這純屬推測。聯想到在『王族卜辭』中集中地出現這種情況，確實是一個值得考慮的問題。它說不定能夠成為考慮占卜所具有意義的一個線索。在這裏僅是提出這個問題而已。

附：『桃山獸骨』探訪記

在郭沫若《卜辭通纂》別錄二（一九三三年五月出版）中刊登了一片『桃山獸骨』的照片並附有考釋。這是內容特殊、很有意義的一件卜骨。但照片不大清楚，其它書也沒有登載。因有『京都桃山中學藏品，田中常太郎氏撮贈』的字，為了調查此片，我於一九七三年二月訪問了『京都府立桃山高等學校』（伏見區桃山街，毛利長門東街八號）。在該學的衆位教師的積極協助下，雖然弄清了當時的『桃山中學』確是現在的『桃山高等學校』；但是，那塊卜骨已不知去向了。其中一位教師是該校的畢業生。據他回憶說，一九三四年夏，因為遭到『室戶臺風』的襲擊，該校的史地教室倒塌了，多數學生參加了發掘整理房屋，這片甲骨可能是在那個時期丟掉了。或者是戰後學制改革時，新建的幾所新制的中學分配棟本時，該骨包含在棟本中給分掉了。關於『田中常太郎』這個人誰也不清楚，因為原學校校長田中常賢氏的長子常一氏已經戰死，所以探詢不到什麼消息了。以後，該校教師土田寬來信，談到『在課堂中講到此事時，聽到一個學生（其父在桃山中學畢業）說，他父親曾在歷史教師那裏見過這片甲骨』。這片卜骨似乎是桃山中學的藏品。由於『室戶臺風』的關係，在《通纂》出版後不久而埋滅了，僅留下了一張不清楚的照片。非常感謝該校諸位教師的協助。考慮到將來可能還有想『調查』此事的人，故把調查的始末記述於此。

譯者附記

一、解放前數十年，由於各種原因，流傳在國外的甲骨文為數不少。有的已相繼

出專書著錄，有的發表於各種雜誌之中，有的至今尚未發表。我們認為，把這些分散於國外的材料收集發表出來，對甲骨文的研究是有意義的工作。所以，翻譯此文，為讀者們提供一些甲骨資料。

二、《散見於日本各地的甲骨文字》中的(一)、(二)、(三)、(四)、(五)章，是分別登載在日本《甲骨學》中的第(七)、(八)、(九)、(十)、(十一)各期，每期一章。

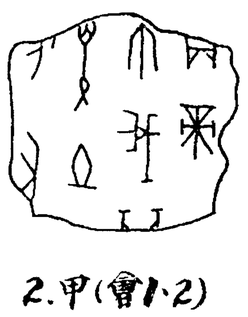
三、譯文後面的甲骨文摹本，是從《甲骨學》上依原摹本樣摹下來的。

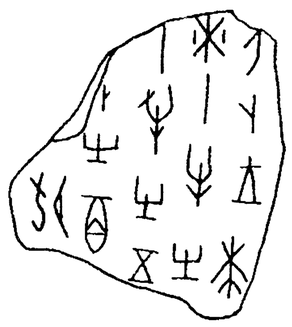
四、本文中的甲骨有一部分已著錄過了。如本文中的八、二五七、三八七分別見於《鐵》八四、二，《鐵》七二、二，《鐵》一二七、一；三九七、四一一分別見於《卜辭通纂》別二、四、三，《卜辭通纂》別二、四；九二以及四分別見於《鐵》七，《前》四、五〇、二(即《續》五、十八、八)等等。在圖中仍然發表它，其目的是要說明此甲骨現藏在日本。


1.骨(會1·1)


4.甲(會1·4)


6.甲(會2·1)

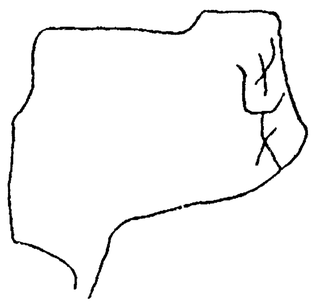

2.甲(會1·2)

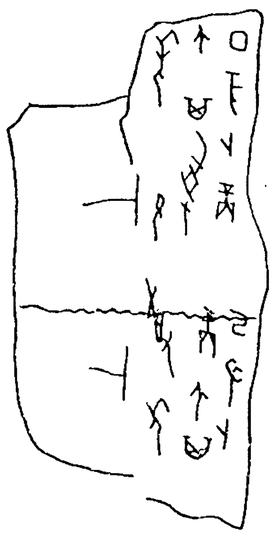

5.甲(會1·5)

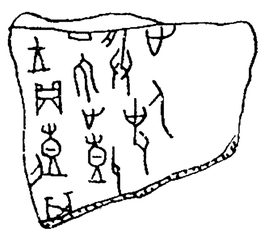

7.甲(會2·2)

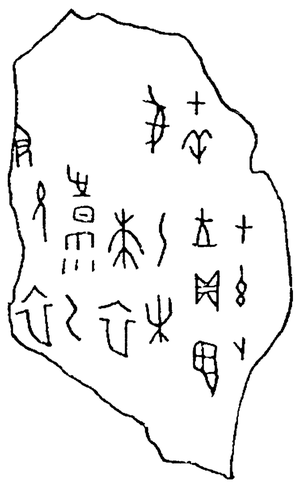

3.甲(會1·3)


8.骨(會2·3)

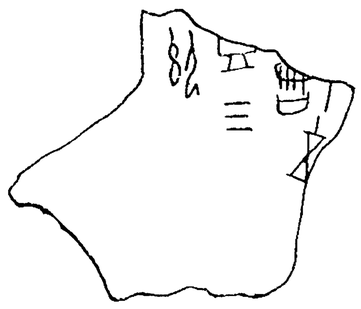

9.骨(會2·3背)

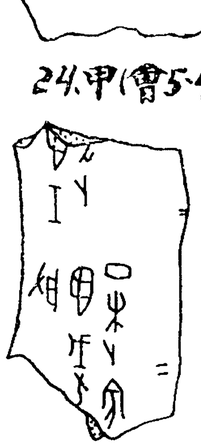

20甲(會4·3)

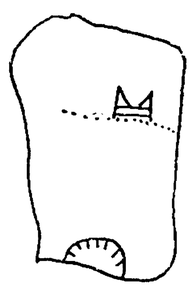

23.甲(會5·3)

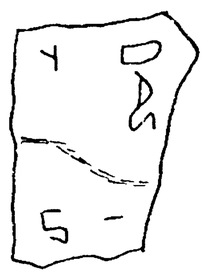

18.骨(會4·2)


19.甲(會4·3)


24甲(會5·4)

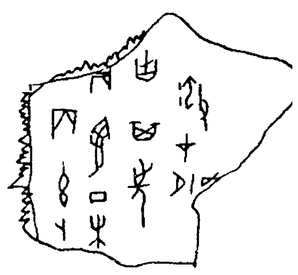

25.骨(會5·5)

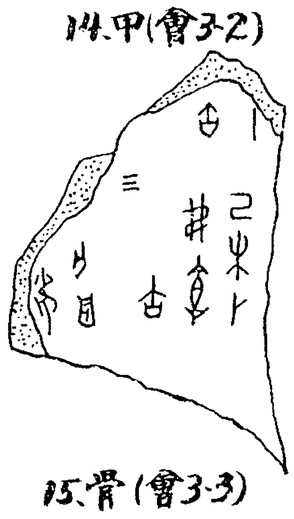

22.甲(會5·2背)

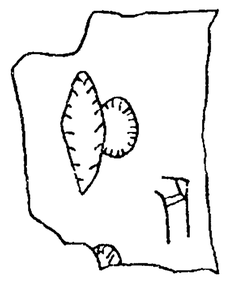

21.甲(會5·2)

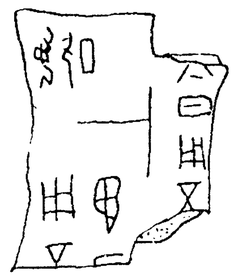

14.甲(會3·2)

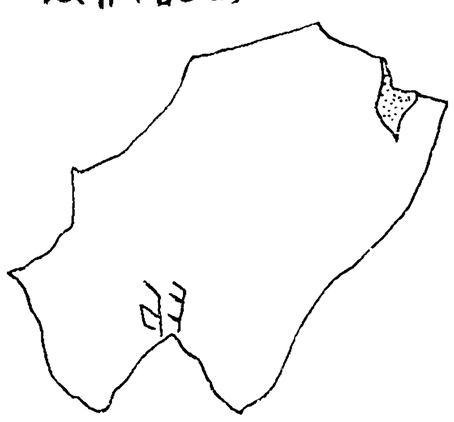

13.骨(會3·1)

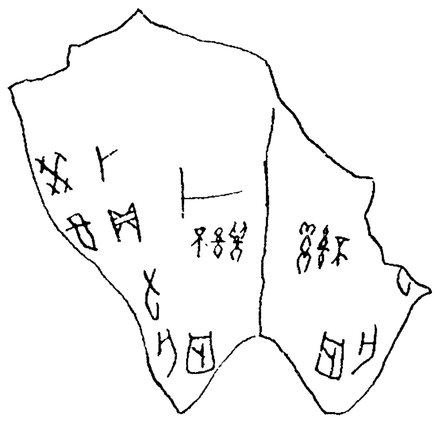

10甲(會2·4)


15.骨(會3·3)


12.甲(會2·5背)


11.甲(會2·5)

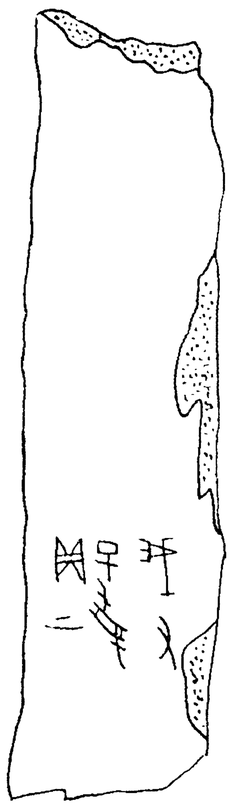

17.甲(會3·4背)


16.甲(會3·4)


40.骨(合15)


37.骨(合12)


39.骨(合14)

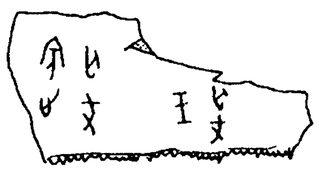

43.骨(合18)


41.甲(合16)


42.甲(合17)


38.骨(合13)


34.甲(合9)


30.甲(合5)


26.甲(合1)


35.骨(合10)

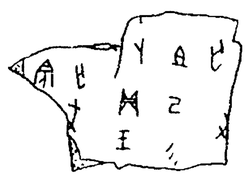

31.甲(合6)

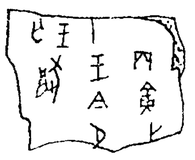

27.甲(合2)

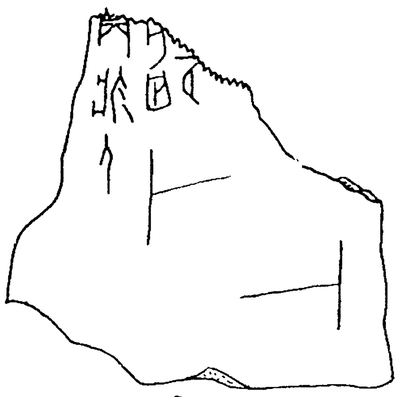

36.骨(合11)

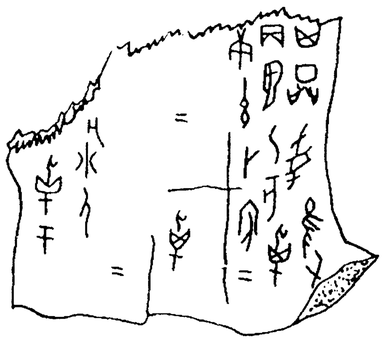

32.甲(合7)

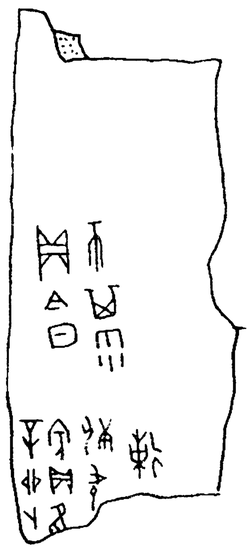

28.甲(合3)

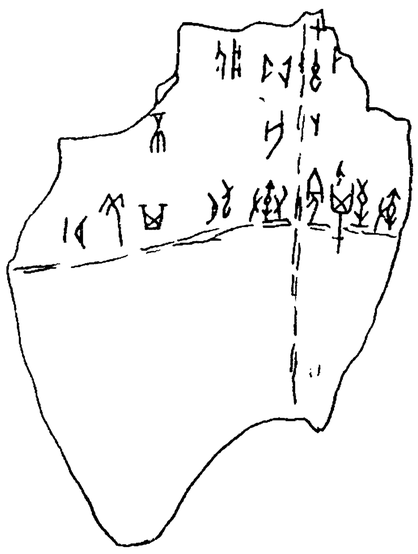

33.甲(合8)


29.甲(合4)


54.甲(東大5)

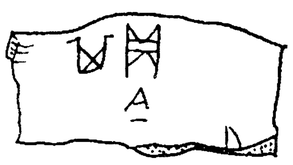

50.甲(東大1)[別二・X-5]


55.甲(東大6)[別二・X-1]


51.甲(東大2)


56.甲(東大7)


53.甲(東大4)


52.甲(東大3)


49.骨(佐藤1-E3)


44.甲(印印33-1)


46.甲(印印39-1)


45.骨(印印34-1)

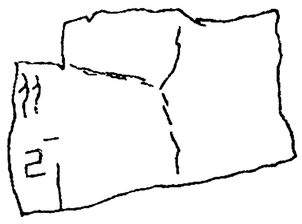

47.甲(印印44-2)



73.甲(東大24)



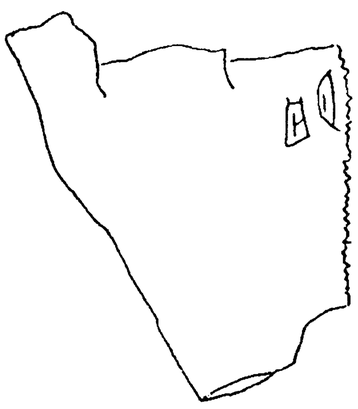
70.甲(東大21)



66.甲(東大17)



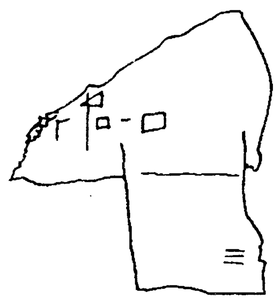
74.甲(東大25)
[鏡6]



71.甲(東大22)



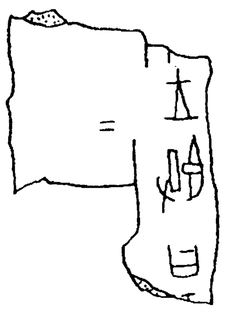
67.甲(東大18)
[鏡13]



68.甲(東大19)



75.甲(東大26)
[別二・X-8.鏡5]



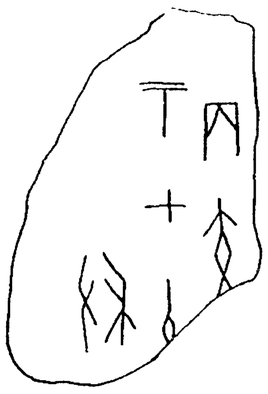
72.甲(東大23)
[鏡3]



76甲(東大27)



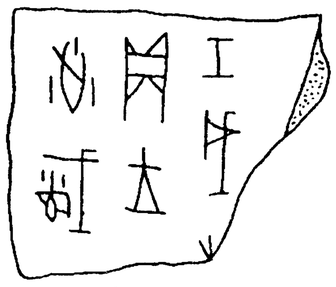
69.甲(東大20)



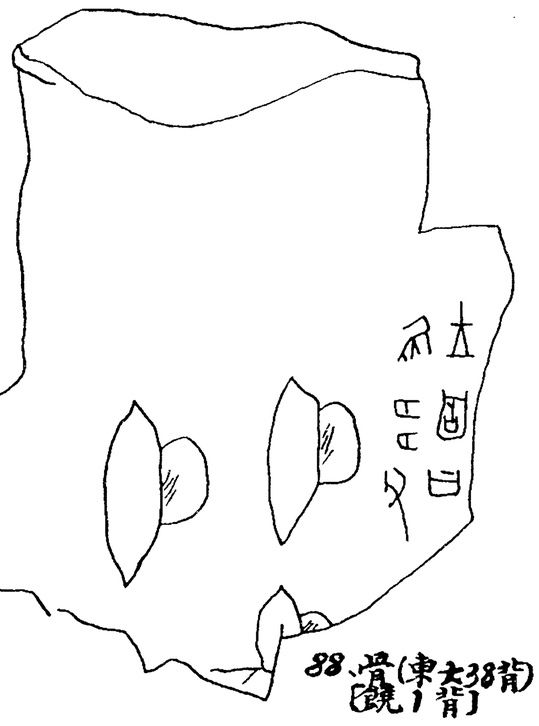
89.骨(東大38臼)



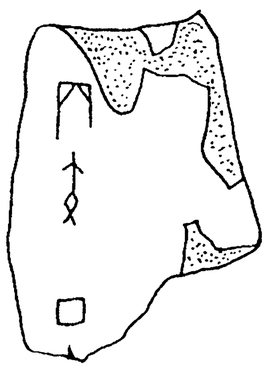
87.骨(東大38)
[別二・X-10.鏡1]



90.骨(東大39)
[鏡8]



88.骨(東大38背)
[鏡1背]



91.骨(東大39臼)



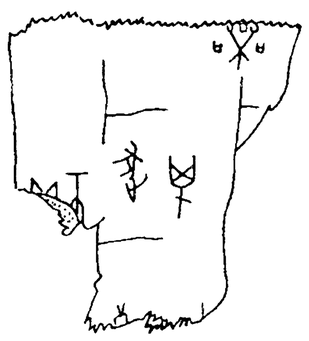
62.甲(東大13)
[鏡9]



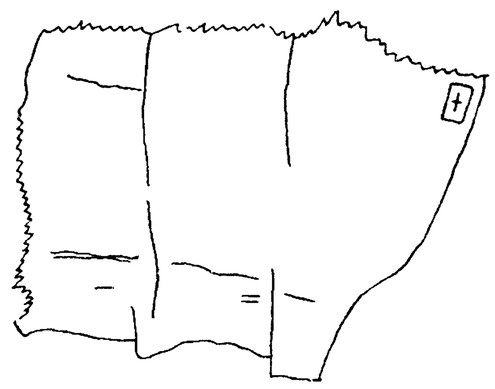
58.甲(東大9)



57.甲(東大8)



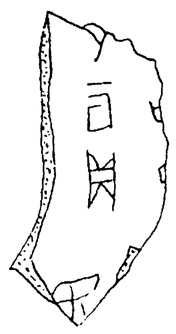
63.甲(東大14)
[鏡50]



59.甲(東大10)



65.甲(東大16)
[鏡17]



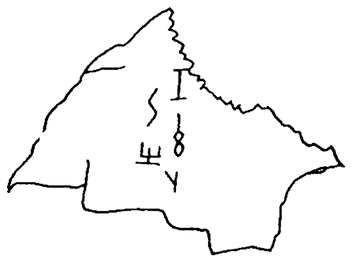
64.甲(東大19)



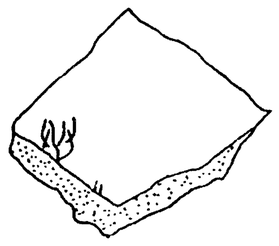
61.甲(東大12)
[鏡12]



60.甲(東大11)
[鏡11]



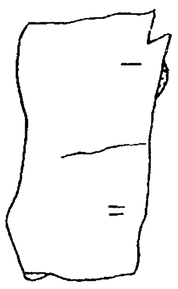
84.甲(東大35)
[鏡44]



81.甲(東大32)



77.甲(東大28)



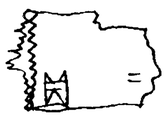
85.甲(東大36)



82.甲(東大33)



78.甲(東大29)



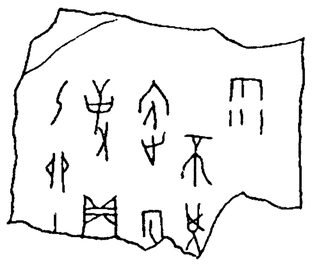
79.甲(東大30)



86甲(東大37)



83甲(東大34)
[鏡18]



80.甲(東大31)

92.骨(東大40)

93.骨(東大41)
【別二-X-13.銕4】

94.骨(東大42)

95.骨(東大43)
【銕2】

96.骨(東大44)

97.骨(東大45)

98.骨(東大46)

99.骨(東大47)

100.骨(東大48)

101.甲(東大49)
【銕37】

102.甲(東大50)
【銕36】

103.甲(東大51)
【銕35】

104.甲(東大52)

105.甲(東大53)

106.甲(東大54)
【銕15】

107.甲(東大55)

108.甲(東大56)
【銕12】

109.甲(東大57)

110.甲(東大58)
【銕29】

111.甲(東大59)
【銕32】

112.甲(東大60)
【銕28】

113.甲(東大61)
【銕30】

114.甲(東大62)
【銕31】

115.甲(東大63)
【銕23】

116.甲(東大64)
【別二-X-4】

117.甲(東大65)

118.甲(東大66)

119.甲(東大67)
【銕16】

120.甲(東大68)

121.甲(東大69)
【銕42】

122.甲(東大70)
【銕47】

123.甲(東大71)
【別二-X-12】
【銕43】

124.甲(東大72)
【銕38】

132.甲(東大80)
[別二・X-7]
[銕34]

129.甲(東77)
[銕49]

125.甲(東大73)
[銕39]

126.甲(東大74)
[銕41]

133.甲(東大81)
[銕21]

130.甲(東大78)
[銕14]

127.甲(東大75)
[銕40]

134.甲(東大82)
[銕26]

131.甲(東大79)
[銕27]

128.甲(東大76)
[銕52]

138.骨(東大86)
[別二・X-9]

139.骨(東大87)
[銕48]

137.骨(東大85)
[別二・X-22]

135.甲(東大83)
[別二・X-11]
[銕25]

140.骨(東大88)
[銕46]

136.骨(東大84)
[銕22]

147.骨(東大95)
[別二・X-3]

144.骨(東大92)
[銕53]

141.骨(東大89)

145.甲(東大93)
[銕34]

142.骨(東大90)
[銕33]

148.骨(東大96)

146.甲(東大94)

143.骨(東大91)
[銕20]

152.骨(東大100)

150.骨(東大98)
[銕19]

149.骨(東大97)
[別二・X-6]

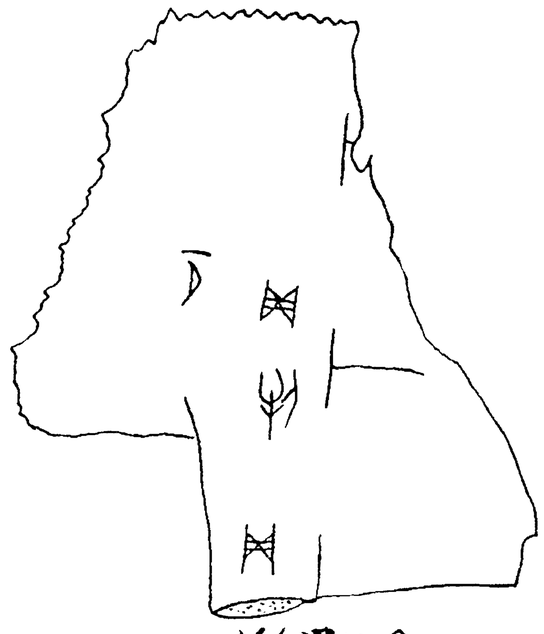
154.骨(東大102)

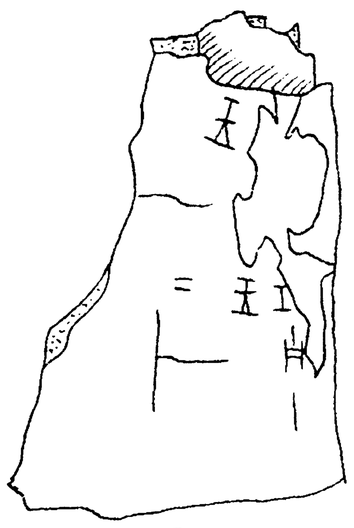
155.骨(東大103)
[銕51]

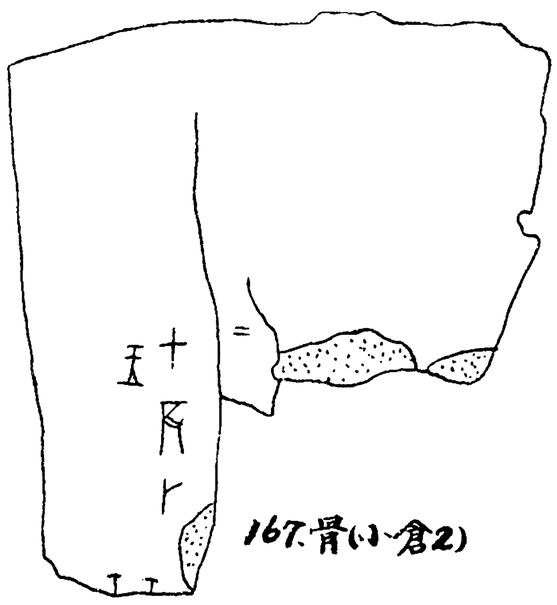
153.骨(東大101)

151.骨(東大99)

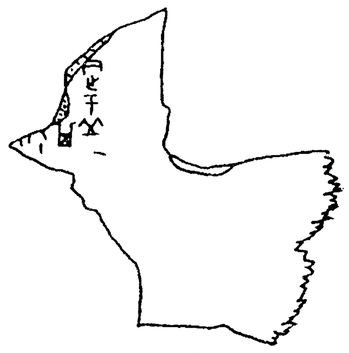

168.骨(小倉3)


166.甲(小倉1)

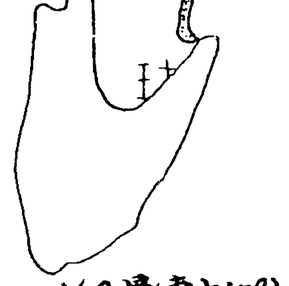

169.骨(小倉4)


167.骨(小倉2)


163.甲(東大111)


156.甲(東大104)


164.甲(東大112)

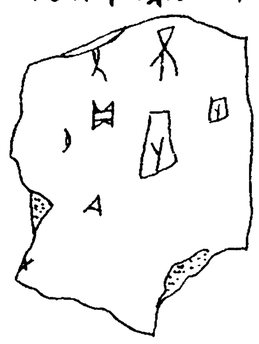

160.骨(東大108)


157.甲(東大105)


165.甲(東大113)

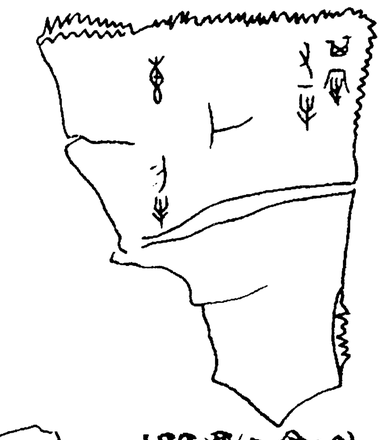

161.甲(東大109)

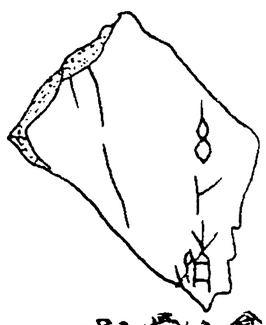

158.骨(東大106)

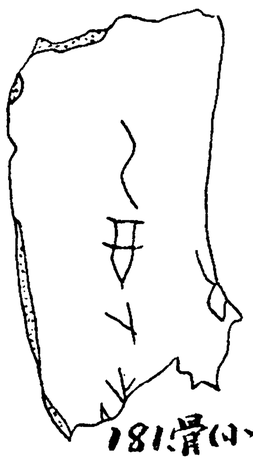

162.甲(東大110)


159.骨(東大107)


180.骨(小倉13)


177.甲(小倉10)


183.骨(小倉16)

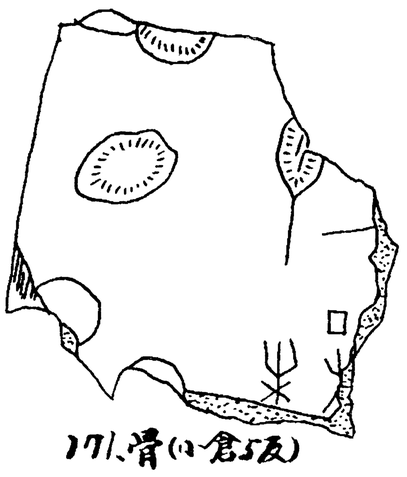

181.骨(小倉14)


178.骨(小倉11)

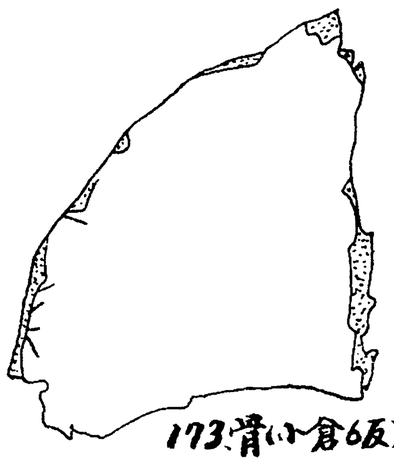

184.骨(小倉17)


182.骨(小倉15)


179.骨(小倉12)


171.骨(小倉5反)

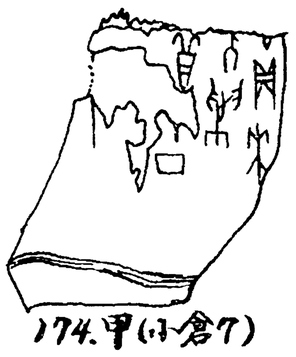

170.骨(小倉5)

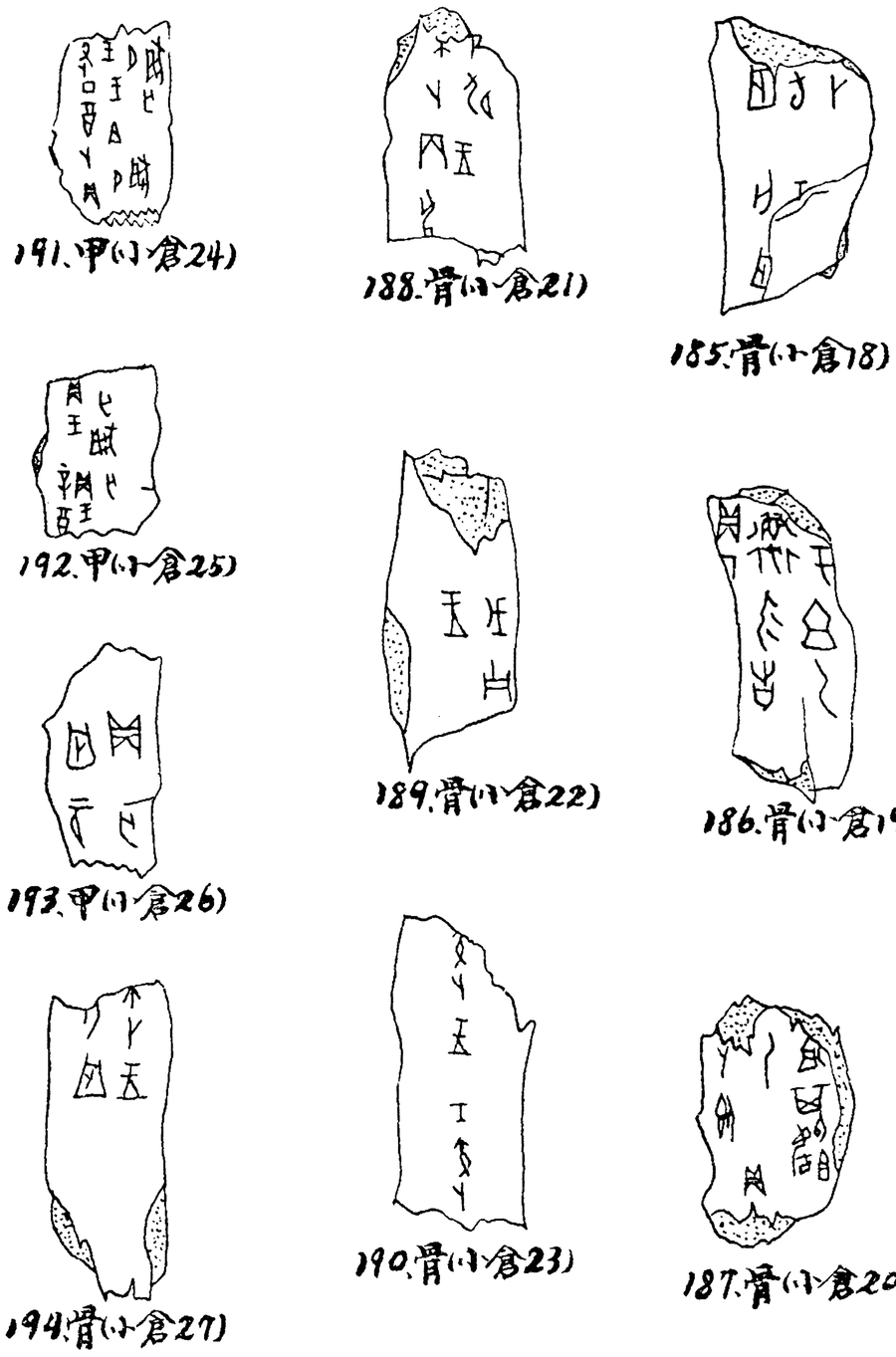

173.骨(小倉6反)

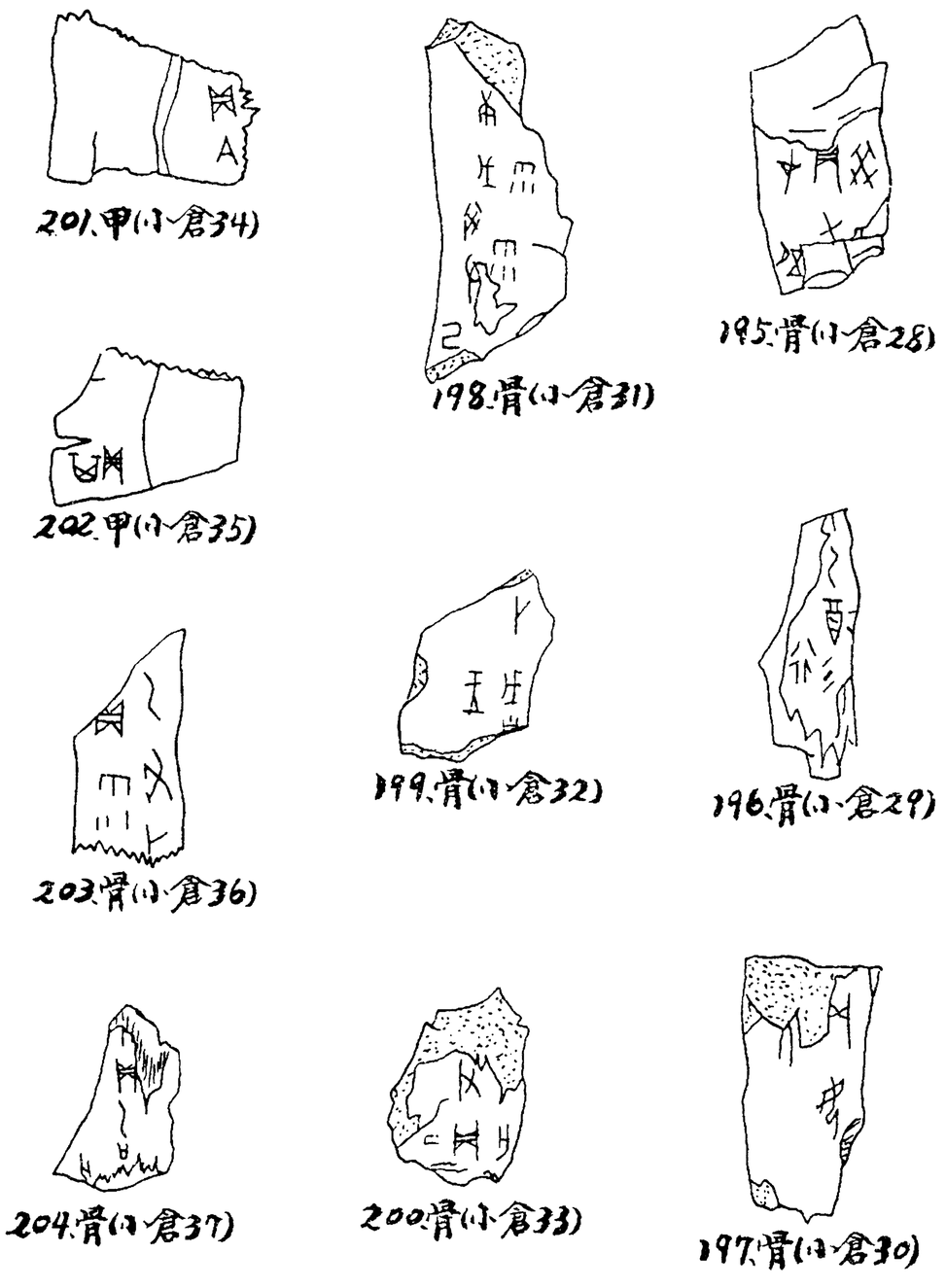

172.骨(小倉6)

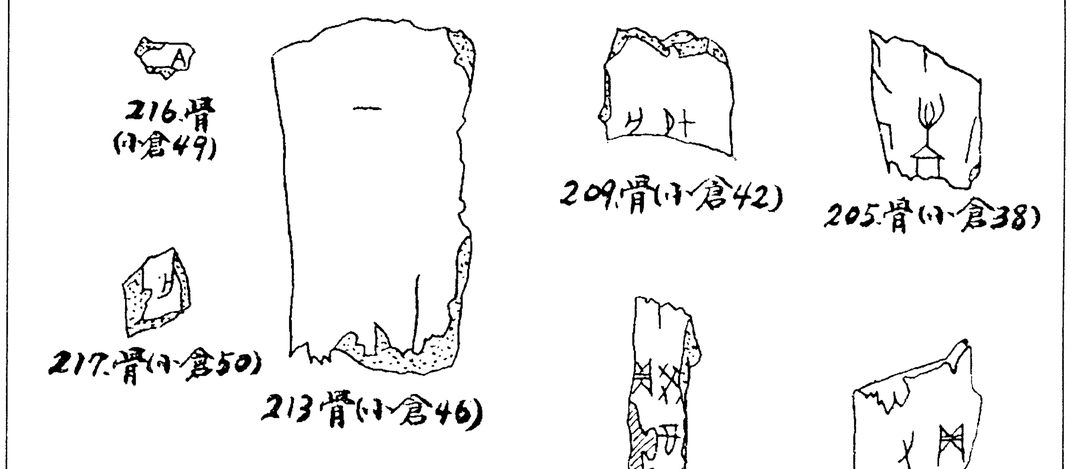

176.骨(小倉9)

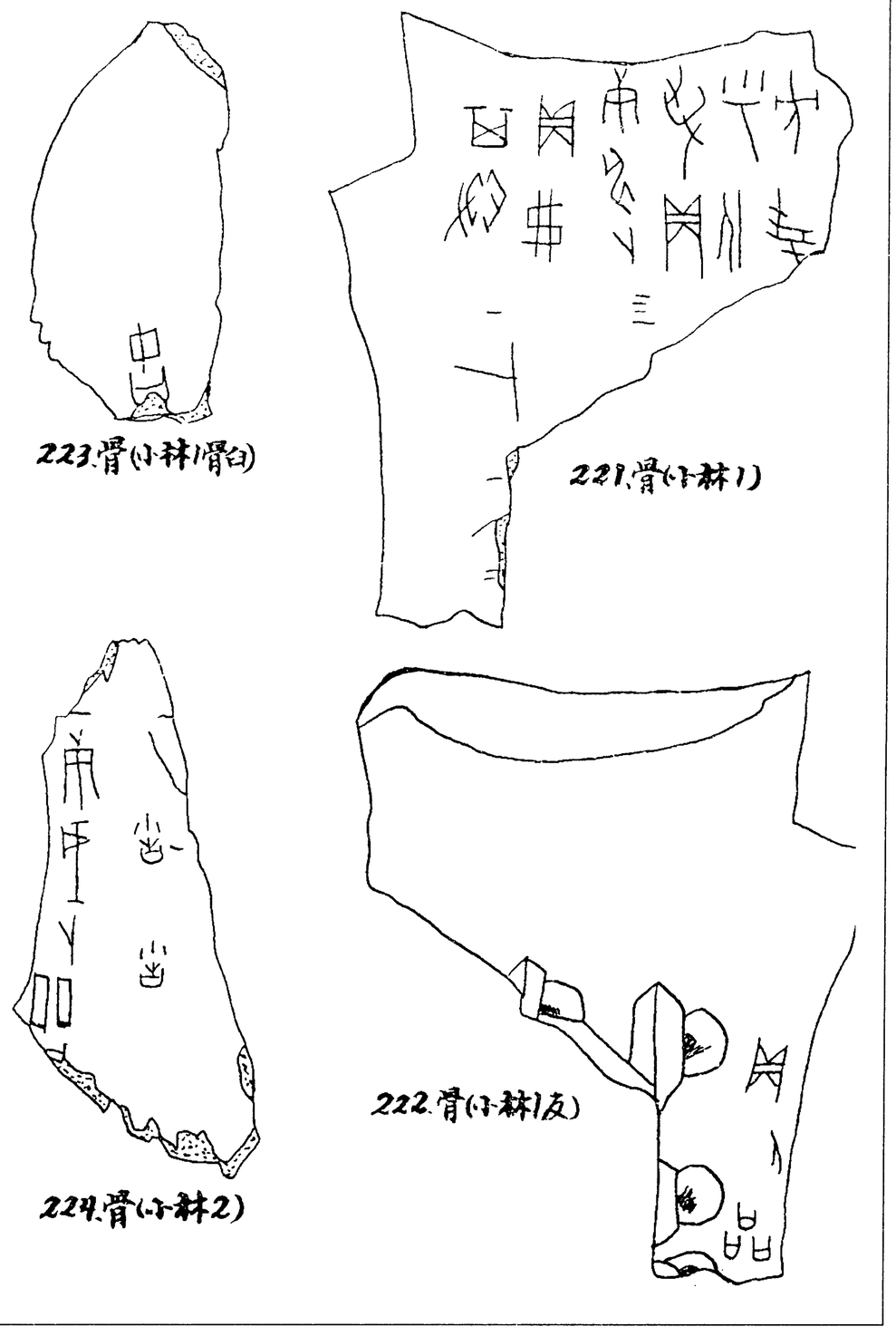

175.甲(小倉8)

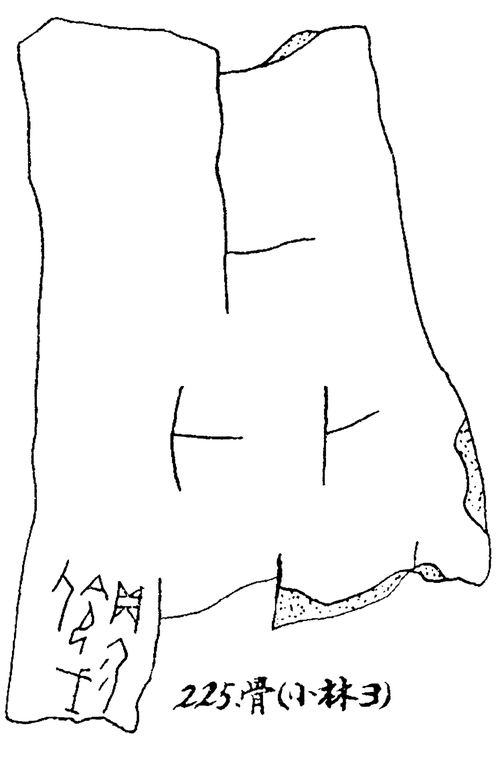

174.甲(小倉7)


191.甲(小倉24)
188.骨(小倉21)
185.骨(小倉18)
192.甲(小倉25)
189.骨(小倉22)
186.骨(小倉19)
193.甲(小倉26)
190.骨(小倉23)
187.骨(小倉20)
194.骨(小倉27)

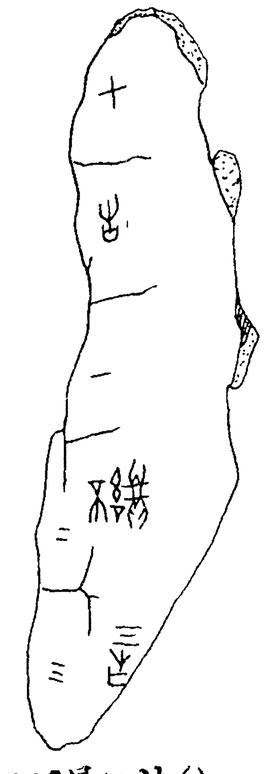

201.甲(小倉34)
198.骨(小倉31)
195.骨(小倉28)
202.甲(小倉35)
199.骨(小倉32)
196.骨(小倉29)
203.骨(小倉36)
204.骨(小倉37)
200.骨(小倉33)
197.骨(小倉30)


216.骨
(小倉49)
209.骨(小倉42)
205.骨(小倉38)
217.骨(小倉50)
213骨(小倉46)
210.骨(小倉43)
206骨(小倉39)
218.骨(小倉51)
214.骨(小倉47)
211.骨(小倉44)
207.骨(小倉40)
219.甲(小倉52)
220.骨(小倉53)
215.骨(小倉48)
212.骨(小倉45)
208.骨(小倉41)


223.骨(小林1骨白)
221.骨(小林1)
224.骨(小林2)
222.骨(小林1反)



225.骨(小林3)



229.骨(小林6)



228.甲(小林5)



227.骨(小林4反)



226.骨(小林4)



230.甲(小林7)

231.甲(小林8)

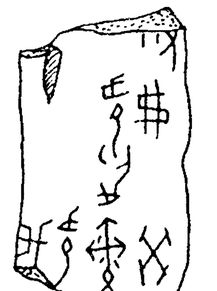


236.骨(小林13)

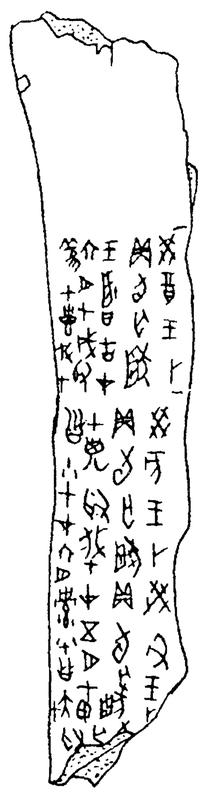
234.骨(小林11)



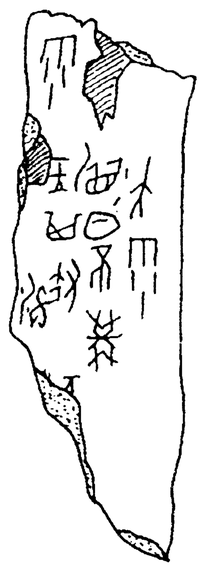
232.骨(小林9)



233.骨(小林10)



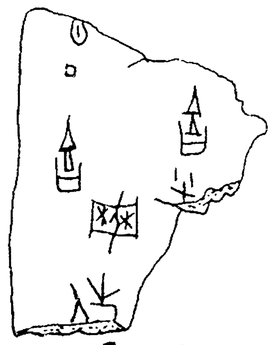
237.骨(小林14)



235.骨(小林12)



254.骨(小林31)



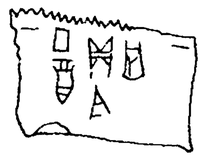
250.骨(小林27)



246.甲(小林23)



247.甲(小林24)



251.甲(小林28)



248.甲(小林25)



255.甲(小林32)



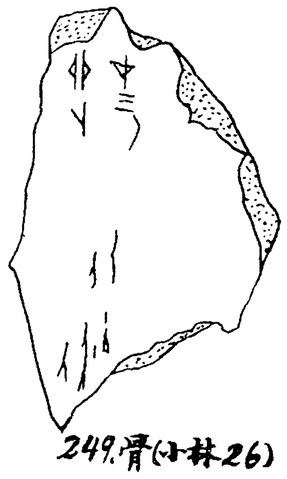
252.甲(小林29)



256.骨(小林33)

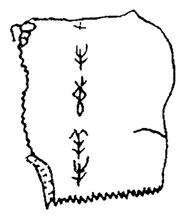


253.甲(小林30)



249.骨(小林26)

242.甲(小林19)

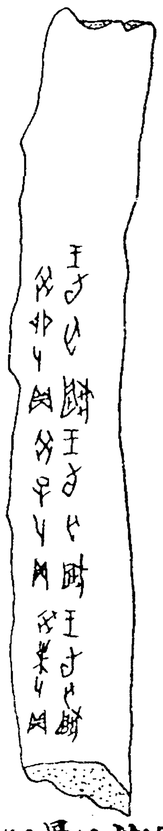


243.甲(小林20)



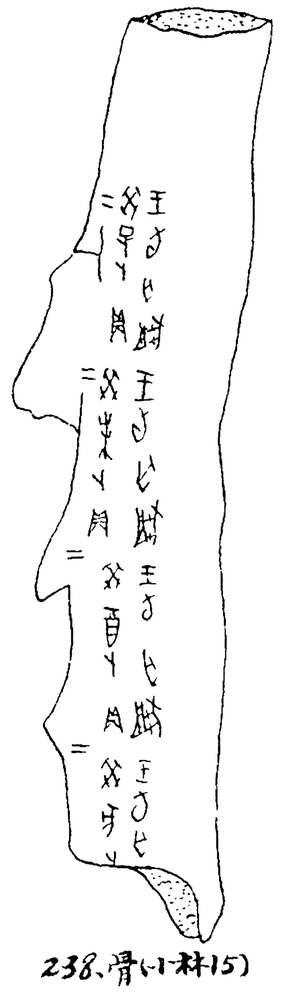
244.甲(小林21)

245.甲(小林22)



240.骨(小林17)

241.甲(小林18)



238.骨(小林15)



239.甲(小林16)

257.甲(國大1)(鐵72.1)

262.甲(國大5)

258.甲(國大1反)

263.甲(國大6)

259.甲(國大2)

264.骨(國大7)

261.甲(國大4)

260.甲(國大3)

265.甲(國大8)

269.甲(早高1)

273.骨(早高4)

266.甲(國大9)

271.骨(早高2反)

270.骨(早高2)

274.骨(早高5)

267.甲(國大10)

275.甲(早高6)

272.骨(早高3)

268.甲(國大11)

276.骨(明大1)

277.骨(明大2)

281.骨(岩井2)

279.骨(明大4)

278.骨(明大3)

282.甲(岩井3)

283.甲(岩井4)

280.甲(岩井1)

284.甲(岩井5)

288.骨(博2)

285.骨(東大教養1)

289.甲(博3)

291.骨(博5)

290.骨(博4)

287.骨(博1反)
填朱

286.骨(博1)

299.甲(博13)

296.甲(博10)
[別二・Ⅸ-7]

292.甲(博6)

300.甲(博14)
[別二・Ⅸ-2]

297.甲(博11)
[別二・Ⅸ-7]

293.甲(博7)

294.甲(博8)

301.甲(博15)

298.骨(博12)
[別二・Ⅸ-1]

295.甲(博9)
[別二・Ⅸ-3]

304.甲(博18)

303.甲(博17)

302.甲(博16)

307.骨(博21)
[別二・Ⅸ-5]

306.骨(博20)

305.骨(博19)
[別二・Ⅸ-4]

313.骨(八木4)

311.骨(八木2)

309.骨(松谷2)

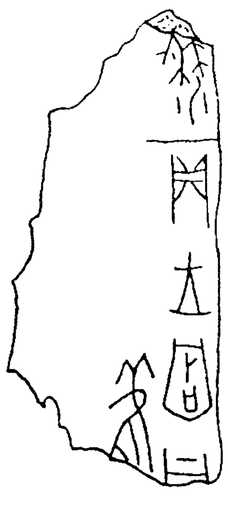
312.骨(八木3)

314.骨(八木5)

315.骨(八木6)

310.骨(八木1)

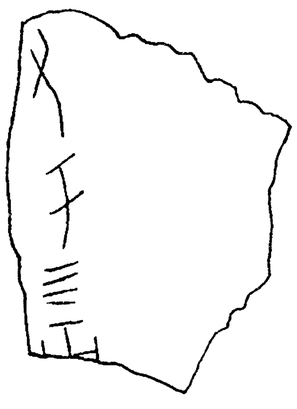
308.骨(松谷1)



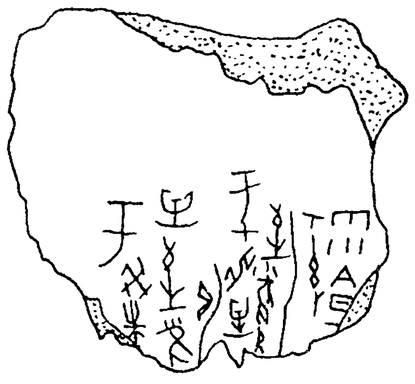
326.骨(白川1-8)



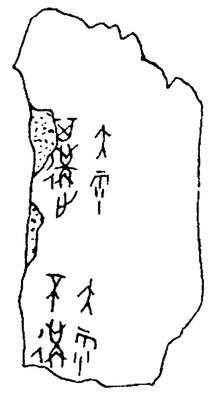
324.骨(白川1-1)



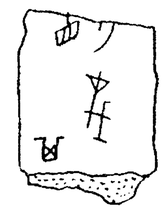
327.骨(白川8-2)



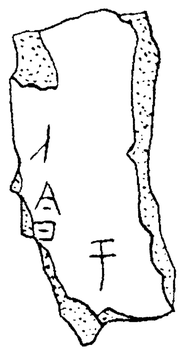
325.骨(白川1-2)



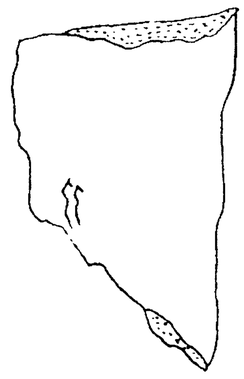
322.骨(八本13)



319.骨(八本10)



316.骨(八本7)



320.骨(八本11)



317.骨(八本8)



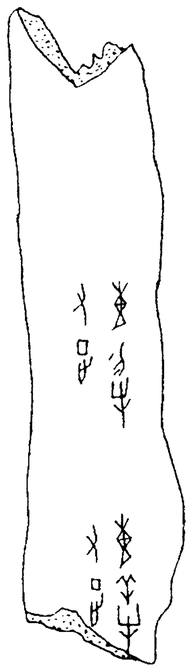
323.骨(八本14)



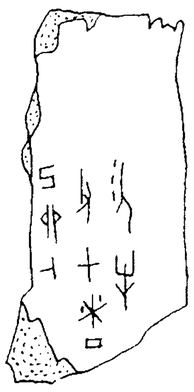
321.骨(八本12)



318.骨(八本9)



342.骨(慶考15)
【保2·8】



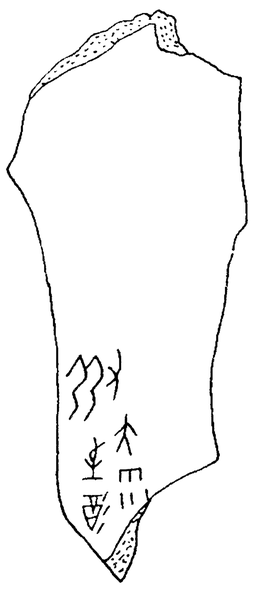
340.骨(慶考13)
【保1·7】



337.甲(慶考10)
【保1·2】



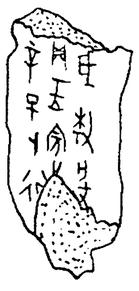
338.甲(慶考11)
【保1·6】



341.骨(慶考14)
【保2·7】



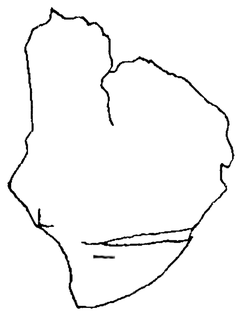
343.骨(慶考16)
【保2·6】



339.甲(慶考12)
【保1·10】



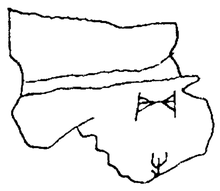
334.骨(慶考7)
【保2·5】



332.甲(慶考5)



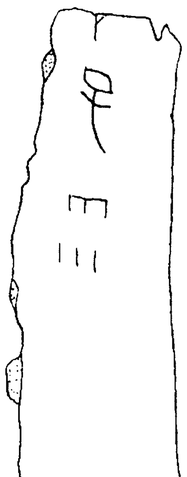
328.甲(慶考1)
【保2·2】



335.甲(慶考8)



329.甲(慶考2)
【保1·9】



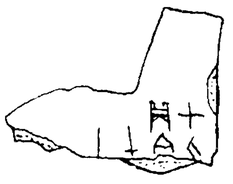
333.骨(慶考6)
【保1·8】



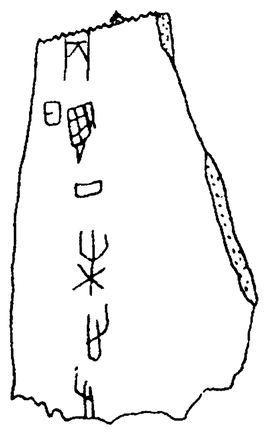
330.甲(慶考3)
【保1·3】



336.甲(慶考9)
【保1·3】



331.甲(慶考4)
【保2·1】



350.骨(慶圖1)



348.甲(慶考21)



349.甲(慶考22)



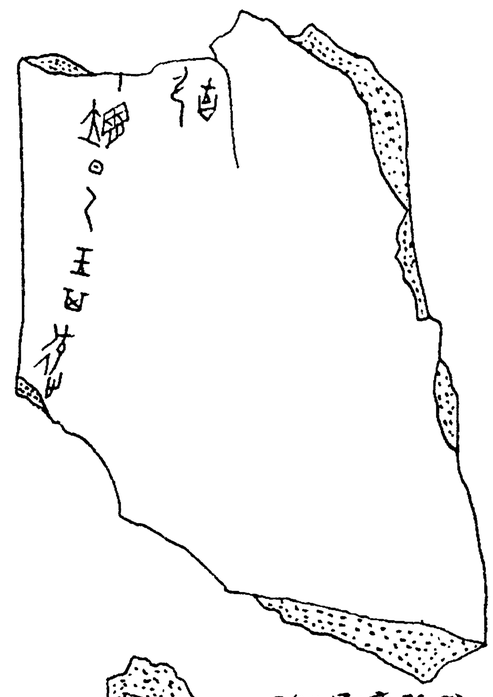
351.骨(私丸1)



346.骨(慶考19)
(保1・4)



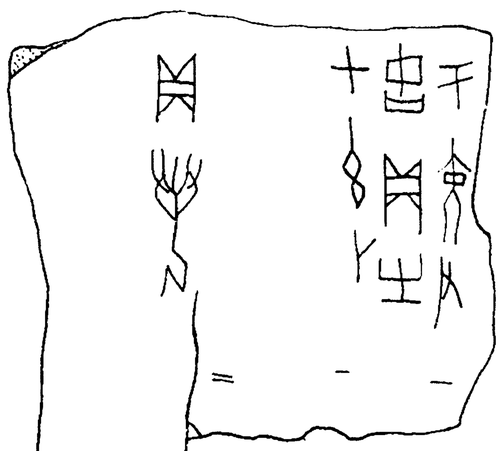
347.甲(慶考20)
[保1・5]



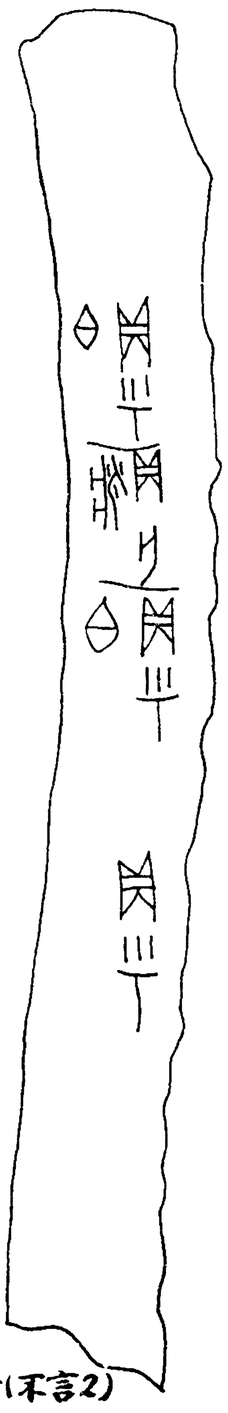
344骨(慶考17)
[保1・1]



345.骨(慶考18)
[保2・4]



354.骨(不言3)



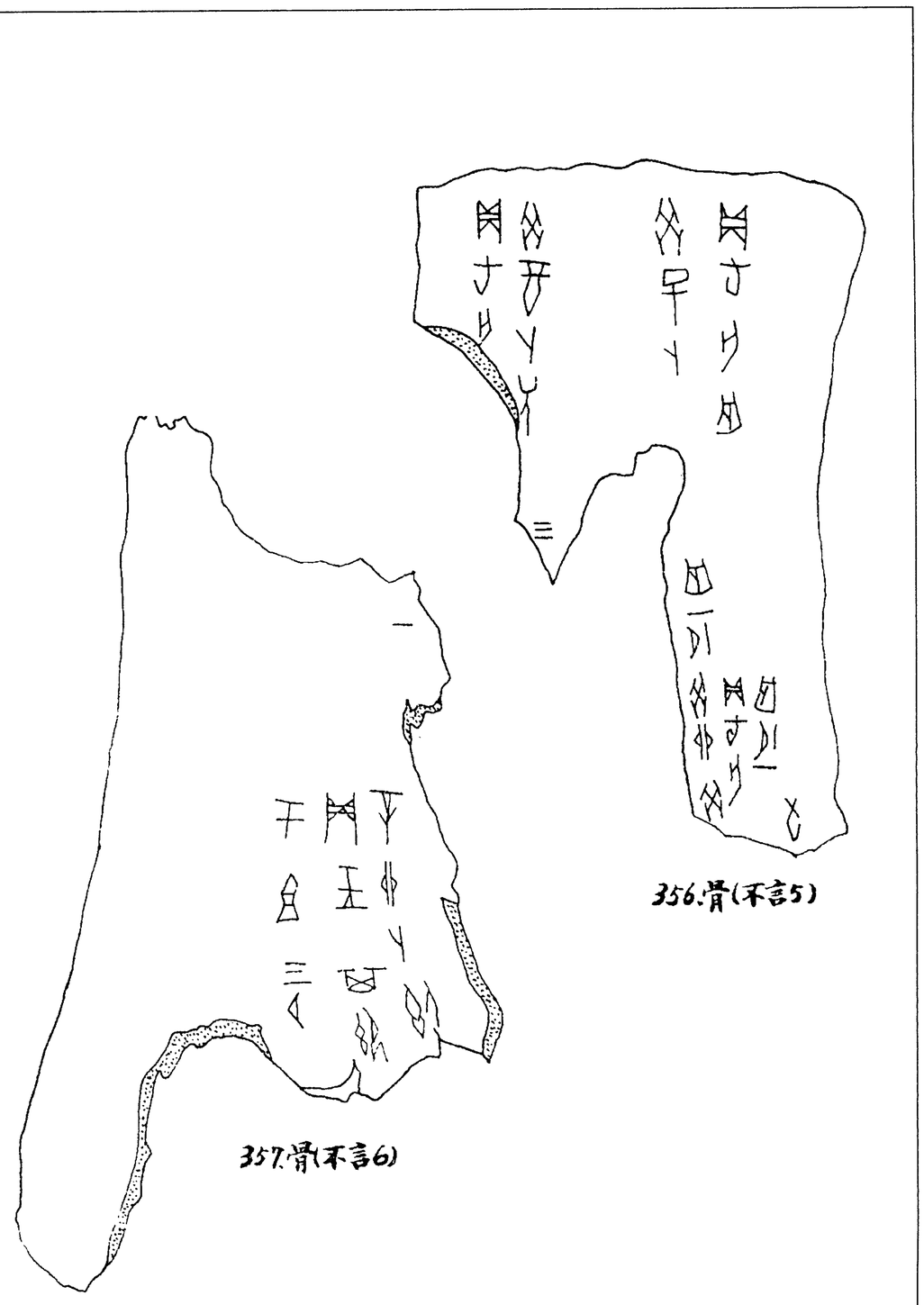
353.骨(不言2)



355.骨(不言4)



352.骨(不言1)



356.骨(不言5)

357.骨(不言6)

358.骨(不言7)

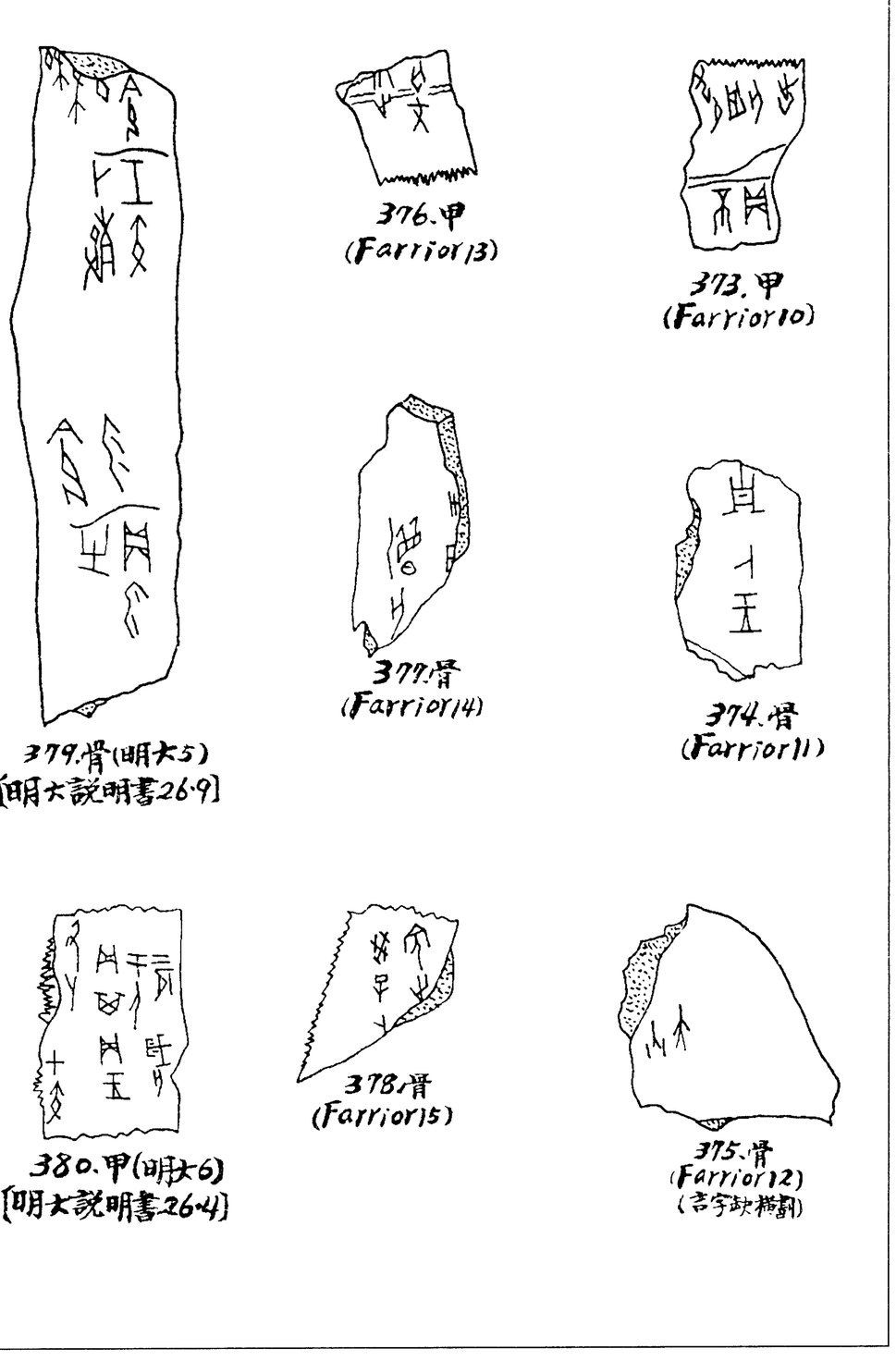
359.骨
(不言8)

360.骨
(不言9)

361.骨
(不言10)

362.骨
(不言11)

363.骨(不言12)



364.骨
(Farrior1)

365.甲
(Farrior2)

366.骨
(Farrior3)

367.骨
(Farrior4)

368.甲
(Farrior5)

369.甲
(Farrior6)

370.骨
(Farrior7)

371.骨
(Farrior8)

372.甲
(Farrior9)

373.甲
(Farrior10)

374.骨
(Farrior11)

375.骨
(Farrior12)
(言字缺橫劃)

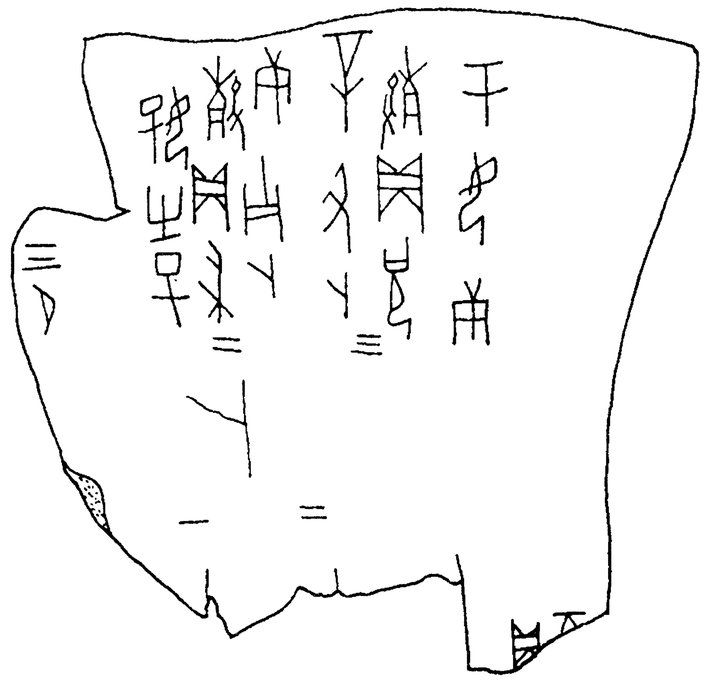
376.甲
(Farrior13)

377.骨
(Farrior14)

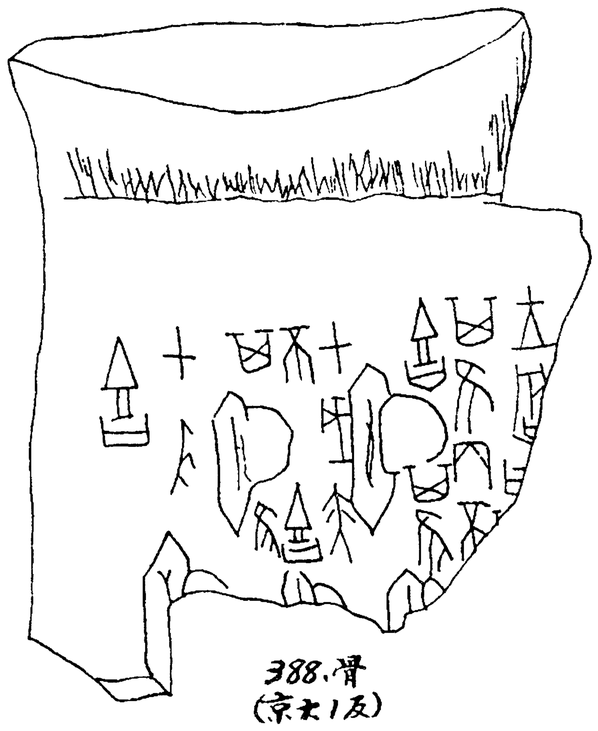
378.骨
(Farrior15)

379.骨(明大5)
[明大說明書26·9]

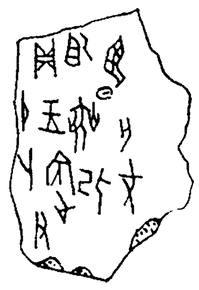
380.甲(明大6)
[明大說明書26·4]



387.骨
(京大1)
[圖錄42-2
別二・XI-1
安・II-1]



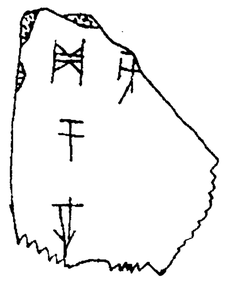
388.骨
(京大1反)



385.甲(明大11)
[明大說明書26・6]



383.甲(明大9)
[明大說明書26・5]



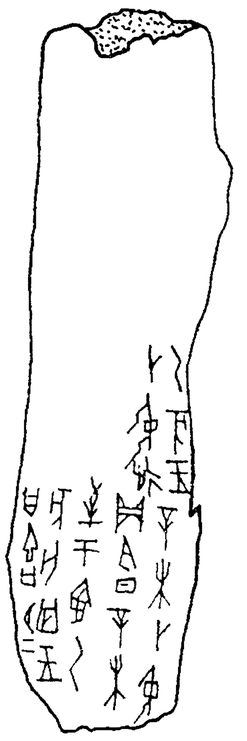
381.甲(明大7)
[明大說明書26・7]



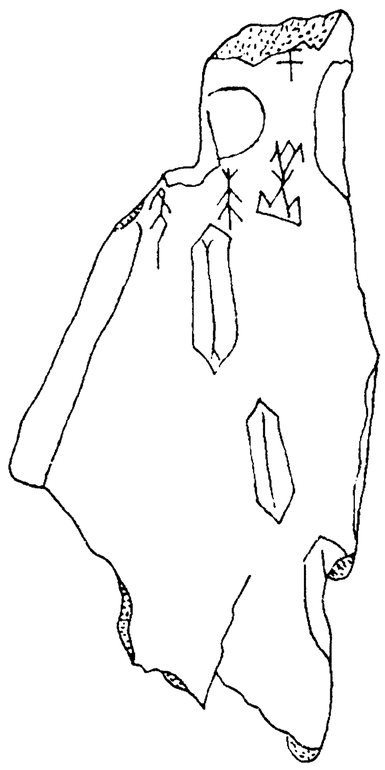
386.骨(明大12)



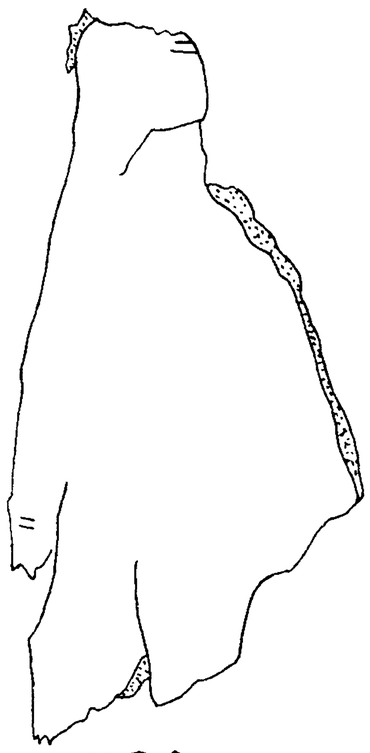
384.骨(明大10)
[明大說明書26・2]



382.骨(明大8)
[明大說明書26・1]



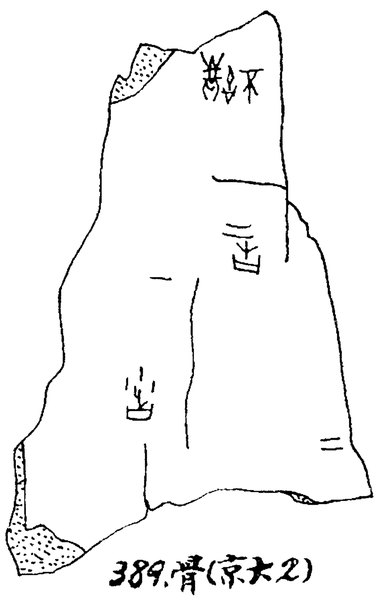
394.骨(京大5反)
[圖錄42-5]



393.骨(京大5)



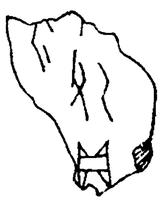
390.骨(京大2反)
[圖錄42-1]



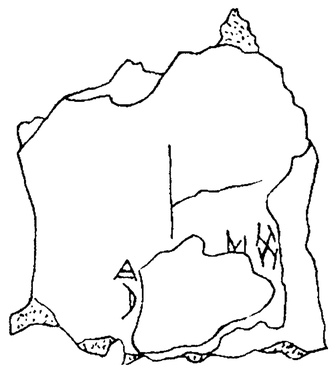
389.骨(京大2)



396.甲(京大7)



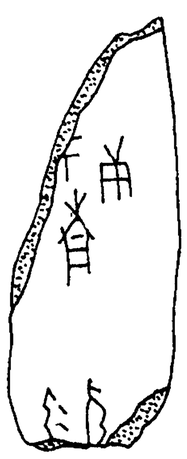
395.甲(京大6)



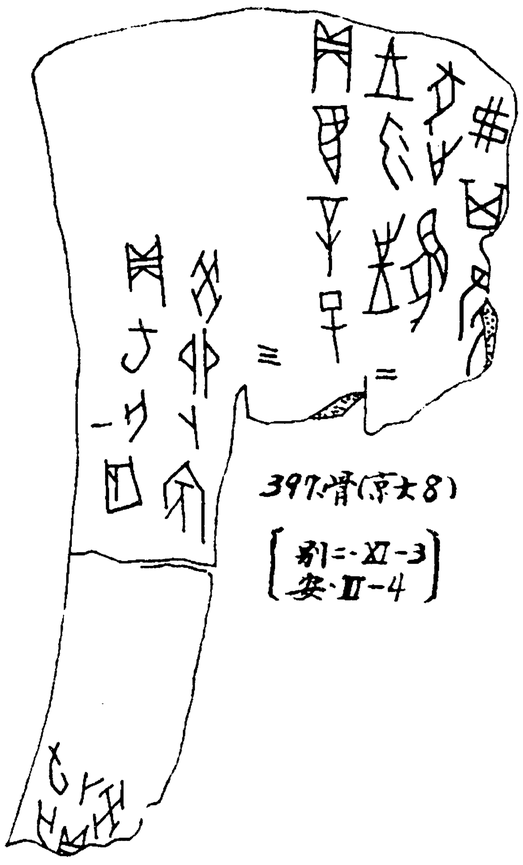
392.骨(京大4)



391.甲(京大3)



398.骨(京大9)
[別二・XI-7]
[安II-3]



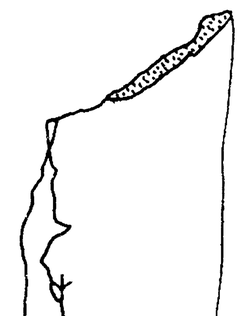
397.骨(京大8)
[別二・XI-3]
[安・II-4]



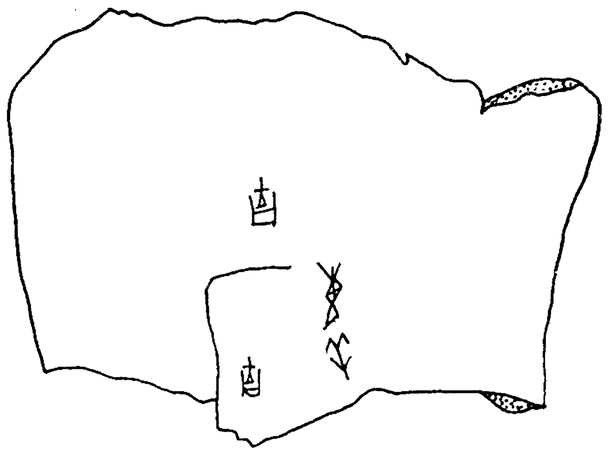
400.骨(京大11)
[別二・XI-4]
[安II-11]



399.骨(京大10)



412.骨(京大23)



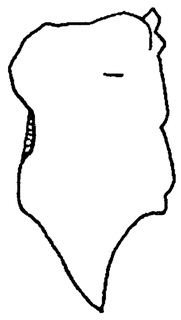
410.骨(京大21)



413.骨(京大24)



411.甲(京大22)(偽刻部分)
[別二・XI-2]
[安・II-14]



407.甲
(京大18)



404.甲
(京大15)
[圖録42-4]



401.甲
(京大12)
[圖録42-3]



408.甲
(京大19)



405.甲
(京大16)



402.甲
(京大13)
[安II-7]



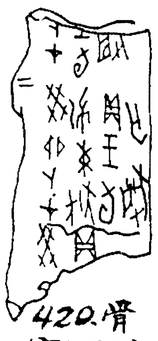
409.甲
(京大20)



406.甲
(京大17)



403.甲
(京大14)
[安II-13]



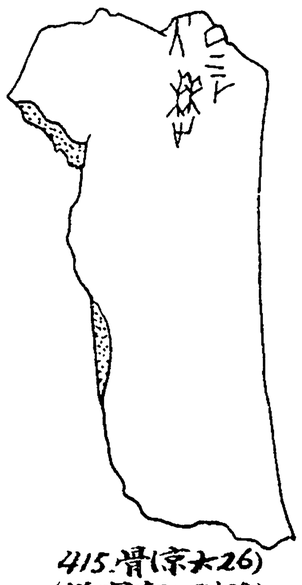
420.骨
(京大31)
[別二・XI-5]
[安・II-12]



417.甲
(京大28)
[安・II-9]



414.甲
(京大25)



415.骨(京大26)
(偽刻部分骨除)



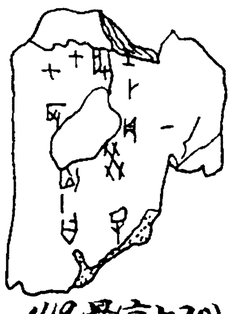
421.甲
(京大32)
[安・II-8]



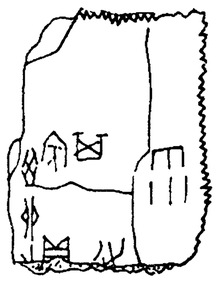
418.甲(京大29)
[安・II-5]



422.甲(京大33)
[安・II-10]

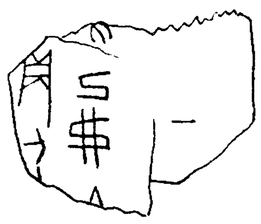


419.骨(京大30)
[安・II-15]



416.甲(京大27)
[安・II-6]


445.甲
(京大56)


441.甲
(京大52)


438.甲
(京大49)


439.甲
(京大50)


442.甲
(京大53)


446.骨
(西川1)


443.甲
(京大54)

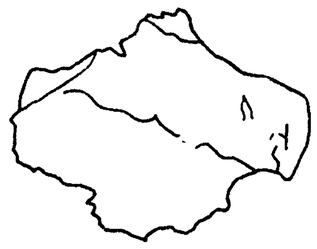

444.甲
(京大55)


440.骨
(京大51)
別二·XI-6
安-II-2


434.甲
(京大45)


430.甲
(京大41)


426.甲
(京大37)


423.甲(京大34)


435.甲
(京大46)

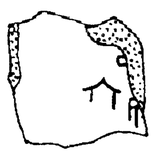

431.甲
(京大42)


427.甲
(京大38)


424.甲
(京大35)


436.甲
(京大47)


432.甲
(京大43)

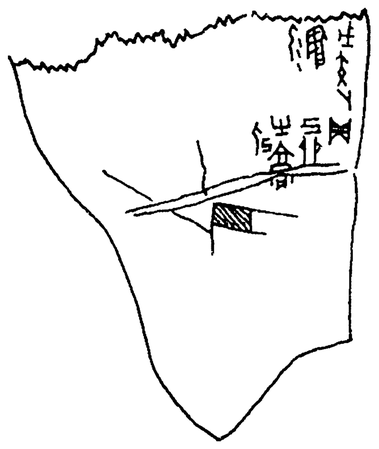

428.甲
(京大39)
(表面泥土固着)

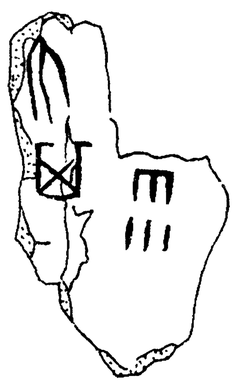

425.甲
(京大36)

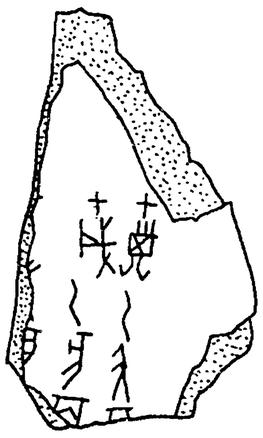

437.甲
(京大48)

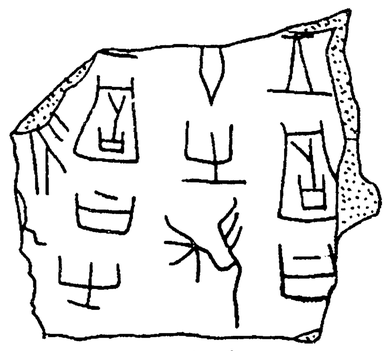

433.甲
(京大44)


429.甲
(京大40)

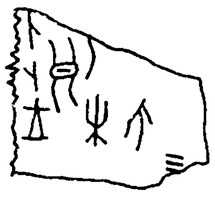

454.甲(東教大3)

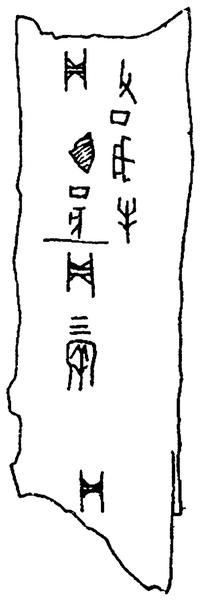

452.骨(東教大1)

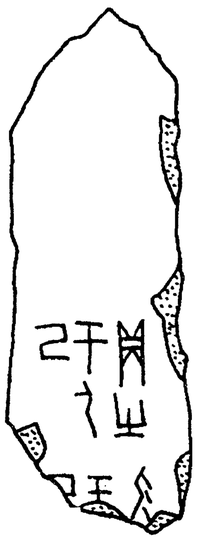

450.骨(武藏4)

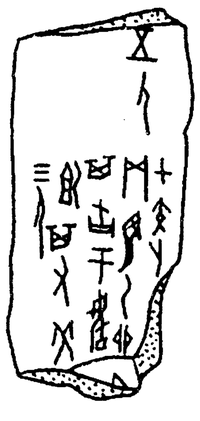

447.甲(武藏1)
填朱

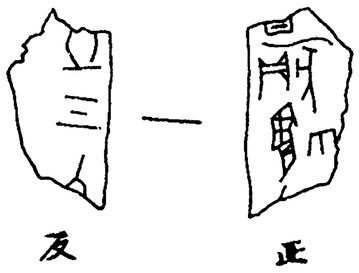

448.骨(武藏2)

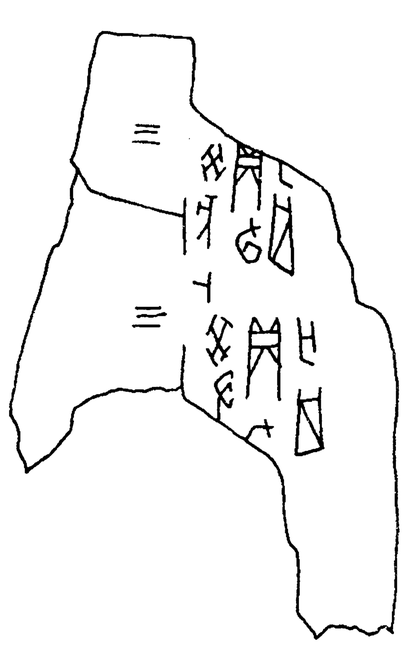

455.甲(東教大4)


453.骨(東教大2)


451.骨(武藏5)


449.骨(武藏3)

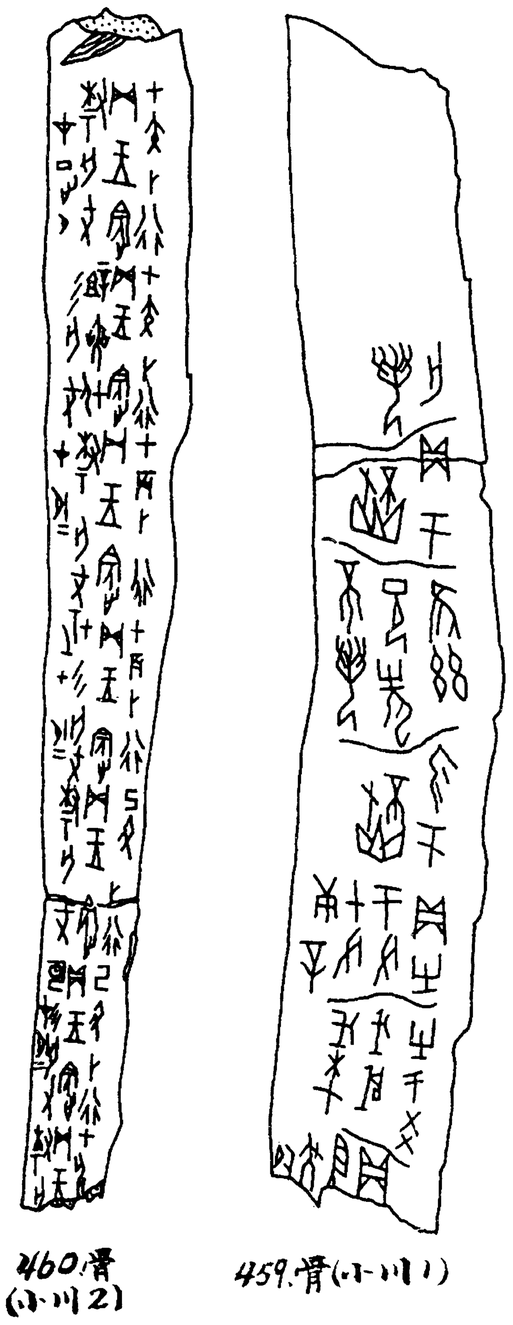

456.甲(東教大5)
反　正



457.骨(東教大6)



458.甲(東教大7)



459.骨(小川1)

460.骨(小川2)

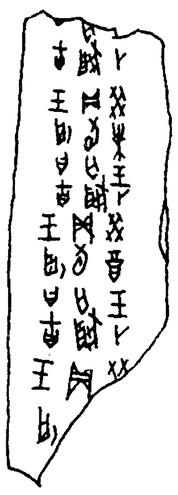


461.骨(小川3)

462.骨(小川5)



462.骨(小川4)

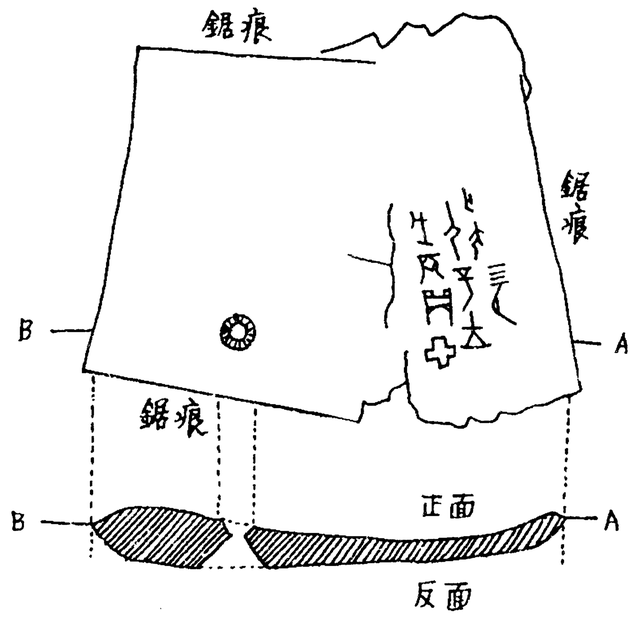


464.骨(小川6)

465.骨(小川7)



468.甲(村野3)



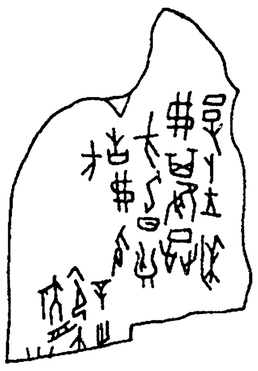
466.骨(村野1)



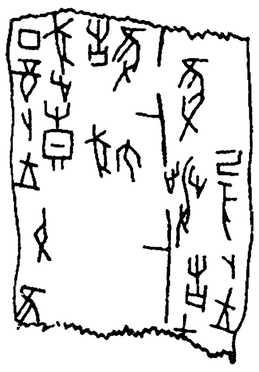
471.骨(エロ2)



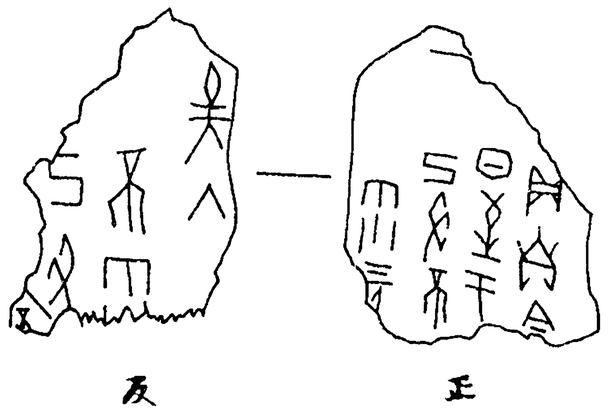
469.骨(楢村1)



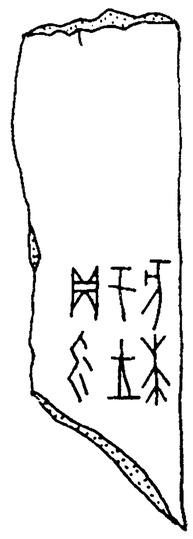
472.甲(エロ3)



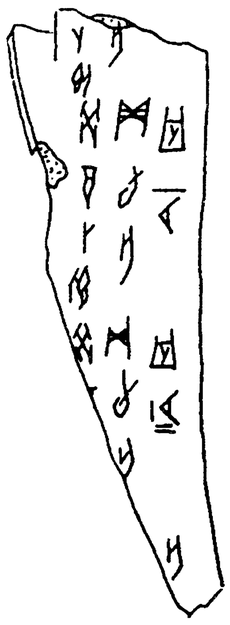
470.甲(エロ1)



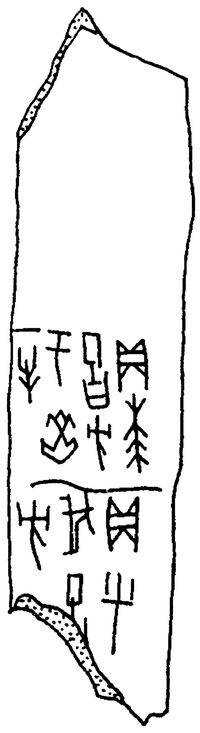
467.甲(村野2)



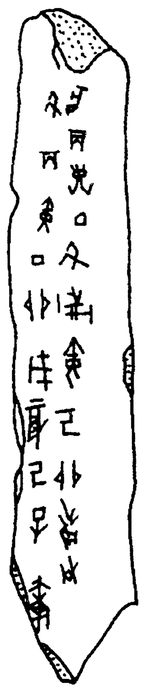
483.骨(東文研1)



481.骨(三浦2)



480.骨(三浦1)



484.骨(東文研2)



482.骨(菅原1)



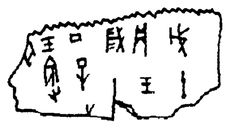
478.甲(河合6)



475.甲(河合3)



473.骨(河合1)



476.甲(河合4)



479.甲(河合7)

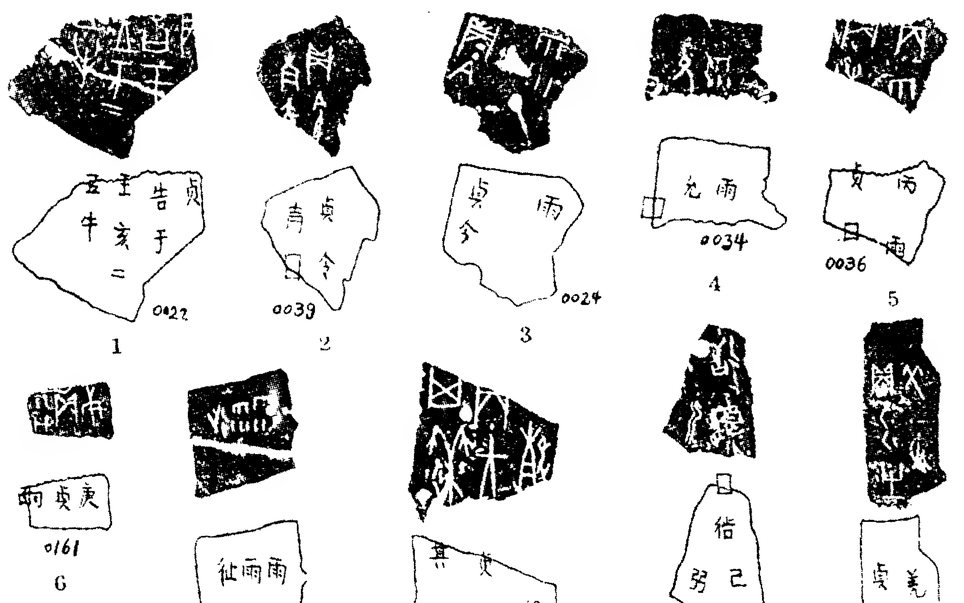


477.甲(河合5)



474.甲(河合2)

安阳市博物馆馆藏卜辞　　图版叁



1～19龟甲第一期

安阳博物馆馆藏卜辞选

安阳市博物馆

最近，我馆在整理文物仓库时，对库藏一百九十片甲骨卜辞进行了拓片和释文。今选择其中的一百片，发表于后，供研究之用。

这批卜辞，是解放以来，陆续收集的。尽管它们的出土时间和具体地点不可详考，但都出于殷墟小屯村一带，当不会有疑。

这次选录的一百片卜辞，包括有龟甲六十九片，兽骨三十一片。其中：属于甲骨断代第一期，相当于盘庚、小辛、小乙、武丁时期的，有龟甲二十四片，兽骨九片，共三十三片。属于甲骨断代第二期，相当于祖庚、祖甲时期的，有龟甲十二片，兽骨十一片，共二十三片。属于甲骨断代第三期，相当于廪辛、康丁时期的，有龟甲二片，兽骨三片，共五片。属于甲骨断代第四期，相当于武乙、文丁时期的，有兽骨二片。属于甲骨断代第五期，相当于帝乙、帝辛时期的，有龟甲三十一片，兽骨六片，共三十七片。

这一百片卜辞，刻有甲骨文字五百四十一个。记载的内容涉及到：

（1）祭祀。　如，“甲戌卜贞王宾畐亡□。”（48—0006，兽骨，第二期）又如，“丙申卜文武丁其牢。”（65—0125，龟甲，第五期）又如，“〔侑〕于上甲示壬示癸□□□□大甲祖乙□□十一月。”（34—0009，龟甲，第二期）　又如，“□子卜贞〔王〕宾大乙〔大丁〕外丙□尤。”（69—0107，龟甲，第五期）

（2）天时。　如，“允雨”。（4—0034，龟甲，第一期）　又如，“丁卯卜贞其雨。”（25—0020，兽骨，第一期）

（3）年成。　如，“□□□殷贞王其黍。”（8—0032，龟甲，第一期）又如，“贞我其受年。”（28—0190，兽骨，第一期）

（4）征伐。　如，“辛丑□□□徵□往□亡□。”（76—0172，龟甲，第五期）又如，“乙卯□□王宾□彳伐□羌。”（77—0183，龟甲，第五期）

（5）王事。　如，“辛亥□□王田□往来亡□。”（78—0002，龟甲，第五期）又如，“□未王卜〔贞〕田秦往〔来亡〕灾。”（96—0101，兽骨，，第五期）

（6）旬夕。　如，“癸酉贞旬亡囚。”（62—0005，兽骨，第四期）又如，“甲戌卜贞王今夕亡尤。”（79—0104，龟甲，第五期）

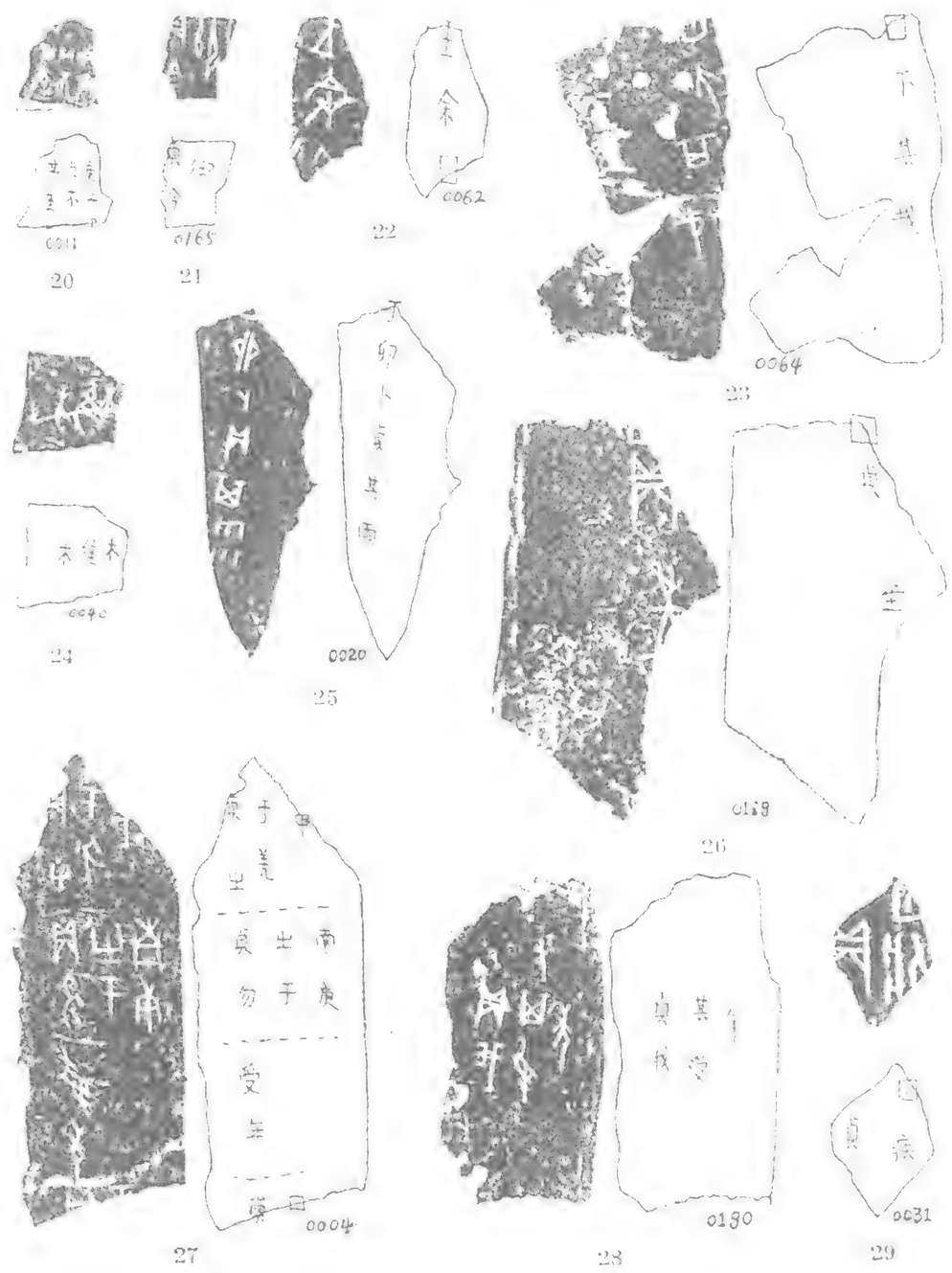
此外，一些卜辞，因残缺过甚，暂不得解其含意，作为资料，今亦拓出，一起发表。

尽管这些卜辞多系断残碎片，但从中仍可见到殷商奴隶社会的一些真实记录。如果这些残片，能够和其他卜辞缀合的话，那末，可以发挥更大的作用。所以，它们作为研究殷商社会历史和古文字的资料，是应该珍视的，有价值的。

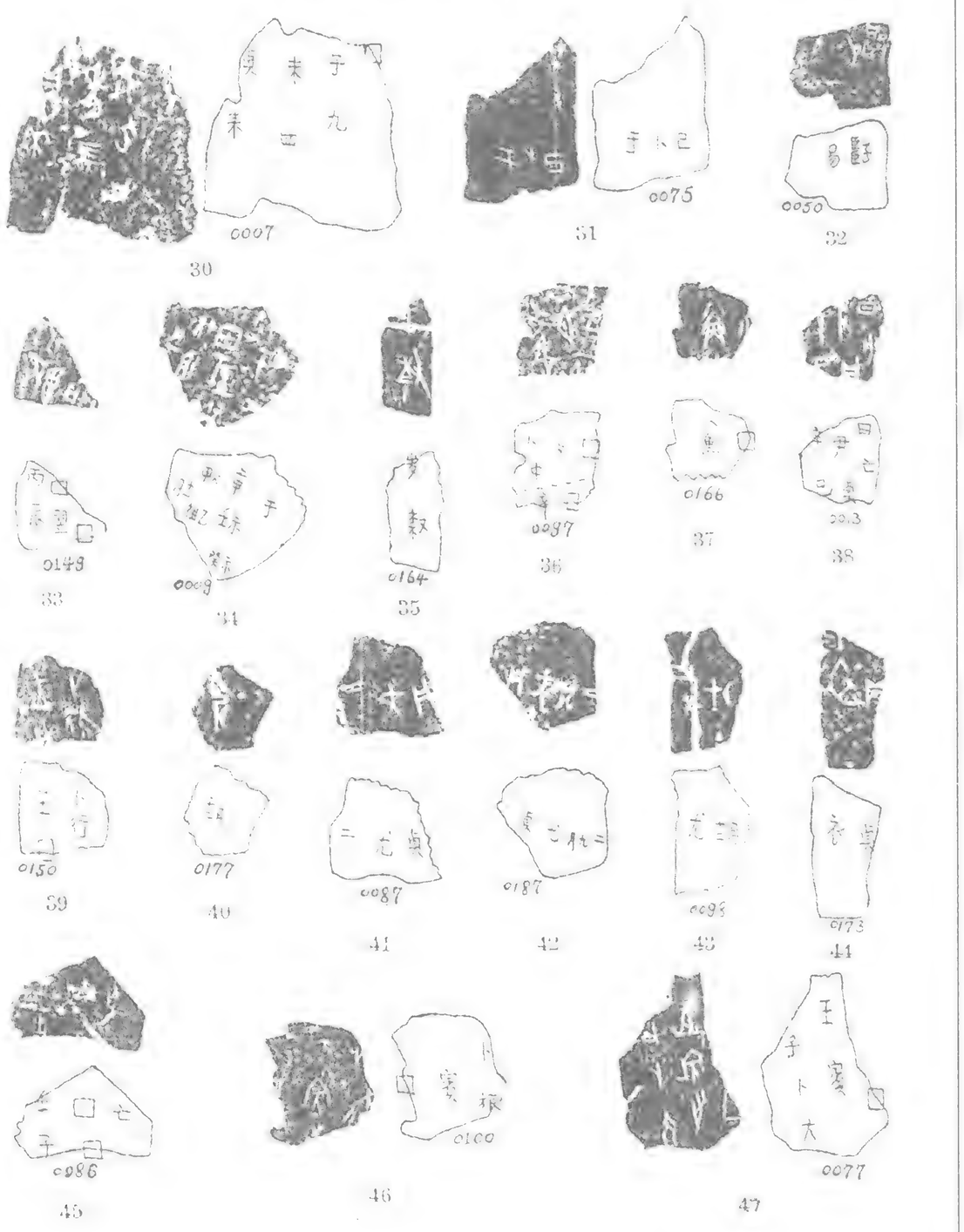
在这批甲骨卜辞的整理过程中，尤其在卜辞的鉴定、断代和释文中，我们得到了胡厚宣先生的具体指导，中国社会科学院考古研究所安阳工作队有关同志的热忱帮助。谨在此致以谢忱。

版图叁：1—19龟甲第一期
版图肆：20～24龟甲第一期；25—29兽骨第一期。
版图伍：30～33兽骨第一期；34～45龟甲第二期；46～47兽骨第二期。
版图陆：48～56兽骨第二期；57—58龟甲第三期；59兽骨第三期。
版图柒：60—61兽骨第三期；62—63兽骨第四期；64—78龟甲第五期。
版图捌：79—94龟甲第五期；95—100 兽骨第五期。

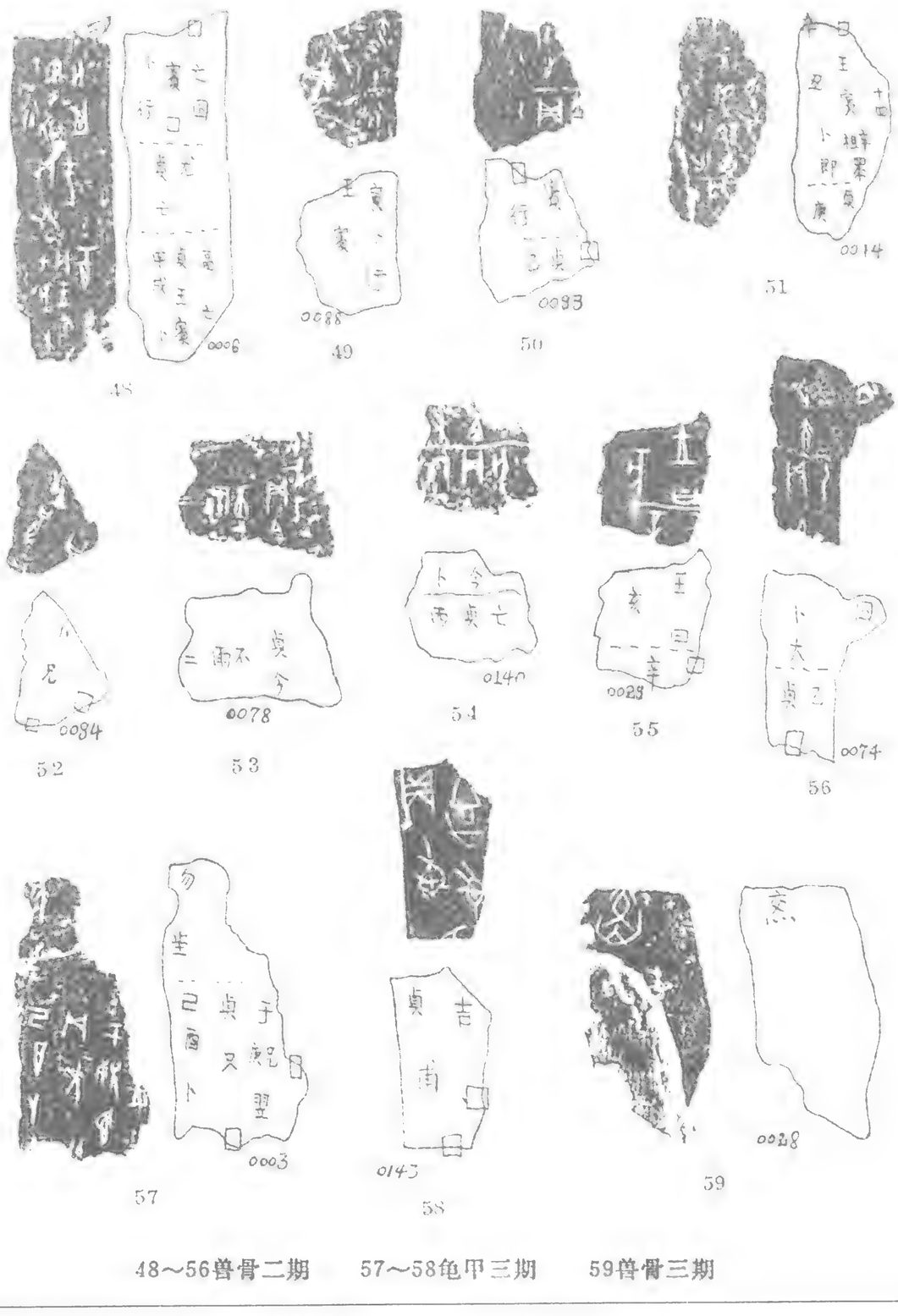
（原載《古文字研究》第三輯，中華書局，一九八〇年十一月）



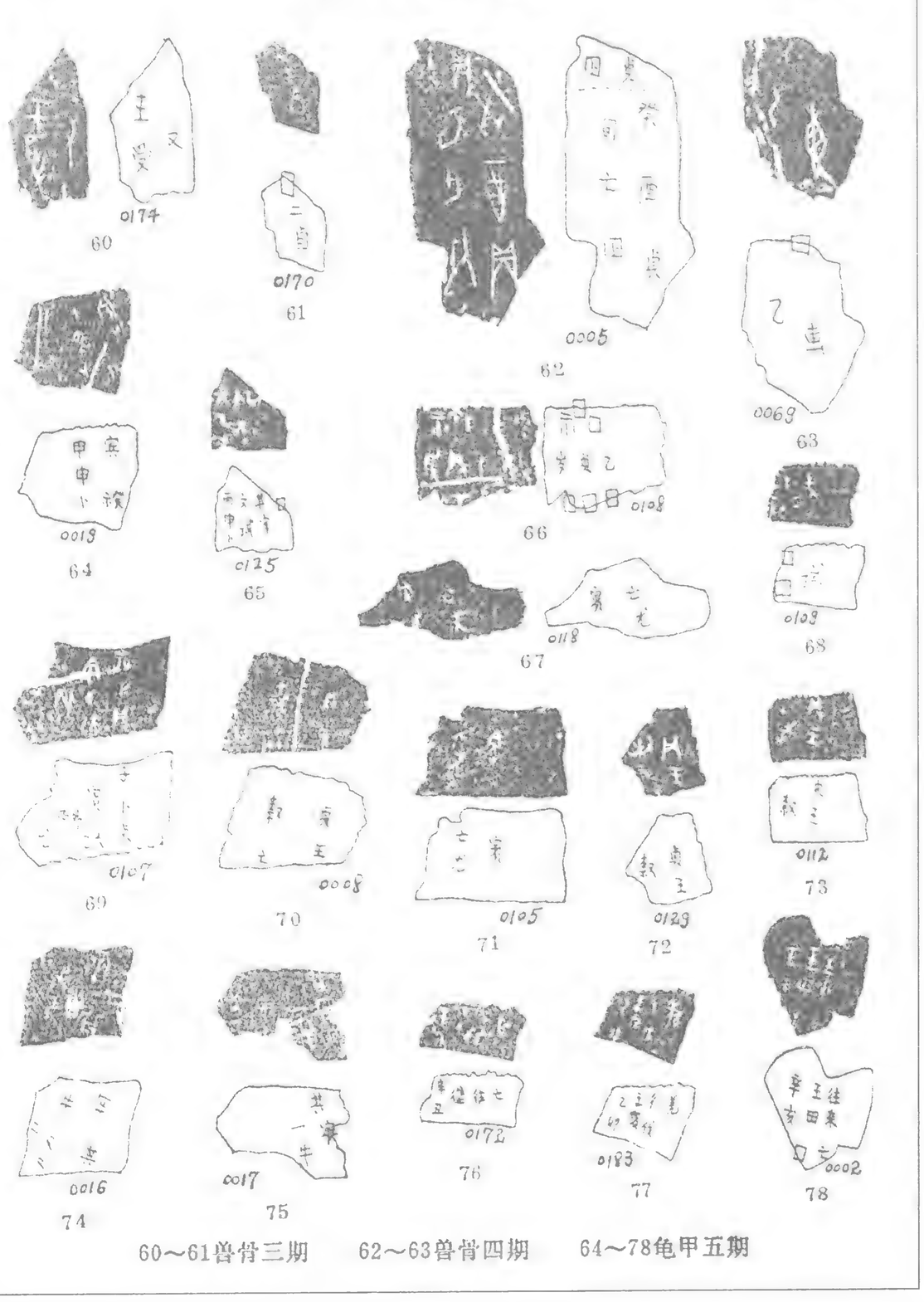
20～24龟甲一期　25～29兽骨一期



30～33兽骨一期　34～45龟甲二期　46～47兽骨二期



48～56兽骨二期　57～58龟甲三期　59兽骨三期



60～61兽骨三期　62～63兽骨四期　64～78龟甲五期

《戩壽堂所藏殷墟文字》補正

沈之瑜　郭若愚

前　言

上海博物館收藏戩壽堂舊藏甲骨七百八十片，其中見於《戩壽堂所藏殷墟文字》著錄者五百五十七片半(注一)，闕九十五片半，經查核其中有五十四片藏於中國歷史博物館，二十九片半藏於中國科學院中國歷史研究所，尚有十二片，因物主散失，至今下落不明，其原書頁片號爲 1.10、5.12、8.14、17.1、30.1、30.8、30.14、33.8、37.2、45.1、45.2、47.5。

由于工作需要，我們曾將館藏戩壽堂舊藏甲骨與《戩壽堂所藏殷墟文字》著錄作了校對，發現其中失背拓者四十片，失正拓者四片，正反失聯者六片，失臼拓者四片，骨臼失聯者六片。原骨藏於中國社會科學院歷史研究所者，我們請胡厚宣同志查對無誤，藏於中國歷史博物館者，我們請史樹青同志查對，據告應予補正者三片，今增圖版七六、七七、七八共三幅，盛情可感，特此致謝。諸凡上述種種誤失，決非館外學者所能得知，貽誤至今已六十餘載，今戩壽堂大部分原物藏於我館，校訂補正，實責無旁貸，爰將誤失各片連同我館在整理中綴合之十七片一并重新釋文發表于後。

凡　例

一、本文頁片號悉據《戩壽堂所藏殷墟文字考釋》所標次第。

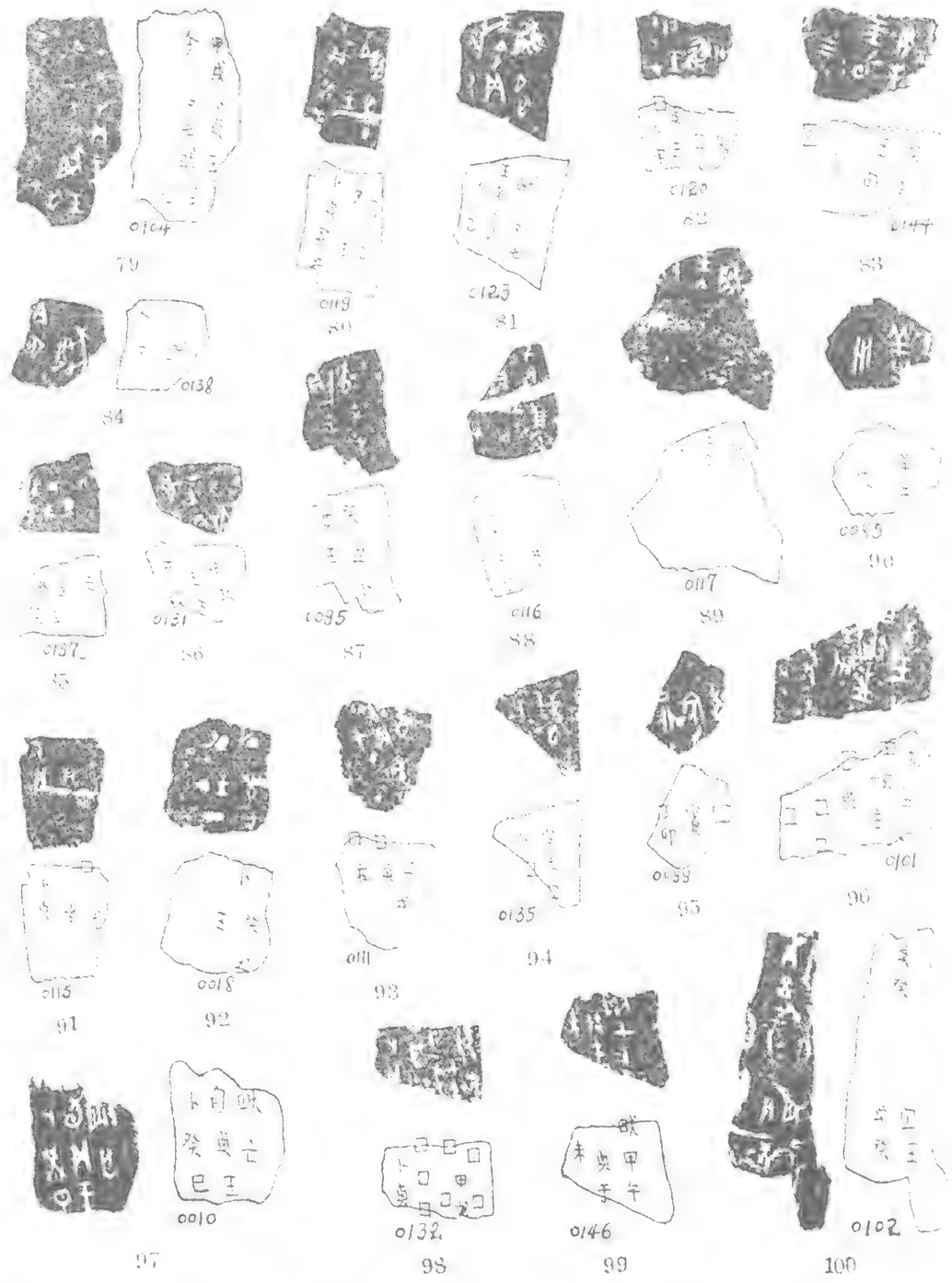
二、凡《考釋》中已說明爲一骨之析者(如二九頁三片與二九頁四片)不再列舉。

三、凡背甲有字而剝蝕不清者概不列舉。

四、凡未注明出處之綴合各片均採自本館所藏戩壽堂舊物。

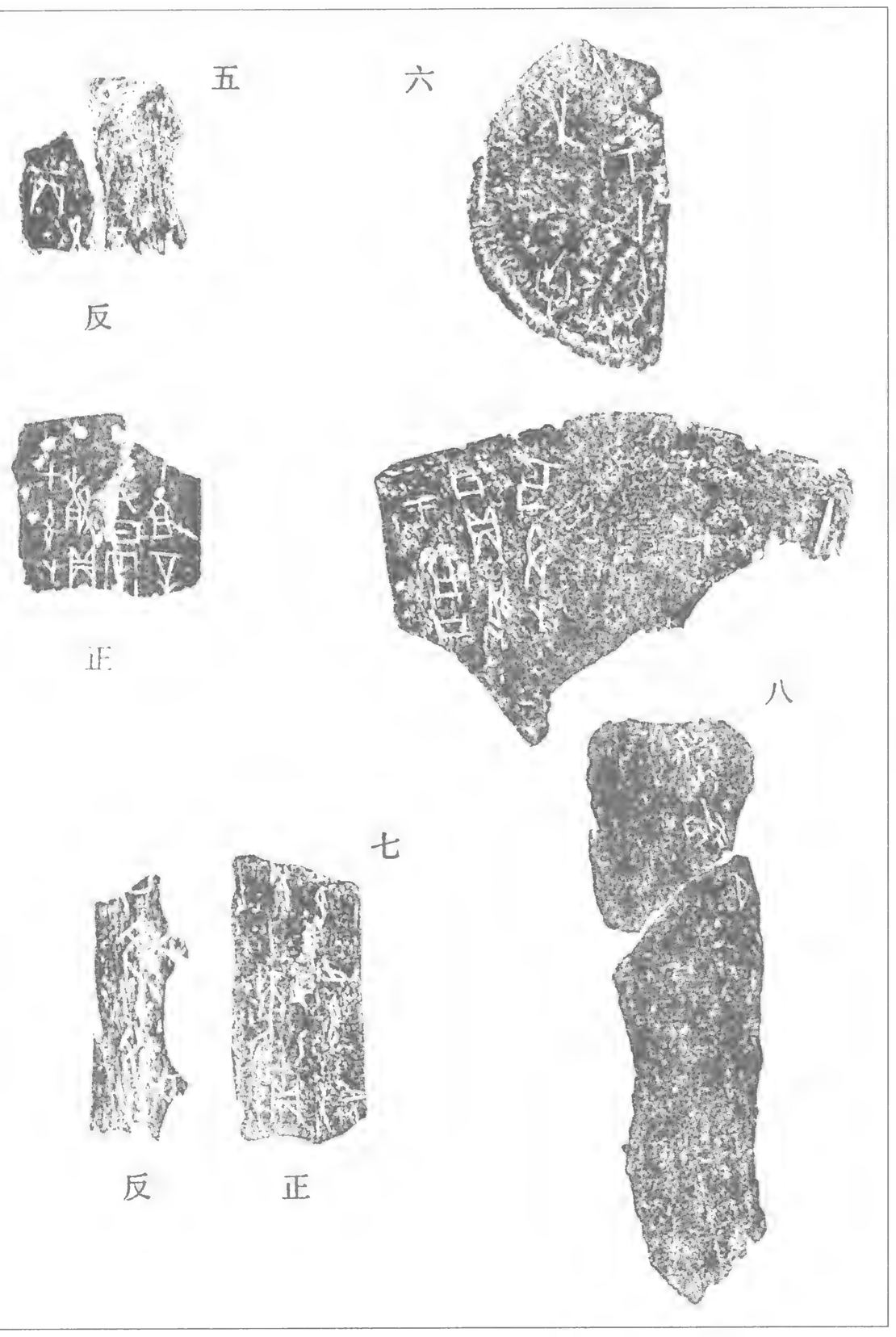
五、凡已由各家綴合無誤者不再列舉，綴合有誤可據館藏原物匡正者附于文末。

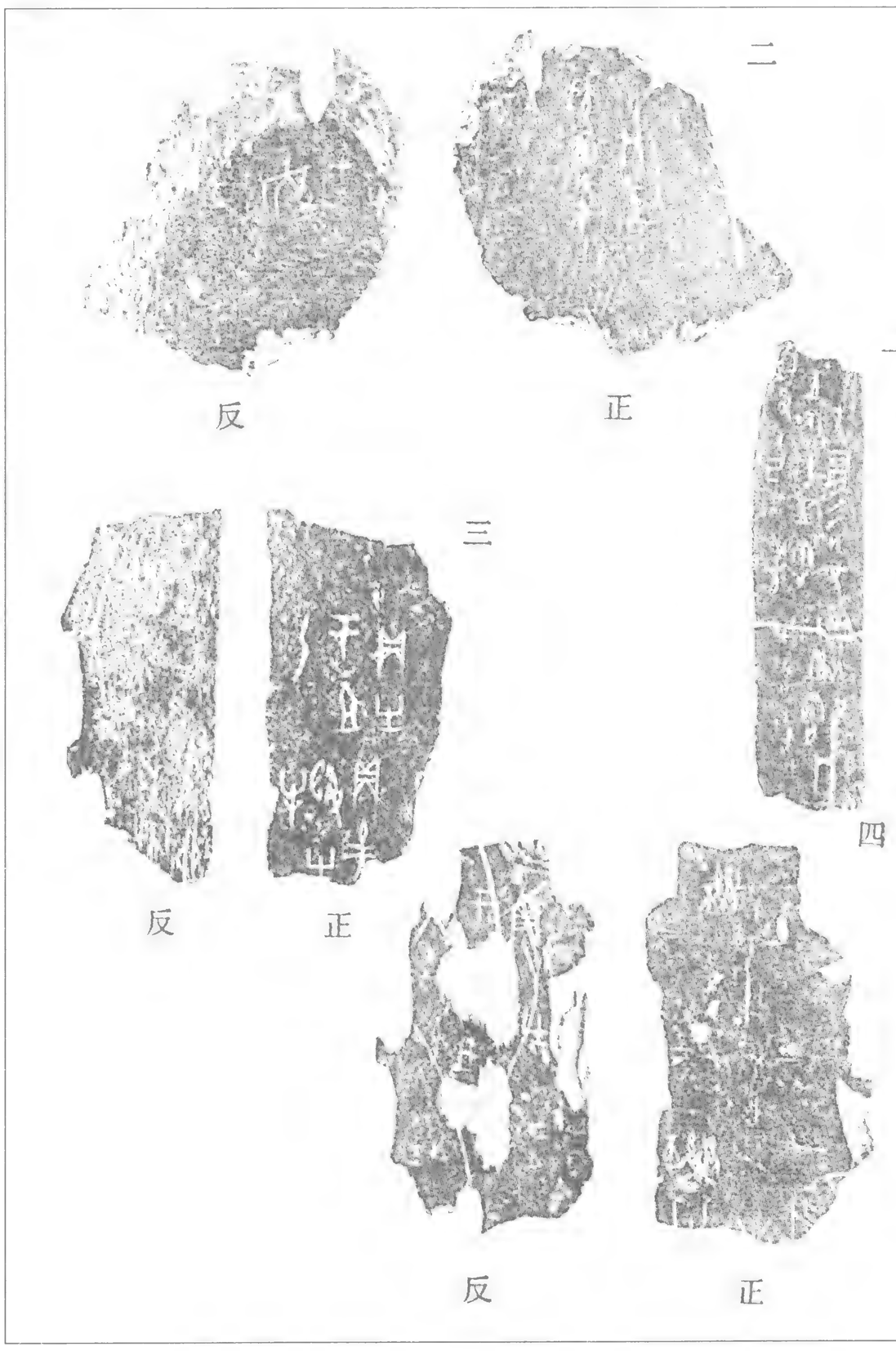
图版捌　安阳市博物馆馆藏卜辞



79～91龟甲五期　95～100兽骨五期

(原載《中原文物》1981 年第 1 期)





九



反

一五



反

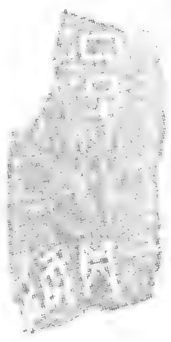


正

一七



反

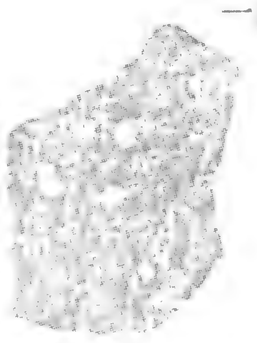


正

一四

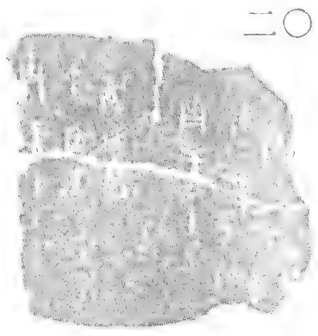


反



正

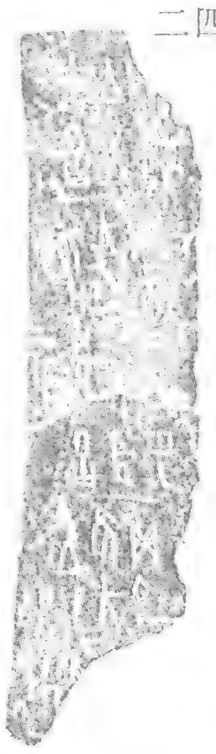
二〇



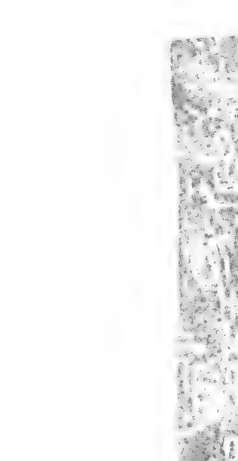
二三



二四



二六



二五



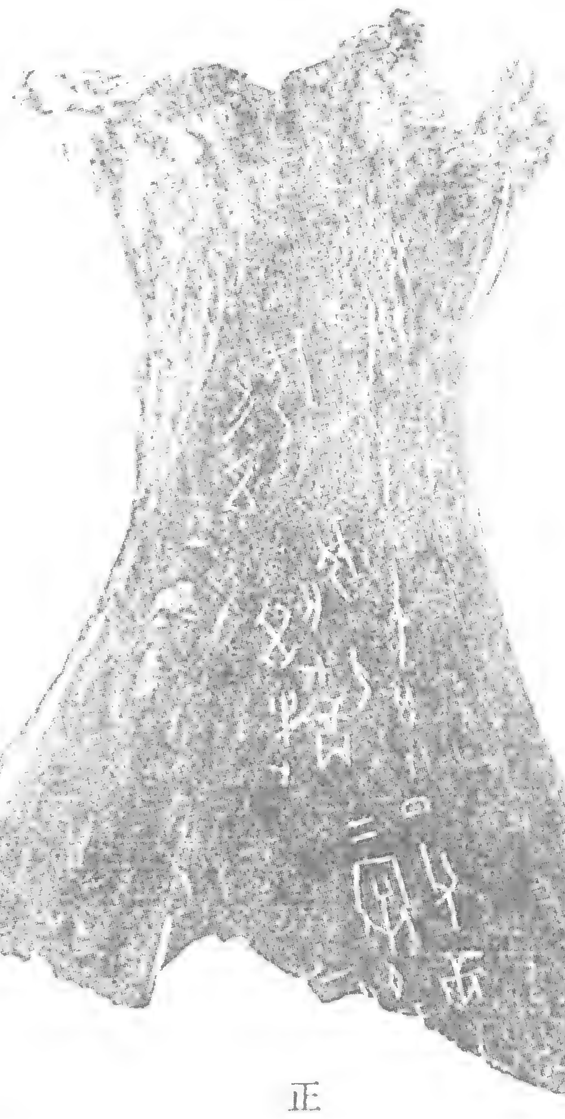
反



正

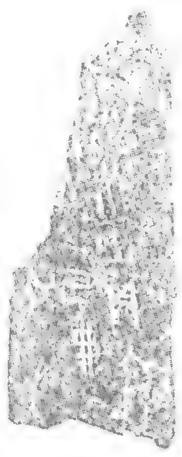


九



正

一一



正



反

一〇

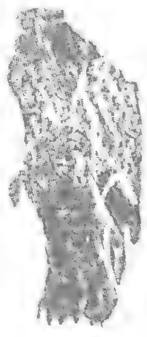


正



反

一二



反



正

一三



正



反

一六



反



正

一八



正



反

二一



二二



一九



反



正



二七

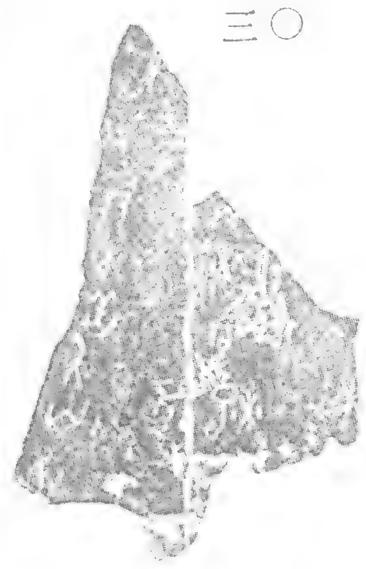


正



反

三〇



二八



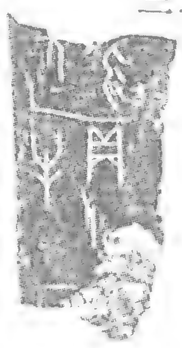
二九



三一



三二



反

三三



正

三四



反

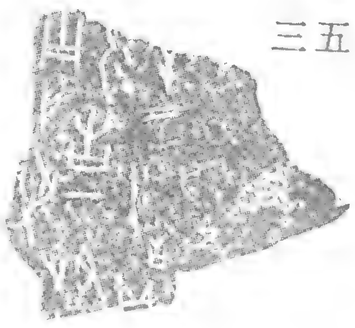


正

三五

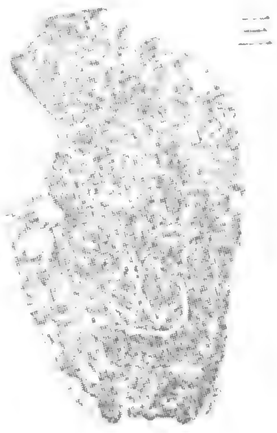


反



正

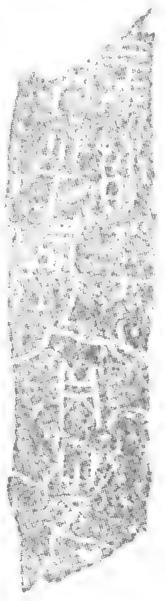
三六



三七

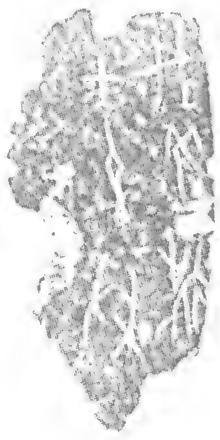


正



反

四〇



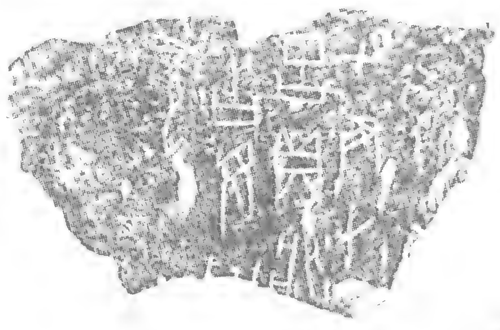


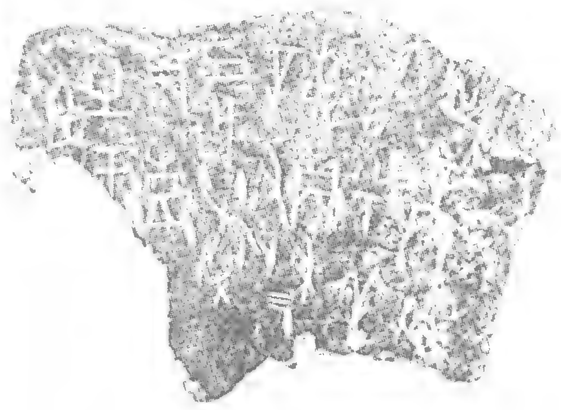
反

四一



正





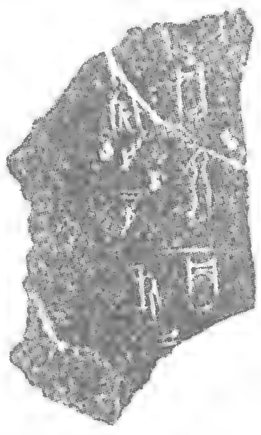
四二





正

三九



三八

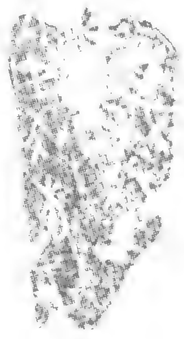


反

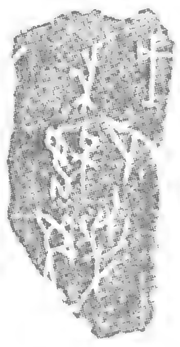


正

四三



反

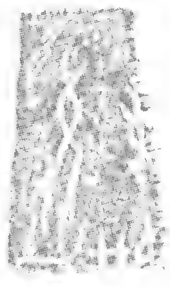


正

反

正

四四



反



正

四五



反



正

四六



反

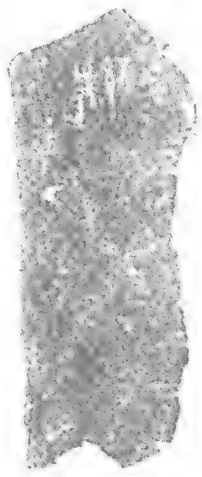


正

四七



反



正

四八

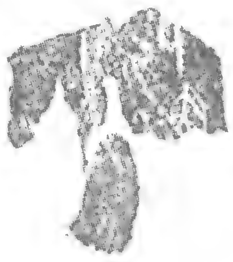


反



正

四九



反

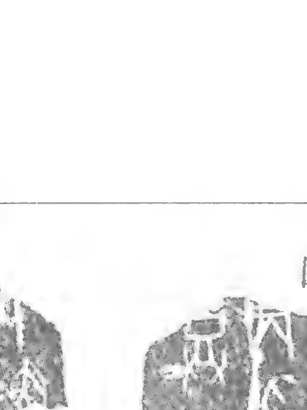


正

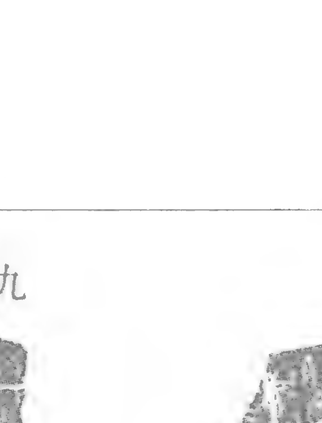
五〇



五一

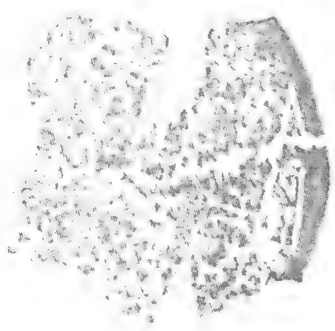


反

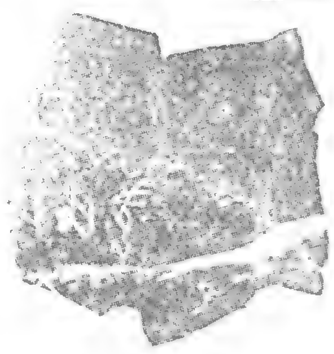


正

五二



反



正

五三



反



正

五五





五四



反



正

五六



反



正

五七

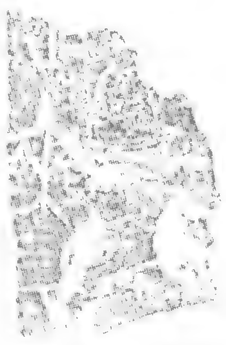


反

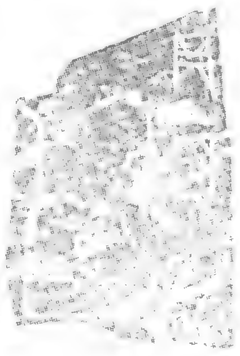


正

五八



反



正

五九



六〇



反



正

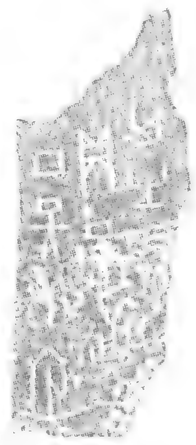
六一



六二

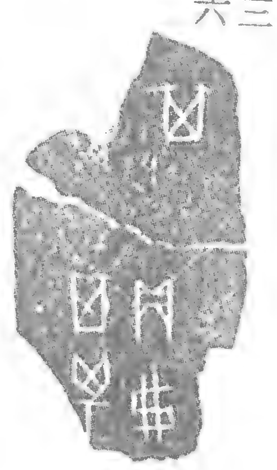


反



正

六三



反

正

六四



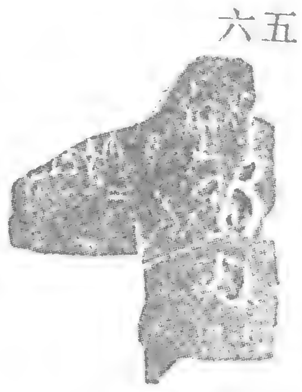
反

正

六五

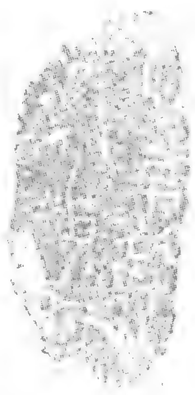


反

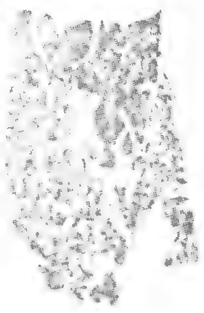


正

六六



六七



反



正

六八





反



正

六九



七〇



反



正

七一



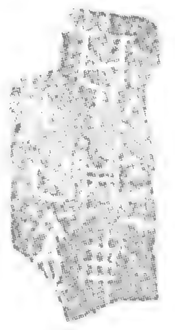
反

正

七二



反

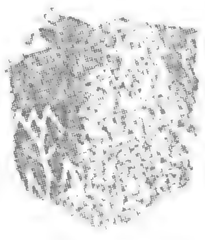


正

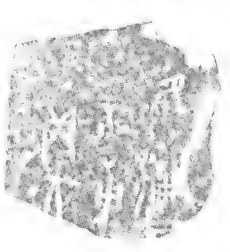
七三



七四



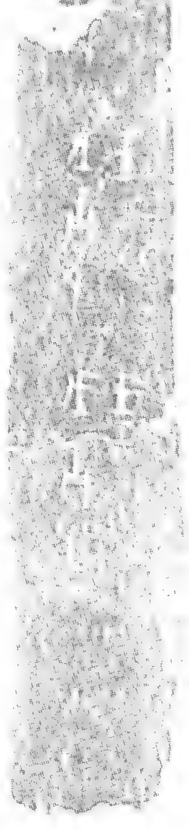
反



正

七五

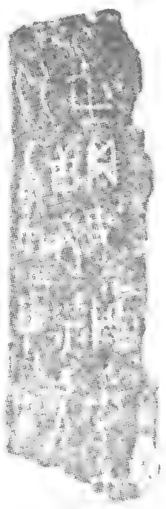




七六



反



正

七七



反



正

七八



反



正

本文图版号	原著页片号	甲骨类别	补正	释文	备注
一	二・一	牛胛骨	缀合一片	甲……貞……彡 甲申卜大貞王宜𣪊叙亡𡆥 己丑卜㞢貞王宜雍 己彡亡𡆥 己丑卜……王宜……亡𡆥	
二	三・二	牛胛骨	失反拓	(正)……卜貞王……大戊彡亡𡆥 (反)𠂤	
三	三・十	牛胛骨	失反拓	(正)貞𡆥(侑)于祖乙 貞𢦏得𡆥牛 (反)癸卯卜宂	
九	六・十三	牛胛骨	失反拓	(正)辛巳卜毋癸其日 二牢口父庚口 癸未卜父甲福伐人 又五伐 弜曰丝用 (反)辛巳……一 庚……𣪊辛 庚……	反"癸卯卜宂"与正"貞𢦏得𡆥牛"相接。
十	七・十	龟腹甲	失反拓	(正)……貞酒毋癸 (反)口子…… 口示十……	
十一	七・十七	牛胛骨	失反拓	(正)貞𣪊(侑)于祖乙 貞𢦏得𡆥牛 ……王……乎 (反)王固曰……	
十二	八・一	龟腹甲	失反拓	(正)……爭…… ……不口𣪊(侑) 貞父庚帚𡆥口…… (反)口八廿	
十三	八・二	龟腹甲	失反拓	(正)……口𣪊庚 (反)戊寅帚……	反骨祢字现已半损
十四	八・十三	龟腹甲	失反拓	(正)……卜設貞帚帚口于父乙甲 (反)……王固曰……	反著释"宾祖乙"，谛审此版实为二辞祖乙貞字之残
十五	九・一	龟腹甲	失反拓	(正)……宾…… 己口……貞……	
十六	九・四	牛胛骨	失反拓	(反)壬子……	
八	六・九	牛胛骨	缀合一片	……于父乙夕口	
七	五・十四	牛胛骨	失反拓	(正)貞……乙……𣪊 不佳父乙𡆥 ……父……𡆥 (反)……其佳父乙……	
六	四・十五	牛胛骨	失臼拓	己丑卜亘貞御于祖丁 (臼)勿𢦏十父口爭	
五	四・十一	龟腹甲	正反失联	(正)𠂤……永……煮……牛 二不多	背文在反著 四九・八
四	四・四	牛胛骨	失正拓	(反)貞𡆥(侑)于祖乙 (正)甲午卜設貞今日雨 ……于祖辛 (反)丙 不多	

十七　九、六　龜腹甲　失反拓　殘失"不""多""告"三字　殘骨下端現已

（正）丁巳……貞𠂤（侑）多介（祖）宰

（反）𠂤（侑）……

癸卯……

十八　九、八　牛胛骨　失反拓

（正）貞自上甲𠂤（侑）……于𠂤（侑）

（反）乙□

十九　九、十五　龜腹甲　失反拓

（正）貞勿往于喜

（反）自骨𠂤（侑）

二十　九、十六　龜腹甲　綴合一片　與同書一九、九綴合

□子王卜……余宜……福亡𡆥

□子王卜……出于……福……

二十一　十、五　牛胛骨　綴合一片　與同書三九、三綴合

王其迄于亞亡……

二十二　十一、十一　牛胛骨　骨臼失联

庚申卜爭貞𡆥（侑）伐𠂤方受出又（祐）

丁巳卜□貞……

（臼）簋……

二十三　十一、十二　牛胛骨　骨臼失联　骨臼在同書四八、八

戊辰卜宁貞登人乎（呼）往伐𠂤方

（臼）丙寅帚𡆥示三屯　兩

二十四　十二、十一　牛胛骨　綴合一片　與《殷綴》三、六、三片綴合，此骨上端非上膊增藏之物，拓片出自翻印增十七字

……乎（呼）

貞勿令王往

貞诗多臣伐𠂤方

貞𡆥王往伐𠂤方

貞𡆥王往伐𠂤方

二十五　十三、一　龜腹甲　正反失联　背文在同書四八、七

（正）貞我弗其受土方𠂤（祐）十一月

（反）

二十六　十三、五　牛胛骨　骨臼失联

己巳卜□貞犬……其出……

辛巳卜設貞王𡆥……伐……受……

（臼）乙未帚妹示𠂤

爭

二十七　十四、七　龜腹甲　失反拓

（正）……王固……其雨……

（反）……辰𠂤（侑）……

二十八　十七、九　牛胛骨　綴合一片

□酉卜逐貞王宜歲不冓大雨

貞其冓大雨

二十九　二一、七　牛胛骨　失臼拓

庚子卜宁貞翌癸卯𡆥

□卯卜□貞……

三〇　二一、八　牛胛骨　綴合一片

丙𡆥已

𡆥

丙𡆥𠂤（侑）

癸𡆥

□示

三一　二三、二　牛胛骨　綴合兩片

乙丑……其𠂤（侑）于……

乙丑卜王曰貞十宰

乙丑卜王曰貞五宰

乙丑卜……貞王宜小乙𡆥

乙丑卜王曰貞翌丁卯不雨　丙雨

戊辰卜㱿貞王宜父丁□二牛亡尤𠂤（侑）十月戊辰

三二　二四、二　牛胛骨　失反拓

貞𢦏牛

……勿……

（反）己巳卜宜

三三　二四、七　牛胛骨　綴合一片

戊辰卜㱿貞王宜父丁□二牛亡尤𠂤（侑）十月戊辰

三四　二四、十　龜腹甲　失反拓

（正）貞𡆥五牛物

（反）庚……住……

三五　二五・五　龜腹甲　失反拓

（正）口子卜爭貞……勿告……羊二
貞……丑……止……小告五

三六　二五・一三　牛胛骨　骨臼失联

（反）涉

三七　二六・七　牛胛骨　失反拓

己亥卜爭貞𢀛生于祖口

三八　三〇・一〇　牛胛骨　失反拓

辛丑卜殷貞帚妌孚（娩）夫永丘商受[年]

三九　三四・三　龜腹甲　綴合一片

（白）[X]

（正）癸□卜貞[旬]亡[𡆥]
癸亥卜貞旬亡𡆥
……巳
（反）……出示𢀛生……

（正）貞孚（娩）嘉于西
貞生

（反）戊戌卜殷

……卜……
貞弱宜二月
貞……伐二[旬]

四〇　三四・四　牛胛骨　骨臼失联

甲辰卜古貞疾𠂤生（有）𡚴
（白）口戌羌彻七又鼎

四一　三四・七　龜腹甲　失反拓

（正）丙……
貞王夢出（有）
貞王夢……
王……一
口未卜[殷][貞]……一

（反）王
氏帚
帚口子，口
今氏帚好口
其氏～～（災）

四二　三四・一三　牛胛骨　正反失联

（正）……者不我其受出（有）二　二告

（反）隹王正（征）

骨臼在周書三九・一二

四三　三五・三　龜腹甲　失反拓

（正）口戌卜爭[貞]帚好兄……
（反）……出（有）出示𢀛示

四四　三五・七　龜腹甲　已反失联

（正）……帚[妌][兄]劝　三月
辛丑卜殷貞帚妌孚（娩）夫永丘商受[年]

（反）……帚妌兄

四五　三六・五　牛胛骨　失反拓

（臼）貞娶乙亥𡆥
（反）壬申卜

四六　三六・七　龜腹甲　失反拓

（臼）貞疫不其得小告

（反）癸卯……

四七　三六・九　牛胛骨　失正拓

（正）不[X]二
（反）丁未卜古貞出得……
……曰……

反拓在周書三・二

反"壬申卜"与"貞娶乙亥𡆥"相接

龜骨現已殘去下半失一下字拟補得二字

四八　三六・一〇　龜腹甲　正反失联

（正）貞不其得
其……
（反）子占正……

四九　三七・五　龜腹甲　失反拓

（正）……貞勿乎（呼）……聲……
（反）[庚]寅

五〇　三七・一四　龜背甲　綴合一片

貞勿使人[田]𠂤一月
[X]二

五一　三八・二　龜腹甲　失反拓

（正）貞來口
貞不其來口
（反）王[田]曰口……
丙……

五二　三九・五　龜腹甲　失反拓

（正）甲辰卜……七[告]一
（反）王[田]……

反拓在周書四〇・四

五三 三九・九 龜腹甲 失反折

(正)貞犬征……
　貞犬征𢦏[土]
(反)出……
　不……
　王……

五四 三九・十 龜腹甲 失反折

(正)丁巳卜㱿貞子唐𢦏出[土]
　小告
(反)口示一口

五五 四〇・六 牛胛骨 骨臼失缺

癸亥卜㱿貞王出口[土]
(臼)帚井示七牛 宁

五六 四〇・一〇 龜腹甲 失反折

(正)口寅卜㱿貞口獲
　北……狩……兕……二
(反)……臼甲戌

骨臼在屑書三五・六

五七 四〇・一四 龜腹甲 失正折

(正)貞取不佳[因]
　口口[卜]㱿貞子(諸)[𠂤]
　弘　矢
(反)[王]固曰吉口口
　口事

五八 四一・七 龜背甲 失反折

(正)……貞犬[告]……
(反)……口來五……

五九 四二・四 牛胛骨 綴合二片

己五……五
己丑卜王曰貞于甲辰[𢦏]
己丑卜王曰貞勿[𢦏]牡 七

六〇 四三・一 牛胛骨 失反折

(正)……[取]卅邑……彭龍　小告一
(反)貞于……勿……

六一 四三・八 牛胛骨 失臼折

壬申卜㱿貞子(諸)子漁出于父口
(臼)已……示

六二 四四・二 牛胛骨 失反折

(正)丁巳卜㱿貞子唐𢦏出[土](步)
(反)王……

六三 四四・五 龜腹甲 綴合一片・失反折

(正)……𢦏……
　貞帚𢦏[禽](擒)
(反)口示口

六四 四四・六 牛胛骨 失反折

(正)貞……氏
　貞𠂤帚𢦏氏
(反)口木卜㱿
　癸亥卜爭
(正)不多[𢦏]二
　不多[𢦏]二告二
(反)……正貞佳……口

與前書四四・二綴合・此片未斷前之拓本見《鐵雲藏龜》二五九・一

六六 四五・九 牛胛骨 失臼折

己未卜㱿貞王賓不佳[因]一
(臼)乙巳[𢦏]又十[𢦏]

六七 四六・二 龜腹甲 失反折

(正)……卜㱿貞……月
(反)……寅……允……

六八 四六・六 龜腹甲 綴合一片・失反折

(正)癸巳卜[殼]……
　壬寅卜㱿貞佳[因]三
(反)王固曰佳……

六九 四六・八 牛胛骨 綴合一片

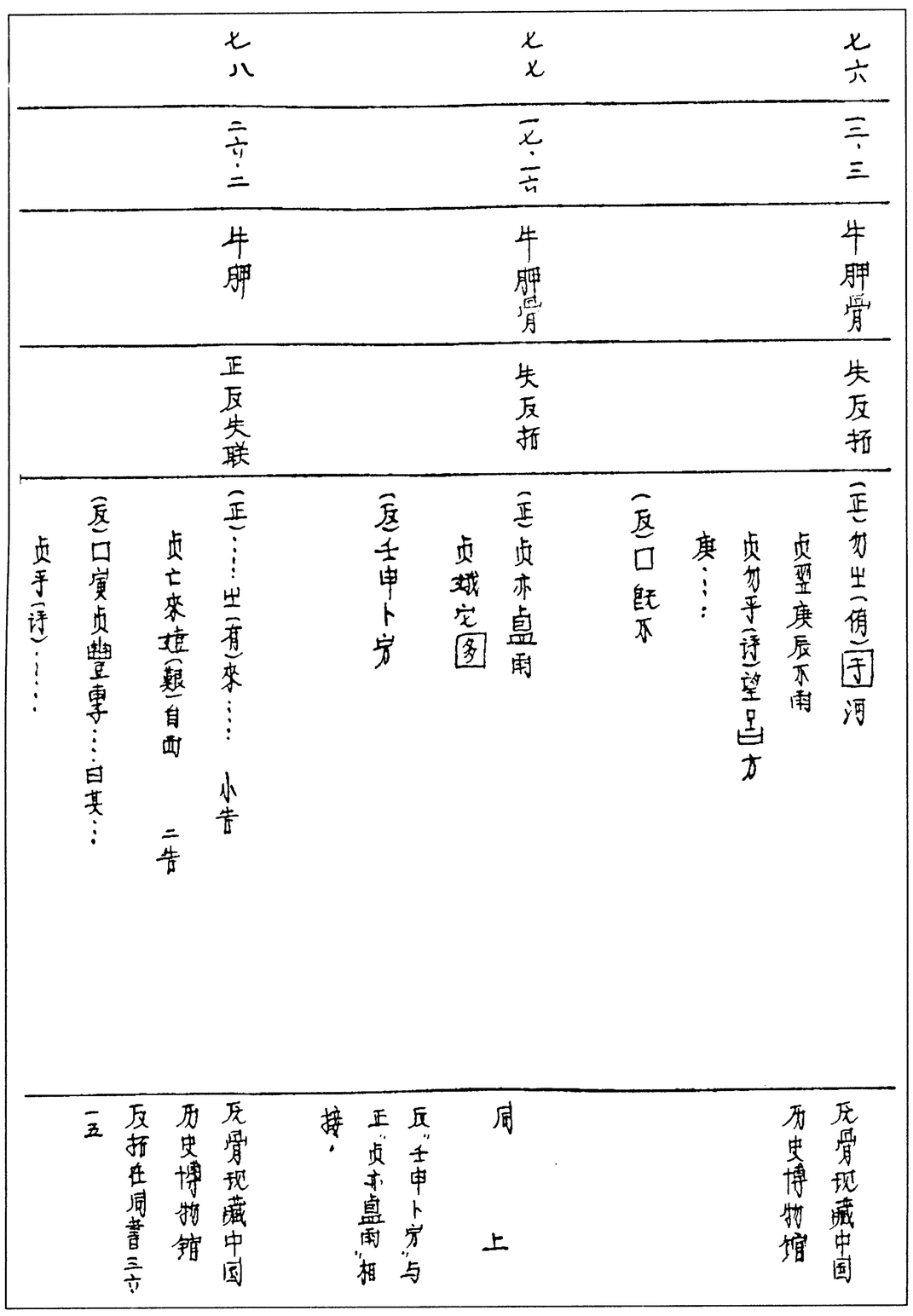
貞今……大告
貞今……告
……于又[𢦏]……告

七〇 四六・九 龜腹甲 失反折

(正)……[酒]貞……固曰……
(反)[𠂤]允出[土]

七一 四六・十 龜腹甲 失反折

(正)……[殼]……王固曰出(有)……四日丙戌……
(反)……佳丙卖……其佳辛……



附　錄

根據凡例第五條，今就館藏原甲骨可訂正綴合有誤者附錄於後：

書名	綴合片號	失誤情況
《甲骨綴合編》(注二)	一〇二	甲片字面已至胛骨邊緣。粹一二五六已無可綴合。
同　上	一一〇	下片骨脊在左，上片在右，故甲乙兩骨骨面弧度不一、骨色不一。
同　上	一一一	兩骨鑿痕不合，骨色、厚薄不一。
同　上	一四〇	甲片有鑿無鑽，乙片鑽鑿並施或有鑽無鑿，乙片斷處尚留鑿痕一半與甲片不綴合，佚六〇四不藏我館。
同　上	二五〇	下片已近臼骨，故與上片綴合處厚薄不一。
同　上	二五一	斷痕不合，兩骨綴合處骨面弧度不一。

注一　《戩壽堂所藏殷墟文字》第一頁第九片原骨現已斷裂，右半現藏中國科學院中國歷史研究所，左半現在我館。

注二　《甲骨綴合編》。曾毅公編，一九四九年出版。

（原載《上海博物館館刊》第 1 期，上海人民出版社，1981 年）

日本散見甲骨文字蒐彙（六）

（日）松丸道雄著
劉明　樺譯

工藤愚盦氏藏九片，本文收錄九片（485—493）。

書法家工藤氏（啟文會主任、住東京澀谷）之藏骨，是在昭和廿三、四年由山形書店主人（原在東大農學部）贈送的，是戰前流傳到我國的。

秋山公道氏藏四十二片，本文收錄四十二片（494—535）。

書法家秋山氏（新日本書法會會長，住在京都下鴨）之藏骨，是從京都已故的漢詩人、篆刻家原徂山氏（園田湖城氏的學生）那里接受下來的。原來是兩大箱、一小箱，共三箱。其中一大箱贈給了東京富氏短期大學，那部分沒有調查。本文494—504是小箱的，505—535是大箱的。甲骨都裝在中國制的囊匣裏，是戰前由中國帶到日本的。

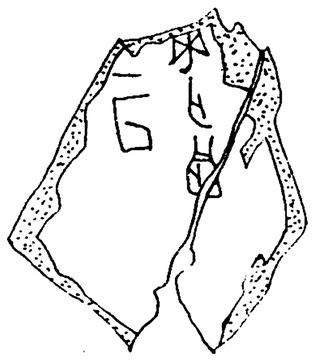
今井凌雪氏所藏甲骨，片數不詳，本文收錄二十五片（536—560）。

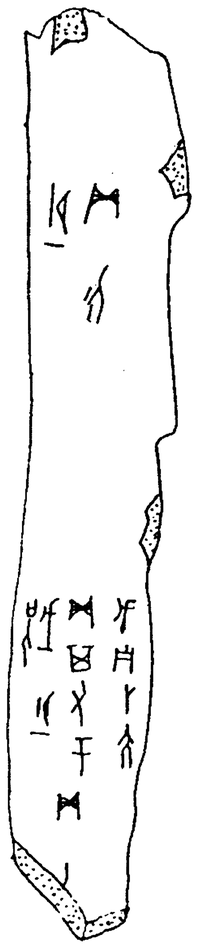
書法家今井氏（築波大學教授，住在奈良市）之藏骨，是近年在東京購得的。除松丸所見的一部分外，其餘的藏在皇宮裏。這一部分在改日看見和調查以後，再另行介紹。這裏發表的是其中的真品，只收錄了二十五片。但是，僅就這次調查而言，就是一個很有趣味的問題，所以想簡要地說明一下。在八個大小不同的箱子中一都是中國製造的），共收了六十一片，即本文收錄的二十五片和一看就能判明是僞刻的七片，以及極巧妙地在殷虛出土的獸骨（？）上刻字的二十七片。這些都混在一起了。實際

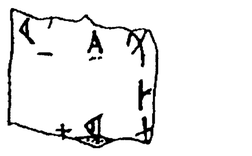
上，從一九三〇至一九四〇年以來在中國製造了一些偽物，這些偽物製造得很巧妙，往往使專門研究者都感到迷惑。近年來，我對此懷着強烈的疑問，草就了《甲骨文偽作問題新探》一文（《池田末利博士古稀紀念東洋學論集》，一九八〇年），在文中試舉了一、二例来加以說明。而現在今井氏購得的一批資料中，發現了不少幾乎與此類似的偽物，這使人震驚。八個箱全都是古色古香的，不可能是近年製作的，大概是一九四〇年前後製作的吧！是戰前流入我國，還是近年流入我國，不大清楚。因此，利用以前刊行的甲骨著錄書（特別是一九三〇年以後刊行的甲骨著錄書時，這是一個值得注意的問題，以後有機會再詳細地加以討論。

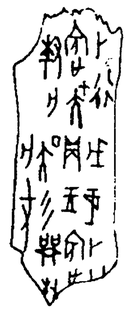
還有，本稿的寫作，得到各位收藏者的大力支持，在此表示謝意。同時，由於臺灣金祥恒教授的寶貴提議，從本號開始，併載拓本。拓本是由笠井僑堂氏拓的。在調查原甲骨時，經常採拓是不可能的。今後盡可能地留意收録拓本，希望各位收藏者大力協助。

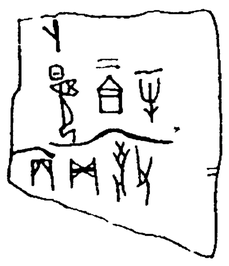

490 甲（工藤 6）

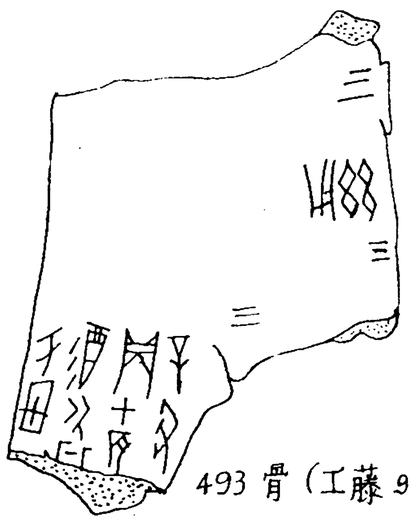

487 骨（工藤 3）


485 骨（工藤 1）

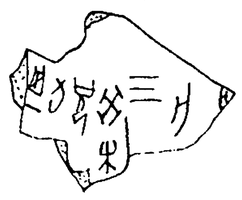

491 甲（工藤 7）

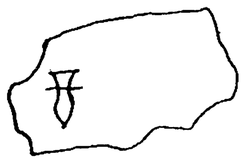

488 骨（工藤 4）

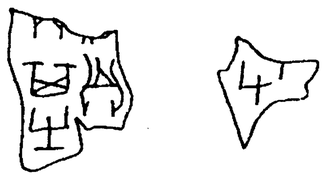

492 甲（工藤 8）


493 骨（工藤 9）


489 骨（工藤 5）

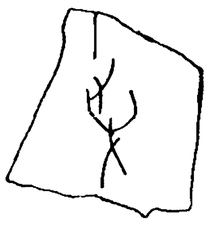

486 骨（工藤 2）


512 甲（秋山 19）


正　反
505 甲（秋山 12）


513 甲（秋山 20）


509 甲（秋山 16）


506 甲（秋山 13）

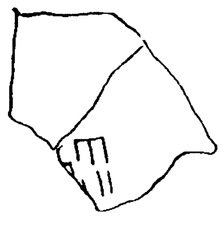

514 甲（秋山 21）


510 甲（秋山 17）


507 甲（秋山 14）


515 甲（秋山 22）


511 甲（秋山 18）


508 甲（秋山 15）

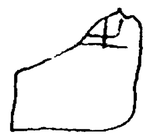

501 甲（秋山 8）


498 甲（秋山 5）

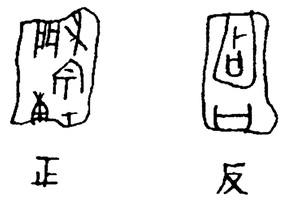

494 甲（秋山 1）


502 甲（秋山 9）


499 甲（秋山 6）


495 甲（秋山 2）


正　反
503 甲（秋山 10）


正　反
496 甲（秋山 3）


504 甲（秋山 11）


500 甲（秋山 7）


497 甲（秋山 4）



533甲（秋山40）



531甲（秋山38）



528甲（秋山35）



534甲（秋山41）



532甲（秋山39）



529甲（秋山36）



正



反

535骨（秋山42）



530甲（秋山37）



551骨（今井16）



548甲（今井13）



545甲尾（今井10）
朱填



552甲（今井17）



549甲（今井14）



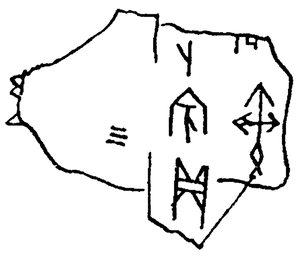
546甲（今井11）



553甲（今井18）



550骨（今井15）



547甲（今井12）



524甲（秋山31）



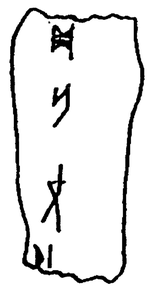
520甲（秋山27）



516甲（秋山23）



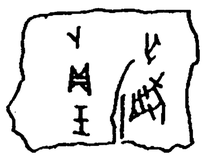
525甲（秋山32）



521甲（秋山28）



517甲（秋山24）



526甲（秋山33）



522甲（秋山29）



518甲（秋山25）



527甲（秋山34）



523甲（秋山30）



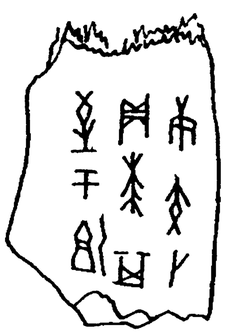
519甲（秋山26）



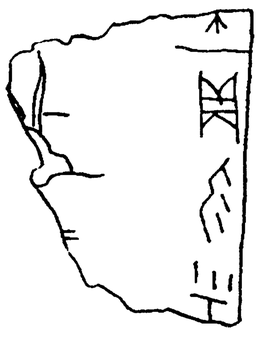
542甲（今井7）



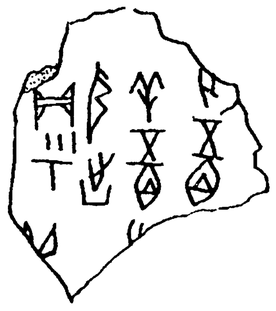
539甲（今井4）



536甲（今井1）



543甲（今井8）



540甲（今井5）



537甲尾（今井2）
朱填



544甲（今井9）



541甲（今井6）



538甲（今井3）

山西省文物工作委員會收藏的甲骨

胡振祺注釋
李梅貞摹拓

一九七四年八月，太原市郝一清同志將其愛人馬林同志多年收藏的二百餘件古代文物，捐献給山西省文物工作委員会，其中有殷墟甲骨殘片一五六件。这批甲骨虽均系殘損小片，大者長寬度不过三厘米，小者長寬度仅一厘米，但甲骨上的契文却极清晰，而且过去未見著录，因此是很珍貴的。這批甲骨上的契文大部分只殘留三兩个字甚至一个字或半个字，兹从文字較多和辭意明确的三十六片中，拓印、摹制並试釋於次。

第一片：「□□卜行貞丁丑父丁又伐」。（右行）

「行」是祖甲時的卜人，「父丁」当指的是「武丁」。「伐」是一种砍头的祭名。「又」在辭中当作「有」講。

第二片：「癸酉卜貞王旬亡𡆥」。（左行）

「𡆥」即「咎」，災禍的意思。「亡」即「无」，晚期卜文。

第三片：「壬戌貞其出𡆥」。（左行）

「出」即「有」。「𡆥」即「災」。

第四片：「其有史」。（右行）

「史」即「事」。

第五片：「貞其雨」。（左行）

从「雨」的字形看，似是早期的卜文。

第六片：「大貞不冓雨」。（右行）

大是祖甲時的卜人。「冓」同「遘」，是相遇的意思。

第七片：「今夕其集𠂤」。（左行）

「集」字从「隹」从「木」，是一种殺禽的祭名。（右行）

第八片：「亡尤二月在𣪊」。（右行）

「亡尤」同「无田」，均為「无禍」的意思。「𣪊」的甲迺狩的地点。

第九片：「乙亥卜宂貞……」。（右行）

「宂」即「宾」，是武丁時卜人。辭意虽不全，但字体粗壯有力，是早期的甲骨。

第十片：「乙丑卜殼貞……王……」。（右行）

「殼」是武丁時的卜人。辭意虽不全，但為早期甲骨。

第十一片：「□戌卜□貞王宾……叙七□」。（左行）

「叙」字从示从木从又，是一种祭名。「形旁似是祖甲時期的卜文。

第十二片：「貞王宾……衩」。（右行）

「衩」即「祐」，是一种祭名。辭中「王宾」是礼敬的意思。从辭中「王」字的字形看似是祖甲時期的卜文。

第十三片：「貞……□壁」。（左行）

「壁」字係晚期書体。

第十四片：「庚午□□貞王……日兄庚昇……尤」。（左行）

「兄庚」疑為祖甲对祖庚之称。「昇」字不识，疑是一种祭名。

第十五片：「……卜貞王□歲七□」。（左行）

「歲」是一种祭名。

第十六片：「□亥卜……向出……其于……旧」。（右行）

「旧」即「咎」災禍的意思。「出」即「有」。

第十七片：「貞今夕王……」。（右行）

第十八片：「癸巳王……齐貞……」。（左行）

从句型上看，「齐」是地名，上缺在宇。

第十九片：「丁亥敫」。（右讀）

「敫」釋作「數」。祭名。

第二十片：「五月」。（右讀）

第二十一片：「癸卯卜貞旬亡□」。（右讀）

第二十二片「丙寅卜㱿貞，今夕亡□」（右讀）

第二十三片：「貞今夕其……」。（右讀）

第二十四片：「己巳……壬寅酒……亡」。（右讀）

第二十五片：「貞王……亡𡆥」。（左讀）

第二十六片：「□子卜貞」。

第二十七片：「出疾」

「出」釋作「有」。



560甲（今井25）



557甲（今井22）



554甲（今井19）



558甲（今井23）



555甲（今井20）



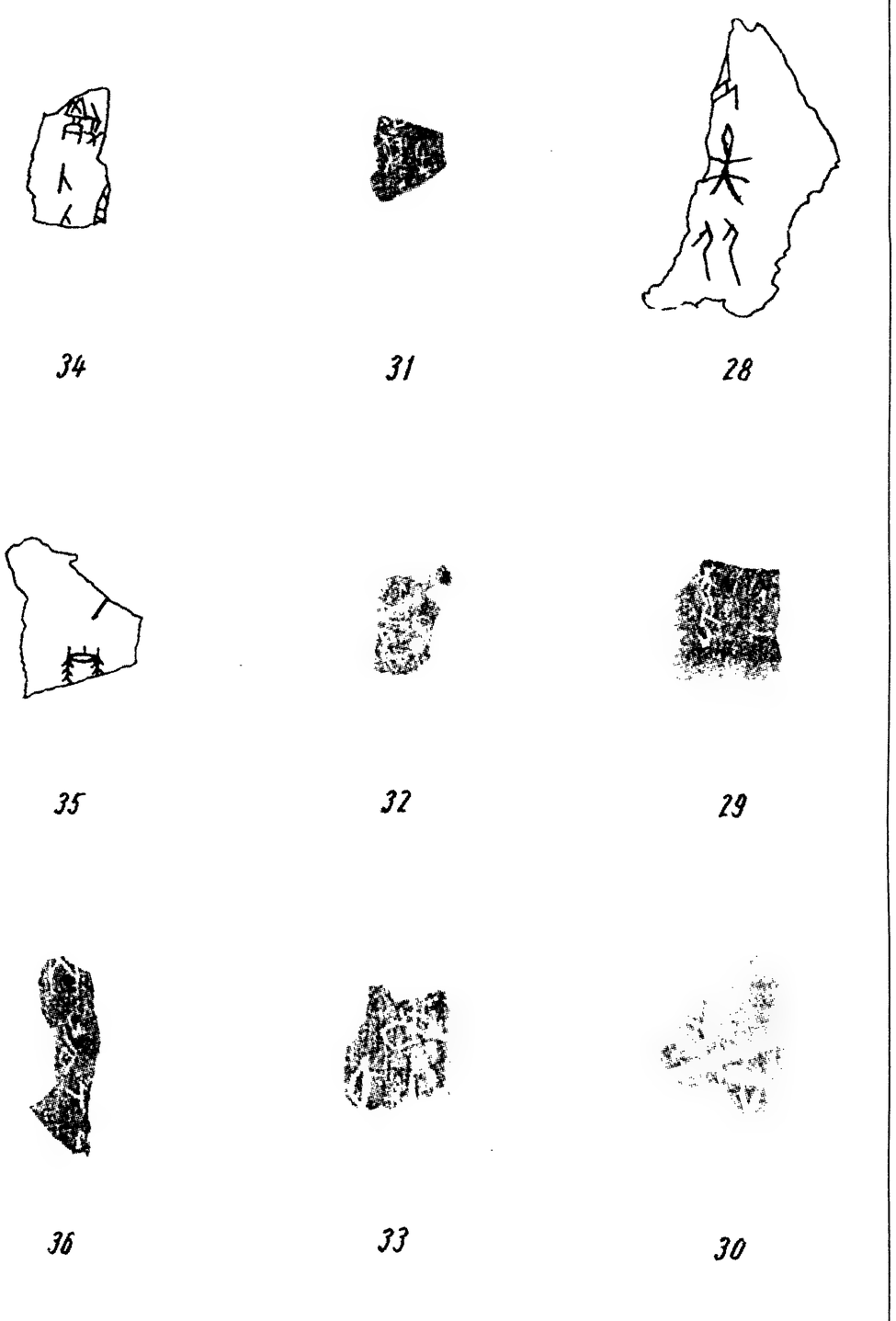
559甲（今井24）



556骨（今井21）

（原載《古文字研究》第八輯，中華書局，一九八三年二月）

第二十八片：「□來𠂤」。
　　「𠂤來」是人名。
第二十九片：「□𠂤」乃「𠂤」之省文，「𠂤」是一種武器。（朱色字文）
第三十一片：「𠂤」「戠牛」之省文，「青春」是美的意思。
第三十二片：「□戠月三羊」。（左讀）
第三十三片：「□錄卜」。（末釋）
第三十四片：「□錄卜」。（末釋）
第三十五片：「□丙申卜」。（末釋）



（原載《古文字研究》第八輯，中華書局，一九八三年）

孟廣慧舊藏甲骨選介

李先登

關於甲骨文最早發現的情況，一般認為是在清光緒二十五年（己亥，公元一八九九年）王懿榮最早發現的。但是，這種看法是不大全面的。實際上，在清光緒二十四年（戊戌，公元一八九八年），甲骨文已經在小屯出土，並已引起古董商人的注意，而天津的王襄與孟廣慧是和王懿榮同時最早鑒定與蒐集甲骨的人。

王襄的情況，世人熟知，茲不贅述。

孟廣慧，天津人，字定生，號遠公，一八六八年生，一九三九年卒。喜好金石之學，齋名『鐸于室』。工隸書，受金冬心和鄧石如影響較大，與華世奎、劉嘉琛、趙元禮並稱為天津近代四大書法家。

關於孟廣慧早年鑒定與蒐集甲骨的情況，除已公開發表的王襄的《簠室題跋》注一以外，在王襄未發表的一些著作中尚有一些重要的記述。茲摘錄如下：

《簠室殷契・序》：『世人知有殷契自公元一八九八年始。濰友范壽軒售古器物來言河南湯陰（實安陽）出骨版（實龜甲、獸骨），中有文字，徵詢吾人欲得之否？時有鄉人孟定生共話，極慫恿其往購，且言欲得之。孟氏意此骨版為古之簡策也。翌年十月，范君來，且告以得骨版，期吾儕到彼寓所觀覽。彼寓西門外馬家店，店甚簡陋。土室壁立，窗小如竇，炕敷葦蓆，群聚其間，出所謂骨版者共相摩娑。所見大小不一，沙塵滿體，字出刀刻。既見其物，復審其文，知為三古遺品。與之議定價格，骨之鉅者，一字一金，小塊以塊計。值亟氏與襄皆寒氏，各盡力所能得者收之而已！所餘之骨版，據云盡售諸王廉生，得價三千金』，言之色喜。售王之骨版使人不能忘者，即全龜之上半，完整無缺，當時群以為『大寶』也。』注二

《鐸于室契文餘珠・序》：『昔濰友范壽軒來天津，攜有河南安陽所出之殷契。同仁等以為人間未見之奇，遂奔走相告，咸至范君寓所（時前清光緒己亥冬十月也）。襄尓時讀書家塾，聞之，為好奇之念所鼓動，遂前去。孟定生世叔廣慧與余有同情，不約會亦前去。至則見范，詢其所謂『殷契』者果何似？范乃侃侃而談，論此物物色之匪易，且言發掘地主之居奇，及千方百計始購得此些許之骨片。此出其所得，朽敝之骨與沙塵雜然，一拂拭，沙去字顯，字之秀麗多姿，雄健無匹，的為三古『法書』。觀玩之下，驚喜過望，念之有餘興焉！問其值，鉅大之骨，每字一金，堅不稍貶。余與定老皆寒酸，力不能逮，祇有深惜而已！襄則取塊小之龜甲一包，論定其價，攜之歸，不虛所見云尓！定老則流連不忍捨去。後聞之云，此次購得鉅大之邊條與凹形之骨數十片，費去數十百金。定老固非雄於資者，何得此項鉅金？蓋其叔志青先生繼壎時官武昌鹽法道，適寄旅費至，欲其遊湖北，故挹彼注茲，以成其大願，所謂『千載一時』也。』又謂：『憶昔訪定老於鐸于室，適為人作書，見其几桌之上殷契與漢研雜陳。君研究殷契有素，於敲、賓、亘、韋諸史之『筆法』，運用於漢隸之間，宜漢隸之獨步一時，為流輩所傾倒。所收殷契之精者，如『壬子卜，亘，貞至于丙辰雨』下有記貞之次第於兆坼之旁，由一至九，每三字排一列，於『九』之側『書』『上告』。注三在當時固推為僅有，至今視之，仍屬難得之品，宜定生捐巨金收之，絕不顧惜也。』注四

孟廣慧前後共收藏甲骨四三一片，其中最大的一片牛胛骨，係偽品，後歸王西銘，今不知其下落。其中四三〇片，先歸楊富郁，後歸李鶴年。一九五二年李鶴年將其中四〇〇片，以小片居多。而李鶴年留下的三〇片，不但片子較大，而且內容也較為重要，即王襄所述當年孟廣慧用巨金所購的『鉅大的邊條與凹形之骨』，始為孟廣慧舊藏甲骨中最為精萃的部分。文化大革命以後，其中二十八片歸天津市歷史博物館，另二片下落不明。

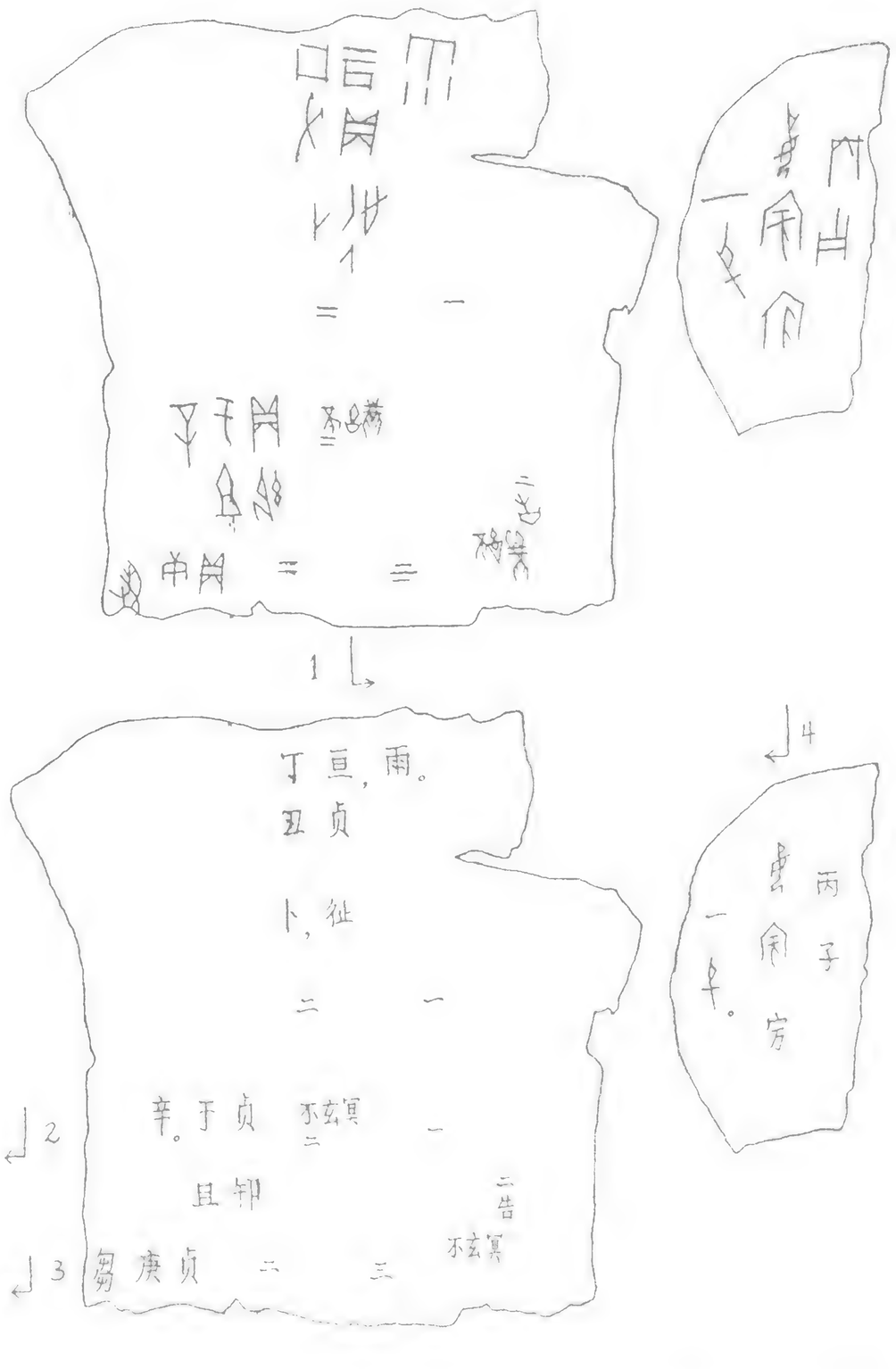
孟廣慧舊藏甲骨是傳世甲骨中最早出土的一部分，大概也是小屯北地之最北部，即緊靠洹河的劉家二十畝地出土的，而從未見於著錄。現在我們選擇現藏天津市歷史博物館的二十八片中的十二片予以簡介，這樣不但可以窺見孟氏舊藏甲骨的部分面貌，而且對於甲骨出土、甲骨之研究以及甲骨文綴合，均會有所幫助。

第一片：牛胛骨（照片、拓片、摹本、釋文依次排列如下。釋文中『I』等代表卜辭編號，『⊢』等代表卜辭方向。下同。圖見七六、七七頁）。

第1條卜辭：丁丑是占卜的日期。亘是武丁時的貞人名，據此可知此片當屬武丁時期。征，羅振玉釋延。注六一、二乃兆序，表示這件事情共占卜了兩次。

第二條卜辭：𠂤即御，譚為禦。《說文解字》：『禦，祀也。』在卜辭用為祭名。且辛即祖辛，是商代第十五個先王。不玄冥即不模糊，比較清楚之意。

第3條卜辭殘了，只剩下『貞……庚……』三個字。二告之『告』，其意猶《易・蒙》『初筮告，再、三瀆，瀆則不告』及《詩・小旻》『我龜既厭，不我告猶』之『告』，意思是卜問的對象能告以吉凶。





第4條卜辭是骨臼刻辭，乃是一種記事文字。[illegible]，誤刻為宁，後改為示字，示讀為祀。[illegible]，于省吾釋屯，注七即一對之意。注八宁即賓，乃記録者之簽名。賓亦武丁時之貞人。

第二片，牛胛骨（圖見八〇、八一頁）。

第1條卜辭殘了。韋亦為武丁時貞人之名，據此可知本片亦當屬於武丁時期。第2條卜辭：且乙即祖乙，乃商代第十四個先王。這是一條占卜禱告於祖先的卜辭。三表示本辭為第三卜，另外還應有兩骨為第一、二卜。第3條卜辭與第4條卜辭乃占卜一事之正、反兩面。第4辭占正面，僅殘存『貞[illegible]三個字。[illegible]讀為途。注九[illegible]讀為有。[illegible]即災字。

第5條亦為骨臼刻辭。帚喜為人名。

第三片：牛胛骨（圖見八二、八三頁）。

第1辭與第2辭亦為占卜同一件事情之正、反兩面。[illegible]字，唐蘭釋為稻。注十這是關於商代農業生產的一條重要材料。

第3條殘了，[illegible]字不識，亦為武丁時貞人名。徂為人名，《鐵雲藏龜》七十三『徂从沚戠』、《殷契佚存》五七一『貞徂往來亡[illegible]』等可證。

第四片：牛胛骨（圖見八四、八五頁）。

本片僅一辭。戊為人名。[illegible]字，唐蘭謂：『[illegible]于省吾釋詁》：『遂，往也。』《殷契佚存》一四二：『戊其亡[illegible]。』乃是占卜同一事情之及面。

第五片：牛胛骨（圖見八六、八七頁）。

本片僅一辭。其特點，九個卜兆皆經刻過，與殷墟第十三次發掘之北地C區一二七坑出土者相似，其時代當屬於武丁早期。

第六片：牛胛骨（圖見八八頁）。

本片特點，大字塗朱。正面卜辭僅殘存：『[illegible]子[illegible]鼉，不[illegible]。二月。』[illegible]共六字，乃驗辭部分。背面僅殘存『出希』二字，乃占辭部分。『鼉其[illegible]。』『天：『好鼉惡粥。』『范望注：『鼉與孕、臚同。』[illegible]希假為祟。《殷墟書契精華》四：『癸亥卜，設，貞旬亡[illegible]。』『鼉』其[illegible]，不[illegible]。』[illegible]可資參考。來數。五日丁卯，子[illegible]鼉，不[illegible]。』[illegible]

第七片：牛胛骨（圖見八九頁）。

第1條卜辭殘了，僅剩下一個寅字。

第2辭與第4辭一正一反，一在第3條卜辭之上，一在第3條卜辭之下，即『相間刻辭』。

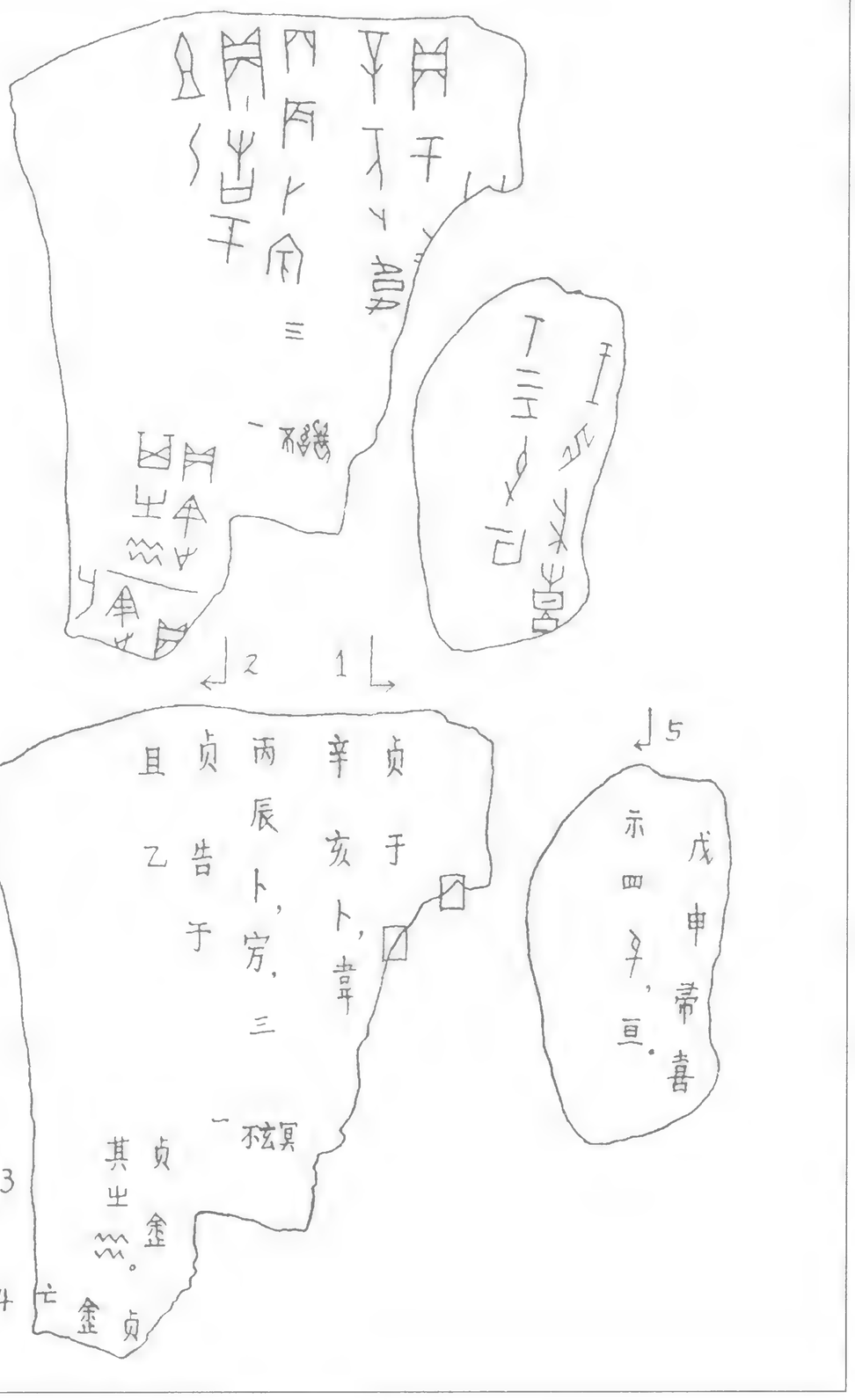
第3條卜辭之『大』，乃祖庚、祖甲時貞人名，據此知本片為祖庚、祖甲時所卜。唐即大乙湯，是商代開國的先王。酒為祭祀之名。

第八片：龜腹甲（圖見八九頁）。

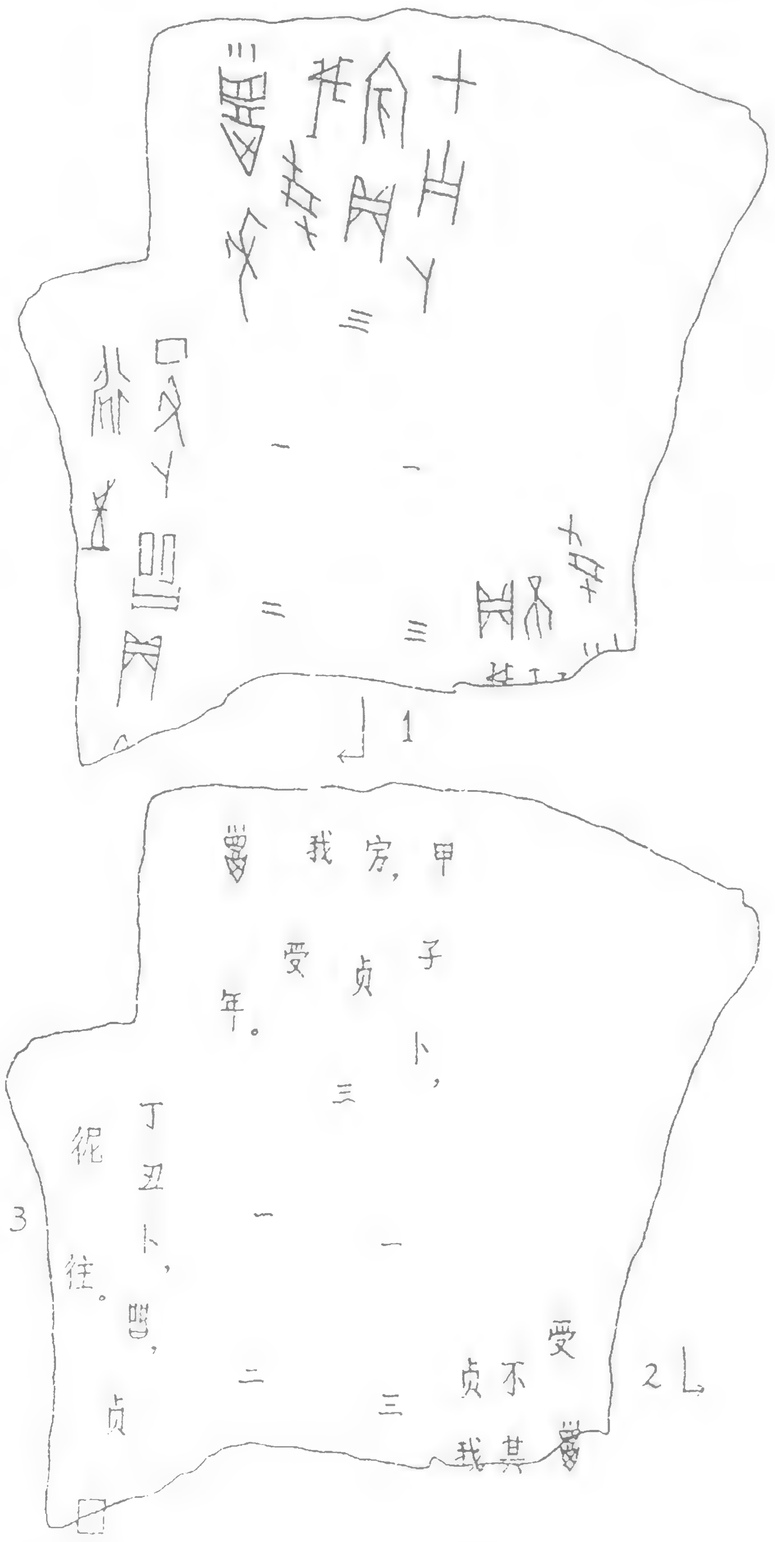
第1條卜辭之[illegible]字，隸定為[illegible]。[illegible]字，葉玉森釋為斷字。注十三在卜辭中用為地名。《殷墟文字乙編》一四一〇『乎它[illegible]丘』、《戰後南北所見甲骨録》坊間五·四四『十月在[illegible]』等可證。

第2條卜辭僅殘存『癸巳[illegible]出祖辛[illegible]』五字。

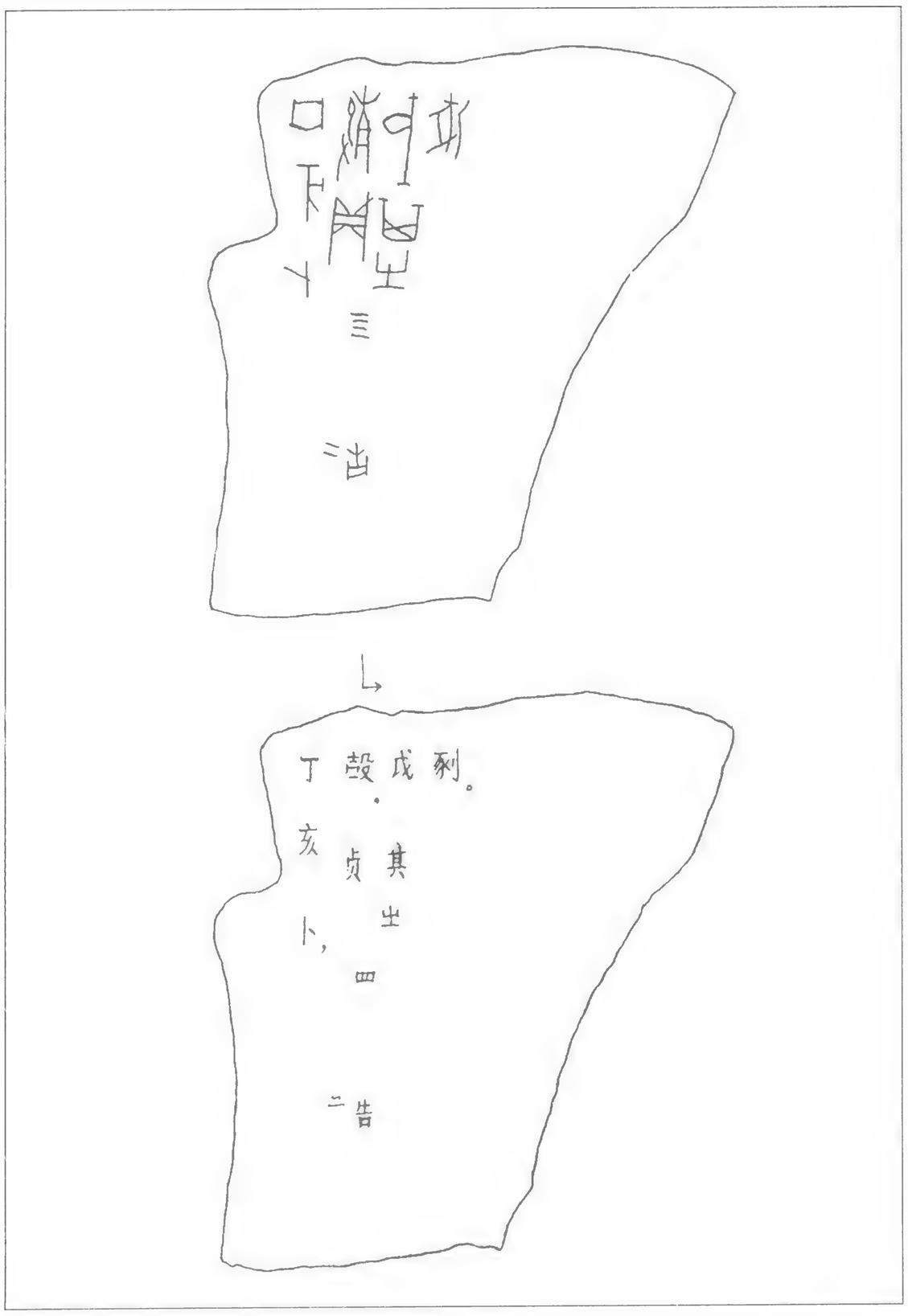
第九片：龜腹甲（圖見九〇、九一頁）。

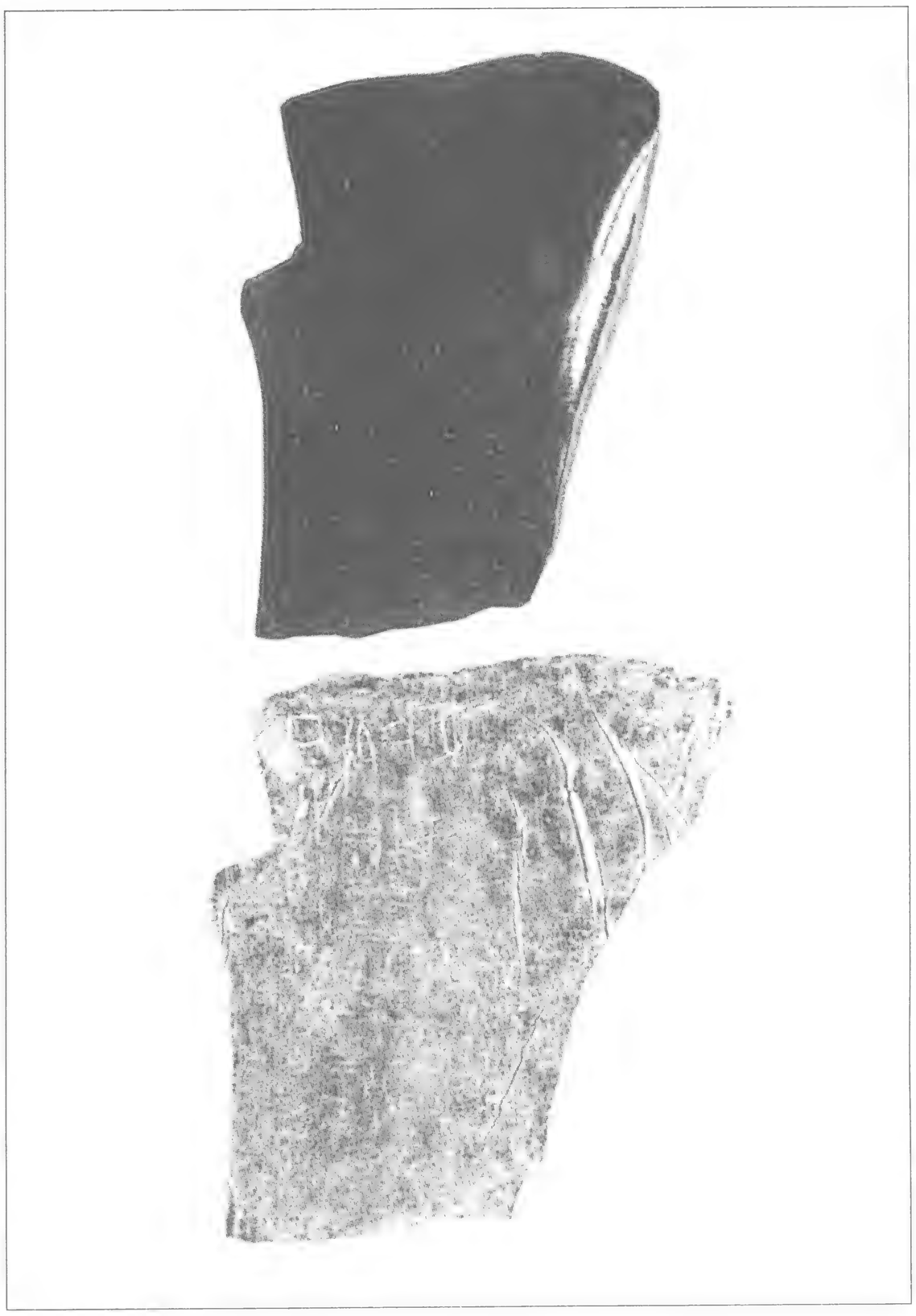

貞于
辛亥卜，韋
貞
丙辰卜，宂，三
貞
告于
且乙
貞于
戊申帝𠂤
示四羊，亘。
貞
其𡆥。
貞
𡆥
貞
𡆥
1
2
3
4
5

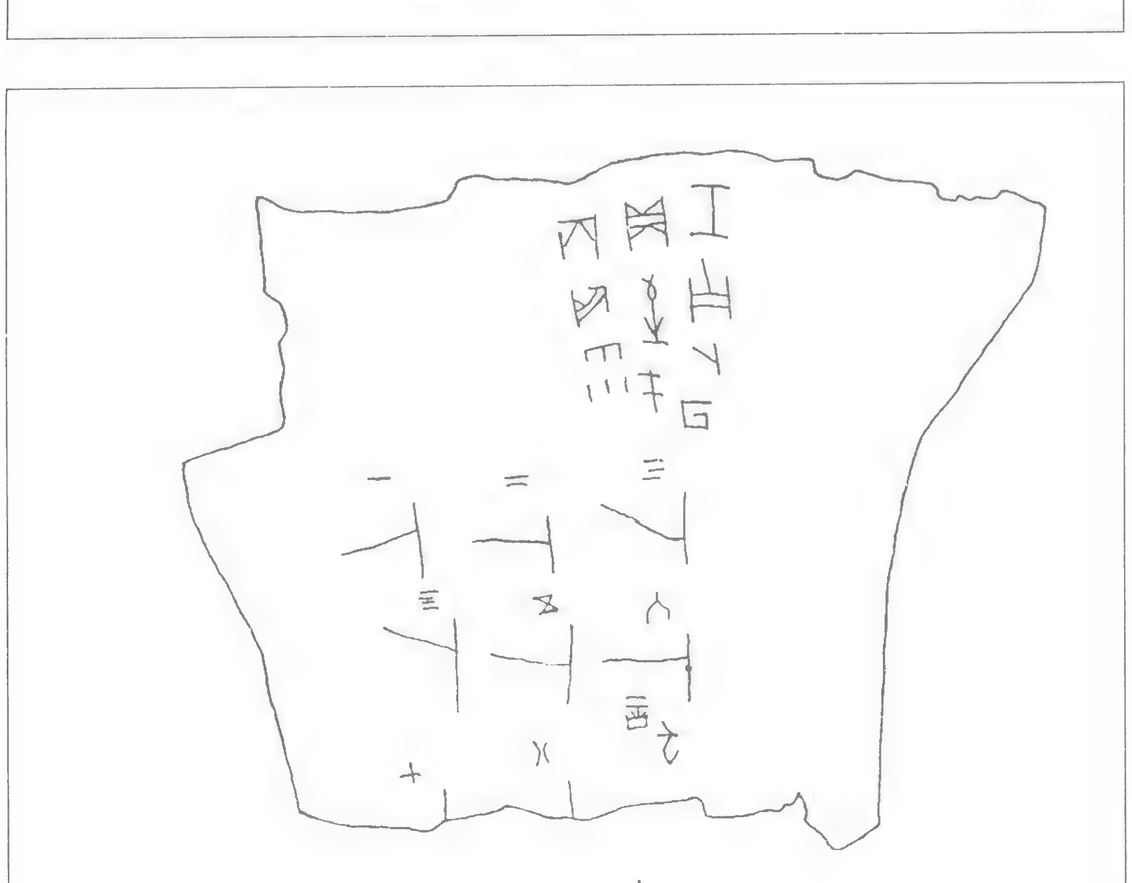



貞
我宂，甲
受
貞
子
年。
卜，
三
丁丑卜，㞢，
祀
往。
貞
受
貞
不
其
我
2
3

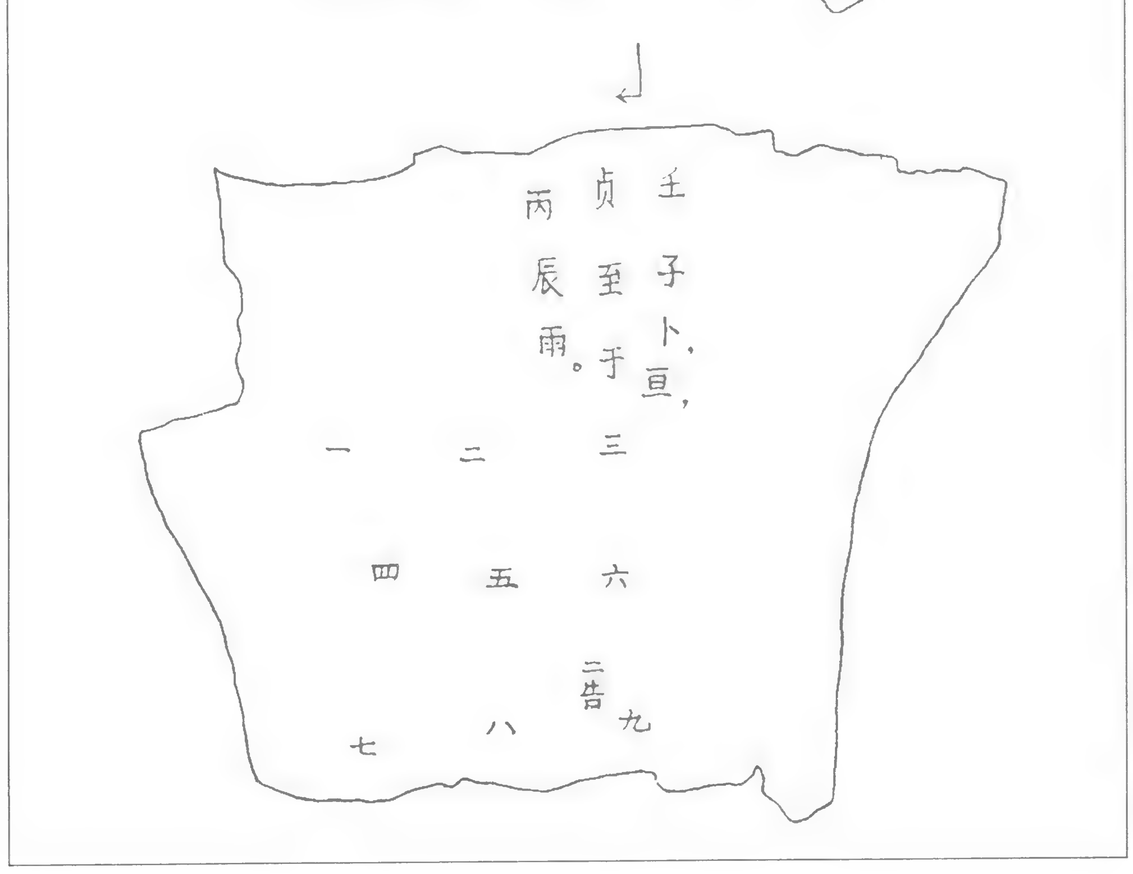


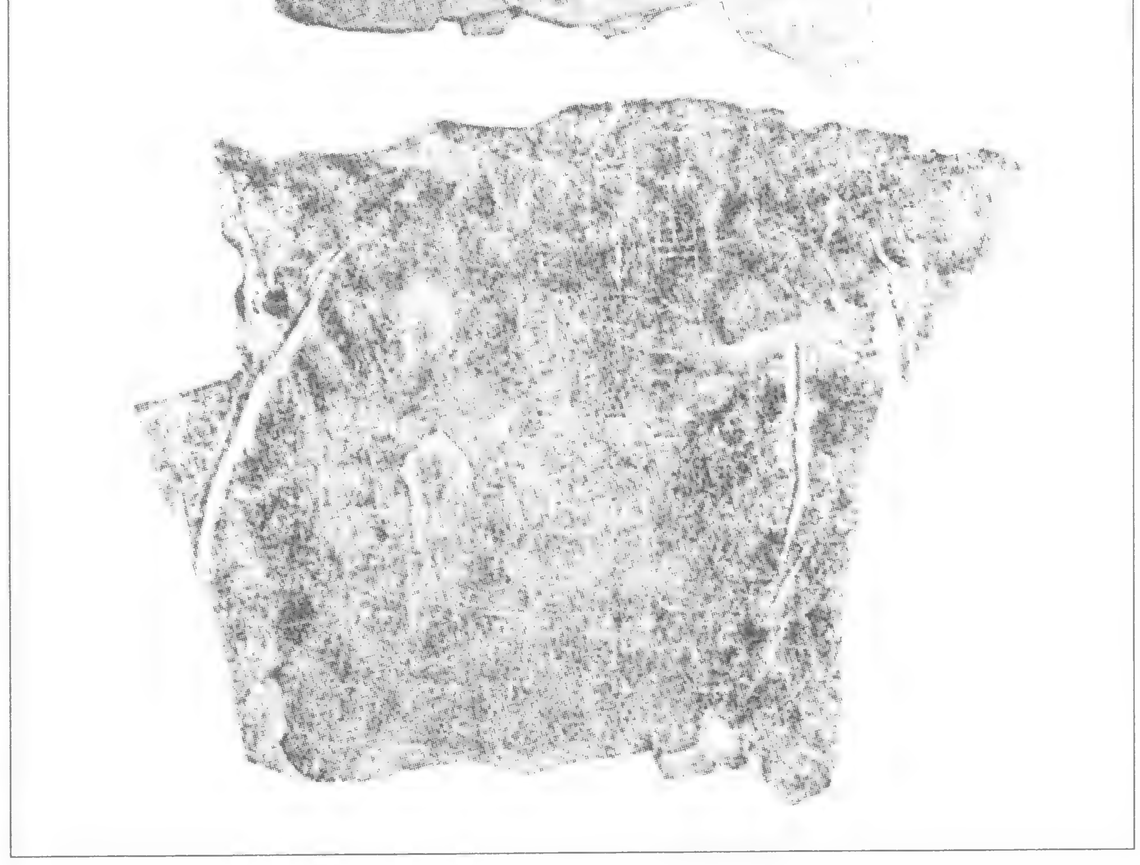


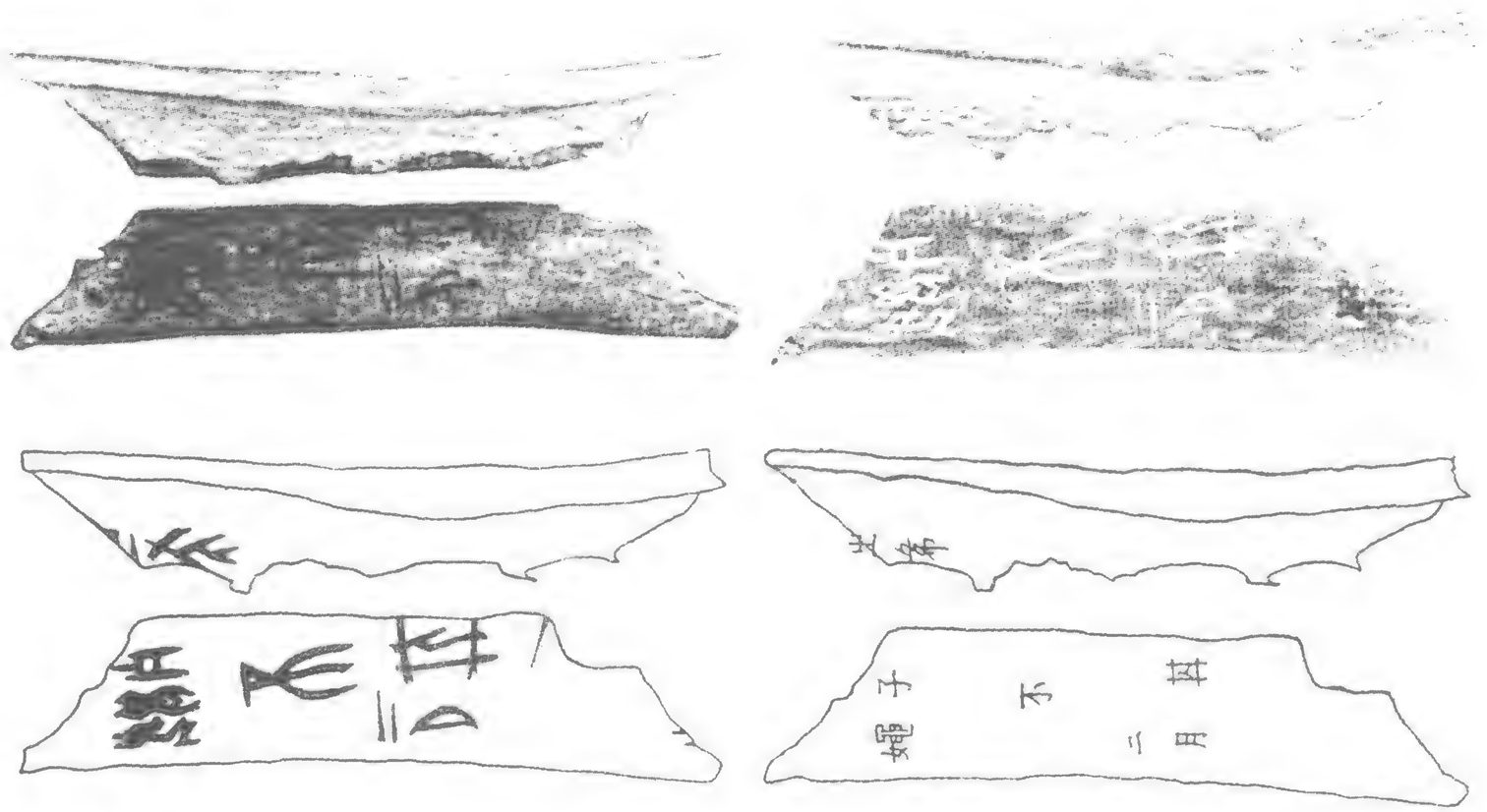


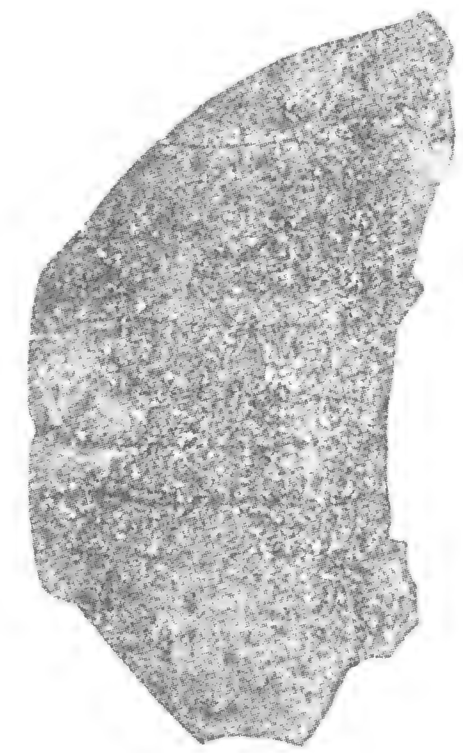




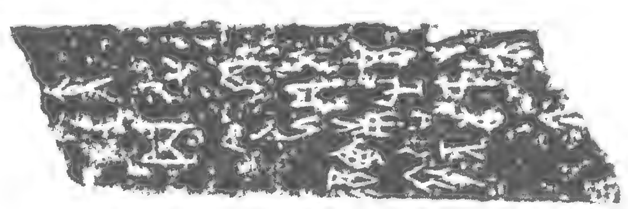




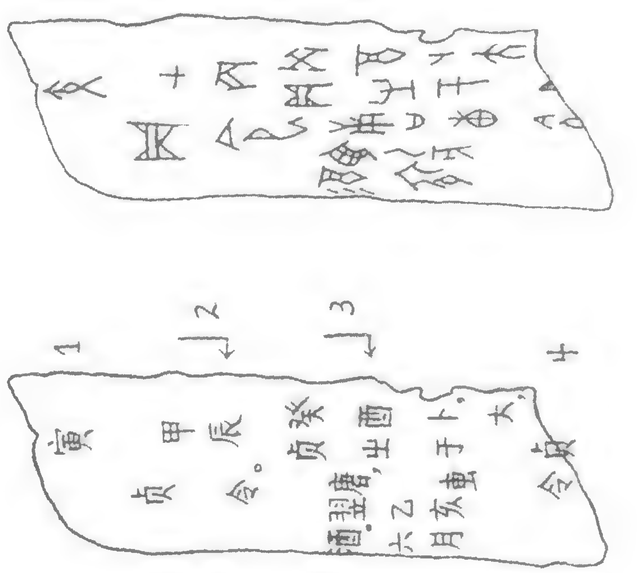


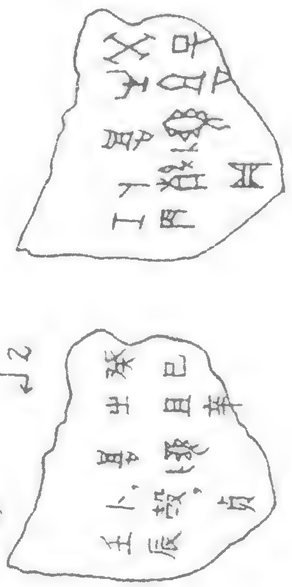


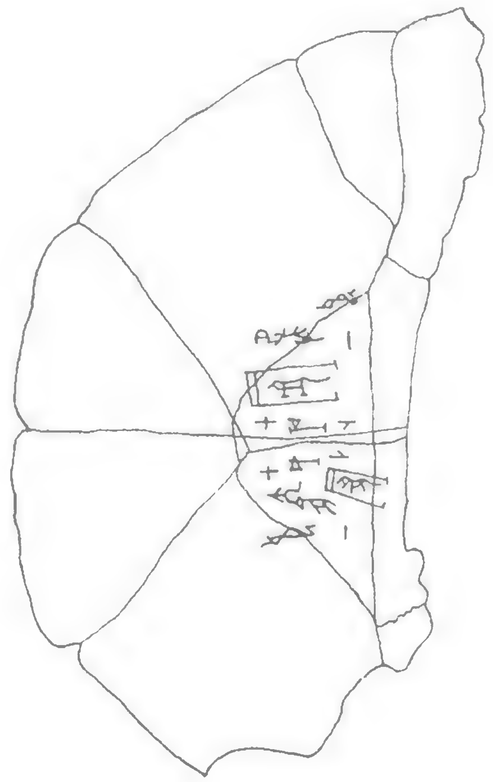


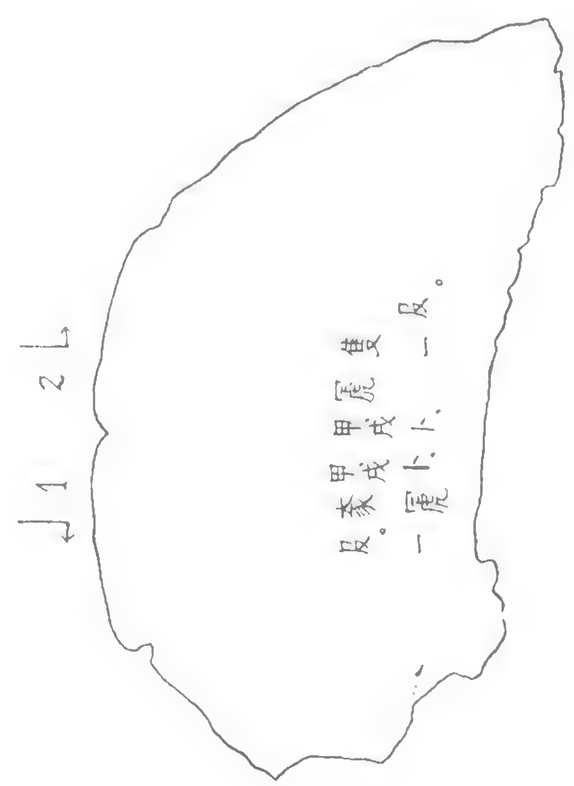


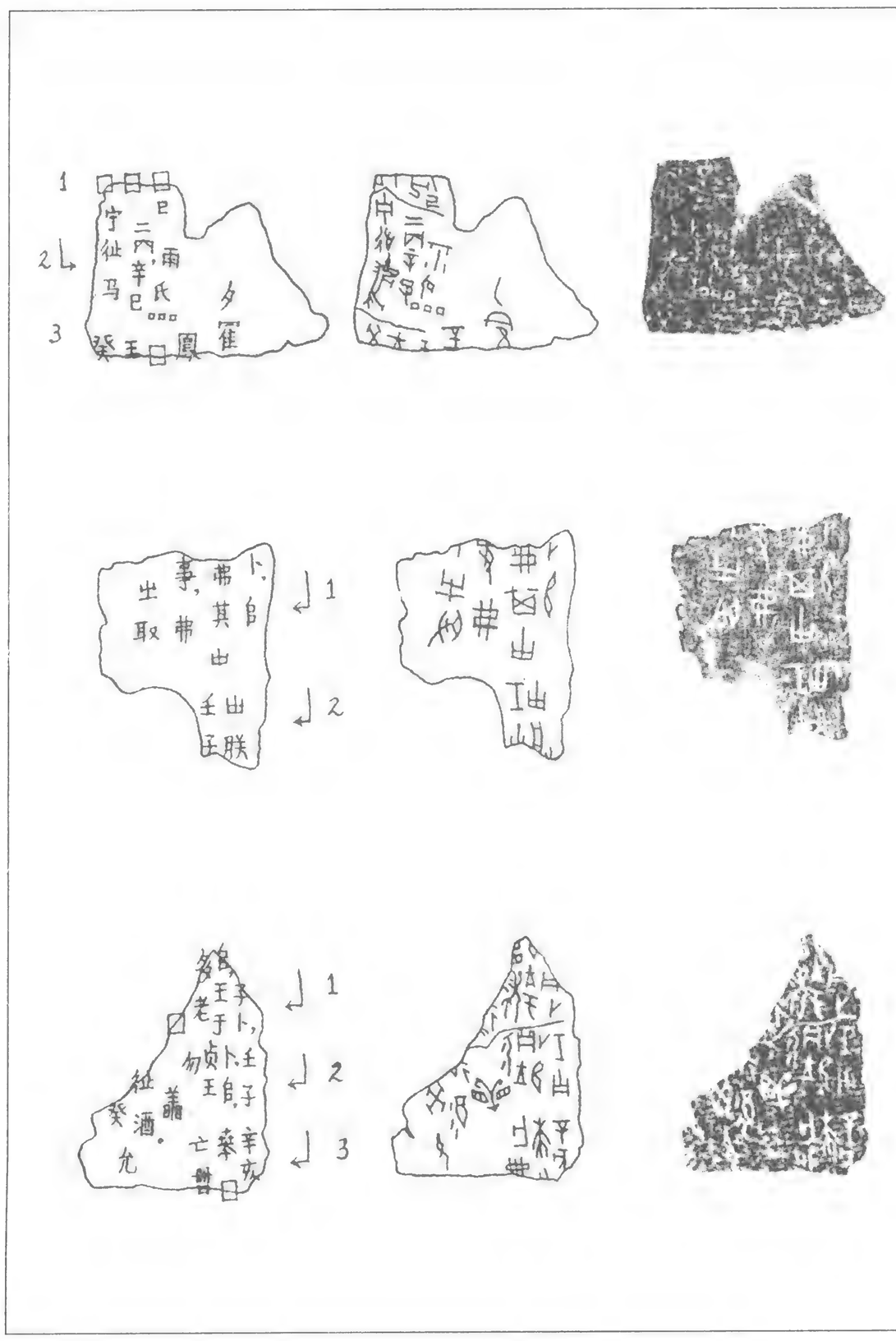



1
2
3
4
貞 甲 辰
今。貞 𡆥
[illegible]，出 酉
六乙
月 [illegible] 重 [illegible] 卜，大
今 [illegible]


1
2
[illegible] 出 [illegible]
[illegible] 且 巳
[illegible] 貞




1
2
及 [illegible] 甲 [illegible] 雇 [illegible]
。[illegible] 戌 [illegible]
一 [illegible] 卜，一 [illegible]。



兩條卜辭皆已殘了。第1條卜辭之參為人名，是武丁時的武官。寬字即《說文解字》的冢字，即今蒙字。艮讀為俘。注十四這是有關從戰爭中獲取戰俘的卜辭。同樣事類的卜辭，如《庫方二氏藏甲骨卜辭》三六三『參隻』、《殷虛文字乙編》三一二七『貞奉帚其隻』、《甲骨續存》上七六三『□辰□，奉寬不其隻』等。

第十片：龜腹甲（圖見下頁）。

第1條卜辭甚殘，僅可看清一個己字。

第2條卜辭之宁為人名。冂字，或釋為丙。卜辭常見『馬若干丙』。例如，《殷墟書契續編》一、二九、四『馬卅丙』等。于省吾謂，丙『應讀為匹，丙、匹雙聲。』注十五氏讀為致注十六□□□乃雹之象形字。

第3條卜辭亦殘了。風讀為風。霍字，郭沫若謂：『冢字之異，今作蒙，蓋借為零和霧。』注十七

第十一片：龜腹甲（圖見下頁）。

第1條卜辭，事字上面當殘了朕字。第2條卜辭，朕字下面當殘了事字。由即叶字。『叶朕事』猶言『叶王事』，郭沫若謂，『殆勤勞王事之意。』注十八『叶朕事』與『叶王事』乃武丁時卜辭常見之成語。旨為貞人名。取為祭名。注十九

第十二片：龜腹甲（圖見下頁）。

第1條卜辭之多老『乃主祭祀之職者。注二十亦見於《殷墟書契前編》七·三五·二『癸卯卜，㞢，貞乎多老口口。王固曰，其出雨？丙午亦雨多。貞勿乎多老舞口』等。

注釋

一、王襄：《簠室題跋》，《河北第一博物院半月刊（畫報）》第三十二期，一九三三年一月十日；又《河北博物院畫刊》第八十五期，一九三五年三月二十五日。陳夢家：《殷虛卜辭綜述》六四八頁曾作徵引。

二、一九五五年稿本，未刊。

三、見本文第五片。

四、一九五七年稿本，未刊。

五、參見陳夢家：《殷虛卜辭綜述》六五六頁。

六、羅振玉：《殷墟書契考釋》增訂本中卷六七頁，一九二七年。

七、于省吾：《雙劍誃殷契駢枝》初編一—四頁，一九四〇年。

八、徐灝：《說文解字注箋》。

九、于省吾：《雙劍誃殷契駢枝》三編，一九四三年。

十、唐蘭：《殷虛文字記》，一九三四年。

十一、唐蘭：《天壤閣甲骨文存》考釋二十三頁，一九三九年。

十二、胡厚宣：《釋𢀛》，《甲骨學商史論叢》初集第四頁，一九四四年。

十三、葉玉森：《說契》，《學衡》三十一期，一九二四年。

十四、郭沫若：《卜辭通纂》考釋一六七頁，一九三三年。

十五、于省吾：《殷代交通工具和驛傳制度》，《吉林大學人文科學學報》一九五五年第二期。

十六、于省吾：《釋氏》，《雙劍誃殷契駢枝》初編，一九四〇年。

十七、郭沫若：《卜辭通纂》考釋八十五頁，一九三三年。

十八、郭沫若：《釋寇》，《甲骨文字研究》，一九六二年。

十九、郭沫若：《殷契萃編》考釋九頁，一九六五年。

二十、島邦男：《殷墟卜辭研究》四七三頁，一九五八年。

（原載《古文字研究》第八輯，中華書局，一九八三年）

记日本京都大学考古研究室所藏一片牛胛骨卜辞

胡厚宣

1981年2月，我曾以“中国考古学古代史学术代表团”的一员，访问日本。2月21日，我在京都先由贝塚茂树教授陪同，参观了京都大学人文科学研究所，后来又由樋口隆康教授和林巳奈夫教授陪同，参观京都大学文学部考古学研究室。在研究室的考古学博物馆里，看到在玻璃柜子里边，有正在陈列着的甲骨文字15片。回国以后，承博物馆的管理人员冈内三真先生寄赠甲骨照片一份（图版肆1、2）。考古学研究室共藏甲骨94片，除了无字的甲骨33片，伪刻的甲骨5片之外，有字的真骨共计56片（见松丸道雄《日本散见甲骨文字蒐汇》、四，刊《甲骨学》第10号，1964年日本东京甲骨学会出版）。这份照片，系从56片甲骨中选照的重要的24片。其中有牛胛骨卜辞一片，正反两面都有文字，而且文字正反两面相接，具有非常重要的内容。

这片牛胛骨卜辞，最初原系刘鹗旧藏（见刘鹗《铁云藏龟》第3册第127叶第1片，1903年自印出版）。后归罗振玉（见郭沫若《卜辞通纂》自序及别录之二，《日本所藏甲骨择尤》十一，《京都帝国大学藏甲骨零片》释文，1933年日本文求堂出版，1977年日本朋友书店重印，1983年科学出版社修订再版）。罗振玉于1915年4月14日寄赠京都大学文学部考古学研究室（见松丸道雄《日本散见甲骨文字蒐汇》四），研究室保存以迄于今。

这片牛胛骨卜辞，最早在1903年著录于刘鹗的《铁云藏龟》第3册第127页第1片。1922年又著录于京都大学的《京都帝国大学文学部陈列馆考古图录》图版42。1933年又著录于郭沫若的《卜辞通纂》别录之二，《日本所藏甲骨择尤》十一《京都帝国大学藏甲骨》第1片。1940年又著录于梅原末治的《河南安阳遗宝》图版第二《京都帝国大学文学部陈列馆藏》《贞卜兽骨片》第1片。（日本小林出版部发行）1963年又著录于京都大学的《京都大学文学部博物馆考古资料目录》第三部。1964年又著录于松丸道雄的《日本散见甲骨文字蒐汇》四第387，388片。1975年又著录于严一萍的《铁云藏龟新编》第663，664页（台北艺文印书馆出版）。1979年又著录于郭沫若主编胡厚宣总编辑的《甲骨文合集》第5册第13926片（中华书局出版）。1984年又著录于严一萍的《商周甲骨文总集》（台北艺文印书馆出版）。

《铁云藏龟》《甲骨文合集》和《商周甲骨文总集》著录的是拓本；《京都大学考古图录》《京都大学考古资料目录》和《河南安阳遗宝》著录的是照片；《铁云藏龟新编》著录的，则拓本、照片和摹本三者全有。可惜的是各家都只著录了甲骨正面的卜辞，遗漏了反面还有相接的文字。

唯独松丸道雄《日本散见甲骨文文字蒐汇》所著录，虽然只是摹本，但他依照原骨摹录，大小不差，而且摹了正反两面的卜辞，这是比较已往显然优越的地方。

但是松丸道雄所摹，仍然还有美中不足之处，即反面甲申的“申”字，摹成了“丑”字。根据这次冈内三真先生寄来的甲骨照片来看，甲申的“申”字，还是比较清楚，可以辨认得出来。如果把它摹成“丑”字，那么六十干支根本没有甲丑，这就不好讲得通了

辛丑卜，㱿，贞帚好㞢子。二月。

（反面）王固曰吉，𠂤。

辛丑卜，亘，贞王固曰好其㞢子，𠂤。（通别二，3　珠620　合集94）

□丑卜，㱿，贞帚好㞢子。二（武汉市文物商店　合集13928）

□辰卜，㱿，贞帚好㞢子。（南京博物院　合集13930）

帚好㞢子。四月。

帚好女（毋）其㞢子。（北京图书馆　合集13927）

帚好㞢子。（北京图书馆　合集13929）

以上“辛丑卜”1、2两辞，或言“王固曰吉，𠂤”，或言“王固曰好其㞢子，𠂤。”𠂤即御，御者郭沫若以为“当如《月令》仲春之月，后妃帅九嫔御之御。”（《卜辞通纂》别录之二日本所《藏甲骨择尤》三《中村兽骨》释文）。我则以为御者，当如卜辞称“王曰丝卜御”（虚119）“王占曰吉丝御”（前2.38.6）　前2.39.6之御，御同用，其义为灵验，为施行。（见胡厚宣《释丝用丝御》，刊《历史语言研究所集刊8本4分，1939年）。

武丁时占卜妇好有子的卜辞虽多，但在占辞中系以某日不吉某日亦不吉某日吉之辞的，则以京都大学考古学研究室所藏的这一片为仅见，所以我才说这是一片非常重要的卜辞。

妇好者，殷王武丁的配偶，在卜辞中所表现的，她非常有为。自从1976年中国社会科学院考古研究所在殷墟小屯村西北发现妇好墓以后，妇好这一人物，就成了考古学者古文字学者和古史学者所热烈讨论的问题之一。因而特将这一片牛胛骨卜辞揭示出来，并略加注释，以供学者讨论之参考，并以谢日本京都大学冈内三真先生之雅意！

（原載《考古與文物》1985年第6期）

现据冈内三真先生寄来的照片来看，牛胛骨的正面，除了几个残辞的文字之外，完整的卜辞有两条：

庚子卜，㱿、贞帚好㞢子。三月。二

辛丑卜，㱿、贞兄于女庚。　三

由贞人㱿和字体看来，此骨是殷王武丁时所卜。庚子和辛丑两日相连。第1辞说，三月庚子日占卜，贞人㱿问卦，问武丁的配偶妇好是否会有孩子。帚即妇，㞢即有。“二”指第二卜，还应有一片第“一”卜，卜辞刻在另外一块骨头上。第2辞说，庚子的第五日辛丑日占卜，仍然是贞人㱿问卦，问要祝祭武丁的母亲小乙的配偶妣庚好么？兄即祝，祭名。女读作母。因为妣庚是小乙的配偶武丁的母亲，所以称为母庚。“三”指第三卜，另外还应有第“一”“二”卜，卜辞刻在别的骨头上边。

牛胛骨的反面，是记的王占之辞（见胡厚宣：《甲骨学绪论》，收入《甲骨学商史论丛》续集第2册，1945年。又《甲骨学提纲》，刊上海《大公报》天津《进步日报》《文史周刊》第13期，1947年）。就占辞所刻的部位看来，应该与正面的庚子一辞相接。是庚子卜辞的占辞部分。占辞说：

王固曰，其□□。其隹丙不吉，其隹戊亦不吉，其隹甲申吉。

固即占，《说文》，“占视兆问也”。隹读作唯。第一个“其”字后面有缺文，疑是“㞢子”二字。郭沫若说，“帚好有子卜生育也”。（《卜辞通纂》别录之二《日本所藏甲骨文择尤》三《中村兽骨》释文）。正面第一辞先说，三月庚子日占卜，贞人㱿，问殷王武丁的配偶妇好是否有子。反面的占辞接着说，庚子日既卜之后，殷王武丁观察了卜兆，最后决定说，妇好是会有子的；如果在庚子占卜的第七日丙午有子，就不吉；如果在第三十五日甲戌有子，亦不吉，如果在第四十五日甲申有子，就吉利。“有子”依照郭沫若的解释，意思就是生子。

武丁时占卜配偶妇好有子的卜辞还有：



图　一

1.1903年刘鹗《铁云藏龟》著录的拓本　2.1933年郭沫若《卜辞通纂》著录的照片　3.1944年松丸道雄《日本散见甲骨文字觅汇》著录的摹本正面　4.同上反面

记香港大会堂美术博物馆所藏一片牛胛骨卜辞

胡厚宣

1983年9月，我去香港中文大学参加国际中国古文字研讨会，会后承中文大学邀请，留学校两周，在中文大学研究院和中国文化研究所，分别作报告两次，并参观了在香港几个单位所藏的甲骨文。

香港收藏的甲骨文字，共有四批。第一批为中文大学联合书院图书馆所藏，原系东莞邓尔雅氏旧物，1969年由其家属捐赠于图书馆。甲骨全部共计56片，李棪教授曾选出45片，发表于所撰《联合书院图书馆新获东莞邓氏甲骨简介》一文，刊《联合书院学报》第7期（1969年）。第二批为中文大学中国文化研究所文物陈列室收藏，本为李棪教授在英国所得，捐赠于中国文化研究所。饶宗颐教授《海外甲骨录遗》一文，曾著录《棪斋所藏甲骨》33片，刊香港大学《东方文化》4卷1、2期（1961年）。中国文化研究所现存26片。第三批为香港大学冯平山博物馆所藏，原为王懿荣旧藏，后归王绪祖，再归谢午生，又归李玄伯，最后由董作宾先生介绍归此。摹本曾著录在拙编《战后平津新获甲骨集》第1册（1946年），拓本曾著录在拙编《甲骨续存》上编（1955年），照片曾著录在饶宗颐教授《欧美亚所见甲骨录存》一文，刊《南洋大学学报》第4期（1970年）。第四批，则为香港大会堂美术博物馆所藏的1片。此片牛胛骨，原为香港大学所藏，今归香港大会堂的美术陈列馆。饶宗颐教授在《历代贞卜人物通考》一书的352页，曾略微提及，其后则以照片著录在《欧美亚所见甲骨录存》的第200片。

四批甲骨，除联合书院图书馆所藏多小片之外，以冯平山博物馆所藏的一批为最精，其次中国文化研究所所藏的一批，亦多精品，香港大会堂美术博物馆所藏虽然只有一片，但有一条卜辞则甚为重要，可惜《欧美亚所见甲骨录存》第200片所著录的照片，虽然较原骨放大约五分之一，但文字仍然不甚清晰，故不为学者所注意。这次我在香港承李棪教授之美意，以原骨拓本相赠，拓本为冯文湛氏所制，甚为清晰精美，愿公之学人，以供进一步研究之参考。

香港大会堂美术博物馆收藏的这一片牛胛骨卜辞（图一），由拓本对照照片看来，除了卜旬的三条卜辞说：

癸酉卜，宾，贞旬亡祸。二　不玄冥

癸未卜，宾，贞旬亡祸。　不玄冥

癸巳卜，宾，贞旬亡祸。二

之外，还有一条占卜“王勿立中”的卜辞说：

己亥卜，争，贞王勿立中。一

“一”者，意思指这是第一卜。他书另有卜辞说：

己亥卜，争，贞王勿立中。二（虚2340　合集7367）（图二）。

己亥卜，争，贞王勿立中。三（粹1218京1607　合集　7368）

“二”“三”者，意思是第二卜第三卜，三辞同文，一、二、三卜正好是一套。有了这一条卜辞一二三卜同文一套，才能配齐，所以说这一条卜辞非常重要。

卜辞中又有占卜“王立中”之辞者，如说：

□□卜，争，贞王立中。（京人972　合集7365）

□□□，争，贞王立中。（簠杂73续5，15，7　合集7366）

两辞亦系同文，兆序已经残去，想来也是一套共有几卜之辞。此两辞言“王立中”，与前三辞言“王勿立中”，是占卜的正反两面。

卜辞中还有占卜王立中若者，如说：

庚寅卜，永，贞王宙（唯）中立若。十一月。王占曰吉。二（前7，22，1　合集7364）

庚寅卜，永，贞王宙中立若。（南明221　虚后1677b　合集7363反）

辛卯卜，永，贞王宙中立若。　二（南明220　虚后1677a　合集7363反）

第2、3两辞为一骨之反正面，1、2两辞又为同日同人所卜，基本部分同文，1、3两辞又都是第二卜，1辞一骨与2、3辞一骨，当为一骨之折，不过中间有残缺，不能密合而已。“若”的意思是顺，这是占卜王若立中是否顺利。

以上这些卜辞，由贞卜的名字及其字体看来，知为殷王武丁时所卜。立中之事，有劳殷王武丁亲自从“立中”“勿立中”又立中是否顺利等几个方面再三的占卜，知其必为一种非常重要的典礼。

除了以上所举“王立中”、“王勿立中”、“王宙立中若”等类卜辞之外，关于“立中”的卜辞，还有很多，我另有专文论之，在这里就不细说了。

不过“立中”之事，到底是怎样的意思，则不妨先约略一谈。

1934年，唐兰先生曾作《释中沖》，说，“中本旂旗之类。”又说，“古者有大事，聚众于旷地，先建中焉。群众望见而趋附，群众来自四方，则建中之地为中央矣。”又说，“列众为陈，建中之酋长或贵族恒居中央，而群众左之右之，望见中之所在，即知为中央矣。”又说，“若为三军，则中军也。”（见所著《殷虚文字纪》，北京大学讲义本。）

其后董作宾先生作《台湾大学所藏甲骨文字考释》，说，“中是大旅”。又说，“殷代立中，当属于建大常一类。”（刊《考古人类学刊》第1期，1953年。）饶宗颐教授作《历代贞卜人物通考》，说，“中即指旗斿”。又说，“立中立斿，即建旗也”。（见原书352页，1959年。）日本白川静教授作《穆师》，也说，“立中即任命中军之元帅。”（刊《甲骨金文学论丛》三集64页，1955年。）大体说来，基本上都是本之唐说。



图一　香港大会堂美术博物馆所藏牛胛卜辞拓本

甲骨卜辭新獲

沈之瑜

本篇新獲材料共分二部份：（一）通過最近在滬的調查，得未經著錄的甲骨計二十六版。其中，包括經科學處理泥垢後，新發現文字的甲骨五版、補背文一版（背文不另編號，附於第26版甲骨綴誤例中）。（二）通過實物驗證學者綴誤甲骨七版。

新獲甲骨有不少大片，內容涉及氣象、王事、祭祀、農業、畋獵。第5片爲新綴合的牛胛骨，上版A爲卡內基博物館藏，摹本首見於《庫》1025片，拓片見於《合集》23148片，B、C未經著錄，一九八〇年七月，爲上海博物館收購。三版完全可綴合一體，綴合後的骨版共得十條完整的卜辭，五條決辭。此版中"幽勿牛"與"黃勿牛"對舉，爲前所未見，這一重要的卜辭發現，徹底解決了幾十年來學術界對此詞聚訟未決的問題，學者們多釋"勿牛"爲"物"，即雜色牛。"物"既爲雜色牛，那就不應在其前冠以形容詞"幽""黃"。可見，"勿牛"不應釋爲"物"，也非雜色牛，應是"犖"字。第2版，在乙巳日占卜"余一人"有無禍害。"余一人"爲殷王自稱，就序數分析，此事共占卜四次，殘存二辭，爲殷王所占自身有無禍害次數最多者。第11版記載了有關舉禾事，共刻有二辭，其中一辭"舉禾于河"，另一辭則是"舉禾于高祖"，這可進一步佐證"河"非殷之高祖。第10版是在壬午日占卜次日癸未天啓否？辭旁有驗辭"允啓"。第17版所載的迎獵地名呂，過去卜辭中未見，屬首次出現。

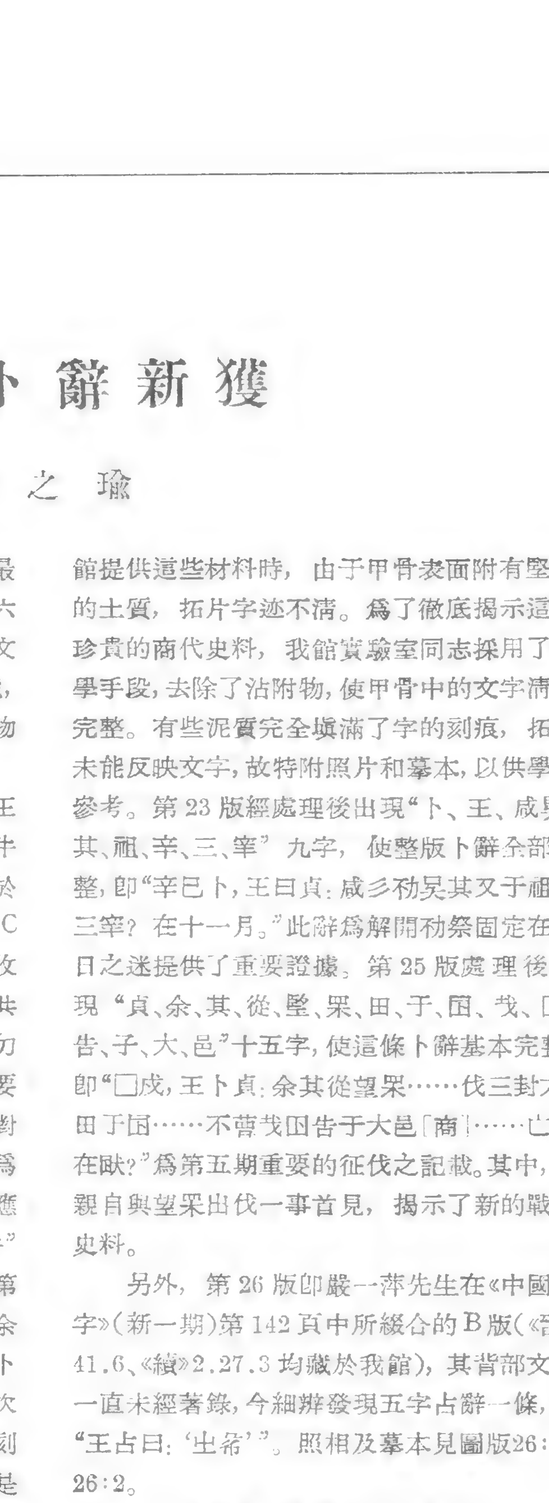
第21版至第25版分別著錄於《合集》10618、23472、22964、32702、36529。當年我館提供這些材料時，由于甲骨表面附有堅硬的土質，拓片字迹不清。爲了徹底揭示這些珍貴的商代史料，我館實驗室同志採用了科學手段，去除了沾附物，使甲骨中的文字清晰完整。有些泥質完全填滿了字的刻痕，拓片未能反映文字，故特附照片和摹本，以供學者參考。第23版經處理後出現"卜、王、咸昊、其、祖、辛、三、宰"九字，使整版卜辭全部完整，即"辛巳卜，王曰貞：咸彡礿昊其又于祖辛三宰？在十一月。"此辭爲解開礿祭固定在辛日之迷提供了重要證據。第25版處理後出現"貞、余、其、從、墾、粊、田、于、囲、戈、囚、告、子、大、邑"十五字，使這條卜辭基本完整，即"□戌，王卜貞：余其從望粊……伐三封方，田于囲……不雨戈囚告于大邑［商］……亡𡆥在𠂤？"爲第五期重要的征伐之記載。其中，王親自與望粊出伐一事首見，揭示了新的戰爭史料。

另外，第26版即嚴一萍先生在《中國文字》（新一期）第142頁中所綴合的B版（《戩》41.6、《續》2.27.3均藏於我館），其背部文字一直未經著錄，今細辨發現五字占辭一條，即"王占曰：'出希'"。照相及摹本見圖版26:1、26:2。

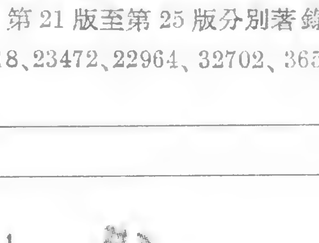
以上都是最近新發現的甲骨文字。

第26版至第32版爲糾正綴合之誤。筆者前曾在《戩壽堂所藏殷墟文字補正》一文附錄中，例舉六版綴誤，並作了簡要說明。後續有發現，現找出原骨，照相刊布，以便學者們驗視。並作說明如下：

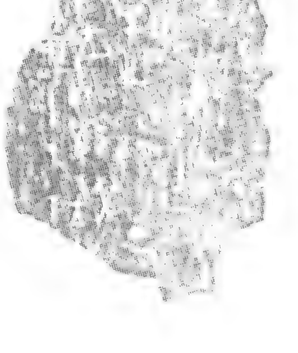
1



2



3



4

第26版爲嚴一萍先生據二龜腹甲拓片綴合，最早刊于他的《甲骨綴合新編》（第274片）中，後又于《中國文字》（新一期）中撰文重申他的這片綴合。事實上，A（《戩》39.9、《續》2.27.2）、B（《戩》41.6、《續》2.27.3）二版是不能綴合的，它們分屬二個不同的腹甲，由于二腹甲大小近似，故它們的殘片綴合很容易迷惑人。查驗實物A版正反塗朱，B版正反均不塗朱，二版色澤不一，背部鑽鑿錯位，無法吻合。圖26.1是實物的綴合情況，圖26.2據實物的摹本。

第27版即曾毅公先生的《甲骨綴合編》第255片。嚴一萍先生在《甲骨綴合新編·訂誤》中曾指出此版不能綴合，這是對的。由於他無法驗視實物，敘述難以確切具體，現據館藏實物作一必要的補充。甲（《戩》15.4、《續》4.16.4）爲左牛胛骨，卜兆均向左，乙（《戩》15.2、《續》4.18.3）爲右牛胛骨，卜兆均向右。甲、乙兩版背部的鑽鑿分別有間隔，據曾氏綴合，則背部灼痕左右相反，鑿痕增長，足證不能綴合。見圖27:1、27:2。

第28版即《甲骨綴合編》256片。甲（《戩》15.6、《續》4.15.5）爲左牛胛骨，卜兆向左，乙（《戩》18.4、《續》4.23.3）爲右牛胛右邊骨條，曾氏爲了重圓一個"戌"字，把乙片光滑的骨邊作爲殘邊與甲片綴合，二骨版的綴合處僅一小部份相接，綴合處骨面的卜辭不但在契刻上違例，就是連卜辭也無法通讀。因此，甲、乙二版無法綴合。見圖28:1、28:2。

第29版即《甲骨綴合編》104片。甲（《前》5.22.5）爲牛胛骨，不藏我館，乙（《戩》46.12、《續》6.8.6）爲龜腹甲，藏於我館，見圖29:1、29:2。曾氏將牛胛骨與龜腹甲相綴，顯然錯誤。

第30版即《甲骨綴合編》第115片。甲（《龜》71.1、《戩》12.6、《續》3.6.4、3.36.4）爲左牛胛骨，藏於我館，見圖30:1、30:2。甲版下端"其"字下有一段骨皮脫落的小骨，而著錄書中的四版拓片均未把這段小骨反映出來，因此，實際斷面並非如拓片所示。由於曾氏未能驗視實物，不了解"其"下還有一小段殘骨，而僅依據著錄中的拓片斷紋綴合，以致錯誤。

第31版即《甲骨綴合編》第156片。甲（《戩》37.15）爲左牛胛骨，卜兆向左，上端爲骨臼頂部，藏於我館，見圖31:1、31:2。乙（《戩》43.2）爲右牛胛骨。由于曾氏沒有注意到這二殘片是分屬二塊不同的牛胛骨，而只是把兩版內容、序數相仿的骨版湊合在一起，這樣不僅斷面無法密合，而且把乙版光滑的頂部，當作殘邊處置了。因此，這二版是不能綴合的。

第32版即《甲骨綴合編》第150片。甲（《續》6.9.6），不藏於我館，著錄拓片上部、左邊經修剪，右邊未拓全。乙（《戩》26.1、《續》5.29.5、6.20.6）爲右牛胛骨，卜兆向右，藏於我館，見圖32:1、32:2。曾氏綴合的摹本，在接合處作過密合修改，事實上這二版的殘邊並不相吻，且二版文字也無互補之處，因此，很難證明這是一版之折。



圖二《甲骨文合集》第7367片

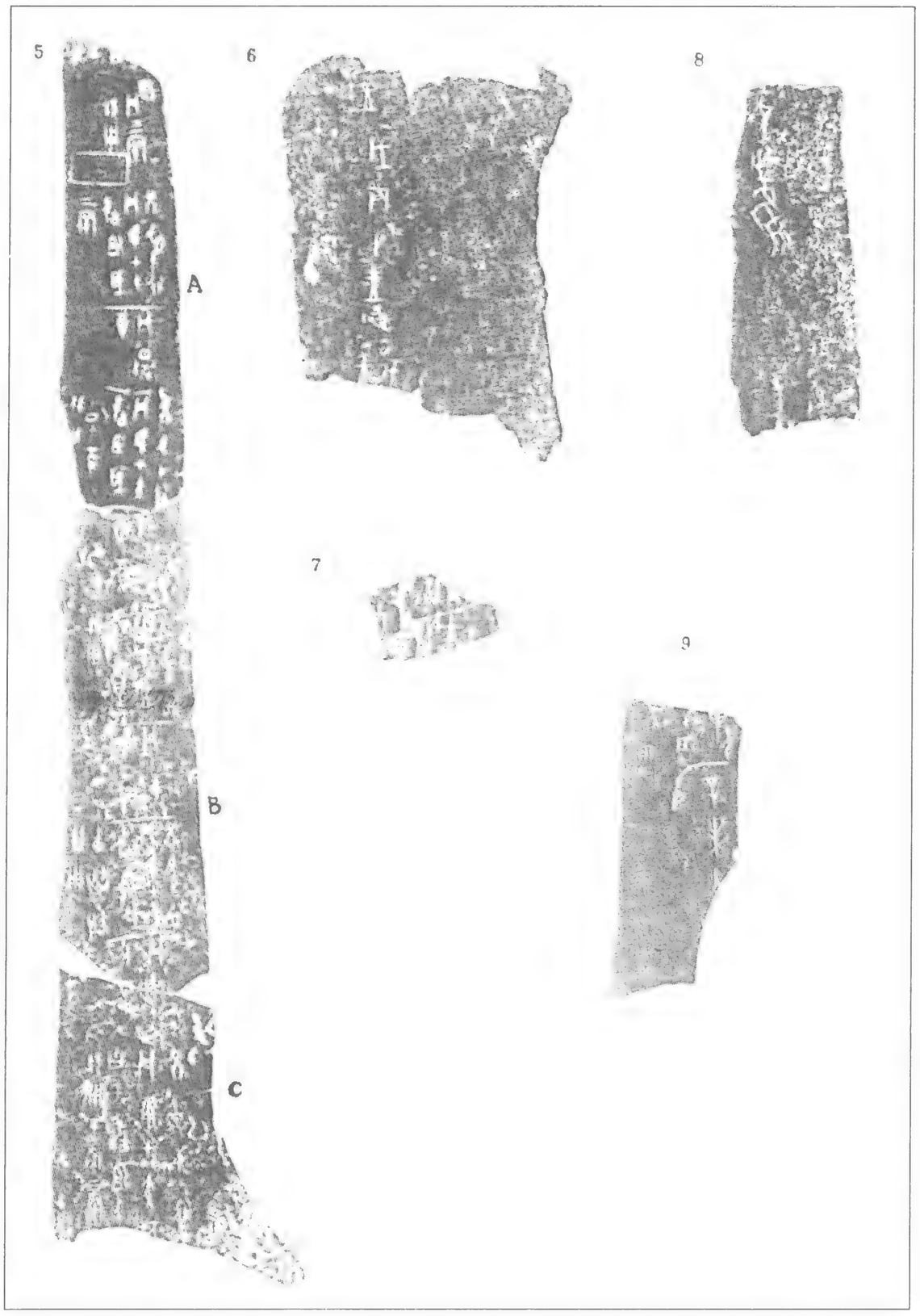
我1955年作《甲骨續存》序文，以甲骨卜辭言"立中"，又言"立𠂤"，又言"𠂤中"，而立中之占，又经常与征伐之卜辞同版，因即略举拙文大意说，"立中者，当为军事驻扎，武装垦殖，或者是原始氏族社会立旗圈地开辟疆土的孑遗（原书序文第5页）"。

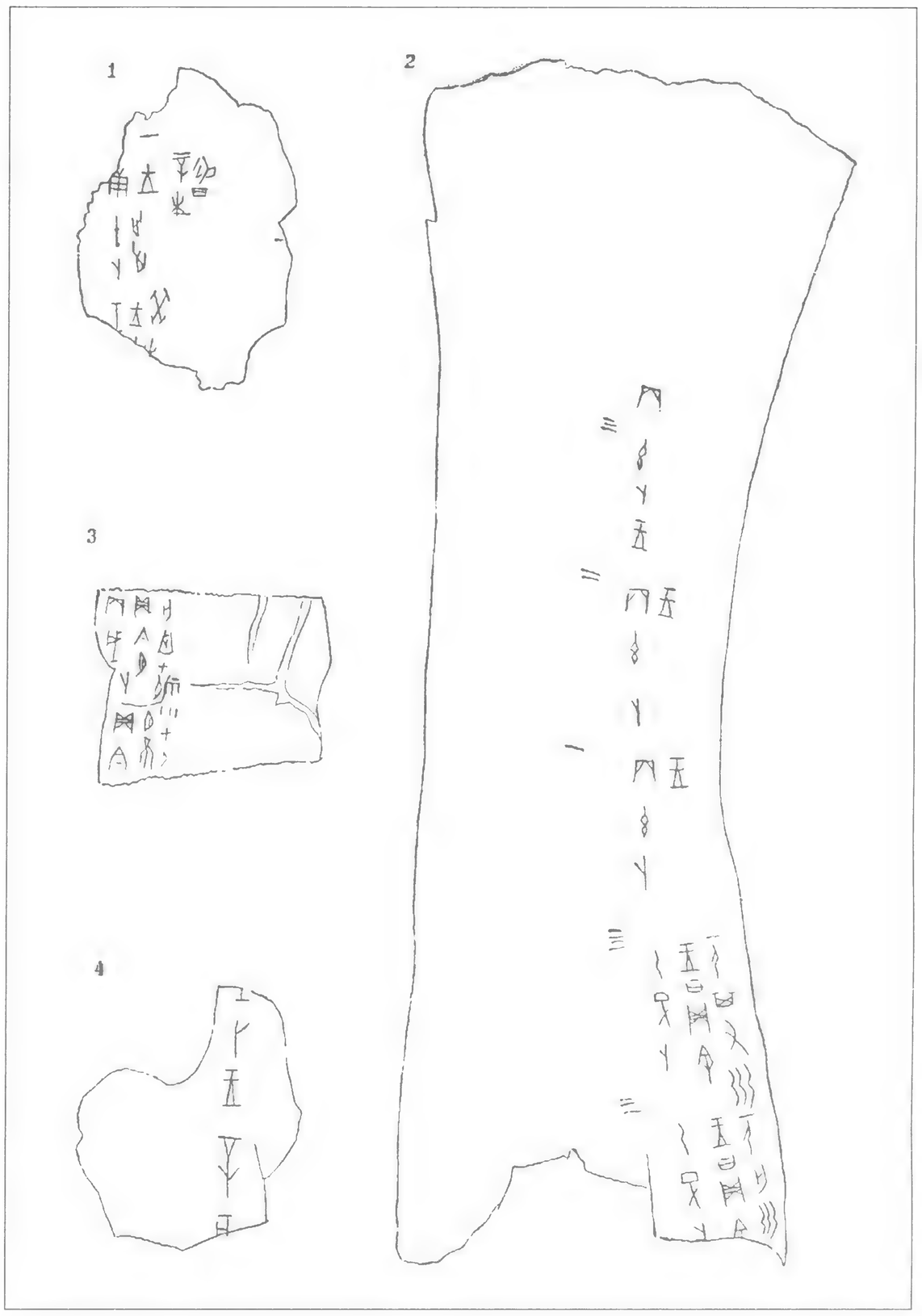
至于所举"立中于北土"一辞，"立中"应释"立史"，1956年经白川静教授指出，（见所著评介《胡厚宣氏编集甲骨续存》，刊《古代学》5卷1期，1956年。）我当即改过，写成《殷代的史官》一文，最近又写《殷代的史为武官说》，刊《全国商史学术讨论会论文集》（1985年出版）。

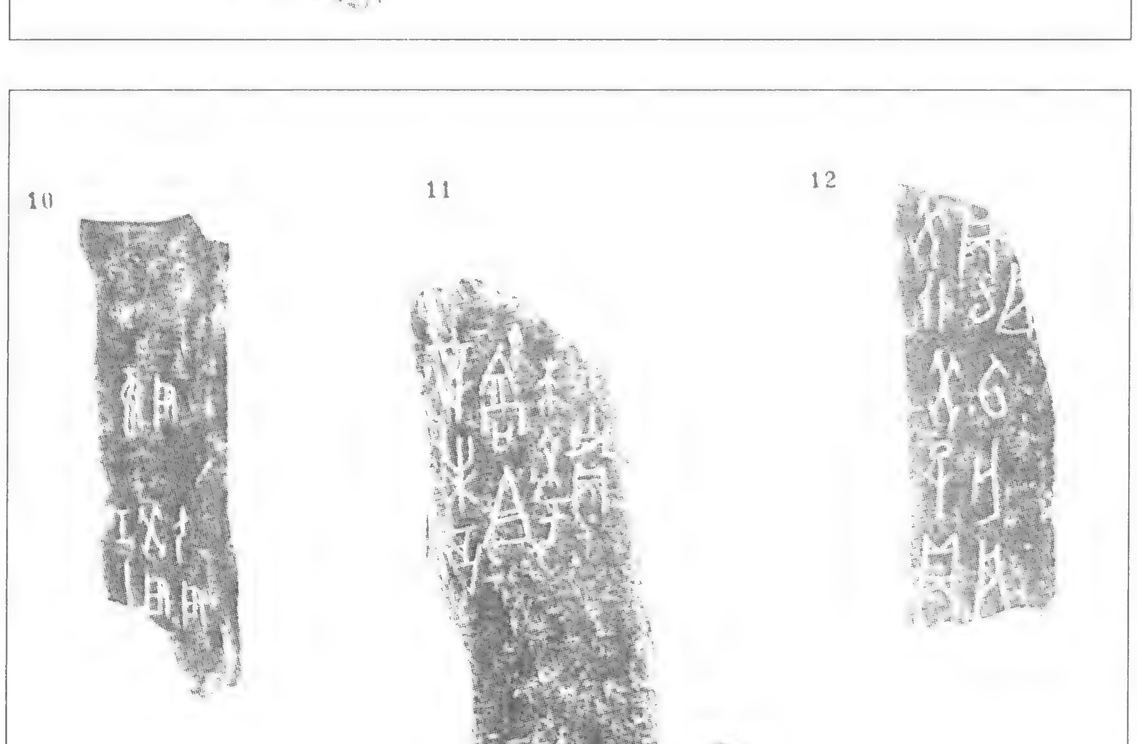
以中字为"立旗为表，以度日晷"，以我所知，始于姜亮夫教授《释中》（收入所著《文字横识》，1946年。）。1975年12月，我应邀去天津参加中国天文学史成果审查会议，12月23日在会上我曾报告这一学说，当时引起大家兴趣，都要我写成文章。会后回到北京，1976年1月20日北京天文馆郑文光同志来到我家，仍希望能早日看到我的论文。1月21日他还写信向我要了一些有关中和立中的材料。

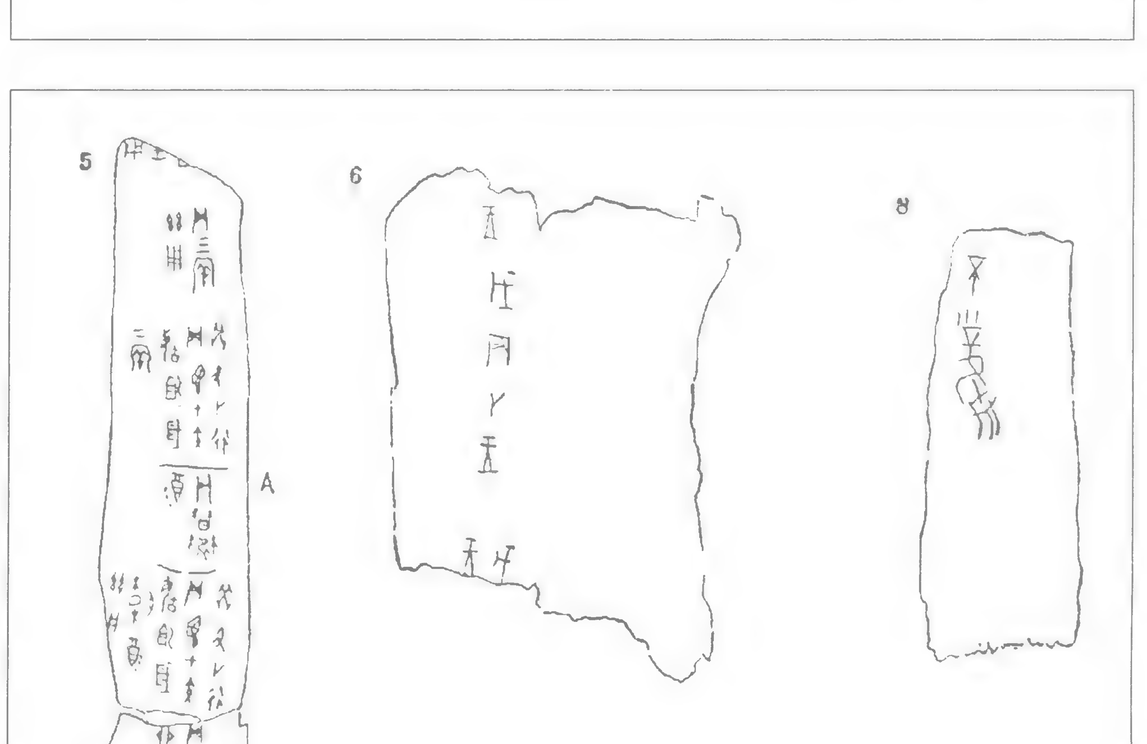
1983年，我所肖良琼同志写成了《卜辞中的立中与商代的圭表测景》一文，发表在《科技史文集》10辑，承她送我一本，我读后很高兴。但她不曾引用香港大会堂美术博物馆的这一条非常重要的材料，我们编辑的《甲骨文合集》也没有收录这一片牛胛骨，因而写此短文，作为一点补充，并提供学者研究之参考。

（原載《中原文物》1986年第1期）

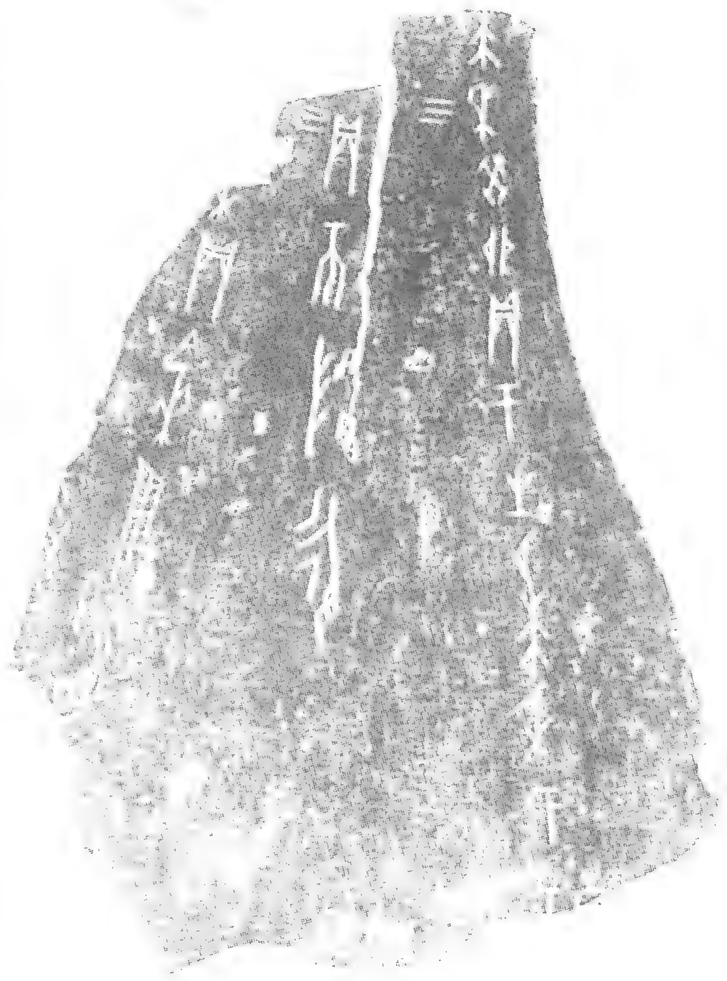

5
A
B
C
6
7
8
9


1
2
3
4


10
11
12
13
14


5
A
B
C
6
7
8
9

15



16



17



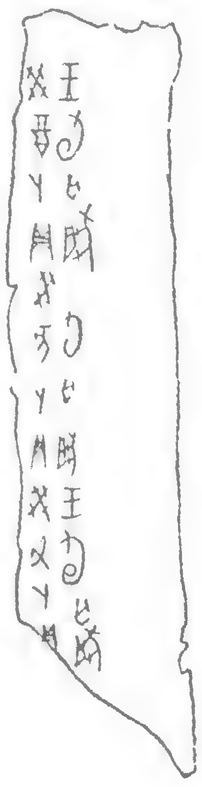
18



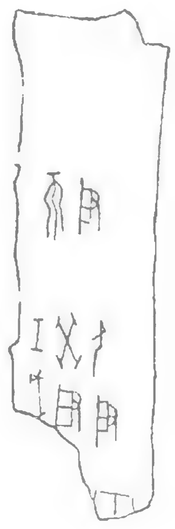
19



20



10



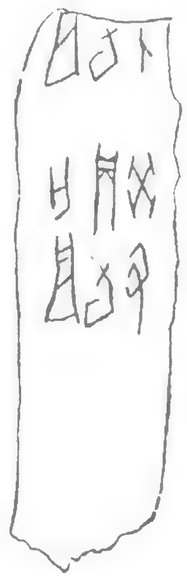
11



12



13



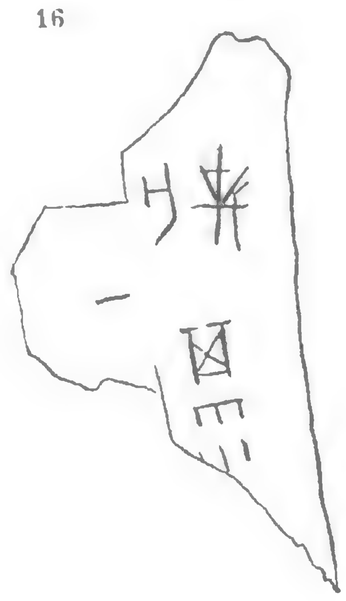
14



15



16



18



17



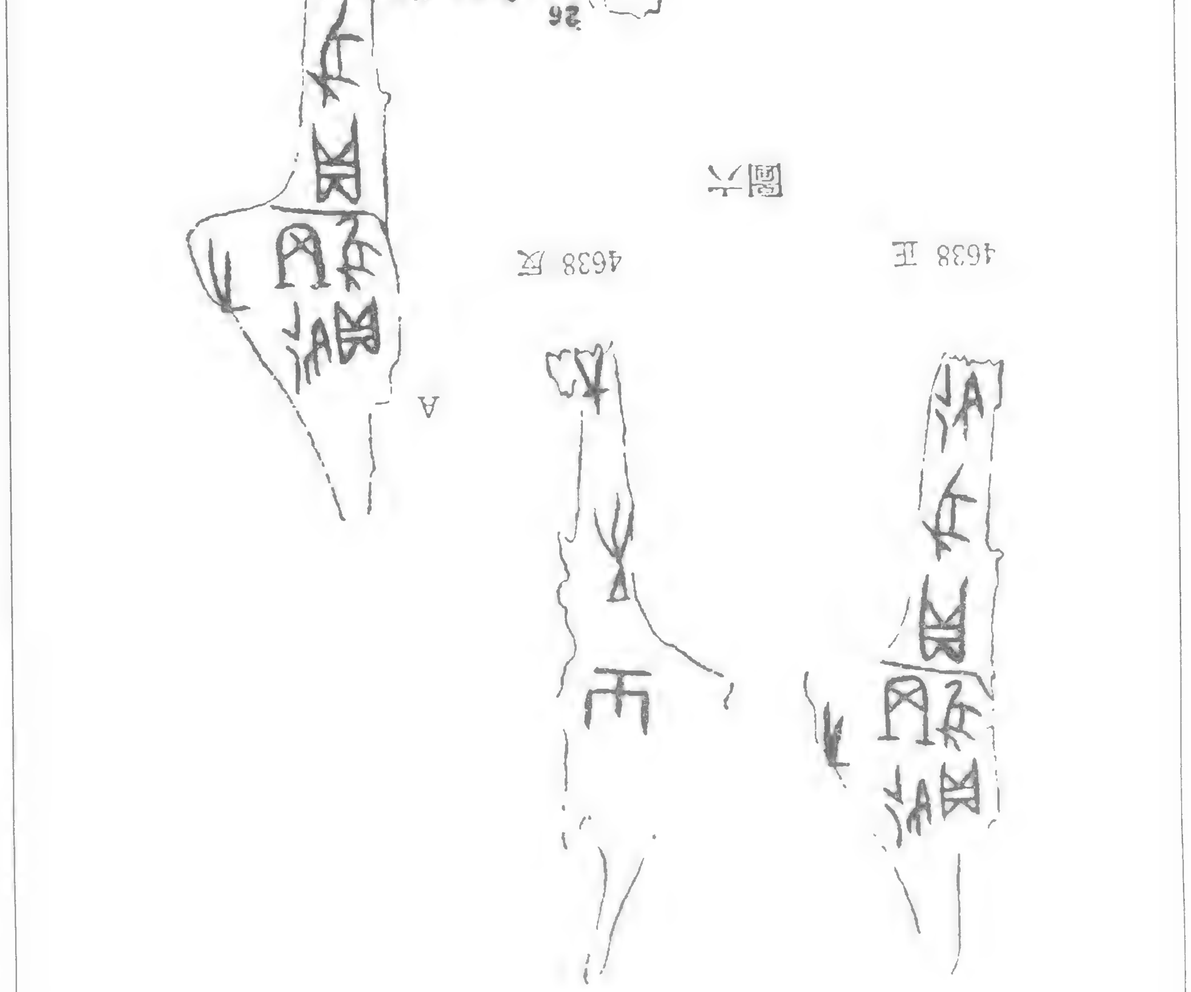
圖七



A 珠39.9
補 2.27.2
B 珠 41.6
補 2.27.3

圖六

4638 正　4638 反



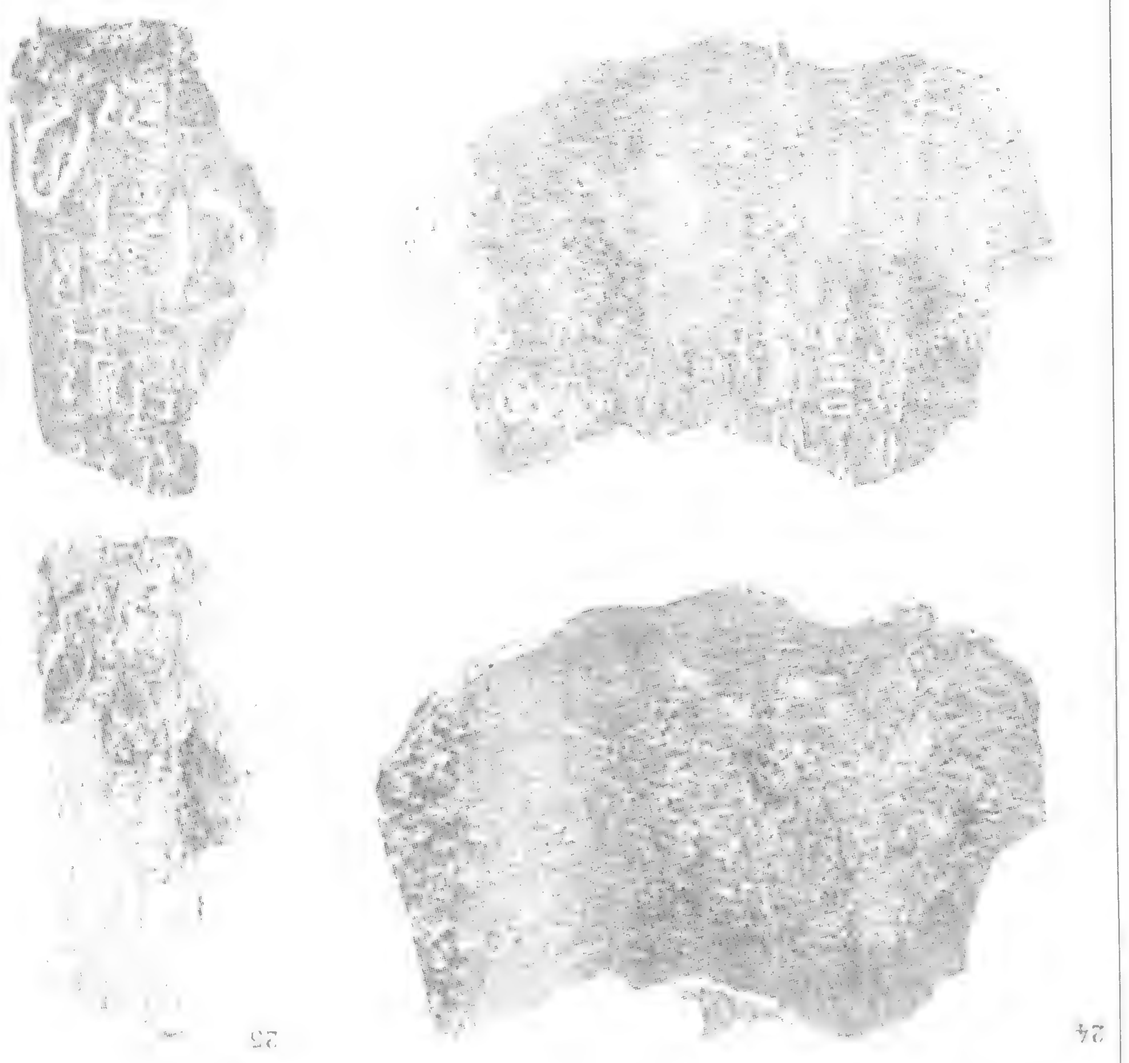
23



22



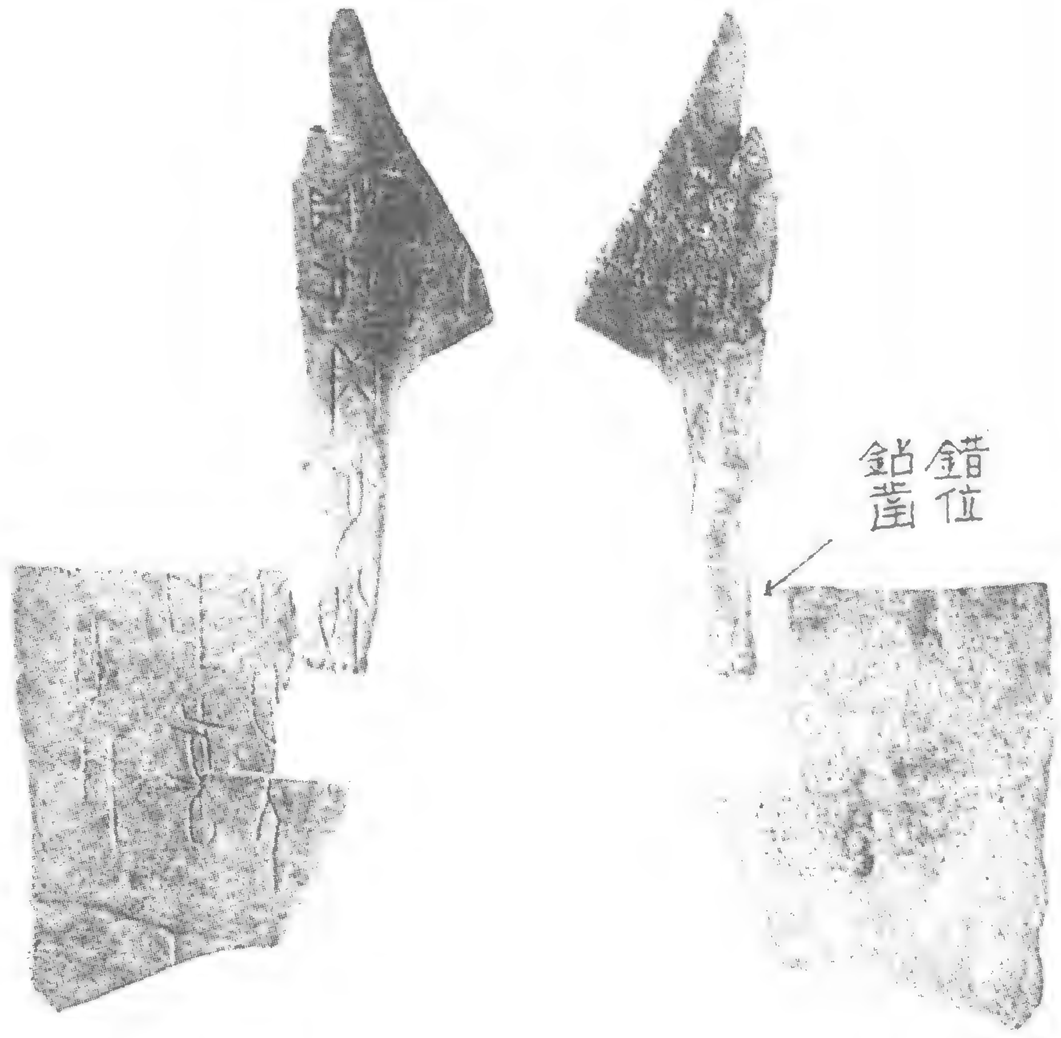
21



24

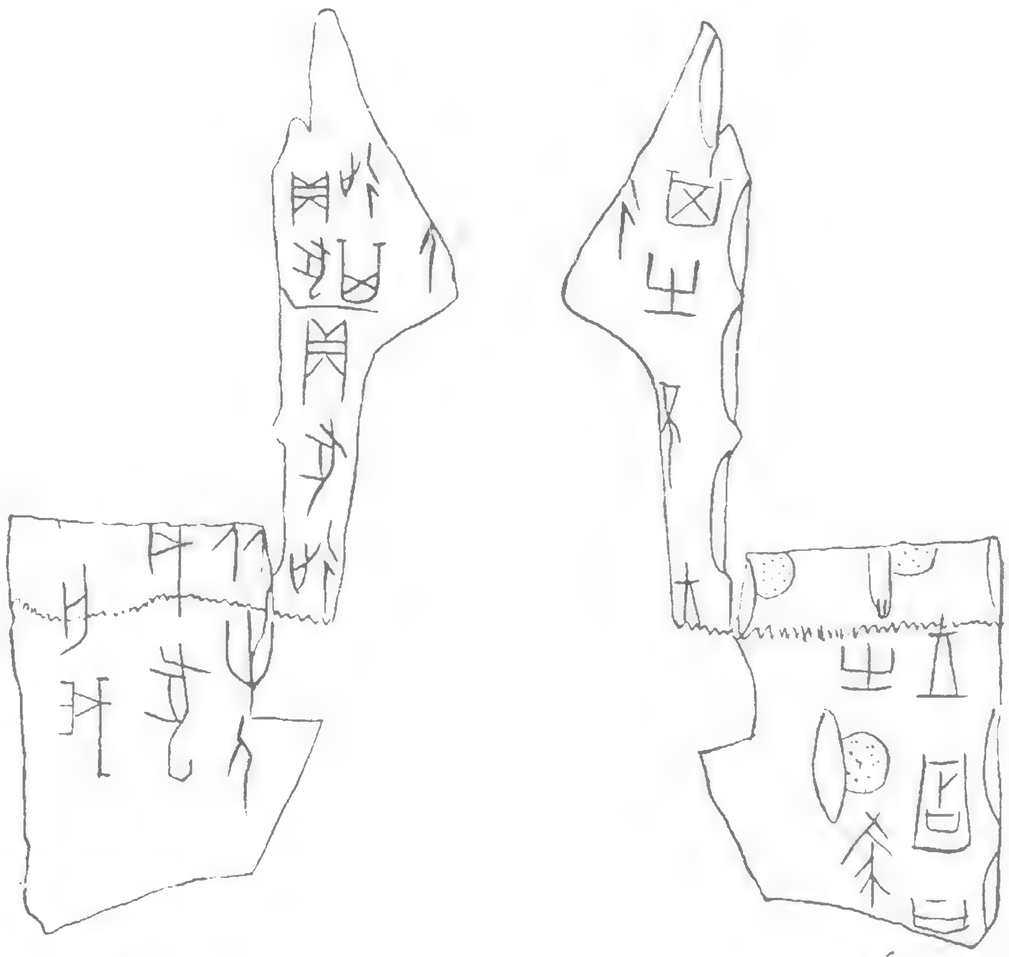
25

26:1



正　　反

26:2



正

反

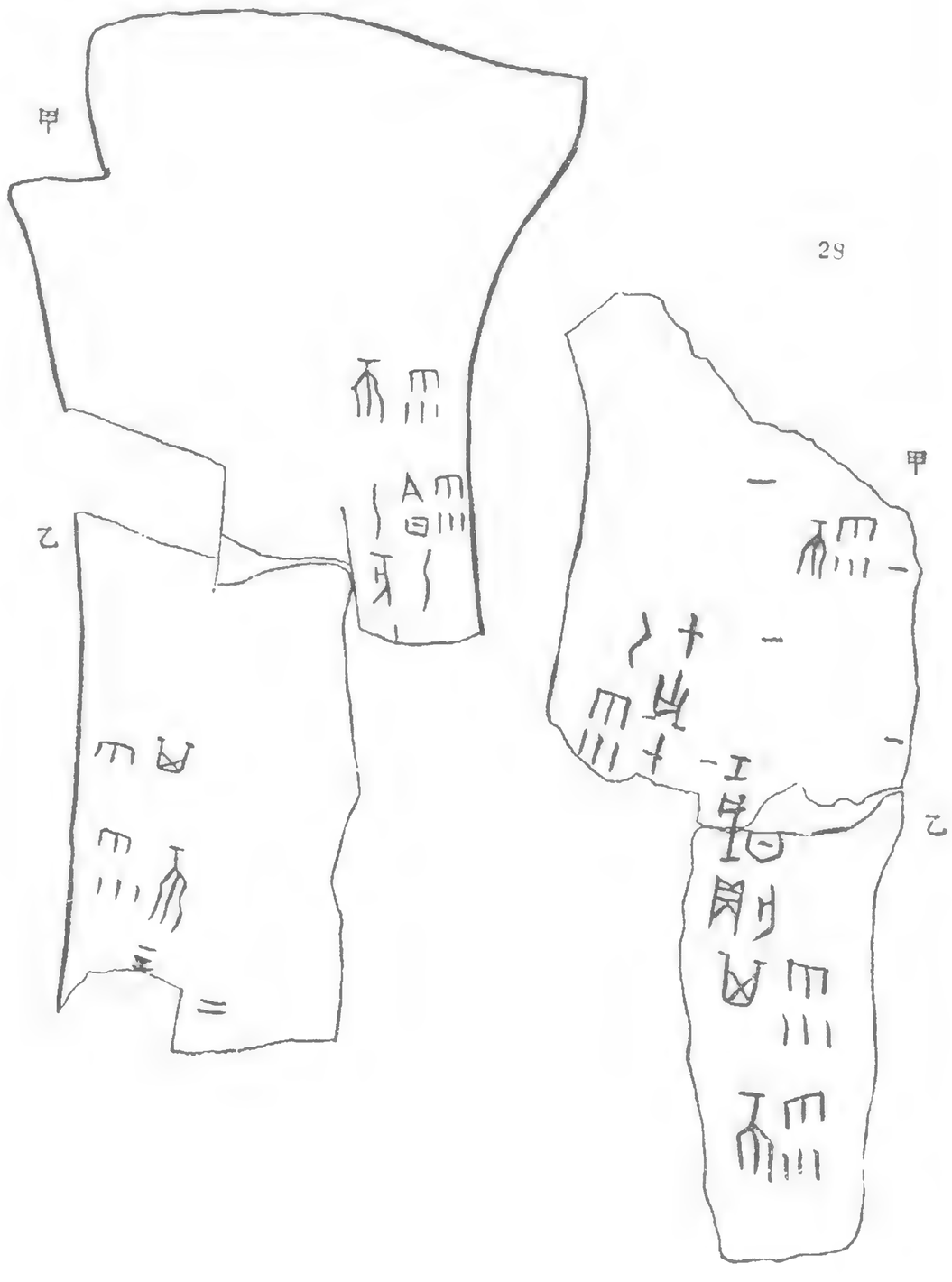
27:1



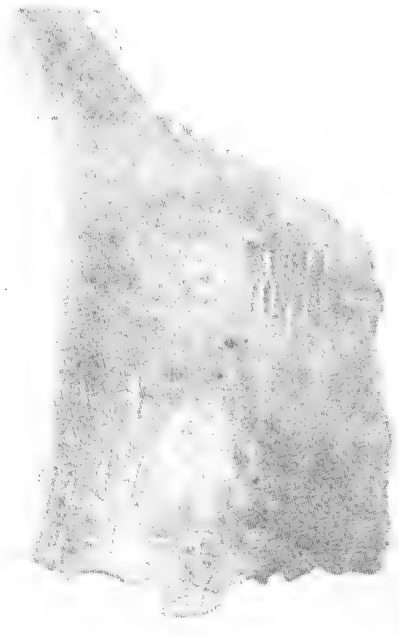
27:2



27



28:1



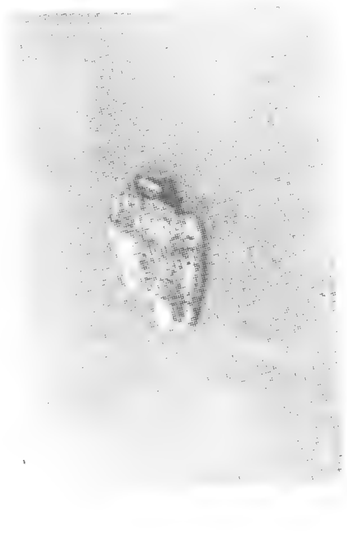
28:2



29:1



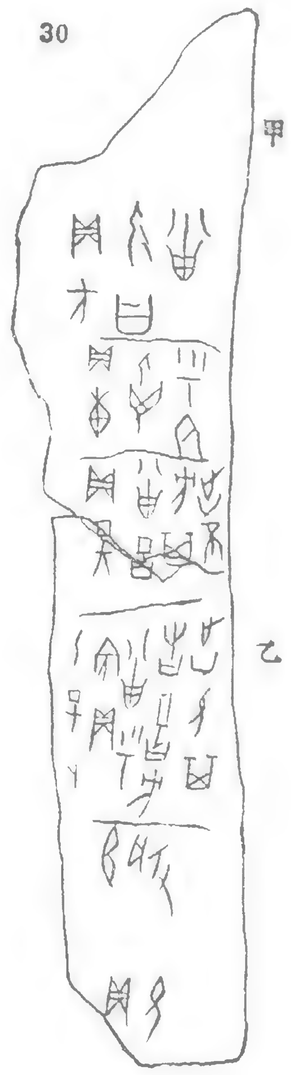
29:2



29



30



30:1



30:2



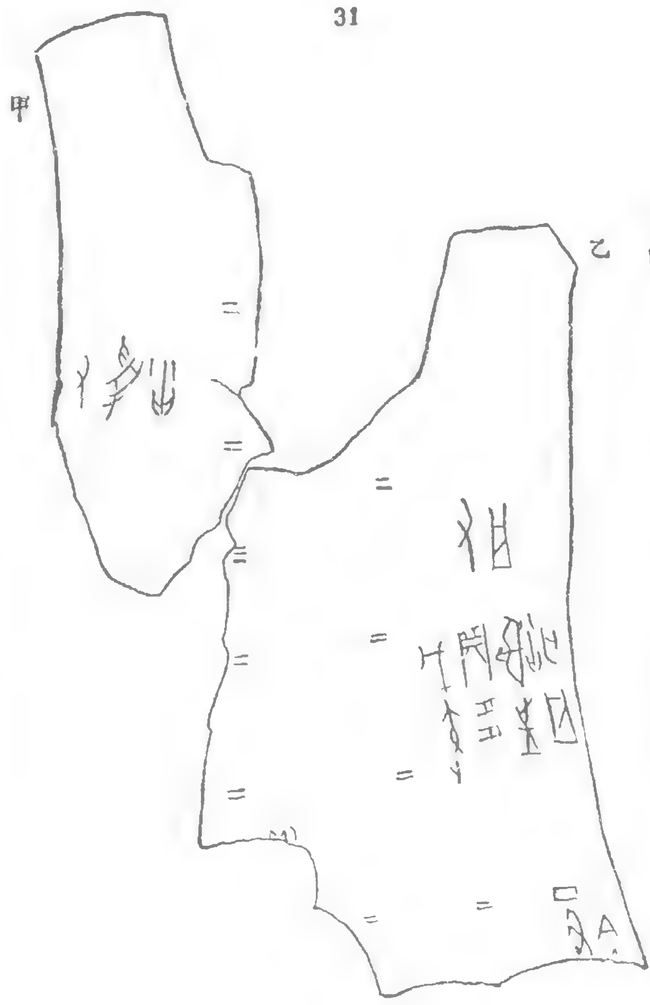
31:1



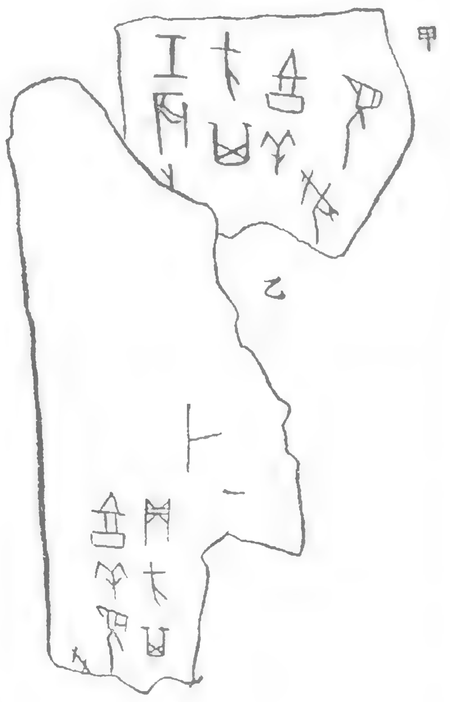
31:2



31



32



32:1



32:2

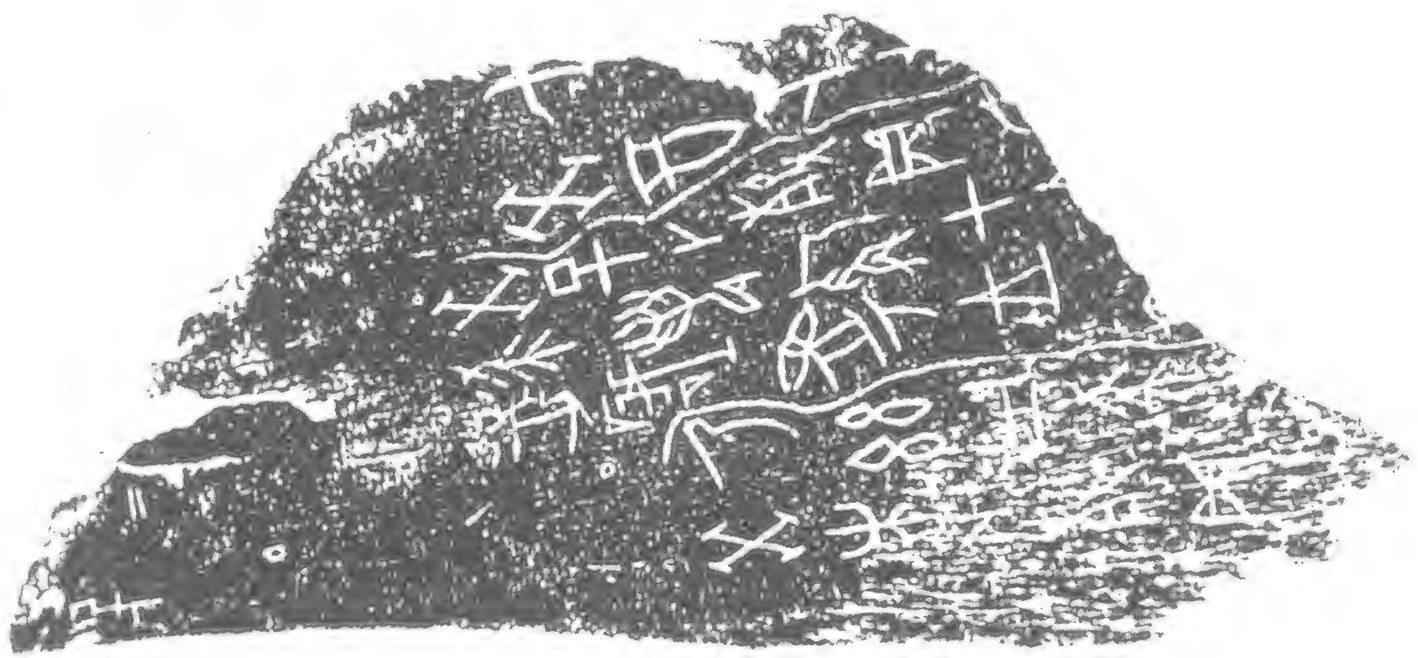


(原載《上海博物館集刊》第 3 期,上海古籍出版社,1986 年)

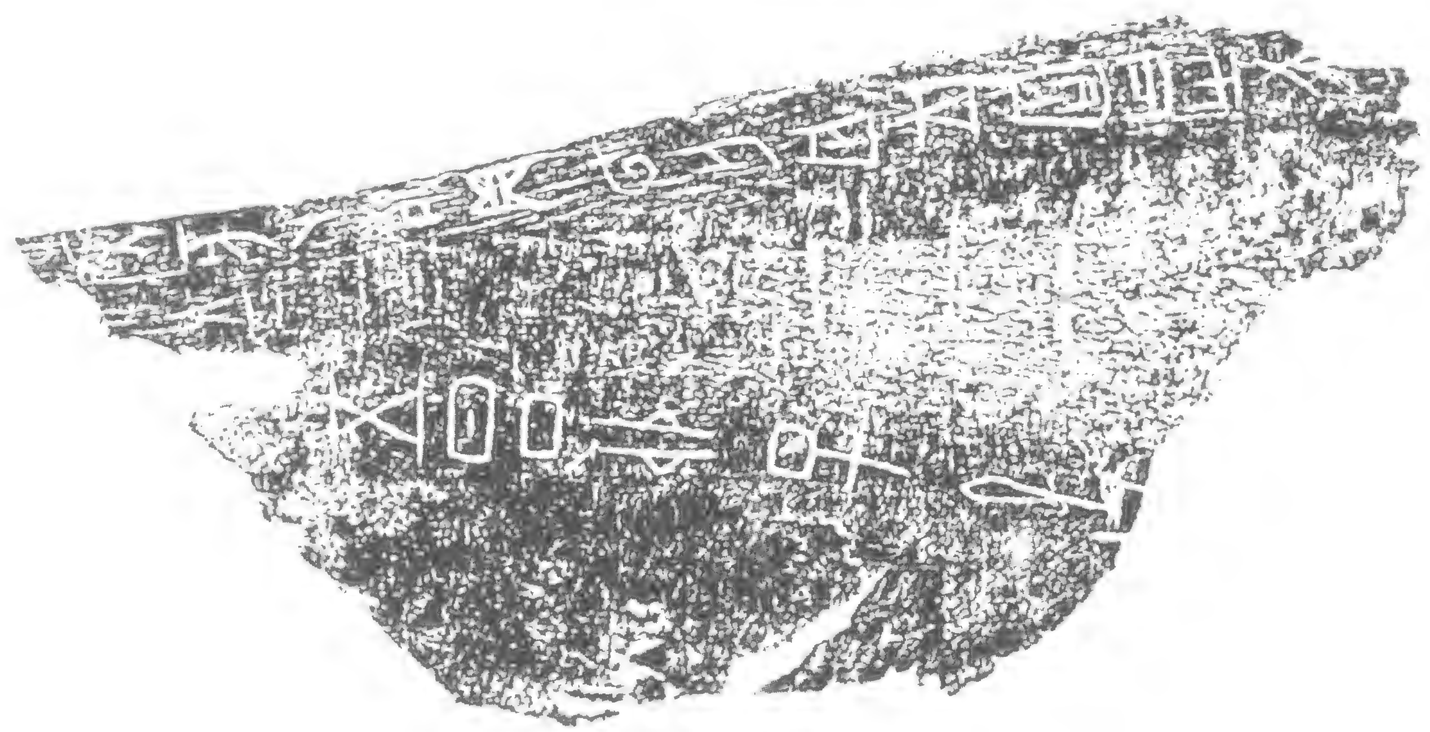
萍廬藏契　附校釋

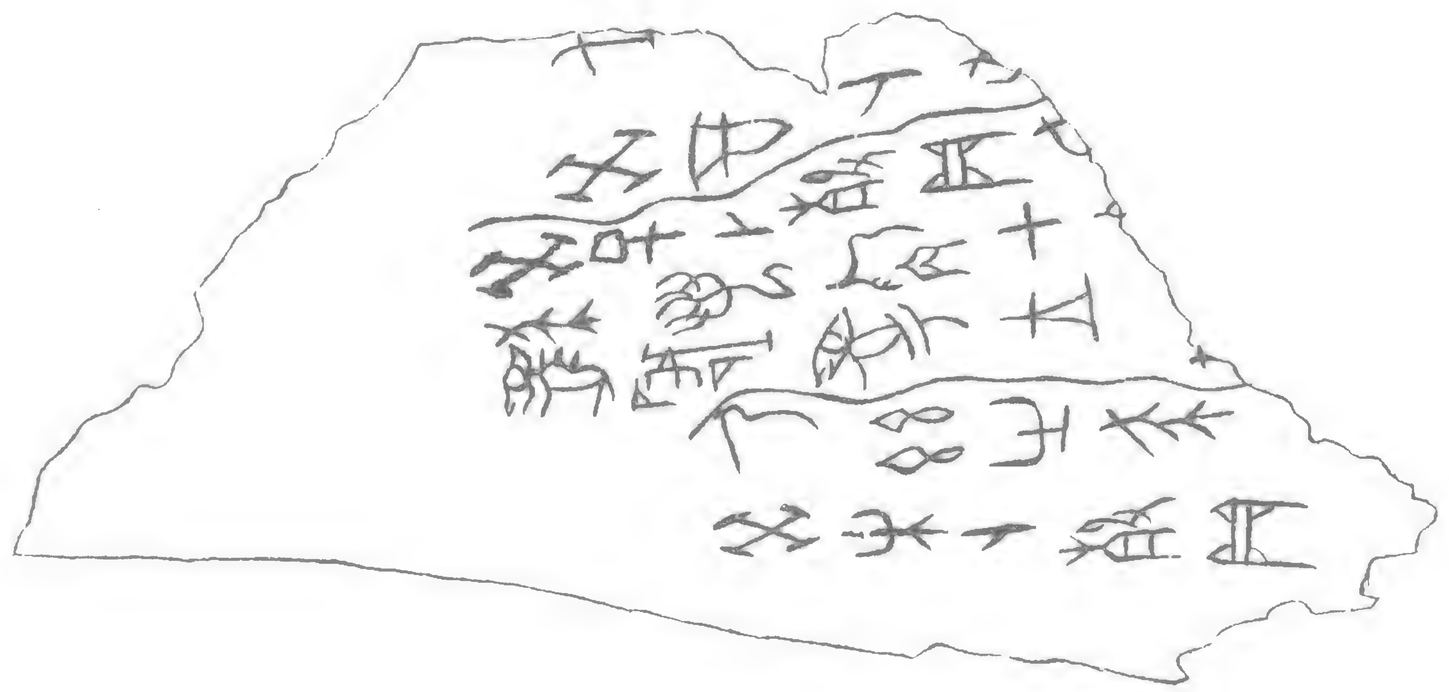
白玉峥

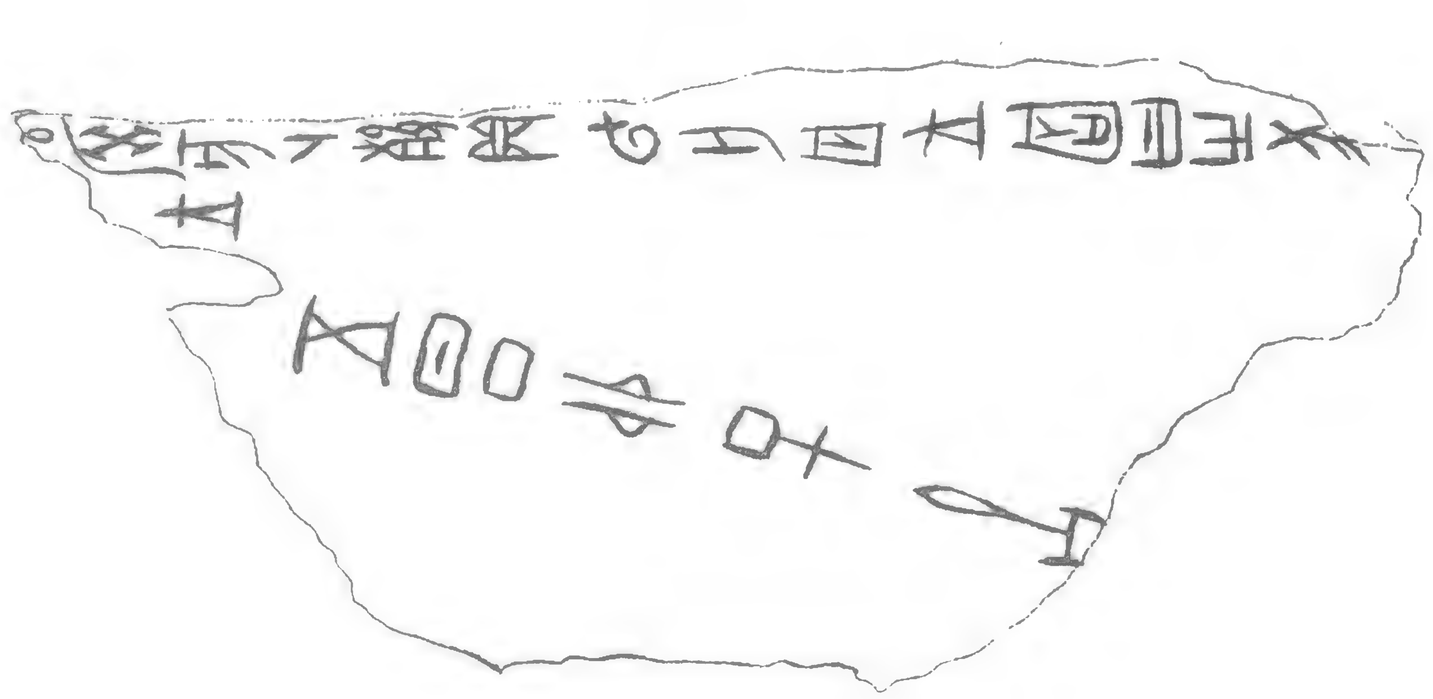
(一)

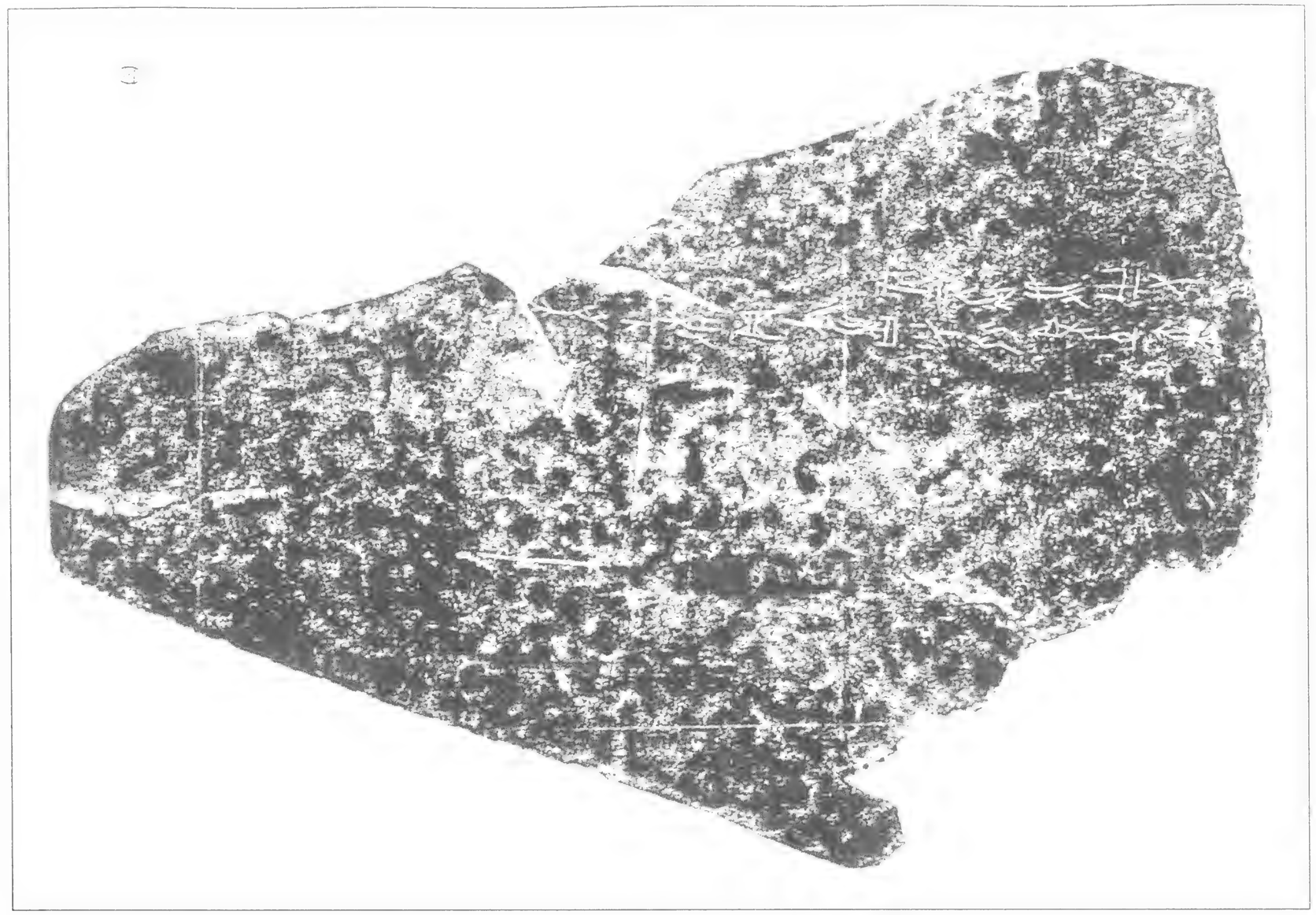


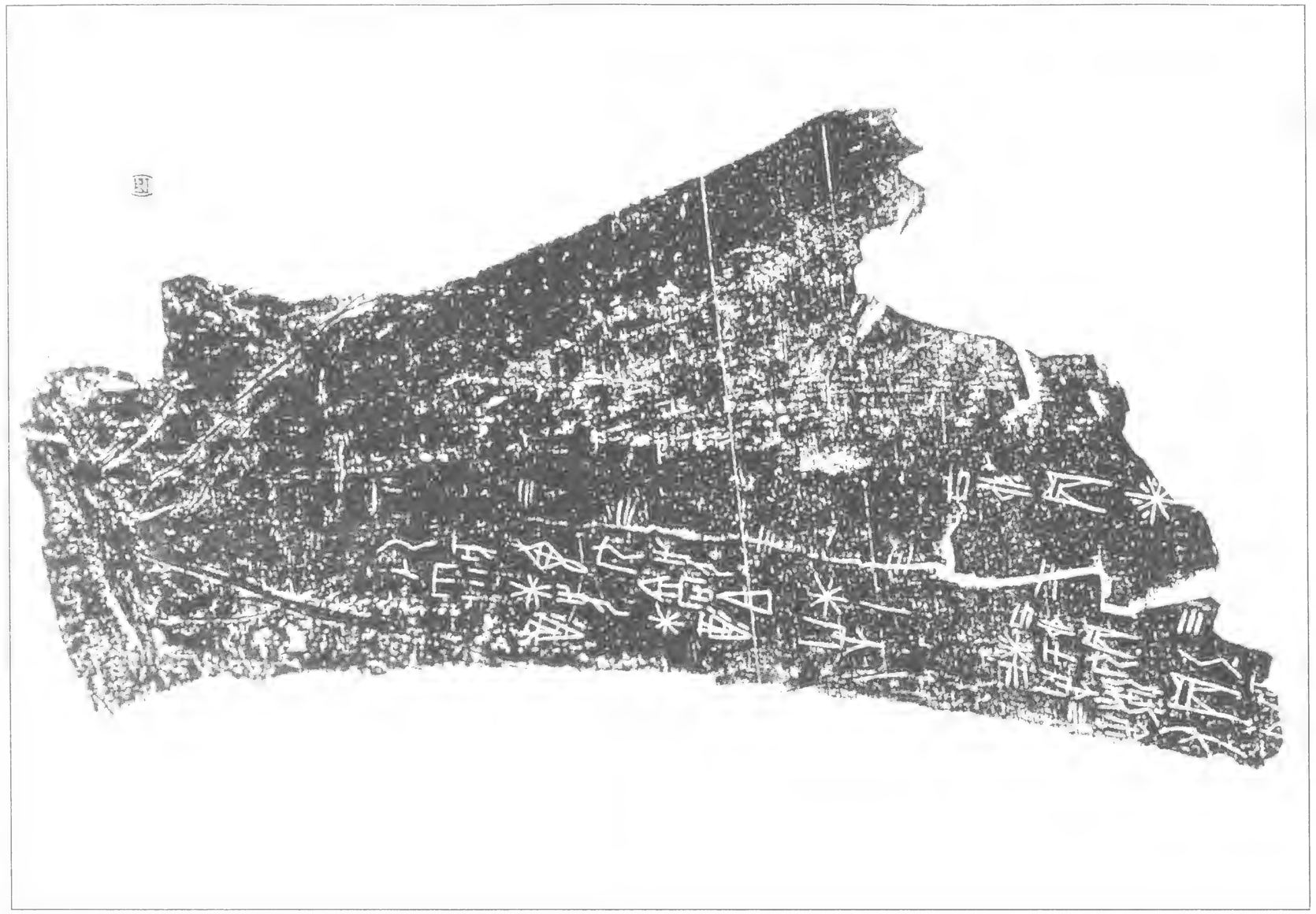
(二)

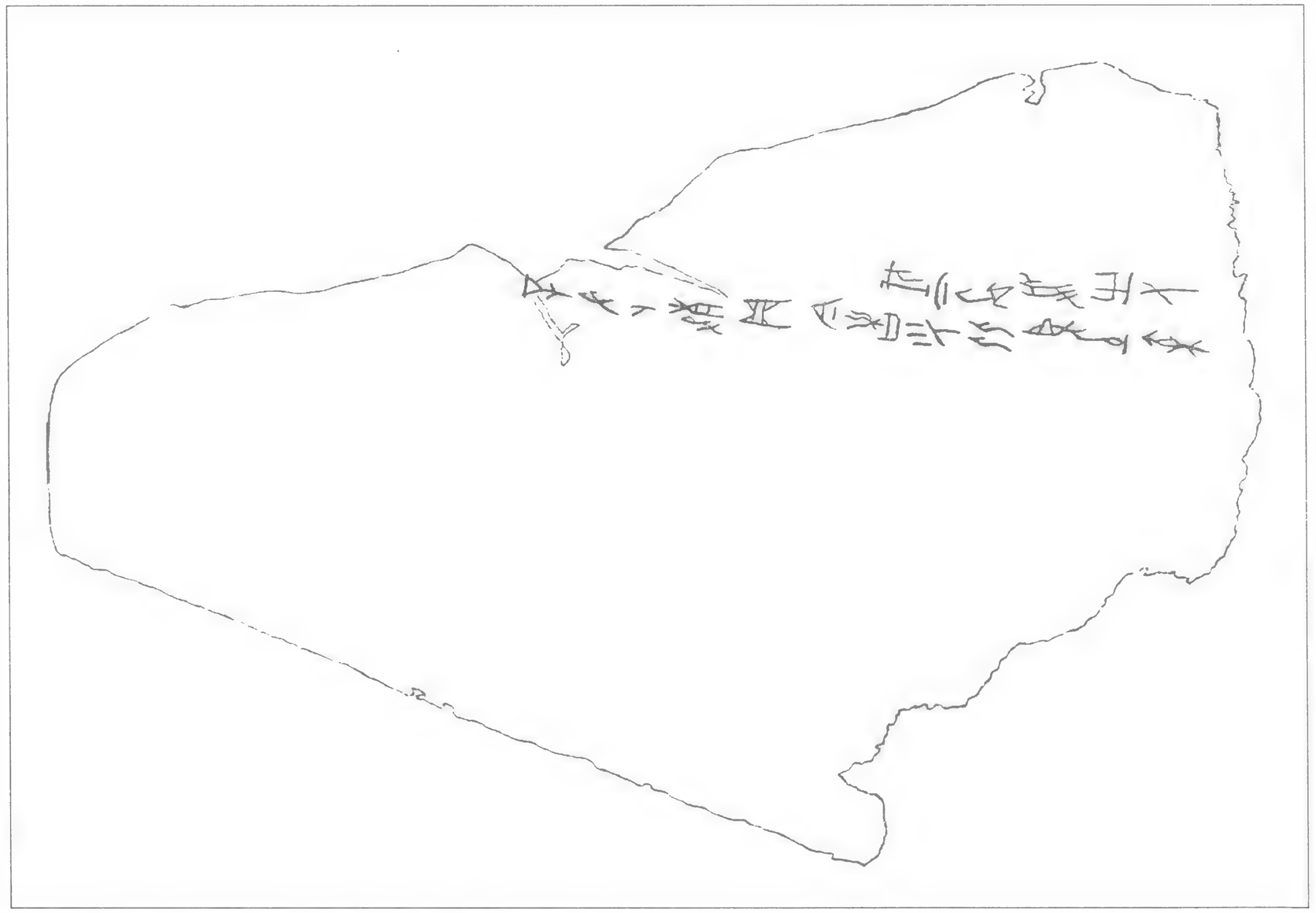


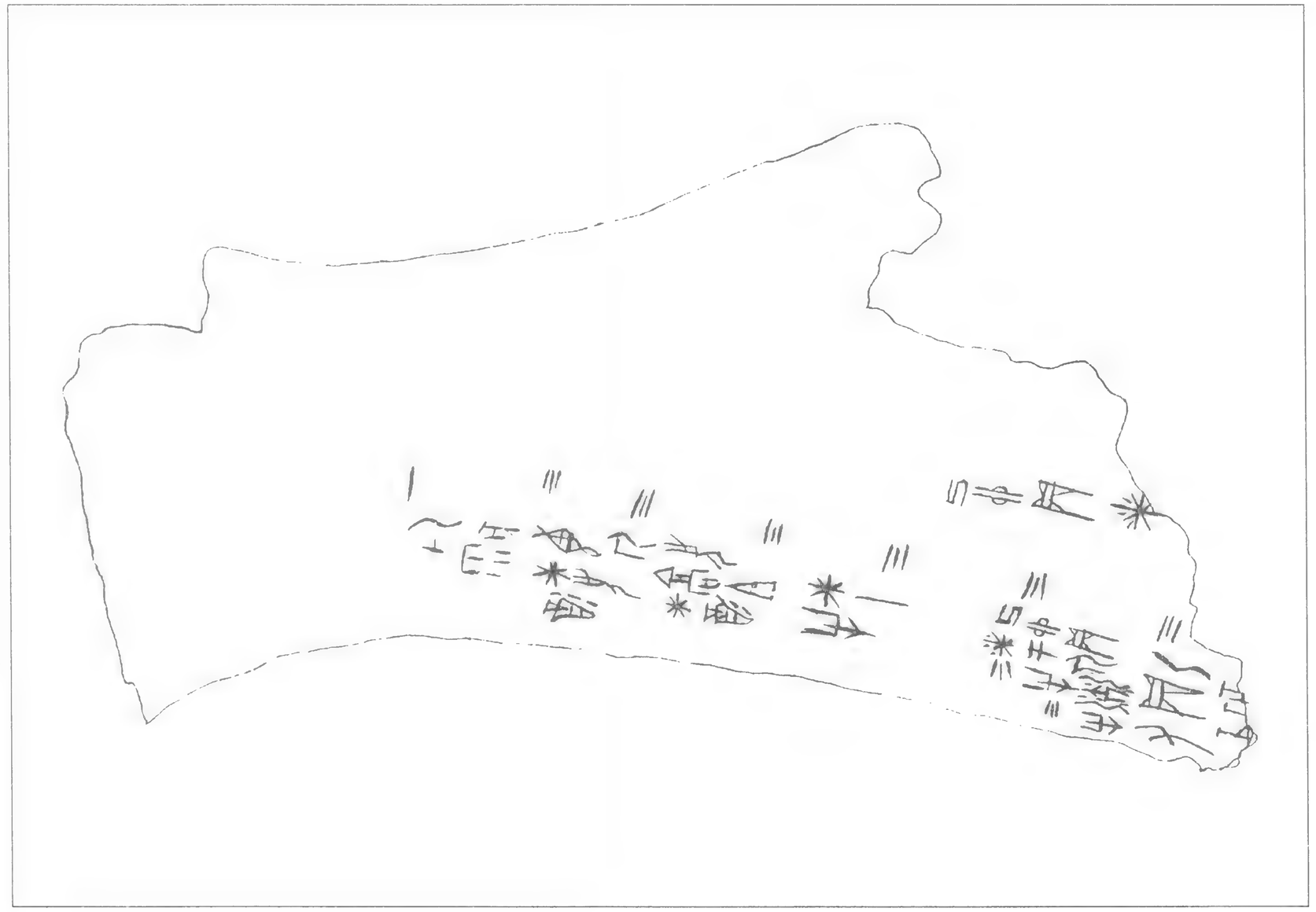


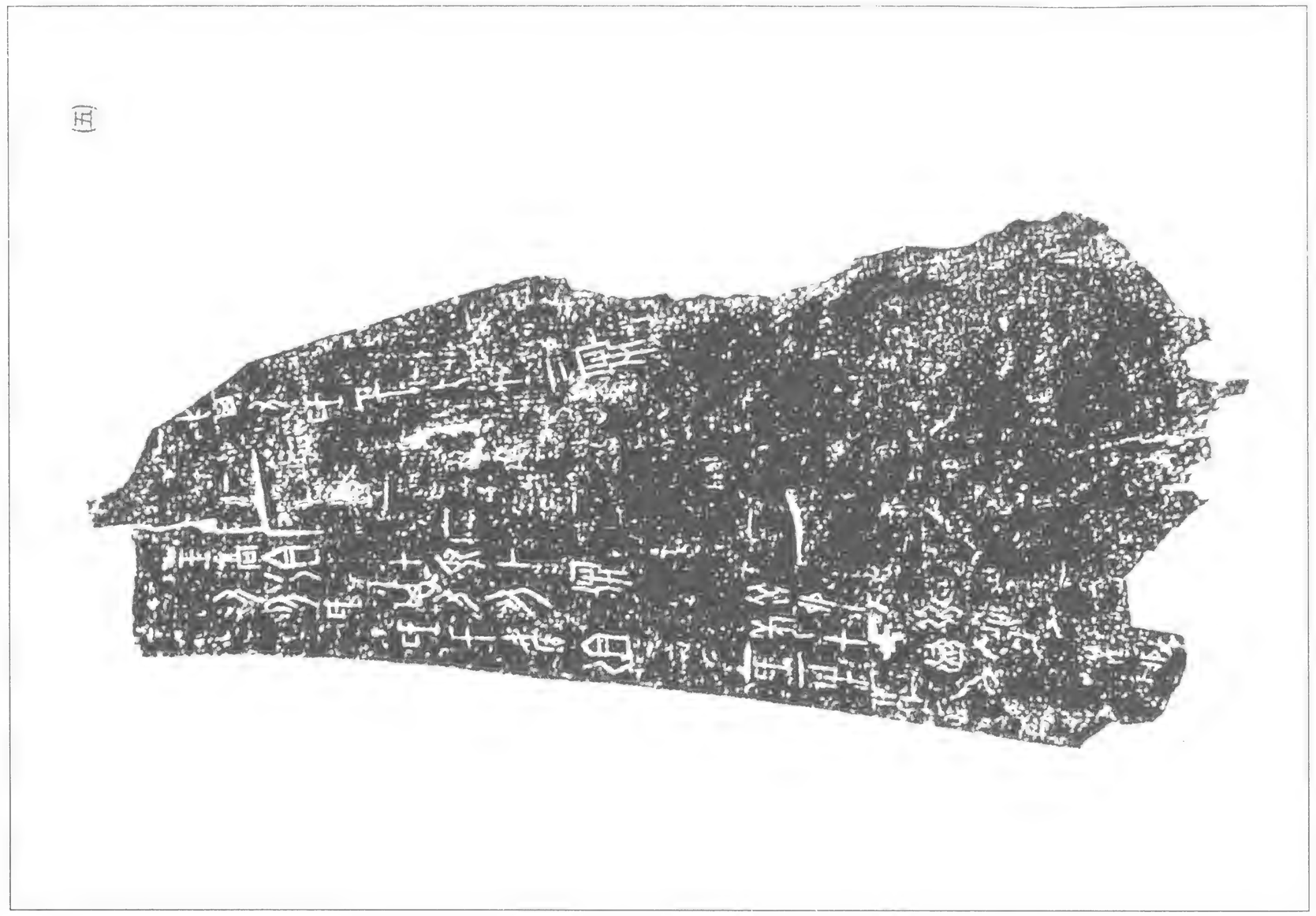


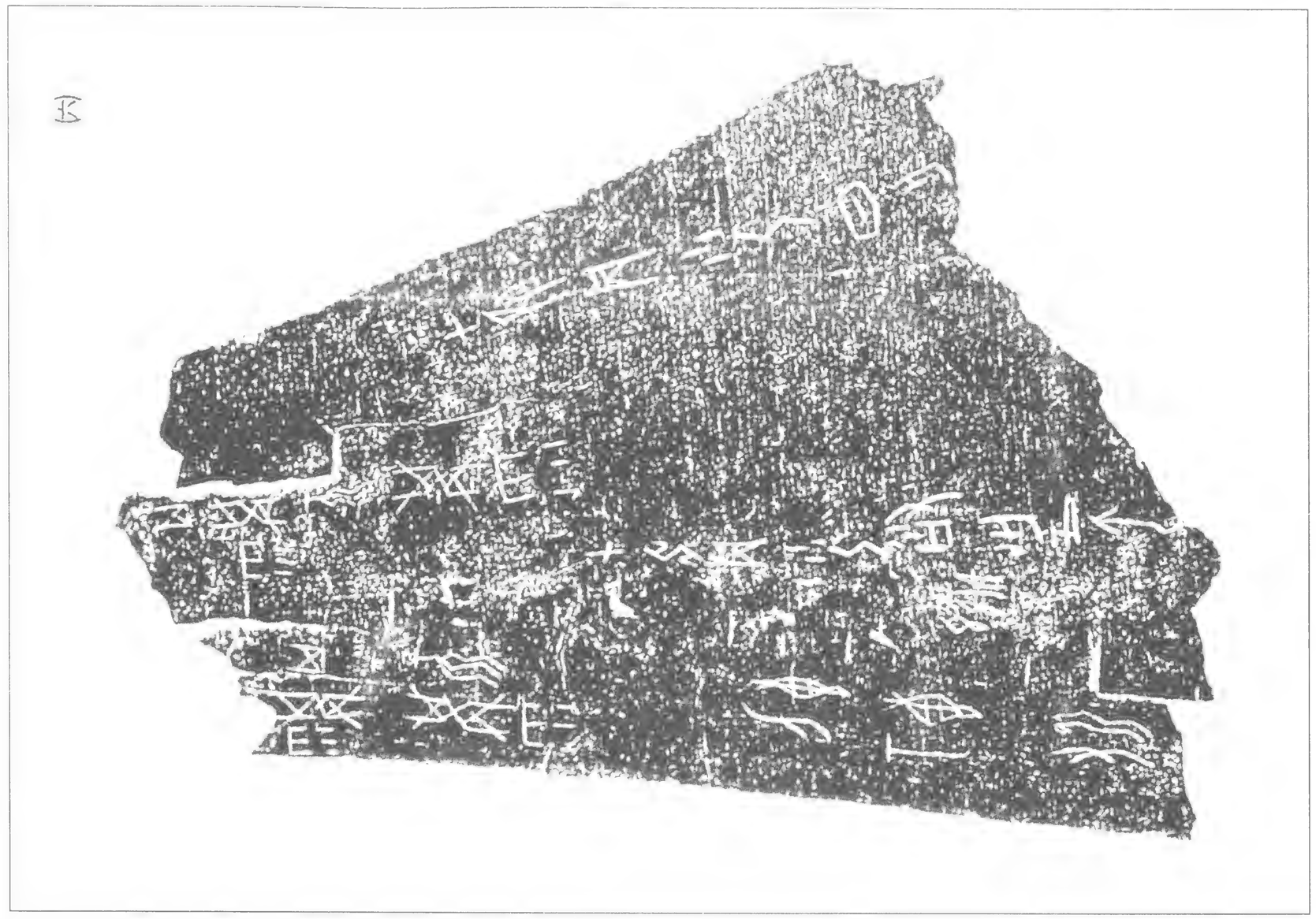


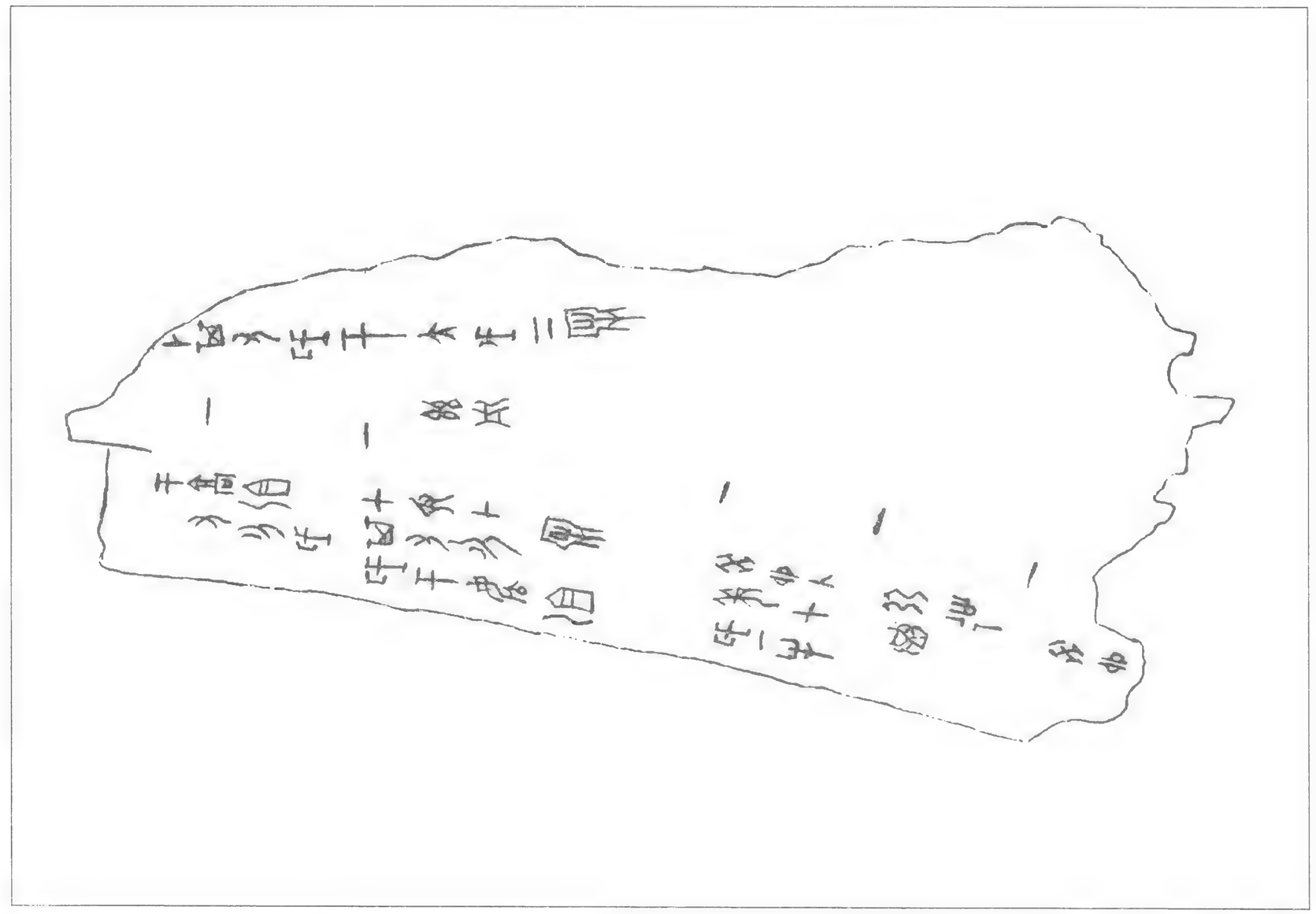


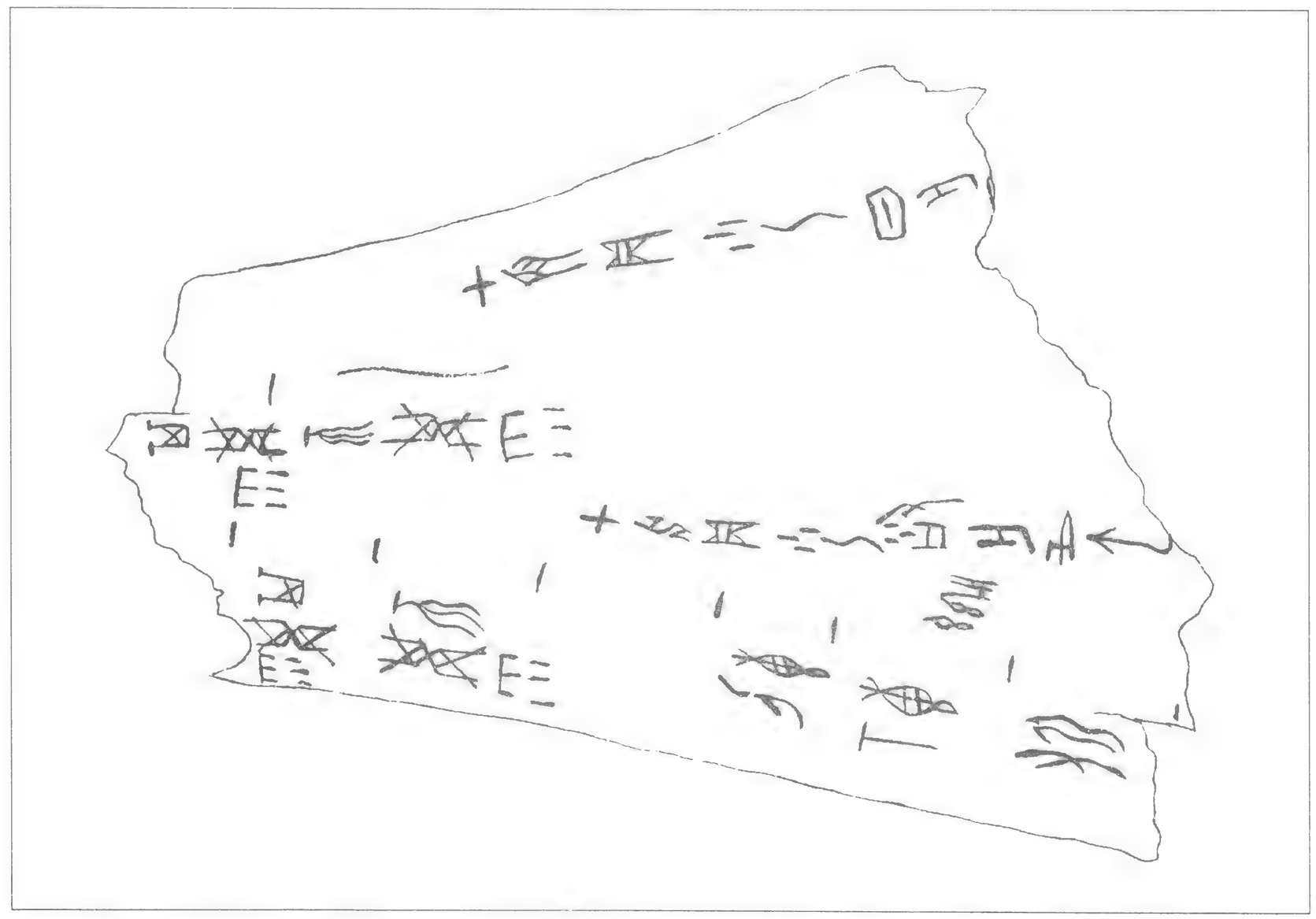





(五)


(六)





校釋

第一版　骨　第一期

1. 癸酉卜殼☑王☑
2. 癸巳卜殼貞：旬☑祟若偁甲午☑馬硪𢦏王☑
3. 癸未卜殼貞：☑乃茲𠂤祟☑
4. 癸巳

本拓本又著錄爲殷契拾綴（簡作拾掇）四五四號面，甲骨續存上卷（簡作存一）九七二片，殷虛文字外編（簡作外編）四六二片。寫本見於戰後寧滬新獲甲骨集卷二（簡作寧二）二四片。

按：本片與寧二、二六片爲同骨之折裂，其綴合版已著錄於甲骨綴合新編（簡作新綴）二七二版（附圖一）。至民國六十九年再與沈德建氏所藏之一片胛骨綴合，遂成爲較完整之卜骨；其綴合版已著錄爲殷周甲骨文字總集（簡作總集）一〇四〇六號面（附圖二）。留存較完整之卜辭三，殘辭一。爲：

1. 癸酉卜殼貞：旬亡𡆥？王二曰：[illegible]。王固曰：俞！𠂤祟𠂤膠。五日丁丑，王宦中丁；𠬜陞。在[illegible]皐。十月
2. 癸巳卜殼貞：旬亡𡆥？王固曰：乃茲亦𠂤祟；若偁。甲午、王往逐[illegible]；小臣古車馬、硪𢦏王[illegible]

3. 癸未卜殼貞：旬亡𡆥？王固曰：往。乃茲𠂤祟。六日戊子、子弜死。一月
4. 癸巳

按：本綴合版與書契精華（簡作精華）第一版（拓本著錄於傳古別錄第二集第八頁）爲同組之卜骨（附圖三）；本綴合版爲右胛骨，兆序爲二，精華一爲左骨，兆序爲一。兩者契辭之部位、行款等，呈左右對稱之勢；本綴合版之缺文卽據彼補錄。祭武丁時期成組之卜骨率多爲五，則本組卜骨尙有三、四、五等兆序之卜骨有俟尋找與綴合也。

王二曰句：彥堂先生曰：「意思是兩次說句。句、在卜辭有兩種解釋：一是禍害的害，一是乞丐的丐。王二曰句、意思是害、害；猶如今人連說壞了、壞了，或糟了、糟了」（詳董作賓先生全集乙編五十九頁）。按，說文：「再、一舉二也」。段注：「凡言二者，對偶之詞；凡言再者，重複之詞。一而又加也」。檢[illegible]羌鐘銘文有「廿又再祀」之辭，意爲二十又二祀；是二與再意同用同。二曰者，再曰也；猶今語再說一次，或重說一次之意。

[illegible]：文編列於附錄，定爲待考之字（附上八十五頁），校編同（附上八十五頁），集釋不僅從其所定，且從其誤書本字之出處而不予訂正（四六六五）。續文編釋俞、無說（八・十五）。檢說文：「俞、空中木爲舟也；从A从舟从巛。巛、水也」。按：許書此說苦澀破亂。所云「空中木」，若據今語言之，當爲中空之木。中空之木、宜爲朽木；朽木且不可雕，焉能爲舟？而巛、旣無木形，何能表示木意？況並未說明何以从巛。茲據契文之構形，並參酌許書之說解，試釋釋其義。字从舟、宜爲其意符，从A、宜爲形符，而此形符則最爲不易索解。許書雖據小篆爲說，然於小篆、亦止於一知半解，而未能作清晰之解說。竊疑：此A、爲「空中木之舟」形。徵於現時各種舟之造形，若予平面鳥瞰視之，其造形仍約略彷彿；而各種之小舟（卽今字筏）其形更肖。惟此舟之實，與一般之舟異。其異，異在空中；空中、不能描繪其形。空中、應爲中空之倒句；中空之解、卽此舟有甲板下之艙。爲示此舟中空之艙，故於A下以◇形示之。許云「空中木之舟」蓋卽此木造之舟，其下有艙者。若以今語喻之、此空中木之舟蓋卽所謂之船艦也。而舟、蓋卽今語之筏者也。至小篆、爲書寫之美觀取姿，而改◇爲巛，空中之義流失。準於六書，宜爲會意。字於本辭，乃其引申意、爲應諾之詞。爾雅釋言：「俞、然也」。書堯典：「帝曰：俞、予聞如何」。傳：「俞，然也；然其所舉言，我亦聞之」。俞、蓋承上「王二曰句」之辭也。

[illegible]：文編逕寫爲[illegible]形（附七。五頁）集釋（四六六五、續編七・二四及二七、校編七・二四及合文十二頁）等均从之。惟文編、集釋同列爲待考字，續編列於[illegible]後，定爲說文所無之字。校編釋爲[illegible]父合文。卜辭通纂考釋（簡作通釋）隸作[illegible]釋爲痛：「从[illegible]省父聲，與祟連類，當含惡意。殆卽痛之繁文。說文：痛、病也；从疒甬聲。父甫古乃同音字」（九〇）。所釋非是。檢卯敦銘文有[illegible]字、[illegible]古錄有[illegible]字，古籀補釋[illegible]。古鉩之文除其增飾之[illegible]、與本字同。則本字當以釋[illegible]爲是。說文有[illegible]無[illegible]。其說曰：「寐而覺者也；从宀从爿夢聲」。然就契文構形審量、字从爿从夕[illegible]从父。从爿、卽今字牀、从[illegible]、象人夢[illegible]之意；从父、非父非夕，乃示夢境中哀喜之狀者，故其字在契文中有作[illegible]形者，亦有作[illegible]形者。據說文、周禮有六夢之占，曰[illegible]（噩）夢、曰懼夢等；辭曰「[illegible]祟[illegible]王[illegible]中丁：爲殷王第六世之大宗，亦卽第十位之殷王。史記殷本記：「中宗崩、子帝中丁立」。

[illegible]：舊釋[illegible]，未必爲是，蓋與[illegible]之構形殊異也。字从宀从[illegible]。[illegible]、與契文[illegible]所从之[illegible]有差；故知釋[illegible]未當。惟究宜何釋，則有俟考定。

[illegible]偁：貞卜人物通考釋仍云：「審其偏旁實从乃、當釋扔。廣雅釋詁：扔、引也。从手義同。扔、讀爲仍。老子：攘臂而扔之，一本作仍。謂禍害相仍也」（八十七頁）。審其所釋，七扒八彎，曲折離析，使人有墜於雲霧中之感。就契文構形言：乃與[illegible]有殊，此蓋象人曲身以手取物之形。釋偁是也。說文：「偁，揚也」，乃其引申誼。字當爲動詞、卽今字稱之本字；權衡也。字於本辭、蓋卽言偁之意。禮記射義：「旄期稱道不亂者」。注：「稱，猶言也」。辭曰「若偁」，乃承上之詞，與論語「如其言」之意同。

俄：契文作[illegible]，从二石重疊从我。檢說文「硪、石巖也」，應與契文爲同字，與俄、巉等爲同意。集韵：「硪：砥硪、山高貌」。按：舊釋人名、爲馭車之小臣。詳察辭義，應爲非是。蓋辭已云：「小臣古車馬」；古旣爲馭車之小臣，則此俄當謂爲「石巖」或「高山」之義。蓋此時車行於高山崇嶺之磴道，而小臣古之馭車術甚爲差池，致使車隊受驚。或緣山路崎嶇，馬失前蹄，因而發生車禍，故辭又云：「子央亦墜」。若以「硪」釋爲人名，或馭王車之小臣名，頗嫌辭義窒塞苦澀；且與「古車馬」辭義重覆。故知釋爲人名，未爲的也。

 ：舊釋馭、未當。字蓋从  从  ，非馬。契文之馬其頸必有鬃、其尾或歧或否、然必下垂。此則既無鬃亦無尾；必謂其有尾，其尾則呈上蹺之態，與馬殊異。此爲二者最顯著之差別。其下从之  、非又非  ，構形不易索解；然非馭馬或馭車之具可以斷言。故知釋馭未當。惟其究當今之何字何義，則有俟考定。然就契辭辭義整體推察，頗疑其爲驀懼、奔突等之義。然否、則有俟推考。

：舊釋車、未當。蓋契文車之構形，一轅二輪二軛、無輿。此則爲二輛一輿。二者構形殊異，至爲明顯。然則，將何以釋之？疑卽今字軶之初文。集韵：「殷車曰大軶」。論語衞靈公篇：「乘殷之軶」。說文段氏注：「婁敬傳：蘇林曰：軶、一木橫遮車前，二人挽之三人推之。軶車、用人不用牛焉。軶、疑有轅無軛」。就契文之構形察之，旣無轅亦無軛，却與用人推之挽之之說合。知段氏有轅無軛之說未之爲的。

第二版　骨　第一期

1. 癸亥卜㱿貞：旬亡？王固曰：崇。五日丁卯子□。
2. 王
3. 糸

本拓本又著錄爲拾掇四五四號背，存一・九七三片，外編四六三片。寫本見於寧二二五片。

按：本片爲前片之背面拓本，寧二・二七片與此爲同骨之折裂者；其綴合版已著錄爲新綴二七三版（附圖四）。經與沈德建氏藏骨綴合後，成爲較完整之胛骨背面拓本；其綴合版已著錄爲總集一〇四〇六號背（附圖五），存留較完整者二辭，殘辭二。爲：

1. 王固曰：崇。八日庚戌，各云自東面；晦。昃、亦出虹，自北飲于河。
2. 癸亥卜㱿貞：旬亡？王固曰：崇。其亦來。五日丁卯、子、不死。

3. 王
4. 糸

按：本綴合版與精四（拓本見傳古別錄二集七頁）爲同組卜骨；缺文，卽據彼補錄。又第一辭之卜日，據占辭之「八日庚戌」逆推，其卜日宜爲癸卯，其辭宜爲「癸卯卜㱿貞：旬亡？」？再下接此占辭。據綴合版之情形推察，其辭或在面拓之上端？

：字不識。文編逕寫爲形，列於附錄，定爲待考字（四六六五）。貞卜人物通考竟亦從其誤，而隸定爲亟（七十五頁）。集釋旣从其誤寫，未能訂正，亦從之定爲待考字（八十八頁）。由此可見居位愈高、名氣愈大者，亦愈鈔焉。千古文章一大鈔，誠永久不變之眞理也。續編與契文同列，定爲說文所無之字（五卷三頁）。或釋古、然二者契文之構形稍異。其究當何字，有俟考定。

子：據例、宜爲武丁時期諸子之一。

：字不識。又作（懷特九五九片）。或釋嫉卽娩，或釋殊、或釋死、或釋。然就辭義推測，或與死不死之義有關。

總按，右二拓本之辭，據彥堂先生之考證，爲武丁二十八年及二十九年所卜者，並以之譜入武丁日譜中。茲摘鈔其有關本二拓本之辭者於後，藉便觀覽。

武丁二十八年

十月大壬子　朔
- 癸丑　初二
- 癸亥　十二
- 癸酉　二十二

丁丑　二十六

十一月小壬午　朔
- 癸未　初三
- 癸巳　十二
- 癸卯　二十二

十二月大辛亥　朔
- 癸丑　初三
- 癸亥　十三
- 癸酉　二十三

武丁二十九年

一月小辛巳　朔
- 癸未　初三
- 戊子　初六
- 癸巳　十三
- 甲午　十四
- 癸卯　二十三

二月大庚戌　朔
- 癸丑　初四
- 癸亥　十四
- 丁卯　十八
- 癸酉　二十四

三月小庚辰　朔
- 癸未　初四
- 癸巳　十四
- 癸卯　二十四

癸酉卜㱿貞：旬亡？王二曰句。王固曰：俞！崇。

五日丁丑，王中丁。陘。在阜。十月。

癸未卜㱿貞：旬亡？王固曰：往，乃茲崇。

六日戊子、子弗死。一月。

癸巳卜㱿貞：旬亡？王固曰：乃茲亦崇。若偁。

甲午、王逐家，小臣古車馬。碱王輅；子央亦墜。

癸卯卜㱿貞：旬亡？王固曰：崇。

八日庚戌、各云自東面、晦。昃、亦出虹，自北飲于河。

癸亥卜㱿貞：旬亡？王固曰：崇；其亦來。

五日丁卯、子、不死。

第三版　骨　第一期

辛丑卜㱿貞：今春乎从望乘伐下危受又？

本拓本又著錄爲拾綴二、一五七片，存一・六二三片，總集六五一九片；寫本見於

寧二・五七片。

按：本片與總集六五一八片爲同骨之折裂，茲予綴合（附圖七），或一較完整之大胛骨，惜僅契二辭。爲：

1. 辛丑卜殼貞：今春乎从望乘伐下危受㞢又？
2. 辛丑卜殼貞：今春勿乎从望乘伐下危弗其受㞢又？

按：本卜骨與庫一六二四版爲同組之兩卜骨；本卜骨之兆序爲二，庫片之兆序殘佚（附圖八）。本綴合版爲右骨、庫片爲左骨；契辭之行款等均同。

又按：伐下危之戰，爲武丁時代三大戰爭之一；而爲伐土方與呂方之戰之序幕，據彥堂先生之考證，戰爭始發於武丁二十九年二月，至同年十一月結束；歷時凡九閱月（詳董作賓先生全集乙編七〇二頁）。本版各辭蓋卽發兵前之廟算、派遣主將之辭，故曰「从望乘」。

春：此字說者甚衆，然數十年來迄無定論。茲姑從葉氏釋春說，藉便解說。至其究當何釋，有俟考定。

望乘：人名，就現時流傳之甲骨資料可以考知者，爲武丁時代征伐下危之主帥。或謂：爲當時氏族或方國之酋長，而供職於王朝者。說亦可通；然乏積極之確證。

下危：彥堂先生云：「卜辭作  ，不可識。其地亦不可考。殆與土呂二方毗連，在殷都西北」（同前）。貞卜人物通考謂：危卽鄙，山海經有陸鄙之山。危地當在今蘇、皖交界處。按：下危爲武丁時之方國已無疑義。惟釋者雖多，但迄無定論，茲姑從釋下危之說，藉便說解。至通考以山海經陸鄙之山作比傅，並謂地當蘇皖之交界，尙乏確證，僅止於臆說而已。

第四版　骨　第四期

1. 乙亥卜：雨？　一
2. 乙亥貞：其又？　三
3. 己卯貞：來于河三牛、沉三牛？　三
   來十牛？　三
   先高且來、酒？　三
   東河來、先酒？　三
4. 己卯貞：來☐　三

本拓本又著錄爲拾掇四六二片，戰後京津新獲甲骨集（簡作京津）三九一六片，外編四六〇片，總集三二三〇八片；寫本見於寧一・一八片。

按：殷虛卜辭後編二四五四（南明四七一一）片與此爲同文（附圖九）；惟就本片之兆序推測，其或爲同組之卜骨歟？緣彼殘佚太甚，無由推勘其究竟矣。

河：小屯南地甲骨考釋云：「河在卜辭中與高且夔、高且亥經常同時致祭，而且尙有：河其卽宗、上甲卽宗于河之辭的記載。凡此種種，均可證明河爲先祖」（十六頁。又云：「種種迹象表明，岳與河同是殷之先祖，地位亦大致相當；然相對而言：河之地位較夒」（十八頁。審其所云：殊爲非是。河與高且同祭，不能證明河就是先祖。「河其卽宗」亦不能證明河是殷之先祖。蓋宗、廟也；河宗、祀河神之廟也。穆天子傳中屢云河宗，其義乃河神廟之主祭者。然則，此可解爲殷之先祖歟？如此說解卜辭之河與岳，無疑是開倒東、而將甲骨卜辭之說解，退回到八十年前鐵雲藏龜之時代，實在不值得論其短長。契辭所祭祀之河，蓋指黃河而言。殷都、地當黃河下游之北岸，而黃河自今之河南省鐵門以東，水出峽谷，流向東方平原，愈東愈低，故歷代典籍皆有水患之紀錄，殷世自不例外。況當時民知未開，迷信之事見於載籍。延及滿清，仍有祀河之事實。吾鄉栗毓美曾官黃河督辦，適當河水氾濫，遂代表皇帝祭河，祈禱其免爲水患，但河水仍氾濫不止，遂以身殉之。卽就科學昌明之今日言，黃河流域之各地，皆有奉祀河神之廟曰、龍王廟或河神廟之事實及祭祀之行爲。俗諺亦有「山水衝倒龍王廟」之歇後語，殷人視河爲神靈而奉祀之、祈禱之，乃事勢之必然也。或謂卜辭之河，蓋指殷都近郊之洹河，亦緣小量殷世之實況而致焉。

高且：武乙時契辭稱高且者有二：卽王亥與大乙。其稱王亥者、若明後二四五九、二四六六、掇一・四五五等皆其例。其稱大乙者、若粹一六三、一六五、一六六等皆其例。至本片之辭曰「高且」者，就版面及契辭所顯示之情形推察，宜爲高且乙、卽大乙之稱。

第五版　骨　第四期

1. 癸卯卜：其祉、𡆥粟于羌甲？
2. 癸卯卜：羌甲歲一牛？　一
3. 甲辰卜：其又升歲毓且乙牢？茲用。　一
   于高且乙又升歲？　一
4. 丁未卜：其又歲于大戊二牢？

本拓本又著錄爲拾掇四五六片，京津三九七三片，外編四六四片，中國書譜殷商編四一頁，總集三二四五四片。寫本見於寧一・一六三片。

按：本片與總集三二五九三片爲同骨之折裂者，茲予綴合（附圖十）。其綴合版他書未著錄；第一辭卽據此綴合版所作者。第四辭之卜日，則據該辭之辭義，及前三辭之辭義而予推補者。

：從殷虛文字類編之釋，爲今字粟之初文。

羌甲：爲第八世殷王之小宗，亦卽第十五位之殷王。史記殷本紀作沃甲，曰：「帝祖辛崩，弟沃甲立，是爲帝沃甲」。索隱曰：「系本作開甲」。契文作羌甲。於此，竊疑史公所記爲祖辛弟有誤焉。據契文例：凡屬小宗之殷王，其配偶均未列入祀典；獨羌甲不然，其配偶則列於祀典。若佚存八七八片有辭曰：「于妣庚羌甲爽妣庚」，粹二五五片有辭曰：「于妣庚羌甲爽」，皆其例證。且粹二五〇片之辭直謂羌甲爲五示之一，而同片之其他四示則皆爲大宗。據此、羌甲（史記之沃甲）宜非小宗，亦非爲史記所稱之祖辛之弟

。然則、羌甲或爲祖辛之子，祖丁之父，而爲大宗歟？然於契辭中不能得到切確之證明，或其他器物及典籍之證明。鑒於史公所記報丁、報乙、報丙世次之誤，不能謂此處所記不誤。此前、卜辭綜述三七頁，張光直先生民族學集刊十三期等亦曾疑及之，僅就管及顧質之大雅方家。

檢小屯南地甲骨二三四二片有辭曰：「于父丁、小乙、且丁、羌甲、且辛」，亦爲逆敘殷王世次之辭，與粹二五〇片所契之辭略同，但稱丁爲「父丁」，且乙爲「小乙」。於此，亦有疑焉。據其書體風格及父丁、小乙之稱謂綜合推勘，似爲武乙時之辭，而若干字之構形與風格，却又類似一期，而無各該期之遒勁與傳神。此其一。若據武乙爲且丁、羌甲、且辛」據小屯南地甲骨考釋五一頁，辭義破碎零維，了無主旨，與一事一辭之辭例牴牾。此其四。辭曰「□丑貞」，其序辭形式，屬無貞人署名之干支貞型，爲文武丁時習見之型式。然文武丁時無父丁之稱。此其五。據屯南所錄拓本，骨面無卜兆痕跡。此其六。緣斯，疑其爲習契者信手鈔襲之習作，並非實質之卜辭。若然，固無研究之價值，然其於羌甲之世次，或爲大宗，或爲小宗，則不失爲一旁證。

準前述資料之推勘，史公於羌甲之記述或有錯誤；猶如所記三匚之次，大丁之未及位等同也。

本拓本又著錄爲拾掇四六三片，京津四〇二九片，外編四六一片；寫本見於寧一・八八片。

按：本片與寧一・四八〇片爲同骨之折裂者，拙會於民國六十六年請　夫子過目。然緣僅據寫本、尤以胡寫本爲之，未敢必。至六十八年十月，夫子返臺，面示：已見拓本，綴合無誤。今此綴合版已著錄爲總集三二六二五（附圖十一）版。右第十辭卽據綴合版所作。

𠂤：從釋祭說。

小乙日：疑爲祭名。若「三匚日」鄴一・四四・一一、「示癸日」粹一二五、「大甲日」後下六・九片、「上甲日」乙三二九七片、他如：「妣庚日」後上七・八片，「妣壬日」後上二・九片　等是其例。惟此等日祭之辭，多見於三四兩期。檢國語周語上：「日祭」注：「日祭、祭於祖考，謂上食也」。此蓋周禮，其施祭之時間宜爲午前。禮記禮器篇謂：「季氏祭、逮日闇而祭」。疏：「言季氏祭於宗廟，逮至日闇而行祭禮」，譏其不知禮也。殷時之日祭，當亦爲午前施行祭禮也；惟於祭之先一日卜之也。

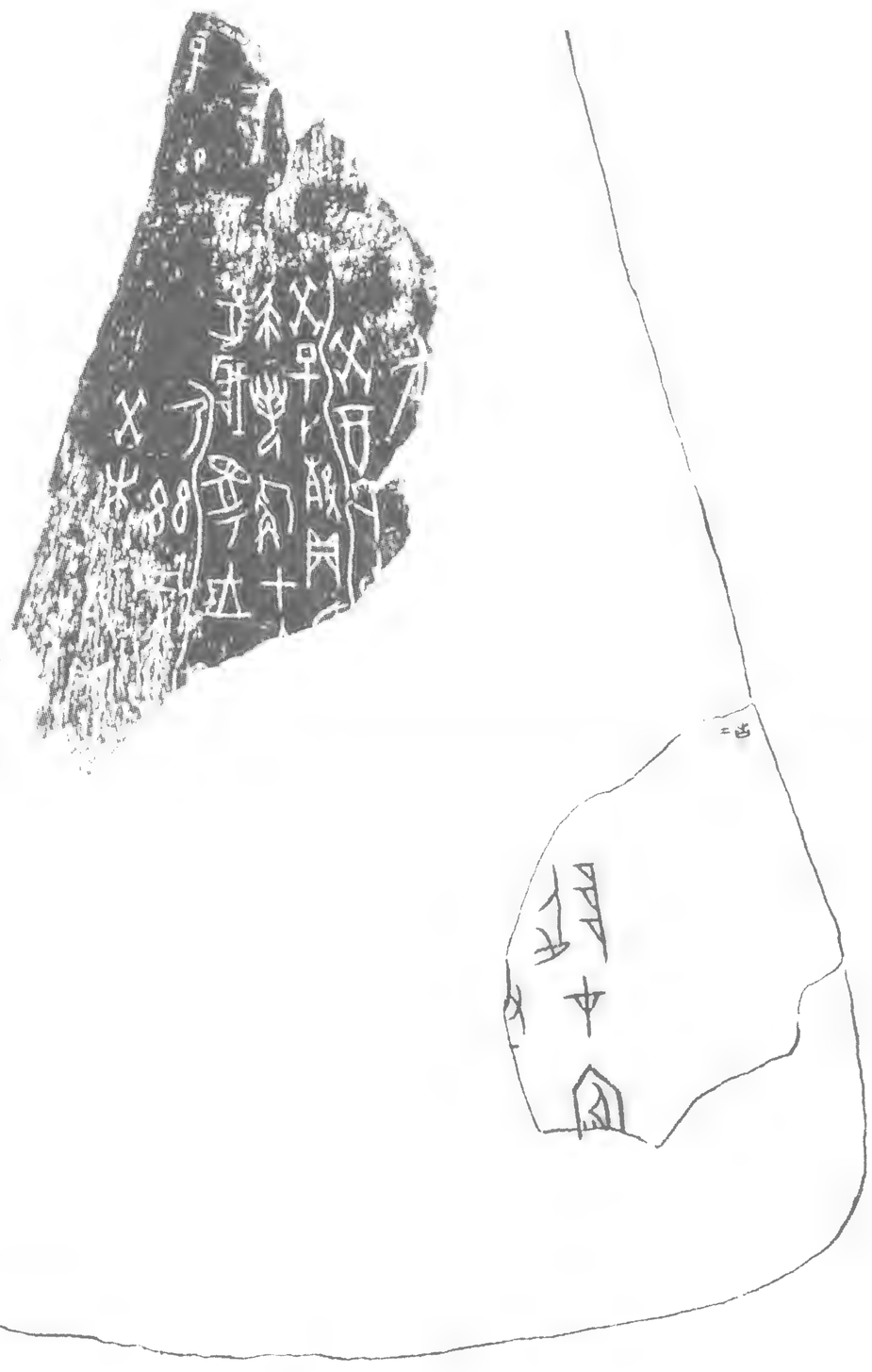
七十六年十月三十日晨二時寫於楓林風雨滿懷盦

毓且乙：武丁時之辭稱父乙，二期以後或稱小且乙，或稱毓且乙；至第五期則逕稱小乙矣。史記殷本紀：「帝小辛崩，弟小乙立，是爲帝小乙」。爲第十世殷王之大宗，亦卽第二十一位之殷王。

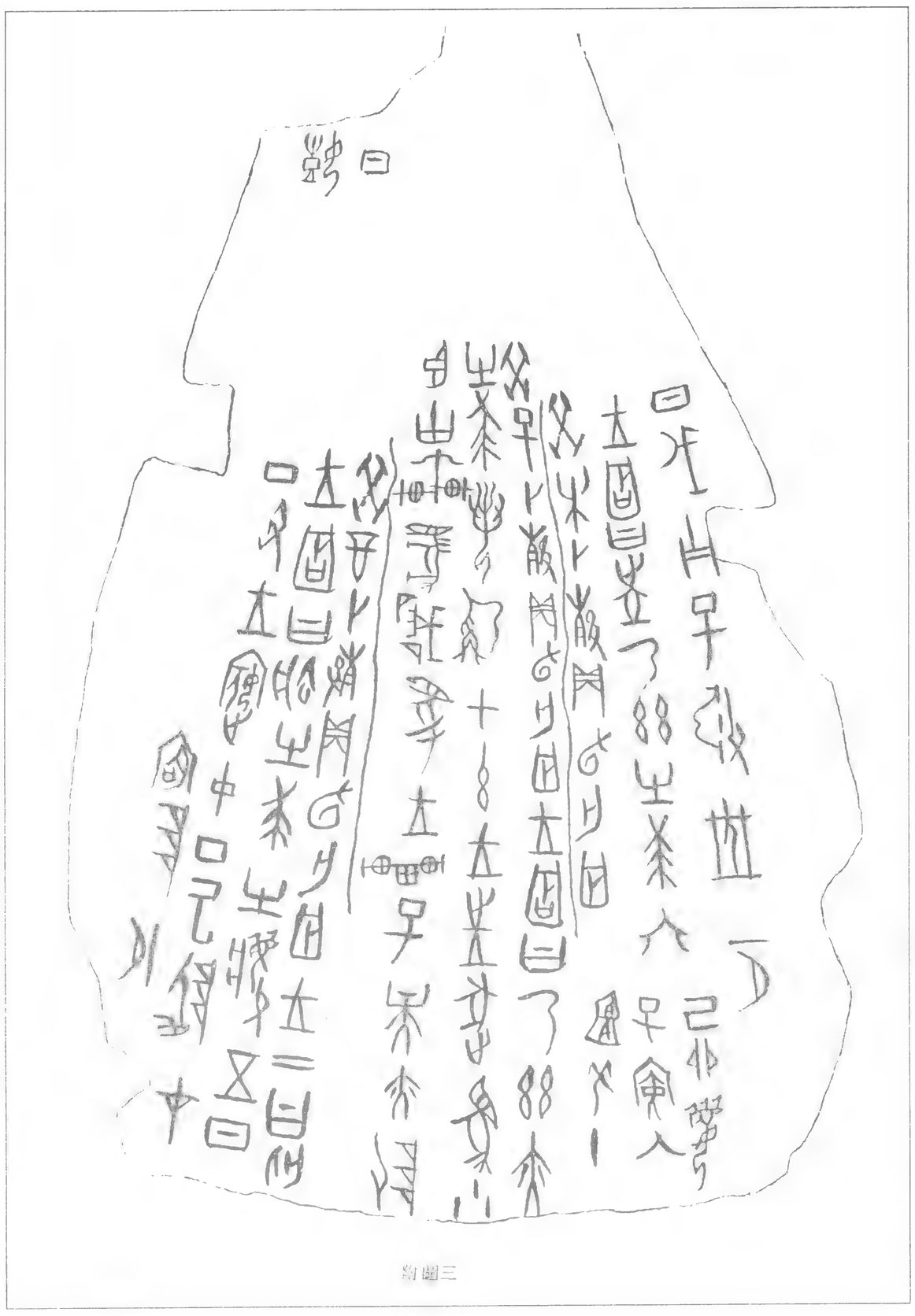
大戊：爲第五世殷王之大宗，亦卽第九位之殷王。史記殷本紀稱太戊，「帝雍已崩，弟太戊立，是爲帝太戊。太戊立，伊陟爲相，殷復興，諸侯歸之，故稱中宗」。據卜辭、中宗爲且乙，史公所記有誤。

第六版　骨　第四期

1. □ 一
2. 弜又 一
3. 惠示 一
4. 惠乜 一
5. 甲申貞：小乙祭亡𡆥 一
6. 不𩅦雨 一
7. 其𩅦雨 一
8. 不𩅦雨 一
9. 其𩅦雨
10. 甲辰貞：小乙日亡𡆥



附圖一



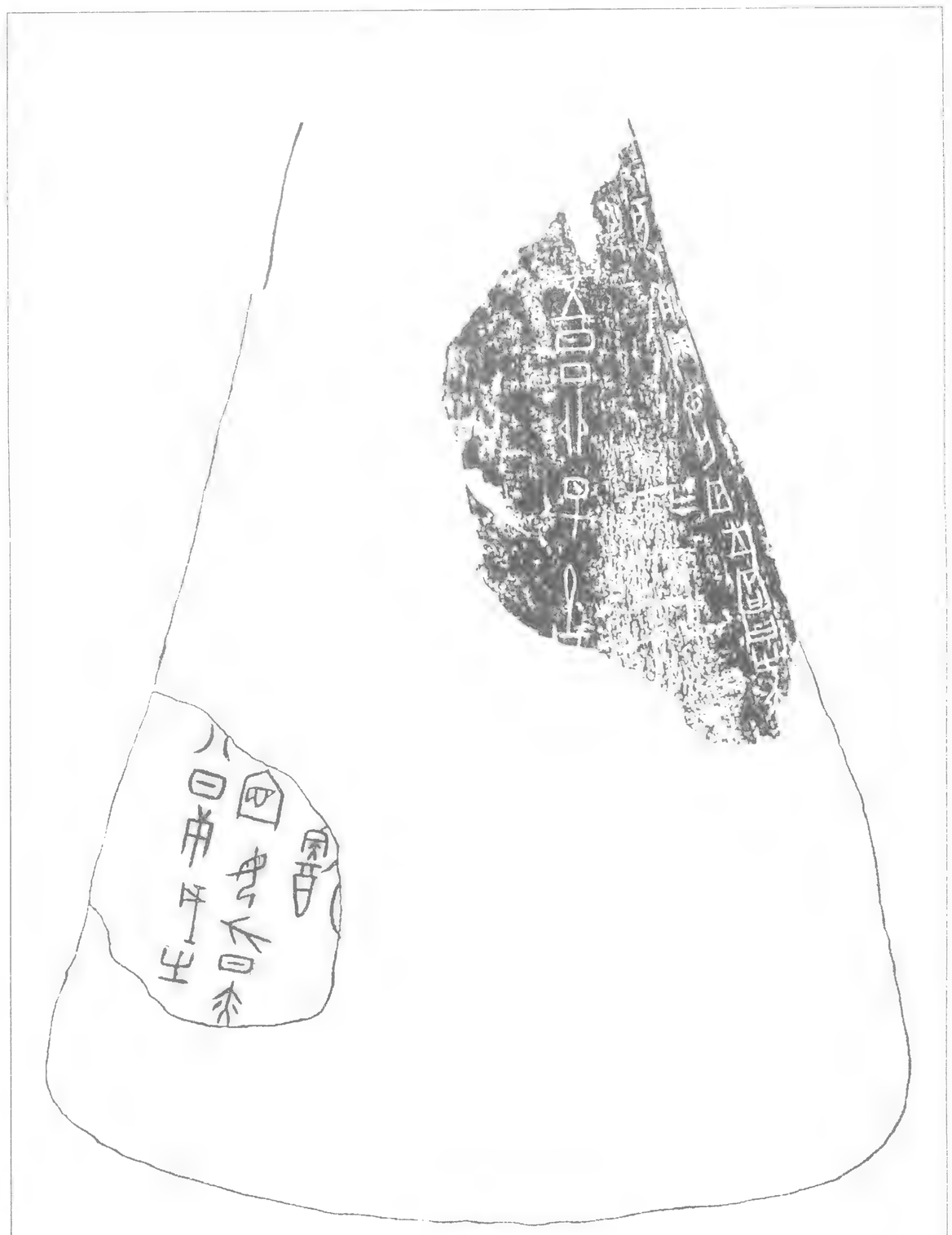
附圖三



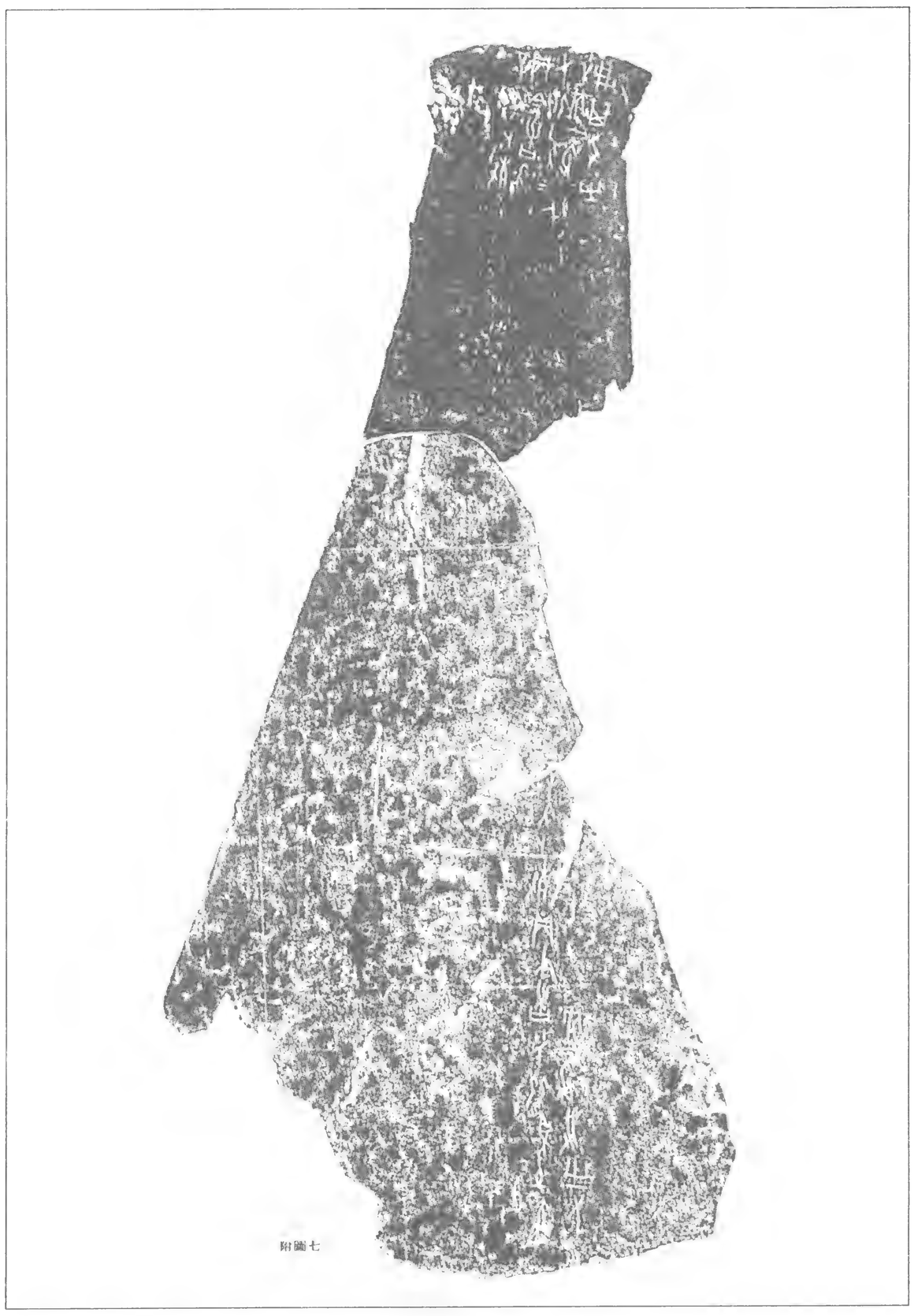
附圖二　新綴 272＋沈氏藏拓



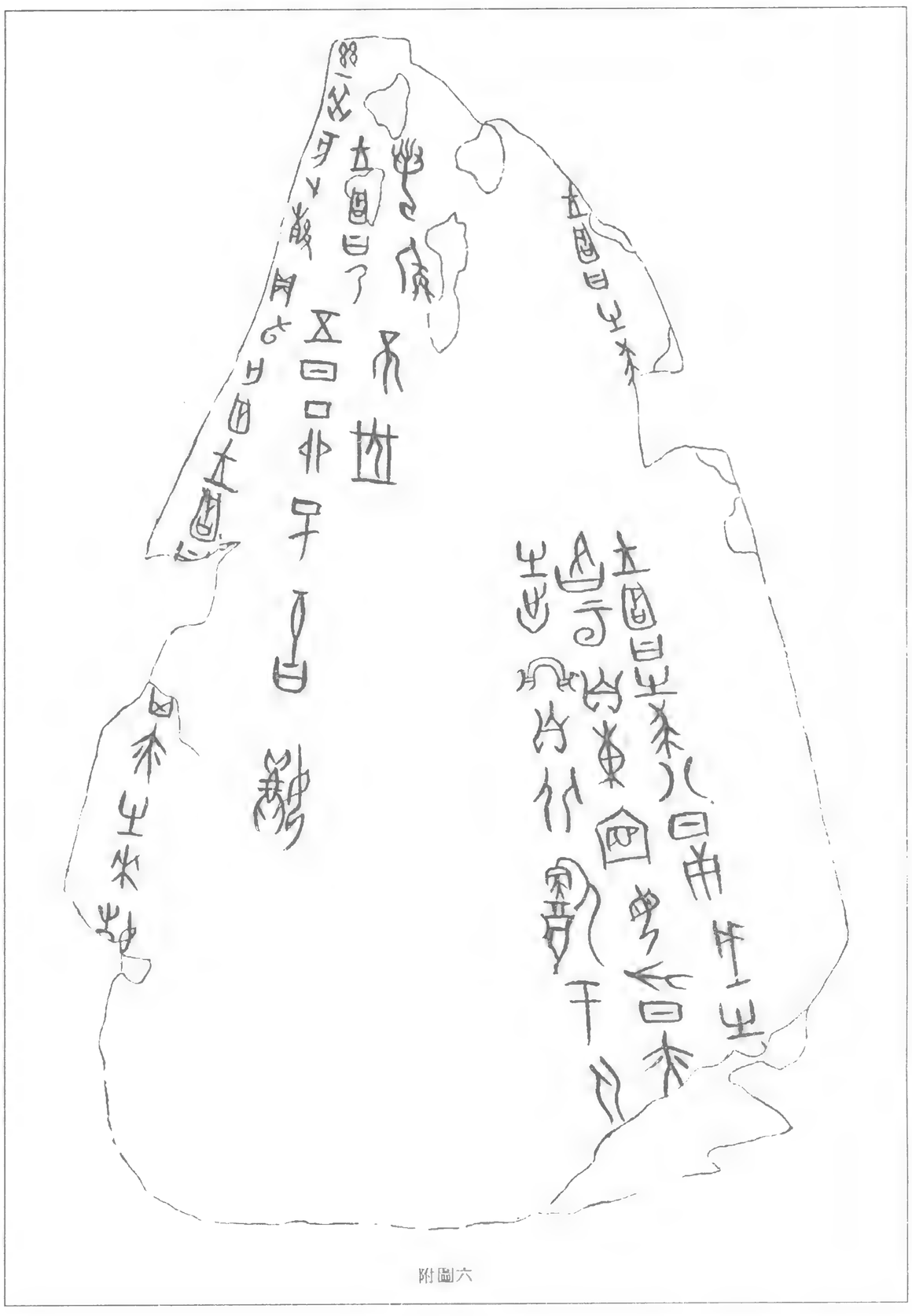
附圖五　新綴 273＋沈氏藏拓



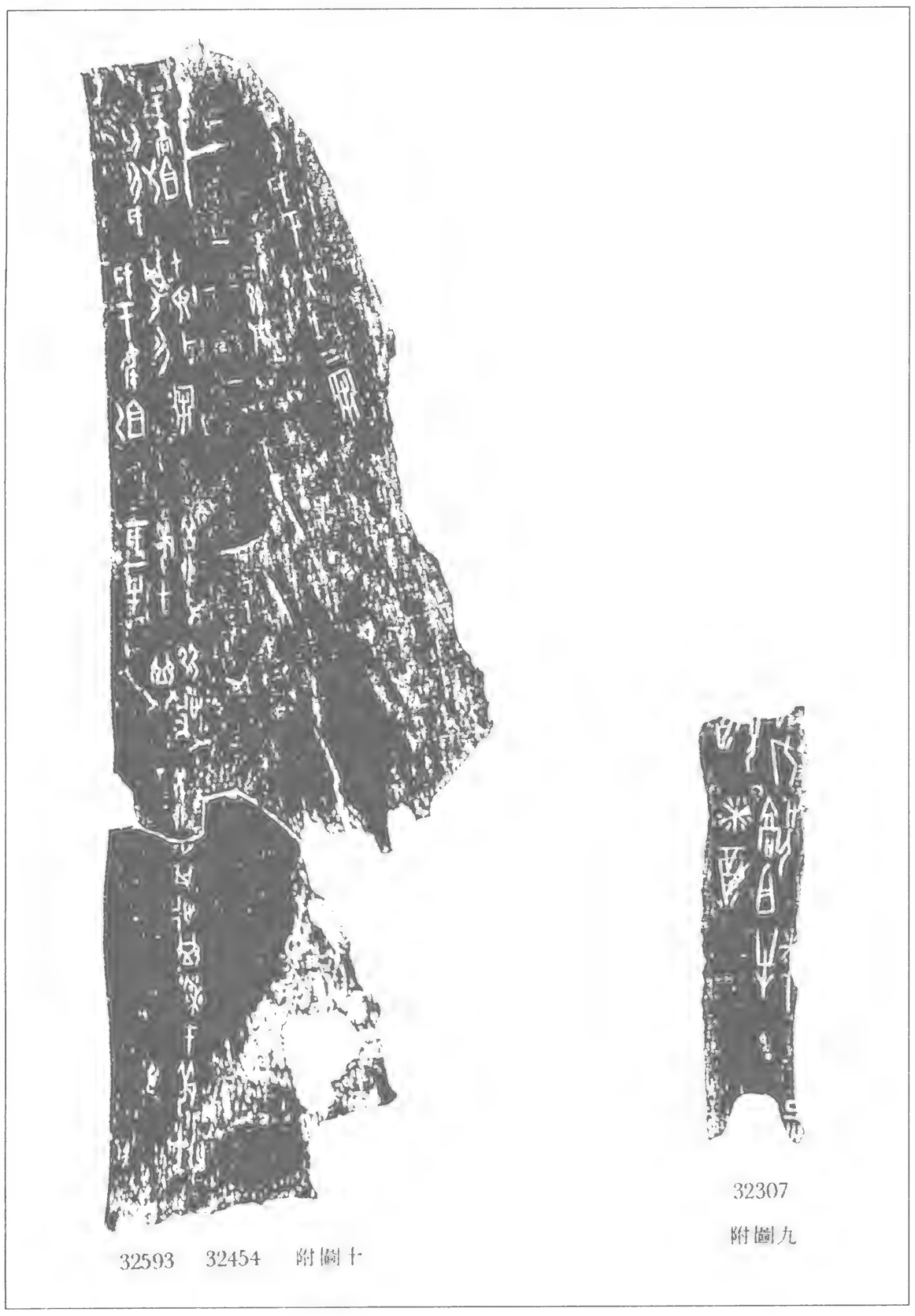
附圖四



附圖七



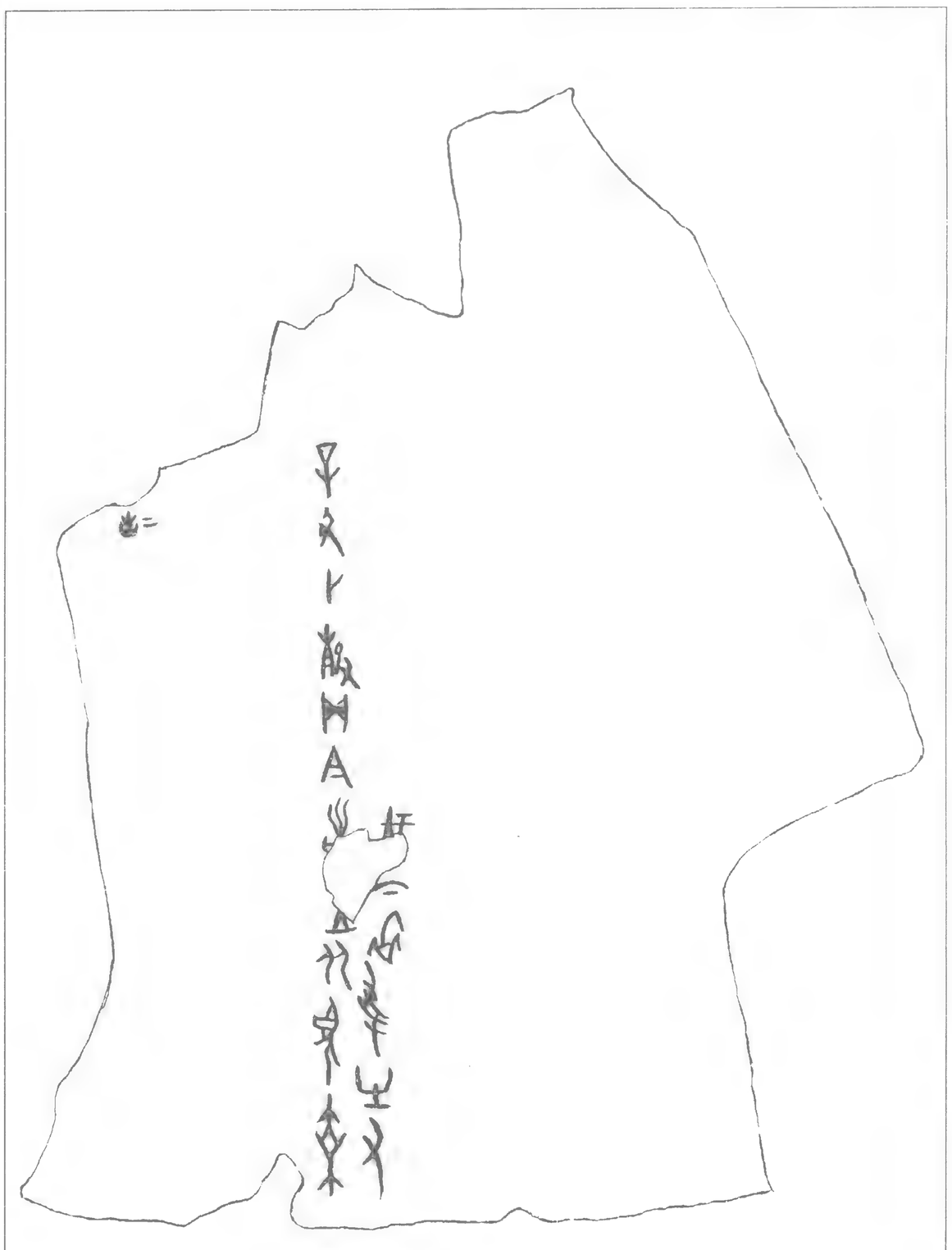
附圖六



32593　32454　附圖十

32307

附圖九



附圖八　庫 1624

日本後藤朝太郎氏藏的甲骨文字

中央研究院 史語所 蔡哲茂

日本學者之中，最早注意到河南安陽小屯殷虛出土的甲骨文，就是龜甲獸骨文字的編者林泰輔博士，當劉鶚所編印的鐵雲藏龜傳至東瀛，林氏初見此書，頗疑其僞，俟東京本鄉文求堂購得百枚甲骨，以之販賣，林氏從文求堂購得十枚，既見實物，始祛其疑，因撰「清國河南省湯陰縣發見の龜甲牛骨に就て」一文，刊於明治四十二年史學雜誌第二十編第八、九、十號。林氏後來得知甲骨正確出土地爲安陽之後，於大正七年四、五月間旅行中國，親至河南安陽，造訪洹水之濱，並蒐集殷虛出土遺物，返日後並撰有「殷虛の遺物研究に就て」於東亞之光第五、六、七、八號。此文大要後來由徐嘉瑞氏譯成「日本甲骨之收藏與研究」，刊於民國十六年的國學月報第二卷一號，林氏該文述及日本甲骨的收藏者，最多的首推三井源右衛門，其次爲林氏本人，又次爲河井仙郎（河井荃廬）及中村不折，至於日本研究甲骨文者，林氏舉出只有高田忠周、河井仙郎，後藤朝太郎等二、三人而已，但沒有提及後藤氏也藏有甲骨。至胡厚宣氏「五十年甲骨文發現的總結」六四頁始揭其藏有甲骨。

一九五六年六月香港大學出版的東方文化三卷一期，載有饒宗頤先生的「日本所見甲骨錄」一文，其中第十七頁㈡東京國立博物館項，饒先生說：「舊藏原二十一片，通纂別二所錄上野博物館七版，即此批之物，現均保存完整。新購入者有二百零二片。據增田精一君云：『此批爲後藤朝太郎舊藏，後歸蘭山龍泉堂，二年前，始售與博物院。』（胡氏云上野博物院藏五一零片，不確。）予以杉村勇造先生之協助，得將全部甲骨摹錄，又荷增田君拓贈一部分，嘉誼厚貺，均足銘感。」但松丸道雄先生在「日本散見甲骨文字蒐彙㈡」（甲骨學第八號）記載國立上野博物館所藏二百二十五片，其中僞刻二片，本稿收二十一片（二八六—三〇七），其云：

「該博物館，第一次（明治四十五年，由黑田太久馬氏所收）十八片，第二次（大正二年，由龜田一恕氏所收）五片（其中二片僞刻）第三次（昭和二十七年，羅振玉的舊藏，此次由於篇幅關係，在此只收第一次（286～304）第二次（305～307），尚有郭沫若卜辭通纂別錄之二所收的七片，茲注明其舊錄號碼，仍在此重載。」

後來松丸先生撰「日本蒐儲の殷虛出土甲骨について」（東京大學東洋文化研究所紀要第八十六册）修正前說，以爲上野博物館後來購入的二〇二片的這批甲骨：

「是座右寶刊行會社長後藤眞太郎氏的舊藏。實際上向其哲嗣後藤茂樹打聽，得知和　後藤朝太郎　此人無關，至於眞太郎從何處得到這批甲骨則不可知，而後藤朝太郎則爲著名的中國古文字、中國文化的研究者，胡厚宣　五十年甲骨學論著目　曾收錄他的五篇論文，又胡氏的　五十年甲骨文發現的總結　六四頁　國外私人收藏　其中之一曾舉有　日本後藤朝太郎舊藏　（其收藏數目未詳）現在到底隱伏著什麼樣的混亂，無法立刻判明，只好把所得知的地方記下，以俟後考。」

按後藤氏論文中的「龜甲獸骨文字の研究」（第一回）發表於東洋學報第四卷第一期，其中附有數張甲骨實物的照片，文中二七頁曾表示甲骨實物爲其所藏，今列舉如下：（編號爲筆者所加）

(1) 丁丑卜：固今至于匽辰，雀囚望☐八□（第五頁）
此片摹本見於南南2、152（合集 39757）

(2) 貞：今☐（第五頁）
此片僅見「貞今」二字，原片倒置，未見他書著錄。

(3) ☐入若？
此片仍存「入若」二字，未見他書著錄。

(4) 辛巳卜，出貞：其㞢，亡田？（正面）（第七頁）
帚井丁五屯，𣪊。自新𠂤气。（臼）（第八頁）
此片正面摹本見於南南2、13（合集 40579）反面有六個完整鑽鑿兩個作○三個作○一個作 d，骨臼見於南南2、14（合集 10579 臼）、摹本「㞢」字漏摹。

(5) 此片爲骨臼豎立側面照片。（第九頁）
(6) 此片爲反面，僅見鑽鑿之形。（第十三頁）
(7) 此片爲反面，有五個鑽鑿（第十三頁）
(8) 此片爲從鑽鑿斷裂處之側面（第十四頁）
按頗疑(7)(8)兩片原爲一片後從鑽鑿處斷裂。
(9) 庚☐貞☐　（二七頁）
不舌
不舌
摹本見於南南2、168
(1)(4)(9)三片俱見於胡厚宣氏所編「戰後南北所見甲骨錄」中的卷二師友所見甲骨錄，根據該書序例云：
「至卷二所錄，多選自友人葉栗如先生所藏其尊人葉渭漁先生遺著甲骨文選甲乙編。」葉玉森氏甲骨文選甲乙編未見，不知此三片摹本是否出自此編。
後藤氏該文中又曾據其所藏實物抄錄其銘文
(10) ☒𠂤大（貞宙立）
手其牢
(11) 其雨
(12) 今月不雨（第十七頁）
(13) (14) □月雨不雨
丁丑卜今至于辰𠂤（按此條即(1)）
(15) 勿呼勿呼𠂤 伐呂方弗其受又
(16) 癸酉卜出貞才𠂤四十月
(17) 癸亥卜出貞才𠂤四十月。（第十八頁）
又後藤朝太郎所著「文字の史的研究」一書，刊於昭和五年，爲東京維山閣所發行，目次之後附圖二、三頁爲甲骨照片，二頁即初版殷虛書契菁華二頁之大骨，三頁則爲十片甲骨，（附圖），根據此書九四頁對附圖三的說明標題爲「何（按河之誤）南殷墟出土の龜甲獸骨遺片各種」其下云：「如圖所示是著者在支那蒐集龜甲的數百點實物中，舉出的數例，皆河南彰德府安陽河畔小屯郊外所出土之物。」又再根據此書五四頁記載，著者曾將自己所藏甲骨持請渡瀨理學博士鑑定，二百餘品之中，百分之八十是獸骨，龜甲的部分則較少。後藤氏藏有的甲骨數目，自云數百點，又曾持二百餘品請人鑑定，則後藤氏少有兩百多片，此書所附十片甲骨，除了一片爲前舉(4)的反面之外外，未見他書著錄，鮮爲人知，茲介紹如下：（原片倒置）
(18) 戊子卜，𣪊貞：王从☐（二七頁）
(19) 此片爲反面僅見鑽鑿。
(20) 此片亦爲反面有兩個完整鑽鑿
(21) ☐其☐既☐
(22) 貞：□薛☐☒☐（原片倒置）
(23) ☐雨？戊戌雨
(24) ☐𣪊貞：𠂤𢦏□
☐𠂤𢦏☐
(25) 戊辰☐王令☐
(26) 癸☐（此片極不清楚，似仍存一「癸」字）

以上是從後藤氏的兩份著作輯出的甲骨，若有任何新著錄甲骨書或博物館收藏品中含有以上的甲骨，可知必有後藤氏之舊藏。上野博物館後來購入的二〇二片甲骨是否後藤朝太郎舊藏，只要覆核以上所舉甲骨立刻可知。

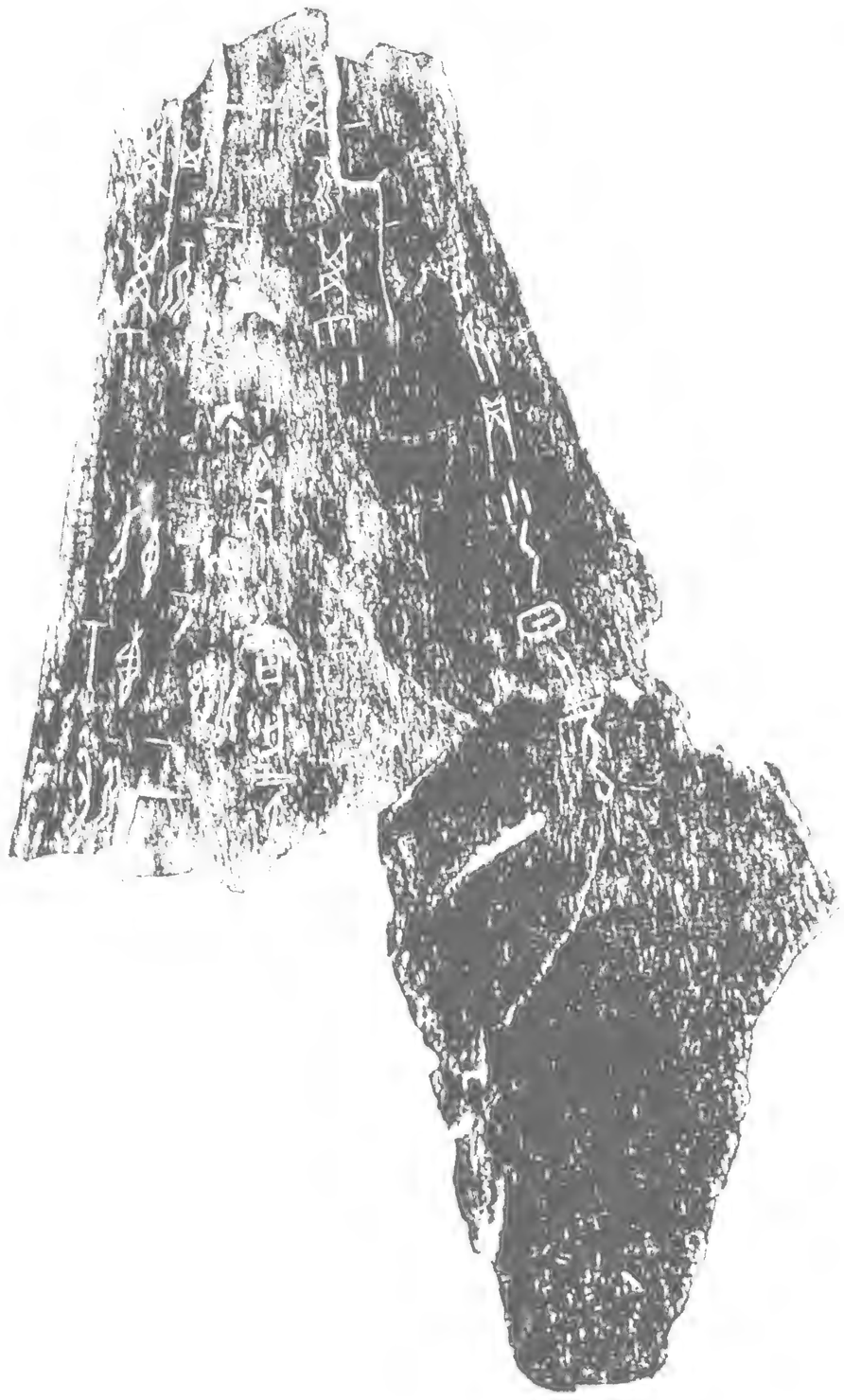
又考古學雜誌第四卷第五期載有後藤朝太郎的「中國河南省所發掘龜甲獸骨の研究」一文，封面有六片甲骨，第一片內容和林2、29、1及林2、29、16（此二片爲僞刻）有相同之字，大概出自同一人的僞刻，其餘五片，由松丸先生的「日本散見甲骨文字蒐彙㈡」可知即今藏上野博物館明治四十五年黑田太久馬氏所收之物，第二片爲散㈡125甲（博9）「別二、IX—3」，第三片爲散㈡122甲（博6）之反面，有一「戊」字，第四片爲散㈡126骨（博12）「別二IX—1」（合集 19992）之反面，第五片爲散㈡126骨（博2）（合集 39723）第六片爲散㈡121骨（博5）之反面倒置。此六片甲骨和後藤氏大概沒有關係。

附識

一、杉村勇造氏也藏有三片甲骨，今歸東京出光美術館，見松丸先生「日本蒐儲の殷墟出土甲骨について」十八、十九頁、松丸先生已預備調查（或已經調查確認）。按出光美術館選書3由杉村勇造所編「中國古銅器」（平凡社）第七頁附有甲骨照片一張，爲其他甲骨書所未見，或許即杉村舊藏三片之一。其文爲：（但所附考釋把羌甲以爲是陽甲是錯誤的。）

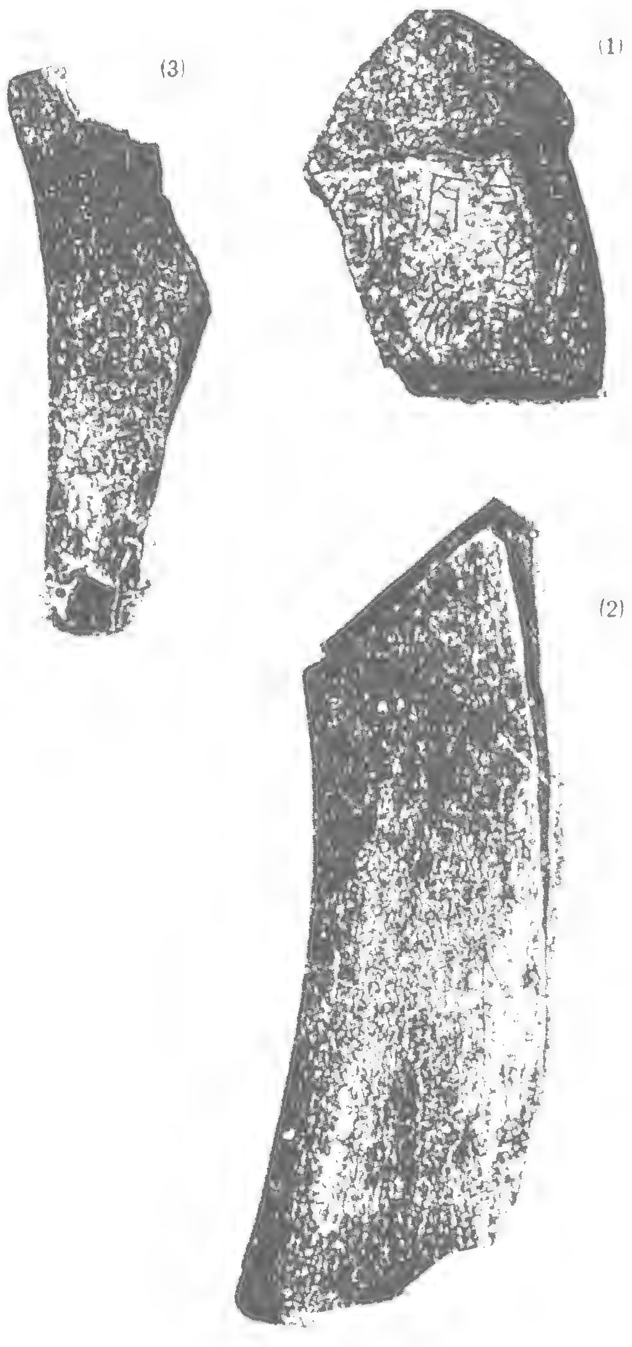
貞：𠂤于南庚？
貞：𠂤于羌甲？
☐𠂤于☐丁？

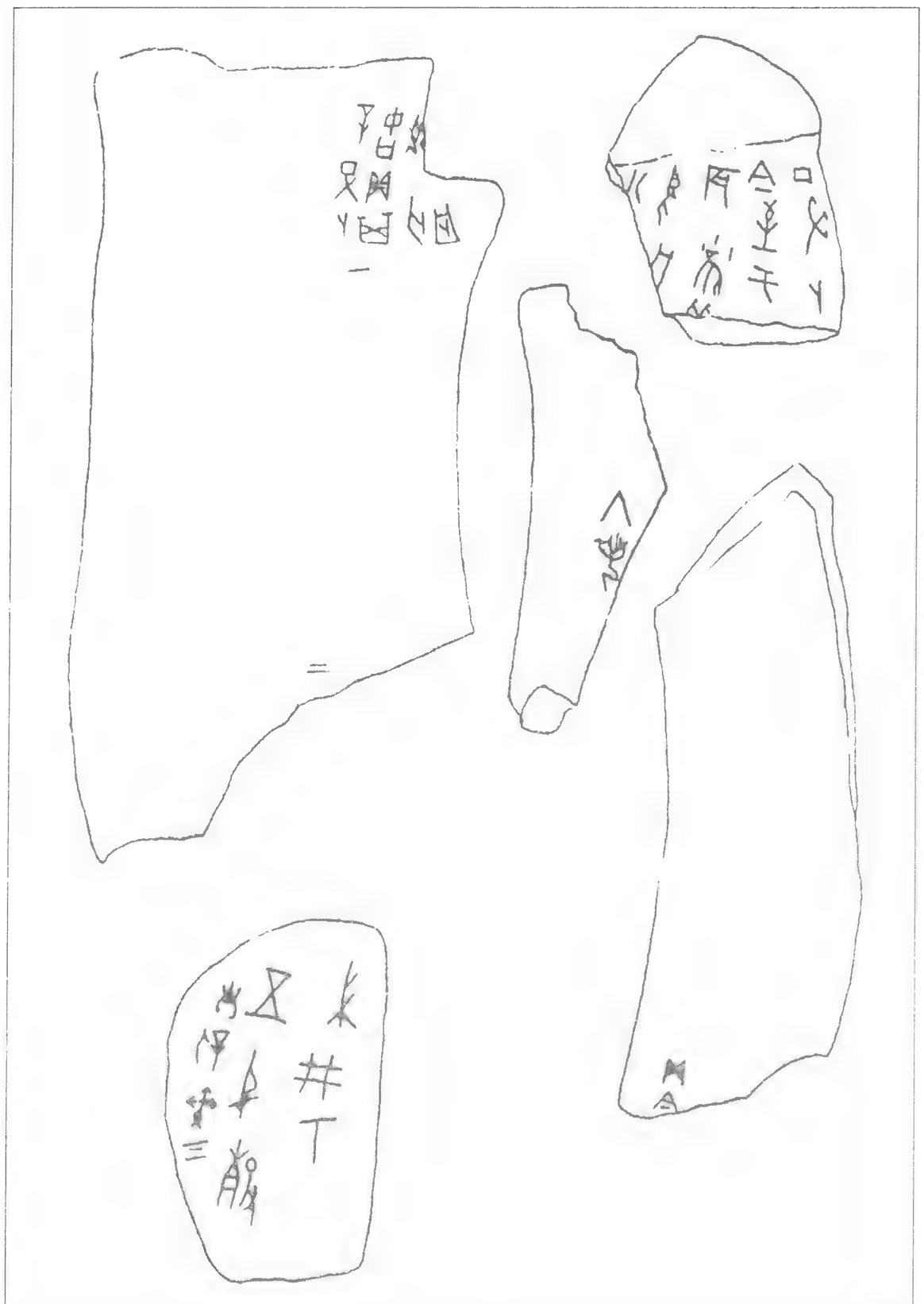
二、胡厚宣氏「五十年甲骨文發現的總結」六四頁曾舉日本岡田朝太郎舊藏，數目未詳，後藤朝太郎「龜甲獸骨文字の研究（第一回）第三頁曾提及其本人親自檢視的甲骨實物不過是法學博士岡田朝太郎自北京携來的百片及林泰輔氏所藏的數百片。是岡田氏有百片甲骨。

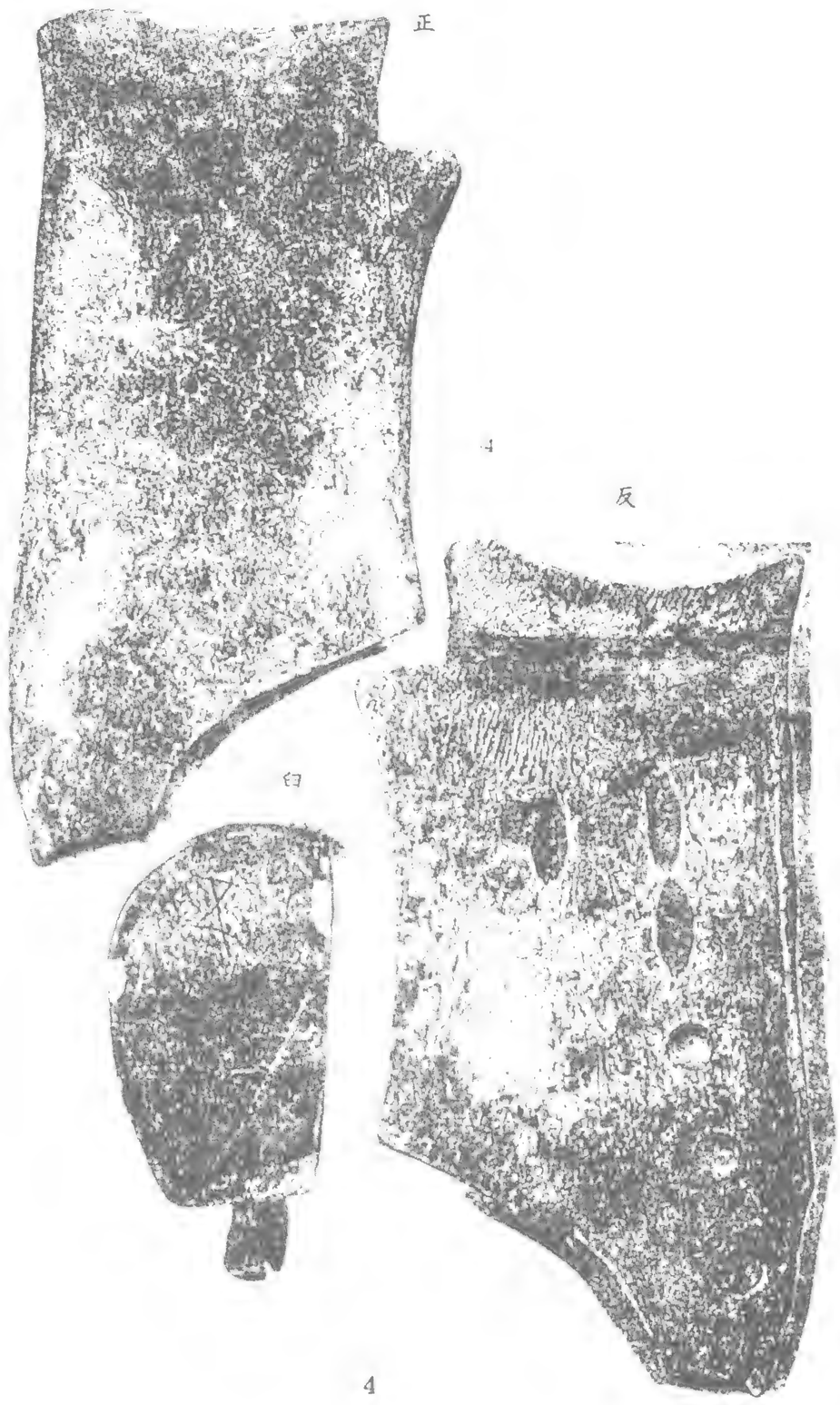


32625　附圖十一

（原載《中國文字》新十二期，一九八八年）





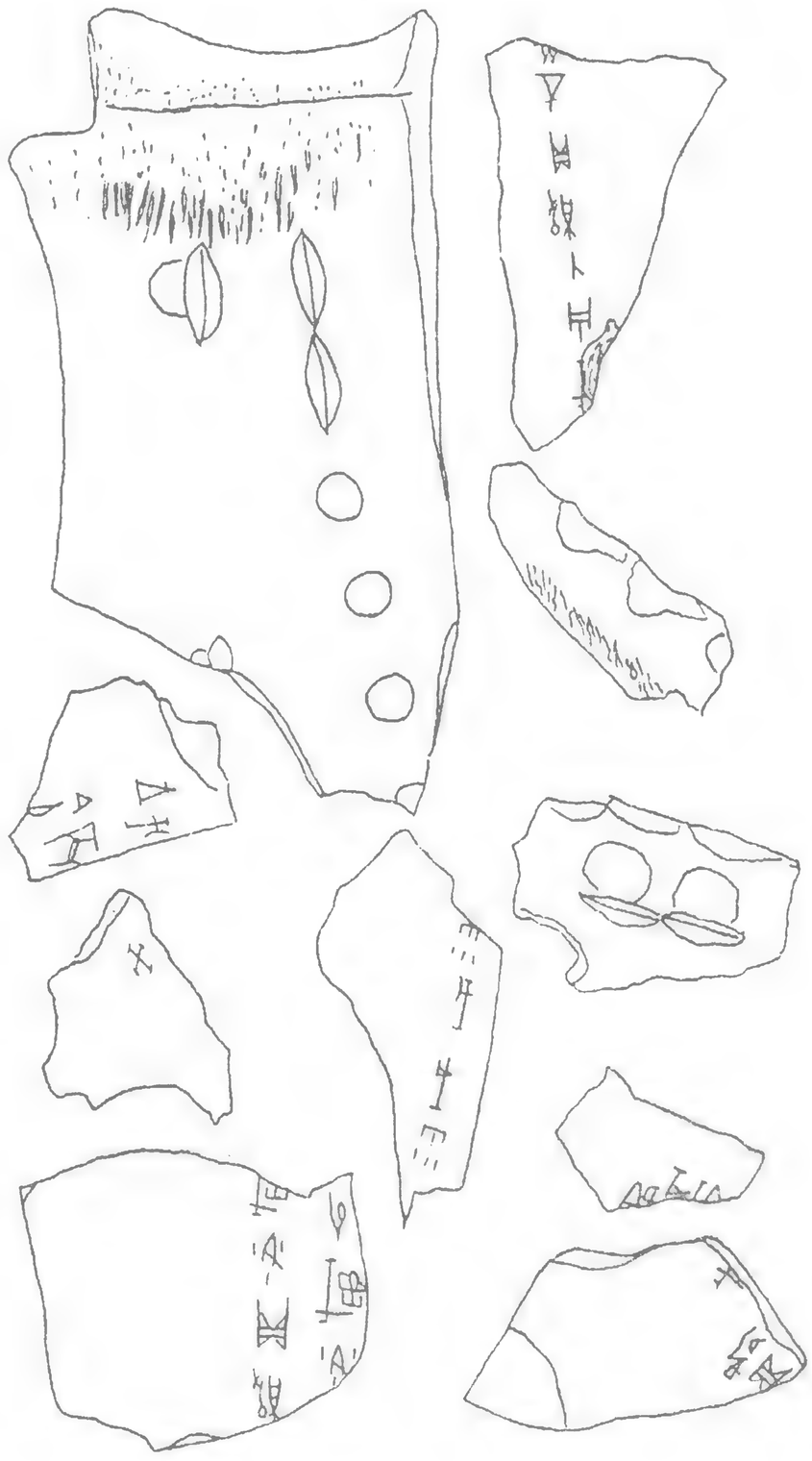


河南殷墟出土の龜甲獸骨遺片各種









西北大学所藏甲骨文字

刘士莪

1956年，西北大学历史系文物陈列室入藏殷代甲骨八片，其中卜甲、卜骨各四片，上面共有刻文134字。这八片甲骨为数有限，内容习见，所卜有天象、祭祀、田猎、征伐等事。其时代分属于甲骨断代一、二、三、五期。考其来源系早年出土于河南安阳殷虚故地。

这八片甲骨业已故陈直先生经手搜购的。至其经世细末，今已无从查寻。著名甲骨学家胡厚宣教授曾目覩审夾，断其全部为真。其后李学勤教授来校授课，亦观察审议，视为良好的教学标本。《甲骨文合集》成书之时，已拓印分类收录。为了便于学者对此检索研究，值此殷虚甲骨文发现90周年之际，特撰写于后，再次公诸学林。

第一片，卜骨。残长10.6、宽3厘米，系牛右肩胛骨的左上部。背面左下沿残存两个削凿的凹痕。正面有刻辞两条，左行：一曰"贞不其易日"五字；二曰"贞…易…"残存二字，均述关于天象的刻辞。

殷虚卜辞中常常见"易日"、"不易日"的记录，如：

庚寅易日，昃雨。（库1668）

甲辰卜，乙巳易日？不易日？雨。（续4.14.4）

□□卜，出□，丁酉易日，不雨，八月。（铁113.2）

乙未卜，王翌丁酉酒伐，易日，丁明，霍大食。（续6.11.3）

卜辞中的"易日"二字，孙诒让说为更日或暴名。按此二字多与雨、雾、昏等词同见于一版，或同卜于一辞，其为与天象之事有关无疑。郭沫若云："易，乃暘之借字，《说文》：'暘，日覆云，雍见也，从日易声'。昼则易日犹言阴日矣。"① 可见卜辞中所说的"易日"、"不易日"，皆指某一日阴或不阴而言。

从卜骨书体来看，文字精劲，属武丁时期遗物。

第二片，卜骨。残长6.8、宽2厘米，系牛右肩胛骨的右侧边沿部分。背面近右沿处有三个削凿的凹痕。正面有刻辞两条，右行：一曰"贞其雨，四月"六字；二曰"甲申……"残存二字，亦系关于天象的刻辞。

甲骨卜辞中关于贞卜雨的记录多见，如：

不雨大雨，不雨小雨。（粹997、1002、1004）

其雨大雨，其雨小雨。（粹807）

雨为遇之初文，祖甲以后加止为意，以后又加彳为遇。《尔雅·释诂》："遇，逢遇也。"意为人于行进中相见。本版刻辞曰："贞，其雨，四月"，即在四月的某天，贞问遇雨之事。

从刻辞书体来看，卜骨为武丁时期遗物。

第三片，卜甲。残长4.2、宽4.1厘米，系龟腹甲的左甲桥上端。背面有修整痕迹。正面有刻辞一条，右行，文曰："壬□□内贞…衔其来艰我于纽鄙"十一字，是卜问征伐的刻辞。

衔，从行旁声。《说文》所无，当为步之繁文，卜辞中屡见，如《铁云藏龟》128.1、174.2可证。古文从行之字，或省其右作彳，或省其左作卜。

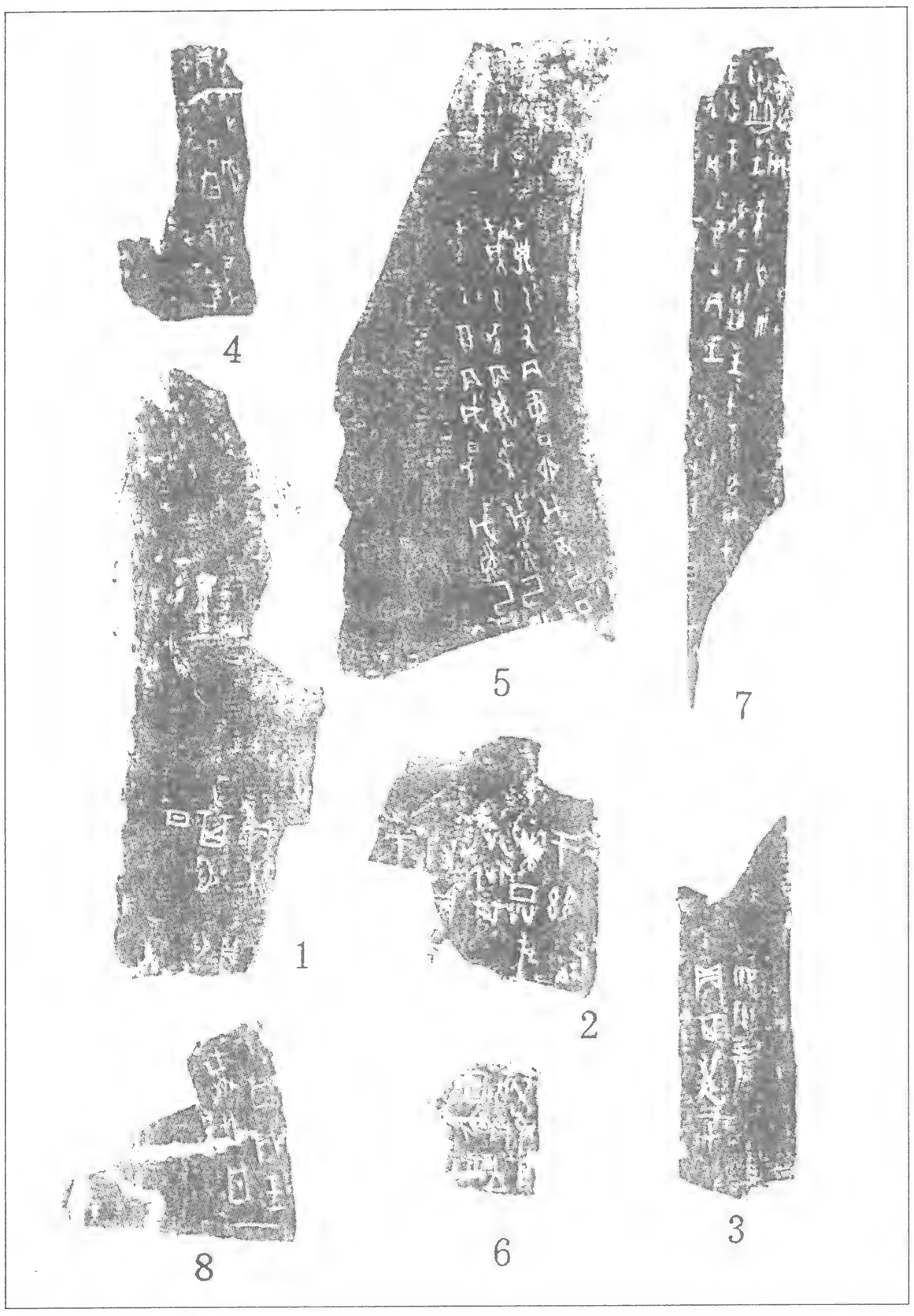
艰，学者多释为正，并训为征伐某方之征如："江盛告曰，土方艰于我东鄙，戈二邑"（前）是其证。第一期甲骨文于獭猎亦言正或艰，例如："獭正𠂤，获鹿百六十二（佚下1.4），"我弗其受艰兕"（铁103.2，林2.14.10），"在𠂤艰豕，弗其𠂤"（铁181.3），等等。可见卜辞中



貞之于
貞于羊
貞之于南庚

中段は「貞り羊（陽）甲を之（祭）る」と読み、下段は南庚とあるので上段の丁は祖丁である。殷王十六代祖丁・十八代陽甲・十七代南庚を祭る龜卜。骨を薄く削り焼くと裏に龜裂ができそれで卜なう。

（原載《大陸雜志》第七十八卷一期，一九八九年一月）



浙江省博物馆新藏甲骨文字

曹锦炎

浙江省博物馆新近整理、入藏了两宗甲骨，计69片（不包括伪片及无字甲骨），原分别为陈器成、张凤两位先生旧藏。胡厚宣先生在《八十五年来甲骨文材料之再统计》①一文中，已将这批甲骨列入私家收藏一栏，不过，胡先生所统计的数字（陈器成4片、张凤14片）有舛误，张凤也不应列入上海市。经初步核查，这批甲骨中除少数几片见于著录外，余皆未公布过。现介绍于次，供大家利用。

一、陈器成旧藏

陈器成先生（1902～1983年），名木，晚以字行，浙江省鄞县（今宁波市）人。寓居上海，创建光明化学制药厂。营利所得绝大部分用在文物收购，为江浙有名的收藏、鉴赏家之一。建国后，陈先生将其所藏文物精品大多捐献给国家，1980年被聘为上海市文史馆名誉馆员，1985年，子女遵其遗愿，将所藏甲骨53片及部分瓷器捐赠给浙江省博物馆。甲骨原购于上海古玩市场。

1.己卯卜，王贞，余弜（勿）比沚𢦏。
六〔月〕。

☑彙☑，余比☑。

这是武丁时代的一片龟腹甲，正反两卜。沚𢦏是武丁时一位著名的方国首领，常配合商王作战。“比”指联合军事行动②。

2.☑伐，王出。

贞，王出。

不告𠂤。

小告。

这是武丁时代的一片龟腹甲，存两条卜王出行之辞，“不告𠂤”、“小告”是记卜兆的情况。右下角还有两字，系伪刻。

3.☑七月。

□子卜，宾贞，□鼻子鹿□。王固曰：隻（获），☑弗迺☑（以上正面）。

☑贞☑。

☑〔王〕固曰：☑佳（唯）其☑鹿☑吉（以上背面）。

这是一片武丁时代的龟腹甲，正、背两面均有刻辞，正面文字涂朱。此片曾著录于《殷契拾缀第二编》第155号、《甲骨文合集》第10323号，但两书均失收背面刻辞。鹿，旧释为鹰，不确。其实甲骨文的所谓“鹰”字构形，乃鹿之反首回顾形，故只见其一角，姚孝遂先生曾加以详细考辨③，此不赘述。鼻字作𠯿，从拓片看较模糊，从实物可以辨认。

4.〔戊〕戊卜，宾贞，今日其雨。

贞，今日不雨。

戊戌不雨。

这是武丁时代的一片牛胛骨，一正一反两辞卜问今天（戊戌）会不会下雨，最后一辞记录了结果：当天没有下雨。这是一版较为完整的气象记录卜辞。

5.☑夕☑雨。

6.☑夕雨。

𢦏字，非仅用于征伐，亦有巡狩之义。第四期甲骨文中另有𢦏字④，均指狩猎言之，此字应是𢦏之繁体。前人认为典籍作正与征，有征伐、征取或猎取之义⑤，但有人认为“卜辞征伐古固亦曰𢦏，字与‘正’不同。《说文》此读若拔，此当是拔乱之拔。”⑥按𢦏所从之𠂤乃意符，非从之为声也。仍古释正训征为宜。

𡆥，从𠂤从邑，地望不详。

这条卜辞记载征伐之事，内容重要，惜字残泐，文义不全。

内为武丁时贞人，故刻辞属于第一期。

第四片，卜甲。残长4.7、宽2.2厘米，系龟腹甲的左前甲首部，背面有修整痕迹。正面有刻辞两条，左行：一曰“癸丑卜，𠂤贞，旬无𡆥，才（在）九月”十一字；二曰“癸酉卜，□贞，旬无□，才□□”残存七字，皆是关于卜旬的刻辞。

𠂤，贞人名。或释为何，郭沫若云：“尤乃廪辛、康丁时卜人，案此即金文中所习见之‘荷戈形’也，当是何（荷）之古文。”⑦今见此字作𠂤与何作尤形不同，不能从一字视之。

𡆥，甲骨文作𡆥、𡆥、𡆥等形，晚期作𡆥。𡆥字不见于《说文》，其造字本义说者纷纭。于省吾云：“旧释为祸为咼为骨为叶为窝为出，均扞隔无据。”⑧其意应仍读为𡆥，七𡆥即七𡆥，为卜辞恒语。

第二辞与第一辞除卜日和月时不同外，所缺之贞人名应是一致的。前辞“癸丑”在九月，后辞“癸酉”属八月或十月。

𠂤为廪、康时期贞人，故字甲属于第三期。

第五片，卜骨。残长10.8、宽5厘米。𡆥骨版原形较小，疑为羊或猪的左肩胛骨右上侧。背面残存二个钻孔，上带灼痕。正面有刻辞三行，下部断缺。左起第一行为甲子至己巳六日刻辞，第二行为甲戌至己卯六日刻辞，第三行为甲申至己丑六日刻辞。此版仅刻前三甲，显然是一个月的干支表。三行下部均缺失四日的刻辞。

殷代通行以干支纪日，则干支表之用至繁，数见于诸家著录者尚多。《卜辞通纂》首列干支表八片。第一片整刻六十干支（下部已缺），第二至第五片亦仅刻前三甲。然如第二片三甲周而复始，第三片周而复始者再。或以为乃练字之骨，仅备一说。

从刻辞书体来看，干支表属于第五期。

第六片，卜甲。残长2.3、宽1.9厘米。系龟腹甲的左侧中部。背面有整治痕迹。正面有刻辞一条，左行，文曰：“癸巳卜，𠂤贞，王〔宾〕𡆥𣏌福□，𠂤兩”十一字。是关于祭祀的刻辞。

“王”下似缺“宾”字，宾用作祭祀，卜辞习见，否则意不完整。

𡆥，从古文甲在口中，表指上甲之甲而言。罗振玉云：“卜辞𡆥字于十外加口，𡆥以示别，与𠂤、𠂤、𠂤同例。”⑨王国维则云：“上甲之骨在口中，报乙报丙报丁之乙丙丁三字在匚或冂中，自是一例，意壇坫或郊宗石室之制，殷人已有行之者与？”⑩杨树达则认为甲文𡆥字所从之口，即经传之祊字。《国语·周语》云：“今将大泯其宗祊”，韦注云：“庙门谓之祊，宗祊犹宗庙也。”故𡆥从口从十者，谓特起一庙施行报祭之甲也。匠匿匠从乙丙丁在匚中者，亦谓特起一庙兄祭之乙丙丁也。并谓“其甲从口，乙丙丁从匚，有别者，盖殷人祭上甲尤尊，则其宗庙之制特隆，而报乙报丙报丁次之，故但以匚表之也。”⑪

𣏌，作𡆥形，与𡆥形当为一字，商承祚隶定为𣏌，⑫王国维谓为极精确。《殷契征文》天象十一，其辞曰：“王宾𡆥”，𡆥仍是作𡆥从𣏌之字，他辞恒言“王宾𡆥福”，则𡆥即𡆥字无疑。唐兰云：“此字当以王（襄）释燕及𣏌之本字为较近”⑬于省吾指出，卜辞中之𣏌，金文中作𡆥、𡆥，石鼓文作𣏌，均为𡆥之古文。并认为“经传从𣏌从𠂤之字音近字通。卜辞𣏌字从祭祀言可读为禘，指宗庙之祭。”⑭禘，即禘从两手奉尊于示前，或者以，或并省示，即后世之禘字，在商则为祭名。福字古训胙肉，今从字形观之，福为奉尊之祭。全辞为卜问殷王在上甲宗庙举行祭祀遇雨之事。

第七片，卜骨。残长11.5、宽15厘米，系牛左肩胛骨的右侧中部，背面残存三个圆形钻孔。正面有刻辞三条，右行，一曰“□丑卜，贞王往于𡆥，步来七𡆥（旬）”十一字；二曰“己酉卜，贞王往于𡆥，步来七𡆥（旬）”十二字；三曰“戊申卜，贞王田于𣏌，步来七𡆥（旬），才（在）□□”十三字，均系贞卜田猎之事。

往，又作徃、迬等形，学者解说不一。罗振玉云：“《说文解字》：‘徃，迸也，从彳㞢声。’案徃与𢦏同，𢦏训行训往，此从𠂤从戈或者止，与许书之徃同，但戈笔殊耳。”⑮另有学者认为此字从彳从𡆥，当是步武之专字，或从行作𡆥，但杨树达视此字从𠂤或从彳从戈为声，即迬字也。⑯

𡆥即𡆥，古𠂤字，地名。郭沫若认为𡆥即《说文》邑部之郢，云晋邑也，从邑𠂤声。地在今河南沁阳境。⑰“王往于𡆥”常见于卜辞，如《殷虚书契前编》卷二·二十四之二云：“己酉卜，贞王往于𡆥，往来亡𡆥。”此条的时间、地点与第二辞全同。《卜辞通纂》第六一五至六三二片亦有记载。

田即畋，狩猎。𣏌，地名。王国维疑𣏌即《左传》僖公二十四年邢、晋、应、韩之邢，杜注云：“河南野王县西北有邢城。”⑱地在今河南沁阳西北，与垣曲相隔不远。又《卜辞通纂》第六二五片云，“辛丑卜，贞王往于𣏌”，“壬寅卜，贞王往于𡆥”，𣏌与𡆥二地相距仅一日路程，其近可知。如是，从本版刻辞之三、刻辞之二来看，戊申日王在𣏌，己酉日王在𡆥，则𣏌与𡆥当为一日路程之距。是知𡆥、𣏌、𣏌是相邻的三地。

卜辞中与𡆥同版或相联系的地名，除𣏌、𣏌外，还有𠂤、衣、雚、宫、向等⑲而且凡言往于某地者，下皆言“往来亡𡆥”。盖殷末于今河南沁阳附近广置离宫别苑以供王与贵族之行幸。

从卜辞通例和字体来看，各句不著贞人名，王字皆作“王”形，三横画等距齐长。当为帝乙帝辛时所卜，故刻辞属于第五期。

第八片，卜甲。残长3.8、宽4厘米，系龟腹甲的甲首左侧部分。背面有整治痕迹。正面残存刻辞一条，左行，文曰：“□□卜，𠂤贞，王𡆥□福，亡𡆥”七字。也是关于祭祀的刻辞。

𠂤，贞人名。又见《殷契粹编》第1348片、《殷契遗珠》第491片。𠂤是祖庚、祖甲时人，故卜辞属于第二期。

上述八片甲骨卜辞，见录于商承祚《殷契佚存》者有三片，即第三、六、八片分别与该书第364、369、362片为同辞之墨本。该书栏外印记“丹陵陈（邦怀）氏藏”。又该书第148片与第366片二者墨书全同。前者栏外印记“北平孙（壮）氏藏本”。是知今西北大学所藏的八片甲骨，曾一度归陈邦怀氏所有，而孙氏墨本似亦出自陈氏之藏。藉此可知本文所写刻辞甲骨经世之一斑。

1989年8月

注　　释

①《易日辞》，见《古代铭刻汇考》22页。

②商承祚：《福氏所藏甲骨文字》考释2页。

③董作宾：《小屯·殷虚文字甲编》第638片；
胡厚宣：《戋后宇沚所获甲骨续》第409片。

④于省吾：《释𡆥》见《甲骨文字释林》卷中。

⑤陈梦家：《殷虚卜辞综述》601页。

⑥《殷契粹编考释》79页上。

⑦《释𡆥》见《甲骨文字释林》卷中。

⑧⑨《殷卜辞中所见先公先王考》见《观堂集林》卷九。

⑩《释田匠匿匠》见《积微居甲文说》26—28页。

⑪《殷虚文字类编》3·9。

⑫《天壤阁甲骨文字考释》46页。

⑬《释𣏌》见《双剑誃殷契骈枝》。

⑭《殷虚书契考释》（增订本）中67页。

⑮同②4页。

⑯《释迬》见《积微居甲文说》7页。

⑰《卜辞通纂》六一五片释文。

⑱《殷虚卜辞中所见地名考》见《观堂别集》卷一。

⑲分别见《卜辞通纂》第六七一、六三五、六二〇、六四〇诸片。

（原载《考古與文物》1990年第4期）

19.二告。

20.二告。

21.二告。

22.小告。

15、22为龟腹甲，16～21为牛胛骨，同属武丁时代。告、二告、小告，均是记录卜兆情况。

23.一。

24.二。

25.五。

26.五，六。

23、24为龟腹甲，25、26为牛胛骨，均属武丁时代。一、二、五、六等数字，是卜兆序数。

27.贞，☐亡☐。

用河。

☐用。

这是武丁时代的一片牛胛骨。"河"是商代传说中的先公名，此卜问祭祀先祖时对河是否用牲。

28.庚辰☐。

29.☐母☐。

28、29为武丁时代的龟腹甲。

30.癸未卜，☐。

☐贞，旬亡𡆥。十一月。

☐贞，旬亡𡆥。十一月。

31.癸☐贞，〔旬亡𡆥〕。

癸卯卜贞，〔旬〕亡𡆥。

☐贞，旬亡𡆥。

32.☐贞，旬亡𡆥。

☐贞，旬亡𡆥。

33.☐亡𡆥。

癸巳卜，☐贞，〔旬亡𡆥〕。

30～33为武丁时代的牛胛骨，均是卜旬之辞，每条卜辞都是在癸日卜问下一旬有否灾祸。

34.☐㞢（？）☐。

35.☐往☐。

36.☐来☐。

37.☐弜（勿）☐。

34～37为武丁时代的龟腹甲，辞已残。

38.南。

这是武丁时代的一片龟左尾甲，字刻在背面，是记录龟的来源，属于武丁时代五种记事刻辞之一④。此类刻辞多刻于龟右尾甲，此片刻于龟左尾甲，罕见。

39.戊☐示☐。

这是武丁时代的一块骨臼，内容亦属武丁时代五种记事刻辞之一，与甲骨的整理、修治情况有关。

40.贞，☐。

41.☐令☐。

42.☐盎☐。

43.☐牢☐。

44.☐来☐。

40～44同属武丁时代，40、41为龟腹甲，余皆为牛胛骨，辞已残。

45.☐王☐

这是祖甲时代的一片龟腹甲，残存一"王"字。

46.戊寅☐。

这是祖甲时代的一片牛胛骨，残存干支。

47.壬子卜，即贞，其攸鼻于小。

这是祖甲时代的一片牛胛骨。攸，《说文解字》作"鞄"，典籍借"施"为之，其本义为以攴击它（蛇），引申义为割解⑤，卜辞中是一种用牲的方法。小，当为"小示"（或"小宗"）之省称。这是卜问是否用割解鼻之肢体以祭商王的一群祖先庙主。

48.☐弜☐才（在）☐。

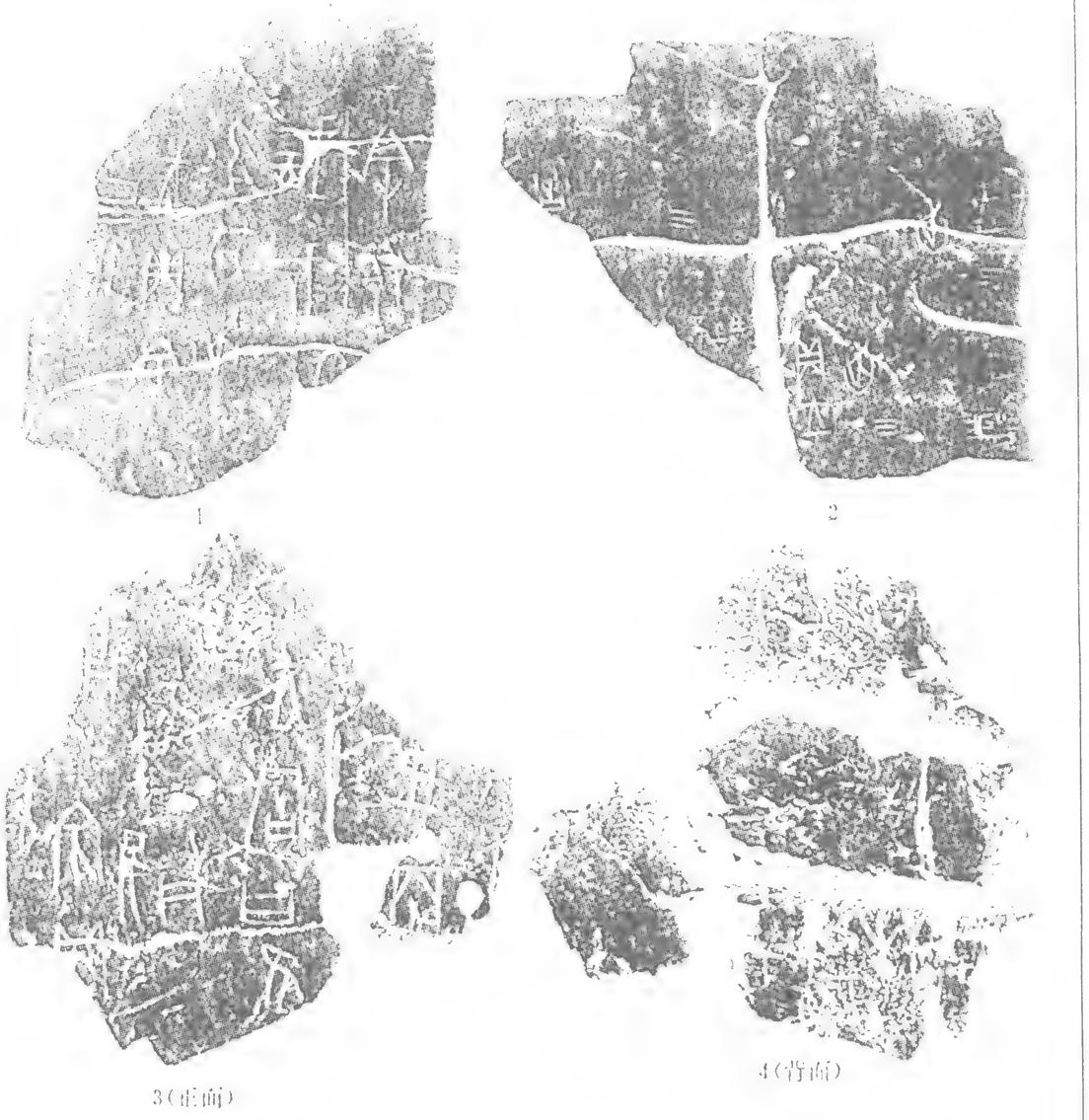
这是廩辛、康丁时代的一片牛胛骨。弜，否定词，义同弗，用法则有别。

49.壬☐田☐。

这是帝乙、帝辛时的一片牛胛骨，卜问商王田猎之辞。

50.甲申〔卜贞〕，武乙方（彷），其牢☐。

重☐。



1

2

3（正面）

4（背面）

7.☐今☐雨。

☐、十一月。

8.☐雨。

9.☐雨。

5～9都是武丁时代的龟腹甲，均为卜雨之辞。

10.☐易日，啓。

11.☐来☐易日。

10、11为武丁时代的牛胛骨，卜问天气是否晴朗。

12.☐☐☐☐☐。

13.☐☐☐。

14.☐☐☐。

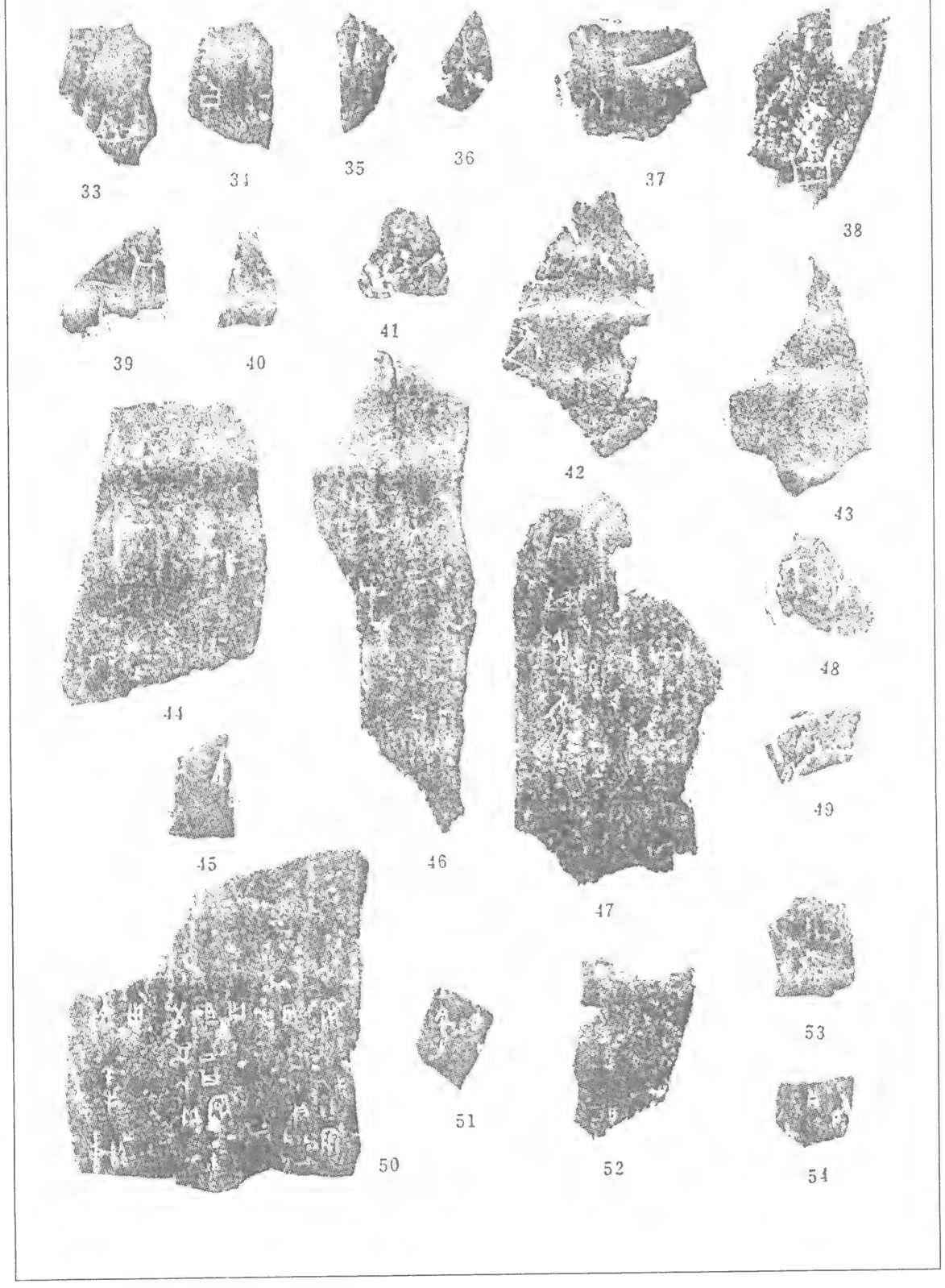
12、13为龟腹甲，14为牛胛骨，均属武丁时代，惜字已残。

15.告。

16.二告。

17.二告。

18.二告。



33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

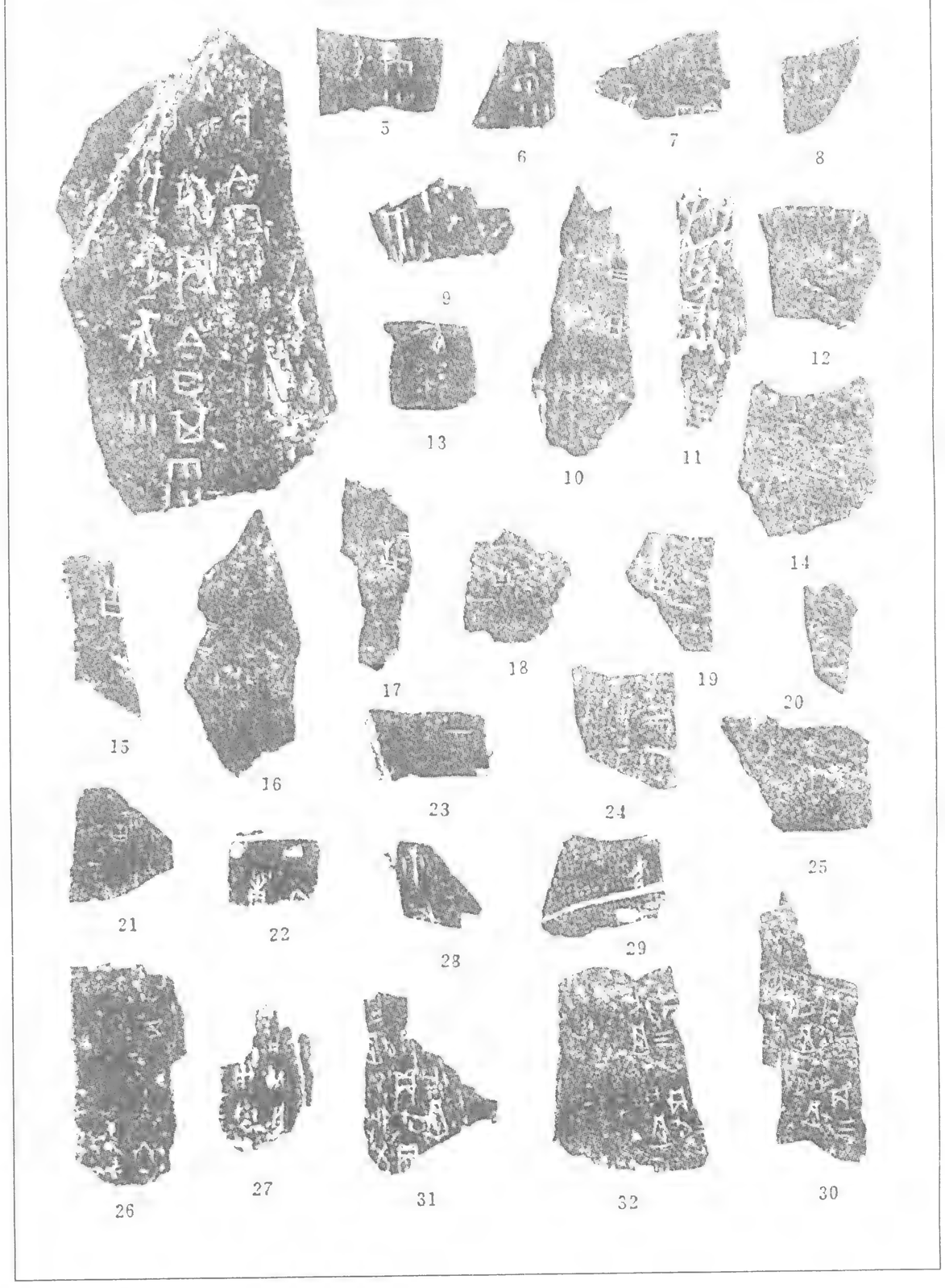
50

51

52

53

54



5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

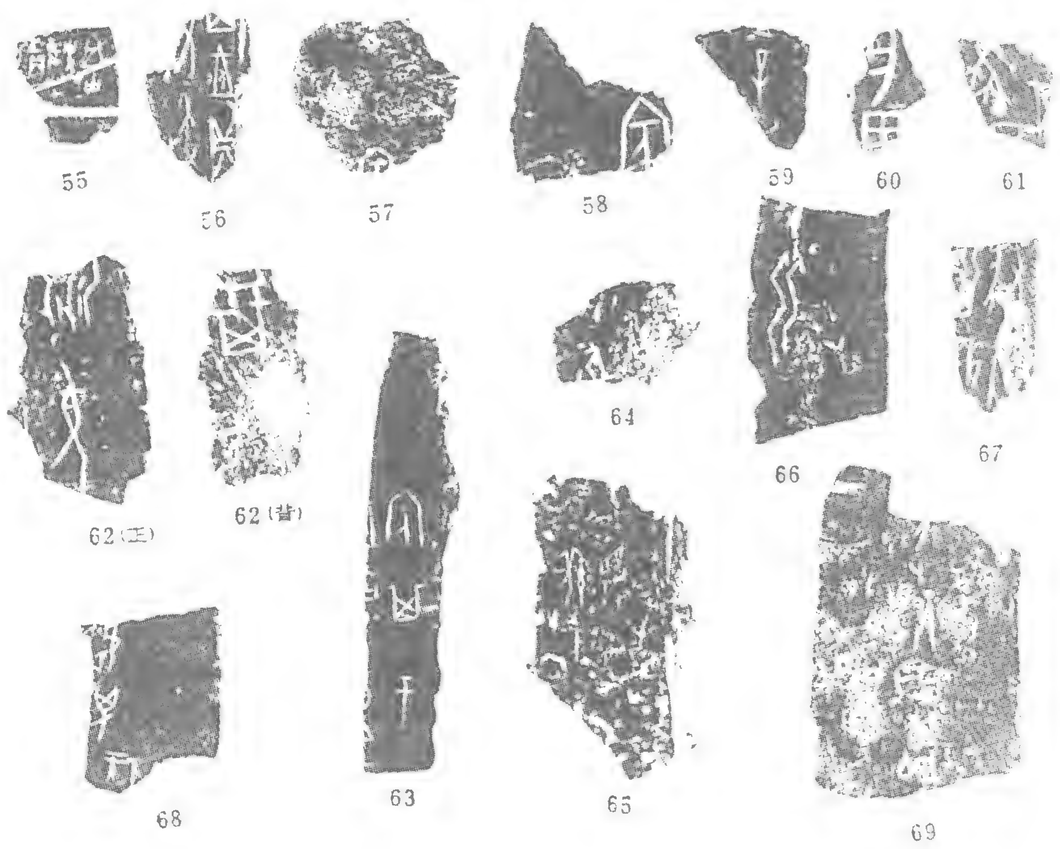
29

30

31

32

① 《史学月刊》1984年第5期。
② 林沄《甲骨文中的商代方国联盟》，《古文字研究》第6辑。
③ 姚孝遂《甲骨刻辞狩猎考》，《古文字研究》第6辑。
④ 胡厚宣《武丁时五种记事刻辞考》，《甲骨学商史论丛》初集第3册。
⑤ 于省吾：《甲骨文字释林·释饮》。
⑥ 载《亚洲杂志》第18期（Journal Asiatique XVIII）。
⑦ 《汉晋西陲木简汇编》初、二编，1931年上海有正书局出版。
⑧ 同⑤，《释酉雨》。
⑨ 同⑤，《释数詈》。



丙戌卜貞，武丁方（祊），其牢，茲用。

癸巳卜貞，且（祖）甲方（祊），其牢，用。

重羊，用。

重☐，茲用。

这是一片帝乙、帝辛时代的龟腹甲，卜问对祢代先王举行祊祭时用牲的选择。重读如唯。

51.□卯卜☐，王宾☐。

52.☐王宾☐。

1、52为帝乙、帝辛时代的龟腹甲，是商王对祖先举行宾祭的卜辞。

53.☐其〔牢〕又☐。

☐牢☐牛。

54.戊☐牛。

☐貞☐。

53、54是帝乙、帝辛时代的龟腹甲，卜问祭祀商王祖先时用牲的情况。

二、张凤旧藏

张凤先生（1887～1966年），字天方，浙江省嘉善县人。1922年留学法国，获文学博士学位。出版有法文版《孔雀东南飞》、《河南甲骨之研究》⑥、《汉晋西陲木简汇编》⑦等著作。历任暨南大学、复旦大学教授，建国后被聘为浙江省文史馆馆员。其所藏甲骨15片系购于上海，1966年张先生逝世后，由其家属连同其他文物图书捐赠给原浙江省文物管理委员会，后拨交浙江省博物馆收藏。

55.☐，王貞，母史田，𠂤。

这是武丁时代的一片龟腹甲，卜问母史的灾祸情况。史，或读为使。

56.☐貞，☐寅☐。

☐其王☐。

57.☐宾☐。

58.☐宾☐。

59.☐辛☐。

56、59是牛胛骨，57、58是龟腹甲，同属武丁时代，辞已残。

60.☐亥田☐。

这是武丁时代的一片牛胛骨，卜问田猎情况。

61.☐风☐。

这是武丁时代的一片龟腹甲，卜问是否刮风。

62.☐泉允☐（正面）。

☐曰：其☐（背面）。

这是武丁时代的一片牛胛骨，正面是卜辞，背面是占辞。

63.☐宾，其于王亳，重☐。

这是武丁时代的一片牛胛骨，卜问商王是否亲自参加征战。

64.☐雨𠂤，☐。

这是武丁时代的一片牛胛骨，是卜雨之辞。𠂤，读为调和之调⑧。

65.羌甲眔（暨）。

这是廩辛、康丁时代的一片牛胛骨。卜问对商代某先王祭祀时，是否兼及羌甲。羌甲，即典籍中的沃甲。

66.羽又。

67.羽☐。

叙𡍮。

66、67是廩辛、康丁时代的牛胛骨。用“羽又”、“叙𡍮”习语，是这个时期卜辞的特点。叙𡍮，读为“延釐”，即延长福祉之义⑨。

68.☐王☐其☐。

☐非𢀛（擒）。

这是武乙、文丁时代的一片牛胛骨，卜问商王田猎是否获兽。

69.□亥卜貞，王其田☐。

这是帝乙、帝辛时代的一片牛胛骨，卜问商王田猎情况。

附记：有关张凤先生的情况承黄涌泉先生指点；本文拓片由韩经世、赵雪民同志协助，在此一并致谢。

（原载《文物》1990年第5期）

未署姓名的私人藏品。現在看來，這六片實際上是顧氏本人在京時所收集之甲骨的一部份。此後，顧氏收藏的甲骨就再也没有在其他書籍或圖録中刊出過，更談不上公開展出了③。1986年顧氏的這批甲骨成爲司馬特畫廊的藏品之後，該畫廊之研究員帛而能先生(Richard Born)即開始籌備在司馬特畫廊爲甲骨以及顧氏捐贈的商周青銅器等其他一些中國藝術品舉辦特展，并擬將展出的實物照片及圖解編輯成書，正式出版。我亦有幸被邀參加編輯工作，主要是將全部卜辭譯成英文并對其作些簡短之介紹④。

最近，芝加哥大學的另外一些學者也在組織稿件，準備出版論文集以慶祝大學圖書館的東亞圖書館前任館長錢存訓教授八十壽辰。錢教授對收集芝加哥大學東亞圖書館裏中國文字資料所作出的貢獻是無需我來贅言的。錢教授本人對中國古文字學作出的貢獻也是人所共知的。譬如，他的第一本書《書之竹帛》中就有對甲骨文字的專門介紹⑤。因此我想乘此論文集出版之際，對芝加哥大學司馬特畫廊的甲骨再用中文寫上簡短的幾句，以表示向錢教授道賀之意。

顧氏原來收藏的這四十三片甲骨，其中有一片無字，三片爲僞刻，其餘的三十九片均爲原刻。可惜，卜辭殘碎得相當厲害，多數已無法聯屬成句，僅有四片尚載有完整的卜辭，即：

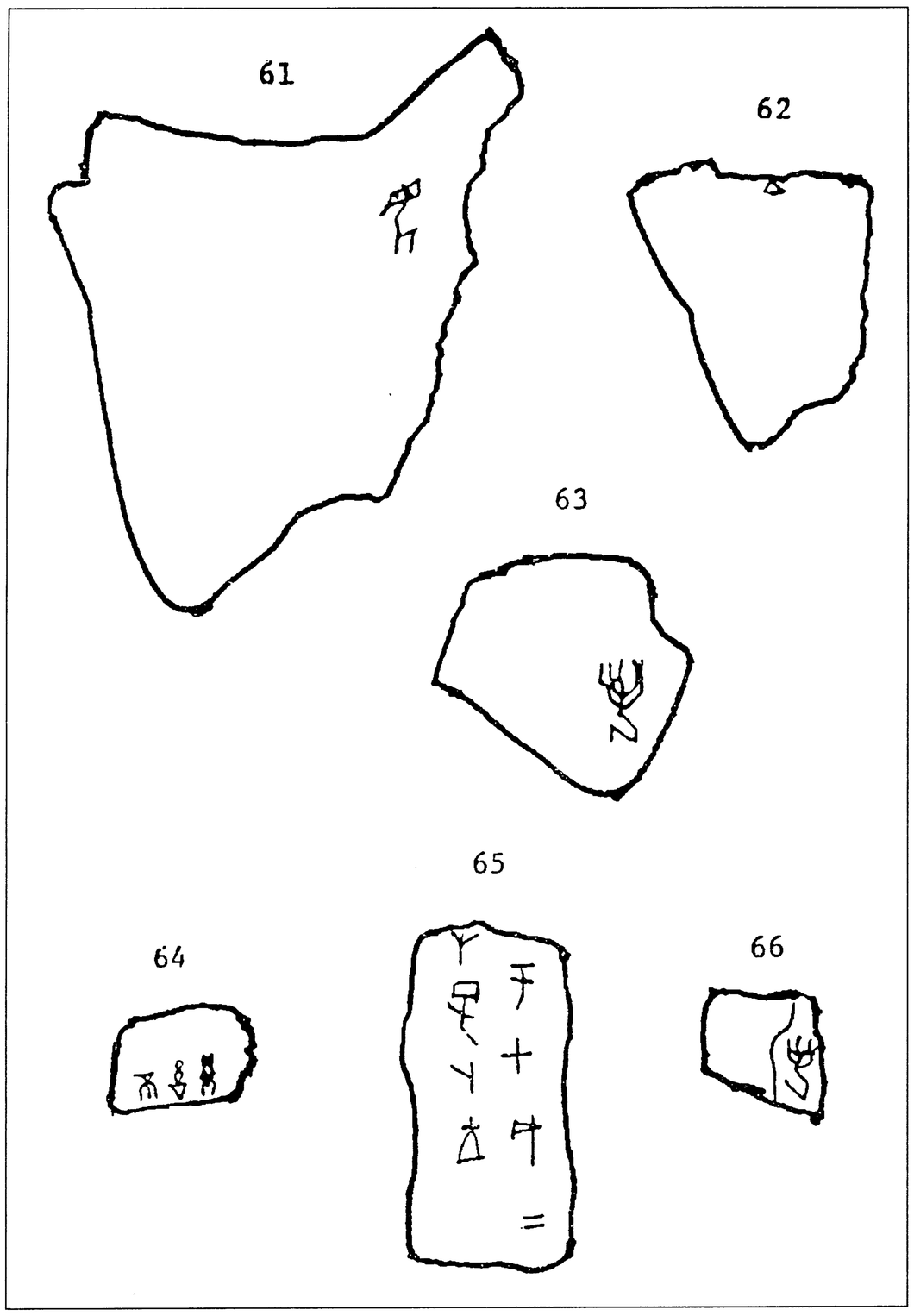
67: 癸卯[卜]，兄貞；旬亡𡆥。一月。
癸丑卜，貞：旬亡𡆥。
癸亥卜，貞：旬亡𡆥。
癸酉卜，貞：旬亡𡆥。
癸亥卜，貞：旬亡𡆥。
74: 庚子卜，貞：又酒升伐三歲三牢。
68: 癸卯貞：王又升歲三牢羌十五。

芝加哥大學所藏商代甲骨

夏含夷

原任芝加哥大學遠東語言及文化系教授顧立雅（Herrlee Glessner Creel）於1986年將其多年來所珍藏的商代甲骨全數捐贈給了大學所屬之司馬特畫廊(The David and Alfred Smart Gallery)。這批甲骨總計有四十三片，均爲顧氏於1932至1935年旅居北京時所蒐集的。三十年代初期可謂是中國古代史學研究之一段黄金時代，一方面，顧頡剛在其陸續刊出的《古史辨》中不斷地提出革命性的新史學概念；另一方面，新建的國立中央研究院也在安陽進行前所未有的正式考古發掘，這一發掘爲學術研究提供了大量的史無前例的科學資料。原擬研究中國古代思想史之顧立雅也借這一大好時機擴大自己的研究範圍，開始對商周史作較爲全面的探索。當時，顧氏與住在北京的許多學者有所交往，并數度前往安陽，實地考察了正在那裏進行的田野工作，從而掌握了中國考古學之最新資料，此時也收集了上面所提到的這批商代甲骨，十數件商周銅器及其他一些零星的古物①。

顧氏於1935年離開中國之前，寫成了著名的《中國之誕生》一書②。這本書可以説是第一部利用安陽考古發現對商周文化史作綜合性描述的著作。書中討論甲骨文之一節附有七片甲骨之照片(相對頁二十二之圖版一)，其下之説明指出這七片甲骨中除了右下角之一片屬於Dr. Cyrus Peake之外，其餘均爲一



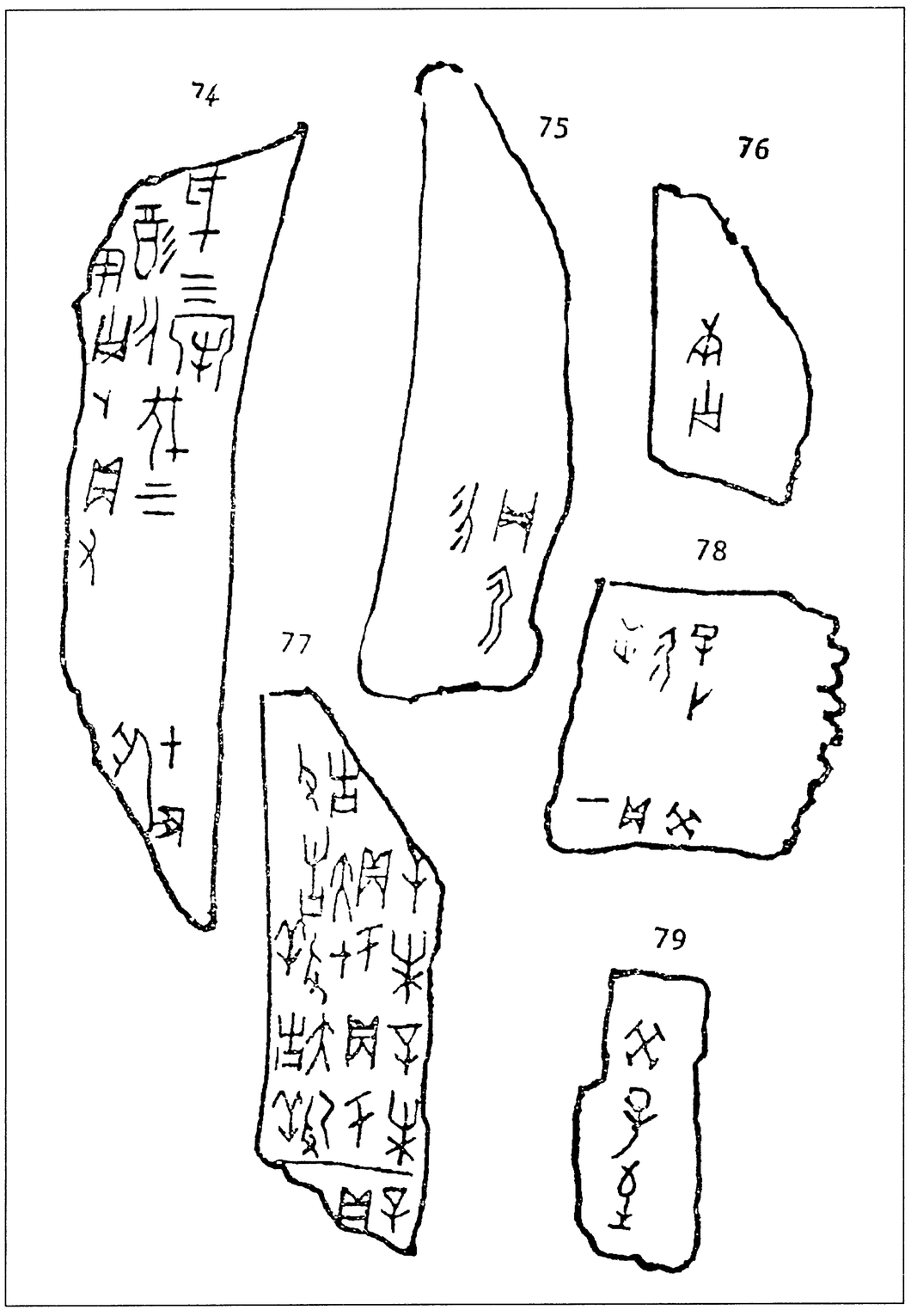
貞：王又歲于且(:祖)乙牢。

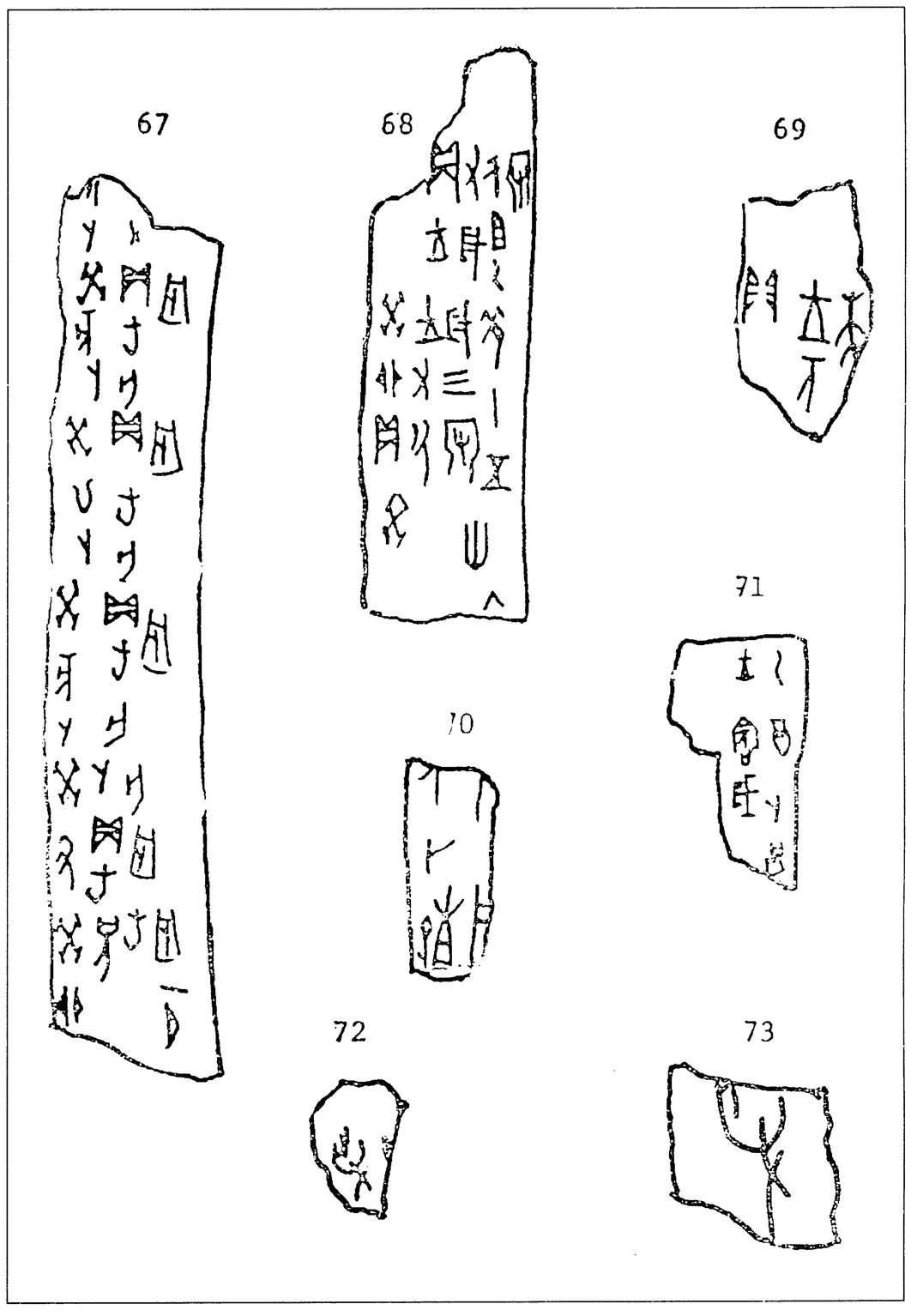
77：辛未貞：于大乙告敉。

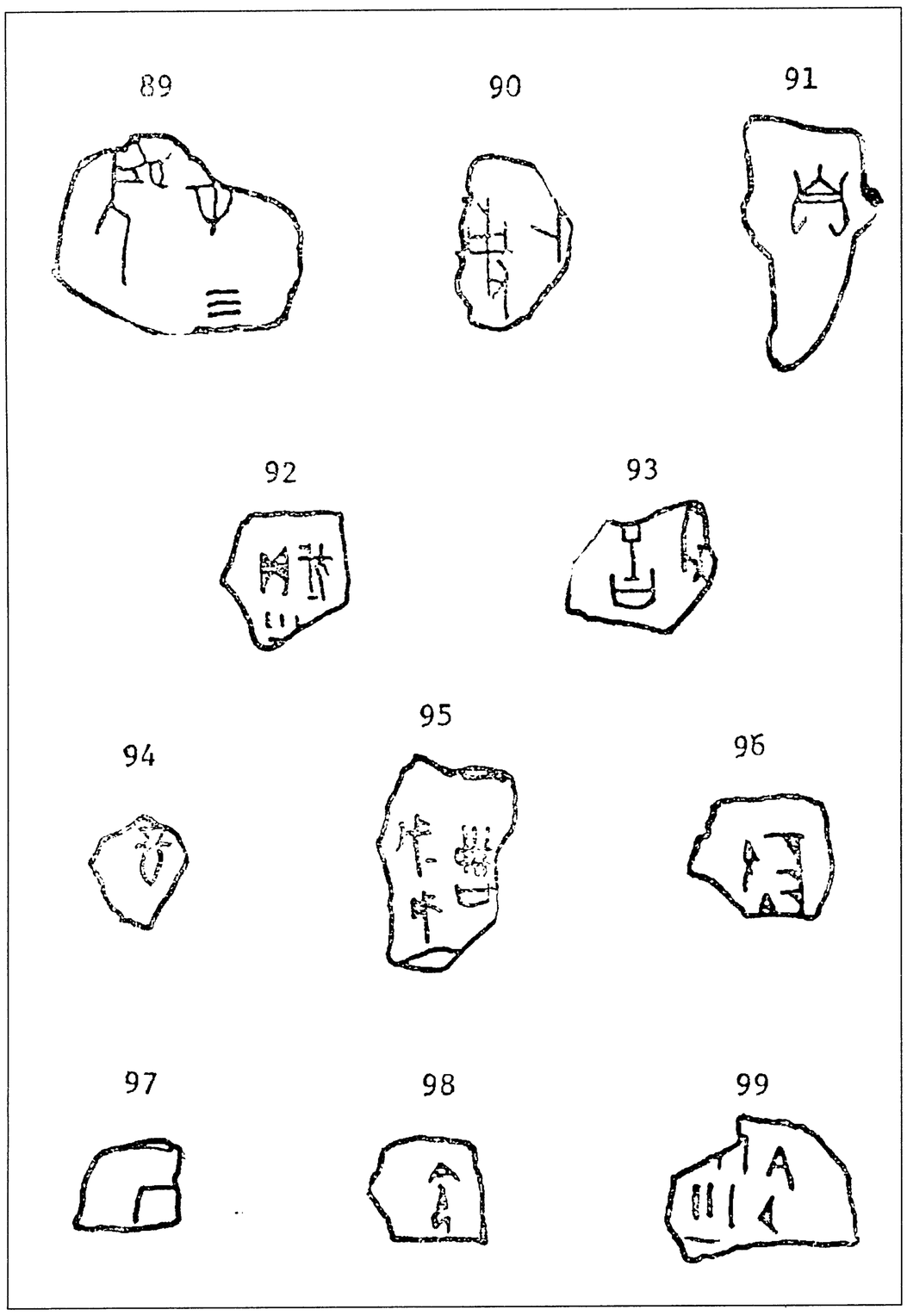
辛未貞：于大甲告敉。

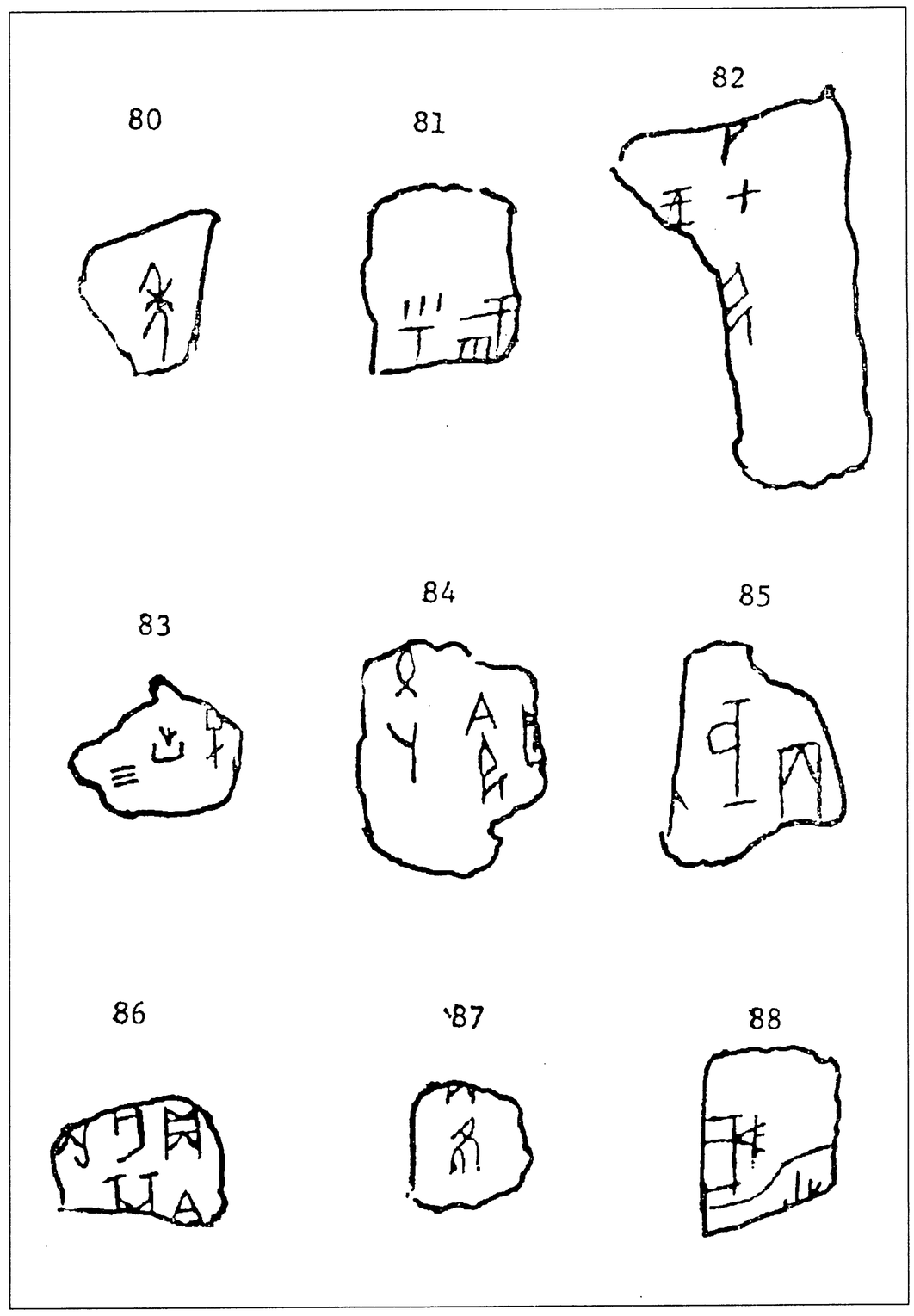
这四片卜辭雖然相當完整，但恐怕也没給我們帶來多少新消息。從過去已發表的殷虚卜辭中，我們很容易找到與顧氏所藏甲骨完全相同或基本上相同的辭例。例如顧67版中之"癸卯卜，兄貞：旬亡𠂤"與不少出組卜辭相同(按照司馬特畫廊的帛而能先生的意見，這批甲骨的每一編號之前都應冠以"顧"字以表明顧氏是其捐贈者)；顧68之"癸卯貞：王又升歲三牢羌十五"與黄濬所編《鄴中片羽三集》40.6同文。唯有顧74比較獨特："又酒""升伐"和"歲牢"雖在殷虚卜辭中都很常見，但據我所知，除了顧氏這一版外，未見有將此三者在一條卜辭之内連用的其他例子。顧氏的這四條卜辭中，最值得注意的可能是第77版卜骨上的"辛未貞：于大甲告敉"。這條卜辭與1973年於小屯村南出土的《屯南》1024同文。我們知道，1929年中央研究院第二次發掘時，曾在小屯村南打了LK和JIH兩條探溝⑥。據説，1930年冬，村民又在該地私掘出百片以上之甲骨⑦。從顧氏和《屯南》這兩片甲骨均屬歷組卜辭，貞卜的日辰及内容完全相同來看，顧氏三十年代初期在北京所購的這一片甲骨，很有可能便是那次私人盜掘時出土的。如果這一推測不誤，便可爲1973年小屯南地之發掘作一個注脚。

除了顧氏所藏的這四片較爲完整的甲骨以外，其餘的殘片就更不超越已知殷虚卜辭文例的範圍。這些卜辭大部份屬於賓組，小部份屬於自組(如顧79)或出組(如75,82)。下面即按司馬特畫廊所編定之號碼，將顧氏所藏之甲骨全數列出，每片卜辭都附有釋文，并注明是龜甲(簡作"甲")或是牛骨(簡作"骨")及









其時代(按董作賓所定的五期斷代)和貞人組別。因爲董氏所定之各期均可含有兩種或兩種以上之不同貞人組別的卜辭（譬如董氏所定第一期,卽武丁時代,不僅包括賓組，同時也包括自組及𠂤組卜辭),而且某一貞人組別之卜辭又不一定限於一個王代(譬如,𠂤組卜辭中早的可以早至武丁,晚的可以晚到祖庚,甚至祖甲；賓組卜辭中大概也有相當一部份要晚到祖庚時期⑧),爲了便於讀者起見,今將兩種斷代之結論一併列出。本人在作下列釋文時,曾多蒙裘錫圭教授賜教,於此謹致謝忱。每片甲骨並附上摹本。遺憾的是,司馬特畫廊目前尚無法拓出卜辭之拓本,這一缺遺只好留待將來再作補充了。摹本是由我(第61–66,74–91號)和我的學生蔡芳沛(第67–73,92–99號)摹寫的。由于我們經驗不足,摹寫得難免有誤,僅附於此,以供讀者參考之用。

芝加哥大學所藏甲骨文摹本。

釋　文

61　(1986.386),甲;　I.賓-出。

　　𠂤(:每/母?)

62　(1986.387),甲。

　　𠂤(太?:)王

63　(1986.404)　甲;　I.賓。

　　若

64　(1986.411)　甲;　I.賓。

　　不𢦏𢦚(:不再𠂤?)

65　(1986.412)　甲;　I.自-賓。

　　辛子(:巳)卜王[貞]:于甲戌…。二

66　(1986.418)　甲;　I.賓。

　　若

67　(1986.391)　骨;　II.出。

　　癸卯[卜],兄貞:旬亡𡆥。一月。

　　癸丑卜,貞:旬亡𡆥。

　　癸亥卜,貞:旬亡𡆥。

　　癸酉卜,貞:旬亡𡆥。

　　癸亥卜,貞:旬亡𡆥。

　　…〔亥〕卜…〔旬〕…

68　(1986.394)　骨;　II.𠂤。

　　…卅…

　　癸卯貞:王又升歲三牢羌十五。

　　貞:王又歲于且(:祖)乙牢。

69　(1986.395)　骨;　I.賓。

　　貞:[于]王亥𢦚…

70　(1986.402)　甲;　I.賓。

　　…〔亥〕卜殼…

71　(1986.407)　甲;　II.出。

　　乙酉卜㞢王賓歲。

72　(1986.420)　甲;　I.賓。

　　…爭〔貞〕…

73　(1986.423)　甲;　I.賓。

　　…爭…

74　(1986.392)　骨;　I.自-𠂤。

　　庚子卜,貞:又酒升伐三歲三牢。

　　[癸]…甲辰…

75　(1986.393)　骨;　II.出。

…貞今…亡其…自…

87 (1986.410) 甲; II. 賓-出。

…貞佳…

88 (1986.413) 甲; I. 賓。

…我…

89 (1986.414) 甲; I. 賓。

…𡆥(:望)…才…。 三

90 (1986.415) 甲; I. 賓。

…卜…事…

91 (1986.416) 甲; I. 賓。

…自…

92 (1986.417) ? ; II. 賓-出。

貞屮(?)伐…

93 (1986.419) 甲; I-II. 賓。

…𠯿…及

94 (1986.421) 甲; I. 賓。

…酉…

95 (1986.422) ? ; I. 賓。

戊戌…𣪊

96 (1986.424) 甲; I. 賓。

…降…

97 (1986.425) 甲; I. 賓。

己…

98 (1986.426) 甲; I. ? 。

…令…

99 (1986.427) 甲; II. 賓-出。

貞:弜勿。

76 (1986.396) 骨: II. 歪。

庚子

77 (1986.397) 骨; II. 歪。

辛…貞…

辛未貞:于大乙告敉。

辛未貞:于大甲告敉。

…告[敉]。

78 (1986.398) 甲; II. 賓-出。

癸…貞…

…子(:巳)卜…勿…步

79 (1986.399) 甲; I. 自。

…癸子(:巳)至…

80 (1986.400) 骨; I. 賓。

…年…

81 (1986.401) 骨; I. 賓。

…乎…酓…

82 (1986.403) 甲; II. 出。

甲申卜:王。

83 (1986.405) 甲; II賓-出。

…子(:巳)…出…。 三

84 (1986.406) 甲; I. 賓。

…寅卜…令…。 三

85 (1986.408) 甲; I. 賓。

丙…戌

86 (1986.409) 甲; I. 賓。

顧氏最近回顧了他在北京的那段經歷，其回憶錄見於 Herrlee G. Creel, "On The Birth of The Birth of China," Early China 12 (1985—87), 1—5。

Herrlee G. Creel, The Birth of China: A Study of the Formative Period of Chinese Civilization (London: Jonathan Cape, 1936)。

顧氏 1936 年返美之後，旋就任芝加哥大學遠東語言與文化系教授職。據說在其講授古文字學時，曾以這批甲骨作爲實例。然而除了師從顧氏受業之學子外，似乎沒有他人再見過這批甲骨。四十年代，陳夢家和董作賓這兩位著名的甲骨學家曾先後在芝加哥從事較長時間的學術研究，但在他們的專著裏，都未見有關這批甲骨的片言只字。七十年代周鴻翔教授出版了他的 Oracle Bone Collections in the United States(Berkeley: University of California Press, 1976), 在該書的第二十三頁，也談到他從未能親見收錄在《中國之誕生》中顧氏之甲骨。

Ritual and Reverence: Chinese Art at the University of Chicago (Chicago: The David and Aifred Smart Gallery, 1989)。

Tsuen-Hsuin Tsien, Written on Bamboo and Silk: The Beginnings of Chinese Books and Inscriptions (Chicago, University of Chicago Press, 1962), 19—37。

見《小屯南地甲骨》(上海: 中華書局, 1980), 3。

見容庚, "甲骨學概況", 〈嶺南學報〉7.2(1947), 24。

見裘錫圭, "論歷組卜辭的時代", 《古文字研究》6(1981), 261—321。關於賓組卜辭可以晚至祖庚時代這一意見，請特別參閱頁 307—316。

（原載《中國圖書文史論集》, 臺北正中書局, 1991 年）

蘇聯國立愛米塔什博物館所藏甲骨文字

胡厚宣

一九五八年七月，那時我們歷史研究所還屬於中國科學院，我所在的研究所是中國科學院歷史研究所第一所，我曾奉派執行中蘇科學合作協定項目，去莫斯科蘇聯科學院中國學研究所講學。

在莫斯科，於蘇聯國立東方文化博物館中國藝術陳列部①，看到有完整無缺的龜腹甲卜辭十七片，龜甲是現代的，文字是後刻的，都是靠不住的僞品。但是一九五五年蘇聯出版的十卷本《世界通史》第一卷第十七章《遠古的中國》彩色插圖三二「載有中國古代文字的龜甲」，收錄的却正是這批僞甲的一版。當時我曾向中國學研究所的專家們指出，他們都大吃了一驚，說這麼偉大的一部著作，怎麼會收錄假的東西呢？我們要趕快寫信告訴總編輯茹科夫院士，讓他更正。一九五九年我國三聯書店出版漢譯本《世界通史》第一卷，經我們指出，把假的龜甲抽出，另外換上了《殷墟文字乙編》著錄的真的完整的龜甲卜辭三版②。可惜印刷時又把它們印倒。至於後來蘇聯原本及我國漢譯本再版出書時，是否已經把它們改了過來，那就不得而知了。

同年八月，我從莫斯科由中國學研究所的塔斯金先生陪同，前往列寧格勒蘇聯科學院東方學研究所講演，又由東方學研究所的郭質生博士陪同，參觀了蘇聯國立愛米塔什博物館③。承博物館的東方民族文化藝術歷史部主任克列切朵娃女士接待，看到了東方部所藏中國殷墟出土的甲骨文字。甲骨共一九九片，乃前蘇聯研究院馬爾博士

語言思想研究所研究生布那柯夫所蒐集，原來陳列在研究所的古器陳列所④。在蘇聯衛國戰爭時期，布那柯夫犧牲，此項甲骨，以後即歸國立愛米塔什博物館保存。但博物館對這批甲骨並不重視，聽說還有人認為可能全是假的東西。其實這批甲骨倒是一片也不假，而且還有一些重要的材料。我另有考釋，在這裡暫不贅說。據布那柯夫文中說，還有大胛骨一版，係由兩片拼合，長二四點六公分，寬一九點五厘米⑤，參觀時未能得見，不知這一大版胛骨，現在收藏在什麼地方。

就我所看到的這批材料而言，其中以獸骨居多，尤其第一期和第三、四期即祖庚、祖甲、廩辛、康丁、武乙、文丁時的卜辭，絕大多數都是獸骨。但布那柯夫說「只有字骨」，也不盡然。即就我們所選錄的這七九片來說，其中龜背甲二片（四七、五五）、龜腹甲一五片（一、六、七、一二、一八、二三、二四、三三、三八、四八、五一、五三、五四、七一、七九），就不能說全是字骨。

就時代來說，一至十二號，為第一期即武丁及武丁以前的盤庚、小辛、小乙時期，共一二片。十三至五十五號為第二期，即祖庚、祖甲時期，共四三片。五十六至七十八號為第三、四期，即廩辛、康丁、武乙、文丁時期，共二三片。七十九號為第五期，即帝乙帝辛時期。以第二期為最多，其次是三、四期，五期最少。

這批材料，布那柯夫曾準備用「合照片摹寫二位一體的辦法，將字骨拓印」。不幸他英年逝世，這一計劃就未能完成。一九五八年八月，在我參觀這批材料時，國立愛米塔什博物館的領導，曾慨允代製影本相贈。我九月回國，以後由於種種原因，這項照片，迄今未能寄來，甚感遺憾！

總之，這批材料，收藏已經五十年，就是從我參觀這今，也已二十五載。除了中國學研究所曾來我國北京大學留過學的劉克甫先生和他的夫人黃淑英女士合著的《古代漢語》一書曾著錄一片⑥之外，一直沒有發表。最近我們編《甲骨文合集》⑦一書，才選收了一部份，但也還不完全。

常年以來，好多甲骨學者，因我去過蘇聯，每每詢及這一批材料的情況，爰將我當時根據原骨所選錄的一個摹本，公佈出來，暫供學者們的參考。又劉克甫先生也曾代我選摹了一些，現亦一併收錄。謹對國立愛米塔什博物館、克利切朵娃女士和劉克甫先生，敬致感激之忱！⑧

著錄甲骨，當然是以拓本為最好，但有時遇到纖細的摹畫，就拓不出來。照片比較真實，但一些刻劃的字體，就不容易看得清楚。摹寫本雖然筆畫容易失真，但是根據原骨摹錄，字迹筆畫就看得明晰。三者各有短長。所以早年董作賓先生提倡照相、摹寫、傳拓三種方法並用，這樣就可以互相補充。董先生說，「在甲骨出土的六十年間，三種方法都是用過的。但是一件材料三種全用的並不太多」⑨。董先生說了這話沒有多久，日本伊藤道治教授作《故小川睦之輔氏藏甲骨文字》⑩、《大原美術館所藏甲骨文字》⑪、《關西大學考古學資料室藏甲骨文字》⑫、《檜垣元吉氏藏甲骨文字》⑬、《藤井有隣館所藏甲骨文字》⑭各文，以及後來又把這幾篇文章集在一起，合稱《日本所見甲骨錄》⑮就是照相、摹寫和傳拓三種方法全用的，極便於學者的研究。

我們現在為應學界的急需，先把摹寫本公佈出來，希望蘇聯國立塔什博物館早日把這批甲骨的照片和拓本予以發表，三者對照，那對甲骨學的研究，就更加方便多了。

一九八二年十二月三十日

注釋

①參看《莫斯科國立東方文化博物館中國藝術陳列部開幕》，刊《文物參考資料》，一九五七年二期七六頁。

②見《世界通史》一卷六〇六頁後六〇七頁前插頁圖版，一九七九年三聯書店出版。

③看克列切朵娃《蘇聯國立愛米塔什博物館》，刊《文物參考資料》，一九五六年六期一三頁。

④看布那柯夫《安陽龜甲獸骨》蘇聯研究院馬爾博士語言思想研究所單刊第三，五一頁及中文提要七頁。一九三五年。

⑤看同前。

⑥劉克甫、黃淑英：《古代漢語》，一二頁，一九七八年。

⑦郭沫若主編：《甲骨文合集》，第一三冊，一九八二年。

⑧編號旁注△號者為劉克甫先生代摹。

⑨看董作賓《殷墟文字乙編摹寫本示例》，刊《中國文字》第一冊，一九六〇年。又《董作賓先生全集》乙編第七冊。

⑩伊藤道治：《故小川睦之輔氏藏甲骨文字》，刊《東方學報》京都第三七冊，一九六六年。

⑪伊藤道治：《大原美術館所藏甲骨文字》，刊《倉敷考古館研究集報》，第四號，一九六八年。

⑫伊藤道治：《藤井有隣館所藏甲骨文字》，刊《東方學報》京都第四二冊，一九七一年。

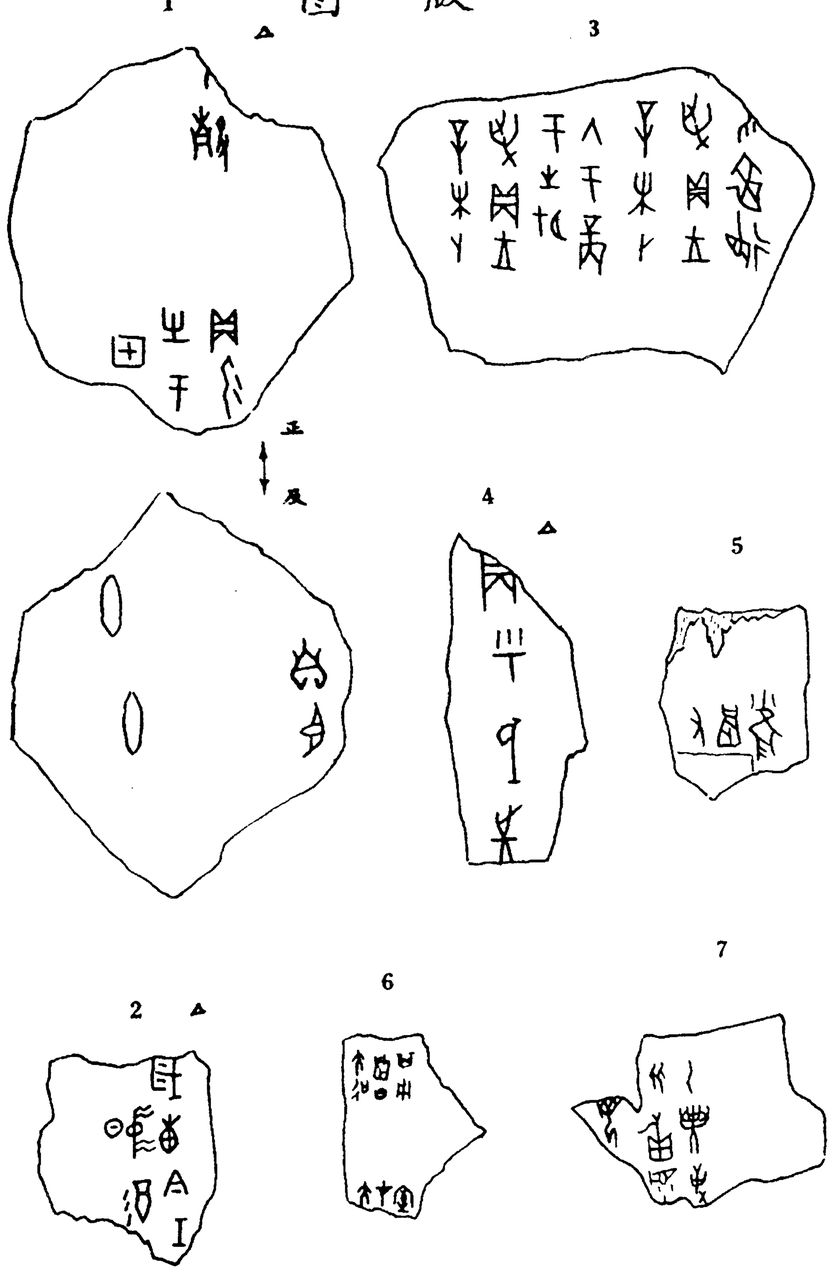
⑬伊藤道治：《檜垣元吉氏藏甲骨文字》刊《神戶大學文學部紀要》第一期，一九七二年。

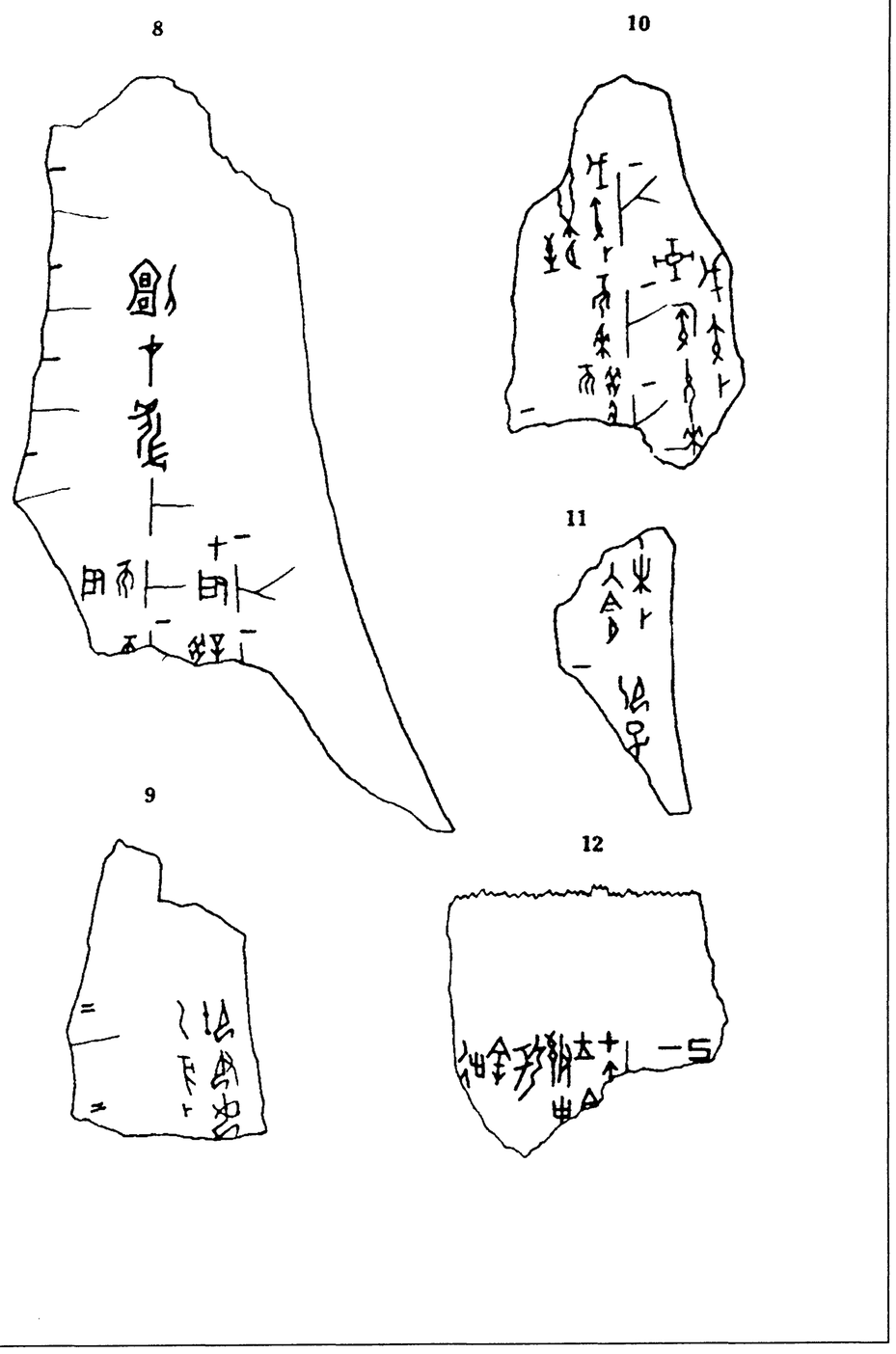
⑭伊藤道治：《關西大學考古學資料室藏甲骨文字》，刊《史泉》第五一期，一九七七年。

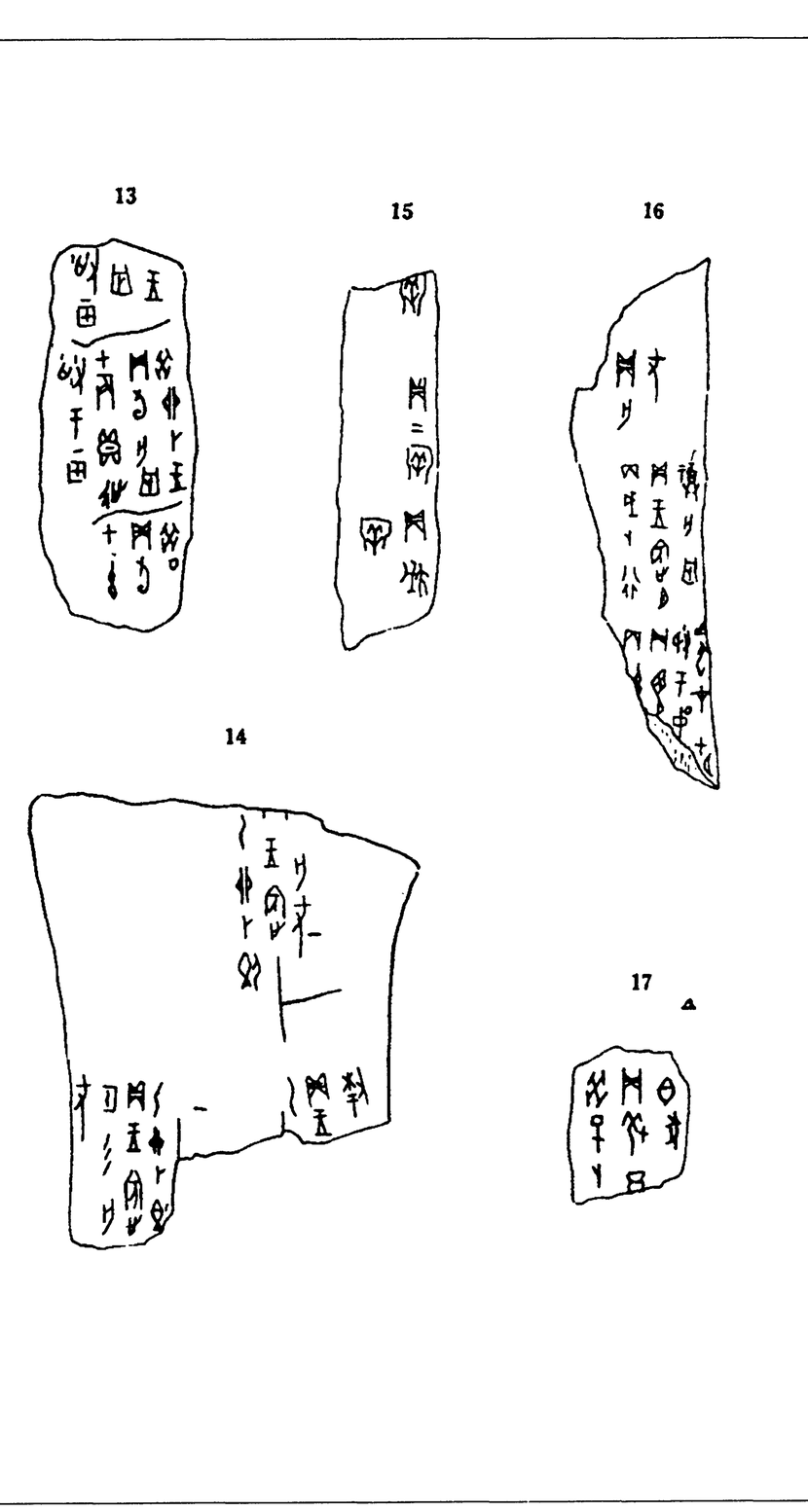
⑮伊藤道治：《日本所見甲骨錄》，收在日本朋友書店重印郭沫若《卜辭通纂》一書之後，作為附錄。一九七七年。

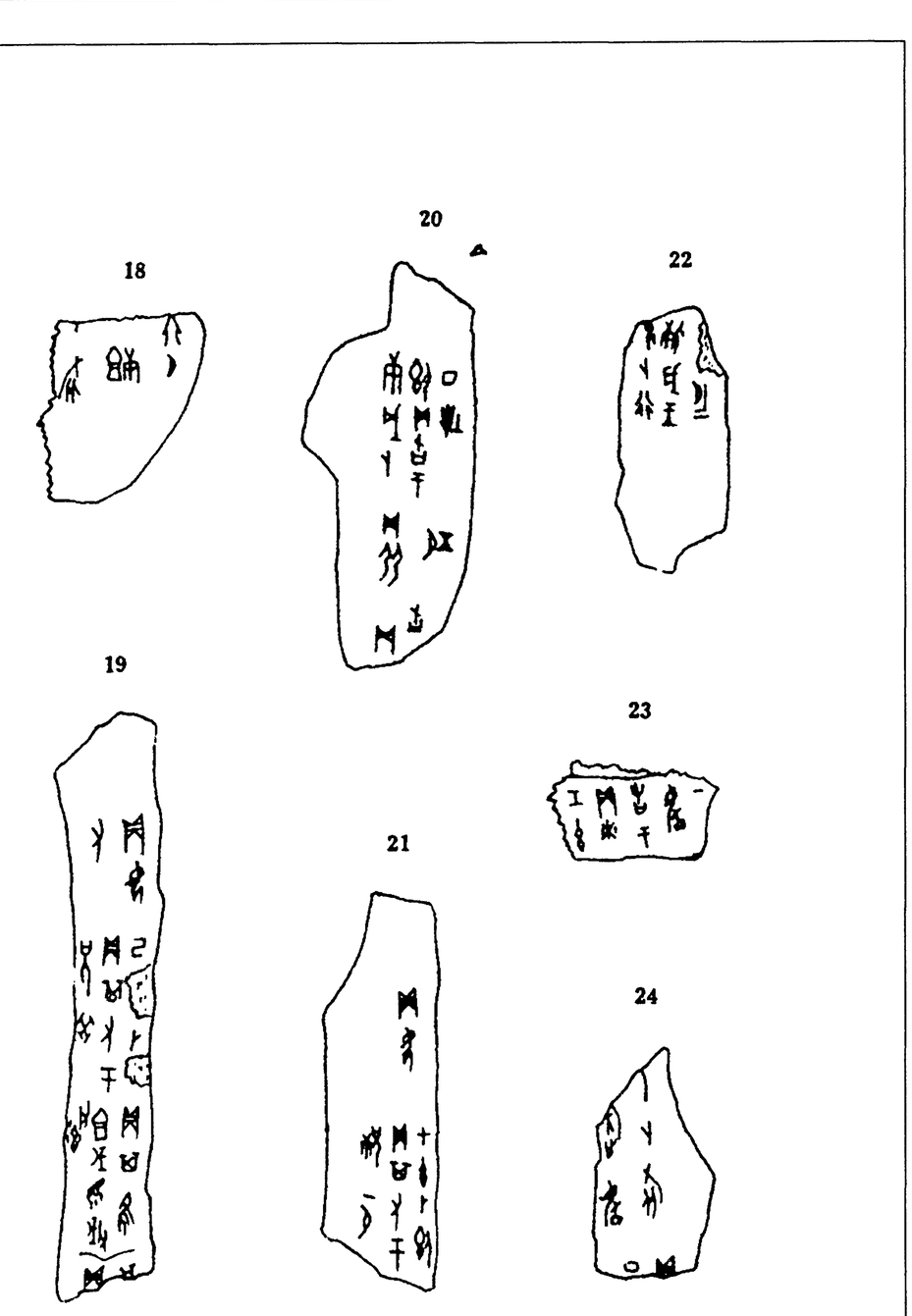
《蘇聯國立愛米塔什博物館藏甲骨文字》

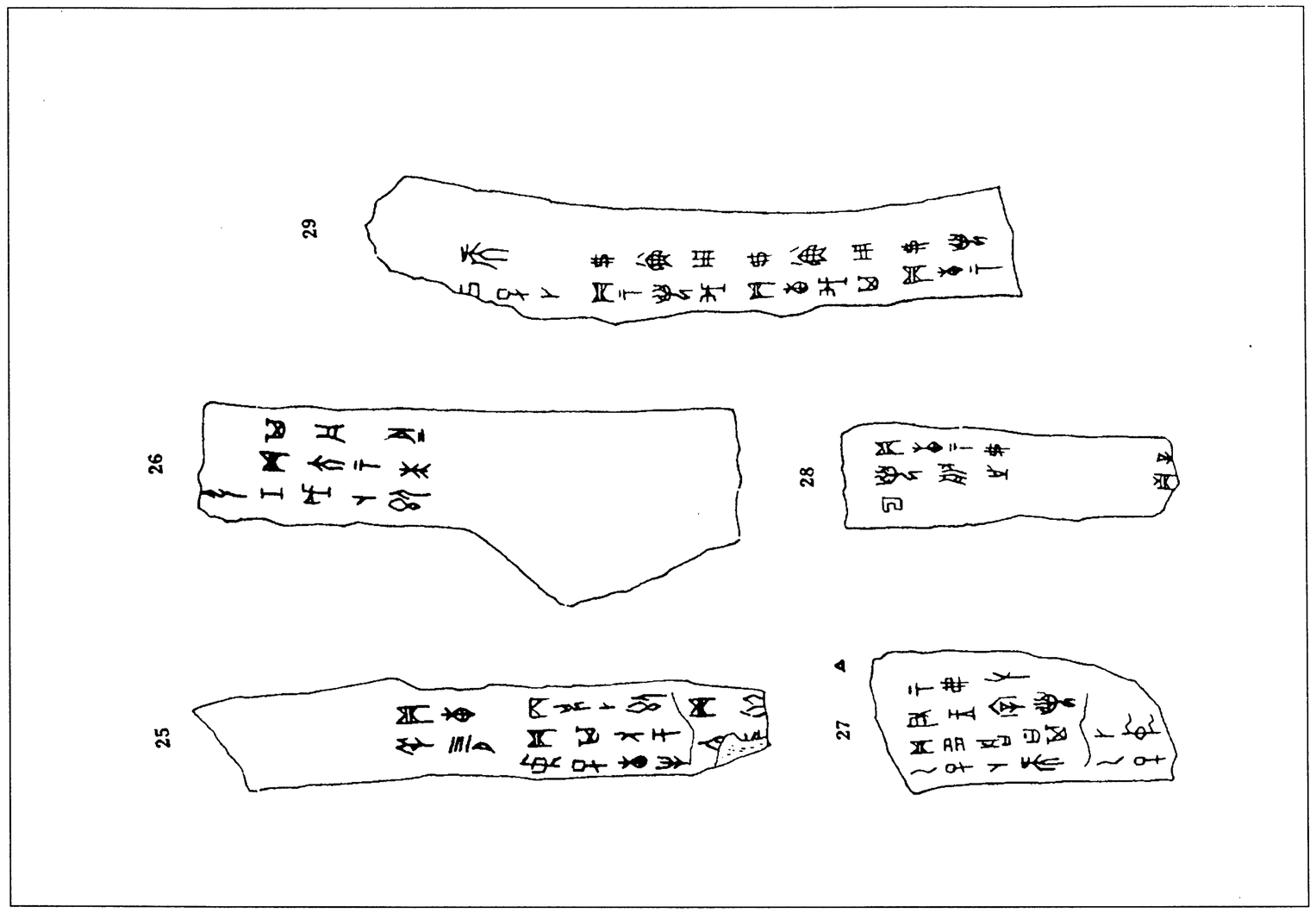
圖版

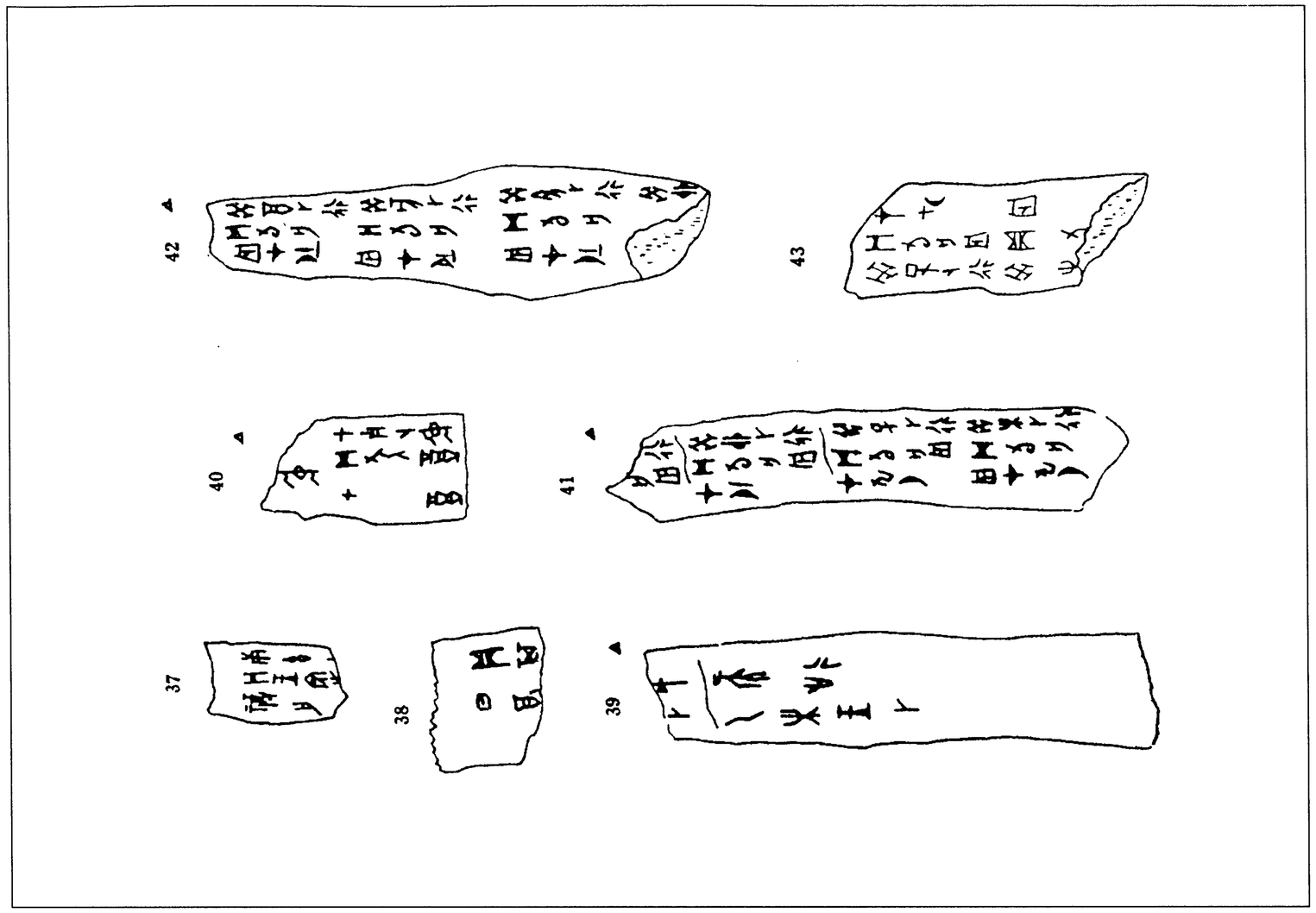


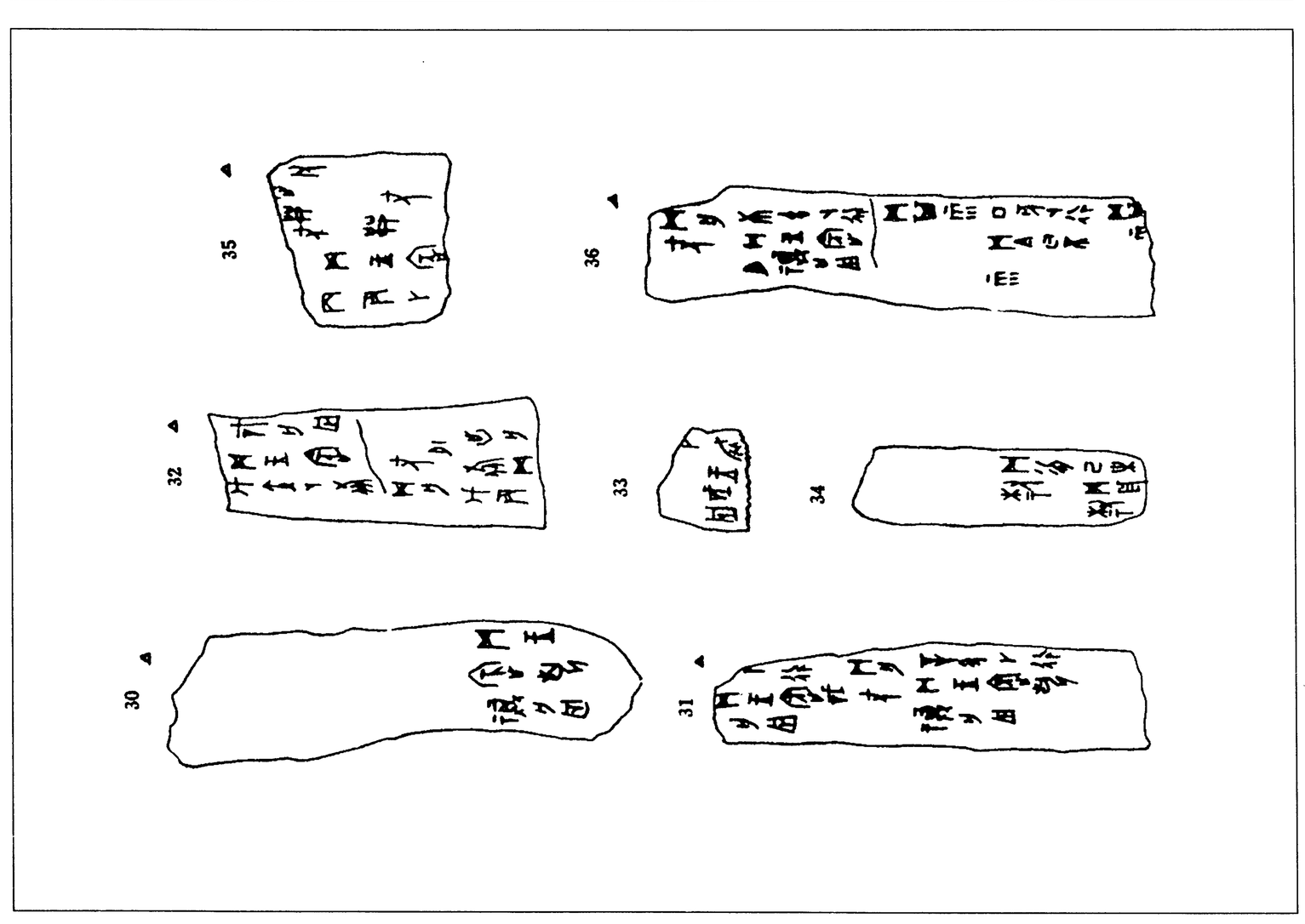


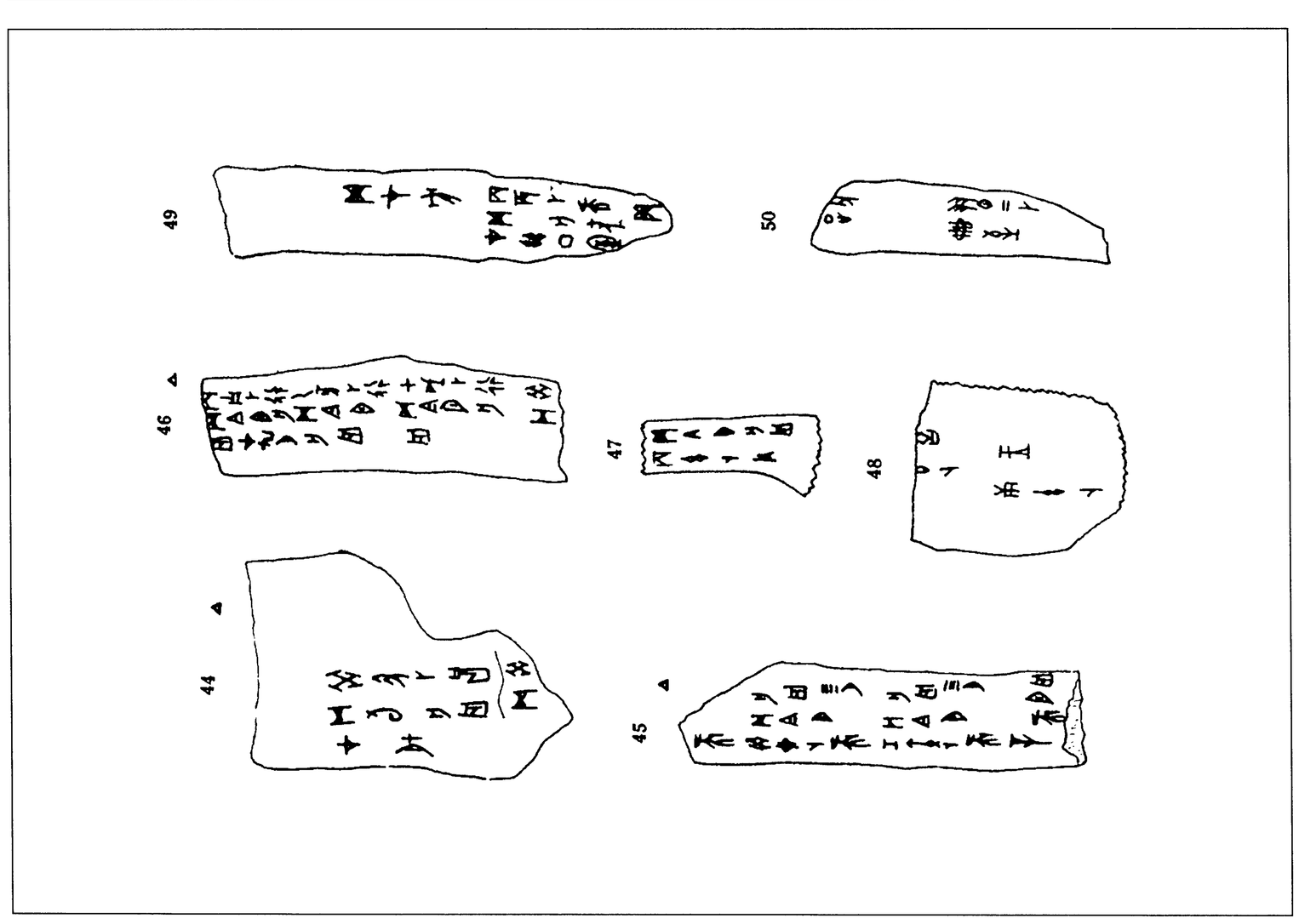


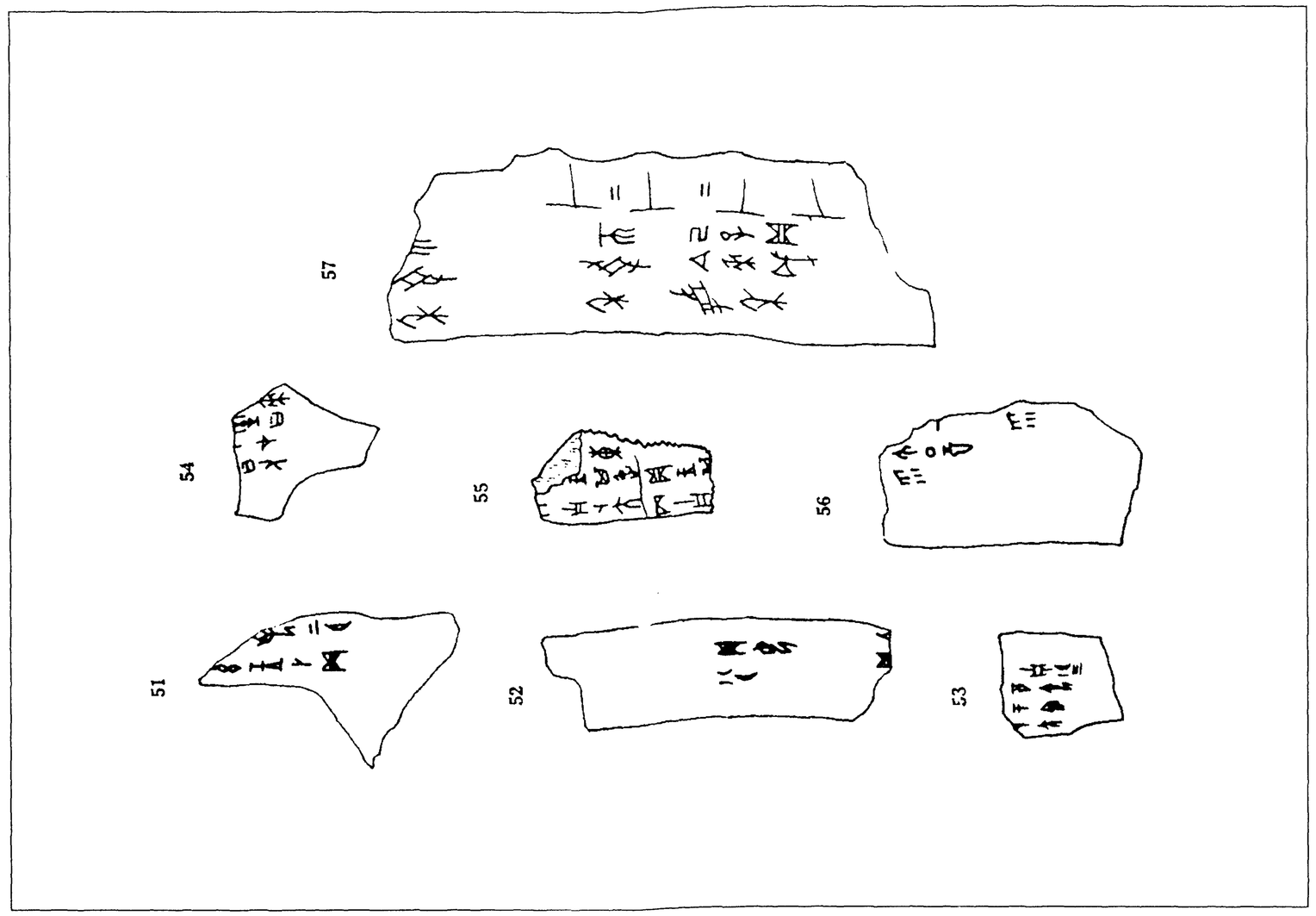


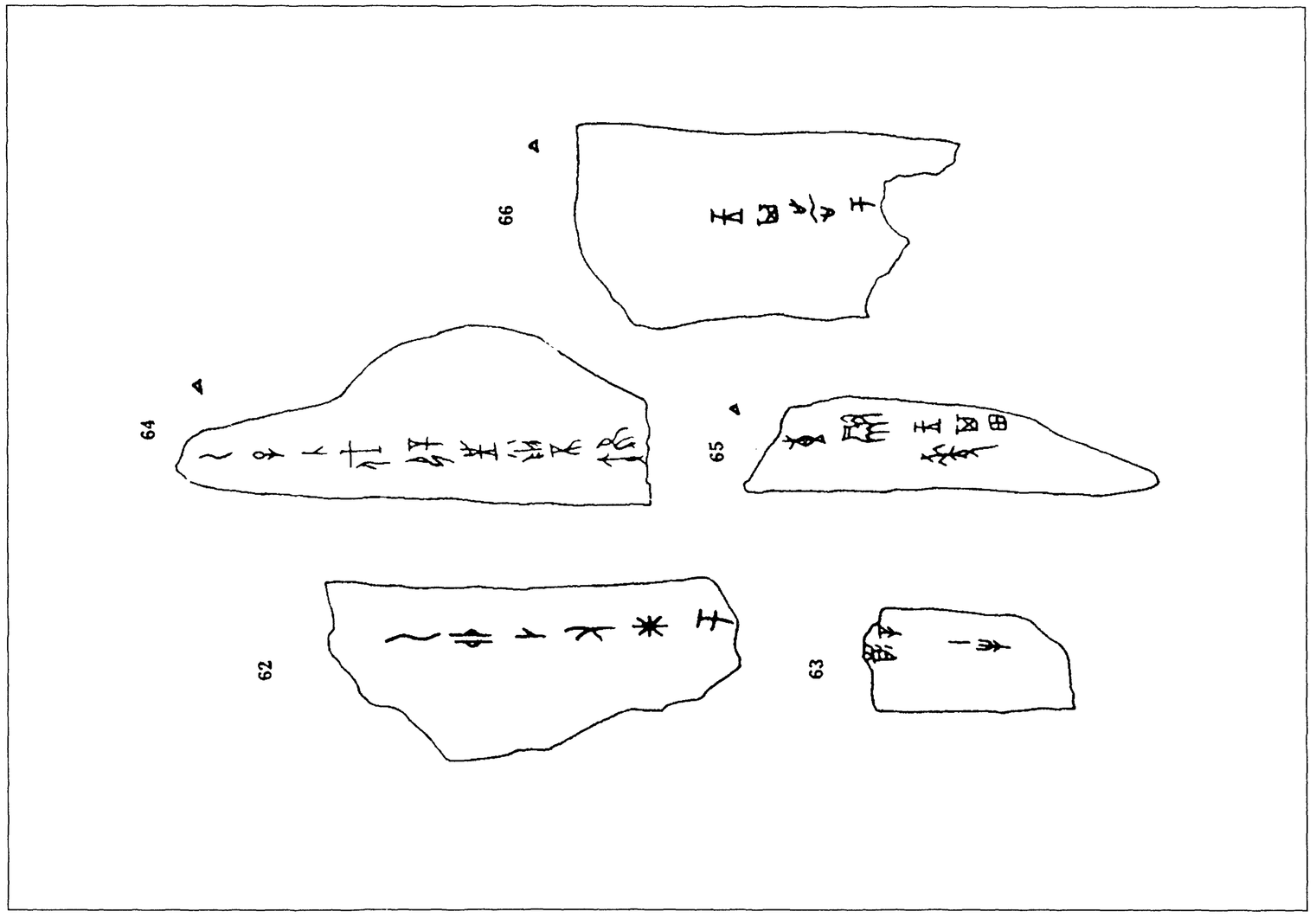


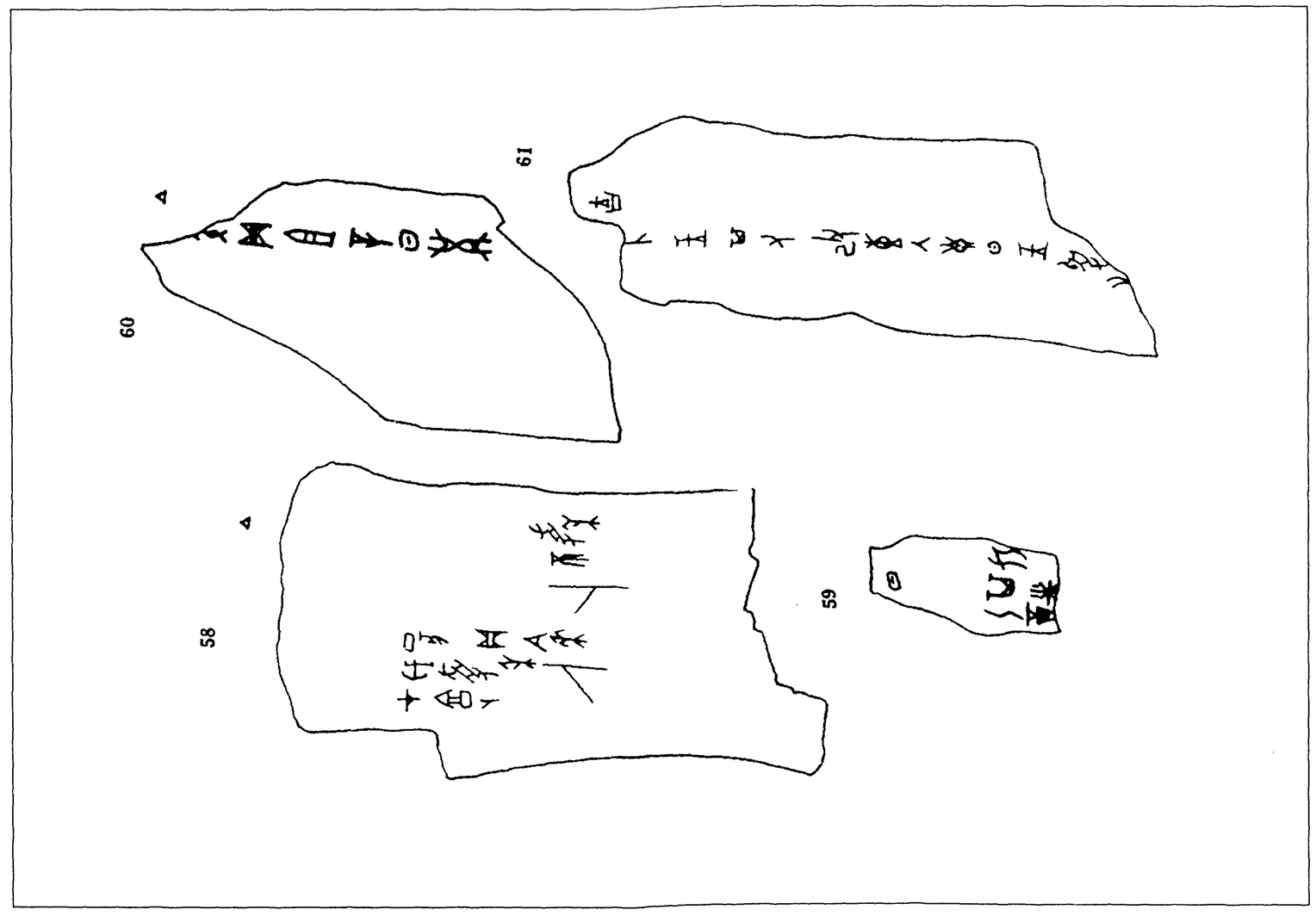


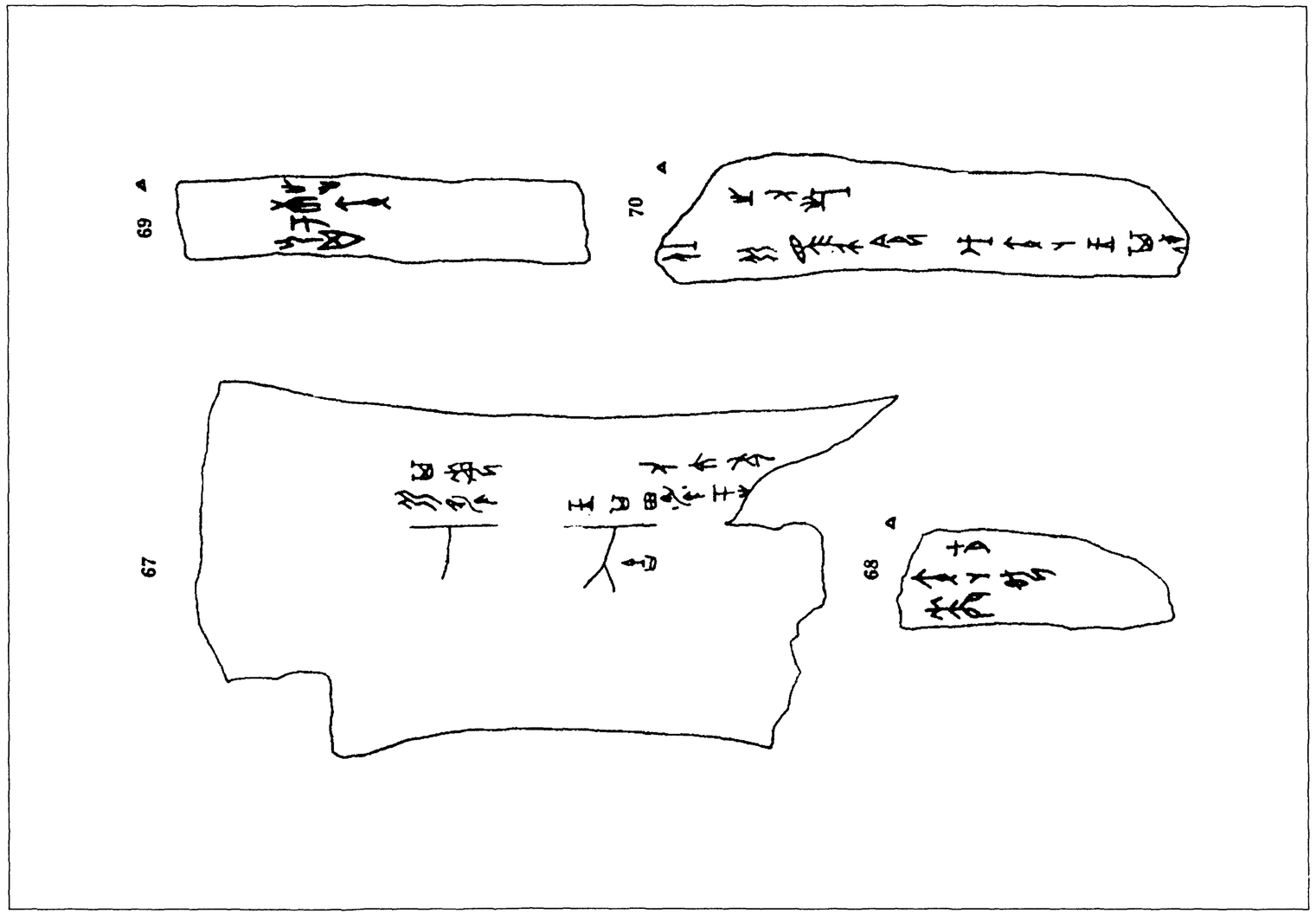


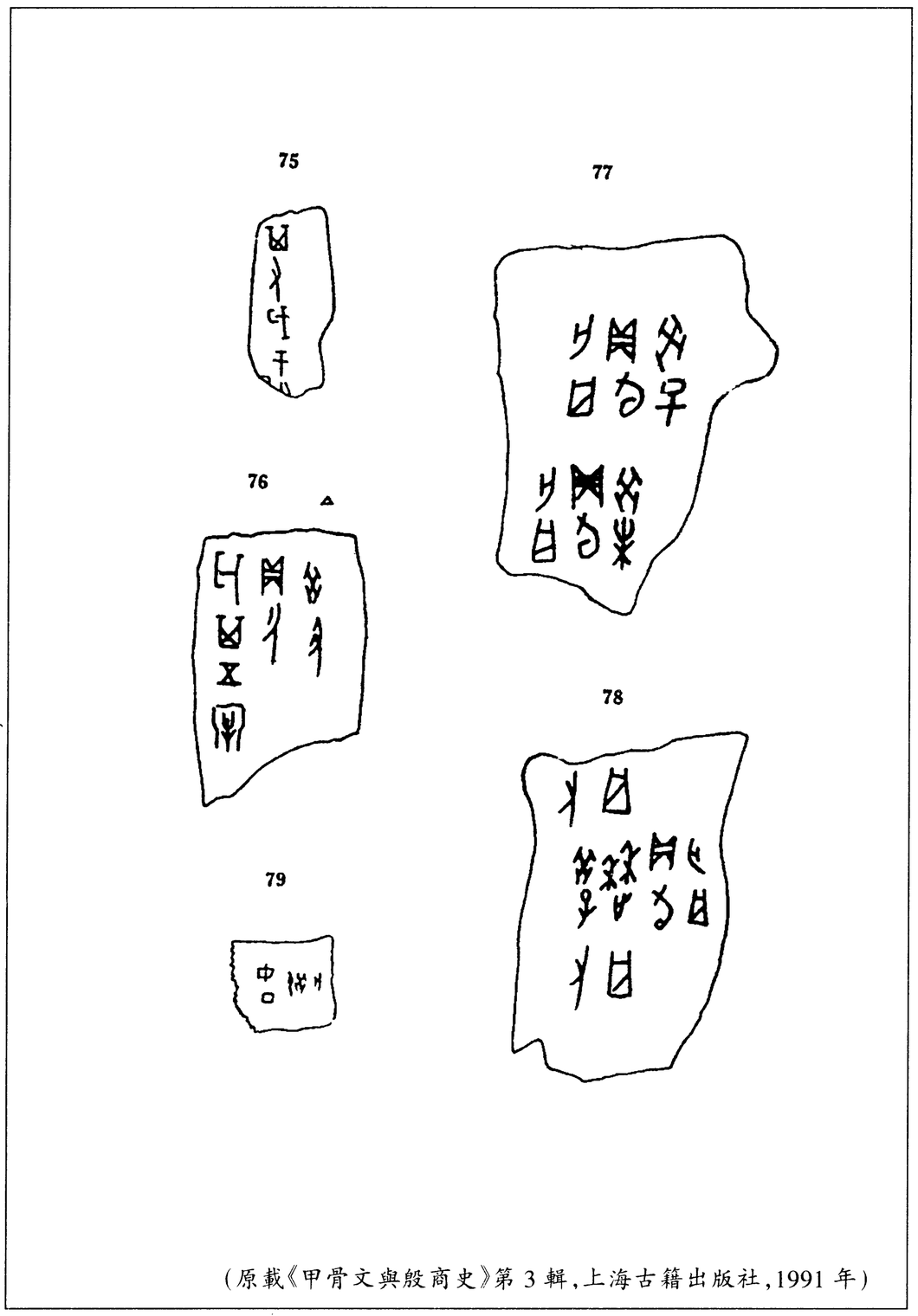



51
52
53
54
55
56
57

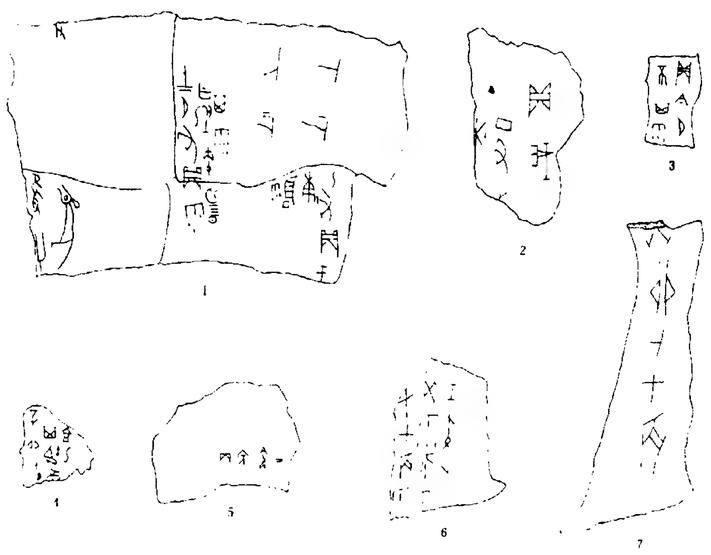

62
63
64
65
66


58
59
60
61


67
68
69
70



（原載《甲骨文與殷商史》第3輯，上海古籍出版社，1991年）



圖一 1～7.甲骨拓本（約為1/2）

七月丁卯卜，〔扶〕……妣庚……御小甲……（《合集》20171）

十月甲申卜，王，于妣己御古雍。（《合集》19886）

十月辛卯卜，自、自今辛卯至于乙未虎……（《合集》21387）

十一月乙亥卜，奏自小伯引。（《合集》20086）

十一月戊申卜，貞𠂤己酉令……（《合集》20819）

十一月□亥卜，……尸。（《合集》20086）

十二月丙申卜，□其入。（《合集》21039）

一月在罗，丁巳卜，令雀既雀。（《合集》20171）

二月在罗，戊午卜，乎戈比□。（《合集》20171）

以上诸卜辞都是记月在前，最后两条是在记月之后又记地名。这些月分都在首行，有的在序辞的前上方，有的在前下方。本片则与序辞同在一行，记月在第一行的开头。由此可知，上列各辞的读法都应从记月开始，如果按一般卜辞的常规，做释文时将首行的记月移至卜辞的结尾就不准确了③。因为行款词位多变化正是自组刻辞的特点之一。第二，卜辞（1）中的“曰”，是“占曰”的简化，“曰：戊寅旬四日其雨。”是占辞。此为占辞的一种特殊形式。众所周知，一条完整的卜辞分为序辞、命辞、占辞和验辞。具备这四项的卜辞仅占少数，多见于宾组。绝大多数的卜辞只具前两项，也有的只有命辞。殷人在用甲骨占卜时，一般由殷王亲自根据兆纹的变化判断吉凶，预言后果。其特点是以“王占曰”的句式引出判断的具体内容。如：“王占曰：有崇。壬其雨，不吉。”（《英藏》1251反）等。由“王占曰”引出占辞也多见于第五期卜辞，如：“癸亥王卜，在旁，贞旬亡祸。王占曰：吉。”（《前》2.3.2）④“王占曰”有时简化为“王曰”，如第二期卜辞“□巳卜，疑，贞咼其入？王曰：‘入。允入。’”（《文》519）咼，是人

记美国辛格博士所藏甲骨

齐文心

辛格博士（Dr. Paul Singer）是美国著名的中国文物收藏家。1982年在纽约有幸认识辛格博士，并参观了所藏甲骨，这批甲骨绝大多数未曾发表，内容也很重要。现将辛格博士所藏24片甲骨全部介绍出来，供学者研究。

这批甲骨原属瑞士人弗里茨·毕费格尔（Fritz Bilfinger），他曾任加拿大铝业公司（Aluminum ComPany of Canada）驻远东代表。30年代在中国购得这些甲骨（中有3伪片）。1977年前后，将它们卖给辛格博士。本文根据辛格博士惠赠的照片做了摹本。

辛格博士所藏24片甲骨的占卜范围涉及祭祀、田猎、晴雨、吉凶等多方面。其时代包括董作宾划分的一、二、四、五期。按组划分则包括自组、宾组、出组、历组和黄组。

第1片：这是最引人注目的一片，为一残龟腹甲，上面留下三条刻辞，未录贞人名，属自组，时代在武丁前后①。曾经著录②。三条卜辞内容如下：

（1）十二月乙丑，贞雨。曰：戊寅旬四日其雨。

（2）乙丑，贞于庚启。雨。

（3）……获二十麋。（图一：1）

第（3）辞是残辞，提到猎获20只麋鹿。根据田猎卜辞的一般规律推测，这条残辞为验辞，是实际上猎获到20只麋鹿。

本片有两点值得注意。第一，是将记月放在卜辞的最前边。一般情况，包括大部分自组卜辞都是将贞问的时间放在一条卜辞的最后。例如宾组的“辛丑卜，殼，贞妇好有子。三月。”（《遗珠》620）“三月”指贞卜的时间。又如自组卜辞“戊申卜，王，御𠂤父乙，庚戌二𠂤？八月。”（《合集》19933）这条辞在“王”之后，省略了“贞”字，是由王亲自贞问的卜辞。“八月”也是记贞问的时间。有的卜辞，除在最后附记月分之外，再附记地名。如：出组卜辞“甲寅卜，行，贞王其田，亡灾。在二月在自□。”（《佚》271）“在二月”是贞问的时间，“在自□”指贞卜的地点。经李学勤先生提示，除本片之外，还有一批自组卜辞也是将记月置于卜辞的起首。有的在记月之外还附地名。如：

一月戊午贞子……子……（《合集》20797）

二月乙未卜，余𠂤毋□。（《合集》19983）

三月戊申，𠂤弗□方允□。（《合集》20456）

三月戊戌卜，扶，步今日追……（《合集》24460）

四月乙酉卜，雨，今夕雨，不……（《合集》20914）

五月辛丑卜，步𣪊……（《合集》20400）

第4片：丁丑卜，……賚……

……貞我……（图一：2）

属宾组。此残辞是于丁丑日贞问，有关向某祖先举行赍祭的事。

第5片：□子〔卜，□，贞〕……弗其〔受又〕。 二（图二：2）

“二”是占卜序数，指第二卜。

第6片：……受有又。 五（图一：3）

为某事占问，是否会受到祖先上帝的保佑。“五”为卜序。“受有又”或“弗其受有又”是关于战争吉凶的贞问。如：“庚午卜，古，贞乎伐舌方，受有又。”本片大概也属于类似的内容。

第7片：丙□〔卜〕，宾，〔贞〕令……二（图一：5）

本辞为在丙日，由贞人宾贞问，所问的内容大概是命令某人去做某事，是否顺利。“二”为卜序。

第8片：…… 乙……𢍏…… 二（图二：4）

“乙”可能指某个名乙的祖先。“𢍏”指特种的羊牲。这条卜辞是向该祖先献祭羊牲的有关占问。“二”是卜序。

第9片：……酒……（图二：5）

酒，残祭名。是以酒等祭品向某祖先献祭的残辞。

第4～9片均属宾组，为武丁时期卜辞。

第10片：□子卜，王，〔贞〕于小乙……母……（图二：6）

这是在某子日，由王亲自贞问，对小乙等祖先进行某种祭祀是否顺利的卜辞。

第11片：□□〔卜〕，尹，贞〔王〕宾夕〔亡〕祸。

癸□〔卜〕，□，贞……夕……（图二：7）

尹，第二期贞人名。宾，祭名。上面一条是在某日由贞人尹问，王举行宾祭，今夜是否无祸。下面一条是在某个癸日贞问相同的内容。商人有干癸日占卜下一旬和在白天占卜当夜吉凶的习惯。甲骨卜辞中这类内容很多。

第12片：庚申卜，□，贞王宾……无祸。（图二：8）

第13片：壬子卜，□，贞王〔宾〕𣪘……（图二：9）“宾”、“𣪘”都是祭名。伊藤道治认为“𣪘，的祭祀是祈愿无灾祸，也就是以消灾除祸为主要目的的祭祀”[1]。

第14片：丙〔子卜〕，□，贞翌〔丁丑〕暜□〔丁〕，〔无𡆥〕。

□□〔卜〕，行，贞……丑……亡𡆥。（图二：10）

翌，在卜辞中用作将来时，在此指第二天。暜，祭名，指下一天进行的祭祀。这是出组周祭卜辞的残辞。根据周祭卜辞的一般规律，于占卜之日的第二天举行暜祭，祭祀同干日的祖先。根据序辞“丙子”可知“翌”之下可补“丁丑”。同时暜祭的祖先当为某丁。这条卜辞是在丙子日贞问，于次日丁丑，暜祭某丁，是否顺利。下一条有贞人行的名字，贞问的内容大概相类。

第15片：……贞……𣪘……（图二：11）

𣪘，祭名。这条残辞是为某祖先举行𣪘祭的相关卜问。

第16片：贞今夕不其雨。[2]（图一：3）

此为一条完整的命辞。从反面贞问今夜是否不下雨。

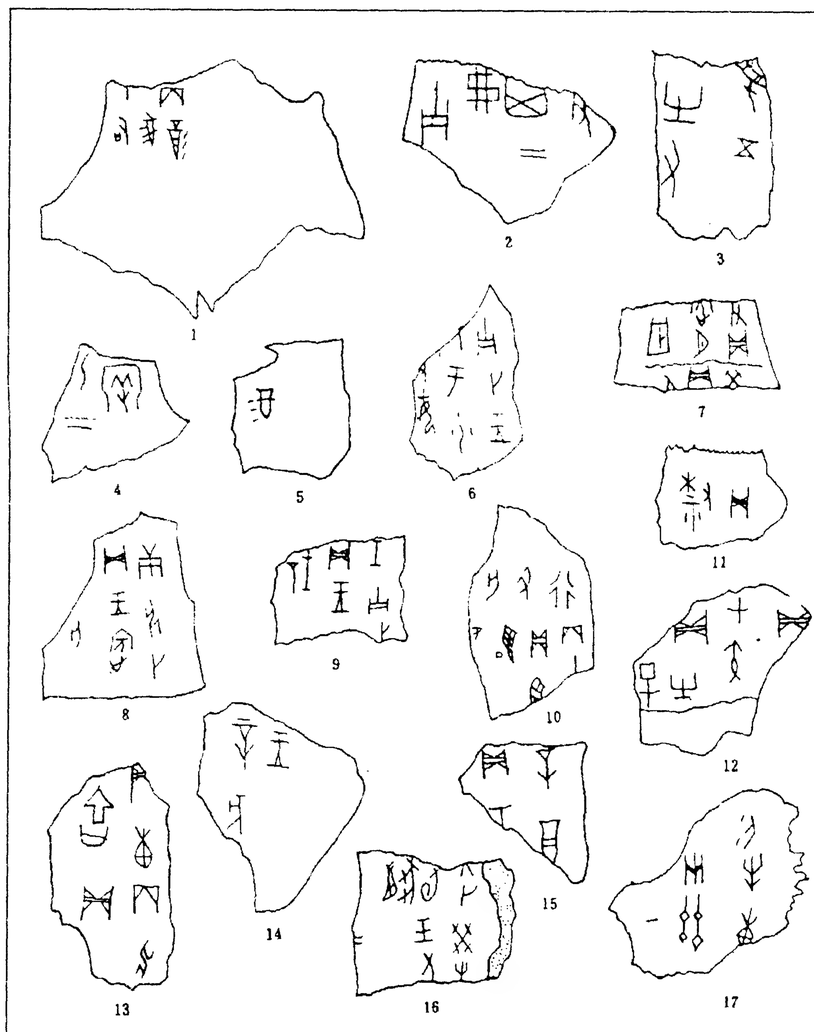
第17片：甲寅……贞……

……贞祷……子……（图二：12）

上条辞是在甲寅日为某事进行贞问。下条辞是关于向某祖先神祇进行祷祭的贞问。

第18片：辛亥〔卜〕，王。（图二：14）

“干支卜，王”在二期多见。有这样内容的卜骨近200片，同类卜辞有数百条，对这一组卜辞的内涵尚无明确的看法。出组由王亲贞的卜辞很多。如：“癸酉卜，王，贞旬亡祸。”（《合集》26505）如果去掉命辞“贞旬亡祸”，剩下的序辞便是“干支卜，王”。在出组这种序辞以独立的形式存在。现选取



1～17.出组卜辞

这条卜辞也属历组。“癸雨。不雨。”是正反对贞。“于甲辰雨”是验辞。这里省去了根据卜兆做出判断的占辞。可能是由不录名的贞人兼任占验之职。

第23片：癸未〔卜〕，王旬〔无祸〕。

〔癸巳〕卜，〔王〕旬〔亡〕祸。 二（图二：16）

是于癸未日和癸巳日分别贞问未来10天是否没有灾祸。这两条卜辞属黄组，按董氏分期法为第五期。

第24片：……物。唯…… 用兹。 一（图二：17）

物，表示牛的毛色，指杂色牛[3]。这条残辞的内容大概是有关以杂色牛为某献祭的贞问。“用兹”同于“兹用”，意为“用此卜”[4]。同类卜辞如“唯物。兹用”（《通》II1）这类占卜在第五期多见。

[1] 小屯南地甲骨》《前言》，上册第一分册第19页，中华书局1980年。

[2] 《邺中片羽》第三集，第35页，第1片；《甲骨文合集》21401，中华书局1982年；胡厚宣《苏德美日所见甲骨录》卷三，第1片，四川辞书出版社1988年。

[3] 参见施谢捷主编《殷墟甲骨刻辞摹本总集》所标各书，中华书局1989年。

[4] 参见[日]松丸道雄《殷墟卜辞综类》第311页。

[5] 由“贞王[入]”引出的占辞，还见于《铁》142.3、《京》698、《存》2.58等卜辞。

[6] 参见胡厚宣《释𢍏用兹御》，《史语所集刊》八本四分，1940年。

[7] 参见[日]伊藤道治《说文》，《殷都学刊》1982年第1期。

[8] 王国维《观堂集林》卷六《释物》。

[9] 胡厚宣《释兹用兹御》，《史语所集刊》八本四分，1940年。

名。“王曰：入”是占辞。“允入”是验辞。有时由王以外的人担任占验，多由贞人兼任。在自组，贞人叶常兼此职。如：“丙寅卜，叶，王告取鄙……叶占曰：若，往。”（《虚》574）前边的“叶”为贞人名，后者的“叶”为同一人，兼占验卜兆之职，做出“若，往”的判断[5]。“叶占曰”有时简化为“叶曰”，如：卜辞“乙丑卜，叶……祖丁。叶曰：……用二伻。”（《拾》1.13）[6]本辞则是将占验者的名字省去，只剩下“曰”，序辞中亦省去了贞人名，可以推测，贞人和占验者由一人兼任。

另外，《英藏》1179著有宾组卜辞“乙丑卜，𣪘，贞今戉来？曰：戉实伐舌方。七月”。“曰”以下的内容也应是占辞，而未录占验者的名字。这种例子在宾组是罕见的。

第2片：辛卯卜，其御唯祖乙？[7]（图一：4）

属自组。御，祭名。

第3片：……丙；酒……𤔔……司……（图二：1）

属自组。是一项贞问以酒和𤔔等牲，向某神或祖先进行祭祀，是否顺利的残辞。

两片比较完整的同类卜辞进行分析。《合集》24352为右胛骨，自下而上共有八段卜辞，内容完整，卜辞是：

庚午卜，王。在□丘卜。 一

庚午卜，王。在十二月。 二

庚午卜，王。在十二月。 三

庚午卜，王。在十二月。 四

庚午卜，王。 五

庚午卜，王。在十二月。 六

庚午卜，王。 在十二月。 七

庚午卜，王。 八

卜辞成双排左行，兆序在辞的右侧。刻辞整体紧靠卜胛的左边缘。这八条卜辞都是在庚午日由王亲自贞问的。第一卜，注明“在□丘卜”，为占卜的地点，表明是在王都以外的旅途上占卜的。第二、二、四、六、七卜都标明在“在十二月”，是卜占时间。再如《合集》24237，卜胛稍残，保留有六段卜辞，内容是：

甲午卜，王，在十二月，在鄙卜。 一

甲午卜，王。 二

甲午卜，王。 三

甲午卜，王。 四

甲午卜，王。 五

〔甲〕午卜，〔王〕。 〔六〕

这六段刻辞都是甲午日由王亲贞的卜辞。自下而上成双排右行。兆序在辞的左侧。卜辞整体紧靠卜骨的右边缘。仅在第一卜标明了卜问的时间和地点。其余各条仅有“甲午卜，王”和兆序。以上这两版卜辞都省去了贞问的具体内容。以上所举各例有的在“干支卜，王”下面标明了“在某月”、“在某地卜”，这证明了“干支卜，王”是完整的存在形式。这些刻辞又都紧靠卜胛边缘，无加刻的余地。至于这些卜辞所占的内容由下面一版可以明瞭：

癸卯卜，王，吉。

癸卯卜，王。

癸卯卜，王，吉。

癸卯卜，王。

癸卯卜，王，吉。（《合集》24027）

三条辞后面有“吉”，是为命辞。另外两条省去命辞“吉”，只余序辞“癸卯卜，王”实际上占卜的内容相同。由此可以判断，“干支卜，王”是一种占问吉凶的简化了的卜辞形式。本片即属此例。是在辛亥日由王亲贞吉凶的记录。

第19片：丙申……贞……

贞唯吉。（图二：13）

第二期有一类从正反两面对贞吉凶的卜辞，是以“吉”和“鬼”进行对贞的。如：“贞唯吉，十一月。”“贞唯鬼。”（《合集》24989）“〔唯〕吉。贞〔唯〕鬼。”（《合集》24988）同类的对贞卜辞还见于《合集》24985、24987等。《说文》曰：“人所归为鬼。”《尸子》曰：“古者谓死人为归人。”所以鬼指死人而言。《礼记·祭法》曰：“人死曰鬼。”故鬼代表不祥。卜辞中以“吉”和“鬼”对贞，就是贞问吉凶。本片即是这种对贞的残辞。补充完整应做“丙申……贞〔唯鬼〕。贞唯吉。”唯，做语首助词，无义。

第20片：辛酉……贞……（图二：15）

本片仅存干支和“贞”，贞问的具体内容残去。

以上第10～20片均属出组卜辞，按董作宾五期分法，属第二期。

第21片：癸卯卜，甲辰……（图一：7）

此为历组卜辞的残辞，依董作宾分期方法属第四期。是于癸卯日卜问，于甲辰日行某事的吉凶。历组刻辞的序辞比较简单，一般不录贞人，只以“干支卜”或“干支贞”起首。如“癸酉，贞旬亡祸。”（《合集》35071）“辛卯卜，癸启。”（《合集》35171）

第22片：壬寅卜，癸雨。不雨。〔于〕甲辰雨。[10]（图一：6）

（原载《文物》1993年第5期）

Ⅴ　曰貞卜辭について

甲骨文は各片の字体をもとに董作賓氏の『甲骨文断代研究例』以来、五期に分類されているが、第二期（祖庚・祖甲期）の卜辞に「曰く貞う」という特徴的文体をもつものが知られ、一般に「曰貞卜辞」とよばれている。

この度ここで紹介する甲骨片の刻辞において、(a)の一文がその「曰貞卜辞」であり、このことから、この甲骨片が第二期（祖庚・祖甲期）のものであるとすることができる。

また『殷墟甲骨刻辞類纂』によれば、「曰貞」の文体をもつ用例は39例が挙げられており、１例を除いて全て第二期に分類されている。

以下に『甲骨文合集』の分類番号を列挙すると22964、22990、23121（二例）、23322、23472、23859、24120、24121、24123、24124、24126、24346（二例）、24356、24391、24398、24402、24448、24449、24471、24501、24502（二例）、24506（三例）、24546、24557（二例）、24686、25961、24982、26197、英1934、英1949、懐1016の38例が第二期の用例とされ、29375の１例が第三期に分類されている。

ところで、董作賓氏の『殷暦譜』によれば、甲骨文は字体から五期に分類される一方で、祀譜等によると旧派・新派の二系統に分けられ、両派が交互に交代しているということが指摘されている。

その際に第二期の祖庚を旧派、祖甲を新派と区分する指標の一つとして「王」字の字体について指摘しており、旧派は「土」につくるが新派は上に一画を加えて「王」につくるとしている。

このことから考えると、この度ここで紹介する甲骨片には「王」字はないものの、「曰貞」の文体をもつ用例は『殷墟甲骨刻辞類纂』によれば、先に挙げた39例の全てが「曰貞」の上に「王」字を伴っており、「王」字を「王」につくっていることから、新派の祖甲期のものであるとすることが可能ではないかと考える。

また、この「王」字の字形と時期については若干の例外もあるが、饒宗頤氏の『殷代貞卜人物通考』巻二、第十一「論卜王」に詳しい。

先学諸賢のご教示をいただければ幸いである。

Ⅵ　おわりに

この度ここに機会を得て、立教大学博物館学研究室所蔵の甲骨片について、極めて簡単にではあるが、拓本・摹本等を加えて改めて紹介することができた。類例の少ない「曰貞卜辞」であるので先学諸賢に益するところがあれば幸いであるが、さらなる検討が必要なこと、なおさねばならない誤りも多いと思われる。ご批判をいただいて、少しでも正していければと考えている。

尚、この度この甲骨片を紹介するにあたり、東京大学東洋文化研究所の松丸道雄先生に、拓本については研究所の非常勤職員の笠井俊人氏を紹介していただき、写真についても採拓の際に先生が撮影されたものを提供してくださり、その使用と公開をも許可してくださった。また、その他にもなにかとご教示、ご配慮をいただいた。あらためて謝意を表したい。

また、私のような者にこの紹介記事を書くように勧めてくださった後藤均平先生、その機会を与えてくださった博物館学研究室の山浦清先生、川名広文先生にも心より謝意を表すとともに、嘱託の田中さん、大久根さん、白石さんにもなにかとご迷惑をおかけした。記してお詫びとしたい。

〔引用・参考文献〕

董作賓『甲骨文断代研究例』中央研究院歴史語言研究所集刊外編（1933）、『董作賓先生全集』二（1977）所収
董作賓『殷暦譜』中央研究院歴史語言研究所集刊（1945）、『董作賓先生全集』六・七（1977）所収
饒宗頤『殷代貞卜人物通考』上下、香港大学出版社（1959）
郭沫若主編『甲骨文合集』中華書局（1977-82）
姚孝遂主編『殷墟甲骨刻辞類纂』上中下、中華書局（1989）
『MOUSEION』第１号（1957年11月）
『MOUSEION』第11号（1965年３月）

〔追記〕

部分拡大写真と摹本は報告者の作成による。

Ｍ１の一文は、駒井和愛『考古小記』開明堂（1976）所収

図１、２　笠井俊人氏採拓
図３、４　松丸道雄先生撮影
図５　報告者撮影
図６、７　報告者作成

（原載《ムゼイオン》第 39 號，日本立教大學學校社會教育講座，1993 年）

立教大学博物館学研究室所蔵甲骨片について

吉　原　道　夫
（立教大学大学院）

Ⅰ　はじめに

この度ここに紹介する甲骨片（一片）は、既に『MOUSEION』第11号（1965年３月）（以下 M11とする）において「博物館学講座収蔵考古資料目録」の「129」として紹介されているものである。その際には他の資料と一括して、写真も併せて紹介されているが、その上に刻まれている甲骨文に対してまでは言及されていないので、今回ここにその刻辞内容にも言及し、改めて紹介するものである。

Ⅱ　来源――本学への収蔵の経緯

来源については、M11においても言及されているが、この甲骨片は駒井和愛先生による寄贈品である。また、先生は戦前・戦後の時期に本学において教授された経緯がある。（詳細は M11の略年譜を参照されたい）

先生ご自身の入手経路については、『MOUSEION』第１号（1957年11月）（以下Ｍ１とする）所収の「立教大学の標本室」という一文において、先生が本学にて考古学の講義を担当されていた頃の標本室の創設と、そこに展示するための標本収集の経緯について先生ご自身が書かれているが、そのなかに「安陽で見つけた殷墟文字のある骨片」という記述がある。

ところで、他の標本についてはその入手経路について「買った」、「拾った」等と明確に言及されているが、この甲骨片については上述のように「見つけた」と書かれている。

このような書き方から、先生ご自身が安陽を訪れていることは容易に判断できる一方で、現地において購入されたのか、それとも採集されたのかについてはいずれの場合も考えられる。

Ⅲ　甲骨片について

この甲骨片は通長51mm、幅32mm の小片で、獣骨を使用しており、その表側には合計18字の甲骨文が縦書きで三群に分けて刻まれており、裏側には、占卜をする際にこの獣骨を焼いた痕跡である灼痕と、占卜の結果を判断するための割れ目である卜兆を得るためにこの獣骨に彫られた鑽と鑿の一部分がそれぞれ認められる。

尚、表側の左上部には文字らしいものが二つ認められるが、その裏側は上から下まで、調整のために削られている。

よって、この二つが文字であるとすると、おそらくは刻字した後に調整により削られ、その一部が残ったものと考えられる。

しかし、通常は刻字の行われない場所であるので、それが文字であるのか否か、文字だとするといかなる性格のものであるのか、またいかなる文字の一部であるのか等、今後さらに検討する必要があると考える。

Ⅳ　刻辞内容について

この甲骨片に刻まれている文字は文章の断片であるので、文章全体を再現することには限界があるが、他の類例から、欠けている部分についても若干ではあるが補足することができる。また、この文章は左から右へ縦書きされたものであり、一般に「左文」とよばれるものである。

以下図に従って文章を群ごとに釋字をしてみる。

(a)丁亥卜□
　曰貞　――。
(b)丁亥卜
　翌戊[子]――。
(c)[乙]□[卜]□[曰]
　[貞]于小乙
　□眚于
　□歲于
　□寧（年）。

（原文は縦書き・左文）

立教大学博物館学研究室所蔵甲骨片について

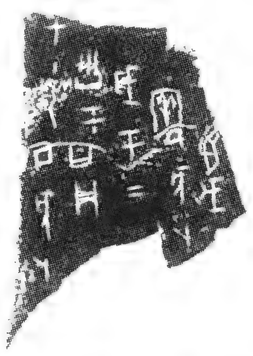


図１　拓本・表（有字面）



図２　拓本・裏（無字面）

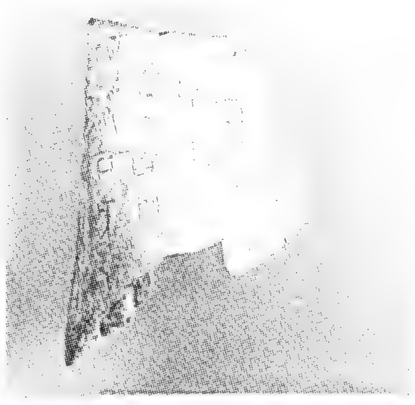


図３　写真・表

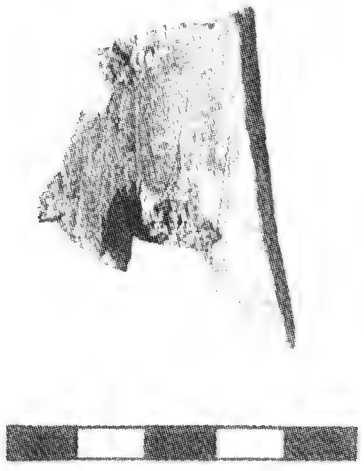


図４　写真・裏



図５　写真
（表・左上部拡大）

（京4034 Ⅲ）

白为伯。《说文》中的"伯长也"。二方国的羌族的首领被供荐于殷王室祖先神的祖丁与祖甲。

二、关于头骨刻字

有关方国首领的供荐，将头盖供荐于祖先神之后，整然处理。特别在头骨上刻上了记事，作为战胜的记念。现在有一三片。

1. 人方白□且乙伐（图a）。（台湾中央研究院历史语言研究所所藏）

2. 方白用（图b）。（京5281）

3. 白𠙵（图c）（续补9067）

4. 白（图d）（续存上2358）

5. 白（续补9069）

6. □丑用于义双（图e）（京5282）

7. 白（续补9070）

8. 又纟（图f）（续补10572）

9. 用（图g）（续补10573）

10. 佳（图h）（掇2.87）

11. 大甲 （英国剑桥大学. 叶慈教授旧藏. 李棪所藏）[10]

12. 囚中凡（图i） （东京大学东洋文化研究所甲骨文字.972）

13. 封𡈼（图j）

五封 （东京国立博物馆所藏）

关于人头骨刻字，已由陈梦家、胡厚宣、李 各先生详述[11]。现在介绍六片的内容。关于[13]的本博物馆的头骨字，我将提出一些个人的意见。

1. 人方白□且乙伐。

人方国的首领被俘虏后，将其头盖供荐。祭祀后，将头盖整理，并刻上战胜记念之记事。人族与殷王室有敌对关系，征伐人族之卜辞很多。

癸巳卜黄贞，王旬无畎。王来正（征）人方。 （合36496V）

癸丑王卜贞，旬无畎，在十月又一。王正（征）人方。在亳。（英2524V）

2. 用方白。

供荐于殷王室祖先神的某方国首领头盖上的刻字。

3. 白𠙵

伯𠙵是𠙵方国首领。卜辞中：

戊申卜，白𠙵其降祸。（续5.15.7 Ⅰ）

庚戌卜王贞，白𠙵允其降祸。（佚9.1 Ⅰ）

壬子卜，白𠙵其用。（前3.1.1 Ⅰ）

𠙵族常常给殷王室带来了祸。

6. □丑用于义双。

义．双方国首领成为牺牲了。卜辞中：

□戌，𢀛义行用遣羌方，又𢦏。

用义行弗遣方。 （后下13.5 Ⅲ）

七日己巳，允有来艰自西。长双角告曰，𠙵方出牧我示𢆶田七人。（菁华2 Ⅰ）

义、双的首领成为俘虏。在殷室的祖先神前供荐了首领的头盖。祭祀之后，头骨上刻了战胜的记事。头盖上所刻的字，是战败而成为牺牲的方国首领的名字。

7. 由

"由"字是头盖的形状。《说文》，"由，鬼头也"。陈梦家说"由象头壳之形。其义或为首脑，或脑壳"。（《卜辞综述》372页）卜辞中：

a. 方 其用，王受又（祐）。

弜用。

其用羌方由于宗，王受又（祐）

甲507 Ⅲ）

b. 用危方由于妣庚。（南明669 Ⅲ）

成为俘虏的羌、危方国首领的头盖供荐于祖先神。7的头骨上刻上了由是某方国首领的头盖。

13. 封𡈼

五封

这是小仓武之助旧藏的骨片。松丸道雄氏于《日本散见甲骨文字苑彙》（二）[12]中说明了那是头骨，而本博物馆的谷丰信氏请人类学者的铃木尚氏予以鉴定时，被确认是头骨。骨片极小，因此不能判明男女之别及属于任何部分。

"𡈼"是封。卜辞中：

丙戌囚，一封口伐。 （库468 Ⅰ）

甲申贞，其执三封白于父丁。（合32287 Ⅳ）

乙丑王卜贞，今囚巫九备，余其𠂤遣，告侯田册执方羌、羞方庚方，余其从侯田甾伐四封方。 （续1.13.1V）

所说的一封、四封方意味着方国。三封白与三方白相同。"𡈼"的骨片破损了，文字不全，是"𡈼"字。卜辞中有"𡈼"、"𡈼"、"𡈼"、"𡈼"。

贞，𡈼邑受囚。（后下7.3. Ⅰ）

甲辰卜王贞，侯其𢦏𡈼。（掇2.463 Ⅰ）

癸卯卜王曰，𡈼其𡰥。（前4.42.2 Ⅰ）

重其大𢀛𡈼。 （前4.42.1 Ⅰ）

"𡰥"是伐。13𢀛卜辞中"乙酉卜，王𢀛伯，受又（祐）。"（粹1176 Ⅰ）郭沫若《殷契粹编考释》（644页）中，解释为"𢀛者建伐也。"武丁时代，𡈼作为与殷王室敌对的方国，常常成为征伐对象。这个头骨刻字为五封，而五方国为殷王室所征伐，𡈼是其中的一方国、𡈼的首领成为俘虏，供荐于殷祖先神后，整理之，作为战胜的记念，刻上了字。

又，帝辛时代（五期），常祭的祖祭也供荐了头盖。

丁酉卜贞，王宾大丁，𡰥，亡尤。

戊午卜贞，王宾大戊，𡰥，亡尤。

（邻12V）

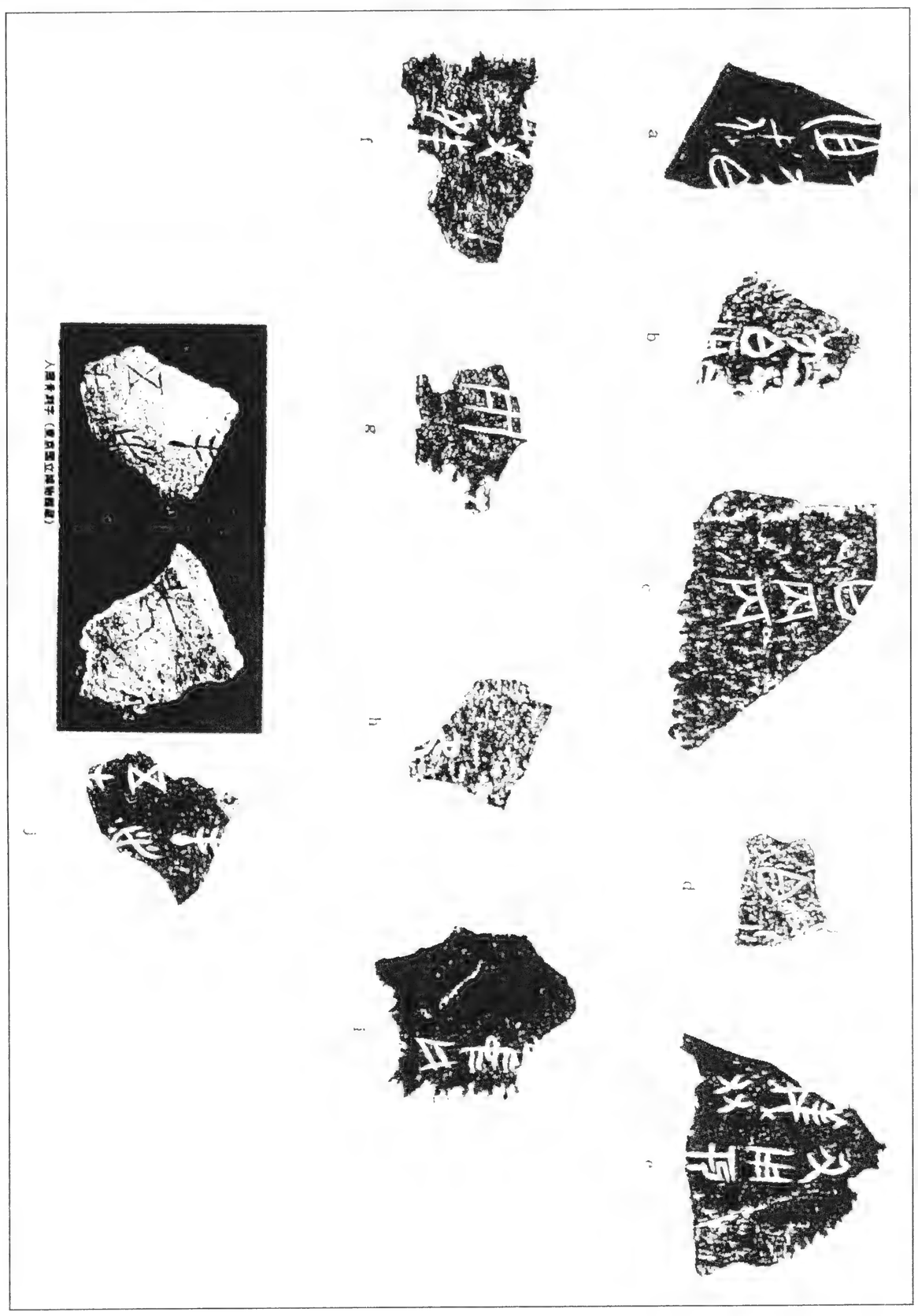
罗振玉在《殷虚书契考释》（六八叶）中述说，"象两手荐牲首於且上"。为供头盖之祭仪。岛邦男氏，伊藤道治氏也按照罗氏的说法。[13]《礼记·郊特牲》中"用牲於庭，升首於室。"郑玄述说，"制祭之后，升牲首於北墉下，尊首尚气也。"这是殷代的礼制传到后世的。

三、关于头骨的咒术的意义

在祖先的祭祀中，敌国首领头盖供荐的咒术的意义，是其一，头中有灵一，具有强大的生命力。对于胜者的共同体，由供荐获得了牺牲者的生命力，再把外力加在共同体上，谋求共同体的安宁作为目的。其二，随着牲首进行血祭。《周礼·春宫·大祝》中有"隋逆牲逆尸，令钟鼓。右亦如之。"秦蕙田于《五礼通考》卷第八七中云，"案隋，注疏谓宗庙荐血极是"。又《礼记·礼器》的"君亲制祭"中云，"惟疏谓血祭是制祭后又荐血腥，分制祭血祭为二似未安"。血祭是指制祭之中所进行的事。这意味着牲体的供荐与血祭同时进行。牺牲者鲜血给予降临了的祖灵较强大的力量，更加保护了人们。仰韶文化时代的洛阳王湾遗址，王湾第一期、第二期文化的人头骨，都涂以朱色。[14]红色是生命的颜色及活力的意义，也促使苏生。[15]王湾人把头骨涂成朱色的理由是，由于头上有强大的灵质及生命力的想法。在西安半坡遗址与陕西省宝鸡北首岭遗址的陶塑人头像，[16]也意味着仰韶人的人头崇拜的表现。[17]殷代中期的藁城台西遗址也能看到人头崇拜。[18]

殷代晚期殷王室的头盖供荐，不但是敌国的首领，有很多方国的俘虏也成为对象、包括王墓的大型墓，除殉葬者，在河南省安阳侯家庄武官村王陵东区1400号大墓的附近的祭祀坑发现了无头人骨与头骨。二四零多个的祭祀坑中发现了约一九三零具的人骨。这是随时进行的成为祖先祭祀牺牲对象的头盖。数目不多，从铜器及陶器的随葬品判断，相当于殷墟陶器第二期，最高限度到武丁时代，最低限度到祖庚。祖甲、廪辛时代。特别是武丁时代的最多。[19]

殷墟的祭祀坑中的大量头骨，是怎样的人种呢。韩康信、潘其风在《殷墟祭祀坑人头骨的种系》中说，[20]即使同样的蒙古人种，也分为东亚，北亚、南亚，特别是殷王室近邻的东亚类型的蒙古人种多。方国是有时成为友邦，有时成为敌国。这些方国的名称列举如下：



东京国立博物馆保管的甲骨片

——有关人头骨刻字的考察——

（日本）荒木 日吕子

一、关于人祭

在原始农耕社会里，自然界大大地影响了人们的生活。人们对自然界所给于生活的力量感到敬畏而作为神祭祀。祭祀时，供奉猪、羊、牛、鹿等。人也成为供奉的对象。在中国，这种习俗已见于仰韶文化时代。陕西省西安半坡遗址的氏族曾作为祭祀场使用过的大长方形的住屋地下，一个人头骨与陶罐被发现了[1]。这是与同一居住区内所埋葬的幼儿瓮棺葬群不一样。而且，成年人葬在沟外的公共墓地内，两具的屈肢人骨是在居住区的窖穴内被发现的[2]。在河南省郑州大河村遗址里，与猪的动物牺牲同样的窖穴内有三具人骨，埋藏在三座窖穴内[3]。在龙山文化时代里，河北省邯郸市涧沟遗址的住居内，发现了四个人头骨。又，窖穴内埋了男女人骨十具及井内重叠五层的老少人骨[4]。西安客省庄第二期文化的六座窖穴中的人骨被发现了。其中四座窖穴里人骨与兽骨埋藏在一起。而且，其中H四五窖穴人骨的股骨4部分有人面的雕刻[5]。就在河南省洛阳王湾遗址里，从三座的窖穴也发现了人骨[6]。仰韶、龙山文化时代能看到的人身牺牲，其一是为了清除邪气，而埋在建筑物地基下。其二是对农业生产有深切关系的自然神或族神而作的人身牺牲[7]。通过这些人祭，可以看到农业生产发展过程中的变化。从仰韶文化时代到龙山文化时代，农业产物的生产力增大了。人们有了丰富的经济力之后，发生了巨大的社会变革。从母权制度移到父权制度，从作为纽带的血缘关系的氏族制度社会到邦国制度社会有过变革。而在青铜器时代的殷代，随着富有集中化，王权确立了。其中国王的神权加强了。由图腾的族神崇拜到祖灵崇拜的倾向，看来加强了。在宗庙的设立时，祖灵的祭祀中进行了非常多的人祭。特别是到了殷代的晚期，与人殉同时人祭的人身牺牲的数目也增大了。

关于人祭的卜辞，胡厚宣先生《中国奴隶社会的人殉和人祭》（下篇）[8]中，述说。"总算起来，从盘庚迁殷到帝辛亡国，在这八世，一二王，二七三年（公元前1 395—1123）的奴隶社会昌盛期间，共用人祭一三零五二人，另外还有一一四五条卜辞未记人数，即都以一人计算，全部杀人祭祀，至少亦当用一四一九七人。"人祭是从武丁期到帝辛期间，尤其多在武丁的时代里进行的[9]。作为牺牲的对象者，主要是在殷周围的方国的俘虏。卜辞中：

乙巳卜宾贞，三羌用祖乙

（前1.9.6 Ⅰ）

戊子卜宾贞，𢀛今夕用三百羌于丁。

（卜245 Ⅰ）

羌族的俘虏被供荐于祖先神的祖乙、祖丁。羌族之外，尸、𢆶，美等方国的俘虏或侍奉小臣、小妾的商王室的近臣者，特别多的是羌人、廪辛、庚丁时代（三期）的卜辞中：

□亥卜，羌二方白其用于祖丁父甲。

⑱市毛勋《朱的考古学》，雄山阁出版，1975年184页。
⑰《西安半坡》189页，图136，图版162。《宝鸡北首岭》（中国社会科学院考古研究所），文物出版社，1983年，75页，图57，彩版1。
⑱王育成《仰韶人面鱼纹与史前人头崇拜》，《江汉考古》1992年2期29页。
⑲《藁城台西商代遗址》（河北省文物研究所编），文物出版社，1985年171页。
⑳《安阳殷墟奴隶祭祀坑的发掘》，《考古》1977年1期29页。
㉑《安阳殷墟头骨研究》，文物出版社，1985年106页。
㉒张秉权《人名地名与方国》，《甲骨文与甲骨学》，国立编译馆主编，1988年，349页。
㉓同㉑。

（原載《南方文物》1994年1期）

第一期武丁时代　　三三方国

㠯方．土方．鬼方．周方．龙方．羌方．莞方．马方．井方．盂方

旨方．基方．祭方．旁方．兴方．湄方．𠂤方．虎方．犬方．戈方

戉方．𢦏方．御方．巴方：‖方．矢方．𢀛方．𠂤方．𠂤方．罗方

人方．下危．𠂤方

第二期祖庚．祖甲时代　　二方国

㠯方．周方

第三期廩辛　康丁时代　　一二方国

危方．羌方．𦎫方．商方．戊方．𢦚方．宣方．北方．𧊒方．牝方．㠯方．人方

第四武乙．文武丁时代　　二六方国

㠯方．周方．危方．人方．羌方．龙方．莞方．马方．井方．鬼方．𢦚方．旨方

亘方．𠂤方．𠂤方．子方．𢀛方．木方．𡆥方．𠂤方．大方．𢀛方．𠂤方．𠂤方

贝方．𡆥方

第五期帝乙．帝辛时代　　八方国

人方．羌方．𢦏方．丟方．𢦚方．𦎫方．林方．𠂤方[22]

各期卜辞中的方国的位置及方向，以殷都为中心，列举如下：

东——人方．𠂤方．巴方．旁方等

南——𠂤方．𡆥方．贝方等

西——周方．旨方．羌方．亘方．戉方．𦎫方等

北——土方．盂方等

东南——下危．木方．林方等

西南——莞方．祭方等

西北——㠯方．井方．𠂤方．马方．湄方．𠂤方．𠂤方．鬼方．戉方等

东北——旁方等[23]

盘庚迁都于殷之后，在武丁时代，殷的势力范围扩大了。尤其是西北方面的土方与一方的战争很多。又与其他的方国的战争也不少。这些方国大多数的俘虏是为了殷王室的安宁的祭祀而牺牲了。

四、结语

以上是关于东京国立博物馆中保管的人头骨刻字的释文与头骨咒术的意义的考察。殷代晚期，特别是武丁期祖先祭祀中，敌国首领的头盖供荐的意义，为了扩张领土的保全与谋求共同体的安宁，咒术力是必要的。头盖被认为有特别强的灵—与生命力。牺牲者的咒术力的获得是其目的。又，与头盖供荐同时进行的血祭，促使祖神灵力强化。殷王室祖先祭祀的头盖的供荐，不仅敌国的首领，很多俘虏也成为对象。河南省安阳侯家庄武官村王陵东区的祭祀坑中发现的无头人骨与头骨，是这个事实的强有力的证明。

注释

①《西安半坡》，文物出版社1963年18页。
②《西安半坡》198页，图147、图148。
③《郑州大河村遗址发掘报告》，《考古学报》1979年3期341页，图版8—1，12—1，2。
④《1957年邯郸发掘简报》，《考古》1959年10期531页。
⑤《洋西发掘报告》（中国社会科学院考古研究所），1962年48页，图29，图版34—8。
⑥《洛阳王湾遗址发掘简报》，《考古》1961年4期177页。
⑦王克林《试论我国人祭和人殉的起源》，《文物》1982年2期69页。
⑧《文物》1974年8期56页。
⑨姚孝遂《商代的俘虏》，《古文字研究》第一辑1979年186页。
⑩李棪《殷墟砍头坑觀骸与人头骨刻辞》，《中国语文研究》1986年8期45页。
⑪陈梦家《第九章　政治区域》，《卜辞综述》，大通书局，1971年327页。胡厚宣一同⑧，李棪同⑩。
⑫《甲骨学》第八号，1960年173页。
⑬叶玉森《殷墟书契前编集释》卷四，57页，艺术印书馆，1966年。
⑭岛邦男《殷墟卜辞研究》，汲古书院，1958年321页。伊藤道治《关于第五期卜辞中𡆥的祭祀》，《关西外国语短期大学研究论集》51号，1991年203页。
⑮《洛阳王湾遗址发掘简报》，《考古》1961年4期176页。

的甲骨卜辞中似不多见，当为晚期卜辞。

008：……牢五牛（图一，8）

009：……〔鱼〕……𢀛……（图一，9）

𢀛，甲骨卜辞中用作祭名，是用酒来祭祀[5]。

010：……𢦏……（图一，10）

011：……卜，……王……酉……（图一，11）

012：乙亥……贞，今……（图一，12）

013：……卜，㕣……〔宜〕……（图一，13）

根据卜辞辞例，"㕣"应为出组卜人，为祖庚、祖甲时期的卜辞[6]。

014：己巳卜，……王宜……（图一，14）

015：乙酉……〔雀〕……（图一，15）

016：……㠯㠯㠯祭……（图一，16）

017：……祭……（图一，17）

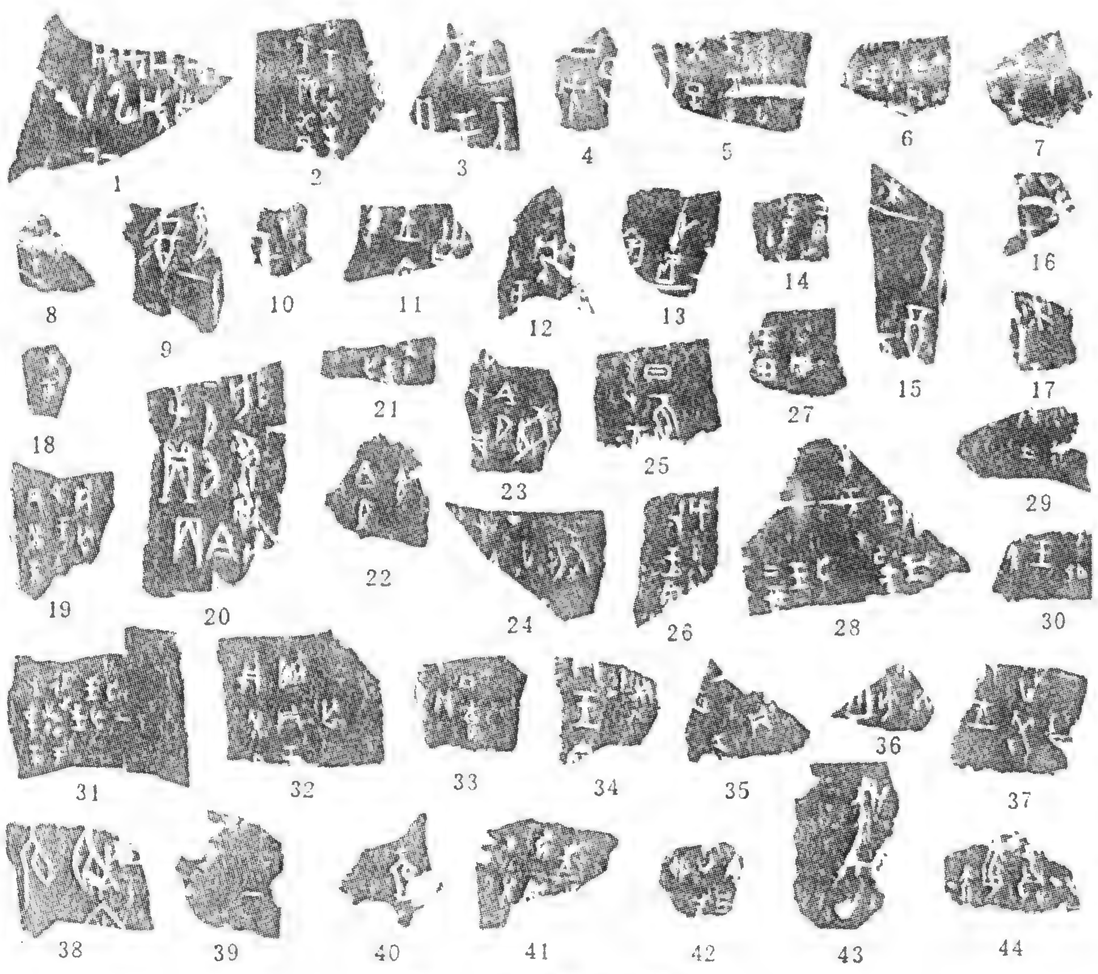
018：……𡆥……（图一，18）

𡆥字是卜辞中的祭名，读为塞，指报塞鬼神之赐福言之[8]。

019：丙……今夕亡……

……己贞，今夕㠯亡〔𡆥〕（图一，20）

己亦当为卜人，又贞字作𠂤，两直画之下各有横短画，子组的贞字一律作此，为武



图一　甲骨文拓本（原大）

殷墟甲骨拾遗

焦智勤

A lot of pieces of oracle bone with inscriptions have been collected from the cultivated land to the northeast of Xiaotun village of the Anyang city. Based on the preliminary study, some oracle bones have been rubbed and elucidated. The inscriptions dealed with astronomical phenomena, worship and war ect. some were not seen in the record. The discovery not only provides fragmentary material for the oracle bone studies but also contributes information for the piecing together work of the oracle bones.

殷墟甲骨文字，自从1899年被学者认识，迄今已近百年，共发现15万片以上。近年来时闻有人在殷墟范围内捡到带字甲骨片，有人还带着所捡甲骨片让鉴定真伪，遂留意这些零星甲骨的选拓。两年来竟得甲骨拓片百余，经初步整理，选81片介绍如下。

一、释读

本文在前辈研究甲骨成果的基础上，试将这部分零星破碎的甲骨片进行释读，谬误之处，敬请专家学者予以斧正。

001：……戊子……

……戊戌……

……戊甲……

……戊午……（图一，1）

此片为干支表的一段，兽骨[1]，残存前三甲的第二十五日，后三甲的第五、十五、二十五日的干支。

002：……〔壬〕申，癸〔酉〕，

……〔辛巳〕，壬午，癸未，

……壬辰，癸巳（图一，2）

此片为兽骨，甲子表前三甲末段残存。

003：……〔㠯〕方于……王亥……（图一，3）

004：……〔征㠯〕方……（图一，4）

005：……癸巳……王宾……𥘅亡……（图一，5）

甲骨卜辞中"𥘅"字，郭沫若先生释为福字[2]，于省吾先生释为𥘅字，殷礼以𥘅为进献品物之祭[3]。此片中"福"字也应释为"𥘅"字，从于省吾先生之说。

006：庚申卜，贞……宖岁……（图一，6）

007：……贞，王……𡆥示（图一，7）

在甲骨卜辞中，𡆥为祭名，为殷商时期的五种祭祀之一，商代𡆥祭的范围很广，可向上帝、自然神、先王先妣、旧臣及有关的神灵进行𡆥祭[4]。"立于宗庙的先王的神主，称之为示，示有大小之别，大示是直系先王，小示是包括旁系先王。大示常用牛牲，小示常用羊牲，'示'之所在，后世称为宗庙。"[5]此片中"𡆥示"连用祭祀先王，在已经发表

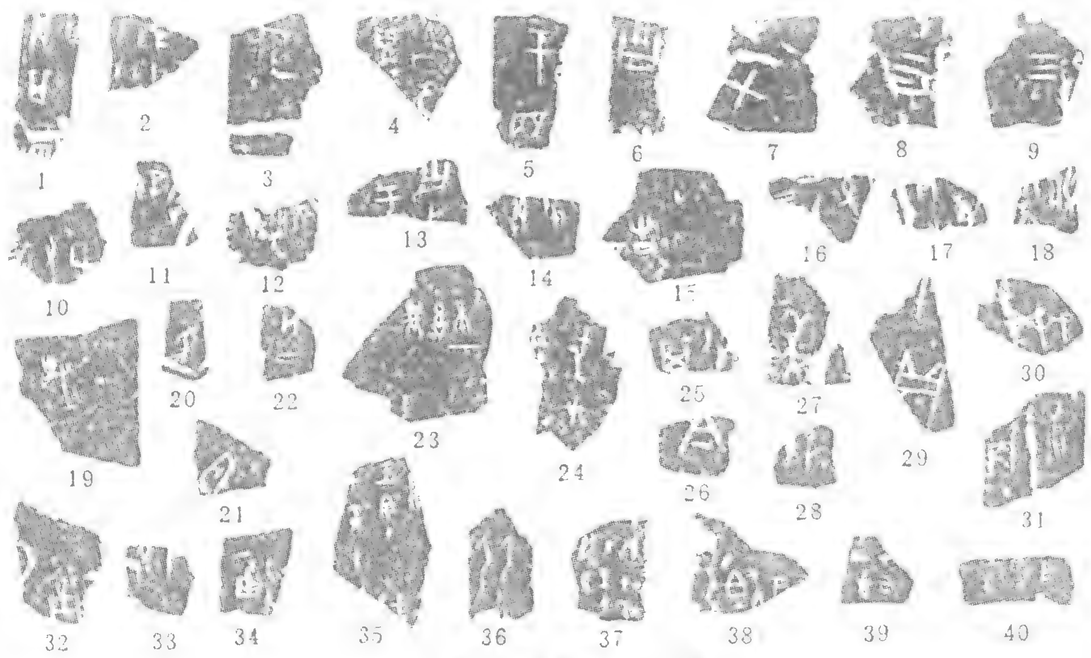
056：……〔五〕告（图二，15）
057：……屯……三月（图二，16）
058：……〔子〕卜，……𠂤（图二，17）
059：……疾……（图二，18）
060：……戈（图二，19）
061：……祟（图二，20）
062：……祸（图二，21）
063：……亡（图二，22）
此片亡字后面有“二”字，当为卜序。
064：不玄冥（图二，23）
065：……尤……在……（图二，24）
此片为兽骨。
066：……共……八月（图二，25）
067：……今……（图二，26）
068：……〔年〕（图二，27）
069：……己……𠂤（图二，28）
070：……〔卜〕，贞……（图二，29）
此片为兽骨。
071：戊……贞……（图二，30）
072：……贞，……不……（图二，31）
073：……庚……（图二，32）
074：癸……贞，……（图二，33）
075：……〔告〕（图二，34）
076：……弜……（图二，36）
077：甲寅卜，贞，王宫小甲……（图二，35）

在祭祀卜辞里，“宫”有两种用法，均为动词，一为配享之意，二是商王亲自进入祭场参加祭祀[9]。此片卜辞里“王宫”即属后者。“小甲”，商代旁系先王。《史记·殷本记》载：“帝大庚崩，子帝小甲立。”

078：甲申……王今……亡……
……卜，贞……夕……酰（图二，37）
079：……卜，〔兄〕……𠫓……于……（图二，38）

此片卜辞里残字当释“兄”，为出组卜辞里的卜人。“”字也有减笔，当为祖庚、祖甲时期卜辞。

080：……在己……〔王〕田，……  ……



图二　甲骨文拓本（原大）

丁晚期卜辞[9]。“今夕师亡歷”，歷即震，震惊之震，意为今夜部队没有震惊[9]。此片为兽骨。

020：癸未……王今……亡……
……贞……夕……酰（图一，19）
此片为兽骨。
021：……丑卜，……𠫓……亡……（图一，21）
022：……寅……今夕……（图一，22）
023：……卯卜，贞……今夕……酰（图一，23）
024：……卜，〔贞〕……夕……酰（图一，24）
此片为兽骨。
025：……巳卜，……〔王今〕日获……（图一，25）
026：……戌卜，行贞，王田……（图一，26）
行为卜人，是祖庚、祖甲出组卜辞[9]。
027：丁酉……王……亡……
己亥……王……亡……
辛亥卜，……王……（图一，28）
028：……王田亡灾（图一，27）
029：乙卯……，贞，王……（图一，29）
030：乙卯……王……大……（图一，30）
031：辛未……𢦏于……往亡……
……卜……𢦏……往亡……（图一，31）
032：癸……贞，王……亡……
……贞，……酰（图一，32）
033：……贞，……（祐）𠫓……（图一，33）
034：……贞，王〔宫〕……（图一，34）
035：……贞，……亡尤（图一，35）
036：……亡祸（图一，36）
037：……卜，王翌癸……其……（图一，37）
038：……取𠂤…………（图一，38）

卜辞中取用为祭名，为火燔烧木柴之祭，取祭和祭祭相同而有别，一般说来取祭在前，祭祭在后，取祭不言用牲，而祭祭多言用牲[9]。

039：此为一片之反正，正面“一”字（图一，39），当为卜序，反面“”字（图一，40）
040：癸……，贞……
……卜，……命……往……（图一，41）
041：……卯卜，……兄……今日……（图一，42）
042：……延雨（图一，43）
此片为兽骨。
043：……自翌大……（图一，44）
044：……贞，……其〔雨〕（图二，1）
045：……雨（图二，2）
046：……雨（图二，3）
047：……贞，……今日（图二，4）
048：……于𠂤……（正面，图二，5）
……〔吉〕……（反面，图二，6）
此亦为一片之正反面。
049：此亦为一片之正反面，正面“𠂤十”字（图二，7），反面“亘”字（图二，8）
050：……迄至（图二，9）

甲骨卜辞中“三”与“三”有别，“三”为数字，“三”字中间一划较短，即今气字。此片之“三”字释为迄字，乃迄至之迄[9]。

051：……有祐𠂤（图二，10）
052：……辛〔妣〕（图二，11）
053：……丙……〔祖〕……（图二，12）
054：……子卜，……于……（图二，13）
055：癸……旅……（图二，14）

中央研究院歷史語言研究所所購甲骨選釋

鍾柏生

一、前言

歷史語言研究所（下文簡稱史語所）到目前爲止，依其收藏的甲骨實物來源，可分爲三類：一、殷墟十五次發掘出土的甲骨；二、一九四九年前購買的甲骨；三、私人贈送的甲骨。第一類原始資料均已出版，剩下綴合及修訂的工作仍待繼續進行。第二類資料來源可分爲三部分：（一）爲民國十七年調查殷墟購得甲骨十六版，發表於《殷墟文字外編》編號四一九～四三四。（二）中央研究院購自南京骨版四十六版；發表於《殷虛文字外編》編號三十～七十五。（三）是民國卅六至卅七年間，由傅斯年先生購買，高去尋、李光宇兩位先生分批運至南京的甲骨[1]。未經綴合前之總數爲一九九片，有字的甲骨爲一九六片。這批古物二年前才開始整理，在購買前出土及流傳的情形，因前輩先生的去逝，無法詳知。筆者因在所資歷不深，加上機緣不巧，史語所藏甲骨多年來沒有徹底整理，所知有限，總總因素陰錯陽差耽擱了這批材料的研究與發表。三、私人所贈甲骨，有待將來整理。

前文所言第二類第三項材料剛進所時，經過初步的整理與統一編號。在此工作展開前，有部分甲骨有更早的編號，它們是「簠某」，

（图二，39）
081：丁未……宫……亡……（图二，40）

二、出土地点调查

上述81片甲骨，传出自安阳殷墟小屯村北地。笔者曾多次前往调查，终于在小屯北地现殷墟博物苑的北墙外，洹水南岸的一小块农田中，捡得甲骨碎片数十片，带有文字的有十余片，多数残存一二字。在后来的调查中，证实了这些甲骨片全部是在这块农田中所拾捡。经查阅有关资料，这块地就是小屯东北地朱姓十四亩地的东北角。据闻此地建国以前曾被人盗掘过，朱姓十四亩地出土的甲骨曾归罗振玉收藏[9]。解放后没有发掘的记录。

1928年10月到1937年，前中央研究院在小屯一带共作过15次科学发掘，所获甲骨约25000片，都有坑位和层次记录，这批材料收入《殷墟文字》甲编和乙编。其中在小屯东北地河滨朱姓十四亩地中，共发掘过二次，即第一、三、四次，董作宾先生在《殷卜辞断代例》中，把第一至第五次发掘定为E区（包括小屯村北朱坤十四亩地和何姓七亩地北半部）。E区出土的甲骨多为殷墟第一、二、五期的卜辞。此地处在洹水自西向东折而南流的转弯处，自发掘起迄今已有60年，至今还能在地表的耕土层中捡到甲骨片，究其原因，不应是科学发掘时的遗留，应是盗掘时所遗弃的碎片。此地经过几十年的耕作，这些甲骨碎片时而被翻出，时而被埋入土中，经过雨水的冲刷露于耕作面上，被踏寻者所拾捡到。目前，这一小块农田已辟为花圃。

在调查和选拓过程中，经检验原甲骨片，多数为龟甲碎片，少数为兽骨碎片。从这些甲骨的字体书风及辞例分析，应以殷墟一、二、五期的卜辞为主，卜辞内容也多见于著录。这批文字内容涉及到殷商时期的天象、祭祀、征伐等方面的内容，但有的内容似不多见于著录。今把这批零星材料整理出来，旨在为甲骨研究者提供一些零星材料，拾遗补阙，同时这对于甲骨文的缀合工作也是件有意义的事。

注　释

① 本文所列甲骨片，除标明为骨骨者，其余皆为龟甲。又，文中□者，为甲骨片有残存笔画而不能释读的字。

② 郭沫若：《殷墟卜辞通纂》，《郭沫若全集·考古编第二卷》，科学出版社，1983年。

③⑬ 于省吾：《甲骨文释林》，中华书局，1979年。

①⑥⑩⑪⑫⑭ 赵诚：《甲骨文简明辞典》，中华书局，1988年。

⑤⑦⑧⑨⑮ 陈梦家：《殷墟卜辞综述》，中华书局，1988年。

（原载《華夏考古》1997年第2期）

貼有這些小紙條的甲骨原先有六十六件，如今有些紙條脫落，只剩四十四件；而大部分的甲骨沒有任何編號。今天所有的編號，以墨汁直接寫於甲骨上，依來源、質材而將其編號分爲二類：一爲P0開頭，由P0.0005至P0.0163；一爲P2開頭，由P2.003至P2.039。P字爲購買品代號，P後之0代表龜版，2則代表骨版。核校原物後，質材的判定，筆者作了少數的修正。至於P0.0005及P2.003編號前的甲骨，筆者並不清楚其縱影。

現在拓片、照片（包括正、反兩面）的工作皆已完成，正在進行考釋工作。筆者揀選比較重要的片子，發表於本會。都是綴合版。

二、甲骨選釋

甲、P2.0010加P2.0014加P2.0022。（圖一）、（圖二）、（圖三）。（綴合圖一）。

本版爲骨版，購買前即斷爲三塊，購買後便編了三個號碼。經筆者綴合後成爲一版。正面未見兆序，背面未見鑽鑿。每段卜辭皆以刻劃之細線隔開。P2.0014重見於《寧》三、九四及《合集》四一〇二八（圖四），兩者皆爲摹本。胡厚宣先生於《戰後寧滬新獲甲骨集》序中云：

「此外數年以來，往還寧滬，於商肆藏家，三五偶見，兼收並畜，細大不捐，計其所得，亦二、三百片。於是編之爲卷三。」

胡先生的說明，應有助追溯此批甲骨部分來源。從左至右筆者將卜辭隸釋如下：

1.□□□□□貞：羽□□乞自報甲𠂤（衣或卒）至□……余一人亡𢦏（舊釋爲𡆥）吉。

2.癸未卜王曰貞：羽甲申二𣪘隹（？）乞自報甲𠂤（衣或卒）……余一人亡……。

3.癸未卜王□貞：翌甲申……乞自報甲𠂤至……余一人……。

4.癸…貞…乞…。

第3條卜辭行款有些混亂，可由1、2條卜辭文例釐清其文句。第三條卜辭即《寧》三、九四，胡厚宣先生於《古文字研究》第六輯〈重論“余一人”問題〉時有隸釋，其釋文抄錄如下：

「癸未卜，王□三𡈼，甲申□自上甲至□，余一人□□。

余一人亡禍。　　（寧三、九四）」

今因綴合完成，比照其他二條文例，修正其釋文如上。

本版卜辭的斷代，可由字體的風格、字形及「王曰貞」「余一人」等用語來斷定。就風格、字形而言，本版與《合集》二五四八一（圖五）最爲相似，比較兩版的「𠂤」（未）、「王」（王）、「亡」（亡）、「𠂤」（癸）諸字，便能很清楚的得知，這類風格的字體，並不常見，不容易找到可供比對的片子。兩版皆有刻劃的細線隔開卜辭。「王曰貞」這類例子集中在第二期及第三期（《合集》的斷代）的卜辭裡，如《合集》二二九六四；二二九九〇；二三一二一；二三三二二；二三四七二；二三八五九；二四一二〇；二四一二一；二四一二四；二四一二六；二四三四六；二四三五六；二四三九一；二四三九八；二四四〇二；二四四四八；二四四四九；二四四七一；二四五〇一；二四五〇二；二四五〇六；二四五四六；二四五五七；二四六八六；二四九六一；二五九六一；二四九八二；二六一九七；二九三七五；四〇九四一（摹本）。「余一人」之自稱詞，胡厚宣先生於《歷史研究》一九五七年第一期〈釋“余一人”〉、〈重論“余一人”問題〉二篇論文中討論的十分仔細。由甲骨文、金文一直參考到典籍資料，証明甲骨之中“余一人”爲殷王自稱。其演變過程是在第一期卜辭多用“一人”爲殷王自稱，第二期卜辭才用“余一人”。由以上研判本版卜辭爲第二期卜辭，《甲骨文合集》的斷代是正確的。在殷人的習慣裡既然「一人」用爲武丁時期殷王自稱，以此條件核對《尚書・盤庚》，可發現一件有趣的事情，今文尚書商書中出現君王自稱「予一人」者，〈湯誓〉篇中有一次，〈盤庚〉篇有六次[2]；「一人」用在君王自稱者，不見於今文尚書，只見於古文尚書〈太甲〉篇。當然古文尚書是有問題的書，其材料可暫置而不論。尚書書序云本篇作於盤庚時，屈萬里先生反對其說，而認爲「本篇蓋殷末人（甚至宋人）述古之作」[3]，筆者基本上也是不贊同書序之說，認爲金景芳先生在〈湯誓新解〉一文中，對湯誓的寫成時代有下面的見解相當可取：「當時（商代）已有文字，大事由史官記錄下來，是必然的事情。當時人留下原始材料，後人據以整理成篇，寫成誓的樣式。寫定成篇的時間，很可能是西周。」斟酌〈盤庚〉篇的殷王自稱及《尚書》的西周早、中期文獻，比對甲骨文資料，〈盤庚〉篇的寫成其時間上限可能在祖甲、祖庚之時，下限則在西周初。本篇並非要仔細討論〈盤庚〉的著成時代，僅對「余一人」對商書斷代提供一項參考標準。

除了「余一人」外，其他需要解釋的詞與字是「乞𣪘」與「𠂤」。首先討論「乞𣪘」，「乞」，甲骨字形作「𠂤」，于省吾釋爲「乞」後，學者皆無異意[4]。「𣪘」字，甲骨文大都作「𣪘」形，此字經長時間討論後，可以肯定其意義爲「祭名」，至於它應相當於後來那個字，仍有待討論[5]。「乞酒」一詞見於下面卜辭：

（一）　庚辰卜，尹貞：羽辛巳乞𣪘𡆥自上甲𠂤至于毓。亡𢦏（𡆥）。在……

（《合集》二二六四七）（二）

（二）　…尹…子乞𣪘…自上甲𠂤至…毓亡𢦏…十二月。

（《庫》一二三〇）（《合集》二二六五六）（二）

（三）　癸丑卜…貞：羽甲寅乞𣪘上甲…𠂤…

（《庫》一二〇五）（《合集》二二六五八）（二）

（四）　…戌乞𣪘…上甲…毓…

…羽…𠂤…亡𢦏…

（《合集》二二六五九）（二）

（五）　…𣪘…報甲𠂤…亡𢦏。

（《合集》二二六六四）（二）

（六）　甲寅…貞：羽…乞𣪘…歲其…亡𢦏。

…卜，即…王宅…歲亡…。

（《七P》一0七）（《合集》二五九四四）（二）

（七） 庚戌卜，王貞：羽辛亥乞酓彡祉自上甲𠂤至于多毓亡𢦏。在十一月。

（《鄴》一、四0、一0）

（《京》三二二五）（《合集》二二六四六）（二）

（八） 癸丑…貞：羽…乞酓彡…上甲…

（《卜》二三六）（《合集》二二六四九）（二）

（九） 庚戌卜，㞢貞：羽辛亥乞酓彡祉自報甲𠂤至于…毓…

（《存》一、一四八三）（《合集》二二六五七）（二）

（十） …旅…乞酓彡…唐𠂤…

（《合集》二二七五四）（二）

（十一） …乞酓彡…毓且乙𠂤…

（《明》一二九九）（《合集》二三一五九）（二）

（十二） 甲辰卜，㞢貞：乞酓彡𢦏彔眀。

（《粹》五0一）（《合集》二五九四二）（二）

（十三） 癸酉卜，㞢貞：羽甲戌乞酓𢀛自上甲𠂤口于多毓…七月。

（《通》XI二）（《合集》二二六五0）（二）

（十四） 癸未卜，口貞：羽甲申乞酓𢀛自上甲𠂤至于口毓亡…

（《合集》二二六五一）（二）

（十五） …尹貞…甲子乞酓𢀛自上甲𠂤至于毓…

（《合集》二二六五二）（《明》三0七）（二）

（十六） …旅…戌乞酓𢀛自上甲…告。十月。

（十七） 甲子…貞：羽…乞酓…于…𠂤…

（《遺》一一）（《合集》二五九三九）（二）

（十八） 癸酉卜，口貞：羽甲…乞酓𢀛于上甲其𠂤又ㄐ歲三宰貞：五宰。在七月。

（《合集》二五九四0）

（《粹》四三八）（《存》一、一四八五）（二）

（十九） 癸丑卜，王曰貞：羽甲寅乞酓𢀛自上甲𠂤至于毓。余一人亡𡆥。茲一品祀，在九月𠂤示癸𢦏。

（《金》一二四）（《英》一九二三）

（《合集》四一0二七）（二）

（二十） 癸亥…甲子乞酓眀自上甲𠂤至于多毓亡𡆥。三月。

（《粹》八五）（《合集》二二六五五）（二）

（二十一） …乞酓眀自報甲𠂤至于毓。亡𢦏…。

（《合集》二二六六三）（二）

（二十二） …旅…子乞（？）酓…

（《合集》二二五五八）（二）

（二十三） …歲于唐其又…其𠂤又…乞酓…

（《合集》二二七四三）（二）

（二十四） 庚辰卜…貞：乞酓…𠂤（？）…

（《合集》二五九四一）（二）

（二十五） 壬子卜，喜貞：乞酓羽…

（《文》五二四）（《合集》二五九四三）（二）

（二十六） 癸亥貞：乞酓…兄在…不用。

…眀乙丑其一酓兄…

（《南地》六0三）（三或四）

（二十七） 庚戌卜，即貞：羽辛亥乞酓彡旬自報甲𠂤至于多毓。亡𢦏。十月。

（《林》一、二一、七）（《合集》二二六四八）（二）

（二十八） 癸…貞…乞酓…自上甲…至于…亡…

（《合集》二二六六一）（二）

（二十九） 庚戌…貞…乞酓…報甲…多毓…𢦏。

（《合集》二二六六二）（二）

（三十） 癸丑卜，口貞：乞酓…大乙𠂤至多毓。亡𢦏。

庚申卜，即貞：羽辛酉乞酓眀旬自報甲𠂤至于多毓。亡𢦏。三月。

（《合集》四0九二二）（二）

（三十一） 庚辰卜，出貞：卅牛气酓。

（《合集》二二六00）（二）

分析上引三十一例，可歸納出下面一些要點：

（甲）三十一例中，除了例二十六屬於第三或四期（董先生斷代標準）外，其餘卜辭皆屬第二期。

（乙）依據常玉芝的分析，這些卜辭性質皆屬五種祭祀卜辭。貞人㞢

的這類卜辭，常玉芝歸於出組。不論許進雄或常玉芝都認爲第二期的五種祭祀都是五種祭祀卜辭發展定型前的初期。

（丙）「乞酓」一詞絕大多數出現在命辭紀日干支之後或“貞”字之後（即命辭之始）。

（丁）「乞酓」之後尚可接“祉”、“彡”、“𢀛”、“眀”等祭名（祭儀）。依島邦男的分析，“酓”祭在五種祭祀中除了不出現在𢦏祭外，其餘四種祭祀都包含了“酓”的祭儀。

「乞酓」于省吾於〈釋乞〉文中云：「“乞”字訓爲“乞求”」。柏案：“乞”訓爲“乞求”以此通讀上舉三十例，不易讀懂。此“乞”應是“其”或“幾”之義[6]。《古書虛字集釋》“迄”字條下云：

「“迄”，“幾”也。

一爲“將”字之義：

《易・井・彖辭》：“汔至，亦未繘井。”（“亦，尚也”。“繘，出也”。）

《易・未濟・彖辭》：“小狐汔濟。”（鄭、虞並注曰：“汔，幾也。”）

一爲“殆”字之義（“殆”是疑而有定之詞）：

《詩・民勞》：“民亦勞止（“亦”、“已”也。“止”、“矣”也。），汔可小康（箋曰：“汔”，幾也。按毛傳訓“汔”爲“危”，“危”亦“殆”也。疑而有定之詞也。）”」

乙、P2.0020加P2.0018（圖五）、（圖六）。（綴合圖二）。

本版爲骨版，購買前即斷爲二塊，入所後編了二個號碼。經綴合成爲一版，正面未見兆序，背面有鑿痕五。P2.0018反面有編號“簠一三二”，爲購買前之收藏者編號。是否爲王襄舊藏，乃有待將來核校相關資料才能確定[9]。P2.0018版甲骨又摹錄於《寧》三、一九0，今將卜辭隸釋如下：

1.貞：在且乙。六月。

2.戊寅卜，即貞：羽己卯（？）…。

3.貞：牝。六月。

4.…卜，即……兄己…

“在且乙”乃“在且乙宗”之省，卜辭云：

（一） …王比今秋（）…又在且乙宗。

（《合集》三三一0八）

（二） 在且乙宗。

（《合集》三四0五0）（《合集》三四0五一）

（三） 戊辰貞：其生于妣庚妣丙。在且乙宗卜。

（《合集》三四0八二）

有時又作“于且乙宗”（《合集》三二三六0）。

“兄己”之名就《合集》的材料而言，集中於“一期附”“二期”及“三期”[10]；依據董先生、島邦男的斷代標準，“兄己”出現在第二、三、四期卜辭[11]；依據陳夢家的斷代標準“兄己”出現在第一、二、三期卜辭[12]。二期之“兄己”，陳夢家、周鴻翔、金祥恒等皆認爲他是武丁之子孝己[13]，即第二期殷王祖庚、祖甲之兄。廩辛、康丁時期又稱爲“小王父己”“父己”[14]。島邦男、金先生又云在武乙、文丁、帝乙、帝辛時期又稱“祖己”[15]。另外在第三期卜辭中有“中己”的稱謂，島邦男認爲他就是第三期稱爲“父己”、第四期稱爲“祖己”的另一稱名。其理由爲：

「中己這稱謂沒有在第三期以後被使用的例子，如《南明》六0四：“戊子卜其又歲于中己王”中的中己便是以王賓之儀受祀的先王的異稱。而己名之王只有雍己與祖己，所以當是此兩王中的一個。第三期康丁有兄己，因此在己日的祭祀是雍己第一、父己（祖己）第二、兄己第三。父己（祖己）在雍己與兄己間受祀，所以稱父己爲中己了。且祖己於中位的己日受祀的情形只存在於第三期，所以這個稱謂到了後期當然便不被使用了[16]。」

柏案：島邦男的說法是正確的，卜辭云：

（四） 己未卜，中己歲兄己歲…

（《南地》二二九六）

“中己”與“兄己”同時出現在一條卜辭中。可見此“兄己”與“中己”並非同一人。三期“兄己”另有其人與二期之“兄己”乃同名而已。三期卜辭有“三兄”之稱（《合集》二七六三六），兄字輩也有“兄丙”“兄庚”“兄辛”等[17]，“兄己”當爲多兄之一（當然這必須是在《合集》斷代正確的前題之下）。

乙例第二條的「」字，字形殘缺，筆者懷疑可能是「」（殽）字之殘。卜辭云：

（五） 又。王受又。

（《合集》二六九五六）

（六） 重羊。

（《合集》三0三一五）

「」字，李孝定先生釋云：

「《說文》：“，繇擊也。从殳，豆聲。古文殽如此。”殽，段注改作投。契文正从殳、从豆。其意疑與殽同…遂訓擊耳。辭云：“重”，屈云：“蓋用牲之名”或是。」

「（？）…」應是“擊殺牲用祭先人”之意。

另外第四條卜辭的“”字，早期學者釋爲“升”[18]，近世學者有釋爲“”（久）、“勺”[19]者。陳邦福認爲其爲“祭名”；詹鄞鑫認爲其爲用牲法[20]。而島邦男認爲：「“”是個無實質意義的用語，下舉的用例可以爲證：

粹217 卜戊戌又歲大戊廿牢
甲903 貞其又歲于大戊三牢用

佚78 又伐十五歲小上甲
甲732 又伐十五歲十上甲

乙5306 甲申伐自上甲
林2.311 貞又伐自上甲

所舉三例，並列二辭皆同一內容，而一方用，另一方則不用，之

《經傳釋詞》云：

「，“其”也。」

筆者認爲：這些卜辭所透露殷王占卜的目的是藉著這些祭祀先王的祭禮，得到“亡”“亡”。卜辭又云：

（三十二） 戊寅卜，爭貞：乞令…伐受又。

（《合集》六二九一正）

（三十三） 戊子卜，貞：乞步伐方受又。

（《合集》六二九二）

（三十四） 辛卯卜，貞：乞乎河，不，正。

辛…貞：河五沉五牛卯五牛俎。

（《合集》一四五三六正）

（三十五） 己未卜，王貞：乞于且乙，王吉卜。

（《合集》二二九一三）

這四個例中“乞”的意義與前例相同，與卜辭“其”的功能有部分相似，“疑而有定”是相當好的訓釋。

至於“”字，過去學者皆釋“衣”[7]，但李學勤、裘錫圭釋爲“卒”[8]，他們都認爲大部分含有過去釋爲“衣”字的殷墟卜辭，都包括）“例”字通讀（本版文例亦包括其中）。裘先生並將此見解用來解釋西周某些金文，但筆者翻閱《金文編》發現一個現象，西周時期的金文“衣”字字形幾乎都寫爲“”，甚至從衣字偏旁的許多字也不例外。“衣”與“卒”是經常可見之字形，若無區分，則令人費解。

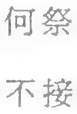
"𠂤"若釋爲"勺"從先秦古文字而言，是有若干線索可尋。小篆勺字作"  "，楚簡作"  "（望山二號墓竹簡）"  "（天星觀竹簡）24，我方鼎銘文作""（爲"祀"字偏旁），其相關句子是：「二女」，"祠"在此爲祭名。25《爾雅・釋天》、《說文》皆云：「祠，夏祭也。」《禮記・王制》云：「天子諸侯之祭，春曰祠，夏曰禘，秋曰嘗，冬曰烝。」對於前者釋爲夏祭，後者釋爲春祭，鄭注云：「此蓋夏殷之祭名，周則改之，春曰祠，夏曰礿。」《周禮・大宗伯》云：「以祠春享先王；以禴夏享先王；以嘗秋享先王；以烝冬享先王。」但在同書〈大司馬〉云：「中夏教茇舍，如振旅之陳…遂以苗田如蒐之法，車弊獻禽以享礿。」鄭注：「礿，宗廟之夏祭也。」在同樣釋爲夏祭之名，《周禮》有"礿""禴"不同的用字，《詩經・天保》：「禴祠烝嘗于公先王」，十三經注疏本有注云：「禴本又作礿，餘若反。」除上所言之外，「禴」祭另有解釋，《易・萃》：「六二引吉无咎孚乃利用禴。」王注：「（禴）四時祭之省者也。」疏云：「四時之祭最薄者也。」〈既濟〉：「九五東鄰殺牛不如西鄰之禴祭…象曰：東鄰殺牛不如鄰之時也。」〈萃〉干注：「非時而祭曰禴」。由《易》〈萃〉〈既濟〉看來「禴祭」並非大祭，與《周禮》所言「禴祭」之隆重有若干距離，卜辭裡有""字，諸家皆釋爲「禽」26，卜辭云：

（八） …戌卜，王貞：王其中丁  禽亡  。

（《合集》二二八五五）

（九） …卜，旅…大乙…禽…

仍嫌不足。

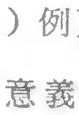
至於詹鄞鑫釋「  」爲「久」，即後世之"灸"爲用牲之法。又言"久"的甲骨文爲炮烙用的"銅格"的形象，考古的証據是曾侯乙墓中出土的"漏鐘"，側面而視頗似「  」形，象「」字。柏案：詹先生所言「  」在卜辭中爲用牲之法，可能是正確的。我們檢視"  "後接"祭名（祭儀）"或"  "後接"祖先名"接"祭名"的卜辭，可以發現一些有趣的現象："（王）"後接"伐"或"歲"這類形式的卜辭時，在"伐"與"歲"前或後可加"  "，而接其他任何祭名（如：祭、  、  、  、  、  、  、禽、等之前或後大都不接""29，這是否點出"  "此祭儀與"伐""歲"的關係？卜辭云：

（十三） 庚午貞：其人（  ）自大乙。

弜人。 （《南地》四三六0）

（十四） 戊辰卜，爭貞：羌自妣庚。

貞：  羌自高妣己。 （《合集》四三八正）

二例相互比較可知："  "這種用牲（人牲）之法與"  "是相類的，"  "常與"伐""歲"等用牲之法一起出現，因此，知道島氏認爲「"  "不是特定的祭儀名稱，只是祭祀上的一般用語」是不對的。又云：「 之有無，對卜辭內容並無實質上的影響。」在（十三）例更是說不通。因爲（十三）例中" "字爲動詞，缺少它，卜辭意義便不清楚。詹鄞鑫釋""爲"久"，字形有若干差距，"，"的有無，有時在字形區分上產生相當大的作用，如戰國文字有無，對卜辭內容並無實質上的影響，所以不是特定的祭儀名稱，只是祭祀上的一般用語。」21

柏案："  "字，早期學者釋爲"升"是有問題的。

卜辭云：

（七） 其  𣪊父甲于  。大吉。

（《合集》二六九七六）

"  "與"  "同在一例出現，顯然地不是同一字。""從字形演變之線索而言應是"升"字。秦公簋蓋銘文云：「西一斗（  ）七（升）大半（升）」（蓋）；器刻銘文云：「西元器一  （斗）七  」（簋）；友毀銘文云：「  既拜稽首（升）于厥文  考」、蔡侯鼎銘文"  "隸定作"  "。22甲文「  」其字形與秦公簋、友簋「  」字相較，其沿用之迹十分清楚。卜辭中"升"前加祖先名的例子常見，如："父甲升"（《合集》三0三五七）、"且丁升"（《合集》三0三五一）、"妣庚升"（《合集》二五0五六）等，由卜辭"翊日己酉父庚升其即宗"（《合集》三0三三0）看來"升"是宗廟中內建築物之名，23而由卜辭"其用在父甲升門又正""父甲宗門又正"（《南地》二三三四）、"弜鄉于（？）升又正"（《南地》二二七六）看來"升"尚有"門"與""這類建築物。令人奇怪的是"升"這類建築幾乎不出現在第一期卜辭，這是否意味著這類建物，由第二期才開始營構而且逐漸增建至第五期，是故卜辭才有"庚戌卜啼（疑即"帚"字）庚（祐）""（《合集》三二0三0）的占卜。

（《合集》二二七三0）

（十） 戊辰卜，旅貞：王大丁禽  亡尤。在十一月。

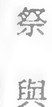
（《合集》二二七六二）

（十一） 乙卯卜，出貞：王禽不冓雨。

（《合集》二四八八三）

（十二） 戊戌卜，口貞：王  中丁禽亡  。十月。

（《合集》二七一七八）

"禽"祭幾乎都出現在第二期五種祭祀中27。其舉行的月分一在十月；一在十一月。自古以來討論殷曆歲首者，約略有下諸說：一爲"建丑"之月爲歲首；一爲"建子"之月爲歲首；一爲殷曆歲首約當夏曆十月，比照後世，約合所謂"建亥"爲歲首。28若是以"建丑"爲正月，十、十一月在冬季；若是以"建子"爲正月，十、十一月也在冬季；若是以夏曆十月爲歲首，此十、十一月是春季。但是"禽祭"卜辭，記載月分者不多，很難作爲有用的証據，以証明"禴祭"與季節的關係。總結以上分析，卜辭有"  ""禽"二種祭名，從辭例看來是性質不同的祭儀，假如釋"  "爲"勺"可以成立，在商代"勺"與"禽"並非如周代文獻所言是一祭之二名。"  "祭在卜辭的記載，其後標明的月分有「六月」（《合集》三一三）、「十二月」（《合集》三七七）、「十三月」（《合集》一四八二二）、「一月」（《合集》二五九八六）、「十一月」（《合集》六六六七）等，似乎與季節沒發生任何關係，也就是與周代所謂之"禴祭"的性質並不相符。釋「  」爲「勺」雖字形看起來頗有可能，但証據

「  」與「  」便可看出。筆者認釋「  」爲「久」需要更強的証據。

註解

1 這批甲骨的來源，乃由筆者訪問石璋如老師及參閱原始資料得知。甲骨分貯於兩個舊木盒，木盒邊貼紙，有下列記載：

「卅六年十月高去尋先生由平運京購品未拓共有大小壹佰貳拾陸塊」

「字甲卅二塊P0.131～0.113　P2.3～P2.39　卅七年八月李光宇先生交來」

2 這項統計數字又見於《今文尚書語言研究》（錢宗武）二三二頁。西周金文中  ，毛公鼎「余一人」「我一人」互用，盂鼎「我一人」「余乃辟一人」互用。尚書中“余一人”等作“予一人”的問題，同書240頁41頁，錢先生有推測。

3 見《尚書釋義》〈盤庚〉篇之說明。

4 見《甲骨文字釋林》〈釋乞〉。

5 「」字字形字義的分析，可參看《甲骨文字詁林》第三冊二七〇二至二七〇七頁。

6 于說見《甲骨文字釋林》。

7 見《集釋》第八冊二七二一至二七二四頁。

8 見《中原文物》（殷墟甲文發現九十周年國際學術討論會專輯）

一九九〇年三期〈釋殷墟卜辭中的“卒”和“衣”〉

9 依據《史語所集刊》六十七本第四分胡厚宣〈大陸現藏之甲骨文字〉記載：王襄所藏之甲骨今歸天津市歷史博物館共一一六六片。其甲骨照片五九八片藏福建省師範大學歷史系。甲骨拓本藏中國社會科學院歷史研究所，其來源：1.選拓天津歷史博物館七十五片；2.簠室舊藏甲骨拓本一0片；3.王襄捐贈簠室殷契拓本一0七一片。天津歷史博物館藏王襄簠室殷契拓本七二0片；未拓全或失拓之拓片七十五片。北京大學圖書館所藏甲骨拓本十九片〈標題爲《半丁藏龜》蝶裝一冊〉。文物局文物博物館研究所藏王襄甲骨拓片三十四片。

10 屬於“一期附”的片子：一九七七五、一九七七六、二二0七五、二二一九六、二二二七五、二二二七六、二二三一二；屬於第二期的片子：二二六0九、二二八二0、二二八八0、二三0一0、二三一二0、二三一四一、二三一八七、二三二四一、二三二四五、二三三五四、二三四六七、二三四六八、二三四七0、二三四七一、二三四七二、二三四七三～二三四七九；屬於第三期的片子：二七六一一～二七六一七。

11 見島邦男《殷墟卜辭研究》（中譯本）四十、四十一頁。

12 見《綜述》一五三、四五六頁。

13 陳說見《綜述》四五六頁；周說見《商殷帝王本紀》；金說見《金祥恒先生全集》第一冊〈甲骨卜辭中之小王解〉。

14 見于省吾《殷契駢枝》三編十二頁，《甲骨文字釋林》四四～四五。金祥恒《金祥恒先生全集》第一冊〈甲骨卜辭中之小王解〉及周鴻翔《商紂帝王本紀》一四三頁。島邦男《殷墟卜辭研究》（中譯本）八十七頁。

15 同註十四。

16 見《殷墟卜辭研究》（中譯本）八十七頁。

17 “兄丙”之稱見《合集》二七六0九；“兄庚”之稱見《合集》二七六一五；“兄辛”之稱見《合集》二七六二二。

18 釋爲“升”者，有柯昌濟、陳邦福、李孝定諸位學者，其說見《集釋》十四冊四一0九～四一一一頁。

19 釋“久”者，見《中國語文》一九八五年五期詹鄞鑫〈釋久〉；釋爲“勺”，見於吳匡〈釋勺〉（稿本）。

20 見註十八，註十九。

21 見《殷墟卜辭研究》中譯本258～259頁。

22 秦公𣪘銘及蔡侯申𣪘銘見《商周青銅器銘文選》（四）六一0頁及三九八頁；友𣪘銘見《三代》卷八頁五十一。

23 《綜述》四七0頁，陳夢家認爲「  」是與宗廟同類的「祭祀所在的建築物」。

24 見滕壬生《楚系簡帛文字編》。

25 見《銘文選》三冊八六頁。

26 見《甲骨文字詁林》第一冊七三三～七三六頁。

27 見《研究》二五六，二九八頁。

28 建丑說見《史記・曆書》：「夏正以正，殷正以十二月，周正以十一月。」建子說見《史記・曆書》《索隱》：「唯黃帝及殷周魯並建子爲正。」約合建亥說見《考古學報》一九九0年第一期馮時〈殷曆歲首研究〉。

29 可參考《類纂》七六八頁“王賓”項。“”有少數出現這些祭名之後者，如：

其其。　（《合集》三0四四三）

引用書目及簡稱

1.胡厚宣：《戰後寧滬新獲甲骨集》，北平：來薰閣書店，1951年。　寧

2.胡厚宣等：《甲骨文合集》，北平：中華書局，1978～1982年。　合集

3.方法斂：《庫方二氏藏甲骨卜辭》，上海：商務印書館，1935年。　庫

4.方法斂：《甲骨卜辭七集》，1938年。　七

5.胡厚宣：《戰後京津新獲甲骨集》，上海：群聯出版社，1954年。　京

6.黃濬：《鄴中片羽初集》，藝文印書館再版，1972年。　鄴一

7.容庚：《殷契卜辭》，藝文印書館翻印，1970年。　卜

8.胡厚宣：《甲骨續存》，上海：群聯出版社，1955年。　存

9.明義士：《殷虛卜辭》，1917年。　明



P2.0010

圖一



P2.0014

圖二



P2.0022

圖 三



《寧》三、九四

圖四

10.郭沫若：《殷契粹編》，日本文求堂，1937年。 粹

11.郭沫若：《卜辭通纂》，日本文求堂，1933年。 通

12.胡厚宣：《甲骨六錄》，齊魯大學國學研究所，1945年。 六

13.金祖同：《殷契遺珠》，上海：中法出版委員會，1939年。 遺

14.方法歛：《金璋所藏甲骨文字》，1939年。 金

15.李學勤等：《英國所藏甲骨集》，中華書局，1985年。 英

16.孫海波：《甲骨文錄》，河南通志館，1937年。 文

17.《小屯南地甲骨》，中華書局，1980年。 南地

18.林泰輔：《龜甲獸骨文字》，1912年。 林

19.李孝定：《甲骨文字集釋》，歷史語言研究所，1974年三版。 集釋

20.陳夢家：《殷虛卜辭綜述》，科學出版社，1956年。 綜述

21.《商周青銅器銘文選》，文物出版社，1990年。 銘文選

22.島邦男：《殷墟卜辭研究》（中譯本），鼎文書局，1970年。 研究

23.姚孝遂：《殷墟甲骨刻辭類纂》，中華書局，1989年。 類纂

歷史語言研究所購藏甲骨選釋（二）

中研院史語所　鍾柏生

前言

歷史語言研究所（後簡稱史語所）收藏著一批由民國三十六年至三十七年，傅斯年先生購買，高去尋、李光宇兩位先生運送至南京的甲骨[1]。總數約一九九片，有字的爲一九四片。這批古物在購買前出土流傳的情形，因爲前輩先生的去逝，無法得知。只是在核對重片時，發現若干片子著錄在《戰後寧滬所獲甲骨集》卷三中，此書爲胡厚宣先生摹寫本。先生於序言云：

> 「此外數年以來，往還寧滬，於商肆藏家，三五偶見兼收並畜，細大不捐，計其所得，亦二三百片。於是編之爲卷三。」

由此可略知這批甲骨部分來源。筆者在所的資歷不深，加上機緣不巧，所藏甲骨沒有徹底清理，陰錯陽差耽擱了這批材料的研究與發表。

這批材料購進所後，經過初步的編號和整理，在此工作之前，有部分甲骨上有更早的編號—（簠某），這類編號的甲骨原先有六十六件，如今標貼有些脫落只剩四十四件；大部分甲骨最早無任何編號。今天所看到的編號，是直接墨書於甲骨之上，依其來源、質材不同，將其編號分爲二類：一爲P.0開頭，由P.0.0005至P.0.0163；一爲P.2開頭，由P.2.003至P.2.039。P字代表購買品，P字後的0代表龜版；2則是代表骨版。核校原物後，其材料的判定，筆者作了若干修正。至於P.0.0005及P.2.003之前甲骨的蹤影，筆者並不清楚。號碼重復者，釋文中自有說明。

本文體例，圖版部分有拓片及照相本，背面有文字者才附拓本及照相本。釋文及說明部分，先標明有字甲骨編號，再列原始編號，質材、斷代、釋文及說明（包括重片）。最後是綴合圖版。

以下所選錄的二十七版，是來自編號P.0.0005至P.0.0163，以字數較多，或有可取的內容爲原則，如：例三卜辭出現「侯豹」之名；例四爲狩獵卜辭。卜辭雖殘缺不全，但知獵獲物相當豐富；例五爲骨面刻辭，可與《合集》三一三五版綴合；例七、例十出現了「牧子𠂤」與「𠂤」之名；例十三爲先寫後刻之例；例十四爲「王田于𠂤」之田獵卜辭；例十五爲

[1]這批甲骨的來源，乃由筆者訪問石璋如老師及參閱資料得知。這批甲骨分貯於兩個木盒，本盒邊貼紙有下列記載，其中之一：
「卅六年十月高去尋先生由平運京購品未拓共有大小壹佰貳拾陸塊」。
其中之二：
「字甲卅二塊由P2.3～P2.39　卅七年八月李光宇先生交來」。



P2.0020

圖五



P2.0018

圖 六

綴合圖一



綴合圖二

（原載《第三屆國際中國古文字學研討會論文集》，
香港中文大學中國文化研究所中國語言及文學系，1997 年）

歷史語言研究所購藏甲骨選釋（二）

一　（P.0.0009　龜版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）戊子卜…帚…𠂤…　二　（塗朱）

（2）…妨子（？）…囚王…屮…帚…𠂤…　二　（塗朱）

柏案：「戊」「子」「屮」皆爲殘文。「囚」字，諸家考釋不一：1.丁山、董作賓、胡厚宣、李孝定釋爲「死」；2.商承祚、葉玉森釋爲「囚」；3.羅振玉釋「囷」爲因，無說。魯實先釋爲「因」，推其義爲「親」；4.孫詒讓釋爲「㚔」；5.唐蘭釋爲「伾」；6.屈萬里釋爲「困」[2]；7.張政烺釋「囷」爲「蘊」，即是「埋」，引伸出「死的意思」[3]；《類纂》隸釋爲「因」，認爲與「殪」、「暗」同義[1]。以諸家考釋解讀卜辭，以《類纂》之釋較爲合適。本版二例文句不全，難以瞭解卜問之事。

乙、反面

鑽鑿四，一完整，其餘皆殘。骨版中鑽一孔。有文字：

（1）貞…𠂤（？）…

（2）王口曰……屮𢀛　…

二　（P.0.0011　骨版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）癸巳卜，亘貞：勿𦎫…

（2）　小告

柏案：例（1）「勿𦎫」之義，眾說紛紜，抄錄如下：

1.孫詒讓釋爲「苜」。引《說文》苜部：「苜，目不正也。从𠂉目，讀若末。」[5]

2.羅振玉釋爲「羊」[6]。

3.郭沫若云：「案此當是眔，若瞿之古文。象鷹瞵鴞視之形。此二辭以“勿𦎫彭河”及“乎言彭河”爲對貞。細審其意，蓋“𦎫”與“言”均當爲虛辭，“眔”用爲“遽”，“言”讀爲“爰”也。」[7]

4.金祖同、李孝定、饒宗頤贊同羅氏所釋之形，申其義爲「祥」，「勿羊」即「勿祥」。[8]

[2]以上諸說見《集釋》。

[3]見《古文字研究》第十二輯〈釋囚蘊〉。

[1]見《類纂》三十五頁。

[5]見《契文舉例》下九葉下。

[6]見《殷虛書契考釋》中，二十七頁（增訂本）。

[7]見《殷契粹編》考釋十二頁。

10.《詁林》的按語：「“𦎫”多與否定詞連言，是一種加強的肯定語氣…至於其字形的演變，則尚有待於進之探索。」[14]

柏案：從目前學者的探索看來，此字在卜辭中語法上的位置是相當清楚，其字形及其意義的確定，是否能不能與後來類似的文字（功用），取得演變上的聯繫都有待將來進一步研究。

乙、反面

鑽鑿三，皆殘。未見文字。

三　（P.0.0012　骨版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）…口受…

（2）…曰…豹（？）…　二

例（2）可以參考的辭例：

（a）貞：王曰：侯豹（？）女史…　（《合集》三二九七正）

（b）…曰：侯豹（？）女史受…　（《合集》三二九八）

乙、反面

鑽鑿二，皆殘。未見文字。

四　（P.0.0014　骨版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）…㞢（？）…𠂤…二百九…　（子組朱）

乙、反面

鑽鑿二，皆殘。未見文字。

五　（P.0.0015　骨版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）辛酉子…

此爲骨面刻辭，“子口”爲人名，其例如：

（a）…子𢀛𢀛𠂤三牛（？）…　（《合集》三一三九）

（b）壬戌子𢀛…　（《合集》三一五二）

乙、反面

未見鑽鑿及文字。

丙、綴合

本版可與《合集》三一三五版綴合，見綴合圖版1。綴合後釋文：

「辛酉子𢀛彳…」

六　（P.0.0019　龜版　五期）

釋文及說明：

[14]見《詁林》第一冊六〇三頁。

「宅某」先王少見的文例；例十六吐露了「方」興亂的消息；例二十爲「彡祭且丁奭妣己」的卜辭；例二十二是相當令人惋惜的殘缺卜辭；「𠂤王臣」的目的不明；例二十三「𠂤伯」貞人中罕見；例二十四爲「王𢀛報乙」的卜辭；例二十五「于大𡆥𠂤夷」此類卜辭少見；例二十七則是在地占卜是否舉行𠂤祭祀的記錄；雖然殘片不少，但從上面所介紹的例子，多多少少可看出這批甲骨的價值。

5.張秉權認爲“𦎫”同《楚辭》“羌內恕己以量人兮”之“羌”。王逸注“羌，猶乃也。”《廣韻》：“羌，發端語也。”在卜辭中“𦎫”與“言”又有通用之例，其爲沒有意義的語詞。[9]

6.連劭名釋此字爲“苜”（同孫詒讓說）。分析其字在卜辭語法中的位置，言其「用法與否世做虛字用的“蔑”相同。“末”與“蔑”古音也可相通。經典中末、蔑二字經常混用。」又云：「甲骨刻辭中副詞性否定詞有“不、弗、𢀛、𠂤、勿、母”等，現在可以補充說：“甲骨文中的“苜”“𠂤”與上述各詞性質相同，應當歸入同一詞類。」[10]

7.張政烺以爲“勿𦎫”二字在動詞前，明顯是個副詞…郭老以“均當爲虛詞”解之，義不可通。張氏以爲“𦎫”之字當從孫詒讓釋爲“苜”，又云：「苜和蔑讀音相同，義亦相近。卜辭中的苜字可讀爲蔑…用否定詞“勿”或“不”擺在苜前，否定的否定而產生積極的意思。…蔑有輕易、怠慢之義，勿苜就會有重視、尊敬、嚴肅對待之意。蔑有細心、拭滅之義，勿苜就會有不要減少，不要取消，保證質量之意。」[11]

8.湯余惠認爲「𦎫」（《合集》一八二九七）从二立目相背，古文字立目即臣字，隸寫當作“𦎫”。此字及由𠂤、𩠐兩部分組成，《說文繫傳》：“𩠐、乖也。从二臣相違、讀若誑。”𦎫很可能是从𠂤、𩠐會意，兼從𠂤聲的一個字。所以卜辭中的𦎫應讀爲“乖”，“勿𦎫”猶言“勿違”。[12]

9管燮初釋“𦎫”字字形從孫詒讓之說。分析苜字在卜辭一二〇例中可分爲八類；它們是a.“苜日”連用，用作動詞謂語的主要成分。b.“苜”單獨用作動詞謂語。c.“苜”位於謂語的主要動詞之前，作修飾語。d.“不”與“苜”連用，位於謂語的主要動詞之前修飾語。e.“勿”與“苜”連用，位於謂語主要動詞之前，作修飾語。f.“勿”和“苜”連用，在謂語中用作修飾語，中心語省略。g.“亡”與“苜”連用，位於謂語主要動詞之前，用作修飾語。h.“弗”與“苜”連用，位於謂語主要動詞之前，用作修飾語。“勿苜”“不苜”“亡苜”“弗苜”是兩個否定副詞構成的並列詞組。“否定加否定”反映了殷商語法中的一種獨特方式。[13]

[8]見《殷虛卜辭講話》十八～二十頁；《集釋》第四冊一三一九～一三二〇頁；《巴黎所見甲骨錄》〈附釋𦎫〉。

[9]見《丙》上二輯九八版考釋。

[10]見《北京大學學報》一九八一年六期（甲骨文“苜、𠂤”及相關的問題）。

[11]見《古文字研究》第十期〈殷契苜字說〉。

[12]見《考古與文物》一九九二年一期〈卜辭“勿𦎫”釋義〉。

[13]見《中國語文研究》第十期〈甲骨文苜字的用法分析〉。

（e）乙未卜：今日王獸  ，禽。允隻虎（？）二，兕二，鹿廿一，豕二，鳥一百廿七，虎二，𤰔廿三，雉廿七。十一月。

（《合集》一〇一九七）

（f）…乎𠂤光芻…　（《合集》一三八〇）

（g）丙寅卜，王貞：侯光若…𢀛東𠂤…侯光…六月。

（《合集》二〇〇五七）

（h）丁未卜，貞：令戍、光。𠂤隻羌芻五十。

（《合集》二二〇四三）

（i）王其比望𠂤冊。光及伐望。王弗每。又𢦏。大吉。

（《合集》二八〇八九正）

例（g）及（h）《合集》斷代歸於“一期附”，我們暫訂這些都是一期的片子。研讀上舉諸例，可以看出“光”是武丁重要人物，他負責“芻”的任務，亦貢“芻”信殷王朝。有時貢羌給殷王朝作爲人牲。殷王也巡行至光之領地，捕獵相當多的動物。排除異人同名的考慮，（g）例告訴我們“光”在武丁時曾任“侯爵”。第三期中“光”受殷王命“伐望”，彼此君臣關係十分明顯。因此二十五版卜辭可能是“光”伐羌後以羌俘及戰利品回殷朝廷留下來的記錄。

乙、反面

鑽鑿一。文字皆殘。

（1）…（？）…帝…（？）　（塗墨）

（2）……帝（？）…　（塗墨）

九　（P.0.0036　龜版　五期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）癸卯貞：且甲丁  牢…

（2）□。

（3）…卜，貞…丁其  用

（4）…貞…丁…牢…

乙、反面

鑽鑿五，皆殘。無文字。

十　（P.0.0049　龜版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）…貞……步…方…

（2）貞：乎射。　一

柏案：“  ”是武丁時期重要人物，其從事的工作多而雜，此地不詳論。令人注意的是“  ”在武丁時期，若連其官名及其他名銜合稱有“子”（《合集》三三五）、“小臣”（《合集》五五七一反）等

甲、正面

（1）癸丑卜，貞：王旬亡。　三

（2）癸丑卜，貞：王旬亡。　三

（3）癸巳卜，貞：王旬亡。　三

（4）癸丑卜，貞：王旬亡。

（5）癸丑卜，貞：王旬亡。　三

（6）癸巳卜，貞：王旬亡。

本版字跡細小，加上土銹，拓本模糊不清，但細看照片文字依稀可辨。

本版讀法，由內而外，由下而上。

乙、反面

．鑽鑿六組，三組完整，三組殘損。未見其他文字。

七　（P.0.0025　骨版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）…岳（）…

柏案：其參考文例：

（a）貞：岳年。　（《合集》一〇〇七一）

（b）勿于岳。　（《合集》一〇〇七九）

（2）…牧（？）子…

柏案：「牧」字字殘，暫時隸定如此。「子」與「  」連用的例子不多，如：

（c）貞：翌…子其…  子十…羌十牢…　（《合集》三三五）

乙、反面

未見鑽鑿及文字。

八　（P.0.0029　龜版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）…□甲（或七）…癸（？）酉光…羌係…　（塗朱）

柏案：可供例（1）參考的文例如：

（a）…羌。王□…𠂤二日癸酉…十羌係…十兩（）𠂤…

（《合集》一〇九七）

“光”爲人名，出現在卜辭一、三期。例如：

（b）甲辰卜，  貞：今三月光乎來。王固曰：其乎來。乞至隹乙。旬𠂤二日乙卯，允𠂤來自光，以羌芻五十。

（《合集》九四正）

（c）貞：光隻羌。　（《合集》一八二）

（d）甲午卜，貞：光其𠂤  。二月。　（《合集》六五六六正）

稱謂，這意味是一人有不同稱謂或三種稱謂代表三個不同的人，這都值得將來仔細推究。

乙、反面

鑽鑿二，皆殘。未見文字。

十一　（P.0.0066　龜版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）…卯卜，  貞：𠂤于且乙。

（2）癸…（？）…（？）…

乙、反面

鑽鑿二，皆殘。見殘字一：

（1）  （？）…

十二　（P.0.0070　龜版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）丙辰卜，貞：𠂤于丁牢。　（塗墨）

乙、反面

鑽鑿一，殘。未見文字。

十三　（P.0.0092　骨版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）…若…　（塗朱）

柏案：“”字中“”仍見殘留墨跡，其他筆劃已刻並塗朱。此爲部分甲骨文字“先寫後刻”之証。

乙、反面

不見鑽鑿及文字。

十四　（P.0.0131　龜版　二期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）乙亥…旅貞：王其田于，亡。

（2）…田于…。

乙、反面

未見鑽鑿及文字。

十五　（P.0.0132　龜版　二期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）甲戌卜，尹貞：王自報甲至于…乙。亡尤。

（2）…尹…其田…在…

甲、正面

（1）貞：于大宁𠂤 夷。　　（塗墨）

柏案：摹本見於《寧》三、七七。可供參考的文例爲：

（a）貞：于大宁𠂤 夷。　　（《合集》八三〇）

張玉金釋“宁”爲“宁”，“丂”爲其聲符。“宁”如同“寢”，是人居住的房子[15]。

乙、反面

鑽鑿四，皆殘。未見文字。

二十六　（P.0.0154　龜版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）貞：弗其古王𠂤…。

柏案：摹本見於《寧》三、八八。

乙、反面

鑽鑿六，皆殘。未見文字。

二十七　（P.0.0160　龜版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）貞：勿酓𢦏。九月。在𠂤(鮫)。

柏案：類似的文例見於：

（a）貞：勿酓𢦏。九月。在𠂤(鮫)。　（《合集》八一〇五正）

（b）…𠂤…　（《合集》八一〇五反）

筆者懷疑本版與《合集》八一〇五不是一版之折便是成套卜辭之一部分。

乙、反面

鑽鑿三，皆殘。有字一：

（1）…𠂤(鮫)…

[15]見《古漢語研究》一九九六年第二期〈論甲骨金文中的“寢”字及相關問題〉。

（2）…三月。

乙、反面

鑽鑿一，殘。未見文字。

二十一　（P.0.0141　龜版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）乙卯卜，貞：𠂤于宰。三月。　一

（2）貞：勿。　一

柏案：「𠂤于」下省去先祖名。

乙、反面

鑽鑿二，皆殘。未見文字。

二十二　（P.0.0144　龜版　一期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）…侑（？）冊土（？）…𠂤王臣…

（2）…𠂤…冊…

柏案：本版摹本見於《寧》三、七。

乙、反面

未見鑽鑿及文字。

二十三　（P.0.0147　龜版　一期？）

釋文及說明：

甲、正面

（1）庚申卜，𠂤貞：今夕亡𡆥。　一

（2）…夕…

柏案：“𠂤”的貞人，在卜辭中罕見。摹本見於《寧》三、二三四。但貞人之名摹寫失眞且缺“夕”字。

乙、反面

鑽鑿三，一完整二殘缺。未見文字。

二十四　（P.0.0151　龜版　二期）

釋文及說明：

甲、正面

（1）乙丑卜，尹貞：王宜報乙𠂤亡尤。

（2）……

柏案：摹本見《寧》三、一八九。例（2）皆殘字。

乙、反面

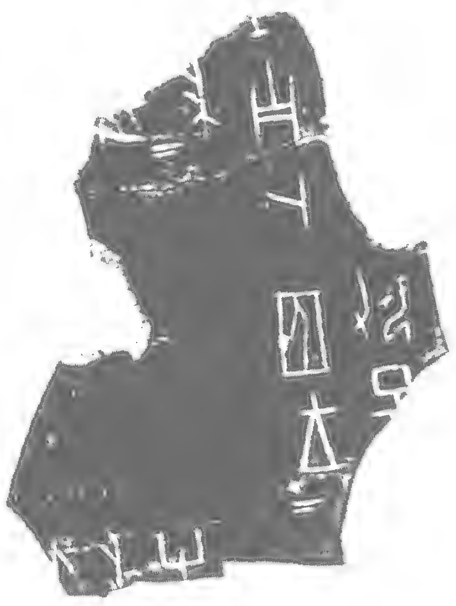
鑽鑿二，皆殘。未見文字。

二十五　（P.0.0152　龜版　一期）

釋文及說明：

引用書目及其簡稱

1.羅振玉	殷虛書契前編	前
2.羅振玉	殷虛書契後編	後
3.羅振玉	殷虛書契續編	續
4.郭沫若	殷契粹編	粹
5.董作賓	小屯殷虛文字乙編	乙
6.胡厚宣	戰後寧滬新獲甲骨集	寧
7.張秉權	小屯殷虛文字丙編	丙
8.饒宗頤	巴黎所見甲骨錄	巴
9.胡厚宣	甲骨文合集	合集
10.羅振玉	增訂殷虛書契考釋	
11.金祖同	殷虛卜辭講話	
12.李孝定	甲骨文字集釋	集釋
13.姚孝遂	殷墟甲骨刻辭類纂	類纂
14.屈萬里	書傭論學集	
15.于省吾	甲骨文字釋林	釋林
16.裘錫圭	古文字論集	
17.于省吾	甲骨文字詁林	詁林
18.第三屆國際中國古文字學研討會論文集		



一　（P.0.0009　龜版　一期）



（P.0.0009反）



二　（P.0.0011　骨版　一期）



（P.0.0011反）



三　（P.0.0012　骨版　一期）



（P.0.0012反）



四　（P.0.0014　骨版　一期）

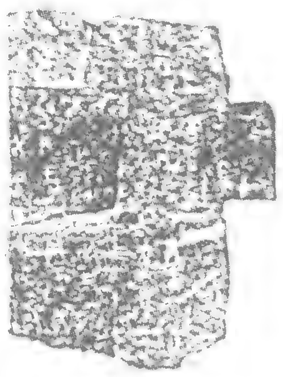


（P.0.0014反）

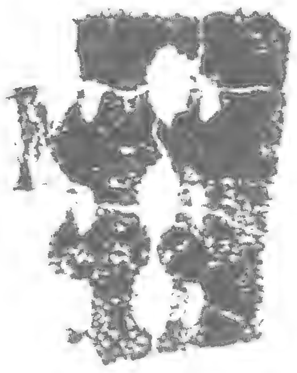


五　（P.0.0015　骨版　一期）

（P.0.0015反）



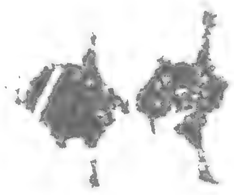
六　（P.0.0019　龜版　五期）



（P.0.0019反）



九　（P.0.0036　龜版　五期）



（P.0.0036反）



十　（P.0.0049　龜版　一期）



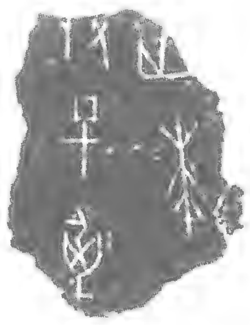
（P.0.0049反）



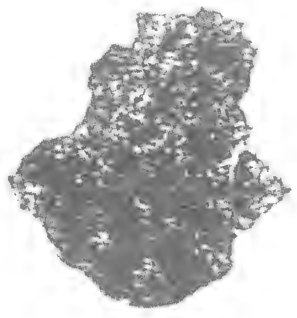
十一　（P.0.0066　龜版　一期）



（P.0.0066反）



七　（P.0.0025　骨版　一期）



（P.0.0025反）



八　（P.0.0029　龜版　一期）



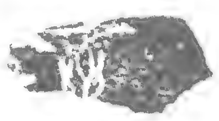
（P.0.0029反）

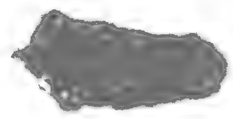
十二　（P.0.0070　龜版　一期）





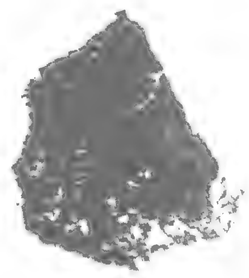
（P.0.0070反）





十三　（P.0.0092　骨版　一期）　（P.0.0092反）





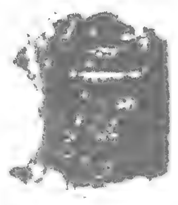
十四　（P.0.0131　龜版　二期）　（P.0.0131反）





十八　（P.0.0137　龜版　二期）　（P.0.0137反）





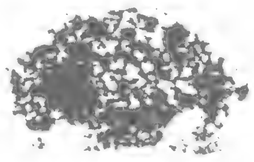
十九　（P.0.0138　龜版　一期）　（P.0.0138反）





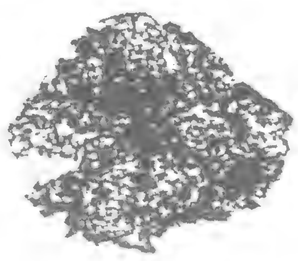
二十　（P.0.0139　龜版　二期）　（P.0.0139反）





二十一　（P.0.0141　龜版　一期）　（P.0.0141反）





二十二　（P.0.0144　龜版　一期）　（P.0.0144反）

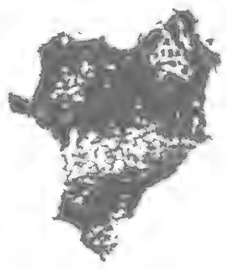




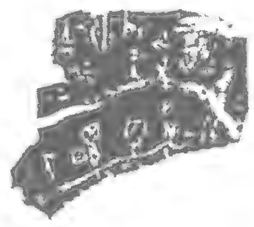
二十三　（P.0.0147　龜版　一期？）　（P.0.0147反）



二十七　（P.0.0160　龜版　一期）



（P.0.0160反）



二十四　（P.0.0151　龜版　二期）



（P.0.0151反）



二十五　（P.0.0152　龜版　一期）



（P.0.0152反）



二十六　（P.0.0153　龜版　一期）



（P.0.0153反）

河北大学文物室所藏甲骨

河北大学所藏甲骨为五十年代初在天津瑞恒委托店所购。原藏家不详，但从旧有编号看，曾分属两批收藏。分编 211 号，其中有无字（或仅残存少许残刻划）32 片，伪刻 5 片。又，经整理缀合 5 片，故文物室藏有字甲骨实为 169 片，其中龟甲 139 片，牛骨 30 片。从内容看包括了殷墟卜辞 1 至 5 期的遗存，而以武丁期居多，祖庚祖甲期次之。

这批甲骨虽多是小片，却不乏重要资料，且过去未曾著录过。七十年代，胡厚宣先生主持《甲骨文合集》编辑工作，曾来我校收集资料，从这批甲骨中选拓 32 片，选用 28 片编入《合集》。这 28 片均属于比较重要的资料，如选用河大的第 1 号是关于祭祀“西母”的卜辞，甲骨文中有“出于东母、西母”，或认为是指日月之神，其中卜祭东母所见不下十条，单独卜祭西母者仅两见（以上见《合集》14335—14345），所以河大所藏这片甲骨的重要性是显而易见的。这 28 片中，祭祀卜辞占一定比例，不仅有卜问祭某位祖先的，还见“不祀于祖”的卜问，是较少见的。涉及的祭祀对象不仅有上甲、祖丁、祖乙等先公近祖及先王，还包括了先公远祖“季”，即《楚辞・天问》中“该秉季德”，“恒秉季德”的“季”，据今所见武丁期祭季的卜辞较多，祖庚祖甲期较少，且多残辞，河大 52 则为一条祖庚祖甲期的完整卜辞，显然相当珍贵。又如河大 15 为祭兄庚的残辞，曾收入《合集》，而今与河大 62 拼合成一条完整卜辞，不仅提高了史料价值，而且还可以与小屯南地新出土的同类卜辞进行比较。此外，第 3、9、11、40 等号甲骨上有关于雨等气象方面的占卜；第 7、10、208 等号甲骨上有涉及征伐的内容，如卜问是否由戍力带领多甸出征是研究商代军事史的重要资料。第 54 号甲骨涉及“刍”，胡厚宣先生曾将此片收入《甲骨续存补编》，并撰文论述刍为畜牧奴隶，此片反映商王朝对逃亡刍奴的追捕。

在不曾收入《合集》的部分，也有一些重要内容，如第 4 号甲骨上刻有一条丙组卜辞，内容是拟用羌和三牢祭祀父丁，占卜结果免用人牲，而祭用五牢。第 56 号甲骨上虽仅有兆序和兆辞，“二，二告。三、三告”，其中“三告”是较少见的。第 71＋181 经拼合，复原了一条完整卜辞，辞中的人名是未见于著录的一个新字。77＋205 号系一片龟背甲，上有圆形钻孔，也是少见的现象。

1995 年秋季，中国社会科学院历史研究所李学勤先生来我校讲学，参观了历史系文物室，这批甲骨文引起了李先生的高度重视，认为很有学术价值，希望能与我系共同进行整理研究。1996 年 11 月李先生与罗琨先生在百忙中再次来校帮助我们着手这批甲骨文的整理。经过与我系刘式今、金家广两教授的密切合作，进行了一个星期的紧张工作，初步鉴定与分析了这批甲骨文，并墨拓其中 177 片。兹后，李学勤、罗琨二位先生又完成了释文。我们在此向二位先生表示诚挚的谢意。



P.0.0015＋合集 3155

綴合圖版一

（原載《甲骨文發現一百周年學術研討會論文集》，
臺灣師大國文學系中研院史語所，1998 年）



1正



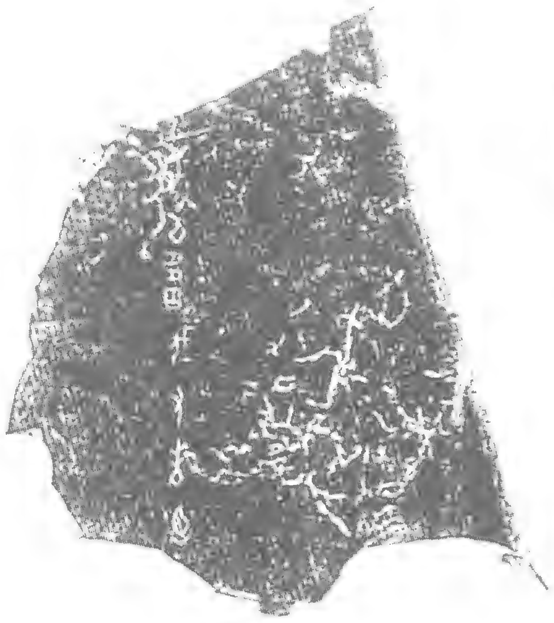
2正



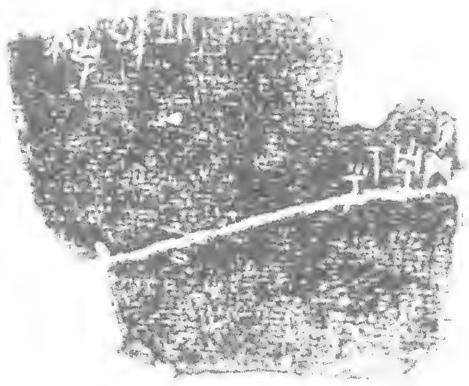
1反



2反



7正



8



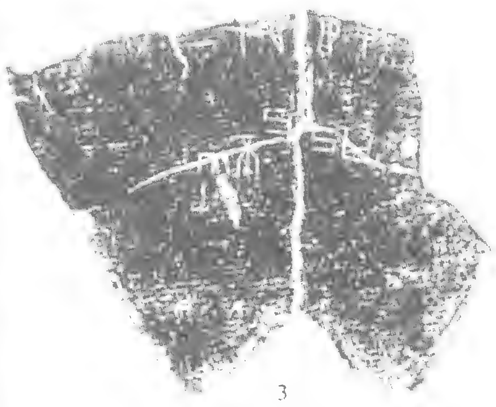
9正



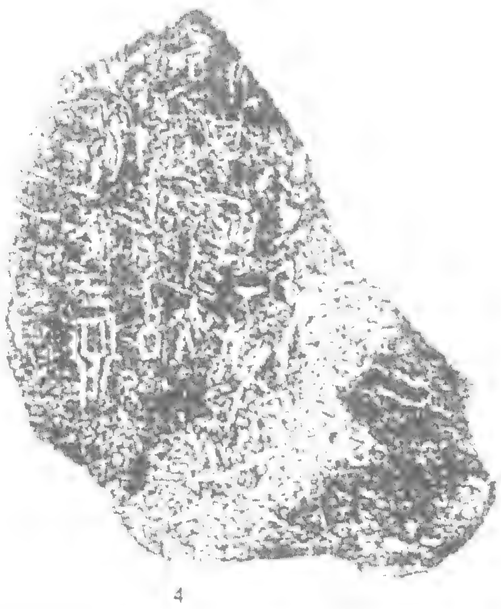
7反



9反



3



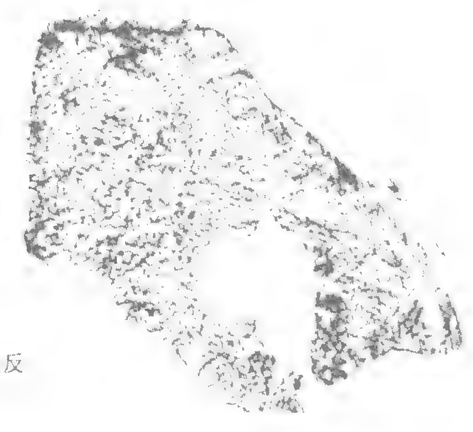
4



5



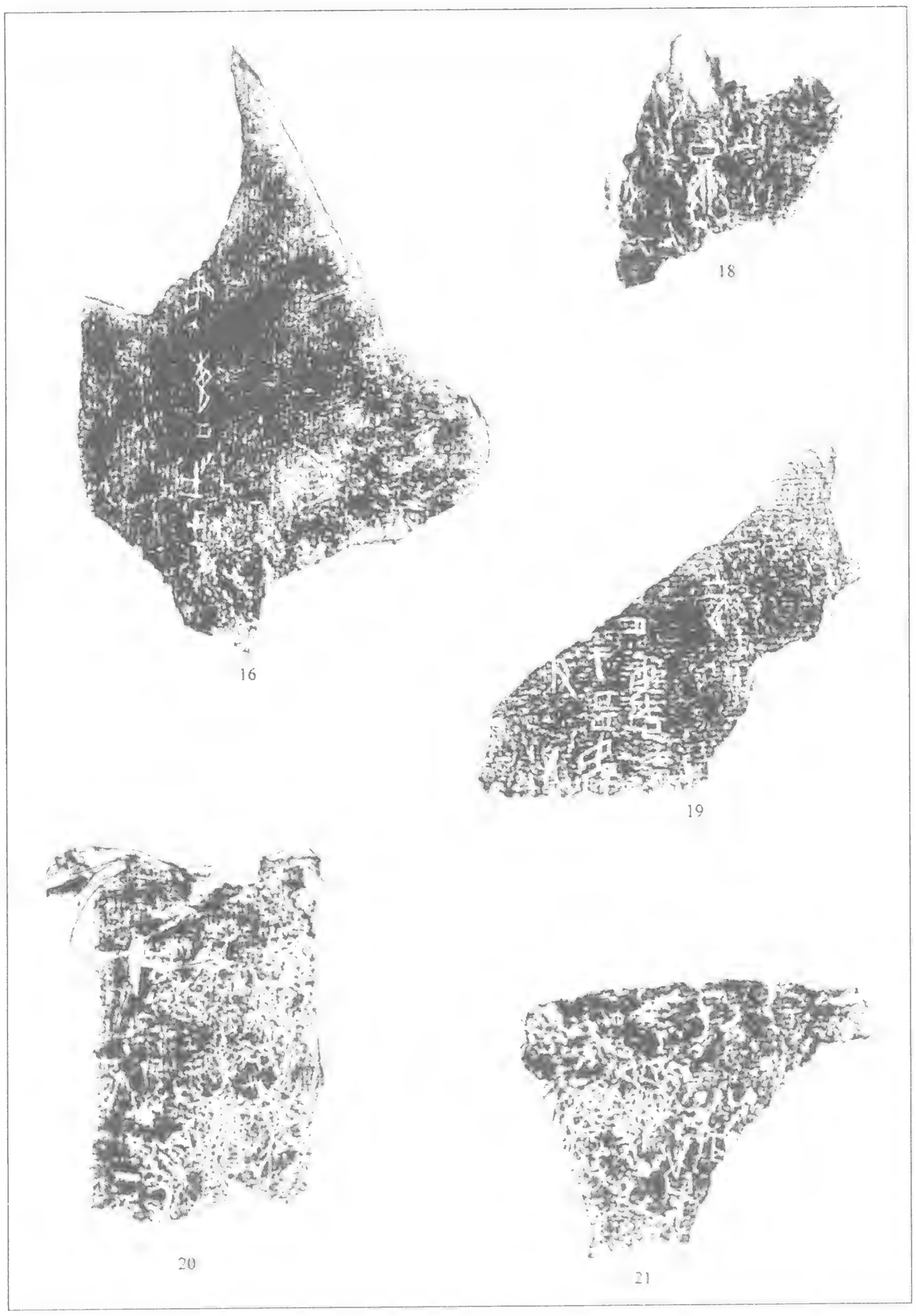
6正反



作为九五国家重大科研项目，“夏商周断代工程”已经正式通过论证并业已启动。我们相信这批甲骨文拓本和释文的发表，会对商代的历史与断代提供有价值的资料，对此项工程的建设有所裨益。

河北大学历史系

1997年2月8日


16

18

19

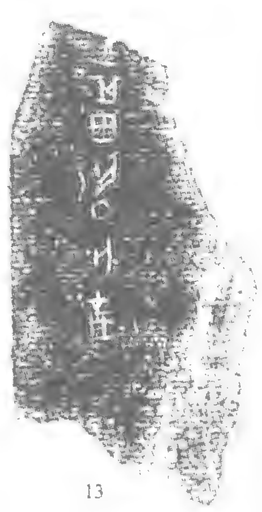
20

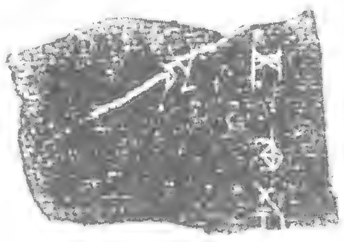
21


10


11

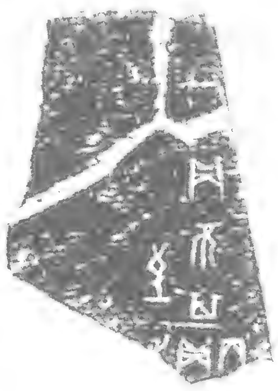

12


13

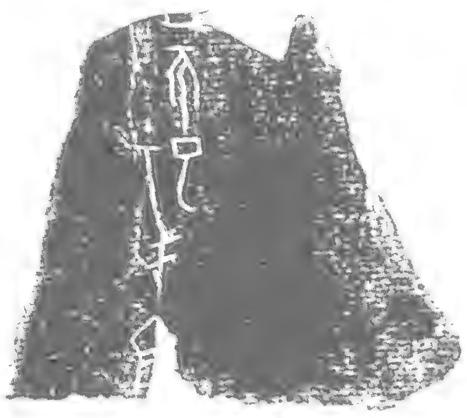

14


15+62

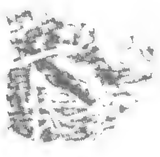

32


33


36


34+35


37

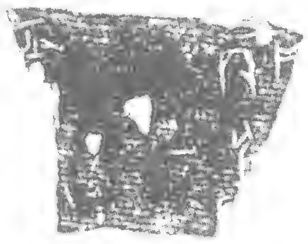

38

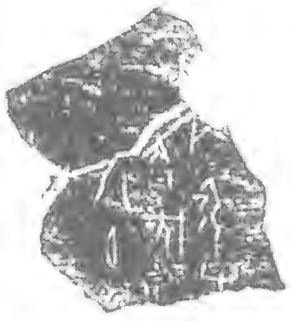

39


40 正反


24


25


26


27

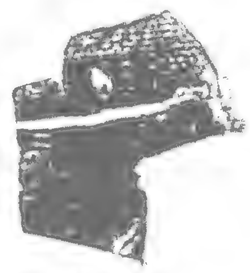

28


29

30


31

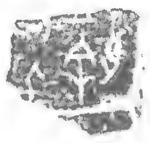

42


43


44

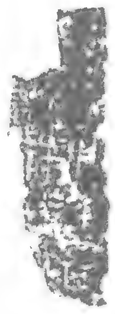

45


46


47

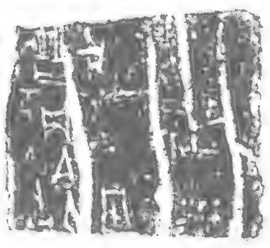

48

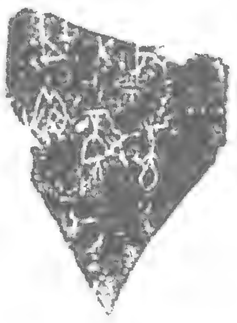

49

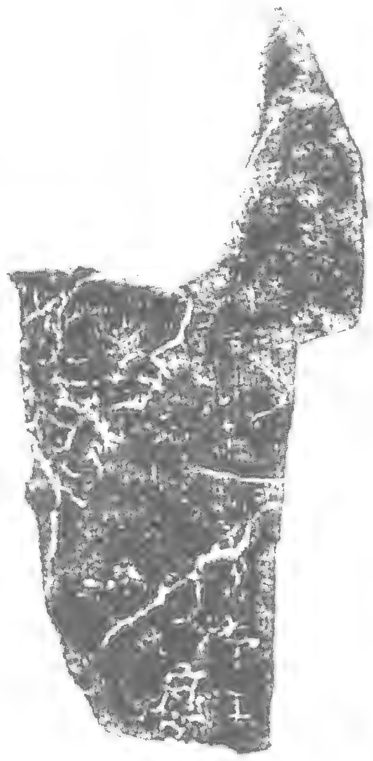

50


51


52


53


54


55

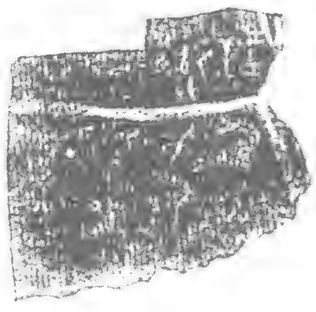

56

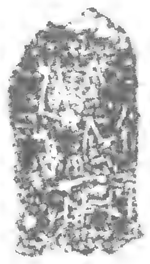

57


58


59


60

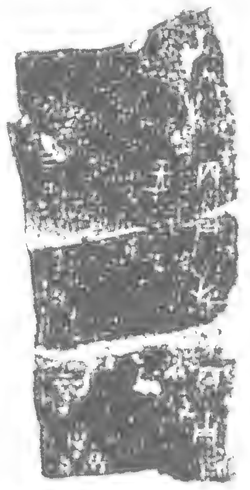

61


63

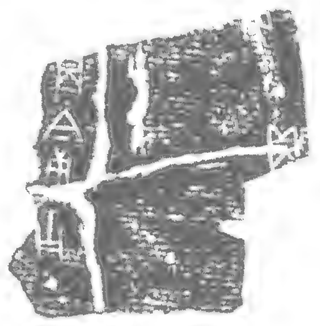

64


65

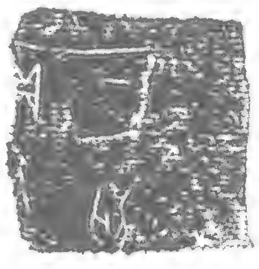

68


67+88


69

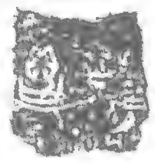

70


71+81


72


73


74

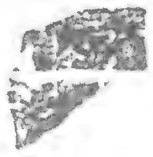

75

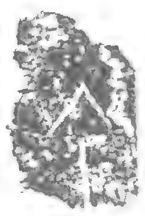

78


79

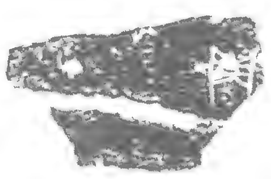

80


77+205

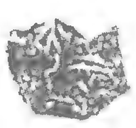

81



82 正反


83


84


85


86

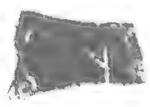

87

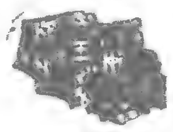

89

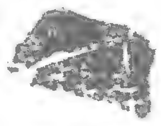

90


91


104


112


113


114


107


115


116


117


118


119


120


121


122

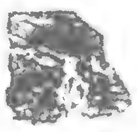

123

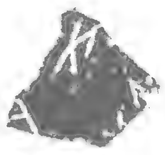

124

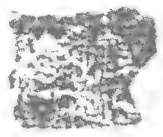

125


126


127


128


129


92

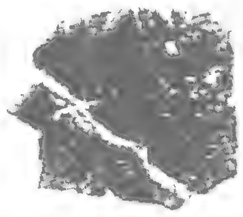

93


95


96


97


98


99 正反



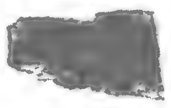

101


100

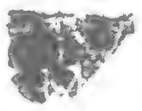

102


103


153


154


155


156


157


158


159

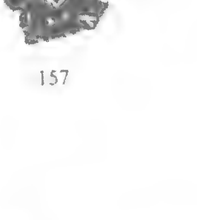

160


161


162


163


164


165


168


171

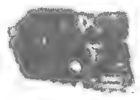

174


180


182


183


185


131


132

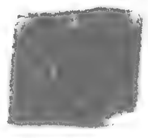

133

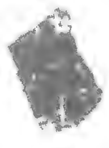

134


135


136


137

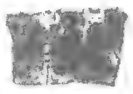

138


139

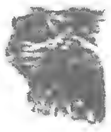

140


141

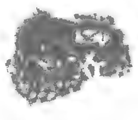

142


143


144


146


148


149


150


151


152

殷墟花园庄东地甲骨卜辞选释与初步研究

刘一曼　曹定云

（中国社会科学院考古研究所，北京，100710）

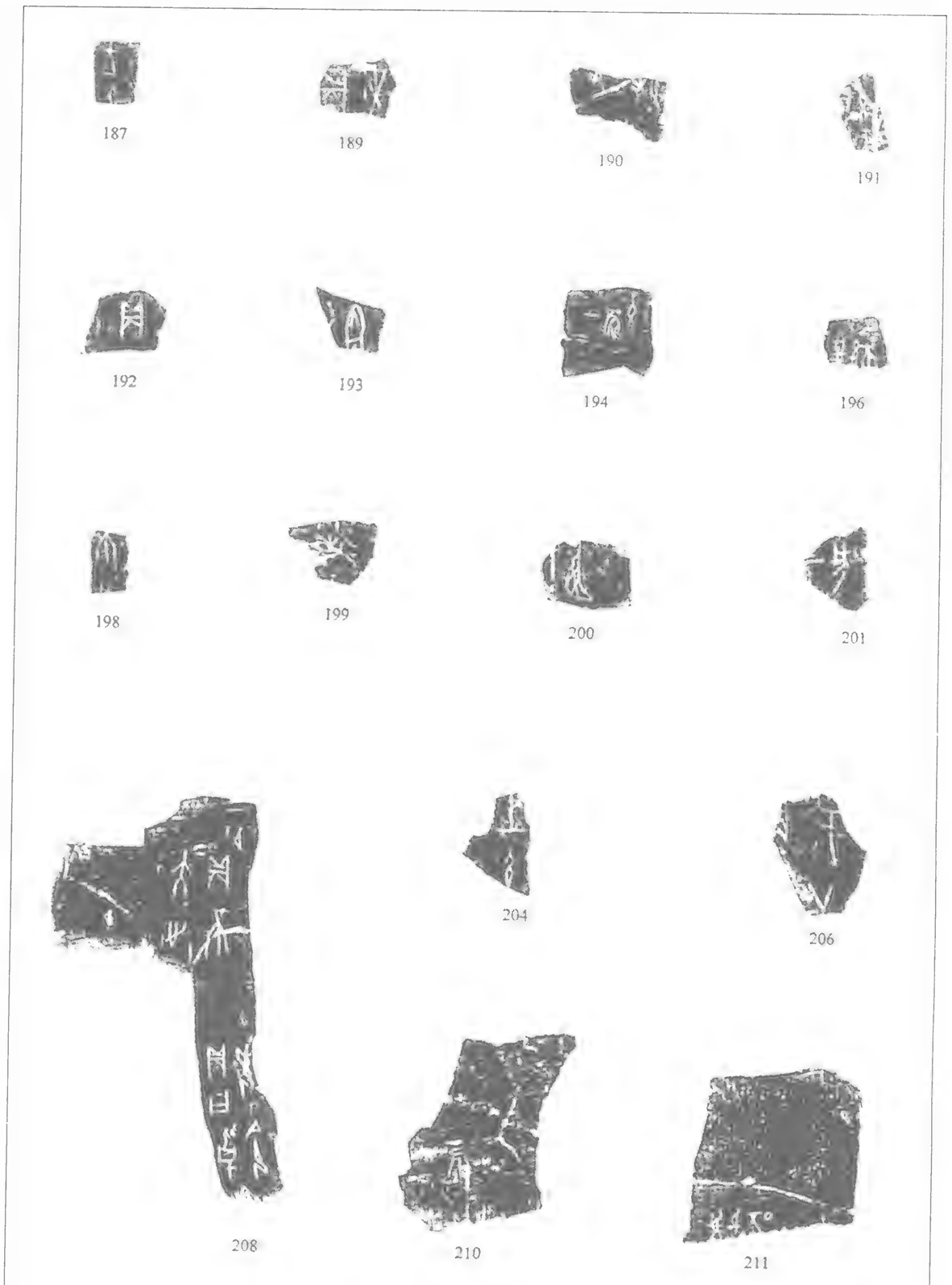
目　次

一、花园庄东地 H3 的概况及所属殷墟文化分期
二、H3 卜辞选释
三、H3 甲骨刻辞的特点
四、H3 卜辞的性质
五、H3 卜辞“子”之身份与地位
六、H3 卜辞的时代

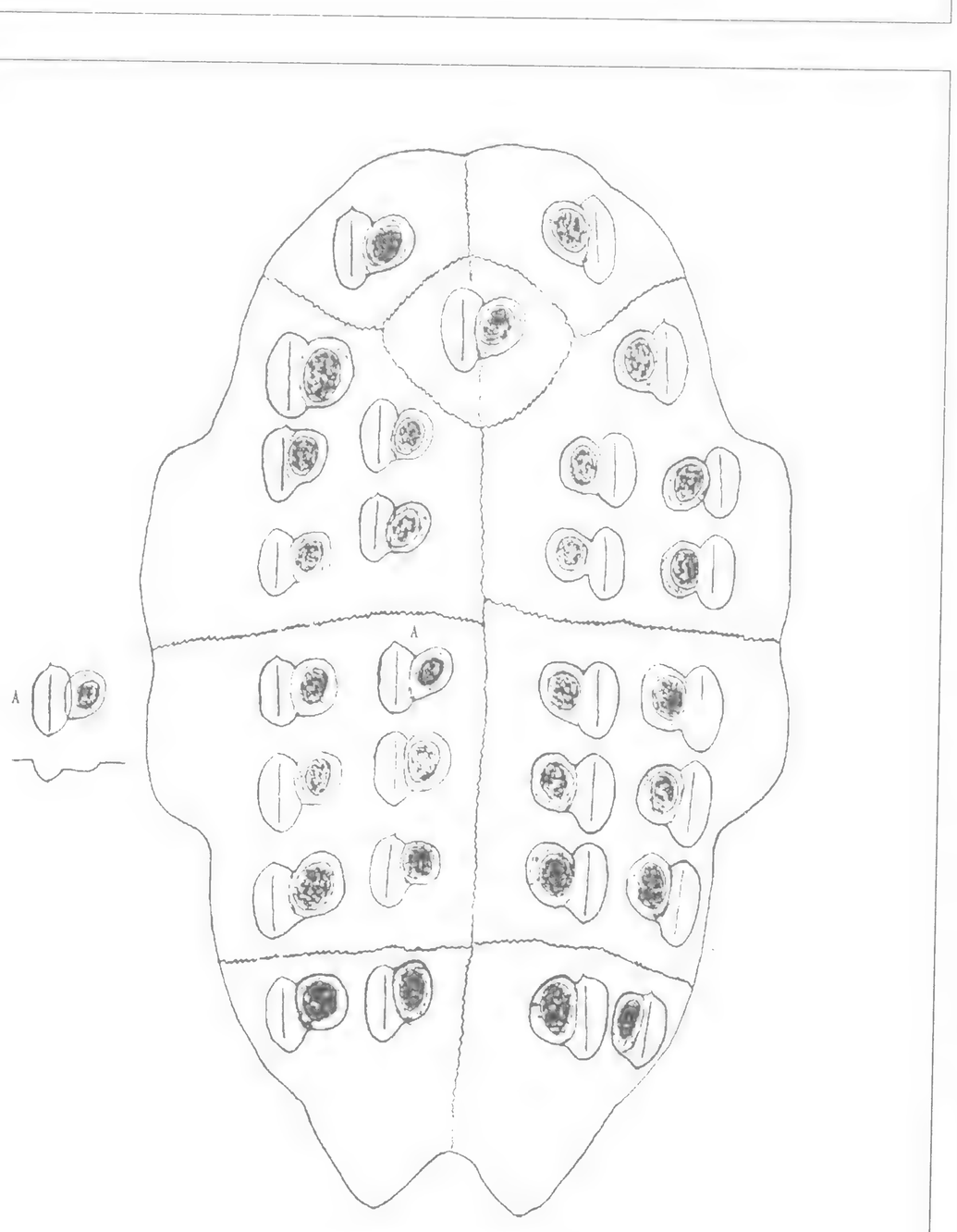
1991 年秋，中国社会科学院考古研究所安阳工作队为配合安阳市的筑路工程，在花园庄一带进行钻探，于村东 100 多米、殷墟博物苑南 400 多米处发现了一个甲骨坑，编号 91 花东 H3。10 月 18 日，我们对该坑进行发掘，10 月 21 日发现了较厚的甲骨堆积层，大多为龟卜甲。由于卜甲保存不好，极易碎裂，给清理工作带来极大的困难。又由于筑路工程工期紧迫，所以我们中止了工地的发掘，将整个甲骨坑套进一个特制的大木箱内，运回安阳考古站院内。从 1991 年 10 月 31 日至 11 月 26 日，1992 年 5 月至 6 月初，在站内开箱取甲骨，前后共花了两个多月时间才将甲骨全部取出。

从 1992 年秋开始直至 1998 年冬，我们对 H3 的甲骨进行修复、加固、粘对、缀合、拓片等工作。1998 年 11 月，我们开始对此坑甲骨进行全面整理，预计将用三年左右的时间完成整理任务。

我们曾在《考古》1993 年第 6 期发表了花园庄东地（简称“花东”）H3 的发掘简报[1]，简报发表后受到国内外学术界的重视，不少甲骨学者对这坑新的甲骨资料极为关注，常常询问有关情况。今年适逢甲骨文发现一百周年，为纪念这一具有历史意义的日子，我们择选了 23 片刻辞甲骨先行发表，同时对 H3 卜辞的时代、特点、性质等问题提出一些看法。由于整理工作刚刚开始，我们对全坑甲骨还缺乏深入的研究，所以，本文的看法只是初步的，错误之处在所难免，望读者批评指正。



（原載《胡厚宣先生紀念文集》，科學出版社，1998 年）



图一　殷墟花园庄东地卜甲钻凿形态（H3：52）（4/5）

另一种浅盘，沿较平，曲足。器盖呈菌状钮，短柱，盖较深，唇向内略倾斜，口部与顶部各饰弦纹二周。罐有两种形式，一种为泥质灰陶，短颈，圆肩，鼓腹，平底；另一种为泥质红陶，短颈，侈口，折肩，深腹，下腹内收，平底。这些器形[3]与殷墟文化第一期同类器相似。

H3　出土陶片不多，有鬲、盆、罐、罍片及一件完整的小陶尊[4]。鬲只存有下部及鬲足，形式有二种，一种为体呈长方形的夹砂灰陶鬲的足部，足根较高；另一种是夹细砂的环络纹鬲的

一、花园庄东地 H3 的概况及所属殷墟文化分期

（一）H3 概况

H3 位于探方 T4 的中北部，是个较规整的长方形坑，南北长 2 米，东西宽 1 米，口部距地表 1.2 米，底部距地表 3.35—3.7 米，底部不大平，南部较高，中北部较低。坑壁整齐，在坑之东、西二壁自坑口以下 0.2—1.3 米处各有三个脚窝。

坑内的堆积可分四层：第 1 层浅灰土，土质松软，厚 0.6 米，出少量陶片、兽骨、木炭屑。第 2 层黄色夯土，厚 0.6 米，土质纯净，坚硬，不出遗物。第 3 层深灰土，土质松软，厚 0.9 米，在此层中部（距坑口 1.7 米）发现了甲骨堆积层。第 4 层亦为甲骨层，厚 0.4 米，甲骨堆中及其周围夹有黄土，土质较松软。

甲骨层厚度为 0.8 米，其上部约 20 厘米，中、小片甲骨较多，这可能是受上部填土的压力所致。中、下部以大块和完整的甲骨为主。甲骨出土时，有的竖立，有的平躺，有的斜置。竖放的甲骨少，主要发现于坑边，特别是坑的东北角和西北角尤为明显，几块竖立的大龟甲紧贴坑边。平放的甲骨最多，大多是反面朝上，露出钻、凿、灼的痕迹，少数是正面朝上。卜甲的甲首或卜骨的骨臼无一定的方向。卜甲与卜骨、龟腹甲与背甲、大块的与小块的、有字的与无字的相互杂处，彼此叠压得十分紧密，甲骨堆中几乎没有什么空隙。

H3 共出甲骨 1583 片，其中卜甲 1558 片（腹甲 1468 片，背甲 90 片），上有刻辞的 574 片（腹甲 557 片，背甲 17 片）；卜骨 25 片，上有刻辞的 5 片。共计刻辞甲骨 579 片。

此坑甲骨以大版的卜甲居多，其中完整的卜甲 755 版，除了整甲外，半甲、大半甲的数量亦多。据粗略统计，半甲以上的大块卜甲占此坑甲骨的 80%，特别珍贵的是有刻辞的完整卜甲达三百多版，占有字甲骨总数的 50%以上。

（二）H3 所属的殷墟文化分期

关于 H3 的时代，可从地层关系、出土陶器、甲骨上的凿钻形态等方面做考古学的考察。

1. 地层关系及出土陶器

花东 H3 发现于 T4 第 3 层下。第 3 层出土的陶片较小且碎，但从盆、罐残片的特征看，应属殷墟文化一、二期。与 H3 处于同一层位的灰坑有三个，其中 H2、H9 也出有一定数量的陶片。

H2　位于 H3 的北部，为一个椭圆形坑，打破 H3 坑口的北部。坑内出有折沿、鼓腹、腹部饰细绳纹与环络纹的鬲片和唇沿外翻、盘略深的豆片。从鬲、豆的形式看[2]，属殷墟文化第一期。

H9　位于花东 T5 中部，南距 H3 约 3 米，是个较规整的圆形坑，出土的陶片较多，且有几件可复原的陶器。器形有鬲、豆、簋、盆、器盖、罍、甑等。簋呈敞口，圆唇，唇沿剖面呈 T 字形，深腹，腹壁斜直，圜底，矮圈足，腹饰凹弦纹四周。豆有两种形式，一种唇沿外翻，腹略深，矮圈足；

出23片甲骨做一介绍。

(一)H3：52　龟腹甲。完整(图三;图版壹;图版贰)。

1. 乙酉卜:子又之阭南小丘,其𢦏获?　一二三四五

2. 乙酉卜:弗其获?　一二三四五

3. 乙酉卜:子于翌日丙求阭南丘豕,𡆥?　一二三四

4. 以人𡆥豕?　一二

5. 乙酉卜:既阜往敫,𡆥豕?　一二

6. 弜敫?　一二

7. 𡆥阭鹿?　子占曰:其𡆥。一二

8. 一二

9. 一二

之,在本片第1段辞,可释为至,作动词。

阭,地名。字本从阜从心。在发掘简报中,我们曾将该字隶定为从心从火之字,现改从李学勤先生释[9]。

𡆥,动词,遇也。

求,从裘锡圭先生释[10]。《英藏》1906"丁未子卜:重今日求豕,𡆥",与此片第3辞"求阭南丘豕,𡆥"词义相近。意谓外出田猎,寻求野豕,会遇上吗?

(二)H3：47+984　龟腹甲。左、右前甲均有残缺(图四;图版叁)。

1. 甲午岁祖甲𡉈一,子祝?　在𣪊。一

2. 乙未岁祖乙𡉈,子祝?　在𣪊。一二

3. 弜已祝,重之,用于祖乙?　用。一二

4. 重子祝,岁祖乙𡉈?　用。一二

5. 丁酉岁妣丁𡉈一?　在𣪊。一

6. 乙巳岁祖乙𠂤,子祝?　在𣪊。一二

7. 乙巳岁祖乙𠂤一,子祝?　在𣪊。三

8. ☐岁☐[8]。

此片上部6、7、8三段为H3：984,下部为H3：47。在后右甲第一、二段辞之间有界划。

𣪊,地名。是本坑卜辞较常见的地名之一,亦见于宾组与出组卜辞。

𡉈,字所从的"土"字横书,为𡉈字的另一种写法。

𡉈,象母豕之形。

岁,祭名。

(三)H3：113+1518　龟腹甲。左甲桥边缘稍残缺(图五;图版肆)。

1. 庚卜,在𩵦:岁妣庚三牡又鬯二,至甲,酋百牛又五?　一

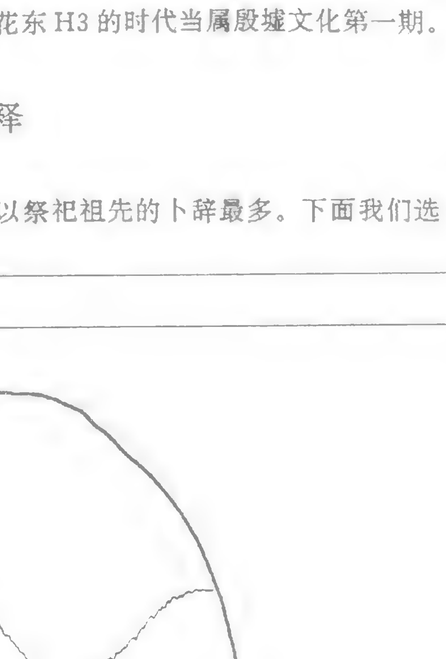
下腹及足部,下腹较鼓,足较矮,绳纹及环络纹细密整齐。盆片折沿方唇,沿内壁斜直,沿面较窄,弧腹,上腹饰绳纹及二周弦纹。罐片小口,短颈,鼓腹,腹饰交叉绳纹,属圜底罐残片。小尊为泥质黑陶,敞口,束颈,腹壁较直,圜底,矮圈足,口径大于通高。此种小尊在殷墟相当罕见,其基本特征与苗圃北地H25：32泥质灰陶尊近似[5],该器属苗圃一期(相当于殷墟文化第一期)。

H3的口部开于T4第3层下,第3层属殷墟文化第一、二期。与H3属同一层位的H2(打破H3)、H9及H3本身所出的陶器多是殷墟文化第一期较常见的器形。

2. 凿的形态

花东H3甲骨的反面均有凿、钻、灼。卜甲上的凿、钻、灼均以中缝为界,左右对称,钻、灼的方向均指向中缝。凿的形态比较一致,腹部呈弧线形(或略带弧度),大多头、尾较圆,部分凿头部略尖,尾部较圆,如花生仁状。凿长1.2—1.8厘米,以长1.5—1.6厘米的为多,宽0.5—0.8厘米,纵剖面多为弧底。钻近椭圆形,钻长0.9—1.3、宽0.7—1厘米(图一)。

卜骨反面有凿、灼,无钻。上部的凿排成两行,内外沿的凿基本上是并列的。灼的方向一致,均对着臼角。凿的形态与卜甲的凿近似,但尺寸较短,腹部较丰肥。长1.2—1.4、宽0.7—0.9厘米(图二)。



图二　殷墟花园庄东地
卜甲钻凿形态(H3：940)(4/5)

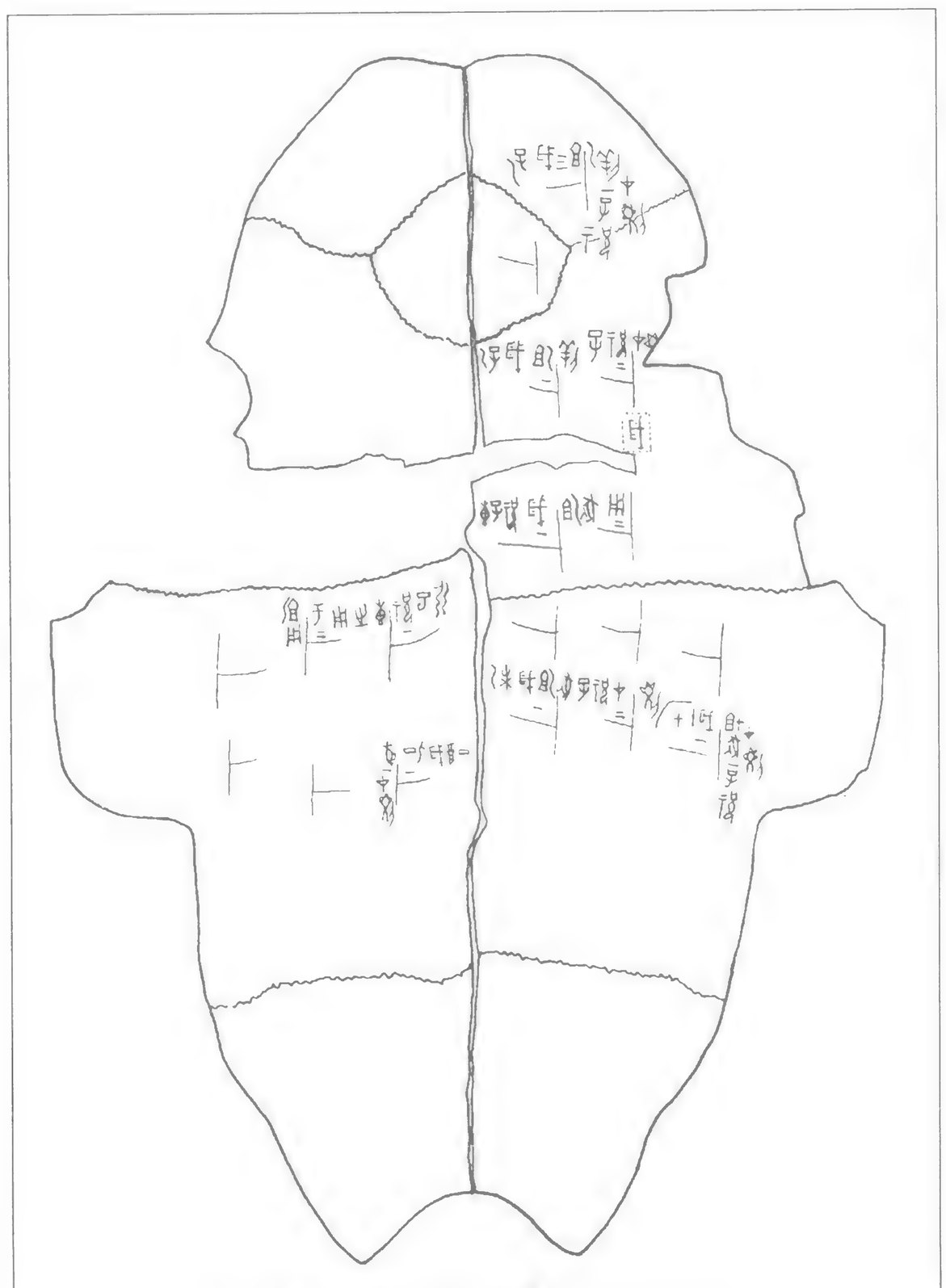
花东H3甲骨反面凿的形态与《小屯南地甲骨的钻凿形态》一文中所述的一型三式凿近似[6]。该式凿在小屯南地发现甚少,只见二片,一片是《屯南》4512(T53：141),属自组卜甲;另一片是《屯南》2698(H102：1),属午组卜甲。这二片卜甲均属小屯南地早期,相当于殷墟文化第一期。

此外,在91花南T3③：6发现了两片无字卜甲,反面凿的形态与花东H3卜甲凿的形态基本相同[7],凿长1.4—1.8、宽0.5—0.6厘米。花南T3③属早期,相当于殷墟文化第一期。

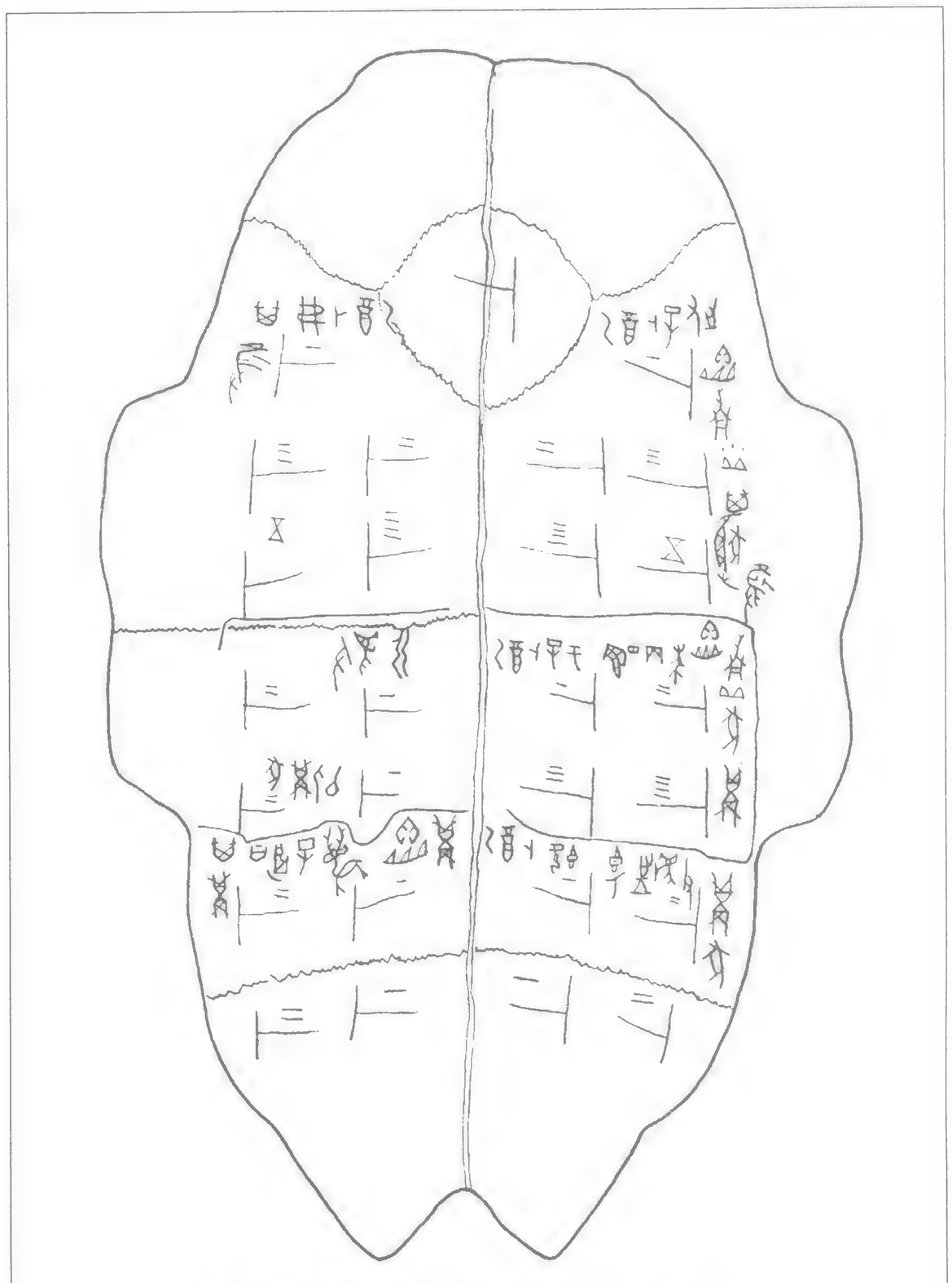
从地层关系、出土的陶器、甲骨上凿的形态来看,花东H3的时代当属殷墟文化第一期。

二、H3卜辞选释

H3的卜辞以祭祀、天气、田猎、疾病等内容为主,尤以祭祀祖先的卜辞最多。下面我们选



图四　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：47+984)(3/4)



图三　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：52)(原大)



图六　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：126+1547)(9/10)

2. 庚卜，在麓：重五牡又酉二用，至翌妣庚？一二三

3. 庚卜，在麓：重五牡用，至翌妣庚？一二

4. 庚卜，在麓：重十牡[用，至]翌妣庚？一二三

第4段辞"麓"之下部及"重十牡"为H3：1518，其余均为H3：113。

麓，地名。过去未见。这是H3卜辞常见的地名之一。

酉，在此片为用牲之法。于省吾谓："酉从册声，古读册如删，与刊音近义通，俗作砍。"[11]

(四)H3：126+1547　龟背甲之左半部上段，中下部残缺(图六；图七)。

1. 丁卜，在𠂤：其东狩？一

2. 丁卜：其？一二

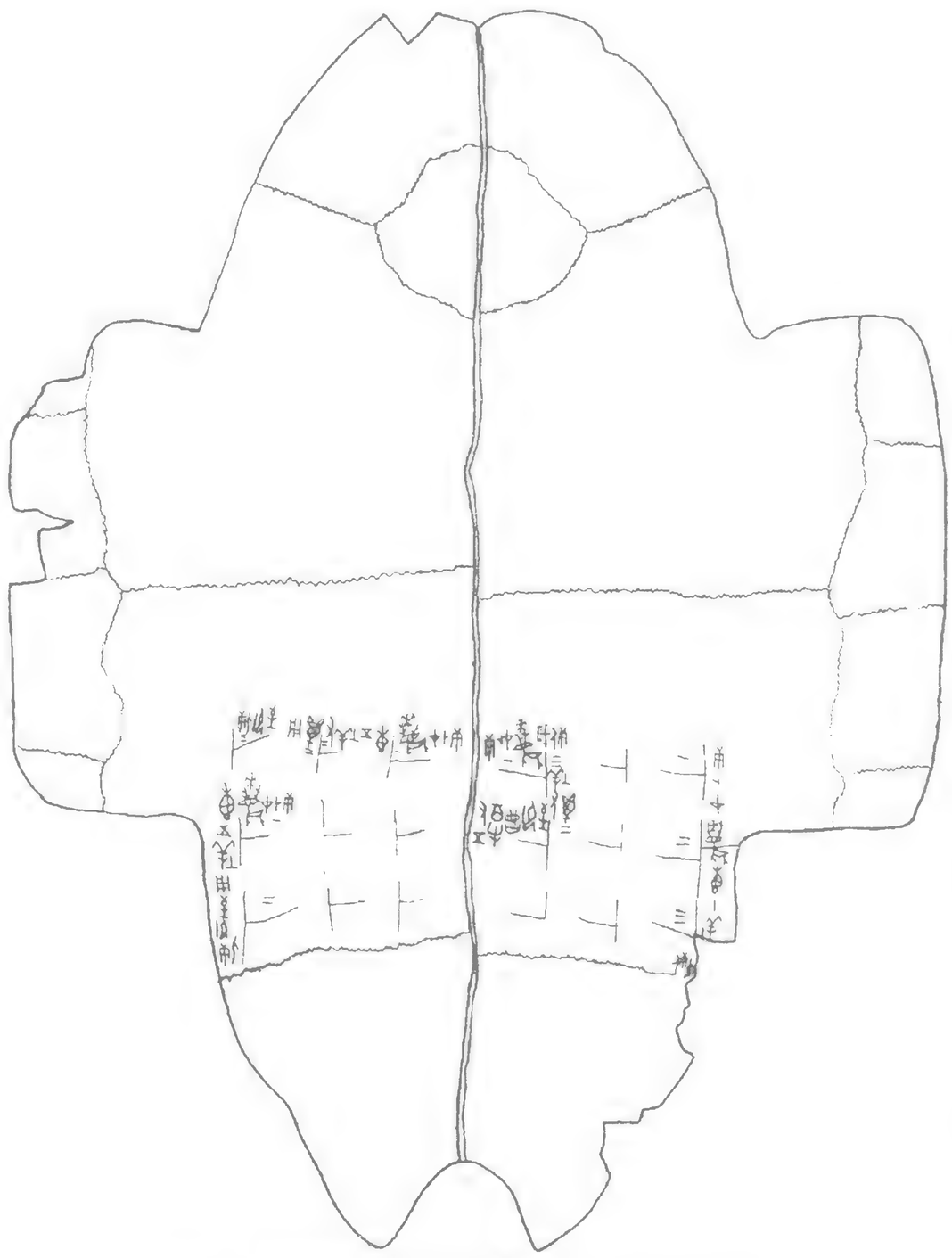
3. 不其狩，入商？在𠂤。一

4. 丁卜：其涉河狩？一二

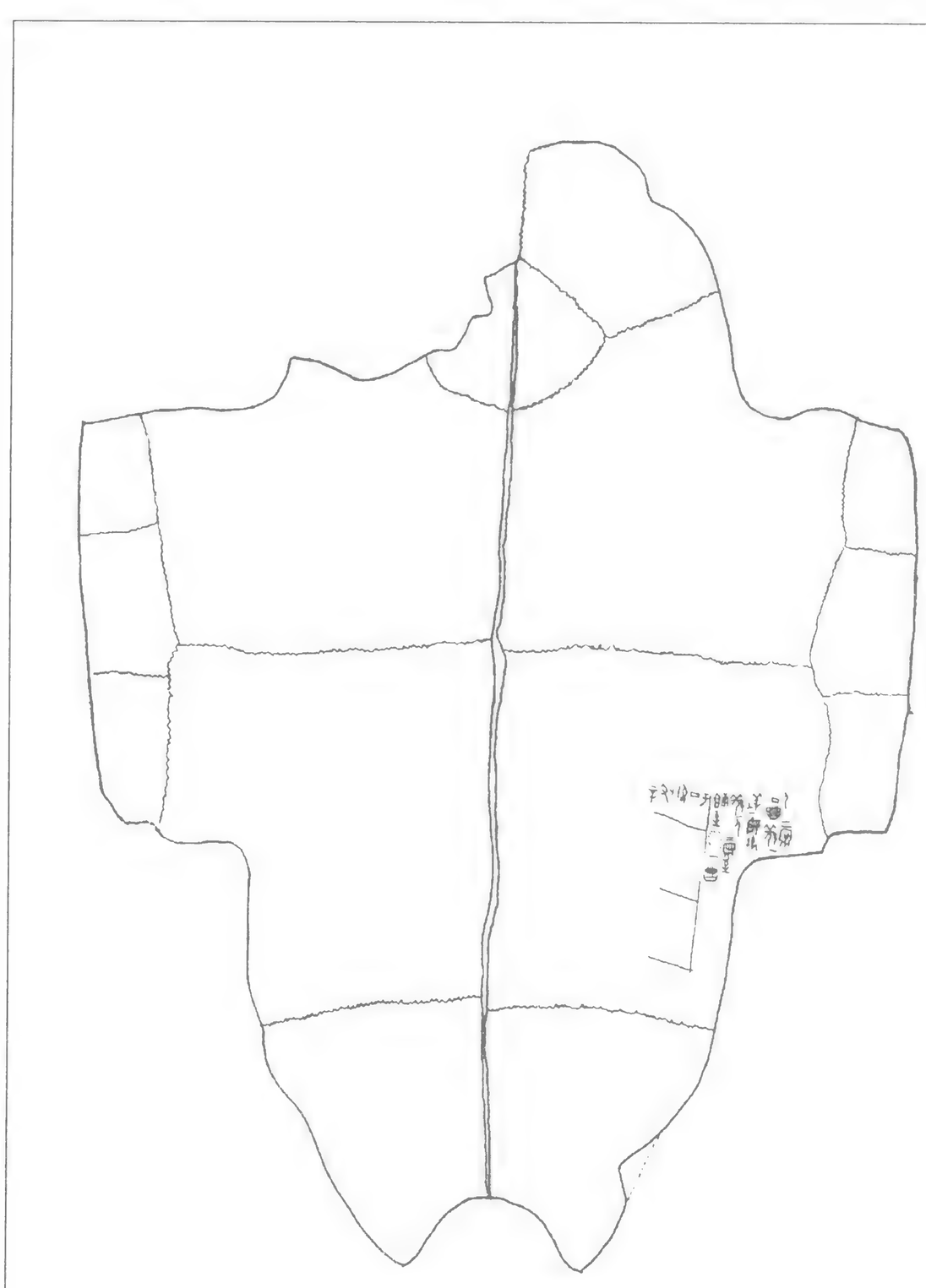
5. 丁卜：不狩？一二

6. 不其狩？一

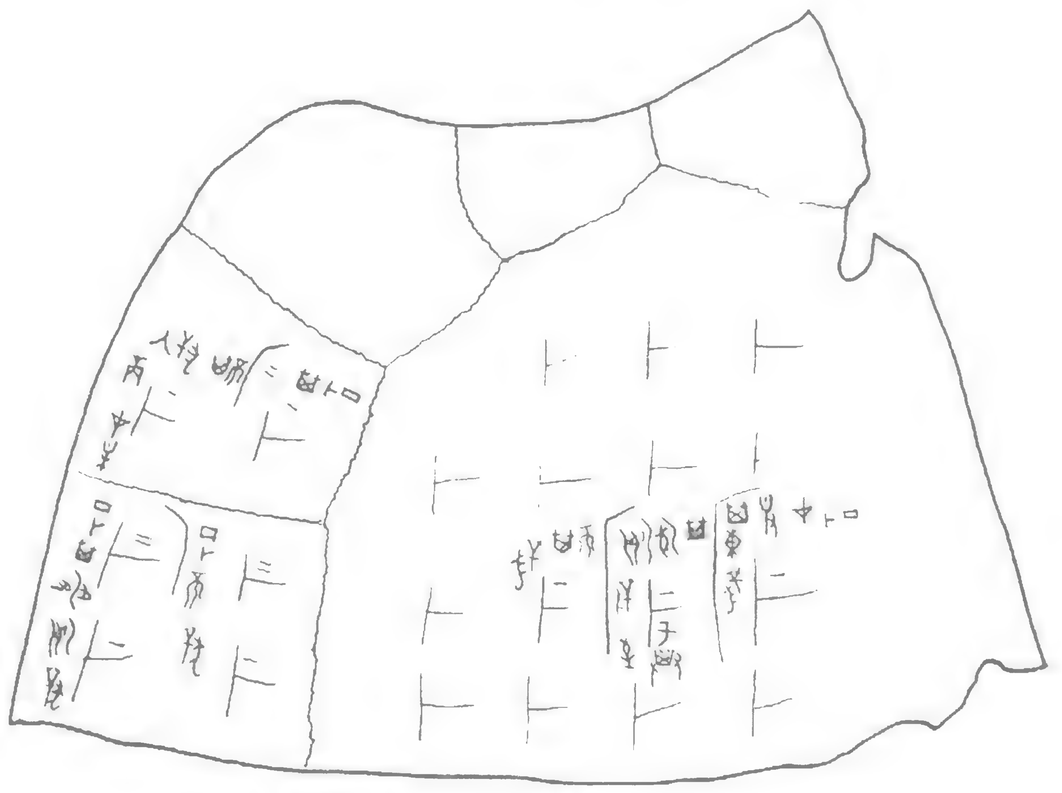
7. 其涿河狩，至于箕？一



图五　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：113+1518)(7/10)



图八　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：200)(7/10)



图七　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：126+1547)(9/10)

各段卜辞之间有界划相隔。

𠂤与𠂤同为一字，地名。在宾组卜辞中较常见，为商王田猎之地。如《合集》10950"乙巳卜：王获在𠂤兕？允获。"

箕，亦地名。

涿，在第7段辞应为动词，其义与涉相近。

第2段辞，"其"字之左尚有空位，似漏刻一"狩"字。"其"之左，界划旁之"二"字为衍字，非兆序。

(五)H3：200　龟腹甲。首左甲残缺(图八；图版伍)。

辛丑卜：钟丁于祖庚至□一，酉羌一人，二牢，至翌一，祖辛钟丁，酉羌一人，二牢？

"祖辛钟丁"，应为"钟丁(于)祖辛"之倒文。

钟，祭名。此片卜辞之钟(禦)是攘除灾祸之祭，即为攘除丁的灾祸而祭祀先王祖庚与祖辛。

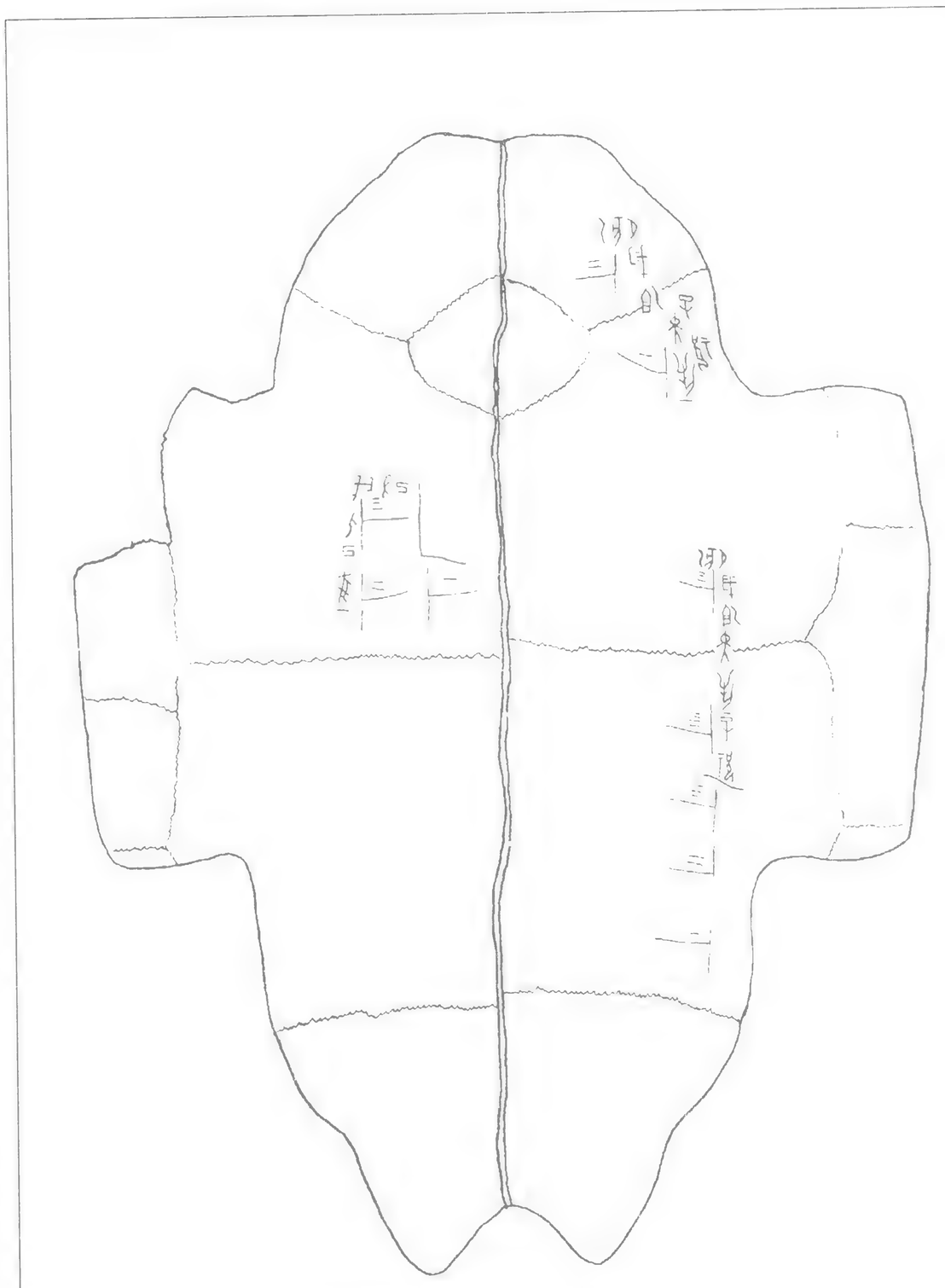
(六)H3：224　龟腹甲。左甲桥边缘残缺(图九；图版陆)。

1. 乙亥夕岁祖乙黑牝一，子祝？一二

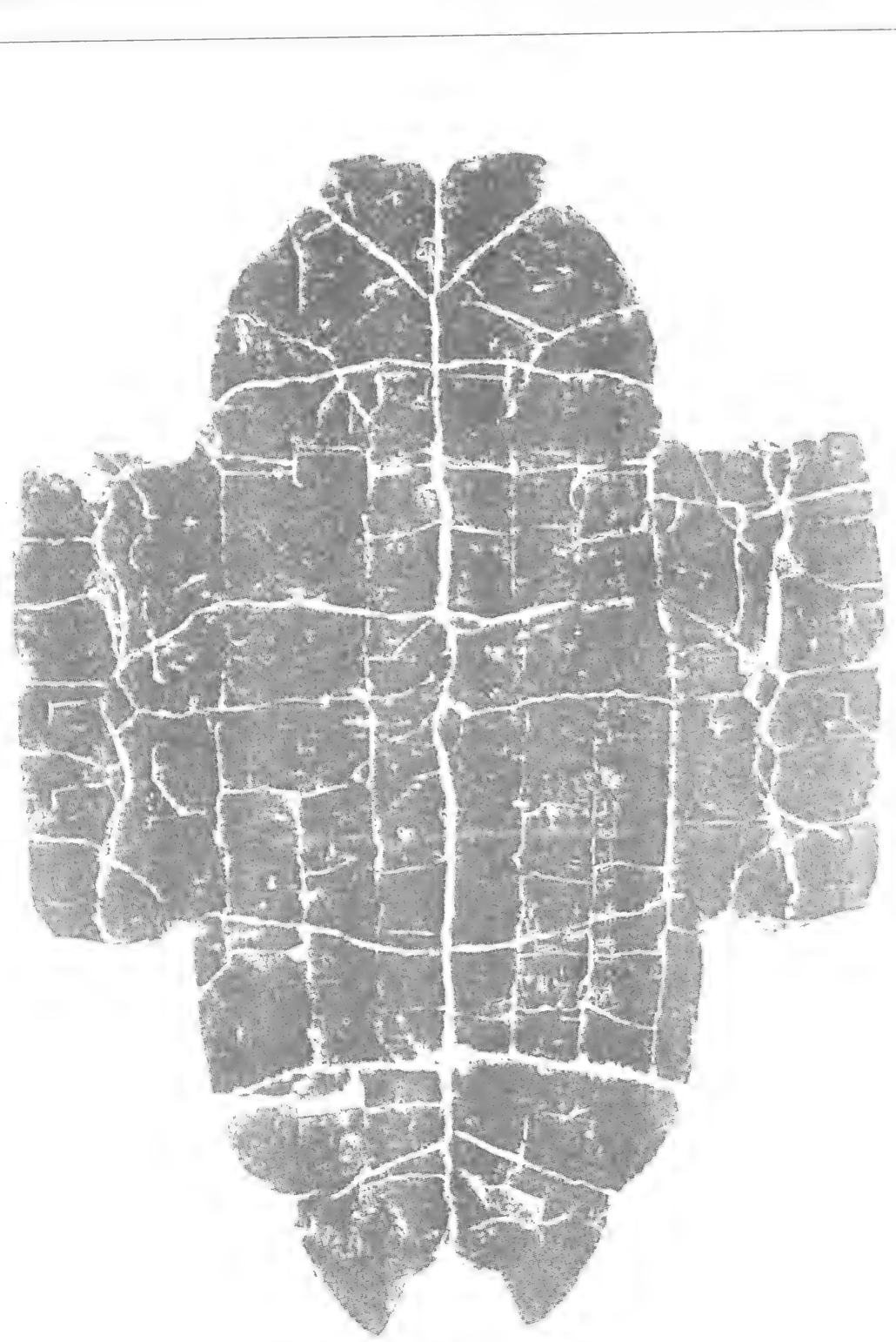
2. 乙亥夕岁祖乙黑牝一，子祝？三四



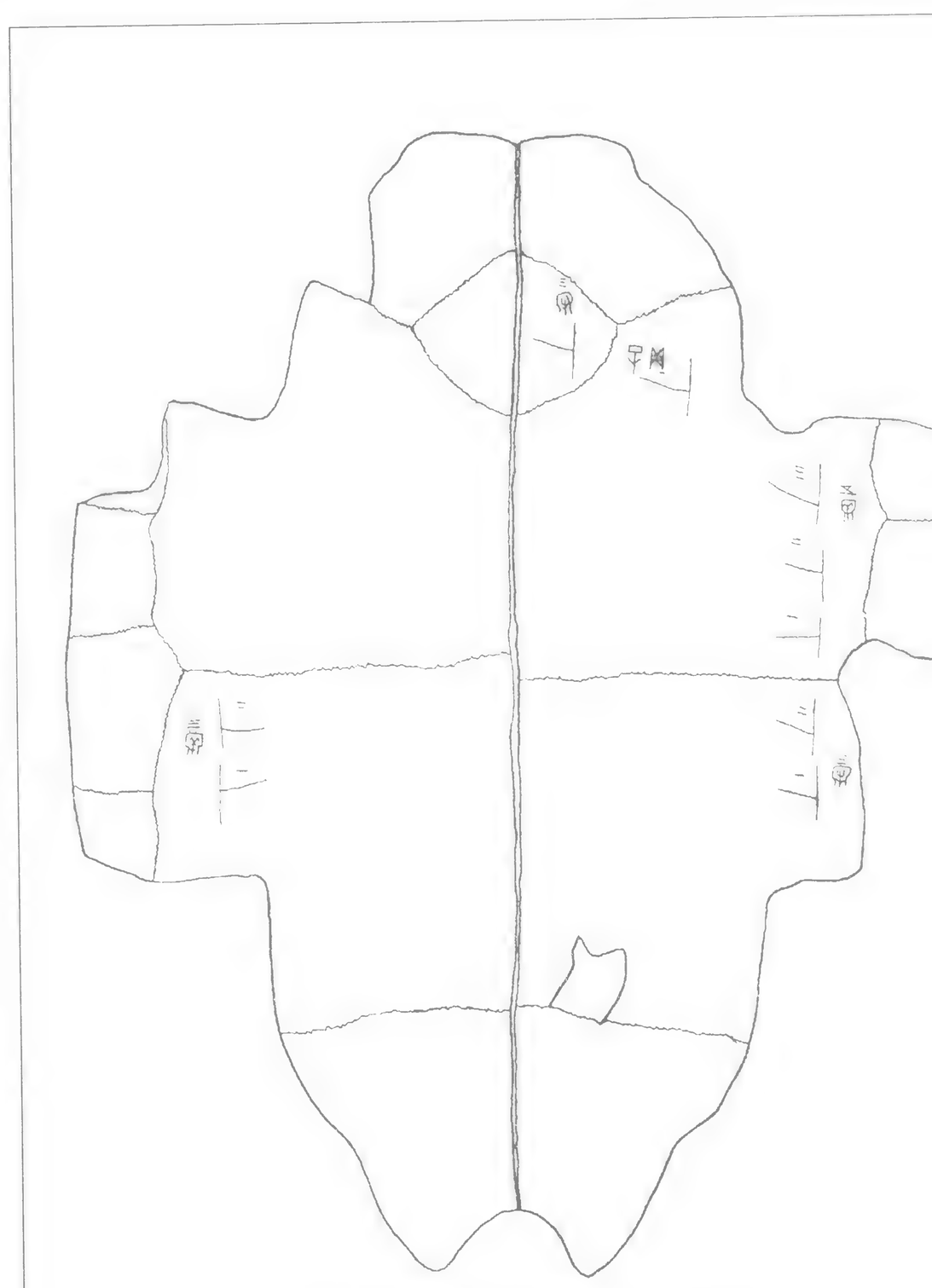
图一〇　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：237)(7/10)



图九　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：224)(3/4)



图一二　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：313)(7/10)



图一一　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：237)(7/10)

3. 己巳岁妣乙龄一？一二三

4. 一二三

第2段辞之下部与第3段辞之右部有界划。

黑，从于省吾先生释[12]。

(七)H3：237　龟腹甲。首左甲、后右甲下部及左、右甲桥稍有残缺(图一〇；图一一)。

1. 子贞。一

2. 三牢？

3. 五小宰？一二三

4. 三牢？一二

5. 三小宰？一二

"子贞"是本坑卜辞主人"子"亲自贞卜之记录，但卜问何事则略去不记。

(八)H3：313　龟腹甲。左甲桥上部略残(图一二；图一三)。

壬申卜，在徉：其𠂤于妣庚，酒十宰，十鬯？用。在麗。一二三

徉、麗均地名。一为前辞，一属验辞。这条卜辞是在徉地卜问𠂤祭妣庚，但后来在麗地才按照占卜的内容进行祭祀。

(九)H3：333　龟腹甲。完整(图一四；图版柒)。

1. 丁卯卜：雨不至于夕？一

2. 丁卯卜：雨其至于夕？子占曰：其至，亡翌戊。用。一

3. 己巳卜：雨不征？一

4. 己巳卜：雨其征巳？子占曰：其征冬(终)日。用。

5. 己巳卜，在𣪊：庚不雨？子占曰：其雨亡司。用。夕雨。一

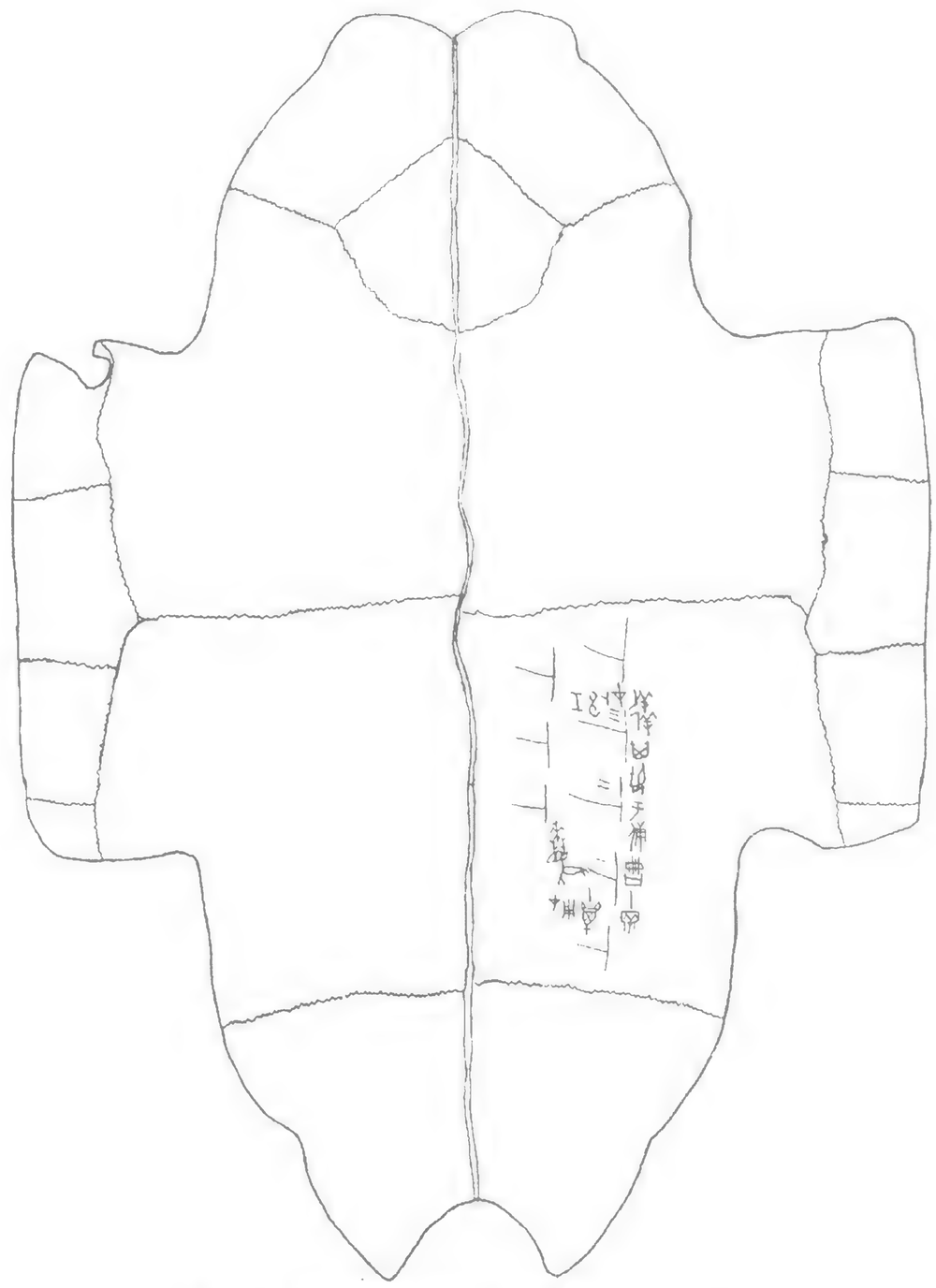
6. 己巳卜，在𣪊：其雨？子占曰：今夕其雨，若。己雨，其于翌日庚亡司。用。

第2、6段辞之上部及第5段辞之上部及左侧均有界划。第4段辞之"终"字，第2段辞之"亡"字正压在卜兆之上。殷人契刻卜辞，一般要避开卜兆，将字刻于卜兆之旁，像此片卜辞叠压兆枝的现象极罕见。

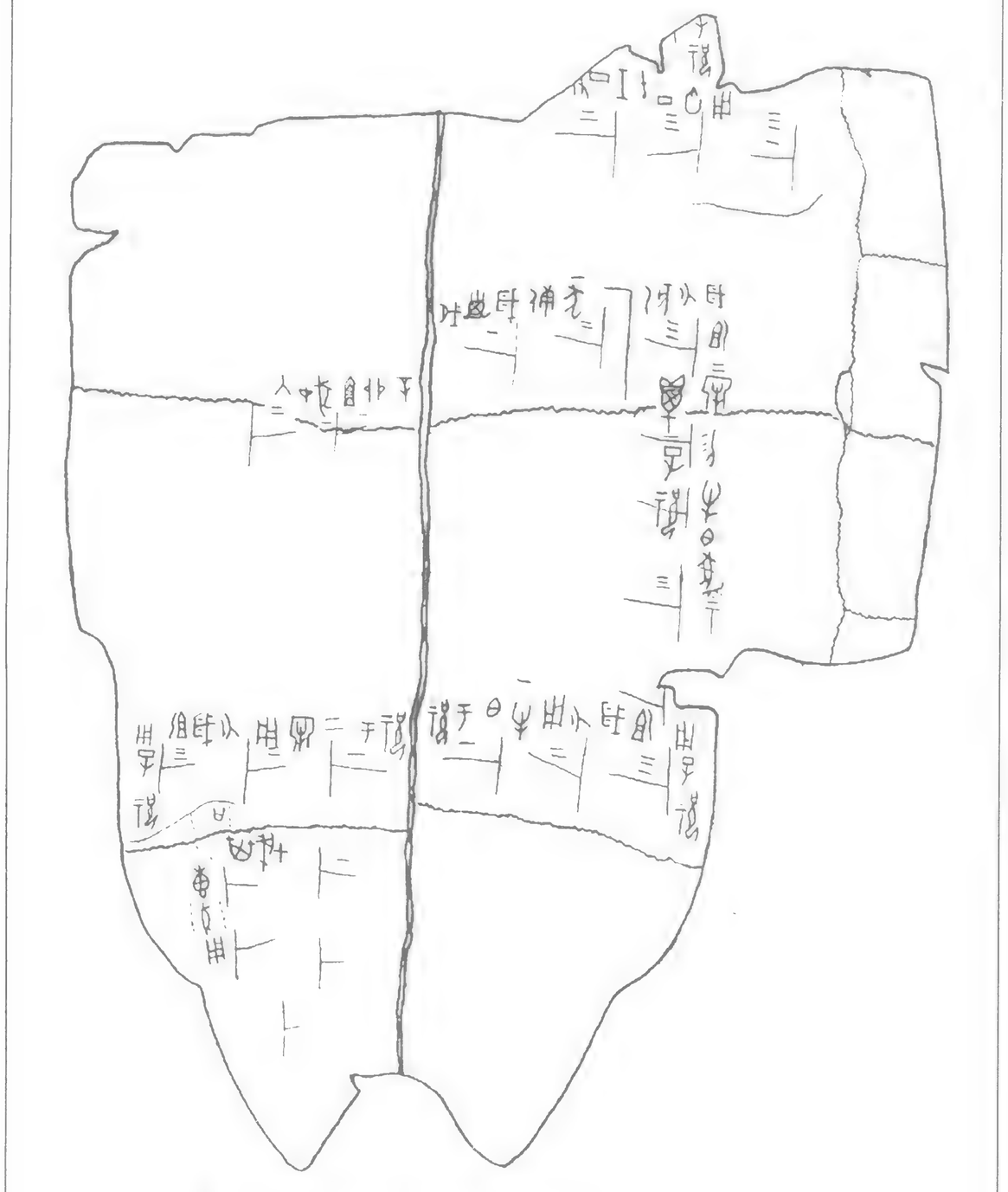
征，即延，有延长、延续之意。

𣪊，地名。在武丁时期的卜辞及晚商金文中此字较常见，多作人名或族名。作地名之𣪊可能是𣪊的封地。

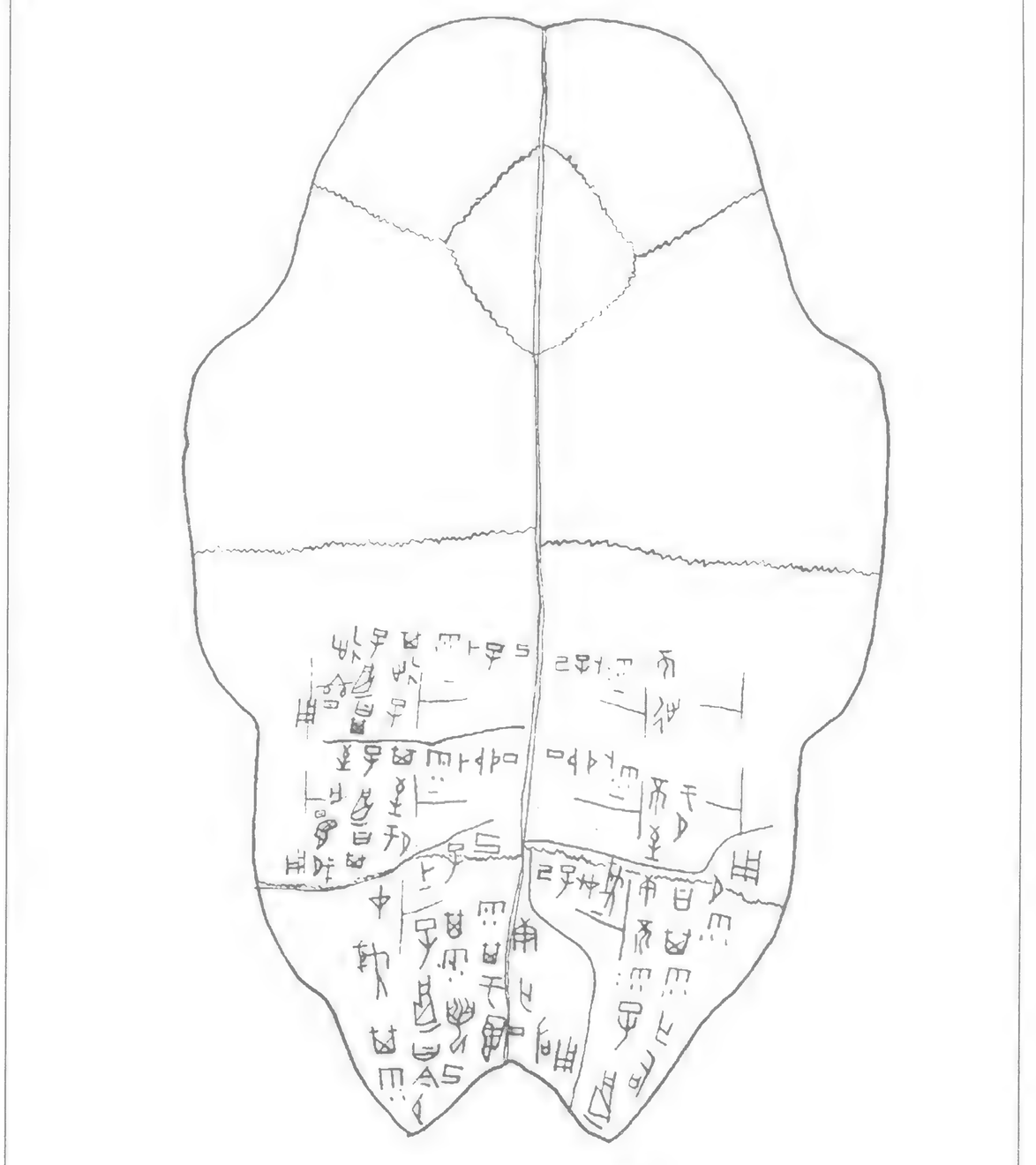
亡司，此词首见，疑作"亡事"解。上古司属心纽之部，事属精纽之部，同音可通。卜辞"有事"一词，学者多认为"事"指祭祀而言。但在子组卜辞中，"有事"、"亡事"之辞甚多，如《合集》21856"丁酉余卜：今八月有事？"《合集》21671"戊辰子卜贞：今岁有事？"这些辞中的"有事"并非指有祭祀，其义应如屈万里先生说的"当如《周易》震卦爻辞'无丧有事'之有事，谓意外之事也"[13]。我们认为，本片之"亡司"，可能近似上述子组卜辞中的"亡事"，义与"无祸"相近。



图一三　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：313)(7/10)



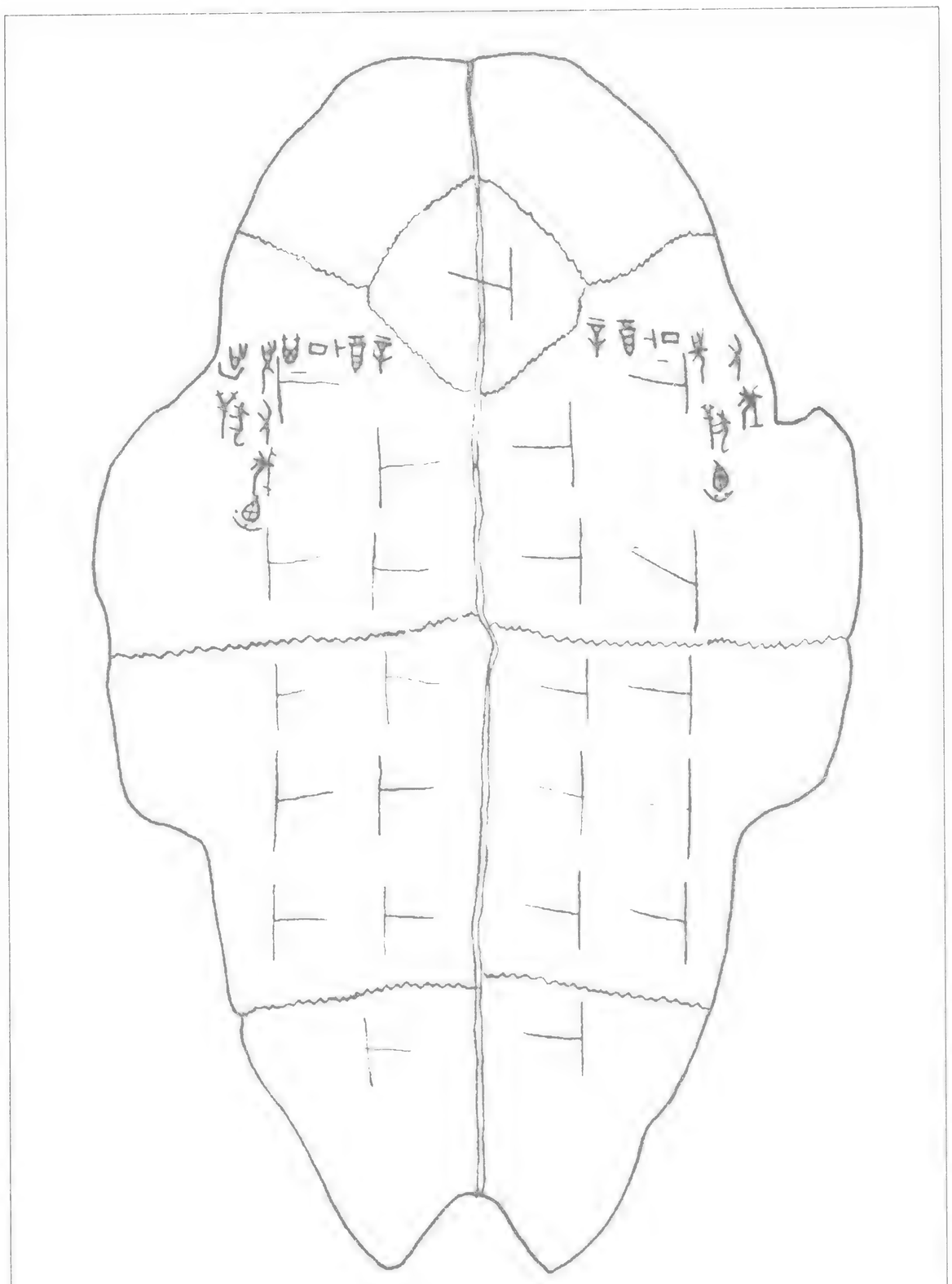
图一五　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：450＋458)(87/100)



图一四　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：333)(原大)

(十)H3：450＋458　龟腹甲。存中下部，缺首甲、中甲及前甲上部(图一五；图版捌)。

1. 甲戌其□重豕？用。



图一七　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：481)(原大)



图一六　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：484)(原大)



图一八　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：505+520+1546)(原大)

1. 庚辰岁妣庚小宰，子祝？在廪。一

2. 甲申岁祖甲小宰，𠂤𠂤一，子祝？在廪。一二

3. 乙酉岁祖乙小宰，𠂤，𠂤𠂤一？一二

4. 乙酉岁祖乙小宰，𠂤，𠂤𠂤一，𠂤祝？在廪。二三四

廪，字本作𡍮、𡍮、𡍮、𡍮诸形，当为一字，于卜辞中为地名。

𠂤，《殷墟甲骨刻辞类纂》[15]与《甲骨文字诂林》[16]均释为"龟"，《殷墟卜辞综类》[17]与《甲骨文字集释》[18]释为"员"，均欠妥，与字形不符。究竟为何字，待考。在本片为人名。此字又见于其他组的卜辞，应为异代同名。

(十六)H3：906　龟腹甲。基本完整，左、右甲桥及甲首上部的边缘稍有残缺(图二五；图

2. 祝，于白一牛用，𠂤岁祖乙用，子祝？一二三

3. 祝，于[illegible]牛用，𠂤岁祖乙用，子祝？一二三

4. 乙酉𠂤岁祖乙[illegible]牛、𠂤牛、白豚、[illegible]，子祝？一二三

5. 戊子岁妣庚一犬？一二

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第1、3辞及4、5辞之间有界划。

𠂤，在877片作𠂤，与𠂤𠂤同为𠂤字，只是手的位置与写法有差异，意义相同，为祭名。

𠂤、岁亦为祭名。

宜，在第6辞为动词，祭名。

𠂤牛，即杂色牛。

入，在本片作地名。此字在卜辞中常作动词，有出入、贡纳之意，作地名之例甚少，曾见于《屯南》附12"辛酉卜，在入，𢦏有祸？"

(十一)H3：484　龟腹甲。完整(图一六；图一七)。

1. 辛酉卜：丁先狩，迺又伐？一

2. 辛酉卜：丁其先又伐，迺出狩？一

伐，在此片为祭名。卜问先狩猎还是先进行伐祭。

(十二)H3：505+520+1546　龟腹甲。缺后左甲、前甲、首甲与中甲(图一八；图一九)。

1. 庚午卜，在𠂤：𠂤子齿于妣庚，[𡍮]牢，牝，白豕？用。一二

2. ☐又齿于妣庚，𡍮牢，𠂤牝，白豕至𠂤一？用。一二

尾甲为H3：520，后右甲绝大部分为H3：505，边缘"[𡍮]牢"为H3：1546。

此片是卜问为攘除子的齿疾而祭祀妣庚。

(十三)H3：620　龟腹甲。完整(图二〇；图二一；图版玖)。

庚申卜：岁妣庚牝一，子尻𠂤往？一二三四五六

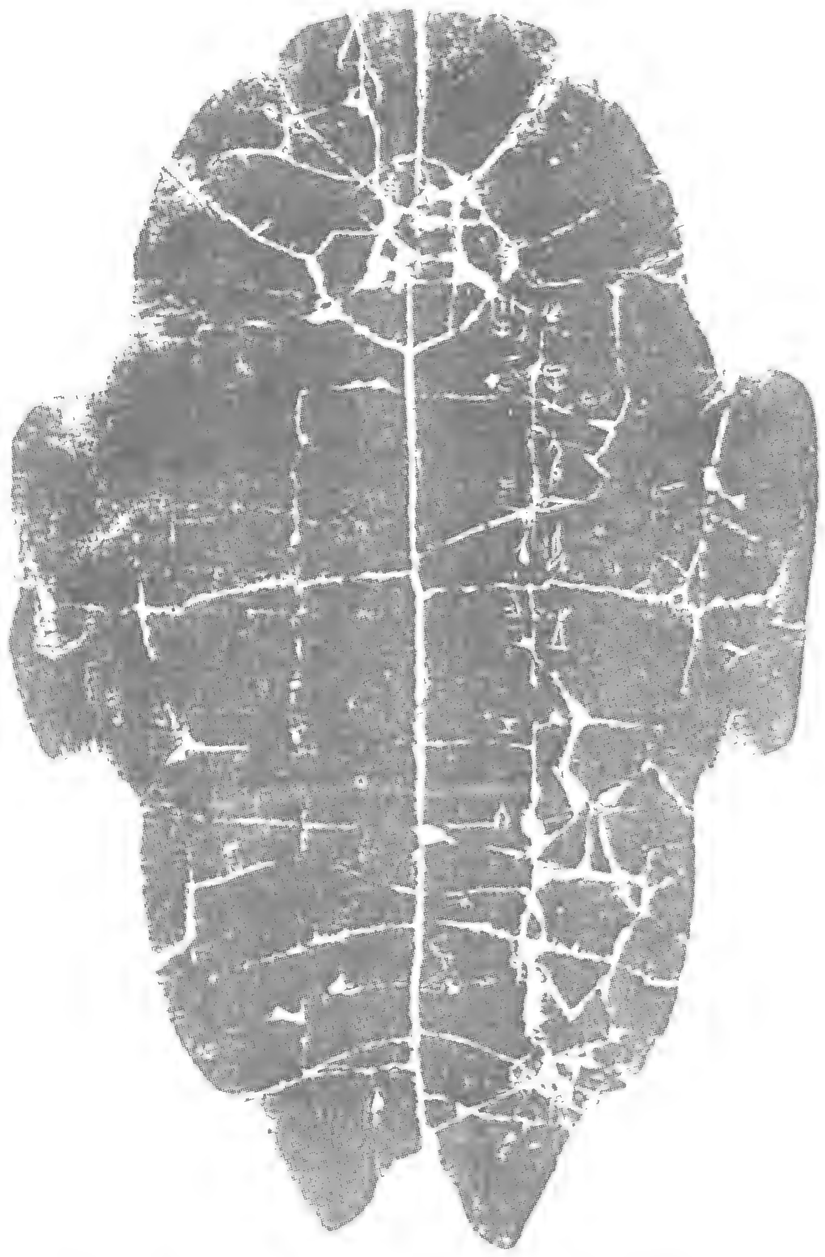
子尻，人名。见于宾组卜辞与自组卜辞。

𠂤、往，在此片为祭名。往祭即后世的禳祭[14]，从下文所引的宾组卜辞有贞问尻的疾病之事，推测此辞是为攘除他的疾病而祭祀妣庚。

(十四)H3：661　龟腹甲。基本完整，只前左甲上部及左甲桥边缘处稍有残缺(图二二；图二三)。

癸亥夕卜：日𠂤雨？子占曰：其𠂤雨。用。一

(十五)H3：877　龟腹甲。右甲桥残损，摹本中的虚线部分为人工修复，非原甲(图二四；图版拾)。



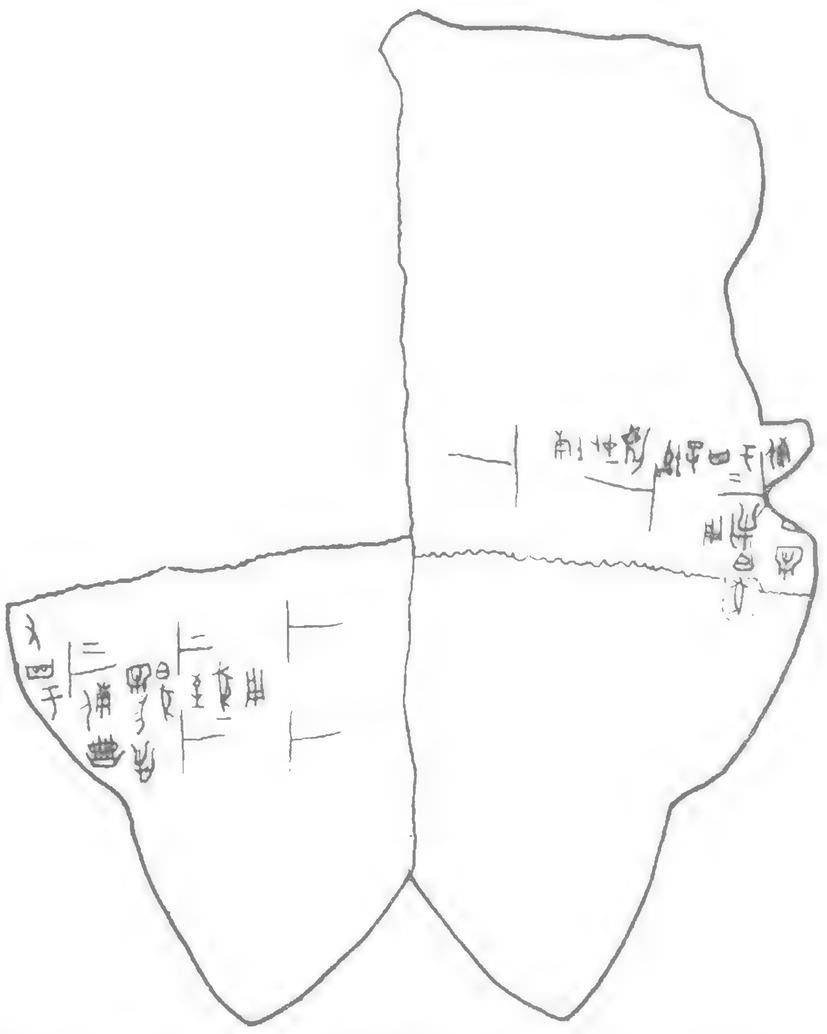
图二〇　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：620)(原大)

首，字乃人首正视之象形，风格稚朴，带有原始性，说明时代较早。

将，本作𤰔，在此片作祭名。

(十七)H3：940　牛胛骨。残留肩胛冈上部及骨臼(图二七；图二八：图版拾贰)。

1. 甲戌夕岁牝一，祖乙𠂤乡𠂤？一二三



图一九　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：505＋520＋1546)(原大)

1. 甲卜：子疾首亡𡆥？一

2. 子疾首亡𡆥？二

3. 乙卜：弜又(侑)于庚？一

4. 乙岁于妣庚彘？一

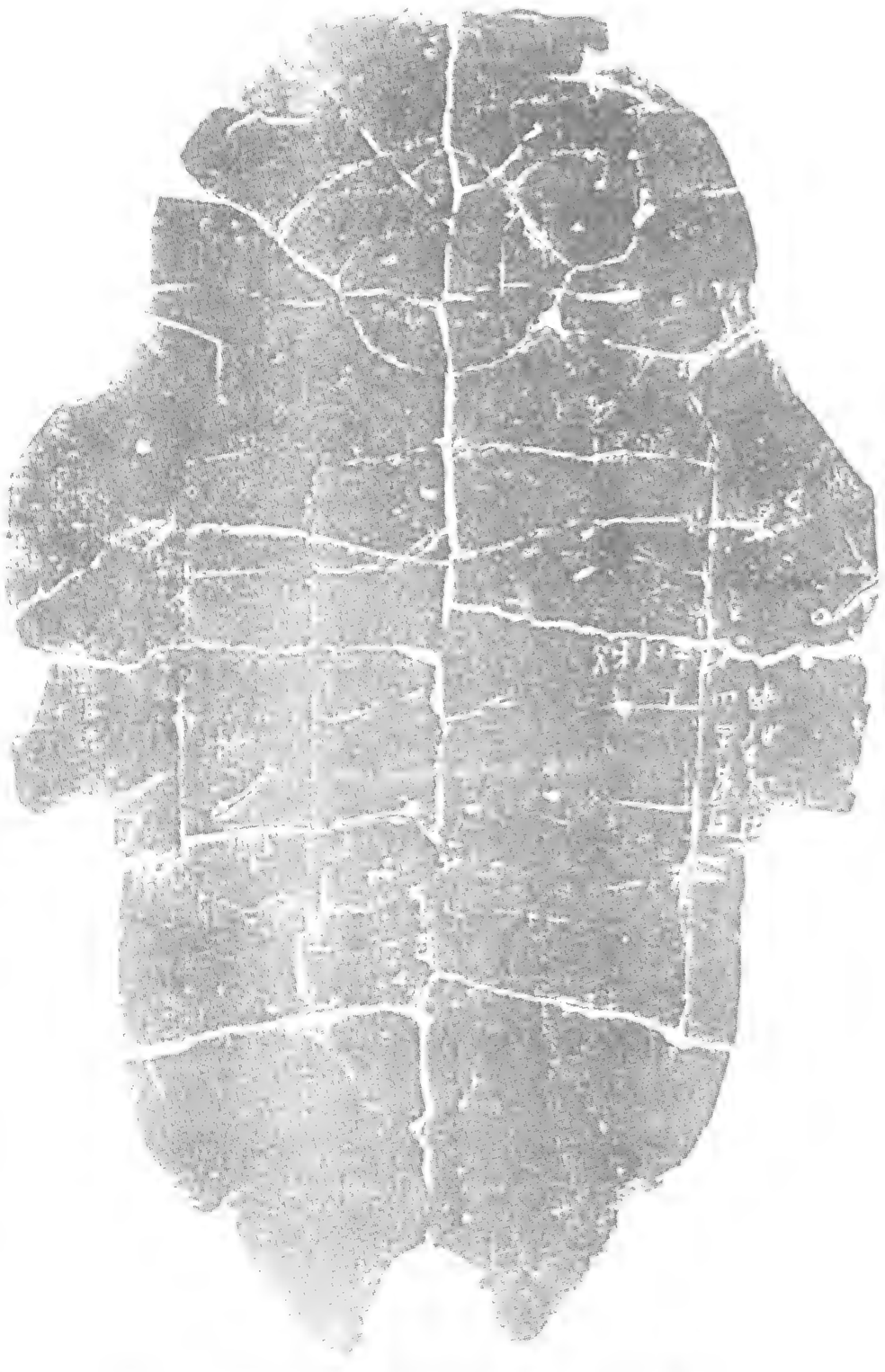
5. 乙岁于妣庚彘？二

6. 丙宜羊？一

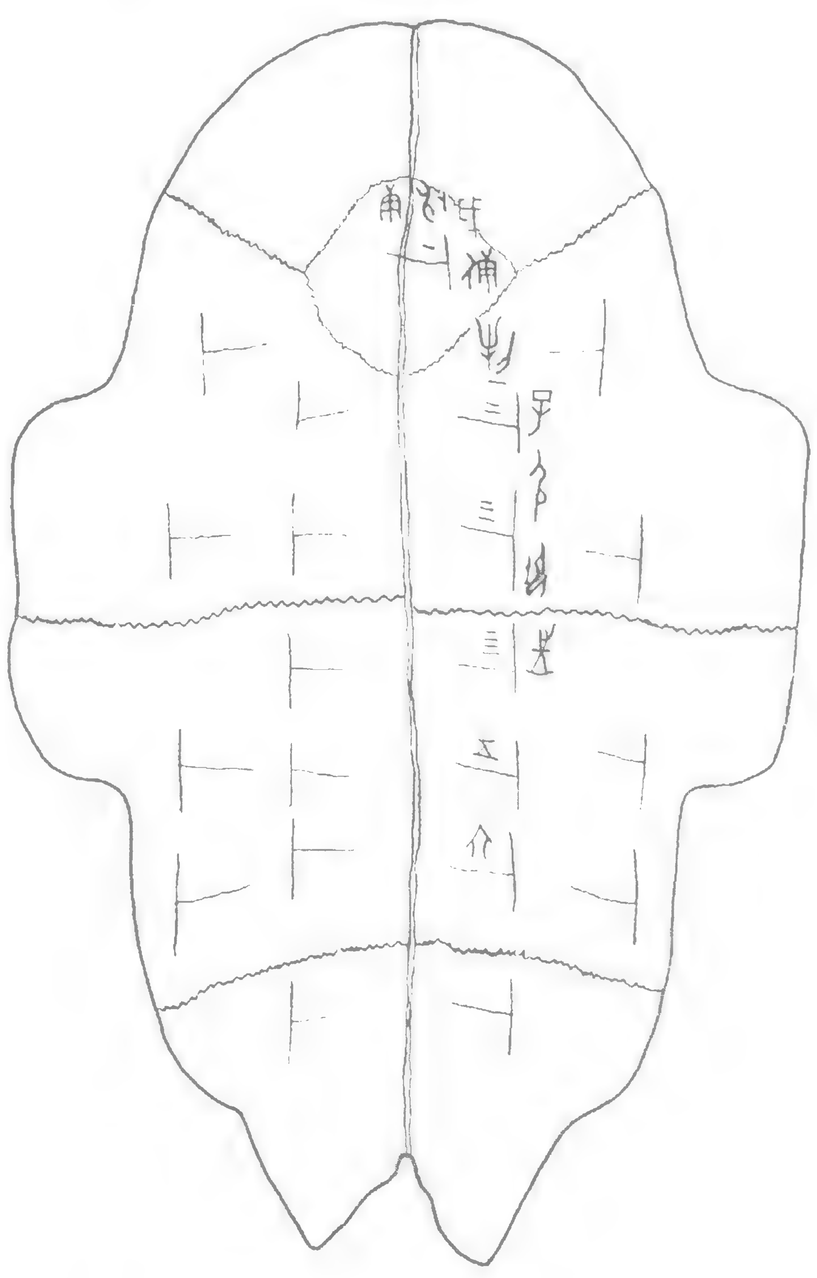
7. 丙弜宜？一

8. 戊卜：将妣己示眔妣丁，若？一

第3段辞"庚"字之前疑漏刻一"妣"字。



图二一　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：661)(原大)



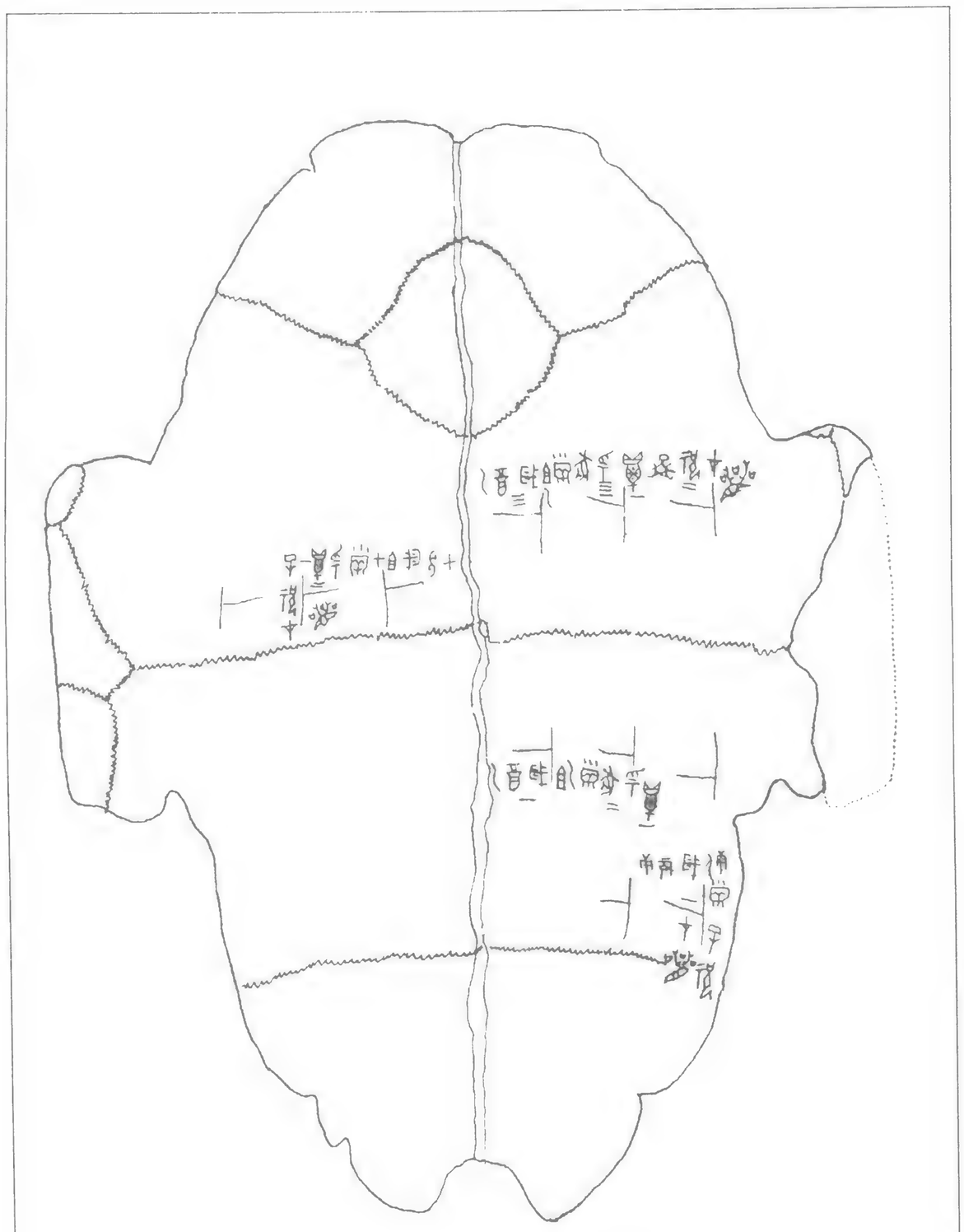
图二一　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：620)(原大)

2. 甲戌夕𣪘伐一，祖乙卯𠂤？九十

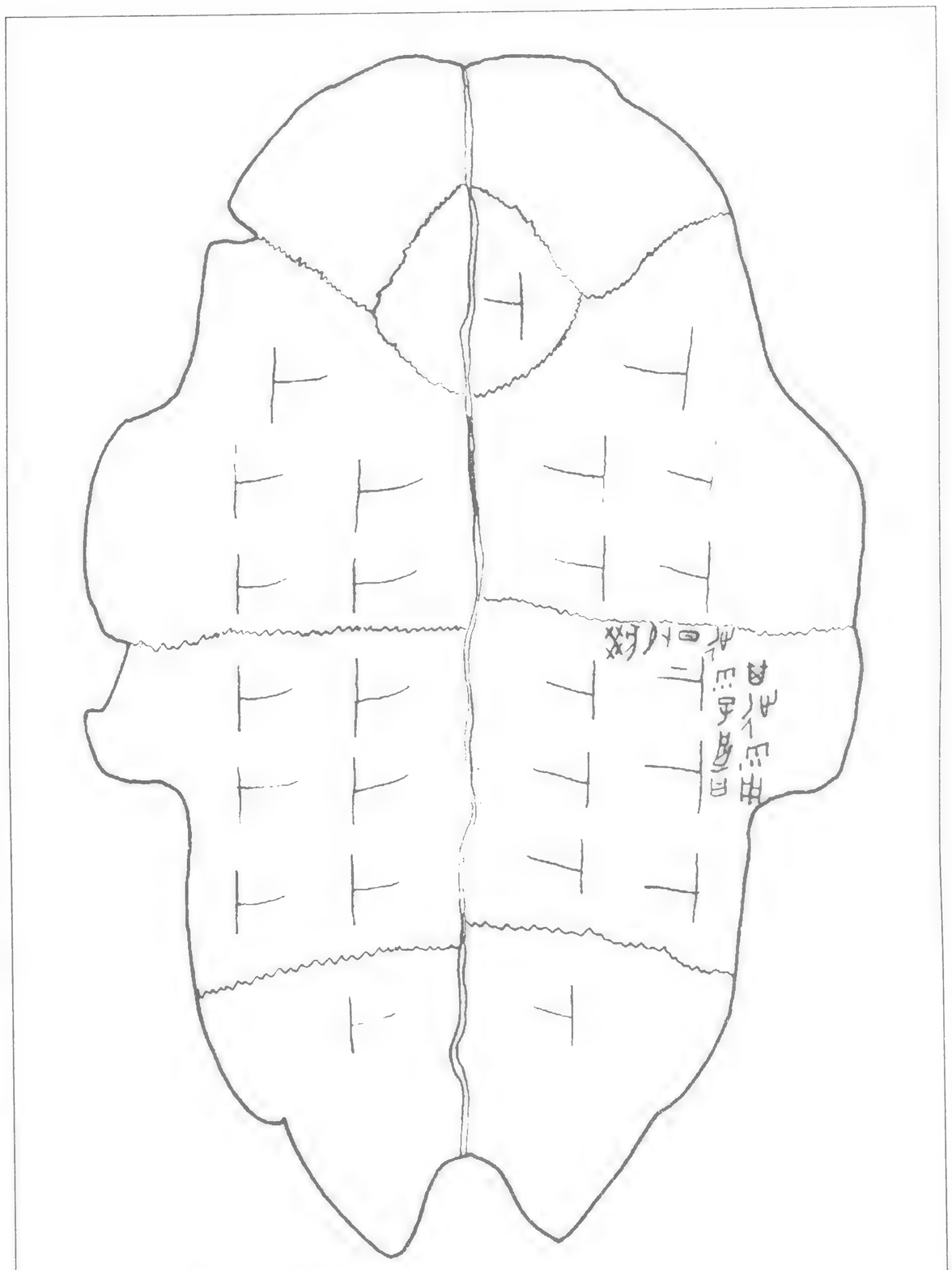
岁、𠂤、乡、𣪘、伐，均祭名。

(十八)H3：974　牛胛骨。残留肩胛冈上部及骨臼(图二九；图三〇)。

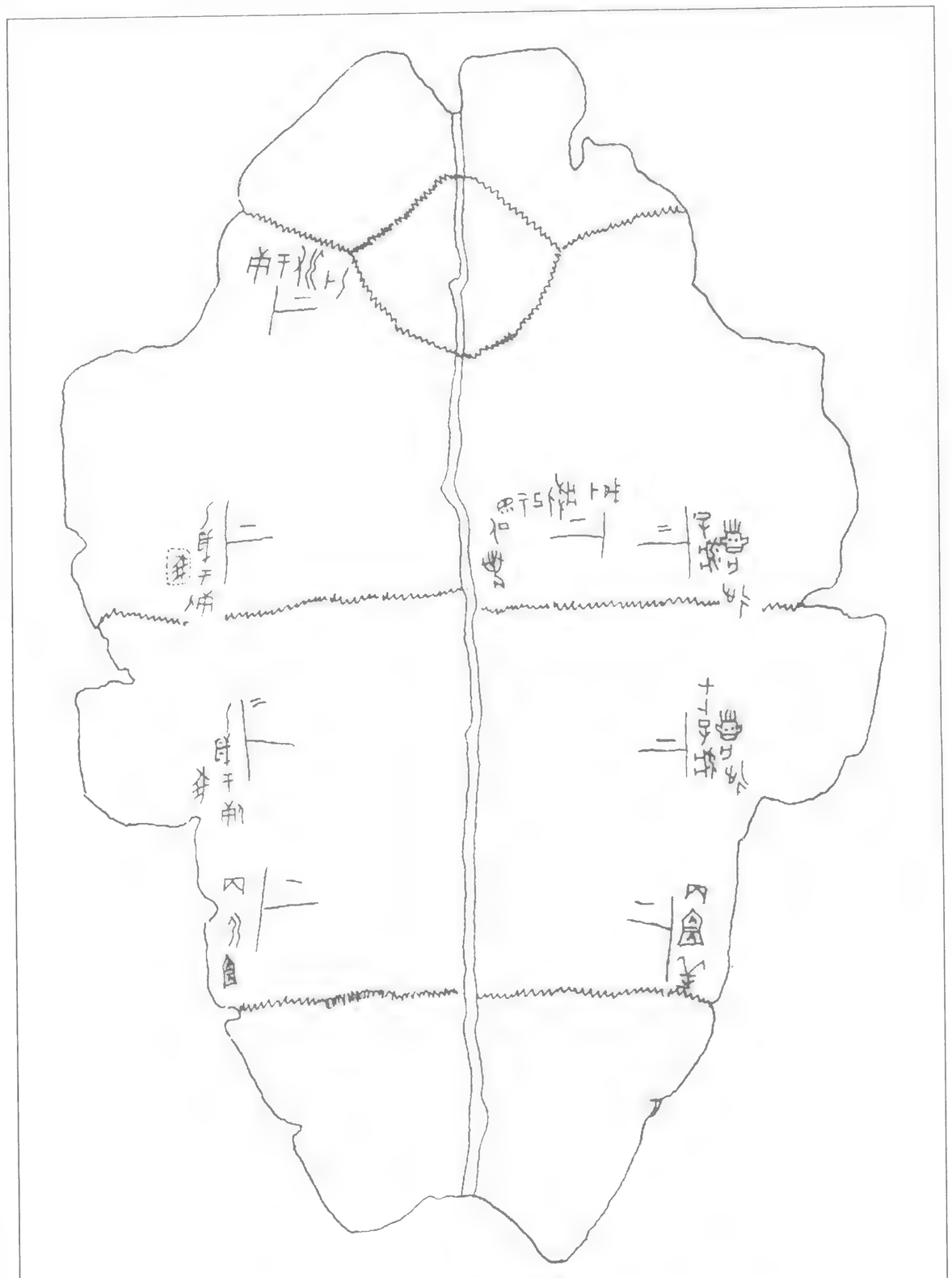
庚午岁妣庚牢、牝，祖乙𡆥，𢦏？在[奴]。



图二四　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：877)(9/10)



图二二　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：661)(原大)



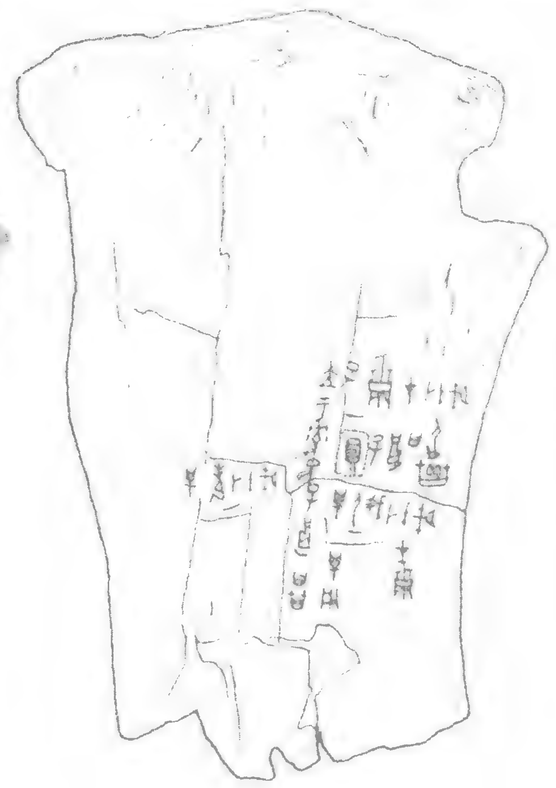
图二六　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：906)(17/20)



图二五　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：906)(17/20)



图三一　殷墟花园庄东地
出土刻字卜骨拓本(H3：985)(91/100)



图三二　殷墟花园庄东地
出土刻字卜骨摹本(H3：985)(91/100)

在该条卜辞之上部及左侧有界划。

此片之妣庚，当为祖乙之配偶。

(十九)H3：985　牛胛骨。残留肩胛冈上部及骨臼(图三一；图三二)。

1. 戊午卜，在㞢：子立于录中□？子占曰：企㠯。一

2. 戊午卜：我人禽？子占曰：其禽。用。在㞢。一

3. 戊午卜：弗禽？一

第1辞与2、3辞之间有界划。

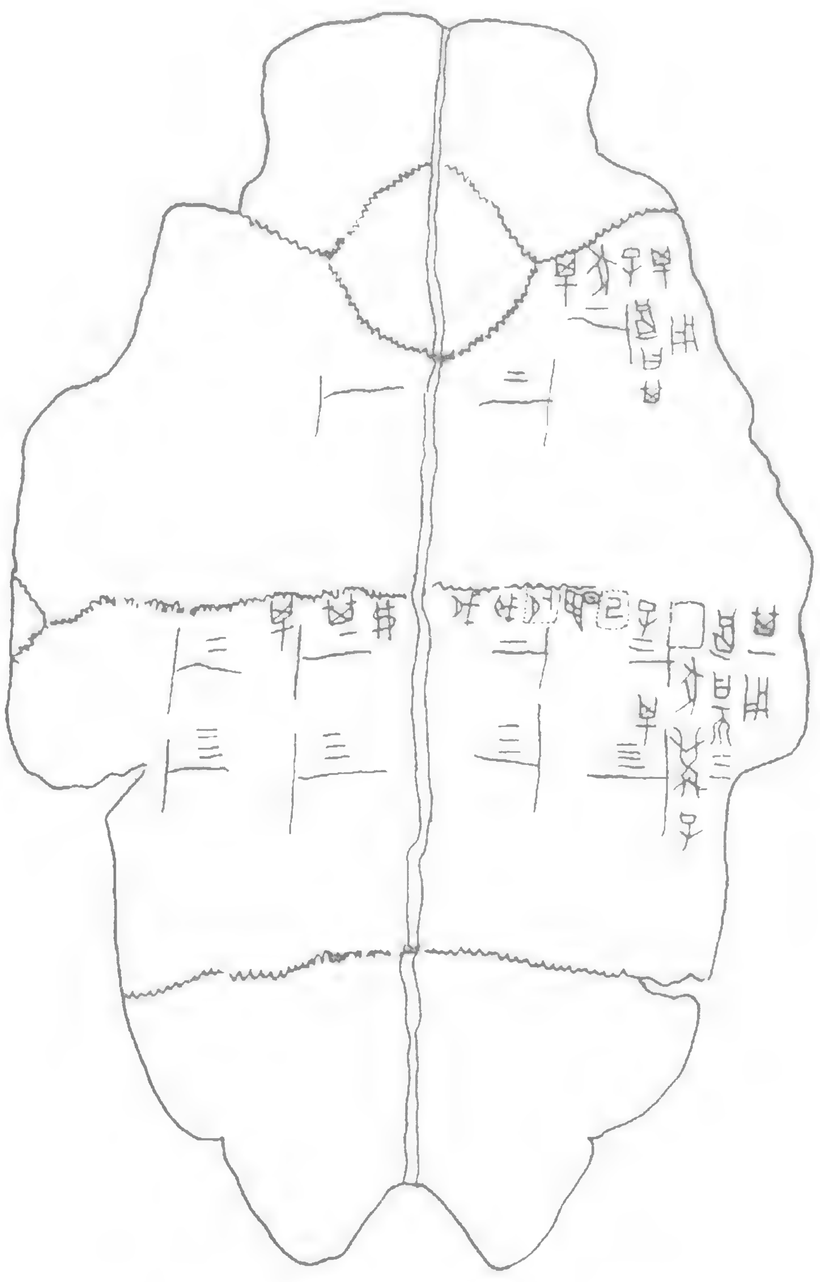
㞢，象形，与屯(《合集》19791)同为一字。在此为地名，是占卜之地点。

立，位也。

录中即"中录"，地名。

(二十)H3：1199　龟腹甲。基本完整，首左甲及后左甲边缘略有残损(图三三；图三四；图版拾叁)。

1. 禽系？子占曰：其禽。用。一二

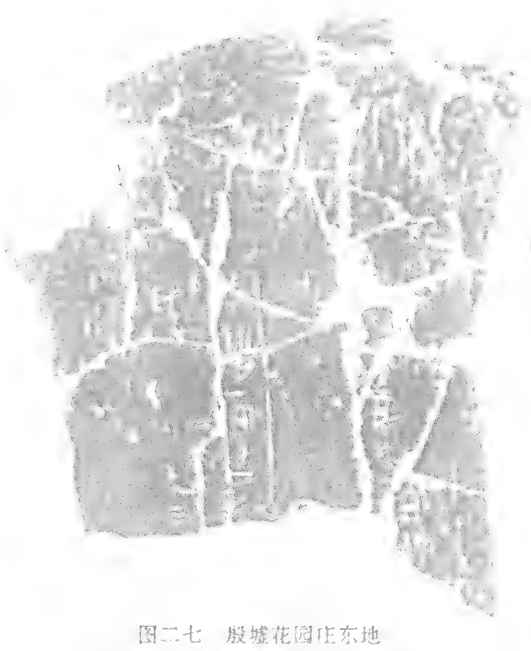


图三四　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：1199)(原大)

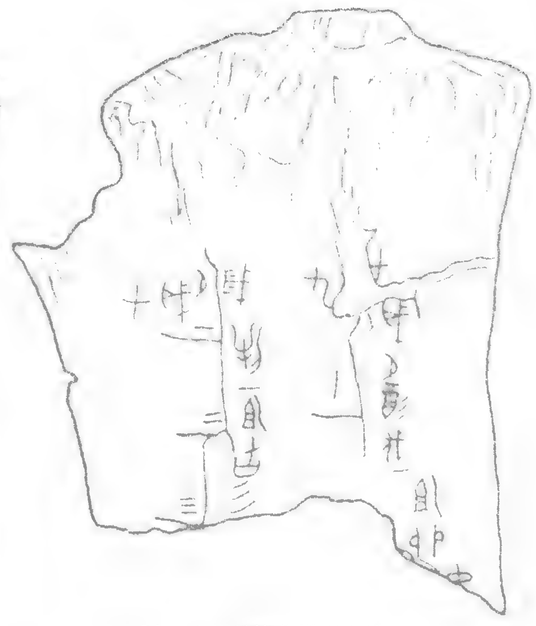
兆，非兆序，而"不三其一"意义难通。

第2辞"不其禽"之禽移位于左边一行，这种情况很少见。

(二一)H3：1347　龟腹甲。完整(图三五；图版拾壹)。



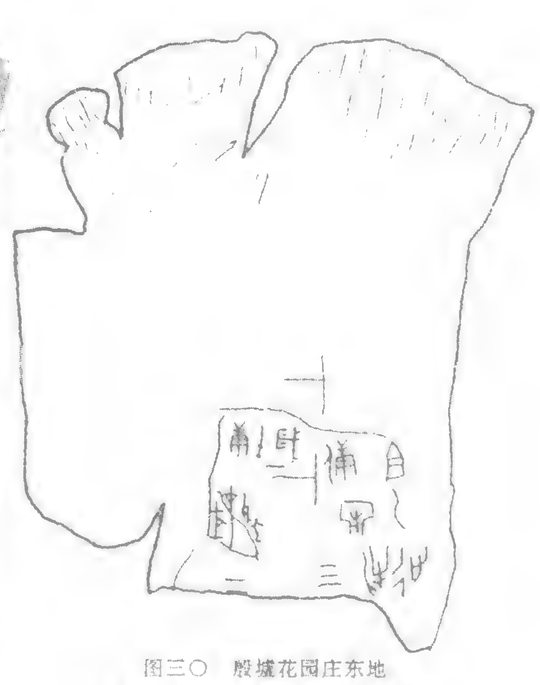
图二七　殷墟花园庄东地
出土刻字卜骨拓本(H3：940)(93/100)



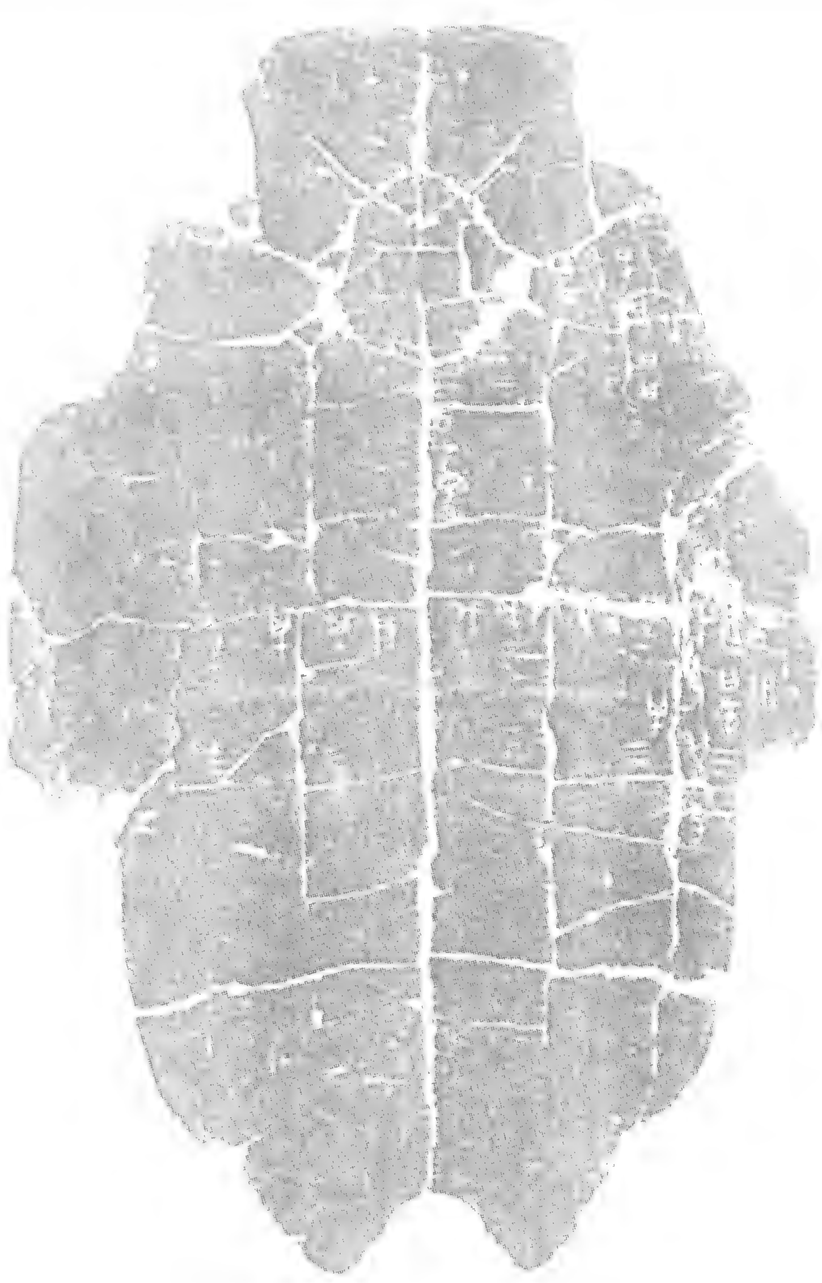
图二八　殷墟花园庄东地
出土刻字卜骨摹本(H3：940)(93/100)



图二九　殷墟花园庄东地
出土刻字卜骨拓本(H3：974)(93/100)



图三〇　殷墟花园庄东地
出土刻字卜骨摹本(H3：974)(93/100)

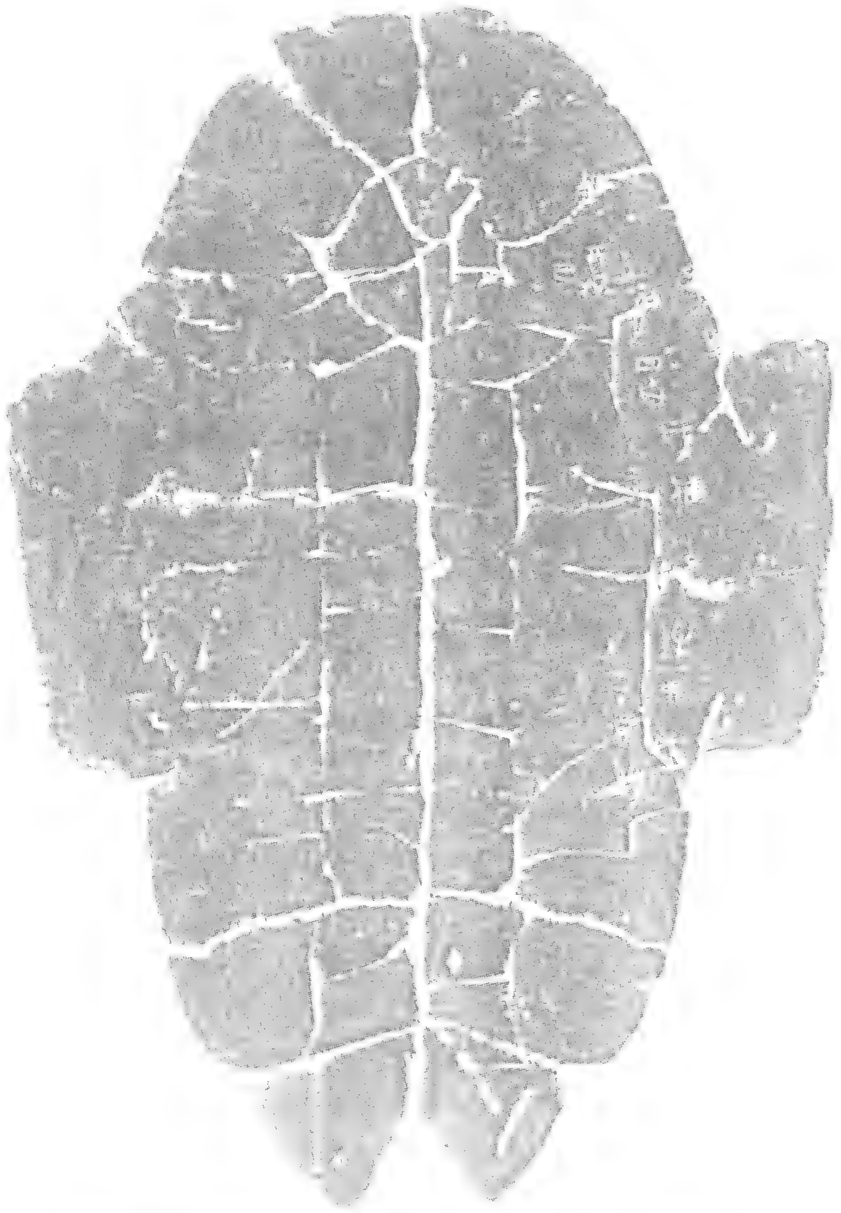


图三三　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：1199)(原大)

2. 戊戌夕卜：翌日己子[酉]豕，禽？子占曰：不其禽。用。一二三四

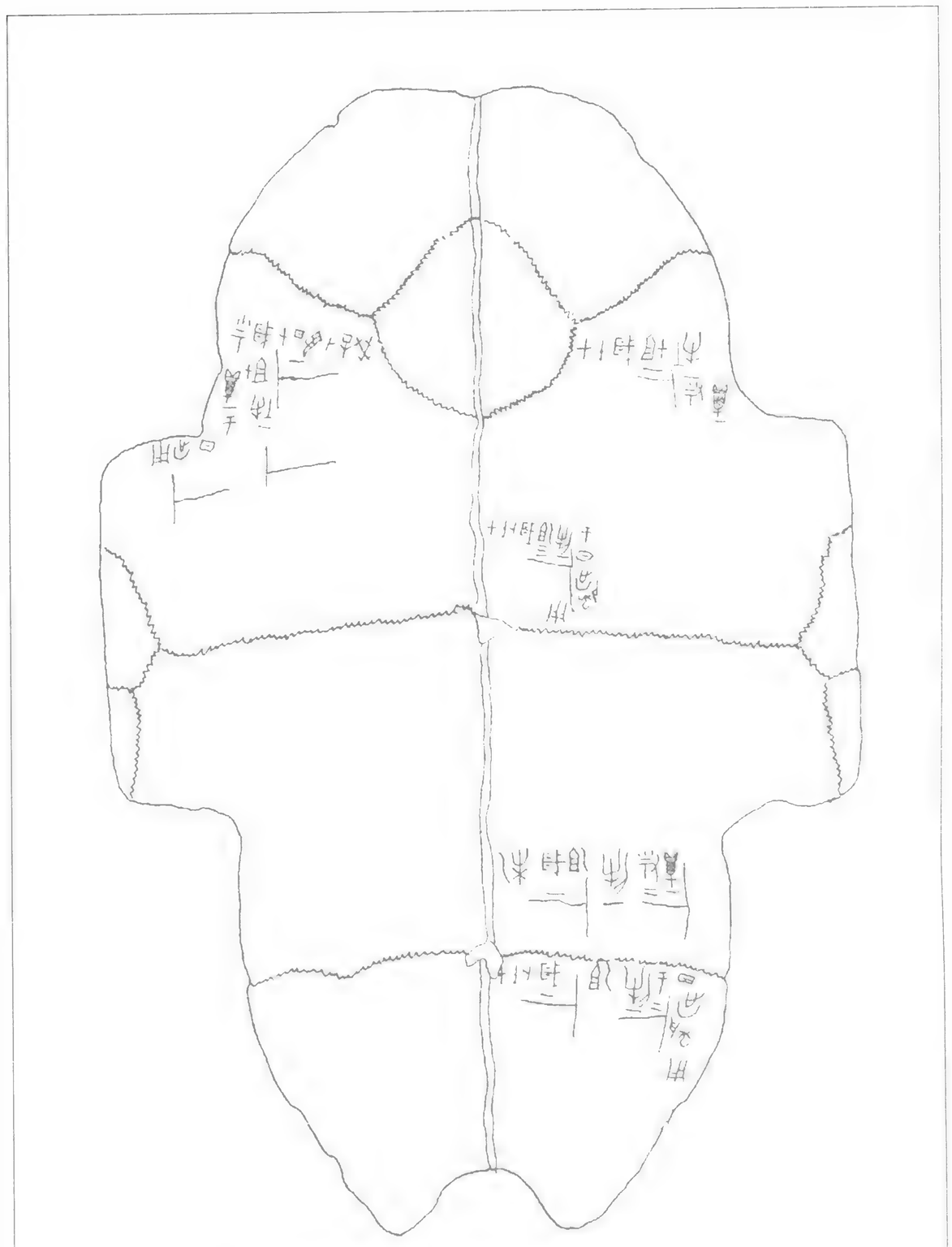
3. 弗其禽？一二三四

"己"，为"己亥"之省。第2段辞"不"字下的"三"，"其"字下的"一"，似衍字，因为该处无卜

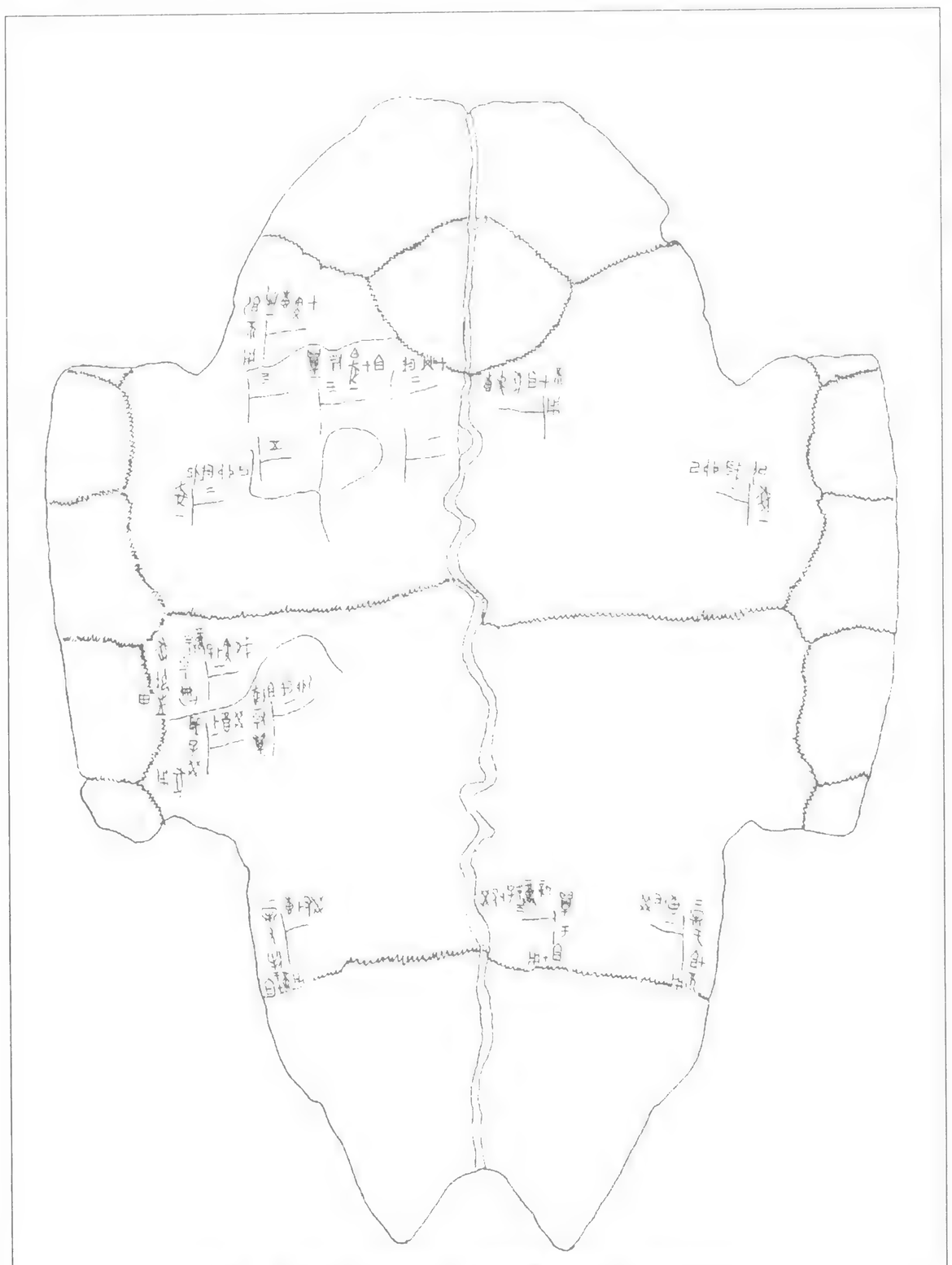


图三六　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲拓本(H3：1406)(原大)

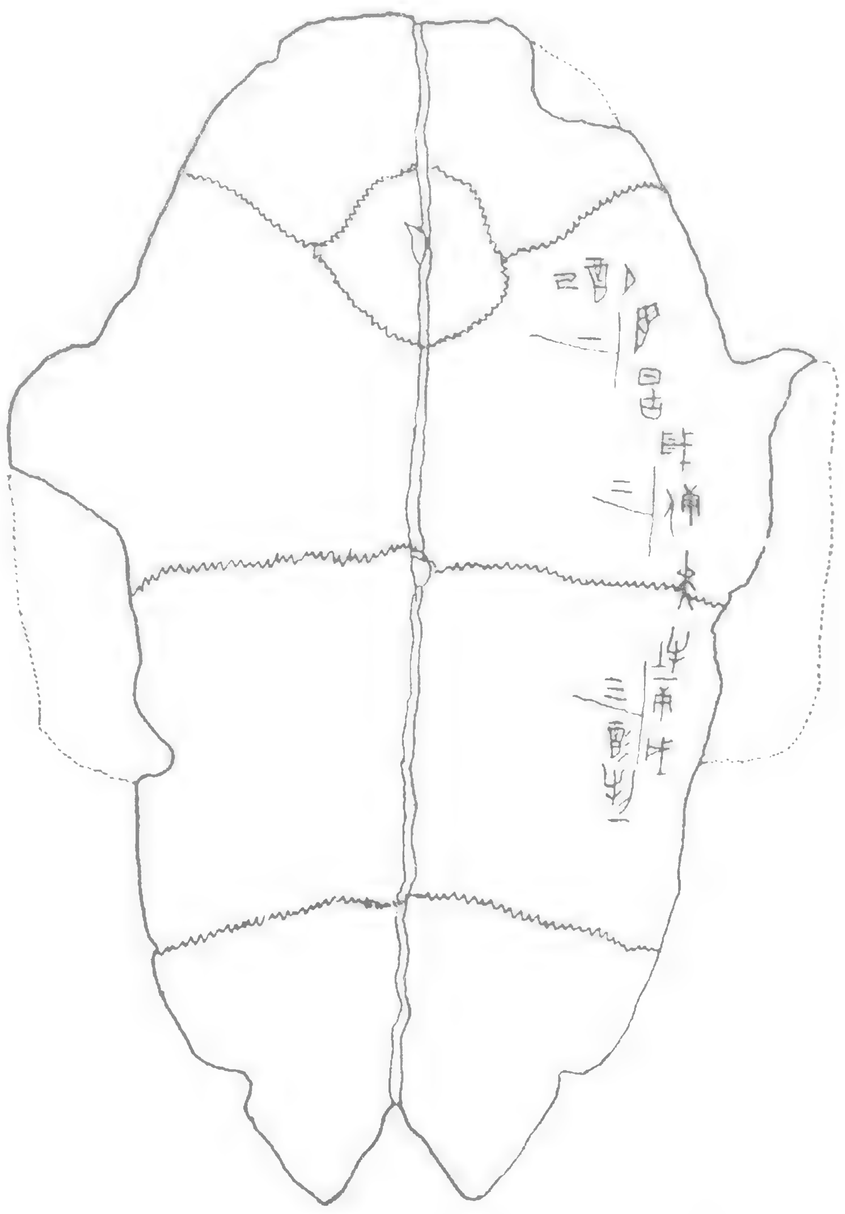
1. 癸巳卜：翌日甲岁祖甲牡一，权鬯一，于日出？用。
2. 甲午岁祖甲牡一，权鬯一？
3. 甲午卜：岁祖乙牝一，于日出饮？用。一二
4. 乙未岁祖乙牝一，权鬯一？一二
5. 甲午卜：岁祖乙牝一，于日出饮？用　一



图三五　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：1347)(9/10)



图三八　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：1417)(3/4)



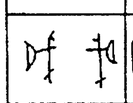
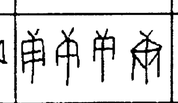
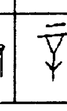
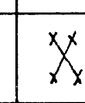
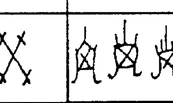
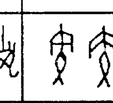
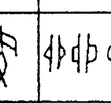
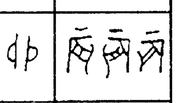
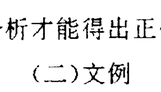
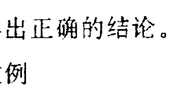
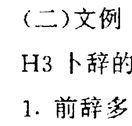
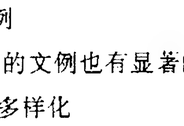
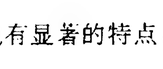
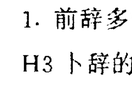
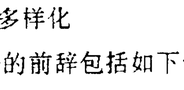
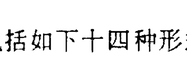
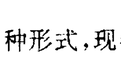
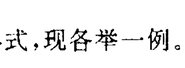
图三七　殷墟花园庄东地出土刻字卜甲摹本(H3：1406)(原大)

该版第2、4两辞属于命辞，分别省略了前辞“癸巳卜”和“甲午卜”，由卜辞内容及兆序为一和一、二可推知，它的前辞应分别为“癸巳卜”和“甲午卜”，与第1、3两辞相同。

(二二)H3：1406　龟腹甲。左、右甲桥多有残缺，摹本上的虚线部分为人工修补，非原甲(图三六；图三七)。

己酉夕：翌日各岁妣庚黑牡一？庚戌彭牝一。一二三

表一　　花园庄东地 H3 甲骨刻辞常用字字形表

戊	庚	辛	癸	子	寅	卯	辰
							
午	未	申	酉	其	令	𠂤	重
							
囚	占	羌	鬯	贞	于	牛	羊
							
戉	雨	弜	旬	隹	不	牝	子、巳
							

晚期)的典型字体,因而作为一项断代的标准。但花东 H3 卜辞中,此种"晚期"字体比比皆是。而 H3 坑的地层关系、共存陶器均属早期(殷墟一期)。这表明,上述这些所谓的"晚期"字体早就出现了,只不过尚未流行,至文丁、帝乙、帝辛时期才被王的贞人集团所接受,成为当时广为流行的字体。所以,随着新资料的不断出上,过去对甲骨文断代的一些传统看法有的应当修正。甲骨文的断代需从多方面考虑,不仅要注意区分不同的卜辞组,研究卜辞的内容(称谓、贞人、字体、文例、事类等),还应十分注意甲骨文出土的地层、坑位、共存陶器的形态,多方面的综合分析才能得出正确的结论。

(二)文例

H3 卜辞的文例也有显著的特点,下面从前辞、占辞、用辞、行款几方面加以叙述。

1. 前辞多样化

H3 卜辞的前辞包括如下十四种形式,现各举一例。

(1)干支卜　乙酉卜:弗其获?　(H3:52)。

(2)干支夕卜　壬辰夕卜:其宜羌一于妣,若?用。　(H3:1325)

(3)干支夕　己酉夕:翌日𠂤岁妣庚黑牡一?　(H3:1406)

(4)干支卜贞　己卯卜贞:龟不死?　(H3:486)

(5)干卜　壬卜:三日雨至?　(H3:757)

表二　　花园庄东地 H3 龟甲行款形式表

序号	腹甲行款	左甲(中缝之左)	右甲(中缝之右)
1	单列直行		
2	单列左行或右行而下		
3	单列左行或右行		
4	单列转复列左行或右行		
5	复列左行或右行		
6	单列左行(或右行)而下再左行(右行)		
7	左行(或右行)而下再右行(左行)		
8	右行而下转左行再上行		
9	下行而左或右		

《合集》24239"丙子卜王在夾卜"。在黄组卜辞中多作"干支卜在某贞",如《合集》36501"丙午卜,在商贞",又作"干支某卜在某贞",如《合集》36743"丁卯王卜在朱贞"等。这两组记地点的卜辞前辞多记卜者,或于地名之后有"贞"字,与 H3 卜辞的前辞仍存在一些差异。

2. 常见占辞

H3 卜辞的占辞大多作"子占曰",如 H3:52、333、661 等片,少数作"子曰",如 H3:793"子曰:其雨"。"子曰"是"子占曰"的省略形式。

在武丁时代的几组卜辞中,宾组卜辞常见"王占曰",个别作"王占卜曰"。自组卜辞也发现十多例占辞作"由占曰"、"由曰"、"扶曰"。而在子组卜辞中虽然也存在子作占辞,但较少见。

3. 用辞使用极普遍

H3 卜辞的用辞,有"用"与"不用"两种,以前者为多。"用"字有的出现于兆旁,如 H3:53 全版卜甲无卜辞,在四个卜兆旁各刻一"用"字。而大多数"用"字出现于卜辞的末尾,在命辞或占辞之后,如上文提到的 H3:313、333、661 等片。

4. 行款较复杂

H3 卜辞就卜甲而言,目前所见的行款变化有九种形式(表二)。

(1)单列直行

见于龟腹甲与背甲,一般字数较少。如腹甲 H3:237 第 2、3、4 辞(图一〇;图一一)。背甲"己酉夕"后省"卜"字。"庚戌彭牝一"为验辞。

(二三)H3:1417　龟腹甲。完整。此龟较大,长 31、宽 22.2 厘米(图三八;图版拾肆)。

1. 癸丑卜:重一牢又牝于祖甲?不用。一

2. 癸丑卜:重二牢于祖甲?不用。一

3. 癸丑卜:子福新鬯于祖甲?用。三

4. 甲寅重牝祖乙?不用。一

5. 乙卯岁祖乙𥘅一、衩鬯一?一

6. 甲子岁祖甲白𥘅一、衩鬯一。二三四

7. 重黑豕祖甲?不用。一

8. 癸酉卜:岁子癸豕?用。一

9. 戊寅卜:子福小示,酉𥘅,𠂤,往田?

10. 己卯岁妣己兇一?一

11. 己卯岁妣己兇一?二

福,祭名。饶宗颐先生指出,"作动词时,可读为'酒',《说文》酒为'酒'之或体"[39]。

三、H3 甲骨刻辞的特点

(一)字体

H3 甲骨刻辞的字体比较规范,异体字较少。字体风格大多较细小、工整、秀丽,常见折笔字,也有不少笔锋较圆润的字。一些干支字及常用字的写法富有特征,如表一所示。

表中所列的 33 个字,与宾组卜辞相同的有"贞"字,与自组卜辞相同的有辛、子、酉、牛、羊、午、庚、未、旬等字,与午组卜辞相似的有牛、于二字,与子组卜辞相似的有辛、子、辰等字,与无名组卜辞相似的有辛、雨、羌、未、庚等字,与"历组一类"卜辞相似的有酉、弜、重、未、羌、庚等字,与"历组二类"卜辞相似的有未、巳、羌、不等字,与黄组卜辞相似的有癸、占、子、辛、午、巳等字。其中戊、戌、令、𠂤、鬯、牝等字是此坑卜辞特有的写法,别具一格。

除表中所列之外,像侑祭之侑,宾组、出组、自组、午组等较早的卜辞作"𠂤",H3 一律作"又"。"以"字宾组卜辞作𠂤,H3 卜辞作𠂤。

另一个值得注意的现象是,H3 卜辞中某些字的写法表现了更多的原始性,如上文提到的 H3:906 的"首"字像人正面之形,刻划细致;H3:52 的"陟",作偏旁的"阜"字横写,山峰直立于地面,远比竖写的阜字象形;H3:126+1547 的"涉"字,双"止"横写置于水符两侧,所会之意更为直观。

应当指出的是,H3 甲骨刻辞的字体中有不少属于过去学术界公认的晚期字形,尤其是四边出头的"癸"字,在字下面加一弯折笔划的"占"字,一直被甲骨文研究者认为是第五期(殷代

(6)干夕卜　甲夕卜:日不雨?　(H3:793)

(7)干卜贞　癸卜贞:子耳鸣无害?　(H3:196+197)

(8)某贞　子贞。　(H3:454)

(9)干支　戊辰:岁妣庚羌一?　(H3:701)

(10)干支昃　辛酉昃:岁妣庚黑牝,子祝?　(H3:540)

(11)干支卜某贞　癸卯卜,亚奠贞:子占曰:冬(终)卜用。　(H3:212)

(12)干支卜,在某　壬申卜,在徨:其𠂤于妣庚,酉十宰,卜鬯?　(H3:313)

(13)干卜,在某　庚卜,在麓:重五牡用,至𠂤妣庚?　(H3:113+1518)

(14)贞　贞:子亡祸?　(H3:1158)

在上述十四种形式的前辞中,以"干支卜"、"干卜"最为常见;"干支夕"、"干支昃"较少;"干支卜某贞"最少,目前只见一版。"干支卜"、"干支卜某贞"、"干支卜贞"、"干支"等为各期各组卜辞中较常见的前辞形式,(2)(3)(5)(6)(7)(10)六种前辞在各期各组卜辞中少见或未见。

H3 卜辞的前辞除种类繁多之外还有三个特点:

其一,只记天干,省去地支。其他组的卜辞也偶见不记地支的例子。

例一,《丙》57(2)"己卜贞:勿𠂤癸?"(宾组)

从拓片上看,"己"与"卜"之间,留出地支的位置,"贞"字上亦有很大的空间,与之对贞的该片第(1)辞的前辞为"[己]丑卜,宾贞",可见《丙》57(2)本来是要刻地支与贞人名的。

例二,《续》3.35.4"[辛]卜,出贞:今夕亡祸?"(出组)

"辛"与"卜"之间亦空出地支的位置。看来,这两条卜辞未刻地支是属于漏刻,非卜者的原意,与 H3 卜辞只记天干的前辞之区别是明显的。H3 卜辞省去地支的前辞数量较多,是这组卜辞的卜者刻记卜辞的惯用形式。

其二,在干支或天干后记时间词夕、昃。这类前辞过去虽有发现,但只有数例。

记"干支夕卜"的前辞曾见于午组卜辞与历组卜辞。如《合集》22093 所录午组卜辞"丙午夕(夕"本作𡇠)卜:侑岁于父丁羊",《合集》32171 所录历组卜辞"甲子夕卜:又祖乙一羌,岁三宰",同属此例。

记"昃卜"的卜辞见于自组卜辞,如《合集》21013"丁未卜,昃卜:翌日雨,小采雨东"。这条卜辞在《殷墟卜辞综类》记作"丁未卜:翌日昃雨,小采雨东",在《殷墟甲骨刻辞类纂》的"采"条后写作"丁……卜,翌日雨,小采雨东……",在"昃"条后又单列"昃卜"为另一条。细审原片,我们觉得这两种录文均欠妥。因为"昃卜"与"未卜"靠得很近,表示二者有密切关系,其字体较小,意味着与右面的卜辞不是同时契刻的,可能是以后补刻的,特意将丁未这天占卜是在昃的时段标出。

其三,在"干支卜"或"干卜"后记地点。这类前辞在 H3 中亦为数不少,但在武丁时期的各组卜辞中甚为少见,而出组卜辞和黄组卜辞中却较常见。出组卜辞多作"干支卜某在某卜",如

《乙》4063、4925、6690等，在中缝两侧刻辞行款向内，在右左行，在左右行。子组卜甲卜辞的行款与王卜辞有显著不同，不论中缝之两侧或卜甲外缘，卜辞的行款大多是左行。如《合集》21586、21805、21635、21555、21804、21793、21537等片，全版卜辞均同向，都左行。在子组卜甲中虽有不同方向的卜辞，但数量不多。

H3卜甲刻辞与王卜甲刻辞的相同之处在于，沿腹甲中缝而刻的卜辞大多方向朝外，左甲左行，右甲右行。稍有不同的是，H3卜辞单列（横行）的较多，或始刻时先单列（横行），然后再转复列。

H3卜甲刻辞与王卜甲刻辞及子组卜甲刻辞行款的差异表现为：(1)沿首尾的两边刻辞，与沿中缝两侧刻辞方向相同，均自内而外，自外而内的例子极少，在本文发表的二十版卜甲中，只见H3：113＋1518第4辞一条卜辞（图五；图版肆）。(2)在一版有多条卜辞的完整卜甲中，未见方向完全相同的卜辞。(3)呈匚冂形（或称侧置的U字形）行款的卜辞常见，而过去发表的具有这种行款的卜辞甚少。在《合集》20624所录自组卜甲的左甲有“□辰卜：王𠂤有听”一条卜辞，文字呈这种排列方式，但这种例子很少。

H3的刻辞卜骨仅5片，且无一片完整者。本文发表的三片均属牛胛骨的中上部。左胛骨的行款有两种，一片如H3：940第1辞（图二七；图二八），单列右行而下。另一片如H3：974（图二九；图三〇），先单列，转复列右行，再后的三字又左行。但后三字与牝、𤰔两行字有较大的间距，而与第一、二字“庚午”相近。整条卜辞似冂形，较为特殊。右胛骨H3：985第1、2两段辞是左行而下再右行，第3辞属单列左行（图三一；图三二）。

过去发现的殷墟卜骨刻辞的行款，如董作宾先生所言：“缘近边两行之刻辞，在左方，皆为下行而左，间有下行及左行者。在右方，皆为下行而右，亦间有下行及右行者。左胛骨中部如有刻辞，则下行而右；右胛骨中部反是，但亦有下行而右者。”[22]H3卜骨刻辞的行款与上述的规律不符。

（三）祭祀对象与祭名

H3卜辞的祭祀对象常见的有妣庚、妣己、祖乙、祖甲、兄丁、子癸，还有妣丁、妣甲、上甲、大乙、大甲、祖庚、祖辛、祖丁、祖戊、母戊等。这些称谓，绝大多数都见于宾组卜辞中，也有的见于子组、午组等非王卜辞中。

H3称谓的特点是：(1)未见各组卜辞中常见的父辈称谓；(2)未见祭祀上甲以前的先公；(3)未见祭祀山川、社等自然神祇。

H3卜辞的祭名有岁、𠂤、𣪊、彡、伐、𠂤、𠂤、祝、将、又、𠂤、往、爵等多种，以岁祭最多，次为𠂤祭。武丁时期的王卜辞与非王卜辞中虽有岁祭，但不如H3卜辞突出。在子组、午组、非王无名组卜辞中，𠂤祭最常见，H3卜辞𠂤祭亦较多，这是H3与这几组卜辞相似的一面。

祭祀时的祭品有牛（牡、牝）、羊（牂、羖）、豕（壮、豖）、白豕、犬、牢、宰、羌、艮、鬯等，一次祭祀用牲数量最多的是上文提到的H3：113＋1518第1辞，祭祀妣庚一次用三牂、二鬯、105头牛。H3卜辞所记的祭品种类及数量虽比不上宾组卜辞，但却比午组卜辞、子组卜辞、非王无名组卜辞要丰富。在非王卜辞中，祭祀用牲最多的是午组卜辞，《合集》22099记一次祭祀用羊158只。一百多头羊的价值当然比不上百头牛。

H3卜辞记祭祀用牲，不仅经常要记牡牝，而且还记牲的毛色等。其他各组卜辞虽也见这方面的内容，但没有H3卜辞那么普遍。

H3祭祀卜辞的另一个显著特征是，常见“某祝”（即由某人进行祈祷），其中以“子”祝最多。记述“某祝”之辞在已著录的卜辞中亦有发现，但数量不多，据《殷墟甲骨刻辞类纂》所录，“王祝”的辞条有18条，属第一期（一般认为属武丁时期）的只有2条。“𡆥祝”的辞条有8条，属一期的仅1条。这次发表的23片H3甲骨卜辞，属祭祀内容的16片，其中记“子祝”的4片11条卜辞，记“𡆥祝”的有1片1条卜辞。

（四）H3卜辞类型单一

H3所出的一千五百多片甲骨，在整治、钻凿形态等方面大体相似。有刻辞的甲骨，其字体、文例等基本一致。大多数卜辞是卜问子及与子有关的事类。毫无疑问，此坑卜辞的占卜主体不是王而是“子”。我们认为，H3卜辞全部是以“子”为占卜主体的单一的卜辞，这在殷墟出土的大型甲骨坑中还属仅见。

四、H3卜辞的性质

（一）历史的回顾

在讨论H3卜辞性质之前，先让我们简单回顾一下甲骨学界对殷墟卜辞性质的认识过程。

在甲骨文发现之初，学者们认为，殷墟卜辞都是殷王室的占卜记录。本世纪30年代末，日本学者贝塚茂树最先提出了“子卜贞”卜辞不是“王卜辞”的见解[23]。1953年，他与伊藤道治在《甲骨文研究的再检讨》一文中，正式提出了“王族卜辞”和“多子族卜辞”，指出武丁时代除了殷王朝公家的占卜机关外，还存在着王族私家的占卜机关和属于多子族私家的占卜机关[24]。1956年，陈梦家先生在《殷虚卜辞综述》中，将武丁时代的卜辞分为宾组、自组、子组、午组等卜辞，认为宾组卜辞是正统卜辞，而自、子、午三组则是“非正统”卜辞[25]。1958年，李学勤先生在《帝乙时代的非王卜辞》一文中，提出殷墟卜辞中存在着非王卜辞，并提出了划分非王卜辞的四个标准：(1)问疑者不是商王；(2)没有王卜，辞中也不提到王；(3)没有商王名号，而另有一套先祖名号；(4)没有符合商王系的亲属称谓系统，而另有一套亲属称谓系统[26]。李先生后来对自己的看法又做过修正。

1971年，安阳小屯西地出土了10片牛胛骨刻辞。这些刻辞上有“父乙”、“父庚”、“父甲”称谓，郭沫若先生将其定为武丁卜辞[27]。不久，裘锡圭先生根据字体风格定为三、四期卜辞，并认为卜辞上的亲属称谓与一般的亲属称谓不合，是由于这批卜辞是“非正统派”卜辞[28]。我们在《小屯南地甲骨》一书中，持相同的看法，并根据这批卜骨的钻凿形态，定为康丁、武乙时期卜辞[29]。

1979年，林沄先生在《从武丁时代的几种“子卜辞”试论商代的家族形态》一文中，将学界认定的“非王卜辞”划分为甲种、乙种、丙种，并认为这三种卜辞的占卜主体是“子”，因而都是“子卜辞”[30]。林沄先生的贡献在于，他将殷墟卜辞的划分从“王”与“非王”的区别提高到“王”与“子”的区别，并认为“子”是男性贵族的尊称，“子卜辞”中之“子”是奴隶主贵族族长。这对研究商代的家族形态有重要意义。1986年，彭裕商先生在《非王卜辞研究》一文中，支持并发展了林说，认为“子组”卜辞主人可能是武丁的兄弟或从兄弟[31]。

黄天树先生提出，“王室”与“王”是两个不同的概念，他认为，“王卜辞就是王卜辞，不能称之为‘王室卜辞’，非王卜辞就是非王卜辞，不能称之为‘非王室卜辞’。”又说：“在判定某一组（类）卜辞是王卜辞还是非王卜辞的时候，主要依据占卜主体（即主辞主人），而不是依据问疑者。”[32]这一看法无疑是正确的。

到目前为止，甲骨学界对殷墟卜辞性质的认识渐趋一致，都认为殷墟卜辞中存在着王卜辞和非王卜辞。我们认为，武丁时代的宾组、自组卜辞，祖庚、祖甲时代的出组卜辞，廩辛时代的何组卜辞，康丁、武乙时代的无名组卜辞，武乙、文丁时代的历组卜辞，文丁、帝乙、帝辛时代的黄组卜辞都是王卜辞；武丁时代的午组卜辞，子组卜辞、非王无名组卜辞，以及1971年小屯西地所出10片牛胛骨刻辞等，都是非王卜辞。当然，非王卜辞的情况也不完全相同，有的属于王室成员；有的虽不属于王室成员，但与殷王同宗，有密切的血缘关系；有的则可能是商族之外的他族。

我们认为，在卜辞分类中，不能只看卜辞字体，而要兼顾卜辞内容，因为卜辞内容最能反映卜辞性质，而卜辞字体的相同或相似，则可受多种因素影响。例如，《合集》21374“辛□王午，王贞：寻不囚（非囚字）？”该片字体属子组，但内容却是“王贞”。从实际内容出发，这条卜辞应该是王卜辞，而不是非王卜辞。类似的情况还有一些，此不一一列举。这里有一个问题需要解决，即正确认识整类卜辞的性质和正确看待特殊卜辞中的特殊情况，也就是人们常说的正确处理一般与特殊的关系。整组卜辞的性质是根据该类卜辞中的绝大多数（一般）卜辞的性质而定的，并不因为其中有一两个特例就去否定该类卜辞的性质。非王卜辞中，有些与殷王有密切的血缘关系，这些卜辞的主人又多在朝中为官。要求在这些卜辞中一点都不牵涉到“王”，不与“王”发生任何关系，实际上是不可能的。相反，有这种关系倒是正常现象。只要这类卜辞的占卜主体不是王，就可以确定该类卜辞是非王卜辞；至于个别的特例，是什么就是什么，实事求是。

（二）H3卜辞是“子卜辞”

上文已经提到，H3卜辞的最大特点是占卜主体是“子”。全坑未见为王而占卜的卜辞。这个“子”作为卜辞主人的主要依据是：

表三　　男性祖先称谓比较表

祖先称谓		H3"子"卜辞	子组卜辞	宾组卜辞	自组卜辞	午组卜辞	非王无名组卜辞
上甲		1488		《合集》248	《合集》19812		
大乙		876		《合集》4325	《合集》19817		
大甲		115+241	《合集》21540	《合集》4325	《合集》19828		
祖	祖乙	47A+984	《合集》21542	《合集》183	《合集》19838		
乙	下乙			《合集》270 正		《合集》22044	
祖辛		200		《合集》190 正	《合集》19812 反	《存下》257	
沃	羌甲			《合集》226			
甲	祖甲	47A+984		《合集》743	《合集》19812		
祖丁		659		《合集》849 正	《合集》19812		
南	南庚		《粹》338	《合集》14 正		《屯南》2118	
庚	祖庚	200		《合集》1822 正	《合集》19813	《合集》22079	
祖戊		1128		《合集》13871	《合集》19875	《合集》22051	
父戊			《合集》21544	《合集》2300	《合集》20017	《合集》22045	《合集》22187
阳	阳甲			《合集》6647 正			
甲	父甲		《合集》21543	《合集》2869 反	《合集》19838		
盘	盘庚		《合集》21538 甲		《合集》19798		
庚	父庚		《合集》21538 乙	《合集》6647 正	《合集》21251		
小	小辛		《合集》21538 乙				
辛	父辛		《合集》21542	《合集》6647	《合集》19920		《合集》22194
小	小乙			《合集》383			
乙	父乙		《合集》21597	《合集》226 正	《合集》19928	《合集》22083 甲、乙	
父丁				《合集》1905		《合集》22046	《合集》22197
兄丁		684+1152	《合集》21586	《合集》892	《合集》19907		
小己			《合集》21586				

了很少一部分，故称谓的搜集可能会有遗漏。如果出现这种情况，请读者予以谅解。

根据上表，可以看到如下几点：

1. H3 所祭先公先王中，仲丁以前的有上甲、大乙、大甲三人，但出现次数很少，一版或两版。这些先公先王也都是宾组、自组卜辞经常祭祀的。

2. H3 卜辞中所祭先王以近祖为主，其中祖乙最多，近 20 版；祖甲有 10 余版；祖辛、祖庚、祖丁、祖戊各 1 版。此中的祖甲应是沃甲(羌甲)，这是因为 H3 卜辞以祭近祖为主，祖乙以前只祭上甲、大乙、大甲三人；祖乙以下武丁祖辈名"甲"者只有沃甲，故祖甲应是沃甲。此中的祖庚应是南庚[34]，祖丁应是小乙之父祖丁。从祭祀出现的频率看，H3 卜辞中的"子"对祖乙、祖甲(沃甲)最为敬重，对祖辛、祖丁、南庚却很一般。被祭的祖戊不知为何人，有待研究。

3. H3 卜辞不祭阳甲、盘庚、小辛、小乙四人，而此四人恰恰是原子组卜辞最为敬重的，也是宾组、自组卜辞中的常祭先王。

4. 原子组卜辞所祭先王以父辈为主，集中在阳甲、盘庚、小辛、小乙四人，且均称父；祖辈以上者只有南庚、祖乙、大甲三人，且祭祀频率甚低，说明原子组卜辞主人亲父辈先王，而疏祖辈以上先王。

H3 卜辞同原子组卜辞所祭先祖既有联系又有区别。其联系在於，他们所祭先祖均见于宾组卜辞和自组卜辞，属殷之先公先王。其区别在于，H3 卜辞所祭多为南庚以前先王，且以祖乙、祖甲(沃甲)为主，而原子组卜辞所祭先王以父辈为主，集中于阳甲至小乙兄弟四人。这些事实说明，H3 卜辞主人"子"同原子组卜辞主人"子"是不同的两个人，H3 卜辞主人"子"很可能是沃甲之后，而子组卜辞主人"子"则可能是祖辛之后，祖丁之孙，是武丁的兄弟或堂兄弟。

H3 卜辞中女性祖先称谓主要有妣癸、妣己、妣庚、三妣庚、妣甲、妣丁、母戊等。为说明问题，现将 H3 卜辞中女性祖先称谓同子组、宾组、自组、午组、非王无名组等卜辞之女性祖先称谓比较，列如表四。

表四　　女性祖先称谓比较表

祖先称谓	H3"子"卜辞	子组卜辞	宾组卜辞	自组卜辞	午组卜辞	非王无名组卜辞
妣壬		《合集》21725	《合集》1823 正	《合集》19900	《合集》22050	
妣癸(中丁)	840+859		《合集》94 正	《合集》19903	《合集》22048	
妣己	224	《合集》21548	《合集》248 正	《合集》19882	《合集》22092	《合集》22211
妣庚	113+1518	《合集》21550	《合集》438 正	《合集》19806		《合集》22248
三妣庚	659					
妣甲(祖辛)	541		《合集》787			
妣丁	47A+984	《合集》21666	《合集》10520	《合集》19790	《合集》22096	《合集》22264
妣辛		《合集》21540	《合集》2491	《合集》19899	《合集》22074	
中母己		《合集》21805				《合集》22248(中母)
母庚		《合集》21554	《合集》2545	《合集》19965	《屯南》2673	《合集》22240
母戊	1258	《乙》1479			《合集》22076	
母壬		《合集》21556	《合集》926	《合集》19969		

表四同前表相类似，表中所列称谓以 H3 卜辞和子组卜辞所出现的称谓为主，并非将其他类型卜辞中所有女性祖先称谓统统列入。尤其需要指出的是，因女性祖先一般只称"妣某"、"母某"，所指对象活动余地很大，若不与男性配偶相连，一般很难确指。因此，表中各类卜辞之同一称谓不一定就是同一个人。为了比较，只能将称谓相同者列在一起，以供参考。下面对一些重要称谓逐一讨论。

1. H3 卜辞中未见祭祀妣壬。殷代直系、旁系先王配偶中，名妣壬者有大庚之配和大戊之配。妣壬在子组、宾组、自组等卜辞中均被祭祀。

2. H3 卜辞中，祭祀靠前的先妣是妣癸，但次数少，目前只出现一片。殷武丁以前先王之配名"癸"者，只有中丁之配。H3 卜辞中的妣癸应是中丁之配妣癸，此人亦是宾组、自组等卜辞中的常见先妣。

3. H3 卜辞中，祭祀靠前的第二先妣是妣己，出现频率较高。殷先王之配中，名"己"者有中丁之配、祖乙之配和祖丁之配。由于 H3 卜辞中祖乙被祭次数最多，且妣己曾与祖乙同版(H3：224)，而中丁未见祭祀，祖丁仅见一版。故 H3 中的妣己很可能是祖乙之配妣己。妣己在子组、宾组、自组、午组、非王无名组中均被祭祀。

4. H3 卜辞中，被祭先妣最多的是妣庚，目前所见有 20 余版。这有两个原因：第一，先王之配名"庚"者多，有示壬之配、祖乙之配、沃甲(羌甲)之配、祖丁之配[35]；第二，祖乙、沃甲等是 H3 卜辞祭祀的重点先王，他们的配偶自然也会受到重视，故祭祀妣庚的次数自然要多。值得指出的是，H3 卜辞中见有祖乙、妣庚同版同辞(H3：974、977 等)，祖甲、祖乙、妣庚同版同辞(H3：1472、1488)。此中，有的妣庚可能是祖乙之配，有的妣庚可能是祖甲之配。可见他(她)们是深受敬重的。

5. H3 卜辞中出现"三妣庚"这一称谓是很特殊的，其他卜辞未见。"三妣庚"作何解释？这里可有两种理解：一是指集合庙主，即三个妣庚在一起被祭祀；二是按同一庙号从上向下数第三个妣庚。我们认为，第二种可能性大。因为殷墟卜辞中常有按同一庙号之先后次序计算祖先称谓的现象，如康丁卜辞中的"二祖辛"(《合集》27340)是指小辛，乙辛卜辞中的"四祖丁"(《合集》36261)是指小乙之父祖丁。据此，H3 卜辞中的"三妣庚"可能为沃甲(羌甲)之配妣庚。沃甲是 H3 卜辞中被祭的重要先王，被祭次数仅次于祖乙，远在祖丁之上。再者，沃甲虽属旁系，但地位重要，其入周祭祀典，且有些学者认为，沃甲在宾组和出组卜辞中，都曾入大示受祀[36]。况且前文已经指出，H3 卜辞之占卜主体可能是沃甲之后，故敬重沃甲之配妣庚也在情理之中。

6. H3 卜辞中的妣甲应是祖辛之配。因为在殷代直系、旁系先王之配中，名妣甲者只有示癸之配和祖辛之配。而从前面的讨论中已经看到，H3 卜辞祭祀先妣是起自中丁之配妣癸，中丁前面的大戊、大庚之配妣壬均未被祭祀，那远离中丁的示癸之配妣甲自然不在被祭之列。故此妣甲非祖辛之配莫属。

7. H3 卜辞中的妣丁不知是何人之配。此称谓在其他各类卜辞中均见，不知是否是同一人。有关妣丁的情况只能等待将来有更多的材料出现后再作讨论。

8. H3 卜辞的母辈称谓中不见母庚，而见母戊。母庚是小乙的法定配偶。此母庚见于子组、宾组、自组、午组等卜辞。H3 卜辞不见母庚，正好说明 H3 卜辞主人与武丁关系较远，不属小乙直系。H3 卜辞有母戊称谓，这一称谓不见于宾组、自组，但却见于午组。在女性祖先称谓中，H3 卜辞与午组卜辞都有母戊，这是耐人寻味的。

第一，H3 卜辞中，大多是占卜"子"或与"子"有关的事情。如：

乙酉卜：子于翌日丙求𠂤南丘豕，𠂤？　(H3：52)

甲午岁祖甲𣪘一，子祝？在𣏌。　(H3：47+984)

甲卜：子疾首亡𡆥？　(H3：906)

庚午卜，在𣏌：钟子齿于妣庚，酉牢，牝，白𣪘？用。　(H3：505−520+1546)

贞：子亡祸？　(H3：1158)

戊午卜，在𠂤：子立于录中□？　(H3：985)

第二，"子"又是 H3 卜辞中的主要贞人。据目前初步统计，H3 卜辞中共见贞人有子、亚奠、𠂤、友、刊、夫、子㠯、弹、纫、子阱等。多数贞人出现的次数是一版，而唯独"子"出现的次数达十余版。这充分说明"子"之地位大大高于其他贞人。

根据以上两点，我们认为 H3 卜辞的占卜主体是"子"，该坑卜辞的占卜活动都是围绕着"子"而展开的。但是，这个"子"同 YH127 坑"子组"卜辞之"子"是不同的两个人，不仅卜辞字体风格不同，而且卜辞内涵也不相同，前文第三节已做交待，此不赘述。

(三)H3 卜辞中的"子"与殷王之关系

H3 卜辞中的"子"是何人物，是需要认真探讨与研究的问题。由于"子"这一称呼不仅见之于不同类型的卜辞，而且又见之于不同氏族徽号的铜器，可见"子"在殷周时代是具有一定身份与地位之男子的泛称，也是男性贵族的一种尊称。值得指出的是，殷代金文中常常出现"子"与"小子"相对。如《𠂤卣》："子令小子𠂤先以人于奠"(《三代》13.42)。《省卣》："子赏小子省贝五朋，省扬君赏"(《三代》13.38)。它表明，"子"与"小子"之关系应是一种君臣关系。可见"子"之地位是比较高的，应是奴隶主贵族中的氏族族长。

有意思的是，殷墟出土的文物中就有"子"与"小子"。苗圃北地采集到的一件陶垫，一面刻"子"字，另一面刻"𣪘"字，此二字应连续为"子𣪘"。又 70 年代出土的一件陶人，作站立状，上身裸露，腰悬"蔽膝"，胸前有"小子"二字[33]。由此可见，"小子"的地位是要低一些。

H3 卜辞中的"子"究竟是何人物，这需要通过对 H3 卜辞中的称谓系统进行分析研究才能知晓。

H3 卜辞中的男性祖先称谓，据目前初步统计有上甲、大乙、大甲、祖乙、祖辛、祖丁、祖庚、祖甲、祖戊、兄丁等。值得指出的是，截至目前，尚未发现父辈称谓。此中预示着什么，需要认真研究。现将 H3 卜辞中男性祖先称谓同子组、宾组、自组、午组、非王无名组等卜辞中的男性祖先称谓对比，列如表三。

对于表三需要说明三点：第一，本表所列的称谓，以 H3 卜辞和原子组卜辞所出现的称谓为主，而不是将宾组卜辞、自组卜辞等所出现的称谓统统列入。第二，本表所列的"祖某"或"父某"称谓中，午组与非王无名组的称谓与其他组的同一称谓不一定就是同一个人，但也不排除是同一个人，列入表中作为参考。第三，由于 H3 卜辞正式整理工作刚刚开始，摹本才做

的。

(三)"子"与妇好之关系

妇好是武丁早期的一员女将,又是武丁的法定配偶,在武丁早年的军事、政治活动中,具有举足轻重的地位。H3 卜辞中的"子"与妇好关系十分密切。

乙亥卜:重子配史于妇好? (H3:11+283)

戊寅卜:自[illegible]鬯其见于妇好?用。 (H3:1390)

壬子卜:子以妇好入于妣。 (H3:123+373)

癸卯卜:子弜告妇好若?用。 (H3:884)

以上卜辞表明,H3 卜辞中的"子"与妇好接触频繁,而且其地位与妇好不相上下。

(四)"子"与"丁"之关系

"丁"是武丁早期的又一个重要人物,他参与王朝的军政大事。H3 卜辞中的"子"与"丁"之关系亦十分密切。

壬卜:妇好告子于丁,弗司? (H3:864)

壬卜,在[illegible]:丁畀子圉臣?一

壬卜,在[illegible]:丁曰:余其[illegible]子臣?允。二 (H3:1290)

子梦丁,亡祸? (H3:1106)

以上四辞,将"子"、"妇好"、"丁"之关系描绘出来。尤其是"丁畀子圉臣",是"丁"将一些"圉臣"送给"子",供其使用,说明他们的关系非同一般。

(五)"子"有呼、令他人的权力

丁卜:子令友…… (H3:405)

甲戌卜,在[illegible]:子有令…… (H3:1472)

乙亥卜:其乎多宁见,丁永。 (H3:816+1221)

翌甲其乎多臣凡? (H3:560)

甲卜:乎多臣见,翌日于丁用。 (H3:1397)

上述诸辞是"子"呼、令他人辞中的一部分。其中"子令友"之"友"是 H3 卜辞中的"贞人",可见"子"之地位确在一般贞人之上。辞中的"多宁"、"多臣"可能是朝中之臣,也有可能是"子"之家臣。

(六)"子"拥有相当规模的占卜机关

占卜机关规模之大小反映了卜辞主人地位之高低。而占卜机关规模的大小则可以通过如下事实反映出来:第一,拥有贞人多少;第二,拥有占卜材料之多少。

关于贞人问题,前文已经指出,H3 卜辞所见贞人在 10 人以上,这在非王卜辞中是罕见的。关于拥有占卜材料(龟版)多少可以从甲桥纪事刻辞中得到一定的反映。甲桥纪事刻辞记录着外地进贡龟版之多少,这种纪事刻辞宾组卜辞常见,自组卜辞偶见,此前之非王卜辞未见。武丁

通过以上分析我们认为,H3 卜辞所祭祀的先妣集中于中丁之配至祖丁之配,不祭阳甲至小乙诸王之配。这说明 H3 卜辞主人与武丁不同父,甚至也不同祖。这与前面的推论是吻合的。

H3 卜辞祭祀男性祖先最多的是祖乙和沃甲(H3 中的祖甲),祭祀女性祖先最多的是妣庚,此妣庚多为祖乙之配与沃甲之配(三妣庚)。由此可以推断,H3 卜辞主人可能是沃甲之后,而沃甲又可能是祖乙之配妣庚所生(祖乙另有一法定配偶是妣己)。因此,H3 卜辞主人重点祭祀祖乙、沃甲和他们的配偶妣庚也就在情理之中了。

总结以上讨论可以认为,H3 卜辞主人与殷王同源于祖乙,可能是沃甲之后,到武丁时代与殷王的关系自然较远,故其卜辞是"非王卜辞"。

五、H3 卜辞"子"之身份与地位

H3 卜辞中之"子"在殷王朝中处于何种身份与地位是需要探讨的又一个问题。由于正式整理工作刚刚开始,故现在只能谈一些粗浅的看法。

(一)"子"主持祭祀

在殷代,祭祀是国家政治生活的重要组成部分,"国之大事,在祀与戎"。祭祀之主持人,一般多由殷王或殷王重臣、重要王室成员担任。这个位置是权力和地位的象征,他人难以染指。而 H3 卜辞中的"子"却能主持祭祀:

乙亥夕岁且乙黑牝一,子祝? (H3:224)

[illegible]岁且乙用,子祝? (H3:450+458)

乙未岁且乙[illegible],子祝?在[illegible]。 (H3:47+984)

以上是"子"主持祭祀的卜辞的一部分。从这些卜辞中可以看到"子"之地位的重要。

(二)"子"作占辞

占卜是殷代国家政治生活中的大事,而占卜中对占问的事情作出判断与回答则决非一般贞人所为。这种判断一般情况下都由殷王作出,常作"王占曰"。而 H3 卜辞中,却有相当数量的"子占曰"。今略举数例如下:

癸卯卜,亚奠贞:子占曰:冬(终)卜用。 (H3:212)

癸亥夕卜:日征雨?子占曰:其征雨。用。 (H3:661)

戊午卜:我人禽?子占曰:其禽。用。在[illegible]。 (H3:985)

[illegible]阜鹿?子占曰:其[illegible]。 (H3:52)

己卯卜,贞:龟不死?子曰:其死。 (H3:486)

上述诸辞说明,H3 卜辞中的"子"在占卜活动中起着十分重要的作用,能对占卜结果作出判断与回答。H3 卜辞中出现"子占曰",这在过去的"非王卜辞"中还是少见的。据初步统计,H3 卜辞中的"子占曰"有 10 余版之多,说明"子"之地位确实很高,是其他"非王卜辞"主人不能比拟

(二)子尻

庚申卜:岁妣庚一,子尻[illegible]往? (H3:620)

□寅卜,古贞:尻其[illegible]疾?

[illegible]贞:尻亡疾? 《合集》13150 正(宾组)

丙戌卜,亘贞:子尻其[illegible]□? 《乙》5451(宾组)

尻亡疾。 《合集》13749(自组小字)

以上均卜问尻、子尻之疾病一事,应是指同一个人。

(三)子[illegible]

贞:子[illegible]爵祖乙,庚亡[illegible]? (H3:1387)

乙丑卜:子[illegible]示? (H3:1307)

贞:重子[illegible]往?

贞:子[illegible]疾? 《合集》3033

贞:子[illegible]不其获兕? 《合集》10426 正

以上均宾组卜辞。在宾组中,子[illegible]是较常见的人物。

(四)子刂

癸酉卜,贞:子刂爵祖乙,辛亡艰? (H3:1387)

□□卜,[illegible][贞]:[illegible]乎刂[illegible]? 《合集》4205(宾组)

贞:子刂亡疾?小告。 《怀特》965(宾组)

(五)[illegible]、[illegible]

壬辰卜:乎[illegible]钟于又示?

乙未卜:乎[illegible]燕见?用。 (H3:876)

庚申:钟[illegible]□癸子,酋伐人,卯宰? (H3:659)

丙午卜,争贞:[illegible]其系羌? 《合集》495(宾组)

[illegible]亡祸? 《合集》3286 正(宾组)

戊辰卜,争贞:[illegible]亡祸,古王事?二告。 《合集》5448(宾组)

庚辰卜,贞:[illegible]亡若? 《合集》21954(非王无名组)

(六)妇好

甲申卜:子其见妇好? (H3:86)

乙亥卜:重子配史于妇好? (H3:11+283)

在宾组卜辞中,有关妇好的卜辞,据粗略统计,有一百七、八十条之多。如:

乙卯卜,宾贞:乎妇好出良于妣庚? 《合集》94 正

乙酉卜,争贞:乎妇好先双人于庞? 《合集》7288

辛巳卜,□贞:登妇好三千,登旅万,乎伐。 《英藏》150 正

宾组卜辞中,进贡龟最多一次达一千只,次者八百只,这是殷王权力和地位至高的反映。子组卜辞未见纪事刻辞贡龟记录,但卜辞中有贡龟记载:

庚辰,令[illegible]佳来?[illegible]以龟二,若令。 《合集》21562

这条卜辞显示,[illegible]进贡给子组卜辞主人二只龟,数量是很少的。而 H3 卜辞纪事刻辞中贡龟数量比较多,现摘引如下。

1. 只录入贡者,未录入贡数量。如史入,H3:437、H3:668;[illegible],H3:601;亚,H3:1506。

2. 记录入贡者及入贡数量。如庚入五,H3:567;[illegible]入六,H3:63、H3:274;[illegible]入十,H3:299、H3:1360。

3. 未记入贡者,只记入贡数量。如十,H3:573、H3:958;三十,H3:306、H3:489、H3:657 等。

以上 H3 卜辞甲桥刻辞说明,此坑卜龟有不少是外地进贡的,且一次最多可达三十。这种情况仅次于"王卜辞",远在子组卜辞之上,是子组卜辞主人无法比拟的。

综上所述,H3 卜辞中的"子"是一位地位很高、权力很大的人。他不仅是一位族长,可能是沃甲之后这一支的宗子,而且又是朝中一位重臣。他与朝中重要人物,如妇好、丁、子[illegible]等交往甚密。他拥有仅次于殷王的庞大的占卜机关。由此可见,此"子"在武丁时代是一位权倾朝野的人物,其地位远在目前所见其他非王卜辞主人之上。

六、H3 卜辞的时代

据前文所述,花东 H3 属殷墟文化第一期,相当于武丁早期[37]。现在让我们进一步分析 H3 之卜辞材料,看这一结论是否正确。

花东 H3 卜辞中有不少人名,这些人名中,有的活着,有的已经去世。这些人名又多见于武丁时代的其他卜辞,因此,考察这些人物的生死,正是我们判断 H3 卜辞历史时代极好的材料。花东 H3 卜辞中的人名,据初步统计有七、八十位之多。有的人名是过去未见的,如子[illegible]、子[illegible]、子[illegible]、子妹、子弹、[illegible]、[illegible]妾、[illegible]等;也有不少人名见于宾组、自组、子组、非王无名组等卜辞。下文将后一类人名列出,以资比较。

(一)子[illegible]

甲子卜:子其舞,永?不用。

甲子卜:子[illegible]弜舞?用。 (H3:914)

此"子[illegible]"在 H3 中是一位活着的人物。但是,在宾组和自组卜辞中,子[illegible]已经死去:

[illegible]子[illegible]? 《合集》13517(宾组)

□戌卜贞:不[illegible]余[illegible]子[illegible]?十月。 《合集》20036(自组小字)

乙丑卜,王:勿肖[illegible]子[illegible]? 《合集》20037(自组小字)

辛未卜,扶:勿乎弹征?二月。 《合集》20557(自组大字)

宾组卜辞学术界一般认为时代属武丁中、晚期(部分可延至祖甲),自组卜辞时代在武丁早、中期(自组大字类早于小字类),子组卜辞的时代自武丁早期至武丁中、晚期之交[38],非王无名组时代约当武丁中期。以上列举的花东H3卜辞中的人物,见于宾组、自组、子组、非王无名组等卜辞中,说明H3卜辞应属武丁时期。

武丁享国五十九年,H3卜辞时代究竟相当于武丁哪一段?下面我们从两个人物的活动作进一步分析。

1. 妇好 关于妇好之死,学术界有不同的说法。有的认为死于武丁晚期或晚叶前期。也有的推断为武丁中后期[39]。宾组卜辞因延续时间长,既有活着的妇好,也有死去的妇好。而H3卜辞中所见的妇好是位活跃的人物,这意味着H3卜辞的时代至少在武丁中期或更早。

2. 子戠 子戠在武丁宾组卜辞和自组小字类卜辞受其祭祀,说明他已经死去。但在H3卜辞中他却是位活着的人物。因此,H3卜辞的时代应早于宾组卜辞和自组小字类卜辞,可能在武丁前期。

据此我们认为,花东H3卜辞的历史时代,上限在武丁前期,下限或可到武丁中期。这一结论与H3所处的地层关系和共存陶器的时代也基本吻合。

注 释

[1] 中国社会科学院考古研究所安阳工作队:《1991年安阳花园庄东地、南地发掘简报》,《考古》1993年6期。

[2] 同[1],490页图四1,图五,3,图四,2。

[3] 同[1],490页图四,3、5、6、7,图五2、4。

[4] 同[1],491页图七。

[5] 中国社会科学院考古研究所:《殷墟发掘报告》,159页图一一九,1,文物出版社,1987年。

[6] 中国社会科学院考古研究所:《小屯南地甲骨》下册第三分册,1984年10月。

[7] 刘一曼:《安阳殷墟甲骨出土地及其相关问题》,56页图五,3,《考古》1977年5期。

[8] 在本文甲骨卜辞释文中,□表示缺一字;☑表示不能确知所缺之字数;字外加方括号者,是由于该字模糊不清、残缺不全,释文是据文例推断出来的。

[9] 李学勤:《花园庄东地卜辞的"子"》,《河南博物院落成论文集》,中州古籍出版社,1998年7月。

[10] 裘锡圭:《释求》,《古文字论集》,59—68页,中华书局,1992年。

[11] 于省吾:《甲骨文字释林》,174页,中华书局,1979年。

[12] 同[11],227—230页。

[13] 屈万里:《殷虚文字甲编考释》,33页,历史语言研究所,1961年。

[14] 同[11],154—156页。

[15] 姚孝遂、肖丁:《殷墟甲骨刻辞类纂》,中华书局,1989年。

己丑卜,殼贞:勿[重妇]好比沚𢦚,上下若,受我[又]? 《合集》7502

己丑卜,殼贞:翌庚寅妇好娩?

翌庚寅妇好不其娩? 《合集》154

□寅卜,韦贞:嫔妇好?

贞:弗其嫔妇好? 《合集》2638

最后二条卜辞卜问是否嫔祭妇好,表明妇好已经死去。

(七)宁垦

己未卜,贞:宁垦有疾亡[祉]? (H3:772)

乙卜,贞:宁垦又口目,死? (H3:330)

贞:勿乎宁垦累☑? 《合集》3508反(宾组)

☑贞:重宁垦☑其出于☑? 《合集》4715(宾组)

(八)丁

乙亥卜:其乎多宁见丁,永? (H3:816)

辛丑卜:𠂤丁于祖庚至□一,哲羌一人,一牢,至羿一,祖辛𠂤丁,哲羌一人,二牢? (H3:200)

丙戌子卜,贞:丁不乞我? 《合集》21717(子组)

王占曰:隹今夕癸见于丁。 《合集》667反(宾组)

庚申卜:扶令小臣取丁羊乌? 《合集》20354(自组大字)

甲子卜:丁乎求兢五,隹若? 《合集》21566(子组)

(九)弔

乙丑卜:乎弔邛,若? (H3:793+911)

贞:𠂤弔于兄丁? 《合集》4306(宾组)

贞:师殷弔出☑? 《合集》4227(宾组)

丁卯子卜:弔归? 《英藏》1900(子组)

(十)子辟

乎多宁累辟,丁永? (H3:816)

𠂤子辟中子不? 《合集》20023(自组小字)

己未卜:𠂤子辟小王不? 《合集》20023(自组小字)

戊午卜:王勿𠂤子辟? 《合集》20024(自组小字)

(十一)弹

庚戌卜:重弹乎见丁累大,亦燕?用。炅。 (H3:1467)

癸卯卜,在箕:弹以马?子占曰:其以。用。 (H3:1502)

令弹求奠目?二告。 《合集》7239(宾组)

[16] 于省吾主编:《甲骨文字诂林》,中华书局,1996年。

[17] 岛邦男:《殷墟卜辞综类》,汲古书院,1967年。

[18] 李孝定:《甲骨文字集释》,历史语言研究所,1965年。

[19] 饶宗颐:《殷代贞卜人物通考》,145页,香港大学出版社,1959年。

[20] 同[1],494页。

[21] 董作宾:《商代龟卜之推测》,《安阳发掘报告》第一期,1929年。

[22] 董作宾:《骨文例》,《历史语言研究所集刊》七本一分,1936年。

[23] 贝塚茂树:《论殷代金文中所见图象文字冀》,《东方学报》(京都)第9号,1938年。

[24] 贝塚茂树、伊藤道治:《甲骨文研究的再检讨》,《东方学报》(京都)第23号,1953年。

[25] 陈梦家:《殷虚卜辞综述》,158页,科学出版社,1956年。

[26] 李学勤:《帝乙时代的非王卜辞》,《考古学报》1958年1期,68页。

[27] 郭沫若:《安阳新出土的牛胛骨及其刻辞》,《考古》1972年2期。

[28] 裘锡圭:《读〈安阳新出土的牛胛骨及其刻辞〉》,《考古》1972年5期。

[29] 中国社会科学院考古研究所:《小屯南地甲骨》下册第一分册,中华书局,1984年。

[30] 林沄:《从武丁时代的几种"子"卜辞试论商代的家族形态》,《古文字研究》第1辑。

[31] 见《古文字研究》第13辑。

[32] 黄天树:《子组卜辞研究》,纪念于省吾教授百年诞辰暨中国古文字讨论会论文(手写稿),1996年,春。

[33] 中国社会科学院考古研究所:《殷墟的发现与研究》,251页,科学出版社,1949年。

[34] 武丁宾组卜辞中(《合集》1822),"南庚"与"祖庚"同版,有学者认为是两个人。我们认为,"祖庚"与"庚"仍为一人。因为武丁卜辞中,同一人在一版上可以同时有两个称谓,如"盘庚"又称"父庚"(见本表三)。

[35] 《后上》3.8一辞:"庚子卜,贞:王宾祖辛奭妣庚彡日,[亡]尤?"但学界对该辞有不同的看法,有的认是习刻,有的认为是误刻。而且仅此一条卜辞,没有第二条卜辞可作傍证。故本文暂不考虑且辛之配庚。

[36] 曹定云:《论武乙、文丁祭祀卜辞》,《考古》1983年3期,238页。

[37] 同[1]。

[38] 同[32]。

[39] 曹定云:《殷墟妇好墓铭文研究》,86页,台湾文津出版社,1993年。

本文引书简称

《后》	罗振玉:《殷虚书契后编》。
《续》	罗振玉:《殷虚书契续编》。
《三代》	罗振玉:《三代吉金文存》。
《粹》	郭沫若:《殷契粹编》。
《存》	胡厚宣:《甲骨续存》。
《乙》	董作宾:《殷虚文字乙编》。
《丙》	张秉权:《殷虚文字丙编》。
《合集》	郭沫若主编、胡厚宣总编辑:《甲骨文合集》。
《屯南》	中国社会科学院考古研究所:《小屯南地甲骨》。
《英藏》	李学勤、齐文心、艾兰:《英国所藏甲骨集》。
《怀特》	许进雄:《怀特氏等收藏甲骨文集》。

A DECIPHERMENT AND PRELIMINARY STUDY OF SELECT ORACLE BONE INSCRIPTIONS FROM HUAYUANZHUAN LOCUS EAST, THE YIN RUINS

by

Liu Yiman and Cao Dingyun

In the fall of 1991, the Anyang Archaeological Team, IA, CASS, excavated at Huayuanzhuan Locus East within the Yin Ruins and discovered in Ash-pit H3 1,583 pieces of oracle bones, of which 579 bear inscriptions and are mostly intact and so especially valuable.

Chronologically, H3 should be dated to the first period of the Yin Ruins culture judging from its stratigraphical evidence, the pottery unearthed in association and the formal features of the drilled holes and chiselled grooves for divination on its oracle bones. The contents of the H3 oracle inscriptions are concerned with sacrifice, hunting, weather, illness exorcizing, etc. In commemoration of the 100th anniversary of the first discovery of oracle bone inscriptions, the authors select 23 pieces from the H3 oracle inscriptions for the first publication.

The H3 oracle inscriptions are regular in character form and display outstanding features: new styles different from the previously seen appear in both grammatical construction and the direction of character and line arrangement.

There are king oracle inscriptions and non-king ones among the finds from the Yin Ruins. The most important feature of the H3 inscriptions is that the main body of divination was not the king but "Zi". This argument is principally based on the following facts: Firstly, the divination activities which the H3 inscriptions concern were all carried out around "Zi"; and secondly, "Zi" was the main diviner of the H3 inscriptions. This "Zi" is a person other than that in the previously-known "Zi group" of inscriptions. The main figures to whom the sacrifices were most frequently offered were the late kings Zu Yi and Wo Jia and their

殷墟甲骨拾遺(续)

焦智勤

1997年,笔者曾就近几年来在殷墟陆续发现的零星甲骨片,进行了调查选拓,写了《殷墟甲骨拾遗》一文[①]。随后继续留意这些零碎甲骨的调查和选拓,又得拓片百余,在甲骨文发现100周年之际,经整理作为《殷墟甲骨拾遗》的续篇,介绍如下:

一、释　读

本文在前辈学者研究的基础上,试将这部分零星碎片释读。不当之处,诚望专家学者指谬。

001.……贞,父乙……王……

002.己……贞,……兄己……亡……

……卜,尹……宾……亡

尹,人名,为祖甲时贞人,知此片为祖甲时卜辞[②]。

003.……小乙亡尤

小乙,商代直系先王。《史记·殷本纪》:"帝小辛崩,弟小乙立,是为帝小乙。"

004.己……贞,王……祖乙……妣己亡……

己……卜,……贞,王……祖丁……妣己

……

王国维《先公先王考》云:"武乙以前四世为小乙、武丁、祖甲、康丁,则祖乙为小乙,非河亶甲之子祖乙。祖丁为武丁,亦非祖辛之子祖丁也。"知此片卜辞中祖乙即小乙,妣己为小乙配偶。祖丁为武丁,妣己为武丁配偶之一[③]。

005.……卜,贞……祖甲亡尤

祖甲,商代直系先王。《史记·殷本纪》:"帝祖庚崩,弟祖甲立,是为帝甲,帝甲淫乱,殷复衰。"

006.……侑于……物母戊……

"屮于",郭沫若先生读为侑于[④],母戊合文,在卜辞辞例中,母或写作女,多通用。

007.……康……其牢……

008.……牢一牛

009.……又一牛

010.……卜,贞……其牢……用…

011.……牢其牛又一

012.……王……祭……

013.壬寅……贞……

壬子王卜贞,田喜……来亡……

此片中"壬子"二字末刻横画,卜辞中习见,喜为地名,音如惠,其地域即今武陟县西之怀[⑤]。

014.庚辰卜,王贞,翌日辛,其……令竹……

竹,卜辞中用作人名。

015.甲辰……旬……雨……

[甲][辰]卜,中贞,兹雨,氏灾?王占曰:不𠂤其氏灾。

中为祖庚时贞人,"𠂤"字为武丁至康丁时期写法,像洪水横溢之状,本是水灾的象征,引申为一切灾异不吉之事[⑥]。

016.……[宾]叡,亡尤

017.……卜,贞……祸惟

018.……其以大……尤

019.癸未……史……

020.……贞,予往……

此片为一片之正反面,正面仅存卜序一、二、二,兽骨。

021.……锡牛……

022.……惟……兹

……物……用

此片按卜甲辞例,应为上下两辞,为重物,兹用之残文,兹字旁刻有卜序。

023.……卜,师……[羊]司……

自为人名,读作师,为武丁晚期贞人。

024.……曰……八月

史……王……从

此片中𠂤应为史字,缺刻横划。

025.……为其……十一月

026.……王迅……[步]往……

027.辛未……贞求……

028.……卜,兄……日不……六月

兄为祖庚时贞人,知为祖庚时卜辞。

029.辛……,酸贞……弗……

为武丁时贞人,此为武丁时期卜辞。

030.……王贞……一牛侑庚……

此片下部残损,牛下有𠂤字可见。

031.……雀……殽……

032.……其……帝……酒……

033.贺入……

卜辞中有妇贺,人名,此片中贺可能亦为人名。

034.……牛卜,……𣪊……秉……

字从示从𣪊,当隶定作𣪊,卜辞中有𣪊字,像手执鸟(隹)置于示前,表示祭祀[⑦]。𣪊亦像手执𣪊置于示前,用法应同于𣪊。

035.庚……贞,王……亡……

036.……贞,令……于一……

037.……𢍏……告……妇……

038.……王……翌日……

039.丙午……出……丁未……之日……

出为祖庚时贞人,知此片为祖庚时卜辞。

040.……卜,旅……𠂤……夕……𠂤……

据字形应为𠂤(音ji),《说文》:"𠂤,饮食气不得息曰𠂤,从反欠。"

041.……卜,𠂤……今夕……

以上两片中,旅、𠂤为祖甲时贞人,为祖甲时卜辞。

042.……王……[工]于……

工读若方,用为祭名,即祊祭。从唐兰先生说。

043.……丙勿……曰……

044.……贞……

……贞,其……

045.……卜,贞……宾……

046.……卜,洋……曰……

洋为祖甲时附属贞人。

047.……宾……亡尤

048.……贞,王宾……

049.……卜,王今夕……酰

050.癸酉……王旬……

……卜……旬……酰

051.……𠂤……宾……

052.……𠂤……[禽]……

根据卜辞辞例,𠂤为人名,为祖甲时贞人。

053.戊午……贞,王……夕亡……

……卜,贞.夕……酰

054.……辰卜……今夕……酰

055.……卜,贞……亡酰

056.……贞,……亡酰

057.甲戌……宾……

058.乙卯……王宾……

059.……卜[喜]……宾……

根据卜辞例,卜下一残字当为喜字,喜为祖甲时贞人。

060.……王宾……勺伐……

勺,祭名,读若刹。

061.……德交……方……

062.……宾……侑……

063.丁丑卜,尹贞,王宾叡亡尤(附摹本)

此片文字锈蚀严重,字口多被土锈锈结,不易剔除,但可以辨认,卜辞完整,尹为祖甲时贞人,为祖甲时卜辞。

064.……贞,王……祖……

065.……龠禦……

066.……翌……侑于𠂤……

067.……贞,𠂤……六月

068.甲寅……贞……

069.……贞……曰……爽……

070.……贞,已……不[鼓]……

071.……其雨……

072.……吾[方]……不……

073.……勿贞……

074.……贞,今……其雨

075.……贞,今……

076.……史……今夕……祸

077.……贞,王……[翌]……

078.癸卯卜……旬……

079.乙亥卜……

080.……[冂]……来……

081.……既一……

082.……子……𠂤……

083.壬……贞……亡

084.庚辰……

085.……贞,……其……在

086.……贞……

癸……贞……

087.……贞,王……

088.……今夕雨

089.……戈……　(正面刻辞,涂朱)

……氏……　(反面刻辞)

090.……卜……豕……(正面刻辞,涂朱)

壬……其获……　(反面刻辞)

091.……卜,贞……延……(正面刻辞)

……[口]曰……　(反面刻辞)

092.……[迄至]……　(正面刻辞)

……吾……[弗]……(反面刻辞)

093.……夕……于……

094.……王……

095.……古隹……

096.……陷……

此片为卜骨之反面刻辞,𠂤字,从字形分析,牛字下边当为[口]形,当为𠂤字,卜辞辞例中隶定为陷字。

097.……卫……　(卜甲反面刻辞)

098.庚辰……[王宾]……

099.……惟吉

100.……惟……十二月

101.癸[　]卜,……

102.……帝……

103.……𢦏……

104.……𠂤……

105.……𠂤……

此片为卜骨,残存一字,字不见已著录的甲骨卜辞。

106.……史……

107.……𠂤……

𠂤,人名,卜辞中有妇𠂤。

108.……追……

109.……获……

110.……禽……获

111.……宁……　(附"宁"字陶文)

宁,读为zhù,义为贮物之器,不同于义为平安,安静之义甯的简化字宁。在卜辞中宁有多种用法,为贞人名,方国名,人名,官职名,有贮集之义等,此片仅存一字,其义不可知。余得一商代陶簋残片,在陶簋的口沿外则刻有一宁字,与甲骨文宁字相同。陶簋残片经考古队的同志鉴定为殷墟文化一期之物[⑧]。采集于王裕口村北地,殷墟青铜器中多有带宁字铭文的,可能作为族徽符号,陶簋上的宁字也可能为族徽符号,为宁族的徽号,在殷墟南区刘家庄[⑨],殷墟西区[⑩]多有宁族墓葬出土,此陶文为研究殷墟家族墓地提供了新材料,在此作为附录附于宁字卜辞之后。

112.甲午……贞,王……

二、出土地点调查

上述百余片甲骨均出土于今殷墟博物苑北墙外滨河的一小块农田中,和《殷墟甲骨拾遗》一文收录的八十余片同出土在一个地点,对此地笔者已作过调查,并作过说明,在调查和选拓过程中,经检验原甲骨片,除少数兽骨外,多为龟甲碎片,这部分甲骨多为一、二、五期的卜辞,与董作宾先生在《殷墟卜辞断代例》中所说的E区出土的甲骨多为第一、二、五期卜辞相合。今把所得拓片整理出来,旨在为甲骨学研究者提供一些零星材料。笔者在整理上述拓片时,又闻有零星发现,我将继续留意这方面的工作。

1999-03-28

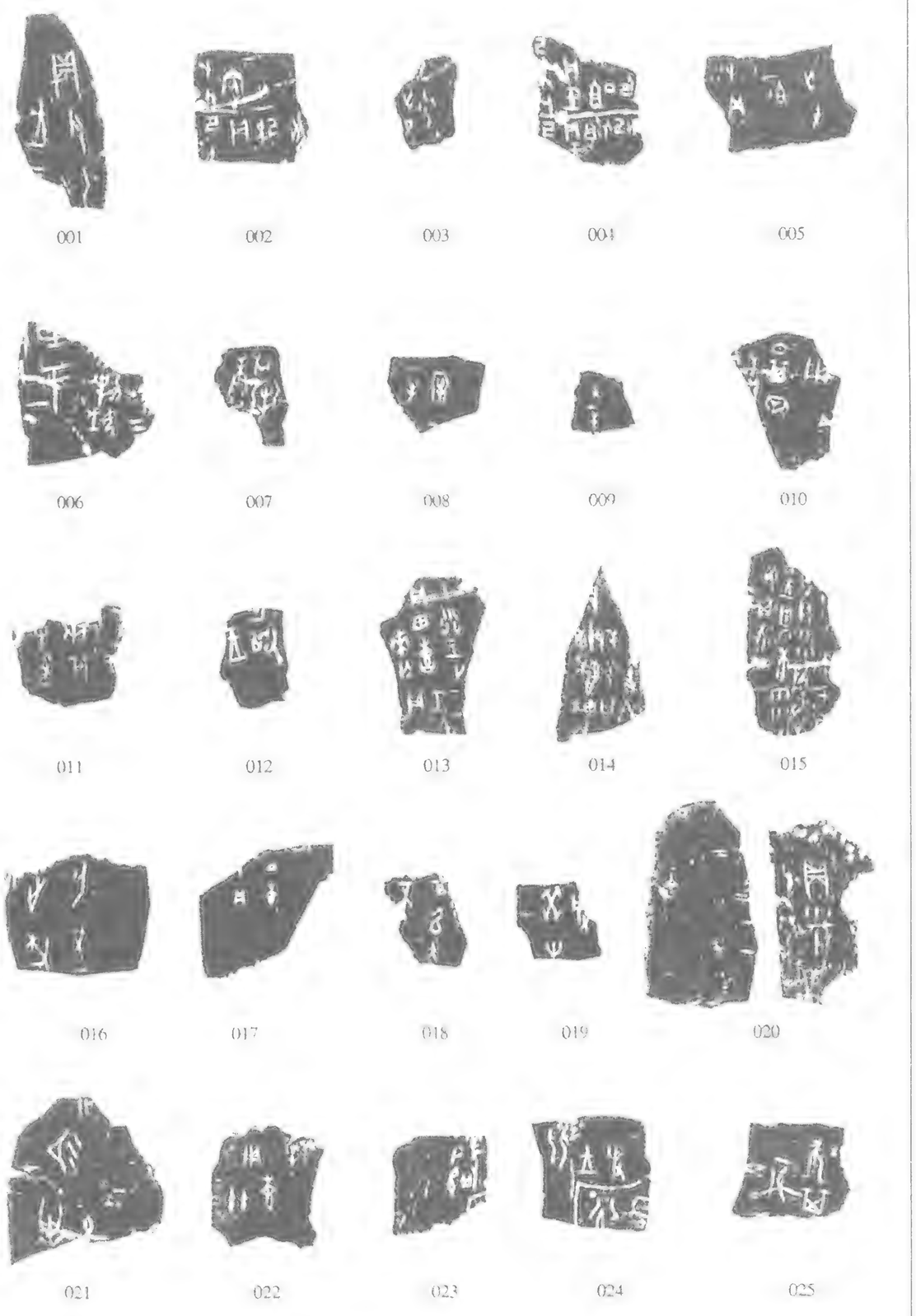
①焦智勤:《殷墟甲骨拾遗》,《华夏考古》1997年2期。②⑥陈炜湛:《甲骨文简论》168页,上海古籍出版社,1987年,书中所列各期卜辞贞人表,为本文释读时所采用。③①郭沫若:《卜辞通纂》,《郭沫若全集·考古篇·第二卷》科学出版社,1982年。⑤陈梦家:《殷虚卜辞综述》308页,中华书局1988年。⑦赵诚:《甲骨文简明辞典》中华书局1988年。⑧刻有"宁"陶文的陶簋残片,经杨锡璋等先生鉴定为殷墟文化一期陶簋。⑨安阳市文物工作队:《1983-1986年安阳刘家庄殷代墓葬发掘报告》,《华夏考古》1997年2期。⑩中国社会科学院考古研究所安阳工作队:《1969-1977年殷墟西区墓葬发掘报告》113页,《考古学报》1979年第1期。

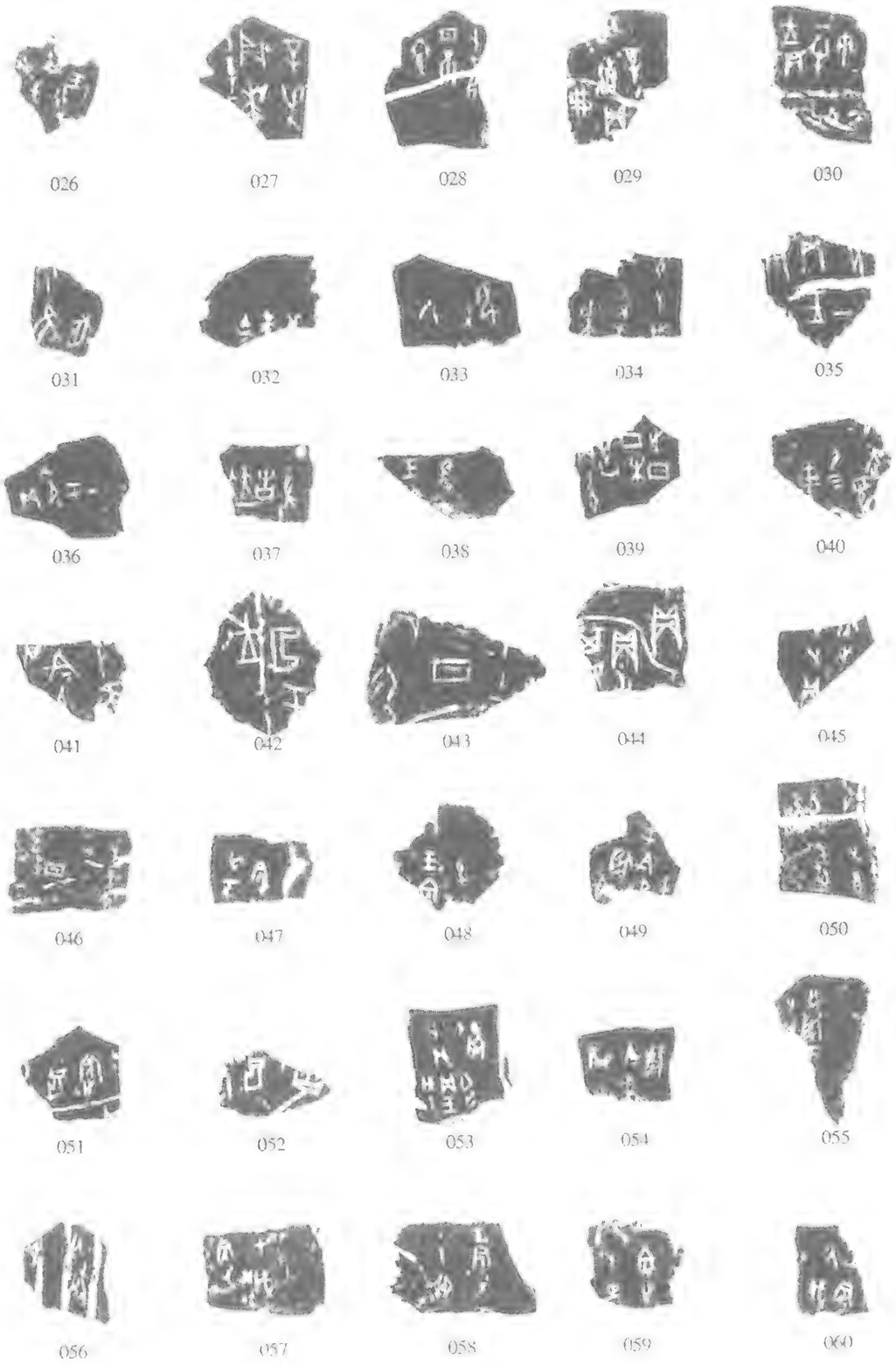
respective consorts Bi Geng and the third Bi Geng. This shows that the "Zi" in H3 inscriptions must have been a member of the Yin king's lineage and might have been Wo Jia's off-spring, and what we encountered in H3 are not king oracle inscriptions but non-king ones.

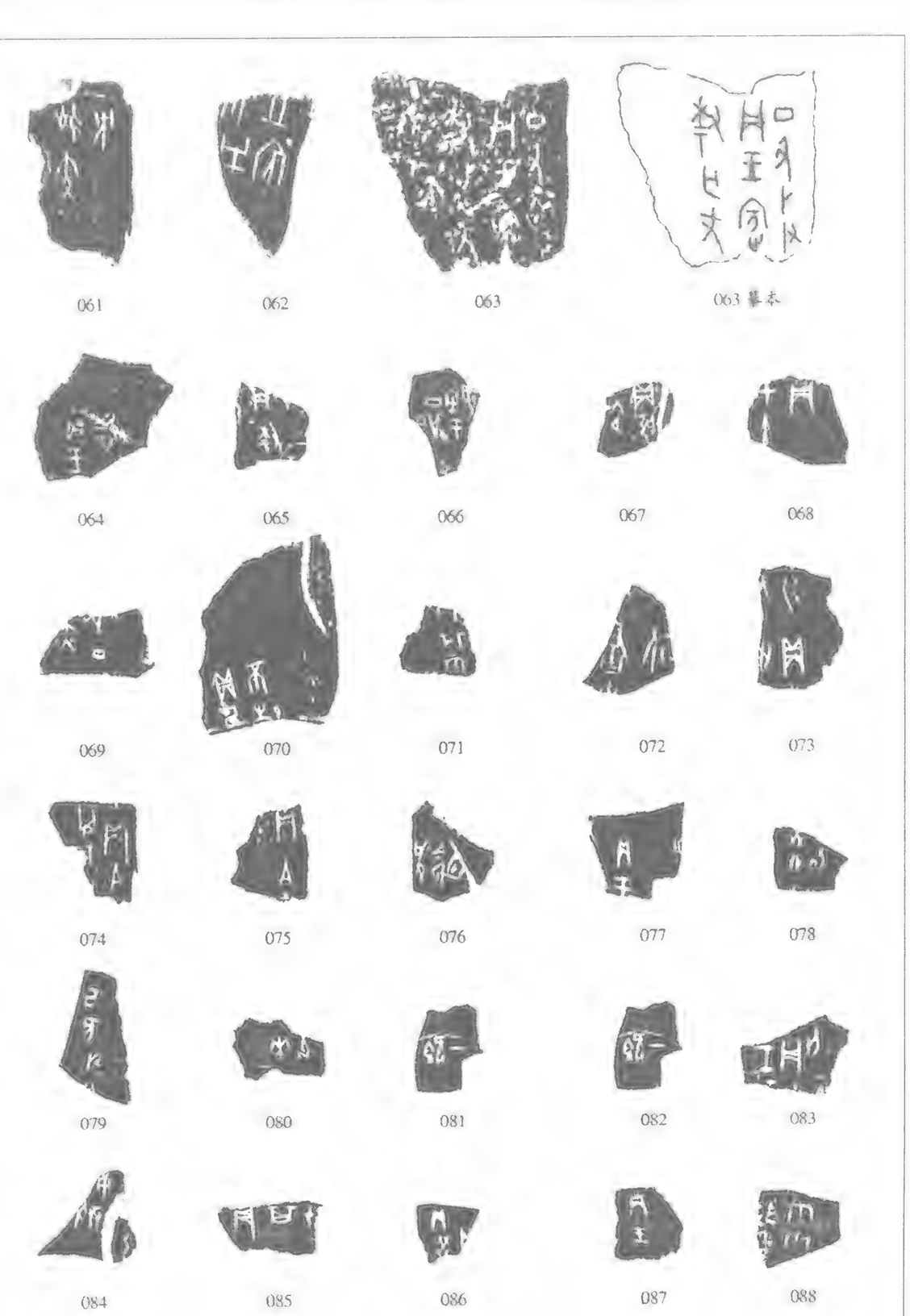
The "Zi" of H3 inscriptions was qualified to conduct sacrificial ceremonies and compile oracle inscriptions; he had a close relationship with influential figures in the dynastic court such as Fu Hao and Ding; and he was authorized to order people about and controlled a large divination organ second only to the king's one. So it can be inferred that he enjoyed the highest position among the chief performers of the divination activities represented by the non-king oracle inscriptions.

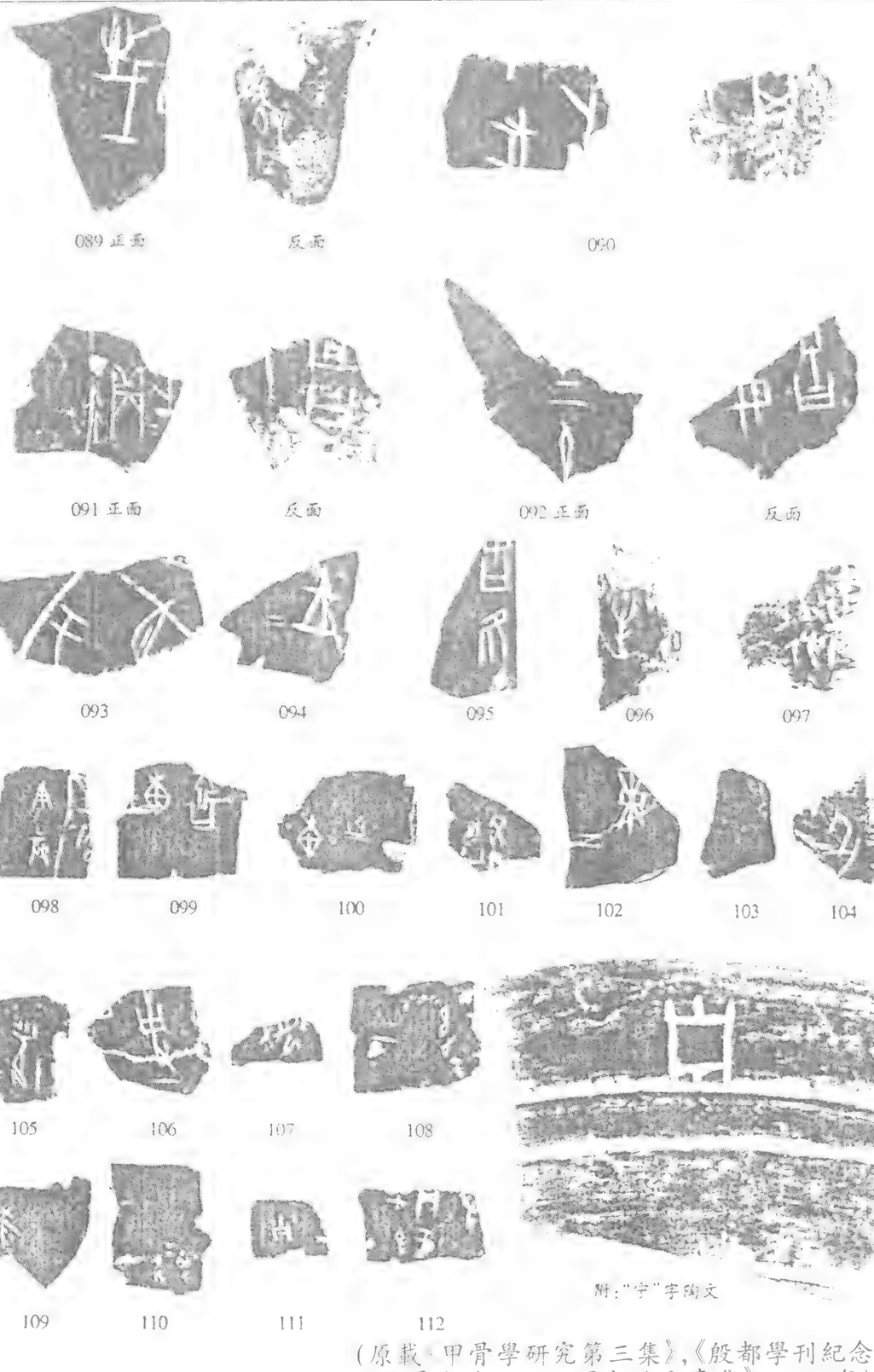
Many figures mentioned in H3 oracle inscriptions occur on other divination bones of the Wu Ding reign, including then still living Fu Hao and Zi Zhi. The two figures as late and worshipped ancestors appear in the Bin group and leser-character Shi group of inscriptions, which are generally beliveved in academic circles to be of the mid and late Wu Ding reign and the mid Wu Ding reign respectively. This further indicates that the H3 inscriptions should be dated to the early Wu Ding reign, which is roughly comformable to the dating based on the stratigraphic evidence and associated pottery objects from H3.

(原載《考古學報》1999年第3期)


001 002 003 004 005
006 007 008 009 010
011 012 013 014 015
016 017 018 019 020
021 022 023 024 025


026 027 028 029 030
031 032 033 034 035
036 037 038 039 040
041 042 043 044 045
046 047 048 049 050
051 052 053 054 055
056 057 058 059 060


061 062 063 063 摹本
064 065 066 067 068
069 070 071 072 073
074 075 076 077 078
079 080 081 082 083
084 085 086 087 088


089 正面 反面 090
091 正面 反面 092 正面 反面
093 094 095 096 097
098 099 100 101 102 103 104
105 106 107 108
109 110 111 112
附:"宁"字陶文

(原載《甲骨學研究第三集》,《殷都學刊紀念甲骨文發現100周年論文專集》,1999年)

著録片考釋

附録

年表

索引

董作賓　著

甲骨

關于甲骨文字三十年來發現研究的總記

年表

據中央研究院歷史語言研究所集刊

一九三〇年第二本第二分册影印

甲骨年表

（關於甲骨文字三十年來發現研究的總記）

董作賓

表例：

1. 本表紀年，始自清光緒二十五年(1899)，至中華民國十九年(1930)。
2. 表中第一欄，首，民國紀元及紀元前。次，甲子。又次，清年代。末，西歷紀元。
3. 表中第二欄，分左右爲二。左欄爲'本年大事紀'，右欄爲'本年出版之論著'。所註，低於正文二格。
4. 表之格式如此

民國紀元(或紀元前)	甲子	清年號年數	西歷紀元
本年紀事： （正文） （附註）		本年論著： （正文） （附註）	

5. 每年皆有此兩欄，文中格式如上表而省去界線。
6. 無紀事及論著之年，僅列第一欄。

民國紀元前十三年　己亥　清光緒二十五年　西歷紀元一千八百九十九年

山東濰縣古董商人范維卿，初以安陽小屯村出土的甲骨文字介紹於世。

先是，小屯北地濱洹水的農田，常有甲骨發現，村人李成檢拾之，售於藥店，謂之龍骨，經過數十年。本年范估才開始收買若干片，獻於端方。

相傳安陽小屯殷故墟出土的甲骨

力卽碎"。賓按劉氏所記出土地，蓋受估人之欺。羅振玉五十日夢痕鐵言之甚詳。

民元前十二年　庚子　清光緒二十六年　西元一千九百年

本年，范估又"挾百餘片走京師，王懿榮見之狂喜，以厚值留之。後有濰縣趙執齋得數百片，亦售歸王氏。未幾，義和拳亂起，王氏殉難"。（鐵雲藏龜自序）

英人考脗（Couling）及美人查爾凡（F.H. Chalfant）在山東濰縣購得甲骨文字殘片甚多。獻於英國博物院及蘇格蘭博物院，芝加哥之 Field 博物院。〔見殷虛卜辭自序〕

民元前十一年　辛丑　清光緒二十七年　西元一千九百零一年

民元前十年　壬寅　清光緒二十八年　西元一千九百零二年

王懿榮之子王翰甫，出所藏古器物，清夙債，龜版最後出，悉數售與丹徒劉鶚。定海方藥雨，得范姓所藏三百餘片，亦歸劉氏。趙執齋更爲劉氏奔走齊，魯，趙，魏之郊，凡一年，前後收得三千餘片。總計劉氏所

藏，約過五千片。（見鐵雲藏龜自序）

上虞羅振玉，在劉鶚家見龜版的墨本，歎爲"漢以來小學家若張，杜，楊，許，所不得見"的文字。以謀流傳之責自任。於是盡墨劉氏所藏千餘片，爲編印之。（見殷虛書契前編自序）

賓按羅氏自序又云"越歲辛丑，始於丹徒劉君許見墨本"。則此條似應列於辛丑年。但劉氏藏龜自序則稱壬寅年，乃得龜版於王翰甫觀察，則羅氏始見龜版當在壬寅。劉序事方隔年，較爲可信。羅序作於壬子，去壬寅已十一載，記憶或不免有誤，今改隸於本年，以符事實。

民元前九年　癸卯　清光緒二十九年　西元一千九百零三年

本年，劉鶚以所得甲骨文字，選拓一千零五十八片，爲鐵雲藏龜六册。八月，羅振玉爲鐵雲藏龜作序文，攷正經史者四事：一曰灼龜與鑽龜，二曰鑽灼之處，三曰卜之日，四曰骨卜之原始。（見原序）

九月劉鶚自序鐵雲藏龜，述龜版出土始末，購求原委。又攷證其繇辭體

劉鶚編印之鐵雲藏龜出版。石印本，全六册。凡二百七十二葉。

頭顱，大哭一場。　至今頭上留有傷疤。

3.袁世凱在洹上村住。

4.正在修洹河上的洋橋，火車還未通。　朱姓所得，多賣與祝續齋，因無火車，祇以土車運北京。

民元前七年　乙巳　清光緒三十一年　西元一千九百零五年

民元前六年　丙午　清光緒三十二年　西元一千九百零六年

民元前五年　丁未　清光緒三十三年　西元一千九百零七年

本年羅振玉方"備官中朝，曹務清簡，退食之暇，輒披覽墨本，及所藏龜版，於向所不能遽通者，稔審既久，漸能尋繹其義，但猶未及箋記"。（殷虛書契前編自序）孫詒讓之後，於甲骨文字貢獻最大，用力最勤的當推羅氏。

民元前四年　戊申　清光緒三十四年　西元一千九百零八年

民元前三年　己酉　清宣統元年　西元一千九百零九年

本年春，村前張學獻家地因挖掘山藥　　日本文學博士林泰輔作清國河南省

萬版"。　（見殷虛書契前編自序，國學叢刊）

民元前一年　辛亥　清宣統三年　西元一千九百十一年

羅振玉就購得的甲骨文字中，"汰其贋作，得尤異者三千餘版"。"意不自歉，復命弟振常（子敬），　婿弟范兆昌（恆齋）至洹陽采掘之，所得又再倍"。羅氏乃寒夜擁爐，手加氈墨"擬編印行世。（見前編自序）

前編自序云"宣統改元之二年"，遣肆估搜求甲骨，一歲所得逾萬。　"意不自歉"，又命其弟振常與范兆昌同往采掘，則振常等再往，在一年之後，應列辛亥。但又說逾年冬而武昌起義，似又應列庚戌。　文人的時間觀念，往往如此含混。

聞小屯村人言，同時搜求購買者，尚有上海估人金宋卿，及山東范兆慶，北京祝續齋（卽祝繼先）。　羅振常時年四十許，貌似日人，村人呼曰'日本羅'。　呼祝曰，'祝吃巴'，祝諳其僞，土人不能欺。

本年冬，革命軍起，羅振玉逃赴日本

羅振玉以殷虛書契前編三卷，刊入國學叢刊，石印本。

例，定爲殷人刀筆文字。　（見原序）

十月，仁和吳昌綬作鐵雲藏龜序。

民元前八年　甲辰　清光緒三十年　西元一千九百零四年

十一月，孫詒讓自序契文舉例。　謂"不意衰年睹此奇迹，愛翫不已。輒窮兩月力校讀之，以前後復縋者互相案繹，廼略通其文字"。　孫氏精於古金文，對於甲骨文字的研究，在中國爲開創之第一人。

本年冬，小屯村人朱坤，率領工人，大挖掘甲骨文字於村北地洹水南岸。搭蓆棚，起爐竈，工作甚久。　所得甲骨盈數車。　村人霍文元，劉金聲等與朱姓爭挖掘之地，械鬥成訟。從此縣官禁止，不許挖掘。

朱坤字厚菴，現居安陽城內。他在北地大挖掘的年代，村人多不能確定，現據下列各證，定爲本年。

1.村長張學獻方十歲。　學獻說他在十一歲時，他家買北地，那時朱姓剛已挖過，打過官司。

2.村人何國棟八歲。　時在朱家地裏看挖坑，坐土堆上撿小塊字骨，忽坑裏工人擲一骨版，打破

瑞安孫詒讓作契文舉例成。　全書凡二卷，石印，二册。　上卷：月日第一，貞卜第二，卜事第三，鬼神第四，卜人第五，官氏第六，方國第七，典例第八。　下卷：文字第九，雜例第十。

溝發現甲骨文字。　村人相約發掘，得"馬蹄兒"及"骨條"甚多。

按此年學獻十五歲，今年三十六，惟知當在一九〇九。　這次挖掘，未得地主允許，學獻母大罵村人，因被毆打，頭破血流，經人和解，未成訟，由村人出"保辜"了事。　保辜者，乃是一種文約，請醫包治，百日內死，則毆者負責償命，百日外卽不負責了

湯陰縣發現之龜甲獸骨一文，揭載於史學雜誌。　同時富岡謙藏亦著有古羑里城出土龜甲之說明一文

民元前二年　庚戌　清宣統二年　西元一千九百一十年

林泰輔以所作甲骨論著郵寄羅振玉，羅氏乃於本年二月著手考證貞卜文字，更以長夏屏絕人事，閉戶兼旬，草成殷商貞卜文字考一書。

五月，羅氏作自序，謂始由估人之來自中州者"詢知發見之地在安陽縣西五里之小屯而非湯陰，其地爲武乙之墟"。　又因刻辭中有殷帝王名諡，而定爲"殷室王朝之遺物"。　皆屬創見。

六月，羅氏書成，作後記。

羅氏以搜求甲骨，視放釋爲尤急，乃於本年遣廝肆估人祝繼先，　秋良臣"大索於洹水之陽，先後所得乃達二

羅振玉著殷商貞卜文字攷出版。　石印一册。　篇目：考史第一：一，殷之都城；二，殷帝王之名諡。　正名第二：一，籀文卽古文；二，古彙形字因形示意，不拘筆畫；三，與金文相發明；四，糾正許書之違失。　卜法第三：一曰貞，二曰契，三曰灼，四曰致墨，五曰兆坼，六曰卜辭，七曰藏龜，八曰骨卜。　餘說第四。

。 盡所藏甲與骨裁入行篋。 因展轉運輸，及稅吏檢查，損壞者十之五六。（見前編自序）

中華民國元年 壬子 西元一千九百十二年

十二月，羅氏作殷虛書契前編自序，述甲骨文字之出土，採掘，購求，傳拓，編印始末甚詳。

羅振玉編印之殷虛書契前編出版。珂羅版精印拓本，全書八卷，四冊。所收甲骨凡二千二百二十九版。

民國二年 癸丑 西元一千九百十三年

民國三年 甲寅 西元一千九百十四年

本年春，坎拿大人明義士 (James Mellon Menzies) 乘老白馬遊於洹水南岸，攷察殷虛出土甲骨文字情形。自此以後，頻往調查搜求，所獲頗多。明氏自謂“第一次所得之大者，乃全爲僞物”。 以後乃知小者之不可忽。 故所得以龜甲碎片爲多。（見殷虛卜辭自序）

明氏時爲安陽傳教師，甚注意於甲骨的購求。 初得大牌骨，乃新牛骨仿製者，佔人欺外人不識眞僞，舉以售之。 未久，腐臭不可嚮邇。 然明氏從此悉心攷

羅振玉編印之殷虛書契菁華出版。全一卷一册。 所收甲骨共六十八版。同時羅氏所著殷虛書契考釋出版。王國維手寫石印本，全書一厚册。篇目：都邑第一，帝王第二，人名第三，地名第四，文字第五，卜辭第六，禮制第七，卜法第八。

賃車至小屯。 其地在邑之西北五里，東西北三面洹水環焉。 彰德府志以此爲河亶甲城，近十餘年間，龜甲獸骨，悉出於此。 詢之土人，出甲骨之地約四十餘畝。 因往履其地，則甲骨之無字者田中纍纍皆是，拾得古獸角一，甲骨盈數斛。 其地種麥及棉，鄉人每以刈棉後卽事發掘，其穴深者二丈許，掘後卽填之，復種植焉。 所出之物，甲骨以外，蜃殼至多，與甲骨等。 往歲所未知也。 古獸角亦至多，其角非今世所有，至一鄉人家，見數十具，角之本，近額處，相距約一二寸許，有環節一，隆起如人指之著指環者然，土人謂是龍角。 得貝一，其材以蜃殼爲之，雕文與古玉蒲璧同，惜已碎矣。 旋以天氣亢燥，思飲，亟歸寓”。（五十日夢痕錄第廿二葉）

民國五年 丙辰 西元一千九百十六年

春三月，明義士印行殷虛卜辭，作英文自序一篇，謂書中所收甲骨，蓋從五萬件中選出者。本書凡三次易稿，經三年之功乃成。 序文作於上海，時明氏將歸坎拿大。（見殷虛卜辭自

明義士編殷虛卜辭出版。 摹寫石印本一册。 收甲骨凡二千三百六十九版。

羅振玉編殷虛書契後編出版。 影印拓本，凡二卷，二册。 所收甲骨一

究，終成鑑別眞僞的能手。

十月，羅振玉復影照精印其所藏最大之肩胛骨，脆弱易損，未經拓墨者，爲殷虛書契菁華一卷。 有自序。

十二月，羅氏自序殷虛書契考釋。謂“發憤鍵戶四十餘日，遂成考釋六萬餘言”。 又述根據遺文，補苴往籍的“三難”，及可資考訂的“六端”。 並謂“予爰始搜輯，訖於觀成，或一日而辨數文，或數夕而通半義，譬如冥行長夜，乍覩晨曦，既得徵行，又蹈荆棘；積思若痗，雷霆不聞，握觚在手，寢饋或廢”。 頗能寫出作者研究的精神。 （見殷虛書契考釋自序）

王國維書殷虛書契考釋竟，爲作跋文，歎爲“三代以後言古文者未嘗有”之書。（考釋跋）

民國四年 乙卯 西元一千九百十五年

春正月，羅振玉輯篋中所藏劉鶚贈與之甲骨文字墨本，爲鐵雲藏龜之餘行世。 首有羅氏自序。

三月，羅氏至安陽小屯村，考察殷虛遺址。 自記有云：“三十日，是日已刻抵安陽，寓人和昌棧。 亟進餐，

羅振玉編輯鐵雲藏龜之餘出版。 全一册。 收甲骨文字凡四十版。

序）

羅振玉序後編云“今年春遊滬，始知歐人哈同君者，篤嗜我國文字之學，嘗創立學舍以養諸生，名之曰倉頡大學，其趨向可知也。 聞余爲此書，請而刊焉，乃以十日之力，亟蘞爲二卷付之，俾與前編共傳當世”云。

四月，羅氏自序殷虛古器物圖錄，有云：“頃既成殷虛書契後編，私念言殷虛遺物，雖殘缺斷爛之餘，而可窺見古代良工之制作兼可攷見古器之狀，收多識之益。 今秘予篋中垂十年，世莫得而見也”。 “乃親督工影寫，成書一卷，計古器物五十有五”。 “考證所得，爲錄一卷，附於圖後”。 殷虛出土物，除甲骨文字外，鮮有注意者。 羅氏能將其殷虛遺物，搜求流傳，於考古學上的貢獻不少。

五月，羅氏更編甲骨文中不可識之字，爲待問編行世。 首有自序。

民國六年 丁巳 西元一千九百十七年

千一百零四版。

羅氏編著之殷虛古器物圖錄一卷，附說一卷，影印本，全一册，於四月出版。 又所編殷虛書契待問編一卷，石印寫本，全一册，於五月出版。

王國維著殷卜辭中所見先公先王考一卷，續考一卷，殷周制度論一卷，共一册。 同時出版，收入學術叢書中。

。　又稱“近年復出土甚夥，經詢近購得數百片，其字奇古，有爲羅書所未載者，蓋晚出者係被壓於下層，自爲一系，與初出土者時代不同，文字自異耳”。

實按時先生有三誤：一是定名之誤，誤以甲骨爲竹簡；二是解說之誤，甲骨並無若何之化學變化；三是鑑別之誤，誤以贋品爲眞。　他在地志中所舉之例，卽是僞品。　所惜時先生已與世長別，不及見新出之眞品，以是正前此之錯誤了。

民國九年　庚申　西元一千九百二十年

是年，北五省大旱成災，鄉人迫於飢寒，相約挖掘甲骨文字於村北河畔。凡前曾出土甲骨之處，搜尋再四。附近村人亦多參加。

十二月，華石斧爲殷虛類纂作序文。王襄亦有自序。

天津王襄編簠室殷契類纂一書出版。石印本全四册。　一，正編依說文次序，載甲骨中可識之字凡八百七十三。　二，附編輯錄合文；三，存疑；四，待考。

王國維作隨庵所藏殷虛文字跋一文，刊入觀堂別集補遺。

民國十年　辛酉　西元一千九百二十一年

本年（日本大正六年）十二月，林泰輔自序龜甲獸骨文字，謂此書乃就商周遺文會諸家所藏的實物拓本，編印而成者。

日本林泰輔編龜甲獸骨文字出版。全書二卷二册。　所收甲骨計椎石齋，聽冰閣，纗述堂所藏共一千零二十三片。

膠西柯昌濟作殷虛書契補釋出版。自刊本，全書一卷，一册。

民國十一年　壬戌　西元一千九百二十二年

遂古齋主人霍保祿以所藏甲骨文字，捐贈北京大學研究所國學門。　凡四百六十三版。

民國十二年　癸亥　西元一千九百二十三年

春，小屯村中，張學獻家菜園內，有字骨出現。

時學獻菜園築圍牆，何國棟爲幫工，掘土，得大骨版二，皆有文字，何默記其地。　這是民國十五年村中大發掘的伏線。　何國棟言。

夏，王國維爲殷虛文字類編作序文，商承祚亦有自序。

丹徒葉玉森作殷契鉤沈二卷，手寫石印，刊入學衡第二十四期。　別有單行本。

番禺商承祚殷虛文字類編出版。　貽安堂刻本，全六册。　前四册爲正編十四卷，通檢一卷，後二册爲殷虛書契攷釋一卷，殷虛文字待問篇一卷。

東莞容庚作甲骨文之發現及其攷釋一文，刊於北京大學國學季刊一卷四號。

陸懋德作甲骨文之歷史及其價值一篇，載晨報副刊（十二月份）。

民國十三年　甲子　西元一千九百二十四年

葉玉森著說契一卷，擧契枝談卷甲一卷，刊於學衡第三十一期。　皆葉氏手寫石印，有單行本。

馬叔平（衡），在協和醫院講演三千年前的龜甲和獸骨。　講演稿載京報副刊第二十號。

民國十四年　乙丑　西元一千九百二十五年

本年春，葉玉森購得劉鶚家所藏龜版一千三百版，乃選未著錄者二百四十版，拓印成册，名之曰鐵雲藏龜拾遺，並附攷釋。　五月書成，作自序。

村人大發掘於村前大路旁，得甲骨數簣，胛骨有長至尺餘者。　多售於上海估人。

丹徒陳邦懷著殷虛書契攷釋小箋一卷出版。

葉玉森編著鐵雲藏龜拾遺出版，影拓本，附攷釋一卷，共一册。

王襄著簠室殷契徵文二卷，攷釋二卷出版，全四册。　石印本。

商承祚著殷虛文字攷一篇，載入國學論叢二卷四期。

民國十五年　丙寅　西元一千九百二十六年

春三月，村人在張學獻家菜園中大挖掘。　時張方爲匪架去，出款多，村人乘機與商，得甲骨文字以半數歸之，約遂定。　掘得胛骨甚多，多歸明義士。

余永梁作殷虛文字攷一卷，刊入國學論叢一卷一號。

福山王懿荣著殷虛書契菁華二卷出版，自印本。

實按此書未見，出版年月亦不詳

聞村人言：此次挖掘，卽在村長張學獻家菜園內，共數十人，分三組，鼎足而掘，各由深處向中間探求，忽空虛下陷，埋四工人，急救出，皆死而復蘇，因罷工。 霍姓子至今爲駝背。

。 因見於本年出版洹陽黃立猷之金石書目，故附於此。

又王維樸東武王氏商盉堂金石叢話云"洎民國丙辰，避地來津，與僑居日本上虞羅丈，借郵簡商確舊學，乃整理舊藏，購致新出，積萬餘枚，選拓成殷虛書契菁英一書，已經黃毅侯農部錄入金石書目中矣"。 是王氏此書，但選拓，未印行耳。

民國十六年 丁卯 西元一千九百二十七年

明義士於本年購得大批甲骨文字。

自民國三年以來，明義士駐彰德傳教，土人呼曰"明牧師"。村人言，十餘年間，明氏得甲骨甚夥，民國六年，明氏出版殷虛卜辭時，已收藏五萬片，然皆破碎者，自後能辨眞僞，購求乃及於大版。 十四年及十五年村中所出，本年亦多爲明氏收買。

徐嘉瑞作日本甲骨之收藏與研究一文，刊入國學月報二卷一號。

陳邦懷著殷虛拾遺出版。 石印一册。

陸懋德作由甲骨文攷見商代之文化一篇，刊入清華學報四卷二期。

民國十七年 戊辰 西元一千九百二十八年

本年春，北伐軍作戰安陽，駐兵洹水南岸，小屯村人因廢農作。 四月，

聞宥著殷虛文字孳乳研究，刊於東方雜誌二十五卷三號。 又作甲骨學之

三月，國立中央研究院歷史語言研究所攷古組全體赴安陽發掘殷虛，設辦事處於洹上村。 三月七日開工，至五月六日停工，得甲骨有文字者六百八十版，古器物，獸骨，蚌殼，陶片之類甚夥。

五月間，軍事突興，土匪蜂起，攷古組工作停止，乃以所掘古物一部分，運至北平整理研究。

本年秋，容庚爲燕京大學國學研究所購得徐枋舊藏甲骨一千二百版，以甲爲多。

十月七日，攷古組再赴安陽開工，二十一日，忽有河南省政府所派何日章聲言拒絕研究院工作，並招工自掘，攷古組乃暫停工。 十一月十五日復開工，至十二月十二日停工，先後得古器物甚多，甲骨文字凡二千七百四十二版。 何日章所派人員，挖掘兩月，亦得甲骨文字及古器物甚多。

十二月，歷史語言研究所所長傅斯年，因安陽發掘糾葛，至汴與河南省政府接洽，商定解決辦法五條以歸。

關於安陽發掘交涉經過，詳傅斯年作國立中央研究院歷史語言研究所發掘殷墟之經過一文。 載集刊第一本第二份，安陽報告第

聞宥作研究甲骨文字的兩條新路一文，載中山大學語言歷史學週刊百期紀念號。 又譯日本林泰輔所著甲骨地名攷一篇，載同週刊第九集，第一〇四，一〇五兩期中。

陳邦懷著殷契辨疑出版， 石印，一册。

李濟主編之安陽發掘報告第一期出版。 本期論文共九篇，洋裝一厚册。目錄如下：序，蔡元培；發刊辭，李濟；中華民國十七年十月試掘安陽小屯報告書，董作賓；小屯地面下情形分析初步，李濟；殷商陶器初論，李濟；商代龜卜之推測，董作賓；新獲卜辭寫本附後記，董作賓；新獲卜辭寫本後記跋，余永梁。

馮宗麟作甲骨文字學史一篇，載中央大學半月刊第一卷第二期。

丁山作釋疾，釋瘳，釋𡆥三篇，載歷史語言研究所集刊第一本第二分。

軍事結束，村人乃大挖掘於村前道旁，得甲骨文字甚多，多售與開封估人。

村人因受軍事影響，無以爲生，因與地主相商，得甲骨，以半數與之，乃大挖掘於村前路旁，及麥場前之樹林中，得物盈數筐，多售與上海，開封商人。

八月，國立中央研究院派歷史語言研究所編輯員董作賓，至安陽小屯村，調查近年甲骨出土情形。

十月，中央研究院再派董作賓赴安陽，試掘甲骨文字，並由河南省政府及教育廳派員協助工作。 自十三日起，至三十日止，得甲骨文字七百七十四版，古器物十餘種。

工作詳情，見董作賓作中華民國十七年十月試掘安陽小屯報告書。 載入安陽發掘報告第一期中。

十二月，中央研究院復聘李濟博士爲攷古組主任，主持安陽發掘事宜。

李濟乃偕助理員董光忠邀同董作賓再赴安陽查勘，並籌備來春發掘事宜。

董作賓手寫新獲甲骨文字，並後記稿本爲一册。 付石印。

民國十八年 己巳 西元一千九百二十九年

過去與將來一文，載民鐸九卷五號。

陳邦懷著殷虛臆契攷出版，石印一册。 又著殷虛瓿徵一書（見臆契自序）未見。

胡光煒著甲骨文例出版。 凡二卷，上卷形式篇，下卷辭例篇。 余永梁手寫石印本。 全書一册，爲國立中山大學語言歷史學研究所攷古學叢書之一。 董作賓作殷虛甲骨文之發現及其著錄與研究一文，載東方雜誌二十五卷十五號。

二期，另有單行本。

民國十九年 庚午 西元一千九百三十年

三月，河南省政府不顧成約，准許何日章派人再赴安陽小屯挖掘古物，中央研究院安陽攷古工作，因復完全停頓。 何所派人，自二月二十日起至三月九日止，又四月十二日起至月終止，凡開工兩次，所得古物，未詳。

傅斯年作國立中央研究院歷史語言研究所發掘安陽之經過一文，單行本出版(本年二月)。

李濟作現代攷古學與殷墟發掘一篇，附入發掘安陽之經過，同出單行本。

董作賓作甲骨文研究之擴大一篇，附入發掘安陽之經過，同出單行本。

關百益編著殷虛器物存眞第一集出版。 拓本，附圖攷一卷，合一册。

郭沫若著卜辭中之古代社會一文，載入中國古代社會研究中，於本年二月出版。 著者別有甲骨文釋四卷，同時脫稿。

劉盼遂作甲骨中殷商廟制徵一文，載女師大學術季刊第一卷第一期。

聞宥作甲骨文中×文之研究一篇，商承祚作殷虛文字用點之研究一篇，葉玉森作芝加哥博物院殷契攝影記一篇，均載入中山大學語言歷史學周刊第十一集，第一二五至一二八期合刊之文字專號(四月出版)。

民國十九年七月一日，初稿寫完於北平北海公園靜心齋。

甲骨年表

董作賓　著

據商務印書館一九三七年四月版影印

編纂略例

一、本年表乃就董作賓民國十九年七月所發表之甲骨年表，增訂重編。

二、本表紀年始自清光緒二十五年（一八九九），訖於中華民國二十五年（一九三六）八月。民國紀元以前，以陰曆爲主，民國紀元以後，以陽曆爲主。

三、表中共分三欄：（一）紀年，列中國年代，甲子，西曆紀元。（二）紀事，略記甲骨文字之發現始末，流傳情形，及研究撰著之經過。（三）撰著，備列關於甲骨文字之專著及論文。

四、撰著一欄，有聞必錄，不厭其詳。惟間有徵引甲骨文字而無關宏旨者，概不列入。

五、撰著中除中文之外，西文日文之作品，亦均收錄。其有譯爲中文者，則僅收譯文。

六、撰著中有雖尚未出版，但據他書稱引，知其確已撰成者，本表亦酌量收錄。

七、撰著排列，以成稿之年月爲準，而注明其出版之年月。其原文未載成稿之年月者，以出版年月爲準。其原書所記月份，有陰陽曆之不同，則於與本表系統不同之月份，別注一陰字或陽字。月份不詳者，附於本年之後。

八、撰著之下，均詳注卷數册數，或所見之雜志報章，出版處所及定價等。不知者闕之。

九、撰人之籍貫別號，均於第一見時注明。不知者闕之。

十、每種撰著編爲一號。末附甲骨文論著分類索引，甲骨文論著撰人索引，以便檢查。

十一、本表紀事欄共錄九十七條，撰著欄共錄三百三十三款。以與原表相較，在民國十九年七月以前，有原表佚誤今爲之訂補者，計紀事欄凡二十九，撰著欄凡八十四。在民國十九年七月以後，爲原表所無，今爲之增入者，計紀事欄凡二十三，撰著欄凡一百八十七。數年之間，關於甲骨學之文獻，增益何啻倍蓰，惟此稿僅據翻檢所及，缺誤之處，當不能免，博雅君子，幸賜補正！

甲骨年表

專撰著

紀年	紀事
清光緒二十五年 己亥 一八九九— 一九〇〇	先是，遠在本年以前，河南省安陽縣小屯村北地濱洹河之農田中，即常有甲骨發現，小屯村人以爲藥材，檢拾之，售於藥店，謂之龍骨。村人有李成者，終其身，即以售龍骨爲業，今已老死。所謂龍骨，多半皆爲甲骨文字，售法有零有整，零售粉骨爲細面，名曰「刀尖藥」，可以醫治創傷，每年趕「春會」出售。整批，則售於藥材店，每斤價制錢六文。有字者，多被刮去。 是年丹徒劉鶚鐵雲客游京師，寓福山王懿榮正儒私第。正儒病痞，服藥用龜版，購自菜市口達仁堂。鐵雲見龜版有契刻篆文，以示正儒，相與驚訝。正儒故治金文，知爲古物，至藥肆詢其來歷，言河南湯陰安陽，居民掊地得之，輦載衙粥，取價至廉，以其無用，鮮過問者，惟藥肆買之云云。鐵雲徧歷諸肆，擇其文字較明者購以歸。（據汐翁龜甲文。惟原文誤以爲光緒戊戌年事，特更正之。）
清光緒二十六年 庚子 一九〇〇— 一九〇一	山東濰縣古董商人范維卿，爲端方搜買古物，往來於河南武安彰德間，見甲骨刻有文字，購若干片，獻端方，端極喜，每字酬銀二兩五錢。范乃竭力購致。至今小屯村人尚能稱述其事，傳爲美談。 是年秋，范估以甲骨文字十二版售與王懿榮，每版價銀二兩。（據明義士甲骨研究講義引范估所言。） 劉鶚鐵雲藏龜自序云：「龜版已亥歲出土，在河南湯陰縣屬之古牖里城。傳聞土人見地墳起，掘之，得骨片，與泥相黏成團，浸水中或數日或月餘，始漸離晰，然後置諸盆盎，以水盪滌之，兩三月，文字方得畢現。同時出土有牛脛骨，頗堅緻。龜版一種色黃者稍堅，色白者略用力即碎。」蓋范等估人販賣甲骨，希圖專利，不肯告人以眞實出土之地，劉氏所記，乃受其欺。上虞羅振玉叔言五十日夢痕錄言之甚詳。（見雪堂藏契。）
清光緒二十七年 辛丑 一九〇一— 一九〇二	北京仍未安，范估亦未去彰德。（據明義士甲骨研究講義。） 且文字奇古，必爲殷商遺物。秋、義和拳亂起，王氏殉難。 范估亦以拳亂之故，攜所存古物走濰縣，而存其一部分於行友趙執齋。此時以甲骨文字見重於時，遂漸有僞刻出現。（據明義士甲骨研究講義。）
清光緒二十八年 壬寅 一九〇二— 一九〇三	王懿榮之子王翰甫出所藏古器物，滂夙儥，甲骨千餘片最後出，悉數售與劉鐵雲。定海方若藥雨又得范估所藏三百餘片，亦歸劉氏。趙執齋更爲劉氏奔走齊、魯、趙、魏之郊，凡一年，前後收得三千餘片。劉氏復命第三子大紳至安陽搜羅，又得千餘片。總計劉氏前後一

清光緒二十九年
癸卯
一九〇三—
一九〇四

所得，約五千片而強。（見鐵雲藏龜自序。）

上虞羅振玉叔言在劉鶚家見甲骨墨本，歎爲「漢以來小學家若張、杜、楊、許所不得見」之文字。以謀流傳之責自任，於是亟墨劉氏所藏千餘片，爲編印之。（見殷虛書契前編自序，惟羅氏誤以爲歲在辛丑，在撥鐵雲藏龜自序，當在此年。）

本年，劉鶚以所得甲骨文字選拓一千零五十八片，付諸石印，爲鐵雲藏龜六册，是爲甲骨文字著錄行世之第一部。

八月，羅振玉爲鐵雲藏龜作序文，以其有所是正於經史者四事：一曰灼龜與鑽龜，二曰鑽灼之處，三曰卜之日，四曰骨卜之原始。（見原序。）

九月，劉鶚自序鐵雲藏龜，述龜版出土始末，賙求原委，又考證其繇辭體例，定爲殷人刀筆文字。（見原序。）

清光緒三十年
甲辰
一九〇四—
一九〇五

十一月，瑞安孫詒讓仲容自序契文舉例謂：「不意衰年睹此奇跡，愛翫不已，輒窮兩月力校讀之，以前後復經者互相案繹，迺略通其文字。」孫氏精於金文，對於甲骨文字之研究，實爲開創之第一人。

冬，小屯村地主朱坤，率領農佃，大舉挖掘甲骨文字於村北洹河南岸朱氏田中，搭蘆棚，起爐竈，工作甚久。所得甲骨盈數車。村人霍文元、劉金聲等與朱姓爭挖掘之地，械鬬成訟。從此縣官禁止，不許挖掘。

范估又得千版，售於端方。

北京脩古齋主人江夏黃濬伯川得甲骨文字六百版。

徐枋梧生在北京，亦得千餘版。（以上三條，並據明義士甲骨研究講義。）

美國長老會駐濰縣宣教士查爾凡及英國浸禮會駐青州宣教士考齡（Rev. Samuel Couling）在濰縣合購甲骨文字殘片甚多。

駐濰縣柏爾根牧師（Rev. Paul Bergen）亦得七十餘版，贈濟南廣智院（The White Wright Institute, Tsinan），今陳列該院，惟多贋品。

查考二氏既買得第一批甲骨，其後從河南來

（二）十月，丹徒劉鶚鐵雲所編印之鐵雲藏龜出版，抱殘守缺齋石印本六册，凡著錄甲骨文字一〇五八片，前附羅振玉序、吳昌綬序及自序。又民國二十年五月蟫隱廬石印本，附鮑鼎釋文。

文字。（見原序。）

美國長老會駐濰縣宣教士查爾凡（Rev. H. Chalfant）爲上海皇家亞洲學會博物院（The Museum of the Royal Asiatic Society, Shanghai）購得甲骨文字四百片。（據明義士甲骨研究講義引查氏 Early Chinese Writing 一文。）

（三）十一月，瑞安孫詒讓仲容著契文舉例二卷成。目次：上卷，（一）日月，（二）貞卜，（三）卜事，（四）鬼神，（五）卜人，（六）官氏，（七）方國，（八）典禮。下卷，（九）文字，（十）雜例。前附自序。（民國六年出版，吉石盦叢書本。又十六年八月蟫隱石印本二册，定價洋一元。）

山東者，繼續不絕，二氏遂盡量收買，讓與美國皮茲堡喀尼各博物院（The Carnegie Museum, Pittsburgh）。後又得一批，售與愛丁堡皇家蘇格蘭博物院（The Royal Scottish Museum, Edingburgh）。繼又得第四批，先爲二氏合購，後歸考氏一人。其後於一九一一年（清宣統三年）又售歸不列顛博物院（The British Museum）。

此外英國赫布金（Mr. L. C. Hopkins）得八百版。德國柏林博物院（The Museum für Völkerkunde）得七百餘版。青島威氏（Dr. Wilhelm）得七十版。天津新學書院（The Anglo-Chinese College）亦藏有若干，則爲王懿榮後人所贈。（以上四條，據明義士甲骨研究講義所引考氏 The Oracle-Bones from

清光緒三十一年 乙巳 一九〇五—一九〇六

Honan 一文。）

清光緒三十二年 丙午 一九〇六—一九〇七

九月（陽），美國駐維宣教士查爾凡（Rev. Frank H. Chalfant）著中國原始文字考（Early Chinese Writing），是爲歐美研究甲骨文字之第一人。

（三）十一月，孫詒讓著名原二卷，自刻本，又上海三頌堂書局翻印本。

清光緒三十三年 丁未 一九〇七—一九〇八

本年羅振玉方「備官中朝，曹務清簡，退食之暇，輒披覽墨本及自所藏龜，於向之蓄疑不能遽通者，諦審既久，漸能尋繹其義，但猶未及箋記。」（殷虛書契前編自序）孫詒讓之後，甲骨文字之研究，以羅氏用力最勤，貢獻最

（四）九月（陽），美國駐維長老會宣教士查爾凡（Rev. Frank H. Chalfant）所著中國原始文字考（Early Chinese Writing）一書出版，爲喀尼各博物院報告之第四卷（Memoirs of the Carnegie Museum, Pittsburgh, Vol. IV.）

清宣統二年 庚戌 一九一〇—一九一一

甲骨文字百版，以之販賣，林氏購得十版，既見實物，始覺渙然，於是乃信其眞爲古代之物。至本年，乃揭載其事於史學雜志。其時疑者仍甚多，而林氏則對於甲骨獨感特殊興趣。既而林氏又購得六百版，三井源右衛門亦得三千版，次若河井仙郎中村不折亦均藏百餘版或數十版。（據徐嘉瑞日本甲骨之收藏與研究。）

林泰輔以所作甲骨論著郵寄羅振玉，羅氏以爲援據賅博，足補其曩日鐵雲藏龜序之疏略，惟尚有懷疑不能決者，於是「乃以退食餘晷，盡發所藏拓墨，又從估人之來自中州者，博觀龜甲獸骨數千枚，選其尤殊者七百。并詢知發見之地，乃在安陽縣西五里之小屯，而非湯陰。其地爲武乙之墟，又於刻辭中

（六）六月，上虞羅振玉叔言所著殷商貞卜文字考一卷出版。玉簡齋石印本一册，定價洋五角。目次：考史第一：（一）殷之都城，（二）殷帝王之名謚。正名第二：（一）簡文即古文，（二）古象形字因形示意，不拘筆畫，（三）與金文相發明，（四）糾正許書之違失。卜法第三：（一）貞，（二）契，（三）灼，（四）致墨，（五）兆坼，

清光緒三十四年 戊甲 一九〇八—一九〇九

大。

春，小屯村前，張學獻地，因挖掘山藥溝，發現甲骨文字。村人相約發掘，得「馬蹄兒」及「骨條」（村人呼牛胛骨，骨端曰「馬蹄兒」，胛骨之過破裂成條者曰「骨條」，皆胛骨刻辭較多之處。）甚多。又此次挖掘，未得地主允許，學獻母大罵村人，因被毆打，頭破血出，經人調解，未致成訟。日本文學博士林泰輔作清國河南湯陰縣發現之龜甲獸骨一文，（林氏亦受估人之欺，不知甲骨文字眞實出土之地。）爲日本人研究甲骨文字之始。先是，鐵雲藏龜出，林氏頗疑書中所載恐爲僞造之物。其後東京文求堂購得

清宣統元年 己酉 一九〇九—一九一〇

（五）十月（陽），日本林泰輔所作清國河南湯陰縣發現之龜甲獸骨一文出版，刊史學雜志第二十卷第八、九、十期。（日本東京史學會發行，每册定價日金拾七錢。）

得殷帝王名謚十餘，乃恍然悟此卜辭者實爲殷室王朝之遺物。其文字雖簡略，然可正史家之違失，考小學之源流，求古代之卜法。發本是三者，以三閱月之力，爲考一卷。凡林君之所未達，至是乃一一剖析明白。」（殷商貞卜文字考自序。）即殷商貞卜文字考一書。

羅振玉既撰殷商貞卜文字考，「已而漸覺其一二違失，於舊所知外亦別有啓發，則以所見較博於疇昔。故於是始恍然寶物之幸存者有盡，又骨甲古脆，文字易滅，今出世逾十年，世人尚未知貴重，不汲汲蒐求，則出土之日，即澌滅之期，矧所見未博，考釋亦詎可自信，由此觀之，則蒐求之視考釋，不尤急歟。因遣山左及廠肆估人至中州，瘁吾力以購之。一歲所獲，殆逾萬。意不自歉，復命弟子敬振

（七）七月（陽），日本富岡謙藏所講古羨里城出土龜甲之說明一文出版，刊史學研究會講演集第三册。（日本東京史學研究會出版。按諸家皆誤作刊史學雜志。）

（八）卜辭，（七）藝藏，（八）骨卜。餘論第四。前附自序，後附後識各一篇。

清宣統三年 辛亥 一九一一 一九二二	本年冬，革命軍起，羅振玉赴日本，「將辛苦異域之三千年骨與甲者，鄉重戚入行笈，而展轉運輸，及稅吏檢察，折毀者十已五六，幸其尤殊者悉本俱存。」（殷虛書契前編自序。）
	(六)十月（閏），英國赫布金(L. C. Hopkins)所著最近發現之中國周朝文字(Chinese Writing in the Chou Dynasty in the Light of Recent Discoveries)一文出版，刊英國皇家亞洲學會雜志(The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。
	(七)武龍章作安陽洹上之特產及其發現物一文，刊地學雜志第二年第十七號。（北京中國地學會發行。）
	(八)張鳳所著河佫甲骨之研究一文出版，刊亞洲雜志第十八期(Journal Asiatique
	中央大學。一部分歸隱城陳鏡商承祚，容庚，洪維良等。（殷契佚存，及殷虛書契續編。）又一部分歸英王森，後印爲鐵雲藏龜拾遺。一部分歸上海英籍猶太人哈同夫人(Mrs. Hardoon)羅氏，（原藏中國）印爲設色蒙堂所藏殷虛文字。一部分歸英王森，後印爲鐵雲藏龜拾遺。一部分歸上海英籍猶太人哈同夫人(Mrs. Hardoon)羅氏，（原藏中國）印爲設色蒙堂所藏殷虛文字。一部分歸英王森，後印爲鐵雲藏龜拾遺。

中華民國元年 一九一二 辛亥——壬子	羅振玉在日本「乃以一年之力，編爲前編八卷，付工精印，而後編亦將次寫定。」（前編自序。）
	XVIII pp. 127—137 按此爲張氏在法國里昂大學之論文。）
	(十一)法國沙畹(Edward Chavannes)所著中國古代之甲骨卜辭(La Divination pár lécaille tortue dans la haute Antiquité Chinoise)一文出版，刊古物雜志(Journal Antique)。
	(十二)四月，英國赫布金(L. C. Hopkins)所著中國古代之皇家遺物(Royal Relic of Ancient China)一文出版，刊人類雜志(Man)。
	(十三)十月，英國赫布金(L. C. Hopkins)所著骨上所刻之送文與家譜（A Funeral Elegy and a Family Tree Inscribed on Bone)一文出版。

中華民國二年 一九一三 壬子——癸丑	(十四)壬子十二月，羅振玉所輯殷虛書契前編八卷出版。自影印本，四册，初定價八十元，漸增至二百元。凡著錄甲骨文字二二二九版。前附自序。又民國二十一年重拓影印本，四册，定價洋一百元。又清宣統三年國學叢刊石印本三期，共著錄三卷，凡甲骨文字二九二版。
	(十五)七月，英國赫布金(L. C. Hopkins)所著古代骨刻文中龍鱷之研究(Dragon and Alligator being Notes on Some Ancient Inscribed Bone Carvings)一文出版。
	(十六)德國勃可第（Anna Bernkardi）所著中國古代之卜骨(Frühgeschichtlieke Orakelknochen aus China)一文出版，刊Bressler Archiv 第四卷第一期(Band

中華民國三年
一九一四
癸丑——甲寅

本年春，英國駐安陽長老會牧師，坎拿大人明義士子宜（James Mellon Menzies）乘老白馬遊於洹水南岸，考察殷墟出土甲骨文字情形。自此以後，頻往調查搜求，所獲頗多。惟明氏初得大胛骨，乃新牛骨仿製者，舊者欺外人不識眞僞，舉以鬻之。未久，乃腐臭不可嚮邇。然明氏從此悉心考究，終成鑒別眞僞能手。明氏自謂「第一次所得之大者，乃全爲僞物。」以後乃知小者之不可忽，故

IV, Heft I)。

(一九)德國穆勒（H. Mueller）所著中國古代卜骨論(Mitteilungen zur Kritik der Frühgeschtlichen Chinesischen Orakelknochen）一文出版，刊人類學雜志第六期(Zeitschrift für Ethnologie, Heft 6)。

(一八)十月（陰），羅振玉所編殷虛書契菁華一卷出版。自影印本一册，定價洋三元。凡著錄甲骨文字六八版，前附自序。又重印本，多模糊。

(一九)英國浸禮會駐青州教士考齡（Rev. Samuel Couling）所著河南之卜骨(The Oracle Bones from Honan）一文出版，刊皇家亞洲學會分會雜志第四十五期(Journal of the North-China Branch

中華民國四年
一九一五
甲寅——乙卯

甲寅十二月（陰），羅振玉自序殷虛書契考釋謂「發憤鍵戶四十餘日，遂成考釋六萬餘言。」又述根據遺文，補苴往籍，茫若煙海，實有三難。而自謂祛此三難，勉希一得，稽其所獲，厥有六端：曰帝系，京邑，祀禮，卜法，官制，文字。又言「予爰始操翰，訖於觀成，或一日而辨數文，或數夕而通一義，譬如冥行長夜，乍覩晨曦，既得微行，又蹈荆棘，積思若痗，雷霆不聞，操觚在手，寢饋或廢。」頗能寫出作者之研究精神。

春正月（陰），羅振玉欲揭劉鐵雲之功以告當世，乃搜篋得君疊所贈與之甲骨文字墨本，選藏龜所未載者數十紙，爲鐵雲藏龜之餘。（鐵雲藏龜之餘自序）。

三月（陰），羅氏至安陽小屯村考察殷墟遺址。

(二〇)甲寅十二月（陰），羅振玉所著殷虛書契考釋一卷出版。王國維手寫石印本，一册。目次：(一)都邑，(二)帝王，(三)人名，(四)地名，(五)文字，(六)卜辭，(七)禮制，(八)卜法。前附自序，後附王國維後序。又十二年六月商承祚決定不移軒刻本，節錄四章，一册，附於殷虛文字類編中。又十六年二月東方學會石印增訂本三卷二册，定價洋六元。卷前增入王國維序一篇，其餘各目，附入考釋凡數十百條，惟每字之下，删去書名及頁數。

(二一)正月（陰），羅振玉所編鐵雲藏龜之餘一卷出版。自影印本一册。凡著錄甲骨文字四十版，前附自序。又十六年重印本一册，定價洋一元四角。又二十年蟫隱廬石印本，有鮑鼎釋文，附於鐵雲藏龜之後。

所得甲骨以碎片爲衆。（據殷虛卜辭自序）。

十月（陰），羅振玉復影照精印其所藏最大之肩胛骨，未經拓墨者，爲殷虛書契菁華一卷。其骨大者徑尺，字大者七八分，小者不及黍米。陳振東殷契書錄曰：「羅氏介弟振常，嘗語吾師陳保之先生云，其中最大之一片，渠在河南從一土人手中得來，僅費十九銀幣耳。當日甲骨價值之廉如此。」

海寧王國維靜安爲羅氏手寫殷虛書契考釋竟，爲作後序，歎爲「三代以後言古文者未嘗有」之書。

美國查爾凡教士死，其甲骨文字及考釋底稿，存美國芝加哥田野博物院（Field Museum, Chicago）。

(二二)同月，後藤朝太郎所作龜甲獸骨文字之研究一文出版，分刊於東洋學報第四卷第一，第五卷第三兩期。（東京東洋協會學術調查部發行，每册定價日金一圓五拾錢。）

(二三)四月（陰），海寧王國維靜安著殷虛卜辭中所見地名考一文，刊雪堂叢刻（羅振玉輯印。）三代地理小記一文中。又刊觀堂別集補遺。（十六年校印王忠慤公遺書初集本。）

(二三)八月，日本後藤朝太郎所作中國河南省所發掘龜甲獸骨之研究一文出版，分刊於考古學雜志第四卷第五、六、七、九、十二，第五卷第五、八各期。（東京考古學會發行，每册日金四拾五錢。）

(二四)同月，後藤朝太郎所作龜甲獸骨文字之研究一文出版，分刊於東洋學報第四卷第一，第五卷第三兩期。（東京東洋協會學術調查部發行，每册定價日金一圓五拾錢。）

中華民國五年
一九一六
乙卯——丙辰

歸寓。」（五十日夢痕錄雪堂叢刻本第二十二葉。）

春三月（陰），羅振玉輯殷虛書契後編成。自序曰：「乙卯仲春，渡海涉洹，弔武乙之故虛，履發掘之遺跡，恍然如見殷太史之故府。歸而發篋，出所藏甲骨數萬，遴選前編中文字所未備者，復得千餘品，手施甄墨，百日而竣。……今年春，遊滬瀆，始知歐人哈同君者，篤嗜我國古文之學，嘗規立學舍，以養諸生，名之曰倉聖大學，其趨向可知也。聞余爲此書，請而刊焉。乃以十日之力，亟蓋爲二卷付之，俾與前編共傳當世。」

五月（陰），羅氏更錄鐵雲藏龜、鐵雲藏龜之餘、殷虛書契前編、殷虛書契後編、殷虛書契菁華五書中不識之字，爲殷虛書契待問編一卷。自序曰：「乃最錄不可遽釋之字得千名，（三三）三月（陰），羅振玉所輯殷虛書契後編二卷出版。自影印本一册，定價洋二十元。凡著錄甲骨文字一一〇四版，前附自序又藝術叢編第一集本。

（三四）四月（陰），羅振玉所編殷虛古器物圖錄一卷，附說一卷出版。自影印本合一册，定價洋七元。著錄甲骨文字凡四版，前附自序一篇。又藝術叢編第一集本同。

（三五）五月（陰），羅振玉所輯殷虛書契待問編一卷出版。自寫影印本一册，定價洋一元六角。前附自序一篇。

（三六）七月，日本內藤虎次郎所作王亥一文出版，刊藝文第七卷第七期。（日本內外出版印刷株式會社發行。）

「鐵雲死，藏龜有千餘片爲其中表卞翁子休所得。丙辰歲冬，卞翁售與哈同花園。此戩壽堂所藏殷虛文字之由來也。」又王國維隨庵所藏殷虛文字跋云：「丙辰冬，鐵雲所藏一部，歸英人哈同君，余爲編次考釋之。」則此書本王氏編次，而姬某縞其名者。

十二月，林泰輔自序龜甲獸骨文字，謂此書乃就商周遺文會榷石齋聽冰閣繼述堂諸家所藏甲骨實物拓本，編印而成。

韻樓倣宋槧珍本，六册，定價洋十元。又十六年王忠慤公遺書初集本。）

（三二）二月（陰），王國維著殷卜辭中所見先公先王續考一卷，編入學術叢書，（上海倉聖明智大學印行。）又刊觀堂集林卷九。（十二年烏程蔣氏密韻樓倣宋槧珍本，六册，定價洋十元。又十六年王忠慤公遺書初集本。）

（三三）三月，坎拿大明義士子宜（James Mellon Menzies）所輯殷虛卜辭出版。自寫石印洋裝本一册，定價洋二十元。凡著錄甲骨文字二三六九版，前附英文自序一篇。

（三四）四月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著風鳳朋貝考（The Wind, the Phoenix and a String of Shells）一文出版，刊英國皇家亞洲學會雜志（The Journal of

中華民國六年
一九一七
丙辰——丁巳

合以重文，共得千四百有奇，兼旬而校錄竟。」

春三月（陰），明義士寫印所編殷虛卜辭一書，卷首附英文自序。略謂書中所收甲骨，蓋從所藏五萬片中選出者。書凡三次易稿，經三年之功乃成。又謂將著述史前之中國一書，專討論中國歷史之黎明，及其文化之進展。而以殷虛卜辭爲其書之第一部。其第二部爲殷虛卜辭字典。第三部以後諸書，則將根據甲骨之碎片，及別項之證據，以闡發中華民族之古代宗教，並根據各種古石骨瓦器，以討論中國古代之文化問題。（參看原文）

五月，睢寧姬佛陀覺彌所編戩壽堂所藏殷虛文字考釋一卷出版。自寫石印本一册，定價洋六元。

（三六）同月（陰），王國維著戩壽堂所藏殷虛文字考釋一卷。藝術叢編第三集石印本。又單行本，與戩壽堂所藏殷虛文字同刊，共二册，定價洋六元。

（三七）七月（陰），王國維著殷周制度論一卷。編入學術叢書，（上海倉聖明智大學印行。）又刊觀堂集林卷十。（十二年烏程蔣氏密韻樓倣宋槧珍本，

（二九）一月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著商代之帝王（Sovereign of Shang Dynasty）一文出版。刊英國皇家亞洲學會雜志（The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland）。

（三〇）同月，日本內藤虎次郎講中國古代之社會狀態。二十五年四月刊東洋文化史研究。（日本東京弘文堂書房出版，每册定價日金三圓。按此文乃在大阪朝日新聞社講稿。）

（三一）二月（陰），王國維著殷卜辭中所見先公先王考一卷，編入學術叢書，（上海倉聖明智大學印行。）又刊觀堂集林卷九。（十二年烏程蔣氏密韻樓倣宋槧珍本，六册，定價洋十元。又十六年王忠慤公遺書初集本。）

六册，定價洋十元。又十六年王忠慤公遺書初集本。）又北新活葉文選本。

（三八）八月，日本内藤虎次郎所著續王亥一文出版。刊藝文第八卷第八期。（日本内外出版印刷株式會社發行。）

（三九）十月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著象形文字研究（Pictographic Reconnaissances）第一期出版，刊英國皇家亞洲學會雜志（The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland）。

（四〇）十二月，日本林泰輔編龜甲獸骨文字二卷，附鈔釋二卷。凡著錄甲骨文字一〇二三版，前附自序。民國十年出版，商周遺文會影印本二册。又十九年北平富晉書社翻印本，二册，定價洋四元。

（四一）王國維著殷先公先王考附注一文，刊觀堂別集補遺。（十六年王忠慤公遺書初集本。）

（四二）十月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著象形文字研究（Pictographic Reconnaissances）第二期出版，刊英國皇家亞洲學會雜志（The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland）。

（四三）四月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著象形文字研究（Pictographic Reconnaissances）第三期出版，刊英國皇家亞洲學會雜志（The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland）。

（四四）五月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著占卜之方法（Working the Oracle）一文出版，刊新中國評論雜志（The New China Review）。

（四五）十月，通許時經訓志畬著商簡一文，見河南地志（河南商務印書館代售，定價洋一元。）第七章古物。

（四六）王國維作釋旻一文，刊觀堂集林卷六。（十二年烏程蔣氏密韻樓倣宋聚珍本，六册，定價洋十元。又十六年王忠慤公遺書初集本。）

（四七）王國維作釋旬一文，刊觀堂集林卷六。

（四八）王國維作釋西一文，刊觀堂集林卷六。

（四九）王國維作釋物一文，刊觀堂集林卷六。

（五〇）日本林泰輔作殷虛遺物研究一文，刊東亞之光十四卷五號。

竹簡，與鑛質化合，故光瑩如骨。羅書以爲骨質，誤矣。用正今名。」又說明竹簡不腐之故，云：「此物因河患埋沒土中，排去竹質之細胞，與土中之硅酸燐質相吸合，是以逾三千年而不腐。」又稱「近年復出土甚夥，經訓購得數百片，其字奇古，有爲羅書所未載者，蓋晚出者係被壓於下層，自爲一系，與初出土者時代不同，文字自異耳。」

四月，日本林泰輔來華旅行，親至安陽小屯村，調查殷虛，蒐集甲骨，又記載甲骨出土地方之風土區域甚詳。購得甲骨二十版，陶骨貝蚌之類甚多。歸國後作殷虛遺物研究一文。（見徐嘉瑞日本甲骨之收藏與研究。）

本年有大批僞刻甲骨文字發現。估人詭稱新出土者，售於開封市。通許時經訓志畬購得數百片，嘗以此物爲「竹簡」，故名之曰「商簡」，而錄於所編河南地志（本年出版）中。志有云：「骨董商人名曰龜版，羅叔蘊先生著殷虛書契考釋定爲獸骨。今化驗之，確係

是年，北五省大旱成災，鄉人迫於饑寒，相約挖掘甲骨文字於小屯村北河畔。凡前曾出土甲骨之處，搜尋再三。附近村人亦多參與。

十二月，天津王襄綸閣自序所編簠室殷契類纂曰：「纂所藏所見甲骨及墨本，最錄所識之字八百七十三，重文二千百有十，凡二千九百八十三爲正編。一、說文所無及難確認之字，凡千八百五十二，取其偏旁類似者，次之爲存疑。一、不能收入存疑之字，又百四十二，爲待考。一、殷契文中，每多合文，因輯爲附編，凡二百四十三，重者九十八，亦與數焉。參稽舊說，間附己見於各字行間，至卜辭原文，併以錄入。」是爲纂輯文字之第一書。又十

（五一）日本後藤朝太郎作殷代龜版文中之族字一文，刊民族與歷史一卷三期。

（五二）六月（陰），羅振玉所著釋叔一文出版，刊永豐鄉人甲稧。（又稱雲窗漫稧。）

（五三）同月，羅振玉所著釋爰一文出版，刊永豐鄉人甲稧。（又稱雲窗漫稧。）

（五四）同月，羅振玉所著與林浩卿博士論卜辭王賓書一文出版，刊永豐鄉人甲稧。（又稱雲窗漫稧。）

（五五）同月，羅振玉所著與王靜安徵君論卜辭上甲書一文出版，刊永豐鄉人甲稧。（又稱雲窗漫稧。）

（五六）九月（陰），王國維作隨庵所藏殷虛文字跋一文，刊觀堂別集補遺，（十六年王忠慤公遺書初集本。）又十九年觀堂遺墨影印稿本上。

中華民國十年 一九二一 庚申——辛酉	八年十月重訂本後序曰：「戊辰冬，自蜀告歸，里居事簡，檢發著殷契類纂，且夕研討，於存疑待考二編，識未識之字凡八十四名，據形增入。正編所收未安者，是正之，論談者校勘之，凡十三名，重分部居。佳遊廠肆見殷契黑拓，收百數十本，迄儲篋衍。今事理蕭疎，翼文十一名，並以錄補。閱時三月，稿本寫完。」（同係一書，不便割裂，故年雖不同，亦附於此。）
	（三）九月，閻縣林義光樂園著文源十二卷附錄二卷，自寫石印本三冊，定價洋一元。
	（四）十二月，天津王襄編閒所編簠室殷契類纂出版。正編十四卷，依說文次序，載甲骨中可識之字凡八七三。附編一卷，輯錄合文。存疑一卷。待考一卷。自寫石印本二冊，定價洋八元。前附自序，及王守恂華鹽磷兩書後。又十八年十月增訂本，增附後序一篇於卷前。
	（五）一月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著河南遺物之研究及其結果（The Honan Relic, a New Investigator and Some Results）一文出版，刊英國皇家亞洲學會雜志(The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。

中華民國十一年 一九二二 辛酉——壬戌	建古齋主人霍保祿以所藏甲骨文字，捐贈國立北京大學研究所國學門。凡四六三版。
	（六）五月，日本內藤虎次郎所作殷虛考一文出版，刊考古學雜志第十二卷第五期。（滬考古學會發行，每冊定價日金四拾五錢。）
	（七）膠西柯昌濟紙卿所著殷虛書契補釋一卷出版。白刊本一冊。
	（八）日本內藤虎次郎又作續王亥一文，刊藝文第十二卷第二四期。（日本內外出版印刷株式會社發行。）
	（九）一月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著象形文字研究（Pictographic Reconnaissances）第四期出版，刊英國皇家亞洲學會雜志（The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。
	（十）二月，抗父所著殷虛文字之發現與研究

中華民國十一年 一九二二 壬戌——癸亥	春，小屯村中，張學獻家園內，有字骨出現。學獻自掘之，何國棟爲發工，得大骨版二，皆有文字。何默記其地，終遺成十五年春間大規模之私掘。（何國棟所言。）
	（十一）七月，番邑商承祚錫永所輯殷虛文字類編十四卷，附待問編十三卷，及羅振玉殷虛書契考釋一卷出版。前附自序及王國維序。決定不移軒自刻本，六冊，定價洋十元。又十一文出版，刊東方雜誌第十九卷第三號（上海商務印書館發行，每冊定價洋一角三分五厘。）最近二十年間中國發現之進步一文中。又見東方文庫第七十一種，考古學零簡。
	（十二）英國赫布金（L. C. Hopkins）所著殷虛甲骨上所載王室譜系及商代之記載(The Royal Genealogies on the Honan Relics and the Record of the Shang Dynasty) 一文出版，刊德國大亞細亞雜志及德紀念號(Asia Major, Hirth Anniversary Volume)。

	六年刪校本。
	（十三）同月，英國赫布金(L. C. Hopkins) 所著象形文字研究(Pictographic Reconnaissances)第五期出版，刊英國皇家亞洲學會雜志 (The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。
	（十四）八月，趙萬里所作金石甲古文學及文字形體之發明一文出版。刊國學論刊第一卷第二期。（南京國學研究會發行，每冊定價四角三分。）
	（十五）十二月，丹徒葉玉森讱庵所著殷契鉤沈1二卷出版。手寫石印刊於學衡二十四期。（上海中華書局發行，每冊定價二角五分。）前附柳詒徵序，後附自題殷契鉤沈甲乙卷初稿六年刪校本。

中華民國十四年
一九二五
甲子—乙丑

小屯村人大舉私掘於村前大路旁，得甲骨殼數簍，脛骨有長至尺餘者。多售於上海估人。棄玉森謄得劉鶚家所藏龜版一千三百版，乃選二百四十版，印爲鐵雲藏龜拾遺，並附考釋。其自序有曰：「今年春，聞劉先生所藏，家不能保，王君遹貢同年柳君詒徵先後抵余舍，爰得收其千三百版。乃就鐵雲藏龜及鐵雲藏龜拾遺之餘未著者，選佳二百四十版，手自拓墨，編定成卌，顏曰鐵雲藏龜拾遺。管見所逮，並附考釋於後。」丹徒柳詒徵謀得劉家所藏甲骨文字三百版。

(六)二月，丹徒陳邦懷保之所著殷虛書契考釋小箋一卷出版。自刻本，一册，定價洋一元。

前附自序及吉城序。

(六)同月，日本小島祐馬所著殷代之產業一文出版，刊支那學第三卷第十期。（實弘文堂書店發行，每册定價日金四拾錢。）

(六)五月，棄玉森所編著鐵雲藏龜拾遺一卷附考釋一卷出版。自寫石印，本一册，定價洋二元。凡著錄甲骨文字二四〇版，前附自序。

(六)同月，遼五所撰殷墟文字類測上古風俗的一斑一文出版，刊南開大學週刊十九週年紀念專號。

(六)七月，英國赫布金 (L. C. Hopkins) 所著中國古今文字考（Metamorphic Stylization and the Sabotage of Significance, A Study in Ancient and Modern Chinese Writing）一文出版。刊英國皇家亞洲學會雜志(The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。

(六)八月，王國維著古史新證一卷。目次：(一)總論，(二)丙，(三)殷之先公先王，(四)商諸臣，(五)商之諸侯及都邑。北平清華研究院油印講義本。又刊國學月報第二卷八、九、十號合刊，王靜安先生專號。（十六年十月北京樸社出版，每册定價洋四角。）又刊燕大月刊第七卷第二期。（十九年二月北平燕京大學燕大月刊社出版。）又二十三年北平來薰閣影印王氏稿本，一册，定價洋一元二角。

(六)九月，王國維所講殷虛甲骨文字及書目

癸亥—甲子
一九二三
中華民國十二年

小屯村人因築路，發現一坑甲骨文字，爲明義士所得，其中有極大者。（見明義士甲骨研究。）

(五)三月，棄玉森容庚貝塚茂樹合著甲骨文之發現及其考釋一文，刊國學季刊第一卷第四期。（國立北京大學國學季刊編輯委員會出版，每册定價四洋五角。）

(五)七月，棄玉森所著說契一卷出版，手寫石印刊於學衡第三十一期。（上海中華書局發行，每册定價洋二角五分。）又單行本。又十八年北平富晉書社放大影印本，與說契合一册，定價洋二元四角。

(五)同月，羅振玉所著殷虛書契考釋小箋一卷出版。自刻本，一册，定價洋一元。

前附自序及吉城序。

(五)同月，日本小島祐馬所著殷代之產業一文出版，刊支那學第三卷第十期。（實弘文堂書店發行，每册定價日金四拾錢。）

(五)五月，棄玉森所編著鐵雲藏龜拾遺一卷附考釋一卷出版。自寫石印，本一册，定價洋二元。凡著錄甲骨文字二四〇版，前附自序。

(五)同月，遼五所撰殷墟文字類測上古風俗的一斑一文出版，刊南開大學週刊十九週年紀念專號。

(五)七月，英國赫布金 (L. C. Hopkins) 所著中國古今文字考（Metamorphic Stylization and the Sabotage of Significance, A Study in Ancient and Modern Chinese Writing）一文出版。刊英國皇家亞洲學會雜志(The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。

(五)十二月，馬衡在協和醫學校講演三千年前的龜甲和獸骨，講稿載十三年十二月二十五日北京京報副刊第二十號。

(五)同月，羅振玉所著殷虛書契考釋一卷出版，手寫石印，刊學衡第三十一期。又單行本。又十八年北平富晉書社放大影印本，與說契合一册，定價洋二元四角。

(五)同月，英國赫布金 (L. C. Hopkins) 所著象形文字研究 (Pictographic Reconnaissances) 第六期出版，刊英國皇家亞洲學會雜志 (The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。

(五)十二月，馬衡在協和醫學校講演三千年前的龜甲和獸骨，講稿載十三年十二月二十五日北京京報副刊第二十號。

(六)二月，丹徒陳邦懷保之所著殷虛書契考釋小箋一卷出版。自刻本，一册，定價洋一元。

前附自序及吉城序。

(六)同月，日本小島祐馬所著殷代之產業一文出版，刊支那學第三卷第十期。（實弘文堂書店發行，每册定價日金四拾錢。）

(六)五月，棄玉森所編著鐵雲藏龜拾遺一卷附考釋一卷出版。自寫石印，本一册，定價洋二元。凡著錄甲骨文字二四〇版，前附自序。

(六)同月，遼五所撰殷墟文字類測上古風俗的一斑一文出版，刊南開大學週刊十九週年紀念專號。

(六)七月，英國赫布金 (L. C. Hopkins) 所著中國古今文字考（Metamorphic Stylization and the Sabotage of Significance, A Study in Ancient and Modern Chinese Writing）一文出版。刊英國皇家亞洲學會雜志(The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。

(六)八月，王國維著古史新證一卷。目次：(一)總論，(二)丙，(三)殷之先公先王，(四)商諸臣，(五)商之諸侯及都邑。北平清華研究院油印講義本。又刊國學月報第二卷八、九、十號合刊，王靜安先生專號。（十六年十月北京樸社出版，每册定價洋四角。）又刊燕大月刊第七卷第二期。（十九年二月北平燕京大學燕大月刊社出版。）又二十三年北平來薰閣影印王氏稿本，一册，定價洋一元二角。

(六)九月，王國維所講殷虛甲骨文字及書目

中華民國十五年
一九二六
乙丑——丙寅

春，番禺商承祚錫永以溧陽王瀣伯沆之介紹，與友人合得劉鶚所藏甲骨二千五百餘版。又選其文少見字之變異者，手拓六百餘版。（見商著甲骨文字研究講義上篇。）

往歲所見各家之甲骨與墨本，借歸或摹者，約四百餘紙。欲集殷契佚存一書。

春三月，小屯村人在張學獻家菜園中大舉私掘。時張方爲匪擄去，出款多，村人乘機與商，得甲骨文字以半數歸之，約遂定。掘得胛骨甚多，多歸明義士。聞村人言，此次在張學獻家菜園內挖掘，共數十人，分三組，鼎足而立，各由深處向中間探求，忽虛土下陷，埋四工人，急救出，皆死而復蘇，因罷工。有雀姓子者，至今猶爲駝背。

（十九年三月，北平大學女子師範學院國故出版委員會發行，每册定價洋五角。）

（八八）四月，忠縣余永梁紹孟著殷虛文字考一文，後附自記。刊國學論叢第一卷第一號。（十六年六月北平清華研究院出版，每册定價洋一元二角。）

（八九）七月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著象形文字研究（Pictographic Reconnaissances）第七期出版，刊英國皇家亞洲學會雜志（The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland）。

（九〇）八月，張世祿所作金石骨甲文字學者疑許書古文平議一文出版，刊國學叢刊第三卷第一期。（南京國學研究會發行，每册定價洋三角五分。）

（九一）福山王緒祖編殷虛書契菁華二卷。（見黃立猷金石學目。尚未印行。）

（九二）一月，徐嘉瑞所撰日本甲骨之收藏與研究一文出版，刊國學月報第二卷第一期。（北平樸社發行，每册定價洋一角。）

（九三）九月，余永梁著殷虛文字續考一文，後附自記。刊國學論叢第一卷第四號。（十七年十月北平清華研究院出版，每册定價洋一元二角。）

（九四）同月，松江閻宥在宥譯日本林泰輔甲骨文地名考一文。刊中山大學語言歷史學研究所周刊第九集一〇四、一〇五期。（十八年十一月廣州國立中山大學語言歷史學研究所出版，每期定價洋五分。）

（九五）十月，商承祚著殷虛文字一卷，廣州中山大學講義石印本。

（九六）同月，英國赫布金（L. C. Hopkins）所著象形文字研究（Pictographic Reconnaissances）第八期出版，刊英國皇家亞洲學會雜志（The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland）。

（九七）十二月，王國維所著殷禮徵文一卷出版。王忠慤公遺書二集石印本。目次：（一）殷人以日爲名之所由來，（二）商先公先王皆特祭，（三）殷先妣皆特祭，（四）殷祭，（五）外祭。

（九八）同月，陸懋德所著由甲骨文考見商代之文化一文出版，刊清華學報第四卷第二期。（北京清華學校出版，每册定價洋三角五分。）

（九九）陳邦懷所著殷契拾遺一卷出版，自寫石

中華民國十六年
一九二七
丙寅——丁卯

明義士於本年購得大批甲骨文字。蓋自民國三年以來，明義士駐彰德傳教，土人呼曰「明牧士」。據村人言，十餘年間，明氏得甲骨極夥，民國六年，明氏出版殷虛卜辭時，已藏五萬片。而十四年及十五年村中所出，本年亦均爲明氏所收買。

本年五月三日上午，海寧王國維靜安自沈於北平西郊昆明湖。

中華民國十七年
一九二八
丁卯——戊辰

本年春，北伐軍作戰安陽，駐兵洹水南岸，小屯村人因廢農作。四月，軍事結束。村人因受軍事影響，無以爲生，因與地主相商，得甲骨，以半數與之，乃大事挖掘於村前路旁及麥場前之樹林中，所得甲骨文字，多售與上海開封商人。

二月，績溪程憬仰之所著殷民族的社會出版，此與郭沫若卜辭中之古代社會同爲由甲骨文探討古代社會最早之作品。

七月，嘉興胡光煒小石所著甲骨文例出版，爲最早專講甲骨文例之書。

八月，國立中央研究院派歷史語言研究所編輯員董作賓，至安陽小屯村，調查近年甲骨出土情形。

十月，中央研究院再派董作賓赴安陽小屯，掘甲骨文字，並由河南省政府及教育廳派員協助工作。自十三日起，至三十日止，得甲骨文字七百七十四版，古器物十餘種。（看董作賓中華民國十七年十月試掘安陽小屯報告書一文。）是爲安陽發掘之第一次。

十二月，中央研究院復聘李濟博士爲歷史語言研究所考古組主任，主持安陽發掘事宜。李濟乃偕助理員董光忠邀同董作賓再赴安陽查勘，並籌備來春發掘事宜。

董作賓手寫新獲甲骨文字，並後記稿本爲一冊，付石印。

明義士自去年迄今年，二年之間，將所藏甲骨印本一册，定價洋一元。

(一〇〇)容庚撰甲骨文一篇，見所著中國文字學。（北京燕京大學講義石印本。）

(一〇一)二月，陳柱所譯明義士殷虛龜甲文字發掘的經過（按即明氏殷虛卜辭自序。）一文出版，刊東方雜誌第二十五卷第三號。（上海商務印書館發行，每册定價洋一角二分五。）

(一〇二)同月，閒宥所作殷虛文字孳乳研究一文出版，刊東方雜誌第二十五卷第三號。

(一〇三)同月，績溪程憬仰之所著殷民族的社會一文出版，刊中山大學語言歷史學研究所周刊第二集第十六期。（廣州國立中山大學語言歷史學研究所發行，每册定價洋五分。）

(一〇四)三月，程憬著商民族的氏族社會一文，刊中山大學語言歷史學研究所周刊第四集第三十九、四十、四十二期。（同年七月、八月，廣州國立中山大學語言歷史學研究所出版，每册定價洋五分。）

(一〇五)四月，英國赫布金(L. C. Hopkins)所著象形文字研究(Pictographic Reconnaissances)第九期附引得出版，刊英國皇家亞洲學會雜志(The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。

(一〇六)五月，和縣丁山著殷契亡尤說一文，刊國立中央研究院歷史語言研究所集刊第一本第一分。（同年十月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋五角。）

(一〇七)六月，丹徒陳邦福墨逐所著殷虛雘契考一卷出版。自寫石印本一册，定價洋八角。前

之未收於殷虛卜辭中者，拓成墨本，名爲殷虛卜辭後編。（見明氏甲骨研究。）

附自序。

(一〇八)同月，何定生所著漢以前的文法研究一文出版，刊中山大學語言歷史學研究所週刊第三集第三十一、三十二、三十三期。（中山大學語言歷史學研究所發行，每册定價洋五分。）

(一〇九)七月，嘉興胡光煒小石所著甲骨文例二卷出版。廣州中山大學語言歷史學研究所石印余永梁手寫本，一册，定價洋一元。上卷形式篇，下卷辭例篇，末附余永梁後記。

(一一〇)八月，蕭炳實所著殷虛甲骨文之發現及其著錄與研究一文出版，刊東方雜誌二十五卷十五號。（上海商務印書館發行，每册定價洋一角二分五。）

(一一一)十一月，閒宥所作甲骨文之過去與將來一文出版，刊民鐸雜誌第九卷第五號。（上海商務印書館發行，每册定價洋一角二分。）

(一一二)十二月，南陽董作賓彥堂編著新獲卜辭寫本一卷，後記一卷。摹寫石印本一册。又十八年十二月安陽發掘報告第一期（國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元五角。）影寫石印本。後記又刊北平新晨報，十八年三月十七日，四月七日，五月十二日，六月十五日，七月二十一日，八月二十五日文化特刊。

(一一三)上虞羅福成君美編傳古別錄第二集。影印本一册，定價洋二元。著錄甲骨文字凡四版。

(一一四)陳邦福著殷虛甄微一書。（尚未印行。）

(一一五)明義士編殷虛卜辭後編。（尚未付印。）

中華民國十八年
一九二九
戊辰——己巳

三月，國立中央研究院歷史語言研究所考古組李濟董作賓董光忠王慶昌王湘等全體人員赴安陽發掘殷虛，設辦事處於洹上村。三月七日開工，至五月六日停工，得甲骨文字六八〇版，又古器物、獸骨、蚌殼、陶片之類甚多。是爲安陽發掘之第二次。

五月間，軍事突興，土匪蜂起，考古組停止工作，乃以所掘古物一部分，運至北平整理研究。

同月，容庚爲北平燕京大學國學研究所購得徐枋舊藏甲骨一千二百版，以甲爲多。

十月七日，中央研究院歷史語言研究所考古組李濟董作賓董光忠張蔚然王湘等再赴安陽開工。二十一日，忽有河南省政府所派何日章至安陽，聲言拒絕中央研究院工作，並招工自掘。考古組乃暫時停工。十一月十二日天津益世報藝術週刊。

（二二）二月，松江浦江清撰殷虛甲骨之新發現一文，刊十八年二月二十五日天津大公報文學副刊第五十九期。

（二七）同月，郭沫若撰殷墟之發掘一文，刊於所著中國古代社會研究附錄。（十九年五月，上海新新書店三版增訂本，每冊定價洋一元五角。）

（二八）四月，如皋魏建功天行所著論六書條例不可逕用於甲骨文字責彥堂一文出版，刊於十八年三月十七日及四月七日北平新晨報文化特刊。

（二九）同月，鄧爾雅所著跋董作賓新獲卜辭寫本一文出版，刊中山大學語言歷史學研究所週刊第七集第七十五期。（廣州國立中山大學語言歷史學研究所發行，每冊定價洋五分。）

（二〇）五月，陳邦福所作龜甲文一篇出版，刊十八年五月十四日天津益世報藝術週刊。

古器物甚多，甲骨文字凡二七四二版。是爲安陽發掘之第三次。

何日章所派人員，挖掘兩月，亦得甲骨文字及古器物甚多。

十二月，中央研究院歷史語言研究所所長傅斯年因安陽發掘糾紛，至開封與河南省政府接洽，商定解決辦法五條以歸。（詳情見傅斯年國立中央研究院歷史語言研究所發掘殷墟之經過一文。）

（二三）八月，胡韞玉所作論甲文一篇出版，刊於所著文字學。（上海世界書局ABC叢書，每冊定價洋八角。）

（二三）同月，董作賓著商代龜卜之推測一文，刊安陽發掘報告第一期。（同年十二月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每冊定價洋一元五角。）

（二三）九月，開宥著研究甲骨文字之兩條新路一文，刊中山大學語言歷史學研究所週刊百期紀念號。（同年十月廣州中山大學語言歷史學研究所出版，每冊定價洋二角。）

（二四）同月，郭沫若著卜辭中之古代社會一卷，刊所著中國古代社會研究中。（十九年三月，上海新新書店出版，一冊，定價洋一元五角。此外增訂本及翻印本坊間極多。）

目次：（一）序說，（二）社會基礎的生產狀況，（三）上層建築的社會組織。後附白二則。

（二三）十月，丁山著釋疾一文，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第一本第二分（十九年，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每冊定價洋六角。）說冀附錄一。

（二六）同月，丁山著釋瘳一文，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第一本第二分說冀附錄二。

（二七）同月，丁山著釋蒙一文，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第一本第二分說冀附錄三。

（二八）十一月，馮宗璘所著甲骨文字學史一文出版，刊中央大學半月刊第一卷第二期。（南京國立中央大學出版組發行，每冊定價洋二角。）

（二九）十二月，董作賓所作中華民國十七年十

月試掘安陽小屯報告書一文出版，刊安陽發掘報告第一期。（國立中央研究院歷史語言研究所出版，每冊定價洋一元五角。）

（二三〇）同月，鍾祥李濟濟之所著小屯地面下情形分析初步一文出版，刊安陽發掘報告第一期。

（二三一）同月，余永梁所著新獲卜辭寫本後記跋一文出版，董作賓手寫石印，刊於安陽發掘報告第一期。

（二三二）同月，胡光煒所講干支與古曆法演說稿出版，（閎君豪筆錄）刊印。（南京金陵大學國學研究會印行。）

（二三三）陳邦福所著殷契辨疑一卷出版，自寫石印本一冊，定價洋八角。

（二三四）陳邦福所著殷契說存一卷出版，自寫石

中華民國十九年
一九三〇
己巳——庚午

三月，河南省政府不顧成約，准許何日章派人再赴安陽小屯挖掘古物，中央研究院安陽考古工作，因復完全停頓。何所派人，自二月二十日起，至三月九日止，又四月十二日起，至月終止，凡開工兩次，所得古物，未詳。

印本，一册，定價洋一元。

（一三五）程憬所作商民族的經濟生活之推測一文出版，刊新月第二卷第六期。（上海新月書店發行。）

（一三六）一月，聊城傅斯年孟眞撰國立中央研究院歷史語言研究所發掘安陽殷虛之經過一文，本年三月排印單行本，又刊安陽發掘報告第二期。（同年十二月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元五角。）

（一三七）二月，董作賓著甲骨文研究的擴大一文，同年三月，與發掘安陽殷虛之經過一文合刊本，又刊安陽發掘報告第二期，又刊史學雜志第二卷第三、四期合刊。（同年九月，南京中國史學會出版，每册定價洋四角。）

（一三八）同月，李濟撰現代考古學與殷墟發掘一文，同年三月與發掘安陽殷墟之經過一文合刊本，又刊安陽發掘報告第二期，又刊史學雜志第二卷第三、四期合刊。

（一三九）同月，郭沫若作殷虛中仍無鐵的發現一文，刊所著中國古代社會研究。（同年五月，上海新新書店三版增訂本，每册定價洋一元五角。此外坊間翻印本極多。）

（一四〇）三月，董作賓著獲白麟解一文，刊安陽發掘報告第二期。（同年十二月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元五角。）

（一四一）同月，柳詒徵纂謀所作論文化事業之爭執一文出版，刊史學雜志第二卷第一期。（南京中國史學會發行，每册定價洋二角。）文中載何日章發掘安陽殷墟文字之經過及陳列安陽殷虛甲骨及器物之感言兩文。

（一四二）四月，葉玉森所著芝加哥博物館殷契攝影記一文出版，刊中山大學語言歷史學研究所周刊第十一集一二五至一二八期合刊文字專號。（廣州國立中山大學語言歷史學研究所出版，每册定價洋二角。）

（一四三）同月，閒宥所著甲骨文字乂文之研究一文出版，刊中山大學語言歷史學研究所周刊第十一集一二五至一二八期合刊文字專號。

（一四四）同月，商承祚所著殷虛文字用点之研究一文出版，刊中山大學語言歷史學研究所周刊第十一集一二五至一二八期合刊文字專號。

（一四五）同月，董作賓作殷虛沿革一文，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二本第二分。

（同年八月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋八角。）

（一四六）八月，郭沫若著甲骨文字研究二卷，目次：上卷：（一）釋祖妣，（二）釋臣宰，（三）釋寇，（四）釋攻，（五）釋作，（六）釋封，（七）釋聖，（八）釋版，（九）釋耤，（十）釋朋，（十一）釋五十，（十二）釋鉞言，（十三）釋南，（十四）釋酓，（十五）釋飼，（十六）釋歲。下卷：（十七）釋支

干。前附序及序錄。（二十年五月出版，上海大東書局石印自寫本二册，定價洋五元。末附一年以後之自跋兩篇及後記。）

（一四九）同月，東臺陳振東枕亞撰殷契書錄二卷，排印本一册，前附自序，後附戚元良跋。

（一五〇）九月，董作賓著卜辭中所見之殷曆一文，刊安陽發掘報告第三期。（二十年六月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元五角。）

（一五一）同月，傅斯年所作致南京史學雜志社函一文出版，刊史學雜志第二卷三、四期合刊。（南京中國史學會發行，每册定價洋四角。）

（一五二）同月，陳邦福著殷契瑣言一卷，考釋甲骨文字凡四十一條。二十三年四月出版，自寫石印本一册，定價洋八角。

（一五三）同月，日本梅崎鶴雄所作殷虛文字之發現與研究一文出版，刊東亞第三卷第九期。（東京東亞經濟調查局發行，每册定價日金五拾錢。按此文乃據羅振玉講演而作。）

（一五四）同月，日本矢島恭介所作讀殷墟發掘報告一文出版，刊考古學雜志第二十卷第九期。（東京考古學會發行，每册定價日金四拾五錢。）

（一五五）十月，永嘉周遯予同所撰最近安陽殷虛之發掘與研究一文出版，刊中學生九號。（上海開明書局發行，每册定價洋一角八分。）

（一五六）十一月，丹徒束世徵天民所著殷商制度考一文出版，刊中央大學半月刊第二卷第四期。（南京中央大學出版組發行，每册定價洋二角。）

（一五七）十二月，傅斯年所著新獲卜辭寫本後記一文出版，刊安陽發掘報告第二期。（國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元

五角。）

（一五八）同月，李濟所作民國十八年秋季發掘殷虛之經過及其重要發現一文出版，刊安陽發掘報告第二期。

（一五九）同月，沈西林所作殷代國際地位蠡測一文出版，刊史學創刊號。（上海光華書局發行，每册定價洋六角。）

（一六〇）同月，金華劉朝陽著殷曆質疑一文，刊燕京學報第十期。（二十年十二月，北平燕京大學燕京學報社出版，每册定價洋五角。）

（一六一）萬國鼎所著殷代的農業一文出版，刊金陵光第十六卷第二期。（南京金陵大學發行，每册定價洋一元五角。）

（一六二）丹徒陳邦直進宦所著殷契賸義一卷出版，自寫石印本，定價洋八角。

中華民國二十年
一九三一
庚午——辛未

三月間，中央研究院歷史語言研究所考古組李濟董作賓梁思永郭寶鈞吳金鼎劉燿霞李光宇王湘周英學等全體人員赴安陽發掘殷墟，此外更有河南省政府特派招待員二人，河南教育廳派參加員三人，河南大學派實習學生二人參加工作。每日工人平均百餘人，自三月二十一日起，至五月十二日

（一六三）馬元材非百所著卜辭時代的經濟生活一文出版，刊飛躍雙週第二卷第一期。

（一六四）張蔚然所著殷虛地層研究一文出版，刊安陽發掘報告第二期。（中央研究院歷史語言研究所發行，每册定價洋一元五角。）

（一六五）沔陽陸和九作契文一篇，編入所著金石學附錄。（北平中國大學石印講義本一册，定價洋二元。）

（一六六）三月，麗江方國瑜著獲白麟解質疑一文，刊師大國學叢刊第一卷第二期。（同年五月，北平師範大學出版部出版，每册定價洋二角五分。）

（一六七）五月，望都胡厚宣譯日名靜一卜法管見一文，刊德音第一期。（二十一年六月，保定培德中學出版。每册定價洋三角。）

（一六八）同月，吳縣器潤緝子陵所著骨卜考一文

止，掘獲甲骨文字共計七八一版。此外出土器物共二百餘箱。除銅、石、陶、骨、蚌器均有多量珍品收獲外，在小屯北地復有殷人居住穴洞遺址之發現。又在後岡發現甲骨文一版，其地下情形，與殷墟相類，可知殷墟之範圍，決不只限於小屯村。是爲殷墟發掘之第四次。

六月，關葆謙所編殷虛文字存眞第一集出版，其分集拓印說明略謂：本館所存甲骨，爲十八年冬省政府派員前往殷墟所掘獲，共有三千餘品，同時全拓，頗感繁難，特定分集出書，以每百品爲一集，庶幾拓者易成，閱者易分集拓印說明。

購。本集所收百品，全爲龜甲。

同月，董作賓著大龜四版考釋，初發現有條不紊之文例及斷代基礎之貞人。

出版，刊燕大月刊第八卷第一期。（北平燕京大學月刊部發行，每册定價洋二角五分。）

（一六九）同月，合肥張龍炎子淋所著殷史蠡測一文出版，刊金陵學報第一卷第一期。（南京金陵大學編輯部發行，每册定價洋八角。）

（一七〇）同月，丹徒鮑鼎所作鐵雲藏龜釋文及鐵雲藏龜之餘釋文出版，蟫隱廬石印本，共六册，均釋於原版之旁，書端有釋文凡例。

（一七一）六月，開封關葆謙百益所編殷虛文字存眞第一集出版，河南博物館拓本一册，定價洋五十元。凡著錄字甲一百版，前附自序及分集拓印說明。

（一七二）同月，董作賓所作大龜四版考釋一文出版，刊安陽發掘報告第三期。（國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元五角。）

七版。

中華民國二十一年
一九三二

三月，董作賓著甲骨文斷代研究例，擬定斷代之標準凡十：一曰世系，二曰稱謂，三曰貞人，四曰坑位，五曰方國，六曰人物，七曰事類，八曰文法，九曰字形，十曰書體。爲甲骨學中絕大之發現。

四月一日，中央研究院歷史語言研究所殷墟第六次發掘開工。工作人員爲李濟、董作賓、吳金鼎、劉燿、石璋如、李光宇、王湘、周英學等。自四月一日起，至五月三十一日止，計得甲骨文字一版。此外發現歷經改造可分三期之建築物，完整的殷人炊爨之爐灶，房屋之基礎，及陶、骨、石、蚌各器物百餘箱。

十月二十四日，中央研究院歷史語言研究所殷墟第七次發掘開工。工作人員爲李濟、董作賓、李光宇、石璋如等。自十月二十四日起，至十二月二十日止，共得甲骨文字二十九版。此外重要之發現，爲長六十公尺之版築

七版。

學文第一卷第四期。（北平學文雜志社發行，每册定價洋一角五分。）

（一七九）同月，林義光所著釋栽蓋一文出版，刊國學叢編第一期第三册。（北平中國大學出版部發行，每册定價洋五角。）

（一八〇）十一月，林義光所著卜辭求貳即熒惑說一文出版，刊國學叢編第一期第四册。（北平中國大學出版部發行，每册定價洋五角。）

（一八一）周予同所著關於甲骨學一文出版，刊中學生，（上海開明書店發行。）又開明書店活葉文選本。

（一八二）王漢章所撰殷虛甲骨紀略一文出版，刊美術叢刊創刊號。（天津美術館發行。）

（一八三）二月，丁迪豪所著殷民族的奴隸制度一文出版，刊進展創刊號。（北平進展月刊社發行，每册定價洋二角。）

辛未——壬申

十一月七日，中央研究院歷史語言研究所考古組殷墟第五次發掘又復開工。工作人員爲董作賓、郭寶鈞、劉燿、石璋如、王湘等。此外河南省政府特派員一人，河南大學實習生二人，清華大學實習生一人，前往參加工作。自十一月七日開工，至十二月十九日停工，共掘獲甲骨文字三八一版。而在村中發掘，爲探尋十七年試掘時出土甲骨文字之坑位及地下情形，結果求得殷人居住之圓穴洞及儲藏器物之地窖，甲骨文字散見其中，足以糾正前此洪水湮沒說之誤。又在村北更發現兩層建築遺址，下爲大圓坑，上爲版築之屋基，並有純粹黃土臺基一處，其爲殷代之建築物，更屬無疑。

本年中央研究院於南京購得甲骨文字四十版。此外重要之發現，爲長六十公尺之版築

（一七三）同月，開封秉志農山所著河南安陽之龜殼一文出版，刊安陽發掘報告第三期。

（一七四）七月，衛大法師聚賢作讀釋支干一文，自油印本。

（一七五）同月，汐翁所著龜甲文一篇出版，刊本年七月五日北平華北日報華北畫刊第八十九期。

（一七六）同月，董作賓作釋後岡出土的一片卜辭一文，刊安陽發掘報告第四期。（二十二年六月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元五角。）

（一七七）同月，閻侯林義光藥園所著鬼方黎國並見卜辭說一文出版，刊國學叢編第一期第二册。（北平中國大學出版部發行，每册定價洋五角。）

（一七八）九月，潢川孫海波所著說弇一文出版，刊

堂基，及基上排列勻整之柱礎。居住與版築之分佈情形，亦較前數次更爲明晰。在小屯村北六百公尺以內，有數重爲版築基址，覆穴竇窖，卽散布其間，確爲殷代之宗廟宮室所在。出土器物亦計百餘箱。

本年，葉玉森欲將所藏甲骨文字售歸中央研究院，託程演生爲介紹，其原函有云：「敝藏殷墟甲骨千三百枚，悉得之同鄉劉鐵雲先生家。先生逝後，諸姬俵分所藏甲骨數千枚，亦先後展轉至寧。友人首爲介紹，鄙人兩次赴寧，就數千枚中選得千三百枚。零甲碎骨中，多罕見文字，至堪珍異，故收入之價獨昂。同好王君分去普通之品二百枚，故現存千一百枚。往年以經濟缺乏，僅選印二百數十枚，略加詮釋，成鐵雲藏龜拾遺一卷，聊慰鐵

翁在天之靈而已。鄙人罷官以後，卽墮窳鄉，除甲骨外，別無長物。上年駐蕪日本領事藤村君搜羅吾國骨董，曾願以巨金易敝藏甲骨九十。以此項珍物爲吾國三千年上之瑰寶，於歷史上且爲吾鄉鐵翁家之舊藏，斷不忍令散落海東島國，故拒而未允。今年春，始攜存敝友吳眉孫兄處。以滬多名流，收藏家亦不少，苟能得主，主非外人，卽可讓與。本來甲骨與古文學有絕大關係，最好中央研究院代爲保存，以供高材生研究之助。其次則同好者收藏之，亦可云得所矣。」甲骨自安陽出土後，膺鼎雜出。嬰得芝加哥博物院甲骨影片若干葉，其十九爲膺品。多雕刻爲璧環、劍鏃、龍龜、雙魚、諸形，花紋致精，其上鐫滿文字，無三數字聯貫者，且隔數字卽加一小○，

刊第一期。（上海枕戈旬刊社發行，每册定價洋二分五。）

（一八八）五月，孫海波所著說十三月一文出版，刊學文第一卷第五期。（北平學文雜志社發行，每册定價洋一角五分。）

（一八九）同月，瞿潤緡著大龜四版考釋商榷一文，刊燕京學報第十四期。（二十二年十二月，北平燕京大學燕京學報社出版，每册定價洋八角。）

（一九〇）六月，瞿潤緡所著說壹一文出版，刊中山大學文史研究所輯刊第二册。（國立中山大學文史研究所出版，每册定價洋六角。）

（一九一）同月，秀水唐蘭立厂所著獲白兕考一文出版，刊史學年報第四期。（北平景山書社發行，每册定價洋七角。）

（一九二）同月，松江聞宥在宥所著上代象形文字

二十餘片，東洋文庫五百餘片，林泰輔藏。中村不折約千片，中島蠔山二百片，田中子祥四百餘片，京大考古學教室四五十片，羅振玉寄贈，半爲濱川青陵博士於殷墟所拾得，內藤湖南博士二十餘片，故富岡君搜七八百片，此外聞尙有大宗蒐藏家，則因種種關係，未得寓目也。」（見所著卜辭通纂序。）

本年十月二十一日，閩侯林義光藥園患咯血卒。

中日文之研究一文出版，刊燕京學報第十一期。（北平燕京大學國學研究所發行，每册定價洋五角。）

（一九三）同月，商承祚著甲骨文字研究二篇，國立師範大學石印講義本。目次：上篇（一）總論，（二）定名，（三）發現之歷史及考證之書籍，（四）由甲骨文字中推想上古人民生活之程序，（五）甲骨文字中用点之表示。下篇：文字（一）象形，（二）指事。（以未完。）

（一九四）七月，安陽殷公田雨先所作殷虛之研究（明義士訪問記）一文出版，刊本月份河南民國日報副刊。

（一九五）八月，李濟作安陽最近發掘報告及六次工作之總估計一文，刊安陽發掘報告第四期。（二十二年六月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元五角。）

（一九六）九月，董作賓作釋殷禮一文，刊安陽發掘報告第四期。

（一九七）同月，董作賓作今後怎樣研治甲骨文一篇，國立北京大學講義排印本。

（一九八）十月，林義光所著論殷人祖妣之稱一文出版，刊國學叢編第二期第一册。（北平中國大學出版部發行，每册定價洋五角。）

（一九九）同月，南陽郭寶鈞子衡著B區發掘記之一一文，刊安陽發掘報告第四期。（二十二年十二月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元五角。）

（二〇〇）同月，郭寶鈞著B區發掘記之二一文，刊安陽發掘報告第四期。

（二〇一）同月，劉朝陽著再論殷曆一文，刊燕京學

報第十三期。（二十二年六月，北平燕京大學燕京學報社出版，每册定價洋八角。）

（二〇二）同月，鄭師許作讀殷虛文字之批判一文，刊大陸雜志第一卷第十期。（二十二年四月，上海南京書店出版，每册定價洋二角五分。）

（二〇三）同月，日本飯島忠夫作殷虛文字之年代一文，刊東洋學報第二十一卷第一號。（二十二年十月，東京東洋協會學術調查部發行，每册定價日金一圓五拾錢。）

（二〇四）十二月，蕭炳實所作以甲骨文證商代歷史一文出版，刊廈大學報。（廈門廈門大學發行。未見。）

（二〇五）同月，明義士所著商代文化一文出版，刊齊大季刊第一期。（濟南齊魯大學刊行。）

（二〇六）同月，鄒齋所作卜辭中戋災田戾之研究

中華民國二十二年
一九三三

二月，商承祚撰福氏所藏殷虛文字序有云：「美國福開森先生旅居我國凡四十年，常與士大夫游，酷嗜中華文物舉凡殷商甲骨，周秦彝器，漢魏碑碣，宋元書畫，以及磚甓陶瓷經史典籍，藏之無不備，其鑑別之精，有非尋常考古家所可企及者。……去年秋，余爲金陵大學中國文化研究所來北平搜集商周文化史料，抵平進謁，因得盡觀庋藏。福先生謂余曰：『余年已六十有八，天假我年，不過數歲，而余亦欲於數年間寫定重要文字若干卷，以竟此生之志願。又余所藏物，多未編目，亦已倩人爲之。今君助我先成甲骨文，甚善也。』乃將甲骨若干舉以受余，研究所復將福先生已寄至學校甲骨八函覽平，共選拓得三十七版，精印行世，文字之末，附以考釋。甲骨皆劉鐵雲（鶚）徐梧生（恊）故物也。（七、八、九、十一、十三、二十九、凡六版爲徐氏舊藏。）」又陳振東殷契書錄謂：「文敏長君諱崇烈者，曾出其家藏甲骨，售與美洲人福開森氏，予嘗於吾師陳墨遂先生處見拓本數十紙。」據此則福氏所藏，或又得自王氏歟？

三月，容庚序殷契卜辭，言：「十八年五月余爲燕京大學以千金購得徐枋所藏甲骨千二百片於德寶齋。徐氏所藏雖不詳其購置年月，然彼卒於民國五年，其時價品猶少，故此中僞刻不及百分之一，今既加以淘汰，使不至眞僞雜糅，則所存者自可信據。其甲子大版一方，完善無缺，亦他處所未見。遂於暇日選取八百七十四片命工拓之，略事排比。時瞿子潤緝從余治甲骨文字，屬其同爲釋文，並撰集文編附於後。商承祚唐蘭董作賓魏建功諸先生復爲校勘一過。取以印行，庶幾爲甲骨文字多一參證焉。」

五月，郭沫若卜辭通纂出版，其自序言：「本書之目的，在選輯傳世卜辭之菁粹者，依余所懷抱之系統而排比之，幷一一加以考釋，以便觀覽。所據資料，多採自劉羅王林諸氏之書，然亦有未經著錄者，如馬叔平氏之凡將齋藏甲骨文字拓本，計百十八片，未印行。何叔甫氏所藏品之拓墨，計七十一片，聞其原骨已悉交北平圖書館云。及余於此間（按指日本）所得公私家藏品之拓墨或照片，均選尤擇異而著錄之。其已見著錄者，由二以上之斷片經余所復合，亦在三十事以上，中有合四而成整簡，本書第五九六片，合三而成整簡，第二五九片，合二而成整簡者，第七三〇片，均爲本書所獨有。故

壬申——癸酉

一文出版，刊枕戈旬刊第一卷第十二期。（上海枕戈旬刊社發行，每冊定價洋二分五。）

(二〇七)聞宥所作甲文彩飾初論一文出版，刊中山大學文史研究所輯刊第二冊。（國立中山大學文史研究所發行，每冊定價洋六角。）

(二〇八)嘉興胡光煒小石著說文古文考二卷。（未見，目見本年五月葉玉森所著之殷虛書契前編集釋參考書目。）

(二〇九)英國明義士(James M. Menzies)所著商代之文化(The Culture of the Shang Dynasty)一文出版，刊北平導報(The Leader)又單行本。（北平導報社發行，每冊定價洋二角。）

(二一〇)一月，安慶徐中舒著殷周史料考訂大綱，國立北京大學講義排印本。

(二一一)二月，董作賓編甲骨文論著目錄，國立北京大學講義排印本，又自排印單行本，又刊讀書月刊第二卷第七號。（同年四月，國立北平圖書館出版，每冊定價洋五分。）

(二一二)四月，鄭師許所譯日本飯島忠夫殷虛文字之批判一文出版，刊大陸雜志第一卷第十期。（上海南京書店發行，每冊定價洋二角五分。）

(二一三)同月，商承祚所編著福氏所藏甲骨文字一卷，考釋一卷出版，南京金陵大學中國文化研究所影印本，一冊，定價洋二元五角。凡著錄美國福開森所藏甲骨文字三十七版，前附自序，後附董作賓跋。

(二一四)同月，王禮錫所著古代的中國社會一文出版，刊讀書雜志第三卷三、四期合刊，中國社會史論戰第四輯。（上海神州國光社發行，每冊定價洋六角。）

藏。）」又陳振東殷契書錄謂：「文敏長君諱崇烈者，曾出其家藏甲骨，售與美洲人福開森氏，予嘗於吾師陳墨遂先生處見拓本數十紙。」據此則福氏所藏，或又得自王氏歟？

三月，容庚序殷契卜辭，言：「十八年五月余爲燕京大學以千金購得徐枋所藏甲骨千二百片於德寶齋。徐氏所藏雖不詳其購置年月，然彼卒於民國五年，其時價品猶少，故此中僞刻不及百分之一，今既加以淘汰，使不至眞僞雜糅，則所存者自可信據。其甲子大版一方，完善無缺，亦他處所未見。遂於暇日選取八百七十四片命工拓之，略事排比。時瞿子潤緝從余治甲骨文字，屬其同爲釋文，並撰集文編附於後。商承祚唐蘭董作賓魏

建功諸先生復爲校勘一過。取以印行，庶幾爲甲骨文字多一參證焉。」

五月，郭沫若卜辭通纂出版，其自序言：「本書之目的，在選輯傳世卜辭之菁粹者，依余所懷抱之系統而排比之，幷一一加以考釋，以便觀覽。所據資料，多採自劉羅王林諸氏之書，然亦有未經著錄者，如馬叔平氏之凡將齋藏甲骨文字拓本，計百十八片，未印行。何叔甫氏所藏品之拓墨，計七十一片，聞其原骨已悉交北平圖書館云。及余於此間（按指日本）所得公私家藏品之拓墨或照片，均選尤擇異而著錄之。其已見著錄者，由二以上之斷片經余所復合，亦在三十事以上，中有合四而成整簡，本書第五九六片，合三而成整簡，第二五九片，合二而成整簡者，第七三〇片，均爲本書所獨有。故

冊定價洋六角。）

(二一五)同月，董作賓著帝乙說一文，刊安陽發掘報告第四期。（同年六月，國立中央研究院歷史語言研究所出版，每冊定價洋一元五角。）

(二一六)同月，明義士著甲骨研究初編，濟南齊魯大學石印講義本。目次：（一）甲骨之定義，（二）甲骨發現小史，（三）收買甲骨者，（四）甲骨片數，（五）出版品，（六）後出品書籍，（七）商代帝系。（未完。）

(二一七)五月，郭沫若所著卜辭通纂一卷，考釋三卷，索引一卷出版，日本東京文求堂書店石印本，四冊，定價日金拾二圓。目次：（一）干支，（二）數字，（三）世系，（四）天象，（五）食貨，（六）征伐，（七）畋遊，（八）雜纂。又別錄之一：（一）中央研究院藏大龜四版，（二）同新獲

卜辭拓片，（三）何遂氏藏甲骨拓片。別錄之二：日本所藏甲骨擇尤。前附序文、後記及序例，後附書後一篇。

(二一八)同月，容庚瞿潤緡所編著殷契卜辭一卷，釋文一卷，文編一卷出版，北平哈佛燕京學社石印本三冊，定價洋十元。凡著錄燕京大學所藏甲骨文八七四版。前附容氏自序，又考釋文編前各附凡例一篇。

(二一九)同月，溫丹銘所著殷卜辭婚嫁考一文出版，刊中山大學文史研究所月刊第一卷第五期。（國立中山大學文史研究所發行，每冊定價洋三角五分。）

(二二〇)六月，永嘉劉節子植所作評卜辭通纂一文出版，刊燕京學報第十三期（北京燕京大學燕京學報社出版，每冊定價洋一元五角。）學術消

僅就資料而言，本書似已可要求其獨立之存在矣。進而言考釋，亦頗有意外之收穫。」

是爲最早通編研究甲骨文字之書。

九月（陰），羅振玉自序殷虛書契續編，謂曩曾百計搆求海內諸家所藏甲骨文字墨本，十餘年間，得約三千紙，每欲發憤編次，以續兩編，卒阻於人事而未成。最近「乃以一月之力，就此三千餘紙選三之二，成書六卷。往昔前後兩編，約得三千餘紙，合以此編，總得五千餘紙。雖不敢謂殷虛菁華，悉萃於是，然亦略備矣。此二千紙中，大率爲丹徒劉氏，天津王氏，北京大學，四明馬氏所藏。其什之一，則每見估人所售，於千百中選選一二而手拓以存之者。至其中可備考證者，將別爲考釋，其文字不可識者，將別紙傳錄，以補往者考釋及待問編之不備。」按羅書所著錄之二〇一六版中，見於戩壽堂所藏殷虛文字者五六八版，見於簠室殷契徵文者六四五版，見於鐵雲藏龜者四四版，見於鐵雲藏龜之餘者三八版，其自相重複者亦五十餘片。

十月，商承祚自序殷契佚存曰：「曩從上虞羅雪堂師攻治斯學，師嘗慨然曰：『甲骨古脆，出土之日，即澌滅之期，收集材料，則尤重於考釋也。』承祚默識弗忘。頻歲奔走南北，搜求不遺餘力，凡估人所鬻，財力所及，必購得之，朋好弆藏，必借拓之，共數百紙。自念所藏甲骨，與夫墨本，局吾篋笥，久不付印，又與散佚何異乎？願以資力不給，未遑遽償吾願，復冀續有所獲，以增益之。去歲金陵大學中國文化研究所屬予來北平徵印古文字材料。

息櫬。

（三一）同月，明義士所著表較新舊版殷虛書契前編並記所得之新材料一文出版，刊齊大季刊第二期。（濟南齊魯大學刊行。）

（三二）同月，丁迪豪所作商代母系制的諸形態一文出版，刊歷史科學第一卷三、四期合刊。（北平歷史科學研究會刊行，每册定價洋一角五分。）

（三三）同月，開封許敬參彥魯所著殷虛文字存眞第一集考釋出版，河南博物館石印本，一册，定價洋五元。前附自序，凡例，關百益序及分集拓舊說明。

（三四）同月，陳準所著殷契書目錄一文出版，刊圖書館學季刊第七卷第二號。（中華圖書館協會發行，每册定價洋四角。）

二十三年又刊既風雜志第一、六、七期。（浙江瑞安甌風雜志社刊行。）

（三五）同月，温丹銘所著新獲卜辭寫本後記書後一文出版，刊中山大學文學院專刊第一期。（國立中山大學出版，每册定價洋一元。）

（三六）同月，假師石璋如所著第七次殷墟發掘E區工作報告一文出版，刊安陽發掘報告第四期。（國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋一元五角。）

（三七）同月，胡厚宣撰殷商文化叢考一文，刊新夢第一卷五、六期。（二十二年九月，十二月，國立北京大學新夢社出版，未登完。）

（三八）七月，英國葉慈（W. P. Yetts）所著商朝與安陽古物（The Shang-Yin Dynasty and the An-yang Finds）一文出版，刊英國皇家亞洲學會雜志（The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland）。

（三九）八月，鄭師許著讀殷商無四時說一文，刊嶺南學報第三卷第二期。（二十三年四月，廣州嶺南大學出版，每册定價洋八角。）

（三〇）同月，王子玉所撰甲骨文一卷出版，載續安陽縣志（仿宋字鉛印本，與安陽縣志合刊共十二册，定價洋八元。）其重要目錄：（一）殷虛文字著作書目一覽表，（二）殷虛古物發現年月考，（三）殷墟出土古物表，（四）殷墟沿革表，（五）殷時邑東故大河圖考，（六）殷商世系考，（七）分類甲骨文字凡一百七十二版。前附自序。

（三一）九月（陰），羅振玉所輯殷虛書契續編六卷出版，自影印本，六册，定價洋八十元。凡著

葬年之間，計續得北平孫氏壯甲骨墨本百九十三紙，侯官何氏遂所藏六十一版，美國施氏美士六十二版，冀縣王氏富晉二十七版，丹徒陳氏邦懌三十版，海城于氏省吾七版，江夏黃氏濬墨本六十紙，益以予所藏七十七版，墨本四百九十三紙，共得千版，合爲一編，後附考釋。」

同月二十日，中央研究院歷史語言研究所，殷墟第八次發掘開工。工作人員爲郭寶鈞李景聃李光宇石璋如劉燿尹煥章等。自十月二十日起，至十二月二十五日止。共得甲骨文字二五八版。此外又發現建築房基東西兩座。東長三十公尺，寬九公尺，石柱礎之外，尚有銅柱礎十個。西長二十公尺，寬八公尺。版築下復發現黑陶時期之大圓坑，與連年發現之建築居住遺址，可得相當之聯絡。

本年秋，丹徒葉玉森葆漁卒。

（三二）同月，丁迪豪所著殷代奴隸史一文出版，刊歷史科學第一卷第五期，奴隸史特輯。（北平歷史科學研究會發行，每册定價洋一角五分。）

（三三）十月，商承祚所編著殷契佚存一卷，考釋一卷出版，南京金陵大學中國文化研究所影印本二册，定價洋十四元。凡著錄各家所藏甲骨文字共千版。前附董作賓序，唐蘭序及自序。考釋前附考釋凡例一篇。

（三四）同月，陳寧恵所著貞人質疑一文出版，刊中山大學文史研究所月刊第二卷第一期。（國立中山大學文史研究所發行，每册定價洋二角五分。）

（三五）十一月，泰興陳晉夕康所著龜甲文字概論出版，上海中華書局石印本，一册，定價洋

一元。目次：(一)契學定義，(二)甲骨出土之時代地域，(三)龜骨種類，(四)卜法，(五)契學中之文字，(六)契學中之典禮制度風俗，(七)契學中之帝王、世系及人名，(八)契學中之地理，(九)諸家著述，(十)契學之將來。前附陳司直序。

(二三六)十二月，吳其昌所著殷卜辭所見先公先王三續考一文出版，刊燕京學報第十四期。(北平燕京大學燕京學報社刊行，每册定價洋八角。)

(二三七)同月，醴陵朱芳圃所輯甲骨學文字編十四卷出版，上海商務印書館石印本二册，定價洋二元五角。前附序目，後附附錄二篇及補遺。

(二三八)同月，郢白徐協貞吉軒所著殷契通釋六卷出版，北平文楷齋木刻本六册，定價洋十

四元。目次：多方篇(一)殷代社會，(二)兩性文源，(三)王朝政績。儀祭篇：(一)卜貞原理，(二)各種祭法，(三)王公考證。前附自序、李盛鐸序、及張伯烈序，後附自跋。

(二三九)同月，郭沫若所著殷契餘論出版，刊所著古代銘刻彙考。(日本東京文求堂書店石印本，三册，定價日金六圓。)

中。目次：(一)殷奭拾遺，(二)申論丂甲，(三)斷片綴合八例，(四)殘辭互足二例，(五)缺刻橫畫二例，(六)易日例，(七)鍛鼰解，(八)釋圂圁，(九)宰丰骨刻辭。

(二四〇)同月，吳其昌著叢殷甲骨金文中所涵殷曆推證一文，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第四本第三分。(二三年國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋八角。)

中華民國二十三年
一九三四
癸酉——甲戌

三月九日，中央研究院歷史語言研究所殷墟第九次發掘開工。工作人員爲董作賓石璋如劉燿李景聃祁延霈李光宇尹煥章等。自三月九日至六月二日，在小屯共得殘碎甲骨文字四四二版。在小屯偏西對岸洹河之北，有侯家莊，距安陽縣城十二里。是年春，洹河北岸盜掘古物者徧野，侯家莊村人於南地發現甲骨文字。事爲董作賓知悉，卽暫停小屯後岡工作，率全體員工，往侯家莊南地發掘。自四月二日起，至六月二日止，掘獲甲骨文字十五版，內有完全大龜腹甲六版，背甲一版，皆有文字，爲庚辛康丁時代同一史官所記錄。此外又發現殷人居住之大圓穴洞建築基址，石基土階，地窖等皆如小屯。遺物以陶、骨、蚌、石、銅、等殘器爲多。

丹徒葉玉森既歿，其族人及朋友合組督印葉漢漁先生遺著同人會。本年十月，殷虛書契前編集釋出版。自序曰：「予曩有殷虛書契前後編釋文之作，寒暑十數易，稿經五校，終

(二四一)陳松茂所著殷墟甲骨文字辨僞初論一文出版，刊廈門圖書館聲第二卷第三期。(廈門公立圖書館發行。)

(二四二)黎徵賦所著由甲骨文窺見殷商社會的宗教生活一文出版，刊南星雜志第二卷第七期。(香港南星報社發行。)

(二四三)英國明義士(James M. Menzies)所著中國商代之卜骨(Old Bones of the Shang Dynasty China)一文出版，刊濟南扶輪社報告(The Bulletin Rotary Club of Tsinan)。又抽印本。

(二四四)一月，李星可所著釋女一文出版，刊中法大學月刊第四卷第三期。(北平中法大學發行，每册定價洋二角。)

(二四五)同月，丁山著宗法考源一文，刊中央研究

惴惴不敢自信，发流覽諸家考釋，就稿本錄存其說，積而久之，嘗眉墨編，別下零籤，端緒恂明，姑藏篋衍，頗思暇日編纂成書，以就正有道。王仲壬云：『箸作者，思慮開也，未必材知出異人也。』玩味斯言，深歎得閒是福，而箸書爲尤。顧予累於一官，此事坐廢，甚自悔也。去年傭書滬濱，乃大閒，得理舊業，發憤逐寫舊稿，羅列衆說，附以管闚，自春徂冬，鍥而不舍，書既成，名曰殷虛書契前後編集釋。」本年，山東省立圖書館自濰縣譚賈購得甲骨文字凡十三版。

（二五〇）同月，王名元作殷周貨幣考一文，刊中山大學文史研究所月刊三卷三期。（二十四年一月中山大學文史研究所出版，每册定價洋三角五分。）

（二五一）同月，丁山著辨殷商一文，刊文史叢刊第一期。（本年五月國立山東大學出版，每册定價洋六角。）

（二五二）四月，戴家祥所作評龜甲文字概論一文出版，刊本年四月七日天津大公報圖書副刊第二十一期。

（二五三）同月，孫海波著由甲骨卜辭推論殷周之關係一文，刊禹貢半月刊第一卷第六期。（本年五月北平禹貢學會出版，每册定價洋一角。）

（二五四）五月，郭沫若所著釋七十（殷文紀數之一新例）一文出版，刊所著古代銘刻彙考續編。（日本東京文求堂書店石印本，一册，定價日金三四五拾錢。）

（二五五）同月，郭沫若所著釋勿勿（殷代用斁用笏之證）一文出版，刊所著古代銘刻彙考續編中。

（二五六）同月，郭沫若所著骨臼刻辭之一考察一文出版，刊所著古代銘刻彙考續編中。

（二五七）同月，董作賓作殷曆中幾個重要問題一文，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第四本第三分。（本年國立中央研究院歷史語言研究所出版，每册定價洋八角。）

（二五八）六月，徐協貞戴家祥關於殷契通釋之討論出版，刊本年六月二日天津大公報圖書副刊第二十九期。

（二五九）同月，濤所撰鐘鼎甲骨概說一文出版，刊武漢日報二十三年六月二十八日藝風第五期。

（二六〇）七月，呂振羽所作殷代奴隸制度研究一文出版，刊勞動季報第二期。（南京正中書局發行，每册定價洋三角。）

（二六一）八月，積微所作讀商承祚君殷契佚存一文出版，刊本年八月二十五日天津大公報圖書副刊第四十一期。

（二六二）同月，趙世昌所撰殷之社會一篇出版，載所著中國上古史研究。（北平新史研究社鉛印本，一册，定價洋三角。）

（二六三）九月，周傳儒書舲所著甲骨文字與殷商制度出版，上海開明書局排印本，每册定價洋四角。目次：（一）導言，（二）殷墟之由來及其經過，（三）甲骨文之發現及其印

行，（四）系統的發掘，（五）文字之研究，（六）殷史之二重證，（七）新史料之提供，（八）殷代工藝文化之推測。前附自序，後附甲骨文書目。

（二六四）同月，李旦可所作易經與卜辭的比較研究一文出版，刊中法大學月刊第五卷第五期。（北平中法大學發行，每册定價洋二角。）

（二六五）同月，邵子風所作增訂殷虛書契考釋後記一文，刊燕京大學圖書館報第六十七期。（北平燕京大學圖書館發行，每册定價洋四分。）

（二六六）同月，戴家祥所作評甲骨學文字編一文出版，刊圖書季刊第三期。（國立北平圖書館編印，每册定價洋五角。）

（二六七）十月，葉玉森所著殷虛書契前編集釋八卷出版，上海大東書局石印本八册，定價洋

三十元。前附自序及凡例。

(二六八)同月，孫海波所輯甲骨文編十四卷，附合文一卷，附錄一卷，檢字一卷備查一卷出版，北平哈佛燕京學社石印排印本，共五册，定價洋十四元。前附唐蘭序，容庚序，商承祚序，自序及凡例。

(二六九)十一月，民所撰甲骨文中之食一文出版，刊武漢日報二十三年十一月十五日、二十九日、藝風十三、十四期。

(二七〇)同月，商承祚所著說文中之古文考（未完）出版，刊金陵學報第四卷第二期。(南京金陵大學編纂委員會發行，每册定價洋八角。)

(二七一)十二月，朱芳圃編甲骨學商史編十卷。目次：(一)民族，(二)世系，(三)人物，(四)都邑，(五)方國，(六)文化，(七)制度，(八)產業，(九)卜法，(十)附錄。前附序例十則。二十四年二月，上海中華書局出版，石印本二册，定價洋二元五角。

(二七二)吳其昌所著殷虛書契解詁及一續、二續出版，分刊於文哲季刊第三卷二、三、四期。(國立武漢大學出版部發行，每期定價洋五角。)共釋殷虛書契前編自一至六十九版。

(二七三)孫海波所著釋采一文出版，刊行素雜志一卷三期。

(二七四)孫海波所著釋眉一文出版，刊行素雜志一卷三期。

(二七五)九月，日本石濱純太郎所著殷虛學文獻小志一文出版，刊龍谷史壇第十四號。(旧本龍谷大學史學研究室禿氏祐祥刊行。)

(二七六)唐蘭著殷虛文字記。(未印行。目見本年十二月出版之考古社刊第一期。)

(二七七)唐蘭著北京大學藏甲骨刻辭考釋。(未印行。目見本年十二月出版之考古社刊第一期。)

(二七八)孫海波著甲骨釋文。(未印行。目見本年十二月出版之考古社刊第一期。)

(二七九)孫海波著卜辭小記。(未印行。目見本年十二月出版之考古社刊第一期。)

(二八〇)戴蕃豫著殷虛文字待問編考釋。(未印行。目見本年十二月出版之考古社刊第一期。)

(二八一)戴蕃豫著殷禮足徵記。(未印行。目見本年十二月出版之考古社刊第一期。)

(二八二)戴蕃豫著殷契論叢第一輯。(未印行。目見本年十二月出版之考古社刊第一期。)

(二八三)一月，李夢英所作從卜辭中所見的殷民族一文出版，刊史學第一期。(國立北京大學史學社刊行，每册定價洋二角五分。)

(二八四)同月，孫海波所編古文聲系二卷出版，北平來薰閣書店石印本四册，定價洋六元。前附于省吾序、劉盼遂序、唐蘭序、自序、聞宥函、凡例、分韵及目錄，後附檢字。

(二八五)二月，江夏黃濬百川所集鄴中片羽二卷出版，北平尊古齋影印本二册，定價洋二十元。所著錄除銅器、玉器、骨器、陶範之外，有甲骨文字凡二百四十五版。前附柯昌泗序。

(二八六)同月，鄭師許所作我國甲骨學發現史一文出版，刊文學期刊。(上海復旦大學中國文學系發行)第二期。

(二八七)同月，吳澤作殷代經濟研究一文，刊勞動季報第五期。(本年五月南京正中書局出版，每册定價洋三角。)

甲骨卜辭 (The Couling-Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bone) 一書，而序其端曰：「此甲骨集爲山東濰縣兩牧師所收藏。兩牧師者，一英人考齡先生(Samuel Couling)，一美人查爾凡博士(Frank Herring Chalfant)是也。一九〇四年至一九〇八年間，二氏即向骨董商收購，然初不知即殷墟遺物也。此集有獸骨六百七十片，龜甲一千零一十六片，鹿角一，共凡一千六百八十七件。分散於四博物院中，美國二所(Carnegie Museum, Field Museum of Natural History)，英倫一所(British Museum)，蘇格蘭一所(Royal Scottish Museum)。……此集所刊之各片，均可爲河南安陽縣所發掘之代表品。然亦須審愼

同年七月間歐戰爆發，不果。手稿存於飛檔

十三日病卒時，全書已告完成。方擬刊行，以士仍孜孜研究不輟。至一九一四年一月二

不幸在青島遭意外，以致半身癱瘓。然博大之著作，專門研究甲骨文字。一九一一年

已。博士書既問世，即致其餘力從事於一更

(一九一三)同月，譚所撰甲骨文中之汝一文出版，刊

一文中。

(一九一三)同月，曾銓所作殷商甲骨刻文考一文出

版，刊國專月刊第一卷第二號(無錫國學專修學校出版，每冊定價洋一角。)

(一九一三)四月，羅振玉石印流沙墜簡六冊。距博士印行之書，僅早三年而

(一九一三)四月，王國維所撰簡牘檢署考一文出版，刊

學報社出版，每冊定價洋八角。)

(一九一三)四月，曾銓所作殷商甲骨刻文考一文出

版，刊國專月刊第一卷第二號(無錫國學專修學校出版，每冊定價洋一角。)

(一九一三)四月，羅振玉石印殷虛書契考釋一冊。目次：(一)世系的探討，(二)習語的發凡，(三)稱謂的補充，(四)方

(一九一三)同月，金祖同著殷虛卜辭譯語，上海中國書店石印本，一冊。目次：(一)世系的探討，(二)習語的發凡，(三)稱謂的補充，(四)方

國的發現，(五)貞人的計數，(六)風俗的推

闕，(七)文字的解析，(八)從各條說到妣乙，

(九)書體的質疑，(十)引證的問題。前附緒

言，後附鄴縣所藏甲骨文字，及壽蘅佩拓本。

(一九一三)三月，孫海波著卜辭曆法小記一文，刊燕京學報第十七期。(本年六月北平燕京大學燕京學報社出版，每冊定價洋八角。)

(一九一三)四月，曾銓所作殷商甲骨刻文考一文出

版，刊國專月刊第一卷第二號(無錫國學專修學校出版，每冊定價洋一角。)

(一九一三)四月，羅振玉石印殷虛書契考釋一冊。目次：(一)世系的探討，(二)習語的發凡，(三)稱謂的補充，(四)方

(一九一三)同月，金祖同著殷虛卜辭譯語，上海中國書店石印本，一冊。目次：(一)世系的探討，(二)習語的發凡，(三)稱謂的補充，(四)方

國的發現，(五)貞人的計數，(六)風俗的推

闕，(七)文字的解析，(八)從各條說到妣乙，

(九)書體的質疑，(十)引證的問題。前附緒

言，後附鄴縣所藏甲骨文字，及壽蘅佩拓本。

(一九一三)三月，孫海波著卜辭曆法小記一文，刊燕京學報第十七期。(本年六月北平燕京大學燕京學報社出版，每冊定價洋八角。)

德博物院(Field Museum of Natural History)者二十餘年，最近始交余保管，余因選以刊行此書。」又列表以明材料之來源，謂蘇格蘭皇家博物院(Royal Scottish Museum)藏者甲五八二片，骨一七八片，共七六〇片，一九〇九年得自考end美國卡內基博物院(Carnegie Museum)藏者甲二三〇片，骨二〇八片，共四三八片，一九〇九年得自查爾凡。大英博物院(British Museum)藏者甲二〇二片，骨二八二片，共四八五片，一九一一年得自考end美國田野博物院(Field Museum of Natural History)藏者甲二，骨二，共四片，一九一三年得自查爾凡。

武漢日報二十四年四月二十五日雙風第二十三期。

(一九三五)五月，陳夢家作三十五年來的甲骨學一文，刊考古社刊第三期。(同年十二月北平考古學社出版，每冊定價洋五角。)

(一九三六)六月，孫海波所著讀王靜安先生古史新證後一文出版，刊考古學社社刊第二期。(北平考古學社刊行，每冊定價洋二角。)

(一九四七)月，董作賓著甲文例一文。(待刊中央研究院歷史語言研究所集刊。)

(一九三四)同月，宋世儁所作殷商之社會組織一文出版，刊國立四川大學季刊第一期。(國立四川大學出版課發行，每冊定價四洋六角。)

(一九三六)同月，英國葉慈(W. P. Yetts)所著近安陽附近之發掘(Recent Finds near An-yang)一文出版，刊英國皇家亞洲學會雜志(The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)。

(一九三七)八月，劍伯贊所作殷代奴隸社會研究之批判一文出版，刊勞動季報第一卷第六期。(商務印書館發行，每冊定價洋三角。)

(一九三七)同月，董作賓撰五等爵在殷商一文，二十五年八月出版，刊中央研究院歷史語言研究所集刊六本三分。(商務印書館發行，每冊定價洋六角。)

(一九三七)同月，董作賓著安陽侯家莊出土之甲骨文字一文。(二十五年刊中央研究院歷史語言研究所集刊。)

(一九三七)九月，日本長瀨誠所著殷墟卜辭一文出

版，刊同仁九卷九號。(日本京都同仁會發行。)

(一九三一)十月，胝述所作甲骨文發現之經過及其貢獻一文出版，刊集美週刊十八卷四期。

(一九三一)十一月，鄧子風所撰甲骨瑣解題五卷，附甲骨論文解題三卷出版，上海商務印書館石印本一册，定價洋一元二角。前附贅言一長篇及劉節序，後附甲骨學論著索引。

(一九三一)同月，商承祚所著說文中之古文考續(仍未完)出版，刊金陵學報第五卷第二期。(南京金陵大學國學圖書館發行，每冊定價四洋八角。)

(一九三一)十二月，孫海波所著卜辭文字小記一文出版，刊考古社刊第三期，(北平考古學社發行，每冊定價四洋五角。)凡考甲骨文字二十三。

(一九三一)同月，開封許敬參在所撰藏龜室殷文考釋補正一文出版，刊考古社刊第三

期。（北平考古學社發行，每册定價洋五角。）

（三〇六）同月，許敬參所撰鐵雲藏龜釋文補正一文出版，刊考古社刊第三期。（北平考古學社發行，每册定價洋五角。）

（三〇七）同月，夏甲亘所著甲骨文中之食一文出版，刊北平晨報二十四年十二月二十四日、二十五日、二十七日、二十八日、三十日。

（三〇八）同月，商承祚作研究甲骨文字應該注重的一個問題一文，刊中國學生二卷一至四期合刊。（二十五年一月，上海中國學生周刊社出版，每册定價洋二角。）

（三〇九）同月，美國查爾凡（F. H. Chalfant）所摹寫甲骨卜辭（The Couling-Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bone）一書出版。上海商務印書館石印本一册，定價洋二元四角。共摹甲骨文字一六八七片。前附白瑞華（Roswell S. Britton）序文。

（三一〇）吳其昌續著殷虛書契解詁三續四續五續出版，刊文哲季刊第四卷二、四期，五卷一期。（國立武漢大學出版部發行，每期定價洋五角。）

（三一一）俄國布那柯夫所著安陽龜甲獸骨一書出版。（蘇聯研究院馬爾博士語言思想研究所單刊之三，列寧城蘇聯研究院印書館發行。）

（三一二）陳準撰殷契書目提要。（未印行，目見本年六月出版之考古社刊第二期。）

（三一三）關葆謙編拓殷虛文字存眞二至八集。（未詳年月，目見本年六月出版之考古社刊第二期。）

（三一四）許敬參著殷虛文字存眞第二三集考釋。

中華民國二十五年
一九三六
乙亥——丙子

三月，國立中央研究院歷史語言研究所派員赴安陽小屯舉行殷墟第十三次發掘。（第十、十一、十二、三次發掘在安陽侯家莊，發現殷代帝王陵墓及其附從之小墓葬，以與甲骨文字無關，故未編入。）

（未印行，目見本年六月出版之考古社刊第二期。）

（三一五）許敬參著契文卜王釋例。（未印行，目見本年六月出版之考古社刊第二期。）

（三一六）柯昌濟著殷虛書契札記。（未印行，目見本年十二月出版之考古社刊第三期。）

（三一七）柯昌濟著殷虛書契答問。（未印行，目見本年十二月出版之考古社刊第三期。）

（三一八）柯昌濟著甲骨文字解詁。（未印行，目見本年出版之柯著韡華閣集古錄跋尾周進序文。）

（三一九）大興孫壯伯恆編雪園藏龜。（未印行，目見本年十二月出版之考古社刊第三期。）

（三二〇）一月，劉朝陽著三論殷曆一文，刊中山大學研究院文科研究所歷史學部史學專刊第一卷二期。（二月廣州中山大學出版部出版，每册定價洋五角。）

工作地在小屯村北之B區C區。工作員爲郭寶鈞石璋如李景聃高去尋王湘尹煥章潘慤等。自三月十九迄六月二十，共工作九十四日。開坑五十餘，佔地約十四畝，其重要發現除灰土坑一百二十七，早晚期墓葬一百八十二，完整小夯土臺三座外，（一）爲車坑，內有殉葬之銅玉器及人馬骨架。（二）爲東西成排南北成列之無頭俯身葬。（三）爲黑陶時代及灰陶時代之水溝。（四）爲完整無缺之龜版坑。坑圓形，徑約二公尺，深一公尺餘。其中滿貯整版之字甲。起出後，完整者約三百版，碎片約一萬餘。就原坑之未經擾亂及數量之豐富而言，均可以打破自甲骨文字出土以來之紀錄。就其文字觀之，百分之九十爲第一期之物，其貞人有殼、亘、永、內、

（三一三）二月，沈兼士著鬼字原始意義之試探一文，北京大學講義課排印本，又刊北大國學季刊五卷三期。（七月北京大學出版組出版，每册定價洋八角。）

（三一四）三月，曾昭燏所著讀契文舉例一文出版，刊小學研究。（南京金陵大學文學院國學研究班發行，每册定價洋八角。）

（三一五）四月，日本駒井和愛所撰殷虛文化私考一文出版，刊歷史教育十一卷一期。（東京歷史教育研究會發行，每册定價日金五拾錢。）

（三一四）同月，孫海波所著甲金文中說文之逸文一文出版，刊師大月刊第二十六號。（北平師範大學出版課發行，每册定價洋四角。）

（三一五）五月，畢任庸所撰甲文鬲鼎談一文出版，刊青年界九卷五期。（上海北新書局發行，每册

甲骨文論著分類索引

（一）編纂類

（1）拓印

鐵雲藏龜（劉鶚）（一）
殷虛書契前編（羅振玉）（一四）
殷虛書契菁華（羅振玉）（一八）
鐵雲藏龜之餘（羅振玉）（二二）
殷虛書契後編（羅振玉）（二五）
殷虛古器物圖錄（羅振玉）（二六）
戩壽堂所藏殷虛文字（姬佛陀）（二五）
龜甲獸骨文字（林泰輔）（四〇）
鐵雲藏龜拾遺（葉玉森）（八〇）
簠室殷契徵文（王襄）（八五）
殷虛書契菁華（羅振玉）（一八）
福氏所藏甲骨文字（商承祚）（二三）
卜辭通纂（附別錄）（郭沫若）（二七）
殷契卜辭（容庚）（三八）
殷虛書契續編（羅振玉）（三二）
殷契佚存（商承祚）（三三）
鄴中片羽（黃濬）（六五）
殷虛文字存眞第二至八集（閻傑謙）（三三）
雪園藏龜（孫壯）（三九）
殷虛書契萃菁（王緒祖）（九一）
傳古別錄第二集（羅福成）（一三）
殷虛卜辭後編（明義士）（一三）
殷虛文字存眞第一集（閻傑謙）（一七）
福氏所藏甲骨文字（商承祚）（二三）
卜辭通纂（附別錄）（郭沫若）（二七）
殷契卜辭（容庚）（三八）
殷虛書契續編（羅振玉）（三二）
殷契佚存（商承祚）（三三）
鄴中片羽（黃濬）（六五）
殷虛文字存眞第二至八集（閻傑謙）（三三）
雪園藏龜（孫壯）（三九）

恩、賓、出、間等。第二期之貞人卻僅一見。惟有小字似第三期之卜辭者共十餘版。意者此坑或卽廩辛康丁時代所埋藏。除文字方面之問題外，若用朱墨書寫之文字特多，卜兆多經契刻，卜法皆自上而下，紀序之數字自一至十井然不紊，又有貞人殼皆簽名於骨橋背面之例甚多。亦均爲甲骨學上最值得注意之問題也。

（三六）六月，蔣鏞所撰甲骨文字發達史一文出版，刊江漢思潮四卷五、六期。（湖北省第部江漢思潮社發行，每册定價洋一角。）

（三七）同月，唐蘭所著釋四方之名一文出版，刊考古社刊第四期。（北平考古學社發行，每册定價洋七角。）

（三八）同月，董作賓所著說葷一文出版，刊考古社刊第四期。

（三九）同月，孫海波所著卜辭文字小記之又一部分出版，刊考古社刊第四期。

（三〇）同月，陳夢家所著古文字中之商周祭祀一文出版，刊燕京學報第十九期。（北平燕京大學哈佛燕京學社發行，每册定價洋八角。）

（三一）七月，唐蘭所著關於尾右甲卜辭一文出版，刊國學季刊五卷三期。（北京大學出版組發行，每册定價洋八角。）

（三二）同月，唐蘭所著卜辭時代的文學和卜辭文學一文出版，刊清華學報十一卷三期。（北平清華大學出版部發行，每册定價洋六角。）

（三三）吳其昌所著殷虛書契解詁六續出版，刊文哲季刊五卷四期。（武漢大學出版部發行，每期定價洋五角。）續釋殷虛書契前編自一百六十八版至二百版。

（2）摹寫

殷虛卜辭（明義士）（三三）
新獲卜辭寫本（董作賓）（一一三）
甲骨卜辭（董作賓）（三〇九）

（3）纂輯

殷虛書契待問編（羅振玉）（一七）
簠室殷契類纂（王襄）（五九）
殷虛文字類編（商承祚）（六〇）
殷契卜辭（文編）（閻通綴）（三八）
甲骨文編（孫海波）（一五八）
甲骨學商史編（朱芳圃）（一七一）
古文聲系（孫海波）（一八四）

（二）考釋類

（1）專書

殷虛書契考釋（羅振玉）（一〇）
戩壽堂所藏殷虛文字考釋（王國維）（三六）
殷虛書契補釋（柯昌濟）（六一）
殷虛書契考釋小箋（陳邦福）（七八）
鐵雲藏龜拾遺考釋（葉玉森）（八〇）
簠室殷契徵文考釋（王襄）（八五）
鐵雲藏龜釋文（鮑鼎）（一七〇）
鐵雲藏龜之餘釋文（鮑鼎）（一七〇）
福氏所藏甲骨文字考釋（商承祚）（二三）
卜辭通纂考釋（郭沫若）（二七）
殷契卜辭釋文（容庚）（續綴）（三八）
殷虛文字存眞第一集考釋（許敬參）（三三）
殷契佚存考釋（商承祚）（三三）
殷虛書契前編集釋（葉玉森）（三七）
殷虛書契解詁及一二續（吳其昌）（二五三）

北京大學藏甲骨刻辭考釋唐蘭(二七七)
甲骨釋文孫海波(二九六)
殷虛文字待問編考釋戴蓮溪(二八〇)
戩壽堂殷虛文字考釋補正許敬參(二〇五)
鐵雲藏龜釋文補正許敬參(二〇六)
殷虛書契解詁三、四、五續吳其昌(二一〇)
殷虛文字存眞第二、三集考釋許敬參(二一四)
殷虛書契解詁六續吳其昌(二二三)
(2)散見
釋昱王國維(四六)
釋旬王國維(四七)
釋西王國維(四八)
釋物王國維(四九)
釋叔羅振玉(五三)
釋爰羅振玉(五三)
釋四方之名唐蘭(二二七)
說葦董作賓(二三八)
(3)通考
說契葉玉森(七四)
殷虛文字考商承祚(八〇)
殷虛文字考余永梁(八八)
殷虛文字續考余永梁(九三)
殷契拾遺陳邦懷(九九)
殷契辨疑陳邦福(一二三)
殷契說存陳邦福(一二四)
甲骨及鐘鼎文字研究商承祚(一四六)
殷契瑣言陳邦福(一五二)
殷契賸義陳邦直(一六二)
甲骨文字研究商承祚(一九三)
殷契餘論郭沫若(二三九)
殷虛文字記唐蘭(二七六)
卜辭文字小記孫海波(三〇四)
殷虛書契札記柯昌濟(三二六)
殷虛書契答問柯昌濟(三二七)
甲骨文字解詁柯昌濟(三二八)
卜辭文字小記二孫海波(三二九)
(三)研究類
(1)文字
契文舉例孫詒讓(二)
中國原始文字考查猛凡(四)
殷商貞卜文字考羅振玉(六)
河南甲骨之研究張鳳(一〇)
古代骨刻文中龍龜之研究赫布金(一三)
龜甲獸骨文字之研究後藤朝太郎(一四)
風鳳朋貝考赫布金(二四)
象形文字研究一赫布金(二九)
象形文字研究二赫布金(四二)
象形文字研究三赫布金(四三)
殷代龜版文中之族字後藤朝太郎(五一)
與林浩卿博士論卜辭王賓書羅振玉(五四)
象形文字研究四赫布金(六三)
象形文字研究五赫布金(六七)
象形文字研究六赫布金(七五)
象形文字考赫布金(八二)
象形文字研究七赫布金(八九)
象形文字研究八赫布金(九六)
殷虛文字孳乳研究閻宥(一〇二)
象形文字研究九赫布金(一〇五)
殷契亡尤說丁山(一〇六)
甲骨文例胡光煒(一〇九)
論六書條例不可選用於甲骨文字責彥堂魏建功(一一六)
跋董作賓新獲卜辭寫本郭沫若(一一九)
新獲卜辭寫本後記跋余永梁(一二一)
甲骨文字乂文之研究閻宥(一二三)
殷虛文字用点之研究商承祚(一二四)
甲骨文字研究郭沫若(一二八)
上代象形文字中目文之研究閻宥(一九三)
卜辭中戋伐囚戾之研究郭寶(二〇六)
甲文彡飾初論閻宥(二〇七)
鬼字原始意義之試探沈兼士(二一一)
殷契論叢第一輯戴蕃豫(二六二)
骨文例董作賓(二七四)
讀契文舉例曾昭燏(二二二)
契文卜王釋例許敬參(二三五)
關於尾右甲卜辭唐蘭(二三一)

(2)歷史
骨上所刻之哀文及家譜赫布金(一三)
殷虛卜辭中所見地名考王國維(二二)
王亥內藤虎次郎(二六)
商代之帝王赫布金(二九)
殷卜辭中所見先公先王考王國維(三一)
殷卜辭中所見先公先王續考王國維(三三)
續王亥內藤虎次郎(三六)
殷先公先王考附注王國維(四一)
與王靜安徵君論卜辭上甲書羅振玉(五五)
續王亥內藤虎次郎(六二)
殷虛甲骨上所載王室譜系及商代之記載赫布金(六五)
殷契鉤沈葉玉森(六九)
古史新證王國維(八三)
甲骨文地名考閻宥(九四)
殷虛文字記唐蘭(二七六)
卜辭文字小記孫海波(三〇四)
殷虛書契札記柯昌濟(三二六)
殷虛書契答問柯昌濟(三二七)
甲骨文字解詁柯昌濟(三二八)
卜辭文字小記二孫海波(三二九)
(三)研究類
(1)文字
契文舉例孫詒讓(二)
中國原始文字考查猛凡(四)
殷商貞卜文字考羅振玉(六)
河南甲骨之研究張鳳(一〇)
古代骨刻文中龍龜之研究赫布金(一三)
龜甲獸骨文字之研究後藤朝太郎(一四)
風鳳朋貝考赫布金(二四)

象形文字研究一赫布金(二九)
象形文字研究二赫布金(四二)
象形文字研究三赫布金(四三)
殷代龜版文中之族字後藤朝太郎(五一)
與林浩卿博士論卜辭王賓書羅振玉(五四)
象形文字研究四赫布金(六三)
象形文字研究五赫布金(六七)
象形文字研究六赫布金(七五)
中國古今文字考赫布金(八二)
象形文字研究七赫布金(八九)
象形文字研究八赫布金(九六)
殷虛文字孳乳研究閻宥(一〇二)
象形文字研究九赫布金(一〇五)
殷契亡尤說丁山(一〇六)
甲骨文例胡光煒(一〇九)
論六書條例不可選用於甲骨文字責彥堂魏建功(一一六)
跋董作賓新獲卜辭寫本郭沫若(一一九)
新獲卜辭寫本後記跋余永梁(一二一)
甲骨文字乂文之研究閻宥(一二三)
殷虛文字用点之研究商承祚(一二四)
甲骨文字研究郭沫若(一二八)
上代象形文字中目文之研究閻宥(一九三)
卜辭中戋伐囚戾之研究郭寶(二〇六)
甲文彡飾初論閻宥(二〇七)
鬼字原始意義之試探沈兼士(二一一)
殷契論叢第一輯戴蕃豫(二六二)
骨文例董作賓(二七四)
讀契文舉例曾昭燏(二二二)
契文卜王釋例許敬參(二三五)
關於尾右甲卜辭唐蘭(二三一)

(2)歷史
骨上所刻之哀文及家譜赫布金(一三)
殷虛卜辭中所見地名考王國維(二二)
王亥內藤虎次郎(二六)
商代之帝王赫布金(二九)
殷卜辭中所見先公先王考王國維(三一)
殷卜辭中所見先公先王續考王國維(三三)
續王亥內藤虎次郎(三六)
殷先公先王考附注王國維(四一)
與王靜安徵君論卜辭上甲書羅振玉(五五)
續王亥內藤虎次郎(六二)
殷虛甲骨上所載王室譜系及商代之記載赫布金(六五)
殷契鉤沈葉玉森(六九)
古史新證王國維(八三)
甲骨文地名考閻宥(九四)
由甲骨文考見商代之文化陸懋德(九八)
獲白麟解董作賓(一三〇)
新獲卜辭寫本後記跋傅斯年(一三七)
殷代國際地位蠡測沈兼士(一五九)
獲白麟解質疑方國瑜(一六八)
殷史蠡測張蔭麟(一七九)
鬼方黎國並見卜辭說林義光(一七七)
說弇孫海波(一七)
獲白兕考唐蘭(一九一)
以甲骨文證商代歷史瞿炳寰(二〇四)
商代文化明義士(二〇五)
商代之文化明義士(二〇九)
殷周史料考訂大綱徐中舒(二一〇)
甲骨研究初編明義士(二二六)
表較新舊版殷虛書契前編並記所得之新材料明義

士(三三)
殷商文化叢考 胡厚宣(三四)
貞人窆疑 陳夢家(三五)
龜甲文字概論 陳夢家(三五)
殷卜辭所見先公先王三續考 吳其昌(三六)
殷契通釋 饒宗頤(三六)
辨殷商丁山(三七)
由甲骨卜辭推論殷周之關係 胡厚宣(三七)
甲骨文字與殷商制度 周鴻慶(三七)
易經與卜辭的比較研究 李鏡池(三七)
卜辭小記 胡厚宣(三七)
從卜辭中所見的殷民族 李旦丘(三八)
殷虛卜辭講話 金祖同(三八)
商王靜安先生古史新證書後 陳槃庵(三八)
殷虛文化私考 胡厚宣(三九)

卜辭時代的文學和卜辭文學 胡厚宣(三九)
(3)考古
占卜之方法 董作賓(四〇)
殷虛考 內藤虎次郎(四〇)
殷虛龜契考 陳邦福(一〇七)
殷虛甌徵 陳邦福(一一〇)
商代龜卜之推測 董作賓(一一三)
現代考古學與殷墟發掘 李濟(一一五)
殷墟中仍無鐵的發現 郭沫若(一一五)
殷墟沿革 董作賓(一一五)
殷虛地層研究 張鳳(一一六)
卜法管見 胡厚宣(一一七)
骨卜考 吳其昌(一一七)
河南安陽之龜殼集 董作賓(一一九)
殷墟之研究 威公田(一二〇)

(4)社會
中國古代之社會狀態 內藤虎次郎(一二〇)
殷代之產業小島祐馬(一二)
從殷墟遺文觀測上古風俗的一斑 商承祚(一二一)
殷民族的社會 陳夢家(一二四)
殷民族的氏族社會 陳夢家(一二四)
卜辭中之古代社會 郭沫若(一二四)
殷民族的經濟生活之推測 陳夢家(一二五)
殷代的農業 高國藩(一二七)
卜辭時代的經濟生活 吳其昌(一二八)
殷民族的奴隸制度下遺殼(一二八)
古代的中國社會 王禮錫(一二九)
商代母系制的諸形態下遺殼(一三〇)
殷代奴隸史下遺殼(一三一)
由甲骨文窺見殷商社會的宗教生活 陳夢家(一三一)
殷周食貨考 王毓銓(一三〇)
殷代奴隸制度研究 吳其昌(一三〇)
殷之社會 胡厚宣(一三一)
甲骨文中之食貨(一三六)
殷代經濟研究 郭沫若(一三七)
甲骨文中之求 商承祚(一三一)
殷商之社會組織 陳夢家(一三五)
殷代奴隸社會研究之批判 郭沫若(一三七)
甲骨文中之食貨 胡厚宣(一三七)
(5)禮制
殷周制度論 王國維(一三)
翌契枝譚 董作賓(一三)
甲骨中殷商婚制徵 胡厚宣(一三七)
殷禮徵文 王國維(一三)
殷商制度考 吳其昌(一三)

殷代人祭考 吳其昌(一三)
論殷人祖妣之稱 林義光(一三)
帚矛說 董作賓(一三)
殷卜辭婚嫁考 胡厚宣(一三)
宗法考源 丁山(一三)
骨曰刻辭之一考 郭沫若(一三)
殷禮足徵記 陳槃(一三)
五等爵在殷商 董作賓(一三)
古文字中之商周祭祀 陳夢家(一三)
(6)曆法
干支與古曆法 胡光煒(一三)
卜辭中所見之殷曆 董作賓(一三)
殷曆質疑 劉朝陽(一三)
殷商無四時考 商承祚(一三)
說十三月 胡厚宣(一三)

再論殷曆 劉朝陽(一三)
讀殷商無四時說 鄭師許(一三)
甚額甲骨文中所涵殷曆推證 吳其昌(一三)
殷曆中幾個重要問題 董作賓(一三)
卜辭曆法小記 胡厚宣(一三)
三論殷曆 劉朝陽(一三)
(四)載記
(1)報告
殷虛龜甲文字發掘的經過 曾昭燏(一三)
中華民國十七年十月武掘安陽小屯報告 董作賓(一三)
小屯地面下情形分析初步 李濟(一三)
民國十八年秋季發掘殷墟之經過及其重要發現 董作賓(一三)
安陽最近發掘報告及六次工作之總估計 李濟(一三)
最近安陽附近之發掘 董作賓(一三)
甲骨文字發達史 陳夢家(一三)
(五)論述
(1)專論
清國河南湯陰縣發現之龜甲獸骨 林泰輔(一三)
古羑里城出土龜甲之說明 容庚(一三)
最近發現之中國周朝文字 希白(一三)
中國古代之甲骨卜辭 沙畹(一三)
中國古代之皇家造物 希白(一三)
中國古代之卜骨 可棠(一三)
中國古代卜骨論 勉仲(一三)
河南之卜骨 考古(一三)
中國河南省所發掘龜甲獸骨之研究 陳邦福(一三)
殷虛遺物研究 林泰輔(一三)
隨所殷虛文字跋 王國維(一三)

河南遺物之研究及其結果(三五)
甲骨文之歷史及其價值(三六)
甲骨文之發現及其考釋經過(三七)
三千年前的龜甲和獸骨(三八)
殷虛文字類纂(三九)
殷虛甲骨文之發現及其當從與研究(一一〇)
甲骨文之過去現在未來(一一一)
龜甲文辭通纂(一一二)
甲骨文字學史述略(一一三)
殷墟文字之發現與研究(一一四)
最近安陽殷墟之發掘與研究(一一五)
龜甲文錄(一一六)
關於甲骨學(一一七)
殷虛甲骨紀略(一一八)
談龜獸片(一一九)

107

殷虛文字之年代(一二〇)
殷虛文字之批判(一二一)
商朝與安陽古物(一二二)
中國商代之卜骨(一二三)
三十五年來的甲骨學(一二四)
殷墟卜辭(一二五)
甲骨文發現之經過及其貢獻(一二六)
安陽龜甲獸骨都刻字(一二七)
甲文當細談(一二八)

（2）附見

名原(一二九)
商箙辭訓(一三〇)
文源(一三一)
殷虛文字之發現與研究(一三二)
金石甲古文與文字形體之發明(一三三)

（5）雜評

讀殷墟發掘報告(一三四)
讀釋文干(一三五)
大龜四版考釋(一三六)
讀殷虛文字之批判(一三七)
評卜辭通纂(一三八)
新獲卜辭寫本後記(一三九)
評殷契佚存(一四〇)
評殷契通釋(一四一)
跋柔克藏甲骨文字(一四二)
評龜甲文字概論(一四三)
關於殷契通釋之討論(一四四)
讀商承祚殷契佚存(一四五)
增訂殷虛書契考釋後記(一四六)
評甲骨學文字編(一四七)

109

甲骨(一二)
甲文新證(一二三)
殷虛甲骨文字及書目(一二四)
金石甲骨文字學者疑詁書古文不識(一二五)
甲骨文答問(一二六)
漢以前的文法研究何定生(一二七)
殷墟之發掘郭沫若(一二八)
論甲文新證(一二九)
契文舉例校讀(一三〇)
說文古文考(一三一)
甲骨文字釋林(一三二)
鐘鼎甲骨概說(一三三)
說文中之古文考(一三四)
說文中之古文考續(一三五)
甲金文中說文之過文(一三六)

108

（3）目錄

殷契書錄(一三七)
甲骨文論著目錄(一三八)
殷契書目錄(一三九)
甲骨學目錄並序(一四〇)
殷墟學文獻小志(一四一)
甲骨書錄解題(一四二)
殷契書目提要(一四三)

（4）方法

研究甲骨文字之兩條新路徑(一四四)
甲骨文研究的擴大(一四五)
甲骨文斷代研究例(一四六)
今後怎樣研究治甲骨文(一四七)
殷虛甲骨文字辨僞初論(一四八)
研究甲骨文應該注意的一個問題(一四九)

110

甲骨文論著撰人索引

丁　山
殷契亡尤說（一〇六）
釋疾（一三五）
釋瘳（一三六）
釋蒙（一三七）
宗法考源（一四五）
辨殷商（一五二）

丁迪豪
殷民族的奴隸制度（一八五）
商代母系制的諸形態（二三三）
殷代奴隸史（二三三）

小島祐馬
殷代之產業（七）

內藤虎次郎
王亥（二八）
中國古代之社會狀態（三〇）

繼王亥（三八）
殷虛考（六〇）
續王亥（六二）

方國瑜
獲白麟解質疑（一六五）

王子玉
甲骨文（二三〇）

王名元
殷虛學文獻小志（二三五）

矢島恭介
讀殷墟發掘報告（一四四）

布那柯夫
安陽龜甲獸骨（二二）

汐翁
龜甲文（一三五）

朱芳圃
甲骨學文字編（二三七）
甲骨學商史編（二四一）

考齡
河南之卜骨（一九）

抗父
殷虛文字之發現與研究（六四）

余永梁
殷周貨幣考（二三五）

王國維
殷虛卜辭中所見地名考（二三）
殷卜辭中所見先公先王考（三二）
殷卜辭中所見先公先王續考（三三）
戩壽堂所藏殷虛文字考釋（三六）
殷周制度論（三七）
殷先公先王考附注（四一）
釋昱（四六）
釋旬（四七）
釋西（四八）
釋物（四九）
隨庵所藏殷虛文字跋（五六）
古史新證（八三）
殷虛甲骨文字及書目（八四）

王　襄
簠室殷契類纂（五六）
簠室殷契徵文附考釋（八五）

王緒祖
殷虛書契萃菁（九二）

王漢章
殷虛甲骨紀略（一八二）

王禮錫
古代的中國社會（二二四）

民
甲骨文中之食（二六九）

石璋如
第七次殷虛發掘E區工作報告（三六）

石濱純太郎
殷禮徵文（九七）

束世澂
殷商制度考（一四五）
殷商之社會組織（二九五）

沈西林
殷代國際地位蠡測（一五九）

吳其昌
殷代人祭考（一八六）
殷卜辭中所見先公先王三續考（三六六）
叢甎甲骨金文中所涵殷曆推證（三〇〇）
殷虛書契解詁及一、二續（二三二）
殷虛書契解詁三、四、五續（三一〇）
殷虛書契解詁六續（三三）

吳　澤
殷代經濟研究（二六七）

沈兼士
鬼字原始意義之試探（三二）

何定生
漢以前的文法研究（一九）

呂振羽
殷代奴隸制度研究（三〇）

沙　曉
中國古代之甲骨卜辭（二）

林泰輔
清國河南湯陰縣發現之龜甲獸骨（四）
龜甲獸骨文字（四〇）
殷墟遺物研究（五）

林義光
文源（五七）
鬼方黎國並見卜辭說（一七）
釋栽（一九）

卜辭武帝發惑說(一六〇)
論殷人祖妣之稱(一六一)
武丁章
安陽洹上之特產及其發現物(一六二)
明義士
殷虛卜辭(一六三)
殷虛卜辭後編(一六四)
商代文化(一六五)
商代之文化(一六六)
甲骨研究初編(一六七)
美駿新搜版殷虛書契前編並記所得之新材料(一六八)
中國商代之卜骨(一六九)
周予同
最近安陽殷墟之發掘與研究(一七〇)
關於甲骨學(一七一)
周傳儒
甲骨文字與殷商制度(一七二)
秉志
河南安陽之龜殼(一七三)
邵子風
增訂殷虛書契考釋後記(一七四)
甲骨書錄解題(一七五)
金祖同
殷虛卜辭講話(一七六)
長瀨誠
殷墟卜辭(一七七)
柳詒徵
論文化事業之爭執(一七八)
柯昌濟
殷虛書契補釋(一七九)

釋眉(一八〇)
甲骨釋文(一八一)
卜辭小記(一八二)
古文變系(一八三)
卜辭曆法小記(一八四)
讀王靜安先生古史新證書後(一八五)
卜辭文字小記(一八六)
甲金文中說文之逸文(一八七)
卜辭文字小記二(一八八)
孫詒讓
契文擧例(一八九)
名原(一九〇)
時經訓
商箚(一九一)
馬元材
卜辭時代的經濟生活(一九二)
馬衡
甲骨(一九三)
三千年前的龜甲和獸骨(一九四)
容庚
甲骨文之發現及其考釋(一九五)
甲骨文(一九六)
殷契卜辭附考釋及文編(一九七)
徐中舒
殷周史料考訂大綱(一九八)
徐協貞
殷契通釋(一九九)
關於殷契通釋之討論(二〇〇)
徐嘉瑞
日本甲骨之收藏與研究(二〇一)

殷虛書契札記(二〇二)
殷虛書契答問(二〇三)
甲骨文字解詁(二〇四)
胡光煒
干支與古曆法(二〇五)
甲骨文例(二〇六)
說文古文考(二〇七)
胡厚宣
卜法管見(二〇八)
殷商文化叢考(二〇九)
胡鞏宝
甲文(二一〇)
論甲文(二一一)
後藤朝太郎
中國河南省所發掘龜甲獸骨之研究(二一二)
龜甲獸骨文字之研究(二一三)
殷代龜版文中之族字(二一四)
查樹凡
中國原始文字考(二一五)
甲骨卜辭(二一六)
勃可第
中國古代之卜骨(二一七)
孫壯
雪園殷龜(二一八)
孫海波
說弇(二一九)
說十三月(二二〇)
由甲骨卜辭推論殷周之關係(二二一)
甲骨文編(二二二)
釋朵(二二三)

浦江清
殷虛甲骨之新發現(二二四)
唐蘭
獲白兕考(二二五)
殷虛文字記(二二六)
北京大學藏甲骨刻辭考釋(二二七)
釋四方之名(二二八)
關於屯尾名甲卜辭(二二九)
卜辭時代的文學和卜辭文學(二三〇)
夏鼐
甲骨文中之食(二三一)
姬佛陀
戩壽堂所藏殷虛文字(二三二)
商承祚
殷虛文字類編(二三三)
殷虛文字考(二三四)
殷虛文字(二三五)
殷虛文字用点之研究(二三六)
甲骨及鎰鼎文字研究(二三七)
殷商無四時考(二三八)
甲骨文字研究(二三九)
福氏所藏甲骨文字附考釋(二四〇)
殷契佚存附考釋(二四一)
說文中之古文考(二四二)
說文中之古文考續(二四三)
研究甲骨文應該注意的一個問題(二四四)
陸和九
契文(二四五)
陸懋德
甲骨文之歷史及其價值(二四六)

由甲骨文考見商代之文化(九八)
陳邦直
殷契賸義(一六三)
陳邦福
殷虛甕契考(一〇四)
殷虛甄微(一二四)
龜甲文(一三〇)
殷契辨疑(一三四)
殷契說存(一三四)
殷契瑣言(一三三)
陳邦懷
殷虛書契考釋小箋(六)
殷契拾遺(九九)
陳松茂
殷虛甲骨文字辨僞初論(一四二)
陳　柱
殷虛龜甲文字發掘的經過(一〇一)
陳　晉
龜甲文字概論(一三七)
陳振東
殷契書錄(一四九)
陳寶憲
貞人質疑(一三四)
陳　準
殷契書目錄(一三四)
殷契書目提要(一三三)
陳夢家
古文字中之商周祭祀(一三〇)
陳競明
三十五年來的甲骨學(一九三)

鄴中片羽(二六五)
曹　銓
殷商甲骨刻文考(二九〇)
剪伯贊
殷代奴隸社會研究之批判(二六八)
許敬參
殷虛文字存眞第一集考釋(三三)
戩壽堂殷虛文字考釋補正(三〇五)
鐵雲藏龜釋文補正(三〇六)
殷虛文字存眞第二三集考釋(三一四)
契文卜王釋例(三二五)
富岡謙藏
古羌里城出土龜甲之說明(七)
程　憬
殷民族的社會(一〇三)
殷民族的氏族社會(一〇四)
商民族的經濟生活之推測(一三五)
傅斯年
國立中央研究院歷史語言研究所發掘安陽殷墟之經過(一三六)
致南京史學雜志社函(一三一)
新獲卜辭寫本後記跋(一三七)
曾昭燏
讀契文舉例(一三三)
鄭　齊
卜辭中戋伐因戾之研究(二〇六)
溫丹銘
殷卜辭婚嫁考(三九)
新獲卜辭寫本後記書後(三三五)
馮宗麟

甲骨文字學史(二六)
葉玉森
殷契鉤沈(六九)
說契(一四)
鐸契枝譚(一三五)
鐵雲藏龜拾遺附考釋(八〇)
芝加哥博物館殷契攝影記(一四三)
殷虛書契前編集釋(二六七)
葉　慈
商朝與安陽古物(三六)
最近安陽附近之發掘(二九六)
董作賓
新獲卜辭寫本附後記(一三)
商代龜卜之推測(一三三)
中華民國十七年十月試掘安陽小屯報告書(二三)
張世祿
金石骨甲文字學考疑許書古文平議(九〇)
張　述
甲骨文發現之經過及其貢獻(三〇一)
張　鳳
河南甲骨之研究(一〇)
張慰然
殷墟地層研究(一四)
芝加哥博物館殷契攝影記(一四三)
殷虛書契前編集釋(二六七)
張龍炎
殷史鑫測(一六九)
梅崎鶴雄
殷虛文字之發現與研究(一三三)
戚公田
殷虛之研究(一九四)
黃　濬
甲骨文字學史(二六)
殷契鉤沈(六九)
說契(一四)
鐸契枝譚(一三五)
鐵雲藏龜拾遺附考釋(八〇)
芝加哥博物館殷契攝影記(一四三)
殷虛書契前編集釋(二六七)
葉　慈
商朝與安陽古物(三六)
最近安陽附近之發掘(二九六)
董作賓
新獲卜辭寫本附後記(一三)
商代龜卜之推測(一三三)
中華民國十七年十月試掘安陽小屯報告書(二三)

甲骨文研究的擴大(一三七)
獲白麟解(一四〇)
殷墟沿革(一四三)
甲骨年表(一四五)
卜辭中所見之殷曆(一三五)
大龜四版考釋(一三)
釋後岡出土的一片卜辭(一六)
甲骨文斷代研究例(一八四)
釋馭羞(一九六)
今後怎樣研究甲骨文(一九七)
甲骨文論著目錄(三一)
帚矛說(三一五)
殷曆中幾個重要問題(三七)
骨文例(三四)
五等爵在殷商(三九)
甲骨文研究的擴大(一三七)
獲白麟解(一四〇)
殷墟沿革(一四三)
甲骨年表(一四五)
卜辭中所見之殷曆(一三五)
大龜四版考釋(一三)
釋後岡出土的一片卜辭(一六)
甲骨文斷代研究例(一八四)
釋馭羞(一九六)
今後怎樣研究甲骨文(一九七)
甲骨文論著目錄(三一)
帚矛說(三一五)
殷曆中幾個重要問題(三七)
骨文例(三四)
五等爵在殷商(三九)

安陽侯家莊出土之甲骨文字(三九)
說菫(三八)
萬國鼎
殷代的農業(一六一)
飯島忠夫
殷虛文字之年代(一〇四)
裴文中
跋董作賓獲白麟解(一四九)
趙世昌
殷之社會(二六二)
趙華煦
金石骨甲古文學及文字形體之發明(六八)
聞宥
甲骨文地名考(九四)
殷虛文字孳乳研究(一〇三)
甲骨文之過去與將來(一一)
研究甲骨文字之兩條新路(一三五)
甲骨文字乂文之研究(一四三)
上代象形文字中目文之研究(一九三)
甲文修飾初論(二〇四)
赫布金
最近發現之中國周朝文字(八)
中國古代之皇家遺物(一三)
骨上所刻之哀文及家譜(一三)
古代骨刻文中龍龜之研究(一五)
商代之帝王(二九)
風鳳朋貝考(三四)
象形文字研究一(三九)
象形文字研究二(四三)
象形文字研究三(四三)

蔣鏞
甲骨文字發達史(三五)
黎徵賦
由甲骨文窺見殷商社會的宗教生活(三三)
駒井和愛
殷虛文化私考(三三)
商炳寶
殷虛甲骨之發現及其著錄與研究(一一〇)
從甲骨文證商代歷史(二〇四)
鮑鼎
鐵雲藏龜及鐵雲藏龜之餘釋文(一四〇)
衛聚賢
讀釋支干(一四四)
邁五
從殷墟遺文窺測上古風俗的一斑(六一)
積微
讀商承祚君殷契佚存(三六)
穆勒
中國古代卜骨論(一七)
濤
鐘鼎甲骨概說(三五)
甲骨文中之衣(二九二)
魏建功
論六書條例不可逕用於甲骨文字責彥堂(一八)
瞿潤緡
骨卜考(一六八)
大龜四版考釋商搉(一八九)
說宣(一九〇)
殷契卜辭附考釋及文編與容庚合撰(三一八)
戴家祥

占卜之方法(四四)
河南遺物之研究及其結果(五九)
象形文字研究四(六三)
殷虛甲骨上所載之王室譜系及商代之記載(六五)
象形文字研究五(六七)
象形文字研究六(七六)
中國古今文字考(八二)
象形文字研究七(八九)
象形文字研究八(九六)
象形文字研究九(一〇五)
劉盼遂
甲骨中殷商廟制徵(八四)
劉節
評卜辭通纂(一一〇)
評殷契佚存(一二七)
劉朝陽
殷曆質疑(一六〇)
再論殷曆(一〇一)
三論殷曆(一三〇)
劉鶚
鐵雲藏龜(一)
鄧爾雅
跋董作賓新獲卜辭寫本(一二九)
默厂
談龜(一八七)
鄭師許
讀殷虛文字之批判(一〇二)
殷虛文字之批判(一一三)
讀殷商無四時說(一三九)
我國甲骨學發現史(一六六)

評殷契通釋(一四八)
評龜甲文字概論(一五二)
關於殷契通釋之討論與徐協貞(一五六)
評甲骨學文字編(一六六)
戴蕃豫
殷虛文字待問編考釋(一六〇)
殷禮足徵記(一六一)
殷契論叢第一輯(一六二)
羅振玉
殷商貞卜文字考(六)
殷虛書契前編(一四)
殷虛書契菁華(一八)
殷虛書契考釋(一一〇)
鐵雲藏龜之餘(一一)
殷虛書契後編(一二五)
殷虛古器物圖錄(一六)
殷虛書契待問編(一七)
釋叔(一三)
釋爰(一三)
與林浩卿博士論卜辭王賓書(一四)
與王靜安徵君論卜辭上甲書(一五)
殷虛書契續編(一三一)
羅福成
傳古別錄第二集(一一五)
關葆謙
殷虛文字存眞第一集(一七一)
殷虛文字存眞第二至八集(一三五)

續甲骨年表

董作賓　黃然偉　著

據臺北中央研究院歷史語言研究所
單刊乙種一九六七年五月版影印

紀年紀事

民國二十六年
一九三七
丁丑

二月，徐英所著甲骨文字理惑出版，書曰：「西洋考古學者，謂殷世在石器時代，世人不知用銅鐵，而所謂甲骨刻畫，宛然刀鋼之跡，此亦僞跡之彰者。」「徐杭章太炎開其說而病之，嘗力闢其妄而說未能盡，嘯春黃季剛亦欲辯其僞，未皇操觚，今二君相承謝世，而予書適成，九原可作，儻亦相睨而笑，莫逆於心者歟？」徐氏步早期章氏之後塵，指甲骨非殷代遺物，不足徵信，書列二十二證以明其說，並舉若干甲文以詳其所論，不信甲骨遺物，而著專書反對者殆始乎此。

四月，董作賓胡厚宣編纂甲骨年表，分紀年紀事撰著三項。紀年始自清光緒二十五年（一八九九），訖於中華民國二十五年（一九三六）八月。紀事略記甲骨文字發現始末，流傳情形，及研究撰著之經過。撰著備列有關甲骨文字之專著及論文，末附甲骨文論著分類索引，及論著撰人索引。

四月，郭沫若所著殷契粹編出版。該書爲郭氏將虞江劉體智所藏甲骨一部影印並加考釋。書序曰：「劉氏體智所藏甲骨之多且精，殆爲海內外之冠。氏已盡拓出其文字，集爲書契叢編，冊凡二十。去歲夏間，蒙托金祖同君遠道齎示，更允其選輯若干先行景佈，如此之誼，世所罕遘。余既深受感發，爰不揣謭陋，擇其一五九五片而成茲編，視諸原著，僅略當十之一，然其菁華，大率已萃於是矣。」書一函五冊，拓本二，考釋三。

十月，孫海波編甲骨文錄，其序略云，茲編爲民國十五年何日章君在安陽所採集，總甲與骨凡三千六百方，而儲藏於河南博物館者，錄其菁英，得九百三十版，爲之考釋而著于篇云云。

（一）一月，卞美年撰河南安陽遺龜一文，刊中國地質學會會誌十七卷一號。

（二）二月，吳其昌撰甲骨金文中所見的商代農稼情況，刊張菊生紀念論文集。商務印書館印行。

（三）同月，徐英澄宇著甲骨文字理惑出版，全一冊，中華書局發行，定價國幣七角。

（四）三月，美國白瑞華(Boswell S Britton)撰卜骨中之顏料(Oracle-Bone Color Pigments）一文，刊哈佛亞洲學報第二卷第一期。(Harvard Journal of Asiatic Pigments Studies Vol. 2 No. 1 March, 1937)

（五）同月，章炳麟撰與金祖同論甲骨文書(一)刊日本書苑一卷一號。又收入甲骨文辨證（金祖同著）

（六）四月二日，胡厚宣撰甲骨文材料之統計一文，刊天津益世報人文週刊第十三期，又載開明書店月報一卷五期。

（七）四月九日十六日，雲濟撰評孫海波甲骨文編一文，刊天津益世報人文週刊十四十五期。

（八）同月，章炳麟撰與金祖同論甲骨文書(二)刊日本書苑一卷二號。

（九）同月，董作賓胡厚宣合編甲骨年表出版，全一冊，編屬國立中央研究院歷史語言研究所單刊乙種之四。

（一〇）同月，董作賓撰殷人之書與契一文，刊中國藝術論叢，商務印書館出版。

（一一）同月，孫海波撰釋自一文，刊禹貢半月刊七卷一、二、三期。

（一二）同月，郭沫若著殷契粹編出版，一函五冊，一、二兩冊爲拓本，三、四、五爲考釋，日本文求堂發行。

（一三）五月一日，蔣大沂撰甲骨學小史一文，刊上海民報上海市博物館週刊十六期。

（一四）六月，陳夢家撰釋敉釋豕一文，刊考古社刊第六期。

（一五）同月，唐蘭撰論郊祖宗報一文，刊考古社刊

第六期。

(二六)同月，唐蘭撰釋示宗及主二文，刊考古社刊第六期。

(二七)同月，孫次舟撰釋狄狄二文，刊歷史與考古第四期。

(二八)同月，唐蘭撰釋內二文，刊考古社刊第六期。

(二九)同月，孫海波撰盤庚殷契徵文校錄二文，刊考古社刊第六期。

(三〇)同月，英國吉卜生(H. E. Gibson)撰商代之農業(Agriculture in China During the Shang Period From Information Collected From the Incribed Shang Bone.)刊中國雜誌二十六卷六號(The China Journal. Vol. XXVL No. 6 January, 1937)。

(三一)同月至八月，胡厚宣撰論殷代的紀事文字，刊天津益世報人文週刊第二十五期至三十二期。

(三二)七月，唐蘭撰卜辭所見古代神名多側書二文，刊國學季刊五卷三期。

(三三)同月，聞一多撰釋省(契文疏證之二)，

3

中華書局出版，語言與文學所收。又，民國三十七年八月收入聞一多全集第二冊，開明書店出版。

(三四)同月，陳夢家撰商代郊祀通考二文，刊清華學報十二卷第三期。

(三五)八月，黃浴棻郭中片羽二集出版，北京韓古齋影印本二冊。

(三六)十月，孫海波編甲骨文錄出版，共二冊，河南通志館出版，定價國幣拾圓。

(三七)十二月，英國吉卜生撰商代的田獵(Hunting During the Shang Period.)刊中國雜誌第二十七卷六號(The China Journal. Vol. XXVII No. 6. Dec. 1937.)。

(三八)陳夢家撰殷代地理小記二文，刊禹貢月刊七卷六七合期，古代地理專號。

(三九)陳夢家撰祖廟與神主之起源二文，刊燕大文學年報第三期。

(四〇)美國白瑞華考殷墟甲骨拓片出版，美國紐約影印單行本二冊。

(四一)英國金璋(L. C. Hopkins)撰中國古代文字研究(Archaic Chinese Characters

4

Being Some Intensive Studies in Them.)刊英國皇家亞洲文會雜誌二、四、七月號(Thh Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, Jan. April, guey. 1937.)。

(四二)日本加藤常賢撰釋示二文，刊支那學會雜誌五卷三期。

(四三)許敬參撰契文卜王釋例，刊河南博物館館刊。

(四四)日本佐野袈裟美著氏族制度社會，劉堪之劉希曾譯文，刊中國歷史教程第一篇第二章，讀書生活出版社出版。

(四五)美國皮基來(A. A. Benedetti-pichler)撰中國卜骨塗色之顯微分析(Microchemical Analysis of Pigments Used in the Fossal of the Incisions of Chinese Oracle Bone.)，刊工業機械化學雜誌第九卷三號(Industrial and Engineering Chemistry. Vol. 9, No. 3.)。

(四六)維爾布那柯夫撰安陽古器與美國甲骨學(An-Yang Findsa nd American Sino logy.

5

)，刊美斯科維爾研究院東方問題研究所國書雜誌第十號。

(四七)五月，葛毅卿撰說商，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第七本第四分。

(四八)十月，日本小川茂樹撰殷代令支所見冏象文字考，刊東方學報京都第九號。

(四九)十二月，葛啓揚撰卜辭所見之殷代家族制度，刊燕京大學史學年報十週年紀念號。

(五〇)十二月，陳夢家撰五行之起源，刊燕京學報二十四期。

(五一)美國方法歛(Frank H. Chalfant)著，白瑞華(Roswell S. Britton)校之甲骨卜辭七集出版，影印單行本，美國紐約出版。

(五二)美國顧立雅(H. G. Greel)撰中國的古代象形文字(On the Idlographic element in Ancient Chinese)，刊通訊三十四卷。

(五三)英國吉卜生(H. E. Gibson)撰商代的家畜和祭祀(Domestic Animal of Shang and their Sacrifice.)，刊華洲文會雜誌(Journal of The North China Branch of

民國二十七年一九三八戊寅

民國二十八年
一九三九年
己卯

會稽徐乘先生所藏甲骨拓墨九十三片來，容希白同君拓之。

五月，李旦丘鐵雲藏龜零拾一書出版，共序云：「……去夏（二十七年）吾友金祖同君拓之。

五月，存。」

其重複，得百有八片，幸爲天壤閣甲骨文

並釋福山氏所獲之外。余退惟王氏始臨定，功不可沒，又感激徐先生之厚意，乃合三冊，

學圃堂舊見拓來一冊，首有王氏國維手澆輔先生

閻泰氏者三十餘片，金陵大學已爲印行，余與

王氏永孚澆輔先生稔，昔歲曉曉於天津，藜其以

拓墨二冊見假，並許其傳佈，昨夏又於輔仁大

劉氏（鶚），得頗富其精粹，共後文數次歸於福

考釋。共序云：「王氏（國維）後人既以所藏重

小補？爰不揣謭陋，略加按語於釋文之後，以

供識者參考。」云云。

五月，金祖同選殷契遺珠三卷出版，書附鄧實堂

雞譽堂及自序各二篇。自序云：「殷契遺珠二

卷，蓋錄錄日本河井荃廬氏，中村不折氏，堂

野前種松氏，中島蠔叟氏，田中救堂氏，三井

源右衛門氏六家所藏甲骨刻辭而成，汰雜存

精，約得二千五百片，除三井氏拓本爲見贈者

外，餘皆祖同前年在日本所手拓者。」

曾毅公著甲骨地名通檢爲商代地理考附編，該書

計收地名五二九個，共排列悉以筆畫爲次，不

可悉舉，依自然分部法排列。

(四)日本牧野巽著古代中國之制度與社會，刊東洋文化史大系卷一。

(五)二月，金祖同採開封甲骨文，刊說文月刊第一卷第一期。

(六)二月，陳夢家撰評甲骨文字現象，刊天津大公報圖書副刊第一六八期。

(七)四月，英國金璋（L. C. Hopkins）撰中國兕之服用（The Rescur of the Chinese Rhinoce.），刊英國皇家亞洲文會雜誌（The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. April, 1939.）。

(八)四月，唐蘭著天壤閣甲骨文存出版，附考釋，共兩冊，爲輔仁大學叢書之二，北平輔仁大學印行，每部定價五元。

(九)五月，李旦丘著鐵雲藏龜零拾出版，附釋文，一冊。上海中法文化出版委員會出版，編爲孔德圖書館叢書第二種，定價國幣五元。

(十)五月，金祖同著殷契遺珠出版，共三冊，第一、二卷拓片，第三卷釋文，上海中法文化出版委員會出版，編爲孔德圖書館叢書第一種，定價每部三十元。

(十一)五月一日，徵聚殷墟發掘甲骨說，刊說文月刊一卷四期。

(十二)五月，英國吉卜生撰中國商代的交通（Communication in China During the Shang Period.）刊中國雜誌二十六卷五號（The China Journal Vol. XXVI. No. 5.）

(十三)五月，瞿潤緡撰釋•口＝之演變，刊燕京大學文學年報第五期。

(十四)五月瞿潤緡撰釋不，刊燕京大學文學年報第五期。

(十五)七月，英國金璋撰商王獵虎之紀錄（Records of David's Deed as Hunted By Shang-Yin Sovereigns.）刊英國皇家亞洲文會雜誌（The Journal of the Royal Asiatic Society of GreatBritain and Ireland.）

(十六)八月，陳德鋸撰殷契瑣記，刊說文月刊一卷八期。

(十七)八月，陳夢家撰商王名號考，刊燕慶中央日報史學副刊。

(十八)日本八幡關太郎撰殷墟發掘之甲骨文概說，刊史學雜誌第五十編第十一號。

(十九)胡厚宣撰釋毓用祖御，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第八本第四份。

(二十)曾毅公著甲骨地名通檢出版，一冊，燕京大學國學研究所出版。

(二十一)胡厚宣撰卜辭雜例，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第八本。

(二十二)金祖同撰中國文字形體的演變，刊說文月刊第一卷十、十一期。

(二十三)英國吉卜生撰從商代象形文字看中國文字之進化（The Evotution of Chinese Characesr Begining from Shang Pictographs.）刊亞洲文會雜誌（The Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society Vol. LXX）。

(二十四)胡厚宣撰殷代禁田說，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第九本。

(二十五)顧頡剛撰商王國的始末，雲南大學講義本（民國三十年文哲文史雜誌第一卷第二期）。

(二十六)陳夢家撰卜辭中之田漁與祭祀關係，刊中央研究院歷史語言研究所第十本。

(二十七)九月，陳夢家撰殷墟甲骨文存，刊北平圖書館圖書季刊新一卷三期。

(二十八)九月，日本白鳥庫吉撰見於卜辭之殷代農業，刊東亞經濟研究二十三卷五號。

(二十九)十月八日，唐蘭撰未有學法以前的易制度，刊重慶中央日報讀書第一號。

(三十)十一月二十九日，唐蘭撰關於戲星，刊重慶中央日報讀書第二號。

(三十一)十二月十七日，唐蘭撰說井，刊重慶中央日報讀書第八號。

(三十二)十二月，沈兼士撰釋殺祭古語同源考，刊輔仁學誌八卷二期。

(三十三)十二月，陳夢家撰評殷墟卜辭綜述，刊燕京學報第二十七期。

(三十四)十二月，陳夢家撰殷墟文字甲編考釋，刊燕京學報第二十七期。

(三十五)十二月，唐蘭撰天壤閣甲骨文存，刊北平輔仁學誌八卷二期。

(三十六)胡厚宣撰釋毓用祖御，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第八本第四份。

(三十七)曾毅公著甲骨地名通檢出版，一冊，燕京大學國學研究所出版。

(三十八)胡厚宣撰卜辭雜例，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第八本。

(三十九)金祖同撰中國文字形體的演變，刊說文月刊第一卷十、十一期。

(四十)英國吉卜生撰從商代象形文字看中國文字之進化（The Evotution of Chinese Characesr Begining from Shang Pictographs.）刊亞洲文會雜誌（The Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society Vol. LXX）。

(四十一)胡厚宣撰殷代禁田說，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第九本。

(四十二)顧頡剛撰商王國的始末，雲南大學講義本（民國三十年文哲文史雜誌第一卷第二期）。

(四十三)陳夢家撰卜辭中之田漁與祭祀關係，刊中央研究院歷史語言研究所第十本。

(四十四)日本八幡關太郎撰殷墟發掘之甲骨文概說，刊史學雜誌第五十編第十一號（民國二十九年文載於燕京學報第廿七期）。

民國二十九年庚辰 一九四〇

二月，孫海波編輯之誠齋殷虛文字出版，共序云：「民國二十八年春，我縣孫賓若南游滬瀆，得甲骨墨本數冊以歸，既啓示，乃檢天錫氏之所蒐集，皆新出未錄之品，意甚珍惜，將謀梓版流傳，因屬予爲之斥其重複，甄其菁英，得五百版」。該書初版一百五十部。

五月十四日，上虞羅振玉雪堂逝世，年七十五。（1866—1940）

（乙）一月，董作賓撰研究殷代年曆的基本問題，刊國立北京大學四十周年紀念論文集乙編上冊。

（丙）二月，孫海波撰評殷虛書契續編校記，刊中和一卷一期。

（丁）一月，孫海波撰評甲骨地名通檢，刊中和一卷一期。

（戊）一月，陳榮祿著商史出版，商務印書館印行，中國史第一冊第四編。

（己）一月，德國魏特夫格（Karl August Wittfogel）採商代卜辭中之氣象紀錄（Metoroloyical Records from the Divination Intcription of Shang）刊地理雜誌三十卷一號，（The Geoyraphycal Review, Vol. XXX No.1,）陳家芷譯文，載大學一卷二期。

（庚）二月二十日，唐蘭撰新出版殷虛文字考書刊東洋四十一卷第十一、十二期。

（辛）曾毅公著殷虛卜辭綜述，刊齊魯大學國學研究所國學論叢，又單行本。

（壬）二月，孫海波撰評殷虛書契續編校記，刊中和一卷二期。

（癸）二月，孫海波撰評金璋所藏甲骨卜辭，刊中和一卷二期。

（子）二月，孫海波撰評鐵雲藏龜零拾，刊中和一卷二期。

（丑）二月，孫海波撰評金璋所藏甲骨卜辭，刊中和一卷二期。

（寅）二月，孫海波撰評殷契遺珠，刊中和一卷二期。

（卯）二月，孫海波撰評殷虛書契續編校記，刊中和一卷二期。

（辰）二月，陳夢家撰殷代貞卜人物通考，刊燕京學報專刊之六。

（巳）二月，何天行撰陝西首發現甲骨文之推測，刊上海商報第一輯。

（午）同月，何天行撰甲骨文已發現於古代說，刊上海商報第一輯。

（未）二月廿四日，陳夢家撰殷代貞卜人物通考，刊燕京學報專刊之六。

（申）二月，孫海波撰評甲骨文存，刊中和一卷二期。

（酉）二月，孫海波撰評金璋所藏甲骨卜辭，刊中和一卷二期。

（戌）二月，孫海波撰評殷契遺珠，刊中和一卷二期。

（亥）二月，孫海波撰評鐵雲藏龜零拾，刊中和一卷二期。

（子）二月，孫海波撰評甲骨文存，刊中和一卷二期。

（丑）二月廿四日，陳夢家撰殷代貞卜人物通考，刊燕京學報專刊之六。

（寅）二月，孫海波撰評金璋所藏甲骨卜辭，刊中和一卷二期。

（卯）二月，孫海波撰評殷契遺珠，刊中和一卷二期。

（辰）二月，孫海波撰評鐵雲藏龜零拾，刊中和一卷二期。

（巳）二月，何天行撰甲骨文已發現於古代說，刊上海商報第一輯。

（午）同月，何天行撰陝西首發現甲骨文之推測，刊上海商報第一輯。

（未）同月，孫海波編輯誠齋殷虛文字出版，附考釋，一冊，定價國幣十二元，北京修文堂書店影印本。

（申）二月，孫海波撰評殷虛書契續編校記，刊齊魯大學國學研究所國學論叢，又單行本。

（酉）三月，陳夢家撰造方法敛所祭甲骨卜辭，刊北平圖書館圖書季刊新二卷二期。

（戌）同月，并作賓撰方法敛博士對於甲骨文字的貢獻，刊北平圖書館圖書季刊新二卷二期。

（亥）同月，陳夢家撰評殷虛書契過珠並論羅氏前編的來源，刊北平圖書館圖書季刊二卷二期。

（子）陳夢家撰郭沫若周易的構成時代附錄爲郭著周易的構成時代書後一文，油印單張。

（丑）四月，金祖同撰剖而的殷代祉會學例，刊說文月刊二卷一期。

（寅）同月，將大沂撰從古文字中觀察古代家毛演進的情形，刊燕京學報第三辭。

（卯）同月，李旦丘撰古代文字學的方法論，刊學衡第三輯。

（100）五月，聞一多撰釋鬼，刊金陵學報一卷第二期。民國三十七年八月，收入聞一多全集第二冊。

（101）同月，放雲撰說殷虛記，刊和一卷五期。

（102）六月，于省吾著雙劍誃殷契駢枝出版，石

印本，一冊，北京虎坊橋大業印刷局印行。

（103）六月四日十日十八日，張政烺撰殷代社會史料之商榷，刊昆明中央日報史學八十五至八十七期。又列入所著中國史綱第一冊，浙江大學史地教育叢書。

（104）同月，商承祚撰鬼方壺見卜辭說，刊燕京學報專刊第一號。

（105）八月，楊樹達撰釋祀，載於湖南大學古文字學研究論叢。

（106）九月，陳夢家撰述方法敛所著甲骨卜辭，刊北平圖書館圖書季刊新二卷三期。

民國三十年
一九四一
辛巳

一月，李旦丘著殷契摭佚出版，序曰：「己卯冬，暨門携羅振玉氏所藏甲骨拓片千餘片來館求售，類皆殘闕，精品絕少。本館櫥古代遺物之將餘於散逸也，乃購而藏之。入秋以後，余（三三）一月，楊樹達撰釋亭，載於湖南大學古文（三四）一月，李旦丘著殷契摭佚出版，附考釋一冊，原孔德圖書館叢書第三種，定價國幣十元。

（三五）丁山著新殷末紀，史釜第二冊。

（三六）日本花原宗治著河南安陽遺墟出版，日本影印本一冊。

（三七）七期。

（三八）陳夢家撰商王名號考，刊燕京學報第二十（三九）中央研究院歷史語言研究所集刊第八本。

（四〇）董作賓撰論殷己在殷代紀典中的位置，刊東方雜誌三十八期。

（四一）張宗驤撰卜辭男弗通用考，刊燕京學報第二十八期。

（四二）十二月，于省吾著雙劍誃古器物圖錄二卷出版，影印本二冊。

（四三）十一月，楊樹達撰釋畝，載於湖南大學古文字學講義。

（四四）同月，楊樹達撰釋㠯，載於湖南大學古文字學講義。

（四五）十月，楊樹達撰釋臧，載於湖南大學古文字學講義。

（四六）同月，楊樹達撰釋畁，載於湖南大學古文字學講義。

（四七）十一月，于省吾著雙劍誃古器物圖錄二卷出版，影印本二冊。

（四八）十二月，張宗驤撰卜辭男弗通用考，刊燕京學報第二十八期。

（四九）董作賓撰論殷己在殷代紀典中的位置，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第八本。

（五〇）陳夢家撰商王名號考，刊燕京學報第二十七期。

（五一）丁山著新殷末紀，史釜第二冊。

（五二）日本花原宗治著河南安陽遺墟出版，日本影印本一冊。

（五三）同月，楊樹達撰釋商，載於湖南大學古文字學講義。

（五四）同月，楊樹達撰釋㠯，載於湖南大學古文字學講義。

（五五）同月，鶴宗頤撰ㄆ為根圉說，刊成都齊魯大學國學研究所實錄半月刊二卷十三期。

（五六）十月，楊樹達撰釋臧，載於湖南大學古文字學講義。

（五七）同月，楊樹達撰釋祉，載於湖南大學古文字學講義。

（五八）十一月，于省吾著雙劍誃古器物圖錄二卷出版，影印本二冊。

（五九）董作賓撰論殷己在殷代紀典中的位置，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第八本。

（六〇）陳夢家撰商王名號考，刊燕京學報第二十七期。

（六一）七期。

（六二）丁山著新殷末紀，史釜第二冊。

（六三）日本花原宗治著河南安陽遺墟出版，日本影印本一冊。

（六四）貝塚茂樹撰論語之新研究，刊東方學報第十一冊。

（六五）十二月，金祖同著殷契遺珠，上海出版。

（六六）林泰輔著龜甲獸骨文字研究，日本出版。

（六七）十一月，董作賓撰殷曆譜，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第九本。

（六八）十二月，董作賓撰殷曆譜後記，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第九本。

（六九）容庚著商周彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（七〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（七一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（七二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（七三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（七四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（七五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（七六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（七七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（七八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（七九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（八〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（八一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（八二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（八三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（八四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（八五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（八六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（八七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（八八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（八九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（九〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（九一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（九二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（九三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（九四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（九五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（九六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（九七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（九八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（九九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一〇〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一〇一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一〇二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一〇三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一〇四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一〇五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一〇六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一〇七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一〇八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一〇九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一一〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一一一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一一二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一一三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一一四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一一五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一一六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一一七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一一八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一一九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一二〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一二一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一二二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一二三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一二四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一二五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一二六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一二七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一二八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一二九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一三〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一三一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一三二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一三三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一三四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一三五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一三六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一三七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一三八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一三九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一四〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一四一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一四二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一四三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一四四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一四五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一四六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一四七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一四八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一四九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一五〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一五一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一五二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一五三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一五四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一五五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一五六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一五七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一五八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一五九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一六〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一六一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一六二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一六三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一六四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一六五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一六六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一六七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一六八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一六九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一七〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一七一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一七二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一七三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一七四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一七五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一七六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一七七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一七八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一七九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一八〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一八一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一八二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一八三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一八四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一八五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一八六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一八七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一八八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一八九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一九〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一九一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一九二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一九三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一九四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（一九五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（一九六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（一九七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（一九八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（一九九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二〇〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二〇一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二〇二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二〇三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二〇四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二〇五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二〇六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二〇七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二〇八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二〇九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二一〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二一一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二一二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二一三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二一四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二一五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二一六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二一七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二一八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二一九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二二〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二二一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二二二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二二三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二二四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二二五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二二六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二二七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二二八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二二九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二三〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二三一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二三二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二三三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二三四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二三五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二三六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二三七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二三八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二三九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二四〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二四一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二四二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二四三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二四四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二四五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二四六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二四七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二四八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二四九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二五〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二五一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二五二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二五三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二五四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二五五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二五六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二五七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二五八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二五九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二六〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二六一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二六二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二六三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二六四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二六五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二六六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二六七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二六八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二六九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二七〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二七一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二七二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二七三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二七四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二七五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二七六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二七七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二七八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二七九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二八〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二八一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二八二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二八三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二八四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二八五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二八六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二八七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二八八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二八九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二九〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二九一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二九二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二九三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二九四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（二九五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（二九六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（二九七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（二九八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（二九九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三〇〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三〇一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三〇二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三〇三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三〇四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三〇五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三〇六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三〇七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三〇八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三〇九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三一〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三一一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三一二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三一三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三一四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三一五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三一六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三一七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三一八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三一九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三二〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三二一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三二二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三二三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三二四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三二五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三二六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三二七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三二八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三二九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三三〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三三一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三三二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三三三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三三四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三三五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三三六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三三七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三三八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三三九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三四〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三四一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三四二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三四三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三四四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三四五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三四六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三四七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三四八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三四九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三五〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三五一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三五二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三五三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三五四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三五五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三五六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三五七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三五八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三五九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三六〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三六一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三六二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三六三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三六四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三六五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三六六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三六七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三六八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三六九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三七〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三七一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三七二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三七三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三七四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三七五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三七六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三七七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三七八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三七九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三八〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三八一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三八二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三八三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三八四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三八五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三八六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三八七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三八八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三八九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三九〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三九一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三九二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三九三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三九四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（三九五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（三九六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（三九七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（三九八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（三九九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四〇〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四〇一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四〇二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四〇三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四〇四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四〇五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四〇六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四〇七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四〇八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四〇九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四一〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四一一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四一二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四一三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四一四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四一五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四一六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四一七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四一八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四一九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四二〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四二一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四二二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四二三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四二四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四二五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四二六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四二七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四二八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四二九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四三〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四三一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四三二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四三三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四三四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四三五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四三六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四三七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四三八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四三九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四四〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四四一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四四二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四四三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四四四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四四五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四四六）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四四七）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四四八）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四四九）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四五〇）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四五一）容庚著頌齋吉金續錄，刊燕京學報第三十期。

（四五二）容庚著武英殿彝器圖錄，哈佛燕京學社出版。

（四五三）容庚著寧壽鑑古，刊燕京學報第三十期。

（四五四）容庚著秦漢彝器通考，刊哈佛燕京學社引得特刊之一，上下二冊，共一千四百餘頁。

（四五五）容庚著頌齋吉金圖錄，刊燕京學報第三十期。

（四五六）容庚著頌齋吉金續錄，

（一四九）五月，楊樹達撰釋獸，刊湖南大學古文字學研究講義。

（一五〇）六月，鄧初民撰奴隸社會出版，中國社會史教程第三章，文化供應社出版。

（一五一）八月，楊樹達撰釋反，刊湖南大學古文字學研究講義。

（一五二）八月，董作賓撰殷代的羌與蜀，刊說文月刊三卷七期巴蜀文化專號。

（一五三）九月，董作賓撰從高宗諒陰說到武丁父子們的健康，刊中國青年七卷二三期。

（一五四）十月，日本藪內清撰殷周至隋之曆法史，胡仲譯，刊中日文化二卷八、九期。

（一五五）十一月，庄掌撰商代的浙江，刊眞知學報二卷三期。

（一五六）十二月，日本松田壽男撰卜辭與古代中國人之生活，刊加藤博士還曆紀念東洋史集說。

（一五七）葉芝（Y. P. Yetts）著安陽之回顧（Anyang: A Retrospest. Chnia Society）出版，印於英國倫敦。

（一五八）梅原末治撰河南省彰德府侯家莊古墓羣之概況出版，刊日本寶雲二十九至三十一期。

（一五九）董作賓撰殷特夫商代卜辭中之氣象紀錄，刊華西大學中國文化研究所集刊三卷一、二、三、四號合刊。

（一六〇）容庚編著卜辭研究，北京大學講義，北平石印。

（一六一）張政烺撰六書古義，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第十本。

（一六二）沈啓无、朱耘莊撰龜卜通考，刊華北編譯館刊一卷一至三期。

（一六三）郭沫若撰甲骨文辨證序、刊說文月刊第二卷合訂本。

（一六四）一月，胡厚宣撰甲骨學概要，刊大學二卷一期。

（一六五）二月，紀慍宣撰商史徵，刊眞知學報二卷六期。

（一六六）四月，蔡元邦撰中國社會的檢討，刊中山大學經濟科學第五期，中國經濟史研究特輯。

（一六七）四月，袁亦山撰中國氏族社會與土地共有制，刊中山大學經濟科學第五期，中國經濟史研究特輯。

民國三十三年
一九四四
甲申

三月，胡厚宣所著甲骨學商史論叢初集出版，自序云：「余弱年讀書北京大學，從諸大師治古史每感書闕有閒，文獻難徵，及入中央研究院，既參加殷墟發掘工作，整理殷墟出土之甲骨；並作殷墟文字釋文，乃恍然知研究古史，必當自殷商，而甲骨文實爲其最基本之材料。又念研治甲骨文字倘欲免斷章取義，穿鑿附會之嫌，則所見之材料必多於是，乃發奮蒐集所有國內外公私已否著錄之材料，先作一總結之研究。十年以來，凡已出版之書，必設法購置，其未出版之材料，知其下落者，必輾轉設法，借拓鉤摹國內國外公私所藏，雖一片不遺，雖千金莫惜。而中央研究院先後發掘所得大版碎片近三萬，以工作關係，玩之尤爲熟悉，迄今計所得見之材料，約七、八萬片，以視全部材料，所差者不過十之一、二或二、三而已。二十六年事變之後，隨中央研究院西遷，居昆明三年，所成論文，逾百萬字，其長篇之作，以種種原因皆未能付刊。二十九年夏，應齊魯大學之聘來成都，教學之餘，方期以最大努力，在最短期間，對甲骨文作一通盤總括之澈底整

（一六八）五月，于省吾著雙劍誃殷契駢枝三編出版。北京虎坊橋大業印刷局印行。

（一六九）六月，胡光煒撰卜辭中之岂即昌若說，刊中央大學文史哲季刊一卷二期。

（一七〇）六月，沈啓无撰卜辭中之繇辭及其他，刊眞知學報三卷二期。

（一七一）七月，董作賓撰殷虛甲骨文字，刊讀書通訊六十九期。

（一七二）八月，金祖同撰孔德所藏卜辭寫本錄副，刊說文月刊三卷一期。

（一七三）十二月，羅振玉遺著貞松老人外集補遺出版。

（一七四）十二月，翦伯贊撰略論殷商青銅器文化，刊文風雜誌第一卷第一期。

（一七五）十二月，董作賓撰殷文武丁時卜辭中一旬間之氣象紀錄，刊氣象學報十七卷一至四期合刊。

（一七六）伍獻文撰武丁大龜之腹甲提要，刊六學術團體聯合年會論文提要，讀書通訊七九、八十兩期合刊。

（一七七）二月，陳夢家撰中國原始社會之母系制的考證，刊中華報七卷二號。

（一七八）三月，隨河撰殷代的巫覡階級與占卜，刊申報月刊復刊號二卷三期。

（一七九）三月，胡厚宣著甲骨學商史論叢初集出版，共四冊，齊魯大學國學研究所專刊之一。目次：第一冊：徐（中舒）序；繆鉞題辭；自序；殷代封建制度考；殷代婚姻宗法生育制度考；殷非奴隸社會論；殷代焚田說。第二冊：殷代舌方考；殷代之天神崇拜；「一甲十癸」辨；甲骨文四方風名考證；論殷代五方觀念及中國稱謂之起源。第三冊：卜辭下乙說，殷人疾病考；殷人占夢考；武丁時五種紀事刻辭考。第四冊：殷代卜龜之來源；卜辭地名與古人居丘說；釋𡆥；廈門大學所藏甲骨文字；讀會毅公君殷墟書契續編校記；甲骨文發見之歷史及其材料之統計，引用甲骨文材料簡名表。

（一八〇）四月，翦伯贊著古代社會，刊所著中國史綱第一卷第三章，五十年代出版社出版。

（一八一）五月，吳澤撰殷代帝王名謚世次世系家族與繼承制研究，刊中山文化季刊一卷四期。

理。不意一病經年，此事遂廢。三十一年夏，余身體漸健，乃略據舊作，每成新篇，遂以顧頡剛先生之慫恿，寫印甲骨學商史論叢一書，並擬賡續前志，於三數年內，成書四集，然後作甲骨文字學及商史新證兩書以完成澈底整理之宿願。今甲骨學商史論叢初集，實其朝始之工作也」。全書刊論文二十篇，約四十萬言。

（一八三）五月，李泰華撰殷代之農業與物質文化，刊讀書通訊九十期。

（一八三）五月，董作賓撰王若曰古義，刊說文月刊第四卷合訂本。

（一八四）五月，姜蘊剛撰殷商民族與文化，刊說文月刊第四卷合訂本。

（一八五）六月，董作賓撰歷些象形文字字典序，刊李霖燦所著歷些象形文字字典，中央博物院出版。

（一八六）九月，傅築夫撰關於殷人不常厥邑的一個經濟解釋，刊文史雜誌五六期合刊中國經濟史專號。

（一八七）九月，萬國鼎撰殷商之土地制度，刊文史雜誌四卷五六期合刊中國經濟史專號。

（一八八）十月，郭沫若撰古代研究的自我批判，刊羣衆九卷二十期，又列入所著十批判書。

（一八九）十一月，楊樹達撰釋臤，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九〇）同月，楊樹達撰釋凡，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九一）同月，楊樹達撰釋丮，載湖南大學古文字學研究講義。

民國三十四年
一九四五
乙酉

四月，董作賓著殷曆譜出版。序曰：「此書雖名殷曆譜，實則應用『斷代研究』更進一步之方法，試作甲骨文字之分期分類、分派研究之書也。余之目的，一爲貞卜辭中有關天文曆法之紀錄，以解決殷周年代之問題，一爲揭示用新法研究甲骨文字之結果，以供治斯學者參考。前者在殷曆，後者在曆譜，蓋由譜以證曆，非屈曆以就譜。曆求合天，譜徵信史；曆自曆譜自譜，一而二，二而一者也。」

（一九二）同月，楊樹達撰釋丮，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三）五月，李泰華撰殷代之農業與物質文化，刊中山文化季刊二卷一期。

（一九三）劉朝陽撰殷曆的輪廓，刊華西大學中國文化研究所專刊乙種第二冊，周初曆法考之三。

（一九四）五月，姜蘊剛撰殷商民族與文化，刊說文月刊第四卷合訂本。

（一九五）六月，董作賓撰歷些象形文字字典序，刊李霖燦所著歷些象形文字字典，中央博物院出版。

（一九六）九月，傅築夫撰關於殷人不常厥邑的一個經濟解釋，刊文史雜誌五六期合刊中國經濟史專號。

（一九七）九月，萬國鼎撰殷商之土地制度，刊文史雜誌四卷五六期合刊中國經濟史專號。

（一九八）十月，郭沫若撰古代研究的自我批判，刊羣衆九卷二十期，又列入所著十批判書。

（一九九）十一月，楊樹達撰釋臤，載湖南大學古文字學研究講義。

（二〇〇）同月，楊樹達撰釋凡，載湖南大學古文字學研究講義。

（二〇一）吳澤撰甲骨地名與殷代地理新考，刊中山文化季刊二卷一期。

（二〇三）劉朝陽撰殷曆的輪廓，刊華西大學中國文化研究所專刊乙種第二冊，周初曆法考之三。

（二〇三）劉朝陽撰殷末周初日月食考，刊華西金陵齊魯三大學中國文化研究所彙刊第四卷。

（二〇四）日本梅原末治著河南安陽遺物之研究出版，影印本一冊。

（二〇五）一月，石璋如撰小屯的文化層，刊中央研究院歷史語言研究所集刊外編第三種，又六同別錄上卷。

（二〇六）一月，張政烺撰說文燕召公史篇名醜解，刊六同別錄上冊。又三十七年載中央研究院歷史語言研究所集刊第十三本。

（二〇七）一月，張政烺撰奭字解，刊六同別錄上冊，又三十七年刊中央研究院歷史語言研究所集刊第十三本。

（二〇八）一月至三月，劉朝陽撰甲骨文之日珥觀測紀錄，刊宇宙十一卷一至三號。

（二〇九）二月，楊樹達撰甲骨文鑫測撰要，載湖南

學研究講義。

（一九三）同月，楊樹達撰釋臤，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三）十二月，張政烺撰關於奭字說，刊齊魯大學學史叢刊第一期。

（一九四）十二月，李得賢撰殷周制度新論，刊成都齊魯大學學史叢刊第一期。

（一九五）十二月，白雪樵撰殷代婦女地位的推測，刊成都齊魯大學學史叢刊第一期。

（一九六）十二月，董作賓撰中康日食，刊入徐炳昶著之中國古史的傳說時代，中國文化服務社出版。

（一九七）十二月，張政烺、胡厚宣撰關於殷代卜龜之來源，刊成都齊魯大學學史叢刊第一期。

（一九八）十二月，胡厚宣撰齊魯大學對於甲骨學的貢獻，刊成都新中國日報齊魯大學八十周年紀念刊。

（一九九）呂烟胡厚宣撰關於殷代之氣候刊齊魯大學學史叢刊第一卷。

（二〇〇）徐中舒撰殷井田制度探源，刊中國文化研究所彙刊第四卷上冊。

大學古文字學講義。

（二〇〇）三月，楊樹達撰釋塵羞羌狄，載湖南大學古文字學講義。

（二〇一）三月，楊樹達撰釋丮，載湖南大學古文字學講義。

（二〇二）三月，周鐵錚撰書釋丮後，載湖南大學古文字學講義。

（二〇三）三月，楊樹達撰說方，載湖南大學古文字學講義。

（二〇四）三月，楊樹達撰說戠，載湖南大學古文字學講義。

（二〇五）三月十三日，楊樹達撰方族考，載湖南大學古文字學講義。

（二〇六）三月，楊樹達撰釋弋，載湖南大學古文字學講義。

（二〇七）三月，楊樹達撰黃尹黃奭伊奭考，載湖南大學古文字學講義。

（二〇八）三月，楊樹達撰高禖說，載湖南大學古文字學講義。

（二〇九）三月，楊樹達撰殷人尚白說，載湖南大學古文字學講義。

（三四）五月，楊樹達撰釋古文字學講義。

（三三）五月，楊樹達撰釋古文字學講義。

（三二）五月，楊樹達撰釋古文字學講義。

（三一）五月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（三〇）五月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（二九）五月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（二八）五月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（二七）五月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（二六）五月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（二五）五月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（二四）五月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（二三）五月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（二二）六月，楊樹達撰說文古文字學講義。

（三〇）三月，楊樹達撰甲骨文中之四方神名與風名，載湖南大學古文字學講義。

（二九）三月，楊樹達撰甲骨文中之先公夔疑，載湖南大學古文字學講義。

（二八）三月，楊樹達讀殷契劉鶚藏龜札記，載湖南大學古文字學講義。

（二七）四月，初厚宜著甲骨殷商史論叢二集出版。總目：自序，卜辭中所見之殷代農業。（以上第一冊）氣候變遷與殷代氣候之檢討；甲骨學緒論；甲骨斷類目。（以上第二冊）兩冊共收論文四篇約二十五萬言。印於成都華西壩。

（二六）四月，董作賓著殷曆譜出版，中央研究院歷史語言研究所專刊。重要目錄。（上編）卷一，殷曆譜序，第一章緒言，第二章時與日，第三章月，第四章年，第五章閏，第六章殷曆譜編制，第四章殷曆譜之編制：第一章四分術之基礎，第二章殷代朝閏之推求，第三章年曆譜之編制，第四章九譜之編制。卷二，曆譜之編制：第一章殷代之紀年法，第二章乙辛祀典，第三章祀譜述要。卷三，祀鼎年：第一章殷之年代，第二章殷代朝閏之推求，第三章年曆譜之編制，第四章九譜之編制。卷四，殷曆譜：第一章殷代之紀年法，第二章乙辛祀典，第三章祀譜述要。卷四，殷曆譜：第一章殷代之紀年法，第二章乙辛祀典，第三章祀譜述要。

（三〇）七月，楊樹達撰說易，載湖南大學古文字學講義。

（二九）七月，楊樹達撰說于，載湖南大學古文字學講義。

（二八）七月，楊樹達撰說母，載湖南大學古文字學講義。

（二七）七月，楊樹達撰釋𢦏，載湖南大學古文字學講義。

（二六）七月，楊樹達撰說𠂤，載湖南大學古文字學講義。

（二五）七月，楊樹達撰釋𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（二四）七月，楊樹達撰釋𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（二三）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（二二）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（二一）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（二〇）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一九）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一八）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一七）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一六）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一五）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一四）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一三）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一二）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一一）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一〇）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（九）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（八）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（七）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（六）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（五）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（四）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（三）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（二）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

（一）七月，楊樹達撰說𢦚，載湖南大學古文字學講義。

學講義。
（三五一）七月，楊樹達撰說卽，載湖南大學古文字學講義。
（三五二）七月，楊樹達撰釋𠂤，載湖南大學古文字學講義。
（三五三）七月，楊樹達撰釋帝，載湖南大學古文字學講義。
（三五四）七月，楊樹達撰釋帝補，載湖南大學古文字學講義。
（三五五）七月，楊樹達撰釋𢀛，載湖南大學古文字學講義。
（三五六）七月，楊樹達撰再說方，載湖南大學古文字學講義。
（三五七）七月，楊樹達撰說攸，載湖南大學古文字學講義。
（三五八）七月，楊樹達撰說曰，載湖南大學古文字學講義。
（三五九）七月，楊樹達撰說凍，載湖南大學古文字學講義。
（三六〇）七月，楊樹達撰又宗西宗考，載湖南大學古文字學講義。

（三六一）七月，楊樹達撰冬爵考，載湖南大學古文字學講義。
（三六二）七月，楊樹達撰卯史考，載湖南大學古文字學講義。
（三六三）八月，魯實先撰斥傅斯年殷曆譜序之謬，刊重慶新蜀報蜀雅十一輯
（三六四）八月，董作賓撰歷些象形文字典序，刊說文月刊五卷三四期合刊。
（三六五）八月，楊樹達撰說雀，載湖南大學古文字學講義。
（三六六）八月，楊樹達撰釋鬘，載湖南大學古文字學講義。
（三六七）八月，胡厚宣撰論殷人卜辭中關於雨的記載，刊學術與建設第一期。
（三六八）九月，楊樹達撰說亦，載湖南大學古文字學講義。
（三六九）九月，楊樹達撰凡方考，載湖南大學古文字學講義。
（三七〇）九月，馮漢驥撰由尙書盤庚篇觀察殷商社會，刊成都新中國日報中國社會五、六、七期。又民國三十四年載文史雜誌五卷五、六期

究所集刊第十三本。
（三七〇）十二月，屈萬里撰甲骨文从比二字辨，刊六同別錄中冊。又三十七年刊中央研究院歷史語言研究所集刊第十三本。
（三七一）十二月屈萬里撰自不賅解，刊六同別錄中冊。又三十七年載中央研究院歷史語言研究所集刊第十三本。
（三七二）十二月，屈萬里撰讞法濫觴於殷代論，刊六同別錄中冊。又三十七年載中央研究院歷史語言研究所集刊第十三本。
（三七三）石璋如撰小屯後五次發掘的重要發現，刊中央研究院歷史語言研究所集刊外編第三種。
（三七四）陳夢家著西周年代考出版，商務印書館出版，又四十四年重訂本印出。
（三七五）楊樹達撰脅日考，載湖南大學古文字學講義。
（三七六）鄭子田著中國原始社會之研究出版，上海永祥印書館出版，全一冊。
（三七七）陳子展撰龜曆歌，刊重慶新蜀報蜀雅。
（三七八）劉朝陽著晚殷長曆出版，華西大學中國文化研究所專刊乙種第三冊。

中國社會專號，題爲自尙書盤庚篇看殷商社會的演變。
（三七一）九月，楊樹達撰說湯盤，載湖南大學古文字學講義。
（三七二）十月，楊樹達撰說祉，載湖南大學古文字學講義。
（三七三）十月，楊樹達撰釋帝，載湖南大學古文字學講義。
（三七四）十月，楊樹達撰釋帝補，載湖南大學古文字學講義。
（三七五）十月，楊樹達撰說靈，載湖南大學古文字學講義。
（三七六）十月，楊樹達撰說高，載湖南大學古文字學講義。
（三七七）十月，楊樹達撰補釋𢀛，載湖南大學古文字學講義。
（三七八）十月，陳夢家撰殷代社會史之探究，刊大學月刊四卷七八期。又三十五年三月載新中華復刊四卷五期。
（三七九）十一月，蔣逸雪撰殷商拓印朝鮮考，刊東方雜誌四十一卷二十一期。
（三八〇）十二月，董作賓撰殷曆譜後記，刊六同別錄中冊。又三十七年刊中央研究院歷史語言研

民國三十五年
一九三六
丙戌

五月，胡厚宣著殷契卷佚存考釋三卷，石印本，一冊。

七月出版第二冊。第一冊總目：元嘉造像室所藏甲骨文字；頌齋所藏甲骨文字；國立北平圖書館所藏甲骨文字；平津坊間所見甲骨錄；厚宣所藏甲骨文字；自序，附錄。按第二冊錄：元嘉造像室所藏甲骨文字，共錄綴本二七〇片。總目所列國立北平圖書館所藏甲骨文字，共五三七片，附釋文。全書二冊，共錄綴本二五四片，附釋文。第二冊錄：頌齋所藏甲骨文字，本二七〇片，頌齋所藏甲骨文字，變劍誃所藏甲骨文字，厚宣所藏甲骨錄，厚宣所藏甲骨文字，片，附釋文。

（一九三六）三月十五日，楊樹達撰釋弜，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月十日，楊樹達撰屯匹匹，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月八日，楊樹達撰釋豕，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月六日，楊樹達撰說兄，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月十九日，楊樹達撰釋與，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月十六日，楊樹達撰說逐，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月十六日，楊樹達撰釋追逐，湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月，楊樹達撰釋弜，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）六月，饒宗頤撰殷周民族考，刊文瀾學報一卷一期。

（一九三六）六月，饒宗頤撰殷代地名三釋，刊文瀾學報一卷一期。

（一九三六）劉朝陽撰關於殷周曆法之基本問題，刊華西大學中國文化研究所集刊第四卷。

（一九三六）劉朝陽撰夏書日暦考，刊華西齊魯金陵三大學中國文化研究叢刊第五卷。

（一九三六）繆鳳林撰殷末周論古史疑，中央大學講義。又載燕京原月刊，商務印書館出版。

（一九三六）二月十六日，楊樹達撰釋追逐，湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）二月十六日，楊樹達撰說逐，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）二月十九日，楊樹達撰釋與，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月六日，楊樹達撰說兄，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月八日，楊樹達撰釋豕，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月十日，楊樹達撰屯匹匹，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）三月十五日，楊樹達撰釋弜，載湖南大學古文字學研究講義。

（一九三六）四月二十日，胡厚宣撰甲骨文發現之經過，刊成都中央日報商代甲骨銅器展覽專刊（下）。

（一九三六）四月二十日，胡厚宣撰甲骨文發現之經史，刊成都中央日報商代甲骨銅器展覽專刊（下）。

（一九三六）五月，胡厚宣著殷契佚存考釋三卷，石印本，一冊。成都齊魯大學研究所出版，初版二百部。線裝一冊。

（一九三六）六月，饒宗頤撰殷周民族考，刊文瀾學報一卷一期。

（一九三六）六月，饒宗頤撰殷代地名三釋，刊文瀾學報一卷一期。

一卷二期。

（一九三六）六月三十日，荻堯撰釋示，刊南京中央日報文史週刊。

（一九三六）七月，胡厚宣著殷契卜辭研究，刊齊魯大學國學研究所出版。目錄：變劍誃所藏甲骨文字。齊魯大學國學研究所出版。

（一九三六）七月，胡厚宣撰我怎樣搜集的這一批材料，刊成都新中國日報副刊。

（一九三六）七月，胡厚宣撰甲骨學商史論叢四集，目次：（一）元嘉造像室所藏甲骨文字，（二）頌齋所藏甲骨文字。一冊。成都齊魯大學研究所出版，初版二百部。線裝一冊。

（一九三六）七月，饒宗頤撰殷代地名三釋，刊文瀾學報一卷一期。

（一九三六）七月，胡厚宣著殷契佚存考釋三卷，石印本，一冊。成都齊魯大學研究所出版，初版二百部。線裝一冊。

（一九三六）七月，饒宗頤撰殷代地名三釋，刊文瀾學報一卷二

民國三十七年
一九四八
戊子

四月，董作賓編輯之殷虛文字甲編出版。甲編收錄中央研究院歷史語言研究所小屯九次發掘所得甲骨經整理後拓印而成，該書選拓有字龜甲二四六七片，有字骨版二三九九片，共計三八六六片。此外計有牛頭刻辭一件鹿頭刻辭一件鹿角語一件。附自序及李濟之殷墟人祀歲考序。

十月，董作賓主編之殷虛文字乙編上辭出版。乙編爲繼甲編之後拓印中央研究院歷史語言研究所自序。

（一九四八）三月，金祖同著龜卜出版，溫知書店影印本一冊。

（一九四八）一月，劉衍撰釋贏，刊中山大學文史集刊第一冊。

（一九四八）一月，錢穆先著中國社會經濟史上的奴隸制問題，商務印書館出版。

（一九四八）三月二十日，周祖謀撰甲骨卜辭中的如字，刊上海申報文史十五期。

（一九四八）三月，張政烺撰卜辭用爲貞人名之干支，刊南京和平日報人文二十二期。

（一九四八）三月，振鐸撰介紹董作賓先生的殷曆譜，刊南京和平日報社會與政治副刊四十四期。

（一九四八）四月九日十六日，丁山撰十批判書之批判，刊上海東南日報文史三十七三十八期。

（一九四八）五月，楊樹達撰積微居甲骨說，刊復旦學報第三期。

（一九四〇）六月，聞一多撰釋毋釋冢，刊考古社刊第六期。又再七年八月收入聞一多全集第二冊，開明書店出版。

（一九四二）六月四日，十一日，丁山撰邓其曰三器銘文考釋，刊上海中央日報文物週刊三十七、三十八期。

（一九四三）八月二十六日，陳子展撰關於殷曆譜料簡，刊申報春秋。

（一九四三）九月，吳澤撰殷代貢納制考辨，刊大厦大學歷史社會學季刊一卷二期。

（一九四三）九月一日，徐景賢撰釋徐，刊南京大剛報，文史副刊。

（一九四三）九月，常鴻剛撰殷人祀歲考，刊藝文十七卷九號。

主持之第十三次至四十五次（民國二十五年春至二十六年春）發掘所得甲骨，共計一八四〇五片之編分上中下三輯。上輯錄13.01—13.07275中輯錄13.0.7276—13.0.13349，下輯錄13.0.13350—15.2.50。

（一九四三）三月，董作賓編殷虛文字乙編中輯出版，中央研究院歷史語言研究所出版，安定珂羅版社印刷。

（一九四三）八月，吳澤著古代史出版，長風書店出版。

（一九四三）八月，侯外廬著殷代社會的特性，三聯書店出版，中國古代社會史第二章第二節。

（一九四三）十月，董作賓編中國文字在商代，刊天籟第一卷一、二兩期。

（一九四三）中國考古學報第四冊出版，商務印書館印

（一九四三）三月，聞一多撰釋不𢍏，收入聞一多全集第二冊；又刊清華學報十二卷三期。

（一九四三）八月，聞一多撰釋語，收入聞一多全集第二冊。

（一九四三）八月，聞一多撰釋鼠，收入聞一多全集第二冊。

（一九四三）八月，聞一多撰釋衆，收入聞一多全集第二冊。

（一九四三）八月，聞一多撰釋祟，收入聞一多全集第二冊。

（一九四三）八月，聞一多撰釋臬，收入聞一多全集第二冊。

（一九四三）八月，聞一多撰釋𢍏，收入聞一多全集第二冊。

（一九四三）八月，聞一多撰釋糞，收入聞一多全集第二冊。

（一九四三）八月，聞一多撰釋𢍏，收入聞一多全集第二冊。

（一九四三）三月，聞一多撰釋𢍏，收入聞一多全集第二冊。

（一九四三）三月，董作賓撰殷虛文字甲編出版。甲編收錄中央研究院歷史語言研究所小屯九次發掘所得甲骨經整理後拓印而成，該書選拓有字龜甲二四六七片，有字骨版二三九九片，共計三八六六片。此外計有牛頭刻辭一件鹿頭刻辭一件鹿角語一件。附自序及李濟之殷墟人祀歲考序。

（一九四三）三月，董作賓編輯之

民國三十九年
一九五〇
庚寅

曾毅公編甲骨綴合編出版，綴合甲骨卜辭約四百片，以王亥、方國、地名、天象、田狩、卜旬、卜夕、卜日、甲子表爲先後。附容庚序及自序。

（三七）四月，殷虛調查被掘工作，刊科學通報第二卷第八、九兩期。

（三七）七月，殷虛發掘組工作概況，刊文物參考資料第六期。

（三七）七月，石璋如小屯殷代的皮室兵器附殷代的策，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十二本。

（三七）四月，胡厚宣所編之戰後寧滬新獲甲骨集出版。序曰「曾出一九四〇年前後，安陽出土甲骨一大坑，爲上海再次發現。」

（三七）七月，胡厚宣戰後寧滬新獲甲骨集之二。序曰「曾出一九四一年以來，往往零星殷契，常爲卜辭有關之辭。凡四百餘版，並附錄舊著五篇。」

（三七）四月，郭沫若中國古代社會研究出版。目次：（一）引言。（二）甲骨文的名稱。（三）甲骨文的發現和流傳。（四）甲骨文出土的地方。（五）甲骨文的時代。（六）甲骨文的內容。（七）甲骨文的文法。（八）甲骨文的性質。（九）甲骨文的年代。（十）甲骨文的辨僞。（十一）甲骨文的價值。（十二）甲骨文的整理。（十三）甲骨文的出土和採訪。（十四）甲骨文的著錄。（十五）甲骨文的考釋。（十六）甲骨文的分類。（十七）甲骨文的分期。（十八）甲骨文的分派。（十九）甲骨文的分組。（二十）甲骨文的斷代。（二十一）甲骨文的綴合。（二十二）甲骨文的坑位。（二十三）甲骨文的鑽鑿。（二十四）甲骨文的行款。（二十五）甲骨文的兆序。（二十六）甲骨文的兆辭。（二十七）甲骨文的兆序。（二十八）甲骨文的兆辭。（二十九）甲骨文的兆序。（三十）甲骨文的兆辭。（三十一）甲骨文的兆序。（三十二）甲骨文的兆辭。（三十三）甲骨文的兆序。（三十四）甲骨文的兆辭。（三十五）甲骨文的兆序。（三十六）甲骨文的兆辭。（三十七）甲骨文的兆序。（三十八）甲骨文的兆辭。（三十九）甲骨文的兆序。（四十）甲骨文的兆辭。（四十一）甲骨文的兆序。（四十二）甲骨文的兆辭。（四十三）甲骨文的兆序。（四十四）甲骨文的兆辭。（四十五）甲骨文的兆序。（四十六）甲骨文的兆辭。（四十七）甲骨文的兆序。（四十八）甲骨文的兆辭。（四十九）甲骨文的兆序。（五十）甲骨文的兆辭。（五十一）甲骨文的兆序。（五十二）甲骨文的兆辭。（五十三）甲骨文的兆序。（五十四）甲骨文的兆辭。（五十五）甲骨文的兆序。（五十六）甲骨文的兆辭。（五十七）甲骨文的兆序。（五十八）甲骨文的兆辭。（五十九）甲骨文的兆序。（六十）甲骨文的兆辭。（六十一）甲骨文的兆序。（六十二）甲骨文的兆辭。（六十三）甲骨文的兆序。（六十四）甲骨文的兆辭。（六十五）甲骨文的兆序。（六十六）甲骨文的兆辭。（六十七）甲骨文的兆序。（六十八）甲骨文的兆辭。（六十九）甲骨文的兆序。（七十）甲骨文的兆辭。（七十一）甲骨文的兆序。（七十二）甲骨文的兆辭。（七十三）甲骨文的兆序。（七十四）甲骨文的兆辭。（七十五）甲骨文的兆序。（七十六）甲骨文的兆辭。（七十七）甲骨文的兆序。（七十八）甲骨文的兆辭。（七十九）甲骨文的兆序。（八十）甲骨文的兆辭。（八十一）甲骨文的兆序。（八十二）甲骨文的兆辭。（八十三）甲骨文的兆序。（八十四）甲骨文的兆辭。（八十五）甲骨文的兆序。（八十六）甲骨文的兆辭。（八十七）甲骨文的兆序。（八十八）甲骨文的兆辭。（八十九）甲骨文的兆序。（九十）甲骨文的兆辭。（九十一）甲骨文的兆序。（九十二）甲骨文的兆辭。（九十三）甲骨文的兆序。（九十四）甲骨文的兆辭。（九十五）甲骨文的兆序。（九十六）甲骨文的兆辭。（九十七）甲骨文的兆序。（九十八）甲骨文的兆辭。（九十九）甲骨文的兆序。（一百）甲骨文的兆辭。（一百一）甲骨文的兆序。（一百二）甲骨文的兆辭。（一百三）甲骨文的兆序。（一百四）甲骨文的兆辭。（一百五）甲骨文的兆序。（一百六）甲骨文的兆辭。（一百七）甲骨文的兆序。（一百八）甲骨文的兆辭。（一百九）甲骨文的兆序。（一百十）甲骨文的兆辭。（一百十一）甲骨文的兆序。（一百十二）甲骨文的兆辭。（一百十三）甲骨文的兆序。（一百十四）甲骨文的兆辭。（一百十五）甲骨文的兆序。（一百十六）甲骨文的兆辭。（一百十七）甲骨文的兆序。（一百十八）甲骨文的兆辭。（一百十九）甲骨文的兆序。（一百二十）甲骨文的兆辭。（一百二十一）甲骨文的兆序。（一百二十二）甲骨文的兆辭。（一百二十三）甲骨文的兆序。（一百二十四）甲骨文的兆辭。（一百二十五）甲骨文的兆序。（一百二十六）甲骨文的兆辭。（一百二十七）甲骨文的兆序。（一百二十八）甲骨文的兆辭。（一百二十九）甲骨文的兆序。（一百三十）甲骨文的兆辭。（一百三十一）甲骨文的兆序。（一百三十二）甲骨文的兆辭。（一百三十三）甲骨文的兆序。（一百三十四）甲骨文的兆辭。（一百三十五）甲骨文的兆序。（一百三十六）甲骨文的兆辭。（一百三十七）甲骨文的兆序。（一百三十八）甲骨文的兆辭。（一百三十九）甲骨文的兆序。（一百四十）甲骨文的兆辭。（一百四十一）甲骨文的兆序。（一百四十二）甲骨文的兆辭。（一百四十三）甲骨文的兆序。（一百四十四）甲骨文的兆辭。（一百四十五）甲骨文的兆序。（一百四十六）甲骨文的兆辭。（一百四十七）甲骨文的兆序。（一百四十八）甲骨文的兆辭。（一百四十九）甲骨文的兆序。（一百五十）甲骨文的兆辭。（一百五十一）甲骨文的兆序。（一百五十二）甲骨文的兆辭。（一百五十三）甲骨文的兆序。（一百五十四）甲骨文的兆辭。（一百五十五）甲骨文的兆序。（一百五十六）甲骨文的兆辭。（一百五十七）甲骨文的兆序。（一百五十八）甲骨文的兆辭。（一百五十九）甲骨文的兆序。（一百六十）甲骨文的兆辭。（一百六十一）甲骨文的兆序。（一百六十二）甲骨文的兆辭。（一百六十三）甲骨文的兆序。（一百六十四）甲骨文的兆辭。（一百六十五）甲骨文的兆序。（一百六十六）甲骨文的兆辭。（一百六十七）甲骨文的兆序。（一百六十八）甲骨文的兆辭。（一百六十九）甲骨文的兆序。（一百七十）甲骨文的兆辭。（一百七十一）甲骨文的兆序。（一百七十二）甲骨文的兆辭。（一百七十三）甲骨文的兆序。（一百七十四）甲骨文的兆辭。（一百七十五）甲骨文的兆序。（一百七十六）甲骨文的兆辭。（一百七十七）甲骨文的兆序。（一百七十八）甲骨文的兆辭。（一百七十九）甲骨文的兆序。（一百八十）甲骨文的兆辭。（一百八十一）甲骨文的兆序。（一百八十二）甲骨文的兆辭。（一百八十三）甲骨文的兆序。（一百八十四）甲骨文的兆辭。（一百八十五）甲骨文的兆序。（一百八十六）甲骨文的兆辭。（一百八十七）甲骨文的兆序。（一百八十八）甲骨文的兆辭。（一百八十九）甲骨文的兆序。（一百九十）甲骨文的兆辭。（一百九十一）甲骨文的兆序。（一百九十二）甲骨文的兆辭。（一百九十三）甲骨文的兆序。（一百九十四）甲骨文的兆辭。（一百九十五）甲骨文的兆序。（一百九十六）甲骨文的兆辭。（一百九十七）甲骨文的兆序。（一百九十八）甲骨文的兆辭。（一百九十九）甲骨文的兆序。（二百）甲骨文的兆辭。（二百一）甲骨文的兆序。（二百二）甲骨文的兆辭。（二百三）甲骨文的兆序。（二百四）甲骨文的兆辭。（二百五）甲骨文的兆序。（二百六）甲骨文的兆辭。（二百七）甲骨文的兆序。（二百八）甲骨文的兆辭。（二百九）甲骨文的兆序。（二百十）甲骨文的兆辭。（二百十一）甲骨文的兆序。（二百十二）甲骨文的兆辭。（二百十三）甲骨文的兆序。（二百十四）甲骨文的兆辭。（二百十五）甲骨文的兆序。（二百十六）甲骨文的兆辭。（二百十七）甲骨文的兆序。（二百十八）甲骨文的兆辭。（二百十九）甲骨文的兆序。（三百）甲骨文的兆辭。（三百一）甲骨文的兆序。（三百二）甲骨文的兆辭。（三百三）甲骨文的兆序。（三百四）甲骨文的兆辭。（三百五）甲骨文的兆序。（三百六）甲骨文的兆辭。（三百七）甲骨文的兆序。（三百八）甲骨文的兆辭。（三百九）甲骨文的兆序。（三百十）甲骨文的兆辭。（三百十一）甲骨文的兆序。（三百十二）甲骨文的兆辭。（三百十三）甲骨文的兆序。（三百十四）甲骨文的兆辭。（三百十五）甲骨文的兆序。（三百十六）甲骨文的兆辭。（三百十七）甲骨文的兆序。（三百十八）甲骨文的兆辭。（三百十九）甲骨文的兆序。（四百）甲骨文的兆辭。（四百一）甲骨文的兆序。（四百二）甲骨文的兆辭。（四百三）甲骨文的兆序。（四百四）甲骨文的兆辭。（四百五）甲骨文的兆序。（四百六）甲骨文的兆辭。（四百七）甲骨文的兆序。（四百八）甲骨文的兆辭。（四百九）甲骨文的兆序。（四百十）甲骨文的兆辭。（四百十一）甲骨文的兆序。（四百十二）甲骨文的兆辭。（四百十三）甲骨文的兆序。（四百十四）甲骨文的兆辭。（四百十五）甲骨文的兆序。（四百十六）甲骨文的兆辭。（四百十七）甲骨文的兆序。（四百十八）甲骨文的兆辭。（四百十九）甲骨文的兆序。（五百）甲骨文的兆辭。（五百一）甲骨文的兆序。（五百二）甲骨文的兆辭。（五百三）甲骨文的兆序。（五百四）甲骨文的兆辭。（五百五）甲骨文的兆序。（五百六）甲骨文的兆辭。（五百七）甲骨文的兆序。（五百八）甲骨文的兆辭。（五百九）甲骨文的兆序。（六百）甲骨文的兆辭。（六百一）甲骨文的兆序。（六百二）甲骨文的兆辭。（六百三）甲骨文的兆序。（六百四）甲骨文的兆辭。（六百五）甲骨文的兆序。（六百六）甲骨文的兆辭。（六百七）甲骨文的兆序。（六百八）甲骨文的兆辭。（六百九）甲骨文的兆序。（七百）甲骨文的兆辭。（七百一）甲骨文的兆序。（七百二）甲骨文的兆辭。（七百三）甲骨文的兆序。（七百四）甲骨文的兆辭。（七百五）甲骨文的兆序。（七百六）甲骨文的兆辭。（七百七）甲骨文的兆序。（七百八）甲骨文的兆辭。（七百九）甲骨文的兆序。（八百）甲骨文的兆辭。（八百一）甲骨文的兆序。（八百二）甲骨文的兆辭。（八百三）甲骨文的兆序。（八百四）甲骨文的兆辭。（八百五）甲骨文的兆序。（八百六）甲骨文的兆辭。（八百七）甲骨文的兆序。（八百八）甲骨文的兆辭。（八百九）甲骨文的兆序。（九百）甲骨文的兆辭。（九百一）甲骨文的兆序。（九百二）甲骨文的兆辭。（九百三）甲骨文的兆序。（九百四）甲骨文的兆辭。（九百五）甲骨文的兆序。（九百六）甲骨文的兆辭。（九百七）甲骨文的兆序。（九百八）甲骨文的兆辭。（九百九）甲骨文的兆序。（一千）甲骨文的兆辭。（一千一）甲骨文的兆序。（一千二）甲骨文的兆辭。（一千三）甲骨文的兆序。（一千四）甲骨文的兆辭。（一千五）甲骨文的兆序。（一千六）甲骨文的兆辭。（一千七）甲骨文的兆序。（一千八）甲骨文的兆辭。（一千九）甲骨文的兆序。（二千）甲骨文的兆辭。（二千一）甲骨文的兆序。（二千二）甲骨文的兆辭。（二千三）甲骨文的兆序。（二千四）甲骨文的兆辭。（二千五）甲骨文的兆序。（二千六）甲骨文的兆辭。（二千七）甲骨文的兆序。（二千八）甲骨文的兆辭。（二千九）甲骨文的兆序。（三千）甲骨文的兆辭。（三千一）甲骨文的兆序。（三千二）甲骨文的兆辭。（三千三）甲骨文的兆序。（三千四）甲骨文的兆辭。（三千五）甲骨文的兆序。（三千六）甲骨文的兆辭。（三千七）甲骨文的兆序。（三千八）甲骨文的兆辭。（三千九）甲骨文的兆序。（四千）甲骨文的兆辭。（四千一）甲骨文的兆序。（四千二）甲骨文的兆辭。（四千三）甲骨文的兆序。（四千四）甲骨文的兆辭。（四千五）甲骨文的兆序。（四千六）甲骨文的兆辭。（四千七）甲骨文的兆序。（四千八）甲骨文的兆辭。（四千九）甲骨文的兆序。（五千）甲骨文的兆辭。（五千一）甲骨文的兆序。（五千二）甲骨文的兆辭。（五千三）甲骨文的兆序。（五千四）甲骨文的兆辭。（五千五）甲骨文的兆序。（五千六）甲骨文的兆辭。（五千七）甲骨文的兆序。（五千八）甲骨文的兆辭。（五千九）甲骨文的兆序。（六千）甲骨文的兆辭。（六千一）甲骨文的兆序。（六千二）甲骨文的兆辭。（六千三）甲骨文的兆序。（六千四）甲骨文的兆辭。（六千五）甲骨文的兆序。（六千六）甲骨文的兆辭。（六千七）甲骨文的兆序。（六千八）甲骨文的兆辭。（六千九）甲骨文的兆序。（七千）甲骨文的兆辭。（七千一）甲骨文的兆序。（七千二）甲骨文的兆辭。（七千三）甲骨文的兆序。（七千四）甲骨文的兆辭。（七千五）甲骨文的兆序。（七千六）甲骨文的兆辭。（七千七）甲骨文的兆序。（七千八）甲骨文的兆辭。（七千九）甲骨文的兆序。（八千）甲骨文的兆辭。（八千一）甲骨文的兆序。（八千二）甲骨文的兆辭。（八千三）甲骨文的兆序。（八千四）甲骨文的兆辭。（八千五）甲骨文的兆序。（八千六）甲骨文的兆辭。（八千七）甲骨文的兆序。（八千八）甲骨文的兆辭。（八千九）甲骨文的兆序。（九千）甲骨文的兆辭。（九千一）甲骨文的兆序。（九千二）甲骨文的兆辭。（九千三）甲骨文的兆序。（九千四）甲骨文的兆辭。（九千五）甲骨文的兆序。（九千六）甲骨文的兆辭。（九千七）甲骨文的兆序。（九千八）甲骨文的兆辭。（九千九）甲骨文的兆序。（一萬）甲骨文的兆辭。（一萬一）甲骨文的兆序。（一萬二）甲骨文的兆辭。（一萬三）甲骨文的兆序。（一萬四）甲骨文的兆辭。（一萬五）甲骨文的兆序。（一萬六）甲骨文的兆辭。（一萬七）甲骨文的兆序。（一萬八）甲骨文的兆辭。（一萬九）甲骨文的兆序。（二萬）甲骨文的兆辭。（二萬一）甲骨文的兆序。（二萬二）甲骨文的兆辭。（二萬三）甲骨文的兆序。（二萬四）甲骨文的兆辭。（二萬五）甲骨文的兆序。（二萬六）甲骨文的兆辭。（二萬七）甲骨文的兆序。（二萬八）甲骨文的兆辭。（二萬九）甲骨文的兆序。（三萬）甲骨文的兆辭。（三萬一）甲骨文的兆序。（三萬二）甲骨文的兆辭。（三萬三）甲骨文的兆序。（三萬四）甲骨文的兆辭。（三萬五）甲骨文的兆序。（三萬六）甲骨文的兆辭。（三萬七）甲骨文的兆序。（三萬八）甲骨文的兆辭。（三萬九）甲骨文的兆序。（四萬）甲骨文的兆辭。（四萬一）甲骨文的兆序。（四萬二）甲骨文的兆辭。（四萬三）甲骨文的兆序。（四萬四）甲骨文的兆辭。（四萬五）甲骨文的兆序。（四萬六）甲骨文的兆辭。（四萬七）甲骨文的兆序。（四萬八）甲骨文的兆辭。（四萬九）甲骨文的兆序。（五萬）甲骨文的兆辭。（五萬一）甲骨文的兆序。（五萬二）甲骨文的兆辭。（五萬三）甲骨文的兆序。（五萬四）甲骨文的兆辭。（五萬五）甲骨文的兆序。（五萬六）甲骨文的兆辭。（五萬七）甲骨文的兆序。（五萬八）甲骨文的兆辭。（五萬九）甲骨文的兆序。（六萬）甲骨文的兆辭。（六萬一）甲骨文的兆序。（六萬二）甲骨文的兆辭。（六萬三）甲骨文的兆序。（六萬四）甲骨文的兆辭。（六萬五）甲骨文的兆序。（六萬六）甲骨文的兆辭。（六萬七）甲骨文的兆序。（六萬八）甲骨文的兆辭。（六萬九）甲骨文的兆序。（七萬）甲骨文的兆辭。（七萬一）甲骨文的兆序。（七萬二）甲骨文的兆辭。（七萬三）甲骨文的兆序。（七萬四）甲骨文的兆辭。（七萬五）甲骨文的兆序。（七萬六）甲骨文的兆辭。（七萬七）甲骨文的兆序。（七萬八）甲骨文的兆辭。（七萬九）甲骨文的兆序。（八萬）甲骨文的兆辭。（八萬一）甲骨文的兆序。（八萬二）甲骨文的兆辭。（八萬三）甲骨文的兆序。（八萬四）甲骨文的兆辭。（八萬五）甲骨文的兆序。（八萬六）甲骨文的兆辭。（八萬七）甲骨文的兆序。（八萬八）甲骨文的兆辭。（八萬九）甲骨文的兆序。（九萬）甲骨文的兆辭。（九萬一）甲骨文的兆序。（九萬二）甲骨文的兆辭。（九萬三）甲骨文的兆序。（九萬四）甲骨文的兆辭。（九萬五）甲骨文的兆序。（九萬六）甲骨文的兆辭。（九萬七）甲骨文的兆序。（九萬八）甲骨文的兆辭。（九萬九）甲骨文的兆序。（十萬）甲骨文的兆辭。（十萬一）甲骨文的兆序。（十萬二）甲骨文的兆辭。（十萬三）甲骨文的兆序。（十萬四）甲骨文的兆辭。（十萬五）甲骨文的兆序。（十萬六）甲骨文的兆辭。（十萬七）甲骨文的兆序。（十萬八）甲骨文的兆辭。（十萬九）甲骨文的兆序。（一百萬）甲骨文的兆辭。（一百萬一）甲骨文的兆序。（一百萬二）甲骨文的兆辭。（一百萬三）甲骨文的兆序。（一百萬四）甲骨文的兆辭。（一百萬五）甲骨文的兆序。（一百萬六）甲骨文的兆辭。（一百萬七）甲骨文的兆序。（一百萬八）甲骨文的兆辭。（一百萬九）甲骨文的兆序。（二百萬）甲骨文的兆辭。（二百萬一）甲骨文的兆序。（二百萬二）甲骨文的兆辭。（二百萬三）甲骨文的兆序。（二百萬四）甲骨文的兆辭。（二百萬五）甲骨文的兆序。（二百萬六）甲骨文的兆辭。（二百萬七）甲骨文的兆序。（二百萬八）甲骨文的兆辭。（二百萬九）甲骨文的兆序。（三百萬）甲骨文的兆辭。（三百萬一）甲骨文的兆序。（三百萬二）甲骨文的兆辭。（三百萬三）甲骨文的兆序。（三百萬四）甲骨文的兆辭。（三百萬五）甲骨文的兆序。（三百萬六）甲骨文的兆辭。（三百萬七）甲骨文的兆序。（三百萬八）甲骨文的兆辭。（三百萬九）甲骨文的兆序。（四百萬）甲骨文的兆辭。（四百萬一）甲骨文的兆序。（四百萬二）甲骨文的兆辭。（四百萬三）甲骨文的兆序。（四百萬四）甲骨文的兆辭。（四百萬五）甲骨文的兆序。（四百萬六）甲骨文的兆辭。（四百萬七）甲骨文的兆序。（四百萬八）甲骨文的兆辭。（四百萬九）甲骨文的兆序。（五百萬）甲骨文的兆辭。（五百萬一）甲骨文的兆序。（五百萬二）甲骨文的兆辭。（五百萬三）甲骨文的兆序。（五百萬四）甲骨文的兆辭。（五百萬五）甲骨文的兆序。（五百萬六）甲骨文的兆辭。（五百萬七）甲骨文的兆序。（五百萬八）甲骨文的兆辭。（五百萬九）甲骨文的兆序。（六百萬）甲骨文的兆辭。（六百萬一）甲骨文的兆序。（六百萬二）甲骨文的兆辭。（六百萬三）甲骨文的兆序。（六百萬四）甲骨文的兆辭。（六百萬五）甲骨文的兆序。（六百萬六）甲骨文的兆辭。（六百萬七）甲骨文的兆序。（六百萬八）甲骨文的兆辭。（六百萬九）甲骨文的兆序。（七百萬）甲骨文的兆辭。（七百萬一）甲骨文的兆序。（七百萬二）甲骨文的兆辭。（七百萬三）甲骨文的兆序。（七百萬四）甲骨文的兆辭。（七百萬五）甲骨文的兆序。（七百萬六）甲骨文的兆辭。（七百萬七）甲骨文的兆序。（七百萬八）甲骨文的兆辭。（七百萬九）甲骨文的兆序。（八百萬）甲骨文的兆辭。（八百萬一）甲骨文的兆序。（八百萬二）甲骨文的兆辭。（八百萬三）甲骨文的兆序。（八百萬四）甲骨文的兆辭。（八百萬五）甲骨文的兆序。（八百萬六）甲骨文的兆辭。（八百萬七）甲骨文的兆序。（八百萬八）甲骨文的兆辭。（八百萬九）甲骨文的兆序。（九百萬）甲骨文的兆辭。（九百萬一）甲骨文的兆序。（九百萬二）甲骨文的兆辭。（九百萬三）甲骨文的兆序。（九百萬四）甲骨文的兆辭。（九百萬五）甲骨文的兆序。（九百萬六）甲骨文的兆辭。（九百萬七）甲骨文的兆序。（九百萬八）甲骨文的兆辭。（九百萬九）甲骨文的兆序。（一千萬）甲骨文的兆辭。（一千萬一）甲骨文的兆序。（一千萬二）甲骨文的兆辭。（一千萬三）甲骨文的兆序。（一千萬四）甲骨文的兆辭。（一千萬五）甲骨文的兆序。（一千萬六）甲骨文的兆辭。（一千萬七）甲骨文的兆序。（一千萬八）甲骨文的兆辭。（一千萬九）甲骨文的兆序。（二千萬）甲骨文的兆辭。（二千萬一）甲骨文的兆序。（二千萬二）甲骨文的兆辭。（二千萬三）甲骨文的兆序。（二千萬四）甲骨文的兆辭。（二千萬五）甲骨文的兆序。（二千萬六）甲骨文的兆辭。（二千萬七）甲骨文的兆序。（二千萬八）甲骨文的兆辭。（二千萬九）甲骨文的兆序。（三千萬）甲骨文的兆辭。（三千萬一）甲骨文的兆序。（三千萬二）甲骨文的兆辭。（三千萬三）甲骨文的兆序。（三千萬四）甲骨文的兆辭。（三千萬五）甲骨文的兆序。（三千萬六）甲骨文的兆辭。（三千萬七）甲骨文的兆序。（三千萬八）甲骨文的兆辭。（三千萬九）甲骨文的兆序。（四千萬）甲骨文的兆辭。（四千萬一）甲骨文的兆序。（四千萬二）甲骨文的兆辭。（四千萬三）甲骨文的兆序。（四千萬四）甲骨文的兆辭。（四千萬五）甲骨文的兆序。（四千萬六）甲骨文的兆辭。（四千萬七）甲骨文的兆序。（四千萬八）甲骨文的兆辭。（四千萬九）甲骨文的兆序。（五千萬）甲骨文的兆辭。（五千萬一）甲骨文的兆序。（五千萬二）甲骨文的兆辭。（五千萬三）甲骨文的兆序。（五千萬四）甲骨文的兆辭。（五千萬五）甲骨文的兆序。（五千萬六）甲骨文的兆辭。（五千萬七）甲骨文的兆序。（五千萬八）甲骨文的兆辭。（五千萬九）甲骨文的兆序。（六千萬）甲骨文的兆辭。（六千萬一）甲骨文的兆序。（六千萬二）甲骨文的兆辭。（六千萬三）甲骨文的兆序。（六千萬四）甲骨文的兆辭。（六千萬五）甲骨文的兆序。（六千萬六）甲骨文的兆辭。（六千萬七）甲骨文的兆序。（六千萬八）甲骨文的兆辭。（六千萬九）甲骨文的兆序。（七千萬）甲骨文的兆辭。（七千萬一）甲骨文的兆序。（七千萬二）甲骨文的兆辭。（七千萬三）甲骨文的兆序。（七千萬四）甲骨文的兆辭。（七千萬五）甲骨文的兆序。（七千萬六）甲骨文的兆辭。（七千萬七）甲骨文的兆序。（七千萬八）甲骨文的兆辭。（七千萬九）甲骨文的兆序。（八千萬）甲骨文的兆辭。（八千萬一）甲骨文的兆序。（八千萬二）甲骨文的兆辭。（八千萬三）甲骨文的兆序。（八千萬四）甲骨文的兆辭。（八千萬五）甲骨文的兆序。（八千萬六）甲骨文的兆辭。（八千萬七）甲骨文的兆序。（八千萬八）甲骨文的兆辭。（八千萬九）甲骨文的兆序。（九千萬）甲骨文的兆辭。（九千萬一）甲骨文的兆序。（九千萬二）甲骨文的兆辭。（九千萬三）甲骨文的兆序。（九千萬四）甲骨文的兆辭。（九千萬五）甲骨文的兆序。（九千萬六）甲骨文的兆辭。（九千萬七）甲骨文的兆序。（九千萬八）甲骨文的兆辭。（九千萬九）甲骨文的兆序。（一億）甲骨文的兆辭。（一億一）甲骨文的兆序。（一億二）甲骨文的兆辭。（一億三）甲骨文的兆序。（一億四）甲骨文的兆辭。（一億五）甲骨文的兆序。（一億六）甲骨文的兆辭。（一億七）甲骨文的兆序。（一億八）甲骨文的兆辭。（一億九）甲骨文的兆序。（二億）甲骨文的兆辭。（二億一）甲骨文的兆序。（二億二）甲骨文的兆辭。（二億三）甲骨文的兆序。（二億四）甲骨文的兆辭。（二億五）甲骨文的兆序。（二億六）甲骨文的兆辭。（二億七）甲骨文的兆序。（二億八）甲骨文的兆辭。（二億九）甲骨文的兆序。（三億）甲骨文的兆辭。（三億一）甲骨文的兆序。（三億二）甲骨文的兆辭。（三億三）甲骨文的兆序。（三億四）甲骨文的兆辭。（三億五）甲骨文的兆序。（三億六）甲骨文的兆辭。（三億七）甲骨文的兆序。（三億八）甲骨文的兆辭。（三億九）甲骨文的兆序。（四億）甲骨文的兆辭。（四億一）甲骨文的兆序。（四億二）甲骨文的兆辭。（四億三）甲骨文的兆序。（四億四）甲骨文的兆辭。（四億五）甲骨文的兆序。（四億六）甲骨文的兆辭。（四億七）甲骨文的兆序。（四億八）甲骨文的兆辭。（四億九）甲骨文的兆序。（五億）甲骨文的兆辭。（五億一）甲骨文的兆序。（五億二）甲骨文的兆辭。（五億三）甲骨文的兆序。（五億四）甲骨文的兆辭。（五億五）甲骨文的兆序。（五億六）甲骨文的兆辭。（五億七）甲骨文的兆序。（五億八）甲骨文的兆辭。（五億九）甲骨文的兆序。（六億）甲骨文的兆辭。（六億一）甲骨文的兆序。（六億二）甲骨文的兆辭。（六億三）甲骨文的兆序。（六億四）甲骨文的兆辭。（六億五）甲骨文的兆序。（六億六）甲骨文的兆辭。（六億七）甲骨文的兆序。（六億八）甲骨文的兆辭。（六億九）甲骨文的兆序。（七億）甲骨文的兆辭。（七億一）甲骨文的兆序。（七億二）甲骨文的兆辭。（七億三）甲骨文的兆序。（七億四）甲骨文的兆辭。（七億五）甲骨文的兆序。（七億六）甲骨文的兆辭。（七億七）甲骨文的兆序。（七億八）甲骨文的兆辭。（七億九）甲骨文的兆序。（八億）甲骨文的兆辭。（八億一）甲骨文的兆序。（八億二）甲骨文的兆辭。（八億三）甲骨文的兆序。（八億四）甲骨文的兆辭。（八億五）甲骨文的兆序。（八億六）甲骨文的兆辭。（八億七）甲骨文的兆序。（八億八）甲骨文的兆辭。（八億九）甲骨文的兆序。（九億）甲骨文的兆辭。（九億一）甲骨文的兆序。（九億二）甲骨文的兆辭。（九億三）甲骨文的兆序。（九億四）甲骨文的兆辭。（九億五）甲骨文的兆序。（九億六）甲骨文的兆辭。（九億七）甲骨文的兆序。（九億八）甲骨文的兆辭。（九億九）甲骨文的兆序。（十億）甲骨文的兆辭。（十億一）甲骨文的兆序。（十億二）甲骨文的兆辭。（十億三）甲骨文的兆序。（十億四）甲骨文的兆辭。（十億五）甲骨文的兆序。（十億六）甲骨文的兆辭。（十億七）甲骨文的兆序。（十億八）甲骨文的兆辭。（十億九）甲骨文的兆序。（一百億）甲骨文的兆辭。（一百億一）甲骨文的兆序。（一百億二）甲骨文的兆辭。（一百億三）甲骨文的兆序。（一百億四）甲骨文的兆辭。（一百億五）甲骨文的兆序。（一百億六）甲骨文的兆辭。（一百億七）甲骨文的兆序。（一百億八）甲骨文的兆辭。（一百億九）甲骨文的兆序。（二百億）甲骨文的兆辭。（二百億一）甲骨文的兆序。（二百億二）甲骨文的兆辭。（二百億三）甲骨文的兆序。（二百億四）甲骨文的兆辭。（二百億五）甲骨文的兆序。（二百億六）甲骨文的兆辭。（二百億七）甲骨文的兆序。（二百億八）甲骨文的兆辭。（二百億九）甲骨文的兆序。（三百億）甲骨文的兆辭。（三百億一）甲骨文的兆序。（三百億二）甲骨文的兆辭。（三百億三）甲骨文的兆序。（三百億四）甲骨文的兆辭。（三百億五）甲骨文的兆序。（三百億六）甲骨文的兆辭。（三百億七）甲骨文的兆序。（三百億八）甲骨文的兆辭。（三百億九）甲骨文的兆序。（四百億）甲骨文的兆辭。（四百億一）甲骨文的兆序。（四百億二）甲骨文的兆辭。（四百億三）甲骨文的兆序。（四百億四）甲骨文的兆辭。（四百億五）甲骨文的兆序。（四百億六）甲骨文的兆辭。（四百億七）甲骨文的兆序。（四百億八）甲骨文的兆辭。（四百億九）甲骨文的兆序。（五百億）甲骨文的兆辭。（五百億一）甲骨文的兆序。（五百億二）甲骨文的兆辭。（五百億三）甲骨文的兆序。（五百億四）甲骨文的兆辭。（五百億五）甲骨文的兆序。（五百億六）甲骨文的兆辭。（五百億七）甲骨文的兆序。（五百億八）甲骨文的兆辭。（五百億九）甲骨文的兆序。（六百億）甲骨文的兆辭。（六百億一）甲骨文的兆序。（六百億二）甲骨文的兆辭。（六百億三）甲骨文的兆序。（六百億四）甲骨文的兆辭。（六百億五）甲骨文的兆序。（六百億六）甲骨文的兆辭。（六百億七）甲骨文的兆序。（六百億八）甲骨文的兆辭。（六百億九）甲骨文的兆序。（七百億）甲骨文的兆辭。（七百億一）甲骨文的兆序。（七百億二）甲骨文的兆辭。（七百億三）甲骨文的兆序。（七百億四）甲骨文的兆辭。（七百億五）甲骨文的兆序。（七百億六）甲骨文的兆辭。（七百億七）甲骨文的兆序。（七百億八）甲骨文的兆辭。（七百億九）甲骨文的兆序。（八百億）甲骨文的兆辭。（八百億一）甲骨文的兆序。（八百億二）甲骨文的兆辭。（八百億三）甲骨文的兆序。（八百億四）甲骨文的兆辭。（八百億五）甲骨文的兆序。（八百億六）甲骨文的兆辭。（八百億七）甲骨文的兆序。（八百億八）甲骨文的兆辭。（八百億九）甲骨文的兆序。（九百億）甲骨文的兆辭。（九百億一）甲骨文的兆序。（九百億二）甲骨文的兆辭。（九百億三）甲骨文的兆序。（九百億四）甲骨文的兆辭。（九百億五）甲骨文的兆序。（九百億六）甲骨文的兆辭。（九百億七）甲骨文的兆序。（九百億八）甲骨文的兆辭。（九百億九）甲骨文的兆序。（一千億）甲骨文的兆辭。（一千億一）甲骨文的兆序。（一千億二）甲骨文的兆辭。（一千億三）甲骨文的兆序。（一千億四）甲骨文的兆辭。（一千億五）甲骨文的兆序。（一千億六）甲骨文的兆辭。（一千億七）甲骨文的兆序。（一千億八）甲骨文的兆辭。（一千億九）甲骨文的兆序。（二千億）甲骨文的兆辭。（二千億一）甲骨文的兆序。（二千億二）甲骨文的兆辭。（二千億三）甲骨文的兆序。（二千億四）甲骨文的兆辭。（二千億五）甲骨文的兆序。（二千億六）甲骨文的兆辭。（二千億七）甲骨文的兆序。（二千億八）甲骨文的兆辭。（二千億九）甲骨文的兆序。（三千億）甲骨文的兆辭。（三千億一）甲骨文的兆序。（三千億二）甲骨文的兆辭。（三千億三）甲骨文的兆序。（三千億四）甲骨文的兆辭。（三千億五）甲骨文的兆序。（三千億六）甲骨文的兆辭。（三千億七）甲骨文的兆序。（三千億八）甲骨文的兆辭。（三千億九）甲骨文的兆序。（四千億）甲骨文的兆辭。（四千億一）甲骨文的兆序。（四千億二）甲骨文的兆辭。（四千億三）甲骨文的兆序。（四千億四）甲骨文的兆辭。（四千億五）甲骨文的兆序。（四千億六）甲骨文的兆辭。（四千億七）甲骨文的兆序。（四千億八）甲骨文的兆辭。（四千億九）甲骨文的兆序。（五千億）甲骨文的兆辭。（五千億一）甲骨文的兆序。（五千億二）甲骨文的兆辭。（五千億三）甲骨文的兆序。（五千億四）甲骨文的兆辭。（五千億五）甲骨文的兆序。（五千億六）甲骨文的兆辭。（五千億七）甲骨文的兆序。（五千億八）甲骨文的兆辭。（五千億九）甲骨文的兆序。（六千億）甲骨文的兆辭。（六千億一）甲骨文的兆序。（六千億二）甲骨文的兆辭。（六千億三）甲骨文的兆序。（六千億四）甲骨文的兆辭。（六千億五）甲骨文的兆序。（六千億六）甲骨文的兆辭。（六千億七）甲骨文的兆序。（六千億八）甲骨文的兆辭。（六千億九）甲骨文的兆序。（七千億）甲骨文的兆辭。（七千億一）甲骨文的兆序。（七千億二）甲骨文的兆辭。（七千億三）甲骨文的兆序。（七千億四）甲骨文的兆辭。（七千億五）甲骨文的兆序。（七千億六）甲骨文的兆辭。（七千億七）甲骨文的兆序。（七千億八）甲骨文的兆辭。（七千億九）甲骨文的兆序。（八千億）甲骨文的兆辭。（八千億一）甲骨文的兆序。（八千億二）甲骨文的兆辭。（八千億三）甲骨文的兆序。（八千億四）甲骨文的兆辭。（八千億五）甲骨文的兆序。（八千億六）甲骨文的兆辭。（八千億七）甲骨文的兆序。（八千億八）甲骨文的兆辭。（八千億九）甲骨文的兆序。（九千億）甲骨文的兆辭。（九千億一）甲骨文的兆序。（九千億二）甲骨文的兆辭。（九千億三）甲骨文的兆序。（九千億四）甲骨文的兆辭。（九千億五）甲骨文的兆序。（九千億六）甲骨文的兆辭。（

民國四十一年
一九五二
壬辰

一月，胡厚宣著五十年甲骨學論著目出版，爲胡氏將「五十年（一八九九—一九四九）來所有關於甲骨文字之專書論文，不加檢選全部收錄。又此目所收「以所藏所見爲主，間有知而未見者，亦酌量收錄，惟於其下注明『未見』二字」。其序言曰：「據我的統計，在這五十年中，甲骨文材料的出土，㈠已著錄出書者七一種四一〇八七片。㈡國內機關採集尚未著錄者三一處，二〇九七一片，㈢國內私人收藏尚未著錄者七六家，九三六二五片，㈣國外機關採集尚未著錄者九處，五四八一片，㈤國外私人收藏尚未著錄者六家，八二五片。總共是一九三家，一六一九八九片。」又根據這一本五十年甲骨學論著目的統計，五十年中研究甲骨學者而有論著的作家，有㈠中國二三〇人，㈡日本四十人，㈢英國六人，㈣美國五人，㈤德國四人，㈥法國二人㈦蘇聯一人，㈧加拿大一人，此外列述研究人著作性質及類目甚詳。該書爲繼甲骨年表後有系統之專書。

九月，郭鼎堂著甲骨文字研究一書出版。該書寫於一九二九年夏，曾於一九三一年在上海印行。

（三四）一月，胡厚宣著五十年甲骨學論著目出版。總目㈠發現，㈡著錄，㈢考釋，㈣研究，㈤通說，㈥評論，㈦彙集，㈧雜著。附著者索引、篇名索引、編年索引。一冊。中華書局出版。

（三五）七月，董作賓撰卜辭中八月乙酉月食考，刊大陸雜誌特刊第一輯下冊。

（三六）七月，嚴一萍撰夏商周文化異同考，刊大陸雜誌特刊第一輯下冊。

（三七）七月，張秉權撰說吉，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十三本，傅斯年先生紀念論文集下冊。

（三八）八月，饒宗頤撰殷代日至考，刊大陸雜誌五卷第三期。

（三九）九月，郭鼎堂著甲骨文字研究出版，影印本一冊。目錄釋祖妣、釋臣宰（附土方考）、釋耤、釋勿勿、釋龢言、釋朋、釋五十、釋歲、釋干支：㈠干支表，㈡十日，㈢十二辰，㈣何謂辰，㈤十二辰古說，㈥十二辰與十二宮，㈦歲名之眞僞，㈧十二次，㈨餘論，㈩附錄—西紀前二二〇〇年代巴比倫之恆星天圖。

（四〇）十月，日本貝塚茂樹撰甲骨學之將來，刊

張丹斧舊藏，㈥陳伏廬舊藏，㈦簡心釗舊藏，㈧黃賓虹藏，㈨陳器成，㈩嚴一萍藏，(11)劉體智藏；(12)陳伯衡藏，(13)邊政平藏，(14)張彥生藏，(15)孫叔仁藏，(16)金祖同藏，(17)劉鶚瑞藏，(18)童大年藏，(19)吳進思藏，(20)杜亞貽藏，(21)潘祖蔭舊藏，(22)智龕自藏，(23)智龕藏本。

（四〇九）三月，郭若愚編殷虛拾掇二編出版，拓本影印一冊。

（四一〇）三月，日本貝塚茂樹伊藤道治撰甲骨文斷代研究之再檢討，刊東方學報京都二十三冊。日本京都大學人文科學研究所發行。

（四一一）四月，董作賓撰我國的文字，刊中央日報社出版我們的國家。

（四一二）五月董作賓撰臺灣大學所藏甲骨文字，刊國立臺灣大學考古人類學刊第一期。考古人類學系印行。

（四一三）六月，李濟撰跪坐蹲居與箕踞，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十四本。

（四一四）十二月，董作賓編殷虛文字乙編下輯出版，國立中央研究院歷史語言研究所出版。藝文印書館印行。

（四一五）十二月，董作賓撰殷代紀日法，刊文史哲學報第五期。

（四一六）十二月，董作賓撰五十年考訂殷代世系的檢討，刊學術季刊一卷三期。

（四一七）十二月陳夢家撰殷代卜人篇—甲骨斷代學丙編，刊古學報第六冊第一份，考古研究所編

民國四十二年
一九五三
癸巳

原書由十七篇考釋組成，今本刪去九篇，另將一九三四年所寫釋勿勿一篇編入（曾收入古代銘刻彙考續編。）此外原書序文及兩編後敘刪去，餘下數篇於文字及引證亦略有改削及補充。

甲骨學第一卷第二號。日本甲骨學會出版。

（四二）十月，日本佐藤武敏撰董作賓氏之甲骨文研究方向，刊甲骨學第一卷第二號。日本甲骨學會出版。

（四三）十月，日本水澤利忠撰契學綜覽㈠，刊甲骨學第一卷第二號。日本甲骨學會出版。

（四四）十一月，董作賓撰中國文字的起源，刊大陸雜誌五卷第十期聯合國中國同志會第八次座談會紀要。

（四五）十一月，嚴一萍撰正日本藪內清氏對殷曆的誤解兼辨「至日」，刊大陸雜誌第五卷第九期。

（四六）十二月，董作賓撰周金文中生簋死霸考，刊國立臺灣大學傅故校長斯年先生紀念論文集。國立臺灣大學出版。

（四七）郭鼎堂撰奴隸制社會，刊新文藝。

郭若愚編殷契拾掇二編，所收公私所藏及郭氏自藏甲骨共二十五處計有㈠北京圖書館藏，㈡南北博物院藏，㈢上海文物會藏，㈣浙江省立圖書館藏㈤沈曾植舊藏；㈥

民國四十三年
一九五四
甲午

三月，胡厚宣編戰後京津新獲甲骨集，所錄甲骨爲胡氏抗戰勝利後在各地蒐集所得，共五六四二片，計實物三分之一，拓本三分之二。

四月二日，梁思永先生因心臟病逝世於北平，享年五十歲。

十一月，楊樹達著耐林廎甲文說，序曰：「此篇收集余說甲骨之文字凡六篇，本積微居甲文說中之文字也。初余以積微居甲文說原稿七十篇送審查出版，經選定十篇，謂可刊行，余意卷中頗多會心之作，可存者決不止十篇，乃達書郭鼎堂，爲余選定五十餘篇，即積微居甲文說是也。此六篇爲郭氏汰去十餘篇之少半，余以爲可以存者，故刊之曰耐林廎甲文說」卜辭求義自序略云：「余於古文字之研究重視義訓，往讀甲文諸家之書，遇有說義善者，則手錄之，心有所觸，自覺其可存者，亦附記焉，久之不覺盈帙，遂即成篇。」云云。

輯。

（四八）三月，胡厚宣編戰後京津新獲甲骨集出版，全書四冊，附序要及楊樹達序。群聯出版社出版，初版共印四百部。

（四九）三月，董作賓撰殷虛出土一塊「武丁逐豕」骨版的研究，刊大陸雜誌八卷六期。

（四五〇）五月，石璋如撰骨卜與龜卜探源，刊大陸雜誌八卷十二期。

（四五一）五月，楊樹達著積微居甲文說卜辭瑣記出版。目次：卷上，說字之文，第一類識字之屬，十一篇；第二類，說義之屬，凡十三篇；第三類說通讀之屬，六篇；第四類說形之屬凡三篇。卷下，考史之文。第一類，人名之屬凡七篇。第二類國名之屬凡五篇。第三類，水名之屬凡二篇，第四類，祭祀之屬凡二篇。第五類，雜考之屬，凡四篇。卜辭瑣記，附自序。

（四五二）六月，張秉權撰殷虛文字劄記，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十五本。

（四五三）六月，張秉權撰殷虛卜龜之卜兆及其有關問題，刊中央研究院院刊第一輯，慶祝朱家驊先生六十歲論文集。

（四四）六月，董作賓撰武丁狩鹿淺說，刊大陸雜誌八卷十二期。

（四五）六月，石璋如撰殷代地上建築復原之一例，刊中央研究院院刊第一輯慶祝朱家驊先生六十歲論文集。

（四六）六月，高去尋撰殷禮的含貝與握貝，刊中央研究院院刊第一輯，慶祝朱家驊先生六十歲論文集。

（四七）六月，董作賓撰骨臼刻辭再考，刊中央研究院院刊第一輯慶祝朱家驊先生六十歲論文集。

（四八）六月，周法高撰古代的稱數，刊中央研究院院刊第一輯慶祝朱家驊先生六十歲論文集。

（四九）七月，嚴一萍撰八月乙酉月食腹甲的拼合與考證的經過，刊大陸雜誌九卷第十一期。

（四〇）七月，董作賓撰鈔本武乙卜辭十一版，刊大陸雜誌九卷第二期。

（四一）八月，董作賓撰我國文字的特色，刊華僑青年二卷一期。

（四二）八月，董作賓撰殷曆譜的自我檢討，刊大陸雜誌九卷四期，聯合國中國同志會第一百次座談會紀要。

（四三）九月陳夢家撰殷代銅器，刊考古學報第七冊。

（四四）十月，饒宗頤撰殷曆之新資料，刊大陸雜誌九卷七期。

（四五）日本白川靜撰釋南，刊甲骨學第三號，日本甲骨學會編印。

（四六）十月，日本池田末利撰釋廟，刊甲骨學第三號，日本甲骨學會編印。

（四七）十月，日本青木英哉撰殷虛卜辭斷代研究管見(一)，刊甲骨學第三號，日本甲骨學會編印。

（四八）十月，日本水澤利忠撰契學綜覽(四)，刊甲骨學，日本甲骨學會編印。

（四九）十一月，楊樹達著耐林廎甲文說卜辭求義出版。一冊，上海群聯出版社出版。

（四〇）十二月，陳夢家撰商王廟號考—甲骨斷代學乙篇，刊考古學報第八期。

（四一）十二月，董作賓撰中國文字，刊中國文化論集。

（四二）安志敏撰一九五二年秋鄭州二里岡發掘

民國四十四年
一九五五
乙未

四月殷虛文字綴合出版。該書爲郭若愚，曾毅公，李學勤三人將中央研究院歷史語言研究所考古報告集之二殷虛文字甲編，殷虛文字乙編之碎片綴合。其中郭氏綴合者計甲編之1—76；乙編77——324曾李二氏人合者有甲編之325—360；乙編之361——482。附鄭振鐸序，編者附記及目錄。

十二月，胡厚宣編甲骨續存出版，序曰：「我編渦戰後京津新獲甲骨集，戰後寧滬新獲甲骨集，戰後南北所見甲骨錄等三書，收錄抗戰復員歸來在南北各地所得見的甲骨文字一萬片在右。最近幾年，由於工作的需要，常到各處去參觀，於公私所藏續有所見，隨手描錄，或施墨拓，日久漸積，就多了起來，略加整理，我想還是把它發表出來，好供大家研究的方便。書編訖題爲甲骨續存。本編體例，一切仍仿前三書，著錄先後，以時代爲序。……編拓本爲上編，摹本爲下編，號碼各自起訖，計錄拓本二七五五，摹本九九八，共三七五三片。」

（四三）四月，郭若愚，曾毅公，李學勤等合著殷虛文字綴合出版。科學出版社出版。

（四四）五月，胡厚宣著殷虛發掘出版，學習生活出版社出版。

（四五）五月，日本白川靜撰作冊考，刊甲骨金文學論叢第三集。

（四六）日本白川靜撰召方考，刊甲骨金文學論叢第三集。

（四七）七月，陳夢家撰殷代社會的歷史文化，刊新建設。

（四八）七月，董作賓著甲骨學五十年出版。目次：㈠解題和概說，㈡殷代文化寶藏的開發，㈢前期研究的經過，㈣後期研究的進行，㈤甲骨文材料的總估計。附嚴一萍序。藝文印書館出版。

（四九）八月，日本白川靜撰釋師，刊甲骨金文學論叢第三集。

（四九）十月，嚴一萍著纘殷曆譜出版。附董作賓殷曆譜的自我檢討及許倬雲殷曆譜氣朔新證舉例。藝文印書館出版。

（四〇）四月，董作賓講殷代甲骨文字與古代文化，在日本東方學會講演辭，藤堂明保翻譯，刊東方

民國四十五年
一九五六
丙申

六月，董作賓編輯殷虛文字外編出版。殷氏序言曰：「殷虛文字外編者，有別殷虛文字而言，殷虛文字者，中央研究所十二次發掘殷虛所得甲骨文字之總集，而爲彥堂先生所手輯。案自民國十七年試掘小屯殷虛以來，迄今已歷十二年，獲甲骨文字二萬四千餘片，其中有字者約佔三分之一，其中有字而可識者，又約佔三分之一，其中重見者，又約佔三分之一，故此書所收，僅爲有字而可識者之十二分之一耳。」

十二月，儀徵阮氏摹刻甲骨文字，名曰殷虛書契續編，凡六卷。

（一九五六）一月，董作賓編殷虛文字外編，第一卷出版。

（一九五六）一月，饒宗頤撰甘博所見甲骨錄（一），刊東方文化第三卷第一期，香港大學出版。

（一九五六）一月，饒宗頤撰王孫告考，刊東方文化第三卷第一期，香港大學出版。

（一九五六）三月，唐蘭撰卜辭中所見的殷先公先王及其配偶，刊大陸雜誌十三卷第五期。

（一九五六）三月，董作賓撰我怎樣研究上古史，刊香港民國叢書第四編。

（一九五六）四月，張秉權撰卜辭中的月食考，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十七本。

（一九五六）四月，瓜瓦里提夫卦源於龜卜考，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十七本。

（一九五六）六月，董作賓，殷虛文字外編出版。

（一九五六）七月，陳夢家著殷虛卜辭綜述出版。重要目次：第一章總論，第二章文字，第三章文法，第四章斷代上，第五章斷代下，第六章年代，第七章曆法天象，第八章方國地理，第九章政治過域，第十章先公舊臣，第十一章先王先妣，第十二章關號上，第十三章關號下，第十四章親屬，第十五章官職，第十六章農業及其他，第十七章宗教，第十八章身份，第十九章總結，第二十章附錄：(1)有關甲骨材料的記載，(2)甲骨論著目，(3)甲骨著錄簡表。科學出版社出版。

（一九五六）九月，丁山著甲骨文所見氏族及其制度出版社出版。

（一九五六）十月，張秉權撰卜辭中月食考，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十七本。

（一九五六）十月，日本加藤常賢撰釋殷虛文字，刊甲骨學第一冊。

（一九五六）十二月，胡厚宣編甲骨續存出版。

（一九五六）楊向奎撰釋不玄冥，刊歷史研究第二卷。

（一九五七）陳夢家撰商殷與反周的年代問題，刊歷史研究第二卷。

（一九五七）唐蘭撰中國古代歷史上的年代問題，刊新建設第二卷。

（一九五七）安志敏撰中國古代的刀，刊考古學報第十期。

（一九五七）胡厚宣殷代農作施肥說，刊歷史研究第一卷。

（一九五七）日本天野元之助撰西周之農業及社會構造，刊日本於大商大論文集七卷一號。

（一九五七）三月，唐蘭撰卜辭中所見的殷先公先王及其配偶，刊大陸雜誌十三卷第六期。

（一九五七）三月，張秉權撰卜辭中月食考，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十八本，慶祝胡適先生六十五歲論文集。

（一九五七）十一月，董作賓撰我怎樣研究上古史，刊香港大學中國學會出版。目次：甲骨文字考，刊大陸雜誌十三卷第九期。

（一九五七）十一月，饒宗頤著巴黎所見甲骨錄出版。目次：(一)甲骨文所見民族及其制度，(二)殷商氏族方國志。科學出版社出版。

（一九五七）十月，張秉權撰卜辭中月食考，刊大陸雜誌十三卷第八期。

（一九五七）十月，日本加藤常賢撰釋殷虛文字，刊甲骨學第一冊。

（一九五七）十月，胡厚宣編甲骨續存出版。

（一九五七）十二月，饒宗頤著巴黎所見甲骨錄出版。目次：(一)甲骨文所見民族及其制度，(二)殷商氏族方國志。科學出版社出版。

（一九五七）九月，董作賓撰殷虛文字乙編出版。

（一九五七）十月，張秉權撰卜辭中月食考，刊大陸雜誌十三卷第七期。

（一九五七）十月，日本加藤常賢撰釋殷虛文字，刊甲骨學第一冊。

（一九五七）十月，胡厚宣編甲骨續存出版。

（一九五七）十二月，饒宗頤著巴黎所見甲骨錄出版。目次：(一)甲骨文所見民族及其制度，(二)殷商氏族方國志。科學出版社出版。

（一九五七）十二月，董作賓撰我怎樣研究上古史，刊香港大學中國學會出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰卜辭中所見的殷代曆分，刊香港大學中國學會出版。

（一九五七）十二月，張秉權撰卜辭中月食的新證，刊中國歷史上三正論之新檢證，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十八本，慶祝胡適先生六十五歲論文集。

（一九五七）十二月，周谷城著古史辨出版。

（一九五七）十二月，董作賓撰卜辭之時代區分，刊中國歷史上三正論之新檢證，刊中央研究院歷史語言研究所集刊第二十八本，慶祝胡適先生六十五歲論文集。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第三十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第四十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第五十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第六十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第七十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第八十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第九十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百二十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百三十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百四十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百五十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百六十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百七十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百八十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第一百九十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十八期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百二十九期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三十期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三十一期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三十二期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三十三期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三十四期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三十五期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三十六期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三十七期，臺灣商務印書館出版。

（一九五七）十一月，董作賓撰殷曆譜後記，刊大陸雜誌十五卷第二百三十八期，臺灣商務印書館出版。

載，流佈日少。爰將拓片重加流理，付之景印，庶幾資料普及，便利研究。原片有可綴合者，今皆合而爲一，凡得一十九版，共綴合三〇與四四一，兩版皆且，而所釋文亦或歧。三三兩加注對，知五七與四四一所釋有可綴合之例，不知當日何緣疏矢，孫若愈撰其編號皆：一七一與五七五。云云。凡此錯正，去其複重綴合，實僅九〇五版」云云。

兩首甲所誤合，今析析之爲二。

參考：

26927；28929；40+41；44+45；68+724；75+76；233+240；259+043；398+485+718；403+424；404+420+421+561；534+535；669+672；725+726；794+795+849。

（三四）七月，殷二萍撰卜辭四方風新義，刊大陸雜誌十五卷第二期。

（三五）八月，張秉權著殷虛文字丙編上輯（一）出版，中央研究院歷史語言研究所出版。

（三六）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共二：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，也可以說是二部殷虛文字乙編甲骨復原，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（三七）十月，屈萬里撰甲骨金文與經義，刊慶人雜誌十五卷第二期。

（三八）十二月，董作賓撰中國古史年代刊國立蘇州社會性質。刊歷史研究第六期。

（三九）徐中舒撰論四馬足對殷代兵制。刊歷史研究第七期。

（四〇）劉啟益撰西周金文中的職官制度。刊歷史研究第七期。

（四一）胡厚宣撰說貞出，刊歷史研究第七期。

（四二）胡厚宣撰釋余一人，刊歷史研究第一期。

（四三）張秉權撰殷代卜辭中的氣象記錄之商榷，刊慶祝蔡元培先生六十五歲論文集下冊。

（四四）北野民夫氏發行。

（四五）董作賓撰中國古史年代刊國立蘇州大學古人類學系印行。

（四六）五月，李學勤撰殷墟地理簡論出版，科學出版社。

（四七）五月，孫若澐撰殷虛文字補編，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四八）二月，勞榦撰史字的結構及史官的原始職務，刊大陸雜誌十四卷第三期。

（四九）二月，並作就甲國文字演變史之一例，刊新亞學報第二卷第二期。香港新亞書院出版。

（五〇）五月，董作賓撰爲甲骨文斷代六期之區分，刊大陸雜誌十四卷第九期。

（五一）五月，高去尋撰小臣宓有殷的殘片與銘文，刊中央研究院歷史語言研究所集刊二十八本下冊，慶祝胡適先生六十五歲論文集。

（五二）五月，董作賓撰漢城大學所藏大胛骨刻辭考釋，刊中央研究院歷史語言研究所集刊二十八本下冊，慶祝胡適先生六十五歲論文集。

（五三）七月，嚴一萍撰卜辭四方風新義，刊大陸雜誌十五卷第二期。

（五四）八月，張秉權著殷虛文字丙編上輯（一）出版，中央研究院歷史語言研究所出版。

（五五）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共二：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（五六）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五七）十月，屈萬里撰甲骨金文與經義，刊慶人雜誌十五卷第二期。

（五八）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（五九）十二月，並作就甲國文字演變史之一例，刊新亞學報第二卷第二期。香港新亞書院出版。

（六〇）張秉權撰殷代卜辭中的氣象記錄之商榷，刊慶祝蔡元培先生六十五歲論文集。

（六一）胡厚宣撰釋余一人，刊歷史研究第一期。

（六二）胡厚宣撰說貞出，刊歷史研究第七期。

（六三）徐中舒撰論四馬足對殷代兵制。刊歷史研究第七期。

（六四）劉啟益撰西周金文中的職官制度。刊歷史研究第七期。

（六五）董作賓撰中國古史年代刊國立蘇州大學古人類學系印行。

（六六）五月，李學勤撰殷虛地理簡論出版，科學出版社。

（六七）五月，孫若澐撰殷虛文字補編，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（六八）五月，董作賓撰中國古史年代刊國立蘇州大學古人類學系印行。

（六九）五月，張秉權撰殷虛文字丙編上輯（一）出版，中央研究院歷史語言研究所出版。

（七〇）五月，勞榦撰史字的結構及史官的原始職務，刊大陸雜誌十四卷第三期。

（七一）五月，並作就甲國文字演變史之一例，刊新亞學報第二卷第二期。香港新亞書院出版。

（七二）五月，董作賓撰爲甲骨文斷代六期之區分，刊大陸雜誌十四卷第九期。

（七三）五月，高去尋撰小臣宓有殷的殘片與銘文，刊中央研究院歷史語言研究所集刊二十八本下冊，慶祝胡適先生六十五歲論文集。

（七四）五月，董作賓撰漢城大學所藏大胛骨刻辭考釋，刊中央研究院歷史語言研究所集刊二十八本下冊，慶祝胡適先生六十五歲論文集。

（七五）七月，嚴一萍撰卜辭四方風新義，刊大陸雜誌十五卷第二期。

（七六）八月，張秉權著殷虛文字丙編上輯（一）出版，中央研究院歷史語言研究所出版。

（七七）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共二：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（七八）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（七九）九月，殷二萍撰中國古代貨幣，刊大陸雜誌十五卷第三期。

（八〇）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（八一）十月，屈萬里撰甲骨金文與經義，刊慶人雜誌十五卷第二期。

（八二）十月，金祥恒撰釋殷墟文字補說，刊大陸雜誌十五卷第四期。

（八三）十月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（八四）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（八五）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（八六）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（八七）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（八八）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（八九）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（九〇）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（九一）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（九二）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（九三）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（九四）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（九五）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

民國四十七年
一九五八
戊戌

孫若澐撰所選輯者，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

五月，羅文印書館重印甲骨文錄，殷二萍手書記目：「甲骨文錄刊於民國二十六年，爲河南通志文物志之一部份。原物藏河南博物館，經董作賓印行。

（一〇）五月，董作賓撰中國古史年代刊國立蘇州大學考古人類學刊第十一期。

（一一）五月，李學勤撰殷地理簡論出版，科學出版社。

（一二）五月，孫若澐撰殷虛文字補編，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（一三）五月，羅文印書館重印甲骨文錄，殷二萍手書記目：「甲骨文錄刊於民國二十六年，爲河南通志文物志之一部份。原物藏河南博物館，經董作賓印行。

（一四）五月，董作賓撰中國古史年代刊國立蘇州大學考古人類學刊第十一期。

（一五）七月，嚴一萍撰卜辭四方風新義，刊大陸雜誌十五卷第二期。

（一六）七月，日本白川靜撰殷代雒族考（四）共五：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（一七）七月，日本貝塚茂樹著甲骨學概說，刊大陸雜誌十七卷第一期，鄒清茂譯。

（一八）八月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共六：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（一九）八月，甲骨文斷代研究，刊中國古代社會性質。

（二〇）八月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（二一）八月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（二二）八月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（二三）八月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（二四）八月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（二五）八月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（二六）八月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（二七）八月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（二八）八月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（二九）八月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三〇）八月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三一）八月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（三二）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（三三）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三四）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三五）九月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（三六）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（三七）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三八）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三九）九月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（四〇）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（四一）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四二）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四三）九月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（四四）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（四五）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四六）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四七）九月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（四八）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（四九）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五〇）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五一）九月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（五二）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（五三）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五四）九月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五五）九月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（五六）十月，金祥恒撰釋殷墟文字補說，刊大陸雜誌十五卷第四期。

（五七）十月，屈萬里撰甲骨金文與經義，刊慶人雜誌十五卷第二期。

（五八）十月，金祥恒撰釋殷墟文字補說，刊大陸雜誌十五卷第四期。

（五九）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（六〇）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（六一）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（六二）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（六三）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

民國四十八年
一九五九
己亥

十月，金祥恒編輯之殷甲骨文綴出版。該書乃繼民國廿三年孫海波氏之甲骨文編而編。全氏搜二千五百餘文，共綴五萬餘字，其拓片計三十九種，前孫氏誤綴錯釋之字，於此皆有糾正。

（一）文史叢刊為一輯，中央日報社出版。

（二）十一月，李濟撰安陽遺址出土之豬猴卜辭動物遺骸與裝飾文樣，刊國立臺灣大學考古人類學刊第九、十期合刊。原文英文，陳奇祿節譯。

（三）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（四）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（六）十一月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（七）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（八）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（九）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（一〇）十一月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（一一）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（一二）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（一三）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（一四）十一月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（一五）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（一六）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（一七）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（一八）十一月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（一九）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（二〇）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（二一）十一月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（二二）十一月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（二三）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（二四）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（二五）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（二六）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（二七）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（二八）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（二九）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三〇）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（三一）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（三二）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三三）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三四）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（三五）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（三六）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三七）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（三八）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（三九）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（四〇）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四一）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四二）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（四三）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（四四）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四五）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四六）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（四七）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（四八）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（四九）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五〇）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（五一）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（五二）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五三）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五四）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（五五）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（五六）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五七）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（五八）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

（五九）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（一）共四：一重新綴拓，重新編輯，加以考釋而成，所以這一編，丙編共分三輯。上輯（一）計有復元龜腹甲五十三，復元龜背甲一，拓本九十五。」

（六〇）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（二）共三：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（六一）十二月，日本白川靜撰殷代雒族考（三）共四：「丙編是由乙編及其續降的甲骨拼凑復原，一部殷虛文字乙編甲骨復原，都九三〇版。書成二十兩三三個月」。

（六二）十二月，日本貝塚茂樹著古代殷帝國出版，一冊。北野民夫氏發行。

民國四十九年
一九六〇
庚子

（一九六〇）三月，貝塚茂樹編著京都大學人文科學研究所出版。
（一九六〇）四月，金祥恒撰卜辭中所見殷商宗廟及祭祀，刊大陸雜誌二十卷第八、九、十三期。
（一九六〇）四月，武健撰說且示，刊大陸雜誌二十卷第七期。

民國四十九年
一九六〇
庚子

（一九六〇）十一月，饒宗頤撰甲骨文字釋例，刊新亞學報第二卷第一期。
（一九六〇）十月，魯實先撰卜辭姓氏通釋之二，刊幼獅學術論文集，臺北幼獅書店發行。
（一九六〇）十一月，董作賓撰殷曆譜後編上冊，刊中華文化出版事業委員會出版。全書共四冊，十四卷，附錄兩卷，檢字一卷。臺北藝文印書館印行。
（一九六〇）十月，張秉權著殷虛文字丙編上冊（自出版）。國立中央研究院歷史語言研究所出版。目次：圖版目錄、考釋目錄、圖版、考釋等。
（一九六〇）十月，魯實先撰卜辭姓氏通釋之二。刊幼獅學報二卷第一期。
（一九六〇）六月，魯實先撰卜辭姓氏通釋之一，刊東海大學人文科學研究所藏甲骨文字，刊大陸雜誌十九卷第三期。
（一九五九）十月，金祥恒編輯殷甲骨文編出版。全書共四冊，十四卷，附錄兩卷，檢字一卷。臺北藝文印書館印行。
（一九五九）十月，張秉權著殷虛文字丙編上冊（自出版）。國立中央研究院歷史語言研究所出版。目次：圖版目錄、考釋目錄、圖版、考釋等。
（一九五九）十月，魯實先撰卜辭姓氏通釋之二。刊幼獅學報二卷第一期。
（一九五九）十一月，董作賓撰殷曆譜後編，刊中華文化出版事業委員會出版。
（一九五九）七月，饒宗頤撰甲骨文字釋例（自印）。加藤德重甲骨文金文關係文獻目錄。
島邦男甲骨卜辭地名通檢。松丸道雄日本殷見甲骨文字索引（自印）。
（一九五九）六月，魯實先撰卜辭姓氏通釋之一，刊東海大學人文科學研究所藏甲骨文字，刊大陸雜誌十九卷第三期。
（一九五九）八月，嚴一萍、金祥恒撰說京都大學人文科學研究所藏甲骨文字，刊大陸雜誌十九卷第三期。
（一九五八）十月，金祥恒編輯殷甲骨文編出版。全書共四冊，十四卷，附錄兩卷，檢字一卷。臺北藝文印書館印行。
（一九五八）十月，張秉權著殷虛文字丙編上冊（自出版）。國立中央研究院歷史語言研究所出版。目次：圖版目錄、考釋目錄、圖版、考釋等。
（一九五八）十月，魯實先撰卜辭姓氏通釋之二。刊幼獅學報二卷第一期。
（一九五八）十一月，董作賓撰殷曆譜後編上冊，刊中華文化出版事業委員會出版。

民國五十年
一九六一
辛丑

（一九六一）一月，嚴一萍撰說文佈修訂本四字辨源，刊中國文字第三期。國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。
（一九六一）同月，董作賓撰殷虛文字中之人獄圖刊中國文字第三期。
（一九六一）同月，董作賓撰殷虛文字乙編綜寫本示例二篇，刊中國文字第三期。
（一九六一）四月，貝塚茂樹撰卜辭中所見殷商宗廟及祭祀，刊大陸雜誌二十卷第八、九、十三期。
（一九六一）四月，武健撰說且示，刊大陸雜誌二十卷第七期。
（一九六一）三月，貝塚茂樹編著京都大學人文科學研究所藏甲骨文字釋文部份出版，一冊，日本京都大學人文科學研究所出版。

（一九六一）十一月，饒宗頤撰殷代貞卜人物通考出版。目次：卷一前論，卷二貞卜人物記名辭或稱例，卷三貞卜人物幕辭一。卷四貞卜人物幕辭二。卷五貞卜人物幕辭三。卷六貞卜人物事辭四。卷七貞卜人物事辭五。卷八貞卜人物事辭六。卷九貞卜人物事辭七。卷十貞卜人物事辭八。卷十一貞卜人物事辭九。卷十二貞人物事辭十。卷十三貞卜人物非貞辭十一。卷十四貞卜人物事辭十二。卷十五貞卜人物非貞辭十三。卷十六貞卜人物事辭十四。卷十七貞卜人物事辭十五。卷十八備考。卷十九結論。卷二十附錄補記索引。

民國五十年
一九六一
辛丑

（一九六一）一月，嚴一萍撰說文佈修訂本四字辨源，刊中國文字第三期。國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。
（一九六一）同月，董作賓撰殷虛文字中之人獄圖刊中國文字第三期。
（一九六一）同月，董作賓撰殷虛文字乙編綜寫本示例二篇，刊中國文字第三期。
（一九六一）四月，貝塚茂樹撰卜辭中所見殷商宗廟及祭祀，刊大陸雜誌二十卷第八、九、十三期。
（一九六一）四月，武健撰說且示，刊大陸雜誌二十卷第七期。
（一九六一）三月，貝塚茂樹編著京都大學人文科學研究所藏甲骨文字釋文部份出版，一冊，日本京都大學人文科學研究所出版。

（一九六一）五月，屈萬里撰殷虛文字甲編考釋，刊中國文字第二冊。
（一九六一）六月，商承祚編著中國文字學概要，刊中國文字第二冊出版。
（一九六一）六月，魯實先撰卜辭姓氏通釋之三，刊東海大學人文學報第二卷一期，東海大學出版。
（一九六一）六月，李孝定撰讀金文札記，刊中國文字第二冊出版。目次：（一）第二篇彝形。（二）第三篇指事，臺灣省立編譯館出版。
（一九六一）七月，日本島邦男撰殷墟卜辭研究（一）及甲骨文字索引（二）。池田末利訂正。池田末利殷虛

民國五十一年
一九六二
壬　寅

胡光煒小石遽世，享年七十五（一八八八—一九六三）。

（一九）一月，甚作甚，據殷文例分常例特例二種說，刊中國文字學研究室編印。

（一九）一月，嚴一萍撰關於文武丁時代一片腹甲的兩種綴合。刊中國文字第六期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（一九）一月，金祥恒撰釋生（下）刊中國文字第六期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（一九）一月，甚作甚，編殷虛文字乙編摹寫本示例四續，刊中國文字第六期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（一九）三月，日本松丸道雄撰論殷虛卜辭中之田獵地區。刊東洋文化研究所紀要第三十一册，日本東京大學東洋文化研究所出版。

（一九）三月，嚴一萍撰釋𠂤，刊中國文字第七期

（一九）歐陽可亮若殷山甲骨美術第一集出版，日本春秋學院甲骨學術研究室出版。

（一九）日本松丸道雄撰殷墟卜辭中所見「殷代貞卜人物通考」，刊東洋學報四三卷四號。

（一九）日本池田末利撰甲骨文字木文編，刊日本東洋學報四四卷三號。

（一九）六月，嚴一萍撰釋大一一次祓褵达。刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋𡈼——逆，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋立——位泣莅涖，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋覓，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋奚——嫉侯，刊中國文字第四期。

（一九）同月，王恒餘撰釋日月甯河，刊中國文字第四期。

（一九）同月，金祥恒撰釋𠂤，刊中國文字第四期。

（一九）六月，嚴一萍撰釋大一一次祓褵达。刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋𡈼——逆，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋立——位泣莅涖，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋覓，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋奚——嫉侯，刊中國文字第四期。

（一九）同月，王恒餘撰釋日月甯河，刊中國文字第四期。

（一九）同月，金祥恒撰釋𠂤，刊中國文字第四期。

（一九）六月，嚴一萍撰釋大一一次祓褵达。刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋𡈼——逆，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋立——位泣莅涖，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋覓，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋奚——嫉侯，刊中國文字第四期。

（一九）同月，王恒餘撰釋日月甯河，刊中國文字第四期。

（一九）同月，金祥恒撰釋𠂤，刊中國文字第四期。

（一九）十一月，嚴一萍撰釋𠂤，刊中國文字第四期。

（一九）十一月，嚴一萍撰釋𠂤，刊中國文字第四期。

（一九）十一月，甚作甚金祥恒撰本系所藏甲骨文字，刊國立臺灣大學考古人類學刊第十七、十八合刊，國立臺灣大學考古人類學系出版。

（一九）羅振玉撰殷虛書契後編，日本春秋學院影印。

（一九）歐陽可亮甚編集殷虛文字楹帖彙編，日本春秋學院出版。

（一九）同月，甚作甚撰殷虛文字乙編摹寫本示例二續，刊中國文字第三期。

（一九）同月，甚作甚、或然偉編殷甲骨年表，刊中國文字第三期。

（一九）六月，日本島邦男撰評僞宗爾著「殷代貞卜人物通考」，刊大陸雜誌二十二卷第十二期，鄭清茂譯。

（一九）六月，魯實先撰殷契新詮之二，刊東海學報第三卷第一期。

（一九）六月殷一萍撰釋大一一次祓褵达。刊中國文字第四期。

（一九）同月，殷一萍撰釋𡈼——逆，刊中國文字第四期。

（一九）同月，殷一萍撰釋立——位泣莅涖，刊中國文字第四期。

（一九）同月，殷一萍撰釋覓，刊中國文字第四期。

（一九）同月，殷一萍撰釋奚——嫉侯，刊中國文字第四期。

（一九）同月，王恒餘撰釋日月甯河，刊中國文字第四期。

（一九）同月，金祥恒撰釋𠂤，刊中國文字第四期。

（一九）六月，嚴一萍撰釋大一一次祓褵达。刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋𡈼——逆，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋立——位泣莅涖，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋覓，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋奚——嫉侯，刊中國文字第四期。

（一九）同月，王恒餘撰釋日月甯河，刊中國文字第四期。

（一九）同月，金祥恒撰釋𠂤，刊中國文字第四期。

（一九）同月，甚作甚撰殷虛文字乙編摹寫本示例三續，刊中國文字第五期。

（一九）九月，金祥恒撰釋生——止之上，刊中國文字第五期。

（一九）九月，嚴一萍撰釋大一一釋天，二釋夫，三釋五，四釋𡈼，五釋矢，六釋天。刊中國文字第五期。

（一九）九月，殷一萍撰釋𠂤，刊中央研究院史語所集刊第三十二本。

（一九）七月，王恒餘撰說祝，刊中國文字第四期。

（一九）同月金祥恒撰釋羊，刊中國文字第四期。

（一九）同月，金祥恒撰釋生——止之上，刊中國文字第四期。

（一九）同月，甚作甚金祥恒撰殷虛文字乙編摹寫本示例二續，刊中國文字第三期。

（一九）同月，甚作甚、或然偉編殷甲骨年表，刊中國文字第三期。

（一九）六月，日本島邦男撰評僞宗爾著「殷代貞卜人物通考」，刊大陸雜誌二十二卷第十二期，鄭清茂譯。

（一九）六月，魯實先撰殷契新詮之二，刊東海學報第三卷第一期。

（一九）六月殷一萍撰釋大一一次祓褵达。刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋𡈼——逆，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋立——位泣莅涖，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋覓，刊中國文字第四期。

（一九）同月，嚴一萍撰釋奚——嫉侯，刊中國文字第四期。

（一九）同月，王恒餘撰釋日月甯河，刊中國文字第四期。

（一九）同月，金祥恒撰釋𠂤，刊中國文字第四期。

（五二）七月，魯實先撰殷契新詮之五，刊幼獅學誌第一卷第三期。

（五三）九月，董作賓撰方地山所藏之一版卜辭。刊中國文字第九期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（五四）九月，金祥恒撰釋牝牡，刊中國文字第九期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（五五）九月，董作賓編殷虛文字乙編摹寫本示例七續，刊中國文字第九期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（五六）九月，于省吾撰釋奴婢，刊考古第九期，北平考古雜誌社出版。

（五七）十二月，金祥恒撰釋后，刊中國文字第十期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（五八）十二月，金祥恒撰甲骨通借字舉隅，刊中國文字第十期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（五九）十二月，董作賓編殷虛文字乙編摹寫本示例八續，刊中國文字第十期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（六〇）費海璣撰小屯第二本考釋前編，刊費海璣近作選集，自印本。

民國五十三年
一九六四
甲　辰

董作賓原著甲骨學五十年，英譯本出版。該書編輯瑣言曰：「一九六二年秋，遠東文化中心徵求董作賓教授同意，將其所著甲骨學五十年譯成英文，付之剞劂。其時董先生適在病中，即函表同意，於是本中心從事此名著之譯事。嚴一萍先生於原書序內提及，此書『綜述五十年來甲骨學研究之結果，並指示將來研究此學之途徑』實爲恰論。因其如是，此書全部實具有特殊性質。是以在將其譯成英文時，對於其內容再三注意，務求使學術專家及一般讀者，皆易於領悟而不致誤解。因之祇有將多數之甲骨刻辭，及書中引用學者之言論，割愛未譯。然爲使讀者易於瞭解是項學問起見，於文中增刊攝影圖片，書末增列附錄。是以本書實爲原書之節本，所至望者，本書之出，可達成將五十年來研究甲骨學之歷史宣揚於世界而不致引起誤解之目的。……本書第一、二、五章，係索費亞大學（Sophia University）楊保羅先生之譯筆，其餘第三、四兩章，則爲遠東文化研究中心所編。」繙譯全文見甲骨學六十年。

（六一）董作賓著殷曆譜重刊本出版，臺北藝文印書館影印，一函四冊。

民國五十二年
一九六三
癸　卯

十一月二十三日下午三時，董作賓先生病逝於國立臺灣大學醫院，享壽六十九歲（一八九五—一九六三）。

（六二）張秉權著殷虛文字丙編中輯(一)出版，中央研究院歷史語言研究所出版。

（六三）張秉權著殷虛文字乙編考釋，刊中國文字第十一期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（六四）三月，金祥恒撰釋𠂤，刊中國文字第十一期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（六五）三月，嚴一萍撰釋𢦏，刊中國文字第十一期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（六六）三月，董作賓編殷虛文字乙編摹寫本示例九續，刊中國文字第十一期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（六七）五月，胡厚宣撰殷代農作施肥說補證，刊文物月刊第五期，北平文物出版社出版。

（六八）六月，嚴一萍撰釋𢦏，刊中國文字第十二期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（六九）六月，許進雄撰釋御，刊中國文字第十二期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

（七〇）六月，董作賓編殷虛文字乙編摹寫本示例十續，刊中國文字第十二期，國立臺灣大學文學院古文字學研究室編印。

甲骨文論著撰人索引

二　畫

丁山
新殷本紀（一一二）
十批判書之批判（三一八）
郘其自三器銘文考釋（三三一）
甲骨文所見氏族及其制度（四七六）

丁驌樹
甲骨文四方風名考證（一四五）

八幡關太郎
殷墟發掘之甲骨文概說（七六）

三　畫

于省吾
釋屯（六六）
雙劍誃殷契駢枝（一〇二）
雙劍誃古器物圖錄（一一七）
雙劍誃殷契駢枝續編（一三三）
雙劍誃殷契駢枝三編（一六八）
釋人仁尼茂（三一〇）
釋奴婢（五九六）

小川茂樹
殷代金文所見阿衆文字淵考（三八）

四　畫

卞美年
河南安陽遺龜（一）

方法歛（Frank H. Chalfant）
甲骨卜辭七集（四一）

方詩銘
甲骨文字（三一八）
天問與猰貐古解（三三七）

毛起鵬
殷商時代婦女娩姒及族制（三一一）

五　畫

石璋如
小屯的文化層（一〇五）
小屯後五次發掘的新資料（一八三）
殷墟最近之重要發現附論小屯地層（三一五）
殷墟最近之重要發現後記（三六五）
小屯殷代的成套兵器附殷代的策（三七一）
骨卜與龜卜探源（四一〇）
殷代地上建築復原之一例（四一五）

加藤常賢
釋宗（三一）
釋𡉉（四七九）
釋𡉉（五二五）

加藤道理

甲骨文金文關係文獻目錄（五二五）

平　盧（董作賓）
甲骨月食鈔版（三七五）

斥　堂
商代的斯丘（一五五）

布那柯夫（George W. Bomacoff）
安陽古器與美國甲骨學（三六）

皮其米（A. A. Benedetti-Pichler）
中國卜骨鑒色之顯微分析（三五）

白川靜
釋鬲（四三五）
釋史（四四八）
作冊考（四五四）
召方考（四五五）
釋師（四五八）
殷代雄族考——其一鄉（五〇一）
殷代雄族考——其二雀其三族（五〇四）
殷代雄族考——其四醜其五臯（五一三）
殷代雄族考——其六雋其七戊（五一六）

白尾陽光
見於卜辭之殷代農業（五九）

白寧樵
殷代婦女地位的推測（一九五）

白瑞華（Roswell S. Britton）
卜骨中之顏料（四）
殷墟甲骨拓片（三〇）
甲骨卜辭七集（四一）

六　畫

池田末利
釋蒯（四三六）
殷虛書契後編釋文（四八二）
島氏「殷歲卜辭研究」及貞人補上之補正（五二五）

方　豪
王氏舊藏兩胛骨補記（四五〇）

方靜若
米爲小甲令文說（三五六）

王達津
湯誓和盤庚的衆和有衆（三一三）

王恒餘
釋日月當何（五六三）
說視（五六七）

王瑞明
胡厚宣教授訪問記（三四六）

天野元之助
西周之農業及社會構造（四六七）

水澤利忠
契齋藏龜（四〇二）
契齋藏龜（續）（四三八）

甲骨文字本文編（五七七）

吉卜生（H. E. Oibson）
商代之農業（一〇）
商代的田獵（一七）
商代的家畜和祭祀（四三）
中國商代的交通（五二）
從商代象形文字看中國文字之進化（七二）

伍獻文
武丁大龜之腹甲提要（一七六）
殷墟出土之魚骨（三六五）

伊藤道治
甲骨文斷代研究之再檢討（四一〇）

朱芳圃
殷卜辭中所見先公先王再續考（三一三）

朱紅庵
龜卜通考（一六二）

宏志欽
殷虛之石刀（三四〇）
中國史前時期之殷業（三六六）
一九五二年秋鄭州二里岡發掘記（四四二）
中國古代的刀（四六五）

沈兼士
布穀祭古語同源考（六三）
初期意符字發微（三一一）

沈啟无
龜卜通考（一六二）
卜辭中之祓辭及其他（一七〇）

赤塚忠
殷王朝之「河」祭及其起源（四八三）

李文伯
中國古代社會新研究（一三六）

古代與現代社會（三一四）

李旦丘

殷契佚存（一二九）
古代文字學的方法論（九九）
殷契粹編（一四九）

李孝定

釋「寮」與「沐」（五四三）

李亞農

殷契摭佚續編（三七四）
殷契維釋（三九一）

李棪華

殷代之農業與物質文化（一八二）

李得賢

殷周制度新論（一九四）

李學勤

殷虛文字綴合（四五二）

岑仲勉

仲旅目含內的難題（三一六）

吳其昌

甲骨金文中所見的商代農稼情況（一）

吳　澤

殷代帝王名諡世次世系家族與繼承制研究（一八一）
甲骨地名與殷代地理新考（一〇一）
殷代貢納制考辨（三三三）
古代史（三六二）

佐野袈裟美

氏族制度社會（三四）

佐藤武敏

黃作炚氏之甲骨文研究方向（四〇一）

何天行

甲骨文已發現於古代說（九〇）
陝西省發現甲骨文之推測（九一）

殷虛地理概論（五一一）

李　濟

攈古堂自序（三六五）
蹲坐跪居與符號（四一三）
安陽遺址出土之符號卜辭動物遺骸與裝飾文樣（五〇三）

貝塚茂樹

甲骨學之將來（四〇〇）
甲骨文斷代研究之再檢討（四一〇）
古代殷帝國（五〇五）
甲骨學概說（五一五）
京都大學人文科學研究所藏甲骨文字（五二一）
京都大學人文科學研究所藏甲骨文字釋文（五三三）

呂振羽

中國社會史上的奴隸制度問題（一四一）
殷代的奴隸制社會（三六八）

呂　烱

關於殷代之氣候（一九九）

屈萬里

甲骨文从止二字辨（一八〇）
白不辰辭（一八一）
論出遝觸於殷代禮（一八二）
易卦源於龜卜考（四七三）
甲骨金文與經學（五〇二）
庖犧氏古（五三六）
釋𠂤（五四〇）
殷虛文字中編考釋（五七二）

邵慎之

安陽發掘出土記（三一二）

周谷城

古史綜論（四九〇）

周法高

古代的稱數（四一八）

周祖謀

甲骨卜辭中的𣪊字（三四五）

周傳儒

甲骨文字的研究（三一六）

周鴻翔

商殷帝王本紀（五一九）

周鐵錚

釋𠂤後（一一二）

金祖同

殷契遺珠（五〇）
殷契遺珠（五〇）
中國文字形體的演變（七二）
剖面的殷代社會舉例（九七）
甲骨文辨證（一三九）
孔德所藏卜辭寫本殘存（一七二）
龜卜（三四二）

金祥恒

記方杰人先生所藏的兩片牛胛骨（四九）
讀京都大學人文科學研究所藏甲骨文字（五一七）

繆甲骨文編（五二八）
卜辭中所見殷商宗廟及殷祭考（五三四）
釋虎（五四六）
釋革（五六四）
釋牛（五六五）
釋羊（五六六）
釋生（上）（五六九）
本系所識甲骨文字（五七三）
釋生（下）（五八〇）
釋又ㄓ ㄓ（五八四）
殷商祭祀用牲之來源說（五八七）
釋昌（五八九）
釋赤與幽（五九〇）
釋牝牡（五九四）
釋后（五九七）
甲骨通借字舉隅（五九八）
釋𠂤（六〇二）
釋𠂤（六〇三）

金璋（F. C. Hopkins）

中國古代文字專題研究（三一）
中國兒之服用（四七）
商王獵鹿之紀錄（五五）
中國古文字中之人形（一一四）

九　畫

姜寬夫

釋王（一四四）
釋示（三〇八）

姜蟾剛

殷商民族與文化（一八四）

胡光煒

卜辭中之𠂤卽昌若說（一六九）

胡厚宣

甲骨文材料之統計（六）
甲骨年表（九）
論殷代的紀事文字（一一）
釋年（六七）

八　畫

牧野巽

古代中國之制度與社會（四四）

松丸道雄

日本散見甲骨文覘（一）（五一五）
饒宗頤「殷代貞卜人物通考」（五六七）
論殷虛卜辭中之田獵地區（五八一）

松田壽男

卜辭與古代中國人之生活（一五六）

竺可禎

二十八宿起源之時代與地點（三一五）

青木木菟哉

殷虛卜辭斷代研究管見（一）（四三七）
殷虛卜辭斷代研究管見（二）（四八一）
昔道博物館藏甲骨文字（五一五）

甲骨文考釋・著錄片考釋・附錄（年表　索引）　續甲骨年表

釋玟用玟御（六八）
卜辭雜例（七〇）
殷代蠶田說（七三）
甲骨文所見殷代之天神（一四〇）
卜辭箚記（一四一）
甲骨文四方風名考證（一四五）
甲骨學截獲（一六四）
甲骨學商史論叢初集（一七九）
關於殷代卜龜之來源（一九七）
齊魯大學對甲骨學的貢獻（一九八）
關於殷代之氣候（二一九九）
甲骨學商史論叢二集（二三三）
甲骨六錄（二四四）
論殷人卜辭中關於雨的記載（二六七）
甲骨學商說（三〇〇）
我怎樣蒐集的這一批材料（三〇二）
甲骨學研究之經過（三〇三）
甲骨文發現之歷史（三〇四）
殷後丕津新獲甲骨集（三〇五）
殷後丕津新獲甲骨集（四）（三一〇）
甲骨學捃華（三一九）
殷後出土的新大龜七版（三三八）
卜辭同文例（三三九）
卜辭記事文字史官簽名例（三五九）
五十年來之甲骨學（三六七）
說吳澤古代史（三六九）
五十年中甲骨文發現的總結（三七八）
殷後鄴溫新獲甲骨集第本（三七九）
殷後南北所見甲骨錄遺本（三八八）
五十年中甲骨學論著目（三九四）
殷後京津新獲甲骨集（四一八）
殷虛發掘（四五三）
甲骨綴存（四六一）
殷代農作施肥說（四六六）
釋余一人（五〇七）
說其田（五〇八）
殷代農作施肥說補證（六〇六）

故　吾

孫伏園
甲骨與龜（三〇一）
孫海波
釋吕（一一）
簠完殷契徵文校錄（一一九）
甲骨文錄（一二）（五一二）
評殷虛書契續編校記（七九）
評甲骨地名通檢（八〇）
評殷契遺珠（八五）
評殷墟龜骨略（八六）
評金璋所藏甲骨卜辭（八七）
評甲骨叕存（八八）
殷虛文字（九二）
殷代農作施肥說補證（六〇六）

振　宜

介紹搶作貨先生的殷曆譜（三一七）
徐中舒
殷代社會史料之一（一〇）
殷代社會史料之一（續）（一〇）
殷代社會史料之一（續）（一〇）
殷代社會史料之一（續）

張秉權
說吉（三九七）
殷虛文字綴記（四一三）
殷虛卜辭之卜兆及其有關問題（四一三）
卜辭甲申月食考後記（四七〇）
卜辭甲申月食考（四七二）
卜辭癸未月食的求證方法（四七八）
卜辭殷曆的序數（四八五）
卜辭癸未月食的新證據（四八八）
殷虛文字丙編上辭（一）（五〇〇）
商代卜辭中的氣象記錄之商榷（五〇六）
卜辭省正化說（五一〇）
殷虛文字丙編上辭（二）（五一九）
殷虛（七五六）

張子祉
甲骨綴合小記（三五七）

張宗縡
卜辭弜弗通用考（一一八）

張政烺
六書古義（一六一）
關於卜辭字說（一九三）
關於殷代卜龜之來源（二九七）
說文燕公史籀名醳解（二〇六）
卜辭字解（二〇七）
殷虛文字丙編中輯（一）（二〇二）

張秉麟
中國史黎明期的大勢（二〇三）

陳子展
龜歷歌（二八七）
關於殷曆譜補譜（三三二）

陳世輝
釋歷（五九九）

陳庆
評甲骨文字理惑（四六）

陳恭祿
商史（八二）

陳夢家
釋妣釋冢（一四）
高祺郊祀通考（二四）
殷代地理小記（二八）
祖廟與神主之起源（二九）
五行之起源（四〇）
商王名號考（五七）
說天球圖甲骨文存（五八）
評鐵雲藏龜零拾（六四）
收買甲骨者日記（八九）
述方法敘所錄甲骨卜辭（九三）
評殷虛書契廿珠並論羅氏前編的來源（九五）
郭沫若周易的構成時代兼後（九六）
述方法敘所錄甲骨卜辭補（一〇六）
商王名號考（一一〇）
射與郊（一三四）

陳槃
殷虛文字丙編中輯（二）（二〇二）

張政烺
六書古義（一六一）
關於卜辭字說（一九三）
關於殷代卜龜之來源（二九七）
說文燕公史籀名醳解（二〇六）
卜辭字解（二〇七）

張蔭麟
中國史黎明期的大勢（二〇三）

陳子展
龜歷歌（二八七）
關於殷曆譜補譜（三三二）

陳世輝
釋歷（五九九）

陳庆
評甲骨文字理惑（四六）

陳夢家
殷代社會史之探究（二七七）

十二畫

管燮公
甲骨地名通檢（六九）
殷虛書契補編校記（七七）
甲骨綴合編（三七六）
殷虛文字綴合（四五二）

勞榦
卜字的結構及史官的原始職務（四九四）

雲齋
評孫海波甲骨文編（七）

費海璣
小屯第二本考釋前編（六〇）

傅東華
先秦古史見於卜辭說（一〇四）

陳夢家
殷代社會史之探究（二七七）

十二畫

管燮公
甲骨地名通檢（六九）
殷虛書契補編校記（七七）
甲骨綴合編（三七六）
殷虛文字綴合（四五二）

勞榦
卜字的結構及史官的原始職務（四九四）

雲齋
評孫海波甲骨文編（七）

費海璣
小屯第二本考釋前編（六〇）

傅東華
先秦古史見於卜辭說（一〇四）

傅斯年
關於殷人不常厥邑的一個經濟解釋（一八六）

喬健
說且示（五三五）

馮漢驥
由侶鼎盤庚篇觀察殷商社會（一七〇）

十三畫

楊向奎
釋不玄冥（四六二）

楊樹盦
中虛日食考辨（三二四）

楊樹達
釋荆（一〇五）
釋狄（一〇七）
釋臺（一〇八）
釋正（一〇九）

釋臧（一一〇）
釋𡆥（一一二）
釋涵（一一二）
釋臭（一一三）
釋雉（一一五）
釋祉（一一六）
讀甲骨文編記（一二七）
釋孚（一三〇）
釋𠂤（一三二）
釋物（一三二）
釋猷（一四九）
釋反（一五二）
釋臤（一八九）
釋凡（一九〇）
釋𠂤（一九二）
釋𠂤（一九三）
甲骨文斷測攗要（二〇九）
釋𣪊（二一〇）
釋𠂤（二一一）

說方（二一三）
說𢦏（二一四）
方族考（二一五）
釋𡆥（二一六）
黃尹黃奭伊奭考（二一七）
高祺說（二一八）
殷人尚白說（二一九）
甲骨文中之四方神名與風名（二二〇）
讀胡厚宣君殷人疾病考（二二一）
釋𠂤（二二五）
釋𢀛（二二六）
說𠂤（二二七）
說𠂤（二二八）
說𠂤（二二九）
余卜考（二三〇）
大方考（二三一）
釋𠂤𠂤𠂤（二三二）
釋𠂤（二三三）

釋祊 釋祀 補(二三四)
釋祊 釋祀 補(二三五)
釋祊 說俎(二三五)
釋祊 說卣(二三五)
釋祊 說彝(二三五)
釋祊 說尊(二三五)
釋祊 說壺(二三五)
釋祊 說罍(二三五)
釋祊 說盉(二三五)
釋祊 說觚(二三五)
釋祊 說爵(二三五)
釋祊 說斝(二三五)
釋祊 說觶(二三五)
釋祊 說角(二三五)
釋祊 說觥(二三五)
釋祊 說觚(二三五)
釋祊 說觶(二三五)
釋祊 說觚(二三五)
釋祊 說觚(二三五)
釋祊 說觚

釋圍（一〇〇）
釋禹釋豕（三三〇）
釋余（三四九）
釋鼎（三五〇）
釋羔（三五一）
釋衆（三五二）
釋臭（三五三）
釋鬼（三五四）
釋不𠂤𠂤（三五五）

圖書週刊編者

胡厚宣氏甲骨學研究近況（三四一）

十五畫

蔡伯毅

略論殷商青銅器文化（一七四）
古代社會（一八〇）

鄭子田

中國原始社會之研究（一八六）

鄭文基

魚字考（五一四）

鄧初民

夏殷時代的中國奴隸社會（一四六）
奴隸社會（一五〇）

歐陽可亮

殘山甲骨美術（五七五）

蔡元邦

中國社會的檢討（一六六）

薛大沂

甲骨學小史（一三）
從古文字中觀察古代家宅演進的情形（九八）

薛逸雪

殷商拓地朝鮮考（一七八）

魯實先

庠傅斯年殷曆譜序之謬（二六三）

卜辭姓氏通釋之一（五二六）
卜辭姓氏通釋之二（五三〇）
卜辭姓氏通釋之三（五三八）
殷契新詮之一（五四七）
殷契新詮之二（五五七）
殷契新詮之四（五八六）
殷契新詮之五（五九二）

劉朝陽

殷曆的輪廓（一〇二）
殷末周初日月食考（一〇三）
甲骨文之日珥觀測紀錄（一〇八）
晚殷長曆（一一八）
關於殷周曆法之基本問題（一一九）
夏殷日曆考（一九〇）

劉節

釋扇（三四三）

衛聚賢

秦漢時發現甲骨說（五一）

十六畫

錢健夫

中國社會經濟史上的奴隸制問題（三四四）

隨河

殷代的氏親階級與占卜（一七八）

十七畫

繆鳳林

芙君論古史籍（一九一）

儲皖峰

訢天堰圮甲骨文存（六五）

十八畫

瞿潤緡

釋・口口口之演變（五三）
釋不（五四）

魏特夫格 (Karl August Wittfogel)

商代卜辭中之氣象紀錄（八二）

十九畫

藍文徵

商代（一四三）

羅振玉

釋𠂤（一三八）
釋止（一三八）
釋𡆥（一三八）
貞㱿老人外集補遺（一七三）
集殷虛文字楹帖彙編（五七四）

羅榮宗

研究商代社會材料之商榷（八四）

薛內清

殷周至隋之曆法史（一五四）
關於殷曆的兩三個問題（四九二）

二十畫

嚴一萍

中國醫學之起源及考略（三八〇）
殷契徵疑（三八二）
殷曆譜「旬譜」補（三八七）
夏商周文化異同考（三九六）
正日本藪內清氏對殷曆的誤解兼辨「至日」（四〇四）
八月乙酉月食履甲的拼合與考證的經過（四一九）
一論「殷曆紹漏」（四四六）
殷殷曆譜（四五九）
殷虛文字外編（四七四）
卜辭癸未月食辨（四七七）
答嚴內清氏「關於殷曆的兩三個問題」（四九三）
卜辭四方風新義（四九九）
中國書譜殷商篇序（五一七）
釋「四日丁」（五二二）
殷雲藏龜跋（五三三）
讀京都大學人文科學研究所藏甲骨文字（五二七）
甲骨文斷代研究新例（五四二）
釋得（五四五）

說文飾修飾拭四字辨源（五四八）
釋𠂤（五五二）
釋𠂤（五五三）
釋𠂤——次汰豕（五五八）
釋𠂤——逆（五五九）
釋立——位流位流（五六〇）
釋竝（五六二）
一釋天二釋大三釋夫四釋扶
五釋矢六釋天（五六八）
略論饒書貞卜人物通考之基礎問題（五七二）
關於文武丁時代一片殷甲的兩種綴合（五七九）
釋𠂤（五八三）
釋𠂤（五八八）
釋𠂤（六〇四）
釋𠂤（六〇七）

饒宗頤

𠂤爲根圉說（一一四）
殷代日至（三九八）

殷曆之新資料（四三四）
日本所見甲骨錄（一）（四六九）
巴黎所見甲骨錄（四八七）
殷代卜人物通考（五三二）
由卜兆記數推究殷人對數的觀念（五四二）

饒頌

殷周民國考（三〇六）
荀柴因三字釋（三〇七）

顧立雅 (H. G. Greel)

中國的古代象形文字（四二）

顧頡剛

商王國的始末（七四）

甲骨卜辭地名通檢（一）

島邦男

（地名として用ゐられてゐる版名と共に、その字が用ゐられてゐるすべての版名を記す）

1

商

鉄 94.1 97.3 114.4 214.1 260.1
林 1.23.1 1.26.5 1.26.8 1.27.2 1.27.8 2.15.9 2.16.1
戩 9.11 9.12 9.13 25.12 39.7 43.8 47.5
餘 8.1
天 74
績 2.28.2 3.1.3 3.14.1 3.14.3 3.14.4 3.145 3.146 3.24.1 3.28.5 3.47.4 4.26.1 5.4.6 5.13.6 5.14.2 6.20.10 6.25.3
通 嬉2 3 粹 41 144 230 907 1064 1068 1069 1070 1239 1297 1302
金 621 732 櫝 1,299 1,294 2,300 2,483 續存 153
七 T24
文 686 687
遣 15 113 114 263 418 603
庫 17 167 273 522 646 981 1003
鄭 2.35.2
小田 727 1225 2121 2291 2325 2337 2378 2365 2416 3558 3576 3652 3690
小乙 98 484 946 1779 1786 2212 2311 3331 3428 3669 4518 4983 5265 5362 5805 6169 6300 6432 7751 8346 8639 8821 8659 9078
寧 1.16 3.91
南 無4 師1.192 2.48 2.88 2.98 明217 坊4.103
京 1220 1558 1581 1584 1585 1586 1587 1588 1589 1592 2220 2250 2330 2480 2924 3001 3002 3008 3114 3240 3940 4380 4892
書道 5.8
東方 2.5
誠 347 348 349
盖 地1 2 人52 游60 雜124 卜 239 240 402 493 692 佚 348 493 687 693 853 902 938 餘 987 天 74 通 嬉2 3 粹 41 144 230 907 1064 1068 1069 1070 1239 1297 1302 金 621 732 櫝 1,299 1,294 2,300 2,483 續存 153
文 686 687
遣 15 113 114 263 418 603
庫 17 167 273 522 646 981 1003
鄭 2.35.2
七 T24
林 1,23.1 1,26.5 1,26.8 1,27.2 1,27.8 2.15.9 2.16.1
戩 9.11 9.12 9.13 25.12 39.7 43.8 47.5
餘 8.1
績 2.28.2 3.1.3 3.14.1 3.14.3 3.14.4 3.145 3.146 3.24.1 3.28.5 3.47.4 4.26.1 5.4.6 5.13.6 5.14.2 6.20.10 6.25.3
前 1.11.2 2.1.1 2.1.2 2.1.3 2.2.1 2.2.2 2.2.3 2.2.6 2.3.5 2.3.7 2.5.3 2.11.7 3.30.6 4.18.1 4.15.2 4.27.3 4.37.5 5.23.3 6.33.1 7.19.4 8.10.3 8.11.1
菁 9.1 9.7
後 上9.12 13.7 18.2 下1.1 10.14 31.15 41.16
明 1910 2248
卜 47
續 1.28.6
佚 524 284
庫 1002
小甲 2161
小乙 1215 1511 4247
擬 2.130

帚 婦 妻

前 5.2.3 6.1.5
後 上15.8 下19.10
盖 游34
續 3.443 6.1011
庫 133
粹 950 1549
鄭 3.45.8
文 682
小甲 623 896 936 1966
小乙 7336
擬 1,384 1,385 1,390
寧 1.115
鉄 138.3
南 無264
小乙 861
京 3722 4843

𠂤

後 下7.15

𠂤

鉄 144 93.4 262.1
前 2.436 4.10.5 4.31.6 4.45.5 5.6.2 5.8.4 6.35.1
戩 10.1
餘 12.1
林 2.1.16 2.2.17
明 99 1545
後 上5.5 下九.11
卜 52 53 417
續 3.43.6 426.2
拾 12.7

𠂤

盖 游99
佚 250 366 374 990
庫 508
遣 93
粹 796 877
天 76
鄭 1.33.11
金 512 569
文 758
小甲 1124 2132 3510
小乙 1215
擬 2.111 2.187 2.313

𠂤

寧 3.13
南 明739 師2.104
京 472 2048 2451 3217
書道 10.3
厦 14

𠂤

前 1.29.4 2.2.4 2.2.5
後 上6.4 9.12 下14.10
佚 928
粹 20 21 22
金 584
小甲 1640
擬 2.59
續 189
南 無40 明567 775
京 3950 3951

𠂤

前 2.12.2 2.12.3 2.12.4 2.32.7
續 3.31.10
盖 典86
卜 383
拾 11.21
粹 657
小乙 1906
佚 937

𠂤

橫寺 1852

𠂤

前 6.1.5
後 下20.15
南 無477
京 576

𠂤

奢 9.10
後 下31.17
小甲 3940
擬 2.24
京 3456

𠂤

前 2.15.1
後 下5.1
明 2291
京 2769

𠂤

明 642

𠂤

前 5.19.1
後 下21.17 25.14 28.9
林 2.2.10 2.19.6
明 1411
拾 12.5 12.7
續 5.10.2
盖 游59
庫 1805
佚 601
遣 211
小乙 539
擬 2.362
鄭 1.33.5 3.40.7

𠂤

南 成2.197
京 1570 2168 2220

𠂤

1.123
南 無95
京 4470 4578

2

𠂤

前 2.3.5 2.20.5 2.20.7 2.20.8 4.19.8 後 上13.12 戩 9.17 10.2 10.10 續 3.15.3 2.15.2 3.155 2.15.2 2.15.3 3.15.4 鄭 1.33.1 遣 677 917 金 192 588 粹 973 975 976 977 983 1011 1016 1017 1022
1979 1984 1985 1986 1987 1992 1993 2366 下818 922 外 62 73
擬 1.403 1018 1021 1024 1026 1027 1561
南 明749 799 師1.68 1.171 坊2.193
寧 1.381 1.412 1.418
京 1440 2856 3820 4419 4420 4425 4426 4427 4428 4429 4436 4540 4568 4569 4570 5284 5287 5294
天 78
鄭 1.43.8 3.40.12
遣 117 406 416 669 670 677
金 192 208 452 621
小甲 445 506 537 767 1391 1721 2119
書 10.2
續存 1733 1734 1736 1977 1978
擬 64
2.1.6 2.28.14
日月 376 1683
卜 388
盖 游52 70 73
佚 56 68 183 295
遣 434 903
後 下9.9
庫 23 76 135 1030 1319
戩 10.3 11.9 46.14
續 3.15.6 3.15.7 3.158 3.16.2 3.16.3 3.16.5 3.166 6.27.6 林 1.27.8 2.1.2

𠂤 𠂤

前 2.3.7 2.20.5 2.22.1 2.29.7 2.30.1 2.30.2 2.30.3 2.30.5 2.31.3 2.31.4 2.34.1 2.34.2 2.34.3 2.35.6 2.39.5 2.41.2 2.42.1 2.43.7 4.15.3 4.15.2 6.13.2 6.23.5 後 下9.9
前 2.8.3 2.8.4
2238 下846

𠂤

佚 720
鉄 221.4
粹 652 717 715 1246
前 4.10.6 4.11.1 4.50.5 5.6.2 5.8.4
遣 418
金 715
小甲 547 1353 3510
小乙 905 4761 5640 5760 5765
後 下25.8 27.14 34.5
戩 40.12 40.13
日月 224
林 1.9.9 2.7.6
寧 1.8 1.69
南 上47
京 1275 2316
鄭 3.49.7
庫 508 1507 1562
續存 337 1375
下178 206 293 319 371 513 91 47 50
明765 明1.66 206 261 709 907 2617 3328
小甲 206 4 6 51 470 884 890 927
小乙 寧 1.426 3.73 766 2498 3134 4080 4406 4628 4631 4776 4806 4919 5163 5507 5540 6471 6590 6671 6692 7576 7751 7767 8081 續編 146 148
盖 奥33
卜 201 681
擬 1.250 1.505 2.170
金 493 526 531 616 665 673 739
書 3.3
南 無5
誠 1 39
鄭 7
續存 186 662 663 664 789 796
1.123
南 無95
京 4470 4578

前 2.5.2 6.29.2 6.29.4
後 145
1072
林 2.1.11 2.8.7
佚 249
粹 1569
明 1280
小甲 1468
甲 1002
摭 2,398
佚 148
南 師1.130
庫 181
小乙 6438
小乙 1046
京 4446 4447
外 146

後 上9.13
明 142
甲 雜92
拾 10.16 10.17
續 5.6.1
福 68
佚 847
鄴 3.44.8
遺 523
誠 271
小乙 2090 2478 5158 6432 6690
金 477
京 4436 4581
續存 415

前 6.30.7 6.31.1
後 下23.1
粹 1456
前 2.45 6.24.6
佚 992
粹 1456

林 2.1.16
前 4.31.6
續 3.28.7
甲 554
佚 295
粹 1212
遺 537
文 182 234 694 771
京 3316

鐵 127.2
前 6.29.6
佚 994
小甲 3816
南 師2.159 2.161

後 上5.6
卜 383
佚 226
青 1
庫 1002 1288 1543
粹 142 281 541
誠 299 312
文 555 909
小乙 731
鄴 3.41.6
南 明677 河3.139
京 772

前 4.10.4
後 上11.3
林 2.1.18
佚 244
小甲 3588
小乙 1188 6921
寧 1.340 1.517 2.26
京 2825

小甲 3536
京 4464

寧 1.373 1.378
南 師1.164
選卜 9
七 X11
京 5641
續 2016 2253

前 2.23.1 2.31.2 2.31.5 2.31.4
後 下3.7 13.13 14.2 14.6
林 1.8.10
庫 139
粹 957 980 977 987 996 1199 1568
誠 313
摭 78
遺 121
小甲 653 867 1183 1565 1798
摭 1.368 1.460
1030 1067 1456
小甲 506 573 1651
小乙 5402
雜續 134
摭 1.460
寧 1.393 1.419
南 誠84 師1.168
京 4421 4423
續存 1969
下497 917
外 23

粹 1571
京 5348

甲 192
金 189

小甲 1808 2229
京 4477

益 4
小乙 4524

前 453.4
粹 945

鉄 12.3
前 5.12.3 7.30.4
後 上9.3
明 1900
續 6.13.11
佚 578
鄴 2.36.10
粹 1214 1229
小乙 664 1405 2895 4516 6043 6667
合 709
寧 3.74
京 88 89 90 1977

前 1.30.5 2.13.6 4.28.7 4.29.3 4.30.1 7.31.4
續 5.6.6
益 人9
拾 6.4
佚 580 670 942
庫 652
金 200 565 694
摭續 105
南 明362 無497
小乙 5403

小乙 7143

續 5.34.4
簋 彙22

粹 1196
京 4829

粹 960
明 387

前 6.29.8

後 上1.53

續 3.31.1 3.31.2
益 地26
佚 915
南 明579
寧 1.517

南 外2.189

前 8.9.4
粹 996
文 734
金 371
摭續 121
京 4281 4469 3455

粹 23

前 2.42.6 2.43.1 2.43.3 2.43.4
摭續 135
南 師1.79

前 2.28.7
小甲 3639
小乙 3334 7205
（地名の用例のみ）

前 2.28.8
戩 11.4
續 3.25.6
林 2.20.9
明 57
卜 642
庫 1006
粹 935 986
南 河4115
京 1543

後 上14.11
戩 11.4
鄴 1.339
粹 957 980
小甲 892
京 4468
書 10.2

後 上15.11
摭 166 2.120
小乙 7751
摭續 149
京 4830
（地名の用例のみ）

晉 10.5
後 下24.1
京 4369

前 2.16.5
金 574

前 2.17.3 2.17.4 2.17.5
後 上15.14
京 5428

前 2.12.5 2.12.6 2.12.7 2.13.1
林 2.15.16
續 3.29.5
益 征52 游50
卜 613
佚 559
通 別2.11.5
遺 192
南 上152
安陽 2.8

前 2.7.8 2.16.3 2.24.5
林 2.1.8
鄴 2.37.3
金 574
京 5300

前 2.5.7 2.6.1

鉄 241.3 250.1
前 2.3.5 2.20.8 5.5.1 5.5.2
後 下7.7 7.8 7.9 7.10 7.11 5.15
林 2.6.13
簋 游109
佚 42
小乙 305 390 4508 4835
鄴 3.38.4
摭 2.436
南 師40
京 419 856 2461

粹 1456

前 5.13.5

前 1.5.7 2.4.6 2.4.7 2.6.2
林 2.20.8
續 3.27.4
益 游35
佚 277
南 師1.201
外 97

前 2.3.3
續 6.10.4
益 游50

前 6.63.5 6.63.6
佚 926
粹 1286
文 639
天 80
誠 356
鄴 3.45.2
小甲 1089 3919
摭續 133
京 1616 4855
續存 1967

京 1561 1563 1731 2197
外 35

鉄 227.2
後 上2.45
續 1.53.3 2.23.9 3.30.3 3.36.5 5.9.3 6.24.4
通 嬨1
益 地36 37
佚 180 612 647
文 707
鄴 3.39.9
小甲 623
小乙 575 5061 7490 8151
南 摭410 明1.43

林 2.4.19
寫 100
天 46

南 明791

前 2.24.2 2.35.5 2.36.1 2.36.2 2.36.4 2.36.5 2.36.6
林 2.2.6 2.20.10 2.22.6
明 1457
續 3.20.5 3.22.7 3.22.8 3.22.9 3.22.10
益 游43 44 45
福 9
金 463 452 549 721
小甲 478
寧 3.271

續 2.1.5 5.4.3
益 地24
文 676

前 8.6.3 8.12.4
林 2.22.1
佚 727
南 輯90
續存 下586

庫 1593
（地名の用例のみ）

小甲 840 1180 1928 3630

甲骨文考釋・著錄片考釋・附錄（年表　索引）　甲骨卜辭地名通檢（一）



前 4.13.7



掇 2.429
南 坊5.63

前 5.12
菁 10.3
後 上10.4
10.5
續 3.28.5
遺 263
金 583



前 2.19.3
2.19.4
2.19.5
小乙 2081



粹 72
1034
後 下22.15
南 明280
京 4602

3510
南 師1.50 坊2.161
京 3486



前 2.11.2
2.15.1
2.19.5
續 3.18.5
匯 游90
遺 121
1.30
小甲 600
2770
2957



前 1.6.5
4.41.4
後 上11.10
11.11
菁 10.4
續 3.31.9
林 2.20.9

外 73
74
239

1978
1985
1988
1989
1990
1991
1993
2002
3366
下 337
463
818
824
828
823
923

厦大 29
旅順 1
續存 733
725
1013
1210
1358
1958
1959
1969
1970
1975
1976
1980

4422
4423
4424
4431
4432
4433
4434
4435
4576
4583
4585
4607
4627
5284
書道 10.2

4506
寧 1.373
1.375
1.382
1.412
1.417
1.419
3.42
京 1408
2155
2352
2659
3748
4152
4421

掇續 168
掇 1.403
1.460
南 無246
498
上101
誠84
明191
796
師1.120
1.168
1.169
2103
坊4.119



佚 996
後 上9.3



後 上18.9
粹 1457
金 493
前 2.4.1



前 6.24.7
粹 73
450
842
1315
1547
京 4207



前 2.8.7
後 上13.1
下37.5
小乙 8895



續 3.31.6
簋 游109
地50



文 721
723
724
935

書 11.3
11.5















前 4.13.7

掇 2.429
南 坊5.63

前 5.12
菁 10.3
後 上10.4
10.5
續 3.28.5
遺 263
金 583

前 2.19.3
2.19.4
2.19.5
小乙 2081

粹 72
1034
後 下22.15
南 明280
京 4602

3510
南 師1.50 坊2.161
京 3486

前 2.11.2
2.15.1
2.19.5
續 3.18.5
匯 游90
遺 121
1.30
小甲 600
2770
2957

前 1.6.5
4.41.4
後 上11.10
11.11
菁 10.4
續 3.31.9
林 2.20.9

外 73
74
239

1978
1985
1988
1989
1990
1991
1993
2002
3366
下 337
463
818
824
828
823
923

厦大 29
旅順 1
續存 733
725
1013
1210
1358
1958
1959
1969
1970
1975
1976
1980

4422
4423
4424
4431
4432
4433
4434
4435
4576
4583
4585
4607
4627
5284
書道 10.2

4506
寧 1.373
1.375
1.382
1.412
1.417
1.419
3.42
京 1408
2155
2352
2659
3748
4152
4421

掇續 168
掇 1.403
1.460
南 無246
498
上101
誠84
明191
796
師1.120
1.168
1.169
2103
坊4.119

佚 996
後 上9.3

後 上18.9
粹 1457
金 493
前 2.4.1

前 6.24.7
粹 73
450
842
1315
1547
京 4207

前 2.8.7
後 上13.1
下37.5
小乙 8895

續 3.31.6
簋 游109
地50

文 721
723
724
935

書 11.3
11.5

卜 628
續 1.521
粹 1175
庫 981
993
1096
1110
龜卜 125

鉄 217.4
前 1.57.6
後 上9.7
下27.7
30.10
林 1.7.19
2.17.6
明 571
2330

前 2.32.3
2.32.5
遺 120
掇 1.366
南 坊4.551

拾 12.2
卜 2
庫 1844
小乙 3431
4529
4615
4926
5227
5393
6235
6273
7470

前 4.53.4
6.51.2
林 2.25.16
續 3.28.5
遺 263
金 583

鄴 3.46.15
誠 293
粹 985
小甲 653

金 621

後 上15.2

鄴 3.46.5

遺 121

林 2.18.12

後 上10.8

續 3.23.6
庫 1672
掇續 106

菁 9.7
續 3.30.4
庫 1655

前 2.22.4
後 上13.4
掇續 164
續 6.104
京 1546
（地名の用例のみ）

小甲 2909
南 師1.63 2.86
京 2.374 2220

佚 382
833
982
庫 293
天 93
遺 263
鄴 1.26.2
1.33.5
1.40.5

1515
2053
續 3.14.6
3.29.6
5.11.1
佚 333
900
簋 地29
征46
人70

鉄 1182
前 2.7.2
3.23.3
5.34.1
6.7.2
後 下20.3
42.9
林 1.25.1
1.25.2
2.25.16
明 1015

簋 游19

5854
6882
7336
8013
南 明289
掇 1.251
京 1552
續存 616
617

後 下31.5
明 322
小甲 2364
2575
小乙 514
718
990
2267
3212
3331

前 1.52.5
續 4.15.7
佚 712
掇續 162
金 623
京 2231
4480

小甲 3590
掇 1.449
寧 1.349
1.493
京 4883

金 349
七 P50

鄴 1.40.4
京 1919

前 6.51.6
7.23.1
7.38.2
後 下38.1
林 2.30.6
續 5.6.5

金 451
小乙 1010
1049
1811
4518
5280
6092
6422
8859
9039
9044
南 上78
明678

（原載《甲骨學》第六號，一九五八年三月）

（以下次号につづく）

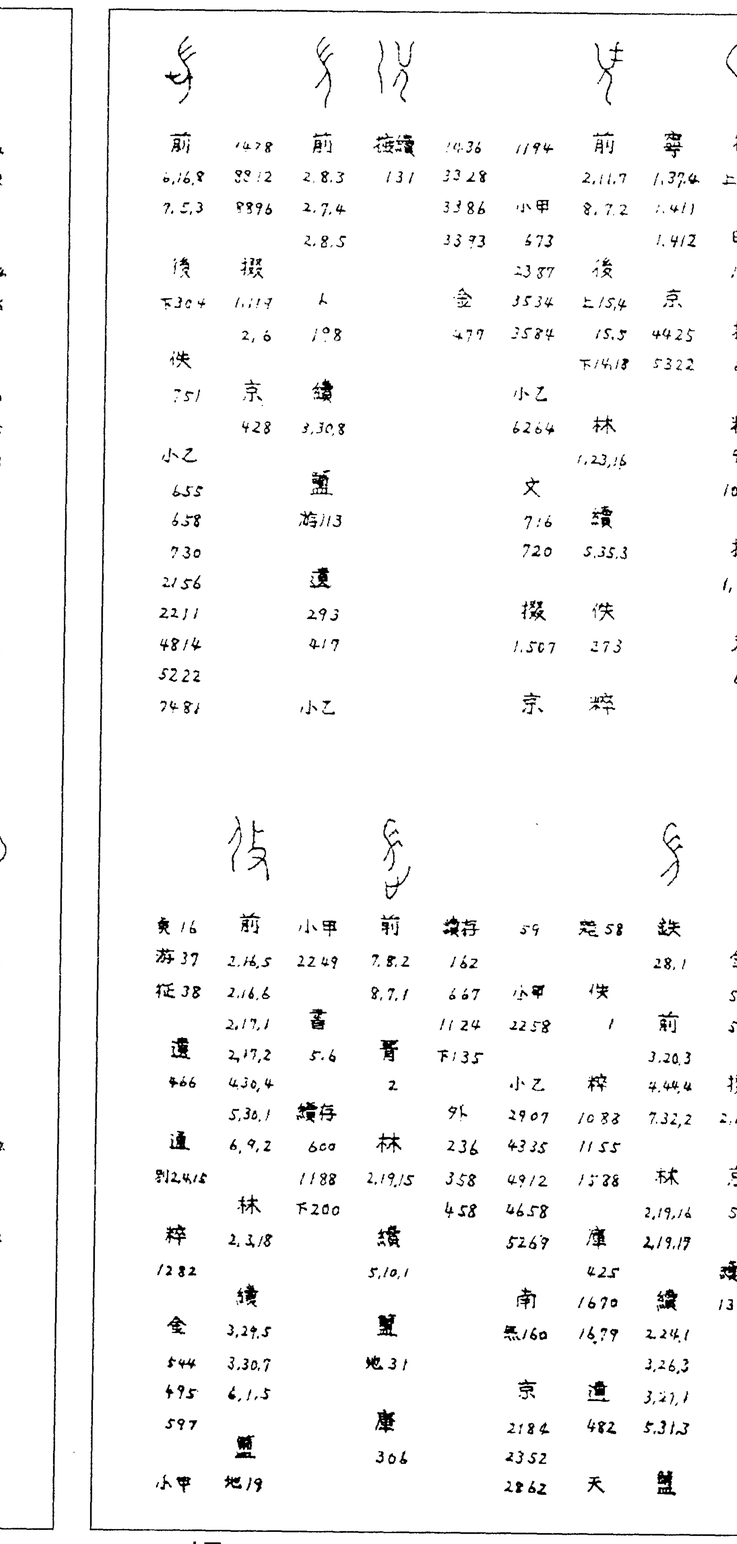
甲骨卜辭地名通檢（二）

島邦男

（地名として用ゐられてゐる版名と共に、その字が用ゐられてゐるすべての版名を記す）



後 上15.2 明 142 拾 6.6 粹 979 1020 掇 1,403 文 608 金 507 590 掇 2,158 京 520 續存 1339



前 2,11,7 8,7,2 後 上15,4 15,5 下14,18 林 1,23,16 續 5,35,3 侯 273 粹 1 寧 1,37,4 1,411 1,412 京 4425 5322 鉄 28,1 前 3,20,3 4,44,4 7,32,2 林 2,19,14 2,19,19 續 2,24,1 3,26,3 3,27,1 5,31,3 盨 地19 後 上15,2 明 142 拾 6,6 粹 979 1020 掇 1,403 文 608 金 507 590 掇 2,158 京 520 續存 1339

前 6,16,8 7,5,3 後 下30,4 侯 751 小乙 655 658 730 2156 2211 4814 5222 7481 1478 8912 8896 掇 1,119 2,6 京 428 前 2,8,3 2,7,4 2,8,5 卜 198 續 3,30,8 盨 鴻113 遺 293 417 小乙 京 粹 1 前 6,63,4 戩 42,10 明 166 卜 794 拾 11,20 續 1,19,3 3,30,10 6,20,3 小乙 433 6988 存 205 下174 416 前 2,9,2 2,9,4 5,44,7 鉄 181,4 粹 1324 南 師2,144 坊3,102 小甲 1092 1157 3461 68 451 2604 南 明584 786 京 2450 5495 5553 東方 4,1 小乙 7746 續存 214 562

後 上13,2 下15,14 明 132 小甲 298 774 778 小乙 3429 4934 京 1415 存 1466 1916 鉄 59,2 後 下34,3 36,3 戩 33,14 續 5,18,7 侯 95 遺 914 8896 8893 南 坊1,73 掇 2,151 京 1562 前 2,2,6 2,32,1 後 下35,2 林 1,26,7 侯 620 遺 393 小乙 428 8712 前 38 遺108 侯 374 507 927 粹 55 1157 1158 1159 1262 續存 1464 前 2,10,4 7,10,4 後 下23,8 林 2,22,11 卜 730 續 5,11,5 6,13,10 盨 天 1 文 717 續存 193 2042 下444 盨 昔71 地20 庫 1884 粹 1256 小甲 799 南 明576 京 1616 4760 前 6,63,4 戩 42,10 明 166 卜 794 拾 11,20 續 1,19,3 3,30,10 6,20,3 小乙 433 6988 存 205 下174 416 前 2,9,2 2,9,4 5,44,7 鉄 181,4 粹 1324 南 師2,144 坊3,102 小甲 1092 1157 3461 68 451 2604 南 明584 786 京 2450 5495 5553 東方 4,1 小乙 7746 續存 214 562

續 3,27,5 盨 鴻106 侯 937 京 5329 前 2,4,3 小乙 423 侯 581 後 上10,6 掇 2,307 京 1331 1332 南 坊2,195 地名のみをあぐ 前 2,4,3 地名のみをあぐ 前 2,37,1 小乙 8728 8814 8981 小乙 2439 5798 7475 8144 庫 383 （地名の用例のみ） 前 2,7,8 盨 地 8 庫 1569 寧 2,147 2,148 京 5356 5357 前 2,7,1 2,17,6 2,17,7 2,17,8 2,18,1 2,18,2 2,18,3 林 2,13,9 2,22,2 明 360 續 3,29,1 7811 京 1569 2181 前 2,8,7 後 上14,3 南 明388 395 前 5,426 文 780 後 下32,14 南 坊5,44 掇 2,457 小乙 771 1044 1410

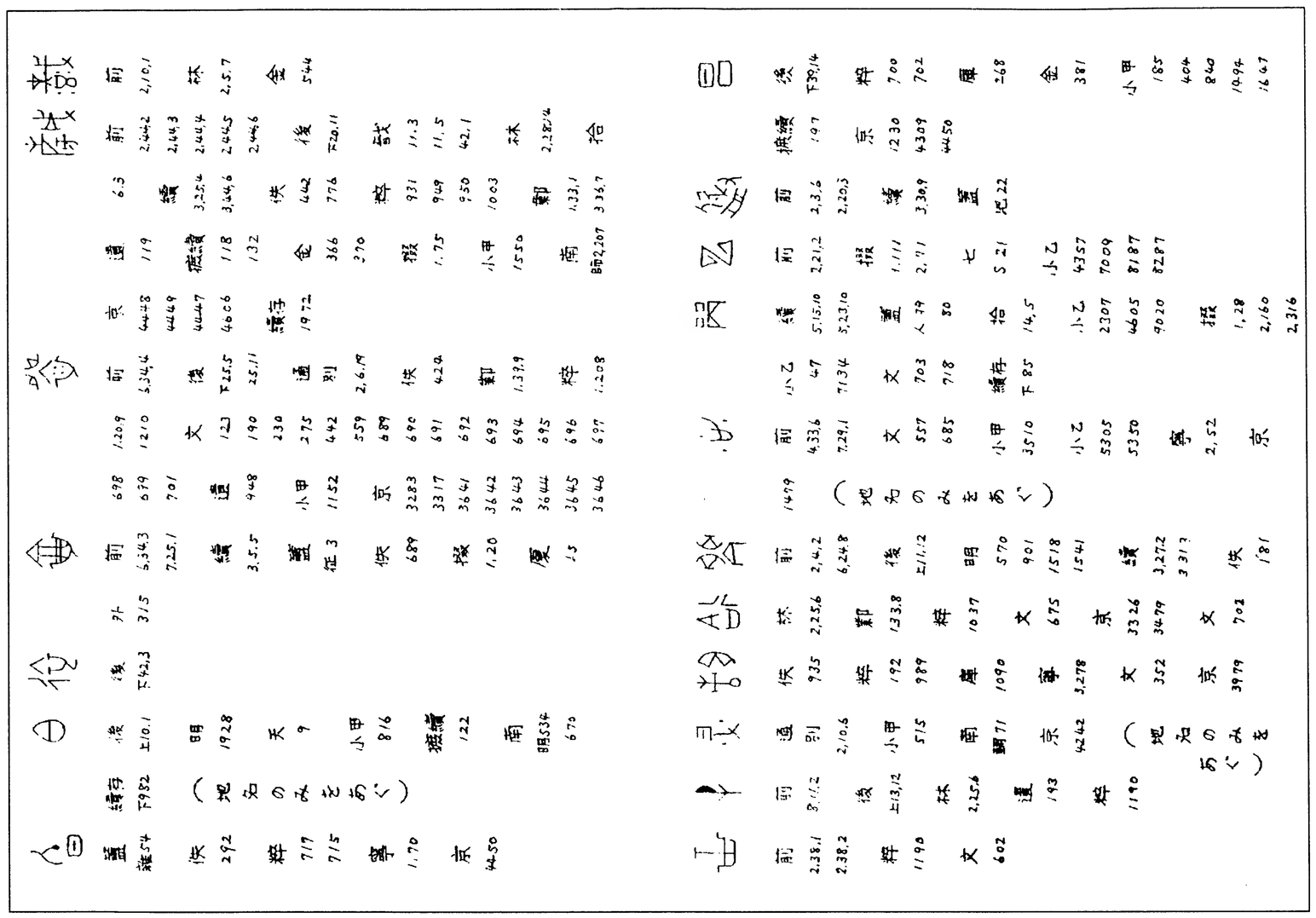
金 477 粹 13 文 722 755 寫 150 小甲 361 前 2,37,1 盨 雜138 遺 564 565 侯 995 林 1,24,5 虎 589 小甲 2121 小田 1252 後 下20,10 續 3,30,6 後 上15,7 小甲 637 續 3,25,2 前 6,30,4 金 545 掇 1,476 遺 264 粹 613 933 小乙 909 1057 1420

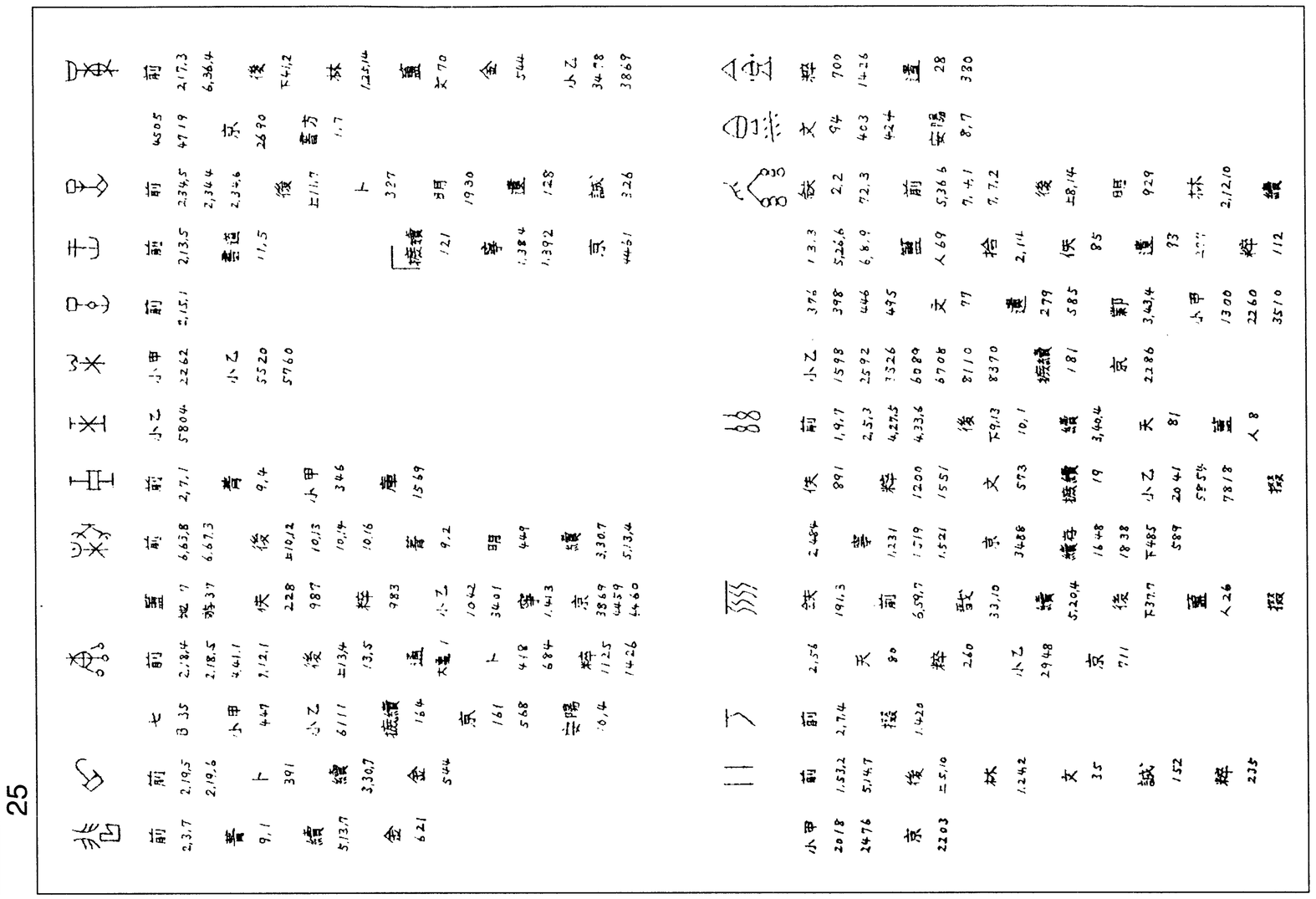


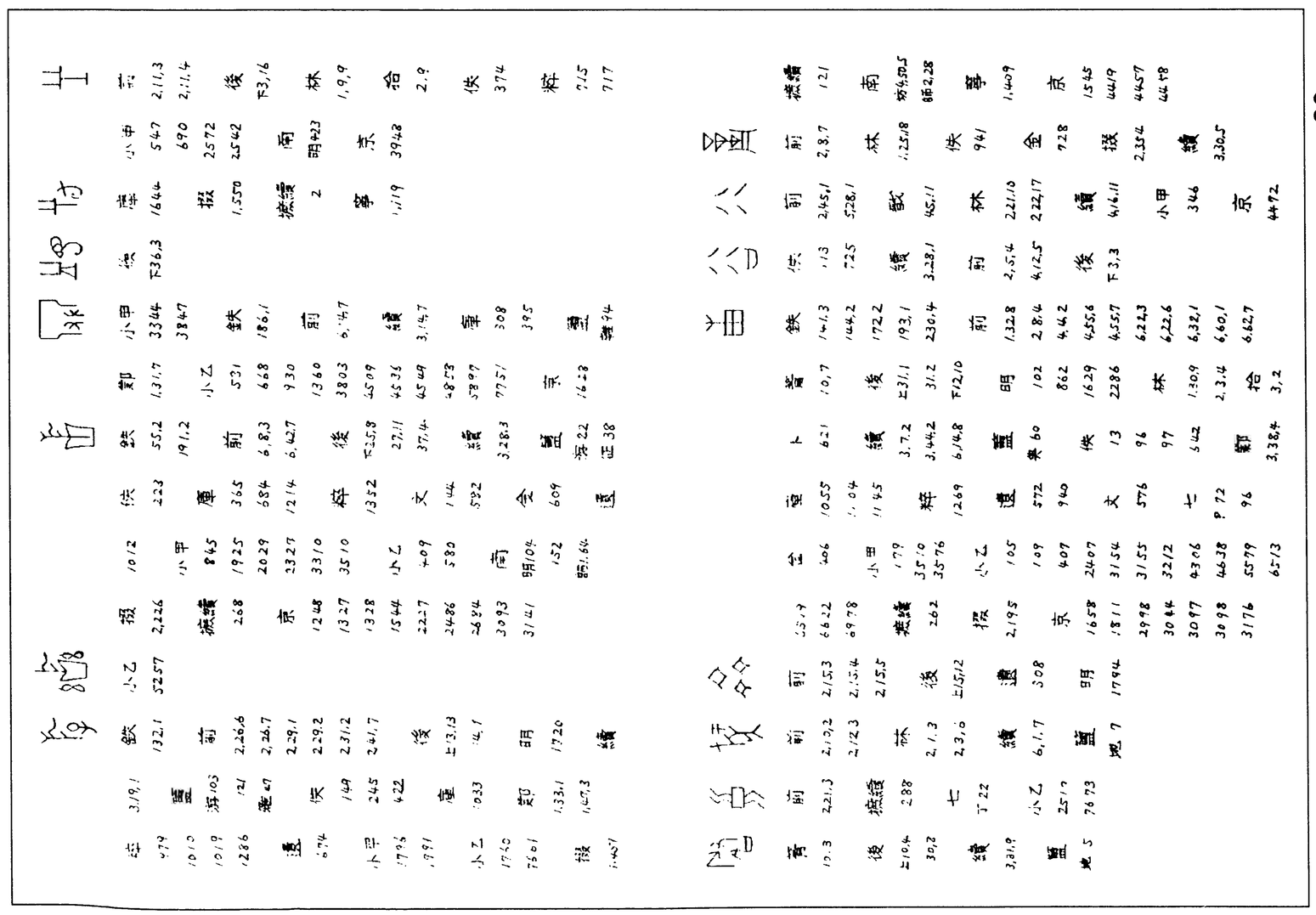
前 2,7,6 2,7,7 2,7,8 2,8,2 2,12,4 續 3,28,6 3,30,2 後 上12,12 13,2 卜 681 盨 前 2,11,4 3,29,1 6,12,5 6,13,4 林 1,28,1 2,6,19 2,16,17 金 583 728 京 3860 4310 2,41 3,108 南 明682 小乙 7191 京 1571 3512 前 5,45,2 5,45,4 5,45,5 林 2,18,1 侯 926 鄴 3,42,2 小甲 1085 寧 1,331 後 上18,11 南 坊3,17 京 1509 前 2,34,7 2,35,1 粹 653 前 2,8,5 2,11,5 明 1494 （地名のみをあぐ） 小甲 346 鄴 4,40,8 京 3641 南 明492 京 4453 4454 後 上10,2 京 1566 4359 寧 1,346 （地名のみをあぐ）

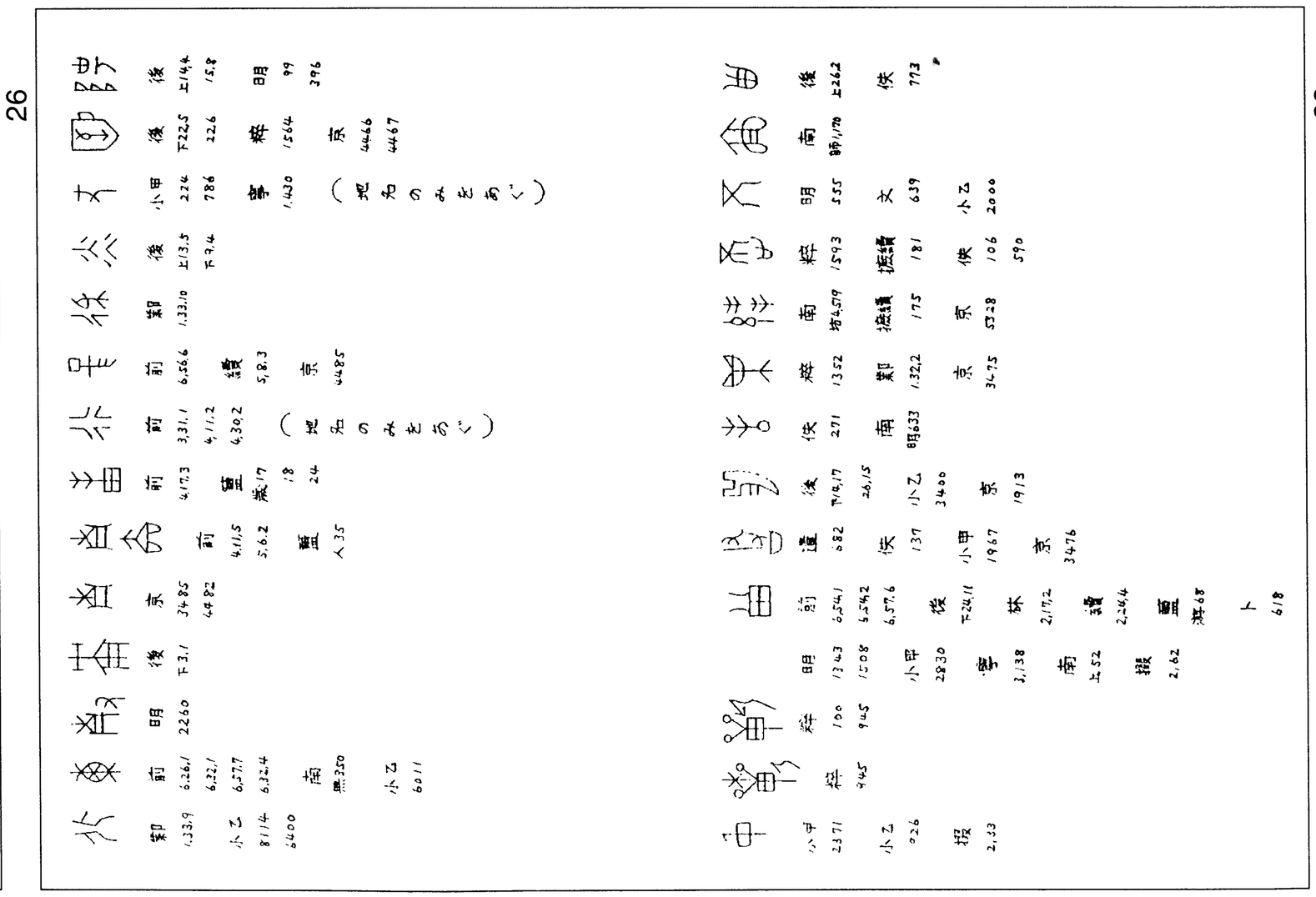
前 2,4,1 卜 647 續 6,1,7 寧 3,13 盨 地 7 南 師1,162 林 1,26,16 前 2,9,5 2,9,6 4,35,1 續 2,9,9 3,43,6 侯 318 366 990 天 76 文 474 南 輯 71 掇 1,235 2,13 京 1086 2557 2180 2997 5348 侯 667 725 粹 1571 小甲 752 小乙 1376 3416 5290 8101 金 594 鉄 25,2 前 3,22,5 3,22,6 4,32,4 4,32,5 林 2,28,11 明 1370 1905 續 1,39,9 後 上10,3 續 3,29,4 3,31,4 掇 2,13,0 （地名のみをあぐ） 七 丁6 庫 308 小乙 605 675 1201 3154 3155 3184 3212 4306 4636 6951 7009 7236 前 2,9,6 2,19,6 6,13,4 林 1,28,1 後 上13,1 前 2,8,7 2,9,1 2,9,3 續 3,31,4 遺 264 侯 943 南 明587 京 3895 粹 1578 京 4841 寧 1,228 存39 粹 1296 京 1560 3484 4462 5366 5552

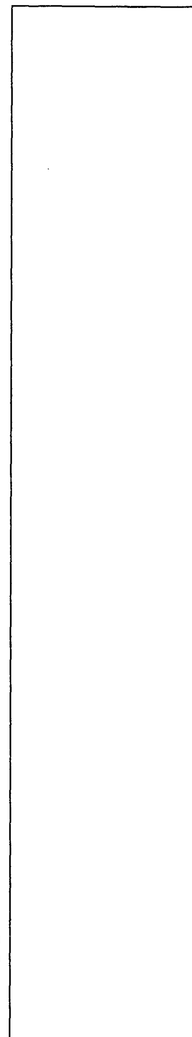
前 2,9,7 2,19,5 5,8,4 鉄 36,3 金 584 前 2,8,6 2,4,8 後 上13,2 林 1,9,12 粹 350 金 448 京 3282 5,145 侯 441 前 2,5,1 2,8,6 2,7,8 遺 486 通 別4,15 金 574 南 明228 續 外 229 52 掇 1,317 小乙 163 3517 5330 5906 南 師1,58 坊3,90 京 1329 1330 前 4,36,7 5,9,3 6,34,1 明 256 侯 298 庫 412 七 6 79 P 68 柏 文 100 710 711 南 明633 京 4468 前 2,3,5 2,21,1 後 上13,10 育 10,15 粹 992 鄴 1,339 掇續 266 寧 1,395 南 坊1,36 京 1578 遺 別 2,12,4 侯 719 庫 77 文 758 掇 1,453 2,111 金 211 前 2,43,5 2,43,6 2,43,7 2,44,1 2,44,3 6,10,5 7,42,1 戩 10,1 續 4,4,5 4,26,2 盨 天 91 存39 粹 1296 京 1560 3484 4462 5366 5552










田
𠂤
𠂤
𠂤

皇家安大略博物館收藏甲骨文字索引（一—九）

許進雄

筆者於一九六八年底受聘來皇家安大略博物館，整理及研究所藏的甲骨。其間有幾年雖然到多倫多大學攻讀學位，仍保留半工的職位，可以說一直沒有中斷對這批材料的整理與研究的工作。在十年的歲月中，先後出版了三本目錄及一些研究的報告。現在，隨着索引工作的發表，整個工作計劃可以說基本完成了，可以喘口氣從事別種的工作了。

有關此博物館收藏的三種甲骨文目錄，一是原骨已毀失的殷虛卜辭後編，由藝文印書館於一九七二年出版。其他兩本是原骨尚存的明義士收藏甲骨（THE MENZIES COLLECTION OF SHANG ORACLE BONES）及懷特氏等收藏甲骨文集（ORACLE BONES FROM THE WHITE AND OTHER COLLECTIONS），都由安大略博物館發行，前者出版於一九七二年，後者出版於一九七九年。於完成懷特甲骨的編輯後，筆者即着手此索引的編排，但因爲經費短絀，出版日期往往拖延數年，故此索引雖然於數年前既已編就，一直沒有提出出版的申請。現在承蒙中國文字編輯委員會的厚意，答應刊登於中國文字，多年來的工作計劃得以完成，學者們也多少對這批材料的應用有所便利。

此索引的編輯有幾個目的，一是便利學者翻查材料，二是可由索引核對拓本不清楚的字形，三是提供商代有些字形演變過程的實例及出現的頻繁度。由於要確定索引所描字形無訛誤，故取有原骨可以驗的材料，而不包括原骨不存的殷虛卜辭後編上的材料。

現將編輯的一些凡例說明於下：

一、明義士收藏的甲骨以M爲代表，懷特氏等人的甲骨以W爲代表。英文字母後的數目即其書出版時的序列號碼。

一、文字的隸定，基本採用甲骨文字集釋上李孝定先生的意見，間或下以己意。

一、文字的順序、分卷基本依從許愼的說文解字。說文解字所無之字但可分析部首者，則附於該部之後。

一、說文所見之字以篆文列於上而以楷書附其下。說文不收之字而可隸定者，但列隸定之字。若難以隸定之字，則附於某部之後，或列於第十五卷。

一、字雖或不可釋，但與某字字形相近，則列於旁，以資比較。

一、每字之字形，先依五期之時代次序安排，分期的依據請參考兩目錄的釋文。每期之下依次先列M的明義士甲骨、後列W的懷特氏甲骨。

一、編輯的原則是把M及W和可與之綴合的甲骨文字都收入。字形完整者描繪全形，字形不全則但列出版號碼而已。

一、可綴合的甲骨，但列先見之號，不列其他號碼，以省篇幅。其可綴合者有：

M〇〇一二加M二九九五
M〇一三三加M〇二三七加M〇三四〇
M〇二七二加M〇九四二
M〇五九七加鐵藏五・四
M一一二九加ｃＴ二四加續編三・一四・四
M一四二六加M一四三四
M一五一二加M一五二四
M一六八〇加明後二二三六
M一六九〇加粹編四一七
M一六九六加M一七二三
M一七〇七加明後二二五六
M一七一四加人文一八八三
M一七四二加人文二三三五
M一七六八加明後二二七九
M一八〇七加明後二二三二
M一八二三加明後二二八五
M一八三四加粹編六五五
M一九一八加M二〇九六
M一九七八加M二二二四
M二〇八一加M二〇八八
M二一〇二加甲編五〇五
M二一一一三加人文二一四二
M二一一七八加M二一九七
M二三一二加明後二四五二
M二三二一加粹編二三七
M二三三七加明後二五一〇
M二三三八加M二六六六加M二七九五
M二三四九加甲編七二六
M二三五〇加明後二五二五
M二三五三加京津四八二三
M二三六四加續存二・七八〇加M二三六五
M二三八〇加明後二五七〇
M二三八二加庫方一七二一
M二三八三加人文二三四七
M二三八六加明後二四九五加明後二四九六
M二四三〇加明後二五五四
M二四五二加明後二四五九
M二四七二加寧滬一・四八一加寧滬一・四八二
M二四八三加明後二四八六

M二四九六加明後二四九二
M二五二八加明後二五〇三
M二五三五加M二五三七加粹編二一
M二五六六加人文二四四四
M二五五八加續存一・二一六六
M二五七八加人文二四七二
M二六一一加京津四七〇一
M二六一六加M二六一八
M二六四二加人文二五〇五
M二六四三加人文二五一七
M二六四七加明後二六一四
M二六五一加明後二六一三
M二六五三加鄴三　三八・三
M二六五七加續存一・五九加京津四五〇五加粹編九五九加續存一・五八加甲編

八八二

M二七一八加庫方一一二六
M二七五五加明後二六一一
M二七四八加明後二四九一

M二八三三加M三〇一五
M二八四七加京津五二〇〇
M二九一一加遺珠七五
M三〇六九加M三〇七一加遺珠二一四加遺珠二二九
M三〇七二加遺珠二一五加遺珠二二七
M三〇九三加遺珠一四一〇
M三一三三加M三一三七
M三一五九加前編二・一三・五
M三一六一加零拾九二
W〇九二七加W〇九二八
W〇九六一加李棪一八
W一一七二加W一一七三
W一一九二加W一二八七
W一三六八加W一四〇四
W一六三八加美國一二一加粹編一一八一

一、原則上，字形殘缺的亦包括於此索引，但殘缺的字若是常見的就不取。若過於常見的字，如卜，貞，其，于，亡，癸等，則於每一期排列大約十五行的字形而於其餘但列出處。

一、爲便利翻查起見，於有數目、大小等形容的名詞或熟語的，列其合文辭例，其排列以下字爲準，間有依其上字排列，但必指明其合詞之字亦見何頁，如三四頁臣字收有帝臣一欄，註明亦見一五六頁，表明帝字見於該頁。

一、人名、官名有時取其合文形式，有時但列單字形式，請原諒其不一致之粗略。

一、有時一字形有數種意義，演變成不同的數字，或不同的隸釋難以決定取捨，則因便安排於某字之下，而以箭號指明參考某頁某字，如禮↓豐，頁六八；祐↓又，頁二九。

一、此索引版面之編排是根據明義士藏骨及懷特氏藏骨而設計的，中國文字的版面不夠寬大，故而一頁要分成兩頁印刷，以ａｂ分別之，今不及一一改動，請原諒其不便之處。

一、爲方便使用起見，本索引附有目錄及檢字表，但只註明頁數，不及ａｂ之分別。

一、甲骨綴合的引用書籍簡稱表。

鐵藏	鐵雲藏龜
續編	殷虛書契續編
明後	殷虛卜辭後編
粹編	殷契粹編
人文	京都大學人文科學研究所藏甲骨文字
甲編	殷虛文字甲編
京津	戰後京津新獲甲骨集
續存	甲骨續存
庫方	庫方二氏所藏甲骨卜辭
寧滬	戰後寧滬新獲甲骨集
鄴三	鄴中片羽三集
遺珠	殷契遺珠
前編	殷虛書契前編
零拾	甲骨文零拾
李棪	歐美亞所見甲骨錄存——李棪齋所藏甲骨簡介
美國	美國所藏甲骨錄

皇家安大略博物館收藏甲骨文字索引目録

page 01 (1)
一元天上帝下示

page 02 (1)
禮祿祥福

page 03 (1)
祐祭

page 04 (1)
祀祖祊祐祠祌祝祈

page 05 (1)
禍崇

page 06 (1)
被襫祰

page 07 (1)
三王

page 08 (1)
匆折春莫葬

page 09 (1)
皇珏气士中屯每屰

page 10 (1)
萑茲蒸若

page 11 (2)
小少八曾

page 20 (2)
屮芻籍弓

page 21 (2)
登步歲

page 22 (2)
此正徒

page 23 (2)
征過逆

page 24 (2)
循退得

page 25 (2)
延

page 26 (2)
行衛齒踞足品侖

page 27 (3)
干肉商以古十千

page 28 (3)
廿卅

page 29 (3)
弄弄弁

page 30 (3)
貞

page 31 (3)
父叟

page 32 (3)
尹聿及艮敫取

page 33 (3)
友

page 34 (3)
臣

page 35 (3)
殺尋專啟徹收攸寇鼓攻孜牧

page 12 (2)
牛

page 13 (2)
牡牝豢

page 14 (2)
牢

page 15 (2)
犂牲犅

page 16 (2)
告口喙嚨名命

page 17 (2)
召唯咸吉

page 18 (2)
周唐吉各吠

page 19 (2)
昌

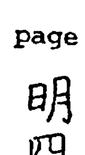
page 66 (5)
page 67 (5)
page 68 (5)
page 69 (5)
page 70 (5)
page 71 (5)
page 72 (5)
page 65 (5)
page 73 (5)
page 75 (6)
page 76 (6)
page 77 (6)
page 78 (6)

page 36 (3)
page 37 (3)
page 38 (3)
page 39 (3)
page 40 (3)
page 41 (3)
page 42 (3)
page 43 (3)
page 44 (3)
page 45 (4)
page 46 (4)
page 47 (4)
page 48 (4)
page 49 (4)
page 58 (4)
page 59 (4)
page 60 (4)
page 61 (5)
page 62 (5)
page 63 (5)
page 64 (5)
page 54 (4)
page 55 (4)
page 56 (4)
page 57 (4)
page 52 (4)
page 53 (4)
page 50 (4)
page 51 (4)

王

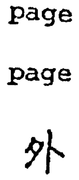
卤

page 88 (7)

明 

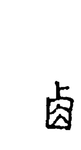
page 89 (7)

page 90 (7)

外 

page 91 (7)





粟 齊 束 鼎

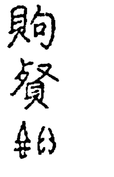
page 92 (7)

禾

page 79 (6)

賞 貯 賓

page 80 (6)

買 

邑 鄉

page 81 (7)

日

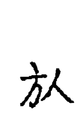
page 82 (7)

page 83 (7)

時 啓 晛 昱

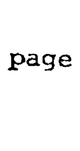
page 84 (7)

昏 晦 昌 昱 昔 昨



旂 游 旋 旅 族

page 85 (7)

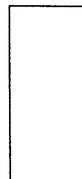


冥 晶 月

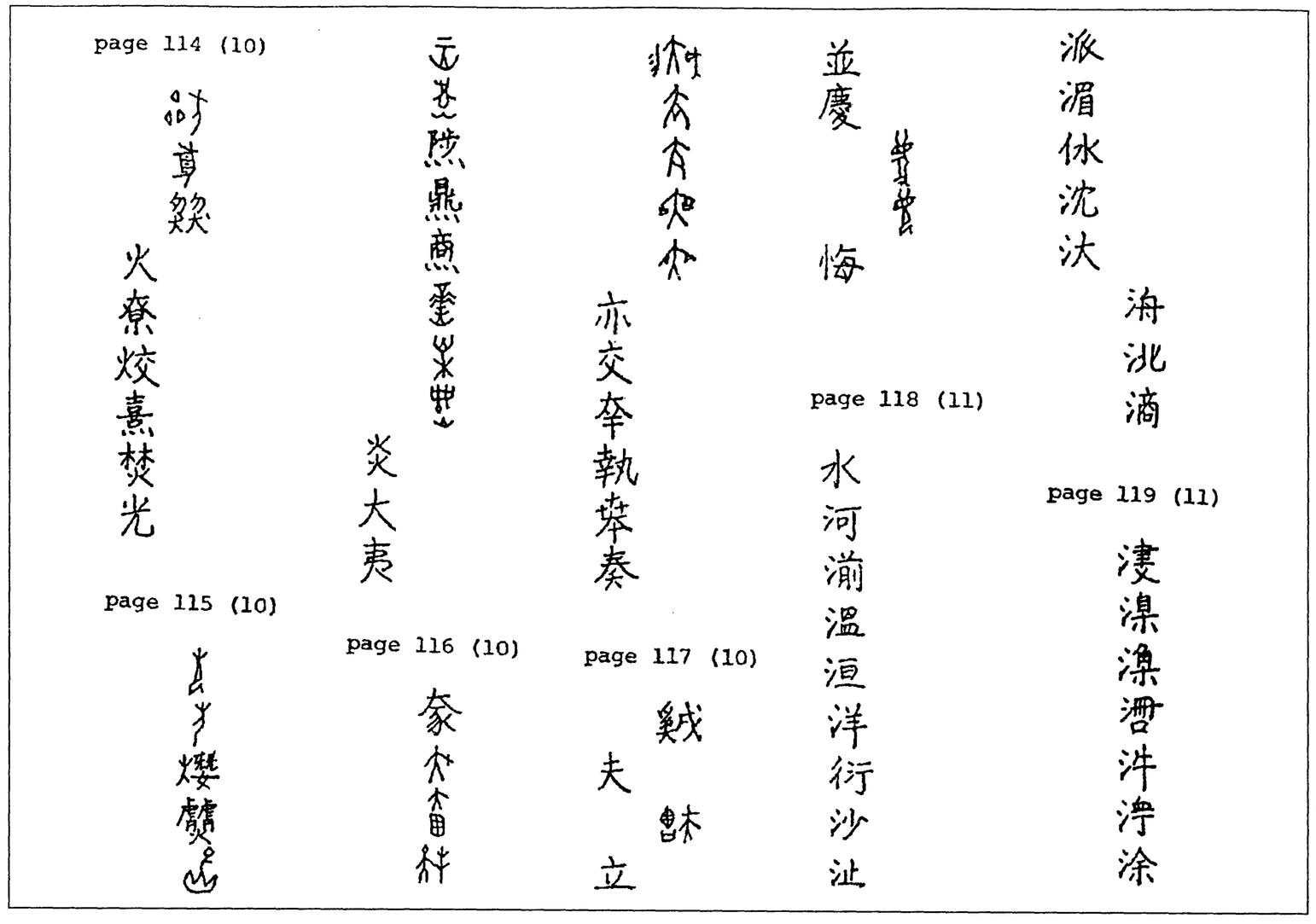
page 86 (7)

page 87 (7)

有

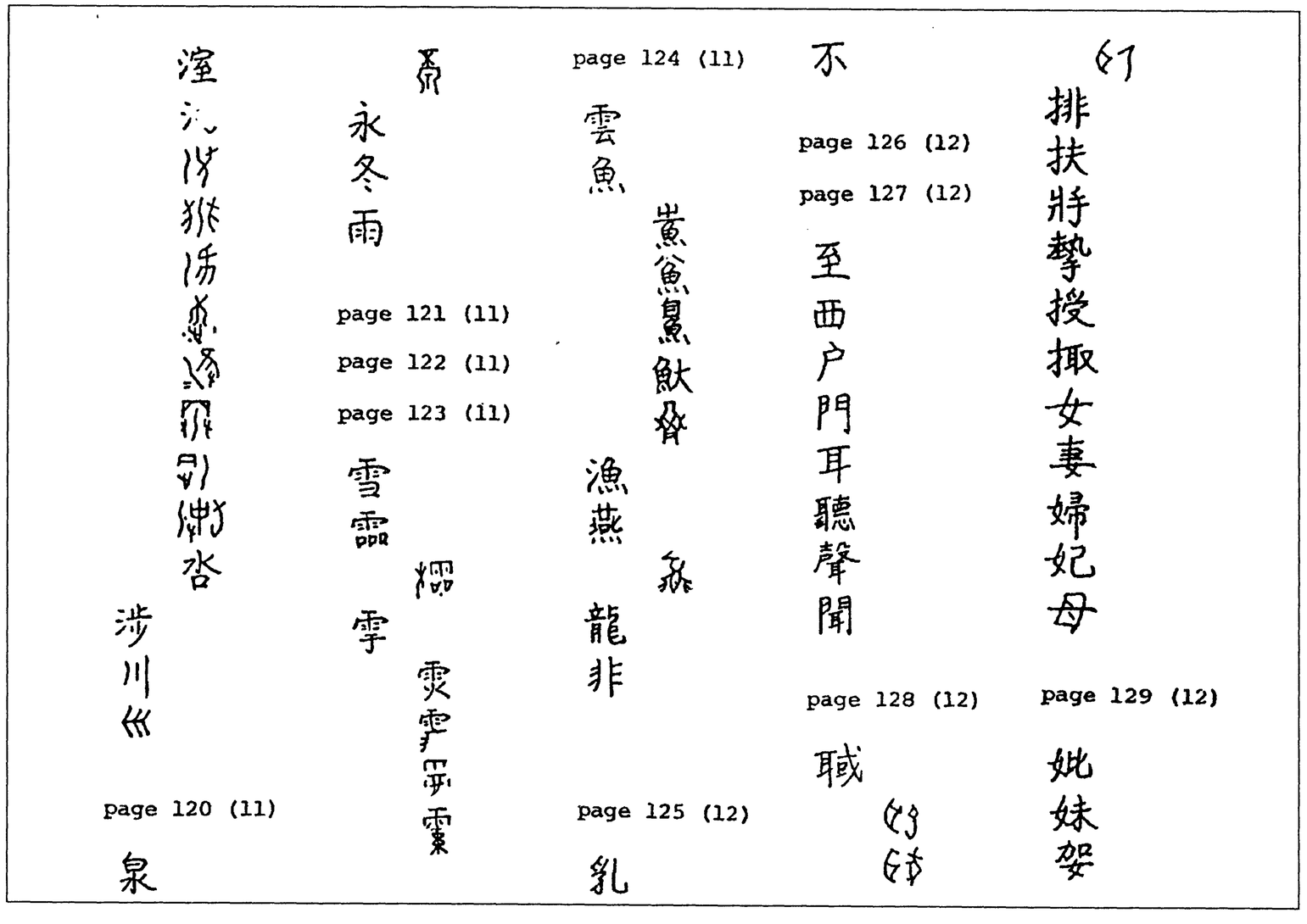


page 114 (10)
page 115 (10)
page 116 (10)
page 117 (10)
page 118 (11)
page 119 (11)



派 湄 伬 沈 汰 海 汕 滴
並 慶 悔
水 河 湔 溫 洹 洋 衍 沙 沚
淒 凓 凔 凘 泖 泮 涂
page 114 (10)
火 尞 烄 熹 焚 光
page 115 (10)
炎 大 夷
page 116 (10)
赤 交 牽 執 埶 奏
page 117 (10)
夫 立

page 124 (11)
雲 魚
漁 燕 龍 非
page 125 (12)
乳
page 126 (12)
page 127 (12)
至 西 户 門 耳 聽 聲 聞
page 128 (12)
職
page 129 (12)
姊 妹 婁
排 扶 將 孷 授 撮 女 妻 婦 妃 母
page 120 (11)
泉
永 冬 雨
page 121 (11)
page 122 (11)
page 123 (11)
雪 靈 雩



涉 川 巡

page 130 (12)
page 131 (12)
娘 妥 嬉 娃 娘 嫁 妤
奴 娥 媚 好 姘 如 嬪 妥 妝 嬖
page 132 (12)
page 133 (12)
戈 擘 戰 戍 或 戕
page 134 (12)
武 戡 戔 戍 我
page 135 (12)
page 136 (12)
page 137 (12)
義 亡
page 138 (12)
弘 弦
匈 匾 匸 匡 匍 弘
彈 弱
page 139 (12)
系 孫
page 140 (13)
終 絰 紳 絧 率 虫 蚰 蠶
page 141 (13)
二 亘 凡 土 埽 在 封
蠉 風 宅 龜 黿 蠉 麃
page 142 (13
墉 墐 堙 堇 艱 田
page 143 (13)
暱 黃 男 力 劦
page 144 (14)
錫 鑄 鏳 鑪 勺 且 俎 新 升 斫 斤
page 145 (14)
矛 皀
page 146 (14)
陨 阢 陾 陳 阹 官 阜 陞 陟 降

page 147 (14)
甲
page 148 (14)
乙
page 149 (14)
page 150 (14)
page 151 (14)
丿
尤
page 152 (14)
丙
page 153 (14)
丁
page 154 (14)
page 155 (14)
戊
page 156 (14)
成
己
page 157 (14)
庚
page 158 (14)
page 159 (14)
辛
page 160 (14)
辭
page 161 (14)
壬
癸
page 162 (14)
page 163 (14)
子
page 164 (14)
page 165 (14)
page 166 (14)
丑
page 167 (14)
寅
卯
Page 168 (14)
辰
page 169 (14)
巳
page 170 (14)
午
page 171 (14)
未
page 172 (14)
申
酉
page 173 (14)
酒
page 174 (14)
page 175 (14)
戌
亥
page 176 (14)
page 177 (14)
page 178 (15)
page 179 (15)
page 180 (15)

page 01a (1)

一 帝 丁

一 M0275 M0780 M2952 M3145 W0248 W0312 W0927 W0993 W1597

also pages 12 13 14 50 51 82 85 87 91 98 110 111

元 ① M0549 ② W1155 ③ M1784 ④ M2332

also page 01

天 ① M0968 ④ M2475

上 also pages 01 17 18 25 112 148

帝 ① M0096 M0097 M0098 M0099 M0297 M0298

M0299 M0300 M1112 W0080 W0081 W0082 W0083

W0084 W0085 W0104 W0897 ② M1322 ③ M1646

M1647 M2113 ④ M2338 M2703

W1565 W1574 ⑤ W1708

also page 34

下 ① W0877

page 01b (1)

示

上 ③ W1871 ⑤ M3161

also pages 151 178

示 ① M0046 M0074 M0078 M0082 M0084 M0085 M0206 M0343

M0598 M0620 M0621 M0664 M0709 M0772 M0773 M0776

M0777 M0780 M1085 W0018 W0053 W0102 W0132

W0157 W0235 W0358 W0473 W0546 W0819 W0860 W0881

W0884 W0940 W0955 W0966 ② M1375 W1203 ③ W1354

④ M0059 M2674 W1521 W1540 W1631 W1632

W1644

大示 ① W0031 W0956 ④ M2330

M2336

小示 ① M0118 ④ W1555

元示 ① W0898

page 02a (1)

福 祥 祿 禮

福 ① M0250 M0251 M0252 W0123 W0128 ② M1319 M1323

祥 → 羊 page 49

祿 → 彔 page 91

禮 → 豐 page 68

also pages 161 163

礻示 ③ M1772

礻示 ④ M2337

徵示 ② M1297

鬱示 ① W0898

伊示 ④ M2330

巫示 ④ M0059

十示又二 ② M1170

二示 ① W0560 ④ M2313 M2386

page 02b(1)

祭 祖 酒 爭 秉

祭 ① W0150 ② M1171 M1219 M1210 M1220 M1234 M1246

M1267 M1269 M1344 W1027 W1047 ③ M1769 M1770 W1373

④ M2420 W1618 ⑤ M2840 M2841 M3053

祐 ③ M1688 M1698 M1714 M1807 M2252 W1311

W1313 W1354 W1362 W1363 ⑤ M2991 M3042

又 → page 29

M1740 M1749 ④ M2360 M2417 M2426

① M0249 M0256 W0129 ② M1275 ③ M1739

③ M1768 W1381 ④ M1742 M2380

④ M2475

M1334 W1029 W1030 W1032 W1033 W1037 W1039 W1054

W1055 W1251 W1258 W1259 W1284 ③ W1307

M1326 M1327 M1328 M1329 M1330 M1331 M1332 M1333

page 03a(1)

祀 祖

⑤ M3161 W1871	祀 ① M0091 M0328 M0344 W0146 ③ M1772 W1390	④ M2389	三祀 ⑤ W1915	祖 → 且 page 144	祊 ① M0060 M0062 M0066 M0067 M0068 M0070 M0072 M0076	M0083 M0132 M0157 M0200 M0300 M0484 M0795 M1109 W0019 W0020 W0021	W0022 W0023 W0024 W0025 W0026 W0154 W0172 ② M1253 M1625 ④ M2335	M2336 M2337 M2346 M2383 ⑤ M2881 M2882	M2884 M2886 M2889 M2892 M2893 M2894 M2895 M2896 M2898	M2900 M2903 M2909 M2911 M2913 M2914 M2915 M2916 M2917 M2918	M2920 M2922 M2926 M2928 M2935 M2988 M3036 W1687 W1688 W1693	W1694 W1696 W1699 W1702 W1705

page 04a(1)

王

④ M2349 M2402 M2711	③ M1680 M1683 M1703 ④ M1789 M2321	③ 三 ① M0090 M0128 M0148 M0985 W0088 W0162 W0560 ② M1285	③ M1784 W1553 W1590 W1680	also pages 03 12 13 14 27 33 39 46 49 50 51 52 59 82 85 87 96 98 109 128 137 145	王 ① M0028 M0040 M0055 M0067 M0109 M0132 M0133	M0146 M0159 M0170 M0220 M0245 M0273 M0289 M0303	M0327 M0337 M0366 M0377 M0396 M0501 M0535 M0536 M0543	M0561 M0598 M0611 M0620 M0630 M0632 M0637 M0713	M0734 M0766 M0778 M0814 M0836 M0838 M0847	M0848 M0853 M0868 M0883 M0891 M0920 M0925 M0929	M0962 M0995 M1055 M1109 M1127 M1129	M0605 M1131 M1132 M1157 W0001 W0053 W0071
③ M1675	M2528											

祈 禍 崇 襏 褸 冊

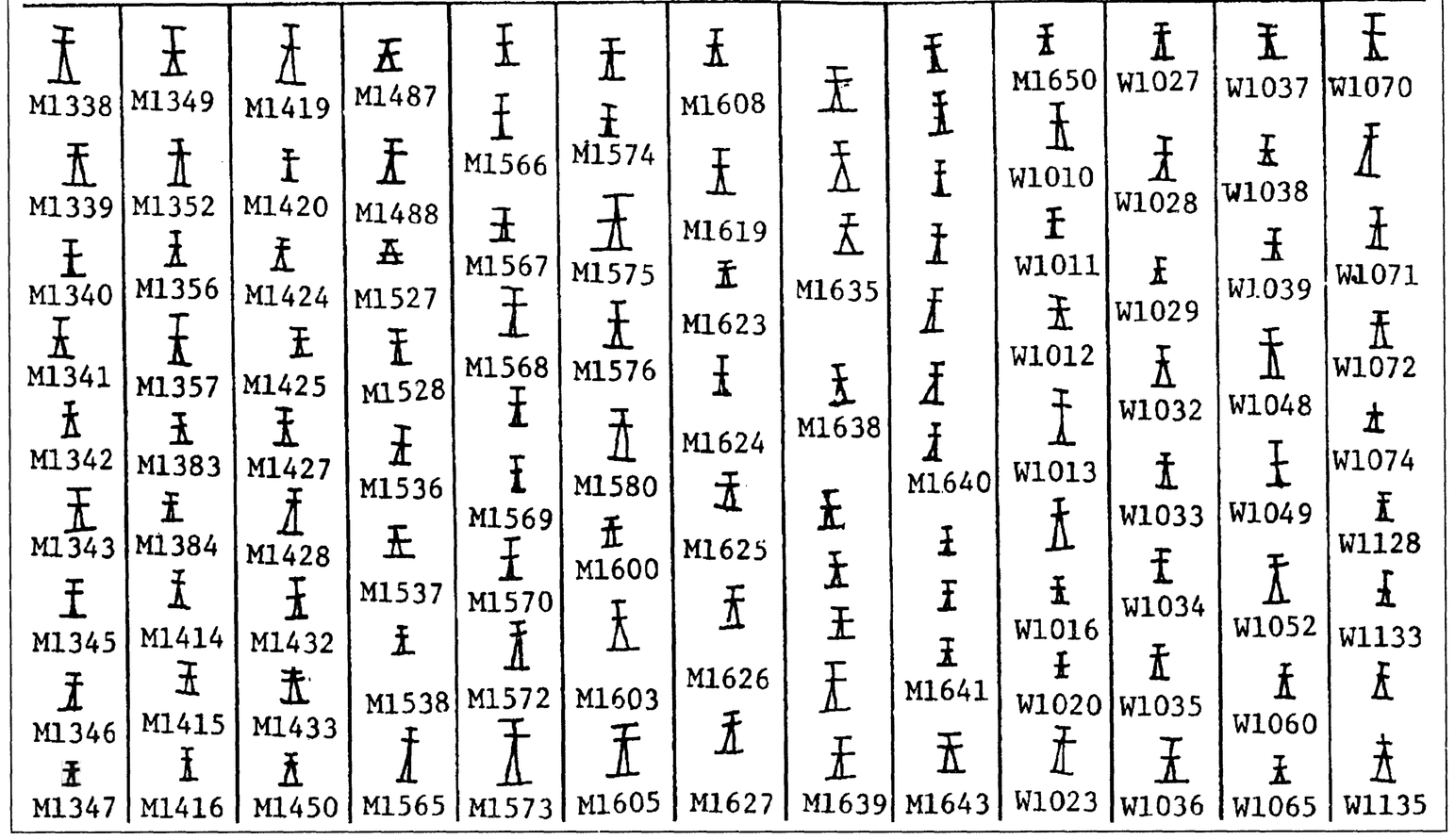
also page 127	祐 ① W0176	祠 → 司 page 106	禘 → 帝 page 01	祝 ① M0158 M0159 W0121 W0246 ② W1026 ③ M1717	M2642 ④ M2400 M2411	祈 ④ M2710	禍 → 咼 page 57 猧 page 113	祟 → 㜷 page 111	⑤ M2861 M2985 M2986 M2987 M2989	① M0318 M0327 ④ M2368 M2389	新冊 ④ M2349	舊冊 ④ M2350

page 03b(1)

W0097 W0117 W0137 W0158 W0296 W0301 W0302 W0313	W0327 W0332 W0336 W0337 W0338 W0339 W0356	W0379 W0383 W0389 W0390 W0391 W0431	W0434 W0441 W0450 W0452 W0473 W0491 W0495	W0594 W0605 W0622 W0635 W0643 W0644 W0675	W0679 W0682 W0688 W0739 W0750 W0776 W0793	W0800 W0820 W0871 W0878 W0886 W0887 W0897	W0902 W0931 W0935 W0952 W0953 W0988	W0994 W1004 ② M1178 M1182 M1184 M1185 M1186 M1197	M1198 M1202 M1212 M1216 M1218 M1219 M1230	M1232 M1238 M1245 M1246 M1250 M1263 M1279 M1280	M1281 M1285 M1287 M1289 M1290 M1291 M1313 M1316	M1317 M1318 M1319 M1323 M1326 M1329 M1331 M1332 M1336

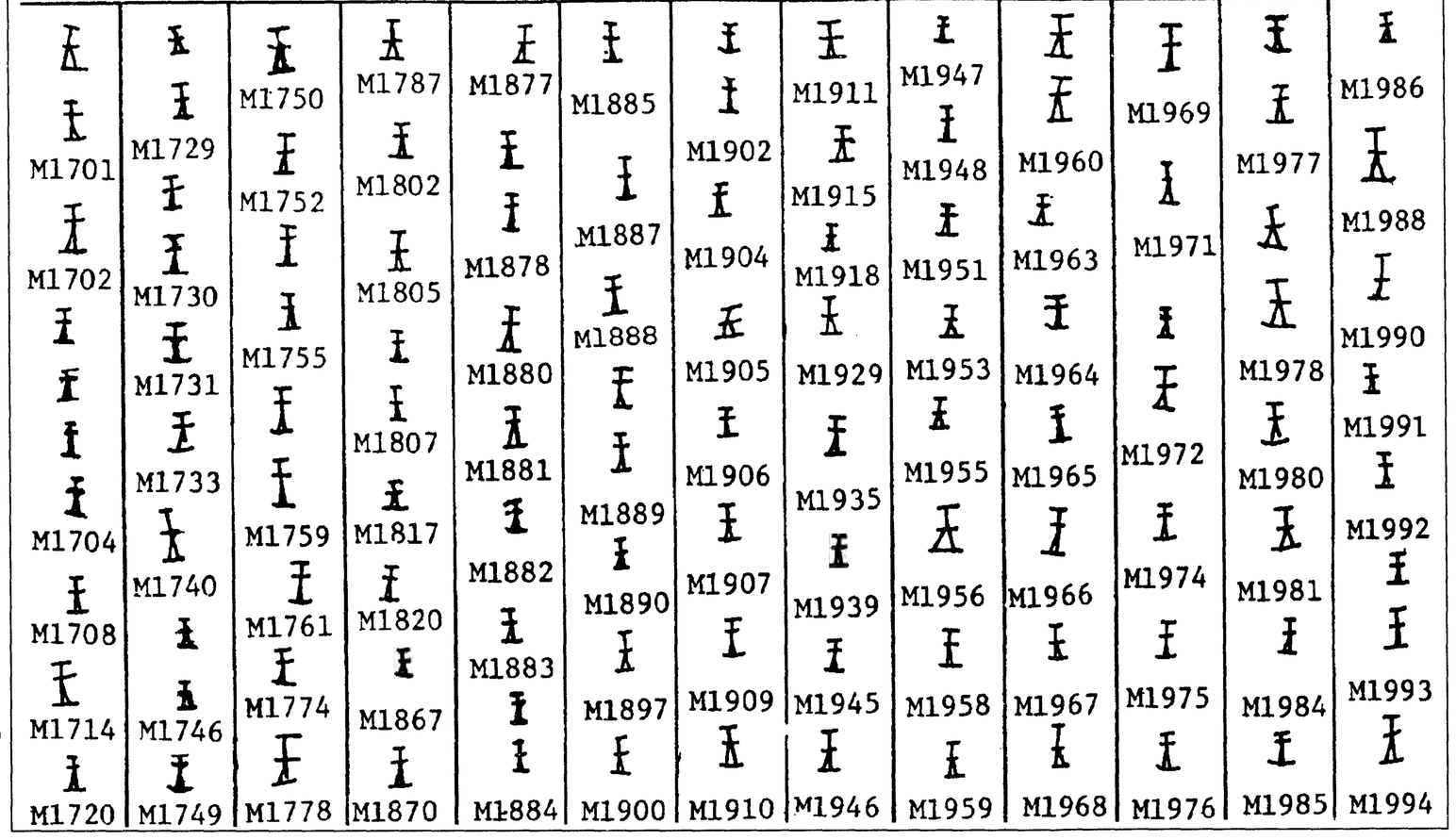
page 04b(1)

page 05a(1)



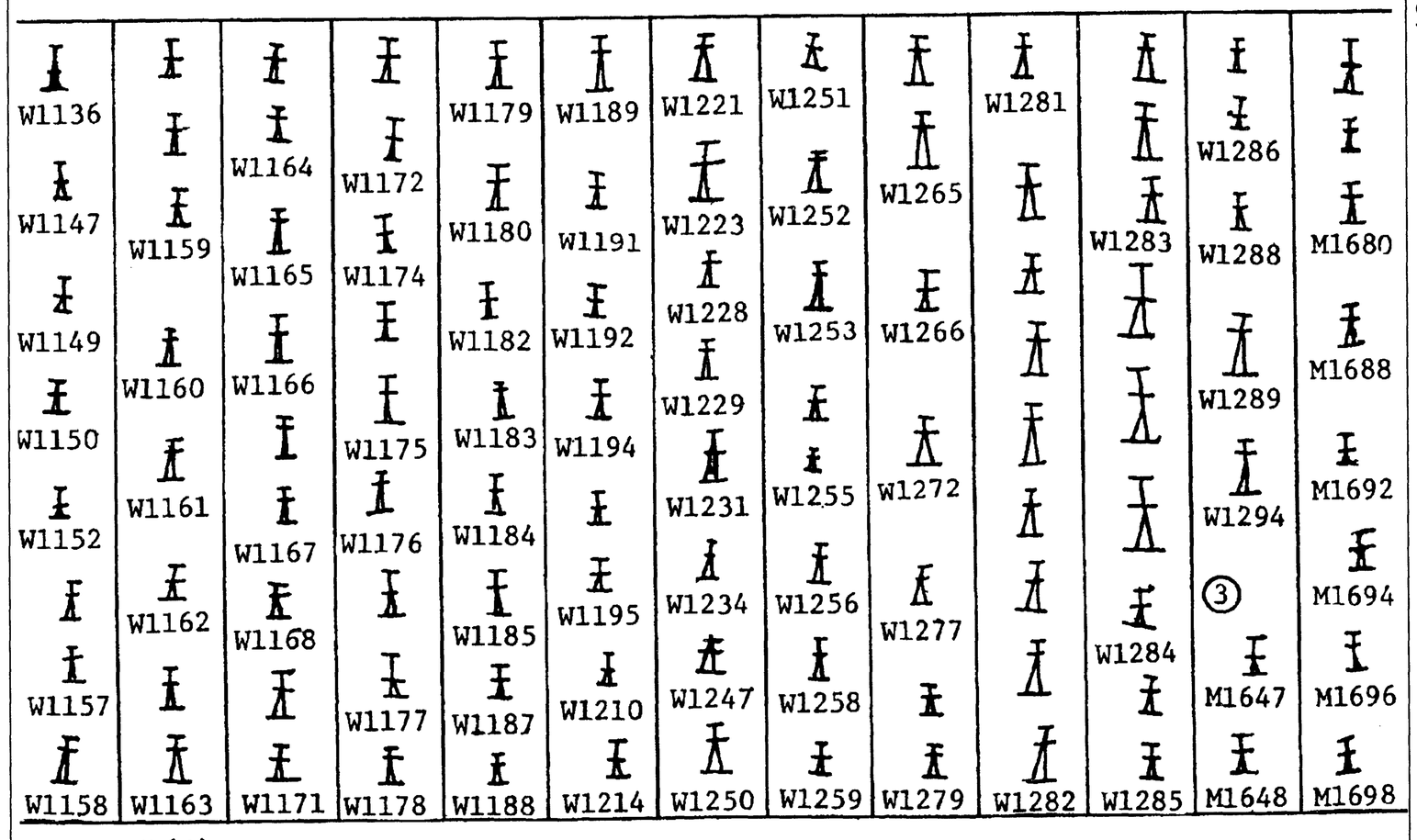
9

page 06a(1)



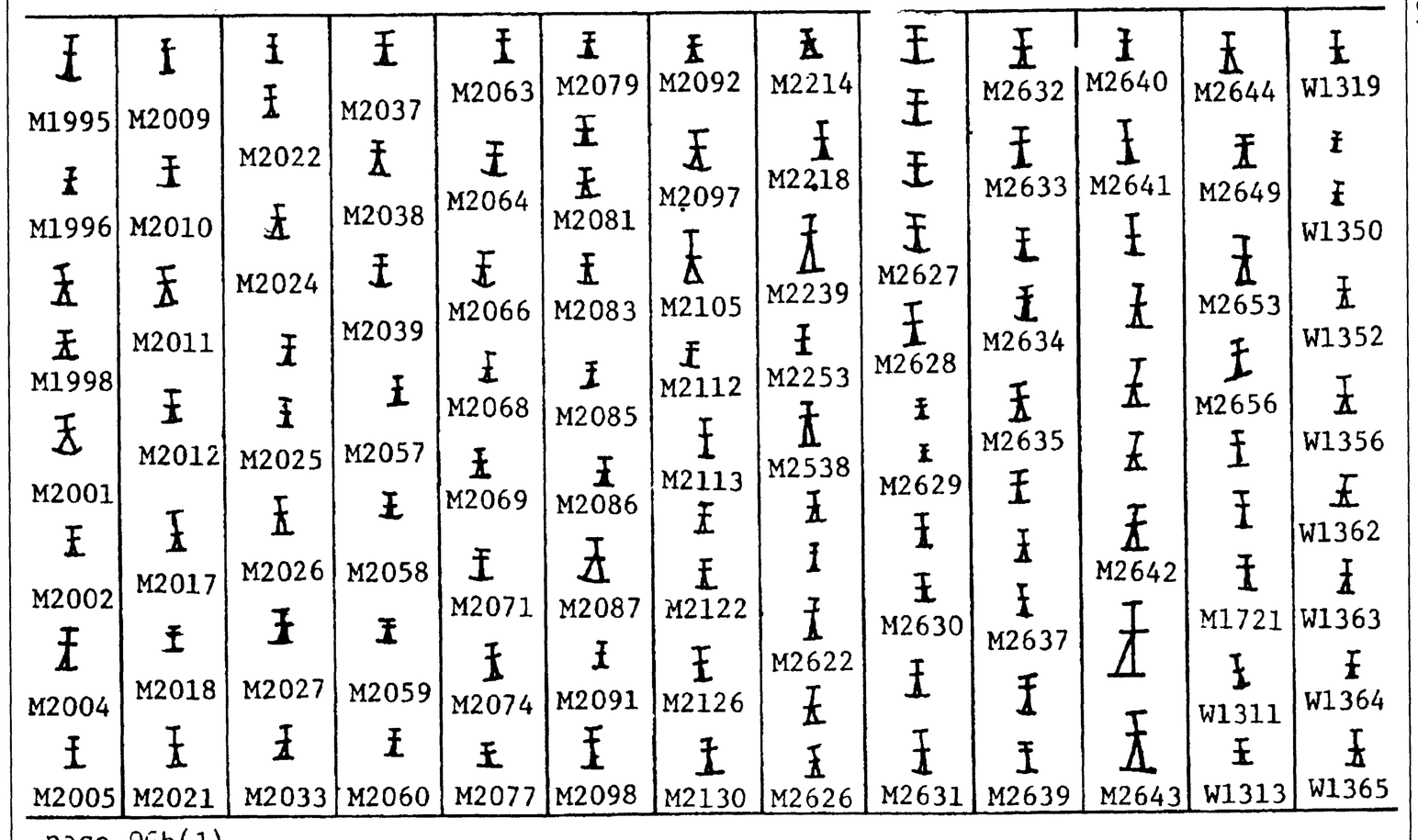
11

page 05b(1)



10

page 06b(1)



12

page 07a(1)

W1368 W1370 W1382 W1391 W1399 W1401 W1400
W1406 M1411 W1417 W1418 W1427 W1428 W1430 W1431
W1432 W1433 W1435 W1436 W1444 W1448 W1449 W1451 W1453
W1459 W1463 W1464 ④ M0059 M1751 M2125
M2250 M2266 M2268 M2273 M2274 M2275 M2280 M2285
M2290 M2292 M2294 M2300 M2304 M2307 M2312
M2319 M2321 M2338 M2396 M2402
M2408 M2411 M2434 M2444 M2508
M2532 M2540 M2623 M2624 M2625 M2645
M2646 M2647 M2648 M2650 M2652
M2658 M2660 M2662 M2663 M2667 M2672
M2675 M2680 M2683 M2684 M2690 M2693
M2703 M2704 M2706 M2710 M2711 M2712

13

page 07b(1)

M2713 M2716 M2717 M2718 M2719 M2721 M2723
M2725 M2727 M2752 M2763 W1481 W1498 W1499
W1503 W1514 W1516 W1517 W1522 W1527 W1544 W1545 W1571
W1574 W1595 W1610 W1625 W1626 W1634
W1637 W1638 W1640
W1641 W1648 W1650 W1651 W1653 W1657
W1666 W1674 ⑤ M2832 M2833 M2834 M2836 M2838 M2839
M2840 M2841 M2843 M2846 M2847 M2849 M2850 M2851 M2853 M2854
M2857 M2858 M2859 M2860 M2861 M2862 M2863 M2867
M2870 M2871 M2872 M2873 M2874 M2875 M2876 M2877
M2878 M2905 M2980 M2981 M2982 M2983 M2987 M2989
M2994 M2997 M2998 M3008 M3009 M3012 M3014 M3017 M3019 M3021
M3022 M3023 M3025 M3026 M3027 M3029 M3034 M3039 M3052

14

page 08a (1)

M3057 M3058 M3059 M3060 M3061 M3065 M3067
M3069 M3072
M3070 M3073 M3074 M3075 M3076 M3077 M3078 M3080
M3081 M3082 M3083 M3084 M3085 M3087 M3088
M3089 M3090 M3091 M3093 M3095 M3097
M3098 M3099 M3100
M3101 M3102 M3103 M3105 M3106 M3108 M3109
M3110 M3112 M3113 M3114 M3115 M3116 M3117 M3118 M3119
M3121 M3122 M3124 M3125 M3126 M3128 M3129 M3130 M3132
M3133 M3134 M3135 M3136 M3138 M3139 M3146 M3149
M3151 M3152 M3153 M3154 M3156 M3157 M3159 M3161 M3168
M3169 M3170 M3171 M3173 M3174 M3175
M3176 W1683 W1689 W1690 W1691 W1703 W1708 W1713 W1716

15

page 08b (1)

W1717 W1720 W1722 W1723 W1724 W1725 W1726 W1729 W1730
W1738 W1739 W1741 W1742 W1744 W1745 W1746 W1748 W1752
W1753 W1754 W1756 W1757 W1758 W1759 W1760 W1761 W1763
W1764 W1765 W1767 W1768 W1794 W1795 W1796 W1797
W1798 W1801 W1802 W1805 W1806 W1807 W1808 W1809 W1810
W1811 W1813 W1814 W1815 W1816 W1817 W1818 W1820 W1821
W1822 W1824 W1827 W1828 W1831 W1833 W1834 W1835
W1838 W1839 W1840 W1842 W1843 W1844 W1845 W1848 W1849
W1851 W1853 W1854 W1856 W1857 W1858 W1863 W1864 W1867 W1869
W1870 W1873 W1877 W1878 W1879 W1886 W1888 W1889
W1890 W1891 W1892 W1893 W1894 W1899 W1902 W1904 W1905
W1907 W1908 W1909 W1912 W1915

also pages 39 64 84 93 176

16

page 09a(1)

皇 ① W0816

珏 ① M0331

气 ① M0037 M0231 M0342 M0677 M0719 M0778 M1087 M1578

W0213 W0553 M0628 ② M1169 M1171 ④ M2324 M2535

M2543 M2701 M2729 M2730 M2731 M2736 W1678 W1679

士 ④ M2718 M2722

中 ① M0585 M1102 M1561 W0341 W0413 ② M1305

M1277 ③ M1848 M2107 ④ M2402 M2745

W1611

also pages 25 82 91 92 93 155 157

屯 ① M0478 ③ W1466

五屯 ① W0955 W0967

七屯 ① W0966

page 09b(1)

每 ① M1885 ③ M1879 M1882 M1884

M1888 M1890 M1947 M1964 M1969

M1973 M1974 M1975 M1979 M1984

M1988 M1989 M1996 M2000 M2002 M2004

M2007 M2017 M2021 M2029 M2030

M2034 M2042 M2056 M2082 M2097 M2105

M2110 M2113 M2122 M2124 M2125

M2128 M2130 M1429 W1432 W1459

W1460 ⑤ W1870 W1907

屯 ① M0214 M0350 M0574 M0588 M0639 M0664

M1022 M1103 M1128 W0364 W0373 W0475 W0817

④ M2328 M2432 M2701 M2702 M2718

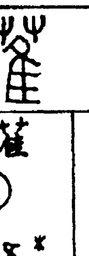
page 10a(1)



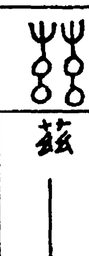
M2755 W1649



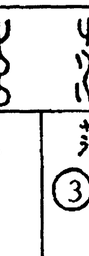
萑 ① W0313



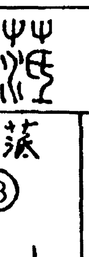
茲 page 53

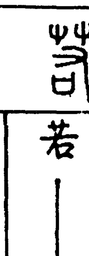


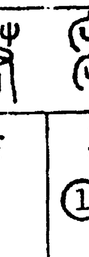
蔡 ③ M2008 W1432

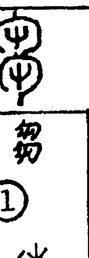


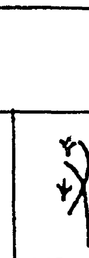
若 page 76

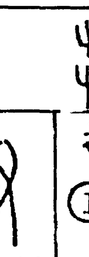


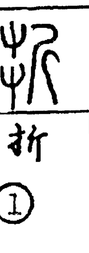


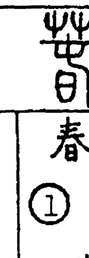


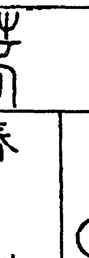


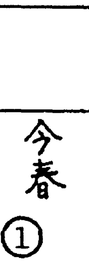


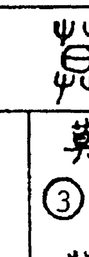


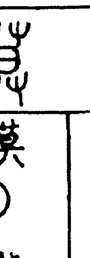


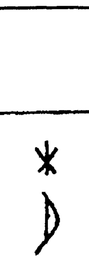


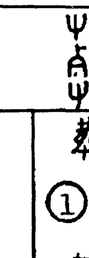


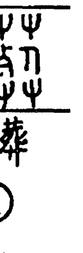


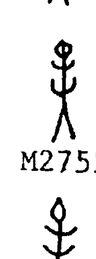


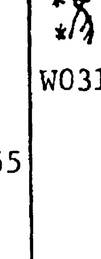


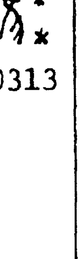


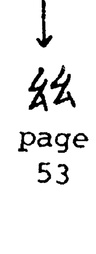


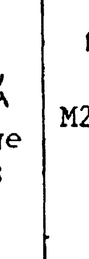


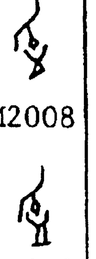


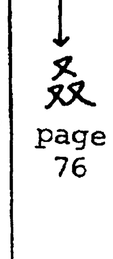


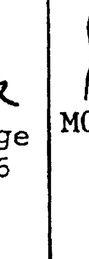


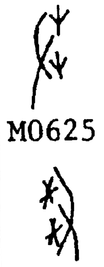




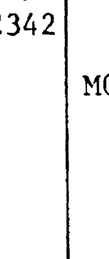


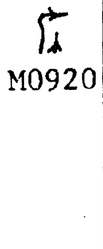


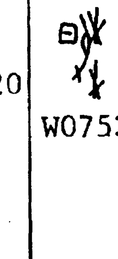


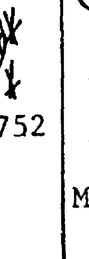




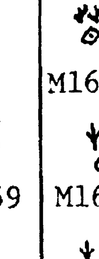


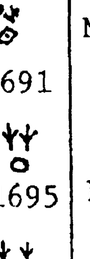




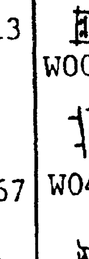


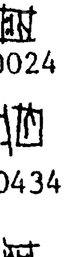




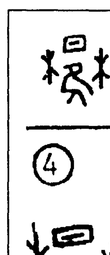




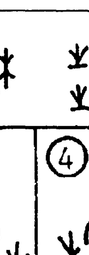




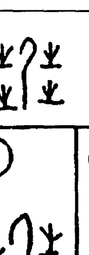
page 10b(1)



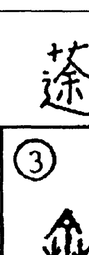
M2337



M2727



M1978



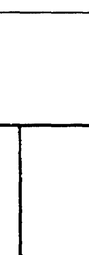






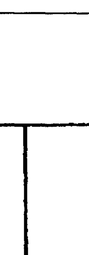


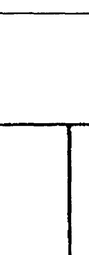




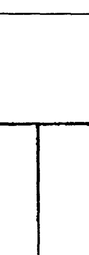


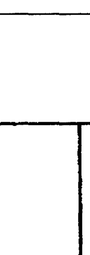




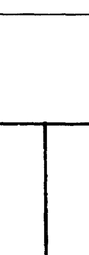


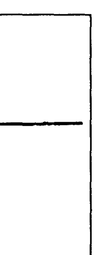


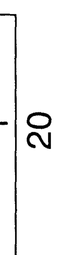






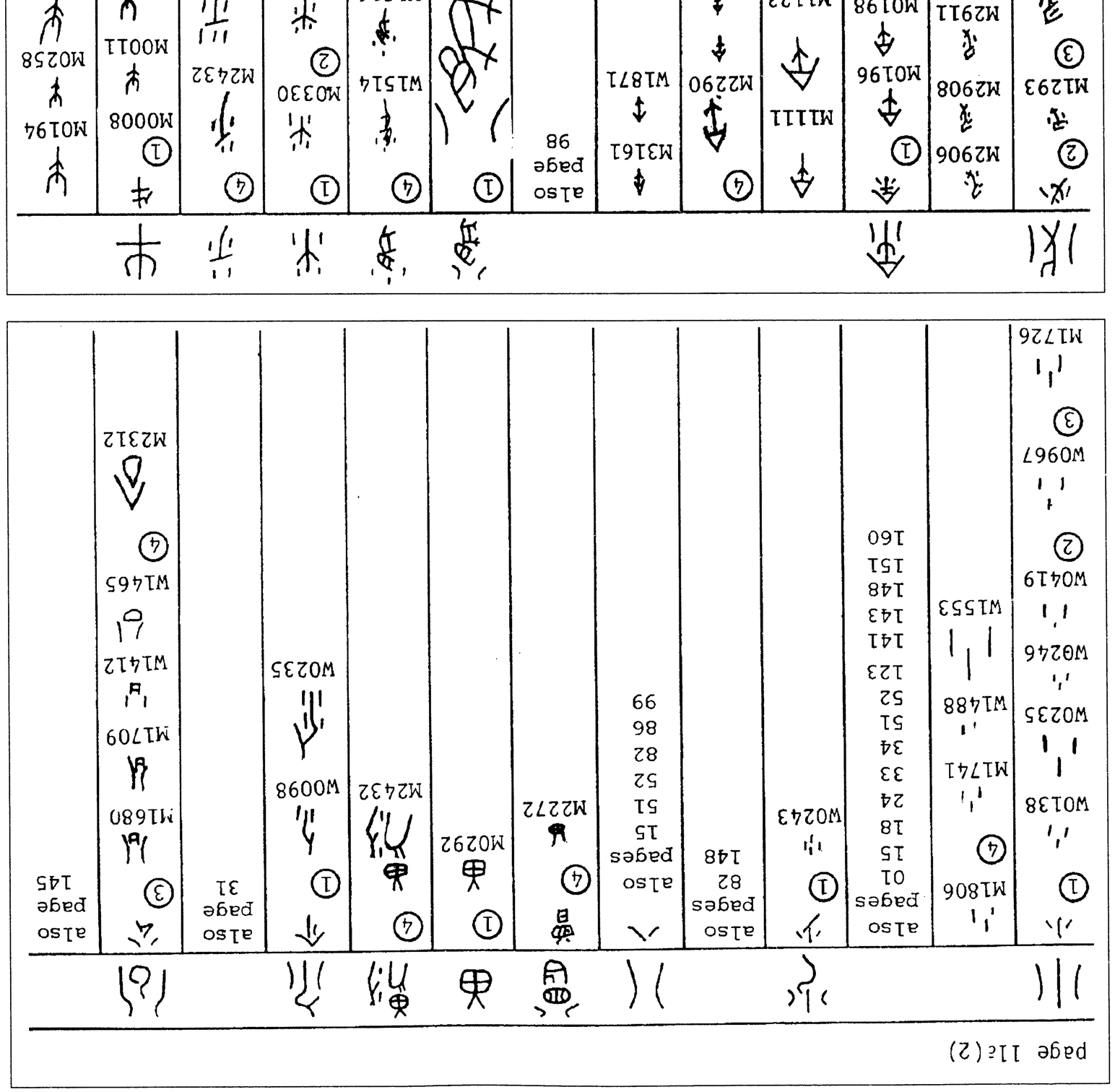




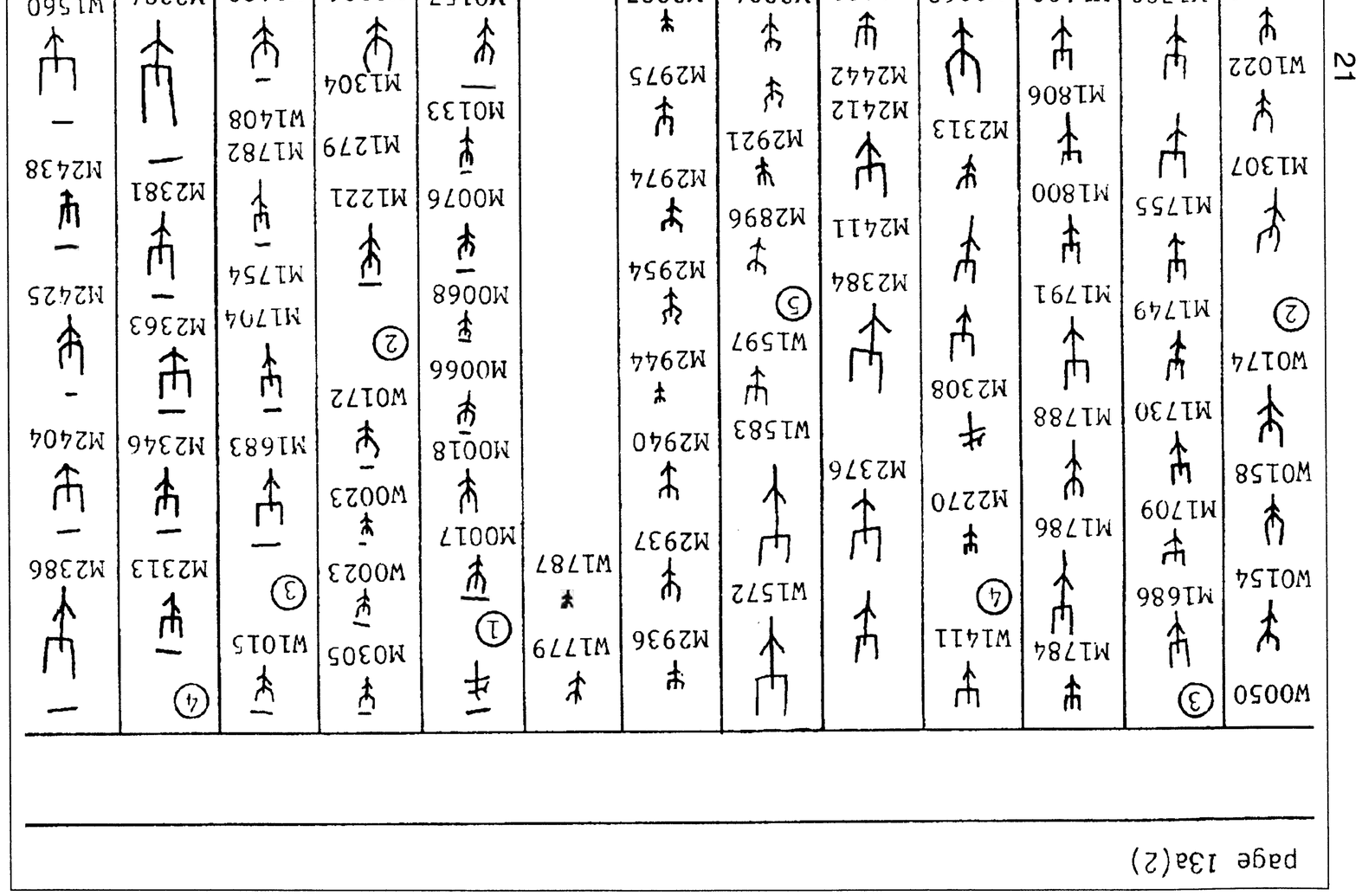


(原載《中国文字》新四期，一九八二年七月)

page 11c(2)



page 12a(2)


W0050 W0154 W1686 W1784 W1786 W1788 W1791 W1800 W1806 W1400 W1783 W1755 W1749 W1730 W1709 W1686 W1784 W1786 W1788 W1791 W1800 W1806 W1400 W1783 W1755 W1749 W1730 W1709 W1680 W1412 W1465 M2312 W1022 M1307 W0174 W0158 W0154 W0050 W1411 M2270 M2308 M2313 M2384 M2411 M2412 M2442 W1491 M2934 M2921 M2896 W1597 W1583 W1572 M2376 M1754 M1780 M1697 M1782 M2313 M2322 M2384 M2374 M2398 M2438 M2367 M2960 M2959 M2938 M2933 M2931 W1564 W1769 W1771 W1776 W1780 W1782 W1783 M1113 W0156 M0133 M0136 M1237 M1781 M2452 W1482 W1572 M2452 M2936 M2937 M2940 M2944 M2954 M2974 M2975 M2997 W1787 W1779 M0157 M0133 M0076 M0068 M0066 M0018 M0017 M1780 M1781 M1782 M1778 M0087 W0898 W0911 M1697 M1780 M1781 M1782 M2322 M2314 M2374 M1754 M1704 M1683 W1409 W1408 M1304 M1279 M1221 W0906 W0911 W0898 M0001 W1492 M2419 M2404 M2425 M2438 M2381 M2363 M2346 M2313 M2386 M2452 M2423 W1560 W1384 W1409 W1492 W0898 W0001 M2419 M2423 M2452 M2314 M2322 M2374 M1782 M1781 M1780 M1697 M1683 M1704 M1754 M1221 M1279 M1304 M1782 M1778 M0087 M0898 M0911 M0898 M0001 M2419 M2423 M2452

page 13b(2)

M2883 M2896 M1784 W1410 M2967 W1407 W0989 M1262 M1674 M1675 M2441 M1675 M0139 M1674 W1481 M1675 M1117 M0261 M1377 M1675 M2386

also page 15

page 50

page 14b(2)

M2382 M1671 M1702 M1712 M1759 M1774 M1773 M1815 M1311 M1742 M2352 M2386 M2430 M2541 M1594 M1596 M1671 M1693 M1712 M1715 M1759 M1397 M1670 M2323 M2386 M1555 M1596 M1558 M1752 M1397 M2377 M2328 M2329 M1715 M1693 M1564 M2382 M2392 M2426

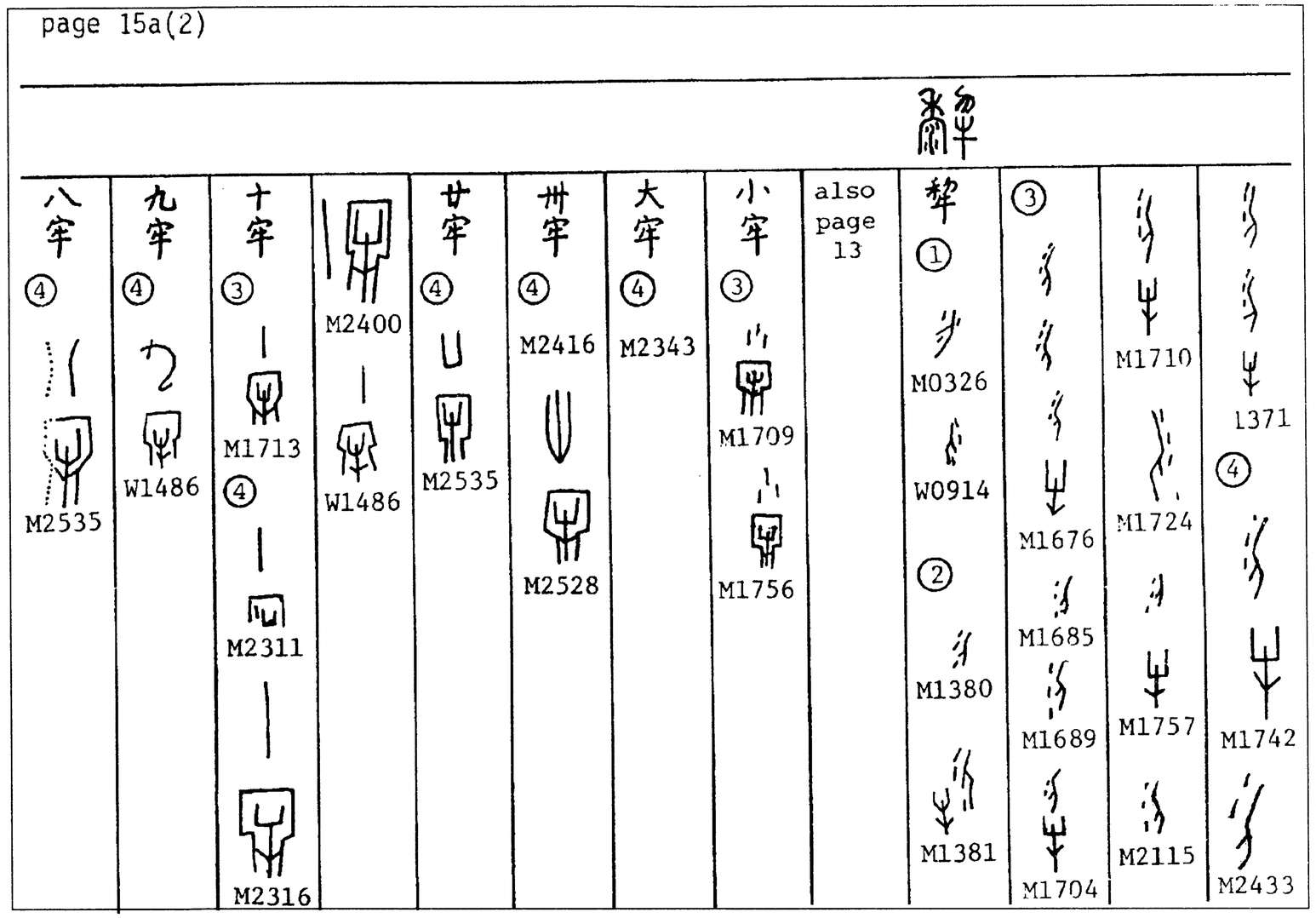
page 13a(2)

M2373 M2370 M2376 M1378 M2327 M2370 M2373 M0899 M2312 M2312 M2376 M2312 M2327 M2372 M0904 M2320 M2321

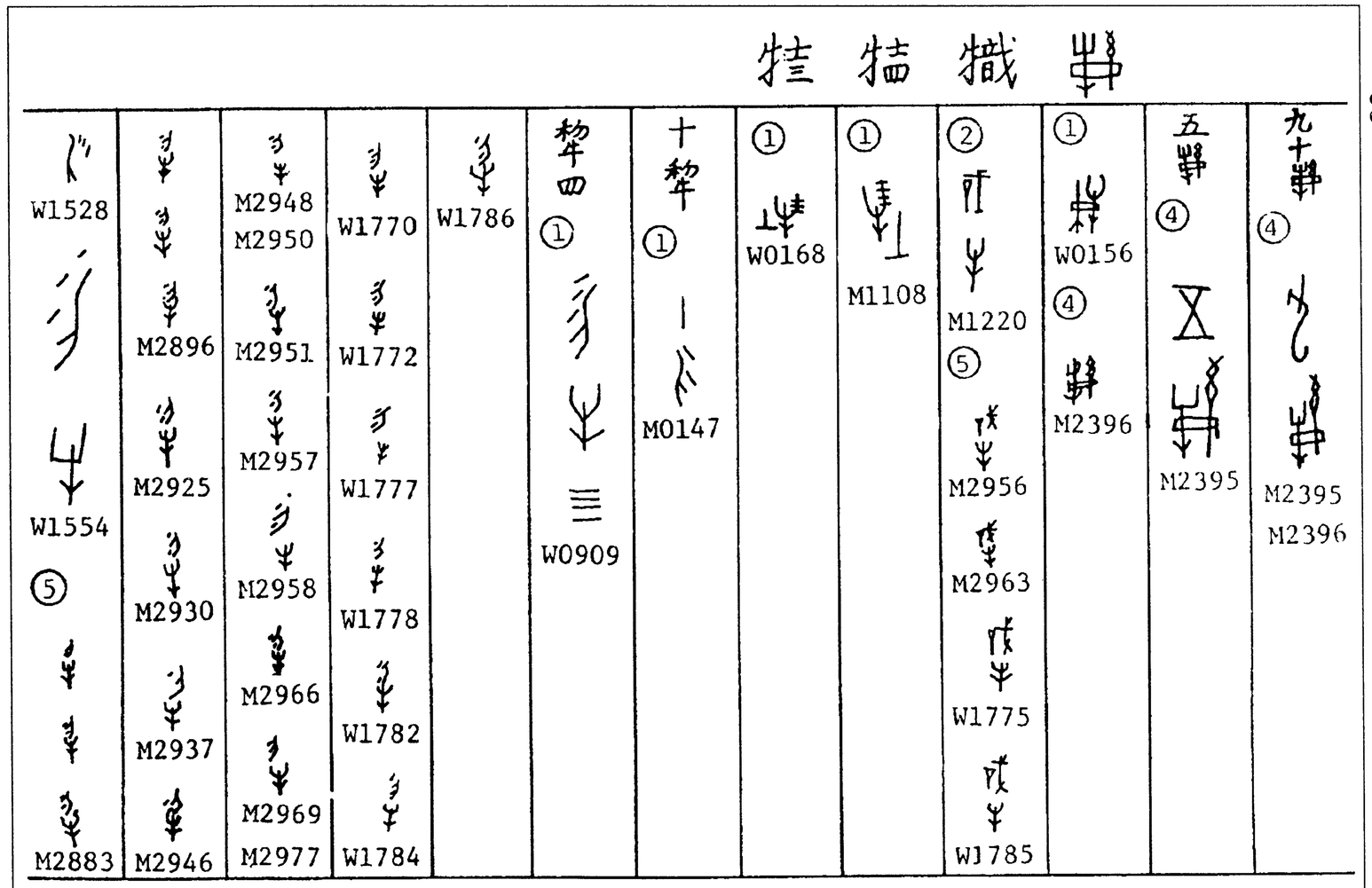
page 14a(2)

M1686 M1411 M1370 M1819 M1786 M1774 M1704 M0160 M2882 M2881 M2408 M2882 M2430 M2541 M2357 M2377 M2378 M2357 M2321 M2357 M2352 M2904 M2903 M2899 M2897 M2896 M2887 M2885 M2886 M2890 M2888 M2891 M2894 M2882 M2881

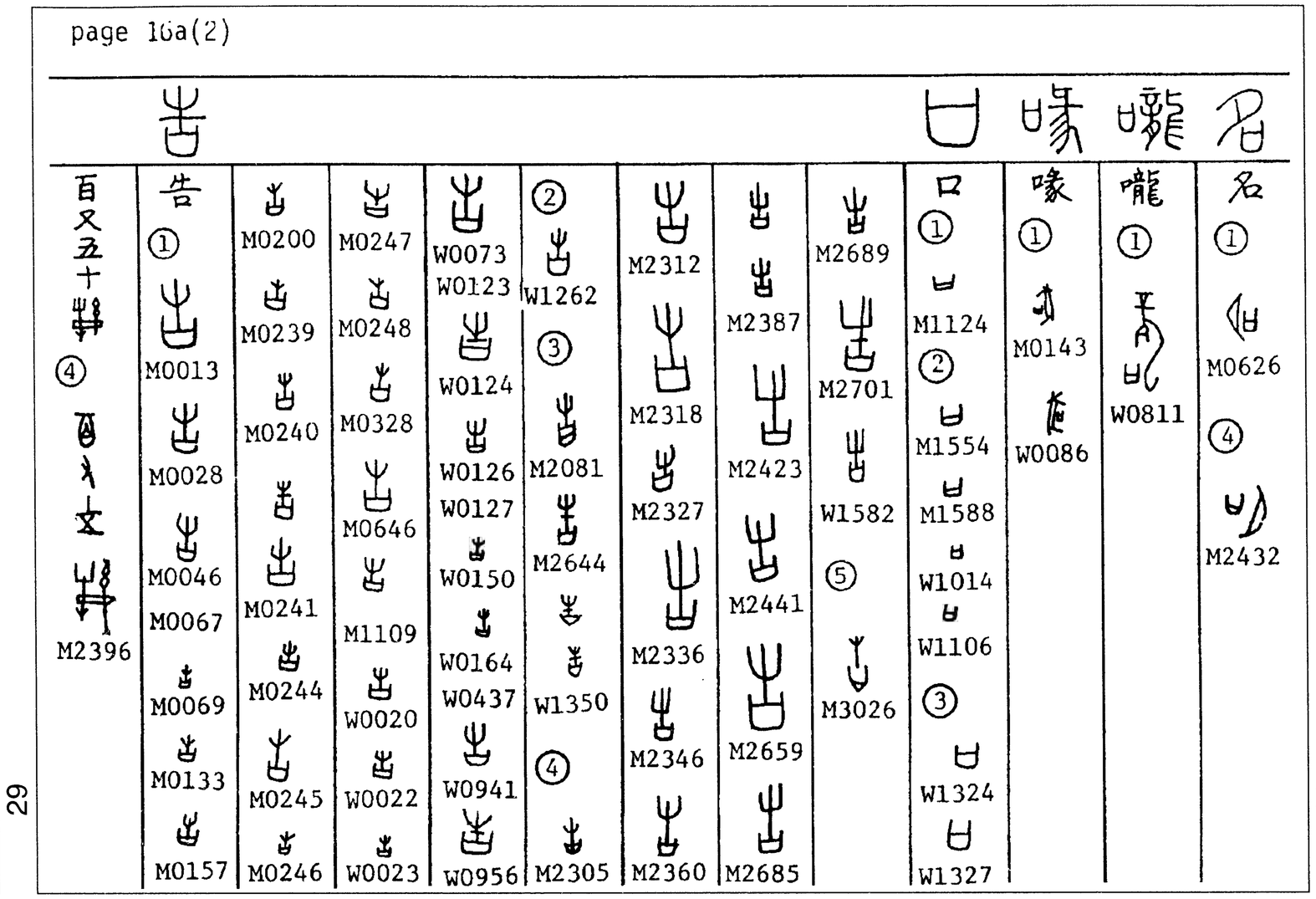
page 15a(2)



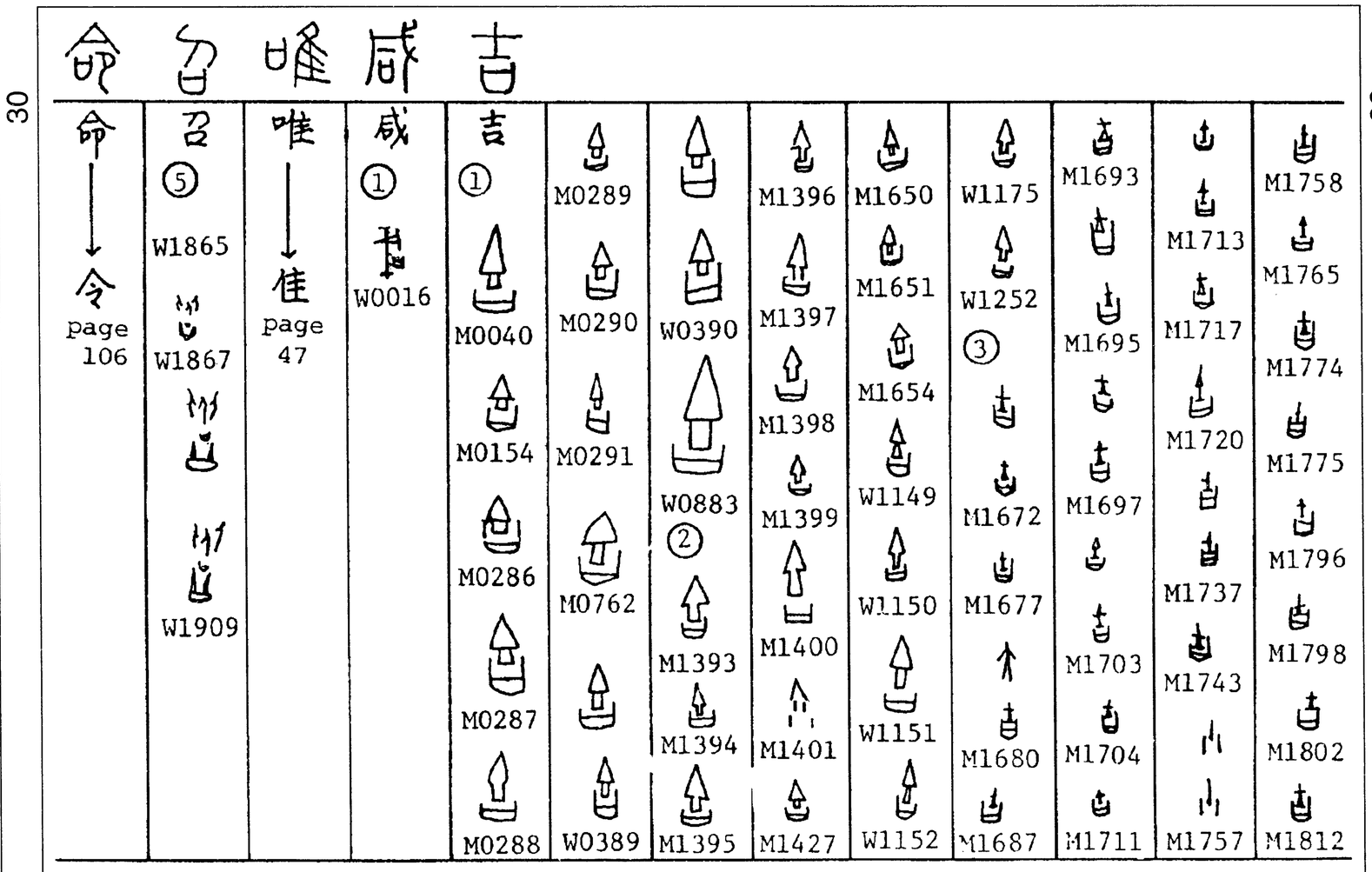
page 15b(2)



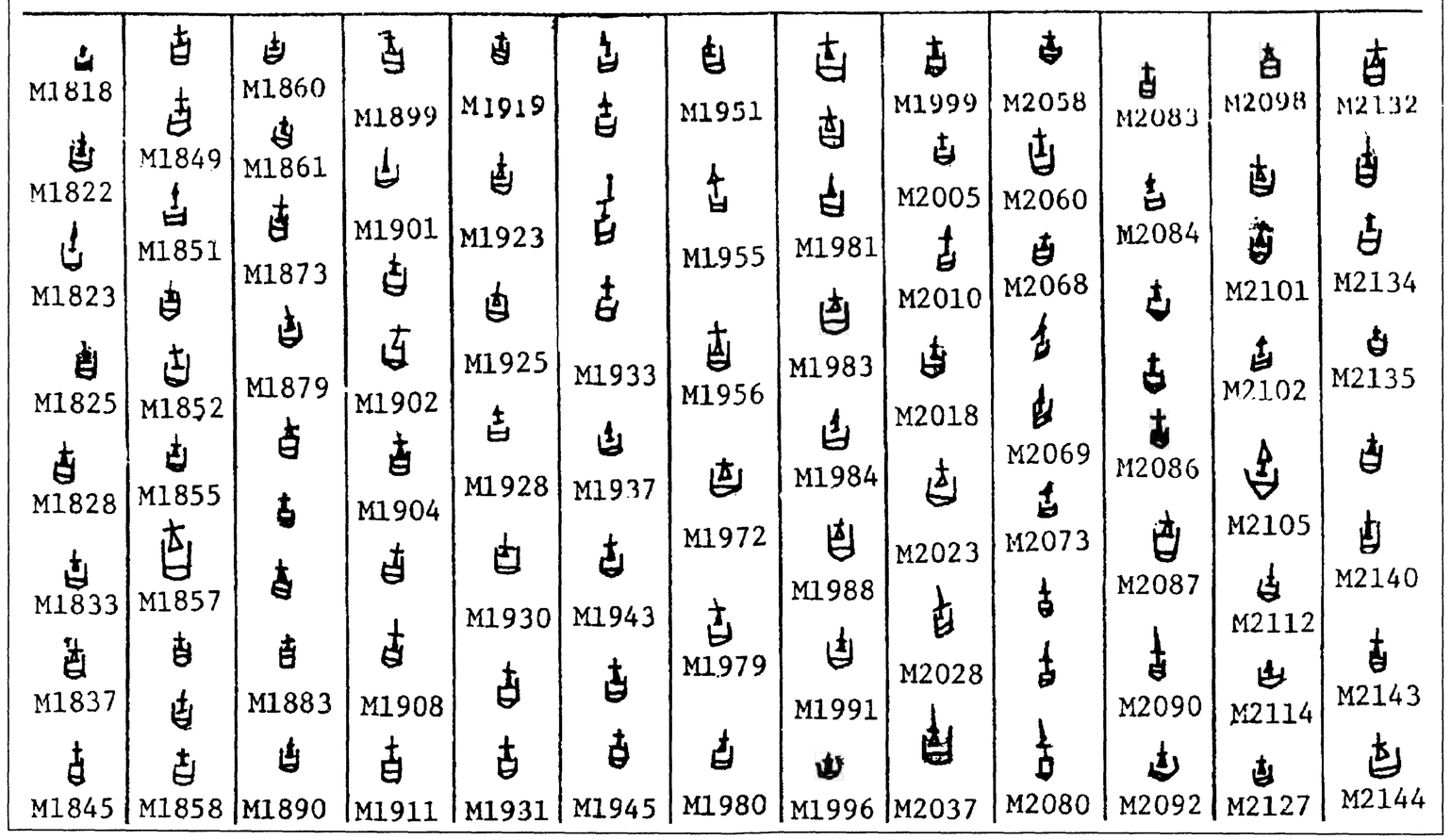
page 16a(2)



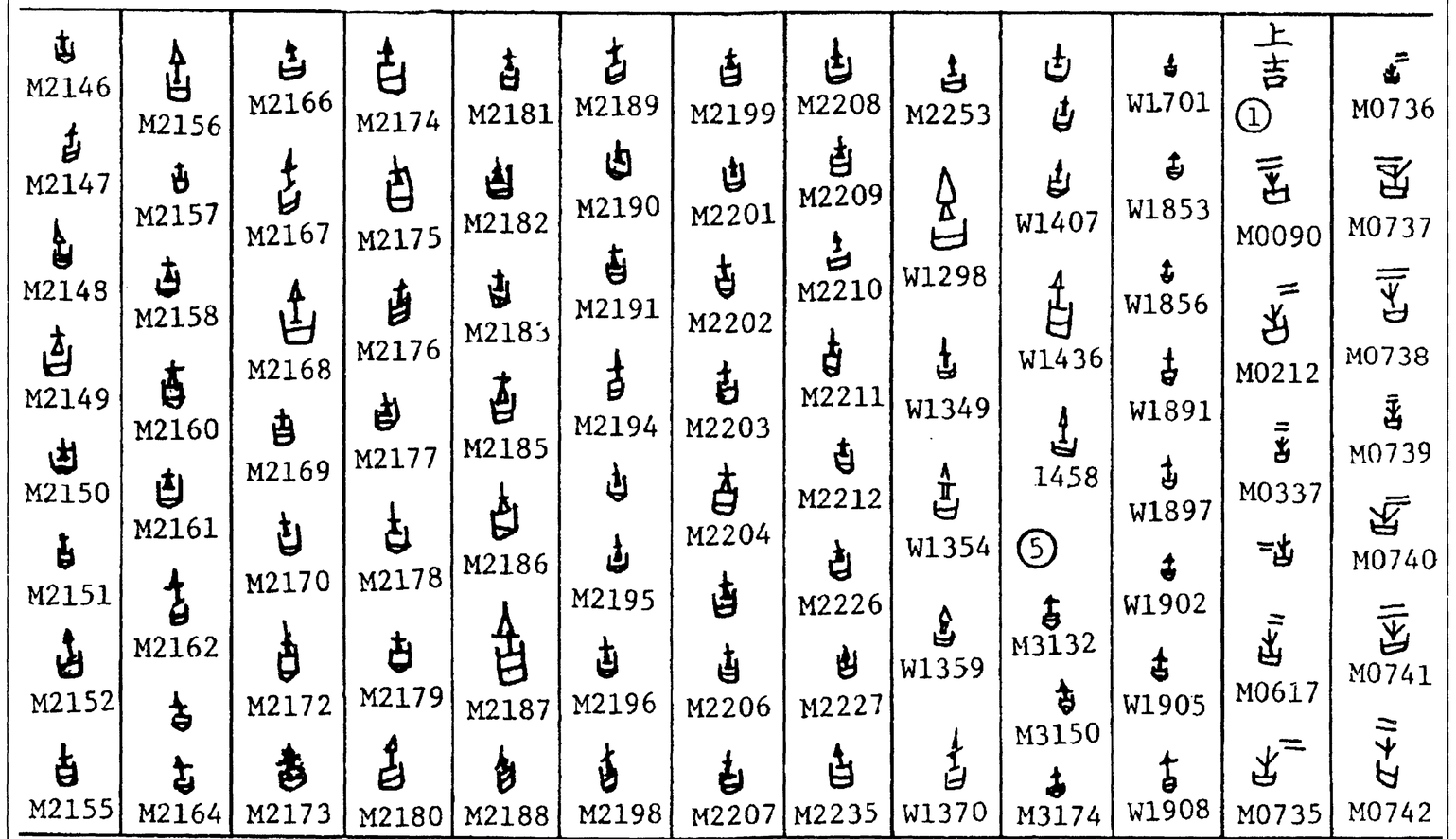
page 16b(2)



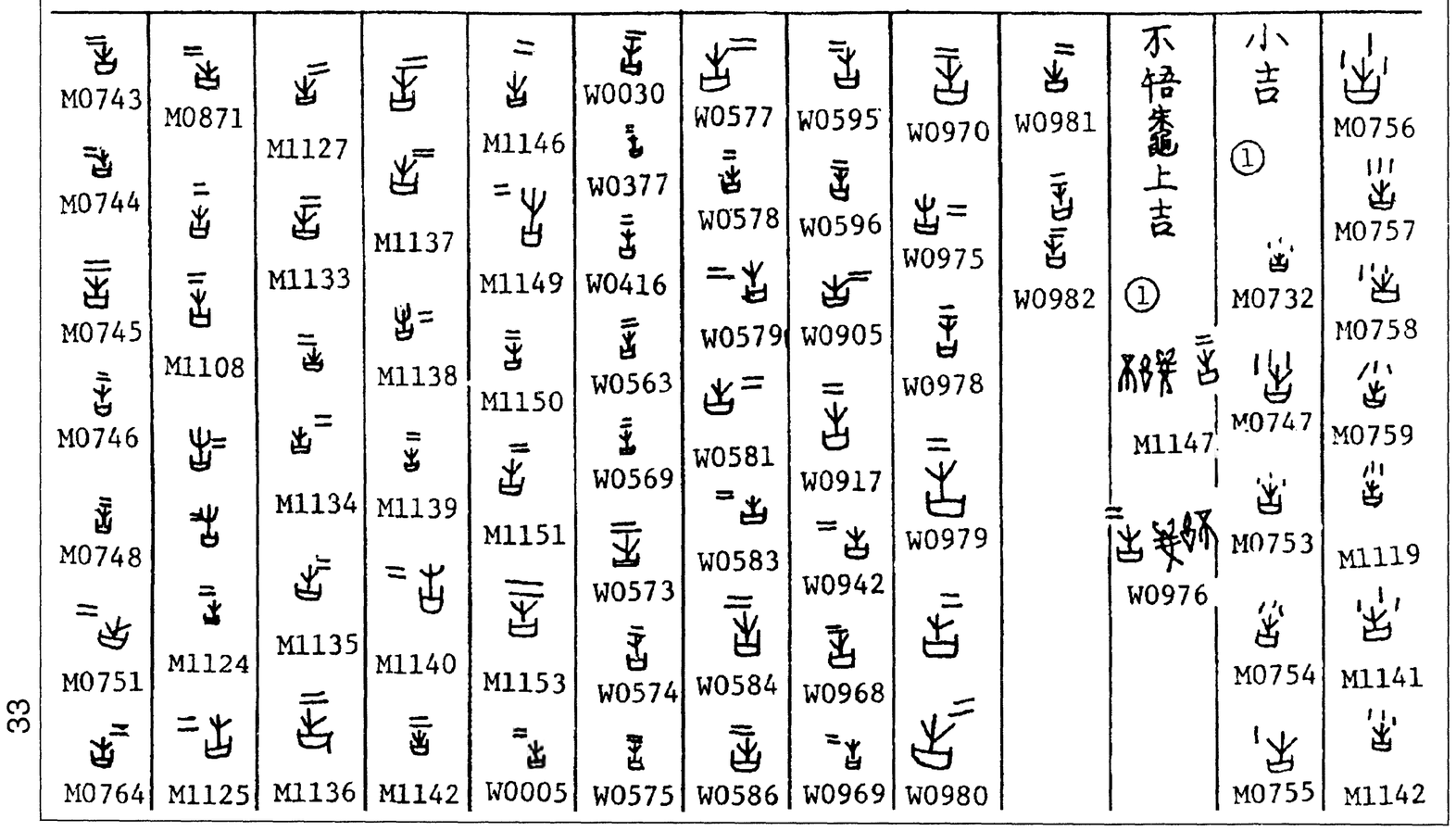
page 17a(2)



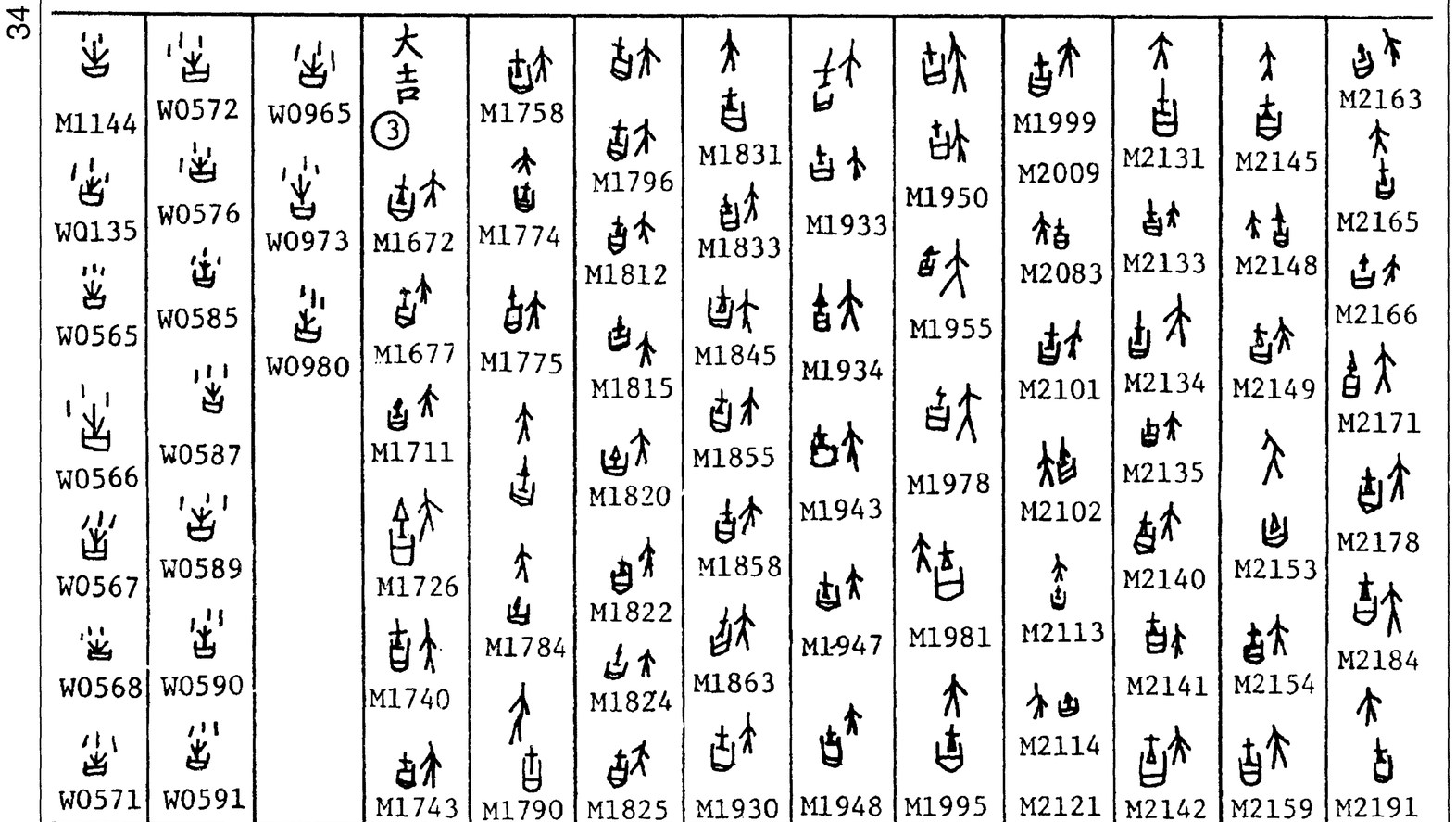
page 17b(2)



page 18a(2)



page 18b(2)



page 19a(2)

| 𠂤 | 𠂤 | 𠂤 |

歲	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步
M0160	① M0009	① M0532	M0534	M0535	M0541	M0542	M0680	M0991	W0152	W0334	W0336	W0337	W0338
M0341	M0012	M0532	M0534	M0535	M0541	M0542	M0680	M0991	W0152	W0334	W0336	W0337	③ M1785
M1113	M0081	M0532	M0534	M0535	M0541	M0542	M0680	M0991	W0152	W0334	W0336	W0337	M2097
W0028	M0153	M0532	M0534	M0535	M0541	M0542	M0680	M0991	W0152	W0334	W0336	W0337	④ M2346
W0130	M0155	M0532	M0534	M0535	M0541	M0542	M0680	M0991	W0152	W0334	W0336	W0337	M2381
W0859	M0159	M0532	M0534	M0535	M0541	M0542	M0680	M0991	W0152	W0334	W0336	W0337	M2675
W0898	M0159	M0532	M0534	M0535	M0541	M0542	M0680	M0991	W0152	W0334	W0336	W0337	M2675

步	登	登	弗	各	各
M2540	① M0792	① M0792	④ W1481	① M0203	① M0203
M2667	M0792	M1101	W1481	M0664	M0664
M2668	M0792	W0452	W1481	M0664	M0664
M2669	M0792	W0452	W1481	M0664	M0664
M2670	M0792	W0452	W1481	M0664	M0664
M2675	M0792	W0452	W1481	M0664	M0664
M3159	M0792	W0452	W1481	M0664	M0664

各	帛	登	步
④ M2480	① M0890	① M0792	M2694
M2480	M0890	M1101	M2713
M2480	M0890	W0452	W1625
M2480	M0890	W0452	⑤ M3159
M2480	M0890	W0452	M3159
M2480	M0890	W0452	M3159
M2480	M0890	W0452	M3159

各
① M0203
M0664
M0664
M0664
M0664
M0664
M0664

正	正	此	今歲	今	今	今	今	今	今	今	今	今	今
M2054	M1699	③ M1733	① M1089	M3041	W1720	W1721	W1722	W1723	W1724	W1736	⑤ M2867	M2868	M2869
M2105	M1714	M1836	② W1262	M3041	W1720	W1721	W1722	W1723	W1724	W1736	M2867	M2868	M2869
M2128	M1727	M1836	⑤ W1792	M3041	W1720	W1721	W1722	W1723	W1724	W1736	M2867	M2868	M2869
W1314	M1772	M1836	M1836	M3041	W1720	W1721	W1722	W1723	W1724	W1736	M2867	M2868	M2869
④ M0595	M1784	M1836	M1836	M3041	W1720	W1721	W1722	W1723	W1724	W1736	M2867	M2868	M2869
M2508	M1825	M1836	M1836	M3041	W1720	W1721	W1722	W1723	W1724	W1736	M2867	M2868	M2869
⑤ M2991	M1825	M1836	M1836	M3041	W1720	W1721	W1722	W1723	W1724	W1736	M2867	M2868	M2869

正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
① M0085	M0127	M0230	M0708	M1043	M1157	W0234	W0644	W0749	W0772	② M1386	W1155	W1222	W1506
M0085	M0127	M0230	M0708	M1043	M1157	W0234	W0644	W0749	W0772	M1386	③ W1669	M1686	M1696
M0085	M0127	M0230	M0708	M1043	M1157	W0234	W0644	W0749	W0772	M1386	M1696	M1696	M1696
M0085	M0127	M0230	M0708	M1043	M1157	W0234	W0644	W0749	W0772	M1386	M1696	M1696	M1696
M0085	M0127	M0230	M0708	M1043	M1157	W0234	W0644	W0749	W0772	M1386	M1696	M1696	M1696
M0085	M0127	M0230	M0708	M1043	M1157	W0234	W0644	W0749	W0772	M1386	M1696	M1696	M1696
M0085	M0127	M0230	M0708	M1043	M1157	W0234	W0644	W0749	W0772	M1386	M1696	M1696	M1696

正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
W1155	M1222	W1506	③ W1669	M1686	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696
M1222	W1506	③ W1669	M1686	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696
M1222	W1506	W1669	M1686	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696
M1222	W1506	W1669	M1686	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696
M1222	W1506	W1669	M1686	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696
M1222	W1506	W1669	M1686	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696
M1222	W1506	W1669	M1686	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696	M1696

正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
M1699	M1714	M1727	M1772	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784
M1699	M1714	M1727	M1772	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784
M1699	M1714	M1727	M1772	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784
M1699	M1714	M1727	M1772	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784
M1699	M1714	M1727	M1772	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784
M1699	M1714	M1727	M1772	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784
M1699	M1714	M1727	M1772	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784	M1784

正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
M1822	M1823	M1824	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825
M1822	M1823	M1824	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825
M1822	M1823	M1824	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825
M1822	M1823	M1824	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825
M1822	M1823	M1824	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825
M1822	M1823	M1824	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825
M1822	M1823	M1824	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825	M1825

正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
M2105	M2128	W1314	④ M0595	M2508	⑤ M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991
M2105	M2128	W1314	M0595	M2508	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991
M2105	M2128	W1314	M0595	M2508	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991
M2105	M2128	W1314	M0595	M2508	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991
M2105	M2128	W1314	M0595	M2508	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991
M2105	M2128	W1314	M0595	M2508	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991
M2105	M2128	W1314	M0595	M2508	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991	M2991

步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步
M1248	M1249	M1250	W1255	W1261	M1273	M1277	M1278	M1279	M1280	M1281	M1282	M1283	M1284
M1249	M1250	W1255	W1261	M1273	M1277	M1278	M1279	M1280	M1281	M1282	M1283	M1284	M1285
M1250	W1255	W1261	M1273	M1277	M1278	M1279	M1280	M1281	M1282	M1283	M1284	M1285	M1286
W1255	W1261	M1273	M1277	M1278	M1279	M1280	M1281	M1282	M1283	M1284	M1285	M1286	M1287
W1261	M1273	M1277	M1278	M1279	M1280	M1281	M1282	M1283	M1284	M1285	M1286	M1287	M1288
M1273	M1277	M1278	M1279	M1280	M1281	M1282	M1283	M1284	M1285	M1286	M1287	M1288	M1289
M1277	M1278	M1279	M1280	M1281	M1282	M1283	M1284	M1285	M1286	M1287	M1288	M1289	M1290

步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步
M1279	M1280	M1281	M1282	M1283	M1284	M1285	M1286	M1287	M1288	M1289	M1290	M1291	M1292
M1280	M1281	M1282	M1283	M1284	M1285	M1286	M1287	M1288	M1289	M1290	M1291	M1292	M1294
M1281	M1282	M1283	M1284	M1285	M1286	M1287	M1288	M1289	M1290	M1291	M1292	M1294	M1295
M1282	M1283	M1284	M1285	M1286	M1287	M1288	M1289	M1290	M1291	M1292	M1294	M1295	M1296
M1283	M1284	M1285	M1286	M1287	M1288	M1289	M1290	M1291	M1292	M1294	M1295	M1296	③ M1671
M1284	M1285	M1286	M1287	M1288	M1289	M1290	M1291	M1292	M1294	M1295	M1296	③ M1671	M1675
M1285	M1286	M1287	M1288	M1289	M1290	M1291	M1292	M1294	M1295	M1296	③ M1671	M1675	M1702

步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步
M1296	③ M1671	M1675	M1702	M1704	M1705	M1706	M1708	M1709	M1710	M1711	M1769	M1799	M1801
③ M1671	M1675	M1702	M1704	M1705	M1706	M1708	M1709	M1710	M1711	M1769	M1799	M1801	W1371
M1675	M1702	M1704	M1705	M1706	M1708	M1709	M1710	M1711	M1769	M1799	M1801	W1371	④ M1674
M1702	M1704	M1705	M1706	M1708	M1709	M1710	M1711	M1769	M1799	M1801	W1371	④ M1674	M2316
M1704	M1705	M1706	M1708	M1709	M1710	M1711	M1769	M1799	M1801	W1371	④ M1674	M2316	M2359
M1705	M1706	M1708	M1709	M1710	M1711	M1769	M1799	M1801	W1371	④ M1674	M2316	M2359	M2404
M1706	M1708	M1709	M1710	M1711	M1769	M1799	M1801	W1371	④ M1674	M2316	M2359	M2404	M2421

步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步
M2311	M2313	M2313	M2315	M2316	M2320	M2321	M2328	M2359	M2337	M2380	M2383	M2386	M2404
M2313	M2313	M2315	M2316	M2320	M2321	M2328	M2359	M2337	M2380	M2383	M2386	M2404	M2421
M2313	M2315	M2316	M2320	M2321	M2328	M2359	M2337	M2380	M2383	M2386	M2404	M2421	M2528
M2315	M2316	M2320	M2321	M2328	M2359	M2337	M2380	M2383	M2386	M2404	M2421	M2528	M2528
M2316	M2320	M2321	M2328	M2359	M2337	M2380	M2383	M2386	M2404	M2421	M2528	M2528	M2528
M2320	M2321	M2328	M2359	M2337	M2380	M2383	M2386	M2404	M2421	M2528	M2528	M2528	M2528
M2321	M2328	M2359	M2337	M2380	M2383	M2386	M2404	M2421	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528

步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步	步
M2425	M2405	M2407	M2408	M2414	M2416	M2421	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528
M2425	M2405	M2407	M2408	M2414	M2416	M2421	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528
M2425	M2405	M2407	M2408	M2414	M2416	M2421	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528
M2425	M2405	M2407	M2408	M2414	M2416	M2421	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528
M2425	M2405	M2407	M2408	M2414	M2416	M2421	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528
M2425	M2405	M2407	M2408	M2414	M2416	M2421	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528
M2425	M2405	M2407	M2408	M2414	M2416	M2421	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528	M2528

逝	過	征	徙	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過
① M0516	③ M1928	page 22	① M0598	M0551	M0557	M0582	M0650	M0660	M1168	W0312	W0382	W0382	W0382
M0516	M2058	page 22	M0598	M0551	M0557	M0582	M0650	M0660	M1168	W0312	W0382	W0382	W0382
M0516	M2059	page 22	M0598	M0551	M0557	M0582	M0650	M0660	M1168	W0312	W0382	W0382	W0382
M0516	M2060	page 22	M0598	M0551	M0557	M0582	M0650	M0660	M1168	W0312	W0382	W0382	W0382
M0516	M2060	page 22	M0598	M0551	M0557	M0582	M0650	M0660	M1168	W0312	W0382	W0382	W0382
M0516	M2060	page 22	M0598	M0551	M0557	M0582	M0650	M0660	M1168	W0312	W0382	W0382	W0382
M0516	M2060	page 22	M0598	M0551	M0557	M0582	M0650	M0660	M1168	W0312	W0382	W0382	W0382

過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過
W0769	W0964	③ M2127	④ W1504	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510
W0769	W0964	③ M2127	④ W1504	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510
W0769	W0964	③ M2127	④ W1504	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510
W0769	W0964	③ M2127	④ W1504	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510
W0769	W0964	③ M2127	④ W1504	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510
W0769	W0964	③ M2127	④ W1504	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510
W0769	W0964	③ M2127	④ W1504	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510	W1510

過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過
W1451	W1453	W1454	W1455	M2061	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063
W1451	W1453	W1454	W1455	M2061	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063
W1451	W1453	W1454	W1455	M2061	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063
W1451	W1453	W1454	W1455	M2061	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063
W1451	W1453	W1454	W1455	M2061	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063
W1451	W1453	W1454	W1455	M2061	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063
W1451	W1453	W1454	W1455	M2061	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063	M2063

過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過
M2066	M2068	M2071	M2074	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077
M2066	M2068	M2071	M2074	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077
M2066	M2068	M2071	M2074	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077
M2066	M2068	M2071	M2074	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077
M2066	M2068	M2071	M2074	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077
M2066	M2068	M2071	M2074	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077
M2066	M2068	M2071	M2074	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077	M2077

過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過
M2078	M2079	M2081	M2082	M2083	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085
M2078	M2079	M2081	M2082	M2083	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085
M2078	M2079	M2081	M2082	M2083	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085
M2078	M2079	M2081	M2082	M2083	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085
M2078	M2079	M2081	M2082	M2083	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085
M2078	M2079	M2081	M2082	M2083	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085
M2078	M2079	M2081	M2082	M2083	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085	M2085

過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過
M2086	M2091	⑤ M3139	M3146	M3148	M3149	M3153	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154
M2086	M2091	M3139	M3146	M3148	M3149	M3153	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154
M2086	M2091	M3139	M3146	M3148	M3149	M3153	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154
M2086	M2091	M3139	M3146	M3148	M3149	M3153	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154
M2086	M2091	M3139	M3146	M3148	M3149	M3153	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154
M2086	M2091	M3139	M3146	M3148	M3149	M3153	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154
M2086	M2091	M3139	M3146	M3148	M3149	M3153	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154	M3154

過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過	過
M3156	M3157	M3158	W1858	W1867	W1904	W1906	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909
M3156	M3157	M3158	W1858	W1867	W1904	W1906	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909
M3156	M3157	M3158	W1858	W1867	W1904	W1906	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909
M3156	M3157	M3158	W1858	W1867	W1904	W1906	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909
M3156	M3157	M3158	W1858	W1867	W1904	W1906	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909
M3156	M3157	M3158	W1858	W1867	W1904	W1906	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909
M3156	M3157	M3158	W1858	W1867	W1904	W1906	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909	W1909

page 23a(2)

遘					通	迮	遲	遲	追		逐	
遘 ③ M1691 M1700 M1811 M1876	M1901 M1902 M1904 M1919	M1908 M1924 M1929 M1940	M1941 M1942 W1417	M2059 ⑤ M3049 M3139 M3176	通 ④ M2444 W1628	徙 ① W1005	遲 ① M0833 M0927 W0459	遲 ③ M1686 M2097 M2113 W1467	追 ① M0272 M0636 M0637 W0401 W0413	W0424 ④ M2281	逐 ① M0511 W0314 W0931 ② M1625 M1358	③ M2000 M2002 M2025

page 23b(2)

途	迪	迄	復	徃	循	復		會	得	
M2021 M2036 M2046 M2056	M2110 ④ M2657 W1534 ⑤ M3140 W1855 W1863	① W0959 ④ M2684	① M0326 ② M1538	④ M2393	復 → 复 page 73	往 → 生 page 77	循 ① M0268 M0575 M0614 M0626 W0403 W0450	退 ① M0825 W0854 ③ M2130 W1379 ④ M2351	M2647	③ M0390	得 ① M0943 W0359 W0598 ② M1014	M1062 ③ M2133

page 24a(2)

律	御							徵
律 ① W0827 ④ W1581	御 ① M0067 M0220 M0221 M0222 M0223 M0224	M0225 M0226 M0227 M0228 M0364 M0481 M1362	W0043 W0052 W0059 W0107 W0108 W0109 W0110 W0111	W0113 W0114 W0115 W0832 W0836 W0917	③ M2112 M2113 M2122 M2128 M2130	W1378 W1386 ④ M2267 M2325 M2419	M2353 M2434 W1501 W1518 W1581	大御 ④ M2312	① W0324 ② W1133 ⑤ M3143 M3145 W1865	茲 ⑤ M3139 M3141 M3142 W1885	小 ⑤ M3047	① W0989 W0990

page 24b(2)

祥	御	徉	徨	徜	徨	彷	徬	彎	迎
① M1128 ④ M2728	⑤ W1888	③ W1333 W1341	① M0486	③ M2021 M2642 W1441	④ W1648	④ M2332	① M0690	⑤ M3026	迎 ① M0012 M0107 M0137 M0422 M0433 M0484

M0680 M0681 M0711 M0734 M0889 W1076 W0117	W0157 W0255 W0287 W0620 W0631 W0736 W0757	W0785 W0886 W0889 W0956 ② M1229 M1258

page 25a(2)

行

M1511	M1903	④ M2321	W1519	大延 ① M0558	W0956	行 ① M0027	W1258	大行 ④ W1581	上行 ③ W1464	東行 ③ W1464	中行 ④ W1504	also page 104
M1625	M1998	M2435	W1602	M0682		② M1338	W1259					
W1223	M2233	M2512	M1607			W1032	W1284					
③	M2251		⑤ W1884			W1247	W1290					
M1709	W1372	M2528	W1903			W1251	W1291					
M1802	W1430	M2669	M3043									
M1826	W1438	W1517	M3139	W0399		W1255						

page 26a(2)

④ W1648	③ M1696	① W0876	冊 ① M0621 ③ M1714 M1717 M1729	① M0890								

③ M1983 M1988 M2011 M2025	衛 ① M0692 W0946 ③ M2126	M2131 M2132 ④ M2722	④ M2675	① M0679	① M0953	圉 ① M0713 M0720 M0729 M1127 W0936	踐 ① W0358 ③ M2016 ④ M2677 ⑤ M3139	尺 ① M0115	① M0103	品 ③ M1719 W1377 ④ M2357 M2395 M2396	𠙵 M2403 M2428 W1494 W1579	會 ② M1185 M1204 W1051

page 25b(2)

page 26b(2)

page 27a(3)

干 ① M0584 W0409 ③ M2132

① M0607

肉 ③ W1368 W1399

商 ① M0553 M0642 W0423 W0575 M1129

W0935 ④ M2342 M2397 W1566 ⑤ M3089 W1871

also page 117

① M1041

屮 ① M0353

古 ① M0353 M0357 M0356 M0561 M0627 M0683 W0405

② M1301 M1371 M1372 W1511 ④ M2265 M2282 M2298

M2303 M2312 also page 33

十 ① M0046 M0479 M0771 M1564 W0009 W0546 W0669

W0884 ③ W1306 ④ M2309 M2813 ⑤ W1818

53

page 28a(3)

丗 ① W0102 W0963

also page 106

言 ② M1423 M1425 M1426 M1428 M1429 M1432 M1433

M1435 W1129 M1679 W1130 W1263 M2108 M2110

訢 page 65

誥 ① M0597 W0402 W0443 W0950 ④ M2680

競 ② M1190

音 page 28

辛 ④ M2345

④ M2312

④ M2733

攴 ① M0677 M0678 M0948

① M1034 M1070

55

千 五十 ① M0276 M0478 ④ M2372

also pages 02 13 15 16 49 50 51 52 87 98 99 113 145 146

千 ① M1047 M1104 M1123

二千 ① M0958

三千 ① W0371 ④ M2719

廿 ① W0053 W0098 W0410 W0043 W0420 M0621

④ M2347 M2535

also pages 09 15 70 90 95 98

① M0945 W0668

④ M2718

卅 ① M0131 M0350 ② M1230 W0029 W1019 W1050

③ W1406 ④ M2416 M2426 W1654

also pages 13 15 50 98 111 113

54

page 27b(3)

卑 ① W0018 W0700

兵 ① M0319

龔 ① M0465

① M0795

④ M2280

③ M1760

④ M2429

④ M2343

異 ③ M1946 M2113

also page 82

興 ③ M2106 ④ M2408

高 ④ M2350 M2389

善 ① M0498 ③ W1398

56

page 28b(3)

page 29a(3)

also page 104	① M0317	③ W1402	④ M2680	④ M2353	⑤ W1725	餗 ① M0336 ③ M1700 ④ M2398	M2394	M3026	② M1052	④ M2648	埶 ① M0155 M0157 ② M1255 M1312	M1313 M1315 M1316 M1317 M1318 M1319 M1320

page 30a(3)

M1262 M1293 M1295 M1297 M1298 M1299	M1300 M1301 M1302 M1303 M1304 M1305	M1306 M1307 M1308 M1309 M1310 M1311 M1381	M1404 M1625 M1644 W1015 W1066 W1072 W1091	W1260 W1263 W1265 ③ M1680 M1683 M1684	M1687 M1691 M1692 M1694 M1696 M1698 M1699	M1702 M1704 M1705 M1706	M1708 M1713 M1714 M1721 M1722	M1725 M1726 M1727 M1730 M1731	M1746 M1752 M1755 M1759 M1772 M1774	M1777 M1778 M1784 M1802 M1809 M1813	M1814 M1816 M1821 M1823 M1824	M1822 M1825 M1827

M1321 M1323 M1324 M1325 M1629 W1028 W1029 W1031	③ M1763 M1878 M1881 M1902	M1907 M1945 M1984 ④	W1559 W1567	④ M2350 M2764 ⑤ M2842 M2843 M2844	M2845 M2846 M2847 M2848 M2978 W1703 W1731	𢦏 ① M0586	① M0308	④ M2539	also pages 84 85 91 95	① M0105 M0107 M0326 M0352 M0359 M0559 M0581	M0585 M0656 W0188 W0409 W0888 W0952	W0953 W0955 W1061 ② M1203 M1221 M1224

page 29b(3)

page 30b(3)

M1828 M1829 M1830 M1831 M1833 M1836	M1841 M1846 M1850 M1852 M1853 M1859 M1863 M1868	M1869 M1886 M1896 M1917 M1956	M1982 M1994 M2000 M2002 M2005 M2019	M2020 M2054 M2055 M2092 M2094 M2100	M2107 M2112 M2126 M2127 M2128 M2133 M2221	M2538 M2644 W1314 W1315 W1368 W1369	W1370 W1371 W1373 W1374 W1384	W1380 W1399 W1400 W1411 W1445	W1447 W1450 W1464 ④ M1804 M2271 M2295	M2298 M2299 M2313 M2315	M2316 M2317 M2319 M2320 M2327 M2328 M2329	M2321 M2332 M2333

page 31a(3)

M2347 M2350 M2354 M2359 M2361 M2371
M2377 M2380 M2383
M2384 M2386 M2389
M2401 M2403 M2405 M2412 M2413 M2414
M2416 M2419 M2421 M2425 M2430
M2435 M2455 M2472 M2474 M2483 M2508
M2535 M2536 M2539 M2621 M2659 M2673
M2678 M2682 M2693 M2711 M2715 W1496 W1546
W1554 W1555 W1556 W1558 W1563 W1564 W1565
W1569 W1584 W1586 W1589 W1596 W1597
W1621 W1628 W1633 W1654
W1656 W1671 ⑤ M2896 M2931 M2937 M2938 M2940
M2952 M2954 M2955 M2960 M2974 M2975 M2991 M3017 M3036

61

page 32a(3)

尹

also page 165

尹 ① M0676 ② M1172 M1184 M1196 M1202
M1204 M1223 M1230 M1235 M1237 M1279 M1288
M1293 M1315 M1318 M1319 M1333 M1342 M1365 M1501
M1515 M1538 M1558 M1636 W1013 W1023 W1034 W1044
W1102 W1122 W1137 W1202
多尹 ① W0348
黃尹 ① M0101 M0104
W0899 ② M1266
褧 ③ M2137
建褧 ③ M1693 M1706 M1730
M1749 M1791 M1833 M1869
M1864 M1912 M2136 M2137

63

page 31b(3)

又

M3040 M3161 W1771 W1776 W1787 W1871 W1901 W1903 W1908

also pages 02 13 16 50 87

父 ① M0037 M0039 M0041 M0042 M0043 M0044
M0045 M0246 M0255 M0949 M1052 W0058 W0059
W0060 W0061 W0063 W0066 ④ M2328 M2363 M2755
W1527 ⑤ W1874
二父 ③ M1680
田父 ④ M2266
多父 ① M0079 W0067 ③ M1682
介父 ① W0064
多介父 ① M0080

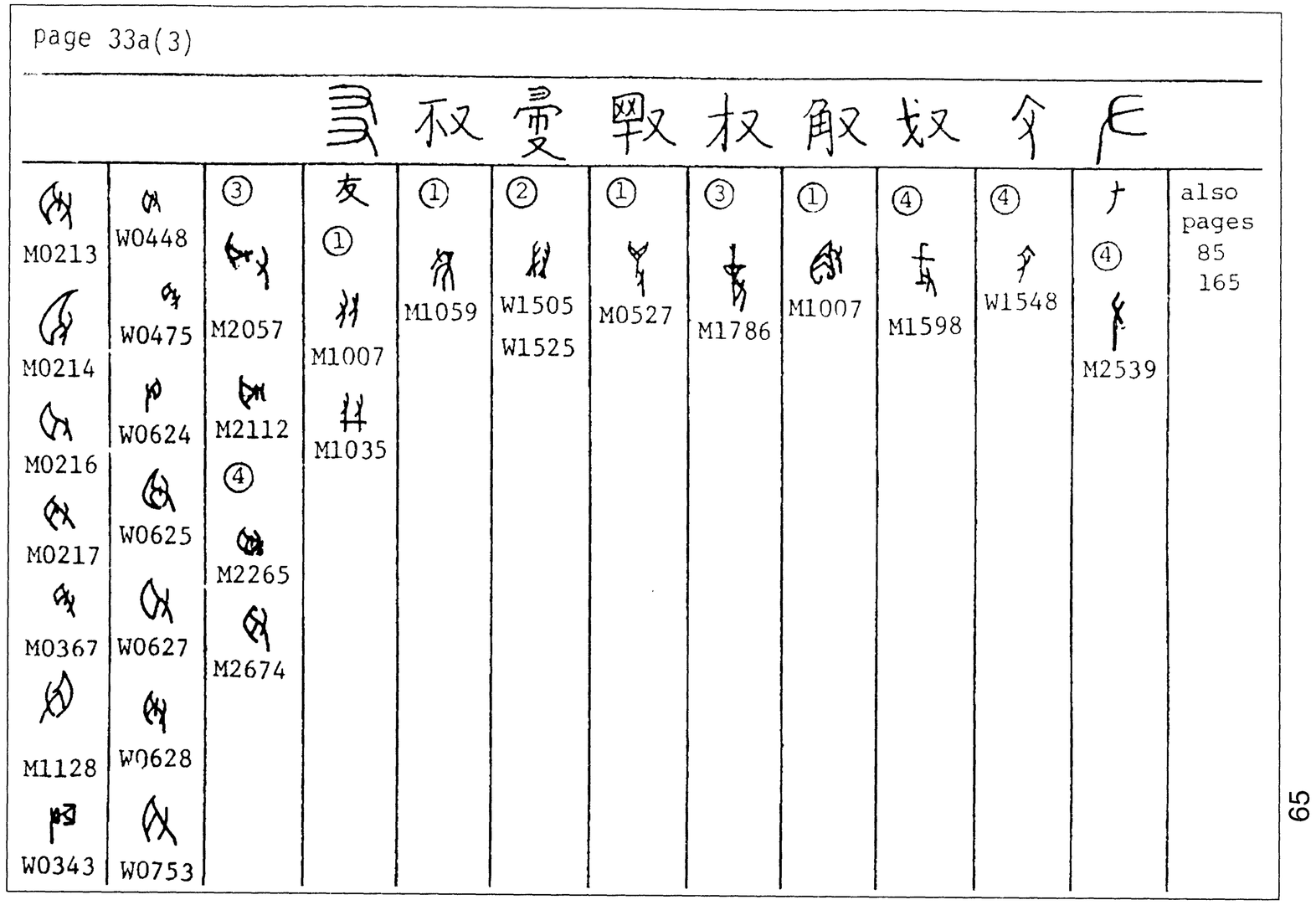
also pages 148 150 153 154 157 158 160

叟 ① W0360 W0961 W0962 ④ M2475

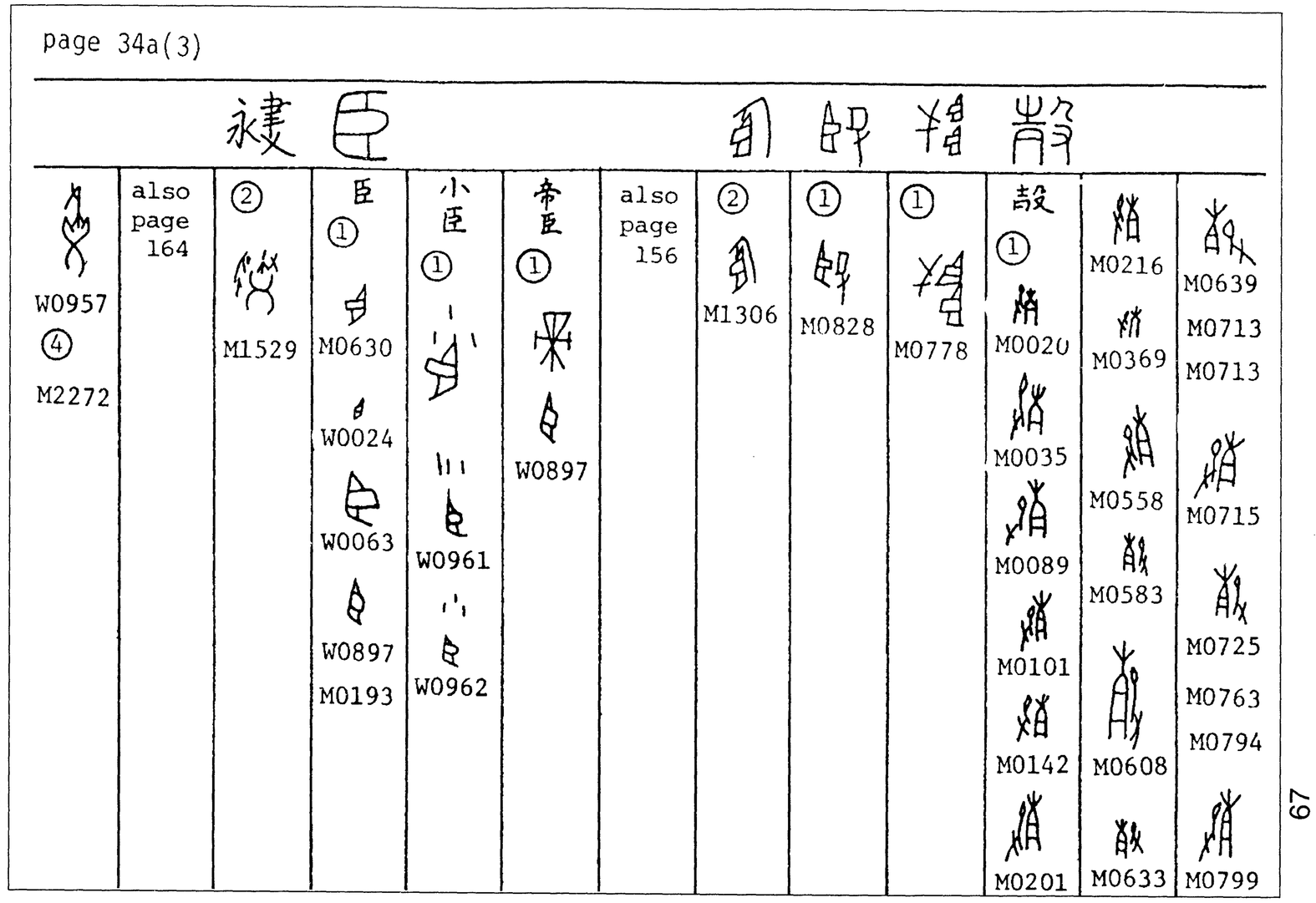
page 32b(3)

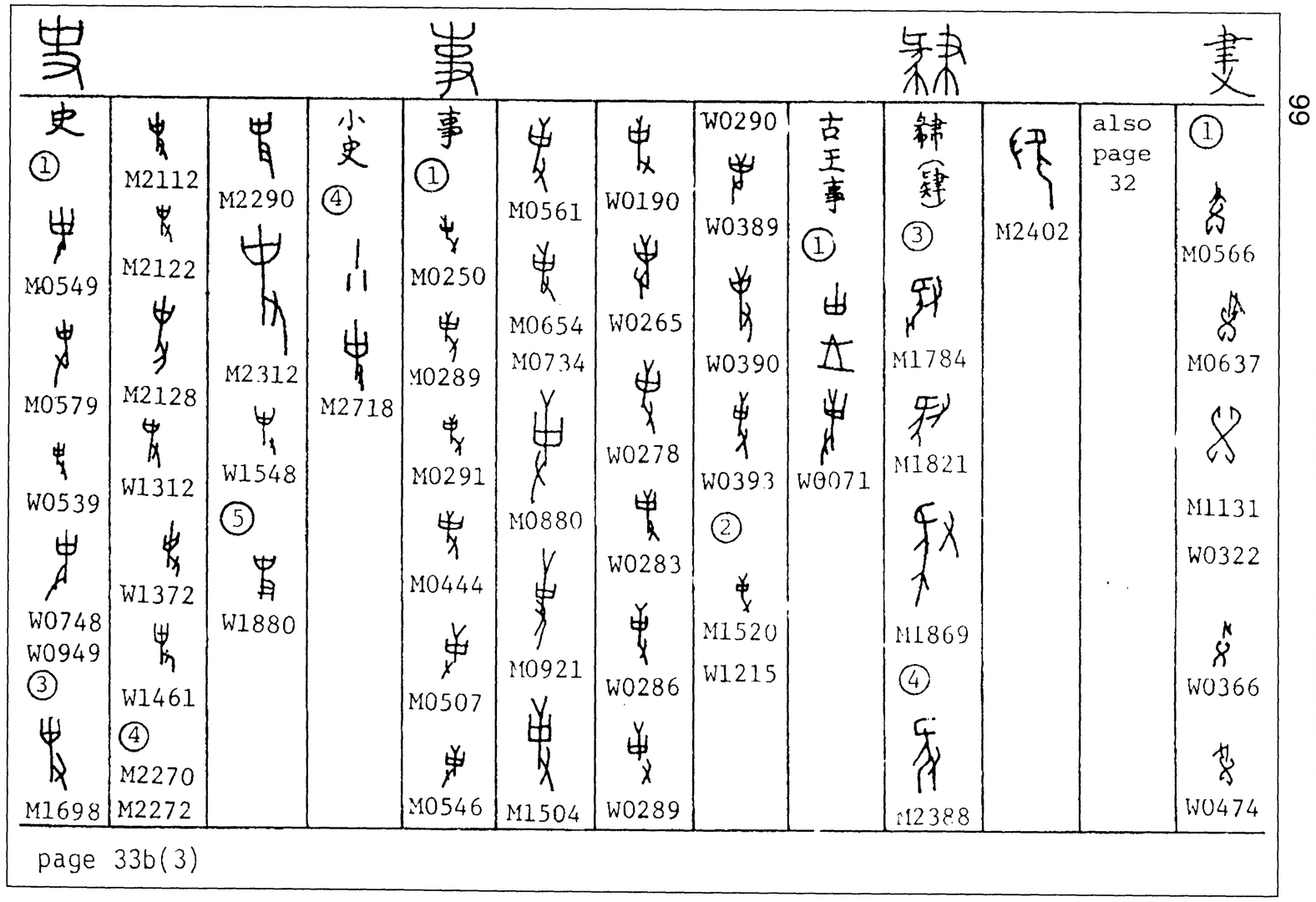
M2138 M2139 W1368
及 ① M0342 M0343 M0355 M0548 W0382 ③ M2112
M2118 M2130 W1466 ④ M2678 W1512
W1631 ⑤ W1903
反 ① M0047 M0873 W0037 ④ W1507 W1518 W1524
叡 ② M1225 M1235 M1248 M1278 M1279 M1282 M1342
M1343 M1344 M1345 M1346 M1347 M1348 M1349 W1011
W1025 W1026 W1038 W0140 W1049 W1050 W1052 W1060
W1255 ⑤ M2870 M2873 M2878 M3018 M3019 M3020
M3023 M3026 M3027 W1717 W1729 W1738 W1739
W1741 W1742 W1744 W1747 W1751 W1752 W1754
W1756 W1758 W1759 W1760 W1764 W1766 W1767
取 ① M0103 M0206 M0207 M0208 M0209 M0212

page 33a(3)

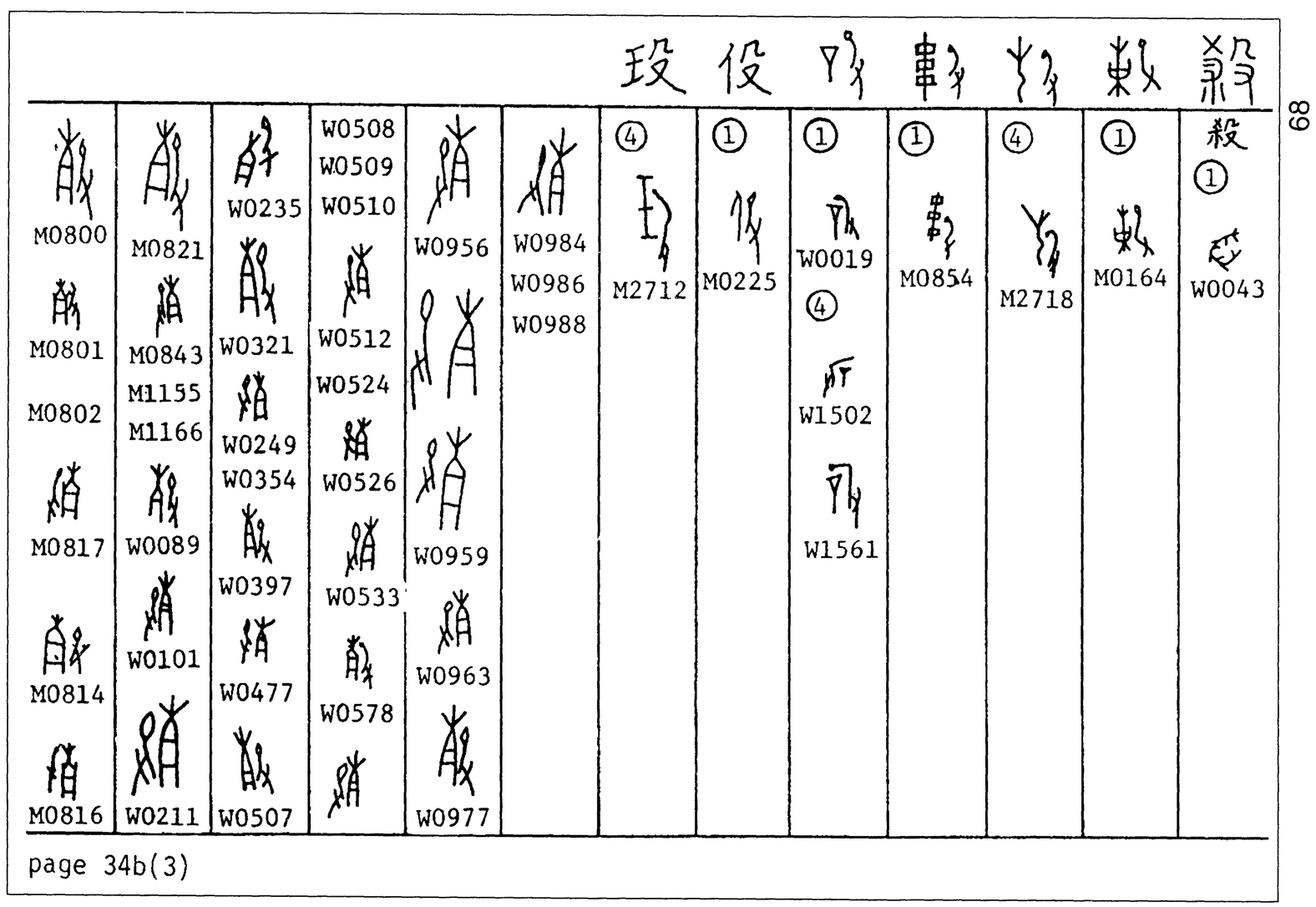


page 34a(3)





page 33b(3)



page 34b(3)

page 35a(3)

尋		專		啟							旧
尋 ① M0957 ③ M1814 M1827 M1886	M2116 M1312 W1391 W1448 ④ M2343	M2393 W1571 W1576 W1845	專 ① M0804 W0448 W0523 W0536 ③ M0473	④ W1630	啟 ① M0306 M0456 M0457 M0458 M0459 M0460 M0461	M0620 M0667 W0252 W0253 W0255 W0256 W0257 W0258	W0259 ② W1098 W1099 ③ M1759 M1935	W1419 ④ M2387 M2502 M2516 M2525 M2527	M2528 M2530	M2534 M2536 M2719 W1496 W1609	大敌 ④ W1496	① W0239 W0855 ④ M2687

page 35b(3)

徹		敗		攸	寇	鼓	攻	孳	牧		斁	敎
徹 ① M0320	also page 02	敗 ① M0257 M0898 ② M1294 M1487 ③ M1709	④ M2289 M2528	攸 ⑤ M3091 W1901	寇 ① W0420 W0451 ② M1322	鼓 → 鼓 page 68	攻 ① W0053 W0421 W0468	孳 → 孳 page 32	牧 ① M0512 M0513 ⑤ W1903	also page 164	③ M1968	③ M1808

page 36a(3)

警	敬	狱	狩	叩	狄	狱	學	卜					
③ M1981	③ M2124	③ W1886	① W0893	① M0689	④ M2291	④ M2342	學 ① M0109 W0890 W0997 ③ M1803	卜 ① M0012 M0022 M0027 M0028 M0053 M0056	M0060 M0062 M0064 M0065 M0067 M0076	M0083 M0091 M0093 M0103 M0104 M0110 M0128 M0131	M0132 M0133 M0137 M0138 M0139 M0140	M0144 M0156 M0157 M0161 M0172 M0176 M0199

page 36b(3)

M0201	M0273	M0448	M0637	M0809	M1123	W0080	W0264	W0333	W0448	W0620	W0793	W0963
	M0277	M0454	M0650	M0811	M1124	W0089	W0266	W0341	W0451	W0629	W0807	W0980
M0203	M0289	M0468	M0656	M0819	M1125	W0100	W0267	W0348	W0452	W0631	W0810	W0983
	M0291	M0470	M0661	M0827	M1126	W0101	W0268	W0352	W0464	W0633	W0820	W0984
M0215	M0305	M0473	M0662	M0832	M1127	W0110	W0270	W0355	W0475	W0635	W0823	W0985
	M0311	M0475	M0666	M0858	M1158	W0115	W0272	W0357	W0478	W0639	W0828	W0987
M0219	M0315	M0476	M0669	M0870	M1520	W0118	W0273	W0364	W0485	W0647	W0855	W1004
	M0318	M0477	M0672	M0907	M1546	W0131	W0274	W0364	W0494	W0652	W0872	②
	M0320	M0478	M0674	M0914	M1561	W0150	W0278	W0372	W0495	W0654	W0887	
	M0343	M0480	M0678	M0916	M1578	W0152	W0279	W0381	W0496	W0670	W0890	M0716
	M0352	M0481	M0689	M0923	W0022	W0175	W0283	W0382	W0510	W0680	W0897	
M0230	M0356	M0487	M0690	M0949	W0023	W0178	W0284	W0383	W0512	W0685	W0899	
	M0362	M0502	M0693	M0956	W0032	W0188	W0286	W0384	W0526	W0688	W0900	
	M0369	M0505	M0694	M1010	W0037	W0190	W0288	W0389	W0527	W0703	W0902	
M0241	M0374	M0522	M0713	M1021	W0043	W0204	W0290	W0390	W0528	W0707	W0925	
	M0377	M0525	M0715	M1044	W0044	W0216	W0291	W0391	W0529	W0709	W0927	
	M0396	M0526	M0725	M1060	W0045	W0225	W0292	W0392	W0531	W0717	W0930	M1122
M0245	M0407	M0541	M0728	M1067	W0048	W0246	W0293	W0393	W0535	W0721	W0931	
	M0410	M0544	M0759	M1085	W0050	W0252	W0295	W0407	W0537	W0730	W0933	M1169
	M0414	M0568	M0795	M1094	W0053	W0253	W0302	W0415	W0539	W0734	W0952	
	M0415	M0589	M0797	M1100	W0056	W0255	W0317	W0420	W0544	W0761	W0953	
M0249	M0421	M0591	M0806	M1108	W0065	W0258	W0320	W0434	W0544	W0774	W0956	M1181
	M0425	M0608	M0807	M1109	W0071	W0262	W0323	W0436	W0571	W0775	W0959	
	M0429	M0625	M0808	M1113	W0078	W0263	W0327	W0441	W0588	W0786	W0961	

page 37a(3)

M1185	M1212	M1240	M1273	M1296	M1313	M1386	M1500	M1537	M1603	W1016	W1091	W1144
					M1314	M1397	M1501	M1538	M1604	W1017	W1095	W1145
					M1316	M1398	M1502	M1550	M1605	W1019	W1102	W1149
					M1318	M1411	M1505	M1551	M1610	W1023	W1103	W1151
					M1319	M1419	M1508	M1557	M1618	W1027	W1106	W1156
					M1323	M1421	M1510	M1558	M1620	W1029	W1108	W1157
					M1326	M1425	M1511	M1560	M1624	W1032	W1109	W1158
					M1338	M1428	M1512	M1565	M1625	W1033	W1110	W1159
					M1339	M1429	M1513	M1566	M1628	W1034	W1111	W1162
					M1340	M1432	M1514	M1567	M1633	W1035	W1112	W1163
					M1341	M1433	M1515	M1568	M1635	W1036	W1113	W1164
					M1343	M1435	M1516	M1569	M1638	W1037	W1114	W1165
					M1345	M1436	M1517	M1570	M1639	W1039	W1117	W1168
					M1347	M1438	M1519	M1571	M1640	W1042	W1118	W1169
					M1349	M1439	M1521	M1573	M1641	W1047	W1119	W1170
					M1352	M1442	M1522	M1574	M1644	W1051	W1120	W1171
					M1355	M1444	M1523	M1576	M1650	W1052	W1122	W1172
					M1356	M1445	M1516	M1577	M1651	W1058	W1124	W1174
					M1357	M1446	M1528	M1580	M1653	W1062	W1125	W1175
					M1359	M1447	M1529	M1581	M1654	W1067	W1126	W1176
					M1363	M1448	M1532	M1588	W0892	W1071	W1127	W1177
					M1365	M1480	M1534	M1591	W1013	W1074	W1135	W1178
M1203	M1237	M1269	M1292	M1311	M1367	M1499	M1536	M1598	W1015	W1087	W1143	W1179
					M1378							

73

page 38a(3)

M2310	M2334	M2346	M2444	M2594	M2719	W1525	W1611	M2834	M2854	M2864	M2878	
		M2348	M2447	M2599	M2721	W1528	W1618					
		M2350	M2455	M2600	M2723	W1537	W1625					
M2317		M2351	M2462	M2604	M2758	W1541	W1626	M2835		M2867	M2881	
	M2336	M2353	M2467	M2610	M2764	W1544	W1628					
		M2366	M2472	M2609	M2766	W1550	W1629	M2838	M2856	M2868		
		M2381	M2474	M2611	M2783	W1559	W1630					
		M2388	M2475	M2615	W1481	W1561	W1631	M2839		M2869	M2882	M2896
		M2389	M2476	M2625	W1482	W1564	W1635					
M2322		M2395	M2477	M2646	W1484	W1565	W1636					
	M2337	M2397	M2479	M2652	W1489	W1566	W1637	M2840	M2857	M2870		M2898
M2329		M2402	M2480	M2657	W1495	W1569	W1638					
		M2403	M2485	M2664	W1496	W1574	W1640	M2845		M2871	M2883	M2901
		M2406	M2491	M2667	W1497	W1575	W1650					
		M2408	M2494	M2668	W1501	W1578	W1659	M2847		M2872	M2885	M2902
		M2409	M2505	M2674	W1503	W1580	W1664		M2858			M2903
		M2416	M2508	M2676	W1504	W1581	W1671	M2849		M2873	M2886	M2905
M2331	M2338	M2423	M2511	M2678	W1505	W1582	W1672		M2860			M2908
		M2425	M2526	M2679	W1506	W1585	⑤	M2850		M2874	M2894	
		M2429	M2531	M2683	W1507	W1588			M2861			M2911
		M2432	M2535	M2691	W1511	W1589	M2832	M2851		M2877	M2895	M2912
M2333	M2343	M2439	M2536	M2700	W1516	W1604	M2833		M2862			
		M2440	M2540	M2711	W1518	W1606						
			M2541	M2718	W1522	W1609						

75

page 37b(3)

W1180	W1251	W1286	M1676	M1781	M1893	M2025	M2218	W1333	W1451	M2111	M2277	M2298
W1183	W1252	W1288					M2219	W1336	W1463			
W1185	W1255	W1289					M2226	W1338	W1475			
W1186	W1256	W1291					M2237	W1339	④		M2281	M2299
W1187	W1256	W1294	M1678		M1901	M2027	M2246	W1340				
W1190	W1258	W1295					M2254	W1341		M2240	M2282	M2300
W1192	W1259	W1297	M1707	M1792	M1904	M2056	M2627	W1342	M0059			
W1193	W1262	③					M2629	W1347		M2245	M2284	M2301
W1194	W1263	M0982	M1709	M1799	M1931	M2064	M2631	W1348	M0121			
W1197	W1267						M2634	W1350		M2248	M2285	M2303
W1203	W1268	M1655	M1725	M1801	M1956	M2070	M2637	W1356	M0549			
W1205	W1269						M2639	W1360		M2261	M2288	M2307
W1206	W1272	M1656	M1733	M1831	M1968	M2071	M2644	W1365	M0810			
W1207	W1273						M2653	W1366		M2265	M2290	M2309
W1208	W1274	M1658	M1739	M1834	M1972	M2077	W1299	W1373	M1673			
W1213	W1275						W1302	W1376		M2269	M2291	
W1215	W1276	M1663	M1748	M1847	M1992	M2081	W1312	W1377	M1804			
W1221	W1277						W1320	W1395		M2274	M2293	M2313
W1228	W1279	M1665	M1769	M1862	M1993	M2137	W1325	W1398	M2238			
W1231	W1281						W1326	W1422				
W1244	W1282						W1327	W1423				
W1245	W1283						W1328	W1425				
W1250	W1284						W1332	W1448				
	W1285											

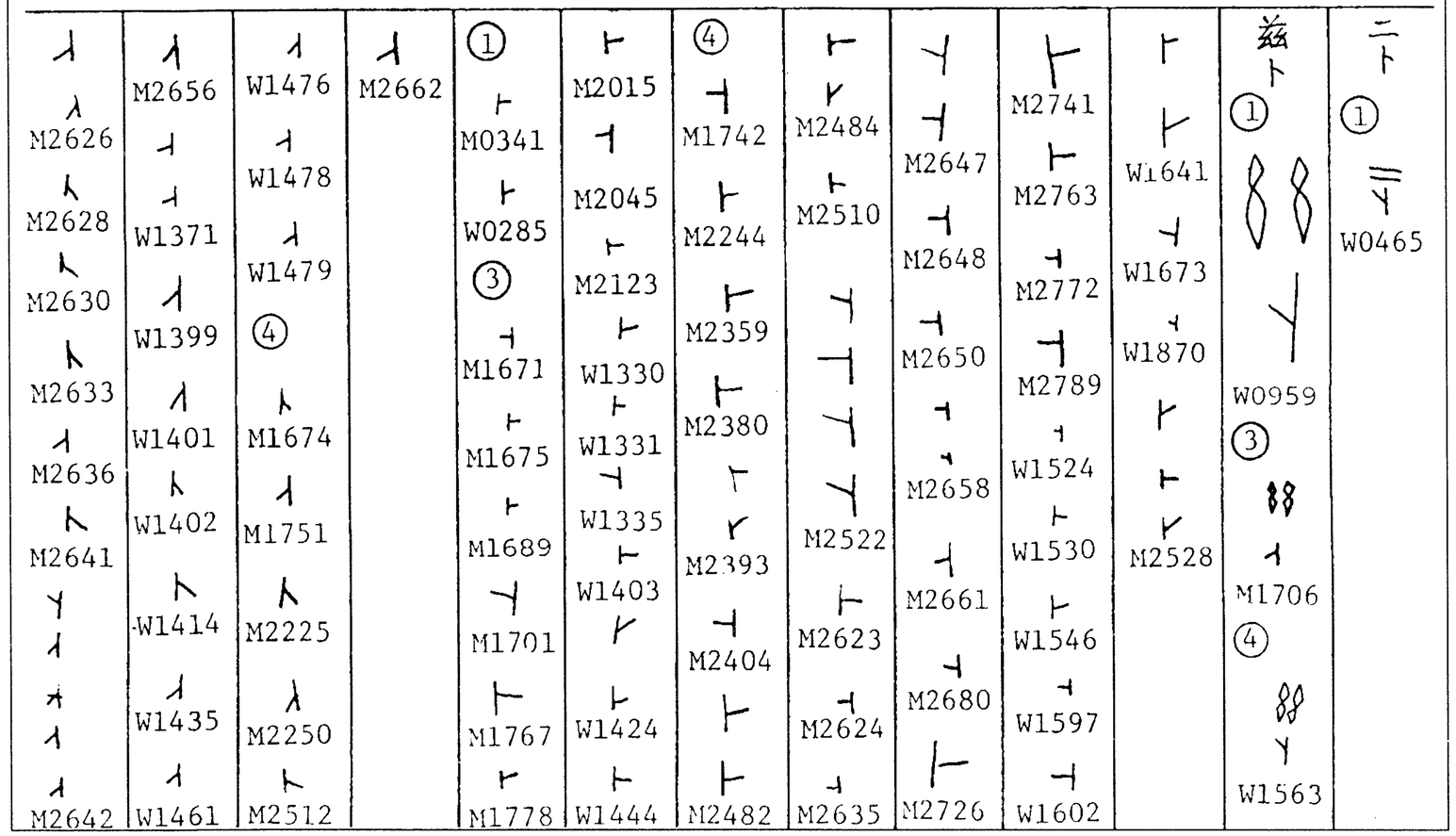
74

page 38b(3)

M2913	M3010	M3073	M3110	M3170	W1734	W1822	W1862	W1904	③	M1835	M1951	M2068
M2914	M3012	M3074	M3112	M3174	W1735	W1824	W1864	W1909				
M2918	M3016	M3076	M3113	M3176	W1737	W1825	W1866	W1912	M1680			M2097
M2919	M3017	M3078	M3114	W1682	W1748	W1826	W1865			M1871	M1964	
M2922	M3019	M3079	M3115	W1684	W1750	W1827	W1869		M1706			M2098
M2923	M3024	M3080	M3118	W1686	W1794	W1828	W1873			M1880	M1971	
M2924	M3026	M3081	M3120	W1688	W1795	W1830	W1876		M1720			M2217
M2926	M3028	M3082	M3123	W1690	W1796	W1831	W1879			M1889	M1974	
M2928	M3037	M3083	M3124	W1691	W1798	W1832	W1886		M1727			M2234
M2978	M3039	M3084	M3129	W1692	W1799	W1836	W1888			M1900	M1976	
M2982	M3045	M3085	M3135	W1693	W1800	W1837	W1889		M1734			M2235
M2983	M3058	M3089	M3136	W1695	W1801	W1840	W1890			M1910	M1978	
M2984	M3052	M3090	M3139	W1704	W1802	W1843	W1891		M1771			M2239
M2988	M3053	M3091	M3144	W1709	W1804	W1846	W1894			M1918	M1990	
M2993	M3056	M3092	M3148	W1710	W1805	W1847	W1895		M1780			
M2994	M3057	M3093	M3150	W1712	W1806	W1848	W1896			M1934	M1998	M2622
M3000	M3058	M3095	M3151	W1713	W1807	W1852	W1897		M1807			
M3003	M3059	M3098	M3156	W1714	W1808	W1854	W1898					
M3004	M3061	M3099	M3157	W1720	W1809	W1856	W1898					
M3005	M3066	M3100	M3159	W1722	W1810	W1857	W1899					
M3006	M3068	M3103	M3161	W1723	W1813	W1858	W1901					
M3007	M3069	M3106	M3168	W1726	W1815	W1859	W1902					
M3008	M3070	M3107	M3169	W1732	W1819	W1861	W1903					
					W1820							

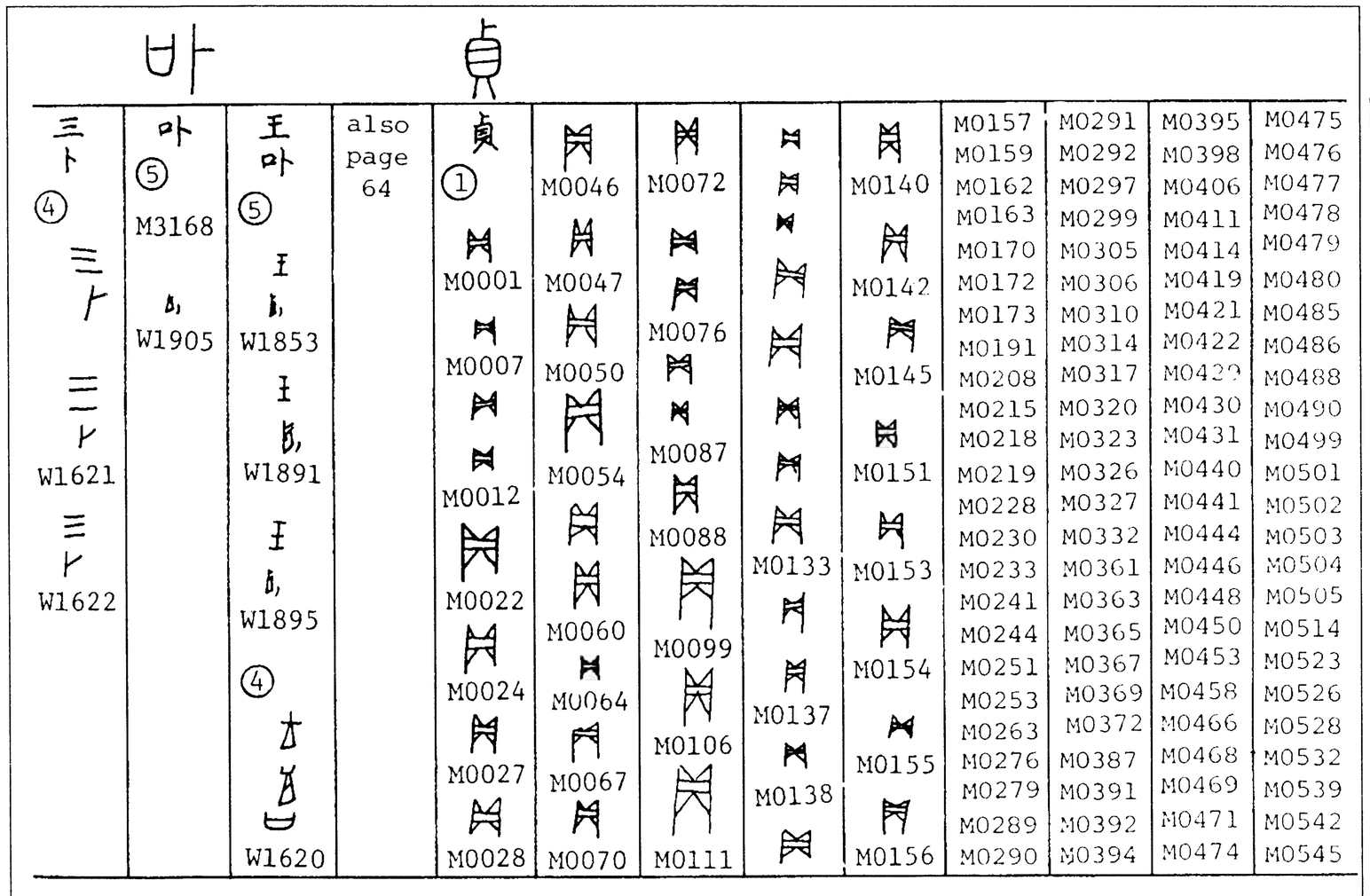
76

page 39a(3)



77

page 39b(3)



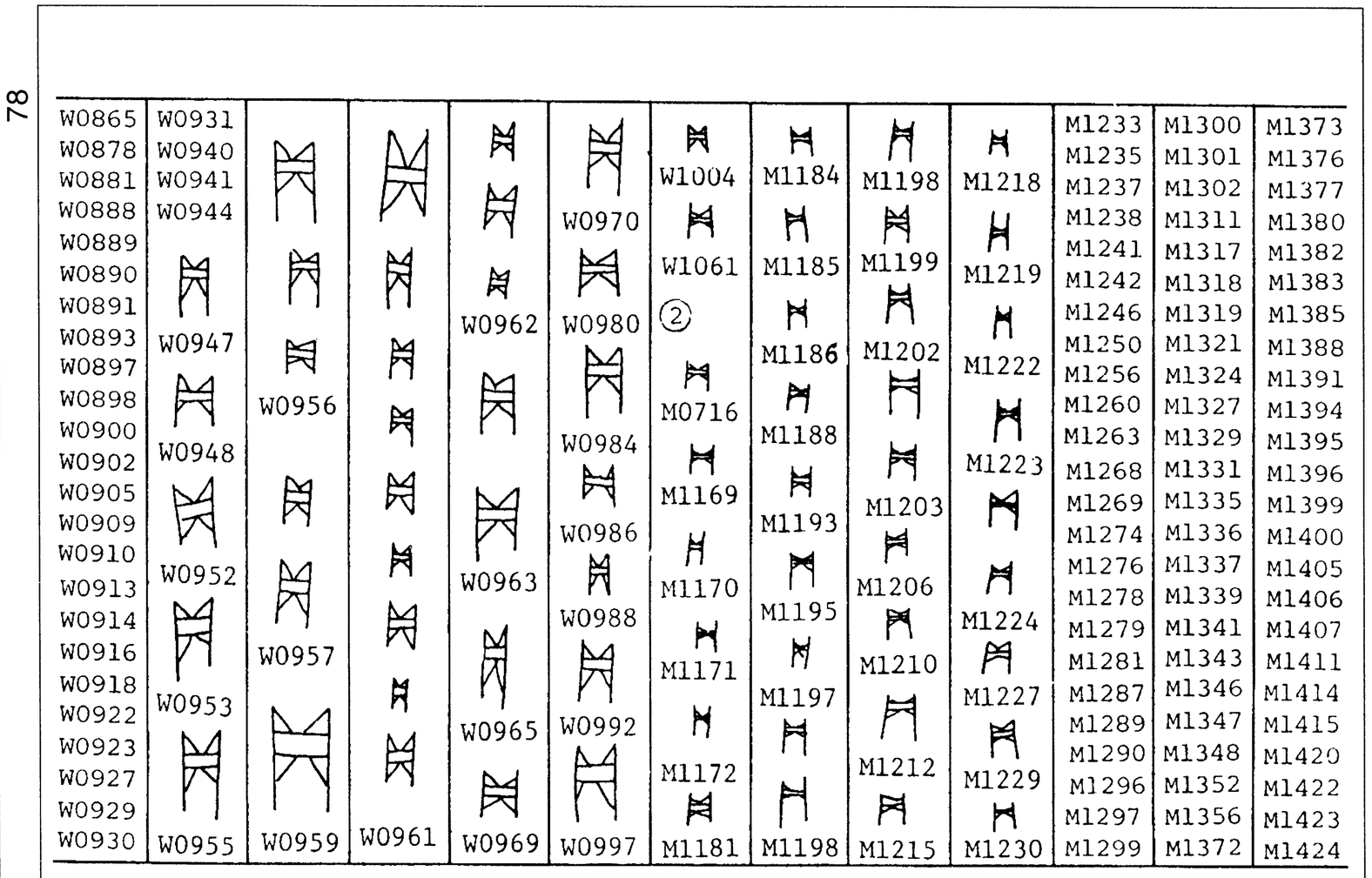
78

M0157 M0159 M0162 M0163 M0170 M0172 M0173 M0191 M0208 M0215 M0218 M0219 M0228 M0230 M0233 M0241 M0244 M0251 M0253 M0263 M0276 M0279 M0289 M0290 M0291 M0292 M0297 M0299 M0305 M0306 M0310 M0314 M0317 M0320 M0323 M0326 M0327 M0332 M0361 M0363 M0365 M0367 M0369 M0372 M0387 M0391 M0392 M0394 M0395 M0398 M0406 M0411 M0414 M0419 M0421 M0422 M0429 M0430 M0431 M0440 M0441 M0444 M0446 M0448 M0450 M0453 M0458 M0466 M0468 M0469 M0471 M0474 M0475 M0476 M0477 M0478 M0479 M0480 M0485 M0486 M0488 M0490 M0499 M0501 M0502 M0503 M0504 M0505 M0514 M0523 M0526 M0528 M0532 M0539 M0542 M0545

page 40a(3)

M0553 M0558 M0561 M0562 M0567 M0568 M0581 M0590 M0591 M0599 M0602 M0611 M0613 M0618 M0621 M0626 M0634 M0637 M0656 M0658 M0665 M0666 M0668 M0675 M0677 M0678 M0680 M0682 M0683 M0689 M0690 M0696 M0719 M0721 M0726 M0778 M0792 M0793 M0795 M0804 M0808 M0809 M0811 M0819 M0823 M0830 M0833 M0839 M0847 M0850 M0851 M0854 M0861 M0875 M0878 M0889 M0894 M0906 M0916 M0919 M0940 M0965 M1010 M1012 M1017 M1021 M1024 M1027 M1036 M1037 M1042 M1043 M1061 M1065 M1076 M1092 M1094 M1099 M1102 M1103 M1108 M1109 M1112 M1122 M1123 M1124 M1127 M1128 M1129 M1132 M1137 M1162 M1164 M1520 M1544 M1546 M1561 M1578 W0001 W0010 W0012 W0020 W0021 W0022 W0023 W0024 W0026 W0027 W0029 W0031 W0032 W0033 W0043 W0045 W0047 W0053 W0071 W0079 W0083 W0084 W0088 W0095 W0097 W0098 W0099 W0101 W0104 W0112 W0113 W0124 W0130 W0138 W0140 W0141 W0148 W0152 W0154 W0161 W0164 W0172 W0176 W0178 W0193 W0195 W0197 W0198 W0199 W0200 W0201 W0202 W0203 W0204 W0205 W0206 W0208 W0212 W0213 W0215 W0217 W0220 W0221 W0223 W0224 W0225 W0226 W0228 W0229 W0232 W0240 W0244 W0246 W0249 W0251 W0252 W0255 W0258 W0261 W0264 W0266 W0271 W0272 W0275 W0279 W0280 W0281 W0282 W0283 W0284 W0285 W0286 W0287 W0290 W0291 W0294 W0295 W0297 W0301 W0302 W0303 W0324 W0327 W0328 W0335 W0336 W0337 W0348 W0349 W0351 W0358 W0362 W0364 W0366 W0383 W0387 W0388 W0389 W0390 W0391 W0392 W0393 W0394 W0398 W0400 W0401 W0406 W0411 W0415 W0418 W0448 W0449 W0452 W0453 W0454 W0458 W0461 W0468 W0475 W0485 W0488 W0496 W0508 W0512 W0515 W0516 W0526 W0536 W0538 W0539 W0545 W0547 W0555 W0562 W0568 W0571 W0596 W0620 W0625 W0626 W0631 W0639 W0648 W0655 W0656 W0660 W0663 W0666 W0670 W0681 W0682 W0685 W0686 W0690 W0691 W0692 W0695 W0701 W0704 W0709 W0710 W0713 W0718 W0720 W0724 W0725 W0726 W0727 W0729 W0730 W0731 W0732 W0736 W0737 W0739 W0743 W0744 W0748 W0749 W0758 W0761 W0778 W0779 W0785 W0792 W0795 W0796 W0801 W0809 W0810 W0820 W0823 W0837 W0856

79

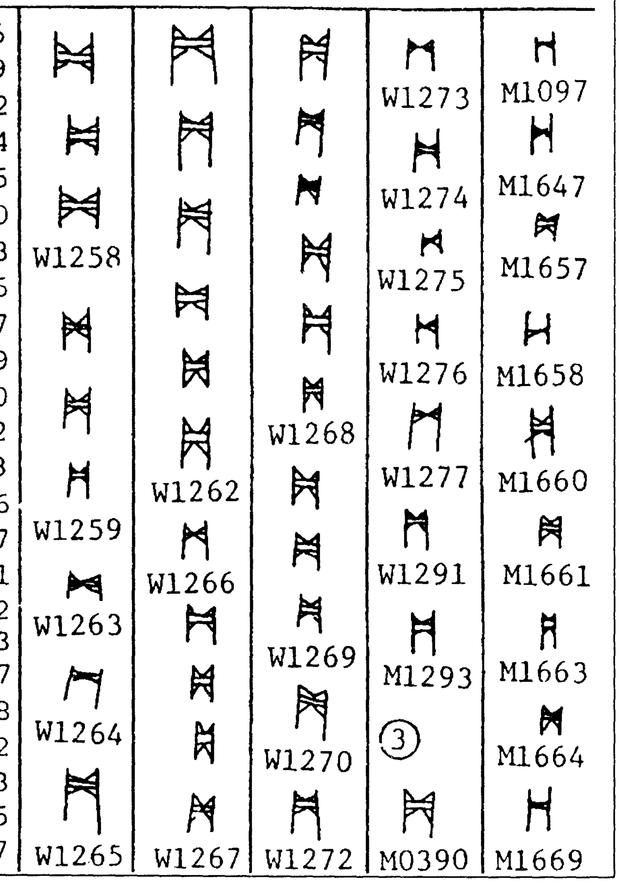


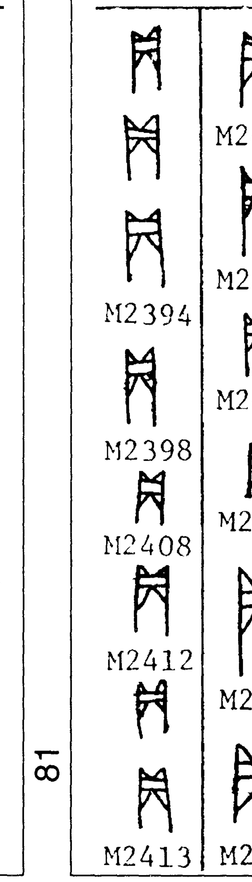
80

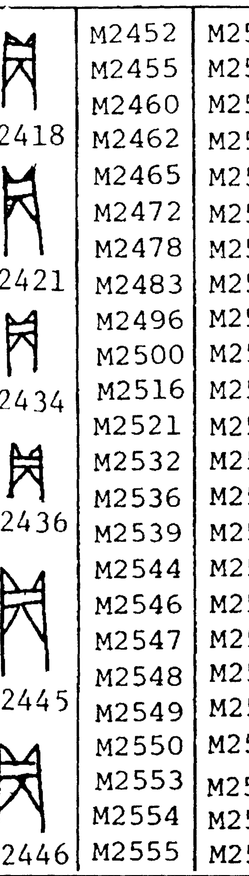
M1233 M1235 M1237 M1238 M1241 M1242 M1246 M1250 M1256 M1260 M1263 M1268 M1269 M1274 M1276 M1278 M1279 M1281 M1287 M1289 M1290 M1296 M1297 M1299 M1300 M1301 M1302 M1311 M1317 M1318 M1319 M1321 M1324 M1327 M1329 M1331 M1335 M1336 M1337 M1339 M1341 M1343 M1346 M1347 M1348 M1352 M1356 M1372 M1373 M1376 M1377 M1380 M1382 M1383 M1385 M1388 M1391 M1394 M1395 M1396 M1399 M1400 M1405 M1406 M1407 M1411 M1414 M1415 M1420 M1422 M1423 M1424

page 41a(3)

M1426	M1473	M1537	M1604	W1018	W1080	W1126	W1206					
M1430	M1474	M1540	M1613	W1019	W1081	W1127	W1209					
M1433	M1476	M1541	M1615	W1020	W1082	W1128	W1212					
M1438	M1478	M1545	M1622	W1023	W1083	W1129	W1214					
M1439	M1479	M1550	M1623	W1025	W1084	W1130	W1215					
M1443	M1480	M1551	M1624	W1026	W1086	W1132	W1220					
M1445	M1483	M1558	M1625	W1029	W1087	W1133	W1223					
M1449	M1487	M1560	M1626	W1032	W1092	W1134	W1226					
M1451	M1489	M1580	M1627	W1033	W1093	W1135	W1227					
M1452	M1493	M1584	M1629	W1035	W1094	W1136	W1229					
M1453	M1500	M1586	M1630	W1036	W1095	W1139	W1230					
M1455	M1501	M1587	M1631	W1038	W1096	W1143	W1232					
M1457	M1502	M1588	M1632	W1043	W1097	W1147	W1233					
M1458	M1505	M1589	M1633	W1046	W1099	W1148	W1236					
M1459	M1506	M1590	M1644	W1047	W1100	W1149	W1237					
M1460	M1507	M1591	M1649	W1049	W1101	W1150	W1241					
M1461	M1509	M1592	M1650	W1052	W1103	W1151	W1242					
M1462	M1511	M1593	M1651	W1059	W1105	W1152	W1243					
M1463	M1512	M1594	M1652	W1060	W1108	W1155	W1247					
M1465	M1514	M1597	W1011	W1070	W1112	W1196	W1248					
M1468	M1522	M1598	W1012	W1071	W1114	W1197	W1252					
M1470	M1525	M1599	W1013	W1073	W1118	W1200	W1253					
M1471	M1528	M1601	W1016	W1076	W1119	W1201	W1255					
M1472	M1536	M1602	W1017	W1077	W1121	W1205	W1257	W1265	W1267	W1272	M0390	M1669







W1273	M1097											
W1274	M1647											
W1275	M1657											
W1276	M1658											
W1277	M1660											
W1291	M1661											
M1293	M1663											
③	M1664											
M0390	M1669											

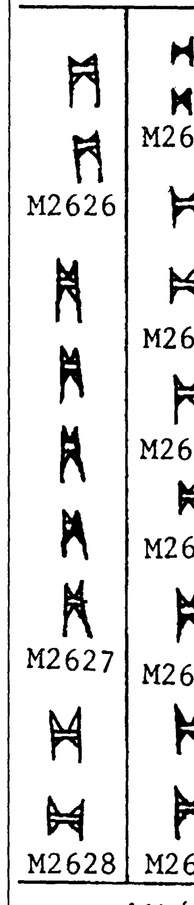
81

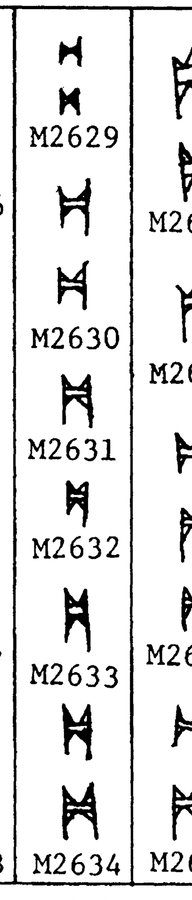
page 42a(3)

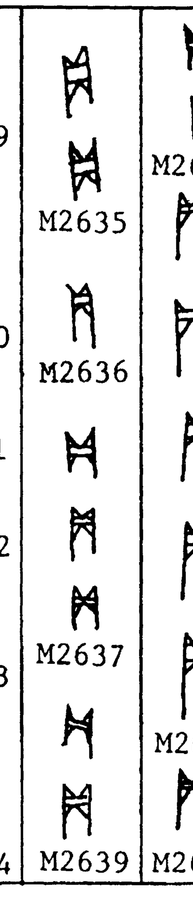
M2394	M2418	M2452	M2556	M2588	M2652	M2752	W1612	M2833	M2850	M2859	M2881	
M2398	M2421	M2455	M2558	M2589	M2663	M2753	W1613	M2834	M2851	M2860	M2882	
M2408	M2434	M2460	M2560	M2591	M2674	M2755	W1614	M2836	M2854	M2861	M2873	
M2412	M2436	M2462	M2561	M2592	M2675	M2757	W1616	M2838	M2856	M2862	M2874	
M2413	M2445	M2465	M2562	M2593	M2681	M2767	W1617	M2840	M2857	M2867	M2876	
	M2446	M2472	M2563	M2594	M2689	M2771	W1618	M2841	M2858	M2868	M2877	
		M2478	M2564	M2596	M2691	M2776	W1619	M2845	M2870	M2871	M2878	M2883
		M2483	M2565	M2597	M2705	M2811	W1621	M2846	M2872	M2879	M2884	
		M2496	M2569	M2598	M2706	M2820	W1622	M2847	M2880	M2885		
		M2500	M2570	M2600	M2708	W1551	W1624					
		M2516	M2571	M2602	M2710	W1554	W1636					
		M2521	M2573	M2604	M2712	W1559	W1638					
		M2532	M2574	M2605	M2713	W1560	W1650					
		M2536	M2575	M2608	M2719	W1563	W1652					
		M2539	M2576	M2609	M2720	W1575	W1653					
		M2544	M2577	M2611	M2722	W1577	W1654					
		M2546	M2578	M2612	M2723	W1581	W1661					
		M2547	M2580	M2613	M2724	W1582	W1662					
		M2548	M2581	M2615	M2742	W1584	W1668					
		M2549	M2582	M2616	M2743	W1589						
		M2550	M2583	M2617	M2744	W1595	⑤					
		M2553	M2585	M2622	M2746	W1600						
		M2554	M2586	M2625	M2748	W1601	M2832					
		M2555	M2587	M2646	M2749	W1610						

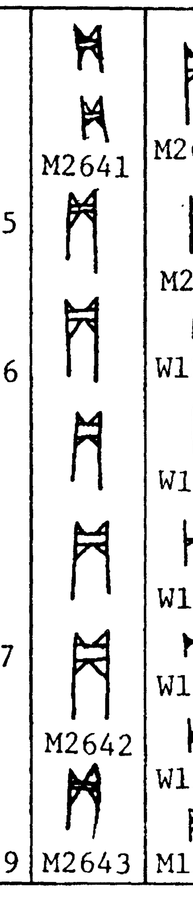
83

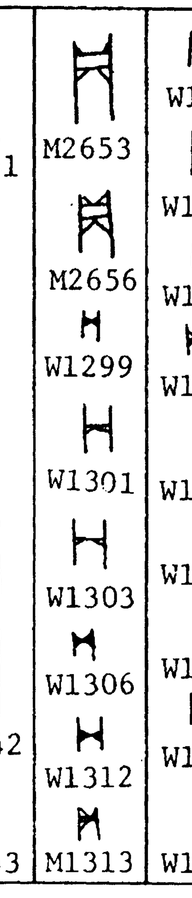
page 41b(3)

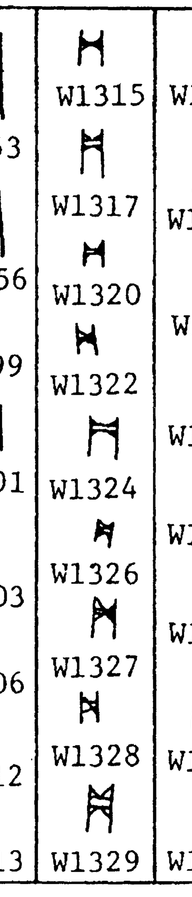


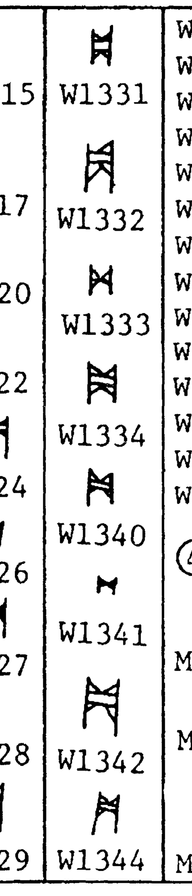




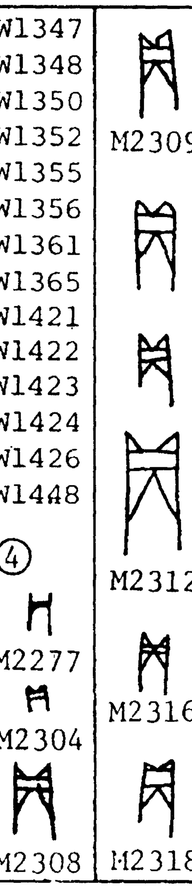


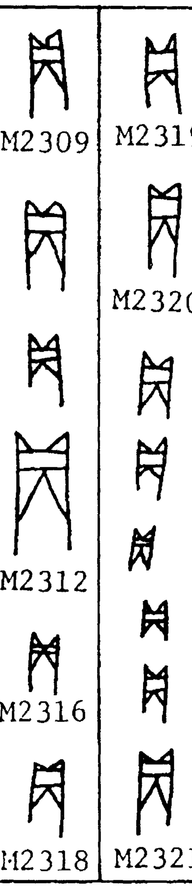


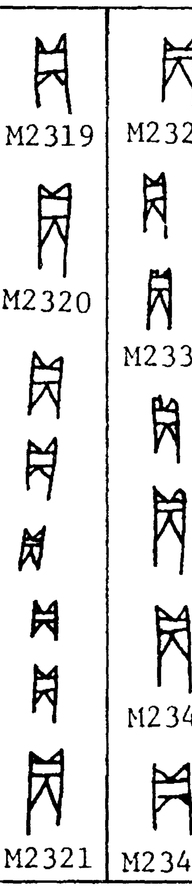




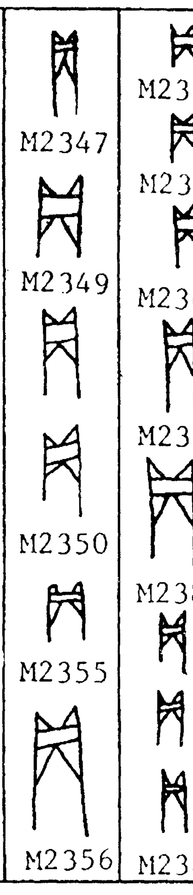
M2626	M2629	M2635	M2641	M2653	W1315	W1331	W1347					
M2627	M2630	M2636	M2642	M2656	W1317	W1332	W1348					
M2628	M2631	M2637	M2643	W1299	W1320	W1333	W1350					
	M2632	M2639	M1313	W1301	W1322	W1334	W1352					
	M2633		W1303	W1306	W1324	W1340	W1355					
	M2634		W1312	W1326	W1327	W1341	W1356					
				W1328	W1329	W1342	W1361					
						W1344	W1365					
							W1421					
							W1422					
							W1423					
							W1424					
							W1426					
							W1448					
							④					
							M2277					
							M2304					
							M2308	M2318	M2321	M2344	M2356	M2388

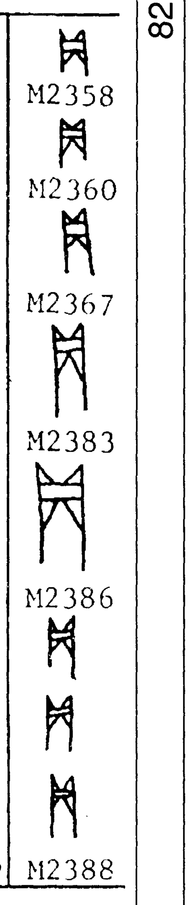








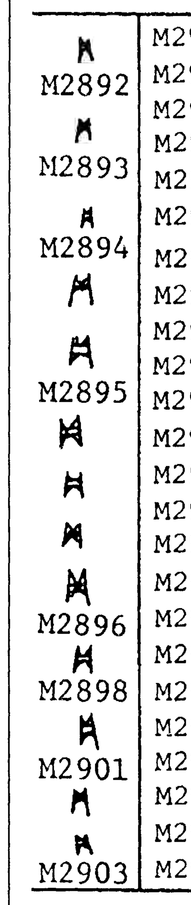




M2309	M2319	M2328	M2347	M2358								
M2312	M2320	M2330	M2349	M2360								
M2316	M2321	M2342	M2350	M2367								
M2318	M2344	M2355	M2356	M2383								
				M2386								
				M2388								

82

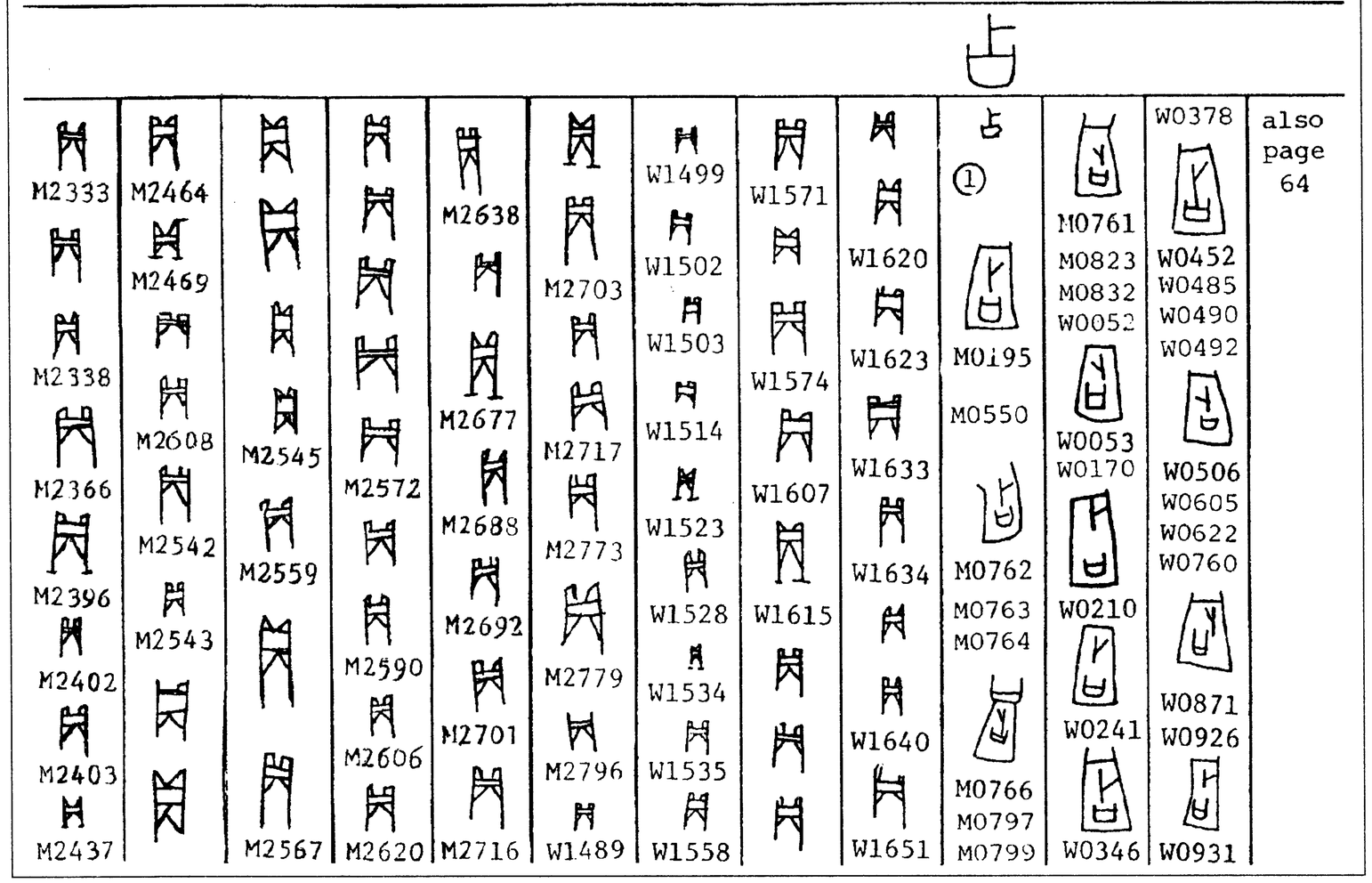
page 42b(3)



M2892	M2906	M2993	M3053	M3085	M3126	W1684	W1725	W1801	W1850	W1897	①	M2287
M2893	M2908	M2994	M3054	M3086	M3128	W1686	W1726	W1802	W1851	W1898	M0993	M2288
M2894	M2911	M2998	M3055	M3087	M3132	W1687	W1734	W1805	W1852	W1901	④	M2296
M2895	M2912	M3000	M3056	M3088	M3133	W1688	W1738	W1807	W1853	W1902	M2269	M2307
M2896	M2913	M3002	M3057	M3089	M3136	W1689	W1739	W1808	W1854	W1904	M2270	M2313
M2898	M2914	M3005	M3058	M3090	M3139	W1690	W1741	W1810	W1855	W1909	M2275	M2314
M2901	M2917	M3006	M3059	M3092	M3143	W1691	W1742	W1814	W1857		M2279	
M2903	M2919	M3007	M3060	M3093	M3147	W1692	W1744	W1818	W1860		M2286	M2317
	M2922	M3008	M3064	M3095	M3148	W1698	W1747	W1824	W1861			
	M2923	M3010	M3065	M3098	M3149	W1699	W1748	W1825	W1862			
	M2924	M3011	M3066	M3099	M3150	W1701	W1750	W1826	W1863			
	M2926	M3014	M3067	M3100	M3151	W1702	W1752	W1827	W1865			
	M2928	M3016	M3068	M3101	M3152	W1703	W1754	W1829	W1866			
	M2929	M3018	M3069	M3103	M3156	W1704	W1756	W1830	W1868			
	M2932	M3020	M3070	M3108	M3157	W1709	W1758	W1832	W1869			
	M2963	M3023	M3072	M3109	M3159	W1710	W1760	W1835	W1872			
	M2973	M3024	M3073	M3110	M3161	W1712	W1763	W1836	W1874			
	M2979	M3026	M3074	M3111	M3163	W1713	W1764	W1837	W1875			
	M2980	M3027	M3076	M3114	M3168	W1717	W1767	W1839	W1877			
	M2982	M3029	M3078	M3117	M3169	W1719	W1773	W1842	W1886			
	M2983	M3037	M3079	M3118	M3170	W1720	W1795	W1843	W1888			
	M2984	M3039	M3081	M3119	M3174	W1721	W1796	W1844	W1890			
	M2986	M3043	M3082	M3120	M3176	W1722	W1797	W1845	W1891			
	M2989	M3048	M3083	M3123	W1682	W1723	W1798	W1847	W1895		M2286	M2317

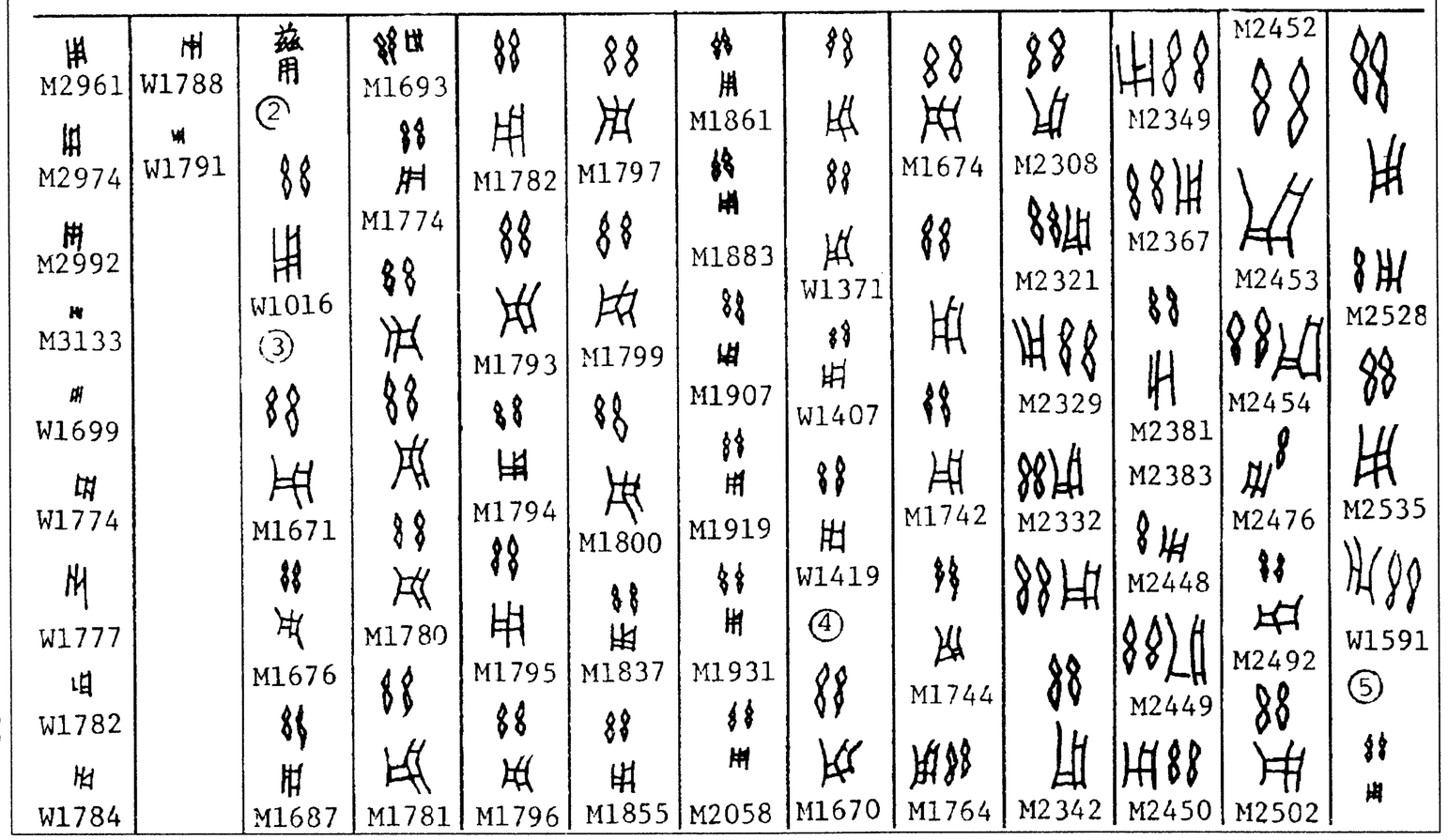
84

page 43a(3)

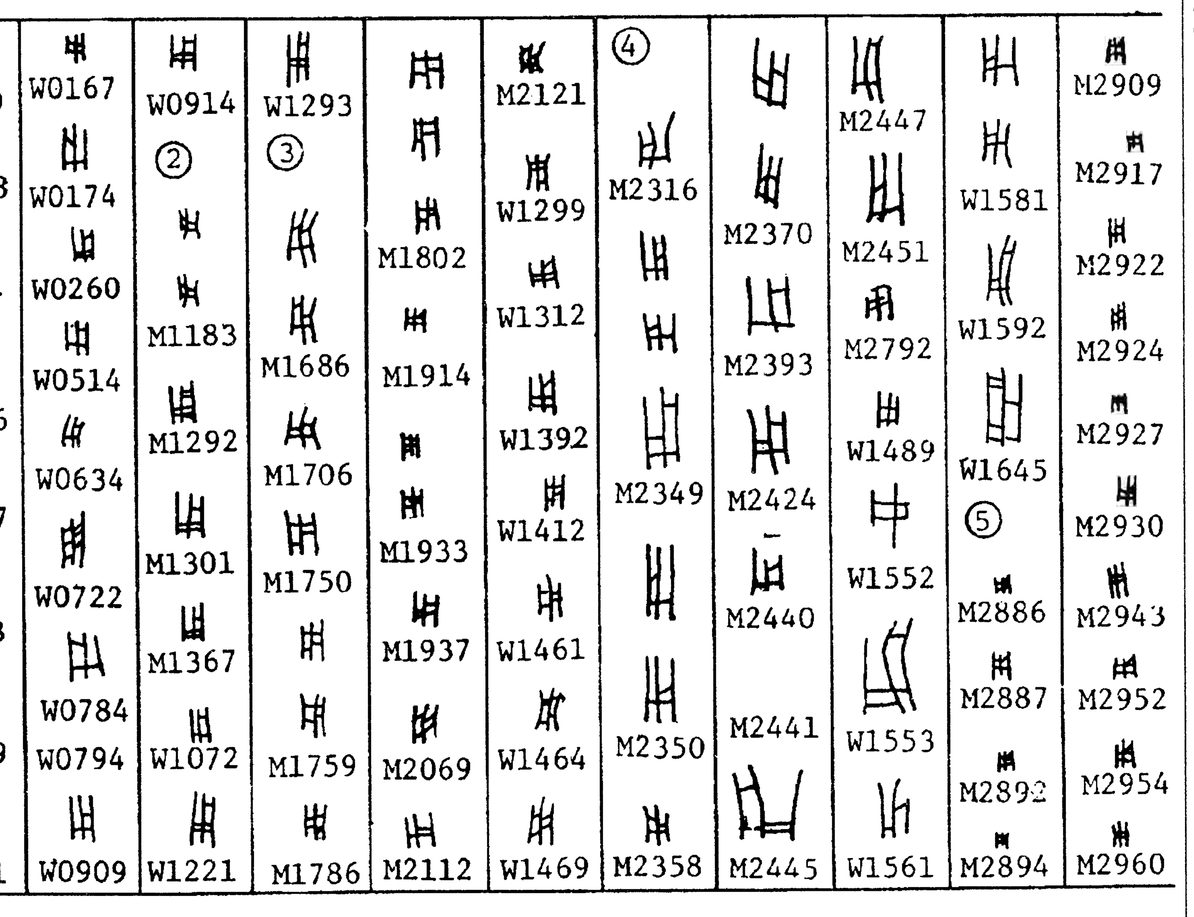


85

page 44a(3)

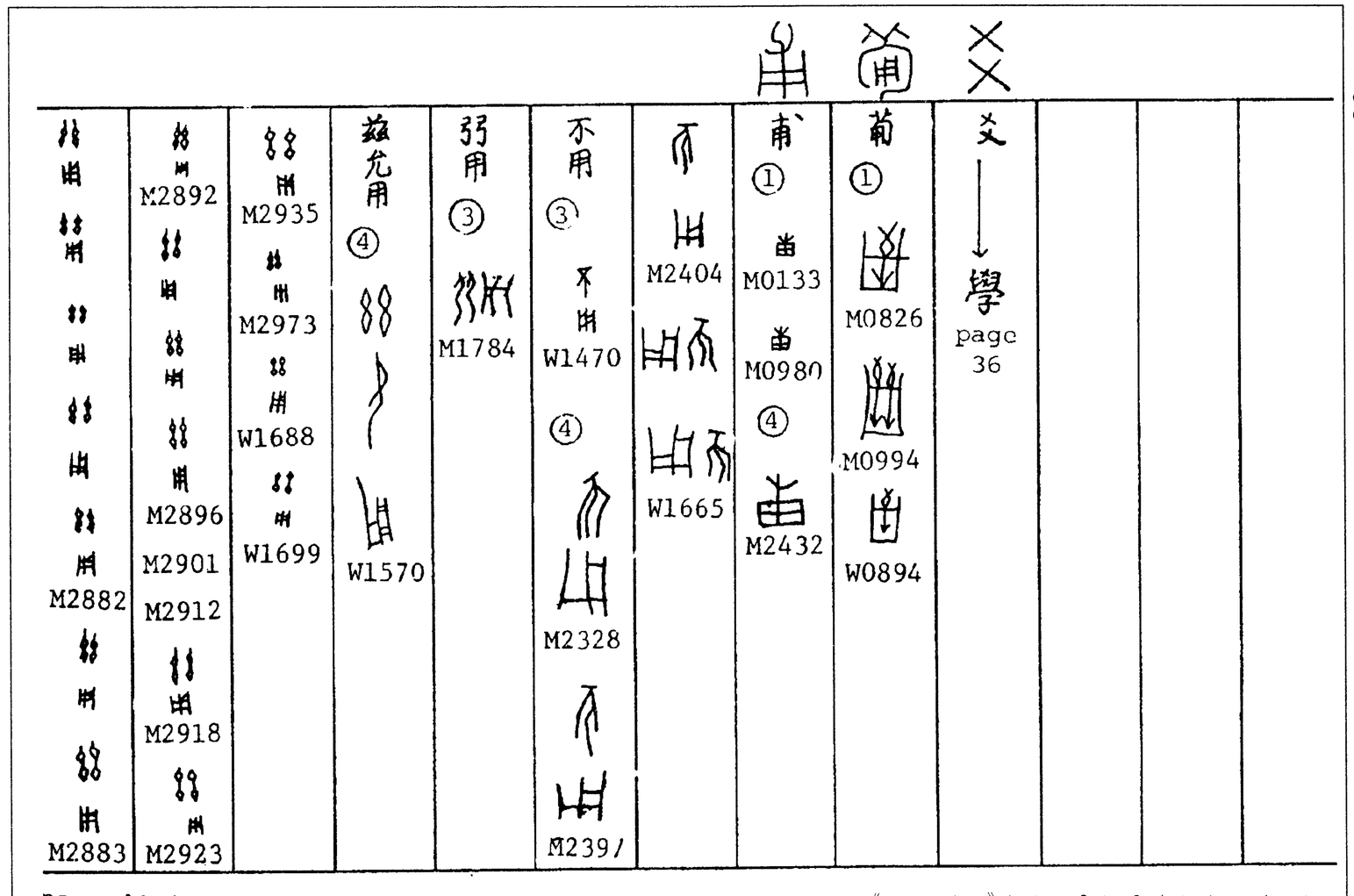


87



86

page 43b(3)



88

page 44b(3)

（原載《中國文字》新六期，一九八一年十二月）

page 45b(4)

M1957 M1943
M1971 M1959
M1970 M1963
M1965 M1964
M1955 M1950 M1954
M1982 M1973
M1981 M1977
M2007 M1984 M1985 M1987 M1993
M1322 M2008 M2012 M1882
M2026 M2032 M2040
M1459 M1428 M1433 M1434 M1443 M1456
M2700
M2050
M0603
M1003 M0052 M1827
M0642 M0677 M0778 M0779 M1087 M1112 M1578 M0024
M0646 M0364 M0360 M0241 M0253 M0187 M0119
M1983 M2642 M1345 also page 02
M0069 M0070 M0081 M0097 M0114
M0007 M1773 M1393
M0128 M0151 M0157 M0316 M0339 M0415 M0418 M0489
M0506 M0521 M0539 M0650 M0656 M0748 M0811
M0858 M0876 M0907 M0916 M0989 M1015 M1056 M1113
M1169 M1578 W0023 W0024 W0025 W0026 W0032 W0044
W0050 W0120 W0122 W0157 W0187 W0206 W0230 W0237
W0250 W0253 W0298 W0302 W0381 W0393 W0624 W0638
W0641 W0670 W0701 W0712 W0761 W0778 W0803 W0820
W0860 W0887 W0916 W0923 W0963 W0992
W0997 W1053 W1061 ② W1187 W1203 M1255 M1268

page 46b(4)

page 45a(4)

M1956
M0028 ③
M0889
M0635 ①
M1191 ②
M0961
M0938
M0890
M0683
M0658 M0168 ①
M1375
M1680
M1672
M1268 ③
M1615 M1249
M2711
M2386 ④
M1649
W0605
M0257 M1041 M0377 ①
M0241 ①
M1709 M1703
M2858 M3008
M2853 M2854 M2857
M1853 M1873 M1888 M1889
M0549 ③ M0626 ① M0119 ① M0187 M0241 M0253 M0360 M0364
M1908 M1903 M1900
M1909
M1942
M2833 M2832 M1251 ⑤ M1178 ② M0923 ① also page 104

page 46a(4)

M0655 ①
M0778 ①
M1834 ③
M0133 ① M0152 M0165 M0275 M0300 M0495 W0166
M1869 ③ W0674
二百 ① W0856
M1504 M1532 M1555 M1565 M1669 ⑤ M3161
M2313 M2321 M2434 M2673 M2694 M2733 M2813
M1802 M2102 M2116 M1343 M1369 ④ M2287
M0945 ② M1169 M1582 M1583 ③ M1691
M0802 M0865 M0881 M0895 M0901 M0793
M0555 M0781 M0687 M0676 M0661 M0654 M0628 W0325 W0204 M0063 M0037 W0032 W0551 W0437
M0858 M0876 M0907 M0916 M0989 M1015 M1056 M1113
M1169 M1578 W0023 W0024 W0025 W0026 W0032 W0044
W0050 W0120 W0122 W0157 W0187 W0206 W0230 W0237
W0250 W0253 W0298 W0302 W0381 W0393 W0624 W0638
W0641 W0670 W0701 W0712 W0761 W0778 W0803 W0820
W0860 W0887 W0916 W0923 W0963 W0992
W0997 W1053 W1061 ② W1187 W1203 M1255 M1268

page 47a(4)

𠂤 隹

M1269 M1298 M1302 M1309 M1404 M1481 M1532

M1533 M1535 M1604 M1605 M1613 W1015 W1016 W1062

W1099 W1111 M1171 W1203 W1205 W1207 W1208 W1247 W1267

W1268 ③ W1346 ④ M2283 M2314 M2399 M2533

⑤ M2834 M2835 M2837 M3095 W1686 W1704 W1714 W1805

also page 81

翌 ③ M1935 M1970 M2098 M2153 M2246 W1308 W1321 W1469 W1470

also page 81

隹 ① M0078 M0080 M0095 M0136 M0298 M0360 M0372

M0434 M0466 M0499 M0577 M0599 M0623 M0627 M0630

M0668 M0709 M0715 M0796 M0820 M0828 M0831

M0882 M0924 M0963 M0976 M1031 M1035 M1068 M1085 M1095

W0053 W0166 W0235 W0254 W0312

93

page 47b(4)

雥

W0452 W0479 W0487 W0489 W0500 W0501 W0503 W0511

W0560 W0600 W0637 W0646 W0651 W0666 W0693 W0750 W0755 W0766 W0873

W0883 W0893 W0897 W0719 W0991 W0910

W0924 W0940 W0945 ② M1616

W0959

③ M1681 M1705 M1883 W1414 ④ M2269 M2317 M2429

M2500 M2539 M2699 M2717 W1509 W1610

W1633 W1639 W1646 W1655 ⑤ W1691

W1915

隻 ① M0342 M0504 M0505 M0510 M0515 M0520

M0525 W0177 W0305 W0306 W0307 W0308

W0309 W0310 W0311 W0313 W0434 W0442 W0788

W0932 W0933 ③ M2047 M2112

94

page 48a(4)

雀

M2232 ⑤ M3141 M3143 M3145 M3175 W1856 W1865 W1915

雀 ① M0198 M0222 M0349 M0651 M0670 W0087

W0355 W0363 W0395 W0434 W0436 W0442

M0556 M0602 M0633 M0638 M0647 M0770 W0804

④ M0595

雚 雥 雧 雧 雧 雧 雧 雧

雚 ③ M2116

雥 ⑤ W1915

雧 ① M0023

雧 ⑤ W1906 also page 157

雧 ① M0695 W0522 ④ M2322 ⑤ M3164

隹 隹 雚

隹 ① M0103

雚 ④ W1643

雚 ① M0460 W0248 W0254

95

page 48b(4)

雋

① M0508

雋 ① M0913 W0245 W0314

④ W1464

⑤ W1790

① M0912

雚 雚 雚 雚 雚 雚 雚 雚 雚 雚 雚

① M0309

① M1016

① W0711

① M1015

① M0629

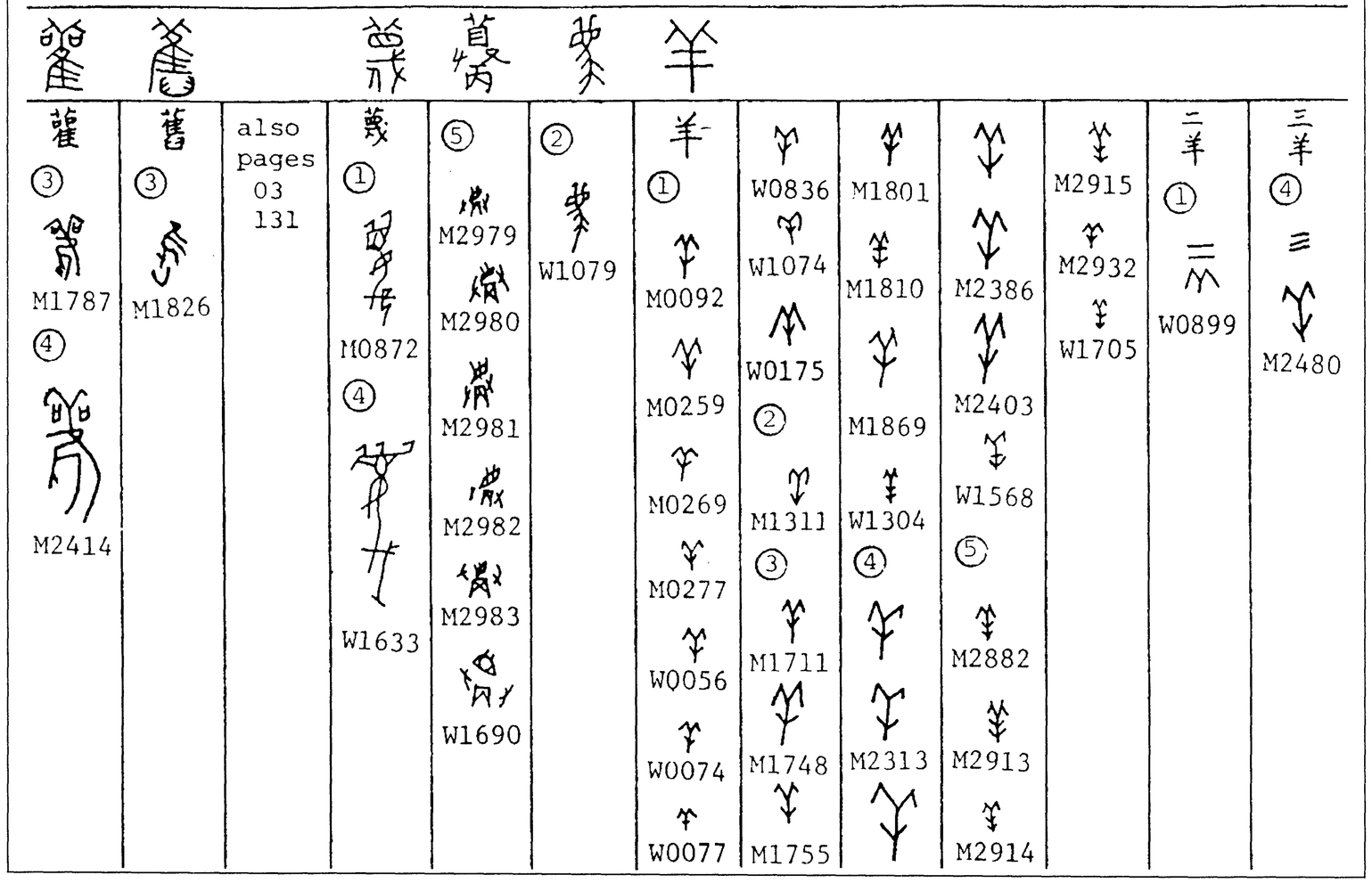
① M0342

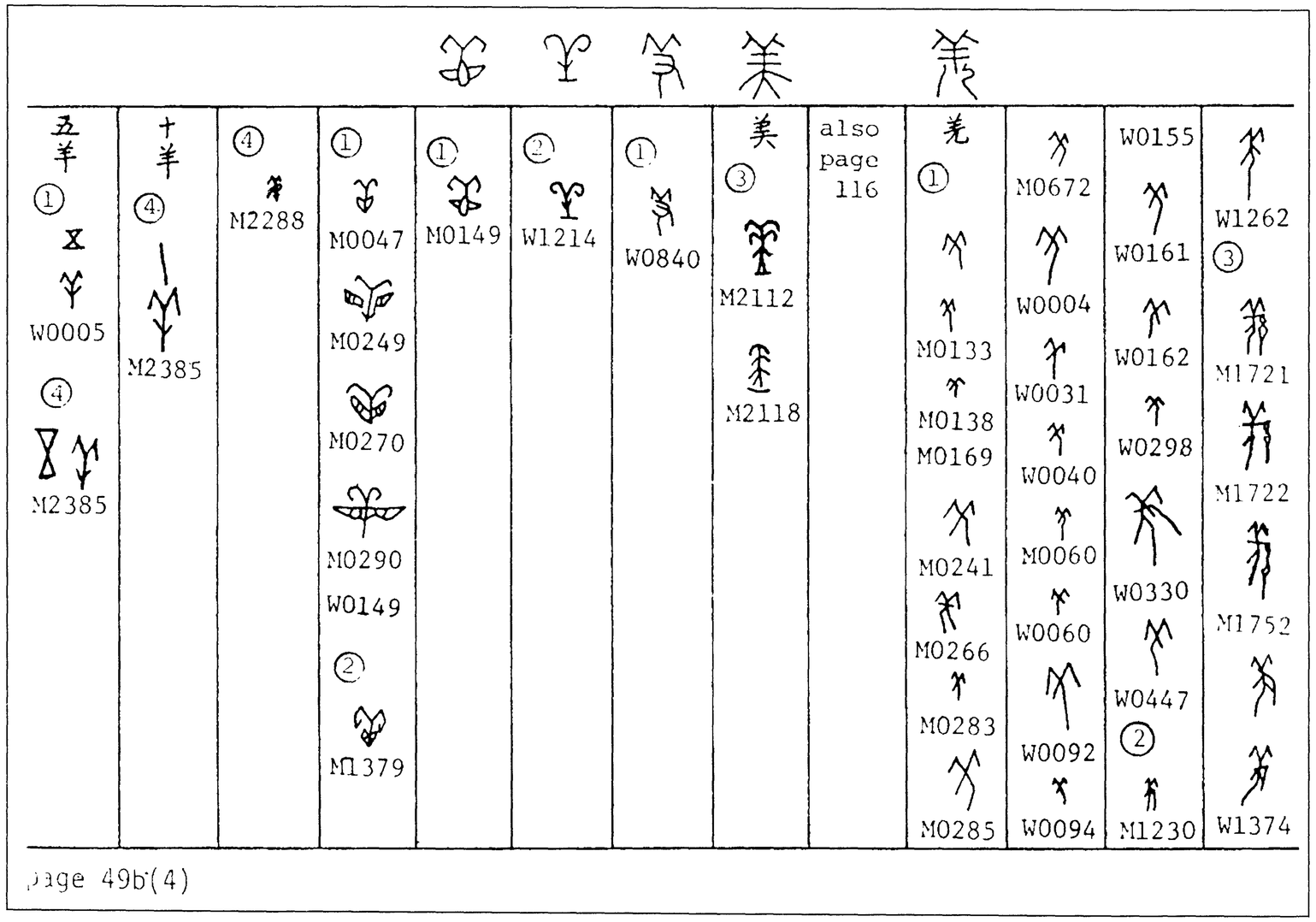
雚 ① M0122 M0622 W0835 W0973 ② W1066

④ M2719 W1588 W1661

96

page 49a(4)

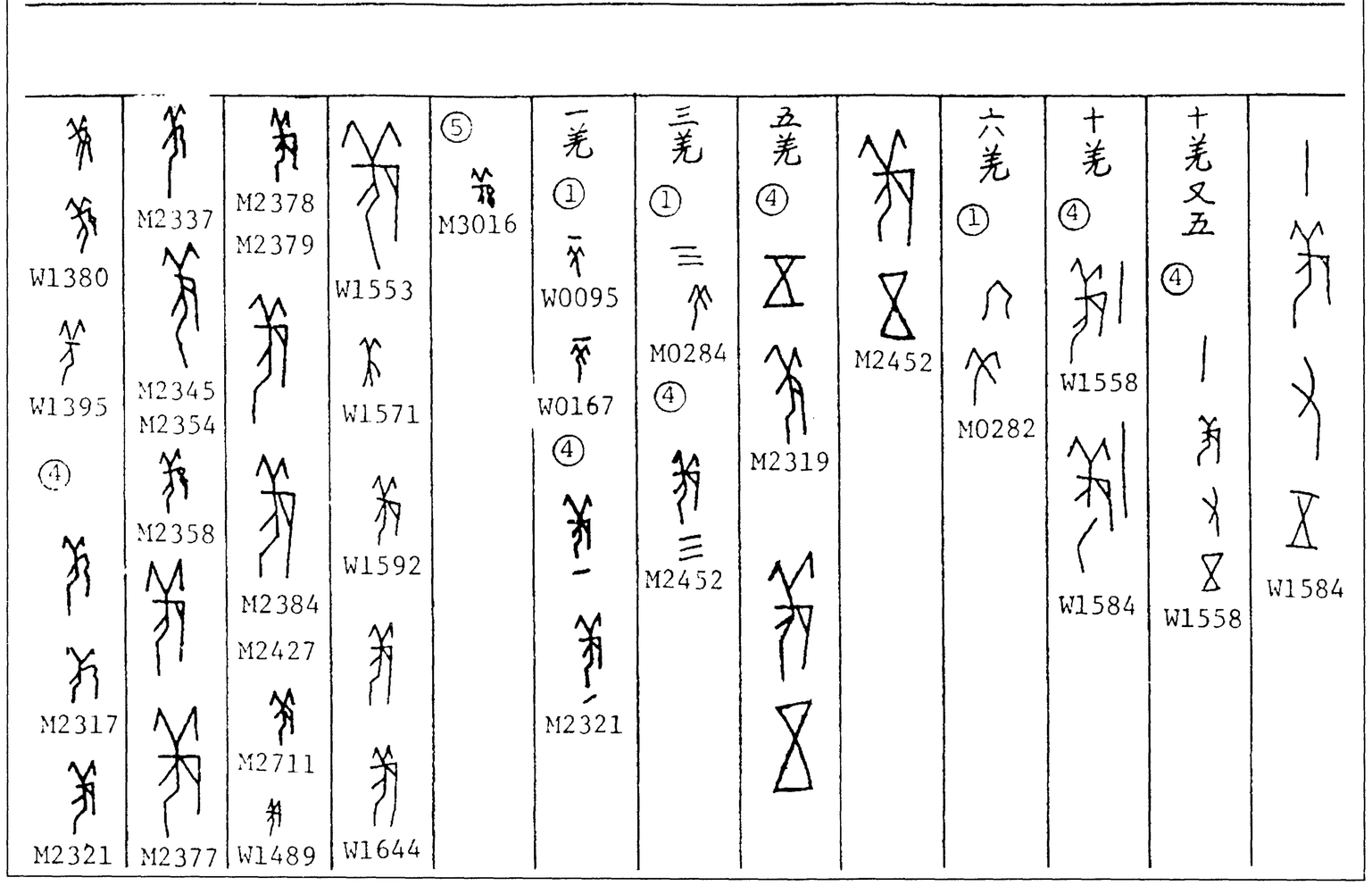


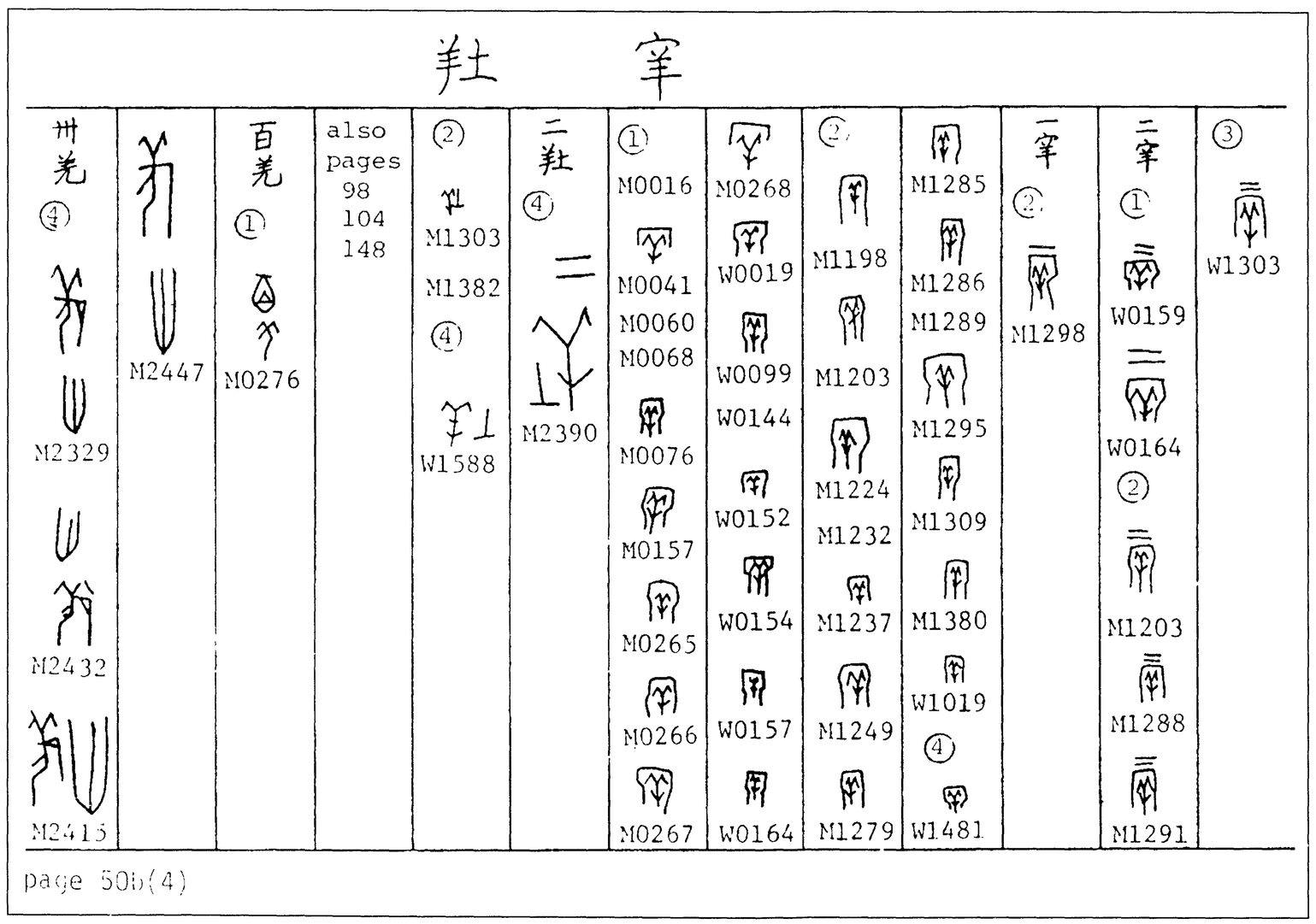


page 49b(4)

97

page 50a(4)





page 50b(4)

98

100

page 51a(4)

三个字	二个字	十个字	五个字	六字	七字	八字	十字	九字	大字	一个字	大風
① M2269 M2438	① M0113	④ W1562	④ M2327	② W1257	① W0734	④ M2342	① M0999	① M1076	③ M1926	③ W1321	③ M1902
③ M0087	② M0262	① M0264	① W0030	① M0048	① W0251	④ M1870 M1921	① M0451	① M0454	① W0247	④ M2424	④ M1909
④ M1758	② W1042	② W0031	② M1230	① W0249	③ M1923	① M1922	① W0248	① W0249	① M1319	① M1928	① M1927
④ M2493	② W1262	⑤ M2418	⑤ M2418	① W0077	① W0067	① M2267	① W0031	① W0169	① M1730	① M1711	① M1776
① M1269	① W1016	① W1017	① W1019	① W1309	① W1310	① W1309	① W1777	① M1755	① W1409	① M2408	① M2409
① W1016	① W1233	① W1233	① W1233	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564

page 51b(4)

三个字	二个字	十个字	五个字	六字	七字	八字	十字	九字	大字	一个字	大風
① M2438	① M0113	④ W1562	④ M2327	② W1257	① W0734	④ M2342	① M0999	① M1076	③ M1926	③ W1321	③ M1902
③ M0087	② M0262	① M0264	① W0030	① M0048	① W0251	④ M1870 M1921	① M0451	① M0454	① W0247	④ M2424	④ M1909
④ M1758	② W1042	② W0031	② M1230	① W0249	③ M1923	① M1922	① W0248	① W0249	① M1319	① M1928	① M1927
④ M2493	② W1262	⑤ M2418	⑤ M2418	① W0077	① W0067	① M2267	① W0031	① W0169	① M1730	① M1711	① M1776
① M1269	① W1016	① W1017	① W1019	① W1309	① W1310	① W1309	① W1777	① M1755	① W1409	① M2408	① M2409
① W1016	① W1233	① W1233	① W1233	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564	① W1564

page 52a(4)

丁	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
① M1911 M1920	① M1924	④ W1496	also page 123	① M1942	① W1417	① M1942	④ W1582	④ M1929	① M1942	① W1417	① M1942
① W1465 M1934	③ M0856 M0820 M0140	① M0144 M0316 M0396 M0624 M0830 W0306	④ W1626	① M0845	① M0841 M0345 W1398	② M1595 M1651 M1652 M1653 W1081 W1094 M1748 M1691	② W0505 W0642 W0725 W0733 W0959	③ W1148 W1235 W1236 M1871 M1872 M1875	① M1780 M1870	① W1095	① M1887 M1890 M1891 M1897 M1900 M1903
① M1906 M1911 M1915 M1918 M1920	① M1887 M1890 M1891 M1897 M1900 M1903	① M1877 M1878 M1879	① M1780 M1870	① W1095 W1148 W1235 W1236 M1871 M1872 M1875	② M1595 M1651 M1652 M1653 W1081 W1094 M1748 M1691	① M0144 M0316 M0396 M0624 M0830 W0306	① W0505 W0642 W0725 W0733 W0959	① W1148 W1235 W1236 M1871 M1872 M1875	① M1780 M1870	① W1095	① M1887 M1890 M1891 M1897 M1900 M1903

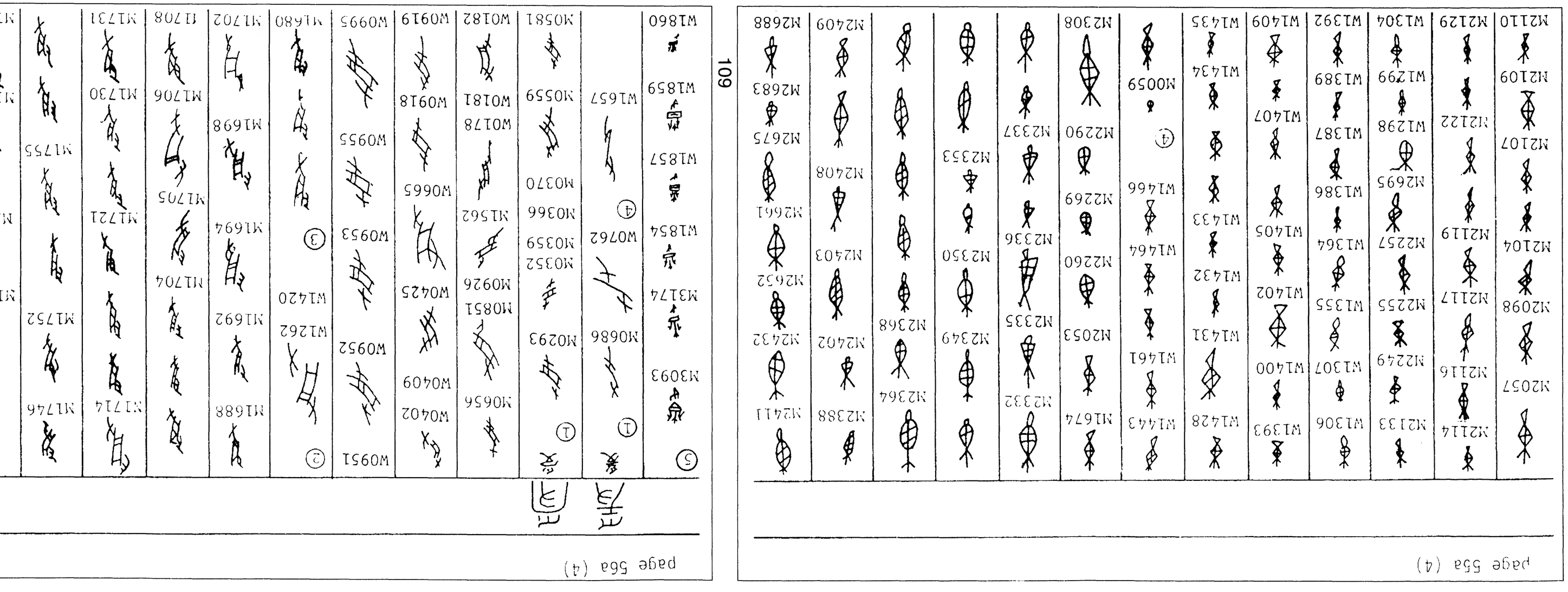
page 52b(4)

丁	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
① M1911 M1920	① M1924	④ W1496	also page 123	① M1942	① W1417	① M1942	④ W1582	④ M1929	① M1942	① W1417	① M1942
① W1465 M1934	③ M0856 M0820 M0140	① M0144 M0316 M0396 M0624 M0830 W0306	④ W1626	① M0845	① M0841 M0345 W1398	② M1595 M1651 M1652 M1653 W1081 W1094 M1748 M1691	② W0505 W0642 W0725 W0733 W0959	③ W1148 W1235 W1236 M1871 M1872 M1875	① M1780 M1870	① W1095	① M1887 M1890 M1891 M1897 M1900 M1903
① M1906 M1911 M1915 M1918 M1920	① M1887 M1890 M1891 M1897 M1900 M1903	① M1877 M1878 M1879	① M1780 M1870	① W1095 W1148 W1235 W1236 M1871 M1872 M1875	② M1595 M1651 M1652 M1653 W1081 W1094 M1748 M1691	① M0144 M0316 M0396 M0624 M0830 W0306	① W0505 W0642 W0725 W0733 W0959	① W1148 W1235 W1236 M1871 M1872 M1875	① M1780 M1870	① W1095	① M1887 M1890 M1891 M1897 M1900 M1903

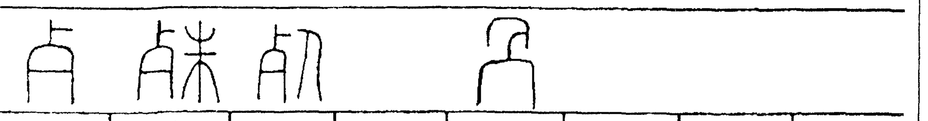
page 53b(4)

| | | |

page 55a (4)


M2057 M2098 M2104 M2107 M2109 M2110
M2114 M2116 M2117 M2119 M2122 M2129
M2133 M2224 M2255 M2257 M2695 M2298 M2304
M2306 M2307 M2355 M2364 M2386 M2387 M2389 M2392
M2402 M2403 M2408 M2409
M2428 M2432 M2434 M2435
M2053 M2260 M2269 M2290 M2308
M2331 M2332 M2333 M2335 M2336 M2337
M2349 M2350 M2353
M2364 M2368
M0059 ④
W1393 W1400 W1402 W1405 W1407 W1409
M2674 M2675 M2676 M2677 M2683
M2688
M2243 M2252 M2261 M2262 M2263 M2264 M2265 M2266 M2267 M2268 M2269 M2270 M2271 M2272 M2273 M2274 M2275 M2276 M2277 M2278 M2279 M2280 M2281 M2282 M2283 M2284 M2285 M2286 M2287 M2288 M2289 M2290 M2291 M2292 M2293 M2294 M2295 M2296 M2297 M2298 M2299 M2300

page 57a (4)



W0043 W0071 W0082 W0108 W0125 W0126

W0130 W0152 W0251 W0260 W0263 W0273 W0274

W0381 W0388 W0392 W0393 W0448 W0483 W0484 W0491 W0511

W0513 W0515 W0516 W0520 W0521 W0527 W0530

W0534 W0541 W0542 W0543 W0618 W0897 W0902 W0024

夕 ① M0996 ④ M2317 W1519

殊 ① W0959 W0960

死 ① M0702 M0705 M0708 M0711 M0719

M0727 M1546 W0062 W0486 W0496 W0611

禺 ② M1209 M1216 M1225 M1340 M1345 M1361 M1432

M1439 M1447 M1448 M1482 M1499 M1500 M1516 M1517

W1019 W1039 W1041 W1110 W1144 M1521 M1523 M1555

① M0140 M0151 M0252 M0354 M0360 M0382 W0428 M0448 M0469

page 57b (4)

M0471 M0472 M0474 M0475 M0476 M0477 M0478 W0479

M0480 M0481 M0482 M0483 M0597 M0696 M0717 M0732

M0771 M1031 M1122 M1123 M1124 M1125

M1126 M1504 M1544 M1662 W0204 W0260 W0261

W0263 W0264 W0267 W0268 W0269 W0270 W0271 W0272 W0276

W0277 W0278 W0279 W0280 W0281 W0283 W0284 W0285

W0286 W0287 W0288 W0290 W0291 W0292 W0293 W0294 W0295

W0554 W0637 W0638 W0671 W0684 W0719 W0735

W0737 W0867 W0927 W0929 W0930 W0961 W0962

② M1177 M1222 M1234 M1243 M1275 M1328 M1332 M1333

M1334 M1337 M1338 M1341 M1351 M1360 M1368 M1499

M1500 M1501 M1502 M1506 M1507 M1508 M1509

M1510 M1511 M1512 M1513 M1514 M1515

page 58a (4)

M1518 M1519 M1522 M1523 M1525 M1536 M1537 M1624

M1626 M1629 M1631 M1632 M1633 M1634 M1636 M1642

M1644 M3063 W1030 W1032 W1033 W1037 W1041 W1055 W1062 W1103

W1104 W1105 W1108 W1111 W1112 W1113 W1117 W1118

W1119 W1122 W1123 W1125 W1228 W1149 W1200 W1233 W1252

W1253 W1258 W1259 W1269 W1272 W1273 W1274

W1275 W1277 W1284 W1289 ③ M0473 M1661 M1663

M1664 W1324 W1326 W1327 W1328 W1330

W1331 W1332 W1335 W1333 W1334 W1336 W1337 W1339 W1340

W1422 W1423 W1424 W1425 ④ M2276 M2277

M2278 M2279 M2280 M2288 M2307 M2331 M2338

M2403 M2413 M2432 M2455

M2508 M2542 M2543 M2544

page 58b (4)

M2545 M2546 M2549

M2547 M2548 M2550 M2551 M2552

M2553 M2554 M2555

M2556 M2558 M2560 M2561

M2563 M2564

M2565 M2566 M2567 M2568 M2569

M2570 M2571 M2572 M2574

M2573 M2575

M2576 M2577 M2578 M2579

M2580 M2582 M2583 M2584 M2585 M2586

M2587 M2588 M2589 M2590 M2592

M2591 M2593

M2594 M2595 M2596 M2599

page 59a (4)

骨

M2597 M2598 | M2600 M2601 M2602 M2603 M2604 M2605 | M2606 M2607 M2608 M2609 M2610 | M2611 M2612 M2613 | M2614 M2616 M2617 M2620 M2621 M2675 W1497 | W1610 W1613 W1614 W1615 W1616 | W1617 W1618 W1619 | W1520 W1525 W1620 | W1621 W1622 W1623 | W1654 W1656 W1670 W1671 ⑤ M3161 W1871 | 骨 ④ M2543 W1679 | 骨 ④ M2324 | 骨三 ④ M2535 M2535 M2729 M2731

117

page 59b (4)

冎 高 肘 脹 刀 also page 104 利 耒 初 剛 刜

M2730 M2734 | ① M0031 M0697 M0698 M0704 M0709 M0718 | W0014 W0501 | 膏 ① M2102 | 肘 ① W0786 | ① M1383 | 刀 ③ M2719 ④ W1655 | 利 ① M0233 M0628 M0950 ③ M1835 M2013 | M2127 W1350 ⑤ W1903 | 初 ① M0312 | 剛 ③ M1801 ④ M2381 M2424 W1650 | 刜 ④ M2332

118

page 60a (4)

剔 則 利 耤 角

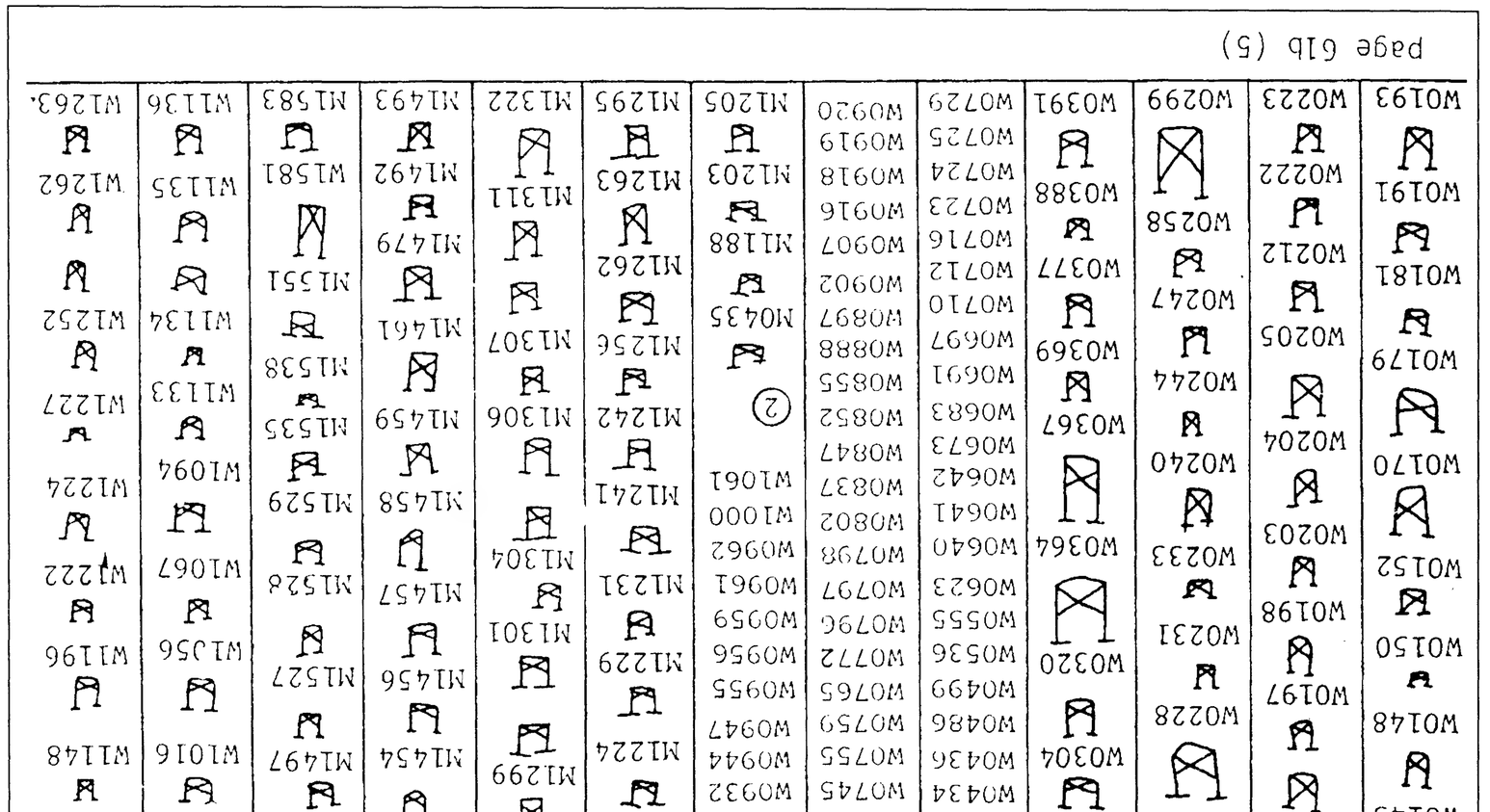
③ M1760 | ④ M1751 | also page 165 | 耤 ① M0531 W0322 ④ W1526 | 角 ① M0895 W0137 ④ W1629

119

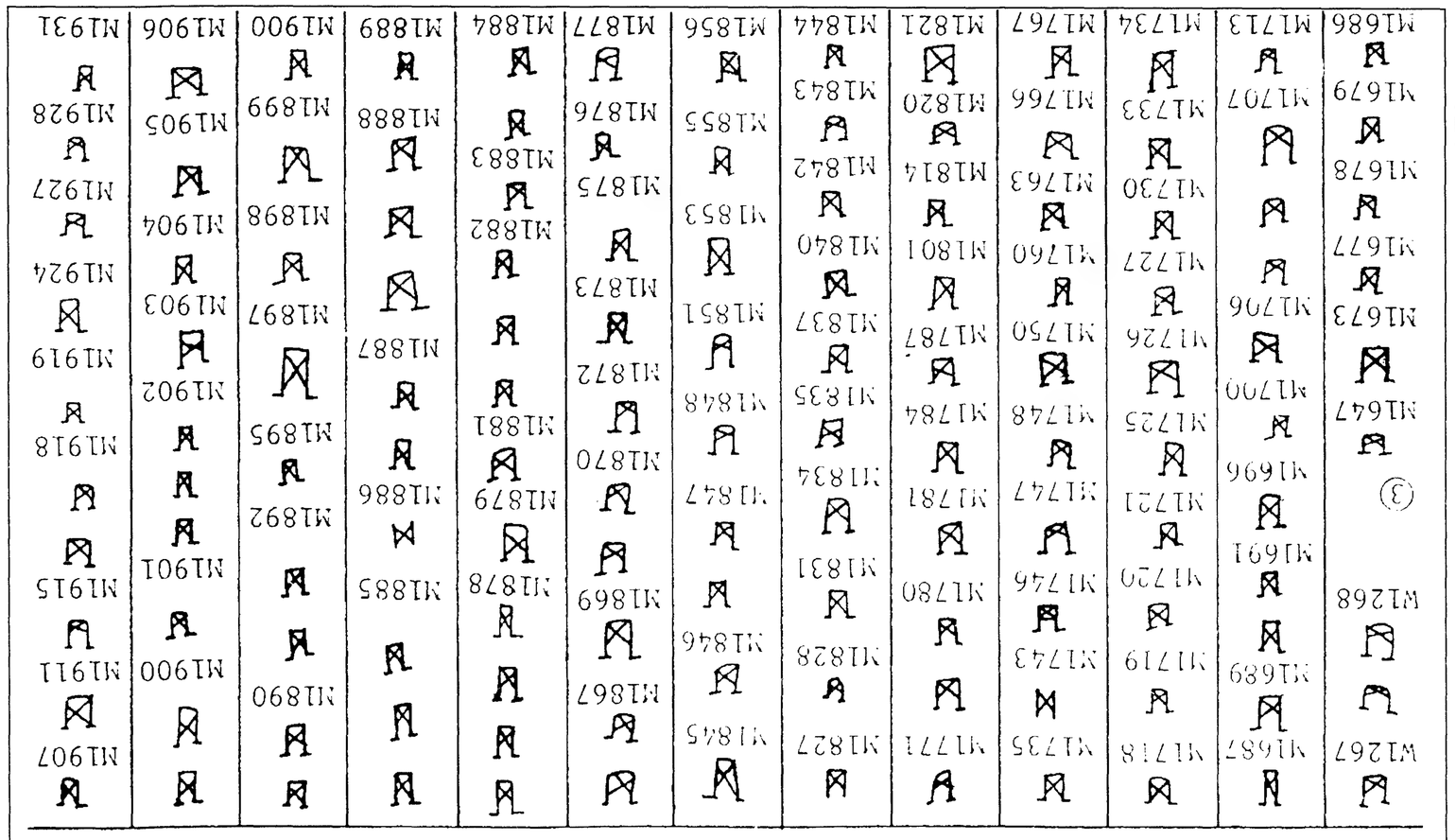
page 60b (4)

120

page 61 (5)



page 62a (5)



page 61b (5)

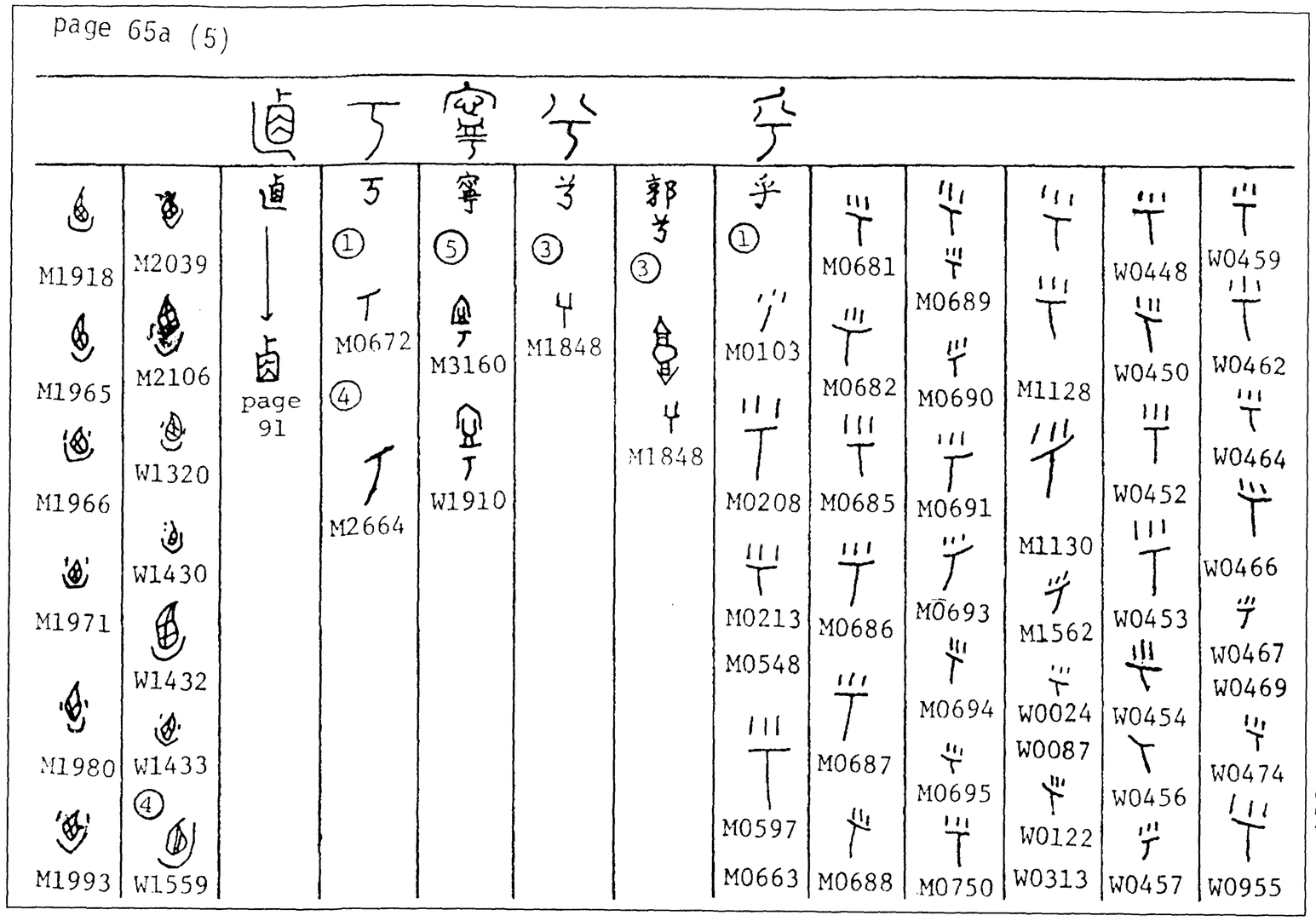
page 62b (5)

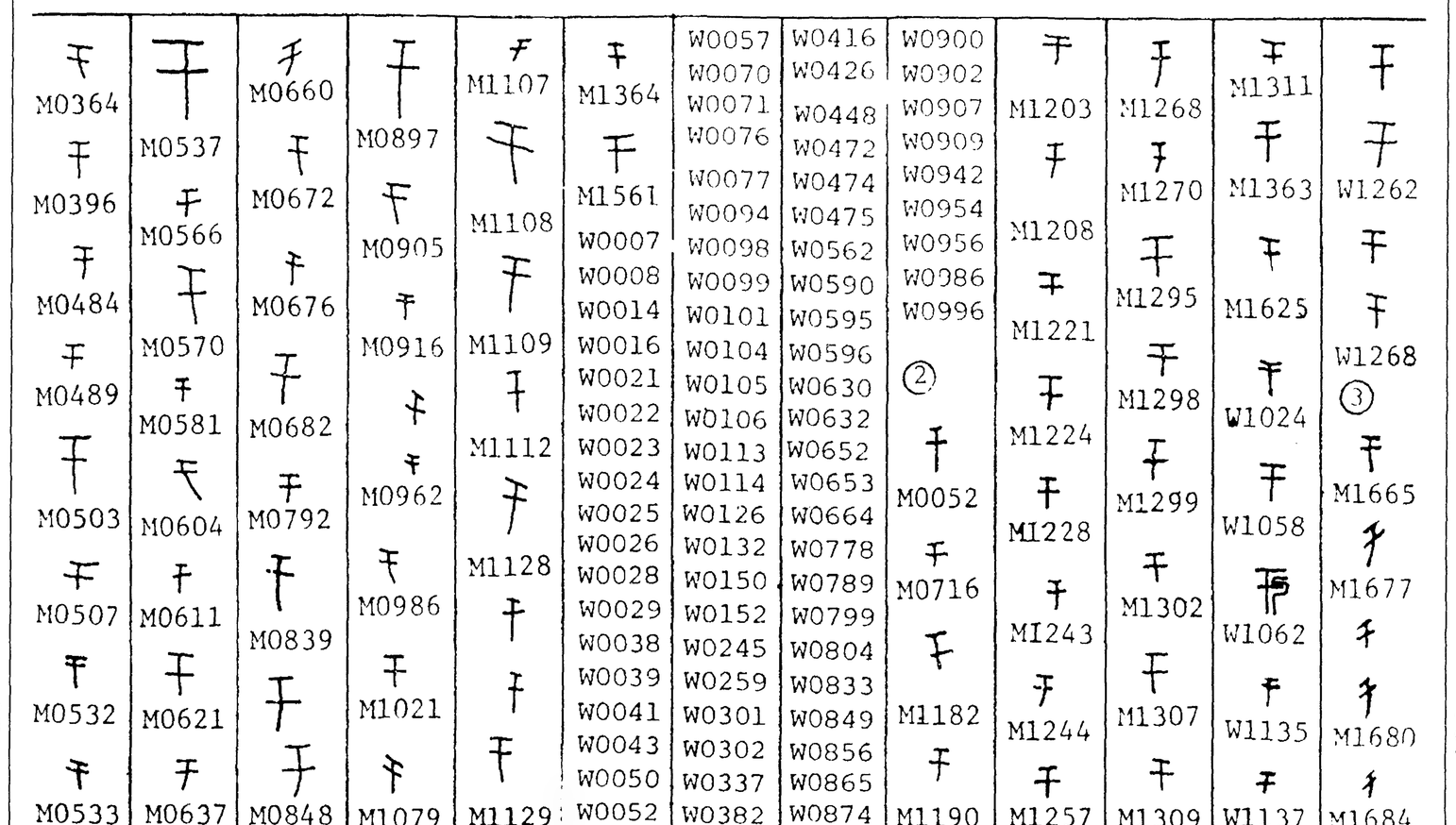
page 63a (5)

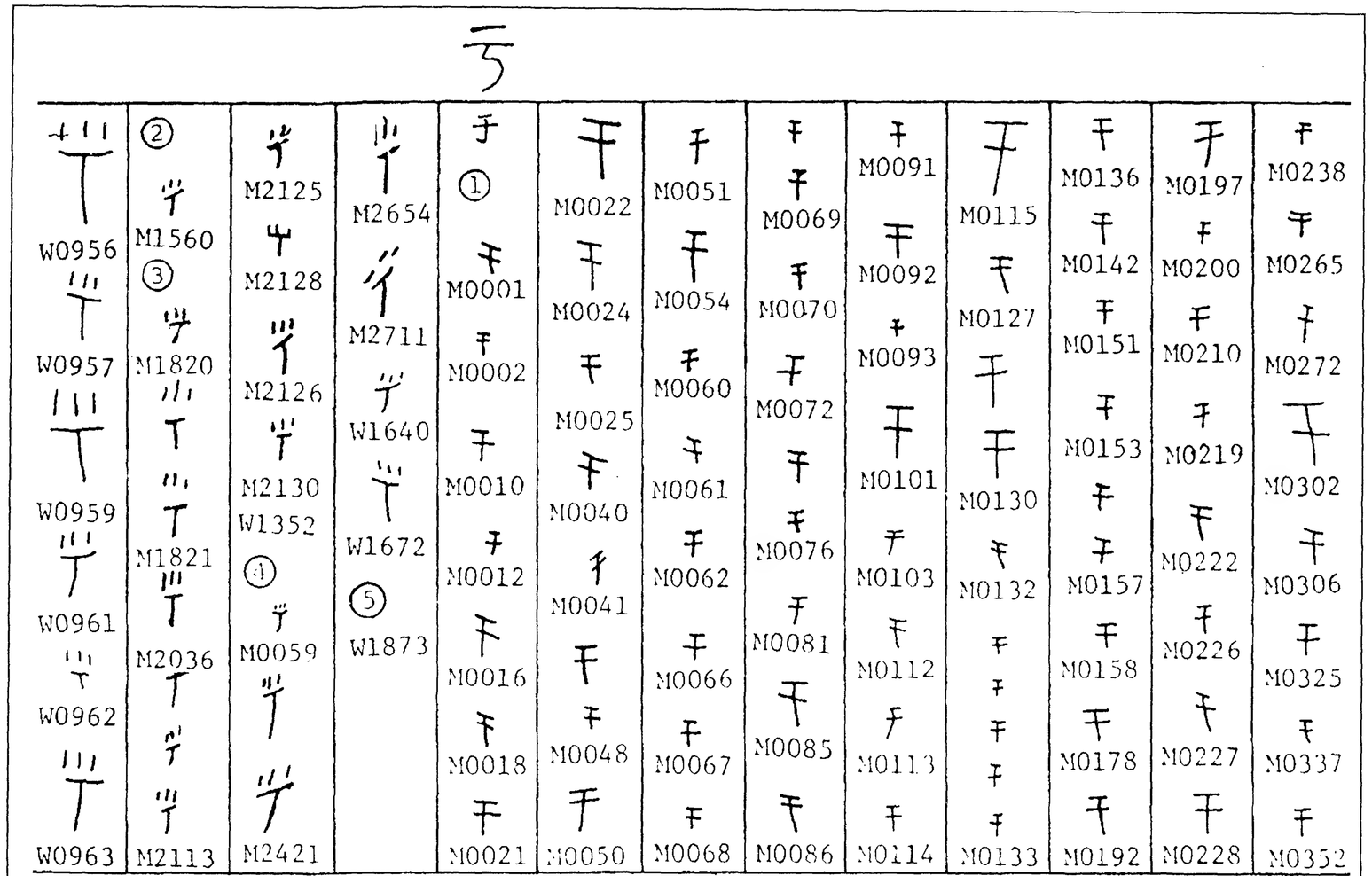
M2350 M2359 M2360 M2367 M2370 M2380 M2386 M2389
M2393 M2394 M2395 M2396 M2424 M2408 M2406 M2402 M2398
M2429 M2434 M2445 M2472 M2480 M2481 M2482
M2483 M2487 M2488 M2489 M2490 M2493 M2494
M2499 M2500 M2506 M2508 M2509 M2510 M2514 M2520
M2528 M2532 M2623 M2624 M2625 M2646 M2645 M2674 M2678 M2679 M2689 M2703 M2705 M2718
M2724 M2725 M2740 M2748 M2749 M2752 M2789
M2819 M2820 M2821 M2822 M2823 M2824 M2825 M2826 M2827 M2828 M2829 M2830 M2831 M2832 M2833 M2834 M2835 M2836 M2837 M2838 M2839 M2840 M2841 M2842 M2843 M2844 M2845 M2846 M2847 M2848 M2849 M2850 M2851 M2852 M2853 M2854 M2855 M2856 M2857 M2858 M2859 M2860 M2861 M2862 M2863 M2864 M2865 M2866 M2867 M2868 M2869 M2870 M2871 M2872 M2873 M2874 M2875 M2876 M2877 M2878 M2879 M2880 M2881 M2882
M1553 M1559 M1560 M1565 M1639 M1634 M1629 M1605 M1601 M1595 M1576 M1644
M1520 M1518 M1515 M1511 M1507 M1496 M1526 M1539 M1641
M0397 M0374 M0339 M0597 M0163 M1458 M2704 M2342 M2712 M1648
M0439 M0700
M1613 M0956 M0779 M1 M2992 M2564 M3174
M0619 M1902 M1897 M1889 M3176 M3175 M2282 M2265 M1154 M0613 M0653 M1152 M0761 M0765 M0516 M0959 M0977 M2425 M1549 M0522 M0549 M0562 M1362 M0296 M0117 M0012 M0033 M0050 M1383 M1313 M1306 M1716 M1713 M0760 M0763 M0797 M0799 M0980 M1123 M0533 M0490 M0420 M0401 M0393 M0210 M0170 M0053 M0052 M1127 M0568 M0043 M0058 M0139 M1393 M4694 M3161 M0521 M1112 M0937 M1680 M1698
M0621 M0647 M0707 M0808 M0931 M0936 M0959 M0991

page 64a (5)

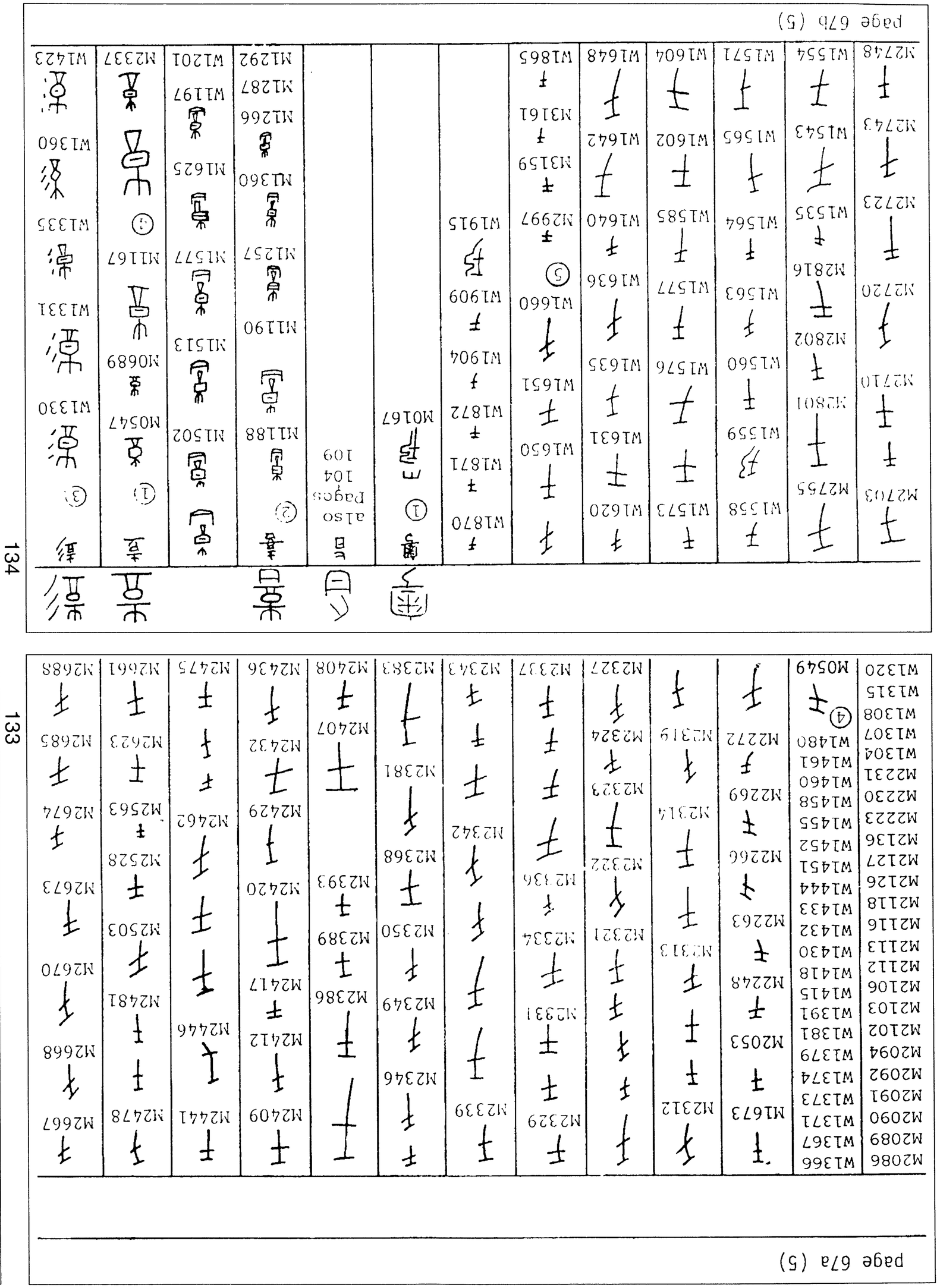
page 64b (5)


M1918
M1965
M1966
M1971
M1980
M1993
M2039
M2106
W1320
W1430
W1432
W1433
④
W1559
M2664
④
M3160
W1910
M1848
③
M1848
M0103
M0208
M0213
M0548
M0597
M0663
M0681
M0682
M0685
M0686
M0687
M0688
M0689
M0690
M0691
M0693
M0694
M0695
M0750
M1128
M1130
M1562
W0024
W0087
W0122
W0313
W0448
W0450
W0452
W0453
W0454
W0456
W0457
W0459
W0462
W0464
W0466
W0467
W0469
W0474
W0955


M0364
M0396
M0484
M0489
M0503
M0507
M0532
M0533
M0537
M0566
M0570
M0581
M0604
M0611
M0621
M0637
M0660
M0672
M0676
M0682
M0792
M0839
M0848
M0897
M0905
M0916
M0962
M0986
M1021
M1079
M1107
M1108
M1109
M1112
M1128
M1129
M1364
M1561
W0007
W0008
W0014
W0016
W0021
W0022
W0023
W0024
W0025
W0026
W0028
W0029
W0038
W0039
W0041
W0043
W0050
W0052
W0057
W0070
W0071
W0076
W0077
W0094
W0098
W0099
W0101
W0104
W0105
W0106
W0113
W0114
W0126
W0132
W0150
W0152
W0245
W0259
W0301
W0302
W0337
W0382
W0416
W0426
W0448
W0472
W0474
W0475
W0562
W0590
W0595
W0596
W0630
W0632
W0652
W0653
W0664
W0778
W0789
W0799
W0804
W0833
W0849
W0856
W0865
W0874
W0900
W0902
W0907
W0909
W0942
W0954
W0956
W0986
W0996
②
M0052
M0716
M1182
M1190
M1203
M1208
M1221
M1224
M1228
M1243
M1244
M1257
M1268
M1270
M1295
M1298
M1299
M1302
M1307
M1309
M1311
M1363
M1625
W1024
W1058
W1062
W1135
W1137
W1262
W1268
③
M1665
M1677
M1680
M1684


W0956
W0957
W0959
W0961
W0962
W0963
②
M1560
③
M1820
M1821
M2036
M2113
M2125
M2128
M2126
M2130
W1352
④
M0059
M2421
M2654
M2711
W1640
W1672
⑤
W1873
①
M0001
M0002
M0010
M0012
M0016
M0018
M0021
M0022
M0024
M0025
M0040
M0041
M0048
M0050
M0051
M0054
M0060
M0061
M0062
M0066
M0067
M0068
M0069
M0070
M0072
M0076
M0081
M0085
M0086
M0091
M0092
M0093
M0101
M0103
M0112
M0113
M0114
M0115
M0127
M0130
M0132
M0133
M0136
M0142
M0151
M0153
M0157
M0158
M0178
M0192
M0197
M0200
M0210
M0219
M0222
M0226
M0227
M0228
M0238
M0265
M0272
M0302
M0306
M0325
M0337
M0352


M1690
M1698
M1706
M1725
M1728
M1734
M1738
M1757
M1759
M1766
M1767
M1768
M1770
M1783
M1802
M1803
M1808
M1816
M1818
M1823
M1824
M1827
M1828
M1832
M1834
M1835
M1838
M1847
M1871
M1878
M1890
M1896
M1900
M1903
M1907
M1918
M1925
M1938
M1945
M1947
M1949
M1962
M1965
M1966
M1967
M1972
M1980
M1981
M1993
M2039
M2041
M2050
M2058
M2061
M2404
M2059
M2060
M2063
M2064
M2065
M2066
M2067
M2068
M2069
M2070
M2071
M2072
M2073
M2074
M2075
M2076
M2077
M2078
M2079
M2080
M2081
M2083
M2084
M2085
M2087


M2086 M2089 M2090 M2091 M2092 M2094 M2102 M2103 M2106 M2112 M2113 M2116 M2118 M2126 M2127 M2136 M2223 M2230 M2231 M1304 M1307 M1308 M1315 M1320
M1366 M1367 M1371 M1373 M1374 M1379 M1381 M1391 M1415 M1418 M1430 M1432 M1433 M1444 M1451 M1452 M1455 M1458 M1460 M1461 M1480
M1673 M2053 M2248 M2263 M2266 M2269 M2272 M2312 M2313 M2314 M2319 M2321 M2322 M2323 M2324 M2327 M2329 M2331 M2334 M2336 M2337 M2339 M2342 M2343 M2346 M2349 M2350 M2368 M2381 M2383 M2386 M2389 M2393 M2407 M2408 M2409 M2412 M2417 M2420 M2429 M2432 M2436 M2441 M2446 M2462 M2473 M2475 M2478 M2481 M2503 M2528 M2563 M2623 M2661 M2667 M2668 M2670 M2673 M2674 M2685 M2688
M0549 ④ M0617 M0688 M0696 M0977 M1007 M1320 M1330 M1331 M1333 M1335 M1337 M1360 M1423 M1428 M1429 M1430 M1431 M1432 M1433 M1434 M1435 M1436 M1437 M1438 M1439 M1440 M1441 M1442 M1443 M1444 M1445 M1446 M1447 M1448 M1449 M1450 M1451 M1452 M1453 M1454 M1455 M1456 M1457 M1458 M1459 M1460 M1461 M1462 M1463 M1464 M1465 M1466 M1467

益 ① M0307 M0316 M0522 ② M1292 M1373 M1532 — W1078 W1267 W1268

盡 ① M1113 ③ M2113 M2126 — ① M0181 M1009

盟 ① M0665 ③ M1910

① W0241

① M0538

① M0558

去 ③ M1835 ⑤ W1858

血 ① M0310 ② M1375 ④ M2425

爭 ① W0249 ② M1174 M1387 M1408 M1409

M1410 M1411 M1412 M1413 M1414 M1415

M1416 M1417 M1418 M1420 M1421 M1422 M1433

既 ③ M1680 M2106 W1430

㞢 ① M0253 M0326 W0119 W0150 ② M1211 M1282 M1376 W1050

③ M1691 M1745 M1770 W1399 W1400 ④ M2321 M2703

甘㞢 ① M0131

③ M1691

① W0409

食 ③ M2106 ④ M2688

多食 ③ M2115

饗 饗 ① M0294 M0448 W0904

養 ④ M2337 M2443 M2664

饗 → 卿 page 107

合 ① W0473

今 ① M0073 M0382 M0384 M0429 M0476 M0479 M0524

M1600 W1128 W1131 ③ M1734 M1808 M2343 — ④ M2339 W1608 — ④ M2371 M2393 — 主 ② M0319 — 丹 ① M0546

井 ① M0709 M0772 W0093 W0546 W0884 also page 96

① M0622

阱 ① M0132 M0494 M0503 W0387 W0931 ③ M2057

M2695 ④ M2661 W1626

皂 ① M0666 ④ W1633

即 ① M0002 ② M1431 M1622 M1626 M1631 W1261

③ M1699 11734 M1756 W1468 ④ M2393

M2397 M2705 M2708 M2709 W1576

M0919 M1099 M1112 M1362 M1561 W0061 W0098 W0191

W0198 W0199 W0200 W0201 W0204 W0215 W0228 W0240

W0252 W0255 W0258 W0277 W0280 W0281 W0282 W0286 W0294

W0295 W0429 W0631 W0633 W0656 W0695 W0697 W0704 W0724

W0743 W0746 W0785 W0792 W0825 W0828 W0865 W0868 W0895

W0980 ② M1311 M1423 M1424 M1439 M1478 M1482

M1516 M1522 M1525 M1543 M1590 M1592 M1594 W0892

W1083 W1100 W1101 W1102 W1115 W1119 W1124 W1127

W1128 W1130 W1144 W1209 W1211 W1213 W1273 W1276

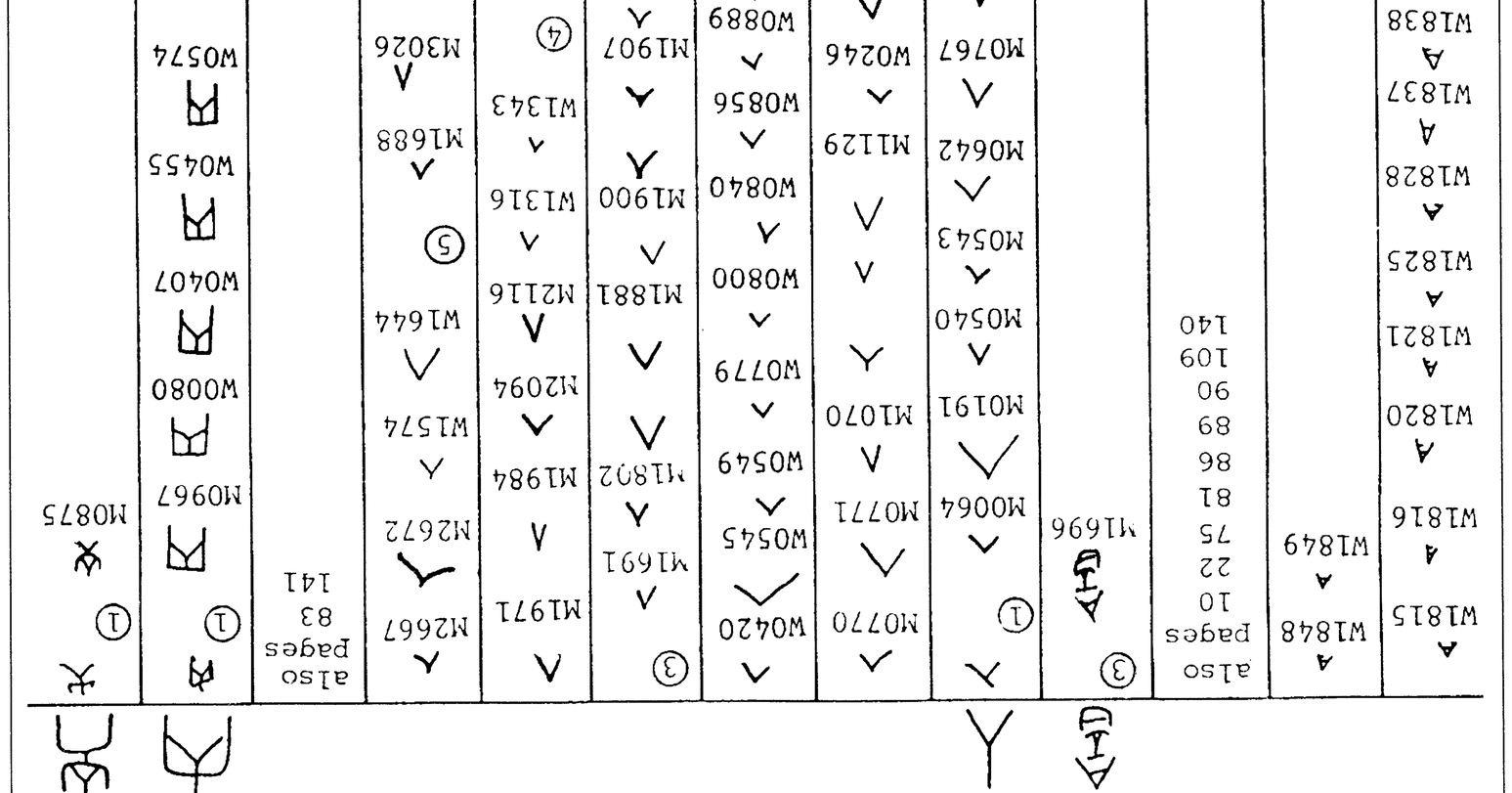
③ M1661 M1709 M1780 M1781 M1896 M2222 W1342

④ M2262 M2270 M2277 M2286 M2294 M2417 M2484 M2652 M2776

⑤ M3097 M3098 M3099 M3100 M3101 M3102 M3103

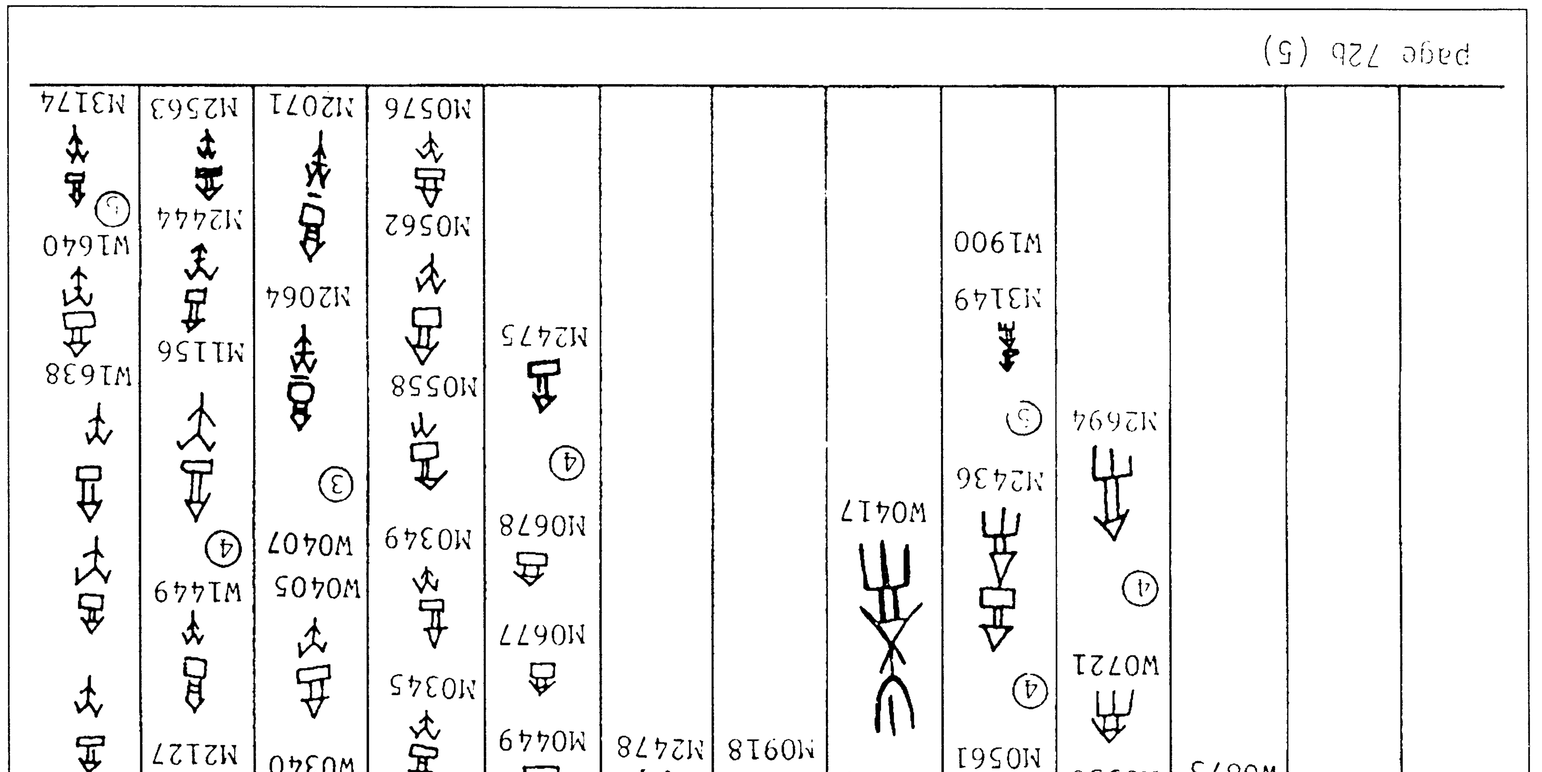
M3112 M3114 M3115 M3117 M3118 M3120 M3122 M3127 M3129 M3161

page 71a (5)

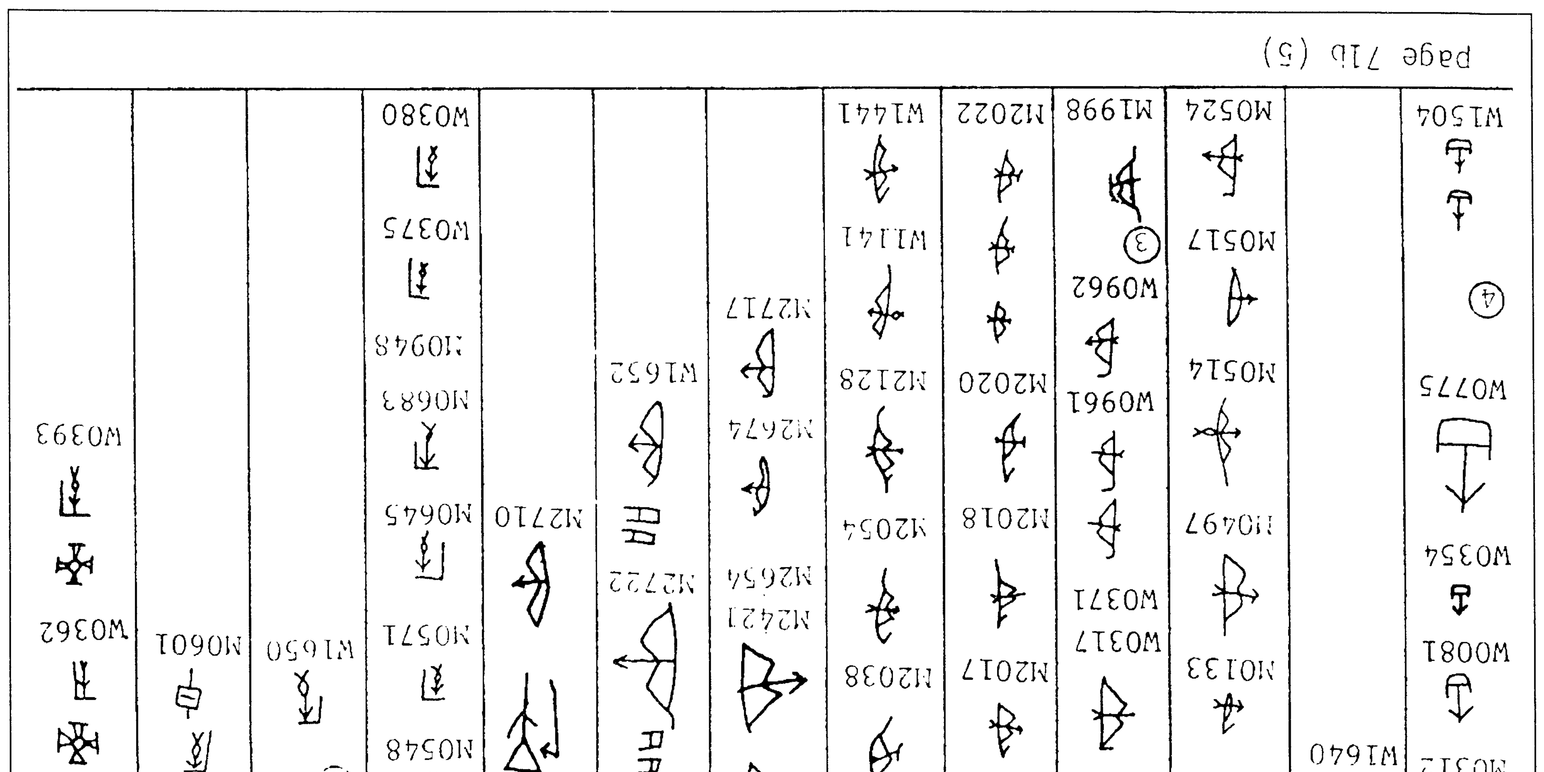


page 71b (5)

page 72a (5)



page 72b (5)



page 73a (5)

④ W1650	鼻 ① W0347	鼻 ③ M2059 M2091 W1418 ⑤ W1687 W1856	W1862 W1868	良 ① W0112 W0495 W0860 ⑤ M2880	亩 ① M0598 W0071	畐 ① M0865 W0361 W0806 W0895 ④ W1640	嗇 ① M0515 M0707 M1020 W0473 ④ W1503	啬 ① M0754	来 ① M0053 M0108 M0204 M0236 M0253 M0326 M0453	M0651 M0713 M0885 M0967 M1364 M1562 W0267 W0298	W0344 W0377 W0380 W0392 W0401 W0595 W0596	W0645 W0659 W0747 W0880 W0939 W0945

145

page 74a (5)

麋 ① M0373 ② M1265 ③ W1461	④ W1571	⑤ M3026	各 ① M0771	舞 → 無 page 75	韋 ① M0318 M0356 M0678 M0793 M0803 M0815 W0869 W0987	③ M2025	乘・望乘 ① W0381 ④	W1637		

147

page 73b (5)

W0946 W0996 W1000 ② M1367 M1542 M1550 M1551	M1552 M1553 M1556 M1558 W1143 W1213 W1219 W1267	W1268 ③ M1684 M1703 M1750 M1780 M1780 M1781	M1817 M2222 M2223 M2644 ④ M2283 M2309 M2337	M2346 M2349 M2357 M2412 M2425 M2429 M2673	M2682 M2740 W1559 W1585 W1629 W1630	W1660 ⑤ M2655 M3132 M3133 M3134 M3135 M3136 M3143 M3150	M3152 M3154 M3155 M3156 M3159 M3174 W1853 W1854 W1857	W1858 W1859 W1862 W1864 W1865 W1868 W1900 W1904	W1905 W1906 W1909	also page 82	孝 ③ M2039	复 ① M0314 ④ M2402

146

page 74b (5)

148

page 75a (6)

also page 97

also page 82

page 75a (6)

also page 104

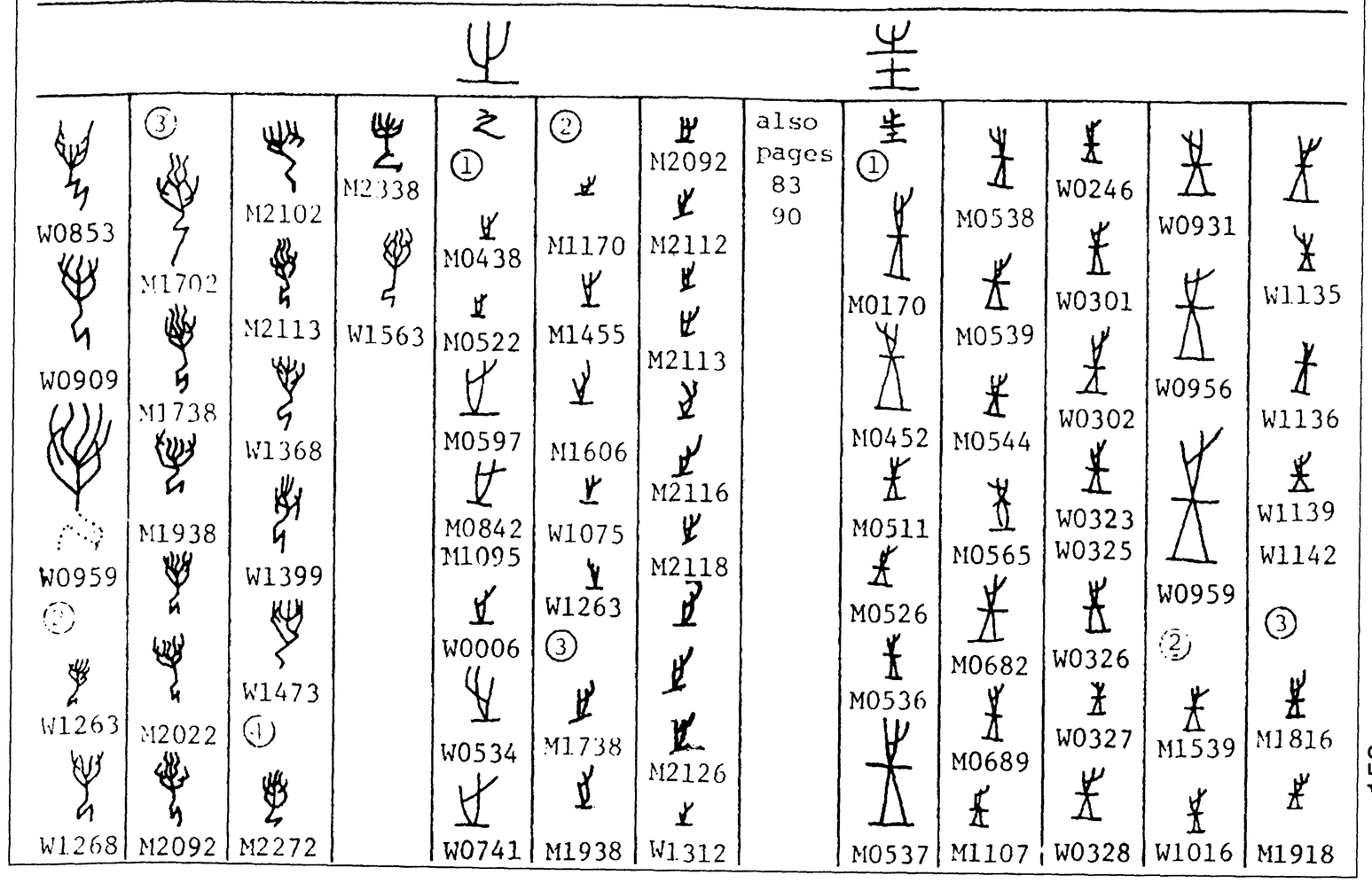
page 75b (6)

also page 96

also page 25 102 142

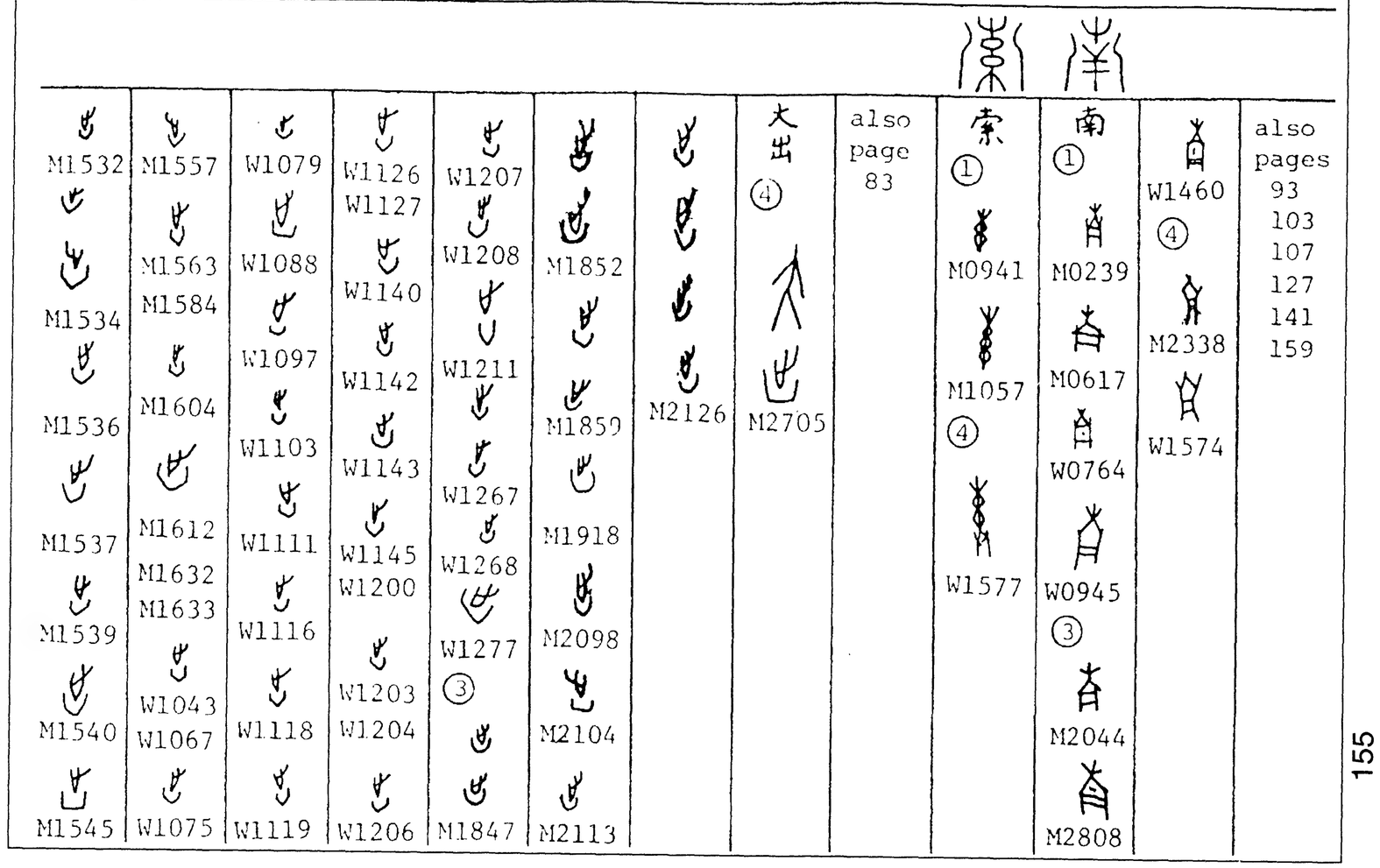
page 75b (6)

page 77a (6)



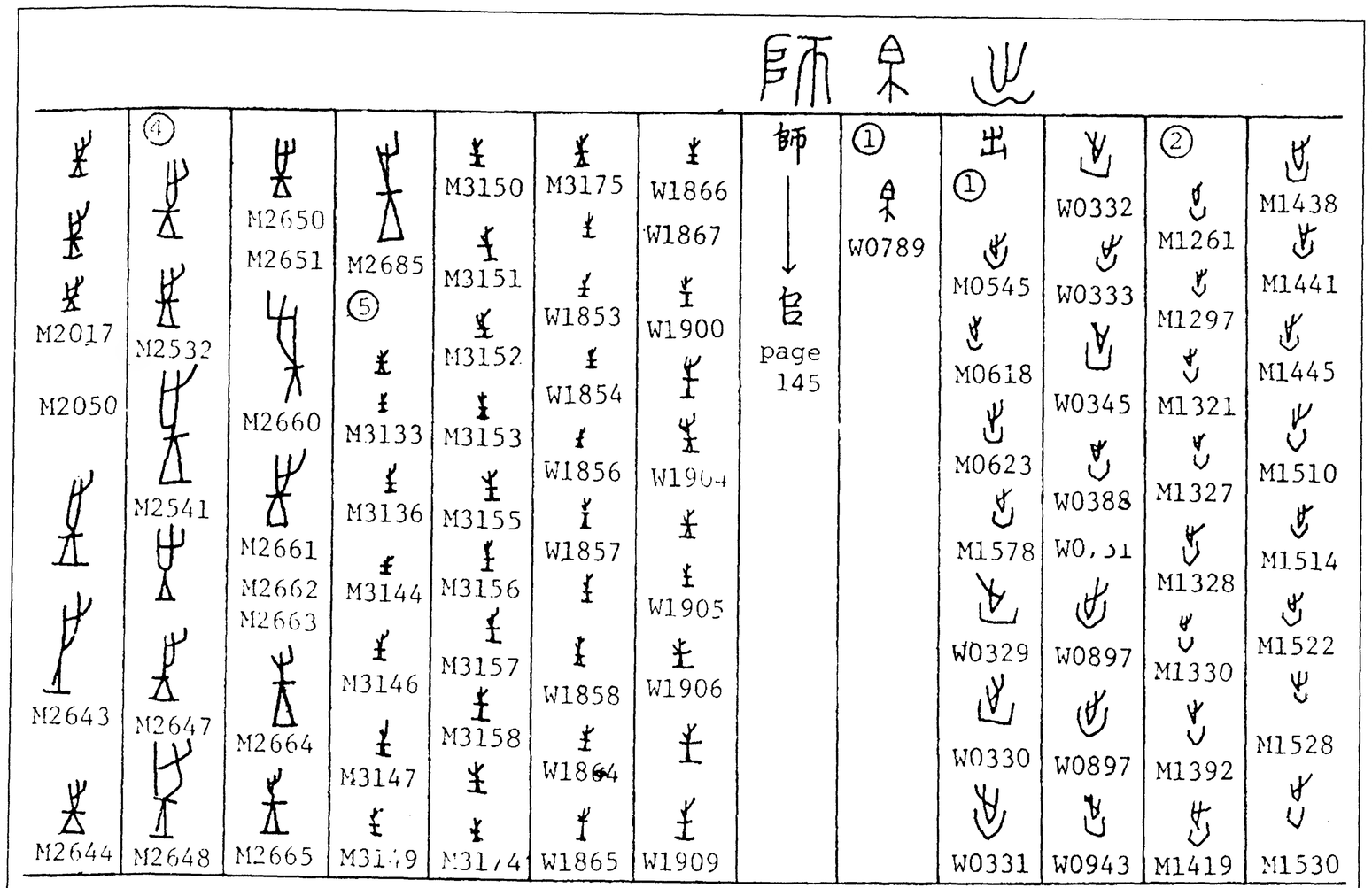
153

page 78a (6)



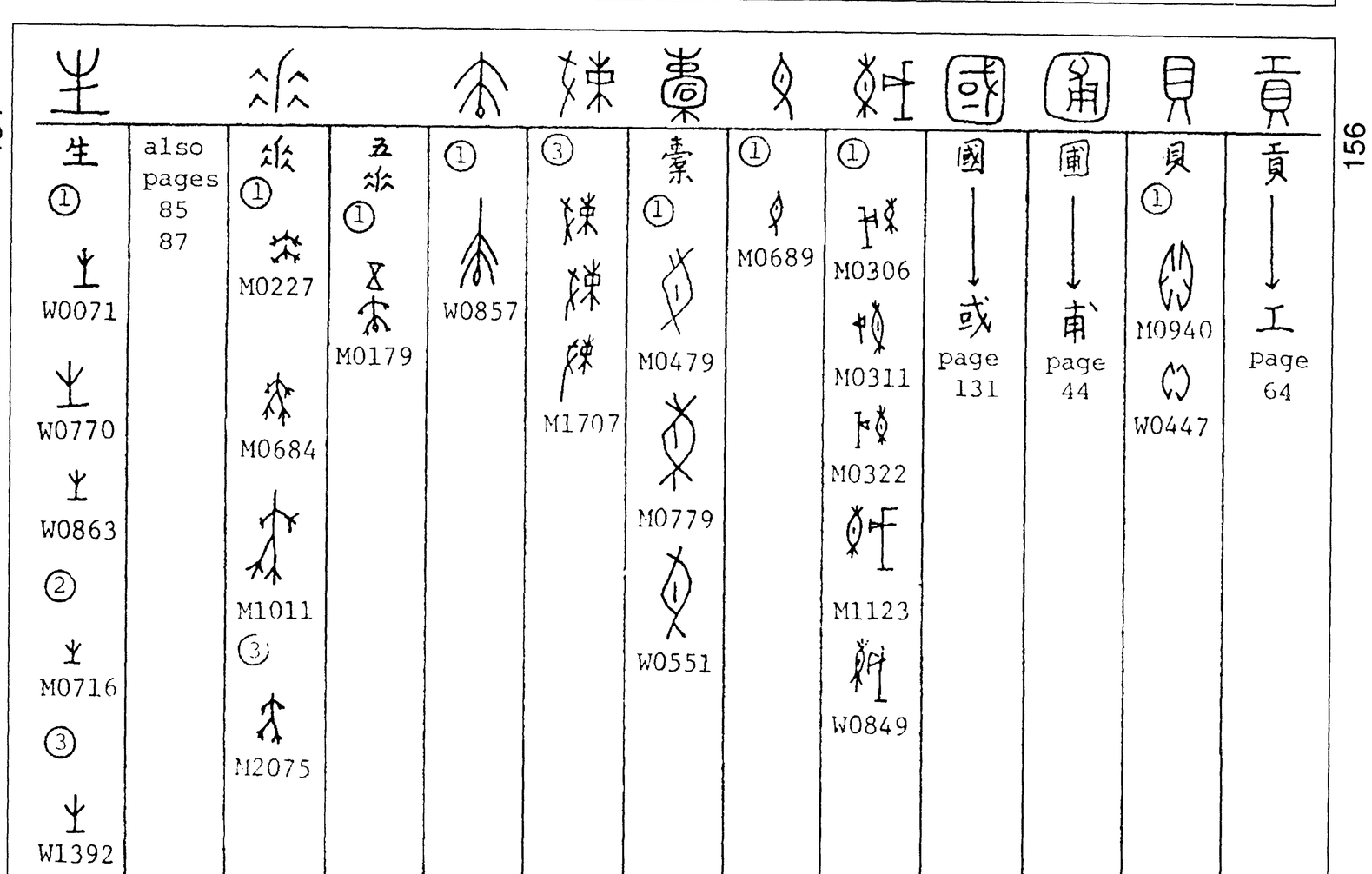
155

page 77b (6)



154

page 78b (6)

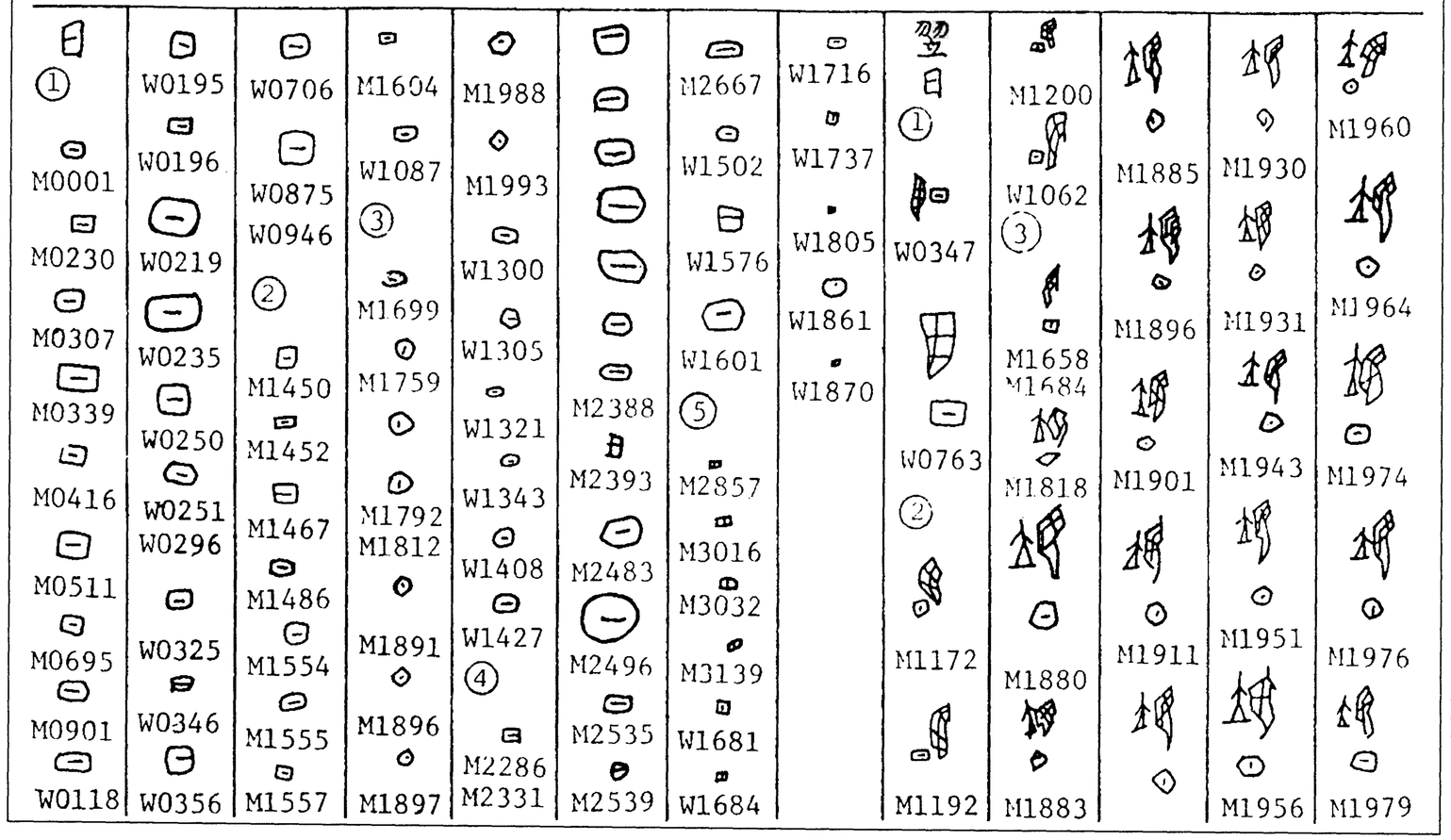


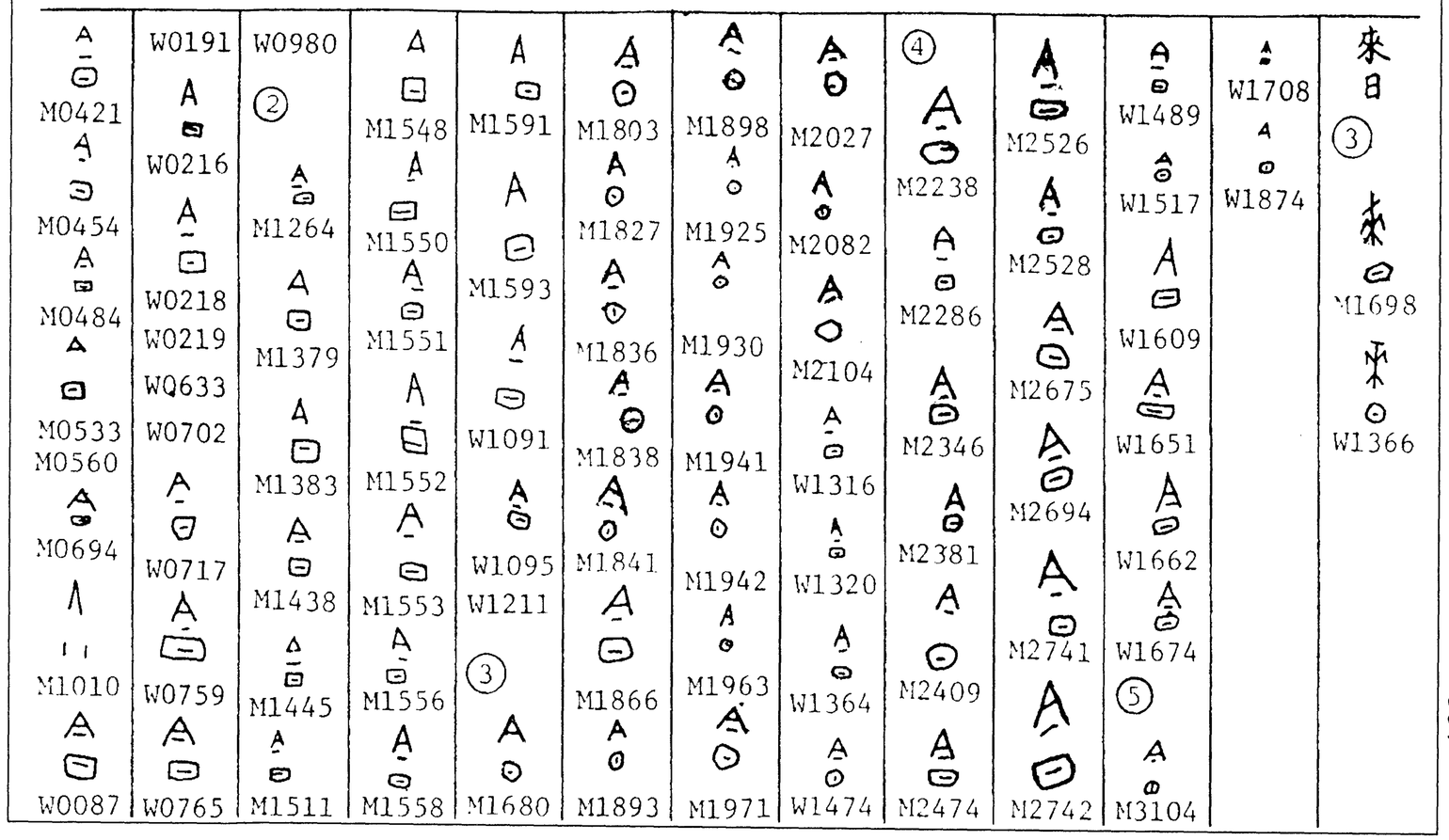
156

page 79a (6)

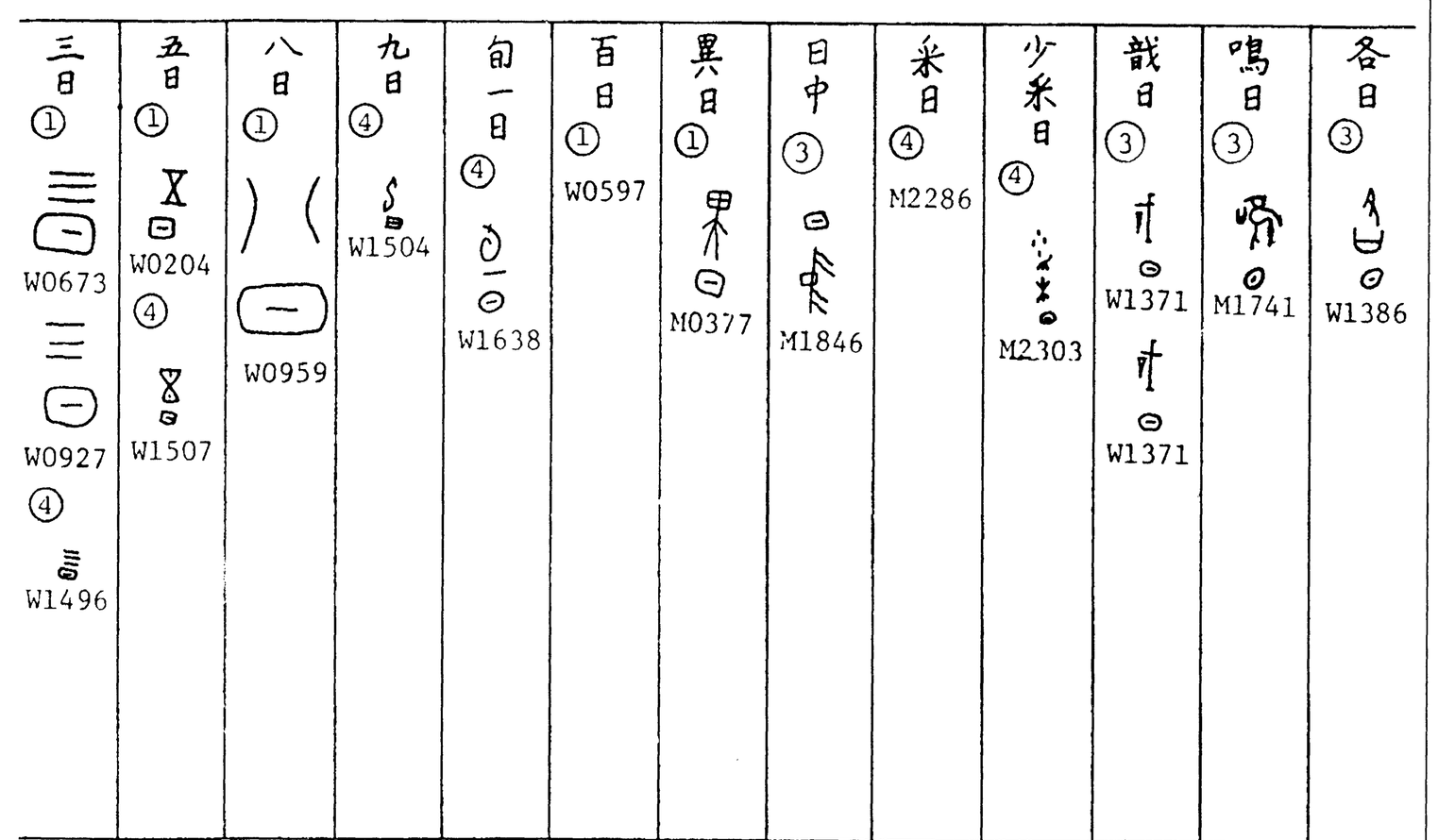
| 賓 | 賄 | 賣 | 賞 | 賞 | 賞



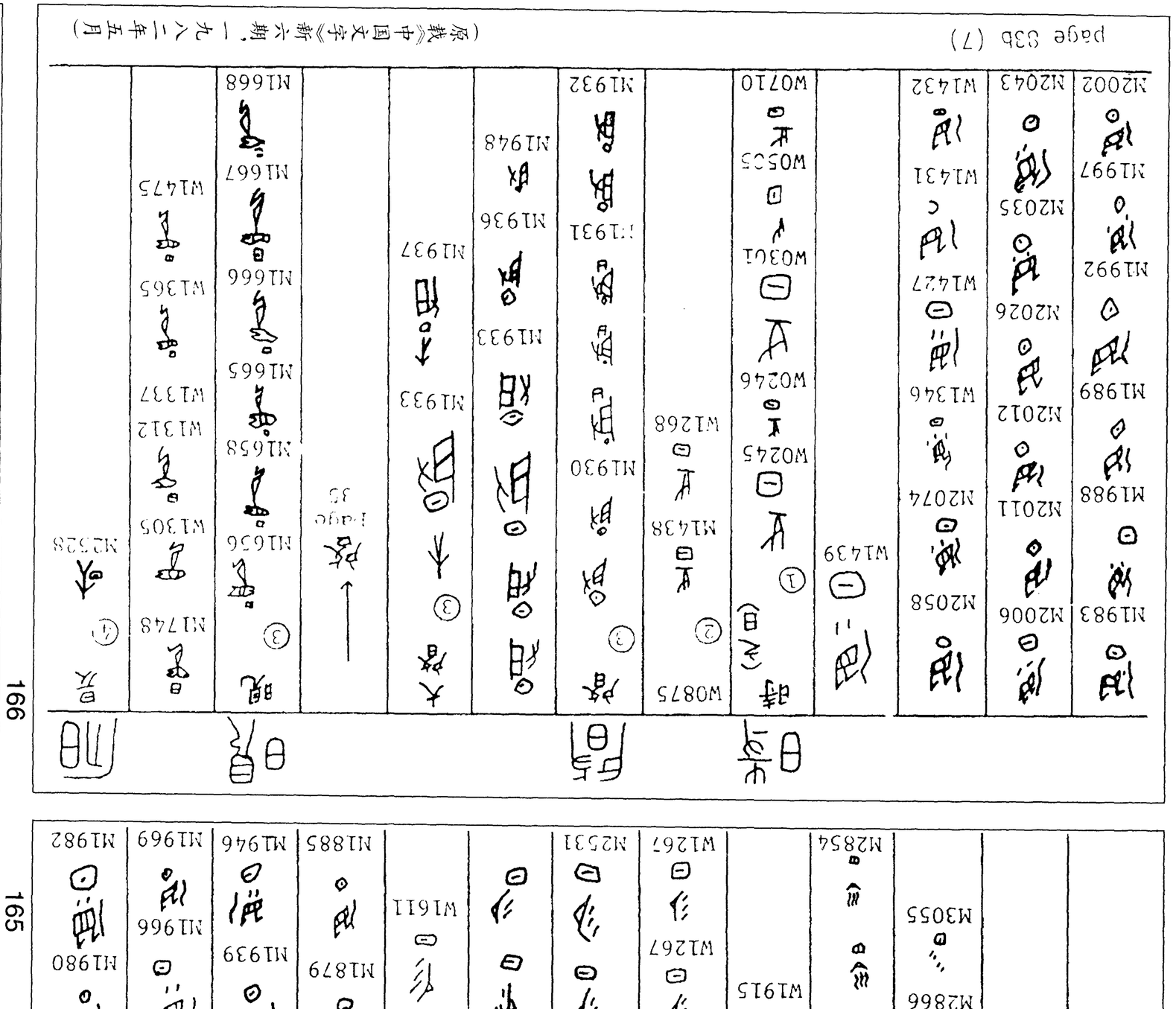

①
M0001
M0230
M0307
M0339
M0416
M0511
M0695
M0901
W0118
W0195
W0196
W0219
W0235
W0250
W0251
W0296
W0325
W0346
W0356
W0706
W0875
W0946
②
M1450
M1452
M1467
M1486
M1554
M1555
M1557
M1604
W1087
③
M1699
M1759
M1792
M1812
M1891
M1896
M1897
M1988
M1993
W1300
W1305
W1321
W1343
W1408
W1427
④
M2286
M2331
M2388
M2393
M2483
M2496
M2535
M2539
M2667
W1502
W1576
W1601
⑤
M2857
M3016
M3032
M3139
W1681
W1684
W1716
W1737
W1805
W1861
W1870
①
W0347
W0763
②
M1172
M1192
M1200
W1062
③
M1658
M1684
M1818
M1880
M1883
M1885
M1896
M1901
M1911
M1930
M1931
M1943
M1956
M1960
M1964
M1974
M1976
M1979


M0421
M0454
M0484
M0533
M0560
M0694
M1010
W0087
W0191
W0216
W0218
W0219
WQ633
W0702
W0717
W0759
W0765
W0980
②
M1264
M1379
M1383
M1438
M1445
M1511
M1548
M1550
M1551
M1552
M1553
M1556
M1558
M1591
M1593
W1091
W1095
W1211
③
M1680
M1803
M1827
M1836
M1838
M1841
M1866
M1893
M1898
M1925
M1930
M1941
M1942
M1963
M1971
M2027
M2082
M2104
W1316
W1320
W1364
W1474
④
M2238
M2286
M2346
M2381
M2409
M2474
M2526
M2528
M2675
M2694
M2741
M2742
W1489
W1517
W1609
W1651
W1662
W1674
⑤
M3104
W1708
W1874
③
M1698
W1366


M1980
M1985
M1991
M1992
M1995
M1998
M2001
M2010
M2037
M2058
M2059
M2060
M2064
M2066
M2068
M2070
M2071
M2074
M2077
M2079
M2081
M2083
M2085
M2086
M2091
M2226
M2231
M2234
M2239
W1300
W1308
W1400
W1433
W1435
W1436
W1440
W1451
④
M2344
M2346
M2350
M2353
M2355
M2360
M2362
M2368
M2441
M2479
M2536
M2713
M2726
M2765
W1496
W1559
W1559
⑤
M2832
M2833
M2836
M2838
M2839
M2991
M3052
M3139
今日
①
M0133
M0186
M0201
M0346
M0394
M0409


三日
①
W0673
W0927
④
W1496
五日
①
W0204
④
W1507
八日
①
W0959
九日
④
W1504
旬一日
④
W1638
百日
①
W0597
異日
①
M0377
日中
③
M1846
采日
④
M2286
少采日
④
M2303
戠日
③
W1371
W1371
鳴日
③
M1741
各日
③
W1386

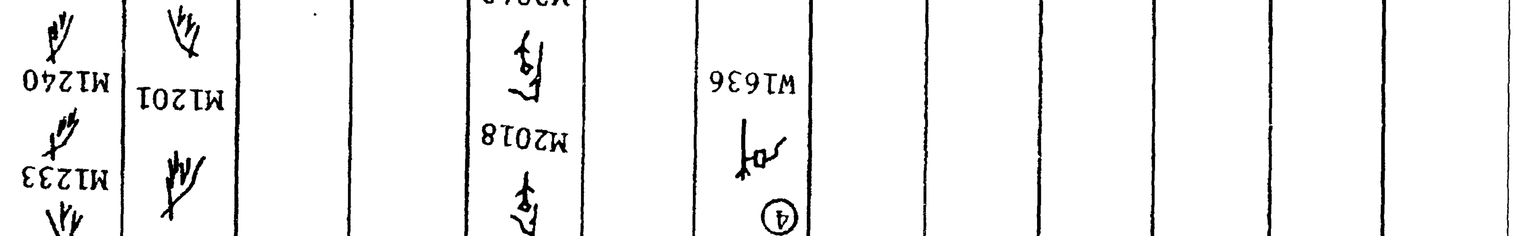
page 83a (7)



page 83b (7)

（參考《中國文字》第六期、一九八二年五月）

page 84a (7)


M1925
M1848
M1004
M0960
M0908
M1760
M1636
M1878
M1865
M1945
M1374
M1426
M1428
M1429
M1449
M1512
M1519
M1536
M1543
M1583
M1579
M1609
M1628
M1015
M1017
M1027
M1030
M1035
M1037
M1045
M1047
M1049
M1051
M1058
M1060
M1064
M1086
M1108
M1220
M1220
M1220

子族 ① W0424

大少族 ⑤ W1901

③ W1464

少旛 ③ W1464

又旛 ③ W1464

④ M2680

① W0377 W0564

冥 ① M0115 M0701 M0721 W0481 W0485

W0488 W0492 W0502 ② W1262 ④ W1516

晶 大晶 ③ M1934

月 ① M0355 M0363 M0558 W0265 W0362 W0390 W0606 W0703

W1104 ② M1402 M1631 ③ M1663 ⑤ M2905 M3056 W1805

生月 ④ W1575

三 W1026 W1109 二 W1258 ④ M2266 ⑤ W1894

四月 ① M0026 M0167 M0305 W0022 W0084 W0555

W0914 W0962 ② M1291 M1338 M1482 M1631 M1632

W1031 W1253 W1268 W1277 ④ M2300

五月 ① M0157 M0269 M0305 M0614 W0899

② M1207 M1224 M1240 M1484 M1502 M1506 W1094

W1111 W1137 ⑤ M3058 W1898

六月 ① M0140 M0254 M0361 M0787 M1122

W0020 W0071 W0148 W0395 W0556 W0558 W0930 W0952

W0953 W0956 ② M1368 M1385 M1393 M1403

W1106 W1118 W1232 W1268 W1285 ④ W1481 W1492

W1524 ⑤ W1805

今六月 ① M1129 ④ M2295

生二月 ① W0413

正月 ⑤ M3132

一月 ① M0020 M0145 M0309 M1121 W0096 W0118

W0248 W0273 W0289 W0401 W0631 W0837 ② M1206 M1228

W1062 ④ W1540 W1640

二月 ① M0087 M0133 M0310

M0328 M0357 M0662 M0786 W0042 W0071 W0204

W0401 ② M1223 M1295 M1311 M1447 M1452 M1513

M1597 W1054 W1091 W1103 W1262 ④ M2303

M2444 W1607 W1625

生二月 ④ M2444 W1506

三月 ① M0076 M0133 M0363 M0384 M0659 W0211 W0286

W0364 W0759 ② M1188 M1228 M1262 M1525

七月 ① M0096 M0423 M0448 M0470 M0789 W0023 W0144 W0561

W0725 W0905 ② M1457 M1509 M1536 W1235 W1269

④ W1630 ⑤ M3168

今七月 ① M1129 W0935

生七月 ① W0902

八月 ① M0252 M0448 M0543 M0730 M0784 M0785

M1052 W0040 W0264 W0290 W0562 W0929 W0964

② M1172 M1254 M1428 M1433 M1501 W1259

④ M2337 W1641

九月 ① M0036 M0202 M0279 M0502 M0623 M0680

W0034 W0209 W0220 W0282 W0554 W0564 M0579

W0737 W0930 ② M1300 M1375 M1376 W1101

W1119 W1217 W1269 ⑤ M3052 M3176 W1712

page 87a (7)

生九月 ④ W1641

十月 ① M0068 M0295 M0427 M0480 M0502 M0792 W0017

W0032 W0272 W0274 W0360 W0383 W0449 W0557 W0560 W0668 W0798

② M1204 M1370 M1401 M1596 M1625 M1627 M1629 M1630

M1644 W1071 W1107 W1257 W1263 W1267 W1269 W1272

④ W1501 W1548 ⑤ W1886 W1886 W1892

W1905 W1908 W1915

十一月 ① M0497 M0790 M0888 W0094 W0180 W0273 W0389

W0607 ② M1184 M1276 M1370 M1405 M1499 M1541

W1017 W1058 W1148 W1256 W1293 ④ M1602

十月又一 ⑤ M3057 W1886

十二月 ① M0067 M0194 M0401 M0488 M0504 M0771

M1085 W0383 W0484 W0559 W0563 W0829

page 87b (7)

有 ① M0001 M0006 M0024 M0029 M0036 M0037 M0042 M0043

M0045 M0047 M0049 M0053 M0056 M0061 M0064 M0066 M0070

M0073 M0076 M0086 M0092 M0094 M0104 M0114 M0117 M0118

M0119 M0122 M0123 M0124 M0125 M0126 M0127 M0128

M0129 M0130 M0132 M0133 M0134 M0135 M0136 M0137

M0138 M0139 M0140 M0141 M0142 M0144 M0145 M0146 M0147

M0148 M0149 M0150 M0151 M0152 M0207 M0240 M0242 M0347 M0357

M0359 M0360 M0412 M0365 M0484 M0559 M0590 M0651 M0656

M0662 M0664 M0692 M0696 M0698 M0715 M0722 M0726 M0771 M0861

W0898

生十二月 ④ W1628

十三月 ① M0321 M0597 M0690 W0231 W0364

② M1212 M1306 M1499 W1241 W1263 ④ W1518

page 88a (7)

M1035 M1086 M1123 M1157 W0011 W0019 W0023 W0031

W0029 W0037 W0038 W0040 W0043 W0045 W0050 W0054 W0060

W0063 W0065 W0074 W0075 W0091 W0092 W0093 W0094 W0095

W0096 W0097 W0098 W0099 W0101 W0102 W0103 W0104

W0105 W0151 M0157 W0160 W0171 W0172 W0234 W0239

W0326 W0333 W0343 W0401 W0411 W0419 W0422 W0428

W0477 W0487 W0490 W0498 W0590 W0613 W0622 W0625

W0647 W0648 W0658 W0666 W0737 W0747 W0749 W0764

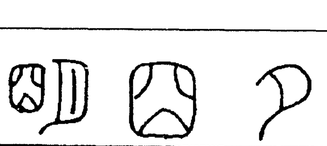
W0777 W0784 W0790 W0798 W0821 W0828 W0829 W0837

W0839 W0856 W0880 W0888 W0893 W0900 W0907 W0903

W0906 W0915 W0920 W0927 W0931 W0939

W0945 W0946 W0952 W0953 W0955 W0956 W0959

W0961 W0962 W0963 W0993 W1000 W1004 ② W1268



④ M0065 M0121 M1297 M2307 M2264 M2265 M2297 W1481 W1484

W1486 W1494 W1495 W1526 W1544 W1551 W1588

also page 145

page 29

明 ① M0455

囧 ④ M2727

M0484 M0519 M0824 M0859 M1035 W0061 W0192 M0436 M0465 M0477 M0480 W0204

W0205 W0207 W0214 W0224 W0281 W0293 W0481

W0641 W0680 W0686 W0692 W0723 W0770 W0958

W0959 ② M0716 M1064 M1311 M1319 M1225 M1328

M1331 M1333 M1337 M1374 M1409 M1410 M1413 M1419

M1431 M1440 M1441 M1461 M1476 M1480 M1485 M1491

page 88b (7)

M1494 M1496 M1513 M1517 M1636 W1032 W1033 W1054 W1070

W1085 W1086 W1109 W1116 W1120 W1123 W1125 W1126

W1224 W1258 W1259 W1275 ③ M0473 M1656 M1659 M1666

M1680 M1684 M1695 M1702 M1704 M1708 M1907 M1918

W1338 W1339 W1341 ④ M2276 M2301 M2302 M2348 M2353 M2482 M2507

M2619 M2675 W1497 W1538 W1552 ⑤ M2860 M3090

M3095 M3099 M3101 M3103 M3109 M3114 M3117 M3118 M3126

M3128 W1685 W1818 W1819 W1826 W1829 W1830 W1832 W1835

W1836 W1839 W1842 W1844 W1845 W1847 W1850 W1910

① M0326 M0338 M0379 M0383 M0385 M0386 M0387

M0392 M0402 M0414 M0424 M0428 M0433

M0440 M0441 M0448 M0448 M0474 M0475

M0477 M0478 M0479 M0480 M0482

177

M1463 M1466 M1468 M1470 M1471

M1473 M1474 M1475 M1489 M1490 M1491

M1495 M1496 M1508 M1512

M1514 M1515 M1518 M1519 M1520 M1521

M1523 M1525 M1587 M1588 M1589 W1088 W1090

W1092 W1097 W1110 W1111 W1112 W1113

W1114 W1117 W1118 W1119 W1121 W1122 W1124

W1129 W1131 W1274 W1275 ③ M1655

M1687 M1857 M1889 W1337 W1338 W1340

W1341 ④ M2279 M2348 M2482 M2505 M2677 M2744

M2766 W1497 ⑤ M3089 M0390 M3091 M3092

M3093 M3095 M3096 M3098

M3099 M3102 M3103 M3105 M3106 M3110

179

M0597 M0728 M0788 M0932 M1027 M1030

M1036 M1050 M1092 M1119

M1123 M1662 W0190 W0193 W0197 W0197

W0198 W0200 W0201 W0203 W0204 W0204 W0210 W0213

W0220 W0221 W0223 W0225 W0228 W0232 W0236

W0256 W0278 W0279 W0283 W0284 W0285

W0286 W0287 W0288 W0290 W0291 W0292 W0295 W0358

W0534 W0656 W0792 W0823 W0854 W0868 W0985

② M1389 M1408 M1409 M1411 M1412

M1414 M1415 M1416 M1417 M1420 M1422

M1425 M1426 M1428 M1429 M1432

M1433 M1435 M1443 M1444 M1446

M1447 M1448 M1451 M1458 M1461 M1462

178

M3113 M3114 M3119 M3120 M3121 M3123 M3124

M3125 M3160 W1817 W1822 W1823

W1824 W1825 W1831 W1834 W1837 W1840

W1843 W1846

之 ② M1445 M1462

M1442

サ ① W0595

彫 ⑤ M2861 M2863

外 also pages 141 142 153

凡 ① M0337

今凡 ③ M1685

多 ① M0319 M0463 M0533 M0658 M0692 M1074 M1544 W0032

W0196 W0247 W0770 W0802 ② M1244 M1480 M1526

180

甲骨文考釋・著錄片考釋・附錄(年表　索引)　皇家安大略博物館收藏甲骨文字索引(四)

page 91a (7)

M1541 M1577

also pages: 31 32 45 64 70 71 84 97 105 112 123 128 143 146 164 165 177

① M0990 ④ M0810 W1547

① M0139 ③ M1734 M1835

① M0273 M0525 M0965 W0380 ④ M2528

函 ③ M2056

① W0961 W0962

① W0726

卤 ② M1374

一卣 ② M1211

又卣 ③ M1803

① M0915 ④ M2312 M2682

W1595

page 92a (7)

中枼 ③ M1737 W1384

未 ③ M2234 ④ M2455 M2456 M2457

M2459 M2460

M2462 M2464 M2465 M2467 M2468

M2469 M2470 M2471 W1599

棟(康) ⑤ M2903 M2907 M2910 M3026

also page 155

年 ① M0364 M0369 M0370 M0372 M0373 W0178

W0179 W0180 W0181 W0182 W0183 W0917 W0919 ② M1436

W1263 ③ M1780 M1812 M1813 M1814 M1815

M1816 M1817 M1818 M1819 W1315 ④ M2466

⑤ M1437 M3041 W1792 W1883

秋 → 龜 page 140

page 91b (7)

④ M2404

③ W1460

栗 ③ M1767

齊 ⑤ W1886

束 ① W0944 ④ M0059

鼎 ① M1001 W0052 ④ M2437 W1550

① M0321

③ M1707

⑤ M3176

克 ① M1104 ③ W1396

枼 ① W0419 ② M1545 ③ M2001 M2117 W1437

⑤ W1915

東枼 ③ M1737

page 92b (7)

③ W1315

① M0213

② W1016

黍 ① M0079 M0366 M0368 W0078 W0183 W0448 W0786

③ M1768 W1403 ④ M2273 M2274 M2508

白黍 ④ M2337

米 ④ M2727

舂 ① M0999

甫 ① M0627 W0412 W0462 W0957 W0963

W0988 ③ M2116 M2127 ④ M2336

M2674 M2677 M2701 M2717 M2719 M2721

W1653

③ M1780 M1781

page 93a (7)

③	③	楸 ①	③	𠂤 ③	家 ①	宅 ①	室 ①	新室 ①	南室 ②	向 ③		安 ③
M1734	W1361	W0831	M1698 M1703 W1401	M1950	W0519	M0133 M0700 王宅 ④ W1576	M0738	M0133 ③ M1823 M1824	W1262 W1262	M1903 M2058 M2060 M2063 M2068 M2069	M2077 M2079 M2085 M2086 M2642 W1451 W1454 W1455	M2061

page 93b (7)

宰 ①	宜	宿 ③	寢 王寢 ④ W1595	also page 96	宕 ③ M2109	宗 ①	M1787 ④ M2382 W1559 W1566 ⑤ M2885	M2901 M2916 M2919 M2920 M2927 M3036 W1701 W1710 W1711	W1712 W1773	中宗 ③ W1302	新宗 ③ W1367	also page 127
M0719 ③ M2136	俎 page 144	M2101 M2102				M0083 W0152 W0164 ③ M1677 M1757 M1765						

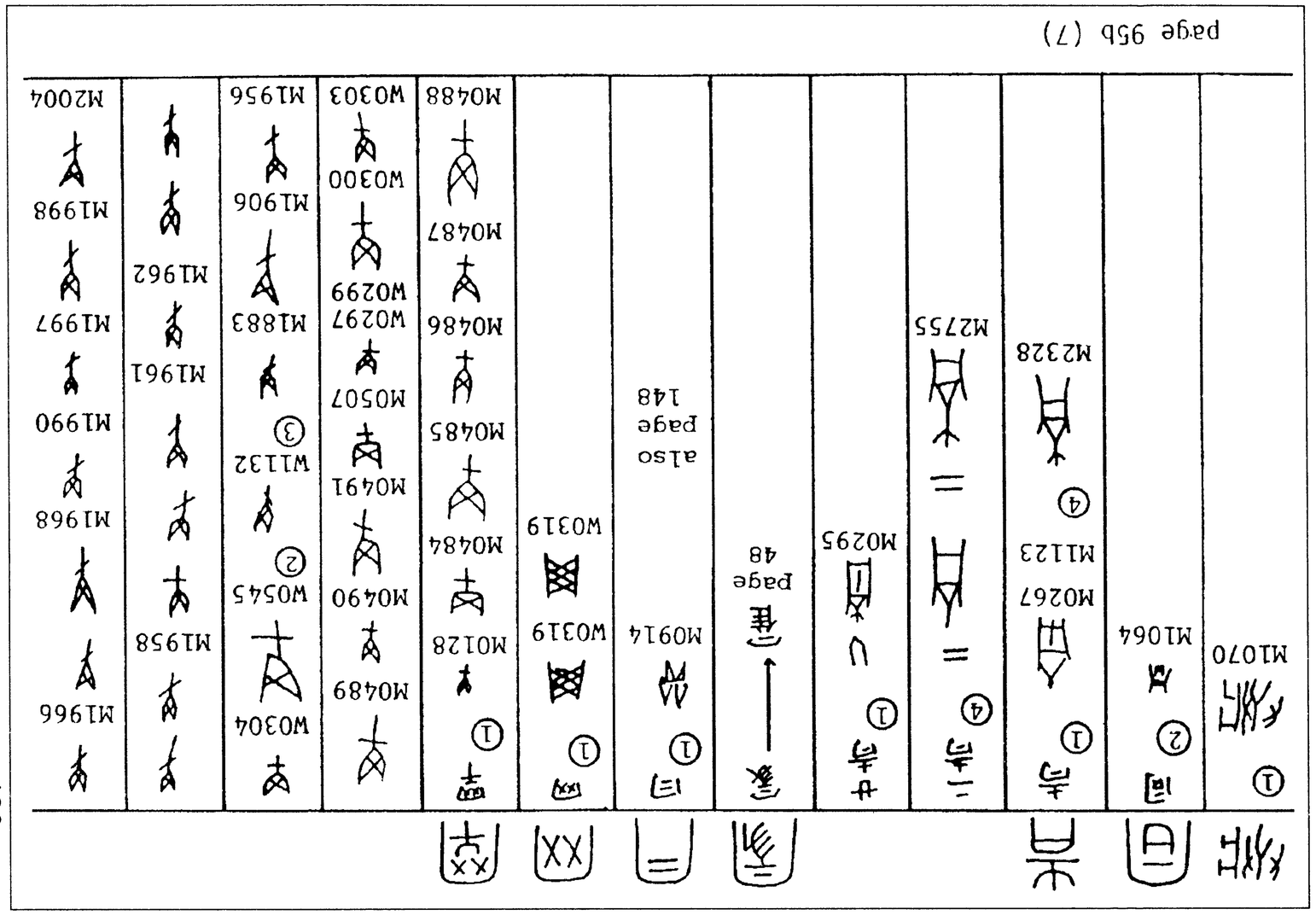
page 94a (7)

新 庭新 ③ W1391	also page 93	牢 ③	宁 ①	宝 ④	莊 ④	富 ④	如 ①	寧 ①	它 ④	崔 ④	帝 ①	④
		M2008 M2108 M2110 M2626 W1350 W1432 ⑤ M3139	M0896	M2408	M2674	M2475	M0756 W0989	W0838	W1564	M2658	W0021	W1499

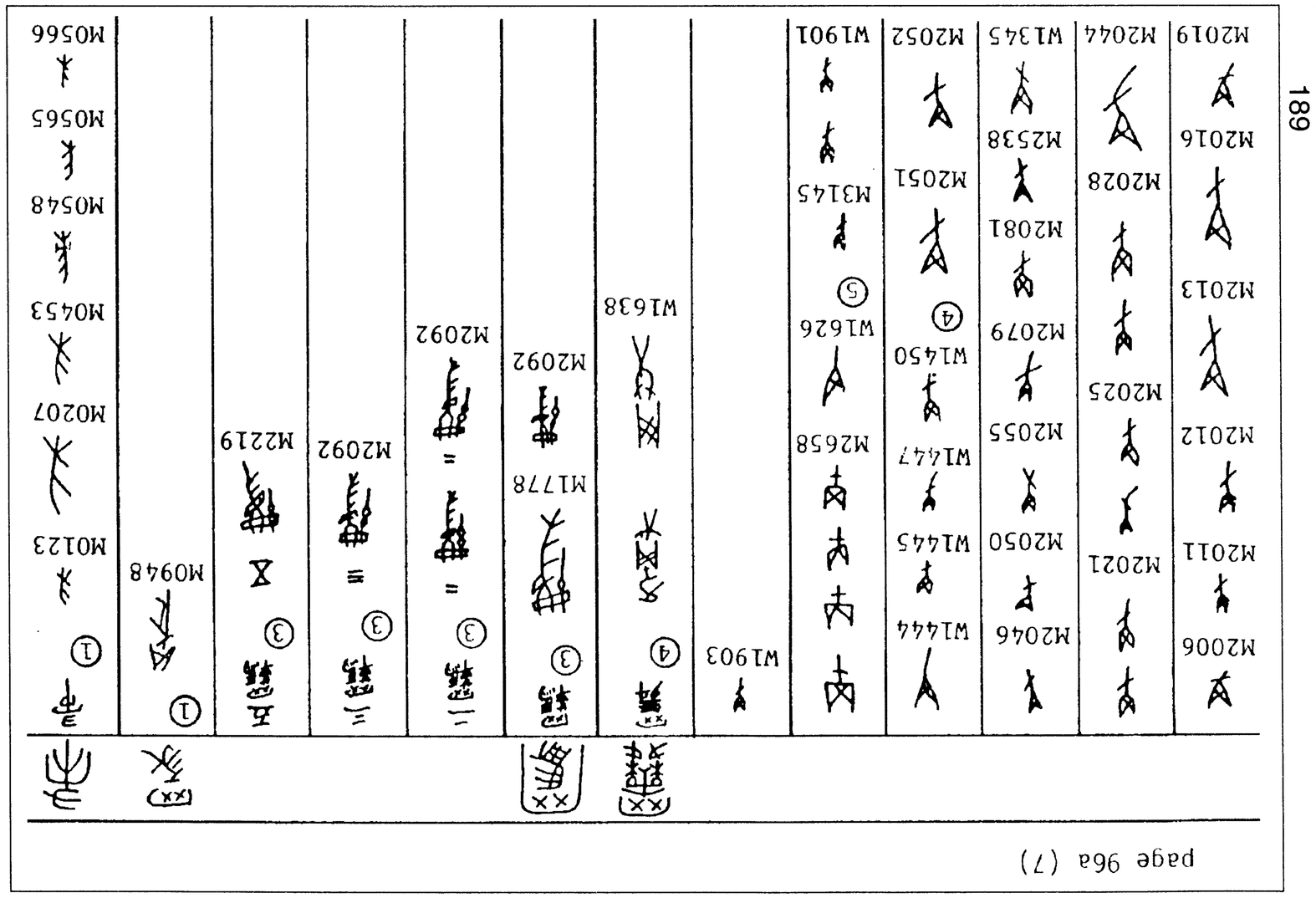
page 94b (7)

② W1142	④ M2821	① M0885 ③ M1981 M1998 W1447	② W1268 W1268	① M0897	⑤ M2988	also page 128	宮 ① M0666 W0400 ② W1137 ③ M1882 M1900	M1909 M1947 M1955 M1957 M1967 M1971 M1973	M1977 M1981 M1985 M1994 M2012 M2059	M2060 M2065 M2068 M2072 M2073 M2074 M2076 M2079	M2081 M2086 M2220 M2642 W1415 W1434 W1452 ⑤ M3131	M3144 W1905

page 95b (7)



page 96a (7)



page 97a (7)

帚 ① W0310

帚 ① W0485

帚 ② W1262

帚 嫊 ① W0432

帚 ① M0973

帚 ④ W1517

多帚 ① M1128

白 ① M0165 M0569 W0391 ③ M1707 ④ M2305 ⑤ W1825

枚白 ③ M2133

白或 ④ M2413

白 ③ M2118

白 ④ M2312

also pages 13 92 113

193

page 97b (7)

寇 ① M0466

寇 ③ M1944

敎 ③ M2229

帚 ① W0407 ③ M1811

194

page 98a (8)

人 ① M0488 M0624 M0672 M0688 M0865 M1003 M1142

W0383 W0514 W0709 W0949 W0959

② M1257 M1258 M1262 M1280 M1304 ③ M2107

M2113 M2116 W1353 ④ M0549 M2272 M2284

M2336 M2432 M2437 M2664 M2678 M2682 M2688

W1523 W1536 W1591 W1595 W1597

一人 ① M0140 ④ W1598

余一人 ⑤ M3161

二人 ① W0849 ④ W1598

三人 ④ W1598

五人 ③ M1807 W1380

十人 ① M0298 W0023 ③ M1721 M1807

羌十人 ① W0050

195

page 98b (8)

十三人 ③ M1752

十五人 ③ M1708

廿人 ③ M1721 W1354

卅人 ③ M1715 M1721

羌卅人 ④ M2447

五十人 ③ W1406

北人 ① M0931

also page 104

保 ① M0640 M0647 M0649 M0666 W0672 W0791 W0822

② M1261

伯 → 白 page 97

仲 → 中 page 09

伊 ④ M2412 W1573

196

(原載《中国文字》新七期，一九八三年四月)

page 99a (8)

何						賓		依	倩	作	任	使
also page 02	何 ① M1662 W0285 W0317 W0343 W0389 W0505	M1650	M1651 M1653 W1113 W1123 W1125 W1135 W1153	W1154 ③ M1657 M1659 W1421 W1422	W1424 W1425 W1465 ④ M2727	儐 ① M0117	→賓 page 79	依 ① M1029	倩 ① M1034 ③ M2121	作 — 乍 page 137	任 ① M0115 ② M1246 ④ M2332 M2432	使 — 史 page 33

197

page 100a (8)

咎	弔	僕											
咎 ① W0042 ④ W1495 W1531	弔 ① M0590	① W0846	④ W1519	① M0947	① W0986	① M0936	① M0733	④ W1538	① M0874	④ M2691 W1571	毓 ② M1354 M1383 M1433 M1435 W1275	化 ① M0975 W0650

199

page 99b (8)

伐												
伐 ① M0104 M0205 M0229 M0231 M0232 M0580 M0687 M0689	M0985 W0006 W0020 W0023 W0027 W0031 W0049	W0341 W0351 W0355 W0371 W0414 W0434 W0905 W0952	W0953 W0955 ② M1230 W1019 W1255 ③ M1736	M1753 M1807 M1915 M2106 M2112	④ M1804 M2319 M2321 M2329 M2345	M2347 M2350 M2358 M2393 M2412 M2432	M2439 M2440 M2675 M2680 M2693 M2716 W1487	W1558 W1641 ⑤ M2993 M2998 M3017 M3161	三伐 ① 三 M0233	八伐 ① 八 M0234	十五伐 ④ 十 五 M2311	伐百 ④ 百 M2440

198

page 100b (8)

𠂤	𠂤												
① W0379	① M0048 M0050 M0053 M0054 M0061 M0134	M0839 W0074 W0076 ② W1024 ③ M1701 ④ M2268	⑤ M2833	also pages 148 150 152 156 157 158 159 160 161 163	𠂤 ① M0488 M0526 M0581 M0587 M0589 M0592	M0599 M0613 M0658 M0668 W0157 W0342 W0367	W0430 W1053 ④ M2330 M2335 M2336	M2346 M2349 M2350 M2676 M2679 M2681 M2685	M2686 M2688 M2694 M2701 M2712 M2718	M2721 M2723 W1639	从 ① M0564 M0626 M0632 M0665 M1058 W0296 W0327	W0349 W0351 W0355 W0384 W0400 W0404 W0414 W0456

200

W0460 W0462 W0938 ③ M1677 M1840 M1971 M1977

M1985 M2012 M2105 M2109 M2119

M2213 M2644 M2808 W1344 W1464 W1479 ④ M2413

M2674 M2683 M2698 M2701 M2722 W1567

W1637

① W0071 W0362 ③ M1724 M2081 M2108 M2110

M2133 M2538 M2644 ④ M2312 M2432 M2690

M2716

also page 123

并 ③ M2075

比 → 从 page 101

北 ① M0097 M0100 M0822 W0184 W0403 W0672 W0801

③ M2021 M2124 W1460 ④ M2338 M2674 W1565

④ W1636 ⑤ M3140 W1863 W1908

襄 ③ M1906 M1961 M1967

M2025 W1307

㚔 卒 ① M0303 M0799 W0841 W0858

W0961 W0962

縈 ② M1456 M3063 W1296 W1297

② W1138

③ M1897

④ M2394 M2434 M2528

求 ① M0003 M0187 M0191 M0193 M0194 M0195

M0197 M0367 W0034 W0044 W0071 W0131 W0132 W0246 W0381

W0899 W0918 ③ M1680 M1690

M1695 M1741 M1766 M1780 M1814 M1816

W1574 W1602 W1654

also pages 98 103

丩 ① M0228 M0832

眾 ① M0486 M0609 ③ M2113 ④ M2339 M2536

M2674 M2682 M2688 M2691

W1639 W1653 W1654

壬 ① M0616 W0961 W0962

望 ① W0429 W0462 ③ M1835 M2112 M2118

also page 74

監 ③ M2129

身 ① W0504

衣 ① M0346 W0032 W0148 W0352 ② M1169 M1244

M1263 M1270 M1276 M1481 M1526 M1527 W1057 ③ W1351

W1382 ④ M2269 M2360 M2364 M2384

M2457 M2458 M2462 M2464 M2468 M2748

W1520 W1560 W1575 W1587 W1604 ⑤ W1726

④ M2381

③ M2123

老 ① M0320 M1132 W0959

② M1563 ④ M2303 W1517

尸 東 ① M1123

舟 M0553 M0689 W0016 W0348 ③ M1834

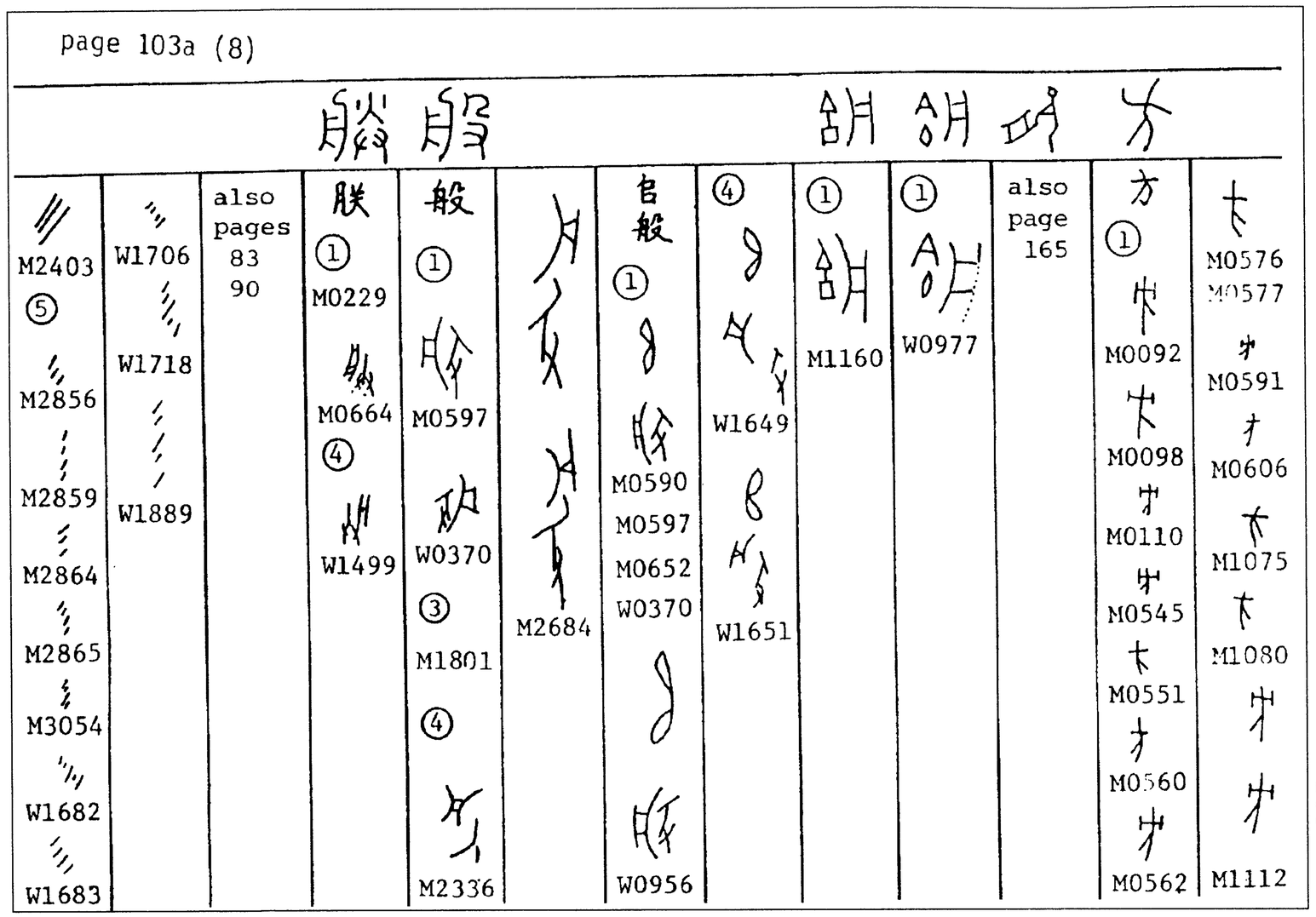
④ M1742 M2712 W1456

彤 ① M0204 M0210 M0304 W0032 ② M1184 M1186

M1202 M1204 M1206 M1222 M1274 M1275 M1276

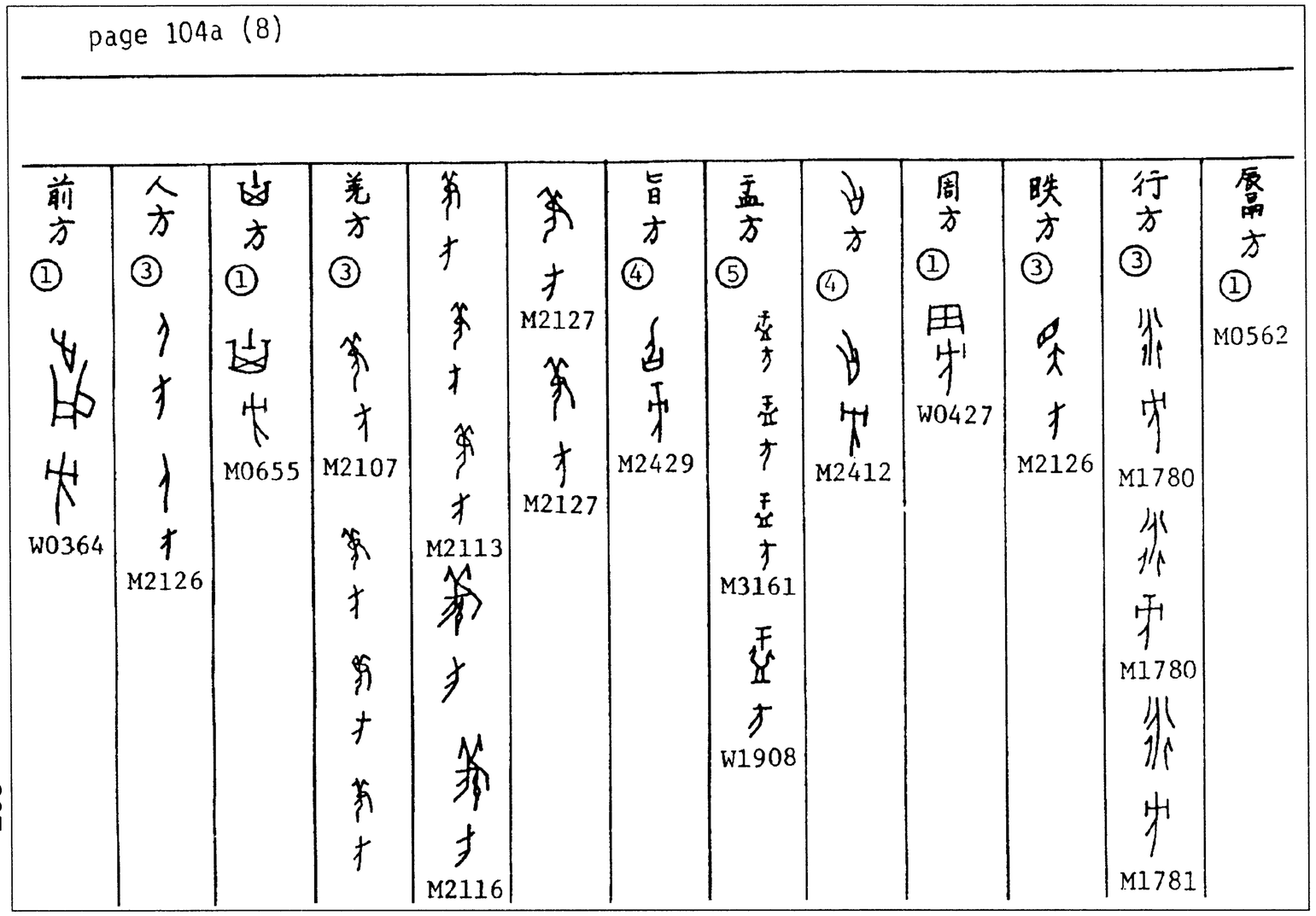
W1012 W1051 ④ M2355 M2356 M2366 M2391 M2394

page 103a (8)



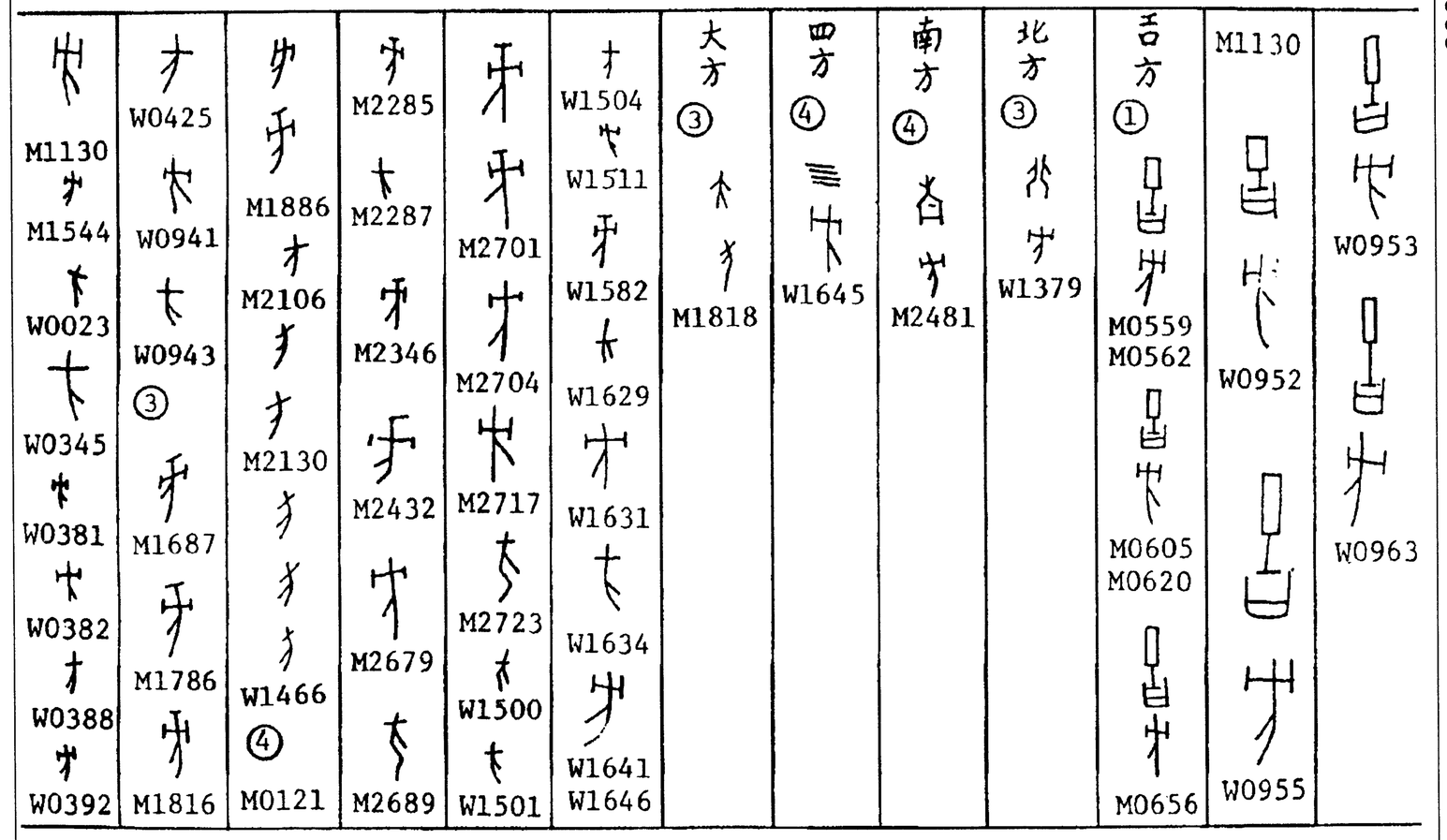
205

page 104a (8)



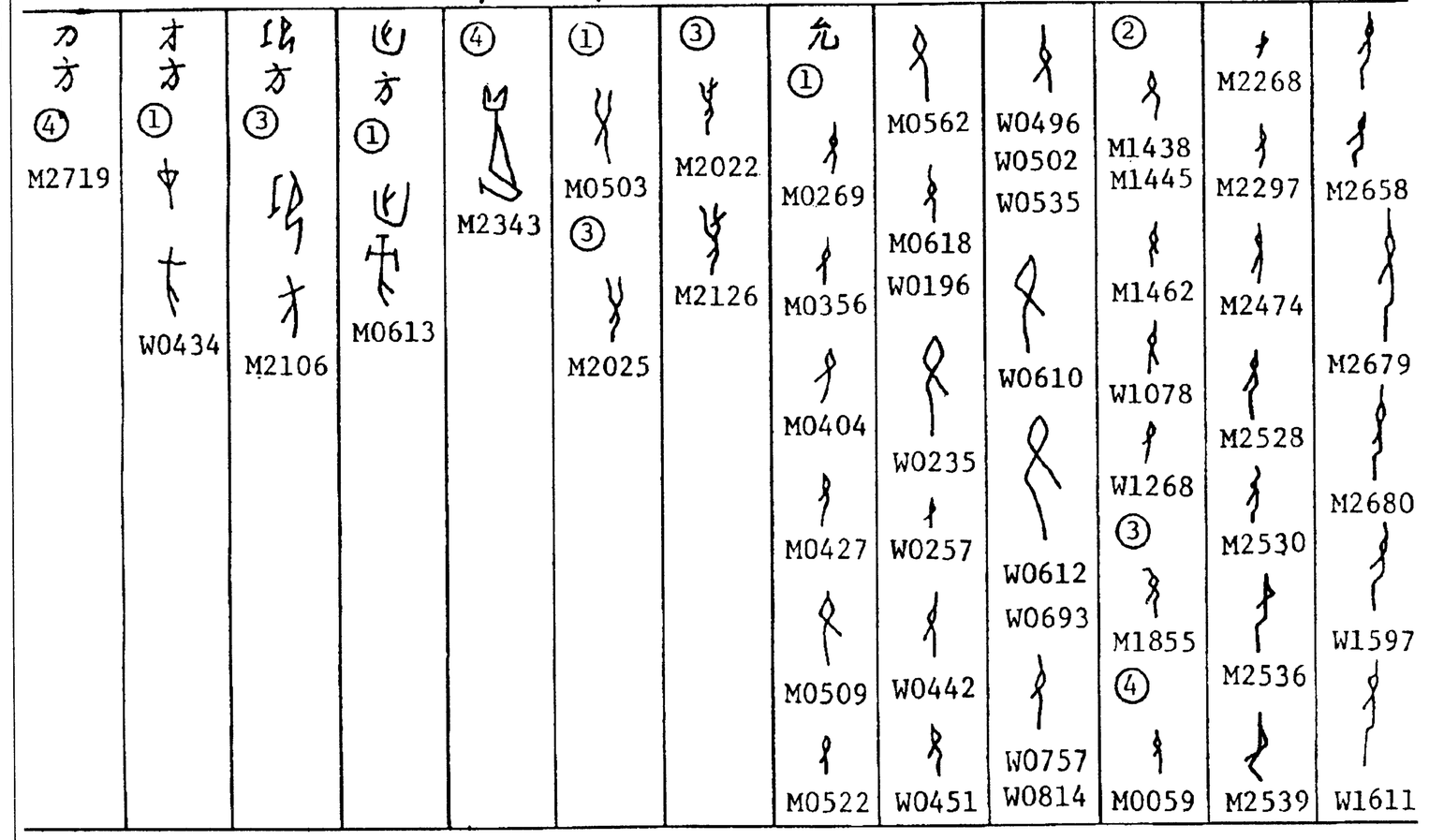
207

page 103b (8)

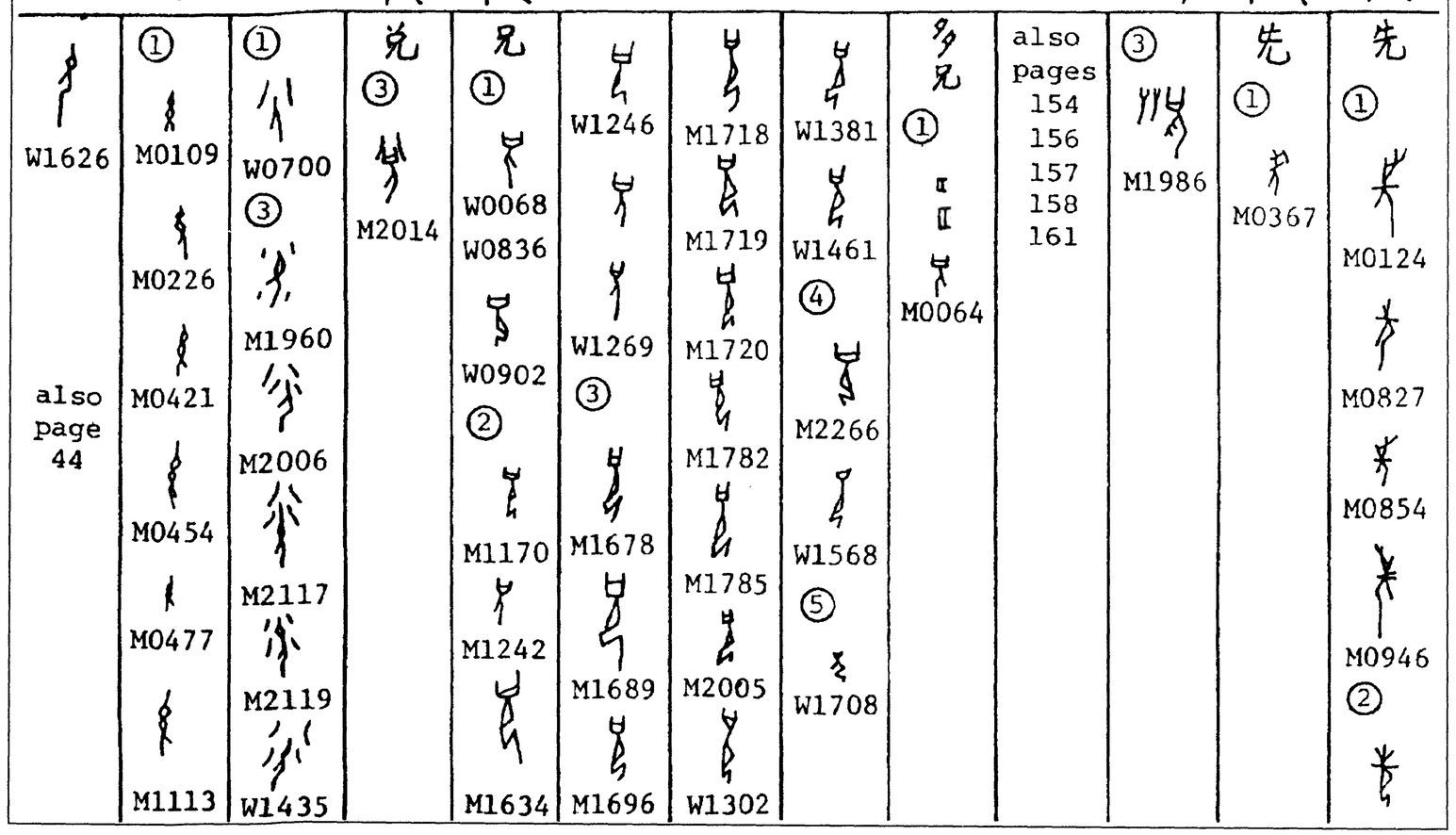


206

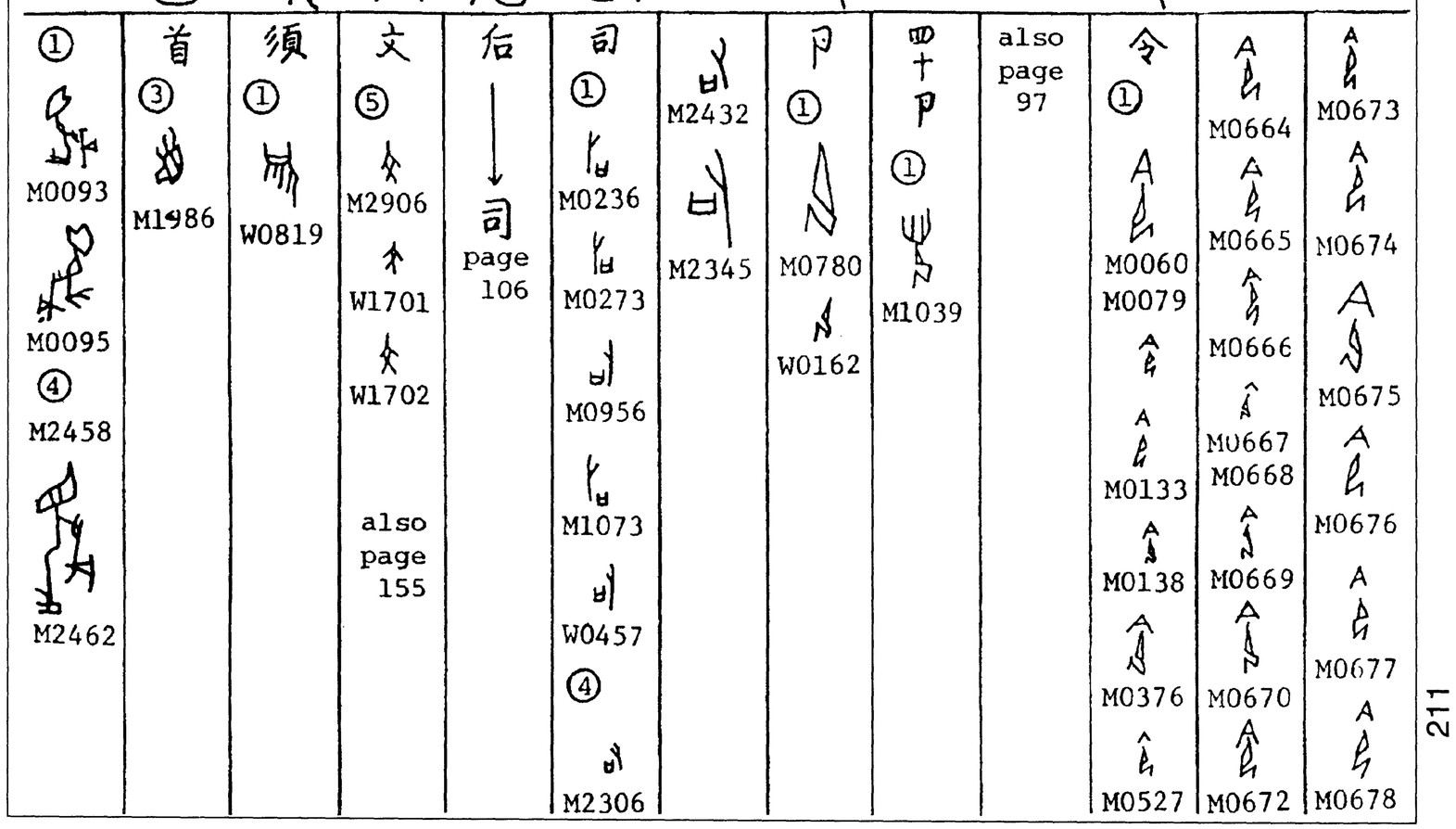
page 104b (8)



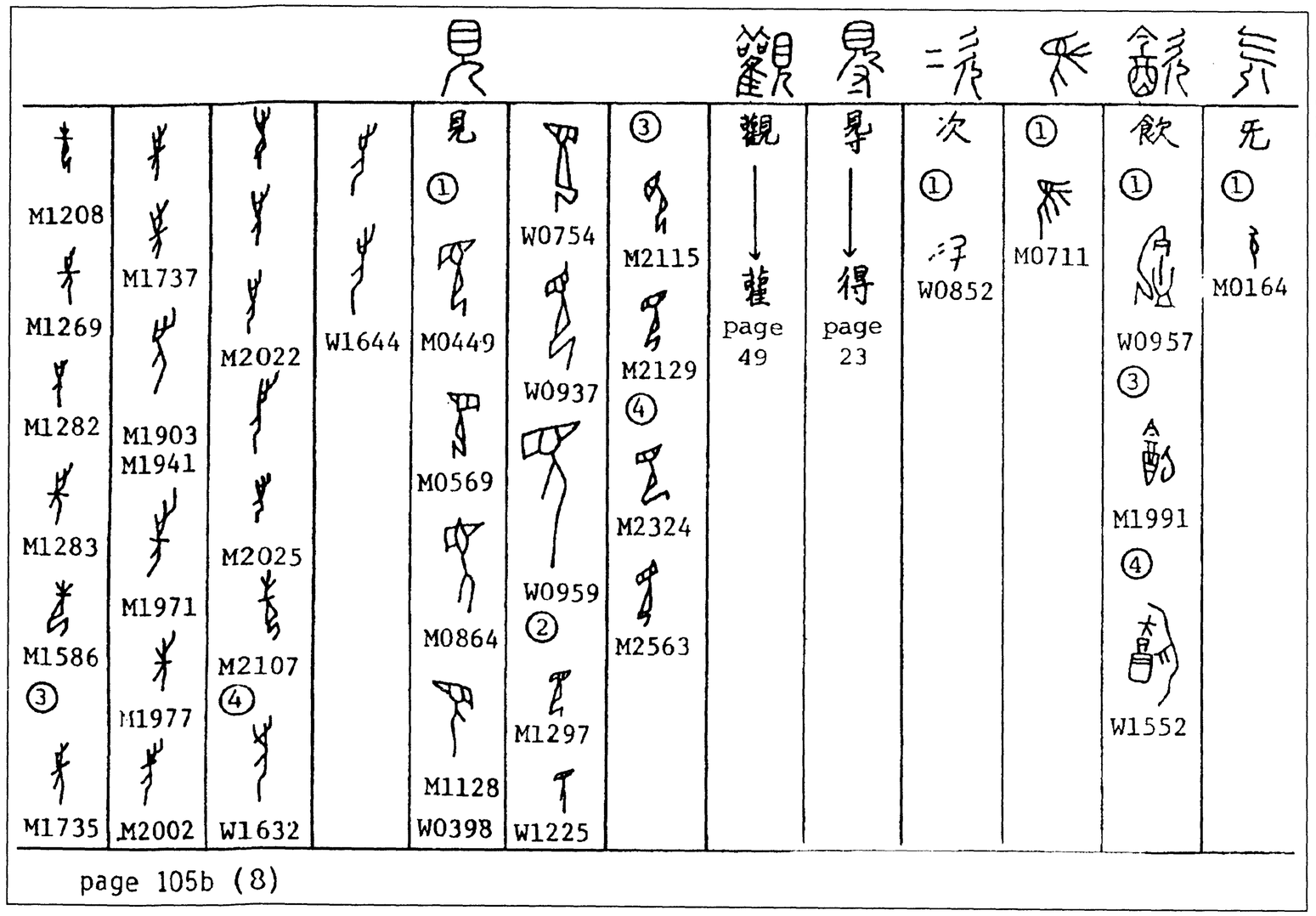
208



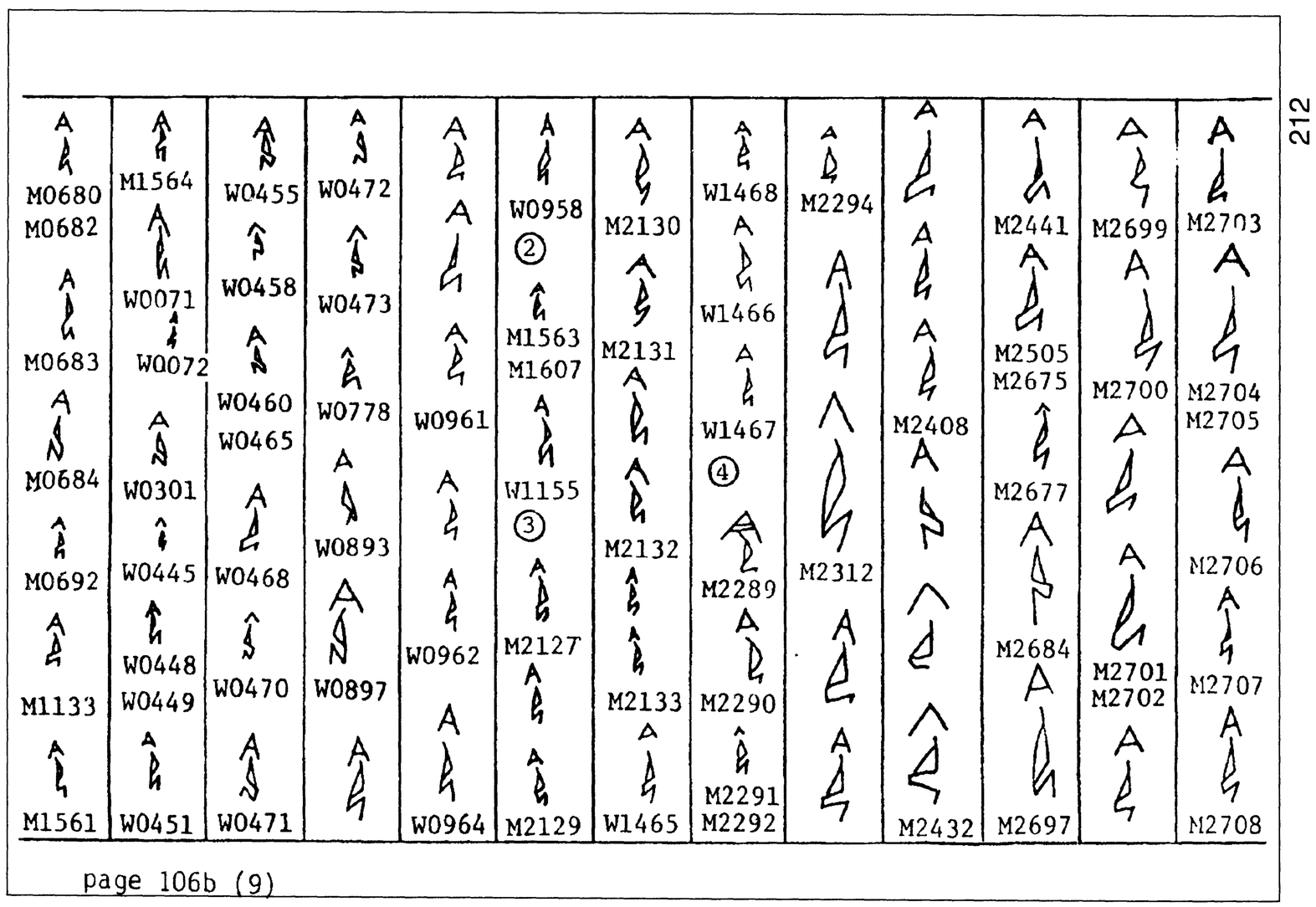
209



211



210



212

page 107a (9)

M2710	M2713	M2718	M2722	W1648	W1652	② M1640 ③ M1661 M1664 W1326 W1334	W1339 W1340	① W0940	also page 104	卿 ① M0110 M1082 W0620 ③ M1682 W1388 ④ M2402	W1483	南卿 ③ W1379
M2711	M2714	M2719	M2723	W1649	W1653							
	M2715		W1512	W1650	W1654							
M2712	M2717	M2720	W1513 W1530 W1647	W1651	⑤ W1665 W1902	W1338						
		M2721										

page 107b (9)

辟 ① W0847 ③ M2116	辟 ③ W1391	旬 ① M0469 M0470 M0662 M1122 M1124	M1126 W0056 W0260 W0261 W0262 W0263 W0263 W0264	W0265 W0266 W0267 W0268 W0269 W0270 W0271 W0272 W0273	W0273 W0274 W0275 W0276 W0614 W0927	W0929 W0930 ② M1263 M1499 M1500 M1501	M1502 M1503 M1505 M1506 M1509 M1510	M1631 M1632 M1633 M1634 W1103 W1104 W1105	W1106 W1107 W1268 W1269 W1270 W1272 ③ M1663	M1664 W1325 W1326 W1328 W1329 W1331 W1332 W1333	W1334 W1336 W1421 W1422 W1423 W1424 W1425	W1426 ④ M2542 M2543 M2544

page 108a (9)

M2545	M2547	M2548	M2549	M2550	M2551	M2552	M2553	M2554	M2555	M2556 M2557 M2558 M2559 M2560	M2561	M2563 M2564	M2565
M2546													
M2566	M2567	M2568	M2569	M2570	M2571	M2572	M2573	M2574	M2575	M2576	M2577 M2578 M2579 M2580 M2582	M2583	M2584 M2585 M2586 M2587 M2588 M2589 M2590
M2591	M2592	M2593	M2594 M2595	M2596	M2597	M2598	M2600	M2602					

page 108b (9)

M2603	M2609	M2610	M2611 M2614	W1612	W1613	W1614	W1615	W1616	W1617	W1618	W1619	W1621	W1622
M2604													
M2605													
M2606													
M2607													W1623 ⑤ M3052
M2608	M2615			W1617	W1620								M3056
M3057	M3059	M3061	M3066	M3068	M3069 M3069 M3070	M3072 M3073 M3075 M3076 M3077 M3078 M3080 M3081	M3082 M3083 M3084 M3085 M3086 M3168 M3169	M3170 M3173 W1794 W1795 W1796 W1797	W1798 W1799 W1801 W1802 W1804 W1805	W1806	W1807 W1809 W1810 W1811 W1812 W1813 W1886	W1888 W1890 W1891 W1892 W1893 W1894 W1896 W1897 W1898 W1899	

今旬	二旬	三旬	五旬	also page 82	勺	鬼		山	嶽			庭
①	①	①	①		①	②		④	(岳)			④
W0204	W0417	W0993	W0606		M0996	M1384	M1390	M2343	①	M1112	M2333	W1585
					③	M1385	M1391		M0084	W0002	M2372	
	W0959				M2066	M1386	W1073		M0086	W0003		
							④			W0004	M2462	
					M2622	M1387	W1516		M0087			
					④					W0005	M2508	
						M1388	W1650		M0088	③		
										M1816		
					W1629	M1389			M0090	W1315		
									M1049	④		

M0111		M0198	M0319	M0603	M0718	M1077	W0041	W0127	W0387	W0453	W0596	W0793	W0902
			M0322	M0609							W0626		
		M0199			M0883	M1084	W0043	W0141	W0401	W0457		W0796	W0913
M0133		M0209	M0364	M0668		M1105					W0628		
					M0897		W0057	W0149	W0401	W0458		W0841	W0935
M0138		M0294	M0502	M0680		M1112	W0070				W0715		
					M0922			W0301	W0418	W0469		W0856	W0936
M0179		M0296	M0506	M0688		M1113	W0070				W0728		
					M1015			W0301		W0473		W0861	W0948
M0181		M0302	M0536			M1130	W0075		W0434		W0781		
					M1024			W0336		W0482		W0884	
M0191		M0309	M0558	M0689	M1071	W0007	W0100	W0339	W0449	W0556	W0897	W0955	

孟庭	also page 94	龐		石		磬			長			勿
③		①	⑤	①	①	③	④	①	①		①	①
M1823		M1077	W1708	M0213	M0377	M1999	M2623	M0129	M0764	W0956	W0396	M0039
		W0438								④	W0602	
M1824					M0465			M0736	M0796	M2733		M0045
					W0698			④				M0047
								M2812	M1018			M0054
												M0057
					W1629				W0753			M0060

而	豕			豭	豢	豕		豚
	①	①			①	①	①	①
W0961	W0025	M0275	W0452	W1483	M0279	M0988	M0277	W0170
			W0748					
W0994		M0350	②	W1588		W0055	M0278	
④			M1311			③		②
M2266		M0485					M0280	W0899
			③			M1972		
W1503		M0988	M1776				M0981	③
								W0899
W1512		W0074	M2025				W0014	
			④					④
W1532		W0305	M2361				W0035	M0768

page 111a (9)

豕 豝 豵 豯 豬 豚 豕

① W0632 W0947 ④ M0121

③ W1377 ④ M2679

① M0323 W0355

④ W1519

① M0690

豕 ① M0064 M0150 M0151 M0196 W0543 W0736 W0737

W0739 M0791 ② M1368 M1369 M1610 W1268

③ W1447 ④ M2111 M2356 M2481

M2710 W1503 W1571

⑤ W1870

豕 ① M0281 M0324 M0665 W0049 W0381 ② M1256

M1582 M1654 W1109 M2283 W1499

卅豕 ④ M2432

221

page 111b (9)

豚 ③ M1711 M1779

豸 ① M1080 W0944 ② M1580

豕 ① M0438 M0485 M1023 M1055 W0315 W0557 W0560

W0967 ③ M2004 M2022

M2025 M2055 ④ M2647 M2659

⑤ M3172

豕一 ⑤ M3138

易 ① M0208 M0228 M0467 M0666 W0135 W0250

② W1268 ④ M2540 W1610

不易 ④ W1592

also page 83

象 ① W0308

222

page 112a (10)

馬 驂

馬 ① M0624 W0097 W0359 ③ M1941

M2123

多馬 ④ M2711

驊 ③ M1685 M1704 M1710 M1788 W1405

W1407 ⑤ M2881 M2882

M2883 M2884 M2887

M2896 M2897 M2898 M2899 M2902 M2904

M2907 M2919 M2924 M2927 M2939 M2942 M2943 M2949

M2953 M2961 M2964 M2970 M2992 W1697 W1699 W1710 W1788

W1789 W1790

駱 ③ M2113

鷹 ① M0516 ② M1616 ⑤ M3153 M3174

鹿 ① M0651 W0320 W0693 ③ M1956 M2012

223

page 112b (10)

M2017 W1350 W1435 ④ M2389

麋 ① M0495 M0496 M0500 M0503 M0509

W0315 W0934 ③ M1949 M1967 M1998

M2000 M2002 M2020 M2021 M2046

M2056 M2057 M2644 W1441 ④ M2657

鹿 ① M0239

麤 ⑤ M3068 M3087 M3092 W1808 W1824

上麤 ⑤ M3170

兔 ① M0831 M0971 ④ M2702 W1632 ⑤ W1889

also page 165

兕 ① M0498 M1022 W0991

大 ① M0125 M0130 M0146 M0271 M0272 M0273 M0274 M0276

W0153 W0163 W0171 W0303 W0306 W0399 W0404 W0452 W0799 W0998

224

page 113a (10)

狄 ③ W1300 W1302 W1323 W1347 W1348

狌 ⓒ W1648

獻 ③ M2022 also page 72

獲 → 隻 page 47

狩 → 獸 page 146

also page 25

㞢犬 ① M0350

十犬 ④ W1564

二犬 ① M0255

④ M2053

M2119 M2217 M2644 M2695 W1344 W1348 W1351 W1412

M2065 M2081 M2105 M2108 M2109 M2110

W1002 ② W1148 ③ M1760 M1801 M2015

225

page 113b (10)

猶 ④ W1638

狐 ① M1038 ③ M2018

狐七 ⑤ M3138

白狐 ③ M2031

大狐 ③ W1445

⑤ M3053 M3056 M3057 M3059 M3060 M3061 M3064 M3066

M3068 M3069 M3070

M3072 M3073 M3074 M3075 M3076

M3078 M3079 M3080 M3081 M3082 M3083 M3085 M3086 M3087

M3089 M3093 M3095 M3098 M3099 M3100

M3103 M3106 M3109 M3110 M3111 M3112 M3114

M3117 M3118 M3119 M3120 M3123 M3124 M3145 M3160

M3169 M3170 M3173 W1794 W1795

226

page 114a (10)

狄 ① M1094

㚔 ① M0842

㚔犬 ① M0628 W0337 W0475 ② W1269 ③ M2008

火 ① W0449

㷗 ① M0002 M0087 M0088 M0112 M0130 M0174 M0175

M0176 M0177 M0178 M0179 M0180 M0181 M0182 M0183

W1796 W1797 W1798 W1799 W1801

W1802 W1803 W1805 W1806 W1807 W1808 W1809 W1812

W1813 W1815 W1819 W1820 W1822 W1824 W1825

W1826 W1827 W1828 W1829 W1830 W1832 W1835 W1836 W1837

W1842 W1843 W1844 W1845 W1847 W1850 W1851 W1852

W1886 W1888 W1889 W1890 W1891 W1893 W1894

W1895 W1897 W1898

227

page 114b (10)

㸚 ① W0188 W0189 ③ M1828 M1829 M1830 M1831

M0184 M0185 W0014 W0086 W0087 W0088 W0089 W0090

W0112 W0547 W0899 ② M1363 ③ M1734

M1735 ④ M2263 M2309 M2334 M2418 M2422

M2429 M2438 M2508 W1572 W1605

M1832 M1833

M1834 M1836 ④

M2475

M2478 M2480

M2482

㷗 ① M0313

焚 ① M0529

光 ① M0334

228

page 115a (10)

also page 96	① W0344 ③ M2109	③ W1361 ④ M2675 also page 72	③ M1690	③ M1900 M1990 M1966 M2009 M2033	③ M1690	③ M1814	① M0744	③ M2126	③ M1737	③ M2127	③ M2215	① M0903

page 116a (10)

page 102	① M0877 M0944 M1033 M1076 W0347	④ M2268 M2299 M2798 W1501 W1504 W1550 W1672	③ M2122	④ W1520	④ M2799	① M0161	① M0647 ④ W1502	① M1108 ③ W1322 ④ W1573 W1636	④ M1789	M2386	亦 ① M0393 M0835 W0018 W0141 W0435 ④ M0810	交 ④ M2344 M2425

⑤ M3154	炎 ④ M2674	大 ① M0018 M0326 M0456 M0730 M0836 M0970 M1075	W0105 W0126 W0782 W0890 W0943 W0998 ② M1245 M1258	M1262 M1265 M1290 M1297 M1306 M1326 M1363 M1369	M1379 M1386 M1440 M1442 M1486 M1503 M1511	M1551 M1560 M1581 M1585 M1607 W1024 W1091 W1115	W1205 W1262 W1268 ③ M1821 M1849 M1852	M1856 M1868 M1891 M1941 M1989 M2102 M2113 W1320	W1322 W1350 W1466 ④ M2343 M2520 M2718	M2809 W1505 W1555 ⑤ W1686 W1915	also pages 01 15 18 24 25 35 51 78 83 85 103 113 118 123 148 150 155 156 159	夷 ① W0384

page 116b (10)

奉 ① M0103 M0602 M0620 M0855 M0931	M0987 M0995 W0354 W0420	W0452 ② M1367 ④ W1496	執 ① M0332 M0767 M0801 M0851 M0868 M0894	M1024 W0161 W0452 ② W1262 ④ M2342	⑤ W1901	奔 ② M1170 M1214 M1365 M1366 ③ W1304 ⑤ M2994	奏 ① M0035 M0089 M0186 M0188 M0189 M0190	M1083 ② W1017 W1067 ③ M1823 M1824	M1825 W1387 ④ M2248 M2426 M2476	新奏 ③ M1825	美奏 ③ M1823	賀奏 ③ M1822

各 奏 ③ M1822
商 奏 ③ M1822
𠂤 奏 ③ M1826
虎 奏 ③ M1823 M1824
婦 奏 ③ M1822
④ M2332 M2388
夫 ① M1035 W0465 ③ M1834 ④ W1503
⑤ M3068
立 ① M0883 M1079 W0826 ② W1226 ③ M2116
M2125 ④ W1532 W1611 W1642 W1659
並 ① M0673 W0401 ④ M2705 M2708 M2709
慶 ⑤ M3089
① M0640 W0006 W0667 ④ M2312

水 ① W0347 ④ M2395 M2396
大水 ③ M1734 ④ M2469 M2473
→ 川 page 119
河 ① M0082 M0089 M0091 M0364 M0689 M1108
W0006 W0007 W0007 W0008 W0009 W0957
② M1376 ③ W1420 W1461 ④ M2334 M2462
M2474 W1572 W1583 W1636 W1636 W1647
渝 ① M0588
溫 ① M0325 ② M1376
洹 ① M0094 W0440 ③ M1725
洋 ② M1446
衍 ④ M2270 W1669
沙 ③ W1299

① M0592
每 → 每 page 09

沚 ① M0567 M0657 M1059 W0357 W0394
④ M2432 M2687 M2716
also pages 96 128
派 ② M1603 ③ M1897 M1903 M1972 M2004 M2045
M2105 W1432 W1458 ⑤ M3068
湄 ③ M1990 M2026 W1321 W1440
also page 83
㳄 ① W0825
沈 → 沈 page 119
汰 ① M0578 M0597 M0652 M0873
④ M1742
④ W1648
海 ③ M1690 M2012 M2017
汨
滴

page 119a (11)

隻	漦	漦	涉	汴	淳	涂	滜	汚	狀	狀	狀	狀
③ M1997 M2081	③ M2644	① M0895	① M1111 W0133	① M0334 ③ W1306 ④ M2418	③ M2113 ④ M2688	③ M2126	③ M1834	① W0636	② W1147 ③ M2102	③ M2013	⑤ M3039 W1800	① M0974

237

page 120a (11)

宋	泉	永	冬	雨								
M3135 M3138 M3139 M3140 M3144 M3146 M3148 M3149 M3150 M3151 M3153	M3154 M3155 M3156 M3157 M3159 M3162 M3174 M3175	W1853 W1854 W1856 W1858 W1860 W1863 W1867 W1904 W1906	W1909	泉 ① M0840 M0846 M0882 ⑤ W1869	① W0864	永 ① M0820 M0846	冬 ① M0951 ④ M2700	雨 ① M0087 M0300 M0364 M0380 M0381 M0382 M0383	M0385 M0386 M0387 M0388 M0389 M0391 M0392	M0393 M0395 M0396 M0398 M0399 M0401 M0402	M0403 M0405 M0406 M0407 M0408 M0409 M0410 M0411	M0412 M0413 M0414 M0415 M0416 M0417 M0418

239

狀	狀	狀	狀	狀	狀	狀	狀	狀	狀	狀	狀	狀
① ? W0311	① M0977	① W0448	① W0705	③ M1981	涉 ① M0502 M0689 ③ M2012 M2017	④ W1654	④ M2472	① M0067 M0362 M0363 M0365 M0542 M1107 W0186 W0298 W0920	② M0902 M1528 M1538 M1609 W1016 W1134 W1135	W1136 W1137 W1138 W1140 ③ M2627	W1307 W1343 W1346 W1347 W1349 W1448 W1449 ④ M2625	⑤ M2655 M2881 M2905 M2906 M2919 M2958 M3132 M3134

238

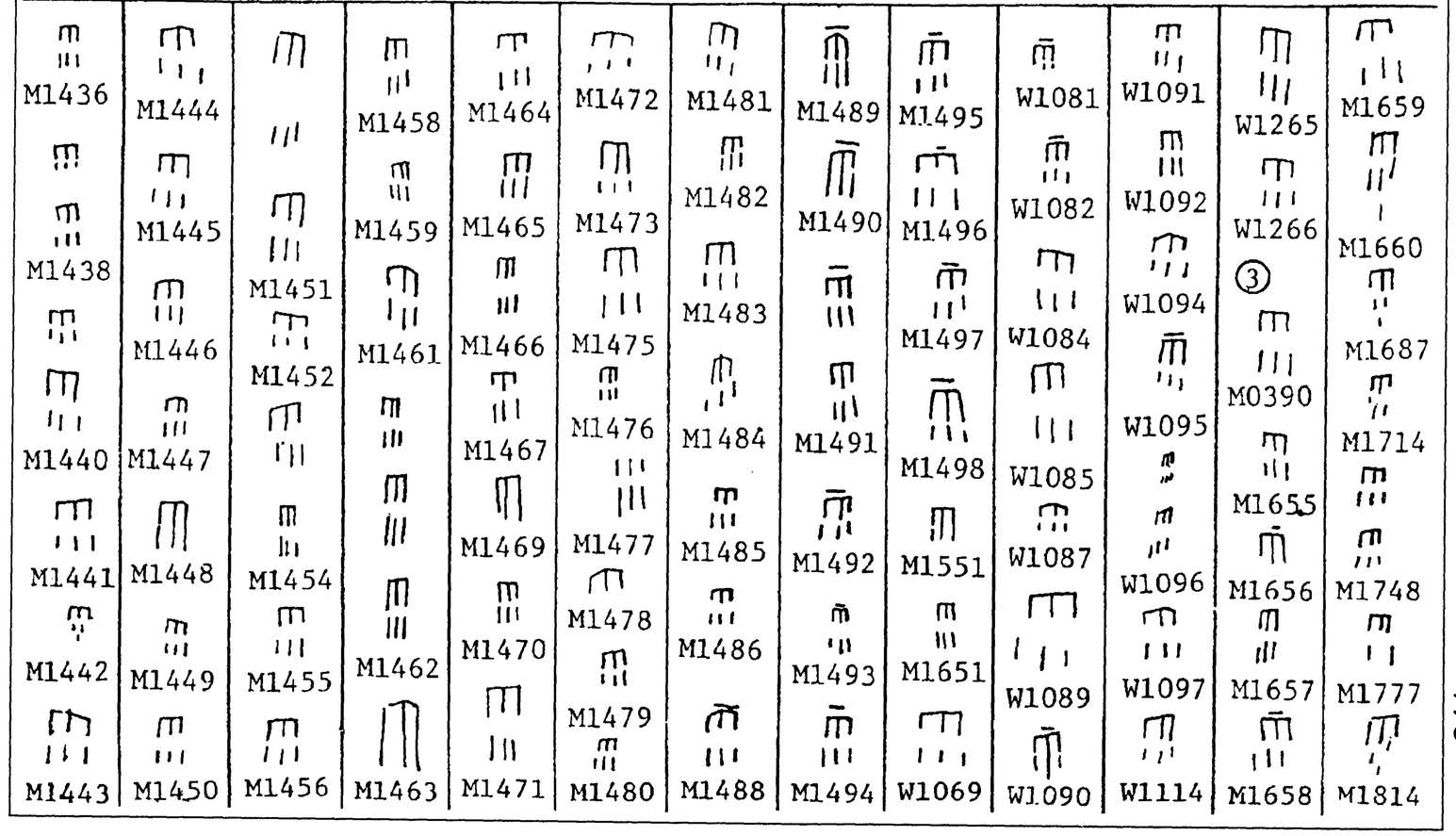
page 119b (11)

M0419 M0420 M0421 M0422 M0423 M0424 M0425	M0426 M0427 M0428 M0429 M0430 M0431 M0432	M0434 M0436 M0437 M0438 M0440 M0441	M0443 M0444 M0446 M0447 M0448 M0449 M0450	M0452 M0453 M0455 M1112 M1119 M1120	M1121 W0187 W0190 W0191 W0192 W0194 W0197 W0198	W0199 W0200 W0201 W0202 W0203	W0204 W0205 W0206 W0207 W0208	W0209 W0211 W0212 W0214 W0216 W0217	W0218 W0221 W0222 W0225 W0226 W0227	W0228 W0229 W0230 W0231 W0232 W0234 W0235 W0237	W0241 W0242 W0243 W0246 W0247 W0287 W0393 W0922	W0923 W0924 W0925 W0926 W0958 ② M0435

240

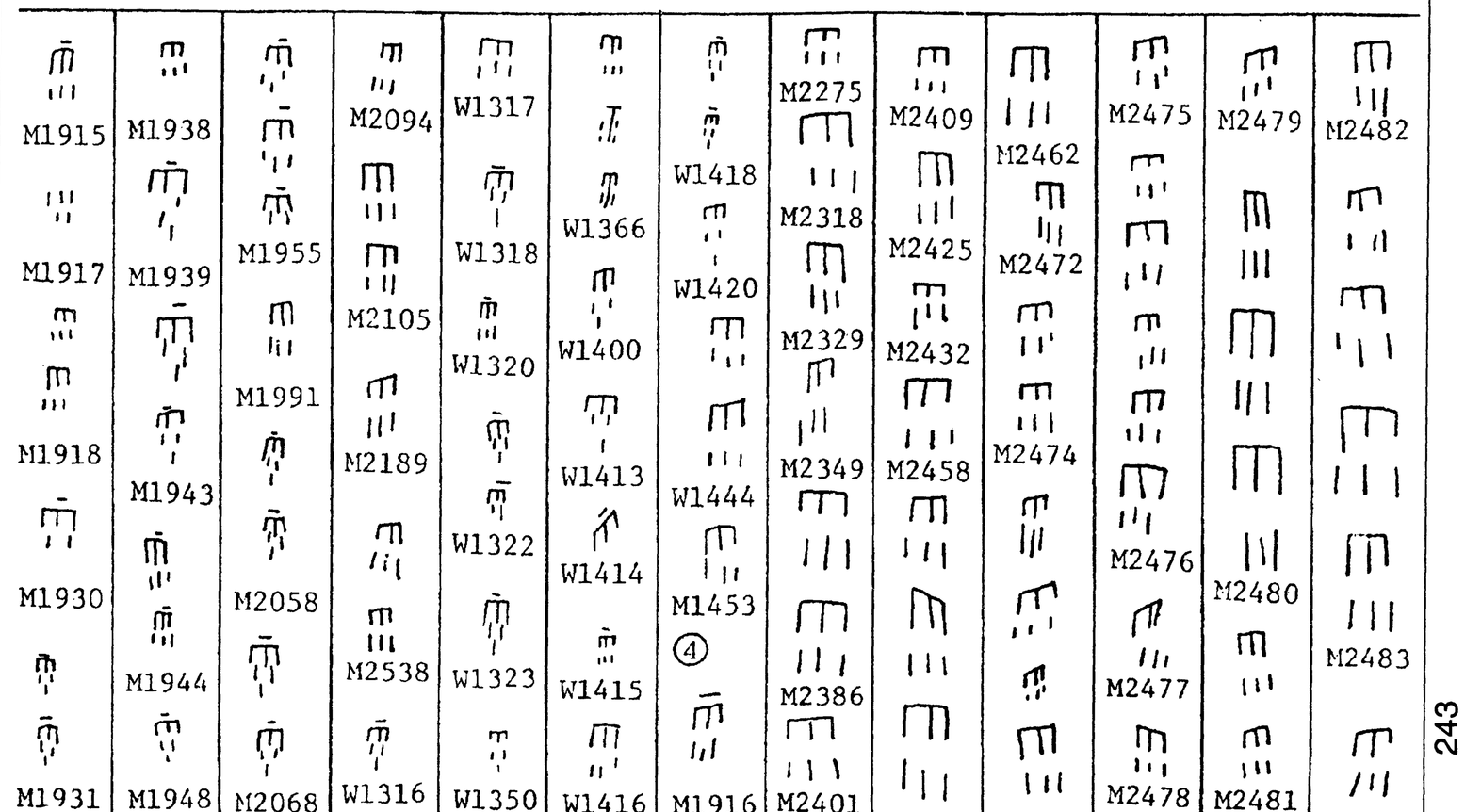
page 120b (11)

page 121a (11)

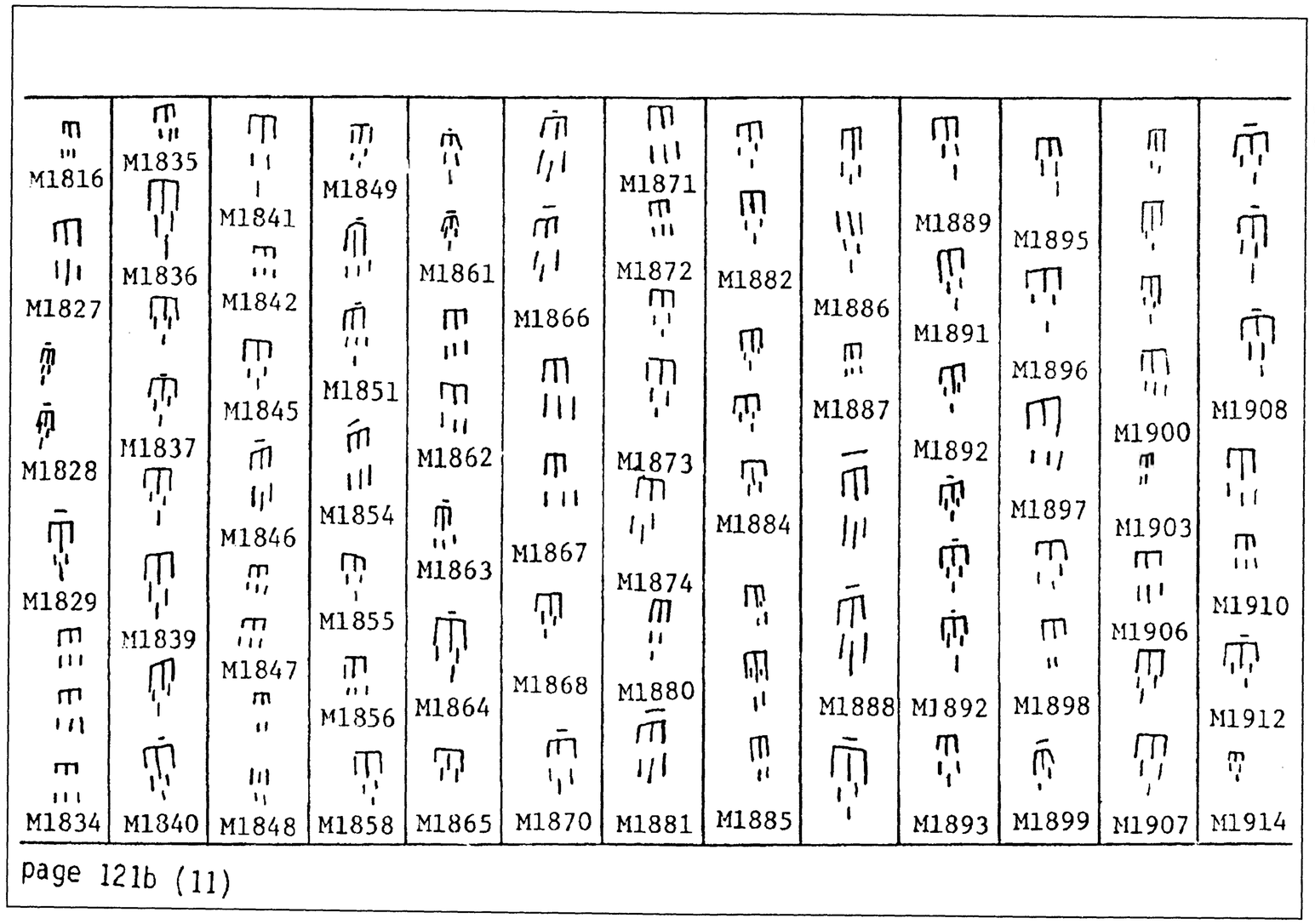


241

page 122a (11)

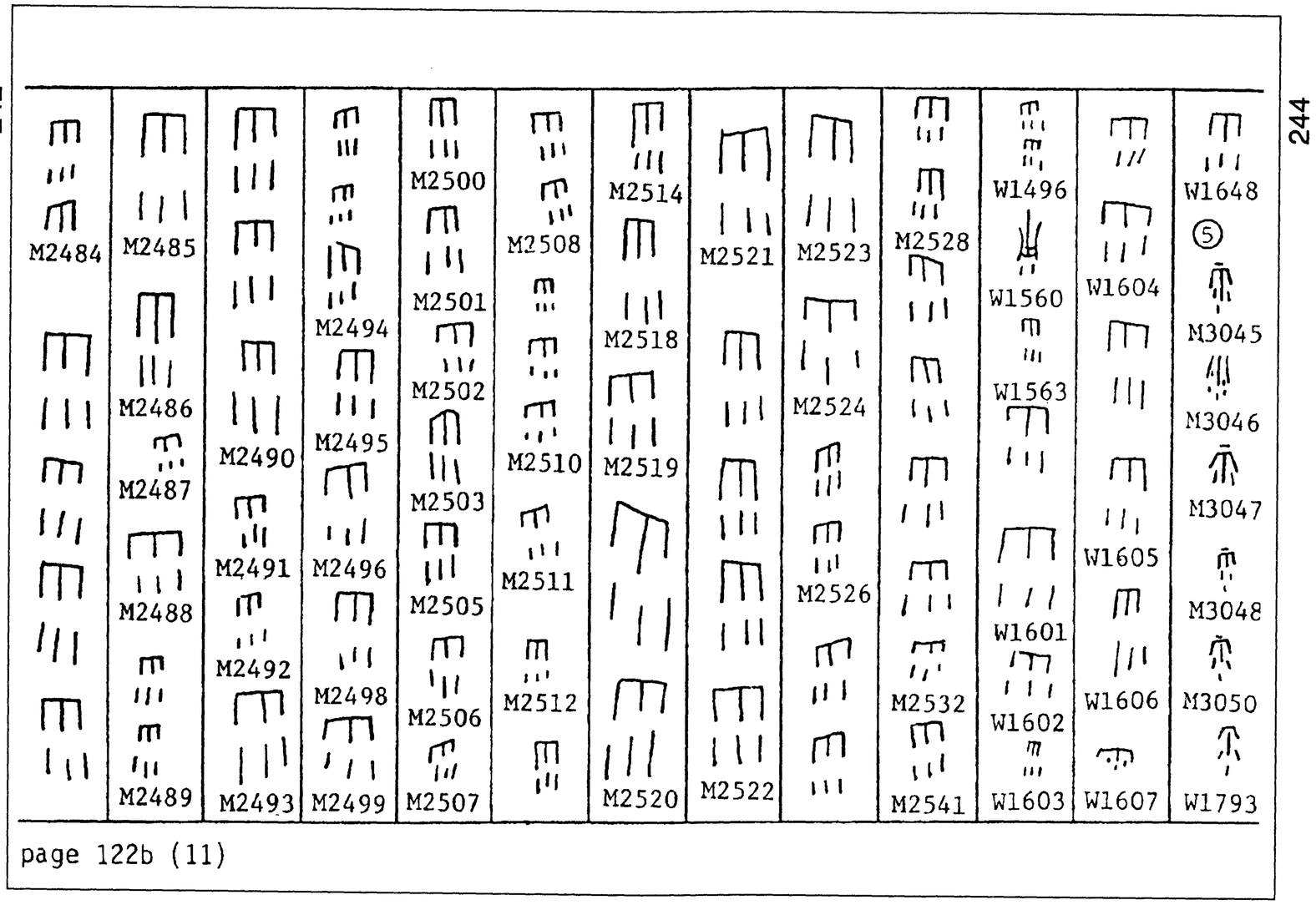


243



242

page 122b (11)



244

page 123a (11)

大風雨 ③ M1940

M2059 M1369 ⑤ M3044 M3139

M1890 M1894 M1896

M1900 M1901 M1931

M1870 M1875 M1876

M1878 M1879

M1859 M1869

M1852 M1853 M1855 M1857

M1838 M1841 M1846 M1850

M1827 M1830 M1831 M1833 M1883

M1822

大雨 ③ M1684 M1813 M1821

W1884 W1885

page 124a (11)

雲 ① M0175 M0457

魚 ① M0508 W0046 W0727 W0740

① M1008 W0347

① M0518 M0521 M0522 M0964 W0246 ② M1530

M1531 M1532 M1533 M1604 W1075 W1076 W1079

W1080 W1267 W1268

① M0859 M1000

also page 97

③ M1711

漁 ① M0224 M0493 M0502 M0620 W0318 ③ M2099

W1462

燕 M0154 M0289 M0291 M0511 W0389

W0390 ② M1649 M1650 M1651 M1652

page 123b (11)

小雨 ③ M1850 M1870 M1877 M1883

④ M2321

多雨 ① M0427 M0442

从雨 ① W0219 W0244

滋雨 ③ M0378 M1860

雪 ① M0462 M0463 M0464 W0958

靈 ① M0596 W0238

③ M2128

雩 ③ M1816 M1820 M1827

③ M2215

① M0445

① W0408 W0431

⑤ W1915

page 124b (11)

龍 ① M0059 M0198 M0704 M0725 M0772

M0917 M1023 M1119 W0484 W0488 W0619

W0644 ③ M1780 M1828 M2104 ④ W1654

W1355 W1356

① W0818

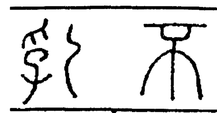
M1653 M1654 W1149 W1152 W1153 W1154 ③ M2120

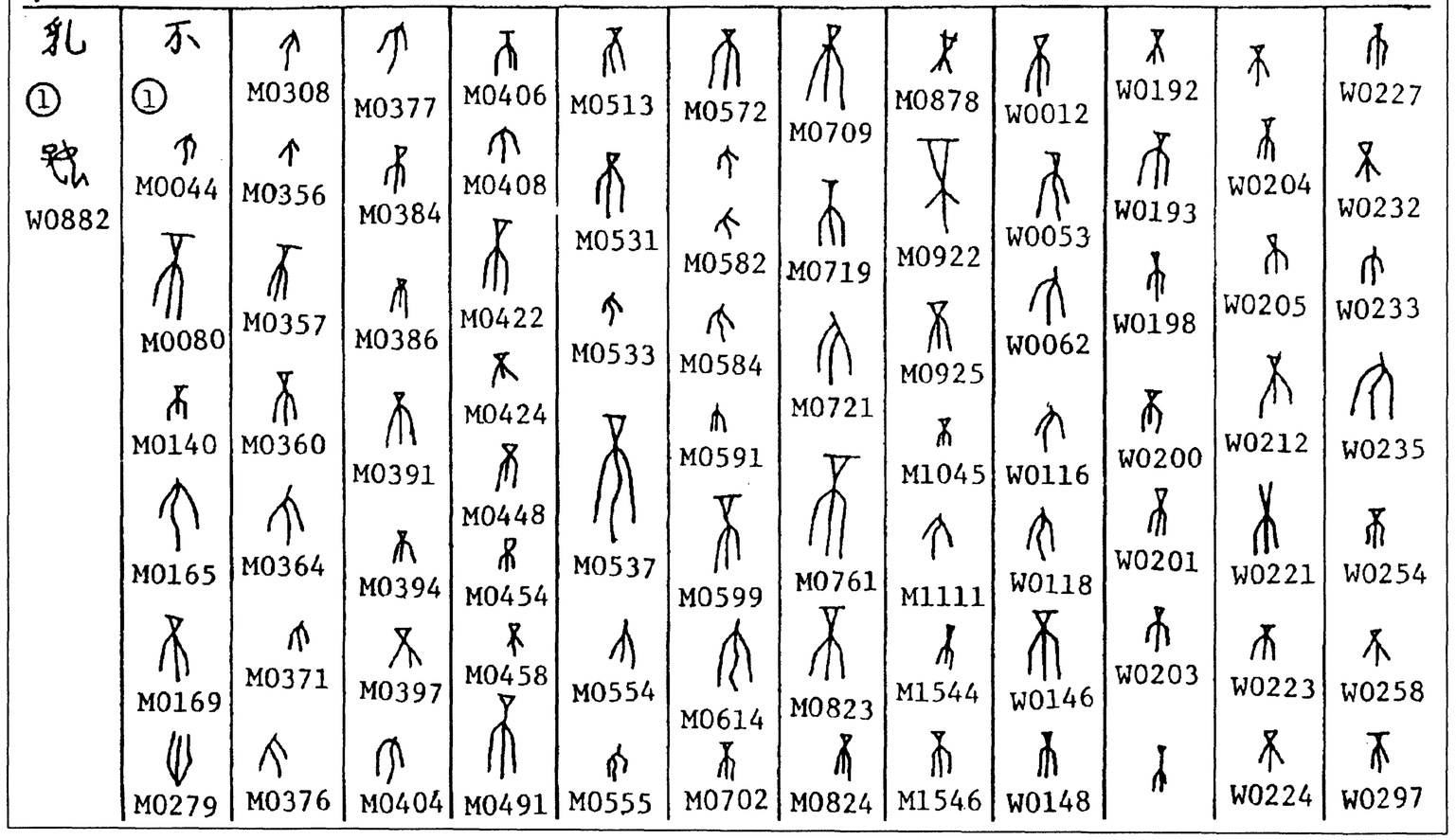
also page 148

非 ③ M1934

（原載《中國文字》新九期，一九八四年九月）

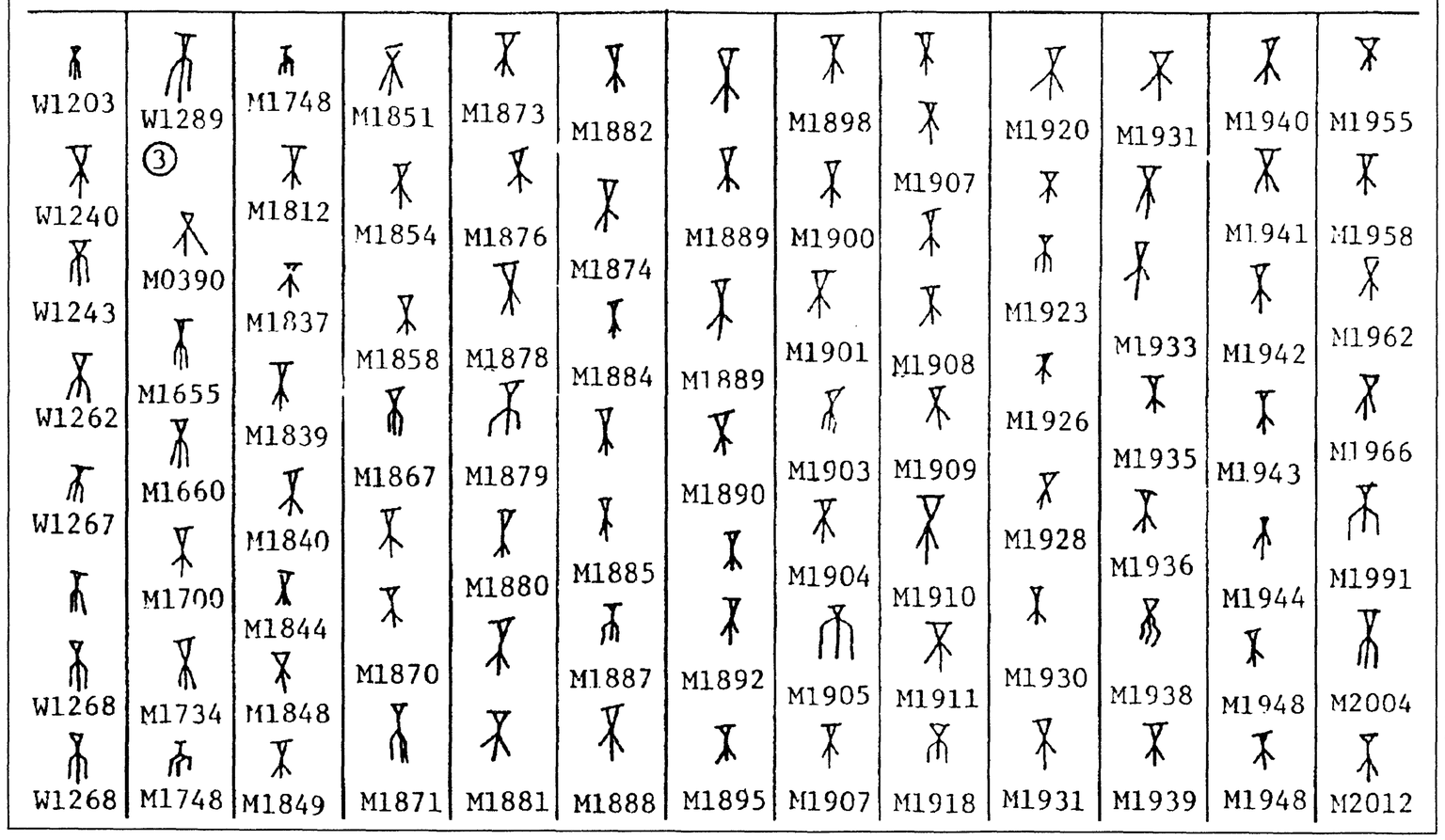
page 125a (12)



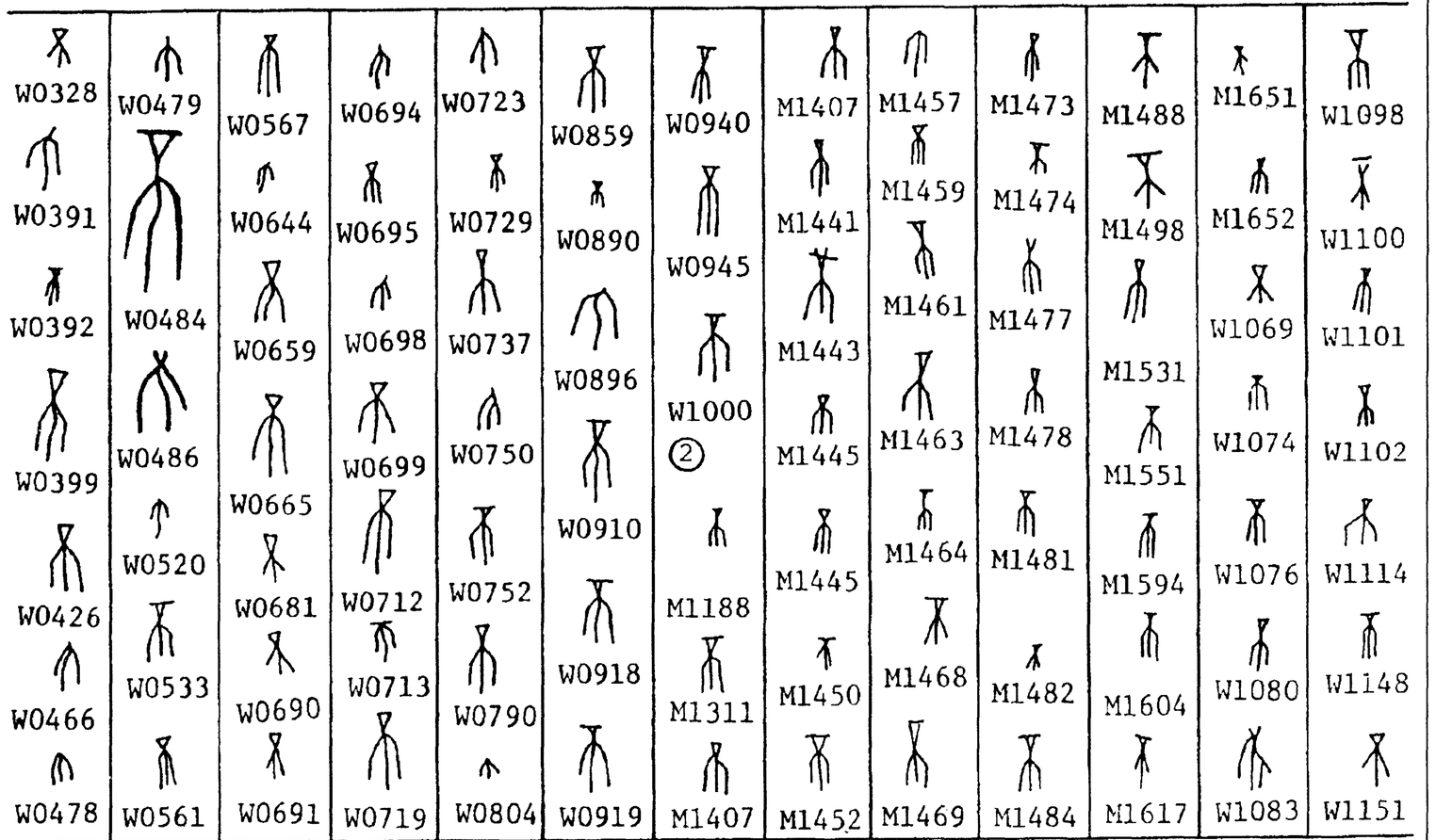


249

page 126a (12)

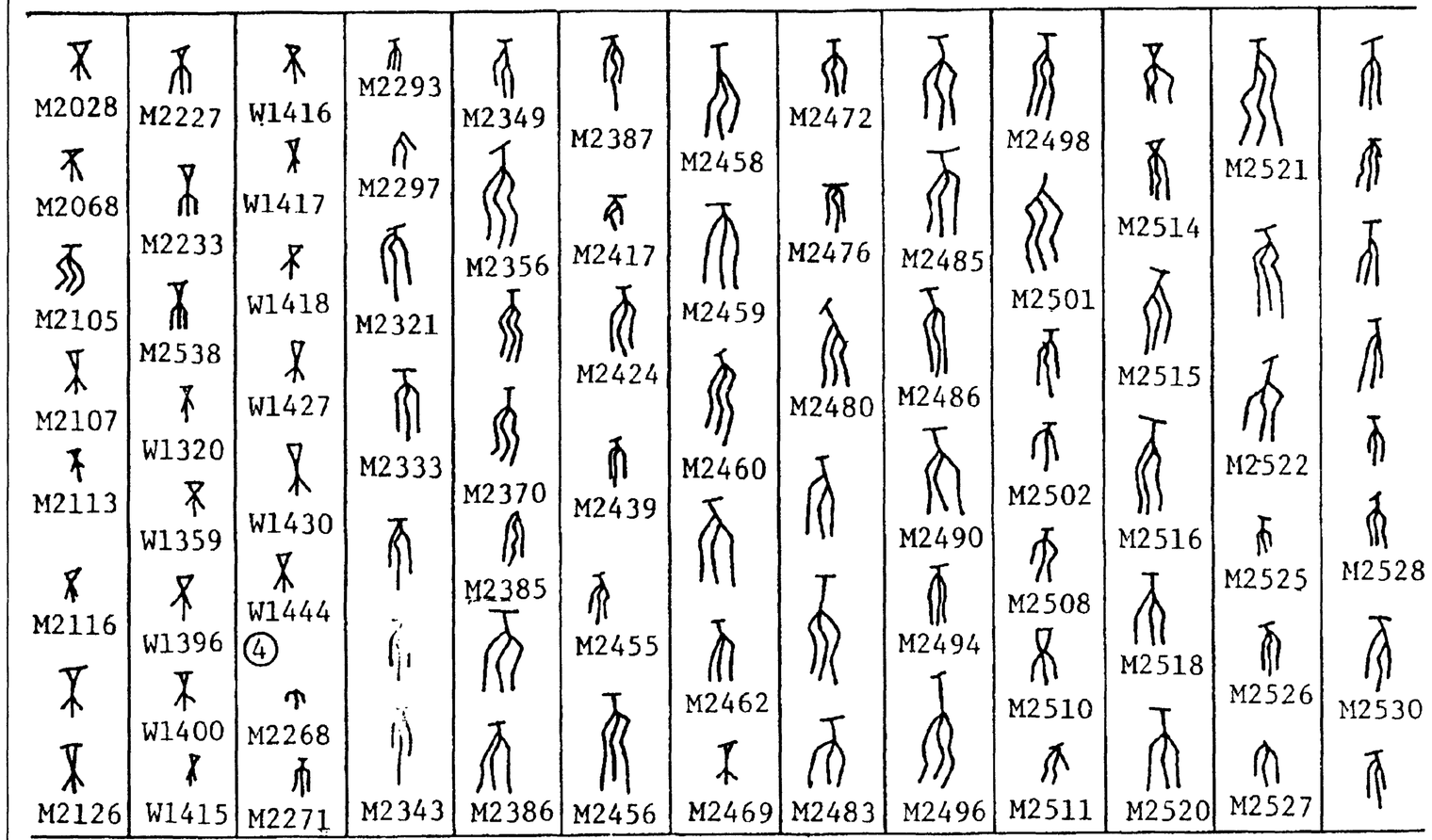


251



250

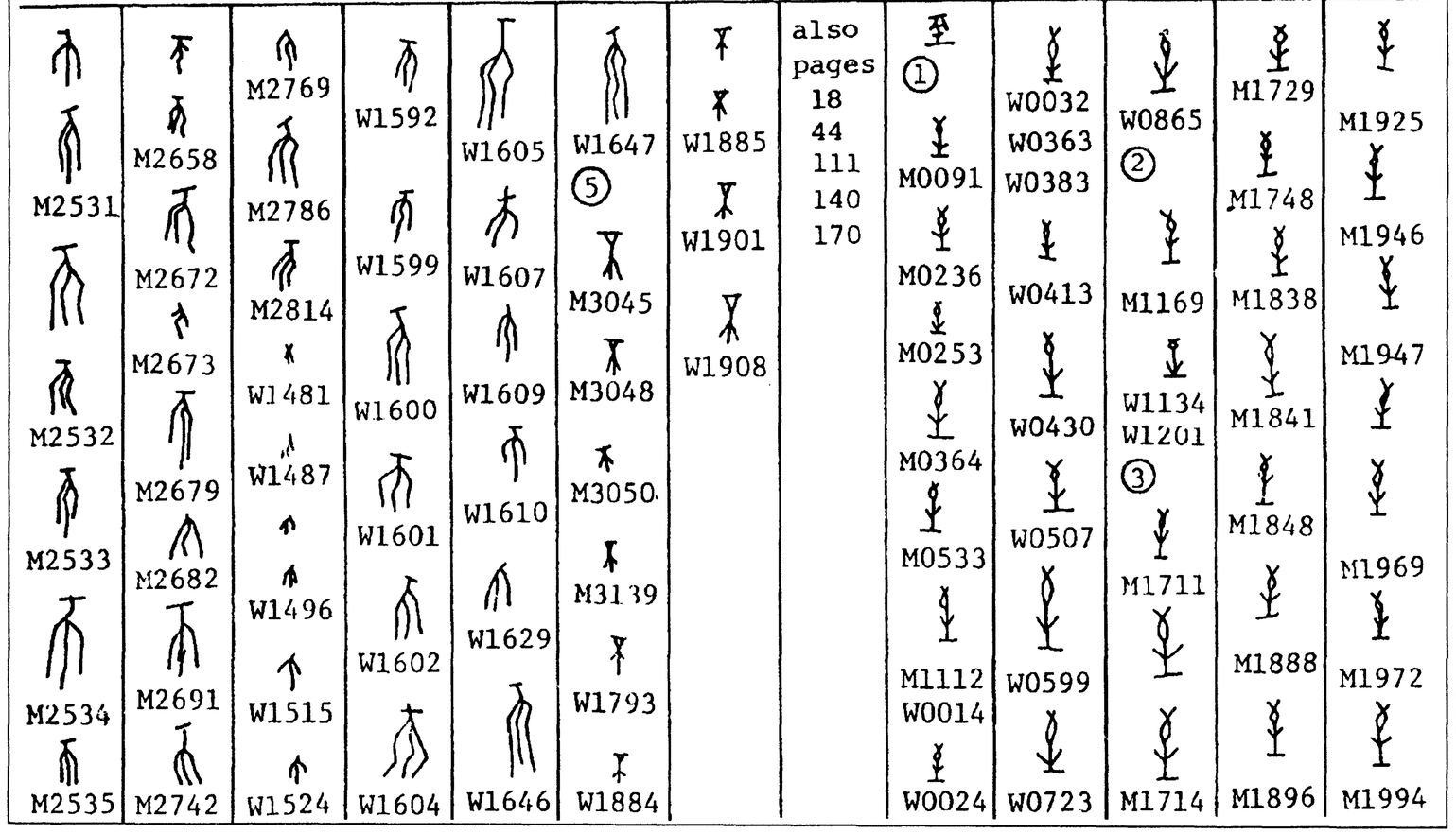
page 125b (12)



252

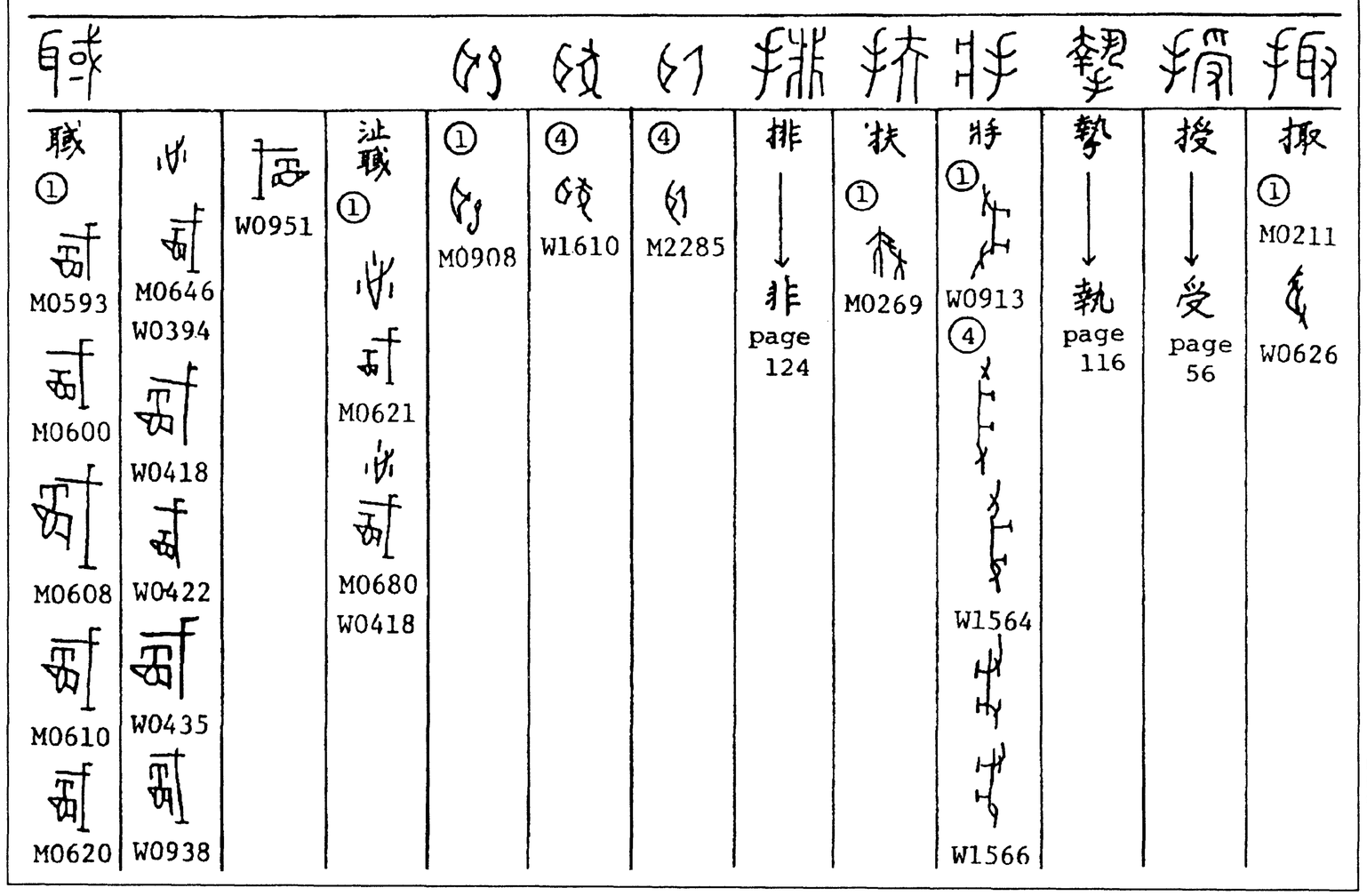
page 126b (12)

page 127a (12)



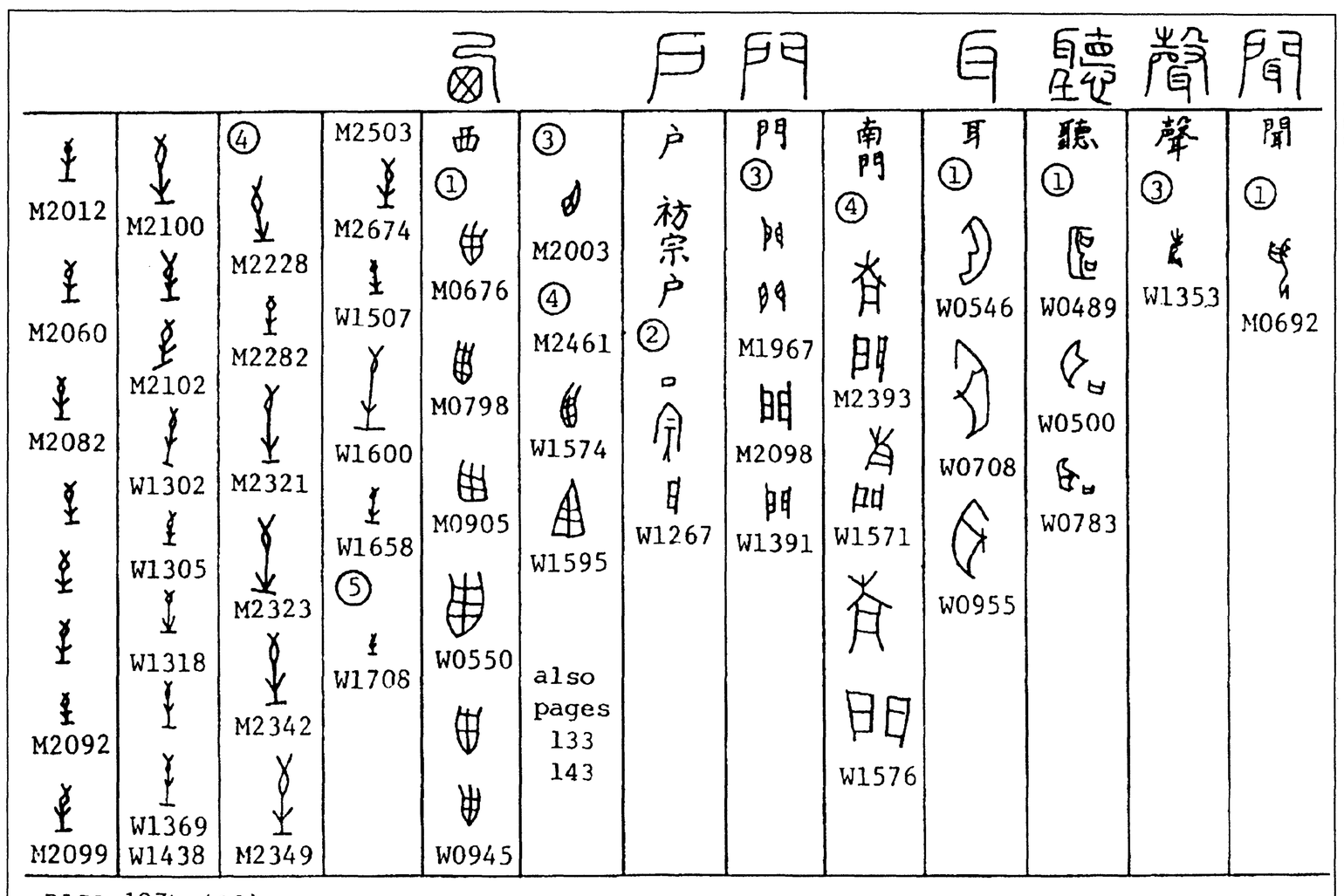
253

page 128a (12)



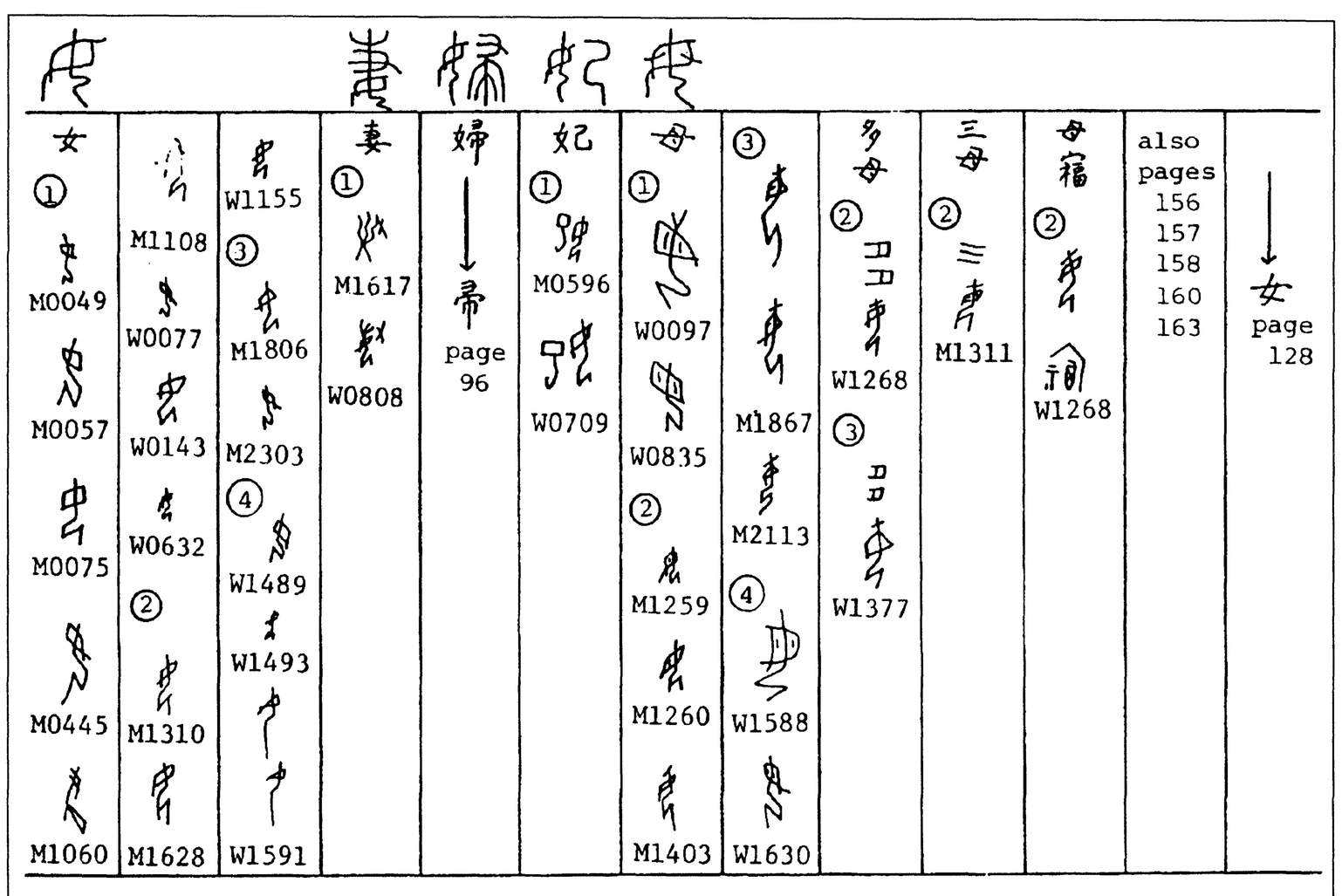
255

page 127b (12)



254

page 128b (12)



256

姚 妹 媧 娥 媚 好 妍 妍

姚 → 兆 page 100

妹 ① W0138 W0026

媧 ① M0721 W0485 W0492 W0494 W0495 W0499 ③ W1262 ④ M2472 W1515 ⑤ M3176

also page 116

奴 ① M0911

娥 ① M0111 W0015 W0571

媚 ① M0709 ④ M2260

好 ① M0158 M0570 M0607 M0644 M0653

M0726 M1105 W0369 W0417

also page 96

妍 ① M0648

also page 96

姘 妹 嫡 嬉 嬰 嬸 嬪 嫉 嫉 毋 乂 弗

④ M2475

② M1678

④ M2675

③ M1831 M1833

② W1227

④ M2478

④ W1515

also page 97

also page 117

毋 → 女 page 128

乂 ① W0652 ③ M2236

弗 M0096 M0161 M0162 M0243 M0352 M0355

M0488 M0499 M0504 M0520 M0557 M0575 M0591

如 嬪 妻 妝 嬖 娘 妥 嬉 姓 娘 嫁 財

如 ④ W1527

嬪 ① M0118 W0581

妻 ① M0774 M0775 M0776 W0522 W0548

妝 ② M1581

嬖 ③ W1383

also page 96

娘 ① M1106 ⑤ M3161

妥 ① M0329 M0550 M0606 M0662 M0955 W0939 W0945

嬉 W0946

姓 ① M0465 W0940

娘 ④ M2304

嫁 ① W0382

財 ④ W1505

M0656 M0708 M0792 W0817 M0917 M0926 M0935

M1014 W0085 W0145 W0155 W0166 W0300 W0303 W0304

W0307 W0314 W0391 W0409 W0434 W0452 W0545 W0623

W0683 W0689 W0699 W0772 W0769 W0791 W0888 W0955

② W1227 ③ M1681 M1762 M1883 M1961 M1967

M1988 M1996 M2012 M2014 M2019 M2020 M2044

M2051 M2052 M2055 M2079 M2097 M2110 M2113

M2122 M2123 M2125 M2130 M2170 W1432

W1445 W1447 W14[illegible] ④ M2333 M2402 M2658 M2678

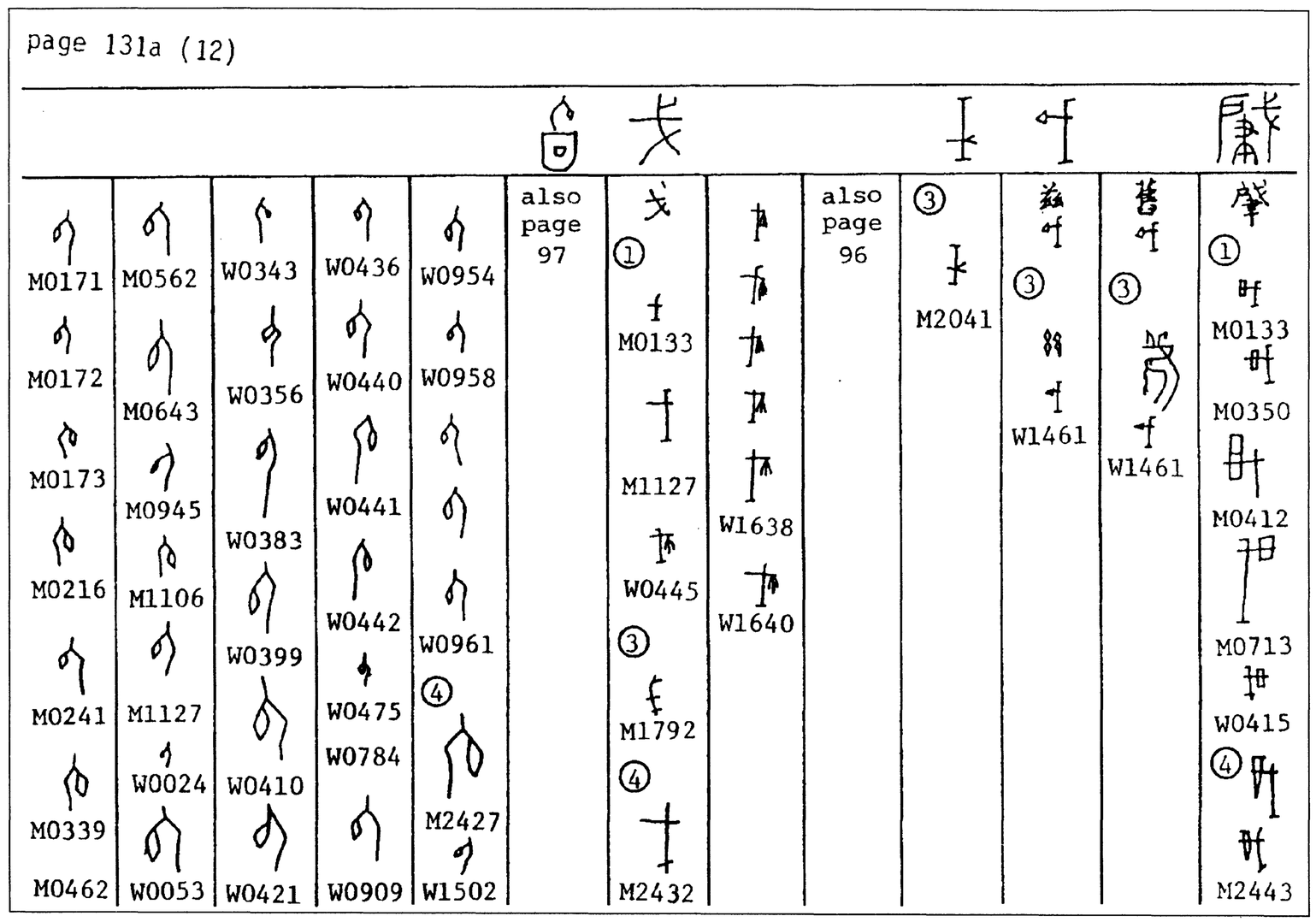
M2699 M2719 W1638 ⑤ M3139 W1870 W1903 W1907

孚 ④ W1588

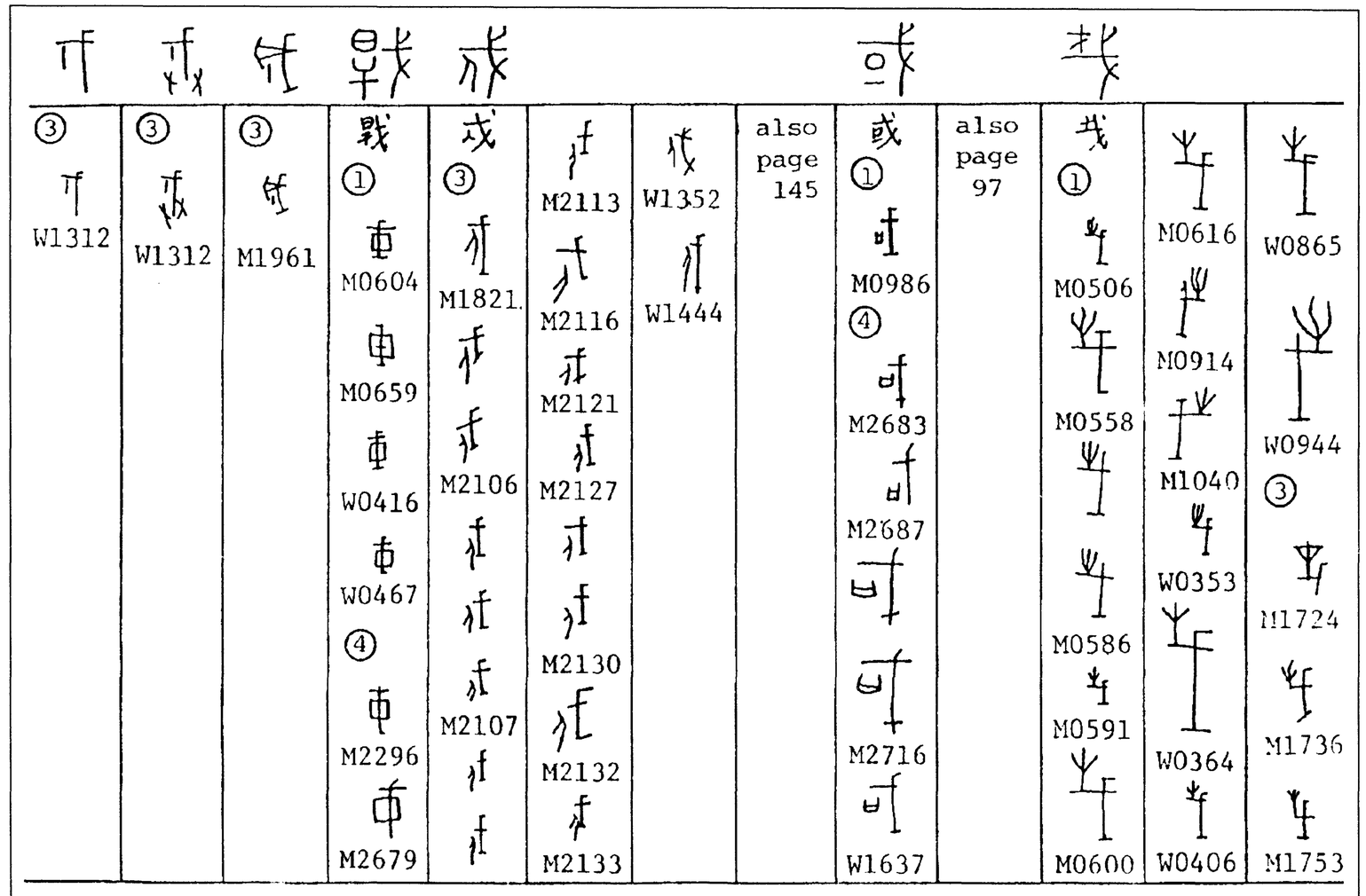
氏 ① M0059 M0091 M0161 M0162 M0163

M0164 M0165 M0166 M0167 M0168 M0169 M0170

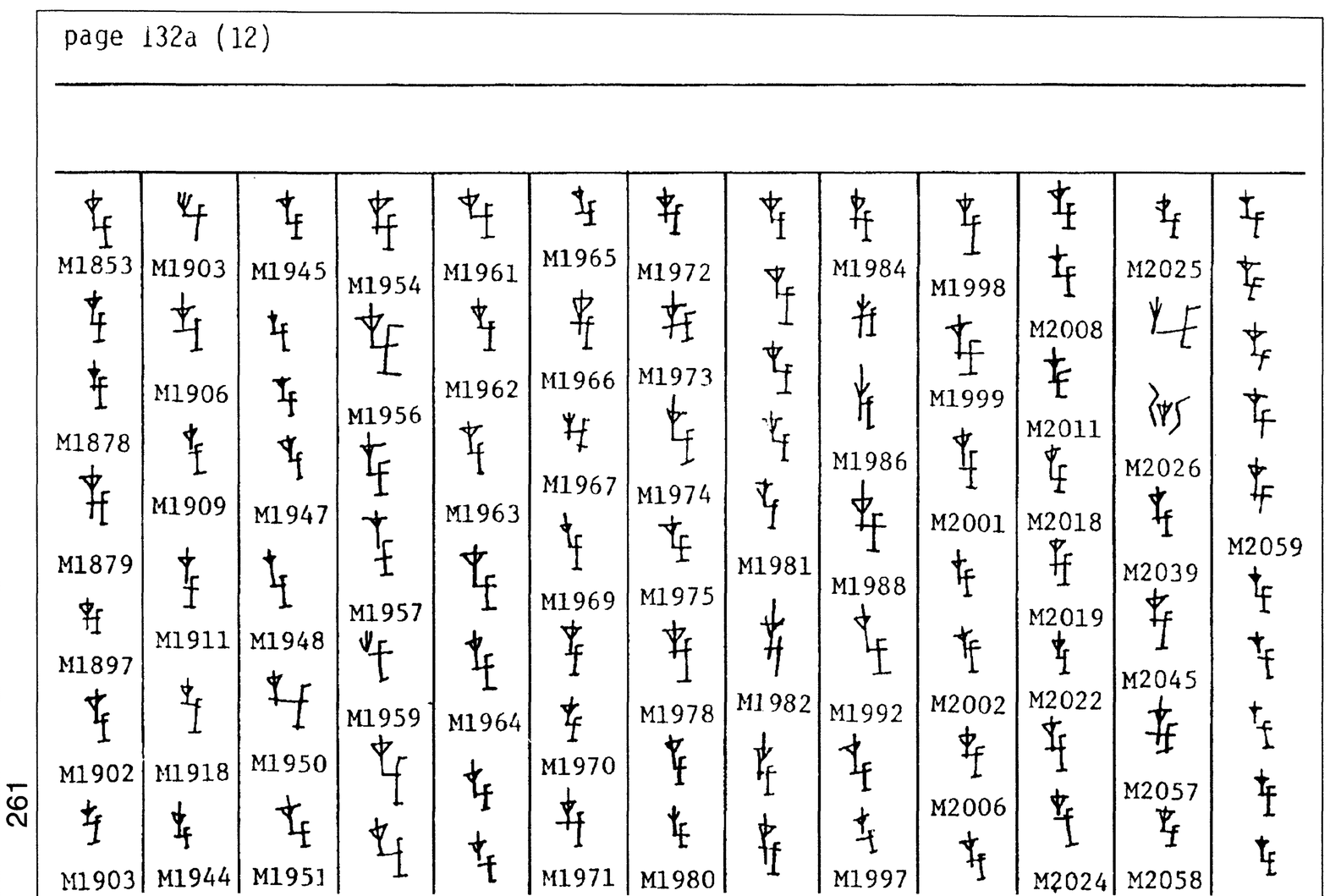
page 131a (12)



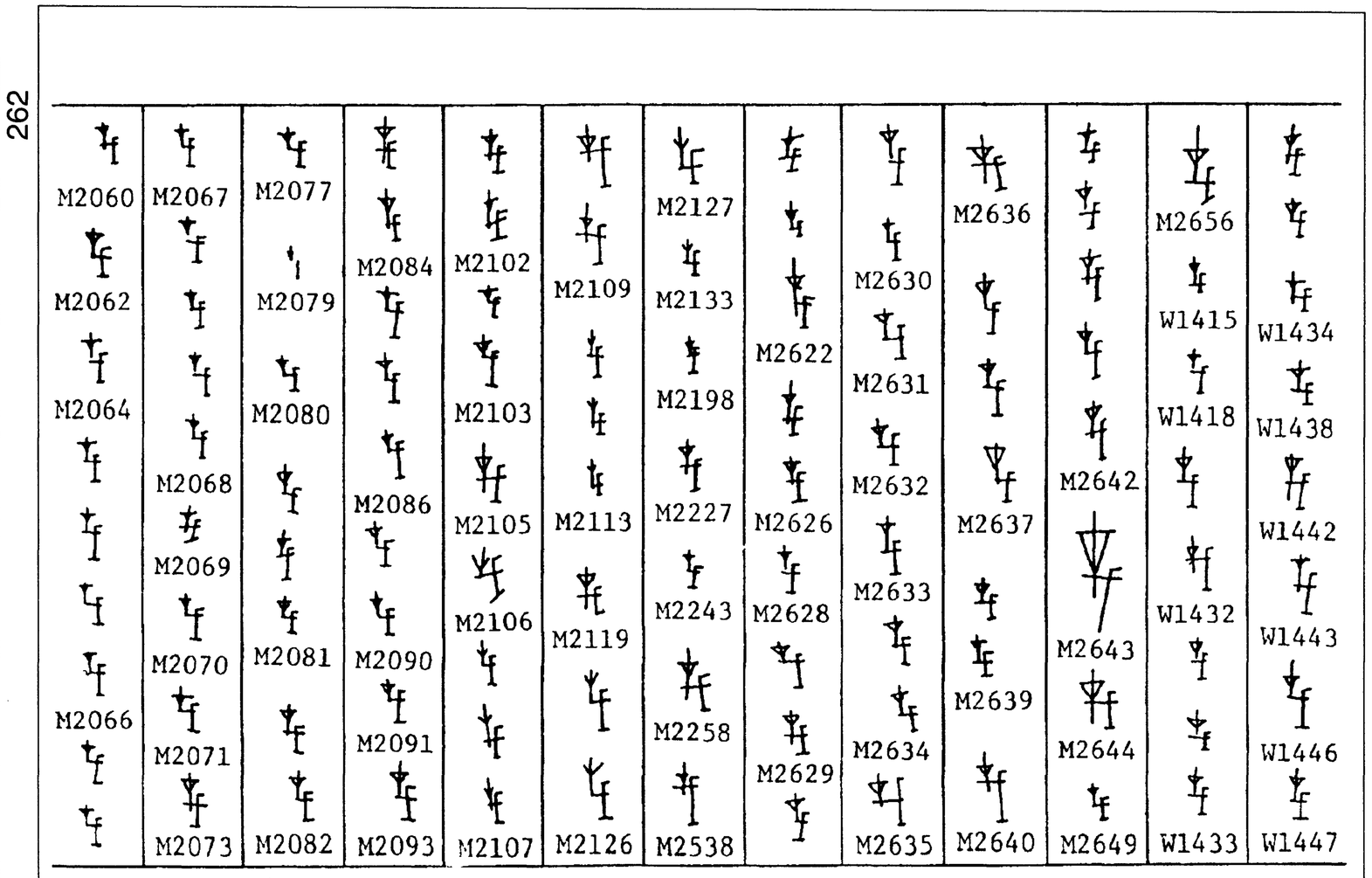
page 131b (12)



page 132a (12)



page 132b (12)



戠 弋 武 音戠

W1451 W1452 W1479 ④ M1751 M2536 M2623	M2624 M2638 M2646 M2647 M2648	M2650 M2699 M2787 W1602 ⑤ W1871 W1908	线 ① W0382 W0958 ④ M2710	M2722	① M1078	武 ① M1546 ③ M2129 ⑤ M2896 M2899 M2911	M2916 M2919 M2992 M2998 W1692 W1695 W1696 W1699 W1700 W1711 W1712 W1713	also pages 151 155	戠 ① M0215 M0216 M0218 M0219 W0513 ② M1190	M1198 M1267 M1269 M1335 M1336 M1337 M1338 M1339 M1340	M1341 M1624 M1626 M1627 W1027 W1033 W1041	W1070 W1252 W1253 ④ M2402 M2539 W1503

義 亾

W0665 W0735 W0762 W0865 W0872 W0900 W0919 W0995 ② M1273	③ M1705 ④ M2111 M2271 M2539 W1571	義 also page 151	亡 ① M0026 M0032 M0067 M0081 M0106 M0118 M0137	M0210 M0259 M0363 M0389 M0429 M0448 M0469	M0470 M0471 M0474 M0475 M0477 M0478 M0480 M0483	M0486 M0489 M0558 M0606 M0707 M0710 M0713	M0714 M0730 M0785 M0804 M0848 M1094 M1107 M1116	M1122 M1123 M1124 M1125 M1504	M1662 W0144 W0147 W0159 W0186 W0204 W0204 W0244	W0260 W0265 W0267 W0273 W0273 W0274 W0276 W0277 W0279	W0280 W0281 W0282 W0283 W0284 W0285 W0286 W0287 W0289	W0292 W0293 W0295 W0296 W0298 W0335 W0358 W0496

我 匄 ㄓ 𢍏 𢍏 𠂤

also pages 82 164	① W0444	also page 148	① M0584 ④ W1517	③ M1688 ④ M2371	③ W1402	also page 117	匄 ① W0364 W0947 ③ M2117	𢍏 ⑤ M3161	我 ① M0161 M0283 M0323 M0354 M0360 M0360 M0371 M0453	M0497 M0531 M0552 M0645 M0686 M0811 M0845 M0852	M0867 M0918 M1013 W0182 W0235 W0249 W0303 W0406	W0407 W0446 W0479 W0484 W0526 W0530

W0497 W0511 W0526 W0536 W0545 W0554 W0642	W0688 W0801 W0869 W0927 W0927 W0929	W0930 W0947 W0956 W0961 W0965 ② M1169	M1173 M1176 M1178 M1179 M1184 M1186 M1194	M1196 M1198 M1202 M1204 M1212 M1220 M1223	M1226 M1228 M1235 M1237 M1243 M1244 M1248 M1249	M1253 M1256 M1262 M1263 M1267 M1268 M1272 M1279	M1287 M1288 M1289 M1291 M1296 M1313 M1317 M1321	M1325 M1326 M1329 M1331 M1336 M1339 M1340 M1341 M1353	M1360 M1370 M1377 M1405 M1406 M1499 M1500	M1501 M1502 M1503 M1505 M1506 M1509 M1510 M1512	M1513 M1514 M1519 M1520 M1522 M1525 M1527 M1528	M1529 M1536 M1537 M1541 M1543 M1545

page 135a (12)

M1547 M1548 M1549 M1551 M1554 M1555 M1556 M1557

M1558 M1573 M1582 M1596 M1602 M1604 M1623

M1624 M1626 M1627 M1629 M1630 M1631

M1632 M1633 M1642 M1644 M3063 W1012 W1013

W1017 W1021 W1031 W1033 W1038 W1039 W1050 W1051

W1052 W1054 W1059 W1062 W1063 W1097 W1103 W1105 W1106 W1107 W1108 W1109 W1111 W1112 W1115 W1118 W1119 W1120 W1125 W1135 W1200 W1202 W1204 W1217

W1228 W1237 W1241 W1248 W1252 W1253 W1255 W1258 W1259 W1267 W1269 W1272 W1273 W1274 W1275 W1276 W1277 W1284

③ M0390

M0473 M1648 M1663 M1664 M1827 M1830 M1833 M1838

M1841 M1850 M1853 M1857 M1878 M1879 M1896

M1897 M1900 M1902 M1903 M1906 M1918 M1939

M1944 M1945 M1946 M1947 M1948 M1949

M1950 M1951 M1952 M1953 M1954 M1956 M1957

M1961 M1962 M1963 M1964

269

page 136a (12)

M2455 M2465 M2472 M2473 M2496 M2508 M2542 M2543

M2544 M2545 M2546

M2547 M2548 M2549 M2550 M2551 M2553

M2554 M2555 M2556

M2558 M2559 M2560 M2561 M2562 M2563

M2564 M2565 M2567 M2568

M2569 M2570 M2571 M2572

M2573 M2574 M2575

M2576 M2577 M2578 M2580 M2582

M2583 M2586 M2587 M2588 M2589 M2590

M2591 M2592

M2593 M2594 M2596

M2597 M2598 M2600

271

M1965 M1966 M1967 M1969 M1970 M1971

M1972 M1973 M1975 M1980

M1981 M1982 M1983 M1984

M1986 M1988 M1992 M1997 M1997 M1998

M1999 M2001 M2002 M2006 M2008

M2011 M2018 M2022 M2024 M2025 M2026

M2035 M2040 M2043 M2045 M2058 M2062

M2059 M2060 M2061

M2064 M2066 M2067 M2068 M2069 M2070 M2071 M2073 M2074 M2077 M2079 M2080 M2081 M2082 M2084 M2086 M2090 M2091 M2093 M2102 M2103 M2105 M2109 M2119

M2127 M2258 M2622 M2626 M2627 M2628 M2629 M2630 M2631 M2632 M2633 M2634 M2635 M2637 M2639 M2640 M2641 M2642 M2643 M2644 W1307 W1320 W1326 W1327

W1330 W1331 W1332 W1333 W1334 W1335 W1336 W1339 W1340 W1342 W1347 W1349 W1415 W1418 W1421 W1422 W1423 W1424 W1425 W1428 W1432 W1433 W1434 W1438

W1443 W1446 W1447 W1448 W1449 W1451 W1452 W1473 W1479

④ M1751 M2276 M2277 M2279 M2322

M2331 M2333 M2338 M2397 M2403 M2413 M2446 M2452

270

page 135b (12)

M2601 M2602 M2603 M2604 M2605 M2606 M2608 M2609 M2611 M2612 M2613 M2615 M2616 M2620 M2623 M2624 M2625 M2645 M2646 M2647 M2648 M2650 M2651 M2673

M2675 M2676 M2677 M2710 M2742 M2787 W1497 W1498 W1525 W1537 W1542 W1602 W1603 W1605 W1610 W1613 W1614 W1615 W1616 W1617 W1618 W1619 W1620 W1621

W1622 W1623 W1624 W1654 W1658 W1668

⑤ M2655 M2833 M2838 M2839 M2840 M2847

M2851 M2854 M2857 M2858 M2860 M2861

M2862 M2866 M2867 M2870 M2871 M2872 M2873 M2874

M2876 M2877 M2878 M2880 M2983 M2984 M2989 M2994 M2996

M2998 M3001 M3002 M3003 M3007 M3008 M3009 M3011 M3012

M3016 M3018 M3019 M3022 M3023 M3026 M3027

M3028 M3030 M3031 M3032 M3037 M3038 M3053 M3055

M3056 M3057 M3058 M3059 M3060 M3064 M3065 M3066 M3067

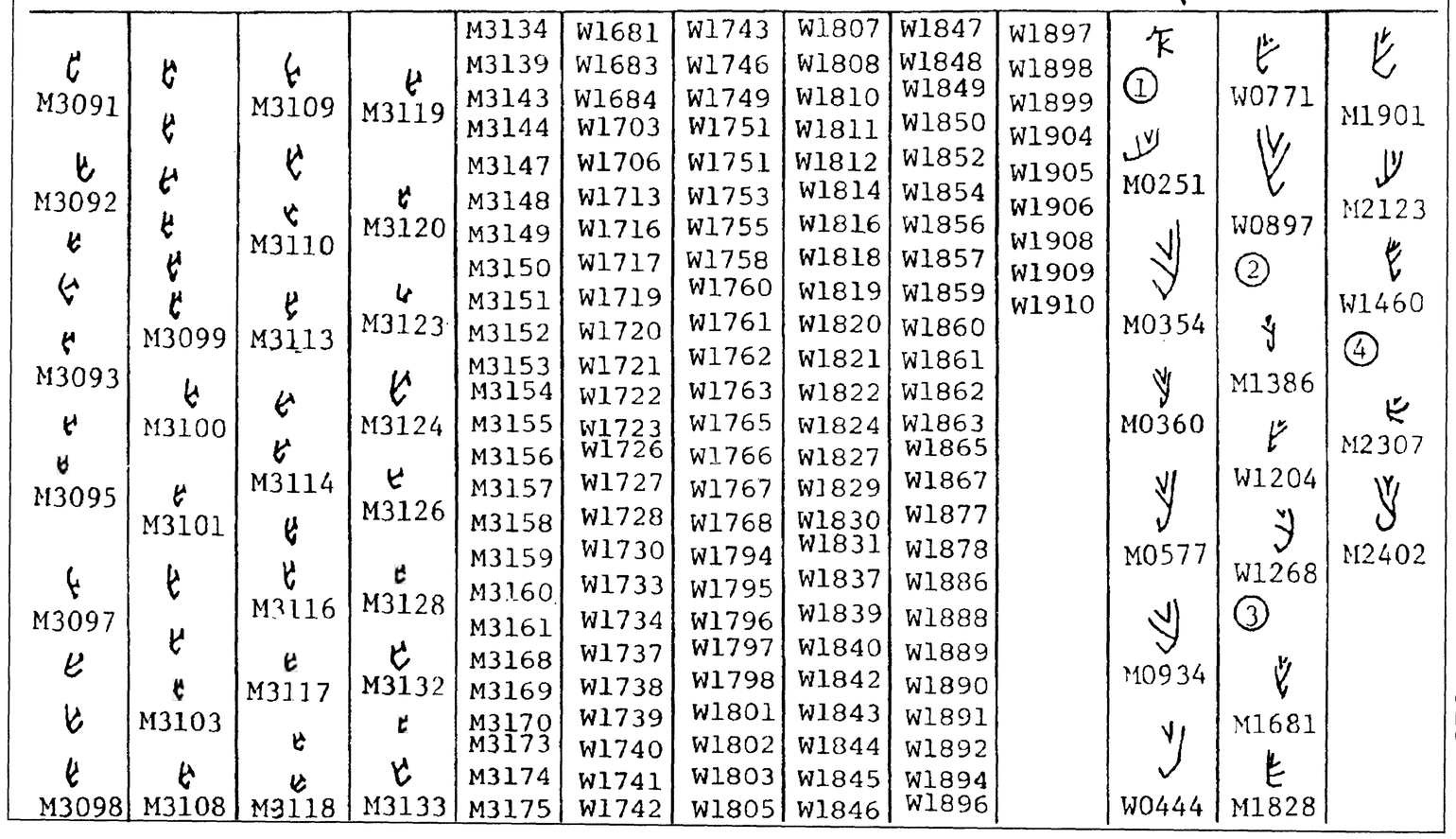
M3068 M3069

M3072 M3073 M3074 M3076 M3078 M3079

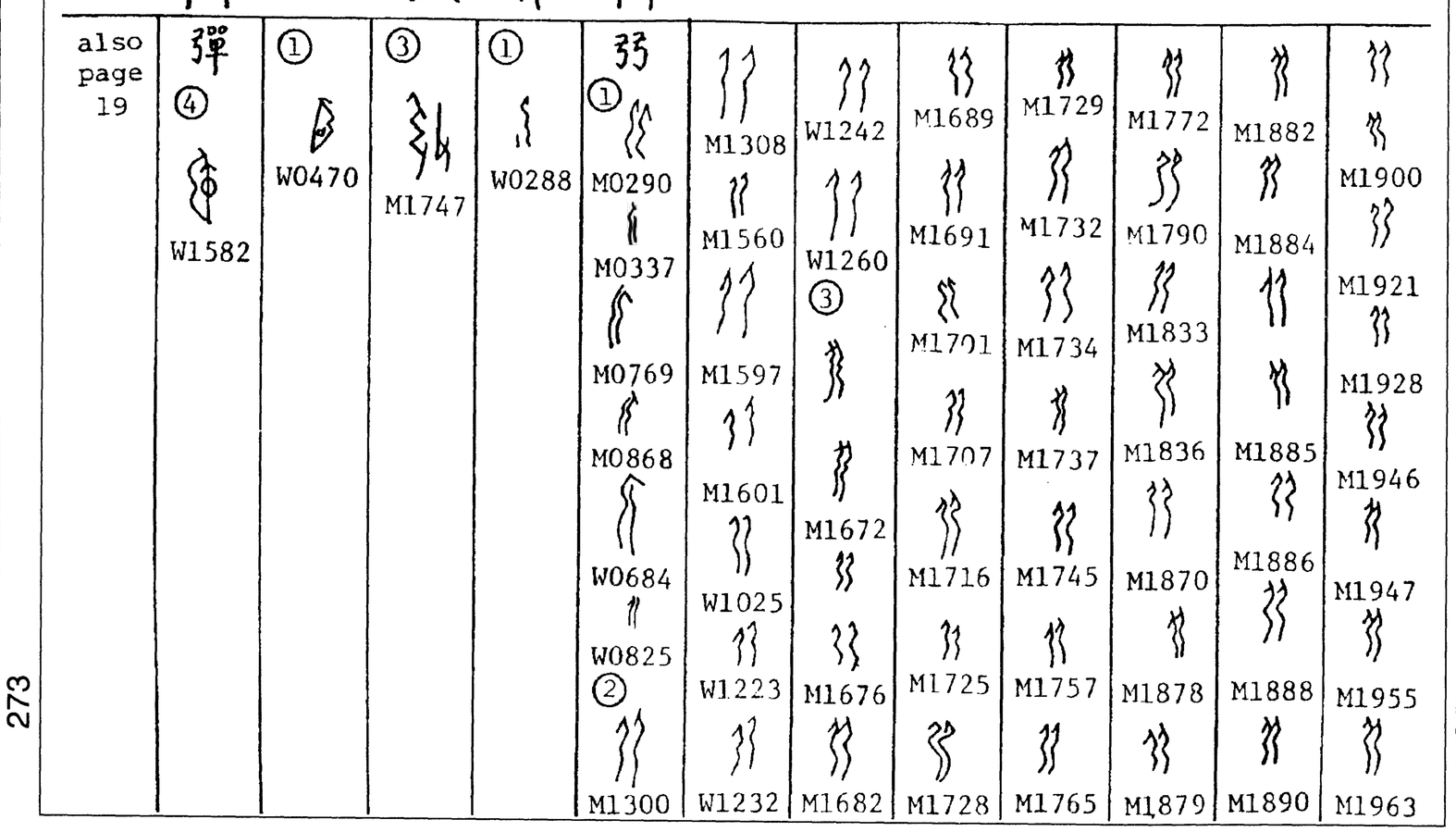
M3081 M3082 M3083 M3084 M3086 M3088 M3089 M3090

272

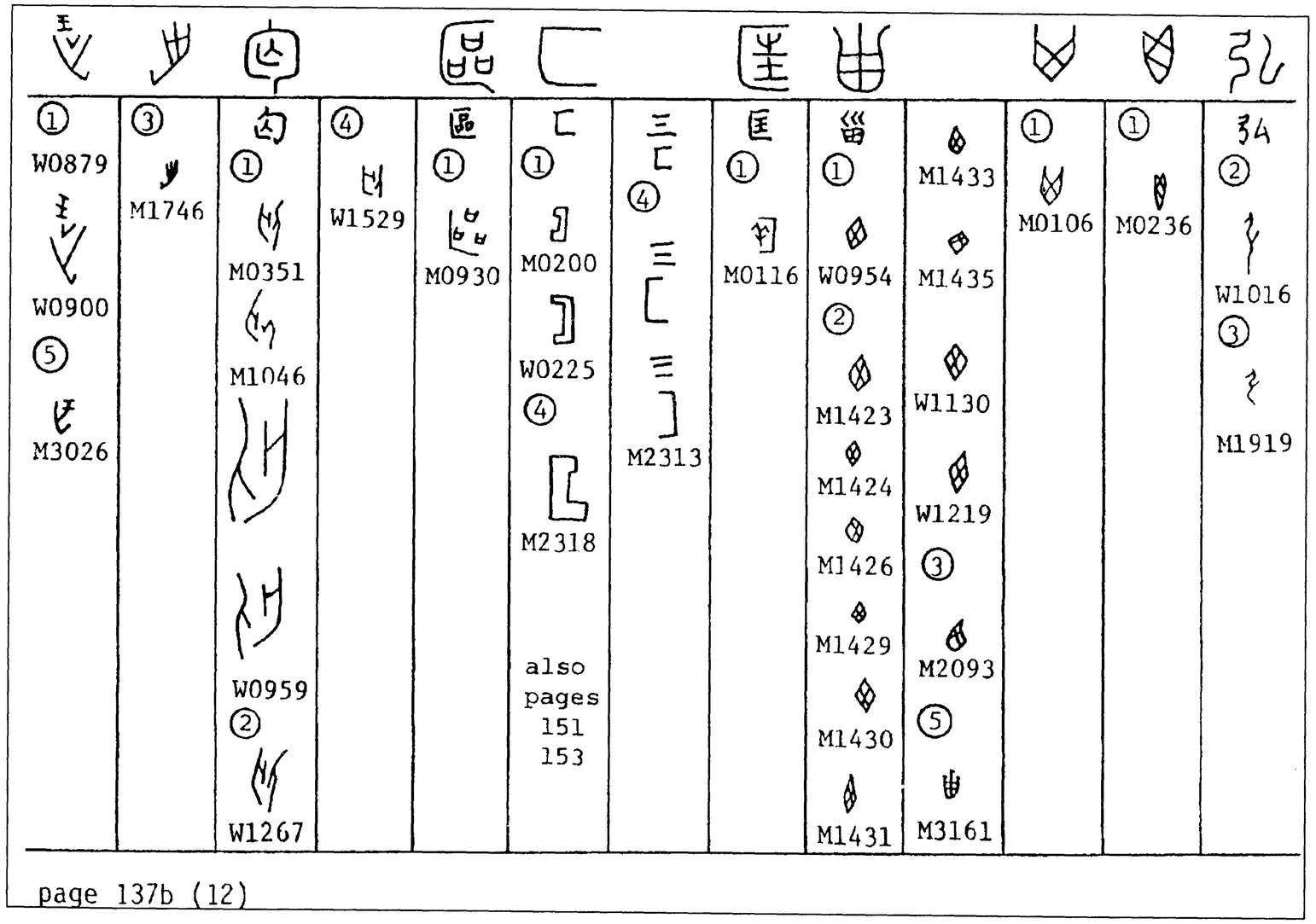
page 136b (12)



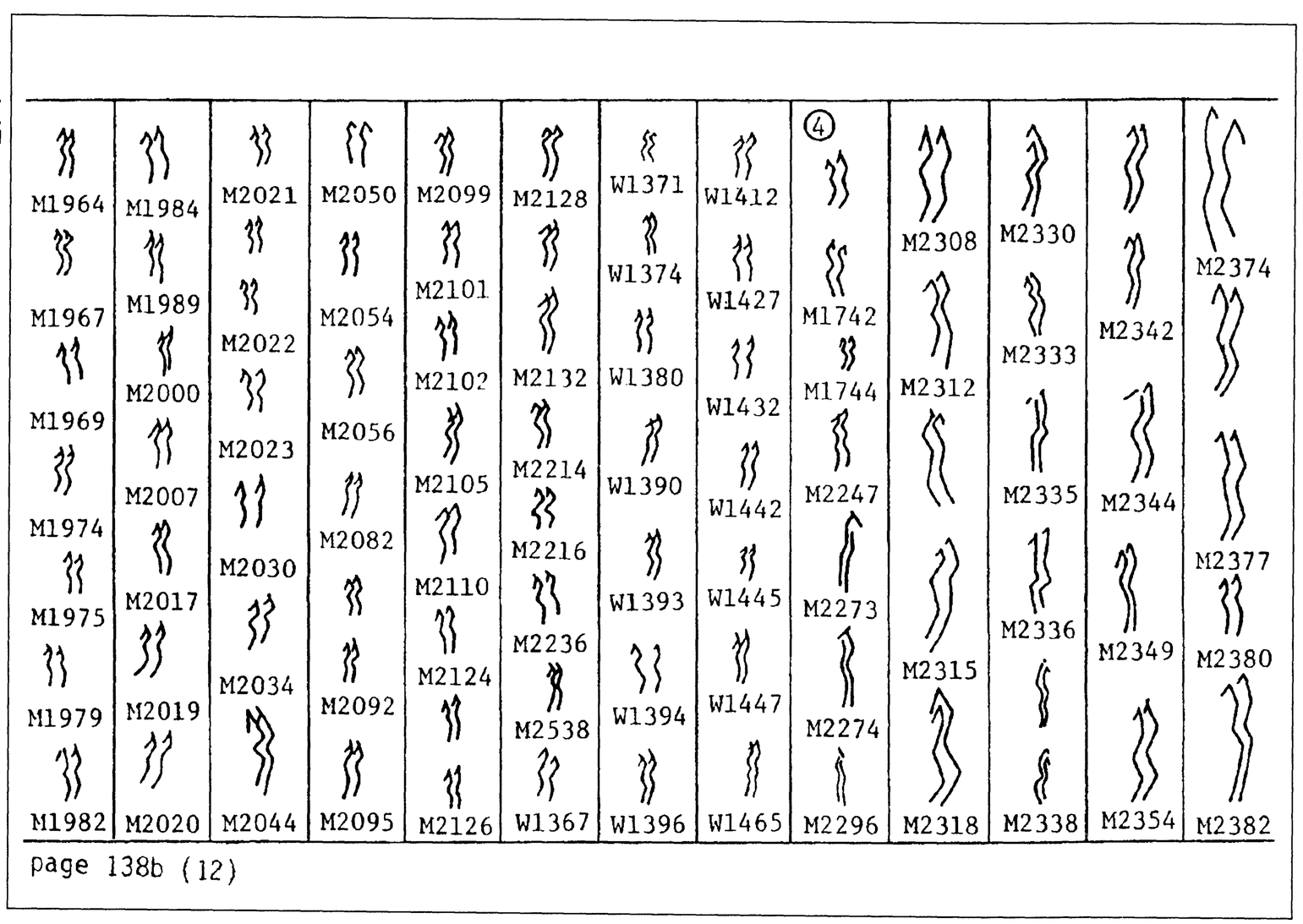
273



275



274



276

page 139a (12)

M2384 M2386 M2387 M2389 M2390 M2394 M2395 M2396 M2399 M2401 M2402 M2408 M2410 M2419 M2421 M2431 M2433 M2441 M2443 M2457 M2474 M2475 M2477 M2483 M2648 M2654 M2664 M2665 M2678 M2708 M2719 M2817 W1541 W1554 W1559 W1564 W1565 W1566 W1574 W1586 W1591 W1595 W1637 W1643 W1644 W1657 W1677 ⑤ W1901 also page 44

277

page 140a (13)

終 → 冬 page 120

絲 → 糸 page 129

④ M2290

④ M2432

① M0575

① M0070

率 ① W0145 W0830 ⑤ M3161 W1863

虫 ① M0946

① W0071

蚰 ① M0120 M0403

蠶 ① W0842 also page 02

蠱 ③ W1314 W1381 W1392

風 ① W0239

279

系 ① M1005 ④ M2687

孫 ① W0434

page 139b (12)

（原載《中国文字》新十期，一九八五年九月）

page 140b (13)

→ 鳳 page 51 凡 page 141

它 ① M0026 M0032 M0044 M0064 M0081 M0130

M0210 M0283 M0358 M1116

W0053 W0085 W0651 W0666 W0817 W0910

W0931 ② M1206 M1407 ④

M2333 M2446 M2452 M2455

M2465 M2467 M2496 M2770 M2800 W1605

W1610

黽 ① M0449 M1046 W0844 ④ M2710

龜 ① M0093 W0022 ④ W1571 W1600

今龜 ④ M2469

龜 ① W0475 also page 18

不韋龜 ① M0749 M0750 M0752 M1119 M1127

M1134 M1143 M1145 M1148 W0191 W0569

W0570 W0580 W0582 W0588 W0592 W0593 W0594

W0931 W0945 W0971 W0972 W0974 W0976 W0977

⑤ W1858

二 ① 二 M0273 二 W0560 二 W0821 ③ 二 M1784 ④ 二 M2360 二 M2392 = W1555

十二 ② 一 = M1565

also pages 02 12 14 27 31 39 46 49 50 51 85 87 95 96 96 98 99 109 110 113 146 158

亘 ① M0022 M0162 M0759 M0819 M1096 W0053 W0102

W0420 W0452 W0485 W0537 W0860 W0963 W0966

W0980 ④ M2417

凡 ① M0717 M0724 M0726 M0933 M1054 W0163

W0490 W0493 W0771 ③ M1828 M1969 M2012

W1352 ④ M2260 M2475 M2478 W1556 W1564

281

墉 外封 ① 封 W0445

東封 ④ M2723

墉 — 郭 page 72

簋 ④ W1648

堕 ③ M1972 W1460

蓄 ① M0371 W0184 W0185 W0921

also page 13

墓 艱 ② M1542 M1543 M1547 M1548 M1549 M1550 M1551

M1554 M1555 M1556 M1557 M1558 M1559 W1144

③ M2075

田 ① M0490 M0506 M0519 M0523 M1107 W0298 W0301 W0302

W0446 W0954 ② M1526 M1528 M1529 M1534 M1535 W1133 W1134

W1135 W1136 W1139 W1140 ③ M1814 M1828 M1853 M1867

283

虎 ② M1264 W1078

also page 117

土 ① M0554 M0878 M0893 M1070 W0001 ③ M1785

④ M2342 M2343 M2432 ⑤ M3159

南土 ① W0896

外？土 ④ M2331

内？土 ④ M2331

埽 ① M0170 M0561 W0043 W0453

W0468 W0640

小埽 ① M0685 M0782 W0053

W0394

在 — 才 page 76

封 ① M0669

282

M1873 M1878 M1882 M1884 M1885

M1887 M1888 M1889 M1890 M1891 M1900

M1902 M1903 M1904 M1905 M1906 M1907 M1908 M1909

M1910 M1911 M1939 M1940 M1942 M1943 M1944

M1945 M1946 M1947 M1948 M1949 M1950

M1951 M1953 M1954 M1955 M1956 M1957

M1958 M1959 M1960 M1961 M1963

M1964 M1965 M1966 M1967 M1968

M1969 M1970 M1971 M1972 M1973 M1974

M1975 M1976 M1977 M1978 M1979 M1980

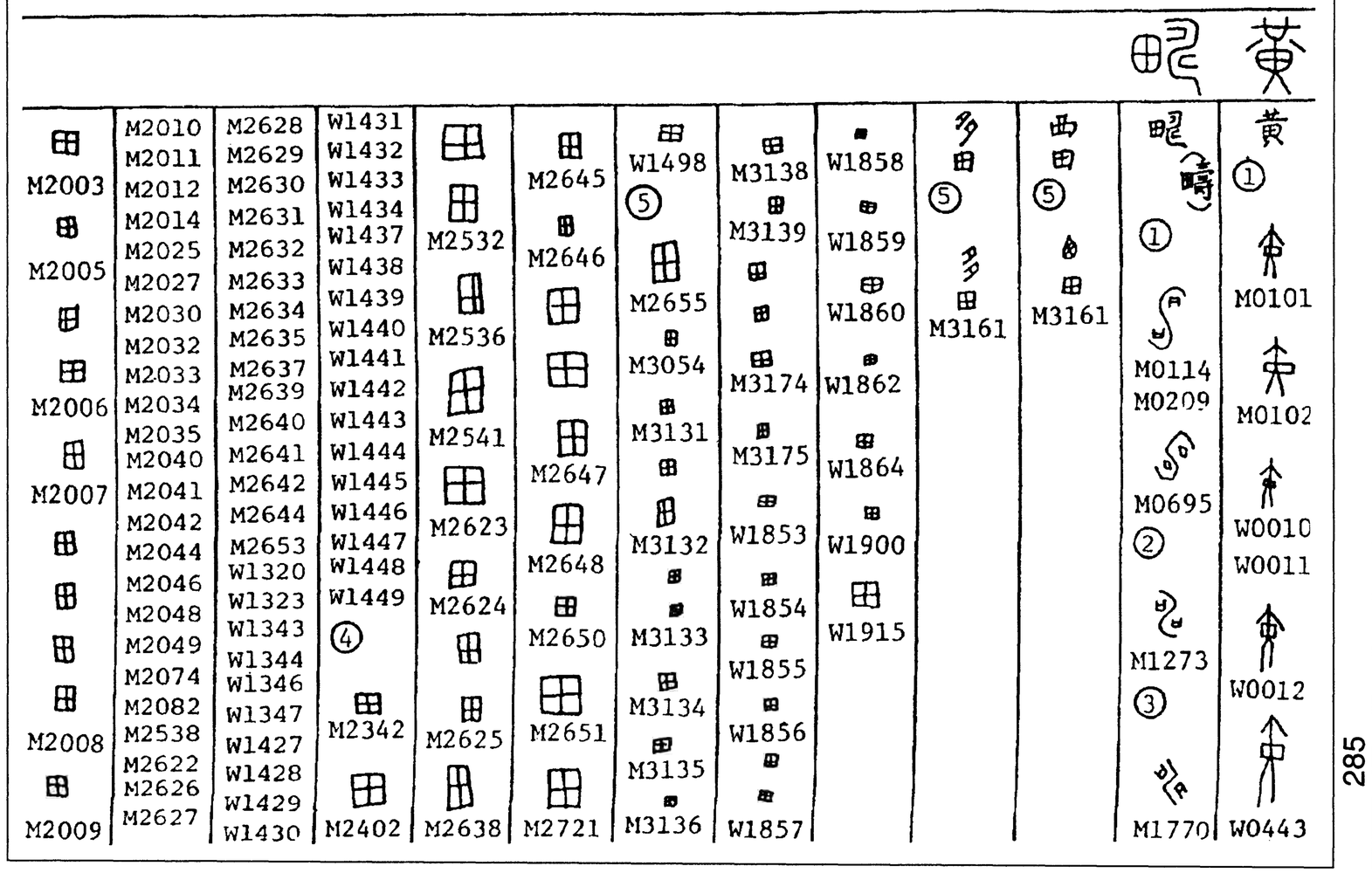
M1981 M1982 M1984 M1985 M1986

M1987 M1988 M1989 M1990 M1991 M1992 M1993 M1994

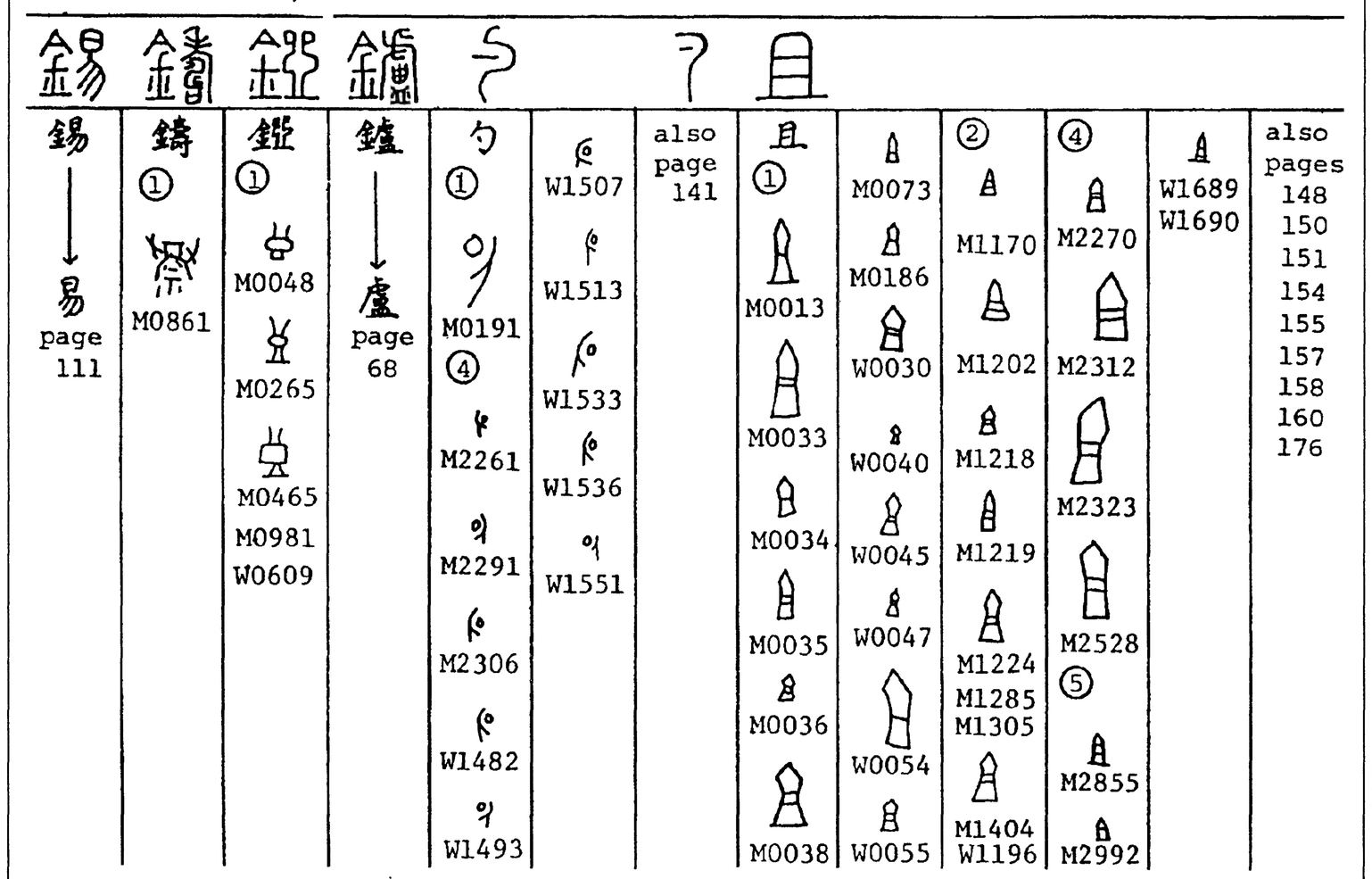
M1995 M1996 M1997 M1998 M1999 M2001

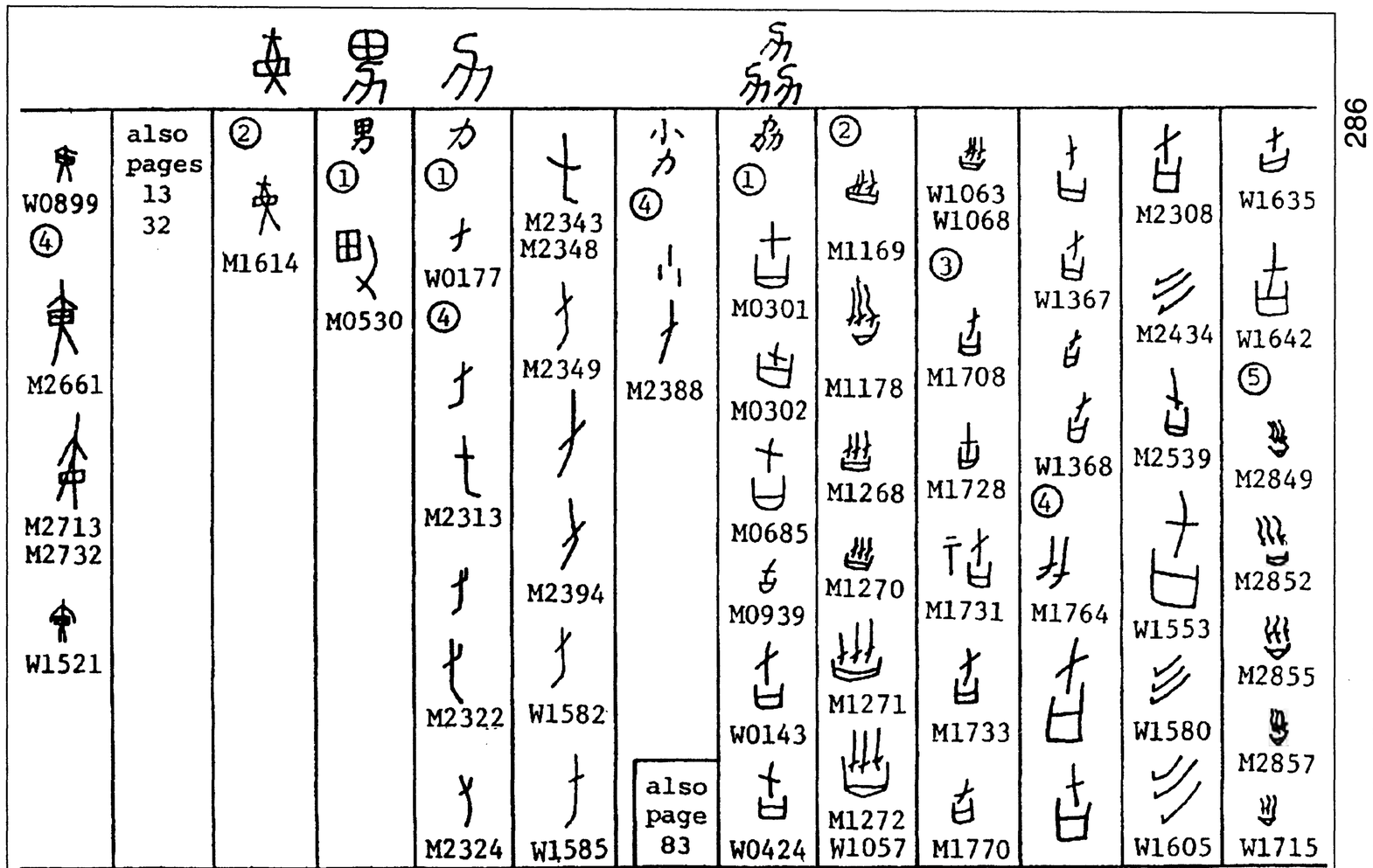
284

page 143a (13)

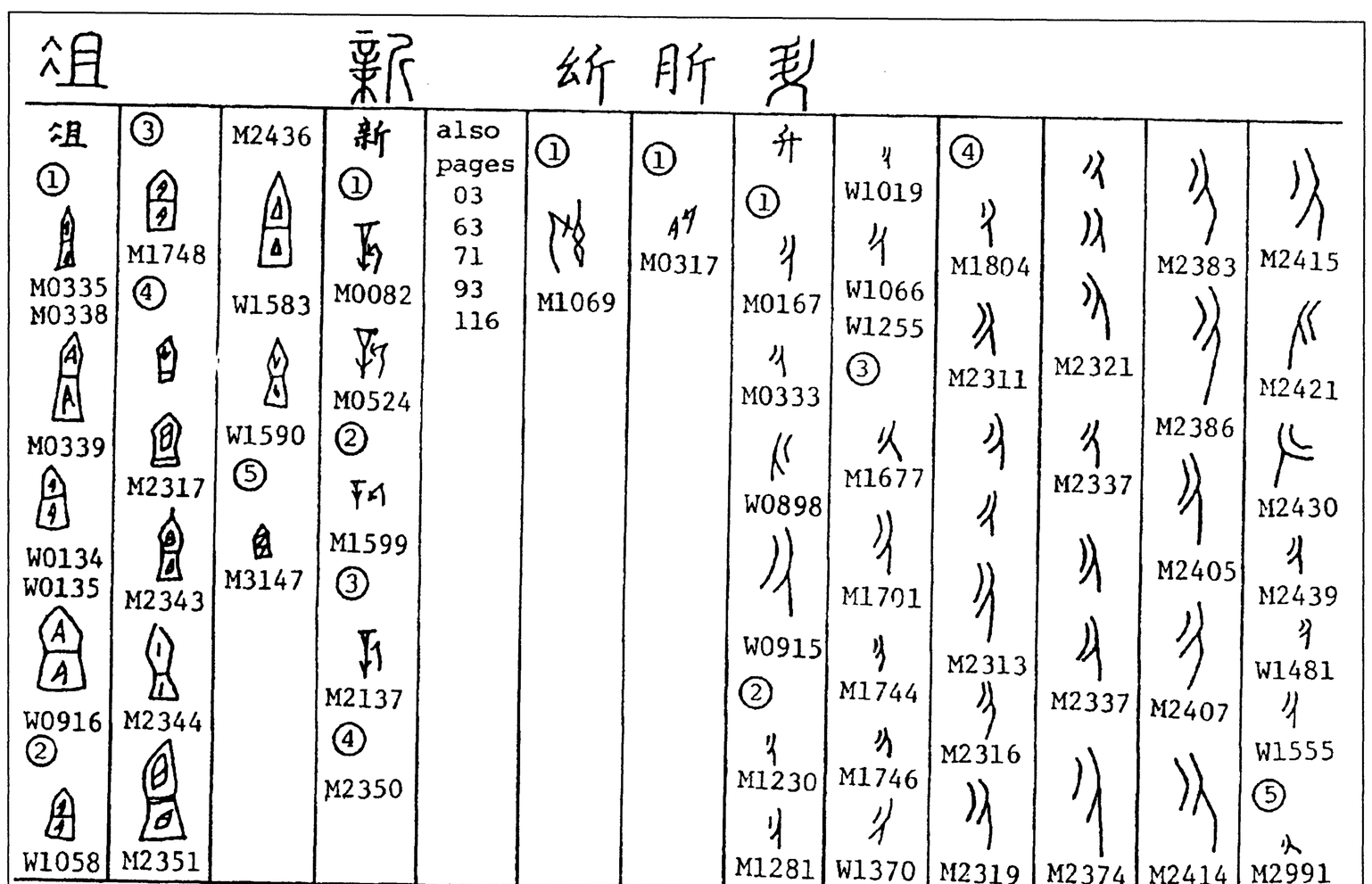


page 144a (14)

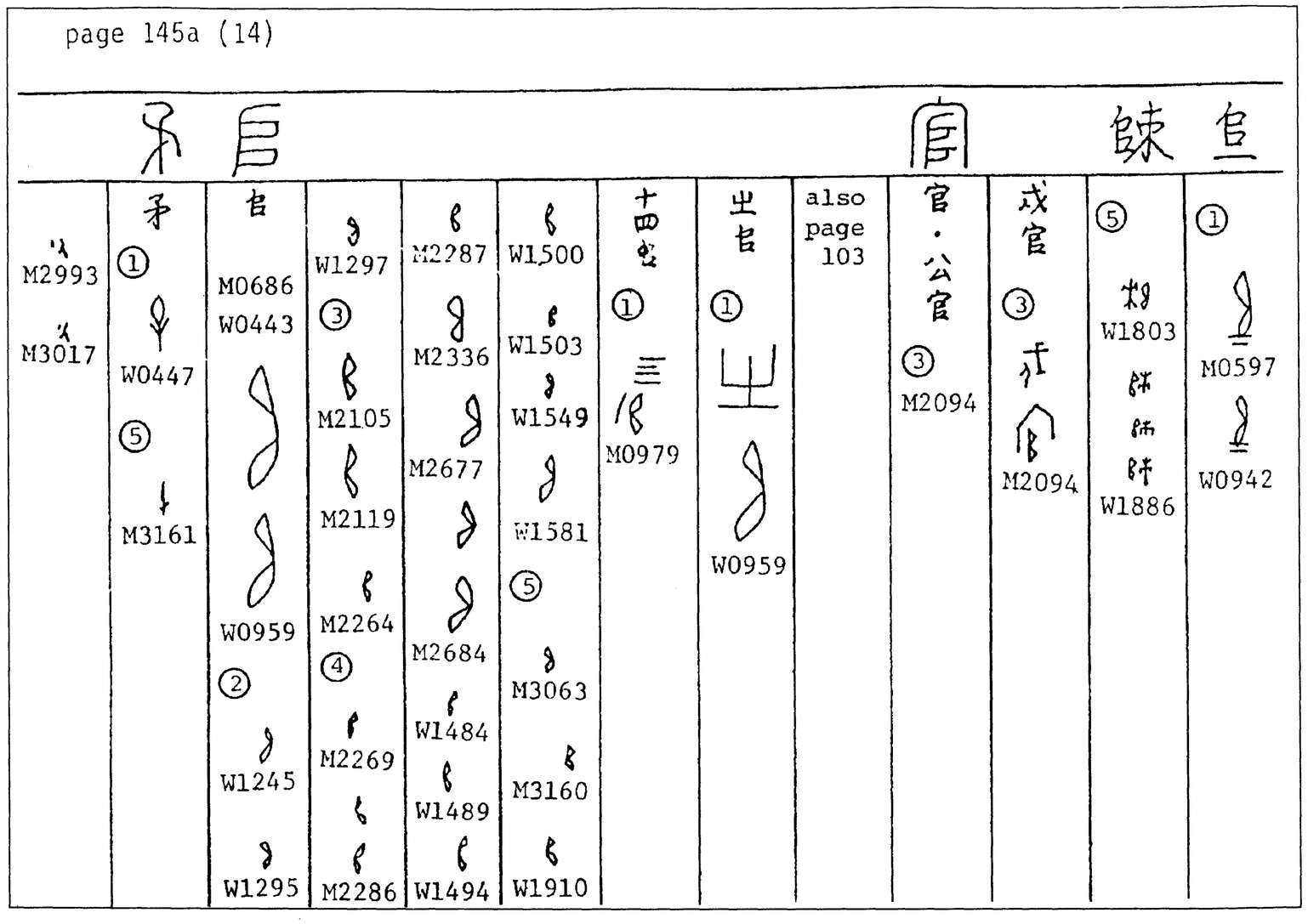


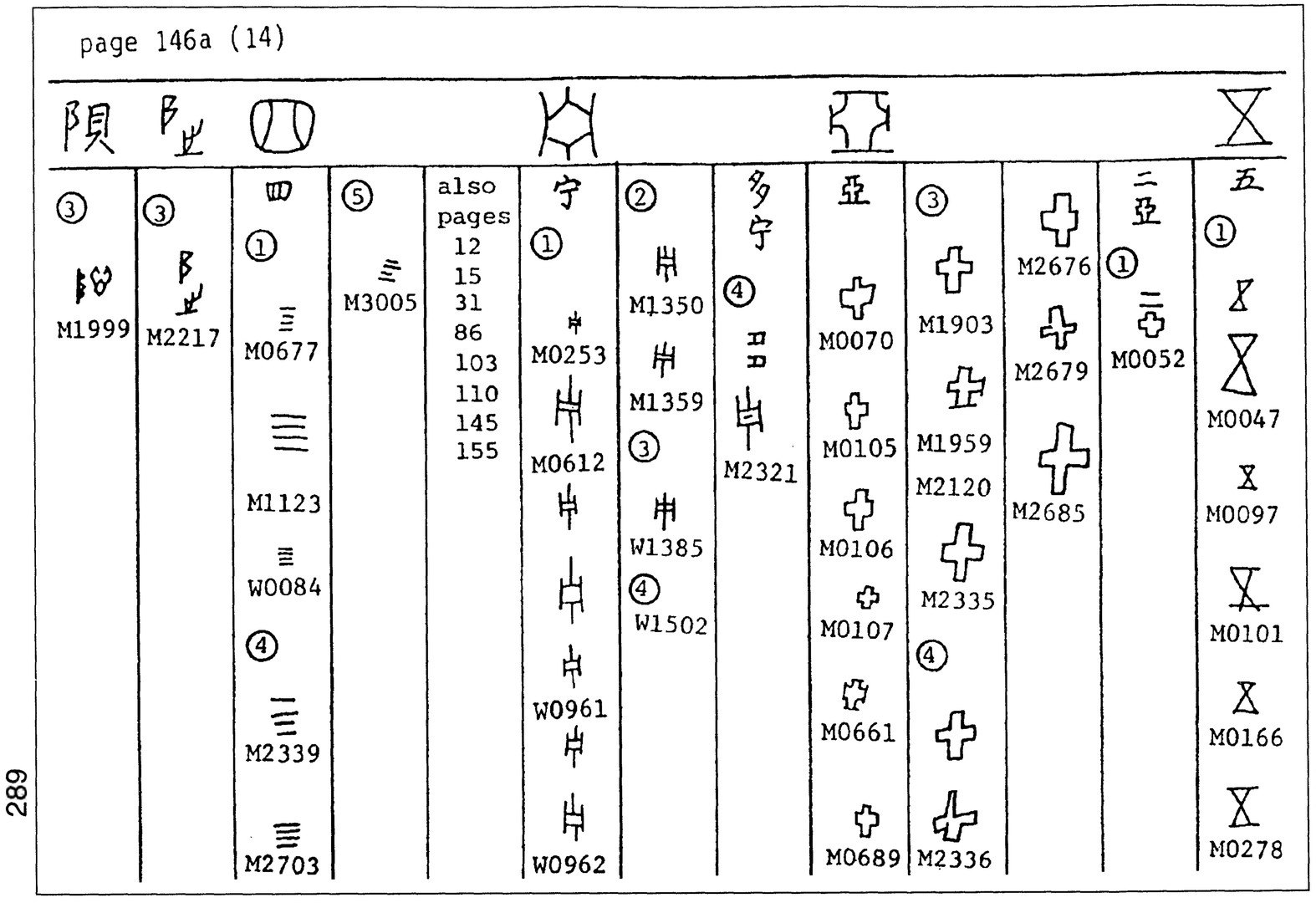


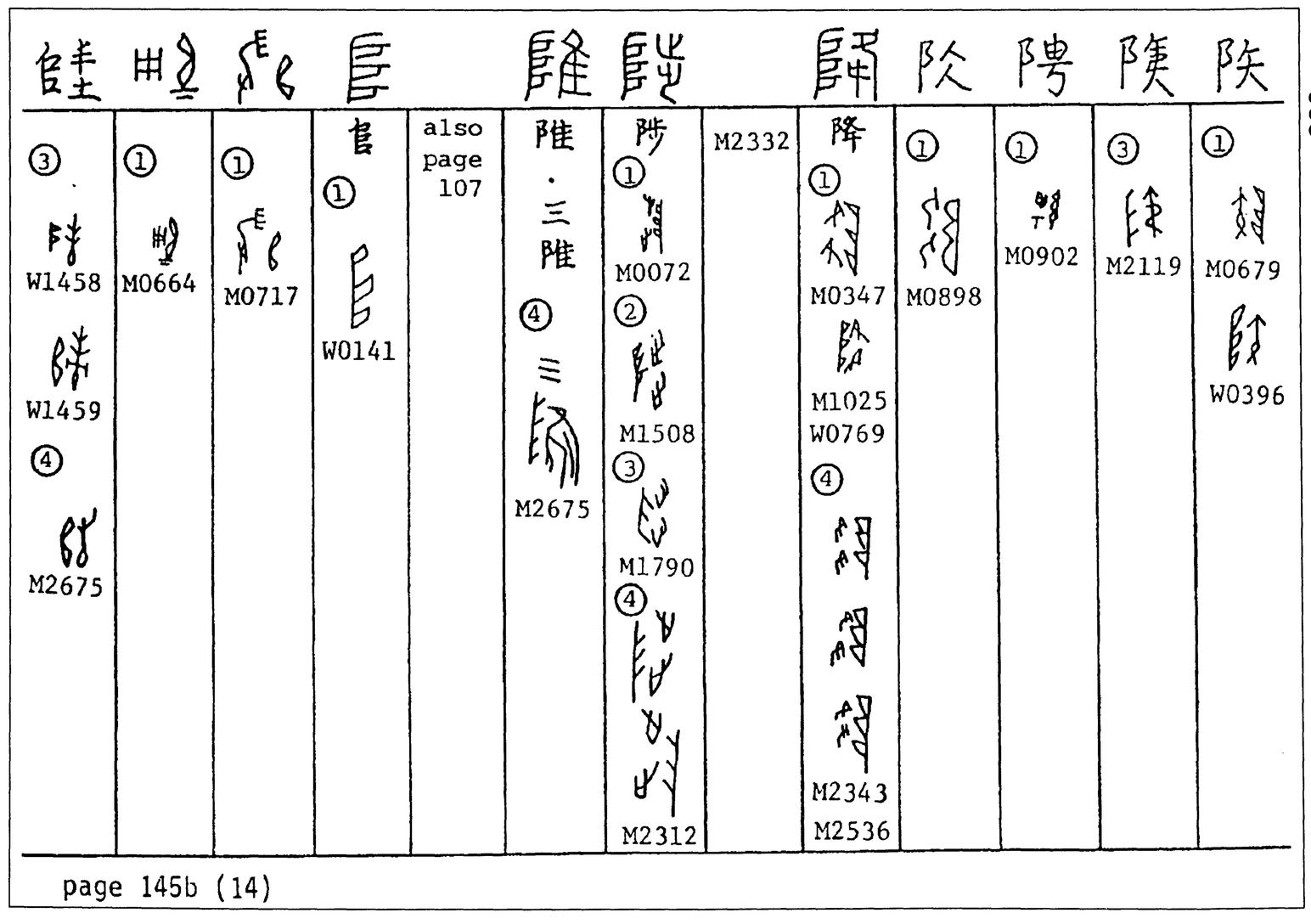
page 143b (13)

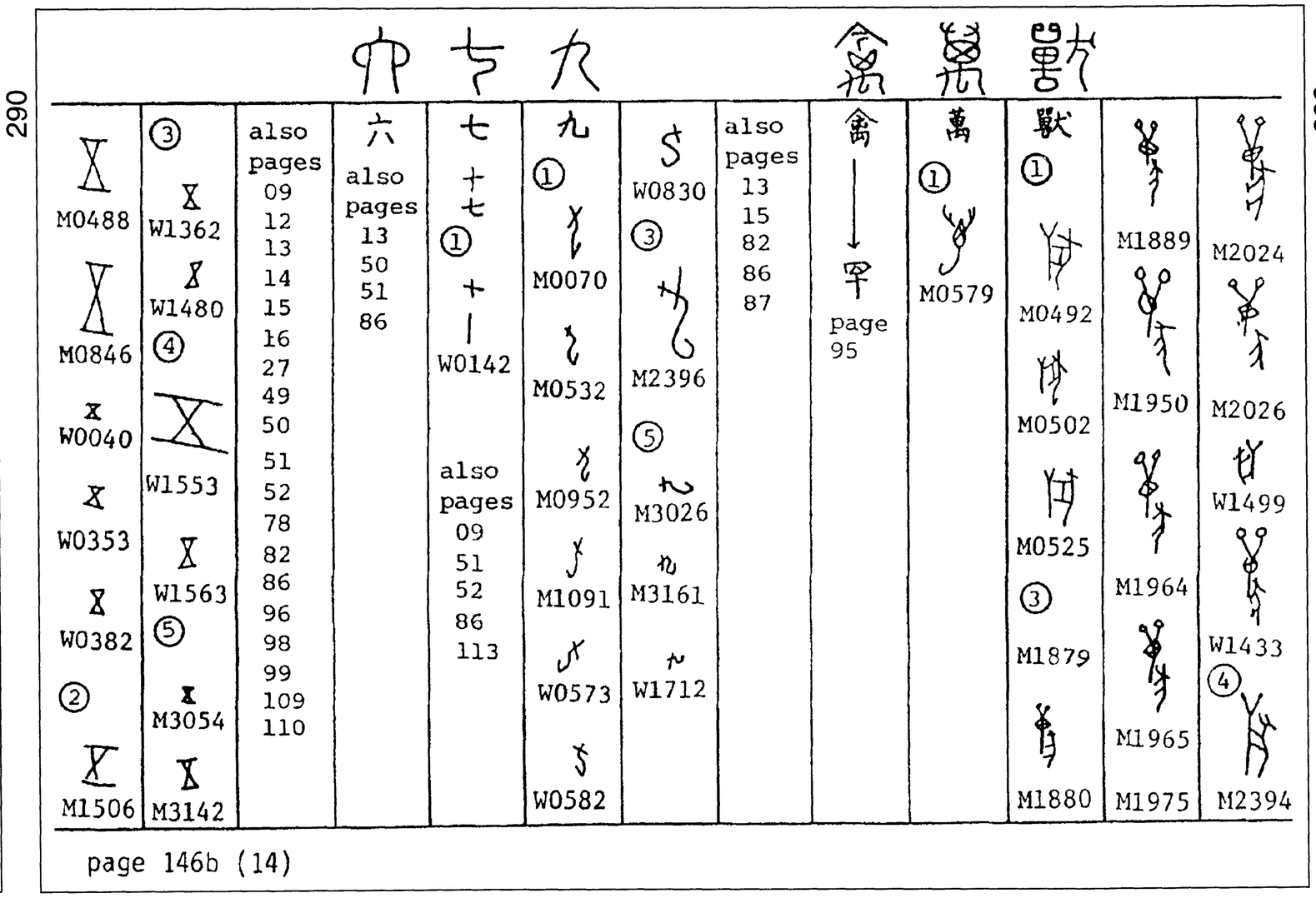


page 144b (14)


M2993
M3017
W0447
M3161
M0686
W0443
W0959
W1245
W1295
W1297
M2105
M2119
M2264
M2269
M2286
M2287
M2336
M2677
M2684
W1484
W1489
W1494
W1500
W1503
W1549
W1581
M3063
M3160
W1910
M0979
W0959
also page 103
M2094
M2094
W1803
W0942
M0597


M1999
M2217
M0677
M1123
W0084
M2339
M2703
M3005
also pages 12 15 31 86 103 110 145 155
M0253
M0612
W0961
W0962
M1350
M1359
W1385
W1502
M2321
M0070
M0105
M0106
M0107
M0661
M0689
M1903
M1959
M2120
M2335
M2336
M2676
M2679
M2685
M0052
M0047
M0097
M0101
M0166
M0278


W1458
W1459
M2675
M0664
M0717
W0141
also page 107
M2675
M0072
M1508
M1790
M2312
M2332
M0347
M1025
W0769
M2343
M2536
M0898
M0902
M2119
M0679
W0396


M0488
M0846
W0040
W0353
W0382
M1506
W1362
W1480
W1553
W1563
M3054
M3142
also pages 09 12 13 14 15 16 27 49 50 51 52 78 82 86 96 98 99 109 110
六 also pages 13 50 51 86
also pages 09 51 52 86 113
W0142
M0070
M0532
M0952
M1091
W0573
W0582
W0830
M2396
M3026
M3161
W1712
also pages 13 15 82 86 87
page 95
M0579
M0492
M0502
M0525
M1879
M1880
M1889
M1950
M1964
M1965
M1975
M2024
M2026
W1499
W1433
M2394

page 147a (14)

中

M2652

M2658

甲
① M0074 M0128 M0157 M0251 M0364 M0421 M0467 M0535

M0692 M0765 M0928 M0958 M1112 M1117 M1362 W0024

W0032 W0037 W0047 W0050 W0078 W0080 W0104 W0152 W0246

W0279 W0290 W0342 W0434 W0452 W0480 W0491 W0660

W0682 W0695 W0704 W0778 W0809 W0878 W090C W0922

W0996 W1001 ② M1169 M1203 M1204 M1274 M1305 M1487

M1567 M1569 M1592 M1621 M1625 M1650 M1652 W1034 W1047

W1049 W1062 W1162 W1163 W1176 W1182 W1184 W1194

W1205 W1215 W1220 W1247 W1255 W1268 W1279 W1291

③ M1658 M1697 M1702 M1719 M1803 M1825 M1880

M1938 M1956 M1964 M2034 M2042 M2070 M2081 M2231

M2234 W1316 W1365 W1368 W1414 W1444 ④ M0059

293

page 148a (14)

M3168 W1687 W1695 W1696 W1699 W1803 W1805 W1817

W1822 W1846 W1859

父甲
① W0057 ② M1232 ③ M1676

M1677 M1807 M1371 W1373 W1376

祖甲
① M0012 ⑤ M2858 M2882 M2883 M2886 M2889

M2890 M2896 M2909 M3008 M3056 W1693

妣甲
① M0062 W0072 ④ M2325 ⑤ M2857

上甲
① M0001 M0002 M0003 M0004 M0005 W0024

W0030 W0031 W0032 W0033 W0034 W0901 ② M1169

M1170 M1171 M1172 M1173 M1174 M1175

④ M1804 M2310 M2313 M2318 M2321 M2383 W1555

⑤ M2836 W1861

大甲
① M0011 M0621 W0904 W0905

295

page 147b (14)

M1114 M1670 M2241 M2275 M2308 M2321 M2327

M2331 M2341 M2349 M2350 M2353 M2355 M2360 M2362

M2381 M2402 M2406 M2410 M2412 M2416 M2421

M2423 M2429 M2437 M2452 M2462 M2476 M2478 M2479

M2496 M2501 M2508 M2511 M2519 M2522

M2528 M2530 M2539 M2540 M2543 M2612 M2613

M2616 M2658 M2674 M2676 M2687 M2688 M2726 M2740

M2751 M2754 M2775 M2790 M2793 M2797 W1535 W1554

W1563 W1575 W1584 W1588 W1605 W1611 W1629 W1637

W1638 W1640 W1652 W1656 W1668 ⑤ M2857 M2862

M2871 M2878 M2881 M2882 M2883 M2884 M2889 M2891

M2893 M2896 M2903 M2908 M2911 M2993 M3013 M3027 M3053 M3056

M3064 M3090 M3095 M3099 M3102 M3106 M3161 M3166

294

page 148b (14)

② M1191 W1012 ④ M2321 M2748

W1486 W1601 ⑤ M2858 M3002 W1683 W1805

W1914

小甲
① W0038

㚔甲
② M1344 W1247 ⑤ M3053

羌甲
① M0012 M0765 W0043 W0900 W0903

② M1198 M1199 ③ M1672

㚔甲
② M1196 M1200 ④ M1674 W1483

W1522 ⑤ M3013 M3053 M3055

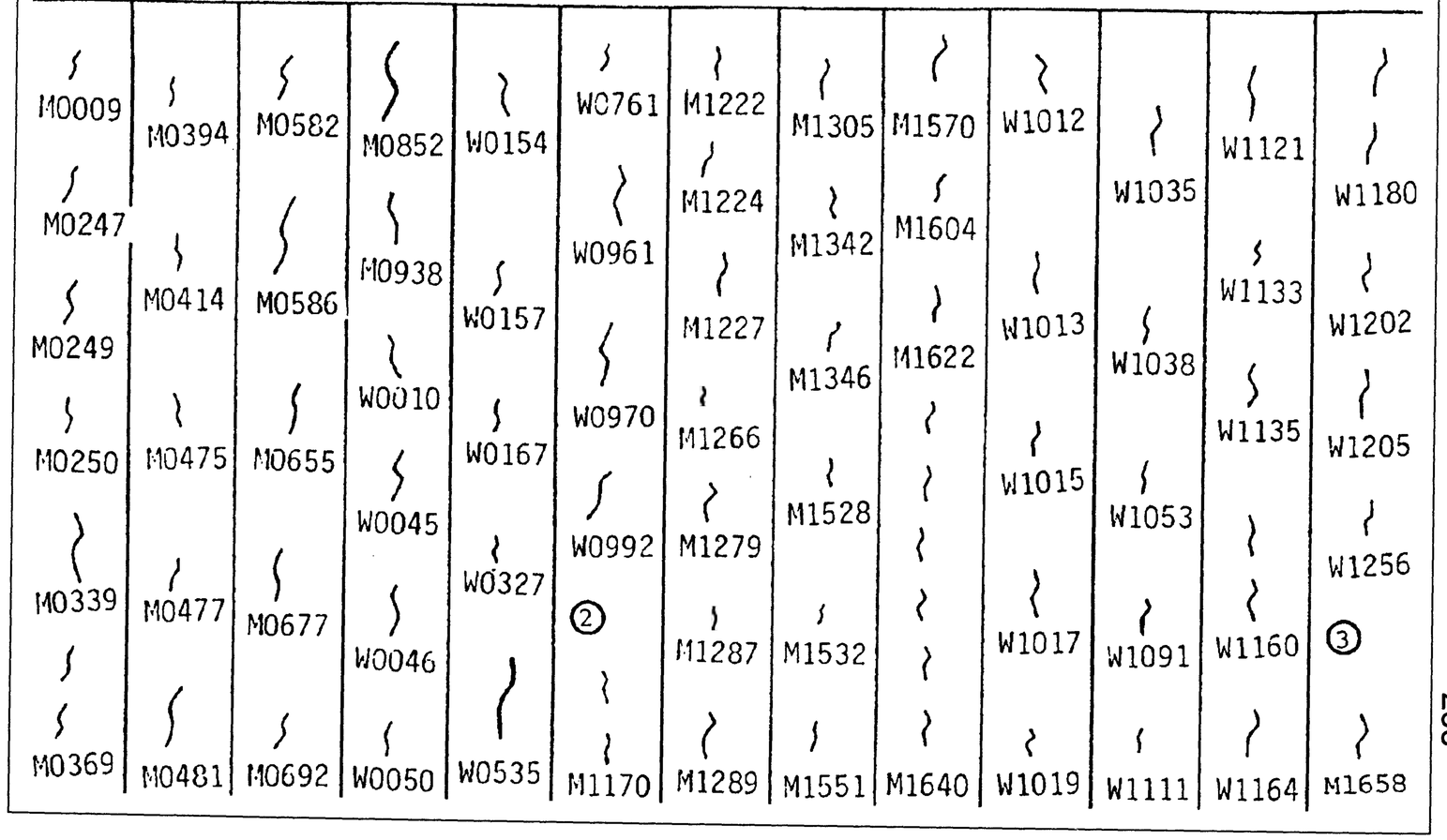
龍甲
① W0035

同甲
① W0036

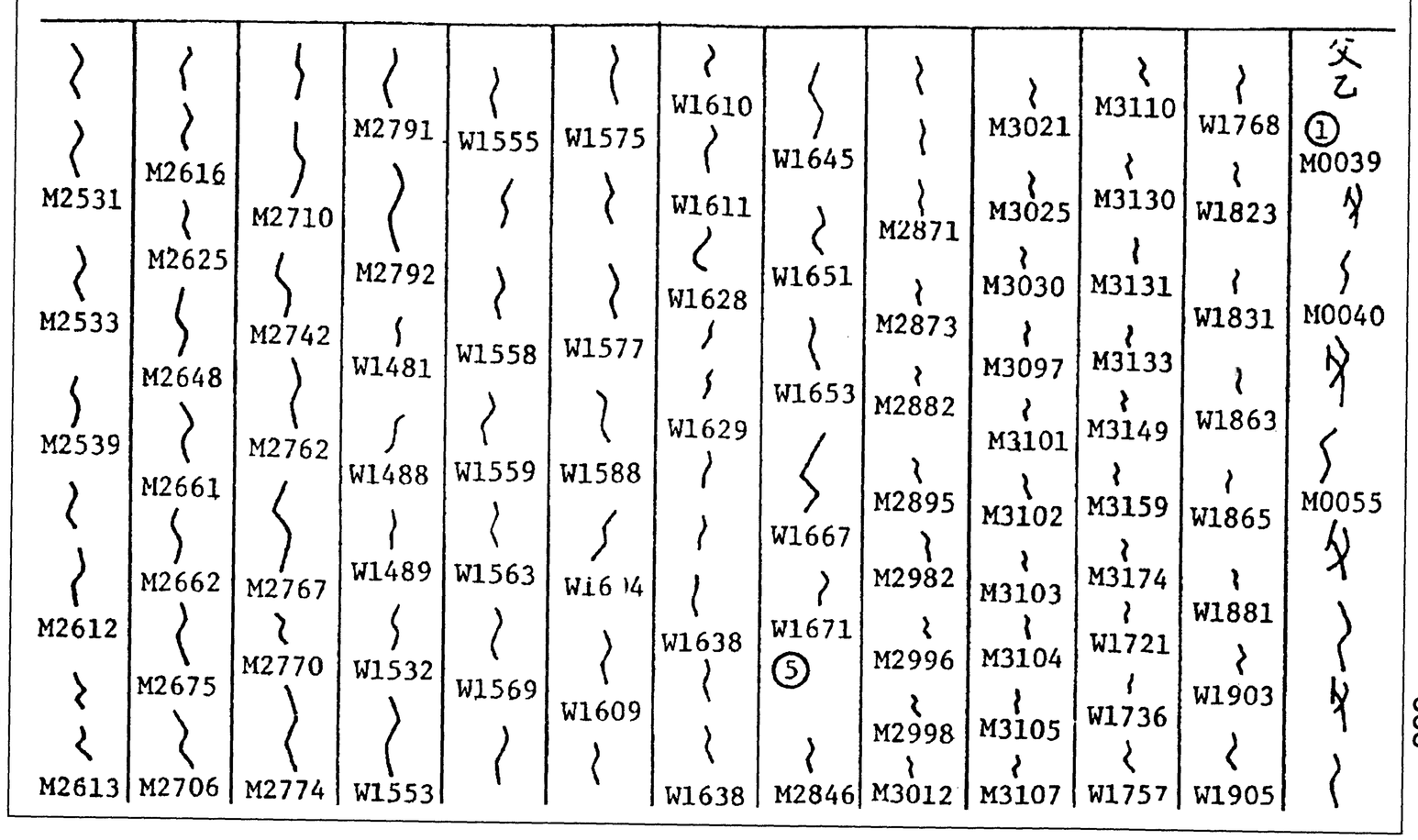
乙
① M0042 M0067 M0086 M0128 M0133

M0145 M0157 M0188 M0189 M0202 M0204 M0206 M0241

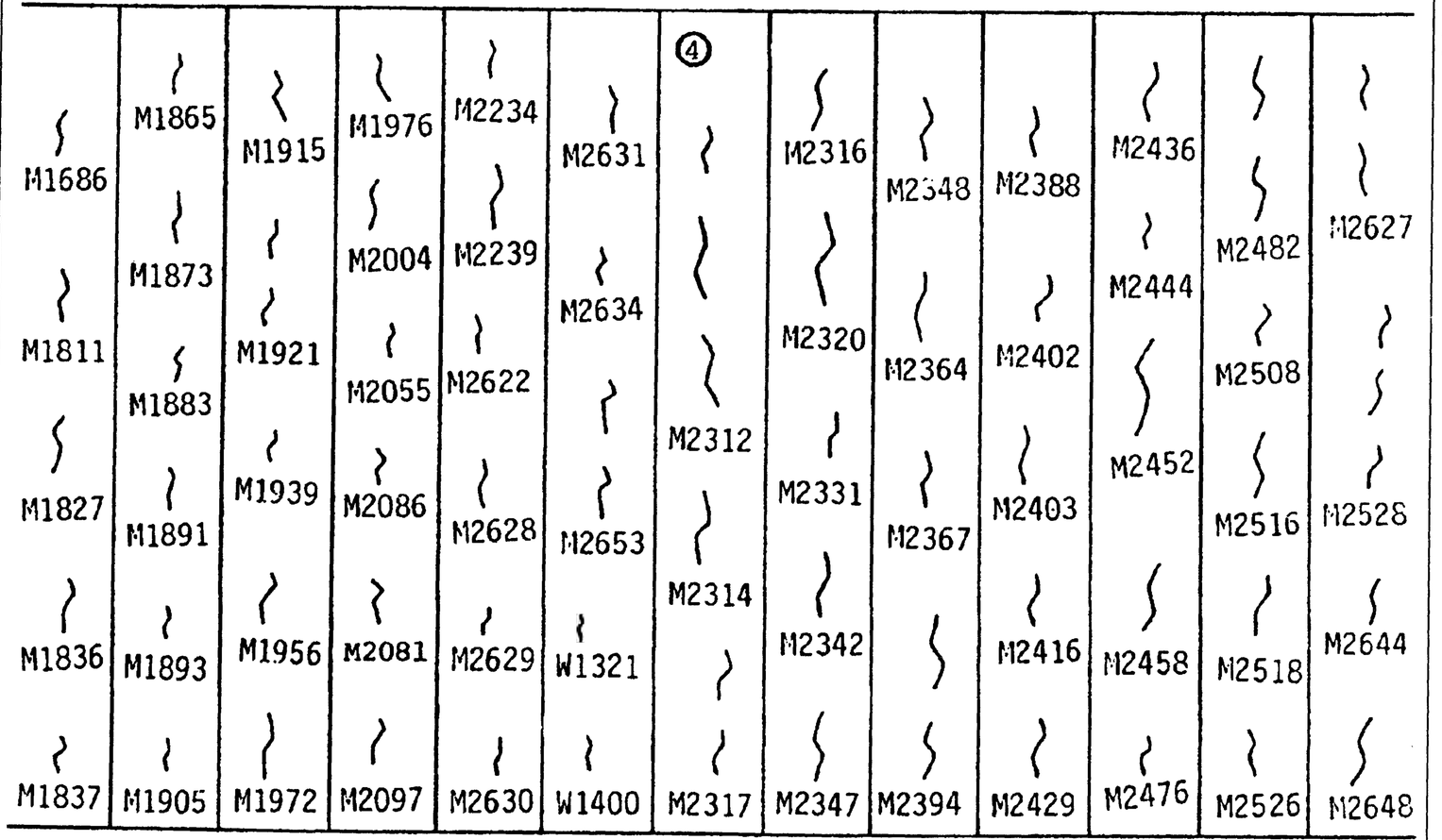
296



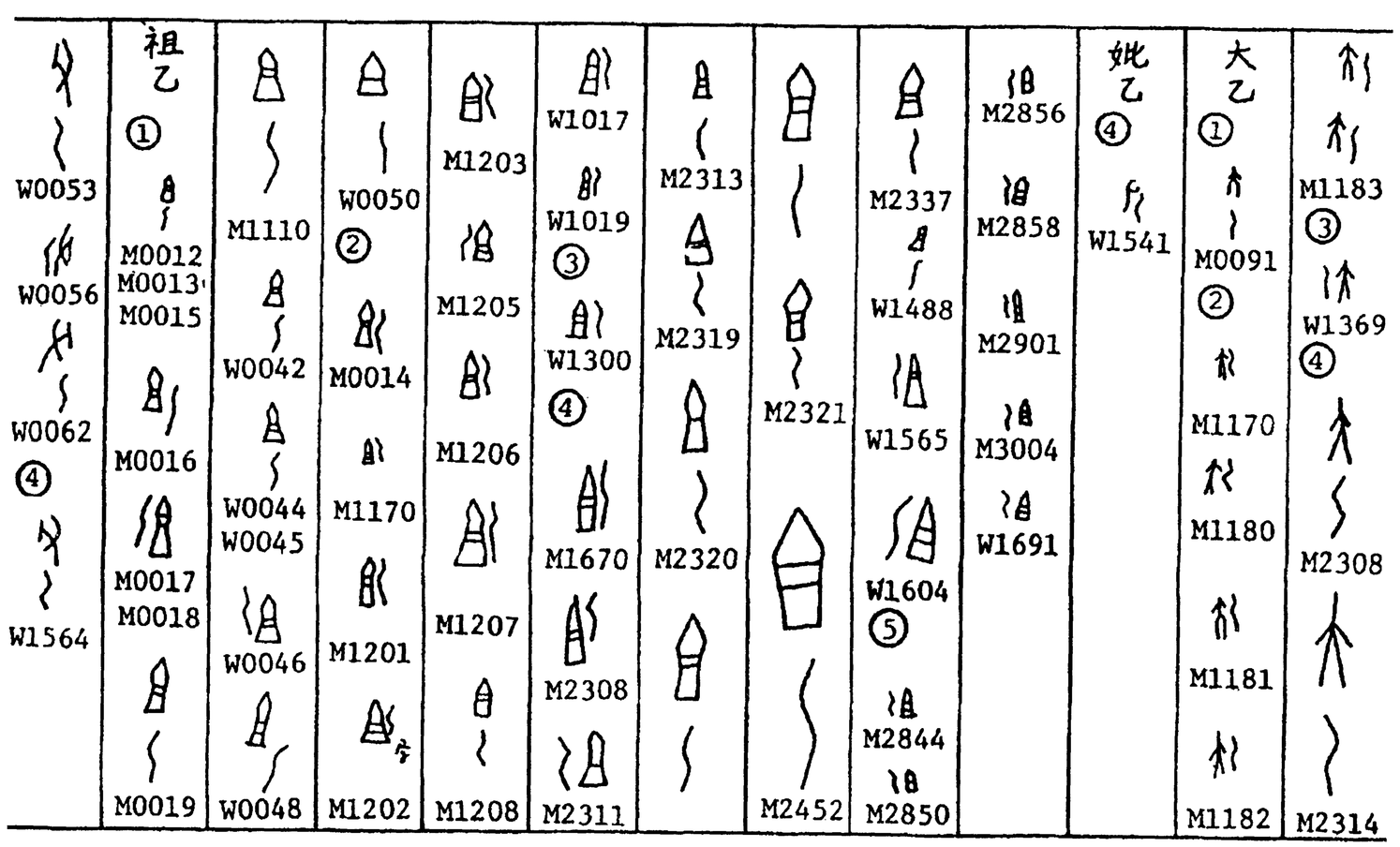
297



299



298



300

page 151a (14)

M2316	M2755	W1559	乙 ② M1176 ③ W1298	高祖乙 ④ M1673	義祖乙 ③ M2113	毓祖乙 ② W1015	小乙 ② M1222 M1622 W1013 W1018 ④ M2308	M2316 M2452 W1554 W1556 ⑤ M2858 M2862	M2864 M3001 M3012	武祖乙 ⑤ W1694 W1700	武乙 ⑤ M2881 M2882 M2883 M2884 M2885	M2889 M2891 M2893 M2896 M2908 M2993 M2996
M2317	W1481	W1605										
M2321												
M2452												
M2496	W1558											

page 152a (14)

丙												
丙 ① M0022 M0066 M0076 M0137 M0140 M0169	W1237 W1241 W1248 W1253 W1255 W1258	W1259 W1277 ③ M1648 ⑤ M2833 M2834 M2836	M2838 M2841 M2843 M2844 M2845 M2846 M2847	M2848 M2851 M2854 M2855 M2857 M2858 M2859	M2860 M2861 M2863 M2864 M2865 M2868 M2870 M2872	M2873 M2874 M2877 M2878 M2880 M2978 M2981 M2983	M2984 M2985 M2987 M2993 M2998 M3000 M3001 M3003	M3008 M3011 M3016 M3018 M3019 M3026 M3027	M3037 W1682 W1683 W1684 W1689 W1691 W1706 W1717	W1720 W1726 W1727 W1728 W1731 W1733 W1734 W1738	W1739 W1740 W1742 W1743 W1746 W1749 W1753 W1755	W1758 W1761 W1762 W1765

下乙 ① W0023 W0902	④ W1636	also page 59	尤 ① M0361 M0619 M1006 W0837 ② M1178	M1179 M1181 M1182 M1184 M1191 M1194 M1196	M1198 M1200 M1204 M1212 M1213 M1217 M1220	M1223 M1225 M1230 M1233 M1237 M1244 M1247	M1248 M1249 M1251 M1264 M1267 M1284 M1287 M1290	M1291 M1296 M1314 M1320 M1321 M1342 M1343	M1346 M1347 M1348 M1358 M1405 M1406 M1536	M1623 M1624 M1627 M1629 W1010 W1013	W1017 W1019 W1023 W1027 W1029 W1054	W1060 W1065 W1068 W1070 W1120 W1217 W1220

page 151b (14)

（原載《中國文字》新十一期，一九八六年六月）

page 152b (14)

M0314 M0393 M0396 M0461 M0480 M0481 M0545 M0560	M0622 M1164 M1165 M1561 W0022 W0037 W0044 W0173	W0331 W0383 W0392 W0461 W0671 W0679 W0733	W0747 W0922 W0961 W0962 ② M1184 M1212 M1237	M1256 M1424 M1426 M1433 M1514 M1519 M1537 M1586 M1604	M1618 W1029 W1060 W1099 W1172 W1176 W1186 W1189	W1215 W1226 W1265 W1267 W1268 W1274 W1276	③ M1714 M1720 M1769 M1836 M1932 M2230 W1318	W1366 W1461 ④ M0810 M1742 M2321	M2322 M2329 M2333 M2336	M2337 M2344 M2346 M2347 M2349 M2350 M2368	M2380 M2389 M2404 M2444 M2472 M2474 M2501	M2521 M2522 M2613 M2616 M2624 M2658

辛丙

M2670 M2701 M2711 M2718 M2719 M2728 M2757

M2768 M2777 M2789 W1484 W1504 W1517 W1528

W1565 W1620 W1629 W1632 W1636 W1648

W1664 ⑤ M2861 M2867 M2869 M2883 M2887 M2888

M2892 M2896 M2896 M2897 M2899 M2900 M2904 M2905

M2906 M2907 M2911 M2992 M3098 M3099 M3100 M3111 M3129

M3139 M3156 M3165 W1697 W1702 W1724 W1745 W1816 W1833

W1882

父丙 ② M1231

妣丙 ① W0071

匚丙 ② M1177

外丙 ② M1184 M1185 ⑤ M2979 M3011

① M0594 M0615 M0634 W0119

M1623 M1625 M1635 W1010 W1016 W1059 W1067 W1095

W1111 W1115 W1135 W1139 W1151 W1197 W1244 W1267

W1268 W1292 ③ M1668 M1693 M1727 M1753 M1780 M1781

M1792 M1803 M1841 M1847 M1889 M1904 M1912 M1923 M1932

M1974 M1978 M1992 M1998 M2007 M2067 M2069 M2170 M2230 W1366 W1369

W1387 W1394 W1399 W1419 W1454 W1461 W1474 W1478 W1479 ④ M0063

M2051 M2271 M2278 M2285 M2304 M2321 M2322 M2328 M2329 M2337

M2344 M2346 M2347 M2349 M2350 M2364 M2368 M2388

M2393 M2397 M2402 M2404 M2408 M2409 M2416 M2425 M2429 M2437

M2447 M2457 M2462 M2472 M2485 M2510 M2512 M2522 M2527 M2532 M2535

M2540 M2616 M2620 M2677 M2680 M2712 M2723 M2741 M2744 M2761 M2767

M2769 M2773 M2778 M2792 W1542 W1558 W1559 W1576 W1577

W1579 W1580 W1588 W1592 W1625 W1626 W1632 W1637

also page 164 ⑤ M3159

also page 97

① M0649 M0746 M0881 ④ W1650

丁 ① M0034 M0064 M0068 M0069 M0087 M0102 M0133 M0336 M0388

M0415 M0418 M0449 M0461 M0481 M0500 M0510 M0518 M0528 M0539 M0566

M0626 M0678 M0689 M0795 M0826 M0858 M0907 M0938 M0978 M1017

M1108 W0043 W0053 W0072 W0088 W0101 W0107 W0120 W0156

W0172 W0187 W0201 W0251 W0282 W0295 W0338 W0365 W0372 W0385 W0448

W0472 W0494 W0507 W0520 W0634 W0652 W0664 W0685 W0689 W0694

W0761 W0861 W0862 W0887 W0899 W0956 W0964 W0978

W0990 W1006 W1053 ② M1170 M1188 M1210 M1214 M1223 M1230

M1255 M1260 M1269 M1309 M1352 M1381 M1480 M1512 M1520 M1522 M1526

W1650 W1659 W1675 ⑤ M2838 M2857 M2871 M2878 M2882 M2888 M2926

M3026 M3031 M3093 M3098 M3114 M3118 M3139 M3151 M3157 M3160 M3165

W1708 W1709 W1713 W1718 W1720 W1722 W1726 W1730 W1768 W1792 W1843 W1858

W1870 W1872 W1880 W1882 W1913

also page 164

父丁 ② M1223 M1225 M1226 M1227 M1228 M1229 M1230

W1016 W1017 W1020 ③ W1372 ④ M2321

M2322 M2326 M2327 M2328 M2329

M2350 W1560 M2452 W1559 W1562 W1563

祖丁 ① M0027 M0028 M0029 M0030 M0031 M0192 M0255

W0049 W0052 ② MJ209 M1210 M1212 M1213

W1014 ③ W1366 W1367 ④ W1484 W1487 W1557

W1559 ⑤ M2881 M2882 W1687 W1688 W1689 W1703 W1907

兄丁 ① W0910 ④ M0065

page 155a (14)

戊

M2260 M2261 M2264 W1564

大丁 ① M0010 ② M1186 M1187 M1188 W1010

④ W1559 ⑤ M2863

中丁 ② W1011 ④ M2315 ⑤ M2854 M2861

四祖丁 ⑤ M2857 M3000 W1685

鐃祖丁 ② M1625 ③ W1368

武丁 ⑤ M2838 M2850 M2883 M2888 M2887 M2892 M2894

M2896 M2897 M2898 M2900 M2904 M3010 W1697 W1698

康祖丁 ⑤ M2857 M2860 M2902 M2905

M2911

文武丁 ⑤ M2906 W1702

戊 ① M0049 M0062 M0103 M0161 M0219 M0226 M0276

M0289 M0298 M0461 M0486 M0501 M0502 M0759

page 156a (14)

戚

M2475 M2503 M2535 M2647 M2650 M2663

M2667 M2681 M2703 M2713 M2725 M2784 W1496

W1504 W1559 W1576 W1581 W1588

W1606 W1654 ⑤ M2851 M2858 M2874 M2988 M2992 M3008

M3038 M3092 M3093 M3109 M3116 M3121 M3136 M3152 M3174

W1818 W1824 W1867 W1880 W1881 W1904 W1909 W1913

兄戊 ① W0068 W0069

母戊 ③ M1675 M1679 ④ M2326

妣戊 ⑤ M2858 M2865 M3008

大戊 ② M1624 ④ M2535 ⑤ M2832 M2843

M2851 M2854 M3007

臣戊 ① W0013

成 ① M0108 M0113 W0017 ④ M2111

M0853 M0870 M0936 M0959 M0978 W0018 W0023

W0074 W0130 W0159 W0204 W0206 W0235 W0284 W0307

W0383 W0391 W0393 W0413 W0544 W0686 W0803

W0819 W0834 W0845 W0902 W0925 W0963 W1003

W1006 ② M1255 M1430 M1539 M1568

M1590 M1624 M1641 M1643 W1011 W1016 W1136

W1203 W1212 W1252 W1262 W1277 ③ M1714 M1755

M1812 M1832 M1859 M1862 M1867 M1878 M1885

M1895 M1896 M1943 M1952 M1971 M1974

M1979 M1981 M1991 M1992 M1998 M2001 M2010

M2030 M2037 M2045 M2068 M2079 M2217 M2538

M2631 M2639 M2641 M2642 M2643 W1348 W1454 W1457

④ M2262 M2321 M2393 M2395 M2396 M2447

page 155b (14)

① M0048 M0067 M0146 M0271 M0393 M0408

M0478 M0532 M0556 M0690 M0694 M0923 M1123

M1127 M1578 W0078 W0204 W0204 W0214 W0291 W0361

W0389 W0393 W0473 W0510 W0531 W0537 W0538 W0563

W0624 W0676 W0678 W0823 W0895 W0956 W0963

W1006 ② M1195 M1233 M1235 M1301

M1331 M1341 M1353 M1356 M1372 M1423 M1438 M1445

M1461 M1488 M1533 M1591 M1649 M1651 W1112 W1130

W1157 W1159 W1174 W1191 W1212 W1218 W1262

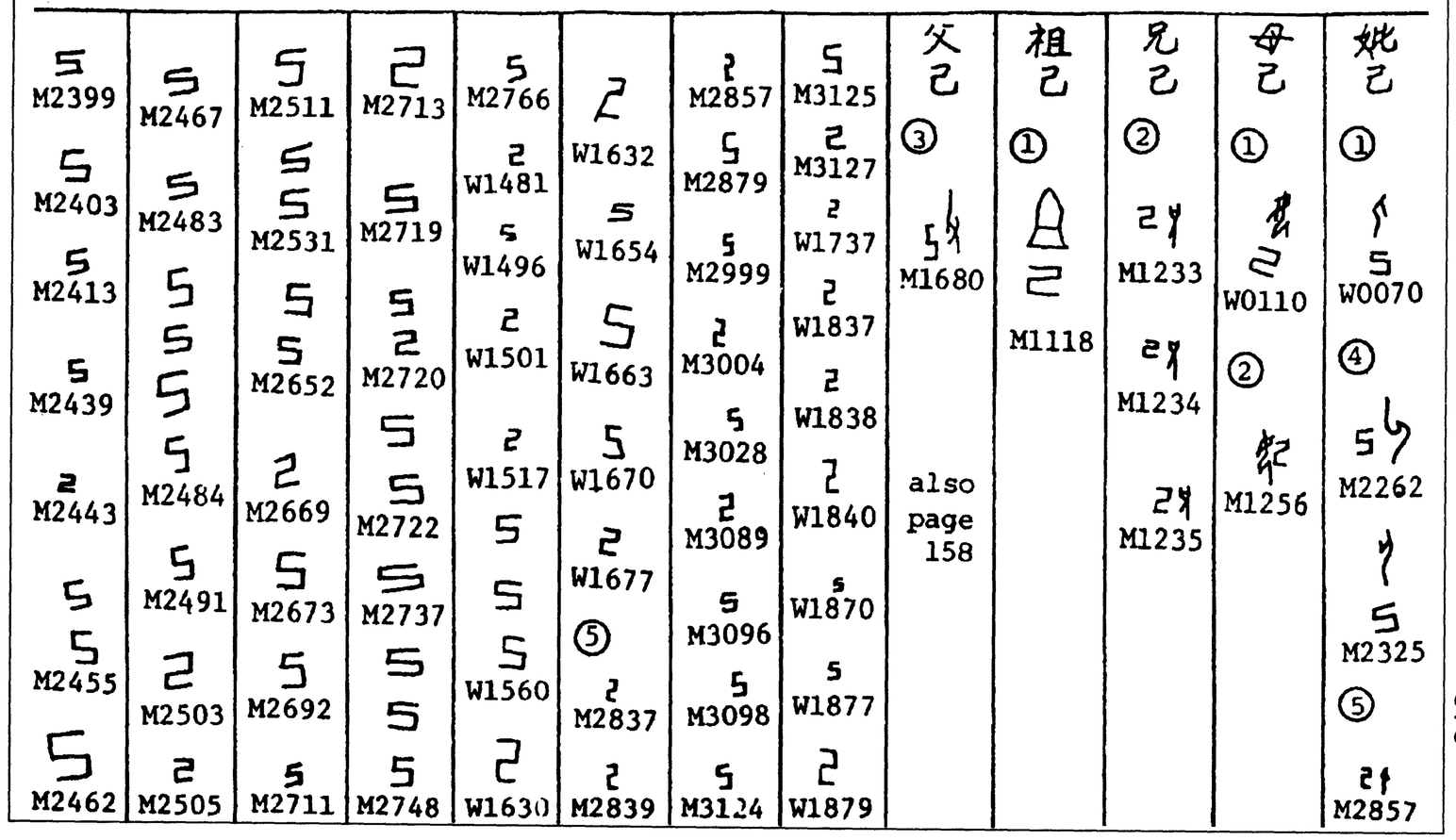
③ M1671 M1678 M1701 M1746 M1749 M1767 M1780 M1781

M1792 M1838 M1839 M1859 M1892 M1930 M2137

M2214 M2223 W1359 W1376 W1389 WJ408 ④ M1751

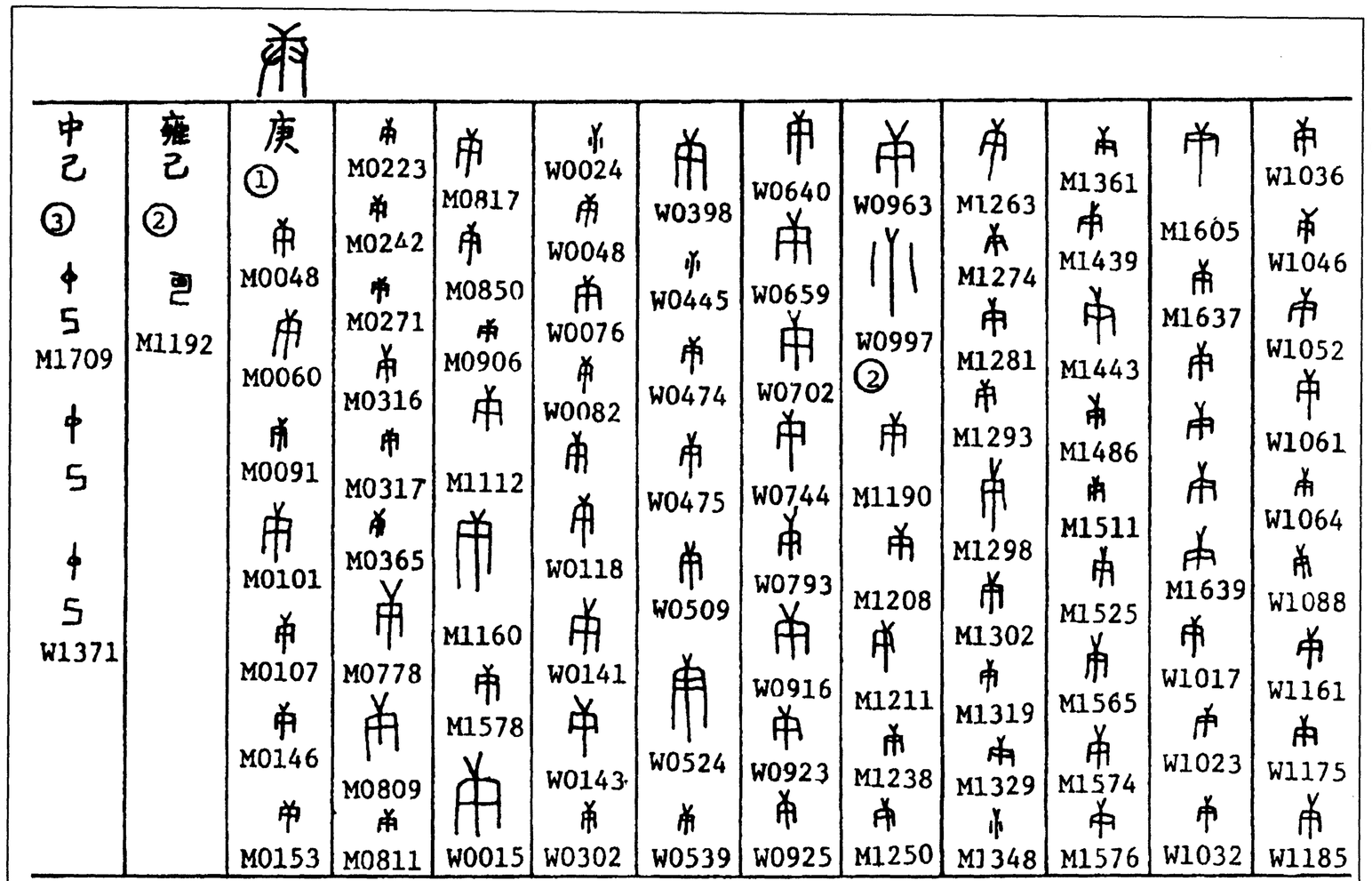
M2313 M2317 M2333 M2336 M2339 M2342 M2351 M2388

page 156b (14)

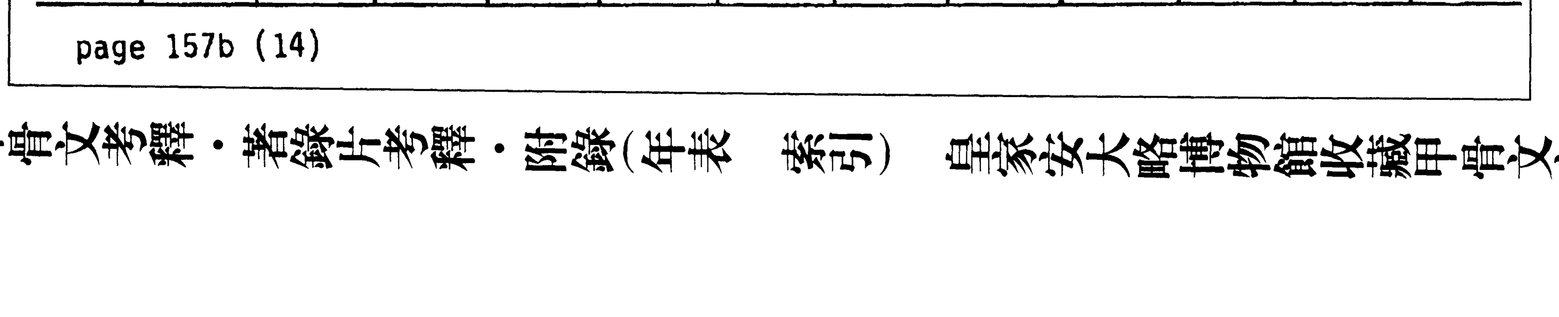


313

315

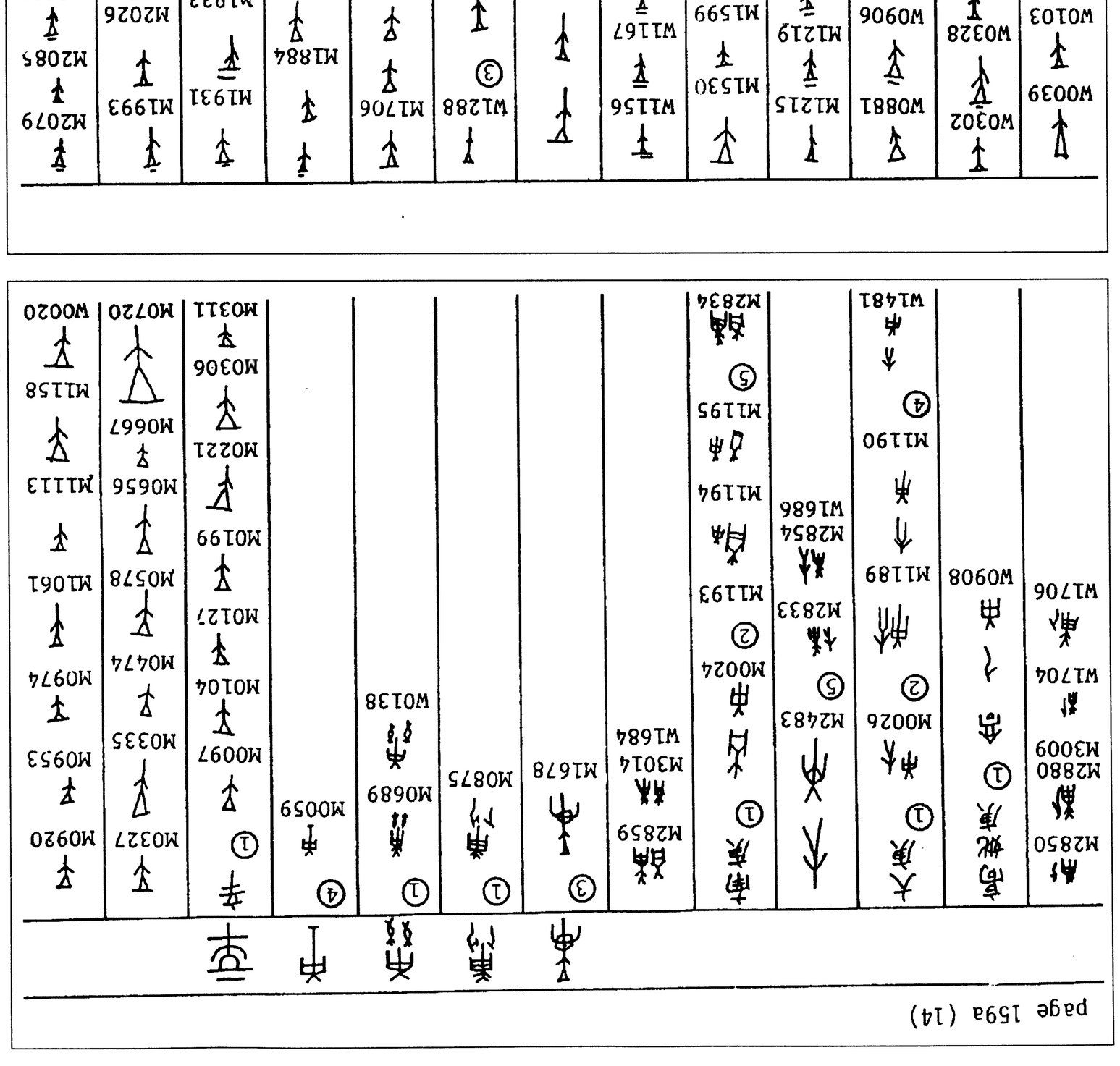


314

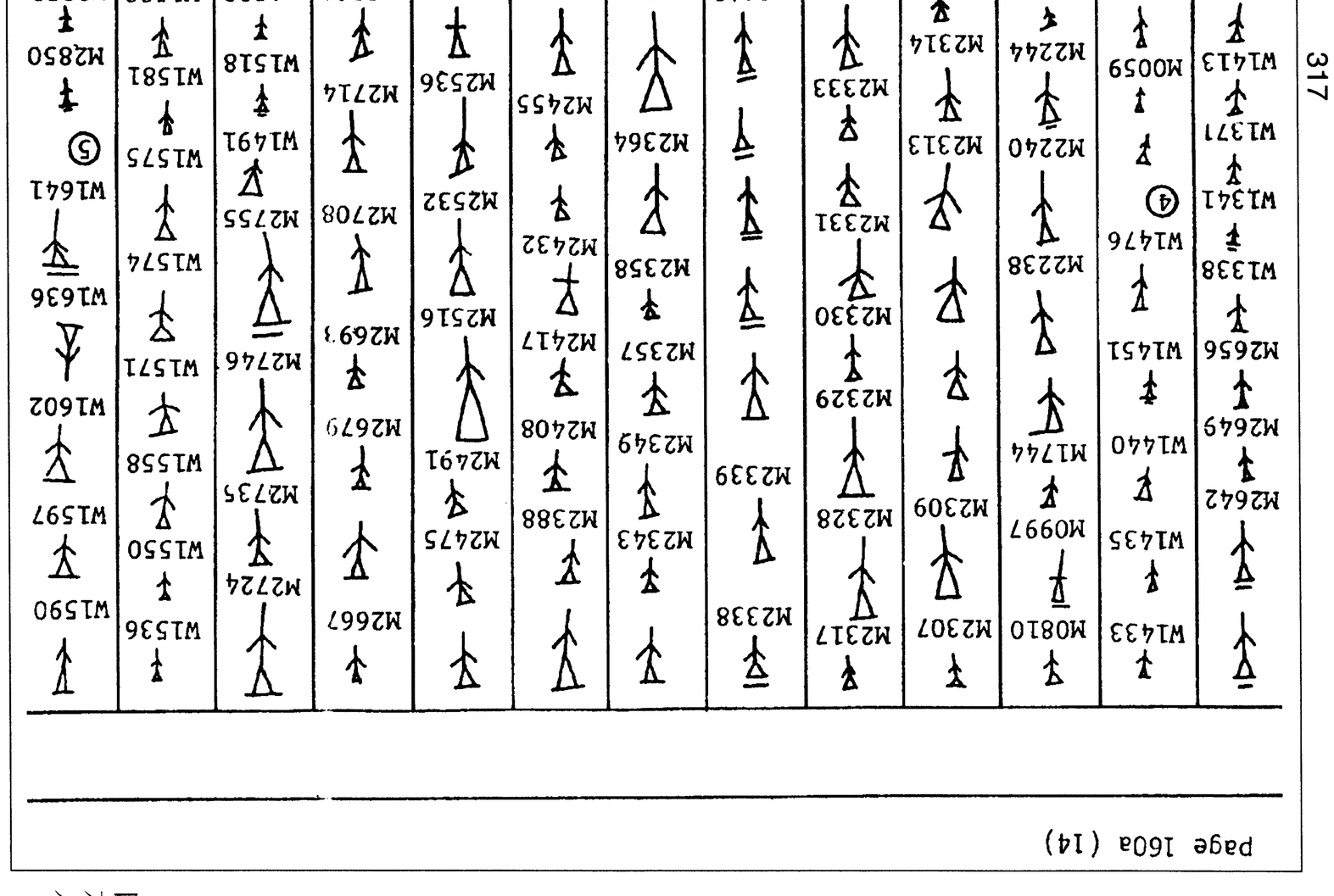


316

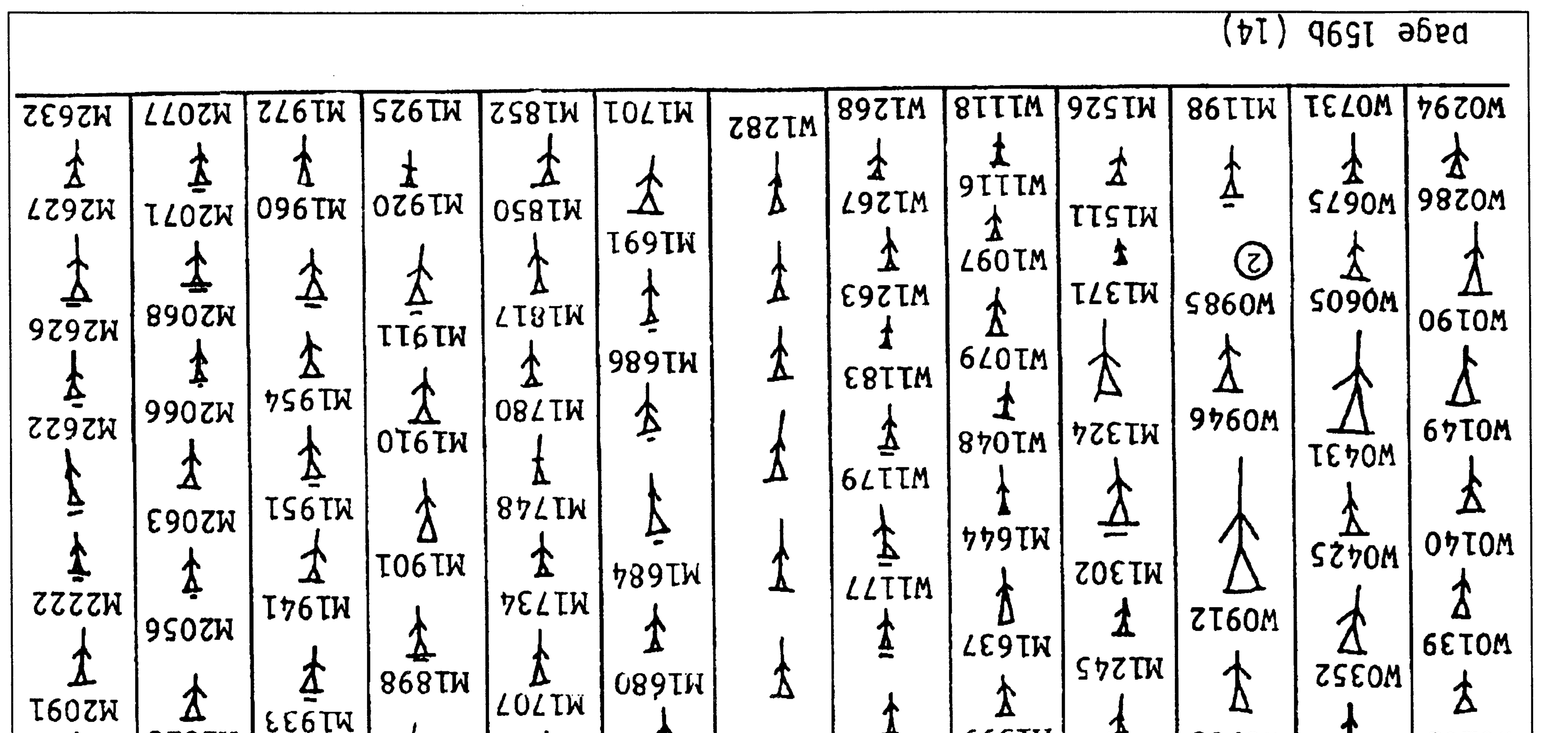
page 159a (14)



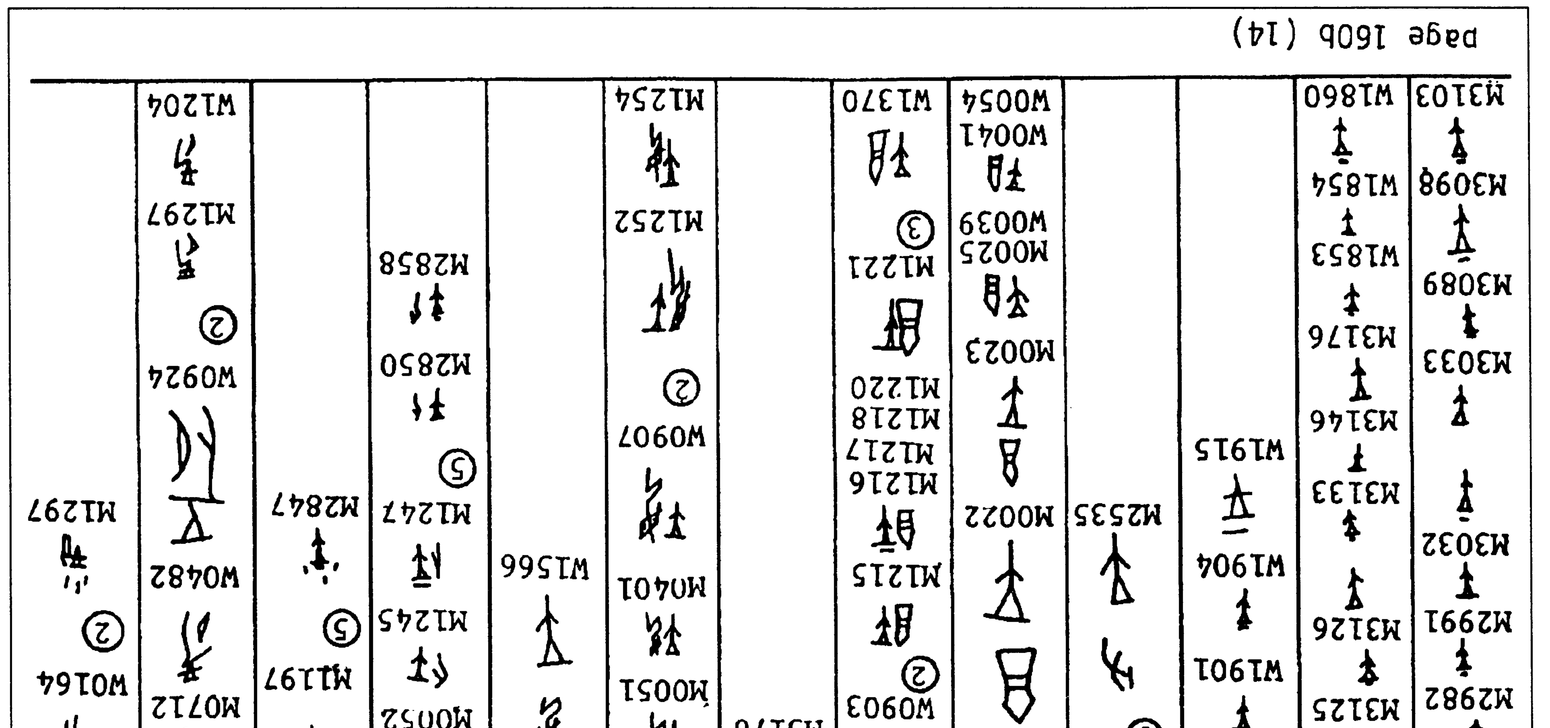
page 160a (14)



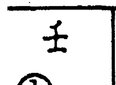
page 159b (14)

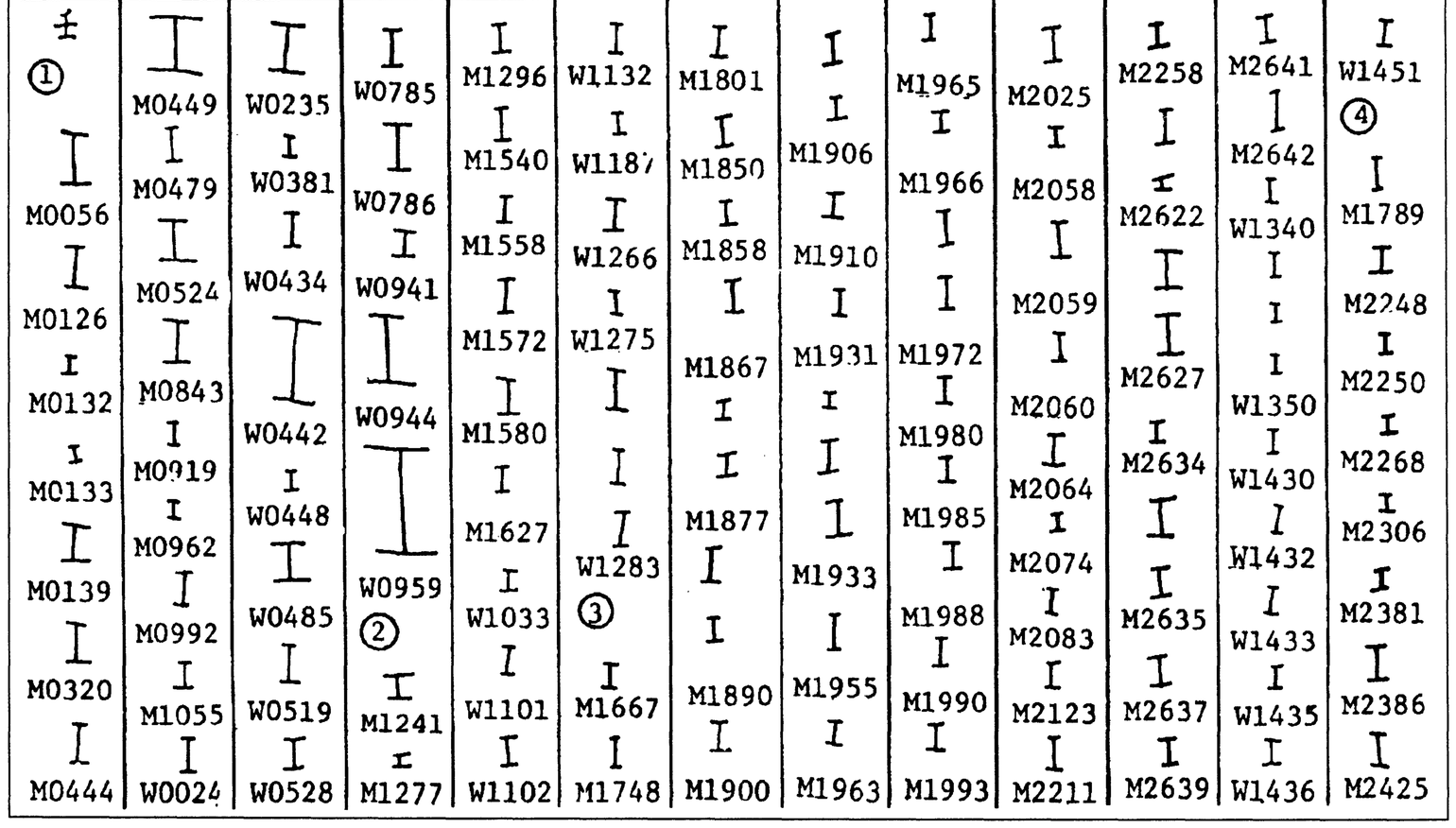


page 160b (14)



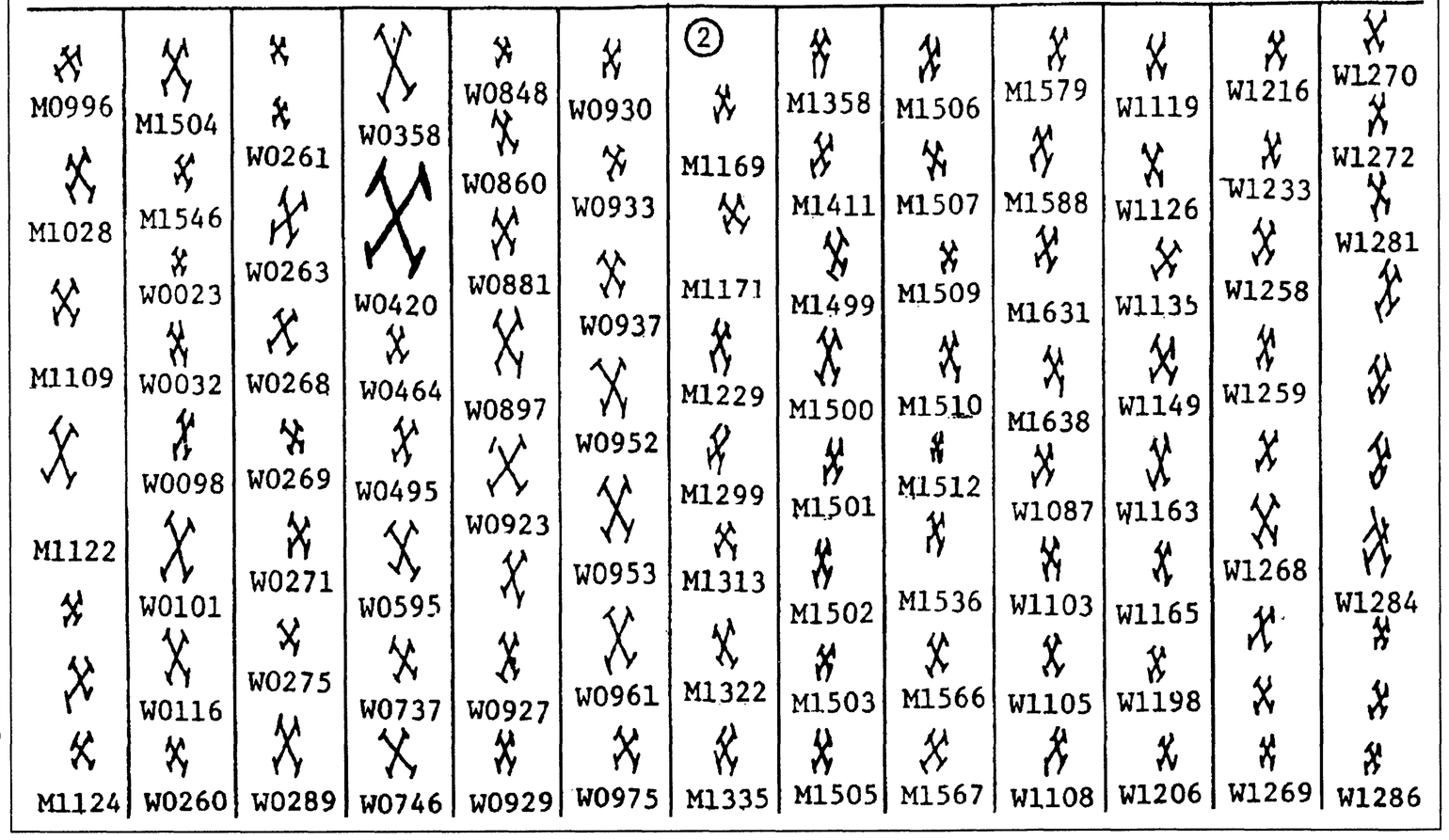
page 161a (14)



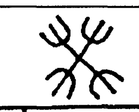


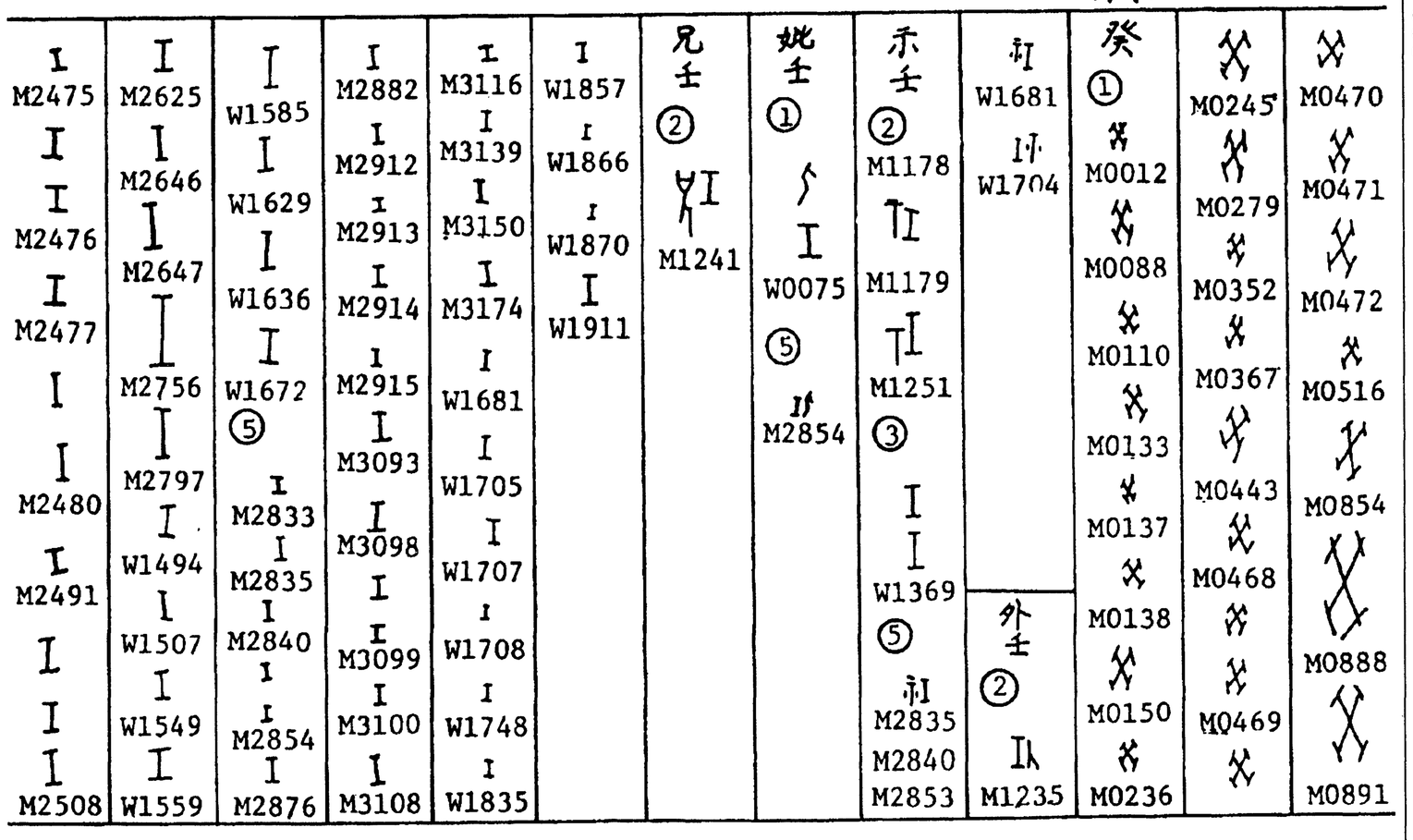
321

page 162a (14)



323

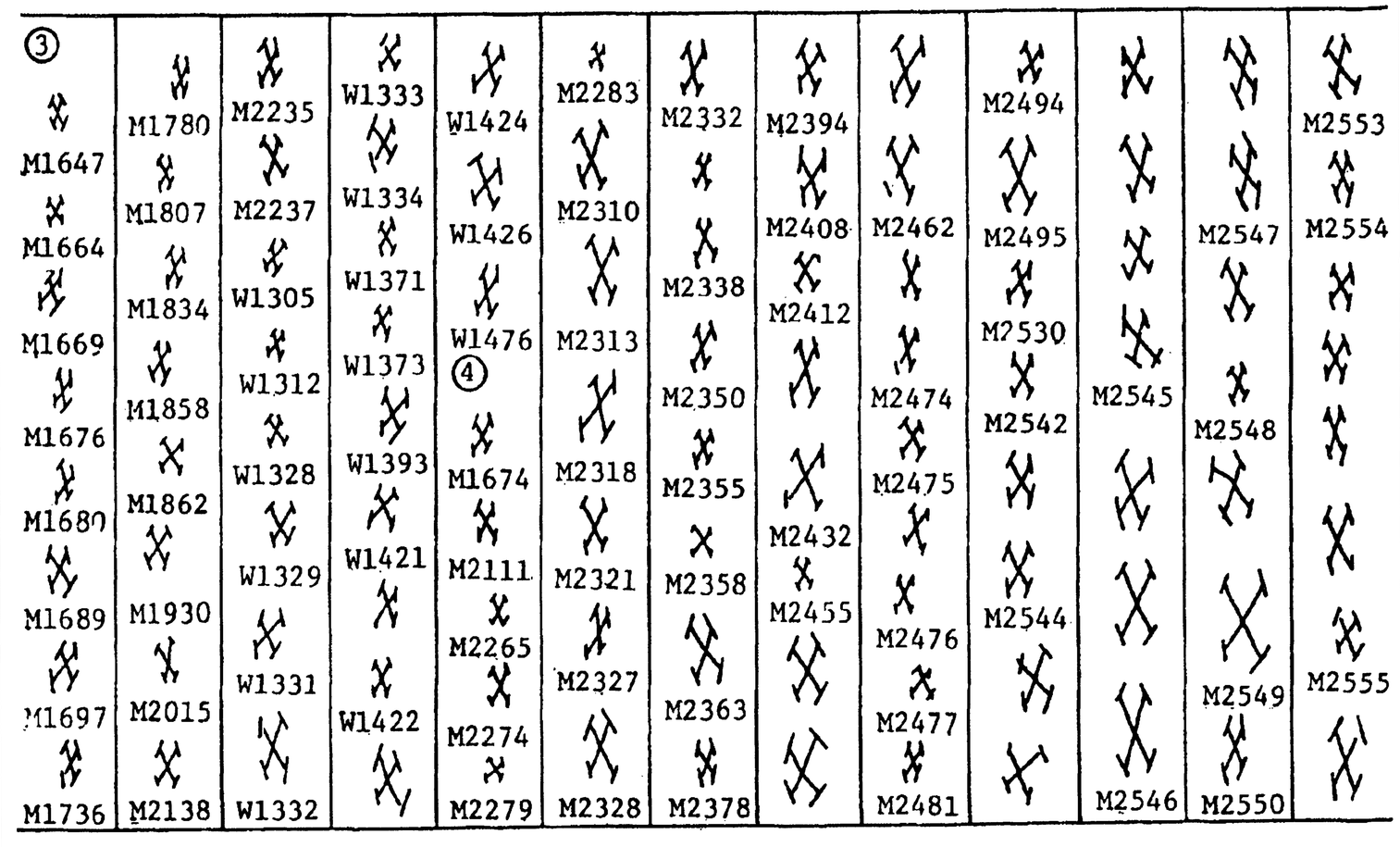




322

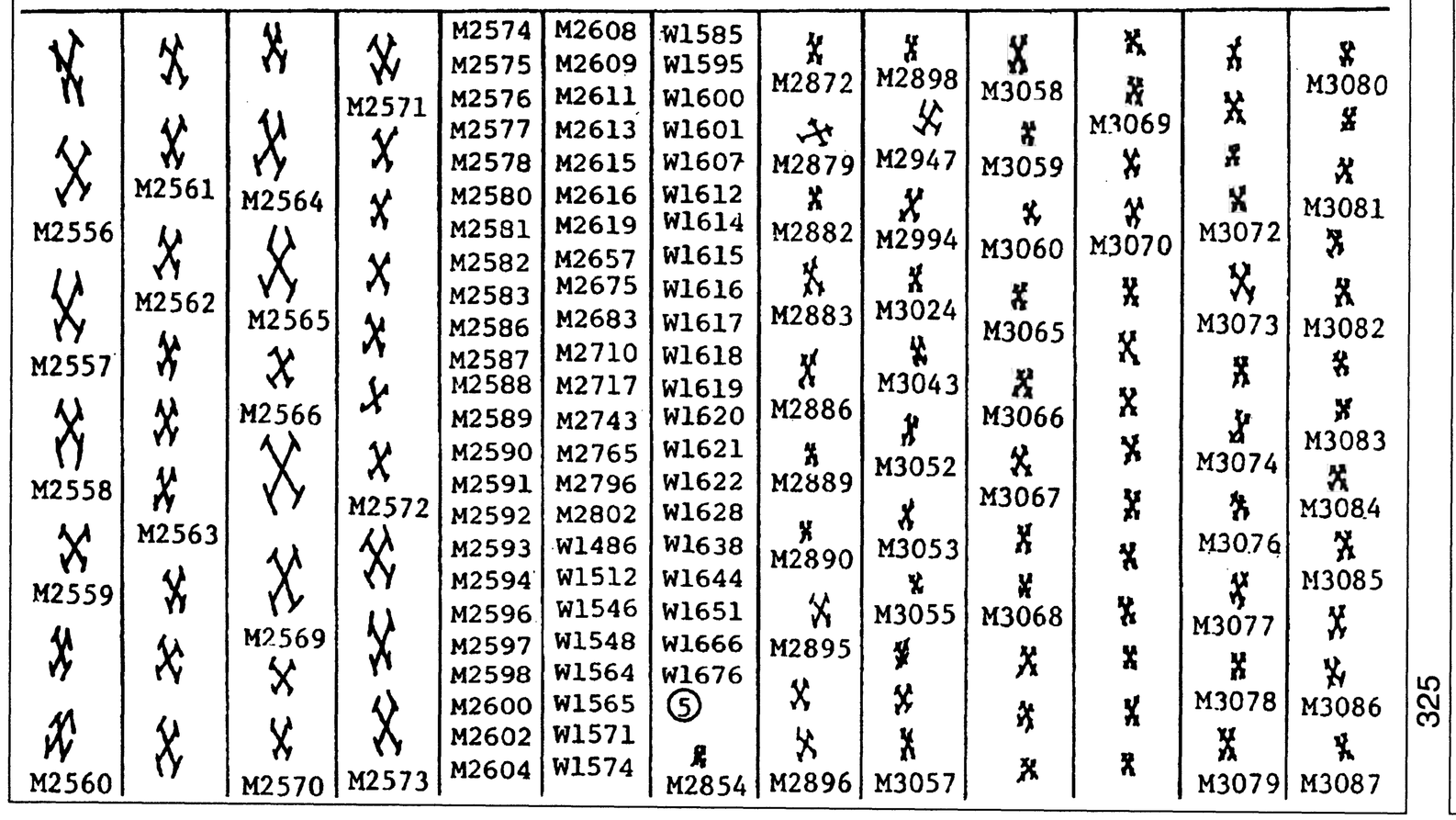
page 161b (14)

page 162b (14)

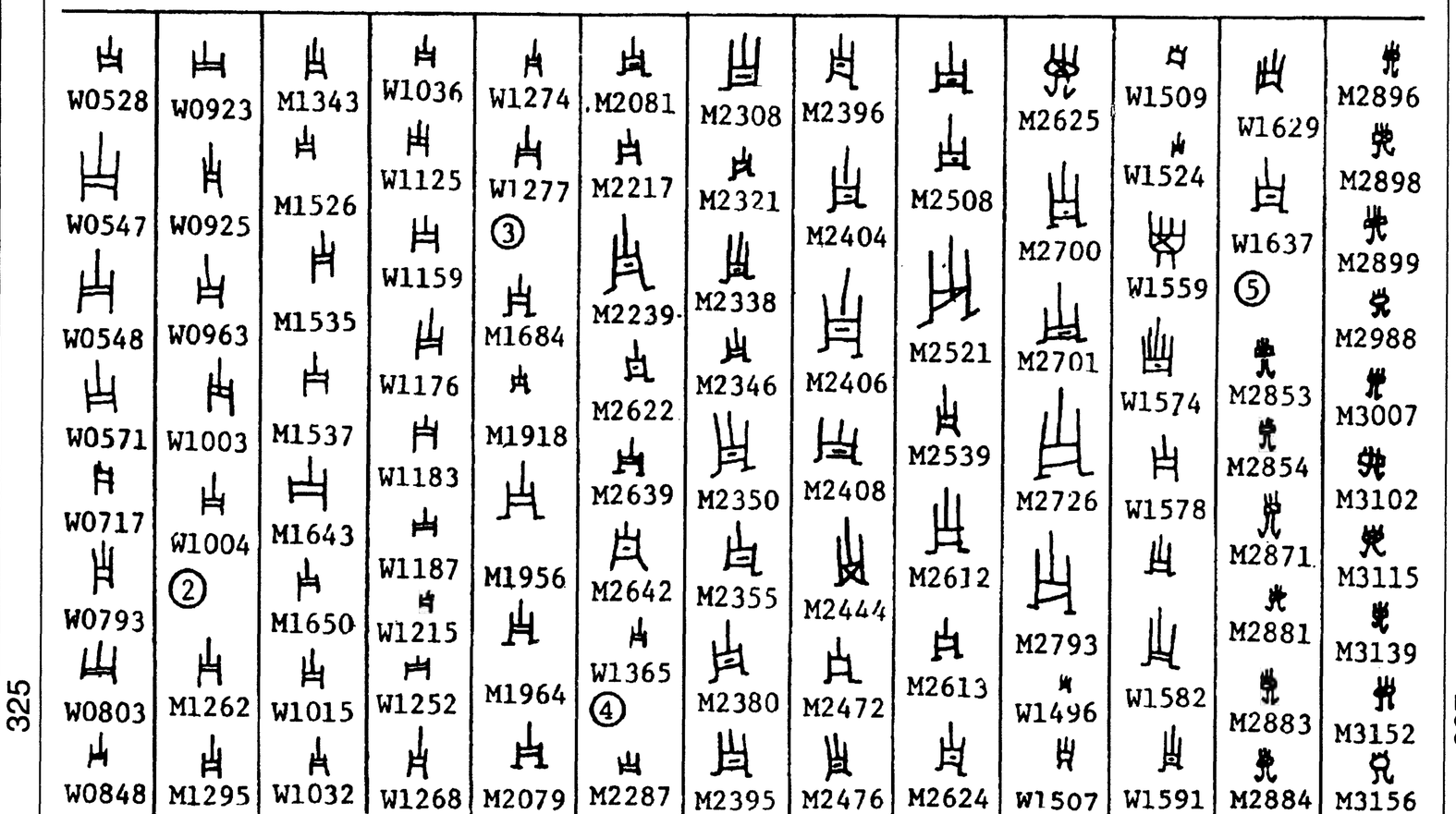


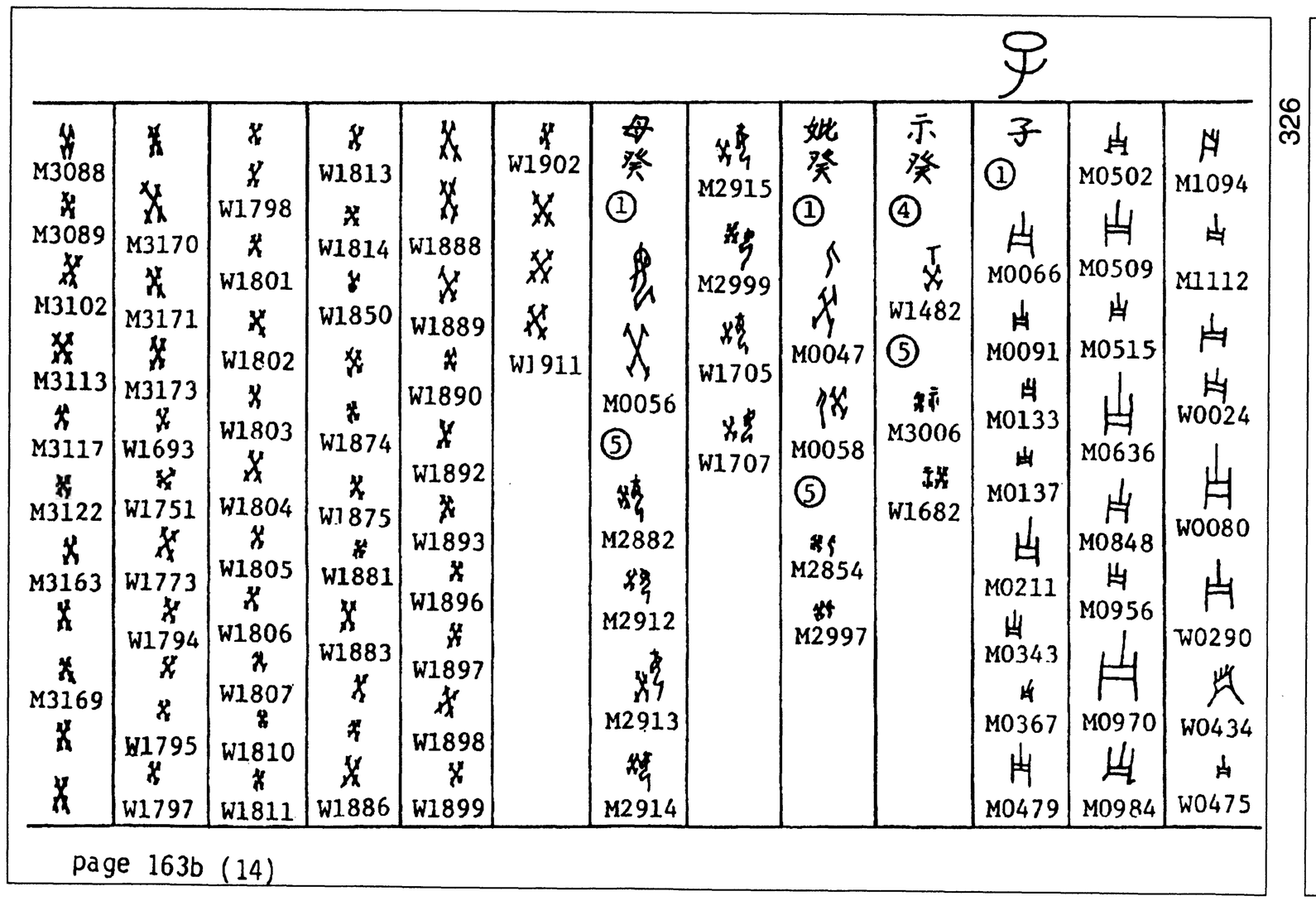
324

page 163a (14)



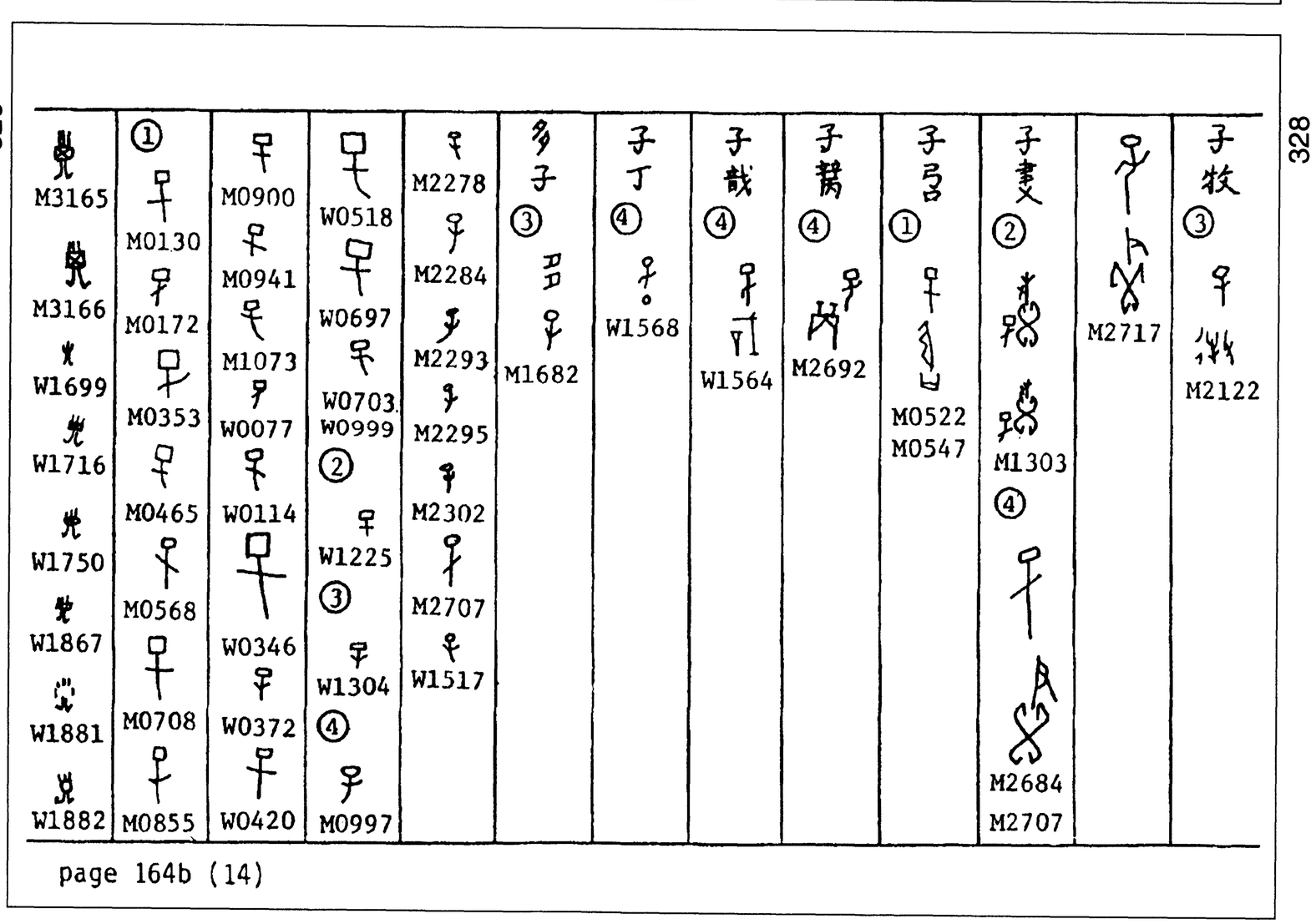
page 164a (14)





page 163b (14)

page 164b (14)



page 165a (14)

子刖 ① W0965	子央 ① M0555	大子 ① W0821	子 ① W1607	子 ① M2403 M2455	子 ① M2332	子 ① W1588	also pages 84 85	殉 → 冥 page 85	季 ① M0139 W0134 W0756	疑 → 匙 page 100	① M0612	孚 ① W0845

page 165b (14)

育 ② M1169 M1243 M1270 M1359 M1625 W1045 W1057	③ W1369 ④ M2321 ⑤ M3176	多毓 ① M0081 W0032 W0091 ② M1244	also pages 151 155	① M1006	丑 ① M0012 M0055 M0073 M0249 M0279 M0341 M0369	M0394 M0477 M0500 M0855 M0978 M1063 M1075	M1123 M1578 W0023 W0188 W0252 W0253 W0282 W0324	W0385 W0386 W0455 W0563 W0633 W0761 W0848	W0915 W0951 W0985 ② M0716 M1198 M1216	M1224 M1227 M1255 M1278 M1316 M1345 M1346 M1353	M1357 M1372 M1438 M1505 M1533 M1584 M1585 M1591	M1649 W1014 W1017 W1135 W1192 W1197 W1234 W1247

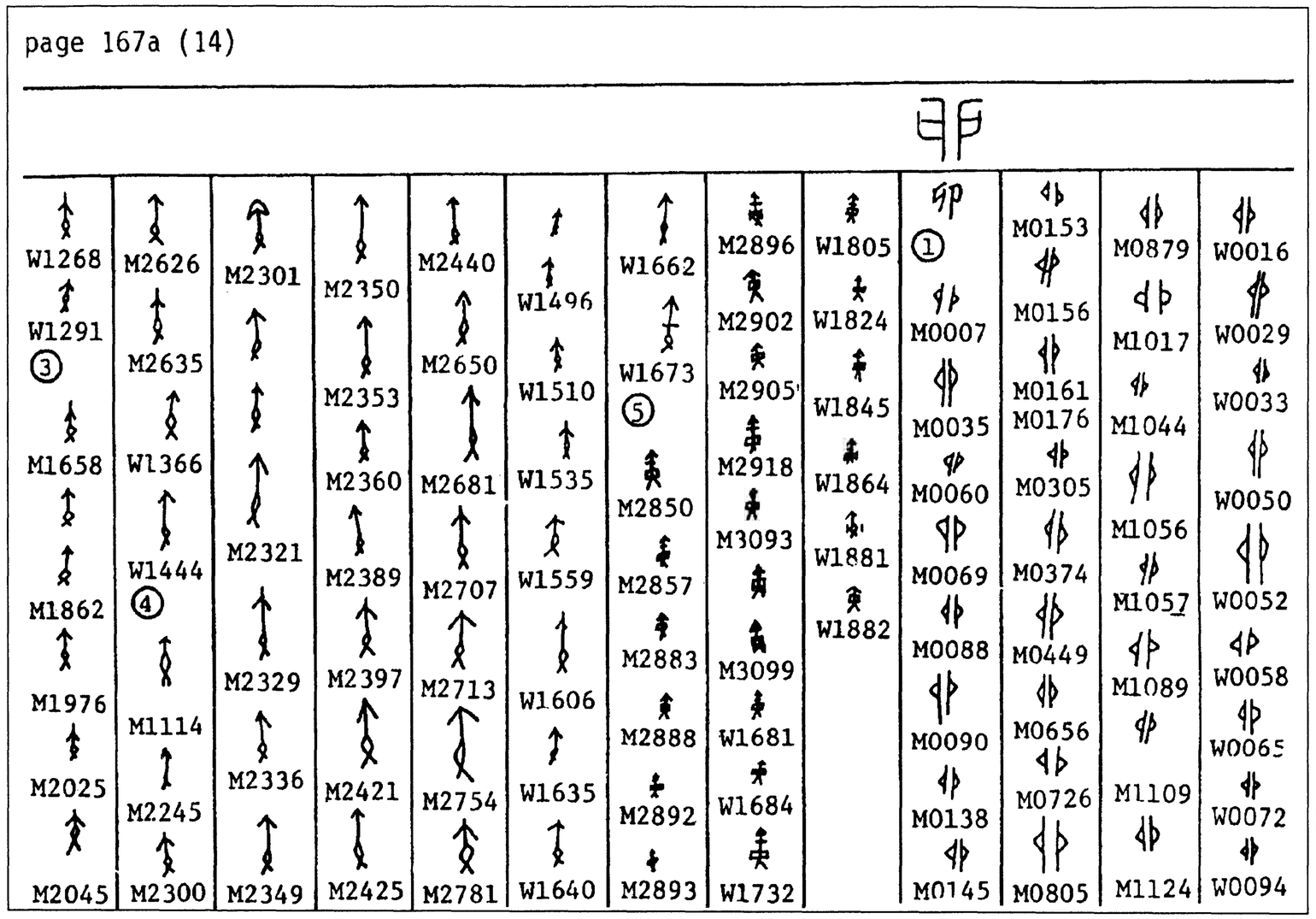
page 166a (14)

W1270 W1280 W1284 ③ M1671 M1680	M1686 M1693 M1706 M1780 M1781 M1811	M1834 M1993 M1998 M2137 M2237 M2622 M2626 M2628	M2630 M2644 W1312 W1325 W1332 W1366 W1451 W1461	W1476 ① M2238 M2240 M2279 M2283 M2293 M2321	M2338 M2339 M2346 M2364 M2383 M2388	M2403 M2436 M2447 M2476 M2483 M2539 M2544	M2545 M2546 M2556 M2561 M2564 M2572	M2573 M2575 M2577 M2580 M2584 M2591	M2592 M2597 M2613 M2615 M2620 M2623 M2661	M2664 M2673 M2675 M2701 M2720 M2735 M2761	M2774 M2788 M2791 W1533 W1548 W1574 W1575	W1582 W1604 W1618 W1619 W1620 W1621 ⑤ M2837

page 166b (14)

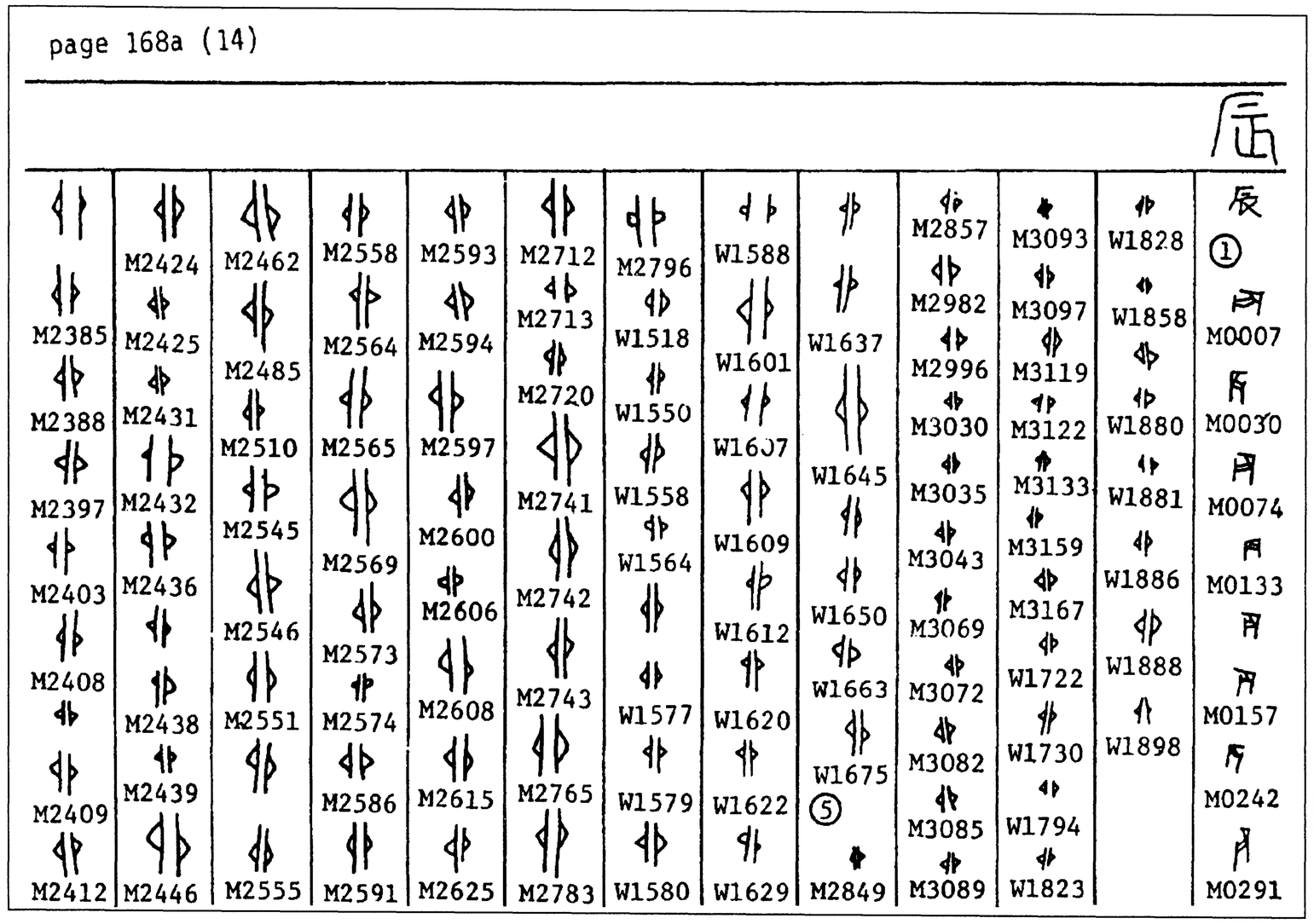
寅 M2858 M2882 M2883 M3024 M3026 M3065 M3069 M3072 M3074	M3089 M3096 M3102 M3104 M3113 M3139 M3170 M3174 W1713	W1757 W1797 W1798 W1800 W1802 W1805 W1806 W1840 W1865	W1886 W1891	羞 ④ M2528	寅 ① M0062 M0076 M0128 M0151 M0176 M0251	M0289 M0502 M0507 M0545 M0568 M0651 M0713	M0778 M0949 M1362 W0014 W0024 W0074 W0078 W0085	W0130 W0173 W0253 W0348 W0429 W0452 W0494	W0654 W0670 W0682 W0855 W0900 W0902 W0996 W1006	② M1175 M1203 M1246 M1254 M1274 M1281 M1525	M1558 M1572 M1580 M1590 M1607 M1620 M1628 W1043	W1166 W1175 W1181 W1185 W1212 W1247 W1255 W1267

page 167a (14)

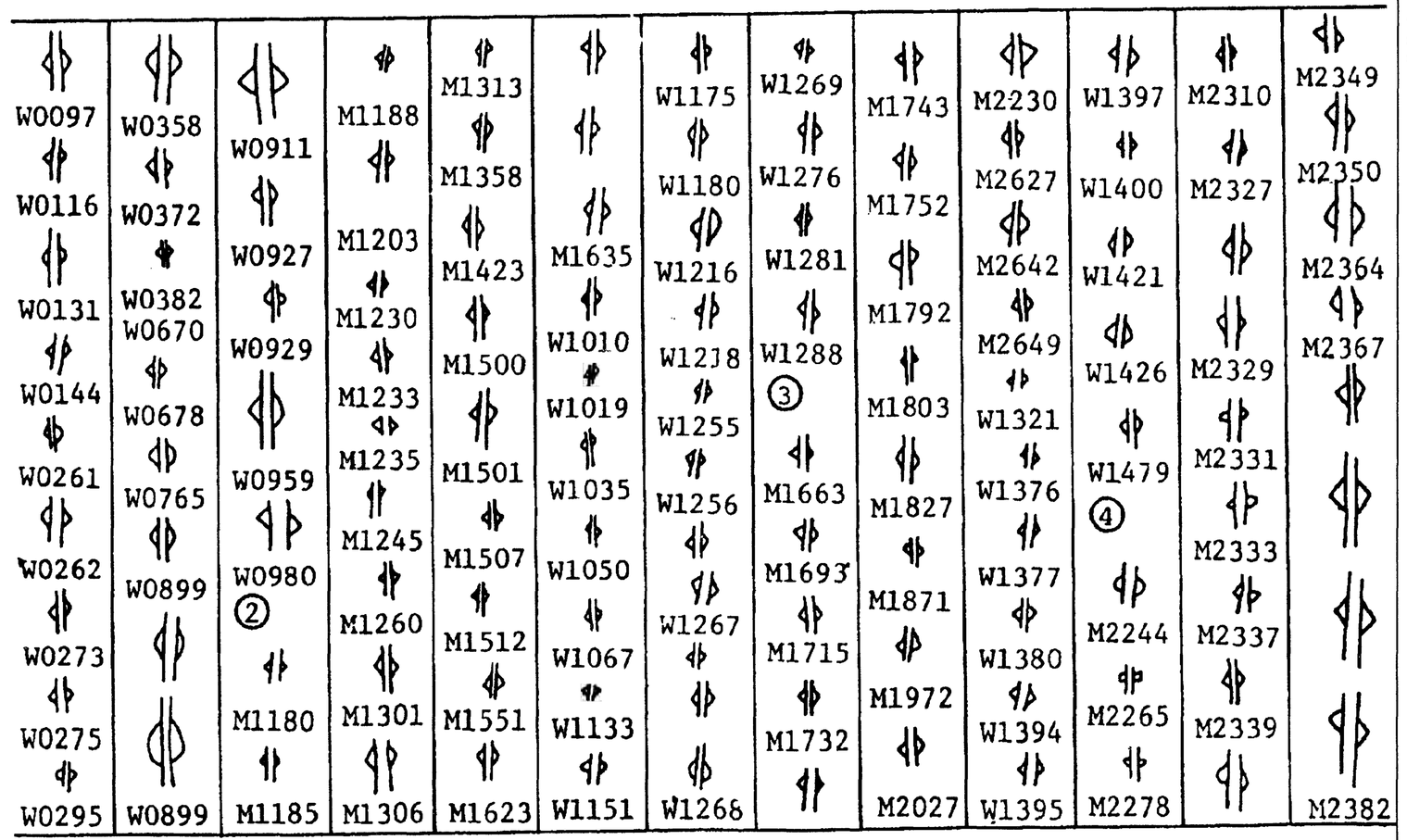


333

page 168a (14)



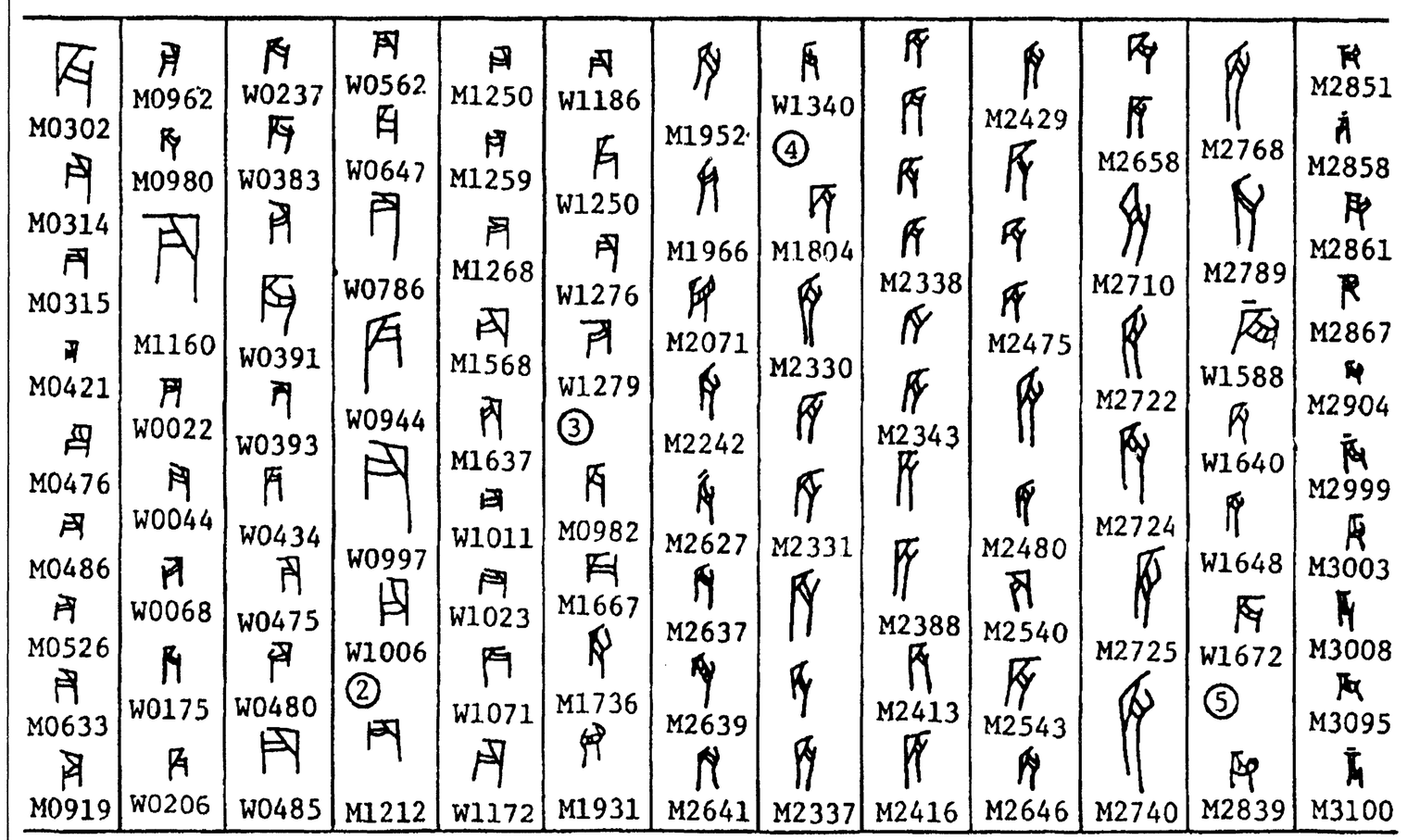
335



334

page 167b (14)

page 168b (14)



336

M3174 W1745 W1816 W1824 W1855 W1859 W1880 W1881

① M0053 M0067 M0073 M0146 M0157 M0195

M0201 M0271 M0342 M0371 M0410 M0457 M0474 M0481

M0539 M0587 M0637 M0640 M0649 M0728 M0826 M0827

M0888 M0916 W0032 W0071 W0106 W0149 W0264

W0266 W0270 W0272 W0285 W0381 W0389 W0393 W0552

W0631 W0737 W0860 W0917 W0946 W0956

W1006 ② W1053 M1229 M1230 M1291 M1352 M1505 M1512

M1528 M1536 M1550 M1605 M1632 M1637 W1028 W1124

W1126 W1164 W1170 W1186 W1188 W1244 W1245 W1259 W1267

③ W1268 M1664 M1676 M1709 M1734 M1746 M1749

M1889 M1893 M1978 M2015 M2632 M2642 M2653

M2656 W1423 W1424 W1478 ④ M0059 M0595 M1114

337

M3167 M3169 M3170 W1693 W1708 W1720 W1735 W1751 W1798 W1801

W1825 W1848 W1853 W1865 W1879 W1881 W1886 W1888 W1889

W1890 W1894 W1898 W1903 W1911

② W1147 ③ M1737 M1780 M1975 M2044 W1352

W1444 W1462 ④ M2305 M2312 M2321 M2330

M2335 M2336 M2342

M2390 M2412 M2536 M2682 M2710 M2711 M2719

M2722 M2755 W1542 W1571 W1629 W1632 W1636

W1653

① M0022 M0137 M0208 M0276 M0277 M0294 M0356

M0836 W0032 W0050 W0284 W0314 W0355 W0381 W0407 W0448

W0709 W0834 W0916 W0941 W0961 ② M1184 M1224

M1240 M1242 M1256 M1297 M1311 M1326 M1329 M1339 M1363

339

M1674 M2111 M2225 M2271 M2285 M2300 M2309 M2312

M2318 M2321 M2330 M2336 M2337

M2342 M2343 M2349 M2394 M2416 M2417

M2455 M2474 M2481 M2485 M2491 M2531

M2542 M2545 M2549 M2550 M2554 M2555 M2558

M2560 M2561 M2564 M2571 M2575 M2576 M2578

M2579 M2590 M2591 M2593 M2594 M2599 M2602 M2604

M2608 M2609 M2611 M2615 M2617 M2652

M2680 M2723 M2724 M2744 M2764 M2817 W1481 W1512 W1532

W1553 W1555 W1563 W1564 W1565 W1575 W1599

W1610 W1620 W1641 W1651 ⑤ M2838 M2847 M2852

M2871 M2873 M2875 M2878 M2982 M2999 M3032 M3056 M3059 M3069

M3072 M3074 M3098 M3103 M3114 M3125 M3127 M3131 M3151

338

M1397 M1433 M1519 M1563 M1565 M1569 M1592 M1603

M1605 M1627 M1641 W1029 W1060 W1266 W1273

W1285 W1293 ③ M1725 M1749 M1825 M1880 M1895

M1901 M1934 M1971 M1980 M1990 M2068 M2634 M2642 W1316

W1350 W1414 ④ M1742 M2262 M2304 M2319 M2321

M2344 M2362 M2398 M2402 M2416 M2452 M2474

M2508 M2667 M2674 M2676 M2718 M2719 M2732

M2751 M1497 W1504 W1528 W1544 W1564 W1575 W1629

W1632 W1636 W1640 W1652 ⑤ M2833 M2857 M2862 M2876 M2885

M2896 M2897 M2982 M3013 M3043 M3056 M3106 W1702 W1723 W1748

W1805 W1857 W1904 W1911

吾 ① M0356

不吾 ① M0356

340

page 171a (14)

also page 18

M3021 M3052 M3053 M3057 M3068 M3069 M3072
M2222 M2627 M2631 W1333 W1371 W1373 W1424
M1780 M1807 M1818 M1847 M1921 M2214 M2218
W1620 W1576 W1560 W1559 M1686 M1701 M1727
W1558 W1545 W1529 W1767 M2749 M2748 W1095
M1640 W1016 W1045 W1062 W1091 W1231 W1268
M1195 M1218 M1289 M1335 M1520 M1588
M2604 M2609 M2662 M2667 M2679
M2578 M2582 M2583 M2587 M2593 M2594 M2598
M2549 M2554 M2555 M2561 M2563 M2564 M2575
M2505 M2528 M2532 M2540 M2541 M2547
M1122 M1126 W0018 W0050 W0263 W0337 W0390 W0494
W0495 W0496 W0529 W0537 W0662 W0664
M0678 M0689 M0690 M0715 M0892 M0953 M0974 M1098
M2462 M2464 M2472 M2475 M2494
M2393 M2394 M2408 M2416 M2445 M2452
M2328 M2334 M2340 M2344 M2348
M0065 ⑭ M0810 M2274 M2304 M2315 M2317
W1435
M0028 ⑬ M0093 M0102 M0133 M0137 M0172 M0337
M0448 M0454 M0470 M0478 M0566 M0591 M0656 M0666
M2393 M2394 M2408 M2416 M2445 M2452
M2328 M2334 M2340 M2344 M2348
M0065 ⑭ M0810 M2274 M2304 M2315 M2317
W1435

page 171b (14)

M2412 M2393 M2381 M2368 M2347 M2306 M2290 M2264
M2478 M2477 M2476 M2475 M2474 M2472 M2454
M2536 M2528 M2522 M2491 M2479
M2757 M2721 M2718 M2711 M2663 M2647
M2759 M2772 W1506 W1541 W1561 M1002 M1662 M0204
M0748 M0907 M0793 W0213 W0235 W0246 W0279 W0302 W0320 W0392
M0748 M0793 M0907 M1002 M1112 M0139 M0053 M0550
W1576 W1599 W1605 W1664 W1671 ⑤ M2854
M3093 M3098 M3099 M3129 M3174 W1694 W1696 W1697 W1705
M2858 M2871 M2874 M2882 M2891 M3038 M3039 M3053 M3091
W0436 W0451 W0519 W0520 W0530 W0640 W0684 W0704
W0734 W0820 W0922 W1001 ② M1169 M1296 M1302
M1309 M1383 M1398 M1424 M1435 M1443 M1511
W1714 W1824 W1846 W1881 W1909 W1911
M2425 ④
M0608 M0610 M0626 M0795 M0809 M0852
M0414 M0425 W0431 M0468 M0471 M0475 M0489 M0586
M0064 ① M0087 M0104 M0110 M0133 M0175 M0306 M0408
M1514 M1552 M1598 M1309 M1383 M1398 M1424 M1435 M1443 M1511
W1033 W1101 W1102 W1114 W1139 W1163 W1246 W1017 M1639
M1675 ③ W1283 M1720 M1769 M1801 M1835 M1850
M1981 M2234 M2252 W1301 W1320 ④ W1461 M2248

page 172a (14)

M0904 M0907 M0972 M0996 M1010 M1108 M1546

W0053 W0150 W0184 W0204 W0213 W0286 W0291 W0302

W0327 W0338 W0388 W0538 W0694 W0815 W0820 W0832

W0854 W0865 W0899 W0930 W0933 W0952 W0953 W1001

② M1170 M1266 M1287 M1290 M1331 M1336 M1342 M1347 M1356

M1445 M1502 M1506 M1511 M1532 M1538 M1567 M1570

M1573 M1638 M1644 W1033 W1038 W1042 W1059 W1111

W1119 W1135 W1165 W1177 W1198 W1201 W1211 W1258

W1263 W1268 ③ W1269 M1647 M1689 M1694 M1697

M1701 M1707 M1767 M1771 M1780 M1954 M1974

M2067 M2627 W1328 W1342 W1399 W1424 ④ W1449 M1751

M2277 M2290 M2310 M2312 M2313

M2320 M2328 M2347 M2351 M2358 M2363 M2364

W0032 W0116 W0117 W0118 W0121 W0122 W0150 W0161 W0164

W0246 W0898 W0899 W0912 W0961 ② M1169

① ③ M1171 M1680 M1684 M1685

M1686 M1687 M1688 M1689 M1690

M1691 M1692 M1693 M1694 M1695 M1697 M1698

M1699 M1700 M1714 M1719 M1763 M1780 M1817

M1818 W1308 W1384 W1386 W1389 W1393 ④ M2294 M2311

M2313 M2317 M2318

M2337 M2340 M2341 M2344 M2348

M2349 M2350 M2355 M2356

M2357 M2358 M2360 M2362

M2364 M2366 M2439 M2452 M2508 W1481 W1482

W1582 W1585 W1604

M2413 M2455 M2462 M2475 M2476 M2526 M2528

M2535 M2545 M2547 M2548 M2555 M2557 M2563

M2564 M2566 M2570 M2572 M2573 M2575 M2583

M2593 M2594 M2597 M2601 M2603 M2604 M2616 M2719

M2722 M2736 M2762 M2802 W1486 W1489

W1498 W1516 W1530 W1546 W1569 W1571 W1581 W1600

W1614 W1615 W1616 W1617 W1620 W1625 W1638

W1659 W1667 W1676 ⑤ M2850 M2871 M2873 M2982 M2984

M3004 M3025 M3061 M3069 M3072 M3098 M3105

M3123 M3170 M3176 W1718 W1736 W1792 W1810 W1838 W1843

W1849 W1870 W1876 W1881 W1897 W1899 W1911 W1913 W1915

酒 ① M0007 M0104 M0178 M0179 M0198 M0199 M0200

M0201 M0202 M0203 M0204 M0205 M0210 M1112 W0014

醴 → 豐 page 68

薦 ① W0120

① W0990

① M0254 ② M1392 W1267 W1268'

① W0025 W0767 ④ W1640

尊 ③ M1771 ④ M2350 W1578

⑤ M3026

戌 ① M0103 M0132 M0298 M0364 M0480 M0559 M0604

M0622 M0759 M1113 W0009 W0037 W0042 W0043 W0216

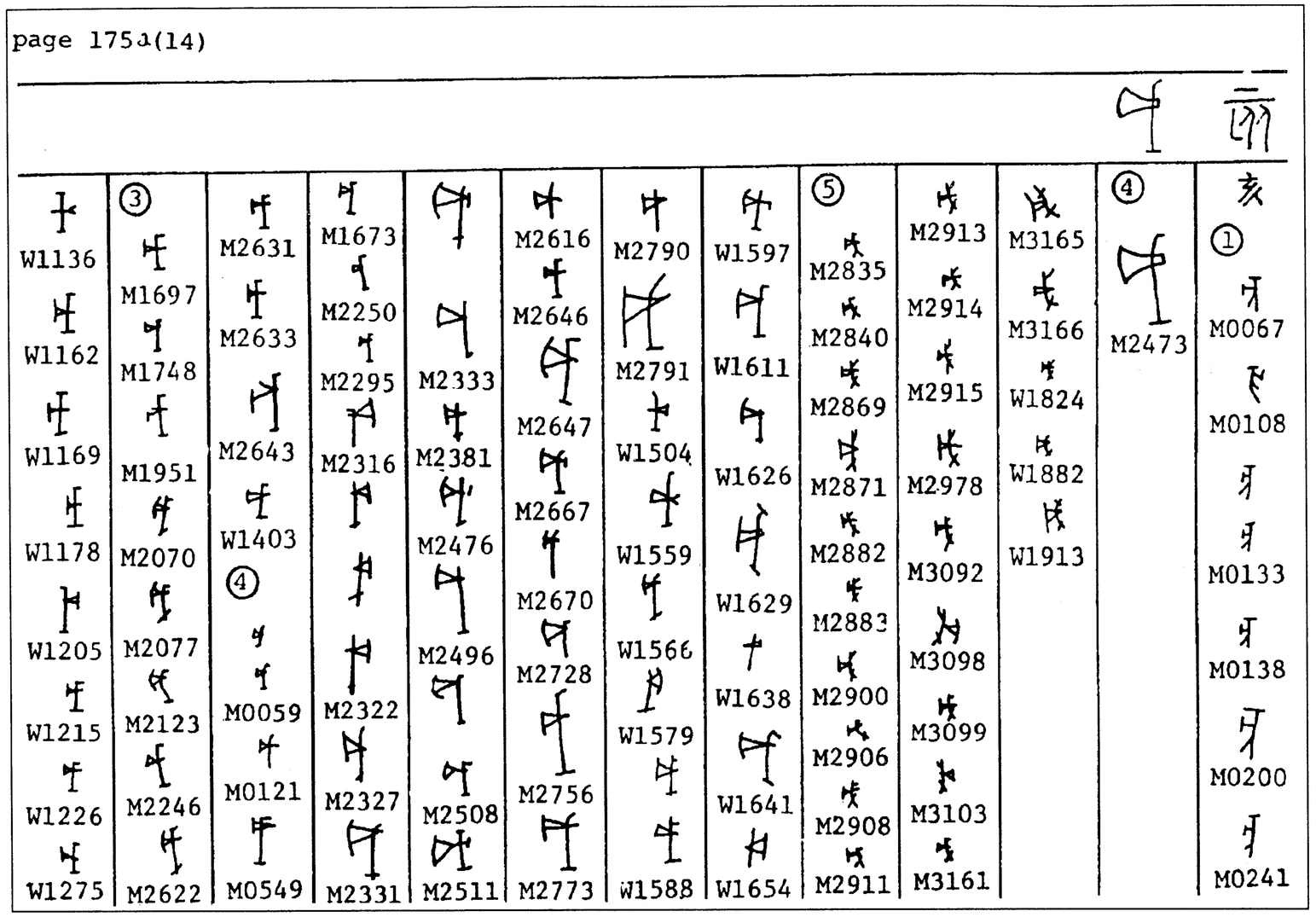
W0420 W0434' W0491 W0506 W0539 W0550 W0578

W0671 W0680 W0819 W0922 W0925 W0963 ② M1238

M1263 M1319 M1323 M1348 M1430 M1439 M1522 M1567 M1571

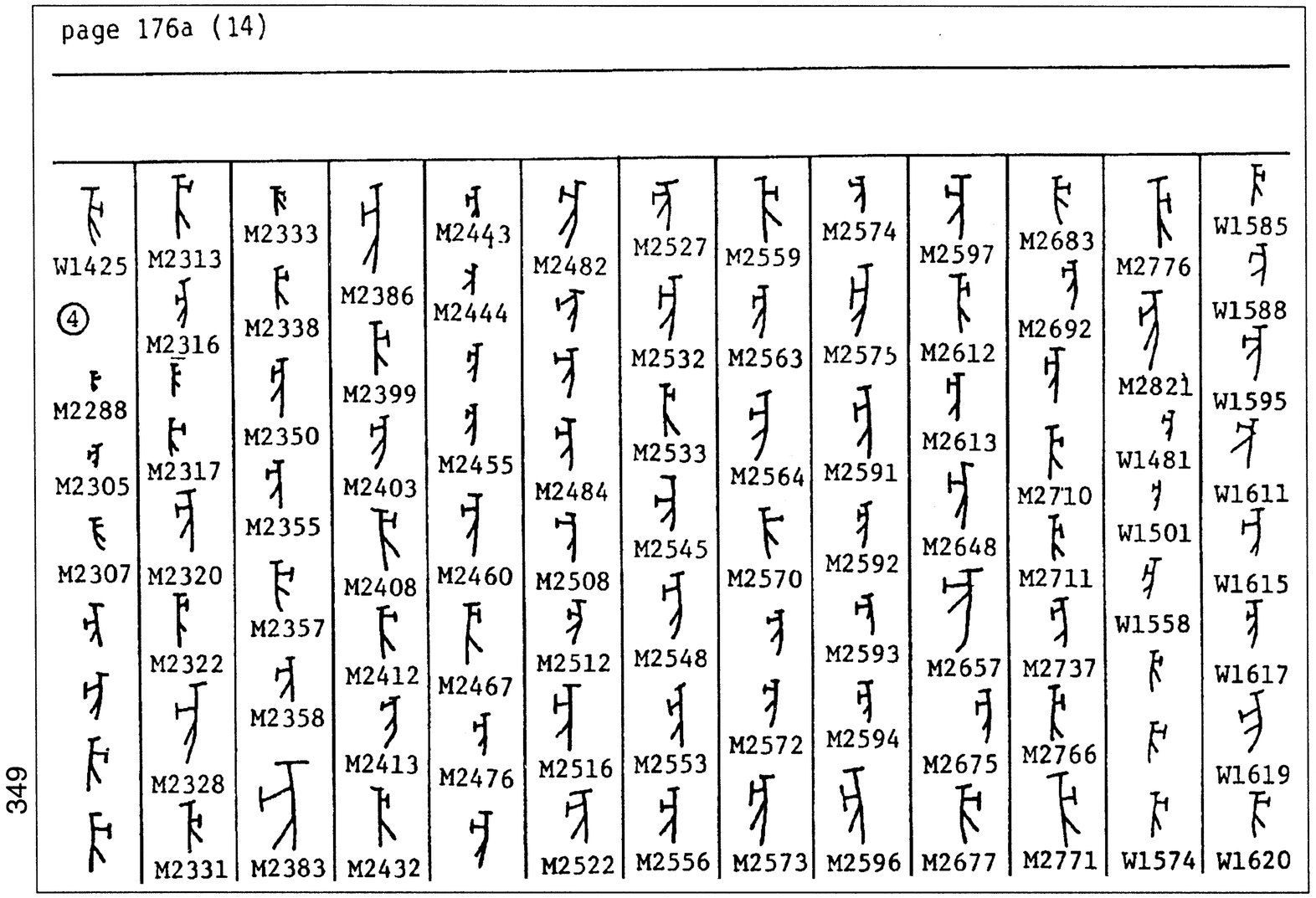
M1586 M1604 M1621 M1624 M1625 W1034 W1052 W1099

page 175a(14)

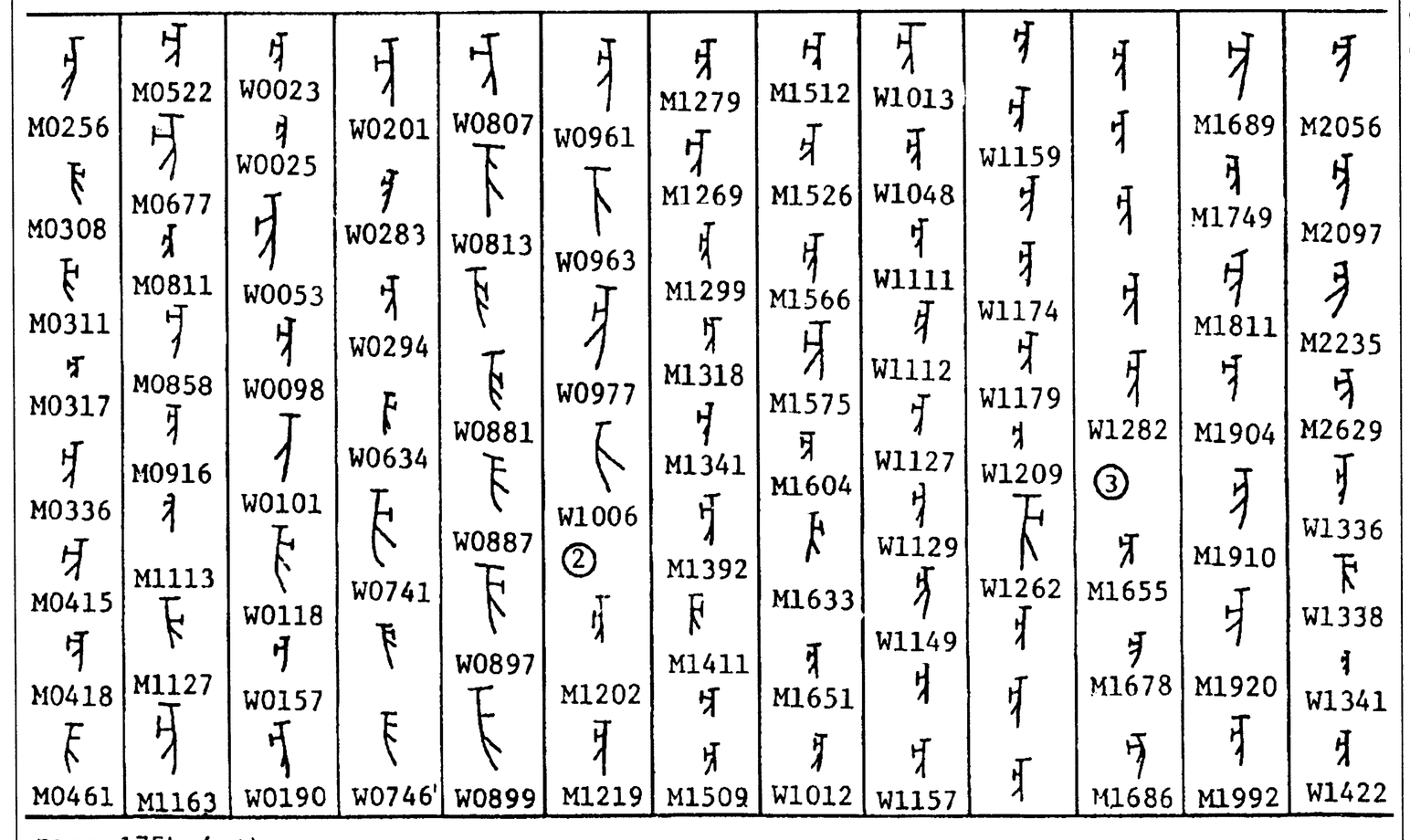


349

page 176a (14)

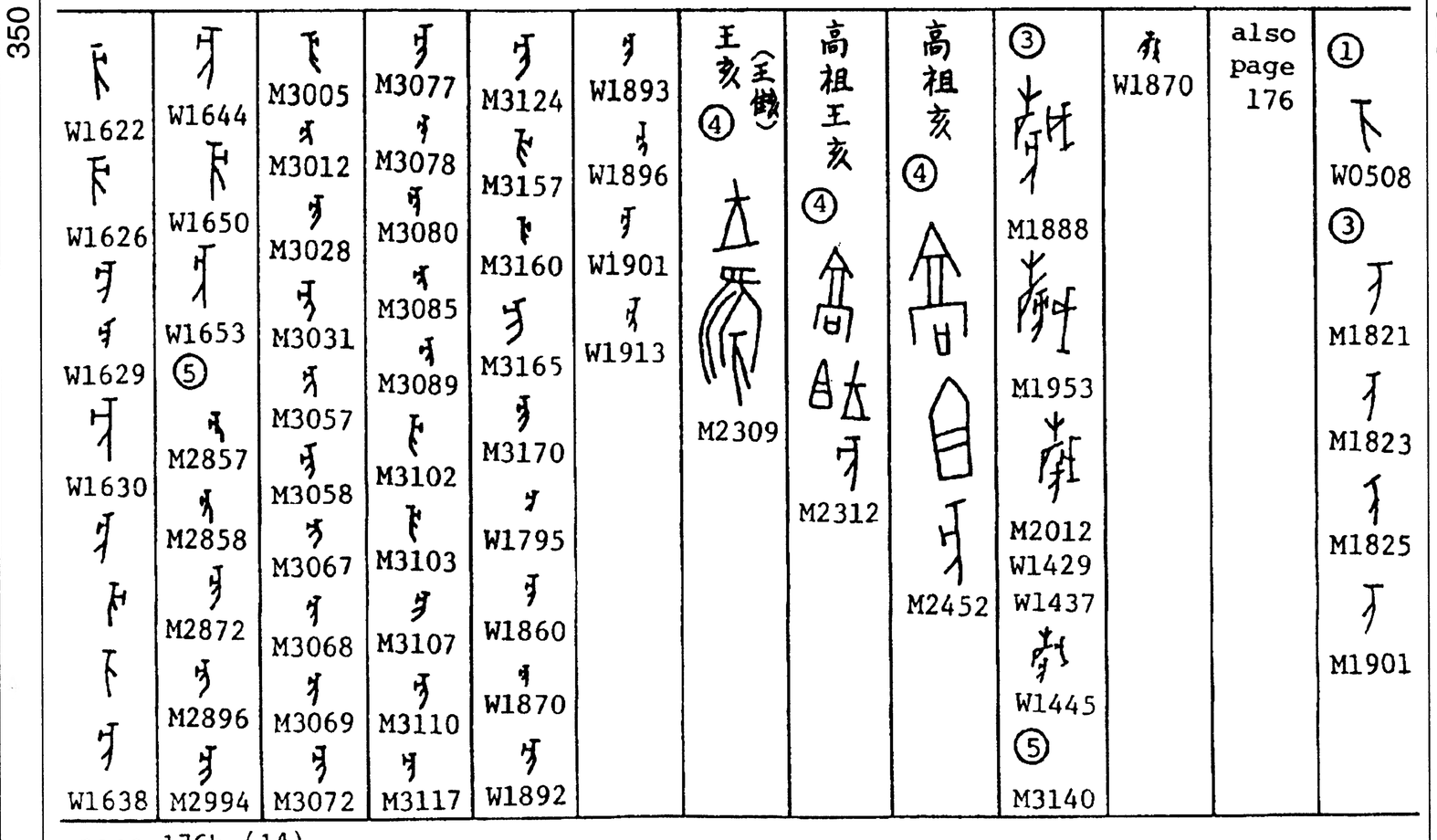


351



350

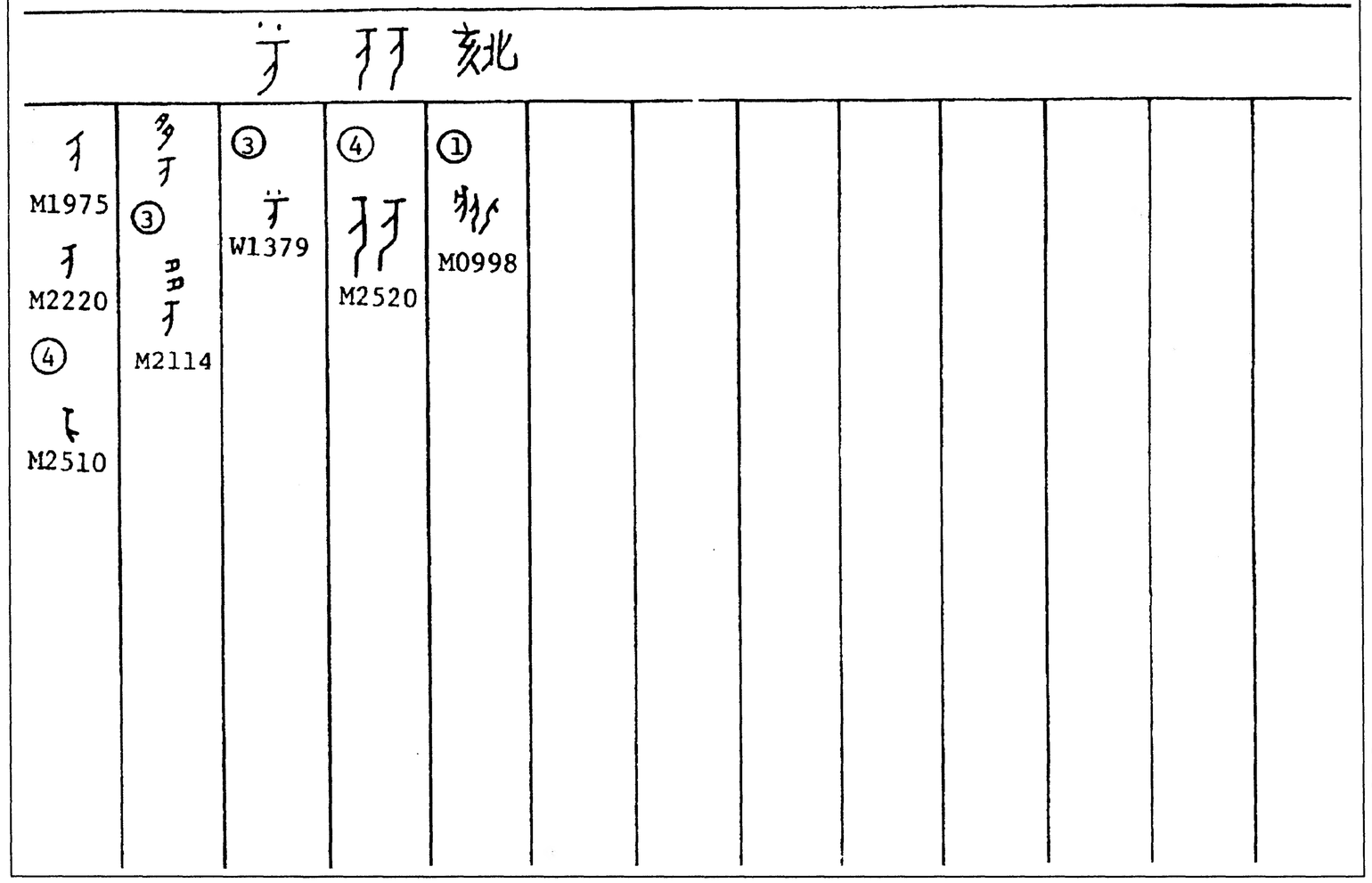
page 175b (14)



352

page 176b (14)

page 177a (14)

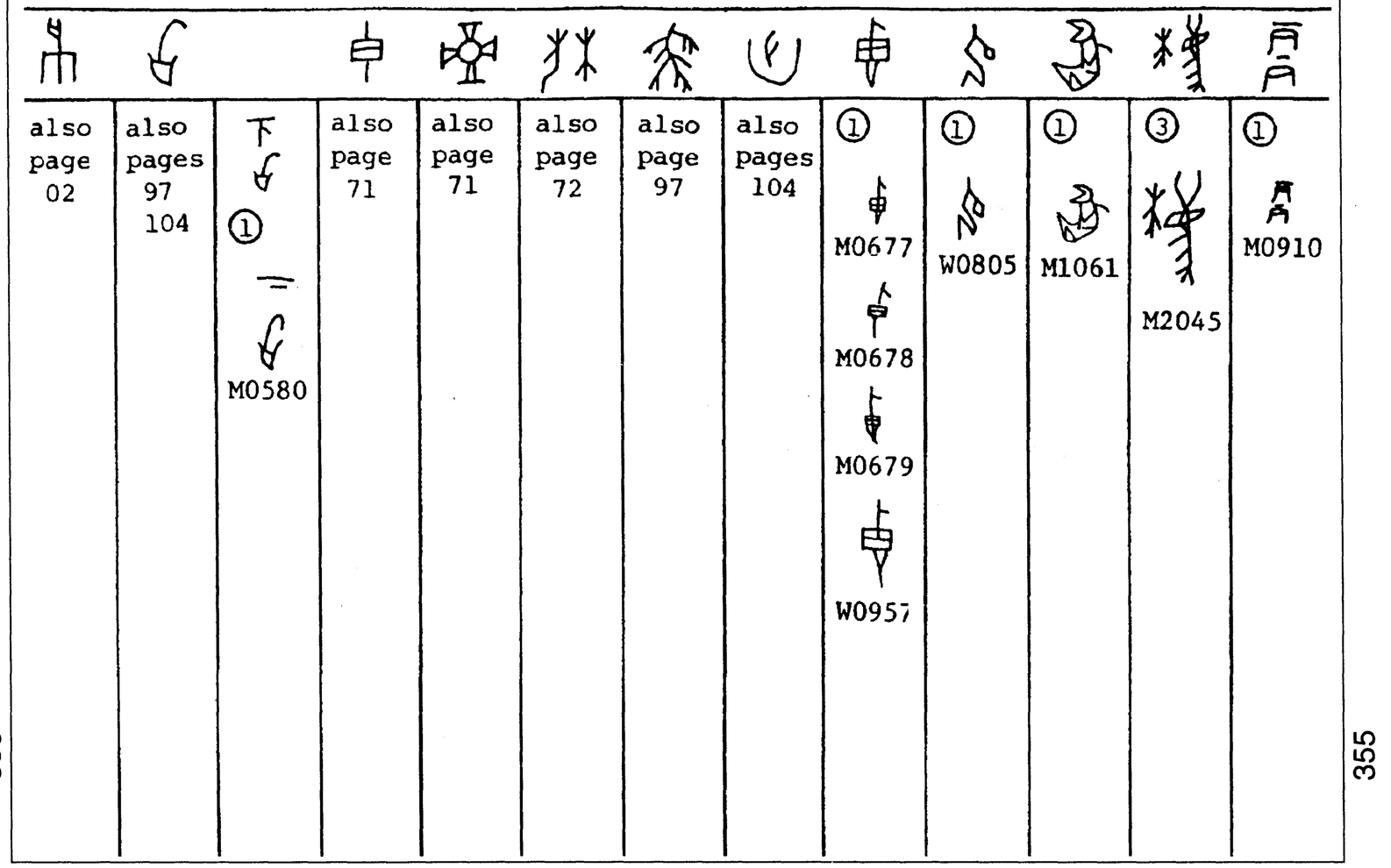


353

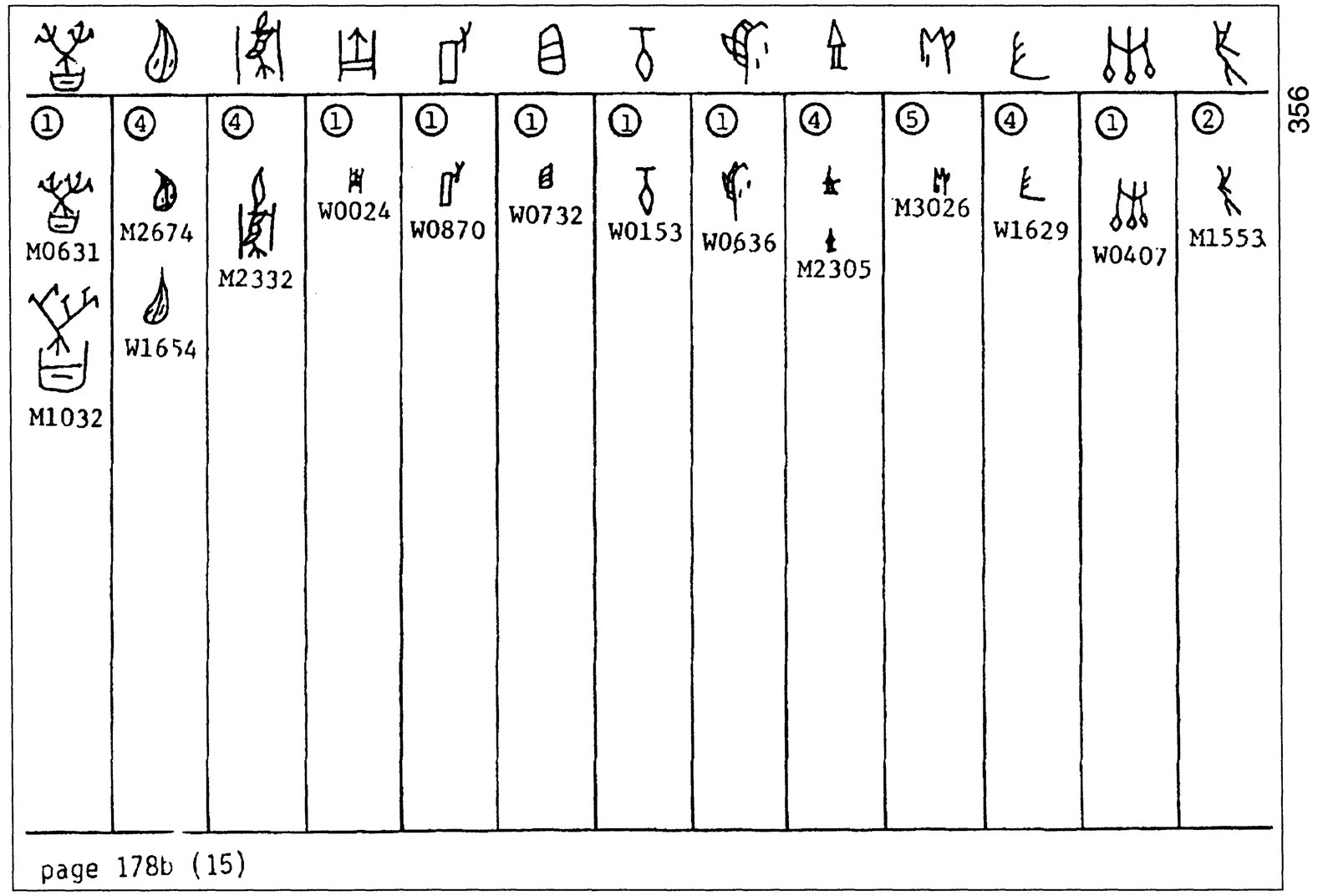
page 177b (14)

354

page 178a (15)



355



356

page 178b (15)

page 179a (15)

④	①	①	①	④	④	②	①	①	①	④	④	③
M2475	M0962	M0594	M0290	W1509	W1552	M1487	M1147	M0099	M0449	M2701	W1540	W1345

357

page 179b (15)

①	①	④	①	②	①	②	①	④	①	①	①	④
W0657	W0153	M0549	M0690	W1056	W0669	W1240	W0411	M0997	W0334	W0851	M0840	W1629

358

page 180a (15)

⑤	①	①	①	⑤	①	④	①	④	①	①	①	①
M3026	M0641	M0564	W0877	W1708	W0957	W1493	W0917	M2769	WQ669	M0443	M0849	M0953

359

page 180b (15)

①	②
W0706	M1045

360

（原載《中国文字》新十二期，一九八八年七月）



中國古文字大系·甲骨文獻集成

ISBN 7-5614-2057-9